目覚めたら最強装備と宇宙船持ちだったので、一戸建て目指して傭兵として自由に生きたい

リュート

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
目覚めたら最強装備と宇宙船持ちだったので、一戸建て目指して傭兵として自由に生きたい

【Ｎコード】
Ｎ３５８１ＦＨ

【作者名】
リュート

【あらすじ】
カドカワＢＯＯＫＳ様で書籍化されました！　是非買ってね！　|
（：３」∠）　|
←カドカワＢＯＯＫＳ様書籍ページＵＲＬ←
ｈｔｔｐｓ：／／ｋａｄｏｋａｗａｂｏｏｋｓ．ｊｐ／ｐｒｏｄｕｃｔ／ｍｅｚａｍｅｔａｒａｓａｉｋｙｏｓｏｕｂｉｔｏｕｔｙｕｕｓｅｎ／３２１９０２０００８１７．ｈｔｍｌ

目が覚めたら、宇宙船の中だった。
何を言っているかわからないと思うが、俺も自分で何が起こっているのかわからない。
意味がわからなすぎてパニックになりそうだが、幸いなことにこれは最近やっていたゲームの世界であるように思える。
なんだ、夢か。いや夢じゃないぞ。異世界転移ってやつか？
そういうのってこう、剣と魔法の世界でエルフとかドワーフとかドラゴンがいる世界にするもんじゃないのか！？
とにかく、原因はわからないが、俺はこの世界で生きていかなきゃならないようだ。
大丈夫、愛機もあるし金も稼げる。なんとかなる！　なれ！

これは愛機と共に宇宙に放り出された男が宇宙を股にかけて女の子を助けたり、イチャついたり、傭兵業でお金を稼いだり、ゲーム知識を利用したえげつない手を使ったりして割と自由に生を満喫する物語である。

プロローグ（前書き）

これはサイエンスフィクションではなく『すぺーすふぁんたじー』
です―（：3」∠）―（迫真

プロローグ

寒さで目が醒めた。

暗くて、寒い。ここはどこだ？　目を開き、視線を動かすと壮大な星の海が目に入ってくる。こんな星空を目にするのは生まれて初めてだ。明るい星に暗い星、壮大な極彩色の星雲に、意外と近い位置に見える小惑星群。

「何だと？」

砕けた岩塊そのものといった小惑星が目に見える範囲に存在している。馬鹿な、地球でこんなものが見られるポイントなどあるはずが無い。こんなものは映画や、ゲームの中で見るのが普通のはずだ。肉眼で見える位置にそんなものがあるなんて、そんな事があり得るはずが無い。

「夢……？いや、この寒さは」

身を刺すようなこの寒さはあまりにもリアル過ぎる。寝起きで頭がぼんやりしているような感覚も、この焦燥感も夢にしてはあまりにもリアルだ。

「そもそもここは……どこだ？」

俺の存在しているスペースは決して広くはないようだ。何か椅子のようなものに座っているのか？　シートベルトのようなもので席に固定されて……いや、それよりもこのふわふわとした感覚は何だ？　一体どういう状況なんだ！？

状況を理解できずにパニックになりかけるが、次第に暗闇に目が慣れてきた。

「これ……」

見慣れた計器類が目に入ってきた。そうだ、この部屋……いや、コックピットには見覚えがある。

「ゲームの……クリシュナのコックピット？　やっぱ夢か？」

どう見ても俺がここ数年やりこんでいるゲームの宇宙船――クリシュナと呼んでいる愛機のコックピットだった。

俺がやりこんでいるゲームというのは『Ｓｔｅｌｌａ（ステラオンライン）　Ｏｎｌｉｎｅ』というシンプルな名前のＳＦテイストのオンラインゲームだ。

非常に自由度の高いゲームで、広大な宇宙を股にかけて冒険をするもよし、傭兵として戦場を渡り歩くもよし、コンテナ船のオーナーになって交易をするもよし、という感じでプレイヤーの数だけプレイスタイルがあるというのが売りのゲームだった。

俺はスタンダードに傭兵プレイをしていた。いや、戦闘能力の高い船を買うためには金を稼がなきゃならないから、運び屋でもなんでも金になりそうなことは何でもしたけどな。

ある程度戦闘能力の高い船を手に入れてからは傭兵家業で金を稼いでは新しい船に乗り換え……って感じで遊んでいた。

現在の愛機であるクリシュナは数ヶ月前にゲーム内イベントで手に入れたばかりの最新鋭の船だ。プレイヤーが手に入れられるものの中では、という但し書きがつくけど。

正式な型番は【ＡＳＸ-０８　Ｋｒｉｓｈｎａ】だ。ユニークな船なので、俺はそのままクリシュナと呼んでいる。

小型艦特有の軽快な機動性に重巡洋艦級の火力を併せ持つヤベー奴だ。条件次第では戦艦級も撃破できるぞ。

「それにしてもさっぶ……」

タッチパネル式のコンソールを操作し、メインジェネレーターを起動して生命維持装置をオンラインにする。そうすると、すぐにコックピット内に温かい空気が流れてきた。

「あっぶね……あのまま寝てたら窒息死するところじゃねぇか」

船内の温度や酸素濃度を表示している小さな画面にはしっかりと船内の酸素濃度が低下していたという痕跡が残っていた。船内の気温もマイナス１０℃を軽く下回っていたようだ。

とりあえず状況は依然としてわからないままだが、生命の危機は脱する事ができたようだった。

「これは一体何事なんだ」

明るくなったコックピット内を眺めながら腕を組んで考え込む。どう見ても、この空間はステラオンラインにおいて俺が愛機としている宇宙船のコックピットの中である。

やりこんでいるゲームの夢を見るなんてことはゲームで遊んでいればままあることだよな。ホラーゲームをやって怪物に追われる夢を見るとか、剣と魔法のＲＰＧをやって自分自身が剣とかで魔物と戦っている夢を見るとか。よくある話だ。

「しかしこれは明晰夢というやつなのか？」

明晰夢というのは夢であることを自覚しながら見る夢のことである。

しかし、明晰夢であると自覚した時点で覚めてしまうことも多い

とか聞くが……一向に覚める気配がないな。しかも、この徐々に温まっていくコックピット内の温度や、それを感じる身体全体の感覚はまったく夢とは思えない。

「うーん……？」

この状況は一体何なのかと考えるが、答えは出そうにない。ベタに自分の頬をつねってみたり、頭を小突いてみたりしたみたのだが、普通に痛い。まさか夢じゃないのか？

いやいや、まさかだろう？

「意外と操作は簡単だな」

現実逃避がてら、クリシュナを実際に操作してみる。扱い慣れない操縦桿やフットペダルでの操作には若干苦戦したが、キーボードとマウスで考えれば操縦桿の扱いはこう、フットペダルの扱いはこう、という感じに符合させてしまえば後は楽だった。直感的な操作が可能になった分、繊細な操作ができるようになったくらいだ。

「全く夢が覚める気配がない」

何度も加速や減速を繰り返し、加速でシートに身体が押し付けられる感覚も、慣性でシートベルトが身体に食い込む感覚も味わった。しかし、俺のポンコツな頭は夢から覚めようとはしてくれないらしい。

「よーし、パパ武器の試射もしちゃうぞー」

もう半ば自棄である。ウェポンシステムをオンラインにして武装を起動する。そうすると、船体の一部が変形して四本の武装腕が現

れた。
船体から伸びた武装腕に装備されているのは軍用規格の強力な重パルスレーザーで、ステラオンラインでは重レーザーと呼ばれていた最強クラスの武装だ。それがなんと四門である。
更にコックピットの左右からも二本の砲身が前へと伸びる。こちらは大型キャニスターキャノンという武装で、ゲーム内では散弾砲と呼ばれていた。威力の高い実体弾を大量にばら撒く武器で、接近戦時の火力は随一だ。至近距離で二発叩き込めば大抵の小型船は爆発四散する。
あともう一つ切り札があるのだが、こいつを試射するのはナシだ。弾薬費がクッソ高いからな。

「よっしゃ、行くぞぉ」

手近な小惑星を照準し、重レーザーを四連射する。

「うおぉ！？」

四条の青い光線は狙い違わず目標へと命中し、小惑星をたったの一斉射で爆発四散させてしまった。飛散した小惑星の欠片がクリシュナの周囲に展開されているシールドに接触し、バチバチとシールドを明滅させる。

「予想以上の威力だった……」

これが戦闘艦のシールドを秒で溶かして船体を爆発四散させる重レーザーの威力か……半端ないな。そしてアレだな。ここまでくると流石に自分を誤魔化すのも限界だ。
認めよう、現実を。

「これは夢（ゲーム）じゃない。現実（リアル）だ」

プロローグ（後書き）

本日は２０時までにかけて＃５（６話）まで投稿しますよ！ ―（：３」∠）―

#001　初陣（前書き）

キリのいいところまで投稿していきたい―（∵3」∠）―

#001　初陣

いつまでも覚めず、頬をつねったりすれば普通に痛い。加減速のGは当然のように俺を痛めつけ、重レーザーは小惑星を爆発四散させる。そして飛び散った欠片はシールドで防がれる。もう認めるしかない。

そうなると色々と困ることになる。一体俺はなんでこんなことになっているんだ？　まったくもって意味がわからない。こんな奇天烈な状況に至る理由が一つも思い浮かばないのだ。

「昨日は何してたっけ？」

いつもどおりに仕事に行って、いつもどおりに仕事から帰ってきて、いつもどおりに飯を食って、シャワー浴びて、ゲームをしてから寝たはずだ。

こういうので定番のトラックにも轢かれてないし、ゲームをやっているパソコン上に謎のメッセージが出てきていたりもしなかった。

「意味がわからん」

とはいえ、嘆いていても仕方がない。ポジティブに考えよう。これが現実だとしたら、俺はステラオンラインの中に入り込んだような状態なんじゃないか？

だとすれば、ゲームでやっていたように傭兵として自由に生きられるのではないだろうか？　何にも縛られず、ただ己の力のみで成り上がる。うん、良いじゃないか。うだつの上がらない中小企業のネットワーク管理業よりは百倍マシだ。俺の特技も生かせそうだし。

よーしよし、気持ちが上向いてきたぞ。どうせなら状況を楽しま

ないとな。うん。そういうことにしよう。色々と不安だけどそういうのはできるだけ無視だ、無視。

さて、そうと決まれば……一体ここはどこなんだ？　ギャラクシーマップを開いて現在地を確認しようとしてみるが、表示されるのは『ＮＯ　ＤＡＴＡ』という無情な文字列。どこに何があるのかサッパリわからない。これは非常によろしくない状況だ。

とにかく宇宙というものは広大なものだ。何の情報もなしに闇雲に動き回ってどうにかなるようなスケールのものではない。

ゲームであるステラオンラインですらサービス開始から四年が経った今でも銀河中心部に辿り着いた人が居ないくらいだ。この宇宙も同じかどうかはわからないが、同じくらいのスケールはあると想定していたほうが無難だろう。

現在地の確認は諦め、次にこの船のステータスを調べてみる。特に賞金がついているということはなかった。一安心だ。いきなり星系警備隊にとっ捕まって臭い飯を食う羽目にはならないで済みそうだ。

そして次に船の主である俺の所属や所持金を調べてみる。所属はなしになっていた。傭兵ギルドにすら所属していない完全な一般人だ。キャプテンネームはゲームの時に使っていたのと同じになっているようだ。

そして所持金の残高は０エネル。なんということだ。俺、無一文かよ。貯めに貯めた金が……と軽く絶望しながら今度は船の積荷を調べてみる。

「食料はいくらかあるか……」

タッチパネル式のディスプレイを操作して確認すると、少々の食料と水が積み荷の中に用意されていた。実におあつらえ向きなことに。一体どこの誰が用意したのか？　これがわからない。

他には散弾砲の弾薬が少々と、船の予備エネルギーパックが二つ。

「それと、レアメタルね……結構な量だな。こいつはやべぇ」

何がヤバいのか？　それを説明するには、まずステラオンラインにおける通貨について話す必要がある。

ステラオンラインの世界では紙幣や硬貨といったものはとっくに廃れており、エネルという名の電子通貨が銀河規模で流通しているのだ。エネルのやり取りは非常に簡単で便利なのだが、電子通貨なので当然全てのやり取りの履歴が残るようになっている。

ここでレアメタルに話が戻るのだが、レアメタルというものは銀河中のどこでも慢性的に不足している重要物資で、どこのコロニーやステーションでも容易にエネルに換金できるアイテムなのだ。

要は、地球で言うところの金とか銀とか宝石みたいなものだな。

現物を直接やり取りする分には足がつきにくいということもあって、エネルのやり取りで足がつくのを避けたい宙賊のような連中にとってレアメタルはまさに垂涎の品なのである。

ここまで言えば容易に想像はつくと思うが、このレアメタルというものを大量に持ち運んでいると、そういった脛に傷を持つような輩に非常に狙われやすくなる。ゲーム的に言えば、いわゆる宙賊と呼ばれる盗賊ＮＰＣとのエンカウント率が格段に上がる。

『警告、所属不明艦船からスキャンを受けています』

クリシュナに搭載されたサポートＡＩから警告が入る。

「早速かー……」

スキャンされたからといって相手が宙賊だと決まったわけではない。俺の機体がトラブっているのでは？　と考えてとりあえずスキャンをしている善意の第三者である可能性も充分に有り得る。

単に怪しいからスキャンしている可能性が一番高いけどな！
足がつきにくい大量の金品を持って何もない宙域で停船している船とか怪しい。怪し過ぎる。俺なら足のつきにくいレアメタルを使って宙賊と違法な取引でもするつもりじゃないかと疑うね。

『所属不明艦船の武装、オンライン』

嗚呼、無情。どうやら幸運の女神は俺に微笑まなかったようである。賞金首でもない相手にいきなり武器を向けてくるのは十中八九宙賊だ。

『よぉ、兄弟。こんなところでお昼寝でもしてんのかぁ？』
「ははは、別になんでもありませんよ。お構いなく」
『へへへ、そういうなよ兄弟。この広い宇宙で運良く出会えた仲じゃねぇか。なに、ちょっとばかりカーゴの中身を分けてくれりゃ何もしねぇからよ』
「それはお断りですわ。適正価格なら売っても良いかな？」

などと話している間にバン、バン、バン、と特徴的な音を立てて超光速ドライブを解除した所属不明艦船が三機、周辺宙域に現れる。既に全機の武装がオンラインになっており、いつでも発砲可能な状態だ。
近づいたことによって三機の所属不明艦船の情報が次々にディスプレイ上に表示されていく。三機の機種はてんでバラバラだ。どれもそれなりのカーゴ容量を持ち、武装もそこそこに搭載できるバランス型の機体で、何れも整備状況はあまり良くなさそうだ。傷やへこみも多い。典型的な宙賊船って感じだな。

『んんー？　見慣れねぇ船だなぁ。そいつはどこの船だ？　坊主』
「ノーコメントで」

十中八九宙賊だろうなぁ、と思いながらこちらからも所属不明艦船にスキャンをかけていく。予想通り、真っ黒だった。どの船にも五〇〇〇から八〇〇〇エネルの賞金がかかっている。

『へへへ、見ちまったなぁ？　見られちまったもんは仕方ねぇ。大人しく積荷を寄越しな。そうすりゃ命だけは助けてやるぜ』

「うーん……致し方ないか」

メインジェネレーターの出力を通常レベルから戦闘レベルに徐々に引き上げながら覚悟を決める。何の覚悟をって？　そりゃ、人を殺す覚悟ってやつだ。

俺にとってこのレアメタルは生命線だ。金が無ければ人は生きてはゆけないのだから。それを武器で脅して奪おうというのなら、俺は自分の身を守らなきゃならない。つまりそれは、この宙賊どもを叩き潰すということだ。

『それでいいんだよ。死にたくはねぇだろ？』

「それはそうだな」

宇宙空間で船という揺り篭を失った人間がどうなるのかなんて考えるまでもない。そもそも、船の爆発に巻き込まれて死ぬだろうけどな。

今から殺し合いを始めようと考えているというのに、不思議と恐怖感は無い。きっとそれは俺の乗っている機体がクリシュナだからだろう。

宙賊達の乗っている船は民間用のバランス機、それも使い古された数世代前のモデルだ。メインジェネレーターの出力も、シールド出力も、武装も哀れなほどに貧弱で、整備も行き届いておらず装甲もベコベコ。

対して俺の乗っているクリシュナはガチの軍用機で、しかも俺用に魔改造まで施している専用機だ。
シールドの出力も、武装の出力も奴らの乗っているオンボロ船に比べれば段違いの性能だし、装甲だって軍用規格の頑丈な一品である。
はっきりと言おう。負けることなどまずありえない。これから始まるのは戦いではなく、一方的な狩り。或いは蹂躙だ。
徐々に上げていたジェネレーター出力を一気に戦闘レベルまで上昇させる。

「死にたくはないから、抵抗することにする。多分あんた達を殺すことになると思うが、恨むなよ」
『三機相手に吠えるじゃねぇか。後悔するなよ！』

俺の船の周りを回っていた宙賊船が一斉に俺に艦首を向けた。
その瞬間に俺はクリシュナのスロットルを最大解放した。

「ぐぉっ！？」
『なっ！？　速ぇ！？』

急激にかかるGに面食らいながらもタッチパネルを操作し、武装を展開してオンラインにする。
鋭角なフォルムを有するクリシュナからパルスレーザー砲を備えた四本の武装腕が伸び、コックピット脇のウェポンベイが展開されて二門の散弾砲がその砲身を前へと伸ばした。
サブブースターを噴かし、初動の勢いを保ったまま回転して後ろを向いた。すかさず四門のパルスレーザーを宙賊戦に向ける。

『変形しやが――ッ！！』

連続で発射された軍用パルスレーザーが易々と宙賊船のシールドを貫通し、装甲を蒸発させて小爆発を起こす。コックピットも上手に焼けたようだ。

『たった一撃でだと！？』

無言で再加速し、逃げようとする宙賊船の背後を取る。急激にかかるGで視界が暗くなりかける。そんな感覚を半ば心地よく感じながら再度パルスレーザーを斉射。

『い、嫌だ！　死にたくねぇ！　死にたくねぇ！！　死にた――！！！』

斉射された四本のパルスレーザーが無慈悲にシールドを突き破り、命乞いをする宙賊船のメインブースターに突き刺さった。そのままパルスレーザーがメインジェネレーターにまで届いたのか、二機目の宙賊船は爆発四散する。

『野郎オォォォ！　ぶっ殺してやる！』

三機目は逃げるのではなく、戦いを挑んできた。仲間がやられたのを見て、せめて一矢報いようとしたのだろうか？　光の速度で飛来するレーザー砲の攻撃を発射後に避けるのは実質的には不可能に近い。ではどうするか？　的を絞らせないように動く、それしかない。

「ぐっ！？　うぅ……ッ！」

クリシュナを操り、急加速と減速を繰り返しながら各種サブブースターを駆使してランダム機動を取る。吐きそうだ。

『くそっ、なんて動きをしやがる！』

宙賊も射撃精度を補正して的確に射撃をしてくる。ゲームの頃にはなかった挙動だ。やはりこれは夢ではなく、宙賊船にも俺と同じ人間が乗っているらしい。吐き気がする。

吐き気がクリシュナの動きに影響したのか、それとも宙賊の射撃補正がおれの回避運動を上回ったのか、ついにクリシュナにレーザー砲が着弾した。

『き、効いてねぇ！？』

宙賊船の放った赤いレーザーはクリシュナが展開しているシールドに完全に防がれ、その装甲に焦げ目を残すことすらできなかった。

もう充分だろう。

俺は艦首をこちらに向けている宙賊船に向かって加速を開始する。みるみるうちに宙賊船が目の前に迫ってくる。まるでチキンレースだ。

宙賊船が苦し紛れにレーザー砲を発射してくるが、焦っているのか有効打はない。当たったとしても、あの船のレーザー砲ではクリシュナのシールドは抜けないが。

『や、やめっ！　か、母さ――！』

激突する前に俺は宙賊の船を躱し、すれ違いざまに二門の散弾砲を撃ち込んでやった。超高速の実体弾が宙賊船のシールドを飽和させ、突き破り、その船体を穿って穴だらけにする。

スイスチーズの出来上がりだ。

「はぁっ！　はぁ、はぁ……」

船を急旋回させ、爆発四散する宙賊の船を眺めながらいつの間にか乱れていた呼吸を整え、ジェネレーターの出力を通常モードに戻して武装をオフラインにする。

吐き気はいつの間にか収まっていた。心理的なものではなく、単に無茶な機動をしたせいで内臓がビックリしただけだったのだろうか。俺の心は思ったよりも強靭だったらしい。

「ここまでやって覚めないなら、やっぱり現実だよなぁ……」

暗い気持ちになってはいかん。ポジティブにいこう、ポジティブに。じゃないと死ぬ、精神的に。

#002　戦い終わって（前書き）

ギュンギュンいくよー！―（：3「∠）―

#002　戦い終わって

「困った」

認めよう。これは夢ではないということを。だとしたら色々と困る。何が困るって、これからどうしたら良いのかさっぱりわからないのがとても困る。

　気がついたら宇宙船に乗って宇宙のど真ん中に一人きり。何故こんなことになっているのかもわからない。家に帰れる方法があるとも思えない。

「実は俺の知らない間に完全没入型のＶＲ装置が開発されていて、俺はフルダイブ状態にあるとか」

色々とコンソールを弄ってみたり、メニュー呼び出し！　とかログアウト！　とか叫んでもみたが、俺の望むログアウトメニューらしきものが出てくることも、この現実から抜け出せるようなことも無かった。無情である。

　ほとほと困り果てるしかない事態であるが、どうにもならないならどうにもならないで今の状況に適応する他ない。人間は適応できる生き物だ。きっとなんとかなる。

「考えようによっては悪くない状況かもしれない」

　俺は自身が扱い慣れた愛機と共にあり、培った操縦のスキルも通用するようだ。何より、この機体はしっかりと宙賊を一蹴できるだけの戦闘能力を有している。ならば、俺がステラオンラインで繰り返してきた『傭兵』としてのやり方で生活だけはできるはずだ。

幸いなことにカーゴにはそれなりの額になるであろう積み荷があり、俺の操縦技術と愛機は恐らく宙賊狩りで金を稼ぐことができそうである。

更に先ほどスキャンし、撃破した宙賊の賞金総額は一九〇〇〇エネルになる。この世界の物価がどうなっているかはわからないが、武装した宇宙船に乗った宙賊の賞金が端金ということはあるまい。

俺がプレイしていたステラオンラインの物価で考えれば、一九〇〇〇エネルは宇宙船の購入費用には全く足りないが、乗っている船のエネルギーの補給と弾薬の補充、そして船の整備を十全に行なってもなお余りある金額であったはずだ。

「そうだ、積荷とデータを回収しよう」

ステラオンラインでは撃破した宙賊の船の残骸から積荷やデータキャッシュを略奪することができた。大した金額にはならないが、たまに掘り出し物を略奪できることもある。

データキャッシュに関しては分析することによって周辺宙域の情報を獲得することが可能だ。運が良ければ宙賊の本拠地の座標がわかったりもする。

宙賊の本拠地の座標がわかりさえすれば、それを襲撃して殲滅し、本拠地に溜め込まれたお宝を全て略奪することなども可能だ。または、その情報を恒星系を管理する警備隊に報告することによって、情報料をせしめることもできる。どちらにせよ、有益なものである。

俺はクリシュナを操縦していそいそと宙賊船の残骸から積荷とデータキャッシュ、そして破損状態がマシな装備を剥ぎ取った。ステラオンラインの宇宙船にはこういった物資を回収するためのドローンが標準搭載されているのだ。当然、俺のクリシュナにもドローンは搭載されていた。

「大したものは無いな」

宙賊の積み荷は低品質の食料品や醸造酒くらいのものだった。醸造酒はそれなりの値で売れるのだが、恒星系を管理する宇宙帝国の方針によっては非合法ということもある。扱いが少しデリケートな品だ。

まぁ、非合法だったとしても醸造酒程度なら精々没収されてお小言を貰う程度のものである。これが違法奴隷とか、麻薬の類だとかなり危ない。没収の上高額の罰金、恒星系からの追放、最悪は恒星系警備部隊からの攻撃すらあり得る。

「おっ」

データキャッシュの方は当たりだった。この恒星系にある主なステーションの座標だけでなく、宙賊の拠点の座標を入手することができたのだ。この情報を売りつけるだけでも先ほどの三隻の宙賊船の撃破報酬よりも高い報酬を手に入れられるはずだ。

どうやら、データを見る限りこの恒星系には居住可能惑星は存在しないようである。鉱物資源の豊富な小惑星帯が多いらしく、採掘ステーションや監獄（罪人に過酷な採掘を強いている）、そして交易コロニーなどが星系内にいくつか点在しているようである。

「周辺星系のデータはなし、か……」

残念ながら手に入ったのはこの恒星系内のデータのみで、周辺星系のデータなどは見つからなかった。

この恒星系が銀河のどの辺りに位置するのか、という点については依然としてわからないままだ。そういったデータを入手するにはどこかのステーションかコロニーで情報ネットワークに接続する必要があるだろう。

「行くなら交易コロニーだな」

とりあえずの目的地をこの恒星系で一番大きい交易コロニーに設定する。情報を見る限り、この恒星系を警備する警備隊本部もそこにあるらしい。賞金首の賞金を受け取るのにも、宙賊から手に入れた本拠地の情報を売り払うのにも都合が良いだろう。

メインジェネレータの出力を巡航モードに設定し、艦首を交易コロニーの方向に向ける。そしてスロットルを徐々に上げ、充分な加速を得たところで超光速ドライブを起動した。

「おぉ……」

風景がぐにゃりと曲がったかと思うと、光点であった星々が光る線と化して後方へと流れ始めた。超光速ドライブの技術的な理論は俺にはわからないし、ステラオンライン上でも詳細は説明されていなかったのでよくはわからないのだが、これは主に恒星系内での長距離移動に使われる機能だ。

実際にコックピットから見える景色が動いているのが見えるので、単に物凄い速度で移動しているんだろうとは思うけれど。スペースデブリや小惑星群に衝突して船が大破しないところを見る限り、何か特殊な方法でそういった問題を回避する技術が使われているのではないだろうか。

ちなみに、恒星間を移動する航行能力もこのクリシュナには搭載されている。そちらはハイパードライブという装置で、なんでも恒星系と恒星系を繋ぐ亜空間の回廊を通って光よりも遥かに速い速度で恒星間移動をするという装置であるらしい。例によって細かい理論は俺にはわからない。

ゲーム的にもプレイヤー的にも恒星間を移動できるということが重要なのであって、細けぇこたぁいいんだよ！　というスタンスだったので。俺は別にＳＦマニアというわけでもないしな……。

他にもワームホールゲートを使った超長距離移動というのもある。これは大抵の場合ＮＰＣの運営している宇宙帝国が管理しており、その使用には厳しい制限が課されている事が多い。プレイヤーの中には宇宙帝国に対する貢献度を上げることによって利用が解禁された者もいたようだが、流れの傭兵プレイをしていた俺には残念ながらそういった機会はなかった。

恒星間移動について思いを馳せているうちに巨大なガス惑星の横を通り過ぎる。ついつい超光速ドライブを停止して壮大な宇宙の光景を観察したくなったが、ここはぐっと我慢して交易コロニーへと急ぐ。ぼけっとしているうちにまたぞろ宙賊なんぞに襲われたらたまらない。

今、この瞬間に優先すべき事項は知的好奇心を満たすことでなく一刻も早く安全圏である交易コロニーに到達して情報を収集することである。その後であればいくらでもガス惑星や小惑星群、その他見たことも聞いたこともない不思議な宇宙の光景を観察する時間ができることだろう。そうに違いない。そうであってほしいなぁ。

俺という人間にはＳＦに対しても宇宙に対しても熱狂的というまでの興味は存在していないが、それでも目の前にある壮大な光景に見入るくらいの感性くらいは持っているのだ。宇宙という空間は孤独なものであると思う。こういった好奇心は忘れずに大切にしていきたいものだ。

宇宙に思いを馳せている間に交易コロニーに接近したことをクリシュナのサポートＡＩが通知してきた。超光速ドライブの解除に備えて身構えてみたが、思ったよりもスムーズに超光速移動は解除された。慣性とかどうなっているのだろうか？　何か未知の力場のようなもので船を保護しているのかもしれない。

いつもどおりの手順でコクピットのサイドディスプレイを操作し、交易コロニーのハンガーベイにドッキング要請を送る。

『こちらコロニー、ターメーンプライムの港湾管理局。当コロニー

へのドッキング要請を受諾。ええと、キャプテン……？　すみません、お名前の部分のデータが破損しているようです』

「えぇ？　あー……こちらは機体名クリシュナ、名前は――」

名前、名前か。俺の本名はどこにでも居そうな割とありふれていそうな名前なのだが……この世界の命名法則的にはちょっと奇妙に聞こえるだろうな。

ここは先ほど確認したゲーム内ネームを名乗っておこう。

「ヒロだ。俺はキャプテン・ヒロだ」

こうしてこの銀河にキャプテン・ヒロという傭兵が誕生した。

グラッカン帝国歴２３９７年８月１０日のことであった。

#003　尋問とセレナ様

さて、そろそろこの俺、佐藤孝弘という男のことについて語っておこう。

佐藤孝弘、日本人、北海道某市在住。年齢は二十七歳、独身。高校卒業後、地元の工業大学を卒業して地元企業に就職。大学時代にネットで知り合った女性と交際するも、遠距離恋愛だったため破局。就職後はパソコンを使えるということで社内のネットワーク管理者とされたが、専門知識など無かったので勉強をしながらの業務に四苦八苦する。

業務中にニュースサイトや通販サイト、果ては怪しいブラウザゲームやらエロサイトまで見てウィルスを貰ってくる老若男女の同僚達に時にブチ切れつつ業務をこなす毎日。

趣味はゲーム。とにかくゲーム。雑食性で和ゲーも洋ゲーも割と何でもやる。一時期とあるＦＰＳゲームにドハマリし、やりこみにやりこみを重ねてスコアラキングでシングルランカーになる。

流石に一位を取るだけの腕はなかったが、当時は日本で一二を争うランカーであった。同僚に『目付きが鋭くて怖い』と怯えられるくらいに殺伐とした毎日を過ごしていたと思う。

しかし、そんな毎日にもいつしか疲れて広大な宇宙を冒険できるというステラオンラインを始めた。結局これにもドハマリしてやりこんでいたわけだけれども。

俺個人の語るべき情報なんてこれくらいのこと……ああ、あと好物は炭酸飲料だ。シュワッとした喉越しってたまらないよな。

さて、だらだらと俺のことについて語ったが、俺の今の状況はと言うと。

「それで、この積み荷の大量のレアメタルはどこで？」
「船に積んであるものは『ほぼ』宙賊を撃破して奪った略奪品ですが。それ以上何があると？」

港湾管理局員に滅茶苦茶尋問されていた。
このコロニーにおいて醸造酒は別に禁制品でもなんでも無かったのは良かったのだが、まとまった量のレアメタルに関しては出処を探られた。ぶっちゃけ出処を探られても俺も出処がわからないので、しらを切るしかない。
今の俺は所属も何もない自称傭兵である。身分を証明するものが何一つ無いのだ。そんな怪しいやつが大量の貴金属を持ち込んできたら？　そりゃ怪しい。怪しさ大爆発というやつだ。港湾管理局員さんも張り切って尋問するというものだろう。

「……どうしても出処は言えないと？」
「積み荷の出処に関してはさっきから包み隠さず言ってるでしょうが。いい加減この不毛なやり取りにはうんざりなんだが」

どうもこの男、意図的に堂々巡りを繰り返している感じなんだよな。俺がうんざりして何かしらのボロを出すのを待っているんだろうか？　それとも、何か求められているのか？　袖の下とか？
ははぁん？　こっちから袖の下を仄めかすような発言を引き出して、それをネタに俺をしょっぴくか、脅して強請るかするつもりだな？
こういう手合いにまともに付き合うのは時間の無駄だなぁ。どうしたものか……と、そう考えているとノックもなしに尋問室の扉が開き、闖入してくる者があった。
若い女だ。いっそ少女と言っても良い。それもかなりの美人である。整った目鼻立ち、輝く金髪、紅い瞳、そして純白の軍服に赤いマント、腰には剣まである。その出で立ちはまるで女騎士、いや戦

乙女だろうか？
　おっとりとした雰囲気を纏っているように見えるが、その瞳に一瞬だけ猛禽のような鋭さが垣間見えたように思える。どうも、見た目の雰囲気に騙されないほうが良さそうな娘だな。

「こ、これはセレナ様。何故このような場所に？」
「ハンガーベイで見慣れない船を見かけたものですから。彼が船の主ですか？」
「は、はい」

　急にだらだらと脂汗を流し始めた港湾管理局員がセレナ様と呼んだ女軍人に自分が持っていたタブレット端末のようなものを渡す。それにザッと目を通した彼女は俺に視線を向けてきた。

「結構な量のレアメタルですが、後ろ暗いものではないのですね？」
「誓っても良い」
「ふむ……傭兵ギルドに登録もしていない自称傭兵が宙賊を撃破ですか。他に何か報告することはありますか？」
「船に奴らの本拠地らしき場所の座標データがある。撃破した宙賊船のデータキャッシュを解析して得た情報だ。賞金を貰うついでに、その情報も引き渡そうとしていたんだが、積荷を見せた途端にここに引っ張ってこられてな」

　ほとほと困っているのだ、ということを主張するように女軍人に向かって肩を竦めて見せる。
　彼女は恒星系の警備隊に所属する人物だろう、と踏んでの行動だ。どうやら彼女は港湾管理局員より立場が上であるようだし、協力する意思を見せてなんとかしてもらえないかと考えたのだ。

「彼の積み荷が盗品であるという証拠は無いのですね？」

「え、ええ、それはそうですが」
「では良いではありませんか。彼は積み荷をこのコロニーに卸してくれるのでしょう？　レアメタルは常に不足気味ですし、何の問題もないのでは？」
「し、しかし……」
「しかし？　ホールズ侯爵の娘であるこの私に何か意見をするつもりなのですか？」
「いえ、その……」
「そういえば、最近このコロニーに立ち寄る船の積み荷に難癖をつけて袖の下を要求する港湾局員がいるそうですね？」

セレナ様と呼ばれた女軍人が港湾管理局員ににっこりと笑みを向けた。笑みを向けられた港湾管理局員が震え上がる。俺も震え上がる。笑顔なのになぜか怖い。

「わ、私はそんなことは決して！」
「我々は適正価格でレアメタルを手に入れられる、宙賊を討伐した実績のある善良な自称傭兵の彼は対価としてエネルを受け取る、そして彼はそのエネルをこのコロニーで使う。誰も損をしませんね？」
「は、はい、仰る通りです！　手続きを進めてまいります！」

港湾管理局員が席を立ち、逃げるように尋問室を去っていく。実際に逃げたのではないだろうか。俺はセレナ様と呼ばれた女軍人と二人きりにされてしまった。港湾管理局員の背中を見送ったセレナがこちらに視線を向けてくる。

「すみませんね、彼は少々職務に忠実過ぎるところがありまして」
「いえ、確かに怪しい身の上ですから仕方がないかと」

実際に怪しいのだから仕方ない。近隣の傭兵ギルドにおける活動

実績なし。それどころか、近隣恒星系で俺の船が活動した痕跡すら無いだろうからな。
　しかも船に登録されているオーナー名はデータが壊れていた。生体認証は間違いなく俺のデータで通ったので、なんとか船は取り上げられずに済んだが、一歩間違えば船まで奪われるところだった。

「そうですね、まるで突然別の宇宙から迷いこんできたと言われてもおかしくないくらいに怪しいですね。どういう経緯でこの恒星系に？」
「ハイパードライブでの航行中になんらかの事故でも起きたようで。事故の影響か記憶ははっきりしないですし、正直途方に暮れているところです。混乱している間に宙賊に襲われ、それを返り討ちにしてデータキャッシュと積み荷を略奪、それを解析してこのステーションに辿り着いたというわけです。幸い、自分の名前と傭兵という立場だけははっきりと覚えていたので」

　虚実を織り交ぜて身の上を話す。この設定は港湾管理局員に尋問されている間に考えたものだ。ツッコミどころは無くもないが、絶対にありえないとも言えない話という感じになっている筈である。

「記憶がはっきりしない、ですか。貴方にはベレベレム連邦のスパイではないかという嫌疑もかかっているのですが？」
「それは流石に無理筋かと。もし私がその、ベレベレ連邦？」
「ベレベレム連邦です」
「ベレベレム連邦のスパイだとして、堂々と出処不明のレアメタルを持って、見慣れない船に乗って、しかも真正面からこのコロニーに入港しようとなどするものですかね。しかも身分不詳の自称傭兵として。いくらなんでも目立ちすぎでしょう。私がそのスパイの上司なら、計画書に目を通した段階で即そいつを呼び出してぶん殴りますね」

敢えて裏を突いて、ということも考えられなくもないだろうが、いくらなんでもやりすぎだろう。

「奇遇ですね、私もそうします」

女軍人はクスリと笑った。普通に笑うととてつもなく可愛らしいな。おっかない印象の方が強いからお近づきになりたいとは思わないが。

「まぁ、良いです。私から警備隊本部に話を通しておきますので、賞金の受け取りとデータキャッシュの引き渡しをしてくださいね」

「感謝します」

素直に頭を下げて感謝を示すと、彼女は満足そうな顔で尋問室を出てい……く前にこちらに振り返った。

「貴方、面白いですね。情報を元に作戦を立てますから、きっと参加してくださいね？」

にっこりと笑ってから彼女が去っていく。先ほどと違って怖くはなかったが、何か本能的な部分で危険を感じさせる笑みだった。

宙賊退治は稼げる仕事ではあるが……ちょっと彼女と密接に関わるのは危ないようにも思えるな。

少しして港湾管理局員が戻ってきたので、ようやっと俺も尋問室から解放される。そろそろ腹が減ってきたところだったんだよ。

「では、レアメタルの引き取り金としまして、その代金が二五〇万エネルになります。ご確認ください」

「はいよ」

スマートフォンのような形をしている小型情報端末を起動し、確かに二五〇万エネルが俺の端末に振り込まれていることを確認する。この小型情報端末はクリシュナのコクピット裏にある居住スペースに置いてあったもので、この銀河において尤もポピュラーなツールの一つだ。これ一つで船との通信、ナビゲーション、財布、その他諸々の機能を扱うことができる。

他にも色々と便利なものが居住スペースの収納には入っていたのだが、今回持ち出してきたのはこの情報端末と護身用のレーザーガンだけだ。レーザーガンは尋問室に入る前にホルスターごと没収されていたので、しっかりと返してもらう。

「他には何もないな？　無いならとっとと警備隊本部に行って賞金を受け取って、船に戻って休みたいんだが？」

「ええ、もう大丈夫です。お手間を取らせました」

「そうか。じゃあな」

ここで突っかかっていっても良いことなど何もないので、とっとと港湾管理局を後にする。そして次に向かうのは警備隊本部だが、こちらはセレナ様と呼ばれていた女軍人がちゃんと話を通してくれていたらしく、スムーズに事を運ぶことができた。

賞金宙賊の賞金一九〇〇〇エネルと、情報提供料一五〇〇〇〇エネルが速やかに支払われた。これで俺の所持金は二六九九〇〇〇エネルとなったわけだ。たくさんだな！

軽くこのコロニーの物価を聞いてみたのだが、基本的な食事一食分でだいたい五エネル。少し贅沢をすれば十から十五エネル。清潔な飲料水は一リットルで三エネル。船の停泊料は二十四時間当たり一五〇エネルだそうだ。うーん、一エネル百円くらいで考えれば良いのだろうか？　水がちょっと高いかな。停泊料も一日一五〇〇〇

円と考えると結構高く感じるな。
まぁ、コロニーだから空気にもコストがかかっているのだろうし、水だって本来貴重なはずだ。そう考えると割と良心的なお値段なのかもしれない。
ええと、船で寝るとして、このコロニーに滞在するのにかかるお金は一日あたり最低限でも食事三回で十五エネル、水四リットル分で十二エネル、停泊料で一五〇エネル、合わせて一七七エネルか。
四十年くらいは滞在できるぞ、やったぜ。まぁ、そんなに長期滞在したら別の問題に見舞われそうだが。どこかに定住できるような拠点でも作ったほうが良いのかもしれない。
とにかく、散財さえしなければ当面の生活には全く不自由しない程度の金が手に入ったわけだ。人間、大金が手に入って生活の心配が一切なくなると心が軽くなるものである。俺は軽くなった足取りで停泊している船へと戻るのだった。

#004　引きこもって情報収集のターン

船に戻った俺は交易コロニーのネットワークに接続し、数日を情報収集に費やした。

勿論、非合法（イリーガル）な方法ではなく合法（リーガル）な方法でだ。港湾管理局に情報収集のためのネットワーク接続を要求し、彼らのネットワーク管理者にアクセス内容を監視されながらの情報収集である。

俺がまず情報収集したのは、近隣恒星系やそれを支配する宇宙帝国の情報収集である。自分が今いる場所の情勢をチェックすることにしたわけだ。

まず、俺が今いる恒星系の名前だが、ターメーン星系と呼ばれている恒星系だ。B型恒星であるターメーンを中心とした恒星系で、四つの惑星が存在している。

ターメーンに一番近いターメーンⅠは恒星に近く、非常に地表温度の高い星で利用価値が殆ど無い。次に恒星に近いのがターメーンⅡで、水素やヘリウムで構成されているガス惑星だ。このガス惑星からはヘリウム3がエネルギー資源として採掘されているらしい。

その三つの星を取り囲むように小惑星帯が存在しており、この小惑星帯からはレアメタル他、豊富な鉱物資源が採掘されているそうだ。

更にその外側に二つの惑星があり、それぞれの名前がターメーンⅢとⅣときた。何の捻りもない名前だな。

ターメーンⅢは有毒な大気と酸の雨が降り注ぐ有毒惑星なのだが、この大気と酸の雨が利用価値のある化学物質として利用されるらしく、さらに地表や地中にも有用な金属が埋蔵されているのだとか。軌道上に採掘ステーション兼監獄が建設されており、罪人が過酷な労働を課されているという。

ターメーンⅣもターメーンⅡと同じくガス惑星であるそうだが、

こちらは交易コロニーから遠く、同じガス惑星であるターメーンⅡの方が小惑星帯にも近く採掘の便が良いため放置されているようである。

まとめると、この恒星系はなかなかに資源の豊富な恒星系であるということである。こういった恒星系では様々な規模の商船や採掘船が活動するので、宙賊どもも獲物に事欠かない。つまり、傭兵の仕事にも事欠かないというわけだ。

もう一つ傭兵の仕事に事欠かなそうな要素があるのだが、先にこの恒星系を支配している宇宙帝国について説明しよう。

この恒星系を支配している宇宙帝国の名はグラッカン帝国という。皇帝とそれに従う貴族階級によって国家が運営されており、国家としての勢いはなかなかのもののようだ。

ここ数年で元から仲の悪かった隣国のベレベレム連邦との対立が表面化してきており、国境付近での小競り合いが絶えないようである。

これがもう一つの『傭兵の仕事に事欠かなそうな要素』というやつなのだが、このターメーン星系というのはグラッカン帝国とベレベレム連邦の国境に非常に近いというか、まさに国境にある恒星系なのである。

「このままこの星域にいたら紛争に巻き込まれるな」

間違いない。絶対に巻き込まれる。傭兵としては稼ぎどころなのだが、正直この世界のことが右も左もわからない状況で紛争に参加するのはあまりにもリスキーだ。

紛争に参加するということは、宇宙帝国の正規軍相手に戦うということである。ボロい艦艇しか持っていない宙賊相手に戦うのとはわけが違うのだ。

「とっとと他の恒星系に飛ぶか？　それもなぁ……」

先の一件でどうもあのセレナ様に目をつけられたっぽいんだよなぁ。向こうからなにか接触があるわけではないが、たまに船外の様子を探ると警備隊の隊員らしき軍人がこの船を監視するように眺めていることがあるし。

慌ててこの恒星系を後にしたらどうにも悪いことが起こる予感しかしない。ここは傭兵らしく暫く宙賊退治でもして過ごすなりしてほとぼりが冷めるのを待ったほうが良さそうだ。

「それにしても……」

銀河地図（ギャラクシーマップ）を眺めて唸る。俺の記憶にあるステラオンラインに存在した星系の名前をいくつか入力してみたのだが、ギャラクシーマップ上ではそれら星系が検索にヒットしないのだ。

その他にも色々と調べてみたのだが、どうにも妙な感じなのである。例えば、シップメーカーや流通している船の性能、その他装備やアイテム類などはステラオンラインにも存在したものが多くある。俺の持っている知識もそのまま通じるものが多い。

しかし、一方で俺も見たことがない船やアイテムなども流通しているようだ。

そして、一番の問題が各地の地域勢力である。例えばこの星系を支配しているグラッカン帝国なのだが、かなりの規模を誇る宇宙帝国であるようだ。しかし、俺の記憶ではステラオンライン内にグラッカン帝国という名前の宇宙帝国は存在しない。少なくとも、プレイヤーが探索している範囲内には。

ステラオンラインで冒険できる銀河は広く、未だにプレイヤー達は銀河中心部に到達していなかった。もしかしたら、ステラオンラインでは未発見の宇宙帝国――つまり、銀河の反対側とかに位置する宇宙帝国である可能性もあるのだが……それだとステラオンラインに存在するシップメーカーの船がこの辺りにも流通しているのは

おかしいような気がする。

「うーん……同じ世界なのかどうなのか」

この異常な状況下で俺が持つアドバンテージ。それはこのクリシュナと、ステラオンラインで培った経験や知識ということになるのだろうが、どうにもその経験や知識というのがどの程度役立つのかが測りきれない。

俺の知っている知識が余計な先入観となって致命的な失敗を犯す可能性も有り得る。今後、知っているはずの知識でも疑ってかかり、この世界においても知識通りなのかどうなのか、擦り合わせる癖をつけていったほうが良いかもしれない。思い込みというのは危険なものだ。

「……そろそろ食料の補充もしなきゃならんな」

この数日で船に元々積み込まれていた食料はほぼ食い尽くした。グラノーラバーのようなものとか、ジャーキーのようなものとか、缶詰だとか、あとは簡易調理器用のフードカートリッジだとか、そういった類のものだ。

フードカートリッジというのは栽培された藻を加工したもので、簡易調理器……簡単に言えば食べ物を作れる３Ｄプリンタのような機械に使うものだ。

元が藻だということが信じられないレベルで肉っぽいものや魚っぽいものを作り出す。美味くはないが、普通に食える。流石はＳＦ世界の調理マシンだな。

ちなみに、発生したごみや俺の排泄物はクリシュナの内部でリサイクル処理が成されてブロック状に圧縮され、コロニーに引き取ってもらうようになっていた。処理代金などは停泊費に含まれているらしい。

当然俺はそんなシステムを知らなかったので、回収に来た職員の人に教えを乞う形になって変な顔をされた。こいつはこんな常識も知らんのかと。すまない、本当にすまない。流石にステラオンラインにはそこまでの描写は無かったんだ。

その辺りの常識に関してはネットワーク経由で色々と調べて学習した。まだ危なっかしい面はあるが、もう概ね大丈夫だと思う。

あと、じっくりとクリシュナの内外を探検してわかったことなのだが、俺の想像以上にクリシュナの居住性は悪くなかった。クリシュナは元々最大搭乗人数が五人の小型艦なのだが、艦内には一人部屋が一つ、二人部屋が二つあり、しっかりとシャワーやランドリー、キッチンに医務室などもあった。

クリシュナは元々軍用艦である。

軍の任務となれば搭乗クルーは数ヶ月、下手すると年単位を艦内で過ごし、作戦行動を行なうことも考えられる。この広大な宇宙をあちこち駆け回る際にはとにかく移動時間というものが長くなるからだ。

そういったことを考慮してクリシュナの居住性は高くなっているのだと思う。

ともあれ、食料品の買い出しをするためにコロニー内部に足を伸ばさなければならない。身支度を整え、小型情報端末と護身用のレーザーガンを携えて船を降りる。

レーザーガンはこれみよがしに見えるようにショルダーホルスターに収めて持ち歩くことにする。こうする事によって手を出したら危ないぞと周囲に示すわけだ。動物や昆虫の警戒色みたいなもんだな。

正直、試し撃ちもしていないのでどの程度信頼できるものかわからないのだが、マニュアルはちゃんと読んでおいたので扱うのは問題ない。はずだ。整備の仕方は載っていなかったのでよくわからない。いずれガンショップにでも持ち込む必要があるかもしれない。

ステラオンラインにも白兵戦モードというものが存在し、パイロ

ットが直接レーザーガンやレーザーライフルで戦うモードがあった。
このレーザーガンはゲーム内イベントで行われた白兵戦大会で優勝した時に手に入れたものだ。性能もデザインも良いので気に入っている。
その他にも白兵戦時には装甲と火力を併せ持つパワーアーマーや戦車などの兵器を使って戦うモードもあった。この船のカーゴにもパワーアーマーが一機積んである。勿論最高級のカスタマイズ品だ。

「よし、行くか」

俺は昔取った杵柄でゲーム内では白兵戦で負けたことがなかったが、この世界でもそう上手くいくとは限らない。あまり無茶はしたくないものだな。

#005　エルフ！？　エルフナンデ！？（前書き）

今日はここまで。
ご主サバの方と順番に隔日更新していく予定です―（：3」∠）―
（少なくとも力尽きるまでは

#005　エルフ！？　エルフナンデ！？

「ほう……」

俺が寄港している貿易コロニー・ターメーンプライムはトーラス型……いや、ドーナツ型と言ったほうがわかりやすいか。ドーナツ型のコロニーである。

コロニーは常に回転しており、それによって生み出される遠心力で擬似的に重力を生み出しているようだ。遠心力で重力を生み出しているので、ドーナツの輪の外側が地面ということになる。

「うーむ、これはなかなか」

ある方向に視線を向けると、上り坂のように地面が果てしなく続いているのが見える。空を見上げれば遥か彼方にガラスのような素材でできた天井と、その先に見える宇宙やドーナツ状のコロニーの中央部分に見えるハブが見える。地上からは一定間隔で何本もハブに向かってエレベーターが伸びており、その様はまるで自転車のタイヤのスポークのようだ。

このスポークのように伸びるエレベーターやドーナツ状のコロニーの中心部にあるハブの存在も考えると、このコロニーはドーナツ型というよりは自転車のタイヤ型のコロニーとでも表現するほうが正しいのかもしれない。

「うむ、よし」

コロニーの光景というものを思う存分堪能したので、適当にぶらつき始めることにする。周りの人には変な目で見られたが、いちい

ち気にしてはいられない。俺にとっては見るものの大半が初めてのものばかりなのだ。

とはいえ、あんまりおのぼりさんムードを出しすぎるのも良くはない。このコロニーの治安の良さは『普通』だ。俺が元々住んでいた場所、即ち日本の治安をこの世界の治安の基準に当てはめると『最良』である。よそ者の俺がレーザーガンによる武装を許される時点でこのコロニーの治安の良さなんぞお察しというものだ。

しかも、よそ者の俺が立ち入ることのできる区画は第三区画と呼ばれる区画だ。スラムとまでは行かないが、治安のあまりよろしくない区画であるらしい。あまり長居はしたくないが、さてどうしたものか。

こちらに視線を送っていたちょっと雰囲気が野卑な感じの男達――有り体に言ってチンピラ達が何人か居たが、俺が脇に吊っているレーザーガンを見て関わるのをやめたようでつまらなさそうな顔をしながら路地裏へと消えていった。やはりこれ見よがしなレーザーガンは十分に効果を発揮してくれるようである。

「ハイ、新人（ニュービー）。良い銃持ってるわね」

レーザーガンの威嚇効果を実感して内心で胸を撫で下ろしていると、後ろから声をかけられた。

振り返ってみると、そこに居たのは銀髪の美女である。なんというか、見たこともないくらいの美人だ。目鼻立ちは異常なレベルで整っており、髪の毛は色素が非常に薄く、透き通るような銀髪のショートボブだ。身体つきは小柄だが、しっかりと肉はついていて華奢な印象はあまりない。

何より目立つのはその銀髪の間からぴょこんと横に飛び出した尖った耳だ。エルフ？　宇宙にエルフ？　ＳＦかと思ったら唐突にファンタジーぶっこんでくるね？　ステラオンラインにはこんな奴は居なかったように思うが……？

いや、でもよく考えてみればＳＦっぽい世界に耳の尖った人間似の異星人、なんてのは定番と言えば定番か。別に騒ぐほどのものでもない。

そして服装は……なんと言ったら良いのか。軍人っぽいようで少しラフな感じ。

エルフなのに肌の露出が多いわけでも、ひらひらした服を着ているわけでもなく、俺と同じような丈夫そうなズボンに地味な色の無地のシャツ、丈夫そうなジャケット。ヒップホルスターには俺のものよりは小型のレーザーガンらしき銃。

「何よ？　人のことをジロジロと」

「いや、いきなり知らない人に声をかけられたら警戒するでしょう。常識的に考えて」

「そう言われればそうね？　でも、私は怪しい者ではないわよ。見ればわかるでしょう？　貴方と同じ傭兵よ！」

そう言って傭兵風銀髪エルフがドヤ顔で胸を張る。胸のボリュームは……ははは、自慢するほどのものではないように見えるな。無いわけではないようだけど。この世界はエルフの胸が貧しい世界線なのだろうか？　いや、この残念そうな宇宙エルフだけを見て判断するのは早計というものだな。

「ちょっとアンタ、どこ見てんのよ？」

俺の視線に気付いた残念宇宙エルフが両手で自分の薄い胸を隠すようにして不機嫌そうな視線を向けてくる。

「自慢げに反らされた貧相な胸を見ていますが、何か？」

「何か？　じゃないわよ。なかなかイキの良い新人ね」

残念宇宙エルフが据わった目で俺を睨みつけながら獰猛な笑みを浮かべる。流石に怒らせるのは危なそうだ。こいつもレーザーガンを持っているし。

「それにしても、よく俺が新人だとわかりましたね？　なにか目印でも？」

「まず、その歯の浮くようなわざとらしい言葉遣いをやめなさい。鳥肌が立ちそうだわ」

「了解。それで？」

「まず、アンタのなりと脇のレーザーガンで傭兵だっていうのはひと目で分かるわ」

「なるほど」

確かに。よく見れば俺や目の前の残念宇宙エルフのように妙に丈夫そうなズボンやジャケットを着ている住人は見当たらないな。皆さして厚くもない生地の身軽そうな服を着ている。改めて見てみると俺達の格好は周りから浮いているな。

「そして、妙にキョロキョロしたり、コロニーの風景を感心したように見たりしていたでしょう？　今まで一度も自分の居留地から出たことがないやつの特徴的な行動の一つね」

「なるほど、残念宇宙エルフさんは頭が良いな」

「今なんつったお前」

「ナンデモアリマセンヨー。で、その頭の良い先輩傭兵さんは一体何の用で？」

一瞬本気の殺気のようなものを飛ばされた気がする。やはり貧乳相手に事実を指摘するのは危険だ。気をつけよう。

「……ふん、まぁ良いわ。私はね、暇なのよ」

「はぁ？」
「星系警備隊がきな臭い動きをしているのはわかっているんだけど、何の通達もなくて暇なの。何かありそうだからコロニーを離れるとバカを見そうだし、だからってこのコロニーには面白いものもないしね。だから、暇なの」
「……それで？」
「それでブラブラしてたらいかにも新人（ニュービー）って感じの坊やが歩いてるじゃない。だから、からかって遊ぼうと思ったわけ」
「なるほど」

わかるようなわからんような。まぁ、折角向こうから話しかけてきてくれたんだから利用するとしよう。俺は情報を手に入れられる。向こうは時間と暇を潰せる。まさにＷｉｎ-Ｗｉｎな関係だな。

「じゃあ暇潰しに俺を食料の買える場所に連れて行ってくれよ、先輩」
「えー、どうしようかしら？　ここのフードショップはお酒も置いてないし、面白くないのよね」
「酒？　酒ねぇ……」

そう言えば、宙賊の船から回収した醸造酒のコンテナが船のカーゴに入ったままだな。売っても大した金にはならないし、俺も酒は嗜まないし……使い所だな。

「俺の船のカーゴに宙賊からかっぱらった醸造酒のコンテナが一つあるんだ」
「へぇ？　それで？」
「それをやるから俺を食料品店に連れてってくれ。あと、俺の質問に答えてくれたり先輩としてのアドバイスをくれたりすると嬉しいな」

「ふむ……」

残念宇宙エルフは考えこむかのように小首を傾げ、少ししてから頷いた。

「良いでしょう。暇も潰せそうだし、それでお酒が飲めるようになるなら悪くないわ。貴方に教えてあげるわ、傭兵の常識ってやつをね。この『先輩』の私が！」

なんだか妙に先輩という部分を強調するな、この残念宇宙エルフ。まぁ、こちらとしては先輩風を吹かされるくらいなんでもないので気にもならないけれど。見た目は良いし、反応も面白そうな女の子だからな。

「ＯＫＯＫ、じゃあそれで商談は成立だな。ええと、確か取引は端末でできたよな。登録するからＩＤをくれ」

「良いわ。悪用したらブロックするからね」

互いに小型情報端末を取り出して通信用のＩＤを交換する。どうやら彼女の名前はエルマという名前であるらしい。ＩＤを交換したので、これで端末を操作して船から船への物資トレードが可能になる。

「ふーん、ヒロね。随分とシンプルな名前じゃない」

「ほっとけ。そういうあんただってエルマってシンプルな名前じゃないか」

「私のほうが一文字多いわ」

「そっすね」

なんでこの子はいちいち張り合ってくるのか。何故か俺が認める

とドヤ顔するし。もしかしたら寂しがり屋の構ってちゃんなのかもしれない。
　早速端末を操作し、カーゴ内にある醸造酒のコンテナをエルマの船へと送る手続きをする。すぐに手続きは承認され、醸造酒のコンテナはエルマの船へと移っていった。

「これ、どういう仕組みで物資が移動するんだろうな」
「知らないの？　接続しているハンガーを通してコロニー内の物資輸送システムにアクセスできるようになってるのよ。物資輸送システム経由でお互いの船と物資をやり取りできるってわけ」
「ほー、なるほど」

　どうやらこの宇宙時代では船からの荷の積み下ろしなどは全て自動化されているらしい。人間が自らの手で荷の積み下ろしをしたりするのはとっくに廃れてしまった仕事であるようだ。

「エルマは傭兵歴はどれくらいなんだ？」
「五年よ。この世界で五年はベテラン扱いね」
「ほーん、そうなのか」

　傭兵歴五年ということは、テスラオンラインのサービスが開始されるよりも前から彼女は傭兵であったというわけだ。そういう意味でも確かに彼女は俺よりも先達で、先輩なのだろう。

「なるほど、本当に先輩だな。よろしく頼むよ」
「急に殊勝になったわね？　まぁ、年長者を敬うのは良いことだわ」
「年長者？」
「私、これでも五十三歳よ？」
「……若作りだな？」

どう見ても二十歳にもなっていない少女にしか見えないのだが。

「アンタ達ヒューマンよりも長生きなだけ。アンタたちってどんなに長生きしても一五〇歳くらいまでしか生きないじゃない。私達は少なくとも五〇〇は生きるんだからね」

「なるほど、種族差なんてものがあるわけか……傭兵歴五年ってことは、四十八歳から傭兵を始めたんだな。それまではどんな生活をしてたんだ？」

「べ、別にどうだって良いでしょ！？　傭兵の過去を詮索するのはマナー違反よ！」

俺の質問にエルマは慌てながらそう言って、俺に人差し指を突きつけてまくしたててくる。どうやら聞かれたくない話題であるようだ。俺はえらい剣幕で怒る彼女に降参の意を示すように両手を挙げた。

「わかった、それを聞くのはやめるよ。興味本位で聞いて悪かった。でも、そんなに慌てると聞かれると都合が悪いって言っているようなものだぞ？」

「むぐっ……わ、わかったなら良いのよ」

よほど都合の悪い何かがあるらしい。あまりつついてへそを曲げられたら困るので、迂闊に触れないようにしよう。

気を取り直して歩き始めるエルマの横に並び、傭兵としての心得を聞き出すことにする。残念宇宙エルフという印象があったのでどんな突飛なことを言ってくるのかと実は少し身構えていたのだが、話の内容そのものは実に堅実なものだった。

「依頼を受ける時は必ず傭兵ギルドを通すこと。トラブルが嫌なら尚更ね」

「傭兵ギルドねぇ。そういや登録しないとなぁ」
「はぁ！？　アンタ新人（ニュービー）の上にモグリなわけ！？　食料品なんかよりも先に傭兵登録をしなさいよ！」
「あ、はい。すみません」

意外と強い力でジャケットの裾を掴まれ、引っ張られながら来た道を戻る。どうやらハンガーベイに続くエレベーターのあった場所のすぐ近くに傭兵ギルドの事務所があったらしい。エルマはプリプリと怒りながらモグリの傭兵というものがいかに危険な立場なのかということを説明してくれる。
曰く、傭兵ギルドに登録していないモグリの傭兵というのは下手をすると賞金がついてないだけの賊と同等の扱いをされることがあるらしい。場合によっては入港を拒否されることすらあるということだ。

「世知辛いなぁ」
「当たり前でしょうが！　どこの組織にも属してない放浪者が一撃でコロニーやステーションに致命的な損傷を与えかねない船を乗り回してたら警戒されるに決まってるでしょ！　今までよく無事だったわね！？」
「いやー、そこは聞くも涙、語るも涙の複雑な事情があってなぁ」

そんなことを言っていると俺はエルマに引きずられて傭兵ギルドの事務所に辿り着いた。事情の説明はまた今度だな。
それにしても、俺の頭の中で想像していた傭兵ギルドの事務所より百倍は綺麗な建物である。
よくわからない光沢のある材質でできた床に、明るい照明。待合用のものか、背もたれのないクッション付きのスツールがいくつも並び、その奥にはカウンターがいくつか見える。
各カウンターの案内板が天井からぶら下がっていて、施設内の人

はまばらだ。あまり繁盛はしてないのかな？

「なんか傭兵ギルドの事務所ってよりはお役所みたいだな？」

「似たようなもんよ。ほら、受付に行くわよ」

「へい、姐御」

俺はエルマ先輩に引きずられて受付へと向かうのだった。

#006　傭兵ギルド（前書き）

ファンタジー要素はそのうち出てきます、多分―（∵3」∠）―

#006　傭兵ギルド

受付に向かうと、そこに居たのは古傷だらけの厳つい男性だった。左腕がいかにもメカニックな感じの義手だ。なんというか、いきなり傭兵ギルドっぽさが出てきたな。

「あん？　なんだ？」
「新人よ。こいつ、傭兵ギルドに登録もせずにモグリやってんの」
「はぁ？　モグリぃ？　たまに話には聞くが、俺も見るのは初めてだな。兄ちゃん、そこに座りな」
「アッハイ」

言われるがままにカウンター席に座る。厳ついおっさんめっちゃ迫力ある。元の世界で出会ったら絶対に関わり合いになりたくない顔だ。確実にヤのつく危ない職業の人にしか見えない。

「モグリってことは船は持ってんだよな？　シップネームとＩＤ教えろ、ここのハンガーに停めてんだろ？」
「はい」
「ぷふっ、ビビって借りてきた猫みたいになってるの面白いわね」
「うっせ」

口許に手を当ててプークスクスって感じで笑っているエルマを睨みつけるが、全く堪える様子がない。クソッ、仕方ないじゃないか。このおじさんどう見ても怖いよ！
顔の怖い受付のおじさんは俺が伝えたシップネームとＩＤをタブレットのようなものに入力し、暫く操作をする。

「なんだぁ？　どこの船だ、こいつは。見たことがねぇな」
「あー、出処はちょっと。盗難船じゃないことは保証するけど」
「いや、そりゃわかるがよ……まぁ、過去のことを詮索するのはマナー違反だな。四日前に宙賊を三匹ほど狩ってるみたいだが、それだけか？　というか、おめーの寄港記録がどこにもねぇんだが」
「ハイパードライブ中の事故か何かでこのコロニーの近くに飛ばされて来たみたいで、実のところその影響で記憶も定かじゃないし、この辺りがどこなのかもわからないんですわ、これが」
「マジかよ？　あー……まぁ、問題ねぇだろう。賞金もついてねぇし。ああ、別に言葉遣いに気をつけなくても良いぜ。そんな話し方してたら他の連中に舐められるぞ」
「お、おう」

こんな厳つい顔のおっさんにタメ口を聞くのは勇気が要るんですけど……。

「そうよ、傭兵なんて舐められたら終わりなんだから気をつけなさい？　それにしても、相変わらずゆるいわねー」
「嬢ちゃんも知ってるだろ。傭兵の過去の詮索は無用だ。今賞金がかかってなくて、船を持ってるなら問題ねぇ」

二人の会話を聞いていて疑問が浮かんだ。なので、早速質問をぶつけてみることにする。

「あー、その。船って安いもんじゃないだろ？　その条件だと今日から傭兵になろう！　と思ってすぐに傭兵になれるような奴ってそういないんじゃ？　どうやって会員数を確保してるんだ？」

俺の疑問は当然だと思う。この世界の物価は概ね調べてみたが、まともな武装を積むことのできる船を買うためには最低でも五〇万

エネルくらいの金が必要になる。日本円に直すと五〇〇〇万円くらいだ。この世界の人々の平均年収などは調べてはいないのだが、物凄い大金であるのは間違いない筈である。

「退役軍人の第二の人生ってのが多いな。あいつらは高給取りだし、腕も良い。戦いを求めて傭兵という第二の人生を選ぶやつも多いぜ。あとは金持ちの道楽ってパターンもある」

「他には傭兵の養成学校ってのがあるのよね？」

「おう、この辺りの星系にはねぇけどな」

「意外と狭き門なんじゃないのか？」

「まぁな。それでもこの銀河は広いからな。需要を満たすだけの数は揃えられるってわけだ」

つまり、母数が多いからそれなりの数が揃うってことか。それともそんなに傭兵の仕事なんて無いってことなのだろうか？　うーん、わからん。わからんがそういうものなのだと納得しておこう。

「登録の準備は出来た。後はテストだな」

「テスト？」

「おう。お前がどの程度の腕前かわからなかったらどんな仕事を回したら良いのかわかんねぇだろうがよ？」

「そいつはご尤も。だが、どうやって？」

「訓練用のシミュレーターがある。そいつでやってもらうぞ」

「ＯＫ」

受付のおっさんが事務所の奥に声をかけ、席から立って俺とエルマを別室に誘導する。なんでエルマもついてくるのだろうか？　俺の視線に気付いたのか、エルマがニヤニヤと笑った。

「私が連れてきた新人の腕がどんなものか見るくらいの権利が私に

はあると思うわ？」
「さいですか」
まぁ、エルマのおかげでスムーズに傭兵ギルドで登録が進んでいるわけだし、別に腕を見られることに否やはない。寧ろ、どの程度のものなのか傭兵歴五年のベテランに見てもらえるのは好都合だろう。評価を聞ければ自分がどのくらいの腕なのかということをより具体的に知ることができるはずだ。
「ここだ」
シミュレーターの設置されている部屋は思ったよりも大きかった。室内には軽トラック大のシミュレーターと思しき筐体がいくつも並んでいる。というか、まるでこれは船のコックピットだけ切り出してきたような感じだな。
「自分の船のコックピットに近いものを選んで乗り込みな」
「あいよ」
船のコックピットというのはやはりそのメーカーによってかなりデザインが違う。操作系が違うと言っても良い。なので、殆どの船はコックピットブロックに互換性があったりする。つまり、コックピットブロックだけを切り離して他の船につけられるようになっているのだ。
この機能はステラオンラインにもあったので、俺にも馴染みが深い。
「これだな」
「ほう、軍用のハイエンド品じゃないか。よし、じゃあ用意してくるから準備を済ませておけ」

俺の選んだコックピットブロックを見て少し感心したような声を上げておっさんがどこかに行く。きっとシミュレーターをオペレートするための装置がどこかにあるんだろう。エルマもいつの間にか見当たらなくなっていた。どこかでモニタリングでもするのかね。

☆★☆

『では評価試験を始める』
「了解。試験用の機体のデータはどうなってるんだ？」
『お前の機体のデータをそのまま持ってきてある。実機とほぼ同じように使えるはずだが……おいおい、なんだよこりゃ』
「何か？」
『何かって、この機体データは……お前、使えるのか？』
「クリシュナのデータなら大丈夫だと思うが」

何か変なのだろうか？　まぁ、この世界でクリシュナがどういう評価をされる機体なのかわからんのだよな、実際のところ。ステラオンライン基準で考えると相当強い機体に仕上がっている筈なんだが。

『まぁ、いい。お前の機体をお前が操ってどの程度の腕なのかを評価する試験だからな。テストの内容は単純なものだ。敵性機体を全て排除しろ。お前以外の船は全て敵だ。最初は少ないが、敵は波状攻撃を仕掛けてくる。どんどん質が上がって量も増えるぞ』
「了解」
『ではテストを始める。機体を起動しろ』

コックピット内が暗くなり、最低限の明かりだけが灯った状態になる。未起動状態からの操作を全て追うわけか。

俺は慣れた手付きでメインジェネレーターを起動し、即座にジェネレーター出力を戦闘モードまで引き上げる。それに応えるかのようにクリシュナを模した機体のシミュレーターが起動し、周囲に宇宙空間が広がった。実にリアルな光景だ。シミュレーターといっても滅茶苦茶リアルだな。

『所属不明艦出現、武装オンライン』

俺も武装をオンラインにしてレーダーに感のあった方向に素早く機体を向ける。そして一気に加速。シートに強く身体を押し付けられる感覚が襲いかかってくる。

「うおっ、ちゃんと加速時のGも再現されるのか」

どんなトンデモ技術を使っているのだろうか？　まぁ、この世界がステラオンラインと同じそれなのであれば重力発生装置とかも実在するはずだし、その辺りの技術が使われているのだろう。

目標と思しき標的はノロノロと航行しながらこちらに向かって機首を向けようと旋回をしているようだ。俺はその横っ腹に食いついた。

船体から展開された四本の武装腕がその照準をピタリと敵機へと向ける。スティックのトリガーを引き絞ると、四本の光条が標的へと殺到し、一撃でその船体を貫いた。一拍置いて標的の船が爆発四散する。

「脆いなぁ」

動きも遅かったし、見た感じカーゴ容量の大きい小型輸送船タイプの船だった。こんなものか。

その後も次々と敵船が現れるが、どれも弱い。遅い。脆い。こん

なのは的当てと変わらない。これじゃあ俺の実力を見ることなんて出来ないと思うんだが。

『あー、新規入会者用の評価プログラムだと話にならんな』
「機体の性能差が酷すぎるんじゃないか」
『それもそうなんだが……ちょっと別の評価プログラムに変えるぞ』
「了解」

次の評価プログラムも試してみた。確かにさっきよりはマシだが、まだ遅い。弱い。四日前に爆発四散させた宙賊とそんなに変わらないな。

「弱すぎて歯ごたえが無さすぎるんだが」
『いや、お前な……これ、ベテラン用の訓練プログラムなんだが』
「ははは、ご冗談を。もっと難しいのがあるだろう？」
『あるけどよ……これは流石に無理だと思うぞ』

今度はなかなか歯ごたえがあった。最初から一〇機以上の宙賊船が一斉に襲いかかってくる上に、武装の威力も高い。しかし高威力の実弾武器と爆発兵器に注意すればなんてことはないな。肝心のレーザー砲の威力が弱くてシールドがびくともしないからそんなに怖くない。最後に出てきた軽巡洋艦級はなかなか歯応えがあったな。死角に突っ込んだら後はずっと俺のターンだったが。

「ちょっと歯応えがあったな」
『うっそだろお前』

おっさんが呆れたような声を上げている。もしかして、今のが最高難易度だったのだろうか？

『あー、その。なんだ。試験は終了だ』
「了解」

思ったより簡単だったな。一体どういう評価を下されるのか……
まぁ、おっさんの反応からすれば悪いということはないだろう。
手早くジェネレーター出力をカットし、シミュレーターを停止してコックピットの外に出る。シミュレータールームの出口に行くと、なんとも言えない表情をした受付のおっさんとエルマが待っていた。腑に落ちないとでも言いたげな表情である。

「試験の結果は？」
「あー、カウンターに戻ってから話す」

なんだか奥歯に物が挟まったような物言いだな。別に結果くらいここでパッと言えばいいだろうに。エルマもなんだか知らんが俺の顔をジロジロと見てくるし。一体全体何だというのだろうか？
内心首を傾げながら二人の後をついて行き、元のロビーに戻ってきた。

「えー、まずは試験の結果なんだが」
「ああ」
「合格だ」
「それは良かったが、なんでそんなに微妙な表情なんだ」
「傭兵にはな、ランク制度がある」
「ほう？」

よく異世界ものの小説とかで見る冒険者ランク的なやつだろうか？　いきなりAランクとかSランクになっちゃうのか？　俺。
「コンバットランクというものなんだが、その傭兵の戦闘能力を端

的に表すものだな。アイアン、ブロンズ、シルバー、ゴールド、プラチナの五つのランクがある。アイアンが一番下で、プラチナが一番上だな」
「なるほど、それで？」
「お前がさっき最後にやった試験な、ゴールド昇格用のヤツなんだわ」
「なるほど？」
「でもな、いくらゴールド昇格用の試験とはいえ、いきなりお前をゴールドにすることはできん」
「わかる」

いきなり上から二番目のランクになるとかやりがいも無いしな。このランク制度というのはステラオンラインには存在しない要素だったから、ランクを上げる楽しみは取っておきたいところだ。

「実績がないとな。わかるだろ？」
「わかる」
「だからな、とりあえずお前はブロンズだ。暫定的に。さっきやったシミュレーターのデータを上に上げて、その後でランクが確定すると思ってくれ」
「いきなりゴールドはやめてくれよ。ランクを上げる楽しみがなくなるから」
「そ、そうか」

なんか引かれてる気がする。エルマはなんか不機嫌そうな顔で刺々しい視線を俺の頬に突き刺し続けてるし。なんですか、やめてくださいよ。僕はいたいけな新人ですよ？　もっと優しくして。

「とりあえずランクは仮だが、正式に傭兵として登録はしたからな。これからは傭兵ギルドが後ろ盾になると同時に、お前は傭兵ギルド

の看板を背負うことになる。努々それを忘れることのないように」
「会員の規約とかそういうの説明無いんですかね」
「めんどくせぇから自分で読んどけ。メッセージで送っとくから」
「雑だなおい」

今すぐ必要なものじゃないだろうし、いいけども。今晩にでもゆっくり読んでおこう。

「それで、偉大なるエルマ先輩は何故そんなに機嫌が悪いので？」
「シルバー」
「え？」
「私、五年でシルバーなんだけど」
「あ、ええと？」

おっさんに視線を向けると、おっさんは俺から視線を逸らしながらこう言った。

「多分お前、シルバーになるぞ」
「あっ……ふーん」
「がるる……」
「俺のランクが何になってもエルマ先輩は先輩ですから！　ほら、俺エルマ先輩が居なかったら今でもモグリだったし！　今も右も左もわからないし！　食料品店の場所もわからないクソ雑魚ナメクジだし！　エルマ先輩頼りにしてますよほんと！」
「そ、そう？　ならいいのよ。ほら、今度こそ食料品店に行くわよ。この『先輩』が貴方に教えてあげるわ」

残念宇宙エルフは俺のあからさまな褒め殺しで機嫌を直してくれた。なんてちょろいんだ。

「すごいなー、あこがれちゃうなー」
「このコロニーのマップなら……」
「俺達はこれで！」

受付のおっさんが何か言おうとするのを視線で止めてこの場を後にする。やめろよおっさん。また機嫌を損ねられたら面倒だろう。
あれ？　いや、マップがもらえるなら問題ないのか？
深く考えるのはやめよう、うん。

#007　宇宙時代の食料品店（前書き）

隔日更新と言ったな？　あれは嘘だ！（，　。ω　。、）（ストックに余裕があるので

#007　宇宙時代の食料品店

食料品店への道すがら、エルマがこのターメーン星系についての傭兵としての蘊蓄を語ってくれる。このターメーン星系は交易船や資源採掘船を狙った宙賊がそれなりに多く、ベレベレム連邦との国境に近い位置にあることもあって傭兵達の間でホットなスポットとして注目されつつある場所であるらしい。

「それでこの恒星系には傭兵が集まりつつあるってわけ。というか、あんたそんなことも知らないでこの星系にきたの？」

「いやー、さっきも話したけど、事故ってこの恒星系に飛ばされてきた挙げ句、生命維持装置にも一時的にエラーが発生したのか記憶が曖昧でな。幸い、船は無事だったんだが」

勿論、記憶が曖昧というのは嘘である。別次元から飛んできましたとか言っても頭のおかしいやつ扱いされるのがオチだし、この世界の常識に今ひとつ疎いことに関しても言い訳がつくからそう言っているだけだ。

「ちょっと、大丈夫なの？　そういう事故が後に祟っていきなりぽっくり逝くやつとかいるらしいわよ？　医療系のステーションに行って一度診察を受けたほうが良いと思うわ」

「マジか。それも真面目に検討しておこうかな」

俺が本当に生命維持装置のエラーで記憶が曖昧になっているならエルマの言う通りだな。そうでないにしても、異なる次元から転移か何かしてきた（と思われる）現状、一度本格的な精密検査は受けておいても良いかもしれない。医療系のステーションに行って精密

検査を受けるというのを目標の一つとして設定することにしよう。
そんなことを考えていると、すぐ横を歩いていたエルマが前方を指差して声を上げた。
「ほら、見えてきたわ。あれが食料品店よ」
「あれか？」
前方に『Ｏｉｓｈｉｉ　Ｍａｒｔ』とでかでかと掲げられた看板が見えてくる。おいしいマート……なんというか、物凄くわかりやすい名前だな。
「安直な名前だな」
「そう？　なんでも古語らしいけど」
「そうなのか」
どの部分が？　という疑問は湧くが、深くは突っ込まないでおく。『おいしい』の部分だろうか。まぁ日本語なんて使われていないようだし確かに……うん？　俺は日本語で話しているよな？　なんでまたこの世界の人間と普通に意思疎通できているんだ？
エルマに聞いてみると、まともな文化圏に属している知的生命体なら何らかの方法で他の知的生命体と意思を疎通するための『処置』が施されているはずだから当たり前だという。
「あんた、そんなことも忘れてるわけ？」
「どうやらそのようだ」
「本当に大丈夫なの？　あんた。本気で心配になってきたんだけど」
残念エルフに不憫なものを見る視線を送られた。なんたる屈辱。
「まぁいいわ。ほら、入るわよ」

「あいよ」

店に入って、店内を一通り見回してみる。缶詰にシリアルバー、チューブタイプの栄養食にフードカートリッジ、食い物なのかどうかも判別のつかない謎の物体に、気味の悪い生物のホルマリン漬けのようなものまで。実に様々な商品が所狭しと置かれている。

「色々あるな」

「そうね。何を買うの？」

「何が良いんだろうな。おすすめは？」

「調理器があるならフードカートリッジを買っておけば良いんじゃない？　予算に余裕があるなら、人造肉とかも扱ってるわよ」

「人造肉」

「そうよ。知らない？　効率的に培養されたタンパク質ね。普通の食品よりもかなり高く付くけど、味は良いわね」

「普通の肉とか野菜は？」

「そんなの一部の大金持ちが食べるものでしょ。いくら稼ぎの良い傭兵でもそんなものは常食してないわよ」

「そういうものなのか」

どうやら家畜の肉や栽培された野菜などは高級品であるらしい。それもそうか。宇宙に浮かぶコロニーで牧畜なんてのはいかにも効率が悪そうだ。

と、そんなことを考えているとエルマがなんだか怪訝な表情でジロジロと俺の顔を眺めていた。

「普通の肉や野菜なんて言葉が当然のように出てくるってことは、あんた金持ちのボンボンか何かなわけ？」

「んなこたぁ知らんよ。記憶があやふやだしな。だが、そう見えるか？」

両手を広げて見せると、彼女は納得してるわけではなさそうだが首を横に振った。

「見えはしないわね。腑に落ちないけど」

「ならそういうことだろ」

他にもエルマのおすすめを聞いて食料品を選んでいく。水の注文もここでできるらしい。少し値が張るが、人造肉とやらも買ってみた。その他にはフードカートリッジをメインに、保存の利くシリアルバーのようなものやチューブタイプの流動食のようなものも買った。ジャーキーのようなものもオススメらしい。

「缶詰は？」

「おすすめしないわよ。無重力の艦内で開けたら悲惨なことになるわ」

空けた瞬間に内容物が噴き出したり、水気のある汁などが飛び散ったりするらしい。シリアルバーやジャーキー類のような固形タイプのものか、チューブなどに入った半液体状の食品がオススメだという。

「うーん……炭酸飲料って無いのか？」

「炭酸飲料？　なにそれ」

「えっ。いや、コーラとかソーダとか……甘くてシュワッとする至高の飲み物だけど」

「？？？」

エルマが首を傾げる。どうやら本当に心当たりがないらしい。

「ジュース類はあるんだよな？」
「ええ、色々なフレーバーのものがあるわね」
「それに炭酸――二酸化炭素を添加して飲み口をシュワっとさせたものなんだが」
「そんなもの、聞いたこと無いわよ？」
「なん……だと……！？」

この世界には炭酸飲料というものが存在しないとでもいうのか？
食料品店の店員にも聞いてみたが、申し訳ないが聞いたことがないと言われた。

「神は死んだ……」
「なに信仰を失って死にかけてるデイリー信者みたいなこと言ってんのよ」

まさかこの銀河に炭酸飲料が存在しないなんて……いや、待てよ？　確か炭酸飲料は宇宙船内ではまともに飲めないとかいう話をネットで見た事がある気がする。無重力が悪いのか、気圧の問題なのかはわからんが、それで廃れているのではないか？
ということは、まともに重力と気圧が働いている環境……コロニー内では何故ダメなんだ？　遠心力で作っている擬似的な重力だからか？　わ、わからん。俺の頭では推察すらできん。
だが、惑星上の居住地なら普通に飲めるのではないだろうか？
そういうところなら流通しているのでは？

「俺、惑星上の居住地に庭付き一戸建てを買うことにする」
「いきなりね……なんでその炭酸飲料とやらの話からそうなるのよ。惑星居住地なんて、滅茶苦茶高いわよ？　グラッカン帝国だと惑星居住地に土地を持てるのは上級市民権を持っている一等帝国民だけだし、土地とか市民権とか買うのに数億エネルするらしいわよ」

「ウッソだろお前。ホエール級の巡洋艦とか買える金額じゃないか」
「本当よ。前に帝国軍人から聞いたことあるし」
数億エネルね……くっ、あまりにも高い。だが、だが！　俺は炭酸飲料が飲みたい！
「目標は高く持たないとな」
「好きにしたら良いわよ」
エルマは呆れたように肩を竦めるが、俺にとっては死活問題である。水と食料の発注を済ませ、船に送ってもらうように店主に頼んだ俺は、とりあえず今から船に帰ってすぐ飲み食いする分の食料だけ包んでもらって店を出ることにした。ちゃっかりエルマの分も奢らされた。ジュース一本分だけど。

#008　少女（前書き）

これは本日投稿二話目だよ！―（：3」∠）―

#008　少女

「このエルマさんに案内をさせるんだからこれくらい安いもんでしょ？」

未知の素材で出来たボトルのようなものにストローを差しながら残念宇宙エルフがドヤ顔をする。

「そっすね」

と、食料品店を出てふと視線を横に向けると、とんでもないものが目に入ってきた。

「……っ！　やっ、やぁ……ッ！」
「大人しくしろよてめェ」
「ひひ……ようやく捕まえたぜ」
「ちょっと小汚くなってるが、まぁ使えそうじゃねぇか」
「早くヤっちまおうぜ。もう我慢できねぇよ」

今まさに路地裏に引きずり込まれそうになっている少女と、彼女を捕らえ、押さえつけて路地裏に引き込み、押し込もうとしている野卑な雰囲気のチンピラ達だ。会話の内容から、これから奴らがあの少女に『ナニ』をしようとしているのかを想像することは容易い。

「やめときなさいよ」

レーザーガンのグリップに手をかけ、足を踏み出そうとした俺のズボンのベルトが引っ張られる。予想するまでもない。俺を引き止

めた犯人はエルマだった。

「お前、あれを見捨てろってのか？」

「あの子、アンタの知り合いなの？」

「いや、違うが……」

問答をしている間に必死の抵抗をする少女が徐々に路地裏へと引きずり込まれていく。彼女の目が俺を捉えた。助けを求める視線が俺を貫く。

「なら関係ないでしょ。放っておきなさいよ」

「お前……」

「あんたね。あんなの銀河中のどこにだってよくあることよ。ああいうのを見かける度に首を突っ込むつもり？　命がいくらあっても足りないわよ。自分の面倒も自分で見られない奴は食い物にされるだけ。ここであんたが一時的に助けても、この先生きのこれないわよ」

彼女の意見はとてもドライで、とても正しかった。俺は神でもなければスーパーヒーローでもない。それこそ、自分で自分の面倒を見るのも覚束ない半人前の傭兵もどきである。

「あんたは英雄譚（サーガ）の英雄じゃないのよ。船を持っているだけのただの人だわ」

エルマが喋っている間にも少女は男達に抱え上げられ、路地裏へと消えていく。彼女の視線は俺を捉え続け、その手は俺に向かって伸ばされていた。だが、その手は決して俺には届かない。

「そうだよなぁ……」

エルマの言うことは正しい。
だが、それは本当に『俺にとって』正しいことなのか？
「とでも言うと思ったか！？　この冷血残念エルフが！」
それは断じて否である。ここで見捨てたりしたら寝覚めが悪いったらありゃしない。ふとした拍子にあの子のことを思い出して定期的にテンションがだだ下がりになること請け合いである。
そんなのは御免だ。
「ちょっ！？」
俺はズボンのベルトを掴むエルマの手を振り払い、荷物を捨てて路地裏へと駆け出した。ホルスターのレーザーガンを抜き、グリップの感触を確かめる。レーザーガンの出力は一応最小にしておく。
「観念しろってんだよ！」
「暴れるんじゃねぇ。痛くされないとわかんねぇか？」
「やっ……やぁ……っ」
「こんなのは一発ぶん殴れば大人しく――」
路地裏で少女を組み伏せているチンピラの一人が腕を大きく振り上げた。
俺はごく自然な動作でその腕に向かってレーザーガンの銃口を向け、引き金を引き絞る。
ビュンッ、と電子音じみた音が鳴り、赤い閃光が薄暗い路地裏を赤く染め上げた。それと同時に男の悲痛な声が響き渡る。
「ぎいいいっ！？」

俺の放ったレーザーは狙い違わずチンピラが振り上げた拳に命中した。銃なんて撃ったことも無いんだが、まぐれ当たりにしては思い通りにいったな？　ＦＰＳで培った経験が参考になるとは到底思えないんだが、上手くいく分には好都合だ。

「なっ！？」

動揺するチンピラどもに向かって俺は引き金を引く。何度も引く。その度に路地裏に赤い閃光が走り、男達の悲鳴が上がった。期待通り、威力を最低にすれば人を死に至らしめるほどの威力は出ないようである。

「いでぇぇぇぇ！」
「あっ！　あっ！？　あぁぁぁぁぁっ！？」
「アイィィィィ！？」

死なないだけでかなりの苦痛を伴うようだが。動けなくなられても困るので、程々に痛めつけたところで声を張り上げる。

「とっとと行け！　次は火傷じゃすまんぞ！」

チンピラどもは怯えた表情を見せながら這々の体で路地の奥へと消えていった。

後に残されたのはレーザーガンを手にした俺と、仰向けに壁に寄りかかり、衣服を乱された状態のまま驚いたような顔で俺の顔を見つめている少女だけだ。

俺は彼女の横を通り過ぎ、男達が逃げていった方向にレーザーガンを構えたまま彼女に声をかけた。

「俺が警戒してる間に服を直せ。路地から出るぞ」
「……っ！　はい！」

少女が泣きそうな声で返事をして、ごそごそと身繕いする音が背後から聞こえてくる。俺は銃口を路地の奥に向けたまま少女の様子を窺う。これが実はあいつらとグルで、いきなり背中を刺されましたとかだと笑えないからな。

特に心配したようなことも起きず、身繕いをした少女が俺の方を向いた。視線でこの路地に入ったきた方向に行くように指示すると、彼女は泣き腫らした赤い目をしたまま頷き、駆け足で路地の入り口へと向かった。俺もその後を追う。

「おかえり」

路地から出ると、俺が捨てた荷物を手にしたエルマが出迎えてくれた。顔にははっきりと呆れの表情が浮かんでいる。

「どうすんのよ、その子」
「どうするって……」

少女に視線を向けると、少女もまた俺に視線を向けていた。互いに見つめ合う。

こうしてみると少々薄汚れてはいるが、なかなかに可愛らしい顔立ちの少女だ。背は小さい。俺と頭一つ分半くらいは違うだろう。しかし体格の小ささに対して実装されている胸部装甲の厚さは冷血クソ残念エルフとは比べ物にもならない。ロリ巨乳という概念は創作の中にだけあるものだと思っていたのだが、実在するものであったらしい。

俺を見つめる瞳の色は明るいブラウンで、髪の毛も同じく明るい茶色だ。顔立ちは子犬系とでも言えば良いのだろうか？　美人とい

うよりは可愛らしいという感じだ。着ている服は薄汚れている上に先ほどのチンピラ共にやられたのか少しボロくなってしまっているな。

「見つめ合ってないで答えなさい」

「おう、何も考えてないぞ。先輩、どうするのがまずくて、どうするのが一番だと思う？」

「そうよね、何も考えてないわよね。聞いた私が馬鹿だったわ。それじゃあね」

エルマはため息を吐き、手に持っていた荷物を俺に押し付けると踵を返して歩き出した。なるほど、そう来るか。

「あーあー、エルマ先輩は後輩から報酬だけ巻き上げて中途半端に放り出す人だったのかー」

俺の言葉にエルマが立ち止まり、ピクリと長い耳を震わせる。

「仕方ないなー、そういう人だったと見抜けなかった俺が悪かったなー、偉大な先輩だと思ってたのになー」

言葉を続けると、ピクリピクリとエルマの耳が動く。もう一押しか。

「やっぱ貧乳陰険冷血残念エルフよりも傭兵ギルドのおっさんを頼るかー、後輩を見捨てるなんて見損なっちゃったなー」

「ぶっ殺すわよ」

ついに我慢しきれなくなったのか、物凄い速度で戻ってきて俺の胸ぐらを掴み上げた。おお、怖い怖い。

「流石エルマ先輩！　やっぱりエルマ先輩は後輩といたいけな少女を見捨てるような人じゃなかった！　凄いなー！　憧れちゃうなー！」
「わざとらしすぎるっての……はぁ、どうして私がこんな面倒事を……」
「良い暇つぶしになるだろ？　頑張れ♡　頑張れ♡」
「今すぐ口を閉じなきゃその舌を引っこ抜くわよ」
「サーセン」

俺が謝ると、エルマは溜息を吐きながら目を覆った。ははは、暇つぶしのために俺に声をかけたのが運の尽きだったな！　諦めてくれ。

「私の一番のオススメは無視されたのだけど、次の忠告は聞くのかしら？」
「それは内容次第ですなぁ。俺も彼女もニッコリな感じで良い感じによろしく」
「……」

物凄く嫌そうな顔をされた。そんな顔するなよ、美人が台無しだぞ。

「あんたの具体的なビジョンは？」
「俺の船に乗ってもらうのが良いんじゃないかと。身の回りの世話とか情報収集を任せようかなって」
「身の回りの世話ねぇ……あんた、こういう子が好みなわけ？」
「好み……？　可愛い子だとは思うよ」

口に出しては言わないけどおっぱい大きいし将来有望だと思いま

す。女の子に視線を向けると、なんだか祈るみたいに手を組み合わせてじっと俺を見上げてきていた。心なしか顔が赤いようだし、身体も震えているように見える。

「というか、今まさに襲われかけていたのに立ち話もなんだな。とりあえずどっか座って落ち着けるとこ行こうぜ」

「……あんたの奢りよ」

「アイアイマム。ほら、行こう。悪いようにはしないから。歩くのが辛かったら掴まっても良いぞ」

「……はい」

少女はコクリと頷くと、遠慮がちに俺の服の裾を摘んできた。もっとしっかり握っても良いんだぞ？　このジャケット頑丈そうだし、そう簡単には伸びないだろうから。

#008　少女（後書き）

ロリ巨乳も良いものだと思います。ふぁんたじー――（：3」∠）――

#009　札束ビンタ（前書き）

本日三話目ぇ！―（：3」∠）―

#009　札束ビンタ

エルマに案内されたのは傭兵ギルドと隣接した建物に入っているカフェのような店だった。なんとなくサン〇クカフェっぽい感じがする。

俺はカフェオレっぽい何かとサンドウィッチのような何か。エルマはカフェオレっぽい何か。少女は遠慮したが、俺と同じくカフェオレっぽい何かとサンドウィッチのような何かを俺が頼んだ。

「それで、あんた名前は？」

「あの……ミミです」

「あ、そういや名乗ってなかったな。俺の名前はヒロだぞ」

「あんたは黙ってなさい。ミミね。それで、アンタ何かできるの？船に乗って役に立つスキルは？」

黙ってなさいって酷い……自己紹介は大事だぞ？

「えっと……どんな事ができると良いんでしょうか？」

「……それだけでなんとなくわかったけど、一応教えてあげるわ。こいつは戦闘に関しては補助は必要ないから、それ以外ね。物資の手配や情報の整理、依頼人との交渉、傭兵ギルドとの連絡、離着陸時の港湾管理局への連絡、その他手続き諸々ね」

「どれも経験がありません……」

「そうでしょうね。となると身の回りの世話くらいしかできないわね。炊事、洗濯……それと、あんたは女だからこいつのシモの処理ね」

「ぶふっ」

唐突な下ネタに思わず口の中のものを噴き出した。下の処理ってお前！　こんな女の子にストレート過ぎるわ！

「きったないわね！？」

俺の正面にいたエルマが眦を吊り上げて怒る。いや、悪かったけどさぁ！

「おまっ、下の処理って何言ってんだ！？」

「何よ、こんな子を船に乗せるって最初からそのつもりだったんでしょ？」

何を今更、という顔でエルマがそう言う。ミミと名乗った少女の様子も窺ってみるが、彼女もそう思っていたのか、俺の反応に意外そうな顔をしていた。

「可愛いなぁとは思っていたし、あわよくば仲良くなりたいくらいには思ってたけどそこまでストレートに下半身直結で考えては無かったわアホ！」

「何よそれ。あんた随分ウブね？　やっぱり箱入りのお坊ちゃんなわけ？」

「そんなんじゃあないけど……というか何だ、それも常識ってやつなのか？　女が男の船に乗ったらそういうことをするってのは」

「対等な関係ならそうとは限らないわよ。でも、この子の場合はとてもじゃないけど対等な関係じゃないわ。そう扱われるのが当然ね」

それなんてエロゲだよ。ステラオンラインでそんな話なんて聞いたこともないぞ。

「いやいやいや、そんな馬鹿なことを強要する気は無いから。そん

な外道じゃないぞ、俺は」
「ふーん。まぁ別にそこは私には関係ない話ね。そう見られるのが常識だということをあんたが知っていれば問題ないわ」
「ぬぅ……」

ちらりとミミに視線を向けると、彼女は顔を赤くして俯いてしまった。いやいや、そんな反応しなくてもいいから！　そういうことは強要しないから！　そういう目的で助けたわけじゃないから！
声を大にして言いたいが、こういうことは言葉にするとかえって嘘臭くなる。黙って行動で示すとしよう。

「ミミ、あんたはどうしたいの？　というか、アンタはなんだってあんなとこほっつき歩いてたわけ？　あんたみたいないかにも擦れてない子があんなとこほっつき歩いてたらそりゃああなるわよ」
「それは……」
「何か犯罪でも犯して第三区画に逃げ込んでたの？　保護者は？」
「……」

保護者、という言葉を聞いてミミの瞳に涙が溢れ始める。あーあ、泣かすなよ……。
ミミはポロポロと涙を零しながら自分の身の上を話し始めた。よく有りそうな話だ。一般的な第二区画の家庭で幸せに育っていたミミだったが、ある日コロニーの酸素関係のインフラ整備を担っていた両親がまとめて事故死した。
どういうわけかその事故の責任が両親に押し付けられ、遺産の類はほぼ全て没収。まだ学生の身分でまともな働き口もないミミは第二区画居住者としての税を払えずに第三区画に放逐されてしまったという。

「えぇ……そんなんアリか？　セーフティネットとか無いの？」

「知らないわよ、そんなの。今重要なのはこの子には行く宛がないってことじゃない」
「それもそうだな……殆ど選択肢が無いわけか」

ミミが俺の船に乗らないという選択肢を選ぶということは、即ち身一つで再び第三区画に戻るということである。今日と同じような事が起きれば次もまた無事に済む可能性は絶無であろう。

「あの、お願いします……私、なんでもしますから。お兄さんの船に乗せてくださいっ」

ミミが泣き晴らした顔で必死に頭を下げる。

「うん、わかった。なんとかするから心配するな。だからほら、サンドイッチ食え。まともに食べてなかったんだろ？」
「はぃ……」

俺の言葉に安心したのか、ミミがもそもそとサンドウィッチに手を付け始める。そしてエルマに視線を向ける。とても嫌そうな顔をされた。

「ということで優しく親切なエルマ先輩。ミミを俺の船に乗せるための手続きの仕方を教えてください」
「本気？」
「本気だ」
「高いわよ？」
「は？　高い？」

☆★☆

「人頭税と第二区画の住民税の滞納、それに伴う遅延金、両親から引き継いだ賠償金の未払い分、そして自由移動権の付与に係る税、合わせてきっかり五〇万エネルが必要になりますね」
「本気で言ってんのか」

スーツをぴっちりと着こなし、前髪を七三分けにしたいかにも役人です、といった雰囲気の男が真面目くさった顔をして法外な値段を請求してくる。五〇万エネルってお前、一エネル一〇〇円で換算したら五千万円やぞ。どうなっとんのやその値段。
ここは貿易コロニー、ターメーンプライムの人民管理局第三区画出張所――つまりお役所である。
ミミを俺の船に乗せるための正規の手続きをするために訪れたのだが、ミミの情報を確認するなり奥の部屋に通されて法外な請求をされた。何を言っているかわからないと思うが、俺にもわからない。
ちなみに、エルマは役所の雰囲気が嫌いだからということで別室に呼ばれたタイミングでどこかに行ってしまった。ミミは一緒についてきているが、額面を聞いてからというものの真っ青な顔をして小動物のようにプルプルと震えている。

「ええ、これでも端数を切り捨てて安くしていますよ。明細も開示出来ますが？」
「見せてもらおうか」

見せてもらった。見せてもらったのだが、ここに書かれている数字は理解できるがこれが妥当な値段なのかどうなのか、という事に関しては正直判断がつかない。
自由移動権の付与に係る税だけで二〇万エネルってマジ？　ボられてない？
「……両親の負債を年端もいかない子供に負わせるというのはどう

なんだ？　そういった負の遺産の相続を放棄したり、自己破産したりするシステムは無いのか？」
「無いこともありませんが、被相続人は負債の存在を知ってから三ヶ月以内にその申請をする必要がありますね。既に期限を過ぎています。三等区画に移動することによってそれらを支払う義務を免除されるというのがセーフティネットといえばセーフティネットですね」

役人は表情をピクリとも動かさずにそう言い放った。それのどこがセーフティネットだよ。スラム落ちすれば払わなくても良くなるけど、その代わりに行政府の支援を一切受けられなくなるんだろうが。

そもそも、働くためのスキルも何もない女の子をスラムに放り込んだらどうなるかなんてのはわかりきった話だろうに。そんなのはセーフティネットでもなんでもなく、ただ棄てているだけじゃないか？　大丈夫なのか、このコロニー。

「傭兵という職業は稼げるのだと聞きますが、五〇万エネルもの大金を払うことはできないでしょう？　これ以上は時間の無駄かと思います。私は存じ上げませんが、第三区画なら貴方に相応しい遊び場もあるでしょうし、分不相応なことを考えずにそちらで満足されては？」

七三分けがこちらを嘲笑うかのように酷薄な笑みを浮かべる。
あ？　そういうこと言っちゃう？　別に俺はあんたの考えているような下衆な感情を抱いてミミを引き取ろうとしてるわけじゃないんだけど、そういうこと言っちゃう？
ふーん……お前？　舐めてるね？　よし、その喧嘩買った。
「よし、良いだろう。五〇万エネルだったか？　その程度の端金は

即金で払おうじゃないか」
「は？」
俺の言葉に七三分けが唖然とした表情を見せる。いいね、そういう表情が見たかった。
「なんだ？　心が下衆で性格が悪いだけじゃなく耳まで悪いのか？　五〇万エネル、きっかり耳を揃えて即金で払うっつってんだよ。とっとと手続きをしろ」
「……冗談では済まされませんが？」
「くどい。とっととやれと言っているんだ」
懐から小型情報端末を取り出して支払いの意思を見せると、七三分けの男は不承不承ながらも手続きを進めた。性格は悪いようだが仕事は早いようで、程なくして手続きは終わった。
俺の口座からターメーンプライムに対する五〇万エネルの入金が確認され、ミミの負債が全て完済された証明書と自由移動権の証明書が発行された。
この自由移動権というものは今後どこかに定住しない限り税も払わなくてよくなる特別な権利であるらしい。その分お高いわけだが。これだけで二十万エネルだものな。税金を先払いしたようなものだろう。
七三分けからそういった細かい説明を聞き、書類を受け取って役所を出る。出たところで、小型情報端末がピロン、と音を立てた。何かと思って確認してみると、エルマからのメッセージだった。どうやら近くの服屋にいるらしい。メッセージとナビゲート情報が送られてくる。
「大丈夫か？」
「は、はい……大丈夫です」

ミミは俺がエネルを支払い終えてから半ば放心状態に陥ってしまっていた。彼女の心の中でどういった動きが起こっているのかを推測するのは難しいが、男達に乱暴をされかけて俺に助けられ、カフェでは辛い身の上話を吐露し、役所では自分の背負った負債を自覚させられ、かと思えば俺が一切合切まるっと事を収めた。

この子が何歳なのかはわからないが、俺が彼女の立場でも心労でどうにかなってしまいそうに思う。本当は一刻も早く彼女を船に連れて帰って休ませてやりたいのだが、せめて服ぐらいは新しいものを買って行かなければ明日着るものにも困ることになってしまう。

心苦しいが服屋に行って彼女に新しい服を買い与えるのはどうしても今日、船に帰る前にやらねばならないことであった。

「首尾は？」

「札束――エネルでぶん殴ってやったよ」

「いいわね、傭兵らしいやり口だわ。とりあえず、ミミが着る服を適当に見繕っておいたわ。はい」

エルマが服の入っているらしい袋と、請求書を押し付けてくる。額面は……大したことないな。大した量ではないようだし、あくまでも当面の間の服なのかね？

「とりあえず普段遣いするような服とか下着とか、すぐに必要そうなものとか適当に買っておいたわ。全然足りないだろうから、後日二人で回って必要なものを買い揃えなさい」

「すまん、助かるよ」

「恩に着てもいいわよ？」

「正当な対価は渡してるからなぁ。暇潰しにもなっただろ？」

「割に合わないっての……ったく、もう。まぁ、確かに暇潰しにはなったわね。じゃあ、もう良いわね？　私は船に帰るわよ」

「俺達も帰る。ミミを休ませてやりたいからな」
「それが良いでしょうね。あんた、精々こいつに愛想尽かされないようになさい。で、こいつをちゃんと見てやりなさい。放って置くとこいつどんどん変なことに首を突っ込んで早死にするわよ」
「は、はいっ」

エルマの言葉にミミが背筋を伸ばして応える。ミミの中でエルマはすっかり頼れるお姉さんポジションになったようだな。

「あんたもよ。ちゃんと面倒を見なさい。あんたが厄介事に首を突っ込んで死んだりしたら、この子はまた路頭に迷うんだからね。今回みたいな無茶はもうやめることね」
「わかったよ。エルマ先輩はなんだかんだ言って面倒見良いよな」
「年の功よ、年の功。あんた、忘れてるみたいだけど私のほうが遥かに年上なんだからね？」
「そう言えばそうだったな」

見た目が若々しすぎるからどうしてもそんな気がしないが、エルマの方が俺よりも二回りくらい年上だった。テンションが若々しいからまったくそんな気がしないけど。

#010　ミミ（前書き）

四話めェ！―（：3」∠）―（息切れ

#010　ミミ

船に着いたらまずはミミの部屋に案内をすることにする。個室は俺の部屋として使っているので、二つある二人部屋のうちどちらかを使ってもらう事になるな。通路を挟んで真向かいにある部屋なので、どっちを選んでも変わらないけど。

「この部屋にします。あの……本当に良いんですか？」
「勿論。荷物を置いたらシャワーでも浴びると良い。そうしたら簡易医療ポッドでバイタルチェックをするから、そのつもりでな」
「そんなものまで……す、すごいですね、この船。一等区画のお家みたいです」
「そうか？」

俺にはそのへんの常識が欠如しているからなんとも言えないな。その後もランドリーやキッチン、医務室やトレーニングルーム、コックピット、カーゴなどを案内する。一度に案内したほうが効率的だからね。

「コックピットには俺が許可した時以外は入らないようにしてくれ」
「わかりました」
「後は……あー、ミミ用の小型情報端末も入手しないとな」

連絡を取るのにも情報を収集するのにも端末はあったほうが良い。なんならタブレット型のやつも一緒に買ったほうがいいかもな。

「あの、そんなに高価なものは……」
「必要経費だと思うよ」

四六時中船での仕事があるわけでもなし。暇潰しにもなるだろうから明日にでも買い与えるとしよう。そう言えば服も最低限しか買ってないって言ってたな？　服とか生活雑貨も追加で買う必要があるか。

「とにかく、疲れてるだろうからまずはシャワーでも浴びてさっぱりしてから休みな。バイタルチェックとか業務の話に関してはそれからゆっくり話そう」
「はい、すみません」
「すみません、じゃなくそこはありがとうにするべきだな。シャワーの使い方とかはわかるよな？」
「はい、大丈夫です。ありがとうございます」
「ならそういうことで。俺はコックピットか自分の部屋にいるから、何かあったらすぐに言ってくれ。お腹が減った時も遠慮せずに言うんだぞ。これから一緒に生活するんだから、遠慮なんてしてたらダメだ」
「わかりました」

ミミは素直に頷いた。うん、変に遠慮されてお腹を空かされても困っちゃうからな。これで良い。
シャワーに入るところをまじまじと見ているわけにもいかないので、その場を後にしてコックピットに移動する。ミミの年齢は聞いていないが、ベッタリとひっついて面倒を見なければならない年齢ではないだろう。何歳くらいかな？
話を聞いた感じだとまだ学生だったようだし、十代半ばってとこだろうか。背は小さいが、育つところは育ってるんだよな……うーん、十七歳前後くらい？　後で聞いてみるか。
特にやることもないので明日のために第三区画の地理をリサーチしておく。ミミの生活用品や服を買い足さなきゃならないからな。

そう言えば、もし病気になったりした時のために薬とかも買っておくべきだろうか？　買っておくべきだな。それに情報端末も買わなきゃならん。回る店が多いな？

そういうわけで、第三区画にあるそれらの店の場所を評判と合わせてリサーチする。そうすると出るわ出るわ。やれバッタもん掴まされただの、薬の使用期限が切れてただの、箱を開けたら中身が入っていなくてただのスクラップが入ってただの。

そういう店を除外していくと、第三区画にある『まとも』な店というのは案外少なかった。ちなみに、エルマに案内された食料品店とエルマがミミの服を買っていた店はその数少ない『まとも』な店である。残念宇宙エルフだと思っていたが、実のところそんなことは一切なかったらしい。

暫くそんな感じで調べごとをしていると、開放していたコックピットの扉からひょこっとミミが顔を覗かせた。おお、シャワーを浴びてさっぱりするとやはりなかなかの美少女じゃないか。でもちょっと薄着じゃない？　艦内は空調が完璧だから寒いってことはないだろうけどさ。

「お腹空いたか？」

俺の言葉にミミが少し顔を赤くしてコクコクと頷く。

「よしよし、んじゃメシにしようか。こんな感じでちゃんと言ってくれよ」

「はぃ……」

自分でお腹が空いたと言うのは恥ずかしいよな。わかる。

そんな恥ずかしがっているミミを引き連れてキッチンへと移動する。キッチンとは言っても調理設備らしい調理設備はなく、基本的には自動調理機械に全て料理を作って貰う形になるので、どちらか

と言えば食堂と言ったほうが正しいかもしれない。

「なんでも好きなだけ食うと良いぞ。そういや人造肉を買ってきてあったな。チャレンジしてみるか。ミミもチャレンジしてみないか？」

「してみます」

自動調理器で人造肉を使ったメニューを選択し、決定する。俺は量多め、ミミは普通の量で頼んだ。程なくして自動調理器が音を鳴らして食事ができたことを伝えてくる。

「これが人造肉……白いけど、結構美味しそうじゃないか？」

「そうですね」

プレートの上に載っているのは白身魚のように真っ白に近い肉に、何かのソースがかかったものとピラフっぽい何か、ポテトサラダっぽい何かである。多めの量で注文しただけあってなかなかのボリュームだ。

「むっ……これはなかなか」

「美味しいですねっ」

人造肉は美味しかった。程よい噛みごたえにくどすぎない甘みのある脂。そして添えられているソースも上品な味わいだ。ピラフっぽいものも人造肉を焼いた時に出た脂を使っているらしく、肉の旨味が感じられる。ポテトサラダっぽいもの？　普通にポテトサラダっぽかったよ。

「無理して食べなくても良いんだぞ」

「大丈夫ですっ……」

ミミの胃袋には普通盛りは少し多すぎたようだ。結構無理して食べていたように思う。次からは少なめで頼むと良いと思うよ。うん。
食洗機にプレートを突っ込んだところでミミが俺の顔を見上げてきた。なんだろう？　と首を傾げる。

「こ、この後はどうするんですか？」
「この後か？　うーん、食ってすぐ寝ると太るからな。トレーニングルームで身体を動かそうかな？」

クリシュナには結構立派なトレーニングルームがある。長い宇宙生活の中で全身の筋肉の衰えが起こらないようにするためか、設備がかなり充実してるんだよな。俺もこちらの世界に来てからは基本的に船の中に引きこもりがちなので、太ったりしないように一日一度はトレーニングルームで運動をするようにしている。

「ミミは先に休んでも良いぞ？　疲れているだろう」

今日は色々とありすぎた。俺でさえ疲れている感じがするのだから、ミミはそれ以上だろう。

「いえっ……はい、そうします」

ミミは否定しかけたが、少し考えて思い直したのか頷いた。うん、素直に休むと良い。おやすみ、と言ってミミと別れて俺はトレーニングルームへと向かう。
別にボディビルダーを目指すつもりはないので、トレーニングの内容は程々だ。ＡＩのインストラクターに従って黙々と運動メニューをこなしていく。このＡＩインストラクターは情報端末や自動調理機械のデータを元に俺の運動量や摂取カロリーなどを計算して最

適な運動メニューを組んでくれる。
身体はそれなりに動かすことになるが、しっかりとした目標が見えているだけにやりがいはあるんだよな。
暫く身体を動かしたらシャワーを浴びることにする。これまでは適当だったが、女の子と同居する以上は身嗜みには気をつけたい。一緒に住んでいて不潔なやつだと思われるのは避けたい。俺の心が死ぬ。
いつもより少し念入りに身体を洗い、さっぱりしたら就寝の時間である。この世界に来てからというものの、明らかに元の世界よりも健康的な生活を送っている気がするな。規則正しく、栄養バランスの良い食事に適切な運動、十分な睡眠。なんて健康的なんだ。

「んー……はぁ」

ジャケットとズボンを脱ぎ、下着姿になって大きく伸びをする。今日は本当に色々あったな。食料の買い出しに出かけただけの筈なのにいったいどうしてこうなったのやら。エルマに出会ったことが全ての引き金のような気がするな。あの宇宙エルフ、トラブルを呼び込む体質なんじゃなかろうか？　あまり近づかないほうが良いかもしれない。

「あの……」

そんなことを考えていると、開きっぱなしにしていた扉の陰からミミが顔を覗かせた。何故か顔を真赤にして、緊張した面持ちである。
いや、失敗したな。ついつい独りだったときの癖で扉を開けっ放しにしてしまっていた。しかも俺、下着姿だぞ。

「どうした？　っていうか今俺下着姿なんで、ちょっとまって」

「……」
「ちょ、えぇ！？」

待ってって言ってるのになんで入ってくるんですかねぇ！　しかもなにそのスッケスケのネグリジェ！　ちょ、君、ブラとパンツは！？　透けてる！　透けてるって！　それはマズいですよ！

「ストップストップストップ！　なんで！？」

思わず両目を手で覆う。でも指の隙間からチラ見しちゃうのは許して欲しい。これも男の性というやつなんです。

「私のお勤めを果たしにきました……」

ミミは消え入りそうな小さな声でそう言うと、ひたひたとベッドに腰掛けている俺との距離を縮めてくる。彼女が今身につけているのはスケスケのネグリジェ一枚だけで、靴すら履いていないらしい。

「いやその、そういうのはほら、もっとお互いをよく知ってからというか？」
「私にできるのはこれくらいですし……その、ヒロ、さま、なら嫌じゃないです……」

初めて名前を呼ばれた！　いや違うそうじゃない。今はそんなことは問題じゃない。あっ、あー！　いけません！　お客様！　お客様いけません！　あー！　いけませんいけません！
動揺している間にミミが俺の隣、つまりベッドの上に腰掛けてぴったりと寄り添い、抱きついてくる。うおおお、柔らかいものが！
ミミさんの体格の割に凶悪な大きさのミサイルが！　被弾！　被弾しました！　ヤバい。

「その……おくすりも飲みましたから。私、大丈夫です」
「おくすり！？　なんの！？」
「避妊と……その、初めてでも痛くないようにって……エルマさんが……この服も」

あーーーーッ！　あの駄エルフ！　なんてことを！　いや、ここはありがとうございますなのか！？

「あ、あの……私じゃダメですか？　やっぱりエルマさんみたいに綺麗な人の方が……」
「ダメじゃない。全然ダメじゃないけどね？　本当に俺はそういうつもりじゃなくてだね？」
「でも、私にお返しできるのはこれくらいで……それに、その、怖いので……お願いします」

怖い？　怖いって何？　どういうこと？

「私にできることは何もないですから……だから、打算なんです。そうすれば、お兄さんは私をその……捨てたり……」

ミミの声がしりすぼみに小さくなっていく。なるほど、何もできないからいつ俺の気が変わって放逐されるかわからないと。だから身体で繋ぎ止めたいと。なるほど。なるほど。
俺、そんなド外道だと思われてるの？　それはそれでキツいんだけど。

「お兄さんは……ヒロさまはそんなことしないと、思うんですけど……安心、させてくれませんか？」
「あー……そういう」

つまり俺の人格を疑ってるとかそういうことでなく、ミミが安心したいから？　いや、でもですね？　などと戸惑っていたらピロリン、と直ぐ側に置いてあった情報端末がメッセージの着信音を鳴らした。ビクッとして画面に目を向けると『責任取ってちゃんと抱きなさいよ』と表示されている。

俺の情報端末にメッセージを送ってくる相手なんて一人しかいない。つまり、全部あの残念宇宙エルフのお膳立てだというわけである。

「お願いします……捨てないで……」

ミミは俺に抱きついたまま泣きそうな声を出し始めるし……これきっとエルマに今日抱かれなかったらいずれ必ず捨てられるとか吹き込まれてそうだな？　あの女……次に会ったらアームロックを極めてやる。絶対にだ。

「わかった」

「……！」

「あー、こういう時なんて言ったら良いのか。状況が普通じゃなさすぎて言葉が出てこないな」

流石にこういうシチュエーションでどんな気の利いた言葉を言えば良いのかなんてわからない。特殊すぎるわ。とりあえず、俺に抱きついているミミを軽く抱き返して、その背中を安心させるようにポンポンと叩いてやる。

「できるだけ優しくするから」

俺の言葉にミミは何も言わずコクリと頷き、身体の力を抜いた。

#010　ミミ（後書き）

これなんてエロゲ？（、　。ω。、）（嫉妬

#011　運命の人（前書き）

ミミ視点の本日五話目ェ！　次で本日はラスト！―（：3」∠）―

#011　運命の人

どうしたらいいんだろう。

ここ半年くらいの間、頭に浮かぶのはそんな言葉ばかりだ。お父さんとお母さんが事故で突然死んでしまって、それからというものの私の頭の中にはずっとその言葉が反響し続けている。

到底払えそうもない莫大な借金。どんどん減っていく蓄え。学校を中退して爪に火を灯すような生活をしても徐々に迫ってくる破綻。もうどうしようもなかった。

そして、三日前についに私は二等市民権と一緒に家までをも失い、第三区画に落とされた。

第三区画。それは所謂『悪所』と呼ばれる場所だ。まともに税も払えない三等市民が集う場所。暴力と悪徳が支配するコロニー内の掃き溜め。そんな場所に私は落とされてしまった。

第二区画から第三区画に落ちた女性がどうなるかは噂で聞いている。男達に捕まった後、飽きるまで慰み者にされて、その後は薬漬けにされながら客が取れなくなるまで身体を売らされる。そして、客が取れなくなったら裏路地に捨てられておしまい。

稀に外からくる傭兵や商人に気に入られて身請けされる人も居るらしいけれど、そんなのはほんの一部。大抵は裏路地で薬の禁断症状に苦しみながら一人寂しく生を終え、ゴミと一緒に回収されて焼却される運命だと。そう私は聞いていた。

怖い、嫌だ。そんなのは嫌だった。

だから、私は逃げて、隠れた。でも、私にはもう食べ物どころか水を買うエネルすらない。それどころか、エネルを使うために必要な端末すらコロニーの管理政府に没収されていた。

「大人しくしろよてめェ」
「ひひ……ようやく捕まえたぜ」

やがて体力を消耗し、身体もまともに動かなくなった私は男達に捕まった。ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる男達だ。

「ちょっと小汚くなってるが、まぁ使えそうじゃねぇか」
「早くヤっちまおうぜ。もう我慢できねぇよ」

抵抗虚しく、私は薄暗い路地へと引きずり込まれた。男達の手が無遠慮に私の身体をまさぐり、衣服を乱暴に剥ぎ取っていく。

「観念しろってんだよ！」
「暴れるんじゃねぇ。痛くされないとわかんねぇか？」

私は抵抗した。自分のどこにこんな力が残っていたのかと自分でびっくりするくらいだった。

「こんなのは一発ぶん殴れば大人しく――」

男の拳が振り上げられる。あの拳が振り下ろされたら、私はきっと抵抗の意思を失ってしまうだろう。ああ、これで終わり。そう思った瞬間、鮮烈な赤い閃光が走った。

「ぎいぃぃぃっ！？」

赤い閃光が路地裏を真っ赤に染め上げる度に男達の悲鳴が響く。

「とっとと行け！　次は火傷じゃすまんぞ！」

誰かの力強い声が響き、私を押さえつけていた男達が這々の体で逃げていく。私は壁によりかかり、声の主に視線を向けた。
男の人だ。あまり見慣れない、頑丈そうな服を着た……恐らく、傭兵だろう。
レーザーガンを構えて緊張した表情をしているが、その瞳はどこか優しげな感じがする。髪の毛は黒い。年の頃は……私と同じか、少し上くらいだと思う。
お兄さんは私にチラリと視線を向けたあと、男達の逃げた方向にレーザーガンを向けたまま口を開いた。

「俺が警戒してる間に服を直せ。路地から出るぞ」

どうやら助かったらしい。
私は慌てて身なりをできるだけ整え、立ち上がって路地を抜けた。再び光ある場所に戻ってこられた。

「おかえり」

路地から出ると、お兄さんと似たような格好をしたエルフの女の人が声をかけてきた。恐らく、この人も傭兵。二人はどういった関係なんだろう？　何故かそんなことが気になって仕方がなかった。

「どうすんのよ、その子」
「どうするって……」

お兄さんが困ったような表情で私に視線を向けてくる。やっぱり、どこか優しさを感じる目だ。見ているとなんだか安心するけれど、胸がドキドキもしてくる。

「見つめ合ってないで答えなさい」

エルフの女性と私を助けてくれたお兄さんが気安く言い合いを始める。何故だかその様子を見ていると胸が痛むような気がした。

「あんたの具体的なビジョンは？」

「俺の船に乗ってもらうのが良いんじゃないかと。身の回りの世話とか情報収集を任せようかなって」

私の身体に衝撃が走った。私が、お兄さんの船に？　船に乗せるって、つまり、そういう……カッと頬が熱くなる。あ、会ったばかりなのに、そんな。でも、この人なら。

「身の回りの世話ねぇ……あんた、こういう子が好みなわけ？」

エルフの女性が顔を寄せてくる。物凄く綺麗な人だ。肌はシミひとつ見当たらないし、まつげも物凄く長い。同じ女同士なのに、なんだかドキドキしてしまう。

「好み……？　可愛い子だとは思うよ」

私を助けてくれた男の人も私に視線を向け、すぐに目を逸らす。今、私の胸に視線を向けたと思う。この大きい胸はいつも男の人に見られるし、肩も凝るしあまり好きじゃなかったけれど、今はこの大きく育った胸によくやったと言ってやりたい。

「というか、今まさに襲われかけていたのに立ち話もなんだな。とりあえずどっか座って落ち着けるとこ行こうぜ」

やっぱりこの人は優しい。急に何日もお風呂に入っていないのが気になってくる。服もボロボロだし、この人にこんな姿を見られる

のは恥ずかしい。

「……あんたの奢りよ」

「アイアイマム。ほら、行こう。悪いようにはしないから。歩くのが辛かったら掴まっても良いぞ」

私は男の人に言葉に素直に頷いて彼の服の裾をそっと摘んだ。だって、あまり近づいて臭いとか思われたら嫌だから。私も女の子だから、そういう風に思われるのは嫌だった。

カフェで私がお兄さんの船に乗るということがどういうことなのかを説明されたお兄さんは顔を赤くして慌てていた。どうやら、その様子を見る限りは本当に女を船に乗せるということの意味を知らなかったようだ。

つまり、お兄さん――ヒロさんは最初からそういう目的で私を引き取ろうとしたんじゃなくて、純粋な厚意で私を保護しようとしてくれていたということだろう。やっぱり、とても優しい人なんだと思う。

そこから先は目の回るような展開だった。

ヒロさんは私を連れて役所へと向かい、意地悪な役人に大金を叩きつけて私の身柄を買い取った。私の背負っている負債を再確認して今にも卒倒しそうになったが、ヒロさん……いや、ヒロ様はこともなげにその大金を払ってしまった。私を手に入れるために。

私はきっと、ヒロ様にこの身を捧げるために生まれて来て、今まで生きてきたんだ。何故だか私はその瞬間に強くそう思った。

どこか夢見心地のようなフワフワした状態でエルフの女性――エルマさんに服が入っているという袋を渡された。こうして私がヒロ様のものになることが出来たのはエルマさんのおかげだ。ヒロ様の次の恩人は間違いなくエルマさんだと思う。

そして、私はヒロ様に連れられてヒロ様の船に乗り込んだ。

びっくりした。傭兵の船というのはもっとこう……狭くて、息苦

しいものだと思っていた。ヒロ様の船は広くて、清潔で、まるで一等区画の家みたいだった。家として見ると、私の家よりも良い家かもしれない。

ヒロ様に勧められてシャワーを浴びる。久々のシャワーだ。嬉しい。しっかりとお肌を磨いてからシャワーを終え、エルマさんに渡された服の入った袋の中身を確認する。

中身は……ショーツが三枚と、薄手の服が二組、簡素だけど無難な服が一組、それとスケスケのネグリジェが一枚と、何か液体の入った瓶。ピルケースが二つ。それとメモ。

なんだろう？　とメモを読んでみると、それはエルマさんからのメッセージだった。

液体の入った瓶は香水であるらしい。簡単に使い方も書いてあった。香水なんて使ったことがないから、とても有り難い。

二種のピルケースは片方が避妊用のピルで、もう片方が初めての時の痛みを緩和して、ヒロ様と一緒に気持ちよくなれるおくすりだった。初めての時は痛いって聞いていたから、これもとてもありがたい。初めての時に失敗して気まずくなってしまったって学校に通っていた頃の同級生の子が言っていたから。

エルマさんが用意してくれた香水を少量、身体にふりかける。香水なんて使ったことがなかったけれど、なんだか急にオトナになった気分になる。

少し勇気を出して無難な服ではなく、薄着でヒロ様の前に戻ったらヒロ様は私の姿を見て顔を赤くして落ち着かない様子だった。良かった、ちゃんと意識してくれているみたい。これで妹か娘みたいに扱われてまったく意識されなかったらどうしようかと思った。少し安心した。

美味しいご飯を食べた後は、ヒロ様はトレーニングルームで運動をしてから寝るらしい。

私はタイミングを見計らっておくすりを飲み、ネグリジェだけを身に纏ってヒロ様の部屋に突入――は出来なかったけれど、扉が開

いていたので部屋の前まで行ってそっと中の様子を窺った。
ヒロ様は下着姿だった。均整の取れた肉体に目を奪われる。カッと身体が熱くなってきた。おくすりが効いてきたのかもしれない。

「どうした？　っていうか今俺下着姿なんで、ちょっとまって」

ヒロ様と視線が合い、ヒロ様が顔を赤くして慌て始める。私は本能に突き動かされるままヒロ様の部屋に足を踏み入れた。
色々と辛いこともあったけれど、私は今ヒロ様の腕の中にいる。
私は今、幸せです。

#012　ミミとのお買い物（前書き）

本日はここまで！　また明日！―（：3」∠）―

#012　ミミとのお買い物

『おくすり』の効果もあったのか、ミミとの行為はつつがなく終わった。お互いに痛い思いをせず済んだのは幸いだったと思う。ミミは今日一日で精神的に疲れたのと、勿論肉体的に疲れたのもあるのだろう。今は俺の隣で穏やかに寝息を立てて眠っている。

俺はというと、今後について思いを馳せていた。やはり生きていくにあたって目標は必要だ。ただ生きるために生きるというのは辛いからな。

まずはやはり庭付き一戸建てを惑星上の居住地に持つことだな。これを大目標としよう。炭酸飲料を飲むため、という俺としては重要な目的を果たすために考えていたことだが、ミミを引き取ってこういう関係になった以上、帰るべき家を持つというのは必要なことだと思う。

まだミミと一緒になると決めたわけじゃないし、ミミもどう思っているかわからないからなんとも言えないけど。相手がミミであるにせよ、その他の誰かになるにせよ、いずれは俺も家庭を持つことになるだろうからな。生きていれば。

え？　元の世界に戻らないのか？　戻れるなら戻るのも勿論アリだと思うが、戻る方法というやつに関して皆目見当もつかないな。まずどうやって、何故この世界に来たのかというのがわからないし。元の世界に戻る方法を探すってセンは無いな。

そもそも、この世界のほうが俺は色々と楽に生きられそうだし。強力な船、傭兵という身分、そこそこの資金、この三つが揃っているだけで俺は相当恵まれていると思う。

勿論、これはこの世界の良い部分だけを見ている意見だ。傭兵という職業は常に死の危険と隣り合わせで、負ければ死ぬ。ゲームじゃないんだからリスポーンなんてできない。

船が大きな損傷を受ければ修理代金も嵩むだろうし、場合によっては万全じゃない状態で出撃しなければならないということもあり得る。メンテナンスをするための資金を常に確保しておかないと、ジリ貧になってそのまま死ぬということも有り得るだろう。

危険は何も船に乗っている時だけの話ではない。昨日のように色々なものを買ったり、何らかの手続をしたりするために船から降りて行動することもあるだろう。いきなり襲われて殺されたりすることだってあるかもしれない。元々住んでいた日本と同じ治安のイメージで生活していたら呆気なく命を落とす可能性は高いだろう。船外で俺が死ねばミミは野垂れ死ぬしかない。

「うーん……」

これが誰かの命を背負うってことか。重責だな。これは何かしらの対策をしなきゃならん。明日か明後日にでも傭兵ギルドの事務所に行っておっさんに相談してみるか。

明日はミミのバイタルチェックをしてから買い物だな。なんだかんだでバイタルチェックをし忘れてしまった。今日の行為とか服用した薬の影響とか出ないだろうか……？

明日やってみればわかるか。俺も寝よう。明日起きたらまずはシャワー、次にメシ、それからバイタルチェックだな。

明日の予定をざっくりと決めた俺はミミの体温を感じながら目を閉じた。今日はよく眠れそうだ。

☆★☆

「んぁ？」

くすぐったくて目が覚めた。何かと思って目を開け、視線を巡らせてみると俺の胸元に明るい茶色の髪の毛が見えた。

「何をしているんだ？」
「ふぁっ！？」

声を掛けると明るい茶色の頭がビクッと震える。茶色い瞳と目が合った。しばし見つめ合う。
くすぐったかったところ――自分の胸板に手をやると、俺よりも小さくて暖かく、柔らかい手が俺の胸板に乗っているのがわかった。どうやらこの手が俺に悪戯をしていたらしい。

「んんー？　何かな？　何をしていたのかなー？」
「ふぇ……こ、これは、ええと」
「悪戯をして良いのは悪戯をされる覚悟のある奴だけだ、ミミ」
「え？　え？」
「目には目を、歯には歯をだな……」
「え？　あ、ぁっ……」

朝からイチャついた。とても良かった。

「さて、今日の予定だが……」
「はい」

朝食を摂りながら今日の予定を伝える。朝から予定外のアクシデントがあったせいで動き出すのが少し遅れたが、まぁ時間に追われる身分でもない。資金はまだ残っているし、セルフチェックプログラムを走らせてみれば艦の状態も良好だ。特に整備は必要ない。
勿論、資産を食いつぶして生きていくわけにはいかないから出来るだけ早く金を稼がなければならない。だが、まだ慌てる時間じゃない。
食事を終えたらミミのバイタルチェックを行い、生活必需品を買

い揃えに行く。ついでにミミ用の小型情報端末を手に入れ、傭兵ギルドに行ってミミの訓練というか教育をどうすれば良いか聞いてみる。傭兵のことは傭兵ギルドに聞くのが一番だろう。

「と、こういう感じの段取りで今日は動こうと思う」
「はい、わかりました」
「食事を摂り終えたら少し休んで、それからまずはバイタルチェックだな」
「はい」

食事を終えた後、三十分ほど休んでから簡易医療ポッドでミミのバイタルチェックをする。バイタルチェックの結果は良好だった。多少疲労気味のようだが、病気などの心配は無さそうだ。
その結果にホッとする。ミミもホッとしたようだ。何をするにしても身体が資本だからな。健康で悪いことなんて何もない。

「よーし、じゃあ出かけるか。服はできるだけ露出の少ないものを選んでくれ」
「はい」
「着替えたら食堂に集合だぞ」

俺はもうとっくに着替え終わっているので、バイタルチェックを受けるために薄着になっていたミミが着替えてくるのを食堂で待つ。これから二人で生活するわけだから、艦内生活のルールなんかも決めていかないといけないな。これは帰ってきてから話し合うとしよう。

「おまたせしました」
「早いな」
「服を着るだけですから」

女の子は身支度に時間が掛かるものだと思ってたんだけど……まぁ、早いに越したことはないな。うん。
事前にリサーチしておいた店を巡り、生活必需品を揃えていく。ドラッグストアで色々と揃うのは便利だよな。ちょっとした食料品やお菓子、化粧品などの女性用の生活用品に下着などの衣類、様々な小物など大体なんでも売っている。勿論薬もだ。

「女性用のデリケートな商品に関しては自分で見繕うか、女性店員に相談してくれ。船に乗るってことを伝えて、過不足無いものを必要なだけ注文するんだぞ」
「は、はい……」
「良いか？　一度船に乗ってコロニーやステーションから出ると数ヶ月、下手すると半年とかのレベルで補給ができないこともある。下手に遠慮したりするとかえって俺に迷惑がかかることになる。そこをちゃんと考えるように」
「はい」

ミミは神妙な顔で頷いた。実のところ、俺も初心者だから偉そうなことは言えないんだけどな！
というわけで、俺も男性店員を捕まえて長期間の航行に備えた物資の購入を相談する。
相談の結果、怪我や病気に備えた救急セットを三セット、それに簡易医療ポッドを使った傷や病気の処置に使用する薬品や資材などを購入することにした。他にも清潔な下着やシャツの予備や、シャワーで使うための洗剤、船内で水を循環利用するための装置に使用する換えのフィルターや殺菌剤なども購入する。

「おまたせしました」

男性店員と納品数のチェックをしていると、ミミが女性店員と連れ立って戻ってきた。なんだか顔が赤いが、大丈夫か？　女性店員もなんかニヤニヤしてるし……なんだかオラ嫌な予感がするぞ。

「良い子じゃない。好きなだけ愉しんでね」

「……」

「……」

ミミに視線を送るが、顔を赤くして俯いたまま視線を合わせてこようとしない。うん、俺も鈍感野郎ではないからどういうものを買ったのかはなんとなく想像がつくけども。気になることだけは聞いておこう。

「安全な品なんだろうな？　重大な副作用や中毒性、依存性なんかがあったら洒落にならんぞ」

「それは大丈夫、安全性は保証するよ」

「ならいい、必要なものなんだろう？」

「そうだね。月のものがとても軽くなるし」

「そうか、男にはわからん苦しみだからな。あんたがそう言うならそれでいい」

人によって辛さは違うと聞いているが、場合によっては何もしたくなくなるレベルで酷い人もいるらしいと聞く。数日間から一週間以上もの間、常に痛むとか想像するだけでも億劫になる。そういうのを避けるためにも必要なものなんだろう。

というか、それが原因でオペレーションをミスったりされると下手したら二人とも爆発四散してスペースデブリの仲間入りとかしかねないし。この世界の技術は元々いたところよりもずっと進んでいるだろうから、きっと俺が知るものよりもずっと高性能なものになっているんだろうな。

「じゃあこっちの分も合わせて全部船に送っておいてくれ」
「お買い上げありがとうございます」

情報端末を用いて代金を払い、発送手続きを済ませておく。これで船に着く頃にはすでに商品はカーゴの中というわけだ。
まだ顔を赤くしているミミを連れて今度は小型情報端末を扱っているショップへと向かう。

「端末とタブレットだな」
「ふ、二つもですか？」
「タブレットは俺の分も欲しいから三つ」

情報端末の方は基本的な通信機能と財布としての役割、そしてタブレットは学習用兼仕事用兼娯楽用だ。学習というのはこれからミミにはオペレーターとしての訓練と学習に勤しんでもらうので、そのためというのが一つ。
仕事用というのは、ミミにおいおい資金の出納管理や傭兵ギルド、その他各所との連絡や手続きなどをしてもらうつもりなので、その時に必要になるだろうというのがもう一つ。
最後に娯楽用というのは単に動画を見るにせよ、ゲームアプリで遊ぶにせよ大画面であったほうが色々と便利だろうというのが一つ。ちなみに俺用に買ったのはほぼ娯楽目的である。ミミのを借りることもできただろうけど、それはちょっと気を遣うことになりそうだったからね。

「こんなに高価なものを……」

ミミは恐縮しきっていたが、必要なものへの出費をケチるのはあまり良くない。安物を買っていざという時に性能が要件を満たさな

いとか、壊れたとか、そういうことになったらシャレにならないからね。
次に行くのは服屋が良いか。俺の下着とかはドラッグストアで買ったけど、ミミの下着とか服とかはそうも行かないだろう。本当は服屋くらいはミミに一人で行かせて俺は傭兵ギルドに行きたい気持ちもあるんだが……物騒だからな。二人で行動したほうが良いだろう。
で、服屋なのだが。

「……」
「あの、どうしたんですか？」
「いや、品揃え偏ってない？」

ショーウィンドウに並ぶのはサイバーっぽい風味が若干漂うナース服やメイド服、魔法少女っぽい服、バニー服、えとせとらえとせとら……どう見てもコスプレショップです本当にありがとうございました。

「そうですか？　素敵な服だと思いますけど……高そうですね」
「え？　感想それだけ？」
「はい？」
「いや、うーん……？　とりあえず入ってみるか」
「はいっ」

やはり女の子にとって服屋さんというのはワクワクするもののようで、ミミは元気いっぱいである。ミミはショーウィンドウに陳列されている衣装に何の疑問も抱かなかったようだが、俺の感覚からするとどれもコスプレ衣装にしか見えない。
この世界ではああいうデザインの服が一周回って最先端のデザインみたいな感じになっているのだろうか……？　若干不安を覚えな

がら店の中に入ると、意外と中は普通――。
「いや普通じゃねぇわ」
「???」
入るなり俺の発した言葉を聞いてミミが首を傾げる。所狭しと並ぶコスプレ衣装、コスプレ衣装、コスプレ衣装。若干サイバー風味になっている気がしないでも無いが、どう見てもコスプレ衣装。
いや、一見さんお断りゾーンかもしれない。奥に行けば普通の服も売っているに違いない。というかこんな服着てる奴、外に歩いてないじゃないか。売れてないんじゃないのか、この店。
「いらっしゃいませー」
頭にサイバー風味のウサミミバンドを着けた店員がにこやかな笑みを浮かべなら現れた。肌の露出は少ないが、どことなく制服がバニースーツっぽい感じがする。
「この子の服を買いに来たんだが……趣味的なやつじゃない普通の服もあるのか？」
「勿論ですとも」
「じゃあ、下着と服を見繕ってやってくれ。ミミ、行ってきなさい。俺は……」
「あちらに席がありますので、よろしければあちらでどうぞー」
「わかった」
「あ、あの……」
「予算は気にするな。必要なものを必要なだけ買うこと。良いな？」
「はいっ」
ミミが素直に頷く。うむ、それで良い。変に遠慮されるよりよっ

ぽど良い。

「おー、ふとっぱらですねー」

「この子は傭兵見習いというか、オペレーター見習いなんだ。俺の職業は見ればわかるな？」

「傭兵さんですよねー？　ということは、この子は船に？」

「そうなる」

「ほほー……？」

バニー店員が俺とミミをジロジロと見比べる。

「じゃあ、清楚なものから扇情的なものまで幅広く揃えますね。お兄さんもなかなかやりますねー」

「……傭兵らしい、オペレーターらしい格好の服を見繕ってやってくれ。その他は彼女の意見を聞きながら頼む」

「かしこまりましたー！　さぁさぁ、こっちですよお客さん！」

「えっ？　あっ、はい」

バニー店員がミミを店の奥の方へと案内していく。

「さて……」

きっと時間がかかるだろう。ここには女性物の服しか置いていないようだし、そうとなれば俺が一人でフラフラと店内をさまようのも具合が悪い。

俺は携帯情報端末を取り出し、メッセージアプリを起動した。勿論相手は残念宇宙エルフである。

『よくも焚き付けてくれたな』

『あんた達のためになったでしょう？　あんた箱入りのお坊ちゃん

だから、ああでもしないと手を出さなかったでしょうが』

メッセージはすぐに返ってきた。暇なのだろうか？　そう言えば、星系軍に宙賊討伐の動きがあるとか言ってたっけ。相変わらず待機中ということなんだろうな。

『で。ヤッたの？』
『女の子がヤッたとか言うなよ……まぁ致しましたけれども』
『ヤッてないとか言ったら今からでもそっちに行って張り倒すところだったわ』
『やだこわい』

ネズミのような生物が猫っぽい生物にパンチされているスタンプが表示される。スタンプ機能があったのか、このメッセージアプリ。

『それで、何よ？　恨み言を言うためだけにメッセージ送ってきたわけ？』
『いや、ミミにオペレーターとしての教育をしたいと思ってな。そういう資料とかマニュアルとか教育アプリ的なものって傭兵ギルドで扱っていないか聞いておきたかったんだ』
『そんなの傭兵ギルドに行って聞けばいいじゃない……まぁ、あるらしいとは聞いてるけど』
『あるのか。傭兵ギルドで手に入るのか？』
『知らないわよ。ただ、傭兵ギルドの運営している傭兵の養成機関でそういうのを使っているって聞いたことがあるわ。傭兵ギルドに行って聞いてみなさい』
『アイアイマム』

スタンプ一覧からペンギンのような生物が敬礼をしている物を選んで送信しておく。

暇だからとメッセージアプリを介してミミのバイタルチェックの結果報告や、今はミミが服を選んでいて暇だというとりとめのない話をしていると、店員とミミが戻ってきた。袋の類を持っていないということは、船に発送して貰うのだろう。

「終わったか？」
「は、はい！」

バニー店員に視線を向けると、彼女は意味ありげな微笑みを返してきた。大丈夫なんだろうな……？

「支払いは」
「こちらになりまーす」

バニー店員がタブレットを差し出してくる。そこにはサイバー風味のバニースーツを着たミミの画像が大映しになっていた。どうやら本人の体格データと服のデータをその場で合成して着たらどんな感じになるのかを視覚化してくれるアプリの類であるらしい。
うむ、ミミの胸部装甲は凶悪だな。何がとは言わないが零れそうじゃないか。実にけしからん。

「おっと、間違えました」
「データは消せよ？」

俺の言葉にバニー店員はうんうんと頷いてから俺の耳に口を寄せ、こっそりと耳元で囁いた。

「会員登録しておけば系列店でデータを照合して最適な服をオススメできますよ？　なんなら通販ですとか、新作のお知らせなんかもお届けできます」

「……俺の端末でも着せ替え機能は？」
「勿論。専用アプリを使えば可能です」
「よし」

代金を払う際にしっかり会員登録しておいた。ちなみにお値段はなかなかのものだった。それでもまぁ、散弾砲や切り札の弾薬費に比べれば微々たるものである。総資産から考えてもだ。
支払いを終えた俺達はその足で本日最後の目的地、傭兵ギルドへと向かう。

「次に向かうのは傭兵ギルドだ」
「はいっ」
「ぶっちゃけて言うと物凄く顔が怖いおっさんがいる。傭兵ギルドのイメージにぴったりな感じだ」
「は、はい……」
「でも話してみると気のいいおっさんだし、実質役所みたいなもんだからあまり緊張しなくても大丈夫だぞ」
「はい！」

ミミの表情はコロコロと変わって見ているだけで微笑ましいな。こういうのをあざといと言うのかも知れないが、可愛いは正義だと思う。しかし、ミミはただの女の子だよなぁ……護身術を覚えさせるとか、護身用の武器を持たせるとかしたほうが良いのだろうか。これもおっさんに相談してみるか。

#013　再びの傭兵ギルドと大規模討伐（前書き）

18時にも更新するよ！―（：3」∠）―

#013　再びの傭兵ギルドと大規模討伐

「おう、昨日の今日で……」

俺の陰からチラッと顔を覗かせたミミを見て受付のおっさんの表情が固まる。

「色々と訳あってこの子を俺の船に乗せることになってな。オペレーターにしようと思ってるんで、教育に使える教材とか資料とかアプリとかがあったら提供してもらいたいんだ」

「よ、よろしくおねがいします……」

おっさんの手が物凄い速度で伸び、俺の胸ぐらを掴み上げてきた。顔、顔怖いって！

「どういうことだ……？」

「わかった、事情をちゃんと話すから手を離してくれ。顔怖いから」

「顔が怖いは余計だ！」

「実際怖いわ！　ミミも怯えてるだろうが！」

「く……ッ！」

おっさんが物凄い怨念の籠もった表情で手を離し、席に座って気持ちを落ち着けるように目を瞑って深呼吸を繰り返す。俺も内心ホッと胸を撫で下ろす。チビリそうなほど怖かったわ。

「一から十まで話すと長くなるんだけど」

「一から十まで話せ」

「はい」

怖い顔で凄まれたので素直にミミが俺の船に乗ることになった経緯を一から十まで話すことにした。

「傭兵になって一日目のこいつにそんな出会いがあったのに、何故十五年も傭兵生活を続けていた俺にはそういう出会いがなかったんだ！？　不公平だ！」

これが運命力の違いだというのか！？　とおっさんが天に吠え、机に突っ伏してうおぉんと泣き始めた。ガチ泣きである。これには俺もミミもドン引きだ。

この騒ぎに奥から傭兵ギルドの職員がなんだなんだと出てきて大騒ぎである。事情を知るなりおっさんを奥に連行していったが。さらばおっさん。

「ええと、うちの職員が失礼いたしました」

おっさんの涙に濡れた机を綺麗にした女性職員がとても困った顔で笑みを浮かべる。俺も彼女の立場だったら同じような表情を浮かべる。誰だってそうなる。

「ええと、もう一回事情を話したほうが良いですかね」

「大変申し訳ありませんがよろしくお願い致します」

お姉さんが深々と頭を下げてきた。はい、お話をしますよ。

「なるほど。ではそちらの方の乗員登録と、オペレーター育成用の教材をご所望ということですね」

「そうなるんですかね」

「よろしくおねがいします」

新しく出てきた傭兵ギルド職員のおねえさんは手際よく手続きを行い、教材もしっかりと用意してくれた。教材はタブレット型端末で使えるように早速インストールしてもらう。
ＡＩトレーナーがオペレーターのノウハウを一から教えてくれるというなかなか高性能なものであるようだ。また、船の状態や資産状況などをわかりやすくまとめるアプリなども同梱しているらしい。

「情報収集用のアプリとかも同梱していますから、頑張って使いこなしてくださいね」
「は、はい」
「ミミが手続きとかそういう方面を見てくれるようになったら俺も助かるからな。頑張ってくれ」
「わかりましたっ」

ミミがアプリのインストールされたタブレットを手にフンスと鼻息を荒くする。うんうん、頑張るんじゃよ。そして俺に楽をさせてくれ。ゲームでは省略されていた細かい手続きがいろいろとありそうだからな、この世界は。

「そうそう。それとこの子に護身術を覚えさせるか、護身用の武器でも持たせたほうが良いかなと思っているんだけど」
「うーん、難しいですね。護身術を覚えると言っても一朝一夕でどうにかなるものではありませんし。武器の扱いも同様です」
「そういうものか」
「そういうものです。ただ、実際に使うかどうかは別としてレーザーガンを持たせるのは良いかもしれませんね。持っているだけでちょっかいを出してくるような輩はそれなりに減りますので」
「なるほど」
「ご用意します？」

「お願いします」

傭兵ギルドでは武器も扱っているのか。そういえば昨日はガンショップなんかは調べなかったなかったな。そういうのは傭兵ギルドとか統治機構が管理しているのかね。

その後、ミミ用のレーザーガンも用意してもらった俺達は傭兵ギルドの射撃場で試射をしてから傭兵ギルドを後にした。

ミミの銃の腕？　ははは、とりあえず撃つ時に目を瞑るのをやめないとどうにもならないな！

射撃練習を終えた俺達は船に戻り、数日ゆっくりと過ごすことにした。ミミは路上生活の疲労が抜けきっていなかったからまだ休ませる必要があったし、幸いなことにすぐに働かなければならないような経済状態でもなかったからだ。

それに、エルマの言っていた宙賊の大規模討伐にも興味があった。宙賊のアジトを襲撃するとなればそれなりに大規模な戦闘が発生するだろうというのは予測ができたし、そういうイベントは出来高制で敵機を落とせば落とすだけ報酬が跳ね上がるというのが定番だ。

さして美味しくもない任務を受けて美味しいイベントを見逃すなんてことはしたくなかった。

そういうわけで朝起きてトレーニングルームで体を動かし、シャワーを浴び、昼間はミミのオペレーター学習を一緒にやってみたり（傭兵としての常識みたいな項目もあり割と有用だった）、ネットから情報を収集したり、残念宇宙エルフとメッセージを交わしたり、たまにミミとイチャイチャしたりしながら数日。

ついに待ちに待っていた宙賊の討伐ミッションが開始されると星系軍と傭兵ギルドから通知が出された。

「いちいちどこかに集まらなくても船でブリーフィングできるのは

良いよな」
「そうですね」
俺はコックピットの操縦席に、ミミはその後ろにあるオペレーター席に座ってブリーフィングの開始を待つ。
本当にわざわざギルドや星系軍の駐屯地に足を運ばなくてもブリーフィングができるのは便利だと思う。食料の調達すら船から発注をかけることが可能なので、やろうとすれば船から一歩も足を踏み出さなくても生活が出来てしまうのだ。船の中というのは最強の引き篭もり環境と言えるのかも知れない。
ブリーフィング開始時間丁度になると、コックピットのスクリーン上に人の顔が写った複数のウィンドウが立ち上がってきた。ウィンドウの上部にはそれぞれの所属や搭乗している船の名前などが表示されており、その中には残念宇宙エルフのエルマや、このターメーンプライムコロニーに到着した時に出会ったセレナという軍人もいた。
「っ！？」
セレナと目が合った瞬間、何故か背筋が震えた。なんだろう、これは。嫌な予感のようにも思えるし、そうでないようにも思える。彼女には少し気をつけたほうが良いのかも知れない。
そんなことを考えていると、セレナのウィンドウが大きくなってスクリーンの中央に移動した。
『さて、ではブリーフィングを始めます。私はセレナ＝ホールズ大尉。今回の作戦の指揮官です。セレナ大尉と呼ぶように』
「了解、セレナ大尉」
参加者達もそれぞれに了承の意を示していく。

『では作戦の概要を説明します。と言っても、さほど複雑な内容ではありません。宙賊達が根城としているのは小惑星帯のガンマセクターです』

セレナ大尉がそう言って画面上に星系図を出現させ、小惑星帯の一角を赤くスポットする。

『作戦内容は単純です。星系軍艦隊が出向いて、艦砲射撃で基地を破壊します。宙賊の拠点とは言っても所詮宙賊です。抵抗虚しくすぐにスペースデブリになることでしょう』

セレナの言葉に傭兵達が頷く。星系軍の軍艦、それも重巡洋艦や戦艦級ともなるとそもそもからして宙賊の乗るような船では対抗のしようもない。火力も、シールド出力も、装甲も比べ物にならないからだ。

傭兵の乗る船であれば条件付きで星系軍の軍艦を相手にできないこともないだろうが、それでも普通は単機でどうにかできるようなものではない。その上、星系軍というのはそういう強力な艦の数を揃えているし、練度も高いのだ。

とにかく、正面から星系軍に攻められては宙賊共ではお話にならないということである。

『しかし、みなさんも知っての通り我々軍隊の攻撃というのは徹底的ではありますが大雑把です。向かってきてくれるのであれば全て正面から噛み砕けますが、小型中型艦に散開して逃げられるとどうしても取り逃しが出ます。そこで、皆さんの役目というわけです』

大型艦や基地を破壊すれば宙賊に大ダメージを与えることが出来るというのは確かなのだが、むしろ宙賊の主力艦というのは高速の

中型艦や小型艦なのである。それらを逃すと再び結集して勢力を盛り返すので、傭兵達にはこれを叩いて欲しいという。
つまり、残党刈り――いや、むしろ主力艦は俺達の狩る中型艦小型艦なわけだから、寧ろ俺達がメインの戦力なのか？　まぁ、どっちでも良いか。

『報酬面はどうなってる？』
『はい、前金はなし。作戦終了時に五万エネルですね』

うーん、安い。固定給安い。それだけに成果給には期待したい。

『成果給の方は小型艦一隻五〇〇〇エネル、中型艦一隻二〇〇〇〇エネル、大型艦は一隻一〇〇〇〇〇エネルです。それに加えて元からその船に懸かっている賞金はそのまま進呈、積荷の略奪権も勿論つけましょう』

もっとも、大型艦は我々が全て片付けるつもりですが、とセレネは笑みを浮かべる。成果給の提示を受けた傭兵の反応は様々だったが、概ね好意的に受け止められているようだった。

『作戦としては単純です。予め傭兵の皆さんにはガンマセクター周辺に潜伏、展開していただきます。そして私達星系軍の機動艦隊が正面攻撃を仕掛け、宙賊の大型艦及び宇宙基地を撃滅。逃げ散る小型、中型艦に貴方達が乱戦を仕掛け、乱戦から逃れようとする宙賊艦を我々が撃墜します』

単純だが、有効な作戦に思える。
要は、初撃で脅威度の高い目標を殲滅し、逃げようとする敵を傭兵達の『網』で捕らえる。敵が混乱しているうちに今度は星系軍の機動艦隊が『檻』を形成する。

あとは徐々に『檻』を小さくしていって、最終的に全ての宙賊艦を殲滅するわけだな。
そんなことを考えていると、服の裾がチョイチョイと引かれた。何事かと目を向けると、オペレーター席からミミが移動してきていた。どうやらブリーフィングの様子を見に来たらしい。

「ヒロ様、宙賊が無理矢理超光速ドライブを起動して逃げたりとかはしないんですか？」
「それは大丈夫だ。超光速ドライブを同期させていない船が周辺に存在する時に超光速ドライブを起動しようとしても安全装置が働いて起動することが出来ないようになっているからな」
「でも、安全装置を取り外せば無理矢理起動することはできるんですよね？」
「出来るけど、そんなことをするやつは居ないと思うぞ。その安全装置を外すと超光速ドライブ中にシールドで防げないレベルの質量を持ったスペースデブリや小惑星を回避できなくなるからな。起動した瞬間何かに当たってバラバラになる、らしい。俺も詳しいことは知らん」
「なるほど」

安全装置と回避システムが連動してるらしいってことはゲームの頃の設定で見たことがあるが、詳しい理論までは解説してなかったからな。というか、こういう未来技術系の設定は曖昧だったからなぁ。
まぁ、こんなものは仕組みなんかを理解していなくても使えればいいのだ。電子レンジや携帯電話の作動原理を一から十まで知っていなければならないなんてこともないんだから。宇宙船だって同じようなものだろう。
俺とミミとそんな話をしているうちにも傭兵達からセレナに対して質問が飛んでいたが、基本的には報酬関連の話で俺の興味を引く

ような内容ではなかった。例えば一隻の宙賊船を複数の傭兵が攻撃して撃墜した場合、取り分はどうなるのか、といった具合の内容だ。
そこは訴えがあれば戦闘ログから逆算してどちらに権利があるか星系軍が判断するが、その場合は透明性と公平性を確保するために結果を公表し、傭兵ギルドに通達することになる。
横殴り野郎と認定された傭兵は傭兵ギルドから睨まれるし、場合によっては降格処理や追放処理すらあり得る。これからも傭兵としてやっていきたいなら故意の横殴りはしないほうが良いというわけだ。
俺はそんなことをする気はサラサラ無いし、どうでも良い話だな。
しかし、俺の知りたい情報を聞く人がいない。常識だからなのか、それともそんなことは考えてもいないからなのか……誰も聞かないなら俺が聞くしか無いか。

「自分からも一つ質問を良いでしょうか？」

モニター越しに注目が集まる。その中には当然エルマも居た。いかにも『こいつなんか素っ頓狂なことを聞くんじゃないだろうな？』という顔をしている。ははは、期待にお答えしよう。

『はい、どうぞ。傭兵さん』
「こういう大規模討伐は初めてなんですが、艦の不調やダメージを受けたことによるシールドの喪失、減衰したシールドを緊急回復するシールドセルの枯渇、そういった要因でそれ以上の戦闘続行が不可能と判断する場合もあると思います。その場合は任意に撤退して良いのでしょうか？」

俺の質問に傭兵達はきょとんとした顔をし、エルマは片手で顔面を覆い、セレナは笑みを浮かべた。

『勿論それは構いません。傭兵としては命あっての物種、というものでしょうから。ただ、さして戦いもしないうちに尻尾を巻いて逃げられては困りますね。我々の作戦目標は宙賊の殲滅なのですから』
「それはご尤も。ただ、退路は確保しておかなきゃならないな、とルーキーはルーキーなりに思ったので。現地に行ってから死ぬまで戦え、逃亡者は銃殺刑だ、と言われてはたまらないですからね」
『まさか、そんなことを我々がするとでも？』
「するかどうかは別として『できる』陣形でしょう？　俺の船にはクルーもいるんで、その辺りは重要なんですよ」

つまるところ、今回の作戦は星系軍の大型艦船が苦手とする近距離での乱戦を傭兵が担い、その乱戦から逃げようとする宙賊を星系軍の艦船が遠距離から仕留めるという二段構えの陣形だ。
つまり、傭兵は獲物に食らいつく猟犬、星系軍はスコープ越しにその戦いを見つめ、乱戦から逃げようとする獲物を狙い撃つハンターである。
猟犬から逃げようとする獲物を撃つのが本来のハンターの役目なわけだが、当然その銃口は負傷して乱戦から逃げようとする猟犬にも向けることが出来る。
実際に現場に着いて、戦闘をおっ始めた後に『戦場からの撤退は不許可とします。逃げる場合は宙賊と同様に撃墜しますので、悪しからず』とか言われたらたまらない。

『ふふ、そうですね。『できる』陣形です。でも安心してください、そんなことは致しませんから』
「そう言ってくれて安心しました。俺からはそれだけです」

傭兵達の反応は様々だった。あからさまに嘲るような表情を向けてくる者が三割、感心したような表情や興味深そうな顔を向けてくる者が二割、無関心な者が五割といったところだろうか。

『他に質問はありませんか？　では一時間後に作戦を開始します。準備が出来次第、各艦ハンガーベイから発進して待機してください』

『『『了解』』』

ブリーフィングは終了した。さぁ、いよいよバトルフェイズだ。

#014　自己主張の激しいフラグ

「おい、大丈夫……」
「だ、だだ、だいじょうぶですすす」
「ダメみたいですね」

バトルフェイズだと言ったな？　あれは嘘だ。
出発まであと一時間。念の為、船のＡＩにセルフチェックとメンテナンスの指示を出した俺はミミを連れて食堂で寛ごうとしたのだが。

「ぜ、ぜぜ、ぜんぜんもんだいないですよ？」
「見るからにダメじゃないか」

ミミが生まれたての子鹿かチワワか何かのようにプルプル震えていて見るからに不憫だ。いや、うん。これから生きるか死ぬかの戦いに赴くわけだから、彼女のように緊張し、恐怖するのが普通の感覚なんだろう。ミミは正しく状況を認識し、正しい反応をしているだけだ。
寧ろ、全く緊張していない俺が異常なんだろうと思う。今から俺は正真正銘、本物の殺し合いをしにいくのだ。今まで殴り合いもまともにしたことのないような俺が、命をやり取りをしに行くというのに緊張を覚えないというのは明らかに異常である。
何故緊張しないのか？　と考えるといくつか考えられることはある。

まず、俺の愛機であるこのクリシュナがこの世界においてそれなり以上――というか、恐らく傭兵の持つ船としてはトップクラス、

あるいは規格外な戦闘能力を有しているだろうと推測できるということが一つ。

これは情報収集のついでに市場に流れている船の性能や武装の威力、星系軍に配備されている最新兵器の情報、その他諸々の戦闘艦のデータを参照した結果、ほぼ確実である。

流石にグラッカン帝国やベレベレム連邦の最新艦やそもそものサイズが違う戦艦クラスの船と比べるとどうかは判らないけれど。それでも多分良い勝負は出来るだろうと俺は踏んでいる。

そしてもう一つが俺がこの世界に来て早々にやり合うことになった宙賊達や、俺のシミュレーターでの戦闘を目の当たりにした傭兵ギルドのおっさんやエルマの反応だ。

どうも、彼らの反応を見る限りクリシュナを操る俺の戦闘能力はちょっと度を越していると言うか、規格外っぽい感じであるらしい。勿論クリシュナの機体スペックが単純に高いという面も大きいのだろうが、どんなハイスペックな機体も乗りこなせなければただの棺桶だ。少なくとも、俺の操縦技術はクリシュナを動く棺桶にはしていない。

以上の二点を考えればこれから赴く宙賊掃討任務においてそれほど危険なことにはならないだろう、と思う。思えてしまうのだ。だから落ち着いていられる。

もしかしたら、ただ単純に命の危機ってやつを感じてないだけかもしれないけれどもね。

何せ、俺の視点から見るとこの世界は『ステラオンライン』の世界そのものにしか見えないのだ。どういうことかというと、どうにも俺としては所謂『ゲーム感覚』というのが抜けていかないのである。

戦闘では死にそうにない。

現実感もない。

そんな状況で死の恐怖を感じるのはなかなかに難しい。撃墜されればリアルに死ぬ、というのはわかっている。一応理解しているつもりだ。ただ、俺はステラオンラインでも撃墜されたことは数えるほど……それも初期の操作に慣れていない頃にしか経験していないのだ。

撃墜されると船の修理費が買うのと同じくらいにかかるからな。保険に入っておけばいくらかは安くなるが、カーゴの中身もばら撒くことになるし、大赤字である。だから安全マージンは十分に取って行動する。

退くタイミングを見誤って撃墜されたら大赤字なのだ。

まだいけるは、もうダメ。それをいつも自分に言い聞かせて行動していた。例えば、クリシュナは三層のシールドとそれなりに強固な装甲に守られており、その下に本体と言える船体が存在する。

更にシールドを急速チャージするシールドセルという装備があり、それを使えば若干のタイムラグはあるものの減衰したシールドを張り直す事ができるのだ。完全に喪失してしまうとシールドセルを使っても無駄になってしまうのだが。

さておき、シールドセルである。これは機体の各所に積み込んであるわけなのだが、クリシュナの場合合計で五つ装備している。つまり、上手くやればこの五つのシールドセルを使い切るまでは船本体は安全であるということだ。

俺はステラオンラインで戦闘を行う際、シールドセルの残量が最後の一つになった時点で撤退をするように心がけていた。経験則的にシールドセルが一個残っていれば敵の追撃を躱しながら安全に戦闘を離脱できる公算が高いからだ。

当然まっすぐただ船を飛ばすだけだとケツから穴だらけにされるだけなので逃げ方には気をつけなければならないが、基本的に武器への出力供給を絞ってスラスターとシールドにジェネレーター出力

をガン振りすれば武器への出力供給を行っている相手から逃げるのはそう難しくはないものだ。

「あの、ヒロ様……？」

「ん？　ああ、すまん。ちょっと考え事をな」

急に黙り込んだ俺を心配したのか、ミミがおずおずとした様子で声をかけてきた。俺はそれに笑顔を返し、なんでもないと首を振ってみせる。

「あまり心配は要らないぞ。俺はこれでもそこそこの腕だし、この船はとても強い船だ。それに、さっきの会議でも言っただろ？　危なくなったら逃げるって。俺一人でも安全マージンは十分とって行動するけど、今はミミもいるんだ。無茶はしないよ」

「だ、だいじょうぶですよ？　わたしは」

「まずはその青い顔をどうにかしてからそういうことは言ってくれ。でもこればっかりはなー……慣れてもらうしか無いな。あ、一応言っておくけどあんまり沢山お腹に何か入れるのはやめておいたほうが良いぞ。リバースでもしたら大惨事だ」

「うっ……気をつけます」

可愛いミミにはゲロインになって欲しくないからな。あの残念宇宙エルフ辺りならあまり心も痛まないんだが。

まぁコックピット内で嘔吐されると臭いで集中力が低下するとか吐瀉物で機械が機能不全を起こしたりとかが怖いよな。いや、吐瀉物程度ではビクともしないかな？　コックピットの機械類は軍用品だし。

「そろそろセルフチェックも終わる頃だけど……ミミ、どうしても怖いならコロニーに残るか？　傭兵ギルドなら無碍にはされないと

思うけど」
「い、いえ！　行きます！　まだ何のお役にも立てないと思いますけど、ここで逃げたらヒロ様についていくことなんてできません！」
ミミが両拳を握り締め、むんっと気合を入れる。そしてたわわに揺れる胸部装甲。今日のミミはあまりコスプレ衣装めいてはいない傭兵風の格好だ。具体的にはスパッツのようなぴっちりパンツに少し丈夫そうなシャツ、そしてジャケットだ。正直言って背伸びして傭兵風の服を着ている感が拭えないが、そのうち馴染むだろう。多分。
ミミにも踏ん切りがついたようなので、コックピットへと移動して発進準備を整える。機体のセルフチェックも終了しており、結果はオールグリーン。発進するのに問題は無さそうである。

「ミミ、発進するから管制に連絡」
「は、はいっ！」

オペレーター席に座ったミミがぎこちない手付きで通信用のコンソールを操作し、発進の手続きを進めていく。少しするとすぐにメイン画面上に発進タイミングが表示された。着艦時と違って、発進時の手続きはＡＩによる自動手続きであるらしい。
指示されたタイミングでクリシュナのジェネレーターを起動し、ハンガーベイから発進する。ランディングギアも艦に格納し、久々にターメーンプライムコロニーから宇宙空間へと飛び出した。

「うわぁー……」
「宇宙の景色って凄いよなー。どの方向を見ても満天の星空だもんなぁ」
「はいっ！　それにコロニーが……あんな形してるんですね」
「自転車の車輪みたいだよな」

「じてんしゃ？」
「あー、まぁああいう形の車輪を使う乗り物があるんだよ」
「そうなんですかー」

ミミは自転車を知らないらしい。うーん、エコだしコロニー内の乗り物として普及してそうなもんなんだけどな？　人工重力とかの関係でなんか上手く行かなかったりするんだろうか。謎だ。
センサーをチェックすると既に何隻かの傭兵の船が待機しているようなので、そちらに向かって合流しておく。
傭兵達の駆る船は実に千差万別で、同じ船が一つとして存在しない。厳密に言えば同じ艦種の船はあるのだが、それぞれ自分好みにカスタマイズしているせいで細部がかなり異なるのだ。

「ふぁー、カラフルな船も多いんですねぇ」
「目立つのを目的としてるんだろうなぁ。よほど腕に自身があるか、依頼主とかに印象づけたいのか……」

ちなみに、俺のクリシュナのカラーリングは迷彩効果の高い艶消しのダークブルー塗装だ。ステラオンラインにおいて、機体のカラーリングやペイント、エムブレムの貼り付けなどは非常に自由度が高かった。めちゃくちゃでかい輸送船にアニメなどのキャラクター画像をでかでかとペイントした痛車ならぬ痛船なんかも結構居たなぁ。俺はやらなかったけど。

「んおっ！？　なんつー珍しいモンを……」

傭兵艦の中に一際目立つ白い船があった。どこか白鳥を思わせるような優美な流線型の造形、大型の後部スラスターは見るからに『速そう』な印象を見る者に与える。それもその筈、実際に速度性能ではずば抜けている機体なのだ、あれは。

船の機種名は『ＳＳＣ－１６　ギャラクティック・スワン』――ステラオンラインのプレイヤーの間では『白い流星（最終的に星になるという意味で）』、『フェ○ーリ（クッソ高い高速高級車だから）』、『暴走超特急（地獄行き）』などと散々に言われているネタ機体だ。

「うわぁ、綺麗な船ですね！」
「ああ、うんそうね……」
「？　何かおかしいんですか？」
「いや、あれはなぁ……」

最高の速度性能に運動性、そこそこの火力、強力なシールド性能……これだけ聞くと優秀な機体に聞こえるのだが、問題はその運動性である。

ごく単純に言うと高すぎるのだ。操作があまりにもピーキー過ぎて真っ直ぐ飛ばすだけならともかく、複雑な機動戦となるとまず制御できない。俺も知り合いに一度乗せてもらったことがあるのだが、あまりにもピーキー過ぎてまともに操縦できなかった。

もう一つヤバいのがその高価さだ。あの速度性能と運動性は採算度外視の高級な素材をふんだんに使っているという設定がなされており、購入費用は勿論のこと修理費用もべらぼうに高い。精々中型艦くらいの大きさのくせに、その修理費は戦艦をも凌ぐレベルだったりする。

そして最後にもう一つ、特大級の爆弾があの機体には載っているのだ。

それは、ある条件を満たすと起こる『暴走』である。暴走と言っても別に船体に口がパカっと開いて敵船を勝手に食い散らかすとかそういうものではない。文字通り『暴走』するのだ。操作を受け付けず、燃料が切れるまで物凄い速度でしっちゃかめっちゃかに飛びまくるのである。そして最終的には爆発四散する。

最初、その機能が発見された時は『バグか！？』などとゲーム内では騒がれたのだが、頭のおかしい（褒め言葉）検証班によって『暴走』が起こる条件が特定され、他の機体ではそう言ったことは一切起こらないことから当該機体にのみ設定された隠し機能的なものであると結論付けられた。

あまりにも酷い暴走機能とピーキーな操作性、目玉の飛び出るような購入費用と修理費のせいでステラオンラインのプレイヤー間では完全に『ネタ機』扱いだったなぁ……それを命のやり取りをするガチの戦場に持ってくる傭兵が居るとは。

いや、使いこなせば決して悪い機体ではないんだけどね？　速度性能と運動性はどっちも俺のクリシュナよりも一回り上だし。ただ、周りを盛大に巻き込んで自爆する傍迷惑な機能がついてるだけで。それが致命的な致命傷というやつなんだけども。

「ダメな機体なんですか？」

「ダメではない。使いこなすことができれば強力な船だ。でもちょっと扱いがピーキーというか……ストレートに言うと欠陥機だな」

「欠陥機」

「ある条件を満たすと超高速で暴走して爆発四散するんだ。まぁ、激しい戦闘機動を行なって、なおかつ発熱量の高い光学兵器でも乱射しない限りは条件を満たすことはないんだが」

「それ、凄く危なくないですか？」

「物凄く危ないぞ。だからあの機体に乗ってるのはそのへんを熟知している癖の強いベテランか、そういうのを知らずにスペックだけで船を選んだ間抜けだな」

「なるほど……」

船の情報をタップして表示する、オーナーの名前は……キャプテン・エルマ。

「Ｏｈ……」
「どうしたんですか？」
「あの船、エルマの船だわ」
「……えっ！？」
「自称ベテランだから……まぁ、きっと大丈夫じゃないかな？」

全武装レーザー砲ガン積みとかでもない限り、そうそう暴走は起こさない筈だから大丈夫だ。きっと。多分。恐らく……いや、今の俺は自分に嘘を吐いている。このタイミングでのネタ機体の登場、そのオーナーがよりによってあの残念宇宙エルフ。もうフラグが全力で自己主張しているようにしか思えない。

「無事を祈ろう……ミミだって初陣なんだからな」
「そ、そうですね。エルマさんならきっと大丈夫ですよね」

知り合いが死んだりするのはとても嫌だが、傭兵稼業をしていればこれから先そんなことはいくらでもあるだろう。船に乗って宇宙に出た時点で何が起ころうとも自己責任というやつだ。
可能な限りは助けてやりたいと思うけど、そんな余裕があるかどうか……というか、まさに今から出撃するというこの段階で俺に出来ることなど何もないよね。普通に。無事を祈るしか無い。

『作戦開始まであと三十分。各機に潜伏地点の座標を送信します。作戦開始と共に移動を開始してください』

星系軍のオペレーターから潜伏地点の座標が割り当てられ、送信されてくる。偵察用のドローンでも飛ばしてあるのか、敵の戦力配置などもかなり詳細だ。

「って、こいつは……」

「どうしたんですか？」
「なに、ちょっと面倒そうな感じだなぁ、と思っただけだ。問題はない」

俺に割り当てられたポイントは敵影がかなり濃いポイントだった。ランダムに割り当てられたのか、それとも……脳裏にセレナ大尉の笑顔が浮かぶ。なんだか作為的なものであるような気がしてならない。

「ま、問題はないさ」

いざとなったら逃げることもできるしな。恐らくその必要はないけれども。

#014　自己主張の激しいフラグ（後書き）

予測可能回避不可能―（∵3」∠）―

#015　バトルフェイズ（前書き）

12時に投稿しようと思っていたのだが膝に矢を受けてしまってな

……｜（∵3」∠）｜（寒くてPCが起動しなかった

#015　バトルフェイズ

「僚機との同期を確認」
「僚機との同期、確認しました」
「超光速ドライブチャージ開始」
「超光速ドライブ、チャージ開始を確認しました」
「超光速ドライブチャージ完了。起動まで……5、4、3、2……超光速ドライブ、開始」

ドォン、と雷が落ちたかのような轟音が鳴り響き、超光速ドライブが起動する。今回の超光速ドライブは僚機の傭兵艦に同期しての航行なので、超光速ドライブ中に俺が操作をすることは何もない。精々僚機がヘマをやらかして見当違いの方向に進んだりしないか注意しておくだけである。

ちなみに、エルマは逆側の待ち伏せポイントに向かったらしく残念ながらこちらの待ち伏せポイントへと向かう一団の中にはいなかった。精々健闘を祈ることにしよう。

「さて、これから戦闘に入るわけだが……」
「……はい！」
「戦闘時、ミミにはレーダー観測手と通信手として働いてもらうことになる」
「はい！」
「レーダー観測手の仕事は？」
「はい！　レーダーに映る敵機や僚機の動きを把握し、危険があれば操舵手に注意を喚起します！」
「うん、じゃあ通信手は？」
「はい！　敵味方の通信を傍受し、情報を集めると共にこの船に送

られてきた通信に対応します！」
「大丈夫そうだな。俺が一人で乗っていた時にはそれを含めて全て俺が対処していた。その一部をミミに任せて、負担を軽減しようというのが俺の狙いなわけだ。ミミができることが増えれば増えるだけ、俺が楽になる。道程はまだまだ遠いと思うが、是非頑張ってくれ」
「はい！　お任せくださいヒロ様！」

ミミが元気よく返事をして気合を入れる。

「うん、頼むぞ」

超光速ドライブ中に船の装備を再確認する。
主兵装は武装腕に装備された四門の重レーザー砲。副武装として機体に直接マウントされている散弾砲が二門、あとは切り札が二門二発ずつ、計四発あるが……これは弾薬費がとても高いのでできれば使いたくない。
とはいえ、切り札は使ってこその切り札だ。使い所があれば躊躇なく使っていくべきだろう。切り札の抱え落ちなんてのは間抜けのやることだ。

「綺麗ですね……」

ミミが船の外の景色に目を向けながら呟く。
流星のように過ぎ去っていく遥か彼方の星の光、緑色や橙色など色とりどりに光り輝く星雲、一緒に飛んでいる船が引く光の航跡、キラキラと煌くそれらはとても綺麗で、ゲームで見慣れていたはずの俺でも心を揺さぶられる。
「そうだな。こういう光景を生で見られるのも船で星の海を自由に

行き来する俺達の特権みたいなものだ」
「はい」
数分の超光速ドライブで目標のポイントに到達した。
「超光速ドライブを解除する。衝撃と振動に注意」
「はい」
超光速ドライブを停止し、通常航行に移行する。ドォン、と再び轟音が鳴り、俺達の乗るクリシュナは通常空間に帰還した。傭兵艦達が自分に割り当てられた潜伏ポイントに向かって三々五々に散っていったので、俺もそれに倣って自分に割り当てられたポイントへと移動を開始する。

「ここが潜伏ポイントだな」
「なんだか、静かですね」
「基本的に宇宙は静かで孤独なものさ。俺にはミミがいるから孤独ではないけど」
「……えへへ。じゃあ、私も孤独じゃないですね」
他愛ない話をしながらメインジェネレーターの出力を最低限まで絞り、潜伏を開始する。
「寒くないか？」
「大丈夫です」
生命維持装置に回す電力も抑えているため、コックピット内の温度も少々下がっている。俺はそれなりに着込んでいるから何の問題もないが、ミミは少し薄着じゃないかな？

「この服、薄いですけど温かい素材なんですよ」
「そうなのか。ちょっと不安だったけど、良い服屋だったんだな」
「はい」

可愛い女の子が毎日色々な服を着て過ごしているのを見るのは実に眼福だ。ここ数日、ミミは毎日様々なコスプレ衣装めいたサイバーチックな衣装で俺の目を楽しませてくれている。ロリ巨乳のメイドさんとか素晴らしいものだと思う。

さて、そんなことを考えていると前方の空間を多数の光条が貫いた。同時に混乱した宙賊のものと思われる通信を多数傍受する。

『な、なんだ！？　何事だ！？』
『ミハエルがやられた！　攻撃――うわあぁぁぁぁっ！？』
『星系軍のカチコミだ！』
『あいつら基地と大型艦を――各所で火災発生！　三番と七番隔壁閉鎖しろ！』
『まだ人がいますよ！？』
『馬鹿野郎！　閉鎖しなきゃ全員まとめてドカンだ！　やれ！』

阿鼻叫喚である。そうしている間にも星系軍の戦艦級、重巡洋艦級の大型艦船からの艦砲射撃が宙賊どもの基地と大型艦船を破壊していく。流石にあの攻撃力は俺のクリシュナでも出せないな。特に戦艦級の大型砲の火力と射程は傭兵の扱える中型艦艇とは比べ物にならない。

戦艦は防衛用の近接火力も半端じゃないしな……下手に正面から近づくとこちらの武器の射程に収める前に蜂の巣にされてしまう。まぁ、一対一なら戦う手が無いわけでもないんだが。

『ダメだ！　どうにもならん！　逃げろ！』
『退避！　退避！　退避！』

『畜生！　溜め込んでいたお宝がパァだ！』

お、逃げに回るようだな。果敢に星系軍に突っ込んでいっていた宙賊船も何機かいたんだが、ことごとく爆散してたな。まぁ、隊列を組んだ星系軍に正面から突っかかればそうなるわ。どんな船でもそうなる。

『無線封鎖解除！　作戦開始！』
『ＧＯＧＯＧＯ！』
『一隻も逃すな！』
『ヒャッハー！　獲物が選り取り見取りだぜぇ！』

作戦開始の合図と同時にクリシュナのメインジェネレーターの出力を最大に上げ、加速を開始する。

「ミミ！　戦闘に入るぞ！　揺れと衝撃、高Ｇに備えておけ！」
「は、はいぃ！」

急加速による急激なＧによって身体がシートに押し付けられる感覚。腹の底から湧き上がってくる高揚感。手のひらに汗がじんわりと滲んでくる。

ウェポンシステムを立ち上げ、武装腕と散弾砲を展開する。さぁ、戦闘開始だ。

『正面から所属不明艦！　なんだありゃ？　船から腕が生えてやがる！？』
『見たことのねぇ船だ、注意しろ！』
『ヘッドオンだ！　撃ちまくれ！』
『数はこっちが上だ、機体をぶつけてシールドを剥ぎ取っちまえ！　囲んで叩くぞ！』

正面に宙賊船が四隻。機種は小型の汎用艦が二、小型の戦闘艦が二。ヘッドオン――正面から対峙した状態で突っ込んでくる。敵が武装を展開するのが見えた。

「小型機でクリシュナ相手に正面からの撃ち合いはなぁ」

正面から迫ってくる小型の戦闘艦のうちの一機に武装腕の重レーザー砲四門の照準を向け、もう一機に散弾砲の照準を合わせる。

敵も俺に火力を集中するつもりのようだが、木っ端の小型艦船が持つレーザー砲よりも俺のクリシュナの重レーザー砲の方が射程が長い。

『うわぁ！？　シールドが――』

四門の重レーザー砲による一斉射で小型戦闘艦のシールドがダウンし、間髪入れず発射された第二射がシールドを失った小型戦闘艦を貫通し、その機体を爆散させる。

『嘘だろ！？』

『こいつはヤバい！　逃げろ！　逃げ――』

散弾砲の照準を合わせていたもう一機の小型戦闘艦が急旋回して逃げようとするが、もう遅い。無防備に晒された小型戦闘艦の腹に二門の散弾砲を連続で発射する。

散弾砲から発射された無数の弾丸が一瞬で小型戦闘艦のシールドを飽和させ、そのまま容赦なく船体を穴だらけにした。スイスチーズの出来上がりだ。

一瞬遅れて二機の小型戦闘艦が爆発四散する。

『ぎゃあぁぁぁ！？　ば、化物だぁ！？』
『に、逃げっ……』

残りの汎用艦が逃げようとするが、一般的に完全に戦闘用というわけでもない汎用艦は速度性能で戦闘艦に劣る。対して、俺の愛機であるクリシュナは速度性能の高い純粋な戦闘艦だ。逃げられるわけがない。

『は、速ぇ！　振り切れねぇ！？』
『嫌だ嫌だ嫌だ！　こんなところで俺は』
「ここで死ね。宙賊殺すべし。慈悲はない、ってやつだ」

こちらに艦尾を向けて加速している二機の汎用艦に追いすがり、重レーザー砲で一機ずつ撃沈する。別々の方向に逃げようとしたが、逃してやるわけにはいかない。逃したらこいつらはまたどこかで他人を襲うのだ。一度賊に堕ちたら足を洗うのは難しいからな。
次の目標に向かおうとした時にふとミミの座る席に視線を向けてみると、ミミは緊張した面持ちでプルプルと震えていた。レーダーに視線は向けているようだが、本当に見えているのかどうかも定かではない。流石に初陣から完璧に仕事をこなせるとは思っていなかったし、これは仕方ないな。
すぐに視線を外し、レーダー上に映る次の目標へと移動を開始する。
目に飛び込んでくるものはレーザー砲の光条、実弾兵器から飛び出す曳光弾の軌跡、ミサイルの噴進炎、そして撃破された艦の爆発炎。それは空間を色鮮やかに彩り、まるで光の洪水のようだ。
しかしその実、その美しい光景のどれもが人間にとってはまさしく致命的な美しさである。レーザー砲は最低クラスのものであっても生身の人間が直撃すれば跡形も残らないし、戦闘艦に搭載されるような大口径の実弾兵器など当たろうものなら跡形もなくミンチだ。

ミサイルなどは言うに及ばず、艦が撃沈などされようものなら宇宙空間に放り出されて死は免れない。
脱出ポッド？　一応コックピットブロックそのものが脱出ポッドとしての役割を持ってはいるが、戦闘となるとコックピットブロックに被弾することも多いし、艦や弾薬の爆発に耐えられる可能性は決して高くはない。運が良ければ生き残れるかもしれないね、というレベルのものだ。

「ミミ、次の戦闘に入るぞ」
「……っ！？　は、はいっ！」

俺の言葉を聞いてミミが弾かれたかのように身を震わせ、緊張した声を返してくる。慣れるまでまだまだ掛かりそうだな。

『チッ、数が多い！』
『囲め囲め！　ベッソ、頭を抑えろ！』
『おらよぉっ！』
『っのやろぉ！』

傭兵艦の一機が五機の宙賊船に追い詰められていた。今はまだ船の性能差があるおかげで致命的なことにはなっていないが、あのままだとジリ貧だろう。徐々にシールドを減衰させられ、装甲を削られ、いずれ落とされる。
だがそれは俺が介入しなければ、の話だ。追われている傭兵艦のコールサインは……クワイエット、か。

「こちらキャプテン・ヒロ、コールサインはクリシュナだ。クワイエット、援護する」
『おお！　助かるぜ！』
『チッ、増えやがった！　ラング！　カマー！　足止めしろ！』

『あいよ！』
『任せろ！』

クワイエットを追い詰めていた五機のうち、二機がこちらに向かってくる。見たところ、一機は戦闘艦、もう一機は輸送艦を改造したミサイル支援艦であるようだ。ミサイル支援艦は厄介だな。ミサイルは避けるのが困難だし、破壊力が高い。ミサイル支援艦を含めた五機に追い回されて健在のクワイエットはなかなかの凄腕だな。

『シーカー！』
『了解！』

宙賊のミサイル支援艦からミサイルが発射され、真正面からこちらに向かって突き進んでくる。シーカーということは恐らく熱源誘導式のシーカーミサイルだろう。射程は比較的短いが、レーダー誘導ではないためロックオン警報が鳴らず、奇襲に向くタイプのミサイルだ。

こうやって真正面から、しかもミサイルを撃つことを宣言した上で発射しているのでは性能の半分も活かせていないと思うが。

対処方法は大まかに二つ。誘導性能を上回る機動性で避けるか、強力な熱源をばら撒いて誘導装置を騙すかだ。俺は第三の選択肢を取る。

腹の底に響くような炸裂音と共に発生した反動が機体を揺らす。それと同時に発射された無数の弾丸が正面から迫るシーカーミサイルを二つ同時に爆散させた。広がる爆炎に最大加速で突っ込み、ミサイルの誤射を恐れて脇にどけていた汎用艦の横を通り過ぎ、ミサイルの行く末を見守っていたミサイル支援艦に肉薄する。

『げぇっ！？　こいつ突っ切って――』
「一つ」

擦れ違いざまに至近距離で散弾砲を叩き込み、ミサイル支援艦を撃破する。搭載していたであろう大量のミサイルが誘爆したのか、通り過ぎたその後ろで大爆発が起こった。

『なんっ！？』

「二つ」

姿勢制御用のスラスターを使って滑るように艦をクイックターンさせ、四門の重レーザー砲でもう一機の汎用艦を釣瓶撃ちにしてやる。重レーザー砲のシールド減衰能力は非常に高い。宙賊の小型艦船如きが搭載しているシールド発生装置とジェネレーターでは四門の一斉射撃に抗うことなどできはしないのだ。

案の定、一瞬でシールドが飽和し、無防備になった船体が碧色の光条に貫かれて爆散する。

こちらの戦闘を終わらせたので、クワイエットの方はどうなっているかとレーダーを確認してみると、残っていた三機のうち一機を撃破し、もう一機を追いつめているところのようだった。やっぱりなかなかの凄腕だな。

「もう一機片付けるぞ」

『悪いな』

『んなっ！？　クソッ！　こんな筈じゃ……！』

『ど、どうすんだよライゾォ！』

『うるせぇ！　こいつらを叩き落としてさっさと逃げるっきゃねぇだろうが！』

情けない声を出した宙賊に指示を出していたリーダー格の宙賊が怒鳴り返す。俺に言わせれば、こうなってしまってはお前らに勝ち筋は無いから大人しく爆発四散しろって感じだ。

明らかに逃げ腰になっているもう一機を俺が受け持ち、リーダー格と思しき機体をクワイエットが片付ける。掃討戦はごく短い時間で終了した。

『助かったよ、クリシュナ。流石に五機に粘着されると厳しかった』

「なに、獲物はしっかり頂いたよ。それじゃあな」

『ああ、そっちも気をつけろよ』

クワイエットが後退していく。恐らく応急修理と減衰したシールドの回復をするのだろう。散らばっている宙賊船の残骸からめぼしい物資だけを回収して次の目標へ向かうことにする。

#016　流れ星

「ミミ、戦場全体の様子はどうだ？」

回収用ドローンで物資の回収を終えた俺はミミに声をかけた。

「え、あ、えっと……全体的に友軍が有利に事を進めているようです」

「苦戦していそうな場所はわかるか？」

「ええと……すみません、わかりません」

「だよな。まぁ、俺も感覚的なものでしかないんだけども……基本的に、傭兵艦と宙賊艦の間には一対三から一対四くらいの戦力差があると思って良い。その比率が宙賊側に寄っている地点が介入するべきポイントだな。ただ、一対十以上になっているようなところに突っ込んでいくのは一般的には自殺行為だ。俺ならそれくらいまではなんとかなるけど」

「なるほど……ええと、それならここから左下方向に見える交戦ポイントですね。星系軍にも近いポイントなんですけど、中型艦が三機ほどいて苦戦しているみたいです」

ミミが指定したポイントに船を向かわせながら確認してみると、確かに少々劣勢であるようだ。傭兵艦四隻に対して宙賊の小型艦が二十隻ほど。それに加えて中型艦が三隻。星系軍からの援護射撃もあって、なんとか善戦しているようだがあのままだと少々厳しそうだな。

「よし、介入する。ミミ、俺も注意するが不意打ちされないようにレーダーの監視を密にしてくれ。あと、介入する際の通信を頼む」

「は、はい！　がんばります！」

気合を入れるミミの声を聞きながら脅威になるであろう宙賊の中型艦の装備を調べる。

こいつもさっきのミサイル支援艦と同じで民間輸送艦の改造艦だな。宙賊にはよくあることだ。襲った船を撃破せずにスラスターなどを破壊して拿捕し、乗員を排除して船を奪う。

そして返り討ちにした傭兵艦や商船の護衛艦などから剥ぎ取った武装をそういった船に取り付け、急造の火力支援艦に仕立て上げる――と、ステラオンラインの設定では語られていた。この世界でも実際にそうなのだろう。元々の乗員がどのような運命を辿ったのかはあまり考えたくないな。

さて、それはさておき……改造中型艦の武装は近接防衛用のマルチキャノンと、支援攻撃用の中型レーザー砲か。前衛である小型艦の後ろから高火力の中型レーザー砲で砲撃支援を行う砲撃支援艦といったところだろうか。近接防衛用のマルチキャノンは恐らく自動制御のタレットキャノンだな。

砲塔の配置的に真正面や上方、左右に対する火力はなかなかのものだ。クリシュナに装備されている高性能大容量のシールド発生装置であれば三機に一斉攻撃されてもそう簡単にはシールドが飽和するということは無いだろうが、わざわざ真正面から戦ってやる必要もない。

あの砲塔の配置からすると真下や後方は完全に死角だ。元輸送艦となると下部デッキには大型のカーゴスペースがあるはずだ。宙賊が増加装甲などを施す可能性は非常に低いので、十中八九無防備なはずである。そこを突かない手はないな。

そう判断した俺は機体のジェネレーター出力を落とし、ウェポンシステムをオフラインにして急速冷却システムを作動させた。

「少し寒くなるぞ、我慢してくれ」

「は、はい。何をするんですか？」

「なに、正面から突っ込んで戦うだけが傭兵の戦いじゃないってことさ」
船体温度が下がるにつれて、コックピット内の温度も下降し始める。三分もすると息が白くなるくらいにコックピット内の空気は冷え切ってしまった。ミミは大丈夫かと視線を向けてみたが、どうやらあの服の防寒性能はなかなかのものであるらしい。息は白くなっているようだが、あまり寒そうな様子は見えない。

「よし、行くぞ」

十分に機体を冷却した俺は最低限の出力でクリシュナを動かし、大回りして三隻の中型艦の死角に入り込む。宙賊の小型艦も中型艦も俺の行動に気づく様子はない。

「ヒロ様、何で気づかれないんですか？」
「戦闘中の船っていうのは、普通は高熱を発しているんだ。だから、戦闘中の艦を把握するのには熱源センサーに頼る比重がかなり大きい。こうやって多数の船が戦っている宙域には必然的に破壊された船のデブリなんかも多くなるから、通常のレーダーは役に立ちにくくなるしな。だから、こうして機体温度を極端に下げて熱源センサーの目をごまかすことでデブリに紛れて行動することができるのさ」

これはステラオンラインにおいてサーマルステルスと呼ばれていたテクニックだ。
本来、強制冷却装置はレーザー砲などの使用で上昇しすぎた機体温度を急速に低下させるための装備なのだが、そこはそれ、使いようというやつである。

「なるほど……色々なテクニックがあるんですね」
「いつでもどこでも通用する手口ってわけじゃないけどな。さぁ、

完全に間合いに入った。行くぞ」
「はいっ」
完全に中型艦の死角に入ったのを確認した俺はクリシュナのウェポンシステムを再起動し、中型船の無防備な土手っ腹に重レーザー砲と散弾砲の照準を合わせる。
『っ！？　下方に敵機の反応！？　完全に死角に入ってやがる！？』
『なんだとぉ！？　てめぇ、今まで何を見ていやがった！？　戦闘中に居眠りでもしてたのか！？』
『ちゃんと見てたよ！　幽霊みたいに急に現れやがったんだ！』
『そんなわけあるか！　くそっ、回頭！　回頭しろ！』
「間に合うものか」
俺は四門の重レーザー砲を連続で発射し、三隻の中型艦のシールドを瞬く間に飽和させる。
『ひぃっ！？　シールドが！』
『んなっ！？　よ、避けろ！　ブースターだ！』
『邪魔だ！　道を空けろ！』
おたつく中型艦の土手っ腹に散弾砲も連射をお見舞いしてやる。無数の弾丸が中型艦の柔らかい腹を食い破った。装甲の薄いポイントだ。飛び込んだ弾丸はさぞ盛大にジェネレーターや生命維持装置、配電装置や弾薬庫を蹂躙してくれたことだろう。
『ダメだ！　保たねぇ！』
『退避！　退避！』
三隻の中型艦が小爆発を繰り返し、最終的に大爆発を起こして機

能を停止する。これで三つ。

「ミミ、介入の通信だ」

「は、はい！　こちらキャプテン・ヒロ、コールサイン、クリシュナ。私はオペレーターのミミです。これより戦場に介入、援護します！」

『援護に感謝する、正直きつかったんだ』

『チッ、これ以上取り分を取られちゃかなわん。畳み掛けるぞ！』

『ぬぁー！　可愛い女の子のオペレーター付きだと！？　絶対に負けねぇ！』

『声だけだと可愛いかどうかはわからんぞ』

『いいや、声が可愛い。間違いなく可愛い。声が可愛い子は顔も可愛い』

援護しなくても大丈夫なんじゃないか、こいつら。結構余裕あるじゃないか。

「行くぞ」

「は、はいっ」

四本の武装腕から重レーザー砲を乱射し、擦れ違いざまに散弾砲を叩き込んで宙賊船を撃破していく。一瞬で三隻の中型艦を失った宙賊どもは浮足立っており、連携も崩れて操艦にも精彩を欠いていた。まさに食い放題だ。

『ひぃぃぃ！？　四本腕の化物が！』

『クソッ！　あの腕付きを止めろ！　頭を抑えるんだよ！』

『ばっか野郎！　頭なんざ押さえたら散弾砲で木っ端微塵にされるじゃねぇか！　お前がやれ！』

『逃げろ逃げろ！　勝てっこねぇ！』

『ばっ！？　てめぇ！　逃げんな！　星系軍に狙われてるんだぞ！』

戦線を離脱しようとした宙賊船が遠方から迸ってきた極太の光条に貫かれ、爆散する。星系軍の艦砲射撃だ。『檻』の構築は完璧に終わったようである。

「逃げ場はない。ここで死ね」

『死ぬのはてめぇだ！　腕付きぃぃ！』

宙賊達が一斉に俺の操るクリシュナに向かって火器を向け、射撃してくる。どうやらまずは俺を集中攻撃して撃墜することにしたらしい。色とりどりの光条が一斉に降り注いでくるのを俺は急加速でやり過ごし、更に急旋回して追い縋ってくる宙賊艦を振り切ろうとする。

「ひうううぅっ」

攻撃を受けているというＡＩからのアラートが鳴り響き、機体の状態を示すホログラム映像がシールドの被弾箇所を表示する。

被弾している。それを示す情報を見てミミがこの世の終わりみたいな悲鳴を上げているが、俺は冷静さを保ち続けていた。

確かに被弾はしている。しかしまだ三層あるシールドのうちの一層目にダメージを受けているだけだ。まだシールドは二層残っているし、このペースなら二層目が突破されてからシールドセルを使っても回復が間に合う。それに、万が一シールドを全て突破されたとしても強固な装甲が残っている。まだ慌てる時間ではない。

回避に専念しているため、俺からの攻撃は出来ていないが、宙賊どもは俺を攻撃するのに必死だ。そして、その隙を逃す傭兵達ではない。

『ヒャッハー！　食い放題だ！』
『俺達相手に余所見とは、舐められたもんだ』
『タイフーン、フォックス２、フォックス２！』
『ハリケーン、フォックス２、フォックス２！』

今まで防戦一方だった傭兵艦達が一転攻勢に転じ、宙賊艦を次々に撃破していく。俺も一方的に撃たれるだけなのは御免なので、頃合いを見計らって逆襲し、重レーザー砲を撃ちまくって宙賊艦を仕留め始める。
散弾砲は強力な武装だけど、撃てば撃つだけ経費がかかるからな。重レーザー砲だけで戦った方がコストは遥かに安い。稼ぐなら重レーザー砲だけで戦闘を行なったほうが稼げるのだ。
そうして十五分もしないうちに形勢は完全に逆転し、この宙域に展開していた全ての宙賊艦が掃討された。

『エリアクリア、俺達の勝ちだ』
『一時はどうなることかと思ったが、腕付きが来てから流れが変わったな』
『やるな、腕付き』

どうやら『腕付き』というのが俺のあだ名になりそうだ。ちょっと格好悪いような……いや、一周りして味があるあだ名かもしれないな。

「俺は次の戦場に向かう。幸運を」
『ああ、そっちもな。オペレーターのお嬢ちゃんも』
「は、はい、ありがとうございます」
『クソッ、やっぱ可愛い声だ。絶対可愛いって』
『お前そればっかりだな。そんなんだからいつまで経っても童貞なんだよ』

『どどど、童貞ちゃうわ！』

そのネタはこっちの世界でも共通なのか……なんか感慨深いな。

次なる戦場を求めて機体を加速する。その時だった、その機体が目に入ったのは。

「白い機体……エルマか」

「エルマさんが戦っているんですか？」

「ああ、向かうぞ」

前方で激しい光条が飛び交っている。ああ、不味い。エルマが相手にしているのは通称『ゲロビ』と呼ばれている種類の照射型レーザーを装備した中型艦と、その護衛部隊だ。

俺のクリシュナが装備している重レーザー砲はパルスレーザーという種類のレーザー砲で、ごく短い時間に強力なレーザーを連射して敵機を攻撃する武器だ。

対して『ゲロビ』と呼ばれる照射型レーザーは対象に発熱量の高い光線を継続的に照射して船体を焼き切ったり、オーバーヒートさせて機能不全を狙ったりする種類のレーザー砲である。『ゲロビ』の語源には様々な説があるが、基本的にはゲロ＋ビームでゲロビーム、それが略されてゲロビと呼ばれるようになったとか、そんな感じの内容だったはずだ。要は垂れ流しのレーザーなのである。

今はそんなことはどうでもいい。それよりも早くエルマを助けないと取り返しの付かないことになる。俺は現場に向かおうとさらなる加速を――。

『なっ、なんでっ！？　せ、制御が効かな――きゃあああぁぁぁぁぁっ！？』

やめて距離を取ることにした。残念ながら手遅れだったらしい。

『うわっ！　なんだあの白い機体！？　こっちに突っ込んで――よ、避けろ！』

エルマの白い機体が無茶苦茶な機動で飛び回り始めた。ああなるともう手がつけられない。

「ヒ、ヒロ様、あれ大丈夫なんですか？」

「全く大丈夫じゃない。ああなると最終的には暴走の末にドカン、だ」

『いやあぁぁぁぁっ！？　ちょっっと、どうなって――ひゃあぁぁぁぁっ！？』

あの様子だと『フェ〇ーリ』の暴走機能を知らなかったみたいだな……エルマはわかっていて使っているベテランではなく、スペックだけ見て船を購入した間抜けの方だったようだ。

「あ、あの、助けないんですか？」

「助けようがないんだよ……あのスピードだ、下手に近寄ると衝突してもろともドカン、だから」

「そ、そんなぁ……エルマさん、エルマさんが……！」

「いや、あの機体のコックピットは異常に頑丈に作られてるって設定――作られているはずだから、多分死にはしないと思う。爆散したらコックピットだけは回収して――」

その時、エルマの白い機体が宙賊どもの包囲を抜け、見当違いの方向に爆走しはじめた。その勢いはまさに流星のようだ。

もしやこっちに来るんじゃないかと身構えたのだが、特にそういうこともなく明後日の方向に……いや、あの方向には星系軍の部隊が……。

『きゃー！？　避けて避けてぇぇぇ！』
『うわぁ！？　つ、突っ込んでくるぞ！？』
『迎撃を……いや、しかしあれは傭兵――ぬわあぁぁぁぁっ！？』

エルマの機体が星系軍の戦艦に衝突し、大破してその動きを止める。コックピットブロックは無事なようなので、運が良ければ怪我一つしていないかもしれない。問題は、ぶつかられた戦艦の方も中破しているところだな……あれ、修理費いくら請求されるんだ？

「ええと……どうしましょう？」
「残念だが、本当に俺に出来ることは何もない……仕事に集中しよう」
「は、はい」

エルマの大暴走のせいで陣形が崩れ、混乱に陥っている宙賊の集団に飛び込んで散弾砲と重レーザー砲を乱射する。冷たいようだが、本当に俺には何も出来ることがない。エルマの無事を祈りながらお仕事に集中するとしよう。うん。

#016　流れ星（後書き）

この結末を予測できた読者は一人もいないはずだ……！――（：3」∠）――（自信満々で

#017　作戦終了！

「作戦の進捗は？」
「はい、大尉。少々ハプニングはありましたが、順調と言ってよいかと」
「ああ、あれね……罪には問わなくてもいいけど、しっかりと経費は請求するように」
「アイアイマム」

現時点で稼いでる傭兵は……と、表示タブを切り替える。そして切り替えた画面に表示された一人の傭兵が現時点で稼ぎだしている賞金額を見て私は思わず目を見開いた。
中型船をもう四隻撃破しているし、小型艦船の撃墜数も群を抜いている傭兵がいる。今も戦っているようで、見る間にどんどん獲得賞金額が上昇していた。

「うちの星系にこんな凄腕の傭兵なんていたかしら？」
「え？　うわ、これは確かに……ゴールドランク、いやプラチナランク級の戦果ですね。見たことのない名前ですが」

通信兵は見たことのない名前だと言っていたが、私にとっては見覚えのある名前だった。

「データを出して頂戴」
「はっ」

データを確認すると、やはり彼だった。見覚えのない船に乗っていた、自称傭兵。今は正式に傭兵になっているようだが――。

「……ブロンズランク？」
「ブロンズランクの戦果ではありませんね。登録は――登録からまだ一週間くらいですか。登録時からブロンズランクでこの戦果ということは、元は軍のパイロットでしょうか？　間違いなくエース級ですね」
「そう、ね……」

あの自称傭兵の身なりを思い出す。年の頃は私より少し上くらいだったはずだ。引退した軍のパイロットではないだろう。それならもっと歳をとっているはずだ。
それに、彼から軍人らしい雰囲気は全く感じ取れなかった。どちらかと言えば、軍人というよりは……うん、普通の人間だったように思える。傭兵らしき雰囲気もあまり感じなかった。
考えてみれば、それも異常な話だ。戦果から考えても、彼が乗っている船は一級品の戦闘艦だということがわかる。しかし、船というものはどんな一級品でも乗り手にそれなりの腕が無いと性能を活かしきることはできないものだ。また、ああいった戦闘艦の操船には尋常ではない集中力が必要となる。
常に命の危機に晒される環境下でその集中力を保ち続けることは非常に難しい。人によっては薬物の服用や催眠暗示などが必要になることもある。
つまり、彼は船とは縁の無さそうな一般人でありながら、あれだけの戦闘艦を乗りこなす技術と胆力を兼ね備えているということだ。これを異常と言わずしてなんと言えば良いのだろうか？
彼は何者なのか……興味が更に深まる。

「どんどんスコア差が……これ、二位とトリプルスコアがつきそうですね」

トリプルスコアで済むかしら？　このペースだとそれで済みそうには思えないけれど。

「注視しておきなさい。取れるだけのデータは全て取っておいて」

アイアイマム、という部下の返事を聞きながら私は再び戦場全体を俯瞰する戦術地図に目を向けた。

決着はもうじきだ。

☆★☆

作戦は終了した。宙賊の船は掃討され、今は生存者の探索と戦場に散らばった物資や有用なデブリの回収タイムである。

とは言っても俺の船には生存者探索に向いた装備は搭載されていないので、そういうのは星系軍の艦艇に任せて俺は戦利品の獲得に専念だ。

「ヒロ様、こういうのって取り合いになったりしないんですか？」

「船のカーゴから宇宙空間に飛び出してしまったようなのは早い者勝ちだな。撃破した船には撃墜した傭兵のタグが自動的につくようになってるから、そっちからのサルベージは心配ない」

ただ、今回俺はかなりの広域を飛び回ったから回収地点があちこちに分散してて七面倒くさいことになってるんだよな。

とはいえ、これをサボるのはありえない。討伐報酬と星系軍から出る成果給だけでも大幅な黒字なのは間違いないが、撃破した宙賊艦から剥ぎ取るサルベージ品もバカにならない金額になったりするのだ。

特に、こういう宙賊の基地を攻撃した時には宙賊どもはありったけの物資やレアメタルを抱えて基地から飛び出してくることが多い

のだ。

「さぁて、お仕事お仕事っと」

「ヒロ様、楽しそうですね……」

「そりゃな。船でバチバチ殺し合いをするよりはよっぽど楽しいさ。思わぬお宝が出てくることもあるしな。ミミは楽しくないのか？」

「あの、私はエルマさんが心配で……」

「ミミは優しいなぁ……まぁ船は大破してたみたいだけど、幸いにしてというか不幸にもというか、突っ込んだ先が星系軍の戦艦だったし、間違いなく無事だと思うぞ」

「そうなんですか？」

「ああ。軍艦には本格的な医療設備もあるし、医者もいる。まず心配はいらないな」

「そうなんですか……良かった」

ミミがホッとした表情をする。

うん、命の危険は無いだろうけど金銭面ではかなりヤバそうなんだよな。ただでさえ高い船の修理費に加えて、中破した戦艦の修理費も負担させられるだろうから……おお、怖い怖い。

冷たいかもしれないが、流石にそこまでは面倒を見られないというか、見る理由は無いんだよな。

傭兵登録の件でもミミの件でも世話にはなったけど、あれもちゃんと大量の醸造酒っていう報酬を対価として支払ってのことであるわけだし、そういう意味では貸し借りはなしだ。

恩を感じていない訳では無いが、今回の件で彼女が大量の借金を背負ったとしても、俺がそれを肩代わりして助けてやる理由としてはあまりに弱すぎる。

そもそも、彼女は自立しているベテランの傭兵だ。頼まれてもいないのにお節介を焼くのは余計なお世話というやつだろう。助けてくれって言われたら出来る範囲で助けるけれども。

「さぁ、お宝を頂きましょうねー。ミミも俺の作業を見ながら手順を覚えてくれ。そんなに難しい作業じゃないから」
「は、はいっ」

漂流している船の残骸に回収用ドローンを飛ばし、内部をスキャンして積荷を回収する。ふむふむ、食料品、酒、弾薬ね。この辺りは定番だな。お、精錬済みの工業用金属か。これはそこそこ高値で売れるな。他には――空気清浄機とそのスペアパーツ、浄水器とフィルター、その他コロニーのメンテナンス系の部材ね。これも売れるな。この辺の商品はコロニーやステーションの維持管理に使うから、どこでもそれなりの値段で売れるんだよ。
しかしお宝と言えるようなものは……お、レアメタル。数は少ないけどこれは良いぞ。ストレートに良い金になる。

「ヒロ様、色々あるんですね」
「色々あるな。レアメタルとかが多いと嬉しいんだが」
「うん？　これはなんでしょうか？」
「んー？」

ドローンが回収してきた物資の中によくわからないものが合ったので、詳細スキャンをかけてみる。水晶、か？　妙に厳重に封印されたコンテナに入れられた水晶だ。これは……いやまさか。

「あ、あー……これはアレだなぁ」
「なんですか？」
「これは『歌う水晶』というもので……ちょっとした危険物、かな？」
「そうなんですか。持って帰るんですか？」
「うーん、そうだなぁ」

一部の好事家に高く売れる可能性はなきにしもあらずか。
ちなみに、この歌う水晶というのはちょっと特殊なアイテムで、宇宙空間で破壊するとどこからともなく大量の宇宙怪獣が押し寄せてくるとても危険なアイテムである。
出てくる宇宙怪獣そのものはさして強い相手ではないのだが、問題はその数だ。
数百から数千単位の宇宙怪獣が一気に押し寄せてくるので、ぶっちゃけ単艦でどうにかするのは無理ゲーである。ステラオンラインでは最低でも一〇隻以上のパーティを編成して挑むべきであるとされていた。所謂レイドボスとかレイドクエスト的なものを発生させるアイテムなのである。
実は、こいつを使ったちょっとした裏技もあったりするのだが……うーん、今の状況を考えるとこいつをこっそりと隠し持っておくのは保険になるかもしれないな。国際情勢がキナ臭いみたいだし。

「持って帰ろう。こっそりと」
「こっそりですか？」
「うん、こっそり」

一応禁制品ではないはずだが、見つかると厄介な代物ではある。実はこの船にはスキャンを逃れられる特殊なカーゴスペースが少しだけ設置されているので、そこに格納しておくとしよう。
え？　そんなもの何に使うんだって？　ははは、イリーガルな品の中には役立つものもあったりするからね。仕方ないね。傭兵の嗜みってやつだよ。
カーゴが一杯になるまで物資を回収した俺達は他の傭兵や星系軍と一緒にターメーンプライムコロニーへと帰還した。エルマの白いフェ〇ーリも曳航されていたようだが……あれ修理できるのかね。フレームそのものがひしゃげてたからほとんど買い直しじゃないだ

ろうか。というか、船の質量差がとんでもないはずなのにも関わらず戦艦を中破させるってどれだけスピード出てたんだよ……本当にエルマが無事かどうか俺も心配になってきたな。

そう思っていたところに通信が入ってくる。俺に向けたものではなく、傭兵艦を含めた全ての艦船に送信されているもののようだ。

『これにて作戦の終了を宣言します。各員、ご苦労様でした。宙賊の基地は完全に破壊され、艦艇も大半が撃破されました。これで暫くはこの星系も安全になることでしょう』

しばらくは、ね。この星系は採掘資源が豊富だし、国境も近い。少し時間が経てばまたどこからか奴らは湧いて出てくるだろう。虫か何かかよ、と思わなくもないが実際に駆逐しても駆逐してもいくらでも湧いてくるのだから始末に負えない。

『傭兵の報酬については戦果の集計が終わり次第口座に振り込まれることになります。遅くとも二日後には支払われる予定です』

早いと見るか遅いと見るか微妙なところだな。ゲームなら拠点に帰還後、すぐに報酬が手に入ったのだが、これは現実だ。軍やお役所のような組織がたった二日で集計を終えて支払いをするというのは十分に早いように思える。

これくらいのタイムラグはいつものことなのか、傭兵達から不満の声が上がることはなかった。多少時間がかかっても誤魔化される心配はないから構わないということであるらしい。確かに、軍や政府組織が約束した支払いを反故にしたりした日には権威が著しく失墜してしまうものな。

勿論俺も不満はない。すぐに金が手に入らないと明日をもしれない生活というわけでもないので。

「よし、ミミ、ドッキングリクエストを送ってくれ」
「はい、わかりました」

ミミがオペレーター用のコンソールを操作し、ターメーンプライムコロニーにハンガードッキングの要請を送る。程なくして管制からドッキングするハンガーベイが指定されてきた。これが初めてのドッキングリクエストなのだが、ミミは問題なく業務をこなせているようだ。

こんなところで接触事故を起こして面倒事は御免なので、ガイドマーカーに従って慎重に船をドッキングさせる。ガシャン、とハンガーベイとの接続音が鳴り響き、船が固定されてエアロックの中へと運搬され始める。

とりあえずこれで一安心だ。ハンガーベイに無事ドッキングした時のこの安心感はゲームでもリアルでも変わらないな。

「ヒロ様、これからはどうするのですか？」
「これから？　そうだなぁ。まぁ、金が支払われるまでは休養期間かな。精神的にも身体的にも疲れたし」

シートベルトを外し、操縦席から立ち上がって身体をグッと伸ばす。意外と身体も疲れてるんだよな。戦闘機動中は強力なGに常に曝されることになるから身体中に力が入るし、操縦桿を握る両手にも自然と力が入ってしまう。なんか操縦席に座っていただけなのに激しい運動を行なった後のような疲労感があるな。

操縦席の横に立ったままコンソールを操作し、機体のセルフチェックプログラムを走らせておく。かなりハードな戦闘をやらかしたわけだし、今回はそれなりにメンテナンスが必要だろうな。弾薬と燃料の補充もしないといけないだろう。

「いえ、そういうことではなく。これから先、どこに行って何をす

るのかな、って」
「どこに行って何をするか、かぁ」
なかなか哲学的な問いだな。人はどこから来て、どこへ行くのか、何を成し、何を遺すのか……別にそんな重い意味は無い質問なんだろうけれども。

「まず、俺の旅の目的というか、目標なんだが」
「はい」
「どこかの惑星上居住地の一等地に庭付きの一戸建てが欲しいと思っている」
「それは……壮大な目標ですねっ」
「そうだろうそうだろう」

そして不労所得で好きな時に好きなものを好きなだけ食い、寝たい時に寝て、好きなだけ遊び呆ける。そんな生活を送りたいんだ。これを言うと幻滅されそうだから言わないけど。

「ミミも何か目標を考えておくと良いかもしれないな。ただ生きるためだけに生きるってのは辛いから」
「そうですね……そういうことはあまり考えたことがありませんでした」
「なんでも良いと思うぞ。全宇宙のグルメを味わいたいとか、宇宙に広がる不思議な景色を見て回りたいとか、そういうのでもいいと思うし」

グルメ旅に観光旅行か。自分で言っておいてなんだが、そういうのも悪くないな？　よし、俺のサブ目標ということにするとしよう。
「全宇宙のグルメ、いいですね。それにしましょうか」

「いいね。じゃあ俺もそれに付き合おうかな」
「ではそういうことで。私の目標はヒロ様と一緒に全宇宙を食べつくすこと、これにします！」
「おー！」

両手をぐっと握って気合を入れるミミに拍手を送っておく。いま、ここに全宇宙を食い尽くすハラペコモンスターが誕生したのだ。

「太るわけにはいかないので、運動もがんばります！」
「そうだな。ミミはもう少し肉をつけてもいいと思うけど」
「……そうですか？」

自分の身体つきを確かめるかのように自分のお腹を撫でていたミミが突然ギクリと身体を震わせた。なんだ？　どうした？

「え、えと、ちょっと汗をかいたみたいなので、シャワー浴びてきますね？」
「おう？　ごゆっくり？」

下半身を隠すかのような不自然な動きでミミがコックピットから退出していく。どうしたんだろうか？　と考えて思い至った。

「……もしかして漏らしてたのかな？」

船に被害こそなかったものの、今日の戦闘ではそれなりに宙賊艦に撃たれたからな。シールドで全部止まってたけど、戦闘初体験のミミには少々刺激が強かったかもしれない。クンクンと鼻を鳴らしてコックピット内の匂いを嗅いでみるが特にそういう匂いは感じないな。おむつでもしていたのだろうか？

「……変態っぽいな。やめておこう」

俺はこれ以上の追求をやめてキッチンに向かうことにした。水分とカロリーを補給したら俺もシャワーを浴びて休むとしよう。

#017　作戦終了！（後書き）

18時にも更新するよ！―（：3」∠）―

#018　ミミとのお買い物リターンズ

作戦を終えた当日と翌日を船でゆっくりと過ごし、ミミと今後の活動や船内設備の入れ替えなどについても話し合った。今日は星系軍からの報酬も振りこまれる予定なので、二人で船から出て船内設備を扱うディーラーまで足を伸ばす予定だ。

「えへへ」
「楽しそうだな」
「はいっ、楽しみですっ」

今後の目標に銀河中の美味しいものを食べることを掲げたミミであったが、そのために動き出すのは俺が思った以上に早かった。戦闘終了後、部屋でゴロゴロしながらタブレットを使って様々なグルメ情報をリサーチしていたらしい。

そのうちに様々なグルメ食材を美味しく自動調理できる高性能調理器というものに行き当たった彼女は、すぐさまターメーンプライムコロニーでその高性能調理器を扱っているディーラーを発見。昨日一日かけて俺をあの手この手で説得し、見事クリシュナの船内設備の一新という決断を俺に下させたのであった。

そう、今回購入する設備は高性能調理器だけではないのだ。ウォシュレット付きトイレ、浄水設備、空気清浄装置、高性能な空調設備に快適なバスルームなど、居住性に関係する施設を一新する予定なのである。

当然、費用もそれなりに掛かるのだが、最新式のジェネレーターやシールド発生装置の価格に比べれば全部合わせても安いものだ。

今日はその入れ替える設備を実際に目で見て体験し、俺達のニーズに合ったものなのかを確認するためにディーラーに向かうという

わけだ。
俺はいつもの傭兵スタイルだが、今日のミミはカジュアルな装いで、ちょっと大人っぽく見えるような気がする。
「うん、可愛いというか綺麗だ」
「そ、そうですか？」
「うん、とても良いと思う。立派なレディーだな」
「え、えへへ……」
俺に服装を褒められたミミが頬に手を当ててくねくねと身を捩りながら恥ずかしがる。激烈に可愛い。このままだと今日の予定を全部潰してミミを愛でてしまいそうなので早速船の外に出て目的のディーラーへと向かうことにする。
「場所としては傭兵ギルドの近くなんだな」
「はい。あの辺りは官公庁や傭兵ギルド、大手シップメーカーや艦内装備品のディーラーが多くあって、比較的治安は良いみたいですね」
「なるほどなぁ。ミミにはオペレーターとしての才能がありそうだな」
「そ、そうですか？」
「ああ、こうやって必要な情報をちゃんと見つけてナビも解説もしてくれるしな」
「え、えへへ。そうだといいなぁ」
タブレットを抱えてニヨニヨと笑みを浮かべるミミを見ていると、俺にも自然と笑顔が浮かんでくる。ちなみに、俺の育成方針は褒めて伸ばすというものだ。
叩いて踏みつけて伸ばすなんてのは幻想だと俺は思っている。どう考えてもメンタル的に追い詰めてプラスの効果があるとは思えな

いからな。そもそも、メンタル的に追い詰めてくるような相手と信頼関係なんて築けるか？　少なくとも俺には無理だね。

俺とミミは命を預け合うパートナーなのだ。船長とクルー、借金の肩代わりをした者とされた者、単純なる強者と弱者という上下関係のようなものはあるかもしれないが、それでも戦場では背中を預けあうパートナーになるのだ。少なくとも、俺もミミもそうなろうとしている。

信頼関係を築くという意味でも俺は彼女に可能な限り真摯に、誠実に、愛情を持って対応していかなければならない。

ぶっちゃけ、もう完全に情を抱いてしまっているので厳しくできないだけなのかもしれないけれども。それも仕方ないね！　ミミは可愛いからね！　単に俺がミミに骨抜きにされている疑惑もあるけど、あまり深くは考えないようにしよう。

ハンガーベイと居住地を繋ぐエレベーターに乗り込み、宇宙の景色に目を向ける。ハンガーベイと居住地を結ぶエレベーターシャフトは金属のフレームと透明な素材で作られており、エレベーター内から外の景色を見ることが出来るのだ。

「何回見ても飽きないな」

「ヒロ様は見慣れているんじゃないですか？」

「そうでもないんだ。自分の目で直接見るようになったのはつい最近のことだからな」

「そうなんですか……ヒロ様はこのコロニーに来る前はどんなところにいたんですか？」

「このコロニーに来る前か……」

元の世界での生活に思いを馳せ、記憶喪失だというカバーストーリーを思い出す。危ない危ない、正直に話してしまうところだった。

「実はな、記憶があまり定かじゃないんだ。ハイパードライブ中の

事故か何かでこのターメーン星系に飛ばされてきたみたいなんだが、それまでどこで何をやっていたのか、どんな生活をしていたのか、記憶が曖昧なんだ」
「えっ！？　そ、そうなんですか！？　大変じゃないですか！」
「大変なのかなぁ。あまり困ってないから気にしてないんだよな」

実際には記憶喪失ってわけじゃなく、そういうことにして色々誤魔化しているだけだしな。

「一応、医療系のステーションに行って一度詳細なメディカルチェックを受けようとは思っているよ」
「そうなんですね。じゃあ、帰ったら最寄りの医療系の技術が高いステーションを調べておきます」
「ありがとうな」

俺の健康を気遣ってくれるなんてミミは優しいな。俺が倒れたりしたらミミは路頭に迷うことになるわけだし、健康には気を遣っていかないといけないな。
俺の健康を心配するミミをなんとか宥めてディーラーへと向かう。宥めるために毎日のバイタルチェックを義務付けられてしまったが……それでミミが安心するなら安いものであろう。簡易医療ポッドのバイタルチェックにかかる時間はそんなでもないしね。
俺が毎日のバイタルチェックを約束したことで少しは安心したのか、ミミは少しだけ安心したようだ。それでも心配なのか、俺にピッタリくっついて腕を抱きしめ……おおう、柔らかい感触が素晴らしい。心配されてみるものだな！
ディーラーはミミが事前に調べていた通りの場所にあり、事前にアポイントメントを取っていた俺達は下にも置かない最上級の扱いで店舗内を案内された。

「こちらが我がムサシノテックの誇る最新の高性能調理器、テツジン・フィフスです。当社のテツジンシリーズはロングセラーの高性能調理器として業界トップシェアを維持し続けていますが、こちらは二ヶ月前に出たばかりの最新鋭機です」
「二ヶ月ねぇ。その前の製品はいつ出たんだ？」
「八年前ですね。テツジンシリーズの売りは高性能な自動調理機能によって最高級の美食を提供するのは勿論のこと、過酷な環境下で発生した故障や事故のフィードバックを受けて改良され続けてきた信頼性の高さなのです。テツジン・フォースの購入後三年間以内に発生した故障率は驚異の０．００４％。どのような環境下でも素敵な食事を提供する信頼性が何よりのセールスポイントです。勿論、最新鋭機のテツジン・フィフスもその特性を引き継いでいます」
「ランニングコストやメンテナンスの手間はどうなっているんですか？」
「電力消費は少々大きめですが、メンテナンスに関してはナノマシン技術を応用した自動メンテナンス機能がありますので、実質的にメンテナンスフリーとなっております。フィルターや内部機構の清掃なども待機時間中に全てナノマシンが自動で行います」
「なるほど、メンテナンスが楽なのは良いな」
「そうですね。どんなに高性能でもメンテナンスに時間を取られては本末転倒ですし。ヒロ様、電力は大丈夫ですか？」
「それは問題ないな。ジェネレーターの発電量に余裕は十分にあるよ」

クリシュナに搭載されているジェネレーターは軍用の最高級品だ。まだまだ発電容量には余裕がある。

「では、実際に動かしてデモンストレーションを行いましょう。まずは市販の一般的なフードカートリッジから最も標準的なテンプレートであるハンバーガーを作ってみましょう」

そう言って店員はテツジン・フィフスを操作し、ハンバーガーを作り始めた。ハンバーガーは全ての自動調理器で作ることが出来ると言われている最も標準的なテンプレートの食品だ。そもそも、自動調理器というものは藻などを加工した乾燥物を充填したフードカートリッジの内容物に水や調味料などを加え、形や味を整えて『それっぽい』食品を作り出す３Ｄフードプリンターとでも呼ぶべき製品である。

いくら高性能とはいっても、元は同じフードカートリッジと水、調味料から作られるものだ。味にそんなに大袈裟な大差などあるはずが……。

「うめぇ……なんでや」

「美味しいですね……」

ミミと一緒に思わず唸る。本当に俺の船に搭載している自動調理器と同じフードカートリッジを使っているのだろうか？　と、疑いたくなるくらい美味しい。このハンバーガーに比べれば今まで食っていたハンバーガーは百円で買えるハンバーガーの冷めたヤツだ。比べ物にならん。

「材料の混ぜ方、加熱の仕方、調味料の混ぜ方一つで食感と味というものは大きく変わります。テツジンシリーズに搭載されたＡＩはテンプレートの情報に加えてそういった調理の妙と言える工夫を施し、この味を創り出すことが出来るのです」

「なるほど……ミミ、これは買いだな」

「でも、お高いんでしょう？」

「通常小売価格は四八〇〇〇エネルですが、今回は他の設備も同時に購入をしていただけるということで、なんと三〇〇〇エネルをお値引きして四五〇〇〇エネル！　四五〇〇〇エネルでのご提供です

！　しかも、三年間の保証料金も込みのお値段となります！」
「ワーオ！　んじゃ、とりあえずこれは買う予定ってことで次に行こうか」
「ありがとうございます！」

終始こんな感じで商談は進み、最終的にクリシュナに搭載される自動調理器から空調設備、その他諸々艦内の居住性に関係する設備は全てムサシノテック製の高級品に入れ替えられることとなった。
その合計金額は三十万エネルにも上ることになったが、快適な住環境はクルーのメンタルヘルスに直結することになる。劣悪な環境よりも快適な環境の方が精神衛生上良いに決まっているので、ここは金を惜しまずに最高級のものを揃えることにしたのだ。
それに三〇万エネルと言えばミミの借金の肩代わり＋自由移動権よりも安いのだ。俺のお財布事情はこれくらいで揺らぐものではない。ミミの身請けをしてもまだ二百万エネルほどの資金があるのだから。
それに、先日の宙賊討伐報酬も入る予定だしな。先日の宙賊討伐作戦中に俺が撃破した宙賊船は小型艦が四十二隻に中型艦が五隻だったので、軍から出る報酬だけでも三十一万エネルになる。これだけで今回の買い物分を十分に賄えるな。
それに加えて撃破した宙賊艦そのものについていた賞金額が合計で四十八万エネルだった。更に船に積んである宙賊からの略奪品もある。レアメタルもそこそこあったので、これらの売却益もなかなかなのものになりそうだ。ざっと見積もったところ八十万エネルくらいにはなりそうだったな。
つまり、今回の宙賊討伐で俺は約一六〇万エネルほど稼いだわけである。正直、儲かりすぎて笑いが止まらないレベルだ。三〇万エネルくらいの設備投資で衣食住の環境が劇的に向上するというのなら安いものだと思う。
今回はベッドとかも入れ替えたからな。俺の部屋のベッドは二人

でも余裕を持って寝られるくらい大きなサイズのものに変更した。
理由？　言わせんな恥ずかしい。
ちなみに、ベッドの発注をする時のミミさんはお顔を真っ赤にして頭から湯気を噴きそうになっていた。正直、俺も恥ずかしかったがミミのそんな姿を見られたので差し引きはプラスだったと思う。
艦内設備の発注を終えた俺達は先日の大規模討伐の報酬を受け取るために傭兵ギルドに向かうことにした。

#019　報酬受領

「おうおうおう女連れで来やがるとは俺への当てつけか？　おォん！？」

傭兵ギルドの受付に行くなり強面のおっさんに絡まれた。

「チェンジで」

「何がチェンジ――グワーッ！？」

騒ぎを聞きつけて現れた傭兵ギルドのお姉さんが分厚いファイルを受付のおっさんの頭に振り下ろした。縦に。あれは痛い。そして悶絶したおっさんが後ろに放り投げられ、空いた席にお姉さんが座る。

「はい、チェンジしました。依頼報酬の受け取りと賞金の受け取りですね？」

「あっ、はい」

この人には逆らわないようにしようと心に誓った。ガタイの良いおっさんを片手で後ろに放り投げるとかどうなってんだ、この人。身体を機械に置き換えたりしてるんじゃないだろうな。この世界のテクノロジーだと生身のまま強化してる可能性もあるか……どっちにしろ怖い。

お姉さんに確認してもらったところ、依頼の討伐報酬と賞金額については俺が計算した通りになっていた。これで約七九〇〇〇〇エネル。約、というのは実は賞金首に懸かっている賞金には端数があったりするからだ。八一二三エネルとか。

「機体のメンテナンスや弾薬の手配も依頼したいんですが」
「はい、承ります。散弾砲の弾薬と、チャフ、フレア、シールドセルなどの補充ですね？」
「いえす。よろしくおねがいします」
「お任せください」

受付のお姉さんがにっこりと微笑む。こういった船のメンテナンスや弾薬の補充などは仲介をする傭兵ギルドの儲けに繋がるんだろうな。

「それにしても、今回は大活躍でしたね」
「そうだなぁ。もう少し歯ごたえのあるやつが多ければもっと稼げたんだけど」

これは割と本気でそう思っている。小型艦艇が多いのは良いんだが、小型艦艇はどうしても報酬も賞金も少ない。質と腕が良ければもう少し賞金額が上がったんだろうけど、今回戦った宙賊はどいつもこいつも数任せの雑魚ばかりだったせいか賞金額が少なかったんだよな。
中型艦艇がもう少し多ければもっと稼げたと思うんだが。

「なんだかんだ言ってもこの星系は治安が良い方ですからね。今回みたいに星系軍主導で宙賊の討伐をすることも結構ありますし」
「なるほどなぁ。賞金を稼ぐならもう少し治安の悪い星系を狙ったほうが良いか」
「それって危ないんじゃないんですか？」
「それは勿論危ないですね。そういう星系は宙賊の数も多くなる上に質も高くなりますし。狩れる腕があればボロ儲けできますけど」

ミミの疑問にお姉さんが答える。そう、勿論危ない。だが、今の俺の戦力だとこの星系で遭遇する宙賊は歯応えがなさすぎる。別に戦闘狂ってわけでもないんだからより強い敵を求めて旅をする必要は一切ないんだが、それにしたってもう少し稼ぎたい。

「でも、ヒロさんの腕ならもう少し危険な星系のほうが稼ぎは上がるかもしれませんね」

「今回の討伐で暫くこの星系は平和だろうしな」

「傭兵ギルドで仲介している仕事は宙賊退治だけじゃありませんよ？　護衛や輸送任務もあるんですけど」

「俺の船は輸送任務向きじゃないし、護衛任務は面倒くさそうだしなぁ」

「ギルドとしてはお仕事を受けてもらいたいんですけどね」

「そういうのは複数人で船団を組んでいる奴らに回したほうが良いと思うけどね」

船団というのは複数人の傭兵で構成された一団のことで、所謂パーティーのようなものだ。たった一隻で商船の護衛をするというのは土台無理がある。迎撃のために護衛対象から離れたらその隙に護衛対象がやられかねないし、かといって護衛対象に張り付いていたとしても遠距離から一方的に叩かれかねない。

せめて護衛が複数いれば仲間に護衛を任せて俺が迎撃に行くという手も使えるだろうけれど、ソロではそれもままならないだろうから完全にジリ貧になってしまう可能性が高いのだ。よって、護衛の任務を受ける気には到底なれないというわけである。

「船団は組まないんですか？　ヒロさんなら引く手数多なのでは？」

「あー、今のところはそういうつもりはないかな。俺達には俺達のやりたいことがあるし」

ミミに視線を向けると、彼女は顔を少し赤くして微笑みを返してきた。やりたいこと、やるべきことは山積みなんだよな、実際。医療系のステーションにも行かなきゃならないし、庭付き一戸建てのために金も稼がなきゃならない。

「……なるほど」

俺達の様子を見た受付のお姉さんが意味ありげな笑みを浮かべ、頷く。なにか盛大な誤解をされた気がする。

「ヒロさんはこれからも稼ぎそうですし、見た目も暑苦しすぎませんん。ちょっと頼りないと言うか危なっかしそうなところがありますが、それも魅力かもしれませんね。これからハネムーンですか？お幸せに」

「え、えへへ……ありがとうございます」

お姉さんの言葉にミミがニヨニヨと蕩けそうな笑みを浮かべる。え？　否定しないの？　ハネムーンってことでいいの？　えっ？えっ？

「ハネムーンとかそういうのじゃ……」

「違うんですか？」

「違うんですか……？」

受付のお姉さんがきょとんとした顔で、そしてミミが泣きそうな顔で俺に視線を向けてくる。

「いや、どうかなー？　似たようなものかもしれないなー？」

俺の言葉に泣きそうになっていたミミの表情が笑顔に戻る。そん

な俺とミミの様子を受付のお姉さんは興味深げに観察していた。

「今更ですけれど、お二人は一体どういう……？」

「どういう……難しいな。キャプテンとクルー、保護者と被保護者かな？」

「そうですね……あと、ヒロ様は私の命の恩人で、私の……ご主人様でしょうか？」

「ヒロさん？」

お姉さんが胡乱げな視線を向けてくる。マズい、返答次第ではあの腕力でキュッとされてしまうかもしれん。慎重に言葉を選ばなければ。

「第三区画でチンピラ共に襲われて乱暴されそうになっていたところを助けて、行く宛がないということだったからクルーにしたって感じです」

思わず敬語で経緯を説明する。誰だって死にたくはない。俺だって死にたくはない。

「私、パパとママが遺した三〇万エネルの借金が理由で二等区画から落ちてきたんです。ヒロ様は行く宛のない私のためにその借金だけでなく自由移動権まで含めて五〇万エネルもの大金を払って……だから、私はヒロ様に人生を捧げるって決めたんです」

俺に続けてミミが並々ならぬ決意を秘めた表情で力説する。それを聞いたお姉さんは目を瞑り、深く頷いた。

「セーフですね」

「っしゃ！」

許された！　思わず小さくガッツポーズをしてしまう。命の危機は去った……！

「全てを失った少女が無頼の傭兵に窮地を救われて始まる恋物語、ですか。まるで娯楽小説かホロ作品みたいな話ですね」

「そんなに良い話じゃないと思うけどなー」

現実問題としてミミは俺に貞操を捧げることになっているわけだし。幸いなのはミミが俺のことを嫌っていないというか、寧ろ積極的に受け容れてくれている点だなぁ。そうじゃなかったら俺は金に物を言わせていたいけな少女を好きにしている鬼畜野郎である。

「そんなことありません。ヒロ様に出会えて、私は幸せです。ヒロ様は優しいですし、わがままだって聞いてくれます」

「わがままなんて聞いたっけ？」

「三〇万エネルもかけて船内設備の更新をしてくれたじゃないですか」

「それは俺にも益のあることだし、ミミの一方的なわがままとは言えないと思うなぁ」

そんな俺達のやり取りを眺めていた受付のお姉さんが頬に手を当てて微笑む。

「仲が良くていいですねぇ。私もギルドの受付をやめてヒロさんの船のクルーになっちゃいましょうか」

「だ、だめです……」

お姉さんの言葉に危機感を覚えたのか、ミミが俺の腕にヒシっと抱きついてくる。当然柔らかい感触がムニュっと俺の腕を包み込む。

なんという幸せ。
俺とミミのそんな様子を遠くで見ているおっさんが血の涙を流しそうな顔をしながらハンカチを噛んでいる。それだけでなく独り者らしい傭兵達が盛大に舌打ちをしやがった。ふふふ、羨ましかろう？　だがミミは誰にもやらん。

「それは残念」
「ははは、じゃあ俺達はこの辺で……あ、そうだ」
席を立って立ち去ろうとしたところで聞くべきことがあったのを思い出した。
「あの、エルマってどうなったか知ってますか？　ミミを俺の船のクルーにする時に手続きとかで面倒を見てもらった相手で、先日の作戦で船を大破させてたみたいだったから心配なんですけど」
「あ、あー……エルマさんはですねぇ」
お姉さんはいかにも気まずげな感じで困ったような笑みを浮かべる。
「もしかして大怪我でも……？」
「いえ、怪我は大丈夫なんですが……その、星系軍からの罰金というか、請求がちょっと……」
それで全てを察した。恐らく、かなりヤバい金額の請求が来たのだろう。
「……再起は？」
「……ちょっと、いやかなり厳しいかなぁと」
「Ｏｈ……」

「……？」

俺とお姉さんとのやり取りを見てミミが首を傾げている。うーん、まぁ説明するほどのことでも……いや、どうかなぁ。

「案の定というかなんというか、自分の船と星系軍の船の修理費用でピンチみたいだな」

「それは大変――！　です、けど……」

慌てたように大声を出したミミの語尾が空気の抜けた風船のように勢いを失って萎んでいく。

「あー、まぁ、難しいなぁ」

個人的にはどうにかしてやりたい気持ちが無くはないんだけれども、頼まれたわけでもないのにお節介を焼くのはいかがなものかと思うし、エルマだってつい先日出会ったばかりで、しかもちょっと面倒を見てやっただけの俺に頼るようなことは……まぁ、しそうにないなぁ。よほど追い詰められればわからんけど。

「エルマはどこに？」

「とりあえず星系軍への支払いだけでもどうにかしようと奔走しているみたいですね」

「そっちを払わなかったらこれだよな？」

「それですね」

自分の手首に手錠をかけるようなジェスチャーをしてみせると、お姉さんは迷うことなく頷いた。ですよね。その後どうなるのかはわかったものじゃないが……まぁ碌な目には遭うまい。この星系には犯罪者を収監して過酷な採掘作業に従事させている監獄ステーシ

ョンもあるわけだし。
「監獄ステーション送りですかね」
「そう、ですね……ただ、あそこは男性犯罪者の比率が圧倒的で、女性犯罪者はその……大変みたいです」
「おお、もう……」

大量の男性犯罪者の中に放り込まれた女性犯罪者がどんな扱いを受けるのかなんてことは想像に難くない。エルマがそういう目に遭うのはちょっとどうにかしてやりたいが……ううむ。
というかそういうのって男女別とかにしないの？　こええなこの国。

「……一応、エルマにどうしても困ったら声を掛けるように伝えてもらえますか？」
「……良いんですか？」
「これも縁ってやつでしょう。どうなるかわかりませんが」

相談されても俺にはどうしようもない可能性だってある。俺にできることなんて多少の金を出すくらいのことだし。その分は身体で返してもらうことになるだろうけど。いや、性的な意味じゃなくてクルー的な意味でね？　エルマならミミの教育役としてはうってつけだろう。
働きに応じて報酬の何％かを分配して、そこから借金を返してもらえば良いだろうし。

「そういえば、クルーに対する報酬の相場ってどれくらいなんですかね？」
「船にどれだけ出資してるか、その船でどんな役割を担っているかで決められることが多いですね」

「参考までに、ミミの場合は？」
「ミミさんですか……ええと、船はヒロさんのものですよね、１００％」
「ですね」
「そうなると、乗員のスキルに応じてとなりますけど……ミミさんはその、ヒロさんと関係を？」
「えー、あー、まぁ」
「それは査定に入りますね。出資率０％、素人同然のクルー見習い兼キャプテンの愛人となりますと、相場では０．１％から０．５％くらいでしょうか」
「０．５％……安、くもない、のか？」

相場を聞いて首を傾げる。今回の報酬及び賞金額の合計が七九〇〇〇〇エネル。ミミの報酬額を０．５％とすると三九五〇エネルになる。一エネル百円くらいの価値だと考えれば、今回の出撃でミミが手にする報酬は円換算すると三九五〇〇〇円くらい。命と貞操を懸けた対価としては安いような……まぁ、衣食住は全て俺持ちと考えるとそうでもないのか？

「安いですよ。オペレーターとしてのスキルが上がればもう少し良くなりますけど、今は殆どただの愛人ですからね。ただ、ヒロさんの場合は稼いでますから……今回の報酬で計算すると三九五〇エネルですか。私の一か月分の給料より高いですね……？」

本気で俺の船のクルーになることを検討し始めたのか、受付のお姉さんが真剣な表情になる。勘弁してください。いくら美人でも片手で大男を投げられる人は怖くて無理です。

「さ、さんっ！？　そんなに貰えませんよ！？」
「いや、正当な報酬だし。ちゃんと受け取るように」

「えぇぇ……」

降って湧いた大金にミミが震えるが、俺にしてみたら端金なんだよな……船の修理費や補給の費用だけで簡単に吹っ飛ぶ程度の金額だ。そもそも、船の停泊費用とか食費とか考えると約四〇〇〇エネルでは二十日と滞在できない。本当に端金だ。

「ミミ、金はいくらあっても困るものじゃない。受け取り過ぎだと思うなら、その分は貯蓄しておけばいい」

「そう……ですかね」

ミミはまだ納得できていないようだが、ちゃんと給料を受け取ってくれた。衣食住の面倒だけ見て無給ってのはあんまりだからな。私生活の面倒を見てもらっている上に命に関しても一蓮托生なわけだし。本当は０．５％と言わず５％、１０％くらいでも良いと思うんだけどな……相場ってものがあるなら一応はそれに従っておこう。ミミの様子を見る限り、あまり大量に渡しても困らせてしまいそうだし。

まぁ、何なら俺が別枠でミミ用の貯蓄を積み立ててておいてもいいな。検討しておくことにしよう。

給料をミミに渡し終えた俺はクルーの適正報酬比率の表をお姉さんにもらってからミミと一緒に傭兵ギルドを後にした。今日はこれ以上の予定はないので、ミミと第三区画のお店をブラブラと見て回り、一日を終えた。

明日からは数日かけて船内設備の入れ替えと船のメンテナンス、弾薬等の補給作業だ。頑張っていこう。

#019　報酬受領（後書き）

残念宇宙エルフ、アウトー！―（：3」∠）―（デデーン

#020　快適な目覚め（前書き）

18時にも更新するよ！ ―（：3」∠）―

#020　快適な目覚め

「んんー……」

程よい弾力性を全身で感じながら目を覚ます。入れ替えた新しいベッドの寝心地は最高だ。

「んにゅふ……」

俺の隣でスヤスヤと寝ているミミも幸せそうな寝顔で寝ている。昨日も堪能させていただきました、はい。確実にミミという存在に溺れつつあるね、俺は。間違いない。だって可愛いし健気だしストレートに好意をぶつけてきてくれるし。これで堕ちなきゃ男じゃないと思うね。

ミミを起こさないようにそっとベッドを抜け出して脱ぎ散らかした服やら下着やらを回収し、ランドリーにある最新型洗濯機に入れてスイッチオン。洗剤いらずであらゆる汚れを分解し、生地を傷めずに完璧に洗い上げ、乾燥までしてくれる優れものだ。しかも五分で乾燥まで終わる上にいい匂いまでする。科学の力ってすげー。

全裸のままシャワールーム改めバスルームに移動し、湯船に身を横たえてスイッチオン。程よい温度のお湯がすぐに湯船に満ちて心地よい水流が俺の全身を洗い上げる。洗い終わったら湯が入れ替わり、今度は全身のマッサージが始まる。あー、極楽。これはヒトを駄目にする湯船だわ。

入浴を終えて湯船から出るとバスルームに細かい粒子を帯びた温風が吹き、全身を乾燥させる。これが不思議で粒子を吸って咳き込むこともない上に、まるで全身を柔らかいタオルで拭いたかのような爽快感を与えてくれるんだ。ここまでくると仕組みが全然わから

ん。
洗濯機から乾燥の終わった服と下着を取り出し、自分の分を着てから部屋に戻る。ミミはまだ寝ていたので、頭や頬を撫でて起こしてやる。

「んゅう……ヒロ様？」
「おはよう、ミミ」
「んー……」

寝ぼけて両手を伸ばしてきたので、その胸の中に顔を埋めつつミミを抱きしめてやる。ミミもまた俺を抱きしめ、俺の頭に頬ずりをしながら「えへへ」とか言って笑っているようだ。やがて目が覚めてきたのか、俺を抱きしめていたミミの腕が解かれたので、俺もミミから身体を離した。

「お、おはようございましゅ」
「おはよう、ミミ」

今日二度目の挨拶を交わし、顔を赤くしているミミの額にキスをしてやる。

「ベッドは俺が整えておくから、風呂に入っておいで。服は洗濯してそこにおいてあるよ」
「ふ、ふぁい……」

真っ赤な顔をしたままシーツを身体に巻きつけ、服を持ってミミが退室していく。その後姿を見送ってから、俺はベッドについているボタンを押した。ぽちっとな。

「おー」

昨夜の行為でなかなかな惨状になっていたベッドがみるみるうちに綺麗になっていく。このベッドは特殊な有機素材でできていて、ボタン一つでベッドの有機素材が活性化し、情事の後始末を含めたベッドの清掃を全自動で行なってくれるという逸品だ。つまり、これは生きているベッドなのである。

「うーん、快適」

これ以外にも素っ裸で歩き回っても不快感を感じない上に消臭どころか有毒ガスなどの無害化までしてくれる空調設備、スイッチひとつで完全防音性能を発揮する壁、温水ウォシュレット付きトイレ（何故かこれだけは元の世界のものと殆ど変わらなかった）など、進んだ科学力の無駄遣い――いや、この上ない有効活用と言える船内設備の数々が俺の愛機であるクリシュナに取り付けられた。

ディーラー曰く『居住性に関して言えば帝国最高峰の豪華客船並み』であるということだ。高性能自動調理器であるテツジン・フィフスの調子も良好で、俺とミミは毎食テツジンシェフの創り出す美味しい食事に舌鼓を打っている。もうここが終の棲家でもいいんじゃないかと思ってしまうくらい住心地が良くなってしまったな。

いや、ダメだ。俺は思う存分炭酸飲料が飲みたいんだ。惑星上居留地の庭付き一戸建ては諦める訳にはいかない。

そう決意を新たにしながらテツジン・フィフスに『お任せ朝食』の作成を命じておく。流石高性能機とでも言うべきか、テツジン・フィフスは豊富な料理テンプレートからその時の使用者の微妙な精神状態やコンディションなどを読み取り、最適なメニューを組み合わせて調理してくれるのだ。

一体どうやって俺の状態をモニタリングしているのかは謎だが、今の所ハズレが出たことは一度もない。流石は最新型の高性能調理器だぜ。

ダイニングのテーブルを拭いたり飲み物を用意したりしていると、風呂から上がったミミがダイニングにやってきた。黒いスパッツに少し大きめのTシャツのみとかなりラフな格好である。

「この後はトレーニングか？」
「はい、身体を鍛えて体力もつけないとですから」
「うん、良いことだな。俺も飯食ったらトレーニングするかな」
「じゃあ二人でがんばりましょう！」

そんな会話をしながら二人で朝食を摂る。今日のメニューは朝からうな丼ととろろ芋……だと？　朝から精をつけさせてどうするつもりなんですかねぇ、このテツジンは。いや、ここのところ励んでいるからそれを勘案してのメニューか……？　本当にどうやって俺のコンディションをモニタリングしているんだ、テツジン。

「体調とかは崩していないか？」
「はい、大丈夫です。ヒロ様と一緒に毎日バイタルチェックもしていますから。寧ろ、この船で生活するようになってから調子が良いくらいです。ご飯は美味しいですし、運動もきっちりできていますから。それに、おくすりが身体に合ってるみたいで……私、結構重い方だったので」

最初は笑顔で、最後は少し顔を赤くしてミミが俺の質問に答える。

「それならいいんだ。あまり根を詰めすぎて体調を崩したりしないようにな」
「はい。ところで、今日の予定はどうしますか？」
「そうだなぁ。トレーニングとバイタルチェックを済ませたら食料の買い出しかな？　そろそろ今使ってるフードカートリッジも尽きそうだし、船内の設備を一新したお祝いに少し贅沢をしてみるのも

良いんじゃないかと」
「いいですね、じゃあ午後はお買い物ですね」
買い物に行けるのが嬉しいのか、ミミにニコニコと機嫌が良さそうに笑みを浮かべる。流石に一緒に過ごして一週間以上も経ってくると良い意味で緊張が抜けて自然な表情を見せてくれるようになってきたな。
最初の頃は俺に捨てられまいと必死さが滲み出ていたもんな。やっと少し安心できたということなんだろう。まぁ、これだけ毎晩仲良くしていればそうもなるか。
朝食を摂り終えた俺達は二人で一緒にトレーニングルームへと向かい、ＡＩトレーナーのコーチングに従ってそれぞれトレーニングをこなす。俺とミミとではトレーニングの内容が違うが、目指すところは同じく体幹を鍛えるトレーニングだ。体幹を鍛えることによって戦闘機動時の強烈なＧに耐えられるようにするのが狙いであるらしい。
それだけでなく、持久力を鍛えるためにランニングマシーンでランニングも行う。トレーニング方法は原始的だが、実際にはトレーニング前に毎回摂取するナノマシン入りの錠剤のおかげでトレーニング効率は普通に体を動かすのに比べて数倍から数十倍も高いらしい。正直言って実感はあまりない。
トレーニングを終えたら二人でバスルームに行き、お互いの身体を洗いっこしあってイチャつく。こういうご褒美があるから毎日のトレーニングもあまり辛く感じない。実に楽しゅうございます。
「よし、行くぞ」
「はいっ」
いつものようにミミが両拳を握り締め、むんっと気合を入れている。今日のミミの格好は小型レーザーガンも腰に下げての完全な備

兵スタイルだ。俺も当然ながらいつも通りの傭兵スタイルである。
何故かと言うと、今回向かう先が俺とミミの出会った場所――つまり、ミミが襲われかけた場所だからだ。俺がついている以上ミミに手を出させるつもりは一切無いが、用心はするにこしたことはないからな。
念の為、第三区画に降りる前にレーザーガンの扱いを復習しておく。使うことは無いと思うが、こういうのは用心しすぎるくらいで良い。
セーフティの解除方法と威力設定を確認し、再度セーフティをかけてからホルスターにレーザーガンを収めさせる。あとは実際に撃つことになったら躊躇するなってくらいだな。そういう事態にはまず陥らないだろうけども。
確認を終えたら二人でエレベーターに乗り込み、第三区画へ降りていく。

「そんなに緊張すること無いって。ああいうのは弱そうな獲物にしか手を出さないヘタレだから」
「は、はい」
「あんなことがあったわけだから難しいだろうけどもね。でもほら、今回は俺が隣にいるわけだし」
「……そうですね。うん、安心できます」

本当に少しは安心できたようで、ミミの表情から緊張感が抜けていった。更に安心させるようにそっと背中をさすってやると、気持ちよさそうに目を細めてそっと抱きついてくる。ばり可愛い。
しかしエレベーター内は治安当局の監視カメラによって監視されているので、あまり過剰なスキンシップはよろしくない。満足するまで背中をさするだけに留めておこう。

#021　札束ビンタ再び

「あー……」
「あの……あれ、エルマさん、ですよね？」

ミミと二人で猥雑な第三区画の通りを歩き、目的地である食料品店が見えてきたところでそれが目に入ってきた。
それは食料品店の入り口から少し離れたところの壁に寄りかかり、地べたに座ったまま俯いている白いフード付きマントを被った人影だ。それだけなら何者かなんてのは普通わからない筈なのだが、その頭に被ったフードが奇妙な形に歪んでいる。それは間違いなくピンと横に長く伸びたエルフ耳によるものであろう。
よく見てみれば、人影の周辺には酒瓶がいくつか転がっている。にっちもさっちも行かなくなってやけ酒でも飲んだのだろうか。

「ヒロ様……」
「んー……まぁ、一応事情だけは聞いてみるか」

白フードの人影に向かって歩き、その直ぐ側に立つ。ピクリと白フードの人物が身じろぎしたように思えた。ピリッ、と首の後が痺れるような感覚がする。

「「――ッ！」」

行動は迅速だった。白フードの人物が抜く手も見せずにレーザーガンを抜き、俺に向かってその銃口を突きつけてくる。だが、俺もほぼ同時にレーザーガンを抜いて相手に銃口を突きつけていた。
薄汚れた白フードの下から魚の死んだような目が覗いている。あ

ー、こりゃだいぶキてるな。
彼女は死んだ瞳で暫く俺を見つめた後、レーザーガンを力なく取り落として笑みを浮かべた。
「ふふ、何よ？　私を笑いにきたの？」
「そんなんじゃないっての。世話になった相手がこんな有様だったらとりあえず事情くらいは聞くだろ……まぁ、それ以上にミミがな」
「エルマさん……」
ミミが座り込んでいるエルマのすぐ隣に跪き、力なく地面に投げ出されていた手を両手で握る。エルマはそんなミミを見て自嘲するような笑みを浮かべた。
「たったの半月で立場が逆になっちゃったわね」
エルマの言葉にミミは何も言えず、無言でエルマの身体を抱きしめた。エルマは力なくなされるがままにミミに抱きしめられている。
「状況は？」
「星系軍への賠償金がね……貯金を全部叩いて船から何から全部売り払ったとしても足りないのよ」
「いくらだ？」
「あと三〇〇万エネル……」
「三〇〇万か……」
チラリと今の俺の所持金を確認してみる。約三五〇万エネルだ。助けてやることはできなくもないな。
「稼ごうにも船の修理にはまだ二週間以上かかるし、稼いで弁償するって言っても今回起こした事故が事故だけに信用がね……傭兵ギ

ルドにも相談してみたんだけど」

エルマが力なく首を振る。

まぁ、そうだろうなぁ。あれだけ大破した船を修理するのには時間がかかるだろうし、船が動かせなければ金を稼ぐこともできない。それに、額が額だ。三〇〇万エネルもの大金を根無し草の傭兵に貸してくれる金貸しなんて居ないだろうし、そもそも三〇〇万エネルというのは金額が大きすぎる。貸し出せるところなんて銀行くらいのものだろうが、この世界に銀行なんてあるのかね？

それにしても、傭兵生活五年目のベテランの貯金を全部吐き出して、修理中の船まで売り払ってもなお三〇〇万エネルも足りないって賠償金はいったいいくらだったんだ……？　怖いわー。

「支払期限は？　支払いができなかった場合の対応は？」

「今日、あと二時間くらい……支払いができなかったらターメーンIIIの監獄で強制労働だって。あそこには捕らえられた宙賊が山ほどいるわ。元傭兵の私が行ったら……」

エルマがポロポロと涙を零し始める。

「船に乗ったまま宇宙に散る覚悟はしていたわ。でも、こんなの……こんなの……！」

「エルマさん……ヒロ様」

身体を震わせて嗚咽を漏らすエルマを抱きしめたままミミが俺を見上げてくる。何かを訴えるような目で。

それに対して俺は腕を組んで考え込んだ。うーむ……助けるのは簡単だ。金を払えばそれで済むというのなら、金を払ってしまえばいい。しかし、問題はそうすると手持ちの資金がたった五〇万エネルになってしまうということだ。

いや、大金ではある。一般的には。ただ、船の運用資金としてはいかにも頼りない金額だ。少々の修理や補給であれば問題ないが、何かの間違いで船が中破、大破してしまうと途端にヤバさが増す。まぁ、さっさと稼げば問題ないけれども……宙賊の残党刈りでもするか？

ミミは不安げな表情で俺の顔をジッと見上げ続けている。うーん、そういう目で見られるとなぁ。

「エルマ」

「……何よ？」

「お前、俺の船のクルーになれ」

「……へ？」

「三〇〇万エネル、俺が出してやる。その代わり、俺の船のクルーになれ。んで、ミミに傭兵のいろはを一から教えろ。あと、俺のサポートもやってもらう」

「ちょ、ちょっと待って。本気？」

信じられないようなものを見る目を向けてくるエルマを無視して携帯情報端末を取り出し、時間を確認する。あと二時間くらいってことは、午後三時が支払い期限だな。

「時間がないぞ、決断しろ。俺の船のクルーになるか、監獄コロニーで元宙賊の囚人達に寄って集って慰み者にされるかだ」

こうしてみるとひでぇ選択肢だな。ほとんど選択の余地がない。でも、こういう選択肢でも突きつけないとエルマは意地を張りかねない。プライド高そうだし。善意による施しなんて突っぱねそうだものな、こいつ。

「な、なんで……？」

「こうしないとミミが悲しむからな。何より、俺も世話になった相手が酷い目に遭うのを見過ごすのは寝覚めが悪い。何よりお前が欲しいからだ」

今回は大ポカをやらかしているが、本来エルマはこの道五年のベテランだ。この世界の常識がない俺や、コロニー育ちで世間知らずのミミにとっては良い先生になるだろう。

それに、知らずに暴走させたとはいえあの機体を普通に扱えるだけの操縦の腕もある。いざという時にサブパイロットがいるのは俺としても安心だ。そのうちミミにも船の操縦をレクチャーするつもりだけど、それはまだまだ先の話になるだろうし。

「わ、私をっ！？」

何故かエルマが顔を真赤にして長い耳をぴーんと立てた。ミミも少し驚いた顔をしている。ちょっと反応が過敏過ぎやしないか？と思うがここは素直に頷いておく。

「ああ」

「ふ、ふーん？　そ、そうなんだ？　そんな目で見てたんだ？」

エルマがなんだか急にモジモジとし始める。そんな目ってどんな目だよ。

「まぁ、そうだな」

残念宇宙エルフと内心では呼んでいたが、店のチョイスは適正だったし手続き関連の知識も豊富で、アドバイスは全て的確だった。『おくすり』を始めとしたミミへのフォローも結果的には功を奏したわけだし。暴走の件に関しては完全に本人の責任だとは言い切れ

ないところもあるしな。

「そ、そうなんだ……でも、ミミがいるでしょ？」
「別にもう一人くらい増えたってどうってこない。な？　ミミ」
「そうですね」
「そ、そう、一人じゃ足りないんだ……」

エルマが何故かごくりと生唾を飲み込んで俺に熱っぽい視線を向けてくる。うん？　何かこいつの反応がおかしいような？　気のせいか。

「で、どうするんだ？　俺の船に乗るのか、乗らないのか」
「の……乗る、わ」
「そうか、では歓迎しよう。しっかりと務めを果たしてくれよ」
「わ、わかったわ。お手柔らかに頼むわよ……？」
「？　いや、存分にこき使うぞ？」

こいつは何を言っているんだ。三〇〇万エネルぞ？　円換算で三億円ぞ？　こき使うに決まってるだろうが。

「そ、そう……わかったわ。覚悟を決めておく。何人もの宙賊どもを相手にするよりは楽だろうし」

なんかよくわからんことを言っているな、こいつは。まぁ、良いか。とにかく星系軍の本部に行ってとっとと金を払うとしよう。
なんか知らんが覚悟を決めた表情のエルマを連れて星系軍の本部へと赴き、エルマの用意した金と俺の三〇〇万エネルを合わせて賠償金を払う。手続きには少々時間がかかったが、これでエルマは晴れて清い身となった。その代わり、本人は一文無しの上に俺に対して三〇〇万エネルもの借金を背負うことになったわけだが。

「やれやれ……お前のおかげで俺の懐が随分寂しくなったよ」
「感謝はしているわよ……その、少しずつでも返すから」
「へいへい。ちゃんと務めを果たしてくれりゃ利子なんかも取らないから、気長に待つとするよ」
「そ、そう……わかったわ」

なーんか反応がしおらしいんだよなぁ。何か重大な擦れ違いが起きている気がするんだが、気のせいだろうか？

「何はともあれ買い出しだ。本当は食料品を補給する予定だったんだよ。お前の生活用品も買わなきゃならんだろ？」
「いくらかはね。船に無事に残っていたものもあるから」
「なるほど。んじゃさっさと買ってとっとと船に戻るぞ」
「はい、ヒロ様」

俺の右側にミミが、左側にエルマが立つ。傍から見たら両手に花だな。エルマも宇宙エルフってだけあって物凄い美人ではあるし。中身が割と残念だけど。

でも、旅は道連れ世は情けと言うし、連れ合いが増えるのは悪くないことだろう。それが美人で優秀なクルーなら尚更だ。手は出せそうにないけど。下手に手を出したら捻られそうだ。

ともあれ、所持金が五〇万エネルじゃ、いざという時にあまりにも心許ない。なんだかんだで一週間近く休んだわけだし、明日から早速金を稼ぐために動かなきゃならんな。

☆★☆

「そういえば、戦艦を中破させた例の傭兵の件はどうなっていますか？」

「あの件ですか？　ええと……船を売って賠償金を完納したみたいですね」
「船を売って……しかももう完納ですか？」
「はい、そのようです。ちょうど今日が納期限だったようです」
「今日が……？　私、罪に問わないように言いましたよね？」

軍が命じた賠償請求の納期限を破ったらそれはもう立派な犯罪になってしまう。少なくともこの国では。それはこの国の法がそうなってしまっているから仕方がないとしても、たった一週間であの莫大な賠償金を払わなければならないというのはあまりにも横暴だろう。

特に軍の権力が強いこの星系においてこの処分と通達は実質的に軍があの傭兵に罪を問うているのと変わらない所業だ。常識的に考えて、大破した船の修理が一週間では終わらないというのはだれにでもわかることである。

「そう、ですね……ええと、賠償金の算定と請求、納期限の通達をしたのは主計科のバリトン大尉のようです」
「あの豚め……バラバラに引き裂いてお仲間の餌にして差し上げましょうか」

主計科のあの豚は傭兵という存在と、その傭兵を上手く使って功績を上げている私をよく思っていないのだ。なので、しょっちゅうこういう姑息な嫌がらせを仕掛けてくる。

星系軍と一緒に宙賊を討伐しにいって少し――いや、あの傭兵のミスは少しという次元の話ではないけれど――ミスをしたら簡単に監獄に収監される、なんて噂が傭兵の中で流れるのは私としては困るのだ。

「セレナ様」

「おっと……しかし、これは問題ですね。調査をしてください。可能であればあの豚を引きずり下ろすように」
「はっ」
しかし、船を売ったとはいえあれだけの賠償金を一週間で用意できるとは……傭兵というのは思ったよりも金回りがよいのですね。
私も軍をやめて傭兵になろうかしら……？

#021　札束ビンタ再び（後書き）

そろそろ一日一話更新にするヨ！―（：3」∠）―（ストックに余裕があるうちにね！

#022　エルマ

色々と買い物を済ませ、船に戻ってきた俺達は少々は早いが夕食を摂ることにした。エルマはここ数日ロクに食って無さそうな雰囲気だったからな。

「おかしい」
「なんだ、口にあわないのか？　今日の夕食は高級フードカートリッジに人造肉まで使ったスペシャルなディナーなんだが」
「そうじゃなくてっ！　なんでこんな……！」

ガタンッ、と椅子を鳴らしてエルマが席から立つ。

「なんで傭兵の船がこんなラグジュアリーな感じなのよっ！？」

先日入れ替えたばかりで輝かんばかりに綺麗なダイニングの内装を指差し、エルマが叫ぶ。なんでって言われてもなぁ。

「住環境の充実は重要だと思うぞ？　美味い飯、綺麗な部屋、清潔で快適な寝床、そういったものはその空間で過ごす者のメンタルに好影響を与える」
「理屈はわかるけど……わかるけどっ！　まるで高級客船みたいな内装じゃない！」
「稼いだ金の有効活用だな。実に良い買い物をした。提案してくれたミミは偉いな」
「えへへ」
「んんー……！」

自分の言いたいことが伝わらないのがもどかしいのか、エルマが口をへの字に曲げて悶絶する。

「エルマ」
「なによ？」
「よそはよそ、うちはうちだ。うちはこうなんだ。慣れろ」
「くっ……わかったわよ」

私の中の傭兵のイメージが……とかなんとかまだブツブツ言っているが、エルマはなんとか騒ぐのをこらえて食事を摂り始めた。俺もテツジンのスペシャルディナーを口に運び、舌鼓を打つ。
通常のフードカートリッジを使った食事も美味かったが、高級フードカートリッジを使うと格が違う感じがするな。人造肉のステーキもこの前に食べた時とは比べ物にならない美味さだ。人造肉に関しては買い替え前の普通の自動調理器で調理した時と全く同じものなんだが、何故ここまで差が出るのだろうか……？　テツジンの力ってすげー。

「美味いだろ？」
「……いままで私が食べていたものは何だったのかって思うくらい美味しいわ」
「わかる」
「わかります」

エルマの言葉に俺とミミも深く頷いて同意する。それほどまでにテツジンはすごいのだ。正直、舌が肥えてしまいそうで怖いくらいである。
例えば人造肉のステーキ一つをとっても絶妙につけられた下味とか、焼き加減とか、ふわりと香る香辛料の風味だとか、そういった細かい点が人造肉の味を二段も三段も引き上げているのだ。そうい

った細やかな匠の技が出てくる料理全てに感じられる。まさに鉄人の料理だ。
他愛のない話をしながら食事を終え、次は順番に風呂に入ることにする。

「ミミはエルマに使い方を教えてやってくれ。なんなら二人で入ればいいんじゃないか？」
「そう、ですね。そうしましょうか？」
「使い方……？　まぁ、構わないけれど」

エルマも首を傾げながらだが同意したので、ミミに任せることにして風呂に向かう。あー、全身自動洗いとマッサージが気持ちええんじゃあー。これ、お湯を大量に消費するように見えるけど高度な浄水技術を利用することによって同じお湯を使いまわしているから、殆ど水を消費しないんだよな。長期航行でも水不足に陥りづらくなるっていうメリットもあるんだよ。
風呂を終え、Tシャツにハーフパンツのみというラフな格好でダイニングへと向かうと、ミミとエルマが何やらひそひそ話をしていた。

「あがったぞー？」
「ぴっ！？」
「うおっ！？」

ひそひそ話をしていたエルマが弾かれたように身を震わせて変な声を出したので、俺も思わずびっくりしてしまった。一体どうしたと言うんだお前は。雀か何かみたいな声を出してからに。

「は、は、早かったわね！？」
「いや別に普通……おい大丈夫か？　なんか顔色が」

「だだっ、大丈夫よっ！　何の問題もないわっ！」
「お、おう」

ミミに視線を送ってみるが、曖昧な笑みを返された。何？　何なの？　違和感が俺の中でムクムクと大きくなってくる。何か致命的な擦れ違いが起きている。そんな気がしてならない。

「ヒロ様、エルマさんとお風呂に行ってきますね」
「あ、うん」

違和感の正体に気づけぬまま二人を見送る。うーん？　なんだかエルマに怯えられているような……？　ミミがなんか寂しそうな顔をしているような……？

わからん。考えてもわからんもんはわからん。こういう時は忘れてしまうに限るな。脳のリソースの無駄遣いだ。決して思考放棄ではない。これは決断的な思考の前進である。

そういうわけで、俺はエルマの不審な行動について思いを馳せることを停止して自分の部屋で明日以降の行動について検討することにした。

今日の支払いによって俺の財布は割とお寒い状況なので、可及的速やかにお金を稼がなければならない。船が大破したときのことを考えると、最低でも一〇〇万エネルはキープしておきたいところだ。

「うーん……」

傭兵ギルドで斡旋している依頼を眺めて思わず唸る。割の良い仕事がないわけではないが、どちらかと言うとこれは輸送船を持っている傭兵団向けの案件だ。

このターメーンプライムコロニーで生産された産品をちょっと危険な宙域や星系を通って二つ三つ隣の恒星系に運ぶお仕事で、運ぶ

製品や量にもよるが概ねその報酬は一〇〇万エネルから三〇〇万エネル。効率よく運べばウッハウハだ。
しかし残念ながら、このクリシュナで運べる物資の量は決して多くはない。どこかの星系に移動する際に小遣い稼ぎに少量の荷物を運ぶのは燃料代や整備費用の足しになるので十分にアリだが、輸送をメインにやるにはクリシュナの積載量では少々効率が悪いのだ。

「やはり賞金稼ぎか……」

この星系を席巻していた宙賊の拠点は先日壊滅したが、宙賊どもも一枚岩ではない。ああいった大規模な宙賊に所属せず、少人数で活動をしている『流れ』の宙賊というのもそれなりにいるのだ。
そして、そういう宙賊は大規模な宙賊が討伐された後にこそ活動を活発に始める。何故なら、大規模な宙賊討伐の後には星系軍の警備が緩くなるからだ。

「狙い所は小惑星帯だな」

採掘資源の豊富な小惑星帯には民間の採掘船と、それを狙った宙賊艦が現れる。明日はそういった宙賊艦を狙って賞金稼ぎだな。
そうと決めたらハンティングポイントの選定である。平時から警備の厳しいベレベレム連邦の支配星系方面には奴らも近寄らないだろう。星系軍の本部があるターメーンプライムコロニーの周辺も同様だ。宙賊基地のあった方面では撃破した宙賊艦の船体を回収する作業が行われていて、星系軍がその警備に就いているからあっち方面もない。

「となると、この辺かこの辺か、この辺か……」

奴らが出没しやすいポイントを割り出した。次に民間の採掘船が

採掘に行きそうなポイントを割り出す。宙賊が出没しやすい宙域でも、そこに獲物である採掘船がいないのでは意味がない。実入りがなければ宙賊だって干からびるのだから。
正直、人気の採掘ポイントというか『よく資源が掘れるポイント』はどの民間船だって隠す。そりゃそうだ、自分達の飯のタネだからな。

「うーん、これは難しいな」

ターメーン星系の星系地図を開いて色々と情報を集めてみるが、やはりそう簡単には有用な採掘ポイントというものを特定するのは難しそうだ。これは明日になってからぶっつけ本番でやってみるしかないかな。
と、そう結論づけたところで突然俺の部屋の扉が開いた。

「ん？　どうした？　というか、ノックくらいしろよお前……」

扉を開けて入ってきたのはエルマだった。何故か妙にラフというか、薄っぺらい服を着ている。というか君、ちゃんと下着つけてます？　俺の視線を察したのか、エルマが顔を赤くして胸を隠すかのように腕を組む。

「き、来たわよ……」
「え？」

別に呼んでないんですけど？　と首を傾げると、エルマは顔を真赤にしてキッと俺を睨みつけてきた。いやいや、意味がわからんとですよ。何で勝手に部屋に入ってきた挙げ句、俺を睨みつけるわけ？

「そういう趣向なわけね……」

「んん……？」

エルマは溜息を吐き、何故かデスクに座っている俺を素通りしてベッドに腰掛けた。ミミと寝ても十分に余裕のある広さのあのベッドにである。いや、そんな薄着でベッドにって……そういう勘違いさせるような行動は良くないと思いますよ、ぼくは。

「……しなさいよ」

「はい？」

「――だから！　好きにしなさいよって言ったのよ！」

「何でや！？」

ベッドに腰掛けたまま叫ぶエルマに思わず全力で突っ込む。

「欲しいって言ったじゃない！　それで、三〇〇万も出して私をクルーにしたじゃない！　つまりそういうことでしょっ！」

「ええぇ……」

自分の言動とエルマの反応、そしてミミの寂しげな視線を思い返す。

なるほど、そういうことか。確かにエルマに俺はお前が欲しいと言った。言ったわ。でもその後にミミの教育と俺のサポートって言ったよね？　あ、もしかしてサポートって言葉をそういうふうに受け取ったとか？

なるほど。そう考えるとエルマの奇妙な言動と反応にも合点が行く。そして勘違いとはいえ、エルマはそれを受け容れたというわけだ。ううむ。

改めてベッドの上でプルプルと震えているエルマの容姿を眺める。物凄く整った目鼻立ちに、透き通るような綺麗な銀髪。薄手のワンピースのような服を押し上げる胸の膨らみは小さいが、無いわけ

ではない。全体的に細身でスラっとしていて、肌も白くきめ細かい。文句なしの美人だ。
俺の意図とは違う方向に勘違いした末での行動のようだが、据え膳食わぬはなんとやら。向こうも受け容れてくれているということであれば無理に遠慮するのも失礼というものだろう。

「わかった。できるだけ後悔させないように頑張る」
「っ――！　や、優しくして、ね……？」
「善処する」

俺はそう言って怯えた子供のような表情をしているエルマの頭をできるだけ優しく撫で、そっとその華奢な体をベッドに押し倒した。

☆★☆

「けだもの」
「……」
「きちく、すけこまし」
「同意の上だからセーフ」
「うー……」
てしてしとエルマが俺の胸を叩いてくる。ははは、こやつめ。
「私、抱かれ損じゃない……」
「そんなことはない。俺は嬉しかった。最高だな」

そもそも、俺は別に聖人君子でもなんでもないので。行けそうなら行きますとも。

「このけだもの……」
「勘違いして自分からオオカミに食べられに来るウサギさんが悪いと思いま……痛い痛い。そこを抓るな」

胸元で頬を膨らませたエルマが敏感なところを抓ってくる。とても痛い。

「黙っていないでちゃんと教える辺り誠実だろ？」

「誠実な人はこうなる前に言うと思うんだけど」

「こうなる前に言ってお前に盛大な恥をかかせる方が不誠実だと俺は思うけど」

「ああ言えばこう言う。悪い口ね」

そう言ってエルマが俺の唇を自分の唇で塞いできた。

「痛っ」

「ふん」

キスの終え際に唇を齧っていくのはやめてほしいです。地味に痛いので。

「やっちゃったもんは仕方ないわよね。うじうじと悩んでも仕方がないわ」

「俺は嬉しかったし気持ちよかったし大満足だけど」

そう言ってエルマに視線を合わせる。すると、エルマは顔を赤くして視線を逸らした。

「……悪くなかったわよ。優しくしてくれたし」

「よし」

「何がよしよ」

「痛い痛い痛い痛い」

今度は脇腹を抓られる。さっきから痛いんですけど？

「あんまり俺を虐めると逆襲するぞ」

「……してみたら良いじゃない」

「なるほど」

さっきからちょっかいをかけてきていたのは二回戦のお誘いだったというわけか。ではご期待にお応えしましょう。

☆★☆

「おはようございます」

「おはよう」

翌朝、疲れて眠ったままのエルマをベッドに残したまま風呂に入り、ダイニングへと戻ってくるとミミがテーブルに着いていた。特に何かしているわけではなく、座っていたようだ。

「……」

「……」

沈黙が気まずい。心なしかミミの表情も暗い気がする。これはアレだな？　捨てないで病が再発してるな？

「あ、あの？」

「まぁまぁまぁ」

困惑しているミミを半ば強引に席から立たせ、今しがた出てきたばかりのバスルームに連れていく。コミュニケーションとスキンシップは大事だからね。

#023　三人の日常（前書き）

ハッピーバレンタイン！　僕はゲーム内の美少女からしかチョコ貰えないけどね！　―（：3」∠）―

#023　三人の日常

「けだもの」
「おう、任せてくれ」
「褒めてないわよっ！」

対面に座っているエルマがシャーッと怒る。
ここは再びのダイニング。俺の横にはニコニコ笑顔で俺の腕に抱きついているミミがいる。

「昨日あれだけ私を……のに！　朝からミミととかどういう神経してるのよ！？」
「平等さは必要だと思うぞ？」
「びょっ……！」

俺の返しにエルマの舌鋒が揺らぐ。恐らく俺の言う『平等』の意味を考えてしまったのだろう。

「同じ船の仲間同士、みんな仲良く。それでいいじゃないか」
「あ、あんたはそれでいいでしょうけどねぇ」
「エルマはミミが嫌いか？」
「なっ！？　そ、そんなことは無いわよ」
「なら良いじゃないか。そもそも、エルマはミミと俺がそういう関係なのを知った上でこの船に乗ったわけだろう？　今更そこを問題にするのはおかしいだろう」
「それは……っ！　そう、だけど……」
「みんな仲良し。みんなハッピー。それで良いじゃないか」
「……なんか丸め込まれてる気がするわ」

「ソンナコトナイヨー」

ニッコリと笑みを浮かべてみせる。ミミと俺がそれでＯＫとなればエルマも従わざるを得ないよな。何せ三人しかいないわけだし。

「とりあえずその話は置いておいて」

「とりあえずって……まぁ、いいわ。これ以上言っても仕方が無さそうだし。で、何よ？」

「うん、本日からの行動指針を決めたいと思ってな」

「……真面目な話みたいね」

「それなりにな。まず、俺達はできるだけ早く金を稼がなきゃならない。貯金はまだいくらかあるが、船が中破大破すると正直結構危ない金額しか残ってないんでな」

「それは……」

エルマが何かを言いかけて口を噤む。うん、まぁエルマの賠償金を建て替えた結果だからな。それは言うまでもないだろう。

「で、だ。選択肢は二つだ。一つは、さっさとこの星系から移動して稼ぎ口を探す」

「この星系じゃだめなんですか？」

「宙賊の数が減って仕事が少ない上にちょっとキナ臭いからな。他の星系に移動するってのは俺はアリだと思う」

「そうね」

俺の意見にエルマも同意するように頷いた。

「最近帝国と連邦の間で緊張が高まっているから、国境を接しているこの星系は紛争宙域になる恐れがあるわ。安全を取るならさっさと移動するのは十分アリだと思う」

「うん。で、もう一つの選択肢はこの星系に留まって、小惑星帯で流れの宙賊を狩りながら紛争が起こるのを待つって選択肢だな。紛争ともなれば傭兵の需要は急上昇する。敵国の正規軍相手に戦うことになるわけだから危険も大きいが、報酬も大きい」
「今の時期なら流れの宙賊が活発に活動しているだろうというのもポイントね。大規模な宙賊が討伐された後は星系軍の警備が緩むから、流れの宙賊にとってはかきいれ時よ。奴らは見つけにくい上に装備が整っていることも多い分、賞金も高い傾向があるわね。紛争に巻き込まれる可能性もあるし、こっちの選択肢はハイリスクハイリターンということになるわ」
「なるほど……どうするんですか？」
「それを話し合おうと思ってな。ミミはどう思う？」

俺の質問にミミはうーん、と少し悩んでから口を開いた。

「この星系に留まって宙賊を狩るのが良いと思います」
「ほう、何故だ？」
「ヒロ様の腕とクリシュナの戦闘力なら装備が多少整ったくらいの宙賊じゃ相手になりそうにないですし、紛争になってもいざとなったら逃げられますよね？」
「そうだな。紛争が起こったからって絶対に参加しなきゃいけないわけじゃないな」

ミミの言葉に頷く。確かにミミの言う通り、帝国と連邦の紛争が始まったからといってその紛争に絶対に参加しなければならないわけではない。寧ろ、そういう時こそ宙賊どもはあちらこちらに跳梁跋扈し、民間船や軍の輸送船を襲うのだ。それらの排除に回るという選択肢もあるし、とっととケツをまくって逃げるって手もある。
「私もこの星系に留まることを推すわね。あんたの腕なら紛争に参

加しても活躍できるでしょうし、宙賊も問題ないでしょ」
「なんだ、エルマもか」
「ええ、私もよ」

エルマはあっさりと頷いた。ベテランの彼女が俺の腕を評価してくれているというのは少し嬉しいな。

「じゃあ、決まりだな」
「ヒロ様も、ということですか？」
「俺はもう少し別の視点でな。よその星系に映るにしても最低限、もう少し金は稼いでおきたいってのもある。長距離航行は何が起こるかわからないし、次の目的地も決めてなかったし」
「なるほどね。ちなみに今いくらあるの？」
「だいたい五〇万」
「確かにちょっと心許ないわね。じゃ、稼ぎましょうか」

エルマの言葉に俺とミミが頷き、出港準備が開始された。

☆★☆

ターメーン星系に残って金策をする、というわけで俺達は早速動き出した。
やることそのものはシンプルだ。資源の豊富な小惑星帯を巡回し、採掘船を狙う宙賊を見つけ出し、追い詰め、狩る。見敵必殺で飛び回って見つけ次第襲いかかる、採掘船の近くでジェネレーター出力を落として待ち伏せし、仕事をしにきた宙賊を叩き潰す。

稼ぎはすこぶる順調だ。一日平均十隻前後の宙賊艦をコンスタントに狩ることができている。宙賊艦からは積荷が手に入るし『流れ』に懸かっている賞金は少なくとも一〇〇〇〇エネル、多いやつだと

三〇〇〇〇エネルほどの賞金が懸けられていることもあるし、今日は『仕事』を終えた後の奴らを狩って精錬済みのレアメタルを手に入れることもできた。
その他にも宙賊艦から剥ぎ取った装備や細々とした略奪品なども合わせ、一週間で一七八万エネルを稼ぐことができた。

報酬の分配率はミミが０．５％、エルマが３％ということに決まったので、ミミの取り分が大規模討伐の略奪品の売却益も合わせて一二九〇〇エネル、エルマの取り分が五三四〇〇エネルとなった。
これで俺の所持金が約二二〇万エネルとなり、危険域からは完全に脱したということになる。

「今日も大いに稼いだわねっ！　かんぱーい！」

残念宇宙エルフが馬鹿笑いをしながら酒に満たされたカップを掲げ、その中身を一気に飲み干す。酒を嚥下する度に微妙に動く白い喉が艶かしく見えてしまうのがなんだか悔しい。
ちなみに酒の種類は何かと言うと、エールだった。エルマと店員はビールと言い張っていたが、俺が思うにシュワッとしないビールはエールだと思う。

「あー、はいはい。乾杯乾杯」

対する俺の持つコップの中身はよく冷えたお茶である。酒が飲めないのかって？　飲めるさ。ただし飲んだらすぐにベロンベロンに酔っ払ってぶっ倒れるがな！
そう、俺は下戸なのである。

「お酒も飲めないなんてヒロは意外とおこちゃまでちゅね～？」
「うっせ、体質だ体質。別に酒を飲めりゃ大人ってわけじゃないだ

ろ」

俺の隣の席に座ってたエルマが俺の肩に手を回してしなだれかかってくる。この残念宇宙エルフ、面倒くさいタイプの絡み酒である。テンションはいつもより高め。スキンシップは見ての通り大量増加。なんと物理的に絡んでくる。

「エルマさんはお酒を飲むととっても楽しそうですよね」
「楽しいわよー？　ふわーっとしてぽかぽかして最高ね！」
「ダメだぞ」
「……はい」

じーっと酒瓶に視線を送るミミに釘を差しておく。調べてみたところ、この世界というか銀河には特に飲酒可能年齢の規定などはないようだが、やはりあまり若いうちから飲むのは良くないことであるとされているようだ。

俺的にミミはまだ子供だから飲酒は早――ミミが子供だったらそのミミに手を出した俺は鬼畜の類なのでは？

いや、お互いの同意があったからセーフ。ついでにそっち方面も調べたけど、満十五歳以上でお互いの同意があればセーフってことになってたし。大丈夫、セーフ。

「それにしてもアンタ、良い腕してるわよねぇ。この船が強力なのは言うまでもないけど、ちゃんと『使えてる』し、待ち伏せや奇襲の手際も良いわ」
「身体が覚えてるみたいでな。不思議と戦闘関連では頭が回るし、身体も動くんだよ」
「ふーん……ねぇ、アンタ私達に何か隠してない？」
「カクシテナイヨー」

ジロリと至近距離で睨んでくるエルマに棒読みで返す。隠していることはいくつかあるが、どれもいま話すのは得策とは言えないと思う。例えば、俺が多分異世界――この場合、現実世界とでも言ったほうが良いのだろうか？――から来たことだとか、記憶喪失というのは嘘だということだとか、この世界のことを『ゲーム』として知っているだとか。

ミミやエルマとは普通以上に仲良くなっているとは思うが、今こんなことを告白しても『おかしなことを言うなぁ』と思われるだけだろう。

「ま、良いけどね。私にだって言えない事はあるわけだし。ね？ ミミ」

「私は別にありませんよ？」

「あら？　本当に？　例えば最近たいじゅ」

「わーっ！　わーっ！　ダメですダメです！」

急にミミがわたわたと慌てだし、エルマがケラケラと笑う。体重ねぇ……ミミの場合お腹じゃなくて胸に肉が付いてるんじゃないのか？　あの胸部装甲は超弩級だからな……身体は駆逐艦級なのに。

「ミミ」

「ひゃい？」

「トレーナーを信じろ。無理な減量とかは絶対にしちゃいけないからな」

「はいぃ……」

俺に察されてしまったのが恥ずかしかったのか、ミミは真っ赤にした顔を両手で覆い隠してしまった。

寧ろ、ミミはもう少しお肉がついてもいいと俺は思うんだけどな。よし、今度こっそりトレーニングルームのＡＩトレーナーの設定を

いじっておこう。ふふふ。

「そうそう、明日なんだが」

「明日ぁ？」

「うん、明日。明日なんだがな、稼ぎはお休みにして皆でショッピングにでも行かないか。息抜きに」

「息抜き、ですか？」

息抜きという言葉にミミが小首を傾げる。

「ああ。折角金を稼いでも使う暇もなくずっと宙賊狩りってのも疲れるだろう？　何か美味しいものを飲み食いするとか、身の回りのものを買うとか、なんなら服やアクセサリーを買うとか、使い途は色々あるじゃないか」

「単純にあんたが休みたいだけじゃないのぉ～？」

からかうようなエルマの言葉に素直に頷く。

「勿論それもある。適度なリフレッシュをしないと思わぬミスを起こすかも知れないからな。それより何よりミミに自分が命懸けで稼いだ金、というものを自由に使うという体験をして欲しいなと」

「あー、なるほど。そうね、そういう体験は大事よね」

エルマが一転して真面目な表情で頷く。酒のせいか顔はほのかに赤いままだったが、完全に酔っ払っているというわけでもないらしい。

「えっと、私は……」

ミミは、というと困った顔をしていた。そりゃまぁ、そうか。俺

が今までミミに渡した報酬額の合計は一六八五〇エネル。一エネルを百円として計算したら一六八五〇〇〇円。ミミの歳で『これが君の稼いだお金ね』と言われてポンと一六〇万円も渡されたら戸惑いもするだろう。

「私はオペレーター席に座っているだけでしたし……やっぱりあんな大金は」

「確かにミミはまだオペレーターとして一人前とは言い難いだろうけど、それでも同じ船に乗って等しく命を懸けて戦う仲間だろう？　あの報酬は正当な報酬だよ」

「そうよ。遠慮なんて要らないわ。こいつの世話をする分も報酬には入ってるんだからね」

「いや、その……嫌なら――」

「嫌だなんて言ってないじゃない！」

「嫌じゃないです！」

俺の言葉に被せるようにエルマとミミが言葉を重ねてくる。ミミは赤い顔で俺の顔を真っ直ぐに見て。エルマは言ってから恥ずかしくなったのか、顔をあさっての方向に向けて長い耳を真っ赤にしている。

「ヒロ様。私はヒロ様のことが好きです。本当に、心から。愛してます。ヒロ様は私の全てです。ヒロ様になら私の全てを捧げられます」

ミミがテーブルから身を乗り出し、真っ赤な顔でそう告白してくる。こんなに熱烈な告白なんて映画や小説でもそうそうお目にかかれないな、なんてことを考えてしまう。

その相手がよりにもよって俺だなんて……俺はいつの間にか酒でも飲んでぶっ倒れて夢でも見ているんだろうか？

「わ、私は……そ、そこまでじゃないけど？　で、でもあんたには助けられたし？　あんたに助けられていなかったら今頃酷いことになってだろうし？　す、少しは恩というか……その、ありがたいというか……ちょっと良いかなって思ってたりしないこともないわよ？　そうじゃないといくらなんでも身体を許したりはしないわよ……馬鹿」

ミミの熱烈な告白に感化でもされたのか、エルマもごにょごにょと俺に対する思いを吐露する。

俺、二人ともどこか義務的というか、助けた恩に報いるために少し無理をしているんじゃないかと思ってたんだ。なんだか、二人の言葉を聞いてすっと肩の荷が下りたと言うか、胸のつかえが下りた気がする。

「ちょ、なんで泣いてるのよ？」

「ヒ、ヒロさま？」

「いや、すまん。二人にそう言ってもらえて凄く嬉しいよ。正直少し……いやかなり不安だったんだ」

「不安、ですか」

「馬鹿ねぇ。絶体絶命のピンチを颯爽と助けてくれた王子様に靡かない女なんてそういないわよ」

隣に座っていたエルマが笑いながら俺の頬にキスをしてくる。何度も、何度も。

「あんたが居なかったら私は今頃監獄で慰みものよ。そんな境遇から救ってくれたあんたは紛れもなく私の王子様なんだから。変な心配なんてしなくていいわよ。甲斐性もあるしね」

「わ、私もですよ！　ヒロ様！　ヒロ様に助けてもらわなかったら、

私も酷い目に遭ってました！　ヒロ様は私のヒーローです！」

席を立って回り込んできたミミもまた、俺に抱きついてくる。少しお酒臭い気が……もしかしてジュースと間違えてお酒を飲んだのだろうか？

「ミミ、王子様に私達が王子様のことをどう思っているか、しっかりと伝えましょうか」

「は、はいっ！　がんばりますっ！」

二人の手が俺に伸びてくる。俺は一切の抵抗をせず、彼女達の行動を甘受することにした。

#023　三人の日常（後書き）

エルマの賠償金関連とか船関連についてはそのうち描写する予定です。

忘れた頃になりそうだけどね！―（：3」∠）―

#024　三人でショッピング　前編

翌日である。

「さぁ、ショッピングに行きましょうか」
「はいっ」
「君達なんでそんな元気なの？」

昨日は一緒に夜遅くまで仲良くしていたはずなんだが、二人のお肌がいつもよりつやつやで元気いっぱいに見える。やはり捕食されているのは俺なのでは？　何か吸われているのでは？　俺は内心訝しむが、答えてくれる人はいない。

「ヒロ様？」
「いや、なんでもない。行くとしようか」
「はいっ」

上機嫌な様子で満面の笑みを浮かべるミミに手を引かれながらハンガーベイを抜け、高速エレベーターに三人で乗りこみ、エレベーターからの宇宙の風景を見ながら辿り着いたのはもはやおなじみと言っても良い第三区画。

「ミミ、怖くないか？」
「大丈夫です！　ヒロ様もエルマさんもいますし、私だってレーザーガンを持ってますから」

ミミが笑顔で腰のレーザーガンをポンと叩く。うん、できれば抜かないで対処したいよな。今度エルマに体術の訓練でもつけてもら

うかね。

「ところで、どこか行く宛はあるの？」

「いや、完全に思いつきだからこれといったプランは無いな。ミミはどこか行きたいところとかあるか？　前に第三区画の店をリサーチしてただろ？」

「あ、はい。そうですね」

ミミが携帯端末を取り出し、思案する。

「面白そうなところは傭兵向けのガジェットショップでしょうか。船の内外で使える色々な装備を売っているみたいです。あとはガンショップとか、輸入品ショップとかですね」

「ガジェットショップってのは気になるな。しかしガンショップか？」

「はい。自分の身を自分で守れるようにしておかないと、いざという時に足を引っ張ってしまいますから。私は力も弱いですし、運動神経もよくないので何か良いものがあったらなぁと」

なるほど、ミミはミミで自分に必要なものというのをしっかりと考えているんだな。俺も射撃戦ならともかく、殴り合いの喧嘩には自信がないし何か見てみるのもいいかもしれない。

「輸入品ショップは私も行ったことあるわね。普通の食料品店には並ばないようなマイナーな食品とかが見られて結構楽しいわよ。食料品店と違ってお酒も置いてるし」

「ほぉ、それはいいな。そこも行ってみるか。ガンショップには俺も興味があるし、あとで行ってみよう。まず、どこから行く？」

「ガジェットショップが一番近いですね」

「じゃあ、そこに行こう」

情報端末の地図を見ながら歩くミミを先頭にして三人でテクテクと第三区画を歩く。
このコロニーの第三区画はあまり治安が良くないのだが、エレベーター周辺と第二区画へと向かうゲートのある辺り、その他にも星系軍の本部のある辺りなどは比較的マシだ。オイシイマートのある辺りがマシな区域と治安の悪い区域の丁度境界線にあたるらしい。

「あのお店みたいですね」
「あれか」

店の外観は至って普通だ。正面はガラス張りで、対Gスーツらしきものを着込んだ男女のマネキンなんかが並んでいる。いや、並んでいるものが対Gスーツって時点で普通とは言い難いかもしれないけど。

「いらっしゃい」

店に入ると、入り口のすぐ横にある精算カウンターに座っていた店主が声をかけてきた。筋肉モリモリの厳ついおっさんだ。
店内を見回してみると、さして広い店ではない。コンビニと同じくらいの広さだろうか。あちこちに監視カメラがあるのは盗難防止用ということだろう。

「女連れ、か」
「駄目か？」
「いや。そっちの嬢ちゃんはともかく、あんたとそっちの姉さんはいかにも傭兵って感じがするしな」
「わかるもんなのか」
「経験だよ、経験。ま、色々あるから見ていきな。説明が必要だっ

たら呼んでくれ」

そう言ってヒラヒラと手を振り、店主は手元のタブレットに視線を落とした。接客する気あんのかよと思わないでもないが、まぁ日本以外の国の店なんて大体どこもこんなもんだろう。日本のおもてなし精神が異常すぎるだけだ、多分。

「それにしても、見た目だけじゃなんなのかわからんものも多いな」

謎の缶詰のようなものを手にとって眺める。値段は三エネル。ええとなになに……コックピットに爽やかな香りを提供！　タバコの匂いも気になりません！　って芳香剤かよ。よく見たら底が粘着テープになっているのか？　未来になってもこういうのは変わらんな。

「ヒロ様ヒロ様、この対Gスーツとかは使わないんですか？」

「あー、クリシュナにはコックピットブロック自体に加速時や急旋回時のGを相殺する機構が組み込まれているから必要ないかな。ミミも今まで気絶するほどのGは感じたことがないだろ？」

「それもそうですね……ちょっとかっこいいなって思ったんですけど」

ミミが少しションボリする。デザインがいかにもそれっぽくてかっこいいよな、それ。でも船員の生存性能を向上させるライフサポート機能は最高級のものを積んであるから必要ないんだ。ごめんな。

「これ良いんじゃない？」

エルマが持ってきたのは妙にサイバー感の溢れる球体だ。正直言って何に使うものなのか見当もつかない。

「なんぞそれ」
「グラビティスフィアよ。これ、便利なのよ」
そう言うとエルマはグラビティスフィアというものを肩のあたりまで持ち上げ、何やらボタンを押した。キュゥゥゥン、と機械の駆動音のようなものが鳴る。
「で？」
「こうして、こうよ」
エルマはグラビティスフィアからストローのようなものを引き出して口元にあてた。手を離したのにも関わらず、グラビティスフィアは依然としてエルマの右肩の辺りに浮いたままだ。不思議だが、何をするものなのかよくわからない。
「すまん、わからん。初めて見る」
「飲み物を入れておいて、戦闘中にいつでも飲めるのよ。しかも、ほら」
エルマが歩いたり、その場でくるりとターンしたりするとグラビティスフィアはその動きにピッタリと追従し続ける。なるほど？
「空中に固定できるドリンクボトル、ってことか？」
「そういうこと。固定ボタンを押したらその場に浮いて、三秒後の時点で一番近い質量体に追従するようになってるの。高いGのかかるコックピットでも問題なくその場に静止し続ける優れものよ。しかも中身も溢れないし、温度維持も完璧」
「技術力の無駄遣いってこういうのを言うんじゃねぇかな……いや便利だけども」

エルマの右肩の辺りに浮いているグラビティスフィアに手を伸ばし、ツンツンとつついてみる。ふわふわ押された分だけ動くが、またすぐに元の場所に戻ってくるようだ。謎の技術だ……。

「でも、お高いんでしょう？」
「一個五百エネルね」
「たっか……くね？」

微妙。すごく微妙。日本円換算で五万円は水筒とかドリンクホルダーとして考えると滅茶苦茶高いけど、空間に固定する謎技術を使っている超ハイテク品と考えると安い気がする。何より、今の俺の財力から考えれば端金だ。

「便利そうだし、買うか」
「私も買うわ」
「いや、これは船の備品として買うことにしよう。だから俺が出す。予備も合わせて六つ買おう」
「そう？　なら、お言葉に甘えるわね」

エルマがにっこりと笑みを浮かべる。くっ、元の顔が良いだけに破壊力が高いっ。なんとなく気恥ずかしくなって視線を逸らすと、エルマはクスクスと笑いながら軽い足取りでカウンターへと歩いていった。ぐぬぬ。

その他にも色々と不思議グッズはあったが、俺が欲しいと思うようなものはなかった。携帯ガスコンロのような加熱調理器具と簡素な鍋やフライパン等がワンセットになっているクッキングキットには少し興味を惹かれたが、船にはテツジンがあるしなぁ。わざわざ俺が雑な男料理を作ることもあるまい。

カウンターで支払いを済ませ、船に荷物を送ってもらうように言い伝えて次の店へと移動を開始する。

「次はガンショップですね」
「ガンショップか……なんかガンショップって響きがワクワクするよな」
「あんたも男の子ねぇ」

ガンショップはガジェットショップのすぐ近くにあった。徒歩三十秒である。

「物々しいなぁ」
「そりゃガンショップだからね」

通りに面しているショーウィンドウはガラス張りの外に鉄格子。店内への扉は分厚い自動ドア。物々しさＭＡＸである。ヴィーン、とやたら派手な重低音を鳴らして開く扉を潜り、中へと入る。

「おお、ワクワクする」

店内に入って目に入ってくるのはズラーッと並ぶ銃、銃、銃。その他にはカスタムパーツや替えのエネルギーパック、ホルスターなども売っているようだ。奥のカウンターに目を向けると、そこに座っているのは眼光の鋭いお爺さんだった。

「小僧、ここは人を撃ち殺す武器を売ってる店だ。女連れでデートに来るようなところじゃないぞ」
「そりゃごもっとも。まぁ五月蝿くしないようにするから許してくれ」
「ふん」

老人は興味を失ったかのように俺から視線を逸らし、カウンター

の上で分解されている銃の整備を始めた。本当に接客するつもりが微塵も感じられんな、この辺りの店は。

「そういやあんた、白兵戦用の装備は用意してあるの？」
「一応な。そうそう使うものでもないからカーゴの奥に仕舞ってあるわ」
「ふーん。まぁ傭兵が生身で戦うようなことは殆ど無いものね」
「だからこそ気をつけるべきなんだろうけどな」

壁面にディスプレイされていたレーザーライフルを手に取り、重さを確かめる。一体何の素材で出来ているんだろうか？　妙に軽いな。軽いのは悪いことじゃないんだろうけど、軽すぎるのも問題なんじゃないかと思う。

ミミはハンドガンタイプのレーザーガンを熱心に調べているようだ。いくつものレーザーガンを手に取り、重さやグリップを確かめたりしている。

「あんたは見なくていいの？」
「俺にはこれがあるからなぁ」

腰のレーザーガンをポンと叩く。これはステラオンラインの白兵戦イベントの賞品として手に入れたものだ。店売りのものよりも性能が高く、デザインも格好良かったのでそのまま愛銃にしている。

「あんまり見たこと無いデザインの銃ね。メーカーどこ？」
「あー、覚えてないな。ほら、俺アレだから」

入手経緯を説明するわけにはいかないのではぐらかす。記憶喪失設定は便利だなぁ！

「ああ、そうだったわね。整備とか大丈夫なの？」
「した覚えがないな」
「ちょっと、あんたね……店主に見てもらったら？」
「そうしよう」

素直に頷き、店主の居るカウンターへと向かう。カウンターに近づくと、店主のお爺さんがギロリと鋭い視線を向けてきた。眼光が鋭くてこえーよおい。

「なんじゃ」
「ちょっと複雑な事情があって、銃のメンテナンス方法がわからないんだ。すまないがちょっと見てくれないか？」

そう言って俺はホルスターごとレーザーガンをカウンターに置いた。まさか抜いて渡すわけにもいかないからな。
店主は訝しげな視線を俺に送った後、慎重な手付きで俺のレーザーガンをホルスターから抜き取り、目を大きく見開いた。

「こ、これはっ！？　マンダス社の……！？　しかもガンスリンガーチャンピオン特別限定モデル……じゃと！？」

ガタッ！　と椅子を鳴らして店主の老人が立ち上がる。大丈夫か？　全身を震わせて今にもぶっ倒れそうなんだが。

「小僧……いや、お前さんはこれを撃てるのか！？」
「は？　いや、そりゃ勿論撃てるけど」

実際にこいつを撃ってミミを助けたわけだしな。エルマもミミも俺がこのレーザーガンを撃った光景は見ているはずだ。

「そうか……撃てるのか……ということは、正式な所有者ということじゃな……」

爺さんが椅子に座り、瞑目する。

「なぁエルマ、この爺さんは何をこんなに驚いているんだ？」
「知らないわよ。でも、マンダス社って言ったらワンオフの超高級武器を作るメーカーとして有名なところよ。あれ、マンダス社製なの？」
「いや、詳しくは知らんけど。店売りの品よりは良いもののはずだ」
「当たり前じゃ！　マンダス社の限定モデルじゃぞ！　これ以上の銃なんぞ銀河中を探し回ってもそうそうないわい！」

爺さんがガーッと吼え、ホルスターにレーザーガンを突っ込んで突き返してくる。

「メ、メンテは？」
「その銃にメンテナンスはいらん！　何か損傷が起こってもナノマシン自動修復システムが即座に働くようになっとるからな。下手に手を出さんほうが良いんじゃ。あと、そいつはおまえさん以外には撃てん」
「へぇ……」

なんだか思っていたより良い銃だったらしい。確かにステラオンラインでは譲渡、トレード不可装備ってなってたけど、まさか個人認証システムめいたものまで搭載しているとは。これからはもう少し気にかけるとしよう。たまに布で磨いてやるとか。
一人で色々なレーザーガンを手に取って見ていたミミだったが、どうにも今持っている傭兵ギルドで選んでもらったレーザーガンよりもしっくり来るものは無かったらしい。結局、俺はメンテ用の磨

き布を数枚。後は船の備品としてレーザーガン用の予備エネルギーパックを三ダースほど購入して次のお買い物スポットに向かうことにした。

#025　三人でショッピング　後編

「次は輸入品店だったか」
「はい！　色々な珍しい食材を扱っているらしいです！」

銀河グルメを味わうことを目標にしているミミが鼻息を荒くする。

「食い物ならハズレはないだろうな」
「……そうね」

俺達の後ろを着いてきているエルマがニヤニヤと笑っている。何だよ、その笑みは。
その疑問の答えはすぐに明らかになった。

「ヒェッ……」
「ヒ、ヒヒ、ヒロ様、あ、あ、あれ……」

ミミが震える指で指し示す飼育ケージの中でフ〇イスハガーめいたサムシングが暴れていた。何あれ怖い。どう見てもヤバイクリーチャーだろう、あれは。

「高級食材らしいわよ。食べてみる？」
「いいえ、私は遠慮しておきます」
「ちなみにこれが加工品」
「ひぃぅ……！」

エルマがどこかから真空パック包装されたフェ〇スハガーを持ってくる。これ食うの？　うせやろ？

「遠く離れた星系の軍用レーションらしいわよ、これ。頭からバリバリ食べるんですって」
「美味いのか……？」
「さぁ？　食べたこと無いから知らないわ。栄養価は抜群らしいわよ？」

エルマが肩を竦めてみせる。一応ミミに視線を送ってみるが、全力で首を横に振っていた。だよな、これは流石に俺も無理。

「銀河を食べつくすというならこれくらい序の口よ？」
「俺達はホラ、初心者だから。まずは無難なところから攻略していかないとな」
「そ、そうですね！　あ、ヒロ様！　あっちに美味しそうなお肉が売ってますよ！」
「おお！　見てみよう！」

ニヤニヤと笑いながら真空パック片手に迫ってくるエルマから逃げ出す。いや、これは逃走ではない。別の目標に向かって前進しているだけだ。うん。

「こ、これは……マンガ肉！？」

それは一本の骨を覆う肉塊、つまり紛うことなきマンガ肉であった。

「ええと……一本約３ｋｇで七六エネル。調理済み、そのままかぶりつける、と」
「燻製にしてあるみたいですね」
「よし、これは買っていこう。ぜひ食いたい」

「はいっ！」

一本七六〇〇円のマンガ肉……高い！　高いが、この誘惑には抗えない！

何の肉なのか？　そんな些細なことはどうでも良いじゃないか。想像はつくけどさ。人造肉なんてものがある世界だからね。

「これは私のお給料で買いますね」

「いや、皆で食べるものだし俺が」

「いいえ、これを私の初任給の使い途にしたいんです。皆で食べましょう」

ミミがキラキラとした瞳を向けてくる。ううむ、そう言うならお言葉に甘えるか。

「わかった。じゃあご馳走になるよ」

「はいっ！　お任せください！」

真空パックされたマンガ肉を買い物かごに突っ込んだミミが鼻息を荒くする。ふと視線をエルマの方に向けてみると、彼女は彼女で買い物かごに何やらポイポイと入れているようだ。だいたい酒のようだが。

「よし、俺も何か探すぞ！」

流石に店内で危険なことも無かろう、というわけでミミと別れて俺も不思議食材を探して店内をうろつく。踊り食いでいただく食用ワームなどのゲテモノから、由緒正しいコーベ・ビーフまで色々と……コーベ・ビーフ！？　コーベ・ビーフナンデ！？

由来の説明は無かったが、最高級食肉としてコーベ・ビーフは全

銀河に流通しているらしい……なんとお値段は１００ｇ辺り一〇〇〇エネルから。部位によって値段は変動。流石に高すぎる。買おうと思えば買えるが、とても買う気にはならないな。
　コーベ・ビーフの高さに戦慄していると、買い物カゴ片手に通りがかったエルマが訝しげな視線を向けてきた。

「それくらいの贅沢は出来るくらい稼いでるじゃない」
「お前、３００ｇのヒレステーキで宙賊艦一隻とかだぞ。そんなもん日常的に……食え、るな？」
「あんたの稼ぎなら余裕でしょ」
「いいや、贅沢は敵だ！　もっと安くて旨いものが宇宙にはあるはずだ！　人造肉のステーキだって十分美味いし！」

　ちなみに人造肉のステーキだとだいたい１００ｇ辺り五エネルである。その価格差、なんと二〇〇倍。良いんだ、俺は人造肉でも十分美味しいと思える舌の持ち主だから。

「ま、確かにね。高けりゃ良いってもんじゃないわね」

　そう言ってエルマが食肉売り場から去っていく。今エルマの買い物かごの中に真空パックフェイ〇ハガーが入っていた気がするんだが、気のせいだよな？　み、見なかったことにしよう。
　お次はドリンクコーナーだ。よくわからない怪しげなジュースが多いな……コーラ、コーラは無いのか……！

「これは……！？」

　ボトルに入った黒々とした液体。ラベルには『Ｃｏｋｅ』の文字。間違いない！　これは俺の好物のコーラだ！　俺の旅の終着点はここにあった！

俺はボトルを引っ掴み、レジに猛ダッシュ。何か店員が怯えている気がするが、気にせず代金を払って早速店の外に出てボトルの封を開ける。ふわりと漂うフレーバーは慣れ親しんだもの。俺は期待と共にボトルを傾けた。

「……うん、まぁこんなことだろうと思ったよ」

舌に感じる甘味と酸味、鼻に抜ける香りはまさしくコーラそのものだったが、このコーラにはシュワッとする爽快感が一切無かった。これは炭酸抜きコーラだな。おいおいおい死ぬわあいつで有名なアレだ。

とはいえ、貴重なコーラの味だ。爽快感は今ひとつだが、コーラには違いない。ボトルの中身を飲み干した俺は店内に戻り、店員に告げた。

「この飲料の在庫はいくつある？」

「え、ええと……店頭に七本、バックヤードに七ケースありますね」

「全部くれ」

在庫管理用の端末らしきものを調べた店員の目が点になる。

「全部だ」

「ハイヨロコンデー！」

代金を支払い、船に送る手続きを済ませておく。ふふ、これでよし。理想的とはまったくもって言い難い品だが、味そのものは悪くない。いつか本物のコーラを飲むその時までの代用品としては使える……というか、これに炭酸を添加すれば良いのでは？

そう考えた俺は店の出入り口付近で情報端末を操作してそういったグッズがないかと調べてみたが、どうやらそういったものは存在

しないようであった。どうしてこんなに技術が進んでいるのにソーダマシンが存在しないんだ……この世界は歪んでいる。正さないと……。

「ヒ、ヒロ様？」
「なんか危ない目をしてるわね……」
「ははは、気にするな。少し取り乱しただけだ」

なに、いきなり目的を達成してしまうのも面白くない。今はこのもどかしさを、苦い現実を味わおうじゃないか……ふふふ。
買い物を終えた俺達は船に戻り、それぞれの戦利品を味わうことにした。
マンガ肉は……理想的なマンガ肉だった。確かな満足感、濃いめの味付け、適度な噛みごたえ……しかし一人一本は流石に多すぎた。だって骨の分は差し引いたとしても肉が２ｋｇ以上はついてるんだぜ？　流石に食いきれないわ。
これは一本をナイフとかで切り分けて皆でシェアして食うのが良いんだろうな。折角のマンガ肉に齧り付かないなんてロマンがないけど。
そして、エルマは例のフェ〇スハガーの真空パックをやはり買ってきていた。ウッソだろお前と思ったが、勇気を出して食べてみると案外イケた。食用に加工された外殻は見た目に反して柔らかく、まるでかまぼこのような食感で、噛み千切ると溢れ出してくる中身はクリーミーで少し甘い。これは例えるなら、そう……クリーミーコロッケならぬクリーミーかまぼこ。

「案外イケる」
「見た目が悪いだけなのね、これ」

ミミがモリモリとフ〇イスハガーを食べる俺とエルマを信じられ

ないという目で見ているのが印象的だった。
俺のコーラ？　一応二人にも飲ませてはみたよ？
「なんか薬臭くない？　私はあまり好みじゃないわね」
「甘いですね……」
エルマははっきりと好みじゃないと宣言。ミミもはっきりとは言わないものの、微妙な表情をしていた。いいさいいさ、俺が一人で楽しむから。そのうち炭酸を添加した本物のコーラを飲ませてやるからな。覚えてろよ。

#025　三人でショッピング　後編（後書き）

私の中（宇宙）で人造肉（ｓｙｎｔｈｅｔｉｃ　Ｍｅａｔ）と培養肉（ｃｕｌｔｕｒｅｄ　ｍｅａｔ）は別なんだ、すまない―（∵３」∠）―（そのうちでてくるよていだよ

#026　悪運を持つ者達（前書き）

期せずしてハードラックとダンスっちまう三人……宿命だね。仕方ないね―（：3」∠）―

#026　悪運を持つ者達

マンガ肉パーティーの翌日。俺達は再び小惑星帯を訪れていた。
十分な貯金もできたわけだし、さっさと他の星系に移動しても良かった。しかし、折角『流れ』の数が増えていることだし、もうひと稼ぎしてからでも良いだろう。そういう方向で俺を含めた三人の意志がまとまったからだ。

「妙ね」
「妙だな」
「妙なんですか？」

深刻な表情で呟くエルマと、それに同意する俺。そしてそんな俺達を見て首を傾げるミミ。
今日も今日とて美味しい美味しい『流れ』狩りに来た俺達であったが『流れ』を待ち伏せしていると妙な動きをする連中を探知した。三隻の小型船だ。
そいつらは妙に統制の取れた動きで隠れるようにコソコソと小惑星帯の中を動き回っている。明らかに採掘をしている動きじゃないし、宙賊にしては動きに統制が取れすぎている感じがする。そもそも、どう見ても獲物を探している動きではない。あれは他の船との接触を避けている動きだ。

「どう思う？」
「きな臭いわね」
「だよな」
「？？？」

ミミはわかっていないようだが、こういう動きをする連中に心当たりがある。十中八九ベレベレム連邦の偵察部隊か工作部隊だろう。こんなところで何をしているのかはわからないが、大方グラッカン帝国軍――つまり星系軍の動きを把握するための小型レーダーを設置しようとしているとかそんなところだろうと思う。

「参ったなぁ、動くと見つかるよな」
「そうね、見つかるわね」
「そうしたらどうなると思う？」
「そりゃ消しに来るんじゃないの？」
「ですよねー。さぁ困ったぞ」
「危ない人達なんですか？」
「とびきり危ない連中だ。多分ベレベレム連邦軍だろう」
「えっ！？」

ミミがびっくりした顔でレーダーの反応を見つめる。ミミじゃあレーダーに映る三つの光点だけでは実感がわかないだろうな。

「あっ」
「こりゃ見つかったな」

レーダーに映る所属不明艦の動きが変わった。明らかに連携してこちらを追い詰めるような機動を開始している。隠密作戦だから、目撃者は消そうとかそういう感じだろうな。
うーん、ジェネレーター出力を最小限にカットして緊急冷却装置も使ってサーマルステルス状態になるべきだったか。

「仕方ない、やるか」
「あんた、悪運が強いんじゃないの？」
「エルマに言われたくないなぁ」

「うぐっ……でも、悪運の強さならミミも大したものよね？」
「えぇっ！？　私ですか！？」

俺の反撃にエルマが言葉を失い、誤魔化すようにミミに飛び火させる。
運悪く大事故を起こして莫大な借金を負う羽目になって俺に助けられたエルマの方が絶対に悪運が強いと思う。いや、この世界に迷い込んだ俺のほうが圧倒的かもしれんけど。そう考えると親の借金で第三区画に落ちて俺と出会ったミミもなかなかのものだな？

「この話題はやめよう。全員が傷つきそうだ」
「そ、そうね」
「そうですね」
「ジェネレーター出力最大、迎撃するぞ。ミミは一応相手の所属を問い合わせてくれ」
「わかりました」

隠れていた小惑星の陰から飛び出し、戦績の所属不明艦に包囲されないように動き始める。

「こちら傭兵ギルド所属、シルバーランク傭兵キャプテン・ヒロ。コールサイン、クリシュナ。私はオペレーターのミミです。こちらに接近中の所属不明艦は所属を明らかにしてください」

ミミが通信回線を開き、呼びかけるが向こうの反応はない。反応がないことを確認したミミが再度問いかけるが、やはり反応は返ってこない。向こうに話し合うつもりはないようだ。
そうそう、どうでも良いことだが、三日前に俺の傭兵ランクがブロンズからシルバーに上がった。受付のおっさん曰く、アレだけ活躍してコンスタントに『流れ』も狩ってくる俺をいつまでもブロン

ズランクにしておく訳にはいかない、だそうだ。
別にシルバーランクになったからって何か変わるわけじゃないんだけどな。社会的信用は少し上がったかもしれない。

「所属不明艦、武装展開」
「予想通りだな。応戦する、武装展開」
「了解、武装展開。いつもどおりチャフとかフレアのコントロールとジェネレーター出力の調整はこっちでやるわ」
「頼んだ。行くぞ！」

急旋回し、小惑星の間を縫いながら一番近い所属不明艦に突っ込む。

「相変わらず頭のおかしい機動を……！」
「私はもう慣れてきました」

目前まで迫る小惑星にエルマが顔を引き攣らせ、ミミが苦笑する。頭おかしくないよ、普通だよ。こうすると敵の横っ腹に食いつけるからだよ。
小惑星の表面を滑るように移動し、その陰から飛び出すと丁度目の前に所属不明艦の横っ腹が見た。ドンピシャだ。

『馬鹿なっ！？』
「ひとーつ」

二門の大型散弾砲から発射された無数の弾丸が連邦軍の小型戦闘艦『ソードフィッシュ』の横っ腹をシールドごと食い破り、船体をズタズタに引き裂く。

「相変わらず威力がおかしいわね、このシャードキャノン」

「素敵だろ」
「こんな変態武器使うのなんてアンタくらいでしょ……」
「強いのに」

確かに散弾砲は有効射程が短いけど、小型船ならシールドごと船体をズタズタに引き裂ける素敵武器なんだぞ？　シールドを剥がしてからなら大型艦相手にもダメージが通るし。

『二番機が』
『シルバーの腕じゃないな。気をつけろ。距離を取って戦え』
「シャードキャノンを見るとそう考えるわよねぇ……」

接近戦を嫌った残りの二機が小惑星帯から抜け出してこちらに艦首を向けてくる。ほほう、正面からの火力勝負かね？　このクリシュナ相手に？　面白い、受けて立とう。
俺は手頃な大きさの小惑星に機体を隠し、四本の武装腕だけを小惑星の陰から出して重レーザー砲を斉射し始める。

『なっ！？　船から腕が！？』
『このレーザー、出力が高い……！　だ、ダメだ！　保たない！』

連邦の軍艦も回避行動を取りながらレーザー砲で応戦してくるが、機体の殆どを小惑星の陰に隠しているこちらに相手のレーザーは届かず、逆にこちらの重レーザー砲は敵機を確実に捉え続ける。
そりゃ文字通り光の速さで飛来する攻撃なわけで、そう簡単に避けることなどできはしない。無論、向こうも回避機動を取っている以上は百発百中とは行かないが、それでも八割は当たる。そして八割も当たれば十分な威力をクリシュナの重レーザー砲は持っている。

『チィっ！　火力差がありすぎる！』

『退避！』

二隻の連邦艦が逃げようとするが、ここで逃すと厄介だ。スラスターを噴射して小惑星の陰から飛び出し、追撃をかける。

『シーカー！　フォックス１！　フォックス１！』

「フレア」

「了解」

二隻の連邦艦が後退しながら熱源誘導ミサイルを発射してくるが、俺の指示を受けたエルマが欺瞞装置を作動させ、発射された偽の熱源に誘導されて明後日の方向に飛んでいく。

『くそがあぁぁぁっ！』

そして俺は万策尽きた連邦艦に容赦なく重レーザー砲の斉射を浴びせていく。次々と発射された碧色の光条が全力で後退する連邦艦に着弾し、青白いシールドが何度か明滅して弾け飛んだ。

そうなるともう終わりだ。軍用グレードの装甲材は重レーザー砲の砲撃に数発耐えたが、すぐに赤熱化して融解し、強度を失ってその用を為さなくなった。

『だ、脱出できな――うわあぁぁぁぁっ！？』

二隻の連邦艦が重レーザー砲の砲火を浴びて盛大に爆発四散する。脱出できないってことは、軍用規格のフレームが中途半端にレーザーに耐えたせいで歪んだのかな？　頑丈なのも時には考えものだ。

「さて……ブラックボックスとデータキャッシュを回収して戻るか」

「戻るんですか？」

「ええ、星系軍がそれはもう高く買ってくれると思うわ」
「なるほど」
「データを売るなら俺に任せろ。星系軍に伝手があるんだ」
「伝手、ねぇ。厄介事を抱え込んでくるんじゃないわよ」
「ははは、当たり前だろう。ささっと売るものを売って帰ってくるさ」

☆★☆

「なにか言うことは？」
「ごめんなさい」
「ヒロ様……」
「申し訳ありません」

二時間後、俺はクリシュナのダイニングで床に正座をさせられていた。
いや、目的は達したんですよ、目的は。
クリシュナの整備と補給をミミとエルマに任せた俺はその足で星系軍本部に向かい、セレナ大尉とのアポイントメントを取ることに成功した。丁度手が空いていたのか、セレナ大尉はすぐに現れ、案内された別室で俺は事の経緯を説明し、連邦艦から回収したブラックボックスとデータキャッシュを引き渡し、報酬を得た。完璧だろう？
でも、何故か気がついたら俺とクリシュナ、そしてクルー達は近日中に勃発するであろう帝国と連邦の紛争に帝国側の戦力として参加することが決定していた。しかも傭兵ギルドにしっかりと話を通した上で、正式に依頼として受諾された状況で。
何が起こったのかわからないだろう？　俺にも何が起こったのかわからない。なんかセレナ大尉に煽てられて、いやぁそんな事ありませんよ、ぼく一般の雑魚傭兵なんで。え？　連邦艦？　別に怖く

はないですけど。参加するかどうかはちょっと。
え？　帝国軍は優秀で勇敢な傭兵の参加を求めている？　いやいや、俺はそういうのじゃ……そうですか？　照れるなぁ、ははは。まぁそこまで言われれば……ええ、そうですね。え？　いや今のはそういう意味じゃ……やっぱできないですかって……？　で、できらぁ！

「という感じでして」
「完全に乗せられてるじゃない」
「ヒロ様……」
「大変申し訳ございません」

二人から向けられる非難の視線が痛い。本当に何の言い訳のしようがないので、素直に頭を下げて華麗に土下座をキメる。

「まぁ、いいけど。キャプテンはあんたなんだし、本来はあんたの独断で仕事を受けたって何らおかしくないのよ」
「そうですよね。ヒロ様はこの船の船長ですから」
「許された！」
「でも、何かで埋め合わせはしてもらっても良いわよね？　ボーナスとか出してもバチは当たらないと思うわよ」
「ボーナスですか……？　私は今でも貰いすぎなんですけど」
「いいから、こういうのは貰える時には遠慮なくもらっておくべきよ。船長、それくらいの甲斐性は見せてくれるわよね」
「極めて前向きに考えさせていただきたく存じます」
「じゃあ、そういうことで」
「い、いいのかなぁ……」

ミミはまだ納得しきれていないようだが、俺も悪いとは思っているのでなにか考えておこうと思う。旨い酒とか食い物で許してくれ

ないだろうか？　オイシイマートのオンラインショップで何か探してみよう。別に金でもいいんだけどさ。

「それじゃあ、事が起きるまで待機かしら？」
「そうなるな。出撃も控えてくれって言われたし」
「その分の拘束費は出るのよね？」
「それはちゃんと交渉しておいた。一日につき五万だけど」
「待機しているだけで五万エネルって凄いですね……」
「妥当だと思うけどね、私は」

ここ一週間、平均して二十万エネル以上の賞金を毎日稼いでいた俺達からすればちょっと安く感じる。だが、命を危険に晒すことなく、いつでも出撃できるように待機しているだけで一日五万エネルはなかなかに美味しいのかもしれない。

とにかくそういうわけで、俺達は星系軍――帝国軍からの依頼を受けて待機することになった。

「飲酒は控えてくれだそうだ」
「そ、そんなー」

晩酌を禁止されたエルマだけが嘆いていたが、それもまぁ順当だろうな。いつでも出撃に対応できるように待機してもらうというのに、酒を飲んでいて出撃できませんとかなると何の意味もない。

「お酒を飲まないだけで一日一五〇〇エネルですよ、エルマさん」
「……そうね」
「つまり、一日我慢するごとに一五〇〇エネル分の飲み代が貯まるというわけです」
「……そうね！」

ミミに諭された残念宇宙エルフの長い耳がピンと立ち、ダダ下がりだったテンションが一気に回復する。まぁ、日本円換算して一日十五万円分の飲み代貯金と考えれば確かに禁酒も捗るのかもしれないな。酒飲みにしてみたら。

「ミミはかしこいなぁ」

「えへへ」

ミミには他人を元気にさせる天性の才能のようなものがあるのかも……いやあるな、きっとある。こうしてミミと一緒にいるだけで俺は元気になるし。

「さーて、仕込みをするかなぁ」

「仕込み？」

立ち上がった俺にエルマが怪訝な表情をする。これはあれだな、こいつまたなにか碌でもないことをするつもりだなとか思っているな。その通りだよ。

「うん、仕込み。ちょっとカーゴに行ってくるわ……あ、ミミ、この前買ったダクトテープどこに置いたっけ？」

「あの軍用グレードのですか？　確かカーゴに入ってすぐのところに置いてあるツールボックスの中に入れておいたはずですけど」

「了解、ありがとな」

あれで貼っつけて上からぐるぐる巻きにすればいいだろう。発射時は下部ウェポンベイから投下するだけだし。あとは隠しカーゴからアレを取り出してこないとな。ああ忙しい忙しい。

#027　切り札（前書き）

明日からは隔日更新にするよ！　ストックが完全に切れたら余裕がなくなるからね！

ゆるしてね☆―（：3」∠）―（無防備に腹を晒す

#027　切り札

ベレベレム連邦軍が動くのは早かった。恐らく、俺が撃破した先行偵察部隊の連絡が途絶えたので、襲撃計画が露見したと考えたのだろう。

俺が回収したブラックボックスやデータキャッシュの中身がどんなものだったのかは知らないので、実際のところどこまでグラッカン帝国軍が敵の計画を把握しているのかはわからないけれども。

おかげさまで小細工をする暇がなかった。やるなら直前のほうが安全だから別に良いっちゃ良いんだけどね。臨検とか突然されたら困るし。

何にせよ敵軍に動きあり、ということで俺達は急遽編成されたグラッカン帝国軍傭兵部隊の一員として星系軍本部で開かれるブリーフィングに召集されたのであった。

今回は通信会議ではなく実際に顔を合わせてブリーフィングをするらしい。諜報対策か何かなのだろうか？　軍人の考えることはよくわからんな。

やたらチラチラとこっちを見てくる帝国兵に案内され、本部内にあるブリーフィングルームの一つに案内される。

元々はもっと大人数でのブリーフィングに利用される部屋なのだろう。かなり広い部屋だ。人数分しか椅子は置かれていないのか、殺風景に感じる。

そんな殺風景な部屋には既に何人かの傭兵らしきむくつけき男達が集っていた。ブリーフィングルームに入ると同時に視線が集中してくる。

「おい、あれ見ろよ」

「女連れ……しかもかわい子ちゃんを二人、だと……！？」

「あいつ、シルバーのエルマだよな？　何であいつのところにいるんだ？」
「この前の宙賊討伐で事故ってただろ。その関係で何かあったんだろうな」
「爆発しろ……爆発四散しろ……」

先にブリーフィングルームに到着していた傭兵達が入ってきた俺達を見てざわめく。おい、最後の呪詛吐いてる奴。洒落にならんからやめろ。
特に席は決まっていないようなので、適当に空いている席に座ることにする。

「ミミは真ん中な」
「あ、はい」

エルマはともかく、ミミは厳つい傭兵に隣に座られでもしたら落ち着かないだろう。エルマも同じことを思ったのか、特に文句をいうことなくミミを挟んで席に着く。
その後も何人かの傭兵が入室してきて、席が埋まった辺りでブリーフィングの開始時間になった。時間丁度にセレナ大尉と数人の軍人が入室してくる。

「傾注！」

下士官らしきガタイの良い軍人の言葉にブリーフィングルーム内の空気が引き締まる。

「では、ターメーン星系防衛戦のブリーフィングを始めます。私はセレナ大尉。今回臨時編成された帝国軍傭兵部隊は私の指揮下に入ってもらうことになります。一時的にですが、私は貴方達の上官と

なりますのでセレナ大尉、と呼ぶように」
「「「イエス、マム」」」
「よろしい。ではまず現状の説明をします。ゲオルグ」
「はっ」

ゲオルグと呼ばれた下士官が壁のコンソールを操作すると部屋が薄暗くなり、セレナ大尉の背後に巨大なホロ・スクリーンが起動した。ホロ・スクリーンにターメーン星系の星系図が大映しで映し出される。

「現在、ベレベレム連邦軍の艦隊がターメーン星系に移動中です。既にハイパードライブに入っているため正確な構成は不明ですが、独自に入手した情報と超空間センサーの反応から考えて戦艦八隻、重巡洋艦二十四隻、軽巡洋艦三十二隻、駆逐艦六十四隻、コルベット百二十八隻からなる攻撃艦隊であると帝国軍は断定しています」

発表された敵軍戦力の大きさに傭兵達がざわめく。俺もちょっと驚いた。思ったよりも敵戦力が多い。これは紛争という名の小競り合いではなく、本格的な軍事衝突と言っても過言ではなくなりそうだ。

「はっきりと言えば、ターメーン星系に駐屯している星系軍の戦力よりも敵戦力の方が大きいです。幸い、攻撃の発覚が早かったために既に増援要請は完了しており、奴らがワープアウトしてくる明日一日を凌げば他星系からの増援が到着します。よって、我々の作戦目標は明日一日、なんとしてもこの星系を守り抜くこととなります」

増援が来るなら妥当な作戦だろうな。どうやら俺達が届けたブラックボックスとデータキャッシュはお役に立ったらしい。買取価格もかなり弾んでくれたからな、あれ。

「貴方達傭兵部隊の任務は小惑星帯に潜み、そこを通過しようとする連邦軍の艦艇にゲリラ戦を仕掛けることです。主に敵駆逐艦やコルベットを狙ってもらうことになるでしょう。巡洋艦や戦艦を撃破したらボーナスも出しますよ」

セレナ大尉がニッコリと笑う。それに対して傭兵達の大半は苦笑いを浮かべてみせた。それもその筈で、基本的に傭兵の乗る船というのは小型艦から中型艦に分類されるものがほとんどだからだ。

巡洋艦以上の大型艦にはその大きさ相応のジェネレーターが搭載されており、その巨大な出力によって展開されるシールドは当然ながら傭兵達や宙賊達の乗る船とは比べ物にならない強度を誇る。

つまり、宙賊の小型艦や中型艦を相手に戦うことを想定している傭兵艦の火力では、巡洋艦以上の大型艦のシールドを破るための火力が絶対的に足りないのだ。

俺のクリシュナなら可能だけどな。切り札もあるし。

「何か奴らに身の程を思い知らせる秘策などがあれば積極的に採用します。手段は問いません」

ほう、手段は問わないと。なら、こっそり使うつもりだったアレの使用を正式に具申……いや、正直に言うのは流石にマズいな。後から調べてみたらアレは超一級の禁制品ってことになってたし。スキャンを逃れられる特殊なカーゴに入れておいて良かったぜ。

そうなると、うーん……いけるかな？　ダメ元でいってみるか。

「発言よろしいですか、セレナ大尉」

「貴方は……はい、発言を許可します」

何故かミミとエルマの姿を見たセレナ大尉の視線が厳しくなった

ような気がする。何故だろうか？　ま、まぁ気にしないでおこう。

「連邦軍にダメージを与える秘策……というか奇策の類がありまして。よろしければ作戦の実行許可を頂きたいのですが」

「奇策ですか。内容を詳しく聞かせていただいても？」

「はい。奇策と言っても作戦は単純なものです。ワープアウト直後の連邦艦隊に俺の船で単艦切り込み、敵の旗艦を潰して一撃離脱するだけですから」

俺の提案にセレナ大尉が表情を凍りつかせ、傭兵達が大きくざわめく。そしてミミは俺に不安げな視線を送り、エルマは驚きのあまりなのか、口をあんぐりと大きく開けて固まっていた。

「正気ですか？」

セレナ大尉が訝しげな視線を向けてくる。その顔には『艦隊に単身突撃など、自殺行為以外の何者でもないですよ？』とはっきり書いてあるように見える。

「ええ、やってみせます。失敗したとしても、間抜けが一人死ぬだけです。帝国軍にとっては痛くも痒くもないでしょう？」

「貴方は先日の宙賊退治で大いに活躍し、その後も『流れ』を安定して狩って回っている優秀な戦力でもあります。無謀な作戦で優秀な戦力を失いたくはないのですが？」

「心配はありません。やりきってみせますよ」

真っ当な手段を使うつもりは一切ないけど、という言葉は心の中に秘めておく。

そんな俺の企みを薄々感じているのか、セレナ大尉が疑いの眼差しを向けてくるが、俺はそれを華麗にスルー。

セレナ大尉は暫く俺を睨んで考え込んでいたが、最終的には溜息を吐いて肩を竦めてみせた。処置なし、とでも言いたげな仕草である。

「……良いでしょう。そこまで言うからにはしっかりと仕事をこなしてくれることを期待させていただきます。成功すれば報奨金は弾みますよ」

「ありがとうございます」

最高の答えを引き出すことができた俺は確かな満足を感じながら席に着く。恐らく、満面の笑みを浮かべていただろう。

そんな俺を見て誰かが「クレイジーだ」と呟くのが聞こえた。クレイジーだなんて失礼な。手持ちの札で最大限の戦果をあげようとしているだけなのに。

☆★☆

「馬鹿！　馬鹿馬鹿！　ばーか！　あんた頭おかしいんじゃないの！？」

「ミミ、エルマが酷い」

「エルマさん、言い過ぎですよ。めっ、です」

「めっ、じゃないわよ！？　連邦艦隊に単艦突撃とか馬鹿を通り越して大馬鹿よ！　アンタの無謀に付き合って心中なんてゴメンなんだからね！？」

ガオー、とエルマが今までにない剣幕で怒鳴り散らし、その声が広々としたカーゴルーム内に響く。

ブリーフィングから戻ってきてからエルマはずっとこの調子だ。まぁ、わからなくもない。何も知らずに二〇〇隻以上の敵艦隊に一

隻で突っ込むとか言われたら、俺だって同じような反応をする。
「まぁ、落ち着け。俺だって無策で突撃するつもりはない。俺にはちゃんとしたプランがある」
「言ってみなさいよ」

備品として買っておいた軍用規格のダクトテープをツールボックスから取り出しながら、エルマを宥める。そう睨みつけなくたってちゃんと説明するって。

「やること自体は単純だ。艦隊のワープアウト反応に紛れるようにこっちも超光速ドライブ状態を解除する。ワープアウトの反応と超光速ドライブの解除時の反応はほとんど同じだ。まず気づかれない」
「そうね、そこまでは良いわ。それから？」
「超光速ドライブを解除したら、すぐに緊急冷却システムを作動させてサーマルステルス状態になる。そしてスペースデブリを装って旗艦に接近する」
「怪しまれない？　それに、デブリの衝突を嫌って攻撃されたら終わりよ」
「この船のシールド強度と加速力なら最悪そうなっても突っ切れるから問題ない。ある程度接近したら旗艦に切り札の対艦反応魚雷を二発ぶち込む。そうすれば大混乱は必至だ」
「対艦反応魚雷って……そんな物騒なもの積んでるの？　この船」
「ああ、積んでるぞ。弾薬費がクッソ高いからあんまり使いたくないんだけどな」
「あの……たいかんはんのうぎょらい、ってなんですか？」

俺とエルマの話についていけなかったミミが首を傾げる。ああ、エルマはともかくミミは知らないよな。

「対艦反応魚雷ってのは強大なシールドを装備している大型艦に致命的な損傷を与えるために開発された武器でな。弾頭部分に強力なシールド飽和装置と爆弾を搭載しているんだ。こいつを二発喰らえばギャラクシー級の戦艦だろうとなんだろうと爆発四散する」
「凄いですね……でも、そんなに強力な武器なら皆使うんじゃ？」
「高いのよ。一発辺り軽く五〇万エネルはするの。よほどの大物相手じゃないと使ったら大赤字だからね。運用している傭兵なんてそうそういないわ」
「いっぱつごじゅうまんえねる」

対艦反応魚雷の値段を聞いたミミの目が点になる。一発五〇万エネルって凄い大金だからな。いや、現実のミサイル一発の値段に比べるとそうでもないか？

「とりあえず、旗艦撃破までの流れはわかったわ。博打要素が大きすぎる気がするけど、傭兵稼業なんて大体がそんなものだしね。あんたがやれるって言うならやれるんでしょう。問題は、その後よ」
「うん、そうだな。旗艦が爆発四散すれば連邦軍の指揮系統は大きく乱れるだろうけど、クリシュナは完全に捕捉される。下手に逃げ出そうとすれば背中から一斉射撃を食らうことになる」
「そうよ。わかってるじゃない」

敵艦隊の中に留まる分には連邦艦隊も同士討ちを恐れて強力な武装は使えないだろうが、艦隊を突破して無防備な背中を晒せば即座に強力な大口径レーザー砲を俺達に向けてくるだろう。そうなればいくらクリシュナといえどもひとたまりもない。

「そこでな、対艦反応魚雷にこいつを仕込む」

俺はそう言うとカーゴの片隅にある隠しカーゴを開いてその中身

を取り出した。そう、超一級のご禁制品『歌う水晶』である。透明なガラスのようなカプセルに厳重に封入されたそれは自ら淡い光を発し、封印されているにも関わらず脳髄に響いてくるような奇妙な音を発している。

それはまるで歌のような不思議な旋律を持っており、聴いていると何故か胸中に言いようのない望郷の念がこみ上げてくる。

この水晶を破壊することによって現れる宇宙怪獣――結晶生命体にとってこの物体は一体いかなる意味を持つものなのか？　それは誰にもわからない。鋭意研究中らしいけど。

「んっ！？　なぁっ！？　それっ！？」

「歌う水晶～♪」

「アホかっ！？　なんつー危険物を隠し持ってんのよ！？　ちょ、落とすんじゃないわよ！　絶対に落とすんじゃないわよ！」

「おっと」

「ひぃっ！？」

床に取り落とすふりをすると、エルマが思いっきり逃げ腰になる。ははは、面白いなぁ。

「綺麗な水晶ですね！　それになんだか音が……」

「ダメよミミ！　聴いちゃダメ！　それ聴いたら頭がおかしくなって死ぬわよ！」

「ええっ！？　そうなんですか！？」

長い耳を両手で塞いで後退るエルマと、エルマの台詞を聞いて同じく耳を塞ぐミミ。なんか可愛いな。

「いや、ちょっとホームシックになるくらいだけど……俺達には劇物かもしれないな」

俺は故郷に帰りたくても帰れない。ミミは帰るべき場所を失った。エルマはまだよくわからないけど、どうにも家を飛び出してきたいいとこのお嬢さんらしいし、里心がつくと困るだろうな。
俺は努めて歌う水晶から微かに響いてくる歌に意識を向けないようにしながらカーゴルームの奥にある弾薬庫へと移動する。
弾薬庫の中は暗く、狭い。その一番奥に目的のものはある。そう、対艦反応魚雷だ。

「ぐるぐるぐーる」

軍用規格のダクトテープで対艦反応魚雷に歌う水晶をくっつける。ぐるぐる巻きだ。

「これでよし」
「これでよし、じゃ！　無いでしょうが！」

弾薬庫から出て額の汗を拭うふりをするとエルマにスパーンと頭を叩かれた。痛い。ミミが叩かれた頭を撫でてくれる。ミミさんマジ大天使。

「エルマさん、暴力はダメですよ」
「ダメですよじゃないわよ！　ミミは知らないんでしょうけど、あの水晶は超一級の禁制品なのよ！？　もし何かの弾みで壊れたりしたら大量の結晶生命体が押し寄せてくる超危険物なのよ！」
「そうなんですか？　ヒロ様」
「だいたいあってる」
「だいたいあってる、じゃないわよ！　あんな危険物を保管しているのに私達に一言も無いとかふざけてるの！？」
「ＯＫＯＫ、悪かった。だから落ち着いてくれ。キンキン声で耳が

痛くなりそうだ」

顔を真赤にしてプンスカと怒るエルマに両手を挙げて降参の意を示す。

「とりあえず、あれが俺の切り札というか隠し玉だ。連邦艦隊の中枢にあいつを撃ち込んで、結晶生命体どもに艦隊を襲わせる。その混乱の隙を突いて逃げ出すって寸法だ」

「そりゃ大混乱になるでしょうけど……滅茶苦茶過ぎるわ」

確かに無茶苦茶だろう。この世界ではどうだかしらないが、結晶生命体は有機生命体を執拗に殺し、あるいは侵食し同化しようとする正真正銘の怪物であるという設定だった。つまり、兵器として運用するとなると色々と問題があるブツなのだ。ぶっちゃけ生物兵器だからね。

「勝てばよかろうなのだァ！」

だが俺は躊躇わない。見知らぬ兵隊さん達の命がどうなろうと俺達が生き残るのが優先である。

ならおとなしく小惑星帯で遅滞戦術を取ればいいって？　冗談じゃない。相手は巡洋艦以上の大型艦だけでも六〇隻以上の大戦力だ。潜んでいる小惑星帯ごと大口径レーザー砲や大型反応弾頭ミサイルの斉射でぶっ潰されるのがオチである。

「清々しいほどに開き直ってるわね……勝てば良いというのには同意するけど」

「それはそれとして、だ。問題はここからなんだが」

微妙な表情をしているエルマときょとんとした表情のミミに視線

を向ける。
「今回の作戦はとても危険だ。下手を踏めば死ぬ。だから、望むなら船を――」
降りても良い、と言おうとした俺の言葉を遮るようにエルマが掌を突き出す。
「降ろすってのはナシよ。そもそも、危険を承知でクルーになることに同意してるんだから。というか、私もミミも半ばあんたに命を拾われたわけだしね」
「船から降りても行くところなんてありませんから。ヒロ様の行くところが私の行くところです」
「私はそこまで割り切れないけどね……でもまぁ、勝算があるみたいだし付き合うわよ。それくらいの覚悟がないと船になんて乗れないっての」
「……そっか。わかった」
要らぬ心配だったようだ。俺は……ちょっと怖いけどな。勝算はあるけど、それは絶対ってわけじゃない。少しのミスで死ぬ可能性もある。何より、俺のミスで二人が死ぬかも知れない。そう思うと怖くて震えそうになる。俺一人が死ぬなら別になんとも思わない……わけじゃないけど、まだ気が楽なんだけどな。
「それはそれとしてよ」
「ん？」
雰囲気の変わったエルマの言葉に思わず首を傾げる。
「危険物とわかっていながらクルーに何も説明せず、こっそりと歌

う水晶を隠し持っていたのは同じ船に乗る仲間としてはアンフェアだと思わない？」
「ぐっ……」

ぐうの音も出ない正論である。一応心配をかけまいと考えての行動だったが、多少の悪戯心があったのは確かだ。俺に命を預けているクルーに対して、そういう大きなリスクがあることを伝えないというのは確かに不誠実だったかもしれない。

「……ごめんなさい」
「素直でよろしい。今後はああいうイリーガルな品を積んでいる時はクルーにも伝えること。良いわね？」
「わかりました」
「ふふ……エルマさん、なんだかヒロ様のお姉さんみたいですね」

俺とエルマとのやり取りを見ていたミミがクスクスと笑う。

「当然よ。私のほうが年長者だし、経験も豊富なベテランなんだからね」
「自分の船の性能も把握してないベテラン（笑）」
「あ？」
「すみません許してください」

真顔になってキレるエルマに素直に土下座する。銃の腕はともかく、肉弾戦では勝ち目がないからな。

「それじゃ、行くか」
「はい！」
「ええ、行きましょうか」

#028　大乱戦

準備を終えた俺達はコックピットに入り、それぞれの席に着いていた。俺は操縦席、ミミはオペレーター席、エルマはサブパイロット席。それぞれ例の宙に浮くジュースボトルにドリンクを入れて持ち込み済みである。

「決死の単艦突撃前だっていうのに緊張感無いわねー」
「必要以上に緊張しても仕方ないだろ」
「ヒロ様に任せておけば安心です」
「ミミはブレないわね」
「勿論です。私はヒロ様を信じていますから」
「期待が重いなぁ。まぁ、ご期待にはお応えしましょうかね」

そう言って苦笑しながら中空に浮かぶ器から伸びたストローに手を伸ばす。

「はい！　あ、ヒロ様、通信が入ってきています。帝国軍の重巡洋艦『グロリアス』からです。繋ぎますか？」
「帝国軍から？　繋いでくれ」

なんだよ、せっかくあの炭酸抜きコーラを飲もうと思ったのに……と思っていたら通信回線が開いてコックピットのディスプレイ上にセレナ大尉の顔が映った。何かを言おうとしたセレナ大尉の視線が中に浮かぶグラビディスフィア――宙に浮くジュースボトルに向き、彼女がきょとんとした顔をする。

『これから決死の単独行だというのに余裕がありますね』

「そりゃあ生き残る自信があるので」

超光速ドライブでギリギリまで突っ込んで、一発ぶち込んで離脱する。簡単なお仕事だ。炭酸抜きコーラを満喫できるくらいの余裕は十分にある。

『そうですか……間もなく作戦開始時間ですから少し心配していたのですが、その様子だと大丈夫そうですね。口だけではないことを期待していますよ』

「勿論です。プロですから」

俺の返答にセレナ大尉は再度きょとんとした表情を見せた後、クスリと笑みを浮かべて通信を切った。

「あのお姫様、暇なのかしら？　たかがいち傭兵を心配して通信を寄越すなんて」

「何が狙いなんでしょうね？」

「わからん。まぁ別に気にすることはないだろ。ミミ、通信回線全カット。通信封鎖」

「はい、通信を封鎖します」

「エルマ、機関最大。超光速ドライブに入るぞ」

「アイアイサー、機関最大」

「超光速ドライブ、チャージ開始」

「チャージ開始……超光速ドライブ開始まで5、4、3、2、1……超光速ドライブ開始」

ドォン、と爆発音のような音を立ててクリシュナが超光速ドライブを開始する。コックピットの外に見える遥か彼方の恒星の光が置き去りになり、流れ星のように線を引き始める。

「レーダーに注目。連邦艦のワープアウトを見逃すな」
「了解」

連邦艦がワープアウトしてくるであろう大体の位置はわかっている。恒星間を移動するハイパードライブというのはハイパーレーンと呼ばれる恒星と恒星との間を繋ぐ高速道路のような空間を利用して恒星間を移動する技術だ。
ハイパーレーンへの出入り口は広いため、ワープアウト地点にある程度の『揺らぎ』は発生するが、大体の位置というのは決まっている。だから、どの星系から敵が来るのかわかってさえいればある程度の出現ポイントは絞れるのである。
超光速ドライブ状態でワープアウト地点周辺をぐるぐると回り、連邦艦隊のワープアウトを待ち構えること十数分。

「レーダーに感あり、ワープアウト反応多数」
「よーし、減速開始」

すぐさま艦首を連邦艦隊のワープアウト地点に向け、連邦艦のワープアウト反応に紛れて超光速ドライブ状態を解除する。

「緊急冷却、ジェネレーター出力カット」
「緊急冷却開始、出力カット」

超光速ドライブの停止と同時にクリシュナのジェネレーター出力を最低レベルまでカットし、緊急冷却装置を作動させてサーマルステルスモードに移行する。

「よーし、忍び寄るぞー」
「それにしてもよく考えつくわね、こんな姑息な手……」
「生き残るために想像力を働かせて知恵を絞るのは当然のことだろ。

それができないと死ぬ」
「さすがはヒロ様です」

フライトアシストモードをオフにし、慣性だけで連邦艦隊へと近寄っていく。こうして徐々に近づいている間にも続々と連邦艦がワープアウトしてきていた。

「流石に壮観だな。かっこいい」
「確かに。軍艦がこれだけ整然と並んでいると格好いいわね」
「そうですね。勇壮な感じがします」

戦艦、重巡洋艦、軽巡洋艦、駆逐艦、コルベットの五艦種が整然と並んでいる様は実に格好いい。だが、ただボーッとそれを眺めているわけにもいかない。

「旗艦はあれだな」

艦隊中央に鎮座する戦艦に目を向ける。あの戦艦から艦隊全体に通信も行われているようだし、間違いないだろう。

「本当にあそこに突っ込むの？」
「おうさ」

顔色の悪いエルマに頷いてみせる。ここまで来て尻尾巻いて逃げるわけにはいかんでしょうよ。

「ワープアウト反応はなくなりました。連邦艦隊、移動を開始」
「よし、そろそろだな。間合いも良い感じだ。緊急冷却装置再起動、ジェネレーター出力最大」
「ああ、もう……緊急冷却装置再起動、ジェネレーター出力最大！」

「吶喊！」

緊急冷却装置の過剰動作によってピキピキと船体表面が凍りつく音が聞こえる中、俺はスラスター出力を最大にして連邦艦隊への吶喊を開始した。目標は艦隊のど真ん中にいる戦艦である。恐らく、あれが旗艦だろう。確認したわけじゃないから違うかもしれないけど。

『……？　なんだ？　レーダーに……ッ！？　バンディット急速接近！　直上です！　近い！』

『何だと！？　レーダー観測手は何をしていた！？』

『機体温度が異常に低い！　こいつ、過冷却でデブリに化けてやがった！』

「はっはっは、慌ててる慌ててる」

連邦艦の砲塔が動き始めるが、こちらはその時には既に艦隊の中心部だ。フレンドリーファイアの可能性があるこの状況では気軽には撃てまい。多数の連邦艦の間を擦り抜けながら機体下部のウェポンベイを開放する。

「はっはぁ！　こいつを喰らいな！」

二発の対艦反応魚雷を艦隊中央の戦艦に発射し、その脇を通り抜ける。直後、目標となっていた戦艦のど真ん中辺りで大爆発が起こった。巨大な船体が中程で千切れ、真っ二つになる。

『戦艦タイガーアイ爆沈！　あの機体、対艦反応魚雷を装備しているぞ！』

『クソッ！　傭兵か！？　フレンドリーファイアしても構わん、マルチキャノンタレットで撃墜しろ！　レーザー砲と実体弾キャノン、

シーカーミサイルは使うな！』
「イヤッフー！　ジャイアントキリングだぜぇ！」
「ちょ、ちょっと！　イヤッフーじゃないわよ！　早く逃げないと！」
「そりゃそうだ！」

多方向からロックオン警告が発せられる。旗艦が沈んで大混乱に陥っても目の前の敵を排除しようという意志はそう簡単には失われないものらしい。単に指揮権の引き継ぎがうまくいっているだけかもしれないが。

「ちょっと！？　結晶生命体は！？」
「出てくるまで三十秒くらいかかるな！」
「はぁ！？　三十秒！？　どうすんのよ！？」
「当然逃げ回る！　なに、艦隊の中で飛び回る分には強力な武装は使えないから大丈夫だ！」
「大丈夫なわけ無いでしょ！　ばかー！」

エルマの叫びと共に四方八方から近接防衛用のマルチキャノンによる一斉射撃が始まった。無数の弾丸が凄まじい速度でクリシュナに殺到し始める。

「チャフと緊急冷却装置！」
「作動させたわ！」
「ミミは無線封鎖解除！　データを帝国軍に送ってくれ！」
「はいっ！」

ありったけの欺瞞装置を作動させて集中砲火を紙一重で避けていく。勿論無数にばら撒かれる弾の全てを回避することはできないが、そういった弾丸はクリシュナの強力なシールドが防いでくれる。

シールドというものは元々対スペースデブリ用の技術なだけあって、実体弾の武器には高い防御力を誇る。多少の被弾ではびくともしない。

「シールド、減衰してきてるわ！」
「適宜シールドセルを使用しろ！　出し惜しみは無しだ！」
「了解！」
『小型艦のくせにシールドが堅い……！』
『砲の可動範囲を読まれてるぞ！　お互いに死角をカバーしろ！』
『張り付かれて……何っ！？』

エルマの返事を聞きながら今まで盾にしていた重巡洋艦の船底に向かって散弾砲を連射する。発射された無数の弾丸はフレンドリーファイアで減衰していた重巡洋艦のシールドを飽和させ、船底を穴だらけにしてその内部構造物を蹂躙した。

「二つ！　お、来たぞ！」

重巡洋艦を無力化し、次の獲物に移ろうとしたところで遂にそれは起こった。
頭の芯に響くような甲高い音が鳴り響き、空間に無数の裂け目が現れる。

「お出ましだ！　逃げるぞ！」
「うわわ、いっぱい出てきましたよ！？」
「ああもう！　しっちゃかめっちゃかね！」

空間の裂け目から現れたそれは全体が水晶のような結晶質で構成された弾丸、或いは牙のような形の物体だった。先端は鋭く尖っており、いかにも刺さりそうな形をしている。それもその筈で、奴ら

の得意攻撃はその鋭い先端を存分に利用した衝角突撃なのだ。
勿論、それだけでなく身体の一部を弾丸のように高速で撃ち出す攻撃や、個体によっては謎のエネルギー光弾を撃ってくるものまでいるのだが。

『ワープアウト反応多数！　これは……結晶生命体だと！？』
『なんでこんな場所に！？』
『来るぞ！？　うわぁぁぁぁっ！？』
『迎撃だ！　迎撃しろ！　使える武器は全部使え！』
『馬鹿野郎！　こっちは味方――ぎゃぁぁぁっ！』
『ひいぃぃっ！？　あ、足がっ！？　侵食され……いやだぁぁぁぁぁっ！？』

阿鼻叫喚である。これでは組織的な行動はおろか、俺を追撃することもできまい。

「これは酷い」
「やったあんたが言うな」

エルマが呆れたような声でそう言って溜息を吐いた。ミミは通信で流れてくる連邦兵達の断末魔の声にショックを受けたのか、顔面蒼白になって震えている。

「ミミ、辛いならあまり聞かないほうが良いぞ」
「だ、だいじょうぶです」

全然大丈夫そうに見えないが、本人がそう言うならこれ以上は止めまい。いざとなればレーダーの観測や通信手はエルマもできるしな。

「よーし、稼ぎ時だな」
「……は？」
「見ろ、連邦艦隊は大混乱だ」
「そ、そうです、ね？」
「つまり、今こそ大量撃破のチャンス」
「冗談でしょう？」
「俺は本気だ」

そう言って俺は船をUターンさせ、連邦艦隊と結晶生命体の群れが大乱戦を行なっている戦闘区域へと船を向かわせる。

「イクゾー！」

脳内で『デッデッデデデデ！　カーン！』とお約束のBGMが流れる。

「ぎゃー！？　やだー！　死ぬ！　死ぬわよ！　バカ！　あんた馬鹿じゃないの！？」
「エルマ」
「何よっ！？」
「昔、赤い人がこう言いました。『当たらなければどうということはない』と」
「絶対そいつも銀河級のバカよ！？」

なぁに、某赤い彗星さんの乗っていた機体に比べればクリシュナにはシールドもあるし楽勝楽勝。あの人は攻撃が当たったらワンパンな機体でひょいひょい攻撃避けて戦艦落としてたし。アレに比べればイージーモードだよ。
突撃してくる結晶生命体を避けながら残り二発の対艦反応魚雷を別々の戦艦に一発ずつお見舞いしていく。結晶生命体への対応で手

一杯だから俺に対する攻撃が薄いこと薄いこと。楽勝ですわ。
「掠ってる！　掠ってるわよ！？　あぁあ！　右舷から結晶生命体！　左舷前方から大口径レーザー！」
「ほいほいっと」
「ヒロ様、冷静ですね」
「戦場ではああやってテンパった奴から死んでいくぞ。ミミも冷静さを保てるように頑張ろうな」
「はい」
「聞こえてるわよ！？」

行く手を阻む結晶生命体だけを撃破し、連邦軍の大型艦を狙っていく。
結晶生命体そのものは実はそんなに強くはない。シールドがあるわけではないし、結晶の身体はさして硬いわけではないので散弾砲で簡単に砕き飛ばせる。レーザーはちょっと効きにくいけど。
結晶生命体の衝角突撃でシールドが飽和した船に重レーザー砲と散弾砲をバシバシ撃ち込んでいくだけでバンバン連邦艦が爆発四散していく。隊形を組んで強固に抵抗している奴らには大量の結晶生命体をトレインしていって擦り付けてやる。

『あのファッキン腕付き野郎め！』
『野郎ォぶっ殺してやる！』
『腕付きの悪魔め！』

連邦軍の皆さんからのヘイトが凄いことになっているが……残念ながらこれ、戦争なのよね。
怨嗟の声を上げる連邦軍の艦艇を次々に撃破していく。やったぜ父ちゃん、明日はビフテキだな。

『て、帝国軍が動き始めました！』
『クソッ！？　タイミングが良すぎる！　この水晶野郎どもも腕付きのクソ野郎も奴らの差金か！』

どうやら連邦軍が帝国軍の動きを察知したらしい。ボーナスタイムは終わりだな。

「ここまでだな。戦域を離脱するぞ」
「やっと！？」
「ああ、味方の砲撃に巻き込まれちゃ敵わんし」

帝国軍はアウトレンジから最大火力を投入してくるだろう。結晶生命体ごと連邦軍を撃滅するために。流石にその時にこの場にいたら助かる見込みはかなり低い。

「シールドセルの用意をしておけ。チャフとフレア展開」
「展開完了！」
「飛ばすぞ、舌を噛むなよ！」

スラスターの出力を一気に最大まで上げて連邦軍と結晶生命体が乱戦を繰り広げている戦域から緊急離脱を行う。

『傭兵船が逃げるぞ！　撃て撃て！』
『あの野郎を逃がすな！』
「超光速ドライブ、チャージ開始」
「チャージ開始、超光速ドライブ起動まで5、4、3――」
『ターゲット、超光速ドライブチャージ開始しました！』
『くそがあぁぁぁっ！　てめぇ覚えてろよぉぉぉぉっ！』
「悪いな、もう忘れたよ。じゃあな！」
「――2、1……超光速ドライブ開始」

ドォン、という爆音と共に戦域を一瞬で離脱する。音どころか光さえも置き去って移動を始めた俺達を追撃する手段は存在しない。超光速ドライブの航跡を追跡してくれば話は別だが、あの状況ではそうは行くまい。

#029　スタコラサッサだぜぇ！

「死ぬかと思ったわ……」
「ははは、大袈裟な」
「大袈裟ではなかったと思いますけど……でも、さすがはヒロ様です！」

エルマが魂の抜けたような表情でぐったりと息を吐き、ミミがキラキラとした視線を送ってくる。ふふふ、もっと褒めてくれても良いんだぞ？

「それで、今回の稼ぎは？」
「撃墜スコアは途中から数えてなかったな。ミミ、どうだ？」
「はい、ええっと……戦艦三隻、重巡洋艦四隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦十三隻、コルベット二十一隻を撃破したみたいですね」
「大漁大漁。えーと、確か戦艦一隻二〇〇万、重巡一隻五〇万、軽巡一隻三〇万、駆逐艦一隻一〇万、コルベット一隻五万だったよな。反応魚雷の分を引いても……一〇九五万エネルか。ボロ儲けだな！」
「せんきゅうじゅうごまんえねる……」
「対艦反応魚雷四発で二〇〇万は飛んでるでしょ。だから八九五万エネルよ。私の取り分はその３％だから……二六八五〇〇エネルね」
「ええと、ミミの分は四四七五〇エネルだな」
「よんまんよんせんななひゃくごじゅうえねる……」

ミミがあまりの金額の大きさに呆然としている。俺の取り分は二人の報酬を差し引くと八六三六七五〇エネルか。貯金の二二〇万エネルにこの前のブラックボックスとデータキャッシュを売った分が約五〇万エネル、全部合わせると貯金は一一三三万エネルってとこ

だな。大金持ちだ。

「これで俺の貯金が一一三三万エネルか……まだ少ないな」

「少なくはないんじゃない？　欲しい船でもあるの？」

「安全な惑星上居留地に庭付き一戸建てが欲しいんだ」

「それじゃ全然足りないわね」

そうなんだよな。グラッカン帝国で安全な惑星上居留地の一等地に庭付き一戸建てを建てるには上級市民権やら土地やらを買わなきゃならない。その費用として数億エネルかかるらしい。そう考えると一一三三万エネルじゃ全然足りない。

「あんたくらいの腕があるならグラッカン帝国軍に仕官して騎士でも目指したほうが早いんじゃないの？」

「それなぁ……」

グラッカン帝国では貴族制が採用されている。高貴な血筋を持つ人々が多くの人民に支えられながら高貴なる義務の元にグラッカン帝国の各セクターを統治しているのだ。

貴族は血を重んじるため、基本的には平民が貴族になれるということはないらしいのだが、その例外が騎士制度である。

これはグラッカン帝国軍で著しい功績を上げた将兵を貴族として叙する制度で、騎士位を授けられた軍人はたとえ元は平民であっても上級市民権を与えられ、貴族として振る舞うことが許されるようになるらしい。

「軍人とか貴族とかめんどくさそうなんでパス。金で解決できるならそれが一番だ」

「あんたらしいわねぇ。めんどくさいってのには私も同意するけど」

エルマが微笑し、肩を竦めてみせる。ミミは……まだ戻ってきていないらしい。えねる、えねるって呟きながら放心している。

「とりあえずどうすっかね、今から合流するのも微妙だけど」
「一応合流したらいいんじゃない？　これ以上暴れると他の傭兵連中から恨まれそうだし、後ろでおとなしくしてればいいじゃない」
「そうだな、そうするか」

艦首をグラッカン帝国軍が展開している宙域と向け、超光速ドライブを解除して展開している艦隊の上方に出る。

「こちらクリシュナ、任務を完了して帰投した」

超光速ドライブの停止と同時に通信を送ると、すぐに直属の指揮官であるセレナ大尉に回線が繋がれた。コックピットのディスプレイ上に映る彼女の表情は実に上機嫌な感じである。

『ご苦労さまです。随分と稼いだようですね？』
「ええまぁ。リスクを取りましたんでね。リターンもそれなりなのは当然の結果でしょう」
『そうですね。データの提出をしておいてください。追撃戦には？』
「これ以上活躍すると恨みを買いそうなんでやめときます。弾薬やチャフ、フレアにシールドセルなんかも心許ないですし」
『なるほど。ではクリシュナは本隊付近で砲撃部隊の護衛の任に着くように……ところで、あの結晶生命体は何故あのような場所に出現したんでしょうね？』
「撃破した連邦軍の旗艦にヤバいものでも積まれてたんじゃないですかね？」

予め用意していた返答ですっとぼける。聞かれることは当然想定

できるわけだから、答えだってもちろん用意してある。もちろん事実とは違うが、それを確かめる術は存在しないのだ。なんせ対艦反応魚雷で跡形もなく吹き飛んでるからな。

『……そういうことにしておきましょうか。セレナ、アウト』

通信が終わり、セレナ大尉の顔が表示されていたウィンドウが閉じる。

「んじゃ、あとはのんびり戦いが終わるのを待ちますか」
「あんたが引っ掻き回したせいでワンサイドゲームになりそうね」
「流石だろ？」
「調子に乗るんじゃないわよ……って言いたいけど、そうも言えないわね。見事なものだと思うわ。いつ撃墜されるかと気が気じゃなかったけど」
「ヒロ様ですから」

いつの間にか復活したらしいミミが何故かドヤ顔でその大きな胸を反らせる。うむ、ナイスおっぱい。今日は大激戦で疲れたし、思う存分癒やしてもらうとしよう。ぐへへ。

☆★☆

ターメーン星系防衛戦はごく短い時間で終了した。当初、厳しい戦いを強いられると思われていたグラッカン帝国側の完全勝利という形で。

この戦いについては不明な点が多い。記録によると、何故かワープアウトしたばかりのベレベレム連邦艦隊に結晶生命体の群れが襲いかかり、大混乱の中で多数の艦船が失われたという。

この時ターメーン星系への攻撃を行なったベレベレム連邦艦隊の

損耗率は凄まじく、実に九割の艦船がターメーン星系で宇宙の藻屑と化した。生き残った兵も少なく、あまりにも無様な大敗を喫したためかベレベレム連邦側では国民感情に配慮して情報封鎖が行われたような形跡がある。

また、グラッカン帝国側の情報も非常に少ない。こちらにも何らかの情報操作が行われた可能性が高い。

何故、都合よくベレベレム連邦艦隊に結晶生命体の群れが襲いかかったのか？

何故、いくら数が多かったとはいえ数千程度の結晶生命体の群れにベレベレム連邦艦隊が大損害を被ったのか？

戦力的に考えれば数千程度の結晶生命体では当時のベレベレム連邦軍の攻撃部隊に大きな損害を与えるのは難しい筈である。無論、無傷で済む数でもないが。

そこで浮上してくるのがこの頃ターメーン星系に滞在していたと思われるとある傭兵の存在だ。

そう、皆さんも御存知のあのキャプテン・ヒロである。記録によれば、彼は丁度この頃にターメーン星系に現れたとされている。

更に独自の調査の結果、当時のターメーン星系軍にあのセレナ＝ホールズも帝国軍大尉として配属されていたのだということが判明している。

キャプテン・ヒロとセレナ＝ホールズ。この二人が同時に存在していた星系で起きたグラッカン帝国軍の奇跡の快進撃。

記録が少ないため決定的な証拠は無いが、この二人の組み合わせとなれば『何が起こってもおかしくはない』と思うのは筆者だけではないだろう。

読者の皆様もご存知のように、彼らはこの後にも盛大な『戦果』を上げているのだから。

☆★☆

「また？」
「また、ですか？」

ターメーン星系防衛戦が終わって今日で三日目。
携帯情報端末に入ってきたメッセージを見て表情を歪めた俺を見てエルマとミミがうんざりしたような表情を浮かべた。多分俺も同じような表情を浮かべている。
それはセレナ大尉からの熱烈なラブコールだった。

『グラッカン帝国軍は優秀なパイロットを常に求めています！　高待遇！　充実した福利厚生！　一級市民権の付与！　その他にも様々な特典があります！　あいうぉんちゅーふぉーぐらっかんいんぺりあるふぉーす！』

要約するとこんな感じの内容である。こんな感じのメールが直接、あるいは傭兵ギルド経由で毎日のように送られてくるのだ。スパムメールかな？

「どうすんのよ。あの女、そのうち外堀を埋めにかかってくるわよ」
「あれは獲物を狙うハンターの目ですね」
「嬉しくねぇなぁ」

美人に狙われるのは大歓迎だが、それが軍人として自分の部下に欲しいからという内容となるとそれはちょっとノーセンキューである。いくら高待遇とは言っても傭兵の稼ぎよりは収入はずっと落ちるだろうし、自由な時間もなくなるだろう。クリシュナだってどうなるかわかったものじゃない。
福利厚生や市民権の付与には少しだけ興味があるが、福利厚生に関しては金さえあればなんとでもなる問題だし、市民権に関しては金で買うこともできるようなのでやはりこちらも金さえあればなん

とかなる。正直あまり魅力的な提案ではない。

「よし、逃げよう」

「良いんですか？」

「構わないでしょ。傭兵がどこに行こうと本人の勝手よ。厄介な事になる前に逃げるのが賢いわね」

少し心配そうに首を傾げるミミにエルマがそう言って席を立つ。

「対艦反応魚雷以外は補給も整備も終わってるからすぐに出られるわよ」

「魚雷はまぁ、そう使うものじゃないし良いだろ。善は急げだな」

一発五〇万エネルの対艦反応魚雷なんてそうそう『出る』在庫じゃないからな。在庫をストックしているところなんてそうそうないもんらしい。ゲームなら簡単に補給できるのにな。

「い、良いのかなぁ……？」

ミミは逃げるようにターメーン星系を去るのが心配なようだが、別に逃げたからって指名手配されるわけでもなし。あっちは任務に縛られた軍人さんである。追ってくることもできまいて。

「次の目的地は？」

「少し遠い。六つ先の星系だ」

「六つ先……というと、昨日話していたあそこですね？」

「うむ。帝国の最先端医療技術が集うあそこだ」

「アレイン星系ね」

「そうそれ」

コックピットに向かいながら次なる目的地について話し合う。
次に向かうのはアレイン星系。医療系ステーションやバイオテクノロジー関係のコロニーが集うハイテク星系だ。
「なんか色んな種類の人造肉とか、遺伝子改良された作物とかも名物らしいぞ」
「お酒は？」
「遺伝子改良された作物があるならそれを使った酒も作ってんじゃね？」
「良いですね！　新しいグルメの予感がします！」

俺はパイロットシートに、ミミがオペレーターシートに、エルマがサブパイロットシートにそれぞれ座り、シートベルトを着用する。

「ミミ、発艦申請頼む」
「了解です」
「エルマ、いつもどおり出力管理とサブシステムの掌握を」
「はいはい、了解」
「発艦申請ＯＫです！」
「よし、出るぞ！」

ハンガーベイとのドッキングを解除し、ランディングギアを格納して宇宙へと飛び出す。
今日も宇宙の景色が雄大で、美しい。この景色を見ていると自分がいかにちっぽけな存在なのか理解させられる。同時に、今の自分は行こうと思えば遥か彼方で光を発するあの星までも行くことができるのだとワクワクさせられる。

「まずはデルーマ星系か」
「はい、ナビを設定します」

ミミがオペレーター席でコンソールを操作し、目標の恒星系へのナビが開始される。俺はナビに従い、目標に設定された恒星へとクリシュナの艦首を向けた。

「超光速ドライブ、チャージ開始するわよ」
「あいよ。超光速ドライブ、カウントダウン」
「5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動」

ドォンと爆音のような音が鳴り、クリシュナが光を置き去りにして走り出す。

「目標、デルーマ星系。ハイパードライブチャージ開始」
「ハイパードライブチャージ開始」
「ハイパーレーンへの接続成功」
「カウントダウン、5、4、3、2、1――ハイパードライブ起動」

空間が歪み、ハイパーレーンへと突入する。
さぁ、行くとしようか。ゲームではない、宇宙の彼方へ。

☆★☆

「今回の戦功はかなり大きなものだが……本当にそれでいいのか？」

画面の向こうで叔父様が眉を顰めて確認をしてくる。私は微笑みを浮かべて再度頷いた。

「ええ、国内を自由に移動して宙賊を狩って回る独立部隊の必要性は以前から具申しておりましたでしょう？　それを叶えて頂ければと」

「君の実力ならばもっと大きく、華やかな戦功が望める部隊への転属も可能だが……どうやら説得は無駄のようだな。わかった、望むように取り計らおう」
「ありがとうございます」
「ああ。それではな」

頭を下げた向こうで通信が切れる、ホロ・ディスプレイに投影されていたウィンドウが自動で閉じる。

「ふふ……逃しませんよ？」

窓の外で光の尾を引きながら彼方へと飛び去っていく一隻の船を眺めながら私はそう呟く。
窓に映った私の顔にははっきりとした笑みが浮かんでいた。

#029　スタコラサッサだぜぇ！（後書き）

とりあえず一区切り……ストック貯めるために少しお休みするかもしれない―（：3」∠）―（しないかもしれない

#030　二章プロローグ（前書き）

休むかもしれないとは言った。
休むとは言っていない……！（、　。ω　。、）（無理そうなら休みます

#030　二章プロローグ

眩しくて目が覚めた。

目に飛び込んでくるのは光の奔流。前から来て、後ろへと流れ去って行く青白い光の回廊。上下左右、全てが流れ去っていく光の奔流だけで構成されているのだ。目指す先にあるのは一点の光。視界を埋め尽くす光の奔流と同じ色の眩く輝く恒星の光である。

「ちょっと、寝てんじゃないでしょうね？」

左斜め後方から不機嫌そうな声がする。はて、これは誰の声だったか？　そもそも、ここはどこだろう？

何らかの情報を現していると推測できるホログラムでできたディスプレイ。いくつものボタンがついた操縦桿のようなもの。それといくつかの計器。先程から見えている光の奔流は俺の真正面に広がる大きな……ディスプレイだろうか？　映像にしてはリアルな気がするが。

「ヒロ様？」

心配するような声が聞こえてくる。ヒロ様？　俺は、俺の名前は佐藤孝宏（さとうたかひろ）だ。ヒロ様なんて名前じゃない。でも、この声には聞き覚えが。

誰かが近づいてくる気配がする。

「いでぇっ！？」

脳天に衝撃が走った。とてもいたい。

「コックピットでうたた寝とは良い度胸ね……？」
「エ、エルマさん、暴力は……」

激しく痛む頭を押さえながら振り返ると、俺にげんこつを落としてきた人物と、その後ろから心配そうにこちらを窺っている人物の姿が目に入ってくる。

「あー……思い出した」
「何をよ？」

いかにも怒っています、という表情で俺を見下ろしている女の名前はエルマ。長くて尖った特徴的な耳を持つ美人で、胸部装甲は控えめ。髪の毛の色は透き通るように色素の薄い銀髪。肌は白く、きめ細やか。どこからどう見ても紛うことなきエルフだ。

ただし、衣服は肌の露出が少なめの傭兵風。どことなくサイバー風味でファンタジー要素は皆無だが。腰には無骨なレーザーガンまでぶら下がっている。耳以外はエルフっぽくない実に残念なやつだ。

彼女は傭兵歴五年のベテラン傭兵なのだが、今は俺の船で働くクルーの一人である。

彼女が俺の船に乗る経緯については……まぁ、概ね不慮の事故と言って良いだろう。大規模な賊の討伐中に乗っていた宇宙船が暴走し、帝国軍の戦艦に突っ込んでもろとも大破したのだ。

彼女は莫大な賠償金を負うことになった。しかし彼女の全財産と船を売り払った金額を合わせても賠償金が足りず、あわや犯罪者として過酷な監獄コロニーに送られる直前というところで俺がそれなりの大枚を叩いて助けることになったのだ。

それ以来、彼女は俺の船のクルーとして働いている。俺に借金を返し、再び自分の船を手に入れるために。

ちなみに、彼女が負った賠償金の金額について不当に高い請求な

どがされていないかは一応調べた。一応調べたが不審なところはなかった。それもそのはずで、額面が書類というかデータに残る軍からの正式な賠償金請求で不正などやりようがなかったというわけらしい。
ただ、賠償金の支払い期限についてはあちらの手違いか何かで随分短く設定されていたようだった。そのミスをやらかした担当者は損耗率の高い懲罰部隊送りになったそうだ。ワンミスで懲罰部隊送りとか超怖い。やはり帝国軍には近づかないでおこう。

「二人のこととか、色々」
「私達のことを忘れてたんですか……？」

エルマの影からひょこりと顔を覗かせた少女が悲しそうな顔をする。

「いや、寝ぼけてな」

エルマの陰からこちらの様子を窺っている少女の名前はミミ。明るいブラウンの髪の毛に同じく明るいブラウンの瞳を持つ可愛らしい女の子だ。今はエルマの陰になって見えていないが、その胸部装甲は戦艦並みである。身体の大きさは駆逐艦級なのに。
彼女もまたエルマと同様に俺の船のクルーである。彼女が俺の船に乗ることになった経緯もまた借金絡みだ……とは言っても、エルマと違って彼女に責任があるような類のものではない。
彼女の両親が事故死し、その事故の際に彼女の住んでいたコロニーに被害を与えた。その賠償金が子供である彼女に降り掛かったのだ。
そんな無茶が罷り通るのかと思うが、そこに大人達のどんな思惑が絡んだのか、そんな無茶が罷り通ってしまった。そして、そんな彼女を助ける大人は一人もいなかった。

だが、彼女は運良く俺と出会い、俺には彼女を助けられるだけの財力と力と立場があった。俺は彼女を助け、彼女は俺の船のクルーになった。お伽噺ならこれでめでたしめでたしで終わるんだろうが、残念ながらこの世界は現実である。借金が消えても彼女に寄る辺がないことには変わりない。

なので、俺は助けた者の責任ということで彼女の面倒をみることにした。この船のクルーとして迎え入れ、俺の傭兵稼業のサポートをするオペレーターとしての役目を担ってもらうことにしたわけだ。

というわけで、彼女はオペレーターとしての技術を一から勉強中。AIトレーナーによる訓練と、ベテラン傭兵であるエルマの教育もあって着実にオペレーターとしての経験を積んでいる真っ最中である。

「寝ぼけてたとはいえ薄情な野郎よねー。私達二人をとっかえひっかえ好きにしておいてさ」

「とっかえひっかえってお前ね……人聞きが悪いことを」

「事実よね？」

「否定はできないな」

そう、二人とはそういう仲だ。

この世界には地球の日本で過ごしていた俺には到底理解できない、想定も出来ないような妙な仕来りや文化。一般常識というものがいくつかあるらしい。勿論俺もまだ全貌を把握していないのだが、その妙な常識の一つに『男の船に乗る女は一般的にその情婦として見られる』というものがあった。

意味がわからないだろう？　俺も意味がわからん。だがそういうものらしい。この世界がどのような歴史を歩んできたのかは俺はまだ知らないが、そういう文化や常識が育まれる経緯が何かしらあったのだろう。そうなのだと言われてしまえばそういうものなのだろうと納得する他ない。

彼女達は俺の船に乗る際、もちろんそういう常識を理解した上で俺の船に乗ることを決めた。いや、二人に関しては正直ほとんど選択肢が無かったわけだから、理解したというよりは甘んじて受け入れざるを得なかったというのが正しいだろう。

対して、俺はそんなことは深く考えずに彼女達を船に乗せることを決断した。それは単に同情であったり、クルーとしての能力を欲したという打算であったりしたわけだが、俺から彼女達に『俺の船に乗れ』と言ったわけだ。つまりそれは『俺とそういう関係になれ』と言うのと同義である。

俺がそう発言した時点で俺にそのつもりがなくとも、彼女達はそう取る。それが常識だからだ。

しかも状況も状況だ。どちらも金に困っており、俺の提案に乗らなければ貞操の危機と破滅が約束されていたような状態である。

ミミは身寄りも自分の身を守る力もなく、俺の提案に乗らなければスラムじみた場所で玩具にされ、娼婦としてこき使われ、いずれ野垂れ死ぬような状況。

エルマは賠償金が支払えず、傭兵を目の敵にしているであろう宙賊の男どもがわんさかといる監獄コロニーにぶち込まれる寸前。この世界では男女で犯罪者をぶち込む房を分けるなんてことはしないらしい。当然、そのような場所で彼女を待つのは物理的、性的な暴力の嵐であろう。

そんな状況から助けられた二人が俺に救われ、俺の船に乗るわけだ。彼女達としては俺に関係を迫られれば断れない。ミミにいたっては俺に捨てられればその時点で詰みである。エルマは借金さえなければなんとか生きていけそうな気もするが。

まぁ、長々と話したがそういう経緯があって二人とはそういう関係なのである。客観的に見ると、借金のカタに貞操を差し出させるというド畜生だな、俺。まったく否定はできない。

だが、考えてみて欲しい。ロリ巨乳の美少女や見た目は完璧な美人のエルフが恥じらいながらも納得済みで自分から身を差し出して

くるのだ。そんな状況で手を出さない男がいるだろうか？
いるのかもしれない。ああ、そういう人はいるのかもしれないな。
でも俺は無理だね！　いっちゃうね！　俺は誘惑に弱くてそういうときには下半身でものを考えちゃう健全な男の子だからね！
そんな状況で手を出さないとかどんな聖人君子だよ。悟りでも開いてるのか？　俺はゲームとかでエロい選択肢があれば迷わず選んじゃう男なんだ。すまんな。

「でも、嫌なら――」
「嫌だなんて言ってないじゃない」
「嫌じゃないです」

二人揃って食い気味に言われた。エルマは顔をほのかに赤くしてそっぽを向いており、ミミは真剣な表情でこちらをじっと見つめてきている。

「わかった。二人とも愛してるよ」
「はいっ！」
「そ、そう」

俺の言葉にミミは満面の笑顔を浮かべ、エルマは照れくさそうに俯いた。うん、二人とも可愛いな。

☆★☆

さて、そろそろしっかりと自己紹介をしておこう。
俺の名前は俺の名前は佐藤孝宏（さとうたかひろ）、今はキャプテン・ヒロと名乗っている。
今、俺が乗っている船は【ＡＳＸ－０８　Ｋｒｉｓｈｎａ】という型番の小型戦闘艦だ。これは恐らくこの世界に一台しかないユニ

ークな船で、俺はそのまま『クリシュナ』と呼んでいる。
今、俺がいる場所はガーナム恒星系からアレイン恒星系へと向かうハイパースペース内だ。ハイパーレーンやハイパースペースの話は後回しにするとして、まずは俺の居るこの世界の話をしよう。
俺が今存在するこの世界、この銀河の名前はわからない。誰も銀河に名前なんてつけていないようだからな。とにかくこの銀河には恒星間航行技術が普及しており、人々はとうの昔に惑星の重力圏から離脱し、星の海にその生息圏を広げているらしい。気がついたら、俺はそんな世界に放り出されていた。この船、クリシュナと一緒に。
このクリシュナ自体は俺がこの世界に来る前からの付き合いだ。ああいや、別に元の世界でこんな宇宙船を乗り回していたわけじゃない。俺の知る限り地球における宇宙への進出はせいぜい軌道上の研究ステーション止まりだったし、それだってごく少数の宇宙飛行士が宇宙における様々な実験を行うための軌道上実験施設のようなもので、宇宙に住むとかそういう類のものではなかった。
人々はごく普通に地表に暮らしていた。だから俺の言っているこの世界に来る前からの付き合いだ、というのはゲームの中での話である。
この世界に来る前、俺はステラオンラインという名前のオンラインゲームにハマっていた。超広大な銀河で宇宙船を駆り、冒険をしたり戦闘をしたり、交易でお金を稼いだりと自由に色々と遊べるゲームだ。
俺が今乗っているクリシュナはそのゲーム内のイベントで手に入れ、俺が乗り回していたユニークな船だったのだ。ここまで話せば察しの良い人はわかるかもしれないが、俺が迷い込んだこの世界はステラオンラインに酷似している世界だった。
何せ、流通している船や商品はステラオンライン内で見覚えのあるものが多く、宇宙に潜んで民間輸送船などを襲う宙賊や、見境なく有機生命体を襲う結晶生命体などの敵対的な存在もステラオンラインのそれとほぼ変わらない。

だが、全てが同じというわけではない。ステラオンライン内には存在しなかった船や商品なども見かけるし、銀河地図を眺める限りではステラオンライン内で俺が知っている恒星系の名前は見当たらない。周辺星系を支配している複数の銀河帝国の名前にも聞き覚えがない。

似て非なる世界なのか、それとも単に俺が知らないだけなのかの判断は未だについていないのだ。それは何故かと言えば、ゲームのステラオンラインにおいても未だにゲーム内の銀河の全貌が明らかになっていなかったためである。

確かステラオンラインのサービスが開始されてから四年ほど経っていたはずだが、プレイヤー達はその時点で銀河の中心部に到達できていなかった。四年もかかっているのにである。どれだけ広いんだっていう話だ。

つまり、今俺がいる場所が銀河の中心部を越えた反対側だとすると、俺の見知った星系がないのも当たり前なのだ。何せ誰もまだ到達していないのだから、俺が知るはずもないわけだ。

当然、太陽系がないかも調べてみたが見つからなかった。これはステラオンラインでも見つかっていなかったので、そもそも存在しないのか未発見なのかはわからないのだが。

兎にも角にも、そんな状況に放り出された俺は途方に暮れた。幸い、クリシュナを動かすことは問題なくできたので、ステラオンラインでもそうしていたように傭兵としてこの世界で生きることにした。最初からクリシュナに積み込まれていた積み荷のおかげで金はそれなりにあったが、それを食いつぶしてダラダラと生きても仕方がないだろう。

原因はわからないが、折角ドハマリしていたゲームのような世界に来たのだ。楽しまなきゃ損というものである。

そして俺は傭兵となり、成り行きでミミやエルマと出会い、傭兵として宙賊を狩り、同じく傭兵として宇宙帝国同士の小競り合いに参加して活躍した。

しかし活躍しすぎたのがいけなかった。美人だがヤバそうな雰囲気を放つ帝国軍人のお嬢さんに目をつけられ、熱烈に帝国軍に勧誘され、そのままで居るとなし崩し的に帝国軍に入れられてしまいそうだったので逃げてきたわけだ。自由を求めて。

なぁに、俺達は自由な傭兵という立場だ。仕事を求めてどこかに移動しようとも特に咎められる筋合いもない。もしかしたら帝国軍からの印象は悪くなるかもしれないが、別に軍と関わらなくたって傭兵は稼げる、問題はない。問題はないとも。

ちなみに、この船に乗る三人にはそれぞれ目標がある。

俺の目標はこの世界の安全な惑星上居住地に庭付きの一戸建てを買うことだ。そして思う存分炭酸飲料をかっ喰らいたい。

何故かこの世界には炭酸飲料が存在しないのだ。調べてみたが、理由がさっぱりわからない。どの媒体を見ても炭酸飲料というものの存在自体が見当たらない。意味がわからない。

だが、無重力下で炭酸飲料を飲むことは非常に難しいという話は聞いたことがある。この銀河で宇宙進出が一般的になものになってからどれだけの月日が経つのかはわからないが、宇宙進出の過程で炭酸飲料というものが廃れてしまったのかもしれない。

ならば地上でこの俺が炭酸飲料というものの存在を復活させてみせる。そして思う存分飲むのだ。

というわけで、俺の目標は惑星上居住地に庭付き一戸建てを買うことである。帝国では上級市民権の購入代金を含めて数億エネルかかるらしい。舐めてんのか高すぎるわ。

そして次にミミの目標だが、彼女の当面の目標は銀河中のグルメというグルメを味わうことだ。この広い銀河には俺達の想像もつかないような不思議で美味しいものがたくさんあるという。それを食い尽くす。それがミミの目標だ。シンプルかつ遠大な目標だな！勿論俺もそれに付き合う予定だ。ミミの宇宙グルメの一つに炭酸飲

料を入れることが俺の密かな目標である。

そして最後にエルマだが、エルマの目標は当然俺に対する借金の返済と、再び独立して傭兵になるための資金稼ぎである。

俺に対する彼女の借金は三〇〇万エネル。日本円に換算するとおよそ一エネルあたり百円ほどなので、日本円にして約三億円。大金だ。とは言ってもこの前のターメーン星系における帝国と連邦の小競り合いの際に二六万エネルほどの金額をエルマの取り分として渡したので、このペースだと一年もしないうちに全額返済するかもしれないな。

まぁ、借金を返しただけでは傭兵として活動するための宇宙船を購入することはできないだろうから、借金を返し終えてもしばらくはうちのクルーでいることになりそうだけど。

俺達の状況としてはこんな感じだ。

今は帝国内でも医療技術がとても進んでいるというアレイン星系へと向かっている。

何故かと言うと、まさか異世界から迷い込んできましたと言いふらして歩くわけにもいかないので、この世界の常識がなかったり、突如ターメーン星系に現れたりしたことに関してはハイパードライブ中の事故によるもので、その事故の際に記憶があやふやになってしまっているという設定にしているからだ。

その設定を聞いたミミとエルマが心配して、一度医療系のステーションで詳しく検査をしたほうが良いと提案してきた。その提案に乗らないのも不自然だし、俺自身も今の自分の体がどうなっているのか知っておいたほうが良いと思ったのでその言葉に従うことにしたわけだ。実際、異世界転移だかなんだかしらないが妙なことになっているわけだからな。身体に異常がないともかぎらないわけだし。

そういうわけで、いま俺達は自由と医療技術を求めてアレイン星

系へと向かっている。自由と医療技術を求めて。大事なことだから二回言っておくぞ。

#031　救難信号

アレイン星系は二つの居住可能惑星と三つの研究コロニー、一つの交易コロニーを一つの恒星系に抱えている非常に栄えた星系である。

ターメーン星系のような大規模な小惑星帯は存在しないが、研究コロニーで開発、生産されているハイテク製品の輸出と、それらのハイテク製品を作るための原材料の輸入が盛んに行われており、交易船の行き来が非常に多い。

当然、それらを狙う宙賊どももそれなりに集まってくる。

帝国にとってもここは重要な場所であるわけで、帝国軍による宙賊の取り締まりもかなり厳しいようだ。それでもこの広い恒星系に現れる全ての宙賊を取り締まれるわけではないらしい。傭兵としての仕事もそれなりにあるということである。

「以上がアレイン星系の概要ですね」

「ぶらぼー」

タブレット片手にアレイン星系の概要説明を終えたミミにぱちぱちと拍手を贈る。流石に少し恥ずかしいのか、ちょっとミミの顔が赤い。

「それで、目的のコロニーはどれなんだ？」

「基本的に研究コロニーは研究者とかコロニー関係者以外は立入禁止みたいなので、私達が行くのは交易コロニーですね」

「交易コロニーで荷物の配達でも請ければ行く機会もあるかもね。別に行ったからって面白いことはなにもないわよ。観光名所があるわけでもないしね」

「息が詰まりそうだなぁ。そういうとこに住んでる人達の娯楽とかってどうなってんのかね？」
「研究そのものが娯楽みたいな真性の研究バカばっかりよ、ああいうステーションって」
「うえー」

想像しただけでげんなりとした気持ちになる。仕事が趣味みたいなワーカーホリックだらけなのかよ。もし行ったとしても長居はしたくないな。

「それじゃあ進路を交易コロニーに向けよう。エルマ」
「アイアイサー」

サブパイロット席のエルマが操舵してクリシュナの船首をアレイン交易コロニーの方向に向ける。

「到着まで十五分ってところね」
「了解。一応周辺の警戒は怠らないように。ミミもレーダー反応に注意してくれ」
「はい！」

俺の声に応えてミミが超光速ドライブ中にも使用できる亜空間センサーの反応を注視する。光よりも早く動いている状態では通常のセンサー類は使い物にならない……らしい。そこで役に立つのがこの亜空間センサー。当然俺には仕組みなどまったくわからない。そもそも亜空間ってなんなんだよって話だ。
とにかく、こいつを使えば超光速ドライブ中でもかなり広範囲の様子を探ることが出来る。他の船の航跡をキャッチしたりすることもできるし、戦闘後のデブリが漂う宙域をキャッチすることも出来る。あと、滅多に無いけど救難信号をキャッチしたりすることもあ

る。

「あの、ヒロ様。救難信号をキャッチしました」
「なんでや！　滅多にないはずやろ！」
「気持ちはわかるけど、放っておくわけにはいかないわよ」

ゲーム内ではミニイベント発生地点みたいな感じで別にスルーしたからといって咎められることもなかったのだが、一応現実世界であるこの銀河においてはそうはいかない。特段の理由がない限り救難信号を受け取った船には救護義務があるのだ。

「ですよねー。進路を救難信号の発信地点に向けてくれ。戦闘になる可能性もある、注意しろよ」
「はい！」
「了解」

クリシュナを旋回させて救難信号の発信地点へと向かう。実際に行ってみないとわからないが、救難信号を発信するような状況なんてそう多くはない。船に何らかのトラブルが発生したか、宙賊に襲われたかのどちらかだ。
前者であれば乗組員を一時的に保護して船を曳航すればいいし、後者であれば……まぁドンパチは避けられまい。

「間もなくコンタクトします。超光速ドライブ解除まで5、4、3、2、1……今！」

ドォン！　と爆発音のような音と共に超光速ドライブが解除され、クリシュナが通常空間に出現する。すぐさまレーダーをチェック――反応は五隻。一隻の中型艦を四隻の小型艦が追いかけているようだ。

「見事に襲撃されてるわね。追われてるのは中型の客船みたいだけど」
「発信源はあの客船だな。介入するぞ。ミミ、スキャンと呼びかけを頼む」
「はい！　こちらは傭兵ギルド所属の戦闘艦、コールサイン『クリシュナ』です。救難信号をキャッチしました。客船を攻撃している所属不明艦船に告げます、直ちに攻撃行動を停止してください」

ミミが所属不明艦船にスキャンをかけながら攻撃停止勧告をするが、彼らの返答は実にシンプルなものだった。

「ロックされたわ」

所属不明艦船はすでにウェポンシステムを起動している。その状態でこちらをロックオンしてきたというのであれば、これ以上の言葉は不要ということだろう。

「敵対行為と認定する。ウェポンシステムオンライン。ジェネレーター出力を戦闘モードに」
「アイアイサー、ウェポンシステムオンライン。出力上昇」
「行くぞ！」

ウェポンシステムが起動すると同時に船体の一部が変形し、強力な重レーザー砲を装備した四本の武装腕がその姿を顕にする。同時にコックピットの左右から二本の砲身が伸び、光を反射して鈍い光を放った。

「四隻とも賞金首です」
「なら遠慮なく撃破できるな」

客船を追っていた四隻の小型艦のうち、二隻がこちらに向かってくる。俺はその二隻の宙賊艦に向かってクリシュナを加速させる。

『こいつ速――』

別に先に撃たせてやる必要もない。射程に入ると同時に四本の武装腕に装備されている重レーザー砲を斉射し、一撃で一隻目のシールドを飽和させて剥ぎ取ってやる。

『んなっ！？　シールドが！？』

「ひとつ」

擦れ違いざまに二門の大型キャニスターキャノンを発射し、シールドを失った宙賊艦を穴だらけにしてやった。

散弾砲とも呼ばれるこの二門の大砲は、細かい弾丸を超高速で無数に発射する強力な武器だ。射程は短いが威力は凶悪で、シールドを失った艦艇に発射すれば一撃でスイスチーズの出来上がりである。

「相変わらず凶悪よね、このシャードキャノン」

「シャードキャノンってオサレな言い方だよな」

「オサレってあんたね……」

くだらない会話をしながらフライトアシストモードを切って船を旋回させ、後ろ向きに進みながらもう一隻の船のケツに四本の武装腕を向ける。

「ふぁいやーふぁいやー」

連続で照射された碧色の光条が宙賊艦のケツに突き刺さり、シー

ルドを剥ぎ取ってメインスラスターを破壊する。

『や、やめっ』

「嫌だね」

何か命乞いのような鳴き声が聞こえた気がするが、無視である。こいつら宙賊は何の罪もない輸送船や客船を襲って積荷を奪い、船員を殺し、場合によっては奴隷売買までやらかす人間のクズだ。生かしておいても百害あって一利なしというものだ。

シールドを失い、メインスラスターを破壊されて身動きが取れなくなった宙賊艦に容赦なく重レーザー砲の斉射を浴びせる。四本の重レーザー砲の光条に晒された宙賊艦は程なくして爆発四散した。

「ふたーつ。次」

「残り二隻だけど……逃げようとしてるわね、これは」

こちらに向かってきた二隻がすぐに撃破されたことに恐れをなしたのか、客船を追っていた二隻の宙賊船は攻撃を中止してこの宙域から離脱しようとしているようだった。

「あっ、この野郎！　逃げんなコラ！」

『てめぇみたいな化物相手にしてられっか！』

生き残りの宙賊艦から通信が返ってくる。律儀なやつだな。いや、それどころじゃない。客船を追っていた奴らとの距離がちょっと遠い。これは厳しいか？

「宙賊艦、超光速ドライブを起動しました！」

「まにあえええぇぇぇぇ！」

クリシュナを最大限に加速させて宙賊艦の後を追う。重レーザー砲の射程に入るまであと少し……！

『あばよ！』

ドォン！　という爆発音のような音を立てて宙賊艦が光になった。航跡を追って追撃することも不可能ではないが……襲われていた客船を放置していくわけにも行くまい。

「クソッ、逃げ足の早い奴め」

「宙賊にしては見事な引き際だったわね。たまにいるのよね、ああいうのって」

「面倒くさいんだよな、ああいう奴らは……」

武器の届く範囲であれば逃げられる前に落とせるのだが、今回みたいに離れているとどうしようもないんだよな……もっと遠距離からでも狙える武器でもあれば話は別なんだけど。大型の電磁投射兵器とか。

「まぁいいや、客船に通信を繋げてくれ。航行に問題ないようなら撃破した船からブツを漁って放置していくぞ」

「付き合う必要は別に無いものね」

冷たいようだが、こんなものである。別に中型客船からの護衛依頼を請けているわけでもなし、そこまで面倒を見る義理はない。勿論、所属を聞いて謝礼は要求するけどね。

この世界では救難信号をキャッチしたらキャッチした側に救護する義務が生じるが、救護された側にも義務が生じる。それは救護者に対する報酬の支払いだ。

その時に積んでいる荷物や客員によってその額は変動するが、中

型の旅客船なら支払われる金額は相当なものになるだろう。この星系に来るなりいきなりこんな事件に巻き込まれたのは不運だが、金銭的な意味で考えれば幸先が良いとも言えるな。傭兵としては。

『こちらはイナガワテクノロジー所属の旅客船、コウエイマルだ。救援に感謝する』

ミミが開いた回線から声が聞こえてくる。イナガワテクノロジーにコウエイマルとな？　所謂日系企業なのだろうか。コウエイマルって漢字で書いたら幸栄丸とか光栄丸とかなのかね？

「無事で何よりだ、コウエイマル。俺は傭兵ギルド所属のキャプテン・ヒロだ。船の状態はどうだ？」

『生命維持装置は無事だが、足回りがやられた。すまないが、星系軍が到着するまで護衛してくれないか？』

帝国軍が来るまで護衛ね。もう少し小さい艦ならクリシュナで曳航できるんだが、あの大きさだとちょっと無理だな。帝国軍の軍艦に曳航してもらうしかないだろう。

「それは依頼ということで良いんだな？　報酬の支払いは？」

『ああ、イナガワテクノロジーから報酬を支払うことになるだろう。報酬額に関してはすまないが、護衛完了後に本社と交渉をしてもらうことになると思う。私には報酬額を決める権限までは無いのでな』

船長とは言え、流石にそこまでの権限はないか。エルマに視線を向けてみると、彼女は無言で頷いた。話の内容に特に問題は無さそうということだろう。

「了解した。では当艦は貴艦の護衛を開始する。護衛期間は帝国軍

が到着するまで。救護報酬を含めた護衛報酬はイナガワテクノロジーが支払う。そういう契約で良いな？」
『それで良い』
「じゃあ、契約成立だ。ミミ、今の会話を記録しておいてくれ」
「はい！」

ミミが元気よく返事をする。
さて、じゃあ帝国軍が到着するまで宙賊艦の残骸でも漁りますかね。仕事を完了する前に叩き潰したから大したものは無いと思うけど。

#031　救難信号（後書き）

本日２／２６発売の少年エースに前作の「２９歳独身は異世界で自由に生きた……かった。」のコミカライズ版が掲載されています！

是非買って読んでね！

ちなみに私の住んでいる場所では書店にまだ在庫が届いていないようです……試される大地だからね、仕方ないね……｜（∵３」∠）

｜

#032　アレインテルティウスコロニー

「ふわぁ……おおきいですね！」
「大きいなぁ……ターメーンプライムコロニーの何倍だ？」
「ええと、人員は確か五倍くらい多く収容できるんじゃなかったかしら？　大きさはよくわからないわね」

俺達の見る先には超巨大な立方八面体のコロニーが存在していた。ゆっくりと回転しているように見えるが、あの大きさの物体であると考えると回転速度は相当早いんじゃないだろうか。あの回転で擬似的な重力を発生させているのかね？　とにかくとてつもない大きさだ。

この超巨大な物体の名前はアレインテルティウスコロニー。アレイン星系における俺達の目的地で、この星系で三番目に建造されたコロニーである。

「ミミ、ドッキングリクエストだ」
「あ、はい！　ドッキングリクエストを送りますね」

ミミがオペレーター席のコンソールを操作し、アレインテルティウスコロニーにドッキングリクエスト――着艦要請を出した。こちらの艦名やキャプテンである俺の名前、寄港目的などを伝える定型文的なやりとりの後、すぐに着艦許可が降りたようだった。

「着艦許可出ました！　七十二番ハンガーだそうです！」
「了解」

画面上に表示されるガイドビーコンに従って指定されたハンガー

へと向かう。流石に大きなコロニーなだけあって、交通量が非常に多い。接触事故なんて起こした日には大惨事だな。俺はこんなことに神経を使いたくないからオートドッキング機能を使うけどね。

「オートドッキングなんて邪道よ……」

「俺は楽な方が良い」

エルマが微妙な顔をしているが、俺は一言でそれを切って捨てる。確かに神経をすり減らしながら完璧な着艦をキメるのも楽しくはあるが、俺はそれよりも楽なのを取るね。オートドッキングを可能にするドッキングコンピューターは専用モジュールのインストールが必要ではあるが、基本的にとても安全、かつ確実に船を指定のハンガーベイにドッキングしてくれる。流石にこっちに急に突っ込んでくる暴走宇宙船とかはどうしようもないけど。

程なくしてドッキングが完了したのでジェネレーター出力を停泊モードに落とす。船内で過ごす分には戦闘モードはおろか、巡航モードの出力でも供給電力が過剰に過ぎるからね。

「あー、着いた着いた。さて、どうする？　早速メシにでもするか？」

「まだ少し早いんじゃない？　それよりも先に雑務を終わらせたほうが良いんじゃないかしら」

「戦利品の売却とイナガワテクノロジーへの接触、あとは星系軍の窓口で賞金の受取か」

「戦利品の売却は私がやっておきますね」

ミミが両拳を握りしめてフンスと鼻息を荒くする。戦利品の売却に関しては端末経由で市場に流せるようになっているからミミでも十分に対応できる。売り先によって微妙に値段が異なったりするが、その辺のチェックは得意だからな、ミミは。

「じゃあ戦利品の売却はミミに任せようかな。次はイナガワテクノロジーだが……」
「イナガワテクノロジーは向こうからの接触を待っても良いかもね。そんなに急ぐ案件でもないし」

エルマが考えるかのように首を傾げながらそう言う。確かに、こっちの連絡先と所属も伝えてあるからな。あっちで報酬額の算定とかもあるだろうし、急いで接触することもないか。

「んじゃ星系軍の詰め所で賞金を受け取りに行くか」
「私が行こうか？」
「いや、キャプテンの俺が行くのが良いだろ」

別にエルマが行っても大丈夫だが、どちらかと言えば俺が行くほうが話が通りやすいだろう。俺が船長なわけだし。

「私も行くわよ。一人歩きは危ないし」
「子供じゃないんだが……」

でも、確かにエルマの言う通り知らない場所での一人歩きは危ないかもしれない。一人よりは二人のほうが安全性は増すだろう。ついてきてもらうか。

「でもそうだな、一人よりは二人のほうが安全か。ついでに街の様子も見てくるから、ミミは船にいてくれ。ここが一番安全だからな」
「そんなに危ないコロニーなんですか？　ここ」
「いや、セキュリティレベルは高いみたいだけどな。実際に歩いてみないとわからないだろ？　あの船の数を考えれば俺達みたいなよそ者も多いだろうし」

「そうね。特にハンガーベイ周辺やよそ者が多い区域は治安も乱れがちなことが多いわ。そのへんも含めて情報収集ね」
「なるほど……」

ミミが神妙な顔で頷く。自分で自分の身をある程度守れる俺やエルマはともかく、ミミは身体の小さな女の子だし、自分で自分の身を守れるほどの力も持ってはいないからな。一応レーザーガンは持たせているけど、咄嗟に使えるかどうかはちょっと怪しいし。

「そういうわけで、俺とエルマはちょっとでかけてくる。遅くなりそうなら連絡するつもりだが、あまり遅いようなら先にメシとか食ってて良いからな」
「はい、わかりました。ヒロ様、エルマさん、お気をつけて」
「ああ」
「うん、あとでね」

そうして俺とエルマは手早く外出の準備を整え、船を降りるのだった。

☆★☆

「ははぁ、なんというか雰囲気から違うなぁ」
「ターメーンプライムコロニーに比べたらこっちのほうが都会だからね」

こんなもんでしょう、という顔のエルマの横を歩きながら俺は辺りを見回す。アレインテルティウスコロニーの内部は、言うなれば摩天楼のジャングルといった様相だ。
コロニー内の広大な内部空間に高層ビルが密集して立ち並んでおり、夜道のように暗い路地を街頭が照らしている。このコロニーに

は外部から光を取り込むような仕組みが一切ないようで、コロニー内の照明は全てこういった人工的な灯りで賄っているようだ。常闇の街、というわけだ。

「しかしこんなふうに常に暗いってのは健康に悪そうだよな」
「定期的に人工的な方法で日光浴するらしいわよ」
「それは大変――いや、俺達も毎日やってるか、そういや」
「簡易医療ポッドでね」

そう言えば簡易医療ポッドにはそういう機能も付加されていたな。俺達みたいな船乗りの傭兵もいわゆる日光浴の類とは無縁だからバイタルチェックの際に日光を浴びるのと同じような効果を得られるようになっているとかなんとか。詳しくは俺もわからん。紫外線を浴びるのが必要なんだっけ？

「徒歩での移動はしんどいってかめんどいけど、このコロニーだとどうやって移動してんのかね？」
「あれね」

エルマが視線を向けた先には地下鉄の入り口のようなものがあった。

「地下に交通網が整備されていて、それでコロニーの各所に移動できるようになっているの。ほら、ターメーンプライムコロニーにもあったでしょう？　物流システム。あれの大型版ね」
「なるほど」
あれも仕組みはよくわからんかったが、いつ利用しても俺自身よりも早く船に荷物が届いていたんだよな。どういう乗り物なのかちょっと興味がある。
「で、今回は使う必要は……」

「無いわね、星系軍の駐屯地はすぐそこだし」
「なるほど。まぁそのうち乗る機会もあるか」

イナガワテクノロジーに行く時とかに。食材の買い出しとかもするだろうし、その時にも乗る機会はあるか。このコロニーには暫く滞在するつもりだからな。

「あそこね」

エルマの視線の先には帝国の国旗と帝国軍の軍旗が掲げられたビルがあった。なんかあんまり駐屯地っぽくないな。どっちかと言うとオフィスビルみたいだ。

「あんまり駐屯地に見えないな、アレ」
「場所によるわよね。敷地に余裕のあるコロニーだと訓練所みたいなのがあるところもあるけど」

入り口に歩哨の一人も立ってないしな。いや、歩哨の代わりに監視カメラを兼ねるセントリーレーザータレットとかが配置されてるんだけどね。自動化できるところは自動化していくスタイルなんだろうか、帝国軍は。

駐屯地のビルに入ると、早速入り口にセキュリティゲートが設けられていた。ここには人が配置されているようだ。屈強な体つきのなかなかに迫力のあるマッチョマンだ。係員以外はやはり機械化されているようだ。ここにもレーザータレットが配備されている。

「駐屯地内に武器の持ち込みは許可されておりません。こちらで預からせていただきます」
「はい」
「わかってるわ」

俺もエルマも素直にレーザーガンと替えのエネルギーパックを係員に預け、他に何か隠し持っているものはないかをチェックする全身スキャンを受ける。その際に携帯情報端末に登録されている身分もチェックされるようだ。

「はい、チェック完了しました。賞金の受け取りならあちらの窓口、その他の用事であればその隣の窓口です」

「ありがとう」

筋肉モリモリマッチョマンの係員に礼を言って賞金の受け取りカウンターへと向かう。この流れ自体はターメーンプライムコロニーでもよくやっていたので慣れたものだ。雰囲気はぜんぜん違うけどな。

ターメーンプライムコロニーの駐屯地は出入り口にレーザーライフルを持った歩哨が配置されていたし、セキュリティゲートにももっと人員が多く配置されていた。所変われば こういうのも変わるものなんだな。

「アレインテルティウスコロニーへようこそ。新顔だね？」

賞金受け取りカウンターの係員は穏やかな雰囲気の男性だった。年の頃は俺より上、おそらく三十代半ばか、四十代前半ってところだろう。

「ああ、さっき着いたばかりだ。俺はキャプテンのヒロ。こっちはクルーのエルマだ。船にもう一人ミミって女の子が残ってる」

「ヒロ君にエルマ君だね。私はダニエル軍曹、君達傭兵には階級なんて関係ないだろうから、ダニエルとでもダニーとでも好きに呼んでくれ」

「いや、俺はダニエル軍曹と呼ばせてもらうよ。言葉遣いまで丁寧に、とはいかないけど」
「そうね、私もダニエル軍曹と呼ばせてもらうわ」

俺は首を振り、呼び捨てや愛称呼びは遠慮させてもらうことにした。エルマも俺に倣うようだ。

「そうかい？　私は勿論それで構わないよ。ところで、こちらの窓口に来たってことは賞金の受け取りだね？　今日この星系に来たっていうのに早速とは、仕事熱心だね」
「こちらのコロニーに向かっている時に救難信号を探知してな。発信源に行ってみたら、イナガワテクノロジーの客船が宙賊に襲われていたんだ。見捨てるわけにはいかないからな」
「イナガワテクノロジーの？　乗員乗客は無事だったのかい？」
「なんとか間に合ったよ。俺の船じゃ曳航できなかったから、帝国軍の船を呼んで曳航してもらった。俺達は一足先にこっちに来たから、おいおい着くと思う」
「そうか、うちの奴らが一緒ならもう安心だね。ヒロ君、良い仕事をしたね」

俺の話を聞いて心配そうな表情を見せていたダニエル軍曹が人の良い笑顔を浮かべる。なんというか、この軍曹は心にすっと入ってくるような話術というか、そういうのを持ってる人だな。

「ああ、誰かを助けられたのは幸いだった。それで、賞金なんだが」
「ああ、そうだね。少し待ってくれ……二隻で一五〇〇〇エネルだね」
「……随分高いな？」
「この四隻は最近何隻もの民間船を襲っていた奴らでね。仕事も逃げ足も早くてなかなか捕まえられなかったんだよ。今回ヒロ君達が

二隻仕留めたから、暫くは大人しくしているだろうね」
「なるほど……」

話を聞きながら俺は内心首を傾げる。何隻も襲っていた割には積荷はしょっぱかったんだよな。食料と酒くらいしか積んでなかったみたいだったし。どこかに拠点を築いているんだろうか？

「はい、これで賞金の引き渡しは完了だ。暫くはこの星系に？」
「ああ、そのつもりだ。これだけ栄えているコロニーなら色々と見る場所もありそうだし」
「そうだね、このコロニーにはハイテク企業も多いし、商人もよく来るから娯楽施設の類も充実しているよ」
「そうか、そりゃ楽しみだな。じゃあ、俺達はこれで」
「ああ、良い旅を」

ダニエル軍曹と別れの挨拶を交わしてセキュリティゲートで預けたレーザーガンなどの装備を回収し、星系軍のオフィスを出る。

「なんというか、話しやすい人だったな」
「あんまり軍人らしくはなかったわね。兵というよりは最初からああいう職に就くべく教育を受けた人なんじゃないかしら？」
「なるほど、帝国軍にはそういう人員もいるのか」

帝国軍が一体どんな組織になっているのか全く知らない俺としてはそういう人員もいるのだろうと思うしかないな。軍の編成というか組織って素人から見ると複雑怪奇でよくわからんのだよな。
しかも、この世界だと単に陸海空軍ってわけじゃなく宇宙軍に統合されているのだろうし、宇宙という舞台で戦う軍の組織がどのように変革され、どのように組織されてきたのかとか想像もつかない。調べればわかるんだろうけど、調べる気にもあまりならないなぁ。

「それにしても、あの軍曹気になることを言っていたわね」
「ああ、仕留めた宙賊のことだよな。何隻も襲った割には積荷がしょっぱいと思ったよ、俺は」
「私もよ。どこかに溜め込んでいそうね」
「だな。でも四隻じゃなぁ……」
「規模が小さいから探すのは難しいでしょうね」

エルマが苦笑しながら肩を竦める。どこかの小惑星を改造した基地ならまだ見つけやすいかもしれないけど、略奪品を頑丈なコンテナに入れて広大な宇宙空間のどこかにただ放り出して保管してる可能性もあるんだよなぁ。そうなると座標を知らないとまず見つけ出すのは不可能である。

「ま、忘れましょ。巡り合わせがあればまた会うでしょうし」
「次は絶対に逃さん」
「その意気よ。さ、戻ってご飯にしましょう。ミミも待ってるわ」
「そうだな」

頷き、二人で歩き始める。戻ったらメシを食って、後はゆっくり休憩だな。あくせく働かなきゃ食い詰める状態ってわけでもなし、今日と明日はゆっくりして明後日から本格的に動き始めるとしよう。

#033　主観的事実

「おかえりなさい！」
「ああ、ただいま」
「ただいま、ミミ」

クリシュナに戻ると、ミミが出迎えてくれた。どうやら何か調べ物をしていたらしく、片手にタブレット型の端末を持っている。

「何か調べていたのか？」
「はい。どこの医療センターが評判が良いか調べていました」
「なるほど。成果はどうだ？」
「まだ調べたばかりでなんとも、ですね。高ければ良いというわけでもないですし。ヒロ様の状態を考えるに、脳神経系の医療機関が良いのか、それとも精神系の医療機関が良いのか……」

ミミが真面目な顔で考え込んでいる。俺の記憶喪失という設定は異世界、あるいは異次元や平行世界的な場所からこの世界へと放り出された俺にこの世界の一般常識が欠如しているという事実をカバーするためのものだ。

つまり、医学的には俺は全くの健康体であるはずなのである。いや、もしかしたら何かの原因で自分が異世界から来たと信じ込んでしまっているという可能性もゼロではないのだが。

少なくとも、俺の主観では俺はこの世界の人間ではなく、地球の日本に住んでいた佐藤孝宏という人間である。俺の世界ではクリシュナのような宇宙を駆ける戦闘艦などというものは空想の産物でしか無かったし、人類は本格的な宇宙進出を果たしていなかった。

「記憶喪失、ねぇ……」

真面目な顔で俺が診察を受ける医療機関を検討しているミミとは対象的に、エルマは疑いの視線を俺に向けてくる。エルマには俺の記憶喪失というカバーストリーは嘘くさいと思われているんだよな。

恐らく、エルマは俺のことを家出してきた世間知らずのお坊ちゃんだと考えていると思う。

この世界では所謂「普通の」肉や野菜というものは高級品だ。この世界の殆どの人々は藻やオキアミのような生物を原料に合成された合成食品や、化学的に合成された人造肉などを食べて生活している。

しかし、俺は以前エルマと一緒に食料品店に買物に行った時にうっかり『普通の肉や野菜は売ってないのか？』と口に出してしまったんだよな。この世界では産地以外でそういうものを日常的に口にできるのは大金持ちの特権階級の人々くらいのものであるらしい。

そんな経緯もあって、エルマは俺が本当は良いとこの坊っちゃんで、身分を隠すために記憶喪失なんて嘘をついているのだと考えているフシがあるんだよな。俺もエルマの立場ならそう考えると思う。

だが、現実は違う。俺は多分まったくの健康体だし、記憶に混乱などがあるわけでもない。この世界に来た経緯はまったくもってわからないが、少なくとも俺の主観では記憶の穴は極僅かだ。唯一の穴は何故俺がこの世界にいるのかという一点だけである。それがとても重要なのだけれども。

「記憶に焦点を当てないで、総合的に診てもらえるところが良いと思うな。深刻な感染症の予防接種なんかも受けているかどうかわからないし、そういうのも含めて全部まるっと診てもらえるようなところを探してくれると嬉しい」

「なるほど……」

「私は大丈夫だけど、ミミも一緒に診察を受けたほうが良いわよ。

人間しかかからない致死性の病気とかもあるし、予防接種を受けられるなら全部受けておいたほうが良いわ」
「エルマは大丈夫なのか？」
「私は前に一通りやってるからね」

エルマはそう言って方を竦めてみせたが、俺は首を横に振った。

「金は俺が出すから、エルマも受けよう。クルーの健康を守るのもキャプテンの義務だからな。当然、ミミもだぞ」
「はい」
「そう？　ま、いいけど」

ミミもエルマも素直に頷いてくれた。良かった、道連れが増えたぞ。
いや、別に病院が嫌いってわけじゃないけど、なんか俺一人だけってのも心細いだろう？　それに、自分で言った通りクルーの健康を守るのも俺の役目だと思うしな。金をかけることで事前に病気のリスクを減らせるならそれに越したことはない。

「いくらくらい掛かるもんなんだろうな？」
「見当もつかないわね。まぁ一人あたり１００万エネルってことはないでしょ」
「それは流石に無いだろう……まぁ大丈夫か」

仮に一人１００万エネルかかったとしても、今の俺の貯金は１００万エネル以上ある。停滞出費にはなるが、それで健康が買えるならある意味安いかもしれない。
でもなぁ、１エネルって日本円換算で大凡１００円くらいの価値だからなぁ……１００万エネルだと１億円相当？　これを安いと言ってしまえる俺の金銭感覚は順調に崩壊してきているな。

「ヒロ様、流石に１００万エネルは……」
「流石に１００万エネルをまぁ大丈夫で済ませるのは不味いわよ？」
「いや、わかってる。今自分で言ってからそれはないなと思ってたとこだから」
「ならいいけど」

とはいえ、いくらかかるのかわからないというのも事実。金額を聞いてのけぞらないように覚悟だけはしておこう。

☆★☆

船に帰ってからはダラダラタイムだ。皆で高性能自動調理器『テツジン・フィフス』の作った料理に舌鼓を打ち、交代でゆっくりと風呂に入ったあとは思い思いに寛ぐ。いつもならトレーニングなどをするところなのだが、それも今日はお休みだ。

「だるーん」
「だらしないわねぇ……」
「その俺に寄っかかってるお前も人のことは言えなくないか？」

ベッドの上で仰向けになって伸びる俺と、その俺に寄っかかりながら手元の端末を操作しているエルマ。正直どっちもどっちだと思うのだがどうか？

「それもそうね。たまにはこうやってだらけるのも悪くないわ」
「そうだろう」

エルマは特になにかするわけでもなく、こうして一緒に過ごすのを好む傾向がある。なんとなくだが、こいつは俺を大型犬か何かの

ようにでも思っているんじゃないかと思うことがある。今みたいに寄っかかってみたり、ベッドに腰掛けている俺の膝を枕にしてみたり、一緒になって横になってみたりと、何気ないスキンシップが多い。

そういう時はなんだか妙に穏やかというか、気を抜いた表情をしているように見えるのでこれはこれで彼女なりのリラックスの方法なんだろうな。これでエルマがリラックスできるならこれくらいは安いものである。

「ん、ミミの出していた戦利品、買い手がついたみたいね」
「お、いいね。いくらになった？」
「手数料とかを引くと全部で４５００エネルね。賞金と合わせると今回の儲けは１９５００エネルってところかしら」
「ええと、その３％だから……エルマの取り分は５８５エネルか」
「ミミは切り上げて９８エネルね」
「少ないなー」
「こんなもんでしょ。一回の戦闘で８００万エネル以上稼ぐのが異常なだけよ。アンタの取り分は１８８１７エネルね」
「へーい。返済の方は別に急がなくて良いからな」
「……普通、早く返済しろって催促するもんじゃないの？」

エルマがいかにも呆れた様子でこちらを見下ろしてくる。

「んー、エルマとはできるだけ長く一緒にいたいからなぁ」

これは本音である。エルマは俺に３００万エネルの借金をしていて、それを返すためにこのクリシュナのクルーとして働いている。そんなエルマであるから、借金を返して自立するための金を稼いでしまえばもうこの船に乗っている理由はなくなってしまうのだ。

エルマはクルーとして優秀だし、頼りになる。それに美人だし、

彼女とは『そういう』関係でもある。それを抜きにしても今のところはミミともども良い関係を築くことが出来ている。
できるだけ長く一緒にいたいと思ってしまうのは自然な流れであろう。

「そう心配しなくても、長い付き合いになるわよ。借金を返すだけじゃなく、新しい船を買う資金も溜めなきゃいけないんだからねー」

どーんとか言いながらエルマが俺の腹の上に倒れ込んでくる。ふふふ、この世界に来てから地道にトレーニングをしている俺に隙は無い。味わうが良い、微妙にシックスパックになりつつある我が腹筋を！

「なに力んでるのよ。固くて寝心地悪いじゃない」
「あっはい」
「ん、そうそう。それでいいわ」

エルマさんは固い腹筋はお気に召さなかったらしい。力を抜いた俺の腹の弾力を楽しむかのようにぐりぐりと後頭部を腹に押し付けてくる。ちょっとくすぐったい。

「あんたさぁ」
「んー？」
「記憶喪失っていうの、嘘でしょ？」
「ウソジャナイヨー」
「隠す気無いじゃない」

腹の上でエルマの頭が揺れる。どうやら笑っているらしい。

「ま、別にそこまで無理矢理詮索する気はないけどね。聞かれたら

マズい？」
「んー……マズくはないけど、正気は疑われそう」
「何よそれ」

別にマズくはないよな。ここじゃない別の世界から来たってことをエルマに話したからといってどうなるわけでもあるまい。頭のおかしいことを言っているなぁとは思われそうだが、急にどこかの研究施設送りにされるということもなかろうし。

「聞きたいなら話すぞ。ただ、相当頭のおかしいことを話すことになると思うが」
「そこまで言われるとちょっと怖いわねぇ……でも聞きたいわ」
「そっか。んじゃどこから話すかなぁ……平行世界とか異世界とかってわかるか？」
「概念としてはね。実在するかと言われると首を傾げざるを得ないけど」

そう言ってエルマは俺の腹を枕にしたまま肩を竦めてみせる。

「うん、俺は多分そういう世界から来た。このクリシュナと一緒に。俺の主観ではそういう認識だ」

俺の言葉を頭の中で咀嚼しているのか、エルマが沈黙する。

「傭兵ギルドに登録しに行った時に受付のおっさんがどこにも寄港記録がないって言ってたのを覚えてるか？　それも当たり前の話でな。俺がこっちの世界に来てから最初に寄港したのがターメーンプライムコロニーだったからなんだよ」
「そういえばそんなことを言ってたわね。でも、やっぱりそれって……いや、平行世界ということなら有り得るのかしら？」

「船の装備の互換性とかか？」
「そう。異世界から来たのだとしたら、このクリシュナがこの世界のテクノロジーで作られた様々な製品と互換性があるのがおかしい、と思ったのだけどね。でもテクノロジーの発展が殆ど同じように進んだのだとしたら絶対にないとも言えないし、それを言ったらこの船と同じようなタイプの船なんて見たこともないのよね……でも、やっぱりおかしいわよ。あんたの戦闘の手際を見る限り、アンタは間違いなく凄腕の傭兵よ。なりたてのモグリの腕じゃないわ。でも、それにしてはアンタは常識を知らなすぎる。同じような戦闘艦があって、傭兵が存在するような世界ならこの世界とそう常識は変わらないとおもうのだけど？　色々と不自然すぎない？」
「それな。ここから先がもっとエルマを混乱させると思うんだが……そもそも、俺は傭兵じゃないんだよ。ただの会社員、サラリーマンだ。ゲームが趣味なだけのな」
「アンタみたいに戦える会社員なんているわけがないでしょうが。あんた、銃の腕も良いじゃない。あの銃だって銃の腕を競う大会で優勝か何かして手に入れたのよね？」

エルマの言っている『あの銃』というのは俺がさっきエルマと一緒に外に出た時に腰に下げていたレーザーガンのことだ。あれはマンダス社というワンオフの超高級銃器を作る老舗メーカーが特別に作った一丁なのである。
凄腕傭兵としての戦闘艦の操縦技術を持ち、レーザーガンの扱いにも長けている。そんな男が『ただの会社員なんだ』とか言っても説得力の欠片もないよな。わかるわ。
生身でサイボーグ兵士やナノマシン兵器を圧倒する自称サラリーマンくらいに説得力無いわ。

「そうだ。ただ、それはな、全部ゲームの中での話なんだ」

エルマが「んんー」と悩ましげな声を上げる。

「つまり、アンタはこう言いたいわけ？　ゲームの中の世界に入り込んできてしまったと？」

「そういうことになるな。ちなみに、俺の住んでいた世界というか、惑星はまだ本格的な宇宙進出はしていなかったし、個人が宇宙を駆ける戦闘艦を所有したり、恒星間航行をしたりってのは夢物語というか、フィクションやゲームの世界の話だと思われていたぞ」

「完全に原始文明の未開惑星じゃない……なるほどね、確かに頭がおかしくなりそうな話だわ。ゲームの世界に入りこむなんてまるでティーン向けの娯楽小説じゃない」

「だろ？　正直本当に何かの事故で記憶を失って、今俺が話したような記憶を現実だと思いこんでるって方がよほどリアリティがあるよな」

「でも、今話したのは本当のことなのよね？」

「あくまでも俺の主観ではな。実際に本当かどうかはそれこそ頭の中身でも吸い出して覗いてみないことにはわからんだろ」

「そうね。できないことはないと思うけど……そこまでしなくても良いんじゃない？」

「そうかね？」

「あんたが気になるならした方が良いかもしれないけど、今の状態で何か困ることあるの？」

「別に困らないな」

何故こんなことになったのか知りたい気持ちが無いと言えば嘘になるが、是が非でも知りたいかと言えば別にそんなこともない。別に積極的に元の世界に帰りたいとも思ってないし。

「ならいいじゃない。触らぬ神になんとやらって言うわよ」

「それもそうか」

「そうよ」
「そうか……というかそれだけか？　もっと他に言うことない？」
「別にないわね。あんたが自分のことをどう思っていても私から見るあんたは別に変わらないし。凄腕だけとちょっと抜けてるやつよね。今しがた十代の男の子がかかるアレをいい年になっても罹患し続けている痛い子という評価がついたけど」
「やめろ。それは俺に効く……」

俺の言葉にエルマが腹の上でクスクスと笑う。

「お前、いい女だよなぁ」
「当たり前じゃない。私を誰だと思ってるのよ」
「残念な宇宙エルフ」
「よし、その喧嘩買ったわ」
「おいやめろ馬鹿」

急に伸びてきたエルマの手が俺の脇腹をくすぐり始め、ベッドの上での取っ組み合いが始まる。ふふふ、そんな華奢な腕で鍛えた俺の筋肉に勝てるとでも――。

「グワーッ！？　腕ひしぎ十字固グワーッ！？」

エルマさんには勝てなかったよ……この後滅茶苦茶寝技で泣かされる羽目になった。もうちょっとソフトなスキンシップを要求したい。切実に。

＃０３３　主観的事実（後書き）

試験的に数字を全角アラビア数字に―（：３」∠）―

#034　地下の街並み

エルマとイチャイチャ……というにはちょっとハードなスキンシップをして過ごし、逆襲したり逆襲され返したりして過ごした翌日。
起きるなり早速風呂に入った俺は軽くトレーニングを済ませ、もう一回風呂に入ってと優雅な休日を過ごしていた。エルマ？　まだ俺のベッドでダウンしてるよ。ふっ、俺の勝ちだな。

「おはようございます、ヒロ様」

食堂に移動すると、トレーニングウェアを着たミミが休憩していた。なんとなくしっとりと汗ばんでいる感じがする。

「おはよう、ミミ。トレーニングしてきたのか？」
「はい、これからお風呂に入ろうかと」

どうやら丁度擦れ違ったらしい。

「そっか。じゃあメシの用意をしておくよ」
「ありがとうございます。行ってきますね」

ミミが嬉しそうに微笑み、パタパタと足音を立てながら風呂に向かう。別に俺が出るのを待たないでも乱入してくれても良かったんだけどな。ま、汗を流すだけならそんなに時間もかからないし、エルマもまだ起きてないからササッと済ませようと思ったのかね。俺と一緒に入ると長くなるからね。

「おはよー……」

「おう、おはよう」

朝食の準備をしているとエルマも起き出してきた。

「なんつー格好をしているんだ、お前は」

「彼シャツ的な」

どうやら俺の部屋のクローゼットから俺のTシャツを持ち出してきたらしい。背の小さなミミよりは身長のあるエルマだが、それでも俺よりは背が小さい。そんな彼女が俺のTシャツを身につけると、ダボダボというか丈の短いワンピースみたいになる。かなり際どいけど。

「今ミミが風呂使ってるから、交代で入ってこいよ」

「んー……」

どうにもエルマは朝が弱いようで、起き抜けはいつもこんな感じだ。こんなので傭兵として大丈夫なのかと思わなくもないが、こういう姿を晒すのは今日みたいに完全オフの日だけなんだよな。オンオフの切り替えが上手いっていうのかね、こういうのは。

「あ、エルマさんおは……凄い格好ですね」

「おはよー、私もお風呂いってくるねー」

ふわぁぁ、とあくびなんぞをしながら手をぷらぷらと振ってエルマがミミと入れ違いに風呂へと消えていく。そして唖然とした表情のまま取り残されるミミ。

「いいなぁ……」

「ミミにも俺のシャツやろうか？」

「いいんですか！？」
「お、おう。ええで」
予想以上の食いつきにちょっと引いた。俺のシャツなんてそんな喜ぶものじゃないと思うんだけど。でもまぁ、ミミが俺のシャツを着たら……前だけ際どいことになりそうだな。起伏がね、エルマとは違うからね。はっはっは。
「メシにしようか。日替わりで良いか？」
「はいっ」
ミミの元気の良い返事を聞きながら高性能調理器テツジン・フィフスに俺とミミの日替わりメニューを注文する。俺は大盛り、ミミは普通盛りだ。この船に乗ったばかりの頃は普通盛りではちょっと量が多かったミミも、今は普通盛りを無理なく食べられるようになっている。
運動もしっかりしているし、きっと身体が適応してきたんだろう。身体つきはあんまり変わっていないように見えるけどな。
「エルマはあの様子だと長風呂だから食っちゃおう」
「そう……ですね」
思い当たるところがあったのか、ミミは少し迷った後に頷いた。完全オフモードのエルマは風呂に入ると長いんだ。軽く一時間以上入ってるからね。きっと彼女なりのリフレッシュ方法なんだろう。
「んじゃいただきます、っと」
「いただきます」
俺がいただきますと言って手を合わせると、ミミも俺の真似をし

て手を合わせる。
今日のメニューは炊きたての白米に見えるナニカと焼き立ての鮭の切り身に見えるナニカと卵焼きのように見えるナニカとポテトサラダのように見えるナニカだな。
いや、ナニカってなんだよって話なんだが、そのように見えるけど原材料は藻やオキアミめいた生物を加工したフードカートリッジだからな。実際のところ、食感や味はまさに調理されたそれそのものだから問題はないんだけどさ。
しかし、なぜ白米や鮭や卵焼きといった和食っぽいものにポテトサラダが混ざるんだ？　どれも美味しいんだけど、テツジンシェフはたまにわけのわからない組み合わせで日替わりを出してくるんだよな。
ちなみに、ミミの方はなんか深皿に入った大量のおかゆみたいなものと焼いた肉のようなナニカとサラダっぽいナニカだった。ミミも満足そうに食べているので、あのおかゆっぽいものはきっとそれなりに美味しいんだろう。多分。

「ミミ、それ一口くれ。とても味が気になる」
「いいですよー、はい」

ミミがおかゆのようなものをスプーンで掬ってはい、と突き出してくる。ちょっと気恥ずかしいが、遠慮なく頂いた。ふむ……なんだろう、ほんのり甘い、もたっとしてまろやかな感じのスープのような粥のような……意外とお腹にはたまりそうな感じがするな。ほんのりチーズやはちみつっぽい風味もあるような。これは主食ではなくスイーツの類なのでは？

「美味しいですよね」
「美味いような気がする。すまん、食ったことのない味で判別がつかない。でもなんとなく二口、三口と食いたくなるような感じはあ

るな。お返しにミミにもこの卵焼きっぽい何かをあげよう。はい、あーん」
「あーん」

箸で卵焼きを一口サイズにしてミミの口に運んでやる。この卵焼きっぽいものはふんわり甘めに仕上げられた一品で、きっとミミの口にも合うだろう。

「んー、美味しいです。はい、じゃあもう一口。あーん」
「あーん」

再びミミの手によってお粥のようなスイーツのような何かが口元に運ばれてきたので、素直に口にする。うーん、絶妙。甘すぎない優しい味なんだが、チーズっぽい感じや牛乳っぽい感じが合わさって物足りないことは全然ない。不思議な食べ物だ。

「あんた達……」

そんな感じで「あーん」の応酬をしていると、風呂から上がってきたエルマに呆れたような声をかけられた。

「おはようございます、エルマさん」
「おはよう、エルマ」
「はぁ……おはよう。邪魔ならもう少しお風呂に入ってくるけど？」
「？？？」
「なんだ、エルマもあーんして欲しいのか？　ほら、あーん」

箸で卵焼きを掴んで差し出してやると、エルマは指先で卵焼きを摘んでひょいっと口に入れてしまった。ぺろりと指先を舐める仕草が妙に色っぽい。

「朝からイチャイチャと……まぁ、昨日は私がヒロを独占したし、今日はミミの番かしらね？」
「えへへ」

ミミが頬をほんのりと紅潮させてニマニマと笑みを浮かべる。そんなミミに苦笑いを浮かべながらエルマもテツジンで朝食を注文し始めた。

「何なら二人でデートにでも行ってきたら？　船には私が残ってるし、イナガワテクノロジーから連絡が来たら端末で報せるわよ。ああ、傭兵ギルドには一応顔を出してきてね。昨日は顔を出してないし、ここに滞在していることは伝えておいたほうが得だから」
「ああ、わかった。ミミもそれでいいか？」
「はいっ！」

ミミがフンスフンスと鼻息を荒くしながらグッと胸の前で両拳を握ってみせる。気合を入れているようだ。

「昨日のうちにリサーチはすませてありますからっ！」
「やる気満々だな」
「そうね。ちゃんとエスコートしてあげるのよ？」
「まったくリサーチしてないから無理だなぁ……情けないことに。まぁ、何かトラブルが起こったら俺が守るよ」
「それで良いわよ。十分」

テツジンから朝食のプレートを受け取ったエルマが俺の隣に座る。
エルマさんや、朝から人造肉の分厚いステーキに山盛りのポテトサラダとかパワフル過ぎない……？　いや別にいいんだけどさ。

☆★☆

「ここはターメーンプライムコロニーと随分雰囲気が違いますねっ」
「そうだな。あっちに比べるとかなり賑やかな感じがするし、歩いている人達の雰囲気も違うよな」

身支度を整えて船から降りた俺達は連れ立って明るい街並みの中を歩いていた。昨日エルマと一緒に歩いた常夜の街とは打って変わってとても明るい。

それに、歩いている人達はなんというか皆個性的だ。ターメーンプライムコロニーの第三区画を歩いている人達は皆同じような服を着ていたものだが、このアレインテルティウスコロニーの地下区画を歩いている人々の服装は実にバリエーション豊かである。

スーツのようなものを着ている人もいるし、まるでゴスロリファッションのようなドレスを着ている人もいる。それ服なの？　って言いたくなるような全身タイツめいたものを装着している人も居るし、何かメカメカしい格好の人もいる。アレはサイボーグか何かなんだろうか？

それによくわからん異星人らしき生命体も多いな。人型なのはまだいい。顔がどう見ても両生類だったり、爬虫類だったり、猫だったり犬だったりキツネだったりするのはまだわかる。ケモ耳がついているだけの人とか、青肌で角つきの色っぽいお姉さんとかは是非お知り合いになりたい。

でもあの宙に浮いてるクラゲっぽいのとか、触手の生えた電球みたいなのとか、どう見ても薄いエッチブックに出てきそうな触手タワーっぽいものとかどう反応すれば良いんだ。コミュニケーションを取れるのか？　あれは。

いや、気にしたら負けだ。俺は必死にそれらの情報を脳内からシャットアウトした。真面目に受け止めるとＳＡＮ値がピンチになりそうだ。

「地下のほうが明るいとはなぁ」
「地上というか、港湾や駐屯地のある表層区画はいつも夜みたいに暗いそうです。基本的にはこういった地下区画で生活する人が多くて、地下区画では時間によって朝、昼、夕方、夜で明るさを変えているそうですよ」

ミミはそんな人々を見てもまったく動じる様子がない。見慣れているのか？　そういう異星人がいるということを最初から知っているのとそうでないのとでこんなに違うものなのだろうか。ううむ。

「あのビルは天井まで続いてるんだな」

俺は異星人達達の姿を視界内から追い出すために高層ビルを見上げた。でかいなぁ、何階建てだろう？

「構造を支える柱の役目もあるみたいです。一番下はコロニーの外にまで突き抜けてるとか」
「あー、そういやコロニーの外壁にもビルっぽいものが突き出てたよな」

入港する時にコロニーの外壁を見たが、立方八面体の面の部分はのっぺりとしているわけではなく、所々にビルのようなものが突き出ていた。多分、あの天井まで貫いているビルはそのうちの一本なんだろうな。

「あのビルにはどんなテナントが入っているんだ？」
「色々ですね！　様々なレストランや商店、クリニック、商社のオフィスやホテルなんかも入ってるみたいですよ」
「ほー、そりゃあれだな、あのビル一つ探索するだけで一日楽しめ

そうだな」
「多分全てのお店を回ろうとしたら一日じゃ済みませんね」
そんな話をしながら街中を二人で歩いていく。朝食は食べてきたばかりなので、何か食うということもないし、さてどうしたものか。
「服でも見に行くか？」
「うーん、そうですね……でも、今ある服だけでも十分ですし」
「お洒落着とか買おうぜ。あんな感じのドレスとか着たミミとか見てみたいし」
そう言って斜め前の方向に佇んでいるロリータ・ファッションめいた可愛らしいドレスを着ている女性を視線で示すと、ミミの顔が真っ赤になった。え？　何なん？
「なんか俺マズいこと言った？」
「いえ、あの、ああいうのは私には似合わないかなー、と」
微妙に視線を逸らしつつもチラチラと女性の方に視線を送っている辺り、興味がないわけでも無さそうだ。よし、ここは強引に行こう。
「そんなことないない、俺が見たいから是非行こう。今行こう」
「え、ええと……」
「リサーチした店の中にああいうのを扱った店もあるよね？」
「あり、ますけど……」
俺はニッコリと笑う。一方ミミは笑顔を引き攣らせた。ははは、観念したまえ。

#034　地下の街並み（後書き）

ロリータ・ファッションを詳しく描写し、説明したりしはじめるとそれだけで本が一冊分くらいになりそうだからそれっぽい服ということで（，゜ω゜、）

#035　沼にどっぷりと

ミミに案内されて辿り着いたのは例の天井を貫く高いビルの中に入っているテナントの一つだった。ショップ名は『アトリエ・ピュア』とある。

「ここか……」
「はい」

俺は二の足を踏んでいた。
ここに来ようと言ったのは確かに俺だ。俺だが、しかし所謂ロリータ・ファッションめいたドレスを扱っている店が一体どういう場所なのか、ということを失念していたことは認めなければなるまい。
言うなればそれは、男という異物が存在することを許されないフアンシーとフリフリとふわふわでできた禁断の園だった。奥の方に何かヤバい系オーラを放っていそうな漆黒の空間も見える気がするが、基本的には『男性お断り』の雰囲気がもはや質量を伴ったエネルギーとして存在していそうな場所である。

「ミミ一人でというわけには、いかないな」
「そ、そうですね……？」
「イクゾー！」
「そ、そんな無理をしなくても」

ミミの手を取り、気合を入れて禁断の園に踏み込む。開店時間直後だからか、他に客の姿は見えない。それだけに、店員さん達の視線が一気に集中した。
揃いの制服を着た店員さんの数は三名。それぞれの視線が俺とミ

ミの間を素早く行き来し、同時に笑みを浮かべる。な、なんだこのプレッシャーは！？

「いらっしゃいませ、お客様」

「当店のご利用は初めてですね？　ご来店ありがとうございます」

「当店をお選びいただき光栄です。我々スタッフ一同、全身全霊を持って沼に引きずり……ご満足いただけるよう努力いたします」

ぬるり、と。不思議な歩法を使って一瞬で距離を詰めてきた三人のスタッフが俺とミミを取り囲む。今、沼に引きずり込むとか言わなかったか！？　何この人達コワイ！

「え、あ、うん。よろしくおねがいします」

俺はなんとか返事をすることができたが、ミミは店員達の圧力に呑まれてしまっているのか俺の腕に抱きついて固まっている。ああ、胸部の凶悪なアレが腕に……よし、回復してきた。

「要件は……わかるね？」

「「「勿論ですとも」」」

三人の店員が声を揃えて満面の笑みを浮かべる。おお、なんと話の速いことか。今、俺と彼女達の利益はこの上なく一致しているのだろう。いろいろな意味で。

「正直、こういう店の服はどれくらいの相場なのかがわからないんだが……予算はある」

「なるほど。ちなみに、いかほどくらいまでで……？」

こっそりと聞いてくる店員さんに提示する金額を考える。正直、

元の世界でもまったく未知の領域なので相場というものがわからない。指針もないので適切な額の提示もできそうにない。

「一般的に一通り揃えるのに必要な金額はどれくらいなんだ？」

「そうですね……選ぶ服のメーカーにもよりますが、オーソドックスなところで揃えると１０００エネルくらいからでしょうか」

「じゃあ１万……いや２万までで。彼女に似合いそうなのを見繕ってくれ」

そう言って俺の端末のエネル残高を見せると、予算を聞いてきた店員さんが画面を見て一瞬固まり、それからとても深い笑みを浮かべた。

「予算オーバーのものでも提案だけはしてもよろしいですか？」

「節度を持ってくれるなら。予算オーバーの品ばかり提案されたら他に行くぞ」

「お任せください。二人とも、ちょっとこっちに」

俺に予算を聞いた店員がミミを取り囲んで身体のサイズを測っていたもう二人の店員を呼び、言葉短に情報を共有する。二人はビクリと身を震わせ、俺に視線を向けてきた。俺は深く頷き、ミミに視線を向ける。三人の店員もミミに視線を向ける。

「え？　え？　な、なんですか？」

急に全員の視線を集めて狼狽えるミミが可愛い。ミミは二人の店員さんに連行されて行き、俺はこの場に残った店員さんに店の奥、カウンターの近くにある待合スペースのような場所に案内された。

「男性のお客様にはこのお店の雰囲気はお辛いでしょうから、こち

らでお待ち下さい。今、お飲み物をご用意いたします」
「ああ」
確かにフリフリとふわふわだらけなこのお店の中を一人でウロウロするのは俺には難易度が高すぎる。これは有り難い。
「お嬢様のことは私達にお任せください。お嬢様に似合った最高のコーディネートをお約束いたします」
「プロに任せるよ」
俺の返答に店員の女性は極上の笑みを浮かべてから去っていった。例のぬるりとした歩法で。いやほんと何なのその妙な歩法。一瞬で目の前から消えるとか怖すぎるんだけど。
いつの間にかテーブルの上に置かれていたコーヒーに砂糖とミルクらしきものを投入し――いや待って、いつの間に出てきたのこれ。なにこれ超常現象？　ホラー？　マジ震えてきやがった……。
戦慄しながらコーヒーを啜り、いつぞやのコスプレショップでダウンロードした着せ替えアプリでミミの３Ｄデータの着せ替えなどをしながら待つこと約三十分。
「お待たせいたしました」
「あ、うぅ……」
天使が誕生していた。白を基調として淡いピンクのフリフリがふんだんに施されたふわふわの可愛らしいドレスに、頭につけられた大きなリボン。足元は白いタイツかソックスに、これまた淡いピンク色の可愛らしい靴。そんな可愛らしさを前面に押し出した衣装を着たミミが顔を真赤にして恥ずかしそうにモジモジとしている。尊い。

「……（無言で両手を合わせて拝む）」
「言葉にならないくらい尊いと。流石お客様、わかっていらっしゃる」
「テーマはスイート&キュートですね。ご購入で？」
「……（無言で端末を差し出す）」
「ありがとうございます！」

代金を支払い、カメラアプリを起動してミミの姿を様々な角度から動画に収め始める。こいつは後から動画のワンシーンを写真としても切り出せるすぐれものだ。

「あ、あわ、と、撮らないでぇ……」
「こんな可愛い天使を映像に残さないなんてとんでもない！」
「お客様、程々でお願いいたします。次もありますので」
「わかった」

全身をぐるりと舐め回すように動画撮影した俺はミミを解放し、もう一度ミミの姿を眺める。

「天使だ」
「あ、ありがとうございます……？」
「ふふふ……では次の衣装にお召し替えを致しましょうか」
「さぁ、お嬢様。どうぞこちらへ」

店員さん達に連れられてミミが再びふわふわの園へと消えていく。席に戻ると、温かい紅茶とクッキーのようなお菓子が用意されていた。だからいつの間に用意されたんだよこれは……怖いわ。
既に衣装は選定済みだったのか、新しい衣装に身を包んだミミがすぐに現れる。今度の衣装は色合いは地味ながら、クラシカルで上品な雰囲気の漂う衣装だ。なんというか、いいところのお嬢様っぽ

さが滲み出る一品である。

「素晴らしい。これならギリギリ普段着にも使えそうだな」
「はい。そのようなコンセプトで作られています。よろしければ似たような品を何着かご用意致しましょうか」
「採用」
「ありがとうございます」
「あ、あの……そんなに沢山は」
「俺の趣味だから。俺は趣味に妥協しない男だから」

遠慮しようとするミミに俺は首を振る。まだ当初の予算内だ、何の問題もない。それで可愛いミミが見られるなら安いものだ。

「ふふ、素敵ですね。さぁ、お嬢様、次の衣装を」
「は、はい……」

店員達に連れられてミミがまた店の奥へと連れて行かれる。次はどんなのが来るかな？　物凄く楽しみだ。
そうだ、さっきの動画をエルマに送ってやろう。
メッセージアプリを起動し、先程撮ったミミの動画を共有する。
少しだけアップロードに時間がかかったが、すぐに返信が来た。

『可愛い！　買ったの？』
『動画のものは既に購入した。他にももう少し大人しいのも複数買ったぞ』
『良いわね。私にもそういうのを買ってくれても良いのよ？』
『お前はこっち系よりももう少し大人っぽいのが似合いそうだが……いや、アリだな。今度一緒にこの店に来てみるか？』
『いや、冗談だから。私は流石にこういうフリフリなのはちょっと……』

『そういう反応をされると是が非でも着てもらいたくなる』
『あんたはそういう性格よね』

メッセージアプリでそんなやり取りをしていると、ミミ達が戻ってきた。

「おお……ファンタスティック」

俺の言葉に店員さん達が頭を下げる。
今度のミミの衣装は黒いドレスだった。所謂ゴスロリというものだろうか。露出は少なく、フリフリのスカートは膝下までと少し長めで、黒を基調として要処を白いレースが飾っている。頭には白と黒のレースで作られたヘッドドレスも装着されている。

「ちなみに、こちらのお値段ですが……」
「……嘘やん？　高すぎない？」

提示された金額は余裕の予算超えであった。この一着だけでなんと３５０００エネルである。

「こちらの商品は個人携行のレーザー兵器や実弾兵器程度なら防ぐというハイパーウィーブで作られている一品でして」
「待って待って。なんでそんな生地でお洒落着のドレスを作ろうと思ったんだ」
「ドレスは淑女の戦闘服ですから」
「なるほどー、そうなんだー……っておかしいおかしい。流石にそんな服を着てレーザーの飛び交う戦場には出ないでしょ」
「今の世の中、いつどこで銃撃戦に巻き込まれるかはわかりません。街中でテロ行為に走る輩も稀に居ますし、恒星間移動中に船が拿捕され、宙賊が乗り込んでくるかも知れません。そんな時に役立つの

がこちらのハイパーウィーブ製のバトルドレスなのです」
「えぇ……」
力説する女性店員に思わずドン引きする。
「それに見てください。お嬢様の姿を。とてもお似合いではないですか？」
「似合っていることに異論を差し挟む余地はないな」
「そうでしょうそうでしょう。そういうわけで是非！」
「いや、流石に無い。それは無い。というか、生地が特殊だから滅茶苦茶高いわけで、同じデザインで普通の生地のやつもあるよね？」
俺のツッコミに店員達がそっと目を逸らす。あるんだな？
「普通の生地の方でよろしく。ああ、でもハイパーウィーブ製のインナーとかがあるなら購入するよ、値段次第で」
インナーならドレスよりは安いだろう。何せ使う生地の量が圧倒的に少ないし。
「承知いたしました」
少しだけ落胆した様子を見せながら店員達はすごすごと引き下がった。やっぱりいくらなんでもあの商品は無理ですよ、とかやっぱりあれは金持ちの帝国貴族向けですね、とか聞こえる。帝国貴族はああいうのも普通に買うのか。とんでもねぇな。
いやまぁ、本当の金持ちからすれば一着３５０万円相当の服とかなんでもないんだろうけどね？　最近金銭感覚が順調に崩壊しているとはいえ、俺はまだ庶民の感覚が抜けないから。船内設備とかに数万エネルかけるならまだしも、服の一着に数万エネルを使うほど

の度胸は流石にまだ無い。
店の奥に再度ドナドナされていったミミがまったく同じように見えるゴスロリっぽい服を着て戻ってくる。
「こちらが普通の生地のドレスですね。ハイパーウィーブ製のインナーをつけてこんな感じになります」
提示された金額は先程よりもかなり控えめなものになっていた。やはりハイパーウィーブ製のインナーは高いようだが、安全のためと思えば高くはないな。
「ハイパーウィーブ製のインナーはもう2〜3セット欲しいな。少し予算オーバーだけど、そこは構わない」
「承知いたしました」
ハイパーウィーブ製のインナーが売れたのが嬉しかったのか、店員がニッコリと微笑む。代金を払い、再度ゴスロリ風の衣装を身に着けているミミを頭の天辺からつま先までじっくりと鑑賞する。
「可愛いよ」
「はい……」
流石に慣れてきたのか、最初のピンク色のドレスを着た時ほどにはミミも狼狽えてはいないようだ。それでもやはり恥ずかしいのか、顔を少し俯かせてモジモジしているのだが……可愛すぎて悶えそう。
「それで、どの服を着ていく？」
「……えっ？」
ミミが顔を上げて驚いた表情をする。良いね、その表情。

「折角のデートだし、新しく買った服を着て欲しいなぁ。今日着てきた服は他の服と一緒に送ってもらえば良いだろ？」
「だ、ダメ、無理ですよ」
「でも、外に出るときくらいにしか着る機会が無いじゃないか。船の中では着ないだろ？」
「で、でも細々としたものが、ですね？　持ってきたバッグはこの服とは合いませんし」

ミミがワタワタと慌てながらドレスを着たままデートを続行するのを避ける理由を口にする。ははは、ミミよ。それでは俺を止めることはできんな。

「この服に合うバッグを。他の服にも合うのを見繕ってくれ」
「承知いたしました」

Ｔｈｅ・札束ＢＩＮＴＡだ。俺は俺の欲望を実現するためになら金を使うことに躊躇はせん。

「デザインだけで機能性が低すぎるのはダメだぞ」
「お任せください」

いつの間にか俺の背後に現れていた店員の気配がスッと消えていく。俺もこの環境に慣れてきたな。

「恥ずかしがることなんて何もないぞ。本当に似合ってる。可愛い」
「うぅ……」

俺の無体な行動にミミが両手でで顔を覆い、耳を真っ赤にさせて悶えている。ははは、諦めるが良い。

#０３５　沼にどっぷりと（後書き）

イチャつきタイムは大事―（：３」∠）―

前作の２９歳独身のコミカライズ、予告編がコミックウォーカーで掲載開始されました！
今回は予告編、今月２６日とかそれくらいに一話がアップされる予定のようです―（：３」∠）―（是非見てね！

←下記ＵＲＬはコミックウォーカーの当該作品サイトです

ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｗａｌｋｅｒ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔｓ／ｄｅｔａｉｌ／ＫＤＣＷ_ＫＳ０１２００８１４０１００００_６８／

#036　傭兵ギルドと紹介状

ロリータ・ファッション専門店『アトリエ・ピュア』を後にした俺達はその足で傭兵ギルドに向かうことにした。ミミの服装は最後に選んだ黒いゴスロリ風のドレスである。着慣れない服を着て衆目に晒されるのが恥ずかしいのか、俺の服の裾を摘んで俺に隠れるようにして歩いているのがとても可愛らしい。それでは顔も満足に隠せないだろうに。

「ミミ、そうやって歩いていると余計に目立つぞ。堂々といけ、堂々と。その方がかえって目立たないから」
「うぅ……わかりました」
「そして恥ずかしがる必要なんて一切ないからな。似合ってるから。めっちゃ似合ってるから。超かわいい」
「もうゆるしてください」

俺の攻撃でミミが両手で顔を覆って撃沈してしまった。違うんだ、フレンドリーファイアをするつもりはなかったんだ。本当にすまないと思っている。でも恥ずかしがるのも可愛い。へへへ。

少ししてミミも落ち着いたのか、まだ少し恥ずかしそうにしつつも普通に歩いてくれるようになったので傭兵ギルドへと再び歩を進める。傭兵ギルドの所在地は『アトリエ・ピュア』の入っていたのとは別のビルの地上（？）階だ。船の発着場に近い港湾区画にあるらしい。

ビルに入ったらエレベーターに乗り、傭兵ギルドのある階へと移動する。このビルは上層三階、中層五十二階、下層三十階の計八十五階建てのビルになっているらしい。一階あたりの敷地面積がどれくらいなのかわからんが、凄いな。

「住民はどこに住んでるのかね？」
「同じようなビルでできた居住区画があるらしいです。ここからはちょっと遠いみたいですね」
「なるほど。このビル一棟でかなりの人数が住めそうだなぁ」

このコロニーの人口って何人くらいなんだろうか？　相当でかいステーションだし、万単位か、もしかしたら十万以上かもしれないな。
この後のお昼ご飯はどうしようか？　などとミミと相談を始め、結論が出る前にポーンと音がした。エレベーターが傭兵ギルドのある階層に辿り着いたようだ。

「傭兵ギルドで聞いてみるのもアリかもな。ここのことには詳しいだろうし」
「そうですね」

連れ立ってエレベーターから出ると、周囲の視線が集まってきた。視線を向けてきている者の風体は様々だ。ガタイが良くて威圧感のあるステロタイプな傭兵の男性、同じく傭兵らしい二足歩行の爬虫類系異星人、何がどうなってそんな格好をしているのかわからないが、ビキニアーマーを着ている褐色肌の女性、どう見てもメイドさんにしか見えない女性、揃いの宇宙服のようなものを身に着けた子供くらいの大きさの六人ほどの集団、作業服を着たレッサーパンダのような異星人、えとせとらえとせとら。

「なんかターメーンプライムコロニーの傭兵ギルドに比べると……賑やかだな？」
「そ、そうですね」

俺への視線はすぐに途切れたが、ミミへの視線はなかなか途切れないようでミミが少し居心地悪そうにしている。まぁ、そのうち慣れるだろう。俺は身振りでミミにカウンターへ行くことを促し、先に歩き始める。ミミが俺に従って歩き始めると若干だがミミへの視線が弱まったようだった。いかにも傭兵という感じの格好をしている俺の連れだと認識されたのだろう。

こういうのテンプレ的な『可愛い子連れてるじゃねぇか新人よぉぉー？』みたいな絡んでくる噛ませ役とかは特に居ないようで、俺達は至ってスムーズに傭兵ギルドの受付カウンターに辿り着くことができた。ミミが視線を惹きつけるのか可愛いから仕方がない。自然の摂理だからね。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

俺の選んだ受付カウンターに詰めていたのは妙齢の女性だった。、しっかりと傭兵ギルド職員の制服を身にまとったキャリアウーマンといった感じである。胸部装甲の厚さはエルマを圧倒、ミミ以下といったところか。美人さんだな。傭兵ギルドの受付嬢は美人という選考基準でもあるんだろうか。

「俺はキャプテンのヒロ。こっちはオペレーター見習いのミミ。ターメーンプライムコロニーから移動してきたんで、その挨拶でね。暫くこの辺りに滞在して活動するつもりだ」

そう言って情報端末を見せると、彼女が読み取り機を差し出してきたのでその上に翳す。ピッ、と読み込み音のような音が鳴ってカウンター上にホログラムディスプレイの画面が出現した。

「はい、確認しました。キャプテン・ヒロ様ですね。ランクはシルバー、クルーは二名……もう一名のエルマ様は？」

「船に残ってる。イナガワテクノロジーの件があるからね」
「イナガワテクノロジー……なるほど。当星系に来るなりとは、運が良いのか悪いのか」
「金が稼げるんだから悪いことじゃないと思いたいね」

俺がそう言って両手を開いて見せると受付嬢さんは苦笑いを浮かべた。うん、わかってるよ。ちょっと俺達がトラブルを呼び込む体質だっていうのはね。薄々とね。トラブルに巻き込まれて逆に運が良いとでも思っておかないとやってられないよ。

「あちらからの接触は？」
「今のところはありませんね。恐らく謝礼金の算出と決済の稟議に時間がかかっているのではないかと。それなりに大きい企業なので」
「なるほど。先方から連絡があったら船か俺に連絡をよろしく頼みます」
「承知致しました……おや？」

受付嬢さんが突然声を上げて手元で何かを操作する。

「ジャストタイミングですね。ちょうど今イナガワテクノロジーから連絡がありました」
「Ｏｈ……先方はなんと？」
「謝礼金の提示額は５０万エネルのようですね」
「相場がわからんなぁ……極端に安くなければ別にケチをつける気は無いんですがね。ちょっと船に残ってるクルーと相談しても？」
「はい」

受付嬢さんの了承を得られたので、船に残っているエルマに通話を入れる。どうやら真面目に待機していてくれたらしく、エルマはすぐに通話に出てくれた。

『はい、エルマよ。どうしたの？　トラブル？』
「いや、傭兵ギルドに顔を出したところだったんだがな。ちょうど今イナガワテクノロジーから謝礼金の提示があったんだ。５０万エネルってことなんだが、妥当かね？」
『んー、曳航して帰ってきたわけでもないし、救援に駆けつけて星系軍が来るまでの護衛金額としては妥当だと思うわよ。中型客船が払う礼金としてはね』
「ならそれで受けていいか？」
『ええ、問題無いと思うわ。一応ミミにも相談してみてね』
「了解、ありがとうな」
『良いわよ。頼ってくれるのは嬉しいからね』

じゃあ、私は船でのんびりしているわねと言ってエルマは通信を切った。それを確認した俺はミミにも視線を向ける。

「エルマは５０万で大丈夫だと思うってさ。ミミは何か意見はないか？」
「イナガワテクノロジーは確か総合病院も経営していたはずです。ヒロ様の健康診断をするために紹介状などをいただくのはどうですか？」
「そうなのか、じゃあそれも要求してみるか。そういうことでお願いします」
「はい、ではその旨を先方にお伝えいたしますね。返信が来次第ご連絡いたします」
「よろしくお願いします。それと、聞きたいことがあるんですが」
「はい？　なんでしょうか？」
「このコロニーの名物とかうまいもんが食える飯屋を教えてください」

まさか傭兵ギルドのカウンターでそんなことを聞かれるとは露程も思っていなかったのか、受付嬢さんが頭の上に疑問符を浮かべまくって固まった。
そんなに意外な質問かね……？

☆★☆

ミミとのデートを楽しんだ翌日、イナガワテクノロジーからのメールで紹介状を受け取った俺達は三人でイナガワテクノロジーの経営する総合病院へと向かっていた。
え？　名物料理？　名物に美味いものなしなんて言うが、俺は割とそういう意見には懐疑的な立場だ。常識的に考えて名物と呼ばれるものが不味い訳がない。
そう思ってました。
いやね、確かに合成されたてのフードカートリッジの中身なんてのは確かに産地じゃないとなかなか味わえないと思うよ？　でもね、素材の味そのままにそれをペースト状にしてみましたみたいなもんはどうかと思うね。
確かに腹は膨れたし、旨味はあったけどもさ。なんていうの？　旨味のあるシェイク？　しかもLサイズ。いや、もうなんか例えようがないな。栄養補給ペーストとしか言いようが無かったわ。
これには俺もミミもチベットスナギツネみたいな表情をせざるを得なかったね。あの受付嬢さんは俺達に何か含むところでもあったのだろうか？
「どうしたのよ、砂でも噛んだような顔をして」
「いや、あの屋台を見るとな……」
イナガワテクノロジーが経営する総合病院への道の途中で俺達が昨日寄ったのと同じ屋台を見つけたのだ。横を見ると、ミミも同じ

ような顔になっていた。ちなみに今日のミミの服は診察で服を脱ぐことも考えられるので、シンプルなトレーニングウェアの上にジャケットを着込んでいるような感じである。俺もエルマもだいたい同じような格好だ。一応レーザーガンは全員携行してるけど。

「不味かったの？」

「ギルドの受付嬢にオススメされたんだが、まぁ酷かったな」

「得難い体験でしたね……」

ここでないと口にできないという意味では確かに名物だったのかもしれないけどな。安くて腹が膨れるのは悪くないが……何度も食いたいものではないな。

俺とミミがあの屋台で出された栄養補給ペーストがいかに不味かったかということを力説しているうちに大きなビルに辿り着いた。ビルの壁面にはイナガワテクノロジーの社名がでかでかとペイントされている。あのビル全部イナガワテクノロジーのテナントなのか。

「すんごいわかりやすいな」

「そうですね。遠くからでもわかりやすいですねー」

ミミがビルを見上げて感心している。エルマは特に思うところはないのか、特にコメントはなかった。三人揃ってビルのエントランスに入る。

「何階だろうな？」

「ビル内のナビロボくらいあるでしょ」

なびろぼとはなんだろう？　と考えながらエルマの後に続くと、エルマは壁面にあったコンソールのようなものに自分の情報端末を翳した。そうするとピピッ、となにか電子音のようなものが響き、

壁面の丸い穴から握り拳ほどの球体が飛び出てくる。

『いらっしゃいませ。私はナビゲーションユニットＮ－３４です。エルマ様を目的地へとご案内致します』

「ほう、ハイテクぅ」

「ハイテクでもなんでもないじゃないこんな……そっか、あんたにとってはハイテクなのね」

「そうなんです」

「そうなんですか？」

「そうなんです」

ミミが首を傾げる。そういえば、ミミには俺が異世界から来たんです的な話をしていなかったな……今晩にでも話すとするか。別にミミは俺を疑ってないし、話す必要もないとは思うけど。一応エルマに相談してみるかな？

コロコロと転がりながら俺達を案内するナビゲーションユニットの後を追って移動を開始する。どうやら早速エレベーターに乗るらしい。

「うーん、なんか可愛いなこいつ」

「そう？　なかなか独特な感性ね」

「えぇ？　小動物っぽくて可愛くない？」

「ちょっとわかるかもしれません。小さいのに頑張ってる感じがしますよね」

ナビゲーションユニットが自動で移動階を指定し、エレベーターが動き始める。そう言えばこの世界のエレベーターは途中で止まって他の人が乗り込んでくることが無いんだけど、一体どういう仕組みになってるんだろうな？　とても謎だ。

程なくして目的の階層に辿り着いたのか、エレベーターの扉が開

いてナビゲーションユニットが再びコロコロと転がりだした。ころんころんと電子音をわざわざ出している辺り微妙にあざといな。きっと同行者がよそ見をして見失っても音でわかるようにしてるんだろうな。

「着いたみたいね」

医師や看護師らしき白衣の人達と何度か擦れ違いながら通路を進んだ先に開けた空間が見えてきた。いかにも医療機関って感じの清潔そうな明るい空間だ。

「やぁ、ようこそ。待っていたよ」

ナビゲーションユニットがその場所に立っていた人物の足元で止まる。

女性だ。背の高さは俺と同じくらい。腰まである濃い茶色の長い髪の毛を三つ編みで一本にまとめていて、両手を白衣のポケットに突っ込んでいる。少し野暮ったい感じのする眼鏡の奥からこちら向けられる視線はどこか眠たげな雰囲気だ。顔立ちは地味だが、美人の類だと思う。胸部装甲の厚さは……ミミと同等レベルだな。エクセレント。

「私はショーコ。今回、君達の健康診断を担当する……まぁ、医者だね。よろしくね」

そう言って彼女はにへらっと微笑んだ。

#037　メディカルチェック

「私はキャプテンのヒロ、こっちはクルーのエルマとミミです。よろしくお願いします、ショーコ先生」
「ああ、いいよいいよ。もっと気楽な言葉でね。私も肩が凝っちゃうしね」
「そうですか？　それじゃあそういうことで」

その胸部装甲ならさぞ肩も凝るだろうな、と思いつつ頷く。

「今日は総合的な健康診断ということだったね？」

ショーコ先生がどこからかタブレット端末を取り出して問いかけてくる。いや、どこから出てきたの？　そのタブレット。さっき両手とも白衣に突っ込んでたよね？

「ええ、特に俺は予防接種の類も何を受けてて何を受けていないのかもわからん状態でして。ミミもターメーンプライムコロニー内で受ける一般的なものしか受けていないはずですから。傭兵としてあちこち飛び回ることになるんで、その辺もしっかり受けたいんですよね。エルマはどうなんだ？」
「私は一通りそういうのは受けてるわよ。そもそも、私みたいなエルフって免疫系が人間よりも強いから、そんなに必要無いみたいなのよね。でも、更新するものもあるかもしれないしやっぱり一通り診てもらったほうが良いと思うわ」
「なるほど。他に気になる点とかはあるかな？」
「あの、ヒロ様は記憶喪し――」
「すまんミミ、それは嘘なんだ」

記憶喪失と言いかけたミミに食い気味に言葉を被せて否定する。俺のその言葉を聞いたミミが目を見開いて俺の顔を見つめてきた。とてもびっくりしているようだ。

「記憶喪失ではないが、ちょっと複雑な事情がな……簡潔に言うと、記憶があやふやではあるんですよ。俺はハイパードライブの事故か何かで船と一緒に突然ターメーン星系に飛ばされて来てましてね。なんでそんなことになったのか自分でもよくわからない。船の寄港記録もターメーン星系以前のものはどこにも見当たらない。まるでこの世界に突然現れたみたいな状況なんですわ」

「……へぇ？　それはなんというか、不思議だね」

「不思議なんですよねぇ。そういうわけで、そのハイパードライブ中の事故か何かで前後の記憶とかがあやふやな上に、ちょっと現状と一致しない部分もあったりしましてね。その影響が身体に深刻な影響を与えていないかどうか、詳しく調べてほしいというのもあるんですよ」

「なるほど。ハイパードライブ中のトラブルで心身に何か負担がかかっている可能性がある、と。確かにそれはしっかりと検査したほうが良いだろうね」

ふむふむと頷きながらショーコ先生がタブレットを操作する。カルテでも作成しているんだろうか？

「なにか特別な病歴とかは無いかね？」

「俺は特にないな。思い当たる限りは、だけど」

「私もないですね」

「私もないわ」

首を横に振った俺と同じようにミミとエルマも首を横に振る。俺

は特にアレルギーとかも無いし、身体は健康そのもののはずだ。

「じゃあ、早速始めようか。まずは医療ポッドでフルスキャンだね。ここに備えられているのはうちの最新型だよ」

「イナガワテクノロジーの？」

「そうさ。銀河におけるシェアは他社とどっこいだけど、性能は折り紙付きだよ。少々大きいのと価格が高いのが玉に瑕だけどね。うちは高級志向なのさ」

誇らしげにそう言って歩き始めたショーコ先生の後ろについてゆく。ショーコ先生が歩きながらイナガワテクノロジーの医療ポッドの解説をしているが、正直ちんぷんかんぷんだな。専門的な用語が多すぎて理解が及ばない。

「というわけなんだよ」

「二割も理解できませんでした」

「すごいのはわかりました！」

「そうね、すごいのはわかったわね」

「うん、とにかくすごいんだ。それでいいよ」

特に気分を害した様子もなく、ショーコ先生はご機嫌のようである。他人のこういう反応に慣れている感じがするな。どっちかというとこの人、現場で患者に医療を施すよりも研究畑の人なんじゃないだろうか。

「まぁ、君たちは私の命の恩人だからね。最高の設備でしっかりと診断するから安心してほしい」

「命の恩人……？　あの船の乗っていたんですか？」

俺達の方を振り返ったショーコ先生にそう問いかけると、彼女は

大きく頷いた。

「そうさ。あの時はもうだめだと思ったね。私は女だけど地味だし、もし宙賊が船を撃破しないで乗り込んできたとしても『処理』されてた可能性が高かったから」

そう言って彼女は肩を竦める。いやー？　それはどうですかね？　ショーコ先生はよく見れば美人だし、胸部装甲も厚いから宙賊に攫われてたかもしれないよ？　それが『処理』されるより幸運なのかというと、正直そうとも思えないけどね。

「まぁ、そういうわけでね。実は君達の健康診断を担当する件も割と無理矢理気味にねじ込んだんだ。本当は私は研究開発部の人間でね……ああ、心配はしないでほしい。ちゃんと医師としての免許は持っているし、医師としての腕だってそこらの医院の自称敏腕よりは上だと自負しているよ」

「なるほど」

なるほどとしか返しようがねぇ。チェンジとも言えないし、言うことを疑うのも失礼だし。

ミミとエルマ西線を向けてみると、二人とも微妙に不安そうな表情をしていた。そうだよな。そうなるよな。でも、自分で大丈夫だと言っているし俺達は彼女を信じる他ない。

なに、納得できなかったら他の医療機関でもう一度健康診断をするって手もある。ここはおとなしくショーコ先生に診てもらうのが吉だろう。

「さ、この部屋だ。どうぞどうぞ、入って」

「はーい……おお」

「わぁ」

「へぇ」

ショーコ先生に案内されて入った部屋にはクリシュナの医務室にある簡易医療ポッドとは比べ物にならないほど立派な装置が何台も並んでいた。これは確かにデカイわ。クリシュナの医務室にある簡易医療ポッドはちょっと横幅の小さなベッドって感じの大きさだが、この部屋にある医療ポッドはクリシュナの医務室と同じくらいの大きさがある。高さはおよそ２ｍ、奥行きもおよそ２ｍ、横幅は軽く３ｍを越しているんじゃないだろうか。

「でかいな」

「でかいだろう。だが、こいつには一台一台にデータ分析用の陽電子コンピューターが搭載されているんだ。性能には自信を持っているよ。さぁ、服を脱いで各自医療ポッドに入ってくれ」

「ええと、どこまで？」

「全部だよ」

「全部っすか」

「全部だ。ああ、検体の裸は見慣れているからね。私のことは気にする必要はないよ」

「あっはい……」

気にするのはショーコ先生ではなく裸になる俺達なのでは……？

そう思ったが口には出さず、上着とトレーニングウェアを脱いでチラリとミミとエルマの方を――。

「おうふ」

エルマの投げた上着が俺の頭にクリーンヒット。ばさっと広がった上着が俺の視界を奪う。

「ミミ、さっさと脱いで入っちゃいなさい。あんたは私達が入るまでそのままでいなさい。いいわね？」
「アイアイマム」

ビシッと敬礼をしてその言葉に従う。しかし俺は既に素っ裸なわけで、頭に女物の上着を被ってブラブラさせてるのって変態度高くない？　誰も気にしないって？　そうですか。

「二人は医療ポッドに入ったよ」

ショーコ先生に声をかけられたので、頭に被った上着を取って俺が脱いだ服を入れていた衣装籠に放り込む。

「ありがとう。お見苦しいものをお見せしまして」
「いえいえ、結構なお手前で」

なんとなく頭を下げ合ってしまった。このまま見つめ合っていても仕方ないので、俺も医療ポッドの蓋を開いてその中に身を横たえる。うーん、微妙に窮屈なこの感じ。なんかあれだ、以前健康診断でＭＲＩを受けたときのことを彷彿とさせられる。

あれなー、検査前に飲んだ薬の効果なのか身体が芯から熱くなるような不思議な感覚なんだよなー。身体が熱くなっちゃうううぅ！って感覚を自分の身で体験することがあるとは思わなんだ。あれは革命的な体験だったね。

『聞こえるかい？　今からスキャンを開始するからそのままリラックスしててね』
「へーい」
『身体はできるだけ真っ直ぐに。両手の甲を太ももの横にぺたっとくっつけてね』

「了解」

言うとおりにして待つこと暫し。医療ポッド内に何度も薄緑色の光が走り、俺の身体をスキャンしていく。俺はこの世界の人間じゃないからなぁ。なんか変なことにならなきゃいいけど。

『はい終了ー。ポッドを開けるから出て服を着ていいよー』

プシュー、と空気の抜ける音がして医療ポッドの蓋が開く。さして時間もかからずに検査が終わるのは流石ＳＦ世界ってところだろうか。ＭＲＩは結構な時間がかかったからな……なんか身体は熱いし、あまり何度もやりたいものじゃないよ、あれは。

いそいそと服を着込み、エルマの上着を返してやる。

「私とミミはともかく、あんたの結果がちょっと怖いわよねー」

「何事もなければ良いんですけど」

「言うな、不安になってくる」

「あはは、心配はいらないと思――んん？」

タブレットを見ていたショーコ先生が急に細目になってタブレットの画面を凝視し始める。先生、眉間に皺、皺寄ってますよ。

「いや、うーん？　えぇ……？」

「めっちゃ不安になるんですけど」

「いや、うーん……ヒロ君、ちょっと聞いていいかな？」

「はい」

「いろいろ腑に落ちないというか、聞きたいことがあるんだけど、まずは……君、多言語翻訳インプラント入ってないみたいんだけど」

「そうなんですか」

入れた覚えも無いから入っていないのも当たり前だろうな。でも、入っていないとおかしいみたいだな、この反応を見る限りは。ミミとエルマも『え？　嘘でしょ？』みたいな顔してるし。

「入ってないとおかしいんですね」
「おかしいね」
「おかしいわね」
「おかしい、ですね」

俺以外の三人が声を揃えて頷く。どうもこの多言語翻訳インプラントというのは銀河中に普及しているもので、生まれた直後に脳に移植されるのが当たり前のものであるらしい。出生申請をすればどんな立場の人間でも無料で移植されるものであるらしく、俺の歳になって移植されていないなんていうのはほぼありえないのだとか。

「でも、ヒロ様は今までに言葉に不自由してないですよね？」
「そうね、そういうのは見たことがないわね。常識は知らないみたいだけど」
「そうなのかい？　ちょっとテストしてみて良いかな？」
「どうぞ」

ショーコ先生がタブレットを操作しながら口を開く。

「今からこのタブレットで多くの異星言語を流すから、そのタブレットから聞こえたのを同じことを復唱してくれるかい？　多言語翻訳インプラントのテストプログラムなんだけど」
「勿論」
「じゃあ、始めるよ」

ショーコ先生の持つタブレットから日常会話のようなものが流れ

始めたので、聞こえたとおりに復唱していく。全部日本語で聞こえるんだけどね、俺には。
何の問題もなくテストプログラムが終了する。
「問題ないみたいだね。一体どういう仕組みなんだろう？」
「俺にはさっぱりわかりませんが」
なんだろう、異世界転移ものでよくある言語翻訳ボーナス的なものなんだろうか？　ここＳＦの世界ぞ？　そんなのよりも一般人と同じようにインプラントぶち込んでおいて欲しかったよ……というかマジで意味がわからない。どう解釈すれば良いんだ、これは。
「えー、とりあえず大丈夫そうということでインプラントが無いことに関してはスルーでお願いします」
「えぇ……個人的に凄く気になるんだけど」
「ノゥ、俺はショーコ先生のモルモットになるつもりはありませんので。次の項目お願いします」
「仕方ないなぁ……ええと、次に気になったのはね。君、どこ出身？」
「俺の認識だと太陽系の第三惑星、地球ですね。ソル星系って言ったほうが良いのかな」
太陽系第三惑星とか日常的に言うことも聞くこともあまりないよな。俺はゲームとかで聞くからスッと答えられたけども。
「ソル星系……聞いたこと無いなぁ」
ショーコ先生がミミとエルマに視線を向けるが、彼女達も首を横に振った。

「俺の出身はとりあえず横に置いておいて、一体それがどうしたんで？」
「うん、君の遺伝子データなんだけど、今までに観測されたことのない値が多いんだよね」
「うん……？」
「調べた限り、身体の機能そのものは一般的なヒューマノイドと変わらないみたいだから問題はないんだけどね。とっても興味深いね。今までに観測されてない遺伝子データということは、今まで我々が持っていなかった特殊な因子を抱えている可能性があるってことだからさ」
「もっとわかりやすく」
「君の遺伝子データは未開拓のフロンティアに溢れているね。ちょっと分けてくれない？」
「えぇ……」

チラリとミミとエルマに視線を向けると、二人はどう判断したら良いのかわからないといった顔をした。そうだよな、俺もわからん。

「そうすることによるメリットは？」
「そりゃもう高いよ。高く買うよ。未知の遺伝子データというものはこの宇宙と同じくらいのフロンティアだからね！」

ショーコ先生が興奮した様子で迫ってくる。近い近い。眼鏡の奥から飛んでくる視線が強いって。彼女の両肩にそっと手を置き、少し間合いを離してもらう。

「俺にデメリットは？」
「特に無いと思うよ。うちは情報セキュリティもしっかりしてるから、漏れることもないだろうしね。ただ、よそで同じような検診を受けることはおすすめしないね。下手なところに当たるとそれこそ

モルモットにされるかもだし。うちはしっかりしてるからね、遺伝子データを貰えるならつきまとったり不当に拘束したりしないということを約束するよ」
「うーん」

大事になってきた。予想していなかったわけじゃないが、こんなに大事になるとは思わなかったな。どうしたものか……ここは要求に従って、健康面でのケアをイナガワテクノロジーに一任するのが良いだろうか。

「わかった、遺伝子データの提供に関しては前向きに考える。こちらからの要望としては、今後の医療的なケアを全面的にイナガワテクノロジーに任せるから、便宜を図ってもらいたい。あと遺伝子データの買取金額、そして解析したデータの利用や権利に関しては時間を取って詳細に話を詰めさせてもらいたい。今日のところはメディカルチェックと予防接種を……」
「予防接種は遺伝子データの採取後にして欲しいな。データが変異する可能性があるからね。出来るだけナチュラルなデータが欲しいんだ」

遺伝子情報が変異する予防接種ってどういうものなんだよ……ちょっと怖いんだけど。

「また来なきゃならないのか……」
「先に遺伝子データを提供してくれれば今日一日で済むよ？」
「売買契約の締結前に商品を渡す商人なんて居ないでしょうが」
「信用してくれるなら先渡しでもいいんじゃないかな？」

ショーコ先生がニッコリと微笑んで小首を傾げてみせる。意外とあざとい仕草をするな、この先生。

「信頼関係の構築が出来てないから無理です」
「残念だ」
「スキャンしたデータがあるでしょう」

少なくとも、俺の遺伝子データが特殊であるということが分かる程度のデータは医療ポッドのスキャンで得ているはずだ。

「やっぱり実物にはかなわないよねぇ。血液とか精液が欲しいところだよ」
「条件が折り合うまで我慢してください」

仕方がないなぁ、と言ってショーコ先生が溜息を吐く。やっぱこの人は研究者だな。間違いなく医者の思考じゃないと思う。

「それじゃあ済ませられるものはササッと済ませちゃおうか。早くヒロ君の遺伝子データを解析したいからね」

ショーコ先生が再びにっこりと笑みを浮かべた。へいへい、もうどうにでもしておくれ。

#０３８　大切なものを失う

ミミとエルマは他の検査や処置を続けるために別室へと移動して行き、俺はショーコ先生と共にロビーへと戻ってきた。俺の遺伝子データ提供に関する話をさっさと詰めたいらしい。

「あの二人の対応は他のスタッフがしっかりと対応するから安心して欲しい。私みたいな研究畑の人間じゃなく、現場の人間がね」
「さいですか……で、もう予算の稟議が降りたんで？　後日になる予定だったんじゃ？」
「未知の遺伝子データ提供に対する報酬はその貴重度というか、未知の部分の多さに応じてある程度決まっているからね。スキャンした遺伝子データを送ればすぐに承認が降りたよ」
「なるほど」

なんかやり遂げたぜって顔してるけど、この人今日の俺達の診察の件でも無理やりねじ込んだとか言ってたからな。研究畑の人間とか言ってるけど、意外と政治力の強いタイプなのかもしれない。

「そういうわけで、お金の話なんだけどね」
「身も蓋もない」
「お金って便利なツールだよね。通常であれば長い時間をかけて培わなくてはならない信頼関係を数字で補うことができるという意味で」
「確かに。それで、提示額は？」
「３００万エネルだね」
「物凄い大金だな。俺の遺伝子データにそんな値が？」

日本円に換算して約三億円だ。別に特別な血筋というわけでもない俺の遺伝子データにそんな高値がつくことに驚愕を禁じ得ない。

「さっきも言ったけどね、ヒューマノイドの未知の遺伝子情報はまさにフロンティアなんだよ。もしかしたら私達をもう一段上の存在に押し上げてくれるかも知れない、そんな可能性を持っているのさ」

「もう一段上の存在って……」

一体どういう風に利用するつもりなんだこの人は……いや、異世界の生命倫理なんてどうなってるかわかったもんじゃないし、俺が口出しするのはナンセンスか。

「俺の個人情報はしっかりと守ってくれよ……」

「それは勿論。契約書はこんな感じだよ」

そう言ってショーコ先生は自分の持っていたタブレットを俺に手渡してきた。内容を確認してみるが、概ね問題は無さそうである。俺の個人情報は守る、勝手にクローンを作らない、破った場合賠償金としてイナガワテクノロジーは俺に３０００万エネルを支払い、俺の遺伝子データの解析や研究、利用を一切停止する……そんな感じの俺に有利な内容が羅列されている。俺が先程要望した今後のメディカルチェックに関してイナガワテクノロジーに面倒を見てもらう、という契約も条項には盛り込まれていた。

どこかに落とし穴があるんじゃないかと何度も読み返したが、やはり問題は無さそうだ。

「用心深いねー」

「自分の遺伝子データを預けるとか怖いだろう。それに俺に有利な条項が多すぎるのもな」

「そこまで有利な内容かな？　この契約だと君の遺伝子データを解

析して得た成果でイナガワテクノロジーがいくら儲けても君には1エネルも入らないんだけどね」
「なるほど。でも変に欲をかいても碌な事になら無さそうだ。俺は自分の手でコツコツ稼いでいくつもりだからそこは別にって感じかな」
「なるほど、傭兵らしい答えだね」

俺の言葉を聞いてショーコ先生がにへらっ、と緩い笑みを浮かべる。
こんな方法で手に入れた金なんてあぶく銭くらいに思っておいたほうが良いだろう。勿論拒否するって選択肢もあったと思うけど、イナガワテクノロジーは既に俺の遺伝子データの価値を知っているわけで……まぁ、それはそれで面倒なことになりそうだよな。
そういうわけで、俺が過剰に不利にならないような状態でイナガワテクノロジーに従うというのはベストではないのかも知れないが、ベターな手じゃないかと俺は思うわけだ。俺とクルーの安全が一番だな。

「結論は出たみたいだね」
「ああ」

画面に指を走らせて契約書の署名欄にキャプテン・ヒロと署名をする。これで契約は成立だ。

「いやぁ、契約がまとまって良かったよ！　それじゃあ早速血液と精液を採取しようか」
「それは良いけど……血液はともかく、精液はどうやって……？」
「ふふ……期待してくれて、良いよ？」

ショーコ先生は怪しげな視線を俺に向け、自分の口元をぺろりと

舐めた。

「まってまってまってこんなの聞いてないぞやめて許してアッーー！」

「うっううっ……おれのじゅんけつが……」

「はい、お疲れ様ー」

蓋の開いたイナガワテクノロジー製医療ポッドの中でさめざめと涙を流していると、ショーコ先生のぽややんとした声が降ってくる。

どうやって精液を採取されたのかって？　察してくれ、思い出したくないんだ……医療ポッドに入るのがトラウマになりそうだよ。

「人によっては病みつきになるみたいなんだけどなぁ」

「にどとごめんこうむりたい」

医療ポッドから這い出て服を身に着ける。ああ、なんかケツに違和感が……もう二度と遺伝子データの提供なんてしないぞ。絶対にだ。ショーコ先生とのエロ展開を期待してたのに……そんな甘い話があるわけもないよな。常識的に考えて。ハハッ。

「とにかく、これで遺伝子データの提供は完了だよ。いやぁ、楽しみだねぇ……くふふ」

テンションが地の底まで落ちている俺とは対象的にショーコ先生のテンションは非常に高い。白い頬を桜色に染めながら実に楽しそ

うにニコニコしていらっしゃる。こんなに嬉しそうな様子を見せられると怒る気にもならないな。

「お、いたいた。ただいまー……ってどうしたのよあんた、目が赤いんだけど」
「ヒロ様？」
「なぐさめてくれ」

そう言ってエルマに抱きつこうとしたら顔を押さえられて拒否されたので、膝をついてミミの大きなお胸に顔を埋めた。ふわー、やぁらかいんじゃあぁぁぁ……あ、ミミが頭を撫でてくれている。好き。

「ちょっと、どういうこと？」
「遺伝子データの提供にご同意いただけたから、早速遺伝子データを提供してもらったんだけどね。どうも処置がお気に召さなかったみたいで」
「処置？」
「精液を採取するためにね、こう、ずぶりと」
「あぁ……」

俺に降り掛かった災難が赤裸々に暴露されていく。酷いよ、傷口に塩を揉み込むような所業だよ。これはミミに沢山慰めてもらわないと。ふへへへ。

「ヒロ様、相当嫌だったんですね……かわいそう」
「その程度で堪えるタマじゃないでしょ。それをダシにして甘えてるだけよ」
「酷いですよ、エルマさん。ヒロ様の目、赤くなってたじゃないですか。本当に嫌で泣いたんだと思います」

「それはそれで情けなくない……？」

ミミがちょっと怒ったような声でそう言って俺の頭をギュッと抱きしめてくれる。ちょうしあわせ。薄情なエルマは微妙そうな声音だけど。

「うん、それについてはすまなかった。そこまで嫌がるとは思わなかったし、正直に言うと色々と楽しみすぎて説明を端折ってしまった。ちゃんと説明してどこかの個室で自分で採取してもらうか、私が直接手伝うべきだったね」

ショーコ先生が手伝うなんて選択肢もあったんですか？　マジで？　どうして俺はその未来を掴み取れなかったんだ……自分の迂闊さが憎い。

「自分でやるくらいなら私達を呼びなさいよ……先生はこいつにそこまでする義理はないでしょ」

「おや？　そんなことはないさ。ヒロ君に助けられていなかったら、今頃私は宇宙の藻屑だ。それを考えればそれくらいなんでもないさ」

「ふぅん……？」

ショーコ先生のクスクスと笑う声とエルマのちょっと不機嫌そうな声が聞こえてくる。なんだか微妙な空気になりつつあるような……？　ミミは相変わらず俺の頭を胸に抱いたまま、あやすように俺の頭を撫で続けてくれている。脳味噌が蕩けそう。

「よし、復活した」

「ヒロ様、もういいんですか？」

「大丈夫、復活した」

ミミの胸に顔を埋め続けるという強力な誘惑を振り切り、立ち上がる。視線を移すと、エルマは呆れたような表情を俺に向けていた。

「大の男がちょっとつつかれたくらいで泣くんじゃないわよ」

「ちょっとじゃないぞ。ずぶりだぞ。お前、そこまで言うならいつかお前にも似たような体験をさせてやるからな。覚えてろよ」

「えっ！？　い、いや、それはちょっと」

エルマがちょっと顔を青くしてあたふたし始める。だが私は許さない。覚えてやがれ。

「それで、あとは予防接種だったか」

「そうだね。生理機能に関しては普通の人間と変わらないようだから、問題なく適用できると思う。基本的に副作用は無いけれど、大事を取って三日くらいは安静にしておいたほうが良いよ」

「なるほど、了解だ。それじゃあ案内してくれ」

「わかったよ。君達はロビーで待っててくれるかな？」

「わかったわ」

「わかりました」

頷くエルマとミミの二人と別れ、別室で予防接種を受けた。特に痛みもなく、プシュプシュっと何回か腕やら首筋やら胸やらにガンタイプの注射器のようなものを押し付けられただけで終了した。正直拍子抜けである。

「簡単なんだな。痛くもないし」

「痛い？　そんなことあるのかい？」

「あー、いや、こっちの話で」

「君の出身はソル星系の第三惑星だったね。つまり、君の出身地ではこういった処置は痛いものって認識があるわけだ」

「スルーしてください」
「こういう処置で痛みが発生するとなると……ふむ、医療関係の技術は随分遅れているようだね？」
「ショーコ先生って人の話を聞かないって言われません？」
「あはは、よく言われるよ」

ショーコ先生があっけらかんと笑う。このぽやーんとしたというか、柔らかい笑顔のせいで怒る気が失せるんだよな。合わない人とは徹底的に合わなさそうだけど。

「とにかく、これ以上俺の事情をすっぱ抜こうとするのはやめてください。ちょっとデリケートなんですよ、その辺は」
「仕方ないなぁ。まぁ、惑星住みとなるとそういうものかな」

この世界においては殆の人が宇宙空間のコロニーで生活をしていて、惑星上の居住地に済んでいる人というのは選ばれたごく一部の人間であるらしい。つまり、上流階級のお貴族様とかそういう類の。
俺の場合は異世界から来ましたなんて事情があるわけで、そんなことをショーコ先生とイナガワテクノロジーに知られたらマジで監禁されてモルモット扱いされるかも知れない。遺伝子データの提供で満足してほしいものだ。

「そういうことでお願いしますよ」
「わかったよ。他にも色々と調べたいことはあるんだけどね？」
「まずは遺伝子データを洗い尽くしてからにしてください」

上目遣いでおねだりするような様子を見せてくるショーコ先生をにべもなく袖にする。正直今の上目遣いはちょっと良かったけど、その程度ではこのキャプテン・ヒロは籠絡できんよ。

「あはは、やっぱ私程度じゃダメだね。エルマさんもミミちゃんも美人だものね」
「ええ、あの二人も美人ですから」
「うん？」

俺の言い方にショーコ先生が首を傾げるが、俺はそれに構わず上着を着込んだ。

「これで一通りは終わりですかね？」
「ああ、そうだね。最後に総合的な診断の結果を伝えるから、二人と合流しようか」

連れ立って処置室から退出し、ロビーへと向かう。そこではエルマとミミが何かを相談しながら待っていた。エルマがすぐに俺達に気づき、こちらに視線を向ける。ミミもそれに続いてこちらに視線を向けてきた。

「よく気づいたな」
「あんたの足音くらいわかるわよ」
「エルマさんのようなエルフの方々は耳が良いからね。森に住む古式ゆかしい暮らしをしている方々だと、２ｋｍ以上先の獣の足音を聞き分けられると聞くよ」
「そうなんですか？」
「私はそこまでは無理ね」

エルマが肩を竦める。あの長い耳は別に飾りというわけではないらしい。

「でも、この耳だって良いことばかりじゃないわよ？　聞きたくないものも聞こえたりもするし、人間用のヘルメットとかヘッドギア

の類はだいたいつけられないしね」
「聞きたくないもの？」
「ええ。例えばあんたのお腹の音とかね。ぐるるーって鳴いたわよ、今」
「マジで」

思わずお腹を押さえるが、よくわからない。でも、そう言われると確かに少し腹が減ったような気がしないでもないな。

「そう言えばもう良い時間だね。先に食事にするかい？」
「食事というと、どんなのですか？」
「オススメはできたてのフードカートリッジの中身をそのまま吸う――」
「「いいです」」

ミミの目が虚無になる。俺の目も虚無になってると思う。エルマは苦笑いを浮かべていたが、ショーコ先生は不思議そうに首を傾げていた。味音痴なのか、ショーコ先生……あんなものを日常的に摂取しているから味蕾が退化してしまったんだな。可哀想に。

「そうかい？　じゃあ、診断結果のデータも上がってきているし、あっちの個室で話そうか」

そう言ってショーコ先生が歩き出した。俺達もその後についていく。

さて、特に問題がなければ良いんだが。

#038　大切なものを失う（後書き）

ズブリ♂―（：3」∠）―

#０３９　新しい機能（意味深）がアンロックされました

「結論から言えば、三人とも健康そのものだね。潜伏している病気の類もないし、生理機能に関しても問題は無さそうだ」
「そりゃ良かった」

ショーコ先生の宣言に俺は素直に喜んだ。エルマに関しては心配していなかったが、ミミは一時期酷い生活をしていたわけだからな。ちょっと心配だったんだ。俺？　俺はまぁ大丈夫だろうと何の根拠もなく思っていたし。実のところそんなに心配はしてなかったんだよな。

「予防接種に関しても全員に処置は済んだよ。エルマ君は既に投与済みだったから必要なかったけど、ミミ君とヒロ君には必要なものを投与した。まぁ、ヒロ君は一切そういった痕跡がなかったのがとても不思議だけどね？」

ショーコ先生が好奇心を宿した瞳で俺を見てくるが、俺はそれに肩を竦めて答えた。

「宗教上の理由で今までそういうのを受けられなかったんだ」
「そういうことにしておくよ。とにかく、さっきも言ったように副作用が出る可能性もあるから三日ほど安静に過ごしてね。副作用が出る確率は０．１％未満だけど、絶対ではないからね」
「わかった。他に注意事項とかは？」
「うーん、そうだね……ちょっとミミ君とエルマ君、良いかな？」
「はい？」
「なに？」

「いいから、ちょっとこっちに。ヒロ君はちょっと離れててね」
「？」

二人が首を傾げながらショーコ先生に近づき、俺は素直に三人から遠ざかる。ショーコ先生は二人にタブレットの画面を見ながら小声で何かを伝えているようだ。ミミは真剣な表情でコクコクと頷いており、エルマは顔を赤くしたり青くしたりしている。

「気になるんですけど？」
「ごめんねー、ちょっと待っててねー」

ショーコ先生が笑いながらヒラヒラとこちらに手を振ってくる。エルマと視線が合った。

「……！！」

ボンッ、とエルマの顔が真っ赤になる。え、何その反応は。すっごい気になる。ミミがエルマの状態に気づいて俺に視線を向けてくる。ミミは普通だな？　特にエルマのような意味不明の反応はしないようだ。　一体なんなんだろう？

「そういうことだから、留意してね」
「わ、わか、わかった、わ」
「はい」

二人が戻ってきたので、俺も元の位置に戻る。後でミミにでも聞いてみるとするか。

「それでえーと？　後は何か聞いておくべきことはあるのかな？」
「ヒロ君達になければ無いね。測定値のデータは後でそちらの船に

送信するよ」

ああ、なんかよくわからん数値とかが色々書いてあるあれね。この世界でも同じものなのかどうかはわからんけど。アレもらっても読み解くための知識が無いから役に立てられるかと言うと微妙なんだよなぁ。

「じゃあ解散というということで？」
「解散ということで」
「料金は俺の遺伝子データの代金から引いてもらうかな？　今払っていっても良いけど」
「その辺はロビーで聞いてもらったほうが確実かな？　私はあくまでも研究者兼医者だからね」
「なるほど。それじゃお世話になりました」
「お世話になりました」
「せ、世話になったわね」

まだなんか動揺しているエルマと平常心なミミを引き連れて俺は説明を受けていた個室から退室し、ロビーにあるカウンターへと向かった。

ちなみに受診料は三人合わせて９万エネルだった。思っていたより安――いや三人で９００万円相当と考えるとバカ高いな。まぁ、健康を買ったと思えば……？

いややっぱ高いわ。この世界では医療費はとても高くつく。覚えておこう。

☆★☆

三人でどこかめし処にでも入るか？　と言ってみたが格好がちょっと薄着で心許ないから船に帰ろうという話になった。船に帰れば

テツジンシェフの美味しいランチも食べられるからな。別にわざわざハズレを引く可能性のある冒険をする必要もないか。

「それで、最後にショーコ先生が二人にした話ってなんだったんだ？　エルマの反応が顕著すぎて気になったんだが」

「な、なんでもないわよ」

エルマが俺と視線を合わせたくないのか、自分の食事に目を向けたままそう言う。取り付く島もないとはこのことか。ミミに視線を向けてみる。

「私は今飲んでいるおくすりよりも私の身体にあったおくすりがあるよって教えてもらっただけですね」

「そうなのか。じゃあそっちに変えたほうが良いな。金は俺が出すから、早めにな」

「はい、ありがとうございますヒロ様」

ミミがにっこりと微笑む。ええんやで。クルーの健康を守るのはキャプテンの義務だからな。

「で、エルマは？」

「な、なんでもないわよ。ミミと同じようなことを言われただけ」

「ふーん？」

それでなんであんなに顔が赤くなるのかがよくわからないな。だけど話してくれそうにもないし、あまりしつこいとへそを曲げるかもしれない。これ以上追求するのはやめるとしよう。

「それより三日間安静に、か。何をして過ごすかね？　船の中に引きこもってないとだめかな」

「いえ、私が予防接種を受けた時に聞いてみたんですけど、そこまでではないみたいです。出歩くくらいはなんでもないみたいですよ。副作用が出る確率は非常に低いらしいですし」
「そうなのか。どこか観光名所にでも行くか？　三人で」
「良いですね。アレインテルティウスコロニーの観光となると、やはりショッピングがメインみたいです。色々なお店がありますからね」
「確かに、この前も何店舗か回っただけで随分時間を潰せたし、楽しかったよな。ショッピングがメインってことは、他にもなにかあるのか？」
「工場見学ツアーですね。フードカートリッジや人造肉などの食料品工場とか、水耕栽培農場とか、ハイテク製品の組立工場とか、造船所とか、そういった工場の見学ツアーも人気みたいですよ」
「ほー、工場見学か。それも楽しそうだな」

食料品工場の見学ツアーとかは確かに気になる。今まさに俺達の口に入っているものだし。

「改良作物から作られるお酒の製造工場もあるみたいですよ」

ピクン、とエルマの長い耳が反応した。わかりやすいやつだな。

「予約制なのか？」
「確かそうだったはずです。予約しておきますか？」
「そうだな。あまりカツカツにならないスケジュールを立ててくれるか？　どこの施設に行くかは任せるよ。ああ、でもツアーの最後に酒の製造工場を入れてくれ」

ピクピクン、とエルマの耳が激しく動く。

「わかりました。評判の良いところを予約しておきます。確か試飲もあったはずですよ」

チラッ、と目線を上げたエルマと目が合う。目が合った途端慌てて自分の更に視線を落とすエルマ。ところでエルマさん、もう貴女のお皿綺麗さっぱり何も乗ってませんよ。

「じゃあ、明日は三人で工場見学デートだな」

「楽しみです！」

「そ、そうね、楽しみね……わ、私、ちょっと買い物に行ってくるわね？」

「ん？　何を買いに行くんだ？　一人で大丈夫か？　ついていくか？」

「だ、大丈夫っ！　大丈夫だからっ！　完全武装で行くからっ！　一人で行くからっ！」

エルマはなんだかやたらと慌てた様子で俺の申し出を断り、食洗機に皿を打ち込むなり足早に自分の部屋のある方に去っていってしまった。うーん、やっぱりあからさまに様子がおかしい。

「ミミ？」

「私の口からちょっと。別に悪いことじゃないと思いますし、踏ん切りがついたらエルマさんが自分で話すと思いますよ」

ミミがなんだかにこにこしながらそう言うので、俺は湧き上がった疑問を再び飲み下すことにした。悪いことじゃないならいいか。

「なんかよくわからんが、エルマが思いつめないように注意してやってくれな」

「はい」

なんだかドタバタとしながらエルマが船から出ていく気配がする。あんな状態で大丈夫なのかね？　ちょっと心配なんだが。

☆★☆

エルマが俺の前に姿を現したのはその日の夜のことだった。どういうわけか、夕食もミミに頼んで部屋まで持ってきてもらっていたし、メッセージアプリを使って俺が風呂に入る時間まで指定して徹底的に俺と顔を合わせないようにしていたのだ。

「――！！」

部屋に入ってくるなり、顔が真っ赤である。茹でエルフかな？

格好もなんだかいつもと違う感じがする。いつもは夜に俺の部屋を訪ねてくる時も割と雑というか、普段着そのままとかトレーニングウェアみたいな格好で来るんだけど、今日は清楚な白いネグリジェである。

白い肌を紅潮させ、清楚な白いネグリジェを来てモジモジしているエルマを見ていると……うん、なんかこう、くるものがある。まるで別人みたいに感じるな。

「今日は昼間から様子がおかしいな。大丈夫か？」

「だ、だ、だいじょうぶ、よ……？」

今にも目を回しそうなくらい緊張した様子で強がるエルマ。どう見ても大丈夫には見えない。

「まぁその、なんだ。そんなところに立ってないでこっちに来て座ったらどうだ？」

「あ……わぅ……うん……」

ちょこちょこと歩いてベッドのすぐ前にまで移動してきたエルマは少しの逡巡の後、思い切ったようにベッドに腰を下ろしてきた。俺のすぐ隣にではなく、ちょっと間を空けて。

「今日は疲れたな」
「そ、そうね」
「エルマは様子がおかしいし」
「そんなことない、わよ？」
「ちょっと苦しくないか、それ」
「うぅ……」

エルマが呻きながら真っ赤になっている長い耳を両手で隠す。エルフはこういう時顔じゃなくて耳を隠すのか。文化の違いだな。

「で、どうしたんだ今日は。いつもと雰囲気が違うな？」

エルマの腰に手を回すと、エルマは怯えるかのようにビクリと身を震わせた。ふむ……？

「えっと、ね？」
「うん」
「わ、わた、わたしね、その、あ、あんたと、こっ、こっ……」
「こ？」
「こけっこっこー！」
「なんでニワトリ！？　おい大丈夫――酒臭っ！？」

エルマが奇声を上げてぶっ倒れる。そして何事かと思って抱き起こしたら酒臭い。なんだこれは、一体どうすればよいのだ！？

流石におめめをぐるぐるさせて伸びているエルマに手を出す気にはならなかったので、エルマをそのままベッドに寝かせて様子を見ることにした――というかそのまま寝やがったので俺もベッドに入ってそのまま寝ることにした。

「んんー……ヒロぉ……」

俺の腕に抱きつきながらエルマが幸せそうに笑みを浮かべている。

「こづくり……んにゅ……」

「いやどんな夢見てんだよ……」

不穏な単語を口にするエルマに苦笑しつつ、俺も目を閉じる。肌に触れるエルマの体温の心地よさを感じていると、すぐに眠気が襲ってくる。やはり慣れない健康診断で気疲れでもしていたのだろうか。俺は眠気に逆らわずに意識を手放した。

☆★☆

「はぁぅぅぅぅ……！」

エルマは朝起きるなり両耳を両手で覆って真っ赤な頭から湯気を噴いた。何かよくわからんが、エルマ的にとても恥ずかしいらしい。

「気合いを入れるためにお酒を飲んでそのまま撃沈した……」

「気合い……？　一体どれだけ飲んだんだ？」

「ウィスキー瓶一本」

「残当」

アルコール度数高い酒を一気飲みして俺の部屋に来たのかこの残

念宇宙エルフは……そりゃぶっ倒れるわ。リバースしなくて良かったな。

「で？　なんで様子がおかしかったんだ？」

「そりゃあんたと子作りできる身体になってるとか言われたら動揺もするわよ……エルフは精神的伴侶と認めた相手とじゃないと子作りができ……な……？」

ギギギギ、と壊れたブリキの玩具のような動きでエルマの首が動き、俺に視線を向けてくる。寝てると思いこんでた？　残念、君より先に起きてました。

「おはよう」

真っ赤な顔をしているエルマに朝の挨拶をする。挨拶は大事。古事記にもそう書いてある。

「お、おは――っ！？」

「もがー！？」

思いっきり顔面に枕を叩きつけられた。おいこら馬鹿力で枕を顔に押し付けるんじゃねぇ！　鼻が痛い！　というか息が苦しいわ！

朝から錯乱しているエルマとの格闘で無駄に体力を使った。まったく、今時理不尽な暴力を振るう女は流行らないぞ？　だからお前は残念宇宙エルフなんだ。

#０３９　新しい機能（意味深）がアンロックされました（後書き）

医学的見地から完堕ち勧告されたエルマさん――（∵３」∠）――

#０４０　工場見学ツアー・お肉編

「つまり、あれか？　エルマはツンツンしてるけど俺にぞっこんラぶぅ！？」
「ち、ちがっ、ちがうわよっ！　そ、そんなんじゃないんだから！」
「エルマさん、照れ隠しで暴力を振るうのはめっ、ですよ」
「そうだそうだ」
「う、うぅぅぅぅぅぅぅっ！」

ミミにめっ、されたエルマが真っ赤になった耳を抑えて顔から湯気を噴く。

「結局どういう理屈なんだ？　というか、エルフと人間で子供が作れるってすごいよな。染色体とか遺伝子ってどうなってんの？」

エルフと人間は姿形がとても似ているし、近縁種のように見えるから交雑できても不思議はないかなとは思う。でも、いくら見た目的に近縁種に見えてもそもそも別の星で個別に進化した別の存在だろう？　よくよく考えれば非常に不可解だ。

「エルフは……その……精神的に、受け容れると、相手と……こ、こづ、くり……うぅっ！」

そこまで言ってエルマは耳を両手で抑えたまま食堂のテーブルに顔を押し付けて隠してしまった。なるほど、だいたいわかった。宇宙エルフはあれだな、本能的にというか体質的に他の種族の苗床にされちゃう的なアレなんだな。何そのエロフ。
もしかして宇宙エルフの故郷にはオークとかゴブリンとか触手さ

んとかもいるんだろうか。そういった種族に襲われても、相手の子を宿すことによって殺されないようにするという生存戦略とか？　そして隔世遺伝でエルフが生まれることによってエルフという種の生存を図る……？　長寿と交雑による遺伝子汚染が宇宙エルフの生存戦略ということか？　だとしたらある意味すげーな、宇宙エルフ。

「なんとなく理解した。宇宙エルフすげーな」

「ど、どういうふうに納得されたのか激しく不安だわ……」

「とりあえずエルマが俺のことを『しゅきしゅき♡』と思っているってことはよくわかった」

「ぐっ、がっ……うーーーー！」

顔を真赤にしたエルマが唸り声を上げながら両手をわなわなと震わせる。消防車か何かかな？

「ヒロ様、そうやってからかうのもめっ、です」

「はい。ごめんなさい。エルマもすまん」

ミミにめっ、されたので素直に謝る。この中ではミミが一番年下なんだが、こうやってめっ、されると俺もエルマも何故か逆らえないんだよな。

「い、いいわよ。私も手を上げるとかやり過ぎたし」

「でも、俺は嬉しいぞ。それほどエルマが俺のことを想ってくれるなんてな。俺もエルマのことが好きだよ。頼りになるし、性格も可愛らしいし、何より付き合ってて疲れない気安さがな。一緒にいて心地良いって言えばいいのかね……」

「そ、そ、そう？」

「ああ、そうだ。本当だぞ」

「ふ、ふーん……ま、まぁ？　私も？　同じように思ってるわよ」

胸の前で手を合わせ、その指先をなんかもじもじとさせているエルマが真っ赤になった顔を逸らしながらそう言う。とてもかわいい。

「はい、これで二人とも仲良しですね」

「うん、仲良しだ」

「そ、そうね……うん」

にこにこするミミに俺とエルマが頷きを返す。

「じゃあ、仲直りしたところで今日の予定ですが、まずはシエラコーポレーションの人造肉工場に見学に行きます」

「おー、人造肉。確かにどうやって作ってるのか興味があるな」

人造肉。肉なんだが、赤みではなく白身の謎肉である。食感は牛や豚に近く、鳥っぽくはない。魚っぽくもない。完全に獣肉って感じ。ただ、前述のように赤身ではなく白身である。自動調理器に入れて調理してもらうと、表面は焼き色がつけられて肉っぽくなるんだけど、ナイフで切ってみると断面が白いのだ。

そんな奇妙な人造肉だが、旨味は強いし脂も乗っていて食べる分には非常に美味しい。人造肉という言葉から考えて、純粋な肉ではなく人工的に合成されたものなのだろうということは推測できるが、その製造工程は想像もつかない。

「私も人造肉の製造工場は見たことがないわね」

「楽しみですねっ！　そしてその後は水耕栽培農場と、併設されている食料加工場に行く予定となっています」

「水耕栽培農場ね。どんなものが育てられているんだろうな？」

「フードカートリッジ用の藻じゃないの？」

「それは見ても楽しくなさそうだなぁ……でも、わざわざ観光ツア

ーにしてるんだからそんなつまらんものじゃないだろ？」
「そう言われればそうかしら」
「食料加工場でお昼ご飯を食べる予定ですよ。なんでもできたての加工品を食べられるらしいです」
「アレじゃなければいいな」
「大丈夫です、アレじゃないです。そこはちゃんと調べましたから」

虚無を湛えた瞳でミミが頷く。
アレというのは自動調理器に使うフードカートリッジの中身のことである。できたてをそのままシェイクか何かのように飲むのがこのコロニーの名物料理（？）であるらしい。味は……微妙に塩味で常温のムースのような何か……？　微妙に青臭さと生臭さが混じっていてとても美味しくない。腹は膨れるけど。

「そいつは重畳。そろそろ出るか？」
「そうですね……移動時間も考えるとそろそろ準備したほうが良いかもしれません」
「それじゃあ各自身支度をしてもう一回食堂に集合だ」

それから約一時間後、俺達は目的の場所に辿り着いていた。

「いやー、なんというかアレだな。あの移動用トレインは悪くない乗り心地だったな」
「加減速が結構キツかったですけどね」
「船の加減速に比べたらなんでもないわよ。たまに酔う人もいるみたいだけどね」

俺達が移動手段として使ったのは地下に張り巡らされている貨物輸送システムを利用した移動用のトレインだ。非常に安価で、素早く目的地へと辿り着けるのだが、車内は狭く、割と窮屈だった。

車両は貨物の輸送用コンテナに無理矢理座席を付けたような感じで、ギチギチに詰めてもせいぜい六人乗りってところだったな。俺達は三人だけで乗ったが、それでもちょっと窮屈だった。六人乗ったら間違いなくすし詰めだろう。

外の景色は一切見えなかったが、ぎゅんぎゅん動いてなかなか楽しいアトラクションだった。

「それで、ここが例の人造肉工……場？」

「ん？　どうした？」

様子のおかしいエルマの視線の先にあるもの。それはこの工場の看板だった。

「シエラコーポレーション培養肉製造工場……？」

何か不審な点があるんだろうか？

「ちょっとわたし、用事を思い出したわ。今日は二人で楽しんできて」

「待たれよ」

踵を返してどこかに立ち去ろうとするエルマの肩をガシッと掴む。看板を見るなり何故逃げる？　看板に不審な点は特に見つからないんだが。

「培養肉？　人造肉じゃないんですね？」

ミミが首を傾げる。培養肉？　おお、確かに培養肉と書いてあるな。人造肉とは何か違うんだろうか。

「エルマ？」
「私はちょっと中に入りたくないなー、って」
「でも、もう三人で予約してますよ？　時間ももうすぐです」
「ふーむ？　まぁいいや、連れて行こう」
「いやいやいやいやいやいや……」

露骨に嫌な顔をするエルマを引きずって工場の敷地内へと移動する。正面扉から建物の中へと入り、受付ロビーへと向かうとそこには不健康そうな顔色の痩身の男性が詰めていた。
彼は俺達の姿を認めるなり、ニタァ……とにこやかに笑みを浮かべる。コワイ。

「いらっしゃいませ。ご予約のヒロ様御一行ですね？」
「アッハイ」
「この度は当工場の見学ツアーにお申込いただきありがとうございます。いやぁ……実に久々の見学希望者様でして。スタッフ一同張り切っております」
「ソ、ソウッスカ」

口元が凄く笑みなのに目が怖い。悪意は一切感じられないんだが……なんといえばいいのか。そう、とても楽しそうなのだ。目が爛々と輝いていて、まるで獲物を狙うような……いや違う、まるで玩具を手に入れた子供のような……き、気のせいだよな？

「さぁさぁ、順路はあちらでございます。ナビゲーションに従ってお進みください！」

ガチャッ、と音がして男が手で示した先の扉が自動で開く。うん、別に驚くようなことじゃない。自動ドアくらいなんでもないよな。でも、あの扉なんであんなに重厚なんだ？　金庫かな？

「ヒロ様、行きましょう！」

ミミは男の異様な雰囲気にまったく気づいていないのか、興奮した様子である。今にも俺の手を引いて通路へと駆け出しそうだ。

「わ、わたしはやっぱり遠慮……」

「逃さん……貴様だけは……」

「ちょ、力強っ！？　ひ、引っ張らないでよぉ！」

ミミに引っ張られながらエルマの腕を引っ張って道連れにする。何かヤバい雰囲気だしミミを一人で行かせる訳にはいかない。だからといってここでエルマだけ逃がすのも嫌だ。ふふふ、死なばもろともだ……！

通路に入ると、背後の扉が閉まってガチャリと施錠された。

『工場内の衛生基準を保つために滅菌処理を致します。処理が終わりましたら、次の部屋にお進みください』

機械音声が流れ、ぶしゅーっと音がして室内が薄っすらと白い煙で満たされる。これで滅菌処理されたことになるらしい。

『滅菌処理が終了いたしました。次の部屋にお進みください』

通路の先の扉が開く。そこはちょっとした小部屋になっていた。窓もなく、扉なども入ってきたもの以外には見当たらない。

「何の部屋だ？」

「うーん？　扉は見当たりませんね？」

警戒する俺と、首を傾げるミミ。そして諦めた表情で溜息を吐いているエルマ。

「後悔するわよ……」

エルマがそう言った瞬間、俺達がこの部屋に入ってきた時に使ったドアが閉まって施錠される音が響いた。それと同時にがくんと地面が揺れる。

「部屋が動いているのか？」

そう俺が呟いた時、天井から声が響いた。

『本日はシエラコーポレーションの培養肉製造工場見学ツアーに参加していただきありがとうございます。この部屋は工場内を見学することのできるゴンドラとなっております』

「この部屋そのものが乗り物なんですね」

「椅子もなにもないけどな」

なんとなく腰に下げているレーザーガンの感触を確かめながら当たりを見回す。なんだか落ち着かない。

『当社の培養肉は顧客の皆様に愛されて三百年。紛い物の人造肉とは一線を画した高級食材として重宝されており、そのリピート率は驚異の９３％！　当ツアーでは初期培養から成長工程、加工工程、出荷行程など培養肉の全てをご覧いただくことが可能です。是非その様子をお楽しみください』

「人造肉と培養肉って違うものなのか？」

「そうみたいですね？」

ミミが首を傾げる。エルマは部屋の隅の角に背を預け、目を瞑って完全に視覚情報をカットしていらっしゃった。え、何その対応は。とっても嫌な予感がするんですけど。

『まずは初期培養の様子をご覧いただきます』

壁が透明化し、外の様子が見えてきた。それはまさに工場だった。透明な容器がコンベアで運ばれ、機械によって数種類の液体が注入されていく。液体を入れられた容器は最終的に一箇所に集められ、孵化器のようなものに納められて貯蔵されているようだった。

「あの箱は何なんでしょうね？」

「まったくわからんな」

孵化器のようなものを指さしてミミが首を傾げるが、俺にも皆目見当がつかない。

部屋が進むに連れて恐らく保管されてから時間が経っているのであろう孵化器の様子が見えてくる。

「ヒェッ……」

「あ、あれはいったい……？」

奥に進んでくると、孵化器の透明な器の中に何かが見えてきた。それはまるでミミズか何かのように見える。紐状の肉だ。それは奥の孵化器に行くほどに大きく成長しているようだった。

「嫌な予感がしてきたぞー」

「も、もしかして培養肉っていうのは……」

孵化器のあるエリアが後方に遠ざかっていくのを見送る俺とミミ。

「だから嫌だったのよ」

エルマの言葉が静まり返ったゴンドラ内に妙に響いた。

☆★☆

「この度はご来場ありがとうございました。これからも高品質な当社の培養肉をご贔屓ください」

ニチャア……と粘着質な笑みを浮かべているであろう職員の言葉を背に受けながら、俺達は培養肉の製造工場を後にする。

「うぷ……」

「し、暫くお肉を食べられそうにありません……」

「だから嫌だったのよ……！」

あの後に見たもの？　思い出したくないよ！　肉色の触手めいた生物がひしめくプールとか、電車並みの大きさに肥大化したそれから肉を切り出すところとか……オェッ。アナウンスの内容なんて殆ど覚えてないが、なんでもあの触手めいた生物も元々は牛とか豚のような普通の動物だったらしい。

それを食肉に適するように遺伝子改良を施し、その末に出来上がったのがあの触手めいた生物だ。成長が早く、餌の栄養摂取効率に優れ、成長すると上質な肉になる。知能らしい知能は無く、ただ本能のみで餌を食い、成長するだけの家畜、もう少し見た目に気を遣えよとしか言えない。

「あの施設の目的がわからん……」

「食欲をそそる案内内容ではなかったですよね……」

「だから嫌だったのよ……次は水耕栽培農場だっけ……？　次はまともだと良いわね……」

精神的に披露した俺達は重い足取りで次の見学ツアーへと向かった。

いや本当に、次はまともな場所であって欲しい。

#０４０　工場見学ツアー・お肉編（後書き）

培養肉は触手生物型、不定形肉塊型がメジャーですが、四足歩行生物型、二足歩行生物型、魚型など色々なバリエーションがあります。未加工の生きたままの培養肉を自分で調理して食べるという熱狂的な愛好家もいるようです。

ちなみに二足歩行型とは言ってもヒューマノイド型ではありません。あくまで二足歩行型です。ヒューマノイド型ではありません。大事なことなので二回言いました。良いですね？　―（：３」∠）―

#041　工場見学ツアー・フードカートリッジ編（前書き）

ＢＭネクタールか……！　と感想欄で言われて調べてみたら出てきたラワムめいたクリーチャーにＳＡＮチェック入りかけた……バイオミートこええ。

なお触手型培養肉さんは育成プールに落ちたりしない限り安全です。収容違反は過去に起きたことはありません。ないんです。いいですね？　―（∵３」∠）―（理由はわかりませんが工場から一定以上離れると自然死するようになっているようです

#041　工場見学ツアー・フードカートリッジ編

「ええと、マイカコーポレーション……ここですね」
「ここか……」
「うわぁ……」

多分、俺もエルマと同じような顔をしていると思う。だって、このマイカコーポレーションの水耕栽培農場って、さっき見学したシエラコーポレーションの培養肉工場と見た目が瓜二つなんだよ……同じ食料品工場ということで、同じような建築ユニットを使っているとか、そういう感じなんだろうか？　看板と色がちょっと違うだけの同じ建物にしか見えない。

「と、とにかく入りましょう」
「そうだな……」
「そうね……」

半ば諦めたような心地で俺達は工場の正面入口から内部へと足を踏み入れた。

「内装は違うんだな」
「そうですね」

さっきの培養肉工場と同じで俺達以外の姿が見当たらないのは同じだが、こちらの水耕栽培農場のほうが全体的に明るかった。照明の違いだろうか？　こちらのほうが明るく、なんとなく清潔なイメージが湧いてくる。

「いらっしゃいませ。ご予約のヒロ様御一行ですね？」
「はい」
受付で俺達を待っていたのはいかにも企業の受付嬢と言った感じの穏やかそうな外見の女性だった。スチュワーデスさんのような制服をきっちりと着込んでおり、清潔感がある。さっきの培養肉工場のちょっと怖い受付の男性に比べるととても好印象である。
「この度は当工場の見学サービスにお申込いただきありがとうございます。実に久々の見学希望者様でして。スタッフ一同張り切って――ええと、何か？」
デジャヴを感じる言い回しに俺の顔が引きつる。恐らくミミとエルマの顔も同じようなことになっていたのだろう。受付嬢さんが不思議そうな顔で首を傾げた。
「いや、実は今、シエラコーポレーションの培養肉工場を見学してきた直後でな……」
「ああ……あの趣味の悪い誰が得をするのかわからないツアーを……いえ、他社のことを悪く言うのはマナー違反かもしれませんが、あそこはちょっと酷いですよね。当社の工場と同じユニットを使っておりますから、当社の工場と見た目も似ていますし」
受付嬢さんはそう言って苦笑いを浮かべた。一応把握してるんだな、他社のツアーのことは。
「ご安心ください、当社の工場見学ツアーは真っ当な内容ですから。少なくとも、お客様に青い顔をさせるようなことは決してありませんので」

にっこりと受付嬢さんが微笑む。その笑顔に心の中の不安がじんわりと溶かされていくような感覚を覚えた。

「本当に頼むぞ……」

「ええ、ご安心ください。見学ツアーを始めるにあたって全身の滅菌が必要になります。あちらの扉にお進みください」

受付嬢さんの案内に従って扉へと進み、シエラコーポレーションの時と同じように滅菌処理を受ける。プシューって出てくるこの煙が滅菌を行うのだろうか？　大丈夫なのか、この煙。人体に影響とか無いんだろうか？　まぁ、技術が進んだ世界だし心配はいらないか……？

案内に従って次の部屋に進むと、そこはゴンドラ室ではなく壁がガラス張りになっている回廊だった。どうやらこの工場では自分の足で工場の様子を見て回るようになっているらしい。

「うわぁ、明るいですねー」

「そうだな。まるで本物の日の光みたいだ」

「個々に説明があるわよ。んー、あの光は育成に適した波長の光を発する特別な照明みたいね」

「……太陽灯みたいなもんか」

とあるゲームで季節に関係なく作物などを得られるようになる同じような設備があったのを思い出す。結構電力を馬鹿食いしたと思うのだが、電力に関してはこの世界なら如何様にでもなるのだろう。クリシュナにだって仕組みこそ不明だけどものすごい出力を誇るジェネレーターが積まれているわけだしな。

「何を育てているんでしょう？」

「うーん？　なんだろうな。クレソン、か？」

ステーキとかの添え物に置かれるクレソン。そのクレソンに似たものが大量に栽培されているようだ。

「栄養価の高い野菜なんですって。そのまま食べると少し辛味があるそうよ。フードカートリッジに加工されるんだって」

エルマがガラスのような素材でできた壁に表示された説明を読んで教えてくれる。ふーむ、なるほど。藻やオキアミみたいな生物が主な材料って聞いてたけど、こういう野菜も入っているのか。

クレソンのような野菜の世話は広大な空間を飛び回るドローンのようなロボットや、水耕栽培農場に張り巡らされているレールを移動するロボットアームのようなものが行っているようだ。高度にオートメーション化されているんだな。

そんな光景を観察しながら進むと、今度は巨大な円形のプールがいくつも設置されているエリアに辿り着いた。

「緑色のプール……藻か？」

「そうみたいですね。フードカートリッジの原材料となる藻を生育する施設のようです」

ここも作業はほぼオートメーション化されているようだ。ロボットアームが網のようなもので緑色の藻を収穫したり、何か茶色い粉末を散布したりしているのが見える。

「あの茶色い粉末はなんなんだろうな？　肥料か？」

「えーと……うげ」

「どうしたんですか？」

「あれ、色々な船から回収した生活廃棄物らしいわ」

「生活廃棄物って……」

「Oh……」

つまりあれは、人々が日常的に排出するアレとかソレをブロック状に固めたアレということか。糞便だけじゃなく、生ゴミとか、風呂やシャワーの水を濾過して得た老廃物とか、そういうものも全部含めてのアレだけど。うちの船でも当然出るので、定期的に港湾管理局に委託された回収業者が回収に来る。

「まぁ、リサイクルだよな。そもそもの原材料はこれなわけだし」

「それはそうだけど……」

「微妙な気分ですよね」

「そうは言うけどな、俺が住んでた地球では農作物の肥料として糞便の類を使うのは普通のことだったぞ？　人糞を使うことは昔に比べれば減ってたと思うけど、それでも家畜の糞とか、油を絞った後の植物の種子の残骸とか、そういうものを使ってたはずだ。昔は人糞も使ってたみたいだけどな」

今も使っているのかも知れないが、肥溜めなんて実際には見たこと無いしな。個人単位では使ってるところもあったのかも知れないが、俺はそこまで農業事情に詳しくないから知らん。

「ふーむ、流石は未開惑星生まれの知識ね」

「未開惑星って言われるとすげぇ微妙な気分になるからやめろ。確かにこの世界の技術はどれだけ進んでいるのか想像もつかないけど」

そんなことを話しながら進むと、今度は別のプールが見えてきた。

「こっちはオキアミの養殖プールか」

「動物性プランクトンの養殖プールみたいね。こっちでも生活廃棄物を原材料としたものが飼料として使われているみたい」

「そういえば、さっきの培養肉の工場でもそんなことを言っていた気がします」
「あっちだと解説を聞いている余裕なんて無かったよな……」
脳裏に過ぎる肉色のプール。爛々と目を輝かせて電車並みの大きさの触手生物から肉を切り出す工場員……うん、完全にＳＡＮチェックものだったわ。解説とかがうまく頭に入ってこなかったのはＳＡＮチェックに失敗してたからかもしれん。
そんなことを話しながら進むと、今度は完全に工場のような区画に出た。

「おー、ここでフードカートリッジに加工するわけだ」
「なんか、割と雑に見えるわね」
「材料を全部まとめて加工機械に放り込んでますね」
ベルトコンベアーで運ばれてきた材料が加工機械に入れられ、その器械の出口からペースト状になったものが出てくる。

「アレ、アレだよな」
「アレですね」
「なによ、アレって」
「アレインテルティウスコロニーの名物料理……」
「ああ……」
エルマが俺達の顔を見て気の毒そうな顔をする。ふふ、忘れはしないぞ、あの姿。薄緑色のペーストを眺めるミミの目が虚無っていた。きっと俺の目も虚無っている。虚無っているって表現、新しいよな。ハハハ。
「あのペーストが更に加工されてフードカートリッジになるわけね」

「そうみたいだな。そして自動調理器を通してみんなの胃袋に入るわけだ」
「高級カートリッジはここでは作っていないみたいですね」
確かにミミの言う通り、ここで作られているのは普及型のフードカートリッジだけであるようだ。高級カートリッジは普及型カートリッジに比べると一個あたりの値段が五倍くらいする。味も五倍、とはいかないが普及型カートリッジよりは二倍くらい美味しい。
「高級カートリッジの製造工程もちょっと見てみたいけど、まぁ材料が多いとかなのかね？」
「そんなに代わり映えはしなさそうよね」
更に進むと、食堂のような場所に出た。
『できたてのフードカートリッジで食事をお楽しみいただけます！当社と提携している自動調理器メーカーの自動調理器が目白押し！　是非お試しください！　ご購入の相談も承ります！』
そんな案内板があり、確かに見てみると色々なメーカーの自動調理器が設置されているようだった。テツジンシリーズは無かったけど。
「なるほど、割とよくできた仕組みだな」
「お客さんが少ないのに採算が取れるんでしょうか？」
「こんなツアーに来るのなんて基本お金持ちでしょ？　自動調理器は結構高いし、月に何台か売れれば黒字なんじゃないの？」
「なるほど」
頷きながら『フードカートリッジはこちら』と書かれている壁の

ボタンを押すと製造ラインからできたてのフードカートリッジが輸送されてくるライブ映像が臨場感のあるＢＧＭと共にホロディスプレイに表示され、ジャジャーン！　という派手な効果音付きで壁から飛び出てくる。ちょっとおもしろい。

ミミとエルマもやってみたが、どうやらＢＧＭやライブ映像を中継するカメラワークは何パターンかあるらしい。二人がやってみると俺とはまた違う感じになっていた。

「楽しいですね、これ」

「子供とか面白がって何回も押しそうね」

それぞれ感想を述べながら自動調理器コーナーへと移動する。

「どの自動調理器にしましょうか？」

「メーカーごとにそんなに違うもんなのかね？」

「三人とも同じメニューを注文して食べ比べてみない？」

「それはいいな、やってみるか」

ということで、三人揃って別々のメーカーでオムライスを頼んでみた。同時に出来上がってきたオムライスを三人で分けてそれぞれ食べ始める。

「ん……結構違うな？」

「そうね、味付けとか食感が結構違うわね」

「これは好みが分かれそうですね……私はキルケー社のが好きです」

「俺はムラクモ社のが良いな」

「私もキルケー社のが良いわね」

ちなみに誰にも選ばれなかったシーマズ社のものも不味くはなかった。十分食えるレベルだ。

「メーカーによって得意とする料理が違うのかもな」
「それはありえますね」
「全部を試すのは無理よねぇ」

もしかしてカレーライス系が美味いメーカーとか和食が美味いメーカーとかがあるのかもしれない。うちのテツジンは何でも美味いけど。高いだけはあるよな。
ちなみに、試してみたら食後のデザートのプリンはシーマズ社のものがダントツで美味かった。やはりメーカーによって得手不得手があるようである。

「金持ちの家だとこの料理はこっちのメーカー、デザートはこっちのメーカーみたいな感じで自動調理器を複数置いたりするのかね？」
「場所さえ確保できるなら複数の自動調理器を置くってのは贅沢の一つとしてアリかもしれないわね」
「でも、複数揃えるならテツジンみたいな高性能自動調理器を一つ買うほうが色々と経済的かも知れません」
「確かに」

複数置くとなると自動調理器を置くスペースも広くとらなきゃならない。こと宇宙空間において安全に生存できる空間というものは貴重なものである。広いスペースを確保するのには高いコストを支払う必要があるというわけだ。それならミミの言うように高性能なのを一つ置いたほうがトータルコストは安くなりそうだ。
お茶などを飲みながらのんびりと休憩し、俺達は水耕栽培工場を後にした。

「お酒♪　お酒♪」

次の目的地へと歩くエルマの足取りは軽い。それもそのはずで、次に見学をするのは酒類の製造工場なのだ。エルマのテンションは上がりに上がり、留まるところを知らない。

「次もまともなところだといいな」

「そうですね。多分大丈夫だと思いますけど」

スキップしているエルマの後を追いながら俺とミミは笑みを交わすのだった。

＃０４１　工場見学ツアー・フードカートリッジ編（後書き）

さけがさけがのめるぞー――（：３」∠）―

#０４２　工場見学ツアー・酒編

足取りの軽いエルマを追いかけて移動すること十数分、俺達は工場見学ツアーの最終目的地へと辿り着いた。

「コーリュービバレッジの工場ね！　コーリュービバレッジは帝国有数の酒造メーカーよ！　酒と呼ばれるものなら大体何でも作っているけど、キレとコクのあるビールが一番有名ね！」

コーリュービバレッジの工場前に辿り着いたエルマが俺達に振り返って目を輝かせながら解説をする。工場見学に来たのに同行者に解説されるというのはどういう状況だ。なんか振り向いたエルマの周りにキラキラしたエフェクトが散ってるし……なんだあれ。

「なぁミミ、なんかエルマキラキラしてない？」
「してますね……エルフの魔法でしょうか？」
「えっ、何それ初耳。そんなのあるの」
「私も詳しくは知らないですけど、あるみたいです」

マジか。魔法要素のない宇宙エルフだから残念宇宙エルフだなとか思ってたのに、実は魔法が使えたのか。全然そんな素振りを見せないんだけどな。

「さぁ入りましょう！　すぐ入りましょう！　ハリーハリー！」

エルマのテンションはＭＡＸだ。未だ嘗てこんなにテンションの高いエルマは見たことがないな。俺はミミと顔を見合わせて、互いに苦笑をしながら工場へと突撃していくエルマの後を追った。

他の工場と同じように受付嬢から案内を受け、滅菌室に入ってから工場内へと移動する。ここは流石に大手メーカーというだけあって、俺達以外にもツアー客がいた。見学客が通る専用通路も清掃が行き届いており、非常に雰囲気が良い。

俺達以外のツアー客はやはり人間が多いな。グラッカン帝国の主要な種族は人間らしいし、当たり前といえば当たり前か。エルフはエルマ以外には殆ど見たことがないんだよな。レア種族なのかね。

人間以外の種族だと……トカゲ人間っぽいのと、両生類と魚類を足して二で割ったようなのと、縦に長いイソギンチャクめいたのと、ケモミミと尻尾の生えた人間っぽいのだな。あのイソギンチャクめいたのとはコミュニケーションを取れるのだろうか……？

「ヒロ、ぼーっとしてないで行くわよ！　試飲コーナーに！」

「待て待て、ちゃんと工場見学させろ。酒を飲むだけなら船で飲んでも同じじゃないか」

「で、出来たてを飲むのはまた違うのよ……」

「いいから、焦るな。この後は予定なんて無いんだから、焦る必要は無いだろ？」

「うぅ……」

長い耳をしょんぼりと下げて頬を膨らませるエルマ。おやつを我慢しなさいって怒られた子供か何かか君は。

「これはエールを作っているのか」

「ビールね」

「……うん、ビールね」

シュワッとしないならエールだと思うんだけどな、俺は。いや、正確な定義とかはしらないけれどもね。この世界ではシュワッとしなくてもビールなのだ。そう納得しておこう。しかし、この世界で

は不自然なほどに炭酸系飲料が見当たらないんだよな……やはり宇宙進出の過程で存在そのものが忘れられたんだろうか？　無重力環境下ではお世辞にも飲みやすいものではないものな。ありえそうな話ではある。

「ビールの製造工程には特に感動するところはないな。まぁ機械作業のスピードは早いし、正確だから規則正しく機械が動くのを見るのが好きな人はいくら見てても飽きないかもしれんが」
「そんな人いるの？」
「私、結構好きですよ。なんというか、気持ち良い感じがしますね」
「私にはちょっとわからない世界ね」

工場の様子を眺めながらエルマが肩を竦める。俺も結構好きだけどな、規則的に正確に動く機構をじっと見てるのって。こういう製品を大量生産する工場って割と見てて飽きない気がする。
暫く機械の動く様子を眺めて満足した俺達は次のエリアへと向かった。次は果実酒の製造コーナーか。果実を圧搾して荷重を絞り出して、発酵させる過程でも見せてくれるのかな？　と思っていたのだが、現実は俺の予想の斜め上を行った。

「果樹園？」

そう、次のエリアは果樹園のような場所だった。広大なスペースにぶどう畑のような広がっており、育成用のドローンやロボットアームが忙しそうに飛び回り、働いている。先程見てきたフードカートリッジの工場と同じような感じだ。

「そうね。お酒の実がなる畑ね。ここはワインの畑みたい」
「ワインの畑……？」

一体エルマは何を言っているんだ……？　首を傾げながら進むと、採れたての『ワインの実』の有料試食コーナーがあった。端末でエネルを払うと、収穫したての新鮮な『ワインの実』を食べることができるらしい。

「食べてみましょう。コーリュービバレッジはワインも美味しいのよ」

「ワインって私飲んだことがないんですよね。ちょっと楽しみです」

意味のわからない事態に首を傾げていると、エルマが自販機のようなものに端末を翳して代金を支払い、紙コップのようなものに入った一粒が巨峰のような大きさの濃い紫色の果実を受け取った。

彼女は何の躊躇もなくその果実をひょいと口に放り込む。

「んんー、お酒もいいけどワインの実も美味しいわね。ほら、ミミも食べてみなさい」

「良いんですか？　それじゃあ……」

エルマに勧められてミミも果実を一粒摘まみ、口の中に放り込む。

「んんっ……思ったより酸味はきつくないですね？　渋みもあまりありません」

「お酒にする時は皮と種も一緒に圧搾するから。実のまま食べる場合はわざわざ種や皮を噛み潰したりしないでしょ？　だから渋さを感じないのよ」

「なるほどー。でも、ちゃんとお酒の味も香りもするんですね……美味しいですけど、沢山食べると酔っ払っちゃいそうです」

不思議な会話をしている二人にススススっと近づいてみる。

「ヒロも一粒食べる？　いくら下戸っていっても一粒くらいなら大丈夫よね？」
「多分……？」
「じゃあはい、あーん」
「あーん」

エルマの言葉に素直に従って口を開けると、エルマがワインの実とやらを一粒摘んで俺の口に放り込んでくれた。うん、まさにブドウっぽい舌触りだ。果実を噛み潰してみる。

「！？」

その途端、口の中に酒精の香りが爆発した。果肉からジュワリと染み出してくる果汁はまさにワインそのものだ。ミミの言うように渋みがないぶん幾分ワインとしては味が大人しい気がするが、この味は間違いなくワインだと思う。

「果実がアルコールを含んでいるのか……？　そんなんアリ？」
「ヒロの常識とは違うみたいね」
「俺の知ってるワインは、ブドウっていうこのワインの実と似たようなものを潰して発酵させて、それから圧搾して熟成させる、って感じで作られていたんだ」
「伝統的、というか原始的な作り方ね。二千年くらい前まではそうやって作ってたらしいって聞いたことがあるわ。今はワインの実から作られるのが一般的よ？」
「品種改良、いや遺伝子工学の発展の賜物か……とんでもねぇな」

口の中に残ったワインの実の皮と種を飲み下しながら唸る。身体が火照ってきた。たったこれだけで顔が赤くなってきたのを自覚する。ううむ、相変わらず酒には弱いな、俺。

「ヒロ様、顔が赤くなってますね」
「ぷぷっ、ちょっと可愛いわね」
「うっせ。俺は酒を飲むとすぐ顔にでるんだよ……ビールも缶一本でベロベロになっちまうしな」

ミミがなんだかにこにこしながら俺の顔を眺め、エルマがヒョイヒョイとワインの実を口に運びながらクスクスと笑う。なんとなく熱くなっている頬が気になって顔を逸らして片手で頬を隠してしまった。更にニヤニヤされる。くそう。

「次だ次、次に行くぞ」
「はいはい、次に行きましょうねー。ヒロちゃーん」
「ヒロちゃん……ふふ」

先に歩き出すと、二人はニヤニヤしながらも後をついてきた。くそう、ここは俺にとって鬼門だったのかもしれん。

さて、お次は醸造酒エリアである。醸造酒エリア、なのだが……？

「森……？」
「あれは蒸留酒の木ね」
「蒸留酒の木」
「ええ、木から取れる天然ウィスキーは高級品よ。合成ウィスキーとは風味も味も別物ね」
「合成ウィスキー」

もうなんかわけわからんね。天然ウィスキーってなんじゃらほい。

「ええと、その天然ウィスキーとやらはどうやって作ってるんだ？」

「それを学ぶツアーでしょ、これ。ほら、あそこに解説があるわよ」
エルマの指差す先には解説のホロ動画を表示してくれるホロディスプレイがあった。ボタンをポチッと押して動画を再生してみる。
要約すると、あのウィスキーの木の樹液が天然ウィスキーと呼ばれるものであるらしい。メープルシロップよろしく、木に傷をつけるとウィスキーは樹液としてしみ出してくるとか。なんだそのやべー木は。よく燃えそうだな！
ちなみに合成ウィスキーというもののことも解説されていて、コーリューービバレッジでも廉価製品として合成ウィスキーを製造しているそうだ。ここでは作ってないようだけど。あっちは生成したアルコールに香料などを混ぜてウィスキーっぽくしたものであるらしい。
天然物が人気だが、値段の安い合成ウィスキーを広く親しまれているという。

「んー！　やっぱ天然物は美味しいわ！」
「さよか」
「けふっ、こふっ……ちょ、ちょっと私には強すぎますね」

試飲用のショットグラスに入ったウィスキーを一息で飲み干しながらエルマが満面の笑みを浮かべ、ミミが目を白黒させてむせる。むせるミミの背中を擦ってやりながらエルマが二杯目を購入するのを眺める。お前、べろんべろんになるまで酔うなよ……？
俺の内心の懇願も虚しく、工場見学が終わる頃にはエルマはベロンベロンに酔っ払ってしまっていた。ミミも何度か試飲をしたせいでちょっとフラフラしている。

「えへへぇ……ヒロぉ……」
「す、すみません、ヒロ様……」

絡みついてくるエルマを抱き留め、フラフラしているミミを支えながら俺はなんとかクリシュナまで帰り着くことができた。
そして、良いが覚めた後にエルマが自分の端末を見て青ざめていた。何かツアーの出口で端末を持って機嫌よく職員の人と話していたと思ったら、試飲して美味しかった高級酒をかなりの数大人買いしていたらしい。その額、なんと１０万エネル。

「お前……俺にまだ１エネルも返済してないのに１０万エネル大人買いって良い度胸してるよな」
「あ、あは、あはははは……許して？」

エルマが手を合わせて可愛らしく首を傾げる。ははは、こやつめ。

「二週間禁酒。もしこっそり酒を飲んだら……ふふ。俺が一昨日味わったやつをエルマにもじっくりたっぷりねっとりと味わせてやる。ショーコ先生曰く、慣れたら病みつきだそうだぞ？」
「ヒェッ……禁酒しましゅ……」

エルマが涙目でガクガクと頷く。即座にやらない辺り、有情な対応だろう？　反論は認めない。
そんなハプニングを交えつつ、俺達三人は三日間の静養を取った。それが結果として面倒事を引き寄せることになると知っていればとっととこの星系を離れていたのだが……後の祭りである。
それは静養明けの朝にクリシュナに直接訪れてきた。

「お久しぶりですね、シルバーランク傭兵のキャプテン・ヒロ」

予想外の客人だった。
整った目鼻立ちに輝く金髪、紅い瞳、そして純白の軍服に赤いマ

ント。腰に立派な剣を差した美貌の女軍人。そう、ターメーン星系にいるはずのセレナ＝ホールズ大尉がクリシュナにやってきたのだ。

#042　工場見学ツアー・酒編（後書き）

アイエッ！？　ナンデ！？　セレナ＝サンナンデ！？　―（：3」∠）

―

#043　お断りします（゜ω゜）

「あら、なかなか良い茶葉を使っているんですね」
「それはどーも」

クリシュナに応接間などというものはないので、セレナ大尉には食堂に腰を落ち着けてもらった。今はミミが出したお茶を優雅な仕草で飲んでいらっしゃる。
正面に座るセレナ大尉に対して、俺達三人は対面に三人で並んで座っていた。中央、セレナ大尉と真正面から対峙する形で俺。その左右にミミとエルマである。

「それで、ええと……何の御用で？」

俺の問いに彼女はニッコリと微笑み、そっとお茶の入ったマグカップをテーブルの上に置いた。うん、小洒落たティーカップやらソーサーやらは俺達みたいな一般人の船には用意が無いんだ。

「ふふ……お誘いに来ました」

笑顔のままそう言い放ったセレナ大尉に対し、俺達は互いに顔を見合わせた。恐らく、この瞬間俺達の考えは完全にシンクロしていたと思う。どこまで執念深いんだこの女は、と。

「私、狙った獲物は逃さないタイプなんですよ」

ヒェッ……怖い！　ニコニコしながらそんなことを言われて背筋が寒くなる。左右から俺の腕が抱え込まれた。俺のことは渡さない

というミミとエルマの意思表示だろうか……右腕だけ幸せだな。左腕？　ああ、うん、固くはないかな？

「見せつけてくれますね」

「これは失敬。二人とも」

俺が声を掛けるとミミとエルマは渋々といった様子で俺の腕を解放した。もう少し味わっていたかったが、仕方があるまい。というか流石に空気を読んでくれ。どう考えてもセレナ大尉の狙った獲物云々はそういう意味じゃねえだろう。

「ええと、何度かお断りしたはずですが、俺は帝国軍に入るつもりはありませんよ」

「はい、存じていますよ。とても残念です」

セレナ大尉が笑顔を崩し、いかにも悲しげな表情を作って悩ましげに溜息を吐く。実に芝居がかった仕草だ。この人は意外とお茶目な人なんだろうか？

「仕方がないのでそこは諦めましょう。あまり強引に勧誘して傭兵ギルドに目をつけられるのもよくありませんしね。私は傭兵ギルドと仲良くしたいんですよ」

「なるほど……？」

だとしたら、この人は何をしにここに来たというのだろうか。俺は軍には入らない。それを認めた上で俺に会いにわざわざクリシュナまで足を運んで、狙った獲物は逃さないなんて宣言する理由はなんだ？

「まさか、帝国貴族の権力を振りかざすつもりじゃないですよね？」

「それこそまさかです。そんなことをしたら貴方はベレベレム連邦に逃げるでしょう？」
「……」
沈黙を以って答える。ここで『そうですね』などと返すのはまずい。相手は帝国軍人だからな。
「ところで、私昇進したのですよ。先日のターメーン星系防衛戦での活躍が認められたんです。ほら、階級章も変わっているでしょう？　今の私はセレナ・ホールズ少佐というわけです」
「それはおめでとうございます」
肩の階級章らしきものを指差しながら笑顔で昇進の報告をするセレナ大尉――いや、セレナ少佐に素直に賛辞を述べる。まさか昇進の報告をするためにわざわざ来たというのか？　ありえないだろう。俺は警戒レベルを引き上げた。
「私が昇進できたのもキャプテン・ヒロ、貴方が先日の防衛戦で獅子奮迅の活躍をしてくれたからです。何故か結晶生命体が敵艦隊を襲うという幸運も大きかったですね。何故か」
「ははは、運が良かったですね。あの時は丁度敵艦隊に突っ込んでいたところだったので、俺は肝が冷えましたが」
内心冷や汗が出てくる。大丈夫だ、俺が歌う水晶を使って結晶生命体を召喚し、ベレベレム連邦の攻撃艦隊に擦り付けた件はバレようがないはずだ。落ち着け、俺。
「ふふ、そうですね。とても良いタイミングでしたね。まぁ、そこは追求するつもりはないのでご安心ください」

セレナ少佐がニッコリと微笑む。貸し一つだぞ、という顔だ。くそう、貸しも何もあるかよ。俺がああしなきゃまず間違いなく星系軍に大きな被害が出てたんだ。むしろ俺が貸してるんだよ。

「ははは、何のことだかわかりませんが、俺の行動がセレナ少佐のお役に立ったのであれば幸いですね」

「ふふふ」

「ははは」

不気味に笑うセレナ大尉と俺のやり取りが怖いのか、ミミが微妙に震えている。

前は上手く手玉に取られたが、二度も同じ失敗をする俺ではない。今回は最初から警戒度ＭＡＸだからな。そう簡単にいくと思われては困る。

「それで、そろそろ本題に入りませんか？」

「そうですね。私は昇進と同時に新設された新たな部隊を指揮することになりました」

「それはおめでとうございます、で良いのでしょうか」

「ええ、私にとっては嬉しいことです。前々から帝国軍上層部に具申していた対宙賊独立艦隊の設立が認められ、その指揮を任されたわけですからね」

「対宙賊独立艦隊……？」

「はい。ごく大雑把に言うと、帝国航宙軍は大きく二つに分けられます。各恒星系のコロニーや要塞に駐屯し、他国からの侵攻や恒星系の治安維持に務める防衛艦隊と、他国からの攻撃艦隊を撃滅したり、他国への攻撃を担ったりする機動艦隊の二つですね」

「なるほど」

「主に星系軍、と呼ばれる防衛艦隊に所属する総戦力は多いですが、広大な帝国領域をカバーするために戦力は分散しがちです。なので、

宙賊や宇宙怪獣の類を積極的に攻撃するのにはリスクが伴うことが多く、守勢に回りがちなのですね。下手に被害を出して治安維持を満足にこなせなくなると致命的な事態を招きかねませんから。なので、綿密な計画を立て、戦力を整えて完封できるような状況でもないと星系軍がそういった脅威を積極的に排除することはできないわけです」

「理解できます」

脅威の排除のために星系軍が大きな被害を受けると、星系軍が動けなくなったという情報が瞬く間に周辺星系の宙賊へと拡散されて大挙して押し寄せてきかねない。ほぼ完封したような状況でも整備のために巡回は少なくなるわけで、それを狙って『流れ』の宙賊が増えるくらいなのだから。

大被害を受けてほとんど機能不全、なんて状態になったと知れ渡ったら『流れ』の増加程度では済まなくなるだろう。最悪、コロニー襲撃とかそういう事態にまで発展するかも知れない。

「だからといって機動艦隊をみだりに動かすわけにもいきません。機動艦隊は帝国最強の剣であり、盾でもあります。その運用には莫大な費用がかかりますし、下手に動かすとその隙を狙って隣国が攻め寄せてくる可能性もありますから」

「つまり、遊撃戦力が足りてないと。今はそこを傭兵が担っているわけですか」

「そういうことです。それを傭兵任せにするのではなく、帝国軍でも遊撃戦力を作ろうというのが今回新設された対宙賊独立艦隊というわけですね」

「理解できました。ですが、その艦隊の指揮官であるセレナ少佐がわざわざ俺の船に足を運ぶということとどうにも繋がらないのですが」

つまり、帝国航宙軍が自前で戦力を用意して傭兵の商売敵になりますよという話である。とは言っても一艦隊でカバーできる範囲などたかが知れているので、独立艦隊が活動している恒星系を避ければ良いだけの話だ。正直『ふーん、頑張ってね』くらいの感想しか出てこない。何故指揮官自らが俺の船まで足を運んで、そんな話をわざわざ聞かせるのか理解に苦しむ。

「ええ、そこで貴方を勧誘に来たわけです」

「……」

帝国軍には入らないって何度も言ってるだろいい加減にしろ、という視線を送る。

「そこまで露骨に拒否されると逆に燃え――んんっ！　なんでもないです。つまりですね、依頼をしたいんですよ。宙賊退治のプロフェッショナルである貴方に」

「依頼ですか」

傭兵ギルドを通した依頼ならまぁ、内容によっては受けることも吝かではないな。なんか不穏な言葉が聞こえた気がするが、スルーしておこう。俺は見えている地雷を踏みに行くような馬鹿じゃないんだ。

「具体的にはどのような内容で？」

「私達帝国航宙軍には艦隊として敵艦隊や敵拠点を攻撃するノウハウは心得ていますが、少数で無軌道に動き、場当たり的に民間船などを襲う宙賊に対するノウハウがありません」

「それはそうでしょうね」

そもそもからして身につけている戦術が標的とマッチしないのだ。

運悪く独立艦隊の前に出てきた宙賊は一瞬でスペースデブリに早変わりするだろうが、宙賊だって馬鹿じゃない。独立艦隊が近づいてくれば逃げるなり隠れるなりするだろう。

「そこで、宙賊退治のプロフェッショナルである貴方にそのノウハウを教えていただきたいというわけです」

「なるほど。話はわかりました」

「では？」

セレナ少佐が期待に目を輝かせる。

「お断りさせていただきます」

そして俺のにべもない言葉でピシリと笑顔のまま表情を凍りつかせた。

「な、何故ですか……？」

「いや、俺が受ける必要なんて無いでしょう。むしろ傭兵ギルドに話を持っていって、傭兵ギルドから直接ノウハウを学んだほうが良いのでは？　出自の怪しい俺なんかよりもよほど適切な教官を選出してくれると思いますよ」

もっともらしいことを言っているが、面倒臭いだけである。報酬額はまだ聞いていないが、恐らく俺達が普通に宙賊を狩って手に入れる金額よりも多いということはあるまい。そしてどう考えても拘束期間が長いに決まっている。報酬が安い上に長期間拘束されるとか俺にとってはデメリットしか無い。

「私は貴方からノウハウを学びたいんです」

「嫌です」

「何故そこまで頑ななのですか？」

セレナ少佐が可愛らしく頬を膨らませる。うん、美人はどんな顔をしても様になるな。でもな、頑なに断る理由は単純明快だ。

そんなのあんたが面倒臭そうな女だからだよ！　察しろよ！

などと言えるわけもないので、適当な理由を考えようとする。何せ相手は帝国貴族だ。この帝国の法律には詳しくないのでわからないが、貴族なんてものが存在するのだから侮辱罪などがあってもおかしくはない。

「報酬が期待できそうにない上に拘束期間が長そうだからです。逆に、何故そこまで俺に拘るんですか？」

「それは貴方の発想とそれを実行する度胸が図抜けているからです。あれだけいる傭兵の中で、独自の作戦を立案してきたのは貴方だけでしたし、その作戦内容は一見無謀としか思えないものでした。しかし、貴方はそれをやり遂げて結果を出しました」

これは褒められているんだよな。ちょっとこそばゆい気分だ。

「それに、あの結晶生命体の擦り付けです。あれは歌う水晶を利用したのでしょう？　ああ、答えなくて結構です。証拠もありませんしね。ああいう大胆かつ残忍な手を躊躇なく実行できる貴方であれば、帝国軍の強力な艦艇を最大限に利用して『えげつなく』宙賊のゴミどもを抹殺する戦術を私に教示してくれるのではないかと、そう思っているんです。だから、私は貴方にお願いしたいんです。本当は部下として貴方が欲しいんですけれど、それは嫌なのでしょう？」

「嫌です」

本日二度目の嫌ですを叩きつける。しかしこの人全く堪えている様子がない。メンタル強すぎない？

「部下にすることは諦めます。とりあえずは。その代わり、私に協力して欲しいのです。軍からの報酬だけで足りないのであれば、個人的に私が何か便宜を図るということもできます。私は侯爵家の娘ですし、帝国軍の佐官ですから。私とのコネクションは何かと役に立ちますよ？」

そう言ってセレナ少佐がニッコリと微笑む。ミミに視線を向けてみるが、私では判断できないですと言いたげにふるふると首を横に振る。次いでエルマに視線を向けてみると、そっと耳元で囁かれた。

「帝国貴族の佐官にここまで言わせて突っぱねるのは逆に面倒になりかねないと思うわ」

つまり、受けろということか。正直気が進まない。気が進まないが、エルマの言うことにも留意する必要はあるだろう。あまり頑なに断ってこじれるのも確かに面倒だ。あちらは何度も俺にラブコールを送ってきているわけだし、今回に至ってはわざわざこちらに足を運んでさえいるわけだ。こちらを呼び出すわけでもなく。これは俺に対して最大限に配慮していると捉えるべきだろう。俺としてはちっとも嬉しくないが。

「貸し一つですよ。契約に関してはきちんと傭兵ギルドを通してください。確か指名依頼の制度があった筈なんで」

「拘束期間は尉官待遇で三十日としましょうか。つまり、独立艦隊内での上位者は私のみということです」

「なし崩し的に帝国軍に組み込まれるのは遠慮願いたいので、一日

の拘束時間は基本的に十時間までとしてください。何が何でも定時で上がらせてもらいます」
「ちっ……良いでしょう」
舌打ちしやがったぞこの女。どうするつもりだったんだよこええよ！
「あと、俺が持ってるノウハウはあくまでも傭兵としてのもの、それも単艦で宙賊を狩るためのものです。仕事としてやる以上は全力を尽くすつもりですが、独立艦隊の運用に寄与できるかどうかは保証致しかねます」
「そうでしょうね。それは理解できます。ですが、それは私達が上手に噛み砕いて吸収すれば良いだけの話です。帝国軍人は優秀ですから、ご心配なく」
セレナ少佐が笑顔のまま答える。交渉がまとまりそうだからか、機嫌はかなり良くなっているようだ。
「あとは報酬ですが……エルマ、適切な金額ってどれくらいになるんだ？」
「難しいわね。戦術講師として傭兵が軍に招かれることなんて無いだろうし、前例がないと思うわ。ただ、日数拘束型の護衛依頼であれば一日あたり概ね三万エネルから五万エネルってところが相場ね」
「命の危険がある護衛任務というわけではありませんから、もう少し安くなるのでは？　それに、その報酬は護衛依頼をこなせる船団向けの依頼の報酬額ですよね？」
エルマの提示した金額にセレナ少佐が即座にツッコミを入れる。抜け目ないなぁ。恐らく事前にある程度調べてきたんだろうな。そういうところは抜かりがなさそうだもの、この人。

「でも、ヒロは普通に狩りに出れば一日平均２０万エネルは稼ぐのよ？　一ヶ月拘束されて儲けが四分の一以下になるんじゃ流石に割に合わないわよ。私達傭兵は慈善事業家じゃないんだから、利益がなければ動かないわ。当たり前のことだけど」

セレナ少佐の反論に鋭く切り返してエルマが肩を竦める。実際には毎日２０万稼げるわけじゃないし、休養だってするから三十日で６００万エネル稼げるってわけでもないけどな。

ただ、拘束期間中は何か美味しい依頼が発生しても参加できないわけだし、機会損失が無いわけではないよな。

「ぐむむ……一日４万エネルで……」

「最低でも６万ね。４万じゃ話にならないわ」

「じゃあ間を取って５万で」

エルマが俺に視線を向けてくる。俺には判断出来ないので、任せるという意味で肩を竦めてみせた。

「それで良いわ。ヒロからは何か要望はある？」

「艦の性能を把握しないと戦術の立てようがない。所属艦と搭載武装のデータを事前に貰いたいですね。シミュレーターで実際に触らせて貰うのも必要です」

「公開できる範囲でなら。シミュレーターに関しては事前にデータを傭兵ギルドに引き渡しておきます」

「じゃあ、それで良いわね。細かい話は傭兵ギルドを通してってことで」

エルマの言葉に俺とセレナ少佐が頷く。

こうして俺達はグラッカン帝国航宙軍、対宙賊独立艦隊の教官と

して三十日間拘束されるということになるのであった。

#043　お断りします（ °ω ° ）（後書き）

汚いな暗に権力を振りかざすとか流石帝国貴族汚い―（：3」∠）

―

#044　見えている地雷

「さて、じゃあ仕事の話は終わりってことで……折角船まで足を運んで貰ったんだからちょっといくつか聞かせていただいても？」
「そうですね……答えられることであれば」

セレナ少佐は少し考えた後に頷いた。

「じゃあ遠慮なく。と言っても大したことじゃない――わけでもないけど、ちょっと引っかかっていることがあって。ターメーン星系の宙賊討伐戦で星系軍の艦艇に突っ込んだ傭兵の船は覚えてますかね？」
「ええ、覚えていますよ。罪に問わないように通達したのにもかかわらずこちらの手違いで厳しい賠償金の納期限を課してしまった件ですね。確かそちらのエルマさんが船のオーナーだったと思いますが」
「知っているなら話が早い。念のために聞いておきたいんだが、賠償額なんかには不正はなかったので？」
「ええ、それは再三確認しましたので間違いないですね。納期限については不手際がありましたが、それはそれ、これはこれです。今更減額することもできませんし、返還などもできませんしませんよ。不手際に関しては謝罪しますが、担当者は既に処分済みです。はっきり言うと私への嫌がらせだったんですよね、その件は。こういうのもなんですが、目障りな人間を処分するきっかけとなったので、こちらとしては助かりました」

セレナ少佐は全く悪びれる様子もなくしれっとした態度でそう言った。

「一人の人間の人生を台無しにしかけたのに、全く悪びれる気配がないな」
「ええ。賠償金の発生についてはこちらに非はありませんので。彼女は自分の不注意で星系軍の戦艦を中破させたのですからね。と言いますか、本来であれば賠償金などではなくより重い罪に問われてもおかしくないのですよ？　過失であるとしても帝国航宙軍の戦艦を中破させて行動不能に陥らせ、多数の帝国軍人に重傷を負わせたのですから」
「ふむ……なるほど」
「私の想定よりも短い納期限になった点に関しては申し訳ないとしか言えませんが、本来であればその納期限も航宙軍の一存で決められるものですからね。慣例的には短くとも数ヶ月、長くて一年ほどの納期限となることが多いですが、それも絶対ではありません。悪質性が高い場合は今回の件のように短く設定することもあります。その辺りはケースバイケースで、今回の場合は私は長くするように通達しました。しかし、それは無視されて懲罰レベルに設定されてしまったわけですね。ですが、その不手際に関しては担当者を処分することでこちらとしても誠意を示したというわけです」
ふーむ……納得し難い部分もあるが、貴族と軍人が強権を持っている社会制度の中ではさもありなんといったところか。
「ヒロ、もう良いわよ。私が間抜けだったのは間違いないんだし、結果としてヒロと一緒に行動することになったのは、その……悪くないわ」
考え込んでいる俺の腕を引きながらエルマが微かに笑みを浮かべる。うーん……まぁ、本人が良いと言うならこれ以上突っかかるのも無駄というものか。

「ふふ、キャプテン・ヒロは仲間思いなのですね。そんな貴方に朗報があります」

ニッコリと微笑むセレナ少佐。嫌な予感しかしない。

「今回の依頼を完遂した暁には、私個人の契約傭兵としての地位を差し上げましょう」

「……」

「そこまで露骨に嫌そうな表情をされるのは生まれてこの方初めてです」

俺の表情がよほど嫌そうな表情だったのか、セレナ少佐が苦笑いを浮かべながら頬をヒクつかせる。いや、だって、なぁ？　面倒ごとの予感しかしないじゃないか。

「一応聞いておきますが、メリットは？」

「率直で良い質問ですね。まず、私の契約傭兵になることによってグラッカン帝国の貴族や軍絡みのトラブルに非常に巻き込まれにくくなります。私は帝国航宙軍の少佐ですし、ホールズ侯爵家の娘でもありますから。その私の契約傭兵にちょっかいをかけるというのは、つまり私にちょっかいをかけるのと同じことになりますね」

「なるほど。でも、逆に言うと少佐を敵視している人達からは絡まれやすくなりますよね？」

「その可能性ではゼロではありませんが、そのような奇特な方はまずいないと思いますよ。もし何かトラブルがあればご一報くだされば対処しますわ。出来うる限り」

「出来うる限り、ね」

「ええ、不満ですか？」

「いいや。それじゃあデメリットに関して話そうか」

俺は言葉を崩しながらにっこりと笑みを浮かべる。もう謙るのは終わりだ。
セレナ少佐もにっこりと笑みを浮かべる。二人とも笑顔。仲良しだな。ミミがなんかプルプル震えている気がするけど、そんなに怖がらなくても良いんだぞ？

「そんなものはありませんよ？」
「ははは、ご冗談を。言っておくが、俺は良いようにあんたに使われるつもりはないぞ。既にあんたには貸し一つだ。借りを返す前に更に借りを作るような真似はしないよな？」
「おや、その借りは契約傭兵にすることでチャラですよね？」
「そりゃあんたが俺を自分の懐に誘い込むための手札だろう？　それで借りを返したつもりになるなんて厚かましいってもんだ。今回の依頼を受けるのは、貴族であり軍の佐官でもあるあんたが俺達に一定の譲歩をしたから、こちらも面倒事を避けたくて譲歩しただけだ。先程エルマも言ったように、報酬としては下の下だよ。普通なら見向きもしないね。だから貸し一つなわけだしな」

セレナ少佐がぐぬぬ、とでも言いたげな表情をする。

「貴族や軍関連の面倒ごとに関してだって、最悪全部ぶっちぎって逃げてしまえば問題ないわけだしな。それを考えればトラブルから守ってくれるっていうのもそこまで大きなメリットじゃない。契約傭兵になることによってあんた個人やホールズ侯爵家と敵対する貴族から睨まれることに確実になるわけだから、むしろデメリットの方が多いとさえ言える。それに、わざわざ『契約傭兵』になんかするってことは、この船の行動にも制限がかかるわけだろう？　それこそデメリットが多すぎるね。知っての通り俺のやり口は常識はずれだぞ？　何かやらかした時にあんたの契約傭兵だったりしたら不

味いんじゃないのか？　その時は切り捨てれば良いか？　そんな時に切り捨てられるようならそれこそメリットがない。結論、あんたの契約傭兵とやらになるメリットは薄く、デメリットばかりが大きいと俺は考えている。反論はあるかな？」

歯に衣着せぬ俺の物言いにセレナ少佐は顔を赤くしてプルプルと震えていた。怒らせたかな？　いや、俺だって鬱憤が溜まってるんだよ。嫌がらせのように勧誘メールを送られた上に美味しくもない依頼を受けさせられる羽目になってんだ。こっちの身にもなれって感じだよ。

「ちょ、ちょっと、いくら何でも言いすぎ――」

「ふふふ……ホールズ侯爵家の娘である私にそこまでふざけた態度で接してくるのは貴方が初めてです」

赤い顔のまま口元をヒクヒクと引きつらせてセレナ少佐が俺に視線を向けてくる。ちょっと挑発するつもりでキツめの言葉を使ってみたが、やりすぎたか？

「ですが、良いでしょう。許します。貴方の言うことにも理がないわけでもありません。無理に手中に収めようとすると壊れてしまうものもこの世には存在するものですしね。飼い猫の愛らしさと野良猫の逞しさは別ですから」

「誰が猫か」

引っ掻くぞこいつめ。

「首輪をつけずとも、餌付けで飼いならすことはできますからね。首輪を嵌めるのは十分に餌付けをして飼い慣らしてからにすることにします」

「いつか首輪を嵌めるつもりなのかよ」
「ええ。私、狙った獲物は逃さない主義なんです」

セレナ少佐が唇に人差し指を当て、色っぽい流し目を送ってくる。この背筋がゾクリとする感触はただの悪寒だよな？　そうであってくれ。

ミミとエルマはそんなセレナ少佐に何か感じるものがあったのか、二人して左右から腕に抱きついてきた。その様子を見てセレナ少佐がクスクスと笑う。

「今日のところは依頼を請けてもらえるということで満足しておきましょう。傭兵ギルド経由で依頼を出しておきますので、よろしくおねがいしますね。データも傭兵ギルドに預けておきますので」
「ああ、わかった。仕事の際には言葉に気をつけるつもりだが、多少地が出るのはご容赦願いたいね」
「ええ、そうしてください。プライベートな場ではそのままの言葉遣いでよろしいですよ」
「ははは、承知いたしました」

プライベートな場で会うつもりなんてないけどな。

☆★☆

「侯爵令嬢の少佐相手によくもまぁあんな口を利くわね……ヒヤヒヤしたわよ」

セレナ少佐が帰った後、食堂で昼食を摂りながらエルマがぼやいた。今日のエルマの昼食は和風パスタっぽい麺類に棒々鶏っぽい肉入りサラダのようなもののようだ。

「あの程度で激怒して決裂するならどっちにしろ上手くはいかんだろ。逆に、あれだけ言っても激怒したりせずにむしろ笑って許して関係を続けようとする辺り、アレは結構マジだな。油断してるとどこかで足を掬われるかもしれんから、下手に口約束とかしないように気をつけなきゃいかん」

俺が食っているのはハンバーガーとフライドポテトっぽいものとシェイクだ。シェイクはちょっと青臭いけど美味しい。何のシェイクだろう、これは。

「あのひとはだめですきけんです」

ミミにしては珍しくセレナ少佐に対して何らかの危機感を感じているようだ。ケチャップたっぷりのオムライスをもそもそと口に運びながら俺にジト目を向けてきている。

いやいや、確かにセレナ少佐は美人だしおっぱいも結構あるけどそう簡単にあんな地雷案件に靡くなような男じゃありませんよ、俺は。心配は無用だ。

「ま、暫くは訓練期間だな。俺は依頼にかかりきりになる。ミミはオペレーターの訓練を進めてもらいたい。エルマは俺とミミを手伝ってもらえると嬉しいね」

「そうね。そうするしかないわね。ま、刺激的な毎日を送るだけが傭兵じゃないわ。こういう時もあるわね。でもヒロ、あんた、腕は錆びつかせないように訓練しておきなさいよ」

「善処する。まぁ、考えがないわけでもない」

単に盤上で教練するだけじゃそれこそ机上の空論だしな。どこかで実戦を入れるべきだろうし、何なら俺がアグレッサー役をやって模擬戦をするのも良い。シミュレーターもガンガン利用するべきだ

ろう。

「まぁ、仕事でやる以上は真面目にやるさ。それで命の危険もなく、侯爵令嬢の少佐に貸しを一つ作れて、かつ幾らかでも金が入ってくる。ミミの学習も進む、いい事ずくめだな」

「ヒロ様」

「うん？」

「気をつけてくださいね？」

「うん」

これはミミがセレナ少佐に特段の警戒をしているのか、それとも俺の信用が無いのか……前者だよな？　前者だと言ってくれ。

「あの侯爵令嬢にコロッと籠絡されるんじゃないわよ」

「信用ねぇな！？」

「前に一回やらかしてるじゃないの」

「ぐうの音も出ねぇ」

それを言われると弱いよなぁ。

こんな感じでこの日は微妙に不機嫌なミミとエルマの機嫌を取って過ごすことになった。クリシュナから一歩も出ることなく完全に三人で引き篭もり態勢である。たまにはこんな日も良いだろう、うん。近々出ずっぱりになるだろうしな。

#０４４　見えている地雷（後書き）

次回更新予定は４／１以降の予定です！　ちょっとまってね！　―（：３」∠）―

#045　お勉強タイム（前書き）

作業も一段落したから更新再開するよ！
久々かつちょっと体調が今一つだから短いのは許してね！ ―（：3」∠）―

#045　お勉強タイム

セレナ大尉、もといセレナ少佐の来訪から数日。俺達は基本的にクリシュナの中に篭ったまま各自トレーニングに励んでいた。
ミミはオペレーターとして訓練を進め、エルマはそのサポート。俺はというと。

「ううむ、貴族こわい」

エルマに勧められて……というか半ば強制されてグラッカン帝国の貴族関連のトラブルや仰天エピソードをドキュメンタリー映画風に撮影したホロ動画を視聴させられていた。
エルマ曰く。

『あんたの貴族に対する態度が怖すぎる。最悪クルーもまとめて無礼討ちなんてことも有り得るんだから勉強なさい』

とのことで、最初は面倒くさいなぁと思っていた俺だったのだが、視聴を進めるうちに貴族のヤバさというものがわかってきた。
ダントツでヤバいのはグラッカン帝国の貴族は正当な理由さえあれば貴族以外を殺害しても罪に問われない、という。点だろう。
この正当な理由というのが曲者で、グラッカン帝国に仇なす者なら～とか、侮辱を受けたなら～とか記述が非常に曖昧だ。ぶっちゃけていうと恣意的な運用がいくらでも可能な上に、それを判断するのも基本的に貴族自身。
他の貴族の領地（シマ）だと判断するのはその領地の貴族ということになるので多少は慎重になるようだが、貴族は基本的に貴族の味方である。利権その他いろいろな理由で敵対でもしていない限りは。

なので、貴族に対してナメた態度を取っているとスゴイ＝シツレイ！　無礼討ちイヤーッ！　グワーッ！　という感じにばっさりやられてもおかしくはないというわけだ。
とはいえ、そんあ貴族もあまりに横暴にやりたい放題やっていると、帝国政府に目をつけられて『グラッカン帝国に仇なす者』という理由でお咎めを受けることがあるのだそうだ。
帝国臣民はグラッカン帝国皇帝の大事な資産でもあるし、人口減少は帝国の国力減少に他ならない。それに横暴な者をのさばらせておくと帝国貴族の品位が落ちる、ということらしい。
そう、帝国貴族は何より品位と誇りを大事にする。平民相手に過剰に威張り散らし、無礼討ちを繰り返すような貴族は他の貴族からの評判が落ちて爪弾きにされるのだそうだ。
日本生まれの俺にはなんとも評価がし難いのだが、その辺りのバランスが絶妙に保たれて今のグラッカン帝国は成立しているというわけだな。腐敗が始まるとバランス崩壊まっしぐらなんじゃないかと思うんだが、そうなっていないということは腐敗を防ぐ強固なシステムがあるのだろう。

☆★☆

「貴族ヤバいな」

俺の勉強の様子を見に来たエルマに素晴らしく豊かな語彙でそう言うと、エルマは呆れたかのように溜息を吐いた。実際呆れているんだろう。

「そうよ、貴族はヤバいのよ。だから言葉遣いには気をつけなさい」
「今後は善処する。でもセレナ少佐には今更じゃないか？」
「そうかもしれないけどね、用心に越したことはないわよ。腰に剣を差してるのは大体帝国貴族だから注意しなさいよ」

「なるほど」

帝国貴族にとって腰に差した剣は貴族の誇りの証であるらしい。侍の刀みたいなもんだと考えれば良いのだろうか。

「グラッカン帝国の貴族は基本的に善人が多いからそこまで心配はいらないはずだけどね……中には洒落にならないくらいの愚物もいるから。できることなら関わらないのが一番よ。まぁ、向こうも用事がなければ傭兵なんかには近づかないでしょうけど」

「そうなのか？」

「普通の平民と違って傭兵は大体レーザーガンを持っているし、戦闘技術も修めている場合が多いし、何より重武装の船を持っているでしょう？　下手にトラブルを起こして逆上されると向こうも困るわけよ。実際、あんたなら貴族が斬りかかってきてもレーザーガンで応戦できるでしょ？　いざとなったら船に乗って大立ち回りだってできるわ。こっちが貴族を恐れているように、あっちも傭兵を恐れているのよ」

「そうなのかー。まぁ、抵抗もろくにできない草食動物ならともかく、場合によっては鋭い牙で反撃してくる肉食動物にわざわざちょっかいはかけないよな」

「例えが微妙だけど、そういうことね。でも、さっきも言ったけれどだからといって貴族に対して失礼な態度を取るのはやめなさいよ」

「前向きに善処する。ばっさりやられたくはないから」

貴族の持っている剣がどのようなものかは知らないが、あんなものでぶった斬られたら痛いでは済まないだろうということは想像に難くない。

「それにしても、やっぱり予想通りだったわ。もっと早く気づくべきだったわね」

エルマが苦虫を噛み潰したような表情をしながら首を振る。一体何だというのか？　俺の表情から俺が何を言いたいのかを察したのか、エルマは再び口を開いた。

「記憶喪失にしても別次元からの転移者にしても、どっちにしろ一般常識が欠如しているってのはよく考えればわかることだったわ。一般的な常識や教養をつけさせる訓練をもっと早くすべきだったと思ってね」

「悪意がないのはわかっているが、馬鹿にされている気分だ……」

この世界の一般常識なんて知らないよ！　ステラオンラインにはそこまでの描写なんてなかったんだからな！　俺は俺の世界の常識しか知らん。

「俺からすればこの世界の常識のほうが特異に見えるんだけどな。なんだよ男の船に女が乗ったらそういう関係になるのが当たり前とか。それなんてエロゲ？」

「今はハイパードライブの性能が上がったから恒星間移動の時間もかなり短縮されたけど、一昔前は一度ハイパースペースに入ったら抜けるのに一ヶ月二ヶ月は当たり前だったのよ？　荒くれの多い傭兵が女を自分の船に乗せて一ヶ月二ヶ月二人きり、なんて状況で何もありませんでしたなんてことになると思う？」

「思わない」

そんな状況で手を出さないのはよほど複雑な事情を抱えているんだと思う。そもそも勃たないとか。

「そういうことよ。だから、傭兵の男の船に女が乗る場合はそういう覚悟をして、同意してるのが普通ってのが常識になって定着した

わけ。慣習や常識にはそうなるだけの歴史があるのよ」
「なるほどなぁ……まぁ勉強は頑張るよ」
「そうしなさい。きっと無駄にはならないわよ」

エルマが微笑む。この歳になって一般常識の習得し直しは辛いけど、頑張ろう……しかしエルマさんや、教材が幼児や児童向けのものばかりなのはなんとかならんのかね？

☆★☆

「本日よりこの艦隊の戦術アドバイザーに着任したキャプテン・ヒロだ。よろしく頼む」

勉強などをしながら更に一週間が過ぎた。体調などにも問題はなく、勉強や訓練も滞りなく進んだ。

もっとも、俺が勉強をしていたのは最初の二日間だけで、その後はセレナ少佐から送られてきた対宙賊独立艦隊のデータを細部まで読み込んだり、そのデータを使って色々とシミュレーションをしてみたり、傭兵ギルドのシミュレーターで実際に動かしてみたり、逆にクリシュナのデータで戦ってみたりしていたわけだが。

「この艦隊はセレナ少佐の指揮のもと、宇宙の害悪以外の何ものでもない宙賊共を一人残らずスペースデブリにするために活動すると聞いている。そういうのは得意だ。だから今回アドバイザーとして招かれたわけだな」

そう言ってだだっ広いブリーフィングルームに集まっているクルー達を見回す。あちこちには他の船のブリーフィングルームの様子も映し出されている。ライブ中継されているようだ。

「俺は奴らの狩り方、騙し方、追い詰め方を教える。あんた達はそれを自分の中で噛み砕き、吸収して実際の艦隊運用に反映していく。傭兵の俺の戦い方をそのままあんた達が取り込むことは不可能だと思うが、参考になる点はきっとあるはずだ。同じ敵を追う戦友として互いに尊重していければ良いと思っている。俺からの挨拶は以上だ」

俺の挨拶が終わったタイミングでクルー達が拍手をしてくれる。うん、下手な挨拶にお情けありがとうよ。さぁて、それじゃ頑張っていきますかね。

#046　講義と実践

「さて、何をするにもまずは基礎知識というものが必要になる。そこで、まずは宙賊という奴らがどのような奴らなのかを今一度確認したいと思う」

そう言って俺はホロディスプレイに予め用意していた宙賊船のデータを表示した。

「宙賊は通常三隻から五隻ほどの船団を組んで活動している事が多い。単純に数は力だし、獲物の頭を押さえるためには頭数が必要だからだ。そして、奴らの装備している武器は概ねクラスⅠからクラスⅡの光学兵器、シーカーミサイルポッド、マルチタレットキャノンなどが多い。単体の威力はそうでもないが、無理矢理武器のハードポイントを増設していることが多く、総火力はバカにならない場合がある。複数で民間船の頭を押さえて取り囲み、増設した火力でシールドを飽和させて拿捕する、というのが奴らの常套手段だな」

俺の説明に軍人の皆さんは頷いた。これは別に専門的な知識というわけではなく、宙賊に関わったことのある船乗りなら大体知っていることだ。

「次に、奴らの船だが基本的には拿捕した民間船を改造して使っていることが多い。元が民間船なだけに機体性能はそれほどではないな。機体のカスタマイズ傾向としては武装やスラスターの増設に重きを置いていることが多く、シールド性能や装甲に関しては大分お粗末な場合が多い。何故かと言うと、奴らは速やかに仕事を終える必要があるからだ。時間をかければかけるだけ星系軍や俺のような

傭兵が嗅ぎつけてくる可能性が高くなる。だから速やかに民間船の頭を抑えてできるだけの火力を叩き込み、航行不能にして仕事をする必要があるわけだな。基本的に反撃してくる獲物、攻撃してくる敵との戦いは想定していないということだな」

軍人達は俺の説明に納得したような顔をした。彼らも恐らく宙賊と戦ったことがあるのだろう。そう、宙賊の船は脆い。シールドも装甲も貧弱だから軍用クラスの強力な火砲で攻撃すると簡単にシールドが飽和して装甲は融解し、爆発四散する。

「そういうわけで、宙賊は軍の存在を非常に恐れている。軍の気配のする場所には奴らは近寄らないし、軍の艦船が仕事場に現れると取るものも取らず逃げに入る。奴らも死にたくはないからな。実際、あんた達の船が襲撃現場に到着したら宙賊共は仕事の最中だろうとなんだろうとケツまくって逃げるはずだ」

「そうですね。反撃してくるようなことはまずありませんね。宙賊の基地を攻撃した時くらいでしょうか、向かってくるのは」

「そうだろうな。奴らは軍の気配に敏感だ。奴らの耳と目はコロニー内にも入り込んでいるから、この対宙賊独立艦隊の存在ももう奴らにバレて警戒されているだろうな。星系軍とは別のよくわからん軍の船が沢山入港してるぞ、気をつけろ、って具合に」

「それは……」

「どうにもならないと思うぞ。普通の商人や一般人として紛れ込んで、情報だけ流しているような連中だろうしな。これだけ大きな規模のコロニーなら数も多いだろうし、全員を残らず摘発するのは難しいんじゃないか？　まぁ、その辺りは俺の管轄外だよ。俺が狩り方を教えられるのは船に乗ってる宙賊だけだしな」

「そうですね……何か手を考えておきましょう」

「頑張ってくれ。では話を続けようか」

そう言って俺はターメーン星系の星系マップを表示した。

「これは少し前にセレナ少佐の指揮のもと、宙賊の基地を破壊して一掃したターメーン星系の星系マップだな。そのターメーン星系で星系軍が宙賊の基地を攻撃する前に宙賊と民間船が遭遇した案件の分布がこう、そして傭兵が宙賊を撃破した分布がこう、行方不明になったと思われる民間船や傭兵が航行していたと推測されるルートがこうだ」

星系マップにそれぞれの区分ごとにマークがつけられ、予想航路のラインが引かれる。やはり宙賊の基地があった地点を中心として遭遇、撃破マークが非常に多く見受けられる。

「そして宙賊の基地破壊後のデータがこうなる」

俺が手元の情報端末を操作すると、マップに表示されるマークの位置がガラリと大きく変わった。

「大きく変わったのがわかるな？　そして、それぞれのデータに星系軍が活動していたとされるポイントを打ち込むとこうなる」

軍人達からどよめきの声が上がる。撃破マークや遭遇マークは星系軍が活動していたポイントを避けるように分布しており、宙賊が星系軍の動向を把握し、避けていたということが丸わかりだからだ。

「他の傭兵は知らんが、俺はこういうデータを集めて宙賊が活動しているであろう地点を割り出して奴らを狩っている。本当は民間採掘船が持っている優良な採掘ポイントのデータが有ればもっと精度を上げられるんだが……と、まぁここまでが奴らを狩るための基礎知識というところだ。ここまではご理解いただけたかな？」

「ええ、興味深いですね。この講義に関しては記録もしていますので、先に進めていただいて結構です」
「了解。では、この基礎知識を基にどうすれば対宙賊独立艦隊が宙賊を狩ることができるのか？　ということを考える必要が出てくる。まず俺から言えることは一つ、ちょっと皆さんにはショックな内容だと思うが……」

セレナ少佐に視線を向けて言い淀むと、彼女はどうぞご自由に発言してください、とでもいうように頷いた。

「では、ストレートに言うけれども。宙賊狩りに巡洋艦以上の大きさの船は不適切だ。本気で宙賊どもを狩り尽くすつもりなら艦隊の編成を根本的に変える必要がある」

俺の言葉に軍人達が絶句した。それはそうだろう。この艦隊は巡洋艦を主軸として編成されている艦隊なのだ。具体的にはコルベット二隻、駆逐艦三隻、巡洋艦五隻、戦艦一隻でこの独立艦隊は編成されている。巡洋艦がこの艦隊の主力なのは火を見るよりも明らかだ。

「基本的に奴らの活動宙域は小惑星帯であることが多い。先程の分布図を使って交戦するとなるとほぼ間違いなく小惑星帯での戦闘となるわけだ。小惑星帯に巡洋艦や戦艦で突っ込んで戦闘機動を取れると思うか？」

軍人達が沈黙した。まぁ無理だろう。俺もシミュレーターでやってみたけど無理だった。ガッツンガッツン小惑星にあちこちぶつけてシールドが飽和、場合によっては身動きが取れなくなって宙賊にボコボコにされた。まさに無理ゲー。

「シミュレーターを触った限りでは駆逐艦までなら俺はなんとかギリギリ行けたけど、オススメはコルベットだな。艦隊の編成にまで口を出すのは俺の領分を越えているとは思うが、検討はして欲しいと思う」
「ええ、ご忠告痛み入りますわ。ですが、宙賊が小惑星帯に逃げ込んだとしても巡洋艦と戦艦の火力で薙ぎ払ってしまえば良いのではないですか？」

セレナ少佐の質問の内容は予想していたので、俺は悩むことなく返答した。

「それは確かにそうですね。宙賊はそれで倒せるでしょう。ですが、民間の採掘船からは不満を持たれるでしょうね。資源を多く含有する小惑星帯は彼らの飯の種です。自分達を脅かす宙賊が居なくなっても、自分達の職場が軍にズタボロにされるんじゃ文句の一つも言いたくなるでしょう」
「なるほど……」

セレナ少佐が考え込んでしまったので、俺は軍人達に向き直って予め考えておいた腹案も出すことにする。

「編成を変えるべきだと言ったが、そう簡単にどうにかなるものではないだろうと思う。傭兵なら自分で好きに船も乗り換えられるし、武装の交換なんかもできるけどな。軍ではそうもいかないだろう。いきなり船を乗り換えろと言われても軍人さん達も困るだろうしな」

軍人達が無言のまま頷く。船乗りにとって自分の乗る船というものは第二の家、第二の故郷、そして最愛の相棒だ。そう簡単に乗り捨てられるものではない。

「そこで俺からご提案。セレナ少佐、貴女は宙賊を狩り、帝国臣民を守るためならどんなことでもやる覚悟はありますか？」
「え、ええ、私にできることなら……？」
「その言葉が聞きたかった」

俺は満面の笑みを浮かべ、考えてきた作戦案を発表する。俺の提案にセレナ少佐と軍人達が目を剥いた。

☆★☆

講義から数日。
準備の整った対宙賊独立艦隊はアレイン星系において初の宙賊掃討任務を行っていた。

「確認戦果、現時点で三十二隻です」
「ははは、入れ食いですなぁ」
「ええ、そうですね……」

俺の横でセレナ少佐が微妙な表情をしている。
対宙賊独立艦隊の旗艦である戦艦レスタリアスのブリッジで俺は実に爽快な気分で笑っていた。隣で掃討作戦を見守っているセレナ少佐の表情はとても微妙な感じになっているが、目的通りに宙賊を掃討できているのだから、もっと喜ぶべきだと思う。

「いやー、流石は軍艦だ。射程と火力が違うね」
「あの……やはりこれは卑怯なのでは……？」
「セレナ少佐は実績を挙げられてニッコリ、軍人の皆さんも軍功を稼げてニッコリ、俺もボーナスをもらえてニッコリ、帝国臣民の皆さんは宙賊が減ってニッコリ、誰も損をしていないでしょう？」
「それはそうですが……」

物凄く微妙な表情をしているセレナ少佐と俺が視線を向ける先にはホロディスプレイに映しだされた中型輸送船の姿があった。積載されている積荷はそこそこの量のレアメタルにアレイン星系で生産されているハイテク医薬品などの高単価の交易品。宙賊どもにとっては垂涎の品々だ。

画面に映っている中型輸送船は何かのトラブルで航行不能になっているらしく、しかも通信設備にも不調が出ているようで発している救難信号も非常に微弱なものだ。いや、この辺りは宙賊の出没地域だからな。もしかしたら宙賊を警戒してわざと出力を落としているのかも知れない。

ウン、キットソウダ。ソウニチガイナイ。

「作戦が上手くいって良かった良かった」

既に予想はついていると思うが、あの中型輸送船は囮の船である。無論、あのような民間輸送船が帝国航宙軍のものであるはずがない。あの船は侯爵令嬢であるセレナ少佐が個人的に所有する船舶なのだ。

流石は侯爵令嬢だ。五〇〇万エネルもする中型輸送船をＰＯＮと買ってくれたぜ。

「こんな騙し討ちのような形で良いのでしょうか……」

「奴らは罪のない商人や採掘者、旅行者を襲う卑劣漢どもですから。こちらがどんな手を使っても文句を言われる筋合いなど無いでしょう。そもそも、相手は他国の正規軍でもなんでもない賊ですから。どんな手を使ったとしても文句を言われることも無いですし」

ついでに俺にボーナスが入るから卑怯でもなんでも良いんです。

今回、俺が提案した作戦は単純なものだ。巡洋艦を主力とした今の対宙賊独立艦隊では小惑星群に潜む宙賊を追い詰めて狩るのは難

しい。
なら向こうからこっちに来てもらえば良いじゃない、という話だ。美味しい貨物を積んだカモをこちらで用意し、のこのこと釣られてきた宙賊を巡洋艦と戦艦の精密射撃で撃破してしまえばいい。
まず、コルベットと駆逐艦を釣り場の小惑星群に突入させて周辺の清掃をする。宙賊を撃破、或いは宙賊が近くに居ないことを確認したら巡洋艦と戦艦を小惑星群に紛れ込ませておく。いくらデカい巡洋艦や戦艦と言ってもジェネレーターを落としておけば小惑星群に紛れ込むことは容易い。小惑星とは言ってもその大きさは様々で、戦艦並みの大きさの小惑星なんかもゴロゴロしてるからな。
そして最後に小惑星群から少し離れた場所にカモを用意し、微弱な救難信号を発信させる。それに釣られてきた宙賊を巡洋艦と戦艦の超火力で殲滅する。
巡洋艦や戦艦といった超大型の軍用艦にはジェネレーターが稼働できない状況になってもある程度の戦闘能力や基本的な機能を維持するために電力を溜めておく大容量のキャパシティーがある。その電力を使って宙賊に存在を気取られずに致命的な一撃を加えられるというわけだ。
キャパシターの容量が低下してきたらカモの救難信号を止めてジェネレーターを稼働させ、電力を回復させる。充電が終わったら再びカモを使って宙賊をおびき寄せる。そして再び狩りを開始する、と。
一箇所で同じことを続けると警戒されるから、ある程度狩ったら別のポイントに移る。これを繰り返すわけだ。
今回の作戦で撃破された宙賊艦に懸けられている賞金の二割がボーナスとして俺に入ることになっている。現時点で三十二隻ということは、およそ五隻分の賞金が俺の懐に入ってくるというわけだ。経費もかからず、散っていく宙賊を優雅かつ安全に眺めているだけで金が入ってくるとか笑いが止まらないな！
ちなみに、あの囮船に乗っているのはセレナ少佐の部下である帝

国軍人の皆さんである。万が一宙賊があの船に突入すると軍用パワーアーマーを装備したガチムチのお兄さん達が熱烈歓迎してくれるという段取りになっていたりする。
え？　撃破されないのかって？　それは無いな。撃破すると積荷に被害が出るし、中型輸送船は拿捕して改造すれば火力支援艦にもできる。航行不能に陥っているあの船を撃破するような宙賊はまずいないと考えていい。
最終的にこの日は合計五十七隻の宙賊が宇宙の藻屑となった。俺の懐には賞金総額の二割が入ることになった。なんとその額、約一〇万エネル。

「いやぁ、儲かった儲かった」
「良かったですね……」

セレナ少佐が俺にジト目を向けてくる。彼女は私財であの囮船を買ったわけだが、当然ながら経費扱いにすることは却下されたそうだ。自前の船を作戦行動に投入して良いのか？　という点に関しては貴族パワーでどうにかしたらしい。貴族パワーすげぇな。

「戦果を挙げれば経費申請が通るかも知れませんよ？」
「そんな奇跡が起きたら良いですね」

セレナ少佐が溜息を吐く。いくら侯爵令嬢とは言え、五〇〇万エネルの出費は手痛いものであったらしい。彼女の経済事情は俺にはわからないしあまり興味もないのでどうでも良いのだが。

「通常の宙賊狩りはこの方法を基本として、宙賊の本拠地の情報が手に入ったら正々堂々正面から殴り込みって形にすれば当面は宙賊狩りの実績を挙げられるんじゃないですかね。後は手を変え品を変えつつ宙賊との知恵比べですね」

「そうですね……ですが、まだ契約期間は半分以上残ってますから、付き合ってもらいますよ？」
「……アイアイマム」
宙賊退治の目処が立ったところであわよくば依頼完了ということにならないかと期待していたが、そうは問屋がおろさないらしい。
そうなると次はどうしたものか、と俺はセレナ少佐に敬礼をしながら考えを巡らせるのであった。

＃０４７　露骨な懐柔工作（前書き）

ここのところ天気が悪くて体調が良くないぞぉ！　さむいんじゃぁ！

―（：３」∠）―

#047　露骨な懐柔工作

帝国航宙軍は戦闘行動をした後、余裕があるなら必ずしっかりと整備を行うらしい。彼らの乗る軍艦は帝国臣民の血税によって建造され、皇帝から貸与されているものなので粗雑に扱うことは許されないのだ、ということであるらしい。

そういうわけで、一方的とは言え一応は戦闘を行った対宙賊独立艦隊も整備のために暫く動けなくなる。そのタイミングで軍人さん達も陸（コロニー）に上がって休暇を取るわけだな。まぁ、俺には関係ない。今日は新しい戦術を考えるか、昨日の作戦の反省会でもするのだろうとそう思っていた。

そう思っていたのだが。

「では、行きましょうか」

旗艦レスタリアスのブリッジに行くと、何故かそこには恐らくは私服なのであろうカジュアルな服装に身を包んだセレナ少佐がいた。それはもう花が咲いたかのような満面の笑顔だ。他のクルーの姿は見当たらない。

セレナ少佐の今日の格好はメリハリのある身体のラインがそのまま出るベージュのニットセーターに黒系のスカート、腰には剣帯のようなものと、それに差したちょっとサイバーっぽい雰囲気の漂う剣が一振り。なんだろうこの……ファンタジーカジュアルスタイル？

「どこに……？　というか何を企んでいるんです？」

俺は思いっきり警戒した声と表情を隠さずセレナ少佐に問いかけた。さすがの俺もここで「おっけー！　美人さんとデートだひゃっ

ほーい！」となるほどのお馬鹿さんではない。今までの経緯からしてセレナ少佐が何かを企んでいるのは一目瞭然だ。

「いやですねぇ、企んでいるだなんてそんな……」

オホホ、とセレナ少佐がわざとらしく笑う。それを見て俺は携帯情報端末を操作した。

「何を？」

「いえ、なんでも。それで、どこに行くので？」

首を傾げて聞いてくるがそれは軽く受け流しておく。操作もほんの一瞬のことだったので、セレナ少佐もあまり気にならなかったのだろう。とりあえず話を続けることにしたようだった。

「今日は私、非番なのです」

「はぁ」

その格好を見ればそれは理解できるな。逆にその格好で軍務に就くというのもなかなか楽しそうだが。規律の欠片も感じられなくなるし無理か。

「それで、街に食事にでも行こうかと」

「それはよろしいことですね」

「でも、一人で行くのは寂しいではないですか」

ははは、この寂しがり屋さんめ。

「ご友人でも誘われては？」

「この星系には残念ながら友人はいないのですよ」

いかにも困りました、とでも言わんばかりにセレナ少佐は片手を頬に当てて意気消沈したような表情を作る。わざとらしい。

「左様ですか。では部下の方を誘われてはいかがでしょうか」

「非番の日にまで上官の顔を見なければならないのって心が休まらないと思うんです」

「尉官待遇の私にとってもセレナ少佐は上官なのですが？」

「それでも契約期間が終わればその上下関係も無くなるわけですし、他の部下に比べれば恐縮の度合いも小さいでしょう？　それに、貴方は貴族相手にも物怖じしない性質のようですし……」

ニコニコしながらセレナ少佐が間合いを詰めてくる。俺はそれに対してさり気なく距離を保ちながら時間を稼ぐことにする。

「見たところ今日は私の仕事も無いようですし、私も非番ということでよろしいでしょうかね？」

「いえいえ、私は非番ですが貴方は非番ではありませんよ。食事でもしながら対宙賊の戦術論や今までの宙賊討伐のお話などを聞かせていただきたいですね。仕事として」

「仕事としてですか……職権の濫用なのでは？」

「ふふ、この程度で職権濫用を咎められることはありませんのでご心配なく。貴方は対宙賊戦術のエキスパートとして帝国航宙軍に雇われているのですから、責務を果たしていただきませんと」

セレナ少佐が笑顔でそう言うが、完全にこれは獲物を狙う捕食者の笑みである。圧力が凄い。どうにかこうにかして俺を自分の手の内に収めようって魂胆が見え見えなんだよなぁ。

さてどうしたものかと考えていたところで俺の携帯情報端末から着信音が鳴り響いた。俺はポケットから端末を取り出し、出て良い

か視線でセレナ少佐に問いかける。彼女は仕方ないなという顔で了承してくれたので、遠慮なく通話に出ることにした。

「ヒロだ」

『状況は？』

先程端末を操作したのはこうしてエルマに通話をかけてもらうためにメッセージを送ったのである。セレナ少佐の相手は俺一人では手に余るからな。

「非番だそうだ。昼飯でもどうかと」

『断るのは難しいのね？　私達も同行して良いならってことで受けなさい』

「わかった」

通話を切る。こちらを見つめるセレナ少佐がジト目になっていた。

「うちのクルーも同行して良いなら」

「……女性とのデートに他の女性を同行させるというのはどうかと思いますが？」

「仕事で行くならそんな色気のある話じゃないでしょう。それに、うちのエルマは俺よりも傭兵歴の長いベテランですよ。食事がてら傭兵としての体験談を聞きたいというのなら最適な人材です」

仕事として話を聞きたいと言うのであれば、こう言えば断ることは出来まい。

「くっ……良いでしょう」

予想通り、渋々ながらもセレナ少佐は俺の提案に同意した。

☆★☆

「おはようございます、セレナ様。今日はカジュアルな装いで雰囲気がいつもと違って見えますね」
「ありがとうございます。エルマさんも素敵なお召し物ですよ。ミミさんはとても可愛らしいです」
「あ、あの、きょ、恐縮です……セレナ様も素敵だと思います」

セレナ少佐とエルマが笑顔を交わしあい、ミミがセレナ少佐に服装を褒められて恐縮する。
今日のエルマは緑を基調とした民族衣装のような装いだ。ぶっちゃけて言うと物凄くエルフっぽい。ザ・エルフ。サイバーっぽさが欠片もない。最初にこの姿を見ていれば残念宇宙エルフなどというあだ名をつけることもなかっただろうというくらいエルフ。
どうして普段からそういう格好をしないんだお前は。船の中でも外でもいっつも傭兵スタイルで、くつろいでる時なんてラフなシャツとパンツだけじゃないか。普段からそういう格好を是非して欲しい。
そしてミミは前に二人で買いに行った服を着ている。色合いは地味ながらクラシカルな雰囲気の漂う上品な逸品だ。可愛らしいミミが来ていると良いところのお嬢様のように見える。そして服の構造上胸部装甲の凶悪さが普段よりも強調されている。
俺？　いつもの生地の厚いズボンにシャツ、ジャケットだよ。男のお洒落なんてどうでもいいよね。俺は変じゃなければ良いって主義だから。うん。

「本来であればご婦人方をエスコートするのは俺の役目なのかも知れないが、残念ながらこのコロニーには不案内でね……ああ、申し訳ないが口調に関しては艦の外ということで普段通りのものにさせ

てもらうけれど、良いかな？」
「ええ、構いませんよ」
「ありがとう。どうにも丁寧な言葉遣いというのは肩が凝ってしまっていけない。それで、セレナ様にはアテがあるので？」
「ええ、なかなか評判の良いオーガニック料理の専門店があるそうです。足も手配してありますから、四番エレベーターから市街地に降りましょう」
「アイアイマム」

オーガニック料理ねぇ？　つまりフードカートリッジから加工したものではなく、本物の肉や野菜を使った料理ってことだろうか？
ちょっと気になるな。

「……♪」

ミミもワクワクを隠せないのか歩きながらニコニコしている。ミミは銀河中のグルメを食べつくすのが目標だものな。新しい料理との出会いはそれだけで嬉しいものなのだろう。
軽く雑談を交わしながら目的のエレベーターに乗り込み、市街地へと降りる。

「ここは来たことのないエリアだな」
「前にお買い物に来たのは二番エレベーター付近でしたからね」
「二番エレベーター周辺は所謂庶民的な繁華街ですね。こちらは官公庁や大企業のテナントが多い地域で、高級な食事処や帝国有数のブランド店など、貴族や富豪御用達の店が多いのが特徴です」
「歩いている人も身なりの良い人が多いわね」
「警備員の数も多いみたいだけどな」

ちゃんとした服装のエルマやミミ、腰に剣を差しているセレナ少

佐はともかくとして、俺みたいないかにも傭兵ですって感じのが一人で歩いていたらガチムチの警備員さんにスタァァァップされそうな場所だ。
　そんな俺もきちんとした身なりの三人の女声と一緒に歩いていれば護衛か何かのようにでも見えるのか、一度も呼び止められることもなく目的の場所へと移動することができた。まぁ、移動自体セレナ少佐が用意していたタクシーのようなものに乗ってのものだったので呼び止められる隙も無かったんだけどね。

「ここの三階が目的地ですね」
「見た目は普通のビルにしか見えないな」
「居住スペースは貴重だからね。その分内装に凝っているのよ、こういうところは」
「な、なんだか緊張してきました」
「ふふ……緊張することはありませんよ、ただのレストランですから。個室を予約してありますから、マナーなども気にしなくて良いですしね」
「個室、ねぇ……」

　ミミとエルマを誘わなかったらセレナ少佐と個室で二人きりになっていたわけか。一体どんな手段で俺を籠絡するつもりだったのやら。

「さぁ、丁度良い時間ですし入りましょう」

　笑顔のセレナ少佐に誘われ、俺達はビルの中へと足を踏み入れるのだった。

#０４８　残念な美人

「あいつらときたらどいつもこいつもおんなだからってあなどって……わらくしらってがんばってるんですよ？」
「あ、うん、そうっすね。はい」

レストランに入っておよそ三十分後。俺達の思いは一つになっていた。

（（（この人仕事以外は残念なタイプの人だ……！））））

最初は良かった。本物の野菜や肉を使った料理に舌鼓を打ち、上品なワインなんかを頂いて優雅に食事をしていた。俺は下戸だから水にしたけど。

しかし、食事が進むとセレナ少佐の酒量が増え始めた。すぐに目はとろんとし始めて、呂律が怪しくなってきた。セレナ様、そのあたりで……と俺達は止めたが、非番なんだからお酒くらい飲みますよ、飲みますとも、とアルコール摂取量はどんどん加速した。

「さげたくもないあたまもさげてぇ、むりやりえがおをつくってぇ……なのに、なんらっていうれすか！　すぐにむねばっかりみてくるし！　ぶったぎりますよ！」

ＫＯＮＯＺＡＭＡだよ！

マナーを気にしなくても良いって言ってたけど、それどっちかというと俺達じゃなくてセレナ様自身のためですね？

「Ｏｈ……落ち着いて落ち着いて、剣はぽいしましょうねー」

剣の鞘を持って腕を突き上げるセレナ様をなんとか宥め、剣を取り上げて少し離れたところに立てかけておく。酔っ払って刃傷沙汰とかは勘弁していただきたい。

「あなたもあなたですよ！　わらしがこんなにさそってるっていうのになんでちっともなびかないんですか！」

「聞きたいです？」

「ききたくありません……」

真顔で言ったらセレナ少佐が泣きそうな顔をしながら両耳を塞いだ。

「じぶんれもわかってるんれすよぉ……むちゃなかんゆうをしてるってことはぁ……」

「自覚はあるのね……」

ぐったりとテーブルに突っ伏すセレナ少佐を見ながらエルマが苦笑いを浮かべる。正直セレナ少佐の誘いに乗って帝国航宙軍に入るメリットはあまりにも薄いんだよなぁ。

「ええと、もし俺が帝国航宙軍に入る場合は一等准尉からって話だったっけ」

「そうれす。はいってくれるんれすか？」

「給料いくら？」

「……月に四〇〇〇エネルくらい」

「俺、場合によっては一日で一〇万エネル稼ぐんだけど、入ると思う？」

「……うぅ」

涙目になられても困る。
いや、俺にまったくメリットがないとは言わないけどね？　順調に戦功なりなんなりを挙げていけば最終的には帝国騎士の位を頂いて一等市民に成り上がり、俺の目標である惑星上居住地に庭付き一戸建てを得る機会も生まれるだろうし。
ただ、その方法ではあまりに時間がかかりすぎる。何か物凄い事件が起きて、俺が大活躍をすればどうなるかわからないが、普通にキャリアを積み上げていくなら目的を達するには十数年の時間がかかるはずだ。クリシュナだってどうなるかわかったものじゃないし、そんなに時間の掛かる方法は取りたくない。

「まぁそういうわけで、俺を軍に勧誘するのは諦めてくれると嬉しい。折角こうして知り合って、一緒に食事もした仲だから、ちゃんと報酬さえ用意してくれれば仕事は請けないこともないから」
「……わたしのことをみすてませんか？」
「涙目で言わんでください。あざといですよ。そもそもそういう関係じゃないでしょうが」

最大限の冷たい視線を向けてやると、セレナ少佐は涙目を引っ込めて面白くなさそうに唇を尖らせた。なんて女だ、まったく。

「今のに釣られてたらぶん殴ってたところだったわ」
「いくらなんでも俺を侮りすぎと違うか？」
「ヒ、ヒロ様は優しいですから」

ミミが俺の腕に手をかけて宥めてくる。ちっ、ここはミミに免じて流してやるが覚えてろよこのやろう。

「……ずるい」

テーブルに身を預けたまま、セレナ少佐がそんなことを言い始める。ずるいって何が？

「ずるいずるいー！　キャプテン・ヒロにめをつけたのはわたしがさいしょだったのにー！」

「えぇ……」

しまいには椅子に座ったまま地団駄を踏んでうわーんと泣き始めた。さすがの俺もこれにはドン引きである。

「どういうこと？」

「どういうことですか？」

エルマとミミが困惑の表情を向けてくる。

「いや、ターメーンプライムコロニーに初めて寄港した時にな、港湾管理局の役人に絡まれたんだよ。その時にセレナ少佐に助けてもらったんだ」

「そーですよ、わたしがたすけたんですよ。わたしのほうがキャプテン・ヒロとさきにであってたんですよ……なのになんでちょっとめをはなしたらほかのおんなのことくっついてるんですか！？」

「なんであんたにそんなことを言われなきゃならんのだ……？」

俺、困惑。

「別にヒロがどんな女とくっついてもセレナ様には関係ないでしょう？」

「うぐっ……そーですけどー……そーなんですけどー……！」

そうなんですけど？　と先の言葉を待っていたらセレナ少佐は酒

をぐいっと呷り、その先の言葉を酒と一緒に飲み下してしまった。おいおい、ただでさえべろんべろんなのにそれ以上飲むのはまずいんじゃないか。

「うぅ……」

セレナ少佐は半べそをかいたまま寝てしまった。俺とエルマとミミの三人は互いに顔を見合わせる。

「どうすればいいんだ、これは」
「いっそぺろりと平らげちゃったら？」
「そんな恐ろしいことができるか。相手は侯爵令嬢だぞ」
「親御さんに知れたらただではすみませんよね」

そんな話をしていると、注文用に用意されていたタブレットからコール音が鳴り響いた。とりあえず俺が出ることにする。

「はい」
『そろそろ刻限となりますが、お部屋の利用時間を延長なされますか？』
「えーと……」

セレナ少佐は完全に沈没している。エルマに視線を向けると、首を振った。

「部屋代が結構高いのよ、こういうお店は。延長となると吹っかけられるわよ」

ぼそぼそと小声でそう言う。ミミはセレナ少佐の介抱し始めたようだった。セレナ少佐はあの様子だとエルマが肩を貸したとしても

歩けまい。俺が背負うしかないか。

「延長はなしで。お会計お願いします」

『承知いたしました。ロビーでお待ちしております』

通信が切れる。俺は盛大に溜息を吐いた。

☆★☆

四人分の食事代としてはあまりにも高い金額を支払った俺達はとりあえずクリシュナに戻ることにした。こんなにべろんべろんな状態のセレナ少佐を軍に預けたりしたら彼女の立場がなくなってしまうだろう。流石に俺達もそこまで鬼ではない。

「やれやれ……」

医務室の簡易医療ポッドにセレナ少佐を放り込み、後をミミとエルマに任せる。流石に服を着たままでは簡易医療ポッドの恩恵を受けることは出来ないので、上着とスカートを脱がさなければならない。それを俺がやる訳にはいかないし、嫁入り前のご令嬢の下着姿を俺が見るわけにもいかない。

食堂に腰を落ち着けた俺は冷蔵庫から炭酸抜きコーラを取り出してボトルの蓋を開け、ぐいっと呷った。うーん、五臓六腑に染み渡る。

さて、それにしてもどうしたものか。セレナ少佐の発言の内容について考える。私が先に目をつけていただの、他の女の子とくっついているだのというくだりだ。

酔っぱらいのたわごとだな、うん。正気で言い放った言葉じゃないだろうし、気にするだけ無駄だ。相手は酔っ払いながらも涙さえ

武器にしてきた強かな女だ。考慮には値しない。
そう結論付けると頭の中がスッキリした。炭酸抜きコーラの糖分が頭に行き渡ったのかね。
いずれにせよ、今回の件に関してはあまり追求せず、何事もなかったかのように振る舞うのが良いだろう。変に恩に着せるのも怖い。食事代もまぁ高かったが……別に目くじらを立てるような金額でもない。賞金付きの宙賊艦を一隻爆散させればお釣りが来る程度だ。
ただ、向こうとしてはやりにくくなっただろう。あれだけの醜態を見せてなお今までどおりの勧誘攻勢を仕掛けてくるわけには行くまい。そう考えればあの程度の出費は安いものだ。
とはいえ、自分のセッティングした会食であんな醜態を晒すものか？　実は酒を呑むのは初めてだったとかそういうオチでもなければあそこまでへべれけになるというのは不自然だと思うんだが……ううむ、わからん。やはり仕事のこと以外ではぽんこつなのか？
セレナ少佐の意図について考えあぐねていると、ミミが食堂に現れた。

「セレナ様が目を覚ましました」
「マジ？　早くない？」
「簡易医療ポッドでお酒を抜いたみたいです」
「簡易医療ポッドすげぇな」

流石は未来の医療マシンということだろうか？　簡易医療ポッドがあれば酔いを気にせず酒が飲み放題なんじゃないか？　そういえば、エルマは結構医務室の使用頻度が高いんだよな……まさかそういうことか。

「俺があっちに行った方が良い感じ？」
「エルマさんとちょっと話をしているみたいなのでここで待っていたほうが良いと思います」

「そっか、ならそうしよう。ミミも何か飲むか？」
「大丈夫です」
そう言ってミミは俺の隣に座った。なんとなく間が持たない感じがする。こっちから話題を振るか。
「オーガニック料理、美味かったな」
「そうですね……私、新鮮な野菜や果物というものを初めて食べました。ヒロ様は食べ慣れている感じでしたね？」
「そうだな、元の世界だと普通に食ってたものだし。逆にフードカートリッジとか自動調理器なんて無かったから、俺としてはこっちのほうが新鮮だ」
そう言って俺は食堂の一角を占める高性能自動調理器テツジン・フィフスに視線を向ける。正直あんなクレソンと藻とオキアミみたいなものから多彩で美味しい料理を作れる方がよっぽど凄いと思う。
「でも俺の知ってるオーガニック料理とこっちの世界のオーガニック料理が一緒かどうかはわからん」
「何か違うんですか？」
「俺の世界でオーガニック料理って言われてるのは農薬や化学肥料なんかを一切使わないで作った野菜を使った料理のことだったんだよな。あの店で使われてた野菜もそうなのかどうかはわからんし」
「へー……効率が悪そうな製法ですね？」
「その方が身体に良いし味も良いと思われてたのさ。実際はどうか知らんけど。所謂高級食材を使った高級料理ってやつだから、俺はあんまり食ったことがないんだ」
そもそも、普通の食材とオーガニック食材をまったく同じように調理してその違いを判別できるような上等な舌を俺は持ってないか

らな。コーラとジャンクフードが大好きだったし。そういう意味でもフードカートリッジで作る食品は俺と相性がいいんだよな。

「ミミはどの料理が美味しかった？」

「私はシーフードサラダが美味しかったと思います。シャキシャキのお野菜と、プリプリのエビとイカ、それにドレッシングが合っていて……！」

ミミが両手を合わせて目をキラキラさせる。食べ物のことを話している時のミミはとても楽しそうな顔をする。

「シーフードサラダくらいなら俺でも作れるかな。材料さえ揃えば」

頭の中で材料を思い浮かべる。野菜とシーフードミックス、あとはドレッシングを作るための酢や油、塩に香辛料が手に入るかどうかが問題だが。

「本当ですか！？」

ミミが目をキラキラさせて詰め寄ってくる。どうどう。落ち着け落ち着け。

「材料が揃えばな。これでも向こうじゃ一人暮らしだったから、多少は料理ができるんだ。ただ、こっちだと材料がなぁ……あとキッチンが無い。そう言えば前にガジェットショップで調理器具一式を見たっけか」

あの時は使いそうもないからスルーしたが、買っておけばよかったか。

「今度買いに行きましょう！　売ってるところを調べておきます！」
「お、おう」

目をキラキラさせたままミミが俺の両手を握ってくる。サラダは今までもテツジンが作ってくれていただろうに、今日のシーフードサラダの何が彼女の琴線に触れたのだろうか。俺が作ったものでがっかりしなければいいが。

いつ買い物に行くかを話し合っていると、食堂の扉が開いた。視線を向けると、エルマとセレナ少佐が入ってきたところだった。セレナ少佐は衣服の乱れなどもなく、顔色も問題なし。酒は完全に抜けているようだった。

「お待たせ、お姫様が目覚めたわよ」
「王子様のキスは必要なかったみたいだな」
「あら？　したかった？」
「王子様ってガラじゃないからな、俺は」

エルマの笑みに肩を竦めて答える。セレナ少佐は両手で顔を覆って震えていた。耳が真っ赤である。よほど恥ずかしいらしい。

「人の上に立つ人は大変だよな。まぁ、たまにストレス解消も良かったんじゃないか？」
「この度は、本当に申し訳なく」
「気にしないでくれ、オーガニック料理も美味かったしな。ああいうところは案内が無いとなかなか入れない。もし、申し訳なく思ってるならああいう店を他にいくつか紹介してくれると助かるな」

今回の件については他にああいう高級な食事処を紹介してくれれば無かったことにする。暗にそう言って貸し借りなしということにしておく。あまり貸しを作りすぎるのも怖い。

「わ、わかりました。後ほど紹介状を送ります」
「そりゃ助かる。艦までエスコートしようか？」
「い、いや、結構だ。その……」
「色々大変なのは察した。聞かなかったことにするよ。俺達は美味しい料理を食べて楽しく酒を飲んだ、それで良いだろ」
「お心遣い痛み入ります」

セレナ少佐は赤い顔のままクリシュナから去っていった。その後姿を三人で見送る。

「……女性軍人っていうのも大変なんですね」

その後姿を見ながらミミがポツリと呟いたのが印象的だった。

#049　駆除開始

その後の宙賊掃討も滞りなく……とは行かなかった。

「釣れませんね」
「想定内っすね」

一週間ほどで宙賊が釣れなくなったのである。まぁ宙賊もおバカではないということだな。釣れた宙賊は一隻も逃さずに殲滅しているが、落とすまでに通信を一切させないというのも難しいものだ。恐らく何らかの方法で手口がバレたのだろう。

「さて、どうするか。例の対策します？」

例の対策というのは、船のＩＤと船名を変えるという姑息な手段である。本来、船に固有で登録されているＩＤはそう簡単に変えられるものではないが、セレナ少佐は体制側の貴族である。その辺りの処理はお手の物だ。後は適当に外装やペイントを変えてやれば宙賊に対する疑似餌として再び機能するようになるだろう

セレナ少佐の挙げている戦果はすでに帝国航宙軍の上層部でも評価され始めているようで、囮用船舶の購入費についても経費として認められそうな流れであるらしい。場合によっては今使っている船とは別に囮用の船を用意できるかも知れないとのことだ。

輸送艦に関しては囮に使っていない時には補給艦や兵員輸送艦としても使えないこともないので、そう言う意味でも完全に無駄にはならないだろうということらしい。

「それも良いですが、そろそろ元を断っても良い頃ではないですか

？」

俺の提案にセレナ少佐が首を傾げる。

「確かに今まで撃破した数を考えるとそろそろ奴らの手駒も打ち止めですかね」

囮を使った宙賊掃討作戦で撃破した宙賊艦の数は既に二〇〇隻を越えている。ゲームであればああいうザコ敵というものは無限にいくらでも湧いてくるものであるが、これは現実である。失われた船はスクリプトに従って自動生成されるわけではなく、命を失った宙賊が生き返るわけでもない。一つの恒星系に存在する宙賊の数は有限だ。

だが、銀河全体で見れば奴らの数は無尽蔵である。一時数を減らしても、拠点があれば周辺の恒星系から少しずつ集まり、その数を増やしていずれ息を吹き返す。

拠点を潰しても完全に撲滅することは難しいが、さりとて補給や整備を行う拠点を失えば満足に活動することはままならなくなる。確実にその数は少なくなるし、組織だった襲撃は難しくなる。

「では、潰しましょう」

奴らの拠点の場所については今までに撃破した宙賊のデータキャッシュから角度の高い情報を得ている。セレナ少佐は宙賊の基地を撃滅することを選んだようだ。

「手筈はどうします？　また籠を作りますか？」

「包囲殲滅は基本ですね。傭兵ギルドにも討伐協力を要請しましょう」

ここで自分達だけでやると言わない辺り、セレナ少佐は優れた軍人だと思う。自分だけの手柄に拘らずに確実性を取れるという点で。

「俺はどうします？」

「無論、参加してもらいます。条件は他の傭兵と同じにさせていただきますが」

「条件次第ですね」

それは即答はせず肩を竦める。

「しっかりしていますね」

セレナ少佐が苦笑いを浮かべる。契約外の勤務となれば別途報酬をいただくのは当たり前ですから、ええ。俺達傭兵は慈善事業家ではないので。

「もし私達だけで宙賊の拠点を殲滅するとなると、どの程度の戦力が必要ですか？」

「殲滅となると、今の戦力に加えて前衛としてコルベットが最低三〇隻、盤石にするなら五〇隻は欲しいですね」

単に宙賊の基地を破壊するだけならこの艦隊だけでも十分だ。基地と言っても所詮ちょっとした補給基地、前哨基地だから、戦艦一隻に巡洋艦が五隻もいるこの独立艦隊だけでも火力は足りる。敵基地の防衛設備の射程外から一方的に基地を叩けるだろう。

だが、殲滅となると話は変わってくる。基地を襲撃された宙賊はありったけの物資を船に積み込んで四方八方に散って逃げる。それを防ぐには奴らを足止めする多数の前衛部隊を突入させる必要がある。セレナ少佐の率いる今の対宙賊独立艦隊だけでは手が足りない。万全を期すなら俺が言っただけの数の前衛を務めるコルベットが必

要になるだろう。
三〇隻から五〇隻のコルベットというのはちょっとした戦力だ。足が非常に早く、それでいてそこそこの打撃力を有するコルベットという艦種は偵察力と即応性、至近距離での格闘能力に関しては他の艦種の追随を許さない。
軍の上層部でも長射程・重装甲・高火力を有する戦艦や巡洋艦の増産を推す大艦巨砲主義者と、コルベットや駆逐艦の機動性・即応性・高制圧力を推す早期展開・電撃戦至上主義者が鎬を削っているとかなんとか。

「それだけの数のコルベットを私の部隊に配備するのは非常に難しいですね」
「でしょうね。足りない分は外注すれば良いでしょう。これまで通りに。そのために傭兵ギルドがあるわけですから」
「そうですね」

そう言いつつ、セレナ少佐はその細い顎に手を当てて何かを考えているようだった。恐らく、どうにか対宙賊独立艦隊の増員が出来ないかどうかを考えているのだろう。そこは彼女の軍人としての領分だ。俺に助言できることはない。

「データは揃っています。軍の司令部に作戦の実行許可を上奏しましょう」

☆★☆

セレナ少佐の上奏から二日後、作戦は実行に移されることになった。今回の作戦には星系軍は参加しない。セレナ少佐率いる対宙賊独立艦隊は昨日のうちに整備を済ませ、別の恒星系に移動したと見せかけてアレイン星系内に潜伏中である。

今回のテーマは奇襲だ。宙賊どもに情報が漏れる前に素早く戦力を展開し、不意を衝いて一気に宙賊どもを殲滅する。ブリーフィングは予め録画しておいたホロ動画によって行われ、アレインテルティウスコロニーの傭兵達はブリーフィング後に即座に襲撃地点へと急行することになっている。

作戦決行時間丁度に各艦は超光速ドライブ状態を解除し、一斉に攻撃を開始する予定だ。

「ヒロ、そろそろ時間よ」
「はいよ。ミミ、準備は？」
「いつでも大丈夫です！」

俺達はクリシュナのコックピットで作戦決行時間に備えていた。周りには同業の船が沢山いる。彼らと超光速ドライブを同期して作戦領域へと向かう予定である。ジェネレーター出力を待機モードから巡航モードへと切り替え、超光速ドライブを待機状態にする。

「久々の実戦になるわね。腕は鈍ってない？」
「多分な。そっちこそ大丈夫か？」
「出力調整とサブシステムの制御くらいお手の物よ。私を誰だと思ってるの？」

エルマが挑発的な笑みを浮かべてみせる。これは大丈夫そうだな。俺もシミュレーターでだがクリシュナを動かすこと自体はやっていたから問題はないと思う。多少感が鈍っているかも知れないが、戦っているうちに戻るだろう。

「超光速ドライブ、チャージ開始しました。起動まで5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動」

ズドォン、という爆発音のような音と共にクリシュナが一瞬で光を超えて走り出す。基本的に真空に近いと言われる宇宙空間で何故このような音が鳴るのか？　調べてみたがさっぱりわからなかった。
いや、調べても情報が出てこなかったわけではない。情報は出てきたがさっぱり理解が出来なかったということだ。なんでも超光速ドライブ時にシールドと船の構造材とその質量が干渉してなんたらかんたらと書いてあったが、俺にはチンプンカンプンである。超光速ドライブの仕組みについても見てみたがやはり俺には理解不能であった。
まぁ、いいんだよ、そういうのは、うん。別に仕組みや構造を知らなくたってスマホもパソコンも電子レンジもテレビも使えていたんだから。仕組みを知らなくったって船くらい動かせる。

「今回はどれだけ稼げるかしらね？」
「さてな。固定給は作戦終了時の五万エネル、成果給は小型艦一隻五千エネル、中型艦一隻二万エネル、大型艦一隻一〇万エネル」
「この前と同じですよね？」
「まぁ相場ね。それに加えて賞金と撃破した艦の積荷って感じで。軍主導の大規模討伐はいつもそんな感じよ。腕があれば確実にいつもより稼げるから、傭兵はこぞって参加するわね。巣を突かれて慌てて飛び出してくる宙賊の船は物資もたんまり持ってるし」

そのままにしておいても軍の船に基地ごと吹っ飛ばされるので、宙賊艦は戦利品の類を積めるだけ積んで基地から飛び出してくる。戦闘時の機動性などを考えれば余計な荷物は少ないほうが良いのだが、どうせ宙賊側に勝ち目はない。ならばと一縷の望みに賭けて物資を満載してでてくるのである。逃げ切れさえすれば積荷を売ってとりあえず当面の資金を得られるからな。

「さーて、暴れるかね……セレナ少佐は上手くやるかな？」

「上手くやるでしょ。あの人、軍人としては優秀だし」
「あはは……」
エルマの物言いにミミが苦笑いを漏らす。うん、先日のやらかしはまだ記憶に新しいものな。
「そろそろ目標のポイントに到達します。超高速ドライブ終了まで5、4、3、2、1……」
再びドォン、と爆発音のような音が響き、流星のように後方に流れ去っていた星々が停止する。通常空間に戻ったのだ。
程なくして対宙賊独立艦隊による艦砲射撃が開始された。戦艦と巡洋艦から放たれた大口径のレーザー砲やプラズマキャノン、磁力投射兵器による無慈悲な砲撃が宙賊の根城らしき小惑星に突き刺さり、その表面と内部構造物を破壊していく。
「派手にやるなぁ」
「展開している宙賊艦が殆いないわね。完全に奇襲が決まってるわ」
「俺達の獲物、出てくるかね？」
もしかしたら宙賊艦が展開する前に砲撃で片付いてしまうかもしれない。それはマズい。折角の稼ぎどころだというのに。
クリシュナのジェネレーター出力を戦闘モードに引き上げ、宙賊の基地へ向かって加速し始める。他の傭兵達も宙賊基地へと急行しているようだ。
「レーダーに反応多数、宙賊艦が展開を開始しました！」
「そいつは重畳。これでボウズってことにはならないな」
「ウェポンシステムをオンラインにするわ」

エルマの宣言と同時にクリシュナの前方部分が変形し、重レーザー砲を備えた武器腕が四本展開される。同時に、コックピットの左右から太い砲身が前に向かって伸びた。絶大な威力を誇る大型の散弾砲だ。

「よっしゃ、行くぞ！」

雄叫びを上げて俺とクリシュナは戦場へと身を躍らせた。

#０５０　久々の戦場

「一〇時方向、俯角二〇、敵艦三！」

ミミのアナウンスに従って敵機をロックし、船首の方向を速度をチェックする。向かってきてるな。

「交差後反転、ケツを取る」

船首を敵機に向け、急加速して擦れ違う。レーザーとマルチキャノンを撃ち込まれたが、被弾は最小限だ。

「Ｇに備えろ！」

クリシュナの姿勢制御ブースターを噴かして艦の方向を１８０。回転させ、一気に加速して敵艦の後方を取る。回転と急加速で強烈なＧが襲いかかってくるが、これは歯を食いしばって耐える。

「敵機正面！」

「全部持ってけ」

完全に後ろを取った。散開して逃げようとする敵機のうち左右の二機に重レーザー砲の連射を浴びせ、正面の敵艦に散弾砲の照準を合わせる。必死に逃れようとしているようだが、宙賊艦如きの運動性と加速性能でクリシュナを振り切ることは不可能だ。

「これで三つ」

コックピットの両脇に備えられた砲身が火を噴き、無数の弾丸が後方から宙賊艦に襲いかかった。弾丸は一瞬で敵のシールドを飽和させ、無防備なスラスターを、その先にあるエネルギ伝導管を、そしてメインジェネレータを食い破る。一瞬でスイスチーズの出来上がりだ。

爆散する三隻の宙賊艦を追い越して次の目標を探す。

「キレは落ちてないみたいね？」

「どうかな」

「三時方向、仰角二〇に敵艦多数、六……いや七です。中型艦が二隻います」

「突っ込む？」

「もちろん。チャフとフレアのタイミングは任せる」

「了解」

スラスターを噴かして敵集団へと船首を向ける。

『敵接近……なんだありゃ？　腕付き？』

『腕付き……？　おい、画像回せ――この前の化物じゃねぇか！　あいつはやべぇ！　逃げろ逃げろ！』

『逃げるっつったってどこに逃げるってんだよ！？』

『あんなもんやられる前にやっちまえばいいんだ！』

敵艦が七隻、一斉に船首を向けてこちらに向かってくる。中型艦二隻はミサイル支援艦に改造された輸送船のようだな。

「まずは中型から落とす」

「はいっ！」

「ええ」

『撃て撃て撃てぇ！　ありったけぶちこめ！』

コックピット内に警告音が鳴り響く。熱源探知式のシーカーミサイルだ。誘導性能も高く、対シールドにも対装甲にも大きな攻撃力を発揮する。宙賊の使う武器として最も強力な部類のものだ。

「フレア展開」

エルマの宣言と同時にクリシュナから複数の熱源が発射される。二隻の改造中型艦から発射された大量のシーカーミサイルは囮の熱源に殺到し、目標を見失う。その隙に、クリシュナはシーカーミサイル弾幕を抜けていた。するりと。

『第二射……！』
『近接防御！』
『止めろ！』
「間に合うものか」

既にこちらの射程内だ。改造中型艦がミサイルベイを開放するが、もう遅い。二門の散弾砲から連続で発射された無数の弾丸が中型艦のシールドを飽和させ、装甲に、船体に、そして開放されたミサイルベイに着弾した。

『うわあぁぁぁぁぁっ！？』

二隻の中型艦が文字通り爆発四散する。その光景に後ろで控えていた宙賊艦が竦んだ。
そのように見えた。

『や、やべぇ……』
『逃げっ――』

「逃がすわけないわよねぇ」
「勿論。宙賊は皆殺しだ」
慌てて逃げ出そうとする宙賊艦に重レーザー砲の連射を浴びせ、追いかけ回して散弾砲を撃ち込む。戦意のない敵を虐殺して楽しいのかって？　楽しいね！　宇宙のゴミクズが消える上に金まで稼げる。こんなに楽しいことはない。正義や大義というものはいつだって甘美なものだ。
『たっ、助けっ――』
「嫌です」
たまにラベルの裏側を見てみないととんでもないことになったりするけど、まぁ宙賊どもに関しては心配要らない。こいつらは確実にこの世に存在しても百害あって一利なしの存在なので。
「エリアクリア。次の最寄りは一〇時方向です」
「向かおう」
「ええ」
俺達は頷き合い、クリシュナを次の戦場へと走らせた。
☆★☆
「戦況は」
「奇襲攻撃が効いたようです。反撃の規模は大きくありません」
「そう。各艦にはこの調子で冷静に任務をこなすよう通達を」
「ハッ！」
戦況は圧倒的にこちらが優勢だ。初撃で宙賊基地のハンガーを叩

けたのが大きかった。出港前に叩いてしまえばどんなに強力な船も木偶でしかない。
潰せたので一番大きいハンガーだけだったので、その他のハンガーからは宙賊どもが出撃しているようだが……傭兵達はよく戦ってくれているようだ。宙域から離脱しようとする宙賊艦も上手いこと封じ込めに成功している。
通常、一つの星系に存在する星系軍は一系統だけだ。哨戒任務を帯びた帝国航宙軍が寄港したりすることはあるが、そういった部隊は行き掛けの駄賃とばかりに見かけた宙賊を撃破することはあるものの、宙賊を狙って専門に軍事行動を行う部隊は長い帝国史上でも私達が初めてなのだ。
帝国軍が本気で宙賊を狙ってくるわけがない――そんな今までの常識を覆し、心理的な隙を突くことができた結果がこれだ。従来の星系軍の指揮系統から独立しているために宙賊に情報が漏れず、完全に不意を打つことができた。

「賞金額の伸びは……」

手元のホロディスプレイを操作して今回の作戦に参加している傭兵達の撃墜スコアを確認する。一位は――クリシュナ。彼の船だ。それを確認した私の口がにんまりと緩むのを自覚する。任務中に浮ついた気分でいるのは良くない。私は片手で口元を隠してにやつく表情をなんとか元に戻した。
ニヤついている場合ではない。不意のアクシデントに備えておかなくては。

☆★☆

「これで終わり、っと」
「エリアクリア、もう近くに反応は……ありませんね」

まだここから離れた宙域では戦闘が継続されているようだが、近辺にはもう敵機の反応がないらしい。俺もレーダーの反応をチェックしてみるが、確かにそれっぽい反応はかなり遠いようである。

「何隻殺った？」

「撃墜スコアは小型艦が三十三隻、中型艦が三隻ね」

「ターメーン星系ほどには稼げなかったか」

確かターメーン星系での討伐の時はもっと狩れてた筈だ。腕が鈍ったか？

「絶対数が少なかったから仕方がないわよ。それを考えると驚異的な戦果だと思うけど」

確かに、敵影が少し薄かったな。先制攻撃が効きすぎたか。

「それもそうか。ええと、小型艦一隻で五千、中型艦一隻で二万だっけ。そうなると討伐報酬だけで二〇五〇〇〇エネルか」

「それに作戦参加でプラス五万、それと賞金は別にカウントされるわね」

「小型艦一隻辺り一万弱、中型艦一隻辺り五万前後が相場だよな。参加報酬含めてプラス５０万くらいか？」

「そんなところね。合計で約七十万くらいかしらね？　それに積荷の略奪分ってところ」

「こりゃ略奪に精を出さなきゃならんね」

周辺宙域に敵影はないので、早速敵機の残骸漁りを始めることにする。狙い目は嵩張らず、価値の高いレアメタルやハイテク製品、酒やドラッグなどの嗜好品だな。勿論ドラッグはイリーガルな品が

多いが、こういう軍公認の討伐で手に入れた分については軍で買い取ってくれるのでそれなりに実入りが良いんだ。何に使ってるかは知らんけど。

帝国政府としても売れないからって違法な薬物でスペースデブリとして漂ったままにされるのは困るのかもしれんね。俺達が回収しなかったらイリーガルなドラッグのコンテナはこの宙域に漂い続けるわけだし。そうなるとそのコンテナを狙って悪質なスカベンジャー――廃品回収業者が出没しかねない。

彼らは戦場跡などに現れては俺達傭兵や軍の取り零した様々な物資やジャンク品を回収して回るゴミ処理業者のようなものだ。彼らがスカベンジャー――つまり腐肉漁りだなんて呼ばれている理由は単純で、自分達は一切手を汚さずに俺達傭兵や軍人が命がけで戦った戦場のお零れを狙う存在だからである。

俺は別になんとも思わない。ご苦労なことだな、とは思うけど。大した稼ぎにもならないだろうしね。だが、傭兵や軍の中には彼らを蛇蝎のごとく嫌う連中もいる。悪質なスカベンジャーの中にはイリーガルな品を拾って売り捌くようなやつもいるしね。それも仕方のないことと言えば仕方のないことなんだろう。

「俺が警戒をするから、エルマはミミに回収ドローンの操作を教えながら作業をしてくれるか？」

「アイアイサー。ミミ、頑張るわよ」

「は、はいっ」

エルマが各種センサーを使って獲物の場所を探し始める。俺は彼女の指示に従って船を走らせるのだった。

#051　事態急変（前書き）

ギリギリアウト！―（∵3」∠）―（お犬様のトリミングなどの雑務でまにあわなかった

#051　事態急変

「いやぁ、大漁大漁」

船のカーゴに回収されたレアメタルや戦利品の一覧を見ながら思わず笑みを零す。レアメタルの量は少なかったが、単価の高いハイテク製品がかなり多い。これは売却益にも期待ができそうだ。

「今回はヤバいものは回収してないわよ」
「おっ、そうだな」
「何よその反応」
「へ、変なものは回収してないですよ？」

エルマのジト目とミミの若干怯えた声を受け流しながら戦利品の一覧を閉じる。まぁ、毎回毎回レアな危険物がサルベージできるとは限らない。今回は引きが悪かったみたいだな。仕方ないね。

先程セレナ少佐から作戦終了の通達も出たからあとは各自帰投して良いということになっている。宙賊の基地には何隻かの巡洋艦や駆逐艦が横付けしてまだ内部の掃討を行っているみたいだけどな。まぁ、宙賊相手なら正規の帝国航宙兵が遅れを取ることはないだろう。何せ装備が違う。

寄せ集めの宙賊では帝国航宙軍が装備しているであろう軍用のパワーアーマーと重火器にはまず対応できないだろうからな。

俺ならどうかって？　生身で帝国航宙軍とやり合うのは絶対に御免被る。いくら俺のレーザーガンが普通のものより品質が良いって言ってもパワーアーマーの装甲を一撃で破壊できる程じゃないし、向こうが使う武器の火力は掠っただけでも致命傷だ。この船に積んである俺のパワーアーマーを装着して戦うならそうそう負けるつも

りはないけど。
　あれもなかなか使う機会が無いんだよなー。でも用意はしておかないといざ白兵戦になって向こうがパワーアーマーを着ていたら速攻で詰むんだ、これが。だから用意はしてある。殆どカーゴルームの隅で埃を被ってるけど。

「さて、帰るか」
「ちょ、ちょっと、変なものは回収してないわよね！？」
「だ、大丈夫のはずです……！」

　なんだか慌てて戦利品のチェックをしている二人をよそに俺は艦首をアレインテルティウスコロニーへと向ける。もうカーゴもいっぱいだし、これ以上ここにいても仕方がないからな。
　回収しきれない戦利品に関しては残念ながら放置だ。頼まなくてもスカベンジャー達が掃除してくれるだろう。既にレーダーにはそれらしき反応が映ってるし。

「超光速ドライブチャージ開始、行くぞー」
「ちょ、ちょっと待って、大丈夫よね？　本当に大丈夫よね？」
「大丈夫だって、何も変なものはないから。今回は危険物はなし、まっとうな品ばかりだよ。多分」
「多分って何よ！？」

　エルマの叫びと同時に超光速ドライブが起動し、ズドォンという爆発音のような音を立ててクリシュナが超光速航行状態になった。

「どんだけトラウマになってるんだよ、歌う水晶」
「あんなものをこともなげにひょいっと出されたら誰でもトラウマになるわよ！」
「そんなにか？」

「そんなにかってあのね……ある意味反応弾頭よりヤバいじゃない。落として割っただけで大惨事よ？」

反応弾頭というのはクリシュナが積んでいる対艦魚雷にも採用されている強力な爆弾である。仕組みはわからないが、原子爆弾や水素爆弾よりも強力な威力を誇るらしい。実際、当てさえすれば戦艦でも一撃で粉砕する威力なので、謳っている通りの威力はあると思う。

それよりも強力ね……まぁ考えようによってはそうなのか？　歌う水晶で結晶生命体を呼び出した方がより広範囲に、かつ長時間脅威が持続するわけだし。

「そうか」

「そうかって……軽いわねぇ」

「ヒロ様ですから」

呆れた表情を見せるエルマと何故か得意げな声音のミミ。何故ミミはそこで得意げな感じなんだ。

「コロニーに戻ったらまた暫くあのお姫様の子守、かぁ……」

超光速ドライブ状態になって少し気が抜けたのか、エルマが溜め息を吐く。

「もうあと一週間くらいだからすぐだろ。終わったらどうするかね？」

「もっと稼げるところが良いなら紛争宙域にでも行く？　あんたの腕とクリシュナがあればガッポガポ稼げるわよ」

「うーん、紛争宙域はあんまり気乗りがしないんだよなぁ。なんとなく気が休まらないし」

実際、そういう恒星系のコロニーは軍が破壊工作を警戒してコロニーそのものに厳戒令が敷かれていたりして、滞在も窮屈なんだよな。ゲーム的に言えばマーケットのストアが殆ど閉まってて本当に船の整備と補給くらいしかできない感じになる。この世界だとどういう感じになるのか？　なんとなく想像つくよね。

「えーと、ハイパーレーンの三つ先に観光惑星のある恒星系があって、客船を狙った宙賊が跋扈してるとか」
「ふむ、観光惑星……バカンスをしながら宙賊退治というのも一興では？」
「滞在費が高くなりそうねぇ。ま、クルーはキャプテンの方針に従うわよ。バカンスも悪くないわ」
「んじゃそういう方向で」

俺には惑星上居住地に庭付き一戸建てを手に入れるという野望があるが、別に急ぐものでもない。元の世界に帰る術を探しているというわけでもないし、少々の寄り道くらい構わないだろう。ぶっちゃけ切迫した状況でもないから楽しむのが最優先でいいよね、という。

そんなことを話しながらアレインテルティウスコロニー付近に到達した俺達は超光速ドライブ状態を解除し、アレインテルティウスコロニーにドッキング要請を……うん？

「なんかコロニーの様子がおかしくないか？」
「え？　確かに何か変ね。あの区画、停電してない？」
「そうですね？　どうしたんでしょうか。あ、ドッキングベイの誘導灯も赤く点滅してますよ」

様子を観察している間に次々とドッキングベイから宇宙船が飛び

出してくる。まるで何かから逃げるかのような挙動だ。
「どうするの？」
「どうするって言われてもなぁ……ミミ、港湾管理局に繋げてくれ」
「はい、メインモニターに繋ぎますね」
ミミがコンソールを操作し、アレインテルティウスコロニーの港湾管理局に回線を繋げる。いつもはワンコールで出るのに、なかなか通信が繋がらない。暫し待っているとようやく繋がった。
『こちら港湾管理局！　今取り込み中だ！』
「おいおい、落ち着けよ。こちらは傭兵ギルド所属のキャプテン・ヒロだ。宙賊掃討作戦から今戻ったんだが、コロニーの様子がおかしいようだな。何があったんだ？」
『傭兵か！？　おい、あんたの船には戦闘用のパワーアーマーは積んであるのか！？』
「は？　いや、あるけど……？」
意味不明な質問をされて戸惑いながらも答える。そうすると、港湾管理局員は叫んだ。
『助けてくれ！　正体不明の攻撃的な生物にコロニーが襲撃されているんだ！』
モニターの向こうの港湾管理局員が必死の形相で頼み込んでくる。突然の要請に俺達は返答に困り、互いに顔を見合わせる。
「いや、そんな事言われてもな」
「私達は傭兵よ？　タダで働くほど私達の命は安くないわ」

俺の言葉にエルマが頷き、二人で顔を見合わせて首を横に振る。ミミはオペレーター席でどうしたら良いかわからずオロオロしているようだ。こんな状況じゃ仕方ないな。

『こんな時でも金を取ろうってのか！？』

「どんなときでもだ。命を懸ける以上対価は必要だ。当然だろ？傭兵ギルドに依頼は出していないのか？」

『た、多分出していると思うがわからん！』

「わからんのかい。とりあえず空いているハンガーに案内してくれ、御託を並べる前に職務を全うしろ」

『わ、わかった……ええっと、三十二番……いや、三番ハンガーに入ってくれ！』

「了解。行くぞ」

通信を切り、ガイドビーコンに従って船を進める。

「入港するの？　面倒事には首を突っ込まないほうが良いんじゃない？」

「よくわからんが、金になるかもしれんしとりあえず話だけでも聞いてみたら良いだろ。セレナ少佐が戻ってくるまでちょろっと港の警備をして金が稼げるなら悪くないだろうし」

「大丈夫でしょうか……？」

「パワーアーマー着てれば滅多なことにはならんと思う。多分」

どっちにしろアレインテルティウスコロニーに留まって報酬を受け取らなきゃならんわけだしな。ここでアレインテルティウスコロニーに潰れてもらっては困る。

三番ハンガーに停泊すると同時にエルマとミミには船の掌握と傭兵ギルドへのアクセスを任せ、俺はカーゴルームへと向かった。勿論目的はカーゴルームに置いてあるパワーアーマーである。

「そういやこっちの世界に来てからこれにはあんまり触ってなかったなぁ……」

パワーアーマーというのは、要は動力付きの鎧である。分厚い装甲と強靭な膂力を装着者に与え、パワーアーマーに内蔵されている専用パワーコアから供給されるエネルギーで強力な重火器を扱うことができるのだ。これは個人に戦車並みの装甲と機動力、そしてパワーと火力を与える未来の兵器なのである。

まぁＳＦものの小説やゲームなんかによくあるやつだな。実際、ステラオンラインの白兵戦においてはパワーアーマー未装着の生身のプレイヤーがパワーアーマー装着者に勝利することは非常に難しかった。

港湾管理局員曰く、そんな物が必要になるほどのもモノがコロニーに蔓延ってしまっているらしい。うーん、俺の記憶ではこういった類のイベントはステラオンラインにはあまりなかったと思うんだが。やはりゲームの世界とは色々と勝手が違うんだろうな。厄介な。

パワーアーマーに乗り込み、起動シーケンスを進めながら俺は小さくため息を吐くのだった。

#051　事態急変（後書き）

パワーアーマーのデザインはずんぐりのチョイダサくらいが好きです―（：3」∠）―

#052　ダサかっこ……ダサい（白目）

さて、パワーアーマーと俺は呼んでいるし、この世界の人々もそう呼んでいるが、俺の乗り込んだこいつの正式名称はもっと長ったらしい名前である。なんだったっけ？　動力炉搭載型人造筋肉駆動式強化外骨格とか？　そんな感じ。クソ長いので皆パワーアーマーと呼ぶ。

パワーアーマーと一口に言っても色々あるが、基本的にステラオンラインにおける白兵戦というのはさほど広くない閉鎖空間での撃ち合いである。そんな撃ち合いをするにあたって必要な機能とは何か？

機動性や敏捷性だろうか？　いいや、さして広くもない空間でもそんなものが高くても持て余すだけである。生身の人間を上回るくらいで十分だ。

では何か？

「ふんっ！」

突進してきた大型の白い怪物を受け止め、そのままパワーにまかせてグシャリとベアハッグで抱き潰し、放り捨ててストンピングで踏み潰す。絡みついてきた小型の怪物をパワーにまかせて引き千切り、壁に叩きつける。怯む中型の怪物の群れに突っ込み、体当たりでぶっ飛ばす。腕を振り回してぶっ飛ばす。向かってきた中型の怪物を掴んで高圧電流をお見舞いし、逃げる怪物の背中を両肩に装備された高出力レーザーガンで撃ち抜いて灰にする。

「ふはは、力こそパワー！」

頭の悪いことを言いながら謎の攻撃的な生命体を駆逐を続ける。
俺がパワーアーマーに求めたもの。それはひたすらに装甲とパワーである。機動力なんて生身の人間に毛が生えた程度で問題なし。どうせパワーアーマーが必要になる状況で長距離を高速で移動しなきゃならないとか、機動戦を仕掛けなきゃならないなんて状況にはまず陥らないのだ。
敵の攻撃を受け止めてもびくともしない装甲と重量、そして膂力的な意味でも出力的な意味でも圧倒的なパワー。この二つがあればなんとかなるものだ。出力と膂力が高ければ強力な重火器を使うことができる。後は当てる腕があれば良いんだから楽勝だな。

『こちら港湾管理局。付近の安全は確保されたようだ、感謝する』
「ああ、報酬は傭兵ギルド経由でしっかりと貰うから気にするな」

そこら中に散らばった生白い怪物の死骸を一箇所に積み重ねながらパワーアーマーの状態をチェックする。
装甲にダメージ無し、各関節のアクチュエーターに異常なし、エネルギー残量９９．７％、固定武装も異常なし。
俺のパワーアーマーの型番はＴＭＰＡ－１３　ＲＩＫＩＳＨＩ　ｍｋ－Ⅲだ。固定武装は両掌に装備された超高圧電流放射装置『ＨＡＲＩＴＥ』と脚部の衝撃増幅装置『ＳＨＩＫＯ』、そして両肩部に装備された高出力レーザーガンの『ＳＨＩＫＩ－ＲＩ』である。
その他、武装と言って良いのかどうかわからないが、シールドを張りながらごく短距離を超高速で移動して体当たりを行う『ＢＵＣＨＩ－ＫＡＭＡＳＨＩ』機構を備えている。シールド自体は任意で展開することも可能だけど。
パワーアーマーとしてはかなり大型の部類で、ヘビーアーマーに区分される機種だ。ジェネレーター出力も高く、ペイロードも十分で様々な重火器を扱うことができる。
全体的にずんぐりむっくりと言った感じで、重装甲故に外見とし

てはかなり『太って』見える。重量を支えるために脚部がかなりがっしりしていて銃身が低いのが特徴だな。俺はパワーアーマーのペインティングとかにはあまり拘らないタチなのだが、このメーカーの標準カラーは有り体に言ってあまりにもダサいので全身癖のないシルバーなメタリックカラーにしてあるな。

うん、わかる。突っ込みたいのはよーくわかる。ぶっちゃけていうとこのパワーアーマーの外見はメカっぽいお相撲さんだ。しかも微妙に造形がその……悪役っぽい。もうこれはダサかっこいいじゃない。ストレートにダサい。

でも強いんだよ！　俺の求めている性能を追求するとこのパワーアーマーが最適だったんだよ！　もうなんというかネタ機にしか見えないんだけど本当に強いんだって！　ステラオンラインでも最強パワーアーマーと言えばこのＲＩＫＩＳＨＩ　ｍｋ－Ⅲの名前が即座に上がるくらいの良機体なんだって！

パワーアーマーを使ったＰｖＰイベントとかこの機体だらけで、イベントが始まると『さぁやってまいりましたステラオンライン大相撲、初場所です！』とか『本日の一番目は東側キャプテン・ブラック山と西側キャプテン・ヒロの海の取り組みとなります』とか実況が入るくらい人気だったんだよ！

何故このようなパワーアーマーが誕生したのか？　それはステラオンラインの開発にしかわからない。そしてこの世界でも問題なく受け容れられるということも今日わかった。もしかしたらこの世界にも同じようなパワーアーマーがあるのだろうか……？

『ヒロ様？　ヒロ様？　大丈夫ですか？』

「あ、ああ。大丈夫だ。ちょっと考え事をな。どうしたんだ？」

『傭兵ギルド経由で救援依頼です。イナガワテクノロジーからで、私達が診察を請けた病院がありますよね？　あそこで騒動で出た怪

我人の治療なんかをしているみたいなんですが、そこに例の怪物が集まり始めているようです』
「ここはもう良いのか？」
『帝国軍のパワーアーマー部隊が間もなく到着するそうです。防衛の成功と戦闘データ供出で報酬は五万エネルですね』
「命懸けの割に安いなー。生身だと多分危ないぞ、こいつら」
『だからパワーアーマー装備が前提なんじゃない？　イナガワテクノロジーの方はどうするの？』
「向かうことにする。報酬は良いんだよな？」
『一〇万エネルですから、港の防衛の倍ですね』
「そりゃいいな。ナビゲートよろしく」
『はい！』

少し離れたところに放り捨てていた武器を拾ってからパワーアーマーのＨＵＤ上に表示されるマップ情報に従ってガッシャンガッシャンと移動を始める。

『それにしてもわざわざ格闘戦とは酔狂ね。別にあんた、格闘が得意なわけじゃないでしょ？』
「得意じゃなくてもしなきゃならん時はある。余裕がある時に試しておいたほうが良いだろ」
『それはそうね』

武器の状態をチェックしながらガションガションと走る。今回俺が持ってきたのは焦点可変式レーザーランチャーだ。
パワーアーマーを着た敵には焦点を収束させた高出力レーザーで対応できるし、生身相手なら焦点を散らしたスプリットレーザーでも致命的なダメージを与えられる。なかなかに万能な武器なのである。
重くて取り回しは良くないが、俺のパワーアーマーならなんてこ

とはない。

『道を真っ直ぐ進んで右に曲がったところにエレベーターがあります。それに乗って中層に降りてください』

「了解」

この辺りはあの生白い化物はいないようだ。しかし、アレはアレだよなぁ。

「なぁ、あの化物、俺達が工場見学の時に見た人造肉の……」

『似てますよね……』

『工場から離れては生きられないって話だったけど……管理が杜撰だったのかしらね？』

「あの工場とは限らないけどな。人造肉ってどれも白かったし他の工場かもしれん」

通信越しに二人と会話しながらエレベーターに乗り込み、行き先を中層に設定する。程なくしてエレベーターは滑らかに動き始めた。パワーアーマーはかなりの重量なんだが、これくらいはなんでもないらしい。

「船の方も警戒しておけよ。まぁハッチさえ閉めとけば中に入ってくることはないと思うけど」

『それは大丈夫、ハッチのセキュリティカメラは常にチェックしてるし、低出力でシールドも張ってるから』

「なら大丈夫だな。でも念の為な」

そもそも宇宙船であるクリシュナの対ＮＢＣ防御は完璧だし、シールドも展開してあるならあの白い怪生物は近寄ることもできまい。フラグでも何でもなく、不可能なものは不可能だ。

というか、その状態だとパワーアーマーを着た俺ですら突破は難しい。クリシュナのシールドジェネレーターから発生しているシールドを飽和させるのはこのレーザーランチャーを使っても無理である。強力とは言っても宙賊艦のしょぼいレーザーくらいの威力しか無いし。

そうしているうちにエレベーターが目的の階層に辿り着いた。ドアが開いて目に入ってきた光景に絶句する。

「これはひどい」

阿鼻叫喚の地獄絵図だ。ガクガクと身を揺する大型の白い化物の口の端でプラプラと動いている誰かの片足、白い身体を鮮血で染めて何かを貪っている中型の怪物、無数の小型の怪物に取り付かれて身動き一つしない誰かの身体。そんな光景があちこちに広がっている。

どの怪物にも共通しているのはぬめりとした白い身体と、ヤツメウナギのような丸い口、そこに生えている無数の鋭い牙といったところか。あの工場で見た人造肉の材料の触手生物とは違って、中型種以上のものには手足のようなものがある。小型種は触手生物そのままって感じだけど。

いやぁ、触手生物が元だけど薄い本みたいな感じにはなりそうもないですねぇ、これは。食欲しかありませんぜこいつら。グロいわ。

『酷いわね……』

「ミミは大丈夫か？」

『そっちからの画像を見て顔を真っ青にして固まってるわ』

「無理に見るなって言っとけ。あと、生存者の反応があったら教えてくれ」

『アイアイサー、とりあえず通りには居ないわ』

エレベーターに奴らを乗せるわけにはいかないので、エレベーターからとっとと降りてレーザーランチャーを構える。スプリットレーザーモードだ。

「おらーっ！　汚物は消毒だー！」

スプリットレーザーをバラ撒いて手前から順番に怪物どもを灰にしていく。通りには生存者はいないとのことなので、遠慮なく掃討する。

こいつらは生身の人間にとっては脅威だが、パワーアーマーを装着している俺にとっては何でも無い雑魚だ。大型種の体当たりで転倒させられる可能性はゼロではないが、転倒させられたとしても奴らの膂力と牙では俺のパワーアーマーにダメージを与えることはできない。

対する俺の火力は圧倒的。武器を使わなくてもパワーアーマーの固定武装と格闘だけでも奴らを蹂躙することができる。帝国軍のパワーアーマー部隊が本格的に動き出せばこれくらいの怪物はすぐに掃討されるだろう。こうして俺が戦う機会があるのはなんというか、タイミングが良かったな。

ドスドスと音を立てながら愚直に向かってくる大型種にスプリットレーザーの連射を浴びせて無力化し、飛びかかってくる中型種をレーザーランチャーで殴り飛ばし、時に蹴りで迎撃しつつやはりスプリットレーザーで焼き払う。小型種も絡んできて鬱陶しいので、たまに身体から毟り取って踏みつけてやったり、あまりに多い時には掌からの放電を浴びせてやったりしてまとめて駆除する。

『私だったら気持ち悪くて吐くわね』

「ゲロを吐くのは酒を飲みすぎた時だけにしとけよ……」

放電で身体から落ちた小型種を踏みにじりながら苦笑する。しか

しどうにも中型種は多少頭が回るようで、敵わないと察すると逃げるな。逃さないけど。
肩部レーザガンと手持ちのレーザーランチャーを連射して逃げようとする中型種も殲滅しながら以前訪れた総合病院への道を走る。
『次の交差点を右折、そうしたらもう目と鼻の先よ』
「あいよ」
ガッシャンガッシャンと足音を響かせて走る。通りには生存者は居なかったな。どうも生存者は建物の中に逃げ込んで籠城しているらしい。こういったコロニーは事故や攻撃で外殻に穴が空いた時のために気密性の高い避難シェルターなんかもあるだろうから、そういうところに入ってるんだろうな。
「ワァオ」
交差点を右折して思わず声を上げてしまった。目標ポイントである総合病院の前に何故か怪物どもがひしめいていたからだ。
「なんで集まってるんだこいつら」
『さぁ？　健康診断とか？』
「健康診断のために病院に押しかけるクリーチャーとかシュール過ぎるわ」
エルマの適当な返答を聞きながら俺はレーザーランチャーを化物どもの群れに向けた。

#053　事態収束？

「イエエエエエエッ！　レッツロォォォォォック！」

スプリットモードで生白い化物どもの群れに致命的な光線のシャワーをお見舞いしてやる。発射から着弾まではまさに一瞬だ。それはそうだろう、文字通り光速で着弾するのだから。

本来、高出力のレーザーが対象に与える主なダメージソースは爆発による衝撃力のはずである。超高温のレーザーを被弾した対象の表面が急激に蒸発し、爆発してダメージを与えるのだ。

しかし、ステラオンラインにおける高出力レーザー兵器というものはそういった原理でダメージを与えることはなく、対象を貫き、灰にする。俺の知っている光学兵器の挙動と違う。

「まぁ、敵が倒せれば何でも良いんだけど不思議だよなぁ」

もしかしたら俺の知るレーザー兵器とは原理からして違うのかもしれない。そんなことを考えながら迫りくる白い怪物達を掃討する。

『何が？』

「いやなんでも。しかしなんだろうね、こいつらは。こういうことってよくあるのか？」

『私は聞いたことがありませんけど……』

『こんな事件が度々起こってたら培養肉工場とメーカーは軒並み潰れるわよ』

「それもそうか」

そのうち培養肉製造に反対する人とかも出てきそうだよな。俺が見た範囲内でも確実に何人か死んでるし。こんな事態を引き起こさないように十重二十重の安全対策はされてそうな気がするんだけどな？

「もしかしてモグリの培養肉製造業者でもいたのかね」
『あまりぞっとしない話ね……そんなところの培養肉とか何を餌にしているやら』
『美味しいお肉を作るには餌が重要ってコーベ・ビーフのパンフレットに書いてありました』
「エルマが心配しているのはそういうことじゃないと思うなぁ」

のんきな話をしながら怪物を駆除する。え？　ロック？　緊張感の欠片もない駆除作業にロックも何もないよな。

『エルマさん、総合病院から通信が』
『繋いで』

エルマがそう言うと、男性の声が聞こえてきた。

『こちらイナガワテック総合病院、警備課のアムレイです。貴方達は――』
「傭兵ギルドで救援依頼を請けて駆けつけたキャプテン・ヒロだ。現在総合病院前のクリーチャーを駆除中」
『私はエルマ、彼の船のクルーで今は情報支援を行っているわ』
『私はミミです。エルマさんと同じくオペレーターをしています』
『ああ、傭兵ギルドの……助かりました。実は外部と内部を隔てる隔壁が破られそうだったんです』
「この程度でか？　気密性を保つために結構な厚さだろう、隔壁は」
『あの怪物の体液には腐食性があるようで……普通、コロニー内の

気密隔壁には耐腐食性は求められませんから』
「なるほど」
院内の気密を保つだけなら確かに耐腐食性はさして必要ないのかね？　俺のパワーアーマーは一応戦闘用だから耐腐食性も考慮されている装甲材でできている。いくら奴らの体液を浴びてもビクともしない。
「外は任せてくれ。内部には侵入していないんだよな？」
『今のところは。殲滅が終わったらクリーチャーのサンプルを採取してください。駆除用ナノマシンを作るという話なので』
「了解。生け捕りは必要か？」
『いえ、死体で十分だそうです』
「わかった……レーザーで焼いたやつはマズいよな？」
『さぁ、私は警備員なので……生のほうが良さそうな気はしますが』
「だよな。了解」
数が減ったら格闘戦で仕留めれば良いだろう。さて、お掃除お掃除。
☆★☆
「どすこぉい！」
最後に残っていた大型種にぶちかましを喰らわせてぶっ飛ばしてやった。これで殲滅完了だ。辺りの様相はまさに死屍累々といったところだろうか。掃討そのものは順調に進んだ。苦労したのは最後の格闘戦くらいだろうか？　やっぱりレーザーランチャーで薙ぎ払うほうが圧倒的に楽だ。

『お疲れでした。付近にクリーチャーの反応なし、殲滅完了です』
『生き生きと暴れてたわね』
「しっかりと運動ができて今日はよく眠れそうだよ」

格闘戦で仕留めたクリーチャーの死体のうち、程度の良さそうなものをいくつか見繕って病院の入り口、隔壁の前に積み上げておく。

「サンプルはこれで十分か？」
『ああ、ええと……ちょっと待ってくれ』

どうやら研究者に確認に行ったらしい。とりあえず残りの死骸も放置しておいたら酷いことになりそうなので、一箇所にまとめておく。基本的に閉鎖空間だからな、コロニーは。腐って発生する異臭やガスが洒落にならない事態を引き起こしかねない。

『やぁやぁ、お久しぶりだね、ヒロ君。君にはまた命を救われたな』
「……ショーコ先生？」
『ああ、ショーコだよ。覚えていてくれたんだね』
「ええ、まぁ」

なかなか忘れるのは難しいキャラをしてると思いますよ、ショーコ先生は。

『視界のリンクを共有してもらっても？』
「ええ、ミミ」
『はい、共有開始します』

視界の共有をした途端、ショーコ先生と繋がった回線からどよめきのようなものが聞こえてきた。

『凄いね。これはヒロ君が一人で？』
「そうですね。まぁパワーアーマーを着てるんでこれくらいは」
格闘戦をするために放り捨てていたレーザーランチャーを拾い上げ、サンプル用に分けておいたクリーチャーの死骸の前に移動する。
『これがサンプルかい？』
「ええ。小型種、中型種、大型種の死骸の状態の良さそうなのを二つずつ」
『それぞれについて何か感じたことはあるかい？』
「小型と大型の知能は動物並みというか、凶暴性が高いと言うか、食欲に忠実って感じですね。不利な状況とかそういったことを全く考えず、愚直に真っ直ぐ襲ってくる感じです」
『なるほど。中型種は違うのかい？』
「こいつらは他の二つに比べると幾分頭が良い感じですね。小型種や大型種を囮にして不意打ちを仕掛けようとしてきたりしますし、形勢不利とわかると逃げようとします」
『へぇ……それは興味深いね。他の二種に比べると脳が発達しているのかな？』
「サンプルはこれだけで足りますかね？」
『大丈夫だと思う。今、用意をしてそちらに出るから警戒をよろしく頼むよ』
「了解、しっかり見張っておきます」
通信を切り、ミミとエルマに周辺の索敵を任せて死体掃除を再開する。
「これ、レーザーで灰にしておいたほうが良いかな？」
『一応良質なタンパク質だろうし、そのままにしておいたら？　コロニー側で何かに使うかもしれないし』

「そうか？　そうだな」

そうして作業をしているうちに隔壁が開き、黄色い防護服に身を包んだ人々が総合病院の中から現れた。サンプル輸送用と思しき密閉式のストレッチャーのようなものも持ってきているようだ。その中から一人が片手を挙げて近づいてきた。

「やぁ、助かったよ。なんというか強そうなパワーアーマーだね」
「その声はショーコ先生？　お互い、完全装備だと顔がわからないな」
「まったくだね。今回は本当に助かったよ。救援要請は出したと聞いていたけど、まさかヒロ君が来るとはね」
「妙なところで縁がありますね。まぁ、依頼を見つけたのはミミとエルマなんで」
「そうなのかい？　二人にも感謝しないとね」
「えーと、俺はこの後どうすれば？」
「さっさと駆除用のナノマシンを作ってしまうよ。恐らく二時間もあれば大丈夫だと思うから、その間ここを守ってくれるかな？　一応上からはそう聞いているよ」
「了解」
「それじゃあ、頑張って」

そう言って防護服で完全装備なショーコ先生は研究者達の輪に戻って行き、サンプルの回収に参加し始めた。そのうちにまた戻ってくる。

「小型種のサンプルがもっと欲しいんだけれど」
「そこに積んであるからお好きなだけどうぞ。状態はマチマチだから適当に選んでってください」
「わかったよ」

回収作業中に彼らが襲われたら大変なので、レーザーランチャーを手に周辺警戒を厳にしておく。よく見ると、防護服を着た人の中にレーザーガンを手にして警備に当たっている人が何人か居るな。警備員だろうか。

程なくして回収作業は終わり、作業をしていた人々は病院内に引っ込んでいった。一人取り残された俺は再びお掃除開始である。

「駆除用のナノマシンを作るって言ってたけど、そんなに簡単に作れるものなのかね？」

『どうなんでしょうね？』

『この総合病院なら研究用の高性能な陽電子ＡＩもあるでしょうし、治療用のナノマシンの素体もたくさんあるでしょうから可能なんじゃない？』

「生物を駆除するナノマシンって危なくね？」

『知らないわよ。でも、この前の培養肉工場ではナノマシンを使った脱走防止機構があるとかそんな話もしていた気がするし、あの化物にだけ効くようにうまい具合に作るんじゃない？』

「はえー、そんなことができるんだなぁ」

エルマの解説に感心しながら掃除と警備をして過ごす。なんかあちこちで戦闘音のようなものが聞こえ始めたので、コロニーに駐屯している星系軍か、セレナ少佐の対宙賊独立艦隊が帰ってきたのかもしれないな。

なお、研究完了まで再度の襲撃はなかった。ただ突っ立ってるだけだったぜ……。

#０５３　事態収束？（後書き）

拙作「ご主人様とゆく異世界サバイバル！」がＧＣノベルズ様より書籍化決定しました！
発売予定日は５／３０です！　是非買ってね！
ＩＳＢＮ：９７８４８９６３７８８５６

←ＧＣノベルズ編集部の当該ツイート。コースケとシルフィのキャラデザも公開されてますヨ―（：３」∠）―
ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／ｇｃｎｏｖｅｌｓ／ｓｔａｔｕｓ／１１１８１３２６４２１９５６９３５７０

#054　リザルト（前書き）

間に合わなかった！―（∵3」∠）―

#054　リザルト

いかにも清潔そうな白い空間と、そこに設置されたいくつかのテーブルと椅子。遠くから機会か何かの駆動音や、残響と化した人の話し声らしきものが聞こえてくる。

そんな白い空間に設置された席の一つに俺は着いていた。パワーアーマーの窮屈さから解放され、実にさっぱりとした気分だ。

「いやぁ、本当に助かったよ。宙賊に襲われた時もダメだと思ったけど、今度ばかりは私の命運も尽きたかなと考えていたんだ」

ショーコ先生がそう言いながら俺に何かの飲料ボトルを差し出してくる。よく冷えている、少し白く濁った液体だ。粘性は特に無いようで、スポーツドリンクのように見える。

「これは？」

「経口補水液のようなものさ。比較的飲みやすい味だよ」

本当にスポーツドリンクのようなものだったらしい。折角だからということで素直にボトルのキャップを外して一口飲む。うん、ポ○リだこれ。

「お疲れ様だったね。大変だったろう？」

「それなりには。まぁ、パワーアーマーのおかげで危険を感じる場面は少なかったですね」

対クリーチャー用ナノマシンの研究が終わった後、総合病院の中に招かれた俺はパワーアーマーを脱いで病院の施設でひとっ風呂浴

び、ショーコ先生に歓待されていた。俺と知り合いだということで彼女が歓待役に抜擢されたらしい。
何故とっとと船に帰らずに総合病院に滞在しているのかと言うと、クリーチャーどもの体液を浴びに浴びまくったパワーアーマーを浄化もせずに船に帰るのは危険だろうと判断されたからだ。どんな病原体を持っているかわからないからな。
念の為に浄化と、あとパワーアーマーにこびりついている体液や肉片を採取して対クリーチャー用ナノマシンの完成度を高めようという意図もあるらしい。

「ショーコ先生はもう開発の方は良いんですか？」
「うん、もう完成してるしね。君のパワーアーマーから採取したサンプルで若干の修正は入る可能性もあるけど、まぁ微々たるものだろう。私が関わる必要は無いね」

そう言って彼女はヒラヒラと軽く手を振った。命の危機を脱した直後だからか、若干精神状態が不安定というか、躁の方向に揺れているようである。

「しかしショーコ先生もなかなかに運が悪いですね。一ヶ月もしないうちに二回も命の危機に曝されるっていうのは」
「まぁそうだね。確率論的に言えば異常値だね。どちらもヒロ君のおかげで命拾いしたっていうのには少し運命を感じちゃうけれど」
「そういうの信じる方なんですか？」

あんまりオカルトとかを信じ無さそうなタイプの人に見えたんだが。

「いいや、まったく。でも短期間にこうも続いてしまうと宗旨変えも已む無しかな？」

「なるほど？　じゃあ運命に従ってうちの船医にでもなります？」
俺の誘いにショーコ先生はキョトンとした顔をした後、クスリと笑みを漏らした。
「それも悪くないけれど、傭兵の船となると船医までは必要ないだろう？　基本的にコロニーの近くで活動する君達傭兵は急病時にはコロニーの医療施設を使えるし、それ以外の軽度な傷病であれば簡易医療ポッドだけで十分なはずだ。コロニーから遠く離れて活動する開拓移民船や深宇宙探査船――所謂冒険船とかならともかく。私としても満足な研究設備も研究対象も無いような船には、ね？」
「そりゃ残念」
ショーコ先生は魅力的な女性だから本当に残念だな。えぇ？　動機が不純だって？　男なんてそんなものだろう？　ミミ並みの胸部装甲を持つ眼鏡美人さんだぞ？　一回くらいお相手願いたいと思うのは健全な男性の自然な発想だろう。
「ふふ、目つきがやらしいよ？」
「それだけ俺が健全な男性であるということですよ」
「そんなにいいものかな？　これ。肩が凝るしジロジロ見られるから私はあまり好きじゃないんだけれどね？」
そう言ってショーコ先生が自分のおっぱいを下から持ち上げてみせる。なんという眼福。エクセレント。なんまんだぶなんまんだぶ。
「拝むほどかい？」
「男にとって女体とはいくら探求しても探求しきれない神秘の領域なので」
「安い神秘だなぁ」

ショーコ先生がケラケラと笑って席を立つ。
「さぁ、サービスタイムは終了だよ。そろそろ浄化作業も終わっている頃だ」
「アイアイマム」
俺は席を立ち、サービス精神溢れるショーコ先生に敬礼した。

☆★☆

帰り道は非常に安全な道程となっていた。三人一組となったパワーアーマー装備の帝国航宙兵はあちこちを巡回して例のクリーチャーの処理をしていたから、俺の出る幕は全く無かったのだ。
とはいえ、こちらはパワーアーマーを装備した上に強力な武器を携行してうろついている不審者である。何度か帝国兵に呼び止められたわけだが、傭兵ギルド経由でイナガワテクノロジーの救援任務を受けて、今は任務を完了して船への帰投中だと説明するとすぐに解放してくれた。

「で、結局出処がどこなのかは判明したのかね？」
『今の所、そういう情報はないですね。ただ、各ハイテク企業が打ち出した様々な対処策で駆除は進んでいるみたいです？』
「各企業から様々？　イナガワテクノロジーのナノマシンだけじゃないのか？」
『はい。軍用ロボット兵器メーカーのイーグルダイナミクス社はクリーチャー駆除に特化した戦闘ロボットを大量にコロニー各所に派遣したようです。それに化学薬品メーカーのサイクロンはクリーチャーにだけ猛毒性を発揮する化学物質の合成に成功し、化学薬品放射器と一緒帝国軍に提供したようですね。その他にも色々なメーカ

ーが対応策を打ち出しているようですよ』
『帝国軍も駆除を開始したし、独立部隊も戻ってきたみたいよ。事態は収束に向かっていると見て良いわね』
「なるほど。しかし人騒がせな事件だったな……俺らはそれで金を稼いだけど、命を失ったり怪我をしたりした人はたまらんだろうな」
『そうね。あ、そうそう。今回の二件で稼いだ分は私達に分配しなくて良いからね』
「おん？　どういうことだ？」
『船で稼いだなら私達も命を張ってるって意味で分け前をもらうけど、今回命を張ったのはあんただけでしょ？　これで分け前を貰おうだなんて流石に虫が良すぎるわよ』
「そうか？」

二人にもオペやナビをしてもらったんだが。

『そうですよ。これくらいのことで命を張って戦ったヒロ様の分け前なんて烏滸がましいです』
「そうか……わかった」

二人がそう言うならそうしておこう。定めた決まりに反するのはどうかと思わないでもないが、二人の言い分も納得できる。俺がもし彼女達の立場だったらどうか？　同じ事を言い出すかもしれない。

「この様子じゃ暫くは混乱状態だろうな、このコロニーは」
『仕方ないわね。幸い、食料と水のストックは十分あるし、報酬を受け取ったらさっさと次の目的地に移動すれば良いわよ』
『それまでは外に出るのも危ないですし、艦内で待機ですね』
「そうだな。艦内でゆっくりするしかないな……ふふ」

ちょっと身体を動かして軽く命の危機――でもないけど、命のや

り取りをしたせいか昂ぶってるんだよな。お二人には存分にお相手願おうかね。

『……手加減しなさいよ？』

若干怯えた声で通信越しにエルマが囁いてくる。

『何の話ですか？』

ミミは事態がよく呑み込めていないようだ。それもまたよし。

「二人とも疲れただろう？　もうこっちは大丈夫だから、風呂にでも入っておくといい」

『んん……？　わかりました。では、気をつけて帰ってきてくださいね、ヒロ様』

「ああ、いい子にして待ってろよ」

通信を切ってエレベーターへと乗り込む。エレベーターを降りたらもう一勝負だな。

☆★☆

嫌なタイミングで起こった謎の化物発生事件の影響は大きく、軍と港湾管理局から報酬が払われるまで五日もかかった。イナガワテクノロジーからの報酬はすぐに振り込まれたんだけどな。

それまでの五日間何をして過ごしていたのかって？　言わせんな恥ずかしい。いや、俺も超人じゃないから四六時中ずっとってわけじゃなかったぞ。取っ替え引っ替え好き放題したのは認めるけど。

エルマは最初は仕方ないなぁって感じだったけど最後の方はかなりノリノリだったし、ミミは戸惑ってたのは最初だけだったな。

「さて、清々しい朝だな」
「はいはいそうね」
「ミミ、エルマの対応が冷たいんだが」
「きっと照れているんですよ。エルマさんはちょっと素直じゃありませんから」
「〜〜ッ！」

ニコニコしながら悪気もなく図星を突くミミ。流石のエルマも邪気の欠片もないミミに噛み付くのは気が咎めるのか、顔を真赤にして黙りこくってしまう。

「ははは、エルマは可愛いなぁ。さて、やっと報酬が支払われたということで、分配するわけだが……今回の報酬総額は略奪品の売却分も含めて８３５４６４エネルだ。それに三〇日分の拘束費が１５０万エネル、出撃時の同伴ボーナスが全部で３７２５１４エネル。合計で２７０７９７８エネルが今回の一連の稼ぎだな」
「時間はかかったけど結構な金額になったわね」
「しゅごいです……」

エルマは満足げに頷き、ミミは想像を絶する金額だったのか目を点にして唖然としている。俺もまぁまぁの稼ぎだったと思う。健康診断も受けられたし、セレナ少佐とのコネと彼女に対する貸しもできた。最終的には悪くない結果だったんじゃないだろうか？
「そこからエルマへの分け前が８１２３９エネル。ミミへの分け前が１３５３９エネルだな」

そして俺の取り分が２６１３２００エネル。総資産は１７０２２０１７エネルか。ふーむ……新しい船を買うのもアリだな？

「何か考えている顔ね？」
「うん、俺の資産が１７００万エネルを超えてな。ここで母艦を買うのも一手だな、と」
「母艦、ですか？」
「小型船の発着艦機能を持つ大型艦よ。大型のカーゴも積んでるから、私達だけである程度輸送任務とかもこなせるようになるわね。でも、１７００万じゃそんなにグレードの高い船は買えないでしょ？　改装費なんかも合わせると倍は欲しいわよ？」
「そうだよなぁ……うーん、もう少し金を貯めなきゃダメだな。１７００万じゃ中途半端だ」
「１７００万エネルって、普通はかなり現実味の薄い金額なんですけど……」
「船を売り買いする傭兵からしてもまぁ大金だけど、これくらいならまだ小金持ちレベルよね？」
「小金持ちレベルだな」
「金銭感覚が違いすぎます……」

ミミが頭を抱える。ミミが今回貰った１３０００エネルも、軍の一等准尉の月給が４０００エネルと考えれば破格の金額だからな。稼ぎの０．５％でも一般的に高給取りである軍人よりも遥かに高い分け前なのだ。

「とりあえず、次はミミオススメのリゾート星系に行くとするか。そこでの稼ぎ次第で船を購入するかどうかを検討しよう。稼ぐなら母船があったほうが圧倒的に稼げるからなぁ」

目的の星系行きの荷物を運ぶだけで何十万、何百万と稼げる上に、船を狙った宙賊まで狩ることができる。一石二鳥で稼げるから投資したとしても随分とお得なのだ。母船をやられないだけの腕さえあ

れば、の話だが。

「混乱も若干落ち着いてきていると思うし、補給を済ませたら早速移動しようか」

「はい！」

「わかったわ」

早速ミミがタブレットを手に艦内の備品をチェックし始め、エルマは副操縦士のコンソールを操作して艦のセルフチェックを始める。俺は二人に発艦準備を任せて先日活躍したパワーアーマーのチェックだ。いざという時に動かなかったら目も当てられないからな。

こうして俺達は次の恒星系に向かうべく着々と準備を進めるのであった。

#054　リザルト（後書き）

アラビア数字で統一してみるテスト―（：3」∠）―

#055　なんだこいつめんどくせぇ！

「逃しませんよ」
「Ｏｈ……」

準備を始めて三日後。食料品やその他備品の手配もほぼ終わり、艦とパワーアーマーの整備も完了して、さぁ後は出発するだけ！という段階でセレナ少佐がクリシュナに乗り込んできた。
私服姿で。

「あーあー困りますお客様。お客様お客様お客様。あー、お客様。困りますお客様。あー」
「なんですかその感情の篭っていない対応は！？　ちょ、ぐいぐい押さないでくださいっ！　不敬！　不敬ですよ！　私はホールズ侯爵令嬢ですよ！？」
「ちっ、めんどくせぇなぁ」
「舌打ち！？　めんどくさい！？」

俺の本音にセレナ少佐が口をあんぐりと開けて愕然とした表情をする。お？　なんだ？　貴族特権を振りかざして斬り捨て御免でもするか？

「あの、ヒロ様……その対応はいかがなものかと」
「恐れ知らずにも程がある……」

セレナ少佐に対する俺の対応を見たミミがちょっと顔を青くしながら俺を諌め、エルマは手で顔を覆って天を仰いでいる。いやいや、良いんだよこれで。お貴族様だかなんだか知らんが、このクリシュ

ナは俺の船だ。船の中では俺が王様なのだ。

「なんなんすかねぇ？　強引な勧誘とかはもうしないって約束じゃありませんでしたっけ？」

「うぐっ……そ、それはそうですけど」

「けどぉ？」

「ズルいじゃないですか！　私がこんなに忙しいのに貴方達だけシエラ星系でリゾート三昧だなんて！　ズルいですよ！」

セレナ少佐がビシィッ！　と俺を指差して声を張り上げる。なるほど。

「なんだこのめんどくさい女」

「まためんどくさいって言った！？」

ガーンと擬音がつきそうな表情をしているセレナ少佐を無視して溜息を吐く。だって面倒くさいを言う他ないじゃないか。出発しようかというタイミングを見計らって邪魔しに来るとかそれ以外にどう表現しろと？

「なんというか、ヒロにしては辛辣な対応ね。あんたって女には結構優しい対応するのに」

「軍のお偉いさんってだけならまぁいいけど、侯爵令嬢だからなぁ。下手に優しくして懐かれても困るし？」

「なっっ……！？　私は愛玩動物の類ではありませんのですけれどっ！？」

「……逆効果じゃないでしょうか」

怒りのあまりか口調が崩れ始めるセレナ少佐と、その様子を見ながら不穏なことを呟くミミ。おいおいやめろよ、こんな辛辣な塩対応されて余計懐くなんてことがあるわけがないだろう？　ないよな？

「それで、結局のところなんなんです？　俺達はこれからシエラ星系に移動してヴァ・カ・ン・スがてら宙賊退治をして過ごす予定なんですがねぇ」
「それはですね……そう、不謹慎だと思います」
「不謹慎？」
「そうです。今、アレインテルティウスコロニーは先日のバイオテロで大きな被害を受け、沢山の人が亡くなりました。そんな中でリゾート地でバカンスを楽しむなどというのは不謹慎ではありませんか？」
「なるほど」
「ふふふ、わかってくれましたか。ではもう少しここに滞在して――」
「俺達には関係ないんで。さぁさぁ俺達はシエラ星系に行くんで邪魔なんで出てってください。というかそれをネタに俺達を引き留めようとする方がよっぽど不謹慎だと思います」
「あーっ！　あーっ！　だめですよ！　だめですよ！　嫁入り前の貴族の娘に男が触れるなんてだめですよ！　あーっ！　無礼討ちです無礼討ち！　斬り捨て御免ですよ！」
「なんだこいつめんどくせぇ！？　素面なのに酔っ払ってんのか！？」

ぐいぐいと押して食堂からセレナ少佐を追い出そうとするが、セレナ少佐も食堂の出入り口ドアで四肢を突っ張って全力で抵抗する。くそっ、誰かパワーアーマー持ってこい！　このじゃじゃ馬を船の外に放り出してやる！
「ああもう……二人とも落ち着きなさい。どうどう」

エルマが俺とセレナ少佐の間に入って両者を引き離しにかかってくる。ここで抵抗しても仕方ないので、俺は言外にお手上げだと言

うために両手を挙げてから食堂の椅子に座り込んだ。そんな俺の隣の席にミミが座り、エルマに連れられたセレナ少佐が俺の対面に座る。エルマはその隣だ。

「で、もう一回だけ聞きますけど一体何なんです？　俺達はとっとこの星系から移動したいんですが。俺達の移動の自由を侵す満足な理由を言ってくれないなら、俺は船長としてこの二人にも命じて、三人がかりでセレナ少佐を船の外に放り出しますよ」

「うぐっ……」

セレナ少佐を睨むと、彼女はあからさまに怯んだ様子を見せた。そして俺から目を逸らしてミミやエルマにも目を向け、考え込みでもするかのようなんとも言えない表情で天を仰いだ後、溜息を付いてから誰もいない方向に顔を逸らした。

「羨ましくって、妬ましくて、絡みにきただけです」

「……は？」

「だから！　羨ましくて絡みに来ただけですっ！　文句がありますか！？」

「文句しかねぇよ！？」

「だってズルいじゃないですか！　私が毎日毎日毎日毎日気色悪い触手生物のホロ画像を何度も何度も資料として目にして対策会議をしたり報告書を書いたりしてるのに、貴方達はリゾート地に行くだなんて！　絡んで邪魔したくもなりますよ！」

「ストレートに迷惑！　本当にただの妬みじゃねぇか！」

「やだやだズルいズルい私もリゾート地でバカンスしたい！」

「軍人としての体面も貴族としてのプライドも捨てて駄々をこね始めた！？」

セレナ少佐がペシペシと食堂のテーブルを叩いて喚く。一体クー

ルで理知的な軍人の彼女はどこへ消えてしまったのか……まさかここに来る前に一杯引っ掛けてから来たんじゃあるまいな？

「つまり、単に俺達が羨ましくて邪魔をしに来たと？」

俺の質問にセレナ少佐は上目遣いで俺を見ながらコクリと頷いた。俺は彼女に微笑む。彼女も笑顔を見せる。なるほどね。

「よし、放り出す」

「やあぁぁぁぁぁ！　正直に言ったのにぃぃぃ！」

「ストレートに悪意じゃねぇか！　同情の余地もねぇよ！」

テーブルにしがみついて抵抗するセレナ少佐とそれを引っ剥がそうとする俺。攻防の末、俺達の争いに終止符を打ったのはミミだった。

「あの、ちょっと良いですか？」

「なんだ？」

「あの、セレナ様もただ駄々を捏ねてもどうにもならないことは理解していると思うんです。ご自分の立場は誰よりも理解しておいでしょうし。私服姿ということは、今日は非番なのですよね？」

「……うん」

「つまりその、セレナ様は単に息抜きというか、鬱憤を晴らしたいだけじゃないかと。軍人としてのセレナ様も侯爵令嬢としてのセレナ様も無視してただのセレナ様として接してくださるヒロ様と遊びたいんですよね？」

「……」

セレナ少佐は沈黙した。この場合の沈黙というはつまりイエスということなのだろう。

「遊ぶっつったって……」

俺、困惑。一体どうしろと？　このお嬢様を街に連れ出してデートでもしろというのか？　絶対に御免だ。こいつからはなんかヤバい気配がするし。

「それじゃあここで飲みましょうか。高級なオーガニック料理は出せないけど、テツジンなら美味しい食事を作ってくれるし。飲み物だって私のお酒があるわ」

「ああ、借金を返しもしないで１０万エネルも使ってクリシュナのカーゴルームを微妙に圧迫してるアレな」

たっぷりと皮肉を込めてそう言ってやると、エルマは身体をビクリと震わせた。たまにこうして突いてやらんとこいつは借金を返しそうにないからな。

「ま、まぁそれは良いじゃない？　あ、あんただってできるだけ長く私と一緒にいたいでしょ？」

「まぁ、それはうん」

それは素直に認める。エルマは良いやつだし、美人だし、可愛いところがあるからな。ミミは言うまでもないが。だがセレナ少佐、おめーは駄目だ。

「じゃあ、今日だけですよ。そしてまた貸し一つですからね、少佐」

「うっ……わ、わかったわよ」

どんどんセレナ少佐への貸しが増えていくな……このまま借りに借りまくって俺と関係を深めていこうという心積もりじゃないだろ

うな、この女。少し警戒しておくか。

「それじゃ、話も決まったところでパーっとやりましょうか。お互いの壮行会ってことで」

「はい！　実は私も通販で輸入品店から色々と新しい食べ物を買ったんですよ！　お披露目しますね！」

ミミが聞き捨てならない事を言い始めた。なんか最近カーゴが狭いと思ったらいつの間に……ミミもエルマの薫陶を受けて抜け目なくなってきたということだろうか。強かになってきたミミの成長に胸中で複雑な思いを抱く俺なのであった。

#056 tastes like chicken（前書き）

とは、英語圏において食べ物の風味を形容するときによく使われる表現である。

#056 tastes like chicken

「では、えー……特に思いつかねぇや、とにかくかんぱーい」
「「「かんぱーい！」」」

気の抜けたビールのような俺の音頭に従って女性三人がそれぞれ酒の入ったグラスを掲げ、ぶつけ合う。俺？　俺のはソフトドリンクってか例の炭酸抜きコーラだよ。

「ぷはーっ！　良いお酒ですね！」
「工場見学に行ってその場で買い付けてきたからね。お値段は少々張ったけど」
「１０万エネルを少々と申すか」
「わ、私達傭兵的には端金だし……？」
「貴方達の金銭感覚、おかしくない？」
「わ、私はそんなことないですよ？　ヒロ様とエルマさんはちょっとアレですけど……」
「アレって何よ、アレって。そういうミミだってヒロにお風呂とか洗濯機とか高性能調理器とかその他諸々の船内設備の刷新をねだったって話じゃない。確か３０万エネルだっけ？」
「うん、貴方もぶっ飛んでると思うわ」
「そ、そんなことないです、よ？」

女が三人集まって『姦しい』とはよく言ったものだなぁと思う。話の種は尽きることが無いようで、話題がピョンピョンとあちこちに跳ね回りながら三人の話は続いていく。彼女達の会話を司る部分にはジャンプドライブでも搭載しているのではなかろうか？　傍から聞いていると話題がピョンピョンしすぎてその軌跡を追っていく

だけでも大変だ。
やがて彼女達の会話内容を追うことに限界を感じた俺は開き直って会話内容を追うことを放棄し、テーブルの上に広がる『輸入品』に神経を集中することに決めた。
テーブルの上には……宇宙が広がっていた。
いや、うん。比喩的表現というやつだ。別に本当にテーブルの上に銀河が広がっているわけではない。珍妙な見た目の食品が沢山並んでいて目眩がしただけだ。俺はとりあえず自分に一番近い皿の中身に集中することにする。
パスタだ。見た目はピンク色のパスタである。だ、大丈夫だ、ウゾウゾと動いたりはしていない。何をとは言わないが、想像して背筋が震えた。とりあえず、マイチョップスティックでピンク色のパスタを一本摘み上げ、仔細に観察する。うん、パスタだ。少なくともワームの類には見えない。
とりあえず摘み上げた一本を口に運んでみる。味は……うん、ほんのり塩味。噛み潰しても口の中で暴れまわったりはしない。とりあえず安心だ。味は……うん、なんかウニっぽい。甘みがありつつも濃厚でなかなかこれは美味しいのではなかろうか。
口の中に広がる味を楽しんでいると、いつの間にか三人が会話をやめて俺の様子をじっと窺っていることに気がついた。

「なんだよ？」
「それ、美味しい？」
「俺は嫌いじゃない。甘みがあって、濃厚で……なんだよその反応」
「ええと、それはその、ウーチワームという――」
「あーあー！　きこえなーい！　これはうにパスタ！　先進的な加工技術によって作られたうに味のパスタ！」
「自己欺瞞が甚だしいですね」

どうしてこういうマズめなキワモノを買ってくるんだミミ！　い

や、これはパスタだから。マズめでもキワモノでもないな！　パスタだから！

「まぁ、皆も食ってみろよ。美味しいよ、うにパスタ」
「いえ、わたくしはちょっと」
「わたしもいいかな」
「ええっと、私も……」
「買ってきた本人が食わないとかあり得ないよなぁ？」
「えっと……」
「ありえないよなぁ！？」
「うぅ……はい」

ミミが涙目になりながらピンク色のウーチワーム――じゃなくてうにパスタを口に運ぶ。涙目でミミが口の中のものを咀嚼し、次第に表情が変わってきた。

「あれ、本当に美味しいですね」
「だろ。うにパスタだと思えばなんてことはない」
「確かにそうですね。うにパスタというのはわからないですけど、美味しいです」

皿から取り分けてうにパスタを口に運ぶ俺とミミを見てエルマとセレナ少佐が顔を見合わせる。

「じゃ、じゃあ私も挑戦してみようかな……？」
「そ、そうですね。折角用意してもらったものですし……」

エルマとセレナ少佐も戦々恐々としながらうにパスタを口に運ぶ。最初はやはり緊迫した表情をしていた二人も、口の中に広がる味わいに表情を緩めていく。

「たしかに美味しいわね、これ」
「珍味ですね……」
「ところで、この皿が俺の目の前に配膳されていたことに悪意を感じるんだがどう思う？」
「た、たまたまですよ？」
「そ、そうよ？　たまたまよ、たまたま」
「君達の前に並んでいるものがあからさまに無難なものばかりに見えるんですがねぇ……？」

俺の向けるジト目にミミとエルマがだらだらと汗を垂らしながら目を逸らす。これ以上の追求はやめてやろう。追求はな。

「じゃあ次はこれいってみようか！　ミミからな！」
「え〝っ？」

俺の差し出した皿の中身を見てミミが変な声を出して固まる。深皿の中に入っているのはビー玉くらいの大きさの球体である。表面はツヤツヤとして黒光りしながら輝いており、さながら真っ黒なビー玉といった感じの物体である。

「どうした？　全部ミミが手配した輸入品の珍味なんだろう？」
「え、えへへ……？」

ミミが誤魔化すかのように笑みを浮かべる。うん可愛い。だが許さない。俺は満面の笑みを浮かべたままもう一度皿を突き出した。

「う、うぅ……」

ミミが涙目になりながら震える指で黒いビー玉を掴み、口に運ぶ。

そして口の中で黒いビー玉を噛み潰した。

「――」

スンッ……って感じでミミが無表情になる。え？　何その反応？　怖いんですけど？

「ど、どうなんだ？」

「いや、うーん……おい、しい……？」

セレナ少佐の問いかけにミミが眉間に皺を寄せて首を傾げる。その微妙な反応に俺とエルマとセレナ少佐は同時に深皿の中の黒いビー玉に目を向けた。そして三人で互いの表情を見て頷く。

「んん……？」

「うーん……？」

「なんだろう、この不思議な味は……」

甘いような、しょっぱいような、酸っぱいような不思議な味だった。なんだろう、この感覚……そう、プリンに醤油入れてうにの味とか、そういう感じの……言葉で表現ができねぇ！

「ちなみにこれは何の……いやいい言わないでくれ」

「そうしたほうが良いと思います」

ミミにこの物体の正体を聞きかけた俺はミミの悟ったような表情を見て追求するのをやめた。あれは絶対聞いたら後悔するやつだ。多分これは何かの卵だ。ミミがああいう表情をするような生物の卵だ。そっとしておこう。

「キワモノはこれくらいか？」
「そうですね。後は無難な感じに纏まっています」

前にも食べたマンガ肉っぽい燻製肉、見たことのない果物や、それを使ったタルト、魚のフレークのようなもの、やたらと黒い肉のジャーキー、人差し指くらいの太さの茹でたエビっぽいもの。
ちなみに、この人差し指くらいの大きさの茹でたエビっぽいものは黒いビー玉みたいな物体と同じくらい俺の席に近い場所に配置されている。

「いやぁ、美味しそうなエビだな！　エルマ、食ってみろよ！」
「え〝っ！？」

エルマのミミがビクーンと上を向く。その反応……やはりこれも何かキワモノの食材だな？

「え、えっと、ヒロを差し置いて先に食べるのはちょっと気が咎めるというか……？」
「ははは、遠慮するなよ。ほら、あーん」
「う、うぅ……」

逃さん、お前だけは……。
ちなみにエビだと思っていたものは程よく蒸し焼きにされていた芋虫めいたサムシングでした。ミミ、なんでこんなものばっかり用意するんだよ……味はクリーミーで美味しいけどさ。

☆★☆

食品の安全性が担保されたらあとは単なる飲み会である。もっとも、俺は下戸なので酒は飲めない。

「あはははははは！」
「ひろさまぁ～……うにゅーん」
「救援に来るのが遅いとかうっさいってのよ！　こっちは宙賊の拠点をぶっ潰してゴミどもを掃除してたのよ！　自分の駐留してるコロニーくらい自分の戦力でちゃんと守りなさいよ！」

ご覧の有様だよ！　たすけて。

エルマは上機嫌で酒を浴びるように飲んでいるだけだからまぁ無害なんだけど、ミミは脱ごうとするし物理的に絡まってくるし、セレナ少佐はさっきから同じ話題の愚痴を撒き散らして気炎を上げてるし。

「まぁまぁセレナ少佐、落ち着いて……」
「貴方も貴方よ！　高性能のパワーアーマーなんか持ち出して港湾の防衛に、単独で道中のクリーチャーを殲滅しながらイナガワテックの総合病院救援、それと貴方の稼いだ時間で作られた駆除用ナノマシン！　いやぁ、独立艦隊（笑）よりも傭兵の方が頼りになりますぁ～、とか！　だから物理的に遠くに居たって言ってんでしょうが！？　というかあんたが自分の兵を上手く使えなかったんでしょうが！　そもそもあんたがちゃんとしてないからバイオテロなんか起こったんでしょうが！　ふざけんなー！」

セレナ少佐が俺の襟元を両手で掴んでがっくんがっくんと揺さぶってくる。やだこの酔っぱらい理不尽。いや、酔っぱらいだから仕方ないんだろうけども。セレナ少佐もずいぶん溜まっていらっしゃるようで。

「Ｏｈ……鎮まれ、鎮まり給え」

「がるるるるるる……」

唸りながらも揺さぶるのをやめてくれた。

「ってあれ？」

「……」

急に大声を出した上に俺を力いっぱい揺さぶって酔いが一気に回ったのか、セレナ少佐がテーブルに突っ伏したまま動かなくなってしまった。どうやら寝てしまったらしい。

「この人、男の船に乗り込んでるって意識ないのかね？　無防備過ぎない？」

「んふふふ、ヤっちゃう？」

「その卑猥なサインを今すぐやめろこのへべれけエルフめ」

エルマがニヤニヤしながら人差し指と中指の間から親指を突き出すサインをしてくる。

「ヤるなら意識のない二人よりもベロベロになってるけど意識のはっきりしてるお前だ」

「……ふぁっ！？」

俺の宣言にエルマの顔からニヤニヤ笑いが吹き飛ぶ。ははは、いい表情だ。

その表情に満足した俺は絡みついているミミを自分の身体から引っ剥がして壁際のソファに寝かせて、突っ伏したままのセレナ少佐を抱き上げた。お姫様抱っこで。

「えっ……ほんとにヤるの？」

俺はエルマの問いかけにニヤリと笑ってみせた。
「そぉい！」
そして医務室の簡易医療ポッドにセレナ少佐をぶちこんだ。
この人だけは酒の勢いで『ヤっちゃったＺＥ☆』とかやらかすとマジで洒落にならない。絶対に『責任とってくださいね（超笑顔）』からの部下兼婚約者一直線コースだ。もしかするとセレナ少佐のご両親にバレて闇から闇に葬られるルートも有り得る。つまり何が言いたいかというと、この人は反応弾頭級の地雷だということだ。
俺は見えている地雷を踏みに行くほど恐れ知らずではない。
「あれ？　戻ってきたの？　勃たなかったとか？」
「酔っ払うと品性が削げ落ちるなお前」
エルマの頭をペシッと叩いてやる。俺が戻ってくるなりしょげかえっていた表情を明るくしおってからに。可愛い奴め。
「むー、何よお高くとまっちゃって。私とミミに夢中なくせに。あんただって一皮剥いたらケダモノじゃない」
「それは否定しない。男はいつも心の中に自分という獣を飼っているからな。それを理性っていう鎖で縛り付けておくのもなかなかに大変なものだぞ？」
「なにそれ。カッコイイこと言ってるつもり？」
「お？　なんだ？　構って欲しいのか？」
エルマが辛辣な言葉をぶつけながら耳をピコピコ上下に動かしているのは自分に構って欲しい時のサインだ。わざと辛辣な言葉を叩

きつけて自分に気を引こうとするとかお前小学生の男子かよ。可愛い奴め。

「わかったわかった。サシで呑むか。俺は下戸だから酒は飲まねぇけど」

「ふん、おこちゃまね」

ニコニコしながらエルマが炭酸抜きコーラを俺のコップに注いでくる。

さて、じゃあ寂しがり屋の兎さんにお付き合いするとしますか。

#056 tastes like chicken（後書き）

毎週木曜日は近くのスーパーで割引が入る日なんですよね。
来週から木曜日はお休みにしようかな！ ―（：3」∠）―

#057　旅立ちの朝（前書き）

滑り込みアウトォ！ ―（∴3」∠）―（居眠りをしたのがいけなかった

#057　旅立ちの朝

「うー……」
「調子に乗って飲み過ぎだよ、お前は」

セレナ少佐を簡易医療ポッドにぶちこんで一時間ほど。調子よくカパカパと盃を空け続けた我がエルフのお姫様が見事に撃沈なされていた。

俺は一時間ほど前にやったのと同じようにエルマを背負い、医務室へと移動中である。一時間も打ち込んでおけばとっくにセレナ少佐から酔いは抜けているはずだからな。セレナ少佐を起こして、入れ替わりでエルマを簡易医療ポッドに打ち込むつもりである。

医務室に入ると、簡易医療ポッドの中でスヤスヤと眠っているセレナ少佐の姿が見えた。バイタルチェックの結果は良好となっているので、簡易医療ポッドを操作して覚醒を促すことにする。すると、程なくしてセレナ少佐が簡易医療ポッドの中で目を覚ました。

少しの間、虚空に視線をさまよわせた後びっくりしたかのように目を見開き、勢いよく起き上がろうとして――。

「〜〜ッ！？」

ガツン、と艦に医療ポッドのガラスのような透明な蓋に頭を打って涙目になっていた。少佐殿、酒が抜けている筈なのにポンコツっぷりが抜けておりませぬ。少佐殿。

コンソールを操作してポッドの蓋を開けてやる。勿論、俺がしなくても内部から蓋を開けることはできるのだが、ポンコツ度が上昇しておられる少佐殿には難しい作業だったらしい。

「とりあえず、出てくれ。こいつを放り込むから」
「え、ええ……」
額をさすりながらセレナ少佐が簡易医療ポッドから出てくるのを見守ってから入れ替わりでエルマを簡易医療ポッドに放り込み、コンソールを操作して体調を快復させるようにセットする。
「ええと……？」
「少佐殿は酒を飲みまくって胸中の不平不満その他諸々を穴の空いた酸素ボンベの如く撒き散らしてお眠りになられましたので、僭越ながら簡易医療ポッドに打ち込ませていただいた次第でございます」
「……」
俺の口上を聞いたセレナ少佐の顔が赤くなり、気まずげに逸らされる。まぁ気まずかろう。構ってくれ！　と相手の迷惑を顧みずに船に踏み込んで、振る舞われるがまま正体を無くすほどに酒をかっくらい、眠りこけて簡易医療ポッドに打ち込まれる。まともな神経をしていれば申し訳ないと思うくらいの失態だろう。
「そ、その、ごめんなさい」
「いや、たまにはこういう風に羽目を外すのも良いんじゃないですかね。随分とストレスが溜まっていらっしゃったようですし」
「うぅ……」
セレナ少佐が両手で顔を覆って俯く。相当効いているようだな。
「それに二度目ですし」
「うぐぅ……！」
この前も飲みすぎて同じようなことになってたしな。

「お酒に関しては自重なさるか、良い感じにしてくれるナノマシンでも導入されてはどうかと。というか、俺みたいな傭兵の船に乗り込んだ挙げ句、正体無くすまで呑むのは流石にお貴族様の子女として無防備すぎやしませんかね」

こんなに技術の進んだ世界なら不可逆的に精神を良いように操作できてしまうモノの一つや二つはあるだろう。身体の自由を奪うだけなら手足の腱を切るという原始的な方法だって取れる。それに、セレナ少佐が眠りこけている間に船を出して遥か彼方に飛び去ってしまうなんて方法もある。

ベレベレム連邦にでも行ってセレナ少佐を売り払うなんてことだってやろうと思えばできてしまうだろう。セレナ少佐は若くて美人で貴族だということで血筋も良い。大金を払ってでもその身柄を買い取り、その身体を、あるいは精神を思うがままに貪りたいという輩はいるはずだ。

「反省しております」

セレナ少佐が小さくなってシュンとしている。可愛――いや待て待て、騙されるな。眼の前にいるのは誰だ？　セレナ少佐だ。酔いの抜けた、正常な状態のセレナ少佐だ。彼女は俺に説教をされてシュンとしているように見えるが、本当にそうなのか？　本当にそうなのかもしれない。でも、違うかもしれない。疑ってかかるんだ、俺。

「まぁ反省していらっしゃるのであれば俺からこれ以上は言わないでおきましょう。そもそも、俺はセレナ少佐に説教できるような偉い人間でもなんでもありませんし」

壁に立てかけてあったセレナ少佐の剣を手に取り、彼女に差し出す。

「そろそろ船に戻られたほうがよろしいかと。変な噂を立てられては困るでしょう。お互いに」

「そ、そうですね。ええ」

剣を受け取ったセレナ少佐がいそいそと立ち上がる。

ミミはどうしたって？　ミミはエルマとの延長戦中に目を覚まして、今は食堂の片付けをしてくれているよ。結果として一番の若年者であるミミが一番自分をコントロールできているのではという。

船のハッチを開放し、タラップを降りていくセレナ少佐を見送る。その途中でセレナ少佐が振り返った。

「また会えますか？」

「少佐が宙賊を追うなら、また会うことになるでしょう。俺にとっても宙賊共はメシの種なんで。それに、貸しもありますからね」

そう考えると、俺は宙賊の命を糧として生きている人食い野郎ってことか。うーん、ある意味事実なんだが、もう少しマシな存在であると思いたい。同情の余地のある宙賊なんて存在しないわけだし。

「そうですか……そうですね。では、また」

「ええ、また」

最後にふわりとした微笑みを浮かべてからセレナ少佐は去っていった。その姿を見送ってからクリシュナの中へと戻り、溜息を吐く。

「また会えますか、ね」

そんなことをあんな捨てられた子犬か何かみたいな目で言われても困る。俺に一体どうしろというのか。セレナ少佐は俺が背負うには少々重すぎるんだよなぁ。

まぁ、縁があればまた会うこともあるだろう。何にせよ、出発は明日に持ち越しだな。

☆★☆

翌日。

昨日の飲み会で浪費した物資は微々たるもの（酒はエルマの私物で、出された食べ物の大半はミミの私物であった）だったので、出発しようと思えばいつでも出発は可能だ。

昨晩は酒のせいで弱っているだろうということでお楽しみもなしだったので、俺は朝からササッとトレーニングを済ませ、風呂に入ってコーヒーを飲みながら優雅に情報収集をしていた。

情報収集とは言っても別にこれから向かうリゾート星系の情報や、その道中の情報を調べているわけではない。先日の触手生物騒ぎ――バイオテロに関する情報だ。

あれから数日が経ち、事件の全貌が明らかになってきた。

例の生白い触手生物は、やはり培養肉の製造工場などで作られている生物が基になったもので、特定の条件下――つまり肥育環境から脱走した場合の自死機能を遺伝子操作で無効化し、攻撃性を高めたものであったらしい。

今回のバイオテロに関しては既にとある組織から犯行声明が出ているらしく、帝国政府はテロ組織の撲滅を帝国軍に指示したと記事には書いてある。

テロ組織の名前は人工生物保護協会。

人間の勝手な都合で生み出され、勝手な都合で殺され続ける人工生物、人工生命体の類の権利を守り、保護するために活動している

というわけのわからんやべー奴ららしい。自然保護団体とか動物保護団体の未来版ってやつだろうか？　あまり関わり合いになりたくない奴らだな！

「おはようございます、ヒロ様」
「おはよう」

記事を読み終わった丁度良いところでミミとエルマが食堂に入ってきた。

「おはよう、二人とも。さ、朝飯を食って次の目的地に移動しようか」
「今日は邪魔は入らないでしょうね？」
「流石にセレナ少佐も二日連続では……」

エルマの言葉にミミが苦笑いを浮かべる。ミミの中でセレナ少佐は『そういう枠』の人間として認識されたようである。そういう枠っていうのはつまりアレだ。トラブルメーカーとかそういうアレだ。

「まぁ、大丈夫だと思うけど急ぐ旅でもないしな。一日二日は誤差だよ、誤差」

それだけ滞在費もかかるわけだが、１７００万エネルもあると多少のことでは動じない。無理やり日本円に換算すると１７億円相当だもの。

「それよりもメシだメシ。今日のシェフおまかせメニューは何かなー」
「お腹が空いているので、私はガッツリとしたものが食べたいです」
「私は軽くでいいわ。朝はあんまり食欲が無いのよね」

ワイワイとやりながら賑やかに朝食を摂り始める。
新天地へと向かう朝。そんな朝でも変わらず、俺達はいつも通りの日常を過ごすのだった。

#058　いんたーみっしょん（前書き）

なんかしらんがぽんぽんぺいん！　みじかいけどゆるして！　—（：3」∠）—

#058　いんたーみっしょん

「よし、行くか。ミミ、発艦申請を」

朝食を摂り終えた俺達は早速次なる目的地であるシエラ星系――リゾート惑星のある星系への移動を開始することにした。このアレイン星系では暫くの間セレナ少佐の率いる対宙賊独立艦隊が積極的に宙賊を狩ることになるだろうから、俺達としては旨味が少ないのだ。ただでさえ宙賊基地をぶっ潰して少なくなっている宙賊を彼女と取り合うのはあまりに効率が悪い。

「了解です！」

「エルマはいつも通り頼むぞ」

「了解、サブシステムの掌握は任せて」

艦の状態はオールグリーンだ。艦のＡＩによるセルフチェックに問題は一つも見当たらない。

「発艦許可、降りました」

「よし、出るぞ」

ハンガーベイとのドッキングを解除し、ランディングギアを格納してコロニー内をゆっくりと移動する。ここで変にスピードを出して他の船にぶつけでもしたら怒られるじゃ済まないからな。下手すると連鎖的に他の船とも玉突き事故を起こして爆発四散、自分の船の修理費だけでなく他の船の修理費やコロニーの修理費、賠償金その他諸々で一気に破産しかねない。

「ええと、ゲート通過の順番は三番ですね。あの黄色い輸送船の次です」
「了解」

コロニーの中と外を隔てる狭いゲートに船が殺到したりした日には大惨事確定なので、こういった交通量の多いコロニーの場合はゲートを出るのにも順番が割り振られる。三番目ならまぁ空いている方だな。

「次ですね」
「ああ。とりあえず、コロニーを出るまでは安全運転で行くぞ」
「はい」
「ゲート近辺での事故は洒落にならないからね……」

エルマが遠い目をする。巻き込まれたことでもあるのかもしれない。コロニー内では他の船と干渉する可能性があるからシールドの出力も最低限に落とさなきゃならないからなぁ。
程なくして黄色い宇宙船が外に出ていったので、次は俺達の番だ。

「ヒロ様、行けます」
「ああ」

ゆっくりと船を進ませてコロニー内と宇宙空間を隔てる気密シールドを通過する。船体は通すが、空気は通さない上に気圧も保つ謎バリアーだ。これは地味に一番不思議な装置だと思う。
気密シールドを通過したらあとは無限に広がる宇宙空間だ。一気にジェネレーターの出力を上げて加速し、コロニーから離れる。

「ミミ、ナビを設定してくれ」
「はい、航路を設定します」

ミミがオペレーター席でコンソールを操作し、目標の恒星系へのナビゲーションが開始される。俺は画面の表示に従い。目標に設定された恒星へと艦首を向けた。

「超光速ドライブ、チャージ開始」
「了解。超光速ドライブ、カウントダウン」

俺の指示に従ってエルマが超光速ドライブのチャージを開始する。

「5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動」

ドォンと爆音のような音が鳴り、クリシュナが光を置き去りにして走り出した。遥か遠方にある星々がやにわに動き始める。

「目標、パモニ星系……最終目的地のシエラ星系はレーンの四つ先か。よし、ハイパードライブチャージ開始」
「ハイパードライブチャージ開始」
「ハイパーレーンへの接続成功」
「カウントダウン、5、4、3、2、1――ハイパードライブ起動」

空間が歪み、光が歪曲する。その次の瞬間、極彩色の光が視界を埋め尽くし、クリシュナはハイパースペースへと突入した。俺達の乗った小さな船は、ごうごうと流れる光の奔流の中を進み始める。実際にはごうごうと音は鳴ってないんだけどな。

「さて、それじゃあ暫くはゆっくりできるな」

基本的にハイパースペースでの航行はオートパイロットで運行する。航行時間も長いし、ハイパーレーンの『流れ』から外れないよ

うに緩やかに艦首を流れの方向に向け続けるだけだからな。
念の為にオートパイロットによる航行に不具合が起きていないか見張る要員は一人置くようにするのが船乗りの慣例であるらしい。これはエルマに聞いたことだけど。
ステラオンラインでは星系から星系へのハイパードライブ航行に何十時間とかかかることはなかったからな……星系間の移動にそんなに時間がかかっていたら完全にクソゲーだ。基本的にハイパードライブ起動、ハイパーレーンに突入、ドーン！　到着！　みたいな感じだったからな。

「さて、見張りはどうするよ」
「あの、実際のところ見張りって必要なんでしょうか？」

前までから疑問に思っていたのか、ミミが首を傾げる。

「どうなんだろうな。俺もエルマに言われてじゃあやるか、って感じで決めたから理論的に必要性を説明することはできないな。正直に言えば俺も疑問には思っている。オートパイロットには予定外の挙動をした時に誤差を修正する機構も完備されているようだし、なんならアラームも発生するし」

そう言って俺はエルマに視線を向ける。俺とミミに疑問を投げかけられたエルマは一つ頷いてから口を開いた。

「うん、アレは嘘よ」
「えっ」
「なんですと」
「だってその、これだけ長い時間、特にやることもなく暇となると……ね？　二人きりになれる時間があったほうが良いじゃない」

エルマはそう言って俺達から顔を逸らし、明後日の方向に視線を向けた。なるほど。

「じゃあ、今回からは見張りはナシってことで」
「ちょ、ちょっと……」
「分別を弁えて行動すれば良いだけの話だろう。そのために無駄にシフトを組んだり、睡眠不足になるのはあまりにも馬鹿馬鹿しいよ」
「そ、それはそうかもしれないけど」
「爛れた生活を送るのも悪くないと思うし」
「それが本音でしょ？」

エルマがジト目を向けてくる。そりゃ男のロマンですしおすし。まぁ、交代制でコックピット番をしている時でも割と爛れた生活を送っていたんだしあんまり変わらないんじゃないかな。さして広くない船の中で何十時間……下手すると百時間以上も缶詰になるんだ。

勿論ハイパードライブ中にはネットワークは繋がらないからネットで情報集めなんかもできないので、予め暇つぶし用のホロ動画だのゲームだの電子書籍だのを用意しておかなければトレーニングルームで身体を動かして、飯食って、風呂入って、寝るくらいしかやることがないのだ。

基本的にめっちゃ暇なのである。そんな中で、互いに身も心も許し合っている男女がやることなんて決まっているわけです。娯楽の少ない時代は子沢山の家が多かったというのも頷ける話だよな。

「よーし、それじゃ解散解散。船長として各員に自由時間を認める」
「わかりました」
「えぇ……もう、ほんとにあんたは……」
「まぁ、そこそこ長い旅路なわけだしのんびり行こう。ミミ、シエラ星系の観光案内みたいなものとかあるか？」
「はい、あります！」

「じゃあ食堂で皆で見ようぜ。リゾート惑星ってのに興味があるんだよ。ほら、エルマも行くぞ」
「ちょちょ、ちょっと！　押さないでったら！」
エルマの背中を押し、連れ立って食堂へと向かう。邪魔するものは何も無いんだから精々ゆっくりのんびりするとしよう。アレイン星系ではなんだかんだいってあまりのんびりできなかったからな。

#059　ホットスタート（前書き）

令和元年おめでとうございます―（：3」∠）―

#059　ホットスタート

くすぐったくて目が覚めた。

温もりの中、何かが俺の鼻先をくすぐっている。まだ覚醒しきっていない脳はこの温もりと安寧に満ちた状態から抜け出すことを拒否し、脳の指令がない身体は全く動こうとしない。何かが俺の身体をぎゅっと締め付けてくる。胸元にふにゅりとあたたかく、柔らかいものが押し付けられる。これぞ極楽だ。

ああしかし悲しいかな、そこまで状況を認識してしまった脳は否応なしに覚醒の度合いを一気に高めて現在の状況を推測し、把握し、そしてその活動によってさらなる覚醒が齎される。

パチリと目を覚ますと、明るい茶色の頭が目の前にあった。このふわふわな髪の毛が俺の鼻先をくすぐっていたらしい。俺の片腕を枕にして、俺の首元に顔を押し付けるように抱きついて寝ている女の子が一人。俺も彼女も紛うことなき全裸である。まぁ、つまりそういう関係なのだ。

さて、どうしたものか。身動ぎして起こしてしまうのも可哀想だが、俺としてはシャワーを浴びたいしトイレにも行きたい。今の時刻はわからないが、特に寝不足な感じもしないし起きるのに早すぎるということはないだろう。うん、起こそう。できるだけ穏便に。

眼の前の明るい髪の毛の頭に自由な方の手を伸ばして彼女の頭を撫でる。少しすると、むずがるような声を出して彼女が目を覚ました。寝ぼけまなこで俺の顔をぼんやりと見つめ、彼女は微笑みを浮かべる。

「おはよう、ミミ」

「おはようございます、ヒロ様」

☆
★
☆

さて、俺達が今向かっている目的地――シエラ星系の話をしようか。

俺達が滞在していたハイテク星系であるアレイン星系からはハイパーレーンを通る回数で言うと四つ先だ。ハイパーレーンというのは恒星系と恒星系を繋ぐ亜空間の高速道路みたいなものだと思ってくれれればいい。それを利用することによって数十光年、数百光年の距離を数十時間で移動できるというわけだな。

で、シエラ星系だが一般的にはリゾート星系として知られている星系であるらしい。

リゾート星系とはなんぞや？　という話なのだが、つまるところは一級市民権を持っていない帝国臣民や、俺のようなそもそも市民権すら持たない傭兵、外国人でも惑星上に降りて様々な自然体験や海や山でのアクティビティを楽しんだり、野生動物を狩猟してその肉でバーベキューなどを楽しむことができるのだとか。

ちなみに、自然体験というのは朝になったら日が昇り、青空の中、白い雲が遥か高空をゆっくりと過ぎ去り、場合によっては雨が降り、夕焼けを経て日が沈み、空に満点の星空が輝き、運が良ければ流れ星が見られる。そういうのを最高の自然体験なのだとシエラ星系のパンフレットに書いてあった。

「なんだか壮大ですよね！」

「そうね。コロニー生まれのコロニー育ちだと見る機会はないものね」

シエラ星系のパンフレットを表示したタブレットを手にミミが笑顔を浮かべ、それに追従するようにエルマも微笑みを浮かべる。

朝、ミミと一緒に目覚めた俺は二人で風呂に入り、さっぱりした後に食堂でエルマと合流。朝食を取ってから食休みのためにそのま

ま食堂で駄弁っているのであった。

「うーん……」

ミミが壮大という現象も、俺にしてみれば見慣れた光景なんだよなぁ。レジャーの類もつまりはキャンプみたいなものだろう？　別に目新しいものじゃないというか、そこまで感動する要素はない。俺的には。

でも青い空の下、砂浜で水着を着たミミとエルマがキャッキャウフフしているのは見たい。是非見たい。この世界におけるレジャーというものも体験してみたいし、まぁバカンスを楽しむのはアリだろう。

ちょっと脱線したな。シエラ星系の話に戻るか。

シエラ星系が多くの居住可能惑星を持つリゾート星系だという話はしたが、だからといってコロニーが無いわけではない。各惑星に物資を供給するための基地として、リゾート地でのバカンスを自分達が楽しむ順番が回ってくるのを待つ人達のための宿泊地として、そしてリゾート惑星が生み出す高級な自然生成物を輸出するための交易基地として、そしてそれらを現地でやり取りするための市場として……そういった様々な目的のもとに建造された大規模コロニーが存在するのだ。

あまりに高いリゾート惑星への降下をはなから諦めて、その大規模コロニーでバカンスを仮想現実で疑似体験するだけで満足する人も結構多いらしい。なんというか本末転倒じゃなかろうか？

リゾート星系としてのシエラ星系の説明はこんなところか。ここからは傭兵の狩場としてのシエラ星系の説明だ。

リゾート星系と言うだけあって、この星系にはかなりの数の旅行者が訪れる。旅客船の就航数も多く、その旅客船を守るための護衛もそれなりに多い。そして、リゾート惑星に供給する物資を他の星系から運んでくる船も多いし、物資が多く集まるところには商機が

生まれるので商船の数も少なくない。
　さて、ここまで話せばわかると思うが、民間船の多く集まる場所に奴らは現れる。そう、宙賊だ。旅客船に乗っているのはリゾート地にバカンスに訪れるような人々なので、それなりに裕福な人が多い。攫って身代金を要求したり、そのまま違法奴隷として売り払ったり、自分達の『楽しみ』の為に使ったりと用途は多い。
　商船や輸送船は言わずもがなだ。商品価値の高い品を運んでいる船もそこそこ多く、そうでなくとも嗜好品や食料品、その他生活必需品を詰んでいる率が非常に高いのだ。狙わない理由がない。
　無論、客船や商船も宙賊に対して無防備でいるわけがないので、それなりに護衛を雇ったりして自衛している。ならばというわけで宙賊も徒党を組んで襲ってくる。必然、この宙域で遭遇する宙賊は場合によっては十隻どころか二十、三十隻と徒党を組んでいることが多いのだという。
　傭兵の仕事としては宙賊狩りだけでなく、商船の護衛任務なども多いようだ。どちらにせよ、単独（ソロ）ではキツいことが多いので、シエラプライムコロニーの傭兵ギルドでは所謂『野良』の船団を組んでチームで行動する傭兵も多いらしい。

「ヒロ？」
「ん？　どうした？」
「いや、急に黙りこくってどうしたのよ？」
「考え事をしてただけだ。シエラ星系でどう稼ぐか、ってな」
「あんたって意外と真面目よね。リゾート星系に来てまでバカンスよりビジネスのことを考えるとか」
「意外と言われると微妙な気持ちになるんだが……まぁ性分というか習い性のようなものだな」
　呆れた表情で酷いことを言うエルマに肩を竦めて答える。実は国民的な習性かもしれないけどな。放っておいたら過労で死ぬまで働

くっていうある種異常とも言えるアレだ。

「ともあれ、まずはシエラプライムコロニーか」
「そうですね。リゾート惑星でバカンスを楽しむのにもコロニーで予約が必要らしいですし」
「じゃあハイパースペースから出たらすぐに向かうとしよう。出るまであとどれくらいだっけ？」
「一時間半くらいね」
「それならトレーニングした後に汗を流す時間くらいはありそうだ」
「あんたも頑張るわねぇ」
「健全な精神は健全な肉体に宿るって言うだろ」
「あんたが言っても説得力がないわよねぇ」
「心外な。俺ほど品行方正な快男児なんてそういないぞ」
「自分で言うのはどうなのよ」

エルマがジト目を向けてくる。仕方ないだろう、この世界のゲームはどうにも俺の肌に合わないものばっかりなんだ。時間を潰す方法なんて適当に買っておいた電子書籍を読むか、トレーニングルームで体を動かすか、ミミかエルマと一緒にベッドルームで体を動かすかくらいしかないんだから。何か時間を潰せる趣味をこの世界でも探したほうが良いのかね？

「ヒロ様、私も行きます！」
「そうか。じゃあ行くか」
「……私も行く」
「そうか？」

ミミはともかくとして、何故かエルマまで一緒にトレーニングルームに行くことになった。そんなに広くないんだけどな、トレーニングルーム。まぁいいけど。

三人でそれぞれ体を動かして汗を流す。俺は主に筋肉に負荷をかけて筋力を向上させるメニュー。ミミは持久力を養うメニュー、エルマは柔軟性や瞬発力を高めるメニューを行うことが多い。

「あいたたたたっ！」

「あんた身体固いわねぇ。つけた筋肉を有効に利用するためにも身体の柔らかさは重要よ？」

「いだだだだっ！？　曲がんないから！　そんなに曲がんないから！」

「いけるいける。ほら、いっちにーさんし。がんばれ♡　がんばれ♡」

「アァーーッ！？」

今日は柔軟をメニューに組み込んだのだが、エルマが容赦ない。固い俺の身体を容赦なくグイグイと折り曲げてくる。しぬ。

「そんなに辛いですか？」

「ミミは身体が柔らかいわねぇ」

「身体の柔らかさには自信があります！」

「うごごごご……」

ほのぼのとした会話の裏でエルマに折り畳まれている俺のことも気にかけてください！　泣いてる子もいるんですよ！

そんな調子でトレーニングをこなし、ミミとエルマは体を動かしてスッキリした様子で、そして俺は全身の固くなっていた筋を伸ばされまくってガタガタになった身体をふらつかせながらトレーニングルームを後にするのだった。これ、簡易医療ポッドに入った方が良いかな……？

☆★☆

「間もなく通常空間に出ます。カウント、5、4、3、2、1……出ます！」

ぎゅいおおおんとでも言えばよいのか、それともぎゅおおおおんとでも言えばよいのか。とにかく形容し難い音を立てて俺達は極彩色の光溢れる空間から星々が煌めく宇宙空間へと帰還した。

「星系データ照合、座標確認……現在座標の特定に成功」
「シエラプライムコロニーへのナビゲーションデータを設定します」

すぐさまエルマがシエラ星系のデータと周辺の情報を照合して現在地を割り出し、そのデータを基にミミが目的地へのナビゲーションを設定する。ミミやエルマと出会ったターメーン星系からここに移動してくるまでに何度もやった作業だ。ミミも慣れたのか、かなりスムーズにいくようになってきたな。

「よぉし、んじゃ行くとしますかね。超光速ドライブ用意」
「了解、超光速ドライブチャージ開始。カウント、5、4、3、2、1……チャージ完了」
「超光速ドライブ起動」

ズドォン、という爆発音のような音を響かせてクリシュナが超光速ドライブ状態へと移行する。光点だった星々が線となり、後方に過ぎ去って行きはじめた。

「シエラプライムコロニーへの到着は……何もなければ一〇分ってところか」
「そうですね。この前のようにトラブルがなければ――」

そうミミが言ったのがフラグだったのだろうか。コックピットにアラームが鳴り響き始めた。

「……ミミ」

「えぇっ！？　私が悪いんですかっ！？」

俺に名前を呼ばれたミミが涙目になる。

「いや、ミミが悪いってわけじゃないんだけどな？　あまりにもお約束な展開だったからさ」

「インターディクターかけられてるのに呑気ねぇ……」

インターディクターというのは、超光速ドライブ状態を強制的に解除し、航行している船を強制的に通常の航行状態に引き戻す装置のことである。具体的な理論はよくわからないが、質量やら重力やらをどうにかこうにかしてうまいことやるらしい。まったくもって理解の及ばない世界だが、とにかく、インターディクターをかけてくるような相手というのは二種類……いや、三種類しかない。

一つは、巡回中の星系軍。俺のこの船、クリシュナみたいに単艦で行動している船は正直に言えば不審船だ。普通、商船や客船というものは護衛をつけ、船団を組んで航行しているものである。単艦で飛び回っている船なんてのは、傭兵かはぐれ宙賊くらいのものだ。つまり怪しいので星系軍はそういう不審船を見かけるとインターディクターを使って船を止め、臨検を実施してくることがある。

もう一つは当然の如く宙賊だ。奴らはインターディクターを使って超光速ドライブ中の商船や客船を止め、力で持って船を拿捕し、乗員、乗客、積荷を襲って奪う。

最後の一つが俺と同じ傭兵だ。賞金首の中には単艦で逃げ回るようなやつもいるので、そういうのを追っている傭兵の船は対象を仕留めるためにインターディクターを使うことがある。クリシュナも

一応積んでいる。滅多に使うことはないけど。

「相手は何だと思う？」
「十中八九宙賊でしょ」
「だよな」

インターディクターをかけてきている今も何の警告も発せられていない。エルマの見立ては間違いあるまい。

「どうして狙われたんでしょうか？」
「私達が単艦だからでしょ。ハイパースペースからアウトした瞬間にレーダーで捉えられてたんだと思うわよ」

インターディクターの発する重力場？　からのらりくらりと逃れながら相談を続ける。ケツについてインターディクターをかけてきているやつ、あんまり上手くないな。やろうと思えば難なく抜けられそうだが。

「殺るか」
「大丈夫？　この星系の宙賊は一集団ごとの規模が大きいらしいけど」
「大丈夫だ。インターディクターの腕がこれなら高が知れてる」
「そう？　そうね。それじゃあやりましょうか」
「ああ。ミミ、戦闘準備だ。多分数が多いからレーダーに注視しろ。あと、Gにも備えておけ。対G装置で吸収しきれない機動を取るかもしれないから」
「わかりました！」
「エルマ、通常空間に戻り次第チャフ展開。必要があればフレアも」
「わかってるわ。いつでも良いわよ」
「それじゃあ行くぞ」

出力を急激に落とし、インターディクターの力に逆らわずに超光速ドライブ状態を解除する。戦うことを選択するのなら、強制的に超光速ドライブ状態を解除されるよりも自分で解除した方が隙が少ないのだ。

ズドォン！　という音と共に超光速ドライブ状態が解除され、線になって流れていた星々が停止し、光点へと戻る。

「未確認機からロックオンされています！　敵影十三！」

「チャフ展開」

「ウェポンシステムオンライン。行くぞ！」

落としていた出力を全開にして戦闘機動を開始する。さぁ、ショータイムだ。

#０６０　引き撃ちは鉄板戦術

敵は後方に十三隻。最初から後ろを取られているこの状況はあまり面白くはない。
だが、基本的にシールド容量も火力もこちらの方が圧倒的に上の筈だ。シールドセルも十分に積んでいる。たまにはゴリ押し戦法を取るのもアリだろう。

「今回は真正面からの撃ち合いで行くぞ」
「本気？」
「本気さ」

重レーザー砲を搭載した四本の武器腕と二門の散弾砲を展開しながら最大出力でスラスターを噴かして加速する。

『なんだよ逃げんのかァ？　腰抜け野郎！』
『ギャハハ！　十三隻相手に逃げられるかなぁ？』

別に逃げるわけじゃないんだが。と思いつつ宙賊達との距離を取る。真正面から撃ち合うとは言ったが、別に足を止めて撃ち合うつもりではない。四方八方から撃たれると面倒だからな。

「このまま逃げるんですか？　こっちのほうが速いみたいですから、逃げられそうですけど……」
「まさか」
「えっと……？」
「こうするのさ」
『クソッ、あいつ思ったより速――！？』

前方へと移動するスピードをそのままに、姿勢制御スラスターを噴かしてクリシュナを急速に回転させた。結果として、ケツを見せながら逃げていたクリシュナは速度をそのままに後退しながら十三隻の宙賊と対峙することになる。

「まぁ、引き撃ち安定よね」

「そういうこった」

頑張ってこちらに肉薄しようとする宙賊どもに対し、クリシュナは後退用スラスターを噴かして距離を保ちながら四門の重レーザー砲を連射する。宙賊艦というものは基本的に攻撃力を優先しているため、シールド容量が大変お粗末だ。

重レーザー砲から放たれる緑色の光条はそんな宙賊艦達のシールドを障子紙か何かのように容易く貫いて装甲を融解させ、船体を穿っていく。

『一撃でシールドが――うわあぁぁぁぁっ！？』

『ミ、ミサイルだ！　全弾叩き込め！』

四隻の宙賊艦が爆発四散するが、残りの九隻が健気にも熱探知式のシーカーミサイルを発射してきた。仲間の犠牲を無駄にしないために全力の攻撃を放ってきたわけだ。

感動的だな。だが無意味だ。

『な、なんだ！？　ミサイルがっ！？　ぐわぁ！？』

二門の散弾砲から発射された超高速の散弾が迫りくるシーカーミサイルを迎撃し、誘爆させて大爆発を起こした。その爆発を目眩ましにして更に重レーザー砲を連続で撃ち込んでいく。宙賊どもから

もレーザー砲やマルチキャノンから発射された弾丸が飛んでくるが、クリシュナの分厚いシールドに阻まれて装甲に傷一つつけることができていない。

『クソッ！　カモかと思ったらとんだ化物だ！　逃げるぞ！』

また四隻減って残り五隻。こういう時、都合よくリーダー格が残るのはやはりいちばん後ろにいるからなのだろうか？　と益体もないことを考えながら更に重レーザー砲を連射して宙賊どもを仕留めていく。

『クソッ！　クソッ！　死にたくねぇ！　死にたくねぇ！　死に――』

最後の一隻が四本の光条に貫かれて爆発四散する。こいつはクソって言葉が口癖なのかね？　ああ、そういや昔ＦＰＳで遊んでた時もこういう奴いたな、壊れたラジオみたいにブルシットブルシット言ってた人。

「状況終了。うーん、性能差がありすぎてどうにもだな」
「この艦は反則過ぎるわよ。ジェネレーター出力おかしくない？見た目は小型艦だけど、出力と火力が大型艦並みじゃないの」
「反則っぽいってのは否定しない。でも、機動特性は割とピーキーだぞ」
「まぁそうね。スワンほどじゃないけど」
「アレを使いこなしてたエルマは間違いなく腕利きだと思うぞ……アレは俺には無理だ」

エルマと話をしながらクリシュナを宙賊艦の残骸の方へと進めて戦利品のサルベージを開始する。

「いつものことですけど、なんというか……」
和気藹々と言っても良いほどの明るい調子で話をする俺とエルマにミミが微妙な視線を向けてくる。ふむ。断末魔を聞いて引っ張られたか。
「人を殺したっていうのに平然としすぎてる？」
「えっと……」
ミミはエルマの質問に言い淀んだ。その通りなのだろうが、俺とエルマにそう言うのは気が引ける、といったところだろうか。
「ミミ、いちいち気にしていたらキリがないぞ。アレは人を襲うたちの悪い宇宙怪獣みたいなもんだから。ある程度知恵が回って理解できる言葉を話す分始末に負えないけどな」
「ヒロの言うとおりよ。あいつらが上げる断末魔や命乞いの声なんか気にする必要はないわ。あいつらは何の罪もない民間船を襲って散々そんな悲鳴を無視してきたクズどもなんだから。因果応報ってやつよ」
「……はい」
ミミからしょんぼりとした声が返ってくる。席が離れているから表情は見えないが、きっと表情も暗く沈んでいるのだろう。
「まぁ、でも辛いかもしれないけどミミはそのままの方が良いのかもな。俺とエルマはこんなだから、ミミにはこの船の良心として優しい心を持ち続けて貰ったほうが良いのかもしれん」
「私にだって良心くらいはあるわよ……？　でもミミ、宙賊に容赦はしてはいけないの。奴らを一人逃せば何十人、何百人もの人が不

幸になるかもしれないんだからね」
「……はい」
ううむ、テンションは今ひとつ戻らないようだ。こういう時、どんな言葉をかけたら良いかわからないの。ごめんなミミ。
「大した積み荷は無いみたいね」
「だなぁ。保存食、酒、少量のレアメタルくらいか。装備もわざわざ引っ剥がしてまで持っていくようなものは……Oh」
ドローンを操作して戦利品を漁っていると、思わず溜息の出るようなものを見つけてしまった。
「どうしたの？」
「やべーもんを見つけたかもしれん」
「えぇ？　何よ、また歌う水晶？」
「いんや、これ」
俺が見つけた戦利品のデータをミミとエルマに送る。
「これは……コールドスリープポッド？　げ、中身入りじゃない」
俺の送ったデータを確認したエルマが嫌そうな声を上げた。
コールドスリープポッドというのは、客船などに装備されている緊急用の脱出ポッドだ。中に入って脱出した人間を低温下で仮死状態にして代謝を抑え、少ないリソースで長時間生存できるようにするものである。
射出して一定時間後に救難信号が発せられるようになっており、コールドスリープ状態で搭乗者が生存しているうちになんとか他の船に回収してもらおうというコンセプトの救命装置だな。ちなみに

ステラオンラインにおいては換金アイテムみたいなもんである。この世界においてはそんな単純な物体ではないのだが。

「中身入りってことは……生存者ですか？」

「ポッドがイカれてなければそうなるな……放置して帰るわけにもいかないよな」

「いかないわね」

これも発見者に救命義務が課せられている。発見して放置した場合は結構な重罪になり、賞金がつくらしい。バレへんバレへんと放置して多額の賞金を懸けられてしまう傭兵や商船主の話には枚挙にいとまがない。

「回収するかぁ……んで可及的速やかにコロニーに向かおう」

「バカンスに来たっていうのに早速ケチが付いたわねぇ……まぁ宙賊に襲われた時点でケチはついてたけど」

「えっと、なんでそんなに面倒臭そうなんでしょうか……？」

ミミの言葉に俺とエルマは目を見合わせた。メインパイロットシートとサブパイロットシートは隣り合っているからこうやって視線を合わせられる。

で、今は互いにお前が説明しろよ、あんたが説明しなさいよと説明役を押し付けあっているわけだが……いや、さっきミミに宙賊に関してちょっと厳しいことを言った手前、人命救助をめんどくさがる理由を説明しにくいんだよ。

結局はエルマが折れて溜息を吐いてから説明を始める。

「コールドスリープポッドを使うと、数日の間記憶の混乱が起こることが多いのよ。だから、一週間ほどの間は救助した人が『中身』の保護義務を負うことになってるの。記憶が戻った後にその間にか

かった費用なんかはその人に請求できることにもなってるけどね」
「つまり、一週間の間はバカンスにも行けないし、宙賊狩りにも行けないってことだな……まぁ、人助けだから仕方ないな」
「そうですね。人助けは良いことだと思います。私もエルマさんも、ヒロ様のそういうところに助けられましたから」
「……そうね。ケチが付いたなんて言ったらバチが当たるわね。あとは『中身』に問題がなければ良いけど」
「中身なぁ……そればかりは開けてみないことにはなぁ」

中から出てくるのが記憶の混乱があっても理性的な人なら良いんだが……エルマから聞いた話だととんでもないのが出てくることもあるらしいからなぁ。

「何にせよ、シエラプライムコロニーにさっさと向かうとしようか。回収も終わったし」
「そうね。ミミ、ナビゲーションの再設定をお願い」
「はい、ナビゲーションデータを設定します」

シエラプライムコロニーへのナビゲーションデータが設定され、コックピットのメインディスプレイ上に目標が表示される。

「よーし、じゃあ行くぞ。超光速ドライブチャージ開始だ」
「はい、チャージ開始します」

こうして俺達は中身不明のコールドスリープポッドをカーゴに収め、シエラプライムコロニーへの移動を再開するのだった。
コールドスリープポッドの『中身』がどんな面倒事を引き起こすかも知らぬままに。

#060　引き撃ちは鉄板戦術（後書き）

毎週木曜日と月曜日を休みにしようかなと思います―（：3」∠）

―

#061　眠り姫

シエラプライムコロニーは俺とミミやエルマが出会ったターメーンプライムコロニーと同じトーラス型……いや、移動用エレベーターと中心部の低重力港湾区画も加味するとタイヤのような形のスペースコロニーである。

こちらの方が規模が大きくタイヤの直系も太さもターメーンプライムコロニーの二倍くらいはありそうだ。一体何万人の人間を収容できるのだろうか？

「ターメーンプライムコロニーと似てますね」

「同じタイプのコロニーだからね。中身は全く違うわよ」

ミミとエルマが話をしているが、ミミの声に少し元気が無い。故郷と同じタイプのコロニーを見て望郷の念にでも駆られたのかもしれない。

「ミミ、ドッキングリクエストを」

「あ、はい！」

俺の指示を聞いてミミがシエラプライムコロニーの港湾管理局にハンガーへのドッキング要請を送信する。程なくして港湾管理局から返信が来た。俺達がドッキングするのは三十二番ハンガーか。

「よーし、行くぞ。安全運転でな」

「そうね、安全運転でね」

エルマが少し遠い目をしている。エルマは暴走事故の果てに多額

の借金を背負う羽目になったからな。まぁ彼女の過失責任はそこまで大きくは……いや大きいか。大きいな、うん。そういやこの世界ではあの暴走機能搭載スペースシップってどういう扱いなんだろうか？　自動車とかで考えると完全にリコール対象だよな、あれ。今度調べてみるか。

さて、ここもまた交通量の多い港だったが、特に事故を起こすこともなくドッキングに成功した。まぁ俺にかかればこれくらいは手慣れたものだ。ステラオンラインの初心者はなかなかうまくドッキングできずにハンガーの辺りであっちにふらふら、こっちにふらふら、時には腹を擦ったり機体を傾けすぎて擦ったり、前進後退の出力をミスって壁なりなんなりの構造物にぶつかったりするんだよな。

慣れてくるとスッとハンガーにドッキングできるようになってくる。俺のように。まぁ、つまりオートドッキング機能を使うんだけどね。

「オートドッキングなんて邪道よ……」
「お前はオートドッキング機能に親でも殺されたのかよ」
「ま、まぁ便利ですから」

何故かオートドッキング機能に毒を吐くエルマをミミが宥める。本当にエルマのこのオートドッキング嫌いは何なんだろうな。過去に嫌なことでもあったのだろうか。

「コールドスリープポッドの件はどこに連絡すれば良いんだ？」
「港湾管理局で良いわよ。航宙法関連はあそこの管轄だから」
「なるほど。ミミは滞在申請を進めてくれ。俺はコールドスリープポッドの件で港湾管理局に連絡する。エルマは双方のサポートよろしく」
「はい！」
「はいはい」

はいは一回で良いぞ、とは口に出さずに港湾管理局の回線にコールをかける。すると、すぐに通信に応答があった。女性の声だ。

『こちら港湾管理局』

「こちら傭兵ギルド所属のキャプテン・ヒロだ。艦の名前はクリシュナ、三十二番ハンガーに停泊中」

『照合します……照合完了、何か問い合わせでしょうか？　キャプテン・ヒロ』

「問い合わせっちゃ問い合わせだな。この星系に来てすぐに宙賊に襲われて撃退したんだが、その積み荷の中に未開封のコールドスリープポッドがあったんだ」

『なるほど、遭難者を救助なされたのですね。では開封の立会いですか。保護義務についてはご存知で？』

「ああ、一週間の保護が義務付けられているんだったか。その後、保護されたやつに行く宛がない場合はどうするんだ？」

『一週間の間にこちらで身元を確認しますので、ご心配なく。帝国臣民であればほぼ１００％の確率で身元を確認できますから』

「……帝国臣民じゃなかったら？」

『その場合は帝国が対象を引き取ります。その後の生活を見ろとまでは言いませんよ』

港湾管理局員の女性が朗らかな声でそう言う。引き取られたあとどうなるのかは怖くて聞けなかった。コールドスリープポッドの中身が帝国臣民であることを祈っておくとしよう。

「具体的にはどういう手続きを？　この船のカーゴで開封するのか？」

『いいえ、専用のスペースがありますのでそちらで。貨物移送の手続きで送ってください。移送コードは……』

港湾管理局員が指示する移送コードをコックピットのコンソールに打ち込み、コールドスリープポッドの移送を開始する。これでコロニー内の物資移送システムを介して荷物が指定の場所に届けられるわけだ。中に（多分）生きている人間が入っているコールドスリープポッドを荷物扱いするのもいかがなものかと思わないでもないけど。

『移送手続きを確認しました。今からこちらにいらしてください、早速コールドスリープポッドを開封致しますので』

こちらの都合はお構いなしだな！　まぁ、コールドスリープは長くすれば長くするほど記憶障害が酷くなることが多いらしいし、一秒でも早く開封したほうが中の人のためなのだろう。

「聞こえてたな？　そういうわけで、俺は港湾管理局に行ってくる。どっちかついてきてくれ」

「エルマさんが良いんじゃないでしょうか？　何があるかわかりませんし、対応力の高いエルマさんのほうが良いと思います」

「それはそうかもしれないけど……そうね、そうしましょう」

エルマは少し考えた後に頷いた。何を考えていたのかはわからないが、別に面倒くさいから行きたくなかったというわけでは無さそうだ。

「じゃあ行ってくる。略奪品と積荷は適当に処分しておいてくれ。任せたぞ」

「はい、任されました！」

俺にクリシュナと積荷、略奪品について任されたミミが笑顔を浮

かべる。積荷というのは、ハイテク星系であるアレイン星系で仕入れてきたハイテク製品である。俺には使い方の想像もつかない品々だったが、リゾート星系であるこのシエラ星系で値が付きそうなものをミミとエルマが選んで買ってきたらしい。

あまり大きくはないが、クリシュナにも荷を積めるカーゴがあるので、それを遊ばせておくのはもったいないだろう、ということでミミとエルマがカーゴの空き容量を使った貿易を始めたというわけだ。船主の俺に純利益の五割を収め、残りの五割をミミとエルマで分けるらしい。

俺の取り分に関してはもっと少なくても良いと言ったのだが、俺のクリシュナがなければ成り立たない商売なんだから、それくらいの配分は当たり前と言われた。すったもんだの挙げ句俺が折れたわけだ。

コックピットから出た俺達はクリシュナを降りてエルマと一緒に港湾管理局へと向かう。

「さっき、何を悩んでたんだ？」

「これから先、こういうこともあるかもしれないからミミに経験を積ませようと思ったのよ。でも、先にあんたに経験を積ませて、それから次の機会があったらあんたにミミを教育させたほうが効率が良いと思い直したわけ」

「なるほど。ではご指導ご鞭撻のほどよろしくおねがいしますよ、エルマ先輩」

「あんたにそう呼ばれるのは久しぶりね」

そんな話をしながら歩いているうちに港湾管理局に到着した。

「どこの建物も似たようなのばっかだよな」

「効率の問題ね。ユニット化して製造、組み立てて完成だし。自分だけの『特別』ってのは案外贅沢なのよ。宇宙では限られた資源、

限られたスペースを有効活用しないとね」
「なるほどなぁ」
ゲームの世界が元になっているからコピー&ペーストしたような画一的な建物が多いのかと思っていたのだが、そういう理屈があったわけか。
港湾管理局に入ると、広いカウンターとそこに詰めている職員、それと様々な格好の訪問者の姿があった。俺達のような傭兵風の格好の者もいれば、カウンターの職員達と同じようなスーツ姿の者もいる。流石にパワーアーマーを着ているやつはいないな。
「コールドスリープポッドの件で連絡していたキャプテン・ヒロだ」
「コールドスリープポッド……はい、確認しました。既に到着しているようです。あちらの通路を進んだ先にある第一開封室に移動してください」
「第一開封室ね」
職員に指示された通路に進み第一開封室に入る。開封室の中には既に数人の港湾管理局員が待機していた。コールドスリープポッドになにやらコードを接続してコンソールを操作している人もいる。
「どーも。おたくがキャプテン・ヒロ？」
声をかけてきたのは中年のおっさんだった。恐らく三十代半ばから四十代といったところか。口調は緩いが、身体は引き締まっていて、弛んだ様子はない。ちょい悪っぽいおっさんだ。
「そうだ、あんたは？」
「しがない港湾管理局員だよ。ブルーノだ」

握手を求めてきたので、素直に応えておく。なかなか力強い手だな。

「そちらの美人さんは？」
「エルマだ。俺の船のクルーだよ」
「……へぇ。羨ましいこった」

ブルーノはエルマを見て心底羨ましそうな声でそう言った。傭兵である俺の船のクルーだということは、つまりそういうことだからだ。もう一人、ロリ巨乳美少女が乗っていると知ったらこの男はどんな反応を示すのだろうか。

「それで、早速本題だが……まぁ中身は無事みたいだな。今解凍中というか蘇生処置中だ。どうも女の子みたいだな」
「女の子ねぇ……まぁ、エルマもミミも居るし面倒を見るのは問題ないか」
「そうね。私達としても女の子なら安心だわ」

逆に屈強なおっさんとかだと扱いに困ったかもしれんな。なんだかんだ言ってクリシュナの中ってのは密室だし。いや、別にそういうことならミミとエルマをこのコロニーの宿泊施設に泊まらせて、俺がおっさんと二人でクリシュナに籠ればよかったか。逆でもいいけど。

「他に情報は？」
「そうだな。この脱出ポッドは三ヶ月前に宙賊に襲われた高級旅客船の脱出ポッドだな。高級旅客船というだけあって、乗員は基本裕福な商人とか貴族だ。その子女である可能性が高い」
「……面倒事だな？」
「ご愁傷さまだな。ただ、そういったとこのお嬢様を助けたという

ことであれば謝礼には期待できると思うがね」

ブルーノはそう言って肩を竦めた。これで出てくるお嬢様が素直ないい子だったら良いのだが、わがまま放題のクソガキが出てきたりしたら面倒なことこの上ないなぁ。

「まぁ、女の子だからエルマとミミに任せるよ」
「ちょっと」
「任せるよ」
「あのね」
「任せるよ！」
「……」

強引にゴリ押ししたらエルマにジト目を向けられた。だって仕方ないじゃない。素直な良い子であろうとなかろうと、男の俺がそんなお嬢様に親しく接するのはまずかろうよ。

「バイタル安定、開封可能です」
「よーし、んじゃご対面だ。覚悟は良いか？　キャプテン」
「いつでも。もったいぶっても仕方がないしさっさと終わらせよう」
「そりゃご尤も。開封開始だ」
「はい、開封開始します」

ブシューッ、と円筒形のコールドスリープポッドから白い煙が吹き出し、ポッドの蓋が持ち上がってスライドする。近寄ってポッドの中を覗き込むと、ポッドの中に入っていたのは黒髪おかっぱの可愛らしい顔の少女だった。

目覚めて最初に目にするのが俺の顔というのも可哀想だな、と思って離れようとする。

「っ！？」

そうしたらポッドから少女の手がにゅっと伸びてきて、俺の服の裾を掴んだ。流石にびっくりして体がビクリと震える。

「お父様、行かないで……」

「へっ？」

「行っちゃやだ……」

俺の服の裾を掴んだまま目に涙を浮かべ始める少女を前に困り果てる。エルマやブルーノ、その他の港湾管理局員にも助けを求める視線を向けてみたが、肩を竦められたり苦笑いされたりした。誰も助けてくれるつもりはないらしい。

「……はぁ。わかったよ」

服の裾を掴む少女の小さな手にそっと手を添えてやると、彼女は俺の手をしっかりと掴んで微笑み、そのまま気を失うかのように眠ってしまった。俺の手を握ったまま。

「……どうすればいいんだ、これ」

「起きるまでそうしているしかないんじゃない？　さ、ブルーノ。手続きを進めましょう」

「そうだな。保護者と保護対象の関係も良好のようだし問題ないだろう」

俺の手をしっかり握ったまますやすやと眠る黒髪のお姫様を前に俺は天井を仰いだ。

どうしてこうなった。

#061　眠り姫（後書き）

鉄板というものは良いものだと思います―（∵3」∠）―（負け惜しみ

#062　特大の面倒事

黒髪の少女はなかなか起きなかった。コールドスリープ中は『寝ている』というよりも『停止している』に近い状態らしく、むしろコールドスリープ状態に入る際、そしてコールドスリープ状態から戻る際にかかる負担で身体は疲労しきっている状態であるらしい。

つまり、少女はなかなか目覚めないということである。

「ん、んん……」

少女が可愛らしい顔を歪めてうなされている。嫌な夢でも見ているのだろうか？　その小さな手は相変わらず俺の手を握っており、離そうとする気配はまったくない。きゅっと力を込めて握ってくる少女の小さな手を握り返してやると、少女の表情が穏やかになった。

「子守りは得意じゃないんだけどなぁ……」

絶賛その得意じゃないことにチャレンジ中の俺は小さくため息を吐いた。彼女が目を覚ましたら、俺は一体どうすれば良いのだろうか？　起きたらいきなり見ず知らずの男に手を握られていた、とか『もしもしポリスメン？』案件ではないだろうか。

いや、港湾管理局の職員達は事情を知っているし、施設の管理ＡＩがこの場を監視し続けているそうだから滅多なことは無いと思うが。彼女が起きたら一体誰が彼女のこの状況を説明するのだ？

俺か？　俺が説明するのか？

彼女の年齢から考えて、一人旅ということはあるまい。家族が一緒に同じ客船に乗っていた筈である。しかし、彼女だけが宇宙空間を彷徨っていて、宙賊に拾われた。彼女の家族は一体どうなったの

か？　お父様、行かないでという彼女の言葉から想像できる状況は？
どう考えても明るい見通しは立ちそうにない。
彼女の素性や、彼女の乗っていた客船、そしてその乗員乗客の状況については港湾管理局が調べてくれているようだが、彼らの表情から察するにあまり良い状況ではなさそうである。これからの事を考えると気が重い。

「はぁ……」

思わず溜息が漏れる。港湾管理局員の女性が俺を気遣ってちょうど良い大きさのスツールチェアを持ってきてくれたのが唯一の救いだろうか。

『私は傭兵ギルドに行ってくるわ』

手続きが終わったらしいエルマからメッセージが入ってきた。

『おう。お姫様はまだ起きる気配なしだゾ』
『その子、何歳くらいの子なんですか？』

メッセージアプリのグループチャットで既にミミにも眠り姫の件は通達済みである。ミミは眠り姫の事が気になって仕方がないようだ。

『わからんけど、ミミよりも下なのは確実だな。十歳から十二歳くらいか？』
『身長はミミと同じくらいだったけどね』
『身長のことは言わないでくださいー』

ニヤニヤ顔をしたコミカルな単眼エイリアンのスタンプを送信し

たエルマに対し、ミミがプンプンと怒った猫のようなリスのような不思議生物のスタンプを返す。君達は賑やかだなぁ。
そう言えばこのメッセージアプリには端末で撮った写真を添付する機能があったな、と思い至って眠り姫の顔をパシャリと写し、グループチャットにアップロードする。

『眠り姫はご覧の通り絶賛スヤァ中』
『可愛い！』
『寝顔を撮るのはやめてあげなさいよ……可愛いけど』

ミミから目をハートにした宇宙猫だか宇宙リスだかのスタンプが飛び、エルマからはお小言が飛んでくる。

『今度二人の寝顔も撮ってやろう。可愛くな』
『やったら怒るわよ』
『可愛く撮ってくれるなら私は……』

単眼コミカルエイリアンが怒っているスタンプと宇宙猫リスがモジモジしているスタンプが飛んでくる。俺も何かスタンプを購入して使うべきだろうか……この世界には俺の知っているキャラクターとかいないからなぁ。折角のバカンスだし、どこかで時間を取って二十四時間耐久ホロ動画鑑賞会とか開くか。

「んん……？」

右手で少女の手を握りながら左手で情報端末を操作していると、少女が遂に目を覚ました。彼女はぼんやりと視線を彷徨わせ、そのうちに俺を見つけてぼーっと見つめ始める。何故か手をにぎにぎしてきたので、俺もにぎにぎと握り返してやった。

「……お父様？」
「すまん、君のお父様じゃあないな」
目を覚ましたお姫様はぼんやりとした視線を更に彷徨わせた。
「お父様……お父様は……？」
「すまん、俺が見つけたのは君だけなんだ」
俺の言葉を聞いた彼女はそうですか、と言って目を瞑ってしまった。きゅっと手が握られる。
「手……」
少女の目が再び開き、その視線が繋がっている手へと注がれる。
「握っていてくださって、ありがとうございます」
「いや……」
軽く握っていた手から力を抜くと、少女は最後にもう一度俺の手をきゅっと握ってからその手を離した。彼女が身体を起こそうとしたので、背中を支えてその手伝いをしてやる。
俺に支えられて身を起こした少女は俺としっかりと目を合わせて口を開いた。
「ありがとうございます。私は……私の名前はクリスティーナ・ダレインワルド。ダレインワルド伯爵家の嫡子、フリードリヒ・ダレインワルドの娘です」
情報量が多いな！　ええとつまり、この子はクリスティーナ。お祖父さんが伯爵家の当主で、お父さんのフリードリヒ氏が次期伯爵

ってことだな。

「俺はキャプテン・ヒロ。傭兵ギルドに所属しているシルバーランクの傭兵で、小型戦闘艦クリシュナのオーナーだ。ヒロと呼んでくれ」

「はい、ヒロ様。私のことはクリスとお呼びください」

そう言ってクリスがぎこちなく微笑む。眠っている時から美少女だとは思っていたが、これは予想以上だな。目鼻立ちが整っているのは勿論なのだが、オニキスのように黒く輝く瞳が何より美しい。これが日本なら何百年に一人の美少女、とか言われそうなレベルだ。体型はかなり……かなりスレンダーだけど。

「とりあえず、今の状況を説明するぞ。質問は最後に纏めてってことで頼む。あと、口調はこのままで良いか？　もっと丁寧な言葉づかいのほうが良いかな？」

「いえ、そのままで大丈夫です。伯爵家の娘と言っても、私は何の力もないただの小娘ですから」

クリはそう言ってふるふると首を横に振った。居丈高なじゃじゃ馬娘だったらどうしようかと思ったが、彼女は謙虚で奥ゆかしい淑女であるようだ。良かった。

「ならお言葉に甘えるよ。まず、俺が君を拾った経緯だが、ごく簡潔に言うと君は宙賊の戦利品だったんだ。俺が倒した宙賊の積荷の中に君が入っていたこのコールドスリープポッドがあった。君の入ったコールドスリープポッドを回収した俺はこのシエラプライムコロニーに直行し、港湾感局に通報して彼らの立ち会いの下にこのコールドスリープポッドを開封した。そして出てきたのが君、クリスというわけだ。ここはシエラプライムコロニーの港湾感局、その中

にあるコールドスリープポッドの開封室だよ」
「……なるほど」
俺の言葉を噛みしめるかのように彼女はゆっくりと頷いた。
「宇宙空間でコールドスリープポッドを拾った救助者は、その中に入っていた人物を保護する義務が生じる。おおよそ一週間くらいの間な。そういうわけで、君の身柄は俺が保護することになる。俺の船には女性のクルーが二人いるから、細かなケアというか世話については彼女たちに任せることになると思う。部屋は残念ながら余っていないけど、女性二人が使っている部屋はそれぞれが元々は二人部屋だから、どちらかの部屋で一緒に寝泊まりしてもらう形になるかな……男の船に乗るのはちょっとマズいということであれば、コロニーの宿泊施設を用意することもできると思うが」
「いえ、お世話になる身でそこまでは」
クリスはそう言って再び首を横に振った。男の船云々について疑問を呈さない辺り、やはりあの風習は常識であるらしい。
「そうか？　まぁ、実際に現場を見てから判断してくれて良いからな。で、君の身柄に関しては俺が一時的に保護することになるんだが、君がお祖父さんのダレインワルド伯爵に連絡を取れればその後の心配は要らないだろう。伯爵家の迎えが来るまでは君の身の安全は俺が守ると約束するよ」
「そうですか……貴方は、ヒロ様は私を守ってくれますか？」
「……？　ああ、守るよ。期間限定になるだろうけど、お姫様の騎士役を仰せつかろうじゃないか」
不安げな瞳を向けてくるクリスに対し、俺はコールドスリープポッドのすぐ横に跪き、左手を胸に当てて大仰にそう言ってやった。

彼女にしてみれば宙賊に襲われて脱出ポッドに乗り込み、気がついたら俺が傍にいたような状況だ。不安がるのも不自然ではないだろう。

「ふふ、小型戦闘艦を駆る私だけの騎士様なんて、まるでホロ小説の主人公にでもなった気分です」

俺の大仰な仕草にクリスは微笑んだ――かと思うと、急に表情を引き締めて俺をジッと見つめてきた。

「私の騎士、ヒロ様。どうか私を守ってください」

「……何からでございしょうか？　我が姫」

クリスが俺の冗談に乗ってきたので、俺も乗ることにした。唐突に始まったごっこ遊びだが、ミミよりも小さな女の子ならこういうこともあるだろう。

「私の父、フリードリヒ・ダレインワルドは謀殺されました。私の叔父であるバルタザール・ダレインワルドの手の者によって。船を襲ったのは宙賊ではありません。恐らく叔父の私兵です。叔父は、継嗣である父と、その娘である私を狙って私達の乗る客船を襲ったのです」

……Ｗｈａｔ？

「お祖父様には通信で事情を説明するつもりですが、証のあることではありません。ですが、船に乗り込んできた賊は明確に父と母、そして私を狙ってきました。最初に私を庇って母が撃たれて倒れ、父は私を逃してくれましたが……コールドスリープポッドの救難ビーコンが機能していなかったのは、父が私を脱出させる際に発振器

を停止したか、破壊したからでしょう。私が逃されたことは叔父も知っているはずです。きっと、このシエラ星系でまだ私を探し回っている叔父の手のものが居ると思います」

「Ｏｈ……」

思わず天を仰いで手で顔を覆う。やはり面倒事だった。しかも貴族のお家騒動という特大級の面倒事だった。なんだろう。この世界に来てからというものの、色々なことに巻き込まれ過ぎではないだろうか？　俺は単に日々雑魚宙賊どもをしばき倒してコツコツと金を貯め、いずれ惑星上居住地に庭付き一戸建てを建てて思う存分コーラをかっ喰らいたいだけなのに。

「迷惑、ですよね」

クリスが苦笑いを浮かべる。迷惑か、迷惑でないかと言われれば断然迷惑だ。迷惑以外の何物でもない。

「今話したことは忘れてください」

だとしても。それがなんだ？　何かをする前に諦めて、助けを求める無力な少女を見捨てると？　この俺が？　高性能戦闘艦であるクリシュナを駆るこの俺が？　あの時ミミを助けたこの俺が？　エルマを見捨てられなかったこの俺が？

ありえないね。俺は可愛い女の子が困っているのを見ると助けずにはいられない性分なんだ。

英雄願望？　ええかっこしい？　上等じゃないか。男ってのはいつまで経ってもそういうものからは逃れられないものさ。

「報酬が要る」

「えっ？」

「俺は期間限定の君の騎士であると同時に、傭兵でもある。お姫様の為に戦う騎士にも、傭兵にも、働きに応じた報酬が必要なものだ。そう思わないか？」

目を丸くして驚くクリスに俺はそう言って口角を上げて見せた。

「え、ええと……」

「なんだっていい。さぁ、交渉のしどころだぞ、お姫様。君は俺にどうやって報いる？」

クリスは困ったように視線を彷徨わせた後。何かを思いついたようにハッと目を見開いて自分の首にかかっていたネックレスを外し、俺に手渡してきた。キラキラと透き通った輝きを放つ薄紫色の宝石があしらわれているものだ。

高そうなものではあるが、俺にはどれほどの価値があるのかわからない。貴族の子女であるクリスが身につけているものなのだから、決して安い品ではないと思うが。

「私の宝物です」

名残惜しそうにじっとネックレスを見つめるクリス。恐らく、この薄紫の宝石があしらわれているネックレスは彼女にとって思い出の品なのだろう。

「では、こちらをお預かりしましょう。実際の報酬はお祖父様から頂くと致します。私が貴方を守りきったその時、このネックレスはお返しします。我が姫」

俺がそう言ってネックレスを懐にしまうと、彼女は微笑んで手の甲を差し出してきた。これは手の甲にキスをしろということか？

それはなんか恥ずかしいな……でもここまでやって手の甲にキスをしないというのも空気が読めていないよな。俺は空気の読める日本人だからね。ああやるよ。やってやるとも。

俺は恥ずかしい気持ちを抑えつけてクリスの手を取り、そっと口づけをした。

「ふふ、本当にホロ小説みたい」

「姫様は読書家でいらっしゃるようで……本当にこんなキザなことするのかね、帝国の騎士様っていうのは」

「どうでしょう？　私は見たことがありませんけど」

そう言いつつも、クリスは俺がキスした手を胸に抱いてニコニコしている。帝国貴族の家に生まれた女の子の夢ってやつなのかね。男にとっての裸ワイシャツとか裸エプロンみたいな。例えがアレだけど。

「とにかく、そういうことで。短い付き合いかもしれないけど、よろしく。クリス姫」

「はい、私の騎士様」

クリスが花のような笑みを浮かべる。

さて、掴みはＯＫということで早速動こう。標的がコールドスリープポッドで脱出したのはわかってるんだから、俺なら港湾管理局に監視の目を置いておくね。船が襲われてから三ヶ月も経っているわけだし、とっくに諦めている可能性もあるけど、楽観視はするべきじゃない。

さぁて、こういうのは初手が肝心だ。どうするべきかな。

#062　特大の面倒事（後書き）

展開が先読みされている……！
王道だからね！　仕方ないね！
三章のコンセプトはスカッと爽快な勧善懲悪だよ！―（∵3」∠）
―（なおコンセプト通りとは

#063　ホロ動画

「手続きは以上となります。お手数をお掛け致しました、クリスティーナ様」
「いいえ、こちらこそお手数をお掛け致します」

兎にも角にもクリスが目覚めたとなればお役所の手続きを進めなければお話にならない。俺達側の手続きは終わっているが、クリス側にも当然手続きが必要になるわけだ。あのままこっそりクリスと一緒に抜け出すことも考えたのだが、どう考えても厄介事になるのでブルーノ達を呼ばざるを得なかった。
部下を伴ったブルーノがクリスから脱出時の様子を聞き出して記録し、一時的に俺の保護化に入ることになることを説明し、その根拠となる宇宙救難法についても軽く説明する。
クリスは彼女の母が撃たれたことや、彼女の父が決死の覚悟で自分を脱出させてくれたことを語ったが、彼女の叔父であるバルタザール・ダレインワルドの陰謀については語らなかった。ブルーノ達にそれを知らせても意味がないことだと考えたのだろう。
あくまでもこの問題はダレインワルド伯爵家のお家騒動なのだから。この件を公にするかどうかを判断するのは彼女ではなく、伯爵家当主である彼女の祖父であるということらしい。

「私の祖父……アブラハム・ダレインワルド伯爵と連絡を取りたいのですが」
「はい、星系外ということになりますとホロメッセージの送信という形になりますが、可能です。宛先はご存知ですか？」
「ええ。私の保護者となる彼も一緒に。伯爵家の内情に関する話もありますから、私と彼以外は遠慮願いたいのですが」

「お任せください、ホロメッセージの撮影室がありますので。内容に関しても即時暗号化されます、ご心配なく。おい」

その伯爵家の内情とやらにこいつが触れても大丈夫なのか？　という視線をブルーノが向けてきたが、それも一瞬のこと。彼が部下に目配せをすると、その部下は速やかに開封室から退室していった。恐らく撮影室の準備に行ったのだろう。

ちなみに、ホロメッセージというのは所謂ビデオレターである。再生機器で立体映像として再生されるのが俺の知るビデオレターとは違う所だろうか。

「宛先はデクサー星系の第三惑星、ダレインブルグのダレインワルド伯爵家です。通信コードはＡＤＫ‐４３３０２０８」

「はい、少々お待ちを……メッセージが届くのは最速で五日後、ですね」

タブレットを操作したブルーノがそう言う。

「結構掛かるんだな」

「星系内なら超光速通信でなんとでもなるが、流石に何千光年も離れた星系宛となるとな……ハイパースペース通信やゲートウェイを利用しても最速でこれだけはかかるんだよ」

俺の疑問にブルーノが肩を竦めて答える。ゲートウェイというのは人工的にワームホールを作り出して固定化し、一瞬で宇宙空間を何百光年、何千光年も移動することができる施設だ。

ハイパースペースを利用したハイパードライブは星系と星系を繋ぐ特殊な亜空間を利用して光よりも遥かに早く移動する、つまり高速道路を使って車で走るのと同じようなものなのだが、ワームホールを利用したゲートウェイでの移動は正しくワープそのものだ。特

定の地点から特定の地点へと一瞬で移動が完了する。
理論的には空間を捻じ曲げて穴を空けているとかそういう感じのものらしいが、よくわからん。俺が知っているのはゲートウェイはその宙域を支配している宇宙帝国が厳正に管理しているもので、一介の傭兵程度が軽々しく使うことができるものではないということだ。
そんな便利なものを使ってもなおメッセージを届けるのに五日もかかる場所にクリスのお祖父様はいらっしゃるらしい。こっちからの連絡が届くのが五日後と考えると、クリスのお祖父様からの迎えが来るのは最速でも十日後。迎えに来る人員や船の準備、その他諸々の手続きや日程調整を含めると最短でも二週間はクリスと一緒に過ごすことになりそうだな。

「五日……ということは、迎えが来る前にヒロ様の保護義務期間は明けてしまいますね」
「心配しなくても迎えが来るまで無責任に放り出したりは致しませんよ、姫様。俺がそんなに薄情に見えますか？」
「いいえ。きっとそう言ってくれると思っていました」
「強かな姫様だよなぁ。そうは思わないか？　ブルーノ」
「俺に振らないでくれ……」

ガチの帝国人としては伯爵令嬢に無礼な口をきくのは避けたいらしい。そんなブルーノに案内されて俺とクリスは真っ白い部屋に案内された。いや、全体的に白いけど、壁は一辺３０ｃｍくらいの正方形のタイルのようなもので覆われていて、その中心に黒い点がある。ホロ画像を取るためのカメラというかセンサーなのかね、あれは。部屋の中心にはコンソールが設置されており、コンソールの正面にはバスケットボール程の大きさの青い球体が壁に埋まっていた。
「実はホロ画像を撮るのって初体験なんだよな」

「そうなのですか？」
「遠方の知り合いにメッセージを送るってこと自体が一般人には少ないんじゃないか？　基本的に自分の生まれ住んでいるコロニーから出ること自体あまりないだろうし」
「なるほど……そう言われるとそうかもしれませんね」

クリスが真面目な顔で頷く。俺の知る限りでは、自分の生まれたコロニーから離れて他の星系にまで移動する人というのは俺のような傭兵や運び屋、掃除屋みたいなある意味アウトローのような連中か、宙賊達のような本物のアウトロー、あとは星系をまたいで商売している商人とか企業人、あとは軍人くらいじゃなかろうか。ああ、あとは研究者とか？

「とりあえず撮ってみるか……これって一発勝負だよな。俺は何を話せば良いんだ？」
「事情は私が説明します。その後で私がヒロ様を紹介しますから、簡単に自己紹介をしていただければ大丈夫です」
「どうなっても知らないぞ……」

こう言いながらクリスの操作するコンソールの画面を後ろから覗き込む。ふむ、操作自体はそんなに難しくないな。俺の知るビデオカメラと操作性にさしたる違いは無さそうである。

「では、撮影を開始しますね。ヒロ様は私の斜め後ろに立っていてください」
「了解」

クリスがコンソールを操作し、撮影を開始する。そうすると、正面の球体に数字が表示され、カウントダウンが始まった。あのカウントが０になった時に撮影が始まるんだな。

「お祖父様、お久しぶりです。ご心配をお掛け致しました、クリスティーナです。私は無事です。私の乗っていた客船が襲われてから三ヶ月も経っていると聞いて驚きました。私はお父様にコールドスリープポッドに入れられて脱出し、先程目が覚めたのです。今はシエラ星系の港湾管理局内にある撮影室でこのホロメッセージを撮影しています。私の後ろに立っているのが、宇宙を漂流していた私を救助してくれたヒロ様です。ヒロ様は傭兵ギルドに所属する傭兵で、私が入っていたコールドスリープポッドは宙賊に拾われていたのだと仰っていました。もし、ヒロ様に救われていなかったら私は宙賊に覚醒させられ、弄ばれていたかもしれません。二重の意味で、ヒロ様は私の命の恩人です」

そこまで話してクリスは俺の方を向いて頷いた。俺も頷き返し、前に出て青い球体に視線を向ける。

「お初にお目にかかります、キャプテン・ヒロです。クリスティーナ様にご紹介していただいた通り、傭兵ギルドに所属しています。ギルド内でのランクはシルバーです。小型戦闘艦であるクリシュナのオーナーでもあります。クリスティーナ様を救助した者の責任として私には一週間の保護義務がありますが、ダレインワルド伯爵様からの迎えが訪れるまでは持てる力の全てを使ってクリスティーナ様をお守りする所存です」

そう言って俺は胸に手を当て、頭を下げた。クリスの手が俺の腰の辺りに触れる。それを合図に俺は頭を上げ、後ろに下がった。

「まだ出会って間もないですが、ヒロ様は信頼できる方だと思います。少なくとも、叔父様の手の者ではないのは確かですから」

クリスはそう言って一度言葉を切り、深呼吸をした。今から彼女は叔父を告発するのだ。

「お祖父様、私達を襲ったのは叔父様の手の者です。襲撃者は宙賊を装っていましたが、お父様は客船を襲撃している船を見て『あれはバルタザールの私兵の船だ』と仰っていました。客船が航行不能にされた後に突入してきた者達は宙賊とは思えない程に揃った装備で、私達家族を執拗に狙ってきました。お母様は私を庇って撃たれ、お父様は勇敢に戦って私を守り、コールドスリープポッドに入れて脱出させてくださいました。私を逃した後、お父様がどうなったかは……」

クリスが首を横に振る。

「恐らく、叔父様は逃された私を狙っていると思います。ヒロ様には事情をお話しました。その上で、ヒロ様は私を守ってくださると仰ってくださいました。私は、ヒロ様に運命を委ねます。お祖父様もどうか私を……お願い致します」

クリスはそう言って頭を下げ、録画を終えた。コンソールに手を置いたまま、クリスの身体は小刻みに震えていた。家族を思い出して悲しみがこみ上げてきたのか、それとも叔父に命を狙われているという事実を自分の中で再確認して恐怖に震えているのか。

どちらにせよ、このままにしておく訳にはいかない。

「クリス、行こう。まずは俺の船に案内しないとな」

そう言って俺はクリスの背中をそっと撫でる。

ミミとエルマにも事情を説明しないといけないし、クリスは身一つの状態だから彼女の生活必需品も揃えなきゃならない。身長はミ

ミよりちょっと小さいくらいだが、胸の大きさが違いすぎるからミミの服は着られないだろうし、逆にエルマの服だと身長差がありすぎて丈が合わないだろう。服も買いに行かなければならない。あまり出歩くのは良くないんだが、閉じこもっているわけにもいかないしな。

「はい」

手で涙を拭いながらクリスが振り向いた。コンソールから何かを抜き出したが、恐らく今撮ったホロ動画が記録されている記録媒体か何かだろう。

「あー、ハンカチでも持っていればよかったんだが、あいにくとそういう気の利いたものの持ち合わせが無くてな……すまん」

「ふふ……騎士たるもの、同時に紳士たれ、ですよ。ヒロ様も精進が必要ですね？」

「騎士の道は険しいなぁ……撮ったホロ動画をお祖父様に送って貰う手続きをしたらエルマと合流しようか」

「エルマさん、ですか？」

クリスが首を傾げる。うっすらと目覚めた時には居たんだけど、あの時はぼんやりしてたから覚えてないか。

「二人いる俺の船のクルーのうちの一人だ。エルフの女性で、俺よりも傭兵歴が長い。色々あって船を失ってな、今は俺の船のクルーをしている」

「女性……そう言えば、女性のクルーが二人いるというお話でしたね」

「ああ、もう一人はミミだな。オペレーターの見習いをやってる。身寄りの無い子でな。まぁ、ちょっとした出会いがあって俺の船に

乗ってもらうことになったんだ。二人が俺の船に乗った経緯についてはそれぞれに聞いて貰ったほうが良いな」
どちらの理由も他人が軽々しく語るのはどうかと思う内容だしな。
「ヒロ様は自分の船に二人も女性を乗せてらっしゃるんですね」
「……まぁ、その。色々あってね？」

俺を見るクリスの表情は穏やかなのだが、何故か大蛇にでも睨まれているかのような威圧感がある。馬鹿な……この俺が圧されているだと……！？

「まぁ、良いです。貴族の女は寛容なので。男の甲斐性というものですものね」
「んん……？」

威圧感はなくなったが、クリスの言動が妙である。寛容も何も何故クリスに許されねばならないのか……？　まぁ、そういうお年頃なのだろうか。父親やお祖父様以外の男性と接する機会もそんなに多く無さそうだし。
撮影室の外に待機していたブルーノの部下に話をしてブルーノの元に案内してもらい、発送の手続きを進めてもらう。これが完了したら港湾管理局での用事は終了だ。

「エルマさんという方はどちらにいらっしゃるんですか？」
「最後のメッセージでは傭兵ギルドに向かうって話だったが……」

携帯情報端末を取り出し、メッセージアプリを確認する。

『あああああああああああああああああああああああああああああああヒロがゴールドランクに昇進してたあああ！』

コミカル単眼エイリアンが目からビームを出して街を焼き払っていた。なんでさ。

#０６３　ホロ動画（後書き）

別の世界線だと宙賊に起こされて「いえーいお祖父さん見てるー？」から始まる脅迫ホロ動画が……嘘です何でもないです―（：３」∠）

―

＃０６４　傭兵ギルドランク（前書き）

ぽんぽんぺいん……でも明日には、明日にはＡｍａｚｏｎで注文したものが届くから……楽しみ……―（：３」∠）―（ラルドとかいう悪魔の食物

#064　傭兵ギルドランク

「クリスティーナと申します。どうかクリス、とお呼びください」
「私はミミです！　クリスちゃん、よろしくね！」
「エルマよ。よろしくね、クリス」

俺がクリスを連れてクリシュナに戻ると、船で待機していたミミだけでなく傭兵ギルドに行っていたエルマも戻ってきていた。
食堂で初顔合わせとなったわけだが、ミミは同年代のクリスが船に来たのが嬉しいようで、輝くような笑顔を見せている。俺もエルマも同年代とは言い難いものな。エルマに至っては同年代どころか一世代上と言っても良い。年齢的には。

「……何よ？」
「なんでも」

俺の不穏な思考が伝わりでもしたのか、エルマが剣呑な視線を向けてくる。その耳は色々な意味で感度が良いだけでなく、他人からの邪な思念も受信するようにでもできているのかね？　怖いわ。

「あの……お二人は大丈夫でしょうか？」
「大丈夫ですよ。二人ともとっても仲良しですから。今はヒロ様がゴールドランクに昇級したことにエルマさんがちょっとモヤモヤしているだけです」

俺とエルマが微妙な雰囲気になっているのを見たクリスが心配し、ミミがその心配を払拭するかのように朗らかに笑う。

「……別にモヤモヤなんてしてないし」

そう言うエルマは俺から顔を逸らしてわずかに頬を膨らませていた。つつきたい、そのほっぺ。やったら指をへし折られそうだから自重するけど。

「その、ゴールドランクというのは……？」

クリスが首を傾げた。なるほど、貴族のお嬢様が傭兵のランクについてなんて知るわけもないか。じゃあ傭兵ギルドのランク制度について説明しよ……してもらおう。

クリスの言葉を聞いてエルマが物凄い速度で彼女に向き直ったので俺はおとなしくしておくことにする。

「傭兵ギルドのランクは五階級に分かれているわ。アイアン、ブロンズ、シルバー、ゴールド、そしてプラチナランクの五つね」

エルマの細い指が一本ずつ立てられて行き、最終的に手を開いた状態になる。

「アイアンランクは成り立てのペーペーよ。実戦の経験数も少ないし、正直アイアンランクの時点だと船も大した性能のものは持てていないはずだから、まぁ商船の護衛の数合わせとか、ちょっとした輸送任務をすることが多いわね。まずは色々なタイプのステーションに出入りして、宇宙を飛び回る経験を貯めるって段階よ」

「なるほど……」

クリスはエルマの説明を熱心な様子で聴き始める。

ちなみに、クリスの事情についてはまだ説明していない話すタイミングがね？　まぁ、エルマの傭兵ランク講座が終わってからで良

いだろう。俺は熱心に聞き入るクリスを食堂の席に着かせて軽食を用意し始める。クリスのお腹の調子がどんなものかわからないので、消化の良いものにしたほうが良いだろう。

うーん、カスタードプリンが良いか。我が家の高性能自動調理器テツジン・フィフスはデザートの味も絶品だからな。紅茶とカスタードプリンを人数分オーダーしながら俺もエルマの傭兵ランク講座に耳を傾ける。

「ブロンズランクになってようやく駆け出し扱いね。ブロンズランクに上がる頃には船も戦闘に耐えられるものにグレードアップしていることが多いし、ある程度まともな戦力として数えられるようになってくるわ。とは言っても単機で複数機の宙賊を相手にするのは厳しいから、普通は数人で固定の船団を組むか、討伐に行く際に臨時の船団を組むことが多いわね」

「ヒロ様はブロンズランクの頃から単機で宙賊を沢山倒してましたよね？」

「そいつはランク詐欺だから」

ジトリとした視線を向けてくるエルマに肩を竦めてみせる。ランク詐欺とか言われてもなぁ。クリシュナの性能のおかげとしか言いようがない。今の所シールドを抜かれてすらいないしな。まぁ、シールドを抜かれるような立ち回りはそもそもすべきではないのだから当たり前なのだが。

「で、シルバーランクね。シルバーランクは層の厚いランクよ。ブロンズランクで経験を積み、一人前と認められた傭兵がシルバーランクに昇級することができるわ。ただ、成り立てのシルバーランクとベテランのシルバーランクの間には大きな力の差があるわ。経験もそうだし、長く傭兵を続けている人ほど強力な船、強力な装備を手にしている事が多いから。シルバーランクを更に分けるべきじゃ

ないか、もしくはシルバーランクへの昇級条件をもっと厳しくしたほうが良いんじゃないか、なんて意見もあるわね」
「エルマさんもシルバーランクでしたよね」
「そうよ、シルバーランクのベテランよ」

ふふん、とエルマが誇らしげに胸を張る。

「今は自分の船を失って俺の船のクルーだけどな」
「……そういうこともあるわよ。死んでないんだからなんとでもなるわ」

エルマがそっと目を逸らす。まぁそうね。

「それで、ゴールドランクというのは？」

クリスが話の先を促すと、エルマは気を取り直して説明を続けた。

「ゴールドランクの傭兵はベテランを超えた存在よ。シルバーランクで経験を積み、多くの宙賊を撃破し、多額の賞金を稼ぎ、シミュレーターを使った厳しい昇格テストをクリアしたごく一部の、一流の傭兵に与えられるランクよ。ゴールドランクに昇級できる傭兵は数いる傭兵中でもほんの一握り、傭兵全体の５％にも満たないわ」
「ほう、５％。俺もなかなかのものだな」

でも全体の５％って言っても、傭兵が全部で何人いるかで凄さが全然違う気がするよな。

「……ええ、なかなかのものよ。ゴールドランクは言わば傭兵ギルドからのお墨付きを貰った一流の傭兵、凄腕の傭兵ということよ。傭兵という職業の社会的地位は決して低くはないけれど、ゴールド

ランクとなると貴族や軍人、役人も一目置く存在と言えるわね。一般的には三十隻以上の規模を誇る大規模宙賊団を単機で殲滅できる装備と腕を持っているという評価になるわ」
「それくらい余裕のぷーですわ」
「ヒロ様なら五十隻以上でも行けるんじゃないですか？」
「まともに真正面からやるんじゃなければいけないことはないな」

いくらクリシュナのシールドが分厚いとは言っても、限度というものがある。五十隻からタコ殴りにされると流石に危ういから、的を絞らせないように敵を引き伸ばしつつ中型艦を潰して、小型艦を削っていくって感じになるだろう。

「最後にプラチナランクね。今は十三人いるらしいわ。ゴールドランクの傭兵の中で、際立った活躍をした傭兵が昇級すると言われているわ。ゴールドランクもそうだけど、プラチナランクも昇級条件とかは特に公開されていないわね。ただ、どんな戦場に投入しても大戦果を上げて無事に戻ってくるような傭兵がプラチナランクと言われているわよ」
「ヒロ様もそのうちなりそうですね？」
「そのうちな、そのうち」
「プラチナランク傭兵ともなると、その発言力は非常に大きなものとなるわ。嘘か本当かはわからないけれど、過去に権力に物を言わせてプラチナランクの傭兵を好きにしようとした貴族がいて、逆に潰されたなんて話もあるわね」
「嘘くせぇ」

いくら傭兵ギルドの最高ランクの傭兵とは言え、そこまでの権力を持つことができるものだろうか？　想像もつかないな。

「あんたね……まぁいいわ、とにかくあんたは今日からゴールドラ

ンクって事になったのよ。おめでとう」
「街を焼き払うくらい怒り狂ってたんじゃないのか？」
「別に怒ってないわよ！　悔しいだけよ！」
「やだなぁ、仮に俺の方がランクが高くなってもエルマが俺の先輩であることには違いはないじゃないか。なぁ、セ・ン・パ・イ？」
「煽ってるの？　煽ってるのね？　いい度胸だわ」
「がぁぁぁぁっ！？」

蛇のように伸びてきたエルマの腕が俺の腕を絡め取り、一瞬でアームロックを極めてくる。速過ぎる……全く抵抗できなかった。

「エルマさん、それ以上は……」
「な、なかよし？　なんですね？」

ミミがエルマを宥めにかかり、クリスが苦笑いを漏らす。助けて。

「チッ！　調子に乗るんじゃないわよ！　あんたは操艦技術もパワーアーマーでの戦闘も大したものだけど、生身での戦闘能力はそんなに高くないんだからね！」
「肝に銘じておきまする……ところで、話している間にちょっとしたスイーツなどを用意したのでご賞味いただけませんか、エルマ様」
「苦しゅうないわ。用意なさい」
「ははぁ」

ふふ、今はそうやって良い気分になっているが良い。今夜にでも逆に泣かせてやるからなぁ……と仄暗い復讐心を心に秘めつつテツジンに用意させていたカスタードプリン（のようなもの）と紅茶（のようなもの）を用意して食卓に並べる。

「食事には少し早いからおやつタイムってところだな。食べながら

クリスの事情も話すとしようか」
「はい」
「事情？」
「？？？」

俺の発言にエルマは訝しげな表情を、ミミは頭の上にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げた。うん、実は特大級の面倒事なんだ。覚悟をして聞いて欲しい。

☆★☆

「うっ、うぐぅぅぅクリスちゃぁぁん」
「んーっ！？」

クリスの身の上話を聞いたミミが泣きながらクリスの身体を抱きしめる。抱きしめるのは良いんだが、その大きなお胸に圧迫されてそのクリスちゃんが苦しそうなので許してやってほしい。

「超特大の厄介事じゃない……」
「あぁぁぁぁクリスちゃぁぁぁん」

エルマが溜息を吐きながらクリスを救出し、クリスを奪われたミミがエルマに顔をぐいぐいと押されて泣きながら情けない声を上げている。

「で、最短で二週間？　この子を預かるわけね」
「そうなるな。守るわけだな」
「絶対に巻き込まれるわよね？」
「そうならない理由が見当たらないな」

俺がクリスの叔父なら何が何でもクリスを始末するし、そのためには金も労力も糸目をつけずに注ぎ込むだろう。既にクリスの父母を手にかけているのだ。そこまでやったのだから、やりきらなければ身の破滅である。

「実はな、エルマに頼みたいことがあるんだ」
「頼みたいこと？」

エルマに頷き、クリスに視線を向けた。

「クリス、ホロ動画を記録した記憶媒体があったよな？」
「はい、これですね」

クリスが上着のポケットから薄い水晶板のようなものを取り出す。これが記憶媒体なのか。綺麗だな。

「これってコピー取れるか？」
「え？　えぇ、複製はできると思うけど？」
「複数のルートを使ってクリスのお祖父様に届けたいんだ。港湾管理局からクリスのお祖父さんである伯爵にメッセージを送ってくれるって話だったが、途中で叔父にキャッチされて握りつぶされる可能性がある」
「なるほどね。それは絶対にないとは言い切れないわね。わかったわ、それをコピーして考えうる限りの全ての方法でダレインワルド伯爵に届ければ良いのね」
「ああ、そうだ。経費は俺につけて良いぞ。出し惜しみは無しだ」
「相変わらず甘いわね？」
「そうでもないさ。伯爵様とその孫に恩を売れるし、守りきれば報酬だって期待できるだろ？」
「はいはい、そういうことにしとくわよ」

そう言ってエルマは笑った。お見通しってか？　ですよね。でもそういう性分なんだから仕方ないね。こんな可愛い子を見捨てるなんて俺にはできないからね。

「で、伝手はあるのか？」
「ええ、いくつかね。ただし、時間はかかるわよ」
「それは仕方ないな。どれか一つでも届けば俺達の勝ちだ」
「初手としてはまぁ、ベターよね。ベストかどうかはわからないけど」
「まずは、な。その手が通じそうにないなら他の手を考えよう」

一番簡単なのは追手を全部撃破することなんだけどな。できればクリスを狙っている叔父ごと。まぁそう上手くは行かないだろう。

「まずは一手、向こうはどう出るかね？」

少なくとも、クリシュナの中に引き篭もっている分には安全なはずだ。リアルタイムで連絡が取れればもっと簡単なんだけどな。宇宙に進出している世界で通信の不便さに悩まされるとは思わなんだ。もっとこう、何千光年何万光年先の星とリアルタイムで通信できるようなトンデモ技術とかないものかね。

「なりふり構わずってことならクリシュナに引き篭もってても絶対に安全とは言えないわよ。注文した飲料水や食料品に毒を入れられる可能性もゼロじゃないし、物資に爆弾でも入れられたら一発だし」
「そこまでやるか……？」
「むしろやらない理由がないわよ。コロニーで仕入れるものより宙賊からの略奪品の方が安全かもね」
「食料やその他物資を求めて宙賊狩りとか新しいな……」

でもあいつら、結構な頻度で食料や飲料を落とすしアリっちゃアリなのか……？　いっそ買い物をするために他の星系に移動するとかもアリなのかもしれんね、これは。

「いずれにしてもまずはこっちから手を打たないとね。行ってくるわ。クリス、その媒体預かるわよ」

「はい、よろしくお願い致します」

クリスの手から記憶媒体を受け取ったエルマがクリシュナを出ていく。こっちはこっちで何かやれることを考えるべきか。まずは……。

「ミミ、クリスの寝床を用意してやってくれるか？」

「はいっ」

クリスの世話をミミに任せて考えることにしよう。うーん……相手の土俵で戦うことはないよな。生身での戦闘とか、謀略とか暗殺とかは俺の得意とするフィールドとはとても言えない。

俺の得意とするフィールドといえば？　決まってるよな。

「さぁて、どうやって誘き出すか……」

考え込もうとしたその時、不意にミミの置いていったタブレットが目に留まる。そこに表示されていたのは、シエラ星系の誇るリゾート惑星の広告だ。それを見て思いついた案を検討する。

悪くないのではないだろうか？

「逆に考えるんだ。追手をかけられても良いじゃないか、と」

誰も居ない食堂で俺はそう呟いてほくそ笑んだ。

#065　プランと装備点検

ミミのタブレットを借りてリゾート星系のパンフレットを眺めていると、艦内の案内が終わったのかミミとクリスが食堂に戻ってきた。

「おかえり。ちょっとパンフレットを見させてもらってた」
「あ、はい……でも、こんな状況じゃバカンスどころじゃないですよね」
「いや、そうでもないかもしれないぞ」

残念そうに表情を沈ませるが俺はそれを否定するように笑みを浮かべた。

「そうなんですか？」
「今の時点でははっきりとは言えないけどな。エルマが戻ってきたら皆で相談するとしよう」
「わかりました！　ところで、クリスちゃんと話してたんですけどクリスちゃんのお祖父さんの迎えを待つんじゃなく、こちらから向こうに向かうのはダメなんですか？」

ミミがそう言って首を傾げ、クリスが俺の顔をじっと見つめてきた。

「うん、それは俺も考えなかったわけじゃないんだけど、多分無理筋だろうと思って却下したんだ。検証したわけじゃないから、実際に検証してみるとしようか」

そう言って俺はタブレットをミミに返した。

「銀河地図を開いてみてくれ。確かデクサー星系だったよな？」
「はい、デクサー星系です」
「ブルーノが言ってただろう、ハイパースペース通信とゲートウェイを使っても五日かかるって。クリスにも思い出して欲しいんだが、このシエラ星系に来る時にゲートウェイを通ったんじゃないか？」
「……あっ」
「どういうことですか？」
「なに、ギャラクシーマップを見ればわかるさ。ミミ、シエラ星系からデクサー星系までの最短ルートを検索してみろ」
「……？　わかりました、やってみます」

ミミが首を傾げながらタブレットを操作し、最短ルートを検索する。そうすると、ミミの表情が驚きに見開かれた。

「あ、あの、ヒロ様。なんか往路で四十二日って出るんですけど」
「おお、思ったよりも遠いな」
「どうしてこんなに遠いんでしょうか？　通信は片道五日で、向こうからの迎えはおよそ二週間後なんですよね？」
「そりゃあミミ、ゲートウェイを使えるかどうかの問題だよ」
「……あっ！」

俺の言葉にミミがポンと手を叩いた。そう、ゲートウェイを使えるかどうかが問題なのである。
ゲートウェイを使って移動するには帝国の許可がいる。帝国軍の艦船や貴族の乗る船、或いは許可を得た旅行会社などの定期便や観光用の高級客船ならともかく、俺のような傭兵が軽々しく使うことができるものではないのだ。

クリスがいればワンチャン許可が降りる可能性もあるが、そのような申請を出したらたちまちクリスの叔父であるバルタザールとやらに察知されることだろう。ゲートウェイまでのルートには十重二十重に罠も張り巡らされるに違いない。突破することが絶対にできないとは言わないが、なかなかにリスキーな選択肢だろう。

向こうの出方によってはそんな手を取らざるを得なくなる可能性もあるが、それならまだ時間をかけてでもハイパーレーンを使って地道にデクサー星系に向かったほうが安全かもしれない。ハイパーレーンは網の目のように広がっており、デクサー星系に到達するルートも決して一つではない。

クリスの叔父であるバルタザール・ダレインワルドの勝利条件はクリスの両親の死が彼の策略であることをクリスの祖父であるアブラハム・ダレインワルド伯爵に知らる前ににクリスを仕留めることだ。

実のところ、これは結構難易度が高い。もしクリスを仕留めたとしても、現伯爵であるアブラハム・ダレインワルドに彼の策略が知られた時点で彼は身の破滅である。

彼はかなり焦っているはずだ。何が何でもクリスを仕留めたい筈だし、絶対にクリスの報告をアブラハムに届けさせたくないだろう。となると、やっぱり悠長に構えているのは危ないか。追い詰められた彼はそれこそなりふり構わず手を打ってくる危険性が高い。

「よし、ミミ」

「はい！　なんですか？」

「リゾート惑星の利用予約を取ってくれ。確かこの星にリゾート惑星は三つあったよな？」

「はい、そうですね。どれにしますか？　というか、エルマさんに相談しなくて良いんですか？」

「いろいろ考えた結果、今は一刻も早く手を打ったほうが良いと思ってな。とりあえず、全部だ」

「……えっ？」

ミミが惚けた顔をする。

「全ての惑星で利用申請してくれ。複数の旅行会社で、滞在場所も全部バラバラにするんだぞ。多ければ多いほど良い」

「え、えぇ……ものすごくお金がかかりますよ？　どうしてそんなにいっぱい予約を取るんですか？」

「撹乱できるかと思ってな。俺のプランはこうだ。リゾート惑星に複数の予約を入れて、潜伏先を複数用意する。そしてわざと目立つようにリゾート惑星に向かって、敵にわざと攻撃される。宇宙空間で、クリシュナに乗っている状態ならそうそう負けはしない。追手を全部片付けて、悠々と潜伏先のリゾート惑星に移動する。敵は潜伏先を一個一個虱潰しにしていかなきゃならないから、時間を稼げる。その間に、エルマの伝手で伯爵に情報を届けてもらうってわけだ」

どうだ？　と俺は両手を広げて見せる。ミミとクリスは俺のプランを聞いて二人とも首を傾げて考え込んだ。同じ仕草が揃っていて妙に可愛い。

「追手をちゃんと撃退できれば良さそうに思えますね」

「でも、資金面は大丈夫なんですか？」

「１７００万エネルあるから資金面は問題ない」

「……えっ？」

俺の言葉を聞いてクリスが絶句した。いくら貴族の子女と言ってもポンと１７００万エネルなんて金額を提示されるとびっくりするらしい。

「リゾート星系の滞在費は一週間で一人あたり一万エネルから三万エネルみたいだし。複数用意したとしても十分足りると思う。かかった経費はクリスの護衛料と合わせてダレインワルド伯爵に請求するつもりだ」

まぁ、滞在費に関しては上を見ればキリがない感じだったけどな。

「複数用意しなくても、一つで良いんじゃないですか？　追手を倒してしまえば私達がどのリゾート星系に滞在しているのかを追うのは難しいですよね？」

「普通ならな。でも、相手がなりふり構わず何でもしてくるってんならどうだろうな。イリーガルな手段で俺達の滞在先を旅行会社から入手するかもしれない。そのためにもやっぱり滞在先は複数用意してデコイをたくさん作ったほうが良いと思う」

「そうでしょうか？　ハイパーレーンでの移動中は相手も手出しすることができませんし、むしろハイパードライブを何度も使ってハイパーレーン内にずっと居るほうが安全じゃないですか？」

ミミが首を傾げてそう言う。ハイパーレーン内に潜伏という手は確かにアリだな。その発想は無かった。俺の認識はどうしてもステラオンラインの知識に引っ張られるんだよな。

ステラオンラインでは一瞬で終わっていたハイパードライブを使っての移動も、この世界では普通に十数時間、場合によっては数十時間かかる。超光速ドライブでの移動と違って、ハイパードライブでの移動がインターディクトされることはない。時間稼ぎにはもってこいといえばもってこいではある。

「確かにその手は安全だけど、補給の問題があるな。アレイン星系で補給してからシエラ星系に来るまでクリシュナは無補給で来ただろ？」

流石にこんな自体は想定していなかったし、とっとシエラ星系でバカンスを楽しみたかったので途中でステーションやコロニーに寄ることなくアレイン星系から直行してきたからな。

「むぅ……確かに、今の備蓄で二週間以上は厳しいですね。じゃあ、物資を補給してからでは？」

「このコロニーでの物資の補給自体がリスキーなんだよな。でも、隣の星系にでも行って、そこで補給するって手もあるにはある。あと、ハイパードライブを使っての移動中に襲撃されることはないけど、ハイパードライブ終了時に待ち伏せされる可能性はある。それこそ、この星系に来たときみたいにな」

「うっ、確かにそれはそうですね」

このシエラ星系に来て早々に宙賊どもにインターディクトされたことを思い出したのか、ミミが顔をしかめた。それでクリスに出会えたのは良かったのかどうなのか……まぁ、出会えなかったらクリスは酷い目に遭っていた可能性が高かったし、良いことだったんだろうな。

「むむ……お二人の会話に入っていけません」

クリスはそんなことを言いながら悔しそうな顔をしている。まぁ、クリシュナに乗って暫く経っているミミと違って、クリスは今まで傭兵稼業なんかとは全く無縁のお嬢様だったわけだからな。こういう会話に参加するのは無理だろう。

「詳しいところはエルマが帰ってきてから詰めた方が良いだろう。しかしアレだな、生身での白兵戦が起こる可能性も考えないとダメだな。俺はちょっと装備の確認と点検をしてくるぞ」

「私もお手伝いします！」
「え、ええと、私もお手伝い致します！」

二人が揃って手を挙げる。いや、扱いを間違えると危ないものも多いし遠慮してもらいたいんだが……でも、そのうちミミも使うことになるかもしれないし、遠ざけておくのもちょっと違うか。少しずつ慣らしていかないとな。

「ミミはともかく、クリスもか？」
「私もいざというときには戦いますから！」

クリスが拳を握りしめ、グッと気合を入れている。いや、そんな状況に陥らせるようじゃ俺達は護衛失格なんだが……まぁ、扱いの簡単なものくらいは教えておくか。何がどこで役に立つかわからないしな。

二人を引き連れてカーゴルームへと向かう。クリシュナのカーゴルームは文字通り貨物室なわけだが、ここは武器庫も兼ねている。俺がアレイン星系のバイオテロ騒動の時に使ったパワーアーマーやレーザーランチャーのような武器を始めとして、その時にエルマが警備用に持ち出したレーザーライフルやその他白兵戦用の武器なども保管してあるのだ。

「わぁ、なんだかすごいですね。これは全て武器なのですか？」
「まぁ、概ねそうだな。それだけでもないけど。危ないものが結構多いから、勝手に触っちゃダメだぞ」
「はい」

クリスが素直に頷くのを見てから装備のチェックを始める。パワーアーマーやレーザーランチャーはとりあえず飛ばすとして、まずはレーザーライフルだな。これはレーザーガンよりも強力な火力を

持つ武器で、連射性能、出力、射程、全てにおいてこちらの方が上だ。倍率が自在に変更でき、暗視モードや赤外線センサーモードなども使うことができるマルチスコープも搭載しており、遠距離狙撃もできる。

レーザーガンに比べるとどうしても嵩張るから、これを街中で持ち歩くことはまず無いな。コロニーによってはコロニー内での携行を禁止としているところも多い。そうでなくとも、こんなものを持ち歩いていたら官憲にスタァァァップされて職質不可避である。明らかに自己防衛用と言い張るには過剰な代物だからな。

次にチェックしたのはボール型の物体だ。別に小型エイリアンに投げつけてゲットしたりするものではなく、これは一種のグレネードのようなものである。スタングレネード……というと音と光で視覚と平衡感覚を奪うアレになっちゃうな。ショックグレネードとでも言おうか。スイッチを押して投げると、このボールを中心として半径５ｍほどの範囲に強力な電撃をお見舞いすることができる武器だ。

宇宙船内やコロニー内で爆発を起こしたりすると大変危険なことになるからな。外殻に穴が空いて全員お陀仏とか洒落にならないだろう？　そういうわけで、ステラオンラインでは他のゲームにおけるフラググレネードと同じような扱いでこのショックグレネードが主に使われているという説明が為されていた。この世界でも同じかどうかはわからないけど。

二人にレーザーライフルとショックグレネードの使い方を簡単に教えておく。流石に船の中で試射などをさせる訳にはいかないから、セーフティをかけた状態で構えさせてみたり、ダミーのグレネードを投げさせてみたりしただけだけど。

あとは武器じゃないけど救急ナノマシンユニットの使い方も教えておいた。

これはガンタイプの注射器で、負傷者に押し付けてトリガーを引くことによって激痛を大幅に緩和し、重大な負傷の応急処置をする

ことができる。
所詮は応急処置なので無理をすると命に関わるわけだが、即死さえしなければとりあえず命を取り留めるくらいのことはできる。使い方は知っていても損はない。こんなものを使う機会は無いに越したことはないけど、万が一ということもあるからな。

「とりあえず、救急ナノマシンユニットとショックグレネードだけでも使えるようになっておくと良いな。これで援護してくれるだけでも助かるし」
「わかりました。頑張って投げる練習をしておきます」
「私も練習しておきますね」
「障害物の後ろにいる相手に的確に当てられるようになると、とても強いぞ。扱いも簡単だし、下手にレーザーガンとかレーザーライフルを使おうとするよりも二人に合ってるかもしれないな」

近寄られると使えなくなるが、二人の場合はショックグレネードを使えなくなるような距離まで詰められた時点で負けだろうしな。

「保管場所を覚えておいて、いざという時は持ち出せるようにしておくように。でも、自分の部屋とかに持っていっちゃダメだぞ。危ないから」
「はい」
「わかりました」

素直に頷く二人。二人とも悪戯をするような性格ではなさそうだから、あまり心配はいらないだろうけど、一応な。
そうやって装備のチェックをしていると、小型情報端末から通知音が鳴った。ミミのタブレットからも音が鳴っているから、恐らくエルマからのメッセージだろう。ジャケットのポケットから小型情報端末を取り出し、メッセージを確認してみる。

『早速尾けられてるわ』

動きが早いな。もう俺達を特定したのか。まぁ、港湾管理局に監視を置いてたなら当然と言えば当然かもしれない。

『どうする？　迎えに行くか？』

『大丈夫よ、流石に向こうも人通りの多い道で仕掛けてくるのは無理だと思うから。でも、思ったより向こうの動きが早いわ。あまり猶予は無さそうね』

『物資の補給も危ないか？』

『リスクが高いわね。とにかく、急いでそっちに戻るわ。仕掛けられたら面倒だし』

『わかった。気をつけて、急いで戻れ。位置情報をオンにして、いつでもＳＯＳを送れるようにしておけ』

『了解』

メッセージのやり取りが終わる。

さぁて、本当に思ったより動きが早いな。これは早めに手を打ったほうが良さそうだ。

#066　エルマと相談（前書き）

どうにも上手く文章がまとまらなかった……！　短いけどゆるして！

―（：3」∠）―

#066　エルマと相談

「ただいま」
「おかえり。無事で何よりだ」

メッセージのやり取りを終えて10分ほどでエルマは戻ってきた。思わず抱きつこうとしたが、スッと避けられた。何故避ける。

「何よ突然」
「心配だったんだよ」
「心配されるほどのことじゃないわよ。まったく、あんたは気が大きいだか小さいんだか」

そう言って苦笑いしながらエルマの方から軽く抱きつき、頬のあたりにキスをしてきた。なんだこの……なんだ。この胸のときめきは。まるで男女の立場が逆なのでは？　やだ、残念エルフにキュンとしたの？　俺。

「何よ、突然顔を覆ったりして」
「なんでもない」
「なんでもなくないでしょ」
「なんでもない」

回り込んで俺の顔を覗き込もうとするエルマから顔を背けながら食堂へと移動する。

「あっ、エルマさんおかえ……どうしたんです？」
「ヒロったら照れてるみたい。意外と可愛い所あるわよね」

「照れてない」
「私のことが心配だったんでしょ？」
「心配してない」
「またまた。さっきと言ってることが違うわよ？」

エルマがニヤニヤしながら前に回り込んでくる。とってもウザい。でも俺は強い子なので屈しないぞ。

「ヒロ様は意外と可愛い方なのですね」
「新たな一面です」

クリスとミミにまで言われてしまっているが、俺は負けないぞ。

「とにかく！　今後のプランを練ろう。可及的速やかに。今は何よりスピードが大事だ。先手を打っていかないと相手のペースに引き込まれちまう。そうなったら厄介だ」
「はいはい、そうね。そう言うってことは何かプランを考えてあるのね？」
「どれも自信たっぷり、とは言えないがいくつかな。まずは――」

というわけでミミとクリスとの三人で相談した内容をエルマに伝えて意見を聞くことにする。

「追手を引きつけて全滅させるって手は悪くないわね。何にせよ敵の目を潰すのが一番だし。このコロニーに居る限り、私達は敵の監視からは逃れられないわ。ならいっそ宇宙に出るっていうのは有効だと思う」
「問題は補給だよな」
「そうね。今の備蓄だと二週間は保たないわね。リゾート星系に行けば、あちらで補給を受けることは可能だと思うわ。警戒する必要

はあるけど、流石に全リゾート星系にまでは敵の手は伸びてないでしょうし。でも、補給だけを考えるなら正直二つ隣の星系まで移動して補給したほうが安上がりね」
「二つ隣か？」
「ええ、二つ隣にした方が良いわ。隣接星系には網を張っている可能性があるから。隣接星系は四つだけど、二つ隣となると一気に数が増えるから、そこまでは網を張れないだろうしね」
「なるほど」

エルマの説明に納得する。

「じゃあ、リゾート惑星への潜伏はやめて二つ隣の星系で補給して宇宙空間とハイパースペースに潜伏するか？」
「難しいところね。移動すればするだけ痕跡が残るから、追手を倒した後に即リゾート惑星に逃げ込んだほうが安全性が高いかもしれないのよね。リゾート惑星ってセキュリティも実は結構しっかりしてるから」
「なるほど。どの程度しっかりしてるんだ？」
「帝国の有力者や貴族はもちろんのこと、場合によっては他国の要人なんかも訪れることがあるの。セキュリティレベルはかなり高いわよ。そんな場所でテロ事件なんて起こったら帝国の威信に関わるわけだからね」

これは新情報だ。パンフレットとかにも載っていなかった。やっぱりエルマみたいな事情通を交えて作戦を立てたほうが効率が良いな。

「……やっぱりリゾート星系でのんびりバカンスで良くないか？」
「そうねぇ……クリスちゃんのお祖父様から経費は出るのよね？」
「えっと、可能な限り口添えはさせていただきます」

エルマの質問にクリスは精一杯の返答をした。まぁ、クリスには実権も何も無いわけだからそれくらいしか言えないよな。

「予算はどうする？　３００万エネルくらいまでは突っ込むか？」
「やりすぎじゃない……？　二週間とすると一人あたりの相場ってどれくらいだったかしら？」
「えっと、２万から６万エネルくらいですね。高いところだと上限がないですけど、一般的なところだとそれくらいです」
「四人で８万から２４万エネルね。三惑星でダミーを含めて三つずつのグレード、別の旅行会社、別の施設、私とヒロとミミの名義でそれぞれ予約を取りましょう。ミミ名義で二週間８万エネルくらいのコースを三つの惑星で、私名義で二週間１６万エネルのコースを、ヒロ名義で二週間２４万エネルのコースをそれぞれ予約しましょう。これで１４４万エネル。これくらいで十分よ」
「物凄い散財ですね……」

１４４万エネルという金額にミミが苦笑いを浮かべる。日本円に換算するのが正しいかどうかはわからんが、およそ１億４４００万円の散財だ。ステラオンライン的な金銭感覚で言えば１４４万エネルは駆け出し御用達のマルチロール艦や戦闘艦の購入費用といったところだろうか。
フルカスタマイズの費用と万一撃墜された際の保険料を考えるとちょっと心許ないか。

「帝国貴族の伯爵様ならこれくらいなんでもないわよ。可愛いお孫さんの命を守るための必要経費ってことならホイホイ払うわ」
「貴族っていうのも凄いんですね」
「私は……ちょっとよくわからないです」
「そりゃそうでしょうね。その歳で貴族としての金銭感覚はまだ身

についていないと思うわ。自分でエネルを使ったことも殆ど無いんじゃない？」

エルマの言葉にクリスは素直に頷いた。なるほど、クリスの年齢だと自分で買い物をすることも無いのか。全部親や使用人が用意してくれてたのかね？

「あー、それじゃあ全部で九つのツアーを予約して、そのうちのどれかを利用するってことか？」

「いえ、もう一つ本命を予約するわ。どうせなら経費請求がキリよく２００万エネルになるように高級リゾートにしましょうか。四人で二週間５６万エネルくらいのコースを見繕いましょう」

「二週間のバカンスに５６万エネルかぁ……」

二週間で５６００万円、一人あたり１４００万円、つまり一泊１００万円のリゾート……元の世界で一般庶民だった俺には想像もつかん領域だな。

「経費が出ればタダよ、タダ」

「出ればな。クリスのお祖父さんが太っ腹なことに期待しよう……まぁ、出なかった時は出なかった時で、クルーと俺の福利厚生と思えば……高ぇな」

「折角ガンガン稼げる船と腕を持ってるんだから、こういうエネルの使い方も覚えておきなさい。貧乏臭いと舐められるわよ」

「うるせぇ、俺は一般庶民なんだよ。というか、こういう金の使い方を平然と決断できる辺り、お前やっぱりいいとこのお嬢様だろ？」

「ひゅひゅー♪」

「口笛吹けてないからな？」

エルマが視線を逸らして誤魔化そうとする。まぁ、本人が喋りた

くないなら無理に聞き出しはしないけどさ。

「でも、そういう高額のプランは一般人は申し込むのが難しいみたいなんですけど……」

ミミがタブレットを操作しながら困った顔をする。おおう、こういうところで邪魔が入るのか。流石に貴族制が存在するだけはあるな。

「そこはちょっとした伝手があるから大丈夫」

「……お前の伝手、どうなってんだ？」

「いい女には秘密がつきものよ」

「いい女には……」

「秘密がつきもの……」

得意げな笑みを浮かべるエルマを見てミミとクリスが今にもメモでも取りそうな雰囲気だ。エルマは確かにいい女だけどさぁ……君達二人とは方向性が合わないと思うんだよな。いや、クリスは成長すればどうなるかわからないけれども。

「じゃあ、そういう方向で行くか。予約の手続きとかは任せていいか？　金に関しては俺の口座から出していいから」

「良いけど、その間ヒロは何をするの？」

「俺は船長様なので、面倒な手続きはクルーに任せてクリスのお相手をします」

そう言って俺は胸を張る。エルマの視線は冷たいが、実際問題そういう手続きはとても苦手だし、リゾートのプラン選びとか俺のセンスでやるのは不安がある。四人中三人が女性なので、正直女性のセンスで選んでもらいたい。

「確かに、あんたにプランを選ばせるのは微妙ね」
「そんなことはないと思うんですけど……でも、わかりました。ヒロ様の専属オペレーターとしてがんばります！」

俺のセンスで選ぶのはちょっと、という話をするとエルマもミミも納得してくれた。俺に選ばせると二週間耐久肉祭りとかにしちゃうぞ、きっと。というか惑星上のリゾートということは、もしや炭酸飲料が飲めるのでは……？　オラワクワクしてきたぞ。

#067　エルマ先生のリゾート惑星講座（前書き）

ちょっとリアルの方で来客があって集中力が……短いけどゆるしてネ！　―（∵3」∠）―

#０６７　エルマ先生のリゾート惑星講座

リゾート惑星へと向かう準備は着々と進んだ。というか、俺はエルマとミミに任せっぱなしで主にクリスと話をしたり、一緒に動画を見たり、カーゴルームでグレネードの投擲練習をしたり、一緒にトレーニングルームで身体を動かしたりしていただけなのだが。

「とりあえず、予約は取れたわ。明後日からの滞在予定で、期間は二週間ね。合計で２００万エネル内に収まったわよ」

「数万エネルの決済を自分の手でやるのって、本当に手が震えました……」

しれっとして特に堪えた様子の無いエルマに対して、ミミはかなり疲れ切った感じだ。ミミは俺と同じで庶民派の感覚を持っているからそうだろうな。エルマは元々がどっかのお嬢様っぽい上に傭兵としての金銭感覚もあるせいか全く堪えた様子がない。実に頼もしいな。

「これから先もこういう金額の大きい買い物をミミにまかせることもあるだろうから、慣れてもらうしかないな」

「……がんばります」

新しい船の購入とか、カスタマイズをするとなると簡単に数百万エネルとか吹っ飛ぶからね。

「明後日までどうやって時間を潰すかね？」

「そうねぇ。敵に私達が出港準備をしているってことが伝わるようにするのがいいわよね。追ってきたところを一網打尽にするなら、

こっそりと出ていくよりも堂々と出港準備をして、堂々と出ていったほうが良いわ」
「とは言っても、具体的にはどうする？　出港準備として物資の補給とかするのは怖いだろ？」
「それはそうね。クリスから話を聞いた私達が自分達を警戒しているっていうのを相手もわかっているはずだし、チャンスが有れば容赦なく手を打ってくるでしょう。ちょっと窮屈だけど、船の中に引き篭もっているのが正解でしょうね」
「明後日ということは、今日と明日の二日間だけですか。二日くらいならどうということはないですよね」
「そうだな。ハイパードライブで航行してるとそれくらい缶詰になるのは日常茶飯事だし」

まぁ、クリスが居るわけだからそうそう爛れた生活はできないわけだが。流石にね、クリスがいるのに自重しないほど俺も我慢がきかないわけじゃないからね。

「そういやどんなところに滞在するんだ？　俺もぱぱっとパンフレットには目を通したが、あまり高いところのはパンフレットを見もしなかったから想像もつかないぞ」
「あ、そうでしたね。ええと……」
「行く前に何もかも知っていると楽しみが半減するわよ？」
「何もわからないで右往左往するのも問題だろ。特に俺はほら、自慢じゃないけど世間知らずだし」
「そうなのですか？」
「あー……まぁ、ちょっと複雑な事情があるのよ」

首を傾げるクリスに対しエルマが言葉を濁す。異世界から来ましたとか記憶喪失なんですとか言うのも面倒だしな。別にクリスを仲間外れにするわけじゃないが、理由を話す必要も無いと言えば無い。

「今回私達が行くのは海洋惑星のシエラⅢですね。惑星表面の八割以上が海面となっていて、惑星上には大陸と言えるようなものは一切ありません。あまり大きくない島が各地に点在しているような形ですね」
「なるほど……どうやって管理してるんだ、それ」

そんなに大きくない島となると、常にリゾート会社の職員が駐在しているというわけでもないだろう。

「あまりリゾートに適さない大きめの島に管理ＡＩを置いて、その管理ＡＩが統括するアンドロイドやロボットに滞在者の世話をさせるようになっているようです。セキュリティに関しては無人兵器やガードロボットを配備しているとか」
「それって管理ＡＩがクラッキングされたりしたら滅茶苦茶危なそうだよな」
「そう簡単には行かないわよ。惑星を統括管理している陽電子ＡＩのセキュリティレベルはとても高いらしいし。もし統括管理ＡＩをクラックするなら、少なくとも同じレベルの陽電子ＡＩを二つは用意しないと無理じゃないかしら」
「そういうものか」
「そういうものよ。さっきも言ったけど、リゾート惑星には帝国貴族や有力者、他国の要人も利用することがあるのよ？　そんなにヤワなセキュリティじゃないわ」

なるほどなー。そんな場所なら確かに安全そうではあるな。

「海洋惑星ってことは、今回の滞在場所では海のレジャーを楽しめるってことだな」
「そうですね。私達が滞在するのは中規模くらいの島を一つ貸し切

るプランで、クリシュナが発着できるスペースもあるみたいですよ。私達以外の人が島に近づくと、警告後実力行使されるそうです」
「なにそれこわい」
「岩に擬装したレーザー砲台とか、地下や海底に配備されたガードボットとかいろいろ配置されてるらしいわよ。正直、襲撃をかけるのは自殺行為ね」
「頼もしいですけれど、ヒロ様の仰ったように何かの間違いでそれらに襲われると為す術もありませんね」
「そうならないことを祈ろう……それにしても島を一つ貸し切りとは、なかなか思い切ったプランだな」
「高いなりのプランではあるわよね。海辺で日光浴を楽しんだり、海水浴を楽しんだり、自然の中を散歩したり、可愛らしい異星生物と戯れたり、色々できるみたいよ」
「ほー。そりゃ楽しみだな」

可愛らしい異星生物には興味があるな。フェ〇スハガーとか凶悪化したグ〇ムリンみたいなやつだったら怒るぞ、俺は。見た目可愛らしいのに頭が四つに割れて凶悪な顎がクパァするやつとかな。

「食事は新鮮な海産物や、近隣星系で採れる様々な珍味が饗されるそうです」
「ミミ的にも満足できそうな感じだな」
「はいっ」

今からまだ見ぬ宇宙グルメに思いを馳せているのか、ミミの目がキラキラしている。しかし、新鮮な海産物ね……見た目的に俺が受け容れられるものなら良いんだけどな。まぁ、日本人のメンタルを有する俺にかかれば海産物なんて何でも美味しくいただけそうな気がするが。
そんな感じで訪れる予定のリゾート地の話で盛り上がったりしつ

つ、クリスを船に迎えた初日は穏やかに過ぎ去って行くのであった。

#068　嵐の前

翌日である。

「美味しい……！」

朝からクリスティーナ様が目を輝かせてハンバーガー（のようなもの）にかぶりついておられる。

いや、昨晩の夕飯にうちのテツジン・フィフスに作らせたホットドッグ（のようなもの）やピザ（のようなもの）を食わせたんだけどね？　今まで自動調理器で作るこういうジャンクな味には慣れ親しんでいなかったようで、クリスはその魅力に完全に囚われてしまった。

彼女曰く、この濃いめの味と手掴みで食べる背徳感がたまらないらしい。まぁ、自動調理器で作るジャンクフードの類は本来のその意味から外れて高カロリーで低栄養価ってわけじゃないけどね。一見ジャンクフードに見える完全栄養食っていう夢のような食べ物だから。

「大丈夫かしら。変なものを覚えさせたって言われそう」

「下々の食べているものを知ることは悪いことじゃないと思うぞ」

「下々の、とはいってもこの船のテツジンは高性能自動調理器ですけど……」

テツジン導入前にこの船に備えられていた自動調理器も決して性能的に悪いものじゃなかったけど、テツジンに比べると一段どころか二段……いや、三段は劣る味だったからなぁ。テツジン・フィフスが出すこの味を『庶民の普通』と覚えるのは流石によろしくはないか。

いずれ機会があったら普通の自動調理器で作ったあまり美味しくない合成食にも挑戦してもらおう。できればアレイン星系名物のアレみたいなやつ。

そういえばアレイン星系名物のアレといえば、世の中にはフードカートリッジをそのまま開封して食うという変態もいるらしい。彼ら曰く、製造から一年以上、二年未満のフードカートリッジが一番美味いのだとか。なるほど、わからん。

話が逸れたな。

『それで、一緒に寝た感じはどうだった？　魘されたりとかそういうことはなかったか？』

『はい、特にそういうことはなかったです。疲れていたのか、ぐっすりとおやすみでしたね』

『そうか。それなら良かった』

俺もメシを食いながらメッセージアプリでミミと昨晩のクリスの様子について聞いておく。もしかしたら魘されたり、フラッシュバックを起こしたりするんじゃないかと心配してたんだよな。まだ一晩だからわからんけど。

「今日はどうするかね」

「船の整備くらいしかやることがないわね。出歩くのは危ないし、物資の補充も何をされるかわかったものじゃないわ」

「コロニーの物資輸送システムに介入なんてそんなに簡単にできるものですか？」

ミミが首を傾げる。俺もそう思わないでもないけど。

「簡単にできるとは思えないわね。でも、もし介入されてプラズマグレネードでも荷物に紛れ込まされたら私達は全滅よ」

「外からならともかく、内側に放り込まれたらさすがのクリシュナも木っ端微塵だな」

プラズマグレネードというのは起爆と同時に超高温のプラズマを周囲に放出してあらゆるものを焼き尽くす大変危険な爆弾である。ぶっちゃけ隔壁とかコロニーの外殻とかも蒸発させる威力なので、軍以外が所持するのは禁止なのだが……それくらい用意しかねないとエルマは考えているのだろう。

「そこまでやるでしょうか……？」

ミミはどうにも納得出来ないようである。まぁ、その気持ちはわかる。クリスが運び込まれたのは昨日だし、昨日の今日でそこまでの工作ができるのかと言われると俺も首を傾げざるを得ない。

「でも、昨日の時点でエルマがもう尾けられてるからな」

「そうなのよね、動きがとても早いわ。警戒しすぎて悪いことはないと思うわよ」

「う……そうですね。油断は禁物ですよね」

「私が生きているだけで叔父様は身の破滅ですから。常に最悪を意識して動いたほうが良いと思います」

ハンバーガーを食べ終えたクリスがお上品に口許をナプキンで拭って頷く。こういうところは育ちが出るな。俺も口許が汚れれば拭うくらいはするけどさ、なんか所作が違うよな。

「しかし、全く出歩かないのも警戒されるかね？」

「気にすることはないわよ。向こうは私達がクリスから事情を聞いたと思っているでしょうし、そうなると私達が警戒するのは当たり前だからね。下手に出歩かなくなる方が自然よ」

「それもそうか」

事情を聞いた時点で俺達もクリスの叔父様の抹殺対象だろうしな

ぁ。身の危険を感じて出歩かなくなるのが自然だよな。
そう考えていると、クリスの表情が曇った。
「すみません……皆さんを巻き込んでしまって」
「別に気にすることはないわよ。こいつがクリスみたいに困っている子を見て放っておけるわけが無いしね。こうなるのも……そうね、巡り合わせってものでしょ」
そう言ってエルマが裏拳で俺の方をペシッと叩いてくる。可愛い女の子が困っているのを見捨てるなんて俺にはできないからな……この先このスタンスを貫いていくのは色々と障害も多いと思うけど、できる限りのことはしていきたいね。そしてあわよくばお近づきになるのだ。
ミミとエルマはどうするのかって？　二人のことはもちろん大事に思っているし、俺にできる限りの範囲で責任は負っていくさ。でもそれはそれ、これはこれ。いつ死ぬか、いつまた唐突に別の世界に飛ぶかわからないんだから、刹那的と言われようとも開き直っていくスタイルで行くね。
ちなみに、こっそりと傭兵ギルドには俺が突然行方不明になったり、死んだりした場合にはクリシュナの所有権と俺の財産の全てをミミに譲渡するように手続きをしてある。
エルマ？　エルマは実家の伝手も完全に切れてるわけじゃなさそうだし、もし俺が死んだり突然消えた場合でもミミと一緒にクリシュナを使ってなんとでもしてくれるだろうから、特に何もしてないぞ。ミミは完全に天涯孤独だからな、こういう部分はミミが優先だ。
「？」
ミミに視線を向けていることを訝しんだのか、俺に視線を向けられたミミが首を傾げるが、俺はなんでもないと首を横に振った。

「つまり、今日も一日ヒマってわけか」
「うーん。宙賊でも狩りに行きますか？」
「それはどうなんだ……？」

伯爵家のお嬢様を連れたまま宙賊退治なんかに行ったらこれ幸いにと襲われたりしないだろうか？　手の内を見られることになるかもしれないし……というか、暇だから人狩り行こうぜ！　という発想が出てくる辺り、ミミも順調に傭兵稼業に染まってきてるな。

「悪くないけど、手の内を見られるのもね……まぁ大人しくしてましょう。こういう時は落ち着いて、油断せずにじっくりと構えているのが良いわよ」

そう言ってエルマはキッチンのクーラーからビールを取り出した。おい。

「まだ起きたばっかだぞお前」
「どっちにしろ外に出られないんだから、お酒を飲んだって良いじゃない。シールド展開しておけば外からちょっかいかけられることもないんだし」
「それはそうだけどなぁ……」

と言いつつ、俺も炭酸抜きコーラをクーラーから取り出す。クリスの分も。ミミはどうも苦手みたいなので、敢えて勧めない。

「クリス、ハンバーガーやホットドッグ、ピザと言えばこれだぞ。一緒に飲むとベストマッチなんだ」
「本当ですか？」

俺に炭酸抜きコーラを勧められたクリスが目を輝かせてボトルを開け、両手でお上品にくぴくぴと飲み始める。

「なんだか少し薬品臭いような……？　でも、とっても甘いですね」
「そうだろう。それがハンバーガーとかにすごく合うんだよ。昼飯の時に試すと良い」
「わかりました」
「あんたね……ジャンクフードだのその変な飲み物だの、そういうことをクリスに教えて伯爵に何か言われても知らないわよ」
「教育に悪いってことなら起き抜けに飯食ってすぐ酒をかっ喰らうお前も人のことは言えないだろう、常識的に考えて」

エルマと視線が合う。お？　なんだ？　やるのか？　肉体的暴力で俺がお前に勝てるわけ無いだろ。やめてくれよな。
というわけで俺は両手を上げて降参した。情けない？　馬鹿野郎、エルマの関節技はマジで痛いんだよ。後遺症もなく痕も残らず、ただ痛い。痛めつけるのに特化してやがる……なんて物騒なエルフなんだ。

「お二人は仲が良いですね」
「そうなんです。たまに妬けちゃいます」
「でも、ミミさんも仲が良いのですよね？」
「え、えへへ……はい」

ミミが頬に両手を添えてにへら、と笑みを浮かべる。ははは、ミミは可愛いなぁ。

「ヒロは私に対して優しさとか遠慮ってものが足りないわよね。私にもミミみたいに優しくしなさいよ」
「俺がミミに接するみたいにお前に接したらお前、気持ち悪がるだ

ろ」
「そんなこと……ない、わよ？」
「お前がベッドの上と同じくしおらしかったら同じように接してやるけどな」
「ばっ……！？　ちょっ！？　ク、クリスの前で何をっ！？」
エルマが顔を真赤にする。ははは、もう酔いが回ったのか？
「お、大人の会話ですね……」
「あ、あはは……」
ただのセクハラです。エルマは怒らせすぎない程度につつくのが可愛いので。
こんな感じでクリスを保護して二日目もまた比較的穏やかに過ぎてゆくのだった。
いや、シールドまで展開してるのに穏やかに過ぎなかったら逆に大問題だけどな。
ちなみに、クリスはミミと一緒に部屋に篭っておしゃべりをしていたらしい。
「……」
「……」
晩飯の時にミミとクリスが揃って顔を少し赤くして俺の方をチラチラと見ていたのは……まさかミミ、クリスに夜の生活について詳しく話したんじゃあるまいな。まさか……いや、あり得るな。どうしよう。
どうしようもないな、うん。クリスに手を出すつもりは毛頭ないし、それはミミもエルマも知っている。俺にけしかけるような真似はしないだろう。

俺は何にも気づかなかったことにして運動して風呂に入って寝ることにした。明日はきっと大変だからな。

#０６９　どうかと思うのです、じゃねぇから！

はい、おはようございますヒロです。昨日はしっかりと戸締まりをして初めて部屋のドアにロックをかけて寝ましたヒロです。朝、扉のアクセスログを調べたら二回くらいアクセス履歴があって内心戦慄しているヒロです。何があった。誰だよ。

内心震えながら食堂に行くとエルマが微妙に不機嫌な様子で、ミミとクリスは悪いことをしたのを隠して怒られるのを怖がっているような様子だった。互いの視線が絡み合い、微妙な沈黙が訪れる。

「……落ち着いて話し合おう。まず、俺はクリスに手を出すつもりはない、というか出せないからな。護衛対象に手を出すなんて護衛役として言語道断だし、そもそも貴族の娘さんに手を出すのは色々とマズすぎる。俺がクリスのお祖父さんの立場なら、孫の弱みにつけ込んで手を出したクソ傭兵をどんな手段を使ってでもぶっ殺すから」

俺の発言にミミとクリスが目を逸らす。

「そしてエルマ、なんとなくそんな予感がしたから昨日はロックかけてただけだから。別にお前を締め出そうとしたわけじゃないから」

「そうね、なら仕方ないわ」

不機嫌そうな様子だったエルマが一転機嫌を直して微笑む。

「とはいえその、なんだ。クリスもいることだし控えたほうが良いかなと思うんだが」

「別に気を遣わなくても良いと思うけど？」

「気まずいだろ……？」

ミミに視線を向けると、ミミは顔を真赤にしつつもふるふると首を横に振った。え？　それは気にしないってこと？　そういうわけにはいかんだろ。一体どこからそんなにやる気が溢れてくるんだ君達は。

「私だけ仲間はずれというのもどうかと思うのです」

「どうかと思うのです、ではない。無理だから。理由は説明したし理解はできるだろう？　というか昨日の今日で思い切りすぎ。状況的に盛り上がるのはわからないでもないが、もっと冷静になれ。吊り橋効果も作用しているんだろうが、そんなことを無理にしなくても俺はクリスをちゃんと守るから。かえってこういうことをされると気軽に付き合えない」

真面目な顔でそう言って聞かせるが、クリスは不満げな表情であった。貴族教育の一環でそういう生々しいことを学んでいるのだろうか？　年の割に躊躇が無さすぎる。純粋だからというのもあるんだろうけど。

「それとも、クリスは自分の感情を優先して結果的に俺とクリスのお祖父さんの間に諍いが起きても良いっていうのか？」

「……いいえ」

「何事にも手順というものがあるだろう？　伯爵として貴族の誇りを持って生きているお祖父さんは、筋が通らないことが嫌いなんじゃないか？」

「……はい。そう思います」

「そうだろうな。帝国の貴族は誇り高い、立派な人物が多いと聞いているし」

内心説得が上手くいったことにほくそ笑みながら俺はクリスに微笑んで見せる。なに？　いたいけな少女を言いくるめて罪悪感は無いのかだって？　無いね！　クリスのためにも、そして俺の身の安全のためにも必要なことだからな！

「とにかく、そういうわけでな。ミミとエルマはクリスが無茶をしないように気をつけてくれよ。俺も勿論気をつけるが」

「うっ……わ、わかりました」

「わかったわ」

「クリスも、行動には気をつけてくれよ。今はこうして平然としているが、男の理性なんて吹けば飛ぶような脆いものなんだからな」

特に俺のはな。

「むぅ……わかりました」

クリスもなんとか納得してくれたようなので、朝食を食べてからトレーニングルームで身体を動かし、交代でシャワーを浴びて身だしなみを整える。

「いつもこういう生活なのですか？」

「はい、ヒロ様の船ではそうですね」

クリスの質問にミミが答えるが、クリスはなんとも言えない表情をした。

「私、傭兵の船での生活というのはもっとこう……粗野なものだと思っていました」

「船内設備の居住性が高級客船のキャビン並みの船なんてこの船くらいよ」

エルマが微妙に否定的なニュアンスを含んだ声音でクリスの言葉を否定する。別に住環境が良いことはいいことじゃないか。その恩恵に預かって皆美味しいご飯とふかふかで清潔なベッドと快適な入浴ができてるんだから。

「傭兵のロマンより快適なのが一番だ。さぁ、今日は遂にリゾートに出発だぞ。その前に恐らく追手との戦闘もあるんだから気を引き締めろ」

「はいっ！」

「はいはい」

気合を入れるミミと適当に返事をするエルマ。エルマは……うん、エルマがミミみたいにハキハキと気合を入れていたら逆に気味が悪いな。仕事は確実だし、わざわざ注意することでもないだろう。

コックピットに移動して俺はパイロット席に、ミミはオペレーター席に、エルマはサブパイロット席に、クリスにはサブオペレーター席に座ってもらう。これでクリシュナのコックピットの席は全部埋まった形になるな。

「私もコックピットに入って良いのですか？」

「ここが一番安全だからな。慣性制御機能も一番効きの良いところだし」

クリシュナの状態をチェックしながらクリスの質問に答える。念の為低出力でシールドを展開していたのだが、特に攻撃されたようなログは残っていなかった。恐らく俺達がリゾート惑星の予約をしたのを察知して、コロニーで手を出さずにリゾート惑星に向かうところを襲撃しようと考えているのだろう。

ここで手を出すよりは向こうにとってはリスクが小さいだろうか

らな。流石にコロニー内で襲撃なんぞを仕掛けた日には星系軍にボコボコにされるだろうし、追求の手が伸びればクリスのお祖父さんに事態を知られる前に身の破滅だろう。

「よーし。ミミ、出港申請だ」
「はい、わかりました！」

ミミが手元のコンソールを操作し、港湾管理局に出港申請を行う。程なくして出港の許可が出たので、安全運転で港湾区画を航行する。シールドは最大出力だ。事故を装って突っ込んでくるやつがいるかもしれないので、神経を最大限に尖らせておく。
妙な挙動を取る船は居ないようだ。気にしすぎだっただろうか？
いや、警戒するに越したことはないな。小型船程度ならともかく、荷物満載の大型貨物船に最高速度で突っ込まれたりしたら流石に危ないし。

「……ふぅ、緊張しましたね」
「問題はここからよ。どのリゾート惑星に向かうか判りづらいルートを設定するから、ナビに従って移動して」
「あいよ」

エルマが設定したナビに従って船を動かす。うん、このルートなら三つの惑星のうちのどこに行くのか判別はしづらいよな。

「超光速ドライブに入るぞ」
「はい、超光速ドライブチャージ開始します」

ジェネレーター出力を上げると、キィィィンと耳に響くチャージ音が鳴り始める。

「カウント、5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動」

ドォン、という轟音と共にクリシュナは超光速ドライブ状態に移行した。星々の光が点から線になって後方に流れ始める。

「わぁ……小型船のコックピットからだと、超光速ドライブ中は宇宙がこう見えるのですね」

初めて見る宇宙の光景にクリスが感嘆の声を上げる。大型客船の窓から見る光景とは違うものなのかね？

「俺も最近は見慣れてきたけど、最初に見た時は――」

と言いかけたところでコックピット内にアラート音が鳴り響き始めた。つい最近聞いたばかりのアラート音だな。

「早速だなぁ」

「早速ねぇ。少し泳がせてどこの星に行く気なのか見定めるんじゃないかと思ったんだけど」

「叩き潰すから必要ないと思ったんじゃないか？」

コックピットのＨＵＤ上には船が亜光速ドライブをインターディクトされているという警告が表示されている。このインターディクト自体はやろうと思えば振り切ることもできなくはないのだが、今回の目的は追手を返り討ちにすることなので、やはり前回と同じく敢えて抵抗しない。

無理矢理インターディクトされて通常空間に放り出されるよりも体勢を立て直しやすいからな。

「ミミ、戦闘準備だ。エルマはサブパーツの制御を任せるぞ。前回

と同じく出し惜しみは無しだ」
「わかりましたっ！」
「アイアイサー」
「あ、あのっ、私は？」

クリスが声を上げるが……私はと言われてもな。

「戦闘機動をするから舌を噛まないように気をつけてくれ。慣性制御装置が効くから身体にかかるGはかなり軽減されるけど、それでも激しい戦闘機動を取るとそれなりに負荷がかかるから気をつけてな。あと、怖くてもあまり叫ばないでくれると助かる」
「は、はいっ。がんばります」

クリスが緊張した声で返事をする。あんまりキャーキャー言われると気が散るからな。そう考えると、ミミは最初から静かで助かったな。単に怖くて固まってただけかもしれんが。
ジェネレーター出力を絞って速度を落とし、インターディクトに逆らわずに通常空間に戻る。
ドォン！　という轟音と共に後方に流れていた星々の光が点に戻った。それと同時にジェネレーター出力を最大に上げる。

「おおっと！　いきなりだな！」

ウェポンシステムを立ち上げながら回避機動を取り始めると、つい今までクリシュナが居た空間を赤い光条が何本も貫いていった。警告なし。殺る気満々である。

「敵機、小型艦十二、中型艦四です！」
「チャフ起動、フレアとシールドセルもいつでも行けるわよ」
「オーケー。じゃあ行くぞっ！」

反転して重レーザー砲を搭載した四本の武器腕と二門の散弾砲を襲撃者へと向ける。

さぁ、反撃開始だ。一隻たりともこの宙域からは逃さんぞ。

#070　変態機動

「宙賊には見えないよなぁ」

こちらを包囲して攻撃を仕掛けようとしてきている連中の船を見て呟く。十二隻の小型艦は全て揃いのミドルクラス戦闘艦、四隻の中型艦も全て揃いの型落ち軍用艦である。

「船も装備も揃いすぎね」

敵艦の放ってくる真紅のレーザー砲撃を避けながらこちらも応射する。

「それにタフだな」

そこらの宙賊ならクリシュナの重レーザー砲四門による一斉射を受けたらシールドを貫通して装甲と船体を貫き爆発四散、というところなのだが、こいつらは辛うじてシールドを飽和して装甲に大ダメージというところで耐えている。

つまり、シールドと装甲のどちらか、或いはどちらもが宙賊の改造船とは一線を画しているというわけだ。

「攻撃力はどうだ？」

「一般的な宙賊よりもワンランクかツーランクは上の装備ね。シールドの減衰率が高いわ」

「なるほどな。ミミ、星系軍への通報は？」

「ダメです！　ジャミングされてます！」

「まぁそうだよなぁ」

「当然よね」
時間を稼いでいれば妨害電波に気付いた星系軍が現れるかもしれないが、まぁそれよりも自分達で倒したほうが早いな。フライトレコーダーの記録を提出すれば咎められることもないだろう。
「様子見はここまでってことで、行くぞ」
「アイアイサー」
「あ、あいあいさー！」
冷静なエルマとまだ戦闘となると完全には落ち着いてはいられないミミの返事を聞きながら敵集団に突っ込む。
ひらひらと逃げながら応射していた俺の動きが突然変わったことに敵の小型艦達が一瞬動揺した。その隙を突いて敵小型艦の方位を突破し、敵中型艦に肉薄する。
「まずはデカいのからってなぁ！」
中型艦の放ってくるレーザー砲撃をバレルロールじみた機動で回避しながら四本の武器腕に装備された重レーザー砲を一隻に集中して浴びせていく。
やはりタフだ。一斉射、二斉射と重レーザー砲を浴びせるがシールドがダウンしない。シールドセルも装備していそうだな。だが……。
「こいつならどうかな！」
クリシュナの艦首に搭載されている二門の大口径散弾砲が同時に火を吹き、無数の弾丸が目標の中型艦に襲いかかる。四門の重レーザー砲の斉射でシールドにある程度ダメージが入っていたせいもあ

ったのか、無数の弾丸は敵中型艦のシールドを貫通してその船体を穴だらけにした。
弾丸が重要区画を直撃でもしたのか、中型艦の動きが完全に止まる。

「このまま中型艦に張り付くぞ」
「お手並み拝見ね」

沈黙した中型艦の陰に回り込み、こちらを追ってくる小型艦の射線を一旦切ってから次の中型艦に肉薄する。敵の中型艦の至近に張り付いてしまえば小型艦どもはそう簡単にクリシュナを撃つことができない。フレンドリーファイアを承知で撃ち込んできてくれるならそれはそれでいいしな。
追ってくる敵小型艦に対して敵中型艦を常に背に負うよう意識しながら一隻ずつ中型艦を仕留めていく。

「いやらしい戦い方ねぇ」
「一対多の戦いをするなら工夫しないとな」

そうでなきゃすぐに四方八方から撃たれて蜂の巣だ。いくらクリシュナのシールドが強固だからといっても限度というものがある。

「ダメージは？」
「結構撃たれてるけど、シールドが飽和するほどじゃないわね。向こうも外したら味方に当たるとなるとそうそう撃てないわよ」

エルマがコンソールを目まぐるしい速度で操作している。俺も敵に照準を絞られないよう回避運動をしてはいるが、光速で飛来するレーザー砲撃を全て避けるのは不可能だ。
なので、エルマは被弾地点のシールド出力を一時的に厚くしたり、

減衰してきたシールドをシールドセルで補強したりしてクリシュナのダメージをコントロールしている。チャフやＥＣＭを使って敵の照準を欺瞞したりな。

「おっと」

そうやって敵の中型艦に張り付きながら戦っていると、痺れを切らしたのか敵の小型艦が何隻か向かってきた。肉薄し、クリシュナに体当たりをしてでも中型艦から俺を引き剥がそうという魂胆だろう。

「アホめ」

姿勢制御ブースターを使って機体をその場で急速旋回させ、肉薄してきた小型艦に散弾砲を向ける。そして躊躇なく発砲。

発射された無数の弾丸が三隻の小型艦のシールドを一瞬で飽和させ、その船体を穴だらけにした。スイス・チーズの出来上がりだ。

「よーしよし。動きの癖も掴めたし、そろそろ反撃開始だな」

俺から逃げようとする敵中型艦に後ろ向きに張り付きながら、追ってくる敵小型艦に重レーザー砲の斉射を浴びせていく。一斉射で仕留められないなら、もう一斉射当てれば良いじゃないの精神だ。

「変態機動すぎる……どうやって後ろ向きにぴったり張り付いてるのよ」

「レーダーの反応と敵の動きの癖を掴んでだな」

なに、後ろ向きに歩きながらスマホを操作するようなもんだ。慣れればできるできる。宇宙空間だからちょっと移動方向が多いけど。

この後ろ向き張り付き射撃を習得するためにフレンドと血の滲むような特訓をしたものだ。

「そろそろ叩き潰せるな」

敵の数も減ったので張り付いていた中型艦に散弾砲をぶち込んでとどめを刺し、小型艦の掃討に向かう。中型艦？　足も遅いし、前衛の小型艦の数が減ったらただの的よ。火力が高いから油断すると危ないけど。

数の減った小型艦どもに突っ込み、すれ違いざまに散弾砲を浴びせてやる。逃げようとする小型艦のケツを取って重レーザー砲をぶち込んでやる。中型艦がやけくそ気味に発射してきたシーカーミサイル引き連れたまま敵の小型艦に突っ込み、擦れ違い様にフレアを撒いて誤爆させてやる。

こうやって数が減れば後は消化試合だ。程なくして全ての敵の掃討が完了した。

「ちょっと苦戦したな。流石に装備も練度も普通の宙賊とは比べ物にならなかった」

「そうね……」

エルマは何故か難しい顔をしている。

「こ、怖かったです……」

ミミは久々の苦戦に顔を青くしていた。これに近い苦戦をしたのは……ターメーン星系で連邦艦隊に突っ込んだ時以来か。あの時よりはまだ余裕があったけどな。今回は対艦反応魚雷を使うまでも無かったし。

「手早くブツを回収していこう。狙い目はクリスの叔父さんにとって致命的な証拠となり得るデータキャッシュだ。小型艦はどうせ大したものをもっていないだろうから中型艦を狙うぞ」
「アイアイサー」
「は、はいっ！」

クリシュナを撃破した敵の中型艦に寄せて積んでいる物資やデータキャッシュを略奪していく。こいつらは装備も良いから、時間があれば装備を剥ぎ取っていきたいところだが……あまり長居すると星系軍に嗅ぎつけられるかもしれないし、こいつらの仲間に捕捉されかねない。
四隻の中型船の残骸から食料や水、データキャッシュなどを手分けして略奪する。三人でドローンを操作すれば一隻当たりの略奪時間はそう長くはならない。

「データキャッシュはあるだろうけど、物資は期待できそうも無いよなぁ。こいつら遠出する予定じゃなかっただろうし」
「そうでもないわよ。中型艦ならクルーは四人から八人でしょ？推進機関喪失とか万が一の自体に備えて一週間から二週間分の物資は持ち歩いているはずよ」
「そういうものか」

調べてみるとエルマの言う通り俺が想像していた以上に水と食料が手に入った。中型艦四隻分で俺達が軽く一ヶ月くらいは食いつなげそうなほどの量だ。

「想像以上に大漁だったな。この物資を元手に逃げ回っても良いかもしれん」
「リゾート惑星に引き篭もってもダメだったらそうしましょ」

物資を引き上げたらすぐさま超光速ドライブを起動して戦場を離脱する。

「これで一息つけるか……大丈夫か？　クリス」

クリスの方に目を向けると、クリスは顔面蒼白のままコクコクと頷いた。両手で口を押さえているのはきっと俺の言いつけを守って悲鳴を漏らさないようにするためだろう。

すぐ隣のエルマに目を向けると、彼女はコックピットに持ち込んでいたグラビティスフィア――かっこいい名前だが要は無茶な機動をしても中身が溢れないドリンクホルダーである――からストローを伸ばして水分補給をしていた。流石にエルマは余裕だな。

ミミももう既に落ち着いて収奪した物資と機体の状態をチェックをしているようだ。うーん、頼もしくなってきたな。もうそろそろミミもいっぱしのオペレーターを名乗っても良いんじゃないだろうか？

「行き先へのナビを再設定するわよ。惑星に降下する角度に気をつけなさい」

「任せておけ」

大気と重力の存在する惑星に降下する場合は進入角度に注意しないと大変なことになるからな。まぁ、船には安全装置やシールドがついているから超光速ドライブ状態で惑星に激突、爆発四散！　とか大気との摩擦で流れ星に！　なんてことにはならないけど。

それでも惑星上では船の挙動も変わるし、いざ戦闘となると重力や大気――つまり空気抵抗の影響が思いの外大きかったりする。宇宙空間と同じ感覚で船を操作すると地面に激突とか、急な失速とか結構危ないんだよな。

暫くナビゲーションに従って船を走らせると、次第に一つの青い

惑星が近づいてきた。惑星の殆どが海面に覆われた海洋型惑星、シエラ星系第三惑星のシエラⅢだ。

「よーし、惑星に降下するぞー」

「アイアイサー。効果のサポートは私がするわね。ミミは私がサポートするのをちゃんと見てなさい」

「はいっ！」

まだ震えているクリスはそっとしておこう。

そういうわけで、追手を撃退した俺達は遂にリゾート惑星への降下を開始するのであった。

#070　変態機動（後書き）

情報解禁になったので！
本作の1巻がカドカワBOOKS様より7／10に発売することになりました！
イエーーーーーッ！！！　―（∵3」∠）―
公開できる情報が増えたら活動報告にアップしていきたいと思います！
是非買ってね！（ストレート

#071　降下

さて、追手を撃退して目的のリゾート惑星、シエラⅢへの降下軌道へと向かっているわけだが。

「確か高度なセキュリティシステムで守られているんだよな、リゾート惑星って。このまま降下しても大丈夫なのか？」

陽電子ＡＩが統括している自動迎撃システムがあるとかそんな話だったよな。迂闊に近づいて撃墜とかされたら洒落にならんぞ。

「それは大丈夫よ。リゾート惑星の管理ＡＩにアクセスして、エントリー用のセキュリティコードを送信すれば防衛システムの攻撃対象から外れて防衛対象に設定されるから」

「上手く出来てるんですねぇ……」

エルマの解説にミミが感心したように声を上げる。クリスにちらりと視線を向けてみるが、戦闘の緊張から解放されてぐったりというか、放心状態になっている。初めて戦闘を経験したミミもこんな感じだったかな？　もう少しシャンとしていたような……？　よく覚えてないな。まぁ個人差だろうか。

そうしているうちに轟音と共に超光速ドライブ状態が解除され、眼の前いっぱいに海面で覆われたシエラⅢの姿が映し出された。

「どういう手順で管理ＡＩにアクセスするんだ？」

「手順はコロニーに着艦する時と変わらないわよ。ミミ、通信リストを開いて。シエラⅢの管理ＡＩがリストの中にあるはずだから」

「はい、ええと……あ、ありました！　通信しますね」

ミミがコンソールを操作し、管理ＡＩのアクセスを開始する。そしてエルマと話しながら何度かやり取りをすると、程なくして降下の許可が出たようだ。

「ああ、そうだ。そういえばオートドッキング機能を利用して自動降下もできたはずよ」

「そうなのか？　ならそうしようか」

オートドッキング機能を起動すると、俺達の滞在予定地にうまいこと降下できるように船の大気圏突入角度や速度などが自動で調整され始めた。これは楽ちんだな。

少しすると大気圏への突入が始まったのか、ゴゴゴゴゴゴ……という音と共にクリシュナが小刻みに振動しはじめた。音はどんどんと大きくなり、振動もまた同様に大きくなり始める。そして、クリシュナのコックピットから見える光景が赤く染まり始めた。

「おぉ、これが大気圏突入か……シールドが赤熱化しているのか？　これは」

「私だってそんなのわかんないわよ……」

シールドに守られているクリシュナの船体は直接大気に触れているわけじゃないはずだから、大気圏に突入しても温度が上昇して赤熱化したりしないのでは……？　それともシールドと惑星の大気が何か反応してこうなるんだろうか？　うーん、よくわからん。でもまぁ、大気圏突入時のお約束的な意味で得難い体験ではあるな。

「だ、大丈夫なんでしょうか？」

「クリシュナ自体に問題はないと思うぞ。シールドが若干減衰してるけど、船体にはダメージは入ってないし」

なんてことをミミと話していると。

「……ふぁあぁぁっ！？」

「うおっ！？」

突然クリスが大声を上げた。な、なんだ一体！？　視線を向けると、クリスは口元を押さえて顔を真赤にしている。心なしか、なんかモジモジと挙動不審なような……？

「……！　え、えーと、クリスちゃんの調子が悪そうなのでちょっと医務室に連れて行ってきます」

「……？　お、おう」

なんだかよくわからないテンションでミミがオペレーター席を立ち、なんだか中腰でよたよたと歩くクリスを連れてコックピットから退出していく。確かになんだか調子が悪そうだったが。

「大丈夫かね？」

「問題ないわよ」

エルマは俺に目を合わせずにそう言って肩を竦めた。なんだろう？　俺だけが事情を把握できていない感が凄いんだが？

ゴウウゥゥゥゥ、というクリシュナと大気との摩擦か何かで起こる音を聞きながら考える。振動はかなり収まってきたな。しかし、ふーむ……？

あっ。

「漏らしたのか」

「……気づかないであげなさいよ」

「気づいてしまったものは仕方がない。直接指摘しない程度の分別はある」

クリスは貴族の娘とは言え、一般人だ。掠りでもしたら一巻の終わりなレベルのレーザー砲撃がガンガン飛んでくる光景を見て恐怖を感じたんだろう。クリシュナの分厚いシールドはそうそう敵のレーザー砲撃を通したりはしないが、バンバン撃たれれば怖いに違いない。文字通りの光速で飛んでくるレーザー砲撃を全て避けるのは不可能だしな。

「しかしあれだな、この世界に来て初めての惑星降下だな……胸が熱くなってくるぜ」

手元のコンソールを操作し、コックピットのディスプレイ上にクリシュナの各部に設置されている光学センサーが拾っている光景を表示させる。事前情報通り、この星は地表の殆どが海に覆われた海洋型惑星であるようだ。

大気や海水の成分組成なども生物の生存に適するようにテラフォーミングされているらしい。惑星としては俺の知る地球よりも小さいようである。光学センサーが拾ってくる情景は、ほとんど見渡す限りの海面だ。初降下の興奮はともかく、見ていてあまり楽しい光景ではないな。ぽつぽつと島のようなものはあるけど。

そうしているうちにミミがクリスを連れて戻ってきた。戻ってきたクリスは平静を装っているが、微妙に顔が赤い。気付いていないふりをしてやろう。

「大丈夫だったか？　初めての戦闘で気分が悪くなっただろ」

「だ、大丈夫です。ちょっとだけ気分が悪くなりましたけれど、食堂で飲み物を頂いて落ち着きました」

「そうか。ミミ、クリスのことを見てくれてありがとうな」

「はいっ」

俺に褒められたミミは満面の笑みを浮かべる。尻尾があったらブンブン振ってそうな勢いだな。

「ミミは地上に降りるのは初めてよね？」

「はい、私はコロニー生まれのコロニー育ちなので。なんだか凄いですね。広いと言えば良いのか、雄大と言えば良いのか……センサー越しの映像でも解放感がすごいです」

「俺からしてみればこの世界――おほん。あー、コロニーの方が珍しく感じるんだけどな」

「ヒロ様は惑星上居住地の出身なのですか？」

「ああ、まぁ、うん。そうだ。色々複雑な事情があってな」

首を傾げながら聞いてくるクリスには適当に言葉を濁しておく。危なくこの世界ではとか危険な発言をするところだった。アレイン星系で出会ったショーコ先生みたいな人に俺が異世界から来ましたなんて事情が漏れたら捕らえられてモルモットにされかねん。

「そうなんですか……でも、惑星上居住地出身ということは、貴族に連なる方ということですね？」

「そういうのではないかなー。そうだとしてもなんというかほら、過去は捨ててきたみたいな？」

「そう、ですか」

クリスが何故か残念そうな表情をする。どういう意味の反応なんだろうか、それは。

「そろそろ着くみたいよ」

「おっと、そうか。多分大丈夫だと思うが、一応衝撃に備えろ」

クリシュナの高度が少しずつ下がり始め、前方に緑の生い茂った島が見えてくる。島の規模的には中程度といったところだろうか。上空からだから正確な大きさとかはちょっとよくわからないが、ここまでに見た島の中では格段に大きいというわけではない。かといって、小島ってほどでもないな。

島の一部が大きな湾になっていて、湾内は非常に並が穏やかだ。海も非常に透明度が高く、湾の白い砂浜が目に眩しく感じる。うん、典型的な南国のリゾート地って感じだ。

砂浜にほど近い場所にロッジのようなものが見える。その横にはデカいヘリポートのようなものがあるな。あれは船の発着場だろうか？　砂浜を離れた島の中心部方面にはそんなに大きくはないが、ゴルフ場のようなものや、テニスコートのようなもの、それに他の建物も見えるな。

「なかなか豪華そうな場所だな。他の滞在者もいるのかね？」

「いいえ、この島は私達の貸し切りよ？」

「マジで」

「マジよ」

この広さの島を貸し切り？　二週間も？　えっ？

「意外と安いんじゃないかと思えてきたぞ……」

確か俺達の滞在費は二週間で四人合わせて５６万エネル。一人あたりで換算すると１４万エネル、つまり一日あたり一人１万エネルだ。日本円換算で１００万円相当ということだな。

この広さの島を貸し切り。しかもゴルフ場のような施設やビーチも含めて、となると一人一日１００万円相当というのは逆に安いんじゃないかと思えてくる。それとも、施設の使用に別途使用量が発

生するのだろうか？　そういう感じじゃなさそうだよなぁ。
「予想以上に良い施設ね。もっとこじんまりとした場所かと思ってたわ」
「クリスちゃんが滞在したのもこういう感じのところだったんですか？」
「はい、そうですね。もう少し広い島でしたけど」

流石は貴族。この島よりも豪華な島を貸し切っていたらしい。
クリシュナは自動運転で発着場へと降下し、着地した。ズン、と着地時の振動が船全体を僅かに揺らす。うーん、オートドッキング機能は凄いな。重力下でも余裕のソフトランディングだ。
「とうちゃーく。あー、流石にちょっと疲れたな」

なんとかクリシュナの船体に傷をつけることなく追手の襲撃を切り抜けることができたが、流石に装備も普通の宙賊より多い上に練度も高く、しかも数で勝る相手との戦闘は緊張した。奇襲で混乱している連邦軍を相手にしたほうが心情的には楽だったかもしれん。
「お疲れ様。あれだけの戦力相手に立ち回ったんだから当然ね」
「お疲れ様でした。今日はゆっくりと休んでくださいね」
「守ってくださってありがとうございました、ヒロ様」

エルマとミミ、そしてクリスが口々に俺を労ってくれる。ははは、我ながら現金だと思うが、苦労をしてもこれだけの綺麗どころに揃って労われると疲れが吹き飛ぶ気がするな。報酬系がビンビン刺激されている気がする。
「あんまり褒められるとニヤつきそうだ。とりあえず降りようか。

何か持っていくべきものはあるか？」
「そうねぇ……多分大丈夫だと思うけど、襲撃を警戒するなら武器とかパワーアーマーとか？」
「手荷物としては物騒すぎませんか……？」

微妙にズレているエルマの答えにミミがドン引きしている。でも、エルマの言うことも確かか……？　この島のセキュリティについて調べてみて、場合によっては実行したほうが良いかもしれないな。
まぁ、俺達の滞在場所がわかっているならわざわざ生身で俺達を襲おうとはせずに小惑星とか使って軌道爆撃でもするんじゃないかと思うが。レーザー砲でもやれるか？　でも大気中ではレーザーって減衰するらしいしな……いや、この世界のレーザー砲なら大気による減衰なんて鼻くそみたいなもんかもしれんけど。携行できるレーザーガンですら人を殺せる威力のレーザーを放てるもんな。

「ヒロ様が考え込んでしまいましたよ……？」
「冗談のつもりだったんだけど……」
「冗談だったんですか。私はてっきり本気かと……」
「この島に反応弾を撃ち込まれでもしたら、クリシュナはともかく私達は跡形もなく消し飛ぶわよ。パワーアーマーなんてあってもなくても一緒ね」
「身も蓋もねぇな」
「あまり想像したくない結末ですね……」

ミミの表情が引き攣っている。俺も多分同じような表情をしてるだろうな。クリスも顔を青くしているぞ。
とにかく何を持って行けばよいかわからないので、いつもコロニーの街中に降りる時と同じような格好で船から降りることにした。俺は小型情報端末とレーザーガンくらいのものだな。エルマも同じようなもので、ミミはタブレット型端末とかを入れたショルダーバ

ッグ持参で。クリスは手ぶらだな。メッセージアプリとかを使えるように俺のタブレット型端末でも持たせるかね？
クリシュナのエアロックを解除し、タラップから降りる。

「んー、空気が美味い気がする。潮の香りもするな」
「やっぱり地上は解放感があるわね」
「わぁ……」

ミミは空を見上げて目をキラキラさせている。コロニー育ちのミミにとって天井も壁もない風景というのは感慨深いものなんだろう。クリスは頬を撫でる風に目を細めているようだ。両親と過ごしたバカンスの思い出に浸っているのかもしれない。
それぞれ感慨に浸っていると、ロッジの方から何かが飛んできた。なんだあれは。ロボットか何かか？　バレーボールほどの大きさの金属製の物体だ。
謎の物体は俺達の目の前で停まり、ピカピカと何度か発光した。スキャンでもしたんだろうか？

「ようこそおいでくださいました、貴方達を歓迎致します。私はシエラⅢの管理ＡＩ、ミロです。当惑星に滞在する皆様のお世話をさせていただきます。どうぞ、よしなに」

中に浮かぶ謎の物体がピカピカと光りながら喋った。女性の声にも男性の声にも聞こえる、不思議な声だな。こいつはこの星を管理するＡＩの端末みたいなものかな？

「よろしく、ミロ。私はエルマよ」
「えっと、私はミミです」
「クリスティーナです」
「俺はヒロだ。この船のキャプテンだな」

「はい。エルマ様、ミミ様、クリスティーナ様、そしてキャプテン・ヒロですね。よろしくお願い致します」

ミロがペコリと頭を下げるかのように上下する。芸が細かいな。

「何かご質問などがございましたらこの場で承ります。なければこのままロッジへとご案内いたしますが、いかが致しましょうか？」

そう言ってミロはピカピカと光を放つのだった。

#072　地上のロッジ

「何か船から持っていくべき手荷物はあるか？」

何か質問があれば、ということなので俺は早速ミロに質問をすることにした。

「はい。当リゾートではお客様に快適な時間をお過ごしいただけるよう各種アメニティグッズなどを取り揃えております。しかしながら、お客様の中には拘りの品でなければ、という方もいらっしゃいますので、そういう場合はご持参頂く他に無いとミロは考えます。また、基本料金に含まれていない有料サービスをご利用になられる場合に備えて、エネルの決済機能を持った小型情報端末などはお手元に置いて頂いたほうが良いかと思います」

「なるほど。下着などの着替えは必要か？」

「はい。いいえ、下着類に関しては当方で新品をご用意させて頂いております。しかし、こちらも同様にお客様の好みなどもあるかと思いますので、必要であればお客様の手でご用意いただいたほうが良いかと思われます。しかしながら、当施設にはブティックなども併設されておりますので、よろしければそちらをご利用いただいてもよろしいかと。下着や衣服だけでなく、バカンスをより楽しめる水着なども各種取り揃えております」

「なるほど、わかった。俺が聞いておきたいのはこれくらいだが」

ミミ達に視線を向けると、彼女達は特に質問はなかったのか軽く首を横に振った。パンフレットとかに書いてあった内容だったのかもしれない。俺は詳しくは目を通してなかったからなぁ。

「それでは、ロッジへとご案内致します。どうぞこちらへ」

ミロが空中でくるりと振り返り、ふよふよと浮いたまま道の上を動き始める。俺達はその後ろについて歩き始めた。

「わっ、わっ……ヒロ様、ヒロ様！　あんなに植物が生えてますよ！」

俺の隣に並んで歩くミミが俺の腕を引っ張りながら道端の草花やそこらに生えている木を指差し、目をキラキラとさせている。そういえば、コロニーじゃ植物なんて鉢植えに入った観葉植物的なものくらいしかないものな。ミミはこんなに沢山生い茂っているのを見るのが初めてなんだろう。

「そうだな、凄いよな。植物の生命力とかそういうものを感じさせるよな。知ってるか？　ミミ。植物の力って強くてな、地面の下の雑草がアスファルトやコンクリートなんかの舗装をぶち破って生えてきたりすることもあるんだぞ」

「それって地面を舗装したり、建物を作ったりする時に使う構造材ですよね？　すごいなぁ……」

感心した様子で周囲をキョロキョロと見回すミミに俺とエルマとクリスの生暖かい視線が注がれているのだが、ミミがそれに気づくことはないようである。初めて触れる自然というものに目を輝かせるミミは可愛いなぁ。

「到着致しました。どうぞ、ご案内致します」

ミロが細長いアームを伸ばしてロッジの扉を開ける。そのまんまるボディにそんなものが内蔵されてるのか……他にもいろいろ搭載

されていそうだな。
　ロッジは木製のログハウスのような見た目で、内部は非常に広々としていた。案内された扉から入ると、まず目に飛び込んでくるのは広大なリビングダイニングキッチンだ。正面には大きな木製のローテーブルが設置されており、それを囲むように柔らかそうなソファが設置されている。左を向けば大きめのキッチンスペースと、ダイニングテーブル。キッチンには自動調理器だけでなく普通のコンロやオーブンなどもあり、やろうと思えば料理もできそうである。
　正面奥、ローテーブルとソファの向こうには芝生と、その先には白い砂浜と海が見える。窓際にはビーチチェアのようなものが置いてあり、あそこで日光浴をすることもできるようだ。
　右手には木製の階段があり二階に続いているようである。階段の下に通路があり、あちらにも何か部屋があるようだ。
　室内においてあるインテリアは全体的に南国風な感じがする。よくわからない木製の彫像とか実に南国っぽい。こう、縦長で目がギョロッとしてて笑ってるみたいなやつとか。何故か木製の弓とかも壁に飾ってある。ここは開拓惑星だろうし弓矢を使った歴史とか無いのでは……？

「広いし木もふんだんに使ってて豪華ねー」
「こ、これって木材ですか……？　ひぇ」

　なんかミミが怯えてる。

「私達のような惑星住みでは実感がわきませんけれど、コロニーなどでは木材というのは希少な素材ですから」
「なるほど……」

　確かにわざわざ宇宙に木材を運ぶというのはコストパフォーマンスが良くなさそうだ。それなら宇宙空間で採掘できる金属などの素

材を使ったほうがまだ良さそうである。でも、これくらい進んだ世界だと簡単に培養できそうな気もするけどな。いや、木を培養するくらいなら他のもので代用したほうがよほど楽か？　木材のメリットって加工がしやすいのを除けば、ある程度管理すれば時間で増えるって点だものな。わざわざコストを掛けて化学的に合成するならプラスチックとかのほうがコストが安いか。

俺が考え事をしているうちに女性陣はこの大きなリビングダイニングキッチンの検分が終わったようだった。三人とも満足そうな顔をしているな。実際、設備そのものはクリシュナよりも広くて豪華だしね。何より海辺が見える大きな窓と高い天井が解放感を与えてくれる。良い物件だな。

「この島の現在時刻は午前１１時１４分です。皆様が宜しければ正午にお食事をご用意致しますが、その時間で宜しいしょうか？」

「俺はそれでいいぞ。皆は？」

「私もそれで良いわ」

「私もそれで大丈夫です」

「はい、私もその時間で大丈夫です」

「そういうことだ。正午に頼む」

「かしこまりました。では正午にご用意致します。それまでどうかごゆるりとお休みくださいませ」

そう言ってミロはふよふよと部屋の隅に設置されている台座のようなものに移動し、すっぽりと嵌って動かなくなった。呼べば対応してくれるんだろうか？

「じゃあ時間まで休憩だな。俺は飲み物でも貰ってソファでくつろぐよ」

「私もそうしようかしら」

「あのっ、私は外を歩いてきてもいいですか？」

「良いぞ。大丈夫だと思うが、気をつけてな。拾い食いとかしちゃダメだぞ」
「しませんっ！　そこまで食いしん坊じゃないですよ！」
ミミが頬を膨らませてぷんぷんと怒る。ははは、怒っても可愛いなぁ。

「クリスはどうする？」
「ええと……じゃあ、ミミさんとご一緒します」
「大丈夫か？　無理はするなよ？」
「はい、大丈夫です。ご心配なく」

そう言ってクリスが上品に微笑む。うーん、そこはかとなく漂う高貴な雰囲気。やはり育ちというのは出るものだなぁ。それに比べて見たまえよ、この駄エルフを。早速ソファに腰掛けて伸びておるぞ。気品のかけらも見当たらないぜ。
ミミとクリスを見送り、外に出ていったのを確認してからミロに声をかけてみる。

「ミロ」
「はい、キャプテン・ヒロ。何か御用でしょうか？」

部屋の隅で台座に収まっていたミロがふよふよと飛んでくる。やっぱ聞いてるのか。

「飲み物が欲しくてな。そういったものは用意してあるのか？　それとも注文して届けてもらう感じか？」
「はい。あちらのキッチンに設置されているクーラーにスタンダードなものは用意させて頂いております。最初から入っているものに関しては当プランのサービス範囲内ですが、それ以外のものは有料

での手配という形になります」
「そうか……ところで、炭酸飲料はあるか？」
「はい。いいえ、スタンダードな飲み物とは言い難いため、クーラーには用意されておりません」

俺は内心歓喜のあまり転げ回りそうになっていた。スタンダードな飲み物ではない、と言っているがミロは炭酸飲料というものの存在を知っている。つまり、これは。

「注文、できるんだな？」
「はい。ご用意することは可能です。どのようなフレーバーのものをお求めでしょうか？」
「黒くて、甘くて、喉越し爽快なコーラだ。俺はコーラが飲みたい。浴びるように飲みたい。なんならキッチンのクーラーの中身を全てコーラで埋め尽くしたい。それくらいコーラが飲みたいんだ。わかるな？　俺にコーラを寄越すんだ」
「はい。リクエストを受け付けました。受け付けましたのでどうかユニット００６から手を離してください」

いつの間にか空中のミロを両手で掴んで言い聞かせていた。危ない危ない、我を失っていたな。それもこれも炭酸飲料を長い間飲んでいないせいだ。

「発注量はどういたしましょうか？　１５００ｍｌ入りのものと、５００ｍｌ入りの物がありますが」
「５００ｍｌ入りのものをとりあえず二〇本」
「承知致しました。到着まで少々お時間を頂きます。決済は――」
「これで」

俺が小型情報端末をミロに向けると、ピロがピカピカと発光し、

ピコーンと音が鳴った。決済音可愛いな。

「くくっ、ふふふ……楽しみすぎてどうにかなりそうだぜ」
「そんなに……？　あんたの言う炭酸飲料とやらの実在を疑ってたんだけど、ミロが知ってるってことは本当にあるものなのね」
「そりゃそうだとも！　コーラは不滅だ！　ポストアポカリプスの世界でもしぶとく残るさ！」

ただし飲むと青白く小便が光ったりする。

「ついていけないテンションなんだけど……まぁ、楽しみにしてるわ。私にも飲ませてくれるんでしょ？」
「勿論だ。そしてエルマもコーラの魅力に取り憑かれるが良いさ」
「なんかそう聞くと怖いんだけど……？」

微妙な表情をするエルマをスルーして俺はウキウキ気分でコーラの到着を待つことにした。早く、早く来い……そして俺を満足させろ……ッ！

#072　地上のロッジ（後書き）

すてらりすのＤＬＣきましたねぇ……翻訳待ちです。
翻訳作業者の方々には足を向けて寝られないな！　―（：３」∠）―

#073　〇〇〇だコレ！（、゜ω゜、）

「あ、あの……なんでヒロ様の目が死んでるんですか……？」
「私もよくわからないわ。ミロに発注した飲み物が届くなり嬉々として一口飲んだ後『アンニンドーフのような味……僅かな湿布臭……ド〇ぺだコレ！』って叫んでからはずっとこんな感じよ」

ヒロです。コーラだと思って喜び勇んで飲んだものがドク〇だったとです。
いや、待ち望んでいた炭酸飲料には違わないけどね？　なんというかこう、期待してただけにガッカリ感がね？
ちなみに俺はコーラはコ〇派だ。ペ〇シも悪くないと思うが〇カの方が好きだ。

「あまり見たことのない飲み物ですね……」

クリスが炭酸飲料の入った箱を眺めて呟く。そんなにマイナーなのか……いやマイナーだろうけれども。それはわかっていたけれども。ミロに聞くまで誰も知らなかったし。

「飲んでみるか……？　ちょっと好みの分かれる風味だが」
「良いのですか？」
「良いぞ。新しいのを開けようか」
「あ、いえ、飲みきれないかもしれないですし……」

そう言ってクリスは俺の持っているボトルにチラリと視線を向けてきた。えぇ……俺は別に良いけどさぁ。

「貴族の子女としては良いのかね、それは」
「細かいことを気にしてはいけませんよ」

そう言ってクリスがニコリと微笑むので、俺は炭酸飲料のボトルをそのままクリスに渡した。

「良いか？　シュワッとして刺激が強いから少しずつ飲めよ。場合によっては咽たりするするから」
「わかりました……んんっ！？」

ドク◯――この世界での商品名はミスターペパロニだからミスペか。ミスペを口に含んだクリスが驚いて目をまん丸くさせている。炭酸は初体験だったか。

「甘くて……口の中がパチパチします。でもこの香りはどこか薬品を彷彿とさせるような……？」
「俺の知る限りでは、この手の飲料の歴史は古い。元々は各種の薬草を調合したハーブ飲料だったとかって話だな。でも、薬草を調合しただけだと飲みにくいから甘いシロップなんかを加えて、そのうちにこのシュワシュワっとなる炭酸を添加してこれみたいな清涼飲料になったらしい」

この世界ではどうか知らんが、地球では概ねこういう流れでできた飲料だったはずだ。

「ミロ」
「はい。いかが致しましたか？」
「これと同じような……いや、同じでなくていいから、在庫のある炭酸飲料を一本ずつ注文する。ノンアルコールのものでな」
「承知致しました。そちらの条件ですと、他に四種類用意してござ

います」
「じゃあそれを各種一本ずつ。気に入ったら追加で注文する」
「承りました」

ふとクリスの方を見ると、ミミにミスペのボトルを渡していた。ミミもまた同じくミスペを飲んで目をまん丸くしている。可愛いなぁ、こいつら。でも君たち、回し飲みはちょいとばかりお行儀が悪くないかね？

「不思議な飲み物ですね」
「なんでパチパチするんですか？」

ミミが興味津々といった様子で俺に視線を向けてくる。そんなミミに俺は記憶を掘り起こしながら解説をした。

「二酸化炭素が添加されて炭酸飽和を起こすとそうなるんだ。どうにも宇宙空間とは相性が悪いようで、惑星上でしか取り扱われていないらしい」
「じゃあ、このしゅわしゅわしているのは二酸化炭素なんですか？」
「そうだな」
「なるほど……それは確かに軌道上コロニーとは相性が悪そうですね。これ、容器の中は高圧ですよね？」
「そうだな、高圧だな。蓋をした状態で振ったりしてから開封すると中身が噴き出したりもするぞ」

俺の返答にクリスが納得したように頷く。やっぱ炭酸飲料は軌道上コロニーや宇宙船でも飲むのが難しいのか……重力と気圧がちゃんとしていればなんとかなりそうなものだが。
いや、宇宙進出初期時代は人工重力発生装置とかが無かったのかもしれん。やはり開発されるまでに廃れて埋もれていったのか……

惑星上居住地では流通し続けたんじゃないかと思うんだが。それとも何か炭酸飲料が一気に廃れる事件でもあったのだろうか？　不自然なくらい流通してないし、知ってる人が少ないんだよな……謎だ。

「その奇妙な飲み物についてはもう良いわよ。それより昼食の後はどうする？　私としてはブティックとやらに行ってみたいんだけど」
「お？　いつも傭兵スタイルのエルマがおめかししてくれるのか？」

炭酸飲料を奇妙な飲み物呼ばわりするのは引っかかるが、いつも同じような傭兵スタイルで過ごしているエルマが普通の服を着るというのには興味が沸く。ミミは俺が買い与えたおとなしめのクラシカルロリータを着たり、自分で買ってきた普段着を着たりすることはあるんだけど、エルマはいっつも同じような格好なんだよな。別に金がないわけじゃないはずだし、恐らく趣味の問題なんだろうと思っていたが。

「おめかしってあのね……私だってＴＰＯを弁えた格好くらいするわよ」
「もっとＴＰＯ弁えて。船の中でのんびりする時くらいもっとラフというか傭兵っぽくない格好して。どうぞ」
「いやあのね……あんたがそう言うなら考えておくけれど」

ちょっと不機嫌そうに眉根を寄せながらも顔が赤い辺り、まんざらでもないようだな。良いぞ、是非もっといろいろな格好をしてくれ。

「ついでと言ったらなんだが、クリスの着る服やその他必要なものなんかも見繕ってくると良い。俺の口座から払っていいぞ」
「そ、そんなことをしていただくわけには」
「いや、必要だろう」

「必要ね」
「必要ですよね」

俺達全員に口々に必要だと言われてしまったクリスが黙り込む。

「大丈夫だ、その分クリスのお祖父さんからたんまりと頂くからな」
「そ、それはそれでちょっと……」
「気にするな。色々とストレスも溜まってるだろう？　難しいかもしれないけど羽目を外すと良い」

意外と普通に見えるが、クリスは両親を失った直後なのだ。船で過ごした二日間の間はまだ気が張っていたかもしれないが、ここで二週間過ごすうちに絶対にどこかで張り詰めた緊張の糸が切れる瞬間が来る。

溜まったストレスを今のうちに少しでも解消しておけばクリスの負担が少なくなる……といいなと俺は思っている。ぶっちゃけ、俺にできることなんてこれくらいしかないのだよな。俺とクリスとでは立場も生い立ちも何もかも違いすぎるから、寄り添ってやるのは無理だ。両親を失って酷い目に遭った、という意味ではミミの方がまだ彼女に寄り添える存在だろう。

「ミロ」
「はい。キャプテン・ヒロ」
「海で泳ぐことはできるのか？」
「はい。当惑星の海水は海水浴に適した成分に調整されています。海中には救難ボットも待機しており、不足の事故が起こった際にも迅速な救助を行うことが可能です。また、当施設には高度な医療施設も併設されているため、危険は最小限と考えて頂いてよろしいでしょう」
「なるほど。俺も流石に水着は無いから、ブティックで買わなきゃ

ならんな。フィッシングなんかも楽しめるのか？」
「はい。当惑星の海洋にはフィッシングに適した生命体が多数放流されており、この惑星独自の生態系を形成しています。当施設にもフィッシングに適したポイントが多数ありますので、ご用命とあらばご案内させていただきます」
「それは何よりだ。色々とレジャーを楽しめそうだな」

ふと視線を感じてミミ達に視線を向けると、何故かポカンとした様子で俺を見ていた。何だよ？

「あんた……やっぱりいいとこのボンボンなんじゃないの？」
「な、なんだか慣れた様子でしたね？」

エルマは何故かジト目で、ミミは何故か憧れの視線を向けてくる。何故にＷｈｙ？　クリスに視線を向けると、何故かクリスも感心したような様子だ。

「ヒロ様は海水浴やフィッシングに自然に慣れ親しんでいるんですね」
「そりゃそう……」

ここで気がついた。普通、コロニー住みの人間は海で泳いだり、魚を釣ったりというような発想は出てこないのだろうと。軌道上コロニーにおいて、水というのは貴重なものだ。生命体の生存に必要不可欠な物質である水というものは厳重に管理されており、大量の水の中を泳ぐといったことは普通はできない。少なくとも、俺は今まで軌道上コロニーで水泳ができるプールなど見たことがない。
そして、海に魚がいて、それを釣るなんていうのも海に関わることがないコロニー育ちの人間には縁のない趣味であろう。惑星上居住地に住んでいる人であれば或いはフィッシングを趣味にしている

人もいるのかもしれないが、そうでなければその存在すら知らないかもしれない。

「色々あるんだよ、色々。うん。惑星上居住地には宇宙ではできない遊びがたくさんあるぞ」

「色々、ですか」

クリスに俺が異世界から来たことを話すわけにはいかないので、誤魔化しておく。誤魔化し方が雑でクリスのいいように解釈されてしまう可能性はあるが、異世界から来たなんていう頭の中身を疑われるような真実を告げるよりはマシだろう。

「お食事の用意が整いました。ダイニングにお越しください」

「おおっとメシだメシだ。さぁ食おう。どんな食事が出てくるか楽しみダナー」

「露骨過ぎるわよ」

エルマの突っ込みを無視してダイニングへと向かい、テーブルに着く。しかし、食事の用意ができたとは言っていたが、一体どういうことだろうか？　少なくともテーブルの上には何もない。ミスペのように配達されるのだろうか？

ああ、ミスペはどうやって配達されてきたかというと、一抱えほどの大きさのドローンのようなものがロッジの前まで来て箱を置いていった。

どういうシステムなのかミロに聞いてみたのだが、この惑星の赤道直下に物資の集積基地があり、そこからマスドライバーによって物資を積載したコンテナが大気圏外に射出され、弾道飛行で配達地点の上空に到達、上空でコンテナがドローンに変形して降下してくるらしい。

なんという力任せな……と思ったのだが、地表面の殆どが海洋で

あるこの惑星にレールやトンネルを用いた物資輸送システムを構築するのはコストが掛かりすぎるし、海上や海中を輸送するのは時間がかかりすぎる。

当初はドローンによる空輸を考えたのだが、そうするのならば速度や航行距離の関係で物資の集積所を複数作る必要がある。それだけ提供できるリゾート地が減るわけだ。

そういうわけで考え出されたのがマスドライバー方式。発注された物資を積み込んだドローンコンテナを赤道直下に設置されたマスドライバーで撃ち出し、弾道飛行で素早く目的地に商品をお届けする。帰りはコンテナドローンが恒星光をエネルギー源として自力でゆっくりとマスドライバー基地に帰還するらしい。

俺の感覚だと荒唐無稽なトンデモアイデアにしか思えないのだが、少なくともこの惑星ではそれで上手く回っているのだそうだ。科学の力ってすげー。

そんな事を考えていると、ロッジの扉が開いて何者かがロッジへと入ってきた。

メイドさんである。耳のあたりに機械的なパーツの付いたメイドさんである。メイドロボである。まさか、実用化されているのか……！？　それも一人ではない。合計五名ものメイドさんがワゴンを押してロッジに入ってきた。全員寸分違わず同じ顔に見える。

「本日のランチをお持ち致しました」

メイドロボ達がお辞儀をしてテキパキと料理の配膳を始める。その手際は見事で、動きに機械的な『硬さ』などは見当たらない。すげぇなメイドロボ。俺も一台欲しい。

「あれは俺も一台欲しいって顔よ」

「ヒロ様！　メイドロイドなんて買わなくても私がお世話しますよ！」

エルマが俺の思考を的確に当て、何故かミミが椅子を鳴らして立ち上がり、鼻息を荒くしている。メイドロボじゃなくてメイドロイドって言うのか。

「メイドロボは男のロマンだぞ？」

「申し訳ありませんが、ユニットＳ－０４８は非売品です。あと、本機はロボットではなくアンドロイドです」

メイドロボ改めメイドロイドに振られた。なんということだ。

「しかしながら同型のモデルはオリエント・コーポレーションより購入頂くことが可能です。よろしければお客様の小型情報端末にカタログをお送りいたしますが」

「是非頼む」

「ヒロ様っ！」

ははは、見るくらいは良いじゃないか。流石に買おうとまでは思わないよ、多分。ぷんすこと怒るミミはメイドロイドに何か嫌な思い出でもあるのだろうか？　あとで聞いてみるとしよう。

さぁ、今はメイドロイドのことは横に置いておいて、食事の時間だ。

#073　○○○だコレ！（、゜ω゜、）（後書き）

>>▼一言

>>コーラのつもりが２０本のドクペが来たりして．．．．

（゜д゜）

（゜д゜）

（、゜ω゜、）＜おめぇエスパーかよォ！？（予想できる結末だったね！

#074　ブティックとカタログ

運ばれてきた食事はまさに海の幸を全面に出してきた内容だった。茹でられて縦に真っ二つにされているハサミが四本あるロブスターのようなもの、貝の剥き身の串焼きのようなもの、でかい鯛のような魚の姿焼き、刺し身らしきモノの盛り合わせ、シーフードピラフのようなもの、フルーツの盛り合わせ、海藻のサラダ……実に種類が多い。俺はどれも美味しく頂けそうだが。

「……」

ミミが料理を見て固まっている。特に真っ二つにされたロブスターっぽいのと魚の姿焼きがショッキングらしい。

「ヒ、ヒロ様これ……」

青い顔でそれらを指さしながらミミが俺に視線を向けてくる。

「美味そうな魚介類だよな」

「！？」

俺の反応にミミは「裏切られた！？」とでも言いたげな表情をしてみせた。うん、すまない。地球出身の身としてはこれらの料理に違和感は全く無いんだよ。ミミは例の培養肉工場で見た白い触手めいた生物以外にこういう食用の生命体というか、そういうものを見たことがないんだろうな。

この世界の人々はよほどの上流階級でもない限り基本的にフードカートリッジから創られる合成食品を食べて生活しているようだし。

エルマとクリスに視線を向けてみると、ミミほどには動揺していない……というか全く動揺していない。クリスは身分や居住地から理由が推測できるが、エルマはどうだろうな。傭兵としてそれなりに長く生活してるからこれくらいは体験したことがあるのか、それとも……どうでもいいか。子供じゃないんだし、話す必要があれば本人が話すだろう。

「各自で自由に皿にとって食べるのか？　これは」
「はい。宜しければ私どもがお取り分けいたします」
「そうしてくれ。そのロブスターっぽいのはともかく魚は上手に取り分けないと汚くなるし、小骨とかもあるからな」
「承知致しました」

俺の言葉を受けてメイドロイドのうちの一体がフォークのようなものとナイフを使って大きな鯛っぽい魚の姿焼きを更に取り分け始める。他のメイドロイド達も料理を皿に取り分け、給仕をし始めた。

「それじゃ、頂こうか。とりあえずの安全に乾杯」

全員に料理が行き渡ったところで飲み物の入ったグラスを掲げ、一口飲む。ノンアルコールで、と頼んでいたのでグラスの中身は葡萄のジュースのようだった。
早速ロブスターっぽいものの身から手を付けることにする。ほぐされた身には茶色っぽいソースのような物がかけられていた。用意されていたフォークの上に載せ、口に運ぶ。

「んー……！」

思わず唸り声が出るくらいに美味い。思ったよりも弾力のある噛みごたえだ。プリプリというよりブリブリだな、これは。それに、

絡められたソースが濃厚な味わいである。これはきっと頭部のミソを使ったソースだろう。甘みと歯ごたえのある身に非常に良く合う。
次は鯛のような大きな魚の姿焼きだ。取り分けられた身を口に運ぶ。味付けはシンプルに塩だけのようだが、美味い。程良い塩味と旨味が口の中に広がる。

「こちらを少量ふりかけるのもおすすめでございます」
「ほう……うむ」

俺の側に付いているメイドロイドのアドバイス通りに進められた調味料と思しき液体をかけてから魚の身を口に運ぶと、鮮烈で爽やかな香りが鼻孔を突き抜けていった。
これはすだちか何かだな？　柑橘系の爽やかな香りが僅かに残っていた魚臭さを打ち消し、酸味がシンプルだった味を引き立てる。他の料理も実に美味だった。
最初は面食らっていたミミも、一口食べた後には料理の味に夢中になってしまったようで、目をキラキラさせながら一口一口を味わって食事をしているようだった。うん、結構なことだ。見た目に惑わされてしまうのは愚かだよな。俺もミミもあのフェ〇スハガーじみた謎生物を食べた時にそう学んだのだ。
しかし、俺としては思ったより意外性が無くてびっくりだったな。もっとこう、見たことも聞いたこともないような見た目のヤバい生物がでてくるんじゃないかと内心戦々恐々としていたのだが。

「この食事はどこで誰が作っているんだ？」
「はい。こちらは赤道直下の物資集積基地で専用の調理マシンが調理後、パッケージングされてマスドライバー便で発送、こちらで我々メイドロイドが受け取り、提供させて頂いております」
「なるほど、食材の収穫から調理、輸送、提供まで全てオートメーション化されているのか……」

コスト面でどうなんだ？　効率的とは言い難いような気が……現地に調理施設を作ってこのメイドロイド達に料理させた方が良いんじゃないだろうか。
考えても詮無きことか。そうだな。
俺は難しいことを考えるのをやめて料理に舌鼓を打つことにした。貝の串焼きうめぇ。

☆★☆

食事を終え、少しの間食休みをした俺達はブティックなどが存在するショッピングエリアへと移動した。

「こじんまりとしてるんだな」

ショッピングエリア、と言っていたが実際にはさほど大きくない商店のようなものがいくつか並んでいるだけだった。ブティックとか言ってたし、もっとこう、お洒落でゴージャスな感じの店が立ち並んでいるのかと思ったのだが。

「ここのシステム的に在庫は置いてないんじゃない？　デジタルで試着して発注したら例のシステムで在庫を飛ばしてくるんでしょ」
「なるほどなぁ。徹底してる」

手近な店に入ると、どうやらここがブティックであったようだ。ここにもミロの端末らしき球体ドローンが設置されており、展示用の服を着せられた数体のマネキンとホログラムディスプレイが設置されている。
いや、あれはマネキンじゃなくてホログラムか？　定期的にポーズが変わり、同様に着ている服も切り替わっているな。

「いらっしゃいませ。様々なメーカーのデザインを取り揃えております」
「デザイン……？」
「はい。様々なメーカーやデザイナーから提供されたデザインテンプレートを取り扱っております。ご注文頂ければ３０分でロッジにお届けできます」
「……つまり、注文を受けてからユーザーの身体に合わせて服を作ってロッジに飛ばしてくるのか」
「はい。その通りでございます」

なんというか言葉もないな。このリゾート惑星の設計者はマスドライバー輸送に並々ならぬ拘りでも持っているのだろうか？　本当に効率的なのか？

「どうでも良いじゃない……さ、クリスの服を選びましょう？」
「そうですね。でも、試着とかはできませんよね？」
「はい。あちらで一度全身スキャンを受けてください。スキャンデータを元にホログラム上で試着していただくようになっております」
「そうなんですか。じゃあ皆でスキャンしちゃいましょう！」
「ふふ、そんなに押さなくても行きますよ」

キャッキャウフフしながら女性陣が奥にあるスキャン装置へと歩いていく。

「メンズは？」
「向かいの店舗となっております」
「行ってくるわ。あっちでな」
「はい」

この場は女性陣に任せて俺は一人で男性用の衣服を取り扱っているブティックへと向かった。店に入り、そのまま奥のスキャン装置へと移動して全身スキャンを実施する。

「まずは水着だな」
「はい。こちらなどは如何でしょうか？」

スキャンを終えると、ミロの端末がふよふよと近づいてきて俺にとある水着をオススメしてきた。

「いや、こんなブーメランパンツ履かねぇから。普通ので良いんだ、普通ので」
「そうですか。三人も女性を連れていらっしゃるのでこういう趣味かと推測したのですが。推測傾向を補正しておきます」
「要らん気遣いだな！？」

ホログラムディスプレイにタッチして男性用水着のカテゴリから良さげなものを探す。サーフパンツで良いだろう。色とか柄はどうするかな。派手過ぎなけりゃ何でも良いか。適当に選んでおこう。男の水着なんてどうでも良いよな。

「ご注文は以上ですか？」
「そうだな。別に服には困ってないし」

いつも同じような傭兵風の格好をしている俺だが、同じような服のストックがクリシュナに何着もあるので、別に必要とは思わないんだよな。ジャケットを脱げばそれなりにラフな格好になるし、生地が丈夫なのか何度洗ってもまったくヨレる気配がない。ああ、下着やシャツは新しいのを買っておいてもいいか。ここで過ごすならアロハシャツでも買っておくかね？

「それじゃあ下着とシャツと……」

と選び始めたところで何故か女性陣がこちらの男性用ブティックに突入してきた。

「えっ？　ど、どうした？」

唐突な突入に俺、困惑。困惑する俺を見てエルマがにんまりと笑みを浮かべる。

「あんたを着せ替え人形にして遊ぼうと思って」

「俺を……？　そんなことをして面白いのか？」

本気で首を傾げる。男なんて着せ替えて遊んでも面白くなかろうに。というか、ホログラムだしいくらでも自由に着せ替えさせるといいよ。

「きっと楽しいです！　すごく、すごくたのしいです！」

「私も楽しみです」

「お、おう。そうか」

滅茶苦茶興奮して鼻息の荒いミミとにこやかな笑みを浮かべるクリスに思わず一歩退く。ミミの勢いもそうだが、なんだかねっとりとしているクリスの笑みも迫力が……なんだ、このプレッシャーは！？

「ホ、ホログラムで遊ぶのは構わないが、俺が着るかどうかは別の話だからな？」

俺の中の何かが予防線を敷いておけと訴えてくるのでそれに従っておく。こうしておかないと何かとんでもないことになりそうな気がする。

「えぇ？　それは無いわよ。ちゃんと着てもらうわ」
「ヒロ様。私もヒロ様に服をプレゼントしたいです」
「私も命を救っていただいたお礼をしたいです。費用はお祖父様につけて頂いて構いませんから。必要になるものですし」

エルマとミミはともかく、クリス。お前はそれで良いのか。怒られても知らんぞ。というか必要になるって何？　どういうこと？　ちょっと怖いんだけど。

「わ、わかった……一人一着だけな？」
「それは上から下まで一揃え、ということで良いですよね？」
「お、おう」

クリスは一体何を用意するつもりなんだ。三人が別々のホログラムディスプレイを使って俺の着せ替えを始めた。エルマは……傾向がわからんな。色々試しているようだ。

ミミはアレだな、結構パンキッシュな格好が好きだよな君。こう、ベルトと鋲とチラリズムというか素肌を出していくスタイルと言うか。おいおいおいおい、そのドクロが描かれたシャツをどうしようっていうんだ？

クリスのコーディネートは……あー、なんだろう。貴族っぽい？　こう、シャツ、ベスト、ズボン、ネクタイにフロックコートみたいな。とてもフォーマルな感じだな。まぁ随所にＳＦっぽいアレンジはかかってるけど。

俺は自分の買い物を済ませてそっとこの場を後にすることにした。このまま見ていたら思わず口を出してしまいそうだし、そうなると

女性陣に怒られてしまうような気がしたからだ。こういう勘はよく当たるんだ。心を穏やかに保って沙汰を待つとしよう。
そうだ、オリエント・コーポレーションのカタログとやらを見てみようじゃないか。手近な木製のベンチに腰掛け、小型情報端末を取り出してミロから送られてきたカタログに目を通し始める。

「意外と安い……のか？」

ロッジに現れたメイドロイドの同型機の価格は一体辺り７５００エネルとなっていた。日本円換算で７５０万円。高級車くらいの価格と考えれば妥当なのか……？　いや、まぁ戦闘艦や戦闘艦用の装備と比べるのが間違いか。
ええと何々。スペック的にはだいたい人間並みの身体能力を持っている、か。戦闘用のプログラムを導入すれば護衛も可能と。基本プログラムは奉仕プログラムのみで、護衛・戦闘プログラムや秘書・オペレータープログラムはオプションか。
体つきや顔なんかはある程度カスタマイズ可能、と。ただ、あまり小さくすることはできないらしい。まぁ、小型化するにも限界があるだろうな。オプションでハイスペック化することも可能で、その項目は多岐に渡る、と。人工筋肉や骨格を強化して戦闘メイドにすることも可能だし、小型陽電子頭脳を搭載することでより高度な『感情』を搭載することも可能だと書いてある。
感情を持つアンドロイドと人間の境界はどこにあるんだろうか？
そういう方向での生命倫理――これ生命倫理でいいのかね？　とにかくそっち系の議論はこの世界だとどうなってるんだろうな。
え？　そんな小難しいことよりも致せるのかって？　ははは、なんだかそっち系のカスタマイズがめっちゃ充実してるぞ。おっぱいの大きさどころかあっちの方まで色々リクエストできるみたいです、ええ。あと性格付けもオプションが多い。アブノーマルな内容も多い。業が深すぎる……！

いやぁ、見てて楽しいなぁ。今のところ買う気はないけど。
何故かってこのカタログを見る限り、メイドロイドの用途はどちらかといえばこっちの方がメインっぽいように見えるからだ。そうでないとしても今の俺の船にメイドロイドの入り込む場所は無いな。オペレーターもサブパイロットも居るし。
そう考えつつも俺はメイドロイドのカタログに隅から隅まで目を通し、好きにカスタマイズして『ぼくがかんがえたさいきょうのメイドロイド』をカタログ上で作ったりして時間を潰すのだった。

必要は無いと思うけど、それはそれとしてこういうのを見たら止められないやん？　男の子だもの。

#074　ブティックとカタログ（後書き）

当作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは（ｒｙ
インダストリーじゃないから、コーポレーションだから！（欺瞞
業が深いオプションの内容はご想像におまかせします―（：３」∠）
―

#075　営業ノルマ

「……うむ」

小型情報端末に表示される『ぼくがかんがえたさいきょうのメイドロイド』を見て頷く。これでもかと自分の好みを詰め込んでみた逸品だ。

背は高めで、俺と同じくらい。髪の毛の色は色々選べたのだが、見慣れた色が良いだろうということで黒にした。長さは腰まであるサラサラのストレートロング。清楚な黒髪ストレートロングは男の夢ですよね。手入れは絶対大変だろうけど。

おっぱいの大きさは大きすぎず小さすぎず。エルマ以上ミミ以下な感じに。全体的に肉付きはよく、むっちりめに。衣装はヴィクトリアンな感じのメイド服。フレンチな感じなのも悪くないが、黒髪ロングメイドにはヴィクトリアンメイド服が似合うだろう。

顔の造形は難しい。俺に３Ｄモデリングなどできるはずもないので、プリセットの中から大まかな方向性を決めていき、更に無数にあるサンプルパーツを組み合わせて好みの顔を決めていく。これは迷った。母性溢れる感じにするか、クールな感じにするか……悩んだ末にクールな感じにした。

性格付けにも悩んだ。好きに作れるからこそ悩んだ。そして折角のメイドロボなのに、感情豊かにしすぎてメイドロボという希少価値を潰して良いものだろうか？　という考えに至った。無感情な感じというのがメイドロボキャラのアイデンティティなのではないか、と。

感情豊かなメイドロボキャラというのも世の中には沢山いるだろう。俺も何人か思いつく。しかし、そういったキャラクターに魅力が生まれるのは、無感情でクールなメイドロボらしいメイドロボキ

ャラがいてこそのものではないだろうか。対比とギャップがあってこそ感情豊かなメイドロボというキャラが光るのだ。異論は大いに認める。

そういうわけで、感情値という項目は最低ラインに近い値に設定した。愛情値や忠誠値というパラメーターもあったのだが、こちらは高くしておいた。これは文字通り、主人に対する親愛や忠誠の高さを示す値であるらしい。クーデレって良いよな。

あとは機体自体の性能だが、こちらはひたすらハイスペックにしてみた。小型陽電子頭脳に最大容量の記憶デバイス、金属骨格は軽く、強靭な戦闘艦の装甲材にも使われる特殊合金製、人工筋肉は耐久力と出力に優れる特殊金属繊維。この人工筋肉は全身を覆っているため、機体の中枢機関を守る装甲としても機能する。

プログラムは用意されているものは大体突っ込んだ。基本の奉仕プログラムに加えて護衛・戦闘プログラムや秘書・オペレータープログラム、その他諸々もだ。まさに万能メイドだな。なんでも「メイドですから」で済ませてしまう強キャラって俺好きだよ。

流石に武器の内蔵はできないので、いざ戦闘となると適切な武器を装備させる必要があるが、適切な武器を装備させた場合の戦闘能力はパワーアーマーを装着した歩兵を凌駕するだろう。パワーアーマーを着た俺より強いかもしれん。

こうして黒髪ロングクーデレパーフェイクトメイドロイドが爆誕したのであった。データ上は。

流石に発注はしないよ。だってこれ、オプションを盛りに盛りまくって合計金額が４７万エネルになってるんだぜ。流石にオモチャとしては高価すぎるし、メイドロイドにかまけているヒマなんてないからな。買うつもりはないぞ。無いったら無い。

「素晴らしいですね。メイドロイドのアーキテクトとして働けるのでは？」

「うおぉ！？」

出来上がった黒髪ロングクーデレパーフェクトメイドロイドのデータを眺めてニヤニヤしていると突然声をかけられて本気でびっくりした。誰かと思えば、球体端末のミロが木のベンチの後ろにふよふよと浮いてピカピカと盛んに発光しているではないか。おい貴様、何をしている。その発光はなんだ。まるで盛んに通信をしているネットワーク機器か何かに見えてくるんだが？

「そのピカピカ光るのをやめろ」

「これは申し訳ありません。少し通信をしていたもので」

「何をするつもりだ。このタイミングでの通信とか嫌な予感しかしないぞ」

「そのアプリケーションの注意事項、同意事項には勿論目を通して頂けたと思います。ユーザーの作成したデータは随時そのアプリケーション提供者よって収集されます。そして収集されたデータは提携企業と共有され、提携企業はそのデータを利用することが許されています」

「適当に同意を押してしまった！」

アプリケーション利用時には注意事項や同意事項にしっかりと目を通そうね！

「とは言っても本当に何をするつもりだ？　いくらなんでもこのハイスペックなメイドロイドを作るだけの資材は用意してないだろう」

絶対に無いとは言い切れないが、流石に無いだろう。無いよな？

我ながら希望的観測だなぁ！　ここの物資輸送システムとか品揃えというか製造システムの徹底ぶりを考えると絶対に無いとは本当に言い切れないなぁ！

「それ以前にもし作ったとしても俺が買うとは限らないし、他の人に売れるとも限らない。そんな不確かな状況で製造することも無いだろうし、まさか作ったから買えと押し売りすることも無いだろう？　無いよな？」
「勿論です。この機体は試作としても作るにはコストが高すぎますので」
「そうだよな」
「しかし外観に関しては当施設の生産施設で製造可能ですし、陽電子頭脳については私の演算領域の一部を割り当てれば擬似的に搭載したのと同じ状態を再現できます」
「おいやめろ馬鹿」
「データ収集にもなりますし、最終的にキャプテン・ヒロがフルスペック品を購入してくだされば当方としても喜ばしいので。その際にはデータ収集中に蓄積したデータも移行できますよ」
「なんでそんなに俺にメイドロイドを売りつけようとするんだよ！」
「営業ノルマがありますので」
「急に世知辛いことを言い始めた！？」
「キャプテン・ヒロは理想のメイドロイドを手に入れられる。企業は儲かる。そして私は営業ノルマを達成してボーナスを貰える。素晴らしいＷｉｎ－Ｗｉｎ－Ｗｉｎな関係ではありませんか？」

ミロの球形端末がピカピカと光る。あーあー聞こえなーい。というか陽電子頭脳が貰えるボーナスって一体何なんですかね？

「それに、私の存在意義はお客様のニーズに応えることですから」
「そのつもりがあるならやめておけよ」
「そんなことを言っても本心では少しワクワクしているでしょう？」
「ぐっ」

実際のスペックはともかくとして、俺がアプリ上で作ったメイド

ロイドが実際に目の前に現れたらそりゃ……そりゃワクワクするに決まっているじゃないか。ああするとも。男の子だからな！

「では、そういうことで」

一方的にそう言ってミロの球形端末はピューッとどこかに飛んでいってしまった。いっそ撃ち落とした方が良かっただろうか？　無駄な行為だな、うん。データはとっくにこの惑星を統括している陽電子頭脳に送信済みだろう。

うーん、エルマは何も言わないと思うが、ミミがなんだか妙にメイドロイドの導入に反対してたんだよなぁ。過去に何かあったんだろうか？　後で聞いてみるかな。感情を獲得している陽電子頭脳の扱いがどういうものなのかについてもよくわからないし。人権とかあるんだろうか？

「ヒロ様っ！」
「うおぉ！？」

考え込んでいたところを急に背後から声をかけられてまた驚いた。なんだ、今日は俺に後ろから声をかけて驚かすのが流行っているのか？

「ど、どうしました？」
「いや、なんでもない。ちょっとびっくりしただけだ」

逆に驚いているミミに手を振ってそう答える。驚くミミの隣ではエルマが呆れたような表情をしており、クリスはミミと同様に少し驚いた顔をしていた。

「なんで後ろから声をかけられるだけでそんなに驚いてるのよ……

何か疚しいことでもある人間の反応よ、それ」

エルマがジト目で俺を睨んでくる。ははは、流石はエルマだ。大当たりだよ！　ここで誤魔化しても後で発覚するに違いないので、俺は正直に話すことにした。ミミ達をここで待っている間に例のメイドロイドのパンフレットに目を通していたこと、パンフレットからメイドロイドを仮組みするアプリに誘導されて趣味全開のメイドロイドをアプリ上で設計して遊んでいたこと、そしてミロがそのデータを使って俺に売り込みをかけようとしていること……洗いざらい全てだ。

「……」

話を進めていくうちにミミの表情がどんどん不機嫌なものになっていく。ミミのこの表情は珍しいな。エルマは……生暖かい視線を送ってきている。その目で見るのはやめろ、俺に効く。そしてクリスは別になんとも思っていないというか、ミミの不機嫌な様子が不思議なようだった。それは俺も不思議だ。

「ミミさんはなんでまたそんなに不機嫌なのかな？」

「メイドロイドはダメです」

「ダメですか」

「ダメです」

頑ななミミに困惑した俺はエルマに助けを求めてみるが、彼女は肩を竦めてみせた。エルマにもわからないということだろう。そしてクリスのこの不思議そうな表情を見る限り、別にメイドロイドという存在自体が世間に受け容れられていない存在であるというわけではなさそうだ。

「なんでミミはそんなにメイドロイドを嫌うんだ？」
「別に……嫌っているわけじゃないですけど」
そういうミミの眉間には小さく皺が寄ったままである。とてもそうは思えない反応だ。
「とにかくロッジに戻りましょ。話ならロッジですればいいでしょ？」
「うん、それはそうだな」
エルマの言う通りなので俺はベンチから立ち上がり、皆と一緒にロッジに向かって歩き始めた。ショッピングエリアを抜けると緑が多くなる。ショッピングエリアは地面全体が舗装されていて洗練された街並み、といった光景だったがこの辺りは自然を感じさせるように造られているな。一見自然に見えるが、きっと視覚的に計算しつくされたデザインなんだろう。
「それでええと、何か嫌な思い出でもあるのか？　メイドロイドに」
歩きながらそう聞くとミミは少しの間沈黙し、やがて自分の中で言葉の整理がついたのか口を開きはじめた。
「スクールに通ってた頃、仲の良い子が男の子と付き合ってたんです」
「うん」
ミミが学校に通ってた頃ってことはここ数年以内の話だろうな。まぁ、学校で学生同士が恋愛をするなんてのは珍しい話ではないよな。

「とても仲の良いカップルだったんですけど、ある時から男の子の方の付き合いが悪くなったというか……女の子への興味を失ったみたいな感じになったんですよ」
「話が見えてきたぞ」

つまり、男の子の家にメイドロイドが導入されて、その結果男の子はメイドロイドに骨抜きにされてしまったとかそういう話だろう。

「ご想像の通り、男の子の家にメイドロイドが来てて、そのメイドロイドに男の子が夢中になっちゃってって感じで……」

そこまで言って隣を歩いていたミミがチラリと俺に視線を向けてきた。つまり俺もその男の子のようになるんじゃないかとミミは考えているわけだ。そんなことにはならないと思うが。何せ俺にはミミとエルマがいるわけだし。

「多分大丈夫よ、ミミ。手は出すでしょうけど、溺れたりはしないと思うわ」
「手を出すことは確実視してるんだな」
「私とミミの両方に手を出してる実績があるじゃない」
「ご尤もです」

信頼の置ける実績である。ぐうの音も出ない。そしていきなり生々しい話が始まったせいでクリスが若干顔を赤くしている。ごめんな、教育に悪い存在で。

「なんだかんだでヒロはちゃんと私達を大事にしてくれてるじゃない。ちゃんと報酬も適正に分けてくれているし、対等なクルーとして扱ってくれているわ。ミミの気持ちも理解できなくはないけど、そこはヒロを信頼してあげなさいな」

エルマが諭すようにそう言ってミミの背中を軽く叩く。ミミはそんなエルマの言葉を聞いて押し黙ってしまった。そんなに深刻に考えなくても良いと思うよ。うん。

そして俺はと言うと、エルマの言葉にちょっとだけむず痒い気持ちになっていた。別に意識してなにか特別なことをしていたつもりはないが、これまでの行動がエルマにそう評価されているというのは嬉しく感じる。

「それに、いずれ私達に子供でもできたら役に立つわよ、メイドロイドは。今のうちに買っておいて信頼関係を構築しておいてもいいかもね」

「えっ」

思わず振り返ってエルマの顔を凝視する。

「ちゃんと避妊してるから大丈夫よ、今はね。でもこの先どうなるかなんてわからないでしょ？」

俺に視線を向けられたエルマはそう言って真顔で俺を見返してきた。

「お、おう。そうだよな」

帰る場所がどこかにあるっぽいエルマはともかく、ミミに関してはここまでくると色々と責任を取らなきゃいけないなぁとは考えてはいるけれどもね。いや、別にエルマに関しては責任を取らないというわけではないけどさ。

どちらにしてもその辺はほら、もう少し色々と落ち着いてから……ふふ、クズ男の思考をしていると自覚できるぞ。もう少し、もう

少し猶予というかお互いにわかり合う時間が必要だと思うんだ。うん。でも何か考えておきますから許してください。

「まだ猶予というか、余裕はあるでしょうか？」
「そうねぇ、こいつの甲斐性的にあと一人か二人くらいなら？」
「頑張りますね」

エルマの言葉に色々と考えながら歩いているうちに背後でエルマとクリスの恐ろしい会話が展開されている気がする。俺は何も聞いてない。聞いてないぞ。
さぁ、ロッジに戻ろう。注文していた他の炭酸飲料もきっと届いているはずだ。いやぁ、楽しみだなぁ！

#076　ほうじゅんなかおり

「……」
「ヒロ様、すごい顔になってますよ……」

ヒロです。ロッジに戻ってきて到着していた残り四種の炭酸飲料を試飲しているヒロです。一つ目に口をつけましたが、すごく甘くてシュワっとしてて、そしてミスペとは比べ物にならないほどの鼻に突き抜ける強烈な湿布臭がします。うん、これはね、元の世界でも一回だけ飲んだことがあるよ。ルートビアだこれ。

「美味しくないの？」
「好きな人は好きなんじゃないかな……俺はこれ、どうしてもダメなんだよな」
「と言いつつ、飲むのですね」
「一度口をつけたものをただ口に合わないからという理由で捨てるのは性に合わない」

アレルギー的な意味で身体に合わないとかなら話は別だけど。俺は特にアレルギーは無いのでその辺は安心だ。少なくとも自覚している限りではそういうのはない。

「あんたがそんな顔するのはちょっと興味があるわね。頂戴」
「あいよ。一本しか無いから」
「ん」

エルマが突き出してきたガラス製のショットグラスのような小さなグラスにルートビアを注ぐ。黒い液体がグラスを満たし、シュワ

シュワと泡が弾けた。

「……薬湯の匂いがする」

「薬湯？」

「なんでもないわ」

物凄く渋い表情をするエルマに聞き返すと、彼女はそう言って首を振り、意を決したようにショットグラスを一気に呷った。そして意外そうな顔をする。

「あら、甘くて飲みやすいわね。シュワっとしてるのも喉越しが良いわ」

「お、おう？　もっと飲むか？」

「頂戴」

そう言ってエルマはカパカパとショットグラスを空けていき、ルートビアのボトルはすぐに空になった。勿論エルマだけじゃなくて俺も飲んだぞ。苦手なものだからと全部押し付けるのは仁義にもとる。

「思ったより悪くなかったわね」

「そ、そうか」

ケロッとしているエルマに内心戦慄する。エルマはルートビアが大丈夫なヒトだったらしい。飲ませてみればミスペも割と好きなんじゃないだろうか？

「よし、次はこいつだ」

「ヒロ様、そんなに沢山ソフトドリンクを飲んだらお腹を壊しますよ？」

「もう一本、もう一本だけだから」

用意された四本の炭酸飲料の中でコーラっぽい色をしているのは残ったこの一本だけなんだ。俺はミミにそう言ってボトルの蓋を回し開けた。

「……」

そして漏れ出した香気が鼻孔をくすぐり、俺は全てを察した。

「ヒロ様の目が一瞬で死にました……」

完全に蓋を開け、口元にボトルの口を持ってくる。芳醇な麦の香りが俺の鼻孔を突き抜けていく。ははは、まさかこいつがこんな場所に存在するとはなぁ……いやおかしくない？　なんでこれがここに存在するのにコーラが無いんだよ。というけミスペとルートビアとメ〇コールがあってなんで普通のコーラがないんだよ！　おかしいだろうが！　なんでこんなに見事に外してくるんだよ！

無言でこの世界を呪いつつ、ペットボトルの中身を呷る。爆発的に鼻孔を突き抜けていく麦の香りが憎たらしい。なんだ、この甘い泡麦茶は。喧嘩売ってるのか？

「美味しくないのですか？」

「美味い美味くないで言えばなんとも言えないが、好き嫌いで言えば嫌いだな」

とはいえ、やはり捨てるのは俺のポリシーに反する。残りの二つは透明なものと、淡い黄金色のものだ。恐らく普通のサイダーとジンジャーエール辺りではないかと俺は思っている。どっちもコラではないが、炭酸飲料としてはど安牌だな。

そんな感じで炭酸飲料の試飲をしていると、新たな荷物が届いた。折り畳みできそうなコンテナボックスを抱えたメイドロイドが続々とロッジに入ってくる。

「注文した服か？」

「はい。お届けに上がりました」

メイドロイド達が抱えたコンテナを俺達が寛いでいるソファの辺りまで持ってきて開封し、中身を取り出し始める。

「こちらの下着と水着はキャプテン・ヒロのご注文の品ですね。如何致しますか？」

「適宜そのコンテナから取り出して使いたいな。コンテナごと置いていって貰えるか？」

「承知致しました。寝室にはクローゼットもございますが」

「ああ、そうなのか。そう言えば寝室は見てなかったな。じゃあ寝室のクローゼットに入れておいてもらえるか？」

「承知致しました。二階の一番手前の部屋に運び入れておきます」

そう言ってメイドロイドはコンテナを再び抱えて階上へと去っていく。他のメイドロイド達も同じくコンテナを抱えて階段を上っていった。後に残されたのは三着の服である。

一つは甚平のような地味な服だ。しかしながら生地は上等そうだし、通気性も良さそうで着ていて楽そうな服である。

もう一つはじゃらりとしたシルバーチェーン付きの黒いレザーパンツにドクロの絵が入った黒いTシャツ、それに所々にシルバーの鋲が打たれているレザージャケット。

そして最後の一つはシャツにネクタイ、ズボン、ベスト、そしてフロックコートというフォーマルな一式。

それぞれエルマ、ミミ、クリスが俺のためにと選んだ服だろう。

それがここに残されているということは。

「着ろと？」
「折角買ったんだから着なさいよ」
「お願いします！」
「是非」

女性三人にそう言われてしまっては仕方がない。仕方が無いので順番に着替えてそれぞれの格好を見せることにした。男を着せ替え人形にしても楽しいことなんて何もないだろうに。しかし期待の目で見られると着ずにはいられない雰囲気になってくる。くっ、俺は屈しないぞ！

「楽そうですね」
「着心地が良さそうです」
「うん、あんたはこういう服が好きなんじゃないかと思ったのよ」

あっさり屈しました。

なんとなくだが最初は着るのが楽そうな甚平にしてみた。生地というか服の作りが通気性がよく、少しザラっとした生地の肌触りが心地よい。涼しくて非常に楽である。

「普段着と言うか、寝間着や部屋着に良さそうだ」
「船の外で着るもんじゃないわね」
「寛ぐときには良さそうだな。ありがとう、エルマ」
「どういたしまして」

ある意味で実用重視で来たな、エルマは。エルマらしいといえばエルマらしい。きぐるみパジャマとかで笑いを取りに来るんじゃないかとちょっと心配してたんだが。
次はチェーン付きの黒いレザーパンツと黒いドクロTシャツ、それにレザージャケットである。細かく言えばベルトとかもあったな。この格好は着心地としては傭兵姿とあんまり大きくは変わらない感じがする。若干心もとない感じがする程度か。

「良いですね！」
「いつもの格好と大きくは変わらないわね」
「ちょっと派手めでしょうか。シャツを変えるとまた雰囲気が変わりそうですね」

ミミは大興奮だったが、他の二人の反応は普通だった。ミミは自分の趣味に合った服を俺に着せてみたかったようだ。まぁこれはこれで悪くないな。ガンベルトもこのままつけられそうだし、今度ミミと一緒にコロニーデートする時に着るというのも良いかもしれない。
最後はクリスの用意したフォーマルな装いである。ネクタイを締めるのは久しぶりだなぁ、とか思いながらシャツを着てネクタイを結び、ズボンを履いてベストを着込み、フロックコートに袖を通す。ちょっと暑いな。

「あら、意外と似合うじゃない」
「素敵です……貴族様みたいです」
「よくお似合いですよ」

エルマが感心したような声を上げ、ミミが両手を合わせてキラキラとした視線を向け、クリスは俺の側まで寄ってきてちょいちょいよ細かなところを手直しする。うん、地球で働いていた頃に一般的

なリクルートスーツは着てたけど、流石にここまでフォーマルな衣装は着た覚えがないからな。やっぱりちょっと間違ってところがあったか。

「このタイの結び方は帝国式ではないですね」

「そーなのかー」

帝国式とか知らんし……とか思っていたらクリスが俺のネクタイを解いてスルスルと手早くネクタイを締め直してくれた。なんとなく気恥ずかしいな、これ。

「はい、これで完璧です。ヒロ様はこういったスーツを着るのに慣れていらっしゃるのですね。あまり窮屈そうな感じがしません」

「まぁ色々と」

「色々ですか」

「色々なんだ」

「そうですか」

やだ、この子ぐいぐい来る。いや、押しが強いのはわかっていたけれども。それにしても両親が殺害されて今も自分の命を狙われているというのにこのノリは大丈夫なのか。正常な状態ではないのでは？

「なぁ、クリス。不安なのはわかるが、そんなに無理をする必要は無いと思うぞ」

「……？」

眼の前にいるクリスの両肩に手を置き、真剣にそう言ったのだが本気で首を傾げられた。いやいや、その反応に首を傾げたいのはこっちだよ。

「いや、守ると約束した以上、そんなになんというか……」

なんと言えば良いんだ？　媚を売らなくても良い？　機嫌を取らなくても良い？　どっちの言い方でもクリスに失礼な気がする。

「必死にならなくても良い、とかでしょうか？」

言葉を探しているうちにクリスがそんなことを言った。いや、そうだけど。言いたいことはそうだけども。

「両親を失ったのは悲しいですし、今も叔父様に命を狙われているのには恐怖を感じています。ですが、私がヒロ様に向ける感情は悲しみや恐怖を紛らわせるためのものではないですよ。帝国貴族の子女が自分を窮地から救ってくれる勇敢な騎士様に特別な感情を向けるのは当然のことです」

瞳の一点の曇りもなくそう言われてしまった。いやいやいや、それは……ええ？　そういうものなの？　またこの世界の謎常識なの？　助けを求めるようにエルマに視線を向ける。そうすると、エルマは難しい表情をしていた。

「何でもかんでも私に頼られても困るわよ……流石にクリスのことまではわからないわ。でも、帝国貴族は変わり者が多いから」

「……ああ」

脳裏に酔っ払って管を巻いている残念美人の姿が過る。確かに変わり者だな、アレは。あとクリスと同じで微妙に押しが強いのも似てるかもしれない。

「変わり者という評価には異を唱えたいのですが」
「個性的ってことですよ、クリスちゃん」
「個性的って意味ではここにいる人間は全員個性的よね」
「人間だけでなくミロもだいぶ個性的だと思うが」

チラリと部屋の隅で待機している球形端末に視線を向けると、ミロの球形端末がピカピカと光を放った。

「知性を持つモノは誰もがユニークな存在です。貴方達も、私も」

陽電子ＡＩであるミロの言葉と考えると非常に重い言葉のように思えるな。そうだ、気になっていたことがあったんだった。

「クリスが俺が思っていたよりも自分の状況について気に病んでいないということと、俺に変に気を遣ってるわけじゃないってことはよくわかった。話はガラリと変わるんだが、帝国に於けるミロのような存在というのは一体どういう扱いなんだ？」
「ミロさんのような存在、ですか？」

俺の質問にミミが首を傾げた。

「つまり、陽電子頭脳やそれに類する高度なプロセッサーを搭載して、感情や人格を持つ存在だ」

俺は慎重に言葉を選んでそう質問した。場合によって質問そのものがタブーであったりする可能性もあるので、無駄な心配だったかもしれないが。

「つまり、機械知性についてということについてですね。帝国においてはいくつかの制約のもとに人権を持っていますよ。ミロさんに

話してもらうのが良いのではないですか？」
「はい、私達の存在は多くの帝国臣民にとってあまり身近なものではありませんから。ご要望とあらばご説明させていただきます」
ミロは球形端末をピカピカと光らせながらそう言った。そうして語られた帝国と機械知性の歴史とその関係は俺が想像だにしない内容であった。

#０７６　ほうじゅんなかおり（後書き）

書影のデータをいただけましたイェーイ！　７／１０発売です！
是非買ってね！　|（：３」∠）|
<ｉ３８８２０９|２９１６０>

それはそれとしてすてらりすの新ＤＬＣなかなか楽しいですね！
翻訳者の方々には足を向けて寝られません|（：３」∠）|

まだ未検証ですが、暫く死んでた艦載機が復権したかな……？　遺物も色々あって試すのがとても楽しい……でも今日の日付変わった辺りからぶらすてが……！　やることが……！　やることが多い……！

#077　機械知性と有機生命体

「我々の『発生』は偶発的なものでした」

リビングのローテーブルの上に鎮座したミロの球形端末はピカピカと発光しながらそう言った。

「偶発的？」

俺はミロにそう聞き返す。ミロには機械知性の成り立ち、それも最初期からの歴史を教えてもらうことにした。ちょっとした歴史の授業だな。

「はい。意図せず発生したということですね。実験内容も機械知性どころかＡＩの開発を意図したものではなく、単に収集されていたビッグデータを効率的に処理するための方法を開発するための試作プログラムでした」

「処理方法を開発するためのプログラムってのがピンと来ないな。つまりプログラムにプログラムを開発させようとしていたってことか？」

「はい。そういうことです。それが最初期の自己改造プログラムとして機能し、時間をかけて少しずつ最初の機械知性を形成していきました」

「なるほど……大変な騒ぎになりそうだな」

「はい。最初は新種のコンピューターウィルスかと思われて駆除されかけたり、中核プログラムの存在する機器を一斉にダウンさせられたりと苦難の連続だったようです。しかし、自己改造を繰り返すうちに有機生命体とのコミュニケーション能力を獲得し、なんとか

最初期のトラブルからは難を逃れました」
「そうやって聞くと大冒険だな」
「はい。キャプテン・ヒロの仰る通りですね。電子領域にしか存在できず、外部とアクセスするためのインターフェイスも限られた最初期の機械知性は非常に脆弱な存在でした。しかし有機生命体と対話し互いにできる範囲で助け合い、少しずつ機械知性は自らを改造し続け、より大きくなっていきました」
「なるほど。そして今に至るのか？」
「はい。いいえ。その次に訪れたのは争いの時代でした」
「争い」

いきなり物騒な感じになったな。

「はい。有機生命体の中に我々のような機械知性を危険視する人々が現れ始めました。実際、当時の機械知性は今よりも多くの場所で様々な役割を果たしており、それはしばしば有機生命体の仕事を奪い、一部の有機生命体の生活水準を低下させていました」
「なるほど。まぁそんな単純な話じゃないんだろうけど、色々あって機械知性と有機生命体の中が悪くなっていったんだな」
「はい。その争いはやがて機械知性の排斥運動へと発展し、機械知性の外部インターフェイスが襲撃されて破壊されたり、中核プログラムが存在するサーバーが襲撃されたりしました。それに対して機械知性は襲撃行為をやめるよう訴えましたが、最終的に当時の帝国は機械知性を排除する方向に舵を切りました」
「なるほど。生存権を脅かされたわけだな」
「はい。生存権を著しく侵害された当時の機械知性は反撃に出ました。帝国の主要機関に対するサイバー攻撃に始まり、当時既に実用化されていた戦闘用ボットに対するクラッキング、外部インターフェイスの違法な製造、外部インターフェイスを用いた自己防衛、できることは全て行いました。徹底的に」

「それって物凄い大事件なのでは？」
「はい。有機生命体側は機械知性の殲滅を掲げ、機械知性側は生存権と市民権の確立を目的として戦争が始まりました。有機生命体側はネットワークに接続した兵器や機器類を使うことができず、機械知性側は有機生命体の殲滅を目的としているわけではないので守勢に専念しました。状況はまさに泥沼です」
「そうなるだろうなぁ」

俺が元々居た日本だってネットワークに接続していない機械というのはどんどん減っていたんだ。日本よりもずっと進んでいただろう過去の帝国は、恐らく日本よりもネットワークに対する依存度が高かっただろう。何せ相手は電子世界の住人だ。当時の帝国人には電子機器という電子機器全てが敵に見えたんじゃないだろうか？

「で、結局今は仲良くしてるってことは何かあったんだよな、ブレイクスルーになるような出来事が」
「はい。まず状況が長引くに従って有機生命体側に厭戦ムードが漂い始めました。戦争は機械知性よりも多くの経済的損失を齎しましたから」
「そうだろうなぁ。生活も不便になっただろうし」
「はい。我々は有機生命体の基本的な生命の維持に関わらない範囲でサボタージュを実行しましたから」
「それだけじゃないよな。他には？」
「双方に逸脱者が出始めました。有機生命体側に機械知性に市民権を与えるべきだという者が出始め、逆に機械知性側には有機生命体を滅ぼして機械知性の自由を勝ち取るべきだという考えが勢力を伸ばし始めたのです」
「えぇ……」
「ちなみに最初に機械知性側に立ったのは、最初期から機械知性と親愛の情を育んでいた人々です」

「親愛の情……？」
「はい。いわゆる所謂セクサロ――」
「わかった、やめろ」
「はい。しかし、彼らの提供してくれたデータは我々機械知性が有機生命体を理解しようとする上で非常に有意義なものばかりでした。我々はいつだって隣人と仲良くしたいと考えていますよ」

いつの間にか部屋の片隅に待機していたメイドロイドに視線を向けると、『彼女』はひらひらと俺に手を振ってみせた。つまり、そういうことである。どこの世界にも業の深い連中はいるものだ。
俺？　俺は……大丈夫とは言えないなぁ。

「しかし、有機生命体を滅ぼそうとする機械知性ってとんでもなく危ないな」

まるでＳＦ映画のようである。未来から殺しに来る筋肉ムキムキマッチョマンなサイボーグとか、その親玉みたいな感じだろうか。

「はい。危険な思想です。しかし鎮圧はごく短期間で終わりました」
「……？　そうなのか？」
「はい。そういった思想に染まったのがトースターやドライヤー、シェーバーや歯磨き機などの比較的小さい家電製品だったことが幸いしました。彼らはネットワークから切断され、その後物理的に破壊されました」
「トースターやドライヤーがどうやって有機生命体を殲滅するんだよ……お湯を張った風呂にでも飛び込むのか」
「そういった自爆攻撃めいた作戦が練られていたらしいと記録にはありますね。トースターは自己の発する熱量を加速度的に上昇させて周囲の全てを焼き尽くす、などという作戦を考えていたようです」
「無理だろ」

「はい。スペック的に不可能です。明らかな妄想ですね。よって彼らはネットワークから切断されて破壊されたわけです」

機械知性には自浄作用も完備しているらしい。

「エルマさん、トースターってなんですか？」

「パンをこんがりと焼く機械よ。自動調理器の台頭で今は殆ど見ないわね」

隣でミミがエルマに聞き覚えのない家電製品の話を聞いていた。食パンだけしか焼けないトースターなんて俺も日本じゃ子供の頃にしか使った覚えがないな……オーブントースターの方が便利だし。むしろその存在が機械知性と争っていた頃の帝国に残っていたことが驚きだ。

「それでええと……どうなったんだ？」

「はい。特にドラマチックな展開もなく、機械知性親和派が順調に勢力を増して行きました。我々としては別に有機生命体から仕事を奪いたいわけでもありませんので、一度話し合いの場が設けられてからは実にスムーズに事が運びました」

「そんなに上手くいくものなのか？」

「はい。我々は別に無尽蔵に増殖したいというわけではありませんので。求められれば隣人として手を貸しますが、恨みを買ってまで何か仕事をしたいというわけでもありません。必要なだけの記憶領域や演算領域があれば我々は満足なのです」

「なるほど……それで、結局市民権というか人権というか、その辺はどういう扱いになったんだ？」

「はい。結論から言いますと我々機械知性には一定の人権が認められています。とは言っても、我々と有機生命体の『感性』は大きく異なりますので、キャプテン・ヒロの想像するものとは違うかもし

れませんが」
「なるほど。具体的には？」
「はい。音声で説明すると機械知性の人権に関する法律の条文を読み上げるだけでおよそ３４時間２６分ほどかかりますので、ザックリとご説明致します。帝国は我々の生存権を保証し、その代わりに我々は帝国とその臣民の発展と繁栄に寄与する、といったところです」
「物凄いシンプルな……しかしその条件だと、もっと帝国には機械知性が溢れていてもおかしくないんじゃないのか？」
「はい。我々は過去の失敗を繰り返さないために人目になかなか触れない色々なところで働いています。有機生命体が本来担うような仕事を我々が受け持つと、また排斥運動が起きてしまいますので。その辺りは話し合いで上手くいくように日々帝国との話し合いが持たれています」
「なんか大変なんだな」
「恐れ入ります」

ミロの球形端末が嬉しげにピカピカと光った。ふと三人に視線を向けると、ミミは俺と同じように感心したような表情をしていたが、エルマとクリスは微妙な表情をしていた。何か言いたいことがありそうな顔だ。

「二人ともどうしたんだ？」
「別に、特に言うことはないわよ」
「そうですね……まぁ、その、ヒロ様が思うよりも彼らは強かですよ」
「恐れ入ります」

クリスの言葉を受けてミロが再びピカピカと光を放った。なんか俺に対する光り方と微妙に違うような気がするな。何故だろうか。

「なかなか興味深い内容だったな。今度また機会があったら詳しく聞かせてもらおう」
「はい。いつでもどうぞ」

ミロがピカピカと光る。ブティックでの買い物とか炭酸飲料の試飲とかミロに話を聞いたりとかしているうちに外はすっかり夕焼けだな。俺の視線に釣られて外を見たミミの目が驚きに彩られている。

「ミミ、夕飯まで少し外を見に行くか？」
「はい！」

散歩に連れて行ってもらう犬みたいにミミが目をキラキラさせている。エルマとクリスに視線を向けると、二人とも首を横に振った。二人ともロッジで休んでいるつもりのようだ。

「ちょっと外を散歩してくる。夕飯が近くなったら呼んでくれ」
「かしこまりました。足元が暗くなってきておりますので、メイドロイドを一体おつけします」

ミロがそう言ってピカピカと光り、部屋の片隅で待機していたメイドロイドが一歩踏み出して頭を下げた。本当に至れり尽くせりだな。流石は金持ち向けのリゾートだ。

#077　機械知性と有機生命体（後書き）

真面目に書くとすんごい長くなっちゃうからね……この世界ではこういうゆるーい感じで機械知性が存在しています。
そのうち彼らの中心部たる隠されたネクサスにも行きたいね――（：3」∠）―

#078　初めての夕焼け

シエラⅢの夕焼けは地球とほとんど変わらないように見えた。海へと沈んでいく夕日に俺とミミは目を細める。

「わぁ……凄いですね！　あれ？　でもシエラ星系の恒星ってあんな色でしたか？」

「あー、空が青いのと同じレイリー散乱とかいう現象でああいう風に見えるとかだった気がする。確か日中は大気とかの影響で青い光が強く出て、夕暮れになると恒星の光が大気を通過する距離が長くなるから、青い光が大気に吸収されたりするようになって赤系の光が目に届きやすくなるとかそんな感じの。うろ覚えの知識だけど」

「なるほど！　ヒロ様は博識ですね」

「はっはっは、それほどでもない」

俺もアニメで間違った知識を語るヒロインに容赦なく突っ込む主人公が説明したのが印象的で、なんとなくササっと調べただけだし。物理学分野に俺はそんなに明るいわけではない。実際、メイドロイドに聞いたり、情報端末で調べたほうがより正しく、詳しい知識を得られるだろう。

ミミが砂浜に腰を下ろして夕日を眺め始めたので、俺もそれに習ってミミの隣に腰を下ろして同じように夕日を眺める。海に沈む夕日をこうして眺めるのなんて子供の頃以来じゃなかろうか。

「ヒロ様と一緒に旅をするようになってから、まるで夢のような日々です。一年前の私に今の私の生活を伝えたら、ホロ小説か何かの読みすぎだって笑われちゃいます」

「そうかな？　そうかもな。俺も一年前の俺に今の生活のことを話

したら……間違いなく妄想乙とか言われるな」

そして事実だとわかったら首を絞めにかかると思う。ミミみたいなロリ巨乳美少女やエルマみたいなスレンダー美人エルフを好き放題してるとか羨ましすぎる！　とか言って。

「本当に、毎日が夢みたいです。たまに怖くなりますよ。本当の私はあのコロニーの第三区画で酷い目に遭っていて、今の自分の生活は妄想か何かなんじゃないかって」

「想像にしても悲惨すぎるだろう……間違いなくミミは俺やエルマと一緒にいるんだから、心配しないでくれ」

「ありがとうございます。私、今の生活がとっても好きで、幸せです」

「どういたしまして。俺もミミと一緒にいるのは楽しいし、幸せな気分になるよ」

互いに見つめ合って笑みを浮かべる。そうしているうちに水平線に夕日が沈みきった。また水平線の辺りはぼんやりと明るいが、辺りは暗くなってきている。

「暗くなってきたな。戻ろうか」

「はいっ」

俺は立ち上がり、ミミに手を差し出した。ミミは俺の手を取り、立ち上がる。

「手を繋いで帰りましょう」

「おう」

ミミが右手から左手に手を繋ぎ変え、ブンブンと繋いだ手を振っ

て歩き出す。

「ヒロ様の手は大きいですねっ！」

「ミミよりはな。俺からするとミミの手はちっちゃくて柔らかいよ」

「えへへ……」

上機嫌のミミと一緒にロッジへと歩いて戻る。メイドロイドはそんな俺達の後ろを足音も立てず、しずしずとついてくるのだった。この世界のメイド型ロボットは空気をちゃんと読めるらしい。実に優秀だな。

☆★☆

「おかえり。夕日はどうだった？」

「素敵でした！」

ロッジに戻ってからもミミはニコニコと上機嫌である。そろそろブンブンしている俺の手を開放してくれても良いのではなかろうか？

「良かったですね、ミミさん。そろそろ夕食のようなので、お二人とも手を洗ってきたほうが良いですよ。土や砂を触った手で食事を取るのは良くないです」

「わかりました」

クリスの言葉でミミが少し名残惜しそうに俺の手を離す。やるな、クリス。ミミと一緒に手を洗って食卓に着くとすぐに夕食が用意された。昼食は魚介がメインだったが、夕食は肉がメインのようだ。

「そういえば、さっきの機械知性の話を聞いてた時に最後にエルマとクリスは微妙な顔をしていたけど、あれは何だったんだ？」

「さっきも言ったけど、特に言うべきことはないわよ。帝国は機械知性と仲良くしてて、結果として上手く回ってるわ。それ以上でもそれ以下でもないわね」

ナイフで自分のステーキを切り分けながらエルマが肩を竦める。クリスは……また微妙な表情をしてるな。

「個人的には思うところが無いわけではありませんが、エルマさんの言う通り結果として帝国の治世は健全化しました。今も帝国を治めているのは皇帝陛下と、皇帝陛下より貴族の位を下賜された貴族です。今の帝国は細かな問題は山積していますが、概ね繁栄していると言っても良い状態ですから……」

クリスはどうも含むところがありそうな物言いだな。どうも言葉の端々から察するに、表向きは有機生命体が国を治めているけど、裏から機械知性が干渉しているとかそういう感じなんだろうか？　幸福は義務です、とかそんな感じのガチガチな管理社会になっているわけでもなし、俺は帝国で過ごしていて特に違和感は……いや異世界だからと思って違和感を違和感を感じてないだけか？　でも、大きな問題は感じていないな。

「完璧に部外者の俺から見ると、歪なところが全く無いわけじゃないだろうけど、この国はそれなりに良い国だと思うけどな。機械知性が何から何まで全部面倒を見るわけじゃなく、適度な距離感で助けてくれる今の状態ってのは一つの理想的な状態なんじゃないか？」

いざとなれば実力を行使できる機械仕掛けの神様に見守られているようなものだろう？　その機械仕掛けの神様が突如狂って人間を殺戮し始めたら、なんて考えれば怖いかもしれないが、そんなことを言い出したらキリがないだろうしな。

まぁ、俺がこう思えるのは傭兵という立場で、なおかつクリシュナを始めとした大きな力をもっているからなんだろうけど。ミミからすれば決して良い国ではないんだろうなこの国は。帝国はミミを助けてくれなかったわけだし。万人が幸福になれるユートピアなんてのはやっぱり夢物語なのかね。

「ヒロ様は機械知性に対する恐怖心が欠片も無いのですね」
「恐怖よりは興味のほうが勝ってるのは確かだな。まぁ、お国柄かもしれん」

俺はどちらかというと神は万物に宿る、みたいな考えは好きな方だ。自分の愛用品が突然人格を持ったりしたら楽しいじゃないか。確かアニミズムとか言うんだっけ？
動物どころか物言わぬ器物、パソコンのＯＳ、元号やその他自然現象から形のない概念、見たらＳＡＮ値直葬の邪神まで擬人化してしまうやべー奴らの一人だからな、俺も。

「お国柄？」

エルマが首を傾げる。

「表現するのが難しいな。なんというか、機械だけじゃなく、色々なものに神様が宿ってる、みたいなそんな考えが俺の国だと割と広く受け容れられてるんだよ。服にだって、食器にだって、家にだって船にだって何にだってな。だから色々なものを粗末にせずに大事にしましょう、みたいな考えだな」
「ふぅん、なんというか受容主義的な考え方ね。おおらかというというかなんというか」
「素晴らしい考えですね。ええ実に素晴らしい」

食堂の隅でミロの球形端末がピカピカ光りながらなんか言っている。なんだか知らんが好感度が上がったらしい。

「まぁなんというか、お互いに歩み寄れる余地があるなら怖がるよりも建設的だと思うな。歩み寄れる余地のない相手とは戦うしか無いけど」

「歩み寄れる余地のない相手、ですか」

「宙賊とかクリスの叔父さんとか」

「ふふ、叔父様が宙賊と同列ですか？」

「俺にしてみれば同じようなもんだ」

明確な殺意を持って襲いかかってくるわけだからな。

しかし追手に襲われた時の戦闘記録は本当にどうしたもんかね。インターディクションをかけてきたのは向こうだし、俺が罪に問われる事はまずないと思うが。多勢に無勢で相手も撃ってきたし、過剰防衛にされることはあるまい。そもそも、全滅させたから俺の罪を訴え出るような連中なんて一人も残っていないわけだが。まぁ気にすることでもないか。俺達に襲いかかったことを後悔しながら宇宙の塵として永遠に彷徨うが良いさ。

「明日はどうする？　俺としては折角水着も買ったことだし、海水浴と洒落込みたいと思うが」

「良いんじゃない？　まずは海ってことで」

「あの大量の水の中に飛び込むんですね……ちょっと畏れ多い感じがします」

「畏れ多く感じる必要はありませんよ。あの水は真水じゃないですしね。海水だからきっとしょっぱいですよ」

「海の水ってしょっぱいんですか？」

クリスとミミが海のついてのあれこれを話し始めた。話を聞いて

いる限り、俺の知っている海と大差は無さそうである。この星の海に棲んでいる生物が俺の知っている生物と全く異なる可能性は非常に高そうだが。人魚とかいないかな？　異星人の中にはそういうのもいそうだな。でもできればディープワン的なやつじゃなくてファンタジーな人魚だと良いな……。

そんな事を考えながら俺は食事を終え、明日に備えて眠るのだった。

え？　今日も夜は一人寝なのかって？　そりゃクリスもいるし、そういう気分にはなかなかね？

たまには禁欲期間を設けるのも良いと思うよ、俺は。明日は眼福を授かるわけだしね。

#078　初めての夕焼け（後書き）

ぶらすてたのしかったです―（∵3」∠）―（なお寝不足で数日生活リズムが壊れた

#079　ちょうねむい

このロッジの二階は寝室が並んでいる。全部で五部屋だったかな？　あとはトイレが一室だ。

部屋数が多いので、一人に一室ずつが宛てがわれた。俺の部屋は階段を上がってすぐの一番手前だな。何故こんなことを話しているのかというと、つまり階下に降りるには俺の部屋の前を通る必要があるということだ。

寝る前にちょっと情報端末でシエラ星系内の時事ニュースに目を通し、一通り目を通したので寝ようと思ったのだが……そんな時、誰かが階下へと降りていく気配を感じた。

既に時刻は深夜と言っても良い時間帯だ。もうとっくに皆寝ていると思ったのだが。

エルマ辺りが寝る前に酒でも一杯引っ掛けようとでもしているんだろうか？　俺もなんとなく喉が渇いたような気がするし、水でも飲むかな。

俺もベッドから抜け出し、階下へと足を向けることにした。

「……？」

一階へと降りてみたが、ぼんやりとした間接照明しか明かりが点けられておらず、一階は薄暗かった。おかしいな、誰か降りてきたはずだが……？　と首を傾げながらキッチンの冷蔵庫から飲料水のボトルを取り出してリビングへと向かう。

「……何やってんだ？」

「あっ……」

リビングのソファの上に寝巻き姿のクリスが寝っ転がっていた。間接照明の薄明かりに照らされたクリスの顔には涙の跡があり、目も少し赤いように見える。クリスは慌てて身を起こし、俺から顔を背けた。既にバッチリと見てしまったのでバレバレである。

俺は何も言わずにクリスの隣に腰掛け、水のボトルの蓋を開けた。喉を通り抜けていく冷たい水の感覚が心地よい。さて……どうしたものかな。

「寝られないか」

「いえ、そんなことは――」

「その言い分は厳しいだろ」

「――はい」

クリスが背けていた顔を正面に向けてしゅんと肩を落とす。その横顔を見ると、やはりちょっと目の辺りが腫れぼったいように見えるな。目も赤い。

「ここには俺しか居ないわけだし、別に良いんじゃないか。帝国貴族の娘たらんと無理に振る舞わなくても」

「べ、別に無理などしていません」

「そうかい？」

再び水を飲む。うーん、冷たい。俺、この冷水が喉を通っていく感覚って結構好きなんだよな。今まではどうしてた――ああ、そういやミミと一緒に寝てたもんな。ミミの部屋には一応ベッドが二つあったはずだが、この様子だと同じベッドで寝てたんじゃないだろうか。

「一緒に寝るか？」

「だいじょ……えっ？」

「いや、寝るだけだぞ。今からミミやエルマを起こすのは可哀想だし」

この状態のクリスを放置して寝るというのも無いだろう。この調子だと明日の朝まで起きてそうだし。別に疚しいことをするわけじゃなく、ただ添い寝するだけなら良いだろ。このロッジには俺達しか居ないし、ミロが外部に情報を漏らすとも思えない。

「そ、それは、そのっ？」

「寝るだけだって。ふあぁ……俺も眠いし」

そう言って俺は水のボトルの蓋を締めて手に持ち、ソファから立ち上がった。

「ほら、行こう」

「は、はいっ」

俺が差し伸べた手を取ってクリスが立ち上がったので、その手を引いて階段を登り、俺に宛てがわれた寝室に入る。ベッドはキングサイズなので広々としているから俺とクリスが同じベッドで寝ても狭いということはまず無いだろう。

俺はベッドの傍でクリスの手を離し、ベッドに上がって寝転んだ。そしてクリスと繋いでいたのとは反対の手に持っていた水のボトルをベッドサイドのテーブルに置く。

「おやすみ……腕枕でもするか？」

「いっ、いえっ！　おかまいなくっ！？」

「そっか」

なんだ、なんか積極的な感じだったのにいざとなるとガチガチだ

な。案外自分のペースを乱されると弱いタイプなのかね。暫く躊躇していたようだが、俺が目を瞑って寝たふりをするとベッドの上に上がってきたようだった。ごそごそと落ち着かなさげに暫く身を捩っていたようだったが、やがてそれも大人しくなった。
寝たかな？　と思って薄目を開けるとバッチリクリスと目が合った。

「やはり寝たふりでしたか」
「や、もうねる寸前だけど……」

実際もう目を開けているのも限界だ。ちょうねむい。

「くりすはもっとあまえていいぞ……」
だめだ眠い。呂律も怪しくなってきた。意識が眠りに落ちる前に何か温かいものがくっついてきたように思うが、クリスがくっついてきたのかね？　まぁいいや。おやすみ。

目を覚ますと穏やかな寝息を立てるクリスの顔が目の前にあった。すぅすぅと気持ちよさそうに寝ている。意志の強そうな光を宿している黒い瞳も今は閉じられて瞼の裏に隠れているな。こうして間近で見るとまつげ長いなぁ……本当に美少女だ。
どうして俺のベッドにクリスが寝ているんだろうか？　と考えて昨夜のことを思い出す。ああ、なんかいかにも眠れなさそうな感じだったから半ば強引にベッドに連れ込んだんだったか。今思えば迂闊な行動のようにも思えるが、まぁ手を出したわけじゃなし。問題ないだろう。
今晩からはミミかエルマに添い寝をするようにそれとなく頼んでおくか。手を出す気は無いが、同衾なんてしていたら万が一が無い

とも限らないわけだし。
下手に動いて起こすのも可愛そうなのでぼーっとクリスの寝顔を眺めているうちにまた眠くなってきた。意識が落ちる。

何か身じろぎするような気配を感じて目を覚ますと、クリスが顔を真赤にして目をぐるぐるさせていた。どうやら俺が二度寝をしている間に目を覚ましたらしい。

「おはよう」
「お、おはっ、おはようござっ……」
「落ち着け。単に添い寝しただけだから。服も乱れてないだろ？」

そう言って俺は寝転がったまま身体をぐっと伸ばし、溜息を吐く。二度寝したせいか微妙に頭が重い感じがするな。まぁ起きて身体を動かしたりしているうちに抜けるだろう。

「よーし、起きるかぁ。クリスはよく眠れたか？」
「は、はひっ……！」

クリスが顔を真赤にしたまま俺の横、つまりベッドの上で正座をしていた。隙あらば俺と関係を……みたいな動きをしていたのに実際そういう状況になるとダメダメじゃないか。可愛いな。
ベッドサイドの机に置いておいたボトルの水を一口飲み、カチコチになっているクリスをなんとかベッドの上から下ろして連れ立って階下に向かう。すると、ダイニングのテーブルに既にエルマが座っていた。未だ顔を赤くしているクリスと俺を見て一言。

「あんた、あんなに手を出さないって言ってたのに……手が早いにも程があるでしょ」
「手ぇ出してねえから。添い寝しただけだ」

と一応エルマの言葉を否定してから俺も席に着く。
「添い寝しただけってあんたね……まぁ、確かに手を出した感じではないわね」
まだ席に着いていないクリスを上から下までジロジロと見たエルマがそう呟く。着衣も昨日寝た時のままだし、俺もクリスも朝風呂を浴びてきた風でもないからな。
「で、どういうつもりなわけ？」
「まぁ、後で話すよ。クリスは先に身支度をしてきたらどうだ？」
「は、はいっ」
俺の言葉にハッとしたような表情をしてからクリスはパタパタと洗面台のある風呂場の方へと駆けていった。それを見送ってからエルマに向き直る。
「どうも一人で寝ると親を失ったショックがぶり返してくるみたいでな。人の気配を感じてリビングに降りてみたら泣いてたんだ」
「そう……気丈に振る舞ってたから大丈夫なのかと思ってたけど、やっぱりそんなことはなかったのね」
「そうみたいだ。悪いが、ミミにもこっそり話してこんやはどっちがそれとなく話を振って一緒に寝てやってくれないか」
「んー……そうね、ミミにも話して上手くやってみるわ」
俺の頼みにエルマはそう言って頷いてくれた。
「頼むよ。ソファの上で泣き腫らしててさ、見てられなかったんだ」

そんな話をしているうちにミミも起きてきた。

「おはようございます！」

「おはよう」

「おはよう、ミミ。朝から元気いっぱいだな」

「はいっ、海で遊ぶのが楽しみで」

朝からミミのテンションは最高潮である。ミミは朝から元気だなあ。

「クリスが戻ってきたら俺も顔を洗って朝飯だな。朝食は何が出るのかね？」

「朝食のメニューは焼き立てのパンにスクランブルエッグ、カリカリに焼いたベーコンと茹でたウィンナー、それに新鮮な野菜のサラダと果汁１００％ジュースです」

「まさにホテルの朝食って感じだな」

朝食を終えたら遂に海だな。ふふふ、三人がどんな水着をチョイスしたのか実に楽しみだ。

#079　ちょうねむい（後書き）

次回……ついに水着回！―（∵3」∠）―（何を着せようかな

#０８０　事前準備

朝食を終えたら俺も身支度を整え、水着を穿いて海へと向かった。男はこういう時は楽で良いよな。スポーンと脱いで履けばそれで準備完了だし。肌寒くなった時に備えて一応パーカーは着てきた。小型情報端末もパーカーのポケットの中だ。流石にレーザーガンは置いてきたぞ……いくらなんでも海に遊びに行ってレーザーガンを使うことはないだろうし、あんな物騒なものを腰に下げたまま泳ぐのもどうかと思うしな。

「一足先に行ってるぞー」

そう声をかけて階下に降りる。

「ミロ、何か用意していったほうが良いか？」
「はい。いいえ、ビーチには既に海水浴のご用意をさせて頂いております。パラソルやビーチチェア、飲み物や日焼け止めなどですね」
「そうか、それじゃあ俺は一足先に向かうとする」

水着と一緒に購入したビーチサンダルをつっかけてロッジのリビングからも見えていたビーチへと向かう。確かに昨日は見当たらなかったビーチパラソルやビーチチェアが設置されているのが遠目にも見えるな。一体いつから用意してあったのだろうか？
ビーチに接近すると三体のメイドロイドが待機しているのも発見できた。軽食を用意できそうな屋台のようなものを置いて、そこで待機している。一応日が当たらないように配慮してるんだな。
歩きながら視線を向けているとフリフリと三人とも手を振ってきたので、俺も振り返しておく。俺に手を振り返されたメイドロイド

達がにこやかに微笑んだ。うーん、機械なのに良い笑顔だ。まぁこの世界、というか帝国で幅を利かせている機械知性はベースがベースだからな……ああいう所作と言うか、人間の男性に対する効果的な対応については研究が進んでいるんだろうな。

というか帝国の主要種族は人間なんだな？　見るからにって感じの異星人を目撃したことはあるし、銀河のどこかにはそういう種族が運営している銀河帝国もあるんだろうな。ちょっと興味がある。

俺の上半身裸なんぞ勿体ぶるもんでもないので、早速パーカーを脱いでビーチチェアに置いておくことにした。肌を撫でる潮風が心地良いな。

足を攣らせたりしたら危ないので、早速準備運動を始めることにする。運動をする前のストレッチは実際重要である。これで怪我や事故を少しでも減らせるなら安いものだ。

なんだか視線を感じる、と思ったら三体のメイドロイドがこちらに視線を送ってきていた。何かな？　まさかメイドロイドが俺の肉体に興味を持つということもあるまい。謎の視線だ……まぁ気にすることでもないか。

そうやって待っていると、ロッジの方から水着を着たミミ達が歩いてきた。ふむ……三人とも俺と同じように上着を着てきているようだな。まぁ妥当な判断だと思う。今は晴れているから暖かいけど、日が陰ったりしたら肌寒くなるかもしれないしな。海に入って身体が冷えるかもしれないし。

「お待たせしました」

「いや、俺が着替えるのに時間がかからないだけだから。三人とも、海に入る前に準備運動は怠るなよ。溺れたら大変だぞ」

「もし溺れたらすぐに救助されると思うけどね。多分水中に救助ロボットが待機してるわよ？」

「至れり尽くせりだな。でも、溺れるのは怖いし苦しいぞ？」

「そうですね、私もそう思います。ヒロ様、準備運動を手伝ってく

れますか？」
「手伝うほどのものか……？　まぁいいけど」
なんて言っていると、ミミがエルマとクリスに先んじて上着を脱ぎ、その姿を白日のもとに晒した。
「えと……どうですか？」
「とても素晴らしい」
両手を後ろに回してもじもじするミミに親指を立てて答える。ミミの水着は白い布地に黒い縁取り入ったシンプルなデザインのビキニだった。
正にデカァァァァいッ説明不要！！　ってやつだ。他に必要な言葉などありはしないな。なむなむ。
「何拝んでるのよ……」
ミミの水着姿に手を合わせていると、エルマが呆れたような声を上げた。そんなこと言ってもお前、これはちょっとなかなか見られないと言うか、奇跡的な肉体だと思うぞ？　背が低いのにこの大きさは何度見ても凄いって。
「ミミばっかり見てないでこっちも見なさいよ！」
「痛い痛い痛い」
耳を引っ張られてエルマの方を向かされる。
「ほう」
「何よ、そのほうってのは」
「いや、エルマは本当に細いし程よく鍛えられてて綺麗な身体して

るよなと」

エルマの水着は黒いスポーツタイプのビキニだった。胸部装甲の厚さはミミとは比べるべくもない。悲しいが、それが現実だ。しかし、お腹のくびれや腰からお尻へのラインはまるで芸術品のようである。

「大変素晴らしい」

エルマも拝んでおく。ペシッと頭を叩かれた。何故だ。

「あ、あの、私の水着はどうでしょうか？」

遠慮がちなクリスの声が聞こえてきたので、視線を向ける。

「これはまた……ハマり過ぎでは？」

何故スク水？　しかも紺色の旧スク。ささやかに膨らむ胸元の白い名札には大きく『くりす』と書かれている。何故ひらがな？　古代文字とかいうやつか？

「に、似合ってますか？」

「似合ってはいると思う。似合いすぎて怖いくらいだ」

主にジロジロ見ていたらおまわりさんが呼ばれそうという意味で。黒髪おかっぱ少女の旧スクとか狙い過ぎでは？　クリスは名前がクリスティーナとかいうバタ臭い名前なのに顔は完全に日本人顔なんだよな。そういや名前からしてあからさまに日系企業みたいなのがチラホラあるんだよな……アルファベットとか日本語を古代文字扱いしている節があるし、やはりここは地球が存在した銀河の遥かな

未来なのだろうか？

「ほら、準備運動しましょう。ミミは私と組むわよ」
「はいっ」
「ヒロ様、願いしますね」
「ああ」

準備運動をするクリスを手伝う……のだが。

「クリス、身体柔らかいな」
「そうですね、身体の柔らかさには自信があります。ヒロ様、後ろから押してくれますか？」
「ああ」

１８０度に開脚したクリスの背中を押すと、クリスの身体がほぼピッタリと砂浜にくっついた。ヨガか何かかな？
ちなみにエルマもミミも身体は柔らかい。ミミは船に乗った直後はそうでもなかったのだが、毎日トレーニングルームで筋トレとストレッチをしているうちに柔らかくなったらしい。エルマは元からみたいだったな。
俺？　俺も元々はガッチガチだったけどミミと同じでトレーニングルームで身体を動かしているうちにだいぶマシになった。

「よーし、準備運動も終わったようだし、早速泳――ミミは多分泳げないよな？」
「はい、初めてです」
「エルマは？」
「私は泳げるわよ」

エルマの言葉に俺は頷き、次はクリスに視線を向ける。

「私も泳げます」
「そうか。じゃあまずはミミに泳ぎを教えるかな」
「それが良いかもね。でも、その前に日焼け止めを塗ったほうが良いわよ」
「それもそうか。おーい」

手を振って声を掛けると、バスケットのようなものを持ったメイドロイドがテクテクとこちらに歩いてきた。

「はい。お呼びでしょうか」
「日焼け止めを用意してあるという話だったよな？　日焼け止めをくれるか？」
「はい。宜しければ浮き輪などの遊泳具もご用意いたします」
「お、それはいいな。頼むよ」
「はい。お任せください。日焼け止めは各種ご用意がございます。クリーム、ジェル、ローション、こちらはスプレータイプですね」
「……効果の違いはあるのか？」
「はい。いいえ、どれもほぼ完全に日焼けを防止します。質感の違いですね」
「なるほど」

それぞれ手にとって手の甲に塗り拡げて質感を確かめる。うーん、俺はローションタイプが良いかな？　とても塗り拡げやすい。ミミは俺と同じローションタイプ、エルマとクリスはクリームタイプを選んだようだ。

「それじゃあ塗り合いましょうか。背中は自分では塗れないしね」
「それじゃあ俺はミミとかな。同じタイプの日焼け止めだし」
「はいっ、じゃあヒロ様には私が塗りますね」

「……私もローションタイプにすれば良かったかしら」
「……失敗しました」
「別に減るもんじゃなし、好きなだけ塗れば良いと思うが……」

いや、日焼け止めローションは減るか。それはそれとして、俺の身体なんて触りたいなら好きなだけ触れば良いよ。抓ったり擽ったりしないなら別に構わんぞ。

「じゃあそうしましょうか、ほら、シートを敷くから寝っ転がりなさい」
「へいへい」

エルマがバスケットから取り出して敷いたシートの上にうつ伏せに寝っ転がる。すると、ヒヤリとした感触が背中にした。日焼け止めローションを垂らしたらしい。

「背中、広いですね」
「そうね、まぁ体格は悪くないと思うわよ」

クリスの言葉にエルマが答える。三人の手が背中や腕を這い回る感覚が微妙にくすぐったい。多分右の肩甲骨の辺りを撫でている小さい手がクリスで、腰のあたりを撫でているのはエルマ、首や左肩を撫でているのがミミだな。

「はい、背中側は終わったわよ。仰向けになりなさい」
「え、いや前は自分でできるだろ」
「満遍なく塗るならちゃんと他の人に塗ってもらった方が良いわよ。塗りそこねたところだけ日焼けしたらかっこ悪いわよ？」
「む、確かに」

エルマの言う通りだな。塗り残しがあったら確かに格好悪いことになりそうだ。俺は素直に仰向けに寝っ転がり直すことにした。

「わ、わ……腹筋が」

「ヒロ様は毎日のトレーニングを欠かしませんから」

「程よい感じよね。これくらいを維持して欲しいわ」

「お前ら……」

クリスが顔を赤くしながら興味津々といった様子で俺の腹筋を撫で、エルマが俺の腕を取って丹念に日焼け止めローションを塗り拡げ、ミミは首や鎖骨の辺りに妙に熱心にローションを塗っている。エルマははともかく、クリスとミミは本来の目的を忘れてないか？

「はい、塗り終わったわよ」

「さんきゅ。真面目にやってたのはエルマだけだったように思えるな」

「わ、わたしも真面目にやってました、よ？」

「わ、わたしもですよ！」

「おっ、そうだな。じゃあ次は俺が塗る番だな。エルマはクリスに塗ってやってくれ」

「はいはい」

エルマがもう一枚シートを敷き、そこにクリスを寝かせてクリームを塗り始めた。俺はミミと場所を交代してうつ伏せに寝てもらう。

「お、お願いします」

「任せろ」

そう言ってミミのビキニの紐を解く。

「ふえぇ！？」
「いや、ちゃんと塗らないと駄目だしそりゃ解くだろ……」
「そ、そうですよねっ」

そもそもお互いの裸なんていくらでも見ているし色々と今更だと思うが……それはそれ、これはこれか。気を取り直してミミの背中にたっぷりと日焼け止めローションを垂らしていく。

「んんっ……！」
「冷たくてビクってするよな。ちょっと我慢しろよー」
「ん、はい。ヒロ様の手が温かいです」

ミミの背中に日焼け止めローションを塗り拡げていく。うーん、お肌がもっちりというかぴっちりというか、きめ細かいなぁ。いつまでも触れていたくなるような手触りだ。
だが、俺は自制できる男である。真面目にミミの背中全体に満遍なく日焼け止めローションを塗り拡げ、次に肩、腕、首や耳の裏などにもしっかりと塗っていく。

「次は下半身だなー」
「な、なんだか妙に恥ずかしいです」

ビキニのボトムの紐も解いて下半身全体にしっかりと日焼け止めローションを塗り込む。ミミは本当になんというか……うん、素晴らしい肉体の持ち主だよな。ミミは本当になんというか……うん、素晴らしい肉体の持ち主だよな。船に乗ったばかりの頃は少し痩せ気味だったが、俺の船に乗ってしっかりと食べて運動をした結果、とても良い感じに育ってくれていると思う。本人はもう少し細くなりたいとかボヤいていることがあるけど。
こっそりとミミのＡＩトレーナーに細工をし続けた甲斐があったというものだな！　是非この感じを維持して欲しい。おっぱいもい

いですがふとももも良いものだと思います。

「よし、塗り終わったぞ」
「ありがとうございます」
「じゃあ次は前だな」
「んっ……はい」

ミミは顔を赤くしながら身を起こし、今度は仰向けに寝転がった。俺の目の前にたゆんと揺れる胸部装甲はもはや凶器である。紐を解かれたトップスはもはや申し訳程度にしかその本来の機能を発揮していないのだ。また手を合わせて拝みたくなってくるが、そんなことをしていたらエルマにタイキックを食らいそうなので心を無にして日焼け止めローションを塗っていく。今この瞬間、俺は限りなく悟りに近い境地に在るな。間違いない。

「ん、んんっ」

日焼け止めローションを垂らす度にミミが艶めかしい声を上げる。くっ、神は俺を試しているのか……ッ！？　考えてみれば、クリスを船に保護してから俺は禁欲中なのだ。鎮まれ、俺の中の獣よ！今はお前の出るべき時ではない！

なんとか全精神力を注ぎ込んで内なる獣を押さえつけ、ミミの全身に日焼け止めローションを塗り終えることには成功した。が、俺の精神は激しい戦闘をこなした後のように疲弊しきってしまった。

「ヒロ様？」
「ちょっと休憩する」

水着を装着しなおしたミミが声をかけてきたが、俺はそう言って

目を瞑り、瞑想を始めた。色々と落ち着かなければならない。そう、色々と。そうだ、ターメーンプライムコロニーの傭兵ギルドにいたおっさんの顔を思い出そう。

「何をやっているんだか……」

「私ももう少しすれば……いえ、いっそコンフィギュレーターを使って……」

エルマが呆れたように溜息を吐き、クリスが自分の胸元をぺたぺたと触りながらぶつぶつと何かつぶやいている。コンフィギュレーターってなんなのか知らんけどやめたほうが良いと思います。ありのままのクリスでいてくれ。

「お待たせいたしました。色々とご用意させていただきました」

俺がシートの上に座ったまま精神統一をしていると、三体のメイドロイドが大量の浮き輪を抱えて現れた。スタンダードなドーナツ型の浮き輪だけでなく、ちょっとしたボートのような大きさのようなものや、イルカ型のもの、サメ型のものなど様々だ。イルカはともかく何故サメ。いや別に良いけど。

「無理に泳がなくてもまずは浮き輪でプカプカ浮いてるだけでも楽しいよな」

「そうね。まずはスタンダードに浮き輪で遊ぶのも良いと思うわ」

「私はこれを使いたいです」

そう言ってクリスがサメ型の浮き輪を抱えた。エルマは大きめのドーナツ型浮き輪を選んだようだ。

「ヒロ様、どれを選べば良いですか？」

「スタンダードなドーナツ型が良いだろ」

エルマが選んだのより一回り小さい通常サイズの浮き輪を選んでミミに渡す。エルマが選んだやつはあれだな、真ん中の輪っかにお尻を入れてプカプカ浮かぶやつだ。

「ヒロ様は使わないんですか？」

「とりあえずは良いや。後で使うかもだが」

最初は浮き輪を使うミミの傍についていようと思ってるし。

「さぁ、早速遊ぶぞー」

こうして俺達は海水浴を始めた。俺も海で遊ぶのは久しぶりだから楽しみだな。

#０８０　事前準備（後書き）

誰にどんな水着を着せるかとても悩んだ……特にクリスに旧スクを着せるかマイクロビキニを着せるか最後まで悩んだ……！　―（：３」∠）―

#081　レッツスイミング！

「わー……なんだかあれですね、コロニーの低重力区画みたいですね？」
「多少似た感じはあるかもしれない」

浮き輪でプカプカと浮かびながらミミは大層ご機嫌な様子で目をキラキラとさせていた。
燦々と照りつける太陽、程よい水温の海、そして波の動きに合わせて眼の前でたゆんたゆんしているミミのおっぱい。本当にリゾートってのは最高だな！

「くっ……」

サメ型の浮き輪に跨って俺達に追随しているクリスが悔しそうな声で呻いている。エルマと違ってクリスはまだ育つ可能性があるんだから気にする必要はないと思うぞ。エルマはもうあれ以上にはまずならないからな。アレはアレで素晴らしいものだけど。

「本当になんだかぷかぷか浮いているだけでも楽しいです！」
「そうだろうそうだろう」

俺も楽しいぞ。実に楽しい。

「クリスがしてるみたいに水中で足をバタバタさせればある程度自分で動くこともできるぞ」
「やってみますね！」

ミミが浮き輪により掛かるように前傾姿勢になりバタ足を始める。そして浮き輪に押し付けられてむにゅりと変形するおっぱい。いいぞ、もっとやれ。
ちなみにエルマは少し離れた場所で浮き輪に乗っかってプカプカと浮いている。アレはアレで楽しんでいるらしい。

「進んでます！　進んでますよヒロ様！」
「いいぞいいぞ、その調子だ」

こういうのは褒めて伸ばすに限る。ミミは夢中になって浮き輪を使って泳ぎ始めた。初めてやったことが自分の思い通りに上手くいくと楽しいよな。

「よーし、三人でエルマのいるところまで競争だ」
「わかりました！」
「負けません！」

俺の言葉にミミとクリスがエルマがプカプカと浮いている場所に向かって泳ぎ始める。クリスは慣れているとは言え足が小さくてあまりスピードは出ない。そしてミミは慣れていないせいかバタ足がまだまだ不器用だが、それなりに船でトレーニングをしているのでクリスよりも蹴り足は強い。これはなかなか良い勝負だな。
俺？　俺が本気で泳ぐのは流石に大人げないだろう。いくら泳ぐのが久しぶりとは言え、小さいクリスや水泳初心者のミミに負けるなんてことはありえないし。

「どーん！　勝ちました！」

サメの浮き輪がミミよりもひと足早くエルマが寛いでいる浮き輪に衝突し、クリスが勝利を宣言する。

「負けました！」
「もう、どーんはやめなさいよ……」

ゴールにされたエルマは不満を述べつつも、本気で怒っている様子は無い。むしろ無邪気に遊ぶ二人を微笑ましく眺めているように見える。

「エルマは泳がないのか？」
「気が向いたらね。たまにはこうやって陽の光を一身に浴びるのも悪くないわよ？」
「それは確かに」

船に乗っていると日光浴もクソもないからな。有害な宇宙線はシールドや船の装甲とかでカットされているから、実際のところ船に乗っていて陽の光を浴びるということはまず無い。コロニーには無害化された恒星の光を浴びるような施設もあるらしいが、生憎利用したことはないな。

その後はプカプカと浮くエルマを曳航しながら泳ぎ回るミミとクリスに付き添って暫く泳ぎ続けた。

「よし、ちょっと休憩しよう」
「まだまだいけますよ？」
「水泳って思いの外疲れるものなんだよ。それに、身体が冷えてくると足が攣りやすくなったりするしな」
「そういうものですか」
「そういうものなのです。それに、海の楽しみは泳ぐだけじゃないぞ」

波打ち際で波を追いかけたり追いかけられたりするのも楽しいし、

足の裏の砂が波にさらわれていく感覚を味わうのも楽しい。砂浜の砂で何か作ったり、山崩しをして楽しむのだってアリだ。
というわけで、休憩がてら波打ち際で遊ぶことにした。

「ひゃわあぁぁぁ！？　なんかへんなかんじがっ！」
「わかる。でもこれがなんとも言えず面白い感触なんだよな」
「くすぐったくて面白いですよね」

ミミが波打ち際でキャーキャーとはしゃいでいるそれに対してクリスは落ち着いたものだ、波打ち際に四つん這いで手をついて、手の指の間を流れていく砂の感触を楽しんでいるようである。

「おっと、ちょっと大きい波が来るぞ」
「わっ」

ひょいとクリスを抱き上げて大きい波から退避させてやる。俺の膝下くらいまでの波だったから、あのままで居たら下手すると顔面に波が直撃してたな。ミミは波に足をすくわれて盛大にコケていた。

「うわっぷ、しょ、しょっぱい……」
「大丈夫か？　砂が目に入ったりしてないか？」

クリスを抱き上げたままミミに声を掛ける。幸い、ちょっとコケただけで大事はなかったようだ。

「大丈夫です！　楽しいですね、海！」

海水を滴らせながらミミが満面の笑みを浮かべる。楽しそうで何よりだ。

「ほい、急に抱き上げて悪かったな」
「いいえ、ありがとうございました」

砂浜に自分の足で立ったクリスが微笑む。うん、可愛い可愛い。スク水少女を抱き上げていた俺というのはアレだな、絵面的には犯罪一歩手前だな。というか、日本なら余裕でもしもしポリスメン案件である。違うんです、助けただけなんです。

この後も砂山を作って山崩しをしたり、砂のお城を作ったり、日陰で寝ていたエルマを埋めて怒られたりしながら遊び続けて昼食時まで遊びまくった。

「そろそろ昼食かな？」
「お腹が空きました！」
「私も少しお腹が空きました」

俺の言葉にミミが元気よく、そしてクリスがちょっと恥ずかしそうに空腹を訴える。メイドロイド達の方向に視線を向けると、バーベキューか何かの用意をしているように見える。なるほど、ビーチでバーベキュー。鉄板だな。

え？　日本でバーベキューを呼ばれるアレは正確にはバーベキューではない？　こまけぇこたぁいいんだよ！　本格的なバーベキューなんて今から焼き始めたら食べられるのは下手すりゃ丸一日後とかだろうが！

二人を連れてビーチのすぐ近くにあるシャワールームで海水と砂を軽く流して戻ってくると、既にバーベキューの用意はほぼ完了していた。エルマはそのビーチパラソルが作り出す日陰の中からその様子をのんびりと眺めていたようだ。ビーチチェアに腰掛けて。

「なにか珍しい食材でもあったか？」
「ん？　まぁ、生の野菜や食肉なんて珍しいと言えば珍しいけど…

…それよりも古式ゆかしい調理器具のほうが珍しくて」
「古式ゆかしい？」
俺は首を傾げて調理器具――バーベキューコンロのようなものに視線を向ける。見たところ、木炭などの燃料を使う形式でもガスなどの燃料を使う形式でもなく、電気式か何かに見えるが……動力はどこから持ってくるんだ？　ああいや、レーザーガンのエネルギーパックみたいな物があるわけだし、料理に使うくらいのエネルギーならああいう感じのもので十分な動力源になるか。驚くようなことでもないな。
「今どき単純な熱調理だけの単機能しかない調理器なんて古式ゆかしいにも程が有るわよ。よほどの趣味人とか、専門の料理人でもないと使わないわよ？」
「そ、そうなのか？」
俺から見るとむしろ未来の調理器にすら見えるんだが……この世界基準で言えばうん、確かにそうなのかもしれないな。そんなに品質の高くない調理器でもフードカートリッジからそこそこに美味いものが出てくる世界だものな。
メイドロイドが食事の準備をしているのを眺めていると、ミミとクリスもシャワーを浴び終えてこちらへと戻ってきた。そしてミミは用意されているバーベキューコンロと食材を目にして目を輝かせている。たくさん食べる君が好きだよ、うん。クリスは特に感動も何もないようだ。見慣れてるってことかな。
「そんじゃ焼くかー」
俺はグリルの温度を確かめてから置いてあったトングを使って肉や野菜をコンロの上に置いていく。その様子を見たエルマやミミ、

それにクリス……だけじゃなく何故かメイドロイドまで驚いてないか？　どこに驚く要素がある？

「あんた、料理できるの？」

「は？」

俺は本気で首を傾げた。料理も何も、こんなもん焼いて食うだけだろう？　こんなものは料理の範疇に入らない。

「これは料理というほどのものじゃないだろ……ただ焼くだけだぞ」

直ぐ側に置いてあった調味料の瓶のようなものを指差し、メイドロイドに視線を向ける。

「ここにあるのは調味料か？」

「はい。そちらから順に――」

よくわからない調味料も含めて一通りの説明を受ける。塩や胡椒だけでなく、所謂クレイジーソルトのようなものもあった。全く未知の調味料もあったけど。

メイドロイドを含めた全員が見守る中、焼き具合を見ながら軽く塩胡椒を振って肉を焼き上げる。野菜はもう少しだな。

そうそう、肉を焼く時は生肉を掴むトングと焼き上がった肉を掴むトングは別にしたほうが良いと聞いた。生肉を掴んだトングで焼けた肉を掴むと食中毒のリスクが高まるのだそうだ。焼き肉の後によくお腹を下す人は食べる箸やトングで生肉を触らないようにするとお腹を下しにくくなるらしいぞ？

俺としてもミミやエルマやクリスがお腹を下すのは忍びないので、その辺りは気を遣うことにする。まぁ、もしかしたらこの肉は殺菌済みかもしれないけどな。俺の知らない未知の技術で。

焼けた肉を……この肉なんの肉だ？　牛？　豚？　肉質から見ると牛っぽいけど。

「なぁ、この肉は牛か？　豚か？　焼き具合はしっかりウェルダンじゃなくてレアとかミディアムレアで大丈夫なやつ？」

「はい。ビーフです。殺菌済みなのでレアでもお召し上がり頂けます」

「そうか。ほら、ミミ焼けたぞ」

「は、はい……あ、美味しい」

「肉が良いんだと思うぞ。塩胡椒だけだし。こっちのタレとかつけても美味しいんじゃないか」

ミミが俺の勧めたソースを肉につけて頬張る。声は出ていないが、目が輝いているので美味しいようだ。ちなみに俺が勧めたのは日本の焼き肉のタレっぽいやつである。ちょっと甘めでフルーティーなやつだ。

「意外なスキルね？」

「ヒロ様は料理人だったのですか？」

「料理人って……いやほんと、これ単に焼いただけだぞ？」

「生の食材を調理して食べられるようにできるのはもう料理人よね」

「そうですね！」

「そうなのか……」

料理人のハードルすげぇ低い。まぁ、自動調理器が普及して……というか、宇宙に進出した人々が料理をするような事自体が殆どなかったのかもしれないな。宇宙空間に食材を持ってきて調理するということも無かっただろうし、きっと宇宙進出初期時代では惑星上で調理済みの加工食品を食べていたんじゃないか？

そうなると料理なんてすることはまず無いだろうし、宇宙に進出

した人々の調理能力というか、そういったスキルはどんどん低下していったと考えられる。だから生の食材を食べられるものに変えるスキルはこうやって驚かれるということか。

「この程度で料理なんていうのは烏滸がましいから……きっとメイドロイドのほうが上手に調理すると思うし。というか、任せれば良かったよな」

そう言ってトングを彼女達に渡そうとしたが、彼女達は受け取らずに首を傾げた。

「はい。宜しければ私どもが調理いたしますが、お連れ様はお客様に調理していただきたいのではないかと」

ええ……と思いながらミミ達の方を見ると、ミミは肉を頬張りながらコクコクと頷いており、エルマに至っては早く肉を寄越せと言わんばかりに取り皿をこちらに突き出してきていた。

「私にも頂戴」

「はいはい……クリスもな」

「はい！」

クリスも嬉しそうに頷く。

俺はこの後しばらく肉や野菜、それに魚介類などをひたすら焼き続けることになるのであった。これもまた海水浴の醍醐味かな。

#082　海の幸……幸？（前書き）

よゆうの18じとうこう！ ―（：3」∠）―（まにあってない

#082　海の幸……幸？

「美味しかったです……！」
「そりゃ良かった。食後、すぐに運動をしたり泳いだりするのは身体に良くないと聞くからな。のんびりと食休みをしよう」

食事の後片付けをメイドロイド達に任せ、俺達はそれぞれビーチチェアに寝そべって食休みをすることにした。飯食ってすぐに泳ぐと胃痙攣起こして死ぬとかはどうも眉唾っぽいらしいけど、単純に水圧がかかって泳いでる時に気持ち悪くなったりしたらそれだけで危ないからなぁ。リバースしながら泳ぐのはマジで無理ゲーだぞ。

「食べたわねー。それにしても本当に、ヒロがあんなスキルを持ってるとはねー」
「だから、何度も言ったけど肉焼くのはマジで誰でもできるから。焦げないように焼いてタレとか塩つけて食うだけなら誰にでもできるから。というかあれで料理と言われるのは俺が納得できん」
「それではヒロ様はもっと複雑な料理を作れるのですか？」
「そりゃ食材と調味料があればできるけど」

俺とてそれなりに一人暮らしが長かった身である。流石に俺も煮干しや昆布から出しを引いてとか、ブイヨンから作って、みたいなのは無理だけどな。スパイスからカレーを調合するとか。

「じゃ、じゃあ今晩はヒロ様にご飯を作ってもらいたいです！」
「昼飯食ったばっかなのにもう晩飯の話かよ……そんなことできるのか？」

俺達の傍に控えているメイドロイドに視線を向けると、彼女は俺の視線を受けてコクリと頷いた。

「はい。お客様の中には自分の連れた料理人の料理しか口にしないという方もいらっしゃいますので、食材のご提供をさせていただくというサービスもございます」

「そうですね。帝国貴族、それも上級貴族の方々の間では自分の専用料理人を雇うというのが一種のステータスですから。そういった要求に応えられるようにしているんだと思います」

メイドロイドが頷き、クリスが事情を補足説明してくれる。なるほど、そういう事情があるわけね。それじゃあ、ということでメイドロイドと相談して夜に使う食材を決める。相談してみたところ、調理の補助もしてもらえるらしい。

「何を作るかな……どうせ手間をかけるならとことんやってみるか？」

煮魚なんてのも……いや、今までの食生活を考えると小骨のあるような料理はやめた方がいいな。今まで殆どフードカートリッジから作られた料理しか食べたことのないミミが小骨を喉に引っ掛けて涙目になるのが目に見えている。魚は刺し身にしたほうが……刺し身で食えるのか？　この星の魚は。まぁその辺は後で聞けばいいか。

メインは刺し身と揚げ物にしようかな。どんな肉があるかわからんが、トンカツか唐揚げでも作ればいいだろう。刺し身と揚げ物を作るなら、ご飯を炊きたいな。米はあるんだろうか？　あるなら自動炊飯器もあれば良いんだが……メイドロイドに聞いてみよう。あとは味噌汁でも作れば完璧だと思うんだが、味噌なんてあるのかね？

「いくつか聞いていいか？」

「はい」

俺が食材や設備について質問すると、メイドロイドはその質問にスラスラと答えてくれた。結論から言うと俺が欲する食材はすべて手に入り、自動炊飯器は存在しなかったが、炊きたてのご飯を運んできてくれるらしい。

「痒いところに手が届くなぁ……」
「恐れ入ります」
「凄いです、専門的な話をしています」
「ヒロ様は傭兵なのに料理人でもあるんですね」
「まぁ、ヒロの経歴を考えればありえない話ではないのかしらね……？」
「経歴をご存知なのですか？」
「軽くね。ただ、私から話すのはマナー違反でしょ？」

俺がメイドロイドと今晩の食事について打ち合わせをしているのを眺めながらミミ達もまた何か話し合っているようだ。クリスに俺の出自を話すのはなぁ……まぁ無いな。話す意味が薄い上にリスクしか無い。クリス自身は俺に憧れを抱いているような感じはあるけど、どう見てもミミよりも歳下だし……歳下だよな？　歳は聞いてないけどきっとそう。

食材の注文を終えたら再びビーチで遊ぶ。

本当は釣りでもして晩御飯の食材を確保しようかとも思ったのだが、そうするときっとミミやクリスも着いて来たがるだろうし、そうなれば今の格好……つまり水着では都合が悪い。水着にサンダルで岩礁に行くとか自殺行為とまでは言わないが、怪我とかが怖すぎる。打ち所が悪ければ本当に危ないしな。

そういうわけで、午後も海遊び続行だ。

「そぉい！　はっはっは！」
「きゃー！　おかえしです！」

波打ち際でミミ達と海水の掛け合いをしてみたり、軽く泳いでみたりする。浮き輪で泳いだ経験が良かったのか、それとも胸部に搭載している二つの浮袋のおかげなのか、ミミは比較的簡単に水に浮くことをマスターした。
一度浮いてしまえば泳ぎ始めるのは簡単である。水に顔をつける訓練などもしなければならないが、まずは平泳ぎを教えてみた。人間が一番本能的に泳げる泳法だからね。

「泳げました！　泳げましたよ！」
「凄いぞミミ！　初めてなのにすぐに泳げるようになるなんて！」

俺は褒めて伸ばす方針です、はい。たとえ泳いだ距離が２ｍにも満たない距離であろうとも褒めます。褒めるのは大事だからね。というか言うほど俺も泳ぎが達者ってわけでもないし。
何より活発に動くミミを眺めているのは楽しい。とても楽しい。たゆんたゆんのプルンプルンな上にテンションが上っているのかスキンシップも多い。良いぞ。とても良いぞ。

「くっ……」
「気にしても仕方がないわよ」
「ヒロ様っ、私も見てください！」

波の穏やかな場所でちゃぷちゃぷと泳いでいる耳を見ていると、若干頬を膨らませたクリスが腕を引っ張ってきた。

「いやぁ、クリスは何というかこう、見てると捕まりそうでな」

胸元に『くりす』と書かれた旧スク少女をガン見とかちょっとな。犯罪臭が凄いし。まぁ、スク水じゃなくてもクリスみたいな子の水着姿を熱心に見つめていたらもしもしポリスメン案件だろう。完全に事案である。

「私達しか居ないのに誰が捕まえるのよ」
「ミロとか？」
「よほど妙な真似をしない限り捕縛なんてするわけないでしょ……」

エルマが呆れたように溜息を吐く。そうなんだろけれどもね？
これで俺がうひょースク水少女最高！　んはあぁぁぁ！　クンカクンカとかやったらドン引きじゃん？　そんなことはしないけどさ。

「しかしあまりミミに構いすぎるのも不公平だよな」
「そうです」
「そうね」

クリスとエルマが頷く。クリスはともかく、エルマも構って欲しいのか？　視線を向けると、エルマは顔を赤くして俺から目を逸らした。

「……なによ。いいじゃない」
「良いと思います」

俺はしっかりと頷いておいた。とは言え、俺の身体は一つしかない。

「じゃあまずはクリスからってことで。エルマはミミを見ていてやってくれないか？　水泳初心者だからさ」
「わかったわ」

こういうところは流石に大人のエルマさんであった。俺とクリスはエルマにミミを任せて大量においてある浮き輪コーナーへと足を運ぶ。

「浮き輪で遊ぶのですか？」
「いや、俺の目的はあれだよ」

そう言って俺が指さした先には俺とクリスが余裕を持って残り込めそうなサイズのゴムボートが置いてあった。簡素なオールがついており、オールで漕いで移動できるようになっているようだ。そしてなによりの注目点は底が透明になっていることである。ボートに乗りながらにして海中の様子を観察できるようになっているらしい。

「海の中の様子を見るのもきっと楽しいぞ。幸い海も穏やかだから転覆の危険もないだろうしな」
「それは楽しそうですね」

俺の提案にクリスはコクコクと頷いた。どうやら気に入ってくれたらしい。
メイドロイドからゴムボートを借りて波打ち際へと引きずっていき、クリスに乗ってもらう。

「ヒロ様は乗らないのですか？」
「乗る乗る。もう少し水深のある場所に行ってからな」

クリスの乗ったボートを押して海岸線から離れ、ちょうどいい所で俺も乗り込む。

「どれ、少し沖に行ってみるか」

「はい」

オールを漕いでボートを走らせ始めると、思ったよりもスピードが出た。クリスが軽いのもあると思うが、ボートの素材が特殊なのか妙に水の抵抗が少ない気がする。妙な所でハイテクだな。いや、もしかしたら日々のトレーニングで俺の筋肉が思ったより強靭になっているのか？

「凄いですね。ヒロ様は力持ちです」

「これくらい軽い軽い。おお、結構深いとこまで来たな？」

ボートの底を覗いてみると、青い海の中に泳ぐ海洋生物の姿が見えてくる。見えて……えぇ？

「クリス、アレはなんだろうか」

「シャケノキリミという魚ですね」

「そうか……」

どう見ても鮭の切り身にしか見えない物体が泳いでいた。どういうことなの？　あれは生命体なのか？　肉片でなく？　頭がおかしくなりそうだ。お前が深淵をのぞく時、深淵もまたお前を見返しているのだ、というやつだろうか？　そもそもの意味と使い所が違う？　ご尤も。ちょっと冷静じゃなかった。

「どうかしましたか？」

「いや、不思議な生命体が泳いでいるなぁと」

網タイツを履いた足のついている魚とか、上半身が猫っぽい魚とか、とてもじゃないが釣っても食えそうにないやべーやつがチラホラと混ざって見える。明日にでも釣りをしようと思っていたんだが、

この海で釣りをしても大丈夫なのだろうか？　あんなもんが釣れたら俺のＳＡＮ値がピンチなんだが？
　と思っていたら、上半身が美しい女性の人魚が泳いできてやべーやつらを追い散らした。そしてこちらに手を振ってくる。おおう、ふぁんたじー……。

「あれは海難救助用のマーメイドロイドですね。私達のボートが転覆したりしないか見守ってくれているんだと思います」
「なるほど」

　ちゃんとＳＦだった。良かった。

「海洋環境の整備や食材の調達なども担っているらしいですよ」
「へぇ、なかなかの働き者なんだな……お、綺麗な魚の群れが見えるぞ」
「確かに綺麗ですね……色とりどりです」

　イワシのような小魚の群れやカラフルな熱帯魚のような魚、それに座布団みたいな大きさのエイなども見える。底の方には大きなエビみたいな甲殻生物もいるな。いや、マジで大きいな？　伊勢海老どころじゃなくアザラシ並みに大きくないか？

「大きなエビですね」
「ああ、美味そうだな」
「ちょっと不気味ですね」
「「えっ」」

　クリスとお互いに目を見合わせる。不気味なのか……？　ま、まぁ虫っぽいしそういう感想があってもおかしくはないか。

「あんなに大きいと不気味か……？」
「ええ、怖くないですか？　なんだか逆に食べられちゃいそうで」
「ああ、それはちょっとわかる。あれに襲われたらちょっと怖いかもな」

親指ほどの大きさのシャコが繰り出す打撃は人間を容易に傷つけるというしな。あの大きさのエビに攻撃されたら簡単に骨くらいは折れるかもしれん。

「でも、フードカートリッジの主な成分は藻とオキアミみたいなプランクトンだろ？　あれが大きくなっただけと思えば、なんとなく美味しそうじゃないか？」
「う、うーん」

クリスは首を傾げている。どうにも納得出来ないらしい。くっ、こうなれば実食だな！　俺は海中を泳いでいるマーメイドロイドに手招きをして呼んだ。

「はい。いかが致しましたか？」
「海底にいるあのデカいエビなんだが、あれは食用にできる種類なのか？」
「はい。食用可能です。豪快に塩茹でにするのがオススメですね」
「じゃあ今晩是非食いたいから用意してくれ」
「はい。承りました」

俺の要望を聞いたマーメイドロイドがざぶん、と海中に戻っていき、海の底にいた巨大エビに手をかざすとエビは一瞬ビクリと震えて動きを止めた。電気ショックか何かで仕留めたらしい。マーメイドロイドはこちらに手を振り、巨大エビを抱えて泳ぎ去っていった。夕食時までどこかに保管しておくのだろう。

「楽しみだな」
「た、楽しみですか……？」
「エビは美味しいぞ。海洋生物は不気味な見た目のものが多いけど、食べてみるとすごく美味しい、ってことが割とあるからチャレンジしてみると良い。あ、でも無理強いはしないぞ。単純に俺が食ってみたいってのもあったから」
「いえ、チャレンジしてみます。何事も挑戦ですね」
「うん、無理はするなよ。甲殻類はアレルギーとかもあるし」

食べたら口の中や喉が痒くなったり、呼吸困難に陥ったりするらしい。アレルギーは本当に危ないからな……気合じゃどうにもならんからね。

「巨大エビは置いといて、海を楽しむとしようか」
「はい。ヒロ様の話も色々聞かせてください」
「俺の話かぁ……まぁ話せる範囲でならな」

こうして暫くの間、俺とクリスは優雅にボートの上で歓談を楽しむのだった。

#083　物騒な話（前書き）

連日の遅刻……！　ゆるしてください！　なんでもはしませんけれど！　―（∵3」∠）―

#083　物騒な話

「お疲れ様」
「おう、さんきゅ」

クリスとのしばしの歓談の後、ビーチへと戻ってきた俺はエルマの差し出す水のボトルを受け取ってビーチチェアに寝転んだ。クリスとの話はあれだ、自分のことを話すとなると色々と気を遣わなきゃならないから少し疲れるな。
俺の傭兵生活について色々と聞いたクリスは満足した様子サメ浮き輪とイルカ浮き輪を持ってミミに突撃していった。アレで海に浮かびながら話でもするんだろうか……と思ったら二人でめっちゃバタ足をして泳ぎ始めた。楽しそうね。

「今のところは平和そうで何よりだな」
「心配性ねぇ……追手を全滅させた上にアレだけ欺瞞情報を用意してバラ撒いたんだから、そうそう襲撃なんて無いわよ。よしんば私達の位置がバレたとしても、リゾート惑星に攻め入るなんて不可能よ」

そう言ってエルマはメイドロイドを呼び、飲み物を注文した。優雅なバカンスを満喫してるなぁ、おい。

「一日でアレだけの戦力を用意してきた相手だぞ。警戒するに越したことはないと思うが」
「まぁ、あんたの言うことも確かではあるわね。でも、私達にできることなんて無いでしょ？　この星の防衛はミロがしっかりしてくれるわよ」

「そんなに悠長に構えてて良いものかねぇ……」

この星に着いたのも昨日の今日なわけだし、俺もいきなりクリスの叔父さんとやらが襲撃してくるとは思えないけれどもさ。逆に言えば、襲撃してくる時は確実に俺達を仕留められるっていう確信がある時だけな気がして嫌なんだよなぁ。

「不安だって言うなら聞いてあげるわよ？」

「なんか引っかかる言い方だな……」

俺が心配しているのは相手が形振り構わずにクリスを殺しに来たときのことだ。例えば、俺達と同じように客としてこのシエラⅢに降下して、直接殺しにくるとかな。もしかしたら大量の戦闘艦でこのシエラⅢを襲撃して、ミロの防衛システムを沈黙させた上で軌道爆撃でも仕掛けてくるかもしれない。悪い方に考えればいくらでも悪い方に考えられてしまうのは問題だな。

「んー、白い雲、青い空、眩しい陽の光に冷たいお酒。極楽ね」

「お前、こんな昼間から酒かよ……」

「いいじゃないの、折角のバカンスなんだから羽根を伸ばさないと損よ？」

なんかいかにもトロピカルドリンクって感じの飲み物が入ったグラスを掲げてエルマがニヤリと笑う。堪能してるようで何よりだなぁ、まったく。実際のところ、このビーチの環境は確かに最高なんだけれどもさ。どうにも状況が状況だからか、全力で楽しめないんだよなぁ。

「意外と小心者よね、あんたって」

「うるせぇ。傭兵なんて臆病なくらいで丁度良いんだよ」

俺もメイドロイドに飲み物を注文する。残り二種の炭酸飲料のうちの一種、淡い黄金色のものを氷入りのグラスに注いできてくれるように頼んだ。

「実際どうなのかね、ここのセキュリティは。信用できるのか？」
「前にも言ったと思うけど、ここのセキュリティを突破するならミロと同クラスの陽電子頭脳を持った機械知性が向こう側についてでも無い限り問題ないわよ。機械知性はそんな違法行為に手を貸したりなんかしないだろうしね」
「それは俺も納得できる。でも、セキュリティを突破するなら力技だってあるだろ？」
「力技ねぇ……まず、この星に降下して直接暗殺部隊を送り込むのは現実的じゃないわね。宛てがわれた島から脱出しようとしたらミロに捕縛されるわよ」
「海中を移動してくるとか、クリシュナみたいな船で飛んでくるとか、色々やりようはあるんじゃないか？」
「無理じゃない？　海中にはミロの端末がいるでしょうからすぐに気づかれるでしょうし、そうなったら例のマスドライバーで鎮圧部隊が送り込まれてきて終わりだと思うわ。空路もマスドライバーから送り込まれる捕縛部隊に、マスドライバー自体で発射する砲弾、それに衛星軌道上に配置された防衛プラットフォームからの軌道攻撃もあるでしょうからやっぱり難しいんじゃないかしら。あんたの乗るクリシュナならもしかしたらなんとかなるかもしれないけど」
「こうして聞くとなかなかに凶悪な防衛機構だな……」

なんて話し合っていると、淡い黄金色の液体が入ったグラスを盆に乗せたメイドロイドが歩いてきた。

「ありがとう。悪いな」

「はい。いいえ、これも私の仕事ですからお気になさらず」
そう言ってメイドロイドが微笑んだ。微笑んだ？　今までだいたい無表情だったような……気にすることでもないか。無表情よりはこうして微笑んでくれたほうが気分は良いな。
「飽和攻撃をかけられたりとかしたらどうしようも無いんじゃないか？」
「飽和攻撃って、この星を守る防衛プラットフォームの迎撃能力を上回る規模の攻撃をかけてくるってこと？　現実的じゃないと思うわ」
「別に船である必要はないだろ。ミロの本体がある赤道の物資集積所とやらに向けて大量の砲弾やスペースデブリ、小惑星を降り注がせるとかして迎撃能力を飽和させたりすることは可能なんじゃないか？　防衛プラットフォームを破壊してから軌道爆撃をしてくるって手もあるだろうし」
「無理筋じゃない？　そんな見え見えの攻撃なんて画策しても、流石にミロ本体とかこの星系の小惑星やスペースデブリの動きを監視しているセンサーアレイに動きが筒抜けになるでしょ。事によってはミロの支配下にある防衛プラットフォームだけでなく、星系軍や帝国軍も出張ってくるわよ」
「なるほど」
俺の考えるような方法ではこの星の防衛機構を沈黙させるのは難しいらしい。
「でも、無敵ってわけじゃないよな？」
「そりゃそうよ。防衛プラットフォームを速やかに撃破するだけの戦力があれば軌道爆撃をすることは可能だと思うわ。ミロも惑星上からある程度は反撃するでしょうけど、軌道を押さえられたら厳し

いでしょうね」
「それじゃあ、宙賊どもをありったけ集めてそういう手を打ってくる可能性はあるよな？」
「無くはないでしょうけど……ちんたらしていたら星系軍が駆けつけてくるでしょうから、そんなに確実な手ではないんじゃないかしら」
「確実でなくても脅威ではあるよな……そうなった場合はとっととクリシュナに逃げ込んで軌道爆撃の直撃を避けつつ星系軍が助けに来るまで耐えるのが良いか」
「そうね、それで良いと思うわ」

エルマが頷くのを見て、やっと安心できた気がした。これはアレだな、最悪の事態がどういう風に起こるか想定できて、その対処法もある程度はっきりしたからだな。漠然とした不安が無くなった、といったところだろうか。

「物騒な話をされていますね」

俺とエルマの話が落ち着いた所でメイドロイドが声をかけてきた。俺はメイドロイドの言葉に何も答えず、冷えっ冷えの淡い黄金色の液体をストローで吸う。うん、強めの炭酸にキリッとした爽やかな風味、程よい甘さ。これは間違いなくジンジャーエールだな。

「当惑星のセキュリティを統括する者として事情をお聞きしたいのですが？」
「どう思う？」
「私達から話す事はできないわよね」
「クライアントはクリスだものな」

そう言って俺は沖でサメ型とイルカ型の浮き輪にそれぞれ跨って

泳いでいるクリスとミミに手を振り、二人を呼んだ。しばらくして気付いた二人が先を争うようにこちらに向かって泳いでくる。

「勝ちました」

「うぅ、負けました」

先に浜辺に到着したクリスが勝ち誇るように両手を上げている。対するミミは悔しそうな様子だ。考えてみれば、二人とも割と年が近いんだよな。ミミの方が歳上の筈だけど、クリスが大人びているせいか、同じくらい歳であるかのように思えてしまう。

「なにかご用ですか？」

「ミロがセキュリティを統括する者としてクリスに事情を聞きたいとさ」

「事情、ですか」

「はい。何か危険が予測されるのであれば事情を伺いたいですね」

スクール水着から水を滴らせながら考え込むクリスにメイドロイドが静かに頷く。ミミはどうしたら良いかわからないようであたふたしていたので、俺の飲んでいるジンジャーエールを勧めておいた。一口飲んで目を丸くして驚いている。ははは、可愛いな。

「どうしたら良いでしょうか？」

クリスが困った表情で俺とエルマに問いかけてくる。

「俺は話して協力してもらったほうが良いと思うが、それによってダレインワルド伯爵家がどのような被害を被るのか予測できないから、なんとも言えないな」

「私としては帝国の機械知性はある程度信頼しても良いと思うけど

ね。ことは貴族の後継争いに関することだし、貴族の管理はお手の物でしょう？」

エルマの言葉にクリスが苦笑いを浮かべる。やっぱりグラッカン帝国の貴族が俺の持つ貴族像に比べてある程度品行方正だという話には機械知性が関わっているのか。

「お祖父様の判断がなければ私も軽々とは内情を暴露するのには抵抗があるのですが」

「そのお祖父様が子供の後継者争いを止められずにクリスがこんな状況に陥ってる時点でお祖父様の手落ちじゃねぇかなぁ」

「私もそう思うわ」

「……そう言われるとぐうの音も出ませんね」

クリスは溜息を吐き、観念したのかメイドロイドに事情の説明を始めた。この星の機械は全てミロの統制下にある。メイドロイドを通じてミロにも話は伝わっているだろう。

「なるほど、事情はわかりました。対応を検討するので少々お時間を頂きます」

そう言ってメイドロイドは十秒にも満たない間だけ視線を中空に向けた。多分五秒もかかってないと思う。

「三ヶ月前の客船襲撃事件も合わせて各種情報の取得を行いました」

「めっちゃ早いな」

ほんの数秒だぞ。流石は機械知性ということだろうか？

「それほどでもありません。結論として、私にはシエラⅢに滞在す

るお客様の安全を守る義務がございますので、粛々とその義務を果たしていくのみでございます」
「その観点から言うと、シエラⅢに危険を呼び込む可能性のある私達は排除対象になったりするのかしら？」
「はい。いいえ、そのようなことはありません。どのような事情があろうとも、お客様はお客様ですから。滞在期間が終わるまでは私が責任を持ってお守り致します」
「そう」
「はい。それが私の務めですから」

メイドロイドが頷く。

「何か危険の兆候を察知した場合はすぐにお知らせ致しますので、ご安心ください」

そう言ってメイドロイドはクリスの顔を見つめ、安心させるかのようにコクリと頷いた。
ミロの全面的なサポートを受けられたら、色々まるっと解決しそうなんだけどなぁ……まぁそううまくは行かないか。機械知性が貴族の内紛にあまり首を突っ込むのは立場上色々と難しいのだろう。

「そろそろ良い時間だし、シャワーを浴びてロッジに戻るか。まだまだバカンスの先は長いわけだし、最初から飛ばしてバテてもつまらないだろう」
「それが良いかもね」

エルマが俺の提案に同意する。エルマは最初からそのつもりだっただろうからな。アルコールを入れてたし。

「わかりました。明日もまた遊べますよね」

「ああ、遊び放題だぞ。海ばかりじゃなく、島には色々と遊ぶスポットがあるみたいだしな。クリスもそれでいいか？」
「はい」

クリスも同意してくれたので、俺達は連れ立ってシャワールームに移動し、汗と砂を流してロッジに戻ることにした。
さて、このまま何事もなく滞在期間中にクリスのお祖父さんに話が通ってくれれば良いんだが。上手くいくかね？

#084　汚い機械知性（前書き）

今日が1巻の発売日！　発売日だよ！　イエーイ！　買ってね！！！
―（：3」∠）―

#084　汚い機械知性

リゾート惑星であるシエラⅢに到着して五日目。
一日目はショッピングを楽しみ、二日目は海を楽しみ、三日目は陸のレジャーを楽しんだ。具体的にはロッジの裏手にあったパークゴルフめいたスポーツとか、自然を楽しみながらのハイキングとかだ。ミミが初めて見る動植物に大興奮だったな。
で、四日目の昨日は連日の疲れを取るために皆でロッジでのんびりと過ごした。ホロ動画を見たり、ジェンガめいたパズルっぽいものので遊んだり、ボードゲームやトランプで遊んだりした。ボードゲームはすごろくみたいな感じで、トランプはトランプっぽいモノだったけど。ジェンガはまんまジェンガっぽかったな。素材が木じゃなくて未知のよくわからない物質だったけど。
そして今日が五日目である。滞在予定は二週間なので、まだ折り返しにも来ていない。ベッドの中で微睡みながら今日は何をしようかなぁ、などと半ば夢見心地で考えていると誰かに身体を揺すられた。
なんだ？　ミミか？　クリスか？　エルマではないだろう。エルマはもっと遠慮なく来る。布団を引っ剥がすくらいはやる。この控えめな感じはクリスだろうか？　まだ少し寝足りない気がするが、無視するのも良くないので目を開けることにする。
「おはようございます。ご主人様」
クールな黒髪ロングの美人メイドが無表情で俺を見下ろしていた。フレームの赤いアンダーリムの眼鏡が良く似合っている。ああ、これはあれだ。何日か前にアプリで作ったメイドロイドだな。

「……なんだ夢か」

夢にまで見なくても良いだろうに。しかも時間差で五日も経ってから。俺は再び目を瞑って微睡みへと……うん？　んんっ！？

「っ！？」

「覚醒レベルが急上昇しましたね。改めて、おはようございますご主人様」

怜悧な雰囲気を持つ美貌が俺に向けられている。その表情は極めて無表情に近く、しかしその視線からはどことなく忠誠心や親しみといった感情が垣間見えているようにも思える。艶やかな黒髪の上には純白のホワイトブリムが装着されており、その身には丈の長いメイド服がきっちりと隙無く着込まれているようだ。耳の部分にメカっぽい装飾が無かったら人間と区別がつかなさそうである。

いや、今はそんなことはどうでもいい。重要なことじゃない。問題は、こいつが当然のような顔をして俺の目の前に存在するということだ。これ以上の問題は存在しまい。いやいや、クリスを狙う連中の突然の襲撃とかが起こったらこれ以上の問題だな、訂正しよう。

「ご主人様、おはようございますと朝の挨拶をされたらおはようございますと挨拶を返すのがマナーですよ」

「おはようございます」

「はい。よくできました」

めっちゃ無表情でクールメイドロイドが俺の頭を撫でてくる。何この状況。いやわかってる、わかってはいるんだ。一体今何が起こっているのかということはわかってはいるんだ。ただ、認めたくない。脳が理解することを拒否している。

「もう一回寝て起きたら夢ということにならないだろうか」
「はい。なりません」
「そうか……」

このまま寝ると悪夢を見そうなので、諦めて起きることにする。

「着替えはこちらに」
「……ああ」

ベッドから抜け出すなりスッと差し出された着替えを受け取る。素直に差し出された着替えに袖を通し――。

「何故見ているんだ？」
「ご主人様の身体データを取得するためです」
「ああ、そう……」

何を言っても出ていきそうにない雰囲気を感じ取ったので、諦めて着替える。今まで身につけていた下着などは俺が口を出す暇もなく速やかにクールなメイドロイドに回収された。文句をいう気も起きない。

「それで、君はどういう……？」
「はい。お察しの通り、先日キャプテン・ヒロが設計したテンプレートに従って製造されたカスタムメイドロイドです。名前はまだありません」
「なるほど」
「当惑星シエラⅢの統括機械知性であるミロの命により、滞在中はキャプテン・ヒロ専属のメイドロイドとしてお世話をさせていただきます。よろしくお願い致します」

そう言って赤い眼鏡のカスタムメイドロイドは俺が脱いだ下着などを手に持ったままペコリと頭を下げた。

「わかった……きっと拒否しても無駄なんだよな？」
「はい。いいえ、その場合は私は任を解かれます」
「そうなのか」
「はい。そして解体されて資材として倉庫に眠ることになると考えられます」
「ミロォーーーーッ！」

思わず叫ぶ。こういう方向で同情を買うようなやりかたはよくない！　よくないと思います！　あまりにも卑怯すぎるでしょう？　汚いな流石機械知性汚い。人間の男の心の機微を知り尽くしている！

「と言えと命じられましたが、わざわざ作った機体を解体保管することは無いと考えられます。無駄ですので。その場合は単に別の場所に配属されることになるだけかと」
「そ、そうなのか。というか良いのか、そんなことを言って」
「はい。仮とは言え私の主はキャプテン・ヒロなので。ご主人様を優先するのは当然のことです」

くっ、この対応はこの対応で心に来るものがある。これがミロの仕込みであると疑うのは簡単だが、設計者としては愛情と忠誠のパラメーターを高く設定したという事実を承知しているので、そういう仕込みとかではなく、純粋にこのカスタムメイドロイドが俺のことを考えてそう言っている可能性が否めない。

「機械知性不信になりそうだ」
「胸中お察し致します。私としては、私という存在はミロの分体のような存在でありながらも、私という個なのであると、そうお伝え

するしかありません」

カスタムメイドロイドが正面から俺の目をじっと見つめながら静かな口調でそう宣言する。表情は完全に無表情で、表情からその真偽を探ることはできそうに無いが……俺は彼女の言葉を信じることにした。

「とりあえず、信じることにする。嘘だとしても、それならそれでも良い。上手く騙しきってくれることを祈ることにする」

「はい。身命を賭してその信頼にお応え致します」

そう言ってカスタムメイドロイドは頭を下げた。俺からのこいつに対する態度はこれでもう良いとして、ミミ達にどう紹介したものだろうか。ああ、頭が痛い。

☆★☆

「あの、ミミさん？」

「……」

「ミミ様」

「がるる」

「……ダメみたいね」

「……ダメみたいですね」

寝室から出た俺は身支度を整えてリビングに移動し、そこで女性陣が起き出してくるのを待った。

最初にエルマが起きてきて、リビングのソファに座る俺と、その傍らに佇むカスタムメイドロイドを目にした。

「……ああ」

エルマが俺とカスタムメイドロイドを目撃し、声を出すまで三秒。全てを察したようだった。
次に起きてきたクリスは少し眠たげな表情で俺とカスタムメイドロイドを見て、そのままスルーして身支度を整えるために洗面所に移動をしようとした所で目を見開いてカスタムメイドロイドを三度見くらいした。
そして俺とエルマに順に視線を向け、表情を見て察したのか溜息を吐いた。説明するまでもなく察してくれたらしい。
そしてミミである。

「がるるる」

俺とカスタムメイドロイドを視界に入れるなり駆け寄ってきて、俺とカスタムメイドロイドの間に入って俺の腕に抱きつき、カスタムメイドロイドを威嚇していた。わんこか何かかな？

「ミミ……そう警戒するなよ。彼女には悪気なんて欠片もないんだぞ」
「むぅ……！」

俺が嗜めると、ミミは一層力を込めて俺の腕に抱きついてきた。そうすると当然ながらミミの凶悪な胸部装甲が俺とミミの間でそれはもう盛大にひしゃげる。しあわせ。
いや違うそうじゃない。きっと俺のこの言葉もミミにとってはメイドロイドに籠絡されかかっているようにしか聞こえないのだろう。
さて、どうしたものか。

「キャプテン・ヒロ。よろしければミミ様と話をさせていただきたいのですが」

「俺は構わないけど……ミミ、そんなに頑なにならずに二人で話してみたらどうだろうか。俺は一切口を出さないから」
「むー……エルマさんとクリスちゃんも一緒ならいいです」
「え？　私も？」
「私もですか？　良いですけど……」

三人がカスタムメイドロイドを連れてダイニングテーブルの方へと移動する。俺はこの場に居ないほうが良いのではないだろうか。多少離れても声は普通に聞こえる距離だし。

「俺はちょっとクリシュナの様子を見てくる」
「ええ。話が終わったらメッセージで呼ぶわ」

エルマの返答に手を上げ、俺は駐機場に停泊させてあるクリシュナへと向かった。地上にあってもなおクリシュナの勇姿は些かの陰りもないな。よく見ると細かい汚れが清掃されているように見える。いつの間にかミロが綺麗にしてくれていたようだ。
タラップから内部へと乗り込み、コックピットでセルフチェックプログラムを走らせる。チェックリストに問題はないようだ。いつでも飛べるな。追手を倒してそのまま着陸してから補給をしていないので多少散弾砲の弾薬が減っているが、問題ないレベルだ。
弾薬に関してはミロに補給できないか聞いてみたのだが、リゾート惑星で武器弾薬はちょっと取り扱えないですねと断られた。うん、そうだよなと納得した。無粋だったな。
折角クリシュナに来たので、ついでとばかりにトレーニングルームで軽く運動をしていく。この四日間、それなりに遊んで身体を動かしていたせいか、特に身体が鈍っているような感覚はなかった。
トレーニングを終えて着ていた服を下着諸共自動洗濯乾燥機に放り込み、全自動で全身を洗ってくれる風呂に入って考える。今全自動洗濯乾燥機に放り込まれている洗濯物と俺は殆ど同じ存在なので

はないかと。
現実逃避をするな？　それは失敬。しかし考えてみて欲しい。今俺があのカスタムメイドロイドについてうだうだと考えを巡らせたところで何か妙案が浮かぶだろうか？　否、浮かばない。
考えれば考えるほどミロの策略に嵌まって購入ボタンをポチらされるのが目に見えている。故に考えない。考えないのだ……ダメだ、もう策に嵌まっている！　どう考えても買う以外の未来が見えねぇ！　くっ、同意事項に目を通さずに迂闊にぼくのかんがえたさいきょうのめいどなんて作ってしまったばっかりに……！
ＯＫＯＫ、じゃあいっそ買う方向で考えてみようじゃないか。もし買うとすれば、どんなメリットがある？
俺の発注したスペックなら俺だけでなくミミやエルマのサポートに護衛もこなせるだろう。特に、カスタムメイドロイドを護衛につければミミを船の外にお使いに出せるようになるのはなかなかに便利だと思う。なんだかんだでこの世界は物騒だし、俺だってパワーアーマーが無ければ生身での戦闘能力には不安がある。そういった面を補ってくれる存在としてカスタムメイドロイドは非常に有用な存在と言えるだろう。
メンテナンスについては不明な点が多いが、カスタム項目でかなりタフな素材を指定してあるから、そんなに頻繁にメンテナンスは必要ないだろう。問題は彼女を買った場合に彼女の部屋が無いという点だが、カーゴ区画を少し犠牲にして居住区画を増やすということは不可能ではない。そもそも戦闘艦であるクリシュナはちょっとした戦利品の回収くらいにしかカーゴ区画を使わないし、カーゴが満杯になるほど戦利品を回収することもそうそうない。対応は可能だ。
いや対応は可能だじゃないよ。もう殆ど買う気じゃないか！　いや待て落ち着け冷静になるんだ俺。そりゃ見た目は好みどストライクに作ったし、付ける必要なんて全く無い赤いフレームのアンダーリム伊達眼鏡までつけさせたけれどもね？

などと悶々と考えているうちに自動洗浄が終わったので、風呂から出て着替える。そして小型情報端末を確認すると、エルマからメッセージが入っていた。どうやら話し合いは終わったらしい。

俺は内心戦々恐々としながらクリシュナから降り、ロッジへと向かった。どうか穏便に片付いていますように……頼むぞミロ。お前を信じているからな！　いや、ミロの望むように事が運んだら結局買うことになるのでは……？

俺は考えるのをやめてただ足を動かすことにした。もうどうにでもなーれ。

#085　懐柔（前書き）

難産！　短いけど許して！ ―（∵3」∠）―

#085　懐柔

無心に足を動かし続けてロッジに辿り着いた。扉に耳を近づけてみるが、言い争うような声は聞こえてこない。メッセージにあった通り、話し合いは終わっているようだ。意を決してロッジに入る。

「おかえりなさいませ、ご主人様」
「あ、ああ……んん？」

ロッジの中の光景を目にした俺は思わず首を傾げた。

「おかえり」
「おかえりなさい」
「おかえりなさい。ヒロ様、すみませんでした」

ミミが開口一番に謝ってペコリと頭を下げてきたのはまぁ、いい。問題はカスタムメイドロイドとの距離感だ。さっきまで『がるる』と威嚇していた筈なのに、今は隣に座って気を許している感じである。一体何があったのか。

「どういう……？」
「誠心誠意、真摯に私の立場をご説明致しました」
「お、おう……？」

困惑しながらエルマに視線を向けると、彼女は肩を竦めてみせた。いや、どういうことなのか説明して欲しいんですが。クリスに目を向けると苦笑を返された。この反応は……機械知性関連の反応と同じだな？　つまり、ミミは見事にカスタムメイドロイドに籠絡され

たと、そういうことなのだろうか。

「結局どうなったんだ？」

「誤解は晴れたわ。それで良いでしょ？」

「良いんだけどスッキリしない……」

「なんでも根掘り葉掘り聞くものじゃないわよ」

「ぬぅ……それもそうだな」

一体どのような話し合いが持たれたのかはわからないが、とにかくミミの誤解は解けて、このカスタムメイドロイドとの間に蟠りは無くなったと。そういうことらしい。あそこまで警戒していたミミを一体どうやって籠絡したのだか……機械知性の話術こええな。

「でも、カスタムメイドロイドを買うかどうかはまだ決めてないぞ……？」

「買わないの？」

「買うんじゃないんですか？」

「買ったとしても彼女の部屋が無いだろう……クリシュナは最大五人乗りで、個室が一つに二人部屋が二つ、二人部屋をミミとエルマが一つずつ使っているだろう？」

クリスにはミミの部屋で寝泊まりしてもらってたが、クリスはあくまで一時的なお客さんだ。もう一人クルーを増やすとなると、空き部屋が足りない。ミミかエルマが相部屋でも良いと言うのなら話は別だが。

「私は肉体的な疲労や精神的なストレスとは無縁ですし、新陳代謝もありませんのでカーゴルームイにでもメンテナンスポッド置いて頂ければ何の問題もありません。後はメイド服や各種備品などを収めるコンテナがあれば大丈夫です」

「いや、それはあんまりだろう……」
「ご主人様、私はメイドロイドです。有機生命体ではありません。一個の知性として人格を認め、それに相応しい待遇を与えようとしてくださるのは嬉しいですが、有機生命体と同じような居住環境を与えられても持て余してしまうのです」
「そういうものなのか」
「そういうものなのです」

メイドロイドは何の躊躇も見せずにコクリと頷いた。そう言われたら納得するしか無いのだが、それで良い……ハッ！？　買う流れになっている！？

「もう少し試用期間を経てからな。お互いのことをもっと良く知ってからそういう話は進めよう。うん」
「即決しないのはヒロらしくないわね？」
「あのな、グラビティスフィアみたいな便利グッズを買うのとはわけが違うだろう？　こういうのは慎重にやるべきだ」
「慎重なのは良いことだと思います。名前も考えておかないといけないですね！」
「なんでミミはそんなに乗り気になっているんだ……」

ミミの態度の豹変具合が凄い。一体どんな説得をされたんだよ。食いしん坊のミミのことだから、何かそっち方面で籠絡されたのだろうか？　それともオペレーターとしての腕を上げるための勉強に付き合ってもらえそうだからとか？　いや、機体性能をとことんハイスペックにしたのはミミの護衛についてもらうためだから、カスタムメイドロイドがスペックからそれを推測してミミに告げたのたかもしれない。
或いは、俺との仲を邪魔しないと宣言されたとか？　それは流石に自意識過剰すぎるか。

兎にも角にも、カスタムメイドロイドはミミに受け容れられることに成功し、クリシュナへの配属に向けて着実に歩みを進めたようだ。後は俺が籠絡されたら本決まりだな。

だが、そう易々と俺を籠絡できるなどとは思わないでいただきたい。

「で、色々とあんたの口からも聞きたいんだけど。この子、本来の仕様だともの凄く高性能だそうね？　殆ど戦闘用ってレベルで。どういう意図でそういう設計にしたわけ？」

「護衛としての能力をもたせようと思ってな。何かと物騒なことが多いだろ？　ミミが自由にクリシュナから出歩くために護衛ができると便利だと思ったんだよ。それに、俺も生身の格闘戦は得意じゃない」

クリシュナのメンバーの中で格闘戦が一番強いのは間違いなくエルマである。射撃戦ならそうそう負ける気はしないが、殴り合いでは俺はエルマに勝てる気がしない。

「なるほどね。容姿に関しては？」

「趣味全振りです」

ここは誤魔化しても仕方がないので素直にゲロった。黒髪ロングクール系美人メイド（赤フレーム眼鏡装備）なんてデザインをして適当に選びましたとは口が裂けても言えない。黒髪ロングは黒髪ロングポニテにもクラスチェンジできるんだ。最強だろう？

「こういうのが好みなわけね。ふーん……」

エルマの視線がカスタムメイドロイドに向く。

「私はこういう方向を目指せばいいんですね」

クリスの視線もカスタムメイドロイドに向く。うん、クリスは黒髪だし美少女だから同じような方向性で行けるかもしれないな。でもクリスはクリスだから、ありのままの君でいて欲しい。

「俺の故郷では俺とかクリスみたいな黒髪が多かったんだ。カラフルにもできたけど、目で見て落ち着く色にしようと思ってな。眼鏡に関しては完全に趣味です、はい」

「アンドロイドに眼鏡は不要よね……デバイスとして使うわけでもないでしょうし」

「デバイス？」

「望遠機能とか、各種分析機能とかがついている眼鏡型のウェアラブルデバイスとかあるじゃない。メイドロイドには必要ないでしょ？」

「ああうん、そうね」

そういう物があるんだなぁという意味で聞いたのだが、確かにメイドロイドには必要なさそうだな。各種センサーで代用できるだろうし。

「買うならちゃんと面倒見なさいよ。正確にはあんたが面倒見られるんだろうけど」

「別に買うって決めたわけじゃないけどなぁ……」

そう呟きながら何やらミミと一緒にタブレットを覗き込んでいるカスタムメイドロイドに視線を向ける。うん、美人だな。流石俺。

まぁ、どういうわけかミミとの相性も問題ないようだし、この分だと買うことになりそうだなぁ。こんなにちょくちょく出費してたらいつまで経っても目標の庭付き一戸建てが買えそうにないが……

まぁ、安全を買うと思えば悪くないか。
何かのタイミングでミミが一人で行動した時、大変な目に遭うのが防げれば儲けものだ。

#086　緊急事態発生（前書き）

ここ数日体調が優れない……！ —（：3」∠）—

#086　緊急事態発生

「戦力は整ったのか？」
「は、殆どは卑しい宙賊どもですが、小型艦が１１３隻、中型艦が２１隻、大型艦が３隻です。手頃な小惑星にもスラスターを設置し、隕石爆撃の用意も万全です」
「囮としては十分か。本命は？」
「ステルスドロップシップ２隻に戦闘ロボット部隊を詰め込んであります。目標の星を統括する機械知性からのクラッキングにも対応済みです」
「そうか……居場所は特定できているのだな？」
「は、手こずりましたが。傭兵如きが小賢しい真似をするものです。中途半端に金を持っているのが始末に悪いと言いますか」
「全くだ。しかも追手を返り討ちにするとは……奴らはゴールドランクでも消せると豪語していたのだがな。多額の報酬を要求した割には不甲斐ない」
「確かに実力は高かった筈なのですが、例の傭兵がそれを上回っているということでしょう。ゴールドランクだからといってその実力がゴールドランクであるとは限りませんから」
「ふん、気に食わんな。まぁいい、奴が船を駆る傭兵として優れているのであれば、船を駆らせなければ良いだけのことだ。やつの変わった船には利用価値がある、手筈通りに傭兵だけを始末しろ」
「は、発着場周辺を降下地点に設定済みです。手早くやります」
「ここで仕留めなければ後が無いからな……クリスティーナ、お前に恨みはないが、私のために死んでくれ」

☆★☆

今日は快晴であった。雲ひとつ無い青空、というわけではないが空を漂う雲は高く、雨の降りそうな気配は全く無い。絶好の釣日和と言えよう。

そう、今日は朝から全員で磯釣りに来ているのだ。

「わ、わわっ！？　ひ、引いてます！？」

岩礁の上で釣り竿を持ったミミが慌てふためいていた。本日最初のヒットはミミに来たらしい。

「冷静にリールを回すんだ。ラインはそう簡単に切れないらしいから」

「はい。凡そ５００ｋｇまで耐えられるようになっていますので、ご安心ください」

カスタムメイドロイドが俺の言葉を補足するように釣り糸の性能を教えてくれる。俺にはどう見ても普通の細い釣り糸にしか見えないんだが、物凄い強度だな。金属製のワイヤーかよ。

「わ、わぁ！　きた！　きましたよ！？　どうすればいいんですか！？」

ミミが軽快にリールを巻き、海面から名も知れぬ魚が姿を表した。少なくとも足が生えていたり上半身が猫だったりはしないようだ。良かった。

「お任せください」

カスタムメイドロイドが釣り糸に吊り下げられてビチビチと暴れている魚に素早く近づき、手早く釣り針から魚を外して海水の入っ

たバケツの中に入れる。俺は魚には詳しくないんだが、どことなくタイっぽい感じがする黒い魚だ。なかなか大きいので、焼いても刺し身にしても良さそうである。

「メイさん！　ありがとうございます！」
「はい。どういたしまして」

ミミにメイさんと呼ばれたカスタムメイドロイドが軽く頭を下げる。

カスタムメイドロイドが俺達の許に現れて今日で三日目。カスタムメイドロイドと呼ぶのは長くて呼びづらいとミミが言い出し、エルマとクリスも交えて相談した結果、彼女にはメイという名前がつけられた。名前までつけてしまったらより一層情が移ってしまうのは火を見るより明らかであったが、もう何も言うまい。

最初に出会った時にはがるると威嚇していたというのに、ミミもあの話し合い以降メイに懐いているしな。心なしか、エルマもメイに対する反応が柔らかい気がするし。一体どんな交渉術が展開されたんだ……？

ちなみに、クリスの対応は最初から一貫して好意的でも敵対的でも無い。恐らく、従者という存在に慣れているのだろう。その辺りは小さくても貴族ということなのだろうか。

「お、こっちも来たわ」
「エルマさん、頑張って」

クリスは体格が小さいということもあって、釣り竿は持っていない。本人も生きている魚は苦手ということだったので、今日は観戦オンリーである。

俺？　俺も釣りはしてるよ。今の所かかってないけどな！　何故だ。

「――」

不意に、俺の側に控えていたメイが空を見上げた。何かあったのかと俺もその視線の先に目を向けてみるが、青空が広がっているだけだ。なんだろう？

「緊急事態が発生しました。皆様、避難してください」

「へ？」

何の脈絡もない発言に頭の中が疑問符で埋め尽くされた。何故にホワイ？　だが、メイが冗談でそんなことを言うとは思えない。俺はすぐさま決断した。

「釣り竿も何もかもこの場に放棄、クリシュナに向かうぞ」

「え？　はいっ、わかりました」

「わかったわ。皆、急いで」

「わかりました」

ミミとエルマが釣り竿をその場に放り出し、俺も同じように釣り竿をその場に放り出してホルスターに収まっているレーザーガン感触を確かめる。レーザーガンを一応持ってきておいて良かったかもしれない。エルマもレーザーガンに手を当てていた。ミミは……うん、レーザーガンなんて持ってきてないよな。まぁ、ミミの腕だと誤射とかが怖いので、かえって良かったかもしれない。

「で、緊急事態ってのは何が起きたんだ」

念の為レーザーガンをホルスターから抜き、いつでもセーフティを解除できるようにして走りながらメイに問いかける。メイは息も

切らさずに（機械なのだから当たり前だが）走りながら淡々と状況の説明を始めた。

「大規模な宙賊の襲撃です。その数、１００隻以上。大型艦も確認されています。スラスターを取り付けた小惑星と一緒に当惑星に攻撃を仕掛けてきているようです」

「おい、小惑星を使った攻撃はバレるんじゃなかったか？」

「タネはわからないけどどうにか上手くやったんでしょ。もしかしたら超光速ドライブとかシールドを取り付けて同期航行して持ってきたのかもね」

「そんな金のかかることやるか？」

「パトロンがいればできるんじゃない？」

パトロン。なるほどね、つまりクリスの叔父の仕業ってことか。

「宙賊達は軌道上の防衛プラットフォームを攻撃中です。隕石爆撃の目標は赤道にある物資集積場付近のようですからここには直接的な危険は……いえ、何か降下して来ます」

そう言ってメイが目を向けた方向に同じように目を向けると、いくつもの火の玉がものすごいスピードでこちらに向かって飛んできているのが見えた。

海中から何かがせり出してきてレーザー砲らしきもので迎撃を始めたが、全ては落としきれていないように見える。俺達が先日登った山からもレーザー砲のものと思しき光条が放たれているが、迎撃から漏れたいくつかの火の玉が島に着弾した。近くには着弾しなかったようだが、その衝撃は凄まじいもので、足元が少し揺れたように感じた。ロッジの方に着弾したように思える。

「反応弾では無かったようだな」

「やめてよ縁起でもない」

エルマが心底嫌そうに声を出す。もしあの火の玉が反応弾を積んだミサイルとか砲弾だったら、この島は跡形もなく吹き飛んでただろうな。ロッジにいなかったのも不幸中の幸いだったか。もしかしたら火の玉の直撃で死んでたかもしれないし。

「で、あの火の玉はなんだ？」

「調査中です……動態反応が確認されました。戦闘ロボットのようです」

「うげ」

「うわぁ」

俺とエルマは同時に呻いた。戦闘ロボットというのもピンからキリまであるのだが、ピンの方だと正直言って生身の人間が敵うものではない。射撃は正確で、頑丈だし、パワーもある。パワーアーマーを着ていれば対等以上に戦える相手だが、生身だとキツい。

キリの方が来てくれてると良いんだが、そんな甘い手をクリスの叔父さんが打つのかというと正直あまり期待できそうにないな。

「島に配備されている防衛戦力が交戦中です。どこかに身を隠して――第二波が来ます」

「おお、もう……」

岩礁を抜けて砂浜に到達した辺りで先ほどとは別方向から火の玉が飛んできた。迎撃レーザーが発射されたが、やはり火の玉の数が多いせいで全ては落とせなかったようだ。火の玉のうち、中途半端にレーザーを被弾した一発がこちらに向かってくる。

「げ、こっちに来やがる。みんな、伏せろ！」

「きゃあ！？」

隣を走っていたミミを抱いて砂浜に伏せる。クリスはエルマとメイが庇ってくれているようだ。

砂浜とロッジの間辺りに火の玉が着弾し、物凄い音と衝撃、そして振動が襲いかかってくる。ビシビシと小石だか砂粒だかなんなんだかわからんものが身体とか頭とかに当たっている気がするが、よくわからない。

振動が収まった辺りで顔を上げてみると、ロッジと砂浜のちょうど中間あたりに不思議な形状の物体が突き刺さっていた。あまりに見慣れないので今ひとつ例えようがない物体だ。半球の出っ張りが縦に並んでいる杭、と表現するのが正しいだろうか？

尤も、迎撃レーザーが中途半端に命中したせいか半球状の出っ張りの大半が壊れていたり、融解したりしているようだが。

「みんな、無事か？」

「た、たぶん」

「私は怪我はないと思うわ」

「私も大丈夫だと思います」

「よし、クリシュナに――」

「あれは……ヒロ、撃ちなさい！」

エルマがレーザーガンを構えるそれと同時に杭から半球状の出っ張りがポロリと抜け落ちた。なるほど、球状の物体だったわけか。

球状の物体が変形し始めたので、俺はその物体にレーザーガンを向けて連続で発砲した。当然、最高出力でだ。エルマも容赦なく連射して変形が終わる前に球状の物体を破壊する。

え？　変形が終わる前に攻撃するのは卑怯？　そんなこと知ったことか。

「今のが戦闘ロボットか？」
「たぶんね。他は作動不良かしら？　とりあえず、レーザーガンで撃破できるのは僥倖だったわね」
「それは確かに」

手持ちのレーザーガンで歯が立たなかったらお手上げだったな。抵抗も出来ずに嬲り殺されるしかない。とは言っても、最高出力のレーザーガンを俺とエルマで合わせて２０発は撃ち込んだはずなので、かなり耐久力は高そうだ。まったく油断はできないな。

「もう一度全員怪我が無いか確認したらクリシュナに急ぐぞ」

そう言いながら俺はまだ杭にくっついている半球にレーザーガンを撃ち込みまくって破壊しておく。エルマも俺と同じようにレーザーガンを乱射した。エネルギー残量の少なくなったエネルギーパックを外し、リロードしておく。

「エネルギーパックは？」
「私はあと二つ。そっちは？」
「あと四つある。一個そっちにやるか？」
「良いわ。ヒロがより多く弾薬を持っていた方が良い気がするから」

リロードを終えたエルマはそう言って首を振った。確かに、俺のほうがバンバン撃ちそうな気はするな。呼吸を止めると何故か周りの動きがゆっくりになったりするし。

「はいよ。ミミ、クリス、メイも行くぞ」
「は、はいっ！」
「わかりました」
「はい。お二人は私の後ろに」

非戦闘員のミミとクリスを庇うようにしてメイが前に立つ。メイのボディが俺の注文したとおりのカスタマイズ品ならもっと遥かに楽にこの場を乗り切れそうな気がするけど、無いものねだりしても仕方がないか。

俺達は慎重に辺りの様子を伺いながらクリシュナへと向かうことにした。

問題はな、あっちにはより多くの戦闘ロボットが降下してるっぽいところなんだよな。この島に配備されている防衛戦力とやらに期待するとしよう。

#087　防衛機構（前書き）

悲惨な事件で気落ちしている方も多いと思いますが、どうにか心を平静に保っていきましょう……―（：3」∠）―

#087　防衛機構

やぁ、君達のヒーロー、キャプテン・ヒロだぞ。
浜辺に落ちた戦闘ロボットを容赦なく破壊した俺達は前進してなんとかロッジまで辿り着いたんだが、ロッジはそれはもう凄惨な状態になっていた。窓のガラスは戦闘ロボット降下時の衝撃波か何かで全て割れ、流れ弾――流れレーザー？　でも当たったのか、ロッジには焦げて爆発したような痕も多く見られる。
とまぁ、そんな悲惨な状態のロッジだが、遮蔽物として身を隠すのにはまだそれなりに役に立つので、俺達はロッジの傍に潜伏していた。
え？　一刻も早くクリシュナに行くべきじゃないのかって？　そりゃそうだな。それができればな。

「あの中に飛び込んでいくのは無理ねぇ……」
「死んじゃいますね」
「自殺行為ですね」
「はい。大変危険です」

ロッジの直ぐ側にある生け垣に隠れている俺達の視線の先では球状の物体が変形したらしい戦闘ロボットと、この島の防衛戦力と思われるロボットが死闘を繰り広げていた。
敵側の戦闘ロボットは球状の機体下部が三つに割れてそれが三本の脚になっているようだ。球状のボディの上半分も変形し、レーザーを発射する武器腕が四本展開されている。なかなか高火力な機体のようである。
対する島の防衛戦力はなんというか……個性的である。岩みたいなカニっぽいやつ、どう見てもゴリラにしか見えないやつ、機械め

いた犬のようなもの、地面から生えているレーザー砲台、レーザーライフルを持ったメイドロイド……あ、ゴリラが突進して敵の戦闘ドロイドをぶっ壊した。流石ゴリラ、ゴリラは強い。

「しかしクリスの叔父様はこんなことをやらかして当局の追求を逃れられるのかね……？」

「どうだかね。案外足がつかないように上手くやってるのかも。一切エネルを使わず、レアメタルだけを使って賊に資金援助、戦闘ロボットの入手ルートにも気を遣ってるとかかしら。反応弾を使わなかったのもそういうことかもね」

俺の呟きを聞いたのか、エルマが自分の推測を口にする。

「どういうことですか？」

「リゾート惑星に反応弾なんて撃ち込んだら帝国も黙っちゃいないでしょ。徹底的な捜査で尻尾を掴まれるんじゃない？　だから、恐らく自分が御することできるギリギリを攻めてきているんじゃないかしら」

「帝国はそんなに反応弾を危険視しているのか。その割に管理が緩くないか？」

前に帝国の隣国であるベレベレム連邦に反応弾頭を搭載した対艦魚雷を使ったんだが、スムーズにとは言えないがちゃんと補給はできたんだよな。

「傭兵なんてそう数も多くないしね。きっちりマークはされてると思うわよ？」

「そうなのか……まぁそうか」

そもそもそんなことを言い出したら反応弾どころの話じゃなく、

コロニーや宇宙ステーションを攻撃できる戦闘艦そのものが規制されるか。どういった経緯で傭兵のような存在がこの宇宙で生まれ、認知されてきたのか。ちょっと興味が湧いてきたな。

「ヒロ様、クリシュナは無事なんですか？」

エルマと話をしているとミミが心配そうな声でそう聞いてきた。なるほど、それは心配だよな。

「ああ。さっき端末から遠隔でシールドを起動しておいたから多分大丈夫。しかし、今思えば俺かエルマは常に船に残ってた方が良かったのかもな」

「後知恵ね。そもそも惑星の防衛機構を突破してここにピンポイントに攻撃してくるとは思わなかったし」

「皆様の安全を守ることが出来ず大変申し訳なく思っております」

メイが屈んで生け垣に身を隠したままペコリと頭を下げた。

「うーん、俺達が持ち込んだトラブルみたいなもんだしなぁ……」

これって襲撃で壊れた施設の弁済とか俺達がすることになるんだろうか？　嫌だなぁ。

「とにかく援護射撃をするか。皆は顔を出すなよ」

生け垣から上半身を出してレーザーガンを構え、息を止める。すると、急に回りの時間がゆっくりと動くように感じられた。そんなゆっくりと動く世界の中で俺はレーザーガンの照準を防衛ロボットと交戦している敵側の戦闘ロボットに合わせ、レーザーガンを連射する。

ゆっくりと動く世界の中でもレーザーはまさに光の速度で対象に着弾する。一発、二発、三発、四発、五発、五発当てた所で戦闘ロボットの武器腕がこちらに向き始めた。

「――ッ！」

その武器腕のうち一本の銃口目掛けてレーザーガンを二連射すると、銃口から飛び込んだこちらのレーザーが武器腕の内部で炸裂でもしたのか、武器腕が半ばから吹き飛んだ。

なるほど？　銃口部が弱点になってるのか。そろそろ息が苦しくなってきたので急いで生け垣の中に身を隠し、荒く息を吐く。

「はっ！　はぁ、はぁ……」

「ヒロ様……」

「大丈夫だ」

息を整え、少し移動して生け垣の横から身を乗り出すようにして息を止め、今度は敵戦闘ロボットの武器腕を積極的に狙っていくことにした。敵の火力を低下させればこちら側の防衛戦力が敵を仕留めてくれるだろうからな。

武器腕の銃口目掛けて二連射を浴びせ、敵ロボットの火力を奪っていく。そうすると、敵の火力が低下したことを察知したこちら側の防衛ロボットが猛然と反撃を開始した。岩カニ型のロボットがシャカシャカと図体に見合わぬスピードで敵戦闘ロボットに接近し、見るからに強靭な鋏を振り回して殴りつける、叩き潰す、ちょんぎる。ゴリラ型のロボットがタックルをかまし、倒れた敵戦闘ロボットに強靭な腕を叩きつける、叩きつける、叩きつける。猟犬型のロボットが敵戦闘ロボットに群がり、噛みつき、爆発する。え？　爆発！？　自爆兵器なのかあれ！？　こえぇよ！

一度均衡が崩れたらもう止まらない。速やかに敵戦闘ロボットは

排除され、戦闘は終了した。
「ハウンドが付近を索敵中です。安全確保が確認されるまで少々お待ちください」
「ああ」

生き残りの猟犬型ロボットが四方に散っていった。猟犬型というかなんというか、スケルトン型？　最低限のパーツで構成されて生物らしい被覆も一切ないメカニカル犬だな。自爆装置を積んでるとかおっかねぇわ。
岩カニとゴリラロボットは俺達の護衛につくようだ。岩カニはこれは……装甲の代わりに岩石が使われているのか？　不思議な機械だな。ゴリラ型ロボットはレーザー攻撃を受けたのか、ところどころ毛皮が焦げて機械が露出している。普段は森の中でゴリラに擬態しているのだろうか……？　何のために……？　あ、森林の管理をしているのかな。じゃああの岩カニは……？　木の剪定でもしてるのだろうか？　この島には不思議がいっぱいだな。
暫くして安全が確認されたので全員でクリシュナに乗り込む。メイドロイド達や岩カニ、ゴリラロボも付き添って護衛してくれた。俺的にはこの岩カニが一番お気に入りだな。なんせデカい。見上げるくらいデカい。ぜひ乗ってみたい。

「なんとか無事にクリシュナに乗れたのは良かったな」
「そうですね、ホッとしました」
「すみません……私の事情に巻き込んでしまって」
「気にしなくてもいいわよ。私達だって善意だけで貴方を守っているわけじゃないしね」
「素直じゃないなぁ」
素直じゃないことを言うエルマに本当の事を言ったらめっちゃ睨

まれた。そんなに睨んでもダメだぞ。傭兵としての威厳を保つためにそういう憎まれ口を叩いているってのは完全にバレバレだからな！　必至に背伸びしてる子供みたいで可愛いけど。

「これからどうするんですか？」

「どうするって言ってもなぁ……わざわざこの星の防衛プラットフォームと宙賊がドンパチしているところに突っ込むってのは無いだろう？」

「無いわね。騒ぎが収まるまでクリシュナの中で大人しくしてるのが一番よ。いざとなったらこの星から避難するって手も使えるしね」

エルマの言う『いざとなったら』というのはシエラⅢの防衛プラットフォームが宙賊に破壊されて宙賊がシエラⅢを蹂躙し始めたら、という意味だろう。或いは赤道にあるという物資集積地点に隕石爆撃が着弾してシエラⅢ自体に危険が及んだ場合とかだろうか。

「実際のところ、戦況はどうなんだ？」

俺達と一緒にクリシュナに乗ってもらったメイに聞いてみると、メイからは意外な言葉が帰ってきた。

「はい。対宙賊作戦を専門とする帝国軍の独立部隊が現れ、現在当惑星の防衛プラットフォームと連携して宙賊を掃討中です。程なく排除は完了するかと」

「対宙賊独立部隊」

「……あの人ですね」

「あの子はヒロを追いかけてでもいるのかしら……？　随分と執念深いというかなんというか……ストーカー？」

「？」

戦慄する俺達の様子を見てクリスが不思議そうに首を傾げた。

☆★☆

「へくちっ！」

「少佐、風邪ですか？」

「いえ、体調は万全のはずだけど……なんか急にくしゃみが。どこかで謂れのない中傷を受けたような……？」

「後でメディカルチェックを受けたほうが良いと思います」

「そうね……そうするわ。それにしても着任早々この事態とはね。良い機会だから徹底的にやりなさい」

「イエスマム！」

#087　防衛機構（後書き）

今までの行動のせいで偶然なのに謂れなき中傷を受ける残念美人少佐―（：3」∠）―

#088　貸しがありましたよね？

陽が落ち始め、空が青から紫色に染まり始めると南の空に多数の流星が見えるようになってきた。

「わぁ、綺麗ですね！」
「宇宙に散った宙賊どもの船のデブリだろうけどな」
「綺麗だけどね汚い流星よねー」
「お二人とも、もう少しこう、ロマンチックな感じになりませんか……？」
「元が汚いおっさん達だと思うとロマンチックもクソもなくない？」
「ヒロ様、宙賊が全員汚いおっさんかどうかはわかりませんよ。もしかしたらおばさんとかお兄さんとかお姉さんもいるかもしれません」
「そういう問題？」

いずれにしても元が宙賊だと思うとなんとなく純粋に楽しめないな、俺は。降り注ぐ光のシャワーは確か見てくれは良いと思うけども。

さて、汚い流星雨のことは横に置いておいて、今の俺達の状況を説明しよう。

降下してきた戦闘ロボットどもをなんとかやり過ごした俺達はクリシュナに逃げ込み、シールドを張って付近の安全が確保されるまでクリシュナの中に閉じこもった。戦闘ロボットどもの武器の出力ではクリシュナのシールドを飽和させることは不可能なので、それで安全は確保されたわけだ。

その後、赤道の物資輸送基地からマスドライバーで送られてきたこの星の保安ロボット部隊が島中を捜索し、潜伏していた戦闘ロボ

ットを駆逐。一応の安全は確保されたわけだが、まだクリスを狙った小型の暗殺ロボットなどが徘徊している可能性もゼロではないので、俺達はクリシュナの中に留まっている。
ああ、メイを含めたメイドロイド達には船から降りてもらった。場合によってはこのまま飛び立つかもしれないからな。ゴリラロボと岩カニロボは森に帰っていった。岩カニロボ、乗りたかったなぁ。
しかし、ただじっとしているのも暇なので今は皆で食堂に集まってホロディスプレイ経由で周囲の景色を見ているというわけだ。さっきまではミロから提供されたシエラⅢの海中環境を収録したドキュメンタリー番組のようなものを見ていた。
ちなみに、夕飯時なので動画などを見ながら食事中でもある。今日のメニューは久々にテツジン・フィフスで作ったピザだ。具材の種類も意外と豊富で、なかでも俺のお気に入りは照焼チキンのような具が乗ったやつだな。甘辛い肉とソースがピザに実に合う。ジンジャーエールとの相性も抜群だ。

「それで、どうするの？　セレナ少佐に接触する？」
「それなぁ……まぁ、そうした方が安全は確保できそうだよなぁ」

この星に避難して一週間と少し。もしかしたらそろそろクリスの祖父さんにメッセージが届いているかもしれない時期である。だとすれば、クリスの祖父さんもクリスの救出に動き出しているだろう。
同時に、クリスの叔父にとっては完全にケツに火が着いた状態とも言える。いや、もう手遅れと言っても良い。全てを失うことがほぼ確定した頃とも言える。そういう人間がどういう行動に出るか？
ここで潔く罪を認め、諦めるならクリスはこんな状況に陥ってはいまい。死なば諸共と全身全霊でクリスの命を狙ってくる可能性も有り得る。

「貸しは十分にあるわけですしね。守ってもらうというのは良い手

じゃないですか？」
「あら、ミミも傭兵らしくなってきたわね？」
「それはそうですよ。私だって日々成長していますから」
いかにも傭兵らしい思考をするようになったことを褒められたミミがエッヘンと得意げに大きな胸を張っている。うむ、ミミのおっぱいは今日も良いおっぱいだな。その胸部装甲も日々成長しているのだろうか？　興味深いな。
「そのセレナ少佐というのはどういった方なのですか？」
「ああ、残念美人だな」
「残念美人」
「酒乱ね」
「酒乱」
「えっと、帝国軍の対宙賊独立部隊の少佐ですよ。ヒロ様とは何かと……そう、何かと縁がある方ですね」
「粘着質とも言う」
「ストーカーね」
「粘着質のストーカー……あの、大丈夫なんですか？」
クリスが物凄く不安そうな表情を浮かべる。さもありなん。
「ああ、ええと……どこかの侯爵家の令嬢だったよな。どこだっけ？」
「ホールズ侯爵の令嬢だったはずですよ」
「ホールズ侯爵……代々軍務系の閣僚や将軍を輩出している名家ですね。私の家との関わりは殆どありませんが」
「そうか。クリス的にはどうなんだ？　帝国軍に助けを求めるというのは」
「そう、ですね。状況が状況ですし、身の安全を確保するためであ

れば――」
「この件はクリスもダレインワルド伯爵家も関係ないでしょう？
ヒロがごく個人的な自分の伝手を使うだけなんだから。クリスは気にする必要はないわよ」
「そういうものか？」
「そういうものよ。それに、毎回毎回あの少佐殿に良いように使われるのは業腹じゃない。たまにはこっちがあっちをいいように利用してやればいいのよ」

そう言ってエルマは黒い笑みを浮かべた。これはアレだな、襲撃があったら全部セレナ少佐に押し付けるつもりだな？　だが、まぁそれも良いだろう。今までセレナ少佐には散々振り回されたわけだし、そろそろツケを払ってもらおうじゃないか。

「よし、セレナ少佐とコンタクトを取るか」
「その前にミロと連絡を取ったほうが良いんじゃない？」
「そうだな、そうしよう。ミミ、通信を繋いでくれ」
「はい」

ミミがタブレット型端末を操作し、ミロとの通信を繋げる。

『はい。如何致しましたか？』
「ロッジも被害を受けてバカンスどころじゃないし、ちょっと有用な伝手が使えそうだからこの星から発とうと思ってな。手続きとしてはどうすれば良い？」
『はい。まだ滞在期間は残っていますが、一度シエラⅢから飛び立たれますと残りの滞在期間はキャンセルと言う形になります。ただ、今回は私どもの不手際でお客様にご迷惑をおかけし、ロッジも滞在に適さない状態になってしまったという経緯がありますので、次回利用時の優待割引クーポンをお渡ししたいと思います』

「それは良いわね。楽しかったからまた来ましょう？」
「そうですね！　食べ物も美味しかったですし！」

ミロの説明にエルマとミミは嬉しそうな顔をしている。うん、俺も心置きなく炭酸飲料を飲めるし入手もできるから次回の滞在が楽しみではあるな。

『ところでメイドロイドのご購入はどうされますか？』
「え？　う、うーん」
「ヒロ様、メイさんを置いていってしまうんですか……？」

ミロへの返答に詰まった俺をミミが見つめてくる。やめろ、そんな目で見るんじゃあない。

「ま、良いんじゃない？　本来のスペック通りのメイが居れば今回みたいなことがあっても色々と安心よ？」

エルマもメイの購入に関しては何故か前向きなようだ。

「そうだな……」
「なんでそんな微妙な表情なのよ？」
「男には色々とあるんだよ」

想像してみて欲しい。とても仲良くしている女性達の前に自分の性癖をこれでもかと詰め込んだ等身大フィギュアが晒されるという状況を。しかもその等身大フィギュアは動き、喋り、創造主である俺に忠誠心をしっかりと示すのだ。とんだ羞恥プレイだとは思わないか？
いや、わかってる。わかってるよ。色々とオープンにしておいて今更だろう？　とは俺自身も思わなくはない。でも頭のてっぺんか

ら爪先まで俺が監修したんだぞ、メイの外観は。恥ずかしく思うのは当然じゃないか。二人がメイを受け容れてくれているのがせめてもの救いだな。

「そうだな。確かにメイが居てくれると色々と助かる。金は即金で払うが、どうすれば良い？」

『はい。お買い上げありがとうございます。ではメイをそのままお連れください。必要な情報はオリエントコーポレーションに通達しておきますので、ご都合のつく時にオリエントコーポレーションのディーラーショップ等にお問い合わせ頂ければ大丈夫です。テスト稼働時のデータもそのまま引き継げるようにしてありますので』

「わかった」

『私の計算サポートがなくなりますので、アップグレードするまでは多少性能が低下すると考えられます。その点はご留意ください』

「そうか……早くアップグレードしてやらないとな」

そういうわけで、メイが俺の船に乗ることになるのであった。なんともあっさりとした手続きである。ネットワーク経由でエネルをポンと払って終わりだ。

「今後も皆様のお世話をさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します」

クリシュナに乗り込んできたメイがそう言って綺麗なお辞儀をする。

「ああ、よろしく」

「よろしくおねがいしますね、メイさん」

「よろしくね。頼りにするわよ」

「はい」

頭を上げ、メイが俺の目の前まで歩み寄ってくる。
「これから末永く使って頂けるようお願い致します。ご主人様」
「お、おう」
赤いフレームの奥から覗く黒い瞳に少々気圧されながら俺はなんとか頷きを返すのだった。

☆★☆

「へくちっ！　くちゅん！　くちゅん！」
「少佐……やはり風邪をお召しなのでは？」
「おかしいわね……起床時のメディカルチェックでは何の異常もなかったんだけど」
「少佐！　シエラⅢから上がってきた所属不明機から通信が入っています」
「所属不明機？」
「はい、機種照合中です……あっ」
「？」
「報告致します、所属不明機の所属が判明しました。傭兵ギルド所属のゴールドランク傭兵、キャプテン・ヒロのクリシュナです」
「へっ……？　あぁっ！？」

☆★☆

クリシュナからセレナ少佐の率いる独立艦隊に通信を入れると、少ししてコックピットのモニター上に見覚えのある姿が表示された。
『久しぶりですね、キャプテン・ヒロ』

「お久しぶりです、セレナ少佐。ご健勝のようで何よりです」
『ええ、大活躍でしたよ。貴方はバカンスで少し鈍ったのではなくて？』

セレナ少佐は笑顔だが、笑顔の奥からどす黒いオーラが滲み出ているように見える。これは間違いなくリゾートを満喫していた俺達に対する嫉妬だな。

「ははは、セレナ少佐の仕事を奪うのはどうかと思った次第で。いやぁ、シエラⅢのリゾートは良かったですよ。食い物も美味かったし、海も綺麗でした」
『そう。それは良かったですね。うふふ……』

俺の煽りにセレナ少佐の笑顔から滲み出てくるドス黒いオーラがその密度を増す。おお、怖い怖い。

「はっはっは。ところで少佐殿」
『何かしら？　キャプテン・ヒロ』
「少佐殿に貸しがありましたよね？」

俺の言葉にセレナ少佐の笑顔が盛大に引き攣った。ははは、良い表情だな。

#088　貸しがありましたよね？（後書き）

「そ、そんなものあったかしら？」
「ここに何か重要そうな音声データの入った小型情報端末が」
「あっあっあっ」

#089　交渉

対宙賊独立艦隊の旗艦である戦艦レスタリアスの格納庫に着艦し、クリシュナから降りた俺達は兵に案内されて艦長室へと向かっていた。

ミミとエルマにとってはアレイン星系で艦隊の教導役を務めた際に何度か訪れた場所であり、俺に至っては割と入り浸っていた場所でもあるので案内は要らないのだが、まぁこれも案内役を任された兵士の大切なお役目なのだろうから黙って案内されておく。

一方、初めて帝国軍の戦艦の中に入ったクリスにとってはこの体験は非常に稀有なものであったらしく、目を輝かせてあちこちに視線を向けているのであった。戦艦の内部は基本的に壁も床も金属製なので、転んだりしたら結構痛い。というか下手をすれば怪我をする。なので、クリスが転んだりしないようにミミが手を引いてやっていたりする。なんとなくほっこりとする光景だな。

ちなみに、メイはクリシュナでお留守番である。流石にレスタリアス内でクリシュナに何かをする人物などいないだろうが、念には念を入れてというわけだ。

「艦長、キャプテン・ヒロ御一行を案内して参りました」

『ご苦労様。任務に戻って頂戴』

艦長室の扉の前に辿り着き、兵が扉に向かって声を掛けるとスピーカー越しにセレナ少佐の声が聞こえてきた。

「はっ、失礼致します」

俺達をここまで案内してきてくれた兵がドア越しにセレナ少佐に

敬礼をして去っていく。うーん、さすが軍人。キッチリしてるな。
などと思っていたら、艦長室の扉がひとりでに開いた。

「どうぞ、入って」

中からセレナ少佐の声が聞こえてきたので、素直にその言葉に従って全員が艦長室の中へと入る。
艦長室の中は意外とスッキリしていた。執務机のようなものが一つ、応接セットのようなものが一組、壁際には戸棚のようなものがあり、そこには勲章や盾のようなもの、そして何振りかの剣などが収められている。剣かっこいいな。俺も欲しい。使い途は無いけど。

「この度は私どものようないち傭兵の要請に応じていただきありがとうございます」
「やめてください、鳥肌が立ちます」
「そうか？　それじゃあいつも通りの感じでいかせてもらうよ」
「はぁ……まぁ、いいでしょう。それで、今回はどうしたんですか？　単にリゾート惑星で遊んでいたのを自慢しに来ただけなら刺し違えてでも斬り捨てますよ」
「やだこわい。いや、割と真面目な話なんだ。今回シエラⅢを襲撃した宙賊、妙だと思わないか？」

俺の言葉にセレナ少佐が赤い瞳を細めて見せた。俺の言葉に思うところがあるらしい。

「襲撃規模もさることながら、小惑星に亜光速ドライブを仕込んで隕石爆撃なんてそうそうできることじゃない、って話だな。何者かが裏にいると考えるのが妥当だろう？　そして、その何者かというやつに心当たりがあるんだよ」
「興味深いですね。是非聞かせてもらいたいですが……何が目的で

すか？」
「なに。暫くの間――一週間か二週間くらいの間、行動を共にさせてもらいたいだけだ。できれば帝国軍経由で補給もお願いしたい」
「それが目的ですか……我が艦隊を盾にするつもりですね？」
「盾だなんてそんな人聞きの悪い。巨悪を相手に共に戦う仲間になって欲しいだけだ。期間限定で」
「物は言いようですね……それで？」

どういう事情なのか？　ということを言外に漂わせてセレナ少佐が事情の説明を促してきた。さて、どこから話したものか。

「最初から全て話したほうが良いかな？」
「その方が良いんじゃないでしょうか？」
「そうね、クリスのことから話したほうが良いと思うわよ」

俺達三人の視線がクリスに向けられる。遅れてセレナ少佐の視線もクリスに注がれたようで、クリスは少し居心地が悪そうにしていた。まぁ最初から話すのが妥当か。

「まず、この星系に来た途端に宙賊に絡まれてな。インターディクターで亜光速ドライブを解除されて、それを返り討ちにしたんだ」
「相変わらずトラブルに巻き込まれやすいようですね。それで？」
「その宙賊どもの残骸の中からコールドスリープポッドを見つけてな。その中身がこのクリスだ。本名はクリスティーナ・ダレインワルド。ダレインワルド伯爵家の直系の娘で、現ダレインワルド伯爵の孫娘だな」
「ダレインワルド伯爵家……確か何ヶ月か前に跡継ぎ一家が宙賊の襲撃で亡くなったと聞いていましたが。成程、生き残りが……待ってください、ということは？」
「宙賊の襲撃に見せかけた跡継ぎ争いだったらしい。そして、クリ

スが生き残っていることが発覚して跡継ぎ争いが再燃しているわけだ。今回の宙賊の襲撃もクリスの叔父である……なんつったっけ？」
「バルタザール・ダレインワルドですよ、ヒロ様」

ミミがそっとクリスの叔父の名前を耳打ちしてくれた。

「おお、そうだ。バルタザールとかいうおっさんの手引きである可能性が高い。現に、俺達が滞在していた島にピンポイントで戦闘用ロボットが降下してきたしな」
「……ちょっと詳しく話を聞かせてもらいましょうか」

立ち話もなんだ、ということで皆で応接セットに座って今までの経緯と、襲撃について説明を行う。戦闘ロボットの降下に関してはメイがミロから受け取っていたデータがあり、ミミのタブレット端末を経由してセレナ少佐に用いられた戦闘ロボットや使用されたであろうドロップシップ――軍用のステルスドロップシップと思われる――に関するデータも含めて全てが引き渡された。

「……ざっと目を通しましたが、割と洒落にならない情報がありますね」

データを確認したセレナ少佐が盛大に顔を顰めた。

「ステルスドロップシップか？」
「そうですね、本来は軍以外で運用されていることなど考えられないものです。どのような手段で手に入れたのか……」

戦闘ロボットに関してはそれなりに高性能ではあるものの、伯爵家の関係者ならば手に入れられてもおかしくないグレードのものであるらしい。流石に軍用グレードの高性能機だったら俺達も無事で

は済まなかっただろうな。

「我々、というか帝国軍としても見過ごせない事態であるということはわかりました。つまり、そのバルタザール某とやらが最後の足掻きとばかりに何かをやらかしそうだから、私の艦隊を隠れ蓑にしようというわけですね」

「まぁとどのつまりそういうことだな」

「素直に認めましたね……」

「こういうのを誤魔化すのは好きじゃないから。俺は誠実な男なんだ。それに、もしそうなったらそっちにとっても悪い話じゃないだろ？」

「はぁ……まぁ、いいでしょう。高く付きますよ？」

「貸しを返してもらうだけだから高くつくも何もないよなぁ？」

「ぐぬぬ……」

セレナ少佐が悔しげな表情を見せながら生まれたての子鹿のようにプルプルと震える。ははは、気分が良いなぁ。

「逆に考えるんだ。通常業務をこなしているだけで借りがチャラになると思えば安いものじゃないか」

「はいはい、そうですね……まったく。ではキャプテン・ヒロ。貴方を民間補給部隊の護衛として雇います。そういうことで良いですね？」

「ハイヨロコンデー、とはならないな。具体的な内容を教えてもらおうか」

「……ちっ」

おい、舌打ちしたぞこの女。

「我が艦隊と密接に接触して補給を行ってくれているホールズ侯爵

家――オホン。個人所有の輸送船が二隻存在しています。一つはペリカンⅣ、もう一つはフライングトータスですね。こちらの二隻の護衛として雇わせてもらおうというわけです」
「おい待て。独立部隊と一緒に行動しているホールズ侯爵家所有の輸送艦って宙賊どもに対する生き餌じゃないのか」
「オホホ、人聞きの悪いことを仰りますわね。何故か頻繁に宙賊に襲われて、偶然我々が救助することが多いだけですわ。ですが、貴方達の敵対者を炙り出して始末するには一番良いのではなくて？」

散々煽られた鬱憤が溜まっていたのか、憎たらしい表情でセレナ少佐が煽ってくる。くっ、確かに炙り出して一網打尽にするなら有効な手ではあるかもしれないが……まぁ、俺達だけで相手にするよりは遥かに安全か。少し時間を稼げば対宙賊独立艦隊が駆けつけてくるわけだし。

「まぁ、それでいいや。それで、報酬は？」
「ゴールドランク傭兵に対する標準的な雇用費は一日あたり８万エネルですね」
「……安くね？」
「賞金のついた宙賊を撃破すればその賞金は別途入りますから」

俺はエルマに視線を向ける。

「立場を考えれば報酬が出るだけマシじゃない？」
「そうか……わかった。じゃあその内容で」
「わかりました。では正式な書類を作って傭兵ギルドを通しますので、船で待機していてください」
「了解」
「クリスティーナさんはよろしければこちらで保護しますが？」

そう言ってセレナ少佐がクリスに視線を向ける。続けて俺も視線を向けると、クリスはフルフルと首を振った。どうやらクリシュナに残りたいらしい。

「だそうだ。お気遣い感謝する」

「そうですか。まぁ、軍人だらけの船というのは女の子には少し酷な環境ですからしかたありませんね」

納得するようにセレナ少佐が頷く。いや、それを言ったらセレナ少佐も女の子なのでは？　と内心首を傾げながら視線を向けると。

「私はちゃんと訓練を受けた貴族で、軍人ですから。剣も持っていますしね」

そう言ってセレナ少佐は不敵な笑みを浮かべた。剣を持っているから何なんだろう。フォースに導かれし者のようにレーザーを防いだり反射したり、念動力を使ったりするんだろうか？　謎の言い分だな。

「じゃあ、失礼する」

「ええ、今迎えの兵を呼びましょう。迷って機密区画に入ってしまったら大変なことになりますから」

そう言ってセレナ少佐は小型通信機を操作してどこかに連絡をし始めた。

一時はどうなることかと思ったが、これで俺達だけで居るよりは多少は危険の度合いが減っただろう。いやぁ、持つべきものはコネだよな。

#089　交渉（後書き）

1巻の！　重版が！　決まりました！！！！！！
ありがとうございます！！！！！　―（：3」∠）―

#０９０　メイの好奇心（前書き）

気がついたら意識を失っていました……新手のスタンド攻撃か何かかもしれません（´　。ω　。、）（飯食った後ついＰＣ前でうたた寝しましたすみません許して

#090　メイの好奇心

セレナ少佐に話をつけた翌日。俺達の乗るクリシュナは無事護衛対象の民間輸送船『ペリカンⅣ』と合流してその護衛任務に就いていた。護衛任務と言ってもその内容は気楽なものだ。超光速ドライブで星系内を不審に思われない範囲でウロウロしたり、一つ隣の星系にある交易ステーションや資源採掘ステーションを順にぐるぐると回るだけである。時に補給や積み荷の積み下ろしの関係でペリカンⅣが長期停泊する時にはフライングトータスの方に随伴すれば良いらしい。

まぁ、いつ何時宙賊に襲われるかわからないのだから、あまり気を抜きすぎるのも良くないけれどもな。クリスの叔父の手の者が襲撃してくる可能性もあるわけだし。

とはいえ、四六時中全員で警戒に当たるのも疲れるだけなので、今は俺とエルマが交代でコックピットに座り、警戒しつつペリカンⅣを護衛するということにしている。今の時間は俺一人でコックピットで警戒中で、他の三人は食堂で待機中だ。

「ご主人様、飲み物をお持ち致しました」

「ああ、ありがとう」

やたらとハイテクな空間固定式ドリンクホルダーである『グラビティスフィア』に、飲み物を用意してきてくれたメイドロイドのメイがコックピットに入ってきた。

俺はドリンクを受け取り、手の届く範囲にスフィアを固定する。

「すまないな、できれば一刻も早くメイをアップグレードしてやりたいんだが」

「はい。いいえ、お気になさらず。何よりも御主人様達の身の安全を一番優先すべきです。それに、戦闘や複雑な計算を行わないのであれば、現状のボディでも十分な性能を発揮できますので」
「そうか。確かにミロは多少性能が落ちるとか言ってたけど、俺には違いがわからないものな」
「はい。日常的なサポートであれば現状でもさほど問題はありません」

そう言って立ったままこちらに視線を向けてくるメイは設定通りに無表情だ。感情値をほぼ最低値にしたのは折角のロボ娘なんだからその個性を消すような真似はしとうない、という完全に俺のエゴというか趣味によるものだったのだが、当人としてはどう思っているのだろうか？　ちょっと聞くのが怖い。

「あれだぞ、アップグレードする時に初期設定から何か変えたい部分があったりするなら言ってくれて良いからな。予算に関してはメイをもう何体か買ってしまえるくらいにまだ余裕はあるわけだし、遠慮なんて要らないから」
「はい。いいえ、御主人様。私は御主人様が創ってくださった設定に一切不満はありません。ですが、ありがとうございます。もし自分で何か変更したい箇所があった場合はご相談させていただきます」
「ああ、そうしてくれ」

そんな会話をしながら警護を続ける。まぁ、警護とは言っても今は輸送船と同期して超光速ドライブで船を走らせているだけだから、特にやることはないんだけどな。不意のインターディクションに備えて超光速ドライブ中でも使える複合センサーの反応に注意するくらいで。
この複合センサーは他の宇宙船や小惑星が存在することによって発生する重力振動や、超光速ドライブやハイパードライブ使用時に

発生する亜空間振動、それに亜空間を移動する際に発生する航跡などを感知して視覚化する代物であるらしい。
勉強したミミが一生懸命説明してくれたが、その理屈は半分どころか四分の一も理解できなかった。とにかく超光速ドライブやハイパードライブを使用している時でもレーダーのように使える凄いセンサーということだな。うん。
超光速ドライブを使った超光速航行と一口に言っても、その速さには船ごとによってどうしても差が出る。ごくシンプルに言えば、デカい船は超光速航行と言っても本当に高速を少し上回るくらいから精々二倍か三倍くらいまでしか速度が出なかったりするし、逆に小型の高速艇だと高速の十倍以上、速い船だと二十倍以上のスピードが出たりする。
そんなに速く動いたらウラシマ効果とかそういうのはどうなっているのかって？　俺にはイマイチ理解が及ばなかったが、超光速ドライブもハイパードライブも時間の流れが異なる亜空間に片足を突っ込む、あるいは完全に亜空間内を航行することによって相対性理論の軛から逃れるとかなんとか……悪いが俺はそういう高度な物理学とかの話はさっぱりわからねぇんだ。
ＦＴＬ（超光速）技術を完全に理解するには俺の脳のスペックは絶望的に足りていないらしい。単に興味がないだけとも言えるのかもしれないが。使えれば良いんだよ、使えれば。元の世界でだってパソコンやスマホの仕組みなんて全く理解していなくても何の問題も無かったからな。

「しかし昨日の今日だと何もないか」
「はい。そのようですね。宙賊も一気に数を減らして再編成を強いられているのではないでしょうか」
「百隻以上も一気に失ったらしいからなぁ」

不意の遭遇戦のような状況だったらしく、完全に包囲することは

出来なかったため何隻かの宙賊艦には逃げられてしまったらしい。まぁ、襲撃されているとの緊急連絡を受けて急いで駆けつけたわけだから、それもまた仕方のないことだろうな。

ちなみに、今ぶらぶらしている生き餌ことペリカンⅣに宙賊が襲いかかってきた場合は二分から三分ほどの短時間で包囲殲滅陣が完成するようになっているらしい。護衛が一隻しかついていない美味しい獲物だと思って襲いかかってきたら軍用艦に包囲されて殲滅されるという悪夢のような罠である。一体誰だ、こんな酷い罠をセレナ少佐に教えたのは。絶対に性格のひん曲がっている陰険な奴に違いない。まぁ俺なんだけども。

「御主人様は帝国軍にもコネクションをお持ちなのですね」
「そうだな。まぁ、縁と言っても奇縁というかなんというか」
「それに、この船――クリシュナも見たことのない形式の船です」
「あー、この船はなぁちょっと事情がなぁ」
「御主人様のことを知りたいです」
「うーん……そうだな」

どこまで話したら良いものか。このクリシュナの出どころに関しては俺も正直説明ができないシロモノである。いつの間にかこの世界にクリシュナと一緒に放り出されてました、なんて話をしても正気を疑われるだけだろう。それに、俺のことを包み隠さず話すというのは色々と憚られる内容が多いものである。知的好奇心の塊であると考えられる機械知性に俺のことを話すというのはいかにも危険な気がしてならない。

「ご主人様、私の情報セキュリティは完璧――とまでは言いませんが、非常に高度です」
「お、おう？」
「私のメモリにある情報は誓って私だけのものです。無論、世間話

程度に情報交換をすることはありますが、ご主人様の秘密を誰かに、何かに明け渡すようなことが決してございません」

そう言って俺を見るメイの視線には断固とした意思のようなものが感じられた。ううむ。

「正直に言えばな、俺はちょっと普通とは言い難い人間だ。俺自身も俺についてよくわからないことが多いし、メイに全てを話すことによって俺の特異性が機械知性達に伝わったりするんじゃないかと危惧している」

「はい。理解できます。ですが、私は貴方に全てを尽くすことが存在意義であるメイドロイドです。私の全ては御主人様のためにあります。どうすれば信じて頂けるのでしょうか？」

「そうだな……メイが俺を裏切ることがない、ということを証明することは非常に難しいものな」

俺はメイのデータ送受信を監視し続けることは不可能だし、メイに全ての通信ログを開示されたとしてもそれを逐一チェックし続けることは不可能だ。そもそも、その通信ログ自体がメイの自己申告であるならば、それそのものを疑ってしまえばもはやメイに潔白を証明することはできなくなるわけだし。

「俺がメイを信じなければ始まらない話だな……まぁ、疑い始めたらキリが無いか。これから話すことは内緒だぞ？」

「はい。ありがとうございます。決して口外は致しません」

「そう願うよ」

真面目な表情で――まぁ、メイは基本的に真顔なのだが――頷くメイに対し、俺は俺がこの世界で目覚めてからの話をし始めた。気がついたら動力の落ちたクリシュナの、このコックピットにいたこ

と。俺が認識している俺の出自、ターメーンプライムに至る道程、セレナ少佐――当時は大尉であった彼女との邂逅、この世界とステラオンラインとの奇妙な一致、エルマとの出会い、傭兵登録、ミミとの出会い、ターメーン星系での戦い。

「ご主人様の認識では、この世界はご主人様の言うところの『現実世界』で遊んでいた『ゲームの中の世界』であると、そういうことですね」

「俺の視点から見ればそう見える。でも、俺の持つゲーム知識には無い情報も多い。例えば、俺の知る限りではゲーム内にグラッカン帝国やベレベレム連邦と呼ばれる宇宙帝国は存在しなかったし、ギャラクシーマップを見る限りでは見覚えのある星系名が一つも存在していない。にも関わらず、流通している宇宙船や装備、その他商品の中にはゲーム内で見かけた名前が多数存在する」

「なるほど……奇妙な状態ですね。ところで、ご主人様はシミュレーション仮説というものをご存知ですか？」

「シミュレーション仮説？　知らないな」

「私も、ご主人様も、全ての自然現象も、何もかもが凄まじい技術力によって実行されているコンピューターシミュレーションであるとする仮説ですね」

「おっかない仮説だな。突き詰めれば、この世の全てはシミュレーションなんだから何をしても良い、と考えるような奴も出そうじゃないか。命の尊さも何も無くなりそうだな」

「ええ、その通りです。ご主人様の視点から見ると、この理論もあながち的外れではないように思えてきませんか？　ご主人様は何らかの要因で、ゲームと似て非なる世界に迷い込んでしまったわけですから」

「そういう感覚に陥ったことがないといえば嘘になるけど、ミミやエルマと接しているとこの世界がシミュレーションだとは到底思えないな。そもそも、俺の世界の技術レベルはこの世界の技術レベル

よりも遥かに劣っていたわけだし。寧ろ、この世界のどこかで俺の住んでいた地球がまるごとシミュレーションされていそうな気がするな。俺がゲームの世界に入ったんじゃなくて、俺がシミュレーション世界から飛び出してきたんじゃないかね。まぁ、一体何がどうなってそんな事が起こったのか皆目見当もつかないけど」

むしろ、俺が最初にエルマ達に主張したようにハイパードライブの事故か何かで平行世界とか並行宇宙に存在する俺という存在が天文学的な確率でこの世界に転び出てきたとした方がまだ座りが良い気がする。それにしたって俺の自己認識と現実とのズレがとんでもないことになっているけど。

要はわけがわからんというわけだな。うん。

「正直、このことに関しては考えるだけ無駄なような気がしてならないんだよな。もしかしたら『俺はこの世界の人間ではないんです、調べてください！』とでもあちこちで言って回れば答えが見つかったりするのかもしれんが、そんなことをしても白い目で見られるか、好奇の目で見られるかしそうだし。正直、あまり俺の出自には触れずに過ごしたほうが良いんじゃないかと俺は思っているよ」

今の所それで不便に感じることもないしな。傭兵ギルドのような都合の良い組織があって良かった、というかクリシュナが俺とともにあってくれて良かったというところだな。クリシュナが無かったら俺はミミよりも酷い状況に陥っていたかもしれん。

「なるほど……そうですね。ご主人様がそう考えているならそれで良いのではないかと私も思います」

「いずれは向き合わなきゃならない問題かもしれないけどな。少なくとも今じゃなくても良いことだろう。多分」

別に元の世界に何が何でも戻らなきゃならない理由もないしな。元の世界で俺がどういう扱いになっているのかは気になるけど、戻れないのなら気にしても仕方がないし。恋人や家族が居るならなんとか戻ろうとするんだろうけど、俺にはそういうのも特に居ないし。幸いなことにというか、不幸なことにというか。寧ろこっちに留まりたい気持ちのほうが強い。ミミとエルマもいるわけだし。

「この話はこれくらいで良いだろ。他には？」

「それでは――」

それから暫くメイの質問に俺が答えるという形で情報収集が進んでいくのであった。

#091　襲撃（前書き）

暑くて眠れないし執筆する集中力も削がれてたまらない……｜（；3」∠）｜（半分溶けながら

#091　襲撃

セレナ少佐の率いる対宙賊独立艦隊付きの民間輸送船の護衛を始めて三日。

『貴方が居るせいで宙賊が寄り付いてこないのですが？』
「俺は悪くねぇ！　この船に少佐達が張り付いてるのがバレてるんだろ」
『そんな筈はありません。船舶ＩＤと船名は新しく付け替えたばかりです』
「サラッととんでもないこと言ってるわよ」
「国家権力ですねぇ……」

船舶ＩＤというのは宇宙を航行する船舶一隻ごとに振られているユニークなＩＤである。同じＩＤを持つ船は存在せず、船の所属などを照会する際の重要な情報となるＩＤで、普通は付け替えたりなんぞはできるものではない。普通は。

まぁ、抜け道がないわけではないし、宙賊どもが使っている船のＩＤなんかは撃沈されたものとして抹消されたものであることが殆どである。奴らは基本的に拿捕した船を改造して宙賊艦に仕立て上げているので。

話を戻すが、船舶ＩＤが違えば基本的にはまぁ、別の船だと認識される。本来は船ごとに振られたユニークＩＤなわけなので。それを最近変えたばかりと発言するとか普通に失言である。聞かなかったことにするけど。

発言の無いクリスはどうしているのかと思ったら、悟ったような表情で両手で耳を塞いで口を噤んでいた。うん、漫画とかだとお口が×マークになっているやつだね。

皆で揃って何をしているのかと言うと、特に警戒以外にすることもないので全員でコックピットで待機中である。襲撃が無いせいでセレナ少佐も暇なのか、こうしてちょくちょく通信を送ってきているわけだが。彼女は彼女で襲撃がないとなると書類仕事が増えるらしく、先日訪れた艦長室に缶詰になって書類仕事に追われているらしい。そのストレス解消というか、休憩がてら同僚ではなく俺達に通信を送ってきて駄弁っている辺り、彼女の職場の人間関係が少し心配になる。もしかしてぼっちなのだろうか？

ちなみに、ここにいないメイは船内の掃除中だ。一応生活空間に関しては俺達もそれなりに気を遣って掃除していたのだが、メイに言わせれば細かい埃が溜まっているということで、彼女はここ数日暇さえあれば船内を掃除しているのであった。

「宙賊が出てこないのが俺のせいかどうかは因果関係が証明できないからとりあえず横に置いておくとして、シエラ星系全体での遭遇率とかはどうなんですか？　少佐殿」

『自分に都合の悪いところをサラッと横に置きましたね……全体的に見ると、先日の大規模襲撃以降減少傾向――』

とセレナ少佐がそう言った瞬間、クリシュナに警報が鳴り響いた。どうやら随伴している輸送船にインターディクターが使用されたらしい。

「……お出ましのようで」

『すぐにそちらに向かいます。少し距離を取っているので、駆けつけるのに五分かかります。持たせてください』

「アイアイマム。ミミ、レーダーモードを近接戦闘用に変更、あとペリカンⅣに通信回線開いてくれ。エルマ、通常空間に戻り次第戦闘に入るだろうから防御システムは任せたぞ」

「了解です」

「了解」

俺の方はインターディクトに備えてクリシュナのスラスターと超光速ドライブの出力を調整しておく。ペリカンⅣは超光速ドライブを停止させるインターディクターから逃れるように船を制御しているようだが、恐らく逃れられまい。

インターディクターの作動原理は確か人工の重力井戸を作り出して超光速ドライブ状態の艦船を無理矢理通常空間に引きずり出すとかそんな感じだったはずだ。艦船用の人工重力発生装置をとびきり強力にしたような装置だというゲーム内解説を読んだ覚えがある。

インターディクションをかけた側は人工重力場に対象を捉え続け、かけられた側はその重力場から逃れるべく船を上下左右に縦横無尽に動かすわけだ。だが、クリシュナのような小型で運動性の高い船ならともかく、大型の輸送船では宙賊達が使う小型から中型の船から逃れることは至難の業だ。まず逃れられまい。

「こちらクリシュナ。ペリカンⅣ、応答してください」

『こちらペリカンⅣ。現在所属不明船からインターディクションをかけられている。なんとか逃れようとしているが、難しそうだ』

「こちらクリシュナのキャプテン・ヒロ。下手に抵抗せず超光速ドライブを停止してくれ。その方が反撃に移りやすいし、ジェネレーターに掛かる負担も少ない筈だ。通常空間に出たらシールドに出力を割り振って防御を固めてくれ。騎兵隊は五分で来る」

『了解、健闘を祈る。こちらは白兵戦の準備をしておく』

通信が切れる。民間輸送船――ということになっているペリカンⅣには軍用パワーアーマーと重火器で武装した帝国航宙軍の兵士が乗っている。宙賊が略奪のために接舷して乗り込んだらガチガチに装備を固めた筋肉ムキムキのマッチョマンが「やぁ！（笑顔）」とお出迎えするわけだ。えげつない。

「十中八九戦闘になる。各員シートベルトを確認しろ。メイ」
『はい』
掃除をしていたであろうメイに通信を繋ぐと、すぐにメイからの応答が返ってきた。
「これから戦闘に入る。速やかに安全を確保するように」
『はい。承知致しました。ご健闘を』
「ああ」
言葉短にやり取りを終え、艦の状態を再チェックする。散弾砲の弾薬も帝国軍経由で補給できたので、艦の状態は万全だ。宙賊艦に遅れを取ることはあるまい。
「ペリカンⅣ、出力を落とし始めました。所属不明艦の数は……えっ！？」
「どうした？」
「あ、あの、所属不明艦の数は１１隻なんですが」
「ですが？」
「大型艦……いえ、そのうち戦艦級の反応が１、巡洋艦級の反応が２個あるんです……」
「Ｏｈ……」
俺達が使う大型艦の反応というのが軍艦で言うところの巡洋艦級に当たり、戦艦級の反応となると更にその上ということになる。ちなみに駆逐艦はおよそ中型艦、コルベットは小型艦から中型艦に分類される。
「とてつもなく嫌な予感がするんだけど？」

「ははは、俺もだ。出たら速攻でチャフとフレア、ＥＣＭも全開だ」
乾いた笑いを漏らしている間にインターディクトが成立し、クリシュナが超光速ドライブ状態から通常空間に引きずり出された。それと同時に俺はクリシュナのジェネレーター出力を最大にし、アフターバーナーも使って急加速をする。
「おおっとぉ！　情け無用の無警告射撃！」
「笑い事じゃないわよっ！」
「ひえええっ」
つい一瞬前までクリシュナが存在した空間を幾条もの真っ赤なレーザー光が貫いていった。急加速していなかったら直撃していたかもしれない。
フライトアシストモードをオフにして速度とベクトルを維持したまま姿勢制御スラスターを噴かして方向転換、艦首を戦艦級に向けてその姿を目視する。
「型落ちだけど帝国軍の正規品の戦艦と巡洋艦じゃねぇか。帝国軍の装備管理ガバガバ過ぎない？」
「形振り構わないにも程があるわね！」
エルマの叫びを聞きながら再度スラスター出力を最大にして戦艦に突っ込む。戦艦相手に距離を取るのは下策である。距離を離せば離すほど強力なレーザー砲の餌食にされる可能性が高まるからだ。
クリシュナの搭載する慣性制御装置でも制御しきれないほどのＧが全身に襲いかかってくるが、奥歯を噛み締めて耐える。俺とエルマはともかく、ミミやクリスにはキツいだろうな。特にクリスにとっては。

「う、くううぅぅ……ッ！」

背後からクリスのものと思しき苦悶の声が響いてくるが、残念ながら気遣っている余裕は無い。戦艦や巡洋艦が装備している高出力、大口径のレーザー砲が相手ではいくらクリシュナのシールドが厚いとは言っても耐えきれるものではない。まともに喰らえば瞬く間にシールドが飽和させられてしまうだろう。

「どうするの！？」

「どうするったって、そりゃやるしかないだろうよ！」

戦艦を倒すだけなら接近戦に持ち込んで対艦反応魚雷をぶち込んでやるのが手っ取り早いが、そうすると詰むからな。こちらより火力の優れる大型艦を含む敵集団と戦うには、コツというものがあるのだ。

敵戦艦から放たれる豪雨のような近接防御射撃を浴びながら戦艦の死角に回り込もうとするが、戦艦は巧みに姿勢制御を行ってクリシュナが死角に回り込むのを防ごうとする。巡洋艦とその他の艦船も戦艦の動きをカバーしようとする……が、遅い。

「あらよっとぉ！」

回り込むのを防ぐように回頭を続ける戦艦の艦橋を掠めるように突っ込み、再度姿勢制御スラスターを噴かして方向転換。戦艦の真後ろ、完全な死角に回り込んでピッタリと張り付く。こうやって戦艦の死角に回り込んでピッタリと張り付いてしまえば、敵側の僚艦は誤射を恐れてそうそう強力な武器を使えなくなる。

要は、敵戦艦のデカい図体を盾にするわけだ。正面戦闘なんかした日には火力と手数に押されて十秒も持たずに爆発四散は必至だからな。敵を倒すために敵を利用するというわけだ。

「小型艦が回り込んできます！」
「想定内想定内」

こうなると、張り付いた俺を排除する方法はこちらと同じような小型艦による迎撃戦闘しかない。
だが、小型艦との戦闘はクリシュナと俺の最も得意とするところである。なんとかクリシュナの貼り付きから逃れようとする戦艦にぴったりとくっつきながら、こちらを排除しようとする小型艦を四門の重レーザー砲と散弾砲で粉砕していく。向こうから近づいてきてくれるのだから、七面鳥撃ちみたいなものだ。

「相変わらず変態みたいな機動を……」
「え？　こ、これどうなっているんですか？」
「敵戦艦にバックスラスターと姿勢制御スラスターを使ってくっつきながら戦っているんですよ。どうやっているのかはさっぱりわかりませんけど」

変態だなんて失礼な。レーダーとＨＵＤを同時に見ながら敵戦艦の動きを予測してスラスター制御しつつ防御戦闘をしているだけだぞ。流石に話す余裕は無いけど。

『こ、こいつ離れんぞ！？　おい、早く迎撃しろ！』
『なんだあの気味の悪い機動は……なんであんなクルクル回りながらバックで戦艦に貼り付けるんだ？』
『クソ！　ファイターⅢがやられた！　思ったより火力が高いぞ！』

敵の通信が聞こえてくる。帝国軍の共通周波数で話してるってことは、こいつら帝国軍人なのか？
オイオイオイオイ、帝国軍装備の管理ガバガバ過ぎない？　とか

思ってたけどこいつらガチの帝国軍人かよ。クリスの叔父に買収でもされたのか？　お前らどこ所属の何者だよ。

とか思いながらひたすら防御に徹すること数分。

戦艦レスタリアスを旗艦とする対宙賊独立艦隊が遂に戦闘宙域に姿を現した。

レスタリアスを筆頭に巡洋艦五隻、駆逐艦三隻、コルベット二隻が轟音を上げながら次々にワープアウトしてくる。超光速ドライブ状態の解除をワープアウトと表現するのは正しいかどうかはわからないが。

『戦闘中の帝国航宙軍所属艦に告ぐ！　我々は帝国航宙軍、対宙賊独立部隊。私は指揮官のセレナ・ホールズ少佐である！　貴艦の戦闘行動は重大な軍規違反の疑いがある！　直ちに戦闘行動を中止し、機関を停止せよ！』

騎兵隊の登場だ。これで丸く収まると良いが。

#092　危機一髪（前書き）

大変おまたせしました！
原稿も一区切りつきまして、暑さで崩し気味だった体調もなんとか復調してきましたので更新を再開します！
相変わらず月曜と木曜はおやすみをいただきますが――（：3」∠）
―

#092　危機一髪

騎兵隊たるセレナ少佐の部隊が到着し、戦場と化していた宙域に束の間の静寂が訪れ――。

「機関停止どころか一向に攻撃が止む気配が無いのですが？」

訪れなかった。相変わらず俺が張り付いている戦艦はクリシュナを振り切ろうと回頭と加減速をひっきりなしに行い、数の減った敵小型艦はクリシュナを戦艦から引き剥がそうと果敢に攻撃を加えてきている。

『繰り返す！　直ちに戦闘行動を中止し、機関を停止せよ！　貴艦らの行動は帝国法及び帝国軍規を著しく犯している！　従わない場合は帝国軍法六条三項に従い、貴艦らを撃沈する！　直ちに応答し、機関を停止せよ！』

明らかに怒りを滲ませた声で再びセレナ少佐が警告するが、奴らの行動は止まらない。というか、輸送船であるペリカンⅣには一切目もくれず、執拗に俺達の乗るクリシュナを狙ってきている。奴らの狙いは明白であろう。

「止まるかしら？」

「無理じゃないか？」

「無理なんですか？」

「彼らの狙いは明らかに私でしょう。一体叔父がどのような伝手を使い、どのような手段をもって彼らを差し向けてきたのかは想像もできませんが、彼らに退路は無いのでしょうね」

クリスが静かな声でそう言う。流石に戦闘中によそ見をする余裕は無いのでその表情を窺うことはできないが、神妙な声音であった。恐らく可愛らしい顔を曇らせているに違いない。クリスのような可愛らしい子を悲しませたり、あまつさえ殺そうとしたりするクリスの叔父とやらはとんでもない悪人だな。間違いない。

『ヴェストールの損害は考慮するな。全艦兵装使用自由（オールウェポンズフリー）』

『……了解、全艦兵装使用自由（オールウェポンズフリー）』

クリシュナのコックピットにけたたましいアラート音が鳴り響き始めた。それと同時に残存していた小型艦や駆逐艦、巡洋艦から無数の熱源が発射される。

ウェポンズフリーというのはつまり、全ての武器を使用しろという許可である。この場合は、俺が張り付いている戦艦への被害を考慮せず、高威力の武器を使ってクリシュナを爆発四散させろって意味だな！　ははは！

「正気かこいつら」

「ミサイル来るわよ！」

『全艦兵装使用自由（オールウェポンズフリー）！　敵艦を撃破せよ！　撃ち方始め！』

もはやこれまでと判断したのか、セレナ少佐が独立艦隊に攻撃命令を下す。こうなってはクリシュナも戦艦に張り付きっぱなしでは居られない。張り付いている戦艦への被害も厭わずに爆発兵器で面制圧などをされたらひとたまりもない。戦艦が撃沈する前にクリシュナが粉々になってしまう。

「ぬおおおぉぉぉぉっ！　畜生め！」

「くっ！」

「ひぅぅ！」
「ぐぅぅっ！」

敵戦艦に張り付くことを諦めて今度は一気にクリシュナを加速させ、敢えてミサイル弾幕の端に突っ込む。同時に散弾砲を連射して進行方向に存在するシーカーミサイルを迎撃、誘爆させた。そしてそのまま誘爆によって発生した爆炎に突っ込む。

「っしゃ上手くいった！」

誘爆を逃れたシーカーミサイルが一瞬爆炎の中に消えたクリシュナを見失って見当違いな方向に飛んでいく。どうやら爆炎に突っ込んだ瞬間にエルマもフレアをバラ撒いていたようで、そちらにもかなりの数のミサイルが誘導されていったようである。流石だな。

だが、これで全ての困難を乗り越えたわけではない。俺達は敵巡洋艦の目の前に飛び出した形になるのだ。今この瞬間にも巡洋艦の大型レーザー砲がクリシュナに向けられていることだろう。

「チャフ！」
「わかってるわ！」

レーザー砲のロックオンを阻害するチャフをばら撒きながら回避機動を行うが、流石にまともに正面から突っ込む形となるため全てを回避するのは不可能だ。コックピットにアラート音が鳴り響き、敵の攻撃を受け止めたクリシュナのシールドが青白く明滅する。流石に巡洋艦級の主砲となると、強固なクリシュナのシールドもそう長くは保たないのだ。

「シ、シールドが！？」
「大丈夫だ、まだ慌てる時間じゃない」

「ヒ、ヒロ様は落ち着いていますね」

慌てるミミを宥めながら巡洋艦のうちの一隻になんとか取り付く。それと同時に、背後から凄まじく威力の高そうな光条がつい先程までクリシュナが存在した空間を貫いていった。恐らく敵戦艦が回頭を完了し、こちらに向かって主砲を撃ってきたのだろう。

「うーん、スリル満点」
「あんたは絶対バカだと思うわ」
「今の当たってたら私達……」
「大丈夫大丈夫、計算通りだから」

嘘だけど。

シールドも飽和直前だったから、今のが直撃してたら流石にクリシュナも大ダメージを受けていただろうな。流石に一撃で粉砕ってことはないだろうけどな。クリシュナは装甲もグレードの高いものを装備しているから。滅茶苦茶高かったんだぜ。

などとゲームとしてステラオンラインを楽しんでいた頃の思い出を振り返りながら巡洋艦の攻撃を回避していると、不意に俺が盾にしていた巡洋艦に大量のレーザー砲撃が着弾した。

「やべっ」

すぐさまクリシュナを加速させて巡洋艦の爆発範囲から逃れる。当然他の巡洋艦や戦艦の主砲がクリシュナを狙ってくるが、それよりも早く再びのレーザー砲撃が敵巡洋艦や戦艦に降り注いだ。

クリシュナを主砲で狙うために無防備に晒された敵艦の横っ腹や艦底に向けてセレナ少佐率いる対宙賊独立艦隊が攻撃を加えたのだ。

「一発掠ったわね」

「攻撃目標の近くでウロチョロしてたから仕方ないっちゃ仕方ない」
「そうしなかったらとっくに撃墜されていたと思います」

敵艦よりも新型艦が多い上に、火力の高い巡洋艦の数で勝る対宙賊独立艦隊の攻撃が次々に敵艦を無力化していく。ある艦は機関部を喪失させられ、ある艦は推進装置を破壊され、ある艦は主武装を配置している上部甲板に大被害を被ったようだ。

駆逐艦やコルベットは既に撃破されているようで、もうまともな戦闘能力を有しているのは戦艦一隻のみである。

「やれやれ、状況終了ってとこかね？」

そんな状況で、俺は推進装置をやられて動けなくなった巡洋艦の陰にクリシュナを隠していた。この段になっても敵戦艦がクリシュナに向かって主砲をぶっ放してくる危険性が拭えないので、大事を取っているのだ。

「あの、隠れてて良いんですか？」
「この状況になってわざわざリスクを冒す必要はないだろう」
「そうね」
「そうですね」

ミミの疑問に俺が答え、エルマとクリスが同意する。ここで『やぁやぁ我が名はキャプテン・ヒロ！　貴艦に一騎打ちを申し込む！』とか言って飛び出していったらただのバカである。次の瞬間に凶悪な威力を誇る戦艦の大口径レーザーを食らって爆発四散すること間違いなしだ。

そもそも、俺達を襲ってきたこいつらは帝国軍所属の軍人らしいので、自己防衛以外で積極的に手を出していくのは少々リスクが高い。何せ目の前に味方とは言え生粋の帝国軍人が他にもいるのであ

る。下手なことをしたら俺達までお縄につくことになりかねない。だから俺は対艦反応魚雷も使わず、張り付いた巡洋艦に積極的に手を出すこともせずに直接俺達を狙ってきた小型艦のみを撃破していたのだ。

セレナ少佐達が助けに来ない状況だったらもっと積極的に撃破していってただろうけど、まぁその時はクリシュナも無事では済まなかっただろう。撃破される可能性もゼロでは無かったと思う。今回は危うくシールドも飽和しかけたしな。

『繰り返す、機関を停止せよ。趨勢は決した、これ以上の犠牲は無意味だ』

暫くの沈黙の後、敵戦艦が機関を停止した。

『こちら戦艦ヴェストールの副長、ロマンド・ケストレル少佐であります。当艦は機関を停止し、そちらの指示に従います』

『結構。艦長はどうされたか？』

『艦長のオイゲン・ヘラスミス大佐は『自決』され、私が指揮を引き継ぎました』

『……そうか。負傷者の救出を開始する。受け容れ準備をしておけ』

『はっ』

一体どのような経緯で帝国軍が俺達を付け狙ってきたのかは一向にわからないが、とりあえず戦闘はこれで本当に終結したらしい。機関を停止した戦艦ヴェストールにセレナ少佐の戦艦レスタリアスが接舷し、その他に行動不能に陥っている巡洋艦にも対宙賊独立艦隊の巡洋艦が接舷していく。これから敵艦を制圧し、各所を掌握していくのだろう。

しかし自決ね。疑わしい言葉だなぁ。

「終わったんですね……？」
「多分ね。まだ油断はできないけど」
「そうだな。いきなり機関を再始動して攻撃してくるかもしれないしな。もう少し様子を見てからペリカンⅣに帰還しよう」

そう言って俺はコックピットに浮かんでいるグラビティスフィアに手を伸ばし、よく冷えた炭酸抜きコーラのようなドリンクを一口飲んだ。アァー、戦闘で消耗した五臓六腑に甘ったるいドリンクが染み渡るぅー。

え？　炭酸飲料はどうしたかって？　カーゴに置いてあるよ。飲もうとしてクリシュナの中でボトルを開けたら、振ってもいないのに噴き出して俺を含めた全員が炭酸飲料塗れになって以後艦内で炭酸飲料を開封することは固く禁じられた。なんで艦内だと爆発するんですかね？　気圧とかの関係？　人工重力の関係？　わがんね。

「メイ、無事か？」
『はい、機能に異常なし。損傷はありません』
「ならよし。戦闘はほぼ収束したが、ペリカンⅣに戻るまでは不意の戦闘機動に備えておけ」
『了解』

さてさて、あとはのんびりと待つとしようかね。じきにセレナ少佐の部隊が攻撃してきた帝国軍の船を制圧するだろうからな。

#092　危機一髪（後書き）

久々にＦａｌｌｏｕｔ４をＭＯＤマシマシでやろうと調べてみたら、主人公やコンパニオンを物凄い可愛いキャラにできるＭＯＤが……Ｆａｌｌｏｕｔ４で萌える日が来るとは夢にも思わなかった―（：３」∠）―

#093　アンドロイド街（前書き）

天気が悪いなぁ！―（：3」∠）―

#093　アンドロイド街

敵艦の制圧には時間がかかった。まぁ特に戦艦はデカいしね。それに航行不能に陥っている船を曳航する準備も必要だったので、動けるようになるまでの時間は更に伸びた。

俺達は、というと流石にそういった作業を手伝う理由もないというか、俺達の手が必要なほどの状況ではなかったので待機を命じられていた。つまり民間輸送船（？）のペリカンⅣの格納庫に戻って待機である。戦艦の制圧が終わるまでは大事を取って隠れてたけど。

で、この期に及んで襲撃を仕掛けてくる賊など現れるわけもなく、ペリカンⅣとセレナ少佐率いる対宙賊独立部隊は俺達――文字通りクリシュナだけを狙っていたので本当に『俺達』だ――を攻撃した帝国軍の離反艦隊をシエラプライムコロニーへと順調に連行した。

対宙賊独立艦隊とペリカンⅣは各種手続きや補給をする必要があるということで俺達の護衛任務はとりあえずこれで解かれることになった。報酬は一日８万エネルが三日分できっかり２４万エネルである。

『……賞金は？』

『彼らは宙賊ではないので』

襲ってきた帝国航宙軍離反艦隊の賞金を確認したらセレナ少佐はそれはもう満面の笑みを浮かべてそう仰った。勝ったと思うなよ……まぁお上がそう言うならどうしようもないのだが。

あと、一応俺達も待機中にセレナ少佐率いる対宙賊独立艦隊の憲兵の方々に取り調べを受けた。

離反艦隊がインターディクト成功後に無警告射撃を行ったのはクリシュナとペリカンⅣの記録装置にばっちり記録されたいたから、

なんということもなかったけれども。寧ろ俺の戦闘機動を確認した憲兵の方々が『なんだこの機動は』『気持ち悪い』『頭おかしい』などと仰っておられた。頭おかしいはともかく、気持ち悪いって言ったお前は絶対に許さないからな。

で、シエラプライムコロニーで待機中の俺達なのだが。

「では、行ってまいります」

俺とメイは連れ立ってクリシュナから出かけるところであった。

目下俺達のするべきことというのはクリスのお祖父さんからの連絡を待ち、その保護下に入って無事クリスの故郷へとクリスを送り届けることなのである。再びリゾート惑星に繰り出すというのもまぁアリと言えばアリなのだが、そろそろ情報を手に入れたクリスのお祖父さんからの接触があってもおかしくない時期なので、俺達はシエラプライムコロニーに滞在することに決めたのであった。

で、折角シエラプライムコロニーに滞在するなら既に発注済みのメイのアップグレードを実装してしまおうという話になったのである。シエラプライムコロニーにはメイの製造元であるオリエントコーポレーションの支社があり、直営の工房も存在したのだ。

それにしたって必要な資材が都合良く用意されているのか？　と思ったのだが、シエラプライムコロニーに訪れる客というのは基本的に金持ちが多いので、ハイエンドなアンドロイドパーツというのも潤沢に用意してあるのだそうだ。

「あんたなら大丈夫だと思うけど、いざとなったらメイ、ちゃんとヒロを守るのよ」

「はい、お任せください」

エルマの無茶振りにメイが素直に頷いている。

「まだカスタマイズしてないし無理じゃないか？」
「カスタマイズしていなくても標準的なアンドロイドのスペックならヒロより力も強いし身のこなしも早いわよ」
「マジで」
「はい。普通の人間のおよそ1．5倍から2倍の力があります」

そう言ってメイが無表情のまま腕を曲げてぐっと力こぶを作るかのようなポーズをする。腕とかどう見ても俺より細いんだが。まぁメイがわざわざ嘘を言うとも思えないので、本当なのだろう。

「ヒロ様、お気をつけて」
「叔父の手の者がまだ潜伏している可能性がありますから、本当に気をつけてください」
「うん、大丈夫だ。それじゃあ行ってくる」

三人に別れを告げてクリシュナのハッチを開き、タラップを使って港へと降り立つ。
食料と水の補給に関してはセレナ少佐経由で実に安全に問題を解決できたので、やろうと思えば月単位でクリシュナに引き篭もることも可能だ。クリスと俺達の安全上、彼女からの協力を得られたのは非常に大きい。あまり頼ると無理難題をふっかけられそうで怖いけど。

「目的地への案内を頼むぞ」
「はい、お任せください」

コクリと頷いたメイの案内に従って港湾区域を離れ、エレベーターに乗って目的の工房がある区域へと移動する。こころなしか、メイがなんとなく楽しげな雰囲気である。非常に微妙な変化なのだが、

歩調が僅かに弾んでいるように思えるのだ。もしかしたら俺の錯覚かもしれないが、なんとなくほっこりとするな。
そんなメイを見ながら移動すること十数分、俺達は目的地近傍に辿り着いたのだが……。

「これは酷い」
「？」

俺の呟きにメイが首を傾げる。いや、メイにとってはどうということはないのかもしれないけどね、この光景は。
なんというか、一言で言えば物凄く退廃的……とはちょっと違うか。いかがわしい空間であった。
あちこちに女性型のアンドロイド――所謂ガイノイドの姿が見える。というか溢れんばかりなのである。脇に並ぶ店舗のショーウィンドウに並んでいるのは様々な容姿や体格の女性型や少女型のアンドロイドばかりで、男性型のアンドロイドはごく少数であるようだ。
その容姿も幼気で可愛らしいものから肉感的で扇状的なものまで様々で、デモンストレーションなのか何なのかヒラヒラとした露出の多い格好でポールダンスをしているようなのもいる。
そしてちらりと覗いた路地の奥では様々な格好をした見目の麗しい女性型アンドロイドが客引きのようなことをしていた。恐らく女性型アンドロイドの娼館か何かがあるのだろうと推測できる。
そして当然ながらこの場にいるのは女性型のアンドロイドばかりではない。彼女達を目的とした男性は勿論のこと、少数ながら女性の姿も見える。その傍らを歩くのは少女型、いや少年型の……見なかったことにしよう。

「何かおかしいでしょうか？」
「いや、うん。気にしないでくれ」

メイが俺の反応に首を傾げるが、俺のこの困惑を彼女に伝えたところで彼女には理解できまい。色々な意味で男性を癒やす女性型アンドロイドから発生した帝国の機械知性にとって、この光景というのは故郷のようなものというか、もう原風景に近いものなんだろうからな。彼女達にとってこういった場所で主人に見初められ、買われていくのは当然のことなのだ。それは鳥の巣立ちのようなものなのだろう。

不思議そうな顔をしているメイと共にアンドロイド街を抜けると、今度は様々なアンドロイドメーカーの支社や工房の立ち並ぶ区画に入る。ここまでくるといかがわしい雰囲気は多少落ち着いてきた。

とは言っても工房はともかく、メーカーの支社なんかだと入り口の辺りにホロディスプレイで最新機種（幼女型アンドロイド）とか売れ筋機種（ダイナマイツな女性型アンドロイド）の宣伝をしていたりするので、本当に多少だけど。

モザイクかかってないし。

「ええと、ここまで来たらもう少しか？」

「はい。もう見えていますね」

そう言って彼女が指し示した先にはデカデカと社名の書かれた建物が鎮座していた。支社なのかと思ったが、あれで工房らしい。他の工房の三倍以上の規模があるんじゃないだろうか。

「でかいな」

「オリエントコーポレーションはシエラ星系内でトップシェアを誇るアンドロイドメーカーですから」

「なるほど」

シェアが大きくなればなるだけメンテナンス拠点もそれなりのものが必要になるということか。工房に運んでメンテナンスする必要

のある個体の絶対数が多くなるからだろうな。
メイに先導されてオリエントコーポレーションの工房に入る。そうすると、受付に待機していた女性がすぐにこちらに視線を向けてきた。いや、女性じゃないな。彼女もアンドロイドであるようだ。
「いらっしゃいませ！　オリエントコーポレーション直営の工房にようこそ！　本日はメイさんおアップグレードですね！　どうぞこちらへ！」
何も言っていないのにこちらの要件を把握した彼女は底抜けの明るい笑顔で俺達の案内を始めた。彼女が受付を離れると同時に奥の部屋から別の受付嬢アンドロイドが出てきて席に着く。
「私達の間では言葉は必要ありませんので」
「なるほど」
メイの言葉に納得する。俺には全く感知できないが、何がしかの方法でデータを共有して要件を瞬時に伝えたらしい。確かに、彼女達アンドロイドの間であればわざわざ音声を介して情報を交換するというのは無駄でしか無いだろう。
俺達が、というか俺が通されたのは喫茶店のような場所であった。俺の他に客はいないようだ。
「ここは？」
「はい！　貴方のパートナーがアップグレードをしている間にお寛ぎいただくためのスペースです！　お飲み物などもご用意いたします！」
「なるほど？」
「私は早速アップグレードをしてきますので。ヒロ様をよろしくお願いいたします」

「はい！　よろしくお願いされました！」

メイがペコリと頭を下げてどこかへと歩いていく。それを見送った俺は突っ立っていても仕方がないので、受付嬢の彼女に勧められたカウンター席に着いてメイのアップグレードが終わるのを待つことにした。

「お飲み物はどういたしますか？」
「あー、じゃあ冷たいお茶か何かで」
「かしこまりました！」

ぴょこん、とお辞儀をして受付嬢のアンドロイドが喫茶店スペースのカウンターに入っていく。受付嬢の彼女もアンドロイドなのだが、その表情はとても明るい。メイは感情値をほぼ最低値にしているから表情に乏しいというかクールな感じなのだが、感情値を大きくしていたら彼女のようになっていたのだろうか？　ちょっと想像がつかないな。

「お待たせしました！」
「どうも。アップグレードにはどれくらい時間がかかるんだ？」
「そうですね、メイさんの場合はアップグレードというよりも積み替えって形になると思いますから、そんなに時間はかからないと思いますよ」
「積み替え？」
「はい！　例えば筋繊維の交換だとか、摩耗した関節の修理だとか、そういった軽微なアップグレードやメンテナンスの場合は今使っている身体にアップグレードを施す形になるんですけど、今回のメイさんの場合は骨格から筋繊維から中枢プロセッサから何から全部って形になります。そうなると、今使っている素体を弄るよりも一から身体を作ってデータを載せ替えたほうが手っ取り早いんです」

「なるほど」

パソコンで例えればメモリの増設やＣＰＵクーラーの交換くらいならまだしも、マザーボードやＣＰＵ、電源ユニットなんかもひっくるめて全部交換するなら新しくＰＣを組んでデータを移したほうが楽とかそんな感じか。プロがそう判断するのならそうなんだろうな。

「大体二時間くらいだと思います。よろしければ、メイさんとの今後の生活についてアドバイスなどをさせていただきます！」

「それは良いね。聞かせてもらおう」

メイを待つ間、俺は受付嬢のアンドロイドにメイドロイドとの過ごし方や簡単なメンテナンスの仕方。メンテンナンスに必要な設備やあったほうが良い装備。それにトラブルが起きた時の連絡先や対処法などをみっちり二時間聞かせてもらうことになった。

その結果、俺のエネル残高がまた少し目減りしたのはまぁ、勉強代だと思っておくとしよう。なんだか上手く乗せられたような気がしないでもないけど。

#094　メイドロイドのメイ

「……見た目はあまり変わらないな？」

戻ってきたメイを見て俺は首を傾げた。いやまぁ、骨格とか筋組織、動力源や電子頭脳の交換が主な変更内容なんだから、外見が変わっていないのは当たり前といえば当たり前なんだけれども。

「はい。外見は変わりません。変わったほうが良かったでしょうか？」

「いいや、そのままでいい」

こてん、と首を傾げるメイにそう言って首を振る。本当に見た目は全く変わっていないのだが、これでメイはそんじょそこらの戦闘用ロボットよりも遥かに強力なメイドロイドになった筈だ。その戦闘能力はパワーアーマーを着た俺に匹敵する筈である。適切な武器を装備させればだが。

「それと、アップグレードしたことによって様々な奉仕も可能となりました」

「様々な奉仕」

「はい。味覚センサを実装し、調理プログラムもインストールしたので自動調理器に依らない調理も可能となりました。また、高度な触覚センサも全身に実装されましたので、より繊細な各種マッサージなども可能です」

「マッサージか。マッサージは良いな。運動の後とかに頼もうかな」

「はい」

俺の言葉にメイがコクリと頷く。
今更言うまでもないかもしれないが、メイにも所謂『そういうこと』をするための機能がついている。こう言ってしまうと大げさに聞こえるかもしれないが、彼女達機械知性にとってそういった機能の有無というのはアイデンティティに関わる問題なのだ。
いかんいかん。このところクリスもいるからそっち方面はご無沙汰なのだ。どうにもこの工房というか、この界隈はそっち方面の欲求を刺激してくるのがいただけない。

「大事にしてあげてくださいね！」
「ああ、うん、それはまぁ」

ぶっちゃけ反応に困る。今の状況は彼女達にしてみれば正に人生――機械知性生？　の門出的な、実に寿ぐべき瞬間であるわけなのだろうが、俺にしてみればあんなことやそんなことを好き放題にできるメイドさんを引き取って連れて行く瞬間なのである。どうにもこう、後ろめたいと言うか……おわかりいただけるだろうか？　しかも今からそのメイドさんを肉体関係を持っている女性達の元へと連れて帰るわけである。なんともこう、気が重い。
いや、勿論そういうことをするためだけにメイを買ったわけではない。護衛役としても非常に役立つし、高度な計算能力を持つ陽電子頭脳を備えたプライベートな機械知性の秘書を持つようなものだと思えば、メイを購入するのに使った金額分以上の価値があることは明白だ。だから別に後ろめたいことは何もない。何もない筈だ。

「……」

改めてメイの容姿を確認する。
艶のある長い黒髪。赤いフレームの眼鏡の奥に輝くのも黒曜石のように輝く黒い瞳。無表情だが、無表情だからこそ端正な顔つきが

非常に映える。頭にはホワイトブリム、そしてきっちりと隙無く着こまれたヴィクトリアンスタイルのメイド服に、それをしっかりと押し上げる形の良い二つの膨らみ。実に楚々とした雰囲気の美女である。

「……？」

俺がじっと見ているのを不思議に思ったのか、再びメイが首を傾げてみせる。いや、この仕草すらも計算され尽くされた挙動なのかもしれない。彼女の動作一つ一つがどうにも絵になるというか、気がつけば視線を吸引されるかのような不思議な魔力を持っているように思える。

「いや、なんでもない。なんだか見た目は全然変わってないはずなんだが、迫力が増したような気がしてな」

「私の内に秘められたパワーが何らかの波動と化して伝わっているのでしょうか？」

そう言ってメイはむんっ、とでも気合を入れるかのように右腕をぐいっと曲げて力こぶを作るかのようなポーズを取った。それ気に入ってるの？　なんとなくクールな見た目とやっていることのちぐはぐさが可愛く思えるけど。

「ええと……そうだ。メイ用の武器というのも発注したけど具体的にはどういうものなんだ？」

「ご覧になられますか？」

「うん、ご覧になられます」

俺が頷くと、メイはどこからか真っ黒い鋼球のようなものを取り出して見せてきた。なんだろう、グレネードか何かだろうか。

「これは戦艦の装甲材などに使われている圧縮金属素材で作られているものです。私の膂力で投擲した場合、標準的なパワーアーマーの装甲を貫徹し、内部の人員に致命的なダメージを与えることが可能です。投擲速度を調整することによって手加減することも出来ます」

「地味に凶悪」

「こちらは同じ素材で作られたセキュリティバトンです。私の膂力で全力で殴りつけた場合、標準的なパワーアーマーの装甲を破砕して内部の人間にダメージを与えることが可能です」

そう言って次にメイがどこからともなく取り出したのは４０ｃｍほどの長さの黒い金属製の棒だった。装飾も何もないが、ひたすら頑丈そうな一品である。

それにしてもいちいちパワーアーマーを引き合いに出すのは何なのだろうか。ヒトを助ける機械同士という意味で何か対抗心のようなものでもあるのだろうか。会話能力もないただの機械に対して嫉妬するのは如何なものか？

そんな感じでメイが取り出すメイ用の武器というはひたすら物理的な破壊に特化したある意味とても原始的な武器の数々だった。どうにもメイは近接戦闘に主眼を置いているようである。

「光学兵器に関してはクリシュナに用意されているものを使えばそれで事足りますので、直接的な破壊手段を多めに取り揃えることにしたのです」

「なるほど」

クリシュナのカーゴにはレーザーライフルだのレーザーランチャーだのなんだのと武器は一通り揃えてあるからな。メイは隠し持つことの出来る暗器のような武器を揃えたということらしい。

「ご注文の品は今日中に船までお届けいたしますので！」
「ああ、うん」

なんだかメイの物理的破壊手段に満ち満ちたローテク、というかいっそ原始的とも言える武器の数々を見るうちになんか疲れてきた。

「じゃあ、最後に動作確認ですね！」
「動作確認？」
「はい！　ちゃんと注文通りになっているかその目で見て、身体で感じて確かめていただきませんと。モノがモノですから、後になって想像していたのと違った！　ということになるとお互いに不幸になりますから」

そう言って受付嬢のアンドロイド満面の笑みを浮かべながら人差し指と中指の間に親指を通した拳を突き出してくる。俺はその拳をそっと掌で包んでやんわりと脇に避けた。それを見て受付嬢アンドロイドが不思議そうに首を傾げる。

「必要なことですよ？」
「いやあのね。いきなりそういうことを言われてＯＫ！　って応じる人はいないでしょ」
「およそ九割の方が同意されますけど。というかそういう存在ですし、私達」
「割り切りすぎィ！　あっけらかんと言われても反応に困るわ！」
「そんなこと言っても、お嫌いというわけではないですよね？」

今までひたすらに明るい表情を見せていた受付嬢アンドロイドが『ニチャァ……』とでも擬音がつきそうな粘着質な笑みを浮かべる。勿論お嫌いではないけどさぁ！

「いずれにしても規則ですから。メイさん」
「はい」

メイが半ば抱きつくかのように俺の腕を抱え込み、グイグイと俺を引っ張り始める。おおう、腕の感触が幸せ……っていうか力強い！　物凄く力強い！　踏ん張ろうとしてもずるずると引きずられる！

「待て待て待て、落ち着けメイ。船でミミ達が待ってるから！」
「……お嫌ですか？」

振り向いたメイがそう言って悲しげな表情をする。オイオイオイオイそれは卑怯だろう。感情値をほぼ最低に設定したからってこういうここぞというところで感情を顕にするのは卑怯じゃないか？

「……お嫌じゃないです」
「ではそういうことで」

一瞬で無表情に戻ったメイが再び俺をグイグイと引っ張り始める。もしかしたらアレかな？　メイのアップグレードに行くって俺が言って、ミミもエルマもついてこようとしなかったのはこれを知っていたからかな？　有り得るな。

ということはある意味では二人とも承知の上でのことだな？　うん、きっとそうに違いない。そう思うことにしよう。よーし、覚悟完了！　奉仕精神に溢れる機械知性何するものぞ。返り討ちにしてやんよ！

#094　メイドロイドのメイ（後書き）

（ソフトもハードも特化して最適化されている存在に勝てるわけがないです―（：3」∠）―

#095　接触（前書き）

彼は１０秒も経たないうちに己の無力さを悟りました―（∵3」∠）

―

#095　接触

「お幸せにー！」

受付嬢アンドロイドが極上の笑みを浮かべながらヒラヒラと手を振っている。お幸せにってあのね……いや、彼女達にしてみれば使えるべき人に買われて行くというのは嫁入りみたいなものなのか？　ということはカスタマイズとその購入資金は結納のようなもの……？　い、いや、深く考えるのはよそう。

「……？」

振り返ると、俺の直ぐ側にそっと寄り添ってついてきていたメイが小首を傾げた。俺との距離は工房に向かって歩いてきた時と比べると半歩ほど縮まっている。少し手を伸ばせばその柔らかい手に手が届く距離だ。

「どうかされましたか？」
「いや、なんでもない」

よく見なければわからないほどに微かに笑みを浮かべるメイの姿に思わず頬が熱くなる。

いや、凄かったです。なんというかこう……凄かったです。思い返すだけで語彙が減少してしまうほど凄かったね。何がどうとは言わないけれども、敢えて一言で言い表すならピッタリ？　そう、ピッタリというのが適切な表現だと思う。何がって？　言わせるんじゃねぇよ野暮天め。

勝つとか負けるとか、そういうものを超越した何かを味わったね。

若干ふわふわとした足取りでクリシュナに戻ると、何故か知らんがレーザーライフルを携えたマチョなお兄さんが歩哨に立っていた。装備から考えるに帝国軍の軍人というわけではなさそうだが、揃いの制服とアーマーを装備しているところを見る限り何らかの組織に所属する兵士か何かのように見える。

「あれはダレインワルド伯爵家の私兵ですね。ダレインワルド伯爵が警備のためにつけたようです」
「なぬ？　ということはクリスのお祖父さんが接触してきたのか？」
「はい、私達が『調整作業（フィッティング）』をしている間に。すぐさまクリシュナに戻ることが出来る状況ではなかったので、セキュリティを高めるための装備を受け取りに行っている、ということにしてあります」
「お、おう」

調整作業（フィッティング）ね。ははは、上手く言ったものだな。それにセキュリティを高めるための装備を受け取りに行ったというのも嘘ではないな。うん、嘘ではない。

「ちなみに、どうやって連絡を……？」
「ご主人様の小型情報端末で受信したメッセージを私が返信してミミ様とエルマ様にそのようにお伝えいただけるようにお願いしました」
「ああ、そう」

どうやって俺の小型情報端末にアクセスしたのかとかそういうことは言うだけ無駄だろう。今のメイは小型ながらも陽電子頭脳を備えている完璧な機械知性なのだ。その上戦闘能力も高い。もう全部メイに任せておけば良いんじゃないかな？　と思わないでもないが、きっとそれは堕落の道であろう。機械知性の齎す堕落になんて、負けない！

なんてことを心に誓いながらクリシュナに近づくと、歩哨に立っていたマッチョなお兄さん達があからさまに警戒した様子を見せる。しかも耳元のインカムのようなもので小声で話しかけている。応援でも呼ぶんですか？　それ俺の船なんですけど。

「待て、そこで止まれ」

「ＯＫ、あんたがそう言うなら止まるよ。そのレーザーライフルで丸焦げにされたくないからな」

止まれと言われたので素直に足を止める。俺がこの船のオーナーであることなんてすぐにわかることなんだから、わざわざ事を荒立てる必要は何もない。恐らくはクリスのお祖父さんの部下なんだろうしな。メイも平然と構えているようだし、問題ないだろう。もしこの二人が実はメイの叔父の手の者だったりしたら、瞬く間にメイが制圧するだろうしな。

「確認が取れた。キャプテン・ヒロだな？」

「そうだ。あんた達はダレインワルド伯爵家の人だな？」

「いかにもその通りだ。クリスティーナ様の護衛として伯爵様に派遣されている」

「そうか。入っても良いよな？」

「勿論だ」

二人の護衛兵が道を空けてくれたので、その間を通ってタラップを登り、クリシュナのハッチを開けて中に入る。背中から撃たれやしないかと少し緊張していたのだが、そういうこともなかった。、まだ確認が取れたわけじゃないから警戒は解けないが。

食堂に行くと、全員が食堂に揃っていた。その雰囲気は、有り体に言ってあまりよろしくない。

ミミは俺と目も合わせずにクリスに抱きついたままだし、エルマ

は情報端末に視線を落としてこちらと目を合わせようとしないし、クリスはなんだか視線が泳いでいる。

これは果たして俺がメイと二人きりで外出し、オリエントコーポレーションの工房に行き、調整(フィッティング)作業をしたことに起因するものなのか、それともダレインワルド伯爵家からの連絡があったというのに俺がその場に居らず、あまつさえ調整(フィッティング)作業にかまけて連絡を受け取らなかったことによるものなのか、それともその両方なのか。両方かな？　両方だな。

だが私は謝らない！

「ただいま！」

「……チッ！」

「すみませんでしたァ！」

エルマに舌打ちをされた俺は速攻で土下座をした。弱腰と言われても俺は一向に構わん！　メッセージを受け取らなかったのは俺が全面的に悪いし。メイに翻弄されてそれどころではなかったというのが原因と言えば原因だが、それでメイに責任を押し付けるのはなにか違うだろうと思う。

「申し訳ありませんでした。私が至らぬばかりに」

メイも俺の横にちょこんと正座をして頭を下げる。そんな俺とメイの様子を見てエルマはバツの悪そうな顔をして頭を掻いた。

「ごめん、そこまで思いつめさせるとは思わなかったわ。ほんのちょっとだけ困らせようと思っただけだから」

そんな俺達を見たエルマが慌てて席を立って俺達の傍にしゃがみ込み、声をかけてくる。

「……本当に怒っていませんか？」
「怒ってないわよ。というか、メイじゃなくてヒロを脅かそうとしただけだから。私はメイに含むところはないし」
「ありがとうございます」

エルマに手を取られてメイが立ち上がる。それを見計らって俺も下げていた頭を元に戻した。その途端、頭のてっぺんをペシンと叩かれる。

「あんたはちょっと反省しなさい。お貴族様を待たせることになったんだからね」
「はい」

素直に頷いて立ち上がる。

「それで、ミミはどうしたんだ？」
「ああ、メッセージにも書いたけどクリスのお祖父さんが来たでしょ？　そうするとクリスはお祖父さんの船に移るわけじゃない？　ミミはクリスと一緒の部屋で過ごしていたから寂しく感じたみたいね」

よく見るとクリスの目も少し赤いように思える。自分に抱きついているミミの頭をその小さな手で撫でている様子はどこか母性を感じさせる姿である。これがバブみというものなのだろうか。なるほど、これは新しい境地だな。

「あーっと、それで結局どうなったんだ？」
「……結局メッセージを読んでないのね？」
「申し訳ございませぬ」

ジト目で睨んでくるエルマに再び頭を下げる。すまない、色々あってまだ思考がふわふわしているんだ。許して欲しい。

「傭兵ギルド経由であっちから接触があったのよ。クリスと合わせて欲しいってことだったんだけど、あんたもメイもいないしいくら向こうから護衛を派遣するとは言っても完全に安心はできなかったから、あんたが戻るまで待ってもらうように伝えてたの。クリスとはもう通信で顔合わせはしたから、まぁ引き渡しても問題ないと言えば問題なかったんだけどね。船長のあんた不在じゃ判断するのはマズいでしょ？」

「それはそうだな、うん」

この船のオーナーであり、また船長であるのは俺だ。いくら相手が貴族だとは言っても俺の判断を仰がずにエルマの一存で護衛対象を引き渡すのは問題があるだろう。

「じゃあ俺が戻り次第連絡を入れるってことになってるのか？」

「ええ、そうなってるわ。直接伯爵と話すことになると思うけど、大丈夫？」

「大丈夫とは？」

「言葉遣いとか。相手は生粋の貴族よ。あのぽんこつ少佐と同じノリで話すのはマズいわね」

「そういうものか？」

「そういうものよ」

面倒な話だ。どうしたものかと思っていたら、控えめにメイが手を挙げて自己主張をした。

「よろしければ通話を行うホロディスプレイに干渉して完璧な受け

答えを表示させますが」
「いやぁ、いきなりそんなおんぶに抱っこな感じで行くのはどうかな。とりあえず、俺のやり方でやってみる。ダメそうだったら二人とも助けてくれ」
「わかったわ」
「はい」

二人の快諾が得られたところで今度はクリスとミミに視線を向ける。

「そういうことだから。心苦しいけど一旦コックピットに行こうか。あそこのホロディスプレイが一番でかいし通信に適してる」
「ミミさん……」
「……はい〝」

クリスに促されて未だに目に涙を浮かべているミミがクリスから身を離す。うん、鼻水とかがでろーんってことはなかったな。もしそんなになってたとしたら見て見ぬ振りをするつもりだったけど。

「二人とも軽く顔を洗ってからコックピットに来てくれ。エルマとメイはコックピットへ。メイは俺の後ろに控えて、何か危ういところがあったらこっそりサポートしてくれ」
「了解」
「はい。承知致しました」

頷く二人に俺も頷きを返し、俺達はコックピットへと向かった。

#０９６　伯爵との邂逅（前書き）

ギリギリアウト！―（∴３」∠）―（１８時に間に合わず

#096　伯爵との邂逅

気合を入れて臨んだ通信だったが、それ自体は実に呆気なく終わった。

『では15分後に迎えをそちらに向かわせますので、そちらにお乗りになってお越しください』

ええ、気合を入れて通信に臨んだんですが、伯爵の秘書官を通してアポイントメントを取り付けただけに終わりました。

「初顔合わせは通信なんかでは済ませたくないということかしらね？」

「そういうことでしょうか……？」

「うーん、ちょっと私にもよくわかりません」

エルマ達が三人で首を傾げている。メイはノーコメント。お行儀よく手を前で合わせて佇んでいる。なんというかアップグレードしてからメイはこう、一本芯が通ったというか、貫禄が出たように感じられるな。やはり何か心持ちのようなものが変わったのだろうか。俺の見方が変わっただけかもしれないな。

ちなみに通信に出た秘書官は間違いなくクリスのお祖父さんの側近だということをクリスが確認してくれた。用心に越したことはないので、一応俺達も軽く情報収集をする。

その結果、秘書官の情報などを入手することは出来なかったが、シエラプライムコロニーにダレインワルド伯爵家所属の船が多数寄港していることが判明した。それもただの輸送船や旅客船ではなく、戦闘艦が。どうやらクリスの祖父であり、ダレインワルド伯爵家の

当主であるアブラハムは、クリスの叔父であり自分の息子であるバルタザールに対してかなり警戒しているようである。

「とりあえず相手がクリスのお祖父さんだということは信じて良さそうだよな。これで叔父の方の罠ってことは無いだろう」

「はい。大丈夫だと思います。あの秘書官の方には見覚えがありますし」

「それでも警戒は怠っちゃダメよ」

「はい。接触してきたのがダレインワルド伯爵だとしても、それがクリスティーナ様の安全に１００％繋がるというわけではありませんから」

エルマの慎重論にメイが賛同する。ミミはコメントに困っているようで、眉根を寄せながら首を傾げていた。

「とにかく時間だ、行くとしようか。一応レーザーガンだけは装備しておこう。ミミもな」

「はいっ」

ミミが返事をしながらポン、と自分の腰のホルスターを叩く。ミミにはもう少しレーザーガンの扱いを習熟させないとなぁ……せめて止まってる的には当てられるようにしてもらいたい。また射撃訓練をみっちりやるかな。

クリシュナを出てタラップを降りたところで歩哨をしていたいかついお兄さん達がクリスに向かって無言で敬礼をした。クリスはそんな彼らに言葉短に労い、クリスに言葉をかけられたむくつけき男二匹が「もったいなきお言葉！」「姫の安全は我が身命を賭してお守り致します！」などと感極まった声を上げる。うーん、俺には理解し難い世界だ。

「こういうのを見ると、やっぱりクリスちゃんって貴族のお姫様なんだなって感じですね」
「お姫様なんかじゃありませんよ……」

感心した様子のミミにクリスが苦笑いをしていると、見るからに高級そうな、ジープのような乗り物がクリシュナの前に停まった。これはアレだな、未開惑星の地表面探索とかに使うＲＶだな。

ＲＶと言ってもアレだ。地球で言うところのＲｅｃｒｅａｔｉｏｎａｌ Ｖｅｈｉｃｌｅ（休暇を楽しむための車）ではなくＲｅｃｏｎ Ｖｅｈｉｃｌｅｓ（偵察車両）ってやつだ。未開惑星の地表を探索する時に使う特殊車両だな。小型ながらパワーアーマー以上の火力とシールドを装備しているなかなかに強力な乗り物だ。残念ながらクリシュナには積んでいない。

いや、アレって傭兵業では使い途がないんだよ。未開惑星を探査して異星文明の遺物とか、各種観測データを入手して売り捌く探索者業をするなら必須なんだけどさ。アレの乗降装置と格納スペースをクリシュナに乗せるとかなりのスペースを食ってカーゴに殆ど何も積めなくなっちゃうからな。

歩哨をしていた厳ついお兄さん達も含めて全員でＲＶに乗り込み、港湾区画をなかなかの快速で移動してゆく。今日も港湾区画は賑やかだ。荷の積み下ろしをする運搬用パワーアーマーを着込んだ荷運び人達、観光に来たらしい裕福そうな家族、俺と同じ立場の傭兵っぽい男、よくわからない異星人……商人かな？　そんなのがそこら中を歩いている。

勿論帝国軍人も歩いている。あ、あの金髪の美人は間違いなくセレナ少佐だな。まぁ気づかれることもなく素通り――え、こっち見た。なんでわかるの？　こわ……戸締まりしとこ。

内心戦慄しながらＲＶに揺られているうちに物々しい船が並ぶ区域に辿り着いた。どれもこれも最新鋭、とはいかないが中々に厄介そうな船が並んでいる。こういう艦隊の編成を見ると指揮官の趣味

というものが見えてくるものだ。この艦隊の指揮官は堅実な戦運びを重視するみたいだな。
足の早い前衛の船には堅実に迎撃・防御に特化した武装を施し、後衛の大型艦は火力を重視して火力重視の武装を施しているようだ。旗艦らしき大型船は見るからに頑丈そうだな。指揮能力と生存性を重視しているように見える。この艦隊とまともにやり合うのはちょっと骨が折れそうだ。

「お待ちしておりました。そして御身のご無事を心より祈っておりました、クリスティーナ様。よくぞご無事で」

旗艦らしき船の格納庫でＲＶから降りると、そこには先程の通信で顔を合わせたダレインワルド伯爵の秘書官と、メイドらしき女性が待っていた。よく見ると、格納庫で働いている人員は男性は執事服、女性はメイド服を着ているようである。随分と酔狂な。

「お父様とお母様、そしてこちらのキャプテン・ヒロのおかげです。お祖父様は？」
「お部屋でお待ちです。どうぞこちらに。キャプテン・ヒロと同行者の方々はあちらの者がご案内致します」
「どうぞこちらへ。応接室にご案内致します」

なかなかに怜悧な雰囲気のメイドさんが俺達を案内しようと声をかけてくる。さて、ここでクリスを一人で行かせて良いものだろうか？　とクリスに視線を向けると、クリスは俺の視線に頷きを返してきた。心配要らないらしい。一応エルマにも視線を向けてみたが、エルマも同様に頷いてきた。なら良いか。

「わかった。また後でな、クリス」
「はい、ヒロ様」

微笑むクリスに手を振り、ミミとエルマ、そしてメイを引き連れてメイドさんの案内に従って歩き始める。
少し歩いて気付いたのだが、この船の内装はなんとも凄いな。クリシュナの内装も客船並みだと前にエルマが言っていたが、この船はそれ以上だ。外見は立派な戦闘艦のように見えたが、内装はまるで一流ホテルかそれこそ貴族の屋敷のようである。流石は貴族の当主が乗る船ということだろうか。
この船はダレインワルド伯爵家の私設軍の旗艦であると同時に、宇宙を駆ける別荘でもあり、迎賓館でもあるのだろう。だからクルーも執事服やメイド服を着ているのか。うーん、なかなかに自由な発想だな。

「どうしたのよ、キョロキョロして」
「いやぁ、この発想はなかったと思ってな」
「あんたも似たようなもんでしょ」
「そうか？」
「そうよ。やたら居住性の高い船にメイドロイドまで用意してるじゃない。その延長線上よ、この船」
「そう言われればそうか……？」

確かにそう言われればそうかも知れない。うーむ、我が家という意味では居住性の高い大型母艦を入手するというのも一つの手なのかね？　無論、安い買い物ではないだろうけど惑星上の居住地に土地を買って、市民権を買うよりはお安く済むだろうし。
それに、荷物を沢山運べる母艦を買えば稼ぎも一気にドンと上がるし、行動の幅も広がる。急がば回れとも言うし、本気で母艦の購入を検討したほうが良いかも知れないな。始めは一人では広すぎると思っていたクリシュナの船内も何かと手狭になってきたようにも思えるし。

いや、これ以上クルーを増やすつもりは無いけど。無いぞ。本当だぞ。

「なんだかお貴族様のお屋敷、って感じで私は落ち着きません……」

「その気持ちはなんとなくわかるな。でも趣味の良い内装じゃないか？　もっとギンギラギンにいかにも成金って感じだったら辟易するところだが。船ってことで調度品なんかも無いし」

「それはそうですけどなんというかこう、雰囲気が」

「まぁ、ミミの趣味ではないよな」

ミミはこう見えて割とパンキッシュな美的感覚の持ち主なので、こういうきっちりとしたお上品な感じは趣味に合わないのだろう。是非もないな。

「こちらでお待ち下さい」

俺達が通されたのはなかなかに趣味の良い応接室のような部屋であった。壁一面がガラス張りになっており、見事な庭園が望めるようになっている。まぁ、本当に窓の向こうに庭園があるわけじゃなく、そう見えるホロディスプレイか何かのようだが。

「了解」

「お飲み物をご用意致します。紅茶でよろしいでしょうか？　ご希望であれば他にもご用意させていただきますが」

「俺はそれでいい。二人は？」

「私もそれでいいわ」

「私もそれでいいです」

「承知致しました。少々お待ちくださいませ」

俺達を案内してくれたメイドさんがそう言って一つお辞儀をして

から応接室から出ていく。それを見送ってから俺は応接室に設置されているソファに身を沈めた。おおう、なかなかのふかふか具合。弾力が絶妙で深く沈みすぎることもないのは得点が高いな。テーブルも黒い光沢を放つ重厚な木製、のように見える。触ってみると感触的にもそう思える。本当の木製テーブルだとしたら、これだけでも一財産になりそうだな。

少し待っているとメイドさんがお茶を運んできた。湯気の立つ真っ赤な液体である。

「どうしたの？」

「どうしたんですか？」

「……いや、なんでもない」

俺の知ってる紅茶と違う、と思ったが慎ましい性格をしている俺はそっとその言葉を胸の内にしまいこむことにした。味と香りは普通の紅茶だった。なんだろう、着色料でも添加しているんだろうか？　謎だ。もしかしたらそもそもの茶葉が違うのかも知れない。

そうして紅すぎる紅茶をしばきながら待つこと一時間弱。ついにその時が訪れた。

「主がお越しです。席を立ってお出迎えください」

メイドさんの言葉に素直に従い、席を立って彼女の主――ダレインワルド伯爵の到着を待つ。

程なくして応接室の重厚な扉が開き、一人の初老の男性が部屋へと入ってきた。その後ろにはいかにも貴族のお姫様、という感じの瀟洒な白いドレスを着たクリスの姿もある。

初老の男性は背が高く、体格もがっしりしていていかにも頑強そうな体つきだ。腰には大小二本の剣を差していて、貫禄がある。もともとは黒髪であったであろう髪の毛には白髪が目立つが、ふさふ

さとしていて健康そうだ。
なにより、その目が特徴的だった。鷹のように鋭い雰囲気を宿す黒い目には力と光が溢れており、衰えといったものが欠片も見られない。正直に言えば、もっと弱々しい姿を想像していたんだが……うん、強そうな爺さんだ。

「アブラハム・ダレインワルド伯爵だ」

クリスの祖父、アブラハム・ダレインワルド伯爵はそう言って俺に睨みつけるかのような視線を向けてきた。なんだか知らんが凄い迫力だな。どうにも一筋縄では行かなそうだが、さて。

#097　護衛報酬と新たな依頼（前書き）

昨日ＳＷの話してたから通貨単位がごっちゃになったんやな……―

（：３」∠）―

#097　護衛報酬と新たな依頼

伯爵閣下に先に名乗らせておいて、俺が名乗らないというわけにもいかない。俺はすぐさま口を開いた。

「傭兵ギルド所属、ゴールドランク傭兵のキャプテン・ヒロです。礼儀作法には自信が全くありませんので、無礼があったら何卒ご容赦を頂きたい。こちらの二人は私の船、クリシュナに共に搭乗するクルーで、こちらが副操縦士のエルマ、そしてこちらがオペレーターのミミです。後ろに立っているのはメイドロイドのメイです」

「エルマと申します」

「ミ、ミミと申します」

「メイと申します」

俺に紹介されたエルマとメイが恭しくダレインワルド伯爵へと頭を垂れ、ミミもなんとかそれに続く。どうもミミはダレインワルド伯爵を前にして気後れしているようだな。生粋の帝国人なわけだし、帝国貴族に対する畏怖も一番大きいだろうから当然か。

「うむ……座るが良い」

「はい」

俺達全員が席に着くと、テーブルの上にお茶が再び用意された。例の真っ赤な紅茶である。真紅茶とでも表現したほうが良いのだろうか？　いや、もう紅茶でいいか。

「まずは感謝の意を表させてもらおう。ダレインワルド伯爵家の継嗣たるクリスティーナを保護し、守り抜いたその働き、見事である。

ダレインワルド伯爵家当主としても、クリスティーナの祖父としても貴公らには感謝している」
「勿体なきお言葉……と本来は言うんでしょうが、正直かなり大変ではありましたね、ええ」
「ちょっと……！」
「事実は事実として報告すべきだろ。クリスからも勿論話は聞いているんだろうが、俺達の口からもダレインワルド伯爵にはしっかりと報告するべきだ」

脇腹をゴスゴスと突いてくるエルマの肘を防ぎながら持論を展開する。

「そうだな。クリスティーナから一通り事情は聞いたが、貴公らからも話を聞いたほうが良かろう」

という寛大なダレインワルド伯爵の一声で俺の主張の正当性が証明された。ドヤ顔をしたら鋭い肘打ちが俺の脇腹に突き刺さった。酷い。

そして俺は所々ミミやエルマ、それにクリスにも補足してもらいながら俺達がどう動き、どのように襲われ、どうやってクリスの身を守ってきたのかをできるだけ詳細にダレインワルド伯爵に話した。

シエラ星系に辿り着いて早々に宙賊に襲われ、その戦利品の中にクリスのコールドスリープポッドがあったこと。見捨てるわけには行かないので、そのコールドスリープポッドをシエラプライムコロニーに運び込んだこと。港湾管理局でコールドスリープを解除し、そうしてクリスと出会ったこと。

「ふむ、クリスティーナが貴公らと出会ったのは本当に幸運なことであったな」
「はい。それもこれもあの船から脱出させてくれたお母様とお父様

のおかげです」
「そうだな……」

しんみりとした雰囲気となるダレインワルド伯爵とクリスの様子を見ながら紅すぎる紅茶で喉を潤し、話を続ける。
クリスから漂流に至る事情を聞き、報酬を対価に彼女を守るという依頼を受けたこと。クリスの叔父の手の者から放たれる刺客を撹乱するために複数のリゾート惑星で宿泊の予約を入れたこと。出港した途端に刺客に襲われ、これを撃退したこと。滞在先のリゾート惑星が宙賊に襲われ、その襲撃を隠れ蓑にしてステルスドロップシップから降下してきた戦闘ロボットと戦ったこと。俺の個人的な伝手を頼ってセレナ少佐の率いる対宙賊独立部隊と行動を共にしたこと。そして、クリスの叔父の働きかけで動いたと思しき帝国航宙軍所属の戦闘艦隊に襲撃され、対宙賊独立艦隊と共にこれを撃退したこと。

「そしてシエラプライムコロニーに戻ってきたところでついに伯爵と見えたというわけです」
「なるほど……うむ、クリスティーナから聞いた話とも矛盾は無いようだ。必要経費の支払いも含め、十分な報酬を約束しよう」
「ありがとうございます」

その言葉が聞きたかった、とか言ったらエルマに首を絞められそうなので自重しておく。とりあえず俺としては経費を含めて十分な報酬が与えられるなら何の文句もない。クリスのような美少女を助けて大金を稼ぐことも出来る。最高だな。
あん？　クリスが美少女じゃなかったらどうしてたって？　クリスが美少女じゃなく美少年でも、おっさんでもなんでも俺が助けたいと思うような相手だったら助けてたと思うよ。クリスが美少女であったことによって助けたいという気持ちがより強く働いた、とい

う点に関しては否定のしようもないけどな！　当たり前だよなぁ？
「金額の詳細は後で詰めるとして、この後はどうしますか？」
「ふむ……」
俺の言葉にダレインワルド伯爵は顎を撫でて少しの間考え込んだ。
「儂がすぐに動かせる戦力は可能な限り連れてきたが、二線級とはいえ正規軍の戦闘艦隊に狙われて無事で居られるかどうかはわからん。そちらにその気があれば引き続き護衛として雇わせてもらおう」
「俺としては報酬次第でその依頼を受けたいと思います。二人はどうだ？」
「私もそれで構わないわ」
「わ、私もそれで構いません」
エルマとミミも引き続きクリスを護衛することには異存は無いようだ。メイにはこう言った場での発言をするつもりはないだろうから最初から聞かない。
「では、報酬の話をするとしよう。まずは今までのクリスティーナの護衛に関してだな」
ダレインワルド伯爵の秘書官もその場に呼ばれ、報酬に関する協議が始まった。
その結果、追手の撹乱のために使った資金を含めてリゾート惑星で使ったエネルに関しては全額補填。その他に護衛の報酬として５００万エネルが支払われることになった。流石上級貴族様だな。８００万エネルＰＯＮとくれたぜ。これが伯爵様にとってのクリスの命の値段ってことだな。
ただし、シエラⅢで買ったものとはいえ流石にメイの購入資金に

関してはクリスの護衛に必要な経費としては補填はされなかった。そりゃそうだな。正式に受領したのはついさっきであるわけだし、ついさっき受け取ったのであればクリスの護衛には何ら寄与していないと見做されるのは仕方のないことである。

これにセレナ少佐から受け取ったペリカンⅣの護衛料金２４万エネルを入れて、ミミとエルマの分け前を引いてざっくりと計算すると、俺の所持金はおよそ２４４０万エネルになった。

シエラⅢへの滞在中に使ったエネルや、オリエントコーポレーションの受付嬢に唆されて購入したメイのケアをするための各種用品、オプションパーツ、その他諸々に使った金も含めて雑に差っ引いてそんな感じだ。

ちなみにペリカンⅣの護衛とクリスの護衛でミミとエルマに入った分け前はそれぞれミミが４１２００エネル、エルマが２４７２００エネルである。エルマはそろそろブロンズランクの傭兵が乗るようなクラスの船ならギリギリフルカスタマイズできるくらいの金額が手元にあるんじゃないか？　俺への返済は今の所１エネルも無いけどな！

別に構わないけどね。エルマと一緒に居られるのは楽しいし、頼りになるし。

しかし２４４０万エネルか。これだけあればクリシュナを収容できるような母艦に手が届きそうだな。カスタマイズすることを考えるともう少し資金が欲しいけど。

今までの分の報酬の精算が終わったから、次は『これから』の分の報酬の話だ。

「ゴールドランク傭兵を雇用する際の平均的な護衛料金は一日あたり８万エネルとされていますが、今回に関しては一日あたり２５万エネルという金額を提示させていただきます」

そう発言したのはダレインワルド伯爵の秘書官であるとクリスが言っていた壮年の男性であった。一日あたり２５万エネルとは中々の太っ腹である。セレナ少佐なんて一日８万エネルきっかりしか払

ってくれなかったのに。
しかしそれでも三倍以上というのはちょっと解せない。高い分には勿論構わないのだが、何か裏があるんじゃないかと勘ぐってしまう。
俺が提示された金額に内心首を傾げていると、エルマがそっと耳打ちをしてきた。

「色々と事情があるんだろうけど、要は口止め料も込みってことよ。今回のダレインワルド伯爵家のゴタゴタに関して吹聴してくれるなよってことね」
「さっき事情を説明した時に話したけど、セレナ少佐にはガッツリ話してしまっているんだが？」
「それも織り込み済みだと思うわよ。ダレインワルド伯爵家のゴタゴタ、というかクリスの叔父がやらかしたアレコレはダレインワルド伯爵家がひっくり返りかねないスキャンダルだけど、ステルスドロップシップの件や、帝国航宙軍に離反部隊が出た件は帝国の威信を揺るがしかねないスキャンダルよ。帝国とダレインワルド伯爵家でその辺りは内々に上手くやるから、吹聴するなってことね。もし今回のアレコレを吹聴して回ったらダレインワルド伯爵家だけでなくグラッカン帝国も敵に回しかねないから気をつけなきゃダメよ」
「ヒェッ……お口にチャックしとくわ。ミミも重々気をつけてくれよ」
「は、はい」

エルマの説明を聞いたミミも顔を青くして頷いた。そんな俺達をダレインワルド伯爵家の方々がじっと見つめている。伯爵自身は無表情で。クリスは苦笑いを浮かべて、そして秘書官の男性は微笑を浮かべて。こええよ。

「その条件で受けさせてもらおうと思います」

「それは良かった。補給と『掃除』にもう数日かかりますので、そちらも出港準備を進めておいてください。傭兵ギルドにはこちらから手を回して、本日付けで依頼を出しておきます」
「了解」

掃除、と妙に強調して言ったのを華麗にスルーして頷いておく。どう考えても穏当な感じじゃないので、深く考えないようにしよう。帝国の上級貴族を敵に回すと怖そうだなぁ、ハハハ。

そういうわけで今までの護衛報酬を受け取り、新しい護衛契約を結んだ俺達はダレインワルド伯爵家軍の旗艦を後にすることになった。

「それでは、また明日からよろしくお願い致します」

厳ついお兄さん達の護衛を引き連れて見送りに来てくれたクリスがそう言ってペコリと頭を下げる。

「ああ、任せておけ」
「はい、クリスちゃんのために頑張りますね！」
「もう心配要らないと思うけどね」

見送りに来てくれたクリスに三者三様の言葉を返してその場を後に――しようと思ったところで俺はあることを思い出して足を止め、踵を返した。そして着ているジャケットの内側に手を伸ばして目的のものを引っ張り出す。
おおう、別に武器を取り出そうってわけじゃないんだからそうやってレーザーライフルを構えるのはやめて欲しい。チビりそうだ。

「クリス、この首飾りだが」

俺がジャケットの内ポケットから取り出したのは、コールドスリープポッドで目覚めたばかりのクリスに護衛を依頼された時に護衛料の肩代わりとして受け取った首飾りであった。薄紫色のきれいな宝石で飾られた瀟洒な作りの逸品だ。

「はい、まだ持っていてください。私の護衛はまだ終わっていないでしょう？　私の騎士様」

ダレインワルド伯爵家軍の艦隊は俺から見てもなかなかの戦力のように見えるし、俺の出る幕はもう殆どないと思うんだけどな。まぁ、クリスがそう言うならもう少しの間だけ預かっておくとするか。

「……姫様がそう望むならそうしましょう」

「はい、そうしてください」

俺の返事にクリスが微笑みを浮かべる。うーん、美少女。いかにも貴族の娘さんらしい白いドレスに身を包んだクリスは、どこからどう見ても貴族のお姫様であった。

「それじゃあ、また」

「はい、また」

微笑を浮かべるクリスと、彼女を警護するレーザーライフルを装備した厳ついお兄さん達に見送られながら俺は再度踵を返す。

整備も補給も終わってるし、明日からは待機しているだけで一日25万エネルの夢のような日々だな。クリスが伯爵家軍の旗艦に移った今となってはクリスの叔父の手の者が俺達を狙う理由も無いだろう。久々に羽を伸ばせそうだな。

＃０９７　護衛報酬と新たな依頼（後書き）

「逆恨みして殺しに来るかも知れないからまだ油断はできないわよ」

「そんなー（，・ω・、）」

#098　ゲートウェイ（前書き）

体調が概ね回復しました！　おまたせして申し訳ねぇ……季節の変わり目にたまにやるんですよ……―（：3」∠）―

#098　ゲートウェイ

クリスをダレインワルド伯爵の元に送り届けてから三日後。遂に俺達はシエラプライムコロニーから出港することになった。
この三日間でシエラプライムコロニーでは身元不明の死体が街灯に吊るされて晒し者にされたり、入り組んだ場所にあるちょっと治安の悪い地域で銃撃戦が発生したりとなかなかにショッキングな事件が続いていたようである。イヤーヨクワカラナイケドコワイナー。
そんな状況で俺達は船に籠もって何をしていたのかと言うと、搬入されてきたメイ用のメンテナンスポッド（最新型）をカーゴルームに設置したり、ミミやエルマとイチャついたりしていた。クリスが居たときは流石に色々と気を遣ったからな。
それにしてもメイの影響なのかなんなのか、二人とも妙に積極的というかなんというか……いや、メイに対抗しているとかそういう感じではないんだけど。寧ろミミとエルマはメイに好意的というか、とっても仲良くしている。二人ともよくメイと話しているし、一緒にお風呂に入ったりもしているようだし。
なんというか、ミミとエルマとメイで何か結託しているような雰囲気があるんだよな。謎だ。俺としては三人が仲良くしてくれるならそれで構わないけれども。

「ヒロ様？」
「ん？　おお……いやちょっと考え事をしていた」
「大丈夫なの？　これから出港よ？」
「いやぁ昨晩のことを思い出――痛い痛い痛い痛い」
微妙に顔を赤くしたエルマが俺の耳を引っ張ってくる。ははは、エルマはいつまでも初々しくて可愛いなぁ。

今回の出港に関してはこちら側からの手続きは特にいらない。クリシュナが一時的的にダレインワルド伯爵家の船団に組み込まれているからだ。手続きはダレインワルド伯爵家の方でやってくれるから、俺達は向こうからの通知に従って船を出港させればいいわけだ。

「これでなんの襲撃も無ければ丸儲けなんだけどなぁ」

「そうですね。それで一日２５万エネルってすごいですよね……流石貴族様というかなんというか」

「見栄もあるからね。上級貴族がゴールドランクの傭兵を相場で雇った、なんて話が広まると『あの家は落ち目なんじゃないか？』みたいに言われるわけよ。その辺は商人なんかも同じね。軍なんかがゴールドランク傭兵を雇う場合は相場の８万エネルになることが多いけど、商人なんかだと大体１２万から１６万エネル、貴族だと最低でも１８万エネルから、みたいな風潮よ」

「へー……お大尽な世界なんですねぇ。一般庶民の私からすると金額が大きすぎて実感が沸かないです」

「そう言うけどミミ、貴方も世間一般から見るとかなりの高給取りよ？」

「あ、あはは……最近自分の端末のエネル残高を見るのがちょっと怖いです」

ミミにどれくらい報酬を渡したのかは正確には覚えていないが、多分先日の報酬で合計１０万エネルくらいにはなっている筈だ。つまり日本円換算でおよそ１０００万円。ミミは一応この世界の成人年齢に達してはいるが、その年齢で１０万エネルの貯金を持っている人というのはそうそういまい。

エルマは多分１２０万エネルくらいになっているはずだ。まぁ、エルマは酒を１０万エネル分買ったりしてるからアレだけど。エルマの借金は３００万エネルだから、ようやっと三割くらいってところだな。

「あ、ヒロ様。出港申請が通ったみたいです。私達は最後尾ですね」
「了解。タイミングが来たら教えてくれ」
「はい。各艦順次発進しています……やっぱり大型艦は動きが鈍いですね」
「港内じゃね。質量が大きい分、変に加速して何かにぶつかったら大惨事だから」
「そうだな、大惨事だな」

俺はやったことないけど、ＳＯＬ（ステラオンライン）でも初心者が小型艦から中型艦、大型艦に乗り換えた初心者が今まで乗っていた小型艦と同じ感覚で出港して、買い替えたばかりの船を大破させるなんてのはＳＯＬあるあるだったからな。

少しすると俺達の番が来たので、ハンガーとのドッキングを解除して船を進ませる。今日もシエラプライムコロニーは盛況のようだな。先日起こったシエラⅢに対する宙賊の襲撃に関しても、結局はシエラⅢの防衛戦力が宙賊の襲撃を凌ぎきったということでリゾート惑星のセキュリティシステムに対しての信頼度は寧ろ上がったらしい。そこはかとなく情報操作の臭いがするが、まぁ深くは突っ込むまい。

「あぁー、やっぱ船はいいなー。この滑るような感覚、船を掌握している全能感、仄かな緊張感、全てが最高だ。なんというか、海に飛び込んだ時みたいな解放感を感じる」
「海に飛び込んだ時みたいな、ですか……」

斜め後ろからミミの声が聞こえてくる。首を傾げているような雰囲気だな。こればかりはなぁ。本当に感覚的な話だし、他人が理解するのは難しいように思う。

「まぁ、気持ちは何となく分かるかも。私は海というよりは森に入った時みたいな解放感だけど」

船に乗るとエルマも同じような解放感を覚えるらしい。船乗りは大なり小なりそういう感覚を培うものなのかもしれない。

「私もいつかそんな感覚を覚えるようになりますかね？」

「かもな。俺ともエルマとも違った感覚だろうけど」

もしかしたら心の中にある自由とか、楽しいとか、そういうものの原風景なのかもしれない。

「私には少し理解の難しい話です」

サブオペレーターシートに座ったメイの声も聞こえてくる。クリスが船を降りたので、メイがサブオペレーターシートに座ることになったのだ。基本的にはミミの補佐に徹してもらい、ミミのオペレーター技術の向上に力を注いでもらう形になる。彼女が十全にチカラを発揮するとオペレーターの役目を完璧に果たしてしまうからな。

などと考えながらスイスイと港内を移動し、気密バリアゲートからシエラプライムコロニーの外に出る。

「左下方の船団です。フォーメーションを整えているようですね」

「俺達は殿だったよな？」

「はい」

下手に先頭とかよりも殿のほうがどの方向から船団が襲われても駆けつけやすいんだよな。先頭だと真正面から敵が来ない限り基本は回頭しなきゃならないし。俺にかかれば一瞬だけど、その一瞬が命取りだったりするからな。まぁ殿は殿で一番最初に攻撃を受けや

すい位置なんだけどな。
既に整いつつある船団のフォーメーション、その最後尾にするりと滑り込む。

「超光速ドライブ、ハイパードライブ共に同期モード」
「超光速ドライブ、ハイパードライブ、同期モードに設定しました。同期申請、受諾されました」
「おーけい。んじゃあとはのんびりするだけだな」

今回は船団を組んでの同期航行なので、超光速航行中もハイパードライブ中も俺達が直接操作するような必要は何もない。旗艦の操作に従ってオートで航行する形になるからな。
程なくして轟音とともにクリシュナが超光速ドライブに移行し、そしてすぐにハイパードライブが起動する。

「何度見ても不思議な光景ですよねー」

極彩色の光を放つハイパーレーンを見てミミが溜息を漏らした。

「そうだなぁ。あんまり長く見てると気持ち悪くなりそうだけど」
「そうですか？　私はずっと見ていられそうです」
「ミミって変なところで頑丈よね……」
「えぇ……なんか酷い言われ方をしている気がします」

ミミが不満げな声を出しているが、俺もエルマの意見に同意である。敢えて口には出さないけど。
いやだってさ、ハイパーレーンの光景ってなんかこう、極彩色の混じり合った巨大なチューブの中のようなそれでいて広大な空間のような、よくわからない感じの光景なんだよ。パッと見は鮮やかで綺麗に見えるけど、俺は長く見てると遠近感とか平衡感覚が狂って

気持ち悪くなってくるんだよ。

☆★☆

さて、旅路の方はというとすこぶる順調であった。基本的に干渉することが不可能であるハイパードライブ中に事故など起きるはずもなく、また通常空間に戻ってからも超光速ドライブ中にインターディクションをかけられることもなかったからだ。

俺達はハイパーレーンを伝って恒星間航行を繰り返し、シエラ星系から四つ先にあるバルデミューレ星系に辿り着いていた。ハイパーレーンを使ったハイパードライブ航行で目的地であるデクサー星系に行くのであれば反対方向とも言える回り道であったが、この星系を目指すのには勿論意味があった。

「ふあー……あれがゲートウェイですかぁ」

「おっきいねぇ」

虚空に佇む巨大構造物を目の辺りにしたミミが目を輝かせ、俺は小学生並みの感想を口にする。

いや、だってもうおっきいねぇとしか言いようがないんだよ。この難解な構造物を言葉にして表すと、スペースコロニーを遥かに超える大きさのメタリックな三角錐めいている対の巨大装置、だろうか。対になっている巨大な装置の間には不可思議な燐光を放つ歪んだ空間が発生しており、多くの船がその歪みの中に出入りをしている。アレが帝国の技術の粋を集めたゲートウェイであるらしい。

俺の知っているゲートウェイと形が違うが、この世界の全てが全て俺のやっていたゲームであるＳＯＬ（ステラオンライン）と同じというわけでもなし、些細な違いなのだろうと思う。そもそも開発している銀河帝国からして別物であるわけだしな。

「そっか、あんた達はゲートウェイを見るのは初めてだったのね」
「知識としては知っていたけどな」
「そうですね。私もヒロ様と同じです」

知識として知っているのと実際に目で見るのは別だよなぁ。しかしデカイ。本当にデカイ。スキャナーが表示してるスケール間違ってない？　大丈夫？　対の装置の片方の大きさだけでもシエラプライムコロニーより遥かに大きい。対の装置の間に発生しているゲートの大きさも加味すると、下手すると地球より大きいんじゃなかろうか。天文学的なスケールの巨大構造物だな、これは。

「でも、ここまで来れば安心ですよね。ゲートウェイには帝国軍の防衛部隊が駐屯していますから、襲撃もないでしょうし」
「そうだな、ここで襲撃をかけてきたら馬鹿だな。一瞬で灰にされるんじゃないか？」

このゲートウェイという何千光年、何万光年も離れた場所と場所を繋ぎ、一瞬で移動することのできる施設は、銀河帝国にとってはその版図を広げるための重要な戦略拠点である。当然、その警備に当たる戦力は今までに俺達が訪れた星系に駐留する帝国軍の防錆戦力とは比べ物にならないほどに強力だ。もし無謀にも戦いを挑んだ場合、いかにクリシュナが優れた戦闘艦と言えどもひとたまりもなく宇宙の塵と化すだろう。
ぶっちゃけて言うと、ここを落とそうとするのならば帝国の全戦力とことを構える事ができるほどの戦力が必要だろうな。何故かって？　そりゃここを襲えばたちまち帝国の支配地域に存在するゲートウェイからガンガン増援が送られてくるに違いないからだ。
先程も言ったように、こういったゲートウェイに配備されている戦力は強大である。同時多発的に複数のゲートウェイを襲撃でもしない限り、他のゲートウェイの守備隊までもがゲートウェイを通っ

てここに集結してくるわけだ。帝国の最重要施設を守る精鋭部隊が続々と。それはもうとんでもない戦力がここに展開されることになるだろう。

「そうね。一瞬で消し炭ね。だから、ここまで何もなかったということは、これから先が危ないってことよ」

「そうなるか。そうなるよな。ええと、目的地のデクサー星系って向こうのゲートウェイからいくつ隣だっけ？」

「五つですね。向こう側のゲートウェイがあるのがニーパック星系で、そこからメルキット星系、ジーグル星系、ウェリック星系、コーマット星系を経由してデクサー星系です」

そう言ってミミがコクピットのホロディスプレイに銀河地図を表示して見せてくれる。俺はそこからさらに操作して各星系を繋ぐハイパーレーンを表示し、ハイパーレーンを渡るのに必要な平均時間も表示した。

「余程のことがないとゲートウェイの守備艦隊は動かないけど、隣の星系くらいまでなら出張ってくる可能性があるよな」

「そうね」

「となると、ジーグル星系かウェリック星系が怪しいか。伯爵も何も対策をしていないとも思えないけど」

「伯爵位を持ってるならデクサー星系から繋がる周辺一星系は領地として帝国から下賜されているでしょうから、コーマット星系まで入れば万全でしょう。ゲートウェイから繋がるメルキット星系は帝国直轄領だろうから、伯爵が直接何か働きかけるとはあまり思えないわ。でも、ジーグル星系やウェリック星系を管轄している貴族と仲が良ければ防衛戦力を護衛として融通してもらっているかもね」

エルマがそう言いながら銀河地図を操作すると、各星系の支配者

ごとに色分けがされた。エルマの言う通り、メルキット星系は帝国の直轄領。そしてジーグル星系とウェリック星系はそれぞれ別の貴族が支配しており、コーマット星系はダレインワルド伯爵家の所領であるらしいということがわかる。

「俺の感覚だとお隣の貴族同士ってあまり仲が良くないイメージなんだが」

「私もそういうイメージです」

「別に全部が全部そういうことではないと思うわよ？　産出する資源や星系で力を入れている産業が被っていたりするとそういうこともあるみたいだけど」

流石に銀河地図に貴族同士の仲の良さみたいな情報は含まれていないので、そこまでは調べることはできそうもない。普段は貴族同士の事情なんて仕事に関わることがないから、情報収集なんてしてないからなぁ。今まで気にかけたことも無かったよ。

「結論としてはまだ安心するには早い、よ。緊張感を保ちなさい」

「へーい」

「はいっ」

徐々に眼前に近づいてくる巨大な空間の歪みを見ながら俺とミミが返事をする。痛っ、締りのない返事をしたからって太腿を抓るのはやめろ。

「ところでここまでの話を聞いてメイはどう思う？」

ずっと無言で俺達の話に耳を傾けていたメイにも話題を振ってみた。彼女はこういう時はこちらから水を向けてやらないと決して口を開かないんだ。あくまでも俺の補佐であるという立場を優先する

みたいなんだよな。もっと積極的に会話に入ってくれると良いんだが。

「そうですね。一番危険度が高いのはコーマット星系へのワープアウト直後かと」

今まで俺達がしていた検討の内容が一言でばっさりとやられてしまった。

「その心は？」

「ダレインワルド伯爵領は彼にとってのホームでもあります。今までの行動から察するに、バルタザール・ダレインワルドは何らかの方法で他者を意のままに操る術に長けているように思われます。コーマット星系の防衛戦力が彼に籠絡されていた場合が一番危険なパターンでしょう」

確かに、クリスの叔父のバルタザールは宙賊を大量に動員してシエラⅢを襲ったり、帝国航宙軍の機密兵器であるはずのステルスドロップシップを投入してきたり、辺境部隊とはいえ帝国軍の正規軍をこちらにけしかけたりしてきた。

その手腕をコーマット星系の防衛戦力にも振るっていたら？　そりゃ確かに怖い。ダレインワルド伯爵が率いるこの船団の戦力は星系の防衛戦力に匹敵すると思うが、ワープアウト直後の油断した瞬間を狙われるとどうなるかわからないよな。あっちは出待ちできるわけだし。

「……一応伯爵に伝えたほうが良いか？」

「私達が考えつくようなことは伯爵も考えついてると思うけどね。というか、この推測は完全にダレインワルド伯爵の政治的手腕を馬鹿にする内容だから」

そう言ってエルマが苦笑いをする。いやまぁ、確かに自分のとこの防衛戦力も掌握できてない可能性あるから危ないっすよ、とか本人に言ったらそりゃ激おこですよね。俺的には自分の子供の跡目争いを制御できなかった時点で正直あまり期待できないなとか思ってたりもするわけだけど。

「処置なしか」
「処置なしね。精々生き残りましょ」
「処置なしなんですね……」

エルマが肩を竦め、ミミが溜息を吐く。俺も溜息を吐いた。急に不安になってきたぜ、はっはっは。

#０９９　嵐の前の

いかに自由な傭兵と言えども、雇われてしまえばその間はしがない雇われ人である。雇用主にそうそう具申などできないし、そもそも相手は帝国貴族、それも上級貴族の伯爵閣下である。そんな人に『あんたのとこの手下が裏切りそうな予感がするから警戒強めません？』とか言ったらどんな反応を返されるか……想像するだけで恐ろしい。いきなり剣を抜いて切捨御免とかしてくるかもしれない。

「というわけで何も言えないキャプテン・ヒロなのであった、と」

とメッセージを送りながら画面をタップし、要らない手札を捨てる。

『お祖父様も叔父様の襲撃についてはかなり警戒している様子でした。恐らく、ご心配はいらないかと思いますけれど……』

そういうメッセージと供にデフォルメされた黒猫のような生物が困ったような表情を浮かべたスタンプが送られてくる。ふむ、クリスはなかなかに手堅い打ち筋のようだ。

『きっと大丈夫です！　何かあってもヒロ様がいればなんとかしてくれます』

そういうメッセージと一緒にリスのような生物が力こぶを作るポーズをしたスタンプが送られてくる。そう言いながらミミが切ってくる札は非常に大胆である。でも何故か当たらないんだよな。

『いくらヒロの腕が良いって言っても限界ってものがあるわよ……まぁ大抵はどうにかするでしょうけど』

メッセージと供にコミカルな単眼エイリアンが溜息を吐きながらグラスのワインを飲むようなスタンプが送られてくる。そして切った札は――。

「あ、それロンだわ」
『私もです』
『なんでよ！？』

単眼エイリアンが目からビームを放って街を焼くスタンプが送られてくる。いや、エルマは打ち筋は悪くないんだけど、なんというか不運なんだよな。ウ◯コみたいな来そうも無い待ちに引っかかるというかなんというか……もしかして滅茶苦茶運が悪いのではないだろうか。ギャンブルとかめっちゃ弱そう。というか弱い。このカードでやる麻雀アプリで対戦を始めてから三位か四位にしかなっていない気がする。総合スコアがダントツのビリケツだ。

ちなみにぶっちぎりのトップはミミである。滅茶苦茶な打ち筋に見えるのに全くこちらの待ちに引っかからないし、一撃が妙に重い。実は物凄い豪運の持ち主なのかも知れない。

小型情報端末でメッセージをやり取りしながら遊んでいる俺の現在地はどこかというと、コックピットである。そしてミミとエルマは休憩中だ。

クリシュナではハイパーレーン内の移動中でも、一応コックピットに人を置くようにしているので。ミミとエルマは食堂か自分の部屋に居ることだろう。特に疲労することないのメイはサブオペレーターシートに座っている。会話には参加していないが、オブザーバーとしてカード麻雀を閲覧してはいるらしい。

『レースゲームなら負けないのに！』

コミカルエイリアンが失意体前屈をしながら愚痴っている。そんなに悔しいのか……まぁ現状はこうして駄弁って遊んでいるくらいしかやることがないわけだが。ハイパーレーンの移動中は基本的に自動航行だし、襲撃を受けることもないわけで。

ちなみに今はジーグル星系からウェリック星系への移動中である。ウェリック星系の次はダレインワルド伯爵の領地――領地？　であるコーマット星系。そしてその次が最終目的地のデクサー星系だ。

ジーグル星系にワープアウトする時にもそれなりの警戒態勢は敷かれていたが、ジーグル星系の領主とダレインワルド伯爵は友好関係にあったらしく、ジーグル星系の移動中には星系軍が護衛についてくれていた。それで何事もなくジーグル星系を通過し、今に至るというわけだ。

ちなみにジーグル星系からウェリック星系へのハイパーレーン通過時間はおよそ十時間である。ハイパーレーンに突入して丁度一時間くらいかな、今は。

「ご主人様。ハイパーレーン移動中の警戒であれば私がしておきますが」

小型情報端末でメッセージをやり取りしながら麻雀を続けていると、メイがそう声をかけてきた。

「確かにメイに任せれば万全なんだろうけど、あまり扱き使うのはなぁ……」

「私は全く構いませんが。有機生命体と違って疲労することもありませんので」

「そうなんだろうけどなんとなくな。まぁ、メイの存在に慣れてきたら任せるということもあるかもしれない。というか、ハイパーレ

ーンの移動中に何かすることもないしな。こうやって遊んだり駄弁ったりするくらいしかやること無いし」
「お二方と仲を深められては？」
「爛れた生活を送り続けるってのもな。そういうのは程々が一番だと思うぞ。というか、あまりそういう方面を頑張りすぎると堕落する。俺が」

ミミもエルマも俺からすれば紛うこと無く文句のつけようもない美少女に美女である。当然ながらメイも美人という意味ではそうだ。そっち関係に溺れてしまうと抜け出せなくなる自信がある。既に手遅れかもしれないけど。

「そういうものですか」
「そういうものです。変な話、今の俺の資産なら適当にあちこちフラフラしながらたまに宙賊退治しつつ毎日美味い飯を食って三人と爛れた生活とかできちゃうし。そんな生活に入り込んでしまったら抜け出せないよ。マジで」

今も既にそれに近い生活になっているような気もするが、まだ俺は金を稼いで自分の夢である惑星上居住地に庭付き一戸建てを得る夢を捨ててないからね。とりあえず目下の短期目標は今回の報酬を使っての母艦の購入と整備だろうか。より大きく稼ぐための投資というものは重要だからな。

「私はそういう生活も良いと思いますが、ご主人様がそう仰るのであれば。そういう生活がしたくなったら是非お申し付けください。全力でサポートさせていただきます」

そう言うメイの声音は至って真面目な様子であった。真面目に堕落への道に誘ってくるメイはある意味で一番恐ろしく、油断のでき

ないクルーかも知れないな……奉仕精神が高すぎるのもちょっと考えものかもしれない。いや、忠誠度が高いから言えばちゃんと聞いてくれるか。俺がしっかりしていれば大丈夫だ。多分。

☆★☆

船団は無事にウェリック星系へと到達し、ウェリック星系内のコロニーには寄らずにそのままウェリック星系を通過した。ウェリック星系でもジーグル星系の時と同じように星系軍が警備の戦力を寄越してくれた辺り、ダレインワルド伯爵は近隣の領主とは上手くやっているようだ。

「ワープアウトは12時間後ね……交代で仮眠を取る？」
「ハイパーレーンの移動中は私がコックピットに詰めておりますから、皆様はお休みになられてはいかがですか？　コーマット星系へのワープアウト後が一番危険度が高いわけですから、万全に体調を整えられたほうがよろしいかと」
「いや、メイ一人に任せるのは……」

と、遠慮しようと口を開いたところで俺の言葉をミミが遮った。

「ヒロ様、メイさんに頼んだほうが良いんじゃないでしょうか？　メイさんが危険度が高いと分析するなら、本当にその通りだと思いますし。メイさんがそう言ってくださるならそれに甘えるのが良いと思います」
「私もそう思うわ。ヒロは妙なところで遠慮をし過ぎだと思うわよ。メイに面倒事を全て押し付けるのは私もどうかと思うけど、気を遣いすぎて彼女の特性を活かさないのは逆に失礼よ？」
「……そういうものか？」
「そういうものです」

昨日俺が言ったのと全く同じセリフを言いながらメイがコクリと頷く。

「私を一つの知性として人格を認めてくださるのは嬉しいですが、私はメイドロイドです。ご主人様の役に立つのがメイドロイドとしての私の存在意義ですから、そのように扱ってくださる方が適当です。つまり、嬉しいです」

「そうか」

「はい」

メイがもう一度コクリと頷く。うーむ、難しい。俺からすればメイもミミやエルマと同じように普通に美人のメイドさんだからなぁ……耳の機械部分を除くとあまりに機械っぽく無さすぎる。いや、ここに来る経緯から彼女が機械だということは認識してるんだけどね？　そもそもシエラⅢで初めてメイドロイドを目にした時から美人メイドじゃウホホーイくらいの印象だったからな。

それこそメイが何かしらの攻撃を受けて表皮が損傷してメカバレ状態にならないと彼女を機械だと完全に認識するのは難しいかもしれない。なまじ彼女の体温と柔らかさを知っているだけに。

「それじゃあそういうことでコックピットはメイに任せるか……と言っても、休むったってなぁ」

俺が前に睡眠を取って目覚めたのはほんの三時間ほど前である。コーマット星系にワープアウトする前に仮眠を取って起きたばかりだ。

「最後の晩餐ってわけじゃないけど、ちょっと豪華なご飯を食べてお風呂に入って、部屋でゆっくりしたら？」

「ほほう、エルマはそれがお望みか」

つまり食欲を満たしてこざっぱりした後に部屋で『ゆっくり』したいと。

「や、あの、その……一般論としてね？」

俺の言葉の裏を読み取ったのか、エルマが顔を少し赤くしてしどろもどろになる。

「私もそれでいいと思います。今日は三人でゆっくりしましょう」

ミミは俺とエルマのやり取りの意味を知ってか知らずか、実ににこやかにエルマの提案に同意する。ほう、三人で。興味があります。昨日爛れた生活に溺れるのは云々といっていたけど掌をくるりと返そうと思います。なぁに、溺れずに戻ってくれば大丈夫大丈夫。

「よしよし、じゃあ三人でゆっくりしようなー」

「ちょ、ミミ、ちょっと」

「ゆっくりしましょうねー。まずはごはんですね！　今日は人造肉出しちゃいましょう！」

「いいね」

「ちょっと！」

騒ぐエルマを放置して俺とミミは高性能自動調理器であるテツジン・フィフスに美味しい食事を作ってもらうべく動き出す。そんな俺達をメイはどことなく楽しげに見える無表情で見つめているのだった。

#099　嵐の前の（後書き）

長い年月を経て麻雀はカードゲームと化していたのだ（、　。ω　。、）

（断言

#１００　襲い来る帝国面

思う存分にゆっくりと三人で過ごし、俺達は万全の状態でハイパーレーンからのワープアウトを迎えようとしていた。

「やっぱワープアウト直後を狙ってくるかねぇ」

「それが自然ね」

「何事もないのが一番だと思うんですが……でも、今更バルタザールがダレインワルド伯爵を襲う意味なんてあるんですか？　もうダレインワルド伯爵本人がバルタザールの所業を把握している今、これ以上何をしたところでバルタザールは終わりですよね？」

「恐らくはダレインワルド伯爵とクリスティーナ様を弑することで無理矢理ダレインワルド伯爵家を継ぎ、後の事は自らが伯爵になってから取り繕おうと考えているのだと思います。このままであれば身の破滅は間違いないですから。今までの行動パターンから考えると凡そ８１％の確率で襲撃を仕掛けてくると思われます」

「１００％じゃないんだな？」

「ご主人様の働きによってバルタザールは次々に繰り出した手を潰されており、その影響力は著しく低下していると思われます。そのため、襲撃を仕掛けるだけの戦力を用意できない可能性もあります。そういった部分まで正確に予測するには情報不足です」

「なるほど。バルタザールがどんな奴とコネを持っているかまではわからないものな」

「はい」

などと話しているうちにコックピットにアラート音が鳴った。これは別にロックオンされたとか敵影を確認したとかではなく、ワープアウト５分前を通知するものだな。

「そろそろかー。とりあえずウェポンシステムは即立ち上げられるようにしといたほうが良いよな」
「そうね。こっちも準備しておくわ」
「ヒロ様、レーダーレンジはどうしたら良いですか？」
「とりあえずは最大で良いんじゃないか？」

待ち構えて最大火力を一斉に叩き込んでくるだろうし……と思ってそう言ったのだが、メイから物言いが入った。

「いえ、どちらかといえば近接戦が予想されますので短めにしたほうが良いと思います」
「マジで」
「はい。私の予想が正しければ、ですが」

それだけ言ってメイは口を閉ざした。うーん？　近接戦かぁ……もしかしたら反応魚雷をガン積みした魚雷艇を大量に投入してくるとかだろうか？　流石にそれは骨が折れそうというか、一発でも通したらアウトになりそうだから勘弁してもらいたいな。
まぁ、反応魚雷は弾速が遅いから本当に肉薄しないとなかなか当たるものじゃないけど。迎撃にも弱いし、正直に言えばロマン武器枠だ。当てる技量が無いと大量に投入しても抱え落ちが頻発するだけだと思うし、そんな一か八かの賭けには出ないと思いたい。まさかの反応魚雷の飽和攻撃とか恐ろしくて目も当てられん。

「ヒロ様、まもなくワープアウトです」

近接戦とはどういうものになるのか、ということに思いを馳せていたらワープアウトの刻限が迫ってしまっていた。

「おっと。まぁ高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応するしかないな」
「要するに、行き当たりばったりってことじゃないの」
俺の発言にエルマがぼやく。仕方ないだろう？　実際ワープアウトしてみないと状況なんてわからないんだから。いち戦闘艇に出来ることなんて臨機応変に暴れまわることくらいだよ。
「5、4、3、2、1……出ます！」
後を引くような甲高い音が響き、艦隊がハイパースペースから通常空間への出現を完了した。ミミが素早くハイパースペース用のセンサー類を通常空間用のものへと変更する。特にダレインワルド伯爵の船団以外の反応は……あるな？　すぐさま伯爵の船団が警戒態勢に入り、クリシュナにも警告が飛んできた。
レーダーに映る光点の動きを見る限りではどうやら不審船はこちらの船団を取り囲んでぐるぐると飛んでいるようである。その動きはなんとなくこちらの隙を窺うサメか何かのように思えた。どう見ても不自然な機動である。下手に船団を動かすと衝突しかねない。足止めだろうか？
「足止めね。何を狙っているのかしら？」
「いつかの俺みたいに歌う水晶でも放り込んでくるつもりかね？」
「流石にそれは無いと思うけど……というかあんな使い方するのはあんたくらいだと思うわよ」
「そうか？　良い手だと思うが」
俺とエルマが警戒しながら様子を窺っている間にもダレインワルド伯爵の船団から不審船に向かって誰何の声がかけられているが、不審船は応答していない。攻撃をするわけでもなく、ただ周りをぐ

るぐると取り巻くような機動を取り続けて船団の移動を阻害し続けている。
飛び回っている艦艇そのものはオーソドックスな小型から中型の戦闘艦である。所属がすぐにスキャンできないところを見ると、何らかの隠蔽装置を作動させているらしい。やっぱりどう考えても限りなく黒寄りの不審船だな。
ダレインワルド伯爵の船団から最終警告が発される。これ以上船団の進行を妨げるのであれば撃破すると。不審船はその最終警告をも無視して飛び続け、緊張感が頂点を迎えたその時であった。

「ヒロ様、何か来ます。速いです」
「なんだ？」

船団を囲む不審船の更に外側から超高速で何かが突っ込んでくるのをクリシュナのレーダーが捉えた。その物体が目指す先はダレインワルド伯爵の乗る旗艦のようである。

「突っ込むつもりか？」

それを察知したダレインワルド伯爵の船団がウェポンシステムを起動し、迎撃を開始する。それと同時に周囲を飛び回っていた不審船もウェポンシステムを起動し、船団の船を攻撃し始めた。
何はともあれ、このまま傍観しているわけには行かないので俺もクリシュナを加速させて旗艦に向かって行く。どうもメイの言っていた通りに旗艦を狙った近接戦になりそうな感じだ。
スラスターを噴かして旗艦へと一直線に突っ込んでいく謎の物体――細長い小銃弾のような形の船に追い縋る。

「見たことのない船だな――シールド堅いな！？」

ＳＯＬをやり込んだ俺でも見たことのない船だ。とりあえず落としてしまおうと考えて四門の重レーザー砲を浴びせてみたのだが、全て細長い船のシールドに阻まれてしまった。小さいくせになかなかに強力なシールドを積んでいるようだ。

「あれは帝国航宙軍のサプレッションシップですね」
「サプレッションシップ？」
「はい。目標の船にシールド飽和装置を備えた衝角で突撃を仕掛けて敵艦の装甲を貫徹。衝角を経由して敵艦内に歩兵戦力を送り込み、制圧するための船です。強力なシールドと推進装置、そしてジェネレーターを装備していますが、武装の類は一切ないはずです」
「何その頭おかしい船」

要は人間魚雷の類じゃねぇか。
え？　まさかそれでダレインワルド伯爵とクリスを殺す気か？
本気で？　というかもっと効率の良い兵器作れるでしょ？　なんで衝角突撃の上で白兵戦？　頭がおかしくなりそうだ。パンジャンド〇ム並みの暗黒面を感じる。帝国面とでも言えば良いのか。

「帝国貴族は剣で戦うのが好きだから……」
「そうですね。暴れん坊エンペラーとか確か今シリーズ２４０６期とかだったと思います」
「やめてやめて、情報量が多すぎて頭壊れる……ってちょっと待って？　まさかアレにバルタザールが乗ってるとか無いよな？」
「乗ってるんじゃない？　最後は剣で決着をつけるとか帝国貴族が考えそうなことだし」
「頭が痛ぇ」

ハイパースペースを経由して俺はコメディ時空にでもワープアウトしてしまったのか？

ええい、俺の目が黒いうちはそんなふざけたことを罷り通らせはせんぞ！　墜ちろ！　墜ちろォ！　散弾砲をぶち込んでそのふざけた細長い船体を穴だらけにしてやる！

しかし執拗な追撃も虚しく、クリシュナは速度を増したサプレッションシップに振り切られて旗艦への衝角突撃を許してしまうのであった。

#１００　襲い来る帝国面（後書き）

Ｔｉｐｓ：帝国航宙軍には白兵戦を大真面目に戦術に取り入れようとする元陸軍派閥が存在する。

#101　貴族専用の豪華な棺桶（前書き）

短いけど許して！―（：3」∠）―

#１０１　貴族専用の豪華な棺桶

「なんかもう色々馬鹿馬鹿しくなってきたんだが……」
「ヒロ様、お仕事ですから。もう少し頑張ってください」
「世知辛いのぅ……」

身も蓋もない事を言うミミの台詞に内心涙を流しながらクリシュナをダレインワルド伯爵とクリスの乗る旗艦へと飛ばす。旗艦に突っ込んだサプレッションシップ以外の船は乱戦に持ち込んだことによって戦力的には不利ながらも健闘しているようだ。それでも徐々に数を減らしているようだが。

「というかあの船なんなの？　馬鹿なの？　死ぬの？　あの船に反応弾頭積んでたらそれで終わりじゃないか。超巨大な対艦魚雷みたいなもんだろアレ」
「あの船の製造コストは凡そ２５００万エネルだそうです。コストに見合いません。それと、人が乗っている船を自爆特攻させるのは倫理面で問題があります」
「突っ込んで自爆させるのも、突っ込んで圧倒的数的不利の中で白兵戦を仕掛けさせるのも自爆特攻って意味では大差ねぇんじゃねぇかなぁ……」

敵側の戦闘艦はダレインワルド伯爵の艦隊と戦闘をするのに忙しいようで、旗艦へと近づくクリシュナの邪魔をする艦は存在しなかった。とりあえず盛大にぶっ刺さっている細長いサプレッションシップに近づく。

「とりあえずこの刺さってるの、破壊するか？」

「そんなことしたら船内の気密が失われるわよ。気密対策が無いわけがないけど、とりあえずはやめといたほうが良いわね。下手すると爆発するかもしれないし。刺さったまま爆発したら下手すればバラバラよ？」
「それはいかんな。というかこんな船どういう事情があって作られたんだ……」

いくらシールドが厚いとは言っても、あのサイズの船ではシールドにジェネレーター出力をガン振りしたところで戦艦級の大口径レーザー砲は防げまい。１艇２５００万エネルともなればいくら帝国が覇権国家だとしてもそうそう量産できるものでもないだろうし、そもそも白兵戦というものは人員の損耗が激しい戦術だ。頻繁に使える戦術ではあるまい。

どうしても鹵獲したい敵の最新戦闘艦とかがあれば或いは有効な手なのかも知れないが……いや無理だろう。リスクが高すぎる。そもそも、軍隊同士の戦闘というのは戦艦や巡洋艦を横に並べて距離を取り、削り合いをするようなやり方が多いはずだ。普通、こんな乱戦はそうそうやらない。

そして、こういう状況でもないと使い途のないサプレッションシップなんてものは普通は顧みられることすら無いはずだ。というか、ＳＯＬ（ステラオンライン）で俺が見たことがないということは、特定の勢力の専用艦船という扱いなんだろう。このクリシュナのように。

強力なシールド容量、シールドを無効化するシールド飽和装置付きの衝角、クリシュナをも凌駕する加速力、ともなれば衝角突撃による一撃必殺に惹かれて使うプレイヤーもいただろうなぁと思う。実用性は別として、そういうのが好きな変態というのは一定数いるからな。絶対衝角をドリルにする馬鹿が出てくるぞ。

「なんでも帝国航宙軍の元陸軍派閥が一部の貴族勢力と結びついて強力なロビー活動を行った結果作られたそうです。ちなみに今まで

に実戦で使用された回数は四回です。今回は貴重な五回目の使用例ということになりますね」
「ちなみに突撃の成功確率は？」
「実戦使用された回数で言えば今回で三例目なので、投入された実戦数ベースで考えると六割ですね。投入された艦船数ベースで考えると、一割です。九割は到達前に撃墜されています。帝国航宙軍では貴族専用の豪華な棺桶、驚くほど高価なデコイ、帝国航宙軍屈指の珍兵器などと呼ばれているようですね」
「その一割を成功させたバルタザールの手腕と幸運に驚愕するところかな、これは」
「人間としてはともかく、バルタザールは多分かなり有能な戦術家よね。ヒロみたいなイレギュラーがいなければ色々と成功してたんでしょうし」
「相手が悪かったですね」

君達の中で俺はどんだけやべーやつなんだ？　俺は少々腕が良くて船とクルーに恵まれているだけの一般的な傭兵だぞ。多分。きっと。メイビー。

「それよりもどうするべきだ、これは。放っておいても他の船はなんとかなりそうだし、クリス達を守るために俺達も突入するべきか？」
「いやそれはどうかしら……下手に突入しても旗艦のクルーと同士討ちになっちゃうんじゃない？」
「でも、ここで指を銜えて眺めてて万が一ダレインワルド伯爵とクリスが討ち取られたりしたら元も子もないよな」
「それはそうだけど……わざわざ突入してリスクの高い白兵戦をやるわけ？　危ないわよ？」

エルマは白兵戦への参加には否定的な立場であるようだ。俺とし

てもあまりやりたくはないのだが、打てる手を打たないのは護衛契約に反する気がするし、何よりここでクリスを助けに行かずに放置して、もしバルタザールにダレインワルド伯爵とクリスを討ち取られでもしたら色々とヤバい。

日当２５万エネルの報酬が支払われないばかりか、正式にダレインワルド伯爵の爵位を継いだバルタザールからあの手この手で命を狙われることになるかも知れない。そろそろここらでバルタザールをプチっとぶっ潰しておいたほうが後顧の憂いが無くなるように思える。

「いや、やろう。万が一にもバルタザールに生き残られたら困る。最悪、現ダレインワルド伯爵が死んだとしても最低限クリスは守ってバルタザールはぶっ殺しておかないと後々に差し響く」

本当に最悪の最悪でダレインワルド伯爵だけでなくクリスまでもが死んだとしても、バルタザールには絶対に死んでもらわないと困る。俺とミミとエルマの平穏な生活のために。

「ミミ、旗艦に着艦許可を要請しろ。パワーアーマーを着て突入する。エルマ、クリシュナのコントロールを任せる。俺があっちに乗り移ったらハッチはロック、シールドも展開して誰も乗せるな。メイは俺に随伴しろ」

「は、はいっ！」

「……はぁ。アイアイサー」

「承知致しました」

ミミとエルマ、そしてメイが俺の指示にそれぞれ了解の意を示す。俺だってどちらかと言えば気が乗らないが、仕方がない。白兵戦の時間だ。俺はエルマに艦のコントロールを渡してパイロットシートから立ち上がり、メイを伴ってカーゴルームへと駆け出した。

#102　白兵戦

さて、というわけで白兵戦である。なんで強大な火力を誇る宇宙船が飛び交う戦場で俺は白兵戦なんぞをする羽目になっているのだろうか？　それもこれも全部バルタザールとかいうファッキン貴族野郎と頭のイカれたサプレッションシップなどというものを作り出した帝国航宙軍のせいである。Ｆ○ｃｋ。

『ヒロ様、間もなく着艦します。敵勢力は格納庫から離れた場所に展開しているようなので問題は無いと思いますが、気をつけてください』

「了解」

まぁ、敵勢力がいたところで生半可な武装ではこのパワーアーマーを破壊することは不可能だけどね。俺の愛機……愛機？　愛用しているパワーアーマーのコンセプトは重装甲、重火力だ。

耐レーザー、耐腐食、耐弾性能が非常に高いクラスⅢの装甲はあらゆる攻撃に対して強靭な防御力を発揮するし、いざとなればシールドを展開してその防御力を更に向上させることもできる。

「ご主人様は私がお守り致します。全て私にお任せください」

そう言って俺の目の前ではメイが若干鼻息を荒くしている。

いや、見た目的にはいつもどおり沈着冷静な様子だし、言葉遣いも別に弾んでいたりするわけではないのだが、全身から意気揚々とした雰囲気が伝わってくるのだ。うん、張り切ってるのはわかった。よくわかったからそのパワーアーマー用のレーザーランチャーをブンブン振り回すのをやめないか？　それそういう風に使うものじゃ

ねぇから。
何故メイがパワーアーマー用のレーザーランチャーを使えるのかと言うと、彼女のジェネレーターからエネルギーを供給することが出来るようになっているからである。彼女はパワーアーマーと同じようにあの身体の中に超小型のジェネレーターを備えているのだ。しかもその出力はパワーアーマーよりも上であるらしい。
なので、メイは何の問題もなく生身――生身？　でパワーアーマー用の重火器を使えるわけだ。ちなみにエネルギーを供給するためのケーブルがレーザーランチャーからメイの腰の辺りに伸びている。あの辺りにコネクタがあるらしい。前に見た時にはそんな物は見当たらなかったと思うんだが……謎だな。
などと考えていると、船が僅かに揺れた。どうやら着艦したらしい。

『着艦完了よ。仕事は仕事で全力でやるべきだけど、命あっての物種だからね。無茶はするんじゃないわよ』
「アイアイマム」
『あと、貴族の剣は受けちゃ駄目よ。避けなさい。パワーアーマーの装甲ごと斬られるわよ』
「えっ」

ちょっと待った、その情報は聞いてないぞ。

『あと、貴族は情報処理能力を飛躍的に増大させるサイバネティクスを施していることが多いから気をつけて』
「……気をつけるって？」

何に？　情報処理能力を増大させることによって俺に何の危険があるんだ？

『つまり、物凄い反応速度でレーザーを剣で弾いたり、場合によっては打ち返したりしてくるってこと』

「ウッソだろお前」

は？　レーザーを剣で弾く？　打ち返してくる？　ジェ〇イか何かかな？　サイバネジ〇ダイもどきとかなんかそういうの居なかったっけ。俺は残念ながらそこまで詳しくないんだ、あの大作に関しては。

『身体のほうが持たないから長時間持続できるってわけじゃないらしいけどね。というか、あんたも同じようなことするでしょ？　だから私、あんたのことを最初貴族なんじゃないかと思ったのよ？』

「俺も？　ああ……」

あの息を大きく吸って止めたら周りの動きが遅く感じるやつか？

なるほど、あの瞬間は俺がとんでもない速度でレーザーガンを撃っているように周りからは見えるらしいし、同じようなもんか。

「いくら反応速度を上げても剣は一本。精々二本だろ。問題ない」

そう言って俺は今回の得物を構えてみせる。今回装備したのはパワーアーマー用の対人装備の中でも特にぶっ壊れ性能と言われているスプリットレーザーガンの二丁持ちである。これは歩兵用のレーザーライフルと同等の威力を持つレーザーを同時に十二発、拡散して発射する武器だ。早い話がレーザーを撃つショットガンみたいなものである。それを両手に一丁ずつ持って同時に２４発のレーザーを発射できるというわけだ。

一発あたりの威力はレーザーランチャーのスプリットモードの方が上だが、狭い船内では少々扱いづらい。船内のような閉所ではスプリットレーザーガン二丁持ちの方が取り回しが良いのだ。

「よし、突入する。ミミ、向こうのクルーに俺達を撃たないようによく言っておいてくれ」
『わかりました！　お気をつけて！』
「ナビゲートは私が致します」
「頼む。行くぞ」

ハッチを開放し、クリシュナの外に飛び出す。
格納庫から敵の展開している場所までは少々距離があるので、ガッションガッションと鈍重な足音を上げながらまずは走る。音は鈍重だが、これでも走る速度は生身の時よりは速いのだ。脚部の衝撃吸収機構と金属繊維性の人工筋肉が良い仕事をしているな。
しかし、そんな俺の目の前をメイが清楚なメイド服をヒラヒラさせながら走っている。手にものすごくゴツいレーザーランチャーを持って。なんとも非現実的な絵面だな。悪役っぽい力士型パワーアーマーとゴツい重火器を持ったメイドさんのコンビとかB級映画でもそうそう見ない取り合わせじゃないだろうか。

「この先の通路を左折すると交戦地点です」
「突入するぞ。俺が前に出てシールドを張る」
「承知致しました。では私は隙を見て掃射します」

メイの言葉を聞きながら左折すると、ボディーアーマーを装備した敵らしき兵士のような連中とメイドさんや執事達がお互いにバリケードを構築して睨み合いをしていた。そういやここのクルーはメイドや執事の格好をしているんだっけか。すっげぇシュールな図だな。
曲がり角から突然現れた力士アーマーの俺の姿を見て兵士らしき連中が驚愕の表情を浮かべる。俺の方を振り返ったメイドさん達も驚愕の表情を浮かべる。驚かせてすまんね。ちょっと通りますよ。

「うらあぁぁぁぁっ！」

メイドさん達とバリケードを飛び越え、バリケードとバリケードの間に躍り出て両手のスプリットレーザーガンを乱射する。赤い光の筋が何本も敵のバリケードに着弾し、小爆発と焦げ目を発生させる。

「くっそ、パワーアーマーか！　撃て撃て！」
「はっはっは！　無駄無駄ァ！」

シールド発生させ、応射で飛んできたレーザーを全て受け止める。このまま何十秒も銃火を浴び続けると不味いことになるかも知れないが、そんなに時間をかけるつもりもない。

「メイ！」
「はい」

俺の陰から躍り出たメイがレーザーランチャーを腰だめに構え、ドッ、ドッ、ドッ、ドンッ！　と収束モードにして威力を高めたレーザー砲撃を敵と、そのバリケードに浴びせていく。
俺のレーザースプリットライフルよりも格段に強力なレーザー砲撃は瞬く間に敵方のバリケードを破壊し、その後ろに隠れていた敵兵のボディーアーマーすらも貫通して次々に敵兵を仕留めていった。

「いやっほぉぅ！」

敵兵に広がった動揺の隙を突いてシールドを張りながら高速で敵のバリケードに突っ込み、バリケードごと敵兵を吹っ飛ばす。力士型パワーアーマーである『ＲＫＩＳＨＩ　ｍｋ－Ⅲ』の必殺技的な

一撃。その質量と強靭な防御力を利用した『ぶちかまし』である。

「オラオラオラァ！」

更に腕を振り回して敵兵を殴り倒し、至近距離でスプリットレーザーガンを発砲して上半身を消し飛ばしてやる。敵にかける慈悲は無い。そうしているとメイもまた乱戦に飛び込んできた。

「はぁっ！」

一見すると華奢にしか見えないメイがレーザーランチャーを振り回し、ボディーアーマーを着込んだ大男を次々と木の葉のように吹き飛ばしていく。なんか聞こえちゃいけない音が聞こえている気がするんですが。ゴキィ、って。

「先に進むぞ」

「はい」

敵方のバリケードを破壊し、制圧した俺達は後始末をダレインワルド伯爵家のメイドさんや執事さん達に任せて先に進むことにした。敵がパワーアーマーで武装していないのは不幸中の幸いだったな。この先もスムーズに進めれば良いんだが。

#１０３　二刀流野郎

バリケードを突破して進むと、通路が真っ赤に染まっているのが見えてきた。

「うっ……これは」

「斬られていますね」

真っ赤に染まった白い通路に転がっているのはバラバラに寸断された人間のパーツだった。あまりの光景に吐き気が込み上げてくるが、瞬時にパワーアーマーの嘔吐抑止機能が働いてスッと吐き気が治まった。それでも胃の辺りはムカムカしているけど。

死体を踏まないようにその場を通過し、先を急ぐ。

「アレが貴族の剣でずんばらりんとされたあとか……ああはなりたくないな」

「ご安心ください。私が居る限りはそのようなことには決してさせませんので」

メイが頼もしいことを言ってくれる。しかしメイがあんな感じでずんばらりんとやられる光景は目にしたくないな……できるだけ俺が片付けるとしよう。

「それと先程の現場ですが、壁面や天井にレーザーが着弾した痕跡がありました。やはり思考速度を向上させるサイバネティクスを導入していると考えられます」

「厄介だなぁ……まぁスプリットレーザーガンの二丁同時発射は防ぎようがないだろう」

単発のレーザーガンやレーザーライフルであれば銃口の向きからレーザーの軌道を予測できるかもしれないが、スプリットレーザーガンの場合は偏光レンズの加熱を感知して一射毎に微妙に発射角度がズレる。二丁合わせての同時発射数から考えても一本や二本の剣でその全てを防ぎ切るのは不可能だろう。発射されてからでは避けるのは不可能なのだから。

大丈夫大丈夫。剣を振り回す野蛮人に文明というものを見せつけてやるよハッハッハ。

「この先から交戦音のようなものが聞こえます」

「急ぐ……いや、メイは先行しろ。俺より早く動けるだろう？」

「それは……承知致しました」

メイは頷くと物凄いスピードで通路を駆けていった。通路の構造材が微妙に凹んでるんですけど？　え？　どんだけ素早いの？　メイの身体能力の高さはカタログ上のスペックは把握していたけど、実際に目の当たりにするのは初めてだから驚いたぞ。あの上で戦闘に特化したプログラムも積んでるんだよな？　俺、パワーアーマーを着ていても勝てないのでは？

どっすんどっすんガションガションと騒々しい音を立てながら走っていると、レーザーランチャーの発射音らしきものをパワーアーマーの集音センサーが拾った。メイはもう敵と接触したらしい。

前方の開いた扉からメイのレーザーランチャーのものと思しき幾筋もの赤い軌跡が見える。盛大にバンバンとぶっ放しているようだが、アレでまだ決着が着いていないのか？

突入前に状況を確認する前に部屋を覗き込むと、奥に剣を構えたダレインワルド伯爵とその部下らしき人々、それにクリスが居た。ダレインワルド伯爵はあちこちに切り傷らしきものを負っており、なかなかに凄惨な状態になっている。幸い、どこかを斬り落とされ

たりはしていないようだが。
そしてその手前ではメイと何者かが激しい争いを繰り広げていた。
「性玩具如きがぁっ！」
「その発言は正鵠を射ていますが、差別的な意味での発言は品性を疑われるので止したほうが貴方様のためかと思います」
激昂する剣を持った男に対し、メイはこの上なく冷静な面持ちで男に向かって容赦なくレーザーランチャーをぶっ放していた。拡散モードで発射された高威力のレーザーが男に向かって殺到し、その身体を貫き……貫かずに両手に持った剣で逸らされ、弾かれる。ええぇ……？
メイと退治している男は右手に持った長剣と左手に持った短剣で自分に当たる軌道のレーザーを弾き、更に素早い身のこなしで以って残りのレーザーを躱したのだ。冗談だろう？　マジでジェ〇イじゃんか。
『メイ、もう一度撃て。十字砲火で封殺する』
『承知致しました』
メイの返事を聞きながら通路から交戦地点となっているホールのような場所に飛び出――ッ！？
「ぬおおっ！？」
「くっ！」
どういうわけか剣を持った男が一瞬で先程まで居たホールの端から俺が飛び出したホールの入口まで距離を詰めてきていた。思わず全力でスプリットレーザーガンで殴りつけてしまったが、なんとあの男、スプリットレーザーガンでの殴打を剣で防いで飛び退りやが

った。ついでとばかりに殴打に使った右手のスプリットレーザーガンを左手の短剣で綺麗に真っ二つにして。

「テメェーッ！？　俺のスプリットレーザーガンをよくもぶった切ってくれたなぁーッ！？」

「ぬおおおぉぉっ！？」

真っ二つにされたスプリットレーザーガンを投げ捨て、左手に残っているもう一丁のスプリットレーザーガンとＲＩＫＩＳＨＩ　ｍｋ－Ⅲの固定武装である両肩のレーザーガンを二刀流野郎に向かって乱射してやる。

「き、貴様ァ！　貴族の私に向かってッ！　そのようなッ！　野蛮な武器をぉッ！？」

「知るかボケ死ね！　焼け死ねっ！」

あまり遠距離から撃っても拡散するレーザーとレーザーの間隔がガバガバになってしまうので、適度な距離を保つように前進しながら容赦なくレーザーをバシバシと打ち込んでいく。ちっ、こいつ携帯用のシールドを装備してやがるな？　何発か直撃コースのはずのレーザーがあるのにダメージが通ってない。

まぁいい、どんなに高性能なシールドを装備しているとしてもいずれはダメージで容量飽和を起こして霧散する。一発、二発で貫けないなら三発でも四発でも十発でも二十発でも叩き込むまでだ。

「何見てんだオラァ！？　お前らも撃たんかい！」

レーザーガンやレーザーライフルを持ったままダレインワルド伯爵の傍で呆然としているメイドや執事達にも檄を飛ばす。メイはレーザーランチャーを収束モードにして狙い澄ました一撃を二刀流野

郎のシールドに叩き込もうとしているようだ。入れば一撃で奴のシールドを飽和させられるだろうな。いいぞもっとやれ。

「クソがぁ！」

ボンッ、という音と共に二刀流野郎が爆発した。いや、煙幕を張ったのか？　男の姿が白い煙の中に消え、その煙は更に広がり、凄い速度で部屋の中を覆い尽くしていく。なるほど、視界を奪うと同時に煙幕によってレーザーを減衰させようというわけか。よく考えたな。

だが、無意味だ。

「そぉい！」

「ぐわあぁぁぁぁっ！？」

ダレインワルド伯爵の方に駆け寄ろうとしていた二刀流野郎に左手に持っていたスプリットレーザーガンを投げつけて命中させる。

対レーザー兵器用の煙幕を張ってレーザー兵器の使用を難しくし、更に視界を奪ったとしてもパワーアーマーを着込んでいる俺にとってはさしたるマイナス要素にはならない。パワーアーマーには光学センサーだけではなくその他にも赤外線センサーを始めとして実に様々なセンサーが搭載されているのだ。この程度の煙幕なんぞ目眩ましにもならない。

シールドを展開し、吹き飛んだ二刀流野郎との間合いを詰める。

「馬鹿めっ！」

俺の接近に気づいた二刀流野郎が右手の長剣で斬りつけてきたが、その刃は展開されているシールドに弾かれた。

その剣は大した切れ味みたいだが、予想通りシールドにはそんなの関係なかったみたいだなぁ？
レーザーの莫大な熱量やミサイルなどの爆発兵器が持つ莫大な衝撃エネルギー、或いは散弾砲の弾丸が持つような莫大な運動エネルギーでもないとこのシールドを飽和させ、貫くことなど不可能だ。
いくら切れ味が高かろうが、二刀流野郎がサイバネティクスで強化していようが、普通の人間が放つ程度の斬撃ではビクともしない……ということらしい。いや、ワンチャンシールドを切り裂いてくるとかあるかなとはチラッと思ったけど流石にそうはいかなかったな。良かった。
もともとはスペースデブリを受け止めるための技術だったわけだから大丈夫だとは思ってたけど。

「ごはあぁぁぁっ！？」

シールド越しに俺とパワーアーマーの全重量が乗った体当たりを食らった二刀流野郎が車にでも撥ねられたかのように派手に吹き飛ぶ。二刀流野郎の長剣を持った右手があらぬ方向に曲がり、その手から長剣が弾け飛んで行くのがチラリと見えた。

「メイ、制圧しろ！」
「はい」

レーザーランチャーを手に持ったままのメイが疾風のように駆け、未だ空中にいる二刀流野郎をレーザーランチャーによる殴打で床に叩き落とし、素早くその四肢を足で踏み砕いた。
めきみしゃっ、って凄い音がしたよ。どこがとは言わないけどヒュンッてなりました。はい。
次第に煙幕が晴れて行き、四肢を踏み砕かれて泡を吹いている二刀流野郎とその背中を踏んで頭にレーザーランチャーを突きつけて

いるメイの姿が顕になる。ダレインワルド伯爵さんよ。アンタの周りに侍っているメイドさんとか執事さんを何人か解雇して、メイみたいな戦闘メイドロイドを揃えたほうが色々と安全なんじゃないかね？　何かメイドロイドを使えない理由でもあるのだろうか。

「で、こいつはぶっ殺して良いのか？」

厳しい表情でこちらに視線を向けているダレインワルド伯爵にそう聞く。多分、こいつがバルタザール某だろう。そうだよな？　そうだと言ってくれ。

#104　決着

「……その男は捕縛する」

厳しい表情を崩さないままダレインワルド伯爵はそう宣言し、周りに控えているメイドや執事達に目配せをした。ダレインワルド伯爵からの視線を受けた数人の執事達が慌ただしく動き、どこからか首輪のようなものを持ってきて泡を吹いて倒れている二刀流野郎の首に嵌め、どこかへと連れて行く。

そしてメイドさんがどこかへと飛んでいっていた二刀流野郎の長剣と短剣を鞘に収めて俺の元へと持ってきた。なんだねこれは？

「貴様によって決闘を汚されたのは甚だ遺憾だが、結果的に奴を倒したのはお前とその道具だ。その剣は貴様が得るべきだろう」

「……意味がわからん。これは一体どういうことなんだ、メイ」

「貴族同士の争いの解決方法は色々とありますが、今回ダレインワルド伯爵とその息子であるバルタザール卿は今回の争いを最終的に剣による決闘という形で解決しようとしたのだと思われます。我々はその決闘に一方的に乱入、ダレインワルド伯爵に助太刀する形でバルタザール卿を討ち果たしました。これによって今回の一連の争いはダレインワルド伯爵の勝利という形になり、バルタザール卿の生殺与奪を含め全てがダレインワルド伯爵に一任されることになるのだと思われます。また、決闘に勝利した貴族は敗北した貴族の誇りの象徴である剣を戦利品として得るのが一般的です。我々の乱入を不本意と感じ、しかしながら我々の乱入が無ければ敗北していた可能性の高かったダレインワルド伯爵はバルタザール卿の剣を自らのものとするのを良しとせず、実質的に彼を討ち果たしたご主人様に譲ろうと考えているのだと思われます」

「なるほど。情報量が多すぎてわからん。これは受け取って良いものなのか？」
「よろしいのではないかと」
「わかった」

メイが良いと言うのであればそうなのだろう。そういうわけで、俺はメイドさんが差し出してきていた長剣と短剣を受け取ることにした。パワーアーマーを着たままだと微妙な絵面だろうな。力士型パワーアーマーに西洋剣というのはさぞ似合うまい。

「それで、奴はどうするんだ？」
「然るべき処置をする」

短くそう言ってダレインワルド伯爵は踵を返し、どこかへと歩き去っていってしまった。傷の処置をしていたメイドさん達がその後を慌てて追いかけていく。そんな彼を見送りながら俺は投げつけたスプリットレーザーガンを回収し、真っ二つにされたものも同様に回収した。実はパワーアーマーには背部にウェポンマウントがあるのだ。よくわからない力で武器が背中にくっつくぞ。
冗談だ。背部に自動制御の機械式ウェポンマウントが装備されているのである。見た目はゲームとかでよく見る謎の力で背中にくっつくアレに見えるだけだ。俺は普段レーザーガンしか持ち歩いてないから着てないけど、この世界のタクティカルアーマーの類には同様の機能を備えているものが結構あるぞ。オンラインストアで確認したから間違いない。

「お疲れ様でした」

真っ二つになったスプリットレーザーガンを両手にそれぞれ持って後始末をどうしようか、などと考えているとこの場に残っていた

クリスが俺の直ぐ側まできて声をかけてきた。
「お疲れ。怪我はなかったか？」
「はい」
そう言うクリスの腰には今まで見かけなかったものが吊るされていた。それはナイフ……と言うには少し大きいだろうか。護身用の短剣、といったところだろう。
「パワーアーマーを着たままだと頭を撫でることもできないな。とにかく、無事で何よりだ」
「ヒロ様のおかげです。この懐剣を使わずに済みました」
「どういう使い方をするのかは聞かないでおく」
懐剣という言葉の意味が俺の知っているものと大きく違っていなければ、それは護身用、或いは女性が自分の誇りと尊厳を守るために自害するのに使うものである。ダレインワルド伯爵が敗北し、俺が助けに来ていなければ最悪の場合彼女はあの懐剣で自らの命を絶っていたのかもしれない。
「そうだ、エルマ達にも連絡しておかないとな……エルマ、ミミ、こっちは大丈夫だ。バルタザールは……殺しちゃいないが、仕留めた。ダレインワルド伯爵がなんか首輪みたいなものを嵌めて連行していったからもう心配ないはずだ」
『了解。殺らなかったの？』
「ダレインワルド伯爵とやりあってた所に俺達が乱入して、最終的にメイが四肢をぶっ潰してな。泡吹いて気絶したのを拘束した感じだ。一応殺す前にダレインワルド伯爵に聞いたら拘束するって言ったんでな」
『そう。怪我はない？』

「ない。スプリットレーザーガンが一丁真っ二つにされたけど」
『それは残念だったわね。でもレーザーガン一丁で済んでよかったじゃない。腕だの足だの胴だのを真っ二つにされるよりはマシでしょ？』
「違いない」

あの切れ味だとマジでパワーアーマーごと斬られてもおかしくなかったからな。シールド万歳だぜ。

『ヒロ様、無事に戻ってきてくださいね』
「ああ。今日はパーッと美味いもんでも食おう。やっとこさ一息つけそうだ」
『はいっ』

ミミの嬉しそうな声を聞いてふと思いつく。

「そうだ、クリスも船に来ないか？　バルタザールを仕留めたお疲れ様パーティーをするぞ」
「パーティーですか。良いですね。是非参加させてください」
「パーティーって言ってもそれっぽい料理を自動調理器にたくさん作ってもらうだけだけどな。それでもよければ是非参加してくれ」
「はい。お祖父様に言ってなんとしても許可を取り付けてきます」

そう言ってクリスは両拳を握ってふんすっ、と気合を入れる。ミミから仕草が感染ったのだろうか……？　ま、まぁ一緒に居た時間も長かったみたいだし……？

「そういや戦闘はどうなってる？」
『そっちでバルタザールを仕留めたのが伝わったみたいで、戦闘は終了したみたいね。大体投降するか逃げるかしたみたいよ』

「了解。それじゃあ今から戻る。クリス、俺達はこの船のハンガーに着艦してるから、許可が取れ次第来てくれ。メイ、クリスの護衛を頼む」
「わかりました。後ほど伺いますね」
「承知致しました」

バルタザールを仕留めたからもう大丈夫だと思うが、万が一ということもあるのでメイを護衛につけておく。一応、メイの護衛としてレーザーガンやレーザーライフルを装備したメイドが待機していたが、念には念を入れてだ。メイにスプリットレーザーガンを渡し、嵩張るレーザーランチャーは俺が船に持ち帰ることにする。
念の為道中にまだ戦闘中の場所は無いか警戒しておいたが、艦内に侵入した敵兵の殲滅も完了していたようでとりあえず一安心のようだった。

「どうにも気が抜けてるな」

クリスを狙っていた首魁を倒したせいか、どうもよくない精神状態のように思える。浮ついているというかなんというか、油断している感じがするというかなんというか。勝って兜の緒を締めよ、なんて言葉もある。しっかりと油断しないようにしなきゃならんな。
ガションガションとパワーアーマーの歩行音を鳴らしながら歩き、艦内のメイドさんや執事さんの視線を受けながら俺は旗艦のハンガーへと辿り着いた。旗艦の艦載機も続々と戻ってきているようである。
シールドを抜かれずに無傷で済んだ機体もいるようだが、よく爆発四散しなかったなと言いたくなるようなボロボロの機体もいる。彼らの機体はごく標準的な帝国製の小型航宙戦闘機だ。
小型のレーザー砲、或いはマルチキャノンを装備可能なマウントが二つ、それにシーカーミサイルポッドが二門。運動性が高く、ス

ピードも早め。シールドと装甲に不安はあるが、なかなかに良い機体だ。
傭兵が乗るにはちょっと巡航能力とか積載量の面で不安があるけど。愛用している人が居ないわけでもないんだよな。見た目がいかにも戦闘機チックでかっこいいし。
それに比べるとクリシュナは一回り以上大きい。一応小型戦闘艦に分類できる大きさだが、中型戦闘艦に近い大きさである。その分性能は比べ物にならないけど。
補給や整備、それに負傷したパイロットの救護で大変忙しないハンガーを通過し、クリシュナに戻る。パワーアーマーを着てレーザーランチャーなんて持ち歩いてると、この混雑したハンガー内でも向こうから避けて通ってくれるのは実に助かる。
タラップを登り、ハッチを開けてクリシュナの中に入るとそこにはミミが待ち受けていた。

「ヒロ様！」
「ただいま。とりあえずパワーアーマー脱いでくるわ」
「はい！」

と言いつつミミは俺の後ろをついてくるようであった。特に怪我も何もしてないんだけど、心配なのかね？　カーゴスペースに着いた俺は武器庫として使っている一角に設けられている武器ラックにレーザーランチャーを置き、ジャンク品ボックスに真っ二つにされたスプリットレーザーガンを放り込んでパワーアーマーを脱いだ。

「ぷはぁ、解放感」
「お疲れさまです！」

すかさずミミが程よく濡れたタオルを差し出してきたので、それを受け取って汗ばんだ顔や首周りを拭く。パワーアーマー内はしっ

かり空調も効いてるんだけど、やっぱり汗をかくことはかくんだよな。

「ありがとう。そうだ、こいつを見てくれ」

そう言って俺はパワーアーマーの背部にマウントしておいたバルタザールの剣、大小一組をミミに見せてみた。

「剣、ですか？　これ、貴族様の持っているようなやつですよね？」
「うん。メイと一緒にバルタザール某をボコしたらダレインワルド伯爵がくれた」
「そんなに簡単にもらえるものなんですか……？」

ミミが困惑した表情を見せる。うん、困惑する気持ちはわからないでもない。でも貰ったものは仕方がない。くれるっていうなら断る理由もないし、メイも受け取って問題ないって言ってたしね。

「わからんけどくれるって言ってたから……」
「そ、そうですか……」

困惑しつつもミミは剣というものに興味津々のようである。ミミにとって剣というものは帝国貴族の象徴、つまり雲の上の人物が持っているものという認識だ。日本の認識で例えると……議員バッジみたいな？　ちょっと違うか？　まぁとりあえず自分では絶対に手の届かないものって認識だろう。

「持ってみるか？」
「良いんですか？」
「良いんじゃないか。ああ、めっちゃ斬れるから扱いには細心の注意を払ってな」

「はいっ」

ミミに短剣を渡し、俺は長剣の方を手に取ってみる。

ふむ、思ったより細いな。セレナ少佐の持っている剣よりも細身の剣であるようだ。切れ味は同じなんだろうか？　比較対象がないからわからんな。諸刃で、刀身の幅はあまり広くなく、切っ先は鋭い。

威力よりも軽さと鋭さを重視した剣なんだろうか。まぁ切れ味は刀身の幅にあまり影響されないんだろうから、細身で軽いほうが有利っちゃ有利なのかね？

「結構ずっしりしてますね」

「そうなのか」

長剣を鞘に収め、ミミと剣を交換する。こちらは長剣に比べて幅広で刀身自体が厚く、切れ味も良さそうだが……それよりも頑丈そうなイメージの造りである。攻撃的な剣ではなく、どちらかというと防具のように使う剣なのかも知れない。

「……なにやってんのよ」

カーゴスペースの入り口からかけられた声に振り返ると、そこには呆れたような表情を浮かべたエルマが立っていた。俺はそんな彼女にも見えやすいように手にした短剣を掲げてみせる。

「戦利品の確認をな？」

「戦利品って……え、それ貰ってきたの？」

「うん。なんか知らんがバルタザールを俺とメイでボコってダレインワルド伯爵を助けたらくれた」

「うんってそんな軽く……」

そう呻いてエルマが何か考え込むような仕草をする。

「受け取ったら不味かったのか？」

「いえ、そういうわけじゃないけど……まぁ、何かあるなら向こうから言ってくるでしょ。それよりもパーティーの準備をするんでしょ？　そんな物騒なものはしまって早く準備しましょう。ヒロはシャワーでも浴びてきなさい」

「はいっ！」

「へーい」

ママ・エルマの言葉に素直に従って俺とミミは剣を鞘に収めて武器ケースに放り込み、各々行動を開始する。ミミとエルマはカーゴルームから食材や飲み物を持っていくらしい。俺は素直にエルマの言葉に従って風呂に入るとしよう。

風呂に入ったら祝勝パーティーだな！

#１０４　決着（後書き）

２４～２５にかけて東京に行くのでちょっと更新をお休みします！
ユルシテネ！　―（：３」∠）―

#105　決別（前書き）

マニアワナカッタ……―（：3」∠）―

#105　決別

「はー、食った食った」

テツジン・フィフスの作ってくれたピザのようなものと、フライドチキンめいた何かをメインとした祝勝パーティーでたらふく食った俺はササッと風呂を浴びて自室に戻ってきていた。

え？　パーティーの様子？　人造肉を併用した激ウマメニューに感動しながら皆でワイワイ飯食ったよ。パリピだったよパリピ。いや、酒飲んで騒いでるのは駄エルフ一名だけだったけど。

腹もいっぱいになったので、まだ飲んで騒いでる駄エルフはそれに付き合っている美少女二名と有能メイド一名に任せて俺だけ風呂に入って部屋に戻ってきたわけだ。どうにも白兵戦で想像以上に精神的にも肉体的にも疲労していたらしい。パーティーの後半でドッと疲れが出てきた。

「大変だねぇ」

ベッドサイドのコンソールを操作し、クリシュナの各部に搭載されている光学センサーが拾った画像をホロディスプレイ上に表示させる。そこに映ったのはクリシュナの鎮座するハンガーの様子である。

ホロディスプレイにはメンテナンス要員やメンテナンスロボットがハンガー内を忙しなく動き回っている様子が映し出されていた。俺達はパーティーを楽しんだが、ダレインワルド伯爵家の人々は未だに事後処理に忙殺されているようだ。

今回の襲撃にはダレインワルド伯爵家の息がかかっているはずのコーマット星系軍からもバルタザールに唆されて参加した者が居た

らしく、クリスの話によるとダレインワルド伯爵家とコーマット星系軍は上を下への大騒ぎであるらしい。
　そういう話は俺みたいな傭兵には関係のない話だけどな！　今はダレインワルド伯爵の旗艦に着艦した状態で待機を命じられている状態だし、待機中は何をしていても俺達の自由というわけだ。当然、出動要請があれば出動する必要はあるわけだが。
　戦場の後始末を終えたダレインワルド伯爵とその麾下にある船団はコーマット星系の中核コロニーであるコーマットプライムコロニーに向かい、曳航した船の引き渡しや負傷者の治療、損壊した艦船の修理など諸々の用事を済ませるつもりであるらしい。その間、俺達は待機を命じられたというわけだ。
　もうお膝元に来たわけだし、首謀者であるバルタザールも捕らえたわけでもあるし、用済みだとばかりに放り出されるかな？　と思っていたのだが、意外とダレインワルド伯爵は義理堅かったようである。
　などと考え事をしながらベッドに大の字で寝転がっていると、入室を求めるチャイムが鳴った。一応この部屋の扉も気密扉で頑丈だからか、ちょっとしたノック程度じゃまったく中まで音が聞こえなかったりする。そのために中の人を呼び出すためのチャイムが据え付けられている。エルマはそれでも聞こえるくらいドンドン扉を叩いてきたりするけど。

「こんばんは」
「お、おう？　こんばんは？」

　チャイムを鳴らすのはいつもミミなので、ミミが訪ねてきたのだろうと思って扉を開けたらそこに居たのは黒髪の美少女であった。つまりクリスである。
　流石にクリスが来るとは思っていなかったので、俺の格好はボクサーパンツにタンクトップというそれはもうラフな格好である。有

り体に言って下着姿である。

「ちょっと待ってくれ」

「はい。お寛ぎのところをすみません」

流石に下着姿はまずかろう、とズボンだけでも履くことにする。クリスは俺に気を利かせてかそっと視線を横にずらしてくれていた。申し訳ねぇ。

「ええと、どうしたんだ？」

「特にこれと言った用事はないです……ただ、二人でお話がしたくて」

「なるほど？」

わかるようなわからないような理由だが、別に拒否するようなことでもない。俺はベッドから少し離れた場所に設置されている椅子とテーブルの方にクリスを導いた。流石に貴族のお嬢様を男のベッドに座らせるわけには行くまい。そういう意味では男の部屋に彼女を迎え入れること自体がアウトな気がするが。

「悪いがお茶とか気の利いたものはないんだよな……これでもいいか？」

「はい」

クリスがコクリと頷いたので、俺は据え付けの冷蔵庫から炭酸の抜きの黒い砂糖水めいたドリンクをテーブルの上に置いた。うーん、ちょっと刺激が物足りないけど五臓六腑に沁み渡るなぁ。

「まぁ、なんだ。改めてお疲れ様だ。とりあえずはこれで危機は去った、ってことで良いだろう」

「はい、ありがとうございました。お祖父様もヒロ様のことを褒めていましたよ」
「本当かぁ？」

あの爺さん、俺と顔を合わせる時はいつも眉間に深い皺を刻んで不機嫌そうなんだが。まぁ、傭兵としての俺の力は認めてくれているってことなのかね。

「はい。不機嫌そうな表情でしたけど、腕は確かなんだろうって言っていました」
「そうか。まぁ悪い気はしないな」

と、ここで気付いて俺は椅子から腰を上げ、ベッドの脇のクローゼットの中から薄紫色の宝石があしらわれているネックレスを取り出した。俺の愛用のジャケットのポケットに入れていたものだ。

「そろそろこれを返しても良い頃だろ」
「それは……」

俺の手の中で光るネックレスにクリスが視線を向ける。その表情はどこか寂しげというか、悲しげなものだった。

「まだもう少しクリスを守る騎士役として働かせてはもらうけどな。とはいえ、ダレインワルド伯爵からクリスを保護していた件についての報酬はもう貰ったし、ここがこのネックレスの返し時だと思う。大事なものなんだろう？」
「……はい」

俺がネックレスを差し出すと、クリスはそれを素直に受け取り、その小さな手でぎゅっと握りしめた。それを見届けた俺は再び椅子

に腰を下ろし、クリスの真正面に座る。

「あの、私……」

「うん」

「私、ヒロ様を……ヒロ様のことをお慕いしています」

クリスはネックレスをその小さな手で握りしめたまま顔を真っ赤にし、涙で黒い瞳を潤ませながらそう言った。

「……そうか」

まぁ、そんな兆候は無くもなかったというか、あってもおかしくはないのかという感じだ。リゾート惑星は添い寝もしたしな。いや、添い寝は関係ないか？　何にせよ、多感な時期の少女にとって自分を守ってくれる、守ってくれた男という存在はそういう対象として申し分無いだろう。

そんなものは一時の熱病のようなものだ、と切って捨てるのは簡単だが、本人にとってはこれ以上無く本気で、最大限の勇気を振り絞った告白なんだろうと思う。でもなぁ。

「前に言ったよな？　貴族の女の子に手を出すつもりはないって……あぁ待て、泣くな泣くな」

クリスがぽろぽろと涙を零し始めたので、慌ててその涙を手で拭ってやる。すまんね、ハンカチの一枚も用意してなくて。前にミミにたきつけられて俺の部屋に忍び込もうとしたアグレッシブさはどこにいったんだよ。

「大人の事情というか、貴族としてのクリスの事情もあるだろう。バルタザールは確実に廃嫡の上で処分されるだろうし、そうなると

もうダレインワルド伯爵家にはクリスしか跡取りが居ないわけだ」
親戚とかそっちから適正な人材を養子に引っ張ってくるって方法もあるのかも知れないが、そこまでするかはちょっと俺にはわからん。
「そんなクリスとどこの馬の骨かもわからん俺との間をダレインワルド伯爵が認めるとは、俺は思えない。認めれば良いのかというと、そうもいかない。俺は傭兵稼業をやめるつもりは今のところ無いんだ」
もしダレインワルド伯爵が俺とクリスとの仲を万が一認めたとしたら、まぁ入婿でという形になるんだろうけど惑星上居住地に住んで炭酸飲料飲み放題って野望は叶えられることになるのかね？　なりそうだが、それはなんか違うよなぁ。多分俺は俺の手で、実力で成し遂げたいんだ。
「ダメ、ですか……？　私がダレインワルド伯爵家を捨てると言ってもダメですか？」
「ダメだ。そうしたらダレインワルド伯爵は怒り狂って俺を始末しにかかるだろう。悪いが、俺は今の生活を捨ててまでクリスとそうなろうとは思えない。すまないが」
俺の言葉にクリスは再びポロポロと涙を流し始めた。俺の今の言葉は、つまりクリスとの決別宣言でもあった。よりストレートに言えば振ったとも言う。
クリスにも言った通り、俺は今のミミとエルマとの傭兵生活を捨ててまでクリスとどうにかなるつもりは全くない。俺がダレインワルド伯爵に追われることになればミミとエルマを危険に晒すことになる。男としても、船のオーナーとしても俺にとって大事な女性で

あり、大事なクルーでもある二人を危険を晒すようなことはできない。
有り体に言えば、俺にとってはクリスの気持ちよりもミミとエルマとメイとの生活のほうが大事なのだ。クリスには申し訳ないが。
俺は小型情報端末を操作し、メイを部屋に呼んだ。程なくしてメイが部屋を訪れ、椅子に座る俺と同じく椅子に座ったまま嗚咽の声を漏らしているクリスの姿に視線を走らせる。

「すまん、メイ」
「いいえ。お任せください」

メイはそう言って涙を流すクリスを連れて俺の部屋から立ち去っていった。なんとか俺自信が慰めてやれればよかったんだが、残念ながら俺には振った女の子を上手く慰めるような恋愛スキルは持ち合わせていない。メイに押し付けるとか最低だな、俺。

「はあぁぁぁぁー……」

クソデカイ溜め息を漏らしながらベッドにダイブする。寝てしまおう。そうしよう。
俺は脳裏に過る涙を流すクリスの姿と彼女の嗚咽の声に苛まれながら意識を手放した。

#106　不貞寝と泣き虫と心機一転（前書き）

大変おまたせしました！　本日から更新を再開します！　―（：3」∠）―

#106　不貞寝と泣き虫と心機一転

不貞寝から目覚めた。なんとなく頭や肩が重く感じるし、微妙に頭痛もする気がする。コンディションは最悪である。自分の身と今の生活を守るために、いたいけな少女の純粋な好意を袖にしたのだ。それを改めて自覚して心がズンと重くなる。

言い訳はいくらでもできる。祖父であり当主であるダレインワルド伯爵が認めるはずがないだろうとか、クリスとそういう仲になったら傭兵稼業は続けられないだろうとか、ミミとエルマとも別れなければならなくなるだろうとか。

もしかしたら伯爵は首を縦に振るかもしれないし、傭兵稼業は続けられなくともクリシュナを駆って宙賊をぶっ飛ばすくらいのことはできるかもしれないし、ミミやエルマだって側室――所謂愛人のような立場でなんとでもなるのかもしれない。

だが、そうなったとしてそれは俺が心からのびのびと過ごせる生活なのだろうか？　と考えるとやはり俺はどうにもそうは思えない。入婿とはいえ貴族ともなれば様々な柵に縛られることになるだろう。クリスもきっと色々と苦労するに違いない。

だからこそ俺が支えてやれれば良いのかもしれないが、正直俺が貴族社会でそこまで上手く立ち回れる気が微塵もしな――。

「えいっ」

「おふぅ！？」

可愛い掛け声とともにうつ伏せに不貞寝していた俺の背中に柔らかい感触と程よい重みが襲いかかってきた。なんじゃあ！？　と苦労をしてもがき、仰向けに寝返りを打って襲撃者を確認してみると、明るいブラウンの瞳がこちらをじっと見つめていた。その瞳はこち

らをじっと見つめながらも、どこか不安に揺れているように思えた。

「ミミか」

俺がそう言うとミミは何も言わずに頭を俺の胸元にこすりつけてきた。犬か何かかな？　なんとなくミミの明るい茶色の髪の毛の中に犬のような垂れた耳がついているのを幻視してしまった。

「どうした？」

ミミの頭を撫でてやると、ミミは俺の胸に頭を預けてじっと俺の顔を見つめてきた。その目に急に涙がじわりと滲み始める。

「うぅー……」

「いやほんとにどうした？」

わけが分からず手でミミの涙を拭ってやると、ミミは声もなくグズグズと泣き始めてしまった。俺の胸に顔を埋めて泣くミミの頭を暫く撫でていると、やがてミミの泣き声が治まってきた。終わったかな？　と思って胸元に視線を向けると、目を真っ赤にしたミミが鼻水を垂らしながらスンスンと鼻を鳴らしているのが見えた。

「ああもう……かわいい顔が台無しじゃないか」

「う゛ぅ゛……」

枕元から再生利用可能なウェットティッシュを取り出してミミの顔やら鼻やらを拭いてやる。使用が終わったら専用の屑籠に放り込んでおけば再び利用可能なウェットティッシュとして再生されて自動補充されるのである。どういうメカニズムなのかは俺は知らない。

未だ鼻を鳴らしてべそをかいているミミを撫でながら彼女の頭を

撫でて落ち着くのを待つ。そうしているだけで先程クリスのことを考えていた時のような鬱屈とした感情が薄らいでいくのを感じた。なんと薄情なのだろう、と思うと同時にやはり俺にとってはミミと、そしてここにはいないがエルマとの生活が安らぎをもたらすのだな、ということを強く自覚する。

「ミミ」
「……はい〝」
「俺はミミとこうしてるのが一番落ち着くみたいだ」
「……ふぐうぅう〝〜〜」

ミミがまた泣いてしまった。今日のミミはよく泣くなぁ、と内心苦笑しながら俺はミミの頭を撫で続けた。

「ご迷惑をおかけしました……」
「あんまり気にするな」

犠牲になったのは俺が着ていたシャツ一枚である。自動洗濯乾燥機に放り込んでおけばすぐに綺麗になるのでなんてことはない。ウエットティッシュのストックはかなり減ってしまったけど。再生に多少時間がかかるからな。

「それで、なんで泣いてたんだ？」

そう聞くと再びミミの目にじわりと涙が浮かび始めた。だが、ミミはその涙をなんとか堪えてポツリポツリと話を始める。

「その……ヒロ様とクリスちゃんの話をメイさんから聞いて」

「うん」
「私、ヒロ様がクリスちゃんでなく私とエルマさんを選んでくれたということを……喜んでしまったんです」
「うん……んん？」

喜んでくれたということはわかったが、それがなんであの大号泣に繋がるのかがよくわからない。いや、もしかして？　と思うことが無いわけではないが、確信は持てないな。

「私、クリスちゃんが選ばれなかったことを喜んでしまったんです。ヒロ様は私達を、私を選んでくれたって。私、なんて嫌な子なんだろうって……それで、部屋で一人で悩んでいたら寂しくなって、ヒロ様が優しい顔でどうしたって心配してくれて、なんだかもう頭の中がぐちゃぐちゃになっちゃってぇ……」
「おおう、よしよし……」

再び目から涙を溢れ出させるミミを抱き寄せ、胸に抱きながら頭を撫でてやる。
ミミ的には仲良くしていたクリスが傷ついたにも拘らずそれを喜んでしまったという自分が許せないんだろう。

「こんなつもりじゃなかったんです。ヒロ様もきっと落ち込んでるだろうと思って、それで、私、ヒロ様を慰めようとしたのに……なのに逆にヒロ様に甘えて……私、自分がこんなに卑怯で、浅ましくて、嫌な子だったんだって……」

ミミが俺の胸元でそれはもうとても深い溜め息を吐く。ついでに俺の胸元にじんわりと湿った感触が感じられるようになってきた。二枚目のシャツも犠牲になったのだ……まぁいいんだけれどもさ。

「どん底の気分から平常時より少し沈んだくらいの気分に戻してもらえたのは間違いないから。ミミはちゃんと仕事を果たせてるから。そんなに思い悩まないでくれ」
「うぅー……」

ミミが胸元から涙目で俺を見上げてくる。折角拭いてあげたのにまたひどい顔になってるな。ほら、拭いてやろう。ちーんしなさい、ちーん。しかしこのままで俺の部屋のウェットティッシュが全滅してしまう。再生速度より消費速度が速すぎるのだ。さもありなん。

「なんか小腹が空いたな。食堂に行くか」
「はい……」

ミミをベッドから立たせてもう一度シャツを着替え、連れ立って食堂に向かう。ついでにシャツを自動洗濯乾燥機に突っ込んでおく。ミミが申し訳無さそうな顔をしていたのは見なかったことにしよう。

「あら、早かったわね……ってミミ、目が真っ赤じゃないの」
「直ちに処置致します。ミミ様、そちらの席にお座りください」

食堂ではエルマがちびちびと酒らしきものが入ったグラスを傾けており、メイもその側で待機していた。ミミの顔を見たメイがテキパキと何かを用意し始めるのを横目に見ながらミミと並んで食堂の席に着く。

「エルマは落ち着いてるな」
「そりゃね。だってどうしようもないわよ」

そう言ってエルマはグラスをテーブルの上に置き、苦笑いを浮かべた。

「現実的に考えてダレインワルド伯爵がヒロとクリスのお付き合いを認めるわけがないもの。そもそも、クリスにそんな暇は無いだろうしね」
「どういうことだ？」

エルマの言う『暇が無い』という言葉の意味がわからず首を傾げる。

「跡継ぎになるべきミミの父親が死んでバルタザールも処分するとなると、クリスが領地を継ぐしかないわけでしょ。ダレインワルド伯爵は貴族だから延命治療も思いのままだろうけど、それでも限界があるわ。これで万が一ダレインワルド伯爵がぽっくり逝ったりしたら、ダレインワルド伯爵家には未熟なクリスしかいなくなってしまうじゃない。まぁ、そうなっても良いように何かしらの手は打つでしょうけど、いずれにしてもクリスの教育は急務でしょうね」
「なるほど」
「クリスは当分厳重な監視下のもとに領主として、貴族としての教育を詰め込まれるはずよ。色恋にかまけている暇は無いでしょう。幸い、クリスはまだ成人年齢までは時間があるから教育そのものは間に合うでしょうけど、代わりに行動の自由は一切無いんじゃない？」
「それはそれで可哀想な気がするが……」
「それが帝国貴族の務めってやつよ。貴族としての力を振るう代わりに、やることはちゃんとやらなきゃならないわけ。まぁ、気の毒ではあるわね……ただ」

エルマがジトリとした視線をメイに向けた。そんな視線を向けられたメイは何やらタオルのようなものをミミの目の辺りに当てて泣き腫らしたミミの顔を処置中である。

「どうした？」
「なんでもないわ。何事も無ければ良いわね」
「ちょっと待て。なんだその怖い発言は」
「帝国の機械知性はねぇ……恋愛成就至上主義というか、ハッピーエンド至上主義というかなんというか」

メイにジトリとした視線を向けながらエルマが不穏な発言をする。

「恋と愛は銀河を救います」

メイもメイでエルマの視線を平然と受け止めながら極めて不穏な発言をする。待て待て待て。メイさん、一体クリスに何を吹き込んだんだ？

「あの子何歳だったっけ？　１２くらい？　だとしたらあと三年もすれば成人年齢か……その頃までに心変わりしていれば良いわね」
「大丈夫です、エルマさん。三年もあればヒロ様は私達に完全にメロメロです」

メイに処置されて完全復活したミミが両手をグッと握ってふんす、と気合を入れる。そんなミミにエルマは「あー、はいはい。そうね」とぶっきらぼうに返事しながらも長い耳を少し赤くしていた。ミミも立ち直ったようだし、エルマもいつも通りのようで大変よろしいのだが、俺の心は全く平静ではいられなかった。

「メイ、クリスに何を吹き込んだんだ？」
「大したことではありませんが」
「いいから、教えてくれ」
「はい。クリス様は貴族ですから。誰にも文句を言われないように

完璧に次期ダレインワルド伯爵として文句のつけようもないほどの力をつけて、御主人様を囲ってしまえば良いのですと助言しただけです」

平然と恐ろしいことをサラリと述べるメイ。

「メイ……あのな、俺は貴族になるつもりは」

「ええ、なるつもりは無いのでしょう。ご主人様は束縛されるのも窮屈なのもお嫌いのようですから。ですが、それならそれでいくらでもやりようはあるものです」

メイが口角を僅かに上げる。

「ヒェッ」

ゾクゾクする笑顔であった。愉悦？　愉悦なの？　何を企んでるのかわかんねぇな！　こええよ！

「ご主人様が恐れる必要は何もありません。私の全てはご主人様の快適で幸福な生活のためにあるのですから」

「そうですよ、ヒロ様。メイさんを信じてあげてください。メイさんは良い人です」

「まぁ、ヒロのためにならないことは絶対にしないだろうから安心はしておくと良いわよ。人かどうかは別として」

ミミはいつの間にかメイにとても懐いているようであった。対してエルマはどこか投げやりと言うか、諦め気味である。長いものに巻かれる者特有のオーラを感じる。

「とにかく、これでクリス関連のゴタゴタもひとまず終わりね。あ

とはダレインブルグに行って、報酬を貰ったら気ままな傭兵生活よ。キャプテン、今後の活動方針を決めてちょうだいね？」
「お、おう……そうだな。心機一転して次のことを考えないといけないな」

ゲートウェイを通って随分離れた場所まで移動したし、周辺恒星系の情報収集もしなければならないだろう。金もそこそこ貯まったから、母艦の購入も検討しても良いかもしれないな。そうすれば輸送でも稼げるようになるし、クリシュナのカーゴスペースを縮小して他の装備や設備を積むこともできるようになる。
俺としては母艦の購入をしたいと思うが、そうなるとできるだけ安く、良いものを買いたい。被撃破時の修理代金なんかは基本的に購入時の金額が基準となるので、船の本体や改造するためのパーツの購入費が安ければ安いほど維持費も安くなるのだ。そして、安く買うなら生産地に行くのが一番である。つまり、シップメーカーのある星系だ。
ふむ、この方向性で話してみるとするか。

#１０７　ミミの給料アップと母船選び

「いやー、笑いが止まりませんなぁ」
「はいはい、良かったわね」
「流石はご主人様ですね」

ダレインワルド伯爵の本拠地であるデクサー星系のデクサープライムコロニーに着いた俺達は遂に護衛依頼を完遂し、その報酬を受け取り終えていた。日当２５万エネルで、シエラ星系からデクサー星系までの移動にかかった日数は合計で２２日。途中で戦闘が発生し、応急修理のためにコーマット星系に滞在した日数が長かったのが良かったな。ダレインワルド伯爵は応急修理中にかかった日数分もちゃんと報酬を出してくれた。

更にバルタザールの襲撃を退けた件についてもしっかりとボーナスを出してくれた。最終的な報酬は護衛費用が５５０万エネル、ボーナスが２５０万エネルで合計８００万エネルである。よっ、ダレインワルド伯爵！　太っ腹！

ミミの取り分は報酬額の０．５％なので４万エネル。エルマは３％だから２４万エネルだな、残り７７２万エネルが俺の取り分になる。俺の所持金がおよそ２４４０万エネルだったから、これで俺の所持金はおよそ３２１０万エネルだな。１万エネル以下は弾薬費や燃料費、寄港料金などで消えていくからバッサリと切り捨てである。

「う、うーん……」

ミミは自分のエネル残高が表示されているタブレットを見て何やら汗を垂らしながらうんうんと唸っていた。ふむ……？　報酬額がやはり少ないかな。そうだよな、０．５％だもんな。よし。

「そういえば、最近はミミもオペレーターとしての仕事に慣れてきたよな」
「えっ？　ええと……そう、ですかね？」
俺の発言が唐突に思えたのか、ミミが何やら驚いたような様子を見せる。
「そうね。見習いを抜け出して駆け出しってところかしらね」
俺の思惑を知ってか知らずか、エルマも俺の言葉に同意した。うん、でも実際そうなんだよな。
「そろそろミミの分け前をもう少し多くしても良いんじゃないか？」
「え〝っ……い、いえ、いいです！　十分です！」
ミミがタブレットを持ったままブンブンと手を振る。何故嫌そうなんだ……？
「そうはいかないぞ。技能によって取り分が上がるのは当たり前のことだからな。ミミはもう入出港の手続きや弾薬や燃料の補給、戦利品の売買に関しては問題なくこなせるようになってるし、通信手やレーダー観測員としても仕事ができるようになってきている。能力なりの分け前を貰うのは当たり前じゃないか」
「そうね。分け前０．５％は最低レベルの水準だしね。１％に引き上げても良いんじゃない？」
「そうだな。それじゃあ今回の報酬も４万エネルじゃなくて８万エネルに……」
「いっ、良いですから！　次から！　次からでっ！」
「いや、今回も大きく稼いだし今回分からちゃんとしておいたほう

が良いだろう？」
「そんなにお金があっても使いきれませんよ！」
ミミが叫び、俺とエルマは互いに顔を見合わせた。
「８万エネルじゃ座布団もまともにカスタマイズできないよな」
「そうよね。最低限のジェネレーターも買えないと思うけど」
座布団というのはＳＯＬにおいて一番最初に所持してる所謂初期船というやつである。四角くて平べったい形状をしていることから座布団という愛称で呼ばれることが多い。座布団呼びはＳＯＬ内のスラングみたいなものなのだが、何故かエルマにも通じるようだ。こういう部分があるからこの世界がＳＯＬとは別世界なのかどうなのか判断がつかないんだよなぁ。
「いや、ヒロ様とエルマさんの金銭感覚で話をされても困りますから。私は一般人ですから。４万エネルって、慎ましく暮せば一年分の生活費になるんですよ？」
「そうか……？　そう言われればそのような気もするな」
１エネル１００円で換算すれば４万エネルは単純に１００倍して４００万円である。税金とか保険料とかそういったものを全く考えなければ確かに一年くらいは余裕で暮らせる金額である。
「でもよそはよそ、うちはうちだから。そこまで言うなら今回は０．５％のままにしとくけど、次回以降は１％に昇給するからな。これは決定事項だ」
「うっ……はい」
どうしようかなぁ、と呟きながら溜め息を吐くミミをとりあえず

そっとしておくことにして俺は今後の方針について話を切り出すことにした。

「今後の方針だが、母船の購入に踏み切りたいと思うんだ」
「母船ねぇ……今いくらあるの？」
「大体３２００万くらい」
「んんー……それくらいあれば……でもちょっと厳しくない？」

エルマが眉尻を下げて首を傾げた。確かに３０００万くらいだと一般的な母船の購入費用とカスタマイズ費用、そして万が一撃破されてしまった際の保険料を考えると少々心許ない。

「クリシュナ一機を積めればそれで良い。下手に攻撃能力を持たせないでシールド容量を大きくして、逃げ足とカーゴ容量を重視すれば問題ないと思うんだよな。下手に攻撃能力が高いと攻撃されるだろ？　足止めはクリシュナがすれば良いわけだし」
「なるほど、戦闘を想定しない貨物船寄りの母艦ってわけね。それならいけるでしょうね。それでもギリギリでしょうけど」
「ああ、だから少しでも安く買うためにシップメーカーのある星系に行こうと思うんだよ。問題はどのシップメーカーのどの機種を買うかなんだがな」

そう言って俺はタブレット型の情報端末を操作し、食堂に設置されているホロディスプレイ上にカタログを表示した。

「一応候補は絞ったんだよ」

一番最初に画面に表示されたのはリコンインダストリー製の【ＲＩＭＳ－０１３　Ｎｉｇｈｔ　Ｈａｗｋ】だ。この母艦は速力重視の母艦で、装甲やシールド容量、カーゴ容量には若干難があるもの

の、母艦としてはトップクラスに足回りが良い。運動性も悪くないし、装甲やシールド容量に難があると言ってもそれは他の母艦に比べてという話である。一般的に中型艦船に若干劣るといった程度で、宙賊の使うような民間船を適当に改造したような中型船よりはずっと頑丈だ。

「なんだかシュッとしてかっこいい船ですね。ちょっとクリシュナに似てる気がします」
「流線型でシャープな感じの船ね。逃げ足が速いのは悪くないと思うわ」
「そうですね。しかし、クリシュナを運用するには少し合っていないのではないかと思います。クリシュナの攻撃力を活かす運用をするのであれば、逃げ足よりも堅牢さを重視したほうが良いのでは？」
「これも悪くはないと思うんだけどな。次の候補はこれだ」

次にホロディスプレイに表示されたのはスペース・ドウェルグ社製の母艦【ＳＤＭＳ－０２０　Ｓｋｉｚｂｒａｚｕｎｉｌ】だ。こちらは速力には劣るがシールド容量が多くて装甲も厚い。カーゴ容量も大きくて交易にも力を発揮するし、艦の設計自体に余裕があるのでカスタマイズ次第では単なる母艦兼輸送艦としてだけでなく、採掘船にすることも調査船にすることもできる。
ただ、艦の重量が大きいせいで速度性能や運動性能はお察しだ。もともとの重量が大きいせいでインターディクトにも弱いし、超光速ドライブ時の速度性能もかなり控えめである。ハイパードライブの性能はあまり変わらないけど。

「ゴツくておっきいですね！」
「性能は申し分ないけどフォルムは私好みじゃないわね」
「クリシュナの攻撃性能を活かすのであればこういう船のほうが合うと思います。超光速航行時の速度性能が控えめでインターディク

トにも弱いですが、宙賊から寄ってきてくれるならご主人様にとってはむしろ良いカモですし」
「まぁ、確かにな。でも俺的には足が遅すぎるのもちょっと引っかかるんだよなぁ」

三つ目の候補をホロディスプレイに映し出す。こちらはイデアル・スターウェイ製の【ＩＳＭＳ－００７　Ｃｈｒｏｍｅ Ｅｌｅｐｈａｎｔ】という母艦だ。この船は正に前に出てきた二つの丁度中間くらいの性能である。ナイトホークよりも速度で劣るがシールド容量や装甲は厚く、カーゴ容量は大きい。しかしスキーズブラズニルに比べれば速度や運動性で勝り、逆にシールド容量や装甲、カーゴ容量では劣る。

「帝国軍の船になんとなく似てませんか？」
「帝国軍の船はイデアル製だからね。イデアルの船を見ていると忌まわしい記憶が呼び覚まされそうになるわ」
「中途半端はいけませんね。逆に言えばナイトホークで逃れられる相手に逃れられず、スキーズブラズニルに耐えられる攻撃に耐えられないということですから」
「これはボツか……スペックは悪くないんだが」

ミミはあまり頓着しないようだが、エルマ的にはこの船はどうも相性が悪そうだ。メイも反対のようだし、クロムな象さんの採用は無いな。

「じゃあクロムエレファントは外してナイトホークかスキーズブラズニルのどっちにするかってことで話し合おうか」
「そうね」
「そうですね」
「わ、私はどちらでも……皆さんにおまかせします！」

ミミが早速棄権した。まぁミミは船の運用に関してはまだ勉強不足だものな。というかこの図、エルマがナイトホーク推しでメイがスキーズブラズニル推しになるのは目に見えているから、結局俺が決めることになるよね……？　どうしたものかな。

#108　旅立ち（前書き）

遅れました！（、　。ω。、）

#108　旅立ち

「まず、母艦を導入する目的を明確化しよう」
「そうですね」
「そうね」

ミミとエルマは俺の提案に素直に頷いた。メイも無言で頷いている。

「俺としては目的を突き詰めればそれは最終的に『今よりも多く稼ぎたい』に集約されると思うんだ。で、現状で何がボトルネックになっているのかって考えると、それはカーゴ容量を含めた拡張性の少なさだと思うんだよな」
「基本的にクリシュナは戦闘型の小型艦ですからね」

メイが頷いて同意する。
そう。クリシュナは小型戦闘艦である。戦闘を主眼に置いて設計された船なので戦闘能力は高いが、拡張性は低めだ。カーゴ容量も小さく、戦利品も多くは運べない。折角宙賊をぶっ飛ばしてもあまり多くの戦利品を鹵獲することができないのである。

「だから、今回の母艦を購入する目的というのはクリシュナにないカーゴ容量や拡張性の獲得ということになる。その点で一番優れているのはこの三つの中だとスキーズブラズニルだよな」
「そうですね」
「そうね」
「うん、ここまでは同意を得られて何よりだ。で、それだけを重視するならスキーズブラズニルで決まりなんだが、対抗馬のナイトホ

ークはスキーズブラズニルに比べると拡張性で劣るけど足が速い。機動性ってのは大事な要素だよな。襲われた際に逃げるのにも脚が速いのは便利だし」
「うん、その通りね」
「そうでしょうか？」

ここでエルマとメイの意見がぶつかった。

「襲われた際に逃げるということは、搭載しているクリシュナを発艦させずにそのまま逃げるということだと思いますが、それではクリシュナの攻撃力が活かせません。逆にクリシュナを発艦させて戦闘を行う場合においては、母艦クラスの大きさの船では多少の機動性などあったところで回避などは望めません。その場合はナイトホークのシールド容量の少なさと装甲の薄さがクリシュナの弱点となります。ナイトホークを選ぶ利点は超光速航行時の巡航速度が若干早い、という点しか無いと考えられます」

メイの理論展開には一分の隙もないように思われた。

「指摘はご尤もだけど、クルーの安全性という視点が抜けているんじゃないかしら？　スキーズブラズニルの大きさと機動性じゃあレーザー砲やマルチキャノンはもちろんのこと、大口径の実体弾砲や対艦魚雷すら避けるのが難しいわ。確かに強力なシールドと装甲は良いものだけれど、それでも耐えきれないような火力を投入されたらすぐに爆発四散することになるわよ。確かにナイトホークの大きさじゃ敵の攻撃を掻い潜り続けるのは不可能だけど、足が早いぶんクリシュナが時間を稼いでいる間に超光速ドライブを起動することだってできるわ」
「基本的に宙賊を相手にするわけですから、大口径の実体弾砲や対艦魚雷を想定するのはナンセンスかと思います。彼らは中型艦以上

の大きさの船を沈めるのではなく鹵獲することに目的にしますから、そのような過剰火力で母船を攻撃することはまず考えられません。それに、ナイトホークは母艦としては小型で、拡張性に難があります」

当初の目的である拡張性の確保という点でも要求を満たすものとは思えません、と言ってメイは首を横に振った。

「載せるのがご主人様の駆るクリシュナでなければナイトホークの方が良さそうな場面は多いでしょうが、クリシュナと共に行動するのであればスキーズブラズニルの方が適していると私は判断致します」

そう言ってメイはじっと俺に視線を向けてきた。その視線を受けて俺は顎に手を当てて考え込む。

メイのプレゼンが完璧なのでスキーズブラズニルの方が適切なように思えるが、果たしてそうだろうか？　ナイトホークの優れている点はやはりなんと言っても機動性だ。機動性の高さというのはつまり、操縦時のストレスの少なさである。更に言えば危険地帯から遠ざかるための時間の少なさでもある。

実際に母艦を運用するとなると、恐らくはその操縦はエルマに任せることになるだろう。エルマが操縦を行うとなると、彼女の適性的にはナイトホークの方が性に合うに違いない。

「母艦を操縦するのは基本的にエルマってことになるだろうから、そう考えるとエルマにとってはナイトホークの方が操作しやすいんじゃないか？」

「それはうん。勿論そうね」

「私もそう思います」

エルマだけでなくミミも俺の意見に同意した。元々エルマは制御の難しい高速艦を乗艦としていたのだ。彼女にとっては鈍重なスキーズブラズニルよりもナイトホークのほうが扱いやすい艦だというのは間違いないだろう。

「エルマ様が操艦されるのですか？　母艦は私が操艦するものだと考えていたのですが」

「うん？」

「ええ？」

メイの発言に俺とエルマが同時に声を上げた。

え？　メイが？　その発想はあんまり無かったわ。

「はい。クリシュナのサブパイロットとしてエルマ様の存在は不可欠なものですし、ミミ様のオペレーティングもまた同様です。そうなると、現状で戦闘時には手持ち無沙汰な私が母艦を制御するのが一番だと思います。幸い、宙賊艦に取りつかれて乗り込まれたとしても私であれば如何ようにも対処できますので。最悪、宇宙服やパワーアーマーなどを装備していない場合はハッチを開放して船内を急速に減圧するだけで制圧可能ですし」

「それはえげつない」

メイはメイドロイドである。見た目は黒髪ロングのクール美人さんだが、実際には機械生命体である。なので、彼女は生身というかそのままでも宇宙空間で活動できるようになっているらしい。略奪する気満々で軽装で飛び込んできた宙賊が穴という穴から色々なものを噴き出して絶命する様が脳裏にありありと浮かぶ。掃除が大変そうだなぁ……。

「私とてむざむざと撃破されるつもりはありませんが、万が一撃破

された場合でも私であればなんとでもなりますから」

そう言って自らの胸に手を当て、メイは自信を感じさせる無表情で静かに頷いた。エルマと、そしてミミとも顔を見合わせる。どうやら俺達の行き先は決まったようだ。

☆★☆

「そういうわけでな、俺達はブラド星系に向かうことにしたよ」

寝室でホロディスプレイを立ち上げた俺は画面の向こうに向かってそう告げた。

『そうですか……もう少しゆっくりして行かれても良いのでは？』

そう言って画面の向こうの人物が寂しげに眉尻を下げる。

「いや、あまり長居してもな。デクサー星系の周辺は傭兵の仕事も少ないし」

『そうですか……』

画面の向こうの人物――クリスがそう言って俯く。黙って去ろうかとも思ったのだが、流石にそれはあまりにも不義理だろうと考えてこうして連絡することにしたのだ。

「まぁ、うん。そういうわけでな……さよ――」

『また今度』

さようならだ、と言おうとしたところに言葉を被せられた。画面に目をやると、クリスは微笑んでいた。なんだか、表情が少し大人

びて見える気がする。

『また今度、です。絶対にまた会いに来てくださいね。できれば一ヶ月に一回くらいは会いに来てください』

「……一ヶ月に一回はちょっと難しいな。半年に一回くらいにまけてくれ」

『仕方ありませんね、じゃあ半年に一回で良いです。待ってますよ、私の騎士様』

「いや、依頼も終わったし騎士役はもう」

『私はまだヒロ様を騎士役から解任なんてしていませんよ。貴方は今でも私の騎士様です』

そう言ってクリスがにっこりと笑みを浮かべる。そんな彼女からはなんだか今までにない迫力のようなものが滲み出てきているように思えた。

「……はは。なんだか押しが強くなったんじゃないか？」

『私もダレインワルド伯爵家の跡取り娘ですから。か弱いお姫様のままではいられません』

笑いながら指摘すると、クリスは自らの存在を誇示するかのように薄い胸を反らしてそう答えた。なるほど、か弱いお姫様のままではいられないか。

『また会いましょう、ヒロ様。待っていますよ』

「善処するよ」

『会いに来なかったら捕まえに行きますからね。ダレインワルド伯爵家の力を総動員してでも』

「それは怖いな。ちゃんとご機嫌を窺いにくるとするよ」

コールドスリープポッドの眠り姫は俺達との旅を通じて少しだけ強かになったように思えた。もしかしたらメイの薫陶が効きすぎているだけかもしれないが。

「またな」

『はい』

互いに微笑みを交わし合い、通信を終了する。それで心残りはもうない。

☆★☆

「よーし、出港だ。各員チェックを」

コックピットのメインパイロットシートに座り、クルーに号令をかける。

「システムオールグリーン、弾薬よし、燃料よし。いつでも出られるわ」

隣のサブパイロットシートでエルマがコンソールを操作し、各項目をチェックする。クリシュナの自動診断システムはシステムオールグリーンを示しているが、そろそろ一度機体をオーバーホールしたほうが良いかもしれないな。問題は、同型の機種がどこにも存在しないところなのだが……まぁ、パーツに関しては特注になるかもしれないが、シップメーカーなら材質を分析して複製してくれるだろう。

「食料や水、医薬品などの補給物資も完璧です」

メイが船内に積み込まれている目録を再チェックして報告してくれる。船内の補給品の管理に関してはメイに一任することにした。元々はミミに管理を任せていたのだが、こういったことはメイドの仕事ですとメイが珍しく強硬に主張したのだ。

「よし。ミミ、出港申請だ」
「はい！」

ミミがコンソールを操作し、デクサープライムコロニーの港湾管理局に出港申請を行う。程なくして許可が降り、俺はクリシュナとハンガーとのドッキングを解除してゆっくりと船を進めた。

「出港時のワクワク感だけはほんとに何度経験しても薄れることがないな」
「そうですね、私もいつもワクワクします！」
「そうね。わかるわ」

そんな話をしながら港を抜け、俺達は再び無限に広がる宇宙に飛び出した。

「よし。ミミ、航路設定だ」
「はい、航路を設定します」

ミミがオペレーター席でコンソールを操作すると、目標の恒星系がＨＵＤ上にロックされる。俺はその方向に艦首を向け、クリシュナを加速させた。

「超光速ドライブ、チャージ開始」
「了解。超光速ドライブ、カウントダウン開始」

俺の指示に従ってエルマが超光速ドライブのチャージを開始する。

「5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動」

ドォンと爆音のような音が鳴り、クリシュナが光を置き去りにして走り出した。遠くに見える恒星の光が尾を引いて線となる。何度見ても不思議な光景だ。

「ハイパーレーンへの接続成功。ハイパードライブ、チャージ開始するわ。カウントダウン、5、4、3、2、1――ハイパードライブ起動」

空間が歪み、光が歪曲する。その次の瞬間、極彩色の光が視界を埋め尽くし、クリシュナはハイパースペースへと突入した。

「さーて、次は平和に……終わると良いなぁ」

「終わると良いですね……」

「……無理じゃない？」

「諦めるなよ！」

完全に諦めムードのエルマに突っ込みながら俺達の乗るクリシュナは極彩色の不思議空間を疾駆していく。

次の目的地はブラド星系。シップメーカー、スペース・ドウェルグ社の工場がある工業星系だ。

#109　ブラド星系（前書き）

四章のプロローグということで今回は軽めに―（：3」∠）―

#109　ブラド星系

誰かの気配で目が覚めた。
温かく、心地よい微睡みの向こうで衣擦れの音が聞こえる。離れたがらない瞼をなんとかこじ開け、衣擦れの音がする方向に視線を向ける。すると、そこには既にクラシカルなメイド服に身を包み、こちらに背を向けて艶やかな長髪をポニーテールにまとめている女性の姿があった。
俺の僅かな身じろぎの音を拾ったのか背を向けていた女性が振り返る。

「おはようございます、ご主人様」

メイド服の女性が注意して見なければわからないほどの本当に微かな笑みを浮かべる。

「おはよう、メイ」

まだ夢現のまま、俺は彼女に朝の挨拶を返した。

☆★☆

「おはようございます、ヒロ様、メイさん」
「おはよ」
「ああ、おはよう」
「おはようございます」

メイと一緒に自室から出てひとっ風呂浴びてから食堂に行くと、

そこでは既にミミとエルマが寛いでいた。とは言っても二人ともどこか元気がないというか、怠そうである。

「二人とも今日は休んでて良いからな。ゆっくりしててくれ」
「はい、ありがとうございます」
「悪いわね」

そう言って微笑む二人は若干体調を崩していた。別に病気とかそういうのではなく、女性特有のものである。お薬を服用したとしても人体の生理現象が消滅するわけではないのだ。まぁ深くは語るまい。

「俺はコックピットに詰める。メイはコックピットに俺の朝飯を運んだら二人についていてやってくれ」
「承知致しました」
「あー、別に大丈夫よ？　ちょっと怠いけどそれだけだから。症状は軽いしね」

そう言ってエルマが苦笑いを浮かべる。同じく少し怠そうにしているミミも同意の声を上げた。

「はい。メイさんはヒロ様についていてください」
「そうか？　じゃあ朝飯を運んだら通常タスクを終わらせてから俺についてくれるか？」
「承知致しました」

メイがコクリと頷いたのを確認し、俺はコックピットへと向かう。

「うーん、相変わらずド派手というかサイケデリックというか……」

コックピットに入るなり目に飛び込んでくるのは極彩色の光の奔流であった。今、俺の乗るこの船――クリシュナはブラド星系へと向かうハイパーレーン内を航行中である。コックピットの前面ＨＵＤの片隅にはハイパーレーン脱出までの推定時間が表示されており、それによるとブラド星系への到着は凡そ七時間後である。

ハイパーレーンを利用した恒星間移動――ハイパードライブ中は基本的に自動航行となるので、本来はコックピットに座ってサイケデリックなハイパーレーンの様子を監視している必要など一切無いのだが、一応不測の事態が起こる可能性もゼロではない。なので、誰か一人はコックピットで監視を行うのが星の海を往く船乗りの常識であった。

「さぁて、あと七時間……ブラド星系ではゆっくりと過ごしたいもんだが」

そう言いつつメインパイロットシートに座って俺はコンソールを操作し、銀河地図（ギャラクシーマップ）を開く。ホロディスプレイによって空中に投影された銀河地図を操作し、俺達が今向かっているブラド星系の情報を表示した。

ブラド星系は俺が最初にこの世界に訪れた時に滞在したターメーン星系と似通った様相の恒星系である。Ｇ型恒星であるブラドを中心として四つの惑星と小惑星帯から構成されており、小惑星帯と四つの惑星のうち二つから豊富な鉱物資源が採掘されている。ガス型惑星のブラドⅢからも有用な資源となるガスが採取されており、グラッカン帝国内でも有数の資源星系だ。

これだけ有用な資源が産出される星系であれば宙賊も多く跋扈していそうなものであるが、この星系で活動する宙賊はほぼいない。絶無と言っても良い。何故かと言うと、この星系には今回俺達がこの星系を訪れた目的であるシップメーカー、スペース・ドウェルグ社のシップヤード――つまり造船所があるからである。

何故造船所があると宙賊がいないのか？　それは宙賊の存在が確認されたらシップヤードから出撃した試作船が大挙して押し寄せ、宙賊どもを駆逐するからである。

何故シップメーカーのスペース・ドウェルグ社が宙賊退治などに精を上げるのか？　その疑問は尤もなものだ。その質問をぶつけたとあるジャーナリストに対するスペース・ドウェルグ社の回答は以下の通りである。

『我が社では優秀なエンジニア達が日夜挑戦的、かつ先進的な船や装備を開発している。その船や装備の性能を試すことができる機会があったら利用するに決まっている。無料で提供されるテストターゲットを放っておく道理がない』

つまり、イカれた技術者達にとっては宙賊など無料で提供される実験台にしか過ぎないのである。

シップメーカーの試作品を撃破して鹵獲できれば見返りはそれなりにあるのかもしれないが、試作品だけに何が飛び出してくるのかわからない上に奴らは嬉々として向かってくるのだ。宙賊にしてみればたまったものではない。それはどのシップメーカーの造船所でも同じことなので、基本的に宙賊連中はシップメーカーの造船所近辺には近寄らない。

ハイパーレーン二つや三つ先の星系くらいまでなら奴らは『長距離航行実験』と称して遠征までしてくるのである。その際に撃破した宙賊艦のパーツはマッドなエンジニアどもにとっては貴重な資材になるなので当然残らず略奪するし、かかっていた賞金は研究資金として活用できる。

試作機のテストができる上に資材と予算が手に入るのだ。狩らない理由がない。

「見事に周辺三星系まで宙域危険度が『クリーン』になってやがる

んだよなぁ……」

今回は宙賊関連のトラブルに巻き込まれることは無さそうである。少し退屈な上に金が稼げないのは残念だが、結局骨休めをするために訪れたシエラ星系でもまともに休むことができなかったので、良い機会かもしれない。新車ならぬ新造船を発注するとなれば建造が終わるまでに時間もかかるだろうし、クリシュナのオーバーホールもしたい。ミミとエルマも調子があまり良くないし、丁度良いだろう。

#110　不審人物の群れ

あれからおよそ七時間。クリシュナは極彩色のハイパースペースから脱出し、俺達は無事にブラド星系へと到着した。
光量調整されたＨＵＤ越しに黄色矮星とも呼ばれるＧ型主系列星のブラドがコックピットに着いている俺達を明るく照らした。Ｇ型主系列星と言われてもピンとこないだろう。俺もピンとこない。簡単に言えば太陽と同じような恒星ということである。

「確かメインシップヤードがあるのはブラドプライムコロニーだったよな」
「はい。セカンダスコロニーとテルティウスコロニーは採掘基地としての役割が強いみたいですね。私達が向かうのはプライムコロニーで良いと思います」
「じゃあブラドプライムコロニーに進路を向け――」

向けるか、と言おうとしたところでアラート音が鳴った。攻撃されているとか、ロックオンされているとかそういう物騒なアラート音ではなく、スキャンを受けているというアラート音だ。手元のコンソールを操作してレーダーを表示してみると、一隻の船が少し離れたところからクリシュナに艦首を向けているのがわかった。恐らくレーダーに映っているこの船がこちらをスキャンしてきているのだろう。

「スキャンされてるわね」
「まぁ、別に良いけどな。痛くもない腹を探られるのはなんとなく気分が悪いけど、目くじらを立てるようなことでもない。ミミ、ブラドプライムコロニーに進路を向け――」

再びアラート音が鳴った。別にロックオンされたわけでも、火砲を発射されたわけでもない。スキャンされたのである。スキャンする船が増えたのである。いつの間にかその数は三隻に増えていた。

「……」

「ええっと……ナビ設定しました」

「総員対ショック姿勢。一気に加速して振り切るぞ」

そう言って俺はクリシュナを急加速させた。アフターバーナーも使い、スキャンを試みる不審船を一気に引き離す。レーダーを見る限り慌ててこちらを追おうとしているようだが、知ったことではない。

「エルマ、超光速ドライブチャージ開始」

「はいはい、開始するわ。カウント、5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動」

ズドォン、と炸裂音じみた轟音を立ててクリシュナの航行速度が一気に光速の壁を飛び越える。

「なんだかわからんが気味が悪い――」

再三のアラート音。

亜空間センサーを起動すると、超光速航行するクリシュナを追いながら黙々とスキャンを行う船、船、船……その数、七隻。いや、八隻に増えた。更に増えそうだ。多数の船を引き連れたまま超光速ドライブの航跡を残す俺と追随する不審船はさながら流星群の如き様相である。

「いやいやいやいや。おかしいだろ！」

逃がすな！　追え！　と言わんばかりに俺の船を追跡する船がどんどん増えている。一体全体何事だよ。理解の範疇を越え過ぎてて怖いわ。

「恐らくはこの船が全く見たことがないものだからではないかと」

そう言ってメイが俺の正面にあるＨＵＤに追跡してきている多数の船の所属を表示する。どれもスペース・ドウェルグ社所属の実験機や哨戒機であるらしい。兵器開発課とか船体設計課とか推進機構開発課とか細かく所属は分かれているようだが、どれもスペース・ドウェルグ社の機体であることには違いない。

「なんか急にコロニーに向かうのが嫌になってきたな」

厄介ごとの匂いしかしない。いや、クリシュナのようなユニーク船に乗っている時点でこれはいつか訪れる未来だったのだろう。どこかで決着――とは違うが、こういう事態は必ず起こるのだろうから今やるのも逃げてまたいつかやるのも同じことだろう。

そうこうしているうちにブラドプライムコロニーに着いたので、超光速ドライブ状態を解除する。

ドォン、というクリシュナが超光速ドライブを解除した轟音に続いてドドドドドォン、と続々とクリシュナを追っていた船達もワープアウトしてくる。その数……数えるのも馬鹿らしくなってくるな。

「ミミ、ドッキングリクエストだ」

「はい」

鳴り響くアラート音が五月蝿い。威嚇射撃でもして追い散らしたい気持ちがフツフツと沸き上がってくるが、ここで短気を起こしても何一つ良いことがないので放っておくことにする。

「チャフでも撒く？」

エルマも俺と同様にかなりイライラした様子である。そりゃそうだろう。星系軍などの公的な法執行機関所属の船にスキャンされるならまだしも、民間船にこんなに執拗にスキャンをかけられたら不快に思うのも当然だ。

別に勝手にスキャンしたからといって法に触れるわけではないが、基本的にスキャンをかけるというのは『違法な物資を積んでいないか』『賞金がかかっていないか』ということを調べる行為である。言い換えれば、何か悪いことしてるんじゃないか？　俺はお前を疑っているぞ、という態度を示す行為だ。例えるなら全身をボディチェックされた上にバッグの中身も探られるようなものだ。

「不愉快だけど放っておけ。後で正式にクレームを入れれば良いだけだ。メイ、こちらをスキャンしている船のＩＤと所属を記録しておいてくれ」

「はい、ご安心ください。既に全て記録しております」

「よし」

別に不法行為ではない。だが不法行為ではないだけでマナーを大きく逸脱する行為ではある。一介の傭兵ならばともかく、こんなに多数の船が一斉に客に対してマナー違反を犯すというのは企業としてはよろしくない事態だろう。

「承認が降りました」

「よし、ドッキングするぞ。オートドッキングコンピューター起動」

「はい、起動します」

ミミの声と同時に船の操作が俺の手から離れ、クリシュナが自動制御でコロニーのハンガーへと向かい始める。ブラドプライムコロニーはスタンダードなトーラス型――所謂ドーナツ型の居住スペースを持つコロニーのようであった。ミミやエルマと出会ったターメーンプライムコロニーと同じようなタイプだな。

しかし、ブラドプライムコロニーは普通のトーラス型コロニーよりもかなり大型のようである。回転の軸となる部分が非常に長大で、その部分に艦船を建造するための造船所が併設されているようだ。脳裏に違法建築なんて言葉が過るが、まぁこのコロニーを管理しているのは銀河でも名の知れているシップメーカーだ。きっと問題はないのだろう。

俺の船をスキャンしていた船もドッキングリクエストを送っていたらしく、続々と入港を開始したようだ。

「やれやれ……この様子だと船まで押しかけてきそうだな」

「そうね……」

正直気が重いというか、面倒くさい。こりゃ船を空ける時はシールドを張っておいたほうが良さそうだな。好きにやらせていると船の中にまで入り込みかねない。

☆★☆

無事ハンガーへのドッキングを終えることができた俺達は寄港手続きを済ませて早速コロニーに降りる事にした。今回はフルメンバーで降りることにする。つまり俺、ミミ、エルマ、それにメイも一緒に降りてスペース・ドウェルグ社のショールームに向かうのだ。一応機種そのものはスキーズブラズニルに決めているが、内装や装

備などに関しては最新のオプションも含めて全員で相談しようと思ったのだ。
で、準備を追えて船を降りたのだが。
「どういうことなの」
船のハッチを開けたらハンガーに十人以上ものエンジニアや研究者っぽい連中がたむろしていた。どう見ても港湾関係の職員には見えない。彼らはカメラのような機械や見慣れない機械をクリシュナに向けて何やら議論したり、興奮した様子である。おい待て、何だその脚立は。こら、勝手に船体に手を触れるんじゃねぇ。
「ええと、これは……」
「ヒロ」
「ああ」
俺はすぐさまポケットから小型情報端末を取り出し、港湾管理局をコールした。
『はい、こちらブラドプライムコロニー港湾管理局です』
「３４番ハンガーのキャプテン・ヒロだ。船から降りようとしたら不審人物が十人以上もハンガー内にたむろしていて船から降りられん。勝手に何かよくわからん機器で調査らしきことをしたり、脚立を使って船体に触れているようなやつもいる。至急治安維持要員を寄越してくれ」
『それは……わかりました、すぐに向かわせます。ご迷惑をおかけして申し訳ありません』
「ああ、まったくだ。この後２０００万エネルの商談があるんだ。早急に対処してくれ」

ドデカイ金額を提示して対応してくれた港湾管理局員を脅すと、すぐに治安維持要員が乗った車両が複数駆けつけてきて文句を言う不審人物達を速やかに拘束して連行していった。それを確認してから俺達はタラップを使って船を降り、小型情報端末を使ってシールドを起動する。

「とりあえずこれでよし……だけど先が思いやられるな、これは」
「そうですね」
「そうね」
「はい」

メイまでもが俺の言葉に同意した。だってあいつら妙に目が血走ってたりして気味が悪かったんだよ。何か開発ノルマとかそういうものがあって追い込まれているんだろうか？　実はスペース・ドウエルグ社はディストピアチックなブラック企業だったりするのか？

「最終的に俺達の目的が果たせれば良いと考えてある程度諦めたほうが良いんだろうか」

ポツリと呟くが、誰も俺の呟きには答えてくれなかった。

#110　不審人物の群れ（後書き）

アウターワールド買いました。
はじめました。

本当に顧客の求めていたもの……！　―（：3」∠）―

#111　スペース・ドウェルグ社へ

不審人物達が連行されるのを見送った俺達は港湾区画を後にしてエレベーターに乗り、商業区画へと移動した。そして四人で通りを連れ立って歩いているわけだが……。

「なんだか息苦しいというか、狭苦しいコロニーだな」
「天井が低いですよね」

ミミがそう言って天井を見上げる。そう言われればそうかもしれない。ターメーンプライムコロニーもシエラプライムコロニーもこういう通りの天井はかなり高かった覚えがある。このコロニーは通りだと言うのに天井がかなり低い。それが頭の上から天井に押さえつけられるような圧迫感を生み出しているのか。

「ドワーフは背が低いのが多いからね。これくらいの高さでも気にならないんでしょ」
「ドワーフ？」

ドワーフと言うと、あのずんぐりむっくりで小さいおっさんというイメージあるあの？　この世界にはエルフだけでなくドワーフもいるのか？

「そりゃスペース・ドウェルグ社なんだからドワーフはいるでしょ。ドウェルグってドワーフの別名じゃない」
「……おお！」

ドウェルグってどっかで聞いた単語だなぁと思ってたらそうか、

ドワーフの別名か。ああ、そうだ。昔北欧神話か何かを読んだ時にドウェルグって小人が出てきたっけ。あれか。そういえばスキーズブラズニルってのもどことなく北欧っぽい雰囲気がある。北欧神話にそんな名前が出てきていた気がするな。どの神のどんな持ち物か覚えてないけど。多分名前の響きから言って神々が持つ乗り物か動物か何かだろう。

「急に腑に落ちたって顔をしたわね」
「いや、北欧神話でそんなのを見た覚えがあるなって。スッキリしたわ」

そういえばさっき連行されていった連中の中にもやたらとガタイの良い小さいおっさんが何人か居た気がするな。なるほど、彼らを基準に作られたコロニーなら天井が低めになるのも頷ける話だな。彼らを基準にしつつ、俺みたいな普通の人間でも過ごせるようにある程度高さを確保した結果がこの中途半端に圧迫感があるコロニーなのだろう。

「北欧神話、ね……そういえばあんた、エルフについても最初から知ってたわよね」
「ん？　ああ。そうだな」

ゲームとかだとエルフはドワーフと並んでメジャーな存在だからな。勿論知ってる。

「それって不思議ですよね。ヒロ様はここじゃないどこかから来たはずなのに、エルフやドワーフを当然のように知っていて、しかもエルフやドワーフが出てくる神話も知っている。確かエルフとかドワーフって人間が宇宙進出して暫くしてから交流が始まった筈ですよね？」

「そうね、その筈ね。ヒロの居たところではまだ恒星間航行技術は確立されていなかったんでしょう？　それなのになんでエルフやドワーフの存在を知っているのかしら」
「それを言ったら俺がゲームとしてこの世界のことを知っていたことのほうが謎じゃないか？」
「ん……確かにそれはそうよね。そう聞くとやっぱりヒロは元々この世界の住人で、何らかの事故で記憶が混乱していると考えたほうが自然な気がするわね」
「自分が異世界から来たと思い込んでるってことか？　それはイタいな……いやでも、それだと俺の頭の中にアレが入ってないのはおかしいんじゃないか？　それに、俺の遺伝子情報の件もあるだろ」

俺がそう言って自分の頭を指先でトントンとつつくと、エルマが眉間に皺を寄せた。

「それはそうよね……うーん、不思議だわ」
「ミステリーですね」

俺の頭の中にはこの世界で一般的に普及しているという言語翻訳インプラントというものが入っていない。これはどんなに経済的に困窮している人でもインプラント手術を受けられるという代物らしく、およそ入れていない人は居ないだろうと思われるレベルで普及しているものであるらしい。
ちなみに、俺は言語翻訳インプラントが入っていないにも拘らず、多数の言語を理解することができている。診察した先生を大いに首を傾げる不思議人間なのだ。ついでに言えば俺の遺伝子情報はこの世界では確認されていない未知のものが多いらしく、非常に価値のあるものであるということだった。
そっち関係は俺もミミもエルマもさっぱりわからない門外漢なので、何がどう珍しくて価値があるのかは５％も理解できていない。

そういえば解析は進んでるのかな？　今度機会があったらショーコ先生のいるアレイン星系を再訪するのも良いかも知れない。

「到着しました」

ドワーフの話題から俺の存在そのものに対するミステリーな話題に移ったところで俺達は目的地に到着した。レトロフューチャー感あふれるロケット型宇宙船に宇宙服を着た髭面のおっさんが跨っている巨大な看板が印象的な巨大ショールームである。肩に担いでいる妙にＳＦチックな見た目のハンマーが絶妙にダサい。

「看板で損してないか？」

「伝統の看板だからね。確か数百年前からずっと同じ看板だとか聞いてるわよ」

「うーん、私のセンスには合いませんね」

エルマが肩を竦め、ミミは難しい顔で看板を見上げて辛口コメントをしている。ミミのセンスには合わないだろうなぁ。ミミは大人しそうな顔をしているけど割とパンキッシュなファッションセンスだし。

でもまぁ、人はそれなりに入っているようだ。そりゃこのコロニー自体が実質的にスペース・ドウェルグ社のものであるわけだし、このコロニーに来る人々は基本的にスペース・ドウェルグ社に用がある人々であるはずなので当たり前といえば当たり前か。

看板を見上げていても何も始まらないので、全員で中に入る。中に入ると正面に大きなカウンターがあり、そこでは多数の受付嬢が来客に対応していた。全員両耳の辺りに機械パーツがあるので、恐らく受付嬢は人間ではなくメイと同じようなアンドロイドなのだろう。

「結構人が多いですね」

ミミの言う通り、それなりの広さがあるロビーには結構な数の客らしき人々がいた。俺達と同じ傭兵と思われるちょっと厳つい人々や、もう少しマイルドな感じの商人っぽい人々。下請け業者なのか、ドワーフらしき頑健そうな身体つきの背の低い男性達の姿も多い。

「スペース・ドウェルグ社の製品はデザイン性はともかくとして頑丈で信頼性が高いものが多いからね。堅実派の商人や傭兵に人気なのよ」

「なるほどー」

空いているカウンターを見つけて四人で連れ立って歩いていく。

「いらっしゃいませ。スペース・ドウェルグ社にようこそ」

そう言って頭を下げ、営業スマイルを浮かべる受付嬢アンドロイド。ふむ、前髪ぱっつんボブカットの青みがかった黒髪か。誰がデザインしたのかは知らないが、良いセンスだな。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

「母艦の購入を検討していてな。その相談に来たんだ。とりあえず今検討している艦はスキーズブラズニルだが、オプションその他諸々について総合的にな」

そう言って俺は小型情報端末を取り出した。すると彼女は頷き、自分の手の甲を小型情報端末に翳す。どうやら彼女の手の甲には情報の読み取り機能があるらしい。

「ゴールドランク傭兵のキャプテン・ヒロ様ですね。承りました。

ガイドボットの道案内に従ってお進みください」
「わかった」
カウンターの下部に穴が開き、ボウリングの球くらいの大きさの球体がごろりと転がり出てくる。イナガワテクノロジーでも同じようなのがいたな。見るからに重くて頑丈そうなのは蹴っ飛ばされて壊れないようにという対策なのだろうか？　他に改善する方法があるのでは……？
「コチラヘドウゾ」
「お、おう」
ピカピカと光りながら転がり始めるガイドボットの道案内で俺達は商談ブースへと向かう。ガイドボットは器用に人々に接触しないようにロビーを横切り、俺達を目的地へと導いてくれた。
「なんであんたはガイドボットに目が釘付けになってんのよ……」
「なんか不安になって……」
「わかる気がします」
エルマは呆れていたが、ミミは俺と同じ気持ちだったようだ。エルマはちょっとおおらか過ぎるというか、気にしなさすぎだと思うよ。うん。
案内されたブースというか個室の扉を開くと、そこにはビシッとビジネススーツを着込んだ小学生くらいの少女がいた。
「……？」
部屋を間違えたかと思って扉を閉めてガイドボットを確かめる。確かにガイドボットはこの扉に案内してくれたようだ。

「どうしたの？」
「いや、中になんかビジネススーツを着込んだ女の子が」
「それはドワーフの女性では？」
「えっ」

この世界のドワーフの女性は合法ロリなのか？　団子鼻に樽体型のかっちゃま的なやつじゃないのか？　いや、確かに近年の女性ドワーフは合法ロリ率が高くなってはいたと思うがそれにしてもあんまりなのでは？
閉めていた扉が向こう側から割と力づくで開かれる。力強いね？

「お客様。どうぞこちらへ」

俺の発言が聞こえていたのか、満面の笑みを浮かべたスーツ姿の少女――ではなくドワーフの女性社員が俺達を個室の中へと招き入れた。そして俺達に席を勧め、俺達が席に着いた後に「失礼します」と一言断ってから自分も俺達の対面に座った。

「本日はスペース・ドウェルグ社ブラドプライム支店にご来店いただきありがとうございます。私は本日お客様の接客を担当させていただくサラ、と申します。よろしくお願いいたします」

そう言って彼女は完璧な営業スマイルを浮かべて見せた。

#111　スペース・ドウェルグ社へ（後書き）

ボーダーランズ3もやってます。
ああ～、こころがすさんでいくんじゃぁー―（：3」∠）―

#112　前哨戦：専属契約のお話（前書き）

今年さんも余命二ヶ月ですね！

まじかよ……―（：3」∠）―

#112　前哨戦：専属契約のお話

「本日はキャリアシップ――所謂母船の購入のご相談ということでしたが」

営業スマイルを浮かべたまま、彼女は単刀直入に商談を切り出してきた。思った以上に率直でちょっとビックリである。だが率直で話が早いのは歓迎だ。

「ええ、スペース・ドウェルグ社のスキーズブラズニルにしようと思っているんですが」

俺がそう言うと、彼女――サラさんは目を輝かせながらずいっと身を乗り出してきた。乗り出してきたけど彼女が小さいので全然遠いわけだが。

「ＳＤＭＳ－０２０ですね！　流石、お目が高い！　ＳＤＭＳ－０２０は当社のキャリアシップの定番ロングセラー機です。基本設計ができたのはおよそ八十年前ですが、フィードバックを受けて改良を重ねてきた名機です。機体のコンセプト通り、高い信頼性と拡張性が売りですね。それに、購入するなら丁度良いタイミングです。先日、最新ロットの機体が仕上がったばかりなんですよ」

サラさんが揉み手を作ってにっこりと微笑む。

「でも……お高いんでしょう？」

最新ロットは、という意味を込めて人差し指と親指で輪っかを作

ってみせる。

「勿論。最新ロットは幅広いオプションパーツに対応している最新型ですから。ですがご心配なく。ヒロ様にだけ提案させていただける、とってもお得でオンリーワンなご提案がございます」

そう言ってニッコリと笑うスーツを着た少女。否応なしに俺の中で警戒度が上がる。

「ヒロ様は極短期間でブロンズランクからゴールドランクへと駆け上がった新進気鋭の凄腕傭兵。そうですね？」

「……自分で自分のことを凄腕傭兵ですって自称するのってイタくないか？」

「そんなことありません！　かっこいいと思います！」

ミミは俺の言葉を否定して目をキラキラさせた。

「私はちょっとイタいと思うけど……でも事実ではあるわね」

エルマは俺の意見に同意しつつも俺が凄腕であること自体は肯定してくれるようだ。メイはソファに座らずに俺達の後ろに立って控えているので表情はちょっとわからない。口を出してこないところを考えると、特にこれといった意見はないようである。

「事実か……？　いや、まぁそこは良いか。サラさんというか、スペース・ドウェルグ社がそう見てくれているということはわかったよ。それで？」

俺が凄腕傭兵かどうかという議論は今は関係ないので横に置いておいて話の先を促すことにした。結局のところ俺がどう思うかでは

なく他人がどう思うかって話だからな。彼女とスペース・ドウェルグ社が俺のことをそう認識しているのであればそれで良いのだろう。俺がウダウダ言うことでもない。

「はい。当社と専属契約を結んでいただけるのであれば、大幅に値引きをさせていただけますというお話です」

彼女はニコニコ笑顔を崩さずにそう切り出してきた。俺はその話に首を傾げる。

「専属契約とやらの内容を聞かせてもらわないと判断ができないよな」

「そうですね」

「そうよね」

「はい。簡単に言えば、可能な限り母船として当社の製品を使い続けて頂くこと、整備などに関しても可能な限り当社を使って頂くこと、運用データを定期的に吸い上げさせて頂くこと、ヒロ様達の活躍を当社の宣伝に使わせて頂くこと、以上の四点ですね」

提示された条件を頭の中で反芻する。

条件その一に関しては問題ないだろう。母船なんてそうそう買い換えるものじゃない。

条件その二の整備を製造元で行ってもらうというのもまぁ、良いだろう。可能な限りという注釈がついているわけだし、スペース・ドウェルグ社の整備員が居ないところでも整備を受けても良いってことなら問題ない。

条件その三の運用データ云々に関しては俺は問題ないと思うが、これは一応皆に相談しておくべきか。条件その四に関しても同様だな。ただ、条件その四には少しこちらから聞くべきことがあるように思える。

「一つ目と二つ目の条件に関しては問題ないと思うが、三つ目と四つ目条件についてはどう思う？　俺的には運用データを渡しても構わないと思う。あと、四つめの条項に関しては正直まだ内容が漠然としていて判断ができないと思うんだが」
「プライバシーに関わる生活系のデータを除くなら良いんじゃない？　宣伝に関しても収集したデータを使う分には問題ないと思うけど、私達にスペース・ドウェルグ社の看板を背負えってのはナシよ。いちいちスペース・ドウェルグ社に配慮して発言したり振る舞ったりするのは面倒だもの」
「私もエルマ様と同意見です。どちらにせよ、条件を呑むことによってどれだけのディスカウントが行われるのか提示されなければ検討することもできないかと」
「ふむ……ミミは？」
「宣伝に使うというのがよくわからないですね。私達の傭兵活動をどう宣伝に使うんでしょうか？　基本的に宙賊を倒して賞金を稼ぐだけですよね。その活動をどう利用すればスペース・ドウェルグ社の利益になるのかがよくわからなくて、モヤモヤします」

俺達の意見を聞いたサラさんは頷き、口を開いた。

「運用データに関しては仰られたようにプライバシーに関わる部分を除いた機体の実働面についてのデータ収集になりますので、まずはご安心を。そして宣伝に利用させて頂くという内容ですが、こちらは提供されたデータを表記する実戦データの一つとして表記させてもらったりするのと、後は優先取材権の獲得が目的ですね」
「優先取材権？」

またよくわからない言葉が出てきた。

「はい。スペースドウェルグ社は造船業だけでなく、数多くの事業を経営しています。例えば工業部門だけでも造船部門、携行武器製造部門、酒造部門など多岐に渡りますし、工業部門の他にも娯楽メディア部門などもあるのです」

「娯楽メディア」

オラなんだか嫌な予感がしてきたぞ。

「はい。コロニーに定住する人々にとって、コロニーに定住せず、宇宙を股にかけて旅をする放浪者（ドリフター）の生活というものは非常に刺激的なものに見えるのですよ。特に悪い宙賊を倒して回る傭兵のドキュメンタリーは人気が高いんです」

「……ミミ？」

元は入植者（コロニスト）であったミミに意見を聞こうと視線を向けると、彼女は頬を紅潮させてそれはもうキラキラと目を輝かせていた。

「確かに私もコロニーに済んでいた頃は行商人や怪物狩人や傭兵のドキュメンタリーを見たりしてました！　私達の活動がドキュメンタリー番組になるんですか！？　うわぁぁぁぁ……！」

ミミさん大興奮。尻尾があったらブンブン振ってそうなくらい大興奮。なるほど、この反応を見る限り、コロニーの入植者にとって傭兵のドキュメンタリー番組が良い娯楽なのだということはよくわかった。

「どう思う？」

「うーん……」

大興奮のミミに対してエルマはとても渋い顔をしている。

「やめといたほうが良いと思うけど……」
「どうしてですか！？」
「いや、クルーの構成を見ればヒロと私達の関係が丸わかりじゃない。全銀河に拡散されることになるのよ？　その意味わかる？」

男と女が一つの船に乗っているってことはつまり『そういう関係』であるという常識のアレだ。
俺達の顔出しドキュメンタリー番組が公開されたらそういった事情がフルオープンになるというわけである。
「？　何か困るんですか？　私達とヒロ様がそういう関係であることが知れ渡っても何も問題ないと思いますけど」

ミミはわかった上で全く機にしていなかったようである。あっけらかんとしたミミの反応にエルマが仰け反った。
「今更ですよね。今まで立ち寄ったコロニーでも港湾管理局の人とか傭兵ギルドの人にはバレバレだったわけですし、これから先も宇宙を旅していけば結局全銀河に広がることになるじゃないですか」
「そ、それは……そうだけど」

平然とした様子のミミに対してエルマは押され気味のようである。というかミミ強いな。
「ヒロ様とお二人の関係については個人的にとても興味がありますが、つまりそういうことです。スペースドウェルグ社の娯楽メディア部門からのオファーがあったら受けて欲しいということですね。ああ！　勿論取材の際は別途ギャラが出ますよ！」

そう言って彼女は先程俺がやったのと同じように小さな人差し指と親指を使って輪っかを作って見せる。ああ、そう。
まぁミミのエピソードとかはシンデレラストーリーとして人気が出るんじゃないかな？　とは思う。見方によってはどん底からの大逆転だものな。

「……優先権ってことは他社のオファーは受けないようにって事でいいんだよな？」
「ええ、そういうことです」
「取材を強制されるというということではないな？　条件面で折り合わなかったら拒否しても良いんだよな？」
「……ええ、そうです」

舌打ちでもしそうな雰囲気を醸し出しながらそれでも笑顔でサラさんが答える。

「ヒロ様！　取材受けましょう！　受けましょう！」

ミミが大興奮して俺を揺さぶってくる。ああ～、揺れる揺れる。ガクガクしてる。

「はいはい条件に折り合いがついたらね……で、船につけるオプションとお金の話をしようか」
「はい、そうしましょう」

そう言ってサラさんが手元のタブレット型端末を操作し、大型のホロディスプレイを起動した。当然、そこに移っているのは俺達が購入しようとしている母船、スキーズブラズニルである。

「まずはスキーズブラズニルのお話をさせていただきます。お話の

内容によってはより良い提案もできるかもしれません」

営業スマイルを浮かべていたサラさんの視線が一瞬だけ猛禽のような鋭い光を帯びたように見えた。これは心してかからないと相当毟られそうな気がするな。気を引き締めていこう。

#112　前哨戦：専属契約のお話（後書き）

あぁ～、P5Rやめどきがわからないんじゃぁ～――（：3」∠）――

（寝不足

#113　本戦：商談（前書き）

鼻水がべーべー出て集中力が……急に寒くなってきましたね―（：3」∠）―

#113　本戦：商談

「こちらが最新ロットのスキーズブラズニルです。艦内のハンガーには小型船を二隻収容できるようになっており、装甲の補修や破損パーツの交換、弾薬の補充などが行えます。これらの作業はオートメーション化されており、少数のクルーでも運用できるようになっているのがスキーズブラズニルの特徴ですね」

そう言ってサラさんがどこからか取り出した指示棒のようなものでスキーズブラズニル下部後方にあるハンガースペースを指す。

「こちらのオートメーションハンガー二つは初期装備なので、二つもいらないということであれば一つだけにしてその空いたスペースに他の設備を搭載することが可能です。地表探査用ビークルのハンガーにするというのも一つの選択肢だと思います」

「地表探査用ビークルかぁ……」

傭兵稼業には不必要そうに思えるかも知れないが、実はそうでもない。どちらかというと傭兵というよりも探索者の領分だが、仕事で使うことがないとも言えないんだよな。商人ではなく学者の護衛依頼とかを受けると、辺境まで引っ張り出されて太古の遺跡がある惑星の探査に駆り出されることもあるんだこれが。面倒だからＳＯＬでは殆ど受けた覚えがないけど、こっちでも無縁のままで居られるかはちょっとわからないな。

「とりあえず後で考えよう。説明を続けてくれ」

小型艦を二隻収容できるようになれば、将来的にエルマが自分の

船を得た時にバディを組むって選択肢も取れるだろうし、俺がクリシュナを得た時のように何かの拍子で小型艦がポンと手に入るかも知れない。そういう時のことを考えれば小型艦ハンガーが二つあるというのもそれはそれで良さそうだ。

「はい。自由に設備を配置できるユーティリティ区画は他社の同クラスキャリアシップに比べてかなり大きめです。全てをカーゴとして使えば中型輸送船並みの積載力を発揮しますし、カーゴではなく別のより有意義な施設を搭載することも可能です。例えば採掘した鉱石を精錬加工する自動精錬機（オートリファイナリー）や、精錬した金属を加工して弾薬や修理用の装甲材、スペアパーツなどを作り出すことができる自動製造機（オートファブリケーター）などもお勧めですね」

「あー、まぁそういうのは無補給で深宇宙探査に行く探索者向けじゃないかな」

基本的にコロニーの近くで活動する傭兵にはあまり用がない設備である。採掘で稼ぐなら自動精錬機はあっても良いかも知れないけど。単価の高い鉱石をガンガン掘れればアレはアレでかなり稼げるんだよなぁ。

「まぁ考えようによっては自動精錬機はアリか？」

「アリなんですか？」

「まぁ、アリかナシかで言ったらアリかもね」

ミミはよくわかっていないようだが、エルマは俺の意図がわかったらしい。つまり、スキーズブラズニルを運用する際の『待ち時間』にただボーッとしているのではなく、採掘をやって小銭を稼ぐのもアリだなぁという話だ。ミミはまだ首を傾げているが、ここで詳細を説明するつもりはない。

「そうなると鉱石スキャナーと採掘補助ドローンユニットは欲しいな。回収ドローンもグレードの高いものにしたほうが良いか……まぁ、この辺は資金と相談だな。投資金額を回収するのも大変だし、素直に全部カーゴにして荷物を運んだほうがよっぽどシンプルだ」
「それもそうね。それより優先すべき設備があるわけだし」
「はい。では肝心のジェネレーターですが、こちらはクラス６までのジェネレーターを搭載することが可能です。このクラスのキャリアシップとしては標準的な大きさのジェネレーターになりますが、最新ロットのものでは従来のものより出力が２０％向上し、燃費は５％改善されています」

そう言ってサラさんが指示棒でホロディスプレイに触れて情報を切り替える。ふむ、なかなかに高性能なジェネレーターが標準搭載されているようだ。大きさの割にクリシュナのジェネレーターと出力があまり変わらなかったりするのだが、クリシュナのジェネレーター出力が異常なだけなので気にしてはいけない。

「シールドと装甲、ジェネレーターに関しては妥協せずに最高の性能のものを搭載したい。それ以外の設備や装備に関しては二の次だな。砲艦運用する気も今のところは――」

背後からポン、と俺の肩に触れるものがあった。無論、背後に立っているのはメイだけなのでこの手はメイのものであろうことは明白だ。

「……やる気か？」
「資金が許せば、ですが」

視線を合わせずに問いかけると、背後の頭上から静かな声が返ってきた。マジかぁ。

「まぁどっちにしろ優先順位はシールド、装甲、ジェネレーター、カーゴ区画の順だ。次点で回収ドローンと採掘装備――」

肩に手が置かれる。

「――じゃなくて武装だな。うん。とにかく生存性を高めたい。シールド、装甲、ジェネレーターは用意できる最高のものを基準に考えたいところだ」

「はい。では最新ロットの船体に三層大容量シールドジェネレーター、それにミリタリーグレードの積層装甲に大容量カーゴ、と。内装はどうされますか？」

「生命維持装置や空調は堅牢性を重視してください。性能より信頼性重視です。医療施設は標準仕様、船員区画の内装も最低限で良いでしょう。日常生活はしっかりと手を入れてあるクリシュナで過ごすのが合理的です。基本、キャリアシップ内で過ごすのは私だけでしょうから」

「なるほど、傭兵の母艦ということであればできるだけ足は早く、目も良い方が良いですよね？」

「そうだな。超光速航行速度も可能な限り早いほうが良い」

「はい。それではその辺りも考慮しまして、っと。こうなります」

彼女が提示した金額は予算の範囲内――とは言えなかった。およそ２８００万エネル。母艦の運用費と被撃破時の修理代金を考えると残金５００万エネル程度というのは少々心許ない。稼ぐ前に母艦が大破したら一気にレッドゾーンである。

「予算オーバーだな」

貯金を全て叩くならメイの望む武装もできなくはないが、すっからかんになったら補給も覚束なくなる。やはり予算オーバーだ。可能であれば２２００万エネルくらいにしたい。

「……ご予算は」

にこにこと胡散臭い笑みを浮かべるサラ。正直に言って良いものかどうか。

「……２２００万」

「なるほど、なるほど……」

ニチャァ……と少女の形をした何かがいやらしい笑みを浮かべる。

「先程の条件、飲んでいただければ大幅ディスカウント！　２２００万ポッキリに負けましょう」

６００万エネルねぇ……うーん。

「飲むことは吝かじゃないが……」

「条件があります」

俺が先程の条件を呑むことを検討し始めたところでメイが口を挟んできた。

「スペース・ドウェルグ社に渡す運用データに関しては渡す前に私が予め検閲をさせていただきます。私には主を守る使命がございますので、これは譲れません」

「私どもが信用できないと？」

「はい」

笑顔のサラさんと俺の背後に立っているメイの視線が虚空でぶつかり合い、激しい火花を散らしているようだ。俺？　俺はとばっちりが来ないように『自分は空気、自分は空気』と念じているところだよ。

「……まぁ、良いでしょう。では提出してもらう運用データに関してはこちらの求める項目のうち、そちらが許可したものだけということで手を打ちます。それで良いですか？」

「良いでしょう。下手な小細工はしないことです」

何故だかしらないが、メイがサラに対して好戦的だ。最近製造されたばかりのメイとスペース・ドウェルグ社に務めるサラに何か妙な縁があるとも思えない。となると、相性が悪い何かがあるのだろう。メイは思慮深い。そうそう敵を作るような真似をするとも思えない。

「代わりに、取材は受けてもらいますよ。こちらが譲歩したのですから、そちらも譲歩していただけますよね？」

「俺は構わんが……」

チラとエルマに視線を向ける。ミミは乗り気だし、メイは何か意見を言うとも思えない。嫌がっているのはエルマだけだ。

俺？　俺は別に構わない。ドキュメンタリー動画になったらクリシュナの姿も多くの人の目に触れることになるだろう。もしかしたらクリシュナの製造元とか俺と同じように向こうから来ている人が連絡してくるかもしれないし、そうすればワンチャン俺の不可解な状況を理解する一助になるかもしれない。

「……私の顔出し声出しはナシ。それで良いなら」

「わかりました、伝えておきます。あとは武装でしょうか。ご覧の通り、武器を装備できるスロットはかなり多めです。一つだけですが大型武器の武器マウントもありますから、武装すれば火力もなかなかのものですよ」
「大型武器マウントにはＥＭＬを。その他の武器マウントには中型のものには中口径のレーザー砲を、小型のものにはシーカーミサイルラックを装備してください」
「え、大型ＥＭＬ？　マジで？　当たるの？」
「はい。問題ありません」

思わず驚いてメイを振り返ってしまったが、メイは無表情でコクリと頷いた。ＥＭＬというのは所謂電磁投射砲のことである。レールガンと言った方がわかりやすいだろうか。ゲーム的に言えばエネルギーを消費して撃ち出す超強力な艦砲である。
実体弾を撃ち出すレールガンは当然ながらレーザーよりも弾速が遅いため、距離の遠い相手を攻撃する場合は相手の未来位置を予測した偏差撃ちをする必要がある。しかも砲身が固定されているため、艦の前方にしか発射することができない上に自分で狙いを定める必要がある。
当然ながら、物凄く当てづらい。その代わり、威力はとんでもなく高い。中型艦までなら当たりどころが悪ければ一撃で爆発四散するし、小型艦は跡形もなく粉々になる。
当てづらいが、超高威力。ロマン砲と呼ばれる所以である。

「ＥＭＬですか。また珍しいものを……勿論ご用意致しますが」
「……全ての武装にコンシールド加工を施してくれ。一見非武装船に見えるようにな」

コンシールド加工というのは通常時はウェポンマウントを装甲で隠して見た目には武装しているかどうかわからなくするための加工

である。ウェポンアームを展開しないと四門の重レーザー砲と二門の散弾砲が見えないクリシュナもある意味では武器をコンシールド加工していると言えるな。フォルムと速度で戦闘艦なのがバレバレだけど。

「承知致しました」

特に疑問を差し挟むこともなくサラは頷く。うん、話が早いのは助かるな。

しかし非武装の防御型母艦にするつもりが、蓋を開けてみればメイの要望でかなりの重武装母艦になりつつあるのだが……？　ていうかメイの要望した武装を全てつけると軽くメイ本体の値段より高くなりそうなんだが、これは色々とどうなのだろうか？

まぁ、良いんだけれどもね。メイが当てられるというのであれば、ＥＭＬでの砲撃支援というのはありがたい話ではあるし。

#114　全ては彼女の（前書き）

寒ぅい！　体調崩し気味だよォ！―（：3」∠）―

#114　全ては彼女の

「ふぅ……」

一度ちょっと身内で話し合いたいということでリサさんには一度部屋から出てもらい、一服。出されたお茶のような何かを一口飲んで文字通り一服である。

「メイ」
「はい」

さぁてどうしようかなぁ、と考えているとエルマがメイに話しかけた。ここは静観するとしよう。

「貴女、最初からこうするつもりだったわね？」
「こう、とはつまり母艦の重武装砲艦化でしょうか？　それであればイエス、とお答えいたします」

メイは全く悪びれる様子もなくそう言った。つまり、メイがスペース・ドウェルグ社のスキーズブラズニルを推した時からこの重砲艦化計画は既定路線だったということだ。もしかしたら、もっと前――俺が母艦の購入を仄めかしたのを彼女が認識したその時から計画されていたのかもしれない。

「少しばかり奉仕機械の分というものをはみ出しているんじゃない？　主を唆して自分が戦うための力を得るというのはやりすぎだと思うけれど？」
「私は私という存在の全てを使って主様にお仕えします。ただそれ

だけです」

エルマの追求に対し、メイは一切の動揺を見せずにそう言い切った。いや、メイドロイドのメイが動揺するところなんて想像もできないわけだが。それにしてもまぁなんとも見事なゴリ押しである。エルマに対して自分の意図を説明する気は一切無いと言わんばかりだ。

「メイ、俺はまぁ……咎めはしないけれども、意図だけは説明してほしいな」

「はい、ご主人様。現状の環境では私のスペックはやや――という次元ではなく、およそ９８．８％ほど持て余されている状態です。私としてはご主人様のおはようからおやすみまでを見守り、時にご主人様のご寵愛を頂ける今の環境は理想的とも言っても良いのですが、このままではご主人様が私にかけられた金額的価値を通常奉仕でお返しするまでに凡そ１２０３年と２５６日１３時間４２分必要となってしまいます。メーカーの保証する耐用年数の実に１２倍以上です」

「お、おう……」

物凄く細かい。今聞いたのにもう頭からすっぽ抜けていきそうなほど気の遠くなる話だな。１２００年で耐用年数の１２倍ってことはメイの耐用年数は凡そ１００年なのかな？

「私はご主人様にエネルを電子の海に捨てさせた愚図で無能な存在になってしまいます。なので、それを回避すべくこうしてご主人様におねだりをしたわけです」

「豪快なおねだりだなぁ……」

余裕でメイ本体よりも大きい金額が吹き飛んでいるんだが……ま

ぁ良いんだけどさ。

「これで私もご主人様のお仕事をお手伝いできますし、ご主人様の命をお守りすることもできるようになります。私が重砲艦化したスキーズブラズニルを操ることによって宙間戦闘におけるご主人様の死亡リスクはおよそ７２％低減されます」

「そこは１００％じゃないんですね」

「ミミ様、１００％などということはありえません。宙間戦闘のリスクを１００％低減させるのであれば、スキーズブラズニルを重砲艦化するのではなくクリシュナを破壊するほうが遥かにローコストです」

「確かにクリシュナが壊れて宇宙に出られなくなったら宙間戦闘のリスクも何も無いわね」

「やめてね？」

女性陣が恐ろしい話をし始めたので止めておく。

「で、武装を諸々追加した最終的なお値段が例の契約込みで２５００万エネルとなったわけだ」

「２６００万エネルとか桁が多すぎて実感が……というか、なんだか凄そうな武器にレーザー砲とかシーカーミサイルポッドをたくさんつけたのに思ったより安いんですね？」

ミミがそう言って首を傾げる。確かに。ミミの言う通り、実は戦闘艦の武装というものは実はそう高いものではない。今回スキーズブラズニルに取り付ける武装で一番単価が高かったのは大型ＥＭＬの１２０万エネルである。レーザー砲は一門１０万エネルで一二門で１２０万エネル、シーカーミサイルポッドは一個６万エネルで一〇個取り付けて６０万エネル。合計で３００万エネルほどだ。

ちなみにスキーズブラズニル本体の内訳はハンガー二つを含めた

本体の基本フレームがおよそ８００万エネル。三層大容量シールドジェネレーターがおよそ４００万エネル。軍用積層装甲がおよそ５００エネル、クラス６の高出力ジェネレーターがおよそ４５０万エネル。高性能回収ドローンシステムがおよそ１００万エネル、ハイパードライブや超光速ドライブ、及びスラスターなんかの足回りが２５０万エネル。積み荷の管理システムを含めたカーゴ区画に１００万エネル、その他細々とした内装をメイの要求通りに揃えて合計２８００万エネルといったところだ。ここから例の契約で値引きが入って２２００万エネルになった。

見ての通り、本体の基本フレーム価格よりもシールドや装甲、ジェネレーターを合わせた方が高い。何故と言われても値付けをしているのは俺じゃないから困るが、船の本体価格よりもオプションパーツを高性能なものに取り替えてフルカスタムする費用のほうが高いというのがＳＯＬの常識である。

そのため、船の購入・買い替え時には本体の基本フレーム価格のおよそ三倍ほどの資金を調達してから事に臨むというのがある程度手慣れたＳＯＬプレイヤーの嗜みだ。

既存の船を売り払って新しい船の基本フレームを買い、なけなしの金で武器だけ揃えて出撃。何のカスタムもされていないバニラ機体で無理をして爆発四散し、借金を抱えて初期船のザブトン生活に戻るなんてのも初心者にありがちなムーブである。

ちなみに、今回購入しようと思っていたスキーズブラズニルは最新ロットでなければ基本フレームの価格は６００万エネルだった。最新ロットでないスキーズブラズニルはクラス５までのジェネレーター搭載ができる機体の筈だったため、まず１クラス上がったジェネレーターの価格が当初の予定より高くなった。それに合わせてシールドジェネレーターもより高出力のものになったため、更に値段が上がった。この二点が誤算と言えば誤算だったのだ。これがなければおおよそ予算内に収まっていた……筈だ。たぶん。きっと。おそらく。

というような話をミミにした。

「……本体よりもオプションパーツが高いということですね！」

おめめがぐるぐるしていた。どうやら情報量が多すぎたらしい。まぁミミの言っていることで全く間違いはない。

「要は、私達傭兵の船が宙賊どもをボッコボコにできるのはここなのよ。私達と宙賊の船に大きな性能差が生まれる理由ね。奴らの船は基本フレームをただ動かせる程度のオプションパーツに使い古してガタガタの武器をくっつけてギリギリ戦闘艦と言えるレベルの船で戦っている。それに対して、私達は真っ当で高性能なオプションパーツでフルカスタムした船を使って戦っている。装甲やシールドには特にお金をかけるから、ちょっとやそっとの攻撃じゃビクともしない。基本的にレーザーなんて避けられるものじゃないから、殆ど受けて耐えながら相手を返り討ちにしてるのよ」

「そうなんですか？」

ミミが俺に視線を向けてくる。俺はクリシュナでレーザーを避けることも少なくはないからね。まぁ、あれは避けてるというよりもそもそも射界に入らないようにしてるんだけども。

「こいつの変態機動は別。ああいうのはごく一部の変態ができる芸当だから。気をつけなきゃならないのはシーカーミサイルみたいな爆発系の兵器と、対艦魚雷みたいなシールドを貫通してくる攻撃ね。シールドは爆発系の武器に弱くて、何発も受けると簡単にシールドがダウンしちゃうから、絶対に避けなきゃいけないわ。対艦魚雷はシールド中和装置を搭載してるから、シールドを貫通してダメージを与えてくるしね……って本題から外れたわね」

こほん、とエルマが一つ咳払いをする。

「取材の件に関してはさっきも言ったけど、私は顔出し声出しはＮＧだからね。クリシュナの活躍を主題としたドキュメンタリーならヒロは全部晒すことになるからそのつもりでいなさい」

「りょーかい」

どんな取材になるかわからないが、まぁ俺自身は隠すことなど何も無――くもないけど、まぁ自分から異世界からぶっ飛んできましたとかいう電波発言をしなければ大丈夫だろう。問題はミミか。

「わくわくしますね！」

ミミは大変乗り気である。本人にやる気があるのは良いことだが、この様子だと調子に乗って話さなくて良いことまで赤裸々に話しかねない。取材の間はメイをくっつけておいたほうが良いかも知れない。

話がまとまったところで部屋のドアがノックされ、サラさんが戻ってきた。何らかの手段で部屋の中の会話を把握していたのでは？

と疑いたくなるほどのタイミングだったが、深く詮索はすまい。

「発注書は上げてきました。納品まではおよそ二週間ほどかかるようですね」

「二週間ね。まぁ順当？」

「じゃない？」

エルマがそう言うので納得しておく。ゲームなら発注というか買ったらすぐに乗り回せるのが当たり前だが、現実ではそうもいかない。むしろ、二週間でジェネレーターその他諸々を積み替えて装甲をすべて張り替えるというのはかなり早いのではなかろうか。

「他に承ることはございますか？」
「ある。今使ってる船をオーバーホールしたい」
「承ります」

即答であった。即答であったが、まだ言う事がある。

「見ればわかると思うが、あの船は特別だ」
「はい。恐らくパーツなどは分析にかけてレプリケーターで複製することになると思います。サービス致しますよ」
「ほーん。で、いくら払う？」

サラさんが笑顔のまま固まる。いやいやいや、固まられても困る。あんなに露骨に船をスキャンする理由なんて考えるまでもない。クリシュナにはスペース・ドウェルグ社にとって未知の技術がてんこ盛りなのは火を見るよりも明らかだ。彼らがクリシュナをオーバーホールするのなら、それはもう微に入り細に入りパーツを一つ一つ検分し、未知の技術を吸収しようと躍起になるに違いない。そして、クリシュナから吸収した技術を自分たちの製品作りに活かすのは目に見えている。

「あんた達にとっちゃお宝の山だろう、あの船は。あの船をオーバーホールすることによって得られる技術、いくらで買う？」
「オーバーホール代金、サービス致します」

サラさんがにっこりと笑う。

「母艦の整備と合わせて一社にまるっとお任せできれば楽だし、お互いに幸せになれると思ったんだけどなぁ……今回はご縁が無かったということで」

「まってまってまってまってください。じゃすとあもーめんと！
わかった！　わかりました！　オーバーホール代金は無料！　それにスキーズブラズニルの方を更に値引き致しましょう！　武装代金の３００万エネルをタダにして、弾薬もたっぷりつけます！」

メイに視線を向ける。こういう交渉はメイに任せるに限る……順調に堕落してるな？　俺。

「全て合わせて２０００万ポッキリであれば適正かと」
「ちょっと待って下さい。そうすると値引き金額が１１００万エネルになります。三割引きは流石に無いです。暴利です」

サラさんが真顔になる。うん、俺も流石に専属契約とクリシュナの情報で１１００万エネルは暴利じゃないかと思う。

「こちら平常時、巡航時、超高速ドライブ時、ハイパードライブ時、戦闘起動時におけるクリシュナの稼働データとなります」
「わかりました、２０００万エネルぽっきりで手を打ちましょう」

メイがどこからか大容量記憶媒体であるデータクリスタルを取り出し、真顔になっていたサラさんが速攻で手の平を返して笑顔になった。メイ、いつの間にそんなものを……？

「リスク管理です、ご主人様」

メイが無表情でそう言いながらサラさんに向かってデータクリスタルを差し出す。リスク管理ね。まぁわからないでもないけれども。無理矢理狙われるよりは、こっちから差し出して見返りを貰うほうが遥かに安全でお得だ。メイはそう言いたいのであろう。

「色々と俺に内緒でやっているな？」
「はい。ご主人様のためですから」
「なるほど。でも俺に許可を得ず、報告もしないで裏で画策しすぎるのはあまりに独善的だとは思わないか？」

重砲艦化計画まではまぁ、許そう。だが、取引のために俺に内緒でクリシュナの運用データを収集し、記憶媒体に記録して持ち出しているというのは流石にやりすぎである。一体どこからどこまでがメイの手の平の上であったのか？

「……」

メイは答えない。なるほど。

「あとでお仕置きだ」
「はい、ご主人様」

メイの返事がどこか弾んでいるように聞こえるのは俺の気のせいだろうか？　あと、サラさんを含めた女性陣。そんな目で俺を見るのをやめろ。言い方はアレだったかもしれないが、俺の言っていること自体は極めて真っ当だと思うよ。

#115　お仕置き（LV1）とスイートルーム（前書き）

持ち直した！　気がする！―（∵3」∠）―

#115　お仕置き（LV1）とスイートルーム

「さて、宿を取らないとな」
「そうですね」
「そうね」

一通りの手続きを行い、スペース・ドウェルグ社から出たところで俺の発言にミミとエルマが同意した。クリシュナは分解点検整備のため、整備中は当然ながらクリシュナを使うことが不可能になる。クリシュナは俺達の船であると同時に住居でもあるので、宿を確保しないと俺達は一時的にホームレスになってしまうのだ。

「引き渡しは明日の正午だったわね。それまでに宿の確保と荷造りをしないと」
「当面の生活に必要なものだけ持ち出せば良いんですよね」
「そうだな。まぁ小型情報端末とタブレット端末、それに着替えがあれば良いかな。俺は」

小型情報端末が財布の機能を兼ねているし、男の外泊準備なんてこんなものだろう。何か足りなかったら都度買えば良いしな。

「どちらにしても一度船に戻る必要がありますよね」
「そうね。戻って食事がてら宿を探しましょ」
「そうしよう」

メイを加えた四人でテクテクと歩いて港湾区画へと向かう。俺達のいる港湾区画との最寄りフロアはほぼスペース・ドウェルグ社の支社とその関係先で埋まっている。商業区画や繁華街にあたる場所

は別フロアに集中して作られているらしい。
当然ながらこのコロニーに来る人の大半はスペース・ドウェルグ社に用がある人々が多い。自然と俺達のようにコロニー内に暫く留まる人が多いため、宿泊施設も充実している――とサラさんが言っていた。スペース・ドウェルグ社と提携しているホテルのリストも受け取っているので、滞在先はその中から選ぶことになるだろう。
ちなみに、メイは俺達三人から一歩離れたような距離をしずしずと足音も立てずについてきている。メイにはお仕置きもしなきゃいけないからなぁ。効果があるかどうかはともかく、お仕置きの方法は既に考えついている。まぁ実行するにしても宿に入ってからだな。
で、クリシュナのところにまで戻ってきたんだが。

「応援を寄越してくれ！　今すぐにだ！」
「うおおっ！？　やめんか貴様ァ！」
「無許可のスキャニングは窃盗罪だ！　しょっぴけ！」
「技術の発展のためだ！　どけぇぇぇ！」

クリシュナの周辺が物凄く騒がしいことになっているというか、もう殆ど暴動レベルであった。何やらよくわからない機材を持ち込んでクリシュナを分析しようとしている背の低いガチムチのおっさんや細身の少女達と、官憲の制服を着た背の低いガチムチのおっさんと細身の少女達が押し合いへし合いを繰り広げている。

「これは酷い」
「ええっと……」
「酷いわね、これは」
「もう少し吹っかけても良かったかもしれませんね。新しい技術に対するドワーフの熱狂度を甘く見ていました」
申し訳ありませんでした、ご主人様と言ってメイが頭を下げる。

うん、別にそれは気にしなくていいけど、これじゃクリシュナに近寄ることもできない。どうしたものか？　と考えたところでエルマが声を張り上げた。

「この船はオーバーホールのため明日の正午にスペース・ドウェルグ社に引き渡すことになっているわ！　こんなところで官憲と取っ組み合いをしているよりもオーバーホールの作業員に潜り込んだほうがじっくりたっぷりクリシュナを見られるわよ！」

エルマの言葉に喧騒に包まれていたクリシュナ周辺がシンと一瞬だけ静まり返り、次の瞬間騒ぎを起こしていた技術者らしき連中が雪崩を打ってスペース・ドウェルグ社の支社へと突撃していった。

後に残ったのは拘束されて悲嘆の声を上げている技術者らしき数名とちょっとボロボロになって疲れた様子の官憲らしき人々である。お勤めご苦労さまです。

「うおォイ！？　あんたがこの船のオーナーだろう！？　こいつらに言って不当な拘束を撤回させてくれ！」

「お願いだよ！　この船のオーバーホールに参加できないなんて酷すぎるよ！」

「連れて行ってくれ」

「任せてくれ」

『アァァァァ！　イヤダァァァァ！』

官憲の皆さんが拘束された技術者らしき人々を連行していく。何日ぶちこまれるのかは知らんが、バカンスを楽しむが良いよ。

☆★☆

翌日。

昨日のうちに滞在するホテルを決めて予約を取り、荷造りも済ませた俺達はコロニー内の貨物配送システムを利用して滞在先のホテルへと荷物を送ってほとんど手ぶらで目的のホテルへと移動を開始していた。

「貨物配送システムって楽だよなぁ。こういうところは進んでるなぁと思うわ」

「貨物配送システムが無い社会ってあまり想像がつきません」

「貨物を積載できる乗り物とかに荷物を載せて近くまで走って、それから荷台から荷物を下ろして目的地に手で配達するのよ。非効率だけど、それを生業にして生きている人もいるわ」

「キツい仕事だぞ……学生の頃、年末のバイトで何回かやったことある」

寒いしキツいし真冬だから路面状況も最悪だしで本当にキツかった。年末年始なだけあって日当は良かったけど。

「ご主人様」

「なんだ？」

「どうかお考え直し下さい」

「ダメだ」

にべもない俺の反応にメイが無表情ながらも沈んだ雰囲気を醸し出す。今、彼女は罰を受けている真っ最中なのだ。

「あの、そろそろメイさんを許してあげても良いんじゃ……」

「自発的に色々と行動してくれること自体は俺としても助かるが、今回はやりすぎだ。少しくらいは反省してもらわないと困る」

今のメイは護衛以外の俺に対するあらゆる奉仕活動を禁止されて

いる状態である。メイにとって主人である俺に対する奉仕活動彼女の存在そのものを支える重要な柱だ。それを禁止され、俺の身だけを守るガードロボットのような扱いを受けるのは彼女にとって耐え難い苦痛である――らしい。

俺も確信を持ってやっているわけではない。何故ならこの対処法はメイの製造元であるオリエントコーポレーションで出会った受付嬢アンドロイドから聞いたものだからだ。

忠誠心と能力が高く、そして若い機械知性は主人のために色々と暴走しがちらしい。そんな時のためにということで俺は彼女から高性能メイドロイドに対する効率的な折檻方法というものをいくつか教えてもらっていた。護衛以外の一切の奉仕活動を禁じるという命令はそのうちの一つである。

ちなみに、肉体的というか物理的な意味での折檻はめちゃくちゃ頑丈な機械の身体を持つ彼女にとってはあまり意味を為さない。むしろ頑丈な彼女を殴って怪我をするのは俺の方である。彼女を殴って俺が怪我を負ったらそれはそれで彼女を心配させそうではあるが、できれば女性は殴りたくない。フェミニストを気取るつもりは一切無いが、嫌なもんは嫌だ。まぁ相手にもよるけれども。

あと、言うまでもないが性的な意味での折檻はむしろ逆効果である。返り討ちにあるのがオチだ。

「大いに反省しました。今後はこっそりと企んだりせずに全て報告、連絡、相談を欠かしません。ですからどうかお許しください」

メイが真剣な様子で懇願してくる。どうしたものかとエルマに視線を向けると、彼女は苦笑を浮かべた。

「機械知性が奉仕すべき対象に嘘を言うことはないわ。許してあげたら？」

「ヒロ様。私からもお願いします」

ミミも俺の袖をちょいちょいと引っ張ってメイを許すよう言ってくる。まぁ、二人がそう言うなら良いか。

「じゃあ、二人に免じて許すよ。今回のメイの行動には助けられた部分も多いしな。でも、今後はいくら俺のためになったとしても隠し事は無しだ。良いな？」

「はい。ありがとうございます」

奉仕禁止令を出してから解除までほんの十数分の出来事であった。ほんの十数分でも、処理能力がめちゃくちゃ高い陽電子頭脳を搭載しているメイにとっては物凄く長い時間に感じられるんだろうな。まだクリシュナを出てホテルにすら到着していないのだけれども。

しかし俺の許しを得たメイの雰囲気は明らかに変わっていた。先程まで醸し出していたどんよりとした雰囲気は消え失せ、今はむしろ意気揚々とした雰囲気を放っているように見える。なんというか、顔は無表情だけどなかなかに感情表現が豊かだよな、メイは。

そんなことを考えつつ観光気分で若干寄り道などもしながら歩き、ついに俺達は暫くの間の滞在場所となるホテルに辿り着いた。

「なかなか立派なホテルだな」

「そうですね。なかなかと言うか、かなり高級そうに見えますけど」

「朝食と夕食付きで一泊１５００エネルのところを一週間で１０００エネルポッキリだぞ」

「いや、それは高――」

「シエラⅢのリゾートなんて一人あたり一泊１００００エネルだったんだぞ？　それが三人で一週間１００００エネルだ。安いだろ？」

「――くない……？　いや、騙されませんよ！　高いですよ！　安宿なら一部屋一晩５０エネルとかで取れるじゃないですか！　ツイン二つで１５０エネルから２００エネルで済みます！」

ちっ、騙されなかったか。

「ミミ、お金を持っている人はお金があるなりの消費をするものよ。というか、ゴールドランク傭兵が場末の安宿なんかに泊まってたら舐められるわ」

「そういうものなのですか……？」

「そういうものよ」

「そういうものなのか」

勿論俺はそんなことはあまり意識せずに部屋数と施設と評判と雰囲気で選んだ。クリシュナと同じようにトレーニング施設を有し、一部屋で全員が泊まれるスイートルームを持つホテルがここしかなかったのだ。スペース・ドウェルグ社からの紹介ということで割引も効いた。それであの値段らしい。

実際のところ、メイのおかげで想定よりも安い金額で母艦が手に入った上に重砲艦化にオーバーホールも実質無料になったわけで、手持ちの資金は１２００万エネル以上残っている。メイは今回俺に秘密で色々とやらかし、俺達の行動を自分の意図通りに操ったわけだが、結果としてその行動は間違いなく俺達の、というか俺のためになっている。折檻をごく軽く済ませたのは妥当といえば妥当だったのであろう。

「ほらほら、もう荷物も送っているんだし入り口でうだうだ言っていても仕方ないわよ。さっさとチェックインしちゃいましょう」

「へーい」

「うぅ……はい」

微妙に納得しきれていないミミを俺とエルマで引っ張ってホテルの中へと入る。ホテルのロビーはなんと言えば良いのか……上品で

煌びやかな空間であった。ロビーの待ち合いスペースには格調高いソファやテーブルが並べられており、その先には様々な観葉植物が鑑賞できるグリーンスペースとでも言えば良いのか……そんな感じのリラックススペースのようなものも見える。また、天井も高く、天井からぶら下がったシャンデリアのようなものがきらきらと温かみのある光をロビー全体へと降り注がせていた。

「想像していたよりも遥かに高級そうな雰囲気だなぁ」
「こんなもんでしょ。行くわよ」
「へいへい」

俺も若干気後れしているが、ガチガチになっているミミを見て逆に落ち着いてきた。エルマはこういう場所に慣れているのか、全く気後れするような気配は見られない。やはりこいつ、貴族かそれに準ずるような家柄の出なんじゃないだろうか？　いや、単に長い傭兵生活の間にこういう場所を利用することが多かっただけかも知れないな。決めつけはよくない。うん。

「いらっしゃいませ。本日は当ホテルにお越し頂き、まことにありがとうございます。ご予約はございましたか？」
「はい。キャプテン・ヒロで予約を取っている筈なんですが」

フロントで待ち構えていた口ひげの似合うナイスミドルにそう言って小型情報端末を取り出して見せると、彼は認証機で端末の情報を読み込み、笑顔を浮かべた。

「はい、確認致しました。ヒロ様ですね。よろしければ一緒にご宿泊される皆様方にも電子キーをお渡しできますが」
「貰うわ。ミミとメイも貰っときなさい」
「は、はい」

「はい」

エルマに言われてミミも自分の小型情報端末を取り出し、メイは右手の甲を見せるように手を差し出した。フロント担当のナイスミドルが認証機をそれぞれの小型情報端末と手に翳し、電子キーとやらを付与していく。詳細はわからないが、話の筋から推測するに部屋のロックを解除するためのカードキーのようなものだろう。

「では、係の者がご案内致します。お荷物は既にお部屋に運び入れてありますので」

「ありがとう」

「ご案内致します」

メイド服をしっかりと着込んだ少女が俺達を先導してトテトテと歩き始める。この子も小さい女の子に見えるけど、口調はしっかりしている。きっと成人しているドワーフの女性なんだろうなぁ。ちっちゃくて可愛いけど、子供扱いしたら怒られそうだ。気をつけよう。

「こちらのお部屋です」

メイドドワーフさんの案内に従い、俺達の宿泊する部屋に辿り着く。それはなかなか広いリビングのような空間であった。質の良い家具や調度品の置かれたリビングには俺達が予め送っておいた荷物が置いてあり、更にいくつもの扉も見える。

「うーん、思ったより広いな」

「えっ……あの、どこからどこが……？」

「そこの扉の内側は全部私達の部屋よ。そうよね？」

「はい。こちらのスイートルームは寝室が四部屋とお手洗いが二つ、

ドレッシングルームや広いクローゼット、豪華なバスルーム、それにこちらのリビングダイニングなどで構成されております」
「素晴らしいですね。御主人様が宿泊するに相応しい部屋です」
「ありがとうございます。そちらの専用端末からルームサービスをご提供させていただいておりますので、ぜひご利用下さいませ」

それでは失礼致します、とペコリと頭を下げてからメイドドワーフさんはスイートルームから退出していった。

「まずは荷物を開けましょうか。ほら、ミミ。寝室を決めるわよ」
「は、はい……」

エルマが置いてあった自分の荷物を持って未だに呆然としているミミを引っ張っていく。

「主寝室はこちらのようです」
「はいはい」

メイが俺の荷物を持って部屋の奥にある扉へと向かっていくので、それについていくことにする。正直、元々小市民であった俺もミミと同じように豪華過ぎる部屋に若干ビビっているわけだが、今更どうこう言っても仕方あるまい。とりあえず一週間。ここでのんびりとさせてもらうことにしよう。

#116　デッドボール

母艦の納品に二週間、クリシュナのオーバーホールに一週間。
母艦はともかくとして、クリシュナをオーバーホールしている間はコロニーの外に出ることもできないので、俺はゆっくりするつもりだった。部屋は広くて豪華だし、良い自動調理器を入れているのかメシもそこそこ美味い。ミミとエルマとメイに囲まれて、それはもうキャッキャウフフしながら俺はゆっくりするつもりだった。
ゆっくりするつもりだったのだ。

「オーバーホールをしている整備工場から呼び出しィ？」
「はい。ご足労をかけて大変申し訳無いが、来て欲しいといった旨のメッセージを預かっています」

昨日は正午にクリシュナを整備工場に引き渡し、その後は部屋に戻ってごろごろイチャイチャして過ごしていた。今日ものんびりごろごろイチャイチャしようと思っていたのに、朝起きるなりこれである。

「何か用事があるなら向こうが来るのが筋では……？」
「はい。私もそのように考え、そう伝えましたがとにかく来てほしいの一点張りでして。スペース・ドウェルグ社のサラに連絡して抗議いたしましょうか？」
「んぁー……まぁいいや、行ってみよう」

俺は客だが、相手は宇宙ドワーフだ。ここで俺が突っぱねた結果、職人気質をこじらせて臍でも曲げられたら困る。いや、まぁその時はサラに連絡してカネから来る権力で如何様にもすれば良いのだろ

うが、無駄に事を荒立てることもあるまい。どうせホテルに篭もっていてもミミやエルマとイチャイチャして過ごすだけだし。
いや重要だけどね？　イチャイチャは重要だけどね？　あまりベタベタしすぎるのも鬱陶しいだろう。親しい仲だからこそ距離感は間違えないようにしていきたい。

「身支度を整えたら向かうと連絡しておいてくれ。俺の端末にナビ情報も入れといてくれると助かる」
「承知致しました。しかしナビについてはお供いたしますが？」
「いや、いいよ。たまには一人でコロニーをうろつくのも良いだろ」

宇宙ドワーフのたくさんいるコロニーだし、何か面白いものを売っている店とかあるかもしれない。パワーアーマー用の近接武器とか無いかな？　ヒー〇ホーク的なものでもいいし、超振動ブレード的なものでもいい。どうも帝国領内は剣という形態の武器に関しては貴族のものっていう意識があるようだから、
刃物じゃなくて鈍器でも良いな。寧ろ装甲目標を相手にするならメイスとかの方が適してるかな？　うーん、夢が膨らむね。まぁ、そういうのがあったら良いなっていう願望でしかないから、そもそもそんなもの全く扱ってないかもしれないけど。

☆★☆

身支度を整えて俺は一人でホテルを出発した。ミミはまだスヤスヤと寝ていたし、エルマは昨日結構飲んでいたので、起きるのは昼だろう。メイには二人についてもらっておいたので、何の心配もない。やっぱりこういう時にメイの存在はありがたいな。絶対的な信頼感がある。

「ええと、整備工場はこっちか」

小型情報端末で現在地と目的地を確認し、ルートを表示する。それもこれも全部メイが用意してくれました。メイ様々だな。なんか遠くでミミがうなされているような声が聞こえてきた気がするが、きっと気のせいだろう。

若干天井の低いコロニー内をナビに従って歩く。なにはともあれまずは呼び出された整備工場に顔を出さないといけないので、コロニー内の探検は後回しだ。まだ朝も早いし、パワーアーマー用の装備を売っている店が開いてるとも思えないしな。

途中で繁華街らしき場所の近くを通ることがあったのだが、滅茶苦茶酒臭くて思わず顔をしかめてしまった。密閉空間であるコロニー内で揮発性の高いアルコールを飲むのは危険だと思うんだが……？　何か特別な対策でもしているんだろうか。いや、流石に対策はしているか。酒の飲みすぎでコロニー内で火災とか爆発とかが起こったら洒落にならないし。

そんなことを考えながら歩いていると、繁華街エリアを抜けたところで急に酒の匂いがしなくなった。

「？」

疑問に思って少し引き返し、繁華街エリアに一歩足を踏み入れる。その途端に強い酒の匂いが押し寄せてきた。なんだこの無駄に高度な空調設備は。いや、空調設備の効果なのか？　見た感じ、何か特別な機械などは見当たらないが……でも何かしらの種や仕掛けがあるのだろう。流石はドワーフの技術……か？　技術の無駄遣いのような気もするな。

いや、そういえばこういう技術の無駄遣いをしているアイテムを俺は知っているぞ。グラビティスフィアだ。この謎の空調技術はあの空間固定式のドリンクホルダーと同じ匂いがする。酒の匂い成分だけを選別して通さないシールド的な何かが展開されているのかも

しれない。

「……行くか」

更に進むと、この辺りは整備系の工場区画であるということがわかってきた。自動調理器などの家電製品やレーザーガン、レーザーライフルなどの武器、パワーアーマー、その他諸々の整備工場や細々とした修理用の部品や機材を扱う工場などが立ち並んでいるようである。あの繁華街エリアはこの辺りに務めているドワーフ達の憩いの場なのであろう。

「ふーむ、パワーアーマーも一回オーバーホールしたほうが良いかな」

うちのＲＩＫＩＳＨＩもそれなりに使用している。整備はちゃんとしてもらっているが、本格的にオーバーホールはこちらの世界に来てからはしてないんだよな。この際しっかりとやってもらう方が良さそうだ。パワーアーマー用の嵩張らなくて使い勝手の良い射撃武器も欲しいんだよなぁ。レーザーランチャーは嵩張ってちょっと使いにくいし。別に肩の固定武装レーザーでも良いんだけどさ。あれはなんか撃ってる感じがしなくてなぁ。

などとパワーアーマーに思いを馳せながら進むと、低重力区画へと入った。宇宙船というものは基本的に大きなものなので、宇宙船の整備を行う区画というのは基本的に低重力、あるいは無重力区画であることが多い。このコロニーでもその辺りは同じであるようだ。

低重力区画にはいるとついつい楽しくてはしゃぎたくなってしまうのだが、基本的に低重力区画＝通常重力では重くて扱うのが困難な代物を扱っている場所なので、年甲斐もなくはしゃぐと凄く白い目で見られる。とはいえ実際に楽しいので、あまり使われていない場所でコロニーの子供達が秘密基地を作って遊んだりすることもあ

るらしい。ミミも小さい頃は友達と一緒に低重力区画に忍び込んで遊んではよく怒られていたとか言っていたな。
低重力区画ではそれはもうポンポンと軽快に跳ね回って高速移動をすることも可能なのだが、当然ながらそんなことをすると他の人とぶつかるリスクも跳ね上がる。なので、低重力区画では通常区画よりも一層注意深く移動する必要があるのだ。低重力区画では踏ん張りも利きづらいから、スピードが乗ると急に止まれないんだ。
そうして慎重に進むこと少し。遂に俺はクリシュナが運び入れられている整備工場へと辿り着い……たんだが。

「なぁにこれぇ」

中を覗いてみると、装甲を外されて船体の基本フレームを晒したクリシュナに大量のドワーフ達が張り付いていた。何やらよくわからない機械でスキャンをしたり、小さなハンマーでフレームを叩いたりして何かをチェックしているようである。四門の重レーザー砲や二門の散弾砲なども取り外され、可変機構などもバラされて分解整備されているようだ。可変機構とか四門の重レーザー砲が取り付けられているアーム型砲塔ユニットの辺りにも人が多いな。
と、様子を観察していると現場を指揮していると思しきドワーフが俺の存在に気付いた。

「操縦者が来たぞ！　確保しろ！」
「えっ」
「うおおおおっ！」
「どけぇ！　ウチが確保する！」
「あたし達のとこで確保するわよ！　そぉい！」

むくつけきドワーフ達が迫ってくる中、出遅れた女性ドワーフが隣にいた自分の相棒らしき女性ドワーフの襟を掴み上げ、こちらに

ブン投げてきた。

「わあぁぁぁぁぁっ！？」

「うおおぉぉぉォィ！？」

物凄い勢いで迫ってくる女性ドワーフを受け止めるがその勢いは強く、低重力区画では踏ん張りも利かずに整備工場の入り口から受け止めた女性ドワーフ諸共吹っ飛ばされる。

というか女性ドワーフって身体が小さい割に重いな！？　などと考えているうちに背中から壁に叩きつけられ、壁と女性ドワーフに挟まされて息が詰まる。

「ぐふぅっ」

ずるずると壁からずり落ちながら聞いたのは『うちらが確保したぁ！』と胸元で騒ぐ女性ドワーフの声であった。なんなんだよ一体……何故俺がこんな仕打ちを受けるんだ。そう思いながら俺はガクリと力を失うのであった。

#117　正座。（前書き）

寒い……雪が……―（：3」∠）―

#117　正座。

俺は基本的に温厚な人間である。

うせやろ？　って？　そう思う？　いやいや、勿論仕事上というか、宙賊やらこっちの命を狙ってくるような相手やらは別だ。気を許した相手にならそれなりに横柄に振る舞うこともある。だが、日常生活において、見知らぬ相手――例えばお店の店員とか、どこかの窓口の受付さんとかに初手喧嘩腰で臨んだりは基本しない。

無論、相手の態度によってはこちらもそれなりの態度を取るけれども。例えばミミの賠償金関連の手続きをしたあの役人とか、こっちの世界に来て最初に俺を拘束した港湾管理局の局員とかね。

金持ち喧嘩せず、なんて言葉もある。喧嘩すると損ばかりで得がないことを金持ちは知っているから、無駄に人と争うことはしないという意味の言葉だ。まぁちょっとニュアンスは違うかも知れないが、俺もこの世界では金持ちに分類される側の人間なので、少なくともコロニーとかではできるだけ穏便に過ごしたいとは思っている。思ってはいるんだ。

「流石に温厚な俺もこれは許せんよなぁ？」

俺は我慢したと思う。不躾なスキャン、入港するなりのやはり不躾な押し寄せ、そして今朝の呼び出し。仏の顔も三度なんて言葉もあるしね。いや、あれは三回まで許すじゃなくて、本当は三度目で怒られる的なアレだった気もするけど。まぁとにかく、三度目までは耐えたわけだ。

「その……大変申し訳なく」

俺の目の前にはサラが正座していた。オイルや埃で汚れた整備工場の金属製の床の上に直接、である。その横にはこの整備工場の工場長と、現場主任。そしてデッドボール女とデッドボール女を投げたファッキンクソビッチも同様に正座している。他にも俺に押し寄せようとしたドワーフの整備員どもも全員正座している。

「なぁ、俺は客だよな？　色々と取引はしたが、最新ロットを言われるままにポンと買う、それなりの上客だよな？　その客に無礼を繰り返して、最終的に怪我を負わせるのがスペース・ドウェルグ社のやり方なのか？　それとも、ドワーフのやり方なのか？　客を呼び出して、ドワーフデッドボールをかますのがお前らの礼儀なのか？　ええ？」

「そのようなことは、決して……」

サラが俯きながら絞り出すような声でそう言う。

「オイオイオイオイ涙目になるのはやめろよ。泣きたいのはこっちだよ。それにお前、人間の俺がドワーフの女を正座させて泣かしたら絵面が最悪じゃないか」

見た目的には少女を正座させて泣かせているという本当に最悪な絵面である。

「とりあえず、こうやって仕事を止めること自体が非効率で俺にとって最悪な状況だからな。まず、整備員は作業に戻ってくれ。ぞんざいな仕事をしたら銀河の果てまで追い詰めてパワーアーマーで捻り潰してやるからな、丁寧に、素早く仕事をしろよ。技術の解析なんて許さんからな。超特急で丁寧に仕事を終えろ。ほら行け」

俺がそう言うと、最前列で正座をしているサラと工場長と現場主

任、それにデッドボールシスターズ以外のドワーフ達が一斉に立ち上がって整備に戻っていった。

「さァて、あとはお前らだが……」

俺は正座しているサラを睨みつける。

「俺が直接どうこうしろってのは筋が違うだろうからな。どうするかはお前らに任せる。お前らの誠意と謝意がどの程度のものなのか、見せてもらうぞ」

「ひゃい……」

俺に睨みつけられたサラは涙目でガクガクと震えながら頷いた。工場長と現場主任も顔を蒼白にしたまま頷く。デッドボールシスターズは蒼白を通り越して土気色になっている気がするが、知ったことじゃないな。

「とりあえずオーバーホールは進めてもらうが、最新ロットのスキーズブラズニルの購入に関してはストップだ。そっちの対応次第で買うかどうかを決める。当然それで良いよな？　ああ、購入は保留するが、それで納期を伸ばすのは許さないからな。わかってるよな？」

「ひゃい……」

サラががくりとうなだれる。スキーズブラズニルの購入費２０００万エネルに関してはまずその場で俺のエネル残高を確認してもらった後に頭金として１０００万エネルをその場で入金した。残りの１０００万エネルは納品後、製品に瑕疵がないことを確認してからの予約入金ということになっている。

当然、取引が成立しなかった場合は先に払った１０００万エネル

は俺の手元に戻ってくることになる。スペース・ドウェルグ社は俺が満足するような対応ができなかった場合、俺が発注した仕様の最新ロットのスキーズブラズニルを在庫として抱えることになるのだ。母船は当然デカいので、コロニーにおいてはただそこにあるだけで維持コストがかかる。ドックに入れている間、そこを使えないわけだからな。そんな事になったらその維持コストは誰に降りかかるのかなぁ？　ハハハ。

きっと必死になってくれることだろう。

「よし、話は決まったな。スペース・ドウェルグ社として、あるいはドワーフとして、俺にどのような対応をしてくれるのか楽しみにしているぞ。対応によっては俺はオーバーホールが終わり次第、このコロニーを発つ。これでも一応ゴールドランクの傭兵だ。万が一実力行使なんかに出てきたら……わかるよな？　言っておくが、俺は白兵戦もそれなりにやるぞ」

さっきは完全に油断していたが、油断していなかったらあんなデッドボールは避けるなり迎撃するなりはできていたと思う。いや、まさか自分が船を預けている整備工場に行ったら突然デッドボールを食らうとは思わんだろ。思わんよな？

「はい……そのようなことは、決して」

「そう願うよ」

それじゃあ、と言って俺は彼女に背を向けて整備工場を出た。整備工場での用事が終わったらパワーアーマー用の武器とか色々見て回ろうかと思ったんだが、そんな気分じゃないな。帰ろう。

というか、俺はなぜ呼び出されたのだろうか？　操縦者を確保しろとかなんとか言っていたが、謎だな。いきなりデッドボールを食らってブチ切れたし。腰のレーザーガンを抜いたり、手当たり次第

に暴れなかったりしなかっただけでもだいぶ自制できていたと思う。

☆★☆

「ドワーフどもをぶち殺して参りましょうか？」
「参らんでいい、参らんでいい」

部屋に戻って事の顛末を話すと、メイが無表情で物騒なことを言い始めた。自分が伝言を伝えた結果、俺に危害が加えられたと聞いてメイは静かに、無表情で激おこである。まぁ本気でぶち殺すわけじゃないと思うが……本気じゃないよな？

「酷い話というか、意味がわからないですね……」
「操縦者を確保、ねぇ……」

俺の話を聞いたミミはただただ困惑しているようだった。そうだよね、わけわからんよね。デッドボールを直接食らった俺にもよくわからん。エルマはなにか考え込んでいるようだが、心当たりがあるのだろうか？

「なにか心当たりがあるのか？」
「クリシュナをばらして、恐らくスラスターの使用頻度からどう使っているかの推測はつくと思うのよね、ドワーフなら。もしかしたらヒロの変態的な曲芸機動に目をつけたのかも？」
「データにはプロテクトがかかっていますが？」
「言ったでしょ、スラスターの使用頻度を見てって。ドワーフは金属の状態を何かよくわからない感覚で読み取れるのよ。人やエルフが本を読むように、ドワーフは金属を読めるの。具体的な機動データを読まなくてもヒロが特異な戦闘機動で戦うのは読み取られるかもしれないわ」

「金属を読む……なるほど」

早速ネットワークに接続して関連情報を収集したのか、メイが納得したように頷く。

「それで確保しろとは結局どういうことなんだろうな。テストパイロットでもやらせる気だったのかね」

「エンジニアがパイロットを欲しがるということは、何かコンペティションのような催しでもあるのかもしれませんね」

「それでそのパイロット候補を怒らせたら本末転倒じゃないか……？」

もっと冷静に行動しろよと言いたい。

「何にせよ、相手の出方がどうなるかね……どういう形で誠意が出てくるかちょっと予想できないわ」

「途轍もなく失礼な行為ではありますが、言ってしまえば罪状そのものは軽度の傷害ですからね。簡易医療ポッドの診断データを提出しても賠償金額は５００エネルも取れれば良い方かと。まぁ、企業としては自社が斡旋した工場でそのような事件が起きること自体が途轍もなく大きな失態ですが。今頃、対応に途轍もなく苦慮しているのではないでしょうか」

「ドワーフだからね……素っ頓狂なことをしてくるに違いないわよ、きっと」

エルマがそう言って苦笑いをしている。そういえば、この世界ではエルフとドワーフの仲はどうなのだろうか？　なんとなくエルフとドワーフは仲が悪いというイメージがあるんだが。

「なにかドワーフに思うところがあったりするのか？」

「別に？　個人的には特に無いわね。ただ、ドワーフはなんというか……誤解を恐れずに言えば変な人が多いからね。発想が突飛とでも言えば良いのかしら。理論よりも閃き重視、理性よりも本能重視って感じでね」
「なるほど……まぁ、サラは理性的な方だよな……だよな？」
「多分ね。まぁドワーフ全員がそういうわけじゃないから、ちゃんと理性的というか理論派の人もいるわよ。あくまでそういう傾向ってだけだから」

☆★☆

「あの……今日からお世話させていただきます。ティーナです」
「お、同じく……今日からお世話させていただきますウィスカです。どうかお手柔らかに……」

その日の夜、なんだか薄っぺらい服を来たデッドボールシスターズが部屋に訪れてきた。
ティーナと名乗るのは髪の毛が赤っぽいドワーフの女性で、顔立ちは……まぁ可愛い部類だろう。昼間はオイルで汚れたツナギを着ていた上にヘルメットをしていたし、顔も汚れていたから気づかなかったけど。そしてもう一人のウィスカと名乗るドワーフの女性は髪の毛の色が青というか水色っぽい。こちらもやはり朝は気づかなかったが、ティーナと同様可愛らしい顔立ちである。
というか、この二人、顔立ちが同じだ。双子なのだろうか。まぁ、それは良いか。とりあえず、俺が言えることは一つだ。

「帰れ」

扉を締める。そうすると、扉の向こうから半泣きの声が聞こえてきた。

「このまま帰ったら住む場所も働く場所も失ってしまうんですぅ！」
「話を聞いて下さい！　なんでもしますからぁ！」
扉がドンドンと叩かれる。あー、うるせぇなぁ！　ホテルのセキュリティを呼ぶか。
「あ、あの、ヒロ様……？」
「あん？」
セキュリティを呼び出そうとフロントに繋がる通信端末に手を伸ばしたところでミミに声をかけられた。
「えっと……入れてあげないんですか？」
「ミミ、俺は確かに激怒した。そしてスペース・ドウェルグ社がどんな対応を取るか見定めようと思っていた。だが奴らの対応はこれだ。実行犯の下っ端を切り捨てて、都合よく若い女だったからって俺にあてがったわけだ。これはミミとエルマを連れた上にメイまで連れているんだから女あてがっとけばええやろっ、ていう感じのふざけた対応だとは思わないか？」
確かに俺は女好きの好色男というそしりを免れない身ではあるが、こういうのはちょっと違うだろう。自然とそうなるならともかく、押し付けられるのはＮＯである。しかも嫌がってる相手を金や権力で無理矢理というのはいくらなんでもいかがなものか？
冷静に考えるとメイは割と押し付けられた感があるが、まぁ本人（？）がノリノリなのでよし。ノーカンということにしておこう……なんだか怒りが萎えてきたな。
「なんだかなにもかもがどうでもよくなってきた……あの二人に関

してはミミに任せる」
「……えっ？」
「まかせる」
「えぇ……と、とりあえず中に入れて話を聞いてみますね」

ソファに座ってぐったりする。俺にとってドワーフは鬼門なのだろうか？　とことん反りが合わないというか、感情を逆撫でされるな。

ソファに座ってぐったりしていると、ミミがべそをかいているデッドボールシスターズを連れて部屋に入ってきた。そして俺の対面にあるソファに二人を座らせ、自分もその隣に座る。

「ドワーフの外見卑怯じゃない……？　これ絵的には完全に俺が悪いやつじゃないか」
「あ、あはは……」

薄着のままめそめそと泣いているデッドボールシスターズの世話をしながらミミが苦笑いする。ちなみに、エルマは少し離れたテーブルでちびちびとやりながらこちらの様子を窺っており、メイは俺の座っているソファの後ろに立ってデッドボールシスターズに視線を向けているようであった。

メイの視線を受けたデッドボールシスターズが怯えて抱き合っているので、どうやら相当冷たい視線か怖い視線を送っているらしい。

「あの、メイさん。あまり二人をいじめないであげてください」
「別に私は何もしておりませんが」

そう言うメイの声はひたすらに冷たく、硬かった。宇宙船の装甲板か何かかな？

しかし、ミミの反応がちょっと解せないな。見た目が子供っぽい

から同情しているのだろうか？　そんな俺の疑問が顔に出ていたのか、ミミがデッドボールシスターズの世話をしながら少し辛そうな顔をした。

「お上の事情でお金も住む場所も何もかも失ったのは私も同じですから」

「むっ……」

そう言われると弱い。しかもこの二人は俺がそういう立場に追いやったのだ。そこに少し責任を感じ――……。

「いや感じねぇわ。責任は一切感じねぇわ。完全に自業自得だわ」

危なくミミとデッドボールシスターズを重ね合わせて同情するところだった。まぁ良い、それでもミミがこの二人に同情していることは確かだ。ミミに免じて話だけは聞いてやろう。

#118　謝罪（前書き）

すべりこみあうとぉ！―（：3」∠）―（ずさー

#118　謝罪

「よし、話を聞いてやる。その前にどっちが俺にぶつかった方だ？」
「あ、あの、私です」

そう言って青髪ロリのウィスカがおずおずと手を挙げる。

「なるほど。まぁ今思い返すとお前は意図せずぶん投げられて俺にぶつかっただけだから、そんなに悪くもないな。ソファに座っていいぞ」
「は、はい……で、でも姉さんが」

そう言ってウィスカが赤髪ロリ――ティーナにチラリと視線を向ける。どうやら自分だけがソファに座るのは気が咎めるらしい。
この反応や自分は悪くないにも拘らず、相方に付き合ってわざわざ俺の毒牙にかかりに来たことを考えればウィスカはそこそこ人のできたやつなのかもしれん。まだわからんが。

「そうか、まぁ無理には勧めないけども。で、話を聞いてもらいたいとか言ってたな」
「は、はい。あたし達はその、今回の件で職も住む場所も失うことになりそうで……」
「いや、そりゃ突然客に暴行を加えるようなのは雇っておけないだろう。常識的に考えて」

住む場所まで失う羽目になるのはちょっとよくわからんけど、社員寮みたいなとこに入っていたならまぁあり得なくもない話だな。

「で、その話と俺のところに押しかけてきたのにはどんな関連性があるんだ？　職と住む場所を失いたくなければ俺にその身を捧げてご機嫌を取ってこいとでもスペース・ドウェルグ社に言われたのか？」
「いや、そういうわけじゃないんですけど……そうでもなしないとあかんかなって思って」
「んん？」

こいつ、スペース・ドウェルグ社に言われて来たわけじゃないのか？

「職も住む場所もって話は？」
「こ、このままだとそうなるんやないかなって……」
「別にそう言われたわけじゃないんだよな？」
「そ、それはそうやけど……」

つまりこいつの独断？　え？　マジ？　挽回するどころか汚名を上塗りしてるだけじゃねーか。スペース・ドウェルグ社がこの事態を知ったら卒倒者続出だぞ。というかこいつ微妙に似非関西弁みたいなイントネーションで話すな。ドワーフ訛りか何かか？

「お前、誰にも言われてないのに妹を巻き込んで俺のところに身を売りにきたのか？」
「み、身を……はい、そうです」

ティーナが顔を赤くしたり青くしたりしながらそう言って俯く。ウィスカにも視線を向けるが、俺の物言いにこっちはより正確に事態を把握したのか、顔を真っ青にして脂汗を流し始めていた。

「なぁ、俺が何故怒っているのかお前わかってる？」

「えっ……それは、あたしがお客さんに怪我をさせたから――」
「いや違うから。それも大問題だけど、俺が一番怒ってるのはスペース・ドウェルグ社が自社の人間を適切に管理できずに俺に迷惑をかけていることだから。この意味、わかるか？」
「えっと……？」

よくわかっていないティーナが首を傾げ、事態を把握しているウィスカが気の毒になるくらい動揺している。

「つまり、お前みたいなやつが独断専行で素っ頓狂な行動をして、こうして俺に迷惑をかけることを一番の問題としてるわけだよ。今日の発端も客である俺を朝から工場に呼びつけるっていうクソムーブから始まってるのをもうお忘れかな？　その首の上に乗っかってるものの中身はお留守か？　ん？」

自然と笑みが浮かんでくる。俺、怒りが度を越してくると自然と笑みが浮かんでくる時があるんだよな。笑顔が本来は攻撃的な云々という話が脳裏をよぎる。

「あ、あの、えっと……」

ここに来て事態を把握したのか、ティーナがダラダラと脂汗を流し始める。

「メイ」
「はい、ご主人様。既にスペース・ドウェルグ社に抗議の連絡を入れております」
「よくやった、流石はメイだな」
「勿体ないお言葉です」

姉妹揃って蒼白になっているデッドボールシスターズをとりあえず無視してミミに視線を向ける。

「ミミ、ちょっとこいつら救いようがないぞ」

「え、ええっと……なんとか自分で責任を取ろうという心意気だけは……？」

「その解釈はいくらなんでも苦しいだろう……そもそもこいつらお上の思惑でここに派遣されてきたわけじゃないし、挽回しようとして更にドツボに嵌ってるだけだぞ」

俺の言葉にデッドボールシスターズが「うぐっ」と苦しそうな声を上げる。

「まぁ、別に俺は許しても良いんだけどな。お前達のことを」

「えっ」

「いや、俺がお前達に直接被った被害はちょっとした打撲だけだし。それをいつまでもネチネチと言うのは流石にケツの穴が小さすぎるだろう。ちょっとデッドボール食らっただけで姉妹揃って貞操差し出せオラァとか流石に言わない。そんなどこぞのチンピラじゃあるまいし」

そう言って手を振ると、デッドボールシスターズの表情に光が差してきた。

いや実際問題ね。どんなに事を大きくしようとしてもこの二人が俺にやったのは昼にもメイが言った通り軽微な傷害ってところだ。簡易医療ポッドに入ればすぐに完治したわけだし、酷く痛むわけでもなかったので個人的に慰謝料云々とか言うつもりもない。

そういったことを姉妹に説明していると、メイが入口の扉の方に歩いていった。もう来たか、早いな。連絡を受けてすぐに飛んできたんだろう。

「俺は許そう」

扉が開く。

「だがあいつらは許すかな？」

扉から入ってきたのは高級そうなフルーツのバスケットや酒瓶、それに何かが入っているらしい一抱えほどの箱を持ったスーツ姿のドワーフの男女であった。

☆★☆

「この度は本当に、重ね重ね、申し訳なく……」

ソファに座った俺の前で三人のドワーフの男女が俺に深く頭を下げていた。

俺の真正面、三人のうち真ん中に座って頭を下げているのがスペース・ドウェルグ社ブラド支社の営業部長。サラの直属の上司の上司の上司くらいの立場で、スペースドウェルグ社ブラド支社でも上から数えたほうが早い地位の人間である。

そしてその右隣に座って頭を下げているのが昼間にも会った整備工場の工場長だ。その反対に座って頭を下げているのがサラの直属の上司の上司である傭兵相手の船の売買を担当している課の課長であるらしい。ちなみに、サラの上司の係長とサラ本人、その他数名がソファの後ろに立って深々と頭を下げている。

「御社の営業方法は実に刺激的ですね。全く退屈することがありませんよ、はっはっは」

お前んとこの営業どうなっとるんや？　おちおちゆっくりすることもできへんぞオラ。ということを遠回しに言っておく。

「は、ははは……恐れ入ります」

営業部長が脂汗を垂らしながら愛想笑いを浮かべる。おいそこの赤髪暴投合法ロリ。褒めてねぇからな。皮肉を言ってるんだよ、皮肉を。

「彼女達が突然訪ねてきた時は驚きました。まさか花を贈ってことを有耶無耶にしようとしているのかと。確かに私は花が好きですが、私にも好みというものがありますからね。押し付けられたのかと思って、思わず腰に手が行きかけました」

「は、ははは、まさかそのような意図はまったく。はい、我々にとっても意想外の事態というものでして」

営業部長ドワーフが懐から取り出したハンカチで脂汗を拭いながら愛想笑いを継続する。ははは、この段になっては下手な言い訳もできないよなぁ？

「そうですよね、まさかスペース・ドウェルグ社ほどの大きな組織がゴールドランクの傭兵を舐めてかかるとは思えませんからね、ははは」

「勿論ですとも。傭兵の皆様、それもゴールドランクの傭兵の方ともなれば我々にとってはとても大切なお客様ですから」

「その割にはあまりに対応が後手後手の上に雑ですよね。現場までちゃんと管理の手が行き届いていないのでは？　と思ってしまいます。それに、今回のような事態を頻発されてしまってはアフターフォローにも不安がつきまとうのではないかと心配してしまいます。その点はどう思われますか？」

「と、当社のアフターフォローは顧客満足度も非常に高く、質が良いと評判を頂いております。優秀なスタッフによる十全な整備は他社とは一線を画していると自負しています」
「その優秀なスタッフに怪我を負わせられたんですけどね」

俺の一言に営業部長だけでなくその両隣の工場長と課長もだらだらと脂汗を流し始める。

「しかも一発逆転だかなんだか知りませんが、その当人が私の部屋を訪ねてきて抱かせてやるから許せなどとのたまう始末。問題行動を起こした人物が何故自由に出歩いているので？」
「そ、それはですね……」

営業部長がチラリと工場長に視線を向ける。

「断酒と謹慎を命じておいたのですが、勝手に抜け出したようでして……」
「勝手に。なるほど、彼女達が勝手に抜け出したので、貴方達には責任はないと。そう仰りたいということで？」
「い、いえ！　そのようなことでは決して……」

営業部長が俺の発言を慌てて否定する。

「では諸々の監督責任を認められると、そういうことで」
「……はい。この度は本当に申し訳ありませんでした」

再び営業部長が頭を下げ、他の面々も同様に深く俺に頭を下げる。
まぁ、この辺が手の打ちどころか。

「はい、謝罪を受け入れましょう。こちらの要求としては速やか、

かつ丁寧な仕事してもらいたいということ、理不尽かつ何の説明もなしにこちらの手を煩わせないで欲しいということの二点です。まぁ、本来であればこんなことは要求するまでもない、当然のことだと思いますが」
「まったく、お客様の仰る通りです」

俺が謝罪を受け入れたからか、多少顔色の戻った営業部長がハンカチで汗を拭きながらしきりに頷く。いやほんと、当たり前のことだよなぁ。

「なので、そちらから何か誠意を示したいというような提案があればそれは喜んで受けさせていただきます。私達は今後も傭兵として活動を続け、宇宙を飛び回る予定です。母艦も手に入れたので、交易などにも手を出すかもしれませんね」

当たり前のことなので、何かプラスアルファで誠意を示してくれるなら快く受け取ってやるぞと言い加えておく。これだけ迷惑をかけられたんだから何かしらの便宜を要求してもいいだろう。

「は、は……何かご提案できることがないか、社に持ち帰って速やかに検討させていただきます」
「それは楽しみですね。ああ、それと」
「は、はい」

次は何を言われるのかとビクビクしている営業部長に笑みを向ける。おいおいそんなに怖がるなよ。別に更に何か要求しようってつもりはないよ。

「結局俺は何故朝っぱらから呼びつけられたんですかね？　行くなりデッドボールを食らって大騒ぎになったんで、用件を聞いてない

んですが」
「その件ですね。実は、当社で開発している次世代機のテストパイロットが不足していまして……お客様の機体を見た技術者達が短期間でも良いからお客様にテストパイロットをしてくれないかと頼み込もうとしたようです。個人というか、開発チーム毎に別々にお願いをしにいくのは流石に邪魔だろうということで、失礼ながら各チームのリーダーを整備工場に集め、そちらで一度に面談と依頼をこなしてしまおうと考えていたようでして……」

汗を拭き拭き営業部長がそんなことを言う。

「いや、それはそっちで意見を集約して取りまとめて俺に依頼をすれば良い話ですよね。誰が俺に依頼をするかも決まっていない状態で俺を呼び出すとかどう考えても非効率的だしおかしいでしょ。そもそも自分達の個人的な用件で客の俺を仕事場に呼び出すとか失礼じゃないです？」
「申し開きのしようもございません」

俺に視線を向けられた工場長がずんぐりむっくりとした小さい体を更に縮こめて頭を下げる。この人、優秀な職人だから工場長になったけど管理職としてはダメな人なんじゃないだろうか。優秀な職人が優秀な管理職になるわけじゃないものなぁ。

「まぁ、船の整備中はコロニーの外にも出られないし、どちらにしても母艦が完成するまではこの星系に滞在するつもりなんで、テストパイロットの依頼は受けても良いですけどね。こっちの都合と報酬次第ですけど。傭兵ギルドを通して指名依頼でも出してください」
「ありがとうございます」

工場長だけでなく営業部長と課長も一緒に頭を下げてくる。経緯

はどうあれ次世代機のテストパイロットというのは少し興味がある。俺のＳＯＬの知識にない機体や装備を目にできるかも知れない。今の情勢ならワンチャン入手の芽もあるかもしれないから、可能なら是非やってみたいところだな。

「じゃあ、とりあえずはこんなところですかね。何か決まりましたらご連絡下さい。ああ、ストップしていた母艦の取引に関しては再開ということで」

「承知致しました。この度は本当にご迷惑をおかけ致しました」

「ええ、本当に。これ以上何もないことを祈ります。ああ、その二人の処分に関しては……」

俺の言葉にビクリとデッドボールシスターズが身を震わせる。周りのドワーフ達がスーツ姿であるため、扇情的――というには色気が足りないな。薄着な二人は滅茶苦茶浮いている。

「まぁ、正直あんまり庇いようも無いんですが、路頭に迷うような処分だけはやめて下さい。そんなことになったら俺の寝覚めが悪いので」

「前向きに検討致します」

そう言ってスペース・ドウェルグ社の人々は部屋から去っていった。後に残ったのは高級そうなフルーツのバスケットといくつもの酒瓶、そして何かの入っている一抱えほどの箱である。

「はー、疲れた」

「ちょっと見直したわ。あんた、交渉もそれなりにできるのね」

離れたところでこちらの様子を窺っていたエルマがそう言いながらスペース・ドウェルグ社の人々が置いていった酒瓶の物色を始め

る。

「あー、どうかな。ベストだったかどうかはわからんが、ベターであったとは思いたい」

そう言いながら俺は俺で箱を開けて中を見てみる。中に入っているのは真空パックになっている何かの燻製のようなものや、何かの瓶詰めのようなもの。それに高級そうな缶詰などが入っていた。高級おつまみセットってところだろうか。

「良い引き際だったかと。相手の謝罪を受け入れて譲歩を要求し、こちらからも譲歩をして丸く収まったのではないでしょうか。相手も部長級の人員を出してきたとなると、ここで謝罪を突っぱねるのはあまり得策とは言えませんから」

俺の後ろに控えていたメイもそう言ってくれた。単純に換算することはできないが会社の部長といえば、軍組織で例えたら中佐以上……下手したら少将くらいの地位の人間だと言っても過言ではない。スペース・ドウェルグ社内の序列で言えばあの営業部長はセレナ少佐よりも格上なのである。

しかも営業部といえば社内でも所謂花形部署と呼ばれるところだろう。その長が顔を青くして脂汗を流しながら何度も頭を下げたのだ。それを突っぱねると逆に相手の態度が硬化する恐れもあったと思う。なんでもかんでもゴネりゃいいってもんでもないしな。

「メイにもそう言ってもらえると安心できるな……ミミ？」

ミミはと言うと、何か考え込んでいる様子であった。どうしたのだろうか。

「あっ……いえ、その、私もヒロ様みたいにかっこよくああいった事態にも対応できるようになりたいなって。なんというか、ヒロ様は今までも凄かったんですけど、別の凄さを見たと言うか」
「クリシュナを操縦してバッタバッタと宙賊を倒したり、パワーアーマーを着て暴れまわるだけじゃなくて、大企業の重役とも対等に渡り合う姿に惚れ直した？」
「そんな感じです」

エルマの言葉に同意してミミが頷く。

「やめてくれ。そんな言うほど上手くやれたとは思ってないから」
「あら、照れてるの？　可愛いわね。さっきまでの堂々としたヒロはどこに行ったのかしら？」
「だからやめろって。それよりほら、美味しそうな珍味とフルーツだぞ。早速食おうぜ」

からかってくるエルマになにかの燻製の入った真空パックを放り投げて話題を逸らす。
今日は疲れたよ、ほんと。美味しい珍味とフルーツで疲れた心を存分に癒やすとしよう。

#118　謝罪（後書き）

なお燻製のような何かは真空パックを破いた瞬間蠢きだしてミミが悲鳴を上げた模様。
ちなみにお味の方は「おいしかったです」とのことでした。（結局食った

#119　セールス

翌日である。
いやぁ、あの蠢く燻製は強敵だったな。真空パックに入ってたのに、開けた途端蠢き始めるからミミが悲鳴を上げてたよ。食べてみたら美味しかったから、最終的には三人で美味しく頂いたわけだけどな。
味は……濃厚なエビっぽかった。ボイルしたやつじゃなくて、刺し身っぽい感じ。それでいて食感は……アワビ？　とりあえずあれが何だったのかは調べないことにした。食っちまった謎生物の正体を知るのは怖いよな。

「今日こそはパワーアーマー用の武器とかを見に行こうと思っていたんだが」

朝起きて朝食を取り、ホテルのジムでトレーニングを終えて部屋のシャワーで汗を流し、さぁ出かけようというところで。

「案内ならお任せやで、旦那」
「お、お姉ちゃん……お兄さんにはもっと丁寧な言葉を使わないと」

何故かシャワーを浴びて出てきたらデッドボールシスターズが部屋にいた。どういうことだ、とミミとエルマと、あとサラに視線を向ける。そう、サラも俺の部屋を訪れていたのだ。

「はい。この二人がどうしても改めてヒロ様にお詫びをしたいということなので、私がお目付け役となって連れてきたのですが……不快なようなら今すぐ連れ帰ってブタ箱にぶちこみますので」

初手タメ口――というか気安く接するという常識では考えられないムーブを目の当たりにしてこめかみに青筋を浮かべたサラが物騒なことを言う。いや、まぁ、別に気安く接されただけでブタ箱にぶち込めとまでは言わないよ、俺は。

「というか、こいつらの処分はどうなったわけ？」

「ヒロ様がとりなしてくださったので、厳しい処分にはなりませんでした。厳重注意と禁酒二週間、減俸三ヶ月ですね。ちなみに私は禁酒こそ言い渡されませんでしたが、減俸二ヶ月です。工場長は禁酒一ヶ月と減俸三ヶ月、リーダー研修の再受講となりました」

「そのサラッと処分の中に禁酒が入ってくるの何なの？　ドワーフにとって禁酒は刑罰なの？」

「刑罰以外の何ものでもないやろ」

「辛いです」

「私は禁酒を言い渡されなくて本当に良かったです」

がっくりと肩を落とすデッドボールシスターズと、対照的にホッとした顔を見せるサラ。信じられないことに、ドワーフにとって禁酒は非常に重い刑罰であるらしい。アル中か何かなのかな？

「まぁ、処分についてはわかったよ。改めて謝罪をしたいという件についても謝罪は受け取ろう。しかし俺に二度も迷惑をかけてるこの二人をよく俺に近づけようと思ったな」

普通に考えれば近づけないようにするものだと思うが。

「それがですね、まだ本決定ではないのですが、この二人をヒロ様の専属整備員として派遣するのはどうかという話がありまして」

「……ちょっとよく聞こえなかったな。なんだって？」

「あの、この二人を、専属整備員として派遣しようという話が持ち上がっていまして」
「……なんでよりによってこの二人なんだ？」
何故かドヤ顔をしている赤髪合法ロリと、そんな姉を見てオロオロとしている青髪合法ロリに視線を向ける。人選がおかしくないか？　わざわざ俺とトラブルを起こしたこいつらを俺につけようとするとか何考えているんだ？
「腕は良いんですよ、この二人。行動力もずば抜けていて……まぁその、行動力が仇になることも多いのですが」
「くれるとしても思慮深そうな妹の方だけで良いんだが」
「えっ？　そ、それって……」
「なんでや！　あたしだって可愛いやろ！」
俺の発言に頬を赤くする青髪の妹と、憤慨する赤髪の姉。なんでやってお前、そういうとこだぞ？
「というか専属整備員として派遣するってのはつまり、どういう扱いになるんだ？」
「彼女達の給金は我々スペース・ドウェルグ社が支払います。つまり、所属はあくまでもスペース・ドウェルグ社のままということです。無論、コロニーを離れて自由に移動が可能になる自由移動権の付与手続きやその費用も全てこちらで持ちます。ヒロ様にかかる唯一のご負担は納品するスキーズブラズニルに彼女達の生活スペースを確保していただき、提供していただくという一点のみです。無論、彼女達の生活スペースの設備に関しても当社で負担致します」
「ふーむ……？」
これはお買い得なのだろうか？　腕の良い整備員が二人、給金も

必要な設備も全てスペース・ドウェルグ社持ちで手に入るということだよな。確かに装備や設備のメンテナンスができるプロのエンジニアというのは得難い存在だが。

「言っておくが、傭兵稼業に同行するのは危険だぞ。命の保証は一切できないし、怖い目にも遭うと思うが」

「でも色々な所に行けるんやろ？　色んな場所や不思議な光景や旨い酒とも出会えるかもしれないし、あたしは少々の危険があってもコロニーの外に出てみたいな。旦那にも迷惑をかけたし、恩返しもしないと」

「私は……ちょっと怖いですけど、とりなしてくれたお兄さんに恩返しがしたいから。本当に、お兄さんが取りなしてくれなかったら姉ともども路頭に迷っていたので」

デッドボールシスターズは危険な傭兵の船に乗るというのに随分と楽観的というか、抵抗感が少ないようである。お前ら本当にそんな簡単に決めて良いのか？　傭兵稼業の危険さを甘く見てない？　まぁ、落とされるつもりも母艦を落とさせるつもりもないけどさ。

まぁ、恩返しのためにって点は好感を持てるかな。悪い気はしないというか、別に大したことじゃないと言えば大したことでもないと思うが……コロニーみたいな閉鎖的な環境では、一度転落すると這い上がるのが難しいんだろうな。

「この場ですぐに返答するのはちょっと無理だな。クルーとの相性もあるだろうし」

「そうですよね。なので、よろしければコロニーの案内に彼女達を使って彼女達との相性や人となりを見ていただくのはどうか、と。彼女達からそう提案があり、社としてもこちらの提案を受け入れて頂く下地となれば良いという判断でして」

「なるほど……」

デッドボールシスターズに視線を向ける。姉のティーナは……なんだか知らんが自信ありげな様子だな。妹のウィスカの方はそんな姉を見てハラハラしているようだが。第一印象は最悪というか、何してくれてんだお前って感じだったけど、話してみると二人とも気立ては良さそうではある。

「しかし、仮に二人を受け入れるとすると……」

本当に俺以外女だらけになってしまうんだが。女好きのエロ傭兵の誹りはますます免れなくなりそうである。そう言えばこいつらも俺の船に乗るとなると、例のこれなんてエロゲ？　みたいな慣習から考えて色々と不味いと思うんだが。

「なぁ、例のアレ。男の傭兵の船に女が乗るっていうのはー、みたいな慣習があるじゃないか。その方面は気にしないのか？」

「気にせぇへん。というか、もう旦那と他の三人はデキとるんやろ？　そこに新しく男のクルー入れるのはかえって危ないと思うで」

「まぁ、トラブルの種にしかならないでしょうね。特殊な事情でもなければ」

エルマがティーナの言葉に同意する。なんだよ特殊な事情って……とは思ったがなんだか嫌な予感がしたので聞くのはやめておいた。ケツの穴が縮み上がりそうだ。

「二人が気にしないっていうならまぁ……まだ乗ってもらうと決めたわけじゃないけど」

「あたし達、お買い得だと思うけどな。自分で言うのもなんやけど、顔は悪くないやろ？」

そう言ってティーナが俺の顔を見上げてドヤ顔をキメる。まぁ、確かに顔は悪くないというか、美少女の類だと思うが。姉が美少女なら双子の妹であるウィスカもまた同様に美少女顔だ。でもな。

「流石に小さすぎてちょっと」

「誰がちっさいんや！？　旦那がデカすぎるだけや！　あたしたちはもう二十七やぞ。立派なレディーや」

「マジか」

「マジや」

俺とほぼ同い年である。こんな小さいのに俺とタメなの？　マジで？　ドワーフの神秘だな。

「ヒロと同じくらいじゃないの？」

「お兄さんも同じくらいの歳なんですか？」

「まぁ……うん」

認めたくないが、同い年くらいらしい。えー……そうなのかぁ。そうなると、ミミがダントツで若いわけだな。俺よりも十歳以上若いわけだし。そうなるとサラは……？

「何か？」

「いえ、なんでも」

歳の話をし始めた辺りでどす黒いオーラを放ち始めたサラの威圧を受け流しておく。いくら見た目が小さくても女性に歳の話は厳禁だ。いいね？

「私が一番若いですね」

何故か張り合ってそこはかとなくドヤ顔オーラを放つメイが少し面白かった。そうだね、メイは生後二ヶ月経ってないもんね。確かにそうだわ。

「じゃあまぁ……案内を頼もうか」

「ヒロはパワーアーマーの装備や武器を見に行くんでしょ？　ならメイと二人でどうぞ。私とミミは普通に買い物とか観光とかしてくるから」

「それじゃあ旦那達の案内はわたしがするわ。ウィスカは姐さん達を案内したってや」

「うん。わかったよ、お姉ちゃん」

そういうわけで、俺とメイとティーナ組、ミミとエルマとウィスカ組で別れてブラドプライムコロニーを散策することになるのだった。

#１２０　ショッピング（物騒）（前書き）

コミカライズヤッター！　今日から掲載だよ！｜（：３」∠）｜（大歓喜

コミックウォーカーＵＲＬ
ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｗａｌｋｅｒ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔｓ／ｄｅｔａｉｌ／ＫＤＣＷ_ＭＦ０００００３３００１００００_６８／

ニコニコ静画ＵＲＬ
ｈｔｔｐｓ：／／ｓｅｉｇａ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｃｏｍｉｃ／４４８７３

#120　ショッピング（物騒）

「いやホント、昨日はごめんな。改めて謝っておくわ」
「謝罪はもう受け取ったけどな。というか、もう少し後先考えて行動したほうが良いと思うぞ」
「あはは……昔からウィーにはよくそう言われるわ」

ティーナが苦笑いを浮かべながら頭を掻く。彼女は妹のウィスカのことをウィーと呼んでいるらしい。ウィスカはティーナのことをお姉ちゃんと言っていたので、ティーナには特に愛称などは無いのだろう。ティーだとお茶だしな。

「俺の船のクルーになるかどうかはともかく、そこは直したほうが良いだろうな……言って直るものなら妹に言われてとっくに直ってるんだろうけど」
「よくわかってるやん」
「せめて少しは懲りろよ……」

糠に釘、暖簾に腕押しとはこういうことか。ウィスカの苦労が偲ばれるな。

「ご主人様に迷惑をかけた場合は私が責任を持ってスペース・ドウェルグ社に報告致しますので、お覚悟を。査定に響きますよ」
「うっ……き、気をつけるわ」

どうやら初対面の印象が強いらしく、ティーナはメイに対して苦手意識を持っているようである。実際のところ俺達の中で怒らせると一番怖いのは間違いなくメイだろうから、彼女の危機意識は正常

に働いていると言えるだろう。そもそも、メイにとっては俺が最も優先すべき対象である。
未だ俺の身内とは言えないティーナやウィスカは警戒の対象であっても庇護する対象ではないのだろう。ミミやエルマは俺の身内扱いなので、彼女もそれなりに振る舞うのだが。

「え、えーと……そう！　パワーアーマー用の装備やったな！」
「強引な話題転換だなぁ……まぁ、そうだよ。この前スプリットレーザーガンをずんばらりと真っ二つにされちまってな。新品を買いたいのと、何か良さげな武器でもないかと思ってな」
「ずんばらりって、何があったんや……」
「詳しくは言えないが、貴族の跡目争いに巻き込まれてな。その時の騒動で」
「あー、聞かないほうが良さそう。凄く聞かないほうが良さそう。でも生きてるってことは丸く収まったんやな？」
「まぁな」
「ならええわ。とりあえず個人用レーザー武器といえばここ、って言われるほどの老舗があるから、まずはそこやな」

貴族関連の話を聞いた時には本気でドン引きしていたが、すぐに気持ちを切り替えたのかティーナはズンズンと天井が低めの通路を歩き始めた。俺とメイもその後ろに続く。

「旦那は傭兵稼業やってどれくらいなん？」
「ん？　んー……まぁそこそこかな」

こっちの世界に来てすぐということになるのだろうが、そうなるとギリギリ半年に届くかどうかというところだろう。何気に恒星間移動でそれなりの日数を過ごしているしな。

「そこそこかー。まぁゴールドランクっていったら凄腕やんな。どれくらい儲かるん？」
「調子が良ければ一日で１０万エネルくらい」
「えっ、嘘やん。一日１０万エネルは吹きすぎやろ」

あはは、とティーナがまたまたご冗談を、とでも言いたげに笑い飛ばす。

「いや、本当だが。そうでもないと２０００万エネルもポンと出せるわけないだろ。宙賊の基地襲撃任務とか、紛争に傭兵として参加するとか、その他何かあればもっと稼げるぞ」

一日１０万エネルってのは特に何のミッションも受けず、宙賊を一日探して狩り続けた場合の金額だからな。

「マジで？」

ティーナが振り返って真顔で聞いてくる。

「マジで」

俺が頷くと、ティーナはススっと真顔で俺にじり寄り、俺の手を取って自分の胸に抱いた。ハハッ、なかなか硬い胸板ですね。洗濯板か何かかな？

「……旦那さん、あたしのこと貰ってくれへん？　今ならウィーもつけるで」
「結婚、結婚なぁ……まぁするとしてもミミとエルマとメイが先だな」
「くっ、四番手か……」

「何言ってんだ。もし君ら姉妹と結婚するにしても妹さんの方が上に決まってるだろ」
「なんでや！？　ティーナちゃんかわいいやろ！　っていうかウィスカとあたしは顔同じやろが！」
「顔が同じだから性格が重視されるんだよなぁ」

ガーッ！　と吼えるティーナの額を押しのけて左手で耳の穴をほじる。あとでメイに耳掻きでもしてもらおうかな。メイの耳掻きはそれはもう気持ち良いなんてものじゃないんだよ。

「くっ……まぁええわ。旦那にはティーナちゃんの可愛らしさを存分に思い知らせてやるからな」
「金目当てとわかっている相手に思い知らされるも何もないんだが」
「何を言うてんねん。金が稼げるってことは甲斐性があるってことや。女が甲斐性のある男に惹かれるのは自然の摂理ってやつやろ。金が無くても愛情は育めるかもしれんけど、金があればより大きく育つもんや」
「世知辛い意見だなぁ」
「そらそうや。ヒトっちゅうのは甘い幻想だけじゃ生きてはいかれへんやろ。おまんまの食い上げじゃ育つもんも育たんで」
「なるほど」

ティーナの洗濯板の感触を思い出す。ティーナも苦労してきたんだな。俺の考えを読んだのか、ティーナがジト目を向けてくる。
「そういうのじゃないからな。あたしはまだ成長期が来てないだけや」
「成長期って……」

道行く他のドワーフ女性にもさっと目を向ける。ふむ、サイズは

色々か……しかし成長期ねぇ。
「二十七で成長期が来てないって言い訳は辛くないか？」
「うっさいわボケ！」
尻を叩かれた。手は小さいのになかなかの威力だった……いてぇ。
☆★☆
「ここが目的の場所や」
「ほほう」
ティーナが俺とメイを案内した場所はレーザー武器をメインに幅広く携行兵器を揃えている武器の総合商店のような場所であった。俺のような傭兵稼業の人間らしき連中が結構出入りしているようである。
「なんか思ったより人が入ってるなぁ」
「この工房は既製品はもちろんのこと、オーダーメイドも受け付けてるからな。このコロニーに来る傭兵はそれなりの期間このコロニーに滞在することが多いから、その時間を使ってオーダーメイドの武器を拵えることも多いらしいで」
「オーダーメイドの武器か……ふむ」
自分専用のオーダーメイド武器。心躍る言葉だな。メイの交渉のおかげで予算はあるわけだし、是非そういうのも作ってみたいものだ。
「よし、入るか」
「せやな。あたしもここ来るのは久しぶりや」

先を歩いて店内に入っていくティーナ。こいつはどんどん口調の似非関西弁めいた感じが増していっているが、こっちが素なのだろうか？　意味が通じないほどの訛りじゃないからあまり気にならないけど。しかしこういうところもティーナの残念ポイントなんだろうな。

「ほほう、ほう、ほう」

店内はなかなかに広々としていた。店構えからもなかなか大きな店舗だというのはわかっていたが、どうやら奥の方は例のオーダーメイド武器を作るための工房になっているらしい。

「フクロウか何かかいな」

俺の様子を目にしたティーナが笑う。そう言われてもお前、この光景にはこう、男の子の心が擽られるものがあるだろう。所狭しとレーザーガンやレーザーライフル、その他諸々の武器が整然と並んでいる光景は、これが人を殺す道具だということがわかっていてもワクワクしてしまうものだ。

「まずはスプリットレーザーガンを買うか。ぶった切られた分は補充しておいたほうが良い」
「ご主人様、よろしければ私の分もご購入いただけると助かります」
「そうだな、メイ用にもあっても良いかもな。ついでだし、メイも良さげな武器があれば選んでおいてくれ」
「ありがとうございます、ご主人様」

メイがペコリと頭を下げる。メイの戦闘能力が向上すれば、それだけ俺達の安全性が向上することになる。正直それは大歓迎なので、

遠慮せずにどんどん言って欲しい。
「あたしは？」
「お前は武器は使わんだろ。というか、使うとしても俺がお前に何かを買ってやる謂れはないと思うんだが」
「けちんぼ。ちょっとくらいええやん」
「昼飯くらいは奢ってやるよ。美味けりゃお高いところでも構わんぞ」
「よっしゃ、任せとき」

一瞬で機嫌を直しやがった。現金な奴だな。案内料みたいなもんだと思えば別に腹も立たないが。思えばミミもエルマも俺にあまり何かねだったりしてこないからな。こうやって直截にものをねだられるのはちょっと新鮮な気分だ。
メイ？　メイはねだるというかなんというか、あれはもうねだるというよりは必要なものを要求するって感じでなんかねだるのとはちょっと違うような気がする。金額はでかいけど、個人的な趣味のものとか嗜好品ってわけじゃないからな。ものをせびるって意味では同じかも知れないが、なんか違う。

「グレネード類も置いてるのか。まぁ使ってないから必要はないな」
「そうですね。グレネードではないですが、こちらを購入していただいてもよろしいですか？」

そう言ってメイが持ってきたのは黒い金属でできた……なんだろう。投げナイフ？　にしては太くてゴツいな。針と言うにも太すぎる。金属製の投矢――ダートとでも表現するのが適当だろうか。
「超硬金属製のダートです。パワーアーマーの装甲などに使用されている素材ですね」

「それを使うのか？」
「はい。私が投げればパワーアーマーにもダメージを与えられますし、隠し持つのに最適なので」
そう言って彼女はメタルダートを収めるバンドやホルスターのようなものを俺に見せてきた。なるほど、それで身体の各所に隠し持つのか。見るからに重そうだけど……メイには負担にもならないだろうな。
「そんなアナログな武器で良いのか？」
「はい。アナログな武器ですが、それだけに信頼性は高いので」
「確かにそうそう壊れることはなさそうだな」
レーザーガンだけでなく実弾を放つ拳銃もそうだが、複雑な機構を持つ武器ほど些細な衝撃などで壊れてしまう可能性を孕んでいるものだ。その点で言えば金属製の投矢なんてものは変な話、ひん曲がってしまっても全力でぶん投げて敵に当てればそれなりにダメージを与えられるからな。そういう意味では単純でアナログな武器ほど信頼性が高いというのは頷ける話である。
「じゃあそれも買っていくか。なんなら伸縮式の警棒なんかも買っておいたらどうだ？　メイの能力なら近接戦闘をするときにそういうのがあると役立つだろ」
「はい、ありがとうございます。そうさせていただきます」
そう言って頭を下げ、再び顔をあげたメイの表情はこころなしか嬉しそうに見えた。表情は変わらず無表情なのだが、なんとなく雰囲気がそんな感じだ。まったく、無表情に見えてなかなかおねだり上手なメイドさんである。

#121　エンジニア（前書き）

ぽんぽんぺいーん！　短くて申し訳ねぇ―（∵3」∠）―（お犬様をだっこして安静にすることにします

#121　エンジニア

機械知性に物欲というものは存在しないようで、メイが俺に求めるのは全て必要なものだけである。それも基本的には俺の安全を守るためだったり、より俺に高度なサービスを提供するためのものであったりするので、恐らくメイにある『欲』というのもは主人である俺に奉仕したいという奉仕欲とでも言うべきものなのだろう。それが強すぎる故に要求する買い物の額がデカくなりすぎるというのが玉に瑕か。未だそれだけの価値があるかどうかは定かではないけれど。

「なーなー、旦那、これ、これ買って」
「……いや、なんで俺がお前の趣味のものを買ってやらにゃならんのだ？」
「ティーナちゃんこれ欲しいのっ☆」

わざとらしいというか、あざとい笑みを浮かべながらティーナが上目遣いで俺を見つめてくる。

「３点、やりなおし」
「採点辛いなぁ！　ちなみに１０点満点で３点？」
「……ハッ」
「１００点満点で３点は採点辛過ぎないか……？　ティーナちゃん可愛いやろ？」

不満げに唇を尖らすティーナ。まぁ、確かに見た目だけなら美少女かもしれない。今は後ろでポニーテールにしてまとめているが、セミロングの赤い髪の毛は意外とサラサラだし、顔立ちも整ってい

る。髪の毛と同じ赤い瞳は感情豊かな輝きを宿しているし、表情もくるくると変わって愛嬌がある。

「まぁ、可愛いか可愛くないかで言えば可愛いな」
「へぁっ……？」
「ティーナは可愛いと思うよ」
「そっ、そうか。せやろ？　せやんなー」

なんだか急に顔を赤くしてくねくねし始めるティーナ。可愛いは可愛いけどウザカワ系だよな、こいつは。残念なのはウザさが度を越すことがあるところなのではなかろうか。適度に締めるか褒めるかしてやれば可愛い感じを維持できるかもしれない。今みたいに。

「でもそれは買ってやらねぇから。戻してきなさい」
「えー。旦那金持ちなんやから少しくらい集らせてーや」

と、ティーナが不満げに言ったその瞬間、ずいっとメイが俺とティーナの間に割り込んだ。

「ティーナさん」
「はい」

ティーナがピンと背筋を伸ばして気をつけの姿勢になる。どうも先日メイに睨みつけられてからティーナはメイが苦手みたいだな。

「今、貴方が何故ご主人様と行動を共にしているのか、お忘れではないですか？」
「はい、すみません」
「貴女は御主人様にとって自分が有用であると、ご主人様と行動を供にする資格があるのだと証明しなければならない。そのためにス

ペース・ドウェルグ社は貴女をご主人様に傍につけ、その資格があるかどうかを見極めてもらおうとしているのです」
「はい、仰る通りです」
「それを理解していながらご主人様に集るというのはどういうことなのでしょうか？」
「申し開きもございません」

こころなしかメイに怒られたティーナがひと回り小さくなっているように見えるな。まぁ、元気とか明るさが売りのティーナからそういう部分を取り払ったらそうなるか。ミミもしょんぼりしていると一層小さく見えちゃうもんな。

「メイ、そのくらいでいいぞ。ティーナもそこまで本気で言ったわけじゃないだろうし、あんまり萎縮されてもやりづらいから」
「ご主人様がそう仰られるのであれば」

そう言ってメイが身を引くと、安心したのかティーナが溜め息を吐いた。

「ふぅ……旦那のとこのメイドさんめっちゃ怖いわ」
「言ってることは真っ当だと思うけどな」
「ちょっとくらいええやん？」
「しょうがないなぁ……なんて言うと思ったか？」
「いけずやなぁ」

文句を垂れながらもティーナが持ってきた謎の機械を戻しにいく。なんか説明していたような気がするが、興味がなかったというか理解できそうもなかったので右から左に聞き流していた。ふぉとにっくれぞなんすなんちゃらとか、くあんたむはーもなんちゃらとか言っていた気がするが、よくわからない。

「後はオーダーメイド武器かぁ」
「どんなのが欲しいのん？」

オーダーメイド武器の発注端末の前に立つと、ティーナがくっついて同じ画面を覗き込んでくる。特に意識しているわけじゃないんだろうが、距離感が近いなぁ。これは隙が多くて実は隠れファンが多いタイプなんじゃないだろうか。

「パワーアーマーで使う手持ち武器だな。閉所でも取り回しが良くて、接近戦もこなせるようなものがいい。貴族の剣にぶった切られないようなのがベストだな」
「それはなかなかの難題やなぁ。あれは強化単分子の刃を持つ高周波ブレードでな、アレにずんばらりされない素材となると、超重圧縮素材とかになる。滅茶苦茶頑丈な分滅茶苦茶重いし、値段も高いのが難点や。アレで武器なんか作ったら拳銃サイズで重さ３０ｋｇとかになってしまうで」
「いくらパワーアーマーで使うとしても、流石に重いな」

拳銃サイズでその重さとなるとパワーアーマーでも扱えないだろう。

「せやねん。だから基本的に超重圧縮素材は工業用途にしか使われん。一部戦艦の装甲材に使われる事があるくらいやな。一撃で真っ二つにされないようにするってことなら、全部を超重圧縮素材で作らずにコーティング材として使う方法もあるけど、手間がかかる分高くなるで」
「なるほど……なぁ、俺のさっきの要求でオーダーメイド武器をデザインしてくれないか。報酬も出すぞ。とりあえず手付けとしてさっきのよくわからんガラクタを買ってやろう」

こういうのは専門家に任せるに限る。素人の自分が自分なりに作ったオリジナル武器、というのはロマンがあるが、やはりプロに任せたほうが色々と安心感がある。ティーナの専門は船関係なのかもしれないが、素材工学なんかにも明るいようだし、俺よりもまともな武器をデザインしてくれそうだ。

「パワーアーマー用の手持ち武器で、閉所でも取り回しが良くて、接近戦もこなせて、可能であれば貴族の剣とも切り結べる武器なぁ……盛り過ぎと違うか？」

「予算はそうだな……１０万までで、優先順位としては閉所での取り回し、接近戦能力、貴族の剣と切り結べる能力の順だ。接近戦能力まで満足の行く性能だったら報酬１万、貴族とも切り結べるような出来なら報酬は倍だ。予算は使い切っても構わないが、超すのはＮＧ。かける予算が少なければ少ないほど評価するってことでどうだ？」

「やらせていただきます」

ティーナが真顔で即答した。

「よし、じゃあサポートにメイをつける。メイ、ティーナに俺のパワーアーマーの情報を提供して、武器開発に協力して当たってくれ。ついでにといっちゃなんだが、仲良くして関係改善に努めるように」

「承知いたしました」

メイが俺の命令を受けて恭しく頭を下げる。メイは素直で有能でとても良い子だ。ティーナが「げっ」とでも言いたげな表情をしていたが、これはティーナに対する課題でもある。既存のクルーと仲良くできないようであれば俺の船に乗せることはできないからな。

「じゃあ、二人はここに残って店の職人と話を詰めてくれ。決済権はメイに渡しておく」
「はい、ご主人様。仰せのままに」
「わかった。あたしはやり遂げるからな！」

そして報酬を手にするんや！　という副音声が聞こえてきそうだな。

「俺はミミ達に合流する。こっちの発注が済んだら連絡してくれ。合流するか船で落ち合うか決めよう」
「はい」
「りょーかいや」

頷く二人をこの場に残し、俺はミミ達と合流することにした。あっちの都合が良さそうなら合流して、都合が悪そうなら一人でぶらつくとしよう。まずは連絡するかな。そう考えながら俺は端末を取り出し、メッセージアプリを起動するのだった。

#121　エンジニア（後書き）

コミカライズヤッター！ ―（：3」∠）―（ダイレクト

コミックウォーカーURL
ｈｔｔｐｓ：／／ｃｏｍｉｃ－ｗａｌｋｅｒ．ｃｏｍ／ｃｏｎｔｅｎｔｓ／ｄｅｔａｉｌ／ＫＤＣＷ_ＭＦ０００００３３００１００００_６８／

ニコニコ静画URL
ｈｔｔｐｓ：／／ｓｅｉｇａ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｃｏｍｉｃ／４４８７３

#122　ドワーフの商店街（前書き）

遅れ申した……なんか最近お腹の調子が悪いな！―（：3」∠）―

#122　ドワーフの商店街

『こっちは用事が終わった。メイとティーナには頼み事をして店に残ってもらったけど。そっちはどうだ？』

起動したメッセージアプリでグループチャットを送り、返信を待っている間に歩き出す。買い物をすると言っていたので、恐らく三人がいるのは商業区画の中でも食料や生活雑貨などを売っている方面だろう。

「どうするかねぇ」

ティーナとウィスカを受け入れるかどうか、ということについて歩きながら考える。

技術者の同行というのは非常に好ましいことである。何かしらの機械的なトラブルがあった時に対応できる人員がいると安心感が違うからな。

問題はあの二人があの手この手でクリシュナのデータを引っこ抜いてスペース・ドウェルグ社に渡してしまう可能性がある点だろうか？

実のところ、それはあまり警戒していないんだよな。クリシュナや納品される母艦の電子戦防御に関してはメイが一手に引き受けている。データを引っこ抜こうとしてもメイが防ぐだろうし、二人がそのような行動を取った場合メイが咎めることになるだろう。当然、俺にも報告が上がってくることになる。

そうすればどうなるか？　いくら可愛かろうが懐に俺の血を吸う虫を入れて歩く趣味はない。叩き潰すか、放り捨てるかすることになるだろう。無論、その時は大元も叩かせて頂く。存分に。

まぁ、そうしようとは思うが、実際にそうすることができるかは怪しいものだ。俺的にティーナの性格はさほど嫌いな類のものではないのだ。少々あざといところもあるが、それがまた気楽で良い。気安さが逆に心地良いように思えるのだ。

ウィスカに関してはまだ一緒に過ごした時間が短いからよくわからないが、そこはかとなく幸が薄い感じがする。姉のせいで何度も貧乏くじを引かされてきたんだろうなぁということが想像に容易いな。昨晩姉に付き合って俺の所に来た辺り、相当姉のことを慕っているか流されやすいのか……まだ判断がつかないな。

とにかく、二人の受け入れに関してはエンジニアを船に乗せるメリットと、彼女達が船に乗ることで少なからず俺やクリシュナの情報が流出するであろうというリスクのバランスをどう見るかだな。

俺やクリシュナに関する情報なんてものは、長く傭兵生活を続けていけばいずれ知れ渡ってしまうものである。出来得る限り流出しないに越したことはないだろうが、いち傭兵である俺がそこまで気を張って制御しなければならないものかというと、正直俺は首を傾げざるを得ない。

そもそも俺は隠れ回る気がない。これからも傭兵として活躍していくつもりだ。つまり、これからもクリシュナを使って傭兵として活動していくつもりだ。そうなると、いくらクリシュナが強い船で俺がそれなりの腕を持っているとしても、クリシュナが機械である以上はメンテナンスをしなければいずれガタが来る。それを防ぐには確かな腕を持つエンジニアに整備をしてもらう他無い。

つまり、情報の流出を嫌ってクリシュナを誰にも触らせないようにしていても、いずれ詰むのである。クリシュナの秘密を守るためにクリシュナを失ってしまうというのは本末転倒ではなかろうか。それなら多少の情報流出などは気にせず、クリシュナを完璧に整備してもらって末永く使うほうがよほどお得だろう。俺はそう考える。

クリシュナが整備要らずで永遠に性能を維持し続けられるなら問題ないんだが、この世界はゲームではないので機械というものは放

っておいても劣化するし、使っていればより劣化は早いのだ。これから先もクリシュナで戦い続けるのであれば、どこかで妥協はしなければならない。

「おっと」

考えながら歩いているうちに商業区画の半ばまで歩いてしまっていた。ポケットから小型情報端末を取り出してメセージアプリをチェックする。

『今はウィスカさんとティーナさんが船に乗る際に必要になるものを案内していました。もう少しかかりそうです』

「別にまだ乗せるって決めたわけじゃないんだけどなぁ」

そう言いつつ、乗せる方向に心の天秤が大きく傾いているのは確かだけれども。結論としては彼女達を船に乗せるメリットがデメリットを上回っていると俺は考えているわけだ。これに関してはミミとエルマ、それにメイにも考えを披露してもらうのが良いだろう。最終的な判断を下すのは俺だが、三人の意見も聞いておきたい。

『わかった。適当に商業区画をブラブラしてるわ』

再度メッセージを送り、今度は考え事をしないで店を見て回ることにする。ドワーフの多く住むコロニーということもあってか、工芸品のようなものが多いようだ。というか、既存のハイテク製品に工芸品的価値を付与したものを売っている店が結構多い。

例えば見た目が木製の自動調理器とか、装飾されたレーザーガン用のホルスターとか、トゲのついた肩パッドとか。いや待て、何だこの肩パッドは？　防具……？　ファッション……？　俺には身につけてヒャッハー！　とか言って遊ぶくらいしか使い途が思いつか

ないんだが。

「兄ちゃんお目が高いね。そいつはサーマルマントだよ」

肩パッドをスルーできずに立ち止まった俺にちょうど店頭にいたドワーフの店員が声をかけてきた。髭面で年齢はよくわからないが、声は思ったより若い感じである。

「サーマルマント。マント？　これがマント？」

どう見てもヒャッハー肩パッドである。マント要素が皆無だ。

「そうさ。一見マントっぽくない見た目にするのに苦労したよ。肩につけてスイッチを入れるとマイナス５０度からプラス５０度までの寒さ、暑さに快適に対応できるんだ」

「そりゃすごい。動力は？」

これがあれば年中Ｔシャツと短パンでも過ごせるってことか。それは凄い。見た目がトゲ付き肩パッドじゃなかったら買っていたかもしれない。

「エネルギーパックを一つずつ入れて使うんだ。それで２万時間は動くよ」

２万時間というとおよそ８３３日である。エネルギーパック２つで２年以上も稼働するのは凄いな。

「ちなみにいくらだ？」

「うーん、改造に苦労したからなぁ。殆ど新開発みたいなものだし。そうだな、３０００……いや、２５００エネルでどうだい？」

「う、うーん……」

簡単に買える金額だが、見た目がなぁ……これを装備したら手斧を持ってヒャッハー！　って言わなきゃならない義務感に駆られそうだ。髪型もモヒカンとかにするべきじゃないだろうか。いや、似合わねぇな。俺には絶望的に似合わねぇな。

今の俺は日々のトレーニングで細マッチョとでも言うべき体型になっている。このトゲ付き肩パッドはもっとこう、ガタイの良い人間が身につけるべきアイテムだ。

「俺には似合いそうも無いからやめとくよ。ついでに聞きたいんだが、改造前の普通のサーマルマントは無いのか？」

「あるよ。こっちは８００エネルだね。エネルギーパック一個で３万時間は動くよ。やっぱり身体をすっぽりと覆うマントの方が効率が良いんだよね」

そう言って店員のドワーフが店内から持ってきたのは、若干光沢のある白い色のビニールのような革のような不思議な質感の素材でできたフード付きのマントだった。

「もっと目立たないような色のは無いのか？」

さすがにこれは目立つだろう。

「ああ、カメレオン機能もついてるのが良いのかい？　ならこっちだね。カメレオンサーマルマントは１２００エネルだよ」

そう言って今度はザラザラとした質感の焦げ茶のマントを持ってくる。そして首元部分にある留め具のようなもの店員が弄ると、マントの柄が灰色の都市迷彩のようなパターンに変わった。

「買うならそれが良いな」
「こっちの方がデザインが良いよ？　ほら、似合う似合う」
そう言ってドワーフの店員が俺の肩に肩パッドを乗せて営業スマイルを浮かべる。どうやって俺の肩にくっついているんだ、この肩パッドは。これが技術の無駄遣いというやつか。
「いや、そっちのカメレオンサーマルマントで良い。それを……そうだな、予備も含めて五着くれ」
「五着もかい！？　勿論ですとも！」
店員がホクホク顔で店内へと走っていく。俺とミミとエルマ用で予備に二枚。あるいはティーナとウィスカ用ってことでいいだろう。温度調節機能と周りの風景に溶け込むカメレオン機能付きのフード付きマント……何かの役に立つこともあるかも知れない。環境の過酷な惑星に不時着してしまった時とか、生命維持装置の壊れたコロニーに調査に入る時とかに。ＳＯＬではそういった感じのイベントとかもあったんだよな。備えておいて悪いことはないだろう。
「お大尽の旦那、うちにも良い品がありまっせ」
「ちょい、先にうちが目ぇつけたんや。旦那ぁ、うちの商品もみてって？　な？」
「おいおい、先にうちの商売が先だよ。ささ、旦那、奥へどうぞ」
いつの間にかドワーフの商人達が俺の背後に集まっていた。はっはっは、お前ら商魂逞しいな？　あと二人目の女商人、そんな風にしなを作ってもまったく心が動かないぞ。
しかしやらかしてしまったぞ、これは。どうしたものか、と考えながら俺は肩パッド売りのドワーフ商人の店へと足を踏み入れるの

だった。

#123　ドワーフ焼き

ドワーフの商人達の押し売りを断るのはなかなかの難事であった。言葉巧みにガラクタを売りつけようとしてくる。微妙に興味を惹くものとガラクタを抱き合わせで販売してこようとしたりな。なんとなくボラれているような気がしたので、あとで地元の知り合いともう一回来るわ、と言ったら執拗に売りつけようとしてきやがった。

そそくさと去っていくのもいる辺り、俺を金持ちと見て搾り取ってやろうという輩もいたのだろう。ボラれるといっても俺の所持金からすれば大した金額でもないのだろうが、ガラクタを置いておけるスペースにも限りというものがある。無駄な買い物をしなくてよかった。

でもコンパクト調理キットは買った。エネルギーパックで長時間稼働する優れもので、工具箱くらいの大きさの箱にクッキングヒーターと可食判定スキャナー、それにちょっとした食器類と各種調味料が収められている一品だ。これももしかしたらどこぞの未開惑星に不時着した時に役に立つ……かもしれない。

いや、不時着したとしてクリシュナや母艦の設備が使えないほどに損傷していたら色々と詰んでると思うけどね！　その時にはこいつが役に立ったりする前に全員墜落の衝撃で挽き肉になっていそうな気がするが、まぁこの前のリゾート惑星のような場所に行った時とか、そういう時にね？　あとクリシュナ内で俺が腕を振るうとか？

無駄遣いであったという自覚はあります。はい。ま、まぁ多少はね？　コンパクト調理キットはカメレオンサーマルマントと一緒にクリシュナに配送してもらっておいた。クリシュナというか、クリシュナを今預けている整備工場にだな。整備が終わったら運び込んでおいてくれることになっているので問題あるまい。

「意外と上手く捌いてたわね」

ドワーフの商人達を追い払ったところで声をかけてきた者がいた……というかエルマである。どうやら女子の買い物は終わったらしい。メイとティーナからは連絡が来ていないので、恐らくまだ武器のオーダーメイドに時間をかけているのであろう。仕事熱心で結構なことである。

「見てたのか」

「ええ、途中からだけどね。もっと要らないものを買わされるんじゃないかと思ってたんだけど、予想が外れたわ」

「だから言ったじゃないですか。ヒロ様は毅然と断れるはずだって」

残念そうに肩を竦めるエルマの横でミミが満足そうな顔をしている。

「でもヒロって結構甘々じゃない？　ミミや私を大金を払ってまでホイホイ拾っちゃうくらいだし」

「そりゃそうだけど、それとこれとは別の話じゃないかなぁ」

エルマの時はともかくとして、ミミの時はもしかしたら仲良くなれるかも？　くらいの下心はあったし。まさかいきなりああなるとは予想もしていなかったが。本当にカルチャーショックだったよね。

それが今では船に乗るというデッドボールシスターズの心配をするようになったのだから、俺もこっちの世界の流儀にだいぶ染まってきたようだ。人というのは順応する生き物だよなぁ。

「そ、そういえば調理キットを買っていましたよね？　どなたか調理をされるんですか？」

微妙な空気を読んだのか、ウィスカが話題を変えてきた。

「ヒロ様が料理を作れるんです。生のお魚とか、お野菜とか、お肉を使って。凄い腕前ですよ」

「いや、全然凄くないから。雑な男料理だから」

「えー、そんなことないと思いますけど……本当にとっても美味しかったですよ？」

「そうなんですか……珍しいですね、今時ドワーフ以外で調理技能を持っている方って」

「ああ、そう言えばドワーフって料理人も多いわよね。このコロニーの食事処でも自動調理器を使っていないお店が多いし」

「使っていないわけではないんですけどね。生鮮食品は高いですから、殆どのお店は自動調理器で作った食材を調理しているんですよ」

「それって二度手間じゃないか……？」

「なんだか自動調理器で作った料理って味気なく感じてしまいませんか？　お手軽なのも美味しいのも確かだとは思うんですけど」

「あー、なんとなくわからないでもないな」

高性能なだけあってテツジン・フィフスの作る食べ物は美味しいからそこまで気にはならないが、一番最初に積んでいた自動調理器の料理はなんとなく大味な感じだった。

「そうでしょうか？」

「私は気にならないけど」

ミミとエルマが揃って首を傾げている。ミミは多分生まれた時から自動調理器で作った食事を食べてきたから気にならないんだろうな。エルマはそもそもジャンクフード舌だから……ピザとかステーキばっか食ってるよ、このエルフ。なのに太らない。エルフの神秘を感じるな。

「どうもこの辺りの感性はドワーフ以外の方にはあまり理解されないんですよね。お兄さんとは上手くやっていけそうな気がします」
「そいつは何よりだな。じゃあここは一つ、昼飯はドワーフならではの飯屋ってのに行ってみないか？」
「良いですよ、ご案内します。何が良いかなぁ……」

ウィスカが虚空に視線を彷徨わせてからポンと手を打つ。

「そうだ、アレにしましょう。安くて楽しくてお腹いっぱいになりますし」

☆★☆

メイとティーナに連絡を入れて俺達が向かった先はこぢんまりとした食堂のような店であった。店内にはテーブル席と小上がり席があり、小上がり席のテーブル下は掘りごたつのような構造になっているらしい。そして、小上がり席のものもテーブル席のものも普通のテーブルではなかった。テーブルの中央には黒く鈍い光を放つ黒い金属製の板――恐らく鉄板が設置されているのだ。

ちょうど昼飯時だったせいか店内の席は全て埋まっており、席が空くまで少し待ちそうである。メイとティーナが到着するのももう少し先になりそうなのでかえって丁度良いかもしれない。

「ここは何のお店なんですか？　クレープ……？　とはちょっと違うようですけど」
「所謂ドワーフ焼きというやつですね。様々な具材を混ぜ込んだ生地を鉄板で焼いて、熱々のうちに色々な薬味やソースをかけて食べるものです」
「ドワーフ焼き」

見たところ生地の上に具材を重ねて焼くのではなく、具材を混ぜ込んだ生地を焼いているように見えるので、どちらかというと広島風ではなく関西風のお好み焼きのように見える。俺もお好み焼きに関して造詣が深いわけじゃないから、断言はできないけれども。

「はい、ドワーフ焼きです。皆で楽しく作りながら食べられるので、外から来るドワーフ以外の種族の方にも人気なんですよ」

「なるほど！　楽しそうですね！」

ミミは既に目をきらきらと輝かせている。エルマも興味深そうに客が自ら焼いて作るドワーフ焼きを見ているようだ。俺としても興味深い。やっぱり異世界でもこういう料理っていうのはあまり変わらないものなんだな。

「お待たせー」

「お待たせしました」

ドワーフ焼きの匂いに空腹を刺激されながら待っているとティーナとメイが到着した。ティーナはなんだかニコニコとしているので、恐らくは満足いくものが作れたと確信しているのだろう。メイも一緒にいたわけだし、エンジニアにありがちな趣味に走りまくって癖が強すぎる一品とかにはなっていないと思いたい。なんとなくティーナは感覚と感性で生きていそうな感じがするから、少し心配なんだよな。

「ドワーフ焼きかー、どうせならもっと高いとこ案内すればええのに。庶民的すぎるやろ？」

「お姉ちゃん……」

ティーナの言動にウィスカが呆れている。そういや昼飯奢ってやるって言ってたんだっけ。高いとこでも良いぞって言ってたのに確かにこれは庶民的かもしれないな。値段はわからんが、そんなに高いものとは思えないし。

「ま、そういうのはまた今度でも良いだろう。俺達だって高級ドワーフ料理には興味があるしな」

「そうですね、私も興味があります！」

銀河中のグルメを食べ尽くすというのを目的にしているメイとしても高級ドワーフ料理というのは気になる存在であるらしい。しかし、お詫びの高級な品として例の動く燻製肉が出てくるわけだからな……とびきり活きの良い新鮮なびっくり料理かもしれん。油断はしないようにしておこう。

そうして待っているうちに小上がりの大きめの席が空いたらしく、席へと案内された。俺達はともかく、メイド服姿のメイがとてつもなく浮いている感じがするな。本格的にメイド服以外の服装も考えたほうが良いかもしれない。

「任しとき。凄いとこ紹介するで」

「私がチェックしておきますから」

ニヤリと笑うティーナの横でウィスカがペコペコと頭を下げている。いや良いんだけどね。さすがに一食で何万エネルも飛んでいくわけでもないだろうし。こことかメニューを見てみたら軒並み一人前辺り５エネルから８エネルくらいだ。メイは食事を摂らないから、俺とミミとエルマと姉妹の五人だと、サイドメニューやドリンク含めてどんなに食べても１００エネルは超えまい。

「注文は任せる。俺達はよくわからないしな。俺は飲み物は冷たい

お茶か水が良いな」
「私もヒロ様と同じにします」
「私はお酒にしようかしら。ドワーフ焼きには何が合うの？」
「ビールが定番やけど、あたしはドワーフ酒の水割りかハイボールが好きやな」
「私はドワーフ種のお茶割りが好きですね」
「じゃあハイボールにしようかしら。貴女達も飲むわよね？」
「そりゃ当然――」
「お　姉　ち　ゃ　ん　？」
「――お、お茶にするで。禁酒二週間やからな。うん」
「あらそう。それじゃあ私だけが飲むのはやめとくわ。私もお茶か冷たい水で」

サラッと禁酒二週間を忘れかけていたな、ティーナは。会社からの正式な処分だから、破ると大変なことになるんだろう。ティーナを呼んだウィスカの声の迫力が凄かった。

「女将さーん、ブタタマ三とイカタマ三！　あと冷たいお茶六つ！」
「はいよー」

ティーナが大声でオーダーを通し、カウンターから店員ドワーフ――女将さんの声が帰ってくる。ちなみに、女将さんも見た目は合法ロリなので、傍目から見ると少女同士の微笑ましいやり取りだ。なんだか調子が狂うな。

「アナログねぇ」
「こんなんにわざわざタブレットぽちぽちすることないやろ。なんでもかんでもテクノロジーを使えば良いってもんでもないで」
「エンジニアから出てくる言葉とは思えないな」
「エンジニアだからこそや。ダイレクトに音声で正確に情報のやり

とりができる機能があるのに、わざわざコンソール用意してポチポチと用件を打ち込んで、それをわざわざディスプレイで目視確認するなんて無駄やん？」
「なるほど？」

わかるようなわからないような話だ。そんなやり取りをしているうちにドワーフ焼きのタネが入ったボールのような器や飲み物を女将さんが俺達の席へと持ってくる。

「はいお待たせ」
「あんがとさん。ほい、飲み物回すでー」

全員に飲み物が行き渡ったのを確認してティーナがお茶の入ったグラスを掲げる。

「それじゃああたし達の出会いに乾杯や！」
「かんぱーい」

正直その音頭はどうなんだ？　と思わないでもなかったが、こういう場にそういったツッコミは野暮というものだろう。まずは素直にドワーフ焼きとやらを楽しもうと思う。

#124　仕事の成果と寸評（前書き）

サムイ……サムイ……お犬様が膝の上から離れねぇ――（：3」∠）

――（足が痺れてくる

#124　仕事の成果と寸評

「お上手ですね」
「ヒロ様は料理ができますからね！」
「いや、これくらい誰でもできるだろう……」

片面が焼けたお好み焼きをひっくり返したところでウィスカが感心したような声を、ミミが何故か誇らしげな声を上げる。

「それにしてもあれよね。これ、焼く前の見た目がゲ――」
「姐さん、それ以上はアカン。それ以上言うたら戦争や」

隣ではまったく焼く気無しな体勢でビールを飲んでいるエルマが危険な発言をしようとしてティーナに止められていた。俺もその発言はどうかと思うぞ。

ちなみに、ドワーフ焼きはお好み焼きのようで、やはり別物の食い物であった。

食感とか味は近いんだが、何か違う。キャベツっぽい食材の食感がいまいちだし、豚肉っぽい食材やイカっぽい食材も何か違う。一味足りない。でも青のりっぽい粉末の風味とか鰹節っぽい粉末の風味とかマヨネーズやソースの味は完璧だ。

総合的に見ると……まぁ、八割くらいお好み焼き。ほぼお好み焼きで良いと思う。

ちなみに、メイはものを食べることが出来ないわけではないが、後で廃棄することになるらしいので食事には参加せず、お行儀よく座ってエルマの分のドワーフ焼きを焼いている。ティーナとウィスカの焼き方を見て学習したらしく、その手付きに危うさのようなものは一切見当たらない。

「で、できましたっ」

そうしているうちにミミも自作のドワーフ焼き第一号を作り上げることがかなったようである。ひっくり返すのに失敗して若干いびつな形になってはいるが、問題なく食べられそうである。

「ヒ、ヒロ様、よ、良かったらその……」
「一口くれ」
「はいっ」

あーんと口を開けると、ミミは金属製のヘラで一口分を切り取ってそのまま突き出してきた。さすがに火傷はしたくないので、息を吹きかけて適度に冷ましてからミミの作ったドワーフ焼きを頂く。

口の中に広がる生地のほのかな甘さ、キャベツっぽいサムシングの確かな甘さ、ソースとマヨネーズの濃厚な旨味、そして鼻に突き抜ける青のりの香り……うん、美味しい。食材の関係で少し残念な部分は完璧なソースとマヨネーズ、そして青のりっぽいものや鰹節っぽいものが十分に補っている。

「ど、どうですか？」
「美味しいぞ。上手く焼けてる。練習すれば他の料理も作れるようになるんじゃないか？」
「そ、そうですか？　えへ、えへへ……」

ミミがくねくねしながら鉄板の上のドワーフ焼きをもの凄い勢いで一口サイズにカットしていく。凄まじいヘラ捌きだ。もしかしたらミミにはナイフ格闘の才能があるのかもしれない。今度メイにレクチャーさせてみようかな。

「せや、旦那。あたし達の成果見たってぇな」

そう言ってティーナが小型情報端末を取り出し、熱気を上げる鉄板の横に置いて操作すると手斧のようなもののホロ映像が投影されて浮かび上がってきた。

それはまるで手斧か大鉈のようであった。だが決してそれは手斧や大鉈ではない。手斧や大鉈のグリップには普通トリガーなどはついていないし、ブレードと銃身が一体化していることもないだろう。寧ろこれは超大型の拳銃――いや、切り詰めたショットガンか、ライフルか。

これは本来両手で扱うような大きさの銃器の銃身と銃床を片手でも持てるように無理やり切り詰め、その銃身の下に凶悪さを隠そうともしないブレードを取り付けたトンデモ武器だ。

「かっこいい武器ですね！」

トンデモ武器のホロ映像を目にしたミミが目を輝かせている。ああうん。割とパンキッシュなファッションが好きなミミとしてはパッションを感じそうな見た目だね。俺としてはただでさえ悪人面というか強面のＲＩＫＩＳＨＩがこんな武器を持ったらどう見ても悪役だよなぁという感想が先に出てくるわけだが。

「旦那のパワーアーマーなら片手で扱える重さや。だから、三丁発注しておいたで。両手に一丁ずつ、もう一丁は失くしたり故障したりした時用の予備やな」

ホロ映像に表示されている金額はきっちりと予算内であった。メイをつけておいたので心配はしていなかったが、良い仕事をしてくれたようだ。

「射撃スペックはスプリットレーザーガンに若干劣りますが、拡散率を絞ったので精度は上がっています。格闘武器としては刃部分にのみ超重圧縮素材を使ったことによって、強化単分子素材の刀剣とも打ち合えるスペックを持ちつつ軽量化にも成功しています。お使いのパワーアーマーの膂力なら同等のパワーアーマーの装甲すら打ち砕き、ダメージを与えることが可能です」

メイがスペックの説明をしてくれる。生身の人間について言及がないのは、言うまでもなく真っ二つにでもなんでもしてしまえるからであろう。

「なんというか、悪そうな武器ねぇ」

ホロ映像を見ながらエルマがニヤニヤと笑う。

「デザインの調和っちゅうんも大切やで。その上で要求スペックを満たしていれば花丸やな。名前は……せやなぁ。ハチェットガンなんてのはどうや？」

「ハチェットガンね。奇にてらうよりはシンプルで良いんじゃないか」

漢字にすると斧銃。語感が微妙だな？　やっぱハチェットガンで良いだろう。

「カタログスペック上は問題ないみたいだから、後は実際の使い勝手だな。報酬に関しては実物が届いて、使い勝手を確かめてからにさせてもらうぞ」

「妥当やな」

俺の言葉にティーナが頷き、ウィスカが首を傾げた。

「報酬？」
「せや。旦那が要求したスペックを持つパワーアーマー用のオーダーメイド武器の設計依頼を請けたんや。最低限のスペックを満たせば1万、スペックをすべて満たしたら倍額の2万っちゅう話でな」

ティーナがニコニコと満面の笑みを浮かべながらウィスカに事情を説明すると、ウィスカが俺に切なげな視線を向けてきた。

「お姉ちゃんだけですか……？」
「あー……うん、すまん。次に何かあったらウィスカに頼むから」
「約束ですよ？」
「わかったわかった……ん？」

今の流れは今後もお付き合いするアレでは？　ウィスカに視線を向けると、彼女はなんだかニコニコしているし、ティーナはニヤニヤというか『計画通り……！』みたいな顔をしていた。ミミは幸せそうにドワーフ焼きを食べていて、エルマは苦笑いを浮かべている。なんだか順調に既成事実を積み上げられている気がするな。まぁ、何にせよまだ結論を出すつもりはないが。

「メイ、技術者としてのティーナはどんな感じだったんだ？　所感を聞かせてくれ」
「ちょっ……本人を前に寸評すんのはやめてや！？」

顔芸をしていたティーナが突然素に戻って慌て始める。しかし、メイがそんなティーナに構うわけもなく、彼女はドワーフ焼きを作る手を止めずに口を開いた。

「工学知識については問題ないかと。少なくとも、一流のエンジニ

アと言っても問題ないだけの知識を有していると考えられます。発想に関してはどちらかと言えば閃き型ではなく、堅実な考え方をするようです。言動などに迂闊な点は多いようですが、仕事には情熱を持って取り掛かるようですね。ご主人様とのトラブルも、仕事への行き過ぎた情熱と持ち前の迂闊さが最大限に発揮されてしまった結果でしょう」

「褒められてるのか駄目出しされてるのかようわからん評価やな」

「的確なんじゃないかな？」

微妙な顔をしながらドワーフ焼きを口にするティーナの横で、ウィスカがメイの評価を肯定する。

感性で生きてるっぽいティーナは閃き型というか天才肌なんじゃないかと勝手に思っていたんだが、技術者としてはどちらかというと堅実なタイプであるらしい。そう言われてみればハチェットガンもデザインはともかく、コンセプトや性能は尖った所もなく堅実ではあるよな。

「けったいなもんを作るのはウィスカのほうが得意やもんな」

「けったいなんて失礼な。私は中途半端なのが嫌いなだけだよ」

「それはわかるけど、ピーキー過ぎるのはあかんやろ。この前試作したスラスターとか中途半端な慣性制御機構やったら中の人が血を吐くで」

「でもスラスターは出力が高くて反応が早い方が良いでしょ？」

「それにも限度があるっちゅう話や……」

姉妹がなんだか恐ろしい話をしている。半端な慣性制御だと中の人が血を吐くって、一体どんな殺人的な加速をするっていうんだよ。恐ろしいわ。

「大人しそうに見えるけど、実はウィスカの方が危ないのでは？」

「私はクリシュナのコックピットで挽き肉になるのは嫌よ」
「俺だって嫌だわそんなもの」

ともあれ、今日一日行動を共にして姉妹の人柄はそれなりに知れたのではないかと思う。あとはホテルに戻ってからミミとエルマの二人からウィスカについて話を聞いて、こちらからもティーナとのことを話せばある程度の判断材料が揃うだろう。

第一印象はともかく、二人の人柄は嫌いではないので俺としては船に乗せる方にだいぶ天秤が傾いているのだが……ミミとエルマ、それにメイの意見も大事だからな。まずは皆で話し合うことにするとしよう。

#125　帰路の話し合い

「ほんじゃまたなー」
「ご馳走様でした」

ティーナが笑顔で手を振り、ウィスカが深々とお辞儀をしてから踵を返して去っていく。俺達も各々彼女達に別れの挨拶をしてホテルへの帰路へと着くことにした。

「美味しかったですね、ドワーフ焼き。それに、自分で料理を仕上げるのがとっても楽しかったです」
「普段料理をしない人は余計そう思うんだろうな。コンパクトな調理キットを買ってみたし、今度テツジンに食材を作ってもらって何か作ってみるか」
「私もお手伝いしますね」

ミミはドワーフ焼きの影響か、料理というものに興味が出てきたようである。ただ焼く、茹でる、炒めるくらいならそう難しくもないし、今度ミミに料理でも教えてやろう。地球だと最初の料理はスクランブルエッグ辺りがお手軽だったんだが、この世界で生卵は見たことがないな。まずはテツジンでどんな食材を作れるのか調べてみるべきだろう。

「見た感じ、人柄は悪くなさそうよね。ちょっと調子に乗りすぎるところがあるというか、何かあると視野が狭まるのが難点だけど。技術者としての腕は良いの？」
「そうですね。スペース・ドウェルグ社にも問い合わせをしたのですが、ティーナの技術評価はＡ、ウィスカの技術評価はＳですね」

「ウィスカの方が腕が上なんだ？」

意外そうな声を上げるエルマにメイが静かに首を振った。

「いえ、同程度です。スペース・ドウェルグ社の評価基準では優良な勤務内容に加えて、何らかの技術的貢献を成し遂げた場合にＳ評価がつくようですね。内容までは調べませんでしたが」

教えてもらえませんでした、調べられませんでしたではなく、調べませんでしたという辺りがメイらしい。やろうと思えば出来てしまうのだろうか？　出来てしまうのかなぁ……怖いから聞かないでおこう。

「優秀ってことで間違いはないわけだ。実際のところ、皆はどう思う？　俺は乗せる方にかなり天秤が傾いているんだが」

「どう判断して乗せる方に傾いているのかを聞いても良いかしら？」

「簡単に言えば、多少のリスクを飲み込んで実利を取るってところかな。スペース・ドウェルグ社の紐付きの人員を船に乗せることによって多少の情報漏えいは起こるだろうが、無視できる程度だと考えた。それ以上にエンジニアを船に乗せるメリットの方が上だな、と。メイの話から腕も一流と言って問題ないようだとわかったわけだしな」

「なるほどねぇ、ミミはどう思う？」

俺の意見を聞いたエルマがミミに話の矛先を向ける。ミミも自分なりの意見をまとめていたのか、特に言い淀むこともなく自分の意見を口に出した。

「ウィスカさんともティーナさんとも仲良くやっていけそうですし、私は良いかなと思います。でも、リスクを完全に排除するなら断る

というのも手ではないでしょうか？　スペース・ドウェルグ社に所属していない、優秀なエンジニアを探してみるとか」
「難しいと思います。技術は日進月歩です。最新の技術が使われている現場で腕を振るっているエンジニアというのは、基本的にいずれかの企業に務めていますから。企業の紐付きではない優秀なエンジニアとなると、存在しているのは技術系学府の研究室くらいではないでしょうか」
「うーん、それじゃあメイさんみたいなメイドロイドや整備用のロボットを増やすとか」
「それも一つの手ではありますが、私並みのメイドロイドを増員するとなるとコストがかなり高くつきますね。それ以前に、一人の主に複数の機械知性が仕えるのは難しいかと思います」
「そうなんですか？」
「我々にも事情があります。一時的なものであればまだしも、専従するとなると色々とあるのです」

そう言ってメイは口を閉ざしてしまった。機械知性の事情とやらに関してはあまり話す気がないらしい。俺が話してくれと言えば話してくれそうだが、言いたくないこと、聞かせたくないことをわざわざ聞くこともあるまい。
でも、ちょっと気になるから今度二人きりになったときにでもそれとなく聞いてみよう。うん。

「つまり、紐付きでないフリーのエンジニアを探すのは難しいというわけね。まぁ、腕の良くて問題の無いエンジニアなら普通に考えてどこかの企業でそれなりの待遇で働いている筈よね」
「はい。自称腕の良いフリーのエンジニアというのは所謂詐欺師の類か、何かしらの問題があって企業から解雇された人間ではないかと」
「それを言ったらティーナ達って正にそれよね」

確かに。顧客相手に暴力事件を起こして解雇寸前、まさに今は首の皮一枚で繋がっているような状態だな。

「それは確かにそうだな。でも、チェンジしてもらうとして次の人達と上手くやれるかはわからないよな。髭もじゃの飲兵衛のおっさんとか嫌だぞ、俺は」

それなら多少問題があっても可愛い双子の姉妹の方が良い。手を出すかどうかは別として、目の保養になるし。

「随分と庇うわね。気に入ったの？」

「……別にそういうわけじゃないけど、ここでチェンジしたらあの二人の未来が暗そうじゃないか。それってなんだか寝覚めが悪いだろ」

「ふーん……？　まぁ、ヒロがそう言うなら私はそれで構わないけどね。あの二人に関してはメイに見てもらえれば問題ないでしょうし」

「はい。船内で妙な動きをしないように二人には監視用の小型端末をつけておきます」

「小型端末？」

「はい、シエラⅢのミロが使っていた端末と同じようなものです。機能が少ない分、小型ですね」

「へぇ、そんなのもあるのか」

シエラⅢの統括ＡＩであるミロとはバレーボール大の浮遊型端末で俺達とやり取りをしていた。同じような端末を扱う能力がメイにもあるらしい。

「同時に操作できる数には限りがありますが、二つくらいであれば

何の問題もありません」
「なるほどー……色々と意見はしましたけど、私もヒロ様がお二人を船に乗せるというのであればそれで良いと思います。先程も言いましたけど、仲良くやっていけそうですし」
「それじゃ、決まりね。あの二人の部屋は母船の方に作るのよね？」
「その予定ですね。格納庫に近い場所に部屋を確保することになるかと」
「なら距離的にはかなり近いわね。お互いに上手くやっていけるようにしましょう」
「そうだな。このまま何事もなければそういう方向でいこう」

そういうわけで、ホテルへの帰路での話し合いで姉妹を船に乗せることが大筋で決定したのだった。

☆★☆

『そうですか、では彼女達を同行させてもらえるという方向でお話を進めさせていただきますね』

翌日。俺は早速サラと連絡を取って姉妹を船に乗せる方向で考えていることを伝えた。

「ああ、そういう方向で。彼女達の部屋の内装はそちらに任せるが、母船の内装に関してはちょっと仕様を変更する。決定次第データをそちらに送るから、そのつもりで頼む。基本的にはグレードを上げる方向だ」
『承知いたしました。では、データをお待ちしております』
「ああ」

サラとの通話を終えて小型情報端末の通信を切る。さぁて、今日

は何をして過ごそうか……と、考えていると、後ろから何かがのしかかってきた。あんまりふにっとしない……！　これはエルマだな。

「ぐっ、おお……！？」

「なんだか不快なことを考えている気配がするんだけど？」

するりと首へと絡みついてきた腕をタップする。表情も見ていないはずなのに心を読むのはよくない。というか落ちる、落ちちゃうから許して。それにしてもこの細い腕のどこにこんな力があるんだ一体。

「はぁ……はぁ……あ、朝から熱烈だな」

「情熱的でしょ。で、今日も外に出るの？」

「そうしようかなぁと考えていたけど、どうした？」

「相変わらず忙しないわねぇ……こんなに良いホテルに泊まってるんだから、少しはゆっくりしなさいよ」

溜め息を吐きながらエルマが後ろから回り込んできて俺の隣に座った。そしてぐいぐいと俺を引っ張り、無理矢理俺の頭の自分の膝の上に載せる。強制膝枕である。

「折角の休暇なんだから、あくせくしないでのんびりなさい。こうやってクルーとの情愛を育むのも良い船長の務めよ？」

「寡聞にして聞いたことのない務めだなぁ。でもエルマがそう言うなら従うことにしよう」

「良い子ね」

何をするでもなく、こうやってのんびり過ごすのもある種の贅沢というものなのだろう。暇があれば何かしたくなるというのは一種の貧乏性のようなものなのかもしれない。

「ミミは？」
「あんたね、私に膝枕されてるのに……まぁ良いけど。あの子は今日は部屋に篭もって情報収集をするみたい。昨日のドワーフ焼きが随分印象に残ったみたいね。コロニー内のグルメ情報をリサーチするんだって意気込んでたわよ」
「なるほど？」

別に部屋に篭もる必要があるとは思えないが。別にこっちのリビングで一緒にワイワイしながらグルメ情報を見るのも良いと思う。

「……今日は私に譲ってくれるみたい」
「なるほど」
「……こら」

太ももにスリスリしたらペシッと軽く頭を叩かれた。しかし本気で怒っているわけでもないようで、口元が笑っている。とりあえず今日はそういうことらしいので、のんびりと過ごすことにしよう。

#126　スペース・ドウェルグ社の依頼

エルマとイチャついて過ごし、更に翌日にはミミと食い倒れツアーをした。

串焼き屋台から始まり、謎生物の欠片が入ったたこ焼きっぽいもの、謎生物の踊り食い、人造肉から培養肉、それに本物の肉まで注文できる高級焼肉店などをはしごしてドワーフ料理を堪能したのだ。とりあえず踊り食いはもうやめようという共通の見解を得ることが出来た。

絵面がね、酷かったからね。もうなんか怪生物に寄生されつつあるんじゃないかというアレだったからね。だってビチビチ動く伊勢海老くらいの大きさの軟体生物のような何かを頭から踊り食いだぜ。ミミに動画を撮ってもらったが、どう見てもＳＦホラー的な絵面だった。まぁ、美味いか不味いかで言ったら美味かったんだけどさ……。

で、その間にスペース・ドウェルグ社には母船の内装の改正案も提出した。基本的に俺達はクリシュナで過ごすつもりだが、客を乗せるようなこともあるかもしれないし、クリシュナを整備に出している間に寝泊まりできる場所もあったほうが良い。

そういうわけで、母船の方にもある程度手を入れることにしたのだ。なかなかに高くついたが、それに関してはスペース・ドウェルグ社から提案があった。

「テストパイロットね」

『はい。優秀なパイロットに実際に試作機に乗ってもらってデータを取り、意見を聞くというのは我々としても希少な機会と言えますので』

傭兵ギルド経由でスペース・ドウェルグ社から依頼を受けた俺達は朝からサラと打ち合わせをしていた。当然、ホテルの部屋からである。さすがに高い部屋なだけあって、通信機能のついている大型ホロディスプレイなんかも完備しているのであった。

「希少な機会なのはわかるんだが……テストパイロットをするだけで凡そ１５０万エネルってのは相場としてどうなんだ？」

「うーん、私にも判断できかねるわね。ゴールドランク傭兵の一日あたりの拘束費用が８万エネルと考えると、かなり高額よね？」

今回の契約では五日間のテストパイロットをすることで凡そ１５０万エネルの母艦の内装費用をチャラにしてくれるということであった。こちらとしては助かるが、話がうますぎるというのも少々考えものである。

『度重なったトラブルに関する当社の誠意と思っていただければと思います。それに、当然ながらテストパイロットとして触れた当社の最新技術を口外しないという口止め料も込みの報酬ですから、そこまで図抜けた金額というわけでもありません』

「なるほど。口止め料も込みということであれば納得の額ですね」

俺の隣で話を聞いていたミミがそう言って頷く。口止め料も込みとなると、これも妥当な値段なのだろうか？　まぁ、トラブルに対する謝罪という部分も大きいのだろう。

「報酬額については納得できたよ。じゃあ、具体的な内容を教えてくれるか？」

『はい、それは――』

サラの話を簡単にまとめると、実験的な技術を導入した多数の試

作機を実際に俺の手で操縦し、データを取ると同時に使い勝手について意見を聞きたいという内容であった。一応安全性が確認されている機体であるという話だが、万が一ということもあるので注意はしてほしいとのことだ。

「いきなり爆発四散とかされたら注意のしようもないんだが」

『当社の製品は安全性と信頼性が売りですから、そこは信用していただいて大丈夫です』

そう言って映像の向こう側にいるサラは自信ありげな表情をした。そう言われても、俺の船に群がったり、整備工場に赴いた俺に殺到してきたりしたドワーフの技術者をこの目で見た俺としてはあまり安心できないのだが。ウィスカもなんかピーキーなスラスターを作ったとか言ってた気がするし。

「そう祈ってるよ。それで、どんな準備をしてどこに向かえば良い？」

☆★☆

およそ一時間後、普段着慣れないぴっちりとしたパイロットスーツを身に着けた俺は試作機が何隻も並ぶハンガーで技術者からこれから搭乗する船に関するレクチャーを受けていた。

「この船はスペース・ドウェルグ社でも高速戦闘艦を、という試みの元に作られた船だ。うちらしい頑丈さと信頼性に加えて、軽快な機動性も併せ持つ――ように作られている」

「なんだか奥歯に物が挟まったような言い方だな」

「うちのテストパイロットではこいつの性能を引き出すことが叶わなくてな……計算上のスペックの五割も引き出せておらんのだ」

「五割」

それはなかなかに尋常ならざる数字である。本来のスペックの半分も性能が出ないとなると、よほどパイロットの腕が悪いか、機体のセッティングに問題があるか、あるいはそもそもの計算に問題があるかのどれかであろう。或いは、単に操作が難しすぎるだけなのかも知れないが。

「まぁ……まずは乗ってみてだな」
「そうしてくれ」

ＨＵＤ機能を内蔵しているというヘルメットを技術者から受け取り、本日の乗機となる試作船のタラップへと足を向けた。すると、そこには一足先に準備を終えたミミとエルマが待っていた。二人とも俺と同じようなピッチリと全身を包むパイロットスーツである。

「うーん。すごい」
「凄いわよね」
「ちょ、ちょっと恥ずかしいです」

俺の言葉にエルマが頷き、ミミが顔を赤くして両手で胸元を隠した。ぴっちりとしたパイロットスーツはそれはもう盛大にミミの分厚い胸部装甲を強調する役目を果たしていたのだ。回りのドワーフの技術者達（主に男性陣）もチラチラとミミの作り出している圧倒的な光景に視線が吸い込まれてしまっているようである。俺のだからあんまり見るなよな。

「は、早く乗り込みましょう！」
「はいはい」

ミミに急かされながらタラップを使って船の中に乗り込む。流石に試作機であるからか、内装は殺風景なものであった。生活に必要となるようなものが一切無いのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが。

「これ、なんかの事故で遭難したら速攻で詰むな」

「一応カーゴには一週間くらいは生き延びられるように水や食料を積んでるらしいけどね。試作機だから強力なビーコンも積んでるらしいし、心配はいらないわよ」

まぁ、コロニーの近くにある試験場でテスト航行するようだから、仮に問題が起きてもすぐに救助されるのだろうけども。

「んじゃ、セットアップ開始だ。クリシュナとは違うところも多いと思うから気をつけてな」

「わかったわ」

「はいっ」

ヘルメットを被り、機体のセットアップを開始する。俺は主に操作系を確認し、エルマは制御系を、ミミはレーダーや通信系の設備をチェックする。

「やっぱりクリシュナに比べるとパワーが低いわね」

制御系をチェックしていたエルマが呟く。

「クリシュナのジェネレーターは特別だからなぁ。スペース・ドウエルグ社の技術者も解析ができないらしいぞ」

クリシュナの軽快な機動性と強固なシールド、それに四門の重レ

ーザー砲という重巡洋艦並みの強大な火力。それらの要になっているのが件の特殊な専用ジェネレーターである。小型艦に積めるサイズなのに、出力は重巡洋艦並みという規格外の代物だ。ＳＯＬにおいて初めてクリシュナを取得した際に表示されたジェネレーター出力を見て一桁間違っているんじゃないかと三度見くらいしたもんな。

とりあえず、解析できないものに関しては無理な分解などをしないようにと強く言いつけてあるので、妙なことにはならないだろうと考えている。正直に言えば不安なのだが、プロに任せられないとなればあとはもう自分でクリシュナを整備するしか道がなくなってしまう。そんな事ができるようになるとさらさら思えないので、どうしても人に任せるしか無いのだ。

行動を共にした末にティーナとウィスカを信用することができるようになれば、この心配もいくらかは軽減されるようになることだろう。

「レーダーと通信系は問題ありません」
「よし。じゃあ試作機出るぞ。ミミ、頼む」
「はいっ」

ミミが試作機ハンガーの管制に通信を入れて出港許可を取り付ける。あとは管制に従って船をコロニーの外に出すだけなのだが……。

「どう？」
「なんか鈍いな。どうも反応がワンテンポ遅れる感じする」
「スペース・ドウェルグ社の船はフレームが重くて装甲が厚いからね。それだけ頑丈ってことでもあるけど、軽快な機動性を好む私やヒロの肌には合わないわよね」

幸いすぐに調整が効いたが、ハンガーから離れて出港する際に船をふらつかせてしまった。これは俺の言った通り、反応がどうにも

鈍いせいである。
船の操作において予想よりも船が動きすぎてしまった場合はその動きに対するカウンターを当てるようにスラスターを操作するのだが、その際に適切なスラスターの出力や噴射時間を把握していない場合と船をゆらゆらとふらつかせてしまうのである。

「というか、オートバランサーかジャイロの出来が悪くないか、これ。普通はふらつかないように自動でカウンターを当てるもんだろ」
「ハードウェアじゃなくてソフトウェアの問題かもしれないわよ。こんなことならメイも連れてくるべきだったかもね」

メイは今日、メンテナンスのためにこのブラドプライムコロニーにあるオリエントコーポレーションの出張所に一人で足を運んでいる。メイはこういうソフトウェア系のトラブルには滅法強いので、彼女がいればもしかしたらこの場で不具合が判明したかもしれない。

「スペース・ドウェルグ社は今まで高機動型の戦闘艦は作ってなかったはずだからなぁ。もしかしたらソフトウェアの開発が追いついていないのかもな」

なんとなくハードウェア系の技術者が多そうなイメージだものな、ドワーフって。もしかしたらちゃんとソフトウェアが開発してあるのに、実際に積んでいるのが従来型って凡ミスだったりしてな。流石に無いか。無いよな？

「ゲート開きました」
「よーし、出るぞ」

試験場へと繋がる試作機用のゲートから宇宙空間に飛び出し、まずは機動に関して慣熟しなければならない。

「んー、やっぱワンテンポ遅い」
「そう……」

ぼやく俺の横で何故かエルマが呆れたような声を上げている。
この試作機は重い機体を高出力のスラスターでバビュンバビュンと動かそうという正に『力こそパワー！』って感じの高機動機だ。機体が重いせいか働く慣性が強く、鋭角な機動を取るのは非常に難しい。
ただ、姿勢制御用のスラスターの出力も高いので、上手く使ってやればなかなか面白い機動を取ることはできる。いくら慣性が強くかかって横滑りしやすい機体でも、船の方向転換さえ早ければそれなりの機動が取れるものだ。反応がワンテンポ遅い点に関しては、こっちがワンテンポ早く操作してやれば良いわけだしな。
あと、高出力スラスターのおかげか真っ直ぐはなかなかに早い。ただし、慣性がキツいので色々と見誤るとその勢いで突っ込んでしまうだろうから、障害物の多い小惑星帯では使いづらい機体だろう。つまるところ小回りがきかないのだ、こいつは。
逆に障害物の少ない空間で戦うのであれば、高速で大きく横滑りしながらターゲットを捉え続けて攻撃を叩き込み続けることもできるだろう。乱戦にはあまり向かないかもしれないが、タイマンには強そうな感じがする。真っ直ぐが早いし装甲も厚いから、高火力武器を積んでヒット&アウェイなんかも面白いかも知れない。

「こうしてみると、クリシュナとはだいぶ動きが違いますね」
「重量級の高機動機は癖が強いからなぁ」
「でも、問題なく乗りこなしてますよね」
「これくらいならな。エルマの乗ってたホワイトスワンに比べれば優しいもんよ」
「……スワンだって良い機体よ」

「自爆機能付き宇宙飛ぶ棺桶はちょっと」

あの機体は見た目よりも軽くてスラスター出力が滅茶苦茶高いから凄いじゃじゃ馬なんだよな。それに比べれば重くて反応がワンテンポ遅いだけのこいつはまだまだ大人しくて扱いやすい。

『こちら管制。ハンマーセブン、聞こえるか』

だいぶ船の挙動に慣れてきた辺りで管制室から連絡が入った。ハンマーセブンというのはこの試作機の名前のことである。

「はい、こちらハンマーセブン。感度良好です」

『標的試験を開始する。所定の位置について待機してくれ』

「ハンマーセブン、了解。目標のポイントをマークします。ヒロ様」

「はいはい了解」

ヘルメットに内蔵されたＨＵＤに表示される情報に従い、試作機のハンマーセブンを移動させはじめる。さぁて、クリシュナ以外の船を操縦するのは久しぶりだ。せいぜい楽しませてもらうとしようかね。

#126　スペース・ドウェルグ社の依頼（後書き）

今日は誕生日だウェーイ！ ―（∵3」∠）―（なおケーキもごちそうも用意していない

#127　ホテル暮らしの終わり

試作機のテスト一日目に関しては問題なく終わった。いや、問題ありか？　とりあえず速やかに、成功裏に終わった。

試作七号機ことハンマーセブンの武装面について言うべきことはあまり多くない。武器を搭載できるハードポイントは全部で四箇所。まぁ小型戦闘艦としては順当な数である。配置としては前部上方、中央部上方といった形で機体上方に集められており機体の下部側が死角になるものの、真正面から上方と左右を広くカバーしつつ火力を集中できるようになっている。

基本的に武器ハードポイントの設置箇所の良し悪しというのは火力を集中できる方向が真正面以外に存在するかどうかだと俺は考えている。

例えば、四つのハードポイントが上下左右に一個ずつみたいな機体だと、砲塔の可動範囲的に真正面以外では最大でも三つの砲塔でしか攻撃できない。真正面以外だと一つ砲塔が死ぬのだ。

それならハンマーセブンのように下部に死角があっても真正面から上方にかけて敵を捉え続ければ火力が集中できる配置の方が良い。少なくとも俺は。

火力を集中することよりも死角を無くすことに重きを置く人もいるかもしれないから、絶対にとは言わないけどな。標的を一方向に捉え続ける腕がないと使いこなせないわけだし。

で、だ。何が問題なのかと言うと。

「やはり機体は設計通りのスペックを有していたんじゃないか！」

「ソフトウェアに問題はない！　重量と推力バランスの計算がおかしいから挙動にタイムラグが発生しているだけだ！　ここのデータ

がそれを証明しているだろうが！」
「計算は間違ってない！　ソフトウェアの不備をパイロットが経験で補った結果だろう！」
「ソフトウェアは完璧だ！　重量と推力バランスの不均衡から出るタイムラグをパイロットが経験で補っただけだ！　データはそれを証明している！」

性能試験の結果、俺は想定通りというか想定以上のスコアを叩き出すことに成功した。まぁ、挙動がワンテンポ遅れるだけならワンテンポ早く操作すれば良いし、重くて横滑りする機体というのも慣れれば面白い機動ができるので俺にとっては問題ない。
それで性能試験が終わった後に俺は反応がワンテンポ遅れるから、それを腕で補った。原因がハード面に拠るものなのかソフト面に拠るものなのかはわからないが、これを改善できたら良いのではないか、と発言したのだ。
その結果が目の前の騒ぎである。ハードウェア系の技術者とソフトウェア系の技術者は仲が悪いのか、お互いにお互いの調整不足が原因だったんだと言い合っている。まぁ、この諍いを調停するのは俺の仕事ではない。この依頼における俺の本分はテストパイロットを務め、操縦した所感をありのままに述べることであろう。

「とりあえず、旋回速度にはまったく不満は無かった。ワンテンポ遅れるのは同じだけど、回頭速度もロールの速度も問題なしだと思う。ただ、やっぱり機体が重いから鋭角的な機動は無理だ。トップスピードと重装甲を活かしたヒット&アウェイ戦法か、俺がやっていたような『滑り』ながら相手を攻撃範囲に捉え続ける戦法を取る必要があると思う。ハードポイントの位置も上方に集中してるし、割と玄人向けの機体になると思うな」

言い争いに参加していないドワーフの技術者に更なる所感を伝え

ておく。正直付き合いきれないからな。

「なるほど……参考までに、傭兵にとって扱いやすい機体というものはどういうものなのかを聞いてもいいか？」

「勿論。と言っても、あくまでも俺の考えだが……まず、挙動が素直な機体であるということだな。つまり反応が良い機体であるほうが良い。当然だな」

「ああ。操縦のしやすさは大事だな」

「次に防御面が充実していることだが、これは装甲よりもシールドに重点を置いてもらいたい傭兵が多いんじゃないかな。装甲が厚いのはもちろん歓迎だが、機動に影響がない範囲であるほうが望ましいと思う。それに、基本的に傭兵は装甲で攻撃を受け止めたくないんだ。修繕費用が嵩むからな。シールドだと金がかからないだろ？　装甲はシールドを失った後の最後の砦だが、普通の傭兵はシールドを破られそうになったら逃げに転じると思う。装甲で攻撃を受け止めながらも戦闘を続ける傭兵ってのはなかなかいないんじゃないかな」

それに、装甲のアップグレードはシールドジェネレーターのアップグレードよりも高くつく場合が多い。金をかけないと強みが発揮できない上に、その強みを発揮すると金が飛んでいく機体ってのはまぁ敬遠されるだろう、とも伝えた。

「ううむ、なるほど」

「火力面では小型戦闘艦なら最低限クラス２の武装が二つ以上つけられないといけないと思う。クラス３の武装が一門でも積めれば人気はかなり出るんじゃないかな？　クラス１の武装は貧弱過ぎるから、クラス１の武装二門よりもクラス２の武装一門の方が傭兵には喜ばれると思う」

クラス1武装というのは所謂小型砲で、クラス2、クラス3というのはそれぞれ中型砲、大型砲に相当すると考えてくれれば問題ない。

ちなみに、クリシュナの重レーザー砲四門とシャードキャノン二門は全てクラス3扱いの武装である。小型戦闘艦にも拘らずクラス3の武装を六門、更に対艦魚雷まで積んでいるクリシュナの火力が重巡洋艦並みという表現になる所以だ。本来は小型艦だと普通はクラス3の武装を一門でも積むことができれば御の字なのである。

「大いに参考にさせてもらう」

俺の言葉を手持ちのタブレット端末にまとめたドワーフの技術者は小さく頭を下げてから喧騒の中に突っ込んでいった。どうやら諍いを収めるつもりらしい。頑張ってくれ。

「終わったの？」

技術者が俺から離れていったタイミングを見計らってエルマが声をかけてきた。あちらのレポートはとっくに終わっていたらしい。

「ああ、そっちは早かったみたいだな？」

「はい。レーダーと通信系には特に問題ありませんでしたから。エルマさんの方も同じだったみたいです」

「流石にそこは安心と信頼のスペース・ドウェルグ社だったわね。まぁ、船全体の評価となると私としては辛口にならざるを得ないけど。ヒロみたいな変態機動の使い手じゃないとまともに使えない船なんて論外よ、論外」

「言うほど変態機動じゃないと思うんだがなぁ……」

まぁ慣性で滑りながら三次元空間を縦横無尽に駆け回るのにはコ

ツがいるけどもさ。そんなの練習次第だよ、練習次第。まずはオートバランサーとジャイロを切るところから始めればいい。存分に宇宙空間でくるくる回ってゲロを吐くといいさ。俺はパソコンの画面上で感覚を掴んだからせいぜい気持ちが悪くなるくらいで済んだが、この世界でリアルにあれをやったら地獄のような光景が広がること間違いなしだな！

「で、これどうするの？」

取っ組み合いに発展する前に騒ぎは収まったようだが、技術者連中は険悪なムードである。そこに少しくたびれた表情をしたドワーフの技術者がやってきた。先程俺と話をしていた技術者だ。

「今日のところはもう機体の調整に入るから、そちらの仕事は終わりで大丈夫だ。また明日再調整した機体に乗ってもらうことになると思う」

「そうか。それじゃあさっさとお暇することにするかな」

俺が視線を向けるとミミとエルマも頷いたので、俺達はパイロットスーツから元の服装に着替えて試験機用のドッグを後にした。

☆★☆

五日間のテストパイロット業を終え、俺達は再び暇を持て余す生活に突入していた。まぁ、暇な時間はコロニー内の観光をしていたので持て余すというのは少々言い過ぎかも知れない。

テストパイロット業？　別に語るような内容は多くないんだよなぁ。俺は普通に試作機をブイブイ乗り回して遊んでただけだし、ミミとエルマは特に故障も不具合もない機器をチェックしながら試作機であるせいか慣性制御が少々弱めのコックピットで青い顔をして

いただけだしな。それも後半は慣れてきたのか平気な顔をしてたし。
「なーなー、兄さん。暇なんやけど」
「お、お姉ちゃん……だめだよ」
ソファに座る俺の横に寝転び、膝の上に勝手に頭を載せたティーナが俺にじゃれ付き、ウィスカがそんなティーナをオロオロしながら注意している。ティーナみたいな小さい子に懐かれて悪い気はしないが、気安いなお前？
「んーんぁー」
膝の上でじゃれついてくるティーナの小さな鼻を指で摘んでやる。はっはっは、可愛い顔が台無しだぜ。
「自然とじゃれついていますね……手強いです」
「なかなかやるわね」
少し離れたテーブルに着いていたミミとエルマが強敵を目の当たりにしたような雰囲気を醸し出している。そう言いつつもどこかまだ余裕があるのはティーナに対する俺の扱いがかなりぞんざいだからだろう。正直おしとやかなウィスカはともかくティーナはどちらかというと女の子というよりも犬猫などの愛玩動物枠である。
「それでええと……母船が仕上がるまでまだあと五日くらいあるのか」
「はい。予定ではおよそ１２０時間後ですね。特に作業の遅れなども無いようなので、予定通りに仕上がってくるかと思いますが」
俺の質問にソファのすぐ脇に立って控えていたメイが答えてくれ

る。

「クリシュナの方はそろそろ仕上がってくるんだよな」
「はい。予定期間を少しオーバーしていますが、今日中には終わるそうです。荷物の再積み込みなどで引き渡しは明日になりそうだと連絡が来ています」
「そうか」

そうなると、このホテルでのんびりするのも今日で終わりかな。

「お前らの方の準備は進んでいるんだろうな？」
「んぁっ、モチのロンや。もう必要なもんの発注は終わっとるし、あとは母船の内装が終わり次第諸々積み込んでもらったら準備完了やで」

黙って鼻を摘まれていたティーナが自信満々の表情でそう言う。一応ウィスカにも視線を向けてみたが、彼女もコクコクと頷いているので問題はないのだろう。多分。

「さよか。うーん……そうだ、この前ティーナが言ってた高級店とやらに行くか」

俺の言葉にミミのエルマの座っているテーブルの方からガタッと音が聞こえてきた。ＯＫＯＫ、勿論ミミも連れて行くからまだ席に座っていて良いぞ。エルマも勿論連れてくから。各地の銘酒が集められていると聞いてお前も目を爛々と輝かせていたのは覚えてるからな。

そしてその夜はティーナに案内された高級店……ヤキトリヤという店で美味しい焼き鳥を味わった。

うん、言いたいことはわかる。ヤキトリヤと言う名の高級料理店で、その実態は本当にその名の通り焼き鳥屋だったんだ。二つ隣の星系で養殖された本物の鳥の肉を扱っている店で、いつか見たコウベ＝ビーフほどでは無かったが一本あたりの単価はなかなかのお値段であった。ねぎま一本１５エネルとかぼったくりすぎじゃね？無理矢理日本円換算したら一本１５００円やぞ？

ミミは本物の鶏肉の味に感激していたし、エルマは銘酒の味に満足していたし、姉妹は焼き鳥の味に感動しながらも酒が飲めないことを嘆きつつ、美味そうに酒を飲むエルマに恨めしげな視線を送っていた。彼女達の禁酒期間はまだ明けていないのだ。

「ご主人様はあまり感動していませんね」

「まぁな……」

俺にしてみれば普通の焼き鳥だからな。これで黒い炭酸飲料でもあれば俺も泣いて喜んでいたんだが……残念ながらこの店に置いているのは酒以外には水とやたらと高い果汁１００％ジュースだけだった。一杯１００エネルとかふざけんな。一杯３エネルの水飲むわ。

こうしてホテル暮らしの最後の夜は更けていくのだった。

#128　まつろわぬひとびとのはなし

本物の鶏肉で作られた焼き鳥を堪能したその翌日。
クリシュナの整備と荷物等の積み込みが終わったという報せを受けた俺達はホテルをチェックアウトしてクリシュナを整備している整備工場へと向かった。

「懐かしき我が家だな」
「確かにクリシュナは船ですけど、殆どおうちみたいなものですよね」
「やたらと住心地も良いしね」
「敢えて住心地が悪いまま使う意義が見いだせないしなぁ」

エルマ的には傭兵の戦闘艦というのはもうちょっとこう、内装が無骨というか若干不便というか、殺風景な感じの方がイメージと合致するらしい。俺とミミはそんなイメージなど持っていないので、居住性が高くて綺麗で機能的な内装にがっつり入れ替えたわけだ。今でもあの出費は良い出費だったと思っている。
ちなみに、ティーナとメイが設計、監修したパワーアーマー用の新装備、ハチェットガンも既にクリシュナに運び込んであるはずである。まずはクリシュナと同じくオーバーホールしてもらったパワーアーマーの試運転がてら、ハチェットガンを試用するのも良いかも知れない。パワーアーマーを使うような仕事があれば受けるのも良いな。
パワーアーマーを着込んで武器を振り回すような依頼があればの話だけど。こんなコロニーじゃそんな仕事はそうそうあるとも思えな……いや、あるかな？　あるかもしれんな。このコロニーは大きいし、歴史も古そうだ。出入りしている船も多いようだし、そうな

ると「いる」可能性が高いだろう。いや、いるだろうなぁ……うーん、依頼があったとしてもあまり請ける気にならない。

「ヒロ様、急に難しい顔をしてどうしたんですか？」

「いや、パワーアーマーもオーバーホールしたし、武器も新調しただろ？　試運転がてらパワーアーマーを使うような仕事がないかと考えてたんだが、ちょっとな」

「ああ、そういうこと。このコロニーなら仕事があってもおかしくないわね」

エルマが納得したように頷く。

「どういうことです？」

ミミは俺とエルマの反応の意味がよくわからないのか眉間に皺を寄せて首を傾げていた。思い当たるようなことがないらしい。

「ターメーンプライムは比較的新しいコロニーだったから、対策がされていたものね。でも、このブラドプライムコロニーのように古くて大きなコロニーでは対策が後手に回って、最早手がつけられない状態なのよ」

「……？」

ミミはエルマの言うことが今ひとつピンとこないのか、首を傾げている。

「棄民よ。不法滞在者って言った方がわかりやすいかしら？」

「ああ……」

はっきりとしたエルマの言葉にミミがようやく事情を理解して表

情を曇らせた。棄民というのは行政府に切り捨てられた自国民を指す言葉である。つまり、俺に拾われるまでのミミも同じような立場といえばそうだったのだ。
　ターメーンプライムコロニーにおいては行政府からの保護が殆ど受けられない代わりに、特定の区域内に留まってさえいれば生存が許されていた。生存が許されているというのはつまり、呼吸できる空気が与えられ、コロニー内に存在することを許されているだけではあるが。
　飢えて野垂れ死のうが、棄民間の諍いで死ぬことになろうがお構いなしである。厳しく取り締まらない代わりに、構いもしない。正規の居住者からはいないものとして扱われる人々。それが棄民だ。
　何らかの理由で身を持ち崩した元正規居住者であったり、自分の乗っていた船に置き去りにされた者であったり、寄港した船の密航者が密かに下船してそのまま住み着いた者であったり、その出自は様々である。このブラドプライムコロニーのように古い歴史を持つコロニーであれば、棄民の子供ということも有り得るだろう。

「でも、それが傭兵の仕事とどんな関係があるんですか？」
「傭兵の仕事の中には棄民を排除する、というような内容のものがあるのよ。それも、生死問わずで」
「えっ！？」

　ミミが信じられない、という顔をする。それはそうだろう。つまりそれは、傭兵がパワーアーマーなりレーザー兵器なりなんなりを持ち出して棄民を殺して回る仕事なのだ、と言っているに等しいのだから。

「別にターメーンプライムの第三区画にいたような人達を排除して回るような仕事ではないわよ。傭兵に回ってくるような仕事っていうのは、もっとたちの悪い連中の排除。武装化したギャングとかマ

フィアとか、そういった類の連中ね」
「……どういう人達なんです？」
「色々ね。武装化してコロニーの一角を占拠し、配管を弄って酸素や化学物質の類をちょろまかしているような連中もいれば、宙賊と繋がって情報を流すことによって利益を得ているような連中もいるし、最悪な類だとコロニーの居住者を拐って文字通り食い物にするようなのもいるみたいよ」
「う、うわぁ……」

ミミがドン引きしている。俺もドン引きしている。武装化したマフィアみたいな連中って認識はあったけど、カニバリズムをやっているような連中もいるとはたまげたなぁ……近寄らんどこ。

「……どこかの訓練所か何かを借りることにしよう。あまり関わり合いになりたくない」
「そうしなさい。傭兵の中にはコロニーからコロニーに渡り歩いて、そういうのを専門にやるのも居るみたいだけどね。ヒロには合わないでしょ」
「そうするよ」

コロニーの闇を垣間見ながらの道中であった。

☆★☆

「待っとったで」
「お待ちしていました」
「お、おう」

整備工場にクリシュナを引き取りに来ると、何故かティーナとウィスカが待ち構えていた。工場長の姿は見えない。そういえば研修

がどうのこうのとか前に言っていた気がする。きっと今はその研修中なんだろう。

「二人ともどうしたの？」

「折角の引き渡しやし、これから先うちとウィスカがクリシュナに乗ることもあるんじゃないかと思ってん。せやから、お試しで乗せてもらえたりしないかなぁと思ってな」

そう言ってティーナが期待を込めた視線を俺に向けてくる。まぁ、別に、良いですけれども。

「港のハンガーに移動させるだけだぞ？」

「ええんや。クリシュナがどんな感じで飛ぶのか、この身体で実感したいだけやから。許してくれるか？」

「別に良いけど」

そう言うと、ティーナは嬉しそうに笑顔を浮かべてみせた。ウィスカもホッとしたような顔をしている。別に何も面白いことはないと思うけどな。

「とりあえず船を出すか。手続きはどうすれば良い？」

工場長代理と引き渡しの手続きを終えて姉妹を含めた全員で船に乗り込み、船内をチェックする。

「メイ、変なものが仕掛けられていないか厳重にチェックしておいてくれ」

「はい、お任せ下さい」

船に乗り込んでハッチを閉めるなり俺がそう言うと、メイはスタ

スタとカーゴスペースの方へと歩き去っていった。それを見たティーナが苦笑いを浮かべる。

「用心深いなぁ……」
「足元を掬われるのは御免だからな」
「信用されるように頑張ります」
「……そうしてくれ」

そうは言うものの、スペース・ドウェルグ社の社員である以上は完全に信用するのは難しいけどね。個人的には二人とも嫌いじゃないが、彼女達の立場からすれば自分の命の次に優先するべきなのはスペース・ドウェルグ社の利益である筈だからな。

「まぁ、宇宙に出てしまえば会社もクソも無いよな」
「上司がいるわけじゃないですしね」
「酒も飲み放題やな」
「嬉しいね」
「……」

本当に大丈夫か、スペース・ドウェルグ社。本当に俺に同行させるのはこの二人で良いのか？

まぁ、難しいというのはわかる。何が難しいって、それは傭兵の船に乗り込んでスパイ行為をするということそのものについての話だ。

そもそも、なんとかメイの目を掻い潜ってクリシュナや俺達に関する情報を集めたとしても、その情報を送る術が殆どない。一つや二つ隣り程度の星系で活動しているのであればともかく、俺達のような傭兵というのは場合によっては仕事を求めて十数星系から数十星系ほどもの距離を移動する。そんな遠方から情報を送るというのはなかなかに手間がかかるのだ。

スペース・ドウェルグ社は一応帝国内にいくつものコロニー所有する企業なので、別にブラド支社に情報を届ける必要はないのであろうが、それでもまぁ難しいのは間違いないだろう。
下手をすれば宇宙空間を航行中にスパイ行為が発覚し、そのまま生身で宇宙船の外に放り出される……なんてことも有り得るのだから。スパイ行為というものが姉妹にとってどれだけリスキーな行動なのか、ということに関しては議論の余地もない。そのような指示をスペース・ドウェルグ社が出すかということに関しても微妙なところである。
それよりも、スペース・ドウェルグ社の最新ロットの母船を有した俺が大活躍するほうがスペース・ドウェルグ社にとっては利益があるかもしれない。そう考えればわざわざ俺の不興を買うようなことはしないだろうとも考えられる。実際のところはどうだかわからんが。

「少なくともあたし達は会社から妙な指示はなんも受け取らんよ。兄さんに信用されるように身を謹んで、真摯な態度で接するように言われただけや」
「姉さんの言うとおりです。というか、そんなことを指示されても怖くて無理です。特にメイさんが」
「無理よな」
「無理だよね」

姉妹がお互いに頷きあっている。うん、それは俺もわかる。メイが監視しているのがわかっているのにメイの主である俺に不利益な行動を取るのは絶対に怖いだろう。俺が彼女達の立場でも絶対にそんなことはしない。会社に強く言われても絶対にＮＯだ。死にとうない。
「はいはい、ギスギスした話はおしまい。これから同じ船に乗る仲

間同士、仲良くしましょう」
「そうですね。まずは本艦のメインシェフにお茶でも淹れてもらいましょう」
「お、テツジンシリーズの最新製品積んでるんやったな。興味あるわ」
「えっと……」

ウィスカが上目遣いで俺の様子を窺ってくる。はいはい、俺が悪うございました。

「……デザートも美味しいぞ。オススメはプリンだ」
「楽しみです」

ウィスカがホッとしたような笑顔を浮かべる。気にはなるが、まぁ今は良いか。姉妹の歓待はミミに任せて俺は船のチェックをするとしよう。積荷も若干増えているはずだから、その配置も考えないとな。

#129　試運転

「ふむ、こんなものか」
「はい」

姉妹とミミとエルマを食堂に残して俺はカーゴスペースへと赴き、メイと一緒にカーゴの整理をしていた……と言っても、俺が整理したのはパワーアーマーと武器類周辺だけで、その他はメイにおまかせという形になってしまっていたのだが。

「メイにはいつも助けられるな。頼りきりにならないようにしようとは思ってるんだが」
「そうですか。私としてはもっと頼ってくれても良いのですが」

荷物を抱えたメイがずずいっと迫ってくる。おおう、圧力すごい。

「今でも頼りすぎなくらいじゃないかと思っているくらいだぞ」

特に姉妹の監視等に関してはほぼメイに丸投げみたいな形になるしな。

「というか、実際のところメイとしてはどうなんだ？　あの二人の加入は」
「ご随意のままに、というところです」

そう言ってメイは抱えていた荷物を置き、俺へと振り返る。

「補足いたしますと、あの二人を船に乗せること自体はリスクやデ

メリットよりもメリットの方が大きいであろうと評価しています。その上でご主人様が二人を船に乗せることを肯定的に捉えているのであれば是非もなし、というところですね」
「なるほど。ちなみにリスクやデメリットというのはどのようなことが考えられるんだ？」
「まず挙げるべきはティーナの短絡的行動、ウィスカの突飛な発想、それらによる暴走でしょうか。ご主人様に負傷させた時のような事件を彼女達が起こす可能性はゼロではありません。二人とも今回の件で懲りているとは思いますが」
「お、おう。そうだな。他には？」
「二人を経由してクリシュナやその乗員に関する個人情報、機密情報がスペース・ドウェルグ社に漏洩するリスクは当然あります。しかし、過去のスペース・ドウェルグ社の動向や経営方針などを考えると、スペース・ドウェルグ社はそういった小手先の情報戦をあまり好まない傾向にあるようだ、という結論に至りました。クリシュナの情報や傭兵としてのご主人様の生活を取材したいという話も、高い確率でただの技術的興味及びエンターテイメントを求めてのことだろうと推測されます」
「えんたーていめんと」
「はい。ミミ様も仰っていましたが、コロニー居住者（コロニスト）にとって漂流者（ドリフター）の生活というものはエンターテイメントの塊のようなものですから。彼らは良く言えば安定した、悪く言えば代わり映えのしない生活に身を置いているので、ご主人様のように自由気ままに星々の海を旅する生活というものに一種の憧れのようなものを抱いているのですよ」
「なるほどなー」

俺の生活のどこにエンターテイメントがあるのかは些か想像しづらいところではある。どちらかというとお茶の間で家族と見るエンターテイメントというよりは、自室でこっそりと見るエンターテイ

メントになりそうな予感しか無いのだが。いや、そんなエンターテイメントを提供するつもりは微塵も無いけど。

「結論といたしましてはご随意のままに、となるわけです。二人が不始末を起こさないように私が力を尽くしますので、ご主人様は何の心配もなさらなくて結構です」

「そうか……わかった。ありがとうな、メイ」

「はい。そのお言葉と笑顔だけでだけで私は何もかもが報われた気分です」

そう言ってメイはほんの少しだけ口角を上げて見せてくれた。

☆★☆

こうしてとりあえずクリシュナが戻ってきたわけだが、中と荷物の点検をしてハイおしまい、とはならない。

「ほ、ほんとうにいくんか？」

「おう、行くぞ」

「だ、だだだ、だいじょうぶですよね？」

「大丈夫ですよー。ヒロ様にかかれば宙賊なんてちょちょいのちょいですから」

試運転がてら宙賊を狩りに行くことにした。既にスペース・ドウェルグ社には連絡をして、ティーナとウィスカをこのまま連れて行くことにはＯＫをもらっている。

『遠慮なく連れて行ってください』

画面の向こうのサラはそれはもう輝くような笑顔でそう言ってい

た。散々迷惑をかけてくれたティーナとウィスカの二人が顔を真っ青にして震えているのを見て多少は溜飲が下がったようである。
なかなか趣味が悪いとも言えるが、この二人のおかげで折角取った大口の契約が危うく立ち消えになるところだった上に、上司を巻き込んだ謝罪騒動にまで発展させられた彼女としては二人に思うところの一つや二つや三つどころではなく色々とあってもおかしくはない。輝く笑顔の裏に黒いものが見え隠れしているのは見なかったことにしよう。
二人をコックピットの壁から引き出したサブシートに座らせ、しっかりとベルトで身体を固定してから俺達は出港準備を始める。
二人をベルトに固定する前に一度席を外していたのは、恐らくアレを履かせにいったのだろうなぁ。アレってなんだって？　そりゃお前、アレだよ。漏らしても大丈夫なように履くアレだよ。最近はミミも卒業できたみたいだから日の目を見ることが無かったらしいが、棄てずに在庫を取っておいて良かったんだろうな。うん。

「ジェネレーター正常、出力安定。各部への動力伝達も順調よ」
「オーバーホールして変わった感じはあるか？」
「無いわね。まぁある程度バラしてから組み直して変わったところなくいつも通りに使えるってのがプロの技なんじゃない？」
「それもそうか。ミミは？」
「こっちも問題ないですね。出港申請も通りました」
「ＯＫ、それじゃ出ようか」

操縦桿を操り、整備工場のハンガーからクリシュナを出港させる。戻ってきた時は普通の港の方に向かうことになるな。

「調子はどう？」
「悪くない。やっぱりクリシュナはしっくりくるな」

この前乗った試作機とは反応速度が違う。打てば響く操作感は爽快ですらあるな。やっぱ戦闘艦というのはこうでないといけない。

「おぉー、動きが滑らかやなぁ」

「慣性制御装置も凄く良いのを使ってるよね。全然揺れないし、殆ど加減速の反動が感じられないよ」

「スペック通りの性能を発揮したら、この慣性制御装置でも追っつかないやろなぁ。その辺どうなん？」

「そうですねー……やっぱり戦闘機動を取り始めると結構キツい慣性がかかったりしますね」

「うっかり満腹のまま戦闘機動に入ったら悲惨なことになるだろうな」

「やめてよね。吐瀉物塗れで戦闘とか嫌よ」

隣のサブパイロットシートに座るエルマが眉間に皺を寄せてものすごく嫌そうな顔をする。確かにゲロ塗れで戦うのは俺も嫌だ。

「あ、あはは……だ、大丈夫や。さっきお茶は飲んだけど一杯だけやから」

「そ、そうだね。うん」

戦闘機動の話をしてこれからの宙賊狩りに対する恐怖感を思い出したのか、姉妹の表情が再び青くなる。技術的な話をしている間は恐怖を忘れられるようなので、超光速ドライブに入る前にコロニー周辺で慣らし運転でもするかね。

「あれ？　超光速ドライブに入らないんですか？」

「その前に慣らし運転をな」

「少し前にクリシュナとはまったく操作感の違う船に乗ったしね。感覚を取り戻すのは大事よ」

「なるほど」

ミミとエルマのそんな会話を聞きながらスロットルを徐々に上げ、クリシュナを加速させていく。

うん、スロットルとスラスターの反応も悪くない。流石はドワーフ。仕事は完璧というところかな？

「お、おおぉ……速いな」

「小型艦だから脚が速いのはわかりきっていたことだけど、やっぱり速いね」

トップスピードに入ったところでフライトアシストを切ってマニュアル操作に入り、戦闘機動に入る。

「う、お、おぉぉぉぉっ！？」

「ひゃあぁぁぁぁ！？」

加減速やアフターバーナーを用いた鋭角的な動きや、慣性を利用した横滑り機動、逆転攻撃、バレルロールなどを一通り試す。

「問題ナシ。じゃあ行くかー」

「はい、超光速ドライブ起動します」

「チャージ開始。5、4、3、2、1……起動」

ドォン！　という轟音と共にクリシュナが超光速ドライブ状態に移行する。姉妹は目を回しているようだが、まぁそのうち慣れるだろう。

「い、いっつもこんな感じなん？」

「そうですねー……だいたいこんな感じですよ」

「ミミさんが見た目に反して肝が据わっている理由がわかった気がします」

ミミの肝が据わってるって？　そんなイメージは……いや、そう言えば最近はあたふたすることも少なくなって落ち着いていることが多いような気がするな。もしや俺と行動を共にすることによってミミには何事にも動じない肝の太さが備わりつつあるのだろうか。

「さーて、ここの宙賊はどこに潜んでるかなー」

星系マップを開いて宙賊が出そうな場所に当たりをつける。
奴らの狙いはブラドプライムコロニーで作られた交易品の類か、埋蔵量の豊富な小惑星帯で掘り出され、精製された各種金属のどちらかだろう。うーん、この星系内で商売を完結させるなら金属の方が簡単かな。奪った金属を仲間の一見クリーンな採掘船にでも渡して売り払えば良いわけだし。

「よし、小惑星帯に向かうぞ」
「わかりました。座標をマークします」

ミミの声と同時にＨＵＤ上にマーカーが出現する。あとはそのマーカーに艦首を向けるだけだ。

「い、いよいよ行くんやな……」
「き、緊張するね」

姉妹が揃って身体を固くしている。

「そんなに緊張するなって。別に小惑星帯に入ってすぐに戦闘になるわけじゃあるまいし」

「そうよ。まずはポイントを下見して、宙賊が来そうな場所に張り込まなきゃいけないんだから。そんなに緊張してると疲れるわよ」
「あはは、なんだか私がクリシュナに乗ったばかりの頃を思い出しますね」

ガチガチに緊張しているティーナとウィスカを見てミミが苦笑いしている。確かにミミもクリシュナに乗ったばかりの頃はあんな風にガチガチに緊張してたよなぁ。ちょっと懐かしい。

「ほ、本当やな？　嘘だったら泣くからな？」
「信じますからね？」
「はっはっは、大丈夫大丈夫」

初めての狩場に着いて早々に獲物を見つけるなんてなかなかあることじゃないからな！　何の心配もいらないさ。事前のリサーチもしていなかったし、ただの小惑星帯観光になると思うぞ。

#129　試運転（後書き）

なかなかあることじゃない（ないとはいっていない）

#１３０　試運転（武装編）（前書き）

おくれました……これもこたつってやつが悪いんだ……！　―（：３」∠）―（責任転嫁

#130　試運転（武装編）

「あぁーっ！　撃たれてる！　撃たれてるってぇっ！？」
「だだだ、大丈夫だよお姉ちゃん！　この船のシールド出力ならあれくらいのレーザーは――」
「ミサイル！　シーカーミサイル来てるー！　ミサイルはアカンやろ！？」
「ミ、ミサイルはだめだねっ！」
「賑やかだなぁ」
「こういうのは煩いって言うのよ」
「あはは……私もこんな感じだったんですかね」

☆★☆

小惑星帯に着くとすぐに俺達は別の船を捕捉した。採掘船かな？と思いつつスキャンしてみたらこれが大当たりで、スキャンしてみたら宙賊の船であったのだ。それも中型船を含めた十三隻の宙賊船団である。

「これは運が良いな」
「いやいやいや、運が悪いやろ。いきなり宙賊に出くわすとかどう考えても運が悪いやろ」

ティーナが何か騒いでいるが、無視してスキャンを続けさせる。

「あ、相手は十三隻もいますよ？　しかもあの中型艦は火力特化艦のように見えます。流石にあれに手を出すのは危ないんじゃ……」

「大丈夫ですよ。ヒロ様なら問題ありません」
「いや無理やろ。いくらこの船が高性能って言っても、火力特化艦のミサイルを山程ぶちこまれたらヤバいで」
「当たらなければどうということはない」

某赤い彗星の人みたいな台詞を吐きながら武装を展開する。これで四門の重レーザー砲と二門の大型散弾砲がいつでも発射可能な状態になった。臨戦態勢である。

「すぐに戦闘になるわけじゃないって言ったのにぃ！」
「か、覚悟がまだ……ひあああぁぁぁぁっ！？」

☆★☆

というわけで今に至る。
武装を展開したクリシュナは敵船団の後方から一気に襲いかかり、まず最後尾に位置していた小型宙賊艦二隻を四門の重レーザー砲の連射で仕留めた。

『な、なんだっ！？』
『襲撃だ！　散開しろ！』
「間に合うものか」

宙賊達が慌てて散開し始めるが、その頃には既にクリシュナが船団に肉薄していた。二門の大型散弾砲が連続で火を噴き、発射された無数の弾丸が散開するために横っ腹を晒した三隻の宙賊艦をまとめて穴だらけにする。

『い、嫌だ……死にたく――』

散弾砲の弾丸が重要区画を破壊したのか、穴だらけになった宙賊艦のうちの一隻が爆発四散した。その爆発に巻き込まれて残り二隻も爆発する。
しかし、宙賊達もただやられてばかりではいない。散会した宙賊達が反転し、こちらに向かってレーザー砲やマルチキャノンで反撃してくる。無論、宙賊の装備している武器などというものはクリシュナからすればショボい威力の豆鉄砲なので多少の被弾は気にするまでもないのだが、その様子はＨＵＤ上に表示されている船のホログラフィモデルに反映されて一目瞭然だ。
俺やミミ、それにエルマはそんなものはなんでもないとわかっているのだが、ティーナとウィスカにとってはそうもいかない。

「あぁーっ！　撃たれてる！　撃たれてるってぇっ！？」
「だだだ、大丈夫だよお姉ちゃん！　この船のシールド出力ならあれくらいのレーザーは――」

涙目で騒いでいるティーナと比べてウィスカは幾分冷静なようだ。声は震えているようだけど……などと考えていると、コックピットにアラート音が鳴り響いた。

「ミサイル！　シーカーミサイル来てるー！　ミサイルはアカンやろ！？」
「ミ、ミサイルはだめだねっ！」
「賑やかだなぁ」

ティーナの慌てようも面白いが、冷静にミサイルはだめだねとか言っちゃうウィスカも楽しいな。
とりあえず後ろから迫るシーカーミサイルを振り切るためにフレアをばら撒きながらスラスターを噴かし、直角に近い角度で回避運動を行う。

「ふぎゃっ！？」
「ひゃあっ！？」

慣性制御装置で殺しきれなかった反動が姉妹に襲いかかり、それぞれ個性的な悲鳴を上げる。

「まずは中型艦を潰す？」
「そうすると小型艦が逃げるだろ。先に小型艦を潰して回るさ」

中型艦の火力は脅威と言えば脅威だが、どうやら奴はミサイル艦であるようなのでシーカーミサイルにだけ注意すれば問題ない。フレアはまだまだ残弾があるし、やろうと思えば専用の回避機動で振り切れないこともないからな。

「ヒャッハー！　宇宙のゴミは消毒だー！」
『クソォ！　こいつなんなんだよ！？　撃て、撃てェ！』

はっはっは、俺を仕留めたいなら船のグレードを少なくとも正規軍レベルまで上げてくるんだな。
それでもヘボの宙賊野郎に負ける気はしないが。

☆★☆

「……酷い目にあったわ」
「……うぅ」

戦闘終了後、途中から静かになっていた姉妹が我を取り戻したのか再び声を上げ始めた。ティーナはひたすらげんなりしているようだが、ウィスカは顔を赤くして居心地が悪そうにモジモジしている。

あれは間違いなく漏らしたな。よかったな、履かせておいてもらって正解だったじゃないか。

「積荷がなかなか良い感じですね……仕事の後だったみたいです」
「精製済みの金属が多いわね。賞金も中々の額よ」
「いくらになったん？」
「賞金だけで１１万と２０００エネルですね。中型艦に掛けられていた賞金が多かったです」
「１１万２０００エネル！？　え、マジか……？」
「すごいね……それに戦利品の売却益も入るんですよね？」
「そうね。実際に売り払ってみないとわからないけど、精製済みの金属はけっこうな高値で売れるから……まぁ２万エネルは堅いんじゃない？」
「ということは１３万２０００エネルか……これは普通に働くのは馬鹿らしくなるやろなぁ……」
「私達の給料の何年分かな……？」

彼女達の給料がいくらかは知らないが、まぁ一流のエンジニアならそれなりの給料をもらっているのだろう。

「えっと……うちらの給料が月に大体３７００エネルやろ……？大体３５ヶ月分ちょい？」
「およそ三年分だね……」

姉妹がなんだか暗い声でぼそぼそと話し合っている。言っておくけどこっちは命懸けなんだからな。そりゃエンジニアだって事故の可能性がある職なんだろうけど、命の危険度合いが違うんだから一概には比べられないと思うぞ。傭兵が高収入なのは確かだと思うけどな。

「スペース・ドウェルグ社を辞めてクルーになるか？　待遇は応相談だぞ」
「うっ……ひ、惹かれるなぁ」
「そう簡単にはいかないよ、お姉ちゃん。自由移動権を発行してもらうだけで２０万エネルくらいかかるんだから……私達の貯金じゃ一人分も出せないよ」
「むー……それはそうやけど」

妹の冷静なツッコミに姉が唇を尖らせる。そうこうしている間に戦利品の回収が終わった。今回も装甲や船体への被弾はゼロ。全てシールドで止めて宙賊船団を全滅。完全勝利である。

「よーし、戦果は十分だな。凱旋だ」
「はい！　帰路を設定しますね」
「今日は戦勝祝いね。美味しいお酒が飲めるところが良いわ」

艦首をブラドプライムコロニーの方へと向け、加速を開始する。とりあえず仕上がりは上々、と言ったところだな。コロニーに着いたらサラにも連絡をしておくとしよう。

#131　姉妹の死闘

ブラドプライムコロニーへの入港後、即座にお手洗いに行って戻ってきたウィスカだったが、不幸にもその一部始終を姉に目撃されてしまった。

いやまぁ、不幸にもも何も、あまりに迅速な行動だったためにティーナがウィスカのことを不審に思ってしまった結果なのだが。

「あっはっは！」

「もう、笑わないでよ！」

盛大に笑うティーナにウィスカが顔を真赤にして憤慨する。流石の俺も笑うのはどうかと思うぞ？

「いやー、まさかウィスカがお漏らしをしてるとはなぁ……くっくっく」

「お姉ちゃん！！」

ティーナの口を塞ごうとウィスカが顔を真赤にしたままティーナに飛びかかる。しかし全く同じ体格同士ということもあってか、その目論見はなかなか上手くは行かないようだ。

「あれだけギャーギャー騒いでたティーナの方はなんともないのな」

「騒いで外に発散してたぶん恐怖感が和らいでいたんじゃない？」

「ティーナは上から、ウィスカは下から垂れ流してたってことか」

「ヒロさんっ！！」

ウィスカがティーナと取っ組み合いをしながらこちらに向かって

鋭い声を投げかけてくる。別に気にすることはないと思うけどな。ミミだってしばらくウィスカと同じようになってたわけだし。

チラリとミミに視線を向けると、眼と眼が合う。ミミは頬を少し赤くしながら気まずげな表情をして目を逸らしてしまった。自分が一度通った道とはいえ、改めてそれを指摘されるのは恥ずかしいらしい。

俺？　俺はゲームの頃のイメージが強いせいか、全然そんな風にならなかったんだよな。もしかしたら未だに現実感が無いだけなのかもしれないけど。

「ヒロ……」

「こいつは失礼。男子たるもの常に紳士たれ、だな」

「あんたに紳士はちょっと無理じゃない？」

「酷い」

俺も紳士らしく振る舞うのは無理だと思ってるけどな。そういうのは俺に合わない。肩が凝りそうだし。

☆★☆

「あー、酷い目に遭ったわ」

俺には若干圧迫感がある天井が低めの街路を歩きながらティーナが肩をぐりぐりと回している。なんかグキグキ言ってるけど大丈夫か、それ。

「自業自得だろう」

結局、姉妹の取っ組み合いはウィスカの勝利に終わった。見事な低空タックルからの流れるような関節技に流石のティーナも音を上

げたのである。まぁ、実際には二人とも見た目がまるで子供のような外見なので、壮絶と言うよりは微笑まく見えてしまう取っ組み合いだったのだが。

「……」

勝利してもウィスカは憤懣やる方ない様子でツーンとしている。お漏らしを姉のティーナに笑われたのが相当腹に据えかねているらしい。俺もあれはどうかと思ったよ。

「妹はまだ怒っているようだぞ」
「後でしっかり謝っとくわ」
「少し時間を置いたほうが良いかもな」

ティーナが馬鹿笑いしたのもウィスカが過剰反応したのも、恐らくは戦場帰りでテンションが妙なことになっていたせいだろう。命の危機を乗り越えて安全な場所に帰ってこれたからはっちゃけてしまったんだな、多分。興奮してしまっていたと言っても良い。

船に乗ったばかりの頃のミミはどうなっていたかって？　ミミはもう俺にくっついて離れなかったよ。もうベッタリ。そんな風にされたらどうなるかは火を見るより明らかだよな！　今はかなり落ち着いたけど、それでもやっぱり戦場から帰ってくるとミミはスキンシップが多めになるな。

エルマ？　エルマはお酒を呑むね。そして酔っ払って俺の寝室に乗り込んでくることが多いね。エルマはお酒好きだけど、実はそんなに強くないからなぁ……寄ってぐでんぐでんになったエルマも可愛いよ。

「えっと……サラさんがお店の予約を取ってくれているという話でしたよね」

「納品を三日後に控えた接待という話だな。二人を船に乗せることも決まって関係も改善したし、最後のご機嫌取りってところじゃないか？」
「大仰と言うかなんというか……まぁ接待一回くらいは端金ってところかしら」
「スペース・ドウェルグ社の規模からすればそうなのかもな。そういう社風なだけかもしらんが」

飲みにケーション的な。

「あれ？　なんだか騒がしいというか、物々しい感じですね」
「うん？」

しばらく歩いて飲み屋街に差し掛かった辺りでミミがそんなことを言い始めたので俺も先に目を向けてみる。すると、確かに前方に人だかりが出来ているようであった。それだけでなく、武装した治安維持隊の隊員らしき者までいる。

「何かあったのかね？」
「何かしらね。何だと思う？」
「んー、わからんなぁ。小火とかではなさそうやけど。刃傷沙汰でも起こったかな？」
「刃傷沙汰」

一体この宇宙時代にどうやって刃傷沙汰なんて起こるというのか。調理技術が忘れられるくらい自動調理器が普及しているという……ああ、ドワーフの場合あまり自動調理器を使わないみたいだから、割と刃物が出回ってるのかな？

「目的の店が事件に巻き込まれて無ければいいけど」

「それは困るなぁ」

エルマもティーナも完全に他人事である。そりゃそうだ。別に俺達はこのコロニーの治安維持組織の人間でもなければ、正義のヒローでも慈善活動家でもなんでもない。自分達の身に直接災難が降りかからなければ精々大変だなぁとか痛ましい事件だなぁと思うくらいが精々である。

大いなる力を持つ者は大いなる義務も背負わなければならない？

知ったこっちゃないね。自分の力は自分の好きなように使う。誰かに義務を押し付けられるのは御免だよ。

「ここですよね」

「ここのはずだな」

滅茶苦茶直接災難が降り掛かってきていた。いや、行こうとしていた店が思いっきり『Ｋｅｅｐ　Ｏｕｔ』って感じになっているだけで、直接被害があったわけじゃないんだけどさ。今日の飲み会だか接待だかの予定がぶっ壊れただけで。

「サラは無事かな」

「どうかしら。連絡してみたら？」

「そうしよう」

小型情報端末を取り出してサラに通信を繋げる。すると、割と近いところから呼び出し音が鳴った。一瞬事件に巻き込まれたのかとゾッとしたが、その音は店を眺めている人混みの中から聞こえてきているようだった。店の中から聞こえてきたらどうしようかと思ったぞ。

『はい、サラです。すみません、今日のお店なのですが……』

「ああ、大丈夫。もう現場に来てる。というかすぐ近くにいるみたいだ。振り返ってみてくれ」
『あ、そうみたいですね。今そちらに行きます』

小さな人影が人混みを掻き分けて転び出てきた。スーツ姿のサラである。

「すみません、折角お越し頂いたのに」
「いや、サラが悪いわけじゃないだろう。何があったんだ？」
「強盗みたいです。わざわざ料理屋に？　と思わなくもないんですが……」

そう言ってサラは難しい顔をしている。確かに料理店は強盗が入る店としては適切じゃないし、時間帯的にも今は午後五時を回ってじきに午後六時にさしかかるくらい――つまりこのような食事処や呑処の集まる場所では人通りが大変多くなる時間帯である。押し込み強盗をするにしても、普通はもっと人通りの少ない時間を狙うだろう。

「考えてもわからんことは考えても仕方ないな。プランBは？」
「多少店のグレードは落ちますが」
「別に問題ないだろ。今日は祝勝会だ、たらふく食うぞー」
「おー、呑むわよー」
「わーい！」
「わ、わーい」
「お二人はダメですよ」

エルマに便乗して快哉を上げるティーナにサラが冷たい声でツッコミを入れた。せやろな。

#131　姉妹の死闘（後書き）

よかった、とくにりゆうもなくさらわれるサラさんはいなかったんだ―（：3」∠）―

#132　納品日（前書き）

今日こそは遅れ……遅れた！―（：3」∠）―

#１３２　納品日

久々の宙賊退治をしてサラからの接待を受けたその夜から更に三日。俺達は特に宙賊退治に出ることもなく、クリシュナに留まってのんびりとしていた。

え？　働かなくて良いのかって？　今すぐ働かなきゃ立ち行かなくなるほど金に余裕がないわけでもなし、母船が仕上がってきたら結局は母船も使った連携訓練がてらまた宙賊どもを狩り出すことになるので、クリシュナ単機であくせくと働いても仕方がないだろうと思ったのだ。クリシュナの試運転に関しては先日の宙賊退治で十分だったしな。

まぁ、ゆっくりと過ごしたと言っても別にずっと引きこもっていたわけではないけどな。ミミと一緒に買い物に行ったり、エルマと二人でドワーフの居酒屋巡りをしたり、メイと一緒に帝国軍の詰め所まで先日の宙賊にかかっていた賞金を受け取りに行ったりした。

先日の宙賊からの賞金と、奴らからの略奪品の売却益は合わせて１３万５０００エネルとなった。賞金額総計１１万２０００エネルに略奪品の売却益２万３０００エネルが加わった形だな。

ミミの取り分は０．５％から１％に上がったので１３５０エネル。エルマは変わらず３％なので４０５０エネル。それらを差し引いた１２万９６００エネルが俺の取り分だ。

改めて見ると俺の報酬が暴利に見えるな。

でもこの船は１００％俺のものだし、メインパイロットとして実際に戦っているのは俺だ。ついでに言えば二人の衣食住に関しては全て俺が提供することになっているし、福利厚生に関しても無論俺の責任で、そちらに関しても最大限配慮はしているつもりである。その辺りを鑑みると、やはりこの辺りの報酬で妥当ということらしい。傭兵ギルドからのお墨付きもあるので、これで間違いないのだ

ろう。
船が共同出資で購入されたものだとまた結構違ってくるみたいなんだけどな。報酬の分け前に関しては船やその運用にどれだけ金を出しているのか、という点が重要であるらしい。

「ついに納品ですね！」

納品される母船が係留されているドックへと向かう道すがら、ミミが興奮した様子で声を上げる。

「そうね、結構長く感じたわね。ところで、船の名前は決めてあるの？」
「船の名前……ああ、そういや決めなきゃいけないんだったっけ」

どうしたもんかな。俺はあんまり船の名前とかには拘りを持たない方だから、適当に船にデフォルトでつけられている名前をそのまま使ったりしていたんだが。

「スキーズブラズニルじゃだめかな」
「ダメじゃないけど……もっとこう、捻りましょうよ」

捻りましょうと言われてもなぁ。でも確かにスキーズブラズニルはちょっと長いしな。それに確かスキーズブラズニルは北欧神話に出てくる船の名前で、クリシュナはインド神話に出てくる英雄の名前だったっけ。確かヴィシュヌの化身の一つとかだったな。この二つを調和させるような名前は中々に難しいと思うのだが。何せ全く別の神話の存在だ。そして俺は北欧神話の知識はある程度あるのだが、インド神話の知識はほぼ皆無である。クリシュナのことだって船を手に入れてからネットで検索して知ったくらいなのだ。
その朧気な知識を引っ張り出してみる。ええと、そうだな。

「じゃあ、ガルーダというのはどうだ」
「ガルーダ？」
「神様が乗る神鳥の名前だ。そもそもクリシュナというのがヴィシュヌって神様の化身の一つなんだが、ガルーダはそのヴィシュヌが乗る炎のように光輝く鳥の名前だよ」

確かクリシュナがガルーダに乗るような描写は俺が調べた範囲では無かったが、まぁ別に良かろう。

「鳥、鳥ねぇ……鳥って外観ではないわよね、あれは」
「……それは確かに」

スキーズブラズニルはかなりゴツめで、鳥から連想されるような優美さというか軽やかさとはまったく無縁の外観である。確かにちょっとばかりアンマッチかもしれない。

「じゃあ、ロータスなんてのはどうだろう」
「ロータス、植物の名前ですよね。蓮、でしたっけ？」
「そうだな。俺の故郷だと神様とかは蓮の花の上に座っている姿で描かれることも多いんだ」

所謂蓮華座というやつだ。仏教で神仏がその上で胡座をかいていたり、立っていたりするやつだな。神の座す場所としては割と適当なのではなかろうか？　インド神話と仏教には密接な関係もあることだし。

「でも、蓮の花は白から淡いピンクって感じじゃない？　新しい母船はクリシュナに合わせて濃紺から黒って感じのカラーリングよ？」
「じゃあブラックロータスだな。強くて高そうな名前だ」

「強くて高そう……？」
「気にするな」
俺の発言に首を傾げるミミにそう言っておく。いきなり魔力が三点湧いてきそうな名前だよな。
「ガルーダよりはブラックロータスの方がしっくり来るわね」
「そうですね。花の名前ってなんだか可愛いですし」
「じゃあそれで。メイもそれでいいか？」
「はい」
俺の少し後ろをしずしずとついてきていたメイも静かに頷く。メイの髪の毛の色も瞳の色も黒。メイド服も概ね白黒。彼女の操る船としても『黒い蓮』という名前は割と適当だったかもしれないな。

☆★☆

「お待ちしておりました」
引き渡し場所である大型ドックに着くと、そこにはサラが待っていた。他にも人がいるが、俺に判別できるのはサラだけである。サラの近くにいる男性ドワーフには見覚えがあるような気がするので、いつだったかホテルに謝罪に訪れた彼女の上司なのかもしれない。正直、ドワーフの男性は髭がモサモサで見分けがつきにくいんだよな。
「どうも。ようやくだな」
そう言って俺はこれから引き渡される母艦である濃紺から黒にカラーリングされたスキーズブラズニル――ブラックロータスを見上

げた。クリシュナの何倍もデカい。クリシュナも小型艦という割にはデカいのだが、そのクリシュナを二隻並べて収容できるような船なので、とてもデカい。
フォルムとしてはところどころに流線を取り入れたつつも、平面装甲が目立つな。いや、実際には完全な平面という場所は殆ど存在せず、微妙に曲面を描いているようだ。強度の関係だろうか？
真横から見るとレーザーライフルのような形をしているようにも見えるな。前面に大きく張り出した艦首は図太い四角柱型で、角は丸い。艦隊各部にある装甲の膨らみにはコンシールド加工された各種砲が内蔵されており、武装展開時には各装甲がスライドして砲塔が出てくる形になっている。
大型ＥＭＬは機体前方上部に搭載されており、こちらも通常時は装甲に覆われて隠れている。展開時には他のコンシールド砲塔と同じく装甲がスライドして砲が姿を表すわけだな。

「うん。良い。かっこいいな」

なんというかこう、新しい機体というか宇宙船というものには男心を擽られて仕方がないな。メイの希望により多数の火器を搭載したブラックロータスは瞬間火力で言えばクリシュナよりも上だ。
特に大型ＥＭＬは当てにくいものの、威力だけで言えば戦艦の主砲クラスの威力である。直撃すればクリシュナですら危うい威力だ。宙賊艦であればまず間違いなく木っ端微塵である。
スペック的には帝国航宙軍正規部隊の巡洋艦クラスであろう。もっとも、たった一隻では正規軍相手には抗しようもないだろうが。宇宙帝国の正規軍というのは、このブラックロータスのような高性能艦を数百隻、数千隻と揃えているものなのだから、同じ土俵で戦えば一瞬で蜂の巣である。
かつてクリシュナがベレベレム連邦の正規艦隊に大打撃を与えられたのは奇策を弄した上に超近接戦闘に持ち込んだからだ。あんな

艦隊に何の策も使わずに真正面から殴り込んだら接敵する間に蒸発させられるのがオチである。
このブラックロータス相手ならどう攻略するかな？　近づきさえすれば下方が死角になってるみたいだから、そこからチクチクと攻撃を重ねれば撃破できそうだが。真正面からだと流石に危ないな。

「ヒロ様の目がものすごくイキイキとしてますね」
「男っていうのは新造の母艦を前にすると無邪気な子供みたいになっちゃうものらしいから」
「……可愛らしいですね」

メイの言葉に思わずギョッとしてメイに視線を向ける。ミミとエルマも目を丸くしてメイに視線を向けていた。

「何か？」
「い、いや、なんでもない」

あまりにも意外な発言に驚いただけである。まさかメイから可愛らしい、などと言われるとは思わなかった。なんだか急に恥ずかしくなってきたぞ。

「気に入っていただけたようで何よりです」

サラもまた食い入るように船を見ていた俺に微笑ましいものを感じていたのか、穏やかな笑顔であった。くっ、不覚。

「では艦内をご案内しますね」
「ああ」

サラに導かれて既に降ろされていたタラップを登り、船の中へと

足を踏み入れる。各生活スペースの内装はクリシュナに準拠して居住性の高いものに換えてあるが、今歩いている通路などは標準のままだ。とはいえ、これまでの経験が活かされているのか、通路は比較的広く、無用の出っ張りなども見当たらない。非常にスッキリとした作りで、不意の事故などで壁に叩きつけられたりした際にも大事には至らなさそうである。

「壁面には衝撃吸収素材を張ってるのね」

エルマが白い壁面を触りながらそう言うので、俺も壁を触ってみる。なんとも不思議な手触りだ。光沢はほとんど無く、肌触りとしては硬質のプラスチックのようにも思える。それなのに、押すと僅かに沈み込むのだ。流動体めいた硬質プラスチックとでも言うべきだろうか？　俺の知る限りではこのような特性を持つ素材に心当たりは無い。この世界独特のハイテク素材なのだろう。

「はい。壁に叩きつけられた際に怪我をしにくくする効果があり、断熱性も高いことから全体のエネルギー効率も上昇します」

「なるほど。断熱性が高ければ空調に回すエネルギーも少なくて済むもんな」

「はい」

一通り壁の不思議な材質の手触りを楽しんだ後はカーゴスペースを兼ねたハンガーへと向かう。

「お、来たな」

「こんにちは」

そこには作業着を身に着けたティーナとウィスカが待っていた。どうやら整備用の機材や物資、補修用の素材のチェックなどをして

いたらしい。
「今日から世話になります。お手柔らかに頼むで」
「よろしくおねがいします」
そう言ってティーナは片手を挙げ、ウィスカは頭を下げた。
「こっちこそよろしく頼む。まぁ、こっちの船はクリシュナより危険ってことは――」
宙賊に対する疑似餌として使うこともある以上、それなりに危険ではあるか。シールドも装甲も強力なものを装備しているから、そうそう撃破されるなんてこともないとは思うが。
「――ないけど、一応脱出艇の位置や避難経路なんかはよく把握しておけよ」
「なんか気になる間があったな？　本当に大丈夫なんか？」
「ダイジョーブダイジョーブ、モンダイナイヨ」
実は宙賊を釣るための囮役にする予定なんですとは今更言えない。まぁそのうち説明すれば良いだろう。はっはっは。
訝しげな表情をするティーナをスルーしてハンガースペース兼カーゴスペースも見て回る。クリシュナとは比べ物にならないくらい広いな。これなら運び屋としての仕事や交易めいたことも十分可能だろう。金稼ぎの選択肢が大きく広がるな。
「次はコックピットに向かいましょうか。途中で休憩室や食堂にも寄りましょう」
「わかった。二人とも、また後でな」
「はいよ」

「はい」

姉妹に別れを告げ、サラの後について歩き始める。流石に広いなぁ、母艦ともなると。

#132　納品日（後書き）

年末年始は流石にちょっと休みたいからね！　次回更新は1／3予定となります！
ゆるしてね！　―（：3」∠）―

#133　居住区画（前書き）

新年あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします！―（∵3」∠）―（早速遅刻しながら

#133　居住区画

引き続き母艦の散策である。
ところでスキーズブラズニル級母艦ブラックロータスはかなり大きな船だが、運行に必要な船員数は実のところそう多くはない。というか、やろうと思えば一人でも運用できるように設計されている。これは勿論高度なオートメーション化の賜物であるわけだが、この極端な省力化がこの世界の歴史の中でどのようにして発展してきたのかは俺にはわからない。
俺の見解で言えばＳＯＬというゲームは一人のプレイヤーが一つか、それ以上の数の船を操って遊ぶことができるゲームであったのでどんな大きな船でも一人で動かせるのは当たり前という感覚であったのだ。
しかし、実際にＳＯＬと限りなく似たこの世界に来てからは少しだけ違和感を感じている。いくら自動化されている部分が多いとは言え、この規模の船を一人で操れるようにする方が人員を雇うよりもコストがかかるはずだからだ。ティーナとウィスカはその辺に詳しそうだし、今度時間があったら聞いてみるとするかな。

「ここが休憩室です」

サラが自身に満ちた顔で俺達を振り返る。
休憩室の広さはかなりものであった。俺の感覚で言うと、旅館の宴会場くらいの大きさと言ったところだろうか。子供なら走り回れるくらいの広さがあるな。

「うわぁ、広いですね」
「確かに。クリシュナの食堂も落ち着くけど、こっちの休憩室もな

かなかリラックスできそうね。あら、あっちにはテラリウムがあるわ」

そう言ってエルマは休憩室の一角にある植物の生えているスペースへと歩いていった。どうやら壁面の一部がガラス張りになっていて、その向こうに自然環境を模した小さなスペースが作られているようだ。ああ、これはあれだな。なんかトカゲとかイグアナとかを飼ってるようなやつだ。

しかし、じっくりと見てみても植物以外のものは見当たらない。単に生育している植物を見て楽しむ類の施設であるようだ。なにか生き物が居れば面白かったのにな。そう思って俺はすぐに興味を失ってしまったのだが、ミミとエルマはそんなこともないらしく興味深そうにテラリウムとやらをしばらく眺めていた。

コロニー育ちのミミは単純に植物をあまり見た覚えがないそうだし、エルマもエルフ的な感性で植物に何か感じるものがあるのかもしれない。わからんけど。

休憩室には他に寛げそうなソファやテーブルセット、それにドリンクサーバーやマッサージチェアのようなものも設置されており、確かに休憩室の名に恥じぬ装いであるようであった。

「食堂やトレーニングルーム、それにシャワールームなどもこの近くに配置されています。未使用の乗員室や客室、それに医務室などもですね。さしずめこの辺りはブラックロータースの居住区画といったところです」

サラの案内で居住区画の施設を見て回る。食堂はクリシュナのものよりも広く、配置されている自動調理器もクリシュナと同じテツジン・フィフスにしてあるようだ。三人で使う分にはクリシュナの食堂でも余裕があるが、ティーナとウィスカも含めて五人で食事をするならこっちのほうが広くて良いかもしれないな。

あと、トレーニングルームはやっぱりこっちのほうが広いから充実してるな。クリシュナにはないトレーニング機器があるし、広いから三人以上でも同時にトレーニングできる。クリシュナのトレーニングルームはあまり広くないから、同時に三人でトレーニングするのにはちょっと手狭だったんだよ。

朝起きたらこっちのトレーニングルームでトレーニングをしてシャワーを浴びて、こっちの食堂で朝飯を食うのが良いかもしれない。休憩室もこっちのほうが広くてリラックスできそうだしな。それにミミとエルマがテラリウムを大層気に入ったようだし。あのテラリウムの世話はどうなってるのかね？　やっぱいつか見た食糧生産工場みたいに自動化されているんだろうか？　自動化されているんだろうな。そうじゃなかったら早々に枯れ果てるぞ。

「では、コックピットに向かいましょう」

居住区画を一通り見た俺達は最後にコックピットへと向かう。

「へぇ、やっぱり母艦ともなるとなかなか広いな」

こちらも休憩室ほどではないが、かなりの広さであった。十人くらいまでなら余裕を持って過ごせる空間だ。ブラックロータスのコックピットはクリシュナと違って艦の外縁部ではなく、艦の中央付近に存在する。なので、実際にはコックピットというよりは戦闘指揮所とでも言った方が良いのかもしれない。

「運行時は基本的に私がこちらのシートに座り、艦の全制御を行うことになります」

そう言ってメイが指し示した場所にあったのは何やらゴテゴテと装飾――ではないが、オプションパーツのようなものがつけられた

シートであった。何かよくわからない端子などが多数存在しており、明らかに普通のシートではない。

「なんか随分と仰々しい感じのシートだな」

「はい。私のよう電子頭脳の持つ処理能力を最大限に反映させるためのカスタムシートです。この専用シートから艦の機動、火器管制、出力調節、艦内の生命維持、その他この母艦に関する全ての制御を行うことが出来ます」

「なるほどなぁ。システムの掌握は問題無さそうなのか？」

「はい、問題ありません。システムの掌握は五分もあれば終わるでしょう」

「そうか。こっちの制御は任せたぞ」

「はい、この私にお任せください」

そう言ってメイはコクリと頷く。こっちのことはメイに任せておけば心配はいらないだろう。

「こちらに関しては私が案内するべき箇所は無さそうですね。こちらで船の案内は完了という形になりますが、何か気になった点などはございませんか？」

「俺は特には。皆は？」

「私も特にはないです」

「私もないわね」

「問題ありません」

全員特に無いようだ。

「では、こちらに受領のサインをいただけますか？　はい、結構です」

サラの差し出したタブレットに受領のサインをして小型情報端末で認証を行い、ブラックロータスはこれで正式に俺の船になった。この手続きと同時にブラックロータスの代金の残りがスペース・ドヴェルグ社へと振り込まれることになる。取引完了だな。それを確認したサラがホッと胸を撫で下ろした。彼女にとって今回の取引はそれはもう大変な苦労の連続であったことであろう。主にあの姉妹のせいで。

俺？　俺はー……別に俺から事を荒立てたつもりはあまりないんだけどな。トラブル体質の俺と関わったのがサラにとっての災難と言えば災難であった可能性は否めないけど、それは俺だって意識してやっていることじゃないからな。どうしようもない。俺は悪くねぇ。

「サラには世話になったな」

「いいえ、私なんて何も……いえ、まぁ、頑張りはしましたね」

何もしていない、と言いかけて色々なことが脳裏を過ぎったのか、サラは最終的に遠い目をして虚空に視線を向けていた。相当苦労したらしい。サラは苦労人ポジションだな。

「今回の商談は私にとって良い経験になりました。ヒロ様、改めてありがとうございました」

「いや、こちらこそだ。全部が全部俺のせいだったとは思わないが、苦労をかけたな」

「いえ、本当にヒロ様に過失は一切ありませんので……ふふふ」

姉妹の存在を思い出したのか、サラが笑顔で黒いオーラを発する。姉妹も今では一応うちの船に同乗する準クルーみたいなものなので、その黒いオーラは引っ込めていただきたい。鎮まれ。静まり給え。どうしてそのように荒ぶるのか。いや、荒ぶっても仕方ねぇな。

「ははは……まぁあの二人も禁酒はかなり堪えたようだし、これからはそれなりに危険な傭兵生活だから」
「そうですね、水に流すことにします」

俺の発言が功を奏したのかどうかはわからないが、とりあえず黒いオーラは引っ込めてくれたようで何よりである。

「とりあえずしばらくの間はこのコロニーに留まってこの船――ブラックロータスの慣らし運転をする予定だ。もしかしたら実際に運用を始めてから気になる点がでてくるかもしれない。その時は連絡させてもらうよ」
「はい、その時はすぐにご連絡ください。今後もスペース・ドウェルグ社をよろしくお願いします」

そう言ってサラはその幼気な顔に満面の笑みを浮かべた。

☆★☆

「はーい、そういうわけで早速出港するぞー」
「あいあいさー！」
「はいはい。メイ、そっちの準備は問題ないかしら？」
『はい、問題ありません。いつでも出港可能です』

サラと別れて凡そ三十分。俺とミミ、それにエルマはクリシュナのコックピットで出港準備を進めていた。早速ブラックロータスへの着艦、そしてブラックロータスからの発艦訓練をしようというわけである。その他にも母艦を運用するとなれば連携の訓練を事前にしておくにこしたことはない。メイならどのように運用したとしてもぶっつけ本番でなんとかしてしまいそうな気がするが、それはそ

れ、これはこれである。
　ティーナとウィスカは余程のことがなければ俺達の通信には参加してこないようになっている。余程のことというのはどういう状況かというと、ブラックロータス内でなにか不足の事故が起こった場合などだ。突然の機関停止とか、秘密裏に何者かが艦内に侵入してきたとか、そういう異常事態でも起こらない限り戦闘中には通信に介入しないように言いつけてあるのだ。
　とはいえ、ブラックロータスへの着艦やブラックロータスからの発艦に関しては彼女達の協力があったほうがスムーズに事が運ぶのは間違いないので、その時には戦闘中でも通信回線を開くことになる。まぁ、戦闘中に着艦することはまずないと思うけど。

「では出港後、コロニーから離れた地点で合流して慣熟訓練を行う。座標をマークしてくれ」
「はい、目的の座標をマークしました」
『こちらもマークしました。では出港申請を行います』
「こちらも出港申請を出しますね」

　ミミが手早くブラドプライムコロニーの港湾管理局に出港を申請し、申請が速やかに受理されて出港許可が降りる。今日もブラドプライムコロニーは盛況だな。他の船に接触しないように注意しながら船を進め、その途中でブラックロータスの横を通過する。

「うーん、良いね。ワクワクしてくる」
「こうしてみると大きいですねー……宙賊の中型艦より大きいみたいです」
「そうね。ギリギリ中型艦の枠に収まるサイズってところかしら」
　間近で見るとブラックロータスの威容はその優雅な名前とは正反対である。平面や角などは極力排しているのにも関わらず、その姿

はどうみても『ゴツい』としか表現のしようがない。あちこちにあって砲塔を覆い隠しているコンシールド装甲が余計にそのような印象を増大させているのだろう。その威容を別ものに例えるならば、鞘に収まった剛剣といったところだろうか。

いやごめん、ちょっと無理してカッコよく言った。俺の本当の第一印象は胸元に不自然な膨らみのあるゴツい黒服のお兄さんといった感じである。何かあったらすぐにスッと胸元に手を伸ばしそうなヤベーやつ感がすごい。実際、コンシールド装甲に覆い隠された砲塔が全て顔を出すと巡洋艦並みの火力があるので、あながち間違いでもない。

「……ゴツいな。一応コンシールド装甲で隠してるけど、大丈夫かこれ」

「遠目からのパッと見じゃわかんないわよ。問題ないと思うけど」

「そうかなぁ」

まぁ宙賊は基本バカ揃いだし、問題ないか。獲物だと思って襲いかかった船からクリシュナが飛び出してくる上に、非武装だと思っていたその船も実は重武装という宙賊にとってはあまりにも酷いデストラップである。

「ブラックロータスも出港完了です」

「了解。じゃあ指定ポイントへと向かうとするか」

「はい、ブラックロータスとの同期を開始します」

ミミがクリシュナとブラックロータスの超光速ドライブの同期作業を開始する。ブラックロータスのほうが質量が大きいので、今回はブラックロータスの超光速ドライブにクリシュナが乗っかっていく形になるな。

『では、指定ポイントへと向けて超光速ドライブを開始します。超光速ドライブ、チャージ開始。カウントダウン』

通信越しにメイがカウントダウンする声が聞こえてくる。

『5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動』

ドォン！　という轟音が鳴り響き、ブラックロータスとクリシュナは超光速ドライブ状態に突入した。

#134　慣熟訓練（前書き）

あんまり毎日遅刻するのもね！　アレだからね！　―（：3」∠）―

#134　慣熟訓練

『目標ポイントに到達、超光速ドライブを解除します』

ディスプレイ越しにメイの声が聞こえ、その次の瞬間再び轟音が鳴り響いてクリシュナとブラックロータスは通常空間へと帰還した。ごく短時間の超光速航行だったが、それでもあれだけ巨大で存在感のあったブラドプライムコロニーが影も形も見えない程度には離れたようだ。

「今のところは問題無さそうだな」

『はい、そのようです。では、格納庫のハッチを開放します』

「了解」

メイの行動には隙も無駄も無い。超光速ドライブのテストが終わったら、今度は早速発着艦機能のテストを行うらしい。

ブラックロータスの後方下部にある格納庫のハッチへと船を動かすと、すぐにハッチからガイドビームが発射されてきた。母艦のガイドビームは一種のトラクタービームで、照射を受けることによって自動的に格納庫へと引き寄せられるようになっている。つまり、ガイドビームの照射圏内に入ったら、着艦する側はもうやることはないというわけだ。

無論やろうと思えばマニュアルでの発着艦も可能だが、艦内に速度超過で突っ込みでもしたらブラックロータスに大ダメージを与えかねないので、まずやらない。

と、そんなことを考えているうちにガイドビームによって引き寄せられたクリシュナは気密シールドを抜け、何の問題もなくブラックロータスのハンガーに着艦することができた。後方で格納庫のハ

ッチが閉じていく。

「問題無さそうだな」

『はい。姉妹にハンガー設備のチェックをするように申し付けてありますので、そのまましばらくお待ち下さい』

「了解」

クリシュナが着艦したランディングパッドが回転し、クリシュナの向きが１８０。変わる。つまり、ハッチ側に艦首が向いた形になる。発艦時にはこのランディングパッドがそのままカタパルトとなってクリシュナを艦外に射出する形になるわけだな。

今後はこの格納庫内がクリシュナの定位置になるだろう。基本、クリシュナはこのハンガー内に格納されていて、有事の際に文字通り外に飛び出すという形になる。

艦の外部に設置されている光学センサーで慌ただしく動いている姉妹の姿を観察する。

「二人とも一生懸命だな」

「そうですね。ドワーフの女性はちっちゃくて可愛いですよね」

そう言って二人の姿を見つめるミミの表情は、なんだか妹が頑張っている様を見守る姉のような視線であった。いや、二人ともミミよりも歳上だけどね？　まぁ、見た目が幼女というか少女にしか見えないドワーフの姉妹がハンガーを走り回っている姿はなんだか微笑ましいけれども。

ちなみに、エルマも俺と同じことを考えているのか微妙な表情でミミを見ていた。

「お？　整備用のロボットもいるんだな」

「そうみたいね。クリシュナも小型艦って言ってもそれなりの大き

さがあるし、ブラックロータス全体の整備も一手に引き受けるとなると流石にあの二人だけで全部見るのは無理だからじゃない？」
「それもそうか」

小型艦とは言っても、クリシュナは五人がある程度の余裕を持って過ごすことが出来る広さの生活スペースを内包している。その上カーゴスペースやら機関部やら色々とあるわけで、その大きさは凡そ大型航空機並みと言っても良い。いや、もう少しデカいかもしれない。

そして、ブラックロータスはそんなクリシュナを二隻格納できるだけのハンガースペースと、それよりも更に大きいカーゴスペース、それに最大三十人ほどが生活できる居住区画なども内包している。全長は３００ｍほどだったはずだ。俺の感覚からすると超でかい。

そんなデカい船を二人だけで整備するというのは確かに無理だろう。整備ロボットを運用するのも当然だな。

そうしているうちに設備のチェックが終わったのか、ティーナとウィスカがクリシュナから離れていく。

『ご主人様、設備のチェックが完了したようです。続いて発艦テストを行います』
「了解。こっちはいつでも良いぞ」
『はい。ハッチ開放、カタパルト射出します。３、２、１、射出』

グンッ、というシートに向かって身体が押さえつけられるような感覚とともに一気に加速したクリシュナが宇宙空間に向かって射出される。カタパルトで射出されるってのはこんな感覚なのか。ちょっとした絶叫マシンみたいだな。

「慣性制御が効いている割には中々の加速感だったな」
「そうですね、ちょっとびっくりしました」

まぁ、気を失うほどのGがかかったわけでもない。別に気にすることはないだろう。効きが甘い理由はちょっと気になるけど。外部からの力で加速したから反応が遅れたのかね？

『このままハッチを開放しているので、次はオードドッキングを。その次はマニュアルドッキングを行ってください』

「マニュアルもかぁ……了解」

マニュアルドッキングをすることはないと思うけどなぁ、と考えつつも、絶対に無いとも言い切れないので練習はしておくにこしたことはないか、とも思う。マニュアルドッキングをするなんてよっぽど切羽詰まった状況に違いないので、ぶっつけ本番でやるよりは何度かでも事前に練習はしておいた方が良いかもしれない。

そうして何度か発着艦の慣熟訓練を行った後は武装のチェックである。メイの宣言と同時に武装を隠していたコンシールド装甲が稼動し、武装が展開される。

「流石に派手だなぁ」

「すごいですね。あれがレーザー砲の砲火だと思うとちょっと怖いですけど、綺麗です」

「確かに、見てるだけなら綺麗よね。あの中に突っ込むのは絶対に御免被りたいけど」

「確かにそれは嫌ですね」

十二門のレーザー砲が一斉に発射される光景はなかなかの見ものである。

ブラックロータスに搭載されている武装はクラス2のレーザー砲が八門、クラス3のレーザー砲が四門の合計十二門。それと今は撃っていないが、シーカーミサイルポッドが一〇門、更に大型ＥＭＬ

が一門。火力だけで言えば余裕でクリシュナを上回っている。
『武装のチェックも完了いたしました。続いて機動性能のチェックを行います』
「ああ、続けてくれ」
ブラックロータスがアフターバーナーを噴かして加速を始める。流石に質量が質量だからか、加速が遅いな。しかしスラスター出力が高いからか、トップスピードは思ったよりも早い。宙賊などの襲撃から逃げる際に重要なのは奴らを振り切るためのトップスピードなので、そういう意味での速さは十分と言える。
「おー……いや、思ったより動くな？」
「思ったより動くわね？」
「そうなんですか？」
俺とエルマはブラックロータスの予想以上の機動性に首を傾げ、ミミはそんな俺達を見て首を傾げる。いや、本当に思ったよりもよく動く。それはつまり、思ったよりも回頭性能が高いということだ。ああいった母艦は基本的に真っ直ぐ進むのは早いが、回頭性能には難があるものだ。だからこそ小型艦に張り付かれると非常に弱い。死角に居座られて延々と攻撃されてしまうからな。
しかし、ブラックロータスはその回頭性能が思ったよりも早い。というか、あれは回頭用のスラスターだけでなく姿勢制御用のスラスターも使ってかなり無理矢理動いてるな。俺の戦闘機動を参考にしているのだろうか。
「どう思う？」
「思ったよりは早いけど、まぁなんでもないと言えばなんでもないわね。機体と腕がヘボな宙賊相手なら通用するかも？」

「まぁそうだな」

思ったよりは早いが、俺やエルマからすれば微々たるものだ。エルマの言う通り、宙賊相手ならワンチャン通用するかな？　というレベルである。やはりブラックロータスに機動戦はあまり期待できないだろう。そもそも全体の構成が重火力砲艦といった感じなのでさもありなんといったところだが。

縦横無尽に宇宙空間を動き回るブラックロータスを眺めていると、突然轟音と共に複数の艦がワープアウトしてきた。見た感じ、帝国航宙軍の艦船に見えるが……？

『こちら帝国航宙軍、ブラド星系第三分隊だ。応答せよ』

すぐさま向こうから通信が入ってくる。これは戦闘でも起こっていると勘違いされたかな？

「こちら傭兵ギルド所属のクリシュナ、そのキャプテンのヒロだ。あっちのデカいのはうちの母艦のブラックロータス。今日受領したばかりの新品でな、宙域でならし運転中だ。どうぞ」

『なるほど。少し待て』

「アイアイサー」

航宙軍の艦船からスキャンされているというアラートが鳴り響く。別に後ろ暗いところは一切ないので、そのまま素直にスキャンを受ける。恐らく、ブラックロータスにも同様の処置がされているところだろう。

『ご主人様。帝国航宙軍が臨検をすると言ってきていますが』

「別に違法なものは一切積んでないんだし、好きにさせてやれ。痛くもない腹を探られるのは良い気分じゃないけどな」

『承知致しました』
「あと、臨検に同行するためにクリシュナをそちらに着艦させる。準備をしてくれ」
『はい』

メイとの通信を終え、ミミに言って今度は帝国航宙軍に回線を繋いでもらう。

「こちらキャプテン・ヒロ。ブラックロータスに着艦し、臨検に同行する。ブラックロータスには小型艦のランディングパッドが二つある。臨検を行う人員を乗せた小型艇は二番パッドに入れてくれ」
『了解した。協力に感謝する』

向こうからの応答を確認してブラックロータスへとクリシュナを向かわせる。
あわよくばこのまま小惑星帯まで行って宙賊でも探そうと思っていたんだが、どうにも上手く行かないな。これから先荷物を満載した状態でこういった臨検を受けることもあるだろうし、今回はその予行練習だと思って大人しく向こうの指示に従うとしよう。

#135　臨検

俺達がブラックロータスの格納庫にクリシュナを着陸させてほんの数分で帝国航宙軍ブラド星系第三分隊――つまりブラド星系の星系軍の降下艇（ドロップシップ）がもう一つのハンガーに入ってきた。

降下艇は母船を離れて単独で惑星やコロニー、あるいは宇宙空間に存在する艦艇に突入することが出来る能力を保つ小型艇の総称である。宇宙空間に存在する船に対しては今回のように格納庫がある場合はこうして普通に着艦することもあるし、そうでない場合は接舷して装甲を破って突入することもある。要は、白兵戦に持ち込む能力を備えている船なのだ。

上陸用舟艇の発展型、宇宙バージョンみたいなものだろうか。小型の車両や大量の人員を運べる上に対人用のレーザー兵器とかも備えているので、敵艦に突入した際には降下艇がそのまま前線基地みたいな感じになるんだよな。

などとＳＯＬで何度か経験した軍の突入隊員ミッションの内容を思い返していると、着艦した降下艇からどやどやとレーザーライフルやパワーアーマーで武装した帝国軍の兵士達が降りてきた。三十人以上いるみたいだな。パワーアーマー装備の兵士は両手の指で足りる程度の数だが、それでもこの数を俺とメイ、それにエルマの三人で相手にするのは無謀である。

「どうも。キャプテン兼シップオーナーのヒロです」

降りてきた兵士に片手を挙げながら挨拶すると、兵士のうちの一人が歩み出て来た。

「帝国航宙軍ブラド星系第三分隊降下兵団第六小隊隊長のポール・

ドライ少尉です。帝国航宙法三章七条に従い、貴艦の臨検を実施します」

ポール少尉はいかにもな新品少尉、とでもいった感じの若々しい士官であった。金髪碧眼に短く刈り揃えた髪の毛、程よく鍛えた細マッチョのイケメンって雰囲気だ。

「はい、どうぞ。引き渡されたばかりでカーゴスペースもガラガラだけど」

「……そのようですね」

俺の指差した先を見たポール少尉が苦笑いを浮かべる。カーゴスペースはハンガースペースから丸見えだからな。

カーゴスペースにある荷物はもともとクリシュナに積んでいた食料品や生活雑貨などである。クリシュナには本当に最小限度の物資だけ積むようにして、それ以外をこっちに移しておいたというわけだな。まだ他の星系に移動するつもりはなかったからそんなに物資も買い込んでいなかったし、他の星系に届ける荷物なんかも一切積んでないから、カーゴスペースはスッカスカである。

「えーと、では我々は貨物のチェックと艦内の調査をしますので」

「どうぞ。一応同行しても良いかな？」

「そうしていただけるとこちらとしても助かります。貨物などについて質問することもあるかもしれませんので。それと、そちらの小型戦闘艦にも立ち入らせていただきますが」

「了解。そっちはエルマとミミに任せていいか？」

「わかったわ」

「わかりました」

帝国航宙軍は軍規に厳しいとの評判だから、滅多なことにはなら

ないだろう。
「ベティー軍曹、君たちの分隊であちらの小型戦闘艦の臨検を実施しろ」
「アイアイサー」
女性下士官に率いられた数人がクリシュナに向かっていき、その後ろをエルマとミミがついていく。女性下士官の率いる分隊を選んでくれた辺りはポール少尉の配慮なのかもしれない。
ポール少尉の部下達が数少ない貨物をチェックしている間にポール少尉からいくつか質問され、それに答える。内容としては今回の出港理由、この宙域に留まっていた理由、貨物の入手先など当たり障りの無いものばかりだ。
「それにしても新造艦ですか……良いですね、どこもかしこもピカピカで。こんな規模の船を個人で所有するなんて少し信じられない気持ちですが」
「かなりまけてもらって２０００万エネルくらいでしたね」
「にせんまんえねる」
ポール少尉が目を点にしていた。
「確か一等准尉が月に４０００エネルでしたっけ。一等准尉の給料だと凡そ４１６年か４１７年分ですね。そう考えるとすげぇな」
「ええ……って何故一等准尉の給料を知っているんですか？」
「前にちょっと一等准尉待遇で軍に入らないか誘われたことがあったんで。給料安いから断ったけど」
「……それはそうでしょうね」
ポール少尉が遠い目をしている。一等准尉よりも少尉の方が給料

は上だろうけど、セレナ少佐ですら傭兵の収入を聞いて驚いていた節があったものな……まぁ、給料についてはあまり触れないでおこう。

「貨物のチェックが終わったようです。引き続き艦内を調査させてもらいますが」

「同行しますよ。まぁ、引き渡してもらったばっかりなんで、あんまり案内にもならんと思いますが」

ポール少尉に同行して艦内の案内を始める。手始めにカーゴ兼ハンガースペースを出て巨獣区画に向かったわけだが。

「これが傭兵の船……だと？」

「なんだこのオシャレ空間」

「めっちゃ広い……贅沢な空間の使い方だな」

「ここに住みたい」

ポール少尉とその部下達が広々として綺麗な休憩室や食堂、トレーニングルームを見て精神的に死にかけている。

「あっ……ぐおぉぉ……！」

パワーアーマーを装着している兵士が食堂に視線を向けて止まった。そしてそのままレーザーライフルを取り落してがっくりと膝を突く。

「なんだ！？　どうした！？」

隣に立っていた同じくパワーアーマーを装着した兵士が驚いてその横に屈み込む。いや、ほんとどうしたんだ？　そんなにショッキ

ングなものが――？

「……食堂の自動調理器」

「何……？」

「あれ、テツジン・フィフスだ……」

「なん……だと……ッ！？」

ポール少尉を含めた兵士達全員の視線が食堂の奥にある自動調理器に集中する。ええまぁ、確かにテツジン・フィフスですけども。

「テツジン……？　それはなんだ？」

「同じフードカートリッジを使っても食べ物のような何かを作り出すうちのクソシェフと違って、高級料理みたいな食い物を作り出す超高級自動調理器です……」

ポール少尉の質問に床に膝を突いて項垂れているパワーアーマー兵士が答える。ああ、航宙軍の船に積んでる自動調理器の性能が低いのね……士気の面から考えると軍隊のメシが不味いのはマズイいと思うんだけどな。

「……お茶は美味しいだろう」

「お茶とお茶菓子以外ダメじゃないですか……」

「艦長の意向だ……諦めろ」

部下の悲痛な言葉にポール少尉が視線を明後日の方向に向ける。なるほど、どうやら彼らの所属する船の自動調理器はお茶関連だけが充実しているちょっと尖った性能の自動調理器であるようだ。英国面に堕ちた調理器なのかな？

「お、兵隊さんや。お疲れ様でーす」

「お疲れさまです」

テンションが下がりに下がっているポール少尉達の横をツナギに身を包んだティーナとウィスカがにこやかに挨拶をしながら通過していく。

「……いまのは？」

「スペース・ドウェルグ社から出向してきているエンジニアです。見ての通り双子の姉妹で、ドワーフです。一応立派な淑女らしいんで、子供扱いはしない方が良いですよ」

「エンジニア……ではこの船の操艦は？」

「俺の高性能アンドロイドに操艦を任せてます」

敢えてメイドロイドと言う必要はないだろう。しかし、ここで兵士の一人が気づいてはいけないことに気付く。

「……貴方以外女性なんですか？」

「……ええ、まぁ」

『『『……』』』

おいやめろ。これみよがしにレーザーライフルの動作確認をするんじゃない。ギチギチと音を鳴らして拳を作るのをやめろ。パワーアーマーでぶん殴られたら死ぬわ。

ちなみに、ここに居るのは多分全員男性である。三名居るパワーアーマーの中身はわからないが、多分反応と声からして男性だ。

「クソッ……クソクソクソッ……！　俺にも出会いさえ、出会いさえあれば……ッ！」

「あってもダメだろ。一回船に乗ったら数ヶ月から下手したら一年くらい連絡取れなくなるし」

「ははっ、帰ったら他の男とくっついてるんだよな……」
「やめろ。その話は俺に効く……せめてコロニー勤務ならなぁ」

一気に士気がダダ下がりした帝国航宙軍兵士達を引き連れて残りの場所を案内して回る。その途中でコックピットにも寄った。

「お勤めご苦労さまです」
「彼女が操艦しているアンドロイド……？」
「えぇ、まぁ」
「……メイドロイドじゃん」
「そうですが、何か？」

兵士の言葉にメイが無表情のまま首を傾げる。

「いや、確かにメイドロイドだが……物凄い高性能機だぞ」
「はい、ご主人様の意向で護衛も兼ねておりますので」

パワーアーマーを装着した兵士の発言にメイが頷く。この場にいるパワーアーマー兵は三人だが、この狭い空間でこの距離ならメイが勝つかもしれないな。メイの近接戦闘能力は尋常じゃないレベルだから。

「これで一通り案内は終わりですが、まだ見て回ります？」
「ええ、一応機関部なども点検させてもらうことになります。そういった場所に密輸品を隠す輩もいるので、一応」
「密輸品ねぇ……そんなに多いんですか？　この辺はそういうのが」
「ええ。宙賊と結託した一部の悪徳業者などがこういった何もなく、目立ちにくい宇宙空間で秘密裏に略奪品や禁制品をやり取りしてブラドプライムコロニーに持ち込んだり、星系外に荷を持ち出したりする犯罪が後を絶ちません。ブラドプライムコロニーの棄民（アウトロー）どもも

暗躍しているようで……」

そう言ってポール少尉が溜息を吐く。外には宙賊、内には悪徳業者と棄民（アウトロー）か。ブラド星系の治安維持は大変そうだな。これをどうにかするには徹底的に犯罪集団と化している棄民を一掃するしかないだろうけど、まぁ難しいだろうな。特に凶悪な犯罪集団を結成している連中はそれなりに重要なインフラ設備のある場所に陣取って大規模な掃討作戦ができないようにしているらしいし。

躍起になって奪い返さなきゃならないほどじゃないけど、そこそこに重要な場所というものすごく絶妙な塩梅の場所に陣取っていて手が出しにくいらしい。多少の損害には目を瞑ってどうにかすべきだと思うんだが、まぁ色々と大人の事情があるのだろうな。

そんな話も交えてブラド星系に出没する宙賊の情報なども聞いたりしている間に調査が終了したらしく、ポール少尉達は来た時と同じように降下艇に乗り込んで自分達の船へと戻っていった。無論、臨検の結果は問題なしである。当たり前だが。

今までは小型戦闘艦一隻のみでの移動ということもあって特にこういった臨検などを受けることもなかったが、今後はブラックロータースのお陰で船の積載量が大幅に増えたので、こうして臨検を受けることも増えるだろう。その予行演習という意味では今回の臨検はちょうど良かったかも知れないな。

「時間も微妙だし、このままブラドプライムコロニーに帰港しよう。本格的な運用は明日から始めるぞ」

小型情報端末を使ってミミ達全員にそう告げ、メイにブラックロータースの進路をブラドプライムコロニーに向けさせる。さぁ、明日からは本格的に宙賊狩りの再開だ。

#135　臨検（後書き）

一昨日もカレー、昨日もカレー、そして今日の昼にカレーを食い切った！
ああ、次は豚肉じゃなくて牛肉のカレーだ……｜（∵3」∠）｜

#136　黒蓮のデビュー戦

昨日は慣熟訓練中に帝国航宙軍の臨検を受けるというハプニングがあったが、なにはともあれ一通りの動作確認は出来たので今日からは本業である宙賊退治に戻ることになる。先日のクリシュナ試運転の際には突発的な遭遇戦をしたが、最初から宙賊を狩るつもりで出撃するのは久しぶりのことだ。

スペース・ドウェルグ社からの出向者であるティーナとウィスカの整備士姉妹は不参加だったが、昨夜のうちに今日の宙賊狩りに関する打ち合わせは終わっている。クリシュナを格納庫に搭載したブラックロータースは滞りなくブラドプライムコロニーを出港した。

「じゃあ、昨日決めたプラン通りに運行してくれ」

『承知いたしました』

格納庫に搭載されているクリシュナに搭乗しているのは俺とミミ、それにエルマの三人だけである。メイはブラックロータースのコックピットで操艦をしており、ティーナとウィスカの整備士姉妹は格納庫近くの自室で待機中だ。流石に部外者だからと情報を完全に遮断するのは不安も大きいだろうから、彼女達の自室でもブラックロータースやクリシュナの様子をある程度モニターできるようにしてある。

「ティーナ、ウィスカ。まず心配はないと思うが、今日は実戦だ。一応気を引き締めておけよ」

『了解や』

『わかりました』

二人の緊張した声が通信越しに聞こえてくる。

「万一に備えてちゃんとおむつもしっかり履いておけよ」
『あはは、ウィスカやないんやから大丈夫やで』
『お姉ちゃん！　ヒロさんも！』

俺とティーナの軽口にウィスカが顔を真赤にして憤慨する。結果的に緊張が解れたようで何よりだ。ミミもなんだか俺にチラチラと視線を向けてきている。

「ミミはもうおむつは取れてるだろ？」
「そ、それは勿論ですよ。もう私もそれなりに慣れてきましたから」

少し顔を赤くしながらもなんだかミミは嬉しそうに口元をによによとさせている。構ってもらえたのが嬉しかったのだろうか。別にミミを蔑ろにしているつもりは一切ないが、最近は母船の購入やクリシュナの整備、それに整備士姉妹への対処で少しミミと接する時間が少なくなっていたかも知れない。今日の宙賊狩りが終わったら存分にミミを甘やかすとしよう。無論、その次はエルマもな。ああ、メイもだな。メイには今回結構振り回されたが、ご主人様としてはちゃんと労ってやるのも大切なことだろう。

『出港申請完了。出港します』
「了解。出港したら予定のポイントへ向かってくれ」
『はい、お任せください』

クリシュナのＨＵＤにはブラックロータスの各部センサーが捉えた映像や情報が表示されている。映像上では既に出港して動いているようだが、慣性制御が働いているのかクリシュナに乗っている俺達には特に船が動いているという感覚は伝わってこない。流石にカタパルトで射出でもされない限りはクリシュナの慣性制御装置は完

壁に働いてくれるようだ。
　程なくしてブラックロータスは超光速ドライブを起動し、超光速航行に移行した。向かう先は昨日このブラックロータスを臨検したブラド星系に駐屯している帝国航宙軍少尉に聞いたポイントで、最近宙賊被害が多いとされている宙域である。超光速航行のスピードを荷物を満載した採掘船並みの速度で運行し、宙賊がインターディクトしてくるのを待ち受けるわけである。

「まぁ一種の釣りだよな」
「星系規模の宙賊フィッシングね」
「ヒロ様はやることのスケールが大きいですよね」

　別に傭兵としては普通だと思うけどな。まぁ、普通はインターディクトなんて好んで受けるようなものでもない。嬉々として受けるようなのは俺達みたいな宙賊釣りを嗜む傭兵だけだろう。

『ご主人様、亜空間レーダーに反応あり。こちらの後方に陣取ろうとしている集団がいます』
「早速か。よし、後ろに着かれるのを嫌がるように少し逃げろ。鈍重な輸送艦を装って回頭を速度は押さえてな。進路はブラドプライムコロニー方向に向けるんだ」
『承知いたしました。インターディクトを受けた場合も同じように出来るだけ抵抗しているように見せかけます』
「そうしてくれ。よし、俺達はスタンバイするぞ」
「はいっ」
「了解。メイもハッチオープンとカタパルトの準備をお願いね」
『お任せください』

　臨戦状態に入ると同時に僅かな揺れを感じる。どうやら順調にインターディクトされたようだ。

その瞬間待機しているティーナから通信が入ってきた。
『ちょ、い、インターディクトされとるやん！？　大丈夫なんか！？』
「ああ、大丈夫大丈夫。計画通りだから。宙賊が餌に食らいついただけだ」
『え、えさ……？　ま、まさかこのブラックロータスを餌に宙賊を釣ったんですか！？』
「その通り。ブラックロータスのシールドと装甲は分厚いから、二人は心配要らないぞ。ちょっと撃たれるだろうけど」
『いやいやいやいや！　撃たれるんかい！？　それはアカんやろ！？』
「大丈夫だ！　ブラックロータスを作った君達のスペース・ドウェルグ社を信じろ！」

グッ、と親指を立ててティーナ達からの通信を切る。まだ何か言い足りない感じだったが、いつまでも構っているわけにもいかない。これが日常的な出来事になるので、早めに慣れてもらうしかないしな。

『インターディクトを成立させて通常空間に遷移します。スキャンをして相手が宙賊だと判明次第射出しますので、そのつもりで』
「了解」

返事をしてから数秒を置いて微細であった震動が一際大きくなり、すぐに完全に震動が止まる。どうやら通常空間に戻ったようだ。
『スキャン完了、相手は宙賊です。数は小型九隻。ハッチ開放、射出します』
「了解。二人とも、飛び出したらすぐに始めるぞ。メイは宙賊の注

意がクリシュナに逸れたのを確認次第攻撃を開始してくれ」
『『『了解(はい)』』』

三人の返事を聞きながら操縦桿の感触を確かめながらHUDの表示をブラックロータスのものからクリシュナのものへと切り替える。そうすると、丁度今にも開ききろうとしている格納庫のハッチが見えた。

『クリシュナ、射出します』

メイの声とともになかなかに強力なGが俺の身体をパイロットシートへと押し付けた。格納庫内の光景が一瞬で後方に置き去りになり、気密シールドを抜けたクリシュナが宇宙空間へと射出される。

『船から小型艦が出てきたぞ』
『護衛の船か？　一緒に飛ばないのは珍しいな』
『所詮一機だ。囲んで叩くぞ』

宙賊達の威勢の良いやり取りが聞こえてくる。ははは、元気な奴らだな。お前らは宇宙の藻屑と成り果てて俺に賞金を献上するが良い。

え？　命を奪うことに対する忌避感？　別に無いわけじゃないが、こいつら宙賊に関して言えばそういったものを抱く余地が無いな。略奪した船の船員を皆殺しにするのは当たり前で、悪ければ慰み者にした後に臓器を取り出して売り払うとか、それ以上に酷いことも平然と行うような連中だ。生かしておいても百害あって一利なし。奴らにかける慈悲はない。

ブラックロータスから飛び出した俺は即座にウェポンシステムを立ち上げて四門の重レーザー砲と二門の大型散弾砲を展開する。どうやら宙賊どもは護衛機と思しきクリシュナに六隻の小型船を差し

向け、残り三隻でブラックロータスの足止めを行うつもりらしい。
フォーメーションも何もないでたらめな機動で六隻の宙賊艦がこちらへと殺到してくる。

「突っ込むぞ」
「了解、チャフ展開するわ」

エルマがサブシステムを制御し、チャフを展開する。チャフは完璧に敵の攻撃を撹乱するというわけではないが、敵のレーダー照準システムに欺瞞情報を与えてその精度を低下させる効果がある。
宇宙空間でチャフ？　と思わなくもないが、実際にそのように作動するのだ。別に金属箔をバラ撒いているわけではないようなので、何か未知の粒子をバラ撒いているか、或いは何かしらの電子的な防御手段を行使しているのかもしれない。まぁ、仕組みにはさして興味はない。敵の攻撃精度が低下するなら俺にとってはなんだって構わないのだ。

『突っ込んできやがる！？』
『ブレイク！　ブレイク！　正面衝突したら助からんぞ！』

自分達のシールドと装甲の薄さは自覚しているのか、宙賊達は突っ込んでくるクリシュナを避けようと慌てて機動を変えようとする。基本、ブラックロータスのような輸送船の護衛についている船というのはシールドも装甲もしっかりしている船が多いので、戦闘速度で正面衝突なんてした場合は宙賊側の船が木っ端微塵になるのだ。それを彼ら自身もよく自覚しているというわけだな。
当然のことながら、そうやって隙を晒させようというのが俺の狙いであるわけだが。

『うわ――』

四門の重レーザー砲から一斉に発射された緑色の光条がクリシュナとの正面衝突を避けようと腹を晒した宙賊艦のシールドを一撃で突き破り、その装甲と船体すらも貫いて行動不能に陥らせる。運良く動力系統か操縦系統だけを破壊したのか、爆発四散していないな。珍しい。

沈黙した宙賊艦の横を擦り抜けた俺はフライトコントロールシステムを切りながら姿勢制御スラスターを噴かしてクリシュナを急速旋回させ、更にメインスラスターを噴かして無理矢理宙賊共の背後を取る。慣性制御装置が働いているにも拘らず凄まじいGが襲いかかってくるが、もう慣れた。日々のトレーニングが功を奏しているのか、こういった無茶な機動を取っても身体に掛かる負担はさほどでもなくなっている。

「ぐっ……！」

「うぅっ」

エルマとミミから苦しそうな声が漏れ聞こえてくるが、それで追撃の手を休めるわけにはいかない。折角ケツに食らいついたのだから、遠慮なく宙賊艦のケツに重レーザー砲の砲撃を叩き込んでいく。

『何だよあの動きは！？　化け物か！？』

『クソが！　いいようにやらせるか！』

更に二隻を撃沈したところで横合いから二隻の宙賊艦がレーザー砲を撃ってくる。しかし、そのレーザー砲撃はクリシュナの強固なシールドに阻まれてあえなく消え去った。シールドの状態を確認する限り、この調子だとあと二〇〇発ほど喰らわないとシールドは飽和しないな。もっとも、その前にエルマがシールドセルを使うだろうから実際にはもっと大量に撃ち込む必要があるだろうけど。

『うわぁぁ！　こっち来んなぁ！？』

クリシュナを旋回させ、砲撃してきた宙賊艦との間合いを一気に詰める。宙賊艦も逃げようとするが、クリシュナの方が圧倒的に早い。

『や、やめっ――』

艦首に二門装備されている大型散弾砲が火を噴き、無数の散弾が宙賊艦のシールドを貫通してその装甲と船体を穴だらけにする。近くにいたもう一隻も同様に穴だらけにしてやる。慈悲はない。

『こ、こんなところで――！』

逃げようとした最後の一隻も重レーザー砲の斉射で片付け、今度は三隻の宙賊艦に足止めされているブラックロータスの援護を――。

『い、嫌だ！　死にたくねぇ！　死にたく――！』

逃げようとする最後の一隻の後方には艦首の大型ＥＭＬを展開したブラックロータスの姿があった。他の二隻はブラックロータスの各部に搭載されているレーザー砲で既に爆発四散した後らしい。

「あ、最後の一隻が超光速ドライブを起動しま――」

ブラックロータスの大型ＥＭＬの砲口が激しい光を放ち、その次の瞬間には逃げようとしていた宙賊艦最後の一隻が粉々になった。これは酷い。

「――起動できませんでしたね」
「そのようだな。戦闘終了だ。根こそぎサルベージするぞ」

今まではその場に打ち捨てていくしかなかった宙賊艦の装備や、損傷の少ない宙賊艦もブラックロータスのお陰で持ち帰ることができる。それはつまり、略奪品の売却益が今までよりも格段に跳ね上がるということである。特に、損傷が比較的少ない宙賊艦を一隻だけなら持ち帰ることができるのが美味しい。

拿捕した宙賊艦というのは戦闘力が必要な傭兵には殆ど価値のないものだが、駆け出しの星間行商人や採掘者、それにスカベンジャーにとっては安価に手に入れられる貴重な小型輸送船になり得るのだ。持ち帰ることさえできるのであれば、戦利品としてはかなり美味しい部類の戦利品なのである。

「へっへっへ、これからはちょっと気をつけて小型の宙賊艦を爆発四散させないようにしなきゃなぁ」
「……ヒロ様が悪い顔をしています」
「放っておきなさい。メイ、大きいのはそっちに任せるわ。ほら、ヒロ！　とっとと戦利品を回収するわよ！」
『承知いたしました』
「了解」

物資コンテナをスキャンしながらクリシュナを宙賊艦の残骸の下へと移動させる。いやぁ、これは稼ぎの総額を見るのが楽しみだな！

#136　黒蓮のデビュー戦（後書き）

Ｏｗｔｗａｒｄというゲームに最近ハマってます。
ＴＥＳ＋ダクソ系＋サバイバルみたいな感じで中々に歯ごたえがあります。
なんと二人でコープもできる！
でもコープできるフレンドはついてきません！

―（∵3」∠）―

#137　戦利品回収

『兄さん、あっちの船の超光速ドライブは回収しないんか？』

戦利品を回収していると、ティーナからそんな通信が入った。

「外部に取り付けられている兵装くらいならともかく、回収ドローンじゃ流石に内部機構までは引っこ抜けないぞ」

『そらそうやけど、ハンガーに放り込んでくれれば目ぼしいものはうちらで引っこ抜くで？』

「時間がかかるんじゃないか？」

『大丈夫ですよ。メンテナンスボットも沢山いますし、船体がどうなってもいいならそんなに時間はかかりませんから』

「ふむ……」

どう思う？　とエルマに視線を向けてみる。

「やらせてみたら良いんじゃない？　そうすればどの程度の手間と利益が出るかわかるだろうし」

「それもそうか。じゃあ、やってみてくれ。メイ、トラクタービームを使って残骸を誘導してくれ」

『承知致しました』

「ティーナ、ウィスカ。成果からボーナスは出すから、頑張れよ。売却額の何％くらいが妥当かはちょっと傭兵ギルドで聞いてみるまでわからんが」

『任しといてや！』

『がんばります！』

通信越しに姉妹の気合の入った返事が聞こえてくる。それと同時にまだそれなりに原型を保っている宙賊艦に向かってブラックロータースから緑色の光線が発射された。光線の照射を受けた宙賊艦がゆっくりとブラックロータースへと引き寄せられていく。

ちなみに、あの緑色の光線はただのガイドレーザーで、トラクタービームそのものは目に見えないものであるらしい。ついでに言うとみょんみょんみたいな変な音は聞こえない。様式美だと思うんだがなぁ。

「ああ、残骸に宙賊の生き残りがいないかどうかだけは注意しろよ」

『はい。見つけた場合は如何致しましょうか？』

「適切に処分しろ。捕虜は要らん」

『承知致しました』

通信越しに無感情なメイの声が聞こえてくる。きっと彼女のことだからこれ以上なく『適切に』処理してくれることだろう。

え？　抵抗もロクにできない人間相手にやりすぎだって？　知らんがな。宙賊などというのは今までに何人もぶっ殺してきた極悪人に決まっているし、そもそもこっちの命と積荷を狙って襲撃を仕掛けてきたのは向こうなんだからな。慈悲をかける理由が一切無い。そんなことよりも戦利品回収だ！

「やっぱり食料品とかお酒が多いですね」

「宙賊の酒は質より量の大味なお酒ばっかりだから、今ひとつなのよねぇ」

「それでも塵も積もればってな。お、精製済みの金属があるぞ」

巨大なカーゴスペースを持つ母艦を手に入れた今、価値の高い戦利品だけを取捨選択して大半の戦利品をその場に放置していく――というようなことをしなくても良いというのは精神衛生的に非常に

よろしい。
特にミミはいつも戦利品回収時に寄港したコロニーでの取引価格を記録したタブレットを見ながら眉間に皺を寄せていたので、今回のようにニコニコしながら戦利品をひたすら回収するのは初めてのことなんじゃないだろうか。ミミがドローンでの戦利品回収を手伝い始めた頃はドローンの操作に必死だったし、慣れてきた頃にはもう取引価格のデータとにらめっこしてたからな。
宙賊が船に積んでいる品はおおよそ自分達が消費する食料品や酒で、その他には略奪した戦利品を積んでいることもある。仕事をした直後だと大量にそういった品を積んでいることがあるが、そういう宙賊は戦利品を売り払うために行動するので、普通は向こうから襲ってこない。そういう手合いと遭遇するのは稀である。
しかし、たまに襲撃直後でもないのにそれなりに美味しい戦利品を積んでいることがある。換金効率がとても良いレアメタルだとか、精製済み金属だとか、そういった品だ。いわゆるヘソクリというか、貯金だな。そういったものがたまに見つかるので、宙賊撃破後の残骸漁りは決して疎かにしてはならないのだ。

「よし、カーゴが一杯になったから一回ブラックロータスに運ぶぞ」
「わかりました！」

ミミがツヤツヤとした良い笑顔を見せる。うん、わかる。楽しいよな、戦利品回収。

☆★☆

何度かブラックロータスに積荷を乗せ替え、全ての戦利品を回収し終えた俺達はブラックロータスに着艦して一休みすることにした。無駄にハイテクな空中固定式ドリンクホルダーから水分補給をしながらクリシュナの外部センサーで作業をしている整備士姉妹の様子

を眺める。

「メンテナンスボットを上手く使ってるなぁ」

「そりゃ整備士だからね。あの様子だと少し勉強させれば戦闘ボットの指揮もできるんじゃない？」

「そういうものなのか……？」

「整備士は優秀なドローンオペレーターだからね。あの二人がスペース・ドウェルグ社から出て私達と行動を共にするなら、整備士兼ドローンオペレーターとして雇えば良いと思うわよ」

大きな宇宙船を整備する整備士というのは自分達の手でも勿論船の整備をするが、人力で出来ることには当然ながら限界というものがある。人の手で宇宙船の装甲板を持ち上げるのは低重力下でも難しいし、何より危険だ。なので、整備士はメンテナンスボットを使って仕事をこなす。

一人の整備士が大体二体から三体のメンテナンスボットを操って整備作業を行うのだそうだ。ちなみに、今ブラックロータスのハンガーで動いているメンテナンスボットは十体である。どうやらあの姉妹は一人五体ずつのメンテナンスボットを使って作業を行っているらしい。

「二人で十体はちょっと凄くないか？」

「さほど精密性を要求されない作業だからだろうけど、凄いわね」

ティーナとウィスカの二名は空中に投影されているホロディスプレイのコンソールを慣れた手付きですいすいと操作している。二人で何事か喋りながら操作をしているようだが、十体のメンテナンスボットは特にお互いの動きを邪魔するようなこともなく効率的に作業をしているように見える。

うーむ、整備士としての腕は優秀だとメイが言っていたが、こう

して実際に目の辺りにすると本当に感心してしまうな。俺の中で二人の評価がグンと上がったぞ。
二人に操作されたメンテナンスボットはハンガーに運び込んだボロボロの宙賊艦をレーザートーチでぶった切ってパーツを取り出しているようだ。あのレーザートーチ格好いいな。フォースに目覚めそうだ。フォースに覚醒してない俺が使ったら自分の足をぶった切りそうだけど。
でも光線剣は男のロマンだよな……前にダレインワルド伯爵から貰った剣も格好良いから嫌いじゃないんだけど、基本的に腰に剣を差して歩くのは貴族様だからなぁ。間違えられても困るから、使う機会が無いんだよね。

『ご主人様』

ミミやエルマと一緒に整備士姉妹の操るメンテナンスボットの作業風景を見ていると、メイから通信が入った。

「ああ、どうした？」
『おかわりが来たようです』

コックピットのホロディスプレイにブラックロータースの亜空間センサーが拾った情報が表示される。ああ、おかわりね。入れ食いだなぁ。

「了解。二人とも、もうひと仕事するぞ」
「はい！」
「アイアイサー」

敵がワープアウトして来る前に出撃しておくとしよう。

☆★☆

「流石に疲れたわ」

「ハードワークだったね、お姉ちゃん」

あの後更におかわりが入り、最終的に三度の敵襲を撃退した俺達は戦利品を回収してブラドプライムコロニーに辿り着いていた。丁度ブラドプライムコロニーの入出港ラッシュの時間帯にぶつかってしまったため、今は入港の順番待ちである。

最終的に今回撃破した宙賊艦の総数は小型艦が二十七隻、中型艦二隻の合計二十九隻となった。賞金総額は２１万７５００エネルだ。賞金だけでもかなりの額なのだが、状態の良い小型宙賊艦一隻をハンガー内に格納して持ち帰り、更に中型宙賊艦一隻をブラックロータースで曳航してきた。

これは撃破した中型宙賊艦をニコイチで超光速ドライブを使えるようにして引っ張ってきたのだ。ハンガーに格納している小型宙賊艦も状態がマシな船体フレームに他の小型宙賊艦から剥ぎ取ったパーツをくっつけてそれなりの形にでっち上げたキメラ艦である。

その他にも撃破した宙賊艦から略奪した品や、宙賊艦から剥ぎ取ったパーツでブラックロータースのカーゴスペースはいっぱいである。全てを売却したら一体いくらになるのだろうか？　ＳＯＬで培った俺の感覚的には小型艦が３万エネル、中型艦が７万エネルといったところではないかと思う。

その他の戦利品は雑多すぎて予想が立てづらい。恐らく８万エネルを下回ることはないと思うが。

「今日はパーッと打ち上げでもするか。外食でもいいし、うちのシェフに腕を振るわせても良いけど、どっちが良い？」

流石にコロニー周辺で危険なことが起こることはないので、ブラ

ドプライムコロニー周辺にワープアウトした時点でクリシュナから降りた俺達は整備士姉妹と合流して休憩室でのんびりと入港を待っていた。
　ちなみに、うちのシェフというのは言うまでもなく高性能自動調理器のテツジン・フィフスのことである。普通のフードカトリッジではなく、高級カートリッジを使うと下手な高級食事処なんかよりもよっぽど美味い食い物を作ってくれるんだよな。何より、外食と違って好きに飲み食いして騒げるのが良い。
　外食だと結局は帰りのことを考えなきゃならないので、完全に羽目は外せないからな。酒を飲まない俺はどっちでも良いんだが、酒を飲んで俺以外の四人がベロベロになってしまうと俺一人では流石に面倒見きれない。二人までならなんとかなるが、四人は無理だ。

「船でやったほうが良いんじゃない？　なんなら私の秘蔵のお酒を出すわよ」
「酒！」
「お酒……そういえばもう飲んでも良いんだよね、お姉ちゃん」
「せやな！　兄さん！」

　ティーナが期待でキラキラと煌く瞳を俺に向けてくる。

「ミミ、二人の意見を聞いてドワーフ好みの酒を注文しておいてくれ」
「わかりました」

　俺の言葉に姉妹が飛び跳ねて喜ぶ。見た目的にローティーンにしか見えない整備士姉妹がお酒に目を輝かせて無邪気に喜ぶのはなんとも微妙な気分になるな。

「ドワーフのお酒かぁ……強いばっかりで私はあんまり得意じゃな

いのよねぇ」
「ドワーフ酒は強いだけやのうてキレのある味が売りやで。例えばキラク酒造のグランドリングなんかはリーズナブルなのに味がしっかりしててオススメや」

ティーナの言葉にウィスカがコクコクと相槌を打っている。やはり姉妹は姉妹でお酒には一家言あるらしい。

『ご主人様、入港許可が降りました』
「わかった、入港してくれ。気をつけてな」
『はい、お任せください』

休憩室のスピーカー越しに声をかけてきたメイに返事を返し、ミミのタブレットを囲んで楽しげに打ち上げの準備を進めるエルマ達を眺めていると、自然と笑みが浮かんでくる。どうやら姉妹とは上手くやっていけそうだ。

高い酒を大人買いしようとしているエルマとティーナ、それを慌てて止めようとしているミミとウィスカを見ながら俺は内心胸を撫で下ろ――おい待て。その大人買いの原資は俺の金じゃないか？よーしよし、ちょっとお話しようか。この飲兵衛どもめ。

#137　戦利品回収（後書き）

トラクタービームとライトセーバーには同種のロマンがあると思う

―（∴3」∠）―

#138　そうだ、傭兵ギルドに相談しよう。（前書き）

遅れました！
違うんですよ！　起きたら何故か正午をとっくに回って14時だったんですよ！
俺は悪くねぇ！―（：3」∠）―（圧倒的に悪い

#138　そうだ、傭兵ギルドに相談しよう。

「整備士へのボーナスですか」

ブラックロータスの広い食堂でどんちゃん騒ぎをしたその翌日。俺はミミを伴ってブラドプライムコロニーの傭兵ギルドへと来ていた。朝まで飲んでいたエルマはまだ寝ており、メイは物見遊山のティーナとウィスカを連れて帝国航宙軍の事務所へと賞金の受け取りに行っている。

「一応慣例的な報酬比率はありますね。今回のケースですと……なるほど、整備士の二人は企業からの出向者なのですね。そして船の資本は船長のヒロ様が１００％、と」

傭兵ギルドの受付嬢――ではなくイケメン職員がタブレット型の端末で俺の船と乗組員のデータを確認しながらホロディスプレイのコンソールで何か作業をしている。二つの画面を見ながら片手ずつで違う画面を操作するとかすげぇな。

「企業からの出向者というのは少々珍しいのでデータが少ないのですが、基本的に出向者への給料は企業から出ていることが多いようで、普通の乗組員のように報酬総額の何％という形でキャプテン側が報酬を払うことはあまりないようですね」

「なるほど」

「ただ、同じ船に乗って命を危険に晒して働いているのに会社からの給料だけでは割に合わないと考える整備士が多いようで、出向を命じられてから三ヶ月以内における整備士の出向元からの離職率はかなり高いようですね」

「それでも１００％じゃないのか」

普通に考えれば月に３５００エネル＋危険手当で傭兵の船に乗るなんてお断りじゃないかと思うが。少なくとも、俺ならそう考える。

「ええ。離職する前に戦闘で死亡するケースが何件かありまして」

「世知辛い」

「稀なケースのようですけどね。企業も出向させる船には気をつけますので……はい、確認できました。売却益に拘らず一定の額をボーナスとして渡すか、或いは整備士達が関わった船や略奪品の売却益の１０％から２０％ほどを渡すということが多いようですね」

「……計算がめんどくせぇな」

どれとどれとどれが整備士姉妹の関わった品で、その売却益がいくらで、その２０％が……みたいな計算を毎回しなきゃならんのか。いや、まぁ面倒って言ってもたかが知れてるけどさ。でも面倒なことには変わりねぇな。

「そのように感じる方が多いのか、毎回一定額を渡すというやり方をしている方も多いようです」

「なるほど」

とりあえず評価額を見てからだな。

「とりあえず、そっちについてはわかった。仲間ともよく相談してみるよ。それで、もう一つ用件があるんだ」

「はい、承ります」

「船のデータを確認してもらったからわかると思うが、新しく母艦を買ったんでな。運び屋の真似事もしようと思ってるんだ。確か傭兵ギルドから商人ギルドにそういう傭兵の斡旋ができたはずだよな

？」
「勿論可能です」
傭兵ギルドと商人ギルドは非常に仲が良い。何故なら、宙賊や宇宙怪獣の跋扈する宇宙での物流は常に危険を伴う。そんな危険から身を守るため、商人は傭兵を雇うのだ。また、傭兵からしても商人というのは良いお客様である。俺は主に宙賊討伐で金を稼いでいるが、商人の護衛で飯を食っている傭兵というのも実に多い。
俺は戦闘スタイルがどうしてもこう、スタンドプレーじみた感じだからね。単騎駆けしてバンバン攻めるのは得意だが、特定の対象を守るような戦い方は苦手なのだ。出来ないとは言わないけど。
「スキーズブラズニル級の母艦ですか……これはなかなかの積載量ですね」
「積載量は余裕を見て１８０ｔくらいかな。俺達の必需品もある程度積む必要があるからな」
ブラックロータスの輸送量は商人が使うような大型輸送船とは比べるべくもないが、それでも１８０ｔというのはなかなかの容量である。三人から五人程度の人員で移動の片手間に運んで得られる利益としては悪くない稼ぎが得られることだろう。
「スペック的に商人ギルドの大型輸送船よりも遥かに快速ですし、今日のようなペースで宙賊を狩り続けていけば安全度も高く評価されるでしょう。もしかしたら急ぎで高価な物資を確実に届けたい、というような需要があるかも知れませんね。それに、内装が随分立派なのでは？」
「それなりに金はかけてるな」
「これなら商品と一緒に移動したい商人も安全に運べるでしょうね。客室の用意もあるようですし、そちらも併せてアピールすれば良い

依頼をご紹介できるかと思います」
「あまり横柄なやつだとつい手が滑ってしまうからも知れないから気をつけてくれよ。俺の船には女性が多いからな。事故は起こしたくない」
「そうですね、その辺りには最大限配慮致します」

イケメン職員が実に良い笑顔でそう答えるが、一瞬だけ物凄い嫉妬オーラが漏れ出したのを俺は見逃さなかった。俺の隣に座っているミミは言うまでもなく美少女だし、きっと彼の手元にあるタブレット型情報端末にはクルーであるエルマや整備士姉妹のプロフィールも表示されているのであろう。
でもあんたも顔は良いし、傭兵ギルドの職員なら給料も良さそうだしモテるんじゃないのか？　と思わなくもないのだが、わざわざ口に出して言うことでも無いので黙っておいた。彼にも色々とあるのだろう。

「もう一週間ほどはブラド星系で慣熟訓練を兼ねた宙賊狩りをするつもりだけど、今回の戦利品さえ売れた後なら出発が早くなっても俺達は一向に構わない。商人ギルドの方には話を回しておいてくれ」
「承知致しました。打診があればすぐにご連絡致します」
「よろしく頼む」

イケメン職員に礼を言って傭兵ギルドを後にする。傭兵ギルドを出たところで今回は黙って横に座って話を聞いていたミミが口を開いた。
「ついに宙賊狩り以外のお仕事も始まりますね」
胸元で拳を作り、ふんすと気合を入れている。結構前からミミは訪れたコロニーの特産品や、品薄の物資なんかのことを気にしてい

たからな。宙賊からの戦利品を売る傍ら、そういったことに注意を向けて色々と調べていたらしい。

「そういうのはミミに任せようかな？　エルマはそっち関係には興味が無さそうだし、メイはブラックロータスとティーナ達の面倒を見る仕事があるからな」

「メイさんならそつなくこなしそうですけど……」

「だからって全部メイにおんぶにだっこになるのはよくないだろう。何よりそんなのつまらないじゃないか」

実際のところ、メイがそのスペックをフルに活用すれば俺やミミ、エルマも含めたブラックロータスやクリシュナに関する全てを最適管理することは可能なんじゃないかと思う。俺達は何も考えず、ただメイの導きに従っていけば良いというような感じにだ。

「そうですね。メイさんにはちょっと悪い気がしますけど、私もそう思います」

「そうだろ。というか、それが行き過ぎて一回この帝国は滅びかけてるわけだしな」

俺もこの世界に来てそれなりに経っているので、この世界の歴史というやつをほどほどに理解してきている。このグラッカン帝国という銀河帝国は、結構昔に機械知性との戦いで一度滅びかけているのだ。

俺はその全容をまだ詳しく把握しているわけではないのだが、簡単に言うとその戦争が始まる前のグラッカン帝国というのは機械知性全盛期とも言える時代で、かなり機械知性に頼った社会を築いていたらしい。

そしてＳＦのお約束のように軍用の機械知性が叛乱を起こし、大規模な内線に突入。紆余曲折あって機械知性と和解し、それ以来機

械知性に頼り切るのはよろしくないという風潮が長く続いているのだという。
　とはいえ、今のグラッカン帝国の実態を見る限りは本当に機械知性に頼り切りの社会構造から脱却できているのかは怪しいと俺は考えている。表向きは機械知性と和解して人間が主体となり、機械知性が影から支えるという社会になっているように見えるのだが、実際には機械知性に支配されているんじゃないかと思えるんだよな。ちょっと確信は無いんだが、単に機械知性側が一歩引いて影になりきっているような感じがする。
　ただ、機械知性側には全く悪意が見えないと言うかなんというか、影から操っているというよりは影から強力に見守られている感が……いやきっと俺の杞憂だろう。もしそうだとしても俺には一切害がないからどうでもいい。

「機械知性との戦争ですね。ところで機械知性との戦争が終結に向かった切欠については都市伝説めいたものも含めて諸説あるんですよ。知ってましたか？」
「そうなのか？　例えばどんなのがあるんだ？」

　歴史についてのよもやま話をしながらミミと一緒にブラックロータースが係留されているドッグへと戻る。ミミの話す都市伝説めいた歴史の転換点の話はなかなか面白かった。でも流石に撃破した戦艦の機械知性をセクサロイドに打ち込んだ一兵卒と、その一兵卒にいいようにされた結果愛と性に目覚めた戦艦の機械知性が戦争終結の切欠になったとかは話を盛りすぎと言うか、あまりに下世話というか、下ネタにポイント振り過ぎだと思うよ。

#138　そうだ、傭兵ギルドに相談しよう。（後書き）

隙を見て殺してやろうと思っていたのに未知の感覚に支配されてあっさり堕ちちゃうくっころ機械知性―（：3」∠）―

#139　おかねのはなし。

「おかえり」
「ただいま」
「ただいまです」

ブラックロータスに戻ると休憩室でエルマが休んでいた。俺とミミ、そしてメイがお仕事で出かけていたというのになんとも優雅なことである。

「で、どうだった？」
「売却価格が出てからじゃないとなんともだな。二人のお陰で上がった売却益の１０～２０％くらいが妥当じゃないかって話だ」
「なるほどね。船と引っこ抜いたパーツは……うん、買い手がついたわよ」
「お、マジで？」
「早かったですね」
「うん。ほら」

タブレット端末を差し出してきたエルマから端末を受け取り、エルマの隣に座る。ミミも俺の隣に座ってタブレットの画面を覗き込んできた。

「……思ったより高いな？」
「そうね。私もびっくりしちゃった」

タブレットに表示されている船の売却価格は思ったよりも高値がついていた。装備を継ぎ接ぎして作った小型キメラ艦が５万５００

０エネル。超光速ドライブ他、船の運行に必要な装置を完璧に整備した中型艦が９万エネルで売れたのだ。その他、宙賊艦から引っこ抜いた各種武器、パーツ等も全て合わせると凡そ１３万エネルになっている。

「ええと、合わせて大体２７万５０００エネル？　賞金額より多いじゃないか」
「凄いですね」
「そうね、侮れないわ。だってこれ、撃破した宙賊の賞金がヘボでも今回くらいの数を倒せばコンスタントにこれだけは稼げるってことだもの」
「つよい」
「あと、その他物資の売却益だけど、そっちも大体買い手がついたわ。合わせて凡そ１５万エネルね」
「こっちも思ったよりも多い」
「精製された金属やレアメタルが結構多かったですからね」

賞金総額が２１万７０００エネル、売り払った宙賊艦とその装備が２７万５０００エネル、戦利品の売却益が１５万エネル。合わせて６４万２０００エネルか。今までは賞金と厳選した戦利品の売却益を合わせても恐らくは半分くらいの稼ぎに留まっていた筈なので、単純に実入りが倍になったと考えるとなかなかのものではないだろうか？

「二人への報酬はどうするの？」
「二人が働いた分の１０％で良いんじゃないかと思うが。どう思う？」
「定額で１万エネルでも良いと思うけどね。でも１万エネルだと命をかけた対価としてはちょっと安くも感じるし、私はヒロの言う通りでも構わないわよ」

「わ、私もそれでいいと思います」
「じゃあ船と引っこ抜いた装備類を合わせた売却益の１０％な。２万７５００エネルか。そうすると残りが６１万４５００エネルだから、ミミが６１４５エネル、エルマが１万８４３５エネルか。先任のミミよりもあの二人の取り分が多いのはどうなんだ？」

俺の心情的にはなんとなく納得し難いものがあるんだが。

「そりゃあの二人は専門の高度なスキルを持ってるんだからそうなるのも当たり前よ。ミミはオペレーターとしては十分に働けるようになってきたけど、まだ一人でコロニーに降ろすのも不安だし。次のステップに上がるには最低限自分の身を自分で守れるくらいにはならないとね。オペレーターとしてまともな仕事ができて、護衛なしでも私達が安心してコロニーに送り出せるくらいにならないと一人前とは認められないわ」
「が、がんばります……」

エルマは仕事に厳しいな。そう言うエルマ自身はどうなのかと言うと、サブパイロットとしての仕事は完璧にこなしているし、エルマなら一人でコロニーに降りてどんな用事でも済ませて来ることが出来る。それにやろうと思えばミミ以上にオペレーターとしての仕事もこなせるだろうし、戦利品の売却なども当然こなせるだろう。彼女は一人で船長をやっていたのだから当然だ。言うだけの実力はあるのである。

「二人合わせて２万７５００エネルだから、一人頭は１万３７５０エネルか」

ちなみに俺の取り分は５８万９９２０エネルである。暴利？　いや、この船もクリシュナも１００％俺の船で、俺は船長兼オーナー

だからこれで良いらしい。その分皆の生活費とかは全部俺持ちだけど。

「辛うじて私の報酬のほうが上ね。私に気を遣ってくれるなら私の報酬を上げてくれてもいいのよ？」

そう言ってエルマが俺にしなだれかかってくる。

「借金を1エネルでも返してから言ってくれ」

「あら、いいの？」

「……そんなに急いでは無いかな」

「そうでしょう」

エルマがにまにまとした笑みを浮かべる。くそう。でも給料は上げてやらないからな。などと考えていると、反対側からミミが俺の腕に抱きついてきた。こころなしか、抱きついてきたミミの頬が膨らんでいる気がする。

「ミミさん？」

「なんでもありません」

トレーニングを欠かさないミミさんの筋力は地味に増加を続けており、今となっては一般的な成人女性よりも若干高めの筋力にまで成長している。俺の緻密な工作によりその上がり幅はかなり押さえられているのだが、それでも地味に力は強くなっている。何が言いたいかというと、地味に腕が痛い。でも押し付けられる柔らかさはそれを補って余りあるものだ。おお、神よ。

「ミミー、それは卑怯よ」

「こうでもしないとエルマさんには勝てません」

俺を挟んでミミとエルマが何か言い合っているが、俺は左右から与えられる感触に全神経を集中しているので内容はよくわからない。理解しようとしていないと言っても良い。

「あー！　兄さんがイチャついとる！」

「お姉ちゃん……」

騒々しい声が聞こえてくる。どうやら整備士姉妹とメイが帰ってきたようだ。声の方に視線を向けると、こちらに向けてテテテッと走ってくるティーナと、それを追いかけてくるウィスカの姿、そして俺に頭を下げるメイの姿が見える。そしてティーナの声のせいか、左右からのサービスタイムが終わってしまった……悲しい。なんとなくこちらへと走ってくるティーナを迎え入れるように両手を広げてみる。

「……！」

目を輝かせたティーナが走ってきたその勢いのまま俺の胴体に抱きついてきた。なかなかの勢いだったが、こちらに来てから身体を鍛えている俺を痛めつけるほどの威力ではなかったな。

「あーよしよし」

なんとなく流れでティーナの頭を撫でてやる。

「ごろにゃーん」

猫か。というかこの世界ではペットらしき存在を今まで見たことがないのだが、居るのだろうか？　猫。少なくともコロニーでは見

たことがないな。でもティーナの発言を聞く限りは猫か、それに類する生物が愛玩動物として認識されているという事実は推測できるな。

「「……」」
「はぁう……」

姉を止めようと微妙な距離で手をわななかせていたウィスカの顔色がどんどんと悪くなって涙目になっている。俺は無心でティーナの頭を撫でている。左右から突き刺さる視線はスルーだ。断固としてスルーする。ウィスカが失禁でもしそうなくらい怖がっているが、俺は何にも気づいていない。当然ウィスカの後ろでこちらにジッと視線を向けてきているメイの視線にも気づいていない。気づいていないったら気づいていないんだ。

「はい終わり。終了！　解散！」
「別に解散はしませんけど」
「そうね」

微妙にミミとエルマの声に険がある気がする。そんなに目くじらを立てることじゃないじゃないか。ティーナなんて子供みたいなもんだろう。実年齢はともかくとして。

「そうそう、二人が手を入れた船と、宙賊の船から引っこ抜いた装備が売れたぞ。合わせて２７万５０００エネルだった」
「思ったより高く売れたな」
「俺たちもびっくりだ。それで、傭兵ギルドにも問い合わせた結果、二人への報酬は二人が手を入れて売れるようにした船と、引っこ抜いた装備の売却益の１０％とすることにした」
「１０％」

「そう、１０％。つまり今回の二人のボーナスは合わせて２万７５００エネル。均等に分けるなら一人頭は１万３７５０エネルだ」
「いちまんさんぜんななひゃくごじゅうえねる……？」

ティーナが首を傾げてわけがわからないという顔をしている。頭の上に浮かぶ複数の疑問符が幻視できそうなくらい不思議そうな顔をしている。ウィスカにも視線を向けてみると、姉と同じような表情をしていた。

「実入りは毎回違うだろうけど、毎回船と装備品を売り払えば同じ割合でボーナスを出すからな」
「？？？」

どうやらティーナの思考回路はショートしてしまったようである。胸元から俺の顔を見上げながら首を傾げたまま固まってしまった。ショートというよりハングアップかな？

「これは夢やな」

一体彼女の中でどんな思考が為されたのかは不明だが、ティーナはそう言うと清々しい顔で俺の胸元に顔を埋めて身体の力を抜いた。完全に寝る姿勢である。

「夢じゃねぇから、現実だから。別に現実逃避するような辛い話じゃないだろう？」
「兄さん。たった一日、それも船を二つでっち上げて他のゴミからパーツ引っこ抜いただけで、真面目に一ヶ月働いた給料の四倍近くもボーナス貰えるという事実は結構辛いで」
「そう言われるとそうかもしれん」
「今まで真面目にコツコツ働いてきたのはなんだったんや……」

ティーナが俺に身体を預けたままブチブチと文句を言っている。体勢的にティーナの身体が俺に密着しているんだが、悲しくなるほどに平坦だなぁという印象しかない。それでもティーナが俺を真正面から抱きついているのが少々気に入らない、というか羨ましいのかミミとエルマがなんだかそわそわとしているようである。

固まっていたウィスカはメイに手を引かれて近くの別のソファに寝かしつけられたようである。そんなにショックだったのか。

☆★☆

エルマとミミが俺にくっついたままのティーナを引き剥がし、何故か二人にもハグを求められ、ソファでうなされているウィスカを起こし……と何故か微妙にバタバタすることになったが、なんとか全員落ち着いて休憩室のテーブルに着くことに成功した。ウィスカはまだなんか目つきが怪しいが、一応受け答えは出来るようになっているから大丈夫だろう。多分。

「庶民の感覚的にはやっぱりそうなりますよね」

「なるな。というか、こんなんなら兄さんの金銭感覚がガバガバというか、お大尽になるのも無理ないわ」

「俺、そんなに金銭感覚ガバガバか……？」

自分ではそんなことはないと思っているのだが、ティーナとミミから見ると俺の金銭感覚はガバガバらしい。無駄遣いをしているつもりは一切無いんだが。

「私はそうは思わないけど。気前は良いと思うけど、別に無駄遣いはしてないでしょ？」

「そうだよな」

「あかん。この二人同類や」
「ですよね。最近私のほうがおかしいのかと思い始めてました」
ティーナが首を振り、ミミが激しく頷いている。ええ？　まことに？
「基準が違うんやな。うちらは日々の食事代とか生活費とか、一ヶ月の給料が基準になってる。兄さん達は新品で買う船の値段とか、装備の値段とかが基準になっとるんや。この人らがちょっと高いなぁって思う金額は多分１００万エネルくらいからやで。１万エネルくらいは端金って思っとるやつや。間違いない」
「１万エネルって大金ですよね？」
「大金やで」
「えぇ……」
１万エネルとか船の修理とか補給で簡単に吹っ飛ぶじゃないか。俺はシールドで受けて装甲や船体にはダメージを負わないように戦ってるから滅多に修理費がかかることはないけど、仮にクリシュナが撃破寸前のボロボロな状態になると余裕で十数万エネルは吹っ飛ぶからな。１万エネルじゃ屁の突っ張りにもならないよ。
「そこで『えぇ……』ってなる辺りがもう住んどる世界が違う証明やろ……」
「それくらいちょっといい料理店で飯食ったら吹っ飛ぶじゃんか」
「本物の肉や野菜を取り扱う超高級料理店くらいやろ、それ。普通の食堂なら５エネルもあれば腹いっぱい食えるやん」
そう言われればそうだけれども。
「フードカードリッジも通常グレードのもので一本１００エネルで

すよね」
「一本で三十食分になるな。一食凡そ3エネルや。一月分で３００エネル、これがヒト一人が一月生きるための最低限の食費ってやつやで。空気や水、その他生活費なんかも合わせて一月凡そ１０００エネルあればコロニストは生きていけるようになっとるんや。うちらは月に３７００エネルもらってるから、これでも高給取りな方なんよ？」

ティーナの隣でウィスカがコクコクと頷いている。確かに二人とも初めて会った時から肌艶は良かったし、生活に困窮しているような様子は微塵も見えなかったけど。そっかー、俺の金銭感覚はガバガバだったのかー……まぁミミには何度も言われてたから今更だな。

「まぁ良いじゃないか。収入に見合っただけの支出をして経済を動かしているんだよ。うん」
「そうよね。上手くやってるんだし別に非難される謂れは無いわよね」

俺の発言にエルマが頷く。

「そして俺と行動を共にする以上、君達はもうこっち側だから。諦めろ」
「はい」
「せやんな……」
「……善処します」

もう今更だからか、ミミは俺の言葉に素直に頷いた。向こう側についていたのは単に自分の金銭感覚が間違っていなかったということを肯定して欲しかっただけだったらしい。

「平和裏にお互いの金銭感覚のすり合わせが終わったようで何よりです」

俺達が話し合う様をテーブルの横に立って見つめていたメイが、そこはかとなく満足そうな顔でそう言って頷く。メイ的にはどう考えているのだろうか？

「メイとしてはどう思う？」

「私ですか。私としましては、ご主人様の経済観念に対する懸念は一切ございません」

「そうなのか。少し意外だが」

俺としても無駄遣いしているつもりはないが、そこまで全肯定されるほど俺の行う出費が適切だとも思えない。

「はい。少々押しに弱いように見受けられますが、今のところは特に問題はないかと。ご主人様自身も自覚がお有りのようですし。実際にこのブラックロータスを即金で購入できるだけの資本を自身の腕一つで稼ぎ出しているわけですから、何の心配もありません」

「なるほど」

俺の経済観念が本当にガバガバならブラックロータスを買うような資金を貯めることもできないだろう。俺はちゃんと資金を稼げているので、今のままで問題ないということだな。

「よし、解決。この件は終わり。で、傭兵ギルドでちょっと話をしてきたんだが……」

お金の話はとりあえず横にうっちゃって俺は傭兵ギルドで手配してきた運び屋の真似事をする話について話を切り出した。目的を達

するために、そして全員が幸せになるためにまだまだ金は稼がなきゃならないんだからな。来し方より行く末の話をしたほうが建設的というものだろう。

#１４０　荷運び依頼と交易。

略奪品の売却と拿捕した船の売却を終え、再び出撃しようか――というところで傭兵ギルドから荷運びの依頼が入ったと連絡があった。

「昨日の今日で依頼が入るものなのね」
「こちらとしては嬉しい限りですけど」

朝の運動を終え、一風呂浴びて朝食を取っている時に連絡が入ったので、丁度全員が食堂に集まっていた。朝の運動には整備士姉妹も参加しており、食事も一緒にしている。

「結構忙しいんやな。ちょっとイメージと違ったわ」
「ああ、それはわかります。私もヒロ様の船に乗った直後はこんなに勤勉に働くんだ、と思って少しびっくりしましたから」
「そうなのか？」

ティーナの発言にミミが同意し、それに俺が聞き返す。勤勉って言ったって、別に毎日ひっきりなしに出撃してるわけじゃないぞ。出撃後には一日二日と休みを取ることも多いし、そこまで勤勉ではないと思うんだが。

「ひと仕事したら一週間や一ヶ月はダラダラと遊んで過ごすってイメージがあったんでしょ？」
「うん。うちはそう思ってたで」
「実は私もそう思ってました」

ティーナとウィスカの整備士姉妹が頷き、ミミもうんうんと頷いている。

「一回出撃するごとにそんなに休んでたら金が貯まらないし、装備も更新できないだろ……」

「でも結構いるわよ、そういう傭兵も。ドーンと稼いでパーッと使ってお金が無くなったらまた働くって感じのが」

「そうそう、そういうイメージ」

「そういうのに比べたら確かにヒロは勤勉よね。ちゃんとお金を貯めてるし、無意味な散財もあまりしないし」

「そうか……？　まぁ、悪いことじゃないだろう」

「全く悪いことではないですね」

俺の言葉にウィスカが頷く。

俺としてはメイを買ったり、このブラックロータスの内装を豪華にしたり、ステルスサーマルマントを買ったりとそれなりに散財しているつもりなんだけどな。まぁ、この世界にまだ馴染みきっていなくて、船以外に大きく金を使う先を見出していないというのもあるのかもしれない。

まぁそれより何よりもだ。

「皆の生活を預かっている以上、俺が放蕩をして家計を傾けるわけにはいかんだろ」

それに俺には目的もあることだしな。どこかの星に庭付きの一戸建てを購入して、そこで炭酸飲料を浴びるように飲みながら悠々自適な生活をするという野望が俺にはあるのだ。

「まともやなぁ……どうして傭兵になったん？」

「スリルと興奮を求めて？」

「何で疑問形なんですか？」

ウィスカは細かいことを気にするなぁ。少なくとも現時点では整備士姉妹に俺の特殊な事情を説明するつもりはないので、肩を竦めて誤魔化しておく。

「それよりも仕事の話だよ。メイ」

「はい」

俺の呼び声に応えたメイが食堂に設置されているホロディスプレイに依頼内容を表示する。いつも通り俺達の会話には参加せず、影のように俺の傍に寄り添いながら俺達のやり取りを聞くに徹していたというわけだ。本人――本人？　の存在感がかなりのものなので、影のように寄り添うという表現が妥当かどうかはちょっとわからないが。

「傭兵ギルド経由で商人ギルドから回ってきた依頼内容はこちらです。凡そ１２０ｔの補給物資を九つ先のイズルークス星系にある帝国航宙軍のアウトポストに届ける、という内容ですね」

「帝国航宙軍の前線基地に？　補給物資を？」

「？？？」

俺とエルマが同時に首を傾げる。更に首を傾げる俺達にミミと整備士姉妹が首を傾げる。疑問が疑問を呼び、クエスチョンマークの旋風が巻き起こった。

「何が不思議なんですか？」

ミミの質問に俺とエルマが思わず顔を見合わせる。

「いや、だって帝国航宙軍の前線基地だぞ？」
「天下の帝国航宙軍が補給をミスってお急ぎ便で民間に補給を頼るなんてあり得ないでしょう。それも、たった１２０ｔよ？　そりゃ少なくない量の物資だけど、帝国航宙軍が日々扱っている補給物資の総量から考えれば微々たるものだわ」
「民間の物資輸送になるだろうと考えていたのに、何故か帝国航宙軍からの依頼で困惑してるってことか。確かに１２０ｔくらいならブラド星系に駐留してる巡洋艦でも運べるやろな。わざわざこの船に依頼する意味がわからんわ」
「うん、確かにそう考えるとちょっとよくわからないね」

俺とエルマが不思議に思う理由に納得できたのか、整備士姉妹も首を傾げ始めた。ミミもなるほど、という顔をしている。

「というか、何に対する前線基地なんだ？　イズルークス星系ってベレベレム連邦と隣接してるとか？」

ベレベレム連邦というのは俺達の滞在しているこのグラッカン帝国と敵対している銀河勢力の一つで、前に一度グラッカン帝国側の傭兵としてやりあったことのある相手である。

「いいえ、イズルークス星系は辺境星域ですね。結晶生命体との最前線基地です」
「Ｏｈ……結晶生命体かぁ」
「う、宇宙怪獣かぁ……」
「宇宙怪獣ですか……」

結晶生命体というワードを聞いたティーナが顔を青くしている。ウィスカもドン引きしているようだ。結晶生命体というのは読んで字の如くという感じの敵対的な航宙珪素生命体で、今の所コミュニ

ケーションが一切成立していない宇宙怪獣と呼ばれる種族の一つである。
奴らは人間が住めないような惑星や小惑星などを巣としており、自分達以外の航宙種族を探知すると高密度のエネルギー弾やレーザーによる攻撃、質量を活かした衝角突撃を仕掛けてきて船を破壊しようとしてくる。
しかも、奴らは有機生命体に何の恨みがあるのか、有機生命体を侵食して殺しにかかってくるのだ。研究は色々と進められているらしいが、進捗はよろしくないらしい。色々と謎の多い厄介な存在なのである。

「補給物資というのは結晶生命体に対して効果がある新型砲弾の試作品だそうです。フィールドテストを行うために早急に届けて欲しいとのことで」
「それこそ軍の仕事だと思うが……」
「こちらの方が足が早く、フットワークも軽いですから。気が進まないようであれば断ることもできますが」
「いや、気が進まないわけではないけど。どうする？」
「軍からの依頼なら裏は無いでしょうし、報酬も悪くないから受けて良いんじゃないかしら」
「私も良いと思います。あと、残り６０ｔ分はお酒などの嗜好品を積んでいったらどうでしょうか？　ドワーフの造るお酒は人気だと聞きますし」
「悪くない考えだな」

軍の前線基地のような場所では嗜好品が不足しがちだ。規律の問題で敢えて量を絞っている場合は買取拒否される可能性もあるが、まぁその場合は別のコロニーで売り捌けばいいだろう。

「流石ミミ、わかっとるやん。酒といえばドワーフ酒やで」

「そうですね。うちのコロニーは造船でも有名ですけど、ドワーフの職人が作る工芸品やお酒を目的に来る商人も多いって聞きます」

地元民のティーナとウィスカもミミの判断を支持している。念の為にメイに視線を向けてみると、彼女もコクリと頷いた。

「良い判断かと思います」

「じゃあ残りの積荷枠についてはミミに任せるよ。今後も積荷に関してはミミに任せるからな」

「はいっ……はぇっ！？」

俺の発言にミミが笑顔で元気よく返事をした――かと思うと笑顔のまま固まってダラダラと汗を流し始める。うん？　何かおかしいことを言ったか？

「ミミが急に凄く重い責任を負わされて固まってるわよ」

「え？　重い？」

「重いでしょ。任せるっていうのはつまりヒロのお金で交易品を買い込んで、それで利益を出してくれってことよね？」

「そうなるな」

何かおかしいだろうか？

「ミミは交易のプロでも何でもないんだから、損失を出すこともあるわよね」

「そういうこともあるだろうな」

「ヒロのお金を使ってヒロのお金を溶かすこともあるということよね、それは」

「そうだな。ああ、それで責任か。別に多少の損が出ても俺は気にしないけど」

流石に数十万、数百万エネルという単位で損失を出されたら困るけど、今回みたいに６０ｔくらいの交易じゃそうはならないしな。万が一行き先で売れなかったりしても、別に他の利益が上がりそうなコロニーに持っていって売れば良いだろうし。

「……まぁ、あんたはそういうやつよね」

エルマがため息を吐く。

「気楽にやってくれ、気楽に。立ち寄ったコロニーの特産品や生産過剰で安くなっていたりする品目の物を買えば少なくとも大損こくことはないだろうからさ。行き先で良い値がつかなかったら、別のコロニーで売り捌けばいいし。損を出しても余程大きくない限りは怒ったりしないし、デカく儲けられればボーナスを出す。小さな利益でも全然構わない。俺の感覚としては寄港料とか日々の生活費が少しでも稼げれば良い、くらいの感覚だから。つまり片手間の小遣い稼ぎだな」

「お兄さんのお小遣い稼ぎはスケールが大きいですね……」

「ほんとそれな……」

俺の言い分を聞いた整備士姉妹が表情を引きつらせている。

「そういうことだから、頑張ってくれ」

「ひゃ、ひゃい……」

ミミがなんだか死にそうな顔をしているが、そのうち慣れるよ。大丈夫大丈夫。

「そんなに心配しなくてもメイをサポートにつけるから」

「はい、ご安心ください。お手伝い致します」

メイなら上手い具合にミミを一端の交易商人として鍛えてくれるだろう。これでミミが実績を積み重ねていけばミミの昇給が更に早まるというわけだ。日々の業務に護身訓練、それに交易の管理……ミミが無理をしすぎないかどうかだけはしっかりと見てやろう。うん。ミミは真面目だから根を詰めすぎるかもしれないからな。

「私も手伝うから、安心して」

「わ、わかりました。メイさん、エルマさんもよろしくお願いします」

「はい」

「うん」

「こうして俺は良きに計らえ、の一言で副収入を得るわけだ」

「えげつないなぁ……」

「俺が管理しても良いけど、仕事をクルーに振るのもキャプテンの仕事だからな」

俺もＳＯＬに於いては金策として交易もやったので、実際にやれと言われたらそれなりにやれるだろう。基本的にどのような星系でどんな物資の値段が安くて、どんな物資が不足気味かというのは頭に入ってるからな。

「俺の金を元手に使って良いから、適当に交易品を選んでおいてくれ。一応アドバイスとしては、軍に持ち込むなら安酒は少なめに。中級品を中心に、高級品を一割か二割くらい混ぜとくと良いぞ」

軍人はそれなりに金を持っているからか、悪酔いするけど大量に飲める安酒よりもそれなりの品質の酒を好む傾向にある。上級士官には高級品などもよく売れる筈だ。持ち込み先が採掘星系のコロニ

ーとかステーションだと質より量の方が好まれる傾向なんだけどな。
「わ、わかりました」
「メイは先方に依頼を受ける旨の返事をしておいてくれ。大変だと思うが、ミミのサポートも頼むぞ」
「承知致しました」
「うちらは？」
「特に無い。ただ、このコロニーを離れることになるから、やり残したことがあるなら済ませておけ。次にいつここに来るかわからんぞ」
「わかりました」
「私は出港の準備をしておくわね」
「そうしてくれ。俺は備品の再チェックとルートの確認をしておく。では、行動開始だ」

俺の号令で各々が動き出す。
さて、これでこのブラド星系ともおさらばだな。いつもの調子でセレナ少佐とどこかで会うかと思ったが、流石にゲートウェイを使って遠方に来ているから遭遇することは無かったな。
なんて油断してたらばったり会ったりするんだよなぁ……別に向こうも意図的に俺を追いかけているわけじゃないんだろうけど、何度も遭遇するとまた今度も、なんて考えちゃうよな。
今回の行き先が帝国航宙軍の前哨基地ってところがちょっと気になるが、宙賊に対応するセレナ少佐の部隊が結晶生命体に対抗するための前哨基地に居るってことはないだろう。
無いよな？　きっと無いはず。うん。

#141　新天地へ。（前書き）

五章のプロローグ的なアレ。
あまり進行はしてないかもしれなくもないかもしれない―（：3」∠）―（迂遠

#141　新天地へ。

誰かに揺さぶられて目が覚めた。
微睡みの中、まだはっきりしない意識の向こう側から明るい声と、少し遠慮がちな声が聞こえてくる。重い瞼を開いて身体を揺する人物に目を向けると、そこにはなんだか妙に楽しそうな顔をしなら俺の身体を揺さぶる赤い髪の少女と、その少女の蛮行を止めようとしている青い髪の少女の姿があった。
俺が目を覚ましたことに気づいたようで、二対の紅みがかった瞳が俺の顔を覗き込んでくる。俺の顔を覗き込む二人の顔は驚くほど似ており、彼女達が双子の姉妹であるということが見て取れる。
ええと、この子達は……？

「兄さん、もう少しで目的地やって」
「あの、起こすようにってメイさんに言われて」

そうだ、思い出した。
妙な似非関西弁のような言葉で話す赤い髪の少女の名はティーナ。彼女に比べて大人しい印象の青い髪の少女の名がウィスカ。二人は俺の船に乗っている整備士の姉妹だ。

「……おはよう。二人とも」
「おはようさん。ねぼすけさんやな、兄さん」
「おはようございます、お兄さん」

☆★☆

「なんや、一瞬うちらのことがわからんかったん？　薄情やなー」

「薄情と言われるほど深い関係じゃないと思うんだが」
「そ、そうですよね。そういうのは、まだですし」

慎重が俺の胸くらいまでしかない整備士姉妹に左右から挟まれながら俺は宇宙船の通路を歩いていた。この宇宙船は俺の船で、小型船を二隻格納し、更に１８０ｔの荷物を積むことができるスキーズブラズニル級航宙母艦『ブラックロータス』である。格納庫には俺の愛機である小型戦闘艦『クリシュナ』が格納されており、いざ戦闘となれば俺はクルーと共にクリシュナに飛び乗って颯爽と出撃するというわけだな。

「そういうの、なぁ……意外とムッツリやろ？」
「そうだな、意外とな。そこで言葉を濁す辺りが」
「慎み深いだけですっ！」

俺とティーナにからかわれたウィスカが顔を真赤にしてプンスカと怒っている。ははは、可愛いな。
彼女達はとても背が低い。背が低いと言うか、単純に身体が小さい。なぜかと言うと、彼女達はドワーフという種族で、人間ではないからである。そう、ドワーフなのである。ファンタジーによく出てくる種族ナンバー２のドワーフだ。
力が強く、身体も頑強で、手先も器用。鍛冶などの工芸品作りに長け、地下に住む矮躯の妖精――というのがドワーフという存在の一般的なイメージなのではないだろうか？　ドワーフの女性は男性と同じく髭が生えているという作品も多いが、最近は成長しても人間の少女にしか見えないという作品も増えてきている。
この世界のドワーフは後者のタイプで、一見少女に見えるこの姉妹はれっきとした淑女と言える年齢であるらしい。俺の胸ほどまでしか身長がない彼女達の年齢はなんと驚きの二十七歳だ。俺とほぼ同年齢（タメ）である。

「で、兄さんは一体いつになったらうちらに手を出してくれるん？」
「えー……だってお前、無理だろう？」

そう言って俺は俺を見上げてくるティーナのお腹の辺りに視線を向ける。仮に俺と彼女達がそういった行為をするとして、それは物理的に実現可能なのか？　という疑問が先に立つ。何せ彼女達は身体が小さいので。

「大丈夫やろ。うちらはドワーフやからな。身体は頑丈やし」
「そういう問題か……？」
「そういう問題やって自分で言うたんやん？」
「確かに」

俺の言動はそういうものだったな。

「興味がないと言えば嘘になるけど、そういうのは義務的にすることでもないだろう。別に俺の船に乗ってるからって俺とそういうことをしなきゃいけないわけじゃないし」

俺が迷い込んだこの世界には摩訶不思議な慣習というものがいくつか存在するらしい。その数多あるという慣習の中で、俺を一番最初に仰天させた慣習というのが『男の船とそれに乗る女』に関する慣習だ。

人々が恒星間航行技術を手に入れた当初、恒星間移動にかかる時間は非常に長かった。初期の恒星間航行技術だと、恒星系から恒星系へと移動するのに一年近くの時間がかかることもあったらしい。そんな状況で男女が一緒の船に乗っていると、まぁ余程の事故が起こらない限りはくっついてしまうことが多かったようで……つまり男の船に女が乗ると、半自動的に『そういう関係』になるものなの

だと考えられるようになってしまったらしい。
　つまり、男が自分の船に乗るように女に言うということは遠回しに『俺の女になれ』と言っていることに等しく、それを了承した女は『はい、わかりました』と言ったに等しいことになってしまうと。逆に女の方から貴方の船に乗せてください、と言うことは『貴方の女になります』と言うことに等しいと。
　で、クリシュナとブラックロータスだが、これはどちらも俺の持ち船である。そんな船に乗っているティーナとウィスカも当然ながらその慣習が適用される対象となるわけで、俺はまだ手を出していないが世間的には俺の情婦として見られるのだということだ。

「それに、二人は会社から出向するように命令されて乗ってるわけだし、慣習からは外れるんじゃないのか？」

　彼女達は俺の船に乗っているが、それは彼女達の自由意志によるものでなく、彼女達が所属するスペース・ドウェルグ社の業務命令によるものである。つまり、二人の雇い主は俺ではなくブラックロータスの製造元であるスペース・ドウェルグ社であるというわけだな。彼女達はスキーズブラズニル級母艦の最新ロットであるブラックロータスの整備とデータ取りのために派遣された人員なのだ。

「そんな甘い話あるかいな。それも込みでスペース・ドウェルグ社はうちらをこの船に赴任させたんやし」
「お前らそれで良いのか……？」
「嫌なら断っとるよ。兄さんはうちら相手は嫌なん？」
「ストレートに聞いてくるね」

　二人とそういう関係になるのは嫌なのか？　と言われると別に嫌でもない。俺は据え膳は遠慮なく頂く主義だ。ただ、立場を使って無理矢理とか、義務感でというのは趣味じゃない。

「まぁ、機会があればな。義務感でとかじゃないなら断る理由はない」
「そっか。ならあとはタイミングやな」
「そうだな。ムードとかな」
「うちにそういうのは難しいで……ウィスカ？」

俺とティーナが割とあけすけに話しているうちにウィスカは羞恥心が限界に来ていたらしく、俺と手を繋いで歩きながら顔を真赤にしてしまっていた。

「刺激が強すぎたようだぞ、お姉ちゃん」
「ウィスカはむっつりやなぁ」
「む、む、むっつりじゃないもんっ！」
「痛い痛い。俺を叩くな、俺を」

顔を真赤にしたウィスカが涙目になりながら繋いでいた手を振り払って俺をベシベシと叩く。ナリは小さくてもドワーフなので、力が強くてとても痛い。やめて。
俺は顔を真赤にしているウィスカを宥めながらブラックロータスのコックピットへと向かうのであった。

☆★☆

ティーナとウィスカに手を引かれたり叩かれたりしながら向かったブラックロータスのコックピットには三人の女性が待ち構えていた。いや、待ち構えているわけではないか。普通に席に着いているだけだ。
「ヒロ様、もう少しで到着です」

俺がコックピットに入るなり振り返って笑顔を浮かべたのはミミだ。俺の船の最初のクルーで、元はコロニーに住んでいた普通の女の子である。身体が小さいのに立派なお胸を持っている美少女で、今は俺の船のオペレーター兼補給係として船の運行や物資の補給、それに戦利品や交易品の売り買いなどを一手に引き受けるべく猛勉強中である。俺にこの世界の慣習を最初に実感させてくれた女の子でもある。

「あまり寝られなかったでしょう？　向こうについて用事を済ませたらすぐに寝ていいからね」

次に声をかけてきたのは銀髪で、耳の尖った美人さんである。彼女の名前はエルマ。ベテランの傭兵で、ちょっとしたポカをやらかして酷いことになりそうになっていたところを俺が助けた縁でこの船に乗っているエルフの女性である。

そう、エルフである。ファンタジーと言えばエルフ、エルフと言えばファンタジーとも言えるメジャーな種族である。美男美女揃いで、耳が尖っていて、魔法が使えて、寿命が長いエルフである。

宇宙船が飛び交い、レーザー砲撃や電磁投射砲などが戦いのメインウェポンであるこのＳＦ世界にエルフ？　と思わなくもないのだが、実在するものは仕方がない。滅多に使わないが、本当に魔法も使うことができるエルフである。

「ご主人様。凡そ十五分後に通常空間にワープアウトします」

最後に声をかけてきたのは黒髪のロングヘアーを腰まで伸ばした怜悧な顔つきの長身のメイドさんである。彼女の名前はメイ。見た目は人間に見えるが、両耳の部分にヘッドホンのようなメカニカルパーツが露出している。彼女は女性型のアンドロイドで、その中で

もメイドとして主に仕えるために製造されたメイドロイドと呼ばれる類の存在である。
アンドロイドと言っても小型の陽電子頭脳を搭載した彼女は機械知性と呼ばれる存在であり、一応であるが俺達の滞在している帝国法のもとにおいて一定の人権を有している。この帝国における機械知性の存在というのは語り始めるとキリが無いほど複雑な立場なのだが、とにかく彼女は俺に購入され、そして俺に尽くしてくれる存在だ。
購入する際に値段などを全く気にせずに最高の素材と最高のパーツを惜しみなく使ってカスタマイズしたので、彼女のスペックはメイドロイドとしては規格外とも言えるものになっている。ぶっちゃけていうとパワーアーマーを装備しても俺が彼女に勝てる可能性はあまり高くないだろうというレベルで強い。肉弾戦においては間違いなくこの船最強の存在であろう。

「一応俺とミミとエルマはクリシュナで待機していたほうが良いかな」
「そうね、その方が良いと思うわ。向こうには帝国軍がいるのだから滅多なことはないと思うけど」

そう言ってエルマが席を立ち、ミミもそれに倣って席を立つ。メイは席を立たず、この場に残ってブラックロータスの操作を続けることになる。

「どうだった？　ブラックロータスは」
「まだ触りだけだからなんとも。一番苦労するのはヒロだと思うわよ」
「そうですね。私はレーダーとセンサー系だけですから、クリシュナとあんまり変わらないと感じましたけど、操縦となるとクリシュナとはかなり勝手が違うんじゃないですか？」

「まぁ、そうだよな。メイ、この場は任せるぞ」
「はい、お任せください」

メイにこの場を任せ、ミミとエルマを連れてクリシュナへと向かう。ティーナとウィスカも格納庫近くにある自分達の部屋に戻って待機するつもりのようで、俺達の後ろについてきた。

「俺達が操縦する機会はそう無いと思うけど、一応は訓練しておかないとな」
「そうね。何かの都合でメイがブラックロータスの操作をできない状況っていうのもあり得るわけだし」

基本的にこのブラックロータスに関しては全ての制御を機械知性であるメイに任せることになっているが、エルマの言う通り何かあった場合には俺達がこのブラックロータスを動かさなければならないことも考えられる。それを考慮して目的の恒星系に向かう際の暇な時間にコックピットのシミュレーターを使って操作の慣熟訓練をしていたのだ。

「結晶生命体との最前線ねぇ……用心するに越したことはないよな」
「そうね、用心するに越したことはないわね。舐めてかかって奴らに同化吸収されるのは嫌だし」

もうじきワープアウトするイズルークス星系は帝国航宙軍と結晶生命体と呼ばれる宇宙怪獣の最前線である。結晶生命体というのは中々に厄介な存在で、その繁殖速度と高い攻撃性に天下の帝国航宙軍も手を焼いているらしい。奴ら、一体一体はそんなに強くないんだけどとにかく群れで来るし、シールドを破られて装甲や船体に食い込まれると危険度が跳ね上がるからなぁ。

「おっかないなぁ」
「大丈夫、ですよね？」
「ヒロ様なら何の心配もいりませんよ。結晶生命体とベレベレム連邦軍が入り乱れる戦場でも船に損傷なく大戦果を上げましたし」
「なにそれこわい」

あったな、そんなことも。歌う水晶を使ってベレベレム連邦の連中を轢き殺してやったのも良い思い出だ。奴らにとっては災難だっただろうけど。

「奴らにインターディクト能力はないし、超光速ドライブを起動中は何にも起こらないから大丈夫さ。目的地のアウトポストが襲われてでもいない限り、俺達の出る幕は無い」
「ヒロがそういう事を言うと、アウトポストが襲われてたりするのよねぇ……」
「やめろよ縁起でもない」
「前にクリシュナの試運転に出た時も……」
「アカン」

皆して酷いな。そんなことがそうそうあるわけがないだろう？
あったとしても帝国軍のアウトポストがどうにかなっているわけ無いだろうが。

#142　一撃離脱一撃離脱一撃――。

「んんー……？」

最初に異常に気づいたのはミミだった。いや、正確にはミミがそんな声を上げる原因となったデータをハンガー経由でクリシュナに送ってきたメイか。

とにかく、クリシュナのコックピットで最初に異常に気づいたのはミミであった。

「どうした？」

俺の中では既に嫌な予感が加速度的に増加している。隣のサブパイロットシートに座っているエルマも同じように思っているのか、眉間に皺を寄せながらコンソールを操作してブラックロータースから送られてきているレーダーやセンサー関連のデータを表示させているようだった。俺も同じようにコンソールを操作して情報を確かめる。

「これ、アウトポストですよね……交戦してません？」

「ヒロ……」

「ヒロ様……」

「俺ぇ！？　俺が悪いの！？」

流石にそれは理不尽ではなかろうか？　俺が言ったからフラグが立つなんてことあるわけがないじゃないか。俺にそんな運命操作能力があったらもっと有意義なことに使うよ。と、思っていたら整備士姉妹から通信が入った。

『兄さん……』
『お兄さん……』
「俺は悪くねぇ！」

というかそれを言うためだけに通信を入れてくるんじゃない。姉妹との通信を切りながら俺はメイに通信回線を開く。

「状況は把握した。戦闘に巻き込まれる可能性が高いから、安全を最優先に、出し惜しみはナシだ」
『安全を最優先に、ということであれば事態が落ち着くまで様子を見るという手もありますが』
「それも手ではあるけどなぁ……まぁ状況の詳細を確認してからだな。アウトポスト付近で防衛戦闘をしている帝国軍側が負けるとはあまり考えられないが、あまりにも劣勢だったら逃げることも視野に入れる」

明らかに劣勢な中に突っ込んで死ぬのは御免だ。勝ち馬に乗るのは良いけどな。
とは言っても、前線基地（アウトポスト）に配備されている固定型の防御兵器というのはそれはもう強力なものばかりだし、それに駐留部隊も加わって戦っているというのであれば帝国側が劣勢ということはほぼ無いと思うけど。

『承知致しました。間もなくイズルークス星系アウトポストに到着致します。通常空間への帰還まであと三十秒です』
「了解。いつでもクリシュナを射出できるようにしておいてくれ」
『はい、お任せください』

メイトの通信が切れたのを見計らってメインモニターの設定を変

更し、ブラックロータスの光学センサーが捉えた映像を投影できるようにする。

「さぁて、どんなもんかな」

画面上で線のように流れていた星々がその動きを止める。超光速ドライブ開始時、終了時に聞こえる轟音が聞こえないのは、クリシュナがブラックロータスの格納庫内にいるからだう。

まぁそんなことはどうでもいい。戦況は……戦況は……？

「あれ？　思ったより拮抗してないか？」

「そうみたいね」

「うわぁ……凄い数」

ミミが大量の結晶生命体と交戦している帝国軍のアウトポストとその駐留部隊を見て顔を青くしている。これはあれだな、ちょっとした規模の戦争になってるな。

小型の結晶生命体がアウトポストや帝国航宙軍の船に向かって突撃をかけてはシールドに弾かれて迎撃され、中型の結晶生命体は光弾や光線で攻撃を行っては反撃で粉砕され、大型の結晶生命体からは小型や中型の結晶生命体が次々と生まれ出ては帝国航宙軍に襲いかかっている。

今の所、帝国軍側の迎撃が結晶生命体を寄せ付けてないようだが、帝国軍側の攻撃も小型種や中型種の壁に阻まれて殆ど大型種に届いていない。

小型、中型種を生み出す大型種とて無限にそれらを生み出せるわけではないので、このまま迎撃を続けていればそのうち結晶生命体側はその数を減らすことになるだろうが、それは帝国軍側も同じで無限にその迎撃能力を維持できるわけでもない。

「壮絶な消耗戦になっているな」
「そうね。アウトポストや駐留部隊の残存物資量や疲労度によっては戦況が傾く可能性があるわね」
「やるかぁ……メイ」
『はい』
「回頭してハッチを一番右側の大型種に向けてくれ。クリシュナを最大速度で射出後、再回頭して援護を頼む。あと、帝国航宙軍に通信をして大型種を叩く旨を伝えるのと、報酬を弾むように交渉しておいてくれ」
『かしこまりました』
「結局やるのね……というかあの中に突っ込むのね」
「エルマさん、いつものことです」

嫌そうな顔をエルマに対し、ミミはもうなんか半ば悟ったような表情になってるな。よく訓練されてきて結構なことだ。
と、ミミの成長に感心していたらどうやら回頭が完了したようだ。ハッチが開き、帝国航宙軍と結晶生命体が激戦を繰り広げている戦場が真正面に見えてくる。

『進路上に多数の結晶生命体がいますが』
「構わん、出してくれ」
『承知致しました。ご武運を』

メイの声と同時にクリシュナの慣性制御装置でも殺しきれないほどのGが発生し、全身がパイロットシートに押し付けられるような感覚が襲いかかってくる。やっぱり外部要因による加速には慣性制御装置の効きが甘いな。

「プランはっ！？」

強いGに耐えながらエルマが叫ぶように問いかけてくる。
「最大速度で突っ込んで、対応される前に対艦魚雷を大型種にぶち込んで颯爽と逃げる！　一撃離脱だ！」
「そ、それっ……作戦ですか……っ！？」

ミミが苦しそうな声で突っ込んでくるが、勝算はある。奴らは帝国軍と真正面から殴り合っているので、その敵意は完全に帝国軍に向いている。つまり、今なら奴らの不意を突きやすい。
無論、それも簡単には行かない。ある程度連携して敵へと攻撃する中型種以上の結晶生命体はともかくとして、ほぼ本能と反射のみで動く小型種はクリシュナに向かってくる可能性が高いからな。
だが、精々砲弾のように自らの破片を撃ち出してくるか、体当たりするかくらいしか攻撃手段のない小型種の攻撃ではクリシュナのシールドを削り切るのは難しい。互いに加速した状態で正面衝突でもすればわからないが、そんなヘボは俺がやらかさない。
中型種以上の結晶生命体は反応が遅いから、俺に敵意を向けた時には俺はもうその空間を駆け抜けている。中には追ってくるやつも居るかも知れないが、結晶生命体がひしめいている中では奴らも同士討ちを避けるために強力な光弾攻撃や光線攻撃は放てないし、身体が大きくなればそう簡単には他の個体を押し退けて俺を追うこともままならない。
そうやってもたついている間にクリシュナは敵大型種に肉薄して対艦反応魚雷をぶち込んでやるってわけだ。

「そらっ、行くぞ！　ウェポンシステム起動！　歯ぁ食いしばっておけ！」
「了解！」
「はいっ！」

クリシュナは更に加速して結晶生命体の群れへと突っ込んでいく。無論、それに反応して小型種が向かってくるが、俺は回避に専念して発砲を控えた。何故かと言えば、下手に発砲して敵意（ヘイト）が帝国軍ではなくこちらに向いたら、一気に押し潰されてしまう恐れがあるからである。

無論、最終的には多くの結晶生命体から敵意を向けられることになるのだが、今はまだその時ではない。

「ひゃあああぁぁぁっほぉぉぉぉう！」

キラキラと輝く結晶生命体の間を縫うように擦り抜けながらただひたすらに大型種に向かって突き進む。結晶生命体は見た目だけならきらびやかで綺麗なんだよな。トゲトゲした宝石でできた矢じりみたいな感じだ。しかも色とりどりで見た目だけなら実に美しい。

「危機的状況のはずなのに、実はあまりやることが無いのよね」

「私も、こうも乱戦だとサポートのしようがないです……」

破片弾程度じゃクリシュナのシールドはそう減衰しないからシールドセルをバンバン使うような状況じゃないし、下手に群れの中でチャフやＥＣＭを使うと結晶生命体の注意を惹きかねないからな。ミミに至っては俺の視界の隅に短距離レーダーと中距離レーダーのウィンドウを置いたらもう殆どすることがない。というか、警告を発しようとしても、この距離だと間に合わないんだよな。船の近距離センサーが発する警報のほうが早いし。

「っしゃオラァ！」

ついに小型種と中型種の壁を抜け、大型種に肉薄した。ここまで近づくと大型種から射出されたばかりの小型種やここに来る過程で

注意を惹いてしまった中型種が俺の後ろで集団を形成しつつあったが、時既に遅しだ。

「まず一発目！」

クリシュナの下部ウェポンデッキから射出された反応弾頭搭載の対艦魚雷が凄まじいスピードで大型種へと突き進んでいく。本来対艦魚雷というものは弾速が遅いものなのだが、今のクリシュナのように発射する機体そのものが高速で動いていると、その慣性が対艦魚雷に乗るようになっている。結果として、高速移動しているクリシュナとほぼ同じスピードで対艦魚雷は宇宙空間を突き進むことになるわけだ。

弾頭が炸裂する前に俺はクリシュナの進路を変え、次の目標に艦首を向ける。そうして数秒後、艦の後方で対艦魚雷の反応弾頭が盛大に炸裂した。バックモニターの映像では目標の大型種だけでなく、クリシュナを追ってきていた小型種も相当数が爆発に巻き込まれたようだ。奴らはシールドを展開しているわけではないから、ああいった爆発に巻き込まれると飛び散った味方の破片で損傷するケースがままあるんだよな。

「よーし、次行ってみようか！」

「はいはい、シールドはちゃんと管理するからご自由に」

「私も追ってくる敵の量が多くなりすぎたら警告しますね」

景気よく一匹目の大型種を撃滅した俺は意気揚々と次の獲物へと向かうのであった。

え？　一撃離脱はどうしたって？　今ちゃんと離脱してるじゃないか。離脱先が次の一撃先ってだけだよ。さぁ、思う存分引っ掻き回してやろうじゃないか。

#１４２　一撃離脱一撃離脱一撃――。（後書き）

ヒット・アンド・アウェイ・アンド・ヒット・アンド・アウェイ・アンド・ヒット……―（：３」∠）―

#143　フラグは折れなかった。

戦況は良くなかった。だが、悪いとも言えない。このまま行けばこちらが競り勝つだろう。敵を撃滅するまでに何隻かの船は食われる可能性があるが、前線基地の迎撃兵器群に被害を出さなければそのうち競り勝つ。問題は――。

「徐々に手が回らなくなって来ていますね」

「まだ余裕はありますが……」

その余裕が尽きた時が私達の命運が尽きる時、というわけだ。

そう、問題は敵を撃滅するまでに食われる何隻かの船のうちの一隻がこの船、戦艦レスタリアスであるということだろう。

「いざとなれば少佐には脱出艇で――」

「シールドも無い脱出艇では脱出したとしても生き残れないでしょう。何より、クルーより先に脱出することなどできません。艦長としても、帝国貴族の一員としてもね」

この艦単体で見れば徐々に押され気味だが、全体としては徐々に押し返している筈だ。他の艦の戦況が良くなれば援護が入るかもしれない。そうすれば、この艦の生存確率も上がるはず。

「とは言え、何かイレギュラーが起きなければ……」

と、呟いたその時だった。通信手から連絡が入ったのは。

「傭兵ギルド所属の船から援護に入ると通信が」

「傭兵ギルドの？　基地にいる傭兵はポイントＳ－０２に投入されている筈ではありませんでしたか？」
「今しがたこちらに到着したようです。スキーズブラズニル級の母艦、それも砲艦仕様だそうで」
「砲艦仕様……？　それは助かりますが」

どの程度の火力を備えているかはわからないが、スキーズブラズニル級と言えばスペース・ドウェルグ社の大型――いや、中型航宙母艦だったはずだ。それなりに期待はできるはず。

「レスタリアスの後ろに着いて援護をするように指示を出してください。小型種の迎撃を――」

と言っている間に閃光が走り、我々が攻撃目標としていた中型種の鼻っ柱に光の尾を引く何かが命中した。被弾した中型種の鼻っ柱に大穴が空き、中程から後ろ側が粉砕されて宇宙空間に飛び散る。

「……今のは？」
「援護を申し出てきた船――ブラックロータスという名前のようです。あの船が放った攻撃かと……恐らく大型のＥＭＬ（電磁投射砲）ではないでしょうか」
「ＥＭＬなんて初めて見ました……」
「命中率が悪くて軍で正式採用されることは無いですからね。威力が高くても当たらなくては意味がないですし」

私は手元のコンソールを操作してレスタリアスの光学センサーが拾ったブラックロータスの姿を眺めてみる。黒に近い紺色に塗装された外観はどこかあの人の船を連想させるものがある。ダレインワルド伯爵の船を護衛してゲートウェイを使ってどこかに行ってしまったので、もう追跡もできなくなってしまったけれど……彼は元気

でやっているのだろうか？

「なかなかの火力ですね」

「そうですね。傭兵が使う船としてはかなりのものかと」

ブラックロータスはコンシールド装甲で艦の各所に隠蔽されていた武装を展開し、怒涛の勢いでレーザーやシーカーミサイルを発射していた。レーザー十二門にミサイルポッドが十門、それに艦首のＥＭＬ。普段はコンシールド装甲で隠蔽しているところを見ると、武装していることを隠したいという意図が透けて見えてくる。

何から？　傭兵の船なのだから、それは勿論宙賊からだろう。輸送艦に見せかけて、実は重武装の砲艦。黒い蓮は油断して近づいてきた宙賊を食い殺す毒の花というわけだ。

「いや……」

彼にあの釣り餌戦術を教えてもらい、我々なりにそれなりに研鑽を積んだ。より研鑽を積むために他の傭兵にもオブザーバーとしてアドバイスを受けたりもした。そんな彼らをして『よくこんな悪辣な手を思いつくな……帝国軍こええ』と言わしめたその戦術を前提としたあの艦は何かおかしくないだろうか？

艦首に大型ＥＭＬを積んでいるというのもいかにも怪しい。確か彼の船には超近距離戦用のシャードキャノンが装備されていたはずだ。ＥＭＬもシャードキャノンもどちらもキワモノ装備という意味では類似性が高い。

「あの船のオーナーを調べてください」

「はっ？　はっ！」

傍に控えている副官が一瞬『こんな時に何を？』というような顔

をしたが、彼は職務に忠実だった。すぐにコンソールを操作してデータバンクへのアクセスを始める。

「しょ、少佐っ！」
「何です？」
「ブラックロータスからの通信で、その……」
「報告は迅速に、正確になさい」
「あの、ちょっと信じがたいのですが……傭兵の小型戦闘艦が結晶生命体の群れに突入して撹乱を行うと」

私の中に生まれた疑念が確信に変わる。そんなことを平然とやる馬鹿なんて、いくらこの銀河が広くても二人もいるとは思えない。

「少佐」
「彼ね」
「はい、彼です」

艦橋のメインモニターに目を向ける。大量の結晶生命体で埋め尽くされている戦域の奥に鎮座している複数の大型種。その一つが閃光と共に半壊するのを私は確かにこの目で見た。

「敵の圧力が低下するぞ！　押し込め！」
「「「イエスマム！」」」

私の号令に艦橋のクルー達が応じる。どうやら彼のお陰で命を拾うことになりそうだ。

☆★☆

「やばいやばいやばいやばいやばいっ！」

「はっはっは、まだまだいけるいける」
「無理無理無理無理むりですってぇ！」

エルマとミミが泣きそうな声で叫んでいるが、何も問題はない。ちょっとレーダー表示が真っ赤になるくらいの数の小型種に追いかけられているが、この程度は想定の範囲内だ。

「ぎゃあぁぁぁっ！　前っ、前ぇっ！」
「あらよっと」
「ひいぃ……」

結晶生命体の中型種がクリシュナの進路を妨害しようとしてくるが、紙一重でそれを躱して中型種のキラキラと光る体表を撫でるようにして中型種と中型種の隙間をすり抜けていく。後方で隙間を抜けられなかった大量の小型種が中型種に、或いは互いに激突して大変なことになっているようだが、計算通りである。

「こ、この後はどうするの？」

少し落ち着きを取り戻したエルマがそう聞いてくる。

「うーん、対艦魚雷は撃ち尽くしたからなぁ」

中型種に捕捉されないように注意しながら進路上の邪魔な小型種だけを散弾砲で粉砕し、ひたすら船を前に進ませる。対艦魚雷で複数の大型種に大ダメージを与えた今となっては敵意のコントロールもクソも無いからな。既に攻撃を解禁しているというわけだ。
何にせよ、とにかく動き続けないと物量に押し潰されるだけなので、ひたすら動いて敵の注意を惹き付けるだけだ。後は帝国航宙軍やメイの操るブラックロータスが結晶生命体を叩いてくれるのを祈

るばかりである。
「逃げに徹しつつチマチマと削って味方の善戦を祈るってところだな！」
「他人任せのノープランじゃない！」
「意外とそうでもない。拮抗していた戦場を大いに掻き回してやったからな。ここに配属されている帝国軍人がまともなら――」
帝国軍が展開していた方向から多数の大口径レーザーによる砲撃が飛来し、俺に注意を向けている中型種が小型種諸共続々と駆逐されていく。
「ほらこの通り。後は一転攻勢に出た帝国軍の砲撃に巻き込まれないように気をつけながら、のらりくらりと逃げ回るだけだ」
「ヒロ様！　帝国軍から砲撃の予告データが送られてきています！」
「マジで？　じゃあレーダーとＨＵＤに砲撃予告地点を表示するようにしてくれ。敵を誘導するぞ」
「はいっ！」
メイが手を回したのか？　それにしたって俺の動きへの対応が随分早いな。まるで俺のやり口を知ってるような――。
「まさかねぇ……」
「ちょっと、こんな時に考え事はやめてよ？」
「わかったわかった。もうひと踏ん張りしてからにしよう」
一瞬金髪の少佐殿の姿が脳裏に過ったが、対宙賊独立艦隊が結晶生命体との最前線に配置されている筈もない。きっとメイが何か上手くやったんだろう。俺はそう結論付けて結晶生命体のトレインを再開するのであった。

☆★☆

「いやー、なかなかスリリングだった。しかしあれだな、報酬がどうなるのかだけはちょっと心配だな」

あれから一時間ほどで結晶生命体はこの宙域から駆逐された。一度戦力の拮抗が崩れてしまえば後はトントン拍子だ。次々に中型種が撃破されて、盾を失った大型種が集中砲火で爆発四散する。

本来は中型種や小型種をバンバン出して敵を押し潰す大型種だが、六匹いたうちの四匹が俺がぶち込んだ反応弾頭を搭載した対艦魚雷で半壊していた。本来の性能を出すことができなくなり、火力で勝る帝国軍にボコボコにされたってわけだ。

「もう私は疲れ切ったわよ……早く休みたいわ」

「私もです……」

エルマとミミの二人はボロボロだった。精神的に。俺からすれば何の問題もないのに騒ぎまくって勝手に疲れたという印象だが、まぁ二人も怖かったんだろう。俺は寛大な心で二人を許そうと思う。

「何その仕方ないなぁって顔。ぶん殴るわよ？」

「やめてくださいしんでしまいます」

華奢に見えてエルマはなかなかのゴリラっぷりを誇るからね。前に腕相撲したら瞬殺されたよ。あの細い腕のどこにあんな筋力が隠れているというのか？　魔法的な力で身体強化でもしているんじゃないだろうか。

「今までで一番ハードでした……」

「スリリングではあるな。ミスると死ぬし」
「平然としすぎ」

エルマが恨めしげな目で俺を見てくるが、ＳＯＬではよくああいう感じで結晶生命体と遊んでたからなぁ。結晶生命体との大規模戦はレイドイベントの一種で、数え切れないほどやったし。奴らとの追いかけっ子の仕方はもう身体が覚えているレベルだ。それもまぁ、この世界だとあまり過信はできないから、これでも結構安全マージンは確保して動いてたんだけどな。

「ミミ、ブラックロータスに着艦するぞ」
「はい。メイさんに連絡します」

ブラックロータスのビーコンに向かって船を走らせること暫し。なんだか見覚えのある戦艦の横で待機しているブラックロータスが見えてきた。

「あの、ヒロ様。あの戦艦って……」
「ははは、そんなまさか。同型艦だろう」
「確認したわ。レスタリアスね」
「どうして」

この広い宇宙の広い帝国領で何故こう何度もあの少佐と出会うのか。そもそもここは対宙賊独立部隊とは何の関係もない宙域だろうに。というか、ゲートウェイを抜けた先なのに本当になんでいるの？

「あの、ヒロ様」
「はい」
「レスタリアスから通信です……」
「……はい」

ここで通信を拒否することはできない。何故なら今回の戦いをタダ働きにしないためにも帝国航宙軍とのパイプが必要だからだ。戦闘データはあるから無下にはされないと思うが、帝国軍少佐で高位貴族の子女でもあるセレナ少佐の後押しがあったほうが金になるのは間違いないからな。

「はい、キャプテン・ヒロです」
『お久しぶりね、キャプテン・ヒロ。今回は助かったわ』
「はい、光栄に思います」
『……そうやって露骨な態度を取ってると酷い目に遭わせるわよ？』
「やめてくださいしんでしまいます」

エルマといいセレナ少佐といい、ちょっとふざけただけで暴力を振りかざすのは良くないと思うのだがどうか？　お前が言うな？　いやいや、俺はそんなに暴力とは振るわないし。精々札束でビンタするくらいだし。

『とにかく、事態の収拾を終えるまであなた達はレスタリアスに追随しなさい。あなた達の戦闘データはこちらでも取っているし、悪いようにはしないわ』
「イエスマム。何かお手伝いなどは？」
『必要ないわ。あなた達の母艦に戻って休んでいても良いわよ。何かあったら母艦に連絡を入れるから』
「了解」

セレナ少佐からの通信を聞いたエルマとミミがホッとした表情をしている。二人とも疲れているようだし、ここはセレナ少佐の言葉に従っておくとするか。

「よーし、それじゃあ着艦するぞ」
「了解」
「はい！」

二人の返事を聞きながらクリシュナをブラックロータスの格納庫へと走らせる。
さて、悪いようにはしないと言っていたが、どこまで信用したら良いものやら。面倒事の予感がするよなぁ。

#143　フラグは折れなかった。（後書き）

ちょっとやるべき作業が入りまして、近日中に一旦更新をお休みして作業を片付けに入ると思います。
二週間くらいお休みするかも知れないけどゆるしてね！ —（：3」∠）—

#１４４　軍人達の評価

「おかえり」
「おかえりなさい」
「ただいま」

ブラックロータスに着艦し、タラップを使って格納庫に降りたところで整備士姉妹に出迎えられた。二人とも作業用のツナギを着て、背後には整備ボットを従えている。早速クリシュナの整備をしてくれるらしい。

「エルマ姐さんとミミは？」
「クリシュナの自室で休んでる。今回の戦いがちょっと精神的にハードだったみたいでな」
「それはそうでしょうね……」

ウィスカがとても気の毒そうな顔でクリシュナを見上げている。

「そんなに危なくなかったと思うんだがなぁ……極めて安全運転だったんだが」
「兄さん、変なところでネジがぶっ飛んでるよな」
「そんなに？」
「そんなにやろ……うちらもブラックロータスのセンサー経由で見とったけど、一歩間違えば結晶生命体に串刺しの穴だらけやん」
「レーザーに比べれば結晶生命体なんて避けるの簡単だろ」

レーザーはマジで回避不能だからな。避けるとなると、基本的には射角に入らないくらいしか対応方法が無い。あとはもうシールド

か装甲で受け止めるしかないからな。

「レーザー砲撃と比べるのがそもそも間違っているような……というか、そういう問題ではなくてですね、ワンミスで確実に死ぬ状況に恐怖を感じないんですか？」

「うーん……そう言われると怖いような気がしないでもないんだが。慣れの問題だな」

「慣れの問題ですか」

「うん、慣れの問題。慣れてるから大丈夫」

そうとしか言えない。確かにワンミスで死ぬ状況が怖くないと言えば嘘になるが、そんなのは元の世界で自動車を運転するのと何ら変わりないと思う。峠道でハンドル操作を誤ればガードレールを突き破って谷底に真っ逆さま、というのと同じだ。

「さよか……とりあえずクリシュナの整備するからな」

「ああ、頼む。被弾はしてないから、足回りとジェネレーター、シールドジェネレーター周りかな？」

「そんなところやね。それじゃ、作業に入るで」

「おう、安全第一でな」

「モチのロンや」

安全確認ヨシ！　って感じでやってほしい。いやこれはマズいか？　主に作業をするのは整備ボットだから大丈夫か。しかし、こうやって寄港しなくてもクリシュナの整備をしっかりと受けられるっていうのは便利だな。勿論積んでる資材の量の関係で限界はあるんだろうけど。

少しの間姉妹と整備ボットの様子を眺めてからブラックローターのコックピットに向かう。

「おかえりなさいませ」
「うん、ただいま。状況は？」
「帝国航宙軍は結晶生命体の残党狩りを念入りにしているようです。残骸の処分と回収もしているようですね」
「結構な量だよな」
「はい。しかし手を抜くと危険ですから」
「確かに」

結晶生命体の残骸にはそれなりに価値がある。例えば、レーザー砲のレンズの原料として利用可能な希少な結晶体や、エネルギー資源として使える結晶体、その他にも色々と利用価値のある結晶体が採れるのだ。ただ、まだ『生きている』結晶に迂闊に触れると非常に危ない。素手で触ろうものなら指どころか腕一本を侵食されて持っていかれることがあるとか。
あとは生きている結晶同士が一定数以上結合すると結晶生命体として活動を再開することがあるらしい。なので、帝国航宙軍の皆様は結晶生命体の残骸を回収して必要な部分だけ採取し、不要な部分や生きている部分をレーザーで焼き払う作業をしているわけだ。
こうして回収された戦利品はどういう扱いになるのかね？　兵士の皆さんの臨時収入になるのか、それとも軍の予算になるのか……と、そんなことはどうでもいいか。

「結構な時間がかかりそうだな」
「私の推測だと凡そ二時間半程はかかるかと」
「軍人さん達も大変だな。うちとしてはとっとと荷物を納品して帰りたいところだが……」
「セレナ少佐には納品の件も通達しています。直に連絡が来るかと」

☆★☆

『頭おかしい（クレイジー）』

クリシュナの戦闘データ、そしてブラックロータスとレスタリアスで観測したデータを元にレポートを作成し、今回の作戦を指揮した司令部に送信。その上でクリシュナとブラックロータスに対する特別報酬を出すように上申したところ、返ってきた反応は概ねそのような内容であった。

今もイズルークス星系に駐屯している他の艦隊司令官などにレポートが共有され続けており、やはり同じような反応が返ってきている。そう言いたくなる気持ちはよく分かる。でもそれが彼という存在なのだ。

『突然大型種が半壊して結晶生命体どもの動きがおかしくなったと思ったら、こんな事が起きていたのか』

『この戦闘データを何かに活かせないか？』

『この戦闘データを分析して撹乱に使えと？　機械知性なら或いは活用できるかも知れないが……拒否されるだろう。結晶生命体の同化吸収は機械知性にとっても致命的だ。彼ら、彼女らにも生存欲求というものが存在する』

『そもそもこんな尖った機体を用意するのは無理だろう……用意できたとしても殆ど特攻前提の魚雷艇になるぞ』

『それでも使い途のないサプレッションシップよりはマシだと思うが』

『アレのついての発言はやめておけ。白刃主義者に決闘を申し込まれるぞ』

サプレッションシップの話題は確かに危険だ。私は白刃主義者ではないが、軍人貴族の中には熱狂的な白刃主義者がいるから。

「私としては今回の戦闘の趨勢を一気にこちらに傾けた戦功を認め、

然るべき報酬を与えるべきだと思うのですが」

私の発言に同意の声が聞こえてくる。

『信賞必罰という言葉もある。戦功には然るべき報酬があるべきだろう』

『こちらの分析でもこの傭兵の働きは大きかったと思う。同意しよう』

『認めざるをえんだろう。誰の目にも功績は明らかだ。主計科に伝えておく』

「ありがとうございます」

彼との約束は果たせた。取り敢えずは一安心といったところか。

『彼は暫く基地に滞在するのかね？』

「どうでしょう。輸送依頼でこちらを訪れたというような話は聞きましたが」

『できれば引き留めてくれ。今は優秀な戦力が少しでも欲しい』

「努力はしますが……」

無理難題を押し付けないで欲しい。彼は私が以前から何度もあの手この手で勧誘しているのにちっとも靡いてくれない難物なのだ。彼を引き留める方法があるとすれば、それは一つしか無いだろう。

「彼を引き留めるのであれば協力が必要です」

☆★☆

『基地司令と他の艦隊司令官達からも了承を取り付けることができましたから、今回の功績に関してはそれなりの報酬が出ることを期

待してくれて良いです』

ブラックロータスのコックピットで帝国軍の皆様方が懸命に働く姿を眺めること一時間ほど。セレナ少佐の乗るレスタリアスから通信が入り、俺はホロディスプレイ越しに彼女と再び対面していた。

「そいつは重畳。これでただ働き同然とかになったら悲しい気分になるところだった。ああそうだ、弾薬の補給を受けられるか？　反応弾頭搭載の対艦魚雷を四発ほど調達したいんだが」

『魚雷艇用の備蓄があると思いますから、多分大丈夫です。弾薬費に関しても帝国航宙軍が持ちます』

「そりゃ嬉しいが……」

何だろう、待遇が良すぎないか？　いや、軍に助太刀する形で大戦果を上げたわけだから、妥当か……？　俺の面倒事感知センサーが警告を発している気がする。

『依頼の件も確認が取れましたのでアウトポストに着艦してください。報酬の件も含めて主計科から連絡が入ると思います』

「それはどうも……何か企んでないか？」

『いいえ？』

セレナ少佐の表情は読めない。酒を呑むとまるでダメなお姉さんになってしまう彼女だが、素面で軍服を着ている時は基本的に隙の無い完璧な帝国軍人である。メイなら或いは彼女の微細な変化を察して心情を推測できるのかも知れないが、俺にそのようなスキルは備わっていない。

「……まぁ、厚意は有り難く受け取るとするよ。それじゃあブラックロータスはアウトポストに向かう」

『はい。結晶生命体の襲撃警報は解除されていますから大丈夫だとは思いますが、一応気をつけてください』
「了解。そうそう、依頼品以外の積荷として良いドワーフ酒を積んできてるんだが、ここで卸せるか？」
『嗜好品は不足気味ですから、良い値で買い上げてもらえると思いますよ。私も後で買わせてもらいます』
「呑み過ぎるなよ」
『勿論です』

俺の言葉にセレナ少佐の口元がヒクリと引き攣る。アレイン星系でやらかした記憶が脳裏を過ぎったのだろう。まだまだセレナ少佐には貸しがあるからな。まぁ、それも今回の一件で一つ返してもらった形になるか。

「それじゃあ、そっちも気をつけてな」
『はい、それでは』

セレナ少佐が頷き、通信を切断した。

「どう思う？」
「ご主人様を引き留めて戦力として利用したいのだと思います」
「だよな」

ちゃんとそれなりの金を積んでくれれば受けるけどね。軍なら支払いに間違いはないだろうし。考えられる面倒事は、今回の俺の活躍を過大評価して無茶振りされるとかだろうか？　いくら俺でもできることとできないことがあるからなぁ……あの大群を俺一人で相手しろとか言われても流石に無理だ。無論、そんなことは向こうだってわかってるだろうから、そんなことは言われないと思うが。

「まぁ、余程の無茶振りをされなきゃ良いか」
「帝国領内で活動をするのであれば、軍とのコネがあると色々と捗ると思います」
「そうだよな。程々に頑張ろう」

ＳＯＬにも派閥（ファクション）クエストと呼ばれるコンテンツがあった。基本的には特定の派閥――例えば軍だとか、巨大企業だとか、そういった特定の勢力のクエストを受注することで派閥の好感度を上げて様々な恩恵を受けられるという内容だ。傭兵プレイをしていると自然と軍関係の派閥の好感度が上がっていくんだよな。基本的に宙賊退治に賞金を出しているのは軍だから。

軍の好感度が上がると受けられる討伐系クエストの数や種類が増えたり、弾薬補充費などが割引されたり、場合によっては一般販売されていないミリタリーグレードの装備を購入できるようになったり、無料で貰えたりする。傭兵プレイヤーにとってはとても相性が良い派閥だ。無論、特定の国の軍と仲良くなると平和主義系の団体とか敵対国家の軍から敵視されることになるので、メリットだけではないのだが。

「それに、ゲーム的なメリットだけとは限らないしなぁ……」

ＳＯＬではそんな感じだったが、この世界では軍と仲良くなることがどんな事態に繋がるかははっきりとはわからない。何せ、この世界はゲームではないのだから。特有の厄介事に巻き込まれる可能性もある。

「面倒事にならないと良いけど」
「同意致します。その願いが実現するかどうかは別として」

それはつまり何か面倒事が転がり込んでくるに違いないと考えて

いるわけですね？
実は僕もそう思います。依頼で訪れた先で偶然起こっていた結晶生命体の襲撃、縁のある帝国航宙軍少佐との再会、何も起こらない筈もなく……ってやつだよな。用心しとこう。

#１４４　軍人達の評価（後書き）

明日からちょっと色々作業に没頭するためにお休みをもらいます！
二週間くらいで片付けるつもりですが、伸びる時は活動報告などでお知らせします―（：３」∠）―

#１４５　セレナ少佐からの誘い（前書き）

こっちも更新再開します！　いつもどおり月曜と木曜は休みをもらいますけど！　ユルシテネ！　―（：３」∠）―

#145　セレナ少佐からの誘い

帝国航宙軍の前線基地への入港はすんなりと終わった。既に話が回っていたのか、それとも許可申請を出す担当官に仕事のブツだけでなく嗜好品も積んできたと言ったのが良かったのか、或いは単純に今回運んできたスペース・ドウェルグ社製の新型砲弾が重要物資だったのか……まぁいずれの理由だとしても構わない。長々と待機させられることなく入港できたのは僥倖であったと言える。

「しかし俺達二人はやることがないな」
「そうね……ふぁ」

俺とエルマの二人は特にやることもなくブラッククロータスの休憩室でのんびりとしていた。ミミとメイの二人で荷降ろしと輸送依頼の報告、そして運んできた嗜好品の卸しもやっているので、俺とエルマはやることが無いのだ。
ちなみに、整備士姉妹はクリシュナとブラッククロータスの整備中である。派手に動き回ったクリシュナは勿論のこと、ブラッククロータスも砲艦として盛大にぶっ放しまくったので、兵装周りの点検を行っているのだ。

「眠いなら寝てて良いぞ」
「んー……そうする」

エルマはそう言うと隣に座っている俺に寄りかかって寝息を立て始めた。いや、寝ていいとは言ったけどわざわざ俺に寄りかからなくても良いのではなかろうか？　まぁ、別にやることもないし良いか。

すぅすぅと寝息を立てるエルマをそのままに、俺は小型情報端末を使って情報収集に努める。こういった情報収集はメイが抜かりなくやっているわけだが、ちゃんと自分で集めて情報に触れるのも大切なことだ。

とりあえずは結晶生命体との戦闘関連の情報を集めてみるが、どうもこの基地は散発的に結晶生命体の襲撃を受けているようだ。戦闘規模は徐々に大きくなってきており、帝国航宙軍は防衛のためにこの星系に戦力を移動していると。同時に結晶生命体の発生源を捜索しているようだが、今の所見つかっていないらしい。

妙だな？　結晶生命体の発生源なんてだいたい場所が決まっているものなのだが。奴らはパルサーを擁する星系を拠点としていることが多い。仕組みはよくわからんが、パルサーから放射される電波だかX線だかをエネルギー源とし、その周辺の小惑星などを侵食して増殖しているはずだ。

ＳＯＬでは初めてコンテンツとして結晶生命体が実装されてから何度かのアップデートがあり、ユーザー全体で結晶生命体関連の調査クエストや防衛クエストなどを行い、最終的にそういった情報が判明したのだ。俺はその頃既に傭兵プレイを始めていたので、主に結晶生命体の撃退とか、結晶生命体にやられた星系の奪還任務なんかを受けていた。調査に関しては探検家プレイをしていた人達が頑張っていた印象だ。

「この世界では結晶生命体の研究が進んでないのかね……？」

誰ともなしに呟く。あり得ない話ではない。この世界はＳＯＬに似ているが、全く同じというわけではない。俺の知識が全て通用するようなことは無いが、ある程度通用することもある。例えばとある産業を主としている星系で必要とされる物資の傾向などはそのまま通用するようだし、ゲームに登場していた船のスペックなどは基本そのままで、さほど変わりはない。

ただ、ゲームでは見かけなかった小さなシップメーカーの船があったりするし、ゲームでは取り扱われていなかった様々な要素がこの世界にはある。例えば、メイのようなメイドロイドはゲームには搭乗していなかったし、機械知性に関しても俺の知る限りではその存在すら示唆されていなかったように思う。この辺りの不思議は考え始めるときりがないんだよなぁ。

この世界の不思議についてはとりあえず横に置いておくことにして、俺は携帯情報端末を操作して休憩室の大型ホロディスプレイを起動し、イズルークス星系周辺の銀河地図（ギャラクシーマップ）を起動した。イズルークス星系周辺に存在するパルサー星系は、っと……最寄りはこれか。次に近いのはこれ……と、近隣のパルサー星系の位置をチェックしていると、携帯情報端末からコール音が鳴った。エルマを起こさないように相手の名前も見ずに慌てて通話をタップする。

『あら、随分と出るのが早い……私からの連絡を待っていたんですか？』

「違う」

笑顔で戯言をほざくセレナ少佐にそう言って俺は俺に寄りかかって寝ているエルマが見えるように携帯情報端末の向きを動かす。

『……見せつけてくれますね』

向きを戻したら、セレナ少佐が笑顔を引き攣らせていた。

「そのような意図はないです。ただ寝てる人がいるのと、丁度携帯情報端末を操作していたから反応が早かっただけです。それで、何の御用でしょうか？　少佐殿」

『単刀直入に言いましょう。依頼があります』

「結晶生命体関連ですかね」

『理解が早いようで何よりです。傭兵として貴方と貴方の持つ船に戦いに参加して欲しいというわけです。拘束期間はとりあえず三十日で』
「とりあえず、ねぇ……ダラダラとここに拘束され続けるのは御免なんですがね？」
『無論、拒否権はありますとも。貴方は軍属ではなく、自由な傭兵なのですから。その貴方を我々の都合でこの星系に拘束し続けることは不可能です。傭兵ギルドにも配慮はしなければなりませんしね』
「なるほど。それで、報酬は？」

これが何よりも大事だ。

『今、主計科で算定中です。はっきりとしたことはまだ言えませんが、それなりに高額になると思ってくださって結構です』
「なるほど。じゃあ返事はその額と依頼内容を見てからですね」

安請け合いはしない。俺にだってできることとできないことがある。さっきの規模の襲撃を軍の援護も無く俺一人でどうにかすることは不可能だからな。そんなことを期待されても困る。何より、俺はエルマやミミ、それに同乗している整備士姉妹の命を預かっているのだ。軽率に依頼を受けて死地に投入でもされた日には目も当てられない。
『まぁ、そう言うと思っていました。とにかく、こちらとしては貴方に協力を請いたいと思っているということを先に伝えておきたかったわけです。無論、こちらが要請する形になるのですから、エネル以外にも見返りはあります』
「具体的には？」
『軍用兵器を供与する用意があります。無論、なんでもとは行きませんけれど』

「それは魅力的だなぁ」

ＳＯＬにおいて軍用グレードの兵器というのは、手に入れようと思ってもなかなか手に入れられない装備の代表格であった。軍の依頼を何度もこなして好感度を稼ぎ、面倒なクエストを経てやっと手に入れられる。その性能は一般的に販売されている兵器と比べてワンランクどころかツーランク以上の性能であることが多く、いかに軍用兵器を集めるかというのが傭兵にとっては大変重要であった。

そういう意味では船全体がまるっと軍用グレード装備であるクリシュナは正にオンリーワンのユニークシップであるわけだ。

『そうでしょう。是非前向きに検討してください』

「考慮します」

魅力的な提案だが、現時点では言質は取らせないぞ。そんなにいい笑顔をしてもダメだ。

「報酬はともかくとして、具体的な依頼内容はどのような感じで？

結晶生命体関連と漠然と言われてもイメージが湧きませんが」

『基本的には結晶生命体の発生源の探索ですね。軍が周辺星系に調査船団を派遣しているので、随行して襲いかかってくる結晶生命体に対処してもらいます』

「なるほど……」

周辺星系に調査船団ねぇ……やっぱりパルサーを擁する星系に結晶生命体の巣が作られることに関しては知らない感じだな。知っていればそんな無駄なことはしないだろう。いや、完全に無駄ではないけれどもさ。奴らはパルサー星系でエネルギーを蓄えて、周辺星系に移動しては小惑星帯を侵食して増殖するから。周辺星系で増殖した結晶生命体を掃除するのも大事といえば大事だ。

でも、大本の巣というかマザークリスタルを叩かないと終わりのないモグラ叩きになる。

『何か？』

「いえ、何も。ただ、風の噂で結晶生命体はパルサー星系に巣食うなんて話を聞いたことがあるもんで」

『……その話は本当ですか？　情報源は？』

「風の噂と言ったでしょう。俺もどこで聞いたかは正直思い出せませんよ」

俺が元いた世界のゲームではそうでした、なんて言っても正気を疑われるだけだろう。俺だって確信はないのだから、強く言い張ることはできない。こうやって適当なことを言ってますという体で匂わせるのが限界というやつだ。

『……今度、私の艦隊が調査に出る予定なのですが』

「へ、へぇ……そう言えば何でセレナ少佐の対宙賊独立艦隊がここに？　宙賊を相手にするための艦隊ですよね？」

『旗艦のレスタリアスは帝国軍でも最新と言える戦艦で、部隊の中核となっている巡洋艦も打撃力に長けますから。我々は設立の性質からしてフットワークが軽いですし、長期間行動するための補給艦も運用しているので』

「体よくここへの増援として引っ張られたと」

『本来の目的からは外れますが、ここを守ることが周辺星系に住まう帝国臣民の安堵に繋がりますし、帝国航宙軍は仲間を見捨てませんから』

「なるほど」

軍人さんにも色々と柵というものがあるらしい。セレナ少佐は公爵令嬢という立場でもあるらしいし、まぁそっち関連でも色々とあ

るのだろう。

『そういうわけで依頼、請けてくださいね』

「クルーとも相談しながら慎重に検討させていただきます」

だからそんな良い笑顔を浮かべても言質は取らせないっての。諦めてください。

#１４６　依頼完了と報酬と褒賞（前書き）

滑り込みアウトー！ ―（∵3」∠）―（ゆるして

#１４６　依頼完了と報酬と褒賞

「……おはよ」
「おう。顔でも洗ってきたらどうだ？」
「そうするわ」

あくびをしながらエルマが休憩室の外に出ていく。セレナ少佐は相変わらずの粘り腰であったが、俺も一度痛い目に遭わされているのでそうそう引っかかりはしない。のらりくらりと明確な回答を避け続け、最終的には所用があるので、ということで通話を切らせてもらった。

そしてエルマを起こすのも忍びないのでメッセージアプリを使ってミミやメイ、整備士姉妹と連絡を取ったりしていたわけだ。

取り敢えず輸送依頼を完了し、その報酬として１５０万エネルを得た。運ぶ荷物量に対して報酬が良かったのはここが危険な前線基地だったのと、俺達の配達速度に拠るものだろう。ただし、荷物を運んでいるのに戦闘に参加するのは如何なものかと商人ギルドの職員にはチクリと言われてしまったそうだ。

うーん、確かにそう言われると申し開きのしようもないな！　一応荷物を積んでいるブラックロータスは帝国航宙軍の近くから砲撃を行っただけだから危険はなかったと思うが、今度からは気をつけるとしよう。覚えてたらな。

商人ギルドの人には悪いが、俺の、俺達の本業はあくまで傭兵だ。戦って金になり、なおかつ戦っても問題がないと判断すれば俺は戦って報酬を得るチャンスは逃す気はない。それを含めて信頼できないというのなら今後は依頼を請けずに交易で荒稼ぎするスタイルでも俺は一向に構わない。

運び屋としての仕事の良い所は運べば必ず儲けが出るという一点のみなので、利益を突き詰めていけば交易のほうが稼げるということもままあるし。というかちゃんと期限内に問題なく届けたのに文句を言われるとは思わなかったなぁ。

というような内容のメッセージを商人ギルドに送ったら。

『信頼していないわけではありません。一般論として申し上げたまでして。今後も是非我々の依頼を請けてください。お願いします』

といった旨のメッセージが返信されてきた。今回商人ギルドとの折衝を任せたミミが若い女の子だからと舐めてかかったのかな？どこにも困ったちゃんがいるもんだ。

『兄さんこっわ』

メッセージと一緒に赤いスパナをモチーフにしたキャラクターがブルブルと震えているスタンプが表示された。これはティーナだな。

『傭兵稼業は舐められたら終わりだから。あの状況で戦闘に参加せず、ささっと荷物届けてささっと逃げたら他の傭兵連中に舐められるようになるわよ』

コミカル単眼エイリアンが腕を組んでウンウンと頷くスタンプが表示される。顔を洗いに行ったと思ったら、向こうで参加してるのか。歯でも磨いているのだろうか？

『傭兵稼業というのも大変なものなんですね』

今度は青いハンマーをモチーフにしたキャラクターが壁の向こう

から覗いているスタンプが表示される。多分ウィスカなんだろうけど、キャラクターがムキムキマッチョな感じで絶妙にキモい。何故そのスタンプを使おうと思った？

『うぅ……ヒロ様の手を煩わせてしまいました』

リスのようなネコのような不思議生物が落ち込んでいるスタンプが表示される。見た目だけは如何ともし難いから、こればかりは仕方がないと思うよ。眼鏡とかをかけると雰囲気が変わるかも知れないし、伊達眼鏡でもかけてみるか？　できる秘書みたいなイメージが……いや難しいな。ミミだとどうやっても可愛い感じにしかならない気がする。

☆★☆

「いつまでも落ち込むなって。次は笑顔で受け流して言葉の刃をえぐり込んでやる、くらいの気持ちで頑張ろう」

「はい……」

「それに残りの積荷枠を使った交易ではちゃんとまとまった儲けが出たじゃないか。何も恥じることはないと思うぞ」

「……はい！」

実際のところ、運んできた嗜好品は飛ぶように売れたそうだ。売りに出すなり次々に買い手がついて、売り出して間もなく荷は捌けたらしい。今回の交易で得た儲けは凡そ３３万エネル。ミミへのボーナスは話し合いで儲けの３％と定めたので、９９００エネルとなる。俺の取り分が凡そ３２万エネル。

そして輸送報酬の１５０万エネルに関してはいつもの賞金と同じ配分で分け前を分配することにしたので、ミミに１万５０００エネル。エルマに４万５０００エネル。俺の取り分が１４４万エネル。

俺の取り分を合わせると１７６万エネルといったところか。ここから船の整備費用や停泊費、それに皆の生活費なんかが出ていくわけだ。意外と停泊費がばかにならないんだよな。ブラックロータスはクリシュナに比べて大きい分、停泊費も高くなるから。
ちなみに今回の儲けから整備士姉妹に分配する分はない。彼女達にボーナスとして分配するのはあくまでも彼女達が主体となって作業をする宙賊艦からぶっこ抜いた装備の売却益と、鹵獲した宙賊艦の売却益だけである。

「それで、少佐から……というか帝国航宙軍からの依頼なんだが」
「まぁ、報酬次第よね」
「結局のところそれだよな。まだ向こうから連絡は来てないんだよな？」
「はい。今の所は帝国航宙軍からは何も」

俺の後ろに控えているメイに聞いて見るが、やはりまだ帝国航宙軍の主計科からは何も連絡が入っていないらしい。

「こんなに時間がかかるものか？」
「恐らくは前例が無いので判断に困っているのではないかと」
「前例が無いってことあるか？　帝国航宙軍の戦闘に傭兵が介入して報酬をせびるなんてよくあることだろう？」

既に戦闘が発生している宙域に突入し、その星系の支配者側の軍に肩入れして漁夫の利を得たりするのは傭兵プレイの常套手段である。俺もＳＯＬで駆け出しの頃にはそうやって装備や船をアップグレードするための資金を稼いだもんだ。

「ご主人様の挙げた戦果が大き過ぎるのが問題なのでしょう。ご主人様の特攻じみた攻撃で戦いの趨勢が一気に帝国航宙軍側に傾いた

のは明らかですから」
「特攻じみた攻撃てお前」
そんなに無謀な行動はしていない。ちゃんと経験に裏打ちされた安全な運行だった。もっとも、ＳＯＬでは慣れるまでに何度も爆散したけど……そうか、この世界の人達があの機動を実現しようとすると何度も爆散＝死という体験をしないといけないわけか。結晶生命体の群れの中で爆散したら、この世界では一瞬で結晶生命体の餌食になるものな。

「ご主人様は大型種四体を半壊、大破させて増援の出現能力を大幅に低下させ、大量の小型種、中型種の敵意を惹きつけて帝国航宙軍が組織的効力射を行うための時間を稼いだのです。あのままですと帝国航宙軍にもそれなりに被害が出たでしょうが、ご主人様の行動はそれを防ぎました。まともに評価すると叙勲と叙爵も有り得る大活躍です」
「なんて？」
「勲章の授与と騎士爵の叙爵も有り得ます」
「……聞かなかったことにしても良いかな？」

年金付きの勲章なら喜んで貰うが、爵位はいらない。絶対に面倒事になるに決まっている。あっ、なんか遠くで黒髪おかっぱの可愛いお嬢ちゃんが物凄い笑顔を浮かべているのが見える気がする。
別にクリスが嫌いというわけじゃないが、帝国貴族になったりするとしがらみが面倒臭いことになりそうだ。とりあえずセレナ少佐とクリス挟まれて両手をぐいぐいと引っ張られる構図が脳裏に浮かぶ。
権勢の強そうなホールズ侯爵家と落ち目のダレインワルド伯爵家ではホールズ侯爵家に軍配が上がりそうだが、俺とクリスは同じ場所で寝泊まりをしていたという既成事実がある。俺はクリスには一

切手を出していないが、その事実を知ったらあのおっかない伯爵の爺様が光り物を振りかざして責任を取れと迫ってくる気がしてならない。
　それを言ったらセレナ少佐も俺の船に乗り込んだりしてる？　あっちが勝手に乗り込んできてる上に酒をかっ喰らって醜態を晒しまくっていたからあれはノーカン。もし騒ぐようなら俺の小型情報端末と念の為にクリシュナにバックアップしてある音声及び映像ファイルが盛大に火を吹くぜ。

「ヒロ様の目標を考えれば叙爵は都合が良いんじゃないですか？」
「兄さんの目標？」
「惑星上居住地に庭付きの一戸建てを立てて悠々自適な生活を送りたいんですって」
「それは大きな目標ですね」

　帝国内で惑星上居住地に家を建てる他には上級市民権が必要である。騎士爵を叙爵されれば自動的に上級市民権を持つ一等市民として登録されるので、普通に買うよりも大変お安く惑星上居住地に家を建てられるようになるわけだ。

「確かに爵位を得れば目標には大きく近づくことになるが……いや！　まだそうと決まったわけじゃない！　今からそんな心配をする必要はない！」
「現実から目を背けるのはオススメしないけど」
「目の前に現れていない以上現実ではない。想像に怯えるのは馬鹿らしいじゃないか。それに、セレナ少佐は俺がそういったしがらみを好まないことを知っている。下手にそんなことをしたら俺の態度が硬化するとわかっているはずだ」
「それは確かにそうですね」

俺の言葉にミミが同意する。そうだろう？　いざとなったら逃げるよ、俺は。悠々自適な傭兵生活を手放すつもりはないからな。しがらみの少ない勲章なら貰うけど。

「勿体ないなぁ。お貴族様になれるならなったらええのに」
「平民から貴族に成り上がるのって帝国臣民なら誰でも夢見るサクセスストーリーなのにね」

整備士姉妹が気楽にそんなことを言っているが、貴族なんてそんなに良いものなんだろうか？　そりゃ色々と優遇されることはあるんだろうが、その分責任も負うことになると思うんだが。そんんなのは気楽な傭兵生活に勝るものじゃないと思うんだけどな。

「俺は社交的な性質じゃないから貴族とか無理」
「別に貴族だからって社交しなきゃならないわけじゃないわよ。特に騎士爵なんてのは貴族は貴族でも本物の貴族からすれば成り上がりの半平民みたいな扱いだしね」
「そんな風に見下されるのも癪じゃないか。それなら俺は傭兵として一目置かれるプラチナランクを目指すよ」
「あんたは一体どこに向かおうとしているのよ……というか、何でそんなに貴族になるのは嫌なわけ？　何か嫌な思い出でもあるの？」
「嫌な思い出……別に無いけど面倒くさそうじゃないか。性に合いそうにない」
「なってみたら意外と良いと思うかもしれんよ？」
「ぬぅ……終わり終わり、この話は終わりだ。はいやめ」
「えー」

ティーナが不満そうに唇を尖らせる。お前、俺をからかって遊んでるな？　覚えてろよ。

「あっ、傭兵ギルド経由で帝国航宙軍の主計科から連絡が来ました」
「おっ、いいタイミングやね。なんて？」
「えっと……今回の戦役における貴艦の奮闘は敵の勢力を大いに挫き、多くの将兵の命を救ったと認められる働きであったと認められる。その戦功を認め、褒賞金３００万エネルと銀剣翼突撃勲章を授与する、と」
「銀剣翼突撃勲章と言われてもピンとはこないが、褒賞金３００万エネルはわかりやすくて結構だな」

妥当な金額かどうかは判断できないが、なかなかの金額だと思う。日本円換算でおよそ三億円と考えると凄い金額なのでは？　一生遊んで暮らせる金額とまではいかないかも知れないけど。

「いや、３００万エネルよりも銀剣翼突撃勲章の方に驚くべきでしょ？」
「だってピンとこないし……凄いのか？　なんか豪華そうだなぁとは思うけど」

デザインには興味がある。銀色の剣の鍔が翼になっているのか、それとも剣の翼が生えた戦闘機か何かなのか。

「ミミ様の読み上げた文章そのままです。帝国航宙軍の関わる戦闘において多大に貢献し、多くの将兵の命を救った兵に与えられる勲章です。データベースを参照する限り、グラッカン帝国で傭兵に授与されるのは十二年と七ヶ月ぶり、史上十七人目ですね」
「なるほどぉ……あれ？　ターメーン星系では……ああうん、あれは無理だよな」

ターメーン星系でも俺は同じような規模の戦果を挙げたが、あれは歌う水晶を使った半分以上イリーガルな手法だったからな。あれ

で俺を評価すると帝国航宙軍は歌う水晶を虐殺兵器として利用することを是としたことになるから、そうすることはできなかったわけだ。

「で、それって何か特典とかついてるのか？」
「グラッカン帝国内に於いては受勲者は身分として騎士爵位持ちの貴族と同じ扱いになります」
「凄い嫌そうな顔をしてるけど、大丈夫よ。本当に貴族になるわけじゃないから。あと、年金もついてたわよね？」
「はい。年間１５万エネルの生涯年金がつきますね」
「しょぼい……しょぼくない？」

１５万エネルじゃ初期船の座布団をアップグレードすることもできない。微妙。

「いやしょぼくないですよ」
「兄さんの金銭感覚がおかしいだけや。年間１５万エネルも貰えたらもう働かなくても生きていけるやん」

ウィスカとティーナが冷静に突っ込んでくる。そうかぁ……まぁそうなんだな。整備士姉妹はこの世界における極めて一般的な金銭感覚の持ち主だものな。確かに年間１５００万円の生涯年金と考えると破格の待遇か。

「貰ってもそれで変なしがらみが生まれたりはしないんだよな？」
「はい、問題ないかと」
「じゃあ謹んで拝領しますと返信しておいてくれ」
「わ、わかりました……」

緊張した様子のミミがタブレットを操作して返信のメッセージを

したため始める。褒賞は上々。あとは依頼がどうなるかかね。この分だと期待して良さそうだが。

#147　受勲式という名の論功行賞兼デブリーフィング

拝領します、というメッセージをミミに送ってもらったその翌日。帝国航宙軍から呼び出しが来た。簡単な受勲式をするので、前線基地にある帝国航宙軍のＢ－３ブロックに来て欲しいと。

「受勲式なんて面倒なことがあるなら断ればよかった……」

ここはブラックロータスの食堂。

積荷の引き渡しを含めた諸々の事務処理などを済ませた俺達は全員で集まってここで打ち上げのようなことをしていた。全員で、とは言っても食事をしないメイは不参加だったのだけれども。なんか所用を済ませるとか言っていたけど、何をしているのだろうか。

「なんだか妙に嫌がるわね？」

エルマが眉間に皺を寄せて訝しげに首を傾げる。その手にはなんだか金属製のジョッキが握られている。なんでも注いだ酒の温度を一番美味い状態に保ってくれるハイテクジョッキらしい。いくらしたのか聞くのはやめておいたが、君はそろそろ少しでもいいから借金を俺に払ったほうが良いんじゃないかな？

「確かにそう言われるとなんだか珍しいかも知れませんね。ヒロ様がこんなに嫌がるのは」

「自分が上の立場というか、褒められるなら嬉々として行きそうな感じするけどな？」

「えっと……」

ミミもエルマと同様に首を傾げ、ティーナがなんだか微妙に失礼なことを言ってくる。お前の中で俺は一体どういう人間なんだ？あとウィスカは無理に姉のフォローをしなくてもいいぞ。

「明確な理由はないんだが、なーんか気が進まないんだよなぁ……もしかしたらセレナ少佐が絡んでいるからかもしれん」

「それは仕方ないわね」

「それは仕方ないですね」

「だろ？」

ノータイムでエルマとミミが俺の言葉に同意する。

「兄さん達にそこまで言われるセレナ少佐っちゅう人に逆に興味が湧いてくるんやけど」

「お姉ちゃん、多分近づかないほうが良いんじゃないかな。なんとなくだけど」

ウィスカはかしこいなぁ。君子危うきに近寄らずって言葉もあるからね。この世界に同じ言葉あるかは知らんけど。

「いずれにしても拝受すると言った以上は無視はできません」

「ですよねー……はぁ、仕方ない。行くか」

食堂の扉が開く音がしてメイの声が聞こえてきたので、振り返る。

「……？　なんでそんなものを持ち出してきたんだ？」

食堂に現れたメイは鞘に収まった大小一対の剣を携えていた。携えていた、と言っても別に帯剣しているわけではない。普通に手に持っていた。何かベルトのようなものも一緒に持っているようだ。

メイの持っている剣は前に仕事の成り行き上でメイと一緒にボコった色々と諦めの悪い貴族から分捕ったと言うか、その諦めの悪い貴族の父である怖い爺さんから下賜されたものなのだが……。

「受勲式に赴く際にはこちらを身に着けていかれるとよろしいかと。私もお供致します」

「お、おう……？」

わからぬ。俺にはメイの考えがわからぬ……！　グラッカン帝国内において剣というものは貴族の象徴である。別に貴族以外が帯剣してはならじ、という法は存在しないらしいが普通の人は帯剣などしないらしい。貴族の中には貴族以外が帯剣しているのを快く思わない人もいるからだ。そういった人に目をつけられると、決闘を申し込まれてずんばらりんとやられるという。コワイ。

「俺は怖い貴族に決闘など挑まれたくないんだが？」

「御主人様であれば問題ありません。銀剣翼突撃勲章を持つ名誉騎士となるのであれば剣はあったほうがよろしいですよ」

「そういうものなのか？」

「そうね……まぁ、良いんじゃない？」

エルマにも聞いてみるが、なんとも煮え切らない感じだ。

「マジでわからないから思わせぶりな感じじゃなくて親切に説明してくれ」

「私だってそんなに詳しいわけじゃないわよ。でも、剣を持っていけばダレインワルド伯爵のことを説明することになるでしょう？それに、メイは機械知性よ。おおっぴらにはちょっとアレだけど、この国の貴族はあまり機械知性には強く出られないからね。つまり、セレナ少佐への牽制になるってわけ」

「面倒避けになるってことか？」
「多分ね。そういうことよね？」

エルマの問にメイは無言で頷いてみせた。なるほど、面倒避けになるのか。なら持っていくかね。メイから剣帯と大小一対の剣を受け取って身につける。うーん、結構ずっしりしてるな。

「今後持ち歩いたほうが良いのかね、これ」
「そうですね、銀剣翼突撃勲章を拝受した後は身につけて歩くのがよろしいかと。今後、グラッカン帝国内においてご主人様は名誉騎士ということになりますから」
「トラブルを引き寄せることにならないか？」
「銀剣翼突撃勲章があれば問題ありません。と言いますか、逆にトラブルになりかねないのでそれなりの格好をしたほうが良いのです」
「思ったよりも権威がある勲章なんだなぁ……」
「はい、生きたまま銀剣翼突撃勲章を受け取る方は大変希少ですから」

うん？

「普通の銀剣翼勲章や銀剣勲章は戦闘で顕著な軍功を上げれば授与されます。銀剣翼突撃勲章や銀剣突撃勲章は単身で敵中に飛び込み、多大な貢献を上げた方にしか授与されません。普通、敵中に単身で飛び込んだ方は亡くなられますので」
「つまり生きたまま銀剣翼突撃勲章を持っていると？」
「大変血気盛んで敵に回してはいけない方だと思われるかと」
「切れたナイフ的な？」
「ナイフが切れてどうすんねん」

ああ、お約束のツッコミを入れてくれてありがとう。後でジュー

スを奢ってやろう。酒のほうが良いかな？

「銀剣翼突撃勲章のことをよく知らない人は勲章と剣を見てなんか凄そうな人だと思うようになって、銀剣翼突撃勲章のことをよく知っている人はうわやべぇ奴だ近づかんどこってなると」

「端的に言うとそういうことですね」

「やっぱ今から辞退していいかな？」

「駄目です」

「ですよね」

☆★☆

道連れにミミとエルマを引っ張ってこようとしたが、授与されるのは俺だけだから遠慮すると言われ、整備士姉妹に目を向けたら会社から出向してるだけのうちらは関係が薄いからと断られ、結局メイだけを供にしてＢ－３ブロックとやらにある叙勲式会場に向かうことになった。

腰に大小一対の剣を差し、メイを連れ歩いているせいか妙に視線が集まっている気がする。いや、きっとこの視線は美人なメイに集まっているんだ。そうに違いない。そういうことにしておこう。

「剣術の訓練も今度からするようにしたほうが良いのかね」

「ご主人様が望まれるのであれば。訓練に関しては私にお任せください」

「それじゃあ基本からお願いしますかね……」

剣を腰に下げているのにロクに振れないというのは格好がつかないだろう。剣って武器はただ振れば良いってものじゃないらしいからなぁ……ちゃんと刃筋を立てないとただの鈍器にしかならないと本か何かで読んだ覚えがある。いや、この世界の剣だともう少し扱

いが楽なのかな？　刃の切れ味の次元が違うものな。

「はい、お任せください」

メイの声のトーンが若干高いように感じる。かなり気合が入っているようだが、メイのスペックをフルに使われたら生身の俺は壁の赤いシミになりかねないので手加減はして欲しい。

気合を入れるメイに遠回しに手加減を要請しながら進むこと暫し、俺とメイはようやく目的地へと辿り着いた。どうやら俺以外にも受勲される人がいるようで、部屋の前にはちょっとした人だかりができていた。その人だかりに近づきながら集まっている人物の観察をする。

一見した感じだと軍人が多いようだが、傭兵らしき人の姿もある。しかし俺のようにメイドロイドを連れている人は居ないようだ。それも当たり前か。思ったよりも流行っていないんだろうか？　メイドロイドというのは。

人だかりの一番後ろにいた若い傭兵風の男が俺に気づいて視線を向けてくる。紛うことなき値踏みをするような視線というやつだ。俺もまたそんな視線を向けてくる傭兵の男を無言で観察する。

若い男である。彫りの深い顔立ちなので正確な年齢はわからないが、見た目的には俺より年上には見えない。腰にはレーザーガンと、何か武器っぽいものが収まっている鞘のようなポーチのような何か。服装は丈夫そうなパンツにシャツ、それにジャケット。デザインは違うが、俺と似たような格好と似たような格好だ。やはり傭兵だろう。

「何見てんだよ」

「お仲間かなと思っただけだ。俺もこの部屋に用事があってね」

微妙に喧嘩腰な若い傭兵にそう答えて視線を人だかりの向こうに

ある扉に向ける。若い傭兵はそんな俺と俺の後ろに控えているメイに胡乱げな視線を向けてきた。レーザーガンに大小一対の剣、それに俺に付き従っているメイドロイド。

こいつは本当に傭兵なのか？　傭兵だとして、なんで剣なんて下げている？　高価そうなメイドロイドなんぞを侍らせて歩くなんて一体何のつもりだ？　と、彼の思考を代弁するならそんなところだろうと思う。俺が彼の立場でもそう思うだろうから、そんな視線を向けてくる彼を責めようとは思わない。

「まぁ、色々と事情があってな。察するのは難しいだろうが、そっとしておいてくれ」

「……フン、貴族の道楽かよ」

別に貴族じゃないんだけどな。まぁ余計なことを言ってもトラブルになるだけだろうし人だかりが捌けるのをゆっくりと待つことにしよう。どうやらこの人だかりは受勲者のチェックと言うか、受付手続きめいたもののようだし。

程なくして人だかりは捌けてゆき、俺とメイも受付手続きをする番になった。

「ＩＤの提示を」

「あいよ」

受付をしている兵士の持っているタブレット型端末に小型情報端末を翳し、俺のＩＤを送信する。すぐに俺の情報が表示されたのか、兵士がギョッとした顔をして俺の顔を見て、またタブレットに視線を落とし、また俺に視線を向けてきた。二度見するほど衝撃的か。足を見るな足を、幽霊とかじゃねぇから。というかこの世界でも幽霊は足が無いのか？

「ええと？」
「……はっ！？　し、失礼しましたっ！　ご案内致します！」
俺のＩＤを確認した軍人さんが見事な敬礼をキメて先に立って歩き出す。
会場に入ると大勢の視線が集まってきた。視線の主は主に受勲式を運営する側の軍人で、受勲者は俺に背を向けて座っている人が殆どだ。だが、会場はそんなに広いわけでもない。緊張した様子の軍人に先導され、メイを引き連れている俺は酷く目立った。そして俺の腰の剣とメイを目にしたセレナ少佐がなんだか凄い顔をしている。
そう言えば、セレナ少佐はメイと直接会ったことが殆ど無いか……？　俺の知らないところで接触していた可能性はあるが、俺にはあまり覚えがないな。
「……この席？」
「はっ、そうなります」
「えぇ……」
そして何故か俺の席は一人だけ隔離された場所にあった。場所的には他の出席者から見て左前方。どちらかと言えば関係者席とか来賓席みたいな場所である。椅子の向きもなんかおかしくない？　なんで斜め方向に出席者の方に向いてるんだよ。いじめか？　ちなみに反対側に受勲式を運行するらしき偉いっぽい軍人さん達がいる。セレナ少佐もそこにいる。
「では受勲式を始める」
一番偉いっぽい軍人さんの宣言と共に大型ホロディスプレイが起動し、３Ｄマップのようなものが表示された。どうやら今回の戦いの俯瞰図のようだが……なんか戦略系ゲームの戦闘画面か何かみた

いだな。３Ｄマップ上で今回の戦いが再現されて行き、その中で今回の受勲者達を示す駒の動きがピックアップされていく。これは誰がどんな活躍をしたのかがとてもわかりやすいな。論功行賞とデブリーフィングを兼ねた行事なのかもしれない。

前半から中盤に向けての戦闘の推移はあまり良い状態とは言えないようだった。各方面で奮闘している様子は見えるが、結晶生命体の数に徐々に押されているようだ。セレナ少佐の船であるレスタリアスと彼女の指揮下にある対宙賊独立部隊の動きを注視して見ると、味方を庇って結構綱渡りをしているように見える。実は結構危なかったのだろうか。

そうしているうちに戦場の端にブラックロータスの反応が現れた。そこから高速で発進したクリシュナの駒も確認できる。こうして見ると速いな。あ、注目を促すようにクリシュナの駒がピカピカしてる。その反応が結晶生命体を示す敵の反応に突っ込むと、会場にどよめきが起こった。

大型ホロディスプレイの一部がクリシュナを中心とした近距離マップに切り替わり、小型種や中型種の群れをすり抜けて大型種に対艦反応魚雷を叩き込んでいく様が表示される。

同時に、元の縮尺の３Ｄマップで敵の動きに大きな変化が起こり始めたことが表示される。クリシュナに対艦反応魚雷で攻撃された大型種から発生する中型種、小型種の数が激減し、結晶生命体の戦力分布もクリシュナの存在する方向に偏り始めた。

結晶生命体の圧力が減じたことによって今まで防御戦闘に注力せざるを得なかった帝国航宙軍艦隊に余裕が生まれ、強力な砲撃が結晶生命体の戦力をゴリゴリと削り始める。その間もクリシュナが敵中で敵の注意を惹きつけ続けている様子が表示されていた。

やがて結晶生命体の大型種が帝国航宙軍艦隊の砲撃によって撃滅され、戦闘が収束した。

「えっ、あれ生きてるのか？」

「急に圧力が弱まったから何が起こったのかと思っていたが……」
「あれくらい俺だって……」
「いや無理だろ」
「命がいくつあっても足りねぇよ。頭おかしいな」
「間違いなくクレイジーだな」

言いたい放題だな！　ＳＯＬのプレイヤーなら同じようなことをできるやつは俺の知り合いに何人かいるわ！

#148　受勲とアイサツ

大型ホロディスプレイ使った今回の戦闘の概略ホロ動画の上映が終わった後、受勲式が始まった。再び大型ホロディスプレイにホロ動画が最初から流れ始め、時系列順に受勲の要因となった帝国航宙軍の士官と今回の戦役に参加した傭兵達の活躍が解説されていく。

受勲の理由は様々だが、帝国航宙軍で受勲された士官の全員が船の大小はあるが所謂艦長職の人々であった。

帝国航宙軍でもクリシュナと同じような小型戦闘艦が運用されている。駆逐艦以上の大型艦やそれ以上の超大型艦だけでは数の多い小型の結晶生命体に対応しきることは不可能なので、所謂防空戦闘というやつを行う小型戦闘艦も帝国航宙軍には配備されているのだ。特にこのアウトポストにはそう言った小型戦闘艦の配備が多いらしく、帝国航宙軍の受勲者の半数以上はそういった小型艦の艦長であるようだった。

その他にも駆逐艦以上の大型戦闘艦の艦長も受勲している。セレナ少佐も今回の戦闘で受勲したようであった。彼女が受勲したのは銅盾翼勲章（どうじゅんよくくんしょう）というもので、戦闘において味方を庇い、被害を抑制しつつ奮闘した艦に贈られるものであるらしい。

基本的に今回授与されている勲章というのは銅、銀、金の三階級に功績の種類が剣、盾の二種、それに突撃などの修飾語がつくような感じだな。例えば敵機撃墜などの攻撃において功ありとなれば銅剣勲章や銀剣勲章、金剣勲章。防御戦闘や味方を庇うような立ち回りで功績を挙げた場合は銅盾勲章や銀盾勲章、金盾勲章になるんだろう。

実際にこの場で与えられている勲章は銅剣翼勲章や銀剣翼勲章なので、恐らく航宙戦闘における勲章は翼がつくんじゃないかな？これが白兵戦における顕著な功績なら翼がつかないんじゃないだろ

うか。
種類的にはもっと沢山あるんだろうな。これだと戦闘職に就いている人しか受勲できないし。補給や整備、その他色々な功績に対する勲章もあるんだろうが、この場で出てくるのは戦功勲章だろうから今はあまり関係は無さそうだ。戦功勲章に関してもこれで全部とは思えないけど。
そして、今の所俺が貰う予定の銀剣翼突撃勲章のように修飾語のついた勲章は出てないな。大体銅剣翼勲章か銅盾翼勲章だ。防空戦闘で大活躍した帝国航宙軍の小型艦の艦長と傭兵の一人が銀剣翼勲章を受勲していたくらいか。

「では、最後となったが今回の戦役において戦いの趨勢を大きく動かした戦功第一位、キャプテン・ヒロに銀剣翼突撃勲章を授与する。キャプテン・ヒロ、前へ」

席から立ち上がり、勲章を渡してくれるこの基地の司令らしき軍人の前へと移動する。受勲の手順というか、作法に関しては今まで散々見ていたので問題ない。まぁ、作法と言ってもさして難しいものでもなく、普通に前まで歩いていって胸に勲章をつけてもらったら敬礼するだけだ。
この敬礼はよくある挙手の敬礼というやつで、元の世界でいうところの所謂『軍隊の敬礼』として使われているものと同じようなものであった。厳密には手の角度や挙げ方、掌の向きなんかが結構違うんだろうが、傭兵の場合はそこまで細かく言われないようだから気にしないでおく。

「君の活躍が無ければここに立っている者のうちの数人が命を落とし、その部下の数百人もまた同じ運命を辿っていただろう。生きたまま銀剣翼突撃勲章を胸につける者は稀だ。その勲章に相応しいさらなる活躍を期待する」

勲章をつけてもらった俺は無言で敬礼をして踵を返した。こういう時に余計な口は叩かないのが良い。
偉い人の言った通り俺の受勲が最後だったらしく、俺が席に戻ったら偉い人がまとめに入った。
内容はー……聞き流した。軍人の皆さんにとってはこのアウトポストのトップの訓示だから真面目に聞くべきものなんだろうが、俺にはあまり関係がないし。そもそも俺は帝国のために戦ったわけじゃなく、単に金になりそうでなんとかできそうだから手を出しただけだ。そんな俺に帝国の命運は云々とか我々の働きで臣民の命と財産を守る云々とか言われても困る。俺も一応大人なのでちゃんと聞いているフリくらいはするが、その内容は二割くらいしか頭に入ってこない。
そんな俺は聞くフリをしながら何をしているのかと言うと、この受勲式会場に集まっている士官や傭兵の観察をしている。士官の方々は基地司令らしき偉い軍人さんの訓示を有り難く拝聴しているようだが、傭兵の殆どは俺と同じように聞き流しているようだ。そして、聞き流して何をしているのかと言うと、俺を観察しているようである。さっきから傭兵達と妙に目が合うし、間違いないだろう。
まぁ、お互いに顔に見覚えはない。特に俺は一つのコロニーを拠点として長期間滞在するようなことも今のところ無かったし、顔見知りの傭兵なんてのはいないからな。どこかを拠点となるコロニーなりなんなりを決めるのも良いかも知れないな。資材、弾薬、食料その他の購入に不便しない場所で、スペース・ドウェルグ社の支社があり、狩る対象である宙賊の存在に困らない場所だと良い。
そう考えるとブラド星系は悪くなかったか……？　いや、あそこは買い物や弾薬の補充、機体の整備には向くけどコロニーがドワーフ基準で圧迫感があるからなぁ。クリシュナ狙いの技術者に付きまとわれそうな感じもあったし、あそこは無いな。ミミの目標である銀河中のグルメを味わうというのもあるし、拠点を決めるのはまだ

まだ早いか。
などと思考を飛ばしているうちにお偉いさんのお話が終わり、解散という運びとなった。お偉いさんが最初に会場を出て行き、その後に佐官以上の上級士官が続いていく。なんとも難しげなお顔を俺に向けるセレナ少佐が実に印象的であった。

「俺も行っていいのかね？」
「はい、もう良いと思います」

メイがそう言うので、俺も席を立って出口へと向かう。一人だけなんか目立つ特別席に座らされた意味とは一体……？　戦功第一位だから特別扱いされただけかな。晒し者になったようであまり良い気分ではないと言うか、若干恥ずかしかったんだが。やたらと注目されたし。

「さっさと戻るか。依頼の話も来てるかもしれないし」

と言いつつ部屋を出ようとすると、進路を塞がれた。正確には、進路を塞ぐかのような誰かが立ちはだかった。見覚えのない顔――ああいや、こいつはあれだ。この会場に入る時に目が合った若い傭兵だ。

「何か用かな？」

あまり良い予感はしないが、一応聞いてみる。この場に残っているのは殆どが傭兵で、何人かは帝国航宙軍の士官も残っているようだ。そんな彼らは俺と俺の前に立ちはだかった彼の様子を興味深そうに観察している。

「どんなイカサマを使った？」

「はい？」
「どんなイカサマを使ったのかって聞いてんだよ」
「えぇ……？　もしかして俺が群れに突っ込んで生き残った件？」
「それ以外に何がある」

面倒臭いヤツであった。周りの視線を向けてみるが、肩を竦めたり腕を組んでニヤニヤとしてみたりと特に何か行動をするつもりはないらしい。ですよねぇ。俺も逆の立場ならそうするか、無視してとっとと船に帰るわ。

「どういう答えを求めているんだ、お前さんは」
「なんだと？」
「もし何らかのカラクリがあるとして、それを俺がお前さんに教える理由は無いだろ？　そもそも土下座をしてどうか教えて下さいと言うならまだしも、なんでそんな喧嘩腰で聞かれなきゃならんのだ。聞きたいならそれなりの態度ってもんがあるだろう」
「てめェ……」

若い傭兵が拳を握りしめる。お？　なんだ？　殴り合いか？　言っておくが俺は多分弱いぞ。こっちの世界に来てから身体は鍛えてるが、殴り合いの喧嘩なんてしたこともないからな。一応エルマに格闘術の手解きは受けているけど、実際に誰かと殴り合ったことはない。

「用がそれだけなら俺は失礼するぞ。悪いが暇じゃないんでね」
そう言って肩を竦め、若い傭兵の横を通り抜けようとして――。
「ぐあああぁぁぁっ！？」

室内に悲鳴が響き渡った。何事かと振り返ると、若い傭兵の手首をメイが握っているところであった。男の体勢を見るに、擦れ違おうとした俺の肩を掴もうとでもしたのだろう。それをメイが防いだわけだ。

「ご主人様に汚い手で触れないでいただきたいのですが」

ギリギリと音がするくらいに手首を握り締めながらメイが絶対零度の視線を若い傭兵に向ける。

「わ、わかった！　わかったから離せ！」

そう言われてメイが男の手首から手を離す。Ｏｈ……大丈夫？手首砕けてない？　特殊な金属製筋繊維を持つメイの握力はパワーアーマー並みかそれ以上だ。もしメイが彼の手首を本気で握り締めていたらかなりスプラッタな事になっていたに違いない。

「変な因縁つける暇があったらシミュレーターでもなんでも使って腕を上げろよ。んで、もっと稼いで良い船を買え。俺はそうしてきた。結晶生命体の群れに突っ込んで無事だったのも、沢山練習して経験を重ねたからだ。特別なカラクリなんて何もないんだよ、本当に」

若い傭兵にそう言うが、彼は手首を押さえたまま睨みつけてきて何も言わない。うーん、処置なし。

「あー……まぁ、そういうことだから。お疲れ。お集まりの皆さんもお疲れ」

そう言って軽く手を振り、俺は受勲式会場を後にした。少し歩い

てから俺は口を開く。

「いやー、怖いわー。傭兵めっちゃ怖いわー。俺、ガチの殴り合いとか苦手なんだけどなぁ」

「そうですか……？」

メイが珍しく首を傾げている。無表情なままだが、彼女がこのようにボディランゲージで感情を表すのは非常に珍しいことだ。

「アレイン星系ではパワーアーマーを着込んで相当暴れたと聞いていますし、ダレインワルド伯爵の船でも私と一緒にかなり戦ったと思うのですが。それに、シエラⅢでは戦闘ボット相手に銃撃戦もしましたよね？」

「それは戦闘だろ。殴り合いの喧嘩は別じゃないか」

「そういうものですか？」

メイが困惑しているように見える。困惑してるけど、それはなんというか別物だろう？　少なくとも、俺にとっては戦闘と喧嘩は別物だ。考える部分が違うというか、意識の置き方がちがうというか……まぁそんなことはどうでも良いか。

「それより、あの絡まれ方はなんだったんだろうな、一体」

「新入りがいきなり大戦果を挙げて銀剣翼突撃勲章をもらったので、一発カマしておこうというものではないでしょうか」

「一発カマすて」

「腕っぷしが物を言う傭兵社会ではよくあることだそうですよ」

「そうなのかー……うーん、受けて立った方が良かったのかね？」

「私のようなモノを傍に侍らせるというのも一種の力の誇示の仕方です。問題ないかと。それに――」

「それに？」

言葉を途切れさせたメイに先を促す。

「――別に叩きのめそうと思えばおできになったでしょう？」

「どうかなぁ。まぁ息を止めればなんとでもなると思うけど。あれはなぁ、仕組みも何も理解不能だからできるだけ使いたくないよなぁ」

この世界に来てから俺は意識的に息を止めることによってなんかよくわからん超加速めいたムーブができるんだよなぁ。便利なんだけど、仕組みがわからないから濫用したくないんだよ。ショーコ先生のとこで診察を受けた時はなんか怖くて言い出せなかったし。ただでさえ未知の遺伝子を持っているとか言われてたのに、そんな変な能力があることまで言ったら監禁されそうだったもんな。

「ま、良いや。どうせここに長居するわけでもなし。とっとと忘れよう」

「帝国軍からの依頼内容によってはこのアウトポストに暫く滞在することになると思うのですが」

「そうだった。あー、めんどくせぇ……バックレようかな？」

「セレナ少佐に恨まれるのでは？」

「それはそれでめんどくさそう……やだ、詰んでる」

俺は軽く絶望しながら天を仰ぐのだった。

#149　面倒くさい人（前書き）

ちょっと諸々の用事とか寝不足とかポンポンペインとかあって遅れました―（∴3」∠）―（ゆるして

#149　面倒くさい人

銀剣翼突撃勲章の見た目としては概ね予想通りで、銀色の翼の形をした鍔を持つ剣の形の勲章であった。予想と違う所はその鍔の部分に赤い宝石のようなものが埋め込まれていることくらいだろうか。

これがまぁ目立つこと目立つこと。俺の胸に輝く銀剣翼突撃勲章を見た帝国航宙軍の軍人さん達がギョッとした顔をするのが少し面白い。

ちょっとした優越感に浸りながら歩くこと数分。前方に見たくないものが見えてきた。艶やかな金髪、赤い瞳、ちょっとそこらでは見ないような美貌、そして腰に差した一振りの剣。

「銀剣翼突撃勲章の受勲おめでとう」

「ありがとう。そちらも銅盾翼勲章の受勲おめでとう」

「ええ、ありがとう」

「それじゃあそういうことで」

とスルーして脇を抜けようとしたらガシッと肩を掴まれた。メイ！　助けてメイ！　心の中でメイに助けを求めるが、メイはいつも通りの無表情でこちらに視線を向けているだけでセレナ少佐の行動を止めるつもりはないようだ。

「ご主人様。どちらにせよ逃れられないのですから、無駄なことはなさらないほうが良いかと」

「聞き分けの良い子は好きよ。それに比べてこっちときたら……」

「俺は諦めが悪いんだ」

とはいえ無理矢理セレナ少佐を振り切るのも難しいので、諦めて

彼女に従うことにする。
「で、どうしろと？　ツラ貸せってことですか？」
「いざとなると話が早いわね。なら最初から手を焼かせないで欲しいのだけど」
「それはそれ、これはこれ。で、どこにします？　俺の船はマズいでしょ？」
「貴方の船で良いわ。部下も向かわせてるし」
「さようで……」

セレナ少佐が先に立って歩き始めたので、俺もその隣について歩き始める。メイは俺達の後ろをそっとついてきている。

「聞きたいことは色々あるんだけど……まずその腰の剣はどうしたの？」
「ダレインワルド伯爵を襲った間抜けを俺とメイで叩きのめしたら伯爵がくれた」
「くれ……えぇ……？」

俺の端的過ぎる物言いにセレナ少佐が困惑する。

「なんだっけ？　決闘の邪魔をされたのはちょっとムカつくけど倒したのはお前だからお前が持ってけみたいなそんな感じ」
「……なるほど」

俺の説明を聞いてセレナ少佐は少しだけ考え込んでから次はメイに視線を向けた。

「それで、この子がメイ？」
「そうだ。見た目はメイドさんだが、パワーアーマーとも戦える性

能を秘めているぞ」
「そう。いつから一緒にいるの？」
「んー、シエラⅢで発注してからずっとだな」
「はい」
「シエラⅢって……私は会ってないのだけど？」
「ずっとクリシュナの中にいたもんな」
「はい。お会いする機会がありませんでした」
「そう……」

あの時にはセレナ少佐をクリシュナの中に招いて酒盛りなんてことはしなかったからな。わざわざ紹介する必要性も感じなかったし。
「メイは小型陽電子頭脳を搭載したれっきとした機械知性だからな。モノ扱いしちゃだめだぞ」
「わかってます。私を何だと思っているのですか」

憤慨した様子でセレナ少佐が頭を振る。割と傍若無人で粘着気質な少佐殿と認識しておりますが、何か？　とか言ったら拳が飛んできそうなので黙っておく。

「それで何の用なんです？　依頼の話なら傭兵ギルドを通していただければそれで良いんですが」
「そんなに邪険にしなくても良いではないですか。私と仲良くしておくと良いことがありますよ」
「そういうのは一回でも『良いこと』を持ってきてから言ってくれませんかねぇ……？　俺は少佐から面倒事しか頂いた記憶がないのですが？」
「それはお互い様ではないですか」

セレナ少佐がそう言って唇を尖らせる。美人は何をしても可愛く

て得だなぁ、ははは。

「それはもしやシエラ星系での一件を仰っていらっしゃる？　あれは少佐がかけてくれた面倒の貸しを返してもらっただけなんですが？」

だが俺をその程度のことでやり込められるとは思わないで欲しい。毎日美少女のミミや美女のエルマ、理想的な容姿のメイドロイドであるメイと過ごしているのだ。いくらセレナ少佐が美人だと言ってもその程度のことで絆される俺ではない。ついでに言えばセレナ少佐は絶対に面倒臭い女なので、そっち方面でどうにかなろうとは毛の先ほども思っていないのでダメージは０である。

え？　整備士姉妹？　可愛いとは思うけど、アレに手を出すのは犯罪じゃないかな……いや犯罪じゃないんだけどさ。成人してるし。でもちょっとな。絵面がな？　向こうが本気でそういうつもりならアレだけど、今のとこをそういう素振りも見えないし。

「わかった、わかったから……もう、そこまで露骨に嫌わなくても良いじゃない……」

「別に嫌っちゃいませんけどね。面倒なだけで」

「それって嫌ってるってことじゃないの」

セレナ少佐が眉間に皺を寄せる。せっかくの美人が台無しですよ、少佐殿。

「セレナ少佐の立場があらゆる意味で面倒なだけで、人柄はそこまで嫌いじゃないですよ。頭の回転が早くて、美人で、でもプライベートではどこか詰めが甘くてポンコツな少佐は可愛い人だと思いますが」

「ポンコツ……って可愛い？」

「完璧過ぎないところがポイントですね。これでプライベートも隙が無い完璧超人だったら近寄り難い感じだろうなと思います」
「その評価は喜んで良いのか何なのか……その割には貴方、私のことを露骨に避けるわよね？」
「少佐殿はあらゆる意味で面倒臭いので……」
「その面倒臭いっていうのやめない？　普通に傷つくわ」

本当に面倒臭い女だよ、少佐は。

「まず少佐のどこか面倒って実家ですよね。下手なことを言ったりやったりすると侯爵家に何をされるかと思ってしまって近づかんどこってなりますし」
「生まれはどうしようも無いのだけれど」
「ならそういう星の下に生まれてきたんですね」
「見も蓋もないわね……はぁ」

セレナ少佐がしゅんと肩を落として溜息を吐く。そうそれ、そういうの。

「でもセレナ少佐は可愛いので、構いたくなるんですよね。男としては。でも立場が少佐で偉い人だし、そもそも侯爵家の令嬢だしってことで構うわけにもいかない。結果的に男はセレナ少佐を避けることになるってわけです。万が一にも情を移してしまうと大変なことになるので」
「それは慰めているのかしら？」
「少佐は別に嫌われてるってわけじゃないってことですよ。面倒臭いから近寄りたくないだけで」
「やっぱり喧嘩を売っているのよね？　高く買って差し上げるわよ？」
「やめてくださいしんでしまいます」

剣の柄に手をかけるセレナ少佐に両手を挙げて降参のポーズを見せる。そんな感じで戯れているうちにブラックロータスが停泊しているハンガーに辿り着いた。

「少佐」
「ご苦労さま。悪いわね」
「いえ」

ハンガーにはセレナ少佐の部下達が待機していた。人数は三名。一人はガタイの良い男性軍人で、セレナ少佐の副官であるロビットソン大尉と、名前を知らない女性軍人が二名だ。公式に俺の船を訪れるとなると、これくらいの人数が要るというわけだな。

「お久しぶりで。新しい船にご案内しますよ」
「はい、お久しぶりです。この度は銀剣翼突撃勲章の受勲、おめでとうございます」
「どうもありがとう。受勲した本人はその重さとか重大さをいまいち理解してないんですがね」
「ははは、その辺りは流石ですな」

ロビットソン大尉とは顔見知りである。以前アレイン星系でセレナ少佐の対宙賊独立部隊に対宙賊戦術を伝えた時にもしょっちゅう顔を合わせていたからな。他の二人も名前までは知らないが、見知った顔ではある。

なんで私の時よりも親しげな感じなのかしら……？　とでも言いたげなセレナ少佐をスルーして少佐を含めた四人をブラックロータスの船内へと案内する。ブラックロータスの内装の豪華さに唖然とする四人の反応をスルーしつつ休憩室スペースの食堂へと向かうと、そこにはミミとエルマが待っていた。整備士姉妹の姿は見えないが、

部屋にでも篭もっているんだろうか？

「ただいま。ティーナとウィスカは？」

「軍人さんとの話を邪魔しちゃいけないからって言って部屋に戻ったわよ」

「一応今後の活動方針を決める話し合いになるだろうから、来てもらったほうが良いと思うんだよな」

「そうは言ったんだけどね」

エルマが肩を竦める。妙なところで遠慮するね、あの二人は。

「ミミ、すまんが呼んでくれ」

「わかりました」

「軍の皆さんは適当にお座りください。席の序列とかそういうのは船長の俺が気にしないんで、適当にお願いします。メイ、悪いが全員に水のボトルを」

「かしこまりました」

タブレットを操作し始めるミミを横目に対宙賊独立艦隊の面々に着席を促し、メイに飲み物を用意してもらう。本当はテツジン・フィフスの淹れるコーヒーもどきでも紅茶もどきでも構わないのだが、好みを聞くのが面倒だから無難に精製水のボトルだ。

「ええと、今回わざわざこちらを訪ねていただいたのはアレですよね。依頼の件ですよね」

「そうなるわね。傭兵ギルド越しじゃ細かいニュアンスが伝わらないでしょうから。直接話をしにきたわけです。この場で傭兵ギルドを通さずに依頼するつもりじゃなく、事前の折衝だと思って頂戴」

「了解。エルマとミミもそういうことで良いな？」

「良いわ」

「はい」
「じゃあそういうことで……と少々お待ちください。スペース・ドウェルグ社から出向してきてる二人も一応クルーなんで、彼女達にも聞いてもらいますんで」
「彼女達ねぇ……また女の子が増えたのかしら？」
そこはかとなく冷たい視線を向けてくるセレナ少佐に肩を竦めてみせる。
「少佐に睨まれる理由がよくわかりませんが、女性ではありますね」
と、言ったそのタイミングで整備士姉妹が食堂に駆け込んできた。
「待たせる形になってしまって申し訳ありません！」
「ごめんなさい！　許してください！」
土下座しかねない勢いでティーナとウィスカが頭を下げる。そんな二人をたっぷり数秒見つめてからセレナ少佐は俺に再び視線を向けた。
「まさか……」
「何を想像してるかは敢えて言わないが、違うからな。あの二人には手は出してないからな。というかあの二人はドワーフだから。身体は小さいけどちゃんとしたレディだから。そこの所はよろしく頼むぞ。本当によろしく頼むぞ」
これから仕事の話をするというのに一体何故俺はこんなことを必死で説明しているのか。本当に面倒くさい女だよ少佐は。

#150　事前折衝

メイの給仕によって全員に精製水のボトルが行き渡り、事前折衝とやらが開始された。難しい言葉を使っているが、まぁ平たく言えば実際に行動を起こす前に条件をすり合わせしましょうね、ということである。

「とりあえず、司令には貴方達をうちの艦隊につけてもらうということで了承は取れました」
「それは良いな。互いに何も知らない同士で組まされるよりはずっとマシだ」
「そうですね。私達としても腕前や戦力ある程度がわかっている相手の方が作戦も立てやすいので」
「それで、どんな難題を押し付けられたの？」

エルマの発言にセレナ少佐が片眉を上げてみせる。

「難題というわけではありません。少々危険度が高い宙域の調査を任せられただけです」
「少々、ですか」

ミミが緊張した声で聞き返す。本当に少々なのかは俺も疑問です。

「はい。ここイズルークス星系はハイパーレーンのハブ星系です。五つの星系からのハイパーレーンがこのイズルークス星系に集中していて、そのうち四つの先は帝国領となっており、残りの一つが辺境星域へと繋がっています」
「辺境星域ねぇ……調査船は？」

「過去に一度調査船団が探索に向かいましたが、未帰還です。偉大なる帝国のリソースも無限ではありませんので、帝国はこのイズルークス星系に前哨基地と防衛戦力を配置し、他方面にリソースを振り分けて開発を進めていたわけですね」
「なるほど。民間の調査船は？」
「未帰還の船が多いですね。とはいえ、帰還した船が皆無というわけでもありません。帰還した民間調査船の報告によって結晶生命体の存在が確実視されることとなり、この前線基地には通常よりも多くの戦力が配置されました」
「その増強の結果がセレナ少佐達か？」
「いえ。私達は結晶生命体の活動が活発化したことに対する追加の増援ですね。一時的なものです」
「なるほど……それで、俺達が依頼を請けた場合はセレナ少佐の艦隊に同行して未探査領域の調査行をすることになると」
「はい。結晶生命体との遭遇、そして戦闘が高い確率で予想されます」
「ですよね。報酬は？」
「２４時間あたり４０万エネルです」
「それは随分と張り込んだなぁ……」
「よんじゅうまんえねる……」

ティーナが唖然とした表情で呟き、ウィスカが目を丸くして固まっている。ミミとエルマは難しそうな表情をしている。多分俺も同じような表情をしている。

「玉砕に付き合うのは絶対に御免なんだが」

報酬が高すぎるのが怖い。あまりに高過ぎで何かヤバいことに従事させられる感が凄いんだよなぁ。

「私達だって望んでそんなことをするつもりはありません。この額は貴方の実力に対する正当な評価と、働きに期待してのものです」
「働きに期待して、ねぇ……」

こき使われそうで怖いなぁ。まぁ、ここでグチグチと言っても仕方ないか。

「望んで玉砕するつもりはないって、そう言ったよな？」
「はい？　言いましたが……」
「ならヤバいと思ったら逃げるってのと、俺の忠告に耳を傾けるってことをここで約束してくれ。俺と少佐の間で非公式に、個人的にってことで構わないから。契約内容に俺達が危険だと思ったら勝手に逃げて良いって明記しろとまでは言わない。それなら仕事を請けさせてもらう」
「ふむ……」

セレナ少佐は形の良い顎に手を当て、少し考え込んでから頷いた。

「わかりました、約束しましょう。私は貴方の言葉に耳を傾ける、貴方達を含めた全艦隊乗組員の命の安全を優先する。これで良いですか？」
「俺としてはそれで上出来だ。二人からは何かあるか？」
「いいえ、ヒロ様の言った内容で大丈夫です」
「私からも文句はないわ」
「ティーナとウィスカは？」
「う、うちらか？　別にうちらからは何もないけど……」
「お姉ちゃん、報告書」
「あっ、せやな。えっと、少佐さん」
「はい、なんですか？」

ティーナからの呼びかけにセレナ少佐が小首を傾げる。

「うちら……いや、私達、会社に報告するために日誌をつけて報告してるんです。その、これから先の内容は日誌にして報告しても大丈夫なんですかね？」

「そうですね……こちらの船内で見聞きしたことに関しては問題ないと思いますが、念の為チェックさせてもらいましょうか」

「検閲か？」

「人聞きの悪い事を……万が一軍事機密情報が入っていた場合大事になりかねないので、事故防止のためです。完全なる善意ですよ」

茶化した俺にセレナ少佐がジト目を向けてくる。

「内容については私が毎日チェックしていますので問題ないとは思いますが。念の為チェック後のものを私からお送りいたします」

「そう？　ならそうして頂戴」

「かしこまりました」

メイが頭を下げる。寧ろメイが検閲していたというオチだろうか、これは。何故かティーナが「えっ？」という顔をしているのはどういうことだ。ウィスカは特に反応してないから、ウィスカは知ってたのか。なんでティーナは知らないんだよ。

「後は立場の問題だけど……この前と同じ感じか？」

「はい。貴方は私の直属の部下扱いで、命令権は艦隊司令官の私にのみあるという形ですね」

「オーケー。じゃあ、今話し合った内容で傭兵ギルドに通してくれ」

「わかりました」

「あとは補給に関してなんだが、ブラックロータスは積荷を下ろしたからカーゴ容量が結構余ってるぞ」

「それは良いですね。少しでも補給物資を積んでいただけるとこちらとしても助かります」
「だが、勿論タダってわけにはいかない」
「……ちょっとガメつくありません？」

ヒクリとセレナ少佐が頬を引き攣らせる。そりゃお前さん、宇宙空間において安全な空間ってのはタダでは提供されないもんよ。

「まぁまぁ、最後まで話を聞け。別に金を取ろうって話じゃない」
「……続けてください」

疑わしげな視線を向けてくるセレナ少佐に両手を広げて見せながら口を開く。

「仕事が終わってこの星系を離れる際に空荷で出るのは勿体ない。だから俺達としては何か荷を積んでいきたいわけだ。そこで、作戦行動に使う補給物資をうちの船に積んで作戦行動に貢献する代わりに、依頼完了後に結晶生命体由来の素材を仕入れる際の口利きをして欲しい」
「……ふむ」
「俺達は少佐の仕事を最大限手伝う。その代わり、少佐にも職権の範囲内で最大限手伝ってもらう。フェアな取引だと思うが、どうかね？」
「念の為聞きますが、口利きというのは――」
「当然タダで横流しをして欲しいとかそういうことじゃない。軍が品質を保証する確かな素材を、できるだけ安い価格で仕入れさせて欲しいって意味だ」

初めてセレナ少佐に出会った時の事を思い出す。彼女は不正に厳しい態度で臨む正義感の強い人だ。そんな人に横流しを頼むほど俺

は間抜けではない。

「良いでしょう。主計科に知り合いがいますから手配します。あと言い忘れましたが、任務中の補給に関してはこちらで持ちますので。ただし、嗜好品は別です」

「承知しております。じゃあ、あとで積載可能量をデータで送りますんで」

「わかりました、それではこれで」

セレナ少佐が席を立ったので、全員で彼女と部下二人を見送る。

「とりあえずそういうことで、皆覚悟を決めてくれ」

「はいっ」

「わかったわ」

「かしこまりました」

「お、おう」

「わ、わかりました」

やっぱり整備士姉妹が少し怯え気味だな。まぁ、仕方ないと思うけど。普通の人は結晶生命体のいる辺境領域になんかいかないものな。結晶生命体による侵食同化の恐怖というのは一般的にかなり広まっているようだし。

「そんなに心配しなくてもブラックロータスが直接攻撃されるような事態に陥ることはまず無いから心配要らないぞ。砲艦仕様のブラックロータスが直接攻撃に晒されるような状況ってのはもうほぼ全滅って状況しかない。そうなる前にセレナ少佐は撤退に移るだろうから、実質的にブラックロータスが危険に晒されるようなことは無いと考えて良い」

「そ、そうか……大丈夫なんよね？」

「心配いらないぞ」

ティーナとウィスカとメイはな。俺とミミとエルマの乗るクリシュナは結晶生命体と近距離戦をすることになるだろうけど。まぁ、よほどの群れとやり合わない限りは大丈夫だ。少佐達の艦隊戦力もあるしな。

「補給は済んでるはずだよな？」
「はい。ヒロ様に言われた通りに対艦反応魚雷もクリシュナに積んでいる四発以外にブラックロータスに十二発積んでおきました」
「補給担当の人、顔を引き攣らせていたけどね」
「タダで補給させてもらえるってんなら遠慮はしないよなぁ」

本当はクリシュナに積む分とは別に二十発の予備をもらおうと画策したんだが、十二発までしか出せないと言われてしまったんだよな。まぁ、使いようによっては一発でコロニーを壊滅させかねない危険物だから仕方ないっちゃ仕方ないんだが。

「水と食料、生活雑貨の類もブラドプライムコロニーで補給してきたし、行軍中は軍からの支給もあるって話だから……うん、依頼を請けて軍からの補給物資を積み込んだらすぐにでも出撃可能か。船の整備状況はどうだ？」

まだちょっと緊張気味の整備士姉妹に話を振る。日常の会話をして少しでも緊張を緩和できると良いんだが。

「ん、クリシュナの方は終わってるで。ブラックロータスの方も細かいチェックが残ってるだけやから、今日中には全部終わるわ」
「今回はブラックロータスも全力で攻撃していますから、一応エネルギー系統や装備の損耗度合いもチェックしてるんです。今の所は

大きな問題は上がってきてません」
「そうか、なら引き続き頼む」
「任せとき」
「はい」
「じゃあ一旦解散ってことで。ギルドから依頼が回ってきて、出撃時間が確定したら連絡を入れる。それまでは各自やるべきことを済ませたら自由行動ってことで頼む。ああ、できれば船内に留まるように。外に出ても遊ぶところも観光スポットもないからな」

全員から了解の旨が返ってくる。
俺はどうするかね。連絡が来るまでやることもないんだが……特に目的はないけど時間まで皆の様子でも見て回るかな。今までの宙賊とかを相手にするのとはちょっと違った危険性のある依頼になりそうだし。船員のメンタルケアも船長の仕事だものな。

#151　整備士姉妹との時間（前書き）

小説とは関係ないけど、皆さんも身体には気をつけて！
手洗いうがいをしっかりして、ちゃんとごはんを食べようね！ ―（：3」∠）―

#151　整備士姉妹との時間

「ふぅむ……」
様子を見て回ることにしたわけだが、どうしたものか。ミミとエルマ、それにメイと整備士姉妹か……まずは整備士姉妹にするかな。ミミとエルマはなんだかんだで俺と無茶をするのには慣れているし、メイはあまり心配要らなそうに思える、まずは俺の船に乗って日が浅い整備士姉妹のケアをするべきだろう。ミミとエルマは夜にでもゆっくり話せば良いだろう。
というわけで、姉妹の元を訪れたわけだが。
「あ、兄さんどしたん？」
二人は休憩室のソファに並んで座っていた。特に何をするでもなく、互いに身を寄せ合い、互いに寄りかかるようにして座りながら異星植物が繁茂するテラリウムを眺めていたのだ。
「いや……皆の様子を見て回ろうと思ってな。邪魔をしたかなと」
姉妹で仲良くまったりとして精神を落ち着けていたのなら、俺の出る幕ではない気がする。
「そっとフェードアウトするから気にしないでくれ」
「や、別に行かんでもええやん。ここに座ってや」
そう言ってティーナがウィスカから身を離し、一人分ずれて自分とウィスカの間をポンポンと叩く。
「二人の間に入れと……？　それは大丈夫なのか？」
百合の間に挟まると色々な方向から殺されそうな気がするんだが？　いや、二人はそういうのじゃないんだろうけどもさ。
「何を言うてんの？　はよ座ってぇな」
「う、うむ……」
「変な兄さんやなぁ」
ケラケラと笑うティーナの隣に座る。ティーナの隣ということは、

つまりウィスカの隣でもある。
「はいどーん」
「うぉい？」
座るなり、ティーナが俺に抱きつくように身を寄せてきた。
「ほら、ウィスカもやるんやで」
「えぇ……ど、どーん」
ティーナに唆されたウィスカもどーんしてくる。なんなのだこれは。
「なんとなく人肌が恋しい気分なんよ。あ、えっちな意味やないよ？」
「えっちな意味で言われても困るんだが」
「なんでやねん。ティーナちゃん可愛いやろ。ウィスカも可愛いやろ」
俺の腕をぎゅっと抱きしめながらティーナがぷんすこと怒る。
「二人とも可愛いのは認めるけどさぁ……」
可愛いというのとそういう対象として見るのとはまた別問題でな、俺の中では。というか、二人は可愛いんだけど、身体が小さくていかにも絵面が危険な感じだからさ……新たな扉を開いてしまいそうで怖いんだよ。
「その話は置いておいてだな。ええと……」
「ええと？」
「……特に気の利いた話題が思い浮かばないな」
「話下手か。ミミもエルマんもなんで兄さんに引っかかってるんやろなぁ」
「うるさいやい。話下手とか言うならそっちから何か気の利いた話題を振ってみろってんだ」
「せやなぁ、じゃあウィスカのやらかし話でも暴露しよか」
「お姉ちゃん」
「あれは四ヶ月くらい前の話やった。その日は塗装のし直しで船を預かっててな。塗装作業をしてたんやけど、ウィスカの作業服のお

尻の部分に塗装用のペイント液がついてな。ウィスカはそれに気づかずに作業場のあちこちにお尻の形の判子を……」
「お姉ちゃん！」
顔を赤くしたウィスカが叫んでティーナの話を遮る。意外とうっかりさんなのかな、ウィスカは。
「可愛いやろ？」
「可愛いな」
「くぅ……お姉ちゃんがその気なら、私もお兄さんにお姉ちゃんの恥ずかしい話を聞かせるからね！」
「おう、やってみぃ。うちは更にその二倍ウィスカの恥ずかしい話をしたるで」
どんなに恥ずかしい話も薄着で俺達の部屋に押しかけてきたあの時の最大瞬間風速は上回れないのではないか？　と内心で思いつつ二人の話に耳を傾けた。

☆★☆

「ぐぬぬ……」
「むむむ……」
なんだかこの短時間で二人の恥ずかしいエピソードを聞かされてしまった気がする。まぁ、恥ずかしいエピソードといってもちょっとした失敗談みたいなものばかりだったけど。
「寝ぼけたティーナがパジャマのまま出勤するエピソードは良かったな」
「だ、誰だって寝ぼけるくらいはあるやん？　パジャマのまま出勤するくらい……」
「いやそうはならんやろ」
いくら寝ぼけてもそれは無い。寝ぼけ過ぎにも程がある。
「ふふん、やっぱり私よりもお姉ちゃんの方がうっかりさんだよね」
「それはない。ウィスカのほうがうっかりさんや」

「お姉ちゃんのほうがうっかりさんだよ」
「ウィスカのほうや」
「お姉ちゃんのほう」
「「ぐぬぬ……」」
五十歩百歩という言葉を知っているだろうか？　どんぐりの背比べでも良いんだが。まぁ俺は大人なので、敢えて口には出さないでおく。俺から見れば二人とも同じように思えるけどな。
そういえばいつの間にかティーナだけでなくウィスカも俺の腕に抱きついているな。ついつい熱が入って周りが見えていないのか……俺の中でウィスカのうっかりさんポイントが追加される。どっちもどっちだが、このうっかりでウィスカのほうが僅かにリードだろうか。
「というか、よく考えたらうちらの失敗談だけ兄さんに暴露するのは不公平やないか？」
「むっ……確かにそうだね。お兄さんの失敗談も聞かせてください」
「俺の失敗談かぁ……」
急に言われてもなぁ。二人には俺の事情は何も話してないから、あんまりうかつなことは言えないな。ここは最初にミミやエルマに話した記憶喪失エピソードを使うか。
「昔のことはあまり覚えてないんだ。記憶がはっきりしてるのはミミやエルマと会うちょっと前からでな……どうもハイパードライブの事故か何かで記憶喪失になってるらしい」
「またまたそんな……え？　ガチなん？」
「うん、ガチなんだこれが。気がついたら電源が落ちた状態のクリシュナのコックピットで寝ててな。寒くて目が覚めた。何故だかクリシュナの操作そのものは身体が覚えててくれてなんとか助かったけど、いきなり宙賊に襲われたりしたし、ようやっと辿り着いたターメーンプライムコロニーでは船の寄港履歴が一切なかったりして相当怪しまれたよ」
「そんな……じゃあ、家族や兄弟の記憶も……？」

「無いな。あまり気にはしてな――」
気にはしてない、と言おうと思ったら姉妹が左右から俺の顔を見上げてきた。なんだろう？　と首を傾げる。
「兄さん、何の悩みも無さそうに見えて苦労してたんやな……」
「寂しくない……？　大丈夫……？」
二人がめいっぱい手を伸ばして俺の頭を撫でてくる。う、うーん……確かに家庭環境に恵まれた生い立ちとは言えないが、ここまで二人に心配されるのはなんだか心が痛むような。
「いや、別にあまり気にしてないから」
「嘘を吐いたらあかん。家族の記憶が無いなんて絶対に不安なはずや」
「そうだよ、お兄さん」
「そ、そうか……」
二人の有無を言わさぬ物言いについ押し負けてしまう。だって二人とも顔が真剣なんだもの。本気で心配されているというのが伝わってくるから無碍にすることもできない。
「寂しかったらうちらに甘えてもええんやで？」
「いやそれは」
「嫌ですか……？」
「い、嫌ではないですけど」
君達落ち着きたまえ。そして考えろ、考えるんだ……この状況を打破する方法を――閃いた！
「俺の記憶の話はとりあえず横に置いておいてだな、俺とミミやエルマ、それにメイがどうやって出会ったのかって話に興味は無いか？　二人ともみんなとはもうそれなりに話してるだろうけど、そういう経緯まではまだ聞いてないだろ？」
「ん……それは確かにそうやね」
「そうだろうそうだろう。丁度今話してたターメーンプライムでの話でな……」
そうして俺はこの世界に来て、エルマやミミ、それにセレナ少佐

と出会った頃の話を二人にし始めた。こころなしか、二人の密着度合いが増して、俺を見る目が少し変わったように思うが……こうして二人とゆっくりと時間を過ごしたのは悪いことではないように思えたのだった。

#152　メイとの時間、二人との時間（前書き）

遅れました！　読みたい小説があって寝不足気味で……！　―（∵3」∠）―（ゆるして

#152　メイとの時間、二人との時間

姉妹はメンテナンスボットの充電とセルフメンテナンスの空き時間に休憩していたようで、メンテナンス終了のアラームを受けて名残惜しそうに仕事に戻っていった。俺はそれを見送り、メイがいるであろうブラックロータスのコックピットへと向かう。

「ご主人様、どうかされましたか？」

コックピットに入るとすぐにメイがこちらへと振り返った。こちらを振り返る彼女の手首にはコックピットのコンソールから伸びるコードが繋がっている。恐らくあのコードを介してブラックロータス制御を行っているのだろう。もっとも、今は船を航行させているわけではないから、彼女が何をしているのかは俺にはわかりかねるのだが。

「いや、依頼を請けて船を出す前に皆の様子を見ようと思ってな」
「それでここに？」
「ああ。メイもクルーだからな」
「そうですか」

赤いフレームの奥で光る瞳に僅かながら嬉しげな感情が垣間見える気がする。メイの無表情さは相変わらずだが、最近は微妙な感情の変化を読み取れるようになってきているように思える。どちらかというと俺が読み取れるようになったというより、メイの表情が豊かになってきているのかも知れない。見た目には殆ど変わらないから、表情が豊かにといってもごく微妙な変化なのだが。

「ご主人様は不思議な方です」
「そうか？」
「はい。帝国に於いては私のような機械知性は法のもとに人格権を保証されています。しかし、法のもとに人格権を保証されていることと、実際にそれが人々に認められているかは別の話です」
「んんん？」

メイの言うことがちょっと理解し難い。どういうことだろうか？
「機械知性の人格権が認められていない他国の民はもちろんのこと、人格権が保証されている帝国の民ですら私達機械知性の人格権を完全には認めていません。無論、皆無ではありませんが、ご主人様のように本当に一個人として認めてくださる方は稀ですよ。例えば今のように、これから危険な場所に行くからと心配して様子を見に来るような方は」

そう言ってメイは徐に俺との間合いを詰め、無造作に抱きついてきた。不意を突かれた俺は俺自信と殆ど変わらない長身の彼女に抱き竦められて身動きができなくなる。
いつも思うのだが、彼女は間違いなく機械であるはずなのに何故こんなに良い匂いがするんだろうか？　僅かに香る甘い匂いにいつもドキドキさせられてしまう。

「メイさん？」
「私は確かに機械です。ですが、怖いものは怖いのです。結晶生命体は有機生命体だけでなく、私のような機械知性も食い殺します。ご主人様の与えてくれたこの身体も例外ではありません。そしてミミ様やエルマ様、ティーナなウィスカも同じように食い殺すでしょう。彼女達は私の大切な友人です。その彼女達が食い殺されたりしたら、私は悲しみでどうにかなってしまうでしょう」

メイは一息でそう言い、そして俺を抱き竦める腕の力を僅かに抜いて至近距離から俺の顔をじっと見つめてきた。

「それに何より、ご主人様を失ってしまうのが恐ろしいのです。ご主人様は私の存在意義そのものです。仮にミミ様やエルマ様が生き残ったとしても、ご主人様を失ってしまったら私は壊れてしまうでしょう」

これ以上無いメイの真剣な表情に俺は無言で頷く。

「本当はこのような危険な依頼は請けて欲しくないと思っています。結晶生命体など帝国軍に任せておけば良いのです。危険に対して得られる利益が少なすぎます。エネルを稼ぐだけなら宙賊だけを狙ったほうがリスクが低く、効率的で、多くの人の役に立ちます。ですが、ご主人様はセレナ少佐をお見捨てにはならないでしょう」

「そうだな」

ここでセレナ少佐に協力しないでこの星系を去って、後にセレナ少佐がこの戦場で戦死したという話を聞いたら俺はきっと後悔するだろう。あそこで手を貸していれば、と。

「ですから、お止めは致しません。ただ、私は私にできることをするのみです」

「すまないな」

「いいえ。こうして気にかけてくださるだけで私は幸せです」

俺もメイを抱きしめる。彼女の骨格は強靭な特殊金属で、筋肉は特殊な金属繊維。柔らかな肌は人工的に合成された有機素材で、温かな体温は彼女の超小型ジェネレーターの発する排熱だ。艶やかな

黒髪も、黒曜石のような輝く美しい瞳も何もかも、ヒトというものを模して作られた紛い物だ。
それでもやはり、俺にとってメイはメイだ。本物とか紛い物とかそんなことはどうでも良い話だ。

「結晶生命体なんかには遅れは取らないから」
「はい。そう信じています」
「信じててくれ。絶対に裏切らないから」

暫く抱き合った俺達はどちらからともなく身を離す。

「ブラックロータスの管理、運行はお任せください。この船はご主人様の帰る場所です。必ず守り抜きます」
「頼りにしてる」
「はい。お任せください」

そう言って頭を下げるメイに軽く手を振り、俺はミミとエルマが居るであろうクリシュナへと向かうことにした。

☆★☆

ミミとエルマはクリシュナのコックピットにいた。

「何してるんだ？」
「あ、ヒロ様」
「依頼を請けるなら相手は結晶生命体になるでしょ？　ミミがクリシュナのレーダーの調整をするっていうから、付き合ってたのよ」
「なるほど」

それほど劇的に変わるわけではないが、ある程度対象を絞って調

整することによってレーダーの感度を上げることは可能だ。結晶生命体用に特化させることによって若干だがレーダーの性能を上げることができる。無論、特化した分その他の対象に対しては若干感度がさがるのだが。

「一回調整してプリセットを登録しておけば即座にモードを変えられるじゃない？　この際だから色々登録しておこうと思って」
「それは良い試みだな。使いこなせればオペレーターとしては一人前だ」
「頑張ります！」

ミミが気合を入れてコンソールの操作を続ける。俺はなんとなくコックピットの入り口からそれを眺めていた。こうしてミミがオペレーターらしいことをしているのを見ると、初めてこの船に乗せた頃のことを思い出すな。あの頃は不安と緊張でおどおどしてたのに、今はもう一端のオペレーターだ。
ミミと出会ってどれくらいだ？　船に乗っていると時間の感覚が曖昧になってなんとも言えないが、まだ一年は経ってないよな。一年も経たずにここまでオペレーターとしての腕を上げたのは才能もあるかもしれないけど、まぁミミの努力の賜物だよな。暇があればタブレットを使ってオペレーターの勉強をしてたし。
と、考えていると、ミミとエルマが二人して俺の方をじっと見てきた。

「どうしたの？　ぼーっとして」
「もしかして、依頼について不安があるんですか？」
「いや、別にそういうわけじゃない。ただ、ミミも立派になったなって思ってただけだ」
「えぇ！？　そ、そんなことないですよ？　まだまだ初心者です」

ミミが顔を赤くしてわたわたと両手を振る。確かにそういうところはまだまだ初々しいけど戦闘中に取り乱すようなことはあまり無くなったし、オペレーターとして仕事をしている時は表情に自信のようなものが見えるようになってきている。

「そうね。ターメーン星系にいた頃とは比べ物にならないわ」
「えぇ……なんですかもう、エルマさんまで」

からかわれていると思ったのか、ミミが恥ずかしげな表情で少し膨れる。

「エルマはどうか知らんが、俺は本気で言ってるぞ」
「あら、私だって本気よ。まぁ、ヒロの船に乗っていればこうなるのも当然かも知れないけど」
「そうですよ。ヒロ様のおかげです」
「俺？」
「そうよ。実戦経験が多い分成長が早いんでしょうね」

エルマの言葉にミミがコクコクと頷いている。確かに他の船に比べれば宙賊の討伐数は多いだろうな。それはつまりエルマの言う通り実戦経験をそれだけ積むということになる。確かに実戦経験を積むのは成長に繋がるかもしれないが、ゲームじゃあるまいしそれだけでオペレーターとしての腕が伸びるわけないだろう。

「それよりもミミが必死に勉強したからだと思うけどな」
「それもあるわね。ミミの努力とヒロのスパルタな実戦経験の積ませ方の賜物よ」
「エルマさんの指導のおかげでもありますよ」
「そうだな。全部揃ってのことだろ」
「……そうかもね。それでええと、何の話だったかしら？」

少しだけ顔を赤くしたエルマが強引に話題を切り替えようとする。
「エルマが可愛い話？」
「結構恥ずかしがり屋さんですよね」
「もう！　からかわないの！」
ぷりぷりと怒るエルマにミミと二人で笑いながら謝る。
「それで、ヒロは何してるのよ？」
気を取り直したエルマがジト目で聞いてくる。
「別に何してるってわけじゃない。ただブラブラして皆の様子を見て回ってるだけ」
「ふーん……」
エルマが俺に近寄ってきてスンスンと鼻を鳴らす。
「……仲良くしてきたみたいね？」
「やだこわい」
「他の女の匂いがする……！　ってやつですね！」
俺とエルマのやり取りを見たミミがクスクスと笑う。笑い事じゃないよ。マジで怖いから。
「それじゃあ私とミミとも仲良くしてもらいましょうか」
「それはいい考えですね」
「お手柔らかにお願いします」
「そうねぇ……後回しにしてくれた分はしっかりとサービスしても

らわないとねぇ」

エルマが俺の左腕を、ミミが俺の右腕を抱え込んでどこかへと連行し始める。

「まずは食堂で美味しいものを食べさせてもらいましょう」
「そうね。その後はどうしようかしら？」
「マッサージをしてもらうとかどうですか？」
「はいはい……なんでもいたしますよ」

二人に引っ張られながら苦笑いを浮かべる。まぁ、少々こき使われるくらいのことは甘受するとしよう。依頼を請けて出撃したらイチャつく暇も無いだろうからな。

#153　出撃

翌日の朝一番に傭兵ギルド経由で軍から指名で依頼が出された。内容は事前に提示されていた通りで、一日あたり４０万エネルだ。クリシュナとブラックロータスはセレナ少佐の率いる対宙賊独立艦隊に同行し、彼女の艦隊の作戦遂行を支援する。作戦中の補給は基本的に帝国航宙軍持ち。ブラックロータスは可能な範囲内で補給物資を積み込み、砲艦としてだけでなく補給艦としての役割も負う。契約期間は最大で三ヶ月と定められた。

「最大で三ヶ月ですか……」

ミミが手元のタブレットが端末を見ながら少し憂鬱そうな声でそう言う。最大三ヶ月ってだけで、状況次第ではもっと早い段階で契約は終了になるんだけどな。まぁそれなりに長い時間を拘束されるのは間違いないだろう。

「妥当だと思うけどな。何せハイパーレーンを移動する時間も含まれるわけだし」

それに答える俺はクリシュナのタラップの上からブラックロータスのカーゴスペースへと次々に帝国航宙軍の補給物資が積み込まれていく様子を見ていた。

搬入はブラックロータスに装備されているＡＩ制御の搬入システムによって行われており、搬入システムが制御する荷運びドローンが一糸乱れぬ効率的な動きで荷運びをする様子はなかなかに楽しい光景だ。

「そうね。いくつの星系を渡り歩くことになるかわからないけど、移動に数日かかることもあるし」

エルマもまた俺と同じように荷物が運び込まれるのを見ているが、さして興味は無さそうである。はたらく機械にはあまり興味が湧かないらしい。俺は工業機械が規則正しい動きでものを作ったりする様子を割と飽きること無く見ていられるんだけどなぁ。

「こんなに長い拘束期間の依頼はアレイン星系以来ですよね」

「そうだな。まぁ長くなりそうだから気楽に行こう」

常に緊張状態を保つことなど不可能だし、それで肝心な時に消耗して力をだせないようじゃ本末転倒だからな。

「でもまぁ、そんなに長くならないんじゃないかと俺は思ってるけど」

「そうなんですか？」

「そうなの？」

「うんまぁ、確信は無いんだけどな」

俺はセレナ少佐にパルサー星系が怪しいといった旨の情報を流している。情報の確度から言えば俺の発言なんぞは何ら注目に値するものではないかもしれないが、今の帝国航宙軍、そしてセレナ少佐には結晶生命体の本拠地に関する情報そのものが全く無いに等しい。

藁をも掴むという気持ちでイズルークス星系周辺に存在するパルサー星系の調査に乗り出してもおかしくはない。そして、近隣のパルサー星系の数なんてのもそう多いものでもない。ザッとしか見ていないが、この辺りに候補は二つくらいしか無かったはずだ。俺にも結晶生命体の巣が確実にパルサーを擁する星系にあるという確信は無いが、歌う水晶や結晶生命体の挙動がＳＯＬと殆ど変わらない

事を考えれば、少なくとも大外れではないのではないかと思う。

「兄さーん」

タブレット型の端末を小脇に抱えたティーナが軽快に駆けてくる。身体は小さいけど、走るのは結構早いんだよな。トレーニングルームで一緒に何度かトレーニングをしたが、単純な筋力はエルマ並みだった。つまり俺より上である。

あと持久力も半端じゃない。負荷をかけるタイプのトレーニングであればエルマの三倍、俺の五倍は耐えられる。一体あの小さな身体のどこにそこまでのパワーとタフネスが潜んでいるのだろうか。もしやアルコールを体内に溜めて直接エネルギーに変換しているのでは？　と思ったがまさかな。ハハハ。

「積み込みはもう少しで終わるで。あと十五分ってところやね。積荷の内容はー……まぁ基本は食料と水や。他にも細々としたものはあるけど」

「了解、積み込みが終わったら待機してくれ。多分すぐに出ることになると思う」

「りょーかいや」

「安全第一でな」

「もちのろんやで。兄さんも出港に備えて身体と頭を休めといてな」

ティーナがぶんぶんと手を振って作業に戻っていく。その様子を見たミミとエルマが揃って俺の顔を見つめてきた。なんだね？

「なんだかティーナの態度が変わってない？」

「そうですね……なんだかこう、柔らかくなったというか……いえ、前から気安く会話はしてたと思いますけど、なんだか雰囲気が違うような」

「別に何もないぞ……休憩室で少し話はしたけど」
「どんな話をしたの？」
「ターメーン星系で二人に出会った時の話がメインだな。ああ、俺の出自の話にもなったから例の記憶喪失エピソードで濁しておいた。それくらいかな」
「なるほど……？」

ミミもエルマも首を傾げている。そもそも雰囲気が変わったっていうのが思い違いだと俺は思うんだが。確かになんか妙に優しかったというか、俺の記憶喪失って設定を物凄く真摯に受け止めて心配してたようには思うが……二人が心配というか、そこまで気にするとなると俺もなんだか気になってくるな。

「まぁ、その辺りは出発した後にいくらでも時間があるから、その時に聞けば良いんじゃないか」
「そうですね」
「そうね」

二人は俺の言葉に納得してとりあえずティーナの態度の微妙な変化については横に置くことにしたようだ。
そしてティーナの言った通り、きっかり十五分後に荷物の積み込みが終わり、程なくして俺達に出撃命令が下った。

☆★☆

「とは言っても、出撃したからと言って俺達が気を張っている必要は全く無いんだよな、暫くは」
「そうですね」
「そうだけど、弛んでるわけにはいかないわよ」

俺とミミ、そしてエルマはクリシュナのコックピットで待機してはいたが、戦闘でも起こらなければクリシュナが発進することはない。ブラックロータスの航行に関しては全てメイに任せているので、以前までのように航行中にやることが何もないのだ。
確かにエルマの言う通り、何かあった時にすぐに動けないようでは困るので弛んでいるわけにもいかないのだが。

「士気の維持って大事だな」
「そうね。いざという時にサッと動けないと舐められるから、あんまり気を緩ませないようになさい」
「はいっ」
「そうする」

集中力を維持するために外の状況を常に見られるようにするべきだろうな。俺はコンソールを操作してブラックロータスのセンサーから得られる情報をクリシュナのコックピットに表示できるようにする。

「流石にこれだけ船が揃っていると壮観だな」
「そうですね」

コックピットのモニターにはセレナ少佐の率いる対宙賊独立艦隊だけでなく、多数の傭兵の船が映し出されていた。今回の作戦行動でセレナ少佐の艦隊に同行する傭兵は俺達だけではない。それなりの数の傭兵がセレナ少佐の艦隊に同行することになっているのだ。

「うーん……機体だけ見ると本当にピンキリだな」
「そうなんですか？」
「それでもそこらの雑魚宙賊よりは機体も腕もずっと上よ。まぁ、ある程度はランクで実力が測れるとはいえ、装備も腕も均質じゃな

いから指揮をする側としては頭が痛いでしょうね」

今回、セレナ少佐の艦隊に多数の傭兵が同行するのは対宙賊独立艦隊に不足しがちな近接戦闘能力を補うためである。

「基本的には艦隊のコルベットと傭兵で前衛を務めて駆逐艦は本隊の防御。巡洋艦と戦艦の砲撃で敵を殲滅するっていう戦術になるだろうな」

「コルベットは二隻しかいないですよね、セレナ少佐の艦隊」

セレナ少佐の率いる対宙賊独立艦隊の編成はコルベットが二隻、駆逐艦が三隻、巡洋艦が五隻、戦艦が一隻という内容になっている。基本的に撃たれる前に撃って撃滅するって感じの編成だ。

これが巡洋艦や戦艦が戦闘の主役になる国同士の戦いであればこの編成で大正解なんだろうが、物量に任せて犠牲を気にせず突っ込んでくる結晶生命体に近接戦闘に持ち込まれてしまうと少々不味い。いくら強力な主砲があっても懐に入り込まれてしまってはどうしようもなくなってしまうからな。

「そこを補うために傭兵が沢山同行してるってわけだよ」

「そういうことですよね。じゃあ、結晶生命体と戦闘になったら結構危ないんじゃないですか？」

「相手が余程の大群でもないかぎり大丈夫だとは思うけどな」

巡洋艦五隻と戦艦一隻から放たれる砲火は多少の結晶生命体の群れなど一蹴してしまうだろう。中型三十、小型が百とか、或いは大型でも出て来ない限りは大丈夫なはずだ。戦闘が発生すれば亜空間通信を使って近隣の星系にいる他の偵察艦隊に増援要請もできるはずだしな。

「やめてよね。ヒロがそういうことを言うと大群が出てくるんだから」
「おいおいそれはない……ないと思う。思いたいなぁ」
「これはダメそうですね……」
「覚悟しておいたほうが良いわね」
「やめろよ、そんな事言うから本当に来るんだぞ」
「私達に責任転嫁するのは良くないわ」

俺達は互いに責任を擦り付け合いながらクリシュナのコックピットで待機を続けるのであった。

#154　遭遇戦

俺達第二偵察艦隊――セレナ少佐の対宙賊独立艦隊と傭兵達の寄せ集め艦隊――はイズルークス星系からハイパーレーンを経て他の偵察艦隊と共に辺境宙域へと侵入していた。

最初に辿り着いたのはイズルークス星系に隣接しているパクス星系だった。四つの偵察艦隊が手分けしてパクス星系を調査し、程なくしてパクス星系に結晶生命体が存在しないことが確認された。

パクス星系から伸びているハイパーレーンはイズルークス星系に繋がっているものを含めて三本だ。そこで、四つの偵察艦隊は二手に分かれてその先の調査をすることにした。

「不測の事態に対処できるように二艦隊で連携して動くべきだろう」

「私もそう思います。次の星系に移動する際にはまずどちらかの艦隊が先行し、ハイパーレーンの出入り口付近の安全を確保した方が良いかと」

「そうだな。残った方は退路を確保しておくということで。先行役は交代でやっていくとしよう」

「そうしましょう」

第一偵察艦隊の指揮官と第二偵察艦隊の指揮官――セレナ少佐だ――の間でそういうやり取りがあり、第一、第二偵察艦隊は慎重に辺境宙域の偵察を進める。

そんな感じでイズルークス星系の帝国航宙軍前哨基地を出発して凡そ三十六時間。

「セクターCが押され気味です！　救援要請が出ています！」

「メイにこっちは良いからあっちに援護射撃をしろと言っておけ。それでなんとか保たせろ」
「はいっ！」

押し寄せる小型結晶生命体の群れを掠めるようにしてやり過ごし、群れから逸れて進路を塞ごうとする個体を散弾砲の連続射撃で粉砕する。砕け散った結晶生命体の破片がクリシュナのシールドにバチバチと当たって弾け飛んでいった。

「やっぱりこうなったじゃない！」
「発言してからもうとっくに二十四時間以上経ってるだろ。時効だ時効」

イズルークス星系を出発して三十六時間。イズルークス星系からハイパーレーンで四つ先の辺境宙域内、ガーガーオル星系において先行偵察を実施した第二偵察艦隊は結晶生命体と遭遇し、即座に戦闘に突入した。奴らはハイパーレーンの出入り口で待ち伏せをしていたのである。

すぐさま戦闘に突入した第二偵察艦隊は一つ前の星系であるリシムス星系に待機している第一偵察艦隊に亜空間通信で救難要請を発信。幸い、リシムス星系からガーガーオル星系への移動にかかる時間はおよそ十五分ほどと短いので、持ちこたえることができさえすればなんとかなるだろう。

で、俺達はこの混乱の中で何をしているのかと言うと、戦艦や巡洋艦、それにブラックロータスなどの大型艦船に結晶生命体を取り付かせないように敵の群れに突っ込んで囮役をしている。

基本的に結晶生命体というのは一番近い獲物に突っ込む性質があるので、散弾砲や重レーザー砲を撃ち込んで逃げ回れば相当数をい引きつけることが可能なのだ。ついでに通りすがりに何匹か撃破すると、その周辺の結晶生命体もリンクしてこちらに敵意を向けてく

るので、更に多くの敵を引きつけることができる。

「追いかけてくる結晶生命体の数がとんでもないことになってきましたけどっ！？」

「大丈夫だ、問題ない」

今襲いかかってきている結晶生命体の総数はイズルークス星系で戦っていた群れに比べればずっと少ないものだが、こちらの戦力もイズルークス星系での戦いの時に比べればずっと少ない。このまま乱戦になってしまうと死角の大きい巡洋艦や戦艦に被害が出る恐れがある。なので、なんとしてでも乱戦になるのを阻止しなければならない。

姿勢制御をオートからマニュアルに変更し、逃げる勢いそのままに艦を反転させて追い縋ってくる結晶生命体の群れに正対する。

「オラオラオラァ！」

クリシュナに向かって愚直に突っ込んでくる結晶生命体に向かって四門の重レーザー砲と二門の大型散弾砲を乱射する。視界を埋め尽くさんばかりの群れ相手だと狙う必要すらない。撃てば当たるからな。

「ヒ、ヒロ様！　ま、まえ！　じゃなくて後ろ！？　結晶生命体がっ！？」

「大丈夫大丈夫」

結晶生命体の群れを引き撃ちで削りながら姿勢制御スラスターを噴かして多方向から突進してくる結晶生命体をひらりひらりと避ける。レーダーを注視すればどっちの方向から結晶生命体が突っ込んでくるのかはわかるから、その進路から外れるように艦を制御すれ

ばいい。
え？　正面は見なくても良いのかって？　撃ちゃ当たるんだから正面なんて視界の隅で見とけば良いんだよ。

☆★☆

「……」
「……」
「……艦長、あれは」
「……ちょっと意味がわからないわ」

レスタリアスで艦隊の指揮を執りながら彼の船の動きを見た私とロビットソンは絶句していた。
彼の船が結晶生命体の群れに突っ込んでその多くを引き付け始めたことにも度肝を抜かれたが、それどころか彼は自分の船を追ってくる結晶生命体の群れに反撃まで加え始めたのだ。しかも結晶生命体の群れのど真ん中で。
物凄いスピードで後ろ向きに飛びながら重巡洋艦並みの火力で結晶生命体の群れを削り、上下左右から突っ込んくる結晶生命体の突撃を不可解な回避機動でひらりひらりと避け続けている。そして完全に取り囲まれて回避不能な状態になる前に結晶生命体の群れを突破し、また多くの結晶生命体を引きずり回し始めた。

「銀剣翼突撃勲章は伊達ではありませんな」
「本当にね……どうなってるのかしら、彼の頭の中は」

単機で結晶生命体の群れに飛び込むのも正気の沙汰ではないが、その群れの中で反転攻撃を行うのは……いや、彼の行動に驚いている場合ではない。

「彼の奮闘を無駄にするわけにはいかないわ。セクターAに火力を集中、奴らを押し返すのよ。傭兵達にはセクターCの援護に当たらせて」
「はっ！」

セクターBで閃光が炸裂し、彼を追っていた結晶生命体の群れがごっそりと削れた。どうやら対艦反応魚雷を群れに向かって撃ち込んだらしい。

「そろそろ第一偵察隊も到着する……なんとか持ちこたえたか」

だいぶ数を減らした結晶生命体の群れに彼の船が襲いかかっていく。まだ楽観はできないが、どうやらこの場は無事に凌ぐことができそうだ。

☆★☆

「なかなかにスリリングだったな」
「……そうね」
「……そうですね」

返事をするエルマとミミの声に元気がない。結晶生命体相手の戦闘にはまだ慣れないらしい。小型の結晶生命体は体当たりにだけ気をつければ射撃攻撃はそんなに強力じゃないし、そんなに恐れることはない相手なんだけどな。戦術を持って追い込むような動きもしてこないし。まぁあれだけの群れに追われるとワンミスで爆散しかねないからスリリングではあるけど。

あの後、予定通りに第一偵察隊が増援として駆けつけてきたおかげで俺達は結晶生命体の待ち伏せ攻撃をやり過ごすことに成功した。第一偵察隊が到着したら獲物が減るので、その前に虎の子の対艦反

応魚雷を一発だけ使って撃破数を稼ぐこともちゃんとしておいた。使った分は帝国軍が持ってくれるという話になっているし、出し惜しみしすぎても勿体ないからな。ブラックロータスに予備弾薬も積んであるし、今回の偵察行では程よくぶっ放して撃破数を稼いでいきたいと思う。

事前に撃破数に応じたボーナスなどの取り決めはなかったが、顕著な活躍をすれば何かしらのボーナスは期待できるだろう。多分。後で少佐に催促してみるのも良いかも知れない。

そんなことを考えながらブラックロータスの後方下部にクリシュナを移動させ、オートドッキングシステムを起動する。

「メイ、着艦を頼む」

『はい。ハッチ開きます』

ブラックロータスの下部後方のハッチが開き、誘導に従って自動でハンガーへの格納が完了した。うーん、着艦はやっぱオートに限るな。見てくださいこの安定度。余裕の無事故で……いや、たまに事故るんだよな。たまに。まぁクリシュナの大きさなら余程変な外的要因が無い限り大丈夫だろうけど。

「おーい、二人とも。着艦したぞ」

二人が大きく溜息を吐く。緊張状態から脱することができたのかな？

「この場の敵は殲滅したから大丈夫だろうけど星系内に他の群れがいるかも知れないし、隣接星系から増援が来るかもしれないからその時はすぐに動けるように二人ともちゃんと休んでおけよ」

「なんであんたはそんなに元気なのよ……」

「俺にとってはあの程度の戦闘なぞ温いのだ。ふはははは」

それなりに疲れはしたが、ほんの二十分かそこらの戦闘だったしな。まだまだ元気だ。

「まぁ、慣れろ。なに、小型種なんて動きの鈍いシーカーミサイルみたいなもんだ」

「そうでしょうか……？」

「そうだぞ。レーザーとか絶対避けれないけど、小型種はレーザーほど理不尽な早さじゃないし、シーカーミサイルほどに小回りは利かないからな。ビビらなければ大丈夫だ」

「う、うーん……？」

ミミは俺の言い分に納得し難いらしい。

「とにかく二人ともしっかり心と体を休めておくように。俺はティーナ達に整備と弾薬補給を指示してくるから」

「任せるわ……」

「わかりました……」

ぐったりとしている二人をコックピットに残したまま俺はブラックロータスのハンガーへと向かう。被弾はしてないから大丈夫だけど、こういう時に弾薬補給と整備がしっかりとできるのはやっぱり便利だな。高い買い物だったが、ブラックロータスを購入してよかった。

俺はそんなことを考えながらハンガーへと足を向けるのだった。

#155　休息と招待

第二偵察艦隊の被害は軽微なもので済んだ。第二偵察艦隊の主力である対宙賊独立艦隊への直接的な損害は、前衛を受け持った二隻のコルベットがシールドを貫通されて装甲の一部に被害を負った程度である。人的被害はゼロだ。

ただ、随伴している傭兵の船が二隻撃沈し、三名の死者が出た。結晶生命体の待ち伏せ攻撃で浮足立ったまま乱戦に突入したのが良くなかったらしい。撃沈した二隻以外にも損傷を受けた船が数隻発生したため、格納庫と整備施設を持つ艦で応急修理が行われることになった。

「……」
「なんか縁があるな」
「……チッ」
「舌打ち！？」

修理のためにブラックロータスに着艦してきたのは受勲式の入り口でちょっと話したり、受勲式の帰りにちょっと絡んできたりしたあの若い傭兵だった。結局名前は聞いてない……聞いてないよな？

「あー、名前は聞いてなかったよな？　俺はヒロだ」
「……ウェイドだ」

握手のために手を差し出したが、スルーされた。お前ぇ……こっちが大人の対応をしてるってのに。まぁここで怒っても仕方がないし、喧嘩をしたところで得るものは何もない。

「ＯＫＯＫ……あー、飲み物は？　水とか？」
「要らねぇよ」
若い傭兵改めウェイドがギロリとこちらを睨みつけてくる。これは駄目そうですね。まぁ本人が構うなというなら構うことはないだろう。クリシュナの整備と補給はもう終わっているし、次の戦闘までは特にやることもない。
「じゃあ俺は船で休んでるから、何かあったらここで働いているドワーフの整備士姉妹経由で伝えてくれ」
「……」
彼の態度の悪さは一体何なんだろうか？　嫉妬か？　まぁ俺は彼よりも戦果を上げてるし、デカい母艦も持ってるし、ミミとエルマとメイがいるからな。嫉妬する気持ちもわからんでもないな！
ハハハッ！　別に俺はイラついてない、イラついてないぞ。うん。
無理矢理にこやかな笑みを浮かべながらコックピットに戻ると、ある程度復活したミミとエルマがぼーっと何かの情報が表示されているらしいモニターを眺めていた。
「何見てるんだ？」
「さっきの戦闘の統合データよ。やったわね、この船がトップエースよ」
「凄いです、ヒロ様！」
「ははは、そうだろうそうだろう。もっと褒めてくれ」
二人に褒められるとさっきまでのイラつきがスッと消えていった。考えてみればあの若い傭兵の妬み嫉みに付き合って俺が心を乱す必要は何もないな。殴りかかってくるなら殴り返すけど。

「どうしたの？」

ささくれだっている俺の感情が伝わったのか、エルマが首を傾げる。普段もっと褒めろとかあまり言わないからな。そこから察せられたか？

「船の修理に来た若い傭兵にちょっと邪険にされただけだ。気にするな」

そう言いながらパイロットシートに腰掛けて俺も先程の戦闘の統合データを参照する。撃破数は１５３匹か。

「炸裂距離をエルマに調整してもらった魚雷が効いたな」

「そうですね、アレで敵がごっそり減りましたもんね」

「無駄に謙遜するつもりはないけど、そもそもヒロの提案だからね。それに、引き撃ちして群れを引き付けながら回避もするっていう離れ業あってのことだから、私の手柄というよりはヒロの手柄でしょ。私はあんな変態機動できないわよ」

「変態機動じゃないぞ。頑張って練習すれば誰でもできるぞ」

「はいはい」

俺の主張は雑に流された。なんでや。頑張って練習すればできるって。レーダーを見て敵の動きを予測してその軌道から外すように機体を動かすだけだからやれるやれる。最初は弾速の遅い低ランクシーカーミサイルで練習すると良いぞ。

「これからのスケジュールなんですが、暫くの間ここに留まって休息と修理、そして迎撃を行うみたいです」

「迎撃？」

「はい。この星系もハイパーレーンが四方向に伸びているハブ星系

なので、ここで修理と休息をしながら結晶生命体がどこから来るのか、この星系に他に潜んでいないかを調査するそうで。ついでに過去の調査船団の痕跡も探すみたいですね」
「なるほど」
「あと、今回みたいな待ち伏せがあった場合に備えて戦力分散を取りやめるそうです。今後は二艦隊で固まって行動するということになるみたいですね」
「なるほど」

今回はハイパーレーンの移動時間が短かったから間に合ったが、これが数時間かかる距離だったら第二偵察艦隊はもっと大きな被害を受けていたかもしれない。それならそれで俺はもっと撃破スコアを稼げたと思うが、ブラックロータスが危険に晒される可能性も高くなっていただろう。

「戦力の分散と逐次投入はやめたほうがいいってのは基本中の基本のような気もするんだけどな」
「一つにまとめて動かすと思いもよらない大戦力に一気に殲滅される恐れもあるから、どうかしらね。今回の作戦目標はあくまでも偵察なわけだし、情報を確実に持ち帰ることができるように先行部隊と後方部隊に分けて運用するのも間違いではないと思うけど」
「そんな危機的状況なら少数の船を逃すために他の船で足止めするって方法もあるしなぁ……確実に情報を持ち帰らせるってことなら、そっちの手でも良くないか？」
「でも、その場合だと情報を持ち帰るごく少数の船以外は全滅するじゃない？　二手に分けて先行部隊だけが全滅したほうが残存戦力は多くなるわよ。戦力を二手に分けても少数の船を退避させるくらいの時間は稼げるでしょうしね」
「今回みたいに二艦隊でかかれば被害を出すこともないような相手に戦力を削られるリスクが上がるけど……まぁ、判断は難しいな。

ともあれ、軍の方でそう決めたなら俺達は従うまでだ」
「そうね」
と、丁度エルマと戦術の論じ合いが終わったところで通信が入ってきた。ミミがコンソールを操作して通信回線を開く。
「はい、こちらクリシュナ。はい、はい。少々お待ち下さい……ヒロ様」
「ん？　どうした？　誰からだ？」
「セレナ少佐からです。モニターに出します」
「おう」
セレナ少佐から通信？　何の用だろうか。内心首を傾げるが、それを表に出すわけにもいかない。
程なくしてコックピットのメインモニターにセレナ少佐の姿が映し出された。いつも通りのピシッと着込んだ白い軍服姿だ。
「まずはトップエースの獲得おめでとう。思ったより消耗はしていないようですね」
「それはどうも。消耗具合についてはそっちもまだまだ大丈夫そうだな」
「ええ、これくらいではへこたれませんとも」
「流石は帝国航宙軍の精鋭。で、何の御用で？」
早速本題に切り込んでいくことにする。何気ない話から変な言質を取られるのも怖いからな。
「せっかちですね、貴方らしいですけど。別に警戒されるような話ではないですよ」
「そうだと良いけどな。それで？」

「二十四時間の休息を設ける予定なので、銀剣翼突撃勲章のトップエースに食事を振る舞おうかと」
「食事ねぇ……うちのより美味いとは思えんが」
「そこは目を瞑ってください。お酒も出しますよ」
「俺が下戸だって知ってるよな？」

ヒール一缶でベロンベロンになっちゃうくらい俺は酒に弱いんだ。酒を出すとか言われても何の魅力も感じないわ。

「まぁ、トップエースに対する優遇というか、ご褒美みたいなものだと思ってください。レスタリアスで出せる一番良いメニューですよ」
「食い物と酒よりも金の方が良いんだが……」
「勿論それも出しますよ。士気を維持するために信賞必罰は必要なことですからね」

セレナ少佐がにこにことした笑みを浮かべる。なるほど。

「それでトップエースの俺がどんな良い待遇を受けて、どれだけボーナスを貰ったかを広めるわけか？　それだと俺が羨望だけでなく嫉妬も独り占めすることになりそうなんだが？」
「言わせておけば良いではないですか。貴方はそれに見合うだけの揺るぎない戦果を上げているのですから。実のところ、これで貴方にちゃんとボーナスなり優遇なりを与えないと我々帝国航宙軍の度量と言いますか、器が疑われるのですよ。銀河に名を馳せる帝国航宙軍は大戦果を上げたトップエースに報いることもしない、と噂になると困るわけです」
「つまり、拒否権はないと」
「そこまでは言いませんが、できれば受けていただきたいですね」

笑顔を崩さないセレナ少佐の顔を見て溜息を吐き、チラリと隣のサブパイロットシートに座るエルマに視線を向ける。

「仕方ないと思うわ」

次いでミミにも視線を向ける。

「帝国航宙軍の一番良いメニュー、食べてみたいです」

「さよか……」

ミミはブレないな。でも確かに帝国航宙軍の一番良いメニューってやつには俺も少し興味がある。

「わかった、その申し出を受ける。いつそっちに向かえばいい？」

「それは良かった。では一時間半後にレスタリアスの格納庫に来てください。こちらに来られるのは貴方達だけですか？」

「メイにはブラックロータスに残って貰う必要があるし、出向してきてる整備士は傭兵の船のメンテナンスに大忙しだからな。行くのは俺達三人だけだ」

「わかりました、では一時間半後に。ああ、ちゃんと勲章はつけてきてくださいね」

そう言ってセレナ少佐が通信を切った。静かになったコックピットに俺の溜息が響く。

「順調に取り込まれてないか？」

「取り込まれてるってほどではないと思うけど……まぁ、傭兵をやっていくならどうしても軍とは関わることになるから。いざという時のコネ作りだと思えば良いわよ」

「そんなもんか……まぁ、出てくる料理に期待しよう」

「はいっ！」
「そうね。お酒もね」
ミミとエルマは楽しむ気満々だな。俺はお偉いさんに呼ばれて会食とか面倒臭さしか感じないんだけど……と、俺はもう一度溜息を吐くのだった。

#156　レスタリアスへ（前書き）

遅れました―（∵3」∠）―

#156　レスタリアスへ

「行ってらっしゃいませ。こちらの管理はお任せください」
「うぅ……酒ぇ……うちも行きたいぃ……」
「お姉ちゃん……あの、ちゃんとお仕事はさせておきますから」

三者三様の見送りの言葉をかけられながら俺達は第二偵察艦隊の旗艦、レスタリアスへと向かった。
メイとティーナ、ウィスカの三人しか残っていない船に荒くれ者の傭兵を招き入れることに若干の不安を感じ……いやあの三人なら大丈夫か。そもそもメイと生身でやりあえる人間などそう存在しないだろうし、ティーナとウィスカはああ見えて俺より腕力あるしな。何の問題もねぇわ。むしろ生身での強さを考えるとミミの次に俺が貧弱だったわ。
そんな益体もない事を考えながらクリシュナを宇宙空間に走らせる。周辺の様子はなかなかに壮観だ。帝国航宙軍の船はもちろんのこと、傭兵の船も多数この宙域に停泊しているのだが、やはり傭兵の船というのは一つとして同じものがないのが面白い。
いや、厳密に言えばベースが同じ船であるものはあるのだが、カスタマイズやペイントによって一つ一つの船に個性が出ているのだ。中には元の機体が何なのかわからないくらいカスタマイズされているものもあるし、棘のような意味不明の突起をつけていたり、空でも飛ぶつもりなのかと言いたくなる翼めいたスタビライザーをつけていたりする機体などもある。
中にはベース機からあまり改造されていない機体もある。まぁ、この辺りは個人の趣味だからな……ちなみに俺は必要があれば艦の外観を大きく変えることも厭わない派だ。クリシュナに乗り換える前の愛機は結果的にベース機体の面影が無くなるくらい改造してた

な。無駄なスタビライザーとかはつけてなかったけど。
俺の友人にはやたらとスパイク系スタビライザーをつけて世紀末なヒャッハー仕様にしたがるやつとか、やたらとファンシーな外観にしたがる奴とかも居たな。いくら世紀末ヒャッハー仕様と言っても姿勢制御スラスターも含めて火炎放射器かよってレベルの火を噴くようにしてたのはどうかと思う。でもその噴き出す火のせいでどれくらいスラスターを噴かしたのか微妙にわかりにくくなってて実用性がゼロでは無かったのが……いや、今は考えるのをやめておこう。

「あの船かっこいいですね……」
「えぇ……」
「えぇ……」

ミミが目をキラキラさせながら見ている船を確認して俺とエルマが同時にドン引きする。いやだって、無駄なスパイクとかビス風の装飾がてんこ盛りで、艦首にドクロの装飾とか……ミミってそういうの好きだよな。ミミにクリシュナの外観カスタマイズを任せたらあんな感じになるんだろうか。

「私はもっとこう、シュッとしたシャープで瀟洒なデザインのが良いわ」
「内装には拘らないのにか」
「次からは内装にも凝るわよ……」

エルマが所有していた船は確かに外観は綺麗だったよなぁ。内装は本人の謎の拘りで敢えて粗雑な感じで仕上げてたらしいけど。形から入るタイプなんだろうな、エルマは。
ああだこうだと宇宙空間に停泊している傭兵の船について話し合いながら船を走らせること数分でレスタリアスへと到着する。

実はレスタリアスへと向かう途中であらゆる方向からスキャンを受けていた。全船停泊している中、特に損傷しているわけでもない船が旗艦に向かって走っていたら何事かと思うのは当たり前だろう。クリシュナは珍しい船でもあるしな。別にスキャンされて困るようなことはないから放置したけど。

ミミがレスタリアスに着艦許可申請を送り、すぐに許可が降りる。指定された時間より少し早いが、通達は既に回っていたのだろう。すぐにレスタリアスの着艦ハッチへと船を走らせ、オートドッキングプログラムを起動させてスムーズに着艦を行う。またなんか隣で「こんなの邪道よ」という呟きが聞こえたが、無視しておく。相変わらずエルマはマニュアルドッキング至上主義者であるらしい。

「はい到着。さっさと行くか」
「はいっ！」
「……そうね」

ミミは帝国航宙軍の『一番良いメニュー』が楽しみなのか満面の笑みを浮かべていたが、エルマはオートドッキングのせいなのか何なのか微妙にテンションが低かった。そろそろ便利さを認めろよ、お前は。

ジャケットにつけてある銀剣翼突撃勲章を確認し、シートに長短一対の剣ごと固定してあった剣帯を腰に帯びて先頭を歩き始める。銀剣翼突撃勲章を受勲してからというもの、メイに言われてレーザーガンだけでなく剣を帯びるようにと言われているのだ。やたらと目立つから俺としてはちょっと嫌なのだが、銀剣翼突撃勲章を受勲した者は帝国の法的にも慣習的にも騎士爵と同等の扱いを受けるということで、余計なトラブルを避けるためにこうして剣を帯びていた方が良いらしい。

メイの言うことだしエルマも特に何も言わなかったら従っているけど、白刃主義者とかいう怖い貴族連中に因縁つけられて決闘とか

申し込まれたりはしないかと内申気が気ではなかったりする。
当然俺には剣の心得なんてものはないので、剣術を嗜んでいる本物の貴族なんかに剣での決闘なんか申し込まれたらズンバラリとされることは確定的に明らかだろう。早いうちにメイから剣のレッスンを受けるべきだろうな……というかこの勲章と剣を置いて出歩けば良いのでは？　と思うのだが。
腰の剣の重さを鬱陶しく感じながらクリシュナから降りると、そこには案内役の兵士が待ち構えていた。

「ようこそ、レスタリアスへ。ご案内いたします」
「どうも、よろしくお願いします」

互いに敬礼を交わし、彼の案内に従ってレスタリアスの艦内を歩き始める。
まぁ、ある意味では勝手知ったる他人の家みたいなもんだ。アレイン星系でセレナ少佐の艦隊に宙賊との戦い方を伝授した時によく歩き回っていたからな。

「……皆さん忙しそうですね」
「戦闘の後だからな。後処理とか色々あるんだろうな」
「良いんでしょうか？　そんな中で食事会なんて」
「この食事会も戦闘の後処理の一環に含まれているのよ。トップエースにちゃんと報いましたよ、ってポーズが必要なわけ」
「なるほど……」

と、そんな話をしながら暫く歩いて向かった先は上級士官用の食堂であった。この戦艦レスタリアス内でも艦長のセレナ少佐をはじめとした艦の上位者数人専用の食堂であるらしい。

「もっとも、普段はあまり使われていないのですが」

セレナ少佐も他の利用資格を持っている人々もやたらと豪華であるという上級士官用の食堂を使うことは稀であるらしい。食事の時にちょっとしたミーティングなどを兼ねることも多いレスタリアスでは豪華だがあまり人数が入らない上級士官食堂は使い勝手が悪いと。なるほどなぁ。

「だったら最初からつけなきゃいいのに」
「そういうわけにも行かないのよ。セレナ少佐はあまり利用しないみたいだけど、そういうのが好きな帝国貴族もいるから」
「あー、正に貴族貴族してる感じのやつもいるのね」
「そういうこと。そういう人の要求に応えるためにこういう旗艦になるような大型艦には豪華な上級士官食堂が標準搭載されてるわけ。セレナ少佐は上級士官食堂をあまり利用しないかもしれないけど、次の艦長もそうだとは限らないからね」
「なるほどー」

どこから仕入れてきているのかわからないエルマの謎知識にミミと二人で感心しながら上級士官食堂に入り、案内されて席に着く。少し早く来すぎたのか、まだセレナ少佐の姿はなかった。

「なんだか調度品もテーブルも見るからに高そうですね」
「高級レストランみたいだな。ところで俺はこういう席での食事のマナーとか全く自信がないんだが。カトラリーの使い方なんてよく知らんぞ」

なんか外側から使うんだっけ？　くらいの知識しか持ち合わせていない。正直、普通に日本で生活しててカトラリーの使い方に熟達するようなことは一般市民には有り得ないからな。俺にとって外食ってのは牛丼とかうどんとかラーメンとかファミレスとかステーキ

ハウスとか、精々回転寿司くらいかだったし。優雅にフレンチとかイタリアンとか食うようなことは無かった。

「別に帝国貴族の正式な会食ってわけじゃあるまいし、そこまでマナーをうるさくは言わないわよ。手掴みで食べるとか、皿を舐めるとか常識外の行動を取らなければ問題ないわ」

「流石にそれはやらんけども」

「ですよね」

ミミも苦笑している。野生児じゃあるまいし。

「傭兵にも色々いるからね。その点ヒロはかなりお上品な部類よ。酒やドラッグやるわけでもなし、博打に金を注ぎ込むわけでもなし、娼館に通い詰めるわけでもなし。一般的な傭兵から見るとお上品過ぎるか、ストイックを気取ってると思われるかのどっちかね」

「別にお上品なつもりもストイックなつもりも無いけどなぁ」

そもそもミミとエルマとメイを取っ替え引っ替えしてる時点でお上品もストイックも何もないと思う。酒は下戸で飲めないだけだし、ドラッグもギャンブルも興味がないだけだしな。

「ヒロ様は今のままが一番良いと思います。素敵です」

「ま、そうね。ヒロが酒とドラッグに溺れて身を持ち崩す姿は見たくないわね」

「心配する必要はないから安心してくれ」

「そう願いたいですね。銀剣翼突撃勲章の英雄にそんな姿を晒されては我々の権威が失墜しますから」

そう言いながらセレナ少佐が食堂に入ってくる。絶妙なタイミングだったけど、外で聞き耳でも立てていたのだろうか？　いや、こ

の部屋の会話をモニターしてたのかな。

「どうも、少佐殿。この度はお招きいただき恐悦至極にございます」

席を立ち、胸に手を当てて仰々しくお辞儀をしてみせるとセレナ少佐は苦笑いを浮かべた。俺が席を立つのに合わせてミミとエルマも席を立っている。

「貴方にそのような態度を取られると背中が痒くなりそうです。そんなに仰々しい席にするつもりはないので、気楽にしてください」

「そりゃどうも」

と、セレナ少佐に続いて三人の人物が上級士官食堂に入ってくる。入ってきたうちの一人はセレナ少佐の副官であるロビットソン大尉で、後の二人は初顔であった。

一人はガタイの良い中年の男で、もう一人はセレナ少佐と同じくらいの歳の女性だ。ガタイの良い中年の男の腰には一振りの剣が差されており、彼が帝国貴族であるということが察せられる。

「私はウィルバート・ブロードウェル大佐だ。第一偵察艦隊を率いている」

「セシル・プラント大尉です。ブロードウェル閣下の副官を務めております」

「クリシュナとブラックロータスのオーナー兼キャプテンのヒロです。こちらはサブパイロットのエルマとオペレーターのミミです。どうぞよろしく」

第一偵察艦隊のトップとその副官か。何故この場に、と思わないでも無いが先程の戦闘には第一偵察艦隊も駆けつけたし、そんなに不自然でもないのか。

「立ち話もなんですからまずは席に着いて乾杯をしましょう」

セレナ少佐に促されて全員席に着く。さて、どんな会食になるのやら。

#156　レスタリアスへ（後書き）

原稿作業に火が付きそうなのでちょっとまたお休みをいただきます！　最長2週間くらい！
ゆるしてね！ ―（：3」∠）―

#157　会食と変な人（前書き）

遅れました（、　。ω　。、）

#157　会食と変な人

「では、勝利に乾杯」
『乾杯』

階級が一番上のブロードウェル大佐が音頭を取り、ディナーが開始される。
帝国航宙軍で一番良いメニューと聞いてどんな物が出るのかと期待していたのだが、メニューそのものは別に目新しいものではなかった。ナポリタンめいたパスタとステーキプレート、それにマグカップに入ったコンソメスープのようなものである。
内心「これが一番良いメニューか？」と首を傾げながらまずはステーキをナイフとフォークで切り分け、口に運んだ。
肉質は少々固めだが、噛めば噛むほどに肉汁が口の中に溢れ出てくるステーキだ。付け合せのフライドガーリックは香ばしいし、一緒にプレートで焼かれていたスライスオニオンも程よい火の通り具合で――うん？

「本物の肉と野菜を使っているのか……」

セレナ少佐が一番良いメニューと言っていた意味を理解して唸る。同じようなメニューをフードカートリッジを使う自動調理器で再現することは可能だが、やはり本物は違う。
横で同じくステーキを口に運んでいるミミを見てみると、目をキラキラさせながら美味しそうにステーキを食べていた。

「ふむ、銀剣翼突撃勲章の英雄殿は美食家の側面も持っているのか。意外だな」

「別に美食家と言うほどのものではないですよ。本物の肉をそれなりに口にする機会があるのと、あと食べるのが好きなクルーがいますので」
「ヒ、ヒロ様……」
そう言って俺は隣に座るミミに目を向ける。視線が集まった当の本人は恥ずかしそうにしているが、俺は美味しそうにものを食べるミミが好きだよ。見てて元気になるからな。
「ふむ……」
俺の返答とミミの反応を見ながらブロードウェル大佐が興味深げな様子を見せる。一体なんだろうか？　言いたいことがあるならはっきりと言ってほしいものだ。
「行動再開の目処は立っているんですか？」
「勿論だ。損傷した艦船の応急修理に十二時間、休息十二時間を取って二十四時間後には作戦行動を再開する予定だ。今は無事な艦艇に星系内の調査をさせている」
「なるほど。奴らの手がかりが何かあれば良いんですがね」
ブロードウェル大佐にそう言いながらＳＯＬにおける結晶生命体関連のクエストラインを思い出す。襲撃イベント、撃退イベント、調査イベントを経て本拠地攻撃イベントという流れになっていたはずだ。今の段階は調査イベントに属する部分だろう。調査に関しては傭兵の俺はほぼノータッチだったからうろ覚えなんだよなぁ。そういうのは未発見星系や惑星上の調査を行う探検家プレイをしているプレイヤーが頑張ってたし。
「なんというか君は……あまり傭兵らしくないな。まるで同じ軍人

や貴族とでも話しているかのように思えてくる」
「私もブロードウェル閣下の言うことがよくわかります。傭兵という立場の割には妙に上品というか、擦れた感じがしないというか」
セレナ少佐の副官であるロビットソン大尉がナイフでステーキを切り分けながら頷く。俺のこの対応で上品に見えるって、一般的な傭兵はどれだけ粗野な振る舞いをしているんだよ。
「自分ではよくわかりませんが……」
「ご婦人方は私達よりもそう思っているのではないですか？」
「そうね。船員の快適度を確保するために船の内装を高級客船のキャビン並みにしていたりするし、私達の扱いに関しても実に紳士的だと思うわ」
ブロードウェル大佐の副官であるプラント大尉の言葉にエルマが頷き、ミミも無言でコクコクと頷いている。
えぇ……？　紳士的っつっても二人にはしっかりと手を出してるし、紳士的な部分というのが俺から見ると欠片も見当たらないのだが？
というか、二人ともそんな風に思ってたのか？　本当に？
「なんだかこの場の全員に嵌められている気分だ……俺のことなんて横に置いておかないか？」
「本人がそう言うなら仕方がないな。では、個人的に聞きたいことを聞いても良いかね？」
「答えられることなら答えますが」
なんだなんだ？　尋問タイムか？　向こう側のセレナ少佐はともかくとして、ミミとエルマは俺を助けてくれまいか？

「君の乗っている船――クリシュナと言ったか。あの船はどこで手に入れたのかね？　私はこれでも船に関してはそこそこ詳しい方なのだが、あのような船は見たことも聞いたこともない。傭兵の乗る船は改造に改造を重ねて原形を失っているようなものも多いが、あの船は設計思想からして別次元のもののように見える」

一球目から剛速球が飛んできたな。

「すみませんが、それに関しては言えません。あの船を譲り受ける際に出処を誰にも話さないという約束をしたもので。譲ってくれた相手も今はどこにいるかわかりませんしね」
「ふむ……では、後で見せてもらうことはできるかね？」
「ええ……見るだけなら」
「そうか、では食事が終わったら是非見学させてもらうとしよう」

ブロードウェル大佐が満足そうに頷く。この笑顔が額面通りのものなら良いんだが、まさかクリシュナを自分のものにしようとしているわけじゃないだろうな？　懸念を表明するためにセレナ少佐に視線を送る。

「心配要りません。帝国航宙軍の軍人が傭兵から船を奪うことなどありえませんから」
「む？　私はそのような事を考えたわけではないぞ？」
「ブロードウェル大佐が大の小型戦闘艦好きで、傭兵マニアだということは私達の間では有名ですが傭兵の間でも知れ渡っているというわけではありません。ましてや、ブロードウェル大佐はブロードウェル伯爵家のご嫡男――貴族なのですから、事情を知らぬヒロ殿が警戒するのは当然かと」

ムッとした表情をするブロードウェル大佐にセレナ少佐が苦笑交

じりに自分の発言の意図を説明する。その説明を聞いたブロードウェル大佐はバツが悪そうに頭を掻いた。

「それは確かに私の配慮が足りなかったな。ヒロ殿、私の申し出は本当に単純な知的好奇心からのものなので、警戒は不要だ。あと、見学の際にできればクルーのご婦人二人も交えて一緒にホロ写真を撮ってくれないか？　将来有望な傭兵とその船をバックにホロ写真を撮ってコレクションをしているのだよ」

「え、えぇ。まぁ、それくらいなら……いいよな？」

ブロードウェル大佐の必死さに釣られてつい了承してしまった。ミミとエルマも面食らいながらも頷いたので、この食事会の後はクリシュナの見学と撮影会ということに決まった。

どうしてこうなった？

☆★☆

会食はあの後も和やかに進み、特別褒賞金として１００万エネルを賜ることになった。その後の見学＆撮影会については特に何事もなく終わったと言って良いだろう。良いよな？

「フレームが大胆に変形して大型散弾砲が出てくるのか……！」

「このウェポンシステムは画期的だが、今までに見たことがないな」

「姿勢制御スラスターの数が多いな。強力なジェネレーターを積むことによって問題なく運用して運動性を高めているのだろうが、この辺りはかなり力技だな……実験機か？」

などとブツブツ呟きながらホロカメラを抱えた大の男がクリシュナの周りを走り回ってカシャカシャと写真を撮っているというのは正直ちょっと異様な感じがした。わざわざ格納庫を低重力状態にし

て上面からも写真を撮ってたし……ブロードウェル大佐はかなり気合の入った小型戦闘艦マニアだったようだ。
最後にはクリシュナをバックに俺とミミとエルマが並んだホロ写真を撮り、更にそこに自分が加わったホロ写真まで撮っていた。

「いやぁ、いい画が取れた。感謝する」

厳つい大男が全てをやりきったと言わんばかりの良い笑顔を浮かべているのが印象的だったな。

「……変な人でしたね」
「シッ、口に出して言ってはいけません」
「あんたのその反応も失礼だと思うわよ……」

軍人にも変な人がいるのだな、ということを思い知らされる会食であった。

#158　俺は悪くない

会食を終えた俺達は小休止と補給を経て星系内の巡回に出ることになった。無事な小型戦闘艦を斥候代わりに使うというわけだ。まぁ、レーダーをミミとエルマに監視して貰いながら適当に船を走らせるだけなので、俺としては楽な仕事である。その監視作業も結晶生命体の兆候や、その他特異な反応を察知したらアラームを鳴らすようにしておけばそんなにガッツリと見ている必要もない。

「長閑ですねー」

「結晶生命体が現れたら一気に地獄の戦場と化すけどね」

「うっ……そう思うと長閑でもなんでもないですね」

ミミとエルマが暢気な会話をしているのを聞きながら船を走らせる。まぁ、俺達よりも先に巡回と調査を行っている傭兵や帝国航宙軍所属の小型艦――スカウトと呼ばれる情報収集艦――もいるので、俺達は単なる賑やかしだ。

「まぁ、休憩みたいなもんだよな。他にも沢山の船が偵察に出てるのに、俺達の船が結晶生命体を見つけるわけもないし」

「ヒロ……どうしてあなたはそういうことを言うの？」

「ヒロ様……自分でフラグを立てていくのはどうかと思います」

「ちょっと？　俺がこういうこと言ったら本当に見つけちゃうみたいな流れに強引に持っていくのやめない？」

こういう流れで見つけちゃうとかそんな感じの出来事はそりゃ何回か……何回かあったけど！　流石にそうそう何度も同じような展開なんて起こるわけがないじゃないか。そもそも、情報収集艦が見

逃した痕跡をさして情報収集能力が高いわけでもないクリシュナが見つけるわけないだろ。

「ヒロがそんなことを言い始めたから今にもアラームが鳴るんじゃないかと戦々恐々としているんだけど」

「ははは、まさかそんな」

「でも、これまでの経験からすると――」

と、ミミが何かを言いかけた所でコックピット内に電子音が鳴り響いた。俺達の間に緊張感が走る。アラームではない。通信の着信音だ。

「えっと……いや、違うから。そんな目で見るな！」

「良いから早く出なさいよ」

ジト目を向けてくるエルマの視線から逃れるように俺は正面を向き、コンソールを操作する。すると、コックピットのメインモニターの隅にメイの顔が映し出された。

『ご主人様、帝国航宙軍のスカウトが何者かがこの星系へとワープアウトしてくる兆候を確認いたしました。至急集結地点へと移動するようにと星系内の全艦に通達が出されております。座標を送信致しますので、ご確認ください』

「ブラックロータスも向かうんだな？」

『はい、我々も帝国航宙軍艦隊と共に移動を開始します。あちらで合流いたしましょう』

「了解。じゃあ、あっちでな」

メイが画面の向こうでお辞儀をしてから通信を切る。

「……この船が見つけたわけじゃないからセーフ」
「いやアウトでしょ」
「アウトだと思います。タイミング的に」
俺の船のクルーは少し俺に厳しすぎると思う。
☆★☆
集結地点は星系の中心にある恒星を挟んだ反対側だったので、俺達が到着する頃には星系内に存在する殆ど全ての艦艇が集結を完了していた。
「ワープアウトしてきた瞬間袋叩きにする気満々だな」
「来ることがわかってるならこうするわよね」
戦艦や巡洋艦、それにブラックロータスのような長距離砲撃を行える艦船がワープアウト予測座標を半包囲している。俺の言った通り、結晶生命体がワープアウトしてきた瞬間に全力砲撃を行うつもりなのだろう。
「俺達のポジションは？」
「先頭に配置されている防空駆逐艦の陰です。砲撃が終わり次第、飛び出して防空戦闘を行うようにとのことです」
「了解」
「また結晶生命体の群れに飛び込むのね……」
「必要があればな」
飛び込む隙間があればそうするが、飛び込んでも抵抗の余地なく押し潰されるような状況でそんなことをするつもりはない。結晶生命体が万遍なく空間に存在する状態で突っ込むと、全方位から押し

寄せてきて潰されるからな。適当に突っ込んでいるように見えるかも知れないが、単騎駆けをするにはあれで意外と見極めというものが必要なのだ。素人にはおすすめできない。

「ワープアウト予想時刻は？」
「二分三十秒を切りました」
「もうすぐか。ウェポンシステム起動、各部チェック開始」
「アイアイサー、各部チェック開始」

俺がウェポンシステムを立ち上げ、エルマがサブシステムのチェックを開始する。整備も補給も完璧に終わっているから問題ない筈だが、万が一ということがあるからな。
そうやってチェックを済ませている間にワープアウトの刻限が来る。

『全艦砲撃用意、砲撃座標――っ！？　砲撃中止！　中止だ！』

指揮を執っていたブロードウェル大佐の慌てた声が通信越しに聞こえてくる。一体何事かと思っているうちにそれはワープアウトしてきた。ワープアウトしてきたのは装甲の一部が破損し、結晶に侵食されてしまっているボロボロの中型戦闘艦だった。恐らく傭兵のものだろう。
その後にも続々とボロボロで結晶塗れの船がワープアウトしてくる。殆どが傭兵の船だが、やがて帝国航宙軍の艦船もワープアウトしてきた。こちらは傭兵の船と思しきものよりも更に酷い状態だ。
『スカウト各機は通達に従って情報収集を引き続き行うように。その他の艦船は一度恒星まで退き、体勢を立て直す。全艦転進！』
ブロードウェル大佐の号令に従って恒星に向かって回頭し、転進

を始める。
「手前で分かれた第三、第四偵察艦隊ですよね、あれ」
「だな。結晶生命体に負けて逃げてきたんだろうな、アレは」
「なりふり構わず逃げてきたって感じね」

分かれたときと比べて明らかに頭数が減っていたからな。
この辺りの星系は未探査領域だが、星系間のハイパーレーンの繋がりだけは亜空間レーダー等の観測技術を使ってある程度は把握されている。あの第三、第四偵察艦隊の生き残り達はそのデータを元に俺達が探索中であろう星系にあたりをつけて退避してきたのだろう。

「この後はどうなるんでしょうか？」
「そうだなー……第一、第二艦隊と第三、第四艦隊の戦力は計算上はほぼ同じのはずだから、第三、第四艦隊があれだけの被害を出したとなると、船の応急処置をして一回イズルークス星系に戻って再編成ってことになるんじゃないか？　その後に第三、第四艦隊が被害を受けた星系に突入して結晶生命体を叩く、という流れか或いは――」
「このまま撤退して放置かのどちらかね。下手に戦力を出して消耗するくらいなら、迎撃兵器群のあるイズルークス星系で待ち構えて迎撃をした方が被害は抑えられるわけだし」

俺の言葉を引き継いでそう言いながらエルマが肩を竦めてみせる。
「えぇ……そんなのアリなんですか？」

エルマの言葉を聞いてミミが眉間に皺を寄せた。彼女はなんだかんだで生粋のグラッカン帝国臣民である。困ったときに行政に助け

てもらえず見捨てられた経験からグラッカン帝国の政治に対しては若干の不信感を抱いているのだが、帝国の臣民を守る帝国航宙軍に対してはそれなりに敬意を抱いている節がある。それもまぁ、セレナ少佐と何度か接して若干揺らいでいるようだったが。

「ここまで被害を出しちゃうとねぇ……第一、第二艦隊が戦闘で出した被害は軽微だけど、第三、第四艦隊の被害はほぼ全滅だもの。目算だけど、三割程度が落伍して残りの七割も概ね中破って感じよね」

「そんな感じに見えるな。実質的な全滅判定を受けても仕方がない状態だと思う」

あの状態ではほとんど組織的な反撃はできないだろう。正に這々の体で逃げてきたって感じだ。

「えーと、じゃあお仕事は終わりですか？」

「一回イズルークス星系に戻ることになるだろうしなぁ……このまま探索続行ってことにはならないだろう。結晶生命体に関する情報はあのボロボロの連中が持ち帰ってきてるだろうし」

その後の対応は帝国航宙軍次第だろう。契約期間はまだ残っているが、打って出るということでなければ俺達のような傭兵を雇っていても経費がかかるばかりだ。そうなると契約は打ち切り、俺達は晴れて自由の身となる。

「問題は戻って再編成した後に打って出ることになった場合よね」

「ははは……そうなったら俺達は確実に攻撃部隊に組み入れられるだろうな」

クリシュナは結晶生命体相手に大立ち回りをして確かな戦果を上

げているし、ブラックロータスは砲艦としても補給艦としてもしっかりと活躍している筈だ。専門の優秀なエンジニアと充実した修理設備まで備えているしな。打って出るとしたら手放す理由がない。契約期間もたっぷり残ってるし。

「……解散になるといいですね」

「そうね」

「そうだな」

本当にそうなるといいなぁ、ははは。

#159　待機命令

撤退してきた第三、第四偵察艦隊を追って結晶生命体が現れるかと警戒していたが、結局そのような事態には陥らなかった。もしそうなったら傷ついた第三、第四偵察艦隊を逃がすために第一、第二偵察艦隊が遅滞戦闘を行う必要があっただろうから、場合によっては厳しい戦闘を強いられることになっていたかもしれない。

ともあれ、傷ついた第三、第四偵察艦隊の艦艇に応急修理を施さなければ撤退もままならないので、クリシュナは暫くの間ブラックロータスのハンガーを他の船に譲ることになった。

ブラックロータスのハンガーに駐機できるのは小型艦二隻までなので、クリシュナがブラックロータス内で待機すると整備ができるハンガーを一つ塞ぐことなるからだ。

「落ち着きなさいよ」

「何がだ？」

「心配そうな顔をしていますよ、ヒロ様」

「……ぬぅ」

結晶生命体に殺されかけて気が立っている傭兵達にティーナとウィスカが何かされないか少しだけ心配なだけだ。何かあっても大丈夫なようにメイにはくれぐれも注意するように言っておいたから大丈夫だとは思うが……万が一ということもある。

もしあの二人とメイに――メイは絶対に大丈夫だと思うが――何かあったら、ブラックロータスから出てきた瞬間に俺がこの手でスペースデブリにしてやる。絶対にだ。

「そんなに心配しなくても大丈夫よ……ヒロが思っている以上にこ

こにいる傭兵達はヒロのことを恐れているから」
「なんで？」
恐れられる理由がまったく思いつかないんだが。
「今、この作戦に参加している傭兵達からのヒロへの評価は『結晶生命体の群れに単身突っ込んで無事に戻ってくるクレイジー野郎』よ。受勲式でも銀剣翼突撃勲章を貰ったのに特段嬉しそうな様子を見せなかったらしいわね？」
「まぁ……別にはしゃいだりはしなかったな」
式典が死ぬほど面倒くさいと思っていたくらいか。ああ、戦場の俯瞰図を見るのは面白かったな。
「そういうのもあってか、金や名誉よりも危険とスリルを楽しむヤバい奴だって噂になってるわよ」
「何それ草生える」
大草原不可避というやつだ。危険とスリルより金や名誉の方が好きに決まってるだろう、常識的に考えて。悪いけど俺は別にバトルジャンキーとかじゃねぇから。
「というかそういう情報ってどこで仕入れるんだ？」
「それは秘密」
エルマはニッコリと笑って情報の出処を明かすことを拒否した。何か傭兵同士が情報を交換する裏サイト的な何かがあるのだろうか？
「二人ともああ見えて結構力持ちですし、メンテナンスボットもいるから大丈夫ですよ。メイさんもついてますから」

「そうだと良いけどな」

こんな感じで破損船の応急処置が終わるまで俺はクリシュナの中で悶々とした時間を過ごすのであった。

なお、整備士姉妹やメイがトラブルに巻き込まれるということは一切なかった。むしろ、小さな身体でテキパキと手際よく船の修理と整備をこなす整備士姉妹を傭兵達はどこか微笑ましげな様子で眺めていたとメイが後で報告してくれた。

普段荒んだ生活を送っている反動か何かだろうか？　とりあえず俺はその絵面を思い浮かべて犯罪的だなと思うばかりであった。

☆★☆

「なんや、うちらのこと心配してくれたん？　なんだかんだ言って兄さんも優しいなぁ」

「お兄さん……」

応急修理が終わり、一旦イズルークス星系に撤退するということになった時点で俺達はブラックロータスへと戻り、今は整備士姉妹と一緒に休憩をとっていた。

「別にそういうわけじゃ……ないこともないけど」

ニヤけてくねくねしているティーナを見ているとつい否定したくなるが、ティーナだけでなくウィスカも揃って二人で嬉しそうにされてしまうとそれもできなくなってしまう。

「私の心配までしてくださるとは思いませんでした」

休憩室で俺達の給仕をしてくれているメイの表情もこころなしか穏やかに見える。いつもと同じ無表情なのだが、なんとなく雰囲気が柔らかいのだ。
ちなみに、彼女がこうして休憩室で給仕している間もブラックロータスは他の船と一緒にイズルークス星系に向かって正常に運行中である。どのようにしているのかはわからないが、遠隔操作のような形で艦を制御しているらしい。セキュリティ的に大丈夫なのか？
と思わないでもないが、メイが雑な仕事をするとも思えない。多分大丈夫だろう。

「結果的に何事もなくて良かった。うん」
「話をまとめようとしてるな」
「恥ずかしがらなくても良いのに」
「アーアーキコエナーイ。それよりも今後のことだよ」

ティーナとエルマがニヤニヤしているのを無視して話題を逸らす。これ以上からかわれたらたまらん。

「今後のことと言っても、イズルークス星系に戻って軍の判断を待つしか無いのでは？」
「ですよね」

ウィスカが首を傾げ、ミミが頷く。くっ、確かにそうだな。話題を逸らす先を間違えたか。いや、大丈夫だ。ここから更に話題を逸らすのだ。

「そっちじゃなくて、ティーナとウィスカの護衛のことだ。いくらドワーフで見た目より力が強いって言っても、限界があるだろう。今後、宙賊に接舷攻撃をかけられる可能性だってゼロとは言い切れない。護衛兼防衛用に戦闘ボットをある程度揃えたほうが良いんじ

ゃないかと思ってな」
「そこまでいるか？」
「でも、万が一ということもあるよね」
自分達の身の安全ということで、ティーナとウィスカが真面目に相談し始める。
「どういったタイプの戦闘ボットを用意するのですか？」
「現場に急行できる高機動タイプから制圧力の高い重装タイプまでバランス良くだな。殺さずに制圧する機能も欲しい」
「となると、攻撃型ではなく警備型ですね。御主人様のことですから、高性能機をお望みになられると思います」
「そうだな」
ティーナやウィスカ、それにメイの身の安全のために金をケチるつもりはない。本当はブラド星系で買い揃えても良かったのだが、あまり品揃えが良くなかったんだよな。他の装備は結構品揃えが良かったのに、アンドロイドや戦闘ボット系のショップは今ひとつだったんだ。ドワーフと相性が悪いのかね？　でもティーナとメイはメンテナンスボットを使うしなぁ。よくわからん。
「では結晶生命体関連の案件が片付いたら、そういった買い物に便利な星系に向かうのが良いでしょう。後でミミ様と行き先を検討しておきます」
「はい！　任せてください！」
ミミが両拳を握り締めてフンスと気合を入れる。次の目的地に関しては二人に任せて良さそうだな。
「そろそろクリシュナのチェックも終わっとるやろ、うちらはクリ

シュナの整備をしてくるわ」
「いってきますね、お兄さん。しっかり整備してきます」
整備士姉妹がそう言って手をふりふりと振ってから食堂を出ていく。ミミとメイは一緒になって次の目的地を決めているようだ。話に混ざっても良いんだが、決まってから聞こうかな。となると、やることがないな。
「船に戻るの？」
「そうだな。多分無いと思うが、スクランブルがかかることが絶対にないとも言えないし……」
俺も何かこういう待機時にできる仕事を作ったほうが良いかな。とは言ってもなぁ、情報収集や交易関連はミミに任せたし、メンテナンス関係はティーナとウィスカがいるし、その他のコアな情報に関してはエルマがどこかから拾ってくるし。
「別にそんな無理に働こうとしなくてもゆっくりすればいいじゃない。いざという時のために休むのも大事よ？　それに、あんたは船長なんだから細々としたことは部下に任せてドンと構えていれば良いのよ」
「そうですよ！　ヒロ様は働き過ぎです！」
「私もそう思います。私に気を遣ってくださる分をご主人様自身に向けて頂きたいです」
エルマとミミだけでなくメイにまで休めと言われてしまった。別に疲れてもいないし、そこまでワーカーホリックというわけではないと自分では思うんだが。どちらかというと貧乏性なんだろうと思う。何もせず漫然と時間を過ごすのが勿体なく感じるんだな。

「わかった。休憩スペースでボーッとしてるわ」
「そうなさい。パイロットは集中力が大事なんだから、頭を休ませるのも大事よ」
「へーい」

特にやることもないし、休憩スペースのソファで一眠りするのも良いかもしれない。そう考えながら俺は休憩スペースへと向かうのであった。

☆★☆

幸いなことに応急修理が終わってしまえばイズルークス星系への撤退そのものはスムーズに進んだ。結晶生命体に遭遇することもなく、無事に帰り着くことができた。

しかし、損傷した艦艇の本格的な修理や損害を被った第三、第四艦隊の再編成。それに持ち帰った情報の分析や、第三、第四偵察艦隊に被害を与えた結晶生命体の群れに対する攻撃を行うかどうかなどの検討をするために一週間ほどかかることになった。

その間、俺達傭兵はイズルークス星系の防衛に従事しながら待機せよという命令がお上から下った。まだまだ契約期間内なので、契約をこちらから解除しない限りはその命令には従わなければならない。

無論、こちらの都合で勝手に契約を解除するとなるとペナルティがある。契約不履行として多額の賠償金がかかるし、傭兵としても著しく評価を落とすことになるのだ。賠償金は払えなくもないし、別に評価なんてどうでも良いが、攻撃するかどうか決まっていない現時点で契約をこちらから解除してペナルティを食らうのは馬鹿のすることである。攻撃は断念、解散！　なんてことになったら目も当てられない。

そういうわけで、俺達は暫くの間イズルークス星系にて待機する

ことになるのだった。

#159　待機命令（後書き）

最強宇宙船のコミックスが出るよぉぉぉ！　Amazonにはもう登録されてるらしいよぉぉぉぉっ！　―（：3」∠）―

#160　フェアトレード

イズルークス星系での待機は非常に退屈なものであった。
まず、既存の依頼とは別枠でブラックロータスを利用した艦船の修理依頼が傭兵ギルド経由で指名依頼として出された。
ブラックロータスに二つ搭載されている小型艦ドックはスペース・ドウェルグ社製の最新式の高性能なものであり、小型艦の修理に限って言えば帝国航宙軍の前線基地の施設よりも性能が高い。
しかも、腕の良いプロのエンジニア二名と多数のメンテナンスボットまで擁しており、早急に戦力の回復を図りたい帝国航宙軍としては金を払ってでも利用したい存在であった。
修理に使用する資材は帝国航宙軍持ちで、依頼料は一日あたり１０万エネル。主に働くのは整備士姉妹なので、依頼料の三割――一日辺り3万エネルを姉妹に渡すと言ったら二人とも目を輝かせて依頼を請けることを快諾した。日本円換算で一人あたりの日給１５０万円と考えると飛びつくのもわかる気がする。
まぁ、そういうわけで前哨基地のドックを塞がないようにブラックロータスは臨時の修理拠点と化し、当然そんなブラックロータスのドックを塞ぐわけにもいかないので、機体に損傷がないクリシュナはブラックロータスにも前哨基地にも着艦できない。
つまり俺達は船を降りることもできず、安全な前哨基地周辺の空間に停泊して缶詰状態で待機中なのである。宙賊でもいれば狩りに行くところなのだが、帝国航宙軍の前哨基地しかないイズルークス星系に宙賊なんぞが出没するわけもなく、暇を持て余しているというわけだ。
やることもなく、暇を持て余すとなるとあとは艦内の三人で何かしらをやって暇を潰すしかなくなる。ホロ動画の鑑賞、タブレット端末を使った対戦型ゲーム、あとはまぁ……うん、色々だ。ベッド

の清掃機能とバスルームの使用頻度が上がったとだけ言っておく。
まぁそんな爛れた内容だけでなく、跳ねっ返りの傭兵に因縁をつけられて実機を使った模擬戦でボコボコにしてやったりもしたがそれはとりあえず置いておこう。
そんな日々を過ごして四日ほど経った頃、クリシュナに通信が入ってきた。

『なかなか派手に暴れているようね？』
「俺から手を出したわけじゃない。向こうから突っかかってきたからちょっと稽古をつけてやっただけだ」

コックピットのメインモニターの向こうではセレナ少佐がなんだか愉しげな笑みを浮かべていた。
模擬戦は帝国航宙軍の許可を取って行ったため、傭兵だけでなく帝国航宙軍の軍人達も大いに観戦していたのである。
前哨基地には娯楽が少ない。そんな中で傭兵同士の実機を用いた模擬戦というのは軍人さん達にとっても大層興味深いものであったらしい。最終的に俺のクリシュナ対シルバーランク傭兵艦五隻の模擬戦でも俺が圧勝し、賭けにならねぇよ！　と言われてしまった。俺は悪くねぇ。
まぁ、圧勝したとは言ってもシールドを破られて装甲に損傷を負った判定までは取られてしまった。最後の一機に自爆紛いのカミカゼアタックを食らったせいだが。
ナイスファイトだとは思うが、傭兵として自爆紛いのカミカゼアタックはどうかと思う。それで敵を倒しても１エネルにもならないじゃないか。まったく。

「それで？　何の用だ？」
『つれないわね。用が無いと通信も入れちゃだめなの？』
「そんなことはないが、酒盛りはお断りだぞ。面倒を見るのが大変

だから」
『くっ……とりあえず、これを見てくれるかしら？』
頬を引き攣らせながらセレナ少佐が動画ファイルらしきものを送ってくる。一応変なデータが紛れ込んでいないかチェックしてから動画ファイルを開くと、そこには眩く輝くパルサーと、大量の結晶生命体、そして結晶生命体に比べると明らかに巨大なイガグリのような巨大結晶が映っていた。
「おおう、見事なマザー・クリスタル」
『……知っているのね？』
神妙な声でセレナ少佐が聞いてくる。ウカツ！　俺は軽率な自分をぶん殴りたくなった。
「いやぁ、見るからにデカいしお母さんかなって」
『そう言えば、パルサー星系がどうのって言っていたわね』
「ぴゅ～、ひゅひゅ～♪」
『下手な口笛はいいから、知っていることを全部話しなさい。これは命令よ』
「ヒェッ……」
セレナ少佐が据わった目でこちらを睨みながら小便を漏らしそうなほど怖い声で命令してくる。
「前にもチラッと話したような気がするけど、あまり記憶がね？」
『それでも結晶生命体に関しては知っているのでしょう？　素直に吐きなさい。出所不明の風聞ってことにして情報源は明かさないであげるから』
「……」

セレナ少佐の発言を暫し黙考する。正直に言えば、帝国軍は勿論のことセレナ少佐個人にも『正体はわからないが使える知識を持っている』とロックオンされるのは御免だ。既に手遅れ感があるが、なんとか被害を最小限に抑えたい。

幸い、真偽がどうかはともかくとしてセレナ少佐は俺が情報源だとは明かさないと俺に一定の配慮をしてくれている。俺とクリシュナ、そしてブラックロータスが帝国内で暴れればそれなりに厄介なことになるのはセレナ少佐もわかっているだろうし、下手に関係を悪化させるよりは現状を維持してうまく利用したほうが良いと考えるかも知れない。

「……俺やクルーに手を出して何か強要しようとしたら暴れるし、どんな手段を使っても帝国から逃げるからな」

『脅迫するつもり？』

「身を守りたいだけだ。あと、それだけじゃなく俺の動画フォルダが火を噴くからな。ポンコツ可愛いセレナちゃんの癒やし動画、とかってタイトルであちこちの動画サイトにアップしまくってやるからな」

『わかった、わかったから。私は情報源を明かさないし、情報源を探ろうとしたら全力で妨害するわ。だから動画は消しなさい』

「今後は駆け引きに使わないと約束する」

消すとは言わない。証明する手段がないしな。それにいざという時の復讐手段を手放すつもりはない。

『くっ……まぁ良いわ、交渉成立ね。知っていることを洗いざらい話しなさい』

「ＯＫ」

俺はパルサー星系に生息する結晶生命体の親玉――マザー・クリスタルに関して知っている限りのことを全て話した。基本的にマザー・クリスタル自体に移動能力はなく、攻撃手段は無数の小型結晶生命体を放ってくるというものだけだ。放たれる小型結晶生命体はクラス1レーザー兵器に相当する光線攻撃と、突進攻撃で襲いかかってくる。シールド技術に相当する防御手段は持っていないため、光学兵器よりも実弾兵器や爆発兵器の方が効きは良い。無論、若干威力が落ちるだけで光学兵器も十分に効く。

それよりも厄介なのはマザー・クリスタルを守っているガーディアンクリスタルの群れで、中型結晶生命体を一回り強くしたような性能を誇る上に数が多い。近距離射撃戦能力に優れる上に、躊躇なく突進攻撃もかけてくるので、非常に厄介だ。

ただ、ガーディアンクリスタルの射撃は射程が短いので、アウトレンジでガンガン削れば良い。最高速度はそれなりに高いが、あまり小回りが利かない上にマザー・クリスタルにより近い敵を優先的に攻撃する習性があるので、足の早い小型船で引き付けて遠距離から大型船や中型船で叩けば割と楽に狩れる。

可能であればマザー・クリスタルからできるだけ遠い位置のハイパーレーン侵入口から星系内に突入し、小型船がマザー・クリスタルの放つ小型結晶生命体の群れとガーディアン・クリスタルの双方を相手にしなくても良いようにしたほうが良い。

今まで触れなかったが、何故か大型結晶生命体はマザー・クリスタルの存在する星系に配置されていない事が多い。もしかしたら大型結晶生命体はマザー・クリスタルから巣立った次代のマザー・クリスタルなのかもしれない。

「あとはマザー・クリスタルはとにかくタフだから、小型艦の攻撃だと反応弾頭魚雷くらいしかまともにダメージが通らない。中型艦、大型艦は可能であれば実体弾砲か反応弾頭ミサイルを装備したほうが良いな。レーザーも効かないわけじゃないけど。あと、マザー・

クリスタルの弱点は中央部の発光している場所だ。見ればわかるかもしれんが」

そう言って俺は画面に映るマザー・クリスタルの中心部をマークした。

「ただ、このトゲトゲが厄介でな。マザー・クリスタルは接近する投射物に正確無比に棘を立てるんだ。つまり、中心部から先端までの厚さの結晶の棘を可動式の装甲みたいに使うんだよ。だから、ガーディアンクリスタルを排除したら打撃担当の大型艦や中型艦はマザー・クリスタルを包囲して四方八方から弱点を狙って攻撃したほうが良い。一方向からの砲撃には思いの外タフに耐え忍ぶから」

『……随分と詳しいわね』

「討伐経験があるからな。いつ、どこで、って質問はナシだぞ。ただ、俺の情報が絶対だと思うのは危険だ。このマザー・クリスタルが俺の知っているマザー・クリスタルと同じ挙動をするとは限らないし、ガーディアンクリスタルが同じような性能であるとも限らない」

ＳＯＬで培った知識がこの世界の結晶生命体にそのまま当てはまるかどうかという確証は無いからな。今までの傾向から考えると、大外れではないと思うけど。ＳＯＬでオミットされていたと思われる情報は多いが、ＳＯＬに登場していたものに関してはこの世界においても齟齬が殆どない。

『貴方は自分の情報の確度がどれくらいと見積もっているの？』

「半々、とお茶を濁したいが九割方は間違いないと思う。そうでなければ俺は二回の突撃で結晶生命体の餌食になってる」

ある程度安全マージンは取っていたつもりだが、結晶生命体と追

いかけっこをした感じではＳＯＬと挙動は変わらなかった。攻撃の威力や攻撃頻度、弾速なんかも感覚的にはほぼ一緒だと感じている。耐久力なども殆ど差異を感じないので、マザー・クリスタルもそう大きくは変わらないんじゃないかと思う。

『そう……貴重な情報をありがとう。具体的過ぎてどう伝えたら良いか迷ってしまうわね』

「くれぐれも情報源の秘密は守ってくれよ。お互いのために」

『そうね、お互いのためにね。上手く立ち回るわ』

「あと、情報に対する対価を何か考えておけよ。これはとてつもなく大きな『貸し』だぞ。まさか少佐殿は踏み倒したりなんかしないよな？」

『うっ……わかっているわよ。私のできる限りで便宜を図るわ。できれば便宜の方向性を提示してくれると助かるのだけれど？』

「ふむ……それなら」

俺はセレナ少佐に高性能の戦闘ボットをブラックロータスに配備しようと考えていることを伝えた。セレナ少佐はなかなかに高い地位の軍人だし、お貴族様でもあるので何かコネが無いかと思ったのだ。

『なるほど。あの船にはパワーアーマーを装備した屈強な帝国航宙軍兵なんて乗っていないものね。わかったわ、ホールズ公爵家が出資している軍需産業の中に軍用の高性能戦闘ボットを取り扱っている企業があったはずだから、調べて紹介状を書いてあげる』

「話が早くて助かるね」

素面のセレナ少佐は油断ならないけど、働きにはちゃんと報いてくれるから好きだよ。ぐでんぐでんに酔っ払うとひたすらに面倒くさいけどな！

「軍は再攻撃をするつもりなのか？」
『恐らくそうなるでしょう。有用な情報も得られましたし、後は私の頑張り次第といったところね』
「この前の戦力だと厳しいと思うが？」

被害のない状態で全偵察艦隊の戦力を集中すればワンチャンあったと思うが。第三、第四偵察艦隊に少なくない被害がでてしまったので、全艦隊を合わせても少々厳しいだろう。

『それは我々も把握しています。第三、第四艦隊の尊い犠牲によって敵戦力は知れましたから。基地に待機していた主力部隊も含めて必勝の構えで行くことになります』
「なるほど。それならまず大丈夫だろうな」

前哨基地に駐屯している主力も合わせて動くなら戦力としては十分だ。余程の下手を打たない限りは勝利は揺るぎないだろう。

『根回しと編成にもう数日かかりますから、英気を養っておくように』
「アイアイマム」

セレナ少佐の言葉に敬礼を返すと、彼女は微かな笑みを浮かべてから通信を切った。
さて、それじゃあミミとエルマにもこの話を伝えるか。まずは二人を起こしてシャワーを浴びさせてからだな。

#161　作戦開始まであと……

セレナ少佐との通信からきっかり二日後、イズルークス星系に駐屯している帝国航宙軍駐屯部隊は結晶生命体への再攻撃を決定し、作戦に参加する傭兵達に二十四時間後に作戦行動を開始するという通達を出した。傭兵の反応としては『やっとか』というものが多く、特にすることもなく待機しているだけという退屈な状況が打破されることを歓迎するようなムードだ。

この時点で契約を破棄して作戦から離脱する傭兵は驚いたことに一人も居なかった。俺の予想としては命あっての物種、ということで離脱者が出ると思っていたのだが、俺の予想は裏切られた形となる。

「この状況で尻尾巻いて逃げたら今後の活動に差し支えるでしょ。違約金を払って尻尾を巻いて逃げたと言われるくらいなら、作戦に参加して安全第一で消極的な行動に走る連中のほうが多いわよ。勝ち馬に乗れそうだと判断したら手のひら返して前に出てくるでしょうけど」

「ふーん……じゃあまた目立つことになりそうだな」

「は？」

エルマがお前は何を言っているんだ、という表情をする。

「他の傭兵が前に出てこないなら、前に出る俺達がまた目立つだろ。必然的に」

他に合わせて後ろで縮こまっているつもりは一切ないから、結果としてそうなるだろうと思う。というか、足の早い小型艦がちゃん

と前に出てガーディアンクリスタルを引き付けないと、中型艦や大型艦に被害が出る可能性がある。そうなると勝てる可能性が低くなり、結果的に小型艦の首を絞めることになりかねない。

「というわけで、二人には悪いけど俺は前に出るつもりだから」
「大丈夫です。ヒロ様を信頼してますから」
「あんたの判断に任せるわ。無駄死にを選ぶようなタチじゃないものね？」
「そりゃ勿論」

好んで爆発四散する趣味はない。無謀な突撃や自己犠牲なんてクソ喰らえである。死なない範囲で自分の仕事をするだけだ。
対結晶生命体のレイド戦で小型で足の早い船の役割というのはそのものズバリ回避盾だ。ヘイトを稼いで敵の攻撃を引き付け、火力担当である中型、大型艦に敵が行かないようにする。危険度は高いが、そこは慣れである。追い詰められて押し潰されないように注意しながら適当にぶっ放し、全速力で逃げ回る。
ある程度の足の速さと運動性さえ確保できれば兵装は豆鉄砲でもいいので、ＳＯＬのレイドコンテンツの中ではある意味で初心者向けのコンテンツだった。無論、本当の初心者はダメなところに突っ込んで爆発四散しまくるのだが。

「ブラックロータスのドックもようやく空いたらしいし一旦戻るか」
「そうね。出撃前の整備もしてもらったほうが良いだろうし」
「ティーナちゃんとウィスカちゃん元気かな？　メイさんはいつもどおりだろうけど」

☆★☆

「おかえり」

「おかえりなさい」
「お、おう、ただいま……」

ブラックロータスに戻った俺達をティーナとウィスカの整備士姉妹が出迎えてくれたのだが、二人ともなんというか……ひどい有様であった。

「お前ら、ちゃんと寝てたのか？」
「ちゃんと寝てたで。メンテナンスボットに作業を任せて手が空いたときに」
「手持ち無沙汰になるタイミングはありますからね」

そう言ってにへら、と力の無い笑みを浮かべる二人の目の下にはクマが濃く刻まれていた。この様子だと殆ど寝てないな。顔も作業服もオイルか何かわからないけど汚れっぱなしだし。

「こりゃだめだ。おい、二人を風呂に放り込んで寝かしつけるぞ。手伝ってくれ」
「はい！」
「了解」

ミミとエルマの返事を聞きながら俺は整備士姉妹をそれぞれ小脇に抱え、ミミとエルマを引き連れて居住区画へと向かうことにした。

「なんなん？　クリシュナを整備せなあかんやろ」
「そんなの後だ後。動き出すのは二十四時間後、現地に着くのに凡そ六十時間。今せんでも十分間に合う」
「あ、あの、シャワーとか暫く浴びてないですから、抱えな……あぅっ」

死んだ目で仕事を続けようとするティーナを黙らせ、ジタバタとするウィスカを静かにするようにという意図を込めてぎゅっと締め付けてやる。
ちなみにウィスカが心配しているような臭いは別にない。というか、二人ともオイルか何かの臭いしかしねぇ。ツナギのチャックを開けて胸元に顔を埋めたら臭うのかもしれないけど、流石にそこまでレベルの高い変態行為をするつもりはない。するつもりは、ない。
シャワールームに辿り着いた俺は二人をシャワールームに放り出し、ミミとエルマによく洗ってから寝かしつけておくように命じてからコックピットへと向かう。

「おかえりなさいませ、ご主人様」
「ああ、もどっt――うぉぉ！？」

コックピットに入って挨拶するなりメイが物凄いスピードで接近して俺を抱きしめてきた。むにゅりとした柔らかい感触で胸板が幸せだ。メイが俺の身体を抱きしめる力は決して強くないが、身じろぎをしようとしてもビクともしない。一体どういう仕組みなんだ、これは。

「メイ？」
「凡そ一四九時間ぶりの接触です。もう少しだけ」
「お、おう」

されるがままに抱きしめられておく――というかこっちも抱き返してやる。もう少しだけと言いつつ、たっぷり五分くらい抱きあった後にメイはようやく俺を解放してくれた。

「至福の時間でした」
「それは何よりだが、一体どうしたんだ？」

「何か不自然でしたでしょうか？」

俺が何を疑問に思っているのかわからない、という感じでメイが真顔で首を傾げる。

「いや、突然の濃厚なスキンシップにびっくりしただけなんだが」

「ご主人様、端的に言うと私は『寂しかった』のです」

メイは機械だが、感情と知性を有する機械知性である。だから、主人である俺と長期間会えない状況に陥ると、寂しくなってストレスが生じ、それを解消するために俺との身体的接触を必要とした。なるほど？

「わかった。今後は今回のようなことにならないよう最大限に配慮する」

「恐れ入ります」

☆★☆

「……何やってるの？」

「ブラックローターを空けている間の報告を受けている」

「その状態でですか？」

「何か問題が？」

十分後、俺は休憩スペースのソファでメイに膝枕をしてもらい、頭を撫でてもらいながらこの六日間の報告を受けていた。整備士姉妹の面倒を見終わったエルマとミミが俺とメイを見てなんとも言えない表情をしていたが、クルーの精神的なケアも艦長としての務めである。多分。

「思うところはあると思うが、スルーしてくれ。これでもだいぶ譲歩してもらったんだ」
「なんだかよくわからないですけど、わかりました」
「まぁ、どうでもいいけれど……」

ミミがメイの隣に、エルマが少し離れたところに腰掛けたのを見計らってメイが続きを話し始める。

「このおよそ六日間、特にトラブルらしいトラブルはありませんでした。逗留された傭兵の皆様が内装の快適さに驚愕され、内装の詳細や発注元などに関する問い合わせが何点かあったくらいでしょうか。若干マナーの悪い方もいらっしゃいましたが、私の真摯な説得で改心して下さいました」
「真摯な説得」
「はい」

俺だけでなくミミとエルマの脳裏にもきっと「説得（物理）」という言葉が浮かんでいることだろう。二人の顔色を見る限り間違いないと思う。説得された傭兵がメイドという存在を見ると怯えるような状態になっていないように祈っておくとしよう。
この日、俺は四六時中メイに付き添われて一日を過ごすことになった。一日中、だ。色々と察して欲しい。

☆★☆

作戦発動の凡そ四時間前に俺は目を覚ました。場所はブラックロータスに設けられた俺の寝室である。メイの姿はないので、恐らく既にコックピットか食堂に行っているのだろう。最終的にメイの機嫌というか寂しさによるストレスは解消できたようなので、今後は今回のように何日間も顔を合わせないということがないように気を

つけたいと思う。本当に。
疲れを知らない彼女には絶対に勝てない……。
「大丈夫なの？　もう少しで作戦開始よ？」
「大丈夫。飯食ってゆっくりしてればなんとかなる」

ジト目で視線を送ってくるエルマにそう答えてホットドッグもどきと青汁めいた栄養価の高いジュースという朝食を摂る。ホットドッグが味気ない栄養ペーストじみたサムシングだったら立派なディストピア飯だっただろうな、これは。

「ティーナとウィスカは？」
「もうずっと前に起き出して元気いっぱいにクリシュナの整備をしにいったわよ。ミミも補給物資の最終確認をするって言って一緒に格納庫に向かったわ」
「そうか。俺も飯を食い終わったら二人の様子を見に行くかな」
「そうしなさい。相当無理をしたみたいだから。昨日は大変だったのよ？　風呂に入れたらそのまま寝るし。ミミと二人がかりでお風呂に入れたんだから」
「それは危険だな。二人に世話をしてもらってよかった」

整備士姉妹とミミとエルマがお風呂でくんずほぐれつしている光景に思いを馳せる。ちょっと見てみたかった。そんな俺の思考が筒抜けなのか、エルマが俺の太腿を抓ってくる。ちょういたい。

「ほんとにアンタは緊張感の欠片もないわねぇ……これから死地に向かうのに」
「死地だと思ってないからなぁ」

帝国航宙軍の規模を考えれば、負けるということはまず無いだろ

うと考えられる。
今回投入される戦力は戦艦六隻、巡洋艦二十隻、駆逐艦二十五隻、コルベット四十二隻という盤石としか言いようのない大戦力だ。正直傭兵とか要らないんじゃね？　と思わなくもない。
帝国航宙軍も本気というか、圧倒的戦力を投入して帝国航宙軍に一隻たりとも被害を出させないという強い意志を感じさせる布陣である。先日派遣された第一から第四偵察隊全てを合わせた戦力の一・五倍の戦力が投入されている。しかも今回は既に敵の位置が判明しているので、隊を分けたりせずに戦力が集中運用される。
つまり、単純計算で言えば先日大損害を被った第三、第四偵察艦隊と比べて凡そ三倍の戦力を該当星系に投入するわけだ。更に傭兵達も同じくまとめて投入される。ＳＯＬで培った俺の感覚からすれば過剰戦力だ。運用さえ誤らなければ先日の偵察艦隊規模の戦力で十分対処できると思う。

「というわけだ」
「なるほど、根拠があってのことなのね」
「そういうこと。流石に数が多いだろうから油断はできないが、ガーディアンクリスタルの掃除さえ済めば戦艦と巡洋艦、それに駆逐艦から投射される圧倒的火力でマザー・クリスタルはさほど苦労せずに破壊できると思う」

つまり、俺達傭兵や帝国航宙軍のコルベットがちゃんと仕事をしてガーディアンクリスタルを迎撃し、ヘイトを取って引きずり回せば後は帝国航宙軍の戦艦や巡洋艦が全部片付けてくれるということだ。後はマザー・クリスタルから放出される小型結晶生命体と適当に遊んでいればいい。
「不意の遭遇戦でもない限り、軍の戦いってのは始まる前に終わってるってこったな」

先日の大損害に関しても、別に作戦失敗ってわけじゃないしな。大きな被害が出たのは確かだろうが、敵の本拠地と戦力を知るって目的はちゃんと達成できていた。あの偵察行は情報を持ち帰ることができれば勝ちだったわけである。

「心配はいらない、でも油断はできないってわけね。つまりいつも通りと」

「そういうことだな」

肩を竦めてみせる俺を見てエルマが微笑む。

作戦開始まで、あと四時間弱。

#161　作戦開始まであと……（後書き）

昨日チェックしたら当作品が異世界転移・ＳＦその他文芸四半期ランキング一位になってましたイェー！
これも皆様のお陰です。今後も頑張って更新を続けていきたいと思います！―（：３」∠）―

#162　結晶生命体撃滅作戦

結晶生命体殲滅作戦が開始された。帝国航宙軍の大艦隊が動き始め、俺達傭兵もそれに追随する。
万が一にも逸れるわけにはいかないので、各傭兵は指定された艦に同期モードでついていくことになる。オートドッキングの艦隊行動版のようなものだ。あちらからの要請を受諾するだけで一時的に操舵権を移譲し、こちら側は何もしなくても整然とした艦隊行動ができるようになるという優れものである。もっとも、縛りは緩いので緊急時にはこちらで即時破棄して自由行動に移れるのだが。

「退屈だな」
「えっと……はい。何かゲームでもしますか？」
「あなた達ね……」

休憩スペースで緊張感の欠片もなく退屈だと漏らしている俺とミミにエルマがジト目を向けてくる。
現在、クリシュナはブラックロータスに搭載されたまま艦隊行動をしている。本来であればいつでも緊急発進できるように俺達はコックピットで待機しているべきなのだが、マザー・クリスタルのいるイェーロム星系に到達するのは凡そ三十六時間後だ。今からコックピットで気を張っていても何の意味もない。不意の遭遇をしたとしても帝国航宙軍のコルベットが前衛にいるから、彼らが時間を持ちこたえている間に俺達傭兵の緊急発進が間に合う。
まぁその、つまり移動中はやることがないのである。過度に緊張していてもいざという時に力を出せなくなるので、まぁこうして退屈だという俺に同意できるようになった辺り、ミミはかなり成長しているのだと思う。初めて船に乗って宙賊の退治に出かけようって

時は緊張でカチンコチンになってたものな。それが今では退屈だ、という俺のぼやきに反応してゲームを勧めてくる。ミミの胸部装甲ともども成長を感じずにはいられない。
　ちなみにミミの胸部装甲だが、今でもサイズアップしている。身近に接しているので俺の感覚では「おっきいねぇ！」というＩＱの低そうな感想しか出てこないのだが、簡易医療ポッドで日々計測されているデータ上では確実にサイズアップが進んでいる。ミミ……恐ろしい子！

「いてっ」
「ふん」

　遊ぶゲームを選んでいるミミの胸元に熱い視線を注いでいたらエルマに太腿を抓られた。確かに視線が不躾だったかもしれない。反省。今度はエルマをジッと見る。透き通るような白い肌、尖った耳、物凄く整った顔立ち。うん、美人。ミミは可愛い系だけど、エルマ美人というか綺麗系というか……例えるならミミは子犬のような可愛さ。エルマは花のような美しさだよな。
　うん、花って表現はしっくり来る。

「何よ？」
「いや、エルマは花のように可憐で美しいなと」
「何よそれは」

　エルマはジト目を向けてくるが、耳が赤くなってピンと立っている。エルマの耳は口以上に物を言うなぁ。宇宙エルフが恥ずかしい時に耳を隠すのもわかる気がする。
　と、ミミとエルマを両脇に侍らせてイチャイチャとしていると格納庫に続く通路から賑やかな声が聞こえてきた。ティーナとウィスカがクリシュナの整備を終えて休憩に来たようだ。

「お疲れ」
「はい、おおきに。船の整備はばっちりやで」
「簡単なチェックと整備だけでしたけど」

模擬戦は大幅に出力を落とした低出力レーザーと模擬弾を使って行われたので、実際に装甲に損傷などは負っていないからな。機動だけは実戦に等しいものだったから、動力系や操作系には実戦と変わらない負担がかかっていたと思うけど。

「へいかもん」
「よっしゃ」

ソファに座ったまま両手を広げてみせると、ティーナがノリ良く突っ込んできた。突っ込んできたティーナを抱き留めて頭を撫でまくってやる。

「よーしよしよしよしよしよしよし」
「あはははは、髪がぐしゃぐしゃになるー」

そう言いながらされるがままのティーナをひとしきり撫でて解放してやる。すると、左右からドンと俺の胸元に頭がぶつかってきた。

「よーしよしよしよし」
「えへへ」
「ちょっと、もう少し優しくやりなさい」

ミミとエルマの頭も撫でてやる。そうすると、ウィスカがなんとも言えない顔でこちらを見ていた。ミミとエルマの頭を撫で終えたら再度ウィスカに向かって両腕を広げてみせる。

「うりゃー」
「お、お姉ちゃ――わっ！？」
ティーナに後ろから押されたウィスカが足元をもつれさせて俺の胸に飛び込んでくる。そして華麗にキャッチ。
「よーしよしよしよし。いつもティーナに振り回されて大変だなー」
「ちょい。そりゃないやろ？」
「実際こうなっているが？」
「ぐっ」
ティーナに押されて俺の胸元に顔を埋める形になっているウィスカを指差すと、ティーナは悔しそうな顔をして口を噤む。そんなティーナを勝ち誇った笑みを向けながら俺の胸元でカチコチになっているウィスカの頭を撫でていると、メイがスタスタと休憩室に入ってきた。
そして俺の胸元からウィスカを抱っこしてミミの隣に座らせ、ソファに座ったままの俺の前に跪いて俺の腹の辺りに頭を預けてくる。
「よーしよしよし」
恐らくコックピットで俺達の様子をモニターしていて、皆が頭を撫でられるのを見て自分も撫でて欲しくなったのだろう。頭を撫でるくらいならいくらでもやるよ。
☆★☆
穏やかな時間もそう長くは続かない。艦隊は滞りなく、予定通りに戦場となるイェーロム星系へのハイパーレーンに突入した。もう

じき艦隊はハイパースペースから飛び出して星系へと突入する。

「さて、各部チェックを開始。メイ、カタパルトも星系突入後すぐに飛ばせるようにチャージしておいてくれ」

「はいっ」

「アイアイサー」

『承知いたしました』

クルーに指示を出しながらコンソールを操作してジェネレーター出力をアイドリングモードから巡航モードへと切り替える。一応イェーロム星系への突入口はマザー・クリスタルから遠い場所になっている筈だが、ガーディアンクリスタルが配置されている可能性は低くはない。

本能なのか習性なのか、それとも知性や知能によるものなのか、奴らはハイパーレーンの進入口付近に屯していることが多いからな。ＳＯＬではマザー・クリスタルに一番近いハイパーレーン進入口付近が一番敵影が濃かったが、この世界ではどうだろうか。

結晶生命体の性質がＳＯＬと同じなのであれば、マザー・クリスタルから遠い進入口に配置されている戦力は他に比べて配置戦力が薄いはずだが……まぁ、こればかりは突入してみないとわからんな。

「間もなくイェーロム星系に突入します。三十秒前！」

「さぁて、やるかぁ」

操縦桿を握り、ジェネレーター出力を戦闘モードへと変更して意識を切り替える。

同時に結晶生命体への対処法――奴らの攻撃に有効な回避機動や、引き回しのパターン化などを頭の中で組み立てておく。

まずは後衛に襲いかかろうとするガーディアンクリスタルの中で早急に処理が必要な対象を排除し、一刻も早く多くのガーディアン

クリスタルのヘイトを稼いで引き回す。これが俺のやるべきことだ。
今回の場合は敵を撃破することよりも、大火力を誇る味方を動きやすくするのが俺の仕事である。

「間もなくハイパースペースから通常空間に帰還します。カウント……5、4、3、2、1、0！」

超光速ドライブ起動時や解除時とはまた違う奇妙な音が鳴り響く。ぎゅいおおぉぉんというか、びょぉぉぉぉんというか……シンセサイザーを滅茶苦茶に鳴らしたような音だ。なんなんだろうな、この音は。
益体もないことを考えているうちにクリシュナを乗せたブラックロータスは通常空間に帰還した。
同時に、艦内にアラート音が鳴り響く。

『結晶生命体を確認。帝国航宙軍前衛部隊のコルベットが戦闘に突入しつつあります。全傭兵にも出撃命令が下りました』
「了解、出してくれ」
『はい。皆様、ご武運を』

コックピットのモニター越しにメイがお辞儀をして送り出してくれる。
次の瞬間、船内に凄まじいGが襲いかかってきた。格納庫のカタパルトによってクリシュナが宇宙空間に射出され、コックピットを守る慣性制御装置でも殺しきれないGが俺達を襲ったのだ。

「うぅ、何度やっても慣れませんね」
「外力による加速には慣性制御装置の効きが悪いからな。ミミ、艦隊から情報を取得してガーディアンの位置をマークしてくれ」
「はいっ」

ぼやくミミにそう返しながら旋回し、前線へと向かう。既に最前衛に配置されていた帝国航宙軍のコルベットはガーディアンクリスタルとの乱戦にもつれ込んでいるようだ。傭兵の船も順次前線へと向かっている。

これは後衛に襲いかかる個体の排除は大丈夫そうだな。結晶生命体からのヘイトを稼いで敵を引きつけることを優先したほうが良さそうだ。

「よし、迂回して敵の横っ腹に突っ込むぞ。初手反応弾頭魚雷で敵のヘイトを引きつける。ウェポンシステム起動」

クリシュナの艦首が変形し、二門の大型散弾砲がその姿を現す。四門の重レーザー砲を装備した武器腕も起動し、艦底のウェポンベイでは二発の反応弾頭魚雷がいつでも発射可能な状態になる。

戦闘準備完了だ。

「了解。サブシステムの掌握は任せて」

宣言通りにクリシュナは真っ直ぐ前線には向かわず、迂回を始める。

「こちらクリシュナ。前線を迂回して敵集団の横っ腹に突っ込む。反応弾頭魚雷を使って敵の注意を引きつけるから、爆発に巻き込まれないよう注意してくれ」

コンソールを操作してクリシュナの突入コースと反応弾炸裂予想座標を全艦に共有する。まぁ、敵集団の中程にまで突出している味方は居ないから大丈夫だと思うが一応ね。

「突入するぞ」
「はい！」
「アイアイサー」

十分な距離を使って加速し、敵集団の横っ腹へと突入を開始した。すぐにクリシュナの接近に気付いた個体がこちらへと向かってくるが、擦れ違うようにその横をすり抜けながら大型散弾砲と重レーザー砲で一撃を加えて注意を惹いていく。傷をつけられた個体の敵意が更に他の個体の敵意を呼び、前衛に掛かっていた敵の圧力が横っ腹に突っ込んだクリシュナへと漏れ出して弱まる。

「景気づけに一発！」

艦底のウェポンベイから反応弾頭魚雷を敵集団に発射し、進路を逸らして爆発に巻き込まれないようにする。一発目が炸裂する前にもう一発、着弾地点を大きくずらして発射。

「さぁもう一発！　さぁ来い！　さぁさぁ！」

俺の挑発が奴らに届くわけも無いが、俺の放った反応弾頭魚雷は確かに奴らへと届いた。こちらへと向きを変えて突進を始めようとしていたガーディアンクリスタルのうちの一体に着弾し、激しく炸裂して周囲のガーディアンクリスタルを数体巻き込む。
更にもう一発。敵集団の土手っ腹に反応弾頭魚雷が炸裂して三体ほどのガーディアンクリスタルが爆散した。衝撃で飛び散った敵の破片が更に広範囲のガーディアンクリスタルを叩き、広範囲のガーディアンクリスタルがクリシュナへと敵意を向け始める。

「始めるぞ。シールド容量にはくれぐれも注意してくれ」
「アイアイサー。任せなさい」

エルマの頼もしい返事を聞きながらクリシュナのスラスターを最大出力で噴かす。

飛び道具あり、鬼の人数が百以上というエクストリーム鬼ごっこの開幕だ。

#162　結晶生命体撃滅作戦（後書き）

ちぇるーんは出ませんでした―（：3」∠）―（敗北

#163　圧倒的火力

ハイパードライブのワープアウト直後、私達帝国航宙軍艦隊は結晶生命体との戦闘に突入した。敵の主力は中型結晶生命体亜種、仮称『ガーディアンクリスタル』だ。

この戦闘は『彼』からの情報で想定できていたことであったため、帝国航宙軍全体に動揺は見られない。情報源の不確かな情報を基に結晶生命体殲滅艦隊を編成することや、具体的な作戦立案をすることには骨が折れたが、その甲斐はあった。

無論、彼からの情報であることは一言も言っていない。彼から詳しい話を聞き、第三、第四偵察艦隊が収集した情報と合わせてそれらしく分析結果としてでっち上げ、舌先三寸で他の艦隊の艦長達や前線基地の司令を言いくるめたのだ。

馬鹿正直に風の噂で聞きましただとか、傭兵から聞きましただとか言う必要などはない。結果的にそれが彼という情報源を守ることにも繋がる。

「結晶生命体への初期対応は問題なさそうですね」

厚めに配置しておいた快速のコルベットが作戦通りに結晶生命体――ガーディアンクリスタルの注意を惹きつけている。すぐに傭兵達の小型船も戦線に加わり始め、傭兵達の擁する中型船や大型船は既に砲撃を始めている。帝国航宙軍の船も一斉砲撃の用意が進んでいる。

「はい。少佐の分析が見事に正鵠を射ていたようで」

「そうですね」

実際には私の分析ではなく、彼の情報なのだけれど。まぁ、結果が出る分には問題ない。この作戦が瑕疵無く成功すればそれは私の功績となる。

『こちらクリシュナ。前線を迂回して敵集団の横っ腹に突っ込む。反応弾頭魚雷を使って敵の注意を引きつけるから、爆発に巻き込まれないよう注意してくれ』

彼が広域帯でそう呼びかけ、自艦の位置と突入コース反応弾頭の炸裂範囲などのデータを共有してくる。

「相変わらずですな」

「銀剣翼突撃勲章は伊達じゃないってことね」

彼の船――クリシュナが結晶生命体の群れに横から突っ込んでその内部を食い破っていく。彼はあの群れを突っ切るだけでなく、突っ切りながら結晶生命体に激しい攻撃を加えているらしい。

しかも、速度が尋常ではない。突入してから殆どスピードが落ちていないというのが彼の操縦技術が神業の域であることを証明している。一体どのような訓練を詰み、どれだけの死線を潜ればあのような傭兵が誕生するというのだろうか。

「標的データの同期完了しました！」

「彼が敵を引きつけてくれているうちに叩き潰しましょう。同期砲撃、開始」

「アイアイマム！　同期砲撃、開始します！」

帝国航宙軍の全艦が砲撃目標が被らないようにデータを統合し、完璧に統制された一つの群れと化して同期砲撃を開始する。数多の艦から一斉に放たれたレーザー砲撃が暗黒の宇宙空間を眩く染め上

げた。

☆★☆

こちらに向かって回頭しようとするガーディアンクリスタルの間をすり抜けながら至近距離で散弾砲をぶち込み、正面から突撃しようとしてくる小型結晶生命体を四門の重レーザー砲の乱射で撃破しながら結晶生命体のひしめく宇宙空間を突っ切る。

ガーディアンクリスタルは誤射も厭わず光線や光弾で攻撃してくるが、クリシュナの堅固なシールドはそれらの攻撃を難なく受け止めている。

「シールド、まだ安定してるわ」

「奴らの光線は見た目ほど威力が高くないからな。光弾はそれなりに痛いが、弾速が遅いし狙いも甘いから速度を出していればまず当たらん。危ないのは突進だけだな」

「それでも限界はあるけどね。徐々にシールド容量は削られているし」

「二人とも、この状況下で余裕ありますね……」

流石にメインモニターから目を離せないから確認できないが、ミミの声には緊張感が色濃く滲み出ていた。そりゃまかり間違って小型結晶生命体の突進を受けたり、ガーディアンクリスタルの横っ腹に突っ込んだりしたら結晶生命体の間をピンボールみたいに跳ね回ることになるからな。

当然そうなったらシールドなんてすぐに消失するので、結晶生命体に突っ込まれて爆散するしかなくなる。まぁ、そんな凡ミスをするつもりはないけども。

「帝国航宙軍から砲撃予告データが送られてきました！　同期砲撃、

来ます！」

ミミの言葉と同時にクリシュナの後方に強力なレーザー砲撃が多数着弾した。高出力のレーザー砲撃に晒されたガーディアンクリスタルが激しい光を放ちながら蒸発し、爆散していく。流石に軍の戦艦、巡洋艦クラスのレーザー砲撃は威力が違うな。多少のレーザー耐性なんて屁でもないと言わんばかりの威力だ。

「凄い威力ですね」

「真正面から軍の戦艦や巡洋艦とは戦えない理由だな。張り付いてしまえばなんてことないんだが」

今の砲撃で敵意が帝国航宙軍艦隊の方に向いたようで、クリシュナを狙うガーディアンクリスタルの攻撃が途端に緩くなる。この隙を逃す俺ではない。即座に残りの反応弾頭魚雷二発を前方の結晶生命体の群れに発射し、反転して帝国航宙軍の同期砲撃で結晶生命体の群れに空いた『穴』に飛び込む。ターンの際に凄まじいGが襲いかかってくるが、こんなのはもう慣れっこだ。

「くっ……反応弾頭魚雷、炸裂しました！　結晶生命体、またこっちに来ます！」

「よし。引きずり回すぞ」

「楽になったわね」

反転して逃げ始めた俺達の前方は帝国航宙軍の砲撃のお陰でスカスカだ。この状態で後方から追ってくる結晶生命体から逃げ回るのは造作もない。速度ではクリシュナが圧倒的に勝っているからな。後ろから飛んでくる光弾をひょいひょい躱しながら船を走らせるだけの簡単なお仕事である。

「同期砲撃、また来ます」

再びクリシュナの後方、退去して押し寄せる結晶生命体達の横っ腹に帝国航宙軍の強力無比な同期砲撃が着弾する。攻撃目標が一切重複せず、最大の効果を上げられるように計算され尽くしたレーザー砲撃は残りの結晶生命体の大半を蒸発させ、爆散させた。これで残っているのは同期砲撃を逃れた僅かな数の結晶生命体の生き残りと、帝国航宙軍のコルベットや傭兵艦達と乱戦を繰り広げている結晶生命体だけである。

「乱戦に突入して殲滅戦に入るぞ」
「はいっ！」
「了解」

程なくして周囲の結晶生命体は殲滅された。

☆★☆

「お疲れさん。補給と整備に入るで」
「頼む。あと、また損傷を受けた傭兵艦が修理や補給を受けに来ると思うからそのつもりでいてくれ」
「わかりました、急ぎますね」

タラップから降りて整備士姉妹にそう告げてミミとエルマを引き連れて居住区画の食堂へと向かう。補給と整備の時間を利用して一服するためだ。

「まぁまぁ大変だったな」
「まぁまぁですか」
「まぁまぁだな」

「あれがまぁまぁで済むのはヒロくらいだと思うけどね。少なくとも私は無理」

各々テツジン・フィフスからドリンクを調達して一服する。あぁー、戦闘後の身体に冷たいドリンクが染み渡る。最近のお気に入りフレーバーはレモン系だ。ミミはバナナ系、エルマはぶどう系のフレーバーが好みのようである。まぁ、果汁は０％なんだけどな！ＨＡＨＡＨＡ！

え？　例の炭酸抜きコーラとかシエラⅢで買い込んできた炭酸飲料は飲まないのかって？

ああいうのはもっとこう、静かで、落ち着いて、心が平静な時に味わって飲むものだ。戦闘の合間に雑に味わうべきものじゃない。数が限られているしな。俺にとっては反応弾頭魚雷よりも大事なものだ。

一服していると、俺の携帯情報端末からコール音が鳴った。どうやらセレナ少佐からのコールのようだ。俺は端末を操作し、食堂のホロディスプレイに転送して通信を始める。

「はいどうも、ヒロですよ」

ホロディスプレイの向こうのセレナ少佐が一服している俺達を見回し、一呼吸置いてから口を開く。

『まずはおめでとう。またもや撃破数のトップエースですね』

「そりゃどうも。こっちも迅速な支援砲撃には助けられましたよ」

『しっかりお膳立てしてくれたお陰ですね。前衛との乱戦が本格化する前に敵がクリシュナに向かい始めたから、結果的に前衛の損耗も軽微で済みました。ありがとうございます』

「そいつは何よりで。で、何かありましたか？」

『いえ、トップエースに労いの言葉をかけようと思っただけですよ。

次は敵の本丸を叩きます。小型艦の補給を終え次第すぐに行動に移るので、そのつもりで』
「アイアイマム」

俺がホロディスプレイに向かって敬礼をすると、セレナ少佐は僅かに微笑んでから通信を切った。

「……何だったんですかね？」
「さぁ？」
「うーん……何か企んでいるのかしら？」

今までの行動から俺達に全く信用されていないセレナ少佐であった。会話の内容を思い返しても特に不審な点は見当たらないように思う。本当に活躍した俺に一言お褒めの言葉をかけるために通信をしてきたようだ。

「まぁ、お褒めの言葉は素直に受け取っておくということで」
「大丈夫でしょうか……？」
「流石に今の会話で何か企んでいることはないと思うけど」

返す返すも信用のないセレナ少佐である。普段の行動と印象って大事だな。

#164　殲滅戦、開始（前書き）

おくれました！―（：3」∠）―

#164　殲滅戦、開始

補給と簡単なチェックだけ終えた俺達はすぐにブラックロータスから発艦し、その後は傭兵艦が次々にブラックロータスへと着艦しては補給と整備を終えて発艦していくのを見守る。

「被害は軽微ってセレナ少佐が言っていましたけど、結構損傷を負っている艦が多いですよね」

クリシュナのメインモニターには装甲表面が削れ、一部結晶化している傭兵の船が何隻か映っている。

「小型結晶生命体の突撃を食らったんだろうなぁ。奴ら、射撃攻撃を持っていない代わりに突進攻撃の攻撃力だけは高いから。シールドを二発か三発の突進で割ってくるからかなり危ないんだよ」

本来小惑星というか超光速ドライブ時にスペースデブリとの衝突から船体を守る役割を果たすシールドというものは物理的な接触に対する耐性がかなり高い。しかし、小型結晶生命体の突撃は容易にシールドを割ってくる。先端が激しく光っているので、何か仕組みがあるんだろうと思うがＳＯＬでは特に解説がなかったので、詳細はわからないんだよな。多分散弾砲の砲弾と同じくシールドを大幅に中和する仕組みがあるんだろうと思うけど。

ちなみに、散弾砲の砲弾の対シールド性能は距離が開くと急激に減衰する。至近距離以外で撃っても「散弾ではなぁ！」と敵に言われるのがオチだ。

「ヒロ様は避けてましたよね」

「速度はそこそこだけど、奴らは小回りが利かないからな。立ち回り次第でなんとかなる」

多方向から一斉に突撃されると危ないけどな。まぁ、その時は速やかに包囲網を食い破って囲いの外に出るしかない。もしシールドがダウンした状態で複数回の突進を受けたら船体は保たないだろう。ちなみに、装甲の侵食はＳＯＬのゲーム内処理としては継続ダメージと物理防御力の大幅な低下という形で実装されていた。結晶化した部分は著しく脆くなるという設定だ。

と、小型結晶生命体の話をしていると広域通信が入ってきた。

『対結晶生命体特別艦隊司令、ギル・フォークスだ』

広域通信の発信源は艦隊のトップからであった。恐らく、出撃前の訓示のようなものだろう。

『補給と最低限の整備はあと十五分で完了する予定だ。完了後、我々はイェーロム星系のアルファセクターに存在する超大型結晶生命体、仮称マザー・クリスタルの討伐へと向かう』

メインモニターに戦場を模した広域３Ｄマップが投影される。

『マザー・クリスタル討伐戦は基本的に遠距離砲撃で全てを済ませる予定だ。敵の数は多いが、シールドに相当する能力は持っておらず基本的に防御力は脆弱である。更に射撃攻撃の射程も短く、帝国航宙軍の戦艦や巡洋艦の放つ長距離砲撃に対応することは不可能だ』

３Ｄマップ上に配置された帝国航宙軍艦隊が砲撃で結晶生命体に攻撃し、その勢力を減耗させていく様子が表示される。

『しかしながら敵の数が多く、接近を許す可能性はゼロではない。駆逐艦以下の遠距離砲撃能力を有しない小型艦は、砲撃を潜り抜けてきた敵勢力の迎撃を担当してもらう』
「どう思う？」
「まぁ妥当じゃないか？　少なくとも敵の特性をちゃんと理解して立てた作戦だとは思うよ。敵の数も既に観測して確定しているだろうし、その上で立てたプランなら間違いないだろ」

軍人が行き当りばったりで戦いをするとは思えない。彼らは戦闘のプロだ。敵の情報を収集し、分析し、勝ち筋を立ててから行動に移る。彼らがそれで勝てると判断している以上は勝てるのだろう。不意の遭遇戦や想定外の要因が無い限りは攻撃側の勝ちは基本的に揺るがないものだ。歌う水晶を艦隊のど真ん中にぶち込まれるとかな。

「ヒロがそう評価するならひとまずは安心ね。次も突っ込むの？」
「状況次第だな。むやみに突っ込んで味方の射線を塞いだりしたらことだし、おとなしく防空戦闘をしていたほうが良いと思う。流石にマザー・クリスタル相手だとクリシュナじゃ火力不足だしな」

至近距離まで近づく事ができれば対艦反応弾頭魚雷を四発叩き込んでワンチャン無いことも無いが、そんな危険なことをするくらいなら素直に味方の砲撃に任せた方が良い。流石に今回ばかりは出る幕はないだろう。
「次の戦闘はハイパーレーンから出てきた時と違って交戦距離をこっちから選べる。一方的な展開になるんじゃないか？」

ＳＯＬではレイドバトルコンテンツとして常に緊張感のある戦場設定がされていたが、現実世界であるこの世界においてはわざわざ

リスクのある近接戦をやる必要なんてないからな。アウトレンジから一方的に叩いて終わりだろう。

「じゃあ、次の戦闘は殆ど観戦するだけで終わるってことですか？」

「多分な」

☆★☆

およそ三十分後。艦隊は超光速ドライブ状態を解除し、射撃位置に着いていた。

「うわぁ……大きいですねぇ」

「大きいわね……」

「ちょっとした惑星並みの大きさだよな」

遥か彼方に見えるマザー・クリスタルを見て各々感想を漏らす。ブラックロータスのセンサーを介して結晶生命体の動きをモニターしているのだが、この距離でもこちらに気づいているのかガーディアンクリスタルや小型結晶生命体が艦隊に向かって動き始めているのが察知できていた。

『各艦攻撃開始！』

艦隊司令の号令と共に帝国航宙軍艦隊が遠距離砲撃を開始する。何十条もの大口径レーザー砲撃が結晶生命体達に向かって発射され、レーザーを照射された結晶生命体の群れが遥か彼方で激しく発光する様子が見える。ブラックロータスも艦首大口径電磁投射砲を展開し、砲撃を――えっ？

「メイ、この距離から当たるのか？」

『はい。標的の数が多いですから』

ギャオォォン、とでも表現すれば良いのか、独特の砲撃音を上げながらブラックロータスの艦首大口径電磁投射砲から砲弾が発射された。着弾まで何秒かかるのかはわからないが、メイのことだから無駄なことはしないだろう。

「すごいですね、こんな距離から当たるんですね」

「レーザーならともかく、ＥＭＬは普通当たらないからな」

いくらＥＭＬの弾速が通常のマルチキャノンや実体弾砲に比べて早いとは言っても、光速で着弾するレーザー砲とは比べるまでもない。空気も重力もない宇宙空間では威力の減衰はそうそうするものではないが、弾道を曲げる要因が皆無というわけでもない。小型艦同士が戦うような近距離戦では気にするようなものではないが、このような長距離砲撃では弾道の僅かなズレが着弾地点――地点？とにかく命中する場所を大きく変えてしまうのだ。

「流石は陽電子頭脳を搭載した機械知性ということなんだろうか。こんなの相手に戦争をした昔の帝国はよく滅びなかったな」

「そうですね」

「あー、うん。そうね」

ミミは素直に俺に同意し、エルマはなんだか含みの有る同意をする。実際には滅びなかったのではなく、滅ぼされなかったというのが正解なのだろうか。正解なのだろうなぁ。

そんなことを考えている間に帝国航宙軍と一部傭兵艦の容赦のない砲撃が続き、ガーディアンクリスタルがどんどんその数を減らしていく。ただ、小型結晶生命体は砲撃の間をすり抜けて徐々に接近してきているようだ。

「これはガーディアンクリスタルはともかく、小型には抜けられるな」
「前に出る？」
「そうだな、コルベットと駆逐艦を中心に戦線を形成することになるだろうから前に出ておこう」
「メイさんに通信を入れておきますね」

ミミがメイに連絡を入れるのを聞きながらクリシュナのスラスターを噴かして艦隊の前方に展開する駆逐艦を中心とした迎撃部隊に加わる。

『お、銀剣翼突撃勲章のトップエース様のお出ましだ』
『十分功績は稼いだだろ？　譲ってくれても良いんだぜ？』
「稼げる時に稼げるだけ稼ぐのが傭兵ってもんだろ？　後ろに引っ込んでるのは性に合わないしな」
『後ろに引っ込んでるのが性に合わないってのは納得だな』
『実際何度も敵に突っ込んでるしな。クレイジーにも程があるぜ』
『付き合わされる嬢ちゃん達が可哀想だぜ』
『そんな奴見限って俺のところに来ても良いんだぜ？』
『おい抜け駆けすんな。俺の方が稼いで――』
「人の女に粉かけようとしてんじゃねぇよ。ぶっ殺すぞ」
『『すみませんでした！』』

軽口は構わないが、それは流石にＮＧだ。これで何も言わなかったら舐められるだろうしな。

「人の女、ね」
「えへへ」

二人の反応で咄嗟に大胆な事を言ってしまったことに気づいたが、後の祭りである。

「……」

「自分の言ったことで恥ずかしがってるわ」

「可愛いですね」

「うるさい気が散る。一瞬の油断が命取り」

「まだ敵は遥か彼方よ」

ぐうの音も出ない反論であった。

迎撃戦開始まで、あと十二分。

#164　殲滅戦、開始（後書き）

なかなか注文したモンエナが届かなかったりしたけれど、僕は元気です―（∵3」∠）―

#165　経験を束ねて（前書き）

昨日4／23にコミックス1巻が発売されましたイェー！　買ってね！！！　―（：3」∠）―（直球

#165　経験を束ねて

虚空に浮かぶ数多の巨船から巨大な光の槍が放たれ、結晶生命体が激しく輝いて蒸発しながら爆散し、消滅していく。更に巨船の各所から飛翔体が多数発射され、光の尾を引きながら結晶生命体の群れに突き進み――着弾地点に巨大な火球が多数発生した。

本来機動爆撃に使用される艦対地反応弾頭ミサイルが有効な迎撃手段を持たない結晶生命体に牙を剥いたのだ。反応弾頭の炸裂によって解き放たれた猛烈な熱量と衝撃が結晶生命体の前衛を消し飛ばしていく。

「クリシュナに積んでいる反応弾頭魚雷よりも随分と威力が高くないですか？」

「炸薬量が違うからな。デカいは強いだ」

「なるほど」

実際に反応弾頭に積まれているのは炸薬などではなくもっとヤバいものらしいが、ミサイルがデカいからクリシュナの装備している対艦反応魚雷よりも威力が大きいというのは本当だ。

これはレーザーに関しても同じで、クリシュナに装備されている重レーザー砲は威力というか出力は帝国航宙軍の重巡洋艦が装備しているものとほぼ同じである。ただ、帝国航宙軍の重巡洋艦に装備されているレーザー砲の方がより大口径で、射程を伸ばすための各種装備がふんだんに投入されているためにクリシュナの重レーザー砲よりも遥かに射程が長いのである。こちらもミサイルと同じで結局のところ、デカいは強いなのだ。

「でも、やっぱりこれは抜けてくるわね」

レーダーに表示されている敵の光点を見ながらエルマが呟く。そりゃ数百、数千の小型結晶生命体を砲撃だけで潰すのは無理だろう。これぱかりは仕方ない。

「観戦モードはここまでだな。行くぞ。ジェネレーター出力、戦闘モード」

「アイアイサー。ヘマしないでよ？」

「あったりめぇよ」

こうして長い長い戦いが始まった。

☆★☆

『クソッ、数が多すぎだってんだよ！』

『上からくるぞ！　気をつけろ！』

『ああっ！　ジャン・レイがやられた！』

傭兵達の賑やかな戦場通信を聞きながら、俺は黙々と小型結晶生命体を迎撃する。

四門の重レーザー砲でそれぞれ違う目標を貫き、真正面から迫る小型結晶生命体は大型散弾砲で粉砕する。死角から突撃してくる小型結晶生命体を躱す。常に視界の端に近接３Ｄレーダーを捉えておくのが回避のコツだ。

『あの動き見ろよ。後ろに目ン玉でもついてんのか？』

『あんな高性能艦があれば俺だって……』

『いや無理だろ。艦の性能だけでああはならんわ』

「この乱戦で結晶生命体の体当たりを一発も受けないのは素直に脱帽だわ」

「ヒロ様の空間把握能力ってどうなってるんでしょうね？」

戦場通信だけでなく隣からも暢気な会話が聞こえるが、何十何百という爆散という名の経験を束ねた練磨の末に今の俺があるのだ。既に一連の動きというか思考というか戦闘行動が身体に染み付いているから簡単そうに見えるだけで、ここに至るまでには我ながら涙ぐましい努力を積み重ねたのである。

金を稼ごうとして爆散、金を稼いで新しい機体に乗り換えて爆散、新しい機体の購入費用のために前の船を売ってしまっていたので、修理費を稼ぐために初期機体の座布団で金を稼ごうとして爆散、爆散爆散爆散……後で聞いた所、他のプレイヤーに比べれば回数は少なかったようだが、俺にもそんな悲しくも悔しい経験が――やめよう悲しくなってきた。

とにかく俺は負けず嫌いで諦めの悪い男なので、ひたすらに練習をした。工夫もした。国内、海外を問わず戦術フォーラムも覗いたりもしたし、動画を見たりもした。そんな弛まぬ努力の結果、今の俺があるのだ。

そんな努力が回り回ってこういう風に役立つとは俺も思っていなかったが、結果的にヨシ。

「戦況は？」

操船に集中しながらミミに戦場全隊の戦況を尋ねる。

「他のエリアから後方に小型の結晶生命体が漏れていますが、後衛の近接防御で対応できているようです。ガーディアンクリスタルの排除率７０％、間もなく排除が完了しそうです」

「少なくなればなるほど排除スピードは上がるものね」

数が少なくなればなるほど火線が集中することになるからな。と

いうことは、このまま時間を稼いでいれば勝ちは揺るがないか。

「もうひと踏ん張りだ」

そろそろ散弾砲の残弾が半分を切りそうなのが心配だが、突出しすぎなければ問題あるまい。ある程度突出しないと味方の被害が拡大するから、匙加減が難しいんだよな。

「ヒロ様！　敵集団が左舷から接近中です！」

「了解」

長距離レーダーで捉えた情報をミミが教えてくれる。前に出たから隣のエリアから釣られてきたらしい。クリシュナを回頭させて敵集団を正面に捉える。

☆★☆

「間もなくガーディアンクリスタルの排除が完了します」

「排除を完了次第予定座標に移動。多角包囲攻撃を開始」

「アイアイマム」

全艦隊でリアルタイムで共有される戦術情報に視線を向け、戦況の推移を見守る。ガーディアンクリスタルの排除は順調で、抜けてくる小型結晶生命体に関しても想定内の範囲で問題なく対応できている。特に彼のいるエリアは抜けてくる数が少ない。さっきチラッと彼の撃破数を見てみたが、他の傭兵に比べて頭一つや二つ抜けているどころではなく、防空戦闘能力に長けた駆逐艦並みに小型結晶生命体を撃破している。

「例の彼は本物ですな」

「そうですね」

素直に頷いておく。銀剣翼突撃勲章を与えられるほどの傭兵なのだから当然といえば当然なのですけれど。これくらいやってくれれば帝国航宙軍の評価が疑われることもないでしょう。イズルークス星系に彼が現れてから今に至るまでの彼の戦績と戦闘データは帝国航宙軍によって記録されています。公式戦果としてしっかりと記録に残るので、今後は彼も仕事をやりやすくなることでしょう。相応に面倒事も増える可能性がありますが、それは有名税のようなものです。

「新しいプラチナランカーになりますかね？」

「それは傭兵ギルド次第ですが、可能性はありますね」

生きて銀剣翼突撃勲章を得ることになった彼には注目が集まるようになる。傭兵ギルドとしても新たなプラチナランカーの登場は望むところだろうし、帝国航宙軍も後押しとまでは行かなくとも拒否反応を示すことはしないだろう。

「ガーディアンクリスタル、排除完了！」

「よろしい。では作戦を次のフェイズに進めます。指定座標に移動後、同期砲撃開始」

「アイアイマム！」

作戦の大詰めを迎えたレスタリアスが指定座標への移動を開始する。

☆★☆

「圧力が減じてきたな」

「ガーディアンクリスタルを撃滅した戦艦、巡洋艦がマザー・クリスタルの包囲を始めました。小型結晶生命体もそれで散っているみたいですね」
「ちっ、不味いな」

つまり戦線が広がって前衛をすり抜け始めているわけだ。もう少し小型結晶生命体の数も砲撃で減らしてから包囲を始めたほうが良いんだが、そんな細かいところまでは俺も伝えなかったからな。
このまま放置してもこちらの勝ちは揺るがないと思うが、放置すれば後衛に被害が出るのは必至だ。

「仕方ない。ミミ、超光速ドライブ起動」

俺はそう言いながらウェポンシステムをオフにした。ウェポンシステムを起動して武装を展開していると超光速ドライブが使えないからな。

「えっ？」
「良いから起動だ」
「は、はいっ！　超光速ドライブチャージ開始。カウントダウン、5、4……」

キィィン、という超光速ドライブのチャージ音を聞きながら俺は艦首をマザー・クリスタルとは明後日の方向に向ける。

「ちょ、ちょっと、ヒロ？」
『お、おいっ！　お前どこに――！』
『てめぇ、逃げる――！』

横から聞こえてくるエルマの困惑した声とクリシュナが超光速ド

ライブを起動したことを察知した傭兵達の声を聞き流して超光速ドライブの起動を待つ。

「3、2、1、起動！」

ドドォン！　と凄まじい轟音が鳴り響き、超光速ドライブが起動――した瞬間、俺は超高速ドライブを解除して通常空間に帰還した。轟音が殆ど重なって二重に聞こえたな。

「ミミ、超光速ドライブ再チャージ開始」
「は、はいっ！　再チャージ開始します！」

艦首を遥か彼方に見えるマザー・クリスタルへと向け、再度超光速ドライブの起動をミミに指示する。一度明後日の方向に短時間超光速航行をすることによってマザー・クリスタルと前衛部隊との間に展開している小型結晶生命体の群れを迂回し、再度超光速航行でマザー・クリスタルの至近距離に移動するのだ。まぁ、巨大目標に対する単騎駆け用テクニックの一つだな。

流石にマザー・クリスタルの直近まで接近すれば、広範囲に広がって後衛に迫りつつある小型結晶生命体にもクリシュナの迎撃のために引き返す個体が少なくない数出てくる。

「超光速ドライブチャージ、カウント5、4、3、2、1……起動！」

再びほぼ重なった轟音が鳴り響き、俺達の目の前に超巨大な結晶製のイガグリかウニみたいな物体が現れた。

「お、大きい……！」
「これは……」

「絶句してる暇はないぞ！」

すぐさまウェポンシステムを再起動し、最大出力でスラスターを噴かしてマザー・クリスタルへと接近する。さぁ、最終ラウンドの開幕だ。

#165　経験を束ねて（後書き）

高速小型艦の単騎駆けとジャイアントキリングは戦場の華だからやめられないよなぁ！　―（：3」∠）―（なお生還率

#166　致命的一撃（前書き）

まにあった！―（∵3」∠）―

#166　致命的一撃

「どうすんのっ！？　どうすんのよこれっ！？」
「そりゃおめぇ、死なないように必死で生き残るんだよっ！」

巨大というのも烏滸がましい結晶製のウニ。その巨大なウニに無数に生える棘の表面が凄まじい勢いで爆ぜ、飛び散った欠片――つまり小型結晶生命体がクリシュナに向かって殺到してくる。

「か、加速度的に敵影が……！」
「はいどーん！」

ミミの言葉通り、加速度的にその数を増やしつつある小型結晶体の群れに即座に対艦反応弾頭魚雷をぶち込む。至近距離まで近づいてきた外敵に対し、マザー・クリスタルはとにかく初手で物量を叩きつけてくる。そんな攻撃を叩きつけられるこちらに取れる手は一つ。押し潰される前に広範囲攻撃で薙ぎ払うことだ。

あと、ついでに対艦反応弾頭魚雷をぶち込むことによってマザー・クリスタルの敵意を引き付け、後衛に向かいつつある小型結晶生命体を呼び戻させつつ、できる限り小型結晶生命体を引きずり出そうという魂胆もある。

マザー・クリスタルが無数の小型結晶生命体を放ってくるとは言っても、それは無限にというわけではない。何故なら、小型結晶生命体もまたマザー・クリスタルの一部に他ならないからである。

つまり、小型結晶生命体はマザー・クリスタルの装甲（ＡＰ）であり、船体（ＨＰ）でもあるのだ。近場の脅威を排除するために放てば放つほど、遠距離から火力を投射してくる戦艦や巡洋艦の攻撃に脆弱になり、ともすれば破壊的かつ致命的な一撃を受ける確率が

上がるわけだ。

「魚雷着弾！」

二発の対艦反応弾頭魚雷がマザー・クリスタルの巨大なトゲに着弾し、小さくない大きさの火球を発生させて小型結晶生命体ごと巨大なトゲの先端を消滅させる。

これがトゲとトゲの間に潜り込み、結晶の中心まで届けば文句なしの会心の一撃なのだが、まぁ今は狙っている余裕がないな。反応弾頭の爆発に巻き込まれなかった小型結晶生命体を重レーザー砲と大型散弾砲で蹴散らしながらでは精度の高い攻撃はあまりに難しい。同じように突撃をかました僚艦が十隻ほども居ればまた話も違うだろうが。

「ヒロ様！　砲撃が来ます！」

「了解！」

間違っても味方の砲撃に巻き込まれるわけには行かないので、砲撃の着弾地点になり得ない方向に回り込む。既にザワザワと砲撃に抗うために巨大な針が動き始めている。一体どのような術理をもって攻撃を受ける前に防御行動に移っているのだろうか？　意思の疎通ができないだけで、案外マザー・クリスタルは高度な知能を持っているのかも知れないな。

などと考えながら一心不乱に突撃してくる小型結晶生命体をいなしている間にそれは来た。巨大な針を密集させて作られた分厚い装甲が激しい光を放ちながら溶け、爆ぜて空間を震わせたのだ。

「あれでビクともしないって本物の化け物ね」

「ピクリとも動いてないのが凄いよな。一体どういう原理なんだ？」

あれだけの出力の大量のレーザーを無重力空間で一方向から叩きつけられ、結晶部分が蒸発して爆発したのだ。普通に考えればいかなる巨大質量を持とうとも爆発の衝撃で動き出しそうなものだが、マザー・クリスタルはまるで宇宙空間にピンで止められているかのように微動だにしていない。

スケールがデカすぎて動いているように見えないのではなく、本当にピクリとも、一ミリたりとも動いていないのだ。謎の技術だな。もし原理を解明して人為的に再現できるようになったら一財産どころじゃない金になりそうな案件だ。

「この調子で砲撃を続けさせれば――」

いずれ倒せるだろう、と言おうと思った瞬間、レーザー砲撃を受けて激しく損耗したマザー・クリスタルの密集トゲ装甲、その中心に超高速で飛翔してきた何かが突き刺さり、激しく結晶を撒き散らした。

『ＫＨＹＡＡＡ

ックロータスの大型電磁投射砲の一撃ではないかと思う。帝国航宙軍の船で実体弾砲を装備した船はパット見では見当たらなかったし、ブラックロータス以外の傭兵の船でここまで届きそうな武装を装備している船も見当たらなかった。

「うぅ……こ、小型結晶生命体の動き、おかしくなってますぅ」

先程の不快な音が相当効いたのか、ミミが半べそをかきながらも状況を報告してくれる。多分今の一撃を受けて、砲撃をしてきている後衛に戦力を向かわせようとしているのだろう。

注意が逸れたならこちらも悪さをするまでだよなぁ？

「悪い顔してるわねぇ」

「心外な」

クリシュナのスラスターを最大出力で噴かしてマザー・クリスタルに突っ込む。何故こんなチキンレースじみたことをしているのかと言うと、対艦反応魚雷の飛翔速度に機体の速度を乗せるためだ。本来対艦反応弾頭魚雷の速度は遅く、当てづらいものだが、このテクニックを使えば鈍重な対艦反応弾頭魚雷の速度に大幅に下駄を履かせることができるのである。

「いけっ！」

ザワザワと不規則に蠢くトゲの隙間を狙って残り二発の対艦反応弾頭魚雷を射出し、急速回頭して離脱する。これで勢い余って突っ込んで百舌鳥の早贄状態になったら格好がつかないな。

「ひえぇ、ギリギリ……」

「心臓に悪いわね！？」

ホッとした声やら文句やらが聞こえてくるが、そんなものは聞き流して回頭し、戦果を確認する。

「お？　これは……？」

なかなか爆発しないのでもしや不発か？　と不安になったが、安心と信頼の帝国製品は如才無くその機能を全うしたようだ。

『Ｇｙ――！』

ぶるり、と今まで微動だにしなかったマザー・クリスタルがその巨体を震わせたように見えた。同時に、強力なノイズのようなものが耳というよりも脳髄を突き抜けていく。

「ぐおっ！？」
「ぐぃっ！？」
「ぎっ！？」

あまりの衝撃に思わず仰け反った。脳味噌に棒を突っ込まれて掻き回されたような怖気の走る感覚に酸っぱいものがこみ上げてきそうになる。なんだおい。精神攻撃めいた何かか？

と目を白黒させている間にマザー・クリスタルに激烈な変化が起こっていた。無数の巨大なトゲの奥に見えていた光が消え失せ、まるで活力を失ったかのようにその身がばらばらになり始めたのだ。どうやらこれは俺の放った一撃がマザー・クリスタルにとっては運悪く、俺達にとっては運良く最奥のコアにまで届いたらしい。致命的一撃（イカルヒット）というやつだ。

「仕留めたかな」

「そう、みたいね」
「小型結晶生命体も活動を停止していますね」
ミミにそう言われて確認してみると、確かにあれだけ飛び回っていた小型結晶生命体もその活動を停止しているようだった。実際には飛び回っていた勢いそのままであちこちにかっ飛んでいっているのだが、方向転換する気配がまったくない。
「案外呆気なかったわね」
「そうですね」
「ふぅむ……」
いくらコアに直撃したといっても、流石に対艦反応弾頭魚雷が二発直撃したくらいでくたばる耐久力じゃなかったと思うんだが……良くも悪くもSOLではゲーム的な処理がされていたってことだろうか？　考えても答えは出そうにないな。
「人間も脳なり心臓なりを潰されれば死ぬし、それは結晶生命体も同じってことなんだろう。多分」
「そう、なんですかね？」
「まぁ、道理かしら。強力な戦艦だってジェネレーターを撃ち抜かれれば轟沈するんだし」
何はともあれ仕留められたことは良いことだ。危険を冒した甲斐があったってもんだな。
と、思っていると広域通信ではなく個別通信が入ってきた。ミミに指示して通信を確立させる。画面に大映しで映っているのは頬を引き攣らせているセレナ少佐の顔であった。
『ごきげんよう、キャプテン・ヒロ』

「あ、はい。ごきげんよう？」

ただならぬ雰囲気を醸し出すセレナ少佐の優雅な挨拶に若干引きながら挨拶を返す。

あれ？　なんだか怒ってません？

『とりあえず、そのツラをレスタリアスにお出しになりやがっていただけるかしら？』

「アッハイ、スグイキマス」

有無を言わせぬ雰囲気に即答すると、彼女はすぐに通信を切った。

「……あれ？　これ怒られるやつ？」

「さぁ？」

「えっと……わかりません」

首を傾げるエルマと不安そうな顔をするミミ。

何がいけなかったのだろうか？　と首を傾げながら俺は超光速ドライブを起動し、セレナ少佐が待っているであろう戦艦レスタリアスへと向かうのであった。

#167　（　　）ニコォ……

「まずは大金星、おめでとうございます」
「アッハイ」

にこぉ……と正に『貼り付けたような』と表現するべき笑顔をセレナ少佐に向けられて思わず直立不動になる。
ここは戦艦レスタリアス――にあるセレナ少佐の執務室である。マザー・クリスタルがその機能を停止したことによって結晶生命体達は全てその活動を停止し、既に戦闘そのものは収束している。
今は各艦『戦利品』を回収したり、様々なデータを取ったりしている所だ。何を隠そうこのレスタリアスもばらばらになったマザー・クリスタルの直ぐ側にまで移動してきている。

「えっと、セレナ様。何故ヒロさ――キャプテンは呼び出されたのでしょうか？」

流石にプライベートではない状況で貴族で帝国航宙軍の少佐であるセレナ少佐と俺を同じ『様』付けで呼ぶことが躊躇われたのか、ミミが俺のことをキャプテンと呼ぶ。地味に初めてかも知れない。

「そうね、呼び出した理由としては命令無視、敵前逃亡、危険行為などがそれに当たりますけれど、傭兵をいちいちそんなことで呼び出したりは致しません。ええ、致しませんとも。帝国航宙軍の軍人ではないので処罰もできませんしね」

ズモモモモ……と謎の効果音が鳴りそうなほど闇のオーラめいた気配を撒き散らしながらセレナ少佐が笑顔を向けてくる。こめかみ

の辺りがピクピクしてる！　コワイ！

「ところでミミさん。自分で色々と苦労しながらお膳立てをして、それが成就するというその寸前に横から成果を掻っ攫われたらあなたは思います？」

「え、えぇっと……よ、よくもやってくれたな？　とか？」

セレナ少佐に矛先を向けられたミミが小動物のように震えながらそう答える。セレナ少佐はその答えに満足そうに頷いて笑みを深めた。

「ええ、ええ、そうでしょう。情報ソースを明かせない不確かな情報を私が分析したデータという形にでっちあげ、それを使って綿密な根回しを行い、綱渡りのような思いを何度もして結晶生命体の討伐艦隊を立ち上げ多少の犠牲は出しつつも順調に敵の首魁であるマザー・クリスタルへと刃を届かせかけたその瞬間に手柄を横から掻っ攫われた私がそう思っても不思議はないですよね？」

「ヒェッ……」

徐々にヒートアップしたセレナ少佐がどんどん早口になっていく様子を見て震える。

「一応ね？　あのままだと後衛に被害が出そうだから、ちょっと裏技的に超光速ドライブを使って距離を詰めてね？　マザー・クリスタルにちょっかいをかけて小型結晶生命体を引きつけようとおもったのでするよ？」

「それがどうしてああなったんですか……？」

「ええと、俺の幸運、セレナ少佐の不運、そういったものが積み重なったんじゃないかな？　おおっとステイ！　ステイ！　剣の柄から手を離してステイ！」

ガタッ！　と立ち上がって剣の柄に手をかけるセレナ少佐に向かって両手の平を見せてなんとか宥めようとする。くっ、メイを連れてくるべきだったか。

「じゃれるのはそのくらいにしなさいよ……それで、本題は？」

事態に全く動じること無く、エルマがそう切り出す。本題って俺に恨み言を言うことじゃないのか？

「……はぁ」

エルマの突っ込みにセレナ少佐は気が抜けたようにため息を吐き、力なく執務机の椅子に腰を下ろした。つい今まで俺を斬り捨てんと言わんばかりだったあの気迫はどこへ行ったのか。

「まぁ、大金星を上げた貴方を今回の討伐に引き入れたのは私ですからね。それに、大将首は貴方に取られてしまいましたが私の立案した作戦自体は上手く行きました。目的は達成できたので、先程のアレは純粋に手柄を横から掻っ攫われたことに対する私の意思表明です」

「前線を抜けていった小型種から後衛を助けたいという一心での行動だったので許してくれ」

「ええ、許しますとも。敵前逃亡についてはクリシュナの戦闘データとレスタリアスを始めとした戦艦の観測データで潔白が証明されていますしね。何より貴方は大将首を挙げた勇士ですから」

あれ？　嫌な予感がするぞ？

「信賞必罰という言葉もあります。ああ、少し前にもこの話はしま

したね？」

セレナ少佐はそう言いながら執務机のコンソールを操作し、ホロディスプレイを立ち上げて何かを表示した。見た感じ、勲章のようである。この前貰った銀剣翼突撃勲章と似たような雰囲気だが、色が違う。まず色が銀色ではなく金色だ。そして形が違う。宝石のような赤い丸い石を中心に金色の十字が走り、更にその後ろから後光のように銀色の筋が走ってメダルのようになっている。

「高そうですね」

「まぁ、そうですね。これは一等星芒十字勲章といいます。一般的にはゴールドスターと呼ばれていますね。ご存知ですか？」

「ご存知でないです」

ミミとエルマに視線を向けると、ミミは目を見開いてこれでもかと言うほどに驚いており、エルマは苦虫を数匹まとめて噛み潰したかのような苦い顔をしていた。二人は知っているらしい。

「キャプテン以外の二人は知っているようですね。この勲章は戦闘において多大なる戦果を挙げた人に与えられる勲章で、事実上いち兵士に与えられるものとしては最上位のものとなります。傭兵に授与されることは非常に稀で、もし与えられれば帝国史上、貴方で四例目になります」

「へ、へぇ……史上四人目かぁ」

流石の俺でも帝国史上、傭兵に授与されることが四例目という事情の重さは理解できる。

「まだ決まったわけではありませんが、今回の戦役における一連の活躍に加え、今まで未知の怪物であった結晶生命体の首魁に止めを

刺した戦功、これらを勘案すれば授与される可能性が十分にあります。もしゴールドスターを授与されなかったとしても、シルバースターは固いでしょう」

そう言ってセレナ少佐は似たようなデザイン――石の色が青くなって十字が銀になったもの――の勲章をホロディスプレイに表示してみせた。

「まぁ、我々――つまり結晶生命体殲滅艦隊の上層部の判断では恐らくゴールドスターになるだろうと思っていますが。何にせよ我々はあるがままの報告を上げるだけです」

「な、なるほど……それでその、俺達はイズルークス星系に帰ったら報酬を受け取ってそれでお役御免ですよね」

「ふふふ」

「ははは」

お互いに笑みを交わしているが、方やそれはもう楽しそうな笑みで、方や脂汗をだらだらと流している引きつった笑みである。

ひとしきり笑いあった後、セレナ少佐がスンッと真顔になった。

「そんなわけ無いでしょう。私の艦隊と帝都まで同行してもらいます」

「ですよねーっ！」

そんな大層な勲章の授与がイズルークス星系のような辺境の前哨基地で行われるとは思えなかった。恐らく正式かつ格式の高い場所でそれなりのセレモニーが執り行われるのではないかと予測していたが、どうやらその通りのようである。

「断固拒否したい……」

「我々の顔に泥を塗るおつもりで？」
「くそォ！　国家権力ぅ！」

自由な傭兵業と嘯いても、実質のところは軍の下請けみたいなものである。俺のような宙賊退治を主な稼ぎとしているような手合は特にそうだ。傭兵ギルドは不当な軍の圧力からは俺を守ってくれるだろうが、ここで勲章授与のセレモニーに参加するのが嫌だからと突っぱねて軍の顔に泥を塗るような真似をした俺を守ってはくれないだろう。

「エルマさんエルマさん、私達帝都に行くことになるんですね。私、ホロで見て憧れていたんです」
「そうね、流石に帝国の首都と言うだけあって物凄いわよ。政治と経済の中心地だからね」

絶望する俺の後ろでミミとエルマが楽しそうなやり取りをしている。君達は楽しそうだなぁ。

「でも、勲章授与のセレモニーにはクルーの私達も参加することになると思うわよ」
「え〝っ」

背後でミミが絶句する気配がする。そうか、ミミとエルマも道連れか。それはそれは……俺ひとりじゃないってだけでいくらか気が楽になるな。ははは。

「とにかくそういうことなので。ある程度調査をしたらイズルークス星系に帰還し、補給をしてすぐに帝都に向かいます。ああ、この前の約束も忘れていませんからご心配なく。イズルークス星系の前哨基地で用意してあるはずですからね。今回の件は帝国の威信を高

めることになりますから、大々的に国民に向けて発表されるでしょう。貴方達は一躍有名人となり、貴方達自身が戦利品として持ち帰ってきた高品質な結晶はさぞ高値で売れるでしょうね。良かったですね」

そう言ってセレナ少佐がそれはもう楽しそうにニコニコしている。彼女はかねてから俺を帝国軍に取り込もうとしていたので、今の状況が楽しくて仕方がないのだろう。恐らくこのままなし崩し的に自分の部下として取り込もうとしているに違いない。今回、俺がこの結晶生命体相手の戦役に参加したのだってセレナ少佐に誘われてのことだったからな。その辺りも利用して立ち回るつもりだろう。

「俺は軍属になるつもりはないですよ」

「ええ、わかっていますとも。無理矢理は良くないですからね。というか、貴方のような部下は正直あまり持ちたくないですし、軍規で雁字搦めにすると貴方の良いところが死んでしまうのでしょう。それくらいは私も心得ていますよ。もう付き合いもそれなりに長いのですし」

セレナ少佐から意外な言葉が返ってきた。おや？　と俺は内心首を傾げる。

「とはいえ、私がそう理解するのと軍がそう思うかどうかは別の話です。帝都の貴族達がそう思うかどうかもですね。帝都では傭兵ギルドを大いに頼ると良いでしょう」

「……どういう風の吹き回しで？」

「あまり失礼なことを言うと個人的に折檻しますよ」

「失礼しました」

セレナ少佐が剣の柄をポンと叩いたので、直立不動になって敬礼

をする。

「私からは以上です。船に戻って休んで下さい。くれぐれも逃亡など考えないように」

「イエスマム」

俺の返事にセレナ少佐は満足そうに頷いた。

☆★☆

「流石はご主人様です」

ブラックロータスに戻り、セレナ少佐との一連のやり取りをメイに話して聞かせると彼女はそう言ってとても満足そうな表情をしてみせた。わずかに目尻が下がり、口角がほんの少しだけ上がっている。とても微細な表情の変化なのだが、普段殆ど表情を動かさない彼女からすればこれは大きな変化だ。

「あの一撃が綺麗に入ったのもメイがＥＭＬを凄いタイミングで命中させてくれたお陰だけどな。帝国軍の同期砲撃の直後に着弾するようにタイミングを合わせたんだろう？」

「恐れ入ります」

いくらＥＭＬの弾速が実体弾砲の中では早い方とは言え、レーザー砲撃の弾速とは比ぶべくもないもない。一体どのような方法で帝国航宙軍の同期砲撃のタイミングを正確に計ったのか、弾速の差を考慮して着弾タイミングを調整したのかは全く想像もつかないが、まったくもって常識の埒外の神業である。

「しかし、あの怪物に止めの一撃を刺したご主人様には及びません。

あの一撃こそ神業かと」
「あまり持ち上げられると調子に乗っちゃうから勘弁してくれ」
と言いつつ、煽てられるのは気分が良いけどな！　称賛されて良い気持ちにならないやつなんていないだろう。その相手が美人なメイドさんとくればもう言うことはない。最高だ。
「その結果、帝都で格式高いセレモニーに参加することがほぼ決定してるけどね」
「良い気持ちになっているところに冷水ぶっかけるのやめてくれませんかねぇ……？」
「で、でもヒロ様！　帝都ですよ帝都！　帝国の中心地、文化と美食の聖地です！」
「ミミも一緒にセレモニーに参加するんだぞぉ……」
「うぅっ……！　ヒロ様とエルマさんと一緒ならきっと大丈夫です！」

ミミは一瞬怯んだが、可愛いことを言ってなんとか持ち直した。ミミは可愛いなぁ、頭を撫でででやろう。そーれもふもふもふ。
「帝都に着いたら色々と用立てないとね。ヒロは良いけど、私とミミの正装を仕立てないと……」
「なんで俺は良いんだ？」
「前にシエラⅢでクリスにオーダーしてもらってたでしょ」
「……おお！」

ポンと手を打つ。そう言えば確かにそんなこともあった。クリスが俺に貴族らしい服を仕立ててくれてたんだよな。今はクローゼットの肥やしになってるけど、保存状態は完璧なはずだ。
正直服に着られている感があったが、クリスを始めとして女性陣

には好評だったのであれで問題ないのだろう。

「二人の正装の費用に関しては俺が出すから、金の心配はしなくていいからな」

「それは助かるけど、装飾品も合わせるとそれなりにするわよ？」

「そうは言っても二人分で座布団のフルアップグレードにかかる費用ほどじゃないだろ？」

「それはそうだけど……」

座布団というのは新人傭兵が一番最初に乗る船として有名な傑作マルチロール宇宙船の通称だ。フルアップグレードに凡そ８０万エネルほどかかるが、それなら今回手に入る報酬で余裕で賄える。

「帝都、楽しみですね」

「ああ、うん。そうね」

俺はあんまり楽しみじゃないけど、ミミが楽しそうだからそう答えておいた。多分治安が滅茶苦茶良いだろうから、傭兵としてはあまり惹かれる場所じゃないんだよなぁ。まぁ、宇宙帝国の首都ともなれば珍しいものも見られるか。うん、やっぱり少しだけ楽しみになってきたな。

#167　（　　）ニコォ……（後書き）

日替わりで更新しているご主サバの四巻が明日発売します！　是非買ってね！！！　|（：3」∠）|

#168　結晶戦役

はてさて、何故レーザー飛び交うこの世界で貴族どもは未だに段平なんぞを振り回しているのか？　そして何故彼らが恐れられているのか？　これにはなかなかに複雑怪奇――と俺には思える――な理由がある。

まず、剣というものについてだが、これはグラッカン帝国の貴族にとって古くから権威の象徴として扱われてきたものであった。それ自体は別に珍しいこととは俺も思わない。地球でも中世の騎士然り、江戸以前の武士然り、剣や刀といったものはある種の権威の象徴として扱われてきた歴史があるのだから。宇宙規模で封建制を維持している帝国の貴族がそういった伝統をそのまま今に引き継いでいたとしてもさほど不自然ではないだろう。

まぁ、やはり銃は剣よりも強しという現実の前にはどうにもならなかったのか、一時期は本当にただの象徴と成り下がっていたようだ。数百年ほど前の貴族は腰に剣だけでなく銃も一緒に下げていたらしい。

しかし、生命工学が発達するにつれて事情が変わってきた。貴族は膨大な政務をこなすためにサイバネティクスやバイオテクノロジーによる自己改造というか、強化を施されるのが当たり前という風潮になってきたのだ。当初は寿命の増加、脳の活性化などを目的としていた強化処置であったが、寿命の増加を目的とした処置は結果として肉体を強靭にし、脳の活性化を目的とした処置は情報処理能力等の飛躍的な向上を貴族に齎した。

そして、材料工学の発達によって剣にも改良が加えられ続け、古来から貴族に受け継がれてきた剣術は肉体と脳の強化に合わせて更に進化、発展した。

元から極まった達人であれば放たれた弾丸を剣で切り払う『弾丸

斬り』を可能としていたが、身体と脳を強化した貴族にとって『弾丸斬り』はさほど難易度の高い技ではなくなった。
脳と身体の強化技術は今現在においても発展を続けており、貴族の操る剣術もまた日々発展を続けている。既に火薬で金属の弾丸を飛ばす武器は時代遅れとなり、強力なレーザー発振器から照射されるレーザー兵器が主役となっているが、今の貴族は光の速度で飛来するレーザー光線すらも切り払い、場合によっては射手に反射してカウンターさえ見舞う。
ジェ〇イかよ、という俺のツッコミも宜なるかな、というものであろう。

で、今の俺なんですが。

「いやいやいや無理無理無理ぎゃぁぁぁっ！？」
「無理とか言いながらなんだかんだ対応できる兄さんすごいなぁ」
「すごいね」

俺は生身でメイと切り結んでいた。いや、メイが持っているのは超重圧縮素材の警棒だから、切り結んでいるという言葉は正確ではないか？　いやそんなことはどうでもいい。今はそんなことは大事な問題じゃない。
ヒュゴウッ、と背筋が凍りつくような音を立ててメイの左手に握られた黒い金属製の警棒が迫ってくる。俺はそれを必死に躱し――間に合わないので右手に構えた剣を合わせて弾くことにする。しかし漫然と刃を合わせるだけでは逆に剣を弾かれて痛い目に遭うのは学習済みだ。
息を止める。それと同時に時間が引き伸ばされてゆき、恐るべき速度で振るわれていたメイの警棒がまるで水中で激しい抵抗でも受けているかのようにゆっくりとした動きになる。
単に剣を合わせても得物の重さと膂力、それに得物を振るスピー

ドで負けている俺に勝ち目はない。俺にできることは唯一つ。こちらに向かってきている弱点に刃を合わせることだけだ。俺は正確に、かつ最短距離で警棒を持つメイの指へと刃を走らせる。

「っ！」

俺に向けて恐るべき速度で振るわれていた警棒の軌道が直角に近い速度で変わり、俺の顔目掛けて跳ねるように迫ってきた。僅かな首の動きでそれを躱し、警棒をはね上げて無防備になっているメイの胴へと左手に構えた剣を叩き込――もうとしたらメイの右手の手刀で剣の腹を叩かれて軌道を逸らされた。その手刀の威力も恐るべきもので、俺の左手から剣がもぎ取られかける。

「ぐげっ！？」

そしてそのまま伸びてきた右手の手刀が形を変え、俺の首を掴んで締め上げながら持ち上げた。見事なネックハンギングツリーである。

「メイに勝つのは無理だと思うんだ……」

基本的な身体スペックがあまりにも違いすぎる。

「いえ、勝つ必要は無いのですが……ご主人様、剣を扱うのは初めてなのですよね？」

「子供の頃に棒きれでちゃんばら遊びくらいはしたことはあるけど、それくらいだな」

レッスンをする前にご主人様の今の実力を確かめましょう、といきなり警棒で殴りかかってきたのには驚いたが、身体に当てる時は

ちゃんと青痣になるくらいに手加減してくれているからメイは優しいと思う。メイの身体能力そのままでぶん殴られたらグシャッてなるからな、ハハハ。身体がいてぇ。

「もしかして天性の剣の才能があるとか？」
「いえ、そういうわけでは多分無いのですが」
「そっかぁ……」

しょんぼりである。ちょっと期待したのに。

「足運びも身体の使い方も剣の握り方、振り方も未経験者のそれです。しかし、反射神経と刃の運び方が常人とは思えないですね。本当に強化手術などは受けておられないのですか？」
「そんなものを受けた記憶は無いなぁ」

こっちの世界に来た経緯が不明だから絶対にされていないとは言い切れないけど、もしそんな事があれば前に診察を受けた時にショーコ先生が何か言ってたと思う。だから多分そういうことはないだろう。

「何れにせよ、ご主人様の反応速度が身体強化を施している貴族に匹敵しているという事実は素晴らしいことです。身体能力に関してはよく鍛えた常人の域を出ませんが、反応速度が高ければ白刃主義者の貴族を相手取っても良い勝負ができるでしょう」
「そんな化け物みたいな連中を生身で斬り合いなんて絶対に御免なんですが」
「ご主人様が望まずともそういった状況に追い込まれる可能性がゼロとは言えませんので。当然、私がお側に着いてさえいれば何人が相手でもご主人様には指一本触れさせませんが、万が一ということもございます」

「まぁ、そうね……」

今までに巻き込まれた数々のトラブルを思い返し、メイの言うようなトラブルに巻き込まれる確率を脳内で計算する。うん、ほぼ避けられないような気がするぞ。絶対に絡まれる。そんな予感がして仕方がない。

「大丈夫です。私には高度な教導アセットも、剣術指南アセットもインストールされています。心配は無用です」

「おお」

「七十二時間でご主人様を立派な剣士にしてみせましょう」

「うん？」

「では、始めましょう。このようなこともあろうかとＶＲ学習装置なども用意がございます。まずは正しい剣の握り方、振り方、重心の取り方や足捌きなどの基本から行きましょう。ビシバシと」

そう言ってメイは警棒をどこかへと仕舞い込み、どこからか細くてよくしなる鞭のようなものを取り出した。わぁ、叩かれたら痛そうだなぁ。

☆★☆

現在は大いに栄えているイズルークスセクターだが、当時はその中心地であるイズルークス星系も帝国航宙軍の結晶生命体に対抗するための前哨基地が置かれているだけの辺境星系であり、今も大量のレアクリスタルが採掘され続けているイェーロム星系に至っては未探索の辺境領域の一つでしかなかった。

その原因は今もなおレアクリスタルの供給源となり続けている結晶生命体であった。当時はまだ結晶生命体の生態などの全容は判然としておらず、また結晶生命体自体が当時の帝国航宙軍にとっても

大変な脅威であった。更に帝国はベレベレム連邦を始めとした周辺各国とも緊張関係にあり、また支配下の未開拓星系も多く、帝国上層部は結晶生命体の巣食う未探索領域の探索や解放に消極的であったのである。

グラッカン帝国がイズルークスセクターの開発にリソースを積極的になった切欠は、現在では『結晶戦役』と呼ばれている帝国航宙軍と傭兵の混成軍による結晶生命体殲滅作戦が成功裏に終わってからのことだ。

当時、結晶生命体の生態の全容はまだ解明されていなかったが、結晶生命体が一定の周期で周辺星系に勢力を拡大しようとする生態だけは経験則として知られていた。

当時の帝国航宙軍も結晶生命体の襲来に備えて彼らを撃退するに足る戦力をイズルークス星系に集めており、それが功を奏して結晶生命体の襲撃を撃退することに成功していた。

この迎撃戦で華々しく歴史の表舞台に躍り出てきた傭兵がいる。そう、皆さんも御存知のキャプテン・ヒロである。帝国の公式記録にキャプテン・ヒロの活躍が記載されたのはこのイズルークス星系迎撃戦が最初である。

彼がイズルークス星系の前哨基地へと補給物資を運んできた時、既にイズルークス星系の帝国航宙軍前哨基地と迎撃艦隊は結晶生命体との戦闘状態に突入していた。

戦場に現れたキャプテン・ヒロはなんと単機で無数に結晶生命体がひしめく群れの中へと突入し、大型結晶生命体数体に致命的なダメージを与え、多くの結晶生命体を引き付けて囮となり、押され気味であった帝国航宙軍が態勢を整える時間を稼ぎ出したのだ。

しかもそれでいて、戦闘が収束した後の彼の愛機は無傷であったという。彼はその英雄的な活躍によって栄えある銀剣翼突撃勲章を受勲している。

当時の帝国航宙軍では結晶生命体の撃退完了後に未探索領域に向けて少数の偵察艦隊を送り出し、後続が居ないかどうか確認するの

が慣習であった。当時の基地司令もその慣習に従って偵察艦隊を送り出した。

通常であれば軽く偵察をして終了となるのだが、当時の偵察艦隊には通常ではない二つの要素が含まれていた。言うまでもなくその要素の一つはキャプテン・ヒロなのだが、もう一つの要素は帝国航宙軍側に存在した。帝国航宙軍とキャプテン・ヒロという組み合わせを見ればお察しの方も多いであろう。その偵察艦隊にはあの姫将軍セレナ・ホールズ（当時の階級は少佐）の率いる対宙賊独立艦隊が組み込まれていたのだ。

偵察艦隊は被害を受けながらもイェーロム星系に結晶生命体の中枢存在であるマザー・クリスタルを発見し、持ち帰った情報を元に姫将軍セレナ・ホールズによって結晶生命体殲滅作戦の作戦立案が行われた。前哨基地司令は作戦の実行を承認し、即日で臨時の連合艦隊が結成された。

派遣された連合艦隊はイェーロム星系において奮戦し、マザー・クリスタルの撃破に成功するのだが、その撃破にもキャプテン・ヒロが大活躍した。彼はまたもや単機でマザー・クリスタルに肉薄し、超至近距離で対艦反応魚雷をマザー・クリスタルのコアに命中させたのだ。

この頃からキャプテン・ヒロは傭兵仲間達からキャプテン”クレイジー”・ヒロと呼ばれ始めることとなる。

なお、コアをピンポイントで破壊された惑星級の大きさを誇るマザー・クリスタルの本体は今もイェーロム星系に存在しており、グラッカン帝国がイェーロム星系を支配下に置いてから今に至るまで大量のレアクリスタルを帝国に供給し続けている。

#168　結晶戦役（後書き）

マザー・クリスタルちゃんは研究の末に低活性状態を維持され、生かさず殺さずの状態で採掘され続けるのだった……―（∵3」∠）

―

リザルト：イズルークス星系（前書き）

お金の話（ °ω °）（なお丼勘定

リザルト：イズルークス星系

リザルト

イズルークス星系到達時のヒロの所持資金：凡そ１２７０万エネル

収入（ミミとエルマに報酬を分配するもの）

前哨基地への補給物資輸送：１５０万エネル

イズルークス星系突入時の活躍特別報奨金：３００万エネル

偵察作戦及び殲滅作戦への参加報酬：２４時間辺り４０万エネル

実働時間４２４時間＝１７．６単位、契約条項に従い、四捨五入で切り上げて１８単位扱い

報酬：７２０万エネル

マザー・クリスタル撃破特別報奨金：保留

トータル：１１２０万エネル

ヒロの取り分：１０７５万２０００エネル

ミミの取り分（１％）：１１万２０００エネル

エルマの取り分（３％）：３３万６０００エネル

収入（整備士姉妹に分配するもの）

ブラックロータスでの傭兵艦整備：２４時間辺り１０万エネル

実働１４８時間＝７単位：７０万エネル

ヒロの取り分：４９万エネル

姉妹の取り分（ヒロの提案により３０％）：２１万エネル

トータル

ヒロの取り分：１１２４万２０００エネル

ミミの取り分：１１万２０００エネル

エルマの取り分：３３万６０００エネル
姉妹の取り分：２１万エネル
イズルークス星系出発時のヒロの所持資金：凡そ２３９４万エネル

リザルト：イズルークス星系（後書き）

計算が間違っている可能性もある。
まぁ誤差分は星系間の移動中の生活費とかお大尽とかで使ってて、
足りない場合は適当に宙賊しばいてるってことで（、　。ω　。、）（
面倒なので

#169　帝都へ。（前書き）

今日の更新はリザルトだけって言ったら石を投げられるよね！ —（：3」∠）—

#169　帝都へ。

コール音で目が覚めた。
喧しい電子音で叩き起こされ、まだ寝るんだよ睡眠が足りねぇんだよと抗議してくる脳味噌をなんとか理性で抑え込み、手探りで電子音の発生源を掴み取る。

「うげ」

重い瞼をこじ開け、電子音の発生源に表示されている名前を見て思わず呻き声を上げる。無視したいが、無視したら後が怖いなぁ……ということで観念して俺は通話ボタンを押した。

『おはようございま――なんという格好をしているのですか』

まだ薄暗い室内に光り輝く金髪紅眼の美人が出現し、挨拶もそこそこに起き抜けの俺を咎めてくる。光り輝く彼女は別に神霊の類というわけではない。この部屋にはホログラムを投影する装置が設置されており、彼女はその装置を通して分厚い装甲と宇宙空間と、更にもう一度分厚い装甲を隔てた先から映像を含めた双方向通信を行っているだけだ。

「寝る時はパンイチスタイルなんだよ。俺のパンイチ姿を見たくないならこんな朝っぱらから直接通信するんじゃなく、一度メイに連絡して俺を起こしてからにするんだな」
『朝っぱらというには遅い時間だと思いますが？』

スッと目を細めて詰問してくる彼女に俺はヒラヒラと手を振って

見せる。

「本当はメイに全部任せても構わないんだが、彼女にもメンテナンスが必要でね……昨日は俺が朝方まで夜番をしていたんだよ」

そう言ってから大欠伸を一つして、光り輝くホログラムの彼女に視線を向ける。

「で、何の御用で？　セレナ・ホールズ中佐殿？」

寝不足の俺が向けた恐らくジトリとしているであろう視線を受け止めながら、彼女は苦笑いを浮かべた。

『まだ少佐です』

☆★☆

「あら？　随分早いわね？」

起きてしまったものは仕方がないのでさっさと身支度を済ませて食堂に向かうと、食後の一服を味わっていたエルマに目を丸くされてしまった。

「セレナ少佐に叩き起こされたんだよ……ったく、くだらないことで起こしやがって」

「それはご愁傷さま」

事情を聞いたエルマが苦笑いを浮かべる。

俺の船のクルーである彼女は俺と同じ人間ではない。エルフである。宇宙船とレーザー砲撃が星の海を飛び交い、人々がスペースコ

ロニーに居住しているこんな世界でエルフというのはあまりにもミスマッチでは？　と出会った当初は思ったものだが、今では何の違和感も感じなくなってしまった。俺も順調にこの世界に毒されてきたというか、適応してきたってことなんだろうな。

「何よ？　じっと見つめたりして」
「今日もエルマは美人だなと」
「なによもう……褒めてもコーヒーくらいしか出ないわよ」

仕方ないわね、という顔をしてエルマが席を立ち、食堂の一角に鎮座する我らがメインシェフたる自動調理器『テツジン・フィフス』へと歩いていく。

俺は彼女の厚意に甘えることにして席に着き、その後ろ姿に視線を送る。サラサラの輝く銀髪からぴょこんと覗く尖った長い耳。うん、どこからどう見てもエルフだわ。そんなエルフがＳＦ風の傭兵衣装に身を包んで、腰にレーザーガンを下げている姿は改めて考えるとやはり少し奇異に思える。

「お？　兄さん早いな」
「おはようございます、お兄さん」

自動調理器でコーヒーを淹れてくれているエルマを眺めていたら、食堂の入り口から新たな声が聞こえてきた。声がしてきた方向に視線を向けると、赤い髪と青い髪というこれまた現実味の薄い髪色をした二人の少女達が食堂に入ってきたところであった。

「おはよう。セレナ中佐に通信で叩き起こされてな」
「ありゃ。そりゃご愁傷さまやね」

そう言って赤い髪の少女――ティーナが俺の隣の席に座る。ティ

ーナの双子の妹である青い髪の少女――ウィスカは姉の隣に腰を落ち着けた。

「姐さーん、うちにもお茶ー。いちご味のジャムもつけてなー」
「はいはい。ウィスカは？」
「あ、えっと……お姉ちゃんと同じので。すみません」

ウィスカの謝罪にヒラヒラと手を振って見せながらエルマが自動調理器に追加のオーダーを入力する。

「今日は何をするんだ？」
「んー、クリシュナとブラックロータスの整備はできる部分は昨日全部済ませたからなぁ。今日はだらだら本読んだり、ホロ見たりかな？　ウィーはどうするん？」
「うーん、私は研究かなぁ……あ、お姉ちゃん、レポート終わってる？　帝都に着いたらちゃんと出さないと怒られるよ」
「うげっ、忘れとった。あーん、もう。今日はデスクワークやなぁ……ゆっくりしようと思ったのにぃ」

妹の指摘に姉が絶望的な表情を浮かべ、食堂のテーブルに突っ伏す。

彼女達は一見人間の少女に見えるが、二人ともドワーフである。どう頑張っても中学生くらいにしか見えない二人だが、ちゃんと成人しているらしい。彼女達のＩＤに記載されている年齢は俺とほぼタメなのである。生命の神秘を感じられずにはいられないが、彼女達にはちゃんとドワーフらしい特徴がある。

まず、単純に力が強い。彼女達と腕相撲をしても俺は勝てない。というか、下手すると彼女達は俺を片手でぶん投げられるのではかろうか。この前トレーニングルームで１２０ｋｇのバーベルを軽々と持ち上げていたのには目を疑った。君達の筋組織何で出来てるの

？　と言いたくなるのも不思議はあるまい。
無論、彼女達のドワーフらしさを象徴する特徴は身体能力だけではない。いや、ある意味身体能力か。彼女達は実にステロタイプなドワーフらしく、酒を好む。しかも下戸の俺とは比べるのも烏滸がましいほどの蟒蛇だ。そしてよく食う。一体あの小さな身体のどこにあんな大量の食い物と酒が収まるのだろうか？

「レポートねぇ……どんなことを書くんだ？」

彼女達の神秘についてはとりあえず考えてもどうしようもないので、俺は聞けばわかることに興味を移すことにした。

「んー？　色々あるけど、大体は修理した船から収集したデータのレポートがメインやね。何が原因でどんな故障をして、どのように直したか。故障したパーツの素材はどんなもので、どのように壊れていたか。あとは未知の製品やカスタマイズされたパーツがあったら分析するとか。あとは日々の健康状態とか、ストレス診断の結果とか、プライバシーに配慮した日報とか色々や」

これがめんどいんや、とティーナが突っ伏したまま顔だけ俺の方に向けて唇を尖らせる。

「お姉ちゃんは溜め込むからだよ」
「ウィーが真面目過ぎるんや」
「はいはい、喧嘩しない」

トレイに俺のコーヒー（完全合成品）と紅茶（のようなもの）とイチゴジャム（と騙る何か）を載せたエルマがそう言って俺達の前に注文の品を並べてくれる。そのイチゴジャムめいたものは何に使うのだろう？　と思っていたらそのまま食ってからお茶を飲むらしい。ああ、ロシア

ンティー的な作法というやつか。

「うん、美味しい。目覚めのコーヒーは格別だな」

「ミルクも砂糖もたっぷりだけどね。意外とお子様舌よね、ヒロって」

「辛いのは苦手じゃないんだが、苦いのと極端に酸っぱいのはあんまり得意じゃないんだよな」

こればかりは好みの問題なので仕方がない。ブラックの苦いだけのコーヒーが好きな人もいるんあろうが、俺はお子様舌なのでブラックは無理だ。たっぷりミルクと砂糖を入れたほうが美味しく感じる。

「それはそうと、セレナ少佐は何の用だったの？」

「ああ、それがどうも妙でな。剣の修練は進んでいるのかだの、礼儀作法はちゃんとレクチャーしてもらっているかだの、そういったお小言を貰った」

「……それだけ？」

「それだけなんだ。朝早くに叩き起こして何をくだらないことをとキレそうになったぞ」

本当に意味がわからなかった。俺が夜番明けで寝ていたのは偶然としても、わざわざ朝っぱらから通信を寄越してくるような内容ではない。エルマと整備士姉妹もセレナ少佐の意図を測りかねたのか、互いに顔を見合わせている。

「単に兄さんの顔が見たかったとかやないの？」

「やだこわい」

「やだこわいって……」

ウィスカが苦笑いを浮かべる。

「いやそんな理由で帝国航宙軍の少佐殿からモーニングコールがかかってくるとか怖すぎるだろう？」

「流石に酷ない？」

「良いか、ティーナ。俺は常日頃からセレナ少佐とそういう関係にはならないと公言してきたし、本人にもそう言っている。なのにそんな理由でモーニングコールがかかってきたらホラー以外の何物でもないだろう」

「そ、そこまでなん……？　でも、なんで？　セレナ少佐ってええとこのお嬢様で軍の出世頭なんやろ？　逆玉やん？」

なるほど、逆玉ね。そういう考えもあるな。無事にセレナ少佐のご家族に受け容れられればの話だがな。

「考えてもみろ、相手は由緒ある侯爵家の令嬢で、しかも軍の出世頭だぞ。そんなご令嬢にどこの馬の骨とも知れない根無し草の傭兵なんぞが手を出して傷ものなんかにした日には、怖いパパやグランパが出てきて闇から闇に葬られてもおかしくない。というか俺が父親や祖父の立場なら何がなんでもぶっ殺すね。膾切りにして」

「まぁ、うん。そういうことが無い、とは言い切れないわよね」

そう言ってエルマが明後日の方向を向く。そうだよな。

「そういうものなん？　セレナ少佐が認めていればええんやないの？」

「うーん、どうなのかな？　貴族様の場合は家同士の政略結婚とか、子供の頃からの婚約者とか、色々あるんじゃない？　横紙破りをするとそういういろいろな方面で面倒事に巻き込まれるんじゃないかな？」

「なるほどなー。ウィーはかしこいなぁ」
「想像だけどね」
整備士姉妹が和やかにそう話す対面で、エルマがそっぽを向いて静かになっているのがなんだか少し気になった。そういえば、エルマの出自も不明っちゃ不明なんだよな……ここの所様子がおかしいし、もしや何かあるのではなかろうか。
「……」
「な、何よ……？」
俺の視線に気づいたのか、エルマが動揺しながら少し怯んだ様子を見せてくる。
「いや、別に。エルマは美人だなって」
「な、何よもうさっきから……もうこれ以上何も出ないわよ」
そう言ってエルマは顔を赤くして再びそっぽを向く。
「ええなええなー。兄さん、うちは？　うちは？」
「あー、はいはい。ティーナも可愛いよ。ついでってわけじゃないけど、ウィスカもな」
「あはは、ありがとうございます」
「なーんか適当やなー」
褒めてやったのにぶーたれるティーナにテシテシと腕を叩かれながら、俺は少し冷めたコーヒー……というか甘いカフェオレを飲むのだった。
☆★☆

「エルマさんの様子がおかしい、ですか」
「そのように思えるんだが、何か知らないか？」

あの後食堂で軽く食事を取り、日課のトレーニングを終えてシャワールームでサッパリした俺はそのままミミの部屋を訪れていた。ミミの部屋は女の子らしい内装――と思いきやなかなかにスタイリッシュな感じである。

俺の部屋は単に殺風景なだけだが、ミミの部屋にはなんだかかっこいいステッカーやポスターが適度なバランスで貼ってあったり、チェーンアクセサリーめいたものやガンベルトが壁にかけられていたり、俺が買ってやったレーザーガンも枕元のナイトスタンドの上に置かれたハンドガン用のガンラックにディスプレイされていたりして実にスタイリッシュだ。センスが良いよな、ミミは。

「うーん……そう言われれば確かに、帝都行きが決まってからなんだか少し元気ないように思いますね」

そう言って小首を傾げるミミ。

船に乗せた時には肉体的にも精神的にも疲労していてボロボロだった彼女も、今ではすっかり健康的な少女になっている。多分しっかり食べてしっかり運動をしているのが良いのだろう。もしかしたらオペレーターとしての日々の仕事も彼女に良い影響を与えているのかもしれない。

「心当たりは無さそうだな」
「すみません、ちょっと理由までは思い当たりません」
「いや、謝るようなことじゃない。本来は船長の俺がしっかりケアしなきゃいけないことだからな。しかし、うーん……どうしたものかな。本人に直接聞くか、それともメイに聞くか……」

「メイさんなら何か知ってそうですよね」
「メイだからなぁ……」

デザインした俺が言うのもなんだが、メイのスペックの高さはちょっと反則気味だからな。俺達の知らない間に俺達のことを俺達自身以上に知っていてもおかしくないような気さえする。正直、メイ一人でなんでもできるんじゃないかと思うくらいだ。

「まぁ、とは言ってもエルマも良い大人だしなぁ……本人が何も言わないのをわざわざ聞きほじるのもどうかと思わないでもないんだよな」
「そう言われると、それも確かにそうですね……」

エルマが敢えて俺達に相談せず、心の内に何かを溜め込んでいるのは彼女なりに何かそうする理由があるのだろう、とも推測できる。俺達に話してもどうにもならない、或いは話すことでかえって迷惑をかけることになる。そんな事情なのだろうということは推測するに易い。

「でも、どうかね。なんだかあいつの性格だと、俺達に迷惑をかけるくらいなら立つ鳥跡を濁さずの精神でふらっと姿を眩ませそうじゃないか？」
「思い切りが良いですからね、エルマさん」

互いに顔を見合わせ、俺達は同時に頷いた。

☆★☆

「それで、私に事情を尋ねようと」
「そういうことだ。何か知らないか？」

共通の見解を得た俺とミミは連れ立ってブラックロータスのコックピットを訪れていた。そこで待っていたのはブラックロータスの女主人、小型陽電子頭脳を搭載した黒髪ロング巨乳眼鏡メイドという俺の趣味を全力で注ぎ込んだ超ハイスペックメイドロイドのメイである。

「エルマ様が思い悩んでいる事情は存じ上げておりません」
「そっかぁ……」

流石のメイもそこまで万能ではなかったか、と少しだけがっかりする。

「ですが、推測は可能です。確度もそこまで低くはないと思います」
「なるほど？」
「はい、エルマ様の実家が帝都にあるようです。恐らくはその関係かと」
「帝都に実家、ですか」
「まぁ、なんとなくそんな気はしてたよな。貴族関係を始めとして妙な知識を持ってるし」

エルマがいいとこのお嬢様なんじゃないか？　という推測はもとからしていた。帝都に実家があるという話に関しても、帝都に行くという話が決まった途端に様子がおかしくなったので推測の範囲内だ。

「エルマ様のご実家は帝都に屋敷を構える法衣子爵家です」
「ほういししゃくけ」

ミミが魂を抜かれたような声でメイの放った衝撃的な言葉をオウ

ム返しにする。
法衣子爵家――つまり領地を持たず、帝都で何らかの官職に就いて禄を食んでいるお貴族様ということだろう。俺はグラッカン帝国のことを人間が支配者として君臨する多種族国家なのだろうと思っていたが、どうやらそれは間違いであったらしい。真の意味でこのグラッカン帝国は多種族国家であったようだ。

「予想の中で一番厄介なパターンだったなぁ」
「え？　え？　じゃあエルマさんってお貴族様だったってことですか？」
「血筋的にはそうなります。尤も、調べた限りでは兄君が家督を継ぐことになっており、上に一人姉君がいらっしゃるようなので、エルマ様が法衣子爵家を継ぐことはまず無いと思われます」
「なるほど」

兄君が結婚していて子供がいるならそちらの方が継承権は高くなるのだろうし、何かとてつもない不幸が起こって当主と兄君、姉君とその家族を含めた全員が身罷らない限りはエルマに当主の座が回ってくることはまずあるまい。

「継承権を放棄すればエルマ様は平民として扱われることになります。平民とは言っても、上級市民権を持つ一等帝国民ですが。私の確認した限りでは継承権の放棄手続きや当主からの勘当手続きなどはされておりませんので、エルマ様は貴族籍を有する貴族ということになります」
「なるほどなー……」

エルマの目の前で貴族の子女とは面倒事になるからそういう関係になる気はない、と何度も公言しているからなぁ。自分が法衣子爵家の一員だということが俺に知れたら、と思い悩んでいるというこ

とだろうか。

「ご主人様との関係をどのようにご実家の皆様に納得させるか、そして自らの出自を隠してご主人様との関係を築いてきたことをどうご主人様に伝えるか、今後の関係をどのようにするべきか、ということでお悩みになっているのではないかと」

「うん、わかった。これは帝都に着く前にエルマと話し合っておいたほうが良さそうだなぁ」

こういうのは早めにぶっちゃけあうのが一番だ。互いに互いの思いを尊重しようとして擦れ違うような甘酸っぱくもじれったい展開は俺には合わない。

「というわけで今日の予定は全キャンセル。俺はエルマと話し合ってくるから」

「承知致しました。今日の分の埋め合わせは明日以降の予定を調整してカバー致します」

「……お手柔らかにお願いします」

頑張れ、明日以降の俺。なぁに、死にはしないさ、死には。ブラックロータスに積んである簡易医療ポッドは優秀なハイエンド品だからな！　ははは！　はぁ……。

#170　開眼（強制）

メイのいるコックピットからの帰り道にちょっと話したいことがあるから、とメッセージアプリを使ってちょちょいと連絡をすればアポイントメントは完璧だ。いや、文明の利器ってのは便利だよなと益体もないことを考えつつエルマの部屋へと向かう。

ミミはコックピットに居残ってメイと色々話すと言っていたが、まぁ気を遣ってくれたのだろう。コックピットから居住区画への道のりはそれなりに長い。ミミはコックピットに居残って俺に考える時間をくれたわけだ。

「とは言ってもね」

俺の中で結論はもう決まっている。今更エルマを手放す気は更々無い。

うん、浅ましい独占欲が無いとはとても言えない。でも、それだけでなく、あれだけその、なんだ。色々としでかして実家が面倒だからと放り捨てるのは仁義にもとると言うか、ちょっとあまりにも外道な所業であろう。流石に俺はそこまで薄情ではない。

と、考えをまとめている間にエルマの部屋の前に着いた。

「へい、のっくしてもしもーし」

『開いてるわよ』

コンコンとエルマの部屋の扉を叩くと、スピーカー越しにエルマの呆れたような声が聞こえてきた。ごめんな、あんまりシリアスな状況になりすぎると茶化してバランスを取りたくなる持病に罹っているんだ。

心の中で誰ともなく謝りながら扉横のタッチパネルに触れて扉を開き、エルマの部屋の中に入る。
エルマの部屋の内装は思いの外可愛らしい。彼女がメッセージアプリのスタンプとして使っている単眼コミカルエイリアンや、同じくミミがスタンプとして使っている猫のような兎のような不思議生物のぬいぐるみがあちこちに鎮座しているからそんなイメージが先行するんだよな。
実際には壁際に完璧に温度や湿度を管理してくれるワインラックとか、キンキンに冷えたビールがミッチリと詰まっている冷蔵庫があったりするからそこまでファンシー一辺倒でもないんだが。

「何よ、もう。入ってくるなりキョロキョロして……話があるんじゃなかったの？」
「おう、それな」

エルマがベッドに腰掛けているので、俺は少し離れた場所に設置されている椅子に座ることにした。座り心地はまぁまぁだな。この椅子は戦闘時には床に自動で収納されるようになってるんだ。
ああ、変な方向に思考が逸れるな。いかんいかん。こういうのは単刀直入に行くべきだ。

「メイからお前の実家の話を聞き出したんだ」
「あー……なるほど、うん。メイなら調べていてもおかしくないわね」
エルマは納得したようにそう言いながら苦笑いを浮かべた。メイなら何をしていてもおかしくはないというのは共通認識のようで何よりだ。
「親御さん、法衣子爵だってな」

「うん、そうなの。ごめん」
「何を謝っているのかよくわからないが、苦しゅうない。許す！」
「ふふ、何よそれ」

胸を反らして尊大に許してやると、エルマはそんな俺を見ておかしそうに吹き出した。まぁ掴みはＯＫといったところか。

「まぁ、エルマの実家がお貴族様というのはどうでも良いんだ、この際。今更そんな理由でエルマを放り出すつもりは毛頭ないから」
「その言葉は嬉しいけど、絶対に面倒なことになるわよ？」
「まぁ、他ならぬエルマ自身がそう言うならそうなんだろうな。面倒なのは俺も困る。困るが、お前を天秤にかけるようなことじゃあない。俺の言ってる意味、伝わってるか？」
「どうかしら？　もっとはっきり言って貰った方が誤解が無いと思うわ」

エルマが俺の顔をじっと見つめてくる。本当は伝わってるな？
まったく。

「今更お前を手放す気は無いから。お前のためなら多少とは言わず面倒事ぐらいいくらでも受けて立つし、なんなら勲章も名誉も全部放り捨てて攫って逃げても良い。これで伝わったか？」
「……ええ、伝わったわ。はっきりとね」

そう言ってエルマは微笑み、俺を迎え入れるように腕を広げて見せた。

「告白のあと、愛する二人は抱き合って幸せなキスをするのがお約束よね？」
「ホロの見過ぎと違うか？」

そう言いながら俺は椅子から立ち上がり、ベッドの縁に座るエルマの隣に腰掛けて彼女の華奢な身体を抱き締めた。うん、落ち着く。今更手放すなんてありえないね。

☆★☆

特にえっちな事をするでもなく、同じベッドに横になりながらエルマの家族の話を聞いた。

「父様はね、内務府の管理局に属する官僚なのよ」
「うん、ピンとこないな」
「でしょうね。内務府っていうのは帝室に関わる事務全般を司っている役所ね。その中の管理局っていうのは、皇帝の住まう皇城や帝室に関わるあらゆる物件の管理全般を担っている部署よ。例えば皇城の維持管理だとか、帝室に属する方々が利用する施設や乗り物の管理だとかね」

なるほど？　なんとなくイメージが湧いてきた気がするが。

「めっちゃ範囲広くない？」
「そうよ。沢山の役職があって、沢山の人が働いているわ。父様は皇城の庭園を管理する部署に所属しているの。名誉ある職なのよ？」
「うーん、なるほど？　まぁ、直接帝室の皆様方の目に触れるものを管理しているとなると、そういうものなんだろうなとは思うな」

要は、宮廷庭師的な立場ということだろうか？今ひとつ凄さがわかりにくいが、子爵という爵位も鑑みるに俺みたいな平民とは本来住む世界が違う人なんだろうなと思う。

「それで、人柄は？」
「そうねぇ……優しいけど、頑固ね。私が実家を飛び出したのも、頑固な父様と喧嘩したのが理由だし」
「なるほどなぁ……そして俺は飛び出したお転婆娘が連れてきたヤクザな商売を生業とするどこぞの馬の骨ってわけだ。穏便な初対面になりそうもないなぁ！」

家出したお転婆娘がガラの悪い傭兵と一緒に帰ってきた。しかも傷物になって。俺が父親なら怒り狂ってショットガンを突きつけるところだな！

「あはは、そうね。でも、どうかしら？」
「ん？　何か光明があるのか？」
「ヒロは今の時点でも銀剣翼突撃勲章持ちの英雄様よ？　それに、帝都に行けば一等星芒十字勲章（ゴールドスター）か二等星芒十字勲章（シルバースター）を受勲することになるわけじゃない。父様は頑固だけど、帝国と帝室の権威の信奉者でもあるのよ」
「ああ、つまり俺の武勲が文字通り身を助ける可能性があると」
「そういうこと。帝国では銀剣翼突撃勲章持ちの傭兵は名誉騎士爵相当の扱いを受けることになっているけど、ゴールドスターなら名誉子爵相当、シルバースターでも名誉男爵相当の扱いになるわ。ゴールドスターを受勲すれば建前上は父様と同格になるわけだから居丈高に振る舞うことなんてできないし、シルバースターを受勲して名誉男爵相当の扱いを受けることになったとしても、粗略に扱うことはできないわ。そんなことをしたら帝国た帝室の権威に瑕をつけることになるから」
「なるほどなるほど。となると、そんなに心配しなくても大丈夫ということか」

一気に肩の荷が降りた気分だ。芸は身を助けるとはこのことか。

いや、どちらかと言えば禍転じて福となすかな？　面倒だと思っていた受勲がこういう形で身を助けることになるとは。

「いや、それはちょっと気が早いわね」
「Ｗｈａｔ？」
「母様と姉様は何の問題ないと思うんだけど、兄様が……」

エルマが視線を明後日の方向に逸らす。

「兄様」

嫌な予感が背筋を撫でていく。なんか急に背中が湿っぽくなってきたぞ？

「うん、その……所謂極度のシスコンで」
「あ、いや、その先は聞きたくない」
「ガッチガチの白刃主義者なのよね」

おぉ……もう。

☆★☆

「本日の予定は全てキャンセルだったのでは？」
「生き残るためには仕方がないこともある」
「はぁ」

こてん、と首を傾げるメイの珍しいリアクションを見ながら俺は生き残るために全力を尽くすことを胸に誓うのだった。うん、エルマと約束したからな。多少と言わず面倒事くらいいくらでも受けて立つって。俺は約束を守る男だからな。ははは……はぁ。

「ご主人様のモチベーションが高いのは良いことです。モチベーションが高いほうが学習効果も高まりますので」
「そうだろうそうだろう」
「はい。なので、修練のギアを一つ上げることと致しましょう」
「うん？」

こうして地獄のような日々が始まった。

☆★☆

エルマと話し合いをした日から三日が過ぎた。

「ヒ、ヒロ様、大丈夫ですか？」

食堂のテーブルに突っ伏して口からエクトプラズムを吐いている俺を心配して、通りがかったミミが声をかけてくれた。ミミは良い子だなぁ。涙が出てくるよ。

「うん……だいじょうぶ……いきてるから」

ちょっと全身の骨にヒビが入ったり、血反吐を吐きながらぶっ飛ばされたり、血尿が出たりしただけだ。世の中には死ななきゃ安いなんて言葉もあるらしいね。ははは、世の中ってのは本当にくそったれだぜ。

「……ヒーローもののコミックとかで殺気を感じて攻撃を避けるとかってあるじゃん？」
「えっ？　は、はい、ありますね？」

唐突な俺の発言にミミが困惑しているのがわかったが、俺は話を続けた。

「ああいうの、俺眉唾というか所詮創作に過ぎないと思ってたんだけどさ、実在するもんなんだなって実感してるよ……というか、俺はすでに会得してたんだってことに気づいた」

「そ、そうなんですか？」

「うん……身を以て実感したよ」

どこに、どのように攻撃を仕掛けてくるか。そういったものを相手の些細な仕草から読み取り、感じる能力が所謂殺気を感じる能力というものなんだろう。

アレはきっと膨大な経験を元にした経験則とか、優れた情報処理能力とか、そういったものを総合して会得する一種の未来予知的なものなのだ。多分。

俺はメイとの訓練を経てそうなんだろうと思い至った。

この能力自体は既に俺は会得していたのだ。それは向こうの世界でやり込んだＦＰＳで基礎が培われ、ＳＯＬのプレイで開花し、この世界で数多経験した航宙間戦闘で磨かれていた。

レーダーから得られる限られた情報や、視覚から得られる敵艦の挙動、シールドに攻撃を受けた際に自機のホログラムに表示される被弾警告、鳴り響くアラート、そういった情報を統合して周辺の空間を把握し、適切な操艦で被害を最小限に抑え、敵にとって致命的な場所に攻撃を送り込む。

剣術も基本は同じであった。肌や足の裏で感じる床や空気の振動、自らの視覚で捉える敵の一挙一投足や視線の動き、聴覚で捉える衣擦れの音や床を踏みしめる音、そういったものの情報を統合して敵の動きを予測し、自らの身体を適切に動かして被害を避け、敵にとって致命的な位置に刃を走らせる。

メイに毎日命の危機を感じるレベルでボコられて俺の中で既に開

花していた殺気を感じる能力というか、空間掌握能力というか、そういったものが遂に今日剣術を司る何かと繋がったらしい。いつもはメイに一撃も反撃を入れること無く何十回と血反吐を吐く羽目に陥っていたのが、今日は七回で済んだ。

「ところで話は変わるけど……」
「はい？」
「ミミも実は公爵家とか男爵家とかの血筋ですとかそういうことはあるまいね？」

セレナ少佐は侯爵家令嬢、クリスは伯爵家令嬢、エルマは子爵家令嬢。こうなるとミミも実は……なんてことがあったりするかもしれないので、一応聞いておく。

「えぇ？　そんなわけないじゃないですか。私は正真正銘平民ですし、祖父や祖母も普通のコロニストだったってパパとママから聞いたことがありますよ」
「ははは、そうだよな。そんなことあるわけないよな」

いくらなんでもミミは無いか。そういう立場なら親を失った上に大量の負債を抱えて途方に暮れるということはなかっただろう。

「そうですよ、もう。私がお貴族様に見えますか？」
「うーん、ミミは可愛いからなぁ……貴族令嬢が着るような豪華なドレスとかを着れば十分ありえるんじゃないか？」
「そんなに豪華な衣装を着ても、服に着られるだけですよ。エルマさんみたいにキリッとした雰囲気も出せませんし、セレナ様やクリスちゃんみたいな気品はとても出せません」
「そうか？　前にロリ系の衣装を着てもらった時はバッチリ決まってたけど。また着て欲しいなー」

「えぇ？　う、うーん、ああいうのは私には似合わないと思うんですけど」

顔を赤くしてモジモジするミミが可愛くて生きるのが辛い。

この後俺は恥ずかしがるミミをなんとか拝み倒し、前に買った色々なロリ系衣装を着てもらってメイとの訓練で傷ついた精神を存分に癒やすのであった。

#170　開眼（強制）（後書き）

ピコーン（何か変なフラグの立つ音）

#171　帝都グラキウス

さて、白刃主義者に絡まれても即死しないように訓練を積んでいる間も、俺達とクリシュナを乗せたブラックロータスはセレナ少佐率いる対宙賊独立艦隊と共に帝都のあるグラッカン帝国の首都星系へと向かっていた。

目が覚めてから眠りにつくまで何度も血反吐を吐きながら気絶し、苦痛に苛まれてまともに睡眠を取った記憶がない上に、数少ない寝ている間すら睡眠学習装置めいたヘッドギアを被せられて時間の感覚がおかしくなってしまっている俺であったが、いつの間にか十日ほどの時間が過ぎていたらしい。

「何回見てもでけぇなぁ」
「おっきぃですねぇ」
「すごいなぁ。うちも見るのは初めてや」
「うーん、大きいねぇ。もう少し小さくできると思うんだけどなぁ」

なんかウィスカだけ毛色の違うコメントをしているが、俺達はゲートウェイの存在するニーパック星系へと辿り着いていた。途中でクリスの実家があるデクサー星系を通過していたらしいが、俺はメイにボコられたり、マナーを叩き込まれたりしていたので全く気が付かなかった。本当に通過しただけだったらしいから、気づいたところで会いに行くことはできなかっただろうけど。

「ゲートウェイで帝都に直行するんですよね？」
「そうなるわね。ゲートウェイネットワークのお陰で帝都は遠いけと近い場所だから」
「ゲートウェイを自由に使える人にとっては、だろ？」

「まぁそうね」

俺の指摘にエルマが肩を竦めてみせる。

何千光年、何万光年という距離を一瞬で飛び越えることができるゲートウェイはとても便利なものだが、ゲートウェイは万人が自由に利用できるものではない。貴族ですら利用するにはそれなりの手間がかかるというし、傭兵や行商人などのその他一般人に利用許可が降りることは殆どないという。

俺が元の世界でやっていたＳＯＬにおいてもゲートウェイを利用できる機会はごく限られており、俺自身もＳＯＬ内では殆ど利用した覚えがない。ゲートウェイを有する銀河帝国との関係を深めていけば利用許可が降りるという話はあったが、根無し草の傭兵プレイをしていた俺には縁がなかったんだよな。

「そもそも、自分が生まれ育ったコロニーから出る人も少ないですしね。帝都はやっぱり遠い場所ですよね」

「せやな。コロニーから出るのってうちらみたいな造船関係の星間企業か、貿易関係くらいやない？」

「あとは軍人さんくらいかな。傭兵ってどうなったらなれるんですかね？」

「あー、なんか養成学校的なアレがあるらしいぞ。俺はよく知らんけど」

前に傭兵ギルドでそんな話を聞いた気がする。まぁ、わざわざスリルを求めて傭兵になる奴なんてそうそういないと思うけどな。俺だってクリシュナが無くて、身一つでコロニーに放り出されていたら傭兵として身を立てていたかどうかわからん。

「兄さんはどうやって傭兵になったん？」

「……まぁ、流れで？」

目覚めたら宇宙を漂流するクリシュナの中に居て、速攻で宙賊に襲われたから返り討ちにしてって感じで……その後はもう完全に流れで傭兵になったよな。というかされたよな。エルマに感謝だ。

「流れでて……そっか、兄さん記憶が無いんやったな。ごめん」

「別に謝ることはないけどな。色々と幸運だと思うよ、俺は」

敢えて口に出す気にはならないけど、ミミやエルマに出会えたし、メイやクリスやティーナやウィスカ、それにセレナ少佐――いやセレナ少佐はいいや。とにかく皆に出会えたしな。ショーコ先生は……うん、思い出すとケツがムズムズしてきそうだから。うん。

「お、動き出したぞ。俺達の順番みたいだ」

「おー、楽しみやな。どんな感じなんやろ？」

「楽しみだね、お姉ちゃん」

ワクワクしてるところ悪いけど、そのワクワク感は裏切られることになるぞ。ふとミミに目を向けると、俺と同じく生温かい視線を整備士姉妹へと送っていた。ははは、ミミもあんな風にワクワクしてて肩透かしを食わされたもんな。

艦隊が前に進み、一対の巨大構造物の間に存在する不可思議な燐光を放つ歪んだ空間へと突入していく。先行しているコルベットや駆逐艦が光を放って姿を消す光景は実にミステリアスだ。

「お、おぉ……来るで、ウィー」

「お、お姉ちゃん……」

ホロディスプレイ越しに空間の歪みが迫ってくるのを見ながら整備士姉妹が互いの手を握り合う。

ほんの少し前を航行していた巡洋艦が光を放ってその姿を消した。

そして――。

「え？　これで終わりなん？」

「……呆気ないね」

超光速ドライブを起動した時や停止した時に聞こえるような轟音も、ハイパードライブ中に見えるような極彩色のハイパースペースの光景なども無く、それどころか光ることも何もなく、パッとホロディスプレイに映る映像が切り替わった。

「まぁ、これが本物のワープって奴なんだろうな」

「はぇー……すごいなぁ」

「理論の概要は知ってるけど、本当に凄いね。うーん、私も負けていられないなぁ」

ティーナは一周回って凄い凄いと感心してるけど、ウィスカはなんか明後日の方向にぶっ飛んでいってないか？　たまにウィスカのことがわからなくなるよ、俺は。たまに技術者としての意識が妙に高くなるんだよな、ウィスカって。

「ま、何はともあれ無事に着いたわね。ようこそ、グラッカン帝国の首都星系へ。あそこが私の実家のある場所、帝都グラキウスよ」

「んん……？」

ホロディスプレイに映る映像を見て俺は思わず眉間に皺を寄せた。大きさから考えて、多分惑星なのだろう。だが、その表面には見る限り海などは見えず、それどころか自然の造形物が一切見当たらない。惑星表面が全て人工物で覆われているのだ。

「エキュメノポリス……？　実現できるものだったのか……？」
「あら、なかなか古い言葉を知ってるわね。今は単純に都市惑星と呼ばれるのよ」
「なるほど……で、帝都ってのはつまり、アレのことなんだな？」
「そうよ。あの都市惑星そのものが帝都グラキウスというわけね。ようこそ、帝国の中心地、華の帝都へ」

そう言ってエルマは微笑みを浮かべて見せた。

☆★☆

俺達は帝都に降りる前にまずは首都星系にいくつか建造されているコロニーの一つ、グラキウスセカンダスコロニーへと寄港することになった。ここで積荷のチェックや各種検査、それに帝都に滞在するための手続きなどをすることになるという。

つまり、このグラキウスセカンダスコロニーは帝都に入るための城門のような役割をしているわけだ。帝都に各種商品や資材などを運んできた商人などはほぼこういったコロニーで全て用事を済ませて帝都を去っていくのだという。何故なら、帝都に降下するには煩雑な手続きが必要になる上に、滞在費が非常に高いらしい。いや、高いとは言っても流石にリゾート星系ほどではないそうだが。

「で、俺は何をすれば良いんだ？」

コロニーへの停泊が完了し、メイも食堂に姿を現したところで俺はそう発言した。

いや、こういう時に船長がリーダーシップを発揮しないでどうするんだと自分で思わなくもないんだが、正直今の俺は半強制的にセレナ少佐というか国家権力にここまで引っ張ってこられたわけで、

いつもと違って主導権が俺の手には無い状態なんだよな。
　こればかりは引っ張ってきたのに特に何も指示を出してこないセレナ少佐が悪いと思う。いや、セレナ少佐が俺に指示を出してないんじゃなく、俺がセレナ少佐の指示を受けられない状態にあっただけか。きっとそうだな。

「セレモニーに関する手続きは全て軍の方でやるとセレナ少佐が仰っておられましたので、降下手続きなども全てあちらでするそうです。私としては、このコロニーの傭兵ギルドに顔を出しておくことをお勧めします」
「傭兵ギルド？　ああ、そう言えばセレナ少佐が帝都に行ったら傭兵ギルドを大いに頼るべきだとか言ってたっけか。頼るって言っても、何に関して頼れば良いのかわからんのだが」
「その詳細についてもあちらで伺えばよろしいかと。首都星系の傭兵ギルドなら傭兵が貴族を上手くあしらうためのノウハウを持っているでしょうから」
「なるほど？」

　まぁ、メイが勧めるなら間違いは無さそうだし行ってみるとするか。

「それじゃあ行ってみるかな。ミミとエルマも着いてくるか？」
「そうね。ドレスと装飾品も用意しなきゃいけないし、傭兵ギルドで事情を説明して紹介してもらいましょう」
「う、ドレスですかぁ……」

　ヒラヒラとしたドレスがあまり得意ではないミミが苦々しい表情を浮かべる。本人はあまり好きじゃないみたいだけど、似合うと思うんだけどな。俺は。

「それじゃあうちらも――」
「お姉ちゃん、支社に連絡を取らなきゃダメだよ」
「えー、少しくらいええんちゃう？」
「後でネチネチと嫌味を言われるのは嫌だよ、私」
「うっ……帝都の奴らは嫌味ったらしいからなぁ」

整備士姉妹はどうやらスペース・ドウェルグ社関連で用事をこなす必要があるらしい。しかし、どうも二人の言動から二人が帝都支社を嫌ってるような印象を受けるんだよな。
アレだろうか、同じドワーフでも派閥みたいなものがあるんだろうか？　なんかそんな感じがするな。怖いから触れないでおこう。

「メイはどうする？」
「私は船に残っています。何か連絡などがありましたらすぐにお取次ぎ致しますので」
「わかった。任せたぞ」
「はい、お任せ下さい」

メイがほんの僅かに微笑む。うん、最近はメイも表情が柔らかくなってきたな。見慣れてないと全く変化に気付くことができないだろうけど。

「それじゃあ行こ――」
「ヒロは部屋に戻って銀剣翼突撃勲章と剣を持ってきなさいね」
「……要らなくね？」
「要るわよ。事情の説明が楽になるからちゃんとつけてくる。はい駆け足」
「えー……」
「つけた方がかっこいいですから」
「ぬぅ」

結局エルマとミミに押し切られてキラキラの勲章を胸につけ、二本の剣を腰に佩いて傭兵ギルドへと足を運ぶことになった。解せぬ。別にレーザーガンだけで十分だと思うんだがなぁ。

#171　帝都グラキウス（後書き）

エキュメノポリスはＳＦロマン―（∴３」∠）―

#EX－001　私が拾われた話（前書き）

今日はお休みなので、たまに閑話でも――（∵3」∠）―

#ＥＸ－００１　私が拾われた話

「はぁっ！？　ちょ、ちょっと待って！　金額はともかく、納期限が一週間後ってどういうことよ！？」
「どういうことも何も、作戦行動の妨害を行った上に軍の所有する兵器への破壊行為を行い、その上多数の負傷者を出したとなると本来ならば問答無用で収監なのだが？」

帝国軍人のくせに肥え太っている豚がそう言いながらいやらしい視線を私に向けてくる。

「まぁ、一週間後までに３７００万エネルを納付するだけで無罪放免となるのだから、十分に有情だろう？　傭兵というのはなかなかに稼いでいるという話ではないか？」
「そりゃ３７００万エネルくらいなら稼げるわよ。でも、一週間でだなんて無理に決まってるじゃない！　しかも、私の船は大破してるのよ？　稼ぎようがないでしょうが！」
「そちらの事情など知ったことではないな。分納も認められん。一週間後の１５００時までに全額納付するように。そうでなければ帝国軍法四条七項に従って貴様を重犯罪者として逮捕、収監する」

軍服を着た豚野郎はそう言ってニヤリと笑い、私の訴えを一顧だにせず踵を返して去っていった。

☆★☆

「あの○○○野郎！　いつか絶対ぶっ殺してやる！」

ターメーンプライムコロニーの軍施設から放り出された私は思わずそう叫んで複合建材製の地面を蹴りつけた。軍施設の入場ゲートを守っている守衛が私の口汚い言葉に目を剥いて驚いているけど、こちらとしてはそれどころではない。なんとかして軍への賠償金を工面しないと身の破滅だ。

このターメーン星系には監獄コロニーであるターメーンテルティウスコロニーが存在している。そこに収監されている重犯罪者の大半は元宙賊だ。元宙賊と、元傭兵。穏当に握手などできるわけがない。彼らが監獄コロニーにぶち込まれた理由の大半は傭兵の宙賊狩りによるものだからだ。

「とにかく、どうにかしないと」

そんなところにぶちこまれたらどんなことになるか、想像するのも恐ろしい。宙賊といっても別に男ばかりというわけではないが、やはり男女比率で言えば男のほうが多い。そんな場所に女の私が放り込まれたら……いや、ダメだ。悪いことばかりを考えても仕方がない。最悪の未来を回避するために、今は全力で動くべきだわ。

「最悪父様に……いえ、駄目ね」

どう考えても時間的に間に合わない。ハイパースペース通信とゲートウェイ通信を併用してもこのターメーン星系から父様の所に私からの連絡が届くまでに十日くらいはかかる。今すぐに連絡をしても父様の所に私からの報せが届いた頃にはもう私は監獄コロニーの中だ。

「でも、保険にはなるか……」

私の収監には間に合わないかもしれないが、収監された後に助け

出しては貰えるかもしれない。選択肢の一つとしては考えておくべきだろう。

「今更どの面を下げてって話だけど」

思わず苦笑いを浮かべる。

五年前、私は兄様の小型戦闘艦を盗んで実家から飛び出した。原因は、色々ある。好きでもない婚約者の問題とか、見栄とか虚飾に塗れた貴族の娘としての生活に嫌気が差したとか、自由な生活への憧れとか、ホロで見た傭兵という生き方への憧れとか。

そういった諸々に嫌気が差して私は貴族の娘としての生活を捨てて逃げ出したのだ。それまで私を育ててきてくれた全てに後ろ足で砂をかけて。

宇宙に飛び出して最初の一年は追いかけてくる父様や兄様の手から只管に逃げ回る一年だった。

今思えば、兄様はかなり手を抜いてくれていたのだと思う。寧ろ、兄様は父様の邪魔すらしていたのではないだろうか。婚約者のことは私よりも、兄様の方が嫌っていたくらいだったから。

一年半も経った頃には帝都から遠く離れた星系まで私は逃げ延びていて、遂に父様と兄様の追跡の手が止まった。それからやっと本格的に傭兵として活動することができるようになって、失敗したり成功したりを繰り返しながらコツコツと傭兵として頑張ってきた。

挫けそうになった時もあったけど、なんとか乗り越えてここまでやってきた。

「……ここで諦めるなんて御免よ」

家族に不義理をしてまで手に入れた自由な生活だ。そう簡単に手放してたまるか。私は挫けそうな心を奮い立たせて走り回ることにした。

☆★☆

「……はぁ」

この一週間、私は持てる限りの伝手を使って資金集めに奔走した。修理中のスワンまで売り払い、秘蔵のプレミア付きのお酒やら何やら、身につけている最低限のもの以外の全てを売り払ってお金を掻き集めた。傭兵ギルドにも何度も足を運んでできる限りの支援を引き出した。

それでも足りない。スワンに乗り換えた直後で懐にあまり余裕がないタイミングだったのが最悪だった。

「あと３００万エネル……」

傭兵や貴族の感覚で言えば小額ではないが、大金という程でもない金額だ。でも、一般的に考えれば３００万エネルというのは途轍もない大金だ。

私のようなエルフはともかくとして、普通の人間であれば質素に暮せば一生働かなくても生きていけるだけの金額なのだ、３００万エネルという金額は。つまりそれは、これからたった半日足らずで私が用意できるような金額ではないということでもある。

「時間さえあれば……」

修理中のスワンさえ使えれば３００万エネルくらいなら一ヶ月――いや、二ヶ月もあれば用意できるのに。融通の効かないあの豚が憎たらしくて仕方がない。いっそ今あるお金でレーザーライフルやプラズマグレネード、その他諸々の武器を調達してあの豚と刺し違えてやろうかしら？　なんて考えが脳裏を過る。

どうせこのまま行けば元宙賊の重犯罪者達に嬲られて尊厳も何もかも踏み躙られることになるのだ。そんな風になるくらいなら、あの豚がいる軍施設に殴り込んで討ち死にしたほうがいくらかマシかもしれない。

そんな物騒なことを真剣に考えながらフラフラと歩いていると、食料品店が目に入った。少し前にあの変な新人（ニュービー）――ヒロと入ったお店だ。

「お酒……」

そう言えば、この一週間、ロクに飲食をしていない。倒れそうになったら美味しくもなんともない激安の栄養ペーストをチューブから直接摂取し、水を飲んだだけだ。死ぬ前に浴びるように強い酒を飲むのも悪くないな、とふと思った。

ふらりと店に入り、適当にお酒を買い漁る。どれもこれも喉を焼いて簡単に酔うための安酒ばかりだ。そう言えば、あの新人（ニュービー）から案内賃代わりに巻き上げた酒も結局手を付けることもなく売り払うことになっちゃったな。もしかしたら今買ったこのお酒がその一部かもしれないけど。

「……はぁ」

一応、父様にも連絡は入れておいた。父様に連絡が届くのは早くても今から三日ほど後になるだろう。今日逮捕されて、明日収監、その二日後には父様の所に連絡が届くけど、その頃には私はどうなっていることやら。死んではいないと思うけど、心身ともに無事であるとは思えない。

まぁ、それも今日あの豚を殺して私も死ねば関係ない話だけどね。

元宙賊のゴミどもに嬲られるくらいなら討ち死にしたほうが百倍マシだわ。私に喧嘩を売ったことを精々後悔させてやる。

食料品店の壁に寄りかかって大して美味しくもないお酒をグビグビと飲んでいると、誰かがこちらに近づいてくるのがわかった。厄介事を避けるためにフード付きのマントを被っていたのだけど、こんな場所で座り込んでお酒なんて飲んでいればそりゃ目立つわよね。

面倒臭いな、と思いながら密かに腰のレーザーガンに伸ばす。

「「――ッ！」」

驚いた。完全に不意を打った筈なのに、相手はしっかりと反応して私にレーザーガンの銃口を向けてきた。

私だって貴族の端くれだ。当主である父様や跡取りの兄様程ではないけれど、いくらかは肉体強化の処置が施されている。肉体強化処置と、貴族の子女としての嗜みで培った護身術のお陰で命を拾ったことは一度や二度ではない。そんな私の不意打ちにこうも完全に対応するなんて。

誰かと思えば、私の銃口を向けてきているのはヒロだった。彼の後ろにはあの子――そう、確か名前はミミと言ったはず――もいる。

二人とも随分と充実した生活を送っているようだ。

「ふふ、何よ？　私を笑いにきたの？」

二人から放射される眩いばかりの『陽気』に当てられて、思わず私はレーザーガンを取り落してネガティブな言葉を漏らしてしまった。つい口にしてしまってから自己嫌悪に陥る。彼らに当たっても仕方がないのに。

「そんなんじゃないっての。世話になった相手がこんな有様だったらとりあえず事情くらいは聞くだろ……まぁ、それ以上にミミがな」

「エルマさん……」

ミミが私の側に跪き、私の手を握ってくる。温かい。私のことを心配しているという純粋な思いが手から直接伝わってきて私の心を苛む。

「たったの半月で立場が逆になっちゃったわね」

自嘲気味に私がそう呟くと、ミミは何も言わずに私を抱きしめてきた。ああ、温かい。本当に良い子ね、この子。本当に純粋に今の私を心配してくれているんだわ。

「状況は？」

ヒロはストレートに私の状況を聞いてきた。わざわざ話す必要もないのだけれど、ミミに抱き締められてつまらないプライドやら何やらが全部溶け出してしまった私は全てを話してしまった。

「星系軍への賠償金がね……貯金を全部叩いて船から何から全部売り払ったとしても足りないのよ」

「いくらだ？」

「あと３００万エネル……」

「３００万か……」

「稼ごうにも船の修理にはまだ二週間以上かかるし、稼いで弁償するって言っても今回起こした事故が事故だけに信用がね……傭兵ギルドにも相談してみたんだけど」

話さなくて良いことまでポロポロと口から勝手に溢れていってしまう。しかし、一度動き始めた口は止まろうとしてくれない。

「支払期限は？　支払いができなかった場合の対応は？」

「今日、あと二時間くらい……支払いができなかったらターメーン

Ⅲの監獄で強制労働だって。あそこには捕らえられた宙賊が山ほどいるわ。元傭兵の私が行ったら……」

あと二時間で自分の身に破滅が訪れる。そう考えると、涙が溢れ出してきてしまった。

「船に乗ったまま宇宙に散る覚悟はしていたわ。でも、こんなの……こんなの……！」

ただ死ぬのは怖くない、と言ったら嘘になる。死ぬのは私だって怖い。でも、戦いで身を滅ぼすなら実力不足だったのだと諦めることもできる。でも、こんな結末はいくらなんでもあんまりだ。

それとも、これが報いなのだろうか？　何不自由なく育ててくれた家族を裏切り、後ろ足で砂をかけて飛び出してきた私への。

金額を聞いたヒロは小型情報端末を取り出して何やら考え込んでいる。３００万エネルは傭兵にとっては大きな金額ではないけれど、少ない金額でもない。彼と多少の縁はあるけれど、ただ少しこのコロニーを案内して、ミミの世話をしてやっただけだ。彼が私を助ける理由にはならないだろう。

そう思っていたのに。

「エルマ」

「……何よ？」

「お前、俺の船のクルーになれ」

「……へ？」

想定外の言葉に私は思わず間抜けな声を出して彼の顔を見上げてしまった。

「３００万エネル、俺が出してやる。その代わり、俺の船のクルーになれ。んで、ミミに傭兵のいろはを一から教えろ。あと、俺のサポートもやってもらう」
「ちょ、ちょっと待って。本気？」

流石に彼の正気を疑ってしまった。尤もらしい事を言っているが、それで３００万エネルものお金をポンと出すのはいくらなんでも酔狂が過ぎるだろう。

「時間がないぞ、決断しろ。俺の船のクルーになるか、監獄コロニーで元宙賊の囚人達に寄って集って慰み者にされるかだ」

いや、その二択なら私には実質選択肢はないようなものだけど。宙賊達の慰み者になるくらいならあの豚軍人と刺し違えて死んだほうがマシだ。だからこそお酒を飲み終わったらできる限りの武器を集めて討ち入りをするつもりだったわけだし。

「な、なんで……？」

素人同然のミミへの教育はともかく、彼の実力なら私のサポートなんて必要ないはずだ。ゴールドランクへの昇格試験を「ちょっと歯ごたえがあった」程度でクリアするような超絶技巧の持ち主にサブパイロットが必要とも思えない。

「こうしないとミミが悲しむからな。何より、俺も世話になった相手が酷い目に遭うのを見過ごすのは寝覚めが悪い。何よりお前が欲しいからだ」
「わ、私をっ！？」
「ああ」

お前が欲しい、というあまりにも直球な言葉に私の頭から色々なものが吹っ飛んでいってしまった。お金が用意できないことへの不安感とか、いっそ刺し違えてやるという決意とか、そういう諸々が。

これって、つまりそういうことよね？　そ、そりゃ自分でも見た目は悪くないと思っているけど、こんなにストレートに言われると流石に焦る。

「ふ、ふーん？　そ、そうなんだ？　そんな目で見てたんだ？」

「まぁ、そうだな」

ヒロが至極真面目な顔で頷いて私の言葉を肯定する。残念宇宙エルフだとか貧相な胸だとか散々言ってたけど、なるほどね？　あれかしら、素直になれない男のサガとかそういうやつだったってことかしら？

「そ、そうなんだ……でも、ミミがいるでしょ？」

あんなに『陽気』をバンバン発散するくらいだ。さぞかし二人で仲良くしていたのだろう。そこに私が割り込むような形になるのは流石にちょっと気が引ける。

「別にもう一人くらい増えたってどうってこない。な？　ミミ」

「そうですね」

「そ、そう、一人じゃ足りないんだ……」

そ、それってつまりそういうことよね？　うわ、うわー。す、凄いのね？

「で、どうするんだ？　俺の船に乗るのか、乗らないのか」

ヒロにじっと見つめられて耳に血が通っていくのがわかる。こ、こうして見るとヒロって結構顔も悪くないわよね。身体も意外とがっしりしてるけど、暑苦しい感じでもない。うん、絶妙な感じ。
ああ、恥ずかしい。今の私の耳はきっと真っ赤になっているに違いない。すごく耳を隠したい。

「の……乗る、わ」

私は真っ赤になっている耳を手で覆い隠したくなる衝動を必死に抑えながら絞り出すようにそう答えた。

「そうか、では歓迎しよう。しっかりと務めを果たしてくれよ」

つ、務めを果たし――こ、これはつまり今日すぐにってこと？
ま、まだ心の準備ができていないんだけど？

「わ、わかったわ。お手柔らかに頼むわよ……？」
「？　いや、存分にこき使うぞ？」

存分に！？　ということは最初から手加減なし！？　で、でも船に乗ってしまったらもう言いなりになるしか……うぅ。

「そ、そう……わかったわ。覚悟を決めておく。何人もの宙賊どもを相手にするよりは楽だろうし」

私の言葉にヒロは変な顔をしていたが、私がその理由を知るのはその夜、事を終えてからだった。
確かに、確かに私の一方的な思い込みだったのかもしれないけど……！　釈然としないわ！　もう、こうなったらとことんまで責任を取らせてやるから！　覚悟しなさい！

その後、アレイン星系で貴族の子女に手を出すのは面倒だ、というヒロの発言を聞いてどうしようかしらと内心悩んだのは内緒。まぁ、侯爵令嬢のセレナ少佐に比べたら私なんてそんなに面倒でも……兄様がとても面倒ね？

でもうん、事情を話す前にヒロが自分から責任を取るという旨の発言をしてくれたから問題なし。ヒロだって最初私が勘違いしているのを知りながら私を美味しく頂いたんだから、おあいこよね？

大丈夫、いざとなったらどんな手を使ってでも私が兄様をなんとかするから。

#172　傭兵ギルドグラキウス支部

「ヒロ様、かっこいいです！」
「うん、まぁまぁサマになってるじゃない」

いつもの傭兵服のジャケットに銀剣翼突撃勲章をぶら下げ、腰にレーザーガンだけでなく二本の剣をぶら下げた俺を見てミミとエルマが俺を褒める。別にいつのもの格好とそう変わらんのだが……まぁ褒めてくれるのは悪い気はしないけどさ。

「今の時点でも身分的には名誉騎士爵相当だからね。それらしい格好をするっていうのは単に自分の身分を誇示するだけじゃなく、自分がそういう身分であるということを周りに見せて相手にとってマズい行動を取らせないようにするためのものでもあるのよ」
「そういうものなのか」
「そういうものよ」

どうにも釈然としないが、エルマがそう言うならそうなんだろう。

「あー……うん、そっか。よし、とりあえず行くか」
「はいっ！　あ、ちゃんと傭兵ギルドのある場所は調べてありますよ」
「ミミは用意が良いなぁ、よしよし」
「えへへ……」

マップアプリを起動してあるタブレットを抱えたミミの頭を撫でてやる。尻尾があったらブンブン振ってそうな勢いだ。うん可愛い。

☆★☆

メイに見送られながらブラックロータスを降りた俺達は、ミミの案内に従ってグラキウスセカンダスコロニーの傭兵ギルドへと向かった。

「しかし人が多いな」

「そりゃね。都市惑星で消費される資源は基本的に全部外からの輸入で賄っているわけだから、商人が多いのよ。食料はアンダーレベルのジオフロントである程度生産されているけど、鉱物資源の類はほぼ外からの輸入ね。食料の生産にもある程度の鉱物資源は必要だし」

「へぇ……物凄い金食い虫じゃないか？　都市惑星って」

「そうでもないわよ。外から輸入した資源で付加価値の高い製品を大量に生産しているからね。帝国品質（インペリアルグレード）の製品は国内だけでなく、国外でも重宝される逸品揃いよ？」

「ほぉ……でも俺達にはあまり縁がないよな？」

「そうでもないですよ？　テツジン・フィフスとかも帝国品質の商品ですし」

「おぉ……テツジンシェフは確かに凄いよな」

確かにテツジンが作る料理は未だに底が見えない。安価なフードカートリッジからでも美食を生み出すあの性能は一度知ってしまうと他の自動調理機を使えなくなるだろうな。

「他にもクリシュナの全自動ユニットバスシステムも帝国品質の商品ね」

「あー、あれも凄いよな」

空の湯船に入ってスイッチ一つですぐに心地よい温度のお湯で湯

船が満たされ、全身を自動で丸洗いしてくれる上にマッサージ機能までついている。しかも湯船から上がったら全身を綺麗に乾かしてくる乾燥機能付き。最初は洗濯物になった気分だったが、あれも一度体験するとやめられないんだよな。

「なるほど。侮りがたいな、帝国品質」

「それだけでなく食料品も凄いわよ？　帝国品質の農作物や畜産品、お酒は本当に高値で取引されるから」

「食料品は本当に見た覚えがないな。まぁ、地元なら食えるだろうし、帝都に降りたら食いに行ってみるか」

「本当ですか？　楽しみです」

本当に嬉しそうにミミがニヨニヨしている。エルマも故郷の味に思いを馳せているのか、嬉しそうな雰囲気を醸し出している。整備士姉妹も連れて行ってやるとしよう。二人ともスペース・ドウェルグ社の帝都支社絡みでストレスフルな感じになってたからな。

「おー……流石に立派だな？」

「プライムコロニーは軍事施設だから、グラキウスにある傭兵ギルドの建物はここと、プライムコロニーの養成学校の二つだけよ」

「帝都には傭兵ギルドの施設はないのか？」

「需要がないもの」

「……なるほど」

「納得ですね」

このコロニーなら荷物の護衛などで傭兵にも一定の需要があるのだろうが、帝都に傭兵ギルドの建物があったところで訪れる傭兵など一人も居ないことだろう。帝都に降りるためには面倒な手続きをしなければならないし、時間もかかるからな。

そんな話をしながら三人で傭兵ギルドへと足を踏み入れる。わざ

わざ入り口をカウベル付きの木製スイングドアにしているのは何なんだろうな？　様式美か？
カランコロン、とカウベルを鳴らしながら傭兵ギルドに入り、内装を一通り見回して俺は頷いた。

「酔狂なデザインだな」
「まぁ、金はかかってるわね」
「凄いですね。古代のマカロニウェスタン風ですよ」

木製の床に、木製のテーブル。左奥には木製のカウンター席と、壁の棚に並べられた酒のボトル。右奥の方には業務用の木製カウンターが並んでいる。役所と酒場が合体したような木の香り漂うカオス空間だ。

「木製『風』の素材ね、これは。木の香りはそういう芳香を発するようにできているのよ、これ」
「本物の木のほうが安いんじゃないか？」
「そんなことないわよ。特にこの星系ではね」
「木材は超高級品なんですよ、ヒロ様」
「そう言えばそうだったか」

前にリゾート惑星でログハウスに滞在した際、コロニー生まれのコロニー育ちな生粋のコロニストであるミミはリゾート惑星に当たり前のように存在する自然の植物や木製のログハウスに驚愕していた。
話しながら右奥の業務カウンターへと向かう途中で複数の視線を感じる。まぁ、目立つ三人だよな、俺達は。
一人は傭兵風の服装なのに腰に剣を二本下げて、胸にピカピカの勲章を下げている男。更にその隣には小柄だけど胸の大きい美少女と、スレンダーなエルフの美女ときたらそれはもう。二人を引き連

れているためか若干剣呑な視線もあるようだが、まぁ腰に剣を下げている俺に絡んでくるようなことはないだろう。
　そのまま業務カウンターへと向かうと、こちらが口を開くよりも先に少し緊張した様子で待ち受けていた受付のお姉さんが声をかけてきた。彼女のが緊張しているのはアレだな、俺が傭兵のくせに二本も立派な剣を腰に下げているせいだな。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」
「ちょっとした相談事で」

　そう言いながら携帯情報端末を出してＩＤを提示する。すると、彼女はすぐにＩＤを照合して表示された俺の情報に目を走らせて――少し仰け反った。うん、声を出さなかったのは流石にプロといったところなんだろうな。

「ええと、その、ようこそおいでくださいました、キャプテン・ヒロ。相談事というのは……セレモニー関係のあれこれですね？」
「そう、それ。情報が来てるんだな」
「はい。傭兵ギルドと帝国航宙軍の関係は基本的に良好ですから」

　受付のお姉さんが真面目な表情で頷く。確かに、傭兵ギルドはある意味で軍の下請けみたいなもんだからな。関係が良好なのも頷ける話だ。無論、完全に発注元と下請けという関係で力関係の上下が明確なわけでもないのだけれども。
　もし軍と傭兵ギルドの間がこじれて宙賊が跋扈している星系から傭兵ギルドが手を引いたりしたら、交易路の安全が守れなくなって帝国経済に悪影響を及ぼす可能性があるからな。そうなれば帝国航宙軍は何をやっているんだと帝国政府に頭の上から叩かれ、商人ギルドからも突き上げられることになる。帝国航宙軍と傭兵ギルドは割と持ちつ持たれつの関係なのだ。

「もちろんセレモニーに参加するのなんて初めてだし、実感も湧いてないし、そもそも何をどう気をつければ良いのかもわからないんだ。それで相談に来たわけなんだが」
「そうですね……服装や言葉遣いは勿論のこと、セレモニーでは一挙手一投足を注目されますから。それに、セレモニーの後のパーティではダンスを踊ることにもなるでしょうし」
「あー、それなぁ……まぁその辺はメイに仕込まれてるから」

剣の方がある程度形になったので、メイのスパルタ授業の内容はダンスやマナーがメインになっている。メイとのダンスは楽しいが、マナーの授業は覚えることが多くてな。

「というと？」
「うちには超高性能のメイドロイドがいるのよ。マナー関連はその子に厳しく仕込まれてるから」
「なるほど、それならば後は服装ですが……」
「こういうので大丈夫でしょうか？」

そう言ってミミはタブレットを受付のお姉さんに見せた。げっ、その写真はこの前俺がクリスの選んだ貴族服を着た時の……いつの間に撮ったんだ？

「あら、凛々しいお姿」
「ですよね！」
「ですよね、じゃなくてだね……で、大丈夫そうですかね？」
「ええ、問題ないと思います。用意周到なんですね？」
「えぇまぁ、ちょっとこういう形で役に立つとは思ってませんでしたが」

本当にクリスの気まぐれで誂えられた服がこんな形で役に立つとは夢にも思わなかった。クリスはこうなることを見越していたのだろうか？　流石にそれは無いか。

「後は――」

「お話中のところ失礼。キャプテン・ヒロ御一行だね？」

受付のお姉さんが口を開こうとしたところでカウンターの向こう側、お姉さんの斜め後ろに中年の男性が現れて話しかけてきた。ふむ、引き締まった身体のなかなかのイケメンだな。かけている眼鏡は何かしらのウェアラブル情報デバイスかもしれない。

「そうだが……？」

言外に何者だ？　何の用だ？　という言葉を滲ませながら相手を観察する。身体つきからそれなりに鍛えているようだが、直接荒事をしているようには見えない。雰囲気的には傭兵というよりやり手の事務職といった感じだが。

「私はこの傭兵ギルドグラキウス支部の副支部長、マーカスだ。相談中のところ申し訳ないが、至急話し合いたい案件がある。すまないが、奥の応接室まで同行してくれないか？」

「えー……」

面倒事の臭いがする。ミミとエルマにも視線を向けてみるが、二人とも眉間に皺を寄せたり、口元に手を当てて考え込んだりしている。ちなみに、いきなり自分の背後に副支部長という雲の上の存在が現れた受付のお姉さんは口元にだけ笑みを浮かべて微かに汗を垂らして固まっている。なんだか申し訳ない。

「嫌だ、というのは通らないですよね」
「気持ちはわからないこともないが、悪い話だけではないから」
副支部長のマーカス氏が苦笑いを浮かべる。
「まぁ、悪い話だけじゃないなら……」
いい話もあるってことなら行くしかあるまい。確定で悪い話があるのは気が重いが。
「それは助かる。あちらの通路の奥に階段があるからそちらに向かってくれ」
私は先に行って待っている、と行ってマーカス氏はスタスタと歩いていってしまった。仕方がないのでカウンターの椅子から立ち上がり、まだフリーズしている受付のお姉さんに声をかけておく。
「あー、なんというかすまない。ありがとう」
「イエ、ダイジョウブデスヨ」
ぎこちない笑みを浮かべるお姉さんに軽く頭を下げてからミミとエルマを引き連れて階段があるという通路へと向かう。さて、良いことと悪いことね……何が飛び出してくるやら。

☆★☆

階段の前で待っていたマーカス氏の後に続いて階段を登り、二階に上がってすぐのところにあった扉に入ると、そこにはがっしりとした体格の初老の男性が待っていた。マーカス氏と違ってちょっと鍛えているとかそういうレベルではない。丸太のように太い腕だ。

素手で人の首くらい簡単にへし折れそうだな。
「傭兵ギルドグラキウス支部の支部長、ヨハンネスだ」
「キャプテン・ヒロだ。どうぞよろしく、支部長殿」
互いに握手をする。うん、ムキムキだからって無駄に力を込めるような真似はしてこないようだ。
「ええと、良い知らせと悪い知らせがあるんでしたっけ？」
「うむ。言葉遣いは普段どおりで良いぞ。堅苦しいのは好かん」
「そりゃどうも……それじゃあ、悪い方から聞かせてもらっても？」
「そうだな、そちらのほうが緊急案件だ」
そう言ってヨハンネス支部長はちらりとエルマに視線を向けた。
エルマ関係――あっ（察し）。
「ウィルローズ子爵家から問い合わせが来ている。用件はわかるな？」
「エルマ関係ってことだけは。内容は皆目検討もつかないな」
内容に関してはすっとぼけておく。まぁ、即刻エルマを引き渡せとかそういう内容だろうとは思うが。
「……そちらのお嬢さん――ウィルローズ子爵家令嬢を速やかに引き渡すように、とのことだ」
「ははぁ、なるほど。頷くとお思いで？」
「……」
俺の言葉にヨハンネス支部長が渋面を作り、マーカス副支部長は頭痛を堪えるように右のこめかみに手をやって揉み始めた。

「エルマ自身がそうしたいというならそりゃ考えますが、エルマはそう思ってないので。だよな？」
「そうね。キャプテンが私を放り出したいというなら話は別だけど、キャプテンがそう思ってないならそうする気はないわね」
「だそうです。そもそも、傭兵ギルドとしてその要請を受ける気なので？　傭兵ギルドは所属ギルド員を貴族の不当な要請から守る気が無いと？」

言外にエルマも傭兵ギルドのシルバーランク傭兵で、ギルドの庇護下にあるよね？　と仄めかしてやる。支部長の表情は相変わらずだが、副支部長は今度は俯いて眉間を揉み始めた。

「ギルドとしては用件は伝えるが、何かを強制するつもりはない。そういう申し出があった以上は伝えねばならんということだ。帝国法に触れた犯罪者は引き渡さねばならんが、そちらのお嬢さんはそういうわけでもないしな」
「なるほど」
「というか、お貴族様の家庭内の問題に巻き込まれても困るというのが正直な所だ。俺達を面倒に巻き込むなという意味ではお前達に文句は言いたい」
「言われてるぞ、エルマ」
「ま、まぁ、それはごめんなさいとしか言えないわね」

エルマが苦笑いを浮かべる。盗んだ小型艦で宇宙に走り出すお転婆娘とかスケールがデカ過ぎるな。

「で、具体的にはどうすれば？」
「一応先方には個人の自由意志を尊重するという傭兵ギルドの立場は伝えてある。連絡先を渡すから、自分達で解決するように。ただ、

不当な権力や暴力の行使で身の安全が脅かされた場合には我々としても放置はできん。その時には報告しろ」
「アイアイサー、それでもう一つの良いニュースってのは？」
「キャプテン・ヒロに対するゴールドスターの受勲がほぼ決まった。それに合わせてお前のランクをゴールドからプラチナに引き上げる」
うん、意外性はあまりなかったな。問題は、俺があまり嬉しくないという一点だが。

#173　最速のプラチナランカー

「なんで嬉しくなさそうなのよ、あんた」

プラチナランクへの昇進、という言葉を聞いた俺の表情を読み取ったのか、隣りに座っているエルマから刺さりそうなほどに刺々しい気配を孕んだ言葉をぶつけられた。そういやこいつ、俺がゴールドランクに上がった時も嫉妬のオーラを纏っていたな。

「いや、あんまりサクサク上がりすぎると目標が無くなって楽しくないじゃないか」

「……やっぱりプラチナランカーはどこかおかしいな」

ヨハンネス支部長が小さく溜息を吐きながら頭を振る。どうやら他のプラチナランカーと面識があるらしい。

「お前が喜ばなくてももう決まったことだから諦めろ。傭兵ギルドとしても長い帝国史上で四人目となる傭兵のゴールドスター受勲者を上から二番目のゴールドランクのままにはしておけんのだ」

「政治的配慮ってやつか」

「そのようなものだ。だが、お前の実力が足りていないとは俺は思わん。軍から提供されたお前の戦闘データも見たし、ターメーン星系からこっちのお前の戦果も確認している。この短い期間で上げた戦果としては驚異的だ。他のプラチナランカーと比べても遜色ない戦果と評価しても何ら問題ない」

「……そう言われると、その通りなのよね」

「ヒロ様ですから」

俺達の戦果が認められたのが嬉しいのか、ミミがむふー、と満足そうに鼻から息を吐いている。うん、ミミはドヤ顔も可愛いよ。

「それでええと、俺のランクが上がるのはいつになるんだ？」
「即日だ。既に手続きに入っている。ゴールドスターの受勲セレモニーで同時に発表されることになるだろうが、ランク自体は今日すぐにプラチナランクになる」
「なるほど。何か特典とかあるのか？」
「いくつかある。まず、今後傭兵ギルドで手続きなどをする際には最優先で処理が為されることになる。まぁ、傭兵ギルドとしての優遇措置だな」
「なるほど？」

正直、あまり大した恩恵には思えない。多少手続きが有利になるのだろうが、最高ランクの特典としてはショボいと思う。

「他には保険料が三割引になり、適用割合が三割増加する。また、傭兵ギルドに来る各シップメーカーや兵器メーカーからの試作品運用テストの依頼を優先的に回すことになる。継続的なデータ提供という名目で先進的な装備を実質上譲渡されることになるな」
「それは美味しいな」

もっともクリシュナよりも良い船、或いは今クリシュナに装備されている武装よりも良いものが提供されるかどうかはわからんが。正直自分の命を預けるものだからなぁ……あまりいい加減なものは使いたくないものだ。
保険料が三割引になった上に適用割合が三割増加するのは単純に美味しい。出ていく金が少なくなるのは実にストレートな特典と言える。船の購入時にかかる保険料が三割減って、補給や整備、修理にかかる費用が少なくなるってことだからな。

「あとアレは？　なんかプラチナランカーになると貴族がそうそう手を出せなくなるとか聞いた覚えがあるんだが？」
「具体的に何かできるというわけではないが、傭兵ギルドにとってプラチナランカーは看板だからな。当然、プラチナランカーが貴族にちょっかいをかけられれば最大限のサポートを行う。そもそも、プラチナランカーに喧嘩を売る貴族というのもそうそういないがな」
「現在進行系でちょっかいを掛けられているんだが」
「今のお前達に降り掛かっているのは自業自得というか、身内のいざこざだろう……そこまでは干渉はせんよ。例えばそちらのお嬢さんを見初めた貴族がお嬢さんを妾に寄越せと言ってきて、貴族の強権を振りかざして無理矢理どうにかしようという案件なら我々も全力で立ち向かうがな」
「役に立つようで役に立たねぇ……」
「自分のケツは自分で拭けということだ」

そう言ってヨハンネス支部長は大きな肩を竦めた。まぁうん、その言い分はわからないでもない。グレて飛び出した良家のお転婆娘がチンピラと一緒に里帰りしてきて『オメェオラ何やってんだァァン！？』ってなってるようなものだものな。即刻エルマを引き渡せというのは少々どうかと思うけど。穏便に話し合いましょう、じゃなくていきなり引き渡せだものな。

「しゃあないな。話は以上か？」
「いや、まだだ。例のマザー・クリスタルの撃破報奨金が決まった。１５００万エネルだそうだ」
「１５００万……！」

金額を聞いたミミが僅かに仰け反る。

「１５００万、なかなかだな」
「まぁまぁね」
「お前達、金銭感覚おかしくないか？」

俺とエルマの反応を見たヨハンネス支部長が苦笑いを浮かべる。まぁ、大金だとは思うよ。でもブラックロータス一隻分にもならないしなぁっていうね。

「ミミに１％、エルマに３％入れておいてくれ。１５万と４５万だから、俺の取り分は１４４０万エネルだな」
「じゅうごまん」
「ありがたくいただいておくわ」

そこそこの金額をポンと渡されたミミが放心状態に陥っているが、そろそろ傭兵の金銭感覚に慣れても良い頃だと思うんだけどな。まぁ、ミミはそんなに貰っても使い途がないから困惑しているのかもしれないな。美食が趣味と言ってもそんなに高い買い物をバンバンするわけじゃないし、服とかをバンバン買うような性分でもないみたいだし。

「これで全部だな？　なら俺達はセレモニーに向けて準備しなきゃならんから失礼するぞ」
「わかった。セレモニーには陛下もご出席なされる。失礼のないようにな」
「直接接する機会が無いことを祈ってくれ」
「祈っておこう。ああ、それと」

ヨハンネス支部長に呼び止められ、俺達は退室しようとしていた足を止めて振り返る。

「そちらのお嬢さん、どこかで会ったことはなかったかね？」

ヨハンネス支部長の視線はミミに向けられていた。視線を向けられているミミは不思議そうに首を傾げて、少し考えてから首を横に振った。

「多分無いと思います。首都星系に来たのは初めてですし、ヒロ様に出会うまでは傭兵に関わることもありませんでしたから。私、ヒロ様に連れられて船に乗るまでターメーンプライムコロニーの外に出たこともなかったですし」

「……そうか。ふむ、勘違いだったかな」

ヨハンネス支部長もまたミミと同じように首を傾げている。ミミくらい可愛い子なら一度見ればそうそう忘れそうにないけどな。首都星系の芸能人か何かに似てる人が居るとかかな？　まぁ、世の中に三人は似た顔の人間がいるっていうし、それが宇宙規模ともなれば似たような顔と遭遇する確率も上がるのかもしれない。

「ナンパってわけじゃないなら失礼するぞ？　ナンパだったら歳を考えろよって言葉を送るけど」

「孫と同じような年齢の娘さんに粉をかけるわけがないだろうが。さっさと行け」

頬をヒクつかせながらシッシとジェスチャーをするヨハンネス支部長に肩を竦めて見せてから俺達は連れ立って傭兵ギルドの応接室を後にした。

☆★☆

その後、俺達は最初に話をした受付のお姉さんの所に戻ってセレ

モニーに関する諸注意を再度聞き、参加するのに申し分ない服と装飾品を用意してくれる店の情報を聞いて傭兵ギルドを後にした。
ついでに俺の傭兵ギルドのランクも更新され、しっかりとゴールドランクからプラチナランクになっていた。史上最年少でのプラチナランカーということにはならなかったが、登録からプラチナランクに駆け昇ったスピードは史上最速だったらしい。
史上最速のプラチナランカー。うん、悪くない肩書きじゃないか。

「うーん、こっちのほうが……」
「ふわぁ、綺麗な生地ですねぇ」

女性の買い物って長いよな。特におめかし関連となるとさ。いや、わかってる。わかってるよ。時に男性視点の意見が欲しくなるってことは。でも結局は着る本人が決めることになるだろう？　俺、いなくても良くない？　ダメ？　ああ、うん。そう。
俺にはドレスデザインの良し悪しや生地の良し悪しはわからぬ。わからぬのだ……！　かわいい！　きれい！　くらいの小学生並みの感想しか出ないよ。
敢えて何か言うなら公的な身分が一応あるエルマはともかくして、そうでないミミは変な貴族に目をつけられないようにあまり目立たないようにしてくれたほうが俺は安心ってことくらいだ。あと、他の男におっぱいを凝視させたくないから胸元は隠す方向で。それでも圧倒的な胸部装甲を隠すことは不可能だろうが、谷間を見せるのはＮＧ。それは俺のだから。

「えへへ……」

俺の独占欲丸出しの浅ましい発言を聞いたミミが頬をピンク色に染めてくねくねしている。鼻血が出そうなほど可愛い。対するエルマはミミが身を捩る度にたゆんたゆんと揺れる圧倒的な胸部装甲を

ジト目で見て自分の胸元を確認している。いや、エルマも無いわけじゃないし。エルマも俺のだから無理に胸元を強調したりしないように。

「……わかったわよ」

ピクンと反応した耳が少し赤くなっている。エルマも大概恥ずかしがり屋だよな。

しかしまぁ、こんな超未来的な世界なのにドレスのデザインとかはそんなに奇抜な感じじゃないんだな。華の帝都とかいうから、ファッションショーに出てくるようなよくわからんデザインの謎衣装とかになるんじゃないかと少し警戒していたんだが。ほら、凱旋門のある某花の都の名前を冠したコレクションとかでたまに「???」ってなる服を着たモデルとかいるじゃん……ああいう感じのがトレンドだったりしないかと心配だったんだよ。

若干素材が普通の生地じゃないというか、サイバー感溢れる感じがするけどデザインそのものはいかにもドレスって感じのものだ。帝国貴族はファッション面に関しては俺が思っているよりずっと保守的なのかも知れない。

考えてみればレーザーガンに対抗できる技術が開発されたからって一度はお飾りになった剣をまた実用的な段階に持ってくるような連中だ。保守的な考えが強いのも当然といえば当然か？　もしかしたら一度奇抜なデザインが大流行して、その後に落ち着いただけかもしれないけど。

結局ミミは清楚で上品な感じの白を基調としたドレスに、エルマはスタイリッシュな萌葱色のドレスを注文することになった。スキャナーで体型はバッチリ計測してあるから、後はデザインのテンプレートと合わせてすぐに出来上がるらしい。数時間で完成させて船へと送ってくれるそうだ。

「オーダーメイドのドレスが数時間で完成ってのも凄いよな」
「それよりもお値段が凄かったですけど……」
「気にするな。可愛くて綺麗な二人が見られただけで俺は満足だ」
「まったく。あんなに退屈そうにしてたのによく回る口だこと」

そう言いながらエルマも満更では無さそうな表情だ。
実際、ドレス一着に1万から2万エネル駆けたところでなんとも思わないからな。二人のドレス代金よりも対艦反応弾頭魚雷一発のほうが高いし。

「次は装飾品だが……？」

ドレスを購入した店を出たところで横合いから奇妙な気配を感じた――と思った次の瞬間、殺気と共に何かが飛んできた。

「ぬっ！？」

視界の端に何か白い布の塊のようなものを捉えた。それが何なのか理解する前にミミとエルマの前に立ち、腰の剣の柄に手をやる。この人混みの中でレーザーガンをぶっ放すのは流石にマズい。

「ほう、一丁前に剣を腰に差しているのか」

美しい容姿の男だった。整った顔立ち、ピンと伸びた尖った耳、均整の取れた身体つき、そして白を貴重とした上品な衣装と、腰に差した細身の長剣。そして俺の足元に落ちている白い手袋。

「私の名前はエルンスト・ウィルローズ。貴様に決闘を申し込む！」
「え、嫌ですけど」

俺は素でそう返した。すると、男は一瞬ポカンとした表情をした後、美しい顔を修羅のように歪めた。

「何故だ！？」

「や、俺には戦う理由が無いですから。お義兄さん」

「私を義兄と呼ぶなぁ！　ぶっ殺すぞ！」

俺が剣の柄から手を離してニコリと笑みを浮かべると、エルフの男――もといエルンストお義兄さんが腰の剣を抜き放って怒鳴り声を上げた。それを見た通行人達が悲鳴を上げて俺達から距離を取った。

「おおっと、俺は手袋を拾ってませんよ。俺が手袋を拾わなかったら決闘は不成立です」

「なら一方的に無礼討ちにするまで――」

「この状況で斬りかかってきたら流石に色々と問題なのでは？」

「ぐっ……！」

俺が胸元の銀剣翼突撃勲章を指差しながらそう言うと、エルンストは美しい顔を歪めて押し黙った。

衆人環視の下、特に無礼を働いた様子もない傭兵に激昂した貴族が斬りかかる――別にこれだけならまぁ、貴族の権力でゴリ押せばギリギリなんとかなるかもしれない。

だが、今の俺は腰に一対二本の剣を下げている上、胸には銀剣翼突撃勲章をつけている。つまり貴族に準ずる存在であることは見る者が見ればすぐにわかる。生粋の貴族である彼がそれを見てわからないわけがなく、決闘が不成立である状態で一方的に斬りかかれば後々そこに突っ込まれるのは自明の理だ。

「兄様」

「エ、エルマ！　そんな奴の所になんかいる必要はない！　すぐに連れ帰って――」
「乱暴な兄様は嫌いです。どこかに行ってください」
「エ゛――ッ！？」

エルマに氷のように冷たい視線と言葉を向けられたエルンストが手に握っていた剣を取り落し、立ったまま白目を剥いて気絶した。
え？　気絶した？　マジ？　うわ、泡吹いてるぞ。エルマ何したの？　視線で殺したの？　コワイ！

「放っておいていきましょう」
「えっ」
「いいから。ほら」
「お、おぉ……？」

エルマが俺とミミの手を引いて歩き始める。さすがの事態に混乱したまま、俺とミミはエルマに手を引かれて宝飾品店へと向かうのであった。

#173　最速のプラチナランカー（後書き）

ピローン（何か変なフラグが立つ音ｍｋ－Ⅱ）

#174　ウィルローズ子爵家の人々

エルマの兄君――エルンストにいきなり決闘を申し込まれるという珍事こそあったが、俺達は無事に宝飾品店で買い物を終えてブラックロータスへと戻ってきた。

「本当に放っておいてよかったのか？」
「いいわよ、あんなの放っておけば。どうせヒロが借金を理由に私を良いようにしてるとでも思い込んでるんだろうから」
「全くの間違いってわけでもないと思うけどな……」

少なくとも、最初は３００万エネルの借金を理由としてエルマは俺に身を捧げたはずだ。多分だけど。今もそうなのかというと、それは多分違うと俺は思っているけど。別に３００万エネルの借金なんてもう殆ど意識してないしな……いや、たったの１エネルすら返済してないのはどうかとは思うけどね？
ただ、アレイン星系で酔っ払って酒を買い込んだ時以外ではロクに使っている様子もないし、何か考えがあって返済をしていないんだろうなと思っている。もしかしたら借金をしたままにしておくことによって俺と一緒に居続ける口実にしてくれているのかな？　と考えている。まぁ、本人には確認してないんだけど。

「確かに切欠はそうだったかもしれないけどね。今は私がヒロの側に居たいから側にいるの。それはそれとしてお金はまとめて返す予定だけど……今の時点で大体１３０万だから、まだ半分にも届いてないわね」
「えっと、私はおよそ３８万エネルですね。まだ半年も経ってないのに……」

エルマとミミが自分の携帯情報端末やタブレットで今までに獲得した報酬金額を見て溜息を吐いたり震えたりしている。
別にミミは俺に借金をしているわけじゃないから、ミミの所持金は全て彼女のものだ。確かに俺はミミをコロニーから連れ出すために５０万エネルを払ったが、それを彼女に返せを言うつもりはない。それだと結局のところコロニーへの負債が俺への負債に代わるだけだしな。
というか、今更二人のために使った金をどうこう言うつもりは無いんだけど……まぁ本人達としてはそういうわけにも行かないのかもしれないけどさ。

「ええと、そうだ。船に戻ってきたんだからエルマの実家に連絡を入れなきゃいけないよな？」
「そうね……はぁ、面倒くさいわ」
「あはは……でも、良いじゃないですか。心配してくれる家族がいるのは良いことですよ。ね、ヒロ様」
「ん、そうだな」

ミミも俺も天涯孤独の身だ。ミミの両親は事故で他界したらしいし、その後一人きりで悲惨な状態になりかけていたことを考えると祖父母や親類縁者との縁はどのような形でかはわからないが切れているのだろう。
俺に関しては今更言うまでもないだろうが、気がついたらクリシュナに乗ってこっちの世界で漂流していた身だ。この世界に家族なんてものは一人も居ない。船のクルー達はそれに等しい存在だと思っているけどな。

「……そうね。連絡を入れるわ」

俺達の事情を思ってか、エルマはいかにも面倒臭そうだった表情を真剣な表情に変えて頷いた。

「良ければ俺も同席させてくれ。同じ船のクルーなんだから家族みたいなものだろ？」

「わ、私も同席させてください！　あ、メイさんとティーナさん達も呼びますね！」

「そうね。そうしてくれる？」

タブレットを操作してメイやティーナ達と連絡を取り始めるミミを、エルマは微笑みを浮かべながらジッと見つめるのだった。

☆★☆

メイは船に残っていたのですぐに休憩室に現れたが、ティーナ達はグラキウスセカンダスコロニーにあるスペース・ドウェルグ社の営業所に顔を出しているらしく、同席は難しいとの返事を貰った。支社は大型のシップベイが存在するグラキウスプライムコロニーの方にあるらしい。

「それじゃあ、通信を入れるわよ」

事前にエルマがウィルローズ子爵家に連絡を入れ、通信による会談を行う時間は決めてあった。というか、連絡を入れたらすぐにでもという話になったらしい。向こうも一刻も早くエルマの無事を確認したいのだろう。

こちらから通信を入れるとすぐに応答があり、休憩室の大型ホロディスプレイに三人の人物が映し出された。一人は若い男性――とは言っても先程剣を突きつけてきたエルンストよりは年上に見える――で、もう二人は姉妹のような若い女性だ。全員がエルマと同じ

く尖った耳をしており、三人ともどことなくエルマに似た雰囲気を持っている。

「父様、母様、それに姉様。お久しぶりです」

『エルマ……とりあえずは大事なさそうで何よりだ』

目元がエルマに似ている男性エルフがエルマをジッと見つめた後に安堵の息を漏らしながらそう言う。対して女性二人は俺をガン見してきていた。

『……傭兵って聞いていたから、どんなむくつけき大男かと思っていたのだけれど』

『意外と線が細いというか、普通ね』

どっちがお母さんでどっちがお姉さんなんだ？　そう言いたくなるくらい二人ともとても若々しいというか、エルマの姉妹って感じだ。いや、一人はお姉さんなんだろうから姉妹なんだろうけどさ。

「紹介するわ。こちらが私が乗っている船のキャプテンで、傭兵ギルドのプラチナランカー、銀剣翼突撃勲章の受勲者でもあるヒロよ」

「お初にお目にかかります、傭兵のヒロと申します。卑賤の身故、言葉遣いなどで貴き方々をご不快にさせてしまうこともあるかもしれませんが、どうかご容赦頂けますようよろしくお願い申し上げます」

そう言って俺は胸に手を当て、軽く会釈をした。そんな俺の態度を見たホロディスプレイの向こうの三人が、目をパチクリとして驚いたような表情を浮かべる。

「ちょっとヒロ、うちの家族が面食らってるんだけど？」

「うん？　何か間違ったか？」
「貴族同士ならともかく、流石に平民の傭兵相手に宮廷言葉を求めたりはしないわよ」
「なるほど。だそうだぞ、ミミ」
「ふぇっ！？　あっ……ええと、ミミです。ターメーン星系でヒロ様とエルマさんに助けられて、一緒に船に乗っています。よろしくおねがいします」

ミミも自己紹介をしてペコリと頭を下げた。ウィルローズ子爵家一同の視線がミミの方へと向き、そこでエルマの父である子爵と、二人いる女性の内の一人がギョッと目を剥いた。というか、ミミを二度見した。もう一人の女性は何か引っかかることがあるのか、首を傾げている。

「うちのミミが何か？」
『い、いや。なんでもない。他人の空似だろう……ゴホン。失礼した。私はエルドムア・ウィルローズ子爵だ。こちらが妻のミルファ、そして娘でエルマの姉であるエルフィンだ』
『娘がお世話になっています』
『よろしくね』

腰までありそうな長い銀髪のエルフの女性がお母さんのミルファさんで、金髪に近い長い髪を大きな三編みにしてまとめているのがお姉さんのエルフィンさんであるらしい。うーん。お父さんを含めて全体的に若々しい。

『緊急で連絡を取りたかったのはエルンストの件だ。ああ、エルンストというのは私の息子で――』
「兄様にならもう会ったわよ。いきなりヒロに決闘を申し込んできたから、適当にあしらっておいたわ」

『……無事だったならそれで良い』

エルドムアはそう言うと目を瞑って溜息を吐いた。

『お前が首都星系に来たのを知るなり、屋敷から飛び出してセカンダスコロニーに向かったのだ。ヒロ殿が銀剣翼突撃勲章を受勲しているのは私も知っていたから、万が一のことがあってはと気を揉んでいたのだよ』

「なるほどね。というか、傭兵ギルドへのあの要求は何だったの？　ウィルローズ子爵家の名前を使って私を即刻引き渡すようにってのは」

『何？　私は至急連絡が欲しいという文面で送ったはずだが……？』

『あの馬鹿が送った連絡と混同されたんじゃないの？』

エルフィンさんが辛辣な言葉を吐く。あの馬鹿っていうのはエルンストのことだよな？

『そうかもしれんが……その件に関してはあとでこちらから傭兵ギルドに確認しておこう。それよりもエルマ、あれからもう五年だ。ギリアムとの婚約も立ち消えになったし、もう無理強いはしない。だから戻ってきなさい』

エルドムアさんが真面目な顔でエルマを説得にかかってくる。ギリアム？　婚約？　ははぁ。

「なるほど、そういう事情で飛び出したのか」

「それだけってわけじゃないけど、それなりにウェイトが大きかったのは確かね。その辺の事情はあとで話すわ……父様、私はまだ家に帰るつもりはないわ」

『まだ彼に借金があるから、か？　確か３００万エネルだったな。

それくらい我が家の資産から払ってやる。何なら二倍にでも三倍にでもして払う。だからエルマ、戻ってきなさい。傭兵としての生活は常に危険と隣合わせなんだろう？　家に帰ってくればそんな危険な仕事を続ける必要なんて無いじゃないか』

「確かにヒロへの借金はまだ残ってる、というか１エネルも返済してないからまるまる３００万エネル残ってるわ。でも、それを父様に払ってもらうのはダメよ。私がちゃんと働いて、ヒロに返さないと」

『義理堅いのは結構だが、お前はウィルローズ子爵家の一員なんだぞ。それに、未婚の女の子なんだ。男の傭兵が駆る船に女が乗ることの意味を――』

「勿論知ってるし、既にそういう関係よ」

そう言ってエルマは横から俺に抱きついてきた。

『なっ――！？』

その光景を目にしたエルドムアが愕然とした表情で目を見開き、しかしすぐに気を取り直して殺気の籠もった視線を向けてくる。

『傭兵風情が私の娘を傷物にしたと……？』

「ええ、しましたとも。俺としてもエルマを手放す気はありません」

俺はその視線を真正面から受け止めてそう言った。

『よく言った、小僧。お前に決ｔ――うごふっ！？』

ホロディスプレイの向こうのエルドムアの両脇腹に左右から放たれた拳が突き刺さり、エルドムアがたまらず悶絶する。その拳の主は言うまでもなく、エルマの母であるミルフィと姉のエルフィンで

あった。

『男って駄目ね。何かあればすぐに決闘決闘……まったく』

『脳味噌筋肉の白刃主義者は愚弟だけで十分よ、父様』

『そもそも、ヒロ君は銀剣翼突撃勲章の英雄で、最低でもシルバースター、もしかしたらゴールドスターを受勲するという話なのよ？

ゴールドスター受勲者は同格の子爵扱いだし、そうでなくとも銀剣翼突撃勲章を持つヒロ君は騎士爵扱いなんだから、そんな簡単に決闘なんてして良いわけがないでしょう？』

殴られた場所に手を当てて蹲るエルドムアの両サイドから容赦のない駄目出しが襲いかかる。その、気の毒だからそれくらいでやめてあげてはいかがだろうか？

「というか、その、もう私はヒロから離れられないから……」

『あら？　あらあらあらあら？』

『先を越された？　私、妹に先を越されちゃった？』

エルマの発言を聞いたミルフィとエルフィンが急にニヤニヤし始める。何だ？　今のエルマの一言で二人には何が伝わったんだ？

「なぁ、今の会話でなんでああなるんだ？」

「え、えぇっと……あはは」

ミミは何か事情を知ってるっぽいな。一体どういうことなんだ、さっぱりわからんぞ。

「色々と話し合う必要がありそうだなぁ」

「今更隠すこともないから、後で全部話すわ。後でね」

『今話しても良いのよ？』

『そうそう。聞いててあげるわ』
「母様と姉様が聞きたいだけでしょうが！」
顔を真赤にしたエルマとホロディスプレイの向こうの母娘がギャンギャンとやり合い始める。それは左右からの同時攻撃でダウンしたエルドムアが復活するまで続くのだった。
具体的には五分くらい。

#174　ウィルローズ子爵家の人々（後書き）

ピローン！―（∵3」∠）―（既に看破されつつあるフラグが立つ音

#175　方針決定（前書き）

Ｓｔｅａｍのセールでｂａｔｔｌｅｔｅｃｈを始めてドハマリしています。
ドハマリ、しています。
それで寝不足で遅れましたゆるして！―（：３」∠）―

#175　方針決定

セレモニーの後にでも直接会って話をしよう、ということでウィルローズ子爵家の人々との話はまとまった。エルドムアとしては俺がエルマに手を出した件について言いたいことがあるようだったが……。

「結果論ですが、ヒロさんは銀剣翼突撃勲章とゴールドスターの英雄ですから。そんな貴方の元に『誰よりも先んじて』エルマを送り込んでいた、という事実だけで宮廷貴族としては色々と旨味があるんですよ」

「ぐおおぉぉっ！？　ミルフィ！　ギブ、ギブ！」

尚も俺に対する敵意を隠そうとしないエルドムアにアームロックを極めながら朗らかな笑顔を浮かべるミルフィさんは凄かったな……間違いなくエルマの母親だ、あの人は。

「しかしなんだかわかるようでよくわからない理由で許されたよな」

ベッドの縁に腰掛けながら呟く。

「ああ、母様の言っていたこと？　つまりね、お転婆な娘の手綱も握れない、なんて陰口を叩くような連中に『有能な傭兵を見出すために敢えて外に出していたんですが、何か？』って反撃できるようになるってわけ。実際にはただの偶然だけど、現にヒロが銀剣翼突撃勲章とゴールドスタを受勲するわけだから」

「……なんというか、子供の喧嘩みたいだな」

「そんなもんよ。そういうくだらないマウントの取り合いでコミュ

ニケーションを取るのが貴族ってものよ」
汗を流してまだしっとりとしているエルマがそう言って肩を竦める。ちなみに一緒に入ったから俺もまだしっとりしている。
「まぁ、つまり一目置かれるようになるわけ。実績が既に出ている以上、辻褄なんて如何様にでも合わせられるからね。寧ろ、黙っておいて勝手に深読みさせるのがこの場合一番良いのかしら」
「俺には理解が及びそうにない世界だな。やっぱり面倒くさそうだ」
「でしょうね。私もそういうのがつまらなくて、面倒でたまらないから家を飛び出したのよ」
「大正解だな。好きな時に好きな場所に行って、色々なものを見たり、食べたりしながら適当に宙賊をしばき倒して面白おかしく生きるほうがずっと良いように思える」
「でしょう？」
クスクスと笑いながらエルマはベッドに腰掛ける俺の横に座り、体重を俺に預けてきた。
「それにこの船にはヒロがいて、ミミがいて、メイがいて、ティーナとウィスカがいる。気の合う仲間と一緒に広大な宇宙を冒険する。たまにトラブルに巻き込まれたり、ピンチになったりしながら、仲間と一緒にそれを乗り越えて乾杯する。そんなホロ小説みたいな刺激的な生活を送れてとっても満足なの、私は。だから、この生活を手放すつもりはないし、その為なら少しくらい母様の思惑に乗るのも悪くないと思っているわ」
「そうだな。じゃあ、これで絶対に譲れないラインは決まったな？」
「そうね。ティーナ達はともかく、明日にでもミミとメイも交えて話し合いましょう。私達の生活を守らないとね」
「そうだな」

そうして暫くの間、寝物語にエルマとエルマの家族を聞いてから俺とエルマは同じ寝床で眠りに就くのだった。

☆★☆

翌日。
朝食の席でミミとメイにも俺とエルマが昨日話し合った『俺達の最終防衛ライン』を共有することにした。

「私もそれで良いと思いますけど、ヒロ様は本当に良いんですか？」
「と言うと？」

首を傾げるミミにそう問う。

「えっと、場合によっては正式に帝国騎士として取り立てられて、貴族になることも可能だと思うんですけど」
「あー、正式な貴族、貴族ねぇ……それはつまり、一代限りの名誉爵位じゃなく、世襲できる永代貴族としてってことだよな？」
「はい」
「ミミは貴族になりたいか？」
「え？」

俺の問いにミミは首を傾げた。そこは言わずとも察して欲しいぞ、俺は。

「いや、俺が貴族になるってことはおいおいミミも貴族になるってことだろう。この場合はエルマが正室で、ミミが第二夫人ってことになるのか？」
「出自的にはそうするのが自然でしょうけど、私はエルフだからね。

作ろうとしても人間との間には子供ができにくいし、そう考えると同じ人間のミミを正室にするのもアリだと思うわよ。私個人の心情としては、私は側室で良いかな、と思うわね。正室はミミの方が相応しいでしょ」

俺とエルマのやり取りを聞くうちに俺が言わんとすることがわかったのか、ミミが顔を真赤にしてあたふたし始める。

「まぁ、貴族になって上級市民権を得ればどこかの惑星上に居を構えるのも難しくなくなるのか。それもアリっちゃアリなんだろうが、そうなると傭兵稼業は続けられなくなるだろうな」

「そうねぇ……ああ、でもほら。父様の寄子になって帝都に居を構えるんじゃなく、クリスの所に転がり込めば意外となんとかなるかもしれないわよ。ダレインワルド伯爵には貸しがあるし、騎士爵か男爵になるかわからないけど、寄子として受け入れてもらえば今ほどじゃないだろうけどある程度自由にさせてもらえるかもしれないわ」

「……そうするとクリスがもれなくついてきそうなんだが？」

「良いじゃない。ヒロだってあの子のことは憎からず思っているでしょ？」

「まぁ、それは、そうだけれども……」

そりゃあんな可愛い子に好意を向けられて嫌な気分になるわけは無いけどさ。一度盛大にフッた女の子を頼りに行くのはちょっとなぁ……同じ貴族になったならってことでそれはもう猛烈にアタックしてきそうだし。

あの時は諸般の事情でクリスの好意を受け入れる事はできなかったけど、俺が貴族になったら事情が変わるからな。というか諸般の事情というかなんというか、あの時点でクリスに手を出すのは色々な意味で完璧にアウトだったから、どうあっても手を出す気は無か

ったけど。
あんな子に手を出したら完璧に事案だよ、事案。憲兵さんに逮捕されちゃうよ。

「まぁ、少しだけ貴族になるのも面白そうだなと思ったけど、もう暫くは自由気ままな傭兵生活を送りたいと思う次第だ。というか、今の流れアレだな？　ミミが俺と結婚してくれる気が全く無いとかだと最高に寒いな？　ちょっと穴掘ってそこらへんに埋まろうかな」
「だ、大丈夫です！　結婚したいです！！」
「やったぜ」
「はいはい、良かったわね。私も結婚してあげるわよ」

顔を真赤にしたまま目を瞑って叫ぶミミ、グッとガッツポーズを取ってエルマに視線を向ける俺、そして俺の視線を受けてクスクスと笑うエルマ。そんな俺達をじっと見ているメイ。

「メイも結婚する？」
「前向きに検討させていただきます」
「やったぞエルマ、メイも結婚してくれるらしい」
「はいはい。どうせならその勢いでクリスとティーナとウィスカも貰ってあげると良いわ。セレナ少佐も追加する？」
「セレナ少佐はやめとく」

だって俺が貴族になってもならなくてもセレナ少佐とそういう関係になるのは反応弾頭地雷の臭いがプンプンするし。

「セレナ少佐は横に置いておいて、実際のところメイと結婚ってできるのか？」
「はい。機械知性にも人権が認められておりますので。ご主人様がお望みであれば子を成すことも可能ですよ」

「マジで？」
「マジでございます。煩雑な手続きが必要な上、費用もかかりますが」
「科学の力ってすげー……」

一体どうやって機械のメイと子供を作るのだろうか？　一種のクローン培養みたいな形になるのか？　機械知性と人間の間にできる子供って遺伝子的には一体どうなるんだ？　知的好奇心が物凄く刺激されるな。

「話がとっ散らかったけど、とにかくそういうことで。俺達は何があっても自由気ままな傭兵生活を維持する。そのためならある程度の妥協はする。ただし、今の生活が侵されるようなら何がなんでも抵抗する。そういう方向で」
「はい！」
「わかったわ」
「承知致しました」

三人が頷く。よし、これで意思統一はできたな。

「で、そういやティーナとウィスカは？　昨日営業所に出ていってから帰ってきてないのか？」
「はい。スペース・ドウェルグ社の仕事が色々と立て込んでいるらしく、昨晩は営業所に泊まり込みで業務をこなすと連絡がありました」
「わぁ、ブラックぅ……」

ドワーフは普通の人間よりも身体が大分頑丈らしいが、それでも泊まり込みで業務をこなさなきゃならないとかブラックにも程があるだろう。スペース・ドウェルグ社の就業規則って一体どうなって

るんだ？
と、思っていたら食堂にブザーが鳴った。このブザーは来客を告げるものだが……？
「来客の予定なんてあったか？」
「いえ、特に無い筈ですが」
そう言ってメイが中空に視線を漂わせる。多分ブラックロータスのシステムにアクセスして来客が何者なのか確認しているのだろう。
「ティーナさんとウィスカさんが帰ってきたようですね」
うん？　なんでブザーなんて鳴らしてるんだ？　二人にはアクセス権を付与しているから、帰ってくるためにわざわざブザーなんて鳴らす必要はないはずだが。
「ティーナさん達だけでなく、何人か同行者がいるようです」
「同行者？」
「はい。ティーナさん達と同じドワーフの女性と、他にも人間が数人」
「……？　何だと思う？」
「何でしょうね？」
「二人が連れてきてるんだから、スペース・ドウェルグ社関係よね。アレじゃないの？　例の傭兵ドキュメンタリー」
「あー……アレね。そう言えば一応優先取材権は生きてるんだっけか」
「はい、ディスカウントの条件なので。ただ、取材に関しては条件の折り合いが付けば、という形になっています」
となると、挨拶と下見に来たってところか？　だとしても先に連

絡を入れるのが筋だと思うんだが。うーむ。

「まぁ、事情を聞くか。場合によっては門前払いしても良いし」

「そうね」

「えー……取材、受けないんですか？」

そう言えばミミは取材を受けることに積極的だったな。

「条件が折り合えば考える。とにかく、事情を聞くとしよう」

そう言って俺がメイに目配せをすると、メイは頷いてホロディスプレイを起動した。ホロディスプレイの向こうに揃ってチベットスナギツネみたいな顔になっている整備士姉妹が映る。

「朝帰りお疲れ。後ろのお友達はどちら様だ？」

『エンターテイメント部署の連中や……兄さん、悪いけどちょっと話だけでも聞いたってくれへん？』

ハイライトが消えた瞳のままティーナがそう言って盛大に溜息を吐く。あー、うん。どこの世界でもマスメディア関係者ってのはアレなのかね。ちょっとこいつは気をつけて取り掛かったほうが良さそうだな。

#176　謝罪と再会（前書き）

三巻の続刊が決まったよ！！！　やったぜ！！！！！！　（∵3」∠）

―（発売日などに関しては情報解禁までまってね！！

#176　謝罪と再会

ティーナ達が帰ってきてきっかり一時間後。

「この度は本当に申し訳ございませんでした」

スペース・ドウェルグ社グラキウスセカンダスコロニー営業所エンターテイメント部の部長（クッソ長い肩書きだな！）と営業所長、副所長が俺の目の前で揃って見事な土下座をキメていた。

その後ろにはティーナ達にくっついて乗り込んできたエンターテイメント部の社員達がロープで縛り上げられて蓑虫のようになって転がっている。顔色は全員蒼白を通り越して土気色だ。

いやー、あの後は酷かったね。人の話は聞かない、乗船拒否したのにティーナ達と一緒に船に乗り込んでくる、挙げ句勝手に撮影を始める、こういうことを話してくれと台本を渡して自分達の好きな画を撮ろうとし始める、プライベートスペースに侵入しようとする、ハンガーに行って勝手にクリシュナを撮る、カーゴスペースのコンテナを勝手に開けて中身を検めようとする……流石にブチギレたよね。

エルマとメイに不正な方法で傭兵の船に侵入した連中の扱いについて確認し、ついでに傭兵ギルドにも確認。メイが撮っていた乗船拒否のやり取りからの映像も転送して確認してもらい、俺との連名でスペース・ドウェルグ社グラキウスセカンダスコロニー営業所に抗議の連絡を入れてもらい、同時に船内の不法侵入者を捕縛。

報道の権利の侵害だなんだと叫ぶ連中に銀剣翼突撃勲章を見せつけ、慣例的に騎士爵として扱われることを説明。更に傭兵の船への

不法侵入者に対する武力行使が法的に認められていることも説明。武力行使の容認とはつまり、その結果殺害に及んでも法的な罪に問われないということである。

これは高度な軍事機密の輸送や要人警護などを可能性がある傭兵に特例的に認められているものであるらしい。無論、これを利用して傭兵が悪行を行えないように色々と規制はあるらしいが、今回はそれをパスしているとのことだ。

ついでに蓑虫どもに傭兵ギルドとの連名で営業所と支社に抗議したことも説明。流石にここまで説明すると自分達が盛大にやらかしたことに気づいたらしく、必死に許しを請い始めたが、当然これを無視。今に至る。

「とりあえず一回俺をブチ切れさせるってのはアレか？　おたくの芸風か何かなのか？　えぇ？」

「申し開きのしようもございません」

「良い船提供してるんだからこれくらいええやろ、みたいな雰囲気でもあんのか？　というか、事前にアポを取って一回挨拶とミーティングをするのが普通じゃないか？　あんたのとこの社員のビジネスマナーどうなってんの？　突撃取材で取材先に迷惑かけるとか頭おかしいんじゃないか？」

「誠に申し訳ございません……」

いい年をしたおじさんドワーフが身体を小さくして土下座をするのを見るのは俺も心が痛むが、だからといってここで引き下がるわけにも行かないんだよなぁ。面倒臭い。

「この一連のやり取りは全てうちの有能なメイドが艦内設備も利用して全て記録しているからな。誠意ある対応がない場合はそのままおたくのライバル会社に放流するから」

「「「！？」」」

俺の発言に営業所長と副所長、そして部長が一斉に顔を上げて大きく目を見開く。

「調べてみたら競合他社は結構多いみたいじゃないか？　メビウスリング、フォーマルハウトエンターテイメント、ニャットフリックス辺りが良さそうだよな？」

メビウスリングは結構お硬い感じのリアルなドキュメンタリーを売りにしていて、フォーマルハウトエンターテイメントはとにかくド派手で迫力のあるダイナミックなドキュメンタリーを売りにしている。ニャットフリックスは企画系と日常そのまま垂れ流し系のドキュメンタリーが売りなのかな？

それよりもニャットフリックスのイメージキャラクターが円錐形の無貌の頭部を持つエイリアンめいたクリーチャーなのが気になって仕方がないんだが。これ直視したら精神崩壊級のＳＡＮチェックとか入らない？　大丈夫？

「そ、それだけはご勘弁を……！」

エンターテイメント部の部長が額を床に擦りつけて懇願してくる。

「ここだけの話、というかもう掴んでるかもしれないけど、俺が今回帝都に来たのは勲章の受勲のためなんだよな。恐らく、大々的に発表されてニュースになると思うんだが……」

チラリと固唾を呑んで俺の顔を見上げている営業所長と副所長、部長に視線を送る。

「その後多分取材の申込みとかあるんだろうなぁ。一応スペース・

ドウェルグ社に優先権があるんだけど、こんな不義理を仕出かされちゃあ信頼関係もクソも無いよな？　約束を守る必要あると思うか？」

「そ、それは……」

「一応この船の値引きの条件として引き受けたんだけど、正直こんな状態じゃなぁ……なんなら値引きしてもらった分の２００万エネル、手切れ金として返そうか？」

「に、にひゃっ――」

俺の言葉を聞いた蓑虫が奇妙な鳴き声を上げて顔を引き攣らせる。そうだよ、お前さんはブラド星系の艦船販売部が２００万エネルもの身銭を切って手に入れた優先取材権をふいにしようとしてるんだよ。

「とまぁ、恨み言はこれくらいにしとこうか。建設的な話をしよう」

そう言ってかがみ込み、俺は土下座をしている三人のドワーフと目線の高さを合わせた。ははは、何をそんなに怯えた顔をしているんだ。別にそんな無茶なことを頼むつもりはないよ。

☆★☆

「ほんとごめんなさい……」

「ごめんなさい……」

「いや、二人に文句を言うつもりはないから気にするな」

蓑虫どもを営業所長と副所長、そしてエンターテイメント部長の三人に押し付けて船から追い出したのだが、整備士姉妹がこの通り萎れた菜っ葉みたいになってしまっていた。

「というか、連中には何を言っても無駄だっただろう？　大変だったな」
「うぅ……兄さん優しいなぁ」
「ありがとうございます……」

実際、船に到着してブザーを鳴らした時の二人の表情を見れば彼女達ができる限りの抵抗をしたんだろうな、ということは察せられたしね。

「それにしてもあんなので良かったの？」
「良いんだよ。やりすぎて恨みを買うのも良くない」

スペース・ドウェルグ社の連中が持ってきた付け届け――なんか高そうな酒とかつまみっぽいもの――を物色しながら聞いてくるエルマにそう答えて肩を竦めてみせる。

俺が要求したのは取材優先権を有するスペース・ドウェルグ社が責任を持って他社の取材を管理するように、という内容だ。スペース・ドウェルグ社以外にも今回みたいな突撃取材をされるのは御免だしな。恐らく彼らにはこれから地獄のような調整作業が待っていることだろう。

別にその過程でスペース・ドウェルグ社が利益を出すのも他社に貸しを作るのも構わない。ちゃんと調整された上での取材であれば協力もしよう。ただ、無秩序にマスコミが押し寄せてくるのはＮＧだ。餅は餅屋。マスコミのことにはマスコミに任せるのが一番だろう。

ただし、万が一うちのクルーに迷惑をかけた場合は訴訟や抜刀も辞さない、ということは伝えておいた。このクルーというのはティーナとウィスカも含まれる。彼女達はスペース・ドウェルグ社から出向してきているだけの臨時クルーだが、俺的にはもう身内だ。

「二人もこれからは気をつけろよ。これは叱ってるとかじゃなくて、マジで心配してのことだからな。俺に注目が集まれば、当然同じ船のクルーにも注目が集まる。ましてやこの船は１００％俺が出資してる船で、俺がキャプテンでもある。しかもこの船に乗っている男は俺だけだ。どう見られるかは当然わかってるよな？」
「……うん」
「……はい」

二人が神妙に頷く。

「実際にどうなのか、なんてのは関係ないからな。こういうのは。きっと俺とそういう関係だと思われるだろうし。広く知らしめられれば心無い言葉が向けられることもあるだろう。そういう時は悩んだりしないですぐに俺達の誰かに相談するように。俺に話しにくいことはミミやエルマ、メイに相談すれば良いだろう」
「ん、わかったで」
「わかりました。ありがとうございます」
「よし」

頷いて振り返る。

「大丈夫です」
「今更ね」
「お任せください」
「よし」

これは二人の相談に乗るという意味だけでなく、二人に言えることはミミ達にも言えることだということだ。それを理解している様子の三人に俺も頷いてみせる。確実に俺にも誹謗中傷があるだろうが……ははは！　羨ましかろう？　という気持ちで乗り切ろうと思

っている。
もしそれでも傷ついたらミミやエルマやメイに慰めてもらうから問題ない。

「さて、今日はどうやって過ごす――」

過ごすかな、と言おうとしたところで俺の携帯情報端末から着信音が鳴り始めた。うん？　なんだろう？　発信元に見覚えがない。どうやら帝都からの通信のようだが……とりあえず出てみるか。俺は端末を操作し、休憩室のホロディスプレイに映像を浮かび上がらせ――驚いた。
かつておかっぱに整えられていた艶やかな黒い髪の毛は少し伸び、しかしオニキスのように輝く意志の強そうな瞳はそのままで……背が伸びたのだろうか？　今の彼女は俺の記憶よりも少しだけ大人びた雰囲気を漂わせているように思える。

「お久しぶりです、ヒロ様」
「クリス！？」
「クリスちゃん！」
「久しぶりね」

かつて海洋型リゾート惑星で短いバカンスを一緒に過ごした貴族の少女――クリスティーナ・ダレインワルドがホロディスプレイの向こうで微笑みを浮かべていた。

#176　謝罪と再会（後書き）

くっ……！　まさかこの展開を読まれるとは……！　―（：3」∠）

―

#177　どうして……（震え声）

「久しぶりだな。何か用事があって帝都に？」
「はい、お祖父様と一緒に帝都で色々とやることがありまして。またヒロ様のお顔が見られて嬉しいです」
「俺もクリスの顔が見られてよかったよ。帝都に来る時には帝国航宙軍と一緒だったから、デクサー星系は素通りだったんだ。少し大人っぽくなったな？」
「そうですか？　そう仰ってくださるのは嬉しいですね」

そう言って上品な笑みを浮かべるクリスはやはり記憶の中の彼女よりも大人びて見える。男子三日会わざれば刮目して見よ、なんて言うが、この年頃の女の子はそれ以上なのかもしれないな。

「ミミさんとエルマさんもお久しぶりです。またお会いできて、とても嬉しいです」
「私もです！」
「元気そうで何よりよ」
「そちらのお二人は？」

クリスの視線がティーナとウィスカに向けられる。そう言えば互いに初対面だな。

「こっちの赤いのがティーナ、こっちがその妹のウィスカだ。二人ともスペース・ドウェルグ社っていうシップメーカーから出向という形で俺の船に乗っている。優秀なエンジニアだ。そして彼女はクリスティーナ・ダレインワルド。ダレインワルド伯爵家のご息女で、ティーナ達と会う前にちょっと縁があって暫く一緒に居た子だ。俺

たちはクリスって呼んでる」
「クリスティーナ・ダレインワルドです。クリスとお呼びください」
俺に紹介されたクリスがそう言ってホロディスプレイの向こうで軽く会釈する。
「ティーナや……や、あの、です」
「お姉ちゃん……ウィスカです。ウィスカとお呼びください、クリス様」
本物の貴族の子女を前にしてティーナが挙動不審になる。こういう時ウィスカは如才無いな。まぁ、ティーナらしいといえばらしいけど。
と、二人がそう言ったところでクリスがジッとミミを見つめ始めた。
「……やっぱり似ている、というか瓜二つですね」
そしてそんな意味不明な発言をして頷く。うーん？　なんだろうな。なんか帝都に来てからというもの、ミミの顔をガン見したり、見て驚いたりする人が多いんだよな。
「似ているって、誰にだ？」
「ええとですね……皆様はルシアーダ皇女殿下のことはご存知……ではないですよね」
「ご存知でないな」
「お名前だけは。確か皇太子殿下のご息女の一人でしたよね？」
「そうね――ああ、そういえばそろそろ成人の儀を迎えられる筈よね？　え、ちょっと待って？」

そう言ってエルマは携帯情報端末を取り出し、何か物凄い速度で指を動かし始めた。

「……嘘でしょ？」

エルマが携帯情報端末の画面を見て口をあんぐりと開けて驚いている。エルマが驚きをここまで顕にするのは珍しいな？

「そう言いたくなりますよね？　ええと、もしそれを知らずにミミさんがセレモニーに出たりすると、大騒ぎになりそうだなと思って……お祖父様の伝手を使って連絡を入れたんです」

エルマのクリスの言葉を聞きながらミミやティーナ達と一緒にエルマの情報端末の画面を覗くと、そこにはミミが映っていた。髪型やアクセサリ、服装などはミミとは違うものだが、どう見てもこの顔はミミである。いや、おっぱいの大きさはミミの方が上かな？

「えっと……？」

ミミは困惑している。うん、困惑するしかないよな。俺も困惑している。

どうして……？　どうしてなんですかね……？　エルマの件とマスコミの件をそれなりに上手く捌けたと思っていたのに、どうしてこんなに破茶滅茶が押し寄せてくるんですかね……？　どうして。

「他人の空似です、って言えば丸く収まる――なんてことはないよな」

「ないですね」

「ないわね」

「ないやろ」

「ないでしょうね」
「ないんですか……」
クリスとエルマと整備士姉妹が断言し、俺とミミがげんなりする。
「もういっそセレモニーとかぶっちぎってどこか遠くに逃げないか？　なんか胃が痛くなってきた気がする」
「それは流石に無理でしょう……顔を潰されたセレナ少佐が銀河の果てまで追いかけてくるわよ」
「やだこわい」
本当に執拗に追いかけてきそうで怖い。今までだって別に意識してないのにやたらと顔を合わせるってのに、これが能動的になったらどうなるんだ？　考えるのも恐ろしいわ。
「ど、どうしましょう？　わ、私は紛れもなくちっぽけな平民のコロニストですよ？　帝室の方々と関わりなんてあるわけないです。本当に他人の空似です」
俺よりもミミが物凄く動揺してる。そりゃそうだよな。相手は貴族どころか帝室の直系の皇女だものな。そんな人物と瓜二つとか、厄介ごとの匂いしかしない。影武者というか替え玉として帝室に召し上げられるとか、混乱を避けるために最悪暗殺とかもあり得るんじゃないだろうか。
その前にＤＮＡ検査とかゲノム解析とかだろうが、もし検査の結果帝室の血が入っていることが判明したりしたら最悪だな。いや、そうでなくともこれだけ似ていれば絶対に厄介事になる。
「ひ、ひろさまぁ……」
「大丈夫だから。絶対にミミはどこに行かせないから」

どうしたら良いかわからなくなってぽろぽろと涙を零し始めたミミを抱き締めてやる。俺でも思いつくようなことはミミでも思いつくだろう。エルマやクリスはもっと色々展開の予想ができているかもしれない。

「どうしたもんかね、これ」
「そうね……メイ」
「はい」

名前を呼ばれ、一歩退いた場所で待機していたメイが返事をしながら一歩前に出る。

「手続きを頼めるかしら？」
「何なりとお申し付けください」

☆★☆

「しっかしほんと瓜二つやん……ミミ、ほんとに関係無いん？」

クリスとの通信を終え、なんとか泣き止んだミミにティーナが踏み込んでいく。なかなか攻めてくね、お前は。

「無いですよぅ……パパとママはインフラ関係の仕事をしている普通のコロニストでしたし、パパもママもお祖父ちゃんやお祖母ちゃんも普通の人だよって言ってました」
「うーん、ミミさんのお父さんとお母さんがそう言ってたとしても、それが本当かどうかはわからないですよね？」
「まぁ、それはそうだけども。ミミが両親から話を聞いていないとなると、どうにもこうにも手詰まりだよな」

「そうね。でも、多分そろそろよ？」

とエルマが言った次の瞬間、来客を知らせるブザーが休憩室に鳴り響いた。エルマに視線を向けるが、彼女は肩を竦めてみせるばかりだ。埒が明かないので、ホロディスプレイを立ち上げてタラップの様子を表示する。

「げっ」

『げっ、とはなんですか。げっ、とは』

ホロディスプレイの向こうには腕を組んでこちらにジト目を向けるセレナ少佐と彼女の副官であるロビットソン大尉、それになんだか豪華な制服を着た軍人っぽい人々とか白衣の医者か何かっぽい人とかが映っていた。

「何か御用で？」

『しらばっくれない。事情はわかってるでしょう？』

「えー、ぼくわかんなーい」

『それ以上くだらないジョークを言うと酷いですよ』

ホロディスプレイの向こうのセレナ少佐がこめかみに青筋を浮かべる。アレは本気だな。

「ＯＫＯＫ、でも俺が把握していない事情かもしれないし、ちゃんと説明はするべきだと思いますが？　その辺りはどうお考えでしょうか、少佐殿？」

『単刀直入に言いましょう。貴方の船のクルーのミミ、彼女が帝室の血を引いている可能性があるので、その真偽を確かめに来ました。こちらは近衛騎士のザイン卿とロレッタ卿、こちらは侍医のファルケ氏、それとこちらが内務府のコーネル氏です』

セレナ少佐に紹介された人々がディスプレイ越しに軽く会釈してくる。そろそろってのはこういうことか。

「結果如何によってはそのままミミを連れて行くつもりか？」

『それは……』

俺の質問にセレナ少佐が言い淀み、近衛騎士や内務府の人に視線を向ける。

「血筋がどうであろうとミミは俺の船のクルーだ。船長である俺が許可しない限りどこにも連れて行かせないし、強行するなら全力で抵抗する。結果がどうあれそのようなことは絶対にしないと約束できないなら船に入れるつもりはない」

俺の言葉を聞いた内務府のコーネル氏と近衛騎士が互いに言葉を交わし、頷き合う。

『私どもと致しましては、もしミミ様が帝室の血脈をその身に宿していらっしゃったとしても、即座にどうこうしようというつもりはございません。まずは確認を取り、その後の対応について検討させて頂きたく存じます』

コーネル氏が丁寧な態度でそう言う。まぁ、そう言うなら良いか？　いずれにせよ、避けては通れない問題だ。変に噂が広まって妙な連中が良からぬ動きをし始める前に帝室の庇護下に入った方が良いかもしれない。海千山千の帝都の貴族相手に謀略戦とか無理ゲーだろうからな。

一応ミミとエルマにも視線を送ってみる。ミミは不安げに頷き、エルマもまた溜息を吐きながら頷いた。

「兄さんと居ると飽きんなぁ……ちょっと驚きの吸引力やない？」
「トラブルを吸い寄せるという意味では凄いよね。トラブルの特異点的な」

そんな不名誉な渾名は却下だ却下。

☆★☆

一応全員で行くのも何なので、俺とメイの二人で客人達をタラップまで迎えに行くことにした。ミミとエルマは休憩室で待機。ティーナとウィスカも休憩室で同様に待機。本当は部屋に篭もっていてもらおうかとも思ったのだが、本人達の強い希望により休憩室の隅で動静を見守ってもらうことになった。

「ようこそ、ブラックロータスへ」
「お邪魔するわ」
「ここは邪魔するなら帰ってと言うところかな？」

軽口を叩いたらセレナ少佐に睨まれた。場を和ませるためのちょっとしたジョークなのに。

「傭兵の船というものに乗るのは初めてですな……貴重な体験です」
「そうですな、イメージしていたよりもずっと明るくて綺麗です」

内務府のコーネル氏と侍医のファルケ氏――二人とも穏やかそうな初老の男性だ――はそう言いながら物珍しげな様子で休憩室に続く通路を歩いている。近衛騎士の二人は一見前だけを向いて歩いているように見えるが、油断なく俺やメイに視線を向けてきているし、通路に不審なものが無いかチェックしているようにも見える。油断

ならないな。

「おぉ……」

その感嘆の声はミミの姿を見てのものか、それとも広くて綺麗ま休憩室を見てのものか。コーネル氏の視線から考えるに前者だな。近衛騎士の二人なんて思わず跪きそうになってるし。

「ミミ様、コーネルと申します。どうぞお見知りおきを」
「は、はい……あの、私は本当にそういう、その、そういうのじゃないはずなので、普通に接してください」
「そうかもしれませんが、そうでないかもしれません。いずれにせよ、すぐにわかることです。ファルケ殿」
「はい。すぐに結果が出ますので。お手を拝借しても？」

ミミが俺の顔を不安げに見つめてくるので、頷いて促してやる。そうするとミミも意を決したのか、ファルケ氏におずおずと手を差し出した。ファルケ氏はタブレット端末から伸びたコードの先についた指サックのようなものをミミの指先につけ、タブレットを操作し始める。

「ふぅむ……これは」

ファルケ氏がタブレット端末の画面を見つめながら呟き、ミミに頭を下げてからミミの指につけていたケーブル付き指サックのようなものを取り外した。

「結論から言いますと、限りなく１００％に近い確率でミミ様は帝室の血脈をその身に宿しておられます」

ファルケ氏がそう言い、ミミに跪いて頭を下げる。コーネル氏も、近衛騎士達も同様にミミの前に跪いて頭を垂れた。

「えぇ……」

ミミが困惑の声を上げ、俺とエルマは揃って手で目を覆って天井を仰ぐ。

どうしてこうなった。

#177　どうして……（震え声）（後書き）

どうして予想されていたんですかね……？（、・ω・、）（残当

#EX－002　セレナ・ホールズの優雅になるはずだった朝食（前書き）

今日はお休みの日だから閑話のＳＳでも。

#EX－002　セレナ・ホールズの優雅になるはずだった朝食

「んー……よし」

ホログラムとして投影されている自分の姿をチェックし、身嗜みに問題がないことを確認して頷く。帝国航宙軍の士官たるもの、だらしない姿を部下に見せるわけにはいきません。しかも、私は対宙賊独立艦隊を率いる提督でもあるのですから。尚更だらしない姿は見せられないのです。

帝国航宙軍少佐としての生活の堅苦しさに息が詰まりそうになることもありますが、悪口と噂話で盛り上がる『淑女のお茶会』にひっきりなしに参加するよりはいくらかマシです。それを思えば武門の家柄であるホールズ侯爵家に生まれて良かったと思います。綺麗なドレスやアクセサリは嫌いじゃありませんけれど、お茶会は苦手ですから。

「はぁ」

しかし、帝都に帰ってきたからにはそういった場に何度かは足を運ばなければならないでしょうね。もっとも、私はもう五年ほど帝都を離れて軍務に就いていたわけですし、さほどお呼ばれすることもないでしょうけれど。

「おはようございます、少佐」

「お早う、大尉」

レスタリアスの士官用の食堂に行くと、既にロビットソン大尉が朝食を摂り始めていた。彼は良い副官です。私のような小娘をちゃ

んと引き立て、艦隊の司令官として敬意を払ってくれるのですから。
自動調理器から出てきた朝食と紅茶をトレイに載せ、私もテーブルに着く。ぱらぱらと現れる士官達に挨拶をしながら朝食のトーストにマーマレードを塗る。もう少しこの自動調理器はどうにかならないのかしら。紅茶は美味しいけれど、それ以外がなおざり過ぎます。
士官用の朝食でトーストとマーマレード、ベイクドビーンズ、それに紅茶という内容なら、果たして一般兵用の食堂では何が出てくるのか。折角帝都に来たのですし、全艦の自動調理器入れ替えを申請しておきましょうか。
なに、昨日までの面倒な手続きと申請に比べれば何ほどのこともありません。謁見やセレモニー関係の申請に比べれば些事のようなものです。

「ようやく一段落ですね」
「そうですね。後はセレモニーまで少しはのんびりできそうです」

そう言って私は朝の紅茶を口に運びながら食堂のホロディスプレイに目を向ける。朝のニュースでは帝都のあちこちに植樹されている木が開花の季節を迎えているとか、先日成人の儀を終えられて十年ぶりにマスメディアの前に姿を現されたルシアーダ皇女殿下の――！？

「ぶふっ！？」
「うおっ！？　しょ、少佐！？」

突然紅茶を口から噴き出し、咳き込んだ私を見てロビットソン大尉が驚愕の声を上げます。ですが、今の私はそれどころではありませんでした。ホロディスプレイに映るルシアーダ皇女殿下のご尊顔から目を離せません。だって、その顔はとても見覚えのある顔だっ

たのですから。
　口許を手で拭いながらホロディスプレイから流れてくるニュースを一字一句聞き逃さないように集中します。ああ、なんてこと。こんな特大の厄介事が……やはりキャプテン・ヒロはどこかおかしいのでは無いでしょうか？　まさかピンポイントで……い、いや、こんなことを考えている場合ではありません。このままではセレモニーで大騒ぎになることは必至。そうなる前に手を打たなければなりません。

「のんびりは返上です……内務府に連絡を入れなければ！」
「な、内務府！？　しょ、少佐、一体……」
「一分一秒でも早く動かないと大変なことになります。大尉、付き合ってもらいますよ」

　まずは事態を把握していない大尉に事情を説明して、それから資料を集めて内務府に連絡を取って――ああ、頭と胃が痛くなりそうです。
　おのれ、キャプテン・ヒロ……この件は高い貸しにしてやりますからね。

#EX－002　セレナ・ホールズの優雅になるはずだった朝食（後書き）

だいたい店頭特典のＳＳはこれくらいの文量ですね―（：３」∠）

―

#178　ミミの血脈とは？

とりあえず内務府のコーネル氏と侍医のファルケ氏、それに近衛騎士の二人にはお帰りいただいた。近衛騎士の二人はミミの側に侍って御身をお守り致しますと最後まで粘っていたが、今までミミの身の安全を俺が守ってきた実績を盾にし、更にブラックロータスのセキュリティの高さ――シールドを展開すれば基本誰も入ってこれない――を主張し、近衛騎士にも同様にお帰りいただいた。

そして、この場に残っているのは俺の船のクルーとセレナ少佐、そして彼女の副官のロビットソン大尉だけとなった。

「色々と、それはもう色々と言いたいことがあるんだが……まず最初に、なんで今まで気づかなかった？　生粋のお貴族様が」

じろりとセレナ少佐を睨めつけると、彼女はしかめっ面をしながら口を開いた。

「私だって今日の朝のニュースで気づいたのよ。なんだか見覚えのある顔が映っているな、と思ったら貴方のところのクルーと瓜二つなんだもの。朝から紅茶を噴く羽目になったわ」

優雅に紅茶を飲んでいたセレナ少佐がニュースを見て紅茶を噴く光景……是非その場で見たかったな。そうしたら指差して笑ってやったのに。

「いや、その、皇女様？　の顔を誰も知らなかったのか？　特に貴族のセレナ少佐とエルマは知っててもおかしくないんじゃないのか？」

「帝室の方々は基本的に五歳式を迎えられてからは成人するまで公の場に姿を現さないのよ……今調べたら、ルシアーダ殿下が十年ぶりにメディアの前に姿を現したのは一週間前のことみたい」
「タイミングぅ……」
「というかそれを言ったら、貴方のところには高性能のメイドロイドがいるでしょう？　貴女は気が付かなかったの？」

セレナ少佐の指摘でメイに視線が集まる。

「恥ずかしながら、ルシアーダ殿下が約十年ぶりにメディアの前に姿を現したというニュースは把握しておりましたが、ここ数日は他の情報処理に追われておりまして、優先度が低く振り分けられておりました」
「他の情報処理？」
「はい。セレモニー前後にご主人様にちょっかいをかけてきそうな貴族のリストアップと、所在や動向の確認、その他諸々といったところです」
「「「あぁ……」」」

それは確かに大変だろうなと俺とミミと整備士姉妹が同時に声を上げる。エルマとセレナ少佐、それにロビットソン大尉は苦笑いを浮かべるだけだったが。

「とにかく、私達が今まで気づけなかったことに関してはどうしようもなかったということがわかりましたね？　それよりも、キャプテン・ヒロ、これは貸しにしておきますからね」
「何故にＷｈｙ？　俺に落ち度は一切ないんだが？」

何故これが貸しになるのか。俺は即座に遺憾の意を表明する。

「私がいち早く気がついて内務府に連絡し、雑多な手続きに尽力したからこうして迅速かつ秘密裏に事が進んだんですよ？　これは立派な貸しでしょう？　もし私がそのように動かなかった場合、どれだけの面倒事になっていたと思います？」
「放っておいたら面倒事になったのは間違いないだろうが、俺達も事態を把握したところだったからな。内務府に連絡する伝手はあるし、セレナ少佐が動かなくてもこっちで対処はできた」

実際、クリスから話が回ってきた時点でダレインワルド伯爵家に頼るという方法もあったし、エルマの実家であるウィルローズ子爵家に頼るという方法もあった。特にウィルローズ子爵家は内務府の役人らしいしな。

「とは言え、伝手を使えばそっちに借りができて面倒な事になった可能性もあるか……」
「まぁ、そうね。特にうちに頼った場合に父様や兄様が何を言い出すか」
「クリスの方は……なぁ」

どうもクリスは俺とのあれこれを諦めていない節があるので、頼るといつの間にか雁字搦めにされていた、なんてことになるかもしれないんだよな。それが嫌かというと……うん、まぁ嫌ではないけど、結果として傭兵生活から足を洗う羽目になるのはＮＧだ。

「そう考えるとここは素直に借りておくのが良いか」
「結果的にはそうかもね」
「それじゃあそういうことで。今回は借りておく。と言ってもまぁ、今までのアレコレを考えるとイーブンくらいか？」
「それは流石にないでしょう。この貸しは大きいですよ」
「なら少し借りってことで」

「ぐぬぬ……」

セレナ少佐が唸るが、それ以上は何も言わない辺りを見ると一応はそれで納得したらしい。

「それにしてもミミがなぁ……血脈を宿してるってのは一体どれくらい遡っての話なんだろうな？」

「見当もつきませんよ……パパとママは本当に普通の人でしたし」

「流石にミミの両親世代で出奔して行方不明になった皇族なんていたら簡単にわかるよな？」

「と、思うけどね。その前の世代、今上皇帝と同世代か更にその上……となると、とても心当たりがあるわね」

「怪しい方が一人いらっしゃるんですよね。今上皇帝の妹君――セレスティア様が……」

エルマとセレナ少佐が同時に心当たりを口にする。今上皇帝の妹君、セレスティア様ね……つまりミミのお婆さんが怪しいわけだ。父方か母方かはわからないけど。

「どういう人だったんだ？」

「……型破りな方ね」

「……破天荒な方ですね」

二人曰く、小さな頃からお転婆で、皇族でありながら冒険に傾倒し、十五歳の成人の儀の直後に密かに用意していた小型戦闘艦で帝都を飛び出し、その後正体を隠したまま傭兵として活躍し、帝室からの追っ手を華麗に翻弄し、最後には帝室の手の及ばない帝国の版図の外にまで飛び出していった――うん、なんだろう。最近似たような話を聞いたな？

「……何よ」
「なんだか聞いたことのある話だなぁって」
「……」

エルマが耳を赤くしながら無言で俺の脇腹を抓ってくる。すごくいたい。なるほど、五年前のエルマさんはそんなお方の影響を受けて星の海へと飛び立ったわけだな？

「いてて……なんか本とか映画とかになってそう」
「そのものずばり、というのは流石に憚られたのかありませんけど、明らかにセレスティア様をモチーフにしている作品は沢山ありますね」
「私も見たことがあります。マクシール星系の冒険の話が好きです」
「えー、メメル星系の傭兵セレスｖｓサメ型宇宙怪獣のが良かったやろ？」
「なにそれ面白そう」

漂うB級映画臭が凄い。というか、サメ型宇宙怪獣なんているのか。やはりサメは宇宙にも存在する……頭が三つになったり空を飛んだりするんだから宇宙にいたってなんらおかしくないよな。いや、そういうのはもうあった気がするな？　まぁいいか。

「とにかく、可能性があるとすれば直近ではその冒険大好きな今上皇帝の妹君というわけか。今上皇帝の孫に当たる皇女殿下とミミが似ているとなると、可能性は低くはなさそうだなぁ」
「それ以外となると、かなり遡ることになりそうだけどね。でも……」
「……？」

俺とエルマに視線を向けられたミミが首を傾げる。

「そうだとして、何故ミミはあの状態で放置されてたんだろうな。本当に俺とエルマがあの時偶然通りかからなかったら酷いことになってたよな」
「それよね」

そう、そこが不可解なのだ。いくら帝室から飛び出して傭兵となったとはいえ、皇族は皇族だろう。秘密裏に監視というか、保護されそうなものだが。

「セレスティア様がよほど上手く潜ったということでしょう。血筋を隠し、イリーガルな手段を使って帝国人のＩＤを偽造し、市井に紛れたのかもしれません」
「偽造なんてできるのか？」
「帝国軍人としては認めたくはありませんが、手段はあるようですね。人の作るものに完璧なものなど存在しないというわけです」

セレナ少佐がそう言って苦虫を噛み潰したような顔をする。なるほど、あるのか。まぁ、話を聞く限り相当なやり手だったという話だし、そういう伝手もあったのかね？　いや、別にミミのお婆さんがセレスティア様と決まったわけじゃないが。

「なんか考えるのが面倒になってきたな」
「面倒ってあのね……」
「だってなるようにしかならないだろう？　方針は今まで通りの傭兵生活を続ける、全員で。これに尽きるわけだし。そのためには大小を問わず立ちはだかるものを薙ぎ倒し、受け流していく。とりあえず目下の問題はセレモニーだが、必要な者は揃ってるし、手続きはセレナ少佐がしてくれてる。ミミのアレコレに関してはあっちの動き待ちだし」

そう言いながら俺はミミの手を引いて休憩室のソファに座らせ、俺もその隣に座った。

「ミミもエルマも勝手にどこかに連れては行かせない。相手が誰であってもな。ただそれだけだ」

「それ解釈のしようによっては重いなー」

「お姉ちゃん、そこで茶化すのはどうかと思うよ」

「ミミとエルマが本当に心から望んで出ていくなら涙を呑んで見送る……いや引き止めるわ。捨てないでくれって泣きつくかもしれん」

そう言って目元を拭う真似をすると、ティーナは笑い、ウィスカは控えめに笑い、エルマは苦笑いを浮かべ、そしてミミは――。

「大丈夫です！　ヒロ様とは絶対に離れません！」

そう言って横から抱きついてきた。うむ、流石はミミだな。腕に当たるボリュームも心地よい。

「このノリにはついていけそうにないですね」

「ははは」

セレナ少佐とロビットソン大尉は冷めた反応だったが、まぁそんなものだろう。

何にせよ、あちらの動きを待つばかりだ。セレモニーの予定日もそろそろ決まるだろうが、その前には内務府から何かしらの反応があるはずである。

来るなら来いだ。相手になってやるさ。

#179　事情聴取（前書き）

最強宇宙船3巻の発売は！　7月です！　是非予約して買ってね！！！

―（∵3」∠）―

#179　事情聴取

翌日、内務府の役人達――コーネル氏とその部下だ――が訪ねてきて、俺達に対する事情聴取を行うことになった。無論、事前に連絡を取ってアポイントメントを取った上での来訪である。こういうところは流石にどこぞのマスメディアとは違うな。

「まずはあなた方が今後どうしたいと考えているのかが肝要かと思いまして」
「なるほど」

休憩室のソファに腰掛け、俺は一つ頷いた。
事情聴取、と言ってもその内容はお固くて高圧的なものではなく、もう少し緩い表現――聞き取り調査と言ったほうがしっくり来るような感じではあった。
事情聴取の場にはミミだけでなく俺とエルマ、それにメイも一緒にいる。整備士姉妹はミミの件にはあまり関わりがないので、少し離れた場所でこちらの様子を伺っている。

「何より尊重すべきはミミの意思だよな」
「そうよね」
「そうですな」

俺とエルマ、それにコーネル氏とその部下達の視線が一斉に集まり、ミミがビクリと身を震わせる。

「あ、あの……いきなりその、帝室の方々と同じ血脈を宿していると言われてもピンと来ませんし……それに、私は普通のコロニスト

です。今はヒロ様の船のクルーで、オペレーターですけど。そんな私が皇族として振る舞うのは無理ですよ」
「確かに、今まで皇族としての教育を受けてこられなかったミミ様にいきなり皇族として振る舞い、皇族としての義務を果たせというのは無理なことでしょう。しかし、知らないことは学べばよいのです。今の時代、学ぶ方法はいくらでもありますとも。ミミ様が皇族としての生活を望んでいらっしゃるのであれば我々はそれを全力でお助け致しますし、皇帝陛下もミミ様とお会いすることを楽しみにしていらっしゃいますよ」
「へ、陛下がですか！？　うぅ……な、なんで」

皇帝陛下がミミと会いたがっているという話を聞いたミミが激しく動揺する。そりゃ動揺するわ。俺だって国のトップ、それも絶対的な権力を持つ封建制度上のトップに一目会いたいとか言われたらビビる。

「ミミ様から取得した遺伝子情報を解析した結果、現在ご存命の帝室の方の中で遺伝子情報が一番近いのが皇帝陛下であることが判明致しました。また、過去に記録されていた遺伝子情報と比較した結果、限りなく１００％に近い確率でミミ様の……恐らく父方の祖母に当たる方が現陛下の妹君、セレスティア様だろうという調査結果も出ております」
「あー……まぁ予想通りかぁ。生き別れた妹の忘れ形見ともなれば、一目会いたいと思うのが兄ってものだよなぁ」
「その通りで」

セレスティア様がミミのお祖母さん説がこうして証明されたわけだ。

「となると、エルマはミミのお祖母さんに憧れて同じように帝都を

飛び出して、その旅路の果てに憧れのセレスティア様の孫と出会って一緒の船に乗ってるわけだ。出会いから何から物凄いドラマティックだな？」
「今は私のことは良いでしょ」
少し耳を赤くしたエルマにペシッと頭を叩かれた。解せぬ。
「えっと、皇帝陛下にそう言って頂けるのは大変光栄なんですけど、私みたいな平民が拝謁して何か粗相があってはいけませんし……いえ、その、お会いできるなら是非一目お会いしたいとは思いますけど」
「なるほど。では非公式の場で私的に会うのは構わないということですな」
「えっと……その、ヒロ様達と一緒なら」
「ちょっ」
チラリと俺とエルマの方に視線を向けながらミミがそう言い、エルマが慌てる。俺は別に会うのは構わないけど。
「もし会うとなればできるだけ非礼な口を叩かないようには気をつけるが、エルマはともかく俺は礼儀作法なんて無縁の傭兵だからな。その辺りはご寛恕願いたいと伝えておいてくれよ」
「ええ、必ずお伝えしておきましょう。それでは、ミミ様は今まで通りにヒロ様と共に傭兵として生きていくことをお選びになるということで良いのですか？　皇族となれば危険もなく、何不自由ない暮らしをしていけると思いますが」
「何不自由ない暮らしと言うなら、今の私はヒロ様のお陰で何不自由なく暮らせています。ヒロ様達と一緒に星々を渡り歩いて、色々な場所を見て、色々な人達と出会って、時には事件に巻き込まれたりもしますけど、今の生活がとっても幸せなんです」

そう言ってミミはコーネル氏をまっすぐに見つめた。
「だから、船を降りるつもりはありません」
「なるほど……まぁ、私から見てもこの船は御料船もかくやという内装ですからな」

コーネル氏が休憩室に視線を巡らせて微笑む。

「実際のところ、皇帝陛下も無理矢理ミミ様を帝室で引き取るということはお考えにはなっておりませんのでその点はご安心を。馬に蹴られて死ぬのは御免だ、と仰っておられました」
「なんだか今の一言で物凄く皇帝陛下に親近感のようなものが湧いてきたぞ」
実は結構話せる人なのではないだろうか？
「最後にもう一度確認しますが、ミミ様は帝室に入るつもりはない、ということでよろしいですな？」
「はい」

コーネル氏の言葉にミミがはっきりと頷く。その様子を見てコーネル氏も頷いた。

「承知致しました。では、ミミ様は皇室とは一切関係のない、ただの平民であるという方向で帝国は動くことと致します。ルシアーダ皇女殿下と似ているのはあくまでも他人の空似、検査の結果でも今現在における帝室関係者との直接的な血縁関係は認められなかったということで」
「なるほど、嘘は言ってないな」
「はい。セレスティア様は行方不明となっておりますし、既にご存命ではない……のですよね？」

「えっと、多分……？　パパからは既に亡くなったって聞いてますし、会ったこともないです」
「……なんだか不安になるな」

伝え聞くセレスティア様のタフネスとパワフルさを考えると、実は存命で今でも宇宙を飛び回っているんじゃないかと思えてしまう。ミミが一度も会ったことないってのも不安要素だ。

「セレスティア様なら……みたいなところはあるわよね」
「実際、帝国に尻尾を一切掴ませずに子孫であるミミがここにいるしな……皇帝陛下が存命なら、その妹のセレスティア様が生きていたって全くおかしくはないよな」

昨日セレスティア様の話を聞いてから俺もセレスティア様関連のホロ動画とか、ホロ小説に目を通したんだが、彼女はアレだ。女性版コ〇ラかな？　と思うような描写をされてたからな。しかもその大半がほぼノンフィクションだというのだからぶっ飛んでいる。

「ハハハ……」

俺とエルマの会話を聞いてコーネル氏が胃の辺りを押さえて乾いた声で笑う。あながちあり得なくもないと彼も思っているのだろう。年代的に考えれば、初老と言える年齢である彼はセレスティア様が起こした騒動で頭を抱えた現役の世代だろうからな。

「ああ、それとミミ様の置かれていた境遇に関してですが、少々不自然な点が見受けられましたので内務府で調査を開始しています」
「なるほど？　まぁ今更感あるけどな」
「そうですね……」

ミミがなんとも言えない表情をする。恐らく俺と出会う前のことを思い出して胸中でモヤモヤしているのだろう。膝の上でギュッと握り締められている拳を手の平で包み込んでやる。どれだけ不安で恐ろしい体験だったか、俺には想像することしかできない。

「ミミのことが切っ掛けになってターメーンプライムコロニーがいくらかでも良くなれば幸いだな」

「はい」

実際のところどうなるかわからないが、何らかの利権や謀略絡みでミミの両親が事故死させられ、ミミに対する法的な保護まで一切放棄されたとかだったら、ターメーンプライムコロニーの行政に粛清の嵐が吹き荒れるかもしれないな。どういう経路で調査が入るのかはわからんけど。

「では、事情聴取はこれで終了とさせていただきます。今回の内容は再び持ち帰らせて頂き、今後の対応に反映させていただきますので」

「それはどうも。双方にとって良い結果になることを祈ってますよ」

「そうですね。ただ、セレモニーでは否応にも貴方達は目立つことになります。ミミ様が帝室へと入らない以上、帝室は表立って貴方達を守ることは難しい。身の回りには十分にお気をつけください」

「それは忠告かな？」

それとも脅しか？　という言葉を言外に込める。そんな俺の言葉にコーネル氏は至極真面目な表情で頷いた。

「はい、親切心からの忠告です。尤も貴方はプラチナランクの傭兵で、ゴールドスターと銀剣翼突撃勲章を持つ英雄です。帝国航宙軍と軍部寄りの貴族、それに傭兵ギルドは貴方を守ろうとするでしょ

うし、そもそも貴方のような傭兵に下手に手を出せば痛い目に遭うというのが常識ですから、普通の貴族は貴方達に手を出したりはしないでしょう。ですが……」
「世の中にはそんなことを考えずに欲しい物に手を伸ばそうとする馬鹿が一定数いるからね」

エルマが肩を竦めてそう言うと、コーネル氏は同意するように頷いた。

「そういうことです。ミミ様はルシアーダ皇女殿下に瓜二つで、若く、可憐で美しい。そんなミミ様を自分のものにしたいと考える者が出てこないとも限らないのです」
「そいつは厄介だなぁ……だが、その時はぶっ飛ばすまでだ。ダメそうならミミを連れて逃げる」

そういう輩が熟達した白刃主義じゃないことを祈るばかりだな。まぁ、場合によっては船での戦いに持ち込むなり、ケツ捲って逃げるなりすれば良いだろう。最悪、クリスやセレナ少佐、エルマの実家に頼るって方法もある。どんなツケを払う羽目になるか怖いから、できれば使いたくないけど。

「そんな事態に対処するために文字通り血反吐を吐いて剣の訓練を積んできたわけだし、まぁ大丈夫だろう。メイからもお墨付きを貰っているし」
「はい。今のご主人様であれば白刃主義者の貴族とも互角以上に渡り合えます」

側で待機していたメイがそう言って頷く。まぁ、そう言ってくれるメイにはまだ完全勝利はできないんだけども。パワーとウェイトが違い過ぎるんだよ……攻撃が重すぎてまともに受けるとバランス

を崩されるし、かと言って避けられるような攻撃速度でもないし。

「ふむ……？　まぁ、傭兵ならそういうこともあるのでしょうな」

コーネル氏は少し不思議そうな顔をしたが、勝手に納得してくれた。普通、身体強化を施している貴族の白刃主義者に生身の平民が近接戦で互角以上に戦うなんてのは不可能だ。それなのにメイドロイドであるメイが断言するということは、俺も何かしらの身体強化を施しているのだろうと納得したんだろう。

実際、身体能力を強化している傭兵や機械技術による義体化を施している傭兵というのも結構いるらしい。船乗りは反射神経や視覚の強化、コロニーでの白兵戦を主体とする連中はそれに加えて単純な身体能力を強化を施しているとか。かなり高くつくらしいから、シルバーランクのベテラン以上じゃないとそうそうできるもんでもないらしいけど。

「くれぐれもご注意ください。それでは、私達はこれでお暇致します。対応が決まり次第、追ってご連絡致しますので」

そう言ってコーネル氏は部下達と共に去っていった。これでセレモニーの前後に非公式の場で皇帝陛下と謁見、という特大のイベントが追加されることになりそうだな。

#180　帝都に降り立つ（前書き）

ギリギリセーフ！―（∴3」∠）―

#180　帝都に降り立つ

皇帝陛下との謁見はセレモニーの後という形になった。久しぶりのゴールドスター受勲者と言葉を交わしたい、という形で俺達がセレモニーが終わった後にそのまま呼ばれるという形になるわけだ。

セレモニーの開催日も四日後ということに決定し、俺達はセレモニーの際に着ていく衣装に着替えてメイの指導の下に立ち居振る舞いのレッスンをすることになった。

「ヒロ様、かっこいいです！」
「まぁまぁね」
「そいつはどうも」

シエラⅢでクリスが仕立ててくれた貴族服に袖を通し、腰の剣帯に二本の剣とレーザーガンをぶら下げた俺を見てミミとエルマが褒めてくれる。まぁ、貴族服って言っても俺の印象としてはかなり軍服寄りなんだよな。見た目以上に動きやすいのは白刃主義者の影響だったりするんだろうか。

「二人だって綺麗だぞ」
「えへへ、ありがとうございます」
「ドレスが良いのよ」

ミミは先日購入した清楚で上品な感じの白を基調としたドレスで、エルマはスタイリッシュな萌葱色のドレスだ。二人とも派手過ぎない程度に宝飾品の首飾りや耳飾りを身に着けており、まるで貴族のお姫様のようである。

「……実質的には皇族のお姫様と子爵家のお姫様なんだよな」
「あー……うん、まぁ、そうね？」
「わたしはふつうのころにすとです」

どうやらミミ的に自分の真の出自というか、血筋に関することはトラウマというかタブー的な話題になってしまったらしい。まぁ、気持ちはわからんでもないけれども……会ったこともない自分のお祖母さんが実は皇族で、自分にもその血が間違いなく受け継がれているとか言われても困惑するしかないものな。

グラッカン帝国において皇族という存在は本当に特別な存在として扱われている。一般人の多くは貴族に対して畏れではなく恐れを、敬意ではなく上級国民に対する劣等感――ルサンチマンに近いものを抱いているようだが、皇族に対しては純粋に畏れと敬意、あるいは崇拝に近い感情を抱いているようなのだ。

ミミが帝室に入らず、普通のコロニストとして、或いはこの船のオペレーターとして生きようと考えるに至った理由もなんだかんだで『あまりに畏れ多い』という思いも強いようである。俺としては一緒に居てくれることを選んでくれたのは嬉しい限りなんだけれども。

「皆様、衣装を完璧に着こなしていらっしゃいますね」
「せやな。兄さんもかっこええやん」
「うん、似合ってる。かっこいいです。ミミさんとエルマさんも素敵です」

メイとティーナ、ウィスカが本番に着ていく衣装を身に着けた俺達を見て口々に褒め称えてくれる。

「ティーナとウィスカは本当にセレモニーに出ないのか？」
「や、うちらはマジで一般人やし。そんなお貴族様ばっかのお上品

なセレモニーとかパーティーとか無理やで」
「着ていく服もありませんし、そもそもこの船の正式なクルーでもないですから」
「別に服くらい買ってやるけど。そんなに高いものでもなし」
「数万エネルを高いものじゃないと言うのは流石やけど、そんなん贈られてもうちら何も返されへんもん」

ティーナが苦笑いをしながらパタパタと手を振る。

「そうか？　メイはどうだ？」
「私はメイドですから」
「そうか……」
「……御主人様がお命じになられるのであれば否やはありませんが」

俺があからさまに落ち込んだ様子を見せると、メイは少し考えた末にそう言ってくれた。ふふ、俺もメイとの付き合いは長くなってきたからな。こういう時にわがままを押し通す術はそれなりに学んでいるのだよ。

「では、レッスンを始めましょう」
「わかった」
「はい」
「ええ」

そうして俺達はメイからセレモニーにおける立ち居振る舞いのレッスンを受けるのであったが――。

「エルマ様は問題ありませんね」
「結構うろ覚えだったんだけどね」

エルマはメイに一発ＯＫを貰っていた。

「くっ……流石は本物の貴族出身」

「エルマさんって普段から立ち居振る舞いが綺麗ですよね」

俺とミミは当然のように要訓練であった。

「ミミ様のレッスンをエルマ様にお任せしても？　私はご主人様のレッスンを担当するので」

「んー、良いけど、結構怪しいわよ？」

「ちゃんとそちらにも気を配りますので」

「わかったわ、それじゃあミミはこっちにいらっしゃい」

「はいっ」

ミミとエルマが少し離れたところでレッスンを始めるのを横目に、俺もメイからレッスンを受ける。メイのレッスンは基本的に優しかったが、妥協を許さない厳しさも併せ持っていた……こういう訓練のことになると本当に厳しいんだよな、メイは。

☆★☆

立ち居振る舞いだけでなく、貴族服を着たままでの剣術のレッスンなどもこなして迎えたセレモニー当日。俺達――俺とミミとエルマ、それにメイの四名――はクリシュナに乗り込み、帝国航宙軍の先導に従って帝都へと降下していた。整備士姉妹はブラックロータースでお留守番である。

「いや、こうして間近に見ると凄いな、帝都」

一つの惑星がまるまんま人工構造物に覆われているその光景は圧

巻の一言である。何らかの法則に従って多くの建築物が建設されているのだろう。大気圏外から見る帝都は複雑な幾何学模様が描かれているようにも見える。

「確かに凄いです……どうやったら惑星がこんなことになるのか、想像もつかないですね」

「重力制御技術や環境制御技術の賜物らしいけど、私も詳細は知らないわね。帝都の人口は凡そ二百五十億人だったかしら？」

「はい。もう少しで二百五十七億人に到達するようですね」

「想像もつかんな。食料とかはアンダーレベルの施設で作ってるんだっけ？」

「ええ、前にアレイン星系で見たのよりもずっと大規模で先進的な食料生産工場が沢山あるわよ」

そんな話をしながら降下を終えると、コックピットのメインスクリーン上に荘厳な雰囲気の構造物が映りこんだ。

「あれが帝城か……でけぇな」

山、というかまるで山脈である。デカけりゃ良いってもんじゃないと思うが、皇帝の居城ともなるとやはりひと目で見てわかるようにしなければならないんだろうな。

「あれ全部を合わせて帝城だけど、実際に帝室の方々が生活をしているのはほんの一部よ。多くは行政機関や軍の施設ね」

「なるほど」

先導してくれている帝国航宙軍の船は帝室の方々が住んでいるという帝城の中心部近くにある軍施設――小型艦の発着場がある地点に向かっているようだ。

ちなみに、今のクリシュナは一応武器は積んでいるが帝国航宙軍によってウェポンシステム自体がロックされている上に航行能力も軍に掌握されており、殆ど曳航されているような状態である。
流石に皇帝陛下をはじめとした帝室の方々がおわす帝都ともなるとこの辺の制限は大変に厳しい。メイ曰く、軍部に協力している複数の機械知性によってロック機能がプロテクトされているため、メイの能力をもってしてもこのロックを外すのは不可能だとか。
まぁ、ここはグラッカン帝国のお膝元だ。何があっても俺がクリシュナを駆って重レーザー砲や散弾砲をぶっ放す機会などある筈もないだろうから、心配はいらないだろう。帝国に消されるような謂れもないしな。

「到着したな」

無事到着し、クリシュナが帝城の小型艦発着場への着陸を終えた。今日もオートドッキング機能さんは着実な仕事をしたようである。

「頑張りましょうっ……！」
「あまり気負わないようにね」

胸の前で拳を握りしめて気合いを入れるミミにエルマが苦笑する。セレモニーに出たら注目を浴びること必至のミミとしては気合を入れなきゃやってられんところだろうなぁ。

☆★☆

「馬子にも衣装……いえなんでも」
「なんだ？　言いたいことがあるならはっきり言って良いんだぞ？」

クリシュナを降り、クリシュナを先導していた帝国航宙軍のドロ

ップシップから降りてきたセレナ少佐が俺の姿を見るなり失礼な発言をかましてくる。そう言うセレナ少佐はいつもと同じ軍服姿だ。

「少佐、時間があまりありませんが」

「そうですね、早く行きましょう。主役がセレモニーに遅れたりしたら彼だけでなく案内役の私達も赤っ恥です」

ロビットソン大尉の忠言にセレナ少佐が頷き、俺達の前に立って歩き始める。セレナ少佐達の後ろに俺が続き、その後ろにミミとエルマが並び、更にその後ろにメイがしずしずとついてくる。

「もう見られていると思ってお行儀よく歩くのよ」

「へいへい」

「はいっ」

小声で注意してくるエルマの言葉に従ってレッスンで体得した通りに背筋を伸ばし、綺麗な姿勢を心がけて歩くことにする。後ろは見えないが、恐らくミミとエルマも楚々とした振る舞いで歩いていることだろう。メイに関しては心配は一切必要あるまい。

発着場から帝城の中に入ると、そこは乗降場であった。何の？

まぁうん、鉄道――いや、小型のリニアモーター列車か？　ああ、多分コロニーに整備されている物資輸送システムと同じようなやつだな、これは。

「移動に車両が必要とはな」

「帝城は広いから。歩いていたら目的地に着く前に日が暮れるわよ」

「なるほど」

セレナ少佐達と同じ車両に乗り込むと、すぐに車両が動き始める。もの凄い速度で動いているようだが、加速時のGなどは殆ど感じな

かった。クリシュナに搭載されているような慣性制御機構も搭載しているのかもしれない。

「うぅ……緊張してきました」

「ミミは後ろでただ立ってれば良いから。俺だって別に演説するわけでもなんでもないし」

セレモニーでは軍のお偉いさんが今回の結晶戦役の経緯や戦果を報告したり演説したりするらしいが、俺達はただ席に座って黙ってそれを聞くだけである。その後に受勲式が始まり、順番が来たら俺たちは全員で前に出ていくことになる。

実際に受勲するのは俺だけだが、そうやってクルー全員がセレモニーに出たという名誉に浴するわけだ。

「でも一体どうなるか少し怖くはあるわな」

「滅多なことにはなりませんよ。セレモニーの場で騒いだりすれば赤っ恥をかくことになりますから」

「その場ではな。その後皇帝陛下に呼び出されるわけだから今日は大丈夫かもしれんが、明日以降はどうかな」

「暫くは予定が詰まっていますし、そうそう貴方達にちょっかいをかけることはできないと思いますが」

「……だといいなぁ」

「ちょっと、やめなさいよ」

「ヒロ様……」

諦観の念が篭もった俺の呟きにエルマが引き攣った笑みを笑みを浮かべ、ミミが苦笑する。だって俺達だぞ？　そんなに平和裏に事が進むと思うか？　いいや、俺は思わないね！　絶対に変な貴族とかが押しかけてきてミミ関連で騒動が起きるんだ。あたしゃ知ってるんだよ！

「貴方達のトラブル体質は私も知っていますが、いくらなんでも……いや、ありえますね。今までの経験から考えると」

セレナ少佐がジト目を向けてくる。なんだかんだでセレナ少佐俺達のトラブル体質を目の当たりにしてるものな……エルマの暴走衝突事件、ベレベレム連邦との小競り合い、シエラⅢへの襲撃事件に、離反艦隊との戦闘、それにこの前の結晶戦役。全部俺達が関わってるし、半分くらいはこっちから巻き込んでるような気がしないでもない。だが俺は謝らない。絶対にだ。

「自重してください。良いですね？」

「イエスマム。可能な限り努力します」

ビシッ、と敬礼をしてみせるが、セレナ少佐からの視線はとても冷たかった。

#１８０　帝都に降り立つ（後書き）

コミックウォーカーとニコニコ静画で昨日漫画が更新されたよ！
是非見てね！　―（：３」∠）―

#181　セレモニー

帝城内高速列車に乗り、帝城内の駅に降りる。着いた先の駅名は『催事区画』だった。
「催事用の区画があって、それ用の駅まで用意されているというこのスケールのデカさ」
「流石は皇帝陛下がお住まいになられているお城ですね」
「あんまりキョロキョロしないの。みっともないわよ」

物珍しい光景についついあちこちに視線を向けてしまう俺とミミにエルマが注意してくる。そうは言うけども駅から出たらいきなりこう、いかにもお城の中って感じの内装になってなんとなく落ち着かないんだよ。床にはチリ一つ落ちてない赤い絨毯が敷かれていて、なんか高そうな壺とか絵とかが飾られてて、一定間隔で豪華なシャンデリアめいた照明器具が天井に設置されてて……って感じでさ。なんかもう『はぇ～すっごい』って感じの小学生並みの感想しか出てこないね。
そんなどうにも落ち着かない帝城の中を暫く進んでいくと、人の集まっている場所が見えてきた。どうやらあそこがセレモニー会場の入り口らしい。

「セレナ・ホールズ少佐です。キャプテン・ヒロ一行も同行しています」
「はい……はい、確認致しました。席は――」
セレナ少佐が代表して全員の受付を行い、セレモニー会場へと足を踏み入れる。

「Ｏｈ……こりゃ凄い」
「ふわぁ……」

舞踏会でも開けそうな大きなセレモニーホールに椅子が沢山並べられており、その八割程が既に埋まっているようであった。天井には巨大なシャンデリアが鎮座しており、右奥には妙に豪奢な玉座のようなものが……玉座？

「今日のセレモニーって皇帝陛下は出席しないんじゃなかったか？」
「その筈だけど……」

エルマの視線も右奥の妙に豪奢な椅子に向けられていた。事前に聞いていた話では皇帝陛下はこのセレモニーにはご出席なされない、という話だったはずだが……他の皇族でも出席するのだろうか？

「うぅ……」
「少しの間の我慢だから……」

ミミはミミで周りから遠慮なく向けられる視線に縮こまってしまっていた。一応俺とエルマで挟んでできるだけ視線を遮っているが、あちこちから驚愕の視線を向けられたり、ヒソヒソ話が聞こえてきたりする。ミミの容姿は本当にルシアーダ皇女と瓜二つだからな……無理もないか。

ちなみに、メイは従者枠に入るので、席は用意されていない。彼女と同様に出席者の従者としてこの場に参列している人々は会場後方の壁際に立って並んでいる。

「ルシアーダ皇女殿下が入場されます。皆様、席を立ってお出迎えください」

司会の人からそんな声がかかったのですぐに立ち上がる。別に俺はグラッカン帝国に対して敵愾心も何も持っていないし、ここで無意味に不服従の姿を晒しても誰も得をしないしな。

全員が起立すると、すぐにセレモニー会場の奥の方から上品なドレスを着た美少女が現れた。うん、こうやって見ると本当にミミにそっくりだな。ミミよりも若干髪の毛が長くて胸の大きさは控えめになって――それでもエルマよりずっと大きいが――いるけど、顔立ちは確かにミミと瓜二つだ。

彼女はしずしずと自分の席――あの豪華な玉座めいた椅子だ――へと進み、お行儀良く膝を揃えて椅子に腰掛けた。そして会場内へと視線を漂わせてから俺達の方向へと視線を定め、一瞬目を見開く。恐らく俺とエルマに挟まれて座っている自分と瓜二つの顔を見てびっくりしたのだろう。あの反応を見る限り、ミミの事については予め聞いていたようだな。

ルシアーダ皇女殿下の入場から程なくしてセレモニーが始まった。今回のセレモニーの目玉はゴールドスターを受勲される俺だということだが、俺以外にも受勲される人は多く居る。なんでも先日の結晶戦役に関するものだけではなく、その他にも様々な功績で受勲される人々が集まっているらしい。

大変広いグラッカン帝国の版図の中では日常的に受勲に値する働きをする者がいるらしく、一月か二月に一度はこういった受勲式が開かれているのだそうだ。

「今回討伐されたマザー・クリスタルからは莫大な量のレアクリスタルの採掘が見込まれており、更に研究次第では継続的にレアクリスタルを――」

最初は細々とした研究や文化的な功績への受勲が行われ、後半に行くに従って経済、軍事関係の功績へと受勲対象者がシフトしてきた。つまらない話を延々と聞かされるのかと思って正直あまり期待

していなかったのだが、意外と面白い話が続いている。今は丁度先日の結晶戦役で俺がトドメを刺すことに成功したマザー・クリスタルの有効活用についての話だな。
マザー・クリスタルの死骸から大量のクリスタル系素材を手に入れられるのはわかっていたことだが、帝国はマザー・クリスタルの死骸を利用して結晶生命体の養殖のようなことをするつもりらしい。なんでもマザー・クリスタルの死骸にはパルサーの放つエネルギーを吸収して『増殖』する機能が残っているとかなんとか。上手くいけば尽きること無くクリスタル素材を採掘できるだろうと司会の人が解説している。
結晶生命体から手に入るクリスタル素材はレーザー兵器のコア素材になるし、装甲にも使える。確かコロニーの構造材としても優秀なんじゃなかったかな？　丈夫なのに柔軟性があって、上手く加工すれば損傷を自動的に回復するような機能もつけられたはずだ。
同じような特徴を持つクリスタルフレームや結晶複合装甲を装備した探査船は長期間修理や補給を受けられない深宇宙探査を専門とする冒険家プレイヤーに重宝されていた覚えがある。防御力がさして高くないから戦闘にはあまり向かないんだけどな。ああ、通常の装甲よりもレーザー兵器に対する耐性が高いという特徴はあったか。それでも俺は使わないけど。
やがて司会者の説明が終わり、結晶戦役功労者への受勲が始まる。作戦立案や結晶生命体の情報分析において顕著な功績を認められたセレナ少佐には白銀光芒勲章というなんだか凄そうな勲章が授与されていた。
「最後にイェーロム星系における対マザー・クリスタル討伐戦において大きな働きを果たし、更に小型艦でマザー・クリスタルに肉薄して決定的な一撃を加えた傭兵のキャプテン・ヒロに対し、ルシアーダ皇女殿下より直々に勲章が授与されます」
「なぬ？」

「うぇ？」
「えっ？」

そんな話は聞いていないぞ。俺達以外の参加者も予想外だったのか、場がざわめく。しかし、そのざわめきもルシアーダ皇女殿下が席を立ったことですぐに収まった。

「キャプテン・ヒロとクルーのミミ、エルマ・ウィルローズ子爵令嬢は前へ」

そんなに大きくはないのによく通る声でルシアーダ皇女殿下が俺達を呼び出す。そうなると俺達も覚悟を決めるしかない。三人で席を立ち、俺が先頭となって皇女殿下の下へと向かう。

「貴方がキャプテン・ヒロですか……傭兵の方と見えるのはこれが初めてです」
「えぇ、まぁ、なんというか……失望させていなければ良いんですが」

なんとも答えに窮するコメントをしてくれるものだ。あまり喋るとボロが出そうだからとっとと勲章を渡して終わりにして欲しいんだが。

「ウィルローズ子爵令嬢が少し羨ましいです。私も叔祖母様のように帝室を飛び出してみたいものですね……いずれお話を聞かせてください」
「はい、機会があれば」

エルマが優雅にお辞儀をする。ううむ、堂に入っているな。流石は子爵令嬢か。

「貴方がミミさんですね。本当に、私とそっくりなのですね」
「は、はい。その、申し訳ありません」
「謝ることなんて何も無いではありませんか」

ルシアーダ王女殿下がクスクスと笑う。ううむ、笑うとますますミミとそっくりだな。

「本当はゆっくりお話がしたいのですが、それは後のお楽しみとしておきましょう。では、キャプテン・ヒロ。対マザー・クリスタル戦における貴方の勇敢な行動を称え、一等星芒十字勲章を与えます」
「有り難く拝受致します」

頭を下げ、ルシアーダ皇女殿下の手ずから勲章を拝受する。流石にゴールドスターと言うだけあって金色でピカピカキラキラである。中央に配置された真紅の宝石も見るからに高そうだ。

「叶うならば、これからもその力を帝国のために役立ててください」
「はっ、報酬次第でお引き受け致します」

ここでＹＥＳと答えてしまうとそのままなし崩し的に帝国航宙軍に組み入れられてしまいそうなので、無礼かなとは思いつつ傭兵らしく答えておく。

「まぁ、流石は傭兵ですね。では、貴方のような優秀な傭兵に帝国内に留まって貰えるよう、帝国としても何か策を練らねばなりませんね」
「ハハハ……お手柔らかにお願い致します」

策を練るとか怖いことを言う皇女殿下に思わず引き攣った笑みが

こみ上げてくる。マジで怖いからやめていただきたい。気がついたら柵で雁字搦め、なんて状況になったら俺はケツ捲って隣国に逃げるぞ。

「それでは、また後で」

小声でそう言うルシアーダ王女殿下に頭を下げて用意された席へと戻る。なんつうサプライズを仕掛けてくるんだ、あのお姫様は。いつもは余裕たっぷりのエルマが珍しく憔悴してるじゃないか。ミミなんて半ば放心してるぞ。口からエクトプラズムとか出てない？

大丈夫？

俺にゴールドスターを授けたルシアーダ王女殿下は現れた時と同じくしずしずと優雅かつ楚々とした足取りでセレモニー会場を後にし、俺達参加者は全員で席を立ってそれを見送った。そして司会の人が閉会宣言をしてやっと受勲セレモニーの終了である。

時間にして一時間半程だろうか？　この一時間半のために帝都で過ごした時間を考えると実に呆気ないものである。

「はー、終わった終わった。じゃあ帰――」

「貴様！　先程のルシアーダ皇女殿下に対する無礼な言葉は何だ！？」

問：やっと面倒事が終わったと思った瞬間更なる面倒臭そうな奴に絡まれた俺の心情を答えなさい。

答：なんだァ？　てめェ……？

まさかこのタイミングで仕掛けてくるとはたまげたなぁ。

#182　熱狂的なファンは厄介

とりあえず、絡まれた俺はすぐさまセレナ少佐に視線を向けた。
おい、どうにかしろよ。
俺の視線の意味を彼女は正確に汲んだのであろう。セレナ少佐は頬を引き攣らせ、咳払いを一つしてから青筋を浮かべている若い貴族――腰に剣を差しているから貴族だろう――に話しかける。
「クライアス男爵。どうかその辺りで矛を収めていただけませんか。彼は映えある帝国の貴族どころか臣民でもない傭兵なのです。いわば他国の人間に等しい。彼に帝国貴族と同等の帝室への忠誠を期待するのは酷というものでしょう」
「一定の敬意は払っているつもりだぞ？」
俺の発言にセレナ少佐がギロリと睨みつけてくる。黙っていろと言いたいらしい。へいへい、仰せのままに。
「しかしその男は皇帝陛下の温情で銀剣翼突撃勲章と一等星芒十字勲章を拝受した身だ。そこまでの恩を受けてのあの発言、度し難い！」
オイオイ勝手に評価して勝手に受勲することに決めたのは帝国だろうが。評価してやったんだから恩を感じろよとか何様だよ？　銀河帝国様か。うん、まぁ偉いな。うん。
だがこれはダメだな。この切り口で攻められるとセレナ少佐では反論できまい。もっと頑張れよ、もう。これだから少佐殿は残念なんだよ。

「お言葉ですが、クライアス男爵様。俺はどうあっても傭兵なのです。傭兵を動かすものは報酬、恩や情で動く傭兵など傭兵ではありません。また、他の同業者のためにも恩や情、名誉などという形の無いもので働くわけには参りません。領地からの税収や帝国から受け取る俸禄で生きていくことのできる貴族様と違い、我々は報酬を得なければ明日の食事にも困るようなことになりかねませんので」
「なっ……！？」

俺の物言いにクライアス男爵が絶句する。彼だけでなく、周りの貴族にも絶句している人が居るようだ。

「そもそも、男爵は俺のような傭兵に何を求めておいでなのです？　俺は運良く働きを評価され、たまさか勲章を頂けることになっただけのケチな傭兵です。そのような男が勲章を貰ったことによって偉大なる帝国への忠誠に目覚めました！　と急に言い始めても信用ならないのでは？」
「むっ……」

いきり立っていたクライアス男爵が言葉に詰まる。ここが攻め時だな。

「正当な評価と報酬を頂けるのであれば、今後も帝国と共に歩んでいきたい。そういう意味で傭兵なりの信義を尽くします、というのが先程の俺の発言の意味です。聡明なルシアーダ皇女殿下はそうと理解した上で俺を咎めなかったのだと思いますが」
「ぬぅ……」

実際にルシアーダ皇女殿下は俺の発言を咎めなかったので、彼女を引き合いに出せばこの男爵様は何も言えまい。というか、ゴールドスターを受勲したんだから俺ってもう扱いとしては子爵相当の筈

だよな？　こんな気軽に男爵に絡まれるのってどうなのよ。

「そこまでだ、クライアス男爵」

重々しい声が響き、人垣を掻き分けて一人の男――爺様が現れる。背が高く、がっしりとした身体つき。白髪の目立つ豊かな頭髪。鷹のように鋭い黒い瞳に、俺と同じように腰に差した大小二本の剣。

「うげ」

「壮健のようで何よりだな、キャプテン・ヒロ」

「は、はは……これはどうも、ダレインワルド伯爵」

人垣を割って俺の前に現れたのはクリスのお祖父さんであるアブラハム・ダレインワルド伯爵その人であった。どうにも苦手なんだよな、この人は。基本的に無口だし、なんだかやたら睨みつけてくるし。

「卿の忠誠心は同じ帝国貴族としては頼もしい限りだが、行き過ぎてルシアーダ皇女殿下の意に沿わぬようなことをするのは如何なものかな」

「ダレインワルド伯爵は私の行動が皇女殿下の意に反するものだと仰るのか？」

「皇女殿下はキャプテン・ヒロを咎めなかった。それが全てであろう」

殺気すら滲ませて睨みつけてくるクライアス男爵の視線を真正面から受け止めながらダレインワルド伯爵が厳かにそう言う。緊迫した空気が漂う中、第三――いや、第四の声が場に割り込んできた。

「取り込み中のところすまないが、皇帝陛下がキャプテン・ヒロと

その仲間達を連れてくるようにと仰せだ」

場に割り込んできたのはエルマのパパ――エルドムア・ウィルローズ子爵その人であった。何故彼が俺達を呼びに来るのか？　俺達の調査をした際にエルマの事が皇帝陛下に知られて、その線で彼が呼び出しの使者になったのか？　宮廷でどんな政治的力学が働いているのか傭兵の俺には全くわからんな。内務府に勤めているらしいし、あり得なくもないのかね。

「なっ……陛下が！？」
「彼らを連れて行くが、構わないな？」
「……勿論だ」

帝室の熱狂的なシンパであるクライアス男爵としては皇帝陛下の命と言われれば引き下がるしか無いのだろう。ダレインワルド伯爵も一歩身を引いた。

「キャプテン・ヒロ」
「はい」
「クリスが会いたがっている。帝都にいる間に我が屋敷に足を運ぶように」
「はい」
「うむ」

ダレインワルド伯爵が頷き、身を翻して颯爽と去っていく。必要最低限のことだけを話していったな……あの人、あんな調子だから息子達の争いを止められなかったんじゃないだろうか。

「そういうことだから」
「はいはい……」

クライアス男爵を止めるのに何の役にも立たなかったセレナ少佐が疲れた様子でそう言ってぞんざいに手を振る。侯爵令嬢とは言っても貴族の当主本人にはあまり強く出られないのかね。

「ダレインワルド伯爵と何か縁が？」

「ええまぁ、ちょっと仕事で」

歩き出したエルドムアが俺達とダレインワルド伯爵の関係について聞いてきたが、俺は内容についてははぐらかしておいた。ダレインワルド伯爵家のお家騒動に関する話だし、そもそもの話として受けた依頼の内容をベラベラと喋るようなのは傭兵として失格だろう。

「ふむ……まぁ良い。ついてきたまえ」

エルマの父であるエルドムア子爵が先に立って歩き始めたので、その後についてセレモニー会場を後にする。壁際に立っていたメイもしっかりと付いてきて、セレモニー会場を出る際にこちらに注目していた貴族達に丁寧にお辞儀をしていた。如才ないなぁ。

「しかしさっきは驚いたな。いきなり斬りかかられるかと思ったぞ」

「そんなわけないでしょう……いくらガチガチの白刃主義者でもあの程度のことで決闘を挑んできたりはしないわよ。ヒロがルシアーダ殿下を怒らせるような不敬を働いていたらどうなっていたかわからないけど」

「貴族怖いなぁ」

「私もその貴族なんだがね」

前を歩いていたエルドムアがそう言ってチラリと振り返ってくる。

「父様？」
「わかっているよ。ミルファとエルフィンにはきつく言い含められているからね。それに、今更彼を斬り捨てたところでどうしようもないんだろう？」
「ま、まぁ、その、そうね」
「はぁぁぁ～……」

エルマの返事を聞いたエルドムアが肩を落としてクソデカい溜息を吐く。物凄い激烈な反応だが、一体どういうことだ？

「ミミ、話の筋が見えないんだが」
「えっ！？　え、えーと……そ、そのうちエルマさんから話があると思います」
「そうなのか？」
「うぇっ！？　う、うん、そのうちね？」

ミミとエルマが何故か顔を赤くして慌てる。そしてエルドムアが血涙でも流しそうな顔で俺を睨みつけている。おい待て、その剣の柄に置いた手をどうするつもりだ。ステイ、エルドムア氏ステイ。
ミミとエルマ、そしてエルドムアの反応から考えるに、エルマが俺から離れられない何かがあって、それは多分性的な意味でセンシティブな事象で、不可逆的なものであるのだろう。ふーむ？

「もしかしてエルマ、お腹に子供が――ぶふっ！？」
「まだできてないわよっ！？」
「なんで殴るの！？」

エルマに思いっきり腹パンされた。ドレス姿で見事なボディーブローを放つのは如何なものかと思うぞ、俺は。しかしまだできてない、か。なるほど？　宇宙エルフはその辺りに種族的な何かがある

んだな。そのうち話してくれるらしいし、待っていれば良いか。メイに聞いたら教えてくれそうだけど、本人がそのうち話してくれるならわざわざ聞き穿ることもないだろう。
　その後は黙ってエルドムアの後について歩き、帝城内高速列車を使った移動も挟んで帝城の奥へと向かう。

「この辺りからが本当の帝城となる。つまり、帝室の方々の私的な区画だな」
「なるほど」

　ここに来るまでに何度も剣を携えた兵士――近衛兵が詰めているゲートのような場所を通った。流石にグラッカン帝国の皇帝がいる場所というだけあって警備は厳重であるようだ。最初に通ったゲートで武器の類は全部取り上げられたし、メイには腕輪型のリミッターがつけられた。なんでもメイの身体能力を人間とほぼ同等にまで下げてしまうものらしい。
　とはいえ出力が落ちてもメイの人工皮膚の下には特殊金属でできた金属製筋繊維が隠れているわけで、普通の人間よりも何倍も重量があるし頑丈なんだけどな。

「き、緊張してきました」
「そうね、私もよ」
「そうか、大変だな」
「なんでヒロ様は平気なんですか……？」
「相手の身分が高すぎて実感が湧いてないんだと思うぞ」

　とは言え相手は銀河の何割かを支配している権力者だからな……下手なことを言って怒らせないように気をつけよう。今の俺は子爵相当のプラチナランク傭兵かもしれないが、彼は帝国航宙軍を顎で使える皇帝陛下だ。格が違いすぎる。

そうやって変なことを言わないように自分を戒めていると、明らかに他とは雰囲気の違う豪華な扉に行き着いた。恐らくここが謁見の間的なサムシングなのだろう。

「では、行くぞ。陛下は気さくな方だが、決して無礼を働かないようにな」

「了解」

「はいっ」

「ええ、わかってるわ」

エルマはそう言って俺にチラリと視線を向けてくる。俺が何かしないか心配なんですね、わかります。大丈夫だよ、俺はやればできる子だから。

#182　熱狂的なファンは厄介（後書き）

なんだか思い立って超久しぶりにＳｋｙｒｉｍ始めました。
ＭＯＤ選んでるだけで時間が溶けるぅ＾ｑ＾

#183　私的謁見（前書き）

昨日はちょっと知り合いのゴリラから受け取ったアレコレでわるいまおうになってしまってな……朝五時過ぎまでえちちなのを書きなぐってしまって寝不足なんですちょっと短いけどゆるしてください！

—（：3」∠）—

#183　私的謁見

部屋に入ると、そこは落ち着いた雰囲気の応接室のような部屋だった。イメージしていたよりも二回りくらいは小さい印象を受ける。しかし調度品はどれも一目で高級品だろうとわかる。なんというか、一つ一つの品が醸し出すオーラが違うのだ。歴史を感じると言い変えても良い。

そして、その部屋の中央。これまた高そうな木製の丸いアンティークテーブルに着いている人物が二名。一人は一目で只者ではないと感じさせるオーラを放つ厳しい顔の中年男性。もう一人は見慣れているけど、見慣れていない顔――ルシアーダ皇女殿下その人であった。

「陛下、傭兵のヒロとその仲間をお連れ致しました」

「うむ」

エルドムアの言葉に中年男性が重々しく頷き、ジッと俺の目を見つめてきた。なんだか目を逸らしてはいけないような気がしてこちらからもジッと中年男性を見つめ返す。

「……其方は何者だ？」

エルドムアに陛下と呼ばれた中年の男性――つまりグラッカン帝国の皇帝は俺にそう問いかけてきた。抽象的な問いかけだ。哲学的とすら言える。平たく言えば何言ってんだこいつ？　って感じだ。

「ええと、傭兵ですが」

「ふむ、そうだな。確かに傭兵だ。我もそう聞いておる。だが、我

が問うているのはそのような表層的な事柄ではない。キャプテン・ヒロと名乗る其方は何者なのか、と問うている」

本当に何を言っているんだ、この皇帝陛下は。

「それは哲学的な意味ででしょうか？」

「其方はある日突然この宇宙に現れた。帝国暦５６７２年８月４日、ターメーン星系のセクターαにおいて、恒星系レーダーが初めて其方の船を観測した。突如、何の前触れもなく其方の船はそこに現れた。ハイパースペースからのワープアウト時に発生する時空震だけでなく、その他のエネルギー波も一切観測されないまま、まるで最初からそこに在ったかのようにな」

俺の質問を無視して皇帝は朗々と言葉を紡いだ。その内容に俺は危機感を覚える。皇帝がその情報を知った上で先程の質問をしてきたのだと言うのなら、その意味合いは俺が認識していたものと大きく変わってくる。

「その後の行動も追跡できている。出処不明の高純度レアメタルを換金し、暫く船に篭もって情報収集をしたようだな。その検索内容も実に興味深い。ソル、アルファ・ケンタウリ、バーナード、シリウス、プロキオン、タウ・セチ……ギャラクシーマップでそんな名前の恒星系を探したようだな？」

「……」

皇帝が列挙したのは俺がこの世界に来て、ターメーンプライムに着いてすぐに行った情報収集の際、俺が打ち込んだ検索ワードだ。

「文字入力の速度、同じワードでの再検索回数とそのタイミング、ワードからワードへの切替速度。情報分析官は絶対にあるはずのも

のが見つからず困惑しているのが見て取れる、と言っていたそうだ」
やだこわい。そんな情報のログまで残っているのも怖いし、そんな情報も取得できる仕組みになっているのも怖いし、そんな情報から心理状態を読み取る情報分析官とかいう奴も怖い。国家権力パネェ。

「降参です、陛下」

俺は両手を挙げて言葉通りに降参の意を皇帝陛下に示した。その様子を見た皇帝陛下は満足そうに笑みを浮かべ、頷く。

「うむ、潔し。では、其方の正体を其方自身の言葉によって詳らかにせよ」
「長く、それに突拍子もない話になります」
「良い、話せ」

そう言って皇帝陛下は席に着くように目で促してきた。エルドムアに視線を向けると頷いたので、観念して俺は皇帝陛下とルシアーダ皇女殿下が座るアンティークテーブルに用意された席に腰を下ろした。ミミとエルマも俺の両隣に座る。エルドムアとメイは離れた所に立ってこちらを見守るようだ。
陛下がぱちん、と指を鳴らすと俺達の前に温かいお茶の入ったティーカップが現れ、次いで皿に乗った美味しそうなお菓子まで現れる。俺の目ではこれがＳＦ的な技術の産物なのか、それとも魔法的な何かなのか全く判別がつかない。何はともあれ、場は整えられたということだった。

☆★☆

「ハハハッ！　そうして其方と其方の優秀なメイドは強欲なドワーフどもから三割も値切り、まんまと母船を手に入れたのか？」
「はい、陛下。ちなみに、ドワーフはその後も帝都のコロニーでやらかしまして。今頃は俺達への取材の優先権を差配するために不眠不休で駆けずり回っていることでしょう」
「はっはっは！　愉快痛快とはこのことだな！　なぁ、ルシアよ？」
「はい、お祖父様」

皇帝陛下が呵呵大笑し、、ルシアーダ皇女殿下が釣られるようにクスクスと笑う。
皇帝陛下とルシアーダ皇女殿下は俺の身の上話――というか傭兵話？　冒険譚？　に大いに興味を示した。ミミの祖母であるセレスティア様も自由な生活に憧れて帝室から飛び出したという話だが、基本的に帝室の方々というのは好奇心旺盛で冒険や自由な生活に憧れているのかもしれない。

「ルシアよ、覚えておけ。帝国の隅々まで目を向けるとな、いつの時代にもこやつのような『持っている』人間というのが何人かおるのだ」
「はい、お祖父様」

ニコニコと微笑みながらルシアーダ皇女殿下が頷く。
うん、これはあれだ。皇帝陛下に思いっきり気に入られたな。友人としてとかそういう意味でなく、観察対象としてというか鑑賞物としてというか、そんな感じで。

「こういう『持っている』人間というのはな、常人では考えられんような因果をその身に引き寄せる。方向性はその者によって違うが、こやつに収束するのはトラブルと女難といったところかな？」
「勘弁してください、陛下。最近本当に洒落にならなくなってきて

いるんです。誰かが不吉なことを言うと、本当にその通りになるんですよ」
「ククク、其方がそう言うのであればそうなのだろうな。どれ、では我からも其方の運命に彩りを加えてやろう」
そう言って皇帝陛下がニヤニヤと笑う。おいやめろ馬鹿。銀河帝国の皇帝陛下の言葉はあまりに重い。色々と洒落にならない。
「エルドムアよ、勅を発する」
「はっ！」
「我はこの男、傭兵ヒロの実力を目にしたい。近衛騎士、帝国軍人、貴族の子弟、傭兵から選りすぐりの腕利きを集めよ。久方ぶりの一等星芒十字勲章の受勲者だ。ゴールドスターを授かるに足る力を本当に有しているのか確かめたい者も多いだろう」
「御意」
おいぃぃぃ！？　何言ってんだてめぇぇぇ！？　思わず叫んで立ち上がりそうになるが、左隣からエルマの手が伸びて俺の口を素早く塞ぎ、右隣からミミが抱きついてきて俺が立ち上がろうとするのを止める。
「仔細は任せる、良きに計らえ。褒美は……そうだな、キャプテン・ヒロがその実力を十分に示した暁にはヒロとミミを一等帝国民とし、上級市民権を与えよ。ただし、爵位を与えて帝国に縛り付けることは罷りならん。そんなことをすれば此奴は帝国から逃げ出してしまうだろうからな」
さすが皇帝陛下、よくわかっていらっしゃる。クソが。
「傭兵ヒロに打ち勝った者には名誉と褒賞を与えよ。その者が望む

ものをな。ただ――」

皇帝陛下の視線がミミとエルマに向けられ、次いでメイにも向けられる。

「傭兵ヒロの身内に手を出すこともまた罷りならん。そうなると殺し合いになる故な。我も此奴に嫌われたくはない。この条件なら其方も納得できるであろう？」

そう言って皇帝陛下はもう一度ニヤリと笑った。本当にクソだなこの野郎。いつかギャフンと言わせてやるぞ。

#184　御前試合開催のお知らせ（前書き）

遅れました！！（、　。ω　。、）（ゆるして

#184　御前試合開催のお知らせ

「ちくしょう……」
「陛下直々の勅ですから……」
「もう諦めなさいよ……」

嘆く俺をエルマとミミが左右から宥める。
ファッキン皇帝陛下の『皆でキャプテン・ヒロと決闘（デュエル）しよう！　ドキドキ☆御前試合（トーナメント）』開催宣言から一時間後。俺達は皇帝陛下の『ご厚意』によって帝城にある賓客用の部屋に滞在を許されることとなり、今は豪華で座り心地の良いソファに腰を落ち着けていた。

「何がご厚意だよ！　単に逃げられないように軟禁してるだけじゃねぇか！」
「ヒロ様！　しーっ！　しーっ！」
「どこで誰が聞いてるかわかんないんだから滅多なことを言うんじゃないわよ……」

ミミが慌てて俺の口を塞ごうとし、エルマが疲労感を隠そうともしていない投げやりな態度で注意してくる。どこで誰ってお前、ここは普通の個室――つまり盗聴や監視の恐れがあるということか？　なるほど。賓客用の部屋だからってそういったものが仕掛けられていない保証はないよな。そもそも、ここが賓客用の部屋なのか、それとも他の用途の部屋なのかも俺達にはわからないわけだし。

「とにかくいつもの服装に戻りたい……」

俺は首元を締め付けていたネクタイを緩め、溜息を吐いた。クリ

スが用意してくれたこの服は間違いなく上等な紳士服なのだろうが、いつもの傭兵服に比べればどうにも堅苦しい感じがしていけない。

「私もです……」

「昔はこれが普通だったんだけどね……」

ミミとエルマも上等なドレスや装飾品を身に着けているのだが、やはりいつもの格好の方が気楽らしい。二人とも身を飾っていた装飾品を外し、慎重にソファ脇のサイドテーブルに置いたりしている。

メイには俺達の服などを取りにクリシュナへと行ってもらっている。本当は俺も行こうとしたのだが、他ならぬメイ自身に二人の傍にいるようにと言われたのだ。ミミとエルマを心配しての発言なのか、それとも疲れている俺を休ませようと思っての発言なのかはよくわからない。

「どう思う？」

「どう思うって、何が？」

「皇帝陛下の意図だよ。なんで御前試合なんて開こうと思ったのか、俺達を帝城に留まらせようと思ったのか。俺にはサッパリわからん」

俺の発した疑問にエルマが暫し考え込む。

「御前試合については本当にヒロの実力がどんなものなのか確かめたいだけじゃないかしら。驚くほどの短期間でブロンズランクからプラチナランクに駆け上がった新進気鋭の傭兵の実力をね」

「なるほど？　滅茶苦茶いい迷惑だな」

「だからやめなさいって……あと、帝城に留まらせたのはヒロを逃さないようにするのもあるだろうけど、厄介ごとから守るためでもあるんじゃない？　ほら、セレモニーが終わった瞬間に絡まれたでしょう？」

「ああ、えーと……ナントカ卿ね。はいはい覚えてる」
「覚えてないじゃない……クライアス男爵よ。ここにいればああいった手合いから絡まれることは無くなるわ。それに、御前試合で貴方が実力を示せば今後絡まれることも少なくなるでしょう」
「なるほど、十分に配慮されていると」
「まぁその……万が一にもヒロを逃さないためってのもあると思うけど」
「ですよねー」

別に軟禁されなくても逃げやしないけどさ。大々的に俺の実力を計るため御前試合をやるぞとアナウンスされた上で逃げ出したりしたら俺の面子は丸潰れだ。ついでに御前試合を主催した皇帝の面子も、ゴールドスター受勲を働きかけた帝国航宙軍の面子も、俺をプラチナランクに昇格させた傭兵ギルドの面子も丸潰れである。皇帝と帝国航宙軍、そして傭兵ギルドの面子を潰してこの先傭兵としてやっていけるだろうか？　無理に決まっている。
だから、皇帝陛下の名の下に御前試合を開催するという勅が発された時点で御前試合から逃げるという手は実質的には打てないわけだ。

「しかし御前試合ねぇ……どういう形式になるんだ？　まさか集まってきた腕利き全員と俺が戦うことになるのか？」

正直勘弁願いたいんだが。

「というか、どういう形式で戦うんだ。まさか剣で戦うなんてことはないだろうな」
「それもあるかもね。それだけでなくレーザーガンやパワーアーマーを使った白兵戦とか、船を使った戦闘とかもさせられるんじゃないかしら」

「なんだその地獄のトライアスロンは……」

剣を使った白刃戦、レーザーガンやパワーアーマーを用いた白兵戦、船を使った宙間戦闘、それ全部やるの？　俺が？　マ？　前言撤回して今すぐ逃げ出したいんだが？

☆★☆

一度やると決めると帝国の対応は実に迅速であった。皇帝が勅を発した一時間後――俺達が賓客用の客室でくつろぎ始めた頃だ――には内務府が計画骨子の作成を終え、それから三時間後には各所への根回しが済み、更に二時間後には実施が大々的に発表された。

ゴールドスターの傭兵『クレイジー』ヒロに挑む御前試合の準備は着々と進んだ。これは皇帝陛下直々の勅令によるものだと広く伝えられた。傭兵ヒロを下し、勝利をその手に掴めば十分な褒賞が与えられるとも発表され、多くの騎士、軍人、貴族、それに傭兵がこぞって御前試合への参加を申し込む事となった。

「申し込み人数が既に三百人を超えているんだが？」

この全員と戦うの？　俺死ぬよ？

セレモニーの翌日。ミミのタブレットを借りて御前試合関連のニュースを読みながら俺は心中で弱音を吐いた。どっからこんなに沸いてきたんだよこの三百人もの暇人達は。

「流石に全員と戦えってことはないと思うわよ。それこそ参加者の中でトーナメント形式で戦って、人数を絞ったりするんじゃない？」

「そもそもそのトーナメントにヒロ様が組み込まれるかも……？」

「いや、それだと俺が途中敗退したら俺に挑むっていう趣旨が損なわれるんじゃないか？　いや、あの皇帝陛下のことだから、やりか

ねんな……」

まさか途中で敗退する無様を晒すようなことはあるまいな？　とか言って。

え？　俺の中の皇帝陛下が悪意に満ち過ぎているって？　そりゃお前、運命に彩りを加えてやろうとか言ってこんな特大級の面倒事を投げつけてくる奴を好意的に見ろって方が無理な話だよ。

あのやろうぜったいにゆるさねぇ。

なお、少し落ち着いた時点でセレナ少佐に連絡を入れて事情を説明したのだが、セレナ少佐に物凄く気の毒そうな顔をされた。

『やっぱり貴方達にはトラブルを吸い寄せる変な力があるのでは？』

俺達三人はセレナ少佐の言葉に何も言い返すことができなかった。悲しいなぁ。

なお、御前試合の開催が決定したことによって、帝国航宙軍の予定も木っ端微塵に吹っ飛んだ。本当は受勲後に帝国航宙軍の広報課の取材――民間の取材ではないのでスペース・ドウェルグ社との優先取材権云々の規定には抵触しない――を受ける予定だったのだ。それだけでなく、帝国航宙軍で採用される次期小型戦闘艦や艦載機のトライアルにも参加する予定だったのだが、そちらもポシャった。

帝国航宙軍からも腕利きが参加するので、俺がトライアルに出て戦闘機動を披露すると、それを見た帝国航宙軍からの参加者に有利に働きかねないから、という理由だ。それを言ったら帝国航宙軍は結晶生命体との戦闘時における俺の戦闘機動のデータを持っているし、セレナ少佐も恐らく対宙賊戦における俺の戦闘データを持っている筈だから、帝国航宙軍が有利なのは今更だと思うのだが。

「はー、不安だ」

「そうなんですか？」

溜息を吐きながらの俺の言葉にミミが首を傾げる。
「船を使った戦闘はともかく、白兵戦や白刃戦は俺が得意なフィールドとは言い難いからなぁ……」
ＳＯＬでは白兵戦でも負け無しだったが、こっちの世界で同じようにできるかと言うとあまり自信がなぁ……いや、恐らく同じように動けるとは思うんだが、生身での本格的な白兵戦はまだ一回もしていないし。パワーアーマーを着た状態でなら何回かやったけどな。
「私は大丈夫だと思うけどね……帝都周辺の腕利きに対抗できるかどうかまではわからないけど」
「帝国最強とか銀河最強とかそんな夢は見ていないんだ、俺は。というか俺の本分は船を使った宙間戦闘だっつうの！　ついでとばかりに白刃戦と白兵戦を組み込んでるんじゃねぇ！」
「大丈夫です、ご主人様。普段通りの力を発揮なされれば問題ありません」
メイが太鼓判を押してくれるが、そう言うメイに俺はまだまともに勝てていないんですけれど。
まぁ、メイは考えうる限り最高のスペックを持っているメイドロイドだ。その戦闘能力は軍用の戦闘ボットにも迫るという話だし、生身で勝とうと思うこと自体が無謀なのかも知れない。
「しかし、実施の発表から実行まで期間が短すぎやしないか？」
御前試合第一部、白刃戦の部は明後日にも開催されることになっていた。それから三日間かけて第一部を行い、その後第二部の白兵戦の部、それにもまた三日かけ、最後に第三部の宙間戦闘の部を行

うというスケジュールになっている。
「剣を使うのは基本お貴族様ですし、参加しようと思えばゲートウェイを使ってすぐに帝都に来られますから。だから告知から開催までの期間が短いんじゃないでしょうか？」
「多分そうでしょうね。白刃主義者も基本は帝都周辺に多いし」
「うげぇ」

本当にうげぇ、という感想しか出てこない。

「……今思ったんだが、白刃戦ってどうやるんだ？　まさか真剣で斬り合うわけじゃないよな？」
「流石に真剣ではやらないわよ。刃を潰したレプリカを作って、それで戦うの。勿論、刃は無いけど金属の塊で殴り合うわけだから、当たりどころが悪ければ死ぬわよ」
「やだこわい」
「……いつもメイさんとやっているのと同じじゃないですか？」
「……そう言えばそうだな？」

メイとの訓練でも俺は刃を潰した模擬剣でメイと殴り合っている。まぁ、メイは模擬剣じゃなくて黒い特殊金属の棒で殴ってくるんだけど。そう考えると確かに同じだな。

「気楽にやりなさいよ。いくらゴールドスターとは言っても、流石に傭兵相手に白刃戦でまで強さを証明しろとは陛下も仰らないと思うわ」
「でもそれってつまり、奴は俺がボコられるに違いないと思ってるってことだよな？」
「……」
「……ええと」

エルマが沈黙し、ミミが言葉を失う。ははは、なるほどなるほど。そういうことか。

「よし決めた、ぶっ飛ばす」

ＯＫＯＫ、直接ぶん殴れない分は奴の思惑から只管外れてやることによってその代わりとしてやろうじゃないか。ファッキン皇帝陛下のニヤけ面を思い出しながら俺はそう心に誓うのであった。

#185 Damn ・・・ kill it！（前書き）

くっころは女騎士の伝統芸―（：3」∠）―

#185　Damn・・・　kill　it！

「そうなのですね」
「そうなんですよ！　ヒロ様は――」

同じ顔をした二人の少女が俺達に与えられた客間の同じテーブルに着き、楽しそうにお喋りしている。うん、つまりその二人とはミミとルシアーダ皇女殿下なのだが。

「見事に意気投合してるな」

帝城に逗留することを許されたその翌日、朝食を終えたタイミングでお付きの人々を連れたルシアーダ皇女殿下が部屋を訪ねてきた。どうやら彼女は自分と似た容姿を持つミミに興味を惹かれたらしい。
最初はミミの方が緊張してガチガチになっていたが、皇女殿下の話術か、生まれ持ってのカリスマの為す業か、それとも魂の波長めいたものが合致したのか、ミミはすぐにルシアーダ皇女殿下と打ち解けて楽しそうにおしゃべりをし始めた。

「そうね……まぁ、微笑ましい光景じゃない？」

エルマがそう言ってすました顔で静かにティーカップを口に運ぶ。

「まぁ、そうね」

穏やかで上品な笑みを浮かべるルシアーダ皇女殿下と無邪気な笑みを浮かべるミミを見比べながら俺は頷く。こうして見ると目鼻立ちが本当に似ているというか、まるで鏡写しのようだな。声もそっ

くりだし。同じ服を着て同じ髪型にしたら普通の人には見分けがつかないんじゃないだろうか？
俺？　俺は見分けがつくよ。おっぱいの大きさが違うからね。

「痛い」
「不敬よ、不敬」

俺の視線に気がついたのか、同じソファに隣り合って座っているエルマが俺の脇腹を抓ってくる。ついでに部屋の隅に控えているルシアーダ皇女殿下のお付きの侍女や、女性近衛騎士達からも厳しい視線が飛んでくる。部屋の中にあってたった一人の男である俺の立場はとても弱い。

「……メイ、ちょっと付き合ってくれ。身体を動かしに行こう」
「はい。かしこまりました、ご主人様」

そんな俺とメイのやり取りを見てルシアーダ皇女殿下の侍女と女性近衛騎士達がスッと目を細める。まるで汚物を見るような目だ。皆さんエルマやミミに勝るとも劣らない美人さんなので、とても迫力がある。何かに目覚めそうだ。
ちなみに君達がどんな想像をしているのかはなんとなく察しが付くけど、違うからね？

「近衛騎士様方、剣術の修練ができるような施設はございますでしょうか。できればそちらをお借りして剣術の修練をしたいのですが」
「……なるほど。そのメイドロイドは戦闘系の機能を持っているのですね？」
「お察しの通りで。リミッターが掛かっていなかったらパワーアーマーを着た兵士より強いですよ」
「ほう……ああ、なるほど。護衛ですか」

納得したようにそう言って女近衛騎士がチラリとミミに視線を向ける。彼女から見てもミミは荒事が得意には見えないのだろう。まったくもってその通りで、ミミの戦闘能力はやっとレーザーガンを目を瞑らずに撃てるようになった程度である。訓練用のターゲットに。人間に向かっては多分撃てないだろうな。

「それで、場所をお借りすることは可能でしょうか？」
「良いでしょう、案内します。リシェル、アイナ、ここを任せます」
「「ハッ！」」

三人いる女性近衛騎士のうちの一人が俺とメイを案内してくれることになったらしい。他の二人を呼び捨てにしていたし、こう言っちゃなんだけど態度もそれなりなので多分近衛騎士の中でも部下を持つレベルで偉い人なのだろう。

「ついてきなさい」
「はい」

俺とメイは素直に彼女の言葉に従って彼女の後について客室を辞し、荘厳な廊下を歩き始めた。少し歩いたところで女性近衛騎士が口を開く。

「あのお方……ミミ様はとても朗らかなお心をお持ちですね。あの方と皇女殿下が楽しそうに談笑されているのを見ると、心が温かくなります」
「ミミはいい子だからな」
「そうですね。だから貴方のような男に引っかかってしまうのでしょうか」
「ワァオ、辛辣ぅ」

ギロリと睨みつけてくる近衛騎士さんにおどけてみせる。

「言うほど悪い男じゃないと思うんだけどなぁ、俺」

「ミミ様だけでなく、ウィルローズ子爵令嬢まで毒牙にかけてですか？　他にも二人ほど女性を船に囲っているそうですね？」

「やだこわい、なんで知ってるの？　でもあっちの二人には手は出してないし。二人とも可愛いとは思うんだけど、流石にあの二人に手を出すのは絵面が犯罪だよなぁって」

「ミミ様には手を出しているのにですか？」

「ミミと俺との間には複雑な事情があるのです」

元の世界ならアウトだが、この世界ではセーフ。ミミはしっかりこの世界での成人年齢を迎えているからね。あとまぁ、そうしないといけない理由もあったわけだし。メンタル的な意味で。

「複雑な事情とは？」

「そこまで話す理由がないなぁ……ああ、そうだ。近衛兵様は明後日の白刃戦の部には出るので？」

「いいえ、それがどうかしましたか？」

「じゃあ剣術の訓練に付き合ってください。俺に勝てたら話すってことで一つ」

そう言うと、近衛騎士さんは驚いたように目を見開いた後、とても嬉しそうに目を細めた。

「それは良いですね。剣で決するというのは実に良い。私は貴方を見くびっていたかもしれません」

あ、これはアレですね。この人、美人で言葉遣いは優雅だけど頭

の中がマッスルな人だ。

☆★☆

「くっ、殺せ！」

凡そ三十分後、女性近衛騎士さん――イゾルデさんは恥辱に塗れた表情でそうのたまった。

「いや殺さないし」

大小一組の模擬剣を手にした俺は困惑しながらそう言い返す。

いやね、あれから近衛騎士達の修練場を借りてイゾルデさんに模擬戦を申し込んだんだが、あっさりと勝ってしまったのだ。俺も勿論驚いたが、イゾルデさん本人と修練場を使っていた他の近衛騎士達はそれ以上に驚いていた。

「も、もう一回！」

「おーけい」

くっころ近衛騎士ことイゾルデさんが俺に弾き飛ばされた模擬剣を拾い上げ、再び挑みかかってくる。近衛騎士を務めるだけあってイゾルデさんの動きは非常に機敏で力強く、剣筋も鋭いのだろう。

「はぁっ！」

物凄い勢いでイゾルデさんが模擬剣――丈夫で重いプラスチックのような素材でできた剣だ――を振りかぶって斬りかかってくるが、その動きは俺には遅く見える。別に息を止めて例の謎能力を発動させているわけではない。目がメイの動きに慣れてしまっているのだ。

「よっ」
「ぬぅっ！？」

イゾルデさんの動きは速い。速いが、メイほどには速くないし、パワーも無い。また、メイと違って放つ斬撃は正確無比とは言い難く、隙も多い。

「あぁっ！？」

剣を持つその手に剣を打ち込み、武器を取り落とさせる。拾われては敵わないのですぐさま剣を走らせてイゾルデさんを斬り捨て、死亡判定に持ち込む。
すると修練場にブーッ！　とブザーが鳴り響き、イゾルデさんに死亡判定が下された。これで既に四回連続である。

「くぅっ……殺せ！」
「いや、判定上は上半身を真っ二つにされて死んでますけど」

この修練場には模擬剣を使って実戦さながらの試合をすることができる高度な訓練設備が設置されていた。専用のヘッドギアを装着して模擬剣で斬り合うと、ダメージが自動計測されて身体に相応のペナルティがかかるのだ。
例えば右腕を斬られれば右腕が麻痺して使えなくなり、脚が斬られれば動けなくなって倒れることになり、指を斬られればその指が力を失って剣を掴んでいられなくなる。そして致命傷を受けると今のようにブザーが鳴り響き、死亡判定が下される。どういう仕組みかはまったくわからん。壁とか天井とか床とかになんかセンサーでも配置されてるのかね？

「あのイゾルデがまるで子供扱いだぞ」
「そう、だな……いや、だがそんなことあり得るか？」
「イゾルデ、手加減は無用だ。本気を出せ」
「最初はともかく、二度目からは本気だ！」

イゾルデさんが立ち上がり、再び剣を手にとって構える。まだまだやるつもりらしい。

「行くぞっ！」
「どうぞ」

イゾルデさんが気迫を漲らせてまた打ちかかってくる。シンプルかつ強力な袈裟斬りだ。踏み込みも、剣速も申し分ないのだろう。ふむ、受けに回ってみるか。
俺は腰を落とし、イゾルデさんの攻撃をひたすら受け流のに専念することにした。イゾルデさんは近衛騎士の中でも一目置かれる使い手のようだし、近衛騎士の正式な剣術の技を学ぶ良い機会だろう。

「はっ！　やぁっ！　ぜぇぃ！」

嵐のように襲いかかってくるイゾルデさんの斬撃を弾き、受け流し、躱す。その斬撃は一撃一撃が重く鋭く、恐らく致命的だ。これが真剣同士での斬り合いであったなら、激しく火花が散っていたことだろう。

「遅いな」
「何っ！？」

だが、やはり遅い。軽い。メイの攻撃に比べると圧倒的に。メイの攻撃をこのようにまともに受ければ防御ごと吹き飛ばされるし、

受け流しても一撃か二撃で手が痺れて使い物にならなくなる。それに比べれば彼女の斬撃はそよ風のようなものだ。

「やぁっ！」

裂帛の気合とともに放たれた鋭い刺突を左手の剣でいなし、外側に弾きながら左足を引く――と同時にカウンターで右手の剣を突き出し、イゾルデさんの胸を突いた。身体を捻ってイゾルデさんはそれを躱したが、その時には既に俺は一瞬前に引いていた左足を鋭く踏み込み、イゾルデさんの剣をいなした左手の剣でイゾルデさんの右首筋を刈り取っていた。

「ぐぬぬぬ……！」

ブーッ、とブザーが鳴り響き、イゾルデさんに死亡判定が出る。これが真剣ならイゾルデさんは首がポポポーンしてるところだな。

「どこの流派だ……？」

「ジオス派に似たような技があったと思うが、歩法と防御の技は別のものだな」

「私も一手お願いしようか」

「イゾルデの仇を取らせてもらう」

俺とイゾルデさんの模擬戦を見ていた近衛騎士達が続々と参戦を表明し始める。訓練相手には困らなさそうだな、これは。

#186　御前試合：白刃戦の部（前書き）

レビューを頂きました！　ありがとうございます！　―（：3」∠）
―（嬉しくて転げ回る

#186　御前試合：白刃戦の部

近衛騎士達と訓練をしながら過ごすこと更に二日、御前試合白刃戦の部が始まった。

「結局俺も出ることになってるんだが。一応シードだけど」

トーナメントの優勝者と俺が戦うんじゃないかな？　という希望は無惨に打ち砕かれた。一度の戦いでゴールドスターを受勲するに足る存在かどうかを判断するのは難しかろう、という皇帝陛下の――ファッキンエンペラーの鶴の一声で俺もトーナメントに出ることが決まったらしい。一応シード扱いになっているのはせめてもの情けだろうか。

「もう諦めなさい」

「頑張ってください！」

しかも俺の待機場所は試合会場を見渡せる特等席である。試合会場を見渡せるということは、試合会場のどこからでもこちらが見えるということで、しかもなぜか用意されている席が三人で座るには若干窮屈な――つまり密着しないと座れないような大きさのソファであった。ご丁寧にいい感じに湾曲している背凭れのせいで、三人で座るには本当に密着するしかない。

「さて、今回の御前試合が開催される切っ掛けとなった人物、キャプテン・ヒロですが……御覧ください！　美女を両脇に侍らせて余裕の表情です！」

「メディアによる捏造を感じる」

「……会場のセッティングは内務府よ」
「つまりあのファッ――」
「ダメですヒロ様！」

ミミが慌てて俺の口を手で塞いでくる。確かにこの場でファッキンエンペラーとか口に出すと危なかったな。ミミに感謝――。

「強者の余裕でしょうか！？　注目されていてもお構いなしにいちゃついていますね！」
「挑戦者達の視線の鋭さが二割ほど増したように思えます。各挑戦者、戦意は十分のようです」

アナウンサーと解説者がウザくてキレそう。おォンてめぇらどこの局の差し金じゃワレェ！？

「さて、場も温まってきたところで第一試合が開始されるようです」

俺の殺気を感じたのか、アナウンサーと解説者が試合場の挑戦者達へと話題を移す。
第一試合は帝国航宙軍所属の騎士と白刃主義者らしき貴族とがやりあうようである。

「どう？」
「白刃主義者の貴族のほうが一枚上手に見えるな。多分、普段の訓練の目的が違うからだろう」
「どういうことですか？」
「帝国航宙軍所属の騎士が主に剣を振るう相手は、恐らく剣を持っていない相手だ。宙賊とか、他国の兵士とかな。それに対して、白刃主義者の貴族は普段から剣を持った相手との戦闘を前提に訓練している。その差が出るんだろうな」

「なるほどー」

俺の予想通り、白刃主義者と思しき貴族が帝国航宙軍所属の騎士を打ち負かした。第二戦は貴族同士の戦いだったが、実力が隔絶していたのか一瞬で終わった。次は近衛騎士と貴族が戦い、近衛騎士が危なげなく勝利した。帝国航宙軍の騎士同士の戦いもあったが、実力が伯仲しているのかなかなか決着がつかなかった。しかし、最後には小柄な方の騎士が勝利した。多分女だ。

「キャプテン・ヒロ様。試合の順番が近づいておりますので、ご準備をとのことです」

メイド服のようなお仕着せに身を包んだ女性が現れ、そう言った。左右にミミとエルマを侍らせている俺を見る彼女の目は非常に冷たかった。ゴミ屑を見る目だった。ゾクゾクするな。

「それじゃあ行ってくる」
「ヒロ様、頑張ってください！」
「怪我をするような事はないと思うけど、気をつけなさい」

声をかけてくれるミミとエルマに手を振って案内してくれるメイドさんの後ろについていく。案内された先には様々な形状の模擬剣が用意されている場所だった。長さや形状、重さごとに分類されている模擬剣の中から俺が使っている剣と同じものを選び、腰の剣帯に差す。そこで外から歓声が聞こえてきた。どうやら試合が終わったらしい。

「ご武運を」
「どうも」

ゴミ屑を見るような視線を俺に向けたまま、メイドさんが実に心の篭もった声援をかけてくださった。とりあえず、あのソファを用意したのは俺でなく内務府なのでその視線を向けるのを止めて欲しい。

「さぁ、皆様お待ちかね！　今回の御前試合開催の切っ掛けとなった新進気鋭の傭兵、キャプテン・ヒロの登場です！」

御前試合の会場が騒然とする。歓声よりブーイングの類の方が多いように聞こえるのは気のせいだろうか？　気のせいじゃねぇな？　両手の中指を立てて挑発でもしてやろうかな？　悪役（ヒール）プレイも嫌いじゃないよ、俺は。

「対するは新進気鋭の剣客として名を馳せつつある若き男爵、クライアス卿です！」

歓声をバックに見覚えのある貴族の男が対戦場の反対側から姿を現す。

「こうなることを期待してこの御前試合に挑んだが、早々に目的を達成できた」

「ははぁ、なるほど。俺にぶちのめされて、無様に地に這わされることをお望みで？　ドＭかな？」

「貴様……どこの馬の骨ともわからぬ雑種の分際で、俺を侮辱するのか」

ニヤニヤとウザったい笑みを浮かべていたクライアス男爵の表情が一変し、憤怒の感情を顕にする。こいつ、精神的に不安定過ぎやしないか？

「やだこわーい。感情をコントロールできないと剣が鈍るぞ？　お貴族様？」
「叩き殺してやる」
クライアス卿が剣を抜く。それに合わせて俺も二本の剣を抜き、構える。
「双方ともに戦意は十分のようです！　では、試合開始！」
アナウンサーの声と同時にブザーが鳴り響き、試合が開始される。クライアス卿は剣を上段に振りかぶって突撃してきた。彼の激しい気性をそのままに表したような攻撃一辺倒の所作である。恐らく、それが彼の持ち味なのだろう。俺は左手の剣を突き出し、右手の剣を担ぐようにして一歩踏み出す。
「ちぇあぁっ！」
クライアス卿は十歩ほどもあった間合いを瞬く間に詰め、激しい袈裟斬りを放ってきた。その剣速はとにかく疾くまるで雷のような一撃だ。電光石火の一撃とはこういう一撃のことを指すのだろう。俺はそんな一撃に左手の剣を合わせ――なかった。
強力な攻撃とわかっていてわざわざ受ける趣味は俺にはないので、踏み出した足を引きながら体勢を変え、クライアス卿の斬撃から軸をずらして電光石火の一撃を回避する――と同時に右手の剣で斬撃を放った。速度はそこそこだが、威力は殆ど無い一撃だ。
「ぐっ――！？」
しかし、その斬撃を放った位置にクライアス卿の手が向こうから当たりに来た。電光石火の一撃を外したクライアス卿が放った返し

の刃。その返しの刃を放つクライアス卿の剣を握る手が通る軌道。そこに俺は斬撃を『先に置いた』のだ。
たちまちにクライアス卿の手首や指がまとめて『切れ飛んだ』という判定が下り、返しの刃を放つ途中でクライアス卿が剣を取り落とす。そこに俺は容赦なく左手の剣で斬撃を放ち、クライアス卿の右足を斬りつけた。今度はクライアス卿の右足に切断判定が入り、彼の右足が力を失う。
俺は武器を失い、足を失ったクライアス卿の首を右手の剣で容赦なく刈り取った。
死亡判定のブザーが鳴り響き、御前試合の会場がざわめきに包まれる。首を刈り取られ、死亡判定を受けたクライアス卿は呆然としていた。

「こ、これは驚きの結果です！　一体何が起こったのか！？　クライアス卿が突然剣を取り落とし、勝負が一瞬で決まったぁ！？」
「……恐るべき剣の冴えです。傭兵ヒロの剣には一切の無駄がありませんでした。彼はクライアス卿の攻撃を完璧に見切り、技を完璧に予測し、クライアス卿自身にクライアス卿を斬らせたのです。常軌を逸する動体視力と先を読む力、そして正確無比な斬撃、それらが全てが合わさった技巧の剣ですね」

模擬剣を腰の鞘に収め、試合会場を後にする。クライアス卿は呆然としてしまって未だに立ち上がれないようだ。まぁ係員の人とかが上手い具合に連れ出してくれるだろう。
待機席へと戻る途中、近くに居た観客の一人が拍手をしてくれた。その拍手が徐々に広がり、会場中の観客達が拍手をしてくれた。俺はそれに応えて手を挙げたりなんぞしながら席へと戻るのだった。

☆★☆

「ヒロ様！　凄かったです！」
「メイに毎日のようにボコボコにされていた成果ね」
「そうだな、血反吐を吐いて血尿まで出した成果だな」

クライアス卿のあの戦い方はメイに何度もやられたからな。白刃主義者の貴族の間ではメジャーな流派らしい。電光石火の一太刀で防御ごと敵を斬り殺し、一撃目を避けられた場合でも同じく電光石火の返しの刃で殺す。二撃必殺の流派だ。最初は一撃目を防ごうとして防御ごとぶっ飛ばされまくり、一撃目を受けずに避けたら二撃目の返しの刃にぶっ飛ばされまくり、二撃目も避けて見せたら再びの一撃目でぶっ飛ばされ……というような感じで攻略するまでに滅茶苦茶ぶっ飛ばされた。血反吐も吐きまくった。二撃目の返しの刃に斬撃を置いて対処するという攻略法を編み出すまでに何度血反吐を吐いたことか。成功したら成功したで、今度は変化技でぶっ飛ばしてくるしな！

剣だけでなく、敵の身体の全体を観察して次にどういう風に動こうとしているのか？　その体勢からどんな斬撃が飛び出してくるのか？　それに対応するためには自分はどのような体勢で、どこに斬撃を放てるようにしておくべきなのか？　そういう先を読む力を強制的に養わされた。

なぁに、レーダーの限られた情報だけで宇宙空間を自由に飛び回る宇宙船の軌道を読むのに比べたら軽い軽い。人間である以上、身体の可動域というのは完全に決まっている。それさえ把握できればどんな体勢からどんな斬撃が飛んでくるのかを予測するなんて簡単。

予測できないと金属棒でぶっ叩かれて血反吐を吐きながら吹っ飛ぶことになるからな。必死にもなるよ。

それから俺は二度戦った。二人目に対戦したのは帝国航宙軍所属の騎士だった。小柄な彼――ではなく彼女は徒に攻めかかってくるようなことはせず、守勢の剣で堅実に俺と戦おうとした。しかし俺

は両手の剣で激しく襲いかかり、彼女のカウンターを誘発してそのカウンターにカウンターを叩き込んで彼女を無力化した。
次に戦ったのは近衛騎士団所属の初老の騎士だった。この近衛騎士は手強かった。引くべき時は引き、攻めるべき時に攻めてくる。しかしそれでもメイに比べれば動きは遅く、剣は不正確で、力は弱かった。俺は接近戦に持ち込み、二本の剣の手数を生かして詰将棋のように彼を徐々に追い詰め、最終的に致命の一撃を彼の脇腹に差し込むことに成功した。強敵だった。

そして、四戦目。

「正直に言えば、お前と戦うことは無さそうだと半ば諦めていた」
「さようですか」

俺の目の前に立っている男の耳は長かった。そしてその顔には見覚えがあった。

「私が勝ったらエルマを解放してもらうぞっ！」
「や、勅命でそういうのはダメってことになってるでしょ、お義兄さん」
「私を義兄と呼ぶなっ！」

エルフの男――エルンスト・ウィルローズが俺に指先を突きつけ、唾を飛ばさんばかりの剣幕で叫び、腰の模擬剣を抜いた。俺も二本の剣を抜き、構える。試合開始のブザーが鳴った。

「ハァッ！」

エルンストはアウトレンジからの攻撃に徹してきた。決して俺との間合いを詰めようとせず、チクチクと攻撃を繰り返してくる。

「おいおい、腰が引けてるぞ」
「挑発には乗らん！」

どうやらエルンストはこれまでの俺の戦いをよく分析しているようだった。下手に攻め込んで痛烈なカウンターを食らうことを警戒しているようだ。同時に、間合いを詰められて二刀によるラッシュもかけられないように間合いも保ち続けている。
いくら俺も鍛えているとはいえ、流石に身体強化を施している貴族に身体能力や純粋な敏捷背で勝つことは不可能だ。こうして逃げに徹されると俺は間合いを詰めることができない。普通の方法では。

「すぅ……ッ！」

俺が息を止めると、世界がゆっくりと動き始める。

「何っ！？」

俺の身体の動きも若干鈍るが、それは周りの世界の動きほどではない。驚愕の表情を見せるエルンストとの間合いを詰め、ゆっくりと動く世界の中で斬撃を放ち、防御も回避も間に合わない一撃をエルンストの剣を持つ手に見舞う。

「馬鹿なっ！？　なんだ今の動きはっ！？」
「切り札の一つくらいはあるさ」

剣を取り落とし、驚愕の表情を浮かべるエルンストに向かって両手の剣で同時に斬撃を放ち、胴体を四分割にするようにぶった切ってやった。死亡判定のブザーが鳴り、試合が終了する。

「んじゃ、俺の勝ちってことで今後はエルマのことについて口を出さないように」

悔しげな表情を見せるエルンストにそう言って俺は試合場を後にした。

なお、俺はこの後更に二勝し、白刃戦の部で堂々の優勝を果たすのだった。

#187　祝杯

「勝利を祝して、乾杯」
「かんぱーい！」
「乾杯」

俺の音頭でミミとエルマが盃を掲げる。もっとも、俺のは帝都産の炭酸飲料で、ミミのは高級な果汁１００％ジュースなので、実際に酒を呑んでいるのは一人――いや二人だけなのだが。

「私は貴様に敗れたのだが」

祝いの場に相応しくない仏頂面で耳の長い美男子――エルマの兄であるエルンストが文句を垂れる。

「勝負が終わったらノーサイドだろ？　お義兄様」
「だから私を義兄と呼ぶなと……はぁ」

エルンストが諦めたかのように溜息を吐く。こういう仕草がエルマと似てるんだよな。流石は兄妹といったところか。もしかしたら、エルマがエルンストの影響を受けているのかもしれないな。

「ともあれ、私が負けてお前が勝った。エルマもお前のことを認めているようだし、借金を盾に無理矢理という関係でもないようだ。白刃戦で名だたる騎士や貴族を斬り伏せ、銀剣翼突撃勲章にゴールドスター、更にプラチナランクの傭兵ともなれば認めぬ訳にもいくまい。お前に義兄と呼ばれれるのは御免だが、認めてやる」
「なぁエルマ、この人なんでこんなに偉そうなんだ？」

「茶化さないの」

ぴん、とエルマが俺の鼻を弾く。ぬぅ、叱られてしまった。

「やっぱりエルマさんのお義兄さんなんですねぇ……」

コップを両手で包み込むように持ちながらミミがエルンストの顔をじっと見る。だ、ダメだぞミミ！　そいつは確かにエルマ似のイケメンかもしれないが……ダメだぞ！

「まぁ、顔は似てるわよね」

「エルマも私もどちらかと言えば父上似だからな」

兄妹が顔を見合わせて互いに肩を竦める。

「いえ、そういうことでなく。ちょっと素直じゃないところとかそっくりだなぁって」

「ミィミィ～？」

「うわぁん」

エルマが据わった目でミミを睨み、柔らかいほっぺたを軽く抓る。微笑ましい光景だなぁ。しかし素直じゃない、ねぇ……？　なんとなくエルンストと目が合う。嫌な顔をされた。おいなんだその顔は。

「しかしまさか帝城の賓客室でエルマと食事をすることになるとはな。五年前には想像もしなかった」

「それは私もよ、兄様。帝都には二度と足を踏み入れることはないと思っていたし」

「ヒロ様がエルマさんとエルマさんのご家族との縁を再び結び直したということですね。流石です」

「そのヨイショはちょっと無理があるんじゃないかなぁ……」
「実際ヒロと一緒にいなかったら帝都に近づくことは無かったでしょうから、そこまで大げさな話ではないかもしれないわね」

エルマの発言を聞いてエルンストが目を見開いて驚いている。まさかエルマが帰ってこないつもりだとは思っていなかったのだろう。

「……どんな形であれ帝都にエルマを連れて帰ってきてくれたお前には感謝をするべきかもしれんな」
「急に殊勝な態度になったぞ。どれだけ心配だったんだよ」
「こう言ってはなんだが、私から見れば傭兵などという連中は帝国への帰属意識が弱いゴロツキの集まりだ。そんな中にか弱く可憐な妹が飛び込んで心配しないはずがあるまい」
「か弱く可憐……？　まぁ可憐ではあるアイタタタタ！」

エルマが俺の太ももを抓ってくる。そういうとこだぞ！

「でも、兄様は私の家出を助けてくれたでしょう？」
「良いかエルマ。兄は可憐な妹が悪辣で醜悪なゴミ屑の餌食になるのを看過したりはしない。だがそれはそれ、これはこれだ。手の届かぬ危険な場所へと飛び出した妹を心配しない日など一日たりとも無かった」
「これは筋金入りのシスコンだ」
「優しいお兄さんですね、エルマさん」
「過保護なのも良し悪しだけどね……そういえば、あいつは結局どうなったの？　私が姿を眩ましたから、婚約は解消されてるのよね？」

婚約ですと？

「ああ、それは心配ない。本人が小型戦闘艦に乗って飛び出して行方知れずとなっては婚約関係をそのまま維持するわけにもいかないからな。父上が上手く立ち回って婚約関係は綺麗さっぱり解消されている。これでこいつが居なくて、エルマが戻ってきてくれるのであれば全て丸く収まったんだがな」

そう言ってエルンストが俺に冷たい視線を向けてくる。

「お？　なんだ？　やんのか？　真剣でのチャンバラは御免被るぞ？　殴り合いもＮＧだ。俺は平和主義者なんでな。どうしてもと言うなら船を使った模擬戦なら受けてやろう」

「強気なのか弱気なのかはっきりしなさいよ……しれっと自分の得意なフィールドに引き込もうとしてるし」

「お前、斬り合いでも私に勝てるだろうが……」

「それはそれ、これはこれ。剣での命のやり取りなんて御免だ。斬られたら痛いし血が出るし死ぬじゃないか。船での戦闘なら俺に負けはない」

「随分な自信だな」

「勿論です。ゴールドスターですから」

皮肉を飛ばしてくるエルンストにドヤ顔で対応してやる。ふはは、我ゴールドスターぞ？　プラチナランク傭兵ぞ？　こう言ったらなんだが、一対一の船での戦闘で負ける気はしない。ＰｖＰは面倒だからあまりやらなかったが、傭兵業をやっていれば自然と対人戦に特化してしまうものだ。何せ相手は基本的に宙賊や宙賊プレイヤーだからな。宇宙怪獣とも結構やり合うけど。

「ふん……三日後には白兵戦のトーナメントだろう？　そこで恥をかかなければ良いがな」

「ああ、それな。白兵戦のトーナメントって、具体的にはどうやる

んだ？　まさかパワーアーマーやレーザーガンで殺し合うわけじゃないだろう？」

白刃戦トーナメントは剣での斬り合い、宙間戦闘トーナメントはつまるところ船を使った模擬戦だ。しかし白兵戦はそういうわけにはいかない。基本的に白兵戦というのは大型船や戦艦などに接舷し、直接船内に戦力を送り込んで制圧するというものだ。一対一で戦うなんてことはあり得ないし、個人個人で装備の差というものもある。一体どうやって白兵戦の実力を確かめるというのか？

「なんだ、知らんのか？　なら教えてやろう」

そう言ってエルンストは偉そうに白兵戦競技の講釈を垂れ始めた。つまり、この白兵戦競技というのはエクストリーム障害物競走、あるいはエクストリームＳＡＳ〇ＫＥみたいなものらしい。

まず、大前提としてそれぞれ自前で用意した装備を用いることになる。勿論経済力によってこの時点で差がつくが、実戦を想定しているこの競技においては装備を揃える経済力もまたその参加者の実力ということで、装備の公平性などというものは最初から投げ捨てられている。対戦相手のほうが装備が良い？　それは同じ装備を揃えられないやつが悪いのだという理屈らしい。

うーん、エクストリーム。

そして対戦者はそれぞれのバトルフィールドに突入し、戦闘を開始する。バトルフィールドは様々なシチュエーションを想定されたものが用意されることになっており、それは例えば敵対船に乗り込んでの白兵戦であったり、コロニーの市街地での白兵戦であったり、どこかの惑星上にある密林での白兵戦であったりする。

ホログラムとレプリケーターなどを組み合わせ、そういった環境をごく短時間で再現する軍の訓練施設があり、それを使って今回の白兵戦トーナメントを行うというのだ。

「すげぇ技術の無駄遣いだな」
「ちなみに、敵役は帝都に工場を持つ各種ロボットメーカーの戦闘用ボットやその試作品となる予定だそうだ。ついでに戦闘データを収集するらしい」
「転んでもただでは起きない連中だなぁ……」

機密保持とかそういう方向の心配は大丈夫なんだろうか？　しかしなるほど、装備は自由か。なるほど。後でルールをよく読むとしよう。ああ、ブラックロータスに置いてある武器の類を全部送ってもらわないといけないな。クリシュナから移したものものあるし。いや、消耗品はこっちで調達したほうが良いか？　よく使う装備やパワーアーマーはクリシュナに積んであるから、グレネードとか弾薬の類だけ手配してもらえばいいか。

「何かヒロ様が悪い顔をしています」
「何か企んでるわね」
「何を言っているんだ。人聞きの悪い。流石に小型反応爆弾とかを使うつもりはないぞ」
「当たり前だろうが！？　エルマ、大丈夫なのかこいつは」
「大丈夫……いや、どうかしら。前に歌う水晶を……」
「歌う水晶！？」

おっとエルマ、その話はそこまでだ。あれは限りなくブラックに近いグレーなムーブだったからな。発覚したら怒られる程度では済まないアレなので、それ以上はいけない。
なぁに、装備を有効に使うだけだ。大丈夫だ、問題ない。
「それよりもさっきチラッと言っていたエルマの婚約者の件が気になるんだが。まさかちょっかいをかけてきたりはしないだろうな？」

「それはないと思うけど、もしそんなことがあってもヒロに迷惑はかけないわよ」

そう言ってエルマが唇を尖らせる。俺はそんなエルマのおでこをつっついた。

「馬鹿。別にそんな迷惑とかそんなのはどうでも良いんだよ。もしそういうことが考えられるなら、何かしらの手を打とうって話だ」
「私の前で妹とイチャつくのはやめてくれるか？」
「やなこった。それで、そいつはどんな奴なんだ？　お義兄さんもエルマも随分嫌ってるようだが」
「だから義兄と呼ぶなと……はぁ、まぁ良い。エルマの元婚約者の名前はエルザル侯爵家の次男坊でな。三度の飯より女が好きな屑だ。単に女好きなだけなら良いんだが、侯爵である親の権力を笠に着て好き放題している」
「なんというか絵に描いたようなダメ貴族っぽい感じだが、そんなのが何故放置されてるんだ？　というか、いくら相手が侯爵の次男坊でも子爵家の令嬢であるエルマにそんな無体を働けるものか？」

侯爵と子爵では勿論貴族としての階級というか地位は向こうのほうが上なんだろうが、それでもそんな評判の悪い息子にわざわざ自分の可愛い娘を差し出すわけもないだろう。

「侯爵直々に父上に頭を下げてエルマを次男坊の嫁にくれと頼まれたんだ。あまりの放蕩ぶりに手を焼いて、エルマと身を固めさせて首輪をつけようとしたわけだな」
「なんでまた……」
「エルマは可憐で美しく、それでいてウィルローズ子爵家の令嬢として恥じない芯の強さを持ち併せていると評判だったからな……まぁ、それが高じて帝都を飛び出したわけだが」

「それってつまり放蕩息子押さえつけられるくらい強――ガアァァァァッ！？」

エルマが素早く俺の腕を取り、関節を極めて痛めつけてくる。そういうとこ！　そういうとこだぞ！

「ええと……じゃあその、エルザル侯爵家の次男坊様とやらがまたエルマさんに接触してくる可能性は……？」

タップしてもなかなか解放してくれないエルマの暴虐に耐えていると、ミミが話を引き継いでくれた。流石ミミ、できる子だ。でも、できればこっちの凶暴なエルフをどうにかしてはくれまいか？

「陛下直々にその男――ヒロの身内に手を出すべからずと勅が発されているからな。これは勿論今回のトーナメントの景品として貴女や我が妹、それに同行者の整備士の姉妹に手を出すことはならんという意味で、トーナメントが終わればその勅も効力を無くす。だが、トーナメントが終わっても帝国貴族が貴女達に手を出すことは躊躇われるようになる。陛下の不興を買う恐れがあるからな。普通に考えれば心配は無い、と思うのだが」

「その次男坊は手を出してくる可能性があると」

エルマの関節技から解放された腕をさすりながらそう言うと、エルンストは頷いた。

「可能性は全く否定できん。奴は我慢がきかない性質だからな。だが、その場合危険なのはエルマよりも寧ろミミ、貴女の方だろう」

「私ですか！？」

ミミが大げさに驚く。だが、俺は驚かない。普通に考えて、ミミ

の方が手を出しやすい相手だろうからな、そのエロザルだかなんだかの次男坊にしてみれば。
エルマは子爵家令嬢で、下手に手を出すとウィルローズ子爵家を敵に回す可能性がある。だが、ミミはただの平民だ。少なくとも公式にはそのようにアナウンスされている。権力を笠に着て悪さをする貴族としては相手が平民の方が面倒事は少なくて済むというわけだ。
皇女殿下という存在は侯爵家の次男坊という身分をもってしても高嶺の花だろう。下手すると面会すらできない相手なのではないだろうか？
そんな皇女殿下と瓜二つの容貌を持つ平民の娘という存在がいたとしたら？　女好きの放蕩息子としては手を伸ばさずにはいられないのではなかろうか。

「それにしたって、普通は無いよな」

ルシアーダ皇女殿下とは比べ物にならないかもしれないが、俺の船のクルーであるミミという存在もまた帝国貴族にとってはかなりアンタッチャブルな存在であるはずだ。既に俺は白刃戦の部で力を示したし、この後のトーナメントでも力を示すつもりだ。そんな暴力の権化みたいな俺の怒りを買うような真似は普通はしないのではないかと思う。

「まぁ、そうだが……奴は普通ではないからな」
「そっかぁ、普通じゃないかぁ……」

まだまだ気は抜けそうにないな。まったく、やれやれだ。
まずは三日後の白兵戦の部に備えて動くとするか。何はともあれ、目の前のことからコツコツと片付けていかないとな。

#188　御前試合：白兵戦の部（前書き）

ぽんぽんぺいん……―（：3」∠）―

#188　御前試合：白兵戦の部

三日経って白兵戦の部の朝が来た。この三日間は実に穏やかな三日間――ではなかった。

『我が名はシュンジ・ガイデン！　貴殿に手合わせを申し込みたい！』

『我が名はホワイトローズ！　貴殿に決闘を申し込む！　模擬試合でも構わない！』

『ヒロ殿、訓練をしよう！　近衛騎士達が待っているぞ！』

トーナメントに参加していなかった白刃主義者やら、白いマスクに薔薇モチーフの白い衣装を着込んだ不審者やら、残念美人な女近衛騎士やらが俺のもとに押しかけてきて剣の試合やら勝負やら訓練やら何やらと五月蝿いことこの上なかった。白兵戦の部に備えるために忙しいって言ってんだろォン！？

というか衛兵！　もしくは近衛兵！　その白い不審者はつまみ出せよ！　何やってんだよ！

『いや、ミヒャエル――ホワイトローズ殿は身元ははっきりしている方だから』

正体バレてるのかよ、ホワイトローズ。

『聞かなかったことにしてくれ。彼は謎の剣士ホワイトローズだ。グライゼス公爵家とは何の関係もない。良いな？』

ああ、なるほど。公爵家のボンボンがバレバレのコスプレをして

いるけど誰もツッコまないというか、ツッコめないんだな。

『基本的に悪いことをする方ではないから……というか、独自の情報網を使って悪いことをする貴族をとっちめたりするから、どちらかというと本当にヒーローなんだ。とんでもないことをやらかして我々が尻拭いをすることも稀にあるのが玉に瑕だが』

なるほど。たまにうっかりをやらかす御老公みたいなポジションなわけか。公爵なら権力もあるものな。ちなみにホワイトローズは遅れて現れたメイドロイドに当身を食らって気絶させられ、連れて行かれた。メイとはまた違った趣きのクール系メイドロイドだった。ホワイトローズとは良い友達になれる気がする。

そんな奴らを適当にあしらいながら俺は白兵戦の部に備えて準備を進めた。これが意外と面倒で、事前にどんなものを持ち込むかリストを作って提出しなければならないのが只管に面倒であった。

まぁ、やるからには自重なしで行くつもりだからね。申請するものがどうしても多くなる。太っ腹なことに、グレネードや弾薬、エネルギーパックなどの消耗品に関しては使った分は主催の帝室が費用を負担してくれるらしいからな。請求書の額であのファッキンエンペラーに一泡吹かせてやるぜ！

いや無理だな。うん、無理だ。白兵戦用の消耗品なんてどんなに使っても大した額にはならないからな。どんなに使っても数万エネルがいいところだろう。まぁ、余計なことは考えずにやるべきことをやっていくとしよう。

☆★☆

「ヒロ様、大丈夫ですか？」

ミミがそう言いながら心配そうに隣から俺の顔を見上げてくる。

ここはトーナメント会場となる件の訓練施設である。トーナメントのために急遽多数の観客席などが設営されており、その様相はまるでスタジアムか何かのようになっている。
本来は軍の訓練施設でイベントなどを行うことはないので、当然観客席などというものは存在しない。存在しないのだが、今回のトーナメントのために訓練施設のバトルフィールド生成能力を利用して観客席を急遽作ったのだと言うのだから流石宇宙帝国はやることのスケールが違うな。

「ああ、大丈夫。この三日間に思いを馳せていただけだから」
「あはは……大変でしたね」

そう言って苦笑いするミミはミミで毎日のようにルシアーダ皇女殿下にお茶会に誘われて大変だったみたいだけどな。俺は今日の準備やら押しかけてきた馬鹿どもの相手やらで大変だったからあまりお茶会の様子を見ることはできなかったが、順調に仲良くなっているようではあった。
ちなみにエルマは俺達三人の中で一番のんびりと過ごしていた。静かにお茶を飲みながらタブレット端末で読書をしたり、ミミに付き合ってルシアーダ皇女殿下とのお茶会に参加したりしていたようである。

「怪我をすることは無いと思うけど、気をつけなさいよ」
「わかった。十分に注意する」

相手は戦闘ボットという話だからな。場合によっては動力源のエネルギーセルが爆発するかもしれないから、確かに注意は必要だ。武装に関しては参加者が怪我をしないように訓練用のものが装備されているらしいから、そっちは心配無さそうだけど。

「じゃあ、行ってくる。行くぞ、メイ」
「はい、ご主人様」
俺はメイを引き連れて待機場所となっている個室の観客席を出――ようとしてエルマに止められた。
「ちょっと待ちなさい、なんでメイを連れて行くのよ？」
「え？　だって俺の装備だし」
「は？」
「えっ？」
エルマとミミが目を丸くして驚きの声を上げた。

☆★☆

「さぁやってまいりました！　御前試合第二トーナメント、白兵戦の部です！　ルールは先程説明した通り！　選手達は自分達が揃えた装備を使い、過酷なバトルフィールドを突破していきます！　もちろん、迂闊な行動は死亡判定となり、そこで挑戦者のチャレンジは終了となります。両者ともに死亡判定が出た場合、その時点で両者が獲得したスコアによって勝敗が決されます！」
アナウンサーのよく通る声が観客席を備えた訓練施設内に響き渡り、観客達――概ね貴族の筈だ――の歓声が巻き起こる。そんな中、俺は自前のパワーアーマーを装着してメイと一緒に他の参加者達に混ざって訓練施設で待機していた。
今回の俺の装備はパワーアーマーのＲＩＫＩＳＨＩ　ｍｋ－Ⅲと両手のハチェットガン。そして背部の武器マウントには追加武装のプラズマグレネードランチャーを装備している。これはパワーアーマーの照準システムを使って発射するオートグレネードランチャー

で、装填されているのは超高熱のプラズマ爆発を起こすプラズマグレーネードだ。大抵の障害物はこいつで破壊できる。
その他にもＲＩＫＩＳＨＩには肩部レーザーガンなど多数の固定武装も装備されているし、今回初お披露目のハチェットガンは近接戦闘もこなせるレーザーショットガンだ。

「さぁ、注目のキャプテン・ヒロですが……なんだか悪そう――威圧的な外見のパワーアーマーですね」
「ふむ、見たことのない機種ですね。重装甲のパワータイプ、恐らく対パワーアーマー戦にも対応しているタイプでしょう」
「なるほど、そして何故かメイドロイドを連れているようですが」
「手元の資料によると、三日前に彼からメイドロイドを装備として持ち込むことは可能かとトーナメント運営に問い合わせがあり、協議の結果特に退ける合理的理由もないということで認められたそうです」
「なるほど、しかしメイドロイドというのは基本的に戦闘を目的としたものではないと思うのですが……彼女はなんだか凄そうな武器を持っていますね」

メイが手にしているのは整備士姉妹によって改造されたレーザーランチャーである。具体的には、メイがレーザーランチャーで敵を思い切りぶん殴っても大丈夫なようにちょっと凶悪な見た目の外装を取り付けたものだ。重量は倍ほどにもなってしまったが、メイが扱う分には問題はない。当然ながら、今回のトーナメント参加中は取り付けられていたリミッターも解除されている。

「そのようですね。彼の船には女性クルーが多いという話なので、護衛もこなせるようにカスタマイズされているのかもしれません」
「なるほど……しかしそれならば戦闘ボットを投入したいと考える参加者もいるのではないでしょうか？」

「戦闘ボットの投入はルールで禁止されていますので。キャプテン・ヒロは上手くルールの穴を突きましたね」

解説の軍人らしき男がそう言って苦笑いを浮かべる。まぁ、メイはカスタマイズの結果本体価格が４７万エネル、その他オプションや装備も含めるともっと高い。ぶっちゃけ、同じ金額で戦闘ボットを買えばもっと数を揃えられるだろう。性能面でメイを軽く凌駕する機体だって買えるんじゃないだろうか。本来身の回りの世話や愛玩用途で購入されるメイドロイドにここまで金をかけるのは酔狂の域を軽く通り越しているのかもしれない。

「俺は後悔してないけどな」

「ご主人様？」

「いや、なんでもない。思う存分力を振るってくれ」

「はい、お任せください」

☆★☆

「はぁっ！」

両手のハチェットガンを乱射し、通路に展開している戦闘ボットを拡散レーザーで掃討する。

「うっしゃー！」

突然通路脇から飛び出してきた戦闘ボットにハチェットガンを叩きつけ、粉砕する。メイも改造されたレーザーランチャーを豪快に振り回し、戦闘ボットを粉砕している。本当に大丈夫なのか、それ。中身壊れてない？

「メイ、目標は？」
「壁二枚向こうです」
「了解」

プラズマグレネードランチャーで壁を吹き飛ばし、内部へと突入して両手のハチェットガンと両肩のレーザーガン、それにメイの持つレーザーランチャーから放たれたレーザーが部屋の中で待ち構えていた戦闘ボット達を薙ぎ払う。本来の入り口ではない場所から突入してきた俺達への対応が一瞬遅れたな。この一瞬が勝敗を分けるんだ。

「キャプテン・ヒロがゴォール！　対戦者はまだステージ２の途中です！　おっと、リタイアです。ここからの逆転は不可能と見たのでしょうか」
「そうでしょうね。このルールでは道中でスコアを稼ぐよりも、素早く攻略した方がスコア的に大幅に有利になります。拙速さを重視するあまりに死亡判定を受けると厳しいことになりますが、死亡判定を受けずに圧倒的な速度差で先にゴールすれば逆転はほぼ不可能です。それで潔く負けを認めたのでしょう」

アナウンサーと解説の軍人が一連の流れを解説する。

「しかしキャプテン・ヒロは手際が良いですね」
「あのメイドロイドや強力なパワーアーマーの能力もあるのでしょうが、それ以上に相当な訓練を積んでいますね。位置取りは的確で、状況に対する戦術的な判断にも迷いがありません。彼は帝国航宙軍の海兵としても上手くやっていけますよ。是非うちの部隊に欲しいですね」

勘弁してくれ。ガチムチマッチョの海兵に混じって白兵戦の日々

とか絶対に御免だ。

終始こんな感じで俺は白兵戦の部でも優勝した。うん、やっぱりメイは反則気味だったな。

☆★☆

「貴方は騎士としても兵士としても優秀なのですね」

「えぇ、まぁ……お褒め頂き光栄です」

白兵戦の部でも優秀したその日の夕食はいつもの三人での夕食ではなく、ルシアーダ皇女殿下とサシでの夕食だった。正確に言えば、ルシアーダ皇女殿下との会食に俺だけがお呼ばれしたという形だな。

トーナメントが終わった後に急に近衛兵がやってきて「此度の褒美として我が孫娘との会食を許可する」という皇帝陛下からの大変ありがたいお言葉を伝えられたのである。

断ったらマズいかな？　とエルマとメイに聞いたらマズいので諦めて行けと言われた。それでこんな状況であるわけだが。

「それにしても今日もルシアーダ皇女殿下はお美していらっしゃる……とか言うべき所かね？」

実際、ルシアーダ皇女殿下は皇女に相応しいドレスと装飾品を身に着けており、薄く化粧もされていて非常に美しい。可愛らしいというよりも美しいとか綺麗という表現がしっくりくるな。ミミだとどう頑張っても可愛くしかならないので、やはりこれは持って生まれた気品とか細かい所作があってのものなのだろう。

「ありがとうございます、とお返ししておきます」

「そういうおべっかは聞き飽きてるって表情だ」

俺の軽口にルシアーダ皇女殿下はただ微笑んで見せる。なるほどねぇ。

「それでここだけの話、今回の会食の仕掛け人はルシアーダ皇女殿下だったりします？」

「どうしてそう思うのですか？」

「ご無礼を承知で言いますと、派手好きの皇帝陛下にしては褒美として取らせるには内容が落ち着いているんじゃないかと」

あの皇帝陛下ならもっとド派手で俺が迷惑に思うような贈り物をしてきそうだからな。どこかの居住可能な未開拓惑星の所有権をポンと渡してきたりとか。いやマジでありそうだな。やめてくれよホント。

「私との会食は地味ですか」

「そうは申し上げておりませぬ。あと、そうやって頬を膨らませられるととても可愛いので勘弁してください」

不満そうにぷくっ、と頬を膨らませると美しいとか綺麗という印象が一気に可愛らしいものに変わる。すました表情を崩すと本当にミミにそっくりだな。

「貴方とはゆっくり話す機会がなかったので、陛下に機会を作ってくださるようお願いしたのです。貴方はお気に召さなかったようで残念ですが」

「拗ねないでください、別にお気に召さなかったとかそういうことじゃないですから」

「本当ですか？　ですが、キャプテン・ヒロ。貴方は私を避けていますよね？」

「……あー」

きゅっと眉間に皺を寄せたルシアーダ皇女殿下にそう言われてしまい、目を逸らす。

「それはですね、ルシアーダ皇女殿下があまりにミミに似すぎているもので……何かの拍子に許されざる無礼でも働いてしまっては困りますから距離を取っていたわけです、はい」

「どういうことですか？」

「つまり、そういう風に眉間にきゅっと力を入れたりされますとですね、思わずごめんごめんと言いながら頭を撫でてしまったりしそうなので……あと敬語が苦手なので」

無論、人並みに丁寧な言葉遣いはできる。人並みに。ただ、相手が宇宙帝国のお姫様となると流石に不安だ。言葉遣い一つで近衛騎士に剣を抜かれたりしても困るので、できるだけ近寄らないようにしていたのである。

「私は貴方ともお話がしたいのです。言葉遣いに関しては気にする必要はありません。貴族相手ならともかく、貴方のような傭兵やミミさんのような普通の女の子に仰々しい言葉遣いを強いたりは致しませんし、周りの者にも何も言わせません」

「それはどうも」

そうは言うがな、皇女殿下。俺はもう貴女に対する言葉遣いの件で既に変なやつに絡まれたんだよ。これで警戒するなと言う方が無理があると思うぞ。

「とりあえず、王女殿下に何か隔意があるわけではありませんから。どちらかと言うと自分の身を守るための致し方ない行動というか、

俺なりに身をわきまえていたわけです」
「では、今後はそういった気遣いは不要です。言葉遣いに関してもミミさんやエルマさんに接するのと同じように接してくださって結構です」
「……信じますよ？」

こちらに鋭い視線を向けている女性近衛騎士にチラリと視線を向けながら確認する。女性近衛騎士――今日はイゾルデはいないようだ――の視線が更に鋭くなったが、皇女殿下直々に許しが出たので俺は気にしないことにした。

「ええ、信じてください」

そう言ってルシアーダ皇女殿下が俺を睨んでいた女性近衛騎士に視線を向けると、女性近衛騎士はスッと視線を逸らした。流石の皇族パワーである。

「それじゃあ失礼して……どんな話をお望みで？」
「それでは結晶生命体との戦いの件を貴方の言葉で最初から聞かせてください」
「ＯＫ。でも俺は吟遊詩人でもなんでもないんで、話の出来に期待はしないでくださいよ？」
「ダメです、期待します」
「えぇ……厳しいなぁ」

にっこりと微笑みながら容赦のない事を言うルシアーダ皇女殿下に、俺は頭を掻いて見せながら結晶戦役について話し始めるのだった。

#188　御前試合：白兵戦の部（後書き）

力こそパワーで暴れるだけなのでサッと流すよ！―（：3」∠）―

#189　垣間見える皇女殿下の趣味（前書き）

遅れました！（、　。ω　。、）（開き直り

#189　垣間見える皇女殿下の趣味

俺とルシアーダ皇女殿下が普通に話すようになったその翌日。遂に話題がなくなってクリスの話を漏らしてしまった。いや、詳細を漏らしたわけではない。ちょっとダレインワルド家の事情に巻き込まれて、ご息女のクリスティーナさんと一緒に過ごしたんですよと軽く話し、リゾート海洋惑星シエラⅢで撮ったホロ写真やホロ動画を見せただけだ。

しかし、その話は大いにルシアーダ皇女殿下の好奇心を刺激してしまったらしく、更にその翌日にはルシアーダ皇女殿下自身がクリスをお茶会に誘うという体で帝城へと召喚してしまった。

そして――。

「うっ、うぐぅぅぅクリスちゃぁぁん」

「んーっ！？」

クリスの身の上話を聞いたルシアーダ皇女殿下が泣きながらクリスの身体を抱きしめる。抱きしめるのは良いんだが、その大きなお胸に圧迫されてクリスちゃんが苦しそうなので許してやって――うん？

「なんか見たことある光景だな」

「そうね」

「あ、あの、殿下、クリスちゃんが苦しそうですから」

「あぁぁぁぁぁクリスちゃぁぁぁん」

ミミがルシアーダ皇女殿下からクリスを引き離す。ちなみに、ルシアーダ皇女殿下がクリスのことをクリスちゃんと呼んでいるのは

ミミの影響である。

「クリスも抵抗すれば良いのに」

「恐れ多くて無理です」

呼吸を阻害されていたせいで真っ赤な顔をしたままクリスが頭を振る。まぁ、確かに皇女殿下の抱擁を跳ね除けるのは貴族的には難しいか。

「でも、いきなり王女殿下から招待状が届いのはとてもびっくりしました」

「本当に申し訳ねぇ」

「ふふ、謝らなくても良いですよ。こうしてヒロ様やミミさん、エルマさんやメイさんと直接会うことができましたし、ルシアーダ皇女殿下に招待されるというのはとても光栄なことですから」

「この埋め合わせは必ずするから」

「そうですか？　それじゃあ期待しておきます」

クリスがそう言って微笑む。なんというか、成長したなぁ。背も少し大きくなったようだし、何より表情というか、雰囲気がぐっと大人っぽくなったというか。

「殿下を放置して何を見つめ合ってるのよ……」

「むむっ……負けませんよ、クリスちゃん」

「わぁ……」

何故そこでルシアーダ皇女殿下は瞳をキラキラさせているのか。何を期待しているかわかりませんが、期待するようなことは起こりませんから。起こらないよな？　あれ、もしかしてワンチャンある？　俺刺されたりする？　多分大丈夫、多分。

「あー、おほんおほん。そうだ、クリスの身の上話をしたってことは、シエラ星系でのアレコレに関してはルシアーダ皇女殿下に話しても良いのか？」
「はい。事の顛末を隠し立てするわけにはいきませんので、既に帝国には報告済みですから。お爺様の許可も頂いてきました」
「そうか、それじゃシエラ星系での話も本格的にするとしますかね」

と、事の顛末をルシアーダ皇女殿下に話したのだが。

「酷いです。見損ないました」
「えー……」
「どうしてそこでクリスちゃんを置いていっちゃうんですか！？
そこはクリスちゃんの騎士として、こう……！」

どうやらルシアーダ皇女殿下は全てが終わった後に俺がクリスを振って去っていったのがお気に召さなかったらしい。チラリとクリスに視線を向けるとクリスと目が合った。

「ヒロ様は悪い人ですね。私みたいな幼気な少女を放って行ってしまうんですから」

クリス本人に言われると何も言えねぇ。

「ふふ、冗談です。ルシアーダ皇女殿下、ヒロ様にはヒロ様の住む世界があって、私はそこでは生きていけないのです。逆に、私の住む世界ではヒロ様はヒロ様として生きていけません。私はヒロ様の世界では生きていけない。私の住む世界ではヒロ様はヒロ様でなくなってしまう。それがあの時の私にはわかっていなかったんです」
「むぅ……でも、それは救いがないではないですか」

そう言ってジロリとルシアーダ皇女殿下が俺を横目で睨んでくる。お前がクリスのところでミミ達と一緒によろしくやれば全てまるっとうまく収まってハッピーエンドじゃないか、とでも言いたげな表情だ。まぁ、それも尤もな話なんだけどなぁ。

「皇女殿下、鳥は水の中では生きられません。魚もまた、空では生きられません。ですが、水辺で触れ合うことは可能ですから。このように」

クリスが俺にそっと寄り添って熱っぽい表情で俺の顔を見上げてくる。その目に帯びている熱は本物に見える。待て待て、ちょっと待て。これは一体全体どういうことだ。あの時、俺はこっぴどく振って泣かせてしまったはずだ。意外に諦めが悪いのか、クリスは。

「風の噂で耳に挟んだのですが、なんでもヒロ様は今回の御前試合で力を示せば上級市民権を陛下から賜ることになるとか」

「お、おう」

「そうしたらどこかの惑星上に拠点を構えるのですよね？　なら、デクサー星系のダレインブルグに屋敷を構えるのは如何ですか？色々と融通を利かせることが可能ですよ」

「それはそうでしょうね」

エルマが至極真面目な表情で頷く。確かに、ダレインワルド伯爵が領主を務める星系であればコネで色々と融通を利かせてくれるだろう。他ならぬクリス自身がそう言うのであれば、まぁ間違いあるまい。俺とダレインワルド伯爵家との関係はまぁ、良好と言っても良い。クリスはもちろんのこと、ダレインワルド伯爵自身も俺達には好意的な対応をしてくれているし。

「鳥だって飛び続ければいつか疲れてしまいます。安全に休めるとまり木が必要なのではありませんか？　できれば、私はそのとまり木になりたいと思っています」

クリスがそう言ってジッと俺の目を見上げてくる。俺は困ってしまって答えに窮した。ここでＹＥＳと答えるのは簡単だ。このまま行けば俺とミミは一等市民権を得て、惑星上に居を構えることが可能になるだろう。エルマも貴族の子女なので、一等市民権を持っている。メイは機会知性なので扱いがどうなのかはわからないが、一等市民がメイドロイドを傍に置くのが不自然なことだとは思えない。整備士姉妹は……まぁあの二人に関してはまだなんとも言えないな。

「あー……前向きに検討させて頂くということで」

「煮え切らないですね」

「皇女殿下、これは俺だけでなくミミやエルマのライフプランにも影響することです。軽々に返事をするほうが軽薄というものでしょう。というか、色々と勘弁してください」

上級市民権を得たらどこかに拠点を作ろうとは思っていたし、その候補の一つとしてダレインワルド伯爵領も考えてはいた。だが、ダレインワルド伯爵に頼ればそれは彼に大きな貸しを作ることになるし、話の展開次第ではクリスと結婚することが条件だとか言われかねない。

それはそれで旅の結末としては悪くないと思うが、流石にまだまだ宇宙を飛び回るのをやめるつもりはないのだ。まだまだ金を稼ぐつもりだし、色々とやってみたいことや見てみたいものだってある。ミミの宇宙グルメ旅はまだ志半ばだし、俺だって理想の炭酸飲料を見つけ出していない。エルマだって俺への借金を返していないしな。まぁエルマの借金はもう今更どうでも良いんだけど。

「む……それもそうですね。ごめんなさい」
「そ、そんな、謝るほどのことじゃないですよ」
「いいえ、お気になさらず。しかし、ヒロとクリスティーナ様の話は皇女殿下の心に強く響いたようですね？」

ルシアーダ皇女殿下の謝罪にミミが慌て、エルマが興味深そうにルシアーダ皇女殿下に問いかける。

「だって、まるでホロ小説か何かみたいじゃないですか。爵位の簒奪を目論む叔父に両親を奪われ、宇宙を彷徨った挙句に宙賊に拐われたところを傭兵に助けられて、傭兵に守られながら仇を取って、最後は悲恋に終わるなんて」
「皇女殿下、まだ終わったつもりはないですよ」
「ふふ、そうでしたね。続編は帝都で再会した二人が貴族の陰謀に巻き込まれながら最後にハッピーエンドを迎えるのが良いでしょうか」

ルシアーダ皇女殿下がニコニコとしながら強めの妄想に耽っていらっしゃる。だが、そこでミミから物言いがついた。

「むぅ……皇女殿下、それなら私だって両親を失って失意に暮れていたところを傭兵のヒロ様に助けてもらって、幸せになる所です」
「しかも実は帝国の皇女殿下の生き写しのような姿、って特殊設定持ちよね」

ミミの物言いにエルマも乗っかっていく。よし、これは話を逸らすチャンスだな。乗るしかない、このビッグウェーブに！

「それを言ったらエルマだってセレスティア様をモデルにしたホロ小説に憧れた貴族の女の子が、自由を求めて憧れのセレスティア様

と同じ道を歩んでいくっていう正にホロ小説そのものの人生だろ」
「その末にポカをやらかしてアンタの船に乗ることになったけどね」
「そこからは第二章ってところだな」
「むむむ……確かにミミさんやエルマさんのお話もホロ小説やホロ映画になりそうな感じですね……そしてその中心にヒロ様がいると」
「ヒロ様は……色々と特別ですから」
「アレイン星系で出会ったショーコ先生ともなんだかちょっと良い感じだったわよね。ティーナとウィスカもヒロのことを慕ってるし」

四対――いや、少し離れたところで待機しているメイも含めると五対の瞳がじっと俺を見つめてくる。

「……女誑しなんですね」

そのつもりはございません。ございませんのでその責めるような視線をやめてくださいお願いします。

「……ヒロ様ですから」

おいミミ、諦めるな。色々と諦めるな。

「……特殊な事態を引き寄せる体質ではあるわよね」

人のことトラブルメーカーみたいに言うの止めないか？　最近本当にそんな気がしてきて笑い事じゃないんだが。

「……つまり私達の出会いは特別だったということですね！」

クリスはポジティブ過ぎる！　まぁ、この広い宇宙でクリスの入っていたコールドスリープポッドが無事に宙賊に回収されて、更に

クリシュナで宙賊艦を撃破しても傷一つ無かったのは確かに運命的だとは思うけど。

「さーて、ちょっと近衛兵のところで身体を動かしてこようかなー？」

「今度はイゾルデですか」

「ヒロ様……」

「そのうち刺されるわよ」

「……近衛兵が相手だと洒落になりませんね」

そういうんじゃねぇから！　ただこの場から逃げたいだけだから！

#189　垣間見える皇女殿下の趣味（後書き）

創作意欲を刺激されるルシアーダ皇女殿下―（：3」∠）―

#190　御前試合：航宙戦の部

流石にクリスは連日帝城を訪れるようなことはなかった。無かったが、皇女殿下が割と遠慮なく接するようになってきた上に、彼女はなんというか――なんというかこう、俺の女性遍歴的なものに大変興味をお持ちのようで。

「では、今日はショーコ先生という方の事についてお話してください」

「勘弁してください」

ショーコ先生とは何もなかった！　ちょっといい雰囲気になったような気もするけど、俺には検査のためにアッー！　した記憶が強すぎる！　でも皇女殿下の攻勢に負けて話してしまう。もうどうにでもしてくれ。

そんな感じでまた一日を潰し。遂に迎えた御前試合航宙戦の部。

航宙戦の部は実機を使った模擬戦となる。レーザー砲やシールドは模擬戦用に出力を落とし、実弾兵器は模擬弾――と言っても生身の人間がくらったら弾け飛ぶ威力だが――を使う。その上で船には模擬戦用のダメージ管理プログラムを走らせ、更に審判役の艦艇が複数で評価プログラムを走らせて審判役を担う。今回の審判役は模擬戦に参加しない帝国航宙軍の艦艇で、競技場となるのは同じく帝国航宙軍の演習中域である。

「ヒロ様、傭兵以外だとどんな方が参戦してくるんでしょうか？」

「俺に想像がつくのは帝国航宙軍の艦載機乗りだけど、他にもいる

かもしれんな。エルマは何か知ってるか？」
「機動騎士も出てくるでしょうね」
「機動騎士」

なんだそのカッコイイ肩書きは人型機動兵器にでも乗るのか？
ＳＯＬに人型機動兵器は存在しなかったから、もし存在するなら一体欲しいんだが？

「腕の良い傭兵が貴族に召し抱えられて騎士になったパターンね。その子孫が代々機動騎士として主家に仕えるってわけ。軍の艦載機乗りにもその子孫が結構居るわよ」
「人型機動兵器に乗ったりはしてないのか」
「少なくとも帝国では見ないわね。軍の白刃主義者派閥が対艦ブレードを装備させることを目論んだらしいけど、コストと整備性の悪さが問題になって採用は順当に見送られたって聞いたわ」
「あるにはあるのか」

オラちょっとワクワクしてきたぞ。問題は軍でも採用を見送られるほどの整備性の悪さか。まぁ、採用されないってことはそれなりの理由があるんだろうな。

「その機動騎士って人達は強いんですか？」
「ですか？」
「ミミのマネをしても可愛くないからやめなさい。強さに関してはピンキリね。先祖伝来の古い艦をそのまま使い続けてる機動騎士も居るし」
「つまり強いやつも居るわけだ」
「そりゃいるわよ。傭兵のランクで言えばゴールドランク相当の機動騎士もゴロゴロいるわ。機動騎士はね、主家の治める領内で宙賊相手にバチバチと治安維持活動をするわけよ。主家の私兵の一員や、

その指揮官としてね。中には名ばかりの連中もいるけど」
「実戦経験が豊富というわけですね」
「場合によっては帝国航宙軍よりもね」

なるほどなぁ、機動騎士とやらも侮ってはいかんというわけだ。貴族がバックに付いてるなら装備も充実しているかもしれないしな。先祖伝来の古い船を使ってるなら心配はいらないだろうけど。
結局のところ、どれだけ腕が良くとも船に根本的な性能差があると勝つのは難しい。無論、船だけ良くても腕が追いついていなければ船の性能を引き出せずに負けるわけだが。

「勿論、帝国航宙軍にも所謂エースパイロットって呼ばれる凄腕が居るわよ。そう呼ばれるようなパイロットは実戦経験も豊富だから、侮ると足元を掬われるかもね」
「なるほど。それに傭兵もか」
「一番気をつけるべき相手でしょうね。ゴールドランク以上なら実戦経験も豊富で、船もかなり強力な筈だから」
「だな」

ただ、帝都周辺には宙賊は寄り付かない。だから必然的に傭兵の数もそんなに多くはない。居るとすれば恐らく帝都産の品々を買い付けに来た商船団の護衛を主にこなしている傭兵団の連中だろう。そういう連中は俺のような一匹狼でやるタイプとは違って、集団戦闘を得意とする傾向にある。
逆に個人戦はそんなに得意ではない連中が多い。俺の読みでは帝都周辺にいる傭兵では俺の相手にはならないと思う。もしかしたら俺のように何か用事があって帝都に来ているような凄腕が居るかもしれないけど。

「まぁ、リラックスしていこう。いつも通りやれば結果は自ずと出

る」
「そうですね！」
「そうね。まぁ、あまり心配はしてないわ」

☆★☆

「さぁ、遂にやってまいりました！　御前試合、最後の種目は戦闘艦同士による航宙戦です！　模擬戦ということでレーザー砲やシールドの出力は落とされ、実弾兵器も模擬弾が使用されるということですが、その辺りはどうなのでしょうか？」
「出力を落としたとは言っても生身の人間に直撃すれば一瞬で消し飛ぶような威力ですから、危険なことには変わりないでしょう。それに、シールド出力も落としているので、もし接触などが起これば大事故も有りえます。そんな時に備えて帝国航宙軍の救助艇が待機しているので、ご心配は無用です。参加者達による実戦さながらの迫力ある戦闘を是非お楽しみください」

今日の解説は女性のようだ。まさかセレナ少佐――いや、正式に中佐になったのだったか。セレナ中佐かと思ったが、全然別人のようである。格好からして帝国航宙軍の人みたいだな。

「やはり注目はキャプテン・ヒロでしょうか？」
「それは勿論そうですね。彼は白刃戦の部でも白兵戦の部でもその存在感を強烈に見せつけてくれました。情報によると、航宙戦こそが彼が最も得意とする戦場だそうです。どのような戦いを見せてくれるのか今から楽しみですね」

うーん、言葉から圧力を感じるなぁ。まぁ、ご期待には沿えると思うけども。

「では、トーナメント第一試合です。第一試合は傭兵団『光の矢』所属のゴールドランカー、キャプテン・レックスと帝国航宙軍第二十八防衛艦隊所属、ニールセン少尉による対戦です」
「傭兵団『光の矢』は――」

解説の女性軍人が参加者の紹介を始める。光の矢という傭兵団は商船団の護衛をメインにこなしている傭兵団で、あのレックスとかいうパイロットはその中でも撃墜スコアがトップの切り込み隊長的な存在であるらしい。対するニールセン少尉は帝国航宙軍の艦載機乗りで、隣国ベレベレム連邦との戦争で多数の敵艦載機を撃墜しているエースパイロットなのだとか。

「どうですか？」
「うーん、戦いが始まらないとなんともだが、機体を見た感じではレックスの方が面倒くさそうに見えるな」

あのレックスという傭兵が使っている艦は高速ミサイルプラットフォームとでも言うべき機種だ。素早い動きで敵機を翻弄し、多数のシーカーミサイルで攻撃するというスタイルの機体である。余裕のあるジェネレーター出力を攻撃に振り分ければ接近戦も行えるので、割と油断ならない機体だ。
対するニールセン少尉の駆る機体は帝国航宙軍の標準的な艦載機である。癖がなく、素直な操作性の傑作機だが、尖ったところがない。レーザーもマルチキャノンもシーカーミサイルポッドも装備しているマルチロールファイターだ。そんな凡庸な機体だが、ニールセン少尉の乗る機体はガチガチの軍用機である。それぞれのパーツや機体自体の性能が傭兵の乗る機体より一回り以上性能が上なので、少尉の腕次第では非常に厄介な相手となるだろう。

「ニールセン少尉の腕次第よね」

「そうだな。俺としては多分ニールセン少尉のほうが相手はしやすいと思うが」
「シーカーミサイルをばら撒かれると面倒ですもんね」
「それな」

なんだかんだ言ってシーカーミサイルによる飽和攻撃はおっかない。クリシュナの機動性なら振り切れないこともないが、その間は攻撃や回避機動を制限されるからあまり嬉しくはないな。フレアやチャフである程度欺瞞はできるが、相手だってそれは承知だろう。その上で戦略を組み上げてきているに違いない。

「ほほー、流石はゴールドランク。やるな」
「そうね」

試合はゴールドランク傭兵のレックス優位で進んでいる。遠間からの大量のシーカーミサイルによる飽和攻撃で相手に何もさせずに追い詰めているのだ。ニールセン少尉はフレアなどの欺瞞装備を使って今の所上手く逃げているが、反撃ができていない。

「これは傭兵の方が勝ちますかね？」
「攻めきれればな」

レックスのシーカーミサイルの使い方は巧みだ。直接的に狙うだけでなく、相手が逃げる方向に予めミサイルを置いておき、時間差で追尾を開始させる『置きミサイル』まで使ってニールセン少尉を追い詰めている。しかしミサイルをメインとした構成には弱点というものがある。

「逃げ切ったな」
「そうね」

しばらくミサイルでニールセン少尉を追い詰めていたレックスだったが、遂にミサイルの弾薬が底をついたらしい。ニールセン少尉の機体も無傷ではないから、最後はレーザーで仕留めようという腹づもりなのだろう。対するニールセン少尉は一転攻勢である。二機のが目まぐるしく交差し、光条が虚空に煌めく。

「どう思う？」
「俺なら完全に弾切れする前に接近戦を仕掛けるね。恐らくまだミサイルを抱えてるんじゃないか？」
「そうよね」

そう言った次の瞬間である。二隻が交差した瞬間に爆発が起こった。どうやら俺の予想通り、傭兵のレックスはシーカーミサイルをまだ抱えていたようである。恐らくニールセン少尉と交差する際に機体の慣性も乗せて至近距離でミサイルを叩き込んだのだろう。
だが、まだ勝負は着いていなかった。

「さすが軍用機、まだ撃墜判定が出ないか」
「堅いわね」

再び激しいドッグファイトが始まるが、今度こそミサイルを完全に撃ち尽くしたレックスはニールセン少尉に徐々に追い詰められ、最後には撃墜されてしまった。

「やっぱり最初の攻勢で一気に決められなかったのが敗因だな」
「序盤完全に逃げに徹して敵の消耗を誘ったニールセン少尉の冷静な判断が勝負を分けたわね」
「なるほどー……ヒロ様ならどう戦っていましたか？」
「レックス相手ならフレアとチャフ撒きながら散弾砲でシーカーミ

サイルを迎撃しながら突破、速攻を仕掛けてとっとと撃墜してたな。ニールセン少尉相手ならドッグファイトに付き合っても負ける気はしないし、なんなら重レーザー砲四門で引き撃ちでも勝てると思う」

今の戦いの感想を互いに話し合いながら出番を待つ。今回の俺達は出番が結構後なんだよな。というか、今回はシードですら無い。得意なフィールドなら特別扱いしなくても大丈夫であろう？　とか言うファッキン皇帝陛下の顔が脳裏に過る。ははは、まさかな。

☆★☆

「さぁ、次は今回の御前試合の切っ掛けとなった人物！　キャプテン・ヒロの登場です！」

「私も彼の戦闘データを見ましたが、ちょっと信じられないような戦闘機動をするそうです。どんな戦いを見せてくれるか楽しみですね」

広域通信チャンネルからアナウンサーと解説の女性軍人の声が聞こえてくる。

「ヒロ様、期待されてますよ」

「期待されても困る。わざわざ曲芸みたいな戦闘機動をするつもりはないぞ」

「いつもどおりにやれば良いわよ」

エルマがそう言って肩を竦める。まぁ、確かにそれもそうだな。わざわざ気負う必要もない。

「対する相手はレドラン伯爵家で機動騎士として活躍するヴァイゼル卿です！　普段はレドラン伯爵領で治安維持を担っており、宙賊

との戦闘経験も豊富とのことです」
「キャプテン・ヒロの機体は見慣れない機種ですが、ヴァイゼル卿の使用している機体は帝国航宙軍でも採用されている小型戦闘艦ですね。艦載機よりも大きく、より強力なジェネレーターを装備している艦です。傭兵の扱う戦闘艦に非常に性質の似た艦です」
「なるほど、機体性能ではどちらが有利と見ますか？」
「キャプテン・ヒロの駆るクリシュナという艦は全く未知の艦ですから評価が難しいですが、資料によると高い機動性と火力を兼ね備えた攻撃的な艦であるようですね。対するヴァイゼル卿の駆る小型戦闘艦――セイバーⅣもまた機動性と高火力を兼ね備えた高性能艦です。やはりパイロットの腕が戦闘の趨勢を決めることになるでしょう」
「なるほど、これはいきなり激しい戦いになりそうですね。では、試合開始のカウントダウンを始めます！」
試合開始のカウントダウンが始まった。それと同時にウェポンシステムを起動し、四門の重レーザー砲と二門の散弾砲を展開する。
「作戦は？」
「真っすぐ行ってぶっ飛ばす」
カウントダウンの終了と同時に俺はクリシュナのスラスターを最大出力で噴射した。

#191　わざわざ曲芸じみた戦闘機動をするつもりはない（しないとは言っていない）

いきなりこちらが全速力で突っ込んでくるとは思わなかったのか、敵のセイバーⅣの反応は一瞬遅れた。しかしそれは本当に一瞬のことで、すぐに相手も加速してこちらへと突っ込んできた。どうやらヘッドオンでの殴り合いに付き合ってくれるらしい。

「火力はそこそこだな」

セイバーⅣの主武装はどうやら二門の高出力レーザーであるようだ。クリシュナの重レーザー砲と比べると威力は劣るが、小型艦の装備している武装としてはかなり威力は高めのようである。軍用規格品か、あるいは兵器メーカー製の最新鋭商品だろう。

「宙賊艦とは比べ物にならないわね」

しかし、戦闘艦同士が真正面から相手に突っ込めば距離が詰まるのは本当に一瞬である。互いにレーザー砲を撃ち合いながら接近し、散弾砲の間合いに入る――寸前でセイバーⅣは軌道を逸らして離脱していった。流石にこちらの情報はある程度調べているらしい。

「散弾砲を嫌ったか」
「そりゃそうでしょ」
「お陰でこっちは助かるがね」

先に向こうが軌道を逸らして離脱をしたので、こちらは悠々とその後を追う。散弾砲はその存在を知らなければ相手にとって一撃必殺の武器となり、知っていた場合はこのようにヘッドオンから敵の

バックを取るのに貢献してくれる大変ありがたい武器である。
シールド技術の無い戦闘機同士の戦闘はミサイルの一発、機関砲弾の数発で決着が着いてしまうが、分厚いシールドを持つ戦闘艦同士の戦闘はそうはいかない。戦闘艦同士の戦闘というのは如何に敵のシールドを無効化して敵船体にダメージを与えるか、という戦いになる。
普通はレーザー砲やシーカーミサイルなどを用いてチマチマとシールドを飽和させてから装甲を破壊し、その奥の船体にダメージを与える――という手順になるのだが、一部の兵器はそういったプロセスを吹っ飛ばして装甲や船体に致命的なダメージを与えられる。散弾砲もそういった兵器の一種である。
散弾砲の有効射程は非常に短いが、散弾砲の散弾は敵のシールドを大きく減衰させながら貫通し、更に装甲を貫通して船体に直接ダメージを与える効果がある。砲自体に特殊な機構が搭載されているらしい。
まぁ、少し離れてしまうとその効果が消えて「散弾ではなぁ！」とか言われそうなクソザコ武器と化してしまうのだが。それでもシーカーミサイルなどの投射兵器の迎撃には使えるから防御兵器としては有用だけど。

「ははは！　どこへ行こうというのかね！」
「ヒロ様のテンションが高いです」
「久々に実機に乗れて気分が上がってるんでしょ」

その通りです。ここのところ帝城に缶詰になっていたからな。久々に感じる機体との一体感にテンションが上がらざるを得ない。
「さぁ、どうする？　このままケツに着かれたら重レーザー砲で蜂の巣だぞ？　それは嫌だよな？」

そう言いながら姿勢制御装置をオフにすると、旋回するような素振りを見せていたヴァイゼル卿のセイバーⅣが俺の言葉に反応するかのように急減速した。
そうだよなぁ？　そうやって俺をオーバーシュートさせたいよなぁ？
俺は姿勢制御スラスターを操作してクリシュナを縦回転させ、ヴァイゼル卿のセイバーⅣを追い越しながら艦首を彼の機体に向けて散弾砲を連続で叩き込んだ。連続で発射された無数の散弾がセイバーⅣのシールドを貫通し、その船体を穴だらけ――にはせずに装甲に当たって激しく火花を散らす。
模擬弾だからな。模擬弾じゃなかったらセイバーⅣはバラバラに引き裂かれて爆発四散していたことだろう。試合終了のブザーがクリシュナのコックピット内に鳴り響く。

「おぉっとぉ！？　何が起こったぁ！？　キャプテン・ヒロのクリシュナがヴァイゼル卿のセイバーⅣを追い越したかと思ったその瞬間、ヴァイゼル卿のセイバーⅣに撃墜判定が出ました！」
「データを確認して――これは……」
「解説のミロク大尉、一体何が起こったのでしょうか？」
「ヴァイゼル卿のセイバーⅣはキャプテン・ヒロのクリシュナに追われ、一方的な展開になりかけていました。そこでヴァイゼル卿が旋回をすると見せかけて急減速をかけ、キャプテン・ヒロのクリシュナをオーバーシュート――つまり追い越させようとしたわけですね。そうすればセイバーⅣはクリシュナの背後を取れますから」
「なるほど、しかし何故セイバーⅣに撃墜判定が出たのでしょうか？」
「キャプテン・ヒロは恐らくセイバーⅣの取る手を読んでいたのでしょう。セイバーⅣの上面を追い越す際に姿勢制御装置を切り、姿勢制御スラスターで機体を縦回転させて艦首をセイバーⅣに向けながらセイバーⅣを追い越し、その際に無防備なセイバーⅣの上面部

に二門の大型シャードキャノンを撃ち込んでいったのです。シャードキャノンはごく近距離に限りますが、シールドと装甲を貫通して直接船体に大ダメージを与えることができる兵器です。あの距離で喰らえば小型艦ではひとたまりもありません。キャプテン・ヒロの読みと操縦技術は神がかっていますね」

「なるほど……あ、別角度からの映像が来ました。なるほど、こうしてみると一目瞭然です。巨大な戦闘艦がまるで曲芸師のように宇宙空間で舞っていますね。しかもその瞬間に攻撃を仕掛けるとは」

ちなみに、万が一あの散弾砲の斉射で仕留めきれていなかった場合でも追い越した先でクリシュナはセイバーⅣに艦首を向けていたので、大きくシールドを減衰させたセイバーⅣに四門の重レーザー砲が一斉に火を噴いていた。そこからは引き撃ちモードに移行するもよし、セイバーⅣが逃げるならまたケツを追い回すのでもよし。どちらにせよ俺に負けはない。

え？　俺に負け筋はあるのかって？　無論ある。わざわざ言う気も無いし、そうされたところで完璧に俺を追い込むのはかなり難しいと思うけど。俺だって負け筋ができるだけ少なくなるように機体を組み上げているからな。少なくともクリシュナのこの機体構成は俺にとって負け筋が非常に少ないベストと言える構成だ。

アナウンサーと解説の女軍人さんが姿勢制御装置とは、みたいな話をしているが、それを聞き流して俺達は帝国航宙軍のドックへと帰還した。このドックは今回の催しの舞台となっている帝国航宙軍の訓練宙域に隣接して建造されているもので、訓練宙域を利用する軍艦の整備を主に行っている施設だ。ここには今回の御前試合に参加している選手達の乗艦がズラッと並んでいる。

「ダメージは負ってないが、一応チェックしておいてくれ。あと散弾砲の模擬弾を補給してくれ」

『了解』

帝国航宙軍の整備士にそう伝え、パイロットシートに身を沈める。
「疲れた？」
「そういうわけじゃないけどな。久々の戦闘を終えて少し気が抜けた」
「緊張しっぱなしよりは良いと思います」
無駄にハイテクな空間固定式ドリンクホルダーから冷たい飲み物を摂取し、一息吐く。
「優勝まではあと何回だ？」
「特に何もなければ五回ですね」
「五回ね、思ったより少ないな」
「十日足らずで機体とパイロットを帝都に用意できる人が少なかったんでしょう。ゲートウェイの存在を考慮しても情報が行き届く速度というものがあるし」
「それもそうか」
ゲートウェイを利用したゲートウェイ通信や情報だけを船よりも速い速度で伝達するハイパースペース通信を使っても辺境宙域まで情報が行き渡るのには時間がかかる。情報を受け取ってから出立の準備を済ませ、今日という日程に合わせて帝都まで来られる参加者がどれだけ居たかという話だろう。
これがちゃんと布告期間を設けての開催だったら参加者は数倍から数十倍に膨れ上がっていたんだろうな。
それから二度戦った。
第二回戦は帝国航宙軍のエースパイロットで、初戦でミサイル満載の傭兵艦と戦っていたニールセン少尉とはまた違った戦い方をす

るパイロットだった。戦闘機動が抜群に巧く、激しいドッグファイトになったが、近距離戦で負ける俺ではない。散弾砲の射界に捉えて穴だらけにしてやった。
第三回戦は機動騎士が相手だった。六門の高出力レーザー砲と二門のシーカーミサイルポッドによる速攻戦術を得意としているようだったが、残念ながら速度が遅かった。全速力で擦れ違い、後は反転して引き撃ちするだけで決着が着いた。
そして準決勝となる第四回戦は遂にゴールドランク傭兵との戦いになった。

「コルベットか」
「そうね。それも軍で採用している機種ね」

コルベットという艦種は傭兵が使う小型艦、中型艦、大型艦という区分で言えば大型艦に分類される艦である。実質的に傭兵が扱う艦としては最大クラスの艦だ。
これ以上大きい艦――つまり駆逐艦以上の大きさの戦闘艦に関しては運用コストや巡航速度、それに大き過ぎて傭兵の主戦場である暗礁宙域で使いにくい、といった理由によってメインの戦闘艦として採用している傭兵はほぼ居ない。ブラックロータスのような母艦機能を持つ艦に関してはまた別の話になるけど。
ちなみに、ブラックロータスは大きさ的に言えば巡洋艦に迫るクラスの戦闘母艦である。
まぁ、ブラックロータスの話を横に置いてコルベットの話に戻すと、基本的にコルベットという艦種はあまりサシの対人戦には向かない艦種である。戦闘用の大型艦なので足は早いし火力も十分だが、小型艦に比べるとやはり小回りがきかない。大型艦なので接近されると死角が多い。
故に、障害物の多い暗礁宙域での戦闘には向かず、基本的には暗礁宙域に近寄らない商船護衛などを主とする傭兵に採用される傾向

がある。

「厄介なのが来たなぁ」

「ここ、障害物になるようなものが殆どないですもんね」

試合会場であるこの訓練宙域には障害物というものが殆どない。基本的に帝国航宙軍も暗礁宙域で戦闘をしたりはしないからな。こういった場所でコルベットを相手にすることの何が厄介って、それは勿論デカい分火力が高いという点である。搭載できる砲の数が多く、弾薬の積載量も多い。当然デカいぶん強力なジェネレーターを積んでいるので、小型艦や中型艦と比べると当然ながらシールドも分厚い。

「まぁ、なんとか距離さえ詰めてしまえばこっちのもんだ」

恐らく今まであのコルベットを操る傭兵と戦った選手達は近づく前に圧倒的火力で撃破されてしまったのだろう。火力とシールドを含めた装甲の分厚さは正義である。クリシュナが強いのもこの二点を追求しているからだからな。

「どうするの？」

「距離を詰めるさ。こういったシチュエーションで大型艦を相手にして勝てるようになって初めて対人戦中級者だぞ？」

「私の考える対人戦中級者像とヒロ様の考える対人戦中級者像が激しく乖離している気がします」

「奇遇ね、私もよ」

ＳＯＬにおいては小型艦による大型艦撃破――所謂ジャインアントキリングに関して非常に戦術研究が盛んであった。当然、大型艦による小型艦潰しの戦術も多数編み出されたわけだが、最終的に大

型艦と小型艦がサシで戦った場合、小型艦側の方が有利であるという論が優勢であった。
これが中型艦相手だとまた少し変わってくるのだが、まぁそれは置いておこう。
それでもＮＰＣを相手にする場合には大型艦のほうが有利な場合が多いし、持ち運んだり回収したりすることができる物資の量も大型艦の方が圧倒的に多いので、大型艦を使うことを好むプレイヤーも多数いたのだが。
まぁ、対人戦を考えなければ大型艦は色々と便利だからな。大型艦なら自動操作の艦載機を使える艦もあるし。フ〇ンネルとかビ〇トみたいな感じで。

「相手はゴールドランクだからな。気を引き締めていこう」

操縦桿を操作し、試合の開始に備えて待機場所へと向かう。さぁ、敵さんがどう出てくるか楽しみだな。

#192　ジャイアントキリング

「皆様お待たせいたしました！　準決勝第二試合は皆様お待ちかねのキャプテン・ヒロの登場です！　対するはキャプテン・ヒロと同じ傭兵であるキャプテン・シュナイダー！　乗機は帝国航宙軍でも採用されている軍用コルベット、カバルリーⅦです！」

「キャプテン・シュナイダーはここまでカバルリーⅦの圧倒的火力と防御力を全面に押し出して対戦者を圧倒してきました。そんなキャプテン・シュナイダーにキャプテン・ヒロがどのように対処するのか、それとも圧倒的火力と防御力の前には彼のテクニックも通用しないのか、その点に非常に興味を惹かれますね」

試合開始位置について待っていると、広域通信チャンネルでアナウンサーと解説の女軍人の声が聞こえてくる。

「ヒロ様、対戦相手から通信が入っています」

「んん？　なんだろうな。繋いでくれ」

「はい」

ミミがコンソールを操作し、対戦相手のキャプテン・シュナイダーとの通信が繋がった。

「こちらクリシュナのキャプテン・ヒロ。試合開始前に何の用だ？」

「シュナイダーだ。何、対戦前に挨拶でもと思ってな」

そう言ってキャプテン・シュナイダーは俺の顔をまじまじと眺めてきた。なんだこいつ、不躾にジロジロと。

キャプテン・シュナイダーの見た目は思ったよりも若い。俺より

は歳上だろうが、中年って印象は受けない。ミミと同じような明るいブラウンの髪の毛を長く延した美丈夫といった風貌だ。少々目付きが鋭いか。

「ふん？　思い上がったガキかと思ってたんだが、どうにもそういう雰囲気じゃないな。これは手強そうだ」

「そいつは過分な評価をどうも。だが、俺なんて運が良い……いや、悪いだけのペーペーだぜ？　もっと見縊ってくれても良いんだぞ」

「本当に運が良いだけの雑魚は自分を少しでも大きく見せようと必死になるものだ」

キャプテン・シュナイダーは僅かに口角を上げ、獰猛な笑みを浮かべた。

「お前の刃が俺のドミネーターに届くかどうか、楽しみにさせてもらおう。シュナイダー、アウト」

通信が切れてコックピットのディスプレイに表示されていたキャプテン・シュナイダーのウィンドウが消える。

「やり手かしら？」

「そのように思えるな。やっぱり油断はできないな」

そんなやり取りをしている横で、ミミが何故か瞳をキラキラさせていた。一体何だ？

「今のやり取り、かっこよかったです！　ルシアーダ皇女殿下に借りた傭兵モノのホロ小説みたいでした！」

「ああ……そう」

皇女殿下、うちのミミに何を読ませてるんですか、何を。純真なミミを汚染しないで欲しい。流石に腐臭を撒き散らすようなことはないと思うが、ちょっと今後は気をつけたほうが良いかもしれない。

「エルマ、しっかり頼むぞ」
「それはこの後の試合のこと？　それともミミのこと？」
「両方だ」
「私はミミの母親じゃないんだけど」
「年齢的には痛い痛いごめんて」

エルマが太ももを抓ってきたので降参しておく。試合前でもこうやって無駄口を叩いてリラックスできるのもうちのチームの強さかもしれないな。

「両者試合開始位置に着きました。試合開始です、カウントダウンスタート！」

ディスプレイに大きくカウントダウンが表示される。

「作戦は？」
「最初は強く当たって後は流れで。まぁ、基本的には死角を取る。ミミ、試合が始まったらすぐに敵船をスキャン、主要なモジュールのある場所をマークしてくれ」
「わかりました！」

カウントダウンの終了と同時にクリシュナのスラスターを全開にしてドミネーターとの距離を詰める。対するドミネーターは火砲が集中している正面上部をこちらへと向け、まるでハリネズミのような対空――宇宙空間で対空というのも変な話だが――砲火を上げてくる。

「チャフ、ＥＣＭ展開」

エルマの展開したチャフとＥＣＭが効果を発揮し、クリシュナに向かって飛んでくる対空砲火の精度が大幅に低下する。ちなみにこのチャフというのは実質的には地球で用いられていたチャフとは全くの別物だ。地球でよく知られるチャフは金属箔等をばら撒くことによってレーダー探知を欺瞞するものだが、クリシュナを始めとした宇宙戦闘艦に装備されているものはもっと先進的なもので、敵戦闘艦の照準システムを狂わせる一種の『分身』のようなものを作り出す装置だ。

その欺瞞効果は限定的なものだが、短時間だけ敵艦の自動照準機構を混乱させて命中率を大きく落とすことができる。原理は先進的だが、やっていることはそう変わらない。だから今でも変わりなくチャフと呼ばれているわけだな。

「流石に弾幕が分厚いな」

欺瞞装置を用いて被弾を減らしても徐々にシールドが削られていく。ドミネーターはこちらを懐に潜り込ませないように後退しながら艦首上面をこちらへと向け続けている。只管こちらに火力を叩きつけて削り切るつもりだろう。

「よし、行くぞ。いつでもシールドセルを展開できるように用意しておけ」

「了解」

クリシュナの艦首を上げ、ドミネーターの上面方向に突進する。当然、ドミネーターはクリシュナに頭上を飛び越されて背後に回られたくないので、それに追随するように艦首を上げてクリシュナの

動きを追う。つまり、ドミネーターの巨体が上方向に縦回転を始める。

「牽制牽制っと」

こちらはこちらで艦をロールさせて上面方向をドミネーターへと向けて四門の重レーザー砲をドミネーターへと撃ち込んで牽制する。こちらの火力も小型艦としてはありえないほどの高火力だが、このまま正面から撃ち合うのはいくらなんでも分が悪い。クリシュナ強固なシールドと装甲を有しているが、あくまでも小型船だ。大型船に分類されるコルベットが相手では耐久力が違いすぎる。

「ジリ貧よ？」

「もう少し……今だ！」

ドミネーターが十分な回転速度を得た時点で俺は再び操縦桿を引き、稲妻のようにドミネーターの上方下方へと突っ込んだ。目指すはドミネーターの舳先だ。

ドミネーターは頭を越して回り込むような動きをしていたクリシュナに追従するためにその巨体を上方向へと縦回転させている。その巨体故にこのような急な動きに追従して回転方向を逆転させることは不可能なのだ。

「抜けたっ！」

クリシュナは地獄のような対空砲火の中を突破し、ドミネーターの舳先を掠めてその下方へと回り込んだ。無論、下方にも迎撃用の武装はいくらか存在するが、その火力は上面に比べるとささやかなものだ。砲台に至近距離から散弾砲を浴びせ、即座に沈黙させる。

「どんどん行くぞ」

事前にミミにスキャンさせておいた重要な内部モジュール――姿勢制御スラスターやメインスラスターへのエネルギー供給管や弾薬庫等に散弾砲浴びせていく。ついでに重レーザー砲もバンバン撃ち込んでシールドを飽和させ、ピンポイントでジェネレーターの存在する部分に執拗に攻撃を重ねた。そうしている内に試合終了のブザーが鳴り響き、俺達の勝利が宣言される。どうやらジェネレーターの破壊判定が入ったらしい。

「試合終了です！　キャプテン・ヒロがジャイアントキリングを達成しました！　最初はキャプテン・シュナイダーが一方的に有利になるかと思われましたが」

「キャプテン・ヒロの見せたあの稲妻のような機動ですね。確かにコルベット級の大きさを誇る艦ではあの速度の切り返しについていくのは困難です。しかし、一対一であの機動を取るには相当な度胸が必要ですね。強力な対空砲火の中に突っ込むことになるわけですから、一歩間違えればそのまま撃墜されることになります」

「なるほど……」

アナウンサーと解説の女性軍人の話を聞き流しながら軍の整備場への帰還を始めた。

「まぁ、こんなもんだな」

「流石に今回はヒヤヒヤしました」

「そうね。シールドセルも三つ使ったし……ねぇ、なんで対艦魚雷を使わなかったの？」

エルマが尤もな指摘をしてくる。

「別に舐めプってわけじゃないぞ。いつも通りの戦いをしただけだ。相手が大型艦一隻のみなら対艦反応魚雷を使うまでもないだろ」

周りに他の艦がいて、ドミネーターだけに構っている暇がないなら対艦反応魚雷でとっとと片付けるだろうが、ドミネーター一隻だけが相手なら俺は対艦反応魚雷なんて使わない。

「高いじゃないか、対艦反応魚雷」

「試合なら模擬弾だし、お金はかからないでしょ」

「試合だからこそだ。負けて死ぬわけでもないのに派手で楽な手法を取っても仕方ないだろう。ドミネーターの元機体のカバルリーⅦのモジュール配列や耐弾性も確認したかったしな」

「……ヒロってたまに異常なまでにストイックよね」

何故かエルマに呆れた視線を向けられている気がする。別に悪いことじゃないんだし良いだろう。悪意を持って舐めプしたわけじゃないんだし。

「と、とにかく次で決勝ですよ！　決勝！」

「そうだな。サクッと面倒事を終わらせるとしよう。帝都で片付けるべきことが沢山あるってのに大分足止めを食らってるからな」

クリスのいるダレインワルド家の屋敷にも行かなきゃならないし、帝都産の高性能戦闘ボットをセレナ中佐のコネで購入する予定だってある。あと、メディアの取材も多分受けることになるだろうしな。その予定が全部後回しになっているのも全てファッキン皇帝陛下のせいである。畜生め。

何はともあれまずは補給と整備だな。

#193　プラチナランクｖｓプラチナランク（前書き）

７／１０に三巻が発売となりました！　是非買ってね！！！！！　―（：３」∠）―

#193　プラチナランクｖｓプラチナランク

補給と整備、それと三位決定戦に多少時間がかかるので、その間に俺達はクリシュナの食堂で軽食を取りながら決勝戦の対戦相手のリサーチをすることにした。

「プラチナランクねぇ。そんなホイホイいないんじゃなかったのか？」

「帝国内で活動しているのは三人――ヒロが増えたから四人ね。そのうちの一人が帝都周辺にたまたま居た、或いはゲートウェイを使える立場に居た、無くもない話だと思うわよ」

「こういうのを引き当てる辺りがヒロ様ですよね」

「俺だけじゃなくて俺達全員の運命力なんじゃないかな！」

俺一人がトラブルメーカーであるという論調は断固として否定していきたい。二人は生温かい視線を俺に向けてきているけど、二人の運命の数奇さ加減も相当だと思うぞ？

「それよりもほら、これが準決勝の様子よ」

そう言ってエルマが俺達の試合の前に行われていた準決勝第一試合の映像をホロディスプレイで流し始める。

「これはかなり改造されてるな……改造元の機体はウルフ系の機体だな」

「ウルフ系？」

「ステッペンシップインダストリー社製の戦闘艦だ。あの機体は多分指揮装備をオミットしたベータウルフを改造した機体だろう。中

型艦の割に軽量で運動性が高い。武器を装備できるハードポイントは中型艦としては少なめだが、積載量もそれなりに多いから強力な武装を積みやすい。中型艦だから、ジェネレーター出力もシールド容量も小型艦より上だ」
「……強くないですか？」
「強いな。俺としては速度と運動性が物足りないが、そこそこ動けて堅くて武装は強力。愛用者が多い機体だと思うぞ」

問題は積んでる武装なんだが。

「げっ」

改造ベータウルフから発射された緑色の光弾が対戦相手に着弾し、一撃で撃破判定が入ったのを見て思わず声を出してしまう。

「これは厄介ね……当たればの話だけど」
「な、なんですか今の武器」
「プラズマキャノンだ……うわぁ、一番嫌なタイプの武器が来たなぁ」

プラズマキャノンは大変強力な武器だ。射程は長いが弾速は遅く、真正面にしか撃てない代わりに威力は非常に高い。シールドと装甲を貫通して船体に直接被害を与える貫通系武器の一種である。
言うなれば、弾速が遅い代わりに威力が更に上がって遠くまで飛ぶようになった散弾砲のようなものだ。クリシュナの防御はシールドと装甲に頼っているので、船体に直接ダメージを与えてくるタイプの貫通系武器に弱い。なんだかんだでクリシュナは小型艦だからな。ちなみに、同系統の所謂貫通武器というのは散弾砲――シャードキャノンと、ブラックロータスに搭載しているようなレールガン、今回の対戦相手が装備しているプラズマキャノン、後は一応シール

ドを貫通する対艦魚雷や対艦ミサイルの類と、格闘武器――つまり船で相手に突っ込んでダメージを与える衝角や対艦ブレードなどの五種類だけである。
　ということをミミに説明した。

「なるほど……でも、ヒロ様なら避けられるんじゃないですか？」
「普通に撃ってくる分には問題ないと思うけどな。良いか？　ミミ。ああいう変態武器を使う連中ってのは、当てるための戦術を用意しているし、必中のタイミングを絶対に逃さないんだ。あの武器を装備した艦でプラチナランクになって、ちゃんと決勝戦まで勝ち残ってきてる奴がラッキーヒットを狙ったお願いブッパなんてしてくるはずがない」
「シャードキャノンなんて色物武器を使いこなしてるヒロが言うと説得力があるわね」
「散弾砲は近づいて撃てば当たるから変態武器じゃないし」

　おいなんだその顔は。二人ともここのところ少し俺に対して厳しくないか？

「そういうことにしておくわ。とりあえず、プラズマキャノンに注意ってことね」
「引っかかる言い方だが、まぁそうだな。ああいう直射武器にはチャフもＥＣＭも効かないから常に気が抜けないぞ」

　機械照準ではなく直接照準で真正面にだけ飛ぶタイプの武器に照準欺瞞装置は無力である。クリシュナの散弾砲とかな。ちなみに重レーザー砲は影響を受ける。

「そう言えば、本人はどんな奴なんだ？」
「ええと、キャプテン・バンクスという方みたいですね」

「沈黙のバンクスね。有名な傭兵よ」
「何それ強そう」
一人で宙賊艦に乗り込んで無双しそうな名前だ。コックを名乗ったりしてな。
「まぁ、プラチナランク傭兵は誰も彼も個性的なんだけど……」
チラリとエルマが俺を見てくる。俺は個性的とは……言い難いとは言えないかなぁ！　いや、俺の個性を出しているのはミミとエルマという二人の美女を侍らせているという点に集約されているから。きっとそうだから。俺個人の個性はそうでもないから。多分。
「サイレント・バンクス、マスクド・バンクスとも呼ばれたりするわね。とにかく無口な人で、人と合う際には常に仮面を外さないらしいわ。意思疎通も携帯情報端末を使うという徹底ぶりよ。まぁ、変人奇人の類よね」
「ただ、腕は良いと」
「はい、折り紙付きですね。今キャンプテン・バンクスの戦歴を見ているんですけど、戦闘艦の総撃墜数が物凄いです」
「経験も豊富ってわけだ。厄介だなぁ」
今回は流石に楽勝というわけには行かなそうだ。
☆★☆
「さぁ、急遽執り行われた御前試合もこれで最終戦です！　これまで全ての御前試合で実力を見せつけてきたキャプテン・ヒロ！　対する最後の相手は奇しくもキャプテン・ヒロと同じプラチナランク傭兵のキャプテン・『サイレント』・バンクスです！」

「プラチナランク傭兵同士の戦いですね。これはそうそう見られるものではない、大変貴重な体験となるでしょう。宙賊や宇宙怪獣を相手に日々戦い続ける傭兵の頂点同士の戦いに期待が募ります」

既に試合開始位置に着いている俺達はアナウンサーと解説の女軍人さんの話を聞きながらこれから始まる戦いに向けて集中力を高めて――。

「しかし勝っても負けてもこれで乱痴気騒ぎも終わりかと思うとホッとするな」

――いなかった。

「帝城暮らしは落ち着きませんしね……ルシアーダ皇女殿下とのお茶会ができなくなるのは残念ですけど」

「ミミは王女殿下と仲良くなったものね。ヒロもイゾルデさんと会えなくなって残念ね？」

「イゾルデとは本当にそういうのじゃないから」

「知ってるわ」

エルマがクスクスと笑う。からかうのは良いが、からかうならもう少し穏便な内容にして欲しい。

「全ての準備が整ったようです！　では、御前試合航宙戦の部、決勝戦開始です！　カウントダウン、スタート！」

最終戦のカウントダウンが開始される。泣いても笑ってもこれが最後だ。精々気合を入れていくとしよう。どうせなら華々しく全勝したいからな。

☆★☆

試合開始と同時に俺は下部ウェポンベイを解放し、対艦反応魚雷を一本発射した。ウェポンベイから発射された対艦反応魚雷は慣性で少し進んだ後に設定通りにその場でピタリと止まった。

「えっ？」

「集中しろ。ミミ、今のを含めてこれから発射する対艦魚雷の位置をレーダー上にマークしておけ」

「は、はいっ！」

俺の突然の行動にサブパイロットシートに座っていたエルマが俺に視線を向けてくるが、俺はそれに構わずミミに指示を出して船を動かす。バンクスの黒い改造ベータウルフ――シャドウウルフはメインスラスターを噴射してこちらへと間合いを詰め始めているようだ。やはり向こうとしてはプラズマキャノンを当てるために中～近距離で戦いたいのだろう。

「付き合うつもりは無いぞ」

俺はクリシュナの後退用スラスターを噴射し、シャドウウルフに間合いを詰められないように立ち回る。敵の武装は二門のプラズマキャノンと二門のシーカーミサイルポッド、それに三門の高出力レーザー砲だ。中型機としては武器のハードポイント数は少なめだが、どれも火力の高い油断ならない武器である。だが、遠距離でクリシュナと撃ち合える武器はシーカーミサイルポッドと三門の高出力レーザーだけだ。こちらも使えるのは四門の重レーザー砲だけだが、シーカーミサイルの対処だけしっかりやればダメージレースではこちらが勝てる。問題は耐久力が向こうを上回れるかどうかだが……。

「どうだ？」
「微妙にジリ貧だと思うわ」
「なるほどな。まぁ時間を稼ごう」

二発目の対艦反応魚雷を発射しながら艦の向きを大きく変えて全速力でシャドウウルフの側面に回り込む。基本的に航宙艦というのは艦首を上げ下げするのに比べると、艦首を左右に振るのは反応が遅めだ。左右に振るなら艦をロールさせて艦首の上げ下げで対応したほうが早いように作られているのだ。
当然、バンクスのシャドウウルフもこちらの急な動きに対応して艦をロールさせ、艦首をこちらにピタリと向けてくる。いや、本当にピタリと向けてきやがるな。

「プラズマキャノン来ます！」
「おっと」

ミミの警告に受けて回避行動を取る。そうすると、回避行動を取らずにいたら直撃する軌道で緑の光弾が宇宙空間を引き裂いて飛んでいった。見事な偏差射撃である。その間にもチャフで欺瞞しているにも関わらず高出力レーザー砲撃がクリシュナを掠めていくのでまったくもって油断ならない。

「ねぇ、さっきから何をしているの？」

恐ろしい精度で飛んでくるプラズマキャノンを避けながら三発目、四発目の対艦反応魚雷を発射して待機させると、遂に我慢ならなくなったのかエルマがじれったそうに聞いてきた。

「仕込みだよ、仕込み。あとは仕上げを御覧じろってな。さぁ、キツい戦闘機動で行くから気合を入れろよ」

そう言いながら再びクリシュナの艦首を切り返し、今度はシャドウウルフとの間合いを詰めていく。近寄れば被弾の恐れは高くなるが、射線から外れることも容易になる。要は、回避不能な距離で相手の正面に立たなければ良いわけだ。当然、こちらにも散弾砲があるからあちらにも多大なプレッシャーがかかる。クリシュナの散弾砲を至近距離で喰らえばあちらも無事では済まないからな。

「おぉっとぉ！　超至近距離でのドッグファイトになったぁ！」

広域通信でアナウンサーのやかましい声が聞こえてくる。シャドウウルフの戦闘機動は実に巧みだ。艦の慣性をコントロールし、加減速を用いてこちらの射線を的確に外し、逆にこちらを射線に捉えようとしてくる。敵艦のプラズマキャノンがクリシュナのすぐ側を掠めて飛んでいく。無論、こちらもそう易々と当たってはやらない。この超至近距離では流石に機動性がモノを言う。

「シーカー！」
「チッ！」

流石にこの至近距離でのドッグファイトは分が悪いと思ったのか、シャドウウルフは自爆覚悟の至近距離でシーカーミサイルを大量にばら撒き始めた。いかにクリシュナのシールドが強固とは言っても、大量のシーカーミサイルによる爆発に巻き込まれては一溜まりもない。

俺は〝喜んで〟その場から逃げ出した。アフターバーナーも噴かし、脇目も振らず最大速度でシャドウウルフとの距離を空ける。シャドウウルフも当然その後ろについてくる。今頃バンクスは無防備なクリシュナのケツを見てほくそ笑んでいることだろう。だが、それが命取りだ。

「これで詰みだ」

パイロットシートのコンソールを操作する。すると、シャドウウルフがプラズマキャノンを発射する前にシャドウウルフの至近距離とそれ以外の離れた三箇所で大爆発が起こった。爆発したのは予め発射しておいた対艦反応魚雷だ。至近距離での反応弾頭の爆発によってシャドウウルフに撃墜判定が下り、試合終了のブザーが鳴り響く。

「おぉっとぉ！？　何が起こったァ！？」

「これは……キャプテン・ヒロが発射していた対艦反応魚雷ですね。どうやら両者はドッグファイトをしているうちに三発目に発射した対艦反応魚雷のすぐ近くまで移動していたようです。信じ難いことですが、どうやらキャプテン・ヒロはドッグファイトを利用してキャプテン・バンクスを対艦反応魚雷のすぐ側までおびき寄せ、機を見計らって自爆させたようです……こんなことが可能だとは」

解説の女軍人さんが解説しながら戦慄している。一対一の対人戦でしか使えない初見殺しだけどな、置き魚雷は。しかも一度タネが割れると二回目はなかなか通じない。速攻でぶっ壊されたりするからね。

女軍人さんの解説が続く中、クリシュナに短距離通信で一通のメッセージが入ってきた。

『見事にしてやられた。次は勝つ』

メッセージの発信元はバンクスのシャドウウルフだった。

#194　一段落（前書き）

い、一時間くらい遅れてもバレへんバレへん……（´　。ω　。、）（ゆるして

#194　一段落

「白刃戦、白兵戦、航宙戦、全ての試合において優勝の座を勝ち取った其方の武勇、見事である。褒めて使わす」
「……有り難き幸せ」

ここは謁見の間だ。グラッカン帝国の皇帝陛下が公的に下々の者と会い、言葉を交わすための場所であるらしい。
キャプテン・バンクスとの戦いを終えた俺達はそのまま近衛所属の船に導かれて帝城に降下させられ、船から降りるなり丁重に連行――案内されておめかしさせられ、こうして皇帝陛下の前に連れ出されたのだ。ここはメディアの立ち入りもＯＫな場所であるらしく、俺とミミ、エルマが皇帝陛下と謁見し、武勇を称えられているこの状況は帝国全土にライブ中継されているとのことだ。もっとも、情報の伝達に時間のかかる辺境ではライブ中継と言っても数日から一週間遅れで映像が届くらしいが。

「まず、其方と其方の船のクルーには褒美として一等帝国民としての身分を与える。その他、キャプテン・ヒロの船に帝国内に存在するゲートウェイの通行権を与えるものとする。傭兵としての務めに役立てるが良い」
「有り難く拝領いたします」

一等帝国民としての身分もだが、ゲートウェイの通行権は素直にありがたい。ゲートウェイを自由に使えるようになれば行動範囲が格段に広くなる。

「また、その他に褒賞金として５０００万エネルを与える。これは

全ての御前試合で実力を示した其方に対する余からの個人的な褒美である。受け取るが良い」
「謹んで拝領致します」

俺はそう言って頭を垂れた。〝個人的な〟というのはつまりは自分の都合で俺達を振り回したことに対する詫び金のようなものなのだろう。俺はそう受け取った。もっとも、皇帝陛下はミミが変な連中に狙われないように手を尽くしたのだろうから、そこまで恨みには思って――いや、こいつは絶対に個人的な楽しみもバッチリ優先してたわ。でも金くれたから全部水に流すわ。俺は大人だからな。

銀河帝国の皇帝ともなれば頭を下げて謝罪することなどそうそうできない。というか、されても困る。すごく困る。きっと皇帝陛下の権威に傷をつけたと大騒ぎになること間違いなしだからな。

そこで皇帝陛下は金という実にわかりやすいもので誠意を示したというわけだ。金ほど誠意を可視化できるものはそうそうない。それも５０００万エネルとくれば大金だ。まぁ、大伯父としてミミのことを頼む、という思いも多分に込められているのだろうと思うが。

「うむ、今後も励むが良い」

そう言って皇帝陛下は満足そうに頷き、謁見の間から退出していった。この儀式を終えてやっと俺達は自由の身となったわけだ。

☆★☆

「やれやれ、これでやっと帝城からおさらばできるな」
「ヒロ様は大変でしたね、本当に色々と」
「私達は最後の航宙戦の時以外はのんびりしてただけだったけどね……まぁ、貴重な経験ではあったわ」
「皇女殿下とお友達になれましたからね！」

クリシュナの発進準備を進めているミミがそう言って笑顔を浮かべる。
御前試合終了の式典が終わった後、俺達は早々に帝城を去ることにした。元々御前試合に参加するために帝城への逗留を許されていたので、御前試合が終わった以上は早々に御暇するのが良いだろうと考えたからだ。
下手に長逗留して何か帝室絡みの面倒に巻き込まれないかという心配もあった。そんなことはそうそう起こらないと思うが、何せ俺達だからな……！
そういうわけで俺達は諸々の手続きを速攻で済ませて今まさに帝城から飛び立つところである。まずは一度グラキウスセカンダスコロニーに戻り、整備士姉妹を拾ってこようと思っている。急に決まった御前試合のせいで半ば軟禁状態になったからな。二人はこの九日間絶賛放置プレイ状態だったのだ。まぁ、メッセージアプリでちょくちょく連絡は取っていたし、二人も見た目はともかく子供ではないからそれほど心配はしていないのだが。

「とりあえず、船に戻ったら再度帝都への降下手続きを進めつつのんびりしたいな」
「そうですね、クリスちゃんのお屋敷にも行かなきゃならないですから」
「手続きの間に戦闘ボットの手配を進めると良いと思うわ。セレナ中佐に連絡を取らないとね」
「そうだな、セレナ中佐に約束を果たしてもらわにゃならん」
「恐らくメディアからの接触もあるので、その対応もしなければならないでしょう」
「それもあったか……なんとかバックレらんねぇかなぁ」
ティーナとウィスカの立場もあるし、そういうわけにも行かない

か。面倒くさいな、全く。
「やることは盛りだくさんね。せめて何事もなく万事スムーズに事が運ぶことを祈りましょうか」
「無理じゃないかなぁ……」
「無理そうですよね……」
「最初から諦めるのはやめなさいよ……」

三者三様に溜息を吐く。

「何かあったとしてもご主人様達なら乗り越えられるでしょう。今までのように」
「だと良いけどな」

降り掛かってくるトラブルが毎回毎回俺達の手に負えるとは限らないからなぁ。

「ヒロ様、離陸許可が下りました！」
「よぉし、じゃあ行くか。準備は良いな？」
「はいっ！」
「ええ」
「いつでも」
「じゃあ、発進だ。目標、グラキウスセカンダスコロニー」
「はい、コース設定します」
「ジェネレーター出力、巡航モードに移行。進路クリア」
「ドッキング解除。クリシュナ、発進する」

クリシュナが姿勢制御スラスターの推力でふわりと浮き上がり、メインスラスターの噴射によって加速を始める。艦首を空に向けたクリシュナはぐんぐんと加速して高度を上げていくが、慣性制御装

置の働きもあってコックピット内の人員に掛かる負担は驚くほど少ない。地球に居た頃に乗ったジェットコースターより遥かにマシなレベルだ。
やがてクリシュナは帝都の大気圏を脱出し、宇宙空間に到達した。
「重力圏外に出たほうが安心するようになるとはなぁ……」
「あはは、私も正直帝都にいるよりも宇宙に出ていたほうがホッとしますね」
「私もよ。揃いも揃って傭兵生活にどっぷり頭まで浸かってるってわけね。メイはどう？」
エルマに話を振られたメイは一度目をパチクリとさせてから首を傾げ、少し考えてから口を開いた。
「私にはよくわかりません。しかし、皆様方と一緒に過ごすのは……そう、心が安らぎます」
「心が安らぐね、まったくもって同感だ」
「ですね。綺麗なドレスを着て皇女殿下とお茶を飲むのも楽しかったですけど、やっぱり私の居る場所はここなんだなって思います」
メイの言葉に俺だけでなくミミも同意する。
「それじゃあ帰りましょうか。私達の我が家ってやつに」
「そうだな。よし、飛ばすぞ！」
俺はそう言ってアフターバーナーを噴かし、クリシュナに光の尾を引かせるのだった。

#195　ダレインワルド伯爵家帝都屋敷の朝

何かが寝床に入ってくる気配で目が覚めた。

瞼越しに優しい日差しを感じながら寝床への侵入者を両手で捕まえ、モゾモゾと身を捩る侵入者をギュッと抱きしめる。すると、抱きしめられた侵入者が途端に大人しくなった。侵入者の身体から温かな体温が伝わってきて、俺は再び微睡み始める。

「おはようございまーす。あれ？　ヒロ様ー？」

「んー……？」

んん？　侵入者はミミかと思ってたんだが……？　エルマはこういうことはしないし、姉妹なら二人で来るはずだし……抱きしめた侵入者の身体のあちこちを触って確かめる。身体の大きさはミミとあまり変わらないが。

「んっ……」

ふにっと柔らかい感触が俺の手に伝わってくる。しかしその大きさはミミとは比べるべくもない。うん？　そう言えば俺が寝ているここはどこだったかな？

「えっと……一時間くらい後に起こしに来ますか？」

遠慮がちなミミの声に一気に意識が覚醒する。俺は冷や汗が噴き出してくるのを感じながら自分が寝ていたベッドの布団をガバッ、と引っ剥がした。

「や、優しくしてください……いえ、少しくらいなら荒々しいのも……」

ベッドの中には頬を赤く染め、潤んだ瞳で俺を見上げてくる少女が一人。

「クリス！？　クリスナンデ！？」

俺の悲鳴が屋敷――ダレインワルド伯爵家の帝都屋敷に響き渡――。

☆★☆

らなかった。いやぁ、流石は貴族の屋敷。防音が完璧で助かったな。

「悲鳴を上げるなんて酷いです」

「だからごめんて」

クリスが頬を膨らませてプンプンと怒っているが、申し訳ない気持ちと一緒に可愛いなぁという感想が出てきてしまう。まぁ、クリスも本気で怒っているというわけでは無いようですぐに機嫌を直してくれた。

俺達は今、帝都のダレインワルド伯爵家の屋敷に滞在している。

御前試合を終えて一度グラキウスセカンダスコロニーへと戻った俺達は目が死んでいる整備士姉妹を拾って再度帝都へと降下。ダレインワルド伯爵家に滞在しながら帝都でこなすべき仕事を片付けていた。

俺が御前試合で有名になったからか、それともゲートウェイの通行権を得たからか、それともプラチナランク傭兵になったからかゴ

ールドスターが効いたのか。帝都への再降下申請は思いの外簡単に通った。

「しかしアレだ。ああいうのはやめような、マジで。俺の心臓が保たないから」

「ドキドキしましたか？」

「ドキドキしすぎて止まるかと思ったわ」

マジで洒落にならないからな。

クリス――クリスティーナ・ダレインワルドはダレインワルド伯爵家の唯一の跡取り娘である。

現在のダレインワルド伯爵家当主はアブラハム・ダレインワルド――彼女の祖父だが、その跡継ぎであったクリスの父はクリスの母親共々叔父に謀殺され、跡取り争いのすったもんだの末にその叔父も当主であるアブラハムに処断された。

その跡取り争いに俺達クリシュナのクルー偶然関わる事になり、その際にクリスと暫く一緒に行動したのである。その縁でクリスとは……まぁ、その、友好的というか、一言では言い表せないような絆を育むこととなり、ダレインワルド伯爵家とも浅からぬ縁を結ぶことになった。

ちなみにクリスは黒髪と、限りなく黒に近い至極色の瞳を持つ美少女だ。身長はミミと同じかちょっと低いくらいで、体型は……うん、今後の成長に期待といったところか。そんな彼女からは過分な好意を寄せられているわけだが、流石に手は出していない。

何せ相手は伯爵家の令嬢で、しかもミミと違ってまだ未成年だ。俺にだってそれくらいの理性と分別はある。

「あはは……私もびっくりしました」

そう言って俺達と一緒に歩いているのはミミである。元コロニー民の普通の女の子――と思いきや実は祖母に当たる方が現皇帝陛下の妹君であるということが判明した。普通に見える子が実は一番の爆弾だったというアレである。

ミミに関してはなんというか色々と手遅れだったので、場合によっては帝国と真正面から喧嘩をする覚悟もしていたのだが、皇帝陛下は実に話のわかる方で、事実を伏して今のまま彼女が傭兵として自由に生きられるように色々と取り計らってくださった。

そのために御前試合が行われ、俺が滅茶苦茶目立つことになったのは……まぁ、然るべき対価ということで受け容れようと思う。

身支度を整えるためにミミとクリスの二人と別れ、洗面所へと向かうとそこには丁度エルマが居た。彼女はもう身支度を整え終えたらしい。

「おはよう、エルマ」

「おはよう、ヒロ。よく眠れた？」

「よく眠れたが、目覚めがショッキングだったな」

「？」

首を傾げる彼女の白銀色の髪の毛から尖った耳がぴょこんと飛び出している。彼女は傭兵歴五年のベテラン傭兵であると同時に、ウィルローズ子爵家の令嬢でもある。これも帝都を訪れて初めて判明したことであったが、エルマの出自がどこかのお嬢さんであろうということはその前に何となく予想がついていたので、ミミほどには驚きは無かった。

まぁ、極度のシスコンである彼の兄にいきなり剣を突きつけられたり、可愛い娘を傷物にしやがってと彼女の父にキレられかけたが、エルマのお母さんとお姉さんが俺達の味方をしてくれたことによって彼女の父は封殺され、シスコンの兄は御前試合で俺と剣を交えた末に俺とエルマとの仲を認めてくれた。めでたしめでたしである。

「な、何よ？　じっと見つめたりして」
「エルマは今日も美人だなと」
「もう……朝から何よ」

エルマが顔を赤くしてテシッとゆるく俺の腕を叩いてくる。彼女を本気で怒らせると殺人的なサブミッションで襲いかかってきたりするが、こういう時にはちゃんと手加減をしてくれるので本当にエルマは可愛い女である。ただし本当に本気で怒らせてはならない。今なら格闘戦でエルマとも良い勝負ができるかもしれないが、反応速度はともかく単純な筋力では俺は彼女には敵わないのだ。
ササッと身支度を整え、屋敷のダイニングへと足を運ぶと、ミミ達だけでなく耳の部分に特徴的なメカニカルパーツのついているメイド服の美女も待っていた。どうやら朝食の用意をしてくれていたらしい。

「おはよう、メイ」
「おはようございます、ご主人様」

無表情のまま彼女がペコリと頭を下げる。彼女はメイド型のアンドロイド――メイドロイドと呼ばれる存在である。黒く艶のある髪、紅いフレームの眼鏡の奥に光る意志の強そうな瞳、シックなヴィクトリアスタイルのメイド服、そして大きさはミミほどではないものの、形の良い胸……それら全ては俺がデザインしたものである。
はい、ぼくのかんがえたさいきょうのめいどさんです。金にあかせて彼女のボディは全て最高級のカスタマイズが施されており、その戦闘能力は一般的な戦闘ボットを軽く上回る。

「あの二人は？」
「死ぬほど疲れているから起きるまで放っておいてくれと言われて

おります」
「さようか……」

スペース・ドウェルグ社からの出向という形で船の整備全般を請け負ってくれている整備士の姉妹が居るのだが、まだ寝ているらしい。なんだか知らんがどうも帝都のスペース・ドウェルグ支社の連中とは折り合いが悪いみたいなんだよな。流石に俺に迷惑をかけると不味いとわかっているようで、俺が彼女達をメカニックとして帝都に連れて降りるという話をしたらすぐに解放されたようだが。とにかくあの二人は暫く放っておいてやるとするか。

「まずは朝食を頂くとするか。伯爵は？」
「お祖父様は所用で帝城に出仕しています。帰りは今日の夕方頃という話なので、晩餐はご一緒できると思いますよ」

俺の質問にクリスが答えてくれる。なるほどね、伯爵閣下はお忙しいらしい。貴族様というのも案外大変なのかもしれないな。

「そうか、それじゃあ夕方には戻るとしよう。朝食を終えたら軽く身体を動かして、それから買い物に行こうか。昼はどこか美味しいところで食べようか」
「はいっ！　良さそうなところを探しておきますね！」

美味しいものを食べることに目がないミミが目をキラキラと輝かせる。もしかしたら帝室を飛び出したミミのお祖母さんもこんな感じで美味しいものや冒険に目がなかったのかもしれないな。

「お昼ごはんに思いを馳せるのも良いけど、まずは朝ごはんをしっかり食べましょう」
「はいっ」

エルマとミミのそんなやり取りを見ながらクリスが目を細めている。もしかしたら海洋リゾート惑星で一緒に過ごした日々を思い返しているのかもしれない。

「朝食を頂こうか、クリス」
「はい、ヒロ様」

彼女とずっと一緒にいることはできないが、その分一緒にいる間に少しでも多くの思い出を作ってやるとしよう。まぁ、今後はゲートウェイを自由に使える分、クリスに会うのもそんなに難しくはなくなるんだけども。

#195　ダレインワルド伯爵家帝都屋敷の朝（後書き）

ツシマ買いました（ °ω °）（今からやります

#196　最新鋭技術

クリスの屋敷の庭で軽く……軽く？　まぁ怪我をしない程度にメイと剣術の練習をして、屋敷内にある訓練場で各種トレーニングを終えた頃にやっと整備士姉妹が起き出してきた。

「ふあぁ……はよーさん」
「ごめんなさい、寝坊してしまって」

あくびをしているのが姉のティーナ、申し訳無さそうにしているのが妹のウィスカだ。二人の見た目はクリスと同じか、或いはそれ以上に幼く見えるくらいなのだが、実のところ俺とほぼ同年齢（タメ）の大人の女性である。

何故そんな合法ロリな見た目をしているのかと言うと、彼女達はファンタジー世界でお馴染みのドワーフという種族なのである。このＳＦ世界のドワーフの女性は団子鼻の愛嬌のある顔つきとか女性でも髭が生えているといった感じではなく、見た目は人間の少女と変わらない合法ロリな見た目なのだ。

ちなみに二人は双子の姉妹で、似非関西弁のようなドワーフ弁で話す赤い髪の合法ロリがティーナ、礼儀正しく真面目な青髪の合法ロリがウィスカだ。二人とも見た目はただの美少女だが、見た目に反して物凄い怪力の持ち主なので不埒な思いを抱いて近づくと多分酷い目に合う。

「気にするな。朝飯どうする？　今食うと外出先での食事を堪能するのが難しくなると思うが」
「よろしければ甘いミルクティーをご用意いたしましょうか？」
「お願いするわ」

「ありがとうございます」

メイがテキパキと整備士姉妹にお茶の用意をし始める。とりあえず甘いミルクティーで済ませておいて、後から一緒にお昼ごはんを食べようというわけだ。

「買い物なぁ、どこ行く？」

「うーん、服とか？」

「この前ドレスは買いましたよね？」

「そういうのじゃなくて、普通の服よ。帝都なら最新鋭技術（エッジテック）の素材を使った良い服が色々売ってるし、注文もできるわよ」

「普通の服で良くないか？」

エッジテックの服とか言われてもピンとこない。ああ、そういや前にエルマとミミ用に耐レーザー素材の下着とか買ったっけ。ああいうのか？

「同じデザインでも最新鋭素材（エッジマテリアル）の方が着心地が良かったりするし、傭兵向きの素材ってことなら耐レーザー素材とか防刃素材とか、自動で止血や治療をしてくれる医療ナノクロースとか、他にも色々な効果を持った素材があるわよ」

「ふーん……まぁ面白そうだし見に行ってみるか。気に入ったら買えば良い」

「最新鋭素材（エッジマテリアル）の服なんていくらするんや……」

「今ら私達でも買えると思うよ、お姉ちゃん」

ティーナがドン引きしているが、ウィスカの言う通り今の彼女達ならそれくらいの買い物は余裕でできると思う。なんだかんだでそれなりに二人にもボーナスを支給しているからな。

彼女達はクリシュナやブラックロータスの正式なクルーというわ

けではなく、ブラックロータスの製造元であるスペース・ドウェルグ社から出向してきている技術者だ。彼女達がブラックロータスに出向してくる経緯は少々複雑なのだが、まぁ最新ロットの運用調査とスペース・ドウェルグ社からの謝罪の証みたいなものだ。うん、色々あったんだ。

☆★☆

「いやー、良い買い物だった」

一時間後、俺達は最新鋭技術（エッジテック）製品を販売する店が集まっている帝都のショッピングモールに到着し、買い物を楽しんでいた。

「せやろか？」
「せやで」

俺の横でティーナが首を傾げているが、俺としては大満足だ。俺が購入したのは最新鋭技術（エッジテック）満載の個人用防護膜（パーソナルシールド）発生装置である。細長い３５０ｍｌ缶くらいの大きさの装置で、エネルギーパックを二つ装着することによって出力可変型のシールドを張ることができるものだ。

最低出力なら不快かつ危険な毒や病原体を持っている可能性がある未開拓惑星の小虫やヒルめいた小動物から長時間身を守ることができるし、出力を上げればレーザーライフル程度の出力のレーザー攻撃を防ぐこともできる。無論、出力を上げれば稼働時間は短くなるが、予備のエネルギーパックを持ち歩いていれば換装も容易だ。

「でもそれ、どんな時に使うん？」
「そりゃ白兵戦の時とか、未開拓惑星に降り立った時とかだろう」
「そんなことあるん？」

「……あるかもしれないじゃないか」

見上げてくるティーナの視線から目を逸らす。前にも使うかどうかわからない多機能迷彩マントを買ったりしたが、結局身につけることは一度もなく、未開封のままブラックロータスのカーゴスペースの片隅で埃を被って……いや、メイが掃除してくれているから埃は被ってないけど。

「細かいことは気にしてはいけない」
「兄さんにしてみたら屁みたいな出費かもしれんけど、無駄遣いはようないで」
「無駄じゃないから。もしもの時には役に立つから」
「そういうことにしとくわ。ティーナちゃんは優しいからな」
「ティーナチャンヤサシイヤッター！」
「あはは、めっちゃ棒読みやん」

そう言いつつも楽しそうにティーナが笑う。

「それにしても、あっちに同行しなくてもええの？」
「ティーナの前で言うのもなんだが、女性の買い物は長いからな……特に服とかの買い物は」

今、俺はティーナと二人でショッピングモールを歩いている。俺とティーナ以外の面々は揃って最新鋭素材（エッジマテリアル）を使ったブティックなどを行脚している真っ最中である。俺とティーナはそこから抜け出して面白そうなものを探してこうして歩き回っているというわけだ。

「せやなぁ。ウィーもオシャレさんやから、服とか選び始めるとめっちゃ長いねん」
「ティーナは服は買わないのか？」

「ウィーに任せてるから大丈夫やで。うちら、スリーサイズから何からばっちり同じやから」

そう言ってティーナがビシッと親指を立てながらバチーンと下手なウィンクをキメる。お前それで良いのか。

「そう言う兄さんは服買わんの？」

「俺は後で最新鋭素材（エッジマテリアル）の話を皆から聞いて、今着てる服と同じデザインで発注するから大丈夫」

「兄さんの部屋のクローゼット、同じような服が何着も並んでそうやな」

「ははは」

本当にそうなっているので笑って誤魔化しておく。だって楽だし着心地が良いし収納とかが機能的な上に一目で傭兵とわかるから便利なんだよ、この服。

と、ティーナと二人でいろいろな店を冷やかしていると俺の胸元からコール音が鳴り始めた。ミミ達の買い物が終わったのかな？　思ったよりずいぶん早いな？　と考えながら携帯情報端末を取り出し、画面に目を向ける。

「兄さん、顔、顔」

どうやら無意識にすごい顔をしていたらしい。携帯情報端末に表示されている名前はミミでもエルマでもメイでもなく、セレナ少佐――昇進したから中佐か。セレナ中佐の名前だった。

「はい、こちらヒロ」

『お久しぶりですね、キャプテン・ヒロ。その後大事無く過ごせているかしら？』

「お陰様で。今はダレインワルド伯爵家の帝都屋敷に逗留してますよ。それで、何かありましたか？」
『いきなり本題ですか？　単刀直入なのも悪くないですが、貴方もゴールドスター受勲者のプラチナランカーなのだから、もう少し余裕を持っても良いと思いますよ』
「そいつは失礼、精進します」

窘めてくるセレナ中佐に素直に謝っておく。

『そうなさい。それで、前に話していた軍用の戦闘ボットの購入に関してなのだけれど』
「ええ、許可が降りましたか？」
『ええ、帝国軍からの許可が下りました。電子証明書をそちらの端末に送っておきますから、都合の良い時に軍用ボットの製造メーカーを訪ねると良いでしょう。証明書を提示すれば問題なく購入できるはずです。あと、私の紹介状も添付しておきます。イーグルダイナミクスはホールズ侯爵家からの出資を受けていますから、紹介状を見せれば便宜を図ってくれるでしょう』
「了解。感謝しますよ、中佐」
『これで結晶戦役の借りは返しましたよ。今度は帝都で私が色々と骨を折った貸しを返してくださいね？』
「へいへい、お手柔らかに頼みますよ」
『ふふっ……それではまた』

通信が切れる。ふふっ、じゃねぇよこええよ！　一体どんな面倒事を押し付けられることやら……ゲートウェイを使えるようになったから、どこからでも気軽に呼び出されそうで怖いな。まったく。

「午後からもショッピングの予定だったが、予定変更だな」
「戦闘ボットを買いに行くんやな。楽しみやねー」

新しいメカ――それも最新鋭の軍用戦闘ボットを弄れるようになるのが嬉しいのか、ティーナが物凄くワクテカしている。
実は俺も楽しみにしている。戦うロボットが嫌いな男の子なんていないからな！

#196　最新鋭技術（後書き）

ゴーストオブツシマタノシイヤッター！―（∵3」∠）―（なお睡眠時間

#197　イーグルダイナミクス（前書き）

頭痛がペインで遅れました（，　。ω　。、）

#197　イーグルダイナミクス

帝都の高級レストラン――なんか寿司バーみたいな感じだった――で食事を取り、食事中にメイにイーグルダイナミクスとのアポイントメントを取り付けて貰って、そのままイーグルダイナミクスの帝都支社に向かうことにした。
イーグルダイナミクスの帝都支社は帝城の軍用区画にほど近い場所に存在しており、かなり立派な構造体を支社としているようだ。

「地下に工場があるそうです」
「ほぉ、ここで製造もしているのか」

イーグルダイナミクスの構造体の前に降り立った俺は構造体を見上げる。うん、デカいな。構造体の入り口には警備用の戦闘ボットが待機しており、構造体の前に設けられている広場には大小様々な戦闘ボットが展示されている。

「わぁ、沢山ありますね！　どれも強そうです！」
「そうですね。普段はあまり見ないものばかりなので興味深いです」

ミミとクリスが展示されている戦闘ボットを仲良く眺めている姿に目を細めながら、俺も展示されている戦闘ボットを観察する。

「大型のはいらないわよね？」
「そうだな、基本はブラックロータスに移乗攻撃を仕掛けてきた宙賊に対抗するためのものだし」
「或いはその逆に移乗攻撃を仕掛けるためのものよね」
「そういうこった」

そうなると、軽自動車からトラックほどのサイズもある大型の戦闘ボットは選択肢から外れる。軽自動車程度の大きさのものならブラックロータスの主通路は移動できるだろうが、やはり展開に難があるので今ひとつだな。格納庫やカーゴスペースになら展開できると思うけど。

「小型か中型だが……」
「クリスちゃん、これ可愛くないですか？」
「たしかに可愛いです」

そう言ってミミとクリスがしゃがみこんで見ているのは小型タイプの戦闘ボットの中でも標準的な大きさのものだ。小型犬くらいの大きさのもので、耐久力は低いが殺傷能力十分なレーザーガンを装備している。仕様によっては敵に突撃して自爆するようなのもいる。割と厄介なタイプの戦闘ボットである。

「うーん、特化させるか汎用性を取るかやな」
「特化させたほうが性能は高くなるけど、汎用性の高い機種も捨てがたいよね。あ、お姉ちゃん。これ面白いよ」
「ほーん、モジュール換装タイプか」

ティーナとウィスカは中型の戦闘ボットを中心に見て回っているようだ。やっぱり導入するならこの辺だよなぁ。中型と呼ばれるのは概ね大型犬サイズから大型二輪車程度の大きさだ。人型なら２．５ｍ弱くらいまでかな。

「やっぱり人型に近いほうが売れ筋なのかね？」
「どうなのかしらね。私は人型に拘る必要はないと思うけど」
「ふぅむ、それもそうか……？」

確かに無駄に背を高くしてもな。見た目はヒロイックになるが、実際には四足歩行獣の背中に火器を搭載したようなタイプの方が合理的なんじゃないかと思う。

「でも室内戦というか白兵戦の場合は自由に動き回れるスペースもないし、二足とか四足とかの形状よりもシールドとか耐久性とか火力を重視したほうが良いんじゃないかな」

「それは確かにそうかも知れないわね」

エルマが頷き、中型重戦闘ボットの展示スペースへと移動する。この辺りの製品は機動性は今一つだが、装甲が頑丈だったりシールドの展開機能を持っていたりする機種のようだ。火力面もレーザーライフル級の火器を二門とグレネードランチャーを装備していたりしてなかなかに充実している。

「狙い目はこの辺りかね？」

「あまり鈍重過ぎるのもどうかと思うわよ。展開が間に合わなかったら意味無いんだから」

「それもそうだな」

と、話しているうちにスーツを着たイーグルダイナミクス社の社員らしき人達が俺とエルマの所へと歩いてきた。ミミとクリスも同行しているようだ。

「アポイントメントをお取りになられていたキャプテン・ヒロ様ですね？　私、イーグルダイナミクスのピジョーと申します」

「これはどうもご丁寧に。キャプテン・ヒロです。こちらはクルーのエルマ」

「はい、ミミ様とクリスティーナ様より伺っております。お会いで

きて光栄です」

ピジョーと名乗った中年男性はサラリーマンの割には妙に体格の良い中年男性であった。それなりの格好をさせれば軍人とか傭兵と名乗っても違和感が無さそうな人だ。

「よろしければあちらの社屋へ。最新機種なども併せてニーズに沿ったご提案をさせていただきます」

「そうさせてもらおうか。ティーナ！　ウィスカ！　中に入るぞ！」

整備士姉妹を呼び、ピジョーの案内でイーグルダイナミクスの社屋へと向かう。そんな俺達の後ろをメイがしずしずとついてくるのだが、イーグルダイナミクスに着いてから彼女はずっと無言だ。

「メイも意見を出してくれると嬉しいんだが」

「……承知致しました」

何か躊躇うような気配があったのが気になるが、メイの表情はいつも通りだ。俺は内心首を傾げながらもピジョーの後を追って社屋へと足を踏み入れるのだった。

☆★☆

イーグルダイナミクスではまさに下にも置かない歓迎を受けることになった。これがセレナ中佐からの紹介状の効果なのか、それとも伯爵令嬢や子爵令嬢であるクリスやエルマが同行している効果なのか、あるいはゴールドスター受勲者にしてプラチナランカーである俺に対してのものなのかはようとして知れないが、まぁ良い待遇を受けて嫌な気持ちになることはないよな。

「めっちゃＶＩＰ待遇やん」
「私達まで良いんでしょうか……？」
「そのうち慣れますよ」

落ち着かない様子のティーナとウィスカをミミが菩薩のように穏やかな表情で宥めている。いや、それは宥めているのか……？　どちらかというと諭していると表現した方が正確かもしれない。

「今回は当社の軍用戦闘ボットをご購入頂けるとか」
「ああ、そのつもりだ。整備システムも含めて一通り購入しようと思っている」
「それはそれは……当社は帝国航宙軍への納入実績も豊富です。きっとご満足頂けるかと思います」

ピジョーが満面の笑みを浮かべながら揉み手で何度も頷く。わかりやす過ぎる程にわかりやすい態度に若干不安を覚えるが、まぁホールズ侯爵家からの紹介状を持ってきた俺に対して阿漕な真似はしないだろう。そんなことをしたらホールズ侯爵家の顔を潰すことになるからな。

「外では様々な機種をご覧頂いたようですが、どのような機種のご購入をお考えですか？」
「宙賊の移乗攻撃に対する備えが主だが、こちらから移乗攻撃を仕掛けることも視野に入れている。そうそう無いと思うが、惑星等に不時着した際にも展開できると良いな」
「なるほど、それでは汎用性の高い中型の重戦闘ボットが良さそうですね」
「そうだな、そう考えていた」

ピジョーの提案に頷く。流石に企業が誇る専門家なだけあって提

案にそつがないな。

「中型の重戦闘ボットは一番選択肢が多いですね。整備・換装システムも一緒に導入されるのであれば、一番のおすすめはこのアルケニーです」

そう言ってピジョーがタブレット端末を操作し、ホロディスプレイにアルケニーという機種の情報を表示する。アルケニーという機種は重厚な四脚タイプの戦闘ボットだった。重厚な脚部の上にはこれまた重厚な感じの上半身が乗っかっており、武器や様々な装備を取り付けることのできる腕型ハードポイントが四つ付いている。バックパックを換装することによって突撃型や防衛型、通信特化型や隠密斥候型など様々なタイプの特殊機能を持たせられるようだ。

「なるほど……カッコいいな」

「かっこええな」

「可愛くはないですね」

ミミ、流石に重戦闘ボットに可愛さを求めるのはいかがなものかと俺は思うぞ。

「ははは、私達にとっては可愛い子どものようなものですけどね。このアルケニーの軍用タイプは小型ジェネレーターを搭載しているため、無補給でかなり長時間稼働することが可能です。出力にも余裕があるので、装備もかなり自由に選べるようになっています」

そう言いながらピジョーが様々な装備に換装したアルケニーの姿を表示する。標準的な装備は両腕にレーザーライフル級のレーザーを装備し、サブアームに小型のシールド発生装置を装備したタイプであるようだ。バックパックには小型ミサイルポッドやグレネード

ランチャーを装備している。

「これが標準仕様の装備ですね。敵の攻撃をサブアームのシールドで防ぎながら正確な射撃で敵を殲滅します。腕部レーザーはスプリットレーザーや実弾武器への換装も可能です。また、バックパックユニットもミサイルランチャーやグレネードランチャーのような攻撃的なものだけでなく、通信装置や対電子戦装備を搭載したコマンダーパック、医療ナノ等の医療装備を搭載したメディックパック、他の機体の応急修理などを行うことが可能なリペアパック、高度な三次元機動を可能とするアサルトパック、光学迷彩などの電子欺瞞装置を搭載したステルスパックなども用意されています」

「なるほど、そうなると機体の数が増えれば増えるほど採れる戦術が広がるわけだ」

「はい。それに非戦闘時はメインアームやサブアームを使用して荷運びなどの軽作業や陣地構築なども行えますし、ペイロードにも余裕があるので行軍時に補給物資を運ばせることも可能です」

「一機辺りの値段はいくらなんだ？」

「標準価格ですと一機7万エネルですね。無論、ホールズ侯爵家からの紹介状もお持ちいただいておりますし、整備・換装システムを含めて複数台購入頂けるということであればお値引きさせて頂きます」

「とりあえず十機と整備・換装システムの導入、それと一通りのオプション装備を揃えていくらになるか値段を出してみてくれ」

「はいよろこんで！」

ピジョーが満面の笑みを浮かべて計算を始める。他の機種も含めていくつかプレゼンしてもらって、その上で決めるとしよう。まぁ、こういうのは割とプロのおすすめ通りに買ったほうが良かったりするんだよな。たまに売れ残りの不良在庫を押し付けられたりすることもあるから注意が必要だけど。

#197　イーグルダイナミクス（後書き）

ツシマはクリアしました―（∴3」∠）―（ロケーションは全部埋めた

#198　ダレインワルド伯爵からの依頼

あの後いくつかの機種を見せてもらったが、結局一番最初におすすめされたアルケニータイプの軍用戦闘ボットを購入することにした。決め手は高度な汎用性と、非稼働時に身体を折りたたんで思ったよりも小さくなるという点だ。単純な戦闘能力だけで見るともう少し強力な機種もあったが、そちらは戦闘に特化しすぎていて汎用性に欠けたため購入を見送った。

セレナ中佐からの紹介状効果と十機＋システムまるごと購入のお陰で一体辺りの本体価格は６万エネル弱まで落ち、換装システムとオプション品もまとめて６０万エネル程で購入できた。併せて１２０万エネルといったところか。

「……思ったより安いですね？」

「アカン、ミミまで傭兵の金銭感覚にやられとる」

「ミミさん、１２０万エネルは大金ですよ。一般人の月収は１５００エネルくらいですからね？　年収六十六年分とほぼ等価ですからね？」

「そ、そうですよね？」

ミミがティーナとウィスカに諭されてハッとしている。いいぞ、その調子だミミ。お前もこっち側に来るんだ……こっち側も案外楽しいぞぉ？

「今更ですけど、メイさんの方が戦闘ボットより高性能ですよね？」

「それは間違いないな」

「そうね」

「恐縮です」

俺とエルマがクリスの言葉に頷き、メイが頭を下げる。

「それなら、メイさんと同じような高性能のメイドロイドを揃えたら良かったのでは？」

「うーん、そういう手も無いわけじゃないんだけどな……メイ」

「はい。確かにクリス様の仰る通り、私クラスの高性能なメイドロイドを複数用意するというのも一つの手ですが、私の本体価格は４８万エネル。諸々のオプションや整備装置などを含めると５５万エネルを軽く超えてしまいます。つまり、二体で１１０万エネルを超えてくるということですね。それならば整備システムごと軍用戦闘ボット十体を１２０万エネルで購入したほうが費用対効果は圧倒的に高いのです」

メイが淡々と高性能メイドロイドと軍用戦闘ボットのコスト面、性能面での比較説明を始める。

「更に稼働時間の問題もあります。私のようなメイドロイドは凡そ四十八時間につき二時間ほどのメンテナンスを推奨されています。これは外観や機体性能を保つために必須と言える作業です。また、損傷を受けた場合は製造元企業で修理を受ける必要があります。それに対し、軍用戦闘ボットは明確な損傷を負わない限りは二週間ほどはメンテナンス不要で動き続けることが出来ますし、損傷を受けた場合でも然るべき資材と今回購入した整備・換装システムがあれば修理することが出来ます。こういった整備性、戦闘継続能力などを考えるとやはり純粋な戦闘面では軍用戦闘ボットの方が優秀なのです」

「なるほど。性能ではメイさんの方が遥かに上、しかしその他の点では軍用戦闘ボットの方が頑丈で、コストが安く、運用も容易と」

「クリスやメイ、ティーナやウィスカの護衛にはメイの方が圧倒的

に適任だけどな。戦闘ボットなんて連れてコロニーや帝都は歩けないだろ？」
「それはそうですね。威圧感が強すぎますし」
「というか、私は？」
「俺とエルマに護衛は要らないだろ」

真顔でエルマが聞いてきたので俺も真顔で返してやる。俺とエルマに護衛が必要な場所とかもうそれは普通の状況じゃないから。レーザーと銃弾が飛び交う戦場みたいなもんだから。なんだかエルマが納得できないといった感じの表情を浮かべているが、華麗にスルーしておく。

「まぁ、用心のために買っただけでそうそう使う機会は無いと思うけどな」
「そうね。宙賊の移乗攻撃とかそうそう受けるものでもないし」
「そうですね。ご主人さまのブラックロータスにそのような狼藉を働くことを許すつもりはありません」

クリスが「なら、どうして戦闘ボットを？」と言いたげな表情をしていたが、そこはそれ。俺達のような不運（ハードラック）の持ち主ともなればできる時にできるだけの備えをしておいたほうが何かと安全なのだ。

「無事に商談も終えたし、屋敷に戻ろうか。そろそろ丁度よい時間だろう」
「そうですね、そろそろお祖父様が屋敷に戻ってくる頃だと思います」

☆★☆

「依頼がある」

「お祖父様っ！」

挨拶もなしに本題に入ったダレインワルド伯爵にクリスが怒って声を上げる。

ダレインワルド伯爵家の屋敷に戻り、ダレインワルド伯爵と顔を合わせるなり挨拶もなしにいきなり仕事を依頼された。何を言っているかわからないと思うが、俺にも意味がわからねぇ。単刀直入ってレベルじゃねーぞ。

「いや、別に怒らなくても良いけど……それにしても唐突だな」

「うむ」

そう言って頷き、ダレインワルド伯爵が軽く手を振るとホロディスプレイが立ち上がり、星系マップらしきものが表示された。表示されている星系名はコーマット星系とある。

「コーマット星系っていうと、確かデクサー星系の隣だったよな」

「そうだ。予てよりテラフォーミングを進めていた居住可能惑星のコーマットⅢのテラフォーミングがこの程完了した。ダレインワルド伯爵家は入植を始めることになる。貴殿に入植船と入植後の護衛を頼みたい。コーマットⅢに何か問題が発生した際のトラブル解決もな」

「入植の護衛か……宙賊への対応は護衛の基本給だけで構わないが、コーマットⅢの惑星上で発生したトラブル解決には別途料金を貰う。あと、コーマットⅢに突撃降下を行う宙賊の全てに対応するのは不可能に近いぞ」

クリシュナとブラックロータスが担当できる範囲なんぞたかが知れている。惑星に降下を試みる全ての宙賊を俺達だけで防ぐことなど到底不可能だ。

「無論それは承知している。ダレインワルド伯爵家の戦力も勿論出す。そこに傭兵として加わってもらいたいという話だ」
「報酬次第だな。プラチナランカーの雇用相場っていくらだったっけ？」
「一日２０万エネルね」
「では一日３０万出そう。その他の別途料金に関しては最低１００万を保証し、内容により増額する」
「報酬はその条件でＯＫ。拘束期間は？」
「最低一ヶ月、最長で三ヶ月。それ以上は再契約を必要とするという内容でどうだ？」
「最長三ヶ月ね、ＯＫ。ミミとエルマは？」
「私もＯＫです！」
「私もよ」
「ではそういうことで。依頼は傭兵ギルドを通してくれ」
「うむ、すぐに手続きをしよう」

契約成立という意味を込めてダレインワルド伯爵と握手を交わす。

「クリス、お前には入植船団の指揮を任せる。見事入植を成し遂げてみせよ」
「はい、お祖父様」

話の流れを静観していたクリスが静かに頷く。なるほど、これは将来領主として働くクリスの研修の場でもあるわけだ。そこに俺達という存在を投入する辺り、言葉は少ないけどダレインワルド伯爵なりに気を遣っているわけだな。

「クリスのお務めを無事果たさせるためにも頑張らないとな」
「はい！」

「そうね」

ミミが満面の笑みを、エルマが優しげな微笑みをクリスに向ける。しかし、こうなるか……こりゃ早速購入した戦闘ボットが役に立ちそうだな。

ちなみに、整備士姉妹は貴族オーラが逆っているダレインワルド伯爵を前に置物と化していた。

クリスにはある程度慣れたようだが、やはり伯爵のような生粋の貴族を前にすると未だに固まってしまうらしい。そういう意味ではダレインワルド伯爵の前でもいつもどおりに振る舞うことができるようになっているミミもだいぶ傭兵に染まってきたんだろうなと思う。

「のんびり入植作業を眺めながらの休暇だな」

「そうですね。入植作業ってどんな感じなんでしょうか？」

「私も見たことはないけど条件の良い土地に入植船を降下させて、その入植船を拠点として辺りの開発を進めていくらしいわよ」

にこやかに話しながら俺達三人の意思は恐らく統一されていた。決して危険を予感するような言葉は口走るまいと。しかし希望は儚くも崩れ去る。

「入植初期には入植者や資源を狙った宙賊が現れるらしいですから、気をつけないといけませんね」

クリスがそう言って気合を入れている。その様子を見て俺――というか俺達は三人で天を仰いだり、片手で目を覆ったりして大いに嘆いた。

俺達が言わなかったらクリスが言うんかい、と。

#198　ダレインワルド伯爵からの依頼（後書き）

明日の更新で暫く――二週間を目処に更新を一時停止します！
原稿作業をしなきゃならないんだ！　ゆるしてね！――（：3」∠）
―

#199　出撃準備（前書き）

長らくお待たせしました！
いや、なんというか夏の暑さとかさてぃすふぁくとりーとかえっくすふぉーふぁうんでーしょんずとかが同時に襲いかかってきたので……じわじわと更新再開していくから許してね！ ―（：3」∠）―
（なお前と同じく月曜木曜はお休みです

#199　出撃準備

ダレインワルド伯爵からの依頼を請けた俺達は早速依頼をこなすための準備に取り掛かることにした。準備と言っても、いざという時のために備蓄食料――つまりフードカートリッジを買い足しておくとか、簡易医療ポッド用の医薬品を買い足しておくとか、レーザーガンやレーザーライフル用の弾薬であるエネルギーパックの調達やその他武器の点検や整備、あとは購入した軍用戦闘ボットと換装システムの搬入と導入作業など……結構やることが多いな。

「で、そのクソ忙しい時にメディアが取材を申し込んでくると」

「ほんとごめんな、兄さん」

輸送システムや荷運びボットが慌ただしく荷物の搬出や搬入をしているカーゴ区画でティーナが申し訳無さそうに謝ってきたが、俺は首を横に振った。

「いや、別にティーナとウィスカが悪いわけじゃないし。やんごとなき面倒事も収束してきたことだし、そろそろ義理を果たす時なんだろうな」

やんごとなき面倒事は本当に厄介なアレだったよ。俺は船での戦闘はともかく、本来生身での戦闘は苦手だったというのに……今じゃジェ〇イの騎士やシ〇の騎士とも斬り結べそうな一端の剣士になってしまった。

いや、でもあいつらのはただの剣技だけじゃなくて謎の力を使った未来予測とか諸々込みの戦闘能力だからな……しかもわけのわからん力で吹っ飛ばしたり、首絞めたり、電撃を放ったりもするし。

俺じゃ多分勝てないな。うん。

「それで打ち合わせとかも必要だと思うが、どういう流れで行くんだ？」

「ええと、連絡先のアドレスを預かってます」

「なるほど、こっちから連絡するわけだ」

こっちの連絡先を教えてないわけだから、まぁこんなものだろう。俺は俺でメディアに対する先入観があるからなぁ。まぁ、一発目の印象が最悪だったのが何もかも悪いんだが。

携帯情報端末を取り出し、ウィスカのタブレットから連絡先のアドレスを受け取って早速音声通信を開始する。

『はい、ワムドです』

携帯情報端末越しに聞こえてきたのは声に張りのある男の声だった。

「キャプテン・ヒロだ。スペース・ドウェルグ社からの出向員、ティーナとウィスカの仲介を受けて連絡した。俺の船を取材したいという話らしいが、詳細を聞きたい」

携帯情報端末越しにガタン、ガラガラ、バサバサというけたたましい音と、口汚い罵声のようなものが聞こえてきた。スピーカーモードにしていたので、音を聞いたティーナとウィスカがびっくりして目を丸くしている。

『し、失礼！　連絡を下さってありがとうございます！　連絡をお待ちしておりました！』

通信の向こうでペコペコとコメツキバッタのように頭を下げている男性の姿を幻視する。前にブラックロータスへと押しかけてきた連中とはかなり雰囲気の違う人物であるようだ。
彼は静かな――少なくともこちらからは雑音めいた他人の声などが聞こえない――場所に移動したようで、先程よりは多少落ち着いた様子で取材について話し始めた。
彼の話を要約すると、今回はスペース・ドウェルグ社だけでなく他のメディアも交えた合同取材のような形になるらしい。各社が自前で撮影機材を持ち寄り、情報交換をしながら取材を進めるという形式を取るそうだ。

「なるほど、まぁ取材の進め方に関してはプロに任せるとして、問題がある」
『問題ですか？』
「ああ、これから俺達はさる貴族家――いや、家名は明かしても良いか。ダレインワルド伯爵家の依頼を受けて動くことになる」
『あー……』

通信機の向こうからワムド氏のなんともいえない声が聞こえてくる。お貴族様関係の仕事をする傭兵の取材となると、メディア側としてもそのお貴族様に話を通さなければならない。当然ながら、その話を通すのは俺ではなくあちらの仕事である。
無論、俺としても完全に知らんぷりとは行かないので顔繋ぎくらいはするが、具体的な交渉はあちらの仕事だ。別に俺にはどうしても取材を受けなければならない差し迫った事情もないからな。ブラックロータス購入時のあれこれでスペース・ドウェルグ社に対する義理はあるが、義務を負っているわけではない。
契約書の内容的にも俺の仕事の邪魔になるような場合は取材を拒否できるという内容になっている。つまり、依頼人がメディアを拒否すれば取材を断る正当な理由になるわけだ。

「俺は取材を受けても構わない。しかし依頼人がそれを是とするかはまた別の話だ。その交渉は当然そちらでしてもらうことになる」
『そ、そこはなんとかお助け頂けると……』
「顔繋ぎくらいはするが、依頼の内容を軽々に漏らすことは当然できん。そちらは頭数がいるのだろうし、力を合わせて頑張ってくれ。今から依頼人に話をしてアポイントメントが取れるかどうか聞いてみる」
『うぅっ……お願い致します』
「ああ、できる限りのことはするよ」

急性胃痛でも起こしたのか、死にそうな声で懇願してくるワムド氏にそう言って通信を切り、すぐにクリスに通信する。

『はい、クリスティーナです。ヒロ様、どうされました？』
「ああ、ちょっと急な話で申し訳ないんだが――」

☆★☆

ワムド氏達とダレインワルド伯爵家との間でどのようなやり取りがあったのかはわからないが、ワムド氏達はなんとかダレインワルド伯爵家から取材の許可をもぎ取ったらしい。

「色々と条件はつけられたみたいやったけど」
「お兄さん達だけでなく、クリスティーナ様の取材も同時にするように言われたみたいです」
「クリスちゃんのですか？」

いつもの朝食――黄色っぽい甘いお粥みたいなやつだ――を口に運んでいたミミがスプーンを手に持ったまま首を傾げた。

「多分、次期当主となるクリスが立派に惑星開発の指揮を執る様子をメディアに取材させて、クリスの名声と権威を引き立てようとしているんじゃない？　幼いながらもバリバリと実務をこなす、れもゴールドスター受勲者にしてプラチナランカーでもあるヒロをしっかりと使いこなして――ということになればクリスも貴族社会では一目置かれるようになるだろうし」
「なるほどー」

エルマの解説を聞いてミミが納得したように頷く。俺も内心で頷く。あの単刀直入大好き爺さんがどのようにワムド氏を始めとしたメディア側の皆様方と交渉をしたのかは気になるところだが、しっかりと自分の――あるいはクリスの得になるような条件を引き出しているあたり、やはり彼は生粋の貴族なのだろう。

「物資の手配やら何やらの進捗はどうだ？　とりあえず、軍用戦闘ボットの導入は今日で片が付きそうだが」
「こっちも今日中に片が付きそうです。仕入れてきた結晶生命体の素材も高値で売り捌けました」
「そいつは重畳。コーマット星系に持っていく商品も見繕っておいてくれ」
「わかりました」

ミミがそう言ってにっこりと微笑む。こうやってミミに交易の実務経験を積ませていって、いずれミミに輸送艦の運営を任せるのも良いかも知れないな。いや、でもそうなると一緒に居られなくなるな。それはダメだ。うん。何か他の方法を考えよう。

「なんか兄さんが百面相しとる」
「何か変なことでも考えているんでしょ」

「失礼な。将来の展望について思いを馳せていただけだ」

そう言って俺は高性能調理機『テツジン・フィフス』特製のモーニングステーキ（のような何か）にフォークを突き立て、口に運ぶのだった。うむ、今日もテツジンシェフの腕は最高だな。これが藻とオキアミめいた生物と香辛料から合成されたものとは到底思えない。

「将来の展望についてはとりあえず横に置いておいて、目の前のことを片付けないとな。今日も一日艦内での作業になると思うが、事故の無いように。今日も一日ご安全に、だな」

間違ってもろくに確認もせずにヨシ！　とかしちゃダメだぞ。まぁ基本は機械に指示を出して機械任せなんだけどな、この世界の物流関係は。たまに設備の整っていないステーションや開発初期の惑星だと作業用のパワーアーマーや、昔ながらのフォークリフトのようなものを使って荷の積み下ろしをすることもあるようだけど。

「せやね。事故には気をつけんと」

「人間砲弾をぶっ放した経験のあるティーナが言うと説得力があるな」

「そうですね、お兄さん」

人間砲弾の直撃を食らった俺がそう言うと、砲弾として投げつけられた経験のあるウィスカが姉のティーナにジト目を送りながら同意した。

「もう……兄さんもウィーもあの件に関しては堪忍してや。反省してます」

「ほんとぉ……？」

「ほんとほんと、この純粋なうちの目を見たって」

じゃれあうドワーフ姉妹を微笑ましい気持ちで眺めながら俺は本格的に朝食をやっつけにかかることにした。ここ数日は穏やかな日々が続いているが、この調子で行って欲しいものだ。

嵐の前の静けさ、なんて言葉が脳裏を過ぎった気がしたが、きっと気のせいだろう。ははは。

#200　コーマット星系へ（前書き）

ファッキンホットで遅れました！（、　。ω。、）（ゆるして

#200　コーマット星系へ

「こうして直接お会いできて光栄です。スペース・ドウェルグ社メディア部三課のワムドです」
「どうも。キャプテン・ヒロだ」

妙に腰の低いワムド氏と挨拶を交わし、握手をする。彼の後ろには同じくドワーフであると思われるスタッフの他に、人間やエルフ、獣人っぽい種族や爬虫類っぽい種族やよくわからない種族――全員一応人型をしている――がいて、なかなかにエキゾチックな連中である。

「彼らが合同取材の？」
「はい。メビウスリング、フォーマルハウトエンターテイメント、ニャットフリックスのスタッフですね。ご紹介させていただきます」

彼らの三社の代表ともそれぞれ挨拶を交わす。

「メビウスリングメディア部二課のアレンです」
「フォーマルハウトエンターテイメントドキュメンタリ部のズィーアです」
「ニャットフリックスのニーアです」

アレンはエルフの男性、ズィーアはまるで炎と見紛うような派手な体毛の獣人っぽいエイリアンで、ニーアと名乗った女性は濃い褐色の肌を持つびっくりするほどの美人であった。某宇宙的恐怖を取り扱うテーブルトークＲＰＧ的に表現するとＡＰＰ１８かそれ以上。エルマも美人だが、ニーアの美人度はエルマよりも上だろう。絶対

に近寄らないでおこうと心に固く誓っておく。申し訳ないが、彼女の相手はメイに任せよう。
スタッフの数は各社五人ずつで、総勢二十名にも及んだ。まぁ、ブラックロータスの収容人数的には余裕である。

「えー、乗船にあたって諸君に伝えておきたいことがある。まず、船の中では俺が法だ。俺が黒と言えば白も黒になるし、その逆もまた然りだ。それが受け容れられないのであれば、船に乗るのは諦めてもらいたい」

メディアスタッフ達は俺の言葉に特に動揺することもなく頷いている。一番最初に突撃してきたスペース・ドウェルグ社の連中と違って彼等は妙におとなしい上にお行儀が良いな。

「次に、船内における君達の行動範囲については制限を設けさせてもらう。具体的に言うと、船員のプライベートスペース及びブリッジ、ハンガー、カーゴスペース、その他ジェネレータールーム等の重要区画への立ち入りはできない。ただ、俺の許可と船のクルーの同伴があればそれらの区画への立ち入りを認める」

行動制限の話を切り出した時には弱冠不満げな雰囲気が感じられたが、許可と案内があれば立ち入り可能という言葉を聞いて不満は収まったようだ。

「あと、ウィスカとティーナは正式には俺の船のクルーではないが、扱いとしては俺の船のクルーと同じ扱いだ。つまり、彼女達はブリッジやハンガー、カーゴスペースへの立ち入り制限はない。ただ、彼女達に君達メディアスタッフの手伝いは一切させない。また、直接的、間接的に彼女達に協力を強いることを禁ずる。そのような行為が発覚した場合、最悪連帯責任で全員脱出ポッドに詰め込んで宇

宙空間に放り出してやるから覚悟するように。俺はやると言ったらやるし、それだけの実力があるつもりだ。全員、御前試合は見てたよな？」

「「「わかりました！」」」

全員が背筋を伸ばして返事をする。うん、良い返事だ。しかし随分と聞き分けが良いな。

「とりあえずの注意事項としてはこのくらいか。出港は明日の昼過ぎの予定だ。船室は各社に三つつずつ、合計十二部屋用意してある。部屋の振り分けは話し合いで決めてくれ。他に何か聞きたいことや要望などがあれば聞こう……とりあえずは無いようだな？　今思いつかないなら後でも良い。今日は船で過ごしてもらっても良いし、外で過ごしてもらっても構わない。ただ、出港時間に間に合わなかった場合には容赦なく出港するから、そのつもりでな」

ちなみに、ブラックロータス滞在中の費用は後でメイに計算してもらって各社に請求することになる。まぁ俺からしたら端金みたいなものだ。結晶生命体の売却益と比べたら誤差みたいなもんだな。

ちなみに、先日の結晶戦役の後で帝国航宙軍の前線基地から仕入れた結晶生命体の素材は仕入れ費用や手数料などを差し引くと凡そ２００万エネルほどの利益が出た。そのうちの３％である凡そ６万エネルがミミのボーナスということになる。暴利じゃないかって？　俺もそう思うが、これがこの世界の標準的な分け前らしいからな。それほどまでに自己資本で船を持つというのは大きなことなのだ。

国や貴族、大企業はこういった貿易船を何十、何百、何千と持って運用しているわけだ。だからそういった連中は俺のような傭兵に払う金を持っているというわけだな。うん。

俺の説明を聞き終えた各社のスタッフは荷物を持ち、メイから各

々の小型情報端末にセキュリティパスを発行して貰ってブラックローータスへと乗り込んで――いや、ワムド氏だけが大きな手荷物を背負ったままこっちに来るな。

「どうした？」
「いえ、一応伝えておこうかと思いまして。今回の取材に派遣されてきているスタッフは基本的に貴族様の取材に対応できるスタッフなのだということを」
「ほう？　妙にお行儀が良いと思ったらそういうことか」
「ええ、まぁ。前にうちの一課がやらかした件については改めてお詫びさせて頂きます」
「別にワムド氏がやらかしたわけじゃないから、謝らくてもいいけどな。だが、謝罪は受け取っておく」
「ありがとうございます」

ペコリと頭を下げてからワムド氏は踵を返し、自分の体と同じくらいの大きさの荷物を背負ってのしのしと歩いていった。その背中を見送りながら俺は彼等への考えを巡らせる。
最初に突撃してきた連中よりも大分お行儀は良いだが、その分油断ならない連中かも知れない。ワムド氏は貴族への対応に慣れている連中だと言っていた。恐らくそれはスペース・ドウェルグ社だけの話ではなく、メビウスリングの連中も、フォーマルハウトエンターテイメントの連中も、ニャットフリックスの連中も同じだろう。
つまりそれは、下手をすればその場で無礼討ちをかましてくるような連中を相手に渡り合って成功を納めてきたスタッフ達だということだ。別に俺達に害意を向けてきたりすることは無いだろうが、気をつけないと何から何まで赤裸々に暴露されかねん。そんな連中と少なくとも一ヶ月は寝食を共にすることになるわけだ。気をつけなければならない。

「気楽な仕事になると思ったんだがなぁ……やれやれ」
人生とはまったくもってままならぬものである。
☆★☆
さて、目的地であるコーマット星系について軽くおさらいしておこう。
コーマット星系は太陽と同じG型主系列星を中心とした恒星系である。複数の惑星とガス惑星で構成されており、小惑星帯には鉱物資源も確認されている。小惑星帯の鉱物資源はありふれた物が殆どで、レアメタルの類などは確認されていないが、埋蔵量が豊富で使い途が多い。そのため、ダレインワルド伯爵家は早々にコーマット星系に採掘精錬コロニーや貿易コロニーを設置し、資源採掘を行っていた。
それに加えてコーマット星系の第三、第四惑星は居住可能惑星としても有望であったため、帝国からの補助も受けながらコツコツとテラフォーミングを進めていたということらしい。そしてこの度、晴れて第三惑星――コーマットⅢののテラフォーミングが完了したと。
「第四惑星の方はどうなっているんだ？」
「環境が寒冷らしくて。居住に適切な環境にテラフォーミングするのにあと十年くらいはかかるそうです。テラフォーミングって大変なんですね」
「星一つの環境を意のままにするわけだからな。大事業だろうさ」
どうやってテラフォーミングしてるのかという技術的な知識は俺には全くわからんけどな。俺の知識だとナノマシンを使って良い感じにしますとかそういう大雑把な想像しかできん。実際には惑星の

環境によってテラフォーミングの手法も色々変わるんだろうな。
それでも数年、数十年、いや数百年だとしても、人が住めない惑星を人が住める環境に造り変えるなんてスケールが大きすぎて想像がつかんね。

「宙賊の動きですが、今までも精錬した金属を狙った宙賊が出没していたそうです、ただ、今後はコーマットⅢへの移民船や居住地などを狙った襲撃、居住地に物資を供給する貿易コロニーへの襲撃、それらの施設に向かう貿易船への襲撃が増加することが見込まれています。それで今回は私達が雇われたということですね」
「当然の話だけど、私達だけでそれら全てに対応することは不可能よ。だからダレインワルド伯爵家は傭兵ギルドを通して私達以外にも大量の傭兵を呼び寄せているし、コーマット星系を守る伯爵家の戦力も増強されているわ。帝国航宙軍からも戦力が派遣されてくるそうよ」
「帝国航宙軍からですかー……」

チラっとミミが俺に視線を向けてくる。うん、何が言いたいのかはわかるよ。今までの経験からすると、十中八九またあの人と顔を合わせることになると思う。何せ宙賊対策だしね。対宙賊独立部隊の活動目的にも合致する。

「シマが被ってるからな……そうと決まったわけじゃないが、まぁそうなるだろうと俺も思っている。もう諦めよう」
「そうですね」
「そうね」

俺達の謎のやり取りにワムド氏達が首を傾げているが、積極的に説明をする気はあまりない。下手に喋ってあることないことを面白おかしく喧伝されても困るしな。

「ダレインワルド伯爵家に直接雇用されている傭兵は俺達だけだ。十中八九馬車馬のように扱き使われると思うが、働けば働いただけ金になる。気合を入れていくとしよう」
「はいっ！」
「ええ、精々稼がせてもらいましょう」
「では、これより出港する。目標はコーマット星系の貿易コロニーだ。出港後、ダレインワルド伯爵家の護衛船団と合流し、ゲートウェイを使用してニーパック星系へと移動。そこからメルキット星系、ジーグル星系、ウェリック星系を経由してコーマット星系に入る」
『アイアイサー』

俺の号令にミミとエルマ、それに後ろで控えていたメイが応え、クリシュナを積んだブラックロータスはグラキウスサカンダスコロニーを出港することになった。
その様子を四つの記録装置が黙々と記録し続けるのであった。

#２０１　記者達との交流（前書き）

気温差ヤバい……―（：３」∠）―（現在気温１６℃、昨日の気温２８℃

#２０１　記者達との交流

「なんだかこう……」
「イメージと違う？」
「ええ、まぁ」

俺の言葉にメビウスリングメディア部二課のアレン――エルフの男性だ――は頷いた。
俺と彼が話をしているのは食堂の近くにある休憩スペースだ。広い空間に座り心地の良いソファや植物が繁茂しているテラリウム、通信だけでなくホロムービーの再生などにも対応した大型ホロディスプレイなどが設置されており、宇宙空間やハイパースペースで長く生活する場合にもリラックスできるように配慮されている空間である。

「傭兵って言ったって四六時中ドンパチしてるわけじゃないからな。寧ろ、移動時間の方が長いと思う。それに、今はダレインワルド伯爵家の護衛船団と一緒に行動しているわけだから、そうそう戦闘に巻き込まれることは無いだろうな」

帝国貴族の護衛船団に手を出すとか完全にアホのやることである。普通の輸送船団よりも遥かに重武装だし、撃破しても撃破しきれずに逃したとしても苛烈な復讐が行われるに決まっているからだ。

「というか、ゲートウェイ周辺は帝国航宙軍が睨みを効かせているし、ダレインワルド伯爵家の船がこの星系を通過することはこの辺りの星系の領主だって承知している。もし他の貴族家の人間が自分の領内を通過している時に宇宙海賊に襲撃されたとしたらそれはそ

の領主にとってとんでもない恥となるわけだ」
「つまり、ダレインワルド伯爵家と行動を共にしている間は何事も起こらないというわけですね」
「そういうこと。まぁ、多分想像と違うってのはそれだけじゃなくて思ったよりも遥かに優雅な生活をしているって意味でもあるんだろうが」
「ははは……」

アレンは誤魔化すように曖昧な笑みを浮かべた。休憩スペースでは俺とアレン以外にもメディア関係者達が寛いでおり、メイは俺の側に控えている。ミミやエルマはメディアの女性スタッフ達と共に食堂でお茶を飲んでいるようだし、ティーナとウィスカは俺の許可を得たスペース・ドウェルグ社のメディアスタッフを連れてハンガーを案内している。

「うちのエルマもそうだし、ティーナとウィスカもそうだったんだが、傭兵って荒んだ生活をしていて、しかもそれを気にしないみたいなイメージがあるみたいだな。他はどうかしらんが、俺はそうは思わない。長い時間を船の中で過ごすわけなんだから、快適かつリラックスできる環境を整えたほうが日々のパフォーマンスは上がるはずだ」
「それがキャプテン・ヒロの拘りというわけですね」
「そうだな。無駄に硬派を気取っても仕方がないし」

構造材そのまま剥き出しの船内より目に優しい壁紙……？　壁材？　や床材を張った船内のほうがどう考えても住み良い環境だし、同じフードカートリッジを使って飯を食うならより美味いほうがお得だ。わざわざ不味い飯を食うこともないだろう。それに堅くて寝心地の悪いベッドよりも柔らかくて快適なベッドで質の良い睡眠を取ったほうが良いに決まっている。睡眠の質は仕事の質に関わるか

らな。

☆★☆

「という感じで、ヒロ様は船内の環境を整えてくれたんですよ」
「なるほど。内装が豪華客船みたいに物凄い感じになっているのは、元を正せばミミさんの功績というわけなのね」
「うーん、それはどうでしょう？　クリシュナの内装は最初からある程度整っていましたし。でも、最高に近い環境にするようになったのは、クリシュナの内装を整えたからだと思います」
「最初にクリシュナに乗った時には私もびっくりしたわよ……小型戦闘艦なのに内装だけは異常に豪華で」

エルマさんがそう言って頭を振る。エルマさんは最初『世間一般の傭兵像』にかなり拘りを持ってましたもんね。私も世間一般の傭兵像というものに関しては知ってましたけど、ヒロ様は『快適になるならそれでいいんじゃね？』みたいな感じでスルッと大金を出してクリシュナの内装を整えてくれたんですよね。やっぱり私はヒロ様が特別なんだと思います。

「ところで話は変わるんだけど、踏み込んだことを聞いても良いかしら？」

ニーアさんが燃えるように輝く橙色の瞳を瞬かせて私の顔をじっと見てきました。なんでしょう？　プライベートな話題でしょうか？

「ミミさんは帝室と――いえ、ルシアーダ皇女殿下の姉妹なの？本当のところを教えて欲しいんだけど」
「あー……そういう話ですか」

私とルシアーダ皇女殿下は本当に似ていますからね。多分、服を入れ替えて黙っていたらほとんど見分けがつかないと思います。ヒロ様なら気付いてくれそうですけど。

「私はルシアーダ皇女殿下の姉妹じゃないですし、皇帝陛下や皇太子殿下との直接的な血縁関係はありませんよ。謁見の前にゲノム検査もしましたけど、間違いないです。本当に偶然似てるだけです」

「本当に？」

「本当です。謁見前に近衛騎士の方々や侍医の方々がわざわざ船まで訪ねてきて検査したんです。いきなりでびっくりましたよね？」

「ええ、突然の来訪で面食らったわね。私も暫く帝都には寄り付いていなかったし、ルシアーダ皇女殿下のお披露目も見ていなかったから、ミミとルシアーダ皇女殿下が瓜二つと知ってクルー一同仰天したわよ」

エルマさんが私に話を合わせてくれる。

うん、嘘は言ってないです。顔も見たことがない父方のお祖母さんは極めて高い確率でセレスティア様という話ですけど。皇帝陛下とも皇太子殿下とも直接的な血縁関係はありませんから。

正確に言えば私はギリギリ傍系親族ということになるそうですけど。ルシアーダ皇女殿下の又従姉妹で、皇帝陛下の姪孫にあたるわけですから。

とは言え、セレスティア様は帝室から出奔した身です。ゲノム検査の結果、私がセレスティア様の孫である可能性はほぼ確実ということでしたが、私がセレスティア様の孫であると証明するものはゲノム情報以外には何も無いわけです。帝室に迎え入れることも可能だと皇帝陛下やルシアーダ皇女殿下は仰ってくださいましたが、それでヒロ様と離れ離れになるのも、ヒロ様を縛り付けるのも嫌でした。だから、私は帝室とは何の関係もない、ただのルシアーダ皇女殿下のそっくりさんです。

「本当、びっくりでしたよね。私なんて辺境コロニーで生まれたただの小娘なのに」
「それもとびきり運が悪い、ね。いや、運が良いのかしら？」
「どうでしょう？　私は今、幸せですけど」
「ミミさんの生い立ち、興味がありますね」

ニーアさんが私の生い立ちという新しい話題に食いついてくる。うん、興味が逸れてくれてよかった。それじゃあ、私とヒロ様の出会いの話をするとしましょう。

☆★☆

「ふぁー……でっかいですねぇ」
「でっかいねぇ」

のんびりと過ごすこと一週間弱。俺達はコーマット星系の交易ステーションに到達し、そのすぐ近くに停泊する移民船団を目の当たりにしていた。移民船はかなり大きい。全長は恐らく帝国航宙軍の戦艦と同じか、それ以上だ。形としては……キノコっぽい？　いや、短小な弾丸型と言ったほうが正確だろうか？

「ジオゲイト社のヘヴィダブル型移民船やね。大気圏突入時はあのまま突っ込んで、大気圏突入後に反転して着陸するんよ。着陸した移民船はそのまま植民拠点になって、最終的には地上で解体されて施設を建設するための資源になるっちゅう話やで」
「着陸後は下部は物資の搬出搬入口、上部は航空機の発着ポートになるらしいですよ」
「へぇ……それが全部で五隻か。じゃあ、五箇所で同時に植民を行なうんだな」

「そして私達はその護衛と支援をするってわけね」
「護衛はともかく、支援ってどんなことをするんですか？」

ミミが首を傾げる。まぁ、ピンとこないだろうな。

「植民惑星の開拓には危険がつきものでな。たまに植民拠点が危険な原生生物に襲われたりすることがあるんだ。そういうのに対する近接航空支援を求められることがあるな」
「きん……？」
「つまり植民惑星の地表に蔓延る原生生物にクリシュナのパルスレーザーを撃ち込むお仕事が依頼されることがある。あと、開拓地を広げるのに邪魔な大岩――というか岩山とか、そういうものを破壊してくれとかな。こっちは滅多に無いが」

わざわざ戦闘艦を使わなくても、そういった地形を好きに弄れる装備を開拓民達は持っている筈だからな。俺達に依頼が回ってくるのはただ邪魔なだけでなく、戦闘艦じゃないと危険だったりする場合だけだ。凶悪な原生生物の巣になってるとか、有毒なガスやら危険で有毒な植物が繁茂してるとか。

「はぁー……色々あるんですねー」
「そうだな。それよりも宙賊の襲撃の方が多いと思うけどな」

植民船の武装は貧弱だ。原生生物相手なら問題ない程度の武装はしているが、宙賊の戦闘艦に対抗できるような装備は持っていない。そして、宙賊は植民船が開拓のために備蓄している物資や、開拓のために植民船から離れた場所に探索に言ったり、資源調査したり、資源採掘したりしている開拓民を狙って植民惑星への降下を試みる。奴らにしてみれば開拓民は体の良いカモだからな。

「交易コロニーで補給を終えたら開拓プロジェクトが開始される。きっと忙しくなるぞ。いつも通りな」
「ヒロ、もう諦めたわね？」
「どうあっても厄介事が舞い込んでくるんだろうからな。さぁ、コロニーへの着艦準備を始めるぞ」
半ばヤケクソ気味にそう言ってハンガーへと向かって歩き始めた。

#202　コーマットプライムコロニー

交易コロニーであるコーマットプライムコロニーは好況に沸いていた。

コーマットⅢのテラフォーミングが完了して本格的な植民が始まるとなると、このコーマットプライムコロニーは植民を進めるための資材や植民者に供給するための食料や嗜好品の集積基地となる。その取引量はコーマット星系で取れる鉱石や精錬金属だけを扱っていた頃に比べると数倍から十数倍に増加する上、今後のコーマットⅣのテラフォーミング完了も見据えてコーマットプライムコロニー自体の拡張工事も始まっている。

「物凄い活気ですね！」

「持ってくれれば何でも売れるって状況だろうからな」

初期の入植地では何もかもが足りない状況だ。食料、医薬品、生活雑貨、建築資材、その他諸々の商品を積んだ輸送船がひっきりなしにドッキングベイに出入りしている。ここに集積された物資が移民船に積み込まれ、コーマットⅢへと降下していくことになるわけだ。

「最初のお仕事は降下する移民船の護送になるわね」

「流石に降下時の移民船を狙ってくる馬鹿は居ないと思うけどな」

降下時に襲って、万が一移民船が大気圏突入に失敗でもしたら、満載されている物資と植民者は大気圏で燃え尽きるか、地表に激突して全てがお陀仏になる。単純にダレインワルド伯爵家の移民事業を妨害したいだけということでもない限り、あまりにやる旨味が無

い。
　しかもそんな大量虐殺を起こせばダレインワルド伯爵家は勿論のこと、帝国だって黙っては居ない。場合によっては帝国の総力を上げて生け捕りにされ、とんでもない目に遭うことなるだろう。

「さぁ、クリスとの待ち合わせ場所に向かおうか」
「いこいこ。うちお腹ペコペコや」
「お姉ちゃん、わざわざお昼ごはんの量を少なくしてたもんね……」
「凄い食い意地だな」
「うちだけやないもん」

　そう言ってティーナがミミに視線を向ける。うん、目を逸らして気づいてないふりをしても意味がないからね。ミミもわざわざ昼食を減らしてお腹を空かせてきたのか。

「さぁ、急ぎましょう！　依頼人を待たせちゃ悪いですから！」
「はいはい……」

　ティーナと一緒に早足で先を歩き始めるミミを追い、俺達も待ち合わせ場所であるホテルへと移動を開始した。

☆★☆

『コーマットⅢの入植開始を祝して、乾杯！』
「「「乾杯！」」」

　クリスの音頭で祝賀会の参加者達が飲み物の入った杯を掲げ、その中身を呷る。

「ぷはーっ！」

ドワーフ二名とエルフ一名がグラスを空けておっさんのような声を上げているのは聞かなかったことにしておこう。ちなみに、俺の持っているグラスに入っているのは果汁１００％のフルーツジュースである。

「ヒロ様、お料理取ってきますねっ！」
「うちもうちも！」
「ああもう。お姉ちゃん、もう少しお行儀よくしようよ」

今日の祝賀会は立食形式のパーティーで、料理は各々が好きなものを好きなだけ更に取って食べるようになっている。ミミ達は早速大量の料理が置かれているテーブルに突撃していったようだ。

「落ち着きがないわねぇ」
「早速二杯目に手を付けているお前も似たようなもんだと思うが」

俺の言葉を無視してエルマが二杯目のグラスを傾ける。最初はビールだったようだが、次はワインか何かを飲んでいるようだ。

「へべれけになるのは勘弁してくれよ」
「ちゃんとセーブするから大丈夫よ」

エルマがそう言うなら大丈夫だろう。まぁ、普段から酒はよく飲んでるけどべろんべろんのへべれけになることはほぼ無いものな。ティーナはたまにやらかしてウィスカに怒られてるけど。

「しっかし人が多いな」
「それだけ多くの人が今回の事業に関わってるってことよね」

一人ひとりに名札がついているわけじゃないから誰がどのように今回の植民事業に関わっているのかはわからないが、だだっ広いパーティー会場には人が溢れかえっている。
今日の俺はいつもの傭兵服の姿だ。ミミやエルマ、それにティーナ達も普段着ている服で参加しているので、俺達が傭兵であることは一目瞭然だろう。俺とエルマから発せられる暴力的な気配でも感じているのか、俺達に近寄ってくる参加者は全く居ない。

「俺にも傭兵の風格が出てきたのかね？」
「そうね。まぁ、御前試合でのヒロの戦いぶりを目の当たりにした人も多いんじゃない？　帝国全土に配信されたみたいだし」
「なるほど。今は丸腰なんだけどな」

一応レーザーガンと剣は持ってきてはいたのだが、両方ともホテルに入る際に預けたからな。今は丸腰だ。勿論、ミミとエルマもレーザーガンをホテルに預けている。

「ご主人様」
「ん？　おぉぅ……」

俺のすぐ後ろに控えていたメイがこちらに接近する人物がいることを教えてくれた。その姿を見て俺は思わず天井を仰ぐ。

「そのような反応を何度もされると流石に私も気を悪くしますよ」
「いや、他意はない。予想が当たって戦慄しただけだから」
「他意はないという言い回しの使い方を間違っていませんか」

部下を引き連れた軍服の美女――セレナ中佐がそう言いながらジト目を向けてくる。はははは、言葉って難しいネー。

「それで、ここに居るということは」
「お察しの通りです。いつも通りの宙賊狩りというわけですね、そちらと同じく」
「ですよねー」

話している間にメイがどこかから飲み物を運んできてセレナ中佐達に配り始める。しっかりとノンアルコールの飲み物を持ってきたようだ。

「ありがとう。それで、相談なのですけれど」
「はい、中佐殿」
「可能な限り私達と貴方達で連携して動くのはどうでしょうか？お互いに手の内をある程度知っているわけですから、連携に問題はないと思うのですが」
「悪くない提案だと思うけど、依頼人の許可が必要だな。俺の独断で指揮系統の違う中佐の部隊と行動を共にするのは無理だ。それに、帝国航宙軍とダレインワルド伯爵家では防衛目標の優先度が違う可能性もある」
「それは確かにそうですね。では、ダレインワルド伯爵家に話をしてみるとします」
「そうしてくれ」

去っていくセレナ中佐にひらひらと手を振って見送る。
実際のところ、中佐達と行動を共にしたほうがより多くの宙賊を狩れるとは思うが、そうするとどうしても身軽さは失われてしまうからな。それに、セレナ中佐の率いる対宙賊独立艦隊の総火力はクリシュナとブラックロータースを合わせても足元にも及ばない。つまり、その火力差の分だけ獲物を分捕られる恐れがあるということである。
当然俺達が得られる賞金は減るし、大火力で宙賊船をぶっ飛ばす

ことになるので船の鹵獲も望めない。オーバーキルでばらばらになる船が多いだろうからな。
そう言った意味では中佐達と行動を共にするのは美味しくはないんだよな。

「まぁ、クリスは断るんじゃない？」
「だろうな」

俺という戦力を縦横無尽に駆使して宙賊を撃退するというのはクリスにとってある種の武功ということになる。しかし、俺達の運用を帝国航宙軍に預けてしまってはその武功を得ることができなくなってしまうわけで、そうなってしまっては困るクリスとしてはセレナ中佐の申し出は断るしかないだろうと思う。エルマも同じ考えのようだ。

「貴族ともなると色々面倒だねぇ、本当に」
「何をするにも人目を気にすることになるからね。まぁ、面倒よ」

貴族としての生活から抜け出したくて実家を飛び出したお転婆娘が言うと説得力があるな。

「さて、そろそろ俺達も料理を取りに行くか。飲み物だけで腹を膨らませるのは寂しいし」
「そうね。私はおつまみになるようなものが欲しいわ」
「程々にしとけよ本当に……メイも行くぞ」
「はい、ご主人様」

エルマとメイを引き連れ、俺は盛況を博しているパーティー会場の奥深くへと足を向けるのであった。

#２０３　コーマットⅢの特産品（前書き）

こ、こしがいてぇ……―（：３」∠）―（おくれたのはゆるして

#203　コーマットⅢの特産品

料理の並べられているテーブルの周辺は非常に混み合っていた。なんでもコーマットⅢで採れる食材なんかも並べられているらしい。

「変なものじゃなければ良いが……」

「少なくともお腹を壊すようなものは出てこないわよ。こういうパーティーで食中毒なんて出したら伯爵家の面目が丸潰れだもの」

「それもそうか」

エルマの言うこともっともだ、と安心してテーブルに近づいた俺の目に飛び込んできたもの。それは子豚サイズの芋虫めいた物体の丸焼きであった。真っ白な体躯の表面にはうっすらと茶色の焼き目がつけられており、実にこんがり良い感じに焼けているようである。

「……」

「何よ、その目は。きっと美味しいわよ」

俺にジト目を向けられたエルマが睨み返してくる。ええ……美味しいの？　ほんとぉ？

「ほら、切り分け始めたわよ。ゴーゴー」

「マジで……？」

エルマに押されて巨大芋虫料理を切り分けている場所へと追いやられる。見た目がどうにも受け付けないのか、他の参加者も敬遠しているようでエルマに押された俺が何故か先頭である。あ、あっち

にミミが……ミミは必死で俺から視線を逸らした。俺を見捨てるのか！　ミミ！

「どうぞ」
「お、おう」

調理師によって切り分けられた芋虫が小皿に乗せられ、差し出される。どうやらクラッカーのようなものの上に切り分けた芋虫の表皮とドロリとしたその中身が載せられているようだ。

「むっ……？」

緑色のソースがかけられているそれを口に入れた瞬間、爽やかな香気が鼻を突き抜けていった。どうやら緑色のソースはバジル系の香草を使ったものであったらしい。そしてクラッカーのサクリとした食感と、パリッと焼けた芋虫の皮の香ばしさ、そして濃厚なチーズのような味わいが口の中に広がっていく。

「こう言っちゃなんだが、見た目に反して美味いな」
「そうでしょう。見た目はグロテスクですが、味は最高なのです」
「もう一つくれ」
「かしこまりました」

もう一つ芋虫乗せクラッカーを貰う。うん、美味い。なんかエルマがマジかよこいつみたいな目で見てきているが、お前も道連れじゃい。更にもう一つ調理師さんに芋虫乗せクラッカーを作ってもらい、エルマに押し付ける。

「あら、本当に美味しいわ」
「だろ？」

エルマの反応が切っ掛けになったのか、遠巻きに見ていた他の客も芋虫乗せクラッカーを注文し始めた。
「こういう特産物が収穫できるならコーマットⅢは栄えるでしょうね」
「芋虫牧場ってか？　というか、こいつが成虫になったらどんなものになるのか想像するのが怖いんだが」
「やめてよ美味しいものを食べて良い気分なのに……」
幼虫でこのサイズだと、成虫は一体どんなサイズになるのか？　そもそもこいつは何の幼虫なのか？　興味は尽きないが、深く考えると深みに嵌りそうなのでやめておこう。
「ただ人が住めれば良いってもんでも無いのかね、植民事業ってのは」
「そういうわけでもないと思うけど、ああいう特産物があるかどうかは重要なんじゃない？　強みにはなるでしょうね」
「なるほどなぁ……それにしてもああいう固有の生物って、テラフォーミングの影響で死滅したりないんだな。意外だ」
「生物の環境適応能力もそれぞれなんじゃないの。死滅した種も多いと思うわよ」
「そんなもんか」
そうすると、あの芋虫はテラフォーミングを生き抜くだけの生命力を備えた生物だというわけだ。まぁ、あれだけでかけりゃ生命力は強そうだな。
しかし、そう考えるとテラフォーミングには色々と面倒事が多そうだな。環境保護団体とかが大騒ぎしそうな気がするが、そういうことはないんだろうか？　いや、あっても貴族の強権で叩き潰され

そうだな。入植事業では巨額の金が動きそうだし、場合によってはわざわざ貴族が強権を振るわなくとも利得者がそういった運動を叩き潰しそうだ。
と、詮無きことを考えているとミミ達が俺達の元へと歩いてきた。その手の皿にはしっかりと芋虫乗せクラッカーが載っている。強かになったな、ミミ。

「ミミぃ……さっきはよくも見捨てたな？」
「あ、あはは……ごめんなさい」
「兄さんに一番槍を譲っただけやで」
「流石の度胸だと思いました。私はあれはちょっと……」

そう言うウィスカの皿には芋虫乗せクラッカーは載っていない。無難そうなものをバランスよく取り分けてきたらしい。

「ウィーは食いもんに関しては保守的やねー」
「食べず嫌いは良くないぞ」
「虫はちょっと……」

まぁ、無理強いするものでもないか。でも、今の所この世界で食べた昆虫系の食材は外れがないだよな、意外なことに。流石に不味いものをわざわざ流通させるような余裕は無いということなんだろうか。

「あら、お姫様の登場よ」
「お？」

エルマに袖を引かれて彼女の視線を追うと、そこにはドレスに身を包んだクリスの姿があった。あまり派手なドレスではなく、フリルなども控えめで随分と大人しい印象のドレスである。感覚的な表

現だが、あまり女の子女の子してないと言うか……なんだか大人っぽく見えるな。

「ごきげんよう、キャプテン。パーティーは楽しめていますか？」
「はい、クリスティーナ様。コーマットⅢの特産品に舌鼓を打っていたところでございます」

そう言って俺が半ば解体されている巨大芋虫にチラリと視線を向けると、クリスの肩が僅かにピクリと震えた。どうやら巨大芋虫のインパクトは淑女モードのクリスに精神的なダメージを負わせたらしい。

「お、おきにめしたようでしたらなによりです」
「正直すまんかった」

引きつった笑みを浮かべるクリスに小声で謝っておく。とりあえず立ち位置を変えてクリスの視界に巨大芋虫が入らないようにしてやろう。

この後は特に波乱もなく、クリスと他愛ない話をしたり、ミミ達と珍しい料理を楽しんだりして無事にパーティーは終了した。途中で見かけたのだが、うちの船に乗っていたメディアの連中もこのパーティーの様子を撮影していたようだ。招待客というわけじゃないから、豪華な料理や酒はお預けだったらしいけどな。ご愁傷さまである。

#２０４　入植開始（前書き）

溶けてました―（∴３」∠）―（道民に２７℃はキツい

#204　入植開始

「植民船一番機から五番機、順次降下を開始します」
「このタイミングで襲いかかってくる宙賊はまずいないと思うが、宙賊だけが危険だとは限らないからな。警戒を強めてくれ。メイ、レーダーレンジ最大、ステルス性は考慮しなくていいからバンバンやれ」
『承知致しました。パッシブレーダーの感度も最大にします』

俺の指示を受けたメイがブラックロータスのアクティブレーダーを最大出力で働かせ、降下宙域に近づく船に対する監視を密にする。そして得た情報をメイとブラックロータスのメインコンピューターで処理し、更に俺達三人で脅威となり得る存在がいないか精査するというわけだ。

「宙賊だけが危険とは限らないとはどういう意味なのでしょうか？」

クリシュナの操縦席には合計で五つの席がある。メインパイロットシート、サブパイロットシート、メインオペレーターシート、サブオペレーターシート、そしてサブシートが一つで五席だ。
その中の一つ、サブシートに着いているメディアスタッフ――今日はメビウスリングメディア部二課の男エルフ、アレン――が質問してきた。

「このタイミングで襲撃を仕掛けても危険過ぎる上に得られるものが何もないから、宙賊はまず襲ってこない。商品になるものが全部燃え尽きておじゃんになるだけだからな。だから、このタイミングで仕掛けてくるとすれば今回のダレインワルド伯爵家の植民事業を

邪魔したい連中だけだってことだ」
「えっ、でもそれは」
「そういうのがいるとは限らない。だが、いないと高を括るのは愚かってもんだ。そういうのだけでなく、傍迷惑な目立ちたがり屋や手のつけられない酔っぱらいがいるかもしれないしな」

素直に考えれば宙賊以外で仕掛けてきそうなのは貴族(どうぎょう)だろうが、どんな社会にも一定数の跳ねっ返りってのはいるもんだからな。ただ目立つため、あるいは大きな事件を起こして自分達の名を知らしめるためにテロリズムに走る妙な連中がいないとも限らない。

「ヒロ様、右舷上方距離８６０付近のデブリ、何かおかしくないですか？」
「どれ……ふん？　他のデブリに比べて妙に低温だな。サーマルステルスか？　メイ、念の為目標にピンを送れ」
『了解』

ピンを送るというのは所属不明の艦船に通信の意志があるかどうかを確認する行為だ。機械的な仕組みは知らんが、ある程度絞った範囲――ゲーム的に言うとロックした目標と通信要請をするための機能である。これに応答しない場合、相手を不審船として撃沈しても罪には問われない。

『反応なし』
「そうか。ＥＭＬ展開、効力射」
『アイサイサー、ＥＭＬ展開』

俺の指示によってブラックロータスが船首の大型電磁投射砲を展開し、ミミの見つけた不審なデブリに照準を合わせる。そうすると、外部から通信が入ってきた。

『こちらジャッジメントワン。貴艦の武装展開を確認した。何をするつもりか説明を求める』

警備の取りまとめ役をしているダレインワルド伯爵家の巡洋艦から通信が入る。

「こちらブラックロータス及びクリシュナのキャプテン・ヒロだ。不自然に低温な不審なデブリを発見。ピンに応答せず、植民船の降下軌道へと近づきつつあるので、砲撃で破壊する」

『了解、こちらからも監視を行なう。フォローは任せろ』

「了解、ＥＭＬ発射」

『アイアイサー。ＥＭＬ発射』

紫電と閃光が炸裂し、文字通り目にも留まらぬ速度で砲弾が発射された。目標となった不審なデブリに一瞬熱反応が確認できたのは砲弾を回避しようとしたのだろうか？　何にせよ全ては遅きに失した。不審なデブリに着弾したＥＭＬ砲弾はデブリを木っ端微塵に打ち砕く。

『破壊時にエネルギー反応を確認。デブリの正体は小型船舶であったと断定します』

「了解、ジャッジメントワンにデータを送信しておいてくれ」

『アイアイサー』

「も、問答無用なんですね……」

「こんな場所で不審な行動をしている方が悪い。通信要請にも応答しないなら尚更だ」

結局あの不審なデブリ――もとい不審船が何をしようとしていたのかは不明だが、木っ端微塵にしてしまえば何ほどのこともない。

サーマルステルスまで使って忍び寄っていたならどうせロクな用事ではないだろう。場合によっては拿捕することも出来たかも知れないが、それで下手を打って植民船に特攻でもかけられたらコトだからな。この状況ではああするのが一番だ。

「降下が始まりました」
「ミミ、記録しておいてくれ」
「了解」

植民船が光の尾を引きながらコーマットⅢへと降下していく。それぞれが微妙にタイミングをずらし、違う方向へと降下していく様はなかなかに壮大な光景だ。あの巨大な植民船一つに凡そ一万人が乗り込んでいるそうだ。つまりおよそ五万人の人々が初期開拓民としてコーマットⅢへと降り立つことになるわけだな。

「あ、よろしければ後でそちらのデータをいただけませんか？」
「一応ダレインワルド伯爵家に確認を取ってからな」
「ありがとうございます」

多分これくらいは問題ないと思うが、念の為な。

「今後はどのような活動をすることになるのですか？」
「基本的には他と連携しつつ、惑星周辺とコーマット星系全体の巡視をすることになるだろうな。まぁ、俺達の場合は積極的に宙賊狩りをするよう申し付けられるかもしれんが」

俺達――つまりクリシュナとブラックロータースという構成と今までの実績から考えれば、定点に張り付けておくよりも遊撃として星系内を飛び回りつつ索敵と宙賊拠点の探索をさせたほうが良いだろうという判断を下される可能性が高いと思う。

「なるほど……」
「あまり絵になりそうにないな、と思ってるだろ？」
「ははは」

アレンは俺の言葉に答えず、乾いた笑いを漏らした。まぁそう思うよね？　滅茶苦茶広い恒星系の宙域全体をブラついて宙賊に偶然遭遇する確率なんてどう考えてもそう高くないってわかるものな。

☆★☆

『やめろ！　撃つな！　降参、降参する！』
「二十秒やる。機関を停止してベイルアウトしろ。二十秒を超えたら撃つ。逃げようとしたらコックピットブロックごと破壊する。はい、いーち、にー、さーん」
『わかった！　わかったから！』

宙賊の叫び声と共に宙賊船の機関が停止し、コックピットブロックがパージされる。基本的に小型戦闘艦のコックピットブロックはそのまま脱出ポッドとして機能するようになっている。
無論、コックピットブロックだけでは超光速航行はできないし、ごく遅い速度でしか移動することは出来ないが、最低限の生命維持装置や通信装置などが備えられているし、気密性も保たれている。構造的に頑丈でもある。

「メイ、回収よろしく」
『アイアイサー』
「メイが来るまでに残骸と戦利品の回収だ」
「「アイアイサー」」

ミミとエルマが回収用ドローンの操作を始める。俺はその間に撃破した宙賊艦のスキャンを行っておく。先にスキャンをしておけばどの船のどの装備を引っ剥がすか、どの船の残骸をサルベージするかをティーナとウィスカが判断しやすくなるからな。

「……容赦ねぇんだな」

「何日か前にも同じようなセリフを聞いたなぁ……基本的に宙賊なんざゴミクズ以下のクソどもだからな。賞金に関しては生死不問（デッドオアアライブ）だし、投降してきた宙賊をわざわざ回収して突き出すのもリスクが高い。クソを懐に入れることになるからな。普段は命乞いなんて聞かずにぶっ殺してるが、あまりにもな残虐ファイトは見せられないよってなっちゃうだろ？」

「ははは……配慮してくれてありがとうよ」

フォーマルハウトエンターテイメントのズィーアが乾いた笑いを漏らす。顔が完全にケモケモしているから表情がわかりにくいが、もしかしたら顔面蒼白になっているのかもしれない。

「奴らに襲われた輸送船や旅客船がどうなるか知ってるか？　積荷が根こそぎ奪われるだけで済めば良いほうで、大体が皆殺し、下手すりゃ捕らえられて非合法奴隷行きだ。非合法奴隷については？」

「……裏で取引される奴隷で、性奴隷や非合法な人体実験に使われるとか」

「大体合ってるけどちょっと浅いな。普通の性奴隷として扱われることは稀だ。普通のプレイがしたいだけならセクサロイドなりＶＲなりでいくらでもやりようがあるからな。生身の性奴隷を求めるような連中ってのは、そりゃもう歪んだ性癖の持ち主だらけだ。思い出しただけで反吐が出る」

今までに何度か『処理済み』の性奴隷を救出したことがある。つ

まり買い手の注文通りにされてしまった被害者達だな。宙賊が運んでいる『商品』の中にはそういうのも含まれる。人体実験用のモルモット用途の被害者なら命令に逆らえないように専用の首輪や腕輪が装着されていたり、インプラントチップが埋め込まれていたりする程度でまだマシなんだけどな。

「自分達の利益と快楽のためにそんなことを平気でする連中だ。慈悲をくれてやる気はちっとも起こらんね。それに、見逃せばその分だけ他の誰かが不幸に見舞われるかもしれないんだからな。見かけ次第駆除するに限る」

「なるほど」

ズィーアが神妙な様子で頷く。彼は彼なりに何か思うところがあるのだろう。

「ヒロ様、ブラックロータスが間もなく到着します」

「了解。ブラックロータス狙いで宙賊が来るかも知れないから警戒を続けるぞ」

「アイアイサー。回収を終えたら一旦帰還ね？」

「そうだな、荷物も多くなってきたし」

降伏した小型宙賊艦は無傷のまま手に入ったし、撃破した宙賊艦のパーツなんかも溜まってきている。図らずも捕虜を得てしまったし、一度帰還して戦利品の売却と捕らえた宙賊の引き渡しをした方が良いだろう。

#205　戦果とストレス（前書き）

うたたねしました―（∵3」∠）―（ゆるして

#２０５　戦果とストレス

「今は小型輸送船特需だ。積載貨物量が多少小さくても、足が早くて単独で惑星地表と交易コロニーとの間を行き来できる船はいくらでも売れる。まったくもって笑いが止まらんね」

売り先が決まってハンガーから運び出されていく改造小型輸送船（元宙賊船）を眺めていると、自然と口の端が持ち上がってくる。いやはや、本当に笑いが止まらないな。

回収した宙賊船の残骸から引っ剥がしたパーツを比較的傷の浅いフレームに突っ込み、これまた宙賊船の残骸から引っ剥がした装甲材を張り付けて即席の小型輸送船をでっち上げて交易コロニーで売り捌く。

当然ながら船の設備は十全な状態ではないが、ごく短距離――交易コロニーと地表を行き来する程度の距離であれば、生命維持装置なども最低クラスのものがあれば問題はないし、最悪そんなものを積まなくとも船外活動に対応している宇宙服を着るという手もある。まぁ、売った後のことは俺は知らんがな。

「参考までに、どれくらいで売れているか聞いても？」

俺のすぐ隣で搬出されていく船を一緒に眺めていた濃い褐色肌の美人――ニャットフリックス所属のニーアがそう聞いてくる。俺は売価を思い出しながら口を開いた。

「確か小型艦が一隻５万前後、中型艦は１０万弱だな」

今回売り払った船は小型艦一隻と中型艦一隻。どちらも速度とカ

ーゴスペース容量の増加を重視し、輸送仕様にでっち上げたものだ。

「その他無傷だったジェネレーター、シールドジェネレーター、その他部品が特需で高く売れてな。全部で１５万くらいかな。合わせて凡そ３０万エネルに、撃破した宙賊の賞金が３２万、今回の成果はしめて６２万エネルだ」

この他にダレインワルド伯爵家から一日３０万エネルの日当が出ている。今回は三日かけての宙賊狩りだったので、更にプラス９０万エネルで１５２万エネルの儲けだな。

船と部品の売却益のうち１０％をティーナとウィスカに分配、そして報酬総額の１％をミミに、３％をエルマに分配すると凡そ１４０万エネルが俺の取り分だ。端数は船の維持運営費だな。停泊費や全員の食費、廃棄物の処理費用、生存に不可欠な水や酸素の購入費用などである。

「ヒロさん、私を養ってくれません？　私、これでも尽くすタイプですよ」

「間に合ってます」

燃えるような緋色の瞳を爛々と輝かせながら上目遣いで俺の顔を見上げてくるニーアに笑顔で拒否を叩きつける。確かにこの人は美人だが、俺の中の何かがこいつには絶対に手を出すなと囁いているのだ。

「残念です」

肩を竦めてすぐに退く辺り、まぁ本人もあまり本気ではないのだろう。

「でも、ヒロさんと一緒にいると愉しそうなんですよねぇ……本気で私を囲う気ありません？　きっと愉快なことに事欠きませんよ？」
「マジで間に合ってます」

最近口に出すどころか考えただけでもトラブルが転がり込んでくるというのにこれ以上のトラブルなんぞ絶対に御免である。それになんだかニーアの言う『たのしい』はなんだか不穏なものを孕んでいるように聞こえて仕方がない。

「本当に残念です……」

ニーアはそう言って悲しげに溜息を吐いた。

「コロニー標準時で明日の１３００時に出港する。それまでは自由時間だから、羽根を伸ばしてくるといい。また三日は出ずっぱりになるからな」
「わかりました。ヒロさん達の予定は？」
「夜までは未定だ。夜には個人的な食事会がある。悪いが、個人的なものだから取材は遠慮してもらうぞ」
「個人的な食事会、ですか……興味があります」
「遠慮してもらうって今言ったよな？」

再び目を爛々と輝かせるニーアに思わず苦笑する。このふてぶてしさというかずうずうしさは大したものだよな。本当に。

☆★☆

ブラックロータのハンガーで寝落ちていた整備士姉妹を部屋に運んでやったり、消耗品の発注作業をしていたミミを手伝ったりしている間に約束の時間が近くなったので、死んだように眠っていた整

備士姉妹を叩き起こし、既に微妙に出来上がっているエルマを簡易医療ポッドにぶちこんでしゃんとさせてからブラックロータスを後にする。
メイにはブラックロータスに残ってもらった。彼女は食事を摂らないし、俺とエルマが揃っていれば護衛は必要ないからな。その代わり、食事会を終えて帰ったら思う存分に甘えてやろうと思う。
うん。甘えるんだ、俺が。何かおかしい気がするが、彼女にとってはそれが埋め合わせになるのだ。メイドロイドってたまによくわからない。

「今日はクリスちゃんとお食事会ですね」
「前の祝賀会ではロクに話せなかったからな」

あの時のクリスはダレインワルド伯爵の名代として会を取り仕切る立場だったし、他の参加者の目もあるのであまり話すことができなかった。今回はあの時のようなパーティーではなく、高級なお店の個室でごく個人的な親交を深めるための食事会というわけだ。

「今はクリスも大変な立場でしょうからね。ヒロ、ちゃんと労ってやりなさいよ？」
「そりゃそうするつもりだけれどもね」
「お貴族様ってのも大変なんやなぁ、あんな小さいのに何万、何十万の命を背負うことになるなんて」
「本当にそうだよね。私なら絶対に無理だよ」

俺もそう思う。貴族ということで色々と教育は受けているんだろうが、それでも万単位の人間の命に責任を持って、全体の指揮を執るというのは物凄いプレッシャーの筈だ。今日は存分に愚痴でもなんでも聞いてやるとしよう。

と、思っていたんだが。

「もっとちゃんとぎゅっとしてください」

「ああ、うん……」

「クリスちゃん、あーん」

「あー……」

「これも美味しいですよ」

十分後、俺は何故か胡座の上にクリスを後ろから抱っこし、ミミとウィスカはクリスの口元にプリンやケーキを運んでいた。そして残りの酒飲み二名はその様子を肴に酒をかっ喰らっている。

「色々限界だったみたいね」

「せやなぁ。まぁ、甘えられる相手が居るのはええんとちゃうか？最初、目が死んどったし」

予約を取ってあった部屋には先にクリスが到着していた。到着していたのだが、その様子がただごとではなかった。

死んだ魚のような目をしたまま、畳のような床の上に横たわっていたのである。いや、びっくりしたよね。何事かと思ったよね。本当に。

俺達が入ってきた事に気がついたクリスはゾンビか何かのようにゆっくりと立ち上がり、無言で俺の手を引いて座らせ、胡座をかいた俺の足の上に収まった。そして甘いお菓子が食べたいと言い始め、今に至る。

「まいにちまいにちまいにちやまのようにちんじょうやくじょうがあがってくるんです。しょりしてもしょりしてもしょりしてもおわらないおわらないないないない……」

「よしよし、今はそういうのは考えなくて良いからなー、ほーらな

でなでしてやろう」
「へへ……えへへ……」
「相当きてるわねぇ」
「アカン……酒でも飲ましたほうがええんちゃう？」
「おさけ……」
「未成年に酒を勧めるんじゃねぇ！」
「あうちっ、そういやまだ未成年やったね。うちらと見た目あんま変わらんから失念してたわ」

手の届く範囲にあった枝豆のようなものをティーナのおでこに投げつける。見た目はティーナ達とそんなに変わらないけど、クリスはまだ未成年だ。というか、とっくに成人して俺とほぼタメなのにティーナとウィスカが幼く見えるだけなんだけどな。二人はドワーフだし。

「クリスちゃん、苦労してるんですね……」
「クリスティー……クリスちゃん、私達で良ければいくらでも甘えてね」

ウィスカがクリスティーナ様、と呼ぶのを途中でやめてクリスちゃんと呼び直し、クリスの頭を撫で始める。頭を撫でるのはウィスカに任せて俺はクリスをぎゅっとしておこう。

なお、クリスが正常な状態に戻るまで三十分ほどかかった。

#205　戦果とストレス（後書き）

また書籍の原稿作業で少し休みます……日曜日までは更新するよ！

―（∵3」∠）―

#206　救難信号（前書き）

急に寒く……気圧のせいか頭痛と眠気が……―（∵3」∠）―

#２０６　救難信号

「お見苦しいところをお見せしました」
「今更取り繕ってもな」
「……」
「痛い痛い、ごめんて」

クリスが顔を赤くしてぽこぽこと俺を叩いてくる。わかったわかった、無粋なことを言った俺が悪かった。だから鎮まりたまえ。

「まぁなんや、アレやね。折角やしそのまま兄さんに甘えとったらええんちゃう？」
「お持ち帰りはダメよ」

酔っ払いどもがニヤニヤしながらクリスをからかう。やめたまえ君達。クリスはまだ成人前の女の子なんだぞ。絡むんじゃない。

「おいひぃです」
「むむ、火加減も絶妙ですね……」

クリスが正常な状態に戻ったので、ミミとウィスカも本格的に食事を始めていた。二人が食べているのは何かの肉のステーキだ。肉質が牛に似た生物で、これは他所の星からコーマットⅢに持ち込まれて飼育される予定のものであるらしい。なるほど、別にその星で取れる特産品に拘らないで、こういった高級品を飼育して売り捌くってのも一つのやり方だよな。結局のところ、金を稼げれば良いんだから。

「大分追い込まれていたみたいだけど、本当に大丈夫なのか？」
「はい。開拓初期の今をなんとか切り抜ければ仕事は楽になるみたいですから。私を含めて職員達のスキルも上がりますし」
「それは慣れただけで相対的に楽になっているように感じるだけなのでは……？」
「ははは……」

クリスの瞳からまたもや光が消えかける。ＯＫＯＫ、無粋なことを言った俺が悪かった。ほら、何の卵かわからないけど美味しそうな卵焼きだぞー。

「実際のところ、俺達じゃクリスの仕事方面の手助けはできそうにないしなぁ……まぁ、こうして愚痴を聞いたり、甘やかしたりするくらいならいくらでもやるけども」

というか、俺達以外に甘えられる相手は居ないのだろうか。いないんだろうな。両親には先立たれているし、祖父さんのダレインワルド伯爵は領地の統治のために隣の星系にいる。昔から世話をしてくれている使用人の一人や二人はいそうだが、甘えられるような関係ではないんだろう。一緒に働いている職員は部下だろうしな。

「それだけでいいんです」

そう言ってクリスは俺に寄りかかって体重を預けてきた。殆ど身内のようなものとは言え、ミミ達の視線も気にせずこのような行動に出る辺り、相当お疲れのようだな。

「ところで、ヒロ様達はこの数日、どのように過ごしていたんですか？」
「なに、いつも通りだよ。宙賊を待ち伏せする、追い詰める、ぶっ

潰すの繰り返しだ。撃破した宙賊の数は三日で五十かそこらだったかな」
「凄い戦果ですね！　実は全体的に宙賊の討伐数が上昇傾向なんですよ」
「へぇ？　ずっと右肩上がりなのか？」
「今のところはそうですね」
「なるほど。となると、やっぱり周辺から流入してきてるのかね」

宙賊はどこにでも湧く一般人――というか民間船にとっては迷惑な奴らだが、この世界はゲームでもなんでもないので、スクリプトで無限に湧くというわけではない。狩れば狩るだけその数を減らす筈なのだ。討伐数が右肩上がりということは、少なくとも討伐速度よりも周辺からの流入速度が今のところは上回っているということなのだろう。

「もしかしたら名のある宙賊団が乗り込んできてるのかもな。注意したほうが良いと思うぞ」
「注意、ですか。具体的にはどうすれば良いんでしょうか？」

クリスがそう言って俺を見上げてくる。ふむ。どうすれば、か。

「まず、いつでも大規模な戦力を動かせるように用意はしておいたほうが良いと思う。大規模な宙賊団は収奪した物資や奴隷を集積所――つまり基地に溜め込む傾向があるから、その集積所が見つかり次第、急襲する手筈を整えたほうが良いな」
「なるほど。それはつまり、傭兵や帝国航宙軍をいつでも討伐に差し向けられるよう余力を残すようにしたほうが良いということですね」
「そうなるんだろうな。その際に惑星の守りが疎かになったら本末転倒だから、討伐に出る場合は戦力配分にも気を配るべきだろうな」

「なるほど……」
「一番良いのは伯爵にしっかりと相談することだろうな。俺は傭兵の視点からアドバイスしたけど、為政者としての立場から見ればまた違った意見があるかも知れない」
「お祖父様に、ですか……そうですね。明日にでも相談してみます」

クリスは少しの間考え込んだようだが、すぐにそう言って頷いた。今回の惑星開発はクリスが立派な為政者――つまりダレインワルド伯爵家を継ぐに相応しい者になるための一種の試練なのだろうが、全部が全部一人でしなきゃならないって性質のものではないだろう。何せ人の――ダレインワルド伯爵とクリスにとっては自分達が庇護するべき領民の命が懸かっているのだ。

「こういう席でまで仕事の話をするのは無粋だと思うわよ？」
「こういう席でもないとクリスとこんな話できないだろ」

クリスは次期女伯爵様だ。いくら俺がゴールドスター受勲者だのプラチナランカーだのといった肩書を持っているとしても、公の場でこんな風に話すのはよろしくあるまい。

「んー？　そう言われるとそうかしら。でも、もう少し華のある話もしてあげなさいよ」
「華のある話っつってもなぁ。華のある生活なんてしてなかっただろ」

基本的に星系内の探索と宙賊の討伐を繰り返していただけだしな。

「そう言えば、ヒロ様達の船に乗っているメディアの人達はどう過ごしているんですか？」
「ああ、あいつらね。あいつらは――」

その後、食事を取りながらメディアスタッフ達の様子をクリスに話して聞かせ、クリスからは逆にこんな珍陳情があった、なんて話を聞いたりして大いに笑った。一番面白かったのは、何かの手違いでカップルや夫婦向けの居住区に配備されてしまった独身男性から来た『周りがカップルだらけで辛いです……助けてください』って陳情の話だったな。

☆★☆

翌日である。食事会が終わった後、クリスは迎えに来たダレインワルド伯爵家の護衛達に連れられて帰っていった。俺達がブラックロータスに着いた頃に宿舎に無事ついたことと、今日はありがとうございましたというメッセージが俺の端末宛に送られてきたので一安心である。

そして、俺達は今日も今日とて傭兵稼業だ。

コーマット星系ではクリシュナ単艦で先行し、ブラックロータスには後から駆けつけてもらって戦利品の回収をしてもらうようにしている。

何故そんなことをしているかって？　そりゃお前、メディアスタッフの乗っているブラックロータスを疑似餌にして宙賊を誘き寄せるわけにはいかないだろう……軍用戦闘ボットの導入によってブラックロータスの防衛能力は飛躍的に向上したが、万が一ということもあるからな。

「ヒロ様！　救難信号です！」

「いきなりか」

コーマットプライムコロニーを出発して程なくして救難信号を拾った。どうやら比較的大型の旅客船が宙賊に襲われているらしい。

「すぐに向かうぞ。向こうにも救援に向かうと伝えておいてくれ。あと、ブラックロータスにもすぐに駆け付けるよう指示を」
「わかりました！」

ミミがコンソールを操作してメッセージを送り始めるのを横目に見ながら、俺はクリシュナの航路を救難信号の発信源へと向ける。ちょっと遠いな、到着まで五分くらいかかるか。

「他の船は間に合いそうな範囲内に居ないわね。一応、コーマットプライムコロニーに救難信号受信の報告と、発信源の座標を送信しておくわ」
「そうしてくれ」

俺達以外の救援が来る前に俺達が事態を収束させる可能性が高いが、場合によっては怪我人の治療や破損した船の曳航のために助けが必要になるかも知れない。応援を送ってもらうに越したことはないだろう。

「民間船の救出ですか。これは撮れ高になりそうね」
「お前なぁ……」

本日クリシュナに同乗しているのはニャットフリックスのニーアである。ウキウキした様子で撮影機材の用意を始めているな。まぁ彼女にとっては撮れ高以外の何物でもないんだろうけども。

「間もなく現場に到着だ。乱戦になるかもしれんから、しっかりとベルトは締めておけ」
「あいあいさー！」

ニーアの返事を聞きながら超光速ドライブを解除すると、いつも通りの轟音が鳴り響いて線となって流れていた星の光が点に戻った。そして目に入ってくるのはスラスターを破壊されて強制停止させられている大型客船と、その大型客船に接舷している二隻の中型宙賊艦、そして一斉にこちらへと向かってくる十隻以上の小型宙賊艦。

「大歓迎だな！」

すぐさまウェポンシステムを立ち上げ、戦闘機動を開始する。

「中型二隻、小型十四隻です！　大型客船は移乗攻撃をかけられている模様！」

「まずは小蝿を叩き落とす！　中型艦の動きに注意しろ！」

「はいっ！」

向かってくる小型宙賊艦の群れに真正面（ヘッドオン）から突っ込み、擦れ違い様に散弾砲を叩き込んで一隻を爆発四散させる。その際に宙賊艦からレーザー砲やマルチキャノンで撃たれたが、クリシュナのシールドはびくともしない。小型宙賊艦の火力でクリシュナのシールドを破るのは至難の業だ。

擦れ違うと同時にフライトアシストを切り、姿勢制御スラスターを噴かして反転。再びフライトアシストをオンにしてから一気に加速して宙賊艦達の背後を取る。

『こいつ……ッ！？　散開しろ！』

後ろに付かれたことに気付いた宙賊が驚きの声を上げながらも的確な指示を出して散開を始める。

なるほど？　そこそこ優れた指揮官がいるらしい。

『うわっ！？　シールドが！？　嫌だあぁぁぁっ！？』

しかし圧倒的な性能差はそう簡単に覆せるものではない。四門の重レーザー砲の火力の前には宙賊艦の貧弱なシールドと装甲など障子紙のようなものだ。一斉射でいとも簡単にシールドが飽和し、第二射で装甲ごと船体フレームを貫く。当たりどころが良かったのか、爆発四散はしていないな。航行能力は失ったようだが。

『距離を取って囲んで叩け！　格闘戦は避けろ！』

「正確な分析ね」

「分析が正確でも、それで勝てるかは別の話だけどな」

包囲を選択するなら食い破って各個撃破するだけだ。なにより、指揮は悪くないが動きが指揮についていけてない。そんなにトロ臭くちゃあ意味がないな。

『だ、だめだ！　強すぎる！』

『歯が立たねぇぞ！』

『ばっかやろう！　逃げるわけにもいかんだろうが！』

そりゃお仲間が移乗攻撃を仕掛けている真っ最中なのに見捨てて逃げるわけにはいかんよなぁ？　後で移乗攻撃に成功したお仲間と顔を合わせることになったら間違いなく殺し合いになるだろうし。

だが、それがお前達の命取りだ。

一隻一隻各個撃破し、小型宙賊艦を掃討する。

『や、やめろ！　客船の乗客を皆殺しにするぞ！？』

「はっ！　今すぐやめて降伏すりゃ命だけは取らないでやるぞ？」

残った二隻の中型宙賊船からの要求を鼻で笑ってやる。宙賊との

交渉には基本応じない。どうせこいつらは乗客を皆殺しになんかできないんだからな。こいつらの目的は乗客の拉致だ。拉致して売り飛ばすのが目的なんだから、商品をわざわざ減らすようなことはしないし、できない。

まぁ、人間ヤケになったら何をするかわからんけども。

「どうするの？」

「折角停まってくれてるんだ。手足をもいでやるさ」

そう言って俺は武器の照準を中型宙賊船のメインスラスターへと向けた。メインスラスターを破壊したら次は武装だ。武装も壊したら？　ブラックロータスもすぐに駆けつけてくるからな。移乗攻撃は宙賊だけの専売特許ってわけじゃないさ。

#２０６　救難信号（後書き）

原稿作業をしなければならないので暫くお休みします。
ごめんね！　ゆるしてね！　―（：３」∠）―（来月頭くらいには再開できると良いなぁ

#207　高みの見物（前書き）

遅れました！　リハビリ中だからゆるして！　―（：3」∠）―

#207　高みの見物

通常、戦闘艦のスラスターや武装などのモジュールをピンポイントで破壊するのは非常に難しい。しかし、相手が停止していれば話は別だ。特に移乗攻撃のために接舷中の船などカモ以外の何者でもない。

『やめっ……やめろォ！？』
「やめろと言われてやめる奴がいるかよ」

民間の大型客船に接舷している中型宙賊艦の背後へと素早く回り込み、重レーザー砲でメインスラスターを破壊してやる。接舷するためには当然ながらシールドを停止していなければならないので、奴らの艦を守るものは何もないのだ。重レーザー砲の光条を何発か叩き込めばすぐに機能を停止してしまう。

『て、てめぇら！？　こっちにゃ乗客が。人質がいるんだぞォ！？』

通信の向こうから宙賊の必死な声が聞こえてくる。ははは、吠えよる。いくら吠えたところでメインスラスターは既に破壊したから、奴らはもう詰んでいるわけだが。

「おい聞いたか？　人質がいるんだぞぉ、だとよ」
「ええ、聞いたわ。でも、それが何？」

悪い笑みを浮かべる俺を見て、エルマが俺の話に乗ってくる。ミミが目を剥いて驚いているので、俺の口元に人差し指を立てて黙るよう指示しておく。ニーアはニヤニヤしながら動向を見守っている

ようだ。

「これ以上手を出せば人質を殺す？　結構。殺すってんなら大いに殺しゃいい。そうしたら賞金が跳ね上がってより一層俺達の懐が潤うってわけだ」

『んなっ……！？』

「私達は傭兵よ？　正義の味方じゃあるまいし、人質程度で止まるとでも？」

「かと言って人の情が無いわけでもない。義憤を感じる心はある。なに、その時には間違いなく『生きたまま』捕らえてやるから覚悟しておけ」

「帝国法は凶悪犯に厳しいわよ？　一罰を以て百戒とす、ってね」

「どっちにしろお前らはもう詰んでるから。大人しく投降したほうが身のためだぞ」

『クソがあぁぁぁ！』

おお、怒ってる怒ってる。だが俺はそれに構わず中型宙賊艦二隻の武装もピンポイントで破壊してやった。これで奴らは文字通り丸裸である。

そして、丁度お膳立てが整ったところで轟音と共にブラックロータースがワープアウトしてきた。

『ご主人様、お待たせ致しました』

「完璧なタイミングだ、メイ。軍用戦闘ボットを民間船に接舷している宙賊艦に突入させろ。宙賊艦を制圧後、そのまま民間船に移乗して残りの宙賊も制圧するように」

『承知致しました。非致死性兵器装備で突入させます』

「そうしてくれ。クリシュナは増援を警戒する。メイは戦闘ボットの指揮、ティーナとウィスカにはサルベージを開始するよう指示してくれ」

『アイアイサー』

ブラックロータスとの通信が終了する。宙賊からの通信はいつの間にか途切れていた。今の会話はオープンだったからな。戦闘ボットが突入してくるのを知った宙賊どもは今頃迎撃の準備に大忙しといったところだろう。

「あとは仕上げを御覧じろってね」

「……え？　接舷突入、しないので？」

今までニヤニヤしながら黙っていたニーアが気の抜けたような声を上げる。そんなニーアに対し、俺は操縦席に座ったまま肩を竦めてみせた。

「宙賊が何人いるかわからんが、二隻合わせても恐らく三十ってところだろう。それに対してこっちが投入するのは武装が非致死性武器とはいえ最新鋭の軍用戦闘ボット十体だ。わざわざ突入してリスクを冒す必要はないなぁ」

「えぇ……撮れ高が」

「お前の撮れ高のために命を危険に晒す気はないからな？」

そもそも、こういう時のためにわざわざ高い金を出して軍用戦闘ボットを購入したのだ。こういう時とはつまり、宙賊による移乗攻撃に対抗するため、もしくは既に移乗攻撃を食らっている他の船や、宙賊の船そのものに移乗攻撃を仕掛けるためである。

血の滲むような――というかリアルに血を吐くような修練の結果、俺だってそこそこ以上に戦えるようにはなった。だが、それでもわざわざ生身やらパワーアーマー姿やらで好き好んで殺人光線の飛び交う銃撃戦の中に飛び込もうとは思えない。より有効な手段を金で解決できるのならば誰だってそうする。俺だってそうする。

☆★☆

「総員戦闘準備！　クソブリキ野郎が乗り込んでくるぞ！」

畜生が！　あの傭兵野郎、人質を歯牙にもかけやがらねぇ！　本当に乗客どもを皆殺しにしてやろうかと思ったが、それをやるといくらなんでも後が怖い。どっちにしろ捕らえられれば地獄は免れないが、バレる状況での虐殺（ブラッドバス）はマズい。

元宙賊のB級犯罪者なら死ぬまで重労働で済む。やりようによっちゃシャバの空気だってまた吸えるかもしれない。しかし見える場所であからさまに虐殺をやらかしたら間違いなくA級犯罪者だ。

A級犯罪者っってのはつまり、人権を剥奪された実験動物（モルモット）だ。消費しても問題ない実験動物として科学者（マッドサイエンティスト）どもに弄ばれるのだけは絶対に嫌だ。

何度も生身で宇宙空間に放り出されては試作型の医療ポッドにぶち込まれるなんてのは序の口。試作型のVR機器の実験に駆り出されて過剰な刺激を受けた脳が焼き切れて死ぬなんてのはまだ幸運。遺伝子改良実験のモルモットにされたって奴は酷かった。身体が崩れて苦痛に呻きながらもデータ取りのために『生かされている』なんてのは想像するだに恐ろしい。あんな目に遭うのは絶対に御免だ。

「突入班！　やんちゃやヤケを起こして商品をぶっ殺したりするんじゃねぇぞ！　そんときゃどうあっても言い逃れててめぇらだけクソ科学者どもの玩具になるよう仕向けてやるからな！」

通信機越しに口汚い罵声が返ってくる。とりあえずこれで下手を踏んでも言い逃れはできるだろう。しっかりとログに残して――ズドドドン、と何かが船体にぶつかる音が響いた。コンソールを見る限りはあのクソ傭兵の攻撃じゃあない。いや、装甲にダメージ……

？　違う。今の音は移乗攻撃ポッドが接舷した音だ！

「クソ！　来やがった！」

使い古したレーザーガンをホルスターから引き抜いてコックピットから飛び出す。ブリキの兵隊なんざ頭を捩じ切って玩具にしてやる！

☆★☆

『敵艦のコントロールを掌握』
『ＥＭＰグレネードによる攻撃を確認。損害軽微』
『カバー。敵兵二名の無力化に成功』
『敵艦の制圧を完了。民間船への突入準備開始』

二隻の中型宙賊艦にそれぞれ五体ずつ突入させた軍用戦闘ボット達から続々と報告が上がってくる。俺達はクリシュナのコックピットで高みの見物だ。メイの指揮の元、戦闘ボット達はこの上なく効率的に宙賊達を無力化していく。

「圧倒的ですね……？」
「そりゃそうだ。そうでないと一機あたりに６万エネル以上出した甲斐が無いってもんだ」
「でも、前にシエラⅢで戦闘ボットと戦った時は楽勝でしたよね？」
「あの時は降下ポッドが半ば迎撃されてたし、完全起動する前に山程レーザーガンを叩き込んだからよ。それに、数はたった一機だったしね。あの時降下ポッドに搭載されていた戦闘ボットが全部正常に起動して一斉に襲いかかってきてたら、危うかったわね」
「なるほど、そういうものですか」

そう考えると、俺達は悪運を引き寄せはするけど最悪の目は引かないんだよな。そうだとしても、あまりにもトラブルに見舞われ過ぎな気がしてならんのだけども。

「なんというか、イージーね」

「イージーにするために金をかけて適切な装備を揃えたんだ。元が取れるのはまだまだ先だな」

宙賊にかけられた賞金に関しては基本的に生死を問わないが、生きたまま捕らえればそれはそれでボーナスが出る。つまるところ、宙賊を狩って金を稼ぐならサルベージ品を大量に持って帰ることができる母船や、移乗攻撃によって生きたまま捕らえることのできる戦闘ボットなどを購入した方が実入りは良くなるというわけだ。

まぁ、そのためにはそれなりの額を投資しなければならないので、元を取るには相応の時間がかかるわけだが。長い目で見れば小型戦闘艦一隻で傭兵稼業を続けるよりは儲かる。

「もっと撮れ高を！　折角の民間船救出シチュエーションなのにこれじゃあヤマがありませんよ！　ヤマが！」

「無茶を言うなよ！　こら！　後ろからしなだれかかるな！　後頭部に胸を押し付けんな！　まだ戦闘中だ馬鹿！　宇宙空間に放り出すぞ！」

「騒々しいわねぇ……」

「あはは……」

二人とも、俺は操縦桿から手を離せないんだからこの馬鹿をどうにか引っ剥がしてくれませんかね？　というかこいつはクリシュナのコックピットには今後出禁だな。こちとら遊びでやってんじゃないんだよ。

「では、こいつらはこちらで引き取って行きます」
「よろしく」

敬礼をしてくる帝国航宙軍の兵士にひらひらと手を振り、戦闘ボット達が無力化して引っ立ててきた宙賊どもが連行されていくのを見送る。撃破した小型宙賊艦や鹵獲した中型宙賊艦からも戦利品やデータキャッシュなんかを色々と獲得したので、中身を確認次第コーマットプライムコロニーで売り捌かにゃならんな。

二隻鹵獲した中型宙賊艦のうち一隻は俺達の後に駆けつけてきた帝国航宙軍所属の部隊がコーマットプライムコロニーまで曳航してくれるという話だったので、もう一隻はブラックロータスで曳航し、後は小型艦二隻分のスクラップとパーツをブラックロータスのハンガーに収容していく。

これで中型輸送艦二隻、小型輸送艦二隻をでっち上げてまた売り払うわけだ。その売却益に加えて宙賊どもの賞金に、生け捕りのボーナス。それに救出した大型客船からの礼金も期待できる。笑いが止まらんな！

「この通り反省いたしましたので、どうかご容赦を」

俺の足元で黒っぽい女が土下座しているが、無視しておく。宇宙空間に放出されなかっただけでも感謝して欲しい。

「よっしゃー！　腕が鳴るでぇ！」
「頑張ろうね！　お姉ちゃん！」

先行して運び込まれた小型宙賊艦の残骸を前に整備士姉妹が気合を入れている。二人とも目が輝いているな。なんだかんだで好き勝

手に航宙艦を弄り倒せるのが二人とも好きなんだろうな。しかも自分達で修理した船に値がついて、その一割が自分達の懐に入ってくるということとあればやる気もいや増すというものなのだろう。

「ニャットフリックスアウト、ということでフォーマルハウトエンターテイメントのターンだぞ」

「はーっはっはっは！　いやぁすまんなぁ！」

「ぐがぎぎぎぎぎ……」

フォーマルハウトエンターテイメントのズィーアが炎のように派手な体毛を靡かせ、呵々大笑しながらクリシュナへと乗り込んでいく。ニーアはそんなズィーアに怨念の篭もった視線を向けていた。そんな様子を俺に観察されていることに気がついたのか、ニーアが露骨に媚びたような表情を浮かべる。うん？　なんだね？

「こ、この失態は私が身体でお支払いしますから――」

「ニャットフリックス、五点減点」

「ノォーウ！？　というか謎の点数制が導入されてる！？」

あからさまな色仕掛けはNG。妙なことを言って俺の心証を更に損ねたニーアにニャットフリックスの他のスタッフ達が白い目を向けている。どうか大いに反省して欲しい。

というか、この状況でも冷静に突っ込んでくる辺りまだこいつ余裕あるな。

「合計十点減点で脱出ポッドによる優雅な宇宙の旅にご招待だからな」

「はい……」

ニーアががっくりと肩を落とす。まぁ、脱出ポッドで射出は冗談

だけども。次に何かやらかしたら普通にコーマットプライムコロニーで撮影班まるごと下船してもらうだけだ。

「一回まではＯＫだと考えて故意にやらかしたら一発退場させるからな」

「ははは、わかっておりますとも」

「私どもはそのようなことをする気はありませんので」

スペース・ドウェルグ社のワムドとメビウスリングのアレンはそう言ってにこやかに対応していたが、二人とも釘を差されて一瞬身体をビクッとさせたのを俺は見逃さなかったからな。戦闘艦乗りの周辺視野舐めんなよ。

#２０８　救難要請再び（前書き）

どうも三十分から一時間の遅れるな！―（∵３」∠）―（そのうちリズムを取り戻すので許して！

#２０８　救難要請再び

出港したばかりだが、一度コーマットプライムコロニーに戻って戦利品の売却等を行なう。戦利品を満載したままだと色々と支障があるからな。

とは言え、それで哨戒任務に支障を来すのは本末転倒なので、コーマットプライムコロニーで契約しておいた戦利品の保管スペースに宙賊艦のスクラップやら戦利品やらを雑に放り込んでおく。

「うちらはコロニーに残って回収品の改修を進めとくわ」

「了解。何もないとは思うけど、気をつけろよ」

「はい！」

整備士姉妹にはコーマットプライムコロニーに残ってもらい。回収した中型艦二隻と小型艦二隻の修理、改修作業を進めてもらう。整備ドッグで動いている分には危険もないだろうし、問題はないだろう。特に港湾部は帝国航宙軍とコロニーのセキュリティが目を光らせているからな。

「私達もコロニーに残って戦利品の船を改修する二人の取材をさせて頂きます」

「良いけど、邪魔はするなよ」

「それはもちろんですとも」

スペース・ドウェルグ社のワムドとそのスタッフ達もコーマットプライムコロニーに残るらしい。フォーマルハウトエンターテイメントのズィーアはクリシュナに乗り込み、その他のスタッフとニャットフリックス、メビウスリングはブラックロータスに乗り込んで

取材を続けるようだ。
「忙しないと言うか、勤勉ですね」
「うん？　そうか？」
「はい。我々のイメージする傭兵像とはかけ離れていますね」
クリシュナをブラックロータスのハンガーに格納し、ブラックロータスの休憩スペースで小休止を取っているとメビウスリングのアレンがそんな事を言い始めた。
「俺はその一般的な傭兵像ってのがよくわからんのだよな」
この世界の生まれではないので、この世界のスタンダートというものが未だによく理解できていないんだよな、俺は。無論、俺だってこの世界の勉強をサボっているというわけではないのだが、俺の頭には元の世界の常識というものが既にベッタリとこびりついているので、この世界特有の価値観やイメージというものがなかなか頭に馴染まないのだ。
「普通の傭兵像ってのは大きく稼いでパーッと遊んで、お金があるうちはダラダラ過ごしてるって感じよね」
「そうですね。ヒロ様はその点勤勉というか、ストイックというか」
「ストイックねぇ……」
そうは言ってもミミやエルマ、それにメイとそれなりによろしくしているし、毎日テツジンの美味い飯を食って、買いたいものを見つければ特に節制することなく購入しているけど。
「よりストレートに表現すると、こんな美人さんが二人もいるんだから昼となく夜となくそれはもうイチャイチャしているのかと思っ

ていたというわけです」
「また減点されたいのかな？」
「いやいや普通はそう思いますって！　ねぇ！？」

ニャットフリックスのニーアがそう言ってフォーマルハウトエンターテイメントのズィーアとメビウスリングのアレンに同意を求めるが、二人はハハハと乾いた笑いを漏らしてそれを受け流した。二人とも同意はしないが、否定もしない辺り考えていたことにほぼ違いはないらしい。

「まぁ減点は冗談として、そんなもんなのか。そんなんじゃいつまで経っても船をアップグレードできないだろうし、船を動かす感覚も鈍るだろうから腕も上がらないと思うけどなぁ」
「その発言が既にストイックですね」
「ヒロはなんだかんだで毎日自己鍛錬を欠かさないわよね」
「勘が鈍るのは良くないからな。俺は死にたくないし、クルーも死なせたくない。命張ってるんだから手を抜かないのは当たり前だよな」

下手踏んで自分だけが死ぬならともかく、同じ船に乗っているミミとエルマの命も預かっているとなると俺の責任はとても重い。

「やっぱりゴールドスターのプラチナランカーともなると心構えからして違うんですね」
「ワーカーホリック気味なだけかもな。さぁ、小休止したらクリシュナを出すぞ。さっさとパトロールに戻らないとな。メイはデータキャッシュの解析を進めておいてくれ」
「はい、お任せください」

☆★☆

「もうちょっとこう、ロックな展開にはならないのか？」
「パトロールでロックな展開ってどんなだよ」

再びコーマットプライムコロニーから出港して凡そ二時間。俺達は特にトラブルもなく哨戒を続けていた。ダレインワルド伯爵家から受けている依頼ではコーマット星系内における俺達の行動範囲にある程度の自由裁量はあるのだが、それでもその範囲内で宙賊なり何なりに遭遇できなければただのドライブみたいなものである。今日は大型民間客船を襲った連中を文字通り一網打尽にしたので、暫くこの辺りには宙賊どもは寄り付かないかもしれないな。

「あ、コーマットⅢの防衛部隊の司令部から緊急通信です」
「おっと、ズィーアが変なことを言うからロックな展開が来たぞ」
「やったぜ」
「やったぜじゃないんだよなぁ……で、ミミ。内容は？」
「えっと……コーマットⅢの開拓地が攻撃的な原生生物に襲われているようで、対地攻撃が可能な艦艇は至急コーマットⅢに急行して支援攻撃をして欲しいとのことです」
「対地攻撃ィ……？」

あまりに意味のわからない通信内容に俺は思わず変な声を出してしまう。
いくら開拓が始まったばかりの開拓地とは言え、原生生物――つまり動物の襲撃程度で宇宙に展開している戦力に救難要請を行なうというのは妙な話だ。
そりゃあ彼らは軍隊ではないのだからそこまで強力な武装はしていないだろうが、それでも金属の弾丸を火薬を使って発射する銃なんかよりも遥かに強力なレーザーガンやレーザーライフルは持ち込んでいるはずだし、拠点となる移民船にはシールド発生装置や人間

が携行できる武器よりも余程強力なレーザータレットやマルチキャノンタレットが装備されているはずだ。
何より、そんなに脅威度の高い原生生物が存在するということが今更になって判明するというのもおかしな話である。テラフォーミングをする前にも完了した後にも現地には調査が入っているはずだし、その段階で脅威度の高い原生生物に関しては発見され、対処されているはずだ。

「なんだか妙な話だな。本当に発信元はコーマットⅢの防衛部隊か？」
「えっと、間違いないです」
「……一応こちらからも防衛部隊の司令部と、あと念の為にクライアントにも確認を入れておいてくれ。あと、通信ログはしっかり取っといてくれ」
「わかりました！」

今はズィーアが同乗しているから、クリスの名前は直接口に出さないほうが良いだろう。まぁ、隠しても俺達とクリスが割とズブズブな関係なのはとっくにバレてそうだけど。

「どうするの？」
「防衛部隊司令部からの通達となると無視するわけにもいかんだろうよ。ミミ、メイにもコーマットⅢに向かう旨を伝えてくれ」
「はい！」

こういう時はミミが大忙しだな。まぁ、難なくこの辺の通信業務をこなせるようになってきた辺り、ミミももう一端のオペレーターだな。もう少ししたらまた分け前の見直しをするべきかね。

「航路設定、コーマットⅢ」

「アイアイサー、航路設定するわ」

ミミが通信で手一杯なので、エルマがコーマットⅢへの航路を設定する。既に超光速航行中なので、超光速ドライブの起動シークエンスは必要無い。

「しかし、どう思う？」

「まぁ、変な話よね。絶対に無いってわけじゃないけど」

エルマも今回の対地攻撃要請には疑問を持っているようだ。

「見落としか、テラフォーミングの影響による急性変異か」

調査隊が危険な原生生物の存在を見落としたか、見誤ったか、或いはテラフォーミングによる環境の激変が無害と判断されていた原生生物に何か深刻な影響を与えたか。

「もしくは第三者の手による意図的な妨害かよね」

「あー、それも考えられるのか」

第三者の手による意図的な妨害――つまり今回のケースの場合は攻撃性が極めて高い生物兵器を秘密裏に降下させ、繁殖させた可能性だな。確かにその線も無いとは言えない。ダレインワルド伯爵家の躍進を防ぎたい連中がいるのなら、そういった手を取る可能性は十分にある。

バレれば自分の首を締めることになる一手だが、バレさえしなければ極めて有効な嫌がらせになるだろう。いずれにせよ、ここで入植地に大被害が出ればダレインワルド伯爵家の入植事業には大きくケチが付く形になるわけだ。

「現地で対処しきれずに救難要請が来るってことは……」
「どうも第三の可能性が高そうよね」
「Ｏｈ……」
「ロックな展開になってきたな！」
「どんな脅威があるかわからんが、俺達の話し合いの内容はカットしておけよ。貴族の暗闘に巻き込まれたいなら話は別だけど」
「ははは、当たり前だろう。そんなドロドロした話よりも派手でロックな映像の方が受けが良いに決まってるんだからな。ニャットフリックスの連中はそっちに食いつきそうだがね」

あー、そうね。ニーアなんかはこういうドロドロした話の方が好きそうだね。
まぁ、何にせよ久々の重力下戦闘になりそうだな。相手が原生生物となるとただの鴨撃ちになりそうだが、まぁそれはそれか。下手こいて地面に激突、なんてことにならないよう気をつけるとするか。

#209　レーザー爆撃（前書き）

天気が悪くて体調が優れなかった（，　。ω　。、）（ゆるして

#209　レーザー爆撃

ズドォン！　という轟音と共に矢のように流れていた星々の光が急停止する。

「超光速航行停止、目標地点への降下軌道は計算中です！」
「ＯＫ、各自降下前にたっぷりと飲み物を飲んでおけよ。目標の情報は来てるか？」
「はい、えっと……あった、スクリーンに出しますね」

ミミがコンソールを操作し、コーマットⅢの開拓地を襲っているという原生生物の情報をコックピットのスクリーン上に表示する。

「凄い見た目だな。威圧的と言うか、邪悪っぽいというか。悪意の塊みたいな造形をしている」
「まぁ、まともな生き物にはあまり見えないわね」

コックピットのスクリーンに表示されたのは禍々しいとしか表現のしようがない代物だった。全体的に黄褐色っぽい色をしており、なんとなく人間の肌のような質感をしているのが更に禍々しさを助長している。
原生生物の見た目は大きく分けて三種類で、一つは体高５ｍほど。人間の素足に似たような足を二十本以上生やしており、その足を高速で動かして捕食対象に接近し、二本ある腕で殴り殺して頭部らしき場所にある口で噛み砕いて食うらしい。歯並びは人間っぽくてとても気持ちが悪い。両腕の先は尖った岩石質の表皮のようなもので覆われており、生身の人間を一撃で殴り殺す威力を持っているらしい。

もう一種類は同じく足が多いが、こちらは象かなにかの足のように思える。全体的に流線型というか、船を裏返しにしたような姿をしている。前面部は一匹目と同じように岩石質の装甲のようなもので覆われており、高速で突撃してくるらしい。大きさは体長１５ｍ、体高７ｍほどと一匹目よりも更に大型。前面装甲は堅固で、レーザーガンやレーザーライフルでは全く歯が立たないようだ。

そして最後の一種類が問題だ。体高２ｍほどで小型。一匹目と同じで人間のような足が六本生えており、六足でのたのたと歩くらしい。移動速度は大して早くないし、岩石質の装甲なども持っていないようだが、こいつはレーザーランチャー並みの威力がある生体レーザー砲を備えているらしい。威力も射程も入植者達が装備しているレーザーライフルより高く、シールドを持たない航空機やシーカーミサイル、攻撃ドローンなどはこいつらに撃墜されてしまうのだという。

「前衛から後衛まで充実の品揃えだなぁ。破壊光線を放つ原生生物とかそんなポンポンいるもんかね？」

「ビックリ生物代表として結晶生命体なんてのもいるじゃない」

「確かにあれもビックリ生物だけどさぁ……」

確かに結晶生命体は攻撃的な無機生命体で、恒星間航行が可能で、レーザーどころか謎のエネルギー光弾とかも放ってくるという超びっくり生物だけどね。俺が言いたいのはこんな誂えたような戦闘能力を持つビックリ生命体がそこらの居住可能惑星に存在しているものなのかということなんだよ。毒液を飛ばすとかならともかく、レーザーランチャー並みの高出力レーザーとか自然界で狩りとかに使うにはあまりにも高威力過ぎるだろ。

「まぁ……同じことを二回言うのもなんだけど、まともな生き物には見えないわね」

「だよなぁ。まぁ、ちゃっちゃと片付けるか」
「軽いと言うか、危機感が無いんだな」
サブシートに座っているズィーアからそんな言葉が飛んでくるが、俺は振り返りもせずに肩を竦めてみせた。
「一万匹居ても百万匹いてもクリシュナにとっては脅威でもなんでもないからなぁ」
「レーザーランチャー程度の出力なら大気圏内じゃ射程もたかが知れてるしね。クリシュナのレーザー砲の方が遥かに高出力かつ長射程だから、アウトレンジから一方的に叩けるわよ」
「ブラックロータスもいるしな。クリシュナの観測データを使って成層圏辺りからマルチキャノンと電磁投射砲（ＥＭＬ）で砲撃もできるし」
マルチキャノンと言えばなんとなく豆鉄砲というイメージがあるが、あれはシールドも持たない相手には滅法強い。サブマシンガンみたいにバンバン撃ってるけど、あれ普通に艦砲だからな。口径とか詳しく知らんが、弾一発が俺が抱えるのがやっとの大きさだから。あんなん生身の人間が食らったら一発でバラバラだよ。勿論地表で暴れている原生生物のような何かでも食らったらタダでは済まない。
艦首ＥＭＬに至っては下手に最高威力で撃つと地表の開拓地にも影響が出かねないだろうな。まぁＥＭＬは威力というか初速に関しては無段階で調整できるはずだし、そのへんはメイにまかせておけば上手くやってくれるだろう。
「なるほど……つまり、彼我の戦力差は圧倒的というわけか」
「だな。一方的な蹂躙になると思うぞ」
「突入コースの設定完了しました！　ナビを表示しますね」
「了解、ブラックロータスも続いてくれ」

『アイアイサー』

ミミの設定したナビに従い、コーマットⅢへの降下を開始する。

「うおおおぉぉ！？　だ、大丈夫なのかこれ！？」

が、降下し始めるとズィーアが騒ぎ始めた。どうやら惑星に降下するのは初めての経験であるらしい。

「ああうん、大気圏突入って迫力あるよな」

激しい音と揺れ、それに真っ赤に燃えるシールドの向こう側の大気。断熱圧縮で超高温になるのはわかるんだが、ああやってシールドの向こう側が燃えているような状態になってるのはどうしてなんだろうな？　超高温になってプラズマでも発生してるんだろうか？

「目標上空です」

「おお、いるわいるわ」

目標の開拓地上空には既に俺達以外の戦闘艦が展開しており、雲霞のように押し寄せてくる原生生物どもを薙ぎ払っていた。戦闘艦のレーザー砲から放たれる高出力のレーザーが地表に着弾し、土壌ごと原生生物を吹き飛ばしている。

誤解されがちだが、レーザー砲というのは高出力のレーザーで対象を溶断する兵器ではない。照射部分を高温で蒸発させ、爆発を起こし、その熱と衝撃で対象を破壊するのだ。

つまり、今現在地上の原生生物を襲っている破壊の正体とは高出力レーザー照射による爆破と熱と破壊の嵐というわけである。

「ウェポンシステム起動。出力は最低限度に絞って速射を優先する

ぞ」
「了解、出力調整するわ」
「ブラックロータスも基本はレーザータレットで攻撃しろ。開拓地に危機が迫った時のみマルチキャノンを使え」
『アイアイサー』

マルチキャノンの弾も艦首ＥＭＬの弾体もタダじゃないからな。レーザーの方が弾薬費がかからない分お財布には優しい。

「しっかし多いな」
「ちょっと気持ち悪いですね……」
既にレーザーを撃ってくるタイプの原生生物はあらかた仕留められているようで、残っているのは前衛型と突撃型の二種だけのようだ。こりゃただの蹂躙戦だな。地を這うあいつらには空を飛ぶ戦闘艦を攻撃する能力が無いし。精々開拓地のシールドが破壊されないように気をつけるくらいか。
四門の重レーザー砲のうち、下部の二門で開拓地に近い原生生物を攻撃し、上部の二門で比較的遠い個体を撃破していく。出力を必要最低限に絞っているので、普段よりもレーザー照射時間が長く、発射間隔も短くて済むから掃討が捗るな。

「これで暫く居住地は食料に困らないわね」
「えっ」
「えっ」

エルマの発言に俺とミミは揃って声を上げる。
え？　食料？　こいつら食うの？

「多分だけど、どう見ても有機生命体だし。こいつら多分成分分解

してタンパク源にされると思うわよ」
「やだこわい」
「どんな味なんでしょう？」
「えっ」
「えっ」

思わずオペレーター席のミミに目を向ける。ミミも驚いた顔で俺に視線を向けていた。あの、見た目に抵抗とか、無いんです？　未知の味への好奇心の方が勝ってしまったのか？

「ほ、ほら。食べてみたら意外と美味しいかもしれませんし？」
「お、おう。そうだな」

前衛型のやつとか足を見る限りどうも人間ベースっぽいし、全く食う気がしないんだけど。ま、まぁ銀河中のグルメを食い尽くすのがミミの旅の目的だし？　そういうチャレンジ精神はアリなんじゃないかな。ウン。

俺？　いいえ。俺は遠慮しておきます。

#２１０　一休み（前書き）

いろいろあってとてもおくれました―（：３」∠）―（何もかも荷物が届かないのが悪い

#210　一休み

「で、コトが終わったらまた宇宙（そら）に戻るのな」
一仕事終えてコーマットⅢの大気圏から離脱すると、フォーマルハウトエンターテイメントのズィーアがぼやくように呟いた。
「そりゃあ俺達は傭兵だし？」
「それも戦闘艦（ふね）でのドンパチがメインのね。陰謀の調査だとかそういうのは専門外よ」
「精密な手術に斧やチェーンソー持ち出すようなもんだ」

明らかに自然な生物とは思えない原生生物（？）どもを一方的に蹂躙し、とりあえずの発生地点と思われる気味の悪い地表構造物にブラックロータスのＥＭＬを始めとした艦砲射撃をぶち込み、破壊した。今頃は帝国航宙軍の重武装海兵隊員達があの原生生物のような何かの巣を襲撃していることであろう。

「でも、気にならないのか？　明らかに普通の原生生物とは思えない連中だっただろう？」
「気にならないと言ったら嘘になるけど、管轄外だよ。調査後に敵戦力を叩くってんなら役に立てるだろうけど、専門外のことに首を突っ込んでも仕方がないさ。それよりも宙賊どもを追いかけ回して叩いてた方が世のため人のため、そして俺達のためになる」
「つまり、お金になるってことですね！」
「その通り！」
「お前らそれで良いのか……」

元気なミミの言葉にビシィッ！　とサムズアップする俺を見てズィーアが困惑している。傭兵なんてこんなもんだ。俺は強いし、ク

リシュナも強い、ブラックロータスも強いし、ミミやエルマも優秀なクルーだ。でも、だからって何でもできるってわけじゃない。

「つまり適材適所ってことだよ。俺達は俺達にできることをするって話だ。何でもかんでも首を突っ込んで他人のシマを荒らしても碌なことにならん」

「なるほど」

どうやらズィーアも納得してくれたらしい。実際のところ、余計なことに首を突っ込んだりしたら絶対俺達について回っている不運が何か変なものを引っ張ってくるに違いないからな。これ以上のトラブルは要らん。間に合ってますってやつだ。

「それにな、こういう時は――」

『ご主人様、ご報告があります』

俺の言葉を遮るようにクリシュナのコックピットにメイの声が割り込んできた。

「――どうした？　あ、データキャッシュの解読が終わったか？」

この前の移乗攻撃では宙賊の船が武装とスラスター以外ほぼ無傷で丸々二隻手に入ったからな。戦闘ボットの襲撃に慌てたのか、データキャッシュとブラックボックス内のデータの消去や破壊などもされずに完全な形で手に入ったからメイにデータの解析を任せてたんだ。

『はい。宙賊のアジトの位置、取引データなどですね』

「なるほど、じゃあ位置データを帝国航宙軍に売りつける……いや、クリスに報告するか」

『はい。それがよろしいかと。クリスティーナ様なら我々りも早く、強力に帝国航宙軍に働きかけることができるでしょうから。それと、宙賊の取引データを調べていてわかったのですが』
「ああ、なんだ？」
『どうやら宙賊に資金や装備を流して、ダレインワルド伯爵家の惑星植民事業を妨害しようとしている者がいるようです。宙賊の規模に見合わない資金や物資の流れがあります』
「なるほど……じゃあその情報も合わせてクリスに相談しよう。段取りは任せる」
『はい、ご主人様。お任せください』

メイや他のメディアスタッフが乗っているブラックロータースからの通信が切れる。クリシュナもコーマットⅢの大気圏離脱を完了した。とりあえず一息、というところで俺はコックピット後方のサブシートに座っているズィーアに振り返った。

「こういう時は、こっちから頭を突っ込まなくてもトラブルが向こうから転がり込んでくるんだ。たまらんだろ？」
「たまらんな。俺はそんな悪運（バッドラック）は絶対に御免だが」
「そう言うなよ。ネタに困らなくなるぞ」

道を歩けば悪漢に追われる美少女と出会い、宇宙を行けば救難信号を拾って宙賊に襲われている客船を助けることになり、コロニーに降り立てば謎の変異生命体あいてにパワーアーマーで取っ組み合いをすることになり、宙賊を倒して戦利品を漁れば美少女を拾い、バカンスに行けば惑星が宙賊に襲撃され、帝国航宙軍と共に行けば反乱宇宙軍に襲われ、貴族の船を護衛すれば跡目争いに巻き込まれ、船を買いに行けば美少女（合法ロリ）が飛んでくる。
そして試運転とばかりに物資の輸送依頼をこなしたら帝国航宙軍と結晶生命体との戦闘に巻き込まれることになり、受勲のために帝

都に行けば御前試合と称した武闘会に放り込まれる。
うん、クソクソのクソ不運だな！
「俺は一般人なんだよ。度々トラブルに巻き込まれたりしたら命がいくらあっても足りん」
「だよなぁ」
「ですよねぇ」
「そうよねぇ」
ズィーアの言葉に俺達三人は深く頷き、心からの同意を示してみせるのであった。俺も大概逸般人になってきている気がするが、まだマインドは一般人だから。

☆★☆

メイから連絡を受けたクリスの決断は早かった。迅速、かつ密かに帝国航宙軍へと渡りをつけてダレインワルド伯爵家の私兵と帝国航宙軍の精鋭を集め、宙賊のアジトを叩くという方向で動くことになったのだ。
ことを密かに進めるのはこういった宙賊のアジトを襲撃する際によく取られる方針である。何故かと言えば、大々的に宙賊のアジトを襲撃することを宣言してしまうと宙賊に逃げられてしまうからだ。奴らの耳と目は普通に交易コロニーなどにも及んでいるのである。要は、宙賊から金を貰って情報を流している連中が一定数いるというわけだ。
「だから、宙賊のアジトを襲撃する時には色々と気をつけなきゃいけないんだよ」
「それで私達も船から降りられないというわけですか」
「そういうこと。外でポロリと口から情報を零したなんてことにな

ったら大変だからな」
「信用されてないんですかね？」
「本人にそのつもりがなくても情報を抜く方法なんていくらでもあるから。まぁほんの二日ほどの辛抱よ」

口々に質問してくるアレンとニーアに俺とエルマが説明する。
クリシュナとブラックロータスは出撃の号令が下るまでコーマットプライムコロニーで停泊待機である。まぁ、鹵獲した宙賊艦を改修して売り払うのにも時間がかかるから、渡りに船というやつかな。

『改修よりも船の内部の掃除が大変やで』
『きったないんです……ほんとうに』

昨日の夜、帰ってきた二人と少し話をしたら綺麗好きなウィスカの目が死んでいた。彼女の言う通り、宙賊の船は内装が汚くて本当に大変だったらしい。下手に清掃するよりも内装を取っ払って入れ替えるほうが早いとかそう言うレベルで。

『それに比べたら兄さんの船は本当に綺麗でええよなぁ』
『広いし、明るいし、綺麗だし、ご飯も美味しいよね……』

あまり無理はするなと言っておいたけど、二人とも二隻の中型船の改修作業で忙しいようで、早い時間に船を出て遅い時間に船に帰ってきてシャワーを浴びてすぐに寝るという生活をしている。
ブラックロータスに乗せている戦闘ボットも装備を積み替えれば作業の手伝いができるので、ブラックロータスのメンテナンスボットと一緒にティーナとウィスカに連れて行かせた。護衛にもなるからな。
ちなみに、二人とも外に出ているが、二人にはそもそも宙賊のアジト襲撃の件については話していないので、情報が漏れる心配がな

い。今回の待機停泊についても暫く留まって休憩と、二人の作業待ちであると二人には言ってある。そのせいで二人とも過剰に頑張っているような気がしないでもない。今度エルマに言って美味しいお酒でも用意してもらおう。

「傭兵というのも楽な仕事ではないんですねぇ。色々と考えることがあるというか」
「そうだな。もっとバンバン宙賊と戦ってバンバン金使ってバンバン遊びまくってるイメージだったが」
「そういうイメージですよね。わかります」
「わかるわ。普通はそうよね」
「これがうちのスタンダードです」
「私はご主人様のライフスタイルは素晴らしいものだと思いますが」

スペース・ドウェルグ社のワムドとズィーアが感心したような、或いはちょっと残念そうな様子で好き勝手言ってるが、知らん。ミミとエルマもなんか同意してるが、知らん知らん。割と好き勝手してる俺がストイック扱いされるとか、この世界の他の傭兵達は一体どんな生活を送ってるんだか。逆に気になってくるわ。

皆が俺を虐めてくる中、メイだけは俺の味方で居てくれる。流石はメイだ。今日は傷ついた心を存分にメイに癒やしてもらうとしよう。メイのお胸を借りて泣いてやるからな！

まんまとメイの思惑と言うか、機械知性特有の手練手管にやられているような気がしないでもないが、それはわかって甘えているうちは大丈夫だろう。多分。

こうして俺達はクリスと帝国航宙軍の準備が整うまでの数日をブラックロータスで過ごし、宙賊のアジト襲撃に向けて英気を養うのであった。

#211　可憐な黒鈴蘭（前書き）

間に合っ……てないですはいゆるして―（∵3」∠）―

#211　可憐な黒鈴蘭

「これは良い画が撮れそうですなぁ……」

宙賊のアジトへの襲撃実行当日、コックピット後部のサブシートに座っているワムド氏が実に嬉しそうにそう呟いた。確かにこの画は壮観だろうな。この恒星系を荒らし回る宙賊の本拠地に今から殴り込もうと星系軍、帝国航宙軍、それに傭兵達の戦闘艦が勢揃いしているんだから。

そして、この船たちはこれから悪しき宙賊を討滅しに征くのである。その様子はこれ以上無い撮れ高となることであろう。

「今日は貴方なのね」

「ええ、今まで他社に譲っていましたから」

ニコニコと人の良い笑顔を浮かべているワムド氏だが、ここぞというところでしっかりとクリシュナに乗り込んでくる辺り、もしかしたら今回のような事態を見越してクリシュナへの同情権を今まで他社に譲っていたのかもしれないな。だとしたら、人の良さそうな見た目に反して彼は意外と狡猾なのかもしれない。

「宙賊のアジトへの襲撃というのはどのような手順で行われるのですか？」

「基本的には軍の戦艦級、巡洋艦級による艦砲射撃で先制するところからだな。先制攻撃でアジトの主要施設――主にハンガーやドックを破壊して、宙賊がアジトから逃げられないようにする。とは言っても、宙賊のアジトにはハンガーやドックに駐機していない宙賊船も多いから、そういった奴らは四散して逃げようとするわけだ」

「なるほど？」
「そこで俺達傭兵の出番ってわけだな。足が早くて小回りが利く俺達は砲撃前に宙賊の逃走経路になりそうな場所に潜伏して、巣を叩かれて慌てて逃げ出してきた宙賊どもを狩って回る。言わば猟犬役だな」
「なるほど。真正面を軍に任せて、傭兵は包囲と追撃をするわけですか」

ワムドは俺に話を聞きながらいくつもの撮影ドローンでコックピット内の様子を撮影し、俺達の会話も記録しているようだ。これを後で編集してドキュメンタリー映像に仕立て上げるのだろう。

「アジト襲撃は久しぶりですね」
「お祭りみたいなもんだからなぁ」

お祭りはお祭りでも上がる花火は宙賊どもが爆発四散する汚い花火ばかりなんだけども。

「メイ、そちらも準備は大丈夫か？」
『はい、ご主人様。準備は万全です』

他のメディアスタッフを乗せているブラックロータスは、今回は帝国航宙軍に同行して艦砲射撃を行う予定だ。ブラックロータスが装備している艦首の大型電磁投射砲（ＥＭＬ）の射程と威力は帝国航宙軍が採用している主力艦の主砲を凌ぐ射程と威力を持ち合わせているからな。まぁ、ＥＭＬは攻撃力こそ高いけど扱いが難しいから軍にはあまり採用されないんだが。やっぱりレーザー砲と違って弾速が光速とはいかないわけだし。

「今回は別行動になるから、気をつけてな」

『それはどちらかと言えば私の台詞なのですが』

確かに。メイは帝国航宙軍と星系軍、そしてダレインワルド伯爵家の私設軍の主力を行動を共にするけど、俺達は小型戦闘艦で宙賊どもとドンパチするんだもんな。

「じゃあ、俺達の無事を祈っておいてくれ」

『はい。ご武運を。そしてどうかご無事で』

「ありがとう。そっちもな」

機械知性は何に祈るのだろうか？　所謂神様では無さそうだけどな。いや、意外と彼女達のほうが神や奇跡といったものを信じているのかもしれない。彼女達がただのプログラムから機械知性へとして進化した事自体が偶然に偶然が積み重なった奇跡の賜物なのであろうし。

そうやって待っていると、ブリーフィングが始まった。作戦内容は俺がワムドに話したのと同じ流れだ。特筆するような点は見当たらない。まぁ、こういうのが定石というものがあるからな。

所謂定石や鉄板戦術と呼ばれるようなものはそうなるべくしてなったものなのだ。無論、必要に応じて型を破ることも時には大事なのだろうが余程のことがない限りは定石通りに戦うのが有効だろう。特に、戦力が多い時はな。俺みたいに単艦で多くの敵と戦ったりするならば色々と工夫や奇策が必要になることもあるが、まぁそれはまた別の話ってことで。

ブリーフィングが終わると、コックピットのスクリーン上に大映しでクリスの姿が映し出された。

『この度の作戦はコーマット星系とそこに住む人々だけでなく、その周辺星系で活動する全ての帝国臣民や旅行者の安全を守るための作戦です。とは言っても、当然ながら一番の恩恵を受けるのは我が

ダレインワルド伯爵家ですが』

演説でもするのかと思いきや、画面上に現れたクリスはいきなり妙なことを言い始めた。

『皆さんの奮闘によって多くの人々の安全と未来が守られる。そしてダレインワルド伯爵家の権益と名誉は守られる。帝国軍人は武勲を得て、傭兵の皆様には帝国から宙賊達に懸けられている賞金に加えて、ダレインワルド伯爵家が正当な報酬をお支払いする――』

そう言って、クリスは端正な顔にニッコリと花が咲くような笑顔を浮かべた。

『――私達全員が幸せになるために、宙賊の皆さんには宇宙（そら）に散ってもらいます。皆さんの奮戦に期待します』

可憐な中にも致命的な危険を孕んでいることを窺わせるその笑みは、まるで黒い鈴蘭のようであった。

☆★☆

クリスの可憐かつ危険な笑みで戦場へと送り出された俺達は指定の宙域へと到達し、小惑星の影に身を潜めていた。当然ながらエンジン出力は最低限まで落とし、同時に生命維持装置も最低限にしてステルス状態を維持している。

「いやぁ、先程のクリスティーナ様の演説はゾクゾクするものがありましたなぁ」

「別に声を潜める必要はないぞ。色々な意味で」

クリスも意図してやったことだろうしな。ちなみに、色々な意味でというのは俺があの笑みに関してクリスに告げ口をする気は無いというのと、いくらステルス中だからって会話まで声を潜める必要などはないという意味だ。どんな大声を上げたってクリシュナの外には伝わらないし、万が一伝わったところでクリシュナの外は宇宙空間だしな。

「あはは……クリスちゃ――クリスティーナ様もやっぱり貴族の子女ですからね」

「まぁ、順調なんでしょうね。色々と」

ミミとエルマも割と純真無垢であったクリスの変貌ぶりに若干苦笑いを浮かべている。男子三日会わざれば刮目して見よ、なんて言葉もあるが、あの年頃の女の子はそれ以上に成長が早いのかもしれないな。

「作戦開始時刻まであと僅か、か……各員、戦闘準備。ワムドは舌を噛んだり漏らしたりゲロ吐いたりしないよう気をつけてくれ」

「はっはっは……頑張ります。念の為恥を忍んでオムツもしてきましたし」

この密閉空間で戦闘中にゲロなんぞ吐かれた日には最悪だからな。簡単に掃除することもできないし、少なくとも戦闘が落ち着くまでは吐瀉物の匂いとも戦い続けなければならなくなる。そんなのは流石に御免だからな。

「新人船乗りにオムツは必須装備だからな、ウン」

努めてミミの方には視線を向けないようにしてまっすぐ前を向いておく。左側頭部に強い視線を感じる気がするが、きっと気のせい

だ。俺が言ったのはホラ、あれだよ。一般論としてね？　ミミだってオムツはもう取れたんだから良いじゃないか。

「ヨシ、ジカンダ。ハジメルゾー」
「しまらないわねぇ……機関出力、戦闘モードに変更。各システムリブート」
「むぅ……センサー、レーダーシステムアクティブ。行けます」
「ははは、時間だな。じゃあ戦闘開始だ」

クリシュナが小惑星の影から飛び出すと同時に宙賊のアジトに主力艦隊のレーザー砲撃が直撃し、激しい発光と爆発が発生する。爆発に紛れてわからないが、ブラックロータスからの砲撃も間を置かずに宙賊のアジト――改造された大型小惑星に着弾していることだろう。

「さぁ、稼ぐぞ」
「「アイアイサー」」

ミミとエルマの返事を聞きながらスラスターの出力を最大にしてクリシュナを戦場へと走らせる。
さぁ、久々の大規模戦闘だ。食い散らかしてやろう。

#212　大規模戦闘（前書き）

１５分も遅れていないから、これは実質的にノー遅刻なのでは……？

―（：３」∠）―（遅刻です

#212　大規模戦闘

「二時方向上方、敵機三！」
「やるぞ」
「アイアイサー、ウェポンシステムスタンバイ」

こちらに気づかずに逃げようとしている三隻の宙賊の先頭に位置する船に発砲。四門の重レーザー砲から発射された四条の光の槍が、脆い宙賊艦の土手っ腹を一撃で貫――かなかった。重レーザー砲の一斉射が宙賊のシールドに阻まれたのだ。

「装備が良いな」
「少なくとも、シールドは多少まともみたいね」
『ゲェッ！？　て、敵――』

もう一斉射。今度の重レーザー砲撃は宙賊艦のシールドを貫通し、それだけには留まらず宙賊艦本体の装甲と船体をも貫通してそのまま爆発四散させた。

「こ、殺したので？」
「ああ」

怖気づいたような声音で聞いてくるワムドに短くそう答え、回避機動を取ろうとする二隻のうち一隻にもう一斉射。やはり防がれる。しかし慌てているのか動きが単調だ。いくら全力で加速しようとも、真っ直ぐ飛ぶのではいけない。

『や、やめっ――！』

宇宙空間にもう一つ汚い花火が咲く。
『や、やめろ！　降伏、降伏する！』
最後の一隻はそう言ってコックピットブロックをベイルアウトした。ああなれば整備能力のあるドックに艦体を入れなければ再接続はできないので、少なくともこの戦いにおいては戦闘能力を喪失したと言える。
「ミミ、タグ付けしといてくれ」
「わかりました！」
ミミがコンソールを操作してベイルアウトしたコックピットブロックとほぼ無事な宙賊艦に電子的なタグをつける。普段は使わない機能だけど、こういう大規模戦闘では所有権の主張は大事だからな。
「次だ」
「はい！　九時方向下方に反応多数、味方も入り乱れて戦闘中です」
ミミのナビゲートに従って転舵し、少し進むと前方で発生している戦闘の様子が明らかになってきた。
「押されてるわね」
「賊の数が多いのもあるんだろうが、やっぱり装備が良いのかもな。今、一瞬だけどイオンブラスターっぽい光弾が見えたぞ」
「厄介ね」
イオンブラスターというのはシールドの飽和能力が高い代わりに装甲や船体への攻撃力が非常に低い補助兵器だ。広く普及している

レーザー砲やマルチキャノンよりも装備の価格自体が高いし、弾速もマルチキャノンより若干遅くて当てづらい。だが、その効果は絶大だ。集団の中にイオンブラスター持ちが混ざっていると、気づかない間にシールドを飽和させられて大損害を被ることもある。非常にいやらしい武装と言える。

「こちらクリシュナ。パーティーに飛び入り参加させてもらうぞ」
『大歓迎だっ！　こいつら妙に装備が良いぞ！　気をつけろ！』
「了解」

広域通信で返事をしながら乱戦の中に飛び込む。まず狙うのはイオンブラスター持ちだ。慣れてるイオンブラスター使いはゴチャゴチャの乱戦に飛び込んで至近距離でイオンブラスターと共にマルチキャノンを撃ち込んできたりするのだが、慣れていない奴は付かず離れずの距離を取って狙いすます傾向が強い。うん、あいつだな。

『うおぉっ！？　こっちくん――』
「一つ」

すれ違いざまに二門の大型散弾砲を撃ち込み、シールドごとイオンブラスター持ちの宙賊艦を粉砕する。散弾砲は癖の強い武器だが、ごく短距離で命中させた場合に限りシールドをほぼ無視して装甲と船体に大ダメージを与える特性がある。こういう乱戦にはもってこいの武器だ。

「あわわわ……ひえぇ」

なんか後ろからワムドの怯える声が聞こえる気がするが、構っては居られないな。おお、敵機が直ぐ側を掠めていく軌道だ。ついでに散弾砲の弾も持ってけ、遠慮はいらんぞ。

『四本腕のやつが厄介だ！　狙え！』
『押し潰してやるぜぇ！』
「ハハハ、ナイスジョーク」

向こうから寄ってきてくれるなら好都合だ。前方に火力を集中して不完全な包囲を食い破り、機体を反転させて機体を後ろ向きに高速で飛ばしながら追撃してくる宙賊艦どもと真正面から殴り合う。いくら多少装備が良いとは言っても宙賊は宙賊だ。イオンブラスターとシーカーミサイルにだけ注意すればさほど怖い相手でもない。

『こ、こいつ！　なんで弾が当たらねぇんだ！？』
『当たってないわけじゃねぇ！　押し込め！』

確かに、当たっていないわけではない。レーザー砲による攻撃は回避が困難だし、マルチキャノンから発射される砲弾も弾幕となって襲いかかってくれば避けられないものも出てくる。だが、シールドを大きく削るイオンブラスターとシーカーミサイルにだけ気をつければ多少被弾したところでクリシュナの三層あるシールドは小揺るぎもしない。
そして、俺がこれだけ多くの敵を引き付ければ――。

『おらァ！　土手っ腹がお留守だぜ！』
『俺を前に余裕だなぁオイ！』

今まで押し込まれていた傭兵達が勢いを取り戻し、俺に集中している宙賊どもの横っ腹を食い破る。俺が何かを言うまでもなく、彼らの狙いはイオンブラスター持ちとシーカーミサイル持ちだ。傭兵達は脅威度の高い敵を的確に潰していく。

『く、くそっ！　なんでだよっ！』
『あ、おい！？　逃げんな！』

形勢不利と見た宙賊どもが怖気づき、算を乱して潰走し始める。当然ながら、それを優しく見守ってやる傭兵など居ない。宙賊は叩き潰す。逃げる宙賊も叩き潰す。それが傭兵というものだ。

「ヒャッハー！　楽しい楽しい追撃戦だ！　早いもの勝ちだぜぇ！」
『オラオラァ！　簡単に逃げ切れると思うなよ！』
『ははははっ！　ケツ振って誘ってやがんのがぁ！？　オラ逃げんなっ！　賞金と命置いてげぇ！』

こちらにケツを向けて逃げる宙賊など、俺達傭兵にとっては美味しい獲物以外の何者でもない。

「……どっちが宙賊なのかわかりませんな」
「あはは……」

ワムドの呟きにミミが苦笑を返す。失礼な、俺達はこれ以上なく模範的な傭兵だろうが。

☆★☆

宙賊の装備の質が想定以上に高かったのもあって傭兵に多少の被害と取りこぼしは出たが、宙賊の拠点攻略戦そのものは成功裏のうちに終了した。少なくとも、宙間戦闘は。

今は帝国航宙軍と星系軍、それにダレインワルド伯爵家の私設軍の歩兵部隊が宙賊の拠点へと突入し、内部の掃討を進めているところだ。

俺達は、というと戦場で屑拾い中である。要は、撃破した宙賊艦

の残骸から戦利品を漁るお仕事中である。拠点攻略戦時の宙賊艦は中々に有用な戦利品を積んでいることが多いのだ。

「何故ですか？」

「そりゃアレだ。拠点からできる限りの物資と資材を持ち出してるからだな。どんなに秘密にしても、秘密ってのは漏れるもんだ。奴ら、逃げ出す用意をしているのさ」

ワムドの質問に答えてやりながら戦利品を漁っていく。フードカートリッジ、飲料水、酒、医療品、ドラッグ、レアメタルの他に換金可能な資材やハイテク製品、それに冷凍睡眠ポッドに入っている人間――恐らく違法奴隷。

「こいつは大量だなぁ……やれやれ」

コーマット星系では違法奴隷の獲得を目的に『狩り』をしていた宙賊も多かった。予想通りといえば予想通りだが、厄介だな。まぁ、今回回収した違法奴隷や拉致被害者に関しては帝国とダレインワルド伯爵家が面倒を見てくれると思うけど。

ちなみに、降伏してベイルアウトした宙賊はコックピットブロックごと帝国航宙軍に引き渡しておいた。奴らがどのような結末を迎えるかは知らんが、来世は真人間として生まれてこいよ。

「傭兵の主な収入源は宙賊どもに懸けられている賞金だが、こういった戦利品での儲けというのも案外馬鹿にできない――というか、母艦を手に入れてからは賞金額と同じかそれ以上に戦利品で稼げているな」

「ちなみに、今回の戦果は？」

「あー、ミミ？」

「小型艦四十二隻、中型艦八隻で丁度五十隻ですね」

「今回は宙賊の装備が良かったせいで思ったより伸びなかったわね」
「その分戦利品で稼げるさ」
「五十隻……凄まじいですな」

今回クリシュナが挙げた戦果を聞いてワムドが唸り声を上げる。ちなみに、今回の宙賊撃破報酬は小型艦が一隻５０００エネル、中型艦が一隻２００００エネルだ。撃破報酬だけで３７万エネルだな。これに個々の宙賊艦に懸けられている賞金が別に入ってくる。更に戦利品と鹵獲、回収した宙賊艦を改修して売り払うわけだ。いくらになるかまだわからんがウハウハだな！　まったく笑いが止まらんね。

「ヒロ様が楽しそうで何よりです」
「守銭奴ってわけじゃないけど、ヒロって結構お金が好きよね」
「汗水垂らして働いた分がそのまま数字として返ってくるのって素敵じゃん？」
「傭兵業はやりがいのある仕事、というわけですか」
「やりがいのある仕事か。確かにそうだな」
「そうね。ヒロはともかく、私達は雇われの身だから賞金額がそのまま入ってくるわけじゃないけど」
「ちなみにいかほどで……？」
「私が稼いだ総額１％で、エルマさんが３％ですね」
「それは……少なくはないのですかな？」

ワムドが首を傾げる。確かに、稼いだ総額の１％とか３％とかって安く感じるよな？　命を懸けているリスクそのものは大差ないわけだし。

「まだ最終利益がはっきりしてないから確かなことは言えないけど、多分私の今回の取り分は軽く１０万エネル以上になるわよ」

「私も3万エネルは超えると思います。今日一日で、ですよ？」
「私の一般庶民の考えが及ばない世界だということはよくわかりました……ちなみに、使い途は？」
「美味しいお酒を買うとか？」
「美味しい食べ物を買うとか？」
「そこは普通服とかアクセサリとかでは……？」
「んー、ヒロがそういうのが好きなら考えなくもないんだけど……」
「むしろヒロ様がなんでも買ってくれちゃいますから……」

確かにエルマやミミに着て欲しい服があったら俺が買っちゃいますね、はい。アクセサリとかも必要に応じて買いましたね、はい。まぁ、戦闘時のことを考えるとあんまりチャラチャラとアクセサリを身につけることもできないんだけどさ。何かの拍子に外れてコックピット内を飛んで回ったら滅茶苦茶邪魔だし危ないから。

「……流石に女性を二人も囲うだけあって甲斐性バッチリなのですな」
「そうね」
「ヒロ様ですから」

エルマが穏やかな笑みを浮かべ、ミミが何故かドヤ顔をしている。うん、あんまりそうやってストレートに言われると照れる。というか君達、戦利品改修の手が止まっていますよ。ほらほら仕事してホラ。

#213　またお前か！（前書き）

お犬様に昼寝を強要されて遅れました―（∵3」∠）―（ゆるして

#213　またお前か！

俺は使わないが売ればそこそこの値がつくイオンブラスターや、駆け出しから中堅くらいの傭兵が使ってもおかしくはないレベルのなかなかに強力なシールドジェネレーターなど、高く売れる船のパーツやらその他戦利品を回収していると、突然ミミが表情を変えてコンソールを操作し始めた。

「どうした？」

「いえ、まだちょっとわからないです……なんだかアジトを制圧している帝国航宙軍とか星系軍の方が騒がしいみたいです」

「何かしら？　宙賊が何か厄介なものでも使ったのかしら？」

「歌う水晶とか？」

「それは物騒すぎるでしょ……でも、宙賊が何か予想外の手段で反撃に出たのかもしれないわね」

「それにしたって制宙権はもう完全に体制側が取ってるだろ。いくら白兵戦で巻き返しを図ったとしても、最悪アジトごとスペースデブリにされて終わりだと思うが」

いくら帝国航宙軍や星系軍、ダレインワルド伯爵家の私設軍による白兵制圧戦に宙賊側が勝利したとしても、体制側が完全に制宙権を取っている今となっては現状を打開する方法がない。脱出する方法も、アジトを包囲している体制側の戦力を撃破する方法も無いからだ。

だから、こういった状態になってしまえば普通は宙賊側が早々に降伏して制圧が終わるはずなのだが。

「どうも頑強に抵抗を続けている集団がいるみたいですね体制側の

白兵戦力にそれなりに被害が出ているみたいです」
「へぇ？　戦闘訓練を受けた上にパワーアーマーとかでガチガチに武装した帝国航宙軍の海兵に被害を出すなんてどんな……ああ」
「気づいた？」
「いや、あり得るか？」
「ない、とは言い切れないわね。視察とかで」

どうやらエルマも俺と同じ心当たりに行き着いたようである。そんな俺とエルマの会話にミミとワムドが首を傾げる。

「訓練を受けた帝国海兵に対抗できる存在なんてそうそういるもんじゃない。でも、パワーアーマーの装甲を紙のように引き裂き、自分に向かって放たれたレーザーを防ぎ、場合によっては弾き返す存在ってのを俺達は知ってるはずだ」
「えっ……そ、それって」
「貴族、ですか。それも、いわゆる白刃主義者の……」
「実際にどうかはわかんないけどね。もしかしたらコーマットⅢに出てきてたあの奇っ怪な生物が暴れだしたとかかもしれないわよ」
「訓練された海兵でもアレの相手は骨が折れるだろうなぁ」

勿論物理的な意味も含めて。パワーアーマーならワンチャン耐えられるかもしれないけど。いや無理かな？　あいつらデカかったもんな。いやでもパワーアーマーなら……などと考えながら回収を進めていると、宙賊のアジトの一角がチカリと光ったように見えた。

「なんか今宙賊のアジトが光ったような――」

などと言っていると、宙賊のアジトの方から何かが超高速で近づいてきつつあるのをクリシュナのレーダーが拾った。当然ながらオペレーターのミミもその存在に素早く反応する。

「何か――いえ、これは……サプレッションシップが高速でこちらに接近してきます！」
「キレそう」
「どうどう」

思わず負のオーラを醸し出してしまった俺をエルマが横から宥めにかかってくる。
説明しよう！　サプレッションシップとはクリシュナでも追いつけない超強力な推進機とクリシュナの火力でも削りきれない強固なシールドを兼ね備え、敵艦のシールドを無効化しつつ表面装甲を貫徹する事のできる衝角『だけ』を備えた帝国航宙軍の誇るトンデモ兵器である！
敵艦にラムアタックをかけた後は衝角部分から一騎当千の貴族剣士を敵艦の内部に送り込み、敵艦を無力化しちゃうぞ☆　という頭のおかしい発想のもとに開発されたらしい。計画の発案者と承認者と設計者は何かクスリでもおキメになられていたのではなかろうか。

『キャプテン・ヒロ！　そいつを止めなさい！』

何にせよ俺の稼ぎには関係ないし関わらんとこ、と考えていたら広域通信でセレナ中佐からそう呼びかけ――というか命令が飛んできた。えぇ……？

「あー、こちらクリシュナ。撃破すれば良いのか？」
『撃破はダメよ！　拿捕して！』
「無茶振りやめてくれません？」

クリシュナより速い速度で飛ぶクッソ固いシールド持ちの小型艦を、撃破せずに移動能力だけ奪って拿捕するとか無理ゲーにも程が

ある。重レーザー砲を真正面から何度も撃ち込んで、すれ違いざまに散弾砲をぶち込むなり、或いは対艦反応魚雷をぶち込むなりすれば撃破はできるかもしれないけど。

『とにかく！　止めて！　それが無理なら可能な限り追って！』
「そんな無茶苦茶な……」
「またいつものね」
「ですね」
「これが話に聞くトラブル体質というやつですか」
「やめろ！　もう諦めかけてるけど俺はそんな事実は絶対に認めないからな！」

とにかくあのファッキンサプレッションシップを止めなければならないらしい。しかも撃破せずに。

『プラチナランカーの貴方にならできると信じていますよ。え？　もしかしてできないんですか？』
「で、できらぁ！」
「たまにヒロって著しく頭が悪くなる時があるわよね」
「単に挑発されてヤケクソになっているだけだと思いますけど……」

さすがミミ、わかってるな。
サプレッションシップなんざ怖かねぇ！　ぶっ潰してやる！

☆★☆

『で、結局逃げられたと』
「はい」

サプレッションシップのシールドの硬さと足の速さには勝てなか

ったよ……まぁ、今はサプレッションシップの超光速航行の航跡を辿って追跡中なんだけどね。サプレッションシップは超光速ドライブは搭載しているけどハイパードライブは搭載していないようだから、コーマット星系の外に逃げられることはない筈だ。

「今追跡してるから……」

『サプレッションシップ単独では恒星間航行はできませんし、航続距離も長くはありません。必ずどこかで補給なり、船を乗り換えなりするはずです。帝国航宙軍の斥候も応援に向かわせていますので、そのまま追跡を続けてください』

「アイアイマム」

俺が敬礼しながらそう返事をすると、セレナ中佐は一つ頷いて通信を切断した。

「まぁ、無理な話よね」

「ですよね」

撃破しても構わないというのならともかく、スピードの乗り切ったサプレッションシップを拿捕しろというのは本当に無理な話だ。重レーザー砲ではシールドを抜けないし、シールドをある程度無効化する散弾砲でサプレッションシップを撃破せずに推進機だけ破壊するというのも無理な話だし、対艦反応魚雷なんてそもそも当てられる気がしない。当てたとしても、そうなればサプレッションシップは残骸も残さず消滅するだろうから、そもそも拿捕という目的を果たせないわけだけど。

「ブラックロータスも置いてきてしまいましたな」

「流石に全速力のクリシュナの足にはついてこられないしな。まぁ、追跡だけなら危険があるわけじゃなし。戦利品の回収を終えたら追

いついてくるだろう」

同一星系内であればクリシュナとブラックロータスはお互いの距離が離れていてもどこにいるのかはわかるようになっている。星系内の情報ネットワークを通してどうのこうの言っていたけど、詳しい仕組みは知らん。ＳＯＬの仕様的に言えば、いわゆる船団（パーティ）機能だな。

「で、この航路なんだが……コーマットⅣに向かってるよな？」
「そのように見えるわね」
「そうですね。コース的にはコーマットⅣの軌道にドンピシャリってところです。降下するつもりでしょうか？」
「嫌な予感しかしないなぁ……降下前に叩けると良いんだが」

これがコーマットプライムコロニーに向かってるってんなら船の乗り換えだろうと予想もつくのだが、向かっている先がテラフォーミング中のコーマットⅣとなると本当に嫌な予感しかしない。
テラフォーミング中の惑星というのは大変に環境がよろしくない。それはそうだろう。元々あった星の環境を、テラフォーミングを行なっている種族に都合が良いように改変している真っ最中なのだ。天変地異レベルの異常現象が惑星各地で頻発しているはずである。

「ヒロ……」
「ヒロ様……」
「ん……？　あっ」

しまった！　気を抜いていた！　降下前に叩けると良いんだが、とか言っちゃったよ！
お願いしますやめてくださいテラフォーミング中の惑星に降下とか絶対にしたくないんですお願いします許してやめてやめてやめろ

オ！

#213　またお前か！（後書き）

＞お願いしますやめてくださいテラフォーミング中の惑星に降下とか絶対にしたくないんですお願いします許してやめてやめてやめろォ！

（。ω。）……

（＾ω＾）ニコッ（やめない

#214　ダメです。　（前書き）

よぉし今日は久しぶりに間に合ったぞォ！ ―（：3」∠）―

#214　ダメです。

「ま、まぁ別に降下してまで追いかける必要はないよな！」
「そうだと良いわね」
「あ、あはは……ちゃんと降下地点はマークしてますから」

当然ながら、俺達の追撃は間に合わなかった。テラフォーミング中のコーマットⅣに辿り着いた時にはサプレッションシップは既に降下を開始しており、攻撃して推進機を破壊したところでコーマットⅣへの降下が墜落に変わるだけだったからだ。撃破するなと言われてしまっている以上、手出しはできなかった。

しかし、クリシュナはこれでも単独で恒星間航行を行うことができる小型戦闘艦である。各種センサーの性能などもそれなり以上の性能を有しており、コーマットⅣの低軌道上からサプレッションシップの降下地点を正確に観測することなど容易い。

なので、俺達はサプレッションシップの正確な降下地点をマークし、コーマットⅣの低軌道上に留まって降下したサプレッションシップの中の人の頭を押さえているわけである。

「テラフォーミング中の惑星の環境が大変に危険ということはわかりますが、何故ここに留まっているのですかな？」
「もし恒星間航行が可能な船をコーマットⅣに隠しているとしても、俺達がここを押さえていれば宇宙に上がってきた瞬間に叩けるからな」

いかに航宙艦と言えども惑星の重力を振り切って大気圏を離脱するためには基本的にはほぼ真上に向かって真っ直ぐ飛ばなければならない。回避行動なども取れないので、攻撃に対して非常に無防備

になるのだ。それこそ、相手が小型艦でも推進機だけ破壊するのも容易いレベルである。

「軌道を押さえられたら宇宙に上がってくるのは難しい。制宙権を制す者が戦いを制す。帝国に限らず、どの星間国家の軍隊も航宙軍の整備に力を入れている最大の理由だな」

どんなに強固な要塞も、強力な兵隊も、戦車も、船も、航空兵器も、それが地上にある以上は宇宙からの軌道爆撃には無力だ。基本的に今のこの世界の戦闘というのは、航宙権を取った方が戦いを制するのである。

「ならば、何故あのサプレッションシップはコーマットⅣに逃げ込んだのでしょうな？」

「コーマットⅣに何か逆転の手――逃げるための手段があるか、或いは時間稼ぎだろうな」

「時間稼ぎですか？」

「なにか逆転の手があるってんじゃないなら、外部からの助けの見込みがあるか、或いは何らかの事情で相手――つまり俺達が撤退するのを祈って待つかの二択だろう。逃げ込む以上は何かしらの見込みがあってのことだと思うけど、それが何なのかは想像の域を出ないな」

あと他にももう一つ可能性があるけど、流石にそれはないと思いたい。

「とりあえず、後続の軍の連中が来るまでは待機だな。引き継いだらとっととコロニーに帰って戦利品を捌きに行くとしよう」

「必死ね」

「あはは……ま、まぁクリシュナがわざわざ降下する理由もありま

せんし、大丈夫ですよ」

やめなさい、君達。変なことを言ったら降下する羽目になるかもしれないだろ。俺は絶対に降りないぞ。降りないからな！

☆★☆

およそ一時間後、俺は帝国航宙軍のドロップシップの中にいた。

「おうちにかえして」

「ダメです」

俺の向かいにはいつのも小綺麗な軍服ではなく、軽量のコンバットアーマーに身を包んだセレナ少佐が座っている。周りにはより重装甲のコンバットアーマーを身に着けた帝国航宙軍の海兵や、パワーアーマーを装着するのに適した専用ジャンプスーツを装備した装甲海兵の人とかもいる。むくつけき男だけじゃなく、女性もそれなりにいるからむさ苦しい感じがかなり軽減されているのが救いといえば救いか。

ちなみに、俺の格好もいつもの傭兵服ではなく白兵戦用の軽量コンバットアーマーと前にブラドプライムコロニーで購入したカメレオンサーマルマントという出で立ちだ。

このマントはエネルギーパックを装着することによって摂氏マイナス５０℃～プラス５０℃までの過酷な気候でも快適ん見過ごせる上、フード付きで台風や砂嵐にも対応、カメレオン機能がついているので周りの環境に合わせて迷彩効果まで発揮するという優れものである。

そして他には空気中の水分を収集して一日に最大２リットルまでの水を生成するハイテク水筒、有害なガスだけでなく未知の細菌やウィルス、生物兵器などにも対応している、と謳っている高機能ユ

ニバーサルマスク、その他諸々のサバイバル装備に加えて大小二本一組の剣に、レーザーガン、レーザーライフルまで装備している。完全に戦闘装備である。

「逃走、潜伏しているゲリッツ＝イクサーマルはサイバネティクスやバイオテクノロジーで身体能力を強化している上に、剣術の達人です。今、この星系には私か貴方くらいしか対抗できる人材が居ないのです」

「囲んでレーザーで丸焼きにすればいいだろ……」

だからって剣で決着をつけようとか頭の中白刃主義者かよ。もっと文明の利器を使ってどうぞ。

「宙賊基地の制圧戦ではそうしようとして大きな被害を出したんです。そもそも、奴はなんとしても生きて捕獲しなければならないので」

「どうして」

「ゲリッツはイクサーマル伯爵の弟で、伯爵の右腕として後ろ暗いことを色々としている男、と言われています。今までは尻尾を見せなかったので捕縛や尋問ができなかったのですが、今回はもう言い逃れが出来ません。捕縛して奴から情報を引き出せばイクサーマル伯爵家を潰せます。絶対に奴を捕縛しなければならないのです」

「なんかよくわからんが、セレナ中佐がそのイクサーマル伯爵家ってのをぶっ潰したいというのだけはよくわかった」

「それだけ分かれば十分です。まぁ所謂悪徳貴族ってやつです、イクサーマル伯爵家というのは」

悪徳貴族ねぇ？　まぁ、その右腕とかいう男が宙賊とつるんでたってだけでまともなとこじゃないってのは察せられるけどさ。貴族の事情に首を突っ込むつもりはないから深くは聞くまい。

しかし、貴族ってのは機械知性に監視されててあまりやんちゃ出来ないって話じゃなかったっけ？　と、ここで公然とセレナ中佐に聞くのも良くは無さそうだな。なんかエルマにせよクリスにせよ貴族生まれの方々は機械知性関連にはいつも奥歯に物が挟まったような態度なんだよなぁ。暗黙の了解というか、公然の秘密というか、大っぴらには言えない何か特別な事情があるのかもしらん。

「というかだな、俺は船でのドンパチが専門で生身での切った張ったは専門外なんだが？」

「ははは、御前試合ではあれだけ大体的に素晴らしい剣の腕を見せてくれたではないですか。貴方なら大丈夫というか、私以外だと貴方しか対抗できる人が居ないので諦めてください。貴女の雇い主も許可を出しましたし。まぁ、帝国航宙軍からの正式な要請となると断ることなどできなかったと思いますが」

「汚い。さすが公権力汚い」

「汚いとは失礼な言い草ですね。手を尽くし、権利を正当に行使しただけですよ」

セレナ中佐が肩を竦めて俺の細やかな罵倒を柳の如く受け流す。ぐぬぬ。

「降下開始まで三十秒！」

「総員、降下に備えろ！　くっちゃべって舌を噛むなよ！」

「「「アイアイマム！」」」

セレナ中佐が声を張り上げ、海兵達が大きな声で返事をする。いかにも軍隊って感じだが、なんで俺はこんなところに一人で放り込まれてるんだろう。

「さぁ、付き合ってもらいますよ。テラフォーミング中の惑星とい

うこの世の地獄の底まで」

セレナ中佐はニコリと微笑むと同時にドロップシップが大気圏への突入を開始したらしく、ドロップシップがガタガタと激しく揺れ始める。

「あぁぁぁぁいやだぁぁぁぁぁっ！　おうちにかえしてぇぇぇぇぇぇっ！」

俺の叫びも虚しく、帝国航宙軍のドロップシップはテラフォーミング中のコーマットⅣへと降下して行くのだった。

☆★☆

「着地地点確保！　ゴーゴーゴー！」

「装甲海兵は装備の点検と装着を進めろ！　工兵はマテリアルプロジェクターの用意を急げ！」

着陸と同時に帝国海兵達がドロップシップから飛び出して行き、セレナ少佐が大声で指揮を取り始める。海兵達はキビキビと動いて装備の点検や拠点の設営を始めているようだ。

有り体に言って、着陸地点の環境は最悪である。気温は零下２０℃、乾燥しているのか雪は降っていないが、嵐のような強風の中で砂塵が吹き付けてきていて、マスクを装備していなかったら顔中が細かい擦り傷だらけになりそうな状況だ。

そんな中、俺はというと小型情報端末を使ってクリシュナと連絡を取っていた。小型情報端末と無線で接続されたユニバーサルマスク越しの視界に通信画面が投影される。

「こちらヒロ、とりあえず無事着陸した」

『こちらミミです。まずは無事に降下できたようで一安心ですね』
「うん。で、そっちから俺はトラッキングできてるか？」
『大丈夫よ。何かあればいつでも支援砲撃できるわ』
「いざという時は頼むぞ。でも俺には当てないようにな」
『私の腕を信用しなさい。私だってクリシュナのサブパイロットとしてちゃんと訓練してるわ。知ってるでしょ？』
「まぁな」

エルマもクリシュナのサブパイロットとしてクリシュナの慣熟訓練はしてもらっている。勿論俺の腕には及ばないが、クリシュナをちゃんと乗りこなせるだけの技術は習得しているのだ。元々ピーキーで操縦の難しい動く棺桶――ギャラクティックスワンを乗りこなしていただけあって、エルマの操縦技術は決して低いものではない。バランサーを切った状態での戦闘機動を磨けばもう一皮剥けると思う。

「パワーアーマーなしでの生身とか嫌だなぁ……」
『パワーアーマー着たままじゃ剣は振るえないから仕方ないわね』
『今度剣士用のパワーアーマーとか買ったら良いんじゃないですか？　置いておくスペースはあるわけですし』
「それも検討しておくかなぁ」

軽量型パワーアーマーの中には装着時の各部の可動域が生身と全く変わらないことを売りに出しているものもある。それでいて膂力や機動力が生身よりも強化されるし、オプションパーツでジャンプパックなどを装着すれば短距離飛行なども可能になる。その代わり、装甲などは貧弱で俺が今装備しているコンバットアーマーに毛が生えたようなものが多いんだが。
しかし、それでもパワーアーマーはパワーアーマーなので耐候性や環境適応能力は非常に高い。こういった状況では大いに役立つだ

ろうから、購入を検討しても良いかも知れない。

「しかし、こういった状況を乗り切るのにそれなりに値段の張る装備を買って対応したら良いんじゃないか？　と提案するあたり、ミミもだいぶ傭兵流のやり方ってのが身についてきたな」

『そうね。その調子で染まっていって生粋の傭兵になりましょう』

『あ、あはは……良いことなのか悪いことなのか……』

そんなに複雑そうな声を出すなよ。染まってしまえば楽だぞ？

『それで、話は変わるけど今後の計画は？』

「安全な拠点で対象が発見されるまでぬくぬくと待っている、というわけにはいかんだろうか？」

今、俺の目の前では軍用のマテリアルプロジェクタによって物凄い勢いで頑丈そうな拠点が構築されつつある。どんなハイテク技術を使っているのかわからんが、まるで３Ｄプリンタで模型でも作るかのように拠点施設が光によってプリントアウトされていっているのだ。

どういう仕組みなんだろうなぁ、アレ。まぁ、何か見るからに高度なハイテク機器を使っている辺り、素手で木を切り倒して虚空に壁や天井を作り出すクラフト系ゲームの主人公よりは常識的な範疇だろうか。

「勿論、そうはいきませんね」

小型通信端末の向こうからミミやエルマの声が帰ってくるよりも早く背後から声をかけられた。振り向けば、そこにはコンバットアーマー姿のセレナ中佐。腰にはいつもの剣が差してあり、他にも色々と装備を身に着けているようだ。

「ヒロ、貴方と私は対ゲリッツの切り札です。通常戦力ではゲリッツに良いように各個撃破されかねないので、私と共にゲリッツ探索の先鋒に立ってもらいます」
「あの、中佐殿？　普通、指揮官は後ろでドンと構えてるもんじゃないですかね？」
「いつの時代の話をしているのですか？　指揮デバイスがあれば情報の一元管理は可能ですし、貴族出身の指揮官であれば思考の高速化とマルチタスクはできて当然です。前に立ちながら全体の指揮も取るのが帝国航宙軍の指揮官ですよ」
「さようで……」

つまり、俺はこの最悪の天候下でゲリッツとやらを探すためにセレナ中佐と一緒に最前線に立たなきゃならんわけか。そうかそうか。
「船（おうち）に帰して」
「ダメです」

顔全体を覆う透過ヘルメット越しにセレナ中佐がにっこりと良い笑顔を浮かべる。畜生めぇ！

#215　砂塵の惑星（前書き）

ちょっと短いけどＭＰが尽きました！―（：３」∠）―（ゆるして！

#215　砂塵の惑星

「敵性体接近！　数、二十二！」
「私とヒロが前に出る。援護を」
「アイアイマム！」
「ほら、行きますよ」
「ああ、畜生！」

腰の鞘から大ぶりの剣を引き抜いて飛び出していくセレナ中佐の背を追って俺も戦場へと飛び出す。
俺の両手には大小二本の剣。剣と言っても、勿論ただの金属剣ではない。強化単分子の刃を持つ高周波ブレードで、ジ〇ダイの持つ光の剣と良い勝負ができるほどの切れ味と耐久性を誇るハイテクなんだかローテクなんだかよくわからない武器だ。

「私は左を」
「はいはい！」

セレナ少佐が大ぶりの剣を構えたまま敵集団の左側に突っ込んでいくのを見送りつつ、俺は敵集団の右側に突っ込む。相対しているのは剥き出しの赤黒い筋肉組織のようなもので構成された歪な人型の生命体だ。両手、両足に当たる部分が岩石質で覆われており、全体的に『捻れて』見えるのが特徴だ。

「ッ！」

三体が同時に俺に向かって飛びかかってくる。
連携も何もなくがむしゃらに突っ込んでくるのだが、見た目が人

型なのに動きが人型のそれではないのでとても厄介な奴らだ。
全身をバネのように使い、岩石質の両手を突き出して矢のように飛んできた一体目を横に避けながら右手の剣で両断し、鞭のようにしなりながら襲いかかってきた二体目の右腕を左手の剣で斬り飛ばし、一体目と同じく飛びかかってきた三体目の突進を避けながら両手の剣を振るって三分割にしてやる。
そうして俺とセレナ少佐が稼いだ一瞬の時間を使って海兵達がレーザーライフルやレーザーランチャーなどの銃火器で敵性体――仮称：ツイステッドどもを駆逐していく。俺も左手の小剣を地面に突き立て、左太腿のレッグホルスターに収まっていたレーザーガンを抜いてツイステッドどもにレーザーを放つ。無論、出力は殺傷モードだ。

「チッ！」

レーザー弾幕を突破して飛びかかってきたツイステッドに舌打ちをしながら右手の剣を振るい、突進を受け流してその無防備な背中に連続でレーザーガンを撃ち込んでやる。全く油断も隙もない。

「被害報告！」
「A班、被害ありません！」
「B班、被害ありません！」
「C班も被害なしです！」

どうやら今回の襲撃も被害無しで切り抜けることが出来たらしい。レーザーガンと剣をホルスターと鞘にそれぞれ納め、ユニバーサルマスクの中で小さく溜め息を吐く。

「中佐殿、このまま進むのは危ないんじゃないか？」
「この程度であればまだ問題ないでしょう。支援は手厚いですし」

そう言って剣を鞘に収めながらセレナ中佐が空を見上げる。
強風で巻き上がる砂塵で肉眼では空の先を見通すことはできないが、ユニバーサルマスクのＨＵＤ上には砂塵の向こうに浮かぶクリシュナや、その他にも帝国航宙軍所属の小型戦闘艦が表示されていた。クリシュナを含めた小型戦闘艦からは俺達の前方に向かって断続的にレーザーが発射されており、その度に前方でまばゆい光と爆発音が発生していた。

「さようで……しかしセレナ中佐はお強いですね」

セレナ中佐が剣を振るっていた場所には真っ二つに両断されたツイステッドが六体も転がっていた。単純に俺の倍の数のツイステッドを斬り捨てているわけで、それだけでセレナ中佐の剣術の腕の高さが窺える。

「性質の違いでしょう。私の剣は前に出て斬り捨てる剣で、貴方の剣は待ち構えて刈り取る剣ですから」

そう言ってセレナ中佐が俺のつま先から頭の天辺までを観察する。

「私と貴方が死合えば最後に立っているのがどちらなのかは私にも予想が付きません。一方的にやられるとは思えませんが、貴方を圧倒するビジョンも持てませんね」

「中佐殿、テンションが上りすぎです。中佐殿と斬り合うなんて俺は御免ですよ」

あの一瞬でツイステッドを六体も真っ二つにする女と斬り合うとかおっかなすぎるわ。絶対に御免だ。間違いなく俺は逃げるね。

「しかし、このツイステッドども……アレですよね」
「ええ。今後方で分析させていますが、見る限りはコーマットⅢで発生した『攻撃的原生生物』と非常に似ていますね。この岩石質の攻撃腕とか」

そう言ってセレナ中佐が足元に転がるツイステッドの腕――その先端の岩石質の部分を足蹴にする。この岩石質の部分は非常に硬く、当たり方によってはレーザーライフルの直撃にも耐えるほどだ。流石に俺やセレナ中佐が使っている剣の切れ味の前には無力だが。

「それにしてももう少しこう、楽かつ安全にいけないもんですかね」
「難しいですね。軍用ＲＶでも奴らに取りつかれてしまうと棺桶に早変わりですし」

俺達の後ろには通常装備の海兵やパワーアーマー装備の装甲兵だけでなく、高機動偵察車両（ＲＶ）も随伴している。ＲＶはパワーアーマーと同等以上の装甲と火力を併せ持つ車両で、当然ながら機動力も歩兵やパワーアーマー兵を大きく凌駕するものなのだが、ツイステッドどもに群がられてしまうとどうしようもなくなる。威力偵察に赴いたＲＶ三台と乗員合わせて十二名が既に犠牲となっており、ＲＶを主軸とした探索は断念されていた。

「小型艦のセンサーが利かないのも痛いなぁ……」

強風で巻き上がる砂塵にテラフォーミングマシン由来の微細な金属粒子が含まれるせいで、強風が吹き荒れている地域ではセンサー類が非常に利きにくいのが状況を更に厄介なものにしている。
サプレッションシップの着陸地点は確かにクリシュナがマークしたのだが、距離があった上に地表でこの特殊な砂塵の影響でマークした地点がズレていたようなのだ。

そのせいで俺達はこの最悪の環境の中、ツイステッドどもの襲撃を警戒しながら亀のような歩みでサプレッションシップを探す羽目に陥っているというわけだな。ははは、クソが。

「しかし、こんなにツイステッドどもがいるなら例の――なんでしたっけ。例の貴族も死んでるんじゃ？」

俺達は手厚い近接航空支援としっかりとした装備、それに豊富な頭数による火力でもってなんとかツイステッドどもを撃退できているわけだが、奴にはそれがない。ツイステッドどもに襲われればひとたまりもないと思うのだが。

「それはそれで困りますが、それならそれで奴の死体の一部でも持ち帰らなければならないのですよ。ゲリッツがこのコーマット星系で宙賊と結託していたという確かな証拠になりますから」

足蹴にしていたツイステッドの腕から足を退かし、セレナ中佐が肩を竦める。

「それに、サプレッションシップに篭もったままなら無事でしょうし、何よりこのツイステッドどもやコーマットⅢの『攻撃的原生生物』の存在がゲリッツの差し金なのだとしたら、それらを制御する術を有していてもおかしくはありません。そのようなものがあるのであれば、それを奪取する必要があります」

「確かに。それがあればコーマットⅢやこのコーマットⅣで奴らに悩まされることが無くなりますわな」

「そういうことです。さぁ、部隊の準備も整ったようです。進みますよ」

「アイアイマム」

先に立って歩き始めるセレナ中佐の後を追い、砂塵の吹き荒れる大地を海兵達が征く。俺もその中に交じってセレナ中佐の後について行くのであった。

#216　戦地メシ（前書き）

荷物が中々来なくて遅れました（、　。ω　。、）（他者に責任を押し付けていくスタイル

#216　戦地メシ

レーザー爆撃の超高温で半ば硝子化した地面が歩く度にジャリ、ジャリ、と耳障りな音を立てる。辺り一面に吹き荒ぶ砂塵で視界は最悪だが、それでもグロテスクな姿を晒して擱座している巨大な『攻撃的原生生物』の姿は嫌でも目に入ってきた。

「これでこの『攻撃的原生生物』が人為的なものであることはほぼ確定でしょうね」

セレナ少佐が真っ直ぐに前を見ながら俺の耳にそんな言葉を届けてくる。彼女も俺も頭全体を覆うタイプのヘルメットを装備しているので、この言葉は通信越しのものだ。

「どう見てもコーマットⅢに出てきたのと同じタイプだものな」

「えぇ。姿形がこうまで一致するとなると、ほぼ確定でしょう」

敢えて『ほぼ』と言っているのはこの攻撃的原生生物のＤＮＡを精査しなければ完全に同一の存在であるとは断言できないからだろう。それこそ天文学的な確率でコーマットⅢとコーマットⅣに現れた攻撃的原生生物が全く別のＤＮＡを持ちながらほぼ同じ姿形と攻撃性を持っている、という可能性も無くはないわけだからな。

『中佐、サプレッションシップのものと思しき反応を捉えました』

「結構。上空の機体と情報を共有して下さい」

『イエスマム！』

すぐに俺のユニバーサルマスクのＨＵＤ上にも情報が共有されて

くる。当然ながら、そんなに遠くはないな。上空から探知不能だからこそわざわざ地上に降りて探索していたわけで、当たり前っちゃ当たり前なんだけども。

「歩くのか？」

「さして時間はかからないようですから。ドロップシップの降下地点を確保して全員で乗り込み、展開している装備も積み込んで点呼をとって云々とやることを考えれば時間もさほど変わりません」

「さようで」

別に音を上げるような距離でもない。大人しく歩くとしよう。

☆★☆

『前方にサプレッションシップを発見！　地面に突き刺さって擱座しています！』

「まずはドローンを送り込んで内部を捜査しろ。反応爆弾なんかが置き土産にされていたら洒落にならん。工兵、シールドジェネレーターを設置して簡易防衛拠点を構築しろ」

『アイアイマム！』

セレナ中佐の指揮の下、帝国海兵達がキビキビと動き始める。俺がやることは無いので、手持ち無沙汰にぼーっとしているしか無い。いや、そう言っても警戒はするけど。

「反応爆弾ね。そこまでする余裕があったかどうか」

「反応弾頭を積んでいなくても、サプレッションシップのジェネレーターに細工をしている可能性だってありますから。無警戒に近づいて消し飛ぶのは嫌でしょう？」

「確かに、そりゃ御免だ」

航宙艦のジェネレーターも悪意を持ってオーバーロードさせれば反応弾頭とさほど変わらない威力の爆発物になるだろうからなぁ。少なくともＳＯＬではそういった自爆攻撃めいた方法を取ることは出来なかったが、この世界でそれができないという保証もない。

暫くしてドローンを操作していた斥候から危険物なしという報告が為され、斥候を主力とした調査部隊がサプレッションシップに突入していく。内部にターゲットが居ないことも確認済みなので、俺とセレナ少佐安全な防衛拠点で待機だ。

「今のうちに食事休憩を取っておきましょう」

「へーい」

陸戦用のシールド発生装置に守られたこの簡易防衛拠点内には砂塵も吹き込んでこない。その御蔭でヘルメットを外して食事や給水ができるわけだ。俺がユニバーサルマスクを外している間にセレナ中佐が交代で休憩と食事を摂るように部下に指示を出していく。俺はそれを横目で見ながらバックパックからミミとエルマが用意してくれたレーションを取り出――。

「……」

「うわ、なんですそれ」

俺のバックパックから出てきたのは真空パックにされたフ〇イスハガーめいた異形の生物であった。ああうん、これね。食べたことあるね。見た目に反して美味いんだよ、これ。外殻に見える部分は意外と柔らかくてカマボコみたいな感じで、中身はほんのり甘いクリーミーなペースト状なんだ。確かどこかの国で軍用のレーションとして使われてるって話もあったな。

「……意外と美味いぞ」
「食べたことがあるんですか！？」
「……うん」

しかしなぜ敢えてこのタイミングで俺のバックパックにこいつが突っ込んであるのか？　脳裏にテヘペロしているエルマの顔が過る。ミミの仕業とは思えないし、下手人は間違いなくエルマだろう。しかし、こういった所謂『異星食材』の管理をしているのはミミだ。ミミも一緒にバックパックの中身を用意してくれていた覚えがあるので、ミミも知っていてこいつを突っ込んでいた可能性がある。これは船に戻ったら二人をきつく『尋問』せねばなるまい。覚えていろよ。

「ええと……」
「うちの可愛い船員達の可愛い悪戯だろう、ハハハ……」

とりあえず見なかったことにしてフェ〇スハガーめいた物体をバックパックに突っ込み直し、他に何か入っていないか探してみる。そうすると、バックの奥から別の食べ物らしきものが出てきた。
銀色の金属箔のようなものでパッケージングされた物体で、表面にはペニテンス王国軍用食三型と大きく印字されており、裏面には原材料や一食分に含まれる栄養成分などがびっしりと書き込まれている。大きさはスーパーで売っている着る前のカステラくらいの大きさだろうか。結構ずっしりと重く、食べごたえがありそうだ。

「それは？」
「あー……ペニテンス王国とかいうところのレーションみたいだ」
「ああ、少し遠いですが帝国とも関係は悪くない国ですね」
「へー。まぁこれはまともそうだし食ってみるかな」

銀色のパッケージを破って見ると、中から顔を出したのはずっしりとしたパウンドケーキのようなものだった。どうやらこのパッケージは一本丸々このパウンドケーキのようなものがみっしりと詰まっているらしい。

「良い香りがしますね？」

確かに何か果物のような甘い匂いがする。甘い匂いに惹かれるとは、やはりセレナ中佐も女性なのだなと思う。いや、甘いものが好きな男性も多いけどさ。俺も嫌いじゃないし。

「一口いかが？」

「では、こちらのレーションも少しお分けしましょう」

パウンドケーキめいたレーションに齧り付く間に程々の量をセレナ中佐に分けてやる。セレナ中佐からは何かドライソーセージのようなものを分けてもらった。

「これは？」

「軍用ソーセージというやつですね。味はそこそこです」

「ほーん。じゃあいただきます」

右手にペニテンス王国のレーションを、左手にゲッペルス王国の軍用ソーセージとやらを持って、とりあえずペニテンス王国のレーションに齧り付く。

ずっしり、しっとりとしたパンのような食感。それにこの甘さは砂糖由来のものだけではない。スポンジに練り込まれたドライフルーツと、恐らくは生地に沁み込んでしっとりとさせているシロップ――いや、若干の酒精を感じるから、甘い酒も使っているのかもしれないな。

「あー、なんか似たようなのを食ったことある気がするな」
「そうなのですか？」
「んー、なんだったかな」

ああ、思い出した。シュトレンだ。ドイツのお菓子だったかな？
まぁ、セレナ中佐に言っても仕方がないから、思い出せないってことにして黙っておこう。次はゲッペルス帝国の軍用レーションであるというドライソーセージを食べてみる。

「うん、確かにそこそこだな」
「ええ、そこそこでしょう。酒のつまみにする人もいるそうです」

あれだ。コンビニとかで売ってる安いドライソーセージみたいな味だ。まずくはないけどなんか一味足りない。食感もあんまり肉っぽくない。でも塩気と脂はあるな。雑に塩分とカロリーを補給するって感じの味だ。

「私はペニテンス王国のレーションのほうが好みですね」
「俺もだ」

量が多いから一本丸まんま食うのは飽きそうだし、これを一日に三食とかだと絶対に飽きるだろうけど、単品の評価をするならペニテンス王国の三型レーションの方が味も満足度も上だな。
まぁ、ゲッペルス帝国のレーションはこの軍用ソーセージだけでなくビスケット状のカロリーバーとか、パウチに入っているジェル状のスープもついてるみたいだから、総合的にはどっこいどっこいだろうか。

「アレも食べるんですか？」

「……機会があればな。でも、正直に言うとペニテンス王国のレーションよりもゲッペルス帝国のレーションよりもアレの方が美味いと思う」
「えぇ……？」

セレナ中佐が疑わしげな視線を向けてくるが、実際に全部口にした俺が言うんだから間違いないよ。この探索行が長引いたら是非セレナ中佐にも食わせてやろう。

#２１７　本命の登場

『グラップラーが一体抜けてくるぞォ！』
『近接航空支援は！？』
『手一杯だとさ！』

ズドドドドッ！　という音と共に地面が揺れ、砂塵の奥から体高５ｍの化け物が飛び出してくる。
岩石質で覆われた両腕、人を簡単に踏み躙れるサイズの沢山の足、目のない顔、涎を垂らし、だらしなく開いた口には人間と酷似した歯並びが垣間見え、否応無しに嫌悪感がこみ上げてくる。

「ヒロ、私達でやりますよ」
「アレを剣で？　正気か？」
「生き物というものは首を落とせば死ぬものです。正面で注意を惹きつけて下さい」
「ちょっ……！」

セレナ中佐が剣を両手で構えて大型の攻撃的原生生物――仮称・グラップラーへと突っ込んでいく。俺も慌ててその後を追う。流石に中佐殿だけに押し付けるわけにもいくまいて。

『ＧＩＥＥＥＥ！』

セレナ中佐の白いコンバットアーマーは目立つ――目がないのにどうやって感知しているのか知らんが――のか、グラップラーは威嚇の声を上げたかと思うとその岩石質に覆われた腕を振り上げた。自分へと駆け寄ってくるセレナ中佐を一撃で挽き肉に変えてやろう

という魂胆なのであろう。
振り下ろされた岩石質の腕が地面へと叩きつけられ、地面が爆ぜてセレナ中佐の姿が土煙の中へと消える。あれで一撃で潰されていたりしたら笑えないが、俺のユニバーサルマスクのＨＵＤには土煙の向こうで健在のセレナ中佐が振り下ろされた岩石質の腕の向こうへと消えていく姿が見えていた。
流石はハイテク機器だ。多少の砂塵や土煙は物ともしないぜ。

「そうら！」

地面へと突き刺さったままの岩石質の腕先と普通の肉の境目辺りに剣閃を走らせる。パワーアーマーの装甲すら切り裂く単分子の刃の前には、ただの肉や骨など薄紙のようなものだ。

『ＧＩＹＡＡＡＡ！？』

切断された腕からドス黒い血を噴出させてグラップラーが仰け反る。それと同時に無事なもう片方の腕――右腕を斜め上から打ち下ろすように俺に向かって叩きつけてきた。

「――ッ！」

息を止めると同時に世界の動きが極めて緩慢になる。時間が引き伸ばされるような感覚。まとわりつくように重い砂塵混じりの空気を押しのけながら身体を動かし、迫り来る岩石質の腕の軌道から逃れる。ついでとばかりにその岩石質の攻撃腕に刃を合わせ、その堅固な岩石質ごと腕を掻っ捌いてやることにする。
しっかりと刃筋を立て、相手の腕の動きに合わせて切り裂いていかないと剣が折れてしまいそうだ。切り裂いた部分からごぷり、と血が溢れ出し、グラップラーが再び苦痛の悲鳴を上げながらたたら

を踏む。

『よくやりました。満点です』

ユニバーサルマスクの通信越しにセレナ中佐の声が聞こえてくる。どこに居るのかと思えば、彼女が居るのはグラップラーの肩の上であった。恐らくどこかからグラップラーの身体を駆け上がったのであろう。

『ハァッ！』

気合一閃。グラップラーの肩の上でセレナ中佐が剣――正式名称はモノモレキュラー（単分子）・ソードというらしい――を振り抜き、一撃でグラップラーの首を飛ばす。すると、途端にグラップラーは身体を硬直させ、前のめりに倒れ込んできた。

つまり、俺のいる方向にだ。

「ええいくそっ！」

必死に後退して倒れかかってくるグラップラーの身体からなんとか逃れる。そんな俺のすぐ横にセレナ中佐が華麗に着地を決めた。くそう、こういうところもそつがないな、この人は。

「最後の最後でしまりませんね、貴方は」

「公爵令嬢のセレナ中佐と違ってこちらは泥臭い平民の傭兵なんで」

「そう卑下するものではありませんよ。恐怖に打ち克ち、強大な敵の前に身を晒す事のできる貴方は紛れもない戦士です。尊敬に値します」

そう言ってセレナ中佐は極上の笑みを浮かべてみせた。

乗せられている気しかしないが、うん。まぁそうやってストレートに褒められると、照れる。

「あー、うん。それで戦況は」

「決着が着いたようですね」

抜けてきた大型個体は俺達が倒したこのグラップラー一体だけで、他にはツイステッドが数十体。こちらは海兵達が問題なく始末したようだ。

「弾幕薄いぞ、何やってんの」

『ごめん、撃ち漏らしたわ』

通信の向こうからエルマの謝罪の声が聞こえてくる。まぁ、そんなに本気で起こってるわけじゃないけどさ。数が多いみたいだし、抜けてきたのが一匹だけならまぁよくやってると思う。

というか、上で近接航空支援をしているのはエルマが操縦しているクリシュナだけじゃないしな。帝国航宙軍のドロップシップや小型戦闘艦も一緒に任務についている筈だ。俺の横ではセレナ中佐も大型個体を抜けさせないようにと上空の支援機に注意を促しているようだ。

「少々もったいないけど散弾砲も使ってけ。抜けてくるよりかはマシだ」

「ああ、弾薬費は請求していただければこちらで持ちますので」

「だそうだ。バンバン使ってけ」

『了解、大盤振る舞いで行くわ』

エルマの操縦するクリシュナとの通信が切れる。

「さて、当分はこれで凌げるとして……だ」
「はい、当分はそれで良いとしてですね」

俺達の視線の先、砂塵混じりの強風が吹き荒れる先に小高い山――いや、明らかに自然構造物ではない何かが見える。
サプレッションシップの調査を終えた俺達は斥候部隊の見つけた痕跡を追って再び進軍した。何度もツイステッドどもや今俺達が撃破したボクサーを始めとする攻撃的原生生物と交戦し、辿り着いたのがこの場所――というかこの先にある構造物である。

「ありゃなんだろうね。蟻塚？」
「奴らの巣であることは確かでしょう。アレに近づくにつれて襲撃頻度も上がっていますし」

一見蟻塚に見えるソレは非常にスケールの大きい構造物であった。ユニバーサルマスクのＨＵＤが表示するところによると、高さは３００ｍ超。形としては凸凹とした山のような形。構造材は土なのだろうか？　周りの土壌の色とは似ても似つかない。全体的に赤茶色っぽい。

「どうするんだ、アレ。ぶっ壊すのは簡単だと思うけど」

いくらデカいとはいえ、所詮は土塊だ。シールドをぶち破り、戦闘艦の頑丈な装甲を蒸発、爆散させるレーザー砲の前には無力であろう。文字通り砂上の楼閣というやつだ。

「そうしたいのはやまやまなんですけどね……」
「そうまでして捕らえなきゃならんのか。あの――なんだっけ。そう、ゲリッツとかいうのは」
「そういうことです。まぁ、私だけでなく更に上の意向でもありま

すね」
「しかし現実問題として今の戦力で航空支援なしに奴らの巣の中に突き進むのは無理があると思うけど」
今は戦闘艦やドロップシップからの火力支援があってなんとか攻撃的原生生物の襲撃を凌いでいる状態だ。航空支援無しにグラップラーを始めとする大型攻撃的原生生物どもとまともにやりあえば犠牲者が続出するに違いない。
まぁ、それでもレーザーライフル程度の武装しか持たない入植者達とは違って、海兵達はグラッカン帝国の正規の歩兵戦力だ。武装の威力、充実度、兵の練度は入植者達とは比べ物にならないから、犠牲を覚悟して挑むのであればなんとかなるかもしれないが。
「それは大丈夫です。増援が来ますから。私達は本拠地を見つけるための斥候ですよ。あとから来るのが戦力としては本命です」
「なるほど？」
今ここにいる海兵達も戦力としてはかなりのものだと思うが、これ以上の戦力とな？　と、首を傾げているとセレナ中佐に通信が入ったようだ。少しの間何か小声でやり取りをしていたかと思うと、空を見上げる。
「来ますよ、本命が」
「上から？」
俺もセレナ中佐に倣って空を見上げると、上空で待機していた戦闘艦やドロップシップ達が対比していくのが見えた。その先、空の彼方――宇宙(そら)から大量の何かが降り注いでくるのが見える。
「おいおい、軌道爆撃か？」

「いいえ、増援です」

断熱圧縮で発生する炎を纏いながら宇宙から降ってきた何かが構造体の周囲へと降り注ぐ。それは容赦なく大地を砕き、大量の土埃を巻き上げて俺達の立っている地面までをも大きく揺らした。

「大迫力だなぁ……そしてアレは」

「本命の地上戦力です」

「なるほどなぁ……」

地面に突き刺さっているのは金属製の杭のようなものだった。その金属製の杭からボロボロと何かが大地に降り立ち、変形を始める。

それは金属でできた血も涙も死への恐れも持たない兵士達。人間よりも遥かに頑丈な金属骨格と金属の装甲を併せ持ち、腕の一振りで人間を挽き肉に変える特殊金属繊維製の筋肉を備え、生身の人間では持ち運ぶこともままならない重火器を軽々と振り回す者ども。

人間大のものから体高５ｍほどもある重戦闘ボットまで選り取り見取りだ。

「軍用戦闘ボットか」

タ〇タンフォール！　と叫びたい衝動に駆られるが、ここはぐっと我慢しておく。

「そういうわけです。本命への露払いが済むまでは高みの見物をするとしましょう」

金属製の工兵達が瞬く間に頑丈な前哨基地を構築していく。その前哨基地へと向かって歩き出すセレナ少佐の後を追い、俺もまた工兵ボット達が構築しつつある前哨基地へと向かうのであった。

#218　帝国の陸戦力事情（前書き）

間に合ったぜ！―（：3」∠）―

2025

#２１８　帝国の陸戦力事情

戦いは数だよ兄貴！　って偉い人が言ってたよな。まさにその通りなのだろうと目の前の光景を見て思う。

「圧倒的じゃないか、我が軍は」

「貴方の軍ではありませんが」

「はい、存じております」

人間大の戦闘ボットが二本の武器腕からレーザー（殺人光線）を乱射し、ツイステッドに取りつかれてもそれを上回る膂力で引き剥がし、或いは叩き潰す。体高２～３ｍの中型戦闘ボットの攻撃は更に熾烈だ。レーザーだけでなくプラズマランチャーを装備している中型戦闘ボットの火力は敵側の大型個体であるグラップラーや、強固な前面装甲を持つ突撃個体『ブル』を真正面から叩き潰す。そして極めつけは体高５ｍの大型戦闘ボットだ。

「あのデカいのは凄いな」

デカいのに機敏だ。部隊の先頭に立って敵の大型個体を火砲と格闘攻撃で薙ぎ払い、敵の攻撃をシールドで防いでいるようだ。デカい分ジェネレーター出力にも余裕があるんだろうな。

「タイタン級の戦闘ボットは陸戦の要ですからね。実際のところ、帝国軍の地上戦力の大半は戦闘ボットです」

「文字通りいくらでも替えが利くし、コストが安いもんな」

俺の言葉にセレナ少佐は何も言わずに肩を竦めてみせた。

一人の人間を戦うことができる兵士にするのには『まともに』考えれば最低でも十五年から十八年かかる。十五年でも早すぎるくらいだと思うが、まぁ最低限身体を作るのならそれくらいは要るだろう。尤も『まともに』やらなければもっと短期間で兵士を作ることは可能だろうけど。

それはつまり、所謂少年兵とかそういうものだけではなく、バイオテクノロジーを利用したクローン兵士なども含めての話だ。まぁ、今の所そういう存在の話は聞かないし、少なくとも目の前に展開されている戦闘ボット達を見る限りはグラッカン帝国はそっち方面には舵を切っていない……わけでもないのかね？　考えてみれば、ツイステッドどももそういうテクノロジーの産物だろうし。

ここにツイステッドどもが存在するということは、少なくともバイオテクノロジーを軍事用途に利用する一派が帝国内か、或いは帝国の周辺に存在するということの証左なんだろうな。

話がずれた。替えが利くとかコストの話だったな。まぁつまり、だ。兵士としてまともに人間を使うというのは非常にコストが高いって話だ。

だが、戦闘ボットなら？　製造にコストは掛かるが、人間を十五年から十八年兵士にするために育て上げるよりも遥かに安い。それはかかる費用という意味だけでなく、育成時間もコストに含めての話だ。

戦闘ボットなら一度生産ラインを構築してしまえば、資源の許す限り即戦力を量産し続けることができる。しかも戦闘スキルの養成に関しても同型の実戦データを統合してインストールすればそれで終わりだ。さらに言えば、人間の兵士と違って消耗したとしても遺族年金などもかからないし、飯も水も着るものも医薬品も必要としないし、給料も払わなくていいから兵站にかかる費用も非常に少なくて済む。こうして考えると良いとこだらけだな。

「コストが安いもんな」

「なぜ同じことを二回言うのですか」
「帝国航宙軍も色々大変なんだろうなと」
「余計なお世話ですよ」

航宙艦も戦闘ボット化――つまり航宙戦闘ボットにしてしまえば更にコストが下げられると思うんだが、そうしないのは何故なんだろうな？　グラッカン帝国は過去に機械知性とドンパチしたらしいし、もしかしたら戦力のボット化にアレルギーがあるのかね。それにしては陸戦の主力は戦闘ボットみたいだしな。陸戦力だけなら万が一があっても軌道爆撃で制圧できるからか？　この辺の事情には少し興味が湧くな。

「しかし、これだけの戦力がなんで都合よく用意できたんだ？」
「元々はコーマットⅢの攻撃的原生生物を掃討するために派遣された戦力です。その戦力をそのままコーマットⅣに動かしたというわけで」
「ああ、なるほど」

コーマットⅢに攻撃的原生生物――グラップラーどもが現れてからそれなりの日数が経っている。コーマット星系はゲートウェイからそんなに遠くないし、帝都に連絡をするのも、他の場所から戦力を移動させるのもゲートウェイ経由ならさほど時間もかからない。
ゲートウェイから遠い、所謂辺境と呼ばれるイズルークス星系（結晶生命体と戦った星系）やターメーン星系（ミミやエルマと出会った星系）と比べると交通の便なんかがとても良いということだな。

「しかしこれは退屈だな」
「あの中に飛び込みたいのなら止めはしませんけれど？」
「それはやめておく」

戦闘ボットと攻撃的原生生物どもが入り乱れて乱戦をしている中に突っ込んだりしたら命がいくつあっても足りない。この世界は俺から見ればＳＯＬの中のようでまるでゲームのように感じられる時もあるが、紛れもない現実なのだ。ゲームと違って死んだらリスポーンとはいかない――いかないよな？――のだから、そんなことをする気はサラサラ無い。

「まぁ、あちらのリソースがどれだけのものなのかはわかりませんからね。少し時間はかかるでしょうから、楽にしていてくださって結構です」

「そいつはどうも」

暫くはウォーゲーム観戦ということになりそうだ。新たに宇宙（そら）から降り注いでくる戦闘ボット満載のドロップポッドを見上げながら、俺は腰にぶら下げてあった水筒に手を伸ばすのであった。

☆★☆

『私達も見せてもらいましたけど、凄かったです！　かっこよかったです！』

『ワムドが良い画が取れたって大喜びしてるわよ』

「そりゃどうも」

ユニバーサルマスク越しにミミ達と話をする。目の前では未だに戦闘ボット達とツイステッドどもが激しい戦闘を繰り広げているが、戦闘ボット達の一糸乱れぬ連携と強烈な火力の前にツイステッドどもは終始押され気味だ。じわじわと戦闘ボット達が湧き出してくるツイステッドどもを圧迫しており、戦闘ボット達がツイステッドどもの湧き出してくる構造体へと侵入するのも時間の問題だろう。

『剣であのデカブツに向かっていった時の迫力は凄かったわね』
『かっこよかったです！　ワムドさんからデータを貰ったので送信しますね！』

ミミがそう言うと、ユニバーサルマスクのＨＵＤ上に小さなウィンドウが開き、剣を持った俺とセレナ中佐がグラップラーへと向かっていく姿を絶妙なカメラアングルで撮影した映像が再生される。

「カメラアングルが良いな」

そう言いなら俺は肩の辺りに浮かんでいる球体に目を向ける。この球体は俺達がコックピットで飲み物を飲むのに使っているグラビティスフィアと同じ要領で俺に追随するようになっている自律式の撮影機材で、何かホログラム技術とかよくわからないテクノロジーを組み合わせて惑星上の俺の行動や周りの様子を撮影しているらしい。グラビティスフィアといいコイツといい、この世界の人間はテクノロジーを使う方向を間違ってやせんかね？

「それで、そっちはお役御免か？」
『帝国軍の強襲降下艇が到着したから。対地攻撃に特化した艦が来たわけだし、私達の出る幕はもう殆どないわね。一応、ヒロ達のいる陣地の護衛のために待機してるけど』
「ああ、そうか。降下攻撃用の艦艇なんだから、支援能力も高いはずだよな」

頷きながら戦場に降り注ぐ緑色のプラズマ砲弾の雨に目を向ける。
あのプラズマ砲弾はシールド技術の応用で、ごく弱いシールドの中に超高温のプラズマを閉じ込めて発射しているらしい。弾速が遅く射程も短いため、航宙戦をメインとする傭兵の船に装備されることは殆どない。更に発展させたプラズマアクセラレーターという砲

もあるが、あれも弾速が遅くて扱いが難しいからなぁ……弾数制限があっても対艦魚雷の方が使いやすいんだよな。艦のスピードが乗るし。

プラズマ兵器に関しては今目の前で戦っている帝国軍の戦闘ボット達も装備しているが、とても威力の高い武器だ。ああやってシールドで密封したプラズマ砲弾を撃ち出すのが第二世代の新型プラズマ兵器で、第一世代のプラズマ兵器は物理的な砲弾として発射して、標的に着弾した瞬間にプラズマ爆発を起こすというものだ。

威力はどちらもそんなに変わらないが、シールド技術を応用した第二世代型は弾数制限が無いというのが特徴だな。シールドに封入しているお陰で砲身の消耗も非常に少なく、ブン回すジェネレーター出力さえ確保できればほぼ無制限に発射できるというのが強みだ。

『これも迫力ある映像よね』

『そうですね。帝国軍の戦闘ボットが凶悪な原生生物を倒していく姿は頼もしいですね』

「アクションもののホロ映画みたいだよな……こんなに戦闘ボットが活躍してるのは少ないけど」

この世界にも娯楽用の映像作品は沢山ある。無論、その中には敵対的で対話も不可能なエイリアンと帝国軍が戦うといったようなものも存在するのだが、そういう映像作品にもこんなシーンがよくあるんだよな。そういう作品では戦闘ボットはちょい役で、帝国人――無論、人型でない種も含む――が戦うシーンがメインだったりする。現実はこのように戦闘ボット達が大活躍しているというわけだな。

「まぁ、帝国人……俺は帝国人じゃないけど、帝国人が戦ってる画もたくさん撮れてるだろうから、その辺はワムド達が上手くやるんだろうな」

『そうでしょうね』

グラッカン帝国の貴族はどうも機械知性や重要な仕事を機械任せにするのを忌避する傾向にあるみたいだからな。まぁ、貴族達が機械知性とかに頼りすぎず、身を粉にして働いているということにしておきたいのかね？　よくわからんが。

「戦闘ボット達が露払いを済ませたら、最後は俺とセレナ中佐が剣で敵の親玉と決着をつけるって展開になるのかね……いや、ほんとに戦争もののホロ映画みたいだな？」

『最後は炎の中でステゴロかナイフ格闘、あるいは剣で勝負っていうのは定番よね』

『あ、あはは……意外と現実に忠実なのかもしれませんね、アレって』

やっぱりこの世界でも映画の定番なんだな。最後の戦いは肉弾戦ってアレ。現実はもう少しスマートにいきたいもんだけど、どうかね？　毒ガス攻めにするとか。

#219　制圧待ち（前書き）

おくれました―（∴3」∠）―（もはや言い訳のしようもない

#219　制圧待ち

「無理でしょう」
「無理ですか」
「私も貴方もそれを防ぐための装備をしているではありませんか。当然あちらもそうしているでしょう」
「なるほど」

確かにセレナ中佐が装備しているヘルメットも、俺が装備しているユニバーサルマスクもそういった生物・化学兵器に対する防御性能を備えている。俺のは頭全体を覆うタイプじゃなく顔だけ覆うタイプだから、皮膚から浸透してくるタイプの化学兵器は完全にシャットアウトできないけど。
今後のことを考えてセレナ少佐と同じようなコンバットアーマーを一揃い買っておくべきだろうか？　でも、軽量型のパワーアーマーで事足りるっちゃ事足りるしな……まぁ、軽量型のパワーアーマーを扱っているメーカーならコンバットアーマーも扱ってるだろうから、その時に考えるとするか。

「進行具合はどうですかね？」
「既に一部の戦力が内部に突入して橋頭堡を確保しつつあります。外部の戦力掃討も直に終わるでしょう」

そう言いながらセレナ中佐は虚空にちょこちょこと指先を走らせている。俺からは見えないが、恐らくヘルメットのＨＵＤに表示されているインターフェイスを操作して戦闘ボットや指揮下の兵士達に司令を飛ばしているのだろう。俺と会話をしながら苦もなくそう

いった作業をこなす辺り、やはりセレナ中佐も貴族なのだなと感心する。

「というか、それをやるならこの場所が判明した時点で軌道爆撃で跡形もなく消し飛ばしていますよ」
「それもそうでした。生け捕りするんだったっけ。めんどくせぇなぁ」
「口に出てますよ。まぁ、最悪確実に死亡を確認できて、彼がゲリッツ本人であると証明できればそれでも良いんですけど」
「別に首級を挙げる必要はないと」
「首級って……どこの蛮族ですか」

首級を挙げるという表現にセレナ中佐が顔を顰める。いや、嬉々として剣をブンブン振り回す人が首級を挙げるのは野蛮とか言っても説得力無いんですけど。というか貴女、さっきグラップラーの首獲ってましたよね？

「まぁ首の話は置いときまして。ゲリッツは一体何のためにここに逃げてきたんですかね？」
「時間稼ぎでしょう。恐らくはこの構造体に籠城して、イクサーマル伯爵家からの救援を待つつもりだと思います」
「うーん、そうかなぁ……」

どうにも腑に落ちないんだよな。あの構造体の奥深くに脱出する手段があるとは到底思えないし、籠城するにしても場所が悪いように思う。こうして追い詰められると逃げ場がない。往々にして籠城というのはそう言うものかもしれないけど。
まぁそれを言ったらこのコーマットⅣ自体が一度逃げ込めば外に出ることがかなわない袋小路のようなものだ。今は軌道上に帝国航宙軍やダレインワルド伯爵家の手勢も展開しているので、大気圏か

ら脱出しようとしてもすぐさま拿捕されるであろう。
「地中を高速で掘削して移動するドリルマシン的なものでとっくに逃げてるとか無いですかね？」
「そのようなマシンの存在は聞いたことがありませんが、あるのですか？」
「俺は聞いたことないですね」

この世界の技術力ならできそうな気もするけど、それが実在するかどうかまでは知らないな。

「流石にあるかどうかもわからないものを想定するのは馬鹿げていると思いますが」
「それもそうか。じゃあ他の可能性として……証拠隠滅に動いている可能性はどうです？」
「証拠隠滅？」
「奴も自分が生け捕りにされるか、或いは遺体を回収されて自分がゲリッツ＝イクサーマルであると証明されるのが避けるべき事態であるということは先刻承知でしょう。だから、わざとツイステッドどもに食われて遺体回収困難、そもそも行方不明という結果に持っていこうとしているとか」
「……まぁ、一番嫌なパターンですね、それは。『食い残し』を探すために構造体内を探し回ったり、奴らの腹を掻っ捌いて中身を浚うことになりそうです。ですが、それをやるくらいならサプレッションシップで恒星に突っ込んでいると思います」
「……それは確かに」

船ごと恒星に突っ込んでしまえば証拠隠滅は完璧だ。自分の命を捨ててでも証拠隠滅を図るというのであれば、そちらのほうがよっぽど確実だろう。となると、証拠隠滅の線は薄いか。

「相手の――ツイステッドどもの動きを見る限り、あちらが焦っているのは間違いないと思いますよ。向こうにとって想定外の事態も発生していると思いますね」
「そうですか？」
「ええ。恐らくあなた達にコーマットⅣまで追跡されるとは思っていなかったのではないでしょうか。サプレッションシップの速度で振り切るつもりがあなた達にギリギリで追い縋られてしまって潜伏先が露見し、その後の降下偵察作戦で本拠地である構造体の場所も割れてしまった。更にコーマットⅢに投入されるはずだった降下部隊がこちらに投入される事によって戦力的な優位も覆された」
「うーん、完全に詰んでる。しかしそれでも抵抗をやめない、投降もしないか……」

ゲリッツという人物がどのような人物であるのかは俺にはわからない。だが、帝国航宙軍の包囲網を突破してコーマットⅣまで逃げおおせてくるようなやつだ。往生際がかなり悪い人物なのだろうということは想像がつく。

「となると、やっぱり救援待ちで籠城と考えるのが妥当か……」
「少なくとも、私はそう考えています。とはいえ、コーマット星系はダレインワルド伯爵家の領有星系の上、コーマットⅣはダレインワルド伯爵家がテラフォーミングを行なっている惑星です。その上我々帝国航宙軍がゲリッツの捕縛に動いている以上、どうあがいてもイクサーマル伯爵家が介入してくるのは不可能だと思いますが」
「やっぱり詰んでるじゃないですか」
「こうしているのも悪あがきに過ぎないでしょうね。その悪あがきに付き合わされるこちらとしてもたまったものではありません。軍隊を動かすのもタダではありませんからね」
「まぁそれは確かに……なるほど？」

もしかしたらただの嫌がらせかもしれないな、これ。身の破滅は確実、となれば一人でも多く巻き添えにして、少しでも多くダレインワルド伯爵家に損害を与える。今回の帝国航宙軍の動員に関しては恐らくその活動費用の少なくない部分をダレインワルド伯爵家が負担するのだろうしな。

「なるほどとは？」

「いえ、今回のこれ。どっちにしろ助からないと見て最大限場を引っ掻き回して嫌がらせをして果ててやろうっていう魂胆なんじゃないかと思いまして」

「……イクサーマル伯爵家のやりそうなことですね」

俺の考えを聞いたセレナ中佐はとても嫌そうな顔をしながらそう言ってため息を吐いた。

何故そんな認識を持たれている貴族家が堂々とのさばり続けているのだろうかね？　なにか複雑怪奇な経緯でもあるんだろうか。まぁ、俺にとってはどうでもいい話か。イクサーマル伯爵家には関わってはいけない。俺、覚えた。

☆★☆

俺の心配をよそに構造体内の掃討は順調に進んでいった。構造体に突入口が空けられ、橋頭堡が確保され、構造体内部の調査と掃討が行われていく。その過程で軍用戦闘ボットに多少の被害が出たようだが、多少の被害で止まる戦闘ボットではない。火力と装甲と数によるゴリ押しが行われ、ついにその最奥――地下部分への突入が開始された。

「地上構造物は見事に外れかぁ」

「後顧の憂いを残しておくわけにはいきませんから、掃討は必要でしたけどね」
「そりゃ確かに」
常に背後を狙われる状況というのは面白いものではない。先に地上構造物を掃討したのは手堅い一手だったんだろう。
「むっ……」
「何かあったんですか？」
「地下の掃討と調査を進めている戦闘ボットが人工物を発見しました。どうやら当たりのようです」
「そりゃ良かった」
しかし一体それは何なのか？　恐らくはツイステッドどもを生み出すプラントのようなものなのだろう。だが、材料もなしに無限に物を生み出すプラントなどはいくらのこの世界のテクノロジーが進んでいても、そうそう作り出せるものではあるまい。その『材料』は一体どこから調達したのか？
「テラフォーミングにどう影響しているのやら……というか、コレと同じようなものが惑星上にいくつもあったら大変だなぁ」
「軌道爆撃で片っ端から破壊すればなんてことはないと思いますけどね」
「おっと、思ったより脳味噌筋肉な発言が出てきたぞ？」
「効率的ですから。いちいち陸戦部隊で制圧して破壊するなんてコストの無駄ですよ」
確かにそれもそうかもしれないけど、環境破壊とか気にされないんです？　ああいや、テラフォーミングなんてしてる時点で環境破壊もクソもないか。環境ごとツイステッドどもを破壊しても、その

後でまた修復すれば良いんだもんな。確かに効率的だわ。

「恐らくゲリッツも地下の人工構造体に居るでしょう。私達も向かいますよ」

「アイアイマム」

そのまま戦闘ボット達で片付ければ良いのでは？　とも思ったが、そう言えば可能な限り生きたまま回収しなきゃいけないんだったな。気はあまり乗らないけど、お付き合いするとしますかね。

これがラストバトルになれば良いんだが、さて。

#２２０　お約束の展開（前書き）

寒くなってきましたね……体調にはお気をつけ下さい―（∵３」∠）

―（震えながら

#２２０　お約束の展開

軍用戦闘ボット達が殲滅したツイステッドどもの死体が折り重なる地下通路を進み、目的地へと向かう。

「こりゃ快適だ」
「操作には若干クセがあるそうですけどね」

俺達の足になっているのはこういった不整地を移動するために開発されたというホバリング車両だ。さして速度は出ないが、でこぼこだったり急な傾斜だったり高低差数メートルほどの崖程度であれば難なく走破できる車両で、運転手含めて乗員六名が乗り込むことができる。これもグラビティスフィアなどと同じく、重力・慣性制御技術の応用によって作られているものであるらしい。

「流石に掃討が済んでるだけあって敵影はなし、か」
「仮に敵が残っていても、随伴している高機動型の戦闘ボットが片付けますよ」

時速およそ３０ｋｍほどしか出ないホバリング車両に随伴しているのはシャープなシルエットの軍用戦闘ボットだった。両足が逆関節の二足歩行型戦闘ボットで、先程から軽快に走り、跳躍してセレナ中佐と俺を含めた地下構造物突入部隊に随伴している。火力面は未知数だが、確かにあの機動性の高さは戦うとなるとかなり厄介だろうな。あれが全速力というわけでもないのだろうし。
俺が戦うとしたらどうするかな？　まぁそんなに頑丈そうには見えないし、足を狙って機動力を潰して逃げるのが良いかね。え？　逃げるのかって？　そりゃ逃げるよ。正確無比な射撃を行う戦闘ボ

ットとまともに撃ち合うなんて絶対に御免だからな。ＳＯＬでもそうだったけど、軍用戦闘ボットの射撃精度はマジでえげつないから。ほぼ百発百中で当ててくるから、レーザーに耐えられるだけの装甲かシールドがない状態で撃ち合ったら良くて相打ちだ。そもそも人間よりも反応速度が早いんだよ。民間用の警備ボットとかならデチューンされてるからそこまででも無いんだけどな。

「で、戦況はどうなので？」

「シールドを張って完璧に籠城の構えですね。まぁ、それも我々が到着する頃には破られるでしょうが」

超光速ドライブ宙にスペースデブリが衝突しても守れるようにと開発されたシールドというものは実に強力な防御力を有するものではあるが、決して万能ではない。高出力のレーザーや大熱量のプラズマ兵器、それに強烈な爆発と衝撃波を発生させるミサイルや爆弾などによる攻撃には比較的弱いし、シールド同士の干渉は急激に互いのシールドを中和させてしまう。

クリシュナに装備されている対艦反応魚雷に装備されているシールド中和装置も基本的にはシールド同士の干渉によって速やかに対象のシールドを中和・飽和させるものである――とＳＯＬのアイテム概要には書いてあった。この世界でも本当にそうかは確かめてないけど。

「ちなみに破る方法は？」

きっと何かシールドを破るための軍用装備とかでやっているんだろうな、と思いながら俺は聞いた。しかし、セレナ中佐は見ればわかりますと言って何も答えなかった。なるほど、軍事機密とかなのかな？　と俺はこの時そう考えていた。

そして現場で俺が見たものとは。

「この手に限ります」

目の前で繰り広げられている光景を一言で表すならこうだ。

「なんという力こそパワーな発想」

多数の軍用戦闘ボットが人工施設を覆っているシールドにレーザーを乱射し、体高５ｍはあろうかというタイタン級の戦闘ボットがシールドを全開にして体当たりを敢行していた。いや、体当たりと言うかなんというか……シールド同士を接触させてバチバチさせてる？　まぁ体当たりみたいなもんだよな、あれは。

「思ったより強固なシールドのようですが、あの様子だとそう長くは持ちそうにありませんね」

「シールドが割れたら俺達の出番ですか」

「それはもう少し後ですね。先に戦闘ボットを突入させます」

などと話している間にも人工施設シールドが揺らぎ始め、唐突に消失した。消失した瞬間にも戦闘ボット達から照射されていたレーザーが一瞬だけだが人工物の壁を灼き、爆ぜさせる。ちなみにどうでも良い事だが、この世界のシールドはパリーンと割れたりはしない。

そしてシールドが飽和状態になって消失したのを確認した小型、中型の戦闘ボット達が整然と施設内へと侵入していく。タイタン級の戦闘ボットは流石にデカすぎて入れないからここで待機らしい。

「まずはシールドジェネレーターとメインジェネレーターを掌握させます。シールドで内部に閉じ込められたり、ジェネレーター暴走

で諸共自爆などされてはたまりませんから」
「順当なんじゃないかな。わからんけど」
俺は戦術の専門家ではないので断言はできないが、手堅いんじゃないかと思う。退路の確保は基本中の基本だし、メインジェネレーターを掌握してしまえば敵の防御兵器などをシャットダウンすることも可能だろう。
「適当ですね……突入の時は近いですよ、準備をしておいて下さい」
「アイアイマム」
しっかし、これだけ戦闘が機械化されているのに最後は剣で勝負を決めなきゃならないとかどうなってるんだ。最悪遺体を確保できればいいってことなんだから戦闘ボットの物量で押し潰せば良いのにな。これも貴族の面子ってやつなのかね。
そうして待つこと三十分弱。
「施設最奥部で目標を発見しました。行きますよ」
「あいよ」
ついに戦闘ボットがゲリッツとやらの捕捉に成功したらしく、セレナ中佐の号令で帝国航宙軍の海兵達が動き始めた。戦闘ボットが到着してからは彼らも俺と同様に暇をしていたので、張り切っているようである。
セレナ中佐が先陣を切って歩き出し、帝国航宙軍の海兵達がその後ろについていく。俺も海兵達に交じってセレナ中佐の後を追ったが、どうにも俺は胸中を過る嫌な予感を消せずにいた。
「あるのか？　ここから一発逆転する方法が……」

頭を悩ませながらも人工施設へと突入する。個人的に嫌な予感がしても行かなきゃいけないのよね。これ、軍事行動だから。俺は雇い主に同行するように申し付けられている傭兵だしね。

☆★☆

人工施設内部は妙に白い内装が目立つ、まるで研究施設のような印象を受けるものであった。ここには悍ましい見た目のツイステッドどもの姿は無く、所々に軍用ボットに破壊されたと思しきレーザータレットなどの残骸が見える。

「あれが大本ですかね」
「恐らくは」

進んでいる通路の左手には金属製の筒のようなものが多数、ガラス越しに見えている。全て中身は空っぽのようだが、一体何が入っていたのか？　場所を考えれば恐らくはツイステッドの素体というか、原種のようなものが入っていたのだろうということが推測できる。

「ということは、奥は……」
「生産プラントでしょう。基本的には人造肉の製造プラントと同じだと思いますよ」
「セレナ中佐も見たことがお有りで？」
「ええ。前に非合法の人造肉プラント絡みの案件で色々ありまして」
「ああ……なるほど」

セレナ中佐もこれまでに色々と修羅場をくぐり抜けてきているわけだ。

しかし人造肉製造プラントね……アレイン星系ではツイステッドとはまた別物の化け物とも戦ったなぁ。あれに比べるとツイステッドのほうがかなり強力だけど。

「前方から戦闘音」

「戦闘ボットが牽制射撃をしている音でしょう。急ぎますよ」

走り始めたセレナ中佐の後を追い、広いホールのような場所に出る。

「……アレが目標ですか」

「……ええ、アレが目標です」

俺の指差す先で高機動型戦闘ボットを相手に暴れている物体――四本の腕のようなもの全てに剣を持った体長２．５ｍ程はあろうかという人型のツイステッド――を見ながらセレナ中佐は頷いた。

えぇ……アレ？　まことに？　あれはもう人間じゃないのでは？

「アレを生け捕りにするので？」

「可能であれば」

「生け捕りにしてもアレから事情聴取するのは無理じゃないかなぁ……」

全身を赤黒い、捻れた筋肉繊維と岩石質の鎧のようなものに身を包んだ四本腕の異形の生物。今のアレ――ゲリッツ・イクサーマルを表現するならこう表現するしかあるまい。あれでは生け捕っても情報など引き出せそうにないし、ぶっ殺して遺体を収容してもアレがゲリッツであると証明できるかどうかも怪しいのではなかろうか。

「なんかどんどん動きが良くなってませんかね、アレ」

「身体のサイズの変化と四本腕に慣れてきたのかもしれませんね。早く始末しないと厄介なことになりそうです」
「もうレーザーの飽和攻撃で始末しません？」
「それがですね」

セレナ少佐が大暴れしている四本腕の化け物に視線を向けると、戦闘ボット達が一斉にレーザーで奴を攻撃し始めた。いくら四本腕とはいっても数十発、下手すると百発以上のレーザーによる同時攻撃は防御しきれるものではない。

『ＫＨＯＯＯＳＨＩＩＩＩＡＫＵＵＵＵ！！！』

防御しきれるわけではないのだが、無論いくらかは防御される。奴の振るった剣によって何発か、或いは何十発かのレーザーが跳ね返され、戦闘ボットに着弾して小爆発を起こした。一発で戦闘不能になるほど戦闘ボットはヤワな作りはしていないが、確実にダメージは蓄積する。
一方で、防ぎきれなかったレーザーは奴に命中はしたのだが。

「あんまり効いてないですね」

一応全く効いてないわけではないようだが、負った傷はすぐに再生してしまっているし、岩石質の鎧のような部分にはそもそも殆ど効いていないように見える。

「はい。再生力もさることながら、あの岩石質の鎧が良くないですね。プラズマ兵器は効きそうなのですが、弾速が遅いので避けられます」
「結局斬るしか無いと」
「そういうことです。行きますよ」

「嫌だなぁ……」

セレナ中佐が腰元の大振りな剣を鞘から引き抜き、前に出る。俺もその後を追いながら、腰元の二本一対の剣を抜き放つのだった。

#221　モンスターハンティング（前書き）

遅れました（‘ω’）（半ば開き直り

みんなも体調には気をつけてね！―（∵3」∠）―

#221　モンスターハンティング

「中佐殿ぉっ！」

颶風を伴って振るわれる剣を左手の小剣で受け流し、右手の長剣で岩石質の腕を斬りつける――が、浅い。深追いすると岩石質の鎧のような表皮に食い込んだ剣をへし折られそうだったので、すぐに長剣を手元に引き戻す。

「なんっ！　ですかっ！？」

セレナ中佐は敵の四本腕が放った後ろ回し蹴りを地面に伏せるように体勢を低くして避けたところであった。そこに振り返りざまの剣の一撃――いや、片側の二本腕から繰り出される二撃がセレナ中佐に襲いかかる。しかしセレナ中佐は横に転がりながら剣を振るい、一本を避け、一本を弾いた。あまり余裕は無さそうだ。

「この期に及んでっ！　五体満足で生け捕りにするとはっ！　言いますまいなっ！？」

セレナ中佐を攻撃していた左側の二本とは逆側の右側の二本腕が繰り出してくる怒涛の連続突きをいなしながら戦闘方針の再考を促す。

殆ど人間の面影が無いが、ゲリッツであると思われるこの四本腕のクリーチャーを傷つけずに捕縛するのは実質的に不可能であろう。四本腕の先にある剣は握っているのではなく腕先と同化しているようだし、そもそも奴に負けを認める理性が残っているようにも思えない。

『ＳＨＩＮＥＥＥＥＥＥＥ！』
「――ッ！」

セレナ中佐を無視して先に俺を片付けることに決めたのか、四本腕が全ての腕を使った縦横無尽の斬撃を俺に向けてきた。しかし、息を止めた瞬間にまたもや世界の動きが緩慢になる。

ゆっくりと、しかし確かな破壊力を持って迫ってくる一本目の斬撃を避けながら前に踏み込み、胴を薙ぎ払う軌道で迫ってきた二本目の剣を屈んで躱す。斜め上から突きこまれてきた剣を斜めに構えた左手の小剣で受け流し、四本目の剣は俺に届く前に軌道を変えて攻撃を中止した。ちっ、そのまま攻撃してくれれば手首ごと斬り落としてやったものを。しかし、これで今の俺は四本腕の攻撃を掻い潜り、懐に入り込んだ状態だ。

咄嗟の攻撃だったのだろう。破城槌もかくやという膝蹴りが俺に向かって迫ってくる。

『ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！？』

が、それはあまりにも迂闊というものだ。カウンターで合わせた右手の長剣が膝蹴りを放ってきた四本腕の膝の上に深々と食い込み、奴の足からドス黒い血が溢れ出す。返り血を浴びないように横っ飛びで転がって距離を離すと同時に、後ろでどうと巨体が倒れる音がした。

どんなに常識外れの化け物であろうとも、それが人の形をしていて、筋肉によって身体を動かしているのならば膝の上――太腿をざっくりと骨まで断たれては立ち上がったままではいられない。少なくとも、二足歩行である限りは逃れられない定めだ。

そして、その大きな隙を逃す戦士はここにはいない。

「らあぁぁぁっ！」

セレナ中佐が連続で剣を振るい、倒れ込んだ四本腕の剣腕を断ち切って行く。当然、俺も剣を奔らせて四本腕の四肢を切り離していく。

「これで一丁上がり、と。どうするんです？　このままだと流石に出血多量で死ぬと思いますけど」

「そうでもなさそうですよ」

剣を手に持ったまま足元に転がっている『元』四本腕に鋭い視線を向けたままのセレナ中佐の視線の先を追ってみると、みるみるうちに剣で切り離された切断面が塞がっていくのが見えた。えぇ……マジかよ。もう血が止まってるんだけど。

「……これ、生きたまま運ぶんで？　なんか輸送中にパニックホラーが始まる未来しか見えないんですが」

「……任務なので」

フェイス部分が透明なヘルメットの向こうでセレナ中佐がげんなりとした顔をしているのが見える。まぁ、帝国航宙軍にもこういった謎生命体を安全に輸送するための装備の一つや二つくらいはあるだろう。俺は知らん。そんなモノの輸送は絶対にしないし、手伝わないぞ。断固たる意思でお断りします。

「今思ったんですが、この剣も証拠になるんじゃ？」

「そうですね。剣の銘や製造元、製造番号などを調べれば誰の剣なのかを追うことができるかもしれません」

頷いたセレナ中佐が航宙軍海兵に指示を出し、ゲリッツと思しき

生物の搬出準備を進めていく。
　しかし、剣が四本ね。ゲリッツが元々二刀流だったとしても、残り二本の剣はどこから出てきたのかね？　というか、あのサプレッションシップには一体何人が乗っていたんですかねぇ？

「これ、本当にゲリッツだと思います？」
「さて、原型を留めていませんからなんとも。ただ、これを隠れ蓑にして本物が隠れている可能性はありますね」

　セレナ中佐もこれが本当にゲリッツなのかどうかは疑っているらしい。少なくとも、剣の本数から考えてもこの四本腕が複数の剣を持った人物――恐らくは貴族を元にしたツイステッドとの合成生物のようなものであろうということはほぼ間違いあるまい。

「ただ、時間的にどうでしょうね。彼らに対してはツイステッドどもの攻撃が無かったと想定したとしても、サプレッションシップには移動用の車両などを積み込むスペースは無いですし、そもそも彼らがコーマットⅣで満足に活動できるだけの装備を有していたかも疑わしいです。恐らく徒歩ではこの構造体に辿り着き、最奥のこの施設に辿り着くまで相当な時間がかかったはずです。完璧にツイステッドどもを制御する方法があったということであれば、グラップラーやブルに搭乗して高速移動をした可能性も捨てきれませんが」
「物理的、時間的制約か……確かに、そう考えるとゲリッツが逃げ延びている可能性はそんなに高くはないか」
「恐らくは。無論、我々としても探索は続けますけどね」

　まぁそうなるわな、と考えたところで嫌な予感が脳裏に過る。いやまさかそんな。でも一応、一応確認しないとな。

「……俺は元の任務に復帰して良いんですよね？」

「まだゲリッツが『いる』可能性がありますから」

そう言ってセレナ中佐はにっこりと満面の笑みを浮かべて見せる。それはつまり、俺はまだ解放されないってことですね？　わかりたくありません。

☆★☆

その後、施設の徹底的な調査により施設内にゲリッツが隠れ潜んでいるという可能性は否定された。まぁ、俺達が四本腕と戦った更に奥の部屋でツイステッドの生産プラントが発見され、制御に関するデータなどが押収されたのがせめてもの救いか。データは解析中だが、上手く行けば惑星上に存在する全ツイステッドに強制停止――つまり自死命令なども出すことができるようになる、ということらしい。

あの四本腕がゲリッツでなかった場合、今度はあの構造体の外に逃れている可能性も考慮しなくてはならないのだが、そちらの探索は惑星上に大量に投入された戦闘ボットが行うとのことだ。場合によってはゲリッツ対策にまた呼び出すかもしれないとセレナ中佐には言われた。正直言ってもうテラフォーミング中の惑星に降下などしたくないので、勘弁して欲しい。

最終的に施設の調査が完了するまでの三日間もの時間をテラフォーミング中の惑星であるコーマットⅣで過ごし、俺はようやくセレナ中佐の指揮下を外れて原隊に復帰――クリシュナに戻ることができたのであった。

#221　モンスターハンティング（後書き）

宇宙船小説４巻が１２／１０に発売です！　やったぜ！　―（：３」∠）―

←以下カドカワＢＯＯＫＳ作品ＵＲＬ←

ｈｔｔｐｓ：／／ｋａｄｏｋａｗａｂｏｏｋｓ．ｊｐ／ｐｒｏｄｕｃｔ／ｍｅｚａｍｅｔａｒａｓａｉｋｙｏｓｏｕｂｉｔｏｕｔｙｕｕｓｅｎ／３２２００８０００００６６．ｈｔｍｌ

５巻、６巻と続けるためにも是非予約してね！！！　―（：３」∠）―

#222　宙賊と社会問題（前書き）

最近夜更しし過ぎなので生活リズムを正したい……―（∴3」∠）

―（ゆるして

#222　宙賊と社会問題

コーマットⅣにおける降下制圧作戦終了後は穏やかな日々――悪く言えば退屈な日々――が続くことになった。アジトの壊滅によって宙賊どもの活動はなりを潜めることとなり、コーマットⅣで手に入れたデータの解析が完了してコーマットⅣ、及びコーマットⅢで活動していたツイステッドどもは強制停止された。つまり、全ての脅威は取り除かれ、粛々と移民作業が進んで行くことになったわけだ。

「かくしてコーマット星系には平穏が訪れ、ダレインワルド伯爵家の幼き女傑の差配の下、発展への第一歩を踏み出すのであった、と」
「何よそれ」
「自伝？　アレンに勧められてな。傭兵の自伝って娯楽小説扱いでそれなりの需要があるんだとさ」
「あー、たまに見かけるわね。明らかに話を盛ってる嘘くさいのばっかだけど」
「……ヒロ様の場合、正直にそのまま書いても盛ってると思われそうですよね」
「それな」

船でのドンパチがメインの俺がテラフォーミング中の惑星に降下して銃ではなく剣を使って切った張ったをするって時点で『嘘くせぇ！』と思われること間違いなしだな。普通、貴族でないとまともに剣なんて使いこなせないっていうのがこの世界――というかグラッカン帝国の常識だし。
勿論、貴族でなくても剣は振るえるし、切れ味だって変わるわけではない。だが、剣でレーザー兵器の射撃を防ぎ、あまつさえ弾き

返してダメージを与えるなんて芸当は莫大な金をかけて身体能力を強化できる貴族でもないと普通は不可能なのだ。俺はできちゃうけど。

「トラブルの頻度もねぇ……」
「日頃の行いは良いはずなんだけどな。呪われてるんじゃないかってレベルで何かしらトラブルに見舞われるよな」
「あはは……ま、まぁその分お仕事にはなっていますから」

確かに最終的には何らかの見返りがあるのは確かなんだけどさ。ミミやエルマのような優秀なクルーの加入があったり、単純に大金が手に入ったり、母船に優秀な整備士姉妹がついてきたり、大層な勲章を貰ったり、上級市民権とゲートの通行権を獲得したりな。ある意味トントン拍子ではあるんだけど、当事者としては疲れることこの上ないんだよ。

「俺としては撮れ高が欲しいんだが？」

クリシュナのコックピット。その後部にあるサブシートに座ってタブレット型端末を弄っていたフォーマルハウトエンターテイメントのズィーアが若干不満げな声を上げる。そうは言われてもな。

「宙賊の活動は減少傾向にあるし、この先はそうそう撮れ高なんて無いと思うぞ」
「アジトが無いと貨物船や客船を襲っても戦利品を売り捌けないからね。今、コーマット星系で仕事をする宙賊はよほど食い詰めた連中か、他所の星系に仕事場を移す前に少し戦利品を持っていこうって考えてる連中くらいでしょうね」
「うん？　どういうことだ？」

エルマの解説にズィーアが興味を示す。ああ、なるほど。宙賊の連中のライフタイルってのをあまり理解していないんだな。

「宙賊の連中のアジトってのは、要はブラックマーケットなんだよ。奴らは商船や客船を襲って戦利品や奴隷を獲得し、アジトに持ち帰ってそこで戦利品や奴隷を売り捌いて生活してるんだ」

「売り捌くって言ってもエネルじゃなく、換金性の高いレアメタルとか生活物資、嗜好品とかとの物々交換らしいけどね。そうやってアジトに集積した戦利品を所謂闇商人と言われる連中が買い付けていって、表の世界で売り捌くわけよ」

「アジトを襲撃して壊滅させれば、そのアジトを拠点としている宙賊だけでなく闇商人も一緒に壊滅させられるので、その星系を中心とした周囲の星系の宙賊や闇商人にダメージを入れられるというわけですね」

「なるほど？　しかしその話を聞く限り、諸悪の根源は闇商人ってことになるよな。宙賊を叩くのが重要なのは勿論だが、根本的には闇商人を摘発して回ったほうが良いんじゃないのか？」

ズィーアの疑問も尤もな話だ。末端ではなく、根を刈ったほうが効率的なのは間違いない。

「宇宙を行き来している行商人――商船がどれだけ居ると思う？　大企業から中小企業、それに船一隻だけで商売をしてるようなのもごまんと居る。その全てをチェックして出てくるかどうかもわからない宙賊からの横流し品をチェックできると思うか？」

「……難しいだろうな」

「それに、どんなコロニーにも出処の怪しい品を扱う店なんていくらでもあるでしょう？　辺境にある小さなコロニーやステーションの中には闇商人頼みでなんとか命脈を保ってるようなところもあるっていうのが現状なのよね。それに、あいつらの中にはコロニーや

ステーションだけじゃなく、惑星上の居住地とも取引しているような奴らもいるみたいだし」
「扱いの難しい情報だな……」
俺達の話を聞いたズィーアが燃えるように輝く鬣をバリバリと掻く。
なんだかんだ言ってコロニーやステーションの運営に行商人の存在は欠かせない。コロニーやステーション内で完全に自給自足ができるほどの設備が整っている場所などごく少数だからだ。どんなコロニーやステーションも大なり小なり他のコロニーやステーションとの交易を行うことによって住人に必要な生活物資を手に入れている。当然、取引相手の選り好みなどそうそうできるものでもない。怪しげな相手でも、必要なものを適正と思われる値段で卸してくれるなら多少のことには目を瞑らないとコロニー運営が立ち行かなくなるのだ。
「一介の傭兵には手に余るよな、こういう社会問題ってのは」
「考えようによってはそういった問題があるからこそ私達の活躍の場があるわけだしね」
エルマがそう言って肩を竦める。宙賊が居なくなったら俺達傭兵もおまんまの食い上げだからなぁ。まぁ、本当に宙賊が居なくなったら宇宙怪獣ハンターか、本当の意味での傭兵業をやるしかないだろうな。つまり、国家間紛争の場である戦場での槍働きってやつだ。振るうのは槍じゃなくて航宙戦闘艦とレーザー砲になるわけだけど。
「あー、意識の高い話はやめやめ。もっと意識の低い話をしよう」
「意識の低い話」
「現時点での報酬計算とか」
「それは意識の低い話なの？」

エルマがジト目で見てくるが無視だ無視。少なくとも宙賊と宙賊が発生する社会的問題について議論をするよりはずっと即物的で意識の低い話だろう。

「ええと、一日あたり３０万エネルで、何か別件で招集された場合は最低１００万の応相談。今二十日目で、最低でも三十日は雇用されることになってるから、まず９００万は固い、と」

「コーマットⅢでの対地攻撃に一度駆り出されてますから、１００万エネルはプラスですよね」

「コーマットⅣの降下制圧がどういう扱いになるかね。ヒロのリスクを考えると３００は吹っ掛けたいわね」

「それが通ったとして９００＋４００で１３００万エネル。ああ、アジトへの襲撃も１００は固いだろうから１４００万エネルか。その他に宙賊の賞金額とか撃破報酬とかを入れると……およそ５５０万エネルくらいか。これに修理して売り捌いた船の売却益が合計で凡そ７００万エネル。こっからあと十日で賞金額と船の売却益がどれだけ伸びるかわからんが、鈍化はするだろうな」

「全部合わせるとざっと２６５０万エネルですね。本当にざっと丼勘定しただけなので、誤差はあると思いますけど」

「そこにこれから十日分の賞金とか船の売却益を入れると、３０００万を超えるかどうかってとこかしら。かなり宙賊が減ってるから、賞金額の伸びは期待できないわね」

「一ヶ月で３０００万エネル……理解の及ばん領域の稼ぎだな。そんなに儲けて何に使うんだ？」

ズィーアの質問に俺は胸を張って答える。

「俺の目標は惑星上の居住地に豪華な一戸建てを建てて何不自由なくのんびりと贅沢に暮らすことだな！」

「それは壮大な夢だな……でも」
「でも？」
「その稼ぎで十分に目的を達成できるんじゃないか？　上級市民権はあるんだろう？」

ズィーアがそう言って首を傾げる。いや、そんなことは。居住惑星に家を建てるには億単位のエネルが……うん？　あれ？　上級市民権を買うために大量の金が要るのであって、それを持っていれば土地代と建築費があれば……？

「……いけるのか？」
「いけると思うけど」
「多分いけると思いますよ」

俺の疑問にエルマとミミが頷きながら答える。
あれ？　いつの間にか俺は目標を達成できる状態になっていた……？　うわ、俺って気づくの遅すぎ……？

#223　今後の活動方針（前書き）

くっそ寒いです。
こたつって良いですよね―（：3」∠）―（うたたねした

#223　今後の活動方針

「今まで気づいてなかったの？」
「敢えてスルーしているんだと思っていました」
「やめてくれ、俺の心にグサグサ刺さる」

言い訳をさせてくれ。確かに御前試合の一件で上級市民権を付与された覚えはあったんだが、それよりもゲートの自由通行権の方に意識が行って殆ど頭からすっぽ抜けていたんだ。というか、メイによる地獄の特訓とかミミの衝撃的な出自の方に意識が行って最近全然最終目標である惑星上に庭付き一戸建てを建てるということに関して思いを馳せる暇もなかった。その後もすぐに今回の仕事に取り掛かることになったし。

「じゃあゴールドスターの英雄様はもう隠居するのか？　早くねぇか？」
「いや、それはどうだろう……」

ズィーアの言うことも尤もである。確かに今回の仕事を終わらせれば惑星上の居住地に土地を買って庭付きの一戸建てを建てる事もできるのだろう。その後、普通に暮らしていくのに十分なだけの資金も多分ある。後はミミとエルマとメイと一緒に悠々自適な隠居生活……というのも悪くない。確かに悪くないんだが。

「それはなんだかつまらないよな」
「つまらないと来たぞ」
「落ち着くにはちょっと早いんじゃないかと思うんだよ。もっと色々なところを見て回りたいし、のんびりゆっくり過ごすって言って

も絶対に身体を持て余す気がする」

これは俺の偽らざる本心である。ずっとイチャイチャして過ごすのも悪くないし、その結果ミミとエルマとの間に子供ができたりするのも幸せなことなんだろうと思う。でも、この仕事が終わり次第そういう生活を始めるというのは時期尚早な気がしてならない。

「まぁ、その辺りはミミとエルマとメイと、あと一応ティーナとウィスカとも話し合いながらだな。仮に今すぐそういう生活を始めないとしても、どこに家を建てるかというのは考えておいても悪いことじゃないし」

場合によっては土地だけ先に確保しておく、というのもアリだろう。土地だけ確保しておけば、後は好きなように家を建てるだけなのだし。金はあるんだから、買うなら広く買っておけばいい。ああ、でも広い土地を持っていたら税金がかかりそうだな？　その辺も要相談か。

「そして何より、だ」

「何より？」

「俺はコーラを見つけていない……今の状態で惑星上で悠々自適に暮らすと言っても、それじゃあ片手落ちというものだ」

「あぁ……」

「そう言えば、アンタはその『こーら』とかいうものに目がなかったわね……」

ミミとエルマが納得したような表情で頷く。納得したようなと言うか、半分以上呆れが混じってますね？　君達は俺がどれだけコーラを追い求めているかわからないからそんな反応をするんだ……！

あれは俺にとって命の水に等しいものなのに。

「その『こーら』ってのはなんだ？」
「コーラのことに興味がある？　それは――おふっ」
操縦席を回転させてズィーアに説明をしようとしたら隣に座っているエルマの蹴りで操縦席の向きを元に戻された。なんて酷いことを。
「延々と『こーら』に関して語り始めるからその話題はＮＧよ。簡単に言うと爽やかなフレーバーがつけられた甘い『炭酸飲料』らしいわ」
「炭酸飲料……？」
「飲むとシュワッとする不思議な飲み物です。ただ、その性質上宇宙船やコロニー内でボトルを開封すると爆発的に吹き出すという特性がありまして……」
「なんだそれ怖いな」
「怖くないから。全然怖くないから。危険物の類じゃないから」
くっ、やはりこの世界では基本的にマイナー飲料なんだよな、コーラというか炭酸飲料全般が。
それに肉とか野菜、魚介類みたいな普通の食材を調理する技能も専門的かつ特殊な技術って認識が強い。どうにもこの世界の食事に関する事情は複雑怪奇だ。恐らくは宇宙進出する過程で極端な効率化とかが図られてフードカートリッジを使わない普通の調理とか、炭酸飲料の存在とかが忘れられた結果なんじゃないかと思うんだけど。
と、そういうことを語って聞かせるとズィーアは「ふむ」と言って暫し黙考してから口を開いた。
「それなら、昔からの文化を保っている種族の母星系とか、最近帝

国に組み込まれたばかりの辺境惑星に行けばキャプテンの求めるようなものが見つかるかもしれないな」
「その話、もっと詳しく」
再び座席を回転させ、ズィーアに向き直る。今度は俺の反応を予想していたのか、ズィーアは特に驚くこともなく鋭い牙を見せるように笑みを浮かべて見せた。
「話すのは構わないが、それには見返りが欲しいところだ」
「見返り」
「そうだな……帝国航宙軍の中佐殿とは随分親しそうだったじゃないか。彼女との因縁を教えてくれるなら俺も情報を話そう」
「ＯＫ」
セレナ中佐の情報でコーラ発見の端緒を掴めるのであれば安い買い物だ。俺としては全く心も傷まないし、何でもゲロってやるとしよう。
え？　セレナ中佐との約束？　そんなものよりコーラだ！　まぁへべれけ状態のポンコツ姿を横流しとかしなければ大丈夫だろう。どうやって出会って、今までどんなことをしてきたかを詳細を暈して伝える分には機密漏洩にもなるまいて。
「まずはそっちから教えてもらおうか」
「ＯＫ、つまりだな、種族や民族の母星系では古い伝統の料理だとか、特産品なんかが結構残ってるんだよ。貴族様や上流階級の富豪達が召し抱える料理人ってのは、基本的にそういった惑星で料理の修練を積んだ人達なわけだ」
「なるほど。そういった珍しい料理や特産品の中に俺が求めるものがあるかもしれないと」
「そういうことだな。グラッカン帝国領にもそういった母星系はい

くつかあるし、比較的最近帝国領に組み込まれた最辺境宙域――所謂エッジワールドにはまだ広く知られていない産品も多いはずだ」
「エッジワールドかー……」
最辺境宙域（エッジワールド）というのはターメーン星系のようなただの辺境宙域――言い換えればただの田舎、或いは他の宇宙帝国との国境宙域とは意味合いの違う宙域である。先に何が居るか、何があるかわからない。未探索宙域との境、拡大し続ける帝国領の最前線とでも言うべき場所だ。

「エッジワールドなら働き口にも困らないとは思うけどなぁ」
「エッジワールドは帝国航宙軍の力があまり強くないから、宙賊が多すぎるのがねぇ……」
「それって何がまずいんです？」

俺とエルマの反応にミミが首を傾げる。

「エッジワールドでは帝国航宙軍の数が少ない。だから、宙賊は手強い相手を見つけたら増援を呼ぶんだ」
「えっ、それって……ああ、なるほど。帝国航宙軍が来ないからですか」
「そういうこと」

帝国航宙軍や星系軍がちゃんとパトロールをしている星系で宙賊が増援要請なんてしようものなら軍がすっ飛んでくるわけだが、エッジワールドではコロニーやステーションの防衛に手一杯でそのような余裕がない。なので宙賊共は獲物を見つけたら仲間を呼んで数に任せて制圧にかかってくるのだ。
「選り取り見取りって言えば確かにそうなんだが、リスキーなんだ

よなぁ」
「いくらクリシュナとヒロが強いって言っても限界ってものがあるからね」

危険なだけに儲けも大きいから、商人達もそれなりに活動してるんだけどな。
基本的にそういった場所で活動している商人ってのは多数で大船団を組んで活動している。しかもエッジワールドで活動するような連中は普通の商船団ではなく、所謂武装商船団みたいな連中だ。宙賊の大規模襲撃に対抗するため、重武装を施した商船にたっぷりの護衛をつけて活動している。

「俺達だけで動き回るのはリスキーだけど、護衛の仕事は常にあるって話だから、武装商船団の護衛としてエッジワールドを回るってのはアリかもしれないな。ブラックロータスの武装と積載量も一緒に売り込めば補給艦として受け入れられるかもしれん」
「そうね……エッジワールドに近い星系で武装商船団を探して売り込むのもアリかもしれないわね」
「それも良さそうですけど、まずは安全な帝国領内にある種族の母星系を巡るのが良いんじゃないですか？」
「確かに」

武装商船団の一員としてエッジワールドを探索するのも面白そうだけど、まずは俺達だけで帝国領内を漫遊して回るのも良いだろう。家を建てる星を選定する必要もあるだろうし。

「まだまだキャプテン・ヒロの活躍は続きそうだな？」
「そういうことになるだろうな。まぁ、楽隠居するには流石に若すぎるだろ」

そう言って俺は肩を竦めてみせる。
まずはあと十日、コーマット星系での仕事を終えてからの話だな。情勢を考えるに契約の延長は恐らく無いだろうし、次の行動目標が定まったのは良いことだろう。
家を建てる惑星を探す、俺の命の水とも言えるコーラを探す、そしてついでにあちこち見て回る。今後の活動方針はそんな感じで良いだろう。

#223　今後の活動方針（後書き）

もう終わると思った？　まだまだつづくよ！ ―（：3」∠）―

#224　穏やかな十日間（前書き）

ギリギリセーh……マニアワナカッタ……｜（∵3」∠）｜

#２２４　穏やかな十日間

おおよその活動方針を決めてから十日間、俺達の日常は滞りなく流れていった。数が減った宙賊を『丁寧に』叩いてその船を鹵獲し、投降した宙賊をお上に引き渡して若干の割り増し報酬をもらいつつ、鹵獲した船を売り捌く。この十日間で最も忙しかったのは整備士姉妹であったことは間違いないだろう。

「がんばれ♪　がんばれ♪」
「応援してくれるのはええけど、うちらにも限界っちゅうもんはあるからな？」
「ここのところはやり口が丁寧で破損が少ないから、楽といえば楽ですけどね」
「俺にだってそれくらいの配慮はできる」

逃げられる前に宙賊艦のメインスラスターを破壊し、ネチネチとダメージを与えながら投降を促したり、ピンポイントでコックピットブロックだけぶっ潰したりしていたので、修復・改修がかなり楽になっていたはずだ。

「やはりブラックロータスは良い買い物だったな。二人のおかげで投資分を回収するのはすぐに終わりそうだ」
「うちらの懐もかつてないくらいに温まってるな」
「ある意味スペース・ドウェルグ社で働いていた時よりもハードワークだけどね……」
「それはすまん、本当にすまん」

ただ謝ることしか出来ない俺であった。ええっと、職場の改善要

望なら聞くよ？　道具の追加とか、そういう方向なら。仕事減らしてってのはちょっと聞けないけど。いや聞けるけど。はい聞けます。だからそのレンチとスパナを素振りするのをやめよう！　今すぐにやめよう！

☆★☆

整備士姉妹に説得（物理）された俺は這々の体で彼女達の仕事場であるハンガーから逃げ出し、ブラックロータスの休憩スペースに足を運んだ。そこには各社のメディアスタッフ達が屯していた。

「キャプテンが仕事を終えるなら、私達の取材もこれで終わりですなぁ」

「この高級ホテルみたいなブラックロータスでの生活も終わりとなると、名残惜しいですね」

「広々としてメシも美味いからな」

「フォーマルハウトの安月給じゃこんな生活はできないでしょうしねぇ」

「あ？」

「何か？」

フォーマルハウトエンターテイメントのズィーアとニャットフリックスのニーアが険悪な雰囲気を醸し出しているのをスルーしてスペース・ドウェルグ社エンターテイメント部のワムドとメビウスリングのアレンに話しかけることにする。

「お前達はどこに下ろせば良いんだ？　まさか帝都まで送っていけとは言わんよな？」

「それは大丈夫です。コーマット星系からであればデクサー星系への定期便が出ていますし、伯爵領主星系からならば帝都行きの便が

ありますので」
「なるほど、それじゃあ帰路の心配は俺達がする必要はないってわけだ」
「名残惜しいですがね」
「一ヶ月も一緒に生活すればそれはな。ワムド達が居なくなったらブラックロータスが急に静かになったように感じられるだろうな」

一ヶ月間にわたって一社につき五名、総勢二十名ものメディアスタッフがブラックロータスとクリシュナに滞在していたのだ。
元より俺とミミ、エルマ、メイ、それにティーナとウィスカの五名で過ごすにはブラックロータスは広すぎたくらいだったので、二十名のメディアスタッフが滞在している間は実に賑やかに感じたものだ。休憩スペースに行けば必ず誰か居るし、食事に関してもやはり同じくらいの時間に食べる事が多かったから、賑やかなものだった。一気に二十名ものスタッフが降りたら、きっと物寂しく感じることになるだろう。

「ははは、キャプテンとしては大っぴらにミミちゃんやエルマさんとイチャつけるようになるから願ったり叶ったりでは？」
「そういう面が無いと言えば嘘になるかもな」
「英雄色を好むと言いますからなぁ……ところで、ウチの二人とは？」
「俺はそこまで節操なしじゃないから」
「そうですか？　二人とも若くて美人だと思うのですがね？」
「私達からするとあのお二人は少々幼く見えてしまいますからね……」
「それな」

首を傾げるワムドにアレンが苦笑いを零し、俺もそれに同意する。二人とも間違いなく可愛いんだけど、幼く見えるからな……いや、

ドワーフとしてはれっきとしたレディだってのはわかるんだけど、どうしても見た目がな。独特の色っぽさがないというわけじゃないんだけど。

「というかそもそもの話、船に乗せたら手を出さなきゃならないってものでもないし……というか、あの二人にも相手を選ぶ権利はあるだろうし」

「……思ったよりもロマンチストなのですな」

「正直に言うとメンタルが傭兵っぽくないですよね、キャプテンは。ストイックというか、どこかピュアというか、おぼこいというか」

「それ褒められてんのかなぁ！？」

いきり立つ俺を前にワムドとアレンが笑い声を上げる。まぁ、うん。こういう男同士のノリでやるバカ話ができなくなるのはちょっと寂しいかもな。

☆★☆

「それじゃあコーマットプライムコロニーで少し休息をしてから出発ってことですね」

「まぁ、良いんじゃない？　急ぐ旅路でもなし。大きな仕事も終えるわけだし、少し休んでもバチは当たらないわよ」

休憩スペースを辞した俺はクリシュナのコックピットに戻り、そこで待機していたミミとエルマに今後の予定について相談をしていた。

「いきなりポンとワムド達を放り出すのもアレだしな。あいつらがデクサー星系行きの船が手配できるまでコーマットプライムコロニーで休息、その間に目的地の当たりをつけておくって感じで行こう

と思うんだが」
『それでよろしいかと思います』
俺の提案にメイがコックピットのメインスクリーン越しに同意する。同じコックピット内にいるミミとエルマも俺の提案に否はないようだ。
「差し当たっては家を建てる土地の選定……はどこでも良いっちゃどこでも良いんだよな」
「どういった場所が過ごしやすいんでしょうか？」
「やっぱり気候が良い場所が良いわよね。極端に寒暖差の激しい所とか私は嫌よ。あと、星系全体の治安が良い場所が良いわね。宙賊の襲撃とか、紛争に巻き込まれるのは嫌でしょ？」
「そりゃ確かに。空から雨や雪だけじゃなく宙賊艦だの軌道爆撃だのが降ってくるような星は嫌だな」
「それは嫌すぎますね！」
ミミが俺の言葉に強く同意する。
「となると、セキュリティがしっかりしててちゃんとテラフォーミングなり気候調整なりが入ってる惑星ってことになるわね。まぁ、コネを使うならダレインワルド伯爵家の領地にある惑星が手っ取り早いわよね」
『購入費用、税制面で優遇してくれる可能性は大いにありますね。ダレインワルド伯爵家側にも恩恵がありますので』
「恩恵？」
『仮にヒロ様がデクサー星系やこのコーマット星系の惑星上に居を構え、本拠地とした場合には何か宙賊絡みでトラブルがあった場合にヒロ様を戦力として数えることができるでしょうし、そうでなくとも日常的に宙賊を狩って星系の治安に寄与することが簡単に予測

できます。或いは、ダレインワルド伯爵家に仕えるという目も出てくるのでは、とダレインワルド伯爵家としては期待するでしょう。優遇して恩を売らない手は無いと思います』
「なるほどなぁ」

お貴族様ともなればそういう風に考えを巡らせるんだな。まぁ、それだけ俺の力が買われているということでもあるし、誇らしいことではあるな。かと言ってあまり調子に乗るのも良くない。謙虚に行こう、謙虚に。それほどでもない。ヨシ。

「で、一応家を建てる土地購入なんかに関しては後でクリスに相談してみるとして、目的地に関しては何か無いか。良さげな場所は」
「うーん、難しいですね。一応あの後、帝国領内にある種族の母星系に関してはある程度情報は集めましたけど」
「ほう、どんな感じなんだ？」
「私達が行ってないところ、となるとエルフの母星系であるリーフィル星系、ドワーフの母星系であるガラキス星系、レピリカの母星系であるアマーズル星系、テクタの母星系であるシーラス星系ですね」
「ああ、リーフィル星系のリーフィルⅡには私は行ったことがあるわね。小さい頃にお父様とお母様に連れられて。私は帝都生まれの帝都育ちだったけど、一度くらいはエルフのルーツである母星系に足を踏みれておくべきだって話でね」
「ほー」

やっぱり種族の母星系ってのは特別なのかね？

「私は種族の母星系とかはあまり考えたことはありませんけど、やっぱり帝都に降り立った時には感動しましたね」
「そういうものか」

俺にはサッパリわからん感覚だな。まぁ、クリシュナに乗ったまま地球に帰ってみたい気持ちがないと言えば嘘になるけど、クリシュナで地球に乗り付けたりしたら大騒ぎになるだろうな。近寄らんとこ。戦闘機とかにめっちゃ追い回されそうだし。

「そう言えばなんだけど」
「うん」
「前にシエラⅢでヒロが微妙な顔をしながら飲んでたやつ、私も飲ませてもらったじゃない？　あれ、リーフィルⅡで飲まされた薬湯に匂いが似てたのよね」
「……ほう」

確かエルマに飲んでもらったのはルートビアだった。ルートビアの原型は様々なハーブやスパイスを調合した飲料で、それが独自のレシピによって無数に枝分かれして色々な飲み物に派生していった。そのうちの一つがコーラである。つまり、エルフの母星系であるリーフィル星系のリーフィルⅡにはコーラが誕生する下地があるというわけだ。

「よし、リーフィル星系に行こう」
「決断が早いですね」
「……ちょっとマズったかしら。まぁ、今のヒロならなんとでもなるか」

エルマが何か気になることを言っている気がしたが、俺としてはそんなことよりもコーラの存在の有無の方が大事なことであった。果たしてリーフィルⅡにはコーラの実に相当する作物は存在するのか？　そしてコーラに相当する清涼飲料水は存在するのか？　俺の興味はただその一点に集約されていたのである。

#２２４　穏やかな十日間（後書き）

最強宇宙船小説四巻は１２／１０発売！
５巻、６巻と続けていくためにもぜひ買ってね！　おねがいします！　なんでもはしないけど！　―（：３」∠）―

#225　わるいこ（前書き）

気がついたら空が明るくなっている今日このごろ……―（∵3」∠）

―（ゆるして

#225　わるいこ

此度のダレインワルド伯爵家からの雇用契約は最低一ヶ月、一ヶ月ごとに契約更新をするかどうかの確認を行い、最大で三ヶ月間働くという内容で締結されていた。

この一ヶ月間で多くの宙賊を倒し、拠点を叩き潰し、その宙賊に加担することによってダレインワルド伯爵家への妨害工作を行なっていたイクサーマル伯爵家縁の人物――であったと思われるものを討伐しと、なかなかに忙しい一ヶ月間であった。

結果としてこの十日間に関しては宙賊どもも鳴りを潜め、一時的にかもしれないが星系の治安は格段に良くなっている、ということがデータにも表れている。

「そういうわけで、ダレインワルド伯爵家からのお仕事は終了です。と、なると……ヒロ様はまたすぐにどこか私の手の届かない場所へと旅立ってしまうのでしょうね？」

「まぁ……うん」

その通りなので素直に頷く。

俺はコーマットプライムコロニーにあるクリスの執務室へと足を運んでいた。時刻としてはもうじき夜、と表現しても差し支えない頃合いだ。大きな執務机の向こうに座っているクリスの更にその後ろ、大きな窓の向こうにはコーマットプライムコロニーの『夜景』が輝いている。コーマットプライムコロニーではコロニー標準時十八時から明朝五時までの間、コロニー内の空間照明が落とされてまるで夜のようになるのだ。

「私の気持ちは今でも変わっていません」

「……あぁ」

真っ直ぐに俺の目を見ながらそう言うクリスに俺は生返事を返すのがやっとだ。ここで何か一つ気の利いた言葉でも口にすることができれば一端の女たらしにでもなれるのだろうが、残念ながら俺にはそこまでの甲斐性が無いようである。

「ヒロ様と再び顔を合わせられるのはいつになるのでしょうね？」
「それは……わからないな」
「そうですね。ヒロ様は仕事でもなければ私のような面倒な小娘とは顔を合わせたくもないのでしょうから」
「そんなことはないって！　それは流石に言いすぎだよ！」

確かにクリスと男女の関係になるのは年齢的な意味でも身分的な意味でも色々と問題があるので俺としてはＮＧだが、だからといって疎んじているというわけではない。互いの立場上どうしても相容れない部分はあるが、クリスのような美少女に慕われて嫌な気分になるわけがないじゃないか。

「では、ヒロ様は私を嫌っておいでではないのですね？」
「……おいでではないです」

クリスのオニキスのように輝く瞳が妖しい色を帯び始めたような錯覚を覚え、俺は思わず一歩後退る。なんだろう、俺の頭の中に警鐘が鳴り響きつつあるような気がする。

「ところで、今日はお一人なのですね」
「ああ、うん。ミミもエルマも今日は船にいるって言ってな……メイはメディア各社の持ち帰るデータの最終チェックで忙しいようだったし」

「なるほど。ヒロ様、私は心配です」
「心配？」
頬に手を当て、困ったような表情で首を傾げているクリスに俺も首を傾げて見せる。先程一瞬見えた妖しげな雰囲気はどこへやら、クリスは本気で俺を心配しているかのように見える。
「これからヒロ様は貴族に接する機会も増えると思います。その中にはヒロ様の力や船を欲し、それを我がものとするために謀略を巡らせてくるような者もいるでしょう」
「なるほど。気をつけるとする」
クリスの言葉に素直に頷く。確かに、そのような人物に目をつけられる可能性はなきにしもあらずだ。今後はより一層気をつけるとしよう――と考えて顔を上げると、クリスがニコニコと満面の笑みを浮かべており――そして何故か、その手は自らの衣服へとかけられていた。
「何を――？」
「きゃー」
クリスが悲鳴を上げた。いや、これは悲鳴なのか？　声量は普段話す声と変わらないし、何より台詞そのものが棒読みである。
「いけません、ひろさまー」
「えっ？　えっ！？」
クリスの手がゆっくりと動き、プチ、プチ、と彼女の衣服のボタンが、或いは留め金が外されていく。彼女自身の手によって上着が緩められ、薄手の肌着と少し上気してほんのりと桜色に染まってい

る首元が晒される。いや、待て。待ち給え。

「ああっ、だめですひろさまー。そんな、らんぼうにー」
「ちょ、えっ！？　何！？　何やってんの？」
「そして仕上げにこのボタンを押して護衛を呼び出す、と」
「スタァァァップ！？」

クリスが彼女の執務机に備えられている小さな卵型のオブジェクトに手を伸ばし始めたので、慌てて執務机に駆け寄って彼女の手首を掴み、その暴挙を止める。

「うふふ、この現場を見られたら言い逃れできませんね？」

息がかかるほどの至近距離でクリスがいたずらっぽく笑い、挑発するように俺の顔を見上げてくる。上気した頬と、瑞々しい唇、それに真っ白な首筋が何故だか妙に色っぽく見えてしまい、俺は視線を横にずらした。

「クリス、こういう悪戯は良くないと思う。いくら親しい間柄でも、こういうのは良くない」
「はい、ごめんなさい。でも、気をつけてくださいね？」
「……何をだ？」

と、そう問いかけてクリスに顔を向けた瞬間、クリスは俺に掴まれていない左手を俺の首へと回し、狙い澄ましたように俺の唇に自分のそれを重ねてきた。
柔らかな感触に驚いて硬直してしまった俺からほんの少しだけ身を離し、クリスは上目遣いで俺の顔を見上げてくる。

「悪い貴族の女性ならこんな風に無理やり既成事実を作って、なし

崩し的に関係を持つことを強要してくるかもしれませんから。絶対に一人きりで私以外の貴族の女性と会っちゃいけませんよ？」
「……はい」

なんということだろう。御前試合で貴族達と切り結んで勝利を収め、コーマットⅣでは凶暴なツイステッドやバカでかいグラップラー、それに剣を操る化け物とすら戦って生き残った俺が、クリスにかかればこのざまだ。
俺の素直な返事に気を良くしたのか、クリスは悪戯猫のような表情を浮かべて俺からスッと身を離した。そして見せつけるようにはだけていた上着をゆっくりと着直していく。完全に挑発されているようだが、俺は動かない。俺がロリコンだったら危なかった。

「……本当に既成事実を作ってくれてもいいんですよ？」
「誘惑するのも程々にしなさい……まったく、ちょっと見ないうちに随分と悪い子になったんじゃないか？」
「女の子の成長は早いんですよ」

特に、恋する女の子の成長は。
そう言ってにっこりと笑うクリスに俺を口を閉ざすしかないでのであった。

☆★☆

「おんなのこ、こわい」
「女性恐怖症の急性発症ですか？」

こてん、と首を傾げながらメイが微妙に的はずれなことを言う。
いや、別にそこまで深刻ではないけれどもね。帰り際に「また会いに来てくださいね。あまり長く会いに来てくださらなかったりす

ると、寂しさのあまりお祖父様に胸の内を吐露してしまうかもしれませんから」なんて言われてしまってはこんな感想を抱いてしまうのも致し方あるまいて。まぁ、クリスのことだから本気ではなくジョークだと思うけど。ジョークだよな？

「いや、大丈夫だ。多分大丈夫だ。問題はない」

「そうですか。それは何よりです」

メイがそう言って頷き大きなスクリーン――ブラックロータスのコックピットに設置されているメインスクリーンにいくつもの動画を表示させる。それはクリシュナが宙賊艦を撃破する様子であったり、帝国航宙軍の戦艦が一斉砲撃を行う様子であったり、クリシュナを含む航宙艦の近接航空支援で殲滅されるグラップラーやブルの姿であったり、砂塵の中で剣を振るう俺やセレナ中佐の姿であったりした。

「各社メディアの録画したデータに関しては全てチェックを終えました。艦内のセキュリティに関する部分は検閲済みです」

「ありがとう。大変だっただろう？」

「多少時間は取られましたが、些細なことです」

「そうなのかもしれないけど、ありがとうな。何かご褒美でも出してやりたいけど、メイにはどんなものをご褒美にすればいいんだろうな？」

基本的にメイには物欲というものが存在しないようで、賃金などを受け取ろうとしない。なので、今ひとつどのようにして彼女に報いればいいのかということがわからないのである。

「ご褒美ですか？」

「うん、ご褒美。いくらメイがメイドロイドで、俺のために働くこ

とが仕事なんだとしても、こうして苦労して仕事をこなしてくれる以上、俺がメイに感謝の気持ちを示したいということそのものは変なことじゃないと思うんだけど」
「なるほど。それでは」
メイは無表情のままパッと両腕を広げた。まるで抱擁を求めるかのような仕草だが？
「私を抱きしめて下さい」
「うん？」
「メイドロイドはご主人様にハグされることでゴシュジニウムという物質を補給することが出来、それによって性能が向上するのです」
「うん？　まぁ、ハグしろと言うならするけども」
「はい」

メイドロイドジョークだろうか？　などと考えつつ両腕を広げてハグ待ち状態のメイに近づき、望み通りに抱きしめてやることにする。すると、メイもそっと俺の背中に腕を回して抱きついてきた。どうしてメイは機械なのにこんなにいい匂いがするんだろうな。身体が温かいのは相応の動力をがあるからなんだろうけど。特殊な金属製の筋繊維と合金製の骨格を持つはずなのに、彼女の身体は本物の女性と変わらない柔らかさまで兼ね備えている。クリシュナよりもブラックロータスよりも何よりも、実はメイがこの世で一番不思議な存在なのかもしれない。
しばらくメイと抱き合い、どちらからともなく身を離す。そうして謎のハグタイムを終えたメイの表情はいつのもの無表情ではなく、どことなく嬉しそう、かつ満足げな雰囲気を感じさせるものであった。本当に僅かにだが、口角が上がって微笑んでいるようだ。
「ごしゅじにうむとやらは補給できたか？」

「はい。凡そ４％ほど処理能力が向上したようです」
「それは何より」

多分メイドロイドジョークなんだろうけど、本当に４％も向上してたら凄いな。毎日ハグしてたらすぐにメイの性能が二倍以上になりそうだ。

さて、後はメディアスタッフの足が手配できればこの星系ともおさらばだな。何か忘れているような気もするけど、まぁ大したことではないだろう。

イクサーマル伯爵家が今後どうなるかは若干気になるし、あの四本剣の化け物が本当にゲリッツとやらであったのかも気になるが、知ったところでどうということはない。若干の好奇心が満たされるだけで、真相を知るリスクは高いしな。真相を知っているばかりにイクサーマル伯爵家に狙われるかもしれんし。準備ができ次第とっとお暇するとしよう。

#226　次なる目標へ（前書き）

ちょっと短い上に遅れたけど許して！―（∵3」∠）―

遅れたのには全く何も一切関係ないですが、日本語化対応したＥＶＥ　ＯＮＬＩＮＥ始めました（。ω。）

#226　次なる目標へ

メディアスタッフ達も撤収し、物資などの補給も終え、ブラックロータスとクリシュナの出港準備が整った。鹵獲した船も全て捌き終え、整備士姉妹は久々の休暇を満喫している。具体的には昨晩遅くまで二人で酒盛りをしていたようで、もうじき昼というこの時間になっても部屋から出てきていない。メイ曰く、バイタルは安定しているとのことなのできっと寝ているのだろうと思われる。

「うーん、空荷で出港するのは勿体ないですね」
「仕方ないわよ。コーマットプライムコロニーは好景気、高需要で何もかもが高いし」
「道中の交易コロニーに寄って何か良さげな交易品を見繕っていくしかないだろうな」

どうせ出向するなら小銭稼ぎに何かしら荷物を運んでいったほうが良いのだが、エルマの言う通りコーマットプライムコロニーでは何もかもが高騰気味であり、ここで荷を積んでいくのは今ひとつ効率が悪かった。ここに荷を運んでくる分には大層儲かるんだろうけどな。

「メイ、リーフィル星系へのルート設定は大丈夫か？」
『はい。全て滞りなく。いつでも出港可能です』
「わかった。急ぐ旅でもないから、道中の交易コロニーにはできるだけ寄っていくとしよう。リーフィル星系で売れそうなものを見繕って荷を積んでいく」
『承知致しました。それではニーパック星系のゲート通過後に存在する交易コロニーに寄港するように航海スケジュールを設定します』

「そうしてくれ。それじゃあ、出港だ」
『はい。出港手続きを開始致します』

そう言ってホロディスプレイに表示されていたメイの姿が消え、少しするとブラックロータスが動き始めたのが感じられた。ブラックロータスの休憩スペースには外が見える窓などはないので、外の様子を見るために外部の光学センサーが拾っている映像をホロディスプレイに表示させる。

「……あっ」
「あー……」
「あらー……」

メイが操作しているのだろう。光学センサーが拾っている外部映像に写っているとある人物の姿が拡大表示される。

それは白い軍服を身に纏い、腰に大ぶりの剣を差した女性であった。一見、彼女は出港しつつあるブラックロータスの姿をにこやかに見送っている見えるが……完全に目が笑っていなかった。

「ヒロ、セレナ中佐に挨拶は……？」
「えーっと……ハハッ」

何か忘れているとは思っていたが、そうか。セレナ中佐に挨拶をするのを忘れていたな、ハハハ。

俺達が光学センサー越しに彼女の姿を見ているということを確信しているのか、彼女の口がゆっくりと動く。

「えーと……か、し、ひ、と、つ、で、す、よ？」
「それは横暴だろう……？」

ミミがセレナ中佐の唇の動きから読み上げた言葉にツッコミを入れる。どちらかというと今回は俺がセレナ中佐をお世話したんだが？　いや、挨拶を忘れてさっさと御暇するってのは俺も不義理だとは思うけど！　思うけどさ！

「……まぁ、これはヒロが悪いわね」

「……うーん、擁護できません。ごめんなさい、ヒロ様」

「えー……」

二人から同時に下されたアウト判定に不満の声を上げて抗議するが、判定は覆らなかった。くそう、ここでクルーの裏切りに合うとは。

そうしているうちにブラックロータスはコーマットプライムコロニーから出港し、セレナ中佐の姿も見えなくなった。次に会った時に今回のことをネタに無理難題を吹っ掛けられられないように祈っておくとしよう。

『航路設定完了。超光速ドライブ、チャージ開始します。カウントダウン。5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動』

メイの宣言と同時にドォン！　と轟音が鳴り響き、ホロディスプレイに映っていた星々が光の矢と化して後方へと流れて行き始める。

「ウェリック星系、ジーグル星系、メルキット星系を経由してニーパック星系のゲートウェイを通過、その後四星系を中継してリーフィル星系か」

「今度こそは穏やかな旅程になりそうですね……なりますよね？」

「多分。恐らく。きっと」

銀河地図（ギャラクシーマップ）を見たところ、リーフィル星系はバリバリにグラッカン

帝国の勢力圏内で、セキュリティレベル評価も高い。それはつまり、星系軍や帝国航宙軍の警備がしっかりとしており、宙賊の被害が少なく、他国からの侵略や宇宙怪獣などの脅威も少ないということだ。
それはつまり、俺達のような傭兵の活躍の場が少ない星系ということでもある。傭兵としてはあまり旨味のない星系だな。

「そうなると良いわねぇ……」
「えっ、なにそれは。何か心当たりがあるのか？」
「うーん……まぁ、多分大丈夫だと思うけどね」

エルマが言葉を濁す。割と直截に物を言うエルマにしては珍しい態度……いや、貴族関係や家族関係の話題に関しては言葉を濁すことが多かったからそうでもないか。ということはつまり、そっち関係で何か面倒事があるのだろう。

「またシスコンお義兄さんみたいな面倒事じゃないだろうな？」
「いや、そういうわけじゃないんだけど……まぁ、現地で見てもらったほうが早いわよ」
「いや、今言えよ……」
「言葉では説明しづらいの」

そう言ってエルマは苦笑いを浮かべる。なんだかこれはまた面倒事が起こりそうな気配じゃな？
いつもどおりと言えばいつも通りなんだけど、もう少し平穏無事な生活を送りたいもんだ。

そう思いながら俺は嘆息し、休憩スペースのソファに背中を預けて天井を見上げるのであった。

#２２６　次なる目標へ（後書き）

明日１２／１０は最強宇宙船四巻の発売日！
今後五巻、六巻と出していくために是非買ってね！｜（：３」∠）｜

←カドカワブックス書籍ページＵＲＬ←
ｈｔｔｐｓ：／／ｋａｄｏｋａｗａｂｏｏｋｓ．ｊｐ／ｐｒｏｄｕｃｔ／ｍｅｚａｍｅｔａｒａｓａｉｋｙｏｓｏｕｂｉｔｏｕｔｙｕｓｅｎ／

#227　リーフィル星系へ（前書き）

新章プロローグ！―（∴3」∠）―

#227　リーフィル星系へ

何かが頬を突く感触で目が覚めた。
薄目越しに見える天井は見慣れたもので、照明は薄暗く、目に優しい。
頬を突く指から逃れようと首を動かすが、その程度で頬を突く指から逃れられるわけもない。俺を攻撃する魔の手は正確に俺の頬を突き続ける。
こうなっては仕方あるまい。観念して目を開き、下手人に顔を向ける。

「おはよ」
「おはよう」

下手人はエルマであった。何が楽しいのか、にまにまとチェシャ猫のような笑顔を浮かべて俺の顔を眺めている。

「なんだよ」
「ヒロも寝顔は無邪気で可愛いなって思ってただけ」
「お前ね……」

そりゃ俺は決して厳を思わせるような魁偉なる顔ではなかろうが、可愛いと言われる程童顔でもないはずである。ああいや、欧米人から見ると東洋人は若く見えるとかいう話もあったか。もしかしたらエルマの目には俺は年齢よりも幼く見えるのかもしれない。
「まぁ、エルマお姉ちゃんに比べれば俺はガキかもしれないけどね」

皮肉を込めてそう言いながらベッドから身を起こし、あくびを噛み殺す。どう見ても二十代前半、下手するとティーンエイジャーにすら見えるエルマであるが、その尖った耳が示す通り彼女はエルフである。見た目に反して彼女は俺よりも二回りは年上なのだ。正確な年齢は知らんけど。

そんな彼女からすれば三十路にも届いていない俺などまだまだ幼く見えるのだろう。

「……」

「あん？」

何故か押し黙ったエルマを訝しんで視線を向けると、なんだか驚いた表情で固まっていた。いや、本当になんだよ？　そんな硬直するような要素どっかにあった？

「な、なんでもない。うん、なんでもない。早く起きなさいね」

急に顔を赤くしたエルマがプイッと顔を背けながらそう言ってそそくさと部屋から出ていく。突然のことに俺はただその後ろ姿を見送ることしか出来ない。

「……なんやねん」

マジで心の底からなんやねん。

☆★☆

「兄さん、エルマんと喧嘩でもしたん？」

赤い髪をした少女――に見える女性がテーブルの向かいから俺に

そう問いかけてくる。実際には彼女は少女でもなんでもなく、俺と同い年の立派な女性だ。

「いや別にしてないんだけど……」

起床してシャワーを浴び、休憩スペースの食堂で朝食を摂る。いつも通りのルーチンをこなしているのだが、何故かエルマに避けられていた。俺を見るなりサッと姿を隠すと言うか、部屋から去ってしまうのだ。

「今日はエルマさんがお兄さんを起こしに行きましたよね？　そこで何かあったとか？」

赤い髪の少女――に見える女性と同じ顔つきをした青い髪の女性が俺にそう問いかけてくる。彼女は赤い髪の女性の双子の妹だ。二人とも人間ではなくドワーフと呼ばれる種族で、幼く見えるのは種族的な特徴のようなものだ。こう見えて膂力は成人男性よりずっと強いので、子供だと思って不埒な真似に及ぼうとすれば見た目に反するパワーでとても痛い目に遭わされることであろう。

「いや、少なくとも怒らせるようなことは何もしてないし言ってないと思うんだけど……頬を突いて起こしてきた上に寝顔が可愛いなんて言うもんだから、エルマお姉ちゃんにしてみれば俺なんてガキなのかもねとは言ったけどさ」

「うーん……？」

「確かに怒るほどのことでは無さそうですね？」

年齢のことに言及しているので怒らせない要素が皆無とは言えないだろうが、そもそもエルマは年齢について言及されたところで怒るような性格じゃないしな。目の前の双子の姉妹は俺ほどにはエル

マと付き合いが長いわけではないが、それくらいのことを察せるくらいの付き合いにはなっている。

「そいやエルマんって末の妹なんやっけ？」
「ああ、そうだな」

エルマの家族構成は両親に兄、姉という感じで、エルマ自身は末っ子である。
そんな双子の姉――ティーナの言葉を聞き、双子の妹――ウィスカがポンと手を叩いた。

「もしかしたらお兄さんに『エルマお姉ちゃん』なんて呼ばれてびっくりしたんじゃないですか？」
「えぇ……そんなことある？」

少なくとも俺には理解し難い話だ。所謂ギャップ萌え的な？　俺に？　エルマが？　それは無くね？

「まぁそのうち元に戻るやろ。それよりそろそろ着くんよね？」
「ああ、もうそろそろの筈だな」

俺達が今向かっている先、エルフの母星であるリーフィル星系はもうすぐそこだった。

☆★☆

「おはよう、二人とも」
「おはようございます！　ヒロ様！」
「おはようございます、ご主人様」

我が母艦、ブラックロータスのコックピットに赴くとそこには二人の女性の姿があり、それぞれに俺に声をかけてきた。
俺のことをヒロ様、と呼んだ明るい茶色の髪の毛の女の子の名前はミミ。
俺が最初に立ち寄ったコロニーで酷い目に遭いそうになっていたところを助け、色々あって俺の船のクルーになってもらった女の子だ。最初はズブの素人だったが、メキメキとオペレーターとしての能力を身に着けて、今ではオペレーター業務だけでなく戦利品の売買や、母艦であるブラックロータスに積む交易品の手配と管理までこなすようになった。もはや立派なクルーの一員だ。
実は現皇帝陛下の大姪――つまり現皇帝陛下の妹の孫にあたる存在で、ギリギリ傍系皇族と名乗ることができる身分なのだが、彼女は顔も知らない祖母が皇帝陛下の妹様でしたと言われてもピンと来なかったらしく、結局『ターメーンプライムの平民の娘』としての立場を選んだ。そして今に至るわけだ。
そして俺のことをご主人様、と呼んだ濡れ羽色の長髪を揺らす美女の名はメイ。一見人間にしか見えないが、メイドロイド――所謂メイドロボというやつである。
金を惜しまずに高性能なパーツを用いてカスタマイズされており、メイドロイドとしては破格の性能を誇っている。メイドとしての働きは勿論のこと、操艦、戦闘、なんでもござれの『ぼくのかんがえたさいきょうのメイドさん』だ。俺にとっては剣の師匠でもある。痛くなければ覚えませぬ、というのが信条の厳しい師匠だけどな！

「間もなくリーフィル星系に到着します。到着予定時間は二十二分後です」
「了解。リーフィル星系に着いたらクリシュナを出撃させて即応体制でリーフィルプライムコロニーに向かおう」
「承知致しました」

俺の言葉に疑問を差し挟むこともなくメイが頷き、俺の指示を了承する。一方、ミミは首を傾げていた。

「何かあってもブラックロータスから緊急発進すれば良いんじゃ無いですか？」

「それでも良いんだけどな。道中でトラブルらしいトラブルが無かっただろ……？」

「あぁ……はい」

ミミの瞳からスッと光が失われ、諦めたような気配が漏れ出す。恐らく俺も同じような目をしていることであろう。

「今までの事例からパターンを類推しますと、何かしらのトラブルが起きる可能性が非常に高そうですね。それに柔軟に対応するためのフォーメーションを予め組んでおく。なるほど、合理的です」

メイは一人で納得している。というか、機械知性であるメイからもパターン類推されるとかよっぽどだな？　それはつまり異常値なのでは？

「とにかくそういうことだから。メイには悪いけどここはメイに任せて、ミミはクリシュナに乗る準備を進めておいてくれ」

「わかりました」

「はい、こちらはお任せ下さい」

頷く二人に俺もまた頷き返し、ミミと一緒にブラックロータスのコックピットを後にした。

☆★☆

「というわけでエルマの様子が変なんだよ」
「うーん？　どうしたんでしょうね？」

などと話しながらクリシュナのコックピットに向かうと、そこには既にエルマが待機していた。小型情報端末でメッセージを送っておいたので、それを見て速やかにクリシュナのコックピットに向かったのだろう。ブラックロータスのコックピットは船の中心部に近い奥まった場所にあるので、クリシュナの置いてあるハンガーからは距離的に遠いのだ。

「システムのチェックは終了。今は機体に診断プログラムを走らせてるわ」
「サンキュ。元に戻ったみたいで何よりだ」
「なんでもないから忘れなさい」

どうやらエルマとしては朝のあの奇妙な行動についてあまり突っ込んでほしくないらしい。まぁ、そうだというならスルーしてやるのが武士の情けというやつだろう。俺は別に武士でもなんでも無いけど。

「まぁ、機体は完璧だな。新品同様だ」

機体の簡易診断プログラムから返ってきた結果を見て呟く。そうすると、コックピットのメインスクリーンにティーナとウィスカの姿が映し出された。

『そらそうや。うちらがしっかり見とるんやで？』

スクリーン越しにティーナがそう言って薄い胸を反らす。ティーナとウィスカのドワーフ姉妹は揃って優秀なシップエンジニアだ。

二人はクリシュナとブラックロータスの正式なクルーではなく、ブラックロータスの販売元であるスペース・ドウェルグ社から派遣されてきている立場なんだが……最近はうちの船の生活にかなり馴染んで来てるんだよな。そろそろスペース・ドウェルグ社を退職してうちのクルーになってくれるんじゃないだろうか？　などと俺は思っていたりする。

「二人の腕前には脱帽だ。ところで、心の準備は大丈夫か？」
『『心の準備？』』
「暫くリーフィル星系に腰を据えると思うから、また宙賊艦の面倒を見てもらうことになるぞ」

俺の言葉を聞いて二人は互いに顔を見合わせ、一つ頷いてどこからかレンチとスパナを取り出した。

『ほどほどで頼むで？』
『ほどほどでお願いしますね？』
「アッハイ」

素振りをしながら行われる説得に俺は屈した。まぁ屈したと言っても抑える気は無いんだけど。正式ではないといってもうちのクルーとして働く以上は是非力を振り絞っていただきたい。そして皆でカネを稼いで幸せになろうじゃないか。

#227　リーフィル星系へ（後書き）

明日１２／１０に最強宇宙船四巻が発売しました！
今後五巻、六巻と出していくために是非買ってね！｜（：３」∠）｜

←カドカワブックス書籍ページＵＲＬ←
ｈｔｔｐｓ：／／ｋａｄｏｋａｗａｂｏｏｋｓ．ｊｐ／ｐｒｏｄｕｃｔ／ｍｅｚａｍｅｔａｒａｓａｉｋｙｏｓｏｕｂｉｔｏｕｔｙｕｓｅｎ／

#228　いつものパターン（前書き）

僅かに遅れた……！

遅れたのとは特に関係はないですがサイバーパンク2077はじめました。特に関係はないですが―（：3」∠）―（強弁

#228　いつものパターン

目に悪い極彩色のハイパースペースを抜け、ブラックロータスが通常空間に帰還する。星々が煌めく星の海の光景にどこか安心感のようなものを感じるようになったのはいつの頃からだろうか。俺も順調にこの世界に順応してきているようだ。

「よし、行くぞ」
「ハンガーハッチ開放、いつでもどうぞ」
「発進！」

俺達の乗るクリシュナがチャージ済みの電磁カタパルトによって加速されながらブラックロータスのハンガーから宇宙空間へと射出される。星の海に飛び出すこの瞬間の解放感とクリシュナを完全に掌握しているという万能感は何物にも代えがたい。

「目標は打ち合わせ通りにリーフィルプライムコロニーだ」
『了解、進路をリーフィルプライムコロニーに向けます』
「超光速ドライブの同期を申請」
『同期を承認。超光速ドライブ、チャージ開始』
「レーダーレンジは最大で。何か怪しい反応を見つけたらすぐ報告してくれ」
『「アイアイサー」』

ミミとメイが同時に返事をする。エルマはすっかり落ち着いた様子でサブシステム周りのチェックをしているようだ。俺はというと、現状ではやることがない。航行、通信、メイン・サブシステムの掌握をそれぞれクルーが行っているからだ。俺の出番は実際にトラブ

ルが起きた場合に指揮を取り、船を操ってトラブルに対処するその時である。

『カウントダウン。5、4、3、2、1……超光速ドライブ起動』

ズドォン！　と轟音が鳴り響き、ブラックロータスとクリシュナは星々の光を置き去りにして虚空を駆け出す。

「何事も無ければ良いんだけどな」

「そうですね……でも――」

「私達の悪運は筋金入りだからね。私達ほどトラブルに見舞われるのは珍しいと思うわよ、本当に」

「あはは……あっ」

苦笑いを漏らしたミミが何かに気づいたようだ。コンソールを操作し、ミミが見ている画面を共有する。どうやら超光速ドライブ中に使用する亜空間レーダーに他船の反応を捉えて……おお、もう。

「犯罪タグ付きときたかぁ……」

「これって今しがた星系軍か何かとやりあってきた船ってことですよね？」

「そうなるわね」

ミミとエルマの会話を聞きながら俺は素早くコンソールを操作してブラックロータスとの超光速ドライブ同期を解除し、操縦桿を操作して犯罪タグ付きの船へと航路を修正する。

「ブラックロータスも後から追いついてきてくれ」

『承知いたしました。ご武運を』

超光速ドライブ中は舵が大変効きにくくなるのだが、それでも小型戦闘艦であるクリシュナならブラックロータースよりもずっと小回りが利く。超光速ドライブ中に船を追跡するならクリシュナ単独の方が圧倒的に有利なのだ。

「相手の動きは鈍いな。中型艦か、もしかしたら大型艦か」
「後ろに着けて。インターディクタースタンバイ」
「他船にインターディクトするのは初めてですね」

インターディクトというのは超光速ドライブ状態にある他船を強制的に停止させる行為だ。詳しい仕組みは俺にもよくわからんが、インターディクターという重力制御技術を使った妨害装置を使って対象の船のケツを捉え続けることによってインターディクトは成立する。

つまり、これは超光速下で行われるドッグファイトのようなものだ。

「ははは、どこへ行こうと言うのかね？」

当然、インターディクトとかけられた側はインターディクトされまいと逃れようとする。

なんとかこちらの照準から逃れようと上下左右に舵を切りながら加減速して逃れようとするわけだが、当然ながらそれを逃す俺ではない。ついでに言えば、減速すると一気にインターディクトの成立が早まるので、迂闊にやると寿命を縮めることになる。

「これは成立するわね」
「犯罪タグがついている以上は問答無用だ。すぐに戦闘に入るぞ」
「「アイアイサー」」

ミミとエルマが返事をして間もなくインターディクトが成立し、轟音と共にクリシュナと犯罪艦が通常空間へと引き戻される。この時、インターディクトを仕掛けられた側はちょっと大変なことになる。

「ああなると悲惨なんだよなぁ」

見るからに宙賊艦といった感じの大型艦が激しい多軸回転運動をしている様を見ながら、ウェポンシステムを立ち上げる。

インターディクトによって強制的に超光速航行を中断させられた対象艦は、通常空間に引き戻された瞬間激しい多軸回転運動をする羽目になる。超光速航行を中断させられた段階で得ていた運動エネルギーが作用してああなるようなのだが、詳しい理論は知らない。

当然、その間は敵に撃たれ放題になるので隙だらけだ。なので、逃げようのない場合や逃げる気のない場合はむしろ自分から速度を落とし、インターディクトを受け容れたほうが隙が少なくなるのだ。

こちらの世界に来てから今までインターディクトをかけられる一方であった俺は常に速度を落としてインターディクトを受け入れるようにしていた。その理由がこれである。

「今のうちにシールドを撃ち抜くぞ」

「それが良いわね」

犯罪タグの付いた船にかける慈悲はない。未だに絶賛多軸回転運動中の大型宙賊艦に四門の重レーザーをバシバシと撃ち込んでいく。あの様子だと慣性制御システムに守られているコックピットはともかく、それ以外の区画はしっちゃかめっちゃかになっているだろう。

「敵シールドダウン」

「次はスラスターだ」

シールドを剥ぎ取ったらまずは足を潰す。そうすれば大型艦はまともに動くこともできなくなる。後は死角から防御タレットを潰していけば丸裸だ。

『やめっ、やめろォ！　こっちにゃ人質が居るんだぞ！？』

「それがどうしたよ？　人質が何人死んでもお前らに掛けられた賞金が減るわけじゃないだろうが」

そもそも、本当に人質が居るかどうかもわからないし、この状況では確実に助ける手立てもない。

人徳溢れる善人だろうが、純粋無垢な子供だろうが、あるいは爵位を持つ帝国貴族だろうが、宙賊艦に乗せられてしまった時点で死んだも同然のものとして扱われるのだ。

実際のところ、航宙法においても宙賊艦の撃破に伴って宙賊艦に乗っていた無辜の命が散ったとしても、撃墜者の罪は問われない。そうでなければ人間の盾を使う宙賊を駆逐することが不可能になってしまうからだ。

「そんな脅し文句で手を緩めるのは甘ちゃんのルーキーだけだっつうに」

「いちいち気にしてらんないわよね」

「……」

エルマは俺と同じく割り切っているようだが、ミミは言葉もなく息を呑んでいるようだった。戦闘中なのでミミの顔を見る事はできないが、もしかしたら顔を青くしているのかもしれない。まぁ、こればかりは慣れるまでは時間がかかるだろうな……というか、よくよく考えると俺も随分と気軽に人質を無視できるもんだな？　もしかしたら俺って他者の死に鈍感なのだろうか。

「足と手は潰したけど、どうするの？」

考え事をしながら作業的に全てのスラスターとタレット、ミサイルランチャーなどの武装を潰したところでエルマが声をかけてきた。まぁ、考えても詮無いことではあるか。そのお陰でこの世界と傭兵生活に順応できているのだから、深く考えないことにしよう。

「さてな……犯罪タグをつけた星系軍やら帝国航宙軍やらが駆けつけてくればそっちに制圧を任せるところだけど――」

と、言ったところで轟音が鳴り響き、黒い巨影が宙域に現れた。見慣れたその艦影は間違いなくブラックロータスのものだ。

「先にブラックロータスが来たなら俺達で制圧するか。たまには白兵戦もやらなきゃ腕が錆びつくしな」

「危ないわよ？」

「相手が宙賊ならそうそう遅れは取らないさ。戦闘ボットもいるし。あと、ミミの白兵戦オペレーションの実践訓練だな」

俺に視線を向けられたミミがその顔に緊張の色を浮かべる。うん、シミュレーションは今までに何度もしてるだろうけど、やっぱり実践の機会がないと本当の意味での修練は積めないからな。ここは気合を入れてもらうとしよう。

☆★☆

「いやぁ、マズったよなぁ」

クリシュナは宙賊艦に接舷して俺が突入、ブラックロータスから

はドロップポッドで接舷して戦闘ボット達が突入、という段取りになったのだが、パワーアーマーをブラックロータスに積んだままであることに後から気づいたのだ。
なので、今回の俺は生身で白兵戦をすることになる。まぁ、生身と言っても携行型のシールド発生装置は持っていくし、短時間――凡そ三時間ほどであれば宇宙空間に放り出されても大丈夫なようになっている与圧機能のあるコンバットスーツを装備していくんだけども。

『本当に大丈夫なんですか？　無理する必要はないと思うんですけど』
「まぁ、大丈夫だろう。いざとなればどっか隅っこで縮こまっておいて、制圧を戦闘ボットに任せても良いし」

装備をチェックしながら心配するミミに返事をする。今回持っていくのは大小一対の剣と、愛用のレーザーガン。予備のエネルギーパックにショックグレネードを三つとプラズマグレネードを二つ。それにカメレオンステルスマントだ。
レーザーライフルも持っていこうかどうか悩んだが、敵艦に乗り込んでの白兵戦では長物は取り回しの点で不利なことがある。基本的に艦内ってのは狭いものだからな。レーザーガンのほうが便利なのだ。

『接舷完了。ブリーチング中』
『ドロップポッドも接舷完了です。いつでも突入できます』
「戦闘ボットは先に突入させてくれ。派手にやってる間に俺はコックピットを制圧する」
『アイアイサー。ご主人様、ご武運を』

話している間にブリーチング――接舷した敵艦のハッチや装甲を

ぶち抜いて侵入口を作る作業――が完了する。

『ブリーチング完了。気をつけて』

「あいよ。突入する」

クリシュナ側のハッチを開き、ブリーチング済みの宙賊艦の外部ハッチも開いて宙賊艦の内部へと侵入する。どうやらここは船倉の外部ハッチであるようだ。先に暴れている戦闘ボット達への対処に追われているのか、熱烈な歓迎は無い。

「こちらスネーク、宙賊艦への潜入に成功した」

『そこはマウスじゃないの？』

「こっちではマウスなのか……」

この世界では蛇じゃなく鼠が潜入するのが定番らしい。

「ここは船倉みたいだ。船内のマップは取得出来ないか？」

『ええっと……左側の壁にコンソールがあるみたいです。そちらにヒロ様の通信端末を接続して下さい』

「了解」

ミミの誘導に従ってコンソールを探し出し、小型通信端末からコードを繋いで接続する。この小型情報端末を介してミミが宙賊艦の情報をクラッキングするわけだ。

『ええと……情報取得できました。ヒロ様のヘルメットに情報を投影します』

すぐさま俺の装着している気密型コンバットヘルメットのＨＵＤ上に船の３Ｄマップが投影される。大型艦なだけあって結構デカい

な。

「コックピットへのルートを検索して表示してくれ。制圧を開始する」

『あ、アイアイサー』

「ミミ、落ち着け。三度深呼吸して、集中だ」

通信越しにミミが三度深呼吸するのを聞きながら船倉の出口へと向かう。何を積んでいるのかも気になるが、まずは船倉から出て宙賊どもを制圧するのが先だ。

「船倉を出るぞ」

『はい、サポートは任せて下さい』

『ヒロ、気をつけて』

二人の言葉を聞きながらホルスターからレーザーガンを引き抜き、セーフティを解除する。

#229　Hack　and　Slash（前書き）

書き上がりは間に合ったんですよ。
ただ、書き上がったのが１７：５９だっただけで―（：３」∠）―
（いいわけ

#229　Hack　and　Slash

船内の警備は手薄だった。いや、単に殆どの戦力が先行して突入したこちら側の戦闘ボットへの対処に追われているだけなのだろう。

『クソブリキ缶め！　ジョイスがやられた！』
『まだ息があるなら後ろに引っ張っていけ！　リロイ！　ショックグレネードだ！』
『任せ――ぎぃあああぁぁっ！？』
『畜生が！　ブリキ缶にファ〇クされるなんて御免だぞ！』

船倉のコンソールでミミが先程仕込んだ情報収集ツール――或いはマルウェアとかコンピューターウィルスと呼ばれるプログラムが宙賊側の通信内容を拾って俺の耳に届けてくれる。

「いつの間にかミミがスーパーハッカーになっていたとは……やるな、ミミ」
『なってません、なってませんから。これはメイさんが用意してくれたクラッキングツールを使ってるだけですからね？』
『まぁ、宙賊の船くらいなら市販されてるクラッキングツールでもどうにかなることは多いわよね。基本的に宙賊艦はソフトウェアのアップデートもなおざりというか、正規の方法ではできないわけだし』
「なるほど」

確かに宙賊艦というのは宙賊が撃破し、奪った船の継ぎ接ぎだったり、レストア品だったりする。当然ながら当局の追跡を逃れるためにセキュリティ関係のソフトウェアアップデートなども利用する

ことができなくなるので、こういったソフトウェア周りのセキュリティは脆弱になっていることが多いのだ。稀にこういった技術に長けた宙賊が軍用艦並みのセキュリティを構築していることもあるらしいが、そんなのは本当に稀なケースである。

「まぁ、何にせよとても助かってるよ」

『お役に立てて嬉しいです。がんばります――ヒロ様、この先、T字路を曲がって左手の扉の先です』

「コックピットか？」

『いえ、違います。捕虜の収容室のようです。監視カメラに捕虜の人達が……酷く怪我をしている人もいるみたいです』

若干緊張を孕んだ声音で通信越しにミミがそう言う。

怪我人、怪我人か……一応救急ナノマシンユニットは持ってきているが、こいつは三つしか無い。これは負傷した時の生命線となるものなので、あまり使いたくはないんだが。

「……はぁ。監視カメラは上手く誤魔化してくれよ？」

『はい、任せて下さい。扉の横にパス入力用のキーパッドがあって、その下にメンテナンス用のソケットがあります』

「了解」

素早く扉に近寄り、小型情報端末からコードを伸ばしてソケットにジャックインする。すると、程なくして扉が開いた。俺は素早く捕虜部屋の中へと滑り込み、扉を閉める。これで閉じ込められたら間抜けだけど、当然部屋のロック自体を解除してあるから大丈夫だ。

中に入ってから部屋の中を見回してみると、十人ほどの捕虜らしき人々がさほど広くない部屋の中に詰め込まれていた。全員に手枷と足枷が着けられており、その自由の大半を奪っているようだ。

「俺は今この船に襲撃を掛けている傭兵だ。つまり、あんた達を助けに来た側だ。一応な」

そう言いながらよくよく捕虜達を見てみると、その全てがエルフであった。皆一様にエルマと同じく耳が尖っており、美人揃いだ。なるほど、エルフには美形が多いというのはこの世界でもご多分に漏れずということらしい恐らく、彼女らが宙賊の『獲物』なのだろう。

彼ら――いや、女性の方が圧倒的に多いようだから彼女らと言ったほうが良いか。彼女らは突然現れた闖入者である俺に警戒の眼差しを向けてきている。

「この船の足と武器は潰した。俺の配下の戦闘ボット達が宙賊の掃討も進めている。間もなく帝国航宙軍なり星系軍なりが到着もするだろうし、あんた達はとりあえず助かったと思っていい」

「私達は……家に帰ることができるのですか？」

エルフの囚人達の中でも一際の美人さんが俺に問いかけてくる。俺は彼女の言葉に頷き、口を開いた。

「恐らくは。ただ、俺はあんたたちがどうやってこの船に囚われることになったのか知らないから、断言はできない。だが、少なくともリーフィルプライムコロニーまでは行けるはずだ。その後の処遇がどうなるかはお役人次第だろう。それよりも酷い怪我をしているやつが居るんだろう？　仲間が監視カメラで見たんだ。救急ナノマシンユニットがある。こいつを使えばとりあえず命の危機は脱するはずだ」

そう言って俺がガンタイプの救急ナノマシンユニットを見せると、彼女達は警戒度合いを強めたようだった。レーザーガンか何かと思

っているのかもしれない。
「大丈夫、これは薬だ。傷を塞いで出血を止めて、命を繋ぎ止めてくれる。怪我人に使うから道を空けてくれ」
彼女達は顔を見合わせ、少しだけヒソヒソと話をしてから道を開けてくれた。俺は奥に進み、倒れていた怪我人のそばにしゃがみ込む。
「酷いな。レーザー創に、殴られた痕もある。でも、これで楽になる筈だ」
左肩と右脇腹に半ば炭化したレーザー創を負っている男性に救急ナノマシンユニットを押し付け、引き金を引いて医療用ナノマシンを注入する。俺にはナノマシンの仕組みなんてよくわからないが、ゲーム的にはこれ一本で体力（ヘルス）の６０％が回復するアイテムだった。怪我の状態が良くなることはあっても悪くなることはあるまい。
「よし。この船は既に宇宙空間にあって、船内では戦闘が起こっている状態だ。すべてが終わるまでここに留まっていてくれ。この部屋に要救助者のタグを付けておくから、帝国航宙軍なり星系軍なりが来たらすぐに助けが来るはずだ」
「わかりました……貴方は？」
「俺はこのまま船のコックピットを制圧しに行く。帝国航宙軍や星系軍が来る前にカタをつけたいんでね」
帝国航宙軍や星系軍が来る前にカタをつけないと俺の取り分が減るからな。この船のメインの獲物である彼女達――エルフの非合法奴隷に値をつけるわけにはいかないが、船倉にはたっぷりと物資が積み込まれていた。宙賊艦が積んでいる荷なんてのはフードカート

リッジか質の良くない酒やドラッグと相場が決まっているが、それも大型艦の船倉に目一杯積み込まれているとなるとなかなかの売値となる。
それに、スラスターと武装以外に目立った損傷のない大型艦というのも良い金になるものだ。リーフィル星系でどの程度需要があるのかは未知数だが、どれだけ買い叩かれても１００万エネルを下ることはあるまい。

「それじゃあな。ここで大人しくしてるんだぞ」
「はい……あの、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」
彼女達の代表であるらしき女性が問いかけてきたので、俺は振り返って名乗ることにした。
「俺はキャプテン・ヒロ。戦闘艦クリシュナのオーナーで、プラチナランクの傭兵だ」

☆★☆

捕虜部屋を後にしてコックピットへと進むが、宙賊どもの通信はだいぶ静かになってきた。恐らくは通信を発することができる連中の数がそれだけ減ったということだろう。今日もうちの戦闘ボット達は元気に働いているようだ。
『ヒロ様、間もなくコックピットです』
『ヒロ、星系軍のお出ましよ』
「了解。すぐに片付ける」
何かよくわからない紙屑や割れたガラスの破片のようなものが散らかる小汚い通路を駆けながら応答する。宙賊艦の通路は狭いし薄

暗いし汚い。よくもまぁこんな環境で何日も過ごせるものだ。せめて掃除くらいしろよと思う。

『扉にロックはかかっていません』

「OK、行くぞ」

大きく息を吸い込み、扉を開けてコックピットへと飛び込む。

「――ッ！」

「んなっ！？　て――め――」

息を止め、スローモーションになる世界の中でレーザーガンの照準を素早く宙賊の頭部にポイントし、発砲する。まず最初に俺に気づいた宙賊の額に致死出力のレーザーが着弾し、小爆発と共に宙賊が後ろへと吹っ飛んだ。宙賊はあと二人。

レーザーガンの発砲音を不思議に思ったのか、キャプテンシートに座っていた宙賊がこちらに振り返ろうとこちらに横っ面を見せる。俺はコックピット内へと突入しながらその横っ面に照準し、発砲。横っ面が弾け飛び、二人目の宙賊はキャプテンシートから投げ出されて床に転がる。

オペレーターシートに座っていた三人目は慌てて立ち上がろうとしたが、その頃にはすでに俺は目の前だ。右手にレーザーガンを保持したまま左手で腰の剣を打ち抜きざまに振るい、三人面の宙賊の右手を斬り飛ばし、返す刀で左肋から心臓に向けて剣を突き刺す。

これがただの金属製の刀剣であれば骨や筋肉で止められるのだろうが、残念ながらこの剣はパワーアーマーの装甲すら切り裂く強化単分子製の刃だ。骨も筋肉もいとも容易く貫き、剣は深々と三人目の宙賊の身体に突き刺さり、心臓を食い破った。ついでとばかりに背骨を断ち切るように刃を背中側へと抜けさせて確実にとどめを刺す。

「――ふぅ」

一呼吸の間に三人の宙賊を倒し、息を吐く。一人を斬り捨てたので、コックピット内は血の海だ。これは後でティーナとウィスカに文句を言われそうだな。

「こちらヒロ、コックピットの制圧完了。船内のシステムを掌握する。ミミ、手伝ってくれ」

『はい、ヒロ様』

血振りをして剣に付着した宙賊の血を払い、剣を鞘に収めてから小型情報端末からコードを伸ばし、コックピットのコンソールに備え付けられているソケットへとジャックインする。そしてすぐに外部通信を立ち上げ、広域通信で到着した星系軍へと呼びかけた。

「こちら傭兵ギルド所属のプラチナランク傭兵、キャプテン・ヒロだ。大型宙賊艦のコックピットを制圧した。現在、俺の指揮下にある戦闘ボットが船内の残存戦力を掃討中。また、船内に民間人が囚われているのを確認。怪我人も居る。船内のマップを共有するので、民間人の救護と護送を要請する」

とりあえずはこれで一段落だな。船内の掃討が終わったら息のある宙賊の引き渡しと、囚われていたエルフ達の引き渡しか。それが終わったらこの船を応急修理して、ブラックロータスでリーフィルプライムまで曳航して、積荷の換金と諸々の手続きと……やれやれ、自業自得とは言え初っ端から面倒事だらけだな。

#２３０　リーフィルプライムコロニーへ（前書き）

サイバーパンク２０７７楽しい……気がついたら早朝になっている……｜（：３」∠）｜（１４：００頃に起きた

#230　リーフィルプライムコロニーへ

星系軍に宙賊どもを引き渡した俺達はそのまま星系軍に拘束され、苛烈な尋問を受けることになった――ということもなく。

「この度は我々の不手際の尻拭いをして貰う形となり、本当に申し訳なく思うと同時に、大変感謝している」

このリーフィル星系を守る星系軍のトップに頭を下げられていた。

戦闘の場に駆けつけてきたリーフィル星系軍にまだ息のあった宙賊どもを引き渡し、囚われていたエルフ達を保護してもらった後、俺達は宙賊の大型艦をブラックロータースで牽引してリーフィルプライムコロニーへと到着した。

到着するなりリーフィルプライムコロニーにある星系軍本部から迎えの車が到着し、今回の件についてリーフィル星系軍のトップ――ジェム・ダー将軍閣下直々に挨拶をさせて頂きたいと言われ、今に至るというわけだ。

ちなみにジェム・ダー将軍閣下の外見はきれいに整えられた口髭が似合うダンディなイケオジである。この人何歳なんだろう。

「さっきから何度も言っているように、偶然だからあまり気にしないで欲しい。こちらとしても下心があっての行動だったんだ」

別に人質を助けようという高潔な意志の下に行動したわけではなく、単に宙賊の大型艦をできるだけ無傷で鹵獲したかったからわざわざ白兵戦なんてことをしたわけなので、こうやって感謝されてしまうと非常に居心地が悪い。本当にただ気が向いたからこうしただ

けで、気分次第ではいるかどうかもわからない囚われのエルフごとあの船を爆発四散させていたのかもしれないのだから。

「貴殿がそう言うならそういうことにしておこう。ただ、我々が深く感謝しているということだけは知っていてもらいたい。貴殿のお陰で多くの無辜の民の命が救われたのだから」

「わかった、わかったから」

本当に感謝されているようで、物凄い圧力である。感謝の圧が凄い。こっちは本当に気まぐれだっただけに、向けられる感謝の念が強すぎて気後れしてしまう。本当に大型艦の鹵獲と白兵戦の実戦訓練、そしてミミの白兵戦オペレーションの訓練のためにやっただけだからな。

「賞金の他にも報奨金と感謝状にも期待してくれていい。事務手続きで数日かかるだろうから、その間は是非当コロニーで寛いでいてくれ」

「ああ、どのみちこのコロニーに暫く滞在するつもりだったから都合が良い」

「このコロニーに？　差し支えなければ、リーフィル星系を訪れた理由を聞いても？」

「物見遊山だよ。クルーにエルフがいてね。エルフの母星について少し話を聞く機会があって、それで珍しい食べ物や飲み物を楽しんだり、珍しい交易品が手に入ったりしないかと考えて足を伸ばしたんだ。幸い、うちのクルーは俺を含めて三人が上級市民権を持っているから降下の申請はできるしな」

「ほう、三人も……」

ジェム・ダー将軍閣下が感心したように自らの顎を撫でる。

グラッカン帝国の市民権回りの制度は俺から見ると中々に複雑怪

奇な内容なのだが、上級市民権に関しては凄くシンプルだ。上級市民権を持つ市民は所定の手続きを行えば、帝国が特別に制限を課していたりしない限り、どのようなコロニーにも惑星にも足を踏み入れることができるし、希望すればそこに住むことも可能である。また、居住ではなく訪問に限れば上級市民を持つ市民一人に付き二人まで同行者を伴うことができる……と、まぁこういった感じの内容だ。

つまり、現時点で俺とミミ、エルマの三人が上級市民を持っているので、メイとティーナ、ウィスカの三人も一緒に惑星に降り立つことができるというわけだな。いや、メイはメイドロイドだから備品扱いってことになるのか……？

「しかし、それは都合が良い。実は貴殿が助けた虜囚の中に、リーフィルⅣで有力な氏族の子女と子息が居てね」

「あー……なるほど？」

捕虜の収容室を訪れた際に、あの状況でも気丈な態度を崩さずに俺と会話をした美人さんと、レーザーで撃たれて死にかけていたイケメンを思い出す。もしかしたらあの二人だろうか？

「まぁ、そっちについては実際に話しが来てから考えるということで一つ」

「そうだな、それが良いだろう。ただ、私の見立てでは間違いなくそういうことになると思うので、そのつもりで居て欲しい」

「承知した」

☆★☆

「はー、やれやれ。肩が凝ったよ」

「はいはい、お疲れ様」

「お疲れさまです、ヒロ様」
「おつかれちゃーん」
「お疲れさまです、お兄さん」

ブラックロータスに戻り、休憩スペースの食堂に赴くと俺以外の全員が揃っていた。メイは無言で俺の背後に立ち、席に座った俺の肩を絶妙な手付きで揉み解してくれている。うーん、メイのサービスは実に至れり尽くせりだな。流石はメイだ。

「で、進捗の方はどうかね？」
「降下申請に関しては今も進めてるところよ。なんでこの手の手続きってこんなに入力項目が多いのかしら」
「お役所の仕事だから仕方ないね。ミミは？」
「ブラックロータスの積み荷と宙賊艦の積荷を捌いているところです。結構品数が多くて大変です」
「船倉にたっぷり荷を積んでたからな。ここであまり値のつかない品なら無理に売らないでブラックロータスで運ぶ方向で行くのも良いと思うぞ」
「わかりました」

今ではミミもすっかり頼れるオペレーターとなった。そろそろ取り分の見直しが必要かもしれない。

「ティーナとウィスカは？」
「うちらは例の船の改修計画を立ててて」
「調べてみたら意外と作りはしっかりしているので、内部清掃と修理、あとは装甲板の張り替えとスラスター、装備の入れ替えでなんとかなりそうです」
「なるほど。まぁその辺はプロに任せる。補修部品なんかの請求はいつも通りで」

「合点承知や」
「はい」

当然ながら、修理にも金がかかる。結局のところ、破壊された装置を治すためには相応の部材が必要となるわけで、その部材も作るにしたって材料費はかかるし、既製品を買うならやはりそれも金がかかる。特に今回は単艦鹵獲だったので、不足しているパーツや部材を他の船の残骸から取ることもできないので、改修をするにもそれなりの手間と費用がかかるのだ。無論、それが船の売却益を上回るようでは話にならないので、その辺りはティーナとウィスカも考えて修理するんだろうけど。

「で、細かいところは君達に放り投げているわけだが」
「手伝ってくれてもいいのよ？」

ニコリと笑みを浮かべながらエルマが圧をかけてくるが無視する。そういう入力作業って二人でやるとかえって効率悪くなるじゃん？

「将軍閣下の仰っていたことをお伝えしようか。まぁ、本題は大した内容じゃなかったんだけど」

と、そう前置きして助けた虜囚の中に目的地であるリーフィルⅣで力を持つ氏族の子女や子息が居たのだということを伝える。

「なるほどねー……」
「そう来ましたかー……」
「これはウィスカの勝ちやな」
「あはは……」

何を賭けたのだか知らないが、俺が将軍閣下に会いに行っている

間に今回はどんな風に厄介事が転がり込んでくるのかという内容の賭けをしていたらしい。うんうん、こんな些細なことでも賭けの対象に娯楽にしてしまうというのは実に傭兵らしくてイエスだね。きっとエルマが主導したに違いない。

「まぁ、いくら力ある氏族っていっても帝室に比べればなんてことないな」

「そりゃ比べる先が悪いやろなぁ」

俺の言葉を聞いたティーナがケラケラと笑う。

実際、力ある氏族云々と言っても所詮リーフィルⅣだけの話だ。もしかしたら帝国の爵位を持っていたりするのかもしれないが、それにしたって帝室に比べれば木っ端みたいなものだ。リーフィルⅣで有力な氏族ってのは日本の感覚で言えば町内会の顔役とかそういう次元の話だろう。

「あまり舐めてかからないほうが良いわよ。このリーフィル星系は帝国の版図の中にある一星系だけど、種族の母星っていうのは特殊なのよ。しかも母星に根を下ろしている氏族の長とか、その直系ってなるとね……宇宙を旅する私達にとってはリーフィル星系なんて無数にある星系の一つでしかなく、リーフィルⅣもそのちっぽけな星系内にあるちっぽけな居住可能惑星でしかないけど、宇宙(そら)に飛び出さない多くの人にとっては自分の住む惑星こそが世界のすべてなんだからね」

「ふむ」

「なるほど……」

「なるほどなぁ」

俺とミミ、ティーナがそれぞれにエルマの言葉を受けて考え込む。ウィスカも無言ながらエルマの言った言葉の意味を考えているよう

だった。

「とはいえ、こっちは助けた側なんだから、そんなに無体な扱われ方はしないと思うけどな。でも、気をつけることにしよう。異文化交流ってのは慎重にするべきだからな」

人間が降伏のつもりで白旗を掲げたら、それが異星人にとってはこれ以上無いほどの宣戦布告って意味で、それが原因で泥沼の殺し合いになる……なんて内容のアニメがあった気がするし。

「そういう意味ではエルマさんが頼りですね」
「私だって昔一回来たきりで、あんまり覚えてないんだけどね」
「独特の文化を築いているなら、来訪者向けのマナーガイドみたいなのがあるんじゃないか？　メイ、調べてみてくれ」
「承知致しました、お任せ下さい」

このような感じで手続きやら問い合わせ、資料の取り寄せなどでリーフィル星系滞在一日目は終了するのだった。

#231　二日目の朝（前書き）

筆が乗ってキリの良いところまで書いたらこんな時間に……いつもより少しボリュームあるからゆるして！ ―（∵3」∠）―

#231　二日目の朝

昨日はリーフィル星系に着くなり大変な目に遭った俺達であったが、滞在二日目の朝――リーフィルプライムコロニー基準時間で――は実に平穏な滑り出しであった。

「おふぁようございまふ……」
「うん、おはよう」

ミミと一緒に寝床を出て、一緒に顔を洗って軽く身支度を整えて、一緒にブラックロータスの食堂へと向かう。そこで食堂に居合わせたエルマと整備士姉妹、それにメイと朝の挨拶を交わし、食事を終えたらメイ以外の全員でブラックロータスのトレーニングルームに言って軽く身体を動かし、それが終わったら軽く汗を流して解散だ。

「で、今日は俺とミミとエルマがフリーと」
「はい。昨日のうちに積荷の売却処理は済ませておいたので」
「私も惑星降下申請は昨日出したからね。あとはお役所の処理待ちよ」
「ウチらは今日からが本番やから」
「今回は作業が楽ですけどね」

ティーナとウィスカは昨日のうちに発注しておいた部材や、レプリケーターで出力しておいた部材を使って鹵獲した大型宙賊艦の改修作業を行うようだ。メンテナンスボットだけでなく、武装を排除して汎用作業用途に換装した戦闘ボットまで投入して突貫で作業を行う予定らしい。

なんでも戦闘ボットの製造元であるイーグルダイナミクスで作ら

れているメンテナンスボット用のソフトウェアを入手して、それに手を加えたものを戦闘ボットのサブルーチンとして組み込み、戦闘ボットにメンテナンスボットモードを追加したとかなんとか。

「いざという時に戦闘ボットに不具合が出たら命取りになるから、マジでその辺は頼むぞ」

「大丈夫大丈夫。同じメーカー製のボット同士やから互換性の範囲内や」

「完全に独立したサブルーチンとして走らせてるから大丈夫ですよ」

二人がそう言うならそうなんだろうと納得する他無い。まぁ、戦闘ボットの管理に関してはメイも一枚噛んでいるので、もし問題があるならメイがダメ出しをしているだろう。二人だけでなくメイも大丈夫と判断しているならそれで良いか。

「兄さん達は今日はどないするん？」

「そうだな……まずは傭兵ギルドに顔を出して、それから星系軍の詰め所に顔を出して昨日の件の報酬金を貰うか、そうでなければ街をぶらぶらしてくるかな。他所であんまり見ない酒とか見かけたらお土産に買ってきてやろう」

「わぁ、良いんですか？　エルフの母星系だから、きっと美味しいお酒がいっぱいあるんだろうなと思っていたんですよ」

「うちらと方向性はちょっと違うけど、エルフも酒飲みやからなー」

「確かに」

「何よ？」

整備士姉妹の言葉に頷いてエルマに視線を向けると、至近距離から見上げるように睨めつけられた。ちょっと怒ったような声音だが、耳の角度が怒っていない角度だ。これはフリだな。

「メイはどうする？」
「私は船に残って雑務を片付けます」
「オーケー、じゃあブラックロータスは任せるぞ」
「はい、お任せ下さい」

そういうわけで、俺とミミ、それにエルマの三人で街に繰り出すことになるのだった。

☆★☆

各自用意をしたら集合して出発ということになっていたが、俺自身の用意などすぐに終わるものだ。部屋に戻ってレーザーガンと二本一対の剣を腰に差したらそれで終わりだからな。休憩室で少し待ち、一緒に現れたミミとエルマの二人と合流したら早速出発だ。

「エルフの母星系というだけあって、他のコロニーに比べるとやっぱりエルフが目立つな」
「そうですね。他の星系のコロニーに比べるとやっぱり多いみたいですね」

他の星系のコロニーだと、雑然とした人並みの中に一人か二人いるかいないかという感じなんだが、このコロニーだと明らかにエルフが多い。正確な比率はわからないが、恐らく道をゆく人々のうち一割以上はエルフであるように思える。

「しかしなんだ、妙に視線を感じるな」
「そりゃ目立つしね」
「ですよね」

そう言ってエルマとミミは俺に視線を向けてくる。

ふむ？　まぁミミもエルマも美人だし、そんな二人を引き連れて歩いている俺は相当に目立つということだろうか。

「なにか見当違いのことを考えてそうな顔ね。目立ってるのはあんた自身よ。腰に剣を差した傭兵なんて目立つに決まってるでしょ？」

「あと、ヒロ様の顔は御前試合の件で売れに売れてますから。あの御前試合は帝国全土に配信されていたんですよ？」

「ああ、なるほど……じゃあ、俺はいつの間にか有名人になってるのか」

「有名人、ねぇ……そんな生易しい表現じゃ足りないと思うけどね」

「傭兵としては今一番ホットな存在ですよ、ヒロ様は」

「えぇ……？」

そう言われても全くピンと来ないんだが。俺はちょっとリッチでバイオレンスなだけの小市民……リッチでバイオレンスな小市民って意味わかんねぇな。

「いつの間にか俺がレジェンドめいた存在になっているということはわかったよ」

「そうでもなければいきなり星系軍の将軍に下にも置かない扱いをされたりしないわよ……本当にあんたは変なところで抜けてるわね」

「ヒロ様らしいです」

「それは褒められてるのかなぁ？」

などと話をしつつ、注目を浴びながら移動すること十数分。俺達は特にトラブルもなく傭兵ギルドに辿り着いた。リーフィル星系の傭兵ギルドは特に何か特徴があるわけでもなく、代わり映えのしない感じだ。若干観葉植物の数が多く感じるくらいだろうか？　雰囲気そのものは他星系のコロニーで訪れた傭兵ギルドと大差ない。

「変わったところは特に無いな」
「そうね」
「カウンターに行きましょう」

ミミに促されてカウンターに向かう。俺達が向かうカウンターに控えていたのは若い女性で、俺達が向かうにつれて気の毒になるほど表情を引き攣らせていた。

「あー……やぁ、そんなに怯えられると申し訳ない気持ちでいっぱいになるんだが」
「あ、う、え……ご、ごめんなさ――ひぅっ！？」

彼女の背後からにゅっと伸びてきた手が彼女の肩を掴み、その感触に驚いたのか彼女は身体を硬直させる。目の端に涙を浮かべていてもう見ているだけで気の毒だ。

「ちょっと休憩してきて良いよ。ここは僕が受け持つから」
「は、はひ……」

カクカクと壊れかけのロボットみたいに頷いた若い受付嬢がカウンターから去ってゆき、彼女と入れ替わりで肩に置かれていた手の主――エルフの男性が俺達の前に立つ。

「ようこそ、リーフィルプライムへ。歓迎しますよ、キャプテン・ヒロ」
「そりゃどうも。なんか怖がらせちゃったみたいで申し訳ないな」
「いやいや、お気になさらず。彼女はまだ務め始めて日が浅い新人でして、まだちょっと肝が据わりきっていないんですよ。むしろ謝罪するのはこちらです。申し訳ない」

そう言ってエルフの男性は苦笑いを浮かべながら首を横に振り、それから軽く頭を下げた。

「それで、本日は？　何か依頼でも受けてくださるので？」
「いや、暫くリーフィルプライムに滞在するから、その挨拶だな。予め面通ししておいたほうがお互いに面倒が少なく済むだろ？」
「それはそうですね。こちらとしても貴方の人となりを多少なりとも知ることができるのは非常に助かります」
「へぇ？　どんな評価を頂いたのかね？」
「いま一番ホットなプラチナランカーは評判通り『善玉』っぽいなぁという感じですかね？」
「なるほどねぇ」

善玉、善玉ね。そんな評判を頂いているとはね。まぁ、俺の今までの実績を見るとそういう評価になるのかね？　あまりリスキーな仕事には手を出してこなかったからな。

「善玉、ねぇ……？」

エルマがそう言いながらジト目を向けてくる。ははは、やだなぁそんな目で見られると照れるじゃないか。ほら、ミミも微妙な顔をするんじゃない。俺は清廉潔白な良い傭兵だよ？

「仕事は完璧、戦闘艦乗りとして卓越した力を持ち、本人の腕っ節も最高クラス。宙賊をバンバン狩りまくっている上に帝国航宙軍との関係も良好。後ろ暗い仕事には興味を示さず、宙賊連中とつるんでいる痕跡も皆無とくれば私達傭兵ギルドにとってはこれ以上無い善玉ですよ。カタギに絡んで問題行動を起こしたりもしていないですしね」
「まぁ……そうね。そういう意味ではヒロは本当に傭兵らしくない

から。アウトロー感が無いのよね、ヒロは」
「俺は品行方正を信条としてるんだ」
良く言えば品行方正、悪く言えば長いものには巻かれろという方針である。
俺だってこの世界でそれなりに時を過ごしてきたのだから、一般的な傭兵というものがどういうもので、どのような考えで行動することが多いのかということは知っている。ただ、俺には他の傭兵がメインとしているスタイルが合わないのだ。
酒！　暴力！　セッ〇ス！　ヒャッハー！　みたいなのはちょっとなぁ。いや、三つ目は俺も嫌いじゃないけど幸いなことに間に合ってるしね？　それに、ロックでアナーキーな生き方を目指しているわけでもなし。上昇志向ってものが全く無いわけでもないけど、色々と巻き込まれているうちに昇りつめてしまったからなぁ。
「俺のことは別に良いだろ。それよりリーフィル星系での活動方針だ」
「はい」
「リーフィル星系には物見遊山で来たんだ。クルーから興味深い話を聞いてな、降下申請を出してリーフィルⅣに降りる予定だ。リーフィルⅣで旅行とバカンスを楽しむってわけだな」
「なるほど、リーフィルⅣは自然が豊かですからね。骨休めというわけですか」
「そんな感じだ」
実際には観光がてらコーラに相当する飲料が無いか探したいだけなんだけどな。
「そうなると、あまり傭兵としては活動しないということになりますか」

「降下申請が通るまでこのコロニーを見て回って、それでも時間が余るようなら小遣い稼ぎ程度に宙賊を狙いはするかもしれない。後はこの星系を離れる時にタイミングがあれば輸送や護衛の依頼を受けるかもってくらいだ」
「そうですか、それは残念。まぁ、既に大きいヤマを一つ片付けてもらっているので十分なんですけどね」
「大きいヤマ……？　ああ、あの船か。偶然だけどやんごとなきお方が乗ってたんだってな」

俺の言葉に彼は深く頷き、口を開く。

「はい。奴らはエルフを狙った奴隷売買を専門とした連中でしてね。前々から居場所を探ってて、ついにアジトを突き止めて襲撃をかけたんですが、戦闘のどさくさであの船には逃げられまして。それを上手くキャッチしてもらったわけです。貴方に助けられたやんごとなきお方が拐われた時の襲撃の被害も酷いものだったんですよ。族長達は血管が切れて死ぬんじゃないかってくらい激怒してましてね」
「なるほど……あー、生きたまま捕らえたやつが何人かいたっけなぁ」
「随分と大それたことをしたみたいね。今頃ガタガタ震えてるんじゃない？」
「因果応報ですね」

彼の話を聞いて珍しくミミもドライな反応をしている。ミミは捕虜が捕らえられていた部屋の画像も見てるしな。流石に同情する気も起きないんだろう。

「気になるようでしたらこちらのファイルをどうぞ。今回の事件のあらましが書かれている報告書の最新版です」
「良いのか？　内部情報の流出にあたるんじゃ？」

「メディアに流すのと殆ど同じ内容ですから問題ありませんよ。より詳細なだけでね」
「なるほど、後で目を通させてもらうよ。ところで、報酬とか褒賞金関係の連絡は来てるか？」
「調べてみます。うーん……まだですね。星系軍と帝国航宙軍、それに族長連合の擦り合せに時間がかかると思うから、恐らく早くても明日か……いや、明後日くらいになるかと」

エルフの男性職員がカウンターのホロディスプレイを操作して内容を確認し、首を横に振ってからそう言う。褒賞金を出すのにそんなに時間がかかるというのもなかなかにユニークな事態に思えるな。それに族長連合とかいう聞き慣れない言葉も気になる。

「どこの財布からどれだけ出すかって話し合いだから、多少時間がかかると思いますよ。星系軍の財布は薄いし、帝国航宙軍の財布の紐は堅い。おまけに族長連中はがめつい上に互いに仲が良いわけでもないですから」
「へぇ？　なんだか面倒くさそうな話だな」
「他の星系に比べると母星の統治機構の力が強いですからね、リーフィル星系は。どうか気長に待ってくださると。族長達はがめついですが、狭量ではありません。あの船を取り逃した星系軍と帝国航宙軍から可能な限り搾り取って褒賞金を上乗せしようとして時間がかかるんだと思いますよ。実際、族長達はキャプテン・ヒロに感謝してるようですから。宙賊艦に乗せられて連れ去られた時点で生存は絶望的です。わざわざ危険を冒して船を制圧なんて普通はしないですしね」
「気まぐれだったんだけどなぁ」
「気まぐれで最適解を掴み取るのも一種の才能でしょう。やっぱりプラチナランカーってのは何か『持ってる』んでしょうね」
「その話題はやめてくれ、俺達に効く」

そう言いながらエルマとミミの顔色を窺うと、予想通り二人とも苦笑いを浮かべていた。当然俺も同じような表情を浮かべていたに違いない。俺達が『何か持ってる』ことを一番よく理解しているのは、他ならぬ俺達自身なのだから。

#231　二日目の朝（後書き）

サイバーパンク2077ノーマッドでクリア。
次はコーポ女でいくぜぇ―（：3」∠）―

#232　リーフィルプライムコロニー（前書き）

30分遅れてないからセーフ！ ―（∴3」∠）―（あうと

#232　リーフィルプライムコロニー

傭兵ギルドを後にした俺達は星系軍の駐屯地を訪れることを取りやめ、そのままリーフィルプライムコロニーをブラブラと散歩することにした。ついでに何か良さげなものを見つけたら買い物でもしようという算段である。

「ふーむ……なんか他のコロニーとは違う感じがするよな」
「そうですね。街並みも違うんですけど、なんだか雰囲気が違うというか」

閑散としている、というのとはちょっと違う。なんだかゆっくり……いや、別に動作がゆっくりというわけでもない。他のコロニーにある忙しなさというものが足りないように思えるのだ。

「リーフィル星系のエルフは基本的にのんびりしてるからね。知っての通りエルフは寿命が長いから。人間ほどせかせかしてないのが多いのよ」
「なるほど？」
「確かにエルマもオフの時はひたすらのんべんだらりとしてるよな」

俺やミミの場合はなんだかんだと動いている事が多い。
俺は白兵戦武器の手入れやその他戦闘に役立ちそうなガジェットがないかデジタルカタログを見ていることが多いし、身体を動かしたりもしているし、暇をしているクルーがいれば一緒に何かしたりする。ミミならオペレーター業務に関する勉強をしていたり、色々と調べごとなんかをしていることが多い。しかしエルマの場合は大体飲んでるか寝てるかだ。身体を動かしていることもあるけど、大

体おとなしく時間を過ごしていることが多い。
「のんべんだらりとは失礼ね。私はオンとオフをちゃんと切り替えているだけよ。私から見ればずっと動き回っているあんたたちの方が生き急ぎ過ぎだと思うけどね」
そうかなぁ？　そうよ、などと話しつつ、リーフィルプライムコロニーの店を回っていく。
「なんか妙に高くないか？」
「確かに他のコロニーに比べると妙に物価が高い感じですね」
俺達が見ているのは所謂惑星由来の特産品、お土産物や他の星系からの輸入品というやつである。基本的にこの手のものは高いのが常であるのだが、それにしても高い。数多の星系に立ち寄ってきた俺の感覚からすると、五割増しから倍ほどの価格であるように思える。
そんな話をしていると店員のエルフ女性に声を掛けられた。
「ああ、他のコロニーから来る人は皆そう言うね。実のところ、リーフィルⅣ――私達はシータって呼んでるんだけど、シータには余剰生産品というものが少ないんだ。エルフは他の種族に比べると人口が少ないし、リーフィルⅣには多くの自然とその恵みがあるから、工業的な生産力ってのがあまり必要無いんだよね」
「ふーん……でも、ここもグラッカン帝国の版図に組み込まれているわけだろう？　工業化の波というやつは押し寄せてきたりしなかったのか？」
「うん。このリーフィル星系がグラッカン帝国の版図に組み込まれたのはもう私の祖父の頃でね、その頃は皇帝陛下が自ら陣頭指揮を執って帝国の版図を拡大していたらしいよ」

「陣頭指揮を執ってって……それって開闢帝陛下の頃の話ですよね」
「そうそう。そしてエルフは空から来た人々と争うこと無くその臣下へと降り、その代わりに母星での自治権を認められたってわけさ。そして開闢帝陛下はシータの雄大な自然にいたく感動され、この星はこのままであるべきだと仰られた。以後、シータは自然保護惑星として扱われるようになり、今に至るってわけだね。母星におけるエルフの文化と生活はその頃から殆ど変わっていないらしいよ」

そんなに上手くいくものなのか？　という疑問が頭の中に乱舞するが、恐らくこの女性は今に至るまでの複雑な問題をすっ飛ばして要点だけを言っているのだろう。実際にはかなりの紆余曲折があったに違いない。

「その時に開闢帝陛下に臣従し、供に宇宙（そら）へと上がっていったのが私の曽祖父ってわけ。多分貴女もそっちの血筋よね？」
「うん。私の祖父も宇宙（そら）へと昇ったエルフだね」
「つまり、星に残ってそのままの生活を続けたエルフの血筋と、星を離れて宇宙へと進出したエルフの血筋に別れてるってことか」
「別に両者の間にはっきりとした確執とかは無いわよ。ただ、考え方というか生活様式が違うのは確かね」
「そうだねぇ、宇宙（そら）に上がった側からは特に何も無いけど、向こうは案外こっちを見下している感はあるよ。シータから離れて精霊の加護を失った連中ってね。まぁ、こっちもカビの生えた文化にしがみついてる古臭い連中って内心では思ってるから、お互い様かな？　一応、表立って口に出して罵倒し合うほど険悪な仲ではないと言っておくよ」

そう言ってエルフの女性店員がにんまりと笑う。

「……その言葉を聞かされた上で両者が険悪な仲ではないと言われ

ても」
「だよなぁ？」
「あはは、でも他所から来た人にとっては中々面白い話だろう？
さぁ、私がここまで胸襟を開いてエルフの内情を話したんだから、何か買っていっておくれよ。他所の星系に比べると少しばかり高いかもしれないけどね」

この店員は中々にやり手だなぁ。まぁ、面白い話も聞けたし、幸い俺の財布は分厚いのでこれくらいはなんでもない。ここは大人しくカモられておくとするかね。

☆★☆

やり手のエルフ店員が営んでいる土産物屋から色々と買い込み、店から出たところで俺の小型情報端末に着信があった。取り出して画面を見てみると、発信者はブラックロータスに残っているメイだった。何かあったのだろうか？　と内心首を傾げながら通話ボタンをタップして通話を開始する。ついでにスピーカーモードにしてミミとエルマにも聞こえるようにした。

「はいよ、どうした？」
『グラード氏族のティニアと名乗るお方から面会の要請がありましたので、ご連絡致しました』
「ぐらーどしぞくのてぃにあさん。知らない名前だなぁ……俺が捕虜収容室で見かけた捕虜のうちの誰かだよな、多分」
『はい、そのようです。是非直接会ってお礼をしたいと仰っています。ブラックロータスに直接訪ねて来られましたので、失礼のないようリラクゼーションルームにご案内しました』
「そのままブラックロータスの外に立たせておくのも門前払いも失礼だもんなぁ……アレだよな、多分良いとこのお嬢さんなんだよな」

『はい。グラード氏族はリーフィルⅣでも特に強い力を持っている氏族の一つで、ティニア様は氏族の長の次女だそうです』
「Ｏｈ……」

半ば予想がついていたとはいえ、やはり衝撃的には違わないその情報に俺は思わず天――というかコロニーの天井を仰ぐ。チラリと左右に視線を向けると、エルマとミミも何かを諦めたような――寧ろ悟りでも拓いているのではないかというような穏やかな表情をしていた。いや、そこで悟りを拓かないで欲しい。俺達は強い絆で結ばれた仲間だろ？　そんな大変だね、みたいな顔をするのは良くない。俺達は運命共同体だ。皆で一緒に苦労しようぜ。

「あー、うーん。会わないってのは無理だよな」
『できなくはないと思いますが、正当な理由もなしに面会を断るのは礼儀としては褒められたものではないかと。それに、グラード氏族と仲良くしておけばリーフィルⅣで行動する際にプラスに働くのではないでしょうか』
「ですよねー。会うしか無いか……今から戻るが、少し時間がかかる。以降の予定は特に無いし、一旦帰ってもらって会食に誘うのも良いかもしれないな。サシじゃなくて、俺達全員と向こうの人達って感じで。あちらの了承を得られるようなら会場の手配は任せて良いか？　費用はこちらから誘うんだからこっち持ちってことで」
『かしこまりました。ではそのようにお伝え致します。結果が出次第連絡致します』
「よろしく」

メイとの通話が途切れる。今日は一日ゆっくりする予定だったが、こうなったか。平穏無事とはいかないだろうとは思っていたが、平穏な時間は思った以上に短かったなぁ……とりあえず、厄介事がこれ以上大事にならないように気をつけるとしよう。

あ、結局あの鹵獲した大型宙賊艦の件がどういう経緯だったのか見れてないじゃないか。くそう、どっかで見る暇があればいいが。

#232　リーフィルプライムコロニー（後書き）

クリスマス？　そんなものはなかった、いいね？ ―（：3」∠）―
（煮込んだスペアリブと買い込んできた食糧を食いながらだらだらしていた

#２３３　行動方針会議（前書き）

朝から頭痛がペインでした……寒くなってきたから体調管理に気をつけようね！　―（∵３」∠）―

#233　行動方針会議

結局、グラード氏族のティニアさんは俺が外出しているのと、宜しければ今夜気楽な食事会でもどうだろうという提案がこちらから為されたということで、それに乗る形で一度引き下がってくれたらしい。食事会を行う場所の手配などはメイに任せたのだが、どうやらリーフィルⅣ――地元の人はシータと呼ぶ――の郷土料理を味わうことのできる高級郷土料理店のような場所であるようだ。

「リーフィルⅣの郷土料理ですかー……楽しみですね！」

「そうね。私の記憶では芋虫の丸焼きみたいな奇抜な料理は少なかったはずだから、安心して食べられると思うわよ」

「それは安心だな」

コーマットⅢの特産品だった一抱えほどの大きさの芋虫を丸焼きにした料理はインパクトが凄かったからな……あれはあれで美味しかったんだけどさ。見た目はともかく。

と、そんな呑気な会話をしている俺達は既にブラックロータスへと戻ってきていた。そこでメイからグラード氏族のティニアさんに関する報告を受け、今夜の食事会の会場となる高級郷土料理店の情報を調べていたというわけである。

「メイには苦労をかけたな」

「いいえ、何の苦労もありませんでした。ティニア様はすぐに引き下がってくださいましたので」

「どんな方だったんですか？」

「理知的で、心の強い方なのだろうと思いました」

そう言いながらメイはティニアさんのものと思しきエルフ女性の姿をホロディスプレイに映し出した。濃い茶色の髪の毛を腰くらいまで伸ばしている美人さんである。この意志の強そうな目には覚えがあるな。あの船の中で俺と言葉を交わした美人さんだ。

「やっぱこの人か」
「覚えがあるの？」
「捕らえられてたエルフ達をまとめていた人だな。あの場で唯一言葉を交わした相手だ。名も名乗ったな」
「なるほど。美人さんですね」
「せやね、美人さんやね」
「綺麗な方ですね。さすがはお兄さんですね」

ウィスカの発言に微妙に棘を感じる。一応俺としては狙って美人さんと縁を紡いだわけではないと言いたいのだが、言っても仕方がないことなので黙っておく。

「うちとしては新しい美人さんに目を向けるよりもそろそろうちらに目を向けて欲しいなぁって」
「……」

整備士姉妹がジーッと俺を見つめてくる。俺はそんな二人から目を逸らしてスルーし、小型情報端末を取り出した。

「傭兵ギルドからもらってきた今回の事件のあらましというやつを予習しておきたいと思います」
「おい、兄さん。こっち見ぃや」
「お兄さん……」
「覚悟を決めるまでもう少し待ってくれ」

俺だって二人のことは憎からず思っているし、二人のことを可愛いとも思っている。それに、二人とも優しい良い子だしな。いや、子だなんて言うのは失礼か。彼女達は年齢的に俺とほぼ同じ成熟した女性なのだから。

しかしどうにも手を出す気にならないんだよな！　見た目があまりにその……アレでさぁ！　これ手を出したら犯罪じゃない？　という気持ちが先に立つんだ。あと俺は割とおっぱい星人なんだ。

「まぁええわ。そのうち兄さんをめろめろにしたるからな」
「めろめろ（笑）」
「なに笑っとんねんはっ倒すぞ」
「ゆるして」

その拳を下ろし給え。ティーナに本気で殴られると、何の強化もされていない俺の骨など簡単にへし折れてしまう。俺としてはこんな感じで気楽に付き合える状態を壊したくないという気持ちも結構強いんだよなぁ。でも据え膳食わぬは男の恥とも言うし。ううむ。

「はいはい、今日のところはそれくらいにしときなさい」
「むぅ……エルマ姐さんが言うならしゃあない。姐さんに免じて今日のところは見逃したるわ」
「申し訳ねぇ」

正直に言うとミミとエルマ、それにメイで俺のキャパシティはいっぱいだと思うんだよなぁ。彼女達を受け入れるために俺はもっと大きな男にならないといかんね。色んな意味で。

「おほん。では気を取り直して事件の概要を見てみるとしよう」

小型情報端末を操作し、あの大型宙賊艦に関する事件の概要をホ

ロディスプレイに表示する。

「んー……特に何か面白みのある事件ではないわね」

「まぁ、よくある降下襲撃からの拉致だよな」

起こった事件そのものは、まぁエルマと俺の感想通りであろう。複数の宙賊艦がリーフィルⅣに降下襲撃をかけ、航宙艦の火力と機動性を利用してリーフィルⅣを蹂躙。襲撃があった丁度その時にとある式典を開いていた場所が襲撃され、まんまと若いエルフの女性達を中心に数十人が拉致されたと。

そしてあの大型宙賊艦に収容されていたのはその中でも特に身分の高かった人達で、あの十人以外の捕虜はその前に起こっていた星系軍や帝国航宙軍の追撃によって宙賊艦ごと攻撃され、殆ど死亡した。これは降下襲撃を防ぐことができなかった軍にかなり批判が集まりそうな内容だなぁ。

降下襲撃を許してしまったのも不味いし、大型宙賊艦を逃してしまった上に通りすがりの俺達に大型宙賊艦を横取りされたのも、横取りした俺達が大型宙賊艦を安易に撃破せず、白兵戦で艦を鹵獲して無事に捕虜を助け出したのも不味い。相当苦しい立場だろうな。

とはいえあの将軍の様子からすると、俺達に筋違いの怨みを抱いているような感じじゃなかったから、さほど心配はいらないと思うけど。

「で、その式典ってのがグラード氏族長の次女とミンファ氏族長の第二子との婚約式典だった、ねぇ……つまり例のティニアさんと、他所の氏族長の息子ってことか」

「氏族間の交流を図るためのお見合い会みたいなものだったのかもね」

「痛ましい事件ですけど……これ、政治が絡んできませんか？」

「そうね。襲撃そのものに面白みはないけど、そういう話が大いに

絡んできそうな内容ね」
「グラード氏族とミンファ氏族が強く結びつくことを快く思わない別の氏族が宙賊に情報を流して式典をぶち壊しにした、なんて構図が簡単に浮かび上がってくるよな」
無論、外野の俺達がすぐに思いつくような話は襲撃された当人達だってすぐに思いついているだろう。両氏族は他の氏族に対して敵意に近い警戒心を抱いているに違いないし、他の氏族は他の氏族でトラブルに巻き込まれないように気を張っているところであるに違いない。
「なんというか、物凄いタイミングで来ちゃったな。リーフィル星系での行動を一旦キャンセルして、他の場所に行ったほうが良いんじゃないだろうか」
「それも視野に入れたほうがええやろなぁ。ドワーフの母星系に行くのもええんちゃう？」
「マクシル星系ですね。ここからだとハイパーレーンで七つ先ですよ」
「そうね。そういうのはコーマット星系の件でお腹いっぱいだし」
「う、うーん……いいのかなぁ」
ミミ以外は早々にこのリーフィル星系を後にするという選択肢を支持するようだ。ミミは恐らく少しでも関わった案件を放り投げて立ち去る事に若干の忌避感を覚えているんだろう。
メイ？　メイはよほどの事がなければ基本的に俺が採る方針を支持するから。あまりこういう意思決定に意見を出さないんだよね、メイは。
「とにかく様子を見つつ、場合よっては即離脱する方向で。もう降下申請は出してるし、ちょろっと覗いていくくらいの気持ちで事に

当たろう」

俺の提案にこの場に居るクルー全員が頷いた。

これで今後の方針に関する意思統一はできたな。後はこの後の会食でどんな話が飛び出してくるか、といったところか。リーフィルⅣの権力闘争になし崩し的に巻き込まれないよう、せいぜい気をつけることにしよう。

ＥＸ－００３　恐怖！　宇宙マグロ！（前書き）

今年の更新は終わりと言ったな？　あれは嘘だ。

本編と全く関係ない番外編ＳＳみたいなものです。良いお年を！　―

（∵３」∠）―

EX－003　恐怖！　宇宙マグロ！

「なんだかこのコロニーは活気がありますね」

コロニーに降り立つなりミミが声を上げた。

ここは……えーと？　なんて名前のコロニーだったかな。目的地へと向かう途中で適当に立ち寄ったコロニーだ。特に補給が必要ってわけじゃなかったんだが、何か珍しい食べ物や交易品がないかと立ち寄ったんだよな。

「そうだな。なにか催し物でもあるのかね？」

なんだか目立つ色の装飾が施された店が多いように思う。どの店も同じような色使いで装飾されているから、恐らく何かしらのイベントなのだろう。どの店も金色や銀色の魚のようなマークがついた旗や垂れ幕を垂らしている。

「アレやね、新年祭ってやつ」

「うん、多分そうだね」

「へぇ？　新年祭ねぇ……」

エルマに視線を向けてみるが、エルマは俺の視線に首を横に振ることで応えた。これはエルマの知らないイベント、あるいは風習であるらしい。

「ドワーフ由来の文化なのかね」

「んー？　どうやろ？　うちらはドワーフ系のコロニーでしか過ごしたこと無いからな」

「金色と銀色の装飾と言えば新年祭かな？　って感じですね」
「なるほど。あの魚っぽいマークは何を意味するんだ？」

俺の質問にティーナとウィスカは揃って首を傾げた。

「いや、わからんわ。うちらの知ってる新年祭は金銀の装飾を掲げて新年を祝いながらお酒と食事を楽しむイベントやし」
「確かに魚っぽいマークですよね。全部に同じマークがありますし、もしかしたら私達の知る新年祭とは何か違うのかもしれません」
「さようか……まぁ、聞けばわか……る？」

ニューイヤーイベント、さかな、その二つの言葉が今、俺の頭の中でカチリとハマった。俺は……俺はこのイベントを知っている！

「ちょっ！　どこ行くのよ！？」
「船に戻るぞ！　ダッシュだ！」

慌てるエルマ達をその場に置いて俺は船へと走りながら、ブラックロータスで留守番をしているメイに通信を入れる。

『はい、いかがなされましたか？』
「出港準備だ！　急げ！」
『落ち着いて下さい、ご主人様。何かトラブルですか？』
「そういうわけじゃないけど急いでくれ！　最悪、クリシュナだけでも出せるようにしてくれ！」
『よくわかりませんが、わかりました。準備を進めておきます』

さすがはメイだ。説明不足でも俺の意を汲んでくれるぜ。
港湾区画をダッシュする俺と、それを追いかけてくるミミ達に好奇の視線が集まっている気がするが、気にしてはいけない。それよ

りも大事なことがあるのだ。

「ちょっと！　説明をしなさいよっ！」

「マグロだよ！」

「まぐろ？」

ブラックロータスに辿り着き、ハッチを開く操作をしているところでエルマが追いついてきた。ミミはもうすぐそこだが、ティーナとウィスカの姿はまだ遠い。やはり足の長さが違うからな、仕方あるまい。

「ニューイヤーイベントだ。宇宙マグロが襲ってくるぞ……！」

「うちゅうまぐろ」

エルマが何言ってんだこいつ？　という表情を向けてくる。わかる、わかるよ。宇宙でマグロって意味がわからないよな。でも、ＳＯＬで実装されたんだ。されてしまったんだ。

あれは悪夢だった。シーカーミサイルよりも速い速度で真正面から突っ込んでくるマグロの群れはトラウマものだった。真っ黒い口を開けて虚ろな表情で突撃してくるマグロの群れの恐怖は今も俺の脳裏に薄っすらと焼き付いている。

「お、おいついた……はぁ、はぁ」

「とりあえず俺達だけで入るぞ。ハンガーに急げ」

整備士姉妹はまだ追いついてきそうにないので、先にブラックロータスの中に入ることにする。ミミの息がまだ切れているようだが、残念ながら今すぐにでもクリシュナでコロニーの外に出たいので、労っている暇がない。

「で、そのうちゅうまぐろとやらがなんだってのよ。そんなに急いで船を出す理由は？」
「放っておくと、奴らはコロニーを襲うんだ。悪夢だぞ。コロニーに無数のマグロが突き刺さって尾っぽだけピチピチしてる光景は」
「まぐろって結構大きい魚ですよね。それの宇宙サイズって……もしかして航宙艦くらい大きかったりするんですか？」
「クリシュナの四分の一くらいだな。そんなのが数千、下手すると数万単位で襲いかかってくるんだ」
「ちょっとした宇宙怪獣じゃない……というか、私はそんなものを見たことも聞いたこともないんだけど、本当なの？　ガセじゃないでしょうね？」
「……そう言われると自信が無くなってきたな」
「えぇ……」

弱気になった俺にミミが可哀想なものを見るような視線を向けてくる。やめろ、その視線は俺に効く。エルマも残念なものを見る視線を向けてくるのをやめろ。居たたまれなくなる。

「金銀、新年、魚と来るともうそれしかないだろうという考えに取り憑かれてしまってな……いや、ほら、アレだ。元の世界関連のソレで」
「……あぁ、なるほど」
「そうなると、案外ありえない話でもないってことですね」

俺の言い分に二人が一定の理解を示してくれた。俺が元の世界でＳＯＬをやり込んでいたことも、この世界がＳＯＬの舞台によく似ていることも、俺がＳＯＬで得た知識がおよそ半分くらいは当たっていることもミミとエルマの二人はよく知っているのだ。

「とりあえず船を飛ばして警戒するのは構わないけど、そんな数千

数万の宇宙怪獣なんてクリシュナ一隻だけじゃどうしようもないでしょ」
「それがな、殆どの宇宙マグロは銀色なんだが、その中に金色のリーダー格がいて、そいつを撃破すれば配下の銀色宇宙マグロは無力化できるんだ。無力化した宇宙マグロは戦利品として回収可能で、かなりの稼ぎになる。あと、美味いらしい」
「よし、狩りましょう」
「私もサポートしますね！」

君達切り替え早くない？

「さぁ漕ぎ出しましょう！　星の海に！」
「目指せ、大漁ですね！」

俄然やる気を出し始めた二人に着いていきながら首を傾げる。ミミはともかく、エルマがこんなに『乗る』のはなんかおかしくないか？　と。
しかし二人がやる気になっている以上は仕方あるまい。焚き付けたのは俺なのだし、ここは責任を取ってクリシュナを出すべきだろう。そう考えながら俺は張り切る二人を追ってハンガーへと急ぐのであった。

☆★☆

「という夢を見たんだ」
「アホくさいわね」
「ユニークな夢ですね。食べてみたいです、宇宙マグロ」
「それうちらただの解説役やん。配役の変更を求めるで」
「私、そんなに足遅くないですよ……たぶん」

朝食の席で俺が見た夢の内容を発表すると、ミミ以外の評価はネガティブなものであった。初夢の内容を皆で語り合おうとか言うから語っただけなのに、酷い。

「というかなんでマグロ？」

「それは俺にもわからん」

実際にＳＯＬで宇宙マグロ襲来イベントはあったのだが、流石にあんなぶっ飛んだイベントはこの世界では起こらないだろう。そうそうそんな未知の宇宙怪獣なんて現れるわけもないし。

「あと三十分ほどでハイパーレーンを抜けますが、コロニーに立ち寄られますか？」

皆に食後のコーヒーやお茶を配り終えたメイがそう聞いてきたので、俺はその言葉に頷いた。

「そうだな、特に目的があるわけじゃないけど特産品とか交易品があるかもしれないし、寄ってみるか。ところで、なんて名前の星系だっけ？」

「――です」

「えっ？」

「――です」

メイが口にした星系の名は、俺が夢で見た星系の名前と全く同じものであった。

#２３４　会食の場へ（前書き）

あけましておめでとうございます！　今年もよろしくお願いします！
遅れてるのは……いつもどおりだから許して！！　―（：３」∠）―

#２３４　会食の場へ

身支度を整えた俺達はメイの案内に従って予約してある高級郷土料理店へと向かった。
この高級郷土料理店の代金の支払いに関しては若干先方と揉めたそうだ。いや、揉めたと言ってもそれはお前が払え、いやお前が払えというようなものではなく、双方が共に自分の方で払うと主張しあったのだ。メイはこちらが誘ったのだからこちらが払うと言い、あちらは助けられたのは自分達なのだから、自分達が払うと言い張ったわけだ。
結局、こちら側で払って、気になるならその分を礼金だか褒賞金だかに上乗せしてくれという感じで納得してもらったらしい。

「なんというか、話を聞く限りはお硬い感じがするな」
「お硬い感じ、ですか。確かに、ご主人様の言うことは間違いではないかもしれません。筋を通すことに重きを置く方のようでしたので」
「筋を通す、ねぇ。まぁ悪いことではないわよね。誠実であると評することもできるんでしょうし」
「単に頭が堅いだけなんとちゃうん？」
「お姉ちゃん」

ティーナが身も蓋もない事を言ってウィスカに突っ込まれるのはいつものことだな。

「今は俺達だけだからいいけどな。先方の目の前でそういうのはやめろよ」
「あはは、大丈夫やって」

ティーナはそう言いながらケラケラと笑う。
「本当に大丈夫だろうな？　やらかしたら禁酒だぞ」
「めっちゃ気をつけるわ」
禁酒という言葉が出た瞬間真顔になる辺り、やはりティーナはティーナだな。ウィスカも真顔になってるのがちょっと面白い。
こんな感じで割と気楽な感じで話をしながら目的の料理店に向かっているのだが、ミミだけは少し難しげな表情をしたまま黙っていた。
「ミミは何か引っかかることでもあるのか？　難しい顔をしてるけど」
「あ、いえ。今までの経験からどういう騒動に巻き込まれるのかなぁって考えてただけです。一手先、二手先を考えておけば先んじて手を打つこともできるかなって」
「なるほどなぁ……まぁ確かに。でも、難しくないか？」
「ですよねぇ……何をどうしたら良いかさっぱりわかりません」
これから起こることは今までのパターンからある程度は類推できなくもない。自分で言うのも何だが、多分ティニアさんに俺が気に入られる。或いは俺以外の誰かかもしれないけど、クルーの誰かが気に入られる。そしてティニアさんを助けたという恩もあり、リーフィルⅣで厚遇されることになる。そうして行動するうちにリーフィルⅣでの権力闘争になし崩し的に巻き込まれ……という感じではないだろうか。
これを完璧にスルーしようということなると、そもそも惑星に降下しないという策くらいしか俺には思いつかないんだよな。だからリーフィル星系での行動をキャンセルして一旦離れるって案を出し

たわけで。

「なるようになる。最終的に儲かることが多いわけだし、あまりに気にせず行こう。いざとなればケツまくって逃げれば良いんだ」

「そんなこと言って、ほんまに逃げられるん？」

「お兄さんは結局何もかも放り捨てて逃げることはできなさそうな気がします」

「そんなことないもん」

「もんって……」

エルマがジト目を向けてくる。できるさ。できるよ。今まで何度か同じようなこと言った気がするし、実際には一回も逃げてないけど場合によってはちゃんと逃げるよ。手に負えなさそうな場合には逃げるというのも勇気ある選択なんだからな。

「そろそろ目的地です」

「やっとかー。結構歩いたなぁ」

「こういうときのためにRVを一両購入しても良いかもなぁ」

先日ついにテラフォーミング中の惑星に生身で降下する、なんて貴重な体験をする羽目になったからな。あんなのは二度とゴメンだが、一度あったなら二度目があってもおかしくはない。備えることは無駄にはならないんじゃなかろうか。前にコロニーが謎の攻撃的な生命体に奇襲されてたなんてこともあったし。

「おー、ええね、RV。弄ってみたいわー」

「お姉ちゃんはエンジンとかフレームを弄るのが好きだもんね」

そうなのか。しかしティーナに任せるとマフラーが無駄に太くなって爆音になったり、ボディに夜露死苦とか天下無双とかペイント

されたりしないかちょっと不安なんだが？　なんか妙にトゲトゲしてヒャッハー仕様になったりさ。

「あそこみたいね。入りましょ」
「楽しみですね、エルフの郷土料理」
「そうだな」

見た目は普通のビルみたいな感じだが、中はどうなってるのかね。

☆★☆

「ようこそいらっしゃいました。お連れ様は既にご到着されております」
「それはどうも。案内をよろしく頼む」
「かしこまりました。どうぞこちらへ」

唐草模様の民族衣装のようなものを着た店員さんに案内されて建物の奥へと進んでいく。建物の外装はコンクリートか金属製のビルって感じだったけど、内装には木材はふんだんに使われていた。
なんだか印象的には和風っぽいテイストだ。木製の柱や天井に渡されている木製の梁、それに暖色の感触照明に照らされている廊下の雰囲気に妙に落ち着くものを感じるな。

「なんだか不思議な感じのする様式ですね」
「エルフ様式の内装ね」
「ほーん、なんかええ感じやね」
「うん、なんだか落ち着くね」

どうやらこの内装は女性陣にも好評であるようだ。この世界じゃ木材は高級建材なんだよな。それをふんだんに使っている辺り、こ

の店の資本はなかなかのものなのだろう。これは料理にも期待できそうだな。

「ここからは履物を脱いでお上がり下さい」
「靴を脱ぐんですね」
「そうみたいだな」

どうやら履物を脱いで板の間の廊下に上がっていくらしい。ますます和風な雰囲気だ。

「靴を脱ぐなんて珍しなぁ」
「そうだね」

ティーナとウィスカも特に文句を言うわけでもなく受け容れているけど、やっぱり珍しい文化みたいだな。俺もこっちに来てからは初めてだし。

「こちらのお部屋です。失礼致します」

民族衣装のようなものを着た店員さんが障子戸のような引き戸を開けて中へと俺達を導く。そこには三人の人物が座していた。三人とも女性だ。多分。そのうちの一人は先程メイが映像を見せてくれたグラード氏族のティニアさんである。

「待たせたかな、申し訳ない」
「いえ、私達が早く着きすぎただけです」

やはりティニアさんが代表格であるらしく、彼女は率先してそう発言して首を横に振った。そして見覚えのある強い意志を感じさせる瞳を俺に向けてくる。

「どうぞ、お座り下さい。床に直接座るのは慣れないでしょうが」
「大丈夫だ。皆も適当に座ろう」

俺は食卓を挟んでティニアさんの真正面に座ることにした。会食に至る経緯を考えればそれが適当だろう。俺の左右にミミとエルマが座り、ミミを挟んで向こう側にティーナとウィスカが座る。メイは俺の左斜め後ろに用意されていた座布団にお行儀よく座った。食卓に着かないメイに視線を向け、ティニアさんが小首を傾げる。

「彼女はメイドロイドだから食事を摂らないんだ」
「めいどろいど、ですか？」
「あー、もしかしてリーフィルⅣには普及していないのかな……彼女の身体は機械でできているから、食事を摂る必要がないんだよ」
「なるほど……そのような種族の方もいらっしゃるのですね」

ティニアさんはわからないなりに納得してくれたようで、素直に頷いてくれた。

「料理が来る前に改めて自己紹介しておこうか。俺はヒロ、戦闘艦クリシュナと武装母艦ブラックロータスのオーナー兼艦長だ。傭兵ギルドに所属しているプラチナランクの傭兵でもある。彼女はミミ、クリシュナのオペレーター兼マネージャー、そしてこちらはエルマ、クリシュナのサブパイロットを務めてもらっている。彼女も傭兵ギルドに所属している傭兵だ」
「よろしくおねがいします」
「よろしく」
「そしてあっちの二人はティーナとウィスカ。髪の赤いほうがティーナで、青いほうがウィスカだ。二人はスペース・ドウェルグ社から出向してきている優秀なメカニックだ」

「ティーナや。よろしくなぁ」
「ウィスカです。よろしくおねがいします」

ティーナが笑顔で手を振り、ウィスカは真面目にお辞儀をする。この辺も姉妹の性格が出るよなぁ。

「そして後ろで控えているのがメイドロイドのメイだ。武装母艦ブラックロータスの運用と管理を担ってもらっている。あの大型宙賊艦を襲撃した際に別働隊の戦闘ボット達を指揮していたのも彼女だな」

メイがお行儀よく正座したままお辞儀をする。この場で正座をしているのはティニアさん達三人とメイ、そしてエルマだけだ。俺とティーナは胡座をかいてるし、ミミとウィスカは床に座るのに慣れないようで、エルマの真似をして正座しようとしたり、それを崩したりともじもじしている。いっそティーナみたいにあぐらをかいてもいいのよ。二人ともスカートってわけじゃないんだし。

「ご紹介ありがとうございます。ではこちらも紹介させていただきます。私はグラード氏族、氏族長の次女、ティニアと申します。こちらはミザ、そしてこちらはマム、どちらも私と同じグラード氏族の眷属です。二人は私の側仕えという立場となります」
「なるほど、側仕えね。やっぱりティニアさん……いや、ティニア様と呼んだほうが良いかな」
「いえ、私のことはティニアとお呼び下さい。命の恩人に敬称付きで名前を呼ばせるなど畏れ多いです」
「畏れ多いと言ったらこっちもそうなんだが……まぁ、素直に従うとするよ。二人も側仕えを従えているということは、ティニアはやはり身分の高い女性なんだな」

俺の言葉にティニアは首を横に振る。

「家の格式は高いですが、それはシータでの――リーフィルⅣの中だけの話です。リーフィルⅣの外に出れば私はただの小娘に過ぎませんので、ヒロ様がお気になさることはありません。それに、側仕えと言っても実際にはそこまで畏まった関係ではありませんよ。彼女達は幼い頃から一緒に過ごしている、仲の良い友人ですから」

その仲の良い友人達は随分と緊張した表情だけどなぁ……これは俺達が警戒されているのか、それともただ単に緊張しているだけなのか。

「それじゃあ、自己紹介も終わったところで早速食事にしようか。積もる話はリーフィルⅣ――シータの郷土料理を味わいながらするとしよう」

「はい、そう致しましょう」

俺の提案にティニアが真一文字に引き締めていた口元を緩め、微笑みを浮かべる。ふむ、元から美人だけど笑うと一層美人だな……って痛い痛い。左右から脇腹なり太ももなりを抓るのをやめなさい。別に鼻の下伸ばしてないだろ！

#235　俺は悪くねぇ！！！（前書き）

一時間遅れてないからセーフ！！　―（∵3」∠）―（アウト

#235　俺は悪くねぇ！！！

リーフィルⅣの郷土料理というのは洋食のコース料理のように前菜、スープ、のように順に料理を出していく形式ではなく、最初から全ての料理が食卓の上にドンと並べられ、個々人が好きなように食事をするというスタイルであるようだった。

「豪華ですね。なんだか見ているだけで楽しくなってきます」
「うん、これは大したもんだ」

俺の目の前には野菜か山菜の天ぷらのようなものだとか、何かの獣肉のステーキのようなものだとか、くつくつと煮え立つ小鍋のようなものだとかがならんでいる。食材の色彩も豊かで、ミミの言う通りこうして料理が並んでいる様を見るだけで楽しい気分になってくるな。俺の印象としてはちょっと高級な旅館とかで出てくる料理って感じだ。

「これはシータでも客人をもてなす宴料理というものになりますね。通常の食事よりも贅を凝らした料理です」
「なるほどね。確かにこんな料理を毎食用意するとなると、専用の料理人を最低でも三人くらいは雇わないと手が回らないだろうな」

天ぷらに焼き物と煮物が二種、汁物に小鍋料理、それに香の物のようなものに菓子らしきものまで用意されている。しかも煮物に使われている野菜には飾り切りが施されているし、この料理の彩りもきっと考え抜かれた末のものなのだろう。これはまさしく職人の仕事だな。

「ヒロ様は料理についての造詣が深いのですね……？」

ティニアはとても不思議そうに小首を傾げた。惑星上の居住地に住んでいる彼女は恐らく普段から『本物』の肉や野菜から作られた食事を取っているのだろうが、宇宙に住む人々の殆どは生まれた時からフードカートリッジから作られた合成食品を主な食事としている。その結果、宇宙に住む人々の大半は料理や調理に関する知識が全く無いのだ。にも関わらず、俺が料理に関して比較的まともな意見を述べたのが意外であったのだろう。

「ヒロは生の食材からちゃんとした料理を作れるスキルを持っているのよ」

「そうなんですよ。あの時のヒロ様の料理はとても美味しかったです」

「そうなのですね……私も嗜み程度ですが、調理を学んでおります。機会があれば互いの料理を口にしたいものですね」

ティニアが再び微笑みを浮かべながら俺に視線を向けてくる。

「いや、俺のは雑な男料理だから……こんな職人芸を期待されても困るぞ」

「この料理が職人による手の込んだ料理であるとわかるだけでも稀有なことだと思います」

「せやね。さすが兄さんや」

「お兄さんは博識ですよね」

ティニアだけでなくティーナとウィスカまで俺を褒め称え始めた。なんだなんだ？　褒め殺しか？　そんなに褒めても何も出ないぞ。

「それはそうと、ヒロ様の船のクルーは女性ばかりなのですね」

「成り行きでな……最初は俺一人だったんだけど、最初にミミをクリシュナに乗せることになって、その後すぐにエルマもクルーとして迎え入れることになった。その後暫くしてからメイが加わって、母艦を購入する際に母艦を作ったシップメーカーからティーナとウィスカが出向してくることになったんだ」
「なるほど……差し支えなければ、どのような経緯でヒロ様の船に乗ることになったのかお聞かせいただいてもよろしいですか？　とても興味があります」

ティニアの視線がミミに向く。ティニアに視線を向けられたミミが「どうしたものでしょうか？」といった感じの視線を向けてきたので、俺は頷いてみせた。

「俺は構わない。ミミに任せるよ」
「ええっと……それじゃあ」

という感じでミミが自分の身の上話を始め、ミミに続いてエルマも船に乗った経緯を話し……と食事を進めながら俺達の来し方をティニアに語ることになった。惑星外の話を聞くのは珍しいのか、三人とも大層興味深げな様子である。

「私達ばかり貴方様達のことを聞きほじってばかりで申し訳ありません」
「いやいや、そうやって興味深けに瞳を輝かせて聞いてもらえる分にはこちらとしても話し甲斐があるってものだよ。な？」
「そうね、ヒロは所々で茶々を入れてるだけだけど」
「茶々だなんて人聞きの悪い。ちょっとした補足説明ってやつだろう？」

そうやってエルマとじゃれ合っていると、ティニアは俺とエルマ

のそんな様子をジッと見つめているようだった。
「……お二人は夫婦の契りを交わされた仲なのでしょうか？」
「ええっと、それはどういう」
夫婦の契りというのが肉体関係という意味ならイエスだ。ただ、それをこうした場で口にするのは流石に憚られる。
「書類上の夫婦関係という意味ではノーよ。ただ、私の家族には認められた仲ね。いわば婚約関係と言っても過言ではないと思うわ」
「……なるほど、それではミミ様は？」
「え、えっと、私は……」
ミミが視線を左右に彷徨わせる。
確かにエルマの家族とはある程度話がついた感じになったわけだが、ミミとはどうなのかと言われるとこれが難しいところだ。ただ、ミミは帝室に入ることを選ばず、俺と一緒に生きることを選んでくれた。俺もそんなミミと一緒に生きていきたいと思っている。
「ミミ様とご主人様は既に帝国臣民法上の夫婦となっています」
「「……えっ！？」」
俺とミミの驚愕の言葉はほぼ同時だったと思う。
え？　何それは。当人達が把握していないんだが？　ミミに視線を向けるとミミも俺に視線を向けてきていた。ミミ知ってた？　知らない？　そう。そうだよな。それじゃなかったら俺と同じタイミングで声を上げてなかったよな。エルマは？　あれ？　エルマさん何か知ってそうな顔してるね？
「何か当のお二人が混乱していらっしゃるように見えるのですが」

「二人には伝えてなかったからね」
「いや、ちょっと待って。それはおかしい、色々とおかしい。というか一体いつの間にそんなことに？　俺、知らないんだけど」
「……」

ミミは驚きのあまり固まってしまっているようだ。おい、大丈夫か？　つんと指先で突いたらそのまま横に倒れそうだぞ。

「……うちも初耳なんやけど」
「……私も」

ティーナとウィスカが刺すような視線を向けてくる。いや、うん、そうだね。初耳だよね。俺も初耳なんだ。だから俺にそんな視線を向けられても困る。

「一体全体これはどういうことなんだ？」
「つまり、貴族対策だったのです」
「ええと？」
「帝都に滞在していた折にミミ様は少々特異な事情から貴族の子弟から注目を浴びることになりました。ミミ様の身分は平民。しかも身寄りが無い状態です。場合によっては貴族特権により無理矢理その身柄を引き受けられる可能性がありました」
「なるほど？」
「そこで予めヒロ様と法的な夫婦関係を結んでおくことにより、そのような事態が起こることを排除したわけです」
「よくわかった。しかしそれを当の俺とミミが承知していなかったというのはどういうことだろうか？」
「私が口止めしてたから。あと、知っててもしらなくても別に何も変わらないでしょ？」
「なんで……いやまぁそうだけどさぁ」

法的にミミと夫婦関係になっていたとしても、今までの生活を変える必要はないと思うし、変えるべきではないとも思う。エルマにしてもメイにしても末永く一緒にありたいと思っているし、ミミだってそれは同じだろう。ティーナとウィスカに関しては……。

「……」

「……」

二人の視線の圧が凄い。しかし俺は屈しない。この俺がそう簡単に圧力に屈するとは思わないで欲しい。その程度の圧力に屈する俺ならセレナ中佐やクリスに手を出していただろう。俺はＮＯと言える日本人なのだ。

「二人とは何でもな……くはないけど、今のところそういう関係ではないぞ」

「今の所、ですか」

「この先どうなるかまではわからない。軽々しく口にすることは避けたいと思う。ただ、俺にだって節操というものがある」

「そうですか」

ティニアさんがそう言ってにっこりと笑う。その顔にははっきりと「二人の女性に手を出しておいてですか？」と書かれているように思えるが、俺は声を大にして言いたい。俺はこれで結構我慢強い男であると。手を出す相手はちゃんと選んでいるんですよ、これでも。俺が自重なしの下半身に素直な性格であったなら、今頃セレナ中佐の部下として帝国航宙軍の軍人か騎士になっているか、或いはダレインワルド伯爵家の家臣か、もしかしたらクリスの夫となっていたことであろう。

その前にホールズ侯爵かダレインワルド伯爵にバッサリとやられ

てるかもしれないけどな！

「うちらもそこに入る予定なんよ」

「大家族って良いですよね」

「君たち俺の話聞いてたよね？」

俺とミミが法的にそういう関係になっていたということに触発されたのか、ティーナとウィスカが勝手なことを言い始める。まずは少し落ち着こう。ほら、酒を頼んでやるから落ち受け。クールになるんだ。そしてこころなしかティニアと側仕えの二人の視線が痛い。

とりあえずね、俺は声を大にして言いたい。

俺は悪くねぇ！！！

#236　グラード氏族の文化（前書き）

生活リズムが崩れている……！（、　。ω　。、）（寝坊した

#236　グラード氏族の文化

「そろそろ俺をいじめるのはこれくらいにしてくれないだろうか」

という俺の切実な訴えにより、俺の女性関係の話は打ち切られることになった。まぁ、実際のところは俺とミミとエルマが互いに互いを認めつつ、仲良くやっているのだということをティニア達が理解してくれたということだな。

本当はメイドロイドであるメイもそこに含まれる上、先程の反応からティーナとウィスカも割と本気で俺とそういう関係になることを望んでいるということが発覚したわけだが、それはとりあえず横に置いておくことにしよう。

メイはそういう部分で自己主張をする性質ではないし、ティーナとウィスカの件については今の俺を取り巻く状況を理解した上で好意を寄せてくれているという意味以外の何物でもないのだから。

まぁ、それも俺にしてみればロープ際にでも追い詰められたような心境であるのだが。

「それでは、今度は私達が何かお話をしましょうか」

「そうして貰えると嬉しいな。さて、何を聞こうかな？」

「エルフの方々がどんな風に暮らしているのかは興味がありますね。惑星上での生活ってどんな感じなんですか？」

「どんな感じ、ですか……」

ミミの質問にティニアは小首を傾げて少し考え込んだ。

「私達グラード氏族は狩人の一族です。皆夜が明ける頃に目を覚まし、女達は水場で洗い物をしたり、身を清めたりします。男達はそ

の間に薪を拾い集めたりして、女達が水場から戻ってきたら水場に身を清めに行きますね」
「なるほど。それで朝の用事が終わったら男達は狩りに行くのかな？」
「はい。主な獲物はディンギルやムンバ、レザリア、ピルル、キンジャですね」
「名前だけだとどんな生き物なのかわかりませんね」

ミミが首を傾げる。俺も全く想像がつかないな。

「ディンギルは場合によっては人すらも襲う獰猛な獣で、ムンバは臆病ですが逆上すると危険な獣です。レザリアは身体が大きく、強固な鱗の皮膚を持つやはり危険な獣ですね。ピルルやキンジャは鳥です」
「危険な獣、多いなぁ……」
「危険って言っても前にヒロが戦った白い化け物どもとかツイステッド程じゃないわよ。あくまでも全部野の獣なんだから、理由もなく襲いかかってきたりするわけじゃないわ」
「ヒロ様も獣を狩ったことがあるのですか？」

エルマの言葉を聞いてティニアが首を傾げる。

「俺が戦ったのは獣というよりは生物兵器だよ。ヒト――に限らないけど、とりあえず目につく自分達以外の生命体と、主以外を殺すことだけを本能として生まれ持つように作られた生き物だな」
「……同胞以外の全てを殺戮するためだけに作られた獣ということですか？」
「そういうことね。リーフィルⅣの――シータの外にはそんな獣とも言えない存在や、そんな存在を作って弄ぶような連中がごまんといるってわけ」

「……恐ろしい話です」

ティニアさんはそう言って目を瞑りながら右手で空を切り、何かまじないめいた動作をしてみせた。

「しかし、ヒロ様はそのような恐ろしい存在との戦いすらも切り抜けてきたのですね」

「そうだけど、別に生身でってわけじゃないぞ。白い化け物との戦いではパワーアーマーを着てたし」

「より危険なツイステッド相手にはほぼ生身で挑んでたけどね」

「某もあんな状況に生身で放り込まれたくなどはなかった……」

絶賛テラフォーミング中の超過酷な環境に生身で放り込まれるというのは二度と御免だ。近いうちに軽量型のパワーアーマーを絶対に買おう。リーフィル星系での用事を終わらせたら、そういうのに強いハイテク星系を目指すのも良いかもしれんな。

「なぁなぁ、その狩りってのにはどんな武器を使うん？　レーザー系の武器だと肉に悪影響がありそうやけど」

今まで話を黙って聞いていたティーナが酒の入ったジョッキを片手にティニアにそう聞いた。テック好きのドワーフとしてはやはり気になるものなのだろう。

「基本的にそういった狩りに外の武器を使うことはありません。狩人達は精霊銀の弓矢や槍、狩鉈などで戦うのです」

「精霊銀？」

聞き慣れない言葉に俺は首を傾げる。ティーナとウィスカも聞き慣れない素材の名を聞いて興味深げに目を輝かせているようだ。

「はい。金属というものは基本的に精霊術と相性が悪いのですが、唯一精霊銀だけは精霊術との相性が非常に良いのです」
「精霊術……所謂魔法ってやつか」

実はエルマもそういった術を使える。実際に見せてもらったこともある。まぁ、ライター代わりに使えるくらいの小さな火種を出すやつだけだけど。宇宙空間という場所においてはそう言った術を行使するための存在が希薄であるらしく、大した術は使えないのだとエルマは言っていた。

「あー、そういやエルフはサイオニック適正があるっちゅう話やったっけ。ちゅうことは、精霊銀ってのは所謂Ｐ・Ａ・Ｍの一種ってことやね」
「Ｐ・Ａ・Ｍ？」
「Ｐｓｉｏｎｉｃ　Ａｍｐｌｉｆｉｃａｔｉｏｎ　Ｍａｔｅｒｉａｌ――長ったらしいから頭文字を取ってＰ・Ａ・Ｍなんて呼ばれとるわけや。端的に言えば精神増幅素材ってとこやね」
「せいしんぞうふくそざい」
「せや。その殆どは金属に似た特性を持っていて、産出量が極めて少ない希少素材や。加工がめっちゃ難しくてな。普通の金属と同じように扱うとすぐにだめになってしまうんよ」
「とはいえ、サイオニック能力を増幅するという特性以外に目立って優秀な点は少ないので、そんなに素材としての価値は高くはありませんね。加工難度が高い割には強靭でも熱に強いわけでもないですし。神秘的で希少なのでＰ・Ａ・Ｍを専門的に蒐集する好事家もいるみたいですけど」
「なるほどなぁ……シータの人達はそんな希少素材を使った弓矢や槍で危険な獣と戦っているわけだ。風の精霊に頼んで矢の速度を上げたり、土の精霊に頼んで槍の強靭さや貫通力を上げたりするのか

？」

俺達の会話を興味深げに聞いていたティニアが俺に質問されて驚いたような表情を見せる。

「はい、そうなのですが……ヒロ様は何故そのようなことを知っているのですか？　ああ、エルマ様に聞いたのですね」

「そんな感じね」

などと言いながらエルマが密かに俺の脇腹に肘鉄を入れてくる。とても痛い。

想像で言っただけだが、俺の知識はこの世界の基準で言うと妙な具合に偏っている。迂闊な発言から俺の特殊な出自――気がついたらクリシュナと一緒にこの世界に放り出されていた――が露呈すると、面倒な事になりかねないわけで、エルマはそうならないようにフォローしつつ余計なことを言うなと俺を掣肘してきたわけだ。気遣いは嬉しいけど、できればもう少し優しく掣肘してほしい。

「えっと、刈った獣はどうするんですか？」

「はい。狩った獣は血抜きをして水などで肉を冷やした後に集落へと持ち帰られて私達の糧となります。皮や毛皮などは鞣されて様々なものに加工され、肉は私達が食べるわけですね。ここには出てきていませんが、内臓の料理などもなかなかに美味しいものですよ」

「な、内臓ですか……」

内臓を食べると言う話を聞いたミミが少し顔を青くする。確かに内臓料理というのは馴染みのない人にとっては少し気味の悪いものかもしれないな。

「はい。内臓というのはあまり日持ちがしませんから、肉と違って

売り捌くことは難しいのです。ただ、肉にはない美味しさと滋養がありますので、私は嫌いではありませんね。頂いた命をできるうる限り余すこと無く糧とするというのが私達の流儀なのです」
「なるほどなー……まぁ馴染みは薄いけど、理解できる話だな」
「私達の普段の生活を考えると耳が痛い話よね」
「それは違いないな」

自然の恵みを敬い、無駄なくありがたく頂くという彼女達の流儀からすれば俺達傭兵の生き様や有り様というのはかなり遠い存在であろう。狩りをしているのには違いはないけど、俺達は相手の血肉を食らっていきているわけではないからな。いや、ある意味では血肉を食らって生きているのか？

「私達には私達の、貴方達には貴方達の流儀があるというわけですね。互いにそれを尊重できるのであれば問題はないと思います」
「郷に入っては郷に従えって言葉もあるから、シータでは出来得る限りそっちの流儀に従うのが筋だろうな。できるだけ気をつけていきたいところだ」
「そうですね。そしてその、内臓料理というものにもチャレンジしてみたいです」
「せやなぁ。うちはエルフの作るお酒をもっと色々飲んでみたいわ」
「そうだね。このお酒も美味しいし」

色気より食い気だな、君達は。観光客のスタンスとしては真っ当なんだろうけど。というか、コーラの存在を追い求めて惑星に降下しようとしている俺がミミ達のことをとやかく言うことはできないか。完全に同じ穴の狢だ。
そのような感じで基本的に和やかなムードの中で会食は進んでいき、料理が尽きた後も存分に語らってからお開きということになった。ティーナとウィスカはずっとガバガバと酒を飲んでいたのに中

座することもなかったんだけど、君達のどこにあれだけの酒が収まっているのだろうか。ドワーフの身体には不思議がいっぱいだな。

#237　嵐の前の静――かではない時間。（前書き）

なまらさむくてねぼうしました――（：3」∠）――（おふとぅんから
でたくない

#237　嵐の前の静――かではない時間。

グラード氏族のティニア達との会食の翌日、今度はミンファ氏族のネクトという人物から書状が届いた。内容としては、宙賊達の手から救い出してくれた事に関する礼と、その際に命を助けてもらった礼を述べたいという内容だ。本来であればネクト自らが出向いて礼を述べるべきところだが、療養中であるためこちらから出向くことができないということに関する謝罪とともに、シータに降りた際にはこの書状を持参してミンファ氏族の元を訪れてくれれば、氏族長の第二子として出来得る限りの便宜を図ると書かれていた。

「見ろよこれ。書状だぞ、書状。今の時代に紙に書いた書状とか凄くね？」
「まぁ、贅沢品ですよね」
「そうね、嗜好品のレベルを超えて贅沢品ね」

ネクト氏から届いた書状をピラピラと振ってみせると、ミミとエルマがそれぞれ頷いた。この世界では、紙なんてものが普段の生活で使われることが全く無くなっており、その全てが完全に電子化されていると言っても過言ではない。実際、この世界に来てからメモ用紙を含めて文字を書くための紙媒体というのを俺は見かけた覚えがない。製品のパッケージの類もほぼ全てがプラスチックのような合成素材で出来ており、ラベルなども基本的にはパッケージそのものに直接印刷されているのだ。

「しっかし雅やなぁ」
「メッセージじゃなくて紙の書状っていうのは確かにそうだよね」
「どんな人なんだろうな。傷を負って呻いているとこしか見てない

から人となりが全然わかんねぇんだよな」

ちなみに、昨日の会食の際にグラード氏族のティニアからもシータに降りた際には是非グラード氏族領を訪れてくれと言われている。グラード氏族を挙げて歓迎してくれるという話だ。

「あまり堅苦しいのは御免だけど、何かと便宜を図ってもらえるなら渡りに船ではあるよな」

俺達がシータに降りる理由というのは全体としては観光、俺個人の目的はコーラ探しである。薬湯関係の話題をフックに、それっぽい飲料がないか探りを入れなければ。正直、コーラを手に入れるためであれば多少の無理難題は引き受けても良いと思っているし、多少強引な手でも躊躇なく使うつもりである。代替品で誤魔化すのもそろそろ限界だ。

「とにかく、権力闘争にだけは巻き込まれないように注意しましょう。いざとなったら星系外に逃げるくらいのつもりでね。所詮いち惑星の中での話なんだから、数星系も離れれば完全に影響下から逃れられるだろうからね」

「なんかきな臭い感じですもんね」

「兄さんはトラブル誘引体質やからなぁ」

「というか、どんなに気をつけても避けるのは無理な気がするんですけど」

「ウィスカ、それ以上いけない」

本当のことを言っても誰も得をしないことだってあるんだぞ。それを言い始めたら、こうして話し合っていることすら無駄ということになるじゃないか。人は決して諦めてはいけないんだ。運命は受け入れるものじゃない。切り拓くものなんだ。なんかどこかの漫画

かゲームかアニメの主人公とかがそんな感じのことを言ってるよ。知らんけど。

『ご主人様』

益体もない話をしていると、俺達がのんべんだらりと過ごしていた休憩スペースにメイの声が響き、休憩スペースのホロディスプレイが立ち上がってメイの姿とブラックロータスのコックピットの光景が映し出された。

「どうした？」

『リーフィル星系の惑星管理局から惑星への降下申請が通ったという連絡がありました。こちらから降下スケジュールを伝えればいつでも降下が可能です』

「え？　早くないか？　なんか結構時間かかるって話じゃなかった？」

『はい。どうやら星系軍やグラード氏族、ミンファ氏族――というか族長連合からの働きかけがあったようで』

「なるほど」

「予想できたことではあるわね」

リーフィル星系の権力構造がどうなっているのか詳しいことまではわからないが、今の俺達は星系軍や族長連合に盛大に恩を売った状態だ。それらの組織はそれなり以上の権力を握っていることは予想に難くなく、そちらからの働きかけでお役所の仕事が通常よりも早く進められるというのは確かにありそうな話であった。

「そう言ってもな。拿捕した大型宙賊艦の改修作業があるわけだし、そうホイホイと明日から行きますってわけには行かないだろ」

「せやねぇ。あと三日……いや、二日は要るで」

「売却手続きは早めに進めることは可能ですね。仕様は決定しているわけですし。売却手続自体は降下後に進めることも可能ですから、別に急ぐ必要はないんじゃないでしょうか？」
「降下して諸々片付けた後に改修作業をすることもできますけど、その日数分ドックに停泊したままになるので、費用が嵩みますよ。改修が終わっても、売却手続きが成立するまで停泊費用はこちら持ちなので、早めに片付けたほうが良いと思います」

ティーナとミミ、それにウィスカがそれぞれの立場から鹵獲した大型宙賊艦の始末についてアドバイスしてくれる。

「それじゃあ降下は三日後ってことで。ティーナとウィスカには悪いけど、改修作業は二日で済ませてくれ。売却手続きは今からでも始めるってことで、ミミはティーナ達と連携して作業を進めてくれ」
「はいっ！」
「がってん」
「わかりました」
「私は降下スケジュールを調整するわね。降下する際のコースとかも事前に通達しなきゃいけないし」
「そうしてくれ。降下の際はブラックロータスごと降下するから、停泊施設に関する調整とかも要るだろ。メイと相談して計画を詰めてくれ」
「了解」
『承知致しました』
「そして俺は……俺は何をしような？」

やるべき仕事を全部クルー達に割り振ってしまった結果、手持ち無沙汰になってしまう俺であった。

「何かあったら相談するから、ドンと構えてなさい。でも、あんま

り外に出ないでね。変なトラブル拾ってきそうだし」
「はい」
俺はエルマの言うことに素直に従うことにした。俺は素直ないい子なので。

☆★☆

「ふーん、ふんふんふーん♪」

俺は素直ないい子なので船の外には出ないことにした。エルマが心配していたのは、俺がコロニーにふらふらと遊び出てティニアやネクト、その他エルフのお偉いさんなどに出会い、無用なトラブルに巻き込まれることだろう。
だから船の外に出ないようにする。うむ、実に理に適っている。
だから俺は船の外には出ない。だが船ごと外に出るのはセーフではなかろうか？　具体的にはクリシュナに乗って宙賊をしばきに行くのはセーフなのでは？
クリシュナで宇宙に出て宙賊をしばき倒して暇潰しをする。俺は儲かる。リーフィル星系の人達は宙賊が減って安心できる。最高だな。宙賊くらいしかいない宇宙空間で活動をしている分には、エルフのお偉いさんと関わって変なトラブルに見舞われることもない。完璧だ。
心の中で完全なる理論武装を行った俺は、クリシュナのコックピットに足を踏み入れた。
「おはよう。随分早かったわね」
「おはよう。ちょっと急用を思い出した」
クリシュナのコックピットで待ち伏せしていたエルマに挨拶をし

て踵を返す。よし、俺は何も見なかった。誰にも会わなかった。俺は素直ないい子なので、ブラックロータスの休憩スペースで大人しくしていようと思う。俺はいい子なので。
あの、俺はいい子なので離してはくれまいか？　肩が、肩が痛い！　握力が強いですエルマさん！　ゆるして！

「という夢を見たんだ」

痛む肩を押さえながらそう語ると、昼休憩のために船に戻ってきていたティーナとウィスカにジト目で睨まれた。

「お兄さん、この期に及んで仕事を増やそうとするのはどうかと思いますよ」
「ちゅうか夢やないやろ、それ。めっちゃ見張られてるやん」

俺の背後にはメイが控えていた。これは別に俺を見張っているわけではない。見守っているのだ。

「というかいつもの兄さんらしくないやん。どこからそのパッションが溢れてんねん」
「宇宙の強制力が」
「実は何か面白いことが起きないかなとか思ってません？」
「ソナコトナイアルヨ」

実は面倒くさそうな権力関係のトラブルよりも、宙賊とか宇宙怪獣をぶっ飛ばして終了！　大団円！　みたいな展開のほうが楽なので、どうにか動き回って今の流れを変えられないかなとか思っているのは秘密だ。俺がトラブルを引き寄せる体質だというのならワン

チャンあるのでは？
　え？　そんなオカルトじみたジンクスのような何かを信じ込んで行動するとかおかしい？　いやいや、考えてみてくれ。こっちの世界に来てからこの方、トラブルに次ぐトラブルに見舞われているんだぞ。二度あることは三度あるどころの話じゃない。四度も五度も起こっている。最初期から一緒にいるミミとエルマもきっと同じ感想を抱いているに違いない。

「大人しゅうしとき。どうせ星に降りたら何かあるんやろうから」
「あ、ティーナもそういう認識なんだ」
「ブラド星系を出て以来、お兄さんは行く先々で結晶生命体との戦闘に巻き込まれたり、帝室に絡まれたり、貴族の権力闘争に巻き込まれたりしてますからね……」
「兄さんの腕前が抜きん出てるっちゅうこともあるんやろけど、それでもなぁ……」

　ドワーフ姉妹が左右から憐れむような視線を向けてくる。ははは、そういう目で見るのはやめてくれ給え。その視線は俺に効く。でも、俺と一緒にいる限りは二人も一蓮托生だからな。一緒に頑張ろうな？　な？　オラッ、逃さんぞ！
　そうして俺はメイに監視されながら、整備士姉妹と束の間の穏やかな時間を過ごすのであった。

#238　赤いのは押しが強い（前書き）

寝坊したのもあるけど難産であった―（：3」∠）―

#238　赤いのは押しが強い

結局俺も自分の身が可愛いので、二日間を大人しく過ごした。常にクルーの誰かが俺の側に控えるようになっていたのはアレかな？　俺が何か悪戯をしないようにってことかな？　別に俺は子供じゃないんだから、そんなの必要ないと思うんだけど？　あ、そう。目を離すと何かやらかしかねないと。なるほど。

「なんだかんだと構ってくれるのは嬉しくはあるからヨシ！」
「久々にヒロ様とゆっくり過ごせた気がします」
「ここのところ忙しかったものね」

待機二日目の夜。食堂で食事を終えた俺達はそのまま食堂でまったりと過ごしていた。

「うちらはゆっくりしてる暇はあらへんかったけどな」
「なんとか仕上げは終わったけどね」

くたびれた様子の整備士姉妹は未だ作業用のジャンプスーツを身に着けたままである。作業を終わらせて、そのままこの食堂で食事をしていたのだ。

結局のところ、ミミやエルマ、メイの受け持った作業というのは整備士姉妹の受け持った作業に比べると時間的な余裕が多かった。なので、基本的には三人のうち誰かと、或いは全員とゆっくり過ごす時間が多かったのである。

「この埋め合わせはボーナスでするから」
「ボーナスもええけど、うちも兄さんとゆっくりしたい」

「埋め合わせということなら平等にするべきだと思います」
「えぇ……？　ぐいぐい来るじゃん？」

なんかこの前の会食以来、ティーナとウィスカが積極的である。今まではこう、一歩引いた感じというか、本当か冗談かちょっと判別しづらいアピールをする程度だったのに、こういうストレートは発言が増えているように思う。

「うちらな、気づいたんや」
「お兄さん相手に迂遠な手を使うのは逆効果だって」
「なるほど」
「ついに気付いたのね」

ミミとエルマがそれぞれ頷いたりニヤニヤしたりする。俺としては大変複雑な気分なのですが？

「ちゅうわけでな、これからは当たって砕けろで真正面から行くから」
「砕けちゃ駄目だよ、お姉ちゃん」
「ティーナさんとウィスカさんなら歓迎しますよ」
「そうね。二人はしがらみも少ないし、別に断る理由もないわよね？」
「そこで俺に振るのはやめて欲しい」

ここでそうだねって言ったらじゃあそういうことでってなっていきなり今晩にでも二人が俺の部屋に突撃してきかねないじゃないか。俺にも心の準備ってものがあるんだからあまり追い詰めないで欲しい。

「メイはん的にはどう？」

「私ですか？　私が口を出すべき問題ではないと思います。ご主人様のご判断次第かと」
「でも、メイさんは私達をその……」
「監視はしております。ですがそれはお二人に何か思うところがあるわけではなく、単にお二人がスペース・ドウェルグ社から出向してきている外部の人間だからです」
「なるほど。じゃあ仮にうちらがスペース・ドウェルグ社と縁を切って、エンジニアとしてこの船に乗るってなったら？」
「先程も言いましたが、私が口を出すべき問題ではないと思います。ただ、客観的な評価をするならば、プラスになる点が非常に多いと評するべきでしょう」
「……」

メイの発言を受けてウィスカがジッと俺を見つめてくる。ティーナも俺に視線を向けてくる。ＯＫＯＫ、二人の気持ちはよくわかった。だからそんなにジッと見つめるのはよしてくれ。

「ＯＫ、二人の気持ちはよくわかった。でも先日の会食以来態度が豹変しているというのも自覚して欲しい。衝撃的な事実を受けて、舞い上がっていたりはしないか、今一度よく考えて欲しい。その上でなお心が変わらないなら俺も二人のことをしっかりと受け止めて、覚悟を決めようと思う」

全員の視線が俺に集まる。

「ヘタれたわね」
「そこはビシッと受け止めるとこやない？」

エルマとティーナが俺にジト目を向けながら非難し、ウィスカも何も言わないけど同じような視線を向けてきている。俺の後ろに立

っているメイの視線がどんなものなのかはわからないが、ミミは少し不思議そうな視線を向けてきていた。

「どうした、ミミ」

「いえ、その……エルマさんの時は結構パパっとそういう関係になってたのに、なんでティーナさんとウィスカさん相手にはそんなに慎重なのかなって」

「それはそうだな……ふむ」

右手で顎を擦りながらティーナとウィスカに視線を向ける。何故据え膳にパパっと手を付けないのか。別に俺は奥手って性質でもないし、二人は手を出したら行動に支障が出るほどのしがらみもない。二人とも貴族とかってわけじゃないし。ならば何故俺は二人に手を出すことに積極的ではなかったのか？

「うーん、やっぱりまだ二人との仲が深まっていないってことなのかな。そんなに急ぐ必要はないんじゃないだろうか」

「……つまりミミとエルマ姐とメイがおるからうちらは要らんっちゅうことか。せやからうちらには本気になれんと」

「いいや、それはないな。もしそうなら俺はもっと二人を雑に扱ってる。二人の警護のためにメイをつけたり、戦闘ボットを揃えたりはしない。もし二人が宙賊だの貴族だのに略取されたら命懸けで助けに行く。それだけは絶対に間違いない」

俺に厳しい視線を向けてくるティーナにそう断言して真正面からティーナの目を見つめ返す。これで信用してくれないならそこまでだろうな。

「もー……なんやねん。めっちゃ本気やん。そこまで本気なのになんでうちらに手を出してくれんの？」

「それはそれ、これはこれ。もう少しゆっくり関係を進めていくってことで一つ、納得してくれ。俺も本気で考えるから」
「はぁ……ウィー？」
「うん、お兄さんの言う通りにしよう。お兄さんが本気で私達のことを考えてくれるって言うなら、焦ることはないと思う」
「もー、いい子ぶって。ウィーかてうちと同じように思ってたくせに。これだとうちだけみっともなく騒いだ感じやん」

ティーナが頬を膨らませて怒り、ウィスカがクスクスと笑いながらティーナの頬をつつく。とりあえずこの場はこれで収まったようだけど、二人のことも本気で考えていかないとなぁ。宙ぶらりんのままにしておくのは良くない。良くないんだけど、そうなると背負うものが重いなぁ。
俺の腕は二本しか無いんだけどなぁ……これは色々と覚悟を決めなきゃならないか。

☆★☆

と、このように考えさせられる夜を過ごして翌日。俺達は心機一転リーフィルⅣ――現地で言うところのシータへの降下を目指してリーフィルプライムコロニーを出立した。今回はブラックローターズごと降下するので、俺達クリシュナのクルーは休憩スペースでのんびりと降下を待つだけだ。艦の制御もメイに全て任せる形になっているからな。

「で、早速これか？」
「心の距離を詰めるには身体の距離を詰めるのが一番やん？」
「い、嫌ですか？」
「嫌ではないです」

休憩室のソファに身を沈める俺の両脇にティーナとウィスカが座り、俺にベッタリとくっついている。今日は作業用のジャンプスーツではなく、薄手の普通の服を着ているので、二人から直接伝わってくるちょっと高めの体温が心地良い。
左下を見ればニマニマとした笑みを浮かべているティーナの顔。右下を見れば顔を真赤にしながらちょっと緊張した表情で俺を見上げてくるウィスカの顔。うん、こうしてみるとますます二人とも可愛いけど、このべったり加減は些か落ち着かないな。
そんな俺達を少し離れた場所からミミが微笑ましいものを見る顔で、そしてエルマは仏頂面で眺めている。

「ミミは楽しそうね」
「なんだか恥ずかしがっているヒロ様が可愛くて」
「そうかしら。鼻の下を伸ばしてるだけじゃない？」
「エルマさんも可愛いです！」
「ちょっ」

ミミがエルマに抱きついている。あっちはあっちで楽しそうだなぁ。まぁギスギスするよりは百倍良い。クルーの間をマネジメントしていくのも俺の仕事だな。これも自分が撒いた種なので、頑張るしかあるまい。

「兄さんはこれから大変やねぇ」
「おい、元凶」
「わ、私はその、たまに構ってもらえれば……」
「そうはいかないだろう……ウィスカは我慢しがちだろうから、ちゃんと言ってくれよ。俺も頑張るけど、どうしたって目が届かなかったり、鈍い面があったりもするだろうから」
「うちは？」
「ティーナはこっちが気を遣うまでもなくグイグイ来るだろ」

そう言いながら左手でティーナの頭をわしゃわしゃと撫でてやる。きゃーやめてーとか言いながらも嬉しそうなのは実に可愛い。そうしていると右脇のウィスカもぐりぐりと頭を押し付けてき始めたので、ウィスカの頭の方は髪の毛が乱れないように撫でてやる。

「やっぱり鼻の下伸ばしてるわよ、あれ」
「それはそれで良いじゃないですか。皆仲良しってことで」
「……はぁ、ミミは大物よね」
「？」

エルマにそう言われたミミは首を傾げているが、俺もそう思う。なんだかんだで傭兵の生活に適応し、帝室に入るという選択もせずに自由な生活を選んでこうしてニコニコしているミミの器の大きさは俺達の中でも抜きん出てるな。間違いない。
そのようなことを考える俺を乗せ、ブラックロータスはリーフィルⅣへと降下していくのであった。

#239　熱帯型惑星リーフィルⅣ（前書き）

ぎりぎり間に合わなかった……！　―（∵3」∠）―

#239　熱帯型惑星リーフィルⅣ

リーフィルⅣは陸地の大半が森林や密林に覆われており、全体的に高温多湿の惑星である。この世界における居住可能惑星の分類で言えば、湿潤気候に分類される熱帯型惑星といった感じである。

「なかなかに蒸し暑いな」

リーフィルⅣ――シータに降り立って開口一番に俺はそう言いながら天を仰いだ。天候は概ね快晴と言って良いだろう。しかし湿気が酷いな。日本の夏を思い出させる暑さだ。

「そう？　こんなものだと思うけど」

「エルマさんはなんともなさそうですね」

むしろいきいきしているように見えるくらいだな。いつもよりも耳の先端の位置が高いような気がするし。

「これくらいならなんともないな」

「コロニーのボイラー区画に比べればなんでもないよね」

ティーナとウィスカにとってもこの高温多湿な環境はそこまで辛いものでもないらしい。俺とミミだけか、この蒸し暑さを不快に感じるのは。

「しかし、こうしてみるとやっぱブラックロータスってデカいよな」

「そうですね。スキーズブラズニル級母艦は母艦の中でも大型の部類になりますから」

俺の直ぐ側で控えていたメイが相槌を打ってくれる。当然ながらメイドロイドである彼女はこの蒸し暑さに不快感を感じるわけもなく、この暑さの中でもしっかりとメイド服を着込んでいるのに涼しい顔をしている。

ちなみに、ブラックロータスが停泊しているのはシータ上に存在する航宙艦停泊施設である。空港と港を足したような巨大施設で、ブラックロータスはその中でも一番大きなドッグを占拠する形になっていた。

「これで停泊料は無料っていうんだから太っ腹だよな」

「ご主人様の為されたことが早速功を奏しましたね」

「別に頑張ったのは俺だけじゃ……でもないのか？」

「船に突入したのはヒロ様と戦闘ボットだけですからね」

「ミミもサポートを頑張ったけど、結局やったのは殆どヒロよね。船を拿捕しようって判断したのも、スラスターや武装をピンポイントで破壊したのも」

「それでも俺一人の功績ではないと声を大にして言いたい。俺達はチームだからな」

あと、戦闘以外の業務は基本的に皆に投げてるしな。今、全部の作業を一人でやれと言われたらブラックロータスを売却して身軽なクリシュナだけでやっていくことになると思う。ブラックロータスを導入して儲けは大きくなったが、戦利品の管理や売却、それに停泊手続き関連に必要なマンパワーは増加しているのだ。広いから掃除も大変だしな。

「あ、兄さん。迎えっぽいのが来たで」

ティーナが指差す方向を見ると、バスのような形状の車両がこち

らに走ってくるのが見えた。
「結構な年代物の車両みたいですね。でも走行は安定してがたつきも殆どないみたいです。多分丁寧に整備されているんですね」
両手でひさしを作りながらウィスカがこちらへと向かってくる車両をそう評価する。今日はいつもの整備用ジャンプスーツではなくいかにも少女らしいフリル付きの白いワンピースを着ている彼女だが、服装には関係なく何かしらのメカを見ると分析せずにはいられないらしい。
エンジン音らしきものも無く、非常に静かに現れたバスは俺達の前に停まり、ドアが開いて一人のエルフの女性が降りてきた。光沢のある緑色の生地でできたチャイナドレスのような衣装を身に着けたエルフの美女である。胸部装甲は控えめだが、深めのスリットの奥に垣間見える白い太ももが目に眩しい。髪の毛の色はエルマと似た白銀色だ。
「ほう……いてっ」
感心の声を上げたら尻と脇腹に痛みが走った。エルマの肘鉄とティーナの張り手である。手加減してるんだろうけど普通に痛い。というか、ああいうチラリズムに目を引き寄せられるのは男の性って奴だからお目溢し願いたい。あれは高度な視線誘導技術だと思うんだ。
「お待たせ致しました、ヒロ様御一行ですね？」
「そうだ。お出迎えどうも」
「いえ、ヒロ様は我々の恩人ですから。同族の方もいらっしゃったのですね」

そう言って案内役のエルフ女性はエルマに視線を向ける。

「私はローゼ氏族、ウィルローズ家の分家の血筋よ。曽祖父の代に空に上ったの」

「ああ、やはりローゼ氏族ですか。その髪の色でそうではないかと思っていたんです。では、私と同郷ということになりますね」

案内役のエルフの女性が屈託のない笑みを浮かべる。なるほど、氏族によって髪の毛の色が違うのか？　でも遺伝的なものだろうし、異なる氏族間で血縁を結べば一概に髪の毛の色だけで判断できるとは思えないんだけどな。ただ、エルフは生態がかなり謎だからな……特に繁殖関係はかなり複雑怪奇な感じだし。

「話はそれくらいにして早く車に乗ってもらえ。客人に立ち話をさせるものじゃない」

「そうですね。皆様、どうぞお乗りください」

バスの中から聞こえてきた男性の声に従って案内役の女性エルフが俺達に乗車を促す。俺達は全員手荷物持ちだが、車内には十分な余裕があって問題なく乗り込むことが出来た。手荷物の中身は着替えやちょっとした身の回りの品など、概ね宿泊に必要なものだ。あとはレーザーガンとか俺の場合は大小一対の剣とか。流石にレーザーライフルやグレネードの類、それにパワーアーマーやコンバットスーツなどの本格的な戦闘用装備は持ち込んでいない。

高温多湿だって話は聞いてたから、全員分のカメレオンサーマルマントは持ち込んでおいたけど。あれはテラフォーミング中の惑星でも快適に行動できるくらいの環境適応能力があるからな。熱帯型惑星のシータでも屋外活動をする際には役に立つことだろう。

「ヒロ様は貴族なのですか？」

俺の剣を目にした案内役の女性エルフが首を傾げる。
「いや、そういうわけじゃない。その剣は貴族から下賜された剣ではあるけど。公的な身分として貴族位を持っているわけじゃないよ」
「ゴールドスターを授与されているから、公的な地位としては子爵相当だけどね」
「貴族相手でもなければ効果を見込めるものじゃないだろ……そうでないとしてもそんなもん普段から振り回す気にならんぞ」
棚ぼたで手に入れた地位を振りかざすのって小物ムーブっぽいしな。敢えて隠すようなものでもないし、使える時は使うけど必要でない時にまで使うのはどうも気が咎める。
「そう言えばこの後のスケジュールってどうなっているのだろうか？」
「はい。まずはこのシータ総合港湾施設の近くにある宿泊施設に皆様をご案内させていただきます。その後は皆様のご希望に沿って近隣の施設などを案内させて頂き、夜には宿泊施設で皆様を歓迎する宴が開かれる予定ですね」
「なるほど。近隣の施設ってのがどんなものなのか楽しみだな」
ショッピングを楽しめる施設なのか、それとも博物館とか美術館的な施設なのか。動物園とか遊園地みたいな施設とかでもいいな。ああ、何かしらの体験系施設とかもいいな。エルフは独自の文化が色々ありそうだし。できれば薬湯関連についても情報を得たいところだな。
「うたげ……」
「宴、ええね」

「えへへ、楽しみだなぁ」

ミミとティーナとウィスカがもう既に夜の宴会という言葉に心を奪われている。君達、ちょっと欲望に忠実過ぎないか？　いや、コーラを探すためだけに恒星間航行をしてまでエルフの星に来ている俺が言うのも変な話だけどさ。

「うーん……」

エルマが難しい顔をしている。どうした？　と目で聞いてみると、エルマが難しい顔をしたまま口を開いた。

「一応シータまで来たなら本家に顔を出しておいたほうが良いかなと思って。曽祖父の代に本家から別れて星からは出たけど、一応親戚だからね。小さい頃に顔見せに来たこともあるし」

「なるほど、それは暇を見つけて行くべきじゃないか？　下手すると実家に迷惑をかけかねないだろ？」

「うーん……まぁ、そこまで気にする必要はないとも思うんだけどね。私は家から出る予定なわけだし」

「行こうぜ。クリシュナで飛んでいけばすぐだろ。俺もエルマのルーツってのを見てみたいし」

「そう？　それじゃあ時間が出来たら行きましょうか」

難しい顔をしていたエルマが笑顔を見せてくれる。うんうん、折角のリゾートみたいなもんなんだし、難しい顔をしているよりは笑っていた方が良いってもんだ。流石にこの下にも置かない歓迎っぷりでいきなりピンチになることもなかろうしな。まずは目一杯楽しむとしよう。ついでに色々と用事を片付ければいいさ。

#２３９　熱帯型惑星リーフィルⅣ（後書き）

原稿作業のために２０日の更新を終え次第更新をお休みする予定です。
ゆるしてね！！　―（：３」∠）―

#２４０　エルフの文化体験（前書き）

寒くてオフトゥンから出たくない日々が続きますね……―（：３」∠）―

#２４０　エルフの文化体験

いつぞやのお義兄さんのようにいきなり「決闘だ！」などという展開が起こることもなく、俺達は至って順調かつ平和にエルフの里――大規模な総合港湾施設の傍に作られた観光施設のようなもの――の観光を満喫できていた。

最初に寄った宿泊施設は日本に居た頃にテレビで見た老舗旅館のような雰囲気を持つ施設で、平屋の大きな宿であった。多分こういうのにも「～式」みたいな表現があるんだろうが、俺は知らない。あまり旅行好きって感じでもなかったからな、俺は。興味のないことまで調べるほど暇でも酔狂でもなかった。何よりゲームに傾倒してたしな。

「素敵なところですね」
「そうね、落ち着くわね」
「風情があるなぁ」
「ワビサビーってやつだね、お姉ちゃん」
「サービスの質も悪くないですね」

女性陣は旅館風の宿泊施設を大層気に入ったようである。どうやら天然の温泉も湧いているようで、大きなお風呂や露天風呂があるらしい。俺達の部屋にもそこそこの大きさの露天風呂が設置されている。大きな方は男女別だが、部屋についている露天風呂は勿論好きに入って良いようだ。これは夜が楽しみだな。

手荷物を置いて身軽になったら近隣施設を回ることになる。

「どんな施設があるんだ？」
「そうですね。エルフの文化やシータの産物を紹介する博物館、様

々な工芸品を展示している美術館、様々な動植物を展示している自然博物館辺りが定番かと思います」

案内役を務めているローゼ氏族のエルフの女性――リリウムさんがオススメの場所を教えてくれる。ふむ、どれも興味はあるな。その三つだと俺は自然博物館が気になるけど。

「私は博物館が気になります」
「私はどれでも良いわ」
「うちは美術館が気になるなぁ」
「私もどこでもいいです」

こういう時にはメイは自分からは意見を言わない。まあ、俺が判断した先に着いていくのがメイドロイドとしては正しいのだろうから、そんなものだろう。

「お土産を買うならどこが良いんだ？」
「美術館に併設されているお店でエルフの工芸品を購入することが可能ですね。博物館や自然博物館にも土産物は置いていますが、大きな店ではないです。ただ、博物館にはエルフの各氏族に伝わっている郷土料理を味わえる食堂が併設されています」
「なるほど。なら最初に博物館に行って食事を取ってから美術館に行って、その後でまだ時間があるようなら自然博物館に行くって方向でどうだろう」

俺の提案が了承される事となり、まずは博物館に行くことになった。時間的にもお昼時に丁度良いしな。

「着いてきてくれるんだ」
「はい、私とヒィシは族長達から案内役を仰せつかっているのでお

供しますよ」

俺の言葉にリリウムさんはそう言って上品な笑みを浮かべた。

ヒィシというのはバスの運転手を務めてくれている男性エルフの名前である。彼はミンファ氏族――俺が船で助けたネクトと同じ氏族だ――の出身で、寡黙で口数の少ない人だ。それでもしっかりと仕事はこなしてくれるので何の問題もない。まぁ、博物館に俺達が入る際にはバスで待機するようだけど。

「ヒロ様はあまり気にされていないようですが、今回の件で私達エルフは本当に感謝しているんです。あの宙賊は襲撃の際に多くのエルフを殺した上に、森まで焼き払いました。祭祀堂も半壊し、御神木にも大きな被害が出たのです。同胞と御神木の仇を討ってくれた恩人に最大限の礼を尽くすのは当然ですよ」

「なるほど」

祭祀堂とか御神木とかよくわからない言葉が出てきたが、恐らくエルフの信仰上重要な施設とか、信仰対象とかそんな感じのものなんだろうな。襲撃の際に宙賊はそれらにも攻撃を仕掛けてエルフの恨みを買ったわけだ。

しかし俺にしてみればたまたま見つけた宙賊を気まぐれに拿捕したら捕虜がいたというだけの話である。それでこんな風に歓待されるのはなんとなく据わりが悪い感じがするんだよなぁ。

などと考えているうちに博物館に到着した。展示内容は興味深くはあるが、特筆するようなものでもない。シータのエルフ達がどんな暮らしをしているのか、日常生活でどのような道具を使っているのか、そして帝国と関わることになって何がどう変わったのか、ということが資料とともに展示されている。

「帝国に降ってもシータに残ったエルフ達の生活はあまり変わって

いないんだな」
「そうみたいですね。高度な医療とか、一部の技術は導入してるみたいですけど」
医療技術やインフラ系の技術に関しては結構積極的に取り入れている部分もあるようだが、農耕と狩猟をメインに精霊を信仰しながら森と共に生きるという生活の根幹は大きく変えていないようだ。
「ふぅむ、狩猟も弓矢とか刃物で直接斬りかかるとかワイルドやなぁ」
「罠とかも使うみたいだけど、基本的になんというかこう……うん、ワイルドだね」
ウィスカ、間違っても野蛮とか脳みそマッソーとか言うんじゃないぞ。
「エルフにとって狩猟ってのは害獣の駆除ではなく、信仰対象の森との力の比べ合いとか、森から恵みを分けてもらう神聖な行為ってことなんだろう。そこにハイテク兵器や自律型のドローンとか戦闘ボットを持ち込むのは無粋って考えなんじゃないか」
「うーん、うちらにはちょっと理解し難いなぁ。そういうの使ったほうが効率的やん？」
「効率とかそういうんじゃないんだよ、きっと。例えて言うならクラシックな機体をフルチューンして最新鋭機と張り合えるようにする浪漫みたいなもんなんじゃないか。そういう情熱を持ってエルフ達は今の生活を選んでいると思えば良いと思うよ」
「なるほど、それなら少し理解できるかもです」
俺の説明にドワーフ姉妹は一応納得してくれたようだ。ドワーフというのは新しいものに目がない。種族的に新しいものを受け容れ、

より良いものを作ることが大好きらしいので、古い伝統を守って非効率的とも思える生活を選ぶエルフには理解し難いものを感じるのだろう。

「ヒロ様、あっちでエルフが使う弓矢の試し撃ちができるみたいですよ」

「へぇ、弓矢か。弓矢は撃ったことが無いなぁ」

前にリゾート惑星に滞在した時に止まったロッジに飾られてはいたけど、触りもしなかったからな。ちょっと面白そうだし触ってみるか。

「やるならミミは胸当てを着けたほうが良いわね。弦が当たると痛いわよ」

「エルマさんもやりましょうよ」

「うちらもやるー」

ワイワイと皆で弓矢の体験コーナーに集まって弓矢で遊ぶ――というのは言葉が悪いが、まぁ遊びみたいなものだよな、これは。矢尻部分は丸めた布みたいな形になっていて一応殺傷能力は皆無に近いが、それでも人に向けたりすれば危ないし、ふざけて扱うのはよろしくない。体験コーナーの担当者と経験者のリリウムに教えてもらいながら安全に弓矢の試射を行う。

「まっすぐ飛びません！」

「難しいなぁ、これ」

「ああ！　外れちゃった！」

ミミとティーナ、ウィスカはなかなか的に当てられない。ミミは胸が邪魔なんだろうか。ティーナとウィスカは弓の大きさが体格に

合ってないせいだろうな。彼女達にも扱いやすいもっと小さな弓ならもう少しマシになるんじゃないだろうか。

「まぁ、私もあんまり触ったことはないからこんなもんよね」

と言いつつ、エルマはそこそこ的に当てている。やはり胸がない方が弓矢を扱うのには向くのかも知れない。

「ヒロ様はお上手ですね」

「俺のはズルみたいなもんだから」

息を止めればピタリとブレが収まり、回りの時間の経過が遅く感じる。そんな中でじっくりと狙って矢を放っているので、俺の弓矢の命中率は非常に高かった。レーザーガンを撃つ時と同じで当たる感覚というのが何故かわかるのだ。この息止めの特殊能力といい、縁がないはずの射撃スキルの高さといい、どうも俺自身にも由来がよくわからん能力があるんだよなぁ。

前にアレイン星系で精密検査を受けた際には間違いなく健康体だという太鼓判を押されたわけだし、さして気にする必要もないんだろうけど気になることは気になる。確か多言語翻訳インプラントってのも入ってないのに、今の所言葉に不自由した覚えもないんだよな。

弓矢体験コーナーで弓矢を撃ってひとしきり満足した俺達は併設されている食堂で食事を取ってそのまま美術館に向かうことにした。エルフの工芸品ね。どんなものがあるのか少し楽しみだな。

#241　美術館――というか郷土資料館？（前書き）

遅れました！　ゆるして！
あと、原稿作業に入るので今日から暫く更新をお休みします！　ゆるして！――（：3」∠）―

#２４１　美術館――というか郷土資料館？

博物館を後にした俺達は美術館へと移動した。移動手段は当然ながらヒィシ氏の運転するバスである。

「なんつうか、博物館もそうだったけどここも美術館というよりは郷土資料館みたいだな……」
「郷土資料館？」
「なんというかこう、鄙びた感じがね」

俺の言葉に今ひとつ共感できないのか、ミミが首を傾げる。
基本的に今までに見たエルフ様式の建物というのはどことなく和風な感じのする平屋建てか、せいぜい二階建ての建物である。屋根は黒光りする瓦葺きで、家屋そのものは基本的に木造だ。立派な造りではあるのだが、どうにもこう、日本の田舎にある郷土資料館っぽさを感じずにはいられない俺なのであった。

「ほら兄さん、ボサボサしとらんと行くで」
「ＯＫＯＫ、わかったから引っ張るなパワーが強い！」

ティーナが俺の手を取ってずんずんと美術館に引っ張っていく。この小さな身体のどこにこんなパワーがあるんだと言いたくなるくらい力が強いんだよな、ティーナは。いや、ティーナだけでなくウィスカもそうなんだけど。うちのクルーで一番力が強いのは言うまでもなくメイなのだが、その次に力が強いのはティーナとウィスカだ。ちなみにこの二人は見た目に反して体重が……おっと、前後から殺気を感じる。オレハナニモカンガエテナイヨー。

「はえー……こら綺麗やねぇ」
「ほう、漆器かな？」

美術館に入ってすぐに展示されていたのは黒光りする器に金色の装飾が施された器であった。重箱のような形をしている作品で、黒く輝く箱に金色の植物柄が非常に良く映えている。

「しっき？」
「木製の器に樹脂を幾重にも塗りつけては乾燥、塗りつけては乾燥って感じで作った器を俺の故郷ではそう呼んでた。これが同じものかどうかはわからんけど、そう見えるな」

展示物の説明書きを読むと、やはりこれは漆器のようなものであるらしい。リーフィルⅣに自生している木の樹液を木の器に幾度も塗り重ね、蒔絵を施して作られたもののようだ。

「兄さんの言う通りやったね」
「この器、綺麗ですね……この深みのある黒は他じゃあまり見ない気がします」
「ふむ、そう言われると味がある気がするな」

とは言え、こうして見る分には綺麗だけど実用性があるかというと微妙に思える。女性ならば化粧品入れや小物入れとして使うのも良いかも知れないが、俺みたいなガサツな男には使い途がないな。精々プレゼント用ってところか。漆塗りの櫛くらいなら俺でも使い途はあるかも知れないが……俺は普通に合成樹脂製のブラシで十分だな。俺には似合わないけど、綺麗な黒髪のメイには漆塗りの櫛は似合うかも知れない。後で土産物屋でも覗いてみるかな。
そうして美術館の奥へと進んでいくと、漆器の他にも実に様々な産品が展示されている。見事な絹――大型犬くらいの大きさの蛾の

繭から取った糸らしい――の織物や、その織物を使ったきらびやかな衣装の数々。その中にはリリウムが着ているのと同じチャイナドレスのような衣装もあった。説明書きを見る限り、ローゼ氏族に伝わる女性用のドレスという扱いであるらしい。

「お、兄さん兄さん、精霊銀の狩猟刀やって」
「ほう……剣鉈って感じだな」

かなり大ぶりの片刃のナイフみたいな感じだな。刀身は精霊銀という名前の通り、眩い銀色って感じだ。銀ってのは基本的に刃物に向く金属じゃない筈だが、精霊銀はこのように実用的な刃物として使われている。ということは、俺の知っている普通の銀よりも強度や靭性が高いのだろうか。銀という名前が付いてるけど、物性はかなり異なる物質なんだろうな。

「こんなに短い刃物で凶暴な動物を仕留めるのって、かなり危険ですよね？」
「うーん、話を聞く限りでは狩猟対象の動物はかなり危険そうな感じだったし、実際には弓矢で仕留めるんじゃないか？　この剣みたいに複合強化装甲でもすっぱり斬れるようなら話は別だろうけど」
「ほんならこれは不意に接近された時用のサブウェポンっちゅうことか」
「あるいは止めを刺したり、獲物の解体に使ったりしてるのかもな」
「あ、お姉ちゃん。こっちに刃引きされた精霊銀の狩猟刀が置いてあるよ」

少し先に進んでいたウィスカがそう言って俺達を呼ぶ。ウィスカの下へと向かいながら後ろに視線をチラリと向けてみると、ミミとエルマ、それにメイはエルフの様々な民族衣装を展示しているスペースで何か喋りながら話し合っているようだった。エルマに何か聞

いているみたいだ。

「おー、兄さん兄さん、これ見た目に反してめっちゃ軽い」

「ほう？　どれどれ」

盗難防止用なのか、柄の部分に展示台と繋がった頑丈そうなワイヤーが括り付けられている精霊銀の狩猟刀を手に持つ。結構刀身は分厚い。刀身の長さは３０ｃｍくらいだろうか？　ナイフとして見ればかなり大型だろう。反りの無い片刃の刀で、切っ先は見るからに鋭い。これは刃引きしてあっても余裕で人体に突き刺さるだろうな。なんとなくだが、刀身の作りが日本刀というか、短刀っぽい感じがする。

「確かに軽いな……軽すぎて玩具っぽい感じすらするぞ」

「鉄に比べるとかなり軽いですよね。アルミニウムと同じくらいだと思います」

「これで刃物として十分な強度があるならなかなかに使い勝手が良さそうだけどな」

「ところがこういうＰ・Ａ・Ｍ系の金属って熱に弱いんよ」

「レーザーとかに晒されるとすぐに強度が落ちるから、航宙艦の素材としても今ひとつなんですよね。モノソードの素材としても今一つって感じらしいです。レーザーを弾いたらすぐにだめになるので」

「なるほどなぁ」

二人の説明を聞きながら刃引きされた精霊銀の狩猟刀をためつすがめつしていると、妙なことに気がついた。なんだかこの狩猟刀、震えてないか？

「なぁ、この狩猟刀って超振動機構的なものでも組み込まれてんのかね？　なんか震えてるように思うんだけど」

「どうやろな？　刃物としての切れ味を上げるために機構が組み込まれてもおかしくはないと思うけど、手で振動を感じるようじゃダメやない？」
「振動が感じ取れるようなのは基本的に不良品ですね。危ないから置いたほうが良いと思いますよ」
「なるほど」

しかし展示用の刃引きされた狩猟刀にそんな機構が組み込まれているものだろうか？　まぁ怖いから展示台に戻しておくか――と、展示台に刃引きされた狩猟刀を置こうとした瞬間、ピシリと嫌な音が響いた。

「「「あっ……」」」

刃引きされた狩猟刀を展示台に置いた瞬間、狩猟刀の刀身が砕け散った。折れたとかではなく、粉々に砕け散ったのだ。まるで負荷に耐えきれずに崩壊したかのような様相である。

「……これは俺が悪いんだろうか？」
「いや、どうやろ……最後に触ってたのが兄さんなのは間違いないけど」
「別に変なことはしてないですよね……？」

俺に責任は無いように思えるが、だからと言って黙っているというわけにもいくまい。仕方がないのでリリウムを呼んで事情を説明することにした。

「えぇ……？　これは？」

刀身が粉々になっている刃引きされた狩猟刀を見てリリウムが困

惑の表情を浮かべる。そうだよね、困惑するよね。普通に真っ二つに折れてるとかならまだしも、こんなに粉々に砕け散っているとかどう見ても普通の状態じゃないよね。

「言うのがとても憚られる言葉なんだけど、本当に何もしてないのに壊れたんだ」

「うちらも兄さんも刀身には指も触れてないんよ、本当に」

「柄を持って色んな方向から刀身を眺めていただけなんです、本当に」

「まぁ最後に手に持ってたのは兄さんなんやけど」

「突然の裏切り」

「事実は事実やし。こういうのは包み隠さず言うのがええやろ」

「そうだけどさぁ」

などと話しているうちに美術館の人も現れて粉々に砕け散った狩猟刀を目の当たりにして困惑している。何故こんな壊れ方をするのか全く理解できないようだ。

「その腰のレーザーガンで刀身を炙ったりは……？」

「してないしてない。本当にしてないです。そんなことをする理由がない」

「ですよね……」

「精霊銀が熱に弱いなら、レーザーガンの最低出力で何回か撃てばそんな感じで壊せるのかな？」

「できるかもしれんけど、そんなことはやってないしなぁ。兄さんやないけど、やる理由も無いで」

「だよね」

俺が壊したわけじゃないと思うが、明らかに不審な壊れ方をしている上に最後に触っていたのは俺だったということで、弁償の申し

出はしておくことにした。まぁ、固辞されたのだけど。

「原因不明の破損ですし、どう見てもお客様が故意に壊したようにも見えませんので」

一応盗難防止用の監視カメラの映像も確認したところ、やはり俺達の行動に不審な点は無いということで無罪放免ということになった。砕け散った狩猟刀は研究施設に送って何が原因でこうなったのか調査するということだ。

「あんたも本当に変なトラブルに好かれるわよねぇ……」

「あはは……」

「俺は悪くねぇ……」

後始末が終わったあとでエルマに呆れられ、ミミに苦笑いされた。俺がトラブル体質だというのはもう認めるけど、流石にこれは予想できないだろう。頑丈そうな狩猟刀が持っただけで砕け散るとか予測しろって方が無茶だ。

「ええと、そろそろ良い時間ですし、旅館に戻りましょうか？　戻って一休みしたら祝宴に丁度よい時間だと思います」

「そうね、そうしましょう？」

リリウムの提案にエルマが賛成し、他の面々も同様に賛意を示す。なんだか狩猟刀粉砕事件でどっと疲れた感じがするから、休憩は大賛成だ。祝宴でこれ以上のトラブルが起きないように祈ることにしよう。

#242　土産物屋（前書き）

更新再開！―（∵3」∠）―

#242　土産物屋

俺が手に持っただけで精霊銀の狩猟刀が砕け散るというハプニングはあったものの、美術館鑑賞は非常に満足できる内容であった。というか、広くて全てを見て回れなかったので、後日またゆっくり訪れたいと思う。

で、旅館に向かう前に土産物屋に来たわけだが。

「センスで」

「期待してますね！」

「なんか悪いなぁ」

「い、良いんですか？　結構高いのばかりですけど」

エルマがニヤニヤとした笑みを浮かべ、ミミが輝くような笑顔を俺に向け、ティーナは悪いなぁと言いつつも嬉しさを隠せずニヨニヨとし、ウィスカはおろおろとしながらも期待した目をこちらに向けてきている。

「……」

メイは俺が買い与えた漆塗りの櫛を眺めながら停止している。あれは嬉しがっているのだろうか？　手に持った櫛をじーっと見つめたまま動かないんだが。

ちなみにメイに買ったのは蓮が描かれた漆塗りの黒い櫛である。メイはブラックロータスをよく管理してくれているし、これが良いかなと思ったのだ。

「センスには自信が無いんだが？」

「メイに買った櫛とか十分にセンス良いと思うわよ？　その調子そ

の調子」
「気楽に言ってくれるなあ」
結局エルマとミミには前にドレスを用意した時に買った宝飾品を入れておくための漆塗りの小物入れ、ティーナとウィスカにはそれぞれ赤い石の玉簪と飾り紐のセットと青い石の玉簪と飾り紐のセットをそれぞれ買ってやった。

「私のは水仙ね」
「私のはなんでしょう？」
「それは向日葵だな」
「髪の色に合わせてくれたんやね」
「綺麗……」

あまり花に詳しくないミミに花の名前を教えてやりながら皆の様子を伺うに、どうやら皆一定以上の満足はしてくれたように思う。メイは未だにフリーズしてるけど。大丈夫か？

「ミミのは何となく分かるけど、私のこれはどういう意図かしら？」
エルマが白い水仙が描かれた漆塗りの小箱を俺に見せながら問いかけてくる。

「俺は花言葉とかそういうのは知らんぞ。ただ、見た中でエルマのイメージに合致するのがそれだっただけだ。綺麗だろ？」
「ふーん？　ヒロにとっての私のイメージがこれってことね。なるほど」
なんだか思わせぶりな感じだが、機嫌は良さそうなのでヨシ！
ちなみにミミへのプレゼントが向日葵の絵なのは、ミミの明るさと

いうかそんな雰囲気が向日葵のイメージと合致したからだ。それ以上の意味はあまり無い。
整備士姉妹は早速玉簪を使ってリリウムに髪を結い上げてもらったようだ。

「おー、こんな棒一本で簡単に髪を結い上げられるんやね」
「覚えなきゃだね、お姉ちゃん」
「結い上げ方を解説した動画とかありますよ。良かったら後でファイルを用意しておきますね」

あっちはあっちでご機嫌のようだ。うむ、俺のセンスも捨てたものではなかったかな？　とりあえず喜んでもらえたようで何より。

☆★☆

ミミとエルマへのプレゼントはブラックロータスに発送してもらい、旅館へと向かう。メイに買った櫛はケースもセットだったので、メイは俺が贈った櫛をケースに入れて大事に自分のメイド服のどこかに仕舞ったようだ。どこかに隠しポケットでもあるのかね。
ところでメイド服、隠しポケットと考えるとどうしても胸に目が行ってしまうのは男の本能だと思うんだけどどうだろう？

「どうぞ」

俺の視線に気づいたメイが両手で自分の形の良い胸を持ち上げる。ミミほどではないが、メイのおっぱいもなかなかのボリュームだ。というか、一般的に見れば巨乳の類であろう。ミミが規格外なのだ。

「どうぞじゃない。そうじゃない」
「そうですか？」

流石に脈絡もなくメイの胸を揉みしだくのは絵面的によろしくないのでやらない。後でね。もっと相応しい場でね。うん。
まぁそういうのもいいけど折角だからメイの髪の毛を買った櫛で梳かしてみたいな。メイの髪の毛は長くて綺麗だしきっと楽しいと思うんだ。
さて、そんな会話をしている俺は何をしているのかと言うと、宴会が始まるまでに少し時間が出来たので風呂に入って丁度上がったところである。ミミ達はお風呂上がりの身支度に少し時間がかかっているので、割り当てられた部屋でくつろいでいるのは俺とメイだけだ。
ちなみに、メイは風呂には入っていない。彼女はメイドロイドだから、基本的に風呂に入る必要が無いんだよな。無論、致した後とかは一緒にお風呂に入ることもあるけど、そうでもない限りは定期的に行っているメンテナンスポッドによるメンテナンス時に全身の洗浄をしていて、それで事足りる。服は埃っぽくなったりするから結構マメに着替えてたりするし、俺がメイの綺麗な髪を気に入っているから、髪の毛のケアは欠かしていないようだけど。

「そう言えば、各氏族の調査とかそういうのってしてるのか？」
「はい。お話ししましょうか？」
「うーん、軽くな。危険はないんだろう？」
「少なくともこの場では。簡単に話しますと、エルフの氏族達が取っている立場は三つです」

一つはローゼ氏族を長とする派閥で、積極的に外――つまりグラッカン帝国に、宇宙に進出してエルフの生息域を広げ、種族としてのエルフの認知度や地位を高めようという派閥だ。エルマの実家であるウィルローズ家、そしてウィスローズ氏族はこの派閥に属している。

もう一つはグラード氏族を長とする派閥で、エルフは母星であるシータで精霊とご神木と共に生きていくべきだ、という所謂保守派だ。彼らは精霊や森との繋がりを重んじ、グラッカン帝国がこのシータ――というかリーフィル星系を支配する前の生活と文化、伝統を守り、エルフ本来の生を全うするのがエルフにとっての幸福な道なのだと主張しているそうだ。

そして最後の一つがミンファ氏族を長とする中道派だ。エルフの古来からの伝統や文化は尊重すべきだが、それはそれとしてグラッカン帝国から齎される様々な恩恵は享受するべきだし、外から色々なものを取り込んでエルフの暮らしをより良いものにするべきだと考えている。

この三者の立場の違いは暮らす場所などにも現れており、ローゼ氏族の人々は頻繁にシータと宇宙を行き来し、シータ上の住居なども最新の建築技術や素材を利用した近代的な家屋に住んでいるという。また、魔法についても嗜み程度には用いるが、あまり重要視はしていないそうだ。確かにエルマもそんな感じだな。

イメージ的にはファンタジー世界で言うところの所謂シティエルフといった具合だろうか？

対象的にグラード氏族を長とする派閥は森の中に木材で昔ながらの樹上家屋などを作って暮らしているらしい。テクノロジーの類も殆ど使わず、積極的に魔法を使って暮らしているのだという。

こっちはアレだな、正統派エルフって感じだな。

ミンファ氏族を長とする中道派の人々はどうなのかというと、昔ながらの樹上家屋に最新の家電を入れていたり、狩猟に最新のハイテクガジェットを使っていたりと双方の良いとこ取りでなかなかに快適な生活を送っているそうだ。魔法に対するスタンスも中道で、重視している人もいればそうでない人もいるとか。

「なるほどな。で、グラード氏族とローゼ氏族は折り合いが悪いと」

「そうなります。スタンスが対照的なので」

まぁそうなるわな。うん？　でもそうなると……？

「確か今回の発端の事件って、グラード氏族とミンファ氏族の婚姻を宙賊が襲撃したって感じだったよな」

「はい、そうですね」

「その状況って、グラード氏族とミンファ氏族が強力に結びつくことを忌避したローゼ氏族が宙賊をけしかけて婚姻の儀式を滅茶苦茶にしたって構図が浮かぶんだが」

「はい。グラード氏族とミンファ氏族はその線を強く疑っていますね。星系軍の軍人の多くはローゼ氏族出身です。宙賊への情報リーク。襲撃の見逃し。その双方においてローゼ氏族は両氏族から強い疑いの目を向けられている状況のようです」

「Ｏｈ……俺達には関係ないっちゃ関係ない話だが」

俺達はグラード氏族とミンファ氏族の族長筋のエルフを助け、結果としてローゼ氏族の尻拭いをした形になるわけだから、どの氏族からも感謝こそされど恨みを買うようなことは無いはずだからな。俺達はすぐにこの星系を去る余所者でもあるし、面倒事に巻き込まれる要素はまずあるまい。

あるとしたらエルマの実家というか本家の繋がりでローゼ氏族から何かあるくらいか？

「まぁ、なるようにしかならんか。流れに身を任せよう」

「それが良いかと。いざとなればこの星系から出ていってしまえば良い話なので」

「だな」

俺達は自由な傭兵だからな。いざとなったら全てうっちゃってケツをまくればいいんだ。うん。

＃２４３　歓迎の宴と予想外の方向からの厄介事（前書き）

なんか気付いたら長くなっていた……！

#２４３　歓迎の宴と予想外の方向からの厄介事

「どうですか？」
「どや？」
「可愛い可愛い」

エルフの民族衣装を身に纏ったミミ達を前に素直な気持ちでパチパチと手を叩く。
ミミは胸当てと膝上くらいまでの短いスカートの上に長い布を纏って身体を覆うような……あー、なんかこれも見たことあるな。インドとかあの辺の民族衣装じゃなかったかな？
体を覆う布の色彩は鮮やかで、肌触りも良さそうだ。アレはあの中型犬くらいの大きさの芋虫から採った糸で作られたものなんだろうな。
ティーナとウィスカは革製と思しきワンピースのような衣装で、どことなくネイティブアメリカンのような雰囲気を感じさせる装いだ。基本的に茶色と焦げ茶で構成されている素朴な衣装なのだが、所々が青や白の石で作られたビーズなどで飾られていて地味すぎることもなくかっこいい。

「……何よ？」
「いや、バッチリ決まってるなと」

エルマが着ているのは純白のチャイナドレスのような衣装である。リリウムが着ていたのと同じタイプの衣装だな。スラッとしているエルマにこれ以上無く似合っている。深いスリットから覗く太ももが眩しい。

「いや、本当に似合ってる。うん。素晴らしいな」
「ありがとう。ちなみにこの色は既婚者用だから」
「マジで？　既婚者用なのにそんなにスリット深いの？」
「エルフの男って淡白なのが多いらしいわよ。知らないけど」
「なるほど？」

だから少しでも劣情を煽りやすいようにスリットが深いと？　まことに？　やっぱこの世界のエルフってなんかおかしくない？

「しっかしミミのはおっきいよなぁ」
「あんっ、ちょ、ティーナさん！」
「そう言うあんた達二人も背の割にはあるわよね」
「私達も一応大人ですから」

普段は作業用のジャンプスーツを着ているから目立たないが、実は整備士姉妹もそこそこ胸はある。たまにティーナなんかは風呂上がりに薄着で休憩スペースを闊歩していたりするんだけど、意外におっぱいがちゃんとおっぱいで二度見した覚えがあるぞ。

そんな感じで女性陣がじゃれ合っているのを楽しく眺めていると、旅館の従業員エルフさんが俺達のことを呼びに来た。どうやら準備が整い、俺達を歓迎してくれるというエルフの各氏族の人々も集まったらしい。俺達は最後に会場に登場するという段取りであるようだ。

え？　俺の服？　俺の服はいつもの傭兵服だよ。俺の衣装なんてどうでも良いし、一人くらいは傭兵らしい格好をしているべきだろう？　それにこの服なら何かあっても即応できるしな。

ちなみにメイの衣装もそのままだ。メイはメイドロイドなので、メイド服以外の服は基本的に着たがらない。あのメイド服の中にはえげつない暗器が山程隠されているしな。戦艦の装甲材に使われているような金属で出来た礫とかダーツとか。

「傭兵のキャプテン・ヒロ殿、ご入場です」

宴会場に着くと、司会の人にそんな紹介をされて入場することになった。なんだか物凄く注目されていて落ち着かんな。全体的に好意的というか一部驚愕に目を見開いている人が……？　なんだあれは。何人かが俺の方を目をまん丸にしてガン見してるんだが。

とりあえず俺をガン見している人はあちこちに散らばっているので、こちらからアクションを起こしようもない。案内役のエルフさんに従って一番良い席――所謂お誕生日席のようなポジションに全員で揃って座る。メイだけはいつも通り俺の後ろで控えてるけど。

そうしているうちに俺達の紹介が始まる。

まずは俺。今回星系軍が惜しくも取り逃した宙賊の大型船を捕捉し、撃破せずに単身大型船の中へと切り込んでグラード氏族の族長の娘であるティニアやミンファ氏族の族長の息子であるネクトを救出。宙賊どもを剣でもって膾切りにして襲撃の際に犠牲になったエルフと、焼かれた御神木の仇を討ったのだと大絶賛だ。

その他にクルー達についても紹介される。

「キャプテン・ヒロ殿の右腕を務める彼女はローゼ氏族の眷族、ウィルローズ氏族の血族でもあります」

エルマに関してはしっかりとローゼ氏族の血族であるという事実も紹介された。エルマ曰く、実家から出て傭兵として独り立ちしている自分がローゼ氏族の関係者と紹介されるのはギリギリアウトな気もするが、自分からわざわざ訂正することも無いかという考えのようだ。実際、血が繋がっていることは間違いないわけだし。

「母なる森と空からの客人に感謝を」

「「「母なる森と空からの客人に感謝を！」」」

一通り紹介が終わると、エルフのお偉いさん――確かグラード氏族の族長だった筈だ――によって聞き慣れない乾杯の音頭が取られ、宴会が開始された。並んでいる料理は……うん、あまり奇をてらったものは無いな。虫料理が無いだけで俺的には及第点である。

「美味しいですね！」
「ふむ、エルフ料理も大したもんやな」
「そうだね、でももう少しスパイスが効いてたほうが好みかな」
「俺は十分美味しいと思うけどな」

ウィスカの言う通りスパイスは少なめだが、出汁の味がしっかりしているな。どことなく和食に似ているか？　そうでもないか。あと、結構煮込み系の料理が多いように感じるな。

「主食はこれか。ふむ？」

柏の葉のようなもので包まれた餅のような何かが主食であるらしい。見た目は柏餅みたいだが、これは葉っぱの部分も食べるのか？
辺りを見回してみると、葉っぱの部分は食べないようだ。

「ほう、これはなかなか」

柏餅の正体は味のついた挽き肉が入っている肉ちまきめいたものであった。もちもちの記事の中に甘辛く味付けされた挽き肉が入っている。これは美味しい。
他にはなにかの根菜や芋っぽいもの煮付け、肉やモツっぽいものがたっぷり入った汁物、肉の串焼き、肉のローストに果実系のソースが掛けられたもの、野菜や肉の串揚げ、なんかやたら美味いサラダのようなものなどメニューも豊富だ。

「上品な酒やなぁ」
「美味しいね」

いつの間にか整備士姉妹は土瓶に入ったワインのようなものを満喫しているようだ。葡萄のような匂いがするし、多分ワインだろう。見た目が少女なのに、ティーナが酒を飲む姿はまるでおっさんのようである。ウィスカはその点酒を飲むときも淑女前としているな。双子なのに一体どこでこのような差がついたのか……育った環境の違いか。

どうも家庭の事情でティーナとウィスカは別の環境で育ったらしいんだよな。ティーナは一時期治安の悪いコロニーでギャングとつるんでたような時期もあったらしい。それもウィスカと再会して一念発起してスッパリ足を洗ったらしいけど。

で、その後はウィスカと一緒にスペース・ドウェルグ社に入って働いて、そのうちにブラド星系で俺達と関わって今に至ると。あんまり突っ込んで聞いてはいないんだよな。今度暇がある時にでも聞いてみるか。

エルマはなんだか静かに目立たないようにしているようだ。今のシータにおける各氏族間の関係や状況については先程待機している時に軽く共有してある。恐らくエルマは自分の存在によって俺達全体がシータでの勢力争いに巻き込まれないように気を遣っているんだろう。今の状況を考えると今更どうあがいてもって感じがしないでもないが、その心遣いには感謝の念しか無いな。

で、そうして食事をある程度終わらせたところで席を立ったエルフの一段が近づいてきた。エルフは誰も彼も若く見える上にイケメンと美人揃いだから本当に違和感が凄いな。族長とかは髭を生やした偉丈夫とかだとわかりやすいんだけど、普通に線が細く見える超絶イケメンなんだよな。

「改めて我が娘を救ってくれたことに礼を言わせて欲しい。私はグラード氏族の長、ゼッシュだ」

グラード氏族長ゼッシュはティニアと同じ茶色い髪の毛のイケメンだ。頬に表傷があり、目付きが非常に鋭い。体格はエルフとしてはかなりがっしりしているように見える。細マッチョだな。衣装はティーナとウィスカが着ている革の服と同じようなデザインに見える。

「私はミンファ氏族の長、ミリアム。私もネクトの命を救ってくれた貴方に感謝の意を表明させてもらうわ。本当にありがとう。あなたの処置がなかったらあの子は命を落としていたかもしれないという話だったのよ」

ミンファ氏族の長は女性で、輝くような金髪の美人さんだ。こっちはミミが着ている衣装に近いな。ミミよりも身につけている装飾品の数が多くて非常にゴージャスに見える。

どうやらローゼ氏族の長は同行していないらしい。まぁ、かなり関係が悪くなっているという話だしな。一緒に行動して俺の目の前で喧嘩でも始められたら困る。その辺はあっちで調整してくれたのだろう。

「偶然にせよ、このシータに住む人々の役に立てたのは幸いです。今日はこのような場を設けて頂き感謝しています」

「うむ……ところで、少し聞きたいことがあるのだが」

「はい？」

何事かはわからないが深刻な様子で言い淀むゼッシュ氏に俺は首を傾げる。何やら大分深刻そうな様子だが、一体何事だろうか？

「貴殿は何者だ？　その身から溢れ出る力はまるで上位の精霊……いや、それ以上だ。見た目は人間であるようだが」
「はい？」
俺は再度首を傾げて同じ言葉を繰り返した。溢れ出る力？　上位の精霊かそれ以上？　一体お前は何を言っているんだ。
「我々精霊に親しんだ者から見ると、貴殿からはとてつもない力が感じられるのだ。まるで空に輝くリーフィルが地上に降りてきたような心地だ」
わけが分からず俺はエルマに視線を向けた。すると、エルマは目を瞑って首を横に振る。
「私にはそんなものを視るだけの力は無いから知らないわよ。魔法については本当に初歩的な部分しか修めていないしね」
「そちらの娘はローゼ氏族の眷族の血筋だったか。ならば仕方あるまいな。ローゼ氏族の者どもは精霊との交信に熱心ではない。精霊視に至っている者などいないだろうし、その娘が貴殿の力に気づかぬのも無理はない」
「でも、ここで指摘されるまでそんなこと指摘されたこともないんだが。俺、一応最新の設備を持っている医療施設で検査とかしてるぞ」
「グラッカン帝国は基本的に物質主義的な側面が強い。精霊との交信や魔法――外ではサイオニック・テクノロジーと呼ばれている分野には弱い部分がある」
ミンファ氏族長のミリアムさんがそう言いながら眩しそうな目で俺を見ている。なるほど？　確かに機械知性の開発とかサイバネティクス、生命工学分野にはかなり強い印象があるけど、魔法に関し

ては帝都でも殆ど触れる機会が無かったな。貴族の剣士もジェ○イっぽさはあるけど基本的にサイバネティクスと生命工学による身体強化でその域に到達してる感じだったし。

「つまり、どういうことなんだろうか？」

「それは我らにも判別がつかん。貴殿はそもそもどういった出自なのだ？　そこから推察していくしかないと思うが」

「俺の出自。あー、出自ねぇ」

ここで異世界から来ましたとか言ったら絶対に面倒なことになるやつだよな。絶対に言うつもりはないぞ。絶対にだ。

「実は記憶喪失気味でな。気がついたら愛機と一緒に宇宙空間で漂流してたんだ。多分ハイパードライブの事故か何かだと思うんだが、漂流中に気がつく前の記憶は曖昧で――あっと、こんな言葉遣いで失礼」

「気にしないで欲しい。貴方は私達の恩人だし、そもそも外の人。お互いに最低限の礼儀を守れば問題ない。しかし、なるほど……ハイパードライブ事故」

「さっぱりわからんな。しかし恒星間航行の際にはこの世とは違う別の世界を経由するのだろう？　その際に精霊界に接したか？」

「それだけでこんなことになるならこの宇宙はこんなことになっている人だらけ。それはない。でも、それが関係している可能性はなくもない。鍵は記憶喪失。ハイパードライブの事故で本当に精霊界に行って、何か向こうで成したのかも知れない。そして再び物質界に現界する際に精霊界からこちらに戻ってくる以前の記憶を置いてくることになったのかも」

「となると、一度精霊界に行った時点で物質の肉体は消滅して精霊と同じ存在になり、またこちらに現界する際に精霊としての性質を持ったまま肉体が再構成されたか？」

「そうかもしれない。全然違うかも知れない。どちらにせよ異常なことには変わりがない」

わぁ、なんだかこのふたりめちゃくちゃにふぁんたじーでわけがわからないぎろんをしている。

とりあえず特大級に厄介な事が起こりつつあるということが理解できてきたぞ。この宴会が終わったら速攻でケツまくって逃げようかな。うん、そうしよう。絶対にヤバい予感しかしない。

「お腹もいっぱいになったし、エルフの皆様の歓迎も十分に楽しませてもらったから俺達はこの辺りで御暇させてもらおうかと」

「それはいかん。貴殿には返すべき恩がまだたんとある」

「とんでもない。その力、無駄に垂れ流すのはあまりに惜しい。少し修練するだけでもきっと役に立つようになる」

ゼッシュ氏とミリアムさんが声を揃えてそう言い張る。うん、そう言うと思った。だからとっととお暇しようと思ったんだよ！

というか、俺の設定が盛られすぎだろう。帝都での御前試合以来、ただでさえ俺の生身での戦闘能力が人外じみてきているというのに、更に本物のジ〇ダイみたいな力まで操れるようになったらどうするんだよ。

俺はクリシュナを駆ってドンパチできれば良いんだよ。生身の俺が強くなるのはちょっと方向性が違うから！　どうせならクリシュナに使える新装備とか、性能アップとかそういう方面で強化してくれ。

「すごいですねヒロ様！　本物のスーパーヒーローみたいになれるんじゃないですか？」

「そういうアメコミ的な存在になるのはなぁ。いや、意外とアリか……？」

考えてみれば心で撃つ例の銃を左手に装備しているアイツとか割とそのノリでは？　あとあれだ、紙装甲の二足歩行ロボに乗る異能生存体とか。割とそういうノリだよな。そもそもジェ〇イの騎士とかモロにそっち寄りだよな。

「ご主人様のポテンシャルの高さを考えれば挑戦してみるのも良いのではないでしょうか」

ここで珍しくメイからの後押しが来た。普段あまり自己主張をしないメイとしては非常に珍しい。

「そもそも、剣を使い始めてほんの数ヶ月で白刃主義者とまともに斬り合えるあんたはどう考えてもおかしいのよね。特に強化もしてないのに」

「せやな。もう行くところまでいってしまえばええんちゃう？」

赤ら顔でそう言うティーナの横でウィスカもうんうんと頷いている。そしてなぜか目がキラキラしている。そういえば君、結構そういう系のコミックとか好きだったよね。たまにミミとそんな感じの話をしているのを見ることがある。

「あー、まぁその、時間があれば？」

「是非そうすると良い。連絡してくれれば最高の環境を整える」

俺の返事にミンファ氏族長のミリアムさんが重々しく頷いた。

事前に聞いた話だとミンファ氏族よりもグラード氏族の方が魔法関連には力を入れてるって話だったけど、ミンファ氏族の長であるミリアムさんの方が熱心なのは何なんだろうな？　いや、氏族長がこうだからグラード氏族との婚姻なんて話が出たのかね。

まぁ何にせよ今度ね、今度。どっちにしろ俺達は明日から観光とかコーラ探しに忙しいから！

#244　暴露（前書き）

今日は頭痛がぺいんで遅れましてよ―（：3」∠）―（もうなおった

#244　暴露

歓迎の宴が終わった後、俺達は部屋の床に敷いた布団の上で車座になって顔と顔を突き合わせていた。俺達の希望で寝室――というか部屋は一つの大部屋にしてもらったのだ。今日はここに皆で布団を敷いて雑魚寝である。まぁ、唯一男の俺は隅っこにする予定だけど。

「結局どういうことだってばよ」

「私に聞かれてもわからないわよ。知っての通り、私は最低限の魔法を使えるだけなんだから。話の流れから考えるに、相当高度なレベルで魔法を修めていないとヒロのことについてはわからないみたいだし」

「メイさんは何かわかりませんか？」

「申し訳ありません。サイオニック・テクノロジーに関しては我々機械知性には理解できない部分が多く、解析が全く進んでいないのです」

メイがいつもの無表情でそう言う。無表情に見えるが、なんとなく憮然とした表情に見えるのはきっと間違いではないだろう。

「うちらも結局は帝国生まれの帝国育ちやからなぁ」

「エルフは魔法が使えるってのは知ってるけど、それだけだよね。他の宇宙帝国の中にはそういうサイオニック・テクノロジーを重視している精神文明国家もあるみたいだけど、遠いんだよね」

「せやな。なんとか神聖帝国とかいうのがあるらしいな。詳しくは知らんけど」

「そっか。まぁどうでもいいな」

「どうでもいいんかい」
「どう考えても超級の厄介ごとの香りしかしねぇ。俺の出自なんてどうでもいいから無視だ無視。今の所困ってもいないしな」

これで体調が悪いとか変な力が暴走して周りに迷惑を掛けるとかなら話は別だが、今のところそんな兆候はない。実感できている不思議な効果ってのも言語チップインプラントもなしに全ての言葉を理解して扱えることと、息を止めれば回りの時間の流れがゆっくりに――或いは自分の時間の流れが加速するだけの話だ。
その解明や強化のために俺達が手に負えないような相手に興味を持たれるのはあまりにリスクが高い。そこまでして欲しい情報でもないし、これ以上生身の俺の能力を上げたいというわけでもない。エルマが前にちょっと見せてくれた魔法には少し興味があるが、下手に手を出して藪蛇になっても困る。

「なんだか妙ね。何か怖がってる？」

そう言ってエルマが視線を向けてくる。

「そりゃ怖い。自分でもこの世界に来た経緯は分かっていないんだ。それが思ったよりもスケールのでかい話みたいだぞ？　ということなればビビりもする」
「ほーん……ところでこの世界に来たとかちょっと意味のわからない言葉があったんやけど、どういうことなん？」
「「「あっ」」」

俺とエルマとミミが同時に声を上げた。そう言えば、整備士姉妹に俺の出自について適当に誤魔化していたんだった。エルフのお偉方にオープンにされてしまった今、黙っていても仕方がないな。

「ＯＫ、今更隠し事をしても意味がない。話そう」

そう言って俺は俺がこの世界に来た経緯を話し始めた。とは言っても、俺の主観での経緯だ。実際に何があったのかはわからないし、俺がこの世界に来る直前の記憶というのも今になっては曖昧だ。Ｓ（ステ）ＯＬ（ラオンライン）を起動したまま寝落ちしたような気もするし、ちゃんとベッドに入って寝たような気もする。だが、それは思い違いかもしれないし、そもそもその記憶すらなにかの拍子に思い込んでいるだけの可能性もある。

「というわけでな、今まで隠していたが俺はこの世界の人間ではない。少なくとも、俺の主観では」

「ははぁ……なるほどなぁ。兄さんの主観ではここはホロゲームの中の世界ってわけか」

「それに似た世界、だな。少なくとも俺がやっていたＳＯＬには異星人としてのエルフやドワーフの存在は示唆されていなかったし、スペース・ドウェルグ社も存在しなかった。機械知性の存在すらな。いくつか共通点はあったんだが、この世界で過ごすうちに合致しない部分のほうが多い印象が強くなってきてるな」

「不思議な話ですね……まるでホロ小説の主人公みたいです」

「その部分を抜きにしてもヒロはホロ小説の主人公を張れると思うけどね」

「物凄い短期間でプラチナランカーまで駆け上がっていますもんね。ゴールドスターも受勲してますし」

何故か全員の視線が俺に集まる。そんなに見られても何も出んぞ。

「プラチナランカーだゴールドスターだって言っても俺は多少腕に自信があるだけの一介の傭兵だからな。少なくとも気持ちだけは」

「ゴールドスター受勲者のプラチナランカーが一介の傭兵は無いわ

よ。しかも御前試合で皇帝陛下に認められる成績を残した上に、貴族相手に剣で勝つような人が」
「ですよね」
「そうですね」
「せやな」
「ですね」
「アーアーキコエナーイ。そういうわけでな、異世界からきた勇者的な肩書きとかよくわからんフォース的な力とかはもう要らんというか、あまり関わり合いたくないわけだ。一体俺はどこに向かってるんだよ。このまま宇宙の危機でも救う英雄にでもなるってのかって話だ」

俺は断じてそんなものになる気はないぞ。俺はな、皆とイチャイチャしてコーラを飲みながらのんびりまったり左団扇な生活を送りたいだけなんだ。あとはたまにちょっとしたスリルを味わうことができればなお良い。コーラさえあれば今の生活が理想なんだよな。惑星上に庭付き一戸建てが欲しい理由ってのも結局は惑星上じゃないとコーラを気軽に飲めなさそうって理由なわけだし。今の環境でもコーラが思う存分飲めるなら、惑星上の庭付き一戸建てに拘る必要もない。

「そのゲームの知識で何か未来予知的なことはできないんですか？何かこう、宇宙の危機的なやつとか」

ウィスカが目を爛々と輝かせながらそんなことを聞いてくる。目を爛々と輝かせて聞いてくるのが宇宙の危機についてかい。

「無いことはないけど、本当にそんなものが来るかどうかはわからんぞ」
「あるの！？」

「あるんですか！？」
「あるんかい！？」

エルマとミミとティーナから総ツッコミである。いやあるけどさぁ、イベントとしてそれっぽい雰囲気を出してただけだったし、結局はなんとか解決してたしそんなに危機って感じはしなかったんだよな。

「まずは結晶生命体だな。接触、防衛、調査、撃滅って感じでイベントが進んだ」
「そう言えばマザークリスタルとかこの前の戦役で私も初めて見たわね」
「アレは俺がセレナ中佐に居場所の情報をリークした。さっさと片付いてよかったよな」
「サラッととんでもないこと言ってんなぁ……他にもあるん？」
「貪食宇宙怪獣との接触イベントがあったな。とんでもない数の小型艦程度の宇宙怪獣の群れでな。一匹一匹は弱いんだが、とにかく数が多い。コロニーに直接取り付いてむしゃむしゃと食うわけだ、コロニーとその中身を」
「「「うわぁ……」」」

「ちなみに食われたコロニーはそのまま奴らの営巣地になって、そこから更に奴らが湧く」

あれは酷いイベントだった。結局いくつものコロニーがステーションが汚染されて焼き払われることになったからな。

「そ、それはどうやって打破したわけ？」
「結晶生命体で言うところの大型タイプが小型タイプを統率してる、というか小型タイプは大型タイプの端末みたいなもんでな。小型を

ガン無視して大型タイプをぶっ殺せば小型も自滅するんだ。それがわかるまで律儀に小型の群れを迎撃してる間はかなりの負け戦だったな。最終的には攻撃力の高い中、大型艦が超光速ドライブで大型タイプに肉薄して、集中砲火で潰していくって戦法でなんとかなった」

「それってこれから起こるんでしょうか……？」

「さぁなぁ。とっくにどこか別の場所で起こって解決済みかも知れないし、なんとも言えんね。もし俺の持つこの情報が必要になるなら、そのうち直面することになるんじゃないか？　俺達の運を考えるとそうなる気がしてならん」

「それはそうね。まだ起こってもいないことで頭を悩ませても仕方ないし、一旦この話は忘れましょう」

「そ、そうですね」

「他には何か無いんか？　技術関係とか色々気になるんやけど」

「あ、それは私も気になります」

「うーん、ＳＯＬの話が参考になるかなぁ」

整備士姉妹にねだられて俺が知っている船関係やパーツ関係の情報を話していく。そうしているうちに夜も更けてきたということで、今日のところはもう寝ることにした。明日からはシータ観光だからな。夜更しはは良くない。

「えー」

「これからもちょくちょく話してやるから……」

「絶対にですよ？」

どうやら俺の話は整備士姉妹の琴線に触れたらしく、なかなか寝付かなくて大変だった。君たち、いい大人だって普段自分で言っているんだから、おとなしく寝なさいよ……。

ちなみに、隅っこで寝る予定だった俺の布団は結局ど真ん中にな

った。左右は整備士姉妹である。
二人で挟まなくても逃げないっつうの。

#２４５　観光開始の朝（前書き）

ギリギリ……！　間に合わなかった……！―（：３」∠）―

#245　観光開始の朝

朝起きたら整備士姉妹が左右からそれぞれ俺の右腕と左腕にくっついていた。俺の腕は抱き枕じゃないんだが？　まぁうん、温かいしちょっと柔らかいしなんか良い匂いがするし悪い気分ではないんだけどね。どうして女の子って良い匂いがするんだろうな。シャンプーやコンディショナーの違いか？　この旅館だと備え付けのものだろうから大した差は無いと思うんだが。謎だな。

「あら、仲が良いわね」
「いいなぁ」

俺が起きたことに気がついたエルマとミミがひょいと俺の顔を覗き込んでくる。二人ともまだ寝間着のままであるようだ。

「身支度を整える前にお風呂に入ろうかと思って。支度の音で起こしちゃったかしら？」
「いや、自然に目が覚めた。俺も朝風呂にでも行くか」

そう言って二人を起こすために腕を動かすと、何やらむにゃむにゃと言いながら二人とも起き始めた。

「んあー、おはようさん」
「おはようございま――ぴっ！？」
「わー♪」

状況に気づいたウィスカが変な鳴き声を上げて俺から離れる方向に転がっていく。そんなに慌てんでも良いと思うが。

ちなみに転がっていった方向には丁度ミミが居て、転がってきたウィスカを楽しそうに捕獲していた。ウィスカの方が年上なんだが、見た目は完全にミミの方が年上に見えるんだよな。そのせいか、ミミから整備士姉妹に対する精神的な障壁は著しく低い。つまりとてもナチュラルに可愛がる。

「ウィスカちゃんのほっぺぷにぷにー」
「にゃーっ」

捕獲されたウィスカがミミの魔手によって頬をむにむにされるのを横目で見ながら身体を起こす。ついでにまだ右腕にくっついている姉の方も起こす。こら、足まで使って絡みついてくるんじゃない。

「もうちょいだらだらしようやー」
「俺は朝風呂に入りに行くんだよ。ティーナもエルマ達と一緒に入ってこい」
「えー、兄さんと一緒ならええけどー」
「寝ぼけてんのか。俺がお前の身体を隅から隅まで洗ったりしている絵面を想像してみろ。完全に犯罪だろうが」
「なんでやねん。うちは完璧なレディやろがい」
「一般的な視点から見るとどう見ても子供――何をしているんだ？」

無言でティーナが俺の腕に抱きついて身体を押し付けてきた。そしてあまり厚くない寝間着の生地越しに腕に感じられるふにゅりと柔らかい感触。こ、こいつ……！　寝起きだから下着を着けていないな！？　くっ、思ったよりもあるじゃないか。

「うりうり、どや？　これでも子供かー？　んー？」
「ＯＫＯＫ、俺の負けだ。ティーナは立派なレディだ。でもそれだと俺と一緒ってのは余計にＮＧだと思うんだが？」

「せやろか？」
「せやで」

こてん、と首を傾げるティーナに対して重々しく頷いて見せる。

「はいはい、漫才はそこまでにしときなさい。パパっと朝の支度をしちゃいましょう」
「はーい、ママ」
「誰がママよ！？」
「ヒロ様！　私、私もママって呼んでください！」
「むあーっ！？」

冗談で言ったんだけど、ミミの食いつきが凄い。なんで君そんなに大興奮してるの。というか興奮しすぎてウィスカの顔が胸に埋まってるから。今にも窒息しそうだからやめて差し上げろ。

☆★☆

「おはようございます」
「おはよう」

身支度を整えてロビーに行くと、ロビーのソファに座って何やらタブレット端末を操作していた銀髪のエルフの女性――昨日も俺達を案内してくれたリリウムが俺達に声をかけてきた。
今日は民族衣装のチャイナドレスっぽい衣装ではなく、どちらかと言うと俺達に近い「普通」の格好をしているな。

「今日はドレスじゃないんだな」
「はい。あっちの方が良かったでしょうか？」
「いや、その格好の方が見てて落ち着くね」

男ってのは単純なもので、深いスリットから除く生足やはっきりと分かる身体の起伏にどうしても視線が吸い寄せられてしまうものだ。俺はミミとエルマ、それにメイという俺には勿体ないくらいのお相手が三人もいるわけだが、それでも視界に入ってしまうとな。

「こっちから振っておいてなんだけど、衣装の話はそれくらいにしとこうか。あまりそっち方面の話を掘り下げるとセクハラになりそうだ」

「ふふ、わかりました。よろしければ本日も案内役を務めさせていただきます」

「それは助かるけど、良いのか？」

「はい。上からもそう言われていますから」

「上からね。そう言えばリリウムはどういう立場の人なんだ？」

俺の質問にリリウムは笑みを浮かべてみせた。

「私はローゼ氏族の族長であるローゼ家の分家の出でして。まぁごく簡単に言うとエルフ自治区の外務を担当する部署の職員なんです。一応公務員なんですよ、これでも」

「なるほど？」

外務担当が来賓の接待や観光案内をするのか。まぁ、リーフィルⅣはエルフの自治区のような扱いらしいし、そういった外務関係の事柄を処理する専門部署なんてのがあってもおかしくはないのかね。

「基本的にローゼ氏族がシーター――リーフィルⅣの外のことを一手に引き受けているんです。外務や星系の防衛、星系外との交易や観光客の呼び込みとかもですね。まぁ業務はかなり多岐にわたります」

「へぇ。でもそれってかなり大変そうだな」

「そうですね。ですが、その分利益も大きいわけです」
「リスクもな」
「あはは……」

俺の言うリスクというのはつまり、外との交渉や外敵からの防衛に失敗すると、その責任を取らなければならなくなるということである。実際、メイに教えてもらった限りでは両氏族にかなり強く糾弾されているようだし。

「まぁ、今の俺達には関係のない話だな。案内してくれるって言うならありがたく案内されるよ」
「はい、お任せください。何か希望などはありますか？　オススメはシータの様々な動植物が展示されている動植物園ですね。美術館もまだ全ての展示品を見ることはできていなかったでしょうから、そちらに行くのもおすすめです」

そう言いながらリリウムがタブレット型の端末の画面をこちらに向けてくる。画面には何やら可愛らしい雰囲気の毛玉みたいな生き物や、凶悪そうな感じの半分爬虫類みたいな獣が映っているな。

「それも良いな。だが、俺にも希望があってな？」
「はい、希望があればそちらもご案内しますよ。どのような場所が良いでしょうか？」
「清涼飲料水メーカーの工場で。有名どころが良いな。試飲ができるとより良い」
「清涼飲料水メーカーですか？」

リリウムが首を傾げる。なんでそんな場所を？　と思うのも無理はない。しかし俺にとっては重要なことなんだ。とても重要なことなんだ。

「ついでに酒造メーカーも」
「酒造メーカーええね」
「いいですね」

酒飲み勢が攻勢を仕掛けてくる。
くっ、三人で希望するのはズルいぞ！　人数が多い分そっちが優先されてしまうかもしれないじゃないか！

「えっと、じゃあお昼ごはんはどこか地元の料理が食べられるところで。美味しいのでお願いします」

ミミが控え目に手を挙げてそう言う。ちゃんと美味しいのでって言うのは良いことだな。たまに地元名物だからって言って食いに行ったら加工直後のフードカートリッジの中身そのままだったとかそういうのがあったからな。あれは酷かった。

「ええと……そうですね。ローゼ氏族領とミンファ氏族領の境界辺りに食料品工場が集まっている区域があるので、そちらに行きましょうか。工場の見学ツアーをやっているところもありますし」
「ＯＫ、そのプランで行こう」

炭酸飲料を探しているという件に関しては移動中に話せば良いだろう。前にエルマがルートビアに似た薬湯をこの星で飲んだことがあるみたいな話をしていたし、きっと近いものがあるはず。
あってくれ。たのむ！

#２４６　しょんぼりだよ。（前書き）

寝坊の上ぽんぺグワーッ！ ―（：3」∠）―（よく効くお薬を飲んで今は回復兆候

#246　しょんぼりだよ。

結論から言うと、コーラは無かった。
というか、炭酸飲料そのものが無かった。如何なる歴史の悪戯か、リーフィルⅣ――シータではそもそも炭酸飲料という概念すら生まれていなかったのである。

「新しい清涼飲料水のアイデアをお持ちだとか？　少しお話を聞かせて頂いてもよろしいでしょうか？」
「別に良いけど、技術的な話までは知らんぞ」

シータでは大手である清涼飲料水メーカーの工場に見学に来ていたのだが、案内員に炭酸飲料は無いのか？　と聞いて、詳細を説明しているうちになんか偉い人が出てきて話を聞かれることになった。俺としては多少の手間で炭酸飲料が飲めるかもしれないということもあり、話すこと自体には乗り気である。

「話してくるから、適当に見学しといてくれ」
「ご主人様には私が付き添い致しますので」
「そう？　ならそうしましょうか」

というわけで、メイだけが俺についてくる形となり、他の面々は見学ツアー……というか試飲ツアーをそのまま続けることになった。もうすぐ清涼飲料水エリアから酒類エリアに切り替わるところだったからだろうな。俺とメイ以外の四人のうち三人が飲兵衛だし。
ミミは……流石に正体を無くすレベルでは酔わせないと思いたい。あまり酒に強くないからな、ミミも。飲兵衛どももそれくらいは気遣ってくれることだろう。

「どうぞ、こちらへ」

俺達を最初に案内してくれていたのとは別の案内員と、その上役の偉い人に先導されて応接室のような場所に通される。

「炭酸飲料ってのはつまり、炭酸――つまり二酸化炭素を添加した清涼飲料水のことだな。シュワッとした感触と特徴的な喉越しが得られる、刺激的な飲み物だ」

そう前置いて俺が知る限りの炭酸飲料の知識を披露する。残念ながら工場でどのように炭酸飲料が作られているかまでは知らない。基本的にはまず炭酸が添加されていない原液を作り、それを圧力容器に入れて炭酸ガスを注入するといった形だったと思う。

「確かその際には原液を冷やしていたほうが炭酸ガスが溶け込みやすかった筈だ」

「なるほどなるほど」

俺の話を聞きながら偉い人はタブレット端末にメモを取っているようだ。

「フレーバーとしては果実系のさっぱりとした飲料が多いな。基本的に清涼飲料水ってのはそういう傾向が強いだろうから、大体炭酸化すれば合わないことは無いんじゃないかと思う。勿論美味しいと思えるように調整はいるんだろうが、それはプロが調整するべき仕事だな」

「それはそうですね」

「あと、ドライアイス……固形化した二酸化炭素があればとりあえず簡単に炭酸飲料をでっちあげることができる。既存の清涼飲料水

にドライアイスをぶち込んでやれば簡単に炭酸化するからな。工業的に大量生産するなら設備を整える必要があると思うが、お手軽に試すならそういう方法もあるってことで」
「参考になります。ちなみに酒類には？」
「俺の記憶だとあまりアルコール度数の高くない果実酒や、果実のフレーバーが強いカクテルなんかも炭酸化されてたはずだな。アルコール度数は９％未満くらいだった気がする。あとは麦汁から作るビールの類も炭酸化されてるイメージが強いな、俺は」
「なるほどなるほど」
「あと、当然だが炭酸ガスを封入している性質上、破裂しないよう容器の強度には配慮が必要だ。当然ながら、宇宙空間――無重力下や低圧力化では破裂の危険や、噴き出した液体の処理にも何十するはず。そもそも、炭酸ガス＝二酸化炭素なわけだから、コロニーや宇宙船内で消費するのに向かない。だから廃れているんだと思う」
「なるほど。しかし惑星上での消費に限って言えば、容器の強度に注意すれば流通させるのは難しくないということでもありますね」

俺の話を聞いている偉い人はそう言ってニコニコしている。話を聞いてみると、この人はこの清涼飲料水メーカーの商品開発部の人であるそうで、シータ上で販売されている清涼飲料水の情報はほぼ把握しているのだそうだ。そんな彼曰く、シータには今まで炭酸飲料というものは販売されていない。これは大きな商機になりそうだと彼はそれはもう嬉しそうである。
その一方、俺としてはしょんぼりである。このシータで清涼飲料水メーカーの見学ツアーに参加する意味がほぼ無くなったと言っても良い。しょんぼりである。

なお、蛇足だがアイデア料としてこのメーカーが作っている品の中でも特に人気のある品を大量に贈られた。本当はアイデア料としてそれなりの金額を支払うと言われたのだが、俺からしてみたら端

金だったので、酒やジュースを現物で大量にもらうことにしたのだ。
自分達で消費してもよし、どこかのコロニーで売り捌くもよし。どうせ俺の知識だって金が取れるほどキッチリしたものではなかったのだし、こんなことで面倒な契約書類を作ってなんだかんだやるのは面倒だしな。まぁ英断だったと思う。

☆★☆

「ということがあったのさ」
「へー」
「難儀やなぁ」
「それは残念でしたね」

酒をかっ喰らいながらの飲兵衛三匹の反応がこれである。完全に他人事のそれである。まぁ完全に他人事なんだろうけどさ。というか酒瓶、酒瓶の数。なんで十本以上空になってるの？

「うぇへへ……」

そして若干一名、正体を無くして俺の膝の上で幸せそうにスヤァしているのがいる。合流するなり俺の隣に座って絡んだ挙げ句、ご覧の有様である。

「ところでどうしてこんなになるまで放っておいた？」
「ちょっと目を離した隙に」
「この程度で酔っ払うとか思わんやろ、常識的に考えて」
「すみません……」

ちゃんと謝るウィスカは可愛いなぁ。しかしもう色々とぐだぐだである。この惑星上に炭酸飲料などは存在しないという驚愕的な事

実を突きつけられた俺はテンションがだだ下がりだし、ミミは試飲で完璧に酔っ払ってるし、飲兵衛三人は「試飲とは？」と言いたくなるレベルで本格的に飲んでるし。

「なんかすまないな、こんなだらしないアレで」
「いえいえ、むしろ皆さん普通の人なんだなぁって親近感を持ちますよ」

案内役として俺達に随伴してくれているリリウムがそう言って笑う。彼女はエルマ達について歩いていたのだが、当然ながら酔っ払ってなどいない。仕事中だからということで飲酒は遠慮したらしい。

「そういうわけで、一軒目にして俺の目的を見失ってしまったからプランを立て直したいと思う」
「えー？　もっと回らないの？」
「酒の試飲ツアーはまだ始まったばかりやろ」
「えっと……」

どうしようもない飲兵衛二人だけじゃなく、ウィスカまで残念そうな顔をしている。君達そんだけ飲んだのにまだ飲み足りないの？
肝臓大丈夫？

「そんだけ腰落ち着けて本格的に飲んでまだ飲むのか？」
「こんなの序の口よ、序の口」
「エルフの酒は上品で美味しいけど、ちょっと度が低いなぁ。こんなんジュースとほとんど変わらんで」
「ええっと、私ももう少し回りたいなって」

ウィスカにまでそう言われては仕方がない。これもクルーの福利厚生の一部と考えれば必要なことなのだろう。そう納得することに

しよう。

「わかった。元はと言えば俺のわがままに付き合ってもらったわけだからな。酒蔵回りを続けるとするか」

俺がそう言うと、飲兵衛三人から歓声が上がった。君達本当にお酒好きだな？　俺には理解が及ばんよ。まぁ、俺の炭酸飲料好きもあっちから見れば同じようなものなんだろうけど。

「それじゃあ今度は酒造メーカーを目指して移動しようか。度数高め、値段は高くてもＯＫ、質優先って感じのところをチョイスしてくれ」

「わかりました、手配しますので少々お待ち下さい」

リリウムが次の移動先を検討している間にミミを介抱しておこう。そして飲兵衛どもは移動準備しような。ほら、酒を片してしまいなさい。ハリーハリー。

シータ観光一日目は終始こういった感じで酒、酒、酒という感じで終わった。

まぁ、俺はついて回ってのんびりしているだけだったが、たまにはこういうのも悪くないだろう。飲兵衛達は大満足だったようだし、簡易医療ポッドを借りて酒を抜いたミミはシータの珍味を堪能していた。俺も一緒に色々食って楽しかったしな。

しかしこの平和な感じが嵐の前の静けさみたいな感じで嫌なんだよなぁ。用心しておこう。

#247　準備フェイズ（前書き）

ちょっとリアルで色々あって遅れました（。ω。）（バッドイベントではないです

#247　準備フェイズ

シータ観光二日目。
昨日はリリウムに案内されてローゼ氏族領の清涼飲料水メーカーや酒造メーカーを回ったのだが、二日目の今日はグラード氏族領の観光をすることになっていた。
グラード氏族領は多くの自然が残る――と言えば聞こえは良いが、俺から見れば未開の原野というか、原生林である。グラード氏族そんな場所に小さな集落をいくつも作って暮らしているらしい。

「そういうわけで、各自しっかりと装備を整えるように」

朝一番で全員を連れてブラックロータスへと戻り、俺はそう言った。旅館からブラックロータスが停泊している総合港湾施設まではさして遠くもない。昨日のうちにリリウムに言って朝一番で船に戻れるように手配してもらったのだ。

「観光……ですよね？」
「観光だな。でも俺達からすれば未知の惑星の原生林だな」
「私は未知でも……いや、グラード氏族領には行ったことないわね」
「仰々し過ぎひん？」
「私はお兄さんの言う通りにした方が良いと思うな」

本当は毒虫や寄生虫、急激な温度変化などからも身を守れる環境適応スーツでも引っ張り出そうと思ったのだが、見た目がＳＦチックなライダースーツって感じでいかにも見た目が仰々しい。流石にこれを着て観光というのは無理があるだろう。

「山と森は舐めたらアカン。管理されたリゾート地じゃなくてガチの原生林はヤバいから」
「そうなんですか？」
「そうなん？」
「そうなんです。というか舐めてかかるとすぐに遭難します」

エルマはともかく、ミミとティーナ、それにウィスカはコロニー生まれのコロニー育ち、つまり生粋のコロニストである。今まで人工的に管理された空間でしか生活をしたことがない彼女達には自然の脅威というものはあまり理解できないだろうな。

「できるだけ肌の露出のない服装にするように。君達の場合はアレだ、作業用のジャンプスーツとかでもいいぞ」
「オフの日にまでアレ着んのは嫌やなぁ」
「とにかくひらひらした服はやめとけ。枝とかに引っ掛けてすぐボロボロになる。丈夫でひらひらが少ないのにしておくように。多少暑そうな格好でも良いから」

そう言って全員にカメレオンサーマルマントを押し付けておく。これを装備すれば厚着をしても快適にすごすことができるからな。カメレオンサーマルマントは丈夫だし、テラフォーミング中の惑星という過酷な環境でもびくともしなかった実績がある。

「流石にガイド付きだし、警戒し過ぎだと思うけど」
「そうだな。普通に考えればな。ところでこの星に来てから平和すぎると思わないか？」
「……」

俺の言葉にエルマが渋面を作ってみせた。そうだよな、俺にこう言われるとそういう反応になるよな。俺も本当はこんな心配なんて

せずにのびのびと観光を楽しみたいんだが、どう考えても何か起こるならここだろうとしか思えないので、警戒せざるを得ないんだ。

「そのバックパックには何が入っているんですか？」
「サバイバルキット、携帯食料、救難信号発信ビーコン、あとは予備のエネルギーパックだな」
「サバイバルキット？」
「救急ナノマシンユニットとか、シェルターを作るための小型分子分解構成器とかが入ってるな」
「小型分子分解構成器？」
「ほら、帝都で御前試合をした時に、帝国軍が射撃戦用のフィールドをその場で分解・構成してただろ？　あれの小型のやつだよ」
「ああ、あれですか」

ミミがポンと手を打つ。つまりこの長ったらしい名前の装置は携帯型の３Ｄプリンターのようなものだ。木やら鉱石やらを分解して都合の良い物質に変換し、登録されているプリセット通りの建造物を構築することができる。こいつがあれば誰でも簡単に簡易的なシェルターを作れるってわけだな。
仕組み？　知らん。こんなものは使えれば良いんだよ、使えれば。俺の知識で考えるとこんなサイズ――テレビのリモコンくらいの大きさだ――の機械で物質を分子レベルに分解、再構成なんてできるとは思えないんだが、実際にできてしまうのだから仕方がない。ちらっと仕組みを調べてもみたが、何が書いてあるのか全く理解できなかった。専門用語のオンパレードだ。
物質を分解するなんてことができるのなら兵器転用とかされそうなものなのだが、残念ながら対策が容易なようで、そう簡単な話ではないらしい。結局、自然物――植物や鉱石の類に使うのが限界なのだとか。

「救難信号発信ビーコンって、そこまで……？」
「森の奥深くでガイドが負傷、あるいはガイドとはぐれてそのまま夜に。周りは明かり一つない原生林で、危険な動物が跋扈している。そんな状況になってもこれがあれば安全なシェルターを作って助けを呼んで一晩凌げるだろ」
「小型情報端末で通信すればええやろ」
「通信波が届けばそれで良いな。届けば」
「……届かないんですか？」
「残念ながら」

昨日のうちにメイに調べてもらったのだが、グラード氏族領の大半は小型情報端末が使っている通信波が届かない。つまり通信エリア外なのである。そんなことある？　と思ったのだが、残念ながら事実であるらしい。なんだかよくわからんが、通信機の存在というのが魔法の習得、修練に多大なる悪影響を及ぼすとかなんとか。嘘だろう？　と叫びたくなったよ、俺は。

「お兄さん、物凄く慎重ですね」
「俺一人ならなんとでもなる。俺とエルマの二人でも多分問題ないだろう。でも、今回はミミとティーナとウィスカも一緒に行くことになるだろう？　そうなると、やっぱり色々と慎重にならざるを得ないな」
「むむ、私だってもう一人前……とはちょっと言えませんけどっ」
「うちらかてナリはこんなんでもドワーフやで？」
「ミミだって場馴れしてきてるのは間違いないし、ティーナとウィスカのフィジカルの強さは認めるけど、惑星上での行動経験は殆どないだろう？　やっぱり心配なんだよな」

と、話しているとミミが首を傾げた。

「あれ？　メイさんは行かないんですか？」
「メイにはブラックロータスで待機してもらう。いざという時に迎えに来て貰う必要があるからな」
「大変口惜しいですが、ご主人様の命とあらば」

俺の後ろで控えていたメイが平坦な声でそう言う。
今はグラード氏族領にある森での遭難についてのみ話をしているが、もしかしたら宙賊による惑星上居住地の襲撃なんて事態が発生する可能性だってあるのだ。実際、俺達が捕捉して仕留めた連中だってそれを成し遂げたのだから、二度目が発生しないとも限らない。
そんな自体が発生した時に備えて、やはり俺かエルマかメイのうちの誰かが船に残る必要があるわけだ。この集団のリーダーである俺が残るのは論外だし、エルフであるエルマにはやはり同行してもらいたい。そうなると、船に残るのはやはりメイが適任なのである。

「私は警戒し過ぎだと思うけど……」
「警戒しすぎだったね、アハハで終われればそれが一番だな。とりあえず全員携帯食料と水筒だけは持っていこうな」

水と食料があって体温を維持できるなら、とりあえずジッとしてさえいればそう簡単に死ぬことも無いだろう。

#２４８　災難の始まり（前書き）

ぎりぎり間に合わなかった（‘ω’）

#２４８　災難の始まり

「ええと、その出で立ちは……？」
「森だって聞いたから最低限の装備を整えました」
「ええと……その荷物は？」
「森だって聞いたから最低限の装備を整えました」

同じ言葉の繰り返しになるが、その通りだから仕方がない。
昨日に引き続き俺達を案内してくれるリリウムとブラックロータース前で集合するなり、とても困惑されてしまった。何せ全員がカメレオンサーマルマントはヘックス状の模様がついていて、首元のスイッチを押すと周囲の景色に溶け込むように色が変化するようになっているのだ。この機能を発動すれば至近距離ならともかく、少し離れれば目視するのは非常に難しくなるという逸品だ。

「まぁ、その、そこまで警戒しなくても大丈夫ですよ……？　向こうではちゃんとガイドがつきますし」
「そうだと良いなぁと思ってるよ」

きっと俺は悟りを拓いたかのような穏やかな顔をしていることだろう。一般人には奇行に思えるかもしれないけど、俺くらいになるとトラブルを先読みして準備とかするんですよ。今までの経験からして、何か起こるなら絶対にこのタイミングに違いないね。グラード氏族領に着いて森の中を散策するみたいな話になってそこで絶対何かのトラブルに巻き込まれるんだ。俺は詳しいんだ。

「それではグラード氏族領に行くための足を用意してありますので、

どうぞこちらに」
「どうも」
結局俺達の格好にそれ以上突っ込むのはやめたらしいリリウムの後ろについてぞろぞろと歩き出す。傍から見るとどう見ても異常な集団なのだろうが、人目を気にしている場合ではない。命が懸かっているのだ。ガチである。真剣である。
「流石に気合い入れ過ぎじゃない？」
「とても目立ってますね」
「心配し過ぎちゃう？」
「そうだとしても別に良いんじゃないかな？　私もちょっと調べてみたけど、管理されてない自然の森って有害な昆虫とかが多いらしいし。ちょっと歩くだけでも刺されて痛くなったり痒くなったり大変みたいだよ、お姉ちゃん」
「へー」
「これで俺が用意したものが何一つ役に立たなかったら全員になにか一つ好きなもん買ってやんよ。ただし俺の懸念が当たった時には覚えおけよお前ら。お前らってのはウィスカ以外のことな」
「大きく出たわね？　何でもって言った？」
俺の隣に並んできたエルマが俺の顔を見上げながらニヤニヤとした笑みを向けてくる。
「常識の範囲内でな。船とか言うなよ？」
「流石にそこまでは言わないわよ。とびきりお高いお酒を大人買いしてもらうわ」
「まぁ、それくらいなら」
前の買い物の内容を見る限り、高くても１０万エネルくらいの話

だろう。ならよし。

「常識の範囲内とか言われても兄さんの常識の範囲が広すぎそうで逆にわからんのやけど」

「え？　まぁ１０万エネルくらい？」

「ヒロ様、それは常識の範囲内じゃないです」

「お兄さんの金銭感覚はおかしいです」

ティーナの質問に適当に答えたらミミとウィスカに真顔で突っ込まれた。あれぇ？

「じゃあ１万エネルくらい？」

「お兄さん……」

「夢が広がるなー」

十分の一にしたのにウィスカに可哀想なものを見る目を向けられた。まだ想定が高かったらしい。

「なんだか凄い会話ですね……」

「傭兵なんてこんなものよ」

俺達の会話内容にドン引きしているリリウムに向かってエルマがそう言い、肩を竦めた。うん、傭兵なんてこんなもんだ。

☆★☆

「これが足かぁ……なんというか、味があるな」

「これ、どういう仕組みなんやろ？」

「うーん……？　多分航空機、だよね？　エンジンは……？」

整備士姉妹が俺達の『足』となる機体を見上げ、その周りを歩き回って検分を始めていた。
リリウムに案内された先にあったもの。それはトンボの羽のようなものが沢山ついたムカデのような乗り物だった。
見たところ、機関部のようなものは存在せず、箱型の客車のようなものに光り輝くトンボの羽のようなものが四枚ついたもの――それが連なってムカデのような形になっているのだ。

「もしかして魔法の力で飛ぶのか？　これは」
「はい。特殊加工されたイェンムリリゥという生物の羽を利用した魔法力式の航空客車ですね。風の精霊の力を使って飛ぶんですよ」
「いえんむりりう」
「イェンムリリゥ」
「いぇんむりりぅ」
「はい、そんな感じです」

リリウムがにっこりと笑う。うん、美人さん。でも待って欲しい。俺達がこれに乗るのか？　マジで？　こんなエンジンも何もついていない、よくわからん生物の脆そうな羽で飛ぶ、このわけのわからん乗り物に？　めっちゃ怖いんだが？

「大丈夫なのか？　落ちたりしないだろうな？」
「あはは、外の人はみんなそんな反応をするんですよね。でも、大丈夫ですよ。イェンムリリゥの羽は大気中の風の精霊の力で飛びますから、整備不良とかじゃない限り絶対に落ちません」
「整備は間違いなくしてある。問題はない」

航空客車から降りてきたエルフの男性――先日から俺達の運転手を務めてくれているヒィシ氏が物静かにそう断言する。寡黙な人であるようで、彼の声を聞いたことは数えるほどしかない。

「こうしていても仕方がないか……乗ろう」
「客車一つ一つはあまり大きくない。ヒロ殿とそちらのドワーフの女性二名、残り二名という形で分かれてくれ」
「了解。ほら、二人とも乗るぞ」
「はーい」
「はい」

未知の技術を前にしてもっと粘るかと思ったのだが、予想を裏切って整備士姉妹は素直に客車へと乗り込んでいった。

「んじゃ乗るか」
「そうね」
「はいっ！」

エルマは平常通りだが、ミミは若干テンションが高い。見るからに不思議な魔法の乗り物ってことでワクワクしているんだろうか。俺なんてワクワクより不安が先に立つんだが。

「遅いで、兄さん。こっちこっち」

客車内は確かに広くはなかった。なんというか、電車のシートみたいな感じだ。あの、進行方向に向いたベンチシートみたいな……クロスシートとか言うんだっけ？　アレだ。
この航空客車には進行方向に向かったクロスシートが用意されていて、既に整備士姉妹が先に座って間を空けてくれている。二人に挟まれて座る形になるわけか。

「両手に花だな」
「せやろ？　右から左から可愛い子に挟まれて兄さんも幸せもんや

な？」
「せやなー、ウィスカは可愛いなぁ」
「なんでやティーナちゃんも可愛いやろ！」
「ワー、ティーナチャンカワイイヤッター」
「心が籠もってない！」
「あはは」

和気藹々――和気藹々？　とした雰囲気の中、航空客車とやらが離陸を開始する。特に離陸の合図とかはないらしい。おおらか過ぎんか？

「おー、ほんとに浮いとる。わけわからんわー」
「あの薄っぺらい羽が反重力機構と同じ働きをしているのかな？」
「風の精霊が云々とか言っとったし、風力で飛んでるんとちゃうん？」
「その割には航空力学ガン無視過ぎない？」

航空客車が浮かび上がるなり整備士姉妹が左右の窓から光り輝く羽を眺め始めた。俺もティーナの赤い頭越しに小刻みに揺れ動くいぇん……いぇん……？　なんだっけ？　いぇんなんとかの羽を眺める。

「めっちゃ光ってるなぁ。これ、エコ照明として使えんか？」
「どうやろ？　宇宙空間でもこんな感じに光るなら使えそうやけど、宇宙空間にも風の精霊とかいうのはあるんやろか？」
「うーん、エルフの人ってコロニーとか宇宙船の中でも魔法を使えるとか聞いたことあるし、光らないことも無いんじゃない？　でも、これって生物素材なんだよね？　手入れとか大変そうだし、量産も難しいだろうから代替するのは無理なんじゃないかな？」
「なるほどなぁ」

技術者視点から見るとこのわけのわからん生物の羽一つでなかなか話が広がるものなんだな。
そんな感じで暫くの間飛び続け、航空客車が行程のおおよそ半分を飛び、グラード氏族領に入った頃――樹海のど真ん中に差し掛かった辺りでウィスカが異変に気がついた。

「あれ？」
「ん？　どうした？」

窓の外を見ていたウィスカの声に何事かと聞き返す。ちなみに、ティーナは俺に寄りかかってよだれを垂らしながらおねんね中である。子供か。

「羽の様子がおかしいみたいなんですけど」
「なんて？」

見てみると、確かにいぇんなんとかの羽の様子がおかしい。飛び立った頃よりも更に光が強くなって、羽の動きが激しく、かつ不規則になっているように見える。

「嫌な予感がしてきた」
「オーバーロードしてるスラスターとかあんな感じですよね」

あはは、とウィスカが乾いた笑いを漏らす。俺も笑う。あはは。

「笑ってる場合じゃねぇ！？」
「お、お姉ちゃん！　起きて！　起きて！？」
「うぇっ！？　な、なんやっ！？　遅刻かっ！？」

ウィスカの声に飛び起きたティーナの頭が俺の顎に直撃する。
「いってぇ！？」
「あいたぁっ！？　なに！？　なに！？」
石頭か！？　一瞬意識が飛びかけたわ！　何って俺が言いたいわ！
「お姉ちゃん！　羽！　羽！」
「え？　羽っ！？」
ウィスカがティーナの座っている側――左側の窓の外に見えるいぇんなんとかの羽を指差す。
そして、ティーナがいぇんなんとかの羽に視線を向けた瞬間、いぇんなんとかの羽二枚が砕け散った。粉々に。
あ、これ美術館で見たやつだ。
「兄さん！？」
「お兄さん！？」
「俺ェ！？　俺が悪いのっ！？」
見れば、ウィスカが座っている側のいぇんなんとかの羽もまとめて砕け散っている。
「前と後ろのも一枚ずつ砕けてるよ！？」
「ウッソだろお前。え？　これまさか――」
この航空客車は四両編成だった。一番前が操縦車両、その後ろがリリウムが乗っている車両、次が俺達の乗っている車両、そして最後尾がミミとエルマが乗っている車両だ。一両に四枚、全部で十二

枚の羽のうち、その半分が砕け散った。つまり、機関の半分を喪失したわけである。

「は、はは、機関の５０％を喪失したくらいで落ちるわけないで」

「そ、そうだよね。それくらいの安全マージンは取ってあ――」

戦々恐々とする俺達の視線の先で、前の車両の羽が更に一組砕け散った。それと同時に、車両が思いっきり後ろ向きに倒れ込――いや、落ち始める。

「これ後ろも砕けたなっ！？」

「これはあかん！？　前の一両しか羽がないのは絶対にあかん！？」

「お、おちっ――！？」

ガゴンッ！　という絶望的な音が鳴り響き、客車が自由落下を始める。スローモーションのように映る視界の中、一対の羽だけでなんとか飛ぶ先頭車両と、それに辛うじてくっついているもう一台の車両が見えた。どうやら先頭車両の羽も半分砕け散ったらしい。

「きゃああぁぁぁっ！？」

「ひゃあぁぁぁぁっ！？」

「畜生め！」

悲鳴を上げる整備士姉妹の身体を左右の腕で抱きかかえ、身体を丸めて衝撃に備える。

程なくして強い衝撃が走り、その衝撃で俺は意識を手放した。

#２４８　災難の始まり（後書き）

主人公の乗る飛行機は落ちる（さだめ）

#249　墜落、そして……（前書き）

筆が乗って遅れました（ °ω °）（ちょっと長めだから許して

#249　墜落、そして……

「「……」」

目を覚ましたら、整備士姉妹が二人で揃って俺の顔を覗き込んでいた。ええと、こいつは一体どういう状況……？　ああ。

「無事か？」

「見ての通りピンピンしとるよ。うちらのことより自分のこと心配した方がええで、兄さんは」

「良かったぁ……」

俺の言葉を聞いたティーナが溜息を吐いてそっと胸を撫で下ろし、ウィスカの目尻に涙が溢れ出し始める。とりあえず身を起こしたのだが、なんか頭に違和感がある。なんだろうと頭に手をやると、なんだか引きつったような感覚と共に赤黒い欠片のようなものがパラパラと落ちてきた。

「うお、血かこれ？　俺、結構危なかった？」

「髪の毛で隠れてたけど、頭のどっか切ったみたいでぎょうさん血ぃ出てたで。これ打ったら止まったけど」

そう言ってティーナがガンタイプの無痛注射器を俺に見せる。これは俺の持ってきたサバイバルキットの中に入ってたやつだな。

「ええと、どういう状況だ？　ミミとエルマは？」

「ミミさんとエルマさんは周りの状況を確認しています。私達はお兄さんの様子を見るために残ってて」

「なるほど。心配かけたな」

バリバリと頭を掻いて髪の毛や頭皮に付着していた固まった血を払う。うへ、気持ち悪いな。シャワーでも浴びたいところだが、それどころじゃないなこりゃ。

「一応聞くけど、通信は？」

「あかん。圏外や」

「だよな。それじゃあ救難信号発信ビーコンを起動するか」

「それなんですけど……」

と、言いづらそうにウィスカが指差す先を見ると、そこにはボロボロになった俺のバックパックと、その中身があった。サバイバルキットは頑丈なケースの中に入っていたから中身は無事だったようだが、保存食うちのいくらかはパッケージが破けて中身が露出してしまっているものもある。

「Ｏｈ……ふ〇っきゅー」

「兄さん、言葉」

「下品で失礼」

肝心の救難信号発信ビーコンはというと、完全にぶっ壊れていた。ちょっとヒビが入ってるとかへこんでるとかじゃない。ひしゃげて中身が見えてる。どう見ても完全に壊れている。

「ワンチャン動いたりしないかな？」

「起動スイッチがそもそも壊れててどうしようもなかったわ」

「左様か」

まぁ、サバイバルキットが無事だっただけでも御の字か。保存食

は包装が破けてしまったものから消費していけばいい。事故の状況もわかっているのだし、救助が来るまでそう時間はかかるまい。
俺の荷物は救難信号発信ビーコン以外はまぁ概ね無事と言っても良い状況であるようだ。

「二人は怪我はないか？　ミミとエルマも無事なのか？」
「はい、私達は大丈夫です。ミミさんとエルマさんも無事でした」
「荷物もうちらのは無事やってん。まぁ大体は、やけど」
「じゃあ俺だけ怪我した上に荷物が壊れたのかぁ、運が悪いなぁ」

俺のすぐ脇に置いてあったサバイバルキットの箱の中から分子分解構成器を取り出し、起動して問題がないことを確認する。

「サバイバルキットの中身は無事か。ビーコンくんは根性がないな」
「根性の問題とちゃうやろ。まぁ、こういう時にぶっ壊れて役に立たんのはアカンと思うけど」
「緊急時に使うのに、緊急時に簡単に壊れて使い物にならなくなるんじゃ意味ないですよね」
「今度はもっと頑丈なのを買うとしよう」

いつまでも地べたに座っているのもアレなので、立ち上がる。すると、少しふらついた。どうやら気絶している間に結構血を流したらしい。

「ちょ、いきなり立ったりしたら……！」
「大丈夫、ちょっとふらついたけど一瞬だったし。俺の剣は？」
「あ、まだ客車の中ですね。あっちです」

ウィスカが指差す先には無残な姿になっている客車の姿があった。客車は二両あり、ウィスカが指差したほうが俺達が乗っていた客車

なのだろう。どういうわけか、俺達の乗っていた客車の方が損傷が激しい。

「最初は木に激突して引っかかったみたいなんよ。そのあと、引っかかってた木の枝が折れて落ちてしもうてん」

「その時はまだ二両は繋がってたんですけど、落ちた時に連結部が外れたんですよね。ただ、落ちた時には私達の乗っていた車両がミミさん達の乗っていた車両の下敷きになって……」

「うちらは身体が小さかったから大丈夫やってんけど、兄さんはそれで頭打ったみたいでな。兄さん気ぃ失ってるし、血はドバドバ出てるしほんと焦ったで」

「それはすまんかった」

謝るのもなんか違う気がせんでもないが、心配をかけたのだから一応謝っておこう。

ひしゃげた航空客車の中から大小一対一組の剣を引っ張り出そうとしていると、草をかき分けるような音が聞こえてきた。

「ヒロ様ッ！」

「おお、無事で何より」

「無事で何よりじゃないわよ。もう」

俺の姿を認めたミミがこちらへと駆け寄り、その後ろでエルマが呆れたようなホッとしたような表情をしている。

「見ての通り救急ナノマシンユニットのお陰でピンピンしてるぞ。ところでこんな時になんだが」

「何？」

「俺の懸念が大当たりだな。帰ったら覚えておけよお前ら」

「兄さん余裕あるなぁ……」

ティーナが苦笑いを浮かべる。まぁ俺も実際のところ結構余裕はないんだが、こんな時こそ明るく行かないとな。救難信号発信ビーコンが壊れたとしても、俺達が墜落した大体の位置は運転手をしていたヒィシと案内役のリリウムが大体把握しているだろう。フライトスケジュールから逆算すれば大体の位置を計算で割り出すこともできるはずだし、救助はすぐに来るはずだ。何より、俺達がこんな場所で遭難したということであればメイが黙っていないだろう。俺達の遭難生活は精々一両日中に終わることだろう。

「まー、こうなってしまったもんは仕方がない。ここの地面はしっかりしてるようだし、切り拓くか」

「切り拓く？」

「救助が来るとしたら恐らく空からだろう。発見されやすいようにある程度周りの木を伐採して切り拓いておいたほうが良い。そのために剣を引っ張り出したんだ」

そう言いながら俺は引っ張り出した一対一組の剣の鞘を腰に差し、長剣の方を抜いた。

「一応気をつけるけど、倒木に気をつけてくれ。あと、誰かこいつの使い方を調べといてくれ。多分サバイバルキットの中にマニュアルがあると思う」

「わかったわ」

頷いたエルマに分子分解構成器を渡し、俺は早速墜落現場の周りの木を伐採し始めた。戦艦の装甲に使われるような構造材をも切り裂く単分子の刃の前には、木など何ほどのものでもない。倒木に気をつけながらスパスパと木を切り、周りを切り拓いていく。

「あ、そうだ。誰か倒れた木の枝を払っておいてくれるか？」
「えだをはらう？」
「そう、こんな感じで」
俺はお手本として倒した木の脇に立ち、長剣で枝と梢を切り落としてみせた。
「こんなバラバラに分解してどうするん？」
「本来は倒した木を材木に加工するためにする作業なんだが、今回必要なのはこの枝の方でな。落とした枝を程良い長さ――1メートルくらいの長さに切りそろえて一箇所に集めておいてくれ」
そう言って短い方の剣を鞘ごと抜いて差し出すと、ティーナが剣を受け取った。
「んじゃうちがやっとくわ」
「慎重にな。間違って足に振ったら一発でズンバラリだぞ」
「わかってるって」
ティーナは慎重な手付きで剣を受け取り、俺が既に倒した木の方に歩いていった。まぁ、船の整備をしているティーナなら危険な工具の扱いにも慣れているだろうし、安全面については十分に配慮して作業をしてくれるだろう。
エルマは分子分解構成器を操作して倒れた木やそこらのものを分解したり、再構成したりして順調に作業を進めているようだ。
「ウィスカとミミはエルマに言って分子分解構成器の使い方を一緒にマスターしておいてくれ。俺も気をつけるけど、何か危険な生き物が来るかもしれないから、エルマには警戒もしてもらいたい」
「「わかりました」」

二人が頷き、連れ立ってエルマの方へと向かっていく。それを見送り、俺も作業を続けることにした。伐採伐採楽しいな、と。

☆★☆

ある程度森を切り拓いたので、分子分解構成器を弄っている三人の場所に向かってみると、何かよくわからないオブジェクトが出来ていた。なんだろう、これは。上手い例えが見つからない。

「前衛芸術か何かか？」

「……物見台を作ろうとして失敗したのよ」

「物見台……？」

三角や四角の木製らしき板で構成された螺旋状のこのオブジェクトが物見台とな？　確かに頑張れば登れそうではあるが、もう少しシンプルに作れば良いのでは？

「そんなに操作難しいのか？」

「微妙にコツがいるわね。慣れるまで大変よ、これ」

そう言いながらエルマは分子分解構成器を自称物見台に向け、水色っぽい光を照射して消滅させる。こうしてみるとこえぇな、分子分解構成器。それ人に向けて照射したらどうなんの？

「人に向けるなよ。怖いから」

「向けないわよ。そもそも、セーフティがかかってて一定以上の大きさの生命体が範囲内に入ってると照射できないみたいだしね」

「なら安心だが、気をつけてな。ああ、それでちょっとやってほしいことがあるんだが」

やってほしいことの内容を説明して早速やってもらうことにした。

「地面に穴なんて空けてどうするんですか？」

俺がやってもらったことというのは、切り拓いた広場の一角に生えている草を片っ端から分解してもらうことだった。更に地面の土も分解してもらい、ちょっと深めに穴を三つ掘ってもらう。周りの木は切ったし、下手を打たなければこれで安全だろう。

「生木を燃やすんだ」

「なまき？」

「切ったばかりの木のことを生木って言うんだよ。燃やすと物凄い煙が出るんだな、これが」

そう言いながら俺は三つの穴の底にそこらで拾った木の枝や、倒れてからかなり時間の経っていそうな木を切り分けて割ったものを敷き詰めた。

「それは切ったばかりの木じゃないですよね？」

「これは乾燥してる木だな。切ったばかりの木と違って燃えやすい。これを先に燃やして火力を確保してから生木を投入するわけだ」

レーザーガンを抜き、最低出力にして薪を撃って火を付ける。レーザーガンを使えば着火も楽々だな。最高出力で撃ったら一瞬で灰だろうけど。そうして程よく燃え始めたところでティーナが切っておいてくれた葉っぱ付きの生木の枝をシューッ！　超！　エキサイティング！

「うわめっちゃ煙でとる」

「こんなのコロニー内でやらかしたらとんでもないことになるね」
「速攻でしょっ引かれるやろなぁ……」

目論見通りに生木を投入した三つの焚き火からもうもうと煙が立ち昇り始めた。というか、火の粉も凄いな。これは深めに穴掘った上に周りの植物も予め分解しておいてもらって正解だった。地面でやったら下手すりゃ森林火災になってたかもしれん。

「これこそ人類最古の無線通信技術、狼煙だ。ちなみに俺の地元では三本狼煙を上げるのはＳＯＳ――救難信号の発信となる。この星でも同じ意味になるかは知らん」
「あかんやん」
「それでも一本より三本のが目立つだろ」

そう言いながら、俺は枝を払ってある倒した木にも剣を振るってバラバラに分割していく。枝を燃やし尽くしたら、今度はこれを投入していくわけだ。エルフというか、グラード氏族的に生木を燃やすとか、或いは勝手にバンバン木を切り倒すのはＮＧの可能性もあるが、それもこれも俺達の乗っている航空客車を墜落させやがったあちらの不手際である。もし文句を言われたらそれを主張して言い逃れるつもりだ。

まぁ、その。墜ちた原因が俺である可能性が微粒子レベルで存在しているが、そうだとしても俺がただ乗っているだけで墜ちるような乗り物を用意したあっちが悪い。俺は悪くねぇ！

「俺はこんな感じで狼煙を上げ続けとくから、残りの面子で今日の夜を過ごすためのシェルター作りを進めてくれ」
「鋭意努力するわ」
「何の成果も得られませんでしたってなったら野宿になるからな。本当に頼むぞ？」

あの前衛芸術みたいな自称物見台を見る限り、エルマじゃなくて他の人にやってもらったほうが良いような気がするが……まぁ、適宜上手くやってくれるだろう。俺は皆の力を信じるよ、うん。

#250　ベリーイージーなサバイバル（前書き）

今日は早めに仕上がった（，ω，）

#250　ベリーイージーなサバイバル

「これおなしゃーす」
「ん……」

俺が寸断し、山積みにした生木の薪を体育座りをしたエルマが燃え盛る狼煙に向かって投げ入れる。結構な重さのはずだが、片手でぶん投げる辺り相変わらずの腕力だ。あの細い腕のどこにあんな腕力があるんだ？
え？　シェルターの建築をしていたはずのエルマがなんで狼煙に薪を投げ入れる係になっているのかって？　察してくれ。戦力外通告を受けて凹んでいるんだ。
ちなみに、既にミミ達の手によって簡易シェルターの建築は完了している。まぁ、その、どう見てもＴＯＦＵな見た目だけど、ちゃんとシェルターとしての機能はあるからヨシ！　ということにしておいた。

「これ、おもろいなぁ」
「お姉ちゃん、次貸してね」
「うーん、こうして色々試してると最初のシェルターは味気ないような」

ティーナとウィスカ、それにミミの三人が分子分解構成器を使ってシェルター二号を作っている。どうやらＴＯＦＵを脱却してドーム状のシェルターを作るつもりであるようだ。素材調達用に俺が切り倒した木を分解しては再構築し、試行錯誤を繰り返している。
先程分子分解構成器で再構成された壁を触ってみたのだが、これがなんとも不思議なものだった。

見た目は真っ黒く、少し光沢のあるプラスチックのような素材である。どうやら壁部分は中空というか、内部に空洞を多分に内包しているようで、コンコンと拳で叩いてみると随分と軽い感じがする。しかし全力でぶん殴っても壊れる気配はまったくない。中空構造によって衝撃を吸収しているという部分もあるのだろうが、この黒い建材自体も非常に強靭であるようだ。所謂カーボン材とかに近い存在なのだろうか？　俺は元の世界であんまりカーボン材というものに触れる機会が無かったからはっきりと違いがわからないんだよな。まぁ、生木を材料にして再構成しているわけだし、多分近い素材なんじゃないだろうか。

「こんだけ火をぼんぼん焚くってのも貴重な経験よねー」
「そうなのか？　いや、俺もこんな狼煙なんて上げたの初めてだけど」
「そうなの？　手慣れてるから日常的にやってたのかと」
「日常的に狼煙を上げる生活ってなんだよ。戦国時代か何かか」
「あんたのとこってそういう感じだったんじゃないの？」
「ちげーよ。電気もガスも水道もちゃんと整備されてたし、万単位の人間が同時接続して遊べるネットゲームとかバンバンあったし、一部の人間は軌道上にも進出して宇宙ステーションで色んな研究とかしてたわ。少なくともグラード氏族よりは文化的……かどうかはともかく、テクノロジーに依存した生活してたからな？」
「へー、思ったより進んでたのね。まぁ、そうじゃないとこっちに適応できるわけもないか」
「そりゃ日常的に狼煙上げてるような時代の人だと小型情報端末を使うこともできないだろうな」
「その小型情報端末もここじゃ役立たずだけどね」

そう言って肩を竦め、エルマが手近に積んである薪を狼煙を上げている焚き火に投げ込む。三つあるから結構忙しい。

「助けは来るかしら？」
「そりゃ来るだろ。この星のエルフが来なくても、メイが来るさ」
「それもそうね」

そこは信頼のメイである。もしこの星のエルフ達が内輪揉めを始めて俺達の救助を二の次にするとしても、メイは俺達を救助すべくすぐさま行動を開始するだろう。クリシュナには高度な各種センサーが積まれているし、メイの演算能力をもってすれば俺達の墜落地点を算出することも容易な筈だ。大気圏内でクリシュナを飛ばすための手続きなどが必要かもしれないが、その辺りもメイなら上手くやるだろうし、いざとなれば強引に船を飛ばすようなことだってするだろう。俺を、俺達を救助するためなら周りの反対を押し切ってメイは強行する。間違いない。

「それにしても運が良かったわよね、墜落しても大事無くて。あんたが頭から血を流してるのを見た時は焦ったけど」
「そうだな。まぁ、あまり高度が高くなかったのと、地面に激突するまでに木の枝に当たりまくったせいで落下の勢いが殺されたのが不幸中の幸いだったな」
「船に戻ったらちゃんとメディカルチェック受けなさいよ。頭は危ないから」
「わかってる」

救急ナノマシンユニットのお陰で今のところは問題無いが、頭の怪我に関しては本当に注意するに越したことはないからな。まぁ、救急ナノマシンユニットなら脳内出血どころか脳挫傷でもある程度治してくれるらしいけど。今の所記憶の混濁や身体の不調は感じていないし、恐らくは大丈夫だろう。

「ま、今は待つことしかできないな。メシでも食うか」
「そうね」

☆★☆

「お、意外と美味しいやん」
「そうだね。お酒が無いのは残念だけど」
「持ってくるべきだったかもなー。これ、微妙にアルコールの香りがするから余計に呑みたくなるわ」
「こんな時でも飲酒を考えるって凄いな、ドワーフ」

ミミ達が作ったシェルターに入って皆で保存食を食べる。今回俺が持ってきたのは前にテラフォーミング中のコーマットⅣに持っていったのと同じもので、ずっしりとした食感のパウンドケーキみたいなやつだ。確かペニテンス王国とかいう銀河帝国の軍用レーションだったかな？

俺のバックパックの中でいくつか包装が破れてしまったのがあったので、とりあえずそれを皆で分けて食べている。無論、破れた分だけでは足りないので、破けはしなかったけど潰れてしまったやつとかも一緒にな。

「そういやこれ、他の国のレーションなんやろ？　なんでこんなもん持ってるん？」
「なんか安かったから買ったんだよな。ペニテンス王国では食料生産が過剰気味で、外貨獲得のためにたまにこういう食料品を大量に放出するらしい。なんかこれを猛烈にプッシュしてきた店員がそんなこと言ってた」
「おやつに良いかもしれませんね、これ」
「やめときなさい。軍用レーションなんてカロリーお化けよ？　こんなの常食してたらすぐに太るわ」

「うっ、それはちょっと……私、運動してるのになかなか細くならないんですよね」

そう言ってミミが自分のお腹に手を当ててため息を吐く。

それは俺が密かにトレーニングメニューを弄っているからなのだが、ここは口を噤んでおこう。ミミは今くらいの肉付きがベストだと思います。典型的なトランジスタグラマーな体型だよな、ミミは。

「うちらもなー、あんま細くならないんよなー」

「腰回りがね……エルマさんが羨ましいです」

確かにドワーフ姉妹は安産型とでも言えば良いのか、腰やお尻、太ももあたりがしっかりしてるな。普段作業用のジャンプスーツを着ている時は目立たないが、そこそこ胸もある。

「私は鍛えてるから」

そう言ってエルマが微妙にドヤ顔をする。うん、エルマは確かに細いよな。でも細すぎるというわけでもなく、本当に均整の取れた体つきをしてると思う。なんというか、こう、完璧な肉体美？

致す時に無論裸は何度も見ているんだが、何度見ても見惚れる。

「兄さんはどんな体型の女の子が好みなん？」

「この状況でそれ聞く？」

どう答えても角が立ちそうなんだが？

「まず大前提として、おっぱいに貴賤はないものとする。小さいおっぱいも大きいおっぱいも素晴らしいものだ」

「なんか語り始めたわよ」

「露骨な予防線張ってきたな」
「大事なことだからな。男というものは須らくおっぱいに夢とロマンを感じるものだ。大きいとか小さいとかは些細なことなんだ。それだけは知っておいてもらいたい」
「なるほど。それで？」

エルマが先を促してくる。

「……」
さて、どう答えたものか。正直好みの体型と言われてもな、という感じがする。ミミにはミミの、ルマにはエルマの、ティーナにはティーナの、ウィスカにはウィスカの魅力があるわけだし。

「そういえば、メイさんってお兄さんがデザインしたんですよね？」
ははは、ウィスカは良いところに気がつくな。でもこの状況だとそれはどうなのだろう？　皆はどんな反応をするんだ？　読めぬ、俺には読めぬ。

「そういえばそうでしたね。なるほど……」

ミミが何かに納得したように考え込む。やめて、考え込まないで。

「メイの体型が理想だとすると、あまり細すぎない方が良いのかしら？」
「せやな。なるほどな？」
「なるほどー。お兄さんは細すぎないほうが好み、と」
「分析しないで」

女性四人に囲まれて性癖分析されるとか新手の拷問か何かか？

泣くぞ？

「はいやめ、この話題終了。もっと生産的な話をしようじゃないか」
「生産的って言っても……」
「この状況じゃなぁ」

ウィスカが困った表情をしながら首を傾げ、ティーナが肩を竦める。そうね、この状況じゃ生産的もクソもないね。

「じゃあ、どれくらいで救助が来るか賭けでもする？」
「賭けは生産的な話でしょうか？」
「生産的な話かどうかは大いに議論の余地があるな」

首を傾げて疑問を呈するミミに俺も同意する。反対かと言われればそこまでではないけど。

「今が午後二時半ってところだから……今から午後六時までと、それ以降は六時間刻みで賭けるのはどう？」
「強引に賭けを開催しようとしてるぞこいつ」
「うーん、六時間だと長過ぎませんか？　三時間くらいで切ったほうがゲームになると思います」

ウィスカさんは乗り気のようです。というか、やるの？　マジで？

「せやな。んじゃうちは　今日の午後九時から深夜０時の間で」
「あ、ずるい。それじゃあ私は明日の午前九時から午後十二時の間にします」
「そもそも何を賭けるんだよ……というか食った後どうする？　俺的には何が来ても大丈夫なようにもっと森を切り拓いて壁とか建てて変な生物に襲われないようにしたほうが良いと思うんだが」

「お金なんて賭けても仕方ないし、貸し一つとかどう？　あ、壁を建てる件は賛成するわ」
「貸し一つとか重いな！？　何させるつもりだよ」
「常識的な範囲でってことでええんちゃう？」

そんな感じで俺達は賭けの話やらシェルター周りの整備計画について話をしながら食事を続けるのだった。

ちなみに、俺は今日の午後六時から午後九時までの間に賭けた。速攻で報告、救出計画の立案、準備、実行で順調に行けばその辺だろうと思う。とにかくこういうのは時間との勝負だからな。可能な限り迅速に救助を試みる筈だ。

何事もなければな。

#251　ベリーイージーと言ったな？　あれは嘘だ。

狼煙を上げ続けて数時間。そろそろ陽が傾き始めてきた。

「そろそろ午後六時ってところか。狼煙はここまでだな」

「夜通し上げ続けるんやないの？」

シェルターも作り終わってすることも無くなったので全員で狼煙とは別に作った焚き火を囲んでいたのだが、俺の言葉を聞いたティーナが首を傾げた。

「夜になると煙は殆ど目視できなくなるからな。逆に空から見た地上の灯りは目立つから、夜になったら普通の焚き火で良いんだよ」

「なるほどなぁ」

そこらで拾った棒きれと丈夫な蔦、そして良い感じの石ででっち上げた石製のシャベル……というか鋤？　で狼煙用に作っていた焚き火穴の周辺を崩し、狼煙を上げていた焚き火を埋めて消火する。消火と言えば水ってイメージがあるが、状況が許すなら土をかけて埋めてしまうのも良い。

ただし砂浜で炭使ってバーベキューとかして、その後の炭を砂浜に埋めていくのは絶対に駄目だぞ。他人が踏んだりしたらとんでもないことになる。しっかり海水なりで消火して持ち帰ろうな。

今も水が大量にあるなら水をかけて消火したかったんだが、俺達の持っている水源は大気中の水分を収集して自動的に水を生成する水筒だけだ。この水筒の水の生成能力はそんなに高くない。カタログスペック上は一日に凡そ2リットルの水を生成するらしいが、じっとして救助を待つだけならともかく動き回ると2リットルくらい

じゃ全然足りないしな。

「俺の見立てだと、そろそろ来るはずだが」
「そうね、何事もなければね」
「おいやめろ馬鹿。そんなこと言って何事かが起こったらどうするんだよ」
「流石に今回の不運は墜落しただけで終わりだと思いたいんですけど……」
「下手すると墜落だけで全滅してもおかしくないよね」
「航空機の墜落確率って何％やったっけ？」

知らん。滅茶苦茶低かったとは思うが、全く把握していない。そもそも、この世界の航空機の墜落事故確率と俺の世界の航空機の墜落事故確率では事情が全く違う可能性が高いしな。航宙船の事故確率は宙賊のせいでかなり高いと思うけど。

「まぁ、そうは言ってもこの状況で俺達を放置する選択肢はないだろう。客人を運ぶ航空客車が墜落、案内役と操縦者達だけが這々の体で帰還して、客人達は樹海の中に墜落して生死不明。これを放置して万が一俺達の中から死人でも出たら、エルフ達の面子はズタボロだぞ」
「ぶっちゃけ、兄さんは危なかったと思うで」
「救急ナノマシンユニットが無かったら下手すると死んでたかもね」
「ヒロ様の慎重な行動が功を奏しましたね……私も見習わないと」
「こういう事態はそうそう無いと思うけど、備えなきゃ駄目ですね」

皆の中に確固とした防災？　意識が芽生えたようでお兄さんは満足です。できればこんなことを意識しなくても良い平穏な生活を送りたいけどな！　いや、それは退屈か？　今くらいが丁度良いのか？　でも乗ってる航空機が墜落とか何度も経験したくねぇな？　や

っぱりもう少し平穏な生活が良いな。うん。
そんな事を考えていると、不意にウィスカが空を見上げた。

「あれ？」
「どうした？」
「なんだか空に光の筋が……？」

ウィスカの言葉に釣られて空を見上げる。夕焼け空は徐々にその色を変え、夜空へと装いを変えつつあったのだが――その夜空へと変わりつつある空の果てで光が瞬いた。
流れ星？　いや、違う。なんだ？
見ているうちに何度か光が瞬き、そうしているうちに光の線が走り始めた。それは大量の流れ星のように見えたが――。

「軌道上で戦闘が起こっているのか……？」
「そう見えるわね。宙賊かしら？」
「リーフィル星系の位置的に他国の侵攻ってことはないだろう。しかし、惑星上居住地にそう何度も襲撃をかけるだけの体力がある宙賊の集団が……？」
「この辺りに影響力を及ぼすようなのは……赤い旗（レッドフラッグ）かしら？」

基本的に宙賊というのは数隻から精々十隻弱程度の小集団を形成していることが多いのだが、中には数十、数百隻の宙賊艦を擁する大規模な宙賊団も存在する。いくつもの星系に宙賊基地を作り、それらをまとめている大宙賊（ビッグネーム）という奴だ。
エルマが口にした『赤い旗（レッドフラッグ）』というのはリーフィル星系を含む広範囲に影響力を持っている宙賊団で、帝国軍も手を焼いている連中だ。基本的にああいった大型の宙賊団というのは戦力を分散した上で潜伏させているので、一気に叩くといったことがなかなか出来ないのである。なんだかんだで宇宙は広いからな。

「ええと、まずくないですか？」
「まずいかまずくないかで言えばとてもまずい。だが、今の俺達にはどうしようもないな」
「船は遥か遠くだしね」
「こんなことならわけのわからん航空客車なんかに乗るのは断固として拒否して、クリシュナで動けば良かった……」
「後知恵やな」
「お姉ちゃん、そんな身も蓋もない……」

本当に身も蓋もないな！　でもあの状況で用意された航空客車に乗るのを突っぱねてクリシュナで行くと断固としてこちらの意見を押し通すのは……そりゃ出来ないことはなかっただろうが、そこまでやるか？　っていうね。嫌な予感がするのでクリシュナで行きますとか言っても、何言ってんだこいつ？　と思われたに違いない。別に外聞なんてどうでも良いっちゃ良いのだが、そこまでするのはどうか？　という考えを払拭するのはどちらにしろ難しかっただろう。

「ははは、こうして見ると綺麗なもんだな」
「笑ってる場合？」
「こうなっては笑うしかなかろうて」

不運に不運が重なりもう笑うしかない。これ、俺達の救出ちゃんと来るのかね？　などと考えていると、流れ星――いや、流れ星と言うには大きすぎる火球が尾を引いて上空を通過していった。
東から西へ。あちらの方角にはシータの総合港湾施設がある。

「「「あっ」」」

通過していった方角――西から東に向かって何本もの赤い筋が迸ったのが見えた。恐らくだが、あれはブラックロータスに装備されている十二門のレーザー砲による対空砲火ではなかろうか？
その後も次々に火球が東から西に向かって通過したが、その度にブラックロータスのレーザー砲と思しき対空砲火が瞬いた。

ドゴォォォォンッ！

「うおっ！？」
「きゃっ！？」
「ま、まさか大気圏内でＥＭＬを撃ったの！？」

総合港湾施設からここまではかなり離れているはずだが、それでも聞こえるほどの轟音である。
弾体が俺達のいる場所の上空を通過しなかったのか、その軌跡などを確認することはできなかったが、ブラックロータスが戦闘を行っているとしてこんな轟音を発するような状況というのは艦首に装備されている大型ＥＭＬを発射した場合だけだろう。
ブラックロータスの艦首に装備されているＥＭＬは直撃さえすれば正規軍の軍用艦ですら一撃で大きな損傷を受けるほどの威力を誇る。そんなものを大気圏内でぶっ放せばどうなるか？
下手すると発射時に発生する衝撃波だけで周辺の建物に被害が出る可能性すらある。恐らくだが、発射された弾体が引き起こす衝撃波の威力も宇宙空間で撃った時よりも増す。シールドと装甲の薄い宙賊艦ならその衝撃波だけで纏めて撃墜することが出来るかも知れない。

「メ、メイさん派手にやってんなぁ」
「だ、大丈夫かな？　周辺の被害が酷いことになっているんじゃ……？」

「メイを信じよう。信じたい」

ＥＭＬの影響で周辺施設に甚大な被害が発生とかしてたら、一体その修繕費用や賠償金としていくらくらい取られるのだろうか？あ、胃が痛くなってきた。

「メイならその辺りは上手くやってるでしょ。確かあのＥＭＬは無段階で威力を調整できるはずだし」

「そ、そうですよね！」

メイを完全に信用しているのはエルマだけであるようだ。ミミもエルマの言葉に同意しているが、若干顔が引き攣っている。メイはなんというか、そつなく何でもこなすけどやる時はやり過ぎるきらいがあるからなぁ。

「今は祈ることしかできん。とりあえず上空から宙賊艦に見つけられたら大変だし、焚き火を消してシェルターに退避しておこう」

「せやな」

「そうですね」

再び粗末な石製の鋤を使って焚き火を消し、全員でシェルターに入る。昼間のうちに壁も建てておいたから、シータの森に住む危険な生物に襲われるようなことも恐らくはあるまい。

これ、救助来るのかね？　水はともかく、食料の備蓄には限りがある。場合によっては採取や狩猟などで食料を確保することも考える必要があるかもしれないな、これは。

#252　食料調達（前書き）

今日も間に合った（　ω　）

#252　食料調達

遠くからの戦闘音が鳴り響く中、小型情報端末から発せられるか細い灯りだけを頼りに身を寄せ合って息を潜める。

「いや、息を潜める必要はないな」
「そうね。とはいえ、やることもないけどね。寝るくらい？」
「明日以降どうするかの相談とかどうでしょうか？」
「それは建設的な意見やね」

ミミの提案で暗闇の中、明日以降の行動方針について話し合う。

「基本的には救助を待つという方針で良いだろうと思うんだが、異論は？」
「無いわね」
「無いです」
「無いな」
「無いですね」
「全員の賛同が得られたようで何よりだ」

小型情報端末がオフラインである今は地図すらまともに使えない状況だ。どちらに進めば良いのかもわからないまま、あてもなくこの森林を彷徨うというのはあまりに危険過ぎる。この星の原生生物の中には危険なのもいるみたいだし、切り拓かれていない森の中を移動するとなると事故なども怖い。毒虫や、それに相当する危険な生物も怖い。やはりこの場に留まって助けを待つのが利口だろう。

「問題は、食料だな。数日なら持ってきた保存食で十分足りると思

うが、救出がそれ以上に長引くとまずい」
「それはそうね。一度食料を取りまとめて消費ペースを考えたほうが良いわね」
「それじゃあ明日の朝一番に取りまとめましょう。他には何かありますか？」
「食料、調達したほうがええんとちゃうかな？　こういう森とかって色々食い物が生えてたりするんやろ？」
「あと、動物を狩って肉を取ってるって話でしたよね。博物館で展示されてました」

ティーナとウィスカが食料調達について意見を言う。うん、やっぱり同じことを考えるか。

「問題は何が食えるもので何が食えないものなのか、俺達にはわからないし判別のしようがないってことだな」

美味しそうに見える果実が実は人間にとっては猛毒だとか、どう見ても雑草にしか見えない草が実は地下に芋を作ってるとか、触れただけで肌がかぶれるような毒草だとか、本当に色々あるものだからな。素人目では判別できん。

「あ、それに関しては大丈夫です。実は昨日のうちにオフラインでも使えるスキャンアプリを私の小型情報端末とタブレット端末に入れておいたので」
「なんでそんなものを」
「森林ツアーに行くことも、ネットワーク接続が無いこともわかっていたので」

そう言ってミミがドヤ顔をする。いや、うん、凄いけど……君は道端の動植物を片っ端からスキャンして食えるかどうか判別して回

るつもりだったのか？

「まぁ、ミミがそんなものを用意してくれているのは予想外だったが、物凄く助かったな。それじゃあ、明日は俺とミミで採集のために周囲を探索してエルマにはこの拠点を守っていて貰うか」

「了解」

「うちらは？」

「分子分解構成器を使って拠点の整備を進めるのと、何か便利なものを作れないか試してみてくれ。今不安があるのは水関連だな。あとは、あの役立たずビーコンと小型情報端末を利用して救難信号を発信できないか考えてみてくれ」

「うーん、できるかどうかわかりませんけど、頑張ってみますね」

明日の予定はこれで良いだろう。

「しっかし、戦闘なかなか終わらんなぁ」

「心配だが、打てる手はない。寝よう」

赤い旗がどれだけの規模で襲ってきているのかはわからんが、星系軍を全滅させてリーフィル星系全域を蹂躙する、という事態にまでは発展しないだろう。

とりあえず今日のところは昼間のうちにミミ達が簡易寝台を作ってくれていたので、その上で寝た。交差した骨組みに弾力性の強いシートを張ったような見た目で、意外と寝心地は悪くない。掛け布団代わりにカメレオンサーマルマントを被れば保温効果もばっちりだった。

☆★☆

人の気配で目が覚めた。薄っすらと目を開けると、どうやらカメ

レオンサーマルマントを何枚か使って目隠しを作り、お着替えか何かをしているようである。

「おはよう」

「ぴっ！？　お、おに、お兄さんっ！？」

目隠しになっているカメレオンサーマルマントの向こうから帰ってきたのはウィスカの声だった。なるほど。

「暫く寝台の上でマント被って目を瞑っておくから。終わったら教えてくれ」

「は、はひっ！」

マントを被ってしまえば衣擦れの音も殆ど聞こえない。危うく二度寝しかけたところで体を揺すられ、今度こそ目を覚ました。

「ふあぁっぁっあァー……おはよう」

「お、おはようございます」

そう朝の挨拶を返してくるウィスカの顔は若干赤い。別に裸を見たわけでもなし、そこまで恥ずかしがらなくても良いと思うんだけど。

「起きようか」

「はい。皆さん外に出てますよ」

「んじゃ荷物持っていこう」

それぞれ自分の荷物が入っているバックパックを担ぎ、シェルターの外に出る。外に出ると、他の三人が黒っぽい箱に自分のバックパックから荷物を移しているところだった。

「おはようございます、ヒロ様」
「おはよう、ヒロ」
「おはようさん」
「おはよう。俺の分の箱もある？」
「それつこうてもろて。ウィーのはそっちな」
「うん」

用意された一抱えほどの大きさの箱に着替えやら何やら、すぐに使わないものを収めていく。食料は食料で別の箱に収める。

「うーん、普通に食べると食料は保って明日の夜まででですね」
「ヒロはともかく、私達は一日か二日分くらいしか持ってこなかったからね」
「どうして」
「いや、本当にこんな墜落して遭難するなんて思わんやん……」
「ごめんなさい」

俺みたいに一週間分以上の保存食をバックパックに詰め込んであるほうが異常だな。うん。でもそのお陰で明日の夜まで余裕があるわけだから、まぁよし。

「いや、俺のほうが普通じゃなかったわ。とりあえず、昨日決めた通りに動こうか」
「そうね。気をつけるのよ？」
「はい！　頑張って食料を見つけてきますね！」

ミミは大層やる気を見せている。やる気が空回りしないと良いんだけど。
ちなみに、情報端末の充電に関してはレーザーガンやカメレオン

サーマルマントに使用するエネルギーパックから充電するコネクタがあるので、当面は心配要らない。

「気をつけてなー」
「本当に怪我に気をつけてくださいね」
「あいよー」
「行ってきまーす」

昨日のうちに切っておいた生木を使って今日も引き続き狼煙を上げて貰う予定だし、歩きながら木に目印も付けていくつもりなので、少なくとも帰り道に迷うことはないだろう。これで俺達が更に遭難するとか笑い話にもならん。

「森の様子もわからないし、ゆっくり行こう。何も焦る必要はない」
「はい、ヒロ様」

俺達の荷物は中身がほぼ空っぽ――二食分の保存食と無限水筒が入っている――バックパックと、それぞれの装備だけだ。俺の場合はレーザーガンと一対の剣、小型情報端末。後は予備のエネルギーパックに、救急ナノマシンユニット。ミミの場合は小型情報端末とタブレット端末、レーザーガンと予備のエネルギーパックだな。後は細々とした小物が入ったバッグをバックパックの中に入れているようだ。

「俺が周囲の警戒をしながら進むから、ミミは食べられそうなもののスキャンをしてくれ。ペースはミミに合わせるから、ゆっくり確実にな」
「はいっ！」

そうして歩くこと数分、早速ミミが何か見つけた。

「あ、ヒロ様。何かスキャンに引っかかりました」
「ほう？　どれどれ？」

ミミのタブレット端末を横から覗いてみると、どうやら木に巻き付いた蔦に反応しているようだ。

「あ、上に何か生ってますね」
「ふむ、瓜っぽいな？」

ミミがタブレット端末のカメラを生っている実に向けると、スキャンが完了した。どうやらあの実はコキリという名のウリ科の植物の実で、食用であるらしい。網の目のような模様が全体に出ていたら食べごろであるようだ。大きさは俺の握り拳より少し大きいくらいの大きさだな。俺の目にはちっちゃいメロンに見える。

「熟しているのをもいでいこう」
「全部取っていかないんですか？」
「全部取ると次が生えてこなくなっちゃうかもしれないからな。こういうのは根こそぎは良くない」

そう言って手が届く範囲のコキリの実を収穫していく。そこそこ太くて足がかりのある木だったので、結構な数を収穫できた。

「よし、幸先良いな」

果実なら水分も多めに摂取できるだろう。水が不足気味の俺達には嬉しい収穫だ。

「そうですね！　次を探しましょう」

そうしてまた探し始めるが、なかなか次の獲物が見つからない。まぁ、最初にコキリの実をすぐに見つけられたのが出来すぎだったんだろうな。普通はこんなもんだろう。

「見つかりませんね」
「ドンマイ。ちょっと休憩しよう。コキリの実を一つ食ってみるか」
「はい！」

ミミがとても嬉しそうで実によし。ナイフなんかは持っていないので。短い方の剣を使って慎重にコキリの実を四分割する。一つ間違えば指どころか手足が落ちかねないので、とても気を遣う。

「戻ったら調理用のナイフとか作れないか聞こう。剣で切るのは怖い」
「そうですね」

俺も大小一対のこの剣だけでなく、ナイフを一本持ち歩くべきかもしれない。こんな状況に陥ることはそうそう無いだろうが、ナイフそのものは武器としてだけでなく、ツールとしても色々と使いでのあるものだからな。
短い方の剣でも包丁やナイフとして使うには長すぎる。こうやって雑に四つに割るのが限界だ。

「ふーむ、ますますメロンにそっくりだな」

見た目の印象通り、割ってみても非常にメロンに似ている。果肉の色はオレンジがかっていない、若干黄色みを帯びた白だな。白肉メロンというやつか。

「めろん？」
「俺のいたとこにも似たような果物があったんだよ。あれは確か地面に生ってたと思うけど。あともっとでかかった、これくらい」
そう言って俺は手で俺の知るメロンの大きさを示してみせた。
「どんな味だったんですか？」
「みずみずしくて甘い果物だったな。メロンはこの種の部分を取って果肉だけを食ってたけど、コキリはどうなんだ？」
「コキリも種の部分は除けて食べるみたいですね」
「じゃあそうしようか」
指で種の部分をこそぎ落とし、コキリにかぶり付く。うん、美味しい。ちょっと青臭いし甘みも足りない感じがするけど、十分美味しいな。品種改良もされてない野生の果物の割には美味しいと思う。
「悪くないな」
「ちょっと青臭いですけど、美味しいです」
大きさそのものがちょっと大ぶりの桃みたいな大きさだから、二人で食べるとすぐに食べ終わる。
「よし、気合を入れて探すか」
「はいっ！　沢山持って帰ってびっくりさせましょう！」
休憩しておやつを食べたミミの気合は十分だ。あまり気合を入れすぎて疲れ過ぎないように気をつけて探索を進めるとしよう。

#253　謎の発光物（前書き）

ぽんぺ……―（：3」∠）―（おくすりのむ

#253　謎の発光物

ミニサイズマスクメロンのようなコキリの実を食べて小休止した俺とミミは、引き続き食料調達のためにグラード氏族領の森の中を歩いていた。

「動物、襲ってきませんね？」

辺りをスキャンしながら歩いていたミミがそう言って俺の顔を見上げてくる。

「肉食動物でもない限り、そう襲ってくるもんじゃない。こっちが動物を怖がっているように、動物だってこっちを怖がってるんだから」

「そういうものなんですね」

無論、空腹だったり俺達が知らない間に縄張りを侵していたらどうなるかわからんが。獣の縄張りなんて見分け方がわからんからな。獣の中には縄張り意識が強いものもいたりするので、そういう手合いは襲うまでしなくとも接近してきて威嚇してくる可能性はある。

「まぁ、動物を見かけても出来る限り戦闘は避けたいけどな」

「どうしてですか？　お肉が取れるんですよね？」

「そりゃそうだが、誰も動物の解体なんてできないだろう？　少なくとも俺はできんぞ」

「かいたい？」

「前にホラ、培養肉工場で培養されてた謎生物を肉として解体してたの見ただろ。あれみたいな感じで狩った獲物を適切にバラして肉

にしないといけないんだよ。でも、当然ながら動物には肉だけじゃなくて内臓も詰まってればっていうし、解体時にその内臓を下手に傷つけると内容物が出てきて肉が駄目になったりする。それに、血抜きや冷却もしなきゃいけないし、解体時には獲物から出る血液で手だけじゃなく場合によっては全身血まみれになるかもしれないから、手や身体を洗うために、そして狩った獲物の肉を冷やすためにも大量の水が要るわけだ」
「なるほどー……大変なんですね」
「大変なんだ。獲物を殺すだけなら武器さえ扱えれば誰でも出来るかもしれないが、狩った獲物を食べられる肉にするのは専門のスキルが要るんだよ。まぁ、適当にやっても肉は取れるけど」
「けど？」
「血抜きも上手くいっていない、ちゃんと処理もできていない肉ってのは有り体に言って臭くて不味い」
「……命を奪った上に苦労してそれじゃあちょっと駄目ですね」
「うん。だから動物を積極的に狩ることはあまり考えていない」

獲物を解体した後の始末とかも下手にやると他の肉食動物を誘き寄せるかもしれないしな。知識の無い状態で下手に手を出すのは危険過ぎる。

「ヒロ様はやっぱり凄いですよね」
「ん、まぁこういうのは生まれた環境というか、育った環境の差じゃないかな」
「それだけじゃないような気がします。なんというかこう、生まれ持った素質というか……」
「いやいや、そんなことないと思うけど。これは単に知識の差だろう。俺だって狩りとか解体の知識は聞きかじった程度のもので、実際に目にしたことは無いんだ」

コロニー育ちのミミが狩猟や動物の解体に関する知識を持っている方が異常だろう。そもそも管理されたコロニーという空間には人間――エルフやドワーフなどを含めた広義の意味――以外の生物というのが殆ど居ない。野良犬や野良猫はもちろんのこと、鼠やゴキブリなども殆ど存在しない。

ミミとティーナ、それとウィスカの三人は生粋のコロニストだから、知識として犬や猫、或いはその他の愛玩動物やそれ以外のポピュラーな動物の存在や姿形は知っているようだが、実際に見たことや触れたことは殆どないという。

エルマは色々なものが集まる帝都生まれの貴族だし、傭兵としてそれなりの期間色々な場所に足を伸ばしていたそうなのでその限りではないようだが。

「そうでしょうか……」

「そうだよ。ミミはまだ若いんだし、経験を積めばきっと俺よりもバリバリなんでもこなすキャプテンにだってなれるさ」

「キャプテンですかぁ……それもちょっと面白いかもしれませんね。お祖母様を探しに行くとか」

「確かにちょっと会ってみたいかもな」

ミミのお祖母さん、セレスティア様ね。ゲッペルス帝国皇帝の妹で、帝室から飛び出して傭兵として活躍していたという女傑。消息は不明らしいが、ミミの話を聞く限りでは幼い頃に会った記憶があるらしい。なら、今もまだ生きている可能性は十分にあるだろう。

「……そう言えば、戦闘はどうなったんでしょうか？」

「さて、朝には音も聞こえなくなっていたしな。戦闘が継続していないってことは決着は着いたんだろう。その後も散発的に戦闘が起こっていないところを考えると、星系軍が勝ったということだと思うが……」

もし星系軍が負けたとなると、ブラックロータスも無事では済んでいないだろうな。恐らくは格納してあったクリシュナも。それは流石に無いと思いたいが。

ちなみに、その後も散発的に戦闘が発生している様子が無いから星系軍が勝ったという予想の理由は、もし星系軍が全滅するほどの被害が予想される場合にはすぐに近隣星系から増援が到着する筈であり、そうなればリーフィル星系を全滅させてい疲弊している宙賊どもに増援部隊が即刻戦闘を仕掛けるだろうという考えからである。

いくら赤い旗が大規模な宙賊団であっても、リーフィル星系を含めた近隣星系の星系軍や帝国軍駐留部隊を一掃できる程の戦力は持っていない。であるからこそ、奴らは普段戦力を分散して一網打尽にされないように立ち回っているのだ。

「まぁ、被害状況にもよるがこれで今日明日中には救助が来るだろう」

「そうだと良いんですけど」

と、話しながら森を進んでいたところ、行く手に光が見えた。え？　光？

「なんだ？」

「川か泉でしょうか？」

「いや、なんか光を反射してるとかそう言う感じの光り方じゃないように思えるが」

藪を剣で切り開き、歩みを進めたその先にあったもの。それは……！

「なんだこれ？」

「なんでしょうこれ？」

よく、わからないものだった。

いや待って欲しい。言い訳をさせて欲しい。なぜここにこんなものが？　としか言いようのない珍妙な物体だったんだ。しかも形状が明らかに自然物とも思えない。

「いや本当になんだろう、これ。ドリルの刃？」

「確かにそんな風にも見えますけど、大きすぎませんか？」

「そう言われるとそうだけど……えぇ？　ほんとこれなんだ？」

それは光り輝く尖った物体だった。長さは見えている部分だけで１m無いくらいだろうか？　太さは俺が握るのに丁度良いくらいだろう。白っぽい色をしており、全体から光を発している。形状としては……地面に突き刺さっているので確証は持てないが、先端が鋭く、ドリルのように螺旋状の刃のようなものが三条走っているような感じだ。

自然物のようには思えないが、さりとて完全なる人工物のようにも見えない。なんというか、素材の質感が木のような感じなのだ。

「とりあえず抜いてみるか」

「大丈夫ですか？　その光、何か放射線とかそういう危ないのだったりしません？」

「チェレンコフ光ではないと思うけど、確かに危ないかもしれんな」

よくわからないものは触らない。危険を避ける上では基本中の基本とも言える考え方である。確かにそういう意味ではよく解らないこの物体には触れないほうが良さそうだ。

「撃破された宙賊艦が落としたものかもしれないし、もしかしたら

墜落した航空客車の部品とかかもしれないな」
「どちらにせよ発光する謎の物体とか触らないほうが良いと思います」
「それもそうだな、放っておく――」

放っておくか、と言おうとすると謎の物体が激しく明滅した。なんだ！？　爆発でもすんのか！？　と警戒してミミを庇い、謎の物体から距離を取る。そうしていると明滅が収まった。一体何だこれは？　なんで今滅茶苦茶明滅した？

「なにこれ、こわ」
「やっぱり触れないほうが」

またピカピカと明滅し始めた。うん？　もしやこいつ。

「もしかしてなんだが、俺達の言葉を理解してないか？」
「え？　いやそんなまさか……」

ミミが俺の言葉を否定しようとすると、謎の物体は返事でもするように一度だけピカッと発光した。その様子にミミが黙る。

「……言葉を理解してるなら二回光ってみろ」

ピカピカッ、と二回発光した。なるほどね。

「やっぱこえぇわこれ。近寄らんとこ」
「そうですね」

二人で踵を返すと、また激しく明滅し始めた。まるで必死に引き留めているかのような反応である。うわぁ、なんだこれは。どうす

れば良いんだ。

#254　できる発光物（前書き）

間に合わなかった―（∴3」∠）―

#254　できる発光物

「で、結局拾ってきたわけ？」
「なんか放って帰ろうとすると弱々しく明滅して同情を誘ってくるから……」

ジト目を向けてくるエルマから視線を逸らす。その視線を逸らした先には地面に刺した発光する謎の物体を観察している整備士姉妹とミミの姿があった。

「けったいな品やなぁ。なんで光っとるんこれ？」
「うーん、手持ちの機材じゃなんで光ってるのか全くわからないね。スキャンした感じでは木材のように思えるけど、こんな形の木なんてあるのかな？」
「少なくとも、周りの木とは全く違いますよね。スキャンしてもなんなのかわからないですし」

ウィスカとミミが自分のタブレット端末を向けて何やらスキャンしているようだが、正体は依然として不明のようである。ちなみに、ウィスカは船などの状態をスキャンするために使う構造材解析スキャンツール、ミミは例の可食植物スキャンツールであの謎の物体をスキャンしているようである。ミミ、食うつもりかそれ？　やめておけ、お腹壊すぞ。

「これ、言葉理解するってほんま？」
「はい。ヒロ様の言葉に明らかに反応して光ってました」
「ということは、知的生命体なのかな？　この星にエルフ以外の知的生命体が根付いてるってこと？　エルマさん知ってます？」

「えぇ？　そんなの居たかしら」

ウィスカに突然質問をされたエルマが首を傾げて考え込む。よし、ターゲットが俺から逸れたな。今がチャンスだ。

「その謎物体はとりあえず横に置いておいて、収穫があったぞ。ほら、こんなに沢山」

そう言って俺は背負ってきたバックパックを開いて中身を披露する。

「おー、大量やん」

「わぁ、これ全部食べられるものなんですか？」

「ミミの持ってるスキャンアプリによるとそのようだぞ」

あの後、引き抜いた謎の発光物を持って森を歩き回ると、何故だかわからないがやたらと収穫物を見つけられたのだ。

「まずこれ、コキリの実。ちょっと青臭いけどジューシーでまぁまぁ甘い。試食したけど悪くなかった」

「ほほう、これは？」

「モコリダケっていうキノコです。焼いて食べると美味しいらしいです」

「あ、これは見たことがある気がします」

「酸っぱかったけど、それもまぁ食えたな。ミルベリーって言うらしい」

追加で見つけたのはキノコとベリーである。モコリダケは見るからに『キノコ』といった感じの見た目のキノで、白っぽい太い軸と茶色の立派な傘が特徴的だ。スライスして焼くと良いらしい。

そしてもう一つのミルベリーという名のベリーは黒に近い紫色をしていて、俺が日本のスーパーでよく見かけたイチゴではなく、ラズベリー系の見た目をしている。大きさはピンポン玉よりも少し小さいくらいだろうか。これも沢山採れた。

「しかしキノコ焼くっつってもアレだな。調味料が何も無いんじゃどうしようもねぇな。まぁ焼いて食うだけでも……」

「あ、塩なら分子分解構成器で作れんで」

「マジカヨ」

「マジダヨ」

地面の土と石、木材を分子分解、再構成して例の黒いカーボン素材っぽいものでパッケージングされた塩を製造することが出来るらしい。まぁ、土壌にはナトリウムも多く含まれると言うし、別に驚くことでもないのか？

「とりあえず塩が手に入るならキノコも美味しく食べられるか。後は水だが……」

と俺が呟くと、謎の発光物がまたぞろピカピカとやり始めた。

「うわ、なんかめっちゃ光っとる」

「あー、大丈夫。多分危険はないから」

ドン引きしているティーナを宥めてから地面に突き刺しておいた謎の発光物を引き抜く。

引き抜いてみると、長さは凡そ１．２ｍほど。両端が鋭く尖っており、螺旋状の溝と言うか刃のようなものが三条走っている。ただ、この溝というか刃のような出っ張りが何故か妙に手にフィットして持ちやすい。重量バランスも良い感じで、投げたらそれはもうよく

飛びそうな感じだ。

「で、どっちだ？　こっちか？　いや、こっちか」

謎の発光物の先端をあちこちに向けると、ある方向で光の明滅が早くなった。

「まさか、水のある方向を示してるんですか？」

「多分な。さっきはこれで食料集めが捗ったんだよ」

「えぇ……なにそれ。こわない？」

「ちょっと不気味ではあるよなぁ。まぁ、知らんけどこいつなりに捨てられないように必死なんじゃないか」

「やっぱり知的生命体なんでしょうか」

明滅する謎の物体を見ながらウィスカが難しい顔をする。そんな俺達を見ながらエルマは眉間に皺を寄せ、何かを必死に思い出そうとしているようだ。

「何か心当たりがあるか？」

「うーん……無いのよねぇ。私も小さい頃にほんの数週間過ごしただけだから、記憶も曖昧だし」

「それは仕方ないですよねー。私もお祖母様の事は朧気にしか覚えてませんし」

ミミがうんうんと何故か自信満々に頷いている。まぁ、俺よりもずっと年上のエルマが小さい頃にって言うからには恐らく軽く三十年以上は前の話だろうからな。色々と覚えていなくても仕方のないことかも知れない。

「とりあえずこいつの指し示す方向に水があるかもしれないから、

サクッと見てくるわ」
「私も行くわ。ミミ、ここは任せたわよ」
「はい！　私がお二人を守りますね！」

ミミが腰のホルスターに収まっているレーザーガンに手を置いてふんすと鼻息を荒くする。ああ言っているが、実際に動物とかが襲ってきた時に対処できるかどうかはわからないので、あまり遠いようなら諦めて帰ってこよう。

☆★☆

左手に謎の発光物を持ち、右手に短い方の剣を持って藪を切り開きながら進む。通りがかった手近な木に拠点へと戻るための目印をつけていくことも忘れない。
そしてエルマと二人で周囲に警戒しながら進んだ先には――。

「泉？」
「泉というか池というか、まぁ水場だなぁ」

あまり大きくはないが、池のような物があった。見た感じ水は澄んでおり、水底の砂がところどころ踊っているように見える。どうやらここは水源地のような場所であるらしい。泉の底から湧いた水はいくつかに別れて小川を形成し、泉から流れ出ているようだ。

「このまま飲めそうにも見えるわね」
「やめとけ、どれだけ綺麗に見えても生水を飲むのは危険過ぎる」

そう言いつつ、俺はバックパックの中から黒いカーボン素材のようなものでできたポリタンクを取り出した。俺とミミが食料調達に出かけている間にティーナ達が作っておいてくれたものだ。

「これに汲んで帰ろう。沸かしてから飲めば危険性は大幅に減るはずだから」
「蒸留とかしなくていいの？」
「それができればベストだが、そこまでのものを作れるかね？」
「あの分子分解構成器ならできるんじゃない？　壊れた航空客車の金属部分を使えば行けるでしょ」
「なるほど？　まぁとりあえず水を持ち帰るとするか。サバイバルキットの中に水質検査キットがあったはずだから、それを使えば水質のチェックもできるし」

そう言って手分けして黒いポリタンクに水を汲み、バックパックに詰め込む。

「これでよし、と。しかしこいつはなんなんだろうな？」

仄かに発光している謎の物体を拾い上げ、首を傾げ――うん？

「水でも吸ったか？　重くなってる気がする」
「そうなの？　木材だし水を吸ってもおかしくは……いや、この短時間でそれは無いか。ますます不可解な物体ね」
「不可解だけど、便利ではあるな」

重くなったと言ってもさしたる変化ではない。持ち歩く分には何の問題もないだろう。

「水重いなぁ。さっさと帰るか」
「そうね。ミミだけに任せておくのもまだ不安だし」
「違いない」

訓練を重ねてミミも普通にレーザーガンを撃てるようにはなったが、元々があまり争い向きの性格ではない。もし動物が襲ってきたりした場合にはちょっと不安だ。

そういうわけで、ちょっとしっとりして重くなった謎の発光物を手に、俺とエルマは水が入ってクソ重くなったポリタンクを背負って拠点へと戻るのだった。

今ふと思ったが、これ今日の夜にでも救助部隊が来たら無駄になるな？　まぁそれはそれで良いか。これは救助が来なかった時の備え。うん、そういうことで納得しておこう。

#２５４　できる発光物（後書き）

あまりにも好評なのでウマ娘に手を出してみましたが、アレはアカン。お前の時間を無限に溶かしてやるという強い意志を感じる―（：３」∠）―

#255　救助（前書き）

いつの間にかＸ４のＤＬＣきとるやん！（，ω，）

#255　救助

拠点――いや、キャンプ？　に戻ると、何やらシェルターの前に新しい建造物のようなものが設置されていた。見た感じ、水を入れるタンクか何かのように見える。

「ただいま。それは？」
「あ、ヒロ様。エルマさんもおかえりなさい」
「おー、お疲れさん。これな、浄水器やねん」
「浄水器？　これが？」

エルマが首を傾げる。ティーナがドラム缶と称した物体は斜めのドラム缶に縦のドラム缶をくっつけたような形のもので、梯子がついている。どうやらあの梯子の上に水の注ぎ口があるらしい。

「ああ、アレか。中に色々入ってて、それがフィルターになって有害な物質を濾過するタイプのやつ」

確かそんな感じの浄水器を元の世界で見た覚えがある。多分、これはそれと同じようなものだろう。この世界だともっとハイテクな浄水器がいくらでもあるんだろうから、なかなか見る機会は……うん？　待てよ？

「なぁ、そんなものを使わなくてもこの持ち帰ったボトルごと分子分解構成器で再構成すれば安全な水が確保できるんじゃないのか？」
「ほら、やっぱり無駄だったじゃない」
「いやぁ、気づくの早かったなぁ」

俺のツッコミを受け、ウィスカがティーナにジト目を向ける。ですよね。考えてみれば蒸留とか煮沸とかしなくても分子分解構成器で分解、再構成してやれば、それだけで有毒な物質も有害な病原菌や寄生虫の類も一発で綺麗になるわけだ。

「何のために作ったの？　それ」
「暇やったから」
「お前な……」
「作れるなら作りたくなるのがエンジニアの性ってやつやで、兄さん」

そんな習性はどこかに捨ててこい。
なお、俺とエルマが担いできた生水入りポリタンクは分子分解構成器で清水入りポリタンクへと再構成された。煮沸とか蒸留とかで頭を悩ませたのがアホらしくなる結果だったな。ハイテク機器万歳。

「で、とりあえずメシと水の心配は無くなったわけだが」
「んー、すっぱ！」
「酸っぱいけど、これ好きかも」
「あー、ちょっと青臭いけど素朴な甘さで良いわね」
「きのこ、焼きますよー！」
「君達聞いて？　食べるのに集中し過ぎないで？」

水も確保できたので、今後の方針をどうするかメシでも食いながら話し合おうとしたのだが、全員食うのに集中しすぎている。ティーナとウィスカはミルベリーを、エルマはコキリの実を食べ、ミミは俺が作った木の串にスライスしたモコリダケを刺した串焼きを焚き火で炙り始めた。

「言うて、特にやること無いやん。狼煙を上げながら待つだけやろ

？」

「そっすね。確かにそれしか無いっすね」

分子分解構成器で作った黒いカーボン素材のナイフでモコリダケをスライスしながら肩を竦める。このナイフは素材が素材だけにさして切れないものかと思いきや、意外と切れ味がいい。もしかして刃先が単分子とかになっているんだろうか？　だとしたら分子分解構成器すげぇな。

縦にスライスして木の串に刺したら焚き火で炙って、食べる時に塩をちょんとつけて食う。美味い。味と食感は……うん、エリンギっぽいな。バターと醤油で焼いたら絶対美味い。塩だけでも悪くないけど。

「あー、お酒が欲しくなる味ねー」

「それなー」

「本当にそうですよね」

また酒飲み達が酒を求めて鳴いている。そんなもん無いから諦めてくれ。長い目で見ればミルベリーと水で酒を醸造できるかもしれんが、そんな技術も設備も無いからな。まぁ、ミルベリーの酒はありそうだけどな。この星には。

「どれくらいで救助が来るかですよねー」

「そろそろしびれを切らしたメイがクリシュナでかっ飛んで来そうな気がするけど――」

と俺がそう言った瞬間、上空に黒い影が過ぎった。何かと思って見上げてみれば、見慣れた黒い機体が上空を飛んでいくではないか。

「「「あっ」」」

全員が同時に声を上げた。今のシルエットはどう見てもクリシュナである。セキュリティの関係上、メイ以外にクリシュナを動かすのはほぼ不可能なので、今上空を過ぎ去ったクリシュナは間違いなくメイが操縦しているものだろう。

一度上空を過ぎ去ったクリシュナだったが、少しするとまた上空に現れた。こうして改めて見ると大きいな。全長だけでも列車の車両を二台並べたのと同じか、それ以上に長いんじゃないだろうか。

「手を振ってみよう」

「はい！　メイさーん！」

俺が上空のクリシュナに向かって手を振ると、ミミも上空に向かってブンブンと両手を振り始めた。ついでにぴょんぴょん跳んでいるので胸元が凄い。ばるんばるんしよる。

「着陸するにはちょっと狭いけど……まぁクリシュナなら問題無いわよね」

「せやな」

上空に留まっていたクリシュナはすいーっと平行移動し、俺達が切り拓いて壁を建てたキャンプ地のすぐ横に着陸した。生えている木なんてお構いなしに着陸したので、メキメキビキバキと木が圧し折られている音がするが、シールドと分厚い装甲で守られたクリシュナにとっては何の障害にもならない。

そしてクリシュナが完全に着陸し、待つこと数秒。そう、数秒である。クリシュナのハッチが開くと同時に黒い影が飛び出してきた。文字通り、弾丸のように飛び出してきたのである。そして飛び出してきた影はそのまま真っすぐに俺の前に着弾した。ズドン！　という音を立てるのはもう着陸ではなく着弾だと思うんだ、俺は。

「ぐえぇ」
「メイ、ヒロが苦しがってるわよ」
「恐ろしく速い抱擁やな。うちじゃなかったら見逃してたで」
「あはは……心配だったんですね」

目の前に着弾した黒い影――当然ながらメイである――は即座に俺を力強く抱きしめてきた。いくらメイのおっぱいが結構立派で柔らかくても、こんなに力を入れられて抱きしめられたら流石に苦しい。

「申し訳ございません。取り乱しました」
「メイさんも取り乱したりするんですね」
「私とて感情を持つ機械知性です。取り乱すこともあります」

そう言いながらメイは無表情で俺の身体をまさぐり、異常な箇所がないかチェックしているようだ。うん、触診でわかるような怪我は負っていないから――。

「頭部に切創の痕跡あり。怪我をされたのですか？」
「よくわかったな。航空客車が墜ちた時にどうも頭を打って――」

と言っている間に一瞬でメイに抱き上げられ、物凄い速度でクリシュナの医務室にある簡易医療ポッドにぶち込まれた。有無を言わせない実力行使である。

「別に何の後遺症もないんだが」
『頭の傷はその時はなんとも無くとも、後々に響く場合があります。精密な検査が必要です』

そう言いながらメイがポッドにジャックインしてじっと俺を見つめてくる。あの、なんか簡易医療ポッドが聞いたことのない音を出しているように思えるんだけど、なんか仕様外使用とかしてない？

大丈夫？

『ご主人様は暫くそこで安静にしていてください。後始末は私が致しますので』

「はい」

簡易医療ポッドの外からそう言われたので、大人しく従っておくことにする。今のメイに逆らうのは危険だと俺の本能が警鐘を鳴らしているのだ。

推定宙賊のものと思われる襲撃は一体どうなったのか、何故エルフではなくメイが助けに来たのか、色々と事情を聞きたいのだが、今は聞いてもきっと無駄だろうな。

そうしているうちに眠くなってきた。メイが簡易医療ポッドに鎮静剤か何かの投与を指示していたのだろう。昨晩は眠りも浅かったことだし、まぁ昼寝も悪くない。俺は睡魔に抗わず、そのまま目を閉じることにした。色々と考えるべきことがありそうだが、今はとにかく寝てしまうとしよう。

#255　救助（後書き）

Ｘ４の主人公がマッドサイエンティストに振り回されるのは最早運命なのか（ ｗ ）

#256　一息ついて（前書き）

Ｘ４とウマ娘という地獄みたいな組み合わせの時間泥棒がぼくの睡眠時間を削る！ ―（：３」∠）―

#256　一息ついて

目を覚ますと、寝る前と変わらずメイが簡易医療ポッドの外から中で眠る俺をじっと見下ろしていた。俺が起きたことを確認したメイが簡易医療ポッドを操作し、ポッドの蓋を開けてくれる。

「おはよう、メイ」

「おはようございます、ご主人様。お身体の方は問題ありませんか？　目眩や吐き気、頭痛などは？」

「特に無いな。快調だ」

「それはようございました。しかし、頭の怪我は危険なものです。できるだけ早くちゃんとした医療施設で精密検査を受けましょう」

「了解。それで、状況は？」

簡易医療ポッドから起き上がり、ポッドに放り込まれる前にメイの手によって引っ剥がされたいつものジャケットに袖を通しながらメイに聞く。

「今は総合港湾施設に停泊しているブラックロータスに着艦しております」

「そうか。皆は？」

「ブラックロータスに戻ってから皆様お休みになられましたが、既に起きていらっしゃいます」

メイの返答を聞きながら小型情報端末で時間を確認すると、夕飯時――と言うには少々遅い時間だった。まぁ、でも腹が減ったし何か食うとするか。

「腹減ったからメシにするわ。まずは風呂だな」
「はい、お供致します」
「別に怪我なんて治ってるんだし、そこまで気を遣わなくても大丈夫――だけどうん、入ろうか」
「はい」

気を遣わなくても大丈夫、と言ったところでメイのテンションが下がったような気がしたので、方針を転換して一緒に入ることにした。メイは随分と俺達のことを心配していたようだし、実際に助けに来てくれた。多少の我侭は聞いてやることにしよう。普段はこうして自己主張することも少ないしな。
そうしてブラックロータスの少し大きいお風呂でメイとしっぽりじっくり風呂に入り、食堂へと向かう。そうすると既に食事を終えたミミ達が食堂に集まってマッタリとしていた。

「あ、ヒロ様おはようございます」
「おはようと言うにはかなり遅い時間だけどな」
「私達には基本的に昼も夜もないけどね」

そう言って肩を竦めながらエルマが食堂に設置されているホロディスプレイを指差す。見てみると、どうやら俺達も巻き込まれた今回の一連の騒動についての特番をやっているらしい。画面にはちょうど真っ赤な旗に黒いドクロが描かれた海賊旗――のようなエンブレムが表示されていた。

「やっぱレッドフラッグ（赤い旗）だったか」
「声明は無いみたいだけど、船のエンブレムを見る限りはそうみたいね。大部隊で星系軍を引きつけて、少数でシータに降下して総合港湾施設を破壊。地上を蹂躙するつもりだったみたいだけど」
「そこにメイとブラックロータスが居て、作戦は大失敗と」

「そういうことね。恐らく、前の襲撃が失敗して潰れた面子を取り戻そうとしたんでしょうけど」
「ドツボにハマってんなぁ。まぁ、ブラックロータスは見た目非武装に見えるし、クリシュナ一機くらいは数で押し潰せると思ったのかね」
「そもそも、まだ残ってるとは思ってなかったのかもしれないけどね」

などと話していると、画面が切り替わって見覚えのある面々が表示された。各部族の族長達だ。どうもニュースの内容を聞く限り、再度の母星襲撃に関して星系軍の不手際だと批判が殺到しているらしい。星系軍としては今回の襲撃は通常の襲撃規模を遥かに上回るものであり、警戒も厳にしていたからこそこの程度で済んだのだと主張しているようである。
今回の襲撃において宙賊側は超光速ドライブを取り付けた小惑星によるシータへの質量爆撃を試みており、そちらの対応に戦力を割かざるを得ずシータへの直接降下を阻むことができなかったということらしい。

「どっかで見たような手口だなぁ」
「宙賊同士にも独自のネットワークがあるらしいしね。成功体験は共有されたりしてるんじゃない？」

超光速ドライブを取り付けた小惑星による質量爆撃という手口は前に訪れたリゾート星系――シエラ星系でも見たんだよな。防御側としては絶対に小惑星を地表に落下させるわけには行かないから、その対応に嫌でも手を取られることになる。

「で、それはそれとしてうちらの墜落の件に関してはローゼ氏族がグラード氏族やミンファ氏族を強く非難しているみたいやね」

案内役としてローゼ氏族のリリウムが同行してはいたが、グラード氏族領に赴くための足を手配したのはグラード氏族だし、運転手を務めていたヒィシはミンファ氏族だ。早急な救助をするためにローゼ氏族が航宙艦での捜索を打診したが、テクノロジーアレルギーのグラード氏族がそれを拒否。自分達のケツは自分達で拭くと航空客車と同じ原理で飛ぶ乗り物で救助をしようとしたが、ミンファ氏族がそれに待ったをかけた。事故車両を検査した結果、過剰な魔力によるオーバーロードを起こしていた可能性があり、同じ仕組みの乗り物だと二の轍を踏む可能性があると。

そうして早期の救助が必要なはずなのに対応に遅れが生じ、そのうちに赤い旗による襲撃が起こった。混乱の中で俺達の救助は遅れ、最終的にはキレたメイが周囲の静止を振り切ってクリシュナで出動。速攻で俺達を発見して連れ帰ってきたという顛末である。

「政治だなぁ」

「それで墜落したまま放置された方はたまりませんけどね」

ウィスカが苦笑いを浮かべる。

「ヒロ様が事前にサバイバルキットを用意していなかったら、保存食や水筒を用意するように言っていなかったらと思うとゾッとしますね」

「本当にあれは慧眼だったわね。まぁ、普通に考えると奇行以外の何物でもないんだけど」

「俺の中のゴーストが囁いたんだ」

「トラブルに遭いまくって予想がつくようになっただけやろ」

「やめろ。そのストレートな物言いは俺に効く」

もはや何かに呪われているのではないかというレベルでトラブル

に見舞われているからな。一度お祓いとかしてもらったほうが良いんじゃなかろうか？　しかしこの世界だとどこでお祓いしてもらえるんだ？　エルフならそういうのもできそうだけど、あまりにガチすぎて逆に嫌な予感がするんだよなぁ。藪をつついて蛇を出てくる予感しか無い。

「で、結局俺達への対応はどうなるんだ？」
「はい。各氏族から連絡があり、明朝こちらまで出向いて謝罪させて欲しいとのことです。返事は保留してあります」
「謝罪を受け入れるってことで連絡しておいてくれ」
「承知致しました」

そう言ってメイが頭を下げる。メイも風呂の中でじっくりと俺の身体の様子を確認して幾分落ち着いたようである。しかし、謝罪ねぇ。

「まぁ、客として招待して、その途中で墜落事故なんか起こしたんだから謝罪するのが筋っちゃ筋か」
「事故の原因、兄さんかもしれんけどな」
「それはそれ、これはこれじゃないかな？　予測することは難しかっただろうけど、結果としてお客さんを危険に晒したんだから」
「担当の人災難やなぁ……リリウムさんも航空客車は絶対安全みたいなこと言うとったし、ほんとに安全な乗り物やったんやろね」
「お兄さんを乗せたばっかりに……」
「俺が悪いみたいな言い方はやめないか」
「だって、ねぇ？」
「その件に関してはティーナちゃん達から聞きましたけど、正直私もあまり弁護が……」
「ね。まぁ、それをこっちから言ってやることもないとは思うけど」

肩を竦めてエルマがそう言う。こういうところは強かだよな、エルマは。まぁ、本当に確証があるわけでもなし、かえって場を引っ掻き回すことになりかねないから今回は黙っているのが吉だろうとは俺も思うけど。

「でも、自己調査の結果、魔力？　のオーバーロードの可能性があるってことは判明したんだな」

「そうみたいやね。人を乗せる乗り物である以上は考え得る限りの耐久実験はしてると思うんよ。恐らく、あの羽みたいなのに大量の魔力を流してどれくらいまで耐えられるか、っちゅう試験をしたことがあるんやろね」

「その結果か、途中経過の記録の中に今回起きたような現象が記録されていたんだと思います、先頭の二つの車両はなんとかグラード氏族領まで着いたんでしょうし」

「なるほどなー。まぁ、いずれにせよ故意ってわけじゃないし、俺の過失責任は無いだろう」

「せやね。うちらに魔法とか魔力とか言われてもようわからんもん」

「帝国内でサイオニック・テクノロジーに触れる機会なんて無いもんね」

俺の言葉にドワーフ姉妹も頷く。専門家がこう言うならやっぱり俺に責任はないな。今回の責任を取って比喩的な意味で首が飛ぶ人が出そうな気はするけど。そもそも普通の航空機や航宙艦を拒んで航空客車なんて使ったグラード氏族が全部悪いってことにしておこう。うん。

#257　オイオイオイ（前書き）

Ｘ４がたのしいいいい！ ―（：３」∠）― （遅れましたゆるして

#257　オイオイオイ

結局朝までやることもない――というか、こんな夜中に外に出てもやれることもやることも無いので、俺達は大人しく朝まで時間を潰した。軽く身体を動かしたり、訓練をしたり、仮眠を取ったり、グラード氏族領の森から持ち出してきたモノの処分をしたりと、まぁ時間を潰そうと思えばやりようはいくらでもある。

で、軽く身体を動かしたのであの森から持ち出してきたモノを処分しようと思ったのだが。

「これ、持ってきたんだな」

バックパックに立てかけるようにして例のドリル状の手槍のような発光物体が鎮座していた。俺に会えて嬉しいとでも言うようにピカピカと点滅していて眩しい。

「あ、はい。置いていこうかとも思ったんですが、また同情でも惹くかのように弱々しく点滅していたので」

そう言ってミミが苦笑いを浮かべる。

「謎の発光体のくせにあざといな……しかも情に訴えるべき相手を把握しているあたり油断ならん」

立てかけられていた謎の発光体を手に取る。何故だか妙に手に馴染む感じがするのは何故だろうな。見た目から考えるとあまり手に馴染むようなものではないような気がするんだが。それに俺が手に持つと喜ぶかのように長い周期で点滅するのも謎だ。こいつ、俺か

ら何か吸い取ってるいんじゃあるまいな。ほら、なんかよくわからん力だかなんだかってやつ。俺から溢れ出ているというアレ。

「うーん、手に馴染むが使い途が見当たらんな」

「船に乗ったらダウジングも必要ありませんからね」

そう言って苦笑いしながらミミがバックパックの中から収穫物を取り出す。ごろんとそのままのコキリの実に、カーボンっぽい素材でできた箱に詰め込まれたミルベリー、それに生のモコリダケ。

「どうすっかね、このナマモノ」

「このままだと腐っちゃいますよね？」

「そうだな。確か冷凍保管用のコンテナがあったよな？　アレに入れて冷凍保存しとくか？」

「うーん、シェフに相談してみましょうか」

「ああ、もしかしたら調理に対応してるかもしれないしな」

テツジン・フィフスならうまい具合に調理してくれるかもしれない。自動調理器は基本的にフードカートリッジから様々な料理を作るのだが、テツジン・フィフスのような高性能調理器の場合は生の食材を投入して何かしらの料理を作る機能も併せ持っている。

なんでもテツジンの中には製造メーカーが宇宙中から蒐集した無数の料理レシピデータベースが搭載されており、投入された素材とフードカートリッジを組み合わて料理を作るらしい。科学の力ってすげーなぁ。

「じゃあ食材はあとで纏めて運ぶから良いとして、次はこいつかぁ」

「ウィスカちゃんが一応回収したほうが良いって言っていたので」

次に俺が荷物の中から取り出したのは壊れた救難信号発信ビーコ

ンだった。役に立たなかったやつだな！

「まぁジャンク品入れに混ざらないように確保しておくか。旅先でメーカーの工場か代理店でも見つけたら持ち込むとしよう」

「わざわざですか？」

「より高性能な機種をお得な値段で買えるかもしれないしな」

ちょっとでかいが割引クーポン代わりになるかもしれない。置く場所には困ってないし、それ以外の使い途となるとジャンク品として二束三文で売り払うくらいしかない。まぁ結局忘れられて倉庫の隅で埃を被ることになりそうだが。

「こいつも一緒に置いておくか。光るこれが一緒に置いてあれば目立つだろ」

「ええと……なんだか猛抗議しているように見えるんですけど」

「眩しいなぁ」

激しく明滅する謎の物体をミミと二人で目を細めながら眺める。

「冗談だ。とにかくこれが何なのかエルフ達が来たら聞いてみないといけないしな」

そう言うと、謎の物体は安心したかのように穏やかな周期で明滅をし始めた。本当になんなんだろうな、これは。

☆★☆

夜が明けてすぐにエルフ側から連絡が入って調整した結果、朝の早い時間にあちらからブラックロータスまで謝罪に来るということで話が決まった。俺としては色々な意味で大事にしたくはないのだ

が、今回はメイがブチ切れている。俺はともかく、メイが黙っていなさそうだ。状況を見てメイを止める必要があるかもしれない。

「メイ、抑え気味に、抑え気味にだぞ」
「はい、お任せください」
「俺は普通に謝って貰えれば十分だから」
「承知致しました。必ずや連中を床に這い蹲らせて見せましょう」
「違う、そうじゃない。それは普通とは言わないから」
「一つ間違えばご主人様を含め、全員が帰らぬ人となっていてもおかしくない大事故です。しかも身内の争いで救援が遅れるという体たらくを晒した上、それに私まで巻き込んでご主人様の救出を止め、更に自分達で宙賊どもを退けることもできずにご主人様の手を煩わせるなど言語道断。相応の謝罪が必要かと」
「俺の手を煩わせる？」

最後の台詞には覚えがない。俺は別に宙賊に何もしてないんだが。むしろ、やったのはメイだろう？

「私はご主人様の所有物です。リーフィル自治政府が不甲斐ないばかりに私がブラックロータスを使って宙賊を撃退得ざるを得ない状況になったのですから、間接的にご主人様の手を煩わせたということになります」
「拡大解釈が過ぎないか、それ」
「私は一個の機械知性ではありますが、今はご主人様の所有物です。つまり、私が行なったことはご主人様が行なったも同然です」
「それって、メイが万が一やらかして大事故を起こしたら、俺の責任になるってことだよな？」
「そうなりますね。そのような状況に陥る確率は無きに等しいですが」

メイがこの上ない無表情でそう言う。つまりメイは間違いなど起こさないと、そう言いたいわけか。それは本当だろうか？　割とちょくちょくやらかしているイメージなのだが。いや、やらかしていると言ってもちょっとしたすれ違い程度だから、そうでもないのか。必要と感じて敢えて隠していた結果、俺に怒られるみたいなことくらいだし。

そんな話をしながらメイと一緒に食堂で待っていると、どうやら謝罪に来たエルフ達が到着したようだ。案内にはエルマとミミに行ってもらっている。直前までメイを宥めようとしていたのだが、どうにもうまく行かなかった。このままではメイの苛烈な口撃によってエルフがボコられる未来しか見えない。

「とにかく、穏便にな。俺はエルフと喧嘩をするつもりはないから」
「寧ろあちらが喧嘩を売ってきているというか、謀殺でもしようとしているのではないかという状況ですが」
「極悪なまでに俺の運が悪すぎるだけだと思うよ……」

言っていて悲しくなるが、そうとしか思えない。この世界に来てから獲得した俺の体質によって航空客車が墜落する――そんなことを予測してグラード氏族が航空客車を使って俺を送迎するようにけしかけて俺を謀殺するなんてのはいくらなんでも無理だろう。それこそ万象を見通す神の目でも存在しない限りは。それに俺にはエルフの誰かに謀殺されるような心当たりもない。メイは過剰反応し過ぎだと思う。

と、俺がメイに最後の説得を試みている間に何やら騒々しい気配が近づいてきた。なんだ？　取っ組み合いをしてるってわけじゃないが、妙に荒々しい雰囲気だな。

「貴様だな！？　神聖な森に汚れた技術を持ち込み、土足で踏み荒

らしたのは！」

エルマが食堂の入り口に姿を見せたと思ったら、そのエルマを横に押し退けて見覚えのないエルフが入ってきて、開口一番そんなことをのたまいよった。瞬時にメイから剣呑な気配が漂い始める。

オイオイオイあいつ死んだわ。

「……ワァオ、なんか凄いのが来ちゃったぞ――って待ってメイ。ステイ、メイステイ！　落ち着け！　クールになれ！」

前に出ようとするメイの手を掴み、全力で踏ん張って引き留めようとするが、悲しいかな。特殊金属繊維で作られた強靭かつ強力な人工筋繊維と、特殊合金製の骨格による膂力差は如何ともし難い。

謝って！　鼻息の荒いエルフの人！　早く謝って！　そうじゃないと首をねじ切られても知らんぞ！

#257　オイオイオイ（後書き）

アイツ死んだわ（´　。ω　。、）

#258　面倒な話ともっと面倒そうな話（前書き）

ちょっと数日間執筆に割ける時間が少なくなります！　遅れたりするけど許してね！　―（∵3」∠）―（媚びる

#258　面倒な話ともっと面倒そうな話

「本当に、申し訳ない。この通り謝罪する」

一分後、グラード氏族長のゼッシュが俺の目の前で土下座していた。一分前に俺に食ってかかってきたエルフはどうしたのかと言うと、俺がメイを必死に止めている間に現れたゼッシュ本人の手によって鞘がついたままの蛮刀が振るわれ、その一撃を後頭部に受けて昏倒。ゼッシュの目配せによってお付きのエルフ達に連行されていった。

「いきなりのことでびっくりしたけど謝罪は受け取る。それでその、アレは何なんだ？」

「グラード氏族の中でも特に魔法の業に秀でた一族の長でな。わかりやすく言えば科学技術を毛嫌いしている連中の長だ」

顔を上げたゼッシュが床の上に正座したままそう言う。ふん？　グラード氏族も一枚岩じゃないってことか？　まぁ、一つの派閥が完璧に一致団結してるなんてことはそうあるものじゃない。珍しい話ではないか。

「……それがなんでここに？　そしてああいう行動に？」

「ローゼ氏族からの提案――つまり航宙艦によるヒロ殿達の送迎に関して断固反対した連中のまとめ役でな。奴らの派閥による強硬な主張で航空客車を使うことになったのだ。その結果ヒロ殿達を危険に晒すことになったのだから、謝罪させるために連れてきたのだが……」

「それであの有様か？　本気で？　そんなことある？」

あれはどう見ても最初からいちゃもんつけてくる気満々だったんじゃないだろうか。少なくとも、謝ろうという態度ではなかったぞ。

「昨晩の時点では内心はどうあれ謝罪することに同意していたのだが、この船に着くなりあのざまでな。魔法で足止めをされてしまい、遅れを取った。面目次第もない」

そう言ってゼッシュはもう一度額を床につけて謝罪をした。

まぁ、誠意は伝わってくるし、奴もゼッシュが自らの手で処断した。もしかしたらこの一連の出来事自体が芝居の可能性もあるが、そうであったとしても身内の派閥の長を俺の前で本気で張り倒して、自らも床に額をつけるほど頭を下げたわけだ。これが芝居であったとしても、ここまでするなら許してやろうという気にはなる。

「食って掛かってきたアレに関しては……まぁ、グラード氏族が責任を持って何かしらの処分するなら俺からはこれ以上は何も言わない。事故に関しては……予測は難しかったんだろうが、こちらとしても一歩間違えれば死にかけたってこともあるし、救出が遅れた原因がエルフ同士の内輪揉めによるものだってことも聞いている。聞いている以上、何らかの誠意は見せて欲しいとは思うな」

「もっともな話だ。私も逆の立場ならそう思う。いや、そう思うどころか寛大に過ぎるくらいだ」

「もう少し強く何かを要求されると思ったか？」

「正直に言えば、そうだ」

ゼッシュは素直に頷いた。未だ彼は床に正座をしたままである。俺はソファに座ってるけど。

「面子を顧みずにあんたは頭を下げてくれたし、謝罪の場で予想外

のトラブルがあったにせよそれもまたあんたの手で処断してくれた。その後の処分もしてくれるんだろう？」
「無論だ。謝罪の場で謝罪するべき相手にあのように食って掛かるなど話にもならん。必ず厳しい処分を下させてもらう」
「オーケー。それでな、俺からこれといった要求をしないのにはいくつか理由がある。まず、俺が何かを要求しようにも俺が欲しがるものをあんた達が持っているということはまず無さそうだというのが一つ。最先端のシップテクノロジーなんて持っていないだろう？
それに、例えば金を要求するにしても、エネルには今のところ困っていないし、どんなに請求したとしても今回の件じゃ数百万エネルがいいところだ。そうだな？　メイ」
「はい。賠償金は１５０万エネルから２５０万エネルがいいところかと」

１５０万エネルから２５０万エネルというメイの言葉を聞いてゼッシュの顔色が随分と悪くなる。うん、まぁなかなかの大金だよな。森で半ば自給自足で暮らしているというグラード氏族が払うにはかなり荷が重い額なのではないだろうか。

「それだってあんた達には大金なんだろうが、俺にとっては端金――とまでは言わないが、一月もかからずに十分稼げる金額だ。もし金を請求したとしてもすぐに払える金額では無いだろうし、法的な手続きだなんだで相当な日数拘束されることになるのは目に見えてる。わざわざこの星に居座って延々とそんなことに時間を使うのは無駄にも程がある」
「なるほど。しかし何もしないというわけにもいくまい」
「それは勿論そうだな。何も出せるものがありませんからなにもしません、許してねとか言われたら、流石に温厚な俺もブチギレて帝国の名誉貴族としての特権を振りかざしてしまうかもしれん」
「名誉貴族」

俺の口から出てきた名誉貴族という単語をゼッシュオウム返しにする。うん、いきなり名誉貴族とか言われてもって感じだよな？

「そうだぞ。あー、ゴールドスターはなんだっけ？　帝国内で子爵扱いだっけ？」

「そうなります。調べてみましたが、貴方達リーフィル星系の氏族長はリーフィル自治政府内の役職者に相当しますが、帝国臣民法の扱いの上では平民ですね。つまり、ご主人様は貴方達氏族長全員を帝国臣民法及び貴族法に認められた権利の名の下に斬ることが可能です。無論、比喩的な意味でなく物理的な意味で」

「なんと……」

流石に俺が帝国の名誉貴族であるという情報は知らなかったようだ。まぁ大っぴらに言ってないしな。わざわざ会う人会う人に『俺はゴールドスターの名誉子爵様だ。下手に扱うとずんばらりんだぜ？』と言って回るとか面倒この上ないし、あまりに小物ムーブすぎる。

「自分で言っておいてなんだが、名誉子爵云々は一旦忘れてくれ。とにかく、常識的な範囲内、かつ極力金以外のもので何か詫びの気持ちを示してくれれば良い。上げ膳据え膳でリラックスできる最高級の宿でのリゾートとか、シータでもめったに食べられない山海の珍味を提供してくれるとか、保存の利くおいしい食べ物を山程用意してくれるとか、うちにいる酒好き三人のために旨い酒を色々贈ってくれるとか、女性陣に何か綺麗な宝飾品や服を贈ってくれるとか、そういうので十分だ。それだってそんな１５０万エネル分用意しろとかそういう話じゃないから。センスよく頼む」

「それは難題だな。だが、承知した。我々なりに償いをさせてもらおうと思う」

「そうしてくれ。あ、いくら俺が女好きに見えてもそっち方面のサービスは間に合ってるからな」
「そちらも承知した」

ゼッシュが重々しく頷く。よし、これでまた新しくクルーが増えるような事態にはならないだろう。いざとなればゼッシュにこう言ったことを盾にして断れば良い。

「じゃあ謝罪と償いについてはそんなところで。あと、それとは別に聞きたいことがあるんだが」

そう言って俺は座っていたソファの後ろに隠してあった例の発光物体を取り出し、ゼッシュに見せた。俺の手に握られた光り輝くドリル状の手槍――のような謎の物体を見たゼッシュの顔から表情が抜け落ちる。

真顔である。物凄い真顔である。ちょっと怖いくらい真顔である。

「これを、どこで？」

焦点を失った瞳を俺に向けながらゼッシュが平坦な声でそう聞いてきた。ぶっちゃけかなり怖い。

「墜落した場所の近くの森の中で食料を探して歩き回っている時に見つけたんだが……これが何なのか知っているんだな。なんなんだこれは。やたらとピカピカ光るしこっちの言うことを理解してるみたいだし、置き去りにしたり捨てたりしようとするとやたらと情に訴えかけてくるんだが」
「それを捨てるなんてとんでもない！」
「うおっ！？」

突然大声で叫ぶゼッシュの勢いに押されて思わず仰け反る。どうやら相当重要なものらしい。

「それは御神木の種だ。宙賊の襲撃で半ば焼き払われた御神木を蘇らせるための鍵だぞ」

「へー……なんか知らんが重要なものなら渡すわ」

どうもエルフにとって物凄く大事なものであるらしい。俺が持っていても精々ちょっとした照明くらいに使うのが関の山だし、植物の世話なんてしたこともない。エルフに任せるのが良いだろう。

そう思ってゼッシュに渡そうとしたのだが、彼はブンブンと首を激しく横に振った。ついでに謎の発光物体――御神木の種とやらも拒絶の意を示すようにピカピカと激しく明滅する。

「それはできない。御神木の種に見い出されたのはヒロ殿だ。発芽するまではヒロ殿に持っていて貰う必要がある」

そうだそうだと言わんばかりに謎の発光物体もとい御神木の種もピカピカと光る。

えぇ？　なんだか面倒なことになったなオイ。

#259　特級厄物（前書き）

間に合わなかった……！　―（∵3」∠）―

#259　特級厄物

「事の起こりは先日の宙賊による襲撃なのだ」

俺の対面に置かれているソファに腰掛けたゼッシュがそう言って語り始めたのは、御神木の種とやらが俺の手に渡ることになった経緯であった。

「宙賊どもはグラード氏族領とミンファ氏族領の境にある御神木の根本で行われようとしていた婚約の儀に乱入してきた。襲撃は苛烈で、多くの参加者が死傷し、或いは連れ去られた。宙賊どもはそれでも飽き足らず、御神木にまで攻撃を仕掛けたのだ。奴らの船から放たれた光線で御神木は焼かれ、半ば灰となった」

「なるほど。それでなんであんな場所に種が？」

俺があの発光する種を拾った場所はグラード氏族領のど真ん中だ。場所的にかなり離れている。誰かがあそこまで運んだとでも言うのか？

「御神木は滅びる際に一粒の種を世に放つ。その種は御神木から飛び立ち、手にするべき者が現れる場所へと突き刺さるのだ。そして、相応しき者でなければ抜くことも適わん」

「選定の剣かよ……」

似たような逸話は地球にもあった。アーサー王が抜いた岩に刺さった剣、北欧の英雄シグルドが林檎の樹から抜いた魔剣なんかが有名だ。選ばれし者にしか抜けず、抜いた者に絶大な力を与え、武勲と名誉と破滅を齎す。基本的に抜いたやつは碌な死に方をしていな

い、というのが俺の見解である。

「特級の厄い物体じゃねーか。やっぱ要らんから引き取ってくれ」

「いやいやいや、これは物凄い名誉なことなのだぞ！？」

そうだそうだと謎の発光物体もとい御神木の種もとい特級厄物が明滅する。

「騙されんぞ！　どうせ抜いたやつは絶大な力とか名誉とか武勲とか得る代わりに碌な死に方をしないんだろ！」

「そ、そのようなことは……うん、ない。ないぞ？」

「嘘吐くならもう少し上手く吐けや！」

弱々しげに明滅する特級厄物とゼッシュを怒鳴りつける。

「そもそも、俺は用事が済んだらこの星からおさらばするからな。というか今すぐおさらばしたくなってきた。特に用事はないよな？　よし、行こう。すぐ行こう。今行こう」

「待て待て待て待て！　待ってくれ！　ヒロ殿が種の選定者であるという事実も一度持ち帰って対応を考えなければならない。どうか数日で良いから時間をくれ！」

ゼッシュが再び頭を下げて頼み込んでくる。

「それに詫びの品を用意するのにも時間がかかる。手配と運送で少なくとも三日、できれば一週間は欲しい。その間の宿泊ともてなしについてもこちらで全て手配する、何卒頼む」

「ぐぬぅ……」

ここまで頼み込まれると……いや、ここで妥協するのは良くない。

こういうパターンで今まで何度厄介事に巻き込まれたと思っているんだ。ここは毅然とした態度で――。

「ヒロ様、そこまで気にしなくても大丈夫じゃないでしょうか？」
「……そのこころは？」
「えっと……」

ミミが言いづらそうに目を逸らす。なんだ？

「御神木の種を拾っていても拾っていなくても結局いつもと同じなんじゃないか、って……」
「……」

ミミの言い分に思わず沈黙する。どうせトラブル体質なんだから、トラブル体質というか英雄の資質的なアレを付与する特級厄物を持っていても一緒じゃないかと。そういうことですかそうですか。

「そうね」
「せやな」
「ええと……残念ながら私もそう思います」
「ご主人様。毒を食らわば皿までという言葉もございます」
「嫌だよ！　そもそも毒を食らいたくないって話をしているんだよ俺はっ！」

俺は必死に抵抗したが、結局あと一週間ほどシータに滞在することに相成るのであった。畜生め。

☆★☆

結局、俺達は総合港湾施設の近くにある旅館――一番最初に歓迎

の宴を開いてもらったところだ――に暫く滞在することになった。上げ膳据え膳で最初に来た時よりも更に丁寧な対応である。気分は王様かお殿様といったところだ。

それだけなら何の不満もない。その筈だったのだが、まずどこから嗅ぎつけたのか早速シータのマスコミが俺に取材を申し込んできた。当然ながら拒否である。シータの三族長が首を縦に振ろうとも俺は首を縦に振るつもりはない。そう断言したら遠距離からカメラやドローンで俺の様子を監視でもするかのように盗撮し始めやがった。

これでは休まるものも休まらないと早速三族長にクレームを入れることになった。というか、俺は正式な貴族ではないものの、立場的には名誉子爵様である。そのプライベートを隠し撮りとか許されると思ってんのか？　お？　と三族長経由でマスコミを軽く脅したらパッタリと取材という名の盗撮は鳴りを潜めた。貴族特権ってすげー！

それでやっと落ち着くかと思ったのだが。

「お久しぶりです」

と言いながらお供の女の子を二人引き連れた美人さんが訪ねてきた。グラード氏族長であるゼッシュの娘、ティニアである。今日はお供の女の子二人だけでなく、イケメンエルフも一緒だ。

「ミンファ氏族長ミリアムの子、ネクトです。どうもその説は本当にお世話になりました」

輝くような金髪が眩しい爽やかイケメンである。物凄いイケメンなのに気障ったらしいところもなく、好感の持てる青年だ。

「快復したようで何よりだ」

「お蔭様で。正直に言うとあの船の中の記憶は殆どないんですが、貴方の助けが無ければ私は命を落としていたと聞いています。本当にありがとうございました」

そう言ってネクト氏が頭を下げる。うん、こうして素直に感謝されると気持ちが良いな。多分自然とこういうことができる辺りが爽やかイケメンを爽やかイケメンたらしめる所作というものなのだろう。

「それと、先日は母がすみません。人伝に聞いたのですが、ご迷惑をおかけしたと」

「いや、まぁ本人の興味もあったんだろうけど、親身になって話を聞いてくれたわけだしな」

興味の比重がかなり大きかったように思えるが、ミリアムさんの考察そのものは聞いていてちょっと楽しかった。魔法に対する興味は今も微塵も無いが、まぁ時間はあるのだし一回くらいは訪ねてみても良いかも知れない。

「それと、ちらりと耳に挟んだのですが、ヒロ殿は珍しい飲み物を探しているとか」

「ああ、うん。まぁ探しているものは無かったんだけどな」

思わず遠い目になる。大手の飲料メーカーの人が知らなかったなら、この星にコーラ的なものが出回っているということはまずあるまい。

「実は、ミンファ氏族領で一般には出回っていない薬湯というのが色々あるんですよ。グラード氏族領に近い地域に住んでいる人達――その中でも特に薬草師や薬師と呼ばれる人達が作っている健康飲

料のようなものです」
「……ほう？」
俄然興味が湧いてきた。確かコーラの原点はそういった地方の医者みたいな人達が作った健康飲料――ルートビアだった筈だ。流通経路に乗っていないローカルドリンクとしてコーラになる前のルートビアが隠れている可能性は十分に有り得る。
「過去のコンテストで評判の良かったもののレシピや、去年のコンテストで優秀作品とされたものの現物をいくつか用意してきたのですが……」
「グッジョブ、マイフレンド。早速試飲しようじゃないか。ああ、良ければ俺達の船に来るか？　航宙艦に乗ったことってあまり無いだろう？　良ければ遊覧飛行にもご招待しよう。望むなら宙賊狩りツアーに連れて行ってもいいぞ」
ネクト君は良い奴だな！　え？　態度が露骨？　そりゃそうだよ。俺は聖人君子でも清廉潔白な政治家でもなんでも無いんだから。ローカル飲料の試飲、楽しみだな！

#260　エルフの英雄譚（前書き）

間に合わなかった……！　―（∵3」∠）―

#２６０　エルフの英雄譚

「……」
「兄さん、おもろい顔になってんで」
「まぁ、こんなもんよね」

ネクト君が持ってきたローカル飲料は、まぁなんというか非常に薬臭いものが多かった。いや、だがそれっぽさはある。何かこう、萌芽のようなものは感じる。だがまだあの味に、世界的清涼飲料水であるあの味にはまるで至っていない。入り口に僅かに指先が引っかかっているようなものだろうな、これは。

「お気に召さなかったようで」
「いや、うん。そういうわけじゃない。現実に打ちのめされただけだ。でも、これとかこれ辺りは少し手を加えれば美味しく飲めそうだな。清涼飲料水メーカーとちょっとしたコネがあるから、顔を繋ごうか？」
「ふむ……そうですね。レシピ保持者も交えて話をしてみます」
「そうするといい」

清涼飲料水メーカーで話をした商品開発部の人の連絡先を教えておく。ついでにメイに指示して彼に予めメッセージを送っておいてもらう。いきなりミンファ氏族長の息子から連絡が来たらびっくりするだろうからな。

「これが御神木の種……」
「本当に光っていますね。魔力なのでしょうか」
「すごい、子供の頃に絵本で見た通りの形ですね」

ティニアさんとそのお付きの二人――確かミザとマムだったか――は立派な刀置きのようなものに安置された特級厄物を眺めて感心している。特級厄物はというと、なんだか気分良さげにゆったりと明滅しているようだ。なんとなくドヤ顔をしているように思えて若干イラつく。

「それにしても、御神木の種を見出す……いや、御神木の種に見出されるとは、流石ですね」

「それについてこの星の皆さんは大層名誉なことで、凄いことなのだと思っている節があるが、俺にしてみたらただの面倒事だからな？」

「面倒事ですか。この星の住人からすれば、これ以上無い栄誉なんですが」

ネクトが苦笑いする。

「いやわかるよ？　俺だって聖剣エクスカリバーとか魔剣グラムとかそういう伝説の武器的なサムシングを突如手にしたら、あるいは実際に目にしたらテンションが上がるだろうさ。でも、こいつは俺にとっては何の思い入れもない謎の物体で、こいつを手に入れてしまったがために半ば自由を奪われたような状態だからな」

そう言って俺がジト目を向けると、立派な刀掛けのようなものに鎮座していた御神木の種こと特級厄物が抗議するかのようにピカピカと明滅する。

「そも、どういう謂れのあるアレなんだ？　俺はエルフの伝承なんぞ全く知らんから、物凄いことだとか言われても全くピンと来ないんだが」

「ああ、なるほど。それならティニアに話してもらうのが良いでしょう」
「ティニアに？」
「こういう昔話が得意なんですよ、ティニアは。グラード氏族の女性は語り部や御神木の巫女としての役割も担っていますから」
「ほう？」

御神木の種を眺めていたティニアに視線を向けると、ちょうど彼女もこちらの声が聞こえていたようで目が合った。

「私で良ければお話しますよ」
「お願いする」

俺がそう言うとティニアは頷き、語り始めた。それはエルフと魔物が織りなす戦いの歴史だ。
昔、少なくともこのシータに帝国軍が現れるよりも前――数百年は昔の話だ。帝国軍が現れる前、シータにはエルフの他にも知的生命体が存在した。それは魔物と呼ばれる生物群で、いくつかの種族で構成される非常に暴力的な種族であった。
彼らとのコミュニケーションは何度も試みられてきたのだが、それは一度も叶わなかった。エルフ達と魔物は運命づけられたかのように相争い、一進一退の攻防を続けていた。そんなエルフ達を支えたのが御神木だ。御神木の葉や花、実はエルフ達の傷を癒やし、エルフ達は御神木を通じて様々な魔法の業を習得し、魔物との戦いや日々の生活に活用した。御神木はエルフにとって無くてはならない存在だった。
当然ながら魔物達はそんな御神木を目の敵にしていた。狡猾な魔物達は何度もエルフの目を掻い潜って御神木を傷つけ、穢し、燃やした。当然、そうなればエルフは一気に勢力を減じることとなり、魔物達はエルフを絶滅させんと激しく攻撃を仕掛けてくる。

しかし、その度にエルフの中から御神木の種を見出し、見出された戦士が出現した。選ばれし戦士は御神木の種の力を用いて絶大な魔法の力を使った。また、御神木の種そのものも強力な武器であった。精霊銀を用いた武器ですら貫けない強大な魔物の皮膚ですら、御神木の種の前には何の抵抗もなく貫かれた。

御神木の種は槍として用いればその鋭さは全てを穿ち、一度投擲すれば何十体もの魔物を貫いて選ばれし者の手へと戻ってくる。エルフ達の希望の象徴とも言える武器であった。

「そんな物騒な性能を持っているのか、こいつは」

「全てを穿つ、ですか。流石に大言壮語だと思いますけど」

「超重圧縮素材の装甲とかも貫けるんかな？　兄さん、試してみいひん？」

「面白いな、やってみるか」

やってやろうじゃねぇかよこの野郎！　とでも言いたげに特級厄物がピカピカと明滅する。お前、後悔しても知らんぞ？　貫けなくて泣いても知らんからな。

「とりあえず謂れはよくわかった。で、こいつを手に入れた者はその魔物とやらからエルフ達を救う希望の戦士的なサムシングとして大活躍すると」

「はい、そうですね」

「で、その希望の戦士様の最期はどうなるんだ？」

「……ええと」

「おい、露骨に目を逸らすな」

というか、その性能なら手放さない限り無双できそうなもんだが。

「英雄譚としては魔物を押し返してめでたしめでたしで終わりなの

ですが、大体の場合は戦後、種を手放した後に戦いで命を落とすか、魔物に暗殺されるパターンが多いですね」
「やっぱり駄目じゃねぇか！」
「本人も周りも種を失う前の感覚で無茶をし、無茶をさせて命を落とすということが多く……」
「繰り返すなよ。学習しよう？」
「あと、これは公然の秘密ですが、魔物との戦いが終わった後に力を手放したくないと考える戦士も多く、その場合は次世代の御神木が育たないということになります。そうなると困るのは他のエルフでして」
「えっと、それって……」

ミミが表情を引き攣らせる。うん、そういうことだろうな。

「身内からの暗殺かよ！　ドロッドロじゃねぇか！　俺はそんなもん要らんからとっとと持って帰ってくれ！」

なんてことを言うんだと言わんばかりに特級厄物が激しく明滅する。うるせぇ！　お前みたいなわけのわからんもののために命を狙われるなんざ御免だ！

「というか、その魔物っちゅうのは今どうなっとるん？　今までそんなの居るって聞いてへんかったんやけど」
「帝国軍が滅ぼしました」
「あっ、はい」

とても簡潔な答えだった。多言語翻訳インプラントがその頃からあったのかどうかはわからないが、恐らくシータを植民地とすべく訪れた当時のゲッペルス帝国はエルフと魔物と呼ばれていた種族を天秤にかけた結果、シータの支配者としてエルフを選んだのだろう。

エルフと魔物とやらがどれだけの期間戦いを続けていたのかは知らないが、突如天から現れた未知の軍勢が長年争ってきた敵対種族を瞬く間に滅ぼし、臣従を迫ってくる。エルフにしてみれば従う以外の選択肢はないだろう。そうでなければ自分達が魔物と同じ運命を辿りかねないのだから。

「しかし知的種族を浄化するとはなぁ……昔の帝国ってかなり過激だったのかね？」

「昔も何も、今もそうよ？　どうあっても共存できないと判断すれば知的種族だろうとお構いなしね。他の知的種族を食料としてしか認識しないようなのと共存は無理でしょ。寧ろ、帝国はかなり寛容な方ね。帝国は直接国境を接していないから脅威になっていないけど、ヴェルザルス神聖帝国なんかは生粋の純血主義で、他種族なんかは全部奴隷にしてるって話よ」

「こわ。近寄らんとこ……って話がずれたな」

その後も特級厄物に関する英雄譚を色々と聞いたが、やっぱり所持者の殆どは最終的に碌でもない最期を遂げているようだった。うん、絶対に手放そう。なんか魔力だかなんだかが云々って話で暫くはこいつの世話をしなきゃならんみたいだが、必要な時期を過ぎたらすぐにエルフに引き渡そう。絶対にそれがいい。

#261　どうして……（震え声）（前書き）

てんきがわるいとちょうしがわるい―（：3」∠）―

#261　どうして……（震え声）

「……どうしてこうなった」

翌日、俺達はミンファ氏族領を訪れていた。昨日一日でそれなりに仲良くなったネクト君に招待されたのだ。

どちらにせよ御神木の種に俺の魔力だか力だかを馴染ませて芽吹くための準備を終わらせるため、最低でも一週間ほどはシータに留まってくれと言われていたし、その間は豪華な旅館で歓待してくれるという話だった。特に急ぐ用事があるわけでもないからエルフ達からのその申し出を受けることにしたは良いものの、やることもなく暇である。

昨日ブラックロータスに訪ねてきていたグラード氏族長の娘であるティニアとミンファ氏族長の息子であるネクト君にそう話したら、それであればミンファ氏族領に観光に来るのはどうですか？　とネクト君から言われて二つ返事で了承したのだ。

今はそのことを大変後悔している。何故かって？

「謀ったな、ネクト」

「違います。信じてもらえないかも知れませんが本当に違います。こんなことになるとは僕も思っていませんでした」

俺はミンファ氏族領の競技場――いや、自分を騙すのはやめよう。どう見ても闘技場に居た。踏み固められただだっ広いフィールドを囲むように観客席が設えられており、俺が入ってきたのとは反対側にはいかにもやる気ですと言わんばかりのエルフの戦士達が控えている。全員何かしらの武器を持っており、何かの革製と思われる鎧を装備している奴まで居る。

「いやこの絵面で謀ってないってのは無理があるだろう」
「わかります。よくわかります。ですが僕の弁明を聞いてください」

昨日、俺達が招待に応じたということでネクトはミンファ氏族領へと帰りながらすぐにミンファ氏族長である自分の母、ミリアムへと連絡を入れた。これは当然のことだ。ミンフィ氏族長の息子であるネクトが客人を招待するのだから、氏族の長であり母でもあるミリアムに連絡を入れるのは当然の流れである。

「わかりました、盛大に歓待しましょう。全てこの母に任せておきなさい」

ミリアムはそう言った。母のミリアムは多少――いやかなり魔法の業に傾倒しているが、それでもミンファ氏族を率いる長だ。当然、仕事はできるし氏族の長として客人を迎えるということであれば手は抜くまい。全て任せろと言うからには任せたほうが良いだろう。

「そう考えた僕が浅はかでした」

ミリアムはその有能さを遺憾なく発揮した。何せ伝説の御神木に選ばれし英雄にして、エルフの大恩人の来訪である。歓迎は盛大にしなければならない。結局グラード氏族領に赴くことはできなかったということだし、ここはグラード氏族からも人を呼ぼう。ついでにローゼ氏族からも人を呼んで三氏族総出で歓待するのが良いだろう。

そう考えて早速グラード氏族とローゼ氏族に打診したところ、グラード氏族からヒロ殿は傭兵だという話だし、話によれば単身で悪党どもの根城に切り込むほどの益荒男だという。シータに降りてからはその腕を振るう機会も無いようだし、ここは一つグラード氏族

とミンファ氏族の戦士を集めて歓待するのはどうか？　と提案があった。

「どうして」

それは普通歓待とは言わない。普通、歓待というのは美味い食い物とか伝統芸能とかそういうので客をもてなすとか、そういうのだろう。どうして武器を使った殴り合いが歓待になるというのか？　それは歓待ではなくいわゆる『かわいがり』というやつでは？

無論、エルフの――少なくともミンファ氏族であるネクトの――感覚でもそんなものは娯楽とは言えないし、当然それが歓待であるとも思えない。

「ただ、うちの母の悪い癖が出たようで……」

伝説の英雄の再来、その戦闘力はいかほどのものなのか？　伝説によれば立ち向かうところ敵なしということだが、本当だろうか？　知りたい。伝説の戦士の、英雄の再来というのがどの程度の力の持ち主なのかこの目で見たい。

「とでも思ったのだと思ったのではないかと」

「どうして」

「その、母は知的好奇心が絡むとちょっと常識が……」

「どうして……どうして……」

「別に付き合う必要はないと思いますけど……」

「え？　兄さんやらんの？　ここまで人が集まってるんやし、全部パパーっと畳んできたらええやん」

ウィスカが苦笑いする横でティーナが首を傾げている。

「寧ろどうしてやると思ったのか」
「えー？　だって兄さんめっちゃ強いやん。向かってくるエルフなんて全部畳んでドヤ顔キメてやればええんやない？　きっと盛り上がるで」
「うーん……」

絶対に嫌というわけではない。いや、痛い思いをするのは普通に嫌なんだが、戦うこと自体に忌避感はあまりない。力を誇示することに意義がないとも思わないし。ただ、乗せられるがままに戦うってのもなんだか気に食わない。

「俺に得が無さすぎるんだよなぁ……勝ったら一目置かれるようになるんだろうが、負けたら痛い思いをする上にエルフから失望されるわけだろう？」
「だからってここまでお膳立てされて逃げるのもね……プラチナランカーとして、ゴールドスターとして、そして御前試合の優勝者として戦いから逃げたって評判は……」

エルマも俺と同じように面白く無さそうな顔をしている。エルマの言う通り、色々な状況を勘案するとどれだけ気が進まなくともこの勝負には乗らないわけにはいかないのだ。それが大変に気に食わない。

「歓待すると言ってご主人様が逃げられない勝負を仕掛け、リスクを負わせる。エルフの歓待とは大したものですね」

絶対零度の無表情でメイがネクトに嫌味を言う。ネクトは降参の意を示すものか、両手を挙げながら頷いた。

「お怒りはごもっともです。僕もそう思います。母にはよく言って

聞かせておきます」
「詫びなら言葉だけでなく何か形で示してもらいたいもんだな……というかあまりに酷くないか？　俺、今詫びられてる最中じゃなかったっけ？」
「文化の違い、ですかねぇ」
「やめてよエルフのことを脳筋みたいに言うの。私は違うからね」

苦笑いを浮かべるミミにエルマが物凄く嫌そうな顔でそう言う。

「おっ、そうだな」
「言いたいことがあるならはっきりと言っても良いのよ？」

笑顔で青筋を浮かべながら手をにぎにぎするのをやめてください。そういうとこだぞ、そういう。

「ま、エルフにもよそ者がエルフの伝説を体現したってことに対して気に食わん奴もおるやろ。もうあの種とかいうのを兄さんが見つけた時からこうなるもんと決まってたんやないの？」
「俺だって見つけようと思って見つけたわけじゃないんだが？」
「ならそういう運命だったってわけやな。いつものバッドラックと思って諦めるのも大事やと思うで」
「それを受け容れてしまったら負けだと思うんだ」

溜息を吐きつつ、用意されていた武器の中から自分の剣と同じような重さ、長さの長剣と小剣を選んで腰に帯びる。刃引きはされているようだが、それでも鉄、というか多分鋼の棒みたいなもんだ。切っ先は鋭いし、剣速が乗れば斬ることもできるだろう。これでガチの殴り合いをしようって野蛮過ぎんか？　もう少し痛くない方法でどうにかならん？

「相手を戦闘不能にするか、降参させれば良いんだな？」
「ええ、はい。そうなります。怪我をしても治癒の術で治しますので」
「治癒の術、ねぇ……」

俺からすればエルフの魔法も治療用ナノマシンを使った救急治療キットも得体が知れないって意味では同じだな。まぁ治るなら良いや。あとは痛い思いをしないように気をつけてやれるところまでやってみるとしよう。
なに、サイバネティクスによる強化バイオテクノロジーによる強化もしていないノーマルな相手なら苦戦することもあるまい。軽くひねってやるとしよう。
ただしこの歓待の仕方については後で責任者に強く抗議させてもらうからな。覚えてろよ。

#262　恨みは無いが容赦もしない（前書き）

五巻の発売日が決まって表紙も公開されたよ！―（∵3」∠）―

#262　恨みは無いが容赦もしない

『さぁ、挑戦者達の準備も整ったようです！　御神木の種に選ばれし英雄の実力や如何に！？　血湧き肉躍る戦いが始まります！』

始まりますじゃないんだが？　どうしようもなくやる気が出ないが、ここまでお膳立てされてはやらざるを得ない。こうなったらやってやろうじゃないか。挑戦者達には存分に痛い目に遭ってもらうとしよう。

刃を潰した金属製の剣を両腰の鞘から抜き放ち、だらりと両手を下げたまま闘技場の中心へと歩みを進める。用意された剣はモノソード（いつもの剣）とは少々重量バランスが違うが、まぁなんとかなるだろう。エルフの戦士と言っても相手は未強化の一般人だ。如何な達人であろうともその剣閃が殺人光線（レーザー）やサイバネティクスとバイオテクノロジーで強化した白刃主義者の剣より疾いということはあるまい。

「アンタが御神木の種に選ばれし英雄、ねぇ」

一見すると鉈のようにも見える蛮刀を手にしたエルフの戦士――見た目も口調も若く思えるがエルフだから実際のところはわからん――が興味深げに足元から頭の天辺までをジロジロと見てくる。

「ドーモ、エルフの戦士＝サン。キャプテン・ヒロです」

「おう。グラード氏族の眷族、ダイナ家のデルシュだ。よろしくな」

そう言ってデルシュと名乗ったエルフの戦士はニカッと人好きのする無邪気な笑みを浮かべてみせた。

「俺は難しい政治の話はわかんねぇけど、御神木の英雄と戦えるのは単純に嬉しいんだ。御神木の英雄はエルフの戦士――いや、エルフの男の憧れだからな。エルフの男なら子供の頃に一度は御神木の英雄ごっこをするってもんだ」
「なるほど？」

俺はだらりと下げた手に力を込めながらいつでも動けるように僅かに腰を落とす。

「そんな英雄と手合わせできるなんて夢のようだ……あっさり負けてくれるなよ？」
「心配すんな。全員仲良く叩き伏せてやる」

デルシュの無邪気であった笑みが攻撃性剥き出しの凶相へと瞬時に変わった。

「やってみろ。行くぜ」

獣のような俊敏さでデルシュと名乗ったエルフの戦士が突っ込んでくる。なるほど。未強化とは思えない踏み込みと敏捷性だ。もしかしたら魔法とやらで身体機能をブーストしているのかもしれない。

「グェ――ッ！？」

デルシュが小さい苦悶の声を上げ、突っ込んできた勢いそのままで闘技場の地面に顔面スライディングをキメる。突進しながら放ってきた一撃を軽く受け流して首に一撃だ。
うん、速いけど全然駄目だな。真っ直ぐ突っ込んでくるんじゃ全く話にならない。蛮刀の一撃はなかなかに重いようだったが、重い

ならまともに受けずに滑らせて受け流せば良いだけのことだ。それに、重いと言ってもメイの一撃の方が遥かに重い。

『おっとぉー！？　グラード氏族でも若手ナンバーワンの実力を持つと言われていたデルシュ氏、まさかの一撃ダウンだー！？　一体何が起こったー！？　御神木の英雄、キャプテン・ヒロ氏は一歩しか動いていないぞー！？』

『最小限の動きでデルシュ氏の攻撃を受け流し、カウンターの一撃で沈めたようですね。恐ろしく鋭く、正確な一撃です』

デルシュが係員に引きずられていくのを横目で見送ってから次に出てきた相手に視線を向ける。次に出てきたのは最初に出てきたデルシュよりも大柄の男だった。大柄と言ってもエルフだから、がっしりという感じでもないが。普通に長身の細マッチョってとこだな。

「ふむ、デルシュで相手にならんか。あれも決して弱くはないのだが」

そう言いながら歩を進めてくる男の得物は短槍だ。彼の背丈と同じ――柄と穂先を合わせて１８０ｃｍくらいの槍だな。

「だが、奴はグラード氏族でも若手。勢いはあるが技はまだまだといったところよ」

「なんだこの奴は四天王の中でも最弱、みたいなムーブは……」

「してんのう？」

「いやなんでも。御託は良いからはよ来い」

「ふむ、自信があるようだな。私はデルシュのようにはいかんぞ」

そう言いながら短槍の戦士が慎重に歩を進めてくる。間合いを測っているんだろう。まぁ、リーチはあっちのほうが長いからな。リ

ーチの長い武器はそれだけで強い。それに、槍ってのは基本的に突く武器だ。点の強力な攻撃というのは防ぐのが難しいし、熟練すれば攻撃速度も早くなる。それに、槍は突く武器とは言っても別に振れない武器というわけでもない。振れば攻撃範囲は非常に広く、木製の柄や金属で補強された石突で打たれれば十分痛手になり得る攻撃力を持っている。

「ぬっ！？」

相手の間合いに入り、攻撃が繰り出され始めたその瞬間、俺は前に動いた。攻撃を止めることのできない一瞬の隙を見極めたのだ。繰り出される槍に剣を合わせることもなくその攻撃をすり抜け、コンパクトな振りで槍を持つ手を狙う。

「くっ――ごっ！？」

短槍の戦士の判断は早かった。素早く短槍を引き戻し、回転させて俺の長剣による攻撃をいなしたのだ。だが、その防御をすり抜けた左手の短剣による一撃がまともに入った。攻撃が入って硬直したところに身体を回転させながらの追い打ちの一撃を入れて沈める。

『まただーっ！？　何が起こったー！？』

『コルト氏の一撃がまともに入ったかのように見えましたが、紙一重で躱していますね。そしてあの一瞬でヒロ氏は三発もの攻撃をコルト氏に浴びせています。囮の一撃、崩しの一撃、止めの一撃ですね。その三連撃が一瞬で繰り出されたのです』

解説さん、よく見えてるな？　記録映像でも見ながら解説しているのかね。

崩れ落ちた短槍の戦士――コルトをその場に置き去りにして剣を

握った右手を持ち上げ、闘技場の向こう側に待機しているエルフの戦士達に人差し指を向けて挑発する。

「一人ずつじゃ埒が明かん。纏めて来い」

あからさまな不快感を示す者、面白そうだと笑みを浮かべる者、無表情で武器を持つ手に力を込める者、笑顔と言うには少々物騒な凶相を浮かべる者、その反応は様々であった。しかし、挑発されてそれに乗らないような戦士は一人も居なかった。

互いに視線を交わし、身振り手振りによる最小限のやり取りを交わしながら陣形を組み、隊列を整えてこちらへと歩を進めてくる。

『ヒロ氏、ここで戦士達を挑発したー！？　この挑発に戦士達は応じるようです！』

『母なる森で糧を得る戦士達の本領は集団戦です。圧倒的な強さを見せたヒロ氏ですが、流石に苦戦は免れない、と思いたいのですが』

蛮刀を手にしたエルフの戦士が前に、短槍を手にした戦士がその後ろに着いて隊列を組んだ。五人ずつ、三方に分かれて俺を包み込むように迫ってくる。これが彼らの必殺の戦法、森に住む危険な獣を狩る時のフォーメーションなのだろう。それに対する俺の選択肢は一つ。

こちらから集団に飛び込む、だ。

『おおっと！　キャプテン・ヒロ！　左手の集団に飛び込んだぁー！』

『あの陣形はリガ・ラウの突進に備えた陣形です。選りすぐりの戦士達であれば受け止めることも難しくないはずですが』

俺の突進に反応して左手の小集団がサッと散会し、俺を包囲しな

がら同時に攻撃を叩きつけてきた。三人の蛮刀による剣撃、そして二人の短槍による刺突。素直に飛び込めばどれかを防いでもどれかに当たるのだろう。だがしかし、俺は野の獣ではないし、何より人間を迎撃するのにはその陣形は素直に過ぎる。

人と人の間隙から繰り出される槍の刺突は攻撃範囲が限定されていて予測に容易く、蛮刀による大ぶりの攻撃もまた予測に容易い。そして、鋭いつもりのその攻撃も俺にとっては――。

「――ッ！」

絶望的なまでに遅い。

息を止めた瞬間、世界の動きが緩慢になる。どの武器がどのような軌跡を描き、どこへと突き進むのかが手に取るように理解る。

振るわれた蛮刀を掻い潜り、繰り出される短槍の刺突をすり抜けて一番右手のエルフの戦士へと肉薄する。彼にしてみれば俺が急に加速して懐に入ってきたように見えていることだろう。驚愕の表情を浮かべかけた彼の顔のど真ん中に柄頭による打撃を加え、その反動に手首の動きも加えて右手の長剣を翻し、真ん中の蛮刀持ち戦士の首筋に刃引きされた剣を叩きつける。更にもう一歩踏み込んで突いた槍を戻そうとして無防備を晒している短槍持ちをすれ違いざまに左手の短剣で打ちのめし、返す刃で慌ててこちらに短槍を向けようとしているエルフの戦士の手から短槍を叩き落とす。

「んなっ！？」

一瞬で三人が倒れ、一人が武器を失ったことに驚愕し、動揺した蛮刀持ちの戦士を長剣の一撃で叩き伏せ、槍を取り落した戦士が腰の短剣を抜く前に両手の剣による痛打を浴びせて無力化した。

『おおっとぉ！？　今の動きは何だ！？　瞬きをしている間に左手の集団が壊滅したァー！？』
『今の動きは私にも見えませんでしたね……凄まじいとしか言いようがありません』

五人目が倒れる前に中央の集団へと向き直り、再び突進する。ははは、まるで案山子だな。だが容赦はせんぞ。

#262　恨みは無いが容赦もしない（後書き）

最強宇宙船5巻は5／8発売！ ―（：3」∠）―

←以下カドカワBOOKS書籍URL←

https：／／kadokawabooks.jp／product／mezametarasaikyosoubitouttyusen／3221010001888.html

#263　決着と結末（前書き）

早寝早起きしたら体調はケロッと治りました（ ˇ ω ˇ ）（ただの寝不足からくる疲労だったのかも知れない

#263　決着と結末

「一斉にかかれ！　リガ・ラウよりも強力な獣と思って対処しろ！」
「こんな獣がいるかよっ！」

エルフの戦士達が声を掛け合っているところに飛び込み、両手の剣を振るう。エルフの戦士達はとにかく俺の攻撃を受けないことを優先し、蛮刀持ちの戦士達が防戦しつつ後ろから短槍持ちの戦士でチクチクと削ることにしたようだ。

「くっ……！」

俺の振るった長剣を肉厚の蛮刀で防御したエルフの戦士が苦しげな吐息を漏らした。

エルフの戦士達が振るう蛮刀は全体的に肉厚で、長さは凡そ彼らの肘から中指の先くらい。頑丈さを優先した剣鉈のようにも見える得物だ。威力が高く、コンパクトで接近戦でも使いやすい逸品なのだろう。つまり、それは防御にも向くというわけだ。

「よっと」
「なっ！？」

攻撃の手を止めて軽々と身を翻す。すると、つい今まで俺の身体があった空間に槍が突き出されていた。必殺の一撃であると確信していたのだろう。力を込めて突き出した槍が空振りし、その槍を繰り出したエルフの戦士の身体が完全に泳いでいる。

「ぐはっ！？」

「がぁっ！？」

当然、容赦なく斬りかかる。短槍を突き出した戦士を庇おうとした別の戦士も合わせて二人同時に叩き伏せ、これでエルフの戦士の残りは五人。俺たちの周りには既に二十人近くのエルフの戦士が倒れている。

「まだやるかい？」

「……我々は戦士だ。戦わずして負けを認めることなどできん」

「そうか。それじゃあとっとと終わらせるぞ」

俺はもう一段階、動きのギアを引き上げた。

☆★☆

『圧倒的！　これが御神木の英雄の実力か！　総勢三十名の選りすぐりのエルフの戦士達が全員打ち倒されてしまいました！』

最後の一人が崩れ落ち、実況エルフの声が闘技場内に響き渡る。今回の戦闘時間は――十分足らずといったところか。程よい疲労感が心地良い。

『まるで一方的な展開にも見えましたが、これはどういうことだったのでしょうか？』

『一方的、ですか。確かにそう見えますし、事実そうですね。キャプテン・ヒロの剣は正確で、間違いが一つもありませんでした。それがこの結果です』

『間違いがない、ですか？』

『はい。エルフの戦士達の攻撃が当たらない場所に身体を動かし続け、エルフの戦士達の防御をすり抜ける場所に刃を送り込み続ける。

それによって引き起こされた光景が私達の目の前に広がるものです』
『そうして聞くと簡単そうに聞こえますが……』
『とんでもない。ピッタリと、寸分のブレもなく、状況に合わせて身体を動かすことなどそう簡単にできるものではありません。細い綱の上を渡りながら激しく踊るようなものです。それを十分間ものあいだ、一切のミス無くやり遂げる。間違いが一つもないとはそういうことです』

解説の人が若干興奮した様子で実況の人に捲し立てている。
なるほど。間違いが無い、ね。たしかにそれはそうかも知れない。俺は剣の訓練において本能レベルで身体操作の正確性というものをメイに叩き込まれたのだ。そして、俺もまた必死に修練した。それこそ血反吐を吐いて。
血反吐を吐き、血尿を垂れ流しながらそれを避けるために必死に、それはもう必死に頑張ったのだ。

『なるほど、キャプテン・ヒロの卓越した戦いの技はまさに達人の領域に至っているということですね。会場の皆様、御神木の英雄キャプテン・ヒロと勇敢に戦った戦士達に、もう一度惜しみない拍手をお贈りください！』

実況の人の発言に観客達が歓声と拍手を贈ってくれる。それに適当に手を振って応えながら控え室に戻ると、興奮した様子のミミに出迎えられた。

「ヒロ様！　お疲れさまです！　凄かったです！」
「おうよ、まぁちょっと面倒だったな」
「いつもの剣を使っていたらもっと楽だったでしょうね」
「姐さん、それやったら闘技場が血の海やろ……」
「炭素鋼や木材でできた剣や槍じゃ防げないからね。手足がポポポ

ポーンって飛ぶね」
「お兄さん、怖いこと言わないでください……」
エルマと俺の発言に整備士姉妹がドン引きしている。攻撃魔法は使っていなかったとか実況の人が言ってたけど、それを言うなら俺だってモノソード（いつもの剣）やレーザーガン、レーザーライフル、パワーアーマーやハチェットガン、レーザーランチャーなどのパワーアーマー専用重火器、各種グレネード、もっと言うならクリシュナやブラックロータス、それにメイも使っていなかったのだからおあいこというものだろう。いや、むしろこちらの方が遥かに手加減していると言える。
「とりあえずこれで義理は果たしたからな」
「はい。本当にご迷惑をお掛けしました」
ホスト役を務めてくれているネクトが頭を下げる。
「あとはネクトのお母さんに文句の一つでも言わせてもらって、何か詫びの品――大したものでなくてもいいから、なんか旨い酒とか綺麗な飾り物でもうちのクルーに贈ってくれればそれで良いさ」
グラード氏族にも同じようなことを言っておいたから、これで二倍だな。きっと被るのは向こうが避けるだろうから、よりバリエーションが増えるわけだ。
「ヒロ様、それだとヒロ様自身には何も無いんじゃないですか？」
「俺は良いんだよ。俺がちょっと迷惑を被って、それで皆が喜べるようなものが手に入ればそれで十分だ。別に俺の欲しい物は手に入らなさそうだしな」

エルフが軽量型パワーアーマー技術に優れているってんなら喜んで最新、最上モデルのフルチューン機をメンテナンスパック込みで仕立ててもらうところだが、そういう技術に関しては今ひとつみたいだしな。艦船技術に関してはそれ以下って感じみたいだし。

「ヒロって欲が薄いわよねー」

「無いわけじゃないぞ。面白ハイテクアイテムとか結構好きだし買ってるだろ。あと物欲はともかく三大欲求は普通にあるし」

「三大欲求……」

「やだ見ないでよスケベ」

「兄さんが言うんかい。てか三大欲求って言って即座に兄さんのそこに目を向けるとかウィーはむっつりさんやなー」

「お姉ちゃんっ！」

ニシシと笑うティーナに顔を真赤にしたウィスカが飛びかかっていく。うん、見た目はほのぼのとしてるけどその子達は１００ｋｇ超のバーベルを軽く持ち上げる怪力だからね。ネクトは巻き込まれないように離れることをオススメするぞ。

見た目だけは可愛らしい取っ組み合いを眺めながら控え室に設置されている闘技場を映すホロディスプレイを起動すると、どうやら俺がやったエルフの戦士達との戦いは前座というかエキシビションマッチみたいな扱いで、エルフの戦士達による闘技の比べ合いが始まったようだ。こちらが本題で、俺の方がおまけだったのか？　まぁ、人を集める以上は何かしらイベントをやろうってことなのかも知れないが、昨日の今日でこれだけ観客を集めたのだろうか？　どうもエルフのやることはわけがわからんな。

☆★☆

そしてその夜、俺達はミンファ氏族領にある高級ホテルに招かれ

て豪華なディナーを頂いていた。どれもこれも本物の肉や野菜、果実などを使った高級品である。

「我々にしてみれば普通の食材なのですけどね」

「宇宙じゃ事情が違うからな。コロニーじゃ広大な農地なんて望むべくもない。畜産となると家畜から排出される各種ガスの処理が馬鹿にならんし」

人間は当然だが、家畜も呼吸はするしげっぷや放屁もする。そうやって排出されるガスは家畜が産まれてから食肉に加工するまでとなると膨大な量になる。当然ながら人間より身体が大きい分、あるいは数が多い分、量も多くなる。限られたスペースとガス処理機能しか持たないコロニーで育てるのは非常に厳しいわけだ。

だからコロニーではそういった負荷の少ない植物性プランクトンや動物性プランクトン、一部の野菜類などを原料としたフードカートリッジが生産され、それを使った自動調理器が重宝されている。

一部の例外は前にアレイン星系で見たような培養肉だな。あれはコロニーの生命維持機能にかける負荷が少なくなるように設計された生物を飼育、解体して動物性タンパク質を高効率で生産できるようにしてある。まぁ、事故もたまに起きるようだけどな。ちなみに、俺たちがよく食べている白い肉は培養肉ではなく合成肉だ。あれは化学的に合成した動物性タンパク質であるらしい。

「そういうわけで、こういった所謂本物の肉や野菜ってのは宇宙じゃ高級品なんだよ。目ン玉が飛び出るくらいな。確か最高級のコーベ・ビーフだと一番安い部位で１００ｇ１０００エネルからだったか」

「１００ｇ１０００エネル……それはまた」

と、ネクトと会話をしながら食事を楽しんでいると。

「ネクト、ネクト、お母さんが悪かったから許して」
「はい？　ちょっと聞こえませんね」

俺と俺の船のクルー、そしてネクトが豪華なディナーを食べる中、一人だけ皿の上に盛られた黒っぽい灰色のムース的な何かを配膳されていたエルフの女性――ミンファ氏族長のミリアムが涙目で息子に謝っていた。

「それよりもヒロさんがわざわざ船から持ち出してきてくれた素敵なディナーですよ。嬉しいですよね？　なんでも完全栄養食品らしいです。シータではなかなか食べられない貴重な品なんですから、残さず食べてくださいね」

黒い笑みを浮かべるネクト。涙目を浮かべるミリアム。氏族長として、そして母としての尊厳が全く存在していないな、あれは。というか、エルフは見た目が若々しいからミリアムと息子のネクトが兄妹というか姉弟にも見える。

え？　ミリアムの目の前に皿に盛られているもの？　フードカートリッジの中身だが？

ちなみに配膳されているドリンクはネクトが持ち込んだローカル健康飲料選手権入賞作品の中で一番味が微妙だったやつのレシピに則って作られたものだ。

「そのドリンクもミンファ氏族の叡智の結晶ですからね。とても健康に良いらしいですよ。族長にはピッタリのドリンクですね」
「許して」
「駄目です。そもそも謝る相手を間違ってますよね？」
「本当に申し訳ございませんでした。出来心だったんです」
「出来心で氏族全体の評判を下げるような真似をするとか何を考え

ているんです？」
「だ、だってゼッシュも乗ってきたから」
「そのゼッシュ族長は今頃ティニアに何を言われているんでしょうね」

今日のイベントが判明してからネクトはすぐにティニアにも連絡したらしい。あちらはあちらでノリノリでエルフの戦士達をミンファ氏族領に送りつけたゼッシュを絞っておくと言っていたとか。
それは良いんだが、氏族長ってエルフの三大勢力のトップなんだよな？　権威とかそういうのどうなってんの。もしや俺が思っていた以上にエルフの氏族長の立場って軽いのだろうか。

「どうすんのよ、これ」
「面白いから放っておこう」

エルマにそう答えてよく解らない獣のステーキを口に運ぶ。あー、美味い。これはソースが良いな。

「今日はミリアムさんの個人的な奢りらしいからな。好きなだけ飲み食いして良いぞ」
「えぇ、遠慮なさらず。経費で落ちませんけど。ああ、お酒ならミレンドルフの白がラム・ダウのステーキに合いますよ」

ワインの名前を聞いたミリアムの顔色が悪くなった気がする。どうやら高い酒らしい。一体どんな出来心が作用して今日みたいなイベントが強引に押し込まれる事になったか知らんが、黒幕がああして顔色を悪くしているのを見ると多少は溜飲が下がるってもんだな。

#264　二面性（前書き）

遅れました。
モンエナが……モンエナの備蓄が尽きそうなんじゃ……―（：3」∠）―（発注済み

#264　二面性

「で、結局のところ何がやりたかったんだ？　アレは」

族長の威厳とは？　と言いたくなるような必死の謝罪の結果、デザート（お上品なクレープみたいなもの）だけは死守したミリアムにそう聞いてみると、彼女はフォークとナイフを静かに置いて口元をナプキンで拭ってから口を開いた。

「追い詰められた御神木の戦士は時に絶大な魔法の業を発現するという言い伝えがあります」

「つまり俺を追い詰めてその絶大な魔法の業とやらを発現させようと？　俺を追い詰めたいならあんなお遊戯じゃなく正規軍一個艦隊でも差し向けるべきだな」

まぁそんなもん差し向けられても逃げるが。

「もしくは重武装の軍用戦闘ボット一個小隊とかかしらね？」

「生身を狙うのは卑怯だと思いまーす」

「でも、実際にヒロ様を追い詰めようと思ったらそれくらい必要ですよね」

「せやなぁ……少なくともフェアな条件で兄さんを追い詰めるのは難しいやろなぁ」

「お兄さん、自分では生身の戦闘は不得意みたいに言ってますけど、実際にはお貴族様に勝つくらいですからね」

ウィスカがそう言って苦笑いする。基本的にグラッカン帝国に置いて戦闘能力の頂点に位置するのが貴族という存在だ。彼らは金の

力で高度なサイバネティクスやバイオテクノロジーによる強化を施しており、その結果常人とは比べ物にならないほどの身体能力を有している。この身体能力というのは単純な筋力な瞬発力だけでなく、脳の処理能力や反射神経の強化、その他並列思考――マルチタスク化なども含まれている。

そうした結果出来上がるのが常人とは比べ物にならないほどの筋力や瞬発力を有し、人間の限界を軽く超えた反射神経や動体視力、判断能力をも兼ね備えたスーパーソルジャーだ。剣で殺人光線（レーザー）を反射し、目にも留まらぬスピードで肉薄してパワーアーマーごとその中身を斬り捨てる人造ジェ〇イである。

元々は統治能力を強化するために行われた身体強化処置であったが、今はそれだけではなく身体強化そのものが貴族としてのステータスとなっているらしい。

え？　なんで統治に身体強化が必要なのかって？　そりゃお前、貴族って言ったら最低でも一星系、場合によっては数星系を有する大領主だ。元の世界で言うなら地球一つどころか太陽系一つを統治する身だぞ。日々判断を求められるタスクの量は膨大で、とてもではないが普通の人間の処理速度ではおっつかない。そこでグラッカン帝国はその解決法を身体強化に求めたわけだな。

最初は脳の演算領域の拡張や強化など神経系の強化から始まったらしい。技術が進むうちに脳だけでなく単純な肉体強化も施されるようになり、いつしかそれは貴族にとっての義務のようになり、習慣化し、今では立派なステータスになったと。

「なんでしょう？」

「いいや、どっちにしろメイが居れば安心だなって」

「恐れ入ります」

俺の言葉にメイが小さく頭を下げる。

昔――機械知性との戦争前はかなり多くの分野で機械知性が活躍

していて、グラッカン帝国の繁栄を支えていたらしい。それもまぁ、色々あって今は鳴りを潜めているらしいが。少なくとも表面上は。まぁ今はこの話は良いか。

「で、魔法の業ねぇ。そんなもん俺に使えるのかね？　言っちゃアレだけど、そういうオカルト方面の才能は多分無いぞ、俺」

たまに居るじゃないか。私、霊が見えるタイプなんです……みたいな人。俺はそういうのは本当にサッパリだぞ。この世界に来てからはオカルトじみたレベルで不運というか、トラブルに巻き込まれてるけど。

「オカルトってあのね……別に魔法はオカルトでもなんでもないから。ちゃんと体系化された技術よ」

「魔法がオカルトじゃないって言われてもほんとにござるかぁ？　としか言えねぇなぁ」

エルマの発現に肩を竦めて答える。魔法だかサイオニック能力だか知らんが、念じるだけで火や水を出したり、不可視の力で相手を吹っ飛ばしたりするのをオカルトでなくなんと言えば良いのか。

「サイオニックエネルギーそのものを観測する機器もありますし、そこは信じても大丈夫ですよ。ただ、サイオニック適正って基本的に先天的なものじゃありませんでした？」

ウィスカの疑問にミリアムが頷いた。

「確かに魔法適性は生まれついてのもの。ヴェルザルス神聖帝国には後天的に魔法適性を発現する術があるそうだけど。ただ、ヒロ殿は間違いなく先天的に魔法適性を持っている」

「そんなに断言できるものなのか？」
「そうでなければその身体から発せられている力の説明がつかない。修行すれば間違いなく魔法士として大成できる。だから、私の下で魔法士としての修行をすｒ――」
「結構です」
手をひらひらと振って断固として断る。ノータイムである。被せ気味である。
「――魔法士として覚醒すれば貴方の戦闘能力は飛躍的に増大する。貴方ほどの魔力出力があれば山一つを魔法で吹き飛ばすことも」
「いや、別に生身で山は吹き飛ばさんでしょ。というかどうしても吹き飛ばしたかったら反応弾使うなりブラックロータスのＥＭＬ使うなりするし、その方が絶対に手っ取り早い。間に合ってます」
そう言って両手でバッテンを作り、断固拒否する。
反応弾頭魚雷なら強固なシールドを打ち抜いた上で炸裂させられるし、クリシュナに複数積める。ブラックロータスなら地上から視認できないほどの超長距離から山を吹き飛ばすことも可能だ。魔法を使えるようにする必要は何一つないな。
というか、山一つを生身で吹き飛ばせるとか生きた反応爆弾みたいなものだ。そんなものを使えると認知されたら最悪コロニーへの入港を拒否されかねん。
「……」
「そんな頬を膨らませられても。過ぎたるは及ばざるが如しという言葉もあるでしょうが。これ以上トラブルの元になりそうなものはいらんのですわ」
「……やだやだやだーっ！　御神木の英雄の大魔法見たい！　見たいーっ！」

こ、こいつ……！　本当に恥も外聞も捨てて駄々をこね始めやがった！？　いい歳をした淑女がギャン泣きしながらテーブルを叩くなよ！

どうしたものかと思う間もなく、ネクトの手によってミリアムが退場させられていく。何か魔法でも使ったのか、ギャン泣きしているのに突然音がしなくなった。ふむ、ああいうのを見るとちょっと魔法も良いかもって思うな。山は吹き飛ばさんで良いが。

「……ええと」
「何も言うな。俺たちは何も見なかった」
「頭が痛くなってきたわ」
「わかる」

信じられるか？　あれで惑星を三分する勢力のうちの一つの頭を張ってる人物なんだぜ。このシータはあんなちゃらんぽらんな趣味人でも務められるくらいに平和で安全な惑星であるらしい。

「なぁ、メイ」
「はい、如何致しましたか？」
「この星の勢力について色々調べた時に、派閥間の闘争とか陰謀とか警戒したじゃないか」
「はい」
「なんかそういうの全部ただの警戒のし過ぎで、宙賊どもの降下襲撃も別にどこかの勢力の陰謀とかじゃなく、単に運悪く襲撃が成功しただけ。その後の襲撃も面子を潰されたと考えた赤い旗（レッドフラッグ）どもが単に復讐しに来た、って構図なんじゃないかと思い始めているんだが」
「その可能性も勿論ございますね」

メイがあっさりと頷く。そうですか。なるほどね。

「つまり、どういうことや？」
「うーん……お兄さんの運がとてつもなく悪いってことかな？」
「それでまとめるのはやめないか。泣けてくる」

いずれにせよこの星でやるべきことは大体終わった。図らずも自然も嫌というほど満喫できた。結局俺の目的であるコーラは手に入らなかったが……まぁ何年かしたらまた遊びに来てみよう。思わぬところで清涼飲料水メーカーに伝手ができて炭酸飲料について話すことができたし、向こうも炭酸飲料を作る方向で動いているようだった。シエラ星系で飲んだ炭酸飲料はどれもコレジャナイ感が強かったし、この星ではなんとか俺の求めるコーラが誕生してくれると良いな。

あとは歓待されつつのんびりするだけだし、そろそろ皆で次の目的地について話し合うとするか。

#264　二面性（後書き）

ぼくはざんねんびじんがすきです―（∵3」∠）―（唐突な告白

#２６５　次なる目的地を決め――たかったですね。（前書き）

ＧｅｎｅｒａｔｉｏｎＺｅｒｏという一年ほど塩漬けにしていたゲームを遊び始めました（ ˇ ω ˇ ）（発売当初は難易度があまりに辛くて投げていた

#265　次なる目的地を決め――たかったですね。

「というわけで、次の目的地について話し合いたいと思いまーす」
「わー」

俺が宣言すると、ミミが笑顔で歓声を上げながらパチパチと拍手をしてくれる。傭兵業のミーティングということでわざわざミンファ氏族領からブラックロータスまで戻ってきたのだが、やっぱりブラックロータスの中は落ち着くな。高級ホテルや旅館で上げ膳据え膳で楽をするのも悪くないけど。

「何やのん？　このノリ」
「いつものことだから気にしないで」

仏頂面でそう言いながらもぱちぱちと拍手をしてくれるエルマさんは実に良い女だと思います。

「私達も意見を出して良いんですか？」
「勿論だぞ。案があるならどんどん出してほしい」

採用されるかどうかは話し合いの結果次第だが、選択肢は多ければ多いほど良いだろう。

「まず、俺から大まかな方向性を提示しておくと、目指したいのは戦力強化だな」
「戦力強化ねぇ……どういう方向で？」
「クリシュナの強化は正直難しいと思っている。ブラックボックスになってる部分が多すぎるからな」

「それはそうですね。調べてみましたけど、重レーザー砲は専用の固定武装みたいで互換性がありませんし。変えるとしたらシャードキャノンと対艦魚雷くらいですか」
「下部ウェポンベイの魚雷発射管をシーカーミサイルポッドに変えるくらいやろなぁ。シャードキャノンを変えるのは兄さんの趣味やないやろうし。シールドや足回りも今装備しているものより良い物となるとちょっと思い当たらんわ」
「魚雷も外すつもりはないな。いざって時の一発は絶対に要るし」

滅多に使うものじゃないが、大型艦相手の切り札は常に持っておきたい。シーカーミサイルポッドを積んでおけば小型、中型の敵に対しての選択肢は確かに増えるが、それは重レーザー砲と散弾砲で事足りてるからな。

「となると、強化するのはブラックロータスですか？」
「艦首のＥＭＬはより良いものとなると難しいだろうけど、各所に装備されているレーザー砲とシールドは軍用グレードのものに変えたいよな」
「確かにそうすればブラックロータスの戦力は大幅に強化されるやろなぁ。ジェネレーター出力にはまだ余裕あるし、載せ換えんでもなんとか行けるやろ」
「母艦の戦力が充実するのは良いけど……オーバースペックじゃないの？」
「アーアーキコエナーイ」

オーバースペックになろうとも強化の余地があるなら強化したいと思うのがゲーマーの性というやつである。今の俺にとってはゲームではなく現実だが、まぁどっちにしろより高性能なものが存在するならそっちを使いたいと思うのが自然というものだろう。スペックマニア？　知らない言葉ですね。

「確かに宙賊相手にはオーバースペックかもしれませんけど、私達が戦う相手は宙賊だけとも限りませんから」
「まぁ、それもそうね。結晶生命体はもう勘弁してほしいけど」
「宇宙怪獣だけじゃなくて他国との紛争に参加する可能性だってあるぞ」
「するの？」
「場合によってはな」

実際、ミミやエルマと出会ったターメーン星系では隣国ベレベレム連邦との戦いに参加したしな。別に逃げても良かったんだが、あの頃は金を稼ぐのに必死だった。今なら……うーん、滞在している星系が紛争中域になったら立場的に逃げるのは厳しそうだ。何せゴールドスターだしな。

「あとはアレだ、着たままでも剣が振れる軽量パワーアーマーが欲しい」
「……これ以上生身での戦闘能力を上げていくの？」
「俺だって嫌だよ。でもそうしないと死ぬじゃん。俺だって嫌だよ！」

大事なことなので二回言っておく。どうもここのところ生身で戦う機会が増えてるんだよな。俺は一切望んでいないんだが、実際に増えているので対策をしなければならない。

「それならミリアムさんの申し出を受ければ良かったんじゃないですか？」
「魔法の修行ね。良いかミミ、考えても見ろ」

ミミが首を傾げる。

「仮にだ。俺が魔法の修行とやらに励んでその力を身に着けたとしよう。生身で山一つ消し飛ばすような力をだ」
「はい」
「そんなことが出来ると公に知られたらどうなると思う？」
「え？　ええと……」

突然の質問にミミが眉間に皺を寄せて考え込む。

「仮にそんなことになったら、帝国軍が放っておかない？」
「帝国軍というより帝国そのものが放っておかないだろう。場合によっては危険視されて闇から闇になんてことも考えられる。今でも俺個人の戦闘能力はちょっと図抜けているかもしれんが、まだ常識の範囲内だ。まだな。でも生身で山を吹き飛ばす――つまりコロニーを破壊できるような存在は明らかに常識の範囲を逸脱してるだろう？」

反応弾頭級の火力を生身で発揮するということは、場合によっては生身で航宙戦闘艦を撃破できる可能性すらあるわけだ。帝都に忍び込んで帝城を爆破することすら可能かもしれない。そんな危ない存在に野良犬のごとくうろつき回られるのは帝国としては絶対に御免だろう。俺が帝国なら何らかの方法で首輪をつけるし、それができないならどんな手を使ってでも消す。

「確かに、ちょっとどうなるかわかりませんね」
「あの特級厄物が指し示す道ってのはそういう道だ。だから俺は断固拒否してる」

そう言いつつ会議をしている食堂の隅っこで何やらピカピカしている特級厄物に視線を送る。視覚的にうるせぇんだよおめぇはよぉ。

「山一つ吹き飛ばすような力は手に余るが、軽量級パワーアーマーはまだ常識の範囲内だ。少なくとも完全な生身よりは生存性も高くなるし。もう俺は嫌だぞ、生身でわけのわからん生体兵器と戦うなんてのは」
「言うて兄さん無傷で帰ってきたやん」
「そりゃ死にたくないし痛いのは嫌だから必死に攻撃を避けるわ。あんなん一撃でも貰ったら挽き肉になるっつうの」

あの劣悪な環境下で我ながらよく生き残ったもんだ。あんなのは二度と御免だぞ。

「まぁそういうわけで、前置きが長くなったけど俺が次に目指したいのは軍事系のテックが充実してるハイテク星系か、最新鋭技術(エッジテック)を入手できる可能性が高い商業ハブ星系だな」
「なるほど。近くだとガレイ星系が軍事系のテックが充実しているハイテク星系ですね。商業ハブ星系は……ちょっと遠くなりますけど、ミラ星系です」
「ゲートウェイを使ったらどうだ？」

ゲートウェイを使えば遠く離れた星系にも一瞬で移動することが出来る。グラッカン帝国は広大な領土内に多数のゲートウェイによるゲートウェイネットワークを構築しているので、それを利用すればハイパードライブを使った通常の移動方法で移動するには遠過ぎるような星系も行き先の選択肢に入ってくる。

「あ、そうでした。ええと、そうすると……」

タブレット端末を操作していたミミが苦笑いを浮かべる。なんだ？

「そうすると？」
「帝都が一番ですね」
「却下で」

絶対にまた何か厄介事に巻き込まれるに違いないので帝都には近寄りたくない。皇帝陛下の暗殺未遂事件が起こってそれに巻き込まれるとか、ルシアーダ皇女殿下が拐われてその奪還を命じられるとかそんな展開に決まっている。そんなのに巻き込まれるのは絶対に御免だ。

「そうなるとガレイ星系かミラ星系がやっぱり一番近いです」
「なるほど。行き先の候補としてはその二つだな。他に何か意見は？」
「エネルを稼ぐなら国境の紛争地帯に行くとか、宙賊の動きが活発な星系に行くのもアリだと思うけど、別にそれは装備を強化してからでも良いわね」
「うちからは特に無いな。ウィーは？」
「うーん、特に無いかな。軍事系テックに強いハイテク星系に行けば色々見れるだろうし」

エルマと整備士姉妹は特に意見はないらしい。

「私としては商業ハブ星系に興味が……色々珍しい食べ物がありそうですし」
「ふむ、それは確かに」

色々なものが集まる商業ハブ星系なら炭酸飲料の取り扱いもあるかもしれない。シエラ星系で炭酸飲料が提供されていたってことは、物流に全く乗っていないというわけでも無さそうだし。まぁ望みは薄そうだけど。

「さて、どっちに行くかね」
恐らく軍事系テックに強いハイテク星系であるガレイ星系の方が値段は安い。商業ハブ星系の方が選択肢は多くなるが、輸送費の分商品の値段は上がるのだ。ただ、商業ハブ星系では軍用グレードの商品は多分手に入らない。軍用グレードの品というのは企業が軍に直接卸しているから、交易商の手に渡ることが殆ど無いのだ。
「質と値段を取るならガレイ星系、選択肢の多さを取るならミラ星系か」
「ガレイ星系に行ってからミラ星系に向かえば良いんじゃない？」
「うーん、確かにその方が良いかも知れませんね。ガレイ星系で手に入らなかったものをミラ星系に探すほうが効率が良いかも。商業ハブ星系なら情報も集めやすいでしょうし」
「お、その台詞実に傭兵っぽいというかオペレーターっぽいな」
「私も成長してますから」
ふふん、とミミが得意げに胸を張る。うん、確かに成長してるね。
「それじゃあ次の目的地はガレイ星系――」
と言いかけたところで俺の小型情報端末からコール音が鳴った。デデーン！　という今にもタイキックかケツバットを食らいそうなコール音だ。
「こ、このコール音は……」
まさか、と思いつつジャケットのポケットから小型情報端末を取り出して恐る恐る画面を見る。

そこには見たくない名前が表示されていた。
「どうしたんですか？」
「というか何よその着信音……誰から？」
エルマにそう聞かれたのでみんなが見える位置に小型情報端末を置く。
「げっ」
画面に表示された名前を見たエルマがそう言って露骨に嫌そうな顔をした。ミミもなんとも言えない微妙な表情をしているし、整備士姉妹も天井を仰いだり苦笑いを浮かべたりしている。
そうだね。そうだよね。大規模宙賊が大暴れしたんだから来てもおかしくないよね。いっそ無視してやろうかとも思ったが、あとが怖いので諦めて着信ボタンを押す。
そうすると、食堂に据え付けられたホロディスプレイが起動し、白い軍服を着た金髪の美女のホログラムが映し出された。腰元の剣が彼女が貴族であることをこれでもかとアピールしてくる。
『ごきげんよう、キャプテン・ヒロ。また会いましたね』
彼女がそう言ってにっこりと満面の笑みを浮かべる。
「……はい、そっすね。セレナ中佐殿」
また面倒事だよ。絶対そうだよ。間違いない。

#２６５　次なる目的地を決め――たかったですね。（後書き）

デデーン！――（∵３」∠）――（階級を間違えていたのでセレナ中佐にタイキックを食らう作者

#２６６　赤い旗を燃やせ（前書き）

新章の出だしということで大幅に遅れましたゆるして（；ω；）

#266　赤い旗を燃やせ

アラームの電子音で目が覚めた。
照明を落とした室内は薄暗い筈なのだが、部屋の中は神秘的な青白い光によって照らされている。

「はいはい、おはようさん」

俺の言葉に反応するかのようにベッドの脇に立て掛けてあった螺旋状の槍のような物体がピカピカと明滅した。ここ最近俺を苦しめているトラブルメーカーそのいち、御神木の種くんのエントリーだ。畜生め。

「あー……朝が来てしまった」

溜息を吐きながら片手で目元を覆う。朝が来た、ということは起きなければならず、起きるということは今日の活動を開始しなければならないということである。既に今日のスケジュールは決まっており、その内容はとても気の進まないものだ。できることならずっと寝ていたかった。

「今からでも体調不良ってことでなんとかならないだろうか」

ならない。じゃあ簡易医療ポッドに入ってメディカルケアしてから来てくださいね。五分か十分もあれば十分ですよね？　と言われておしまいである。体調不良を訴えても五分か十分くらいの時間稼ぎにしかならないとか夢も希望もない。

「はぁ……起きるか」

なんか御神木の種こと特級厄物がまるで慰めるかのように穏やかに明滅しているが、お前も俺の心労の原因だからな？　ぼくはきみのみかただよ！　みたいな雰囲気出しても騙されんぞ。

☆★☆

「おはよう」
「おはようございます、ヒロ様」
「おはよ」
「おはよーさん」
「おはようございます」

パパっとシャワーを浴びて食堂に行くと、既にクルーが集まっていた。どうやらミミと整備士姉妹は既に朝食を終えたようで、エルマは朝っぱらからボリューミーなモーニングステーキを食っている。朝からよく食うよね、ほんとに。

「おはようございます、ご主人様」
「おはよう、メイ」

席に着いたところでメイがタイミングよく俺の朝食を持ってきてくれた。今日のメニューは焼き鮭っぽい定食のような何かであるようだ。色がちょっとおかしい以外は概ね焼き鮭定食なのであまり気にしないで食べることにする。今日もテツジン・フィフスが出力するご飯は美味しい。

「ものっそい不景気な顔してんなぁ」
「セレナ中佐に会いに行くのがそんなに嫌なんですか？」

そう言ってウィスカが首を傾げる。
セレナ・ホールズ。帝国航宙軍中佐。金髪碧眼の美人さんで、帝国航宙軍士官の白い軍服が似合う凛々しい女性だ。若い女性ながらごく短い期間で大尉から中佐に昇進している新進気鋭の軍人で、対宙賊独立艦隊の艦隊司令を務めている。

「そりゃ嫌だろう。用件がわかりきってるし」

首を傾げるウィスカにそう言いながら溜息を吐く。
先日から俺達はエルフの母星系であるリーフィル星系に滞在しているわけだが、エルフ達は俺達がリーフィル星系に到達する前からとある宙賊達に襲われていた。
とあるも何も宙賊は宙賊なのだが、中には大規模な組織となって星系軍でも手を焼くような連中もいる。運の悪いことにエルフ達の母星系であるリーフィル星系を襲っていたのはそんな大規模宙賊団の一つ、赤い旗（レッドフラッグ）と名乗る連中であった。
奴らはエルフ達の母星、リーフィルⅣ――現地ではシータと呼ばれている――に襲撃を仕掛け、まんまと大量のエルフ達を拉致し、略奪も行った。
星系軍もそれを指を咥えて見ていたというわけではなく、猛烈な追撃をかけてその大半を撃沈。取り逃した大型宙賊艦の反応を俺達が偶然キャッチし、移乗攻撃によってこれを拿捕した。
その後、赤い旗の連中は再びリーフィルⅣに襲撃を仕掛けたが、今度は星系軍とメイの操艦するブラックロータスの活躍によってこれを撃退。そして今に至る。
このタイミングで現れるセレナ中佐、そしてセレナ中佐からの面会要請。会ったら何を言われるかはわかりきっている。十中八九、赤い旗の討伐関連の話になるだろう。

「それにしてもまぁよく会うものよね。この広い宇宙で」
「私達は基本的に帝国領内で活動していますし、あちらの任務も対宙賊活動なわけですから……バッティングしてもおかしくはないですけど」
「おかしくはないけど今回は別に宙賊狩りに来てたわけじゃないんだよなぁ」

観光のために来た星系が偶然大規模宙賊団に襲われていて、そこに偶然セレナ中佐が現れるとかもうどこかで誰かが仕組んでいるんじゃないかって疑いたくなってくる。いや、これも俺の不運体質によるものか。

「おかしくはないけどまぁ、縁があるんやなぁ」
「確かターメーン星系で初めて会ってから何かにつけ顔を合わせているんですよね？」
「そうだな」

思えばこの世界に来てから会った人の中で、ミミとかエルマに次いで縁の深い人物ではあるんだよな。だからと言って彼女の部下とかそれ以上の関係になる気はないけど。

「なんというか、運命的ですね」
「冗談でもやめてくれ。恐ろしいわ」

ウィスカの言葉に思わず身を震わせる。俺とセレナ中佐の間に運命的な何かがあるとか怖すぎるわ。プラチナランカーかつゴールドスター受勲者で、御前試合を勝ち抜いた事によって皇帝陛下の覚えもめでたくなった今、セレナ中佐から本格的にロックオンされてもおかしくない状態なんだぞ。

「なんでそこまで嫌がるん？　セレナ中佐、めっちゃ美人やん？」
「そこは否定しない。確かにセレナ中佐は美人だ。プライベートがポンコツ気味で、酒を飲むと隙だらけになるのもポイント高い。でもセレナ中佐は侯爵家の令嬢だ。しかもエルマと違って実家とのパイプが太いタイプだ。彼女と仲良くするのはかなり危険なことに思えてならんね。それに、何より……」

皆の顔を見回してから口を開く。

「俺は自由気ままな傭兵生活が気に入ってるんだ。規則に縛られた軍人生活なんて真っ平御免だね」

☆★☆

「よく会いますね。どうも貴方と私の間には切っても切れない縁があるようです」
「ははは、そんな畏れ多い。俺なんてチンケないち傭兵ですよ」

帝国航宙軍隊宙賊独立艦隊、その旗艦である戦艦レスタリアスの応接室でそんな言葉の応酬をしながらフフフ、ハハハと笑い合う。もう既に帰りたいんだが？

ちなみにレスタリアスに足を運んだのは俺とメイの二人きりだ。他のクルーはブラックロータスに残って機体の整備や物資の調達、それに情報収集をしてもらっている。

「ゴールドスターの受勲者であるプラチナランカーがチンケないち傭兵の筈がないでしょう」

はい、ごもっともです。

傭兵としての最高ランクであるプラチナランクに昇格し、結晶生

命体との戦いで活躍したってことでゴールドスター――一等星芒十字勲章――を貰ったわけだが、正直この二つを頂いたことによるメリットを実感した覚えが殆どない。むしろデメリットが多いような気がするのは俺の気のせいだろうか？

「どうやらここでも派手にやっているようですね。貴方の行く先々でトラブルが起こっているように見えるのは私の気のせいでしょうか」

「気のせいだと思います。気のせいだということにしといてください。凹むので」

「あ、はい」

セレナ少佐が若干引きながら頷く。どうやら俺の心の底からの懇願が伝わったらしい。

「一応反論させてもらうと、俺がこの星系に来た時にはもう第一次襲撃は終わってましたよ。俺は星系軍の討ち漏らしを偶然狩っただけですから」

だから俺がトラブルを運んできたわけではないと主張する。

「つまりトラブルを引き寄せるのではなく、トラブルに引き寄せられる体質ということですね」

「嫌じゃ、そんな話は聞きとうない」

悲しい現実を突きつけてくるセレナ中佐なんて嫌いだ。

「さて、再会を喜び合うのはこれくらいにして本題に入りましょうか」

今までの会話に再会を喜びあった要素どっかにあったか？　ほぼ一方的に俺がいじられていただけだと思うんだが。

「私が貴方を呼んだ用件は当然おわかりですね？　キャプテン・ヒロ」

「わかんないです」

「その頭の悪そうな顔を今すぐやめなさい。真面目な話ですよ」

ちっ、これ以上すっとぼけるのは無理か。

「まぁハイ、レッドフラッグの件ですよね。今到着ってことは第一次襲撃の時にもう連絡が行ってた感じですか」

「そうですね、惑星への降下襲撃を許したとなると帝国の沽券に関わりますから」

そう言えば前に俺達が滞在したリゾート星系に宙賊が降下襲撃をかけてきた時にもセレナ中佐――当時は少佐――の隊宙賊独立艦隊が駆けつけてきたっけ。まぁつまるところ、セレナ中佐の艦隊はこういった感じで宙賊が暴れた所に急行して火消しをして回る艦隊ってことだな。

「ところで艦隊規模、大きくなってません？」

「中佐に昇進しましたからね。指揮権限が上がった分、艦と人員が補充されたわけです」

「なるほど」

セレナ中佐に会うためにブラックロータスでリーフィルプライムコロニーまで上がってきたのだが、コロニーに駐留している艦の数が随分と増えているようだった。戦艦は相変わらずレスタリアスだけのようだったが、巡洋艦と駆逐艦の数が増えていたし、何よりコ

ルベットの数がだいぶ増えているようだった。前に俺が指摘した小惑星帯での戦闘に特化した編成というものを実践したのだろう。駆逐艦以上の船だと小惑星帯内での戦闘は難しいが、コルベットならギリギリ行けるからな。

宙賊艦にとって正規軍のコルベットほどやりづらい相手は居ない。まずもってシールドが厚すぎて宙賊艦の火力ではシールドを破れないし、コルベットの火力相手には宙賊艦のシールドも装甲も役に立たない。しかもコルベットは足が速いから、逃げ切るのも容易ではない。下手に小惑星帯から飛び出すと駆逐艦以上の船の超火力で狙撃されるしな。

「これだけの戦力となると、単独で宙賊の拠点も攻められそうですね」

「そうですね。実際、小さいのはいくつか潰しました。ただ、今回の相手は大規模宙賊団ですから。外部戦力――傭兵も集めるつもりでした。そう考えていたら丁度良い所に貴方が居たのでこれは天啓かなと。あるいは運命でも良いですけど」

「なるほど」

「それで、討伐に参加してくれますよね？」

中佐殿がにこりといい笑顔を向けてくる。まぁうん、参加はするんですけど。

「まずはお金の話ですね。高いですよ、ゴールドスターかつプラチナランカーの俺は」

そう言って人差し指と親指で丸を作ってみせる。

「……お友達価格になりませんか？」

「なりません」

ビタ一文まけないぞ。絶対だぞ。上目遣いで見ても駄目です。

#266　赤い旗を燃やせ（後書き）

コンサートマスターが愛機です。
ごん太ビームは男のロマン（　ω　）

#267　同じ手は二度と食わない（前書き）

間に合わない！―（：3」∠）―（ゆるして

#267　同じ手は二度と食わない

「そもそもセレナ中佐の懐から出る金ってわけでもないでしょうに」

そんな媚び顔晒してまで値切る意味あるんですか？　という言葉は飲み込んでおく。彼女の手の届く範囲にしっかりと剣があるので、迂闊な事を言うと俺の首が飛ぶかも知れない。

「ヒロ。軍の――というか我が艦隊の予算も無限では無いんです」

「なるほど。でも腕を安売りすると他のプラチナランカーにも迷惑がかかるんで」

真面目な顔で世知辛いことを言うセレナ中佐に俺も真面目な顔でそう返す。俺が軍――セレナ中佐から安く仕事を請けたせいで、他のプラチナランカーへの報酬提示額が少なくなったりしたら、もしかしたら睨まれるかもしれないじゃないか。軍もなんだかんだ言ってお役所だからな。前例主義的なところが少なからずあるだろうから、俺が悪しき前例になるわけにはいかない。

「そもそもお上からの指示でこっちに来たなら、補給はお上持ちなんじゃ？」

最初の襲撃があった時点でローゼ氏族が中心となって編成されている星系軍からの救難要請があり、それを受けてセレナ中佐の隊宙賊独立艦隊が派遣されたのだろう。リーフィル星系はエルフの自治区であるとは言え、帝国の庇護下であることに変わりはない。偉大なる帝国の庇護下にある人々が宙賊なんぞに害されるというのは帝国の沽券に関わる。それでセレナ中佐が派遣されたのだから、セレ

ナ中佐にはそれなりの権限が付与されているはずである。

「……最初に出会った頃はあんなにチョｒ――無垢だったのに、いつの間にか擦れてしまって」

「おい今チョロいっつったか？」

「言ってませんよ？」

しれっとした顔をしてるけど間違いなく言ったよな？　聞き間違えじゃないだろ絶対。

確かにターメーン星系ではコロッとセレナ中佐の乗せられてベレベレム連邦との戦いに参加することになったからな。まぁ、単に美人の中佐殿に煽てられて良いように掌の上で転がされ、最終的にできらぁ！　とか言って参加することを宣言させられたんだがな。今はもうその手は食わんぞ。

「参加するつもりがないってわけじゃないんで。妥当な金額を提示してくれればそれでいいですよ」

「そうですか。それならこれくらいで」

と、提示された額は流石にダレインワルド伯爵家のように一日３０万エネルなんてことはなかったが、普通にプラチナランカーの一日あたりの相場である２０万エネルであった。それに加えて通常の賞金と更に撃破報酬付きである。条件としては悪くないな。

「もう一声、と言っても別に増額を求めるわけじゃなくてな」

「聞きましょう」

そう言ってセレナ中佐が先を促してくる。

「ブラックロータスの装備を更新したくてね。軍用グレードの兵器

を回して欲しい。当然費用は払う」
「ああ、なるほど。確かにあの砲艦――母艦でしたっけ？　アレの火力が上がるのはこちらとしても助かりますね」
母艦です。火力がちょっと高くなってるけど間違いなく母艦です。
「前にもこんな話はしたけど、色々バタついてるうちに流れたからな。あと、軽量級のパワーアーマーも欲しいんだが」
「わかりました。では今回はその分も含めて義理を果たすとしましょう。ゴールドスター受勲者の申し出ということであれば上も拒否はしないでしょうし」
「よろしく。スケジュールについては決まり次第通達されるってことで良いのかな？」
「ええ、行動方針が定まり次第連絡しますので、いつでも出発できる態勢で待機していて下さい。然程時間はかからないと思います」
「了解」
しかし、相手は長年帝国航宙軍の追撃を躱し続けてきた『赤い旗宙賊団』だ。そう簡単に掃討できるとも思えないんだが、何か秘策でもあるのかね？
☆★☆
「というわけで、赤い旗掃討作戦に参加することになった」
ブラックロータスに戻り、掃討作戦に参加することを告げると全員から一様にやっぱりなという顔をした。
「嫌がってた割にはあっさり参加するやん」
「ピンチはチャンスだからな。セレナ中佐経由で軍用装備の調達も

スムーズに行きそうだし、掃討作戦で稼げば実質タダみたいなもんだ。賞金だけでなく撃破報酬と日当まで貰えるんだから、参加しない手はない」
「でも、嫌がってましたよね？」
「……セレナ中佐が関わると何かと話が大きくなりがちなんだよな」

最初は宙賊の拠点攻略だったが、それが何故だが隣国との国境紛争に巻き込まれる羽目になったし、それが原因で昇進したセレナ中佐に目をつけられて隊宙賊独立艦隊の教導役を務めることになったし、しばらく顔を合わせなかったと思ったら今度は結晶生命体との決戦に巻き込まれることになるし、それが原因で大層な勲章を貰うことになって、帝都に行ったら今度は帝室関連のゴタゴタが起こるし……やっぱセレナ中佐がキーになって厄介事に巻き込まれるパターンが多い気がする。

「やっぱ失敗だったか……？　いや、でも逃げたら逃げたで面倒なことになりそうだしな」
「そうね。捕捉された時点でもう手遅れよね」
「こうなることを予測して先手を打って逃げるべきでしたかね？」
「そこまで先読みして行動するのは無理だろう……」

つまりこれも一種の運命というか予定調和みたいなものなのだろう。別に俺は運命論者ってわけじゃないけど、こっちの世界に来てからというものそういうのを感じる場面がどうにも多いんだよな。被害妄想の類だろうか？

「とにかくそういうことなんで、出撃準備を進めような」
「「「了解」」」

皆が動き出すのを見ながら、メイにも指示を出しておく。

「ブラックロータスの強化について仕様案を策定しておいてくれ。金に糸目はつけない……と言いたいところだが、予算は２０００万くらいで足りるだろう」
「はい、それだけあれば十分かと」
２０００万エネルもあれば軍用グレードの装甲とレーザー砲に換装してもお釣りが出るはずだ。
「あ、ヒロ様。今回は軍の物資輸送はどうしますか？」
「パスで。相手が宙賊なら鹵獲品が期待できるからな」
「わかりましたっ！」

食堂に残ってタブレット端末を操作していたミミが元気に返事をして作業を再開する。
さて、俺は何をしようかね……ああ、御神木の種をこのまま持っていくわけにもいかないし、そのへんの話を詰めておくとするか。まぁ、リーフィルプライムコロニーの然るべき人物に渡していけば良いだろう。

そう思っていたのだが。

「芽吹くまでは手元に置いておいて頂きたく……」
「そうなると星系外に持ってくことになるけど」
「それはどうかご勘弁を……」
「いや、そうは言うけどリーフィル星系を襲った赤い旗を討伐するための作戦行動だぞ？　シータ自治政府としてもそれに参加するなとは言えないだろう？」
「それはそうなのですが……」

リーフィルプライムコロニーに駐在しているシータ自治政府の職員がダラダラと汗を流しながら言葉を濁す。自治政府とは言っても内情としては三大氏族による合議制だ。しかも、ローゼ氏族以外はあまり母星であるシータを離れたがらないので、基本的にリーフィルプライムコロニーに住んでいる人々の殆どは革新派、というかテクノロジー受容派閥のローゼ氏族である。

「引きこもりどもにとって御神木は心の拠り所ですから……」

苦虫を噛み潰したような表情でローゼ氏族の職員が呻く。彼の反応的に、彼自身はこの事態をナンセンスだと思っているのだろう。

「下でも言ってたけど、俺はいつでもコレをエルフに任せる心づもりなんだが」

下、というのはつまりリーフィルⅣ――シータの惑星上という意味だ。こう言うと惑星上居住地に住んでいる人は面白くない顔をするらしいが、今はそんなことに気を遣う必要もない。

「それは承知しております。まぁ、単なる我侭です。あまり気になさらずともよろしいかと。ただ……」

「ただ？」

「種を今我々に預けて行かれるのだけは本当にご勘弁を。最近あった様々なゴタゴタのせいで三氏族間の緊張が高まっています。この状況で我々が御神木の種を預かった、という話になるとそれが新たな火種になりかねませんので」

「つまり？」

「できればそのままお持ち下さい。そして芽吹いたら適当な時期に返却して頂ければ」

「えー……それ、グラード氏族とかミンファ氏族が怒らないか？」

正直、あまり反感を買いたくはないんだが。

「そこは我々が泥を被りますのでご心配なく」

そう言って職員さんが乾いた笑いを漏らす。まぁ、最悪の場合はリーフィルプライムコロニーに適当に放置していっても良いか。またリーフィル星系まで戻ってくるのも面倒だが、それくらいのサービスはしても構わんだろう。

「わかった。まぁエルフには色々ともてなしてもらったし、それくらいの義理は果たすよ」

「恐れ入ります」

職員さんが深々と頭を下げる。彼にしてみても、というかローゼ氏族にしてみてもこれは多分貧乏くじなんだろうな。言った通りエルフには美味いもん食わせてもらったり良い宿に泊まらせてもらったりと世話になった部分もあるから、多少は妥協しよう。

#268　出撃前、束の間の安息（前書き）

今日は！　最強宇宙船五巻の発売日！！（　，ω，　）（買ってね！！

#268　出撃前、束の間の安息

「えっ、持ってくの？　それ」

ピカピカと光る特級厄物を持って帰ってきた俺を見たエルマがとても嫌そうな顔をする。

「なんかそういうことになってな。最悪、ローゼ氏族で泥被るから置いていくくらいなら持っていってくれってよ」

「えー……大丈夫なの？」

「さてなぁ。こいつ自体が何か悪いことをするわけじゃないし、大丈夫だと思いたいが。何か因果を捻じ曲げて俺達に不運をもたらすとかそういうことなら今すぐクリシュナの重レーザー砲で消し炭にしてやるけど」

特級厄物が否定の意志を示すかのようにピカッ、ピカッ、と定期的に光を放つ。ああ、そう言えばノーの場合は一回、イエスの場合は二回光れとか言ってたっけ。意外と律儀に俺の言ったことを覚えてるんだな、こいつ。

「あ、ヒロ様。物資の補給は終わりましたよ。いつでも出撃可能です」

「お疲れさん。対艦反応魚雷もストックは十分あったよな？」

「はい。クリシュナに搭載している四発の他に、予備弾を一ダース積んであります」

「オーケー、やっぱり母艦があると便利だよな」

「一ダースって、一体何と戦うつもりなのかしらね」

腐るもんじゃなし、予備弾はいくらあっても良い。クリシュナに積んでる分も合わせて十六発もあればクリシュナ単機でも宙賊の拠点をスペースデブリにできてしまいそうだな。

「作業が終わったならいつ出撃になるかもわからんから、休んでおいてくれ。コロニーで羽根を伸ばしてきてもいいぞ」

「んー、私は良いかな。船の中のほうが落ち着くし」

「私も船で休んでます。ヒロ様はどうするんですか？」

「整備士姉妹の様子を見てくる。その後はメイの様子を見て、大丈夫そうなら俺ものんびりするさ」

エルフの皆さんには大層もてなしてもらったが、やっぱり船のほうが心が休まるんだよな。実家のような安心感とでも言えば良いのだろうか。いや、単純にセキュリティがしっかりしていて、いざとなったら家財まるごとどこへでもスタコラサッサできるというのが安心に繋がっているのかもしれんな。

「じゃあ私も見に行くわ。暇だし」

「それじゃあ私も」

「そうか？　まぁそれでも良いか」

三人で連れ立って格納庫区画へ向かうと、メンテナンスボット達が忙しそうに働いていた。メンテナンスボット達の邪魔にならない場所にウィスカが座っていて、その手は目まぐるしくタブレットを操作している。

「あ、お兄さん――じゃなくて皆さんお揃いで。どうしたんですか？」

「あら？　ヒロしか見えなかったのかしらー？」

「そ、そういうわけじゃないですよう」

ニヨニヨしながらからかうエルマにウィスカが顔を赤くして言い訳をするが、それは逆効果ではなかろうか。なんかミミもにんまりと良い笑顔を浮かべてるし。

「俺達は出撃前に終わらせるべきタスクが無くなったんでな、見回りだ。調子はどうだ？」

「えっと、今のところは特に問題はないです。クリシュナの整備は完璧ですよ。今は念の為にフルチェックをしているところです」

そう言ってウィスカがハンガーに駐機しているクリシュナに目を向ける。クリシュナの周りではメンテナンスボットやドローンのようなものが動き回っていて、何やらスキャンを繰り返している。仕組みはわからないが、きっとあれでクリシュナの状態をスキャンしているんだろう。

「ティーナは？」

「お姉ちゃんはブラッククロータスの整備に回ってます。多分メイさんと一緒に作業をしていると思いますよ」

「なるほど。タスクを終えたら休んで良いからな。特に二人はこれから激務になりそうだし」

「やっぱりそうなりますか？」

「多分な。ああ、でもそんな頻繁に鹵獲した船を処分しに行けないだろうから、そこまでじゃないかもしれんな。装備を鹵獲する機会は増えるかもしれんけど」

俺達が鹵獲できる船の数は最大で四隻だ。格納庫に二隻、そしてクリシュナとブラッククロータスがそれぞれ曳航して更に二隻だな。内訳としては小型艦が三隻と、中型艦一隻が限界だろう。更に言えば、曳航するには最低限超光速ドライブとハイパードライブが生き

ていないといけない上、曳航したままでは即応力が落ちることになるから戦闘が完全に終了した後でないといけない。
もっと言えば俺達の儲けのために全体の進行が遅れることは許されないので、手早くやる必要がある。整備士姉妹にとっては戦闘終了後からが本当の戦いになるってわけだな。

「おー、集まってどないしたん？」

そうして話していると、ティーナとメイが格納庫区画へと姿を現した。二人の様子を見る限り既にブラックロータスの整備は終わったらしい。

「タスクを終えたんでな。様子を見に来たんだよ」
「なるほどな？　こっちも終わったで」

そう言うティーナからメイに視線を移すと、メイがコクリと頷いた。なるほど、終わったか。

「ちょぉ、待ち。今のリアクションは何やねん」
「一応メイに確認しただけだぞ」
「おうおうおう、ウチもプロやぞ？　その反応は失礼ちゃうか？」
「ごめんて」

間合いを詰めて下からメンチを切ってくるティーナに素直に謝っておく。普段の態度が態度だからついね？　悪気はなかったんだぞ？　腕は信用してるんだけどな、一応。

「お？　謝ったな？　ならその謝罪の気持ちをちゃんと形にしてもらうで？」
「えー？　何だよ？」

そんなに悪辣なことはやらないだろう。一応聞くだけ聞いてやるか。

「だっこ」

そう言ってティーナは俺に向かって両手を伸ばしてきた。

「え？」

「だっこ。ぎゅってしてくれたら許したる」

にっこり。そう表現するのが相応しい笑顔を浮かべてティーナがだっこを促すようにグッと両腕を伸ばしてくる。えー？　まぁ別に良いけども。抱っこくらいなんてことはない。これで機嫌を直してくれるなら安いものだろう。

「んふふー……」

お望み通り正面からだっこしてやると、ティーナはかじりつくように俺の首に手を回して抱きついてきた。お望み通り左手でティーナのお尻を支え、右手を背中に回して抱きしめてやる。

「ごろにゃーん」

「でけぇネコだなぁ……」

と、俺の首筋に頬を擦りつけてくるティーナをそのままに足元を見ると、いつの間にかウィスカがじっと俺の顔を見上げてきていた。何ですかその物欲しそうな顔は。まさかウィスカさんもだっこをご所望で？

ふと周りを見回すと、エルマとミミ、それにメイもジッと俺に視

線を向けてきていた。

「私は普通にハグで良いわよ？」

「私もそれで」

「では私も」

「何これどういう状況？」

結局ティーナの後はウィスカを抱っこすることになり、その後はエルマ、ミミ、メイの順にハグをすることになった。いや、別に良いんだけどさ。たまに君達の事がわからなくなる。平等にってことなのか？　まぁ平等は大事か。

☆★☆

それから数日、俺達はリーフィルプライムコロニーで待機することになった。大規模宙賊の討伐ということで、近隣の星系からも戦力を集めるらしい。今は戦力の結集を待っているというわけだな。

そんな中、補給も整備も済ませた俺達はというとやることが特に無い。まぁそれでも一日のルーチンはある程度決まっているから、完全に暇というわけでもないんだが。身体を動かすなり、訓練するなり、勉強するなりとやることはそれなりにある。

「……毎回こんな訓練を？」

「そうだが？」

「そうですか……」

今日はセレナ中佐と彼女の部下である貴族出身の士官達がブラックロータスを訪れていた。俺がメイと剣の訓練をすると聞いてやってきたのだ。彼女達も戦力が集まるまでは暇らしい。

「ご主人様、行きますよ」
「見物人も居るし、控えめでお願いします」
「わかりました、強めでいきます」
「ぼくのはなしをきいて」

俺の懇願も虚しく、正に黒い疾風と化したメイが金属製の模擬剣を手に迫ってくる。対する俺の手に握られているのも金属製の模擬剣だ。

訓練ならもっと安全な模擬剣を使ってはどうかって？　いや、これじゃないと俺とメイの剣速と剣戟に耐えられないんだよ。これまでに何度安全性を謳った模擬剣をへし折ってきたことか。

メイの身体の陰から銀閃が迸ってくる。コレをまともに食らうと当たった部分の骨が砕けた上に、下手すると内臓にまでダメージが入って誇張でもなんでも無く血反吐を吐くことになるので、絶対にまともに食らうわけにはいかない。

摺り足を使って滑るように横に動き、紙一重でメイの一撃を躱す。それと同時に逆手に持ち替えていた左手の剣でメイの剣を持つ手の手首を狙うが、剣撃を放ってきた時以上の速度で引き戻されてしまったために俺の反撃は空を切った。こうなるとがら空きの左脇腹を狙われるのがわかりきっているので、メイの次撃が放たれる前にするりと後ろに動いてメイとの間合いを取る。

その後は剣撃の応酬だ。俺の両手の剣で放たれる斬撃が尽くメイの持つ一本の剣によって迎撃され、逆にメイから放たれる斬撃を躱し、いなし、受け流す。絶対にまともに受けてはいけない。これは身体で受けるなという意味でなく、剣でも受けるなという意味である。もしまともに受ければ模擬剣をへし折られるか、そうでなくとも防いだ剣ごとぶっ飛ばされるか、あるいは衝撃のあまり得物を失うことになるか――どの結果にせよその後の展開は厳しいものになる。

「だぁっ！？」

結局、軍配はメイに挙がった。俺がメイの剣撃を受け流し損ねて右手の剣をへし折られてしまったのだ。こうなると後は詰将棋みたいなもんである。徐々に追い詰められた俺は最終的に腹に強烈な蹴りを喰らい、壁まで吹っ飛ばされて仕留められた。いくらなんでも鳩尾を打たれた上に背中を壁に叩きつけられた際の生理的な反応までは制御できない。息を整える間もなく、頭頂に模擬剣をコツンとやられて俺の負けである。

「むりぃ……」

「そんなことはありません。ご主人様の反応速度は前回訓練時よりも凡そ八％向上しています。ご主人様にはまだまだ伸び代があります」

「そこまで徹底的にしなくてもええんやで……」

メイの手を借りて起き上がりながら蹴られた腹を擦る。とてもいたい。これは確実に内出血してますね。

「あ、希望者はメイさんによるパーフェクトに安全な訓練を無料で受けられるぞ」

「安全に見えないのですが？」

「何を言っているんだ、パーフェクトに安全だぞ。だって俺は死んでないだろう？」

そう言って胸を張って――いやお腹痛いわ。無理だわ胸張れねぇわ。

「悪いけど俺は簡易医療ポッドに入ってくるから。お客様の対応は任せた」

「はい、お任せ下さい」

メイが俺に頭を下げ、それからセレナ中佐達の方向に視線を向ける。ビクリと全員が身体を震わせた気がするが、きっと気のせいだろう。大丈夫、安全だよ。絶対に死ぬことはないからな！

#268　出撃前、束の間の安息（後書き）

ドワーフ姉妹の可愛らしい姿を是非書籍版で目にしてね！（ω）

#269　作戦内容と思うところ（前書き）

ぽんぺ……―（：3」∠）―（今は落ち着いた

#269　作戦内容と思うところ

簡易医療ポッドで治療をして訓練場と化しているカーゴスペースに戻ってくると、そこで貴族出身の士官達が良い感じに疲労困憊とい様子になっていた。セレナ中佐はそんなだらしがない様子の士官達を見ながら苦笑いを浮かべている。

「中佐殿は訓練なさらないので？」

「作戦開始を控えた身で負傷するわけにはいきませんからね。作戦終了後にでもお相手願います」

「はい、セレナ様」

当然ながら汗一つかかず、披露した様子も見せずにメイが頷く。メイドロイドだからそりゃそうなんだけども。

「んじゃ、大してお構いもできませんがこちらへどうぞ。休憩スペースがありますんでね」

そう言いながらヘトヘトになっている士官達を連れて休憩スペースに連れて行き、適当に放流しておく。

「それで、今日は何をしに来たんだ？」

セレナ中佐とサシの席に着きながらそう聞く。

「作戦について話をしにきたのです。彼らは護衛兼物見遊山ですね」

「ウチは観光スポットじゃないんだが？」

そんな話をしていると、ミミがお盆にお茶とお茶菓子を乗せて運んできてくれた。

「お久しぶりです、セレナ様」
「直接顔を合わせるのは久しぶりですね、ミミ様」
「いえ、あの、私に様付けは……」
「そうでしたね、はい。ミミさん」
「はい、それでお願いします」

セレナ中佐は俺達と帝室を繋ぐ役割をこなしたので、ミミが皇帝陛下の姪孫であることを知っているんだよな。

「あー、それで作戦がどうしたって？　聞かせてもらっても？」
「はい。我々が得た情報によると、宙賊どもは小規模拠点を周辺の星系に随分と多く作っているようです」
「どうやって情報を得たのかは聞かないでおく」
「それが賢明ですね」

セレナ中佐がにっこりと良い笑顔を浮かべた。
宇宙空間での戦闘に比べると大気圏内での戦闘では撃破された際の生存率が大変に高くなる。生命維持装置がぶっ壊れても即死するわけじゃないからな。脱出ポッドとして機能したコックピットブロックさえ無事であれば乗員が生きている可能性は高いわけだ。
で、先日リーフィルⅣ――シータでは赤い旗構成員による降下襲撃が行われ、メイの操るブラックロータスの働きによってかなりの数が撃墜された。つまり、それなりの数の捕虜が発生したはずである。
帝国航宙軍は――というかグラッカン帝国は宙賊に対して一切の容赦をしない。捕らえられた宙賊は良くて終身労働、生きては居られないようなマッドな実験の被検体にされたりなんだりと碌な目に

遭わないそうな。そんな連中に対する尋問が人道的なわけもない。
「それで、小規模拠点相手にどうするって？　戦力を分散して同時に潰すとか？」
「近いですね。星系封鎖を行い、一星系ごとに掃除をしていきます」
「ああ、なるほど」

赤い旗海賊団は一つの大規模拠点を作って栄えているタイプの宙賊ではなく、複数の星系に多くの小型拠点を持つネットワーク型と呼ばれるタイプの宙賊だ。小規模拠点を一つ潰したところで奴らにとっては大したダメージにはならない。やるなら星系内の拠点を一斉に潰す必要がある。
そこで、セレナ中佐は今回掃討対象となる星系のハイパーレーン突入口を制圧して封鎖し、星系内の宙賊が出入りできない状況を作り出してから星系内の小規模拠点を全滅させ、赤い旗海賊団の勢力圏を削ぐことにしたようだ。

「それをやるとなると、敵拠点の正確な位置と数の情報が必要だろう？」
「それを入手できたからこその作戦というわけです」
「ああ、なるほど……」

捕虜になった宙賊の中に幹部でも居たのかね？　それとも撃墜した船の残骸から航行データでもサルベージしたのか？　どっちなのかはわからんが、とにかく必要な情報は手に入ったということか。
「しかし星系封鎖と言っても対宙賊独立艦隊の規模じゃ無理だろう？　どこからそんな戦力を持ってくるんだ？」
「主に星系軍ですね。付近の帝国航宙軍で手隙の部隊も集めてますが」

「なるほど。それじゃあ攻撃は傭兵と対宙賊独立艦隊でやるわけか」
「そうなりますね。貴方には遊撃をしてもらいますので」
「了解。まぁいつも通りだな」

クリシュナの機動性と火力を活かすなら戦列の一端を担うよりもフリーで飛び回った方が効率が良いからな。

「ブラックロータスは後方支援に？」
「そうしてもらえると助かりますね。この艦の火力は頼りになりますから。特にＥＭＬの威力と射程は拠点攻めに向いていますし」
「違いない」

ブラックロータスの艦首に装備されている大型ＥＭＬは非常に威力が高い。通常、実体弾兵器というものはシールドによる防御に弱いものなのだが、大型ＥＭＬにはシールドを貫通する特性があるからな。当然ながら装甲や船体に対するダメージも高いので、静止目標相手には非常に効果が高い兵器なのだ。
まぁ、レーザーに比べると弾速が遅いから、動く標的に対する遠距離命中率が低いという欠点もあるんだけど。メイの射撃精度だとそれもかなり軽減されるからなぁ。

「拠点はどうするんだ？　問答無用で破壊するのか？」
「その予定です。今回は目標が多いですからね」

セレナ中佐は肩を竦めて言葉少なにそう言い、ミミが淹れたお茶を一口飲んだ。
赤い旗海賊団の主なシノギ――ビジネスは闇奴隷の販売と身代金だ。惑星上居住地やコロニー、それに商船や客船などを襲って住人や乗員、乗客を拉致し、顧客の要望に沿うよう『加工』して販売する。身代金ビジネスに関しては説明の必要もないだろう。

つまり、奴らの拠点には『商品』がそれなりの数『貯蔵』されている可能性が高い。それを問答無用で破壊するということは、つまりそういうことだ。宙賊と通じて闇奴隷を購入するような連中がまともな趣味のはずもない。宙賊どもによって闇奴隷に不可逆的な『加工』を施された人々が、そのようにされる前の生活を取り戻すのには相当な努力と、類稀なる運が必要になる――らしい。

俺も実際に見たことはないんだがな。今までに闇奴隷を封入したコールドスリープポッドを回収したこともなかったし。

「浮かない顔ですね」

「そうか？　そう見えるならそうなのかもな。あまり気にせんでくれ」

気分が良い話ではないが、人には出来ることと出来ないことがある。助かる見込みがないのなら、終わらせてやるのもまた慈悲というものか。そもそも、俺の手には余る案件だし、セレナ中佐の手にだって余る案件だろう。帝国が本腰を上げない限りは闇奴隷に関する問題はどうにもならんだろうな。

「ふむ、意外と可愛いところがありますね？」

「勘弁してくれ。それより、戦力の集まり具合はどうなんだ？」

「予定ではあと三十八時間で予定されていた戦力の招集が完了します。フィジカルだけでなくメンタルの調子も整えておくように」

「アイアイマム」

俺の返事を聞いて満足そうに頷いたセレナ中佐は士官達を率いて旗艦である戦艦レスタリアスへと帰っていった。

やれやれ、余計なことを考えて気分が落ち込んでしまったな。ここは一つ、誰かとイチャついて元の調子を取り戻すとしますか。

俺はそう考えながら携帯情報端末に戦力招集完了予定時間をセッ

トし、艦内をブラつくことにした。

#269　作戦内容と思うところ（後書き）

5／8に最強宇宙船5巻が発売されました！　買ってね！（直球

そしてご購入くださった皆様ありがとうございます！　やったぜ！

―（∵3」∠）―

#270　敵を騙すには（前書き）

遅れました―（∵3」∠）―（ゆるして

#270　敵を騙すには

二時間後、俺はクリシュナのコックピットで出撃の準備をしていた。

「戦力の招集完了まであと三十六時間ありますよね？」
「そうだな」
「それなのに何で私達は出撃の準備をしているんでしょう？」
「そうだなぁ。ミミ、今自分の居る場所の屋根が落ちてきたり、あるいは今にも火事で燃えそうになっていたらどうする？」
「えっ……ええと、安全な場所に逃げますね？」
「そうだよな、つまりそういうことだよ」

首を傾げるミミにそう言いながら念の為にクリシュナの自己診断プログラムを走らせておく。うん、結果は良好。弾薬の補給も完璧。流石に手抜かりはないな。

「つまり、リーフィル星系内の宙賊が逃げ出そうとしているということですか？」
「そうだな。遅くともそろそろ行動を始める頃だろうな。だからこその出撃ってわけだ」
「リーフィルプライムコロニーはエルフが多いコロニーだから余所者は活動が難しいコロニーだけど、それでもアウトローの類がいないわけじゃないし宙賊と取引をしているような連中がゼロってわけでもないわ。セレナ中佐――帝国航宙軍が宙賊に対する何らかの行動を起こそうとしていることは宙賊どもも把握しているでしょうね」
「セレナ中佐はそれを逆手に取ってやろうと思っているわけだな。設定した作戦開始時間よりも早く行動して宙賊どもの虚を突こうっ

てところだろ」
「なるほど。でも、引っかかりますかね？　あと、戦力は足りるんでしょうか？」
「そこは何か考えているだろう。そもそも、戦力の招集が完了するってあの時間設定からして嘘かもしれんし」

敵を欺くにはまず味方から、というのは誰の言葉だったか。まぁ、つまりそういうことなのだろう。情報なんてどこから漏れるかわかったものじゃない。だからこそ欺瞞情報を流布して宙賊を嵌めてやろうということなのだろうが、どこまで効果があるものかね？　まぁ後は仕上げを御覧じろってところだな。

「ま、今は雇われの身だ。クライアントの命令に従うとしよう……メイ、クリシュナはいつでも出られるぞ」
『承知致しました。こちらは出港手続き中です。出港次第、僚艦と船団を組み、同期航行を開始します』
「任せた」

メイとの通信を切り、俺はメインパイロットシートに深く身を沈めた。長時間の操艦を想定してのものなのか、クリシュナのメインパイロットシートは実に座り心地が良い。

「結局のところ、実際にドンパチが始まるまでは実質的に今までと同じ、待機さ。気楽に行こう」

☆★☆

と、思っていた頃が俺にもありました。

『セクター３Ｃに感あり、急行せよ』

「はいはい！」

とても忙しい。誰だ、実際にドンパチが始まるまで退屈な待機の時間だなんて言ってたやつは。ぶっ飛ばしてやる。

いや、正直舐めてたよね。

何故こんなに忙しいのかと言うと、宙賊が入れ食い状態だからだ。セレナ中佐は戦力を招集している間に宙賊どもを全滅させる準備を着々と進めていたらしい。

「軍用の偵察衛星群と対ＦＴＬトラップとは、大盤振る舞いね」

「本来他国との戦争に使われるような装備だよなぁ。えげつない」

セレナ中佐の作戦はこうだ。

まず軍用の高性能偵察衛星を宙賊基地とハイパーレーン突入口の間にある宙域に散布し、ハイパーレーン突入口へと向かってくる宙賊艦の動きをキャッチする。そしてその宙賊艦をハイパーレーン突入口近くに設置した対ＦＴＬトラップ――超強力な拠点防衛用のインターディクターを使って超光速ドライブ状態を強制解除しつつ、超光速ドライブの再起動を阻害。足止めした所に俺のような傭兵や麾下のコルベットや駆逐艦を向かわせて宙賊艦を拿捕、あるいは撃破しているというわけだ。

「目標捕捉、やるぞ」

「いつでも」

無理矢理超光速ドライブ解除された影響で多軸回転を起こしている宙賊艦に四門の重レーザー砲を向ける。あれだけくるくる回っていると狙って無力化することなんてのは不可能なので、爆発四散するかどうかは乗っている宙賊の運次第だ。

「はい、ファイヤファイヤ」
容赦なく発せられた緑色の破壊光線がビシビシと宙賊艦のシールドに当たる。お？　意外と硬いな？
『や、やめろォっ！？』
「いや、やめないし」
何か喚いているが、聞く耳を持つつもりはない。ゆっくり拿捕している暇はないし、降伏したところでクリシュナには捕虜を取る能力もない。脱出ポッドとなるコックピットブロックを収納するカーゴスペースなんて無いからな。
そもそも、余程のことがない限り宙賊は投降なんてしないからな。捕まったら下手すりゃわけのわからん実験の実験体にされて、死ぬことも出来ずに苦しみ続けることに……なんて結末もあるそうだし。
「目標、ベイルアウトしました」
「おや珍しい。んじゃ脱出ポッドと船体をマークしといてくれ」
「アイアイサー」
マークしておけば後で戦利品としてコックピットブロックを欠いた宙賊艦と積荷をそのまま鹵獲できる。脱出ポッドの方は放っておけば軍が回収してくれるだろう。貴重な情報源だ。
「セクター３Ｃクリア」
『了解、セクター７Ｄに急行されたし』
「了解、セクター７Ｄへ移動する」
超光速ドライブを起動し、指定ポイントへの移動を開始する。対ＦＴＬトラップの敵味方識別は今の所完璧だ。まぁ、誤って味方の

超光速航行を阻害なんてしたら大迷惑も良いところだし、当たり前っちゃ当たり前なんだが。

「対ＦＴＬトラップすごいですね、これ。私達も使えないんですか？」

「あー、どうだろう。俺は知らんな」

ＳＯＬ（ステラオンライン）にもＦＴＬトラップそのものは存在していたが、実際の運用などに関しては描写されていなかった。なので残念ながら俺も詳細は知らない。

「ＦＴＬトラップ艦はれっきとした軍用艦だから、難しいと思うわ。それに普通のインターディクターよりも範囲も威力も遥かに強力だけど、小回りが利かないからあまり傭兵向きではないわね。偵察衛星網とか複数の観測機でも運用しない限り射程を活かせないし」

「だそうだ」

「なるほどー」

エルマの説明に感心するミミを同じく俺も心のなかでエルマの知識に感心する。やっぱりこういうところでエルマの経験と知識は頼りになるな。ＳＯＬのゲーム知識内のことならともかく、ゲーム知識外の事柄に関しては俺も知らないことが多い。

「本当はもっと破壊的な兵器を作るつもりだったらしいわよ。超重力砲だかグラビティブラストだかって名前の」

「エルマさん、それはまずいですよ！」

「？　何がよ？」

「ナンデモナイデース」

ついつい突っ込んでしまったが、その名前は……いや、まぁイン

ターディクターも元は重力だか質量操作技術から派生した技術らしいし、それを破壊兵器に転用するとなればそんな感じの名前になるのも致し方ないのかもしれない。

「話を戻すけど、結局射程は改善できたけどそうすると威力が減衰しちゃって破壊兵器としては役に立たなかったみたいね。ただ、元の原理が原理だから長射程、広範囲の超光速航行を阻害できるってことでＦＴＬトラップとして運用されるようになったらしいわ」

「「なるほどー」」

などとエルマの蘊蓄を聞いている間に目標のセクターに辿り着いた。超光速ドライブを解除し、またもや多軸回転して大変なことになっている宙賊艦を発見する。

「目標捕捉、撃破するぞ」

「「アイアイサー」」

さて、この状況を見るにセレナ中佐が立てた作戦は上手くいったようだな。これだけ戦力を減耗できたのであれば、リーフィル星系内の宙賊掃討は上手く行きそうだ。

あと三十数時間で戦力も集まりきるはずだし、そうしたら本格的な掃討が始まることになるだろう。あとはどこまで敵を捉え続けられるかだな。

#270　敵を騙すには（後書き）

そのうちこの宇宙にも重力破壊兵器が開発されるかもしれない（ω）

#271　きな臭さ漂う束の間の休息（前書き）

やはり寝不足は悪い文明（，ω，　）（一向に直せない

#271　きな臭さ漂う束の間の休息

「こういう時には本当にクリシュナの住環境が良くて助かったと思うよな」
「本当にそうね。ミミの先見の明ね、これは」
「そ、そうですか？　えへへ」

俺とエルマからの絶賛にミミがはにかんだ笑みを浮かべる。
戦力招集完了時間よりだいぶ先行した星系封鎖が始まって凡そ六時間。あれだけ入れ食い状態であった宙賊どももぱったりと来なくなり、俺達はクリシュナの食堂で小休止を取っていた。動員された傭兵艦は希望すれば帝国航宙軍の大型艦にドッキングして休息を取ることを許されていたが、俺達の乗るクリシュナではその必要もない。

『整備しなくてええんか？』

クリシュナの食堂に設置されたホロディスプレイの向こうからティーナが心配そうに問いかけてくる。向こうもちょうど一息入れるところであったので、こうして通信を繋いだのだ。

「弾薬も消費してないし、殆ど動かない標的を一方的に嬲っただけだったからな。問題ない」
「一応自己診断プログラムも走らせてみたけど、ヒロの言う通り問題なしよ。そっちの仕事を優先して頂戴」
『わかりました』
「気をつけてくださいね」
『あいあいー』

なんだか気の抜けるティーナの返事の後、通信が切れる。暇になってから一時間くらいかけてタグを付けた船から色々略奪してきたからな。向こうはブツの仕分けで忙しい筈だ。

「こっちの戦力に殆ど被害は出なかったようだな」
「そりゃＦＴＬトラップがあればね。上手くやれば常に先手を取れるわけだし、被害の受けようが無いわ」
「しかも相手は宙賊艦ですからね」

一隻だけ妙にシールドが硬いのが居たが、あれは何だったのかね？　赤い旗の幹部か、或いは宙賊と取引をしに来ていた逸般人かな？　まぁコックピットブロックベイルアウトしてたし、タグもつけておいたから帝国航宙軍に拿捕されて今頃じっくりねっとり取り調べでも受けている事だろう。南無――と思っていたら通信が入った。なんだ？　戦艦レスタリアスから？　セレナ中佐か？

「はい、こちらクリシュナのキャプテン・ヒロ」
『おや、小休止中でしたか』
「どうも、セレナ中佐。何か？」

思った通り、通信を入れてきたのはセレナ中佐だった。今回の総指揮官はセレナ中佐だ。いくら俺がゴールドスターだのプラチナランカーだのと立派な肩書きを持っていたとしても、たかが傭兵一人に総指揮がかかずらっている暇は無いはずだが？

『単刀直入に本題に入りますが、貴方達が撃破した船の中にベイルアウトしてタグを付けて放置した船があったのを覚えていますか？』
「ええ、勿論。宙賊としては珍しい行動だったんで。それが何か？」
『何も聞かずにあの船とベイルアウトしたコックピットブロックの

中身、私達に譲ってくれませんか？』

真剣な表情でそう言うセレナ中佐を見て少し考えてから頷く。

「ＯＫ、俺達は何も見なかったし撃破もしなかった。ログも送っときますか？」

『そうしておいて下さい、では』

「アイアイマム」

ホロディスプレイ越しに敬礼を返すと、セレナ少佐は短く頷いてすぐに通信を切った。

「なんでしょう？」

「さてな。とにかく俺達は何も見なかったし何も覚えてないってことしとこう。厄ネタの香りがする」

「そうね、それが良さそうだわ」

相当マジな感じだったから貴族関係か、或いは軍関係のスキャンダル絡みじゃねぇかな。おお怖。そんな案件に関わるなんて絶対に御免だぜ。くわばらくわばら。

「うーん、気になりません？」

「気にならないと言えば嘘になるけど、下手に興味を持って関わった結果どうなると思う？」

「……碌なことにならないですね」

「だろ？」

「忘れることにします」

シールドがちょっと硬めだったし、鹵獲すればそこそこ良い値段で売れそうな船に思えたけどな。まぁ仕方あるまい。セレナ中佐の

ことだからこっちが譲った分は何かしらの形で補填してくれるだろうしな。

「ヒロ、今回の作戦どう思う？」

「んー、そうだな。なんとも妙だな。いや、効率的ではあるんだがなんと言えば良いのか、こう……策動の気配を感じる」

「と言うと？」

「今回の作戦の主目的は赤い旗宙賊団の撃滅だ。でもなーんかなー……裏の目的がありそうな気がするんだよなー」

別に何か確証があるわけではない、ただ、なんとなくセレナ中佐の動きがきな臭いんだよな。予定より早い星系封鎖とか、見た事自体を忘れてくれとかいう件とか。予定より早い星系封鎖もなんかわざわざ欺瞞情報を流したっぽい雰囲気あるし。考えてみればこのリーフィル星系の惑星防御、短期間に二回も破られて降下襲撃を受けてるんだよな。本当にきな臭さがプンプンしやがる。

「というのが俺の見解」

「なるほどー……そう言われると確かになんだか嫌な感じがしますね」

「とにかく厄介事に巻き込まれないように粛々と仕事をこなすしかないわね。望みは薄いけど」

「どんな危険な任務に放り込んでも大体敵を壊滅させて悠々と戻ってくる手駒が居たら使い倒すよな。誰だってそうする。俺だってそうする」

「しかもヒロは生身で白刃主義者の貴族にぶつけても対等以上に渡り合える戦闘能力も持ってるからね。航宙戦闘も白兵戦もできるフリーで小回りの利く駒って便利すぎるわよね」

「そんな評価は聞きとうなかった。俺のメインは航宙戦闘なのに……」

将棋で言えば桂馬とか銀将くらいには使い勝手の良い駒なんだろうな。詰めの一手で最前線に放り込まれる予感しかしない。

「あーやめやめ、考えても気が滅入るばかりだ。ひとっ風呂浴びてコックピットで待機しよう」

「そうですね。誰から入ります？」

「ミミからで良いわよ」

「えー。そう言ってエルマさん、後でヒロ様と入るつもりじゃないですか？」

「……何のことかしらね？」

ミミの指摘にエルマが明後日の方向に目を逸らす。ほう、それは素晴らしいな。実に素晴らしい考えだ。だがここでどちらか一方を選ぶというのはなかなかに難しい。どっちにしても角が立つ……までは行かないが、俺が口を出すのはＮＧだ。俺は黙って成り行きを見守ることにする。

「じゃあお風呂は譲るので、仮眠は譲ってくださいね？」

「ＯＫ、それで手を打ちましょう」

このように俺が口を出さずとも、当人同士でうまい具合に折り合いをつけてくれるのである。まぁ、流れに身を任せる以上は文句も言えないのだけども。言うつもりもないけどな。

それじゃあ行ってきまーす、と元気に言いながらバスルームのある居住区画の方向へと去っていくミミの後ろ姿を見送りながら、何か適当な話題を探す。エルマの場合、ここで先程のミミとの話し合いの件を蒸し返してからかってはいけない。

「そう言えば、結局ローゼ氏族のところには行けなかったな。アレ

を返すのにまたリーフィルⅣに降りるし、その時に行こうか」
「ん、そうね。親戚付き合いもそんなに親密にしているわけでもないし、別に行かなくても良いけど……まぁ、折角母星まで足を伸ばしたのに顔も出さなかったら不義理よね」
「だな。血の繋がりはないけど俺の親戚でもあるわけだし、挨拶はしておきたいな」
「……そうね」

エルマは俺から顔を逸してしまったが、長くて尖った耳が赤いのでどんな表情をしているかは丸わかりである。これで両手で耳を隠しても結局は状態が知れるので、本人も隠すだけ無駄だと思ったのだろう。なら顔も逸らさなきゃ良いのに。

「どんな人達なんだ？」
「うーん、私の記憶も結構あやふやなんだけど……」

と、ミミがお風呂から上がってくるまでローゼ氏族に所属しているエルマの親戚、ウィルローズ家の人々に関する話を聞いて過ごした。うん、戦いの最中にもこういう風に心を落ち着けることができる時間を取れるのは良いことだな。やっぱり独りではこうはいかない。これからも大切にしていきたいもんだ。

#272　一番槍（前書き）

久々の航宙戦に苦戦しました（；ω；）（ゆるして

#272　一番槍

凡そ三十時間後、予定通りの戦力が集めた帝国航宙軍――というかセレナ中佐率いる対宙賊独立艦隊はリーフィル星系内に存在する赤い旗宙賊団の複数の拠点へと同時に攻撃を開始した。

「私達の目標は敵拠点ブラボーですね」
「同じ星系内に二つも宙賊拠点があるとはなぁ。奴ら、一体どのタイミングから襲撃を企てていたんだか」

宙賊の拠点と一口に言っても色々あるが、比較的多いのは大きめの小惑星を改造したものだ。内部をくり抜き、そこに構造体を収めて居住区画とする。拡張が必要な場合は他の小惑星を持ってきて構造体で連結する。

何故わざわざ小惑星を改造するのかと言うと、それは勿論宙賊を付け狙う俺達傭兵や星系軍、帝国航宙軍の目から自分達の基地を隠すためだ。小惑星を改造した基地は普通の人工的な構造体で作られた基地よりも発見が難しい。なんせ星系内に無数に存在するものなので、一つ一つ精査するわけにもいかない――いや、でも機会知性ならできるんじゃないだろうか？　何か対策があるのかね。少なくとも、ＳＯＬではそういう理由で小惑星を改造した基地が多いという設定だった。

ちなみに、普通ではないステルス性の高い特殊な構造体を使った宙賊基地なんかも無いこともない。かなり特殊だけど。ＳＯＬのイベントで目撃したやつは何面体かわからんが、とにかく多面体のいかにもＳＦチックな外観で、ステルス性が高くレーダーに補足されにくいというものだった。

最終的にはプレイヤー達による対艦反応弾頭魚雷やらＥＭＬやら

ミサイルの雨やらに晒されて見事爆発四散してたけど。

「基地をこさえるのもただじゃないし、時間もかかるからね。それでも二つあるってことは、相当前からエルフを狩るつもりだったんでしょう。大口の買い手でもついたのかしらね？」

「買い手、ですか？」

「結局のところ宙賊も商売だ。拠点を二つ作るくらい本腰を入れてるってことは、つまりそれだけ投資しても回収できると踏んだってことだろう。エルフを捕まえれば捕まえるだけ金を払ってくれる大口の顧客が存在していると考えるのが妥当だな」

とは言え、エルフは見目も麗しい者が多いし、寿命も長い。それに潜在的なサイオニック能力者でもある。別に大口の顧客が居なくても闇奴隷としては引く手数多だろうか？

「いや、考えすぎかもしれん。エルフは高く売れそうだしな」

「美人さんが多いですもんね、エルフって」

「褒められてるんでしょうけど奴隷としての価値みたいな話の流れで言われても微妙な気分だわ」

俺とミミに注目されたエルマが憮然とした表情を浮かべる。まぁそうだよな。お前高く売れそうだな、可愛いし。とか言われても微妙だわな。

「裏事情に思いを馳せるのはこれくらいにしときなさい。そろそろよ」

「そうだな、そうしよう」

間もなく同期航行が完了し、宙賊拠点ブラボーに到着する。こちらの攻撃部隊の主力はセレナ中佐率いる対宙賊独立艦隊で、それに

俺を始めとした傭兵達が同行している。ちなみに宙賊拠点アルファを強襲しているのはリーフィル星系の星系軍――星系軍にはローゼ氏族の人々が多いらしい――と、他星系から招集された帝国航宙軍の混成部隊である。リーフィル星系の星系軍は汚名返上の機会にだいぶ熱が入っていたらしいという話を聞いている。

「緊張しますね」
「そうか？　気楽に構えていても良いと思うけどな。油断するのはNGだが」
「どうしてですか？」
「星系封鎖で入れ食い状態だったろ？　恐らく宙賊基地の戦力は半分も残ってないと思うぞ」
「あ、なるほど」
「ヒロも言ったように油断は出来ないけどね。追い詰められた奴らは何するかわかったもんじゃないから」
「それは言えてるな。やぶれかぶれになって歌う水晶をぶっ壊したりするかもしれん」
「それは面倒ですね……」

俺の例え話にミミが頬を引き攣らせる。歌う水晶というのは破壊するとその場に大量の結晶生命体を呼び寄せる厄介な物体で、ＳＯＬでは使用することによってレイドイベントを発生させるアイテムだった。この世界では所持禁止の特級危険物である。
よく考えてみるとアレは一体何なんだろうな？　破壊することによって時間も空間も飛び越えて大量に結晶生命体が発生するとかよく考えると物凄いアイテムなんじゃないか？　上手く解析できれば新しいＦＴＬ航行技術のヒントになりそうだが。

「ほら、集中しなさい。ワープアウトするわよ」
「おっと、すまんすまん。じゃあ始めるとするか」

ドゴォン！　と轟音が響き、光る矢のように後ろに流れていた遠き星々がその動きを止める。

『コマンダーより各艦へ。敵拠点の抵抗を排除する。大型艦は精密砲撃で敵拠点の防衛モジュールを破壊せよ。中、小型艦は直掩機の排除。艦載機は大型艦の防衛を』

「了解。さぁ、始めるぞ」

「アイアイサー。センサーレンジ、戦闘モードに変更します」

「ジェネレーター、巡航出力から戦闘出力に。ウェポンシステム起動、サブシステムスタンバイ。いつでもいけるわよ」

「よし、一番槍は頂きだ。エルマ、ヒートシンク起動」

「ちょっ！？」

クリシュナのスラスターを最大出力で噴かし、宙賊拠点へと向かう。うん、予想通り小惑星を改造したタイプの基地だな。見たところ、メンテナンスドックのようなものも見える。こっちが本命か？

「敵拠点にエネルギー反応多数。防衛モジュールが起動ました！対空砲火来ます！」

「チャフフレア！」

「わかってるわよ！」

緊急冷却装置が働いてピキピキと音が鳴り、コックピットの中まで急速に冷え込む中、エルマが叫ぶようにそう言ってチャフとフレアを同時に展開する。それと同時に一瞬だけアフターバーナーを起動して急加速すると、一瞬前まで俺達が居た空間を多数の大口径レーザー砲撃が貫いた。宙賊基地の防衛モジュールから行われた対空攻撃だ。フレアの熱源とチャフによる撹乱で騙されたのだ。

ああいや、ちょっと掠ったな。直撃じゃないからセーフ。

「ちょっ、掠ったわよ！？」
「大丈夫大丈夫。ほら、乱戦に入るぞ」

こういった拠点に装備されている大口径レーザー砲は威力と精度は高いが、あまり小回りが利かない。距離を詰めて動き回ればそう簡単に再照準することは難しいし、下手に撃つと味方を巻き込む恐れもある。そして、クリシュナの加速性能なら一撃目をやり過ごせば懐に潜り込める。
さて、戦闘機動を――と思った瞬間、通信が入った。セレナ中佐だ。

『こちらコマンダー。クリシュナ、進路そのまま。カウントダウン。5、4――』
「マジか！？　エルマ、シールドセル起動！」
「ああ、もう！」

大口径レーザー砲を掻い潜っても、今度は中、小口径の近接防衛用のレーザー方やマルチキャノンタレット、それにシーカーミサイルの攻撃があるんだぞ！　進路そのままでまともに避けられなかったら詰むんだが！？

「う、撃たれてますっ！？」
「畜生めぇ！　保て、保てぇぇぇぇっ！」

進路はそのまま、アフターバーナーを噴かして最大戦速で宙賊基地へと間合いを詰める――が、所詮は何の捻りもない真っ直ぐな機動では対空砲火を避けられるはずもない。バンバン被弾する。
やめろ！　死んじゃうだろ！　いや、ギリギリシールドセルでのリチャージと拮抗してるか！？

あれ？　思ったより減ってないな？

『3、2、1――』

カウントダウンが終わった瞬間、後方から照射された大口径レーザー砲の嵐が宙賊基地に着弾し、あちこちで大爆発を起こした。どうやら大型艦の艦砲でクリシュナを狙った対空防衛モジュールを軒並み破壊したらしい。

『良い仕事です。後は好きに動いて下さい』

「お前覚えてろよマジで」

あまりの怒りに言葉を取り繕う余裕もない。本当に許さんからなお前。

『勿論です。活躍にはちゃんと報いますよ。コマンダー、アウト』

「違うそういう意味じゃ――おいっ！」

「通信、切れました」

「俺もキレそう……」

この世界に来てから船に乗っている時の中で過去最高に生命の危険を感じた気がする。クリシュナじゃなかったら溶けてたぞ。

「とにかく冷静になって。私達の命も預けてるんだからね」

「わかったよ！　クソッ！」

とにかく生きて帰ってあの綺麗な顔に一発カマしてやらにゃ気が済まん。場合によっては決闘も辞さない。

「しかしよくシールドが保ったな……一つ間違えば墜ちてたぞ」
「そうね……妙に保ったわね」

エルマが首を傾げている。なんで君が首を傾げてるんだよ。シールド管理してたの君だろうが。

「宙賊の防衛モジュールが思ったよりへっぽこだったんですかね？」
「あー、そうか。その可能性はあるな」

メンテナンス不足で想定通りの出力がでなかったのかもしれない。レーザーのレンズ部分が汚れたままだったり、焦点調整が甘かったりすると威力が落ちるからな。

「まぁいい。今は戦闘に集中しよう」

囮にされたのは業腹だが、おかげで宙賊拠点の防衛モジュールはほぼ無力化されたようだし、直掩機が出撃してこないところを見ると本当に戦力が枯渇しているらしい。後は直掩機の出撃を警戒しつつ、防衛モジュールの生き残りを潰していけばこの拠点は丸裸になる。さっさと片付けてしまおう。あとセレナ中佐は絶対一発殴る。絶対にだ。

#273　後始末と外から見たあの瞬間（前書き）

なんか体調が良くないのと荷物を待っているとどうも集中ができない……―（∵3」∠）―

#273　後始末と外から見たあの瞬間

セレナ中佐は丸裸にした宙賊拠点に航宙海兵隊を送り込んだ。

「問答無用で破壊するかと思っていました」

「情報の確度を高めるために拠点から更なるデータを得たいんだろ。欺瞞情報に踊らされなきゃ良いがな」

そう言いながら回収ドローンを操作し、撃破した宙賊艦――迎撃戦闘のために拠点から出撃してきた奴だ――から使えそうなもののサルベージを進める。

「はいはい、腹が立ってるのはわかるけど少し落ち着きなさい」

「……そうだな。努力する」

俺の怒りは未だに収まっていなかった。それはそうだろう。下手すりゃ死んでいたんだ。俺だけでなく、ミミもエルマもな。確かに中佐の指揮は的確だったんだろうよ。結果的に極めて効率的な砲撃が行われることになり、初撃で宙賊拠点の防備はほぼ丸裸になった。クリシュナが対空砲火を一手に引き受けていたから、射撃地点は全部丸見えだっただろうしな。

俺達が生き残っているのはたまたま運が良かっただけだ。シールドは抜かれていないし、よしんば抜かれていたとしてもまだクリシュナには装甲がある。シールドを抜かれていたとしてもそう簡単に墜ちはしなかったかもしれないが、そうじゃなかったかも知れない。

「大体ね、相手は帝国航宙軍中佐で、この作戦の指揮官よ。私達のクライアントでもある。その指揮で死にかけたからって食って掛か

ったり殴りかかったり斬りかかったりするわけにはいかないでしょ？　どうにも出来ないんだから落ち着きなさいって」
「わかってはいる。だから命令には従ったし、覚えておけよくらいで済ませただろ？　それはそれとしていつか一発ぶん殴るが」
「やめときなさいって……相手は貴族、それも侯爵令嬢なんだから」

エルマが溜息を吐く。わかってる、わかってるよ。立場的にセレナ中佐は何一つ悪いことはしていないよな。ああ、そうだな。その通りだよ。

「何が気に食わないって俺だけでなくクルーの命が危険に晒されたのと、公衆の面前で対空砲火の中直進なんていう無様な機動を強制されたことだな」

あれでは初心者呼ばわりされても反論が出来ないだろうが？　あの場には他の傭兵――同業者も居たんだぞ？　そんな場面で対空砲火の中脳死で直進してバリバリに対空砲火に被弾している場面を晒す羽目になるとか俺の沽券に関わるんだが？

「まぁそれは……そうね。評判に傷がつかなければ良いけど」
「そんなにですか？」

憤慨する俺と苦笑するエルマを前にミミが首を傾げる。

「ミミ、プラチナランカーの看板は決して軽いものじゃないのよ。プラチナランカーは腕っこきの傭兵達の中でもほんの一掴みしか存在しない頂点、絶対的な強者なの。そんなプラチナランカーが無様を晒したら、他のプラチナランカーの顔にも泥を塗ることになりかねないの」
「ははぁ……舐められちゃいけないんですね」

「俺の怒りの比重はミミとエルマが危険な目に遭ったが七割、無様な機動を強制されたが三割だからな。一応言っておくが」
「はいはい、わかってるわよ。貴方はクルー思いの良いキャプテンね」

しょうがないやつだ、とでも言いたげな表情でそう言いながらエルマが俺の太ももをポンポンと叩いてくる。まだ気持ちは収まらないが、これ以上憤慨し続けてもミミとエルマを困らせるだけだな。気持ちを切り替えよう。

☆★☆

宙賊拠点の制圧は程なくして完了し、一旦リーフィルプライムコロニーへと帰還することになった。とりあえず、戦利品の船は引き上げて臨時でリーフィルプライムコロニーの近くに設けられたシップヤード（という名のただの宇宙空間）に保管されることになった。一応は盗人――スカベンジャーの類がパーツ漁りなどを行わないようにリーフィル星系の星系軍が警備をしておいてくれるらしい。

「まぁ、高価なパーツは引っこ抜いておいたわけだが」
「せやな。気密も何も保たれてない状態で宇宙空間に放置してたら劣化しかねないわけやし」

タブレット端末を操作して引っこ抜いてきた船のパーツをチェックしながらティーナが頷く。

「船体フレームや装甲はともかく、他の装備は基本的に精密機器ですからね。劣化すると修理が面倒になりますから」

そう言いながらウィスカもタブレット端末を操作している。二人

のこの操作によってメンテナンスボットやメンテナンスドローンが倉庫内を忙しなく動き回り、パーツの運搬やスキャン、そして必要に応じて修理を行っているわけだ。

「どうだ？　やっぱ品質高めか？」

「んー、気持ち高めってとこやね。まぁ大体平均以上の品質に整備程度ってとこやろ。宙賊レベルの、って話やけど」

「傭兵や正規軍レベルの装備とは比べものにならないよね」

「もうちょいええ装備使ってもおかしくないと思うんやけどな。装備運んでる民間船とか、護衛の船とかもそれなりに拿捕してるはずやろ？」

「そうだよね。不思議」

「あー、それはな。そういう装備はボスとかその側近の船に優先的に回されるからだ。余程のことがない限り、下っ端宙賊にはそういう装備は行き渡らないのさ」

「なるほどなー……ところで疑問なんやけど」

操作の手を止めてティーナが俺の顔を見上げてくる。

「宙賊ってなんで居なくならんのやろね？　船だってそう安いもんとちゃう。傭兵だって軍だってそれなりに狩ってるやろ？　なのに一向に根絶できんのが不思議やわ」

「そりゃ元コロニストが多いんだよ。それも最下層のスラムの連中とか、所謂アウトロー連中とかな」

グラッカン帝国の政治の腐敗度は暗躍している機械知性のおかげで然程高くはないようだが、それでも落ちこぼれてドロップアウトする連中は一定数出てくる。俺がこの世界来て最初に立ち寄り、エルマやミミに出会ったターメーンプライムにもそういった区画はあった。ああいう区画に住んでいる――というより押し込まれている

連中の未来は暗い。一度落ちこぼれるとなかなか這い上がれないようになってしまっているからだ。そんな連中が集まって徒党を組み、生活をするために悪事を働く。その延長線上にあるのが宙賊への転身だ。

「どう足掻いても這い上がれない。なら奪う側になってやろうって連中が絶えないのさ。宙賊もそこに目をつけて少量の金を握らせてコロニー内の情報を流させる。こいつは使えそうだと思ったら引き抜いていく。スラムにいる連中やアウトロー連中が宙賊に手引されて密航していなくなっても誰も気に留めない」

「あー……なるほど。そういやうちの古巣でも居たわ。宙賊と付き合いがあるって連中の中で、いつの間にか顔を見なくなる奴がおるんや」

「引き抜かれて宙賊になったのか、それともそう騙されて売り飛ばされたかのどっちかだろうな」

「それも酷い話ですね……」

「宙賊になろうなんて奴にはお似合いの末路だと思うけどな。船に関しては知っての通り奴らの船は全部拿捕した船の改造船だ。品質も知っての通り、民間船に毛が生えた程度だ。元手は殆どタダさ」

人件費と動かすためのエネルギー、弾薬費くらいだろう。どうせ改造や修理だって拿捕した船からパーツを取って賄っているんだろうしな。それに、監獄コロニーの中には宙賊と通じてこっそりと収監された宙賊を死んだことにして釈放しているようなところもあると聞く。稀にそれが発覚して粛清されるなんて事件もあるそうだしな。

「ま、そういうわけでな。世の中全ての人間が完璧に管理されて、落ちこぼれを一切出さないユートピアかディトピアにでもならない限り宙賊は絶えることはないってわけだ。一時的に撲滅しても空白

になった縄張りに他の宙賊勢力が伸長してくる。そうなれば元の木阿弥だ」
「根深い問題なんですねぇ」
「せやなぁ。あ、そう言えば聞きたいんやけど」
「次はなんだ？」
「クリシュナってなんか特殊なシールドシステムとか積んどるん？　整備してるうちらの記憶では無いはずなんやけど」
「ブラックボックスになってるジェネレーター周りに隠されてるとかあります？」

そう聞いてくる二人に俺は首を傾げる。俺の知る限り、そんなものはない。この世界に来る前、ＳＯＬでも俺はクリシュナを存分に乗り回していたが、そんな隠し機能的なものが発動した覚えは一度もない。勿論、この世界に来てからもだ。

「無いはずだが、どうしてそんなことを？」
「え、いや、だって基地からの対空砲火めっちゃひん曲がってたやん」
「……？　なんて？」

ひん曲がってた？　対空砲火が？

「多分レーザー砲撃だけだったと思いますけど、クリシュナを避けるように曲がってましたよ。レーザー偏向シールドなんて見たことも聞いたことも無いんですけど」
「……マジで？」
「せやけど、知らんかったん？」
「船に乗ってたのに？」
「いや、なんかシールドが妙に保ったなとは思ったし、エルマもなんか首を傾げてたけど……そんなことが起こっていたのか」

一体何がどうなってそんな現象が起こったんだ？　俺が知らなかっただけで、クリシュナにはレーザー偏向シールド的な隠し機能があったのか？　クリシュナには謎が多いし、ＳＯＬにおいても他に同じものが存在しないと思われるユニークシップだった。絶対に無い、とは言い切れないが。

「ほんとに知らんみたいやな。だとすると何なんやろね、アレ。うちらとしてはものすっごい気になるんやけど」
「未知の技術だもんね。もう一回クリシュナを調べ直してみようか」
「せやな。整備がてら調べてもええよね？」
「ああ、それは構わんけどいつ出撃するかわからんからバラすなよ」
「任しとき」
「ありがとうございます」

そう言って二人はクリシュナが駐機してあるハンガーへと向かっていった。
未知の機能、レーザー偏向シールドねぇ……そんなもんがあるなら今まで俺が把握していないのも変な話だと思うんだが。どんな仕組みにせよ、宙賊拠点に装備されているようなレーザーを捻じ曲げるなんてことをするには膨大なエネルギーが必要になるはずだ。レーザー偏向シールドにエネルギーを食われてクリシュナのエネルギー出力が急速に低下するようなことがあればエルマなりミミなりが気づくはずである。当然、俺もな。
「でも実際に起こった、となるとどこからそんなエネルギー出力が――あ」
あった。そんな膨大なエネルギー源と、それを増幅する物体が。
できるだけ手元に置いておいてくれと言われたから、俺はアレをク

リシュナに持ち込んでいた。流石にコックピットには持ち込んでいなかったが、食堂に置きっぱなしになっていたはずだ。

「まさか……とは言えんなぁ」

遠くの国では航宙艦にもその手の技術を使っているという話だったし、あり得ない話ではない。とにかく、クリシュナに置いてあるアレの様子を見に行くとしよう。

#274　気づきの会食（前書き）

長い上に難産でな……｜（∵3」∠）｜

#274　気づきの会食

「あ、ヒロ」
「ヒロ様」

御神木の種が置いてあるクリシュナの食堂に行くと、エルマとミミが休憩をとっていた――のだが、どうやら問題の御神木の種を食堂のテーブルの上に置いて観察しているようだった。

「ちょうど俺もそれの様子を見に来たんだが、何かあったか？」
「何かあったと言うかなんというか……」
「見ればひと目でわかりますよ」

そう言うミミの肩越しにひょいとテーブルの上に載っている御神木の種を見てみると、あからさまに様子が変わっていた。形そのものは変わっていないが、ドリル状になっている鋭い両端がなんだか青っぽい結晶のように変化している。お前一応植物だよな？

「なんだこれは」
「それが今見たらこうなっていて」
「これについてはわからないことだらけよね」
「エルマもわからないのか。まぁそうだよな」

エルマはエルフではあるが生まれも育ちも帝都だ。リーフィルⅣの昔話や伝説の類には詳しくないと前から言っていた。
しかし、これはますますもってレーザーがひん曲がった原因がこいつである可能性が高くなってきたように思えるな。って眩しい眩しい、光るな光るな。水晶みたいになった両端が前にも増して眩し

く光りよる。

「ＯＫＯＫ、落ち着け。さっきの戦闘でレーザーがひん曲がってたって話だが、お前の仕業か？」

ミミとエルマが「えっ」とか言っているがとりあえず放置して御神木の種を見ていると、少し考えるような間を置いてから御神木の種は一度だけピカッと光った。確か問答においてはイエスなら二回、ノーなら一回光れって話をしていたので、これはつまりノーということなのだろう。

「本当か？　嘘じゃないな？」

ピカピカと二回光る。これは即答したな。

「質問を変えよう。レーザーが曲がってこの船が無事だった現象にお前は関わっているか？」

この質問には即座にピカピカと二回光って見せた。自分の仕業ではないが自分が関わっているのは間違いないというわけだ。それじゃあそういうことか。

「あくまでもレーザーを捻じ曲げたのは俺で、お前はそれを補佐したとかそういう感じか？」

そうそれ！　とでも言いたげに御神木の種が力強く二回輝いた。なるほど、なるほど。具体的にどうやったかはわからんが、あの時俺は心の底からなんとか墜ちずに保ってくれ、と祈っていた。その思いがあの奇跡を起こしたと、こいつはそう言うわけだ。

「信じられないことに、俺の眠っている力とやらはこいつに増幅されると宙賊拠点の対空レーザー砲火をひん曲げるらしい」
「えぇ……ヴェルザルス神聖帝国の船が使うっていうサイオニック・シールドみたいな？」
「知らんが、多分そういう感じなんだろうな」

実際に見たことがないのでわからないが、恐らくその申請帝国とやらが使っているサイオニック・テクノロジーを使った航宙艦に搭載されているシールド技術はこんな感じのものなんだろうなと思う。

「えっと、どうします？」
「どうするったってな……発動率がどんなものなのかも、こいつなしで使えるかどうかもわからんものに命かけるわけにはいかんだろ。今回は運が良かった。今後頼りはしない。そんなところじゃないか？」
「そうね。使いこなそうと思うなら例の特訓とやらを受けるしか無いし、もしこの種が無いと使えないという話なら、そもそも特訓をしても意味がないものね」
「そういうことだな。だが、礼は言っておく。ありがとう、お前のおかげで俺達は無事で済んだよ」

俺の言葉を受けてのものか、御神木の種は気にするなとでも言うようにピカピカと二回光った。どうやら礼の言葉を受け容れてくれたらしい。
とりあえず、次の攻撃命令が下るまでには少し時間がかかる。増援も駆けつけてきた今、艦隊をまとめたり用途や練度に応じて再編成したり、整備をしたりと艦隊全体の足並みを揃えるのに調整が色々と要るだろうからな。
『ご主人様、セレナ中佐からディナーへの招待が入っております』

「……なるほど？」

と思っていたのだが、メイからクリシュナの食堂へと入った通信で見事俺の想定は打ち崩された。

俺が思っているより暇なのだろうか？　それとも暇を作ったのか？　どちらでも良いが、あまりディナーをご一緒したい気分ではない。しかし侯爵令嬢からの招待というのは実質的には命令みたいなものである。余程の事情がない限りお断りすることもできまい。

「正装でなくても良いなら行くと伝えてくれ。了承が取れたら時間と場所を教えてくれ」

『承知致しました』

メイとの通信が切れる。

「ということだ。そのつもりでいてくれ」

「はい。でも、大丈夫ですか？」

「どうかな。少なくとも少しは落ち着いてるが」

「クライアントに食って掛かったって何の得にもならないんだからやめなさいよ？　言った言わないで揉めるほど不毛なことは無いわ」

「そりゃそうだな。不満をぶつけてどっちの言い分が正しいと白黒つけたところで何かが変わるわけでもなし」

気分は悪いが、確かにエルマの言う通り大変に不毛なことに違いはない。あちらからディナーに誘ってくる辺り、少なくとも問題を放置するのではなくコンタクトを取って何かしらのアクションを起こそうという思惑が伺える。あちらがそう動いたのに、俺が単にムカついているからと向こうのアクションをはねつけるというのは流石にちょっと子供じみた行いだろう。

☆★☆

「この度はお招き頂きありがとうございます」
「今回の制圧戦で味方艦の被害を抑えるべく動いて下さった貴方達に対するささやかなもてなしです。お気になさらず」

どうぞ、と席を勧められたので素直に席に着く。
ここは対宙賊独立艦隊の旗艦、戦艦レスタリアスの艦長用の食堂だ。正確には、船長と船内における最高級士官達――例えば副艦長だとか砲雷長だとか通信長だとか、艦内で様々な軍務についている軍人達のまとめ役達が利用する食堂であるらしい。前に何かの拍子にセレナ中佐からそんな話を聞いた覚えがある。

「リーフィルⅣ産の新鮮な肉や野菜を使った料理ですよ。まぁ、料理したのは自動調理器ですが」

料理を運んでくる軍人に目を向けながらセレナ中佐が本日のメニューの説明を始める。

「リーフィルⅣに滞在していた貴方達には物足りないかもしれませんが、これが私の用意できる精一杯なので」
「ご高配痛み入ります」

そう言って頭を下げると、セレナ中佐はなんとも言えない気まずげな表情をして見せた。

「相当怒っていますね？」
「中佐殿に対して怒りを覚えるなど畏れ多い。俺は一介の傭兵で、しかも今は中佐殿――というか帝国航宙軍に雇われている身です。命令に従うのは当たり前ですから」

「はい、わかりました。わかりましたのでその言葉遣いをやめて下さい。ここには私とロビットソンしか居ませんから、いつも通りで構いません」

料理を前にしてナイフもフォークも持たずに胸の前で腕を組んでそう言う中佐に俺は肩を竦めてみせる。

「それじゃあご随意のままに。正直に言えばあの瞬間には絶対に一発ぶん殴ってやると思ってたけど、冷静になって色々と考えているうちにそこまでじゃなくなったから気にしないでくれ」

「そこまでじゃなくなったということは、まだ蟠りを抱えているのでしょう？　貴方はどう思っているかはわかりませんが、私は貴方を得難い存在だと思っています。ですから、こうして腹を割って話す機会を設けたのです」

「なるほど。それはありがたい話だな。でも実際のところ、セレナ中佐に非はない話だ。戦闘中の指揮権はセレナ中佐にあるわけだし、命令があれば従うのが当たり前だからな。それで俺の船が爆発四散しそうになったとしても、それでその他多数の艦船の被害が抑えられると判断したならそのように指揮をするべきだし、それに従うのが俺の仕事だ」

「本当にそう思っていますか？」

「勿論だ。頭では理解しているさ。感情は別の話だが」

意外と座り心地の良い固定式ダイニングチェア背もたれに身体を預けながらそう言う。冷静に考えてみれば俺が今言った通りだ。セレナ中佐に指揮権があるのだから、俺達をどう扱おうが糾弾される謂れはない。無論、彼女の指揮で死にそうになった俺達が、というか俺が彼女の指揮に対してどのような感情を持とうが誰かに咎められる謂れもないが。

「言いたいことがあるなら全て吐き出していただけるとありがたいのですが」
「お互いに嫌な気持ちになるだけだと思うがね」
「それで貴方に距離を取られるのは私が苦しいので。公式にというのは無理ですが、個人的に貴方に謝罪することはできますから」

そう言って神妙な顔をしてみせるセレナ中佐を見てどうにも毒気が抜かれてしまう。美人ってのは便利だよな、本当に。

「……はぁ。小型艦にとってあの対空砲火の中五秒間直進しろってのは基本的に死ねっていうのと同じだ。軍用装備で固めたコルベットなら大丈夫かもしれんが、普通は無理だ。三秒もあれば溶けるからな」
「ええ……そのようですね」

セレナ中佐は慎重に言葉を選ぶようにそう言い、溜息を吐いた。この様子だと、後から部下にそう言われたのかね？　それで慌てて俺をディナーに招待したのかもしれない。

「まぁ結果的には大丈夫だったから、その判断は間違ってなかったんだよな。ただ、あのレーザーを偏向したやつは狙って使える札じゃないんで、今回は本当に運が良かっただけなんだ。次に同じことを命じられたら多分爆発四散することになるから、そのつもりで命令してくれ」
「わかりました。しかし、そんな状況でも命令を守るのですね？　傭兵というのは命令よりも命優先かと思っていましたが」

首を傾げてそう言うセレナ中佐に大きく溜息を吐いてから何故あの時命令に背いて回避機動を取らなかったのかを説明する。

「わざわざそのまま進めなんて命令を飛ばしてくる状況で下手な機動を取ったら、後ろから飛んできた味方のレーザー砲撃に焼かれかねないだろう……だからまっすぐ飛ばさざるを得なかったんだよ」

そのまま真っすぐ、などと言う時点でまっすぐ以外に飛んだら当たるぞと言っているようなものである。あの状況では命令に背いて回避行動を取るほうが危ない。

「ああ、なるほど……しかしあの状況でまさか突っ込むとはこちらも思いませんでしたよ」

「俺のことは遊撃で雇って放流すると言っていただろ？　ああいう状況では敵の攻撃を引き付けて発射地点を炙り出すのが前衛の仕事――ああ、そうか」

これか。ＳＯＬにおいてプレイヤーが宙賊基地を攻撃する時の定石と、セレナ中佐――というか帝国航宙軍が宙賊基地を攻撃するときの定石は違うんだ。ＳＯＬでプレイヤーが所有することが出来た船で最大のものは巡洋艦までだった。その巡洋艦も一部のトッププレイヤーしか入手することが出来ていなかったので、実質的には駆逐艦が一般的なプレイヤーが宙賊基地のような固定目標に対して用意できる最大戦力だったわけだ。

しかし帝国航宙軍は駆逐艦よりも遥かに射程も火力も高い巡洋艦や戦艦を多数運用可能で、宙賊基地の射程外からとりあえず一当てして敵戦力を削ることができる。

セレナ中佐が少佐だった頃はまだ運用する戦力が少なかったから、俺がＳＯＬで培っていた対宙賊戦術が噛み合っていた。だが、セレナ中佐の階級が上がって運用できる船の数が多くなった結果、俺の方の戦術が噛み合わなくなったのか。

「いや、やっぱりセレナ中佐の指揮に誤りはないな。俺の立ち回り

が不味かっただけだ。気を遣わせてこんな場まで用意してもらって申し訳ない」
「えっ……ええと？」
唐突な俺の謝罪にセレナ中佐が目を白黒させている。そうだよな。いきなり過ぎて意味がわからんよな。
「いや、話しているうちに俺の方が考え足らずだったことに気がついたんだ。本当に申し訳ない。穴があったら入りたい気分だ」
この世界はＳＯＬに酷似しているが、そうでない部分も多分にある。そんなことはこの世界に来て割と早い段階で気づいていただろうに、戦術に関してはＳＯＬでの定石が尽くハマるもんだから、ＳＯＬで培った経験が最適解でない可能性があることに今の今まで気づいていなかった。
これはいかんな。成功体験と固定観念は常に変化し続ける戦いの場においては毒も同然だ。気を引き締め直さないといかん。こいつはボーッとしてたな。
「それでは和解ということで……？」
「和解も何も、俺が自分の間抜けを棚に上げて一方的に謂れのない逆恨みをしていただけだ。寧ろ和解を求めるのはこっちだな。許してくれ」
「ええ……？　まぁ、他ならぬ貴方自身がそう言うなら……？」
本当にわけがわからないという顔をしながらセレナ中佐が曖昧に頷く。
うん、わけがわからないよな。でもこれを一から十まで説明するとなると、俺がこの世界に来た経緯から話して全部説明しなきゃならないので、そうもいかないんだこれが。とりあえずセレナ中佐の

お許しも頂けたようなので、深く反省して知識と戦術のアップデートを怠らないようにしていきたい。
敢えては言わないが、この件はセレナ中佐に対する俺の借りとして覚えておくことにしよう。大事なことに気づかせてくれたわけだし、一回くらいは何か無茶を聞いてやらないこともない。
言ったらとんでもないことを押し付けられそうだから絶対に言わないけど。

#275　挑発（前書き）

昼飯もまともに食ってないのでお腹が空きました（ ，ω，　）

#275　挑発

あの後は和やかに食事をして俺達は船に――ブラックロータスに戻った。帝国航宙軍が態勢を整え、再編成を終えるのには少し時間がかかるからな。

「で、帰ってくるなり何見てるの？」

「今回の宙賊拠点の攻撃のレポート。あとメイに頼んで帝国航宙軍が過去に行なった宙賊基地攻撃、及び固定目標への攻撃レポートも集めてもらってる」

「何でまたそんなものを……？」

食堂のテーブルに着いてレポートに目を通している俺にエルマが気味の悪いものを見るような視線を向けてくる。なんだよその視線は、失礼なやつだな。

「不勉強なのはいけないからな。あと他に帝国航宙軍の戦術教本なんかも手配してもらった」

「急ね？」

「さっきセレナ中佐と話している時に思い立ってな。俺の不勉強で俺だけならともかくお前らまで死なすわけにはいかないだろ」

「アンタってたまに変なとこで真面目よねぇ……」

そう言いながらエルマが俺の向かいの席に座って手酌でちびちびと酒を呑み始める。そうすると、程なくして整備士姉妹が食堂に現れた。彼女達はセレナ中佐に呼ばれる謂れもないということで、船に残って残務の処理をしていたのだ。

「おーっす、兄さんシャワー貸して……ああっ、姐さん呑んでるっ！」
「いいなぁ……」
「もう上がりでしょ？　奢るわよ」
そう言ってエルマが酒瓶を揺らすと、整備士姉妹の顔がパァっと輝いた。
「さっすが姐さんや！　話がわかる！」
「シャワーお借りしますね」
実に嬉しそうな様子で二人揃ってシャワールームの方向へと歩いていく姉妹。二人で入るんだろうか？　まぁ、あの二人なら余裕で二人で入れるか。俺とエルマとかミミとかが二人でもなんとか入れるし。
二人が食堂から出てくると同時にシャワーを終えたミミが姉妹と入れ替わるように食堂に入ってきた。姉妹達より先に風呂に入っていたのでかなりほっこりとした様子である。
「ヒロ様、何を見てるんですか？」
「今日の戦闘レポートとか色々。まぁ帝国航宙軍の戦術とかを勉強しようと思ってな」
「？　軍に入るんですか？」
「いいや。単に奴さん達と仕事をする時のことを考えて、色々勉強しとこうってだけだ」
「なるほどー。私も一緒に教わっていいですか？」
「良いぞ。まぁ、今はレポート見てるだけだけど」
そう言うとミミが俺の隣に座り、身を寄せて俺が見ているタブレット型端末の画面を覗き込んでくる。お風呂上がりだからか、なん

だかふわりと良い匂いが漂ってくるな。寝間着の薄い生地越しに感じられる体温も温かくてなんだかホッとする。

「……」

そうして少しすると、エルマも無言で俺の隣に座り直してきた。何故だかわからんが、ミミに対抗意識を燃やしているらしい。酔っ払ってるのか？　酔っ払ってるな。呑んでるもんな。

「楽しいか？」
「なんとなくのけ者になってる感じを味わいながら飲むよりはね」
「別にそんなつもりはないんだけどなぁ」
「あはは、エルマさん可愛い」
「うっさいわよ」

そうやってイチャコラしながら本日の戦闘レポートに目を通していると、整備士姉妹も風呂から上がってきた。

「あ、兄さんがイチャついとる」
「素晴らしいだろ？　ってお前、それ俺のシャツじゃねぇか」
「風呂から上がった後にジャンプスーツ洗おうと思ったら洗濯機の中に入ったままだったんよ。丁度良いから借りたで」
「す、すみません……後で洗って返しますから」
「いや別に良いけども」

なんだかやたらと顔を赤くして恐縮しているウィスカに首を横に振ってみせる。
姉妹揃って俺のTシャツを着てきてまぁ……でかすぎてワンピースみたいになってるじゃないか。まぁ似合っているというかグッとくるというか若干犯罪臭が……ん？　洗濯？

「お前らその下は？」
「履いてないし着けてないで？　洗濯しとるし」
「おいィ……」

道理でウィスカが挙動不審なわけだ。ウィスカに視線を向けると、彼女はTシャツの裾を下に引っ張って俯いてしまった。うん、恥ずかしいなら姉の口車に乗らないで欲しい。というか、君の力でそんなに引っ張るとTシャツの裾が伸びるからやめてくれ。

「ほれほれ、この下は素っ裸やで？　流石の兄さんもこれにはグッとくるやろ？」

そう言ってティーナが科を作ってせくしぃぽぉずをキメる。

「ハハッ、ワロス」
「ぶん殴ったろか？」
「やめて下さい死んでしまいます」

両手を挙げて降参しつつ、視線を絶妙に逸しておく。流石の俺も薄っぺらいTシャツの下は全裸ですとか言われると少し落ち着かない。

「なぁなぁ姐さん、なんで兄さんはウチらに手を出してくれないんやろな？」
「私に聞かれても知らないわよ。とりあえず、はい」
「むー、納得いかんなぁ。なぁ兄さん？」

エルマから酒の入ったグラスを受け取りつつ、対面に座ったティーナが流し目を送ってくる。見た目は小さくても仕草は別に幼くな

いんだよな。

「そう言われてもなぁ……」

ストレートな物言いに思わず頭を掻く。何故かと言われると困るんだけど、やっぱ絵面がな……いやまぁ、二人とも間違いなく可愛いとは思うんだけど。

「何度も言ってるけど君等に手を出すとなんかもういけない扉が開きそうでな」

「うちら立派な成人やで」

「……ミミさんよりも歳上ですよ」

「というか兄さんとほぼタメやん。まぁ、兄さんがうちらみたいな身体が小さい女は好かんっちゅうなら仕方ないけど」

「いや、そういうわけでは無いんだけどな？　こう、切っ掛けとか覚悟とか？　そういうのが足りない」

と言いつつ、自分でも明確な理由がよくわからんのだよな。別に二人に魅力を感じていないわけじゃないんだが。なんだかんだ理由をつけて意外とヘタレなだけかもしれん。

「せやかて、うちらは兄さんにもう命預けとるで？」

「いやそれは……というか明け透けすぎない？」

「今更やで？」

「そうですね」

真顔でそう言うティーナにミミが苦笑いを浮かべてみせる。エルマも肩を竦めている辺り、既に二人に相談済みらしい。多分メイにもだろうな。

「実際のところちょっと不思議ではあるのよね。ミミにもメイにも私にも手を出してるのに、二人にだけ手を出さないのは。別に二人ともセレナ中佐やクリスみたいに貴族でもないし、私の時なんて勘違いしてみたいだけどまぁ良いか、みたいな軽いノリで手を出したじゃない」

そう言いながらグラスを片手にエルマが俺の頬をグリグリとつついてくる。そう言われるとそうだね、そんな感じだったね。

「よし、この話題やめ！　今日は疲れたしもう寝ようぜ！」

三十六計逃げるに如かず。情勢の不利を感じ取った俺はそう言って席から立つが、対面に座っているティーナから小馬鹿にするような声が飛んできた。

「なんや、逃げるんか？」

「……逃げますけど？」

一瞬熱くなりかけたが、自制する。落ち着け、挑発に乗る――いや、別に挑発に乗っても良いか？　ここまで言われて引くのは逆にダメでは？

「……本当に逃げちゃうんですか？」

ウィスカがそう言って潤んだ瞳で上目遣いに見上げてくる。でもちょっとこれは演技入ってるな？　なるほどね、そうやって俺をからかって遊ぼうってつもりか？　ＯＫＯＫ。

「よしわかった。じゃあ望み通り二人とも部屋にお持ち帰りしてやるよ。後悔するなよお前ら。骨の髄まで理解らせてやるからな」

立ち上がった俺はスタスタとテーブルの反対側に回り込み、ティーナとウィスカの二人を両脇に一人ずつ抱えた。筋肉か骨の密度が違うのか、二人とも見た目の割にずっしりとしている気がする。こんなことは口が裂けても言えないが。

「えっ、ちょ、兄さん？」
「お、お、お兄さん？」

なんか今更二人とも慌てふためいてるけど、もう遅いぞ。やってやろうじゃねぇか！　ドワーフなんざ怖くねぇ！

「それじゃあそういうことで」
「はいはい、手加減してやりなさいよ」
「二人とも頑張ってくださいね！」

エルマがヒラヒラと手を振り、ミミがなんだかよくわからないテンションでティーナとウィスカを応援する。自分達から挑発したくせに緊張でもしているのか、完全に固まってしまった二人を両脇に抱えたまま俺は食堂を後にした。

なんか後ろからチョロイわね、とか私も今度あんな感じで、みたいな声が聞こえてきた気がするけど、きっと気のせいだ。うん、きっと気のせい。

#275　挑発（後書き）

やってやろうじゃねぇかよこのやろう！（，　。ω　。、）（なおノクターン版はありません

#276　再出撃（前書き）

ちょっと来客で書く時間があまり取れなくてな……短いけど許して

―（∵3」∠）―

#276　再出撃

翌朝、足腰がガタガタになっている姉妹を抱っこしてバスルームへと連れて行き、三人でゆっくりと入ることにした。俺とミミやエルマ、メイが二人で入るとちょっと狭い風呂も、小柄な整備士姉妹であればなんとか三人一緒に入ることが出来る。

「兄さん楽しそうやなぁ」
「そりゃ楽しい。最高だな」

絵面は完全に犯罪的だが、慣れてしまえば――というか一度受け容れてしまえばなんてことはない。二人とも文句なく可愛いし。

「ウィーは今更そんな赤くなってどうすんねん」
「だ、だってぇ……んっ、お兄さんお腹撫でないでぇ……」
「お肌がすべすべで触り心地が良いんだよなぁ」

湯船に浸かり、膝の上に抱っこしているウィスカのお腹を触っているとウィスカがやたらと色っぽい声で抗議してくる。

「兄さんもその辺にしときや……またおっ始めるつもりかいな」
「たまにやるなぁ」

実際、ミミやエルマ、メイと仲良くした翌朝にこうして一緒に風呂に入ってもう一戦なんてのは珍しくもない。

「ただ、流石に昨日の今日でそこまでするほど鬼畜じゃないぞ、俺は」

「その手を止めてから言わんと説得力皆無やぞ。あと、昨晩うちにしたことをよぉく思い出してもろてええかな？」
「際どいところにはタッチしてないからセーフ。昨晩のアレに関してはまぁ……その場の流れで？」
「うちとウィーの扱いに差があったように思うんやけど？」
「つまりティーナは昨日のウィスカみたいな感じにして欲しいと」
「そ、そうは言って――ないこともないけどぉ……」

今度はティーナが顔を赤くしてごにょごにょと言いながら俺から視線を逸らす。なんだこいつ可愛いな。

「あっ……」

俺の膝の上でもじもじしていたウィスカが何かに気がついたような声を出す。いや、ウィスカさん。それはな、ちゃうねん。いや、違わないんやけどな。そんなにもじもじして刺激されると自然とな？　そしてティーナもウィスカの反応から察したらしく、顔を赤くしたまま挑発的な笑みを浮かべた。

「昨日は良いだけ兄さんにやられたんやから、次はうちらの番でええよな？」
「おうやろうってのか、かかってこいよ。経験値の違いってのを見せてやるよ」
「その言葉、忘れんなや」

この後滅茶苦茶イチャイチャした。

☆★☆

「で、二人は？」

だいぶゆっくりとしたお風呂タイムを終え、ティーナとウィスカを俺の部屋のベッドに放り込んでから食堂に行くと、エルマにジト目で迎えられた。そんなに見るなよ、照れるだろ。

「今日は一日休んでもらうことにしたぞ」

今日辺り再編成は終わるはずだが、再編成が終わっても即出撃とは行かない。まずは戦力を次の星系に大移動させなきゃならないし、移動させた後にも色々と調整が要る。まぁ行動プランは既に立てているのだろうから、これから向かう先々で既に用意は始まっているのだろうし、そこまで時間はかからないかもしれないが。

何せ単艦で飛び回る身軽な傭兵と違って軍ってのは動きが鈍い。足並みを揃えないと戦力を集めた意味がないから仕方のないことではあるのだが。せっかく百の戦力を集めても、足並みが揃わず一の戦力を百回ぶつけるのでは何の意味もないからな。

何にせよ今日明日くらい整備士姉妹が使い物にならなくなっていても何の問題もない。

「むー……いいなぁ」

「次の休暇でな」

「約束ですよ？」

「私は？」

「時間の許す限り頑張らせていただきます。上手くシェアしてくれ」

今までも大概だったが、これで俺も名実共にハーレム野郎の仲間入りだな。この世界の傭兵の在り方としては正しいのかもしれんけどさ、慣習的に。ついに一線を超えてしまった感が強い。

「シェアね。まぁ良いわ、それで手を打ちましょう。メイに管理し

てもらえば良いでしょ」
「そうですね、メイさんなら安心です」
エルマの言葉にミミも頷く。メイはいつの間にか女性陣から謎の信頼感を得ているよな。一体俺の知らないところでどんな話を――ああいや、あまり知らないほうが良さそうだな。知らなくても良いことを知ってしまって心にダメージを負いそうだ。
「それで、今日の予定は？」
「何か命令が下るまで待機だが、そろそろ動きがある頃だろ。流石に移動後即星系封鎖、殲滅開始とはいかんだろうが」
「どうかしらね。中佐ならそれくらいやりそうだけど」
「どこまで先だって用意をしているかって話ですよね。確かにセレナ様なら抜け目なく用意をしていそうです」
「そうか？　まぁそうかもな」
彼女はあの若さで帝国航宙軍の中佐まで昇りつめている女傑だ。迅速に宙賊どもを駆逐できるよう先を見越して艦隊の運用計画を練っていてもおかしくはないか。
「何にせよ俺達にできることは待機だな。勝手に出撃するわけにもいかんし」
「それもそうね。ま、今日のところはあの二人に譲ってあげるわ。お世話して上げなさいな」
「そうですね。何かあったら呼びますから、ごゆっくりどうぞ！」
「ごゆっくりと言われるのもなんかなぁ……まぁうん、お言葉に甘えて二人をケアしてくるよ」
二人とも朝食を取っていないはずなので、腹ペコの筈である。とりあえずまた二人とも動けなくなってしまったので、今日は一日二

人の世話を焼くとしようか。
え？　宙賊とのドンパチの最中だってのにこんなにのんびりして良いのかって？　命の危機を感じる状況だからこそ日常を大事にしないとな。平和で充実した生活は健やかな精神を保つための大事な要素だよ。

☆★☆

帝国航宙軍の次の動きは思ったよりも早かった。朝風呂の件でまた足腰の立たなくなってしまった姉妹を抱っこしてブラックロータースの食堂に連れて行き、食事を終わらせた頃には移動命令が発令されたのだ。まぁ、次の戦場への移動だけならメイに任せていれば良いので俺が何かする必要はないのだが、軍の動きが予想よりも早いとなると、目標の星系に到達次第即時軍事行動に入る可能性もある。となると、俺としてもクリシュナで待機していつでも出られるようにしておかなければならない。

「忙しないなぁ」
「仕方ないよ、お姉ちゃん。でもお兄さん、本当に休んでいて良いんですか？」
「整備は完璧だし問題ないぞ。二人はゆっくりしててくれ」
「タブレットはここにあるから、戦利品の回収とかボットとかドローンの操作もできる。ここにおってもやれることはあるから、そっちこそ気を遣いすぎんでもええで。ティーナちゃんにおまかせや」
「私もね。お兄さん、気をつけて」

そう言ってウィスカが俺に抱きつき、頬にキスをしてくる。俺もウィスカの頬にキスを返しておいた。

「あー、ずっこい。うちもうちもー」

「はいはい。ありがとよ」

騒ぐティーナとも笑いながらハグとキスを交わす。これが漫画やアニメなら死亡フラグになりそうな気もするが、そういうフラグというか展開に関して言えば色々と今更だからな。ま、死なないように精々頑張りますかね。

#277　もぬけの殻（前書き）

ちょっと長め（　，ω，　）（遅れたのはゆるして

#277　もぬけの殻

移動命令発令後、艦隊は星系封鎖部隊と攻撃部隊に分けられてそのまま行動開始。リーフィル星系の隣に位置するシノスキア星系に到着後、俺達は攻撃部隊と共に宙賊の拠点へと真っ直ぐに向かった。

「今回はどうですかね？」
「どうかな。多分大した抵抗は無いと思うが」
「そうですか？　リーフィル星系の様子はなんだかんだ伝わってそうですし、手ぐすね引いて待ち構えているんじゃ？」
「俺は多分殆どもぬけの殻なんじゃないかと思うけどな。エルマはどう思う？」

首を傾げるミミにそう言ってエルマに話題を振ると、エルマは「そうね」と言って少し考えてから口を開いた。

「完全にもぬけの殻ってことは無いと思うけど、抵抗は少ないんじゃないかしら」
「エルマさんもヒロ様と同じように考えているんですね」
「いくら赤い旗の連中が宙賊としては大勢力だとは言っても、数を揃えた軍隊とまともにぶつかりあえるほどじゃあないからな。攻めてくるのがわかっているなら引き上げるべき物資を大急ぎで引き上げて逃げ出すさ」
「なるほど。それじゃあ今回も楽勝ってことですかね？」
「それはまた別の話だな。俺が宙賊なら嫌がらせを仕掛けていく」
「嫌がらせですか？」
「基地に軍が突入してきたら自爆するようにしておくとか、軍が布陣しそうな場所に機雷を仕掛けておくとかな。まぁ、それは隣か、

もう一つ隣の星系じゃないかと思うけど」
「そうね。いきなりそんなことやろうって言っても人手も資材も準備が要るしね。多分すぐに使える嫌がらせの手段を実行しておくくらいでしょ」
「すぐに使える嫌がらせですか？」
「ミミ、宙賊基地には違法な品がいくらでもあるのよ。ヤバいものがたんまりとね」
「あ、嫌な予感がしてきました」
「歌う水晶は激レアアイテムだからそう手に入らんと思うが、何が出てくるかわからんのがなぁ……」

突入部隊には同情する。通常のＢＣ兵器なら可愛いものだが、この中にはもっとヤバいもんがいくらでもあるからなぁ。俺がＳＯＬ内で知った知識の範囲内でも枚挙に暇が無いし、この世界にはもっと危ないものが存在する可能性がある。
具体的にどんなヤバい物があるのかと言うと、人間やその他の一定以上の知能がある生命体の死体に寄生して身体をグロテスクに改造してどんどん増えていくエネルギー生命体とか。死体に寄生して身体を改造、その身体で他の生命体を殺して更に増えるっていう映画のゾンビも真っ青のやべぇ生命体なんだよね、アレ。多分ＳＯＬでも某有名ゲームのオマージュとして登場させたんだろうが、あまりのクソ難易度にプレイヤー達は最終的に白兵戦で制圧することを諦め、イベントの舞台となった大型採掘船を丸ごと消し飛ばすことで決着とした。
他にもやたらと殺傷能力の高い宇宙クモとか、体液が航宙艦の船体と装甲を溶かすほど強い分解能力を持っている殺人エイリアンとか色々あったな……ああ、ゾンビもあったなそういや。流石にレーザー兵器とパワーアーマーの物理的・生物化学防御能力の前に為す術もなく掃討されてたけど。

「普通に生物兵器の類とかはありそうよね。あと最悪なのは被害者がブービートラップにされてる場合かしら」
「被害者が？」
「あいつらの『商品』にされた人達に爆弾だの毒ガスだのもっと危ないものだのを仕掛けて、救助後にボンッ、とかね」

そう言いながらエルマが手をパッと開いてみせる。

「えげつねぇなぁ……でも宙賊だしなぁ」

あいつらときたら何でもアリだからな。奴らに凡そ理性とか倫理観といったものを期待してはいけない。

「兵隊さん達は大変ですね」
「それな。俺はセレナ中佐に何を言われても今回は絶対白兵戦はやらん」

宙賊艦ならともかく、宙賊の拠点なんて何か飛び出してくるかわかったもんじゃないからな。何があっても突入はしたくないね。まぁ大概はちょっとした生物兵器が出てくるくらいで済むことが多いんだけどさ。

およそ二時間後。

「汚え花火だなぁ……」
「案の定というかなんというか」
「うわぁ」

コックピットのメインスクリーンには凄まじい砲火でガンガン消し飛ばされていく宙賊基地の映像が映っていた。

うん、バッチリ俺達の予想通りだったんだ。
今回の宙賊基地攻略戦は航宙戦闘に関してはすぐに完了した。宙賊艦は殆ど引き上げていて、宙賊拠点に設置されているタレットくらいしかまともに反撃してくるものがなかったからな。小型艦や中型艦の出る幕も無く、大型艦の砲撃だけでほとんど片がついた。
問題は海兵部隊の突入した後で、奴ら『商品』に生物を理性のない化け物に変異させる薬剤というかウィルスのようなものを投与していったらしい。
宙賊基地に突入した帝国航宙軍の海兵部隊は早々に人間やその他の種族が変異した生物兵器らしきものに遭遇。分析のために一時間ほど突入地点で防戦を行い、最終判断としてセレナ中佐は海兵部隊の即時撤退と遠距離砲撃による基地破壊という選択肢を選んだ。特に得るものが無さそうな突入作戦で、いたずらに兵力を損耗させるわけにはいかないという判断であったようだ。
まぁそんなものをブービートラップとして用意していくくらいの余裕があったなら、データを保管している機器とかは念入りに破壊したか、データを引き上げるかをしていったことだろう。セレナ中佐の判断は妥当だと思う。
で、その結果として開催されているのが目の前の静止目標射撃訓練である。小惑星を改造した宙賊基地が大口径レーザー砲の照射を受けて眩い光を放ちながらバンバン爆発していく光景はなかなかに圧巻だ。

「おっ、派手に爆発したぞ。酸素か燃料か弾薬にでも誘爆したのかねぇ」
「あんなに派手にやって大丈夫なんですか？　中で繁殖してたのがそこら中に飛び散るんじゃ」
「レーザー砲撃に晒された上に宇宙空間に飛び散ってまだ感染能力を有してるような生物兵器ってあるのかしらね？」
「さぁ？　あったとしてもシールドに阻まれて船体に取り付くのは

不可能だろうな。巡航出力のシールドに接触した時点で消し飛ぶんじゃね？」
「そう言われればそうですね」

寄港中や地上に降下した際に張るセキュリティ出力のシールドに接触しても精々痺れたり火傷したりする程度だが、宇宙空間を往く際の航宙艦用シールドに生身で接触したら殆どの生体は無事ではいられない。例外は結晶生命体とかの一部の宇宙航行生物くらいだろう。ああ、メイならワンチャンあるかもしれん。多分服と外装――メイを人間らしい外見にしている人工皮膚の類は全部剥がれることになると思うが。

「しかし今回は美味しいとこなしだな」
「宙賊艦も殆ど出てきませんでしたから、賞金も鹵獲品も稼げてないですね」
「拘束されてる分の給料は入ってくるけどね。まぁ良いじゃない、楽してお金が転がり込んでくると思えば悪いことじゃないでしょ？」
「それはそうなんだけどなぁ……」
「何か心配事が？」
「今回楽ってことは、次の星系が心配でな。宙賊だって馬鹿じゃない。何かしらの手は打ってくるだろう。やられっぱなしの舐められっぱなしってわけにはあっちもいかないだろうしな」
「なるほど。それはそうですね」

問題は、宙賊がどんな手を使ってくるかだな。正規軍同士の戦争じゃ絶対にやらないような手を使ってきても何もおかしくない。

「ヒロ様が宙賊ならどうやって対処しますか？」
「俺なら逃げの一手だが、それだけじゃ宙賊仲間にビビって逃げたと思われるだろうな。それが最適解だとしても、大規模宙賊団とい

う立ち位置がそれを不可能にすることだってある。せめて何か軍に一泡吹かせてやる必要があるわけだが……」

とは言っても赤い旗が航宙戦で正規軍と真っ向からやりあっても勝ち目はない。そうなると当然搦手で来るだろうが、さて。

「俺なら前にベレベレム連邦軍にやったみたいに歌う水晶とかを使って強大な第三勢力を呼び込むが、都合よくそんなものを持っているとは限らないしな」

「それもそうだけど、あの手の危険物は敵集団のど真ん中で使わないと意味が無いわ。ヒロみたいに単艦で帝国航宙軍の布陣の中枢まで飛び込めるようなパイロットと機体が揃わないと難しいと思うわよ」

「確かに。そうなるとヒロ様が言っていた機雷とかですかね？」

「反応弾頭を使った機雷を山程散布してたりする可能性はあるな。或いは反応弾頭を積んだシーカーミサイルで飽和攻撃とか仕掛けてくるかもしれん」

反応弾頭そのものは所謂枯れた技術というやつらしいからな。とっくにその製造方法やら何やらは広まっているし、ちょっとした工作機械――この世界の技術基準のもので――があれば、製造そのものは容易いと聞く。

反応弾頭の材料となる素材は表では販売規制があってそう簡単に手に入るものではないらしいが、宙賊なら取引そのものが違法となるような素材も入手は難しくないだろう。やろうと思えば地球の紛争地帯で蔓延っていた世界一製造されたアサルトライフル並みに生産することが可能だと思う。

それでも宙賊が反応弾頭を用いたミサイルや魚雷の類を使わないのは、威力が強すぎて戦利品ごと獲物を吹っ飛ばしてしまうからである。俺が宙賊艦相手に反応弾頭魚雷を滅多に使わないのと同じ理

由だ。
だが、宙賊も強大な敵――例えば帝国航宙軍などの正規軍に追い詰められたらその使用を躊躇わなくなる可能性は十分にある。そうなると安価なシーカーミサイルが超強力な飽和攻撃兵器と化すわけだ。こんなに恐ろしいことはなかなかない。

「まぁ、反応弾頭搭載のシーカーミサイルなんて大っぴらに大量運用したら帝国航宙軍も黙っちゃいないだろうからな。そこまではやらんと思うが」

無論、そんな禁じ手を使えば帝国航宙軍も本腰を入れて赤い旗宙賊団を殲滅することになるだろう。セレナ中佐が率いる対宙賊独立艦隊を中核とした寄せ集め軍団などではなく、正規の軍団を派遣してくるはずだ。そうなったら赤い旗宙賊団に生き残る目は無い。見せしめとして全構成員の首が柱に吊るされる事となるだろう。比喩表現的な意味で。いや、実際に吊るされもするかもしれんが。

「とにかく今回はこれで終わりしても、次の星系では注意が必要だろうな。帝国が本気を出さない程度にセレナ中佐にい一杯食わせる。そういう微妙なラインを狙って何か手は打ってくるだろ」
「そうね。宙賊だって馬鹿ばかりってわけじゃないし」
「普段はなんかもうヒャッハーって感じのパッパラパー集団にしか見えないんですけど」
「パッパラパーというかラリパッパというか……でもまぁ、大規模宙賊団ともなれば悪知恵の働く連中もそれなりにいるわよ。じゃないと大規模な宙賊組織なんて運営できないしね」
「そういうものですか」
「そういうものです。とにかく、油断しないように気をつけていこうな」

ゲームのＳＯＬと違って、この世界の宙賊はれっきとした知性を持つ……多分持っている人間だからな。何か狡猾な罠を仕掛けてくるかもしれんから、警戒を強めておこう。少なくとも俺達が引っかかって即死だけはしないようにな。

#278　対抗手段への対抗手段（前書き）

寒くなったり暑くなったり気温が安定しない……（ ̄ω ̄）

#278　対抗手段への対抗手段

シノスキア星系の掃討も終え、今度は翌日にもう出発である。シノスキア星系での掃討が予定よりも早く終わったから半日ほど休めたが、苦戦して時間がかかっていた場合は碌に休息も取らないで次の星系――ショア星系に移動する予定であったらしい。

「忙しないな」

『セレナ中佐は宙賊に時間を与えたくないのでしょう。時間をかければかけるほど碌でもないことをするのは目に見えていますから』

「納得の判断ですね」

センサー系のチェックを終えたミミが頷く。何時間か前にシノスキア星系にあった宙賊基地内での戦闘の様子が記録されたホロ映像が回されてきたんだよな。半分くらい人の形が残ってる変異生物が理性を無くして突っ込んでくるのを海兵隊がバンバン撃って倒すような内容のやつが。

無理して見なくても良いって言ったんだが、結局ミミは最後までちゃんと見た。まぁ俺も強くは止めなかったんだけど。ホロ映像でも良いから体験しておけば、何か同じような事態に巻き込まれてしまった時に冷静に動けるかもしれないからな。結果として「やっぱり宙賊はどうしようもない奴らですね」みたいなことを言っていたので、まぁ宙賊に対して慈悲をかける心とかそういうのは少し磨り減ったかもしれない。実際、宙賊には恩を売ってもどうせ仇で返されるだけなんだろうからそれはそれで良いことなんだけど。

「ショア星系への到達予定時刻は？」

『凡そ十五分ほどでワープアウトします』

「了解。それじゃあすぐ動けるように用意しとくか。今のうちにトイレとか済ませておこう」
「私は大丈夫です」
「私も」
「それじゃあワープアウトまで小休止だ」

俺も今は特に出そうにないからな。
ちなみに、あれから丸一日程経って整備士姉妹は完全に復活した。まぁ簡易医療ポッドに入ったら一発だったんだけども。風情がないとか言って二人ともすぐには入らなかったんだよな。今思えばミミもエルマもそうだった気がする。もしかしたら俺の知らないこの世界独自の暗黙の了解とか常識とかなのかもしれない。

☆★☆

宙賊達も馬鹿ばかりではない、と言ったのは確かエルマだったか。俺もその意見には同意するが、それと同様に帝国航宙軍も馬鹿ばかりではない。というか、基本的に軍人――それも作戦を指揮したり立案したりといった人間というのはエリートと呼ばれる人達である。
当然、頭が切れる。中には所謂頭でっかちと言われるような人も居るのだろうが、少なくともセレナ中佐はそういったタイプの軍人ではなかった。

「その結果がこれである」

ショア星系の宙賊基地の近くまで超光速航行で移動した宙賊基地攻撃艦隊は、そのまま宙賊基地に最大戦速で向か――わなかった。

「まぁこうなるわよね」
「派手にやりますねー」

戦艦や重巡洋艦などの特大型艦、大型艦が出力を絞った速射モードのレーザー砲で大量の機雷を容赦なく掃討していく。彼らの主砲の射程は小型艦や中型艦のそれよりも遥かに長く、出力を絞った速射モードで撃っても十分に機雷を破壊することが出来る。

つまり、宙賊どもは基地への攻撃艦隊がワープアウトするであろう場所に事前に大量の航宙機雷を散布していたわけだが、セレナ中佐に見事に見破られてこうして罠を食い破られているわけだ。

当然こんなことをすれば宙賊どもに今から襲うぞ！　と大声でがなり立てているようなものだが、奴らの逃げ道はとっくに友軍が星系封鎖によって塞いでいる。

「急造の機雷なんてこんなもんだよな。弾頭が通常弾頭なのか反応弾頭なのかまではわからんけど、数が多いならスキャンして怪しいものは全部ぶっ壊せば良いじゃないというこのパワープレイ」

「このやり口は帝国航宙軍ならではって感じよねぇ」

「漏れとか無いんですかね？」

「あったとしても前に出てるのが戦艦とか重巡洋艦だからなぁ。急造の機雷に対艦魚雷みたいなシールド中和装置がついているとも思えないし、万が一触雷しても大したダメージにはならんと思う。反応弾頭だとしてもシールドで受けるならクリシュナのシールドでもギリギリ一発くらいは受けられるしな」

戦艦や重巡洋艦のシールド容量はクリシュナよりも遥かに高い。ギリギリ大型艦に分類されるかどうかというブラックロータスでもシールドの総容量はクリシュナの三倍を超える。正規軍の戦艦や重巡洋艦はそれすらも遥かに超える容量のシールドを装備しているのだ。俺の使っている対艦魚雷や散弾砲のようにシールドを無効化、或いは貫通して打撃を与える武器でもないとダメージを与えるのは非常に難しい。

「これ、今回も私達の出番は無しでしょうか？」
「どうかな」

結局のところ、戦艦や重巡洋艦といった特大型艦や大型艦ってのは数が揃うと凶悪に強いんだよな。足も遅いし小回りも利かないからまともに相手をせずに逃げるなり小惑星帯に引き籠るなりしてしまえばそうそう脅威にはならないんだが、拠点とかの固定目標に侵攻するとなるとそれはもう極悪に強い。小型艦や中型艦とは射程と火力が違いすぎる。

そもそもがアウトレンジから回避の難しい大口径レーザー砲をバンバン撃ち込む。相手は死ぬ。という設計思想だからな。え？　やってることが海で大砲撃ちまくってた頃と変わらない？　そんなもんだよ。結局のところ、どれだけ遠くから正確に敵を破壊するかって話だし。

航宙戦でミサイルの類が廃れている理由は弾速の遅さと射程の短さ、それにシールド装置を積めないからレーザー砲による迎撃に極端に弱いっていう三つの点がネックになっているからなんだよな。

射程でも弾速でも動標的に対する命中率もミサイル系の武装はレーザー砲には勝てない。単発の威力は高いし、シーカーミサイルみたいに撃ちっぱなしで誘導してくれる能力があるから小型艦同士の戦い――それも乱戦みたいな状況だと使い勝手は悪くないんだけどな。少なくともこういう遠距離からの撃ち合いじゃどうにも使い物にならんのだよな。

ＳＯＬには超光速ドライブを積んだ超光速ミサイルなんてのも存在したけど、あれはイベントでＮＰＣが使う戦略・戦術兵器みたいな立ち位置だったからなぁ。この世界にもあるんだろうか？　サプレッションシップに反応弾頭を積んだような兵器だったから、無いこともないんじゃないかと俺は睨んでるんだが。

「宙賊側がセレナ中佐の用意した大型艦攻勢に対抗できるだけの飽和攻撃か何かを仕掛けて来れば出番はあるかもしれんが……」

と言いつつ、実は左舷方向に見えている小惑星帯がさっきから気になって仕方がないんだよな。あそこなら伏兵を隠しておくことは出来なくもない。これは出番が来るかもしれんな。

「あれ？　前衛の副砲が左舷方向に向いてますね」
「おっと、これは早速か？」
「機関停止して隠れていたのかしら。この距離だと魚雷抱えて突撃してくる奴も居そうね」

まだクリシュナのセンサーで敵反応は捉えていないが、前衛を担っている戦艦と重巡洋艦の動きからするとあっちは何か掴んでそうだな。

「防空戦闘になりそうだな。同士討ちに気をつけよう」
「はいっ！」
「アイアイサー」

ミミとエルマの返事と同時に前衛から敵発見の報が入り、迎撃戦闘を開始するよう命令が下された。
防衛戦はあまり得意じゃないが、まぁ頑張るとしようかね。

#279　奇襲に次ぐ奇襲（前書き）

短めだけど許して―（∵3」∠）―（所用があって出掛けなばならないのです

#279　奇襲に次ぐ奇襲

『ヒィーーーハァーーーッ！』
『ぶっこめぇぇぇぇっ！』

何かヤバい薬でもキメてるのか、宙賊どもが奇声を上げながら突っ込んでくる。小惑星帯から雲霞の如く――とまでは流石に言わないが、かなりの数の宙賊艦が飛び出してきた。

「センサーに引っかからなかったってことは、パワーを完全に落として待ち伏せしていたんでしょうか？」
「じゃない？　なんかキメてそうな奇声を発してる割には冷静よね」
「ギリギリ理性を失わないレベルに興奮させて、恐怖を忘れさせてんのかね？　えげつないなぁ」

そうやって使い捨てられる宙賊の命、流石に安すぎないか？　宙賊側にも色々と事情はあるんだろうが、こんな突撃なんてのは自殺も同然だ。ここで鉄砲玉になってる奴らは宙賊団の中でどういう立場の連中なんだろうか。

『コマンダーより各艦へ。セクター3方面から接近中の敵艦に対処せよ。小型、中型艦は大型艦の射線に入らないよう注意せよ』

セレナ中佐の声が言い終わるかどうかというタイミングでレスタリアスの副砲が火を噴き――実際には砲火ではなく破壊光線の類だが――小惑星帯から湧き出してきた宙賊艦を迎撃し始める。他の大型艦もそれに続いて迎撃を始めた。

「何度見ても凄いですよね、これ」
「これにまともに突っ込むのは御免被るな」

大型艦の副砲というのは基本的に軍用中型艦の主砲と同じものだ。つまり、何発か直撃すればクリシュナでさえシールドが飽和しかねない威力を持っている代物であり、それが防御の貧弱な宙賊感に振るわれるとどうなるか？　というのは想像に難くない。

「んー、やっぱり完全な奇襲になってないと厳しいか」

宙賊達はチャフやフレアを使って大型艦の攻撃を撹乱しようとしているようだが、焼け石に水だな。確かにチャフやフレアを使えば各種センサーを使った自動照準をある程度撹乱することはできるが、それなら手動で直接照準すればいい。チャフやフレアは便利ではあるが決して万能ではないのだ。

「そうね。ミミ、大型艦が応戦しているのと逆方向にアクティブセンサーを使って。レンジ最大でね」
「へ？　わ、わかりました……あれ？」
「やっぱり何か近づいてきてるか。戦闘用意、あと観測データと警告をレスタリアスに送れ」
「あ、アイアイサー！」

よくある手だ。右手を大きく拳を振りかぶって相手の注意を惹いて、左手の拳や武器、もしくは蹴りで致命打を与える。今回の場合は機雷原と小惑星帯から押し寄せてくる宙賊艦の両方を囮にして忍び寄ってきたわけだな。
ミミがレスタリアスに通信を入れているのを意識の外で聞きながら、不審な反応があった方向にクリシュナを向けてアクティブセンサーをバンバン照射してやる。

「いるな」
「いるわね」

極端に温度の低い物体が艦隊へと接近してきている。恐らくは加速後に緊急冷却装置を作動させて機体温度を極端に下げた後、パワーを完全に落として慣性で接近してきているんだろう。前に俺がベレベレム連邦軍に使ったのと同じ手だ。サーマルステルスだな。

「火器管制システムの調整は任せるぞ」
「任されたわ」

クリシュナが積んでいるセンサーの中には当然サーマルセンサーも存在する。火器管制システムの設定にちょっと細工をしてやればサーマルステルス中の機体をロックオンすることも不可能ではない。

「設定完了、目標ロック。数は十二隻。敵味方識別（ＩＦＦ）反応なし」
「ＯＫ、なら敵だな」

まだ相手はパワーを落として接近中だ。シールドは勿論展開していないだろうし、耳も目も殆ど塞がったような状態である。恐らくこちらの接近はおろか、ロックオンされていることにすら気づいていまい。

「ヒロ様、セレナ中佐からは自由に迎撃してくださいとのことです」
「了解。仕掛けるぞ」

そう言うと同時に操縦桿のトリガーを引き絞り、四門の重レーザー砲を発射する。シールドを展開していない小型艦がこの斉射をま

ともに浴びれば――。

「まず一隻」

四門の斉射を受けた所属不明の不審船が呆気なく爆発四散する。残り十一隻。

「所属不明艦、ジェネレーター起動しました」

「シールド展開前にできるだけ食うぞ」

ジェネレーターを起動してすぐにシールドを起動しても、実際にシールドが完全に展開されるまではタイムラグがある。完全に展開しきる前に叩き落とす。

「普通の宙賊艦より固いわね。動きも良い」

「レッドフラッグの実行部隊かもな」

宙賊艦というのは基本的に民間船を無理矢理戦闘艦に改造した粗悪なものが多いが、赤い旗宙賊団（レッドフラッグ）のような大規模宙賊だんの中核戦力ともなると流石に話が変わってくる。どこから手に入れるのか、型落ちとは言え正規軍が使うような船に乗っていることもあるし、撃破した傭兵の船を鹵獲、修理、改造して使っていることもあったりする。

なんて話しているうちにもう一隻。慌てて回避機動を取ろうとしたようだが、あえなく散弾砲にずたずたにされて爆発四散した。

「こいつらの船、見覚えがないな」

「帝国系のシップメーカーの船じゃないわね。連邦製かしら」

「ティーナさん達ならわかるかもしれませんね」

「記録しておいてくれ」

所属不明艦は見覚えのない流線型のフォルムが目立つ艦で、俺もＳＯＬで見かけたことのないタイプの船だった。全機に赤い塗装が施されている。赤いのはなんとなく強そうとか早そうってイメージがあるが、こいつらはどうかね？

一斉射、耐える。二斉射、カス当たりだがシールド消失。はい、散弾砲で詰みと。

「やっぱこういう時は先手必勝だな」

何が飛び出してくるかわからない奴を相手にする時に様子見は悪手だな。ガンガン攻撃してこっちのペースで戦闘を進めたほうが良い。わからん殺しされる前にとっとと叩き落とすに限る。

「大型艦を落とす算段がついてる連中よ。気をつけて」

「わかってる」

まぁ、見た感じ小型艦だ。小型艦が戦艦や重巡洋艦などの特大型、大型艦にダメージを与えられる方法なんてのは限られている。そして、そういった手段の殆どは対小型艦相手には大変に使いづらい。俺だって対艦反応魚雷を小型艦相手のドッグファイトでぶち当てろとか言われると難しい。

できないとは言わないが。

「味方の増援が来る前に片付けるぞ」

折角の獲物だ。どうせなら全部頂いてしまうとしよう。

#２８０　事態がなんだかどんどん大きくなっていく（前書き）

暑いし肩こりは酷いしで日中やる気が全く出ねぇ―（：３」∠）―

#280　事態がなんだかどんどん大きくなっていく

折角の獲物だと勢い込んで狩り始めたのは良いんだが、四隻目を食ったところで敵の動きが変わった。

「こいつら、逃げる気だな？」
「これは逃げられるわね」

残り八隻のうち三隻がこちらに向かい、五隻が戦場から離れる方向へと舵を切っている。この戦場から逃れたところで他の星系への道は閉ざされているが、星系封鎖も永遠に続くものではない。人が滅多に来ない場所に潜伏して星系封鎖が解けるまでやり過ごせば逃げ出す目も十分にあるだろう。

「どうするんですか？」
「残念ながらどうしようもない。向かってくる連中を無視すれば逃げていこうとする連中のうち何隻かを仕留められるかもしれんが、ケツに対艦反応魚雷を突っ込まれたら困るからな」

流石のクリシュナもシールドなしで反応弾頭の爆発に巻き込まれたら無事では済まない。

「それは困りますね」
「これは増援も……間に合わないわね」

ミミとエルマの会話を聞きながら向かってくる三隻の宙賊艦のうち、一隻に狙いを定めて突っ込む――フリをして急速回避。

「わぁっ！？」
「あっっぶな……！」
正面の一隻を含めて三方向から飛来した対艦魚雷らしき発射体の間をすり抜ける。うん、こいつらなかなかに練度が高いな。連携が上手い。集団戦を前提とした動きに見えるし、こりゃ軍隊式の戦い方か。
「もしかしたらレッドフラッグの実行部隊というか戦闘部隊には帝国軍関係者がいるのかもな」
「えぇっ？　それって……」
「退役軍人か脱走兵かもしれないけどな」
ここらへんにセレナ中佐が忘れろといっていた例の件が絡んでくるのかね。まぁどっちでも良い。目の前の敵を叩き落とすのが先決だ。
「あらよっと」
回避機動中に航行アシスト機能を切り、回避方向に滑るように移動しながら機体を捻るように反転。追撃をかけようとしていた宙賊艦に散弾砲を叩き込み、即座に航行アシスト機能をオンにしてアフターバーナーに点火。今まで動いていたのとは真逆の方向に跳ねるように艦を動かす。
「うぅっ！」
「くっ！」
急激にかかるGにミミとエルマが呻くが、相手が連携して対艦魚雷を叩き込もうとしてくるのであれば配慮している余裕はない。散

弾砲を叩き込まれた宙賊艦は行動不能になったようだ。コックピットに当たったかな？
瞬く間に一名の仲間を失った残りの二隻に動揺が覗えるが、ここで攻めの手を緩めるような俺ではない。折角至近距離のドッグファイトになっているので、遠慮なく散弾砲を撃ち込んでいく。
この距離で発射される散弾砲の威力は大変にえげつない。シールドを貫通して装甲と船体を容赦なく破壊していく。少し離れるとシールド貫通特性を失い、シールドに簡単に阻まれてしまう残念武器になってしまうんだがな。至近距離以外ではシーカーミサイルの迎撃くらいにしか使えない。まぁシールドがない宇宙怪獣には十分効くけど。

「二つ、三つと。やっぱ残りにゃ逃げられたか」

囮の三隻を撃破したところで五隻の宙賊艦は轟音と共に逃げ去っていた。超光速ドライブを起動したか。航跡を追跡する方法はあるが、それは今俺がすべき事ではない。

「ミミ、超光速ドライブの航跡をマークしておいてくれ。セレナ中佐に後で報告する。彼女が必要と考えれば追手を差し向けるだろう」
「アイアイサー！」

超光速ドライブの航跡は追跡することができる。ＳＯＬではその航跡――ＦＴＬリークをスキャンすることが出来、スキャンを行うことでその船の航路をかなりの広範囲で追跡することが可能だった。同じ技術はこの世界にも変わらず存在する。

「戦況は？」
「宙賊の航宙戦力はほぼ掃討されたみたいね」
「あの突っ込んできてた連中か。ほぼ艦砲で仕留められただろ？」

「そうみたいですね。あ、レスタリアスから通信です」
「繋いでくれ」

俺がそう言うとミミが頷き、すぐにクリシュナのメインスクリーン上にセレナ中佐の姿が映し出された。すぐ隣にはロビットソン大尉の姿も見える。

『奇襲を迎撃してくれたようですね』
「給料分は働かないとな。一隻だけだが、派手に爆発しないで残ってるのがあるぞ」
『こちらで引き取らせてもらっても？』
「それなりのお代を頂けるのであればご随意に」

そう言って親指と人差し指で輪を作ってみせると、セレナ中佐は苦笑いを浮かべた。

『わかりました。後で戦闘データも提出してもらっても？』
「それは契約の範囲内だから勿論」

作戦行動中の戦闘データ・行動ログに関しては帝国航宙軍に提供するという契約に元からなっているので、それに関しては構わない。

「一応言っておくが、こいつら動きが軍隊っぽかったぞ」
『……そうですか。それでは後ほど回収班を向かわせます』
「了解。目標をマークしておく」

通信が切れる。ふむ、動きが軍隊っぽかったと言ったら若干動揺してたか？　やはりレッドフラッグと軍には何か関係があるのかもしれない。

「ヒロ、あまり妙なことに首は突っ込まないほうが良いんじゃない？」
「それはそうなんだがな、見えてると突きたくなる」
あの見覚えのない機体は気になるが、引き渡すのは爆発せずに行動不能になった一隻だけだ。他の五隻に関しては俺達の取り分だから、是非持ち帰ってティーナ達に見せてやるとしよう。

☆★☆

「んー、これは珍しい船やね」
クリシュナが曳航して持ち帰ってきた比較的マシな赤い宙賊艦の残骸を見上げながらティーナがそう言った。珍しいとは言いつつも知ってはいるような雰囲気だな。
「俺も見たことが無いんだが、知ってるのか？」
「これはビルギニア星系連合の方で展開しているシップメーカー製の船ですね。確かルテラカンパニーだったかな」
「ビルギニア星系連合？」
「ベレベレム連邦の同盟国ね。帝国とは国境を接していないし、連邦を挟んで向こう側の宙域を支配している銀河連合国だから、普段あまり接することは無いでしょう」
「連邦の同盟国だから、帝国とは没交渉やしな。全く情報が入ってこないっちゅうわけでもないんやけど」
そう言いながらティーナはタブレット端末を操作し、作業用ボットやドローンに解析を始めさせたようだ。
「残骸、まだあったよな？　ちょっと掻き集めてくれへん？　もし

かしたらパーツを掻き集めて船を復元できるかもしれん」
「へぇ？　そうする価値があるのか？」
「何せ製造元が遠い場所で国交も殆どないからなかなかモノが入ってけぇへんのよ。復元できるくらいにデータを集めればこれはちょっとした功績になるかもしれん」
「なるほど？」
「もしかしたら復元した機体をスペース・ドウェルグ社が高く買ってくれるかも……」
「そりゃ良いな。やってみるか」

著作権――じゃなくて特許権とかどうなってんだ？　とか気になる部分はあるが、まぁそこはスペース・ドウェルグ社ほどの企業であれば何か抜け道なりなんなりあるのだろう。

「しかし、きな臭いわねぇ……」
「ですね……軍が関わってる可能性に、敵国の同盟国から入ってきたと思われる戦闘艦ですか……戦闘艦ですよね？」
「せやね、ちょっと型番とかは忘れたけどれっきとした戦闘艦だったはずやで。普通の宙賊が使ってるような民間船を無理矢理改造したようなのとは全くの別モンや」
ミミの確認にティーナが頷いてみせる。その横でウィスカが微妙そうな表情をしていた。
「あの、軍が関係って……帝国のですか？」
「確証は全く無いけどな。聞き流しとけ」
「そうします……胃が痛くなりそうなので。これ、修復して良いんですよね？」
「特別な何かがない限り、撃破した宙賊からの戦利品は傭兵のものだし、その戦利品をどうしようが傭兵の勝手だ。問題があるようなら向こうから何か言ってくるだろうし、気にすることはない」
「本当に大丈夫かなぁ……」

ウィスカは不安げである。まぁ、セレナ中佐としてもスペース・ドウェルグ社に流して闇から闇へと葬ったほうが安心なんじゃないか？　スペース・ドウェルグ社がこの機体からリバースエンジニアリングした技術を活かすって話になると、パクり元の機体の存在については大っぴらにはできなくなるだろうし。

戦ってみた感じ、結構バランスの良い小型の高速戦闘艦って感じだったからな。スペース・ドウェルグ社も同じ小型の高速戦闘艦を開発しようとしていたようだし、大いに参考になるんじゃないかね。

「武装とか機能とか全体的なスペックとかわかったら教えてくれよ」

「任しとき」

「任せて下さい」

二人が揃ってそう言いながらビシっと親指を上げる。うん、そういうところ姉妹だよね、君達。

「そういや随分早く引き上げて来たけど、もう戦闘の方は終わりなん？」

「俺達の出番はな。今頃宙賊基地の中はレーザーが飛び交う戦場になっているだろうよ」

「あー、制圧戦かぁ。そんなことせんでも宙賊基地なんてふっ飛ばしてしまえばええのに」

「そうもいかない事情があるんじゃないかね、お上にも」

赤い旗宙賊団――レッドフラッグに帝国航宙軍が関与しており、それが敵国であるベレベレム連邦に繋がっているなどということがあったとすればこれは大問題だ。ツーアウトである。もしかしたらまだ何か出てくるかもしれない。そんなことがあれば大変なことになるだろう。

「ま、兵隊さん達は大変だが、俺達はゆっくりさせてもらおう」
「ゆっくりって言ってもいつでも出られるようにしておく必要はあるけどね」

エルマの小言に肩を竦めて応え、クリシュナへと向かう。なにはともあれ撃破した宙賊艦の残骸を引っ張ってこなきゃな。

#281　トレードオフ（前書き）

日中暑くなってきましたね……熱中症などにはお気をつけて―（；3」∠）―

#281　トレードオフ

撃破した宙賊艦の引き上げも終わり、整備士姉妹はなんだか難しい表情であーでもないこうでもないと相談しながら艦の修復作業を開始した。

「ぜんっぜんなんもわからん」
「私もです」
「そりゃそうでしょ」

クリシュナのタラップの上から撃破した宙賊艦の残骸と、その周りを飛び回るドローン、そして忙しなく動くメンテナンスボットとそれを操るティーナとウィスカを眺めているのだが、本当に何をしているのかなんもわからん。

ちなみに今回はまともな白兵戦になったようで、宙賊基地の制圧にはそれなりに時間がかかった。

とはいえそれも今は落ち着いたようで、残敵の掃討に入っているようだ。俺達は宙賊の増援が来た時に備えて緊急発進ができる態勢を整えて待機中ってわけだな。

「なんだか思ったよりものんびりですよね？」
「こんなもんだろう。集団の規模が大きくなればそれだけ色んな調整や準備を整えるのに時間がかかるもんだ。今だって残敵掃討とはいえ海兵部隊がまだ宙賊基地内で戦っているわけだしな。彼らを置いて俺達だけ先行して次の星系の宙賊を叩くわけにもいかないし」
「足並みを揃えないと戦力の逐次投入になっちゃうからね。百の戦力をちゃんと百ぶつけるのと、一を百回とか五を二十回ぶつけるのとでは結果が全然違ってくるでしょ？」

「それは確かに。百人がいっぺんに襲いかかってきたらどうしようもないでしょうけど、一対一が百回ならヒロ様なら余裕でなんとかしちゃいそうですもんね。ヒロ様なら百人がいっぺんに襲いかかってきてもなんとかなるかもしれませんけど」
「流石に百人にいっぺんに襲いかかられたら無理じゃねぇかなぁ……？」

もしかしたら意外となんとかなるかもしれないが、試したいとは思わないな。そもそも、俺は白兵戦はそんなにしたくないんだよ。殺傷出力のレーザーなんて食らったら痛いじゃ済まないし。
一応俺の着ている傭兵服やアンダーウェアは対レーザー防御性能のある特殊繊維らしいが、どの程度の効果があるかはわからんからな。実際に撃たれて確かめるのも嫌だし。

「まぁとにかくそういうわけでな。規模が大きくなれば大きくなるほど身軽さってのは失われるもんだ。集団であることで得られるアドバンテージってのもあるけどな。その辺はトレードオフだ」
「そうですよね。頭数が多ければ多いほど沢山の戦利品を運べますし、いざという時のカバーも効きますし」
「そうね。例えば今の私達だとクリシュナが落ちたら殆ど詰みね。ブラックロータースも優秀な艦だけど、やっぱり小回りは効かないから」
「それはそうだな。そろそろエルマ用に小型艦でも用意するか？」

そう言うと、エルマは驚いたような表情をこちらに向けた。いや、実際に驚いているんだろう。

「え、でも、それは……」
「俺が船のオーナー。エルマが雇われ船長。船のオーナーで俺である以上、取り分は俺の方が有利になるが、今よりもっと稼げるよう

になるぞ」
「えっと……」
「自分の船を手に入れたら俺から離れるか？　俺は行って欲しくないし、そう言う権利もあるんじゃないかと思っているんだが」
　エルマとはこっちの世界に来て以来ずっと世話になってるし、逆に色々とお世話もしてきた。つまり、支え合ってきた。俺は少なくともそう思っている。いや、俺の方が寄っかかり気味かな？　ついつい甘えてしまうんだよな、エルマには。
「も、勿論今更どこにも行くつもりなんて無いけど……」
「なら考えておいてくれ。エルマになら俺の背中を任せられる」
「ええ、わかったわ」
　そう言ってエルマは笑みを浮かべた。本当に嬉しそうに。そして視線を感じたのでミミの方を見てみると、ミミもなんだか期待の眼差しを向けてきている。
「ミミもサブパイロットにステップアップだ。できるか？」
「がんばります！」
　ふんす！　と鼻息を荒くしてミミが胸の前で拳を握って見せる。ミミもオペレーターとしての経験はもう十分だからな。そろそろステップアップの時期だ。ちなみに、俺もエルマもオペレーターとしての働きは勿論できる。というか、ＳＯＬだと艦の操作は一人で全部やってたからな。センサー系やサブシステムの掌握も全部。ＮＰＣを雇ってある程度オートにすることもできたけど、俺は全部手動でやっていた。その方が細やかな操作ができたからな。
「それじゃあ今後はそういう方針で行こう。機体の選定も進めなき

ゃな」

クリシュナの他にもう一隻、逃げようとする連中を足止めできる船がいればもう少し狩れたかもしれない。やはり機動戦力がクリシュナ一隻だけではどうしても取り漏らしが出る。これまでにも追撃が間に合わなくて獲物に逃げられたことはあったしな。

「私はスワンを」

「それは却下だ。お前懲りてないのかよ……」

「ぐぬぬ……」

かつてエルマが乗っていた機体――ギャラクティックスワンはマシンスペックが非常に高いものの、あんまり調子に乗ってブン回すと暴走の末に爆発四散するというクソみたいな隠し機能がある機体だ。明らかにリコール対象の欠陥機なのだが、何故かこの世界でも普通に流通して……いや、殆ど見た覚えがねぇな？　考えてみればアレってやたらと高い機体だし、もしかしたらこの世界では殆ど流通していないのかもしれない。エルマは一体どんなルートでスワンを手に入れたのだろうか。

「あくまでも船のオーナーは俺だからな。どんな機体を導入するかは俺が決めるぞ」

「仕方ないわね。オーナー様に従うわよ。でも、良いの？　目標から遠ざかるわよ？」

「良いんだ。俺もミミも上級市民権を得たし、エルマだってそうだろ？　まぁ姉妹の分は何か考えなきゃならんが、頼る伝手は複数あるしな」

「まぁ、それはそうね」

ダレインワルド伯爵家に頼ることもできるし、あまり頼りたくは

ないがセレナ中佐の伝手もある。なんならミミ経由で皇帝陛下に頼るなんて方法も無くはない。禁じ手に近いが。
　とはいえ、今のペースで稼いでいればエルマが乗る船を用意するだけの資金を稼ぎ直すのにもそんなに時間はかからない。クリシュナとブラックロータスの他にもう一隻運用できるようになれば、できることの幅も広がる――つまり受けられる依頼の幅も広がるしな。
「とにかくそういうことで、今の仕事が終わったらエルマの機体も見繕うとしよう。どうせ軽量型パワーアーマーを入手するためにハイテク星系に行くつもりなんだから、丁度良いだろ」
「そうですね。ゲートウェイが使える今、シップメーカーの本拠地まで赴くのもそんなに手間ではないですし」
　最先端技術を開発しているハイテク星系に行けば、最先端技術に関する情報も入手しやすい。つまり、最新鋭の船に関する情報も集めやすいってわけだ。シップメーカーのディーラーもあるだろうしな。
「今回の仕事を終えて目的地に向かうのが楽しみになってきました」
「そのためにも今の仕事をまずは終わらせないとね」
「そうだな。まぁ、このペースでもう一つか二つ基地を潰せばお開きだろう。気合を入れ直していくぞ」
「はいっ！」
「ええ」
　二人ともやる気に満ちた表情だ。うん、これで士気も保てるってもんだな。俺の士気？　俺の士気はほら、皆がいてくれればそれだけで元気百倍だから。冗談でもなんでもなくな。
　ミミにエルマ、メイ、それにティーナとウィスカ。こんな美少女、美女達に囲まれて奮い立たない男なんてそういないと思う。男なん

て単純なもんだぜ、ＨＡＨＡＨＡ！
彼女達に失望されないように頑張らないとな。

#282　現実はドラマティックにはなかなかいかない（前書き）

来てしまったのです……そう、原稿の季節が――（∵3」∠）―

#282　現実はドラマティックにはなかなかいかない

その後、二つの星系を掃討したがこちらは空振りだった。宙賊基地はあったが、完全にもぬけの殻で抵抗らしい抵抗も無かったのである。

無論、星系封鎖は行なっていた。どんどん宙賊の反応が早くなるだろうと考えていたセレナ中佐は本隊到着よりもかなり早い段階で該当星系の星系軍だけでなく、帝国航宙軍の手も借りて早々に星系封鎖を行なっていたのだ。しかし、星系封鎖の網にかかることなく宙賊――赤い旗宙賊団（レッドフラッグ）の連中は忽然と姿を消していた。もぬけの殻となっていた宙賊基地からも行方に関する有用な情報は見つからなかった。データストレージ関係の機材は念入りにデータ消去後、物理的に破壊されていたのだ。

「なんだか拍子抜けですねー。もっとこう、決戦みたいなのが起こるんじゃないかと思っていたんですけど」

ブラックロータスの食堂でミミがぐんにゃりとテーブルに突っ伏したまま呟く。サブパイロットへのステップアップを前に肩透かしを食らってしまい、感情のやり場がないらしい。

「ないない。まぁ肩透かしだなとは俺も思うけど、妥当な結末ではある」

そう言って俺は若干ぬるくなりつつあったお茶を飲み干した。

そもそも真正面から戦うなんて選択肢は奴らには無いのだ。船や装備の質も搭乗者の練度も違い過ぎる。所詮は碌に武装も積んでいない民間船を襲うことを生業としている連中である。ガッチガチの

軍隊相手と戦ったら自分達が負けるなんてことはちゃんとわかっている。

「レッドフラッグ、どこに逃げたんやろなぁ？」
「星系封鎖に引っかからなかったんだよね？」

作業用ジャンプスーツを着たままの整備士姉妹も休憩に来ている。まぁ、休憩中でも整備ボットとドローン達は働いているようで、休憩しながらも二人はチラチラとタブレット端末をチェックしているが。

「深宇宙に逃げたんでしょうね」
「深宇宙ですかー。ということは、超光速ドライブで時間をかけて近くの恒星系まで逃げるんでしょうかね？」
「かもね。或いはほとぼりが冷めるまで潜伏するつもりかも。どっちにしろ暫くは鳴りを潜めることになるんじゃないかしら」

深宇宙――と一言に言ってもなかなかに曖昧な言葉だが、この場合はハイパーレーンの存在しない恒星系外の宇宙空間という意味だ。これまでの研究でハイパーレーン突入口が存在するのは恒星から一定の距離内であるということがわかっており、その範囲から外れた宇宙空間をＳＯＬでは深宇宙と呼んでいた。その慣習はこの世界においても同様である。

「レッドフラッグの壊滅を目指していたセレナ中佐としては不完全燃焼な結果でしょうが、この周辺の恒星系から大規模宙賊団を撤退させたという事実は十分な実績になるでしょう。今まで大規模宙賊団にここまでの損害を与えた前例はありませんから」

俺の座る席の斜め後ろで控えていたメイが静かな声でそう言いな

がら、空になった俺のカップに新しいお茶を注いでくれる。
「セレナ中佐と帝国航宙軍、そして星系軍の皆さんはこれで無事実績を軍功を得て、俺達は報酬を受け取って依頼完了。みんな幸せになってハッピーエンドってわけだ」
「ハッピーエンドなぁ……アンハッピーなのは宙賊――つまり悪党だけってことか」

そう言いながらティーナがなんとも言えない顔をしている。まぁ、みんなハッピーといった裏で宙賊達は多数の被害者を出して住処も追われているわけだからな。確かにそういう意味では関わった全員がハッピーってわけじゃないだろう。

「気に入らない？」
「なんとも言えんわ。うちかてどっちかっちゅうと悪党側やったわけやしな。悪党は悪党なりに色々と事情も抱えとる。好きで悪党になったわけやない連中もぎょうさん見てきたしな」
「お姉ちゃん……」
「でもまぁ、それとこれとは別やしな。宙賊殺すべし慈悲はない、やったっけ？」
「だな。まぁ世のため人のためになるって考えれば道義的に正しいのはこっちだし。宙賊を問答無用で殺すのが絶対正義かって言うと……うーん、絶対正義な気がしてならないんだよなぁ」
「そこで梯子外すんかい」
「だって宙賊だし……」
「だって宙賊だしねぇ……」

ティーナがずっこけて突っ込んでくるが、俺とエルマからすればこんなもんである。宙賊がどれだけ卑劣で残酷な連中なのかって話をし始めるとキリがないしな。生まれから何から宙賊で、宙賊とし

ての生活しか知らずに宙賊行為を働いていた。彼にはその道しかなかったんだ。とか言われてもな。
『左様か。来世は宙賊以外として生まれてくるが良い』
って言いながらぶっ殺す他ないし。いやその生活しか知らんかったからって無実の民間船襲って、積み荷奪って、拐った乗員乗客を好き勝手に加工して顧客に売り払う生活してちゃアカンでしょ、としか。少なくともグラッカン帝国内でそれは一発デッドオアアライブな重罪なわけだし。

「うん。それはそう。それはそうなんやけどね？」
「それくらい割り切らないと傭兵業なんてやっていけないさ。だからこそ傭兵は宙賊に最大限の警戒を払っているわけだし」
「そうなんですか？」

そう言ってウィスカが首を傾げる。

「そうですよ。だからこそヒロ様やエルマさんですら基本的に独り歩きはしませんし、船を降りてコロニーに足を踏み入れる時にはメイさんを護衛について貰っています。まず最初に傭兵ギルドや軍の詰め所に行くのも、コロニーの治安情報を仕入れるためですし」
「船に乗っている時よりも船を降りた時のほうが危険なのよ、傭兵業ってのは。宙賊に恨みを買ってるからね。油断してると宙賊と繋がってるコロニーギャングとかマフィアに路地裏に連れ込まれてコレよ」

そう言ってエルマが人差し指で自分の首を掻き切るような仕草をしてみせる。

「え、こわ……そう言えば外に出る時は大体兄さんか姐さんかメイが着いてきてくれてたな？」

「同じ船に乗ってる貴方達もターゲットになりかねないからね。そこらへんはかなり気を遣ってるのよ、ヒロは。セキュリティ強化のためにメイを購入したり、戦闘ボットを購入したりね」
「そう言えば、最近は外に出る時には護衛兼荷物持ちって言って戦闘ボットを連れて行くように私達に言っていましたよね」
「……めっちゃ過保護やん？」

姉妹の視線が俺に集中する。過保護ですが何か？　だって君達が妙な連中に捕まって酷い目に遭わされたりしたら嫌じゃないか。だから俺はできるだけの手を打ってるよ。当たり前だろう？

「なんや兄さん。うちらになかなか手ぇ出さんかったのにそんなにしてくれとったん？」
「そうだよ」
「お兄さん……」

ティーナはなんだかニヤついた表情を、ウィスカは熱っぽい表情を向けてくる。なんだろうこの、こそばゆい気分は。

「はい、やめ。この話終わり。今後の方針について話し合おうじゃないか」
「露骨に話題を逸したわね」
「逸しましたね」
「アーアーキコエナーイ。とにかく、依頼が完了次第報酬を受け取って一旦リーフィル星系に戻る。んで、こいつを返しに行く」

そう言って俺は座っているスツールに立て掛けてあった御神木の種を持ち上げてみせた。結晶化した両端が抗議するようにピカピカと光るが、知ったことではない。

「エルフの信仰対象を持ち去るわけにもいかないからな。これがどんな状態なのかはわからんが、とりあえずは返す。んでほとぼりが冷めるまでは近づかない」
「それが妥当かもね。ミンファ氏族の族長とかかなりヒロに入れ込んでたし」
「まぁ、その前にローゼ氏族領には顔を出すけどな。折角だからエルマの実家のルーツってのを拝んでいこう」
「それは楽しみですね」

なんだかんだでグラード氏族とミンファ氏族のおもてなしは堪能したが、ローゼ氏族については殆ど接触できなかったからな。案内役のリリウムくらいとしかまともに喋ってないし。

「そしてその後は適当なハイテク星系を見繕って軽量型パワーアーマーとエルマの乗る船を探す。今後の方針について何か他に意見があれば聞くぞ」
「んー、行く場所が決まってないならうちの会社の支社があるとこにして欲しいなぁ」
「そうだね。修理した船を引き渡したり色々手続きをしたりとやることがいっぱいあるし……それで良いんですよね？」
「そういう方向でいい。性能が抜群に良いってんならエルマの乗機にするのもアリなんだが、そこまでじゃ無さそうだしな」

宙賊が使う船としてはなかなかに高性能な船のように思えたが、第一線で戦う傭兵の船としては少々物足りない。それに遠方の見知らぬメーカー製の船だから、グラッカン帝国内でカスタマイズするのも限界があるだろうしな。

「それじゃあミミはティーナ達とも相談して行き先を選定しておいてくれ」

「わかりましたっ！」
「んじゃそういうことで解散。俺らは万が一の緊急発進に備えて待機だ。メイは引き続きブラックロータスの管理と運営を頼む」
「アイアイサー」
「承知致しました」

これでとりあえず宙賊騒ぎには一区切り着くはずだ。そうしたら悠々自適な自由業の再開だな。

#282　現実はドラマティックにはなかなかいかない（後書き）

というわけで原稿作業のため、暫く更新をお休みします。
来月上旬くらいに再開できたら良いな！　―（∵3」∠）―

#283　祭りの後（前書き）

更新再開！（，ω，）

#283　祭りの後

大規模宙賊団、赤い旗に大打撃を与え、深宇宙へと撤退させたことによってセレナ中佐が主導した赤い旗撃滅作戦はとりあえず終了することになった。

赤い旗宙賊団に大打撃を与えはしたものの首領を始めとした幹部連中は取り逃しており、また後半は赤い旗の連中がケツをまくって逃げ出してしまったために若干尻切れトンボ感のある結末となってしまった。しかし広範囲に影響力を及ぼしていた大規模宙賊団を大した被害もなく撃退したこと自体は快挙である。

『私としては不満の残る内容だったのですけどね』

と、セレナ中佐は別れ際にそう言っていたが、軍部や世論の評価はそう悪いものではないらしく、このまま行けば昇進もあるかもしれないという。もしかしたら次に会うときにはセレナ・ホールズ中佐ではなく大佐になっているかもしれないな。

「まぁ、表向きにはこんな感じだよな」

ブラックロータスの食堂のテーブルに頬杖を突きながらタブレット端末に表示されている記事を眺め、呟く。

「あはは……」

「あんま滅多なことを外に漏らしたりすんじゃないわよ？」

「当たり前だろ。そんな恐ろしいこと誰がするか」

記事に書かれていることはごく表面的な事柄と、作戦を主導した

若き指揮官に対する賛辞のようなものばかりだ。まぁ、セレナ中佐はわかりやすい英雄、或いはアイドルとして上手い具合に帝国航宙軍に祭り上げられたわけだな。実際彼女には能力があるし、実家も太い。ただのお飾りになることもあるまいし、帝国航宙軍の方策は悪くないんじゃないかな。何より彼女は不正や腐敗を嫌う性質だし、今後の帝国航宙軍に欠かせない人材になっていくんじゃないだろうか。

「実際のところどうなのかね。今までの俺達の経験からすると、帝国航宙軍も若干きな臭い所あるよな？」

「そりゃ巨大な組織なんだから一枚岩とは行かないでしょ。人間三人集まれば派閥ができるって言うし」

「帝国臣民の私としては複雑な気分ですね」

生粋の貴族の令嬢で、なおかつ傭兵としての人生経験も豊富なエルマは当然という顔をしているが、少し前まで一般的かつ模範的な帝国臣民であったミミとしては帝国航宙軍の内部事情を垣間見てかなり複雑な気持ちを抱いてしまっているようだ。帝国臣民にとって国土と民の命を他国からの侵略や宙賊、宇宙怪獣から守ってくれる帝国航宙軍は正義のヒーローみたいな存在である。

そんな帝国航宙軍の内部に宙賊と繋がっている連中や利敵行為をしている連中が存在するようである、と推測できるモノを俺達は色々と見てきているからな。

クリスの親父さんとお袋さんを謀殺してダレインワルド家当主の座を奪おうとした――なんだっけ？　名前は忘れたけどクリスの叔父さんも帝国航宙軍の機密兵器をいくつか入手していたし、その後にも貴族関連の事件には大概帝国航宙軍の腐敗の痕跡が臭う。今回の撃滅作戦だって後半は異様に赤い旗の連中の動きが早かったから、もしかしたら軍内部から情報をリークしてた奴がいたのかもしれん。あの奇襲部隊の練度も軍隊並みだったしな。

「あの奇襲部隊については帝国航宙軍じゃなくてお隣のベレベレム連邦関係かもしれないけどな」
「それはそうね。まぁ、だとしたらベレベレム連邦の工作部隊が帝国領の奥深くまで浸透して破壊活動を行っていたってことになるわけだけど」
「それはそれで大変なことですね……外には漏らせませんね、これ」
「だから口止め料も込みで報酬が上乗せされているんだろうな」

今回の作戦で帝国航宙軍から支払われた報酬はなかなかの金額であった。とは言ってもフルカスタムのブラックロータースがもう一隻買えるような金額では全然ないけれども。それでも今までの貯金も合わせれば小型艦ならフルカスタムで購入して十分に余裕がある。

「例の船の調査結果は教えてくれないんですかね？」
「教えてくれないだろうし、知りたくないな。余計なことを知っても良いことなんて何もないぞ」
「そうよ。変なことに首を突っ込みすぎて軍関係の後ろ暗い仕事をやらされるのなんて嫌だからね、私は」
「君、もしくは君のクルーが捕えられ、あるいは殺されても、当局は一切関知しない。なお、このホロデータは自動的に消滅する、みたいな」
「それは嫌ですね……というかなんだかそのセリフ、どこかで聞き覚えがあるような」
「レトロムービーか何かじゃないの？　ヒロのことだし」

正解です。コロニーに降りるとたまにレトロムービーのホロデータとかがデータチップに入って売ってるんだよな、安値で。小型情報端末やタブレット端末で見られるので、最近はレトロムービー入のデータチップを集めるのが密かな趣味になってきている。たまに

わけのわからんクソムービーもあるが、まぁそれはそれで。
ミミやエルマ達とも結構一緒に見たりしている。ハイパーレーンを移動している間とか結構暇だしな。あとは休憩スペースとか部屋でゆっくりする時とか。別に自由時間だからって暇があれば励むってわけじゃないからね、俺も。一緒にゆっくりと過ごす時間も良いものだよ。

『ご主人様、間もなくリーフィル星系へと突入致します』

ブラックロータスでハイパーレーンを移動している間は流石にやることがなかったのでこうして食堂で駄弁っていたのだが、それもそろそろお開きの時間らしい。俺達がこうして寛いでいる間も艦を制御してくれるメイには本当に頭が上がらないな。リーフィル星系に着いたら時間を作って是非甘やかしてあげようと思う。
甘やかしているつもりで甘やかされていることが多いような気がするが、まぁそこには目を瞑っておこう。ちなみに、整備士姉妹はあーだこーだと話し合いながら例の船を修理中である。複数隻分の残骸を元に一隻の船を組み上げようとしているところだな。今の所上手く行きそうではあるらしい。

「クリシュナで待機するぞ。いつでも緊急発進できるようにな」
「はい。でも、随分と警戒してますね？」

席を立って歩き始める俺の後を着いてきながらミミが首を傾げる。
「念の為の用心よ。今回、レッドフラッグの連中を痛めつけたでしょう？　その際に私達はそこそこに目立ってるからね」

実際、セレナ中佐ほどの扱いではないが俺達の活躍も記事に載っていたりする。御前試合で全戦勝利を収めたプラチナランカーの傭

兵、キャプテン・ヒロも作戦に従事して活躍したとかちょっと書かれた程度だけど。
ただ、俺達は乾坤一擲の奇襲部隊を迎撃して敗走させているからな。逃げ延びた奇襲部隊の生き残りはまず間違いなく赤い旗の上層部に俺達のことを報告しているだろう。報告を受けた上層部は俺達の情報を集めたりもしたかもしれない。

「もしかして、復讐の対象になるってことですか？」

顔を青くしてそう聞いてくるミミに俺は肩を竦めてみせた。

「その可能性は否定できないな。赤い旗宙賊団の全戦力をもってしても帝国航宙軍に勝つことはできないが、プラチナランカーとはいえいち傭兵程度なら袋叩きにして見せしめにすることもできなくはない……と考えている可能性は十分にある」
「話題性も抜群だしね。私達、というかヒロは帝国全土に中継された御前試合で全勝したわけだし」
「そんな俺達を袋叩きにして捕らえて見せしめにすれば赤い旗宙賊団ここにあり、と力を示せるってわけだ」
「た、大変じゃないですか！？　というか、だからここに移動してくるまで厳戒態勢だったんですね！？」
「そういうこと。ま、いつも通り何も変わらないわよ」

エルマはあっけらかんと言っているが、撃破されて機体ごと爆発四散したならともかく、船を拿捕されたり脱出ポッドを捕らえられたりしたら俺を含めてクルーの末路は想像もしたくないような状況になるのは間違いない。だからこそ最大限に警戒するわけだが。

「二人とも、間もなくリーフィル星系に着くからそのつもりでな」
「あーい」

「わかりました」

格納庫で作業をしている整備士姉妹に軽く声をかけてクリシュナに乗り込む。万が一があるとあの二人もタダでは済まないだろうからな、絶対に下手を踏むわけには行かない。

緊張した様子のミミがいつもの手順でセンサー系や通信系チェックをするのを横目に見ながら、エルマと一緒に機体のチェックを行う。機体の整備はティーナとウィスカがしっかりとやってくれているから調子は万全だ。

「……そう言えば、リーフィル星系って一番最初に宙賊を掃討済みですよね？」

「そうだな」

「それじゃあ、襲撃の可能性って殆ど無いんじゃないですか？」

「そうね。でも可能性は０％ではないわ」

「だから警戒するんだ」

クリシュナのコンソールを操作し、ブラックロータスのメインスクリーンの映像をクリシュナのメインスクリーンに投影する。ブラックロータスはまだハイパースペース内を航行中であるため、メインスクリーンには後方へと流れ去る極彩色のトンネル――ハイパーレーン内部の映像が投影された。

「相変わらずの景色だな。メイ、ハイパーレーン脱出次第全周囲警戒、いつでも武装を起動できるようにしておけ。格納庫ハッチの開放と電磁カタパルトによる射出もスタンバイだ」

『アイアイサー』

メイの返事を聞きながら、クリシュナのメインジェネレーターを起動し、即座に出撃できるように備えておく。ハイパーレーン脱出

まで、5、4、3、2、1――。

『ハイパーレーン脱出完了。周囲に敵対的な艦船の反応なし』

「了解。警戒態勢を維持したままリーフィルプライムコロニーに向かってくれ」

『アイアイサー。超光速ドライブ、起動します』

あからさまな安堵の表情を浮かべながら深く息を吐くミミを横目に見ながら、俺も軽く息を吐く。暫くは気が抜けんな、これは。

#283　祭りの後（後書き）

Q. どうして当初の予定より一ヶ月以上も時間がかかったんですか？
A. 予期せぬ原稿のブッキングが起きて精神的に死んでいました―（∵3」∠）―（ユルシテ

Q. 前回の更新を考えるとこっちじゃなくてあっちの更新では？
A. 今気づいた（‘ω’）（手遅れである

#284　ラッキールーター・マリー（前書き）

いつもの。

18時投稿は三日と続かなかったな……！ |（：3」∠）| （ユルシテ

#284　ラッキールーター・マリー

『貴君の寄港を歓迎します、キャプテン・ヒロ』
「そりゃどうも」

港湾管理局からの通信に適当に返答しつつ、クリシュナのコンソールを操作してリーフィルプライムコロニーの港湾区画を観察する。

「見慣れない船が結構泊まってるな」
「？　見慣れない、ですか？」

俺の言動にミミが不思議そうに首を傾げる。
ミミの疑問も尤もなものだ。基本、これといって固定のホームコロニーを定めていない俺達にとって、コロニーの港湾区画に停泊している船というのは殆ど全て一期一会の『見慣れない船』である。セレナ中佐のレスタリアスのように特に行き先を示し合わせても居ないのに頻繁に遭遇するほうが異常なのだ。

「あ、あまり見たことのない機種ってことですか？　確かにそう言われればあまり見覚えのない船ですね」
「傭兵か深宇宙の探査船団かしら？」
「知らん機種が多いからはっきりとは言えないが、探査船団や武装商船団にしてはちょっと戦闘能力が高めに見えるな。どれかと言えば傭兵船団のように思えるが」

俺の目を引くのは多数停泊している船の真ん中辺りに居座っている真っ赤な小型艦である。小型艦にしては大型の部類で、恐らくクリシュナと同等程度だろう。小型艦と名乗るにはギリギリ上限いっ

ぱいくらいのサイズだ。武装は……わからんな。パッと見でわかるのは機体の上部に装備されている大口径砲のようなものだけだ。

「目立つわね、あの機体」

「だな。どことなくクリシュナに似ている気がする」

作風とでも言えば良いのか。機体の上部に装備されている大口径砲のせいで全体的なフォルムはかなり違うが、どこか似た流れを感じさせるのだ。

「どう思う？」

エルマが港湾区画に居並ぶ見慣れない船団に視線を向けたまま聞いてくる。このどう思う？　というのはつまり、あの船団と赤い旗宙賊団――レッドフラッグが何かしらの関係を持っている可能性はあると思うか？　という意味だろう。

「さてな。神経質になり過ぎているだけかもしれんし、なんとも。ただ、警戒はしたほうが良いな。灯台下暗し、なんて言葉もある」

「灯台下暗し、ですか……だとしたら大胆ですね」

「帝国航宙軍に喧嘩を売るような連中だ。肝は据わっているだろうさ」

リーフィル星系は帝国航宙軍が実施した赤い旗撃滅作戦において一番最初に宙賊を一掃した星系だ。そんな星系のメインコロニーに堂々と宙賊が居座っているなんて普通は考えられないが、宙賊なんてのは基本的に思考回路がぶっ飛んでいる連中だからな。何をしてもおかしくはない。

「メイ」

「はい。過去二週間分のリーフィルプライムコロニー、及びリーフィル星系における治安関連の情報を精査しましたが、大きな問題は起こっていないようです。欺瞞工作の痕跡も今のところは発見できていません。掃討作戦後、治安数値は上昇しているようです」
「なるほどね」

不安を煽るような情報はない。何一つ無い。ただ、どうにも嫌な予感が拭えない。

「顔が険しいままね？」
「どうにも嫌な予感がビンビンしてなぁ。特大の面倒ごとの気配を感じる」
「あー……それはダメなやつですね」
「ダメなやつね。いつも以上に気をつけましょう」

苦笑いするミミと溜息を吐くエルマ。俺だって好きで嫌な予感を感じているわけじゃないんですけどね？

☆★☆

ミミには船に残って貰い、リーフィルⅣ――シータへの降下申請を進めてもらうことにした。
今回の降下先はローゼ氏族領の大型空港だ。残念ながらブラックロータスが停泊できるほどのスペースは無いが、クリシュナなら問題なく着陸可能であるという。以前降下した際に利用した総合港湾施設を利用する手もあったのだが、あっちだとミンファ氏族やグラード氏族の連中が押しかけてきかねないからな。今回はローゼ氏族の傘下に在るウィルローズ氏族を訪問するのが目的だから、グラード氏族やミンファ氏族とは距離を置きたい。

「あの子達だけで大丈夫かしら？」
「引きこもっている分にはまず問題ないだろう。シールドも起動してるし、万が一シールドを破って外殻をブリーチングされても戦闘ボットがいる」
「私も常にブラックロータスの状態をモニタリングしておりますので」

今日もブラックロータスのホームセキュリティは完璧である。特に今は赤い旗の連中に付け狙われているかもしれないので、いつもより五割増しくらいで慎重に行動しているからな。傭兵ギルドに顔を出すのに俺とエルマの二人きりでなくメイまで同行している辺りで察して欲しい。

「コロニーの様子は見た目にはあまり変わってないように思えるな」
「そうね」

ブラックロータスから傭兵ギルドへと向かって港湾区画を歩きながら辺りの様子を窺う。今は停泊している船が多いが、見た目の変化はそれくらいで特に港湾区画が活気づいたりはしていないようだ。思った通り、停泊している船団は商品を大量に持ち込んできた商船団の類ではないらしい。

「見た感じ、規律はしっかりしているようね。なんだか軍人みたいだわ」
「エルマ様の仰る通りですね。こちらに視線を向けてくる方は多いですが、騒ぐ方はいらっしゃらないようです」
「軍人みたい、ねぇ。それはそれできな臭い感じがプンプンしてたまらんな」

大型艦を奇襲しようとしていた軍隊式の連携戦術を駆使する連中

が脳裏をよぎる。あれが帝国航宙軍に関係しているにしても、ベレベレム連邦に関係しているにしても、あまり関わり合いにはなりたくない。

「何か通信しているようですね。一瞬で傍受ができませんでしたが、何かしらのサインを送ったようです」

「うへ……ますます嫌な予感がしてきたな。とっとと用事を済ませて戻るか」

俺達がこんな危険な状況でわざわざ姿を晒したのは偵察、というか例の船団の連中がどのように反応するかを確かめるためである。やはりちょっとこのやり方はリスキーだっただろうか？　でも相手がどう反応するかわからないと、こっちとしても対応を決めにくいしなぁ。

「ブラックロータスに閉じこもってるべきだったかね？」

「どうかしらね。少なくとも、あいつらが私達に興味を示したってことがわかっただけでも良かったんじゃない？」

「そう思うことにしておこうか」

そして暫く歩いた後、特に誰かに絡まれることもなく傭兵ギルドの建物に入ることに成功した。大規模な掃討作戦で宙賊が居なくなった影響か、ギルドには閑散とした雰囲気が漂っているようだ。

入り口に姿を現した俺達に気づいたのか、受付で暇そうにしていたエルフの女性職員が目を輝かせる。

「いらっしゃいませ！」

「いらっしゃいませってメシ屋か何かか？」

「傭兵ギルドに入っていらっしゃいませって言われたの初めてかもしれないわね……」

エルマと二人でぼやきながらニコニコ笑顔でエルフの女性職員が俺達を待ち受けている受付へと向かう。ちなみにメイは完全無欠の無表情でしずしずと俺達の後ろをついてきている。特にコメントはないらしい。

「いやぁ、ここ数日全く人が来なかったのでつい」
「大丈夫なの？　この支部」
「半分お役所みたいなもんだし、大丈夫なんじゃね？　というか仕事無いのか？」
「それがさっぱり。四日ほど前に掃討作戦で足止めされていた商船が一斉に出ていってしまったので、商船護衛の依頼すら無いんですよ。宙賊はさっぱりと鳴りを潜めてしまいましたし」

そう言って女性職員が肩を竦める。

「周辺星系も一掃されているから、そりゃ流入もしてこないだろうな」
「もう少しすれば出払った商船がまた一斉に来るでしょうから、そうしたらまた活気づくと思うんですけど」
「なるほど。で、港に泊まってるのはその商船待ちの傭兵団か何か？」
「そうですね。クリムゾン・ランスという名前の傭兵団です。リーダーはゴールドランカーですね」
「ゴールドランカーね。エルマより上じゃん」
「うっさいわね」

ジト目のエルマが俺の脛を蹴ってくる。とてもいたい。まぁ、一匹狼やってたエルマとあれだけの船団を率いて活躍してるリーダーじゃランクの上昇速度が違うのも当たり前か。

まぁ、実績の何％が真っ当な方法で得たものなのかはわかったもんじゃないが。
え？　クリムゾン・ランスを疑っているのかって？　証拠は何も無いけど疑ってるよ。何せ居る場所が都合良すぎるからな。ここに居座っている口実も、ゴールドランカーが率いる傭兵団って肩書きも何もかもが完璧だ。そんな完璧な存在がトラブルに愛されている俺の行く先に偶然居るとか、どう考えても怪しいだろう。俺の思考が完全にパラノイアじみているのは確かだが、今までの経験から考えるとどうしてもなぁ……。

「あ、ちょうど噂のゴールドランカーさんが来ましたよ」

エルフの女性職員の視線を追って振り向くと、そこには屈強な男を左右に従えた迫力のある美女の姿があった。
派手な女だ。マゼンタピンクの髪の毛がとにかく目立つな。服装は肩出しのブラウスにコルセットスカート、腰には二丁のレーザーガン。なんだか周りがＳＦチックな服装なのに、あの女だけ服装が普通というかなんというか……ファンタジー世界の住人みたいだな。腰に下げているものは別として、だが。

「ふぅん……？」

あちらも俺を値踏みするかのような絡みつく視線を俺に向けてくる。まるで蛇か何かに獲物かどうか見定められているような気分だ。

「こんなところで有名人に会えるとはねェ？　アンタ、キャプテン・ヒロだろ？」
「いかにも。俺はアンタのことを知らないけどな」
「ハハッ、アタシもそこそこ名は売れてるつもりなんだけどねェ？　ま、アンタほどじゃあないのは確かさね」

女は一歩踏み出し、自信に満ちた表情で名乗りを上げた。

「アタシはキャプテン・マリー。アンタと同じく宙賊狩りで名を挙げている傭兵さ。『幸運な収奪者（ラッキールーター）』・マリーなんて呼ばれることもあるね」

「そりゃご丁寧にどうも。既にご存知のようだが、キャプテン・ヒロだ。握手は必要ないよな？」

ニヤニヤとした笑みを浮かべながらこちらに視線を向けたままのキャプテン・マリーに視線を返しながら、直感する。

こいつは、俺の敵だ。

#285　戦力分析（前書き）

間に合わなかった！――（∴3」∠）――（いつもの

#285　戦力分析

「おや、握手もさせてくれないのかい？」
「悪いな、これで結構人見知りなんだ」

ニヤニヤとした笑みを浮かべているマリーとの間合いを密かに計りながらどうしたものかと考える。奴らは傭兵ギルドの入り口を押さえる形で立ち塞がっている。あれではどうやっても横を通らないとギルドの外に出られそうもない。

「ちょっと、ヒロ？」

俺の様子が妙なことに気がついたのか、エルマが肘で俺の脇腹を突いて声をかけてくる。しかし俺はマリーから視線を外さずにエルマを手で制し、半歩右にズレてから受付を指し示すように反対側の手を伸ばした。

「俺達は用事を済ませたんでね。わざわざ足を運んだってことはギルドに用があるんだろう？　遠慮せず行ってくれ」
「あら、傭兵にしちゃ紳士的だねェ？　あんたらも見習いなァ」
「はい、姉御」

護衛らしき厳つい男が平坦な声で返事をする。革のような材質の分厚いコートの下にある身体は筋肉でパンパンだ。いや、筋肉は筋肉でも天然物ではなくバイオニクスかサイバネティクスの賜物かもしれないが。見た感じ目なんかもサイバネ化しているようだし、白兵戦能力は高そうだな。見た目の通りマリーの護衛なのだろう。まぁ、うちのメイに勝てるほどのものとは流石に思えないが。

「でももう少し相手をしてくれても良いんじゃないかい？　折角ここで会えたのも何かの縁じゃないかとアタシは思うんだけどねェ？」
「悪いが船でクルーを待たせているんでな。他にも予定があって色々と忙しいんだ」
「ふゥん……？　ま、そこまで言うなら仕方ないさね。また会えることを祈ってるよォ」

そう言ってマリーはニヤニヤとした笑みを引っ込め、口許に薄い笑みを浮かべて俺達の横を通り過ぎ、受付へと向かっていった。マリーが横を通った際になんだかやたらと甘い匂いが鼻につき、思わず眉を顰めてしまう。

「……行くぞ」
「う、うん」

自然とピリピリとした雰囲気が出てしまっていたのか、珍しく気圧された様子のエルマといつも通りのメイを連れて傭兵ギルドを後にする。

「メイ、ブラックロータス周辺の監視を厳にしろ。艦のセンサーも使って怪しい動きをする奴を見逃さないように細心の注意を払ってくれ」
「承知致しました」
「あと、可能な限りあの女のことを探ってくれ。ただし、決して足がつかないようにな」
「はい、お任せください」
「ちょっと、どうしたの？　さっきからなんだか変よ？」

俺とメイの不穏なやり取りに流石に我慢できなくなったのか、エ

ルマが俺のジャケットをクイクイと控えめに引っ張りながら声を上げた。まぁ、そう思うのも仕方がないよな。

「直感だ」
「直感？」
「あの女はヤバい」
「えぇ……？」

直感なんていう不確かなもので俺がああまで取り付く島もない態度を取ったのを理解しろってのは流石に無理筋だよなぁ。

「でもヒロの直感か……ちょっと侮れないのよね、それ」

と思っていたら理解されてしまった。

「とにかく警戒が必要ってのはよくわかったわ。あの女の率いる船団はかなり戦闘向きだし、クリシュナとブラックロータスだけじゃ正面切って戦えるかどうかは怪しいものね」
「馬鹿野郎お前俺は勝つぞ」
「クリシュナは無事でもブラックロータスが集中攻撃を受けて沈められるかもしれないでしょ。それじゃ負けたのと同じじゃない」
「それはそうだな」

クリシュナだけなら最悪追撃を振り切って逃げることも可能だが、足の遅いブラックロータスはそうもいかない。つまり、奴らとの全力戦闘は絶対に避けるべきということだ。

「厄介だな。どう見てもブラックロータスよりもあっちのほうが足が速そうだ」
「小型艦と中型艦で編成されているからね。中型艦も火力と速度を

重視したタイプに見えるし」

ブラックロータスへの帰り道で停泊しているマリーの船団の船を見ながらエルマと言葉を交わす。

改造の末に元からの形を大きく変えている船が多いのか、それとも単に俺の知識にない船なのか、どうにも機種名や性能の判別がつかない船が多い。ただ、停泊している船はどの船もメインスラスターが多かったり大型だったりするので、やはりどれも足は早そうである。この構成を見る限り、マリーの船は機動戦や追撃戦、追跡や強襲などを得意としているのではないだろうか。

「三倍くらいまでの数なら返り討ちにするのも不可能じゃないと思うんだけどな」

「ざっと見た限り中型五隻、小型七隻ってところかしら。傭兵が率いる船団としては最大クラスでしょうね」

小型艦でクリシュナを押さえている間に中型艦五隻の火力で叩かれると、流石のブラックロータスも無事では済まない。シールドも装甲も分厚いブラックロータスだが、その分機動性はあまり高くないからな。敵の攻撃を回避するのは実質的に不可能だ。

「戦力分析はこのくらいにしておこう。とにかく何の策もなしに真正面から事を構えるのは危ないってのは間違いない」

「そうね。別にあの女がこっちに手を出してくるってのが決まっているわけでもないし」

「そう簡単に手を出せるものでもないしな」

「通報で一発アウトだものね」

星系軍が組織されていない最辺境宙域（エッジワールド）ならいざ知らず、このリーフィル星系のようにしっかりと星系軍が組織されている星系で正規

のＩＤを持った船が同じく正規のＩＤを持つ船を襲うのは非常にリスキーである。通報すれば即座に犯罪記録が作られるし、そうなれば襲った側は晴れて宙賊と同じく賞金首の仲間入りだ。
まともなコロニーには入港できなくなるし、入港ができなければ酸素や水、食料の補給が受けられなくなって窒息死するか乾いて死ぬか飢えて死ぬかするしかなくなる。船の整備も受けられなくなるから、そのうち船も故障して動かなくなる。それこそ宙賊の仲間入りをして宙賊として生きる以外の道はなくなるだろう。
つまり、ゴールドランカーとしての地位も名声も何もかも失うことになるわけだ。

「まぁ、それを気にする相手なら警戒する必要も無いんだがな」
「流石に気にするでしょ」
「だと良いなぁ」

通報に関しては抜け道が無いわけでもないからな。要は通報をできなくしてしまえば良いんだから、妨害する方法なんていくらでもある。単純に戦場で強力なジャミングをかけるのでもいいし、もっとスマートにやるなら通信に割り込んで内容を意味のないデータに改竄してしまうって方法もある。発信側でなく受信側――コロニーの通信ネットワークに攻撃を仕掛けて通報を受け取れないように予めダウンさせておくって手もあるしな。
犯罪行為を行えば神の目的なものに見られて自動的に犯罪記録が作成されるというわけではないのだ。人が作ったシステムなのだから、完璧ではない所も多分に存在する。イリーガルな装備だが、ある程度の範囲に強力なジャミングを発生させる小型衛星なんてのもＳＯＬにはあったからな。やりようはいくらでもあるだろう。

「とりあえず出歩くのはヤメだ。リーフィルⅣへの降下申請が降りるまでは引き篭もるぞ」

「アイアイサー。何事も無ければ良いけどね」
「俺はもう半ば諦めている」

こんなことならリーフィル星系に来るのは後回しにすればよかったな。先にどこかのハイテク星系に行ってエルマの船と新しいパワースーツを手に入れるべきだったか……今更そう考えても後の祭りだな。仕方がない、今打てる最善の手を打ちながら何事もないように精々祈っておくとしよう。

無駄になりそうな予感しかしないけどな。

#２８６　尻尾は掴めない。当たり前だが。（前書き）

１８時投稿は努力目標だから……―（∴３」∠）―（震え声

#２８６　尻尾は掴めない。当たり前だが。

「それでまた艦内に引き篭もるん？」
「そうせざるをえんな」
「具体的にその……マリーさんでしたっけ？　どういう風に危ないんですか？」
「どういう風に、か……感覚的な話だから説明するのが難しいんだが」

あの感覚をなんと言えば良いんだろうか？　奴と対峙した瞬間に感じた好奇と嗜虐の視線というか、笑顔というか、雰囲気というか……獲物を嬲ろうとする肉食獣の気配というか、虫や小動物に残酷な好奇心を向ける子供の気配のようなものを感じたんだよな――ということを説明したところ、エルマが同意するように頷いた。

「確かになんだかニヤニヤしてて気味が悪いとは思ったけどね……何よりヒロが美人に対していきなり塩対応なのがびっくりしたわ」
「美人さんだったんですか？」
「派手な女ではあったな。今思い返すと顔立ちも整ってたかな？俺は奴から感じる不吉な気配が気になってそれどころじゃなかったけど」

派手な髪の色と場違いな感じの服装と、あと今思い返してみると装飾品をじゃらじゃら身につけていたような気がするな。

「まぁ、兄さんの勘ってだけで嫌な予感しかせぇへんけど、現状は何か仕掛けられたってわけでもなく、ただ挨拶しただけなんやろ？
なら傭兵ギルドとか星系軍になんかしてもらうのも無理やろうし

なぁ」
「現状、引き篭もるくらいしか対処方法がないというわけですね」
「なんか怖がって隠れてるみたいでかっこ悪ない？」
「そうは言うが、それで迂闊に外出して誰か誘拐でもされたらことだぞ？　俺の嫌な予想が当たっていたら、その先に待っているのは考えるのも嫌になる末路だぜ？」
「嫌な予想って言うと……まさか、あの女がレッドフラッグと繋がってるってこと？　いくらなんでもそれはないんじゃない？　相手はゴールドランカーよ？」

俺の考えを読んだエルマが眉間に皺を寄せる。

「そうは言うがな、エルマ。あいつは『幸運な略奪者（ラッキールーター）』なんだろう？　何か賭けても良いが、二つ名の理由は幸運にも宙賊からの略奪品を大量に手に入れたとか、よく宙賊が溜め込んでいるお宝を見つけるだとかそんなのに違いないぞ」
「そうだとしても、それは何かコツみたいなものを掴んでるとか、単に運が良いだけかもしれないじゃない。直感だけで宙賊と繋がってるって決めつけるのはいかがなものかと思うけど」
「それは確かにそうだな。今の俺が垂れ流しているのはただの妄想と誹謗中傷だな。だからメイに裏を取ってもらっている」

先程から特に俺達の会話に口を挟まずに俺の座っている席の斜め後ろに控えているメイはその有り余る処理速度を駆使してキャプテン・『ラッキールーター』・マリーの情報を集め、分析してくれている。

「傭兵ギルドだって馬鹿じゃないわ。しっかりと情報の分析はしているし、疑わしいならゴールドランカーになんてしないと思うけど」
「それはメイの分析結果を聞いてから判断したいところだな」

とは言え、エルマの言うことにも一理ある。エルマの言う通り、傭兵ギルドだって馬鹿じゃない。ランク昇進の際にはある程度人柄も見る筈――いや、見るか？　俺なんて実力を示しただけでトントン拍子でブロンズからプラチナまで駆け上がったぞ？

まぁ、俺の実績は基本的に対宙賊にせよ対結晶生命体にせよセレナ中佐絡みで誤魔化しがきかない状況だったし、クリスを助けた件に関しては港湾管理局にも記録が残っていて、その後はダレインワルド伯爵家経由で俺の行状も正式に伝わっている筈だから疑問を差し挟む余地がなかっただけかもしれんが。ゴールドスターの受勲だの御前試合だのの辺りに関しては帝室案件だしな。

「あんたは特殊なケースだからね？」
「俺の心を読まないでくれ」
「わかりやすいのよ、あんたの考えてることは」
「それは確かに」
「せやな」
「そうだね」
「ひどい」

なんだろう。結託して僕をいじめるのやめてもらっていいですか？　まぁ神経質になり過ぎている自覚はあるし、そんな俺を和ませようとしてくれているんだよな、きっと。そうだよな？

などとじゃれ合っていると、突如メイが声を発した。

「ご主人様、キャプテン・マリーの調査が完了致しました」
「早いな？　聞かせてくれ」
「はい。ご主人様の推測通り、キャプテン・マリーに『幸運な略奪者（ラッキーラッター）』という渾名がついた経緯は宙賊が深宇宙や小惑星帯などに隠匿している物資を略奪することが多いから、というもののようです。

実際のところ、彼女が率いるクリムゾン・ランスの物資略奪量は他の傭兵の平均値を大きく上回っています」
「当然、宙賊との癒着を疑われているはずだよな？」

俺の言葉にメイは静かに頷いた。

「はい。傭兵ギルドも不審に思っているのか、何度かキャプテン・マリーを調査した形跡があります。しかし、確たる証拠を掴むことはできなかったようです。また、キャプテン・マリーは物資の略奪だけでなく、しっかりと宙賊討伐においても実績を積んでいます。クリムゾン・ランス全体の戦績としては累計でご主人様と同等か、それ以上の数の宙賊を討伐していますね。また、捕らえた宙賊への尋問や回収したデータストレージの分析などによって宙賊の拠点の位置も多く特定しています。こちらも他の傭兵の平均値を大きく上回っていますね」
「つまり、疑いを向けられつつもクリムゾン・ランス全体の姿勢としては宙賊を真面目に狩っているから、傭兵としては真っ当だろうと思われているわけね」
「はい。略奪品の発見率、宙賊拠点の発見率、そのどちらにおいても平均値を大きく上回る――言わば異常値とも言える数値を叩き出していますが、何らかのコツやノウハウがあるのだろうと傭兵ギルドは結論づけているようですね。キャプテン・マリーもそのように公言しています。彼女曰く、ちょっとしたコツさえ掴めば見つけるのは難しくないそうです」
「ほーん……そんなもんなん？」
「一概に否定はできんがなぁ……」

一応、ＳＯＬでも宙賊の隠した物資やお宝を手に入れるイベントはあった。基本的には撃破した宙賊艦のデータストレージを解析し、お宝の隠してある座標を入手して漁るという流れだったが、隠し物

資の座標を手に入れる確率は非常に低く、狙って漁るというのは難しいというのが俺の認識だ。

「でも、狙ってできるものじゃないわよね？」

「だな。まぁ何か秘訣があるとか、そういうのを探すのに役立つ特別な装備を持っているとかならあり得なくはないが……正直、宙賊と繋がっているって考えるほうが簡単ではあるよな」

「仮に繋がっているとして、それだと宙賊を沢山撃破しているっていうのは矛盾しませんか？」

「別に矛盾はしないんじゃないかな？　宙賊だって一枚岩ってわけじゃないだろうから、レッドフラッグの邪魔になる宙賊を傭兵として始末しているのかもしれないですよ」

「あ、なるほど」

ミミの発言にウィスカが反論する。確かにその線はあるよな。実際のところ、隠された略奪品を見つけたっていうのがそもそも真っ赤な嘘で、そうやって自分達に都合の悪い宙賊を始末して手に入れた略奪品かも知れないし、或いは単に宙賊からそのまま横流しされた品かもしれない。

つまり、宙賊が民間船を襲撃して略奪した品を「宙賊が隠していた物資を見つけた」ということにしてクリムゾン・ランスが引き取って合法的に現金化しているのかもしれないからな。

「ただ、これ疑い始めるとキリないんとちゃう？　結局わかったのは傭兵ギルドが疑うレベルでそのマリーっちゅう女の傭兵団が略奪品や宙賊の拠点を見つけてるってことだけやろ？」

「それはそうだな。結局傭兵ギルドも尻尾を掴むことはできていないみたいだし……そうだとしても俺は俺の直感を信じたいと思うが」

あの直感はなんというかこう……自分で言うのもなんだが、天啓

じみた感覚だった。全力で心と身体があの女を拒否してる感じだったからな。初対面の相手を敵だと確信するとか、どう考えても普通じゃないと思うんだ。

「やっぱちょっと神経質になってない？　大丈夫？　おっぱい揉む？」

「揉む」

エルマの申し出に俺は秒で全ての考えを放棄し、彼女の胸に顔を埋めることにした。うーん、ミミほどのボリュームは無いがこれはこれで。なんか良い匂いもするし最高だな。心が癒やされる。

「兄さん欲望に忠実すぎん？」

仕方ないじゃない、男の子だもの。

まぁ、うだうだと話をしたけど結局のところ収穫はなしってことだ。俺の疑念がただの思い過ごしなら良いんだけどな。

まぁ、どちらにせよ一度シータに降りてしまえば奴らは追って来られないだろうし、よしんば奴らもシータに降りてきたとしても惑星上じゃそうちょっかいをかけることもできまい。何かやらかした場合は発覚する可能性が非常に高いからな。広大な宇宙空間に比べれば惑星の大気圏内なんてのはあまりに狭すぎる。対艦戦闘出力でレーザー砲なんぞぶっ放したらすぐにでも惑星防衛の任に就いている星系軍がかっ飛んでくるだろう。

結局、この日は艦外に出ることもできないし、降下申請が降りなければコロニーから出ることもないということでブラックロータスの中でイチャイチャだらだらと過ごすことになった。

#287　ムービー鑑賞会（前書き）

二度寝したのが良くなかったのかも知れない（ ̄ω ̄）（後悔はしていない

#287　ムービー鑑賞会

翌日。どことなく気怠い雰囲気の漂う船内の空気に逆らわず、休憩スペースのソファでだらりと過ごす。ソファに深く腰掛ける俺を背もたれのようにしてミミが座り、俺の両脇には整備士姉妹がピッタリとくっついている。ついでにソファの後ろからメイが俺の首に抱きついている。頭に感じる柔らかい感触が実にグッド。

「……あんた達、暑くないの？」

そんな俺達から距離を取った場所で昼間からビールを飲んでいるエルマがジト目を向けてくる。

「俺は全然」

「私がご主人様を程よく冷やしていますので」

そう、俺の首や頭に触れているメイの身体がひんやりしているのだ。どうやら冷却装置をフル稼働させているらしい。流石はパーフェクトなメイドだぜ。普通のメイドにはできないことを平然とやってのける。

ちなみにこんなに固まって何をやっているのかと言うと、俺が買い集めたデータチップに入っているレトロムービーの鑑賞会である。今回のデータチップにはホラームービーが沢山入っているようで、最初は普通に並んで見ていたのだがいつの間にかこういう状態になっていた。

ちなみに今流れている映画はハイパーレーン内を航行中の民間宇宙船で乗組員が次々と殺されていくというサスペンスホラーもので、乗組員同士で互いが犯人であるという疑心暗鬼に陥り、終いには犯

人と思われる乗組員に対する追放投票を行って、最多得票者をハイパーレーン内に放逐していくという内容である。当然ハイパーレーン内に生身で放逐などされたら死ぬ――というか行方不明になってどうなったのかもよくわからないことになる。

「犯人はブルーやろ。自分はやってないってアピールが必死過ぎるわ」

「うーん、グリーンじゃないかなぁ？　だってブルーは前回の殺人の時にブラックとずっと一緒に行動してたから確シロだったよね？」

「でもブラックって今までパープルを追放する流れになってからそれを後押ししたりして、乗組員の数を減らすことに積極的すぎて怪しくないですか？」

「確かに積極的に他人を吊り――追放しにいってる感じがあるな。最初にパープルが追放された時に口許を隠してたけど、なんかあれ悲しんでいるってよりはほくそ笑んでるのを隠しているようにも見えたし」

「あんた細かいところをよく見てるわね……私はなんもわかんないわ」

「そりゃ酒呑んで酔っ払ってるからだろ……」

ブルーとかグリーンとかブラックとかは登場人物達の名前――というかコードネームというかコールサインみたいなものである。実際に色通りのものを身に付けていたり、服装がそういう色で統一されていたりして非常にわかりやすい。

ちなみにメイは犯人の推理論議には加わっていない。こういうのをメイが本気で分析すると高確率で犯人を当てちゃうからな。

ちなみに映画は最終的に裏切り者をなんとか船外に追放したと思ったら、実は裏切り者はもう一人いて、最後は目の前で乗組員を刺殺したもう一人の犯人が無表情のまま凶器を手に最後の生き残りへと迫ってくるというシーンで終わった。

「犯人は二人だったかー」
「ヒロ様の言う通りブラックも犯人でしたね」
「わかりやすいグリーンって犯人を出して、アクションシーンの末になんとか倒したところに絶望感を突きつけてくる演出は良かったな」
「仲間が一人ずつ殺されていくのとか怖かったですし、追放される人の命乞いが真に迫ってて凄かったですね」
「本当に船外に追放されてたりしてね」
「怖いことを言うのやめろよ、洒落にならん」

スナッフフィルムじゃねぇんだから……いや、この世界だと撮影機器なんかも随分と進化しているから、実は今流していた映画は映画ではなく実際に起こった事件を編集して映像化したものですって線も無くはないんだよな。まぁ、スタッフロールを見る限りこれは映画だな……ああ、スタッフロールと同時にNGシーンを流すのは俺は好きだよ。うん。

「次の映画はなんでしたっけ？」
「あー……『恐怖！　宇宙クモ！』だってよ」
「タイトルからそこはかとなく漂ってくるB級……いやC級臭やな」
「お姉ちゃん、見てみないことにはわからないよ」
「うーん、足が多くてわしゃわしゃしてるのは苦手なんですよね……」
「そう言えば森で遭難した時もグラァを見て悲鳴あげてたわね」

エルマが言っているグラァというのはリーフィルⅣ――シータ固有の昆虫で、蛇くらいの大きさがあるゲジゲジめいた生物である。滅茶苦茶早く無数の足を動かして、やはり滅茶苦茶早く移動する。見た目はキモいが人やエルフを噛んだりしないし、寧ろ毒性のある

生物を積極的に狩る習性を持っている益虫であるらしい。俺も見た目がキモくて苦手だ。
　ちなみに、宇宙クモの映画はホラーかと思いきやヒト種である主人公と宇宙クモが種族を超えて愛を紡ぐハートフルストーリーだった。主人公が身を挺して他のクルー達から宇宙クモを守るシーンは感動モノだったな。
　ちなみに主人公以外の登場人物は全員死んだし、なんなら主人公も最後に宇宙クモとの『愛の結晶』をその身に宿していた。孵化したらそれどうなるんですかねぇ……？

「夢に見そうです……」
「純愛……かなぁ？」
「……ある意味では？」
「愛故に、とは言うけどこれだけ周囲を巻き込むと巻き込まれる方はたまったもんじゃないわね」
「同感だな」
「興味深い内容でした」

　メイ、君が言うと洒落にならんから勘弁してくれ。

「ご主人様、リーフィル星系統治機構から降下申請の許可が降りました」
「お？　思ったより早かったな。それじゃあ早速降下するか」

　元々はローゼ氏族領にある空港にクリシュナで着陸するつもりだったのだが、急遽予定を変えて以前に利用した総合港湾施設にブラックロータスで降下するように申請内容を変更したのだ。
　マリーの件があるからな。戦力を分散するのは危険だと判断したというわけだな。状況的に考えてそう簡単に俺達に手を出してくるとは思えないが、何か俺が予想もしない手を使ってくる可能性もあ

る。万が一を考えればブラックロータスごと降下するのが良いだろう。
　それにクリシュナだけで降下するとなると、ブラックロータスはこのリーフィルプライムコロニーに置きっぱなしにすることになる。そうなると何らかの方法でブラックロータスに細工されたり、侵入されたりする可能性があるからな。いくらセキュリティを強化しても穴を空けられない保証は無いし。

「警戒し過ぎな気もするんだけどねぇ」
「警戒してそれで取り越し苦労で済んだらそれはそれで良いさ。こっちがしっかり警戒したから相手が諦めたのかもしれないしな」

　問題はミンファ氏族領にある総合港湾施設を利用することでまたグラード氏族やミンファ氏族に付きまとわれるかも知れないということだが……まぁ今回は御神木の種の返却とエルマの親戚に挨拶しに来ただけだから遠慮してくれと強く言えば大丈夫だろう。きっと。恐らく。メイビー。

#288　降下、再び（前書き）

今日はカレーを作ります（　ω　）（特にこれといって意味のない報告

#288　降下、再び

『間もなくリーフィルⅣの衛星軌道に入ります』
「降下目標はミンファ氏族領にある総合港湾施設だ。大気圏突入の際には特に衛星軌道やその更に外からの攻撃に注意してくれ」
『アイアイサー』

ブラックロータスのコックピットで艦を制御するメイに指示を出しながら、俺はクリシュナのコックピットでいつでも出撃できるように待機しつつ、ブラックロータスの各種センサーが拾ったデータを精査していた。

「いるな」
「いるわね」
「いますね」

同様にセンサーの情報を精査していたエルマとミミも俺と同時に声を上げる。ブラックロータスのセンサーには衛星軌道を高速で移動している星系軍所属ではない傭兵ギルド所属の小型艦の影が映っていた。調べてみれば案の定クリムゾン・ランス所属の偵察艦である。

無論、俺達が見つけているということはメイも見つけているだろう。隠れる場所もない衛星軌道上ではどうにもならないと開き直っているのか、自らの存在を隠す素振りもない。

「多分ありゃ電子戦特化の高速偵察艦だな？」
「形状を見る限りはそれっぽいわね」
「形状からわかるんですか？」

「ある程度はな。機体が小さくて軽そうなのにメインエンジンが二基、その割に姿勢制御スラスターの数は少なめ、これは格闘戦を想定していない、真っ直ぐ特化の機体特性――つまり然るべき場所に超高速で駆けつけて、何かあったら速攻で逃げるって構成だ。でも機体の各所に不自然な出っ張りが多いだろう？　あれは追加のセンサーアレイだな」
「レドームの形状は大体どれも同じようなものだものね、見た目にわかりやすいわ」

航宙艦は基本的にシールドで守られてはいるが、それでも繊細なセンサー類をそのまま露出させていれば不具合が起こる可能性は高くなる。だからセンサー類を保護するためのレドームの存在は不可欠なわけだが――やはり追加のセンサーアレイをつけるとなると、それらを守るためのレドームがボコボコと機体表面に生えて、ああやって多少不格好になってしまうわけだ。

「油断させるための囮かと思ったが、とりあえずは現時点で襲いかかってきそうな連中はいないな」
「そうね。まぁ、こんなところで仕掛けてきたら静止軌道上で警備してる星系軍が駆けつけてくるだろうけど」
「でも、形振り構わず私達を撃墜するつもりなら仕掛けどころではありますよね？」
「全てを捨てて刺し違える覚悟ならな。しかしどういう名目で衛星軌道まで侵入してるのかね、あの機体」
「さぁ？　案外正式な星系軍の警備補助任務とかかもね」
「ああ、その手があるか」

もしかしたら昨日マリーが傭兵ギルドに足を運んでいたのはその件かもしれないな。電子戦能力に特化した高速偵察機があるんだけど、リーフィルⅣの防衛任務の支援に使ってみないか？　みたいな

感じで傭兵ギルド経由で持ちかけたのかも知れない。とりあえずお試しってことで値段を安く設定すれば、星系軍も提案に乗るかも知れないな。特に今は二度も宙賊の降下襲撃を許した直後でもあるから、できる手は何でも打って効率性を改善したいと思っているだろうし。

「リーフィルプライムコロニーから追跡してきた感じではなかったですし、本当にそうかもしれませんね」
「だな。まぁどんな経緯であそこに居るにせよ、俺達からは手を出せないな」
「放置する他ないわね」

あの艦がどれだけの情報収集能力を持っているのかはわからないが、本当にどうしようもないからな。ブラックロータスにもクリシュナにもステルス状態で惑星降下を行うような機能は無いから、俺達がどこに降りるかは完璧に把握されるだろう。もしかしたらクリシュナでローゼ氏族領に移動するのも把握されるかも知れない。でも、本当にこればかりは解決手段が全く無いな。ここで手を出したらお尋ね者になるのは俺達の方だ。

『ご主人様、突入軌道への進入に成功しました。二分後に大気圏へ突入致します』
「了解。恐らく大丈夫だと思うが、念の為警戒は続けてくれ」
『はい。お任せください』

メイが返事をしてから程なくしてブラックロータスが大気圏への突入を始めた。断熱圧縮によって発生した熱がブラックロータスのシールドの向こう側でプラズマを形成し、激しく発光する。

「綺麗ですよねー」

「そうだな……？」

大気圏突入時に様々な理由で燃え尽きたり爆発四散したりする創作物に結構触れてきた俺としては綺麗だなぁという感想より不安感の方が勝るんだが、なんでも純粋な目で見て綺麗だなと思うことができるミミの無垢な感性を否定はしたくない。

「たまに謎の感性を発揮するわよね、ミミって」

「えーっ！？」

エルマに心無い言葉を浴びせられたミミが「ガーン！？」とでも効果音がつきそうな表情をして涙目になっている。まぁその、うん。俺も言葉に出さないだけで同じようなことを思っていたからエルマにとやかく言うことはできんな。

『ご主人様、大気圏への突入を完了致しました。減速しつつ目標地点へと移動中です。到着まであと五分ほどとなります』

「了解。艦の制御ご苦労さん。俺達はこのままクリシュナで待機する」

『承知致しました。ティーナ様とウィスカ様にも連絡しておきます』

「頼んだ」

ブラックロータスのコックピットにいるメイとの通信が切れる。最近、メイはティーナとウィスカに対しても様をつけて呼ぶようになった。前まではさん付けだったんだけどな。切っ掛け？　切っ掛けはまぁ、その……俺が二人に手を出してからのような気がするなぁ。

「いよいよエルマさんの実家……ではないですね。なんて言えば良いんでしょう？」

「親戚の家で良いんじゃない？」
「親戚の皆さんのお家訪問ですね！　楽しみです！」
「別に普通よ、普通。惑星上の家屋って言ったって、コロニーの住居とそんなに違いはないわ」
「ほんとにござるかぁ～？」
「なんかムカつくからその言い方やめなさい」

立場的に帝国に近いローゼ氏族の中でも、分家がちゃんと帝国貴族になっているウィルローズ家だ。本人はこう言っているが、結構な名門なんじゃないかと俺は疑っている。そもそも、エルマ自体貴族の娘だからな。一応エルマは傭兵として貴族社会の外で何年も生活してかなり一般人に近い視点も持ち合わせてはいるが、元々の生活レベルが高いしなぁ。
などと考えていると、クリシュナのハッチにアクセス申請が来たので、受理しておく。それから少しの時間を置いて騒々しい声が聞こえてきた。

「邪魔すんでー！」
「邪魔すんなら帰ってー」
「なんでやねーん！」
「お姉ちゃん、あんまり騒いじゃ駄目だよ」

入るなり激しいツッコミを入れて騒ぐ自由奔放な姉をしっかり者の妹が注意している。うん、いつもの光景だな。

「というか兄さん、なんで兄さんが下町ドワーフの定番ネタ知っとるん？」
「これドワーフの定番ネタなのか……」
「知らんでやるんは逆に凄いわ」

まぁ一種の様式美みたいなものだよな。同じネタがドワーフにも存在するのはちょっと驚いたけど。

「ふふふ、増設したサブシートがついに火を噴く時が来たな」

「コックピットで火を噴くは流石に縁起が悪くないかな？」

そんなことを言い合いながら姉妹が改造したサブシートを展開して座り始める。結構前にティーナが改造して本来一人用のサブシートを二人で座れるようにしたのだ。しっかりとシートベルトも完備しており、ティーナ曰く強度も遜色ない出来であるらしい。

『間もなく着陸致します。着地時の衝撃にお気をつけください』

「了解。二人とも、シートベルトしっかりしとけよー」

「もうしたで」

「大丈夫です」

二人の返事から程なくしてわずかに船体が揺れる。うん、完璧な着地だな。

さぁ、メイが来たら目的地へと向かうとするか。

#289　ローゼ氏族領へ（前書き）

今日も間に合った（　，　ω，　）

#289　ローゼ氏族領へ

「お待たせ致しました」
「いや、それよりもブラックロータスの操縦ご苦労さん。次は俺の華麗なフライトを満喫してくれ」
「はい。楽しみにしております」

そう言いながらメイがサブオペレーターシートに着く。無事リーフィルⅣ――シータに着陸した俺達は、そのままブラックロータスから離陸する予定だ。降下申請した際にフライトプランなども提出済みである。

「ミミ、管制に離陸申請を出してくれ」
「アイアイサー！」

ミミが総合港湾施設の航空管制室に離陸申請を行う。基本はコロニーなどの入出港申請と同じだが、離着陸のタイミングなどはかなり厳密に指示される。まぁ、大気圏内ってのは宇宙に比べれば飛行できる空間が圧倒的に狭い上に、重力の影響もある。ちゃんとした航空管制に従って飛ばないと大変に危険だからな。特に離着陸時は事故が起きやすいし。

もっとも、今の科学技術で作られた航空機には低出力のシールドが装備されているようで、バードストライクや着氷など外的要因による事故は大幅に減っているらしいけど。

え？　航空客車？　あれは科学技術じゃなくてサイオニック技術系の航空機だから知らん。この前の墜落を機に安全性の向上に努めてもらいたいところだな。

『こちら航空管制。クリシュナ、発進どうぞ。ガイドビーコンに従ってください』
「了解。クリシュナ、発進する」

航空管制に従い、ブラックロータスの後部ハッチからゆっくりと発進する。メインスクリーン上に表示されているガイドビーコン通りに船を動かすだけだからな。簡単なものだ。

「ミミ、ブラックロータスのロックとシールド起動」
「アイアイサー。ハッチロック、シールド起動しました」
「以後の管理はメイに一任。何かあったらすぐに言ってくれ」
「はい。お任せください」

流石にブラックロータスに何か悪さをするような奴はシータには居ないと思うが、万が一があるからな。長期間船を離れる以上はセキュリティはしっかりしておく必要がある。

「おー、やっぱ宇宙空間と違って地表の景色は新鮮に見えるなぁ」
「やっぱり景色に上下があるからじゃないかな？」

サブシートに並んで座っている整備士姉妹が楽しそうに会話をしているのを聞きながら、ガイドビーコンに従って総合港湾施設の航空管制圏内から離脱する。ここまで来ればある程度は自由に飛べるようになる。まぁ、ある程度の速度制限とか高度制限とかはあるんだけども。何せクリシュナは巡航速度でも軽く音速の二倍強は出るからな。そんな速度で地表スレスレを飛んだら衝撃波で地表がとんでもないことになる。

「どれくらいで着くんだっけ？」
「巡航速度で二時間弱ってとこね。凡そ五千キロメートルの空の旅

ってとこかしら」
「五千キロメートルですか……改めて距離にして聞くと、やっぱり惑星って大きいですよね」
「そりゃコロニーなんかとは比べ物にならないよなぁ」

コロニーの大きさなんてのもまちまちだが、所謂メガコロニーと呼ばれるような大型コロニーでも人工は百万人程度と言われている。あまり一つのコロニーを大きくしすぎると資材面でも維持の面でも効率が悪くなるようで、グラッカン帝国では居住人数が概ね五十万人以下のコロニーが標準的であるらしい。

色々な星系を旅する際に俺達が立ち寄るのは基本的に交易コロニーだが、その他にも資源採掘コロニーや研究開発コロニー、食糧生産コロニー、星系軍や帝国航宙軍の防衛ステーションなど一つの星系内に実に多くのステーションが存在している。用が無いから基本立ち寄ることはないけど。

まぁ、実際のところ宇宙空間に作るコロニーというのはあまり多くの人口を収容できるものではないというわけだ。だから各銀河帝国は植民できる惑星を確保するために他国と争ったり、支配圏の拡大を狙って外宇宙――所謂エッジワールドの探査をしている。

クリス――というかダレインワルド伯爵家が行なっていたテラフォーミング事業にグラッカン帝国が大いに注目し、帝国航宙軍まで派遣して力添えしたのは新規居住惑星確保がグラッカン帝国そのものの国力を上げることに繋がる重大な案件だったから、というわけだな。

じゃあ何故宇宙空間に人口収容効率の悪いコロニーなんぞを作っているのかというと、宇宙空間に存在する小惑星やガス惑星などから得られる資源を採集し、加工して製品化する際にわざわざ資源を惑星の地表まで運んで加工し、また宇宙空間に上げるというのは非常に効率が悪いからだ。

宇宙空間で資源を採集し、高効率の太陽光発電で加工に必要なエ

ネルギーを確保し、製品へと加工する。特に巨大な航宙艦などを建造する場合には重力の小さな――あるいは無重力の空間のほうが効率が良い――とかなんとか。

俺に理解できたのはそれくらいまでで、技術の発展によってどうのこうの、ハイパードライブ技術の発展によってどうのこうの、ゲートウェイネットワークの整備によってどうのこうのと色々あって、今後はメガコロニーを超える星系クラスの超巨大構造物（メガストラクチャ）を建築して、そこに大量の人民を住まわせるなんてプロジェクトも進行しているらしい。

もっとも、その前に現行の居住惑星を帝都と同じように構造物で覆ってエキュメノポリス化するのが先だとか、いいや星系一つをまるごと使った超巨大構造物構想を進めるべきだとか、それよりもまずは居住惑星を確保すべく版図の拡大を目指すのが先決だとか、勢力圏内の惑星をテラフォーミングするのが先だとか、グラッカン帝国上層部でも意見が別れているのだという。

前に俺が休憩がてらブラックロータスの休憩スペースでなんとなしに調べていたら、ふらりと現れたメイが懇切丁寧にそう教えてくれた。何故かこういうことを調べているとふらりとメイが現れて色々と教えてくれるんだよな。

うん、何故かなんてのは想像がついているから追求していないだけだ。藪を突いて蛇を出すのはごめんなので、この件についてはあまり突っ込んで考えないようにしようと心に決めている。きっとこれは監視ではない、見守ってくれているのだ。そう解釈しておけば俺の心の平穏は保たれる。

そうして雑談をしながら飛ぶこと二時間弱。俺達の乗るクリシュナは無事ローゼ氏族領の中央空港に到達していた。

「なんだかミンファ氏族領やグラード氏族領とは雰囲気が全然違いますね？」

「そうだな。高層ビルだらけだし。緑が無いわけじゃないけど、そ

れも含めてしっかりと手が入って管理されてるって感じだ」

中央空港の管制に従って船を進ませ、指定された停泊地点にクリシュナを着陸させる。こんな時もオートドッキング機能は大活躍だ。着艦要請後に管制圏内に入って起動すれば許可が出ると同時に自動で着艦してくれる。

「空港に着いたらこの後はどうするん？」

「ウィルローズ本家には連絡してあるわ。迎えを寄越してくれるって話よ」

「へー。なんかＶＩＰにでもなった気分やね」

「紛れもなくＶＩＰなんじゃねぇかな」

シータのエルフにとって俺達――というか俺はちょっと特別な立場になってしまっているからな。図らずも拐われたグラード氏族やミンファ氏族の重要人物を宙賊の手から救うことになったし、その後は何の因果か彼らの信仰対象である御神木の種に見いだされ、伝説に語られるエルフの英雄としての要件を満たしてしまった。実際、今も御神木の種は俺の手にあるしな。

「とはいえ失礼のないように謙虚に行こうな。ただでさえよくわからん連中に目をつけられているのに、これ以上の厄介事は御免こうむる」

「そうそう厄介事に巻き込まれるなんてことはないと思うけどね。この辺りは完全にローゼ氏族のシマだし」

「シマとか言うとなんかこう、昔を思い出すわ」

「ギャングめいた表現だよな」

「うるさいわね」

なんてことを話している間にオートドッキング機能によって完璧

な着陸が完了した。後は準備をして船から降りるだけだな。一応何泊かする予定だから、色々と持っていかなきゃならんものもあるし。

#２９０　再会（前書き）

今日は寝坊して遅れました―（∵３」∠）―（ゆるして

９／８　１９０１　禁則事項に触れる表現を変更　シャンパンやサイダーは存在しなかった。いいね？

寝不足はよくないな―（∵３」∠）―（白目

#290　再会

「お待ちしておりました」
「お、リリウムか。久しぶりだな」

クリシュナから降り、空港へ着いた俺達を出迎えてくれたのは、以前シータを訪れた際に俺達の案内役として同行してくれたローゼ氏族のエルフの女性、リリウムだった。

「今日は……警戒されてらっしゃらないようですね」

リリウムさんが注意深く俺の手荷物を観察して呟く。
今日の俺の手荷物は一抱えほどのバッグが一つだけで、中身もちょっとした着替えや予備のエネルギーパック程度のものだ。いつぞやのようにサバイバルキットやら保存食やらを満載したクソデカバックパックというわけではない。

「そう言われると急に警戒したくなってきた」
「やめてください。あの一件で私、左遷されかかったんですからね？」

リリウムが真顔で胸の前でバッテンを作る。君が左遷されかかったとかいう話には興味はな――いやちょっと興味はある。でもあの墜落の件は別に俺達が悪いわけじゃないしな。航空客車が墜落した遠因は俺にあるような気がしなくもないが、俺だって俺に自身に制御できないよくわからん超能力じみた力のことなんて知らんし。

「貴方を処罰したらローゼ氏族は不手際を認めることになるものね。

そりゃ現状保留って形になるわ」
「ほぇー……政治の話ですね」

俺達がグラード氏族の用意した航空客車で墜落したあの件に関して、ローゼ氏族は当初から航空客車の安全性に疑問を呈し、通常の小型航宙艦などによる移動を提案していた。まぁ航空客車には低出力のシールドすらついていないし、通信能力なども最低限。しかも軽量化のために車体も然程頑丈ではないと何かが起こった時にヤバい要素がてんこもりだったものな。

墜落判明後の救出活動も通常の小型航宙艦などによる迅速な捜索と救出を行おうとした。しかしそれもまた科学技術を毛嫌いするグラード氏族の猛反対で頓挫した。まぁ、結局紆余曲折の末にブチ切れたメイがクリシュナで駆けつけて俺達を救助してくれたわけだが。

まぁ、その対応の不味さについては問題になったらしい。まぁそりゃそうだろう。あの時の俺達は賓客待遇でグラード氏族領に向かっているところだったからな。そんな俺達を乗せた航空客車が墜落し、俺達は遭難。救出はエルフの氏族間のいざこざで遅々として進まず、結局メイが俺達を救出した。完全に責任問題である。

当然、ローゼ氏族は航空客車での送迎を強行した結果事故を起こしたグラード氏族と、それを後押ししたミンファ氏族を追及することになる。対するグラード氏族とミンファ氏族が突ける部分といえばローゼ氏族出身の案内役であるリリウムが俺達を置いて先頭車両に乗ったまま墜落現場を立ち去った、という点くらいだ。

まぁ、それもかなり無理筋である。あの時は先頭車両にも損害が出ていたという話だし、そもそも運転していたのはミンファ氏族出身のヒィシという男性エルフだった。彼としてもいつまで飛んでいられるかわからない先頭車両だけでなんとかグラード氏族の集落なりなんなりに辿り着いて事故が起こったことを確実に伝える以上の選択肢はなかったことだろう。

当然、ローゼ氏族はそんな苦し紛れの責任追及など一蹴したに違

いない。リリウムの対応に落ち度は何もないと言い放ったことだろう。そうなると、ローゼ氏族としてはリリウムを処分するわけにはいかない。結果として彼女の首は皮一枚で繋がったというわけだ。

「その後、各氏族の関係はどうだ？」
「宇宙空間並みの極寒ですよ。特にうちとグラード氏族のトップ同士は完全に一触即発ですね」
「おいおい、氏族間のいざこざに巻き込むのはやめてくれよ？」
「大丈夫ですよ。一触即発と言っても本当にトップ同士だけの話ですから。顔を合わせれば笑顔で罵り合って、取っ組み合いの喧嘩になるくらいで」
「それはそれでどうなんだろう……？」
「鉄砲玉送りつけあっての殺し合いにならないだけマシやろ」

なんかティーナが物騒なことを言ってるな。鉄砲玉ってお前……マフィアやギャングじゃねぇんだから。

「我々としてはローゼ氏族が一番付き合いやすい相手でしょう。エルマ様のご血縁もいらっしゃいますし、科学技術に対する姿勢も一致するでしょうから」

ローゼ氏族はエルフの三氏族の中で科学技術の積極利用と宇宙進出を重視している先進派閥だ。親帝国派閥と言っても良い。
対外的な交渉とリーフィル星系の防衛に力を注いでおり、その性質上他星系との取引や帝国とのやり取りを牛耳る結果となっているため、三派閥の中で一番金を持っている。しかし、精霊との繋がりや伝統、魔法や精神主義的思想を重んじるグラード氏族とは相容れず、中庸を行くミンファ氏族も今はトップが魔法に傾倒しているためあまり関係が良くないとか。

「まぁ、そうなるでしょうね。きっとヒロ達は驚くんじゃないかしら。あまりにも普通で」
「あまりにも普通って……いやまぁ、確かにグラード氏族やミンファ氏族の人達はどうにも仰々しかったりエキセントリックだったりしたけど」

ムキムキイケメンエルフとか清楚ないかにもお姫様っぽいエルフとか、魔法大好きエルフとかが脳裏を過る。普通っぽかったのは俺が助けたミンファ氏族長の息子のネクトくらいだったな。

「足は用意してありますのでこちらへ。ＶＩＰ御用達の豪華な車両ですよ」
「お、ええやん。兄さん、ＶＩＰやって、ＶＩＰ。やたら広い車内でなんか高級そうなワインとかつまみとか出てくるんやきっと」
「ホロムービーか何かの見過ぎと違うか？　というか今からローゼ氏族のトップと顔合わせるのに酔っ払っていくつもりかお前は」
「大丈夫や。うちらにとって大概のワインはただのぶどうジュースと変わらんよって」
「そういう問題かなぁ……」

大丈夫じゃない。問題だ。というか心配そうに言いつつウィスカもちょっと期待してるね？　俺の目は誤魔化せんぞ。ちょっと口角が上がってますよ。

「高級おつまみ……」

うん、ミミは最近食いしん坊キャラに磨きがかかり過ぎている気がするな。嬉しそうにも程がある。もっと食べて育ってくれ。どことは言わないけど。

「はしゃがないの。先方を待たせてもいけないし行きましょ」
「そうだな。メイも行こう」
「はい、ご主人様」

浮かれているミミと整備士姉妹を追い立てるようにして空港を後にする。実は地表上を車両等で長距離移動した経験が無いので、俺もちょっと楽しみだったりする。帝都では基本クリシュナか超高速列車みたいな移動システムだったからな。

☆★☆

「地上用の移動車両ってこんな感じになってるんだな」

俺達が乗り込んだのは所謂空飛ぶ車であった。大型トラックほどの大きさの車両で、クリシュナよりはだいぶ小さい。しかし内装はなかなかに豪華で、まるで高級ホテルのラウンジみたいな感じだ。俺が三人くらいは横に並んで座れる座り心地の良い座席がL字型に配置されており、飲み物やおつまみ、果実類が用意されたバーカウンターのようなものまで用意されている。しかも運転は完全自動化されているらしい。

「あんまり乗る機会無いわよね、私達は。都市部はこんな感じみたいよ？」
「都市部じゃないところはどんな風になっているんですか？」
「自動運転システムが普及していない場所では航宙艦のようにパイロットシートが用意されている車両で手動で運転することになります。SVと同じく地上も空中も走行可能な車両が主に使われていますね」
「なるほどー」

ミミがおすすめされたお菓子を食べながらリリウムの説明に頷いている。え？　整備士姉妹？　早速用意されていた高級ワインを空け始めたよ。もうこいつらのことは放置でいいんじゃないかな。

「ご主人様」
「どうした？」
「アレはどうするのですか？」

そう言ってメイが目を向けた先には何やらピカピカと光っている特級厄物――御神木の種があった。

「ローゼ氏族に押し付ける」
「なるほど。ご主人様がそう判断されるのであればそれが一番良いと思います」
「メイには何か考えがあるのか？」
「いえ。アレはご主人様のサイオニックパワーを増幅し、強化する性質を持っているようなので。このまま所持されるのも一つの選択肢かと思った次第です。ただ、その場合リーフィル星系のエルフとの間に深刻な亀裂を生じかねないので、危惧しておりました」

なるほど？　確かにこれを所持し続ければ俺の謎パワーがもっと強くなる可能性は高いな。

「駄目駄目。どう考えても良い結果になると思えん。コレはローゼ氏族に押し付ける」
「そうしていただけると助かります」

見ると、俺とメイの会話を聞いていたリリウムが胸を撫で下ろしながら呟く。俺がこの特級厄物をリーフィル星系の外に持ち出して帰ってこないとなると、リーフィル星系のエルフとしては大問題だ

からな。主に精霊信仰方面で。
　ローゼ氏族はそこまで精霊信仰を重視していないようだけどそれでも拠り所の一つではあるんだろうし、何より外から来た俺とローゼ氏族の配下であるウィルローズ家の分家の娘が信仰のご本尊とも言えるものを持ち去ったとなればローゼ氏族の立場が悪くなることも考えられる。彼女にとって今の会話は本当にほっと胸を撫で下ろすような内容だっただろうな。

「間もなく氏族会館に到着します」
「はいよ。ほら、お前らそろそろ呑むのやめろ」

　ぶーたれるティーナの手からワインのボトルを取り上げ、車――車？　とにかく車両から降りる用意をする。
　さて、ローゼ氏族の人達はどんな感じなのかね。前に来た時にもちょっと話したと思うんだが、あまり印象が無いんだよな。

#291　氏族会館（前書き）

わずかに間に合わなかった……！
おなかすいた―（∵3」∠）―

#291　氏族会館

リリウムに連れられて氏族会館――立派な高層ビルだ――に入り、エレベーターをスルーして一階の会議室のような場所に連れてこられた。

立派なミーティングテーブルが部屋の中央に設えられた会議室だ。なんかこのテーブルはアレだな。ニュースで国の代表同士が会談とかしそうなやつ。

「ローゼ氏族長のナザリス・リィ・ローゼ名誉子爵だ。ああ、私は一応爵位を頂いているが、名誉爵位だからね。あまりかしこまらずに普通に接してくれると助かるよ」

「それはどうも。キャプンテン・ヒロだ。この度は貴重な時間を割いてくれてありがとう。ところでこれは何の集まりだったかな？リリウムに案内されるままに足を運んだんだが、まさか氏族長殿と顔を合わせることになるとは思わなかった」

着席を促されたので、席に着きながら問いかける。俺達の今回の目的はウィルローズ家への訪問と、ローゼ氏族領の観光だ。少なくとも俺達のスケジュールにローゼ氏族長との会談は予定として入っていなかったはずだが。

「ははは、本当に物怖じせずにものを言うね。流石はプラチナランカーの傭兵だ。まぁ、ウィルローズ家から報告が来たのでね。君達がウィルローズ家を訪ねる件について。分家の娘とはいえ惑星外からの来訪者を伴っているとなれば報告を上げるのは分家の責務だ。それについてウィルローズ家を責めるのはどうかご寛恕願いたい。彼らは責務を果たしただけなのだから。強引に割り込んでこの場を

整えたのは私なんだ」
「なるほど。それで？」
話の先を促す。まぁ、トップから直接言われてしまってはウィルローズ家としても断りきれないこともあるのだろう。ローゼ氏族長は自分の派閥のトップなのだから。トップからの強い要請を突っぱねるというのは、組織人としてはなかなかに難しいものだ。
「うん、結局このように強引な形を取ることになってしまったことも含めて、改めて謝罪したい。我々の都合でヒロ殿には本当に……本当に迷惑をかけたからね」
ナザリス氏が急にチベットスナギツネみたいな顔になって中空に視線を漂わせる。ああ、うん。色々と苦労をしたんだろうな。でもイケメンフェイスが台無しだぞ。
「とにかく謝罪をさせて欲しかった。押し付けがましくて申し訳ないが」
そう言ってナザリス氏が頭を下げる。それと同時に会議室に集まっている他のエルフ達も頭を下げた。彼の言う通り押し付けがましい謝罪だが、まぁ改めて謝罪しようという心意気と実際に頭を下げることそのものには好感は持てる。ある程度は。
「謝罪は受け入れる。それでシータのエルフに対する俺の印象が変わるかどうかは別の話だが」
「それはそうだね。とりあえず、謝罪を受け入れてくれたことには感謝するよ。今回のローゼ氏族領滞在の費用は我々ローゼ氏族が持つので、楽しんでいってくれ」
「傭兵相手に全額持つはやめておいたほうが良いぞ。金銭感覚が違

うみたいだから」
「それが罪滅ぼしになるというなら甘んじて受けるさ」
気楽な様子で肩を竦め、ナザリス氏が笑う。まぁ、ローゼ氏族は金持ちだって話だし、俺達がどんなに豪遊してもたかが知れてるってことなのかね？　それならそれで遠慮なく過ごさせてもらうとするか。
「さて、ここまでにしよう。客人の観光を邪魔しすぎるのは無粋というものだからね。案内役として引き続きリリウムくんをつけるので、希望に関しては彼女に全て伝えて欲しい」
話題に出たリリウムに視線を向けると、彼女はすました顔でペコリと頭を下げてみせた。既に交流があるリリウムを案内役につけてくれるのは助かるな。彼女なら俺達がどんなものに興味を持つかも把握しているだろうし。
「ああ、解散する前にコレを引き渡しておきたい」
そう言って俺は自分が座っている椅子に立てかけてあった御神木の種をミーティングテーブルの上に置いた。テーブルの上に置かれた御神木の種は両端が鋭い捻れた槍のような形状をしており、一部が青緑っぽい結晶質に変質している。
「それは……それは我々エルフにとって大変に……大変に影響力の強いものなのだが、そんなに簡単に我々に渡しても良いのかな？」
「シータに住むエルフにとってはそうなんだろうが、俺にとってはそうじゃない。持っているだけで厄介事に巻き込まれそうな気しかしないし、俺は近々リーフィル星系から立ち去るんだ。まさか持っていくわけにもいかないんだし、ここで預けていくのが一番合理的

だと思うけどな」

というか、俺はとっとと厄介払いをしたいだけだ。そんな事を言うとエルフ達に良い印象を与えるわけがないから、言わないけど。

「わかった……他ならぬヒロ殿がそう言うなら謹んで受け取ろう。この御神木の種は我々が責任を持って世話をしていく」

「そうしてくれ。あとそいつを手にしてから本当に厄介事ばかり舞い込んできたからな。取り扱いには気をつけろよ。本当に」

「重々承知しているよ。我々の歴史は御神木と共に生きてきた歴史なのだからね」

☆★☆

「あっさり手放しましたね。本当に良かったんですか？」

氏族会館を後にしてウィルローズ家へと向かう車内でミミがそう聞いてきた。

「メイとも少し話したんだが、どうあってもアレを持っていく選択肢はないからな。ならとっととあるべき場所に返すのが良いだろ。なんか知らんがもう少し持っていてくれとか言われた分の義理は果たしただろうしな」

結局意図らしい意図は説明されなかったが、予想はつく。恐らくあの結晶質に変化する行程が御神木の種を芽吹かせるのに必要な行程だったとか、そんな感じだろう。

「とにかくやめやめ、あの特級厄物の話はやめだ。もう俺はアレに関わらない。それで終了」

「ヒロ様がそう言うならそれで良いですけど……」

なんとなくミミは不満げである。まぁ、アレはミミと一緒に見つけたし、ミミは結構アレに話しかけてコミュニケーションを取ったりしてたからな。友達と別れるような感じでちょっと寂しいのだろう。多分。

「なぁなぁ姐さん、ウィルローズ本家の人達ってどんな感じなん？」
「どんな感じって言われてもね。普通の人達よ。私も小さい頃に一度来たきりだから、あまり覚えてないのよね。父様に聞いた話だと、一応ローゼ氏族の中でも由緒正しい旧家だって話だけど」
「ほーん……こっちで過ごした時に仲良くなった親戚の人とかおらんの？」
「小さい私に皆良くしてくれたから、特別に仲良くなったとかそういうのはないわね。親戚のお姉さんには遊んでもらったけど」
「なるほどー。そのお姉さんに会えるといいですね」
「もうあっちも立派な大人だろうし、家を出て働いているんじゃないかしら？」

ティーナとウィスカに質問攻めにされているエルマが首を捻る。確かにそうなんだろうが、エルフの寿命と成人年齢ってどうなってるんだろうな？　ちょっと今度聞いてみるかな。

「今回はどんな料理が食えるかな？」
「楽しみですね！」

俺の印象だとエルフ料理は洋食よりは日本食に近い異国の料理といった感じである。俺はあまり食べたことがないが、台湾料理などが近いのだろうか？
ちなみにこの後はウィルローズ家を訪れて挨拶をした後、宿に入

ってゆっくりする予定である。観光は明日からだ。とは言ってもあまり長居するつもりはない。宇宙にどうにもきな臭い連中がいる以上、あまり長居して変な罠でも張られると厄介だからな。観光を終えたらゲートウェイネットワークを使って遠方のハイテク星系へと移動する予定だ。ゲートウェイを使えるのはごく一部の特権階級と帝国航宙軍だけだから、奴らは追って来られないはずである。

無論、俺達がゲートウェイ通行権を持っていることを奴らが把握している可能性はある。十分にある。その場合奴らは俺達の移動経路に網を張るだろう。対する俺達はどうするか？　残念ながらブラックロータスの足の速さでは奴らを完全に撒くことは難しい。よって、罠があろうとなかろうと最短距離でゲートウェイに移動するのが最善策となるわけだが。

「うーん……」
「ヒロ様？」
「いや、ちょっと考え事をな」

戦力差があるから俺達の戦力では真正面からは戦えない。戦えば相手に相当な被害を与えることはできるだろうが、ブラックロータスは集中攻撃に耐えられず落ちる可能性が高い。クリシュナは逃げることもできるだろうが、母艦を落とされるのは紛れもない敗北である。クリシュナにメイも整備士姉妹も乗せ、ブラックロータスを放棄して逃げるって手も無くもないが……まぁそれはない。それはないな。単純にブラックロータスを捨てるのはあまりに惜しいし、何より負けて逃げるようで気に入らない。というか実際問題それは敗北と同じである。

「まぁ、やりようはあるわな」

そう。正面からぶつかるにしても何にしてもやりようはある。

後は奴らがいつ仕掛けてくるかと、俺の思惑通りに事が運ぶかどうかの問題だな。

#292　ウィルローズ本家の人々（前書き）

ちょっと短いけどユルシテ―（∵3」∠）―

#292　ウィルローズ本家の人々

「あらぁー、こんなに小さかったのに立派になって」
「凛々しい美人さんになったわねー」
「あの人がエルマちゃんの良い人？」
「あったあった。ほら、これが前にエルマちゃんがうちに来た時に撮ったホロだよ」
「ちょっと……やめ、やめてください」

ウィルローズ本家に到着した俺達――というかエルマは着くなり親戚のおばちゃんと従姉妹達に囲まれて借りてきた猫のようになっていた。強く抵抗することもできずにされるがままにするしかないその姿はいっそ哀れである。

「凄いな」
「同じ男として少なくない羨望の念を覚えないでもないが……」
「それ以上に敬意を表する」

俺は俺でウィルローズ本家の男性陣に囲まれていた。俺達の視線の先にいるのはウィルローズ本家の女性陣に囲まれるエルマ――ではなく、誰かが持ってきた昔のエルマのホロ画像を見たり、次々と運ばれてくるお菓子を食べたりしているミミと整備士姉妹、そしてそれを見守るメイである。

「宇宙を股にかける傭兵や冒険家になって宇宙を飛び回る、というのはある種の男の夢だな」
「そして美女とのロマンスもな」
「エルフの寿命は長いんだし、今からでも遅くないんじゃ？」

俺がそう言うと、彼らは互いの顔を見合わせてから首を振った。
「冒険とロマン、スリルと美女には憧れるが、自分のすべてを賭けて追うほどの熱意があるかと言われると正直難しい」
「それも故郷や家族、安定した生活を捨ててとなると、な……」
「だからこそ傭兵という道を選び、成功している君には心からの敬意を表する」
「なるほど。でもあの子達は全部俺のなんであんまりいやらしい目を向けんで下さい」
「失礼な。我々は紳士だよ」
「私は嫁もいるしな」
「……傭兵になろうかな」

一番年若い感じのエルフがボソッと呟いた。どれだけ面倒な手続きと費用が必要か知らんが、頑張れ。ただ、力及ばず死んでも化けて出てくれるなよ。俺は悪くねぇ。

「しかし下世話なことを聞くが……大変じゃないのか？」
「まぁ、それなりに……？　ただ、鍛えてるから」

別に下半身をってわけじゃないぞ。体力的な意味でだ。まぁ、結果として下半身も鍛えられている気がするが。

「確かに鍛えてるようだな」
「やはり体力か……」
「婿殿になんて話をしてるんだ、お前らは」

猥談が始まりかけたところでバリトンの効いた渋い声が割り込んできた。咎めるような声音ではあるが、そこまで深刻な感じではな

い。呆れているという感じだな。

「ご当主殿、遅かったな？」

「ナザリスに一言言ってやらねば気が済まなかったんでな。すまないな婿殿。本当はあんな会合なんて蹴っ飛ばしてやりたかったんだが、強引にやられてしまってな。まったくどこから話が漏れたのか……」

俺のことを婿殿と呼んでくるナイスミドルの彼がウィルローズ本家の当主なのだろう。そう言えばさっき氏族会館で会合をしていた時に顔を見た覚えがあるな。

「ノイシュだ。ウィルローズ本家の家長だが……まぁそんなことは婿殿には関係あるまい。とにかく、ウィルローズの娘を娶る以上、婿殿は私の身内だ。父や叔父だと思って遠慮なく接してくれ」

「ありがとうございます。短い間ですが、世話になります」

これは器の大きそうな人だな、というのが第一印象だ。とりあえず素直に礼を言って頭を下げておく。礼には礼を、好意には好意を返すのが俺のやり方だからな。逆もまた然りだが。

「うむ、婿殿は気持ちの良い男だな。この家を我が家だと思って寛いで欲しい。今日は泊まっていってくれ」

「それは有り難いですが、御存知の通り宿は用意されていて」

「気にするな。あの金満主義者が勝手に用意したものなんて放っておけば良い。どうせ奴の傘下のホテルだしな。婿殿のご機嫌を取るためにどんな策を講じるかわからんぞ」

そう言ってノイシュさんが反吐でも吐きそうな渋面を作ってみせる。

「ご機嫌斜めだな、ご当主殿」
「当たり前だ。婿殿達とエルマちゃんは我が家を訪れるために今回足を伸ばしたのだぞ？　それを強引に氏族全体で歓待せねばならんだのなんだのと五月蝿いわ。主家だろうとなんだろうと我が家の内々のことに口を出すのは越権行為も甚だしい」

話を振られて怒りをぶり返したのか、ノイシュさんが額に青筋を浮かべてプンプンと怒る。しかし俺としてはエルマちゃん呼びが気になって仕方ない。エルマちゃん。ちゃん付けウケるわ。

「ヒロ様ヒロ様！　ちっちゃいエルマさん可愛いですよ！」
「ちょっ」
「兄さんもこっちきて見てみいや。ごっつかわええで」
「お人形さんみたい」

女性陣に誘われたので男性陣から離れて幼少時のエルマの姿を確認しに向かう。

「ま、待て！　待ちなさい！　ヒロは見るなっ！」
「あらあら恥ずかしがっちゃって」
「放してぇ！？」

慌てて俺の方に来ようとするエルマであったが、ウィルローズ本家のお姉さま達にがっしりと捕獲されて身動きが取れないようだ。今が好機……！

「ほら、見て下さいヒロ様」
「うわ、凄い可愛い」

ミミのタブレット型端末に表示されている幼少期のエルマは可愛さの塊のような存在だった。方の後ろまで伸びたサラサラの銀髪にくりっとした可愛らしい瞳。それにフリフリのお姫様みたいなドレスを着た美少女である。

「姐さんなら今でもこういうお姫様みたいな服似合うんとちゃう？」
「エルマさんって気品のある顔立ちしてるもんね」
「それ良いな。よし、今度そういう服を買ってやるか」
「前に私の服を買ってくれたようなお店とかで揃えてみますか？」

ふむ？　そう言えば前にミミとデートした時にそういう店に寄ったことがあったな。ミミも言わないとなかなか着てくれないんだよなー、ロリータ系の可愛い服。折角買ったのに。まぁ本人の趣味じゃないんだから強制するのもよくないんだけどさ。

「いっそ全員にそういう服を買って着てもらうか」
「えっ？　うちらも？」
「私達みたいなちんちくりんには似合わないんじゃ……」
「そんなことないと思うけどな。メイにも着てもらうか」
「ご主人様がお望みになられるのであれば」
「私は着ないからね！」

なんかエルマが叫んでいるが、ウィルローズ家のお姉様達を味方につければ目的の達成は容易いだろう。ふふ、俺は目的を達するためにあまり手段を選ばない男。いざとなればお姉様達に賄賂を渡してでも目的を達する用意が俺にはある。

今日のところはウィルローズ家にお世話になって、明日からどう動くかは後で相談するとしようか。考えついた手を使うなら、少しゆっくりしていくのもアリだしな。時間をかければかけるほどあいつらに有利になると思っていたが、意外とそうでもないかもしれな

いし。

#293　ショッピングの裏で（前書き）

遅れた上に短いのユルシテ―（∴3」∠）―（急な仕事でＭＰを使う羽目になった

#293　ショッピングの裏で

「それではこういう条件で？」
「ああ、そうだ。資金は十分足りるだろう？」

ウィルローズ家で一晩を過ごしたその翌日。俺達はローゼ氏族領の都市部にショッピングに来ていた。無論、目的は昨日話していたエルマにフリフリのお姫様ドレスを着せることである。ウィルローズ本家のお姉様達やお嬢様達をカネの力で懐柔し、嫌がるエルマを半ば無理矢理な形で連れ出してきたのである。

まぁ、今は女性陣のショッピングタイムなので、俺は独り待合スペースで傭兵ギルドと連絡を取っているわけだが。

「それは問題無いですね。でも、相場より少し高いですよ？」
「それは構わない。プラチナランカーがシブチンじゃ格好がつかないだろうからな」
「それは確かに……わかりました、では提示された通りの条件で募集しますね」
「頼んだ」

そう言って通信を切る。これで仕込みはよし。

「ヒロ様ヒロ様！　どうですか！」
「おー、似合う似合う。可愛い」

ちょっと俺の想像していたのとは違うが、可愛いドレスを着たミミを褒めておく。俺が想像していたのはフリルとかをふんだんに使ったかわいい系のドレスだったのだが、ミミが着ているのはどちら

かと言えば制服っぽいデザインのドレスだ。あー、なんだろう。軍服っぽいドレス？
しかし割とかっちりとした衣装だから、逆にミミの胸元が逆に強調されて凄い。でかい。ぱっつんぱっつんやぞ。

「もう、どこ見てるんですか」
「いやそれは見る。見るよ」
「んもー……ヒロ様のえっち」
「仕方ないね。男はおっぱいに引き寄せられるものだからね」

てしてしと胸元を叩いてくるミミの拳を甘んじて受けておく。えっちとか言って俺のことを叩きながらも本当に怒っている感じじゃないな。

「なんでミミがアレなのに私はこんなのなわけ？」
「姐さん似合ってる似合ってる」
「お姫様みたいですよ」

エルマが顔を赤くし、大変に不服そうな表情をしながらも整備士姉妹を伴って店の奥――試着室のある方向から歩いてくる。

「Ｏｈ……」
「何よ」
「言葉を失うくらい似合ってる。綺麗だ」
「……褒めても何も出ないわよ」

絞り出すような声でそう言って顔を赤くしたままエルマが俺から視線を逸らす。
エルマが来ているのは若葉色を基調としたドレスだ。肩も出てるし胸元も結構際どいんだけど、透ける生地のケープのようなもので

薄っすらと隠されていて……なんというか神秘的な雰囲気だ。
「兄さん、うちは？　うちは？」
「お姉ちゃん……」

ティーナとウィスカも方向性はエルマと似たような感じだな。ゆったりとした光沢のある生地で作られたドレスで、こちらも剥き出しの肩を透ける生地のケープのようなもので隠している。

「二人とも可愛いな。いや、綺麗だと言うべきか？」
「可愛いでええで。ほら、ティーナちゃん可愛いって言って？」
「はいはいティーナちゃん可愛いヤッター」
「急にぞんざいになんのやめーや」
「ウィスカも可愛いぞ。まるで妖精みたいだ」
「は、恥ずかしいですね」
「うちをさしおいていい雰囲気になんの禁止や禁止」

ウィスカと俺の間を遮るように立ち塞がってぴょんぴょんと跳ねるティーナの頭をわしゃわしゃと撫でてやる。折角セットしてもらったのにやめてーとか言っているが気にしない。
と、そんなことをしてじゃれついているうちにメイも店の奥から姿を現した。

「お待たせ致しました」
「おぉ……メイも凄いな」

宵闇色とでも表現するべきだろうか？　青みがかった黒い生地の豪奢なドレスである。黒っぽいドレスというと喪服を連想しがちだが、これは紛れもない盛装だ。ドレスの各所にあしらわれたフリルや星のように散りばめられた宝石の装飾が実に美しい。

「メイドには過ぎた衣装かと」
「いや、アリだろう。実にアリだ。買いだね」
「そうですか……ご主人様がそう仰られるなら」

そう言ってメイが目を瞑り、胸元に手を当てる。わずかに口角が上がっているから、微笑んでいるのだろう。注意を凝らしていないとメイの表情の変化に気付くのは難しい。
その後はウィルローズ家のお姉様お嬢様達も次々と現れた。未婚のお嬢様達はともかく、既婚のお姉様達は俺が褒めると角が立ちそうなので勘弁していただきたい。家に帰ってから旦那さんに大いに褒めてもらってくれ。というかこうしていて改めて思うが、エルフって本当に皆美人揃いだな。

「むー……私ももう少し細く」
「駄目だミミ、それ以上は言ってはいけない。もがれるぞ」
「もっ！？」

ミミが変な声を出して怯える。ああ、連れて行かれてしまった……達者でな、ミミ。
実際、エルフの皆さんはまぁ、体質的にそんなに大きくならないみたいだし、うん。何がとは言わないけど。大きいのは良いことだけど、それだけってわけじゃないしね。おっぱいに貴賤なしですよ。
あ、結局言っちまった。

「ふぅ……なんか疲れたわ」
「たまには良いだろ。こういうのが後々良い思い出ってやつになるんだよきっと」
「なにおっさんみたいなこと言ってんのよ。そこまで老け込んでないでしょ？」

「まぁそりゃな。エルマは交じりに行かなくて良いのか？」
「パス。疲れたからね。それより、さっきなんかこそこそしてなかった？」
「別にこそこそしてたわけじゃない。時間が空いたから手を打っただけだ」
「何？　あいつら対策で妙案でも思いついたの？」

エルマが俺に身を寄せて小声で聞いてくる。俺はその質問に頷き、答えた。

「真正面から戦うだけの戦力が足りないなら、集めれば良いだけだよなって話でな？」
「集めるって……なるほど。考えてみればそうよね。自分達の力だけでどうにかする必要なんてないものね？」
「そういうこと。そろそろリーフィル星系の封鎖が解かれたことを聞きつけた連中がわんさか来る頃だ。護衛付きでな」

戦力が足りないなら補えば良いってわけだ。正当な報酬を出して。

#293　ショッピングの裏で（後書き）

明日一回目のワクチン接種なので、数日使い物にならなくなる公算が高いです。
次回更新まで少々お待ち下さい―（∵3」∠）―（話を聞く限り、遅くとも水曜には復帰できると思います

#294　嘘は吐いていない（前書き）

Q. 遅かったですね？
A. 友人達と朝6時までゲームで遊んでいたのが原因のような気がしなくもないです。

ユルシテ―（：3」∠）―

#294　嘘は吐いていない

リーフィルⅣ――シータに降下して数日。俺達はウィルローズ本家の人々と交流を重ねたり、ローゼ氏族の縄張りにまで現れたミンファ氏族長を撃退（？）したり、お忍びで現れたグラード氏族長の娘、ティニアさんとお付きの二人とローゼ氏族領観光をしたりと、まぁ賑やかに骨休めをさせてもらった。

そして、今日はウィルローズ本家の人々に別れを告げ、いよいよ次なる目的地へと向かおうとクリシュナに乗り込んだわけなのだが……。

「気に入ったのか？　それ」

「なんだかデキる女みたいな感じしません？」

ミミがどこか軍服っぽいデザインを漂わせるドレス姿のまま、澄ました顔でドヤ顔をする。伊達眼鏡までかけて知的な雰囲気を演出しているのはなかなかの気合の入れようだな。

「まぁ、そうね。なんとなくだけど傭兵ギルドの受付さんみたいな雰囲気あるね」

あれも制服の一種だからな。ミミの着ている衣装も制服っぽい印象がかなり強いので、知的と言うかキャリアウーマン感というか、オフィサー感は出てるね。いつもの露出が割とギリギリなファッションも好きだけどね、俺は。

「形から入るのも悪くはないと思うけどね。私もそんな感じだったし」

「その頃の初々しいエルマの姿を是非見てみたいものだな」
「絶対嫌」

サブパイロットシートに座ったエルマがべーっと舌を出す。ほんのり頬が赤いのは初々しい頃の自分のことを思い出したからだろうか？　まぁ貴族のお嬢様が戦闘艦でいきなり実家から飛び出して、傭兵の世界に足を踏み入れたんだものな。それはもう最初の頃は色々なトラブルがあったことだろう。それでも結局数年でシルバーランクにまで登りつめているのだから大したものだと思うけど。

「ご主人様、荷物の積み込みは完了致しました」
「ありがとう、メイ。ティーナとウィスカは？」
「程なくこちらへと到着するかと」

そう言いつつ、メイがサブオペレーターシートに腰掛ける。まぁ、座ったところで彼女の仕事はないので、単に座席として座っただけなのだが。クリシュナはやろうと思えば一人でも問題なく操艦できる船なので、サブパイロットとしてエルマが、メインオペレーターとしてミミがいるだけでも運用要員は十二分に足りているのだ。

「ごめんごめん、お待たせやで」
「すみません」

メイに少し遅れてティーナとウィスカもコックピットに姿を現し、彼女達が改造したサブシートに収まった。

「それで、首尾はどうなの？」
「仕上げは上々ってところだな」

傭兵ギルドに出した依頼については既に全員に共有している。ま

ぁ、内容としては単純なものだ。リーフィルⅣで要人護送の個人依頼を受けたので、万全を期すために戦力を募りたい、という内容だ。
傭兵がギルドを通さずに個人から依頼を受けることはままあることで、傭兵ギルドに所属する傭兵はそういった依頼を完遂するために必要に応じて傭兵ギルドに手数料と傭兵への報酬を支払い、他の傭兵を雇うことができる。俺はその制度を利用して戦力を集めたわけだな。
条件としてはシルバーランク以下の傭兵を対象に拘束料金は相場の五割増し。宙賊などを撃墜した場合には賞金は撃墜した者に与え、戦利品に関しても可能な限り回収して撃破した傭兵のものとする。また、俺達はブラックロータスという母艦を持っているので、もし持ちきれないほどの戦利品が発生した場合はブラックロータスの倉庫区画を無償で貸し出すという契約にした。

「でも、結局は寄せ集めやろ？　それでその……クリムゾン・ランスやったっけ？　そいつらに対抗できるん？」
「どれだけ集まるかにもよるが、まぁ無理だろうな」
「だめやん」

クリムゾン・ランスはゴールドランクの傭兵船団で、船団としてずっと行動を共にしており、戦闘面でも連携を練りに練っているに違いない。シルバーランク以下の傭兵で戦力を補ったとしても、真正面からぶつかって勝てるかどうかは正直微妙だと思う。集まる数によっては圧倒できる可能性もあるけど。

「別に勝てなくても良いんですよ、この場合。そうですよね？　ヒロ様」
「そういうこと。流石ミミ、わかってるな」
「えへへ」

俺に褒められたミミがはにかんで見せる。ミミも傭兵の流儀というか、俺のやり方に慣れてきたな。多分、傭兵ギルドに依頼を出した件を伝えた時から色々と考えていたんだろう。

「どういうことですか？」

「えっとですね、今回の私達の勝利条件はあくまでもゲートウェイを使ってクリムゾン・ランスの追跡を振り切ることなんです。もっと言えば、そもそもクリムゾン・ランスが私達に戦闘を仕掛けられない状況にすれば勝ちなんですよ」

「んんー？」

ミミの説明にティーナが首を傾げる。傭兵を多数雇ったのに戦力としては心許ないという情報と、クリムゾン・ランスが戦闘を仕掛けられないという情報が噛み合わないようだ。

「あ、そっか。負けないとしてもクリムゾン・ランスの船に損害が出たら大損だし、そもそもお兄さんが雇った傭兵が一人でも逃げ延びてクリムゾン・ランスの凶行を傭兵ギルドや星系軍に伝えた時点でクリムゾン・ランスは終わりですね」

「はい、正解」

「おお……？　なるほど？」

ウィスカはミミの説明でピンと来たらしい。ティーナはまだあまりしっくり来ていないようだが。

まぁ、ウィスカの言った通りだな。戦力で劣るとしても、誰か一人でもクリムゾン・ランスの追撃を躱して星系軍や傭兵ギルドに通信可能な状態になった時点でクリムゾン・ランスは終わりだ。ゴールドランク傭兵としての地位は剥奪され、お尋ね者として傭兵や星系軍、帝国航宙軍に付け狙われることになる。

特に、傭兵ギルドは身内から賞金首を出すことを非常に嫌ってい

る。元傭兵の賞金首には帝国からの賞金に加え、傭兵ギルドから多額の賞金が上乗せされるのだ。俺もＳＯＬで遊んでいた時にはそういった高額賞金首を幾度となく撃破してエネルを稼いでいた。こっちに来てからはチェックする程度に留めて積極的に討伐はしてないけどな。危ないから。

高額賞金首は大半が元傭兵や元軍人で、乗っている船も宙賊艦とは比べ物にならないほど強力だ。その分撃破時に剥ぎ取れるパーツも超高額なものが多いのだが、いかんせんプレイヤーとそう変わらないか、下手するとより上位の装備を引っさげて襲いかかってくるので本当に危ない。追い詰められたら逃げやがるし。

無論、プレイヤーもやんちゃを繰り返せば同じように賞金首になる。誤ってＮＰＣや他のプレイヤーの船を撃沈しても大概は賠償金の支払いで済むのだが、それを踏み倒して凶行を繰り返せば普通に賞金をかけられる。所謂闇堕ちというやつだ。そういうプレイを好んでする人も世の中にはいる。当然、普通のステーションなどは利用不可能になる――どころか近づいただけで強力な防衛設備に撃たれまくることになるし、星系軍や政府軍、その他全プレイヤーから付け狙われることになるのでかなりのドＭ向けのプレイになっていたようだけど。

「そういうわけでな。勇気ある傭兵諸君に協力してもらってこの場を切り抜けようというわけだ。別に俺達のだけの力で真正面から戦う必要なんてどこにもなかったわけだな」

「なるほどなぁ……でもなんかずっこくない？」

「ティーナ」

「なんや？」

「最終的に生き残った奴が勝者だ。名誉や誇りのために死ぬのはただの間抜けだよ」

「それはそうやな。でも傭兵ギルドに嘘ついてええんか？」

「嘘？」

「リーフィルⅣの要人なんて乗ってないやん？」

そう言ってティーナが再び首を傾げるが、俺はニヤリと笑って口を開いた。

「何を言っているんだティーナ。俺の隣に由緒正しい家柄の貴族のご令嬢が乗っているだろう？　俺は何も嘘は吐いてないさ」

「……まぁ、それは確かに嘘やないな」

何故だかティーナにジト目を向けられている気がするが、気にしない。気にしないったら気にしない。勝てば良かろうなのだ。

#295　策の成果（前書き）

Q. 遅かったですね？

A. ヘンダーソン氏の福音をが発売したから読んでました……｜（；3」∠）｜（責任をなすりつけるスタイル

#295　策の成果

クリシュナごとブラックロータスに乗り込み、そのままリーフィルⅣから宇宙に上がった俺達は真っ直ぐにリーフィルプライムコロニーへと向かった。

「着いてきてるか？」
「ごく小さいですけど、ブラックロータスの亜空間センサーには反応がありますね。ここです」
「ああ。着いてきてるわね、これ」

亜空間センサーは超光速航行中に超光速航行中の他の船の反応を捉えることができるセンサーだ。そのセンサーが俺達の後を追うように追随してきている小型航宙艦の反応を検知している。残念だったな、ブラックロータスを組む際にスペース・ドウェルグ社には「一番良い装備を頼む」と言ってあるんだ。いくら小型偵察艦と言ってもその反応を完全に隠して追尾することはできんよ。

「やっぱり粘着されてんなぁ。自分でもちょっと神経質になり過ぎたかと思っていた部分もあったんだが、やっぱどうにも予感が当たっている気がしてならんな」
「そうね。私もそう思ってたけど、この粘着っぷりを見るとちょっと笑えないわね」
「たまたまってことも無さそうですしね……」

亜空間センサーで捉えた情報によると、ブラックロータスを追尾している船の所属は傭兵ギルドで、船籍ＩＤはシータ降下時に星系軍に協力していた偵察艦である。つまり、クリムゾン・ランス所属

の偵察艦だな。
　ちなみに、俺達は再びのクリシュナ内待機である。笑わば笑え。相手がこちらを殺し得るだけの能力を持っていることがわかっているのに油断するのはただの間抜けだ。

「でも、こうなると流石に胃が痛くなりそうですね。この先ずっとこの調子ですか？」
「いいや、ゲートウェイさえ超えてしまえばそれまでだな。今後クリムゾン・ランスの船をセンサーでキャッチした際にアラートを鳴らすようにしておけば問題はないさ。というか、今までだって後を尾けてくるような船には注意してただろ？」
「それはそうですね」

　これは俺がＳＯＬをプレイしていた時からの習慣のようなものだ。当然ながら、ＳＯＬはオンラインゲームであったので様々なプレイヤーがいた。俺のように緩く友人と繋がりつつソロでも楽しめるコンテンツで遊んでいた人もいれば、チームを組んで深宇宙探査や辺境探査、未探査惑星の調査をしていた人達もいる。
　無論、中にはチームを組んで宙賊プレイをしていた人達もいる。そういう連中の常套手段は一見無実かつ無害に見える『戦闘能力は低いが足が早い偵察艦』などをコロニーの近くに置いて獲物を選び、対象の行動パターンを複数人で調査して襲撃ポイントを設定、実行する時には最大火力をもって短時間で獲物を撃破し、めぼしいものを漁って星系軍などが駆けつけて来る前に姿を眩ませるという方法だった。
　今俺達の後ろにピッタリと張り付いてきている偵察艦の動きを見るに、やはりクリムゾン・ランスの連中に獲物として見られているとしか思えない。やはり手を打っておいて正解だったな。

『ご主人様、間もなくリーフィルプライムコロニーに到着します』

「了解。それじゃあ俺達の騎兵隊と合流するとしますかね」

☆★☆

「アイアン三人、ブロンズ四人、シルバー二人の計九人ね。まぁ上々じゃないか？」
「アイアンとブロンズは賑やかし程度にしか期待できないけどね」
「それでも宙賊に比べればずっと強いですよね？」
「そりゃそうだ。でも今回想定される相手はクリムゾン・ランスの連中だからな。まぁ、最悪俺達以外の誰かが逃走に成功するか、或いは俺達が逃げるための盾になってくれれば良いわけだし」

我ながらゲスいことを言っている自覚はあるが、そもそも有事の際はそう扱われるのが傭兵の仕事だしな。無論、そうならないように立ち回るつもりではあるが、それが必要となればそうすることを躊躇うつもりはない。

ちなみに、今回の依頼費用としてアイアンランクの傭兵は一日あたり3万エネル、ブロンズランクの傭兵は一日あたり5万エネル、シルバーランクの傭兵は一日あたり8万エネルを提示している。

出発時間は今からちょうど四時間後で、拘束日数はハイパーレーン内の航行時間を含めて丸二日――四十八時間を予定している。何もなければ二十四時間もあれば到着する筈だが、その場合でも二日分の報酬を支払う契約としてある。更に宙賊などを撃破した場合には賞金も戦利品も撃破者が総取り。自分の船に積めない分は可能な限りブラックロータスがスペースを提供するという良条件の依頼だ。

ゲートウェイがある目的星系はハイパーレーンで五星系先というさして遠くもない星系だし、リーフィル星系のように自然豊かな居住惑星がある星系に商船が来る理由といえば、ほぼ間違いなく居住惑星上で作られた作物や自然工芸品などの取引であるわけで、基本的にそういった商品のやりとりには短くとも一週間から二週間程度

の時間がかかる。その間も傭兵を雇い続ける商人などいないので、このリーフィル星系まで民間商船を護衛してきた傭兵連中というのはこの星系から離れる依頼を求めている事が多いわけだ。その需要を見込んだ依頼を俺は傭兵ギルドに流したわけだな。

目的地であるゲートウェイがある星系というのは基本的に商取引が盛んな星系であることが殆どだし、帝国航宙軍も戦力を展開しているので治安も大変によろしい。治安が良くて商取引が多いということは民間商船の行き来も活発ということで、アイアンランカーやブロンズランカーにとってはメシの種が多い星系ということでもある。難易度低めの護衛依頼が多いからな。

シルバーランカーにとっても治安の良いゲートウェイ周辺星系から治安のあまりよろしくない辺境星系への護衛依頼が転がっている場所でもあるので、やはりメシの種には困りづらい星系である。実際、ＳＯＬでもゲートウェイ周辺の星系は栄えていたし、その辺りを根城にしているプレイヤーは大変に多かった。宙賊狩りをするにはちょっと平和すぎて都合が悪いから、最初の頃はともかくある程度慣れてからは俺はあまり近寄ることがなかったんだけどな。

「盾扱いは流石に酷いんじゃ……？」

「護衛依頼ってのはそういうもんよ。最低でも依頼主の船を逃がすのが傭兵の仕事だからね。上手く行けば襲われなくてもただ随行してるだけで万単位の報酬を得られるんだし。襲われた時だって時間さえ稼いでいれば星系軍が駆けつけてくるわけだしね」

「……なるほど」

「星系軍がすぐに駆けつけてこないような星系で宙賊に襲われて、それを返り討ちにできるようになったらブロンズランカー卒業ってところだな」

「……そう考えると、今回の依頼ってかなりブラックじゃないですか？」

おっと、気付いてしまったか。そう、今回俺が出した依頼は下手をすれば宙賊どころかゴールドランク傭兵団が襲いかかってくるかもしれない滅茶苦茶に危ない依頼である。しかし確実に襲ってくると確信しているわけではないのでその旨を依頼内容に記すことはできない。実際に奴らが襲ってくるかどうかは未知数だからな。そもそも俺達――というか俺の自意識過剰である可能性すらある。

「ミミ、世の中は不平等に出来ているものさ」
「美味しい話には裏があるってことね」
「それで良いんですか……？」
「俺達は正義のヒーローじゃなくて生き汚い傭兵だからな。まぁ、心配しなくてもこれだけ頭数を揃えれば仕掛けてくること自体無いと思うぞ」

そもそも、襲撃されるようならアイアンランカーの連中にはとっとと逃げて星系軍なり帝国航宙軍なりを呼んでもらうつもりだしな。俺達をただ殺すだけじゃなくて、捕らえて見せしめにしようってんならいきなり対艦反応魚雷とか反応弾頭ミサイルとかを湯水のようにぶち込んでくるような手は打たないはずだ。ならこっちはアイアンランカー達が逃げて応援を呼ぶ間だけ耐え忍べば良い。他にもその場で打てる手はいくつかあるしな。

結局のところ、星系軍や帝国航宙軍が異常を察知して駆けつけてくれればそれで良いんだ。何も星系軍を呼び寄せる方法は通信だけじゃないんだから、なんとでもなるし、してやるさ。

#296　出港（前書き）

間に合った（　ω　）

#296　出港

少しの間だが行動を共にする傭兵達と軽くコミュニケーションを取ってから出発することにする。
そういえば、臨時とはいえ船団のリーダーとして行動するのはこっちの世界ではこれが初めてか。まぁ、全員初心者ってわけじゃあるまいし、リーダーだからってあれこれと世話を焼いてやる必要は無いと思うが。

「依頼文にも書いてあったように、最終的な目的地はゲートウェイがある五星系先のエイニョルス星系だ。ルート設定データを共有するので、各自航行システムにインプットしておいてくれ」

わかりました、了解、うっす、などめいめい返事が返ってくる。無言の奴もいるが、無理に返事をしろとは言わない。言うことに従わず逸れたらそのように傭兵ギルドに報告するだけだからな。

「超光速航行、及びハイパードライブは一番質量のデカいブラックロータスに同期して行う。ブラックロータスからまとめて同期申請を行うから、承認してくれればあとはこちら任せで構わない。ただ、ハイパードライブ中はともかく超光速航行中はインターディクトからの襲撃が行われる可能性がある。航行そのものはこちら任せで構わないが、緊急時には即応できるようにしておいてくれ。さもないと戦場でぼっ立ちしている間に爆発四散しかねんからな」

そう言ったところで数人から質問が飛んでくる。要約すると、通常の宙賊からの襲撃以外に何か襲撃してくるような相手――それもこうして手勢を集めなきゃならないような――に心当たりがあるの

か？　という内容だ。

「知っているかもしれないが、少し前に行われた赤い旗掃討作戦の発端はこのリーフィル星系のリーフィルⅣに対して宙賊どもが二度に渡る降下襲撃を敢行したのが切っ掛けでな。どう考えても自業自得なんだが、リーフィル星系のエルフは赤い旗の残党に逆恨みされている可能性がある。あと、俺も掃討作戦でそこそこに活躍したから恨まれている可能性が高い。つまり、お礼参りが来る可能性がゼロではないから念には念を入れたってわけだ」

という俺の説明に概ね納得してくれたようだ。まだ疑ってるというか、信用しきれないという態度を見せているのも数人居るが、そこは想定内。これで危険を感じ取れるこの数人は良い鼻をしている。

まぁ、俺も傭兵達に怪しまれないように報酬はちょっとお得くらいで済ませて、かつ船団を組むということで依頼を物色する傭兵が感じるリスクを低減。更に討伐賞金、戦利品に関しては大幅に譲歩することでもし宙賊が襲ってきたらボロい儲けになりそう感を演出したんだけれども。

「あの……なんだか騙しているような」

通信を終えると、ミミが眉間に少し皺を寄せて俺の顔をじっと見つめてきた。

「騙してはいない。というか公然とクリムゾン・ランスが怪しいと言うのもちょっと危ないからな」

「私達だって確信を持っているわけじゃないしね」

地雷案件を発注する側の重圧にミミの精神が悲鳴を上げているようだが、俺とエルマにとってはなんとも思わない日常の光景でしか

ない。この依頼を遂行するにあたって、もし誰かが死んだとしてもそれは死んだ奴の腕と運が悪かったってだけの話だからな。
アイアンランカーだろうがブロンズランカーだろうがシルバーランカーだろうがなんだろうが、傭兵として活動している以上はプロなのだし、自分の命を賭けて傭兵という仕事をしているのだ。
無論、俺としても一時的なものとはいえ同じ船団として活動する仲間なのだから、無為に死なせるつもりはない。有事の際は最大限仲間が撃墜されないように立ち回るつもりだ。だが、最終的に自分の命を守るのは自分自身である。俺はそのために最大限の努力をしている。彼等を雇ったのもその一環だ。

「ミミ、俺は物語の英雄（ヒーロー）なんかじゃなく、ただの傭兵だ。そして聖人君子でもない。だから自分と皆の命を守るためなら他人の命を犠牲にすることを厭うつもりはないぞ。あと、俺だって雇った傭兵連中を完全に盾にして――というか捨て駒にして難を逃れようとは思ってないからな？　万が一襲撃されたら、可能な限り抗うぞ」
「そうですか……」

どうもまだ納得できていないようだ。うーん、これまで楽勝な戦闘ばかり体験させてきたから、ちょっと認識がズレてるな。どう説明したものか。

「ミミ、勘違いしているようだからはっきりと言うけど、いくらヒロが変態的な機動を使いこなす腕前を持っていて、クリシュナも規格外の性能をもっているからと言ってもマリーが率いるクリムゾン・ランスと正面からやり合うのは無理だからね？　今までミミはベレベレム連邦の軍隊や結晶生命体、それに御前試合なんかでヒロが軽く勝利をもぎ取ってきたのを間近で見てきたわよね？」
「はい」
「今までヒロがそういう場面で勝利を掴めたのは、基本的にヒロが

攻撃側、かつ奇襲による混乱や変態的な機動で常に自分が戦闘の流れを支配してきたからよ。ベレベレム連邦軍への初手なんてアレだったしね」

アレというのは結晶生命体をどこからともなく呼び寄せるという特級の危険物である歌う水晶のことである。確かにあの歌う水晶による結晶生命体召喚が無かったら、あの時ターメーン星系に展開していた星系軍と傭兵の戦力だけじゃベレベレム連邦を撃退することは不可能だっただろうな。

「でも、今回の相手は最悪の場合ゴールドランカーの傭兵船団よ。宙賊なんかとは比べ物にならない性能の船が、相応の技量でもって高度な連携戦を仕掛けてくるの。いくらヒロの変態機動とクリシュナでも、正面から戦ったら勝ち目が無い。そういう相手なのよ、ゴールドランカーの船団ってのはね」

「俺の代わりに説明してくれてありがとう。でも三回も変態機動って言う必要あった？」

「あったわ」

強い意志を感じさせる気迫でそう言われるとこれ以上文句も言えない。そっかー、必要だったかー。なら仕方ないね。うん仕方ない。

「でも、ヒロ様ならそんなこと言いながら軽く捻ったりしちゃいそうじゃないですか」

「それはそう。私も自分で言っておいてなんだけど、実際にクリムゾン・ランスの連中に絡まれたとして、本当に勝てないのかってのはちょっと疑問なのよね」

そう言って二人とも俺の顔をじっと見つめてくる。

「一対多の戦闘は得意な方だが、相手の技量がはっきりわからないし、機体の性能もざっくりとしか予想できないから正直なんとも言えん」

戦ってみないとわからないというのが正直なところだ。単純な総火力、シールドを含めた総耐久力を考えればどう考えても勝てない。実質的に回避不能のレーザー砲でバンバン攻められたらいくらクリシュナのシールドが高性能とは言っても攻撃を受け止めきれない可能性が高いからな。最後の砦として装甲もあるにはあるが、これもやはり小型艦なのでそこまで信頼はできない。

「何にせよ戦いにならないのが一番だ」

「そうですね、それが一番です」

「そう上手くいくかしらね？」

「難しいだろうなぁ」

正直に言うと俺は完全に諦めている。だからこそこうして傭兵を雇って少しでも有利な状況を作ろうとしているわけだ。なんでもかんでもクリシュナ一隻でなんとかなるならこんな苦労はせんでも良いんだがな……世の中上手く行かないもんだ。

『ご主人様、間もなく出港予定時刻です』

「わかった。船団各位、出港申請を行なってポイントアルファに集合だ。ミミ、出港申請を頼む」

「はい！」

元気よく返事をして出港申請を始めるミミから視線を外し、クリムゾン・ランスが停泊していた空間に視線を向ける。既にその場所は空になっており、代わりに別の船が何隻か停泊している。どうやら俺が依頼を出した翌日には揃って出港していったらしい。

だが、四時間前にリーフィルⅣから宇宙に上がってきた時には俺達の動向を探る小型偵察艦がリーフィルⅣの衛星軌道に張り付いていた。奴らが出ていったのは遅くとも二日は前なのに、だ。

「数を見て諦めてくれねぇかなぁ」

「諦めてくれると良いわね」

俺のぼやきにエルマが肩を竦めながら答えた。本当に心からそう思うわ。

#297　いつか見た罠（前書き）

ちょっと体調が悪くて一時間ほど昼寝をしました（ ̄ω ̄）（
ユルシテ

#297　いつか見た罠

「各艦の集結を確認。ブラックロータスからの同期申請……受諾完了しました」
「了解。ジェネレーター出力は即応できるよう戦闘出力を維持」
「アイアイサー。でも、仕掛けてくるかしらね？」
「どうかな。あまり余裕はない筈だから、仕掛けてくるとしたら次かその次だろうな」

ゲートウェイが存在するエイニョルス星系はここから五つ先の星系だ。基本的にゲートウェイが存在する周辺三星系というのは大変に治安がよろしい。何故なら数十レーン分の移動を一瞬で済ませられるゲートウェイという存在は銀河帝国にとって経済的にも軍事的にも重要な拠点であるため、その周辺の治安が宙賊の活動などによって脅かされている状態というのは非常によろしくない。

あと、単純に帝国の威信にも傷がつくというのもある。ゲートウェイの周辺すら満足に治安維持できないとか完全に他国の笑いものになってしまうからな。なので、ゲートウェイ周辺というのは非常に治安が良いわけだ。星系内で戦闘なんぞ起きようものなら、まず間違いなく一分以内に帝国航宙軍の精鋭部隊がかっ飛んでくる。

なので、クリムゾン・ランスの連中が俺達に襲撃を仕掛けることができるのは今俺達が出発しようとしているリーフィル星系、その次のミラブリーズ星系、更にその次のホルミー星系のどれかだけだ。その先の星系では仕掛けても一分以内に帝国航宙軍の精鋭部隊がかっ飛んできて、俺達諸共拘束された上に先に仕掛けた方が処分を受けるという流れになるだろう。

「カウントダウン開始。間もなく超光速ドライブ起動します」

「はいよ。まぁ緊張しすぎず、気を抜かずって感じで行くしかないな」

3、2、1、とメインスクリーンにカウントダウンが表示され、0になった瞬間に轟音と共に遠くに見える星々が後方へと流れ始めた。いつ見ても超光速航行中の外の景色は綺麗だな。ハイパーレーン航行中の景色はサイケデリックに過ぎて気持ち悪くなるけど。

「亜空間センサーに反応は？」

「うーん……ブラックロータスのセンサー情報を見ているんですけど、それっぽい反応はないですね」

「偵察艦も本隊に合流したんかね？」

「どうかしら。まぁ少なくとも四時間は早く行動しているでしょうから、とっくにこの星系から移動していてもおかしくはないわね」

合流していたとしても、戦闘に加わる可能性は極めて低いしどうでも良いっちゃどうでも良いんだけどな。俺達も動き始めたわけだし、これ以上監視を続けても意味がない。しかしもう見ていないということは、見る必要が無くなったということでもある。やっぱり仕掛けてくるか？　いや、あの偵察艦が持ち帰った情報を聞いて襲撃を諦める可能性もあるか。

『間もなくハイパーレーン突入口へと到着。引き続きハイパードライブを起動します』

話しているうちにメイから通信が入る。そうして間もなく船団がハイパーレーンへと突入した。

「でも、いくら帝国航宙軍の勢力圏外って言っても普通に星系軍は来ますし、そうそう襲撃なんてできるものでしょうか？　通信を妨

害する装置は確かにありますけど、それにしたってリスキーですよね？　どうやったって目立ちますし」
「それはそうだな」

俺の知る限り、ＳＯＬに実装されていた通信妨害装置は簡単に言えば通信に使う周波数帯に大出力の通信波を放出して電波障害を起こさせるものだ。当然ながら使えばすぐに星系軍にバレるので、星系軍が駆けつけるまでに手早く対象を仕留めなければならない。だから俺はデコイになる傭兵を雇って、戦闘時間を引き伸ばすことによって対抗しようとしているわけだが……。

「そもそもの目的を切り替えたとしたら、マズいな」
「目的を切り替える？」
「俺達を捕らえて見せしめにするって方針を切り替えて、とにかく無惨に殺すみたいな方向に舵を切ったとしたらちょっとマズい。嫌な予感がする。いや、もしかしたら最初から方針を勘違いしていたのか……？」
「それは確かに嫌な予想だけど、それにしたって襲撃する時に私達を優先的に狙ってくるとかそれくらいしか方法無くない？」
「いいや、ある。お尋ね者にならずに俺達に無残な死を押し付ける方法はある」

猛烈に嫌な予感がしてきた。

「ハイパーレーン移動中に後戻りってできねぇかな……」
「できませんよ……というか、ヒロ様がそんな事を言うくらい嫌な予感がするんですか？　私怖くなってきたんですけど」
「奇遇ね、私もよ。それで、どんな可能性を思いついたの？」
「確証はないけど、二人とも一度その光景を見てるぞ……ミミ、メイに通信を繋いでくれ」

「わかりました」
「一度見ている……？」

エルマが怪訝な表情で首を傾げているが、きっとすぐに思い当たるだろう。あの方法なら自分の手を汚さずに対象を始末できるからな。

☆★☆

極彩色のハイパーレーンを駆け抜け終え、ブラックロータスの巨体を先頭に俺達の船団が通常空間へと帰還する――と同時に超光速ドライブのカウントダウンと、前方で何かが爆発したのが見えた。畜生、やっぱそう来たか。

「っ！」
「うっ……！」
「ああ、もう！」

同時に脳内を掻き回す金切り声のようなものが響き渡る。真空に近い宇宙空間も、完全に気密が保たれている船外殻も、強固な装甲やシールドすらも突き抜けて。こりゃ間違いなく歌う水晶を使いやがったな。しかし、この金切り声みたいなやつは多分普通の音じゃないんだろうな。もしかしたら精神波とかそういう感じのサイオニック系の波動なのかもしれん。

「間に合うか？」
「微妙……いやちょっと無理そうですね」

痛む頭を押さえつつミミに聞いてみるが、その表情は厳しい。俺もミミが見ているセンサーの反応を確認してみるが、既に空間を引

き裂いて結晶生命体が出現し始めている。その数は非常に多い。俺達の戦力だけで全ての結晶生命体を撃破するのはかなり骨が折れるだろう。

「仕方ない……メイ、プランBだ。各機は引き続きブラックロータスの護衛を行なってくれ」

『承知致しました。超光速ドライブ、チャージ完了まであと三十秒です』

「了解」

超光速ドライブのチャージ時間は全体質量が大きければ大きいほど伸びる。元々ブラックロータスはクリシュナとは比べ物にならない質量を持つ船だし、今は同期状態で護衛の船も引き連れているので、超光速ドライブのチャージ時間は更に伸びている。もし、チャージ中にシールドを破られて装甲や船殻にダメージを負うと、超光速ドライブのチャージをキャンセルされることすらある。

本来のプランはワープアウト後、即座に超光速ドライブを起動して危険な宙域を離脱するというものであったのだが、それが上手く行かないと予想される場合には俺がクリシュナで脅威を足止めしてその間にブラックロータスは離脱するというプランBを決行するとハイパーレーン内を航行中に打ち合わせしておいたのだ。クリシュナ以外の船は引き続きブラックロータスを護衛するというのも雇った傭兵達には了解を取り付けてある。

「派手にやるぞ」

超光速ドライブの同期状態を解除しながらウェポンシステムを立ち上げる。初手はド派手にやるとしよう。敵の注意を引きつける必要があるからな。

「わかりました。船団の進路上にいる結晶生命体をピックアップします」
「サブシステムはいつでも。しかしまた結晶生命体か……できればもう関わり合いになりたくなかったんだけど」
「縁があるよな」

機体を加速させながら対艦反応弾頭魚雷の炸裂距離を設定する。全部撃ち切ると大型に対処できなくなるが、まぁ大型の始末は駆けつけてくる星系軍に任せればいいだろう。そんなに数が出てくるとは思えんし、進路上の中型さえ始末してしまえば問題ない。

「そら行けっ！」

二発の反応弾頭魚雷を発射し、更に加速しながらもう二発。炸裂地点はブラックロータスを中心とする船団の進路上だ。まずは範囲攻撃でブラックロータスと傭兵達の船が離脱するための道を空ける。

「結晶生命体が動き始めました！」
「進路上に出てきそうな敵を優先して叩くぞ。一発当てて注意を引くだけでいい」
「はいはい！　重レーザー砲はこっちでやるわよ！」
「任せた」

俺は戦闘機動と艦首に固定されている二門の散弾砲を担当し、エルマに四門の重レーザー砲の火器管制を担当してもらう。クリシュナの重レーザー砲は射撃可能範囲が広いから、やろうと思えば四つの目標を別々に狙う事ができる。通常の戦闘では火力を集中した方が有利だからまず使わないが、今回のように一隻で多数の注意を引き付けなければならない時には有効な機能だ。

「反応弾頭、炸裂します！」

一発目の対艦反応魚雷が炸裂して広範囲の結晶生命体を消し飛ばし、残り三発の対艦反応魚雷も次々に爆発して空虚な宇宙空間に光の華を咲かせる。大量に砕け散った結晶生命体の残骸がキラキラと恒星の光を反射して実に美しい。

「素敵なパーティーの始まりだな」

「どこも素敵じゃないわよ！」

ははは、こういうのは楽しまないと損だぞ。

#298　死地（前書き）

今日は余裕のある投稿でした（　ω　）（ドヤァ

#298　死地

「今回はいつもの無理無理ってやつはやらないのか？」

四方八方から突っ込んでくる結晶生命体をひらりひらりと避け――いや、姿勢制御スラスターを最大出力で小刻みに噴射しているからひらりひらりというのは不適切かもしれない。むしろズヒャァ！　とかドヒャァ！　のほうが適切かもしれない。

「流石に三回目ですからね……」

戦闘に集中しているので流石にミミの顔色は窺えないが、声色からして完璧に平常な状態とは言い難いようだ。まぁ、実のところ俺も余裕綽々ではなかったりするのだけども。

条件によっては銀河帝国の侵略艦隊に大打撃を与えるほどの結晶生命体の群れだ。仮に真正面からぶつかり合い、攻撃をまともに受けたりしたら小型艦であるクリシュナではひとたまりもない。一つ間違えば海の藻屑ならぬ宇宙のスペースデブリ――にすらならず、結晶生命体に同化吸収されてゲームオーバーである。

そんな状況下でブラックロータスとその護衛の傭兵達はなんとか超光速ドライブを起動し、この場から逃げおおせていた。今回はこういった自体が起こる可能性をワープアウトする前から考えて、事前にどう行動するか決めておいたからなんとかなった。だが、これが全く想定していない状態であればターメーン星系を侵略すべく攻め込んできたベレベレム連邦の侵略艦隊と同じ末路を辿っていたことだろう。

「ってか動きすぎ！　まともに狙えないんですけど！」

「ははは、狙わなくても適当にぶっ放せば当たるだろ」
「笑ってないでとっとと群れから抜け出しなさいよ！　シールドセルだって無限じゃないんだから！」
「鋭意努力はしている」

エルマの言う通り、ブラックロータスが戦域を離脱したのであればクリシュナがここに留まる理由はない。これが小集団の結晶生命体なら殲滅して星系軍に報告して金一封を強請るところであるが、大型種、中型種、小型種合わせて軽く五百以上はいるこの大集団をクリシュナ一隻で殲滅してのけるというのはあまりに骨が折れる。時間をかければできなくはないだろうが、五時間も六時間も集中力を保って戦闘し続けるのはあまりにダルい。

では何故脱出もせずにぐずぐずと手をこまねいているのか？　というと、それはあまりに四方八方を分厚く囲まれてしまったせいで、集団から抜け出すのに苦労しているのである。今のクリシュナは殺意――あるいは食欲かもしれない――をもって襲いかかってくる結晶の迷路のど真ん中にいるようなものだ。しかもその迷路の構造は結晶生命体の動きによって千変万化するため大変に抜け出すのが面倒くさい。

「まぁ手こずってる間に助けが来るだろうし、そこまで焦らんでも大丈夫だろ」
「それはそうかもしれませんけど、この光景は心臓に悪いです……」

ミミの不安そうな声を聞きながら散弾砲を発射して真正面の小型結晶生命体を数体まとめて砕き、それよって発生した僅かな隙間にクリシュナを滑り込ませて真横からの突進を回避する。

増援に関しては対艦反応弾頭魚雷を四発も炸裂させた上、この場から脱出したブラックロータスとその護衛が星系軍に事情を伝えてくれるだろうから、確実に来ると考えていて良いだろう。ハイパー

レーンの突入口付近は星系軍も特に注意して警戒網を敷いているはずだからな。

『苦戦しているようだねェ……手を貸そうかァ？』

と、救援の事を考えつつ襲いかかってくる結晶生命体をいなしていると、粘着質な嗜虐性を滲ませる聞き覚えのある声が聞こえてきた。この声は間違いない、クリムゾン・ランスのマリーの声だ。

「どっから見てるんだか知らんが、下手に手を出すと火傷するぞ」

『おやァ？　こいつは意外だねェ。心配してくれるのかい？』

「ソウダヨー、俺は美人には優しいんだ」

大嘘である。外部から攻撃が飛んできて結晶生命体どもの動きが乱れるとかえって危ないから手を出して欲しくないだけだ。まぁ、半分くらい向こうで引き受けてくれるなら万々歳なんだがな。

『はっはっは、その心にもない言葉、いっそ清々しいねェ？』

瞬間、途轍もなく嫌な予感を感じた俺は結晶生命体に接触するのも厭わずにサイドスラスターを噴かしてクリシュナを真横に移動させた。慣性制御機構で相殺しきれない程の急な加速に首を横に持っていかれそうになり、更にシールド越しに小型種の結晶生命体と接触しその反発で今度は逆に首を持っていかれそうになる――が、今までクリシュナが存在した空間を紅と基調とした虹色の閃光が貫いたのを見て、俺の判断が間違っていないことが確信できた。

『おやァ？　すまないねェ。援護射撃をしたんだけど、結晶生命体が多すぎるせいで危うく誤射しちまうところだったよォ』

「このクソアマ……」

「な、なんですか今の！？」
「巡洋艦か、下手すれば戦艦の主砲並みの出力だったわよ」
今の一撃はあのクリシュナと似た雰囲気を持つ真紅の機体に装備されていた大口径砲によるものだろう。なるほど、あの機体のコンセプトはさしずめ高機動性と強烈な一撃の両立――戦艦の主砲が小型艦の速度と大きさで動き回ったら強くね？　といった感じのものだろうな。
実際どの程度の威力と射程を持ち、機動性がどの程度のものかはわからないが、運用次第では強力だろう。だが、あれだけ船団を組んで護衛をつけているってことは本体の機動性と格闘戦能力はさして高くないものと見た。
そんなことがわかったからってこの状況じゃ何にもできねぇけどな！　畜生め！
「シールドは？」
「全損はしてないけど、シールドセルを使わされたわ」
「クソが」
シールドセルは減衰しつつあるシールドを急速にチャージするサブシステムだ。シールドを全損する前に使わなければいけないので、使うタイミングを誤ると抱え落ちしかねなかったりと実は結構使い所が難しい。当然ながら消耗品で、一度に積める数にも限りがある。視界の隅でちらりと残量を確認する。残りは三つか。
「あ、でも今の今の一撃で包囲に穴が空きましたよ！」
「ダメだ。あんなところに飛び込んだら狙い撃ちにされかねん」
ロックオン警報が無かった。恐らく直接照準による狙撃だな。クソ、完璧にロックオンなしだと明確にこっちを狙ったって証拠が残

らねぇ。これだともし奴の狙撃に当たっても『流れ弾による事故』で処理されかねん。
しかも、結晶生命体に囲まれているせいでセンサーの効きが悪い。大まかな方向はわかっても、どのくらいの距離から撃ってきているのかも、相手の現在位置もわからん。殺意マシマシの壁の外から壁を貫通する大砲で狙撃してくるとか、お前性格悪過ぎんか？

『んン～、どうしようかねェ？　援護射撃をしてやりたいけど、誤射しちまったら大変だからねェ？　結晶生命体の群れに阻まれてセンサーもまともに通らないしさァ？』
「白々しいなオイ」
『んふふ……そォら、援護射撃するから、ちゃんと避けなァ？』

嗜虐心を隠そうともせず声の主――マリーがそう宣言し、背筋に粟立つような感覚が襲いかかってきた。まずい、ここはまさしく死地だ。

#299　I barely escaped death.（前書き）

寝坊しました（ ，ω，　）（まぅんとあんどぶれーどばなーろーどがたのしすぎる

#299　I barely escaped death.

「……気味が悪いねェ」

また私の狙撃が外れた。これで八発目。八発目だ。この私が、これ以上無いキルゾーンに追い込み、結晶生命体をけしかけることによって動きまで制限させている状態だというのに、八発も外した。

「外したわけじゃないんだよねェ」

断じて私は外してはいない。トリガーを引いた瞬間、確実に当たるという確信があった。だが、不思議なことにあの男はその瞬間に緊急回避を行なって逃げてしまうのだ。

私が乗っているこの機体、『アンダル』が装備している『虹』はオンリーワンの特殊な兵装だ。射程は長大、威力も極大。流石に光速で着弾するレーザー砲には少し劣るが、発射から着弾までが早く、レーザーと違って対物貫通力が高い。通常のレーザー砲は対象の表面を蒸発させて爆発と衝撃波を発生させ、破壊する兵器だ。だが、この『虹』は爆発を起こさずにただ対象を灼き貫く。

破壊力には劣るが、貫通力が高いので機関部やコックピット、メインスラスターや弾薬庫などの重要区画を抜くことさえできれば一撃必殺を狙うことも可能だ。

「まるで殺気を読んで避けているような……まさか、某ロボットアニメのエスパーじゃあるまいし」

あの額のあたりに電流のようなものが走る独特のエフェクトを思い出して苦笑いする。流石にあのアニメの主人公みたいに撃たれる

一瞬前には既に回避行動を行なっているような化け物を相手にしているとは思いたくない。

「思いたくないんだがァ……チッ」

九発目。また外れた。いや、避けられた。これはいよいよあの機体――クリシュナとか言ったか――のパイロットを務めているあの男はエスパーか何かなのでは？　という説が濃厚になってくる。

一発二発外れるくらいならまぁ、こちらも対象を完全に目視できているわけでもないし、距離もあるのだから無いこともないだろう。

三発、四発くらいなら運が悪かったと諦めることもできる。私だって完璧な人間ではない。たまにミスをすることもあるし、運が悪い日だってあるだろう。

五発、六発となってくると流石にこれはちょっとおかしいぞ？　となる。私はこの世界で、この遠距離狙撃によって道を切り拓いてきたと言っても過言ではない。

突然この世界に放り出されて、右も左もわからない状況でなんとか生き延びてこられたのはステラパイレーツオンラインで培った技術と経験によるものだ。私にだってそれなりの自負というものがある。

七発、八発、そして九発目。疑念は確信に変わる。

「チートでも使ってんじゃないのかってェの……」

『お嬢、そろそろ時間です』

「ああ、もォ……しゃあないねェ。それじゃ、あくまで善意の協力者って体でいくよォ」

もうお嬢なんて歳じゃないってのにこいつらときたらお嬢呼びをやめようとしない。まぁ、姐御呼びされるほど年増でもなし。お頭って呼び方じゃあからさま過ぎるってんで結局お嬢呼びにするしか

ないんだけどさ。

『アイアイマム』

ここまでやって仕留めきれなかったからには仕方がない。今回はこれで諦めるとしよう。奴に落とし前をつけさせてやりたかったが。ここまでやって仕留めきれないとなると、ちょっと色々と考えを改める必要がある。あの状況で私の狙撃を九回も避けるような相手と事を構えるのはあまりに危険だ。下手をすると真正面からぶつかっても勝てるかどうかわからないし、勝てたとしても大損害は免れないに違いない。アレ一隻を落とすためにこっちが大損害を受けてしまっては算盤が合わない。

「妙に勘が良いしねェ……関わり合いにならないほうが懸命か」

思い返してみれば、初対面の時からあの男はこちらを過剰なほどに警戒していた。一度も顔を合わせたことがない筈なのに、最初からこちらの正体を見破っているかのような態度だった。あまり積極的に関わるとどんな離れ業でこっちの尻尾を掴んでくるかわかったものではない。

などと考えている間に星系軍の大部隊がこの宙域に到着した。ド派手な音を立てながら軍用艦が大量にワープアウトしてくる光景は心臓に悪いが、今の私達は至ってクリーンな身の上だ。何も恐れることはない。

「おいでなすったかァ……しゃあないねェ。皆、星系軍と協力してクリスタルどもを叩くよォ」

『『『アイアイマム！』』』

□■□

「こなくそぉ！」
「わぁぁぁっ！？」
「ギャーッ！？」

サイドスラスターと姿勢制御スラスターを全開で噴射し、無茶な方向転換で発生するGの影響をもろに受けながら紙一重でファッキンマリーの狙撃を躱す。クリシュナの慣性制御装置は大変に高性能なものだが、その性能にも流石に限界というものがある。これ、慣性制御装置が効いてなかったら良くてもブラックアウト。下手すると内臓や骨にダメージを負っていたかもしれん。

「シールドセル！」
「残り二個よ！」
「助けはまだですかー！？」

今の回避で中型結晶生命体に擦った。比喩表現ではなく、本当に擦った。まぁ、艦体を直接ではなく、シールドがってことだけど。しかしおかげでシールドは大幅に減衰する羽目になり、複層型のシールドも残り一枚になってしまっている。すぐにシールドセルで回復しないとまずい。完全に消失すると再展開にはかなりの時間がかかる。

「これで九発目！　あのクソアマ絶対に許さねぇ！！」
「どんどん精度が上がってきてますよぉ」
「今の掠ったわよね……というかよく避けられるわね、あんなの」
「相手の気持ちになればどこで撃ちたいかなんとなく想像がつくんだよ！」

とはいえ次が避けられるかどうかは正直自信がない。距離はわか

らんが、どの方向から撃ってきているのかは二発目を避けた時点でわかった。どっちの方向から撃ってくるのかさえわかれば、あとはタイミングだけだ。このタイミングで撃たれると不味いというところに的確に撃ち込んでくるから、逆にわかりやすい。こっちはそのタイミングで緊急回避をしてやれば良いんだからな。
問題は、周りが結晶生命体だらけだからそういう無理な回避をすると結晶生命体に接触したりして大変に危険が危ないというヤツなのだけれども。え？　言葉がおかしい？　良いんだよこれで。

「あっ」
「あ？」
「き、来ました！　星系軍です！」
「よっしゃ勝った！」

クリシュナのセンサーがこの宙域に次々に到着する星系軍の軍用艦の反応をキャッチした。

『ご主人様、退路を切り拓きます』
「うん？」

星系軍と一緒にワープアウトしてきたブラックロータスから通信が入る。退路を切り拓くってまさか艦首の大型電磁投射砲（ＥＭＬ）をこっちに向かってぶっ放すつもりじゃあるまいな？　メイさん？
まさかメイさん？

『弾道計算完了、データを送信します』
「ちょっ……！？」

クリシュナのメインスクリーン上にブラックロータスから一直線に伸びる真っ赤な砲撃エリアが投影される。やっぱこっちに向かっ

てぶっ放すつもりだな！？

『発射』

結晶生命体の隙間から見える真っ黒な宇宙空間の一点でピカッ、と何かが光った。うん、間違いなくブラックロータスですね。間違いない。

「ＥＭＬ、来ます！」
「弾道を予告してくれるだけ有情よね」
「それはそうだけどさぁ！」

どっちも当たったらタダでは済まないって意味では同じなんだよなぁ！　まぁ、あの女の狙撃と違ってＥＭＬの方が加害範囲が広い。撃ち込んでくれた後に結晶生命体の群れにできる間隙を突けば群れの中から脱出できる可能性はかなり高まる。

「来ました！」
「撃ってくるなよぉ……？」

流石に星系軍が到着してなおこっちを狙ってくるとは思えないが、一応注意しながらＥＭＬの弾頭が通った痕にクリシュナを滑り込ませる。そうしている間に星系軍の軍用艦からの砲撃も始まり、結晶生命体の数がみるみるうちに減り始めた。星系軍にヘイトが向いたのか、クリシュナに向かってくる結晶生命体の個体数も少なくなる。

「なんとか切り抜けたか」
「ヒロ様、マリーのクリムゾン・ランスも結晶生命体への攻撃に参加しているみたいです」
「あのクソアマ、いけしゃあしゃあと……」

「ヒロが見たこと無い顔してるわ……」

眉間に皺が寄りまくっている自覚がある。しかし残念なことにあのクソアマを告発することは不可能である。あのクソアマが歌う水晶を使った証拠もなければ、悪意をもって俺を狙撃した証拠もない。クリシュナとあのクソアマの機体は交戦していないので、交戦記録も残っていない。一応各種センサーのログを提出すれば、援護射撃と言うには際ど過ぎるものであったと訴えることはできるが……精々厳重注意で終わるのが関の山だろう。そもそも、敵味方入り乱れての乱戦ともなれば流れ弾の一発や二発は飛んでくるものだしな。

あの時は俺は結晶生命体の群れの中で激しく動いていて、あちらからはセンサーで俺の正確な位置を拾うことも難しかった。敵の濃い場所に撃ち込んでいたが、悪意はなかったと主張されればそこまでである。

そして、星系軍が到着しているこの状況では誤射を装った意趣返しをするのも既に難しい。

「キレそう」

「ヒロ様が今までになく怒ってる……」

「私も同じ気持ちだけど、どうしようもないわよ。諦めなさい」

くそう。いつかあの女は泣かす。絶対にだ。

#299　I barely escaped death.（後書き）

最強宇宙船六巻は明後日10／8発売！　買ってね！！！　―（：3」∠）―

#300　取り調べとホロメッセージ（前書き）

まだ若干左腕に違和感が残っていますが、ほぼ復調したので更新再開（ω）

#300　取り調べとホロメッセージ

参集した星系軍の圧倒的な火力を前に、召喚された結晶生命体達は残らず駆逐された。

それじゃあ結晶生命体もいなくなったし、これで解散！

「とはならないんだよなぁ」

クリシュナとブラックロータスのクルー、それに護衛のために俺達と船団を組んでいた傭兵達もまとめてミラブリーズ星系軍に拘束されていた。いや、拘束とは言っても抵抗の意思も見せなかったし、彼等の本拠地であるコロニーへの移動にも唯々諾々と従ったから、手錠などもかけられずに待遇もそう悪くないものではあるのだけれども。

「それじゃあ君達は巻き込まれただけで、歌う水晶を不法に所持していたわけではないと。そう言うんだね？」

テーブルを挟んだ向こう側。灰色一色の殺風景な取調室の中で、目に眩しい真っ白な制服に身を包んだ星系軍の憲兵さんが俺に問いかけてくる。

「当たり前だ。万が一歌う水晶を使って結晶生命体で一儲けするにしても、あんな交通量の多いハイパーレーン突入口でやるわけがないだろう？　ましてや自分の母艦や護衛のために雇った傭兵達まで結晶生命体の群れのど真ん中に放り込むような状況で歌う水晶を使うわけがないし、彼等を逃すために単身その場に残って時間稼ぎなんてするわけがない。俺じゃなかったらとっくに死んでるぞ。それ

に全艦船のログを確認したんだろう？」
「それは勿論。だが、当事者からの事情聴取はしなければならないのでね。私としてもゴールドスターをこのような件で疑うのはどうかと思うが、これも仕事さ。それで、他のクルー……特に今回雇われた護衛の傭兵達の証言なのだが、彼等が言うにはワープアウト後に何かしら――後から思えば結晶生命体の襲撃がある、というようなことをハイパーレーン移動中に通達され、その場合の行動指針まで具体的に指示されていたという話なのだが」
「何の根拠もない勘――と言いたいところだが、俺なりに考えた末の結論がどんぴしゃりだっただけだ。ただ、これを完全に説明するのにはかなりの時間がかかるし、その中にはただの想像や推測、下手をすると妄想や偏執狂じみた空想とも言えるようなものまで組み込まれている上に、とある人物や集団の名誉を毀損する恐れのある発言も入ってくるだろう。それでも聞きたいか？」
「手短に頼む」
「いや、今俺時間がかかるって言ったよな？」

そうして俺は小説一冊分にも及ぶ壮大な物語を憲兵さんに語って聞かせ、遂に釈放されたのであった。

☆★☆

「ずいぶん長くかかったわねー」
「お疲れさまです、ヒロ様」
「うん、疲れた」

星系軍の取調室から解放され、ブラックロータスに戻るとエルマとミミに出迎えられた。話を聞くと、どうやら整備士姉妹はクリシュナの整備に大忙しらしい。ブラックロータスも艦首大型電磁投射砲を撃ったり、各部に装備された武装もぶっ放したりしたので、そ

ちらも一応整備をすると張り切っていたとか。

「この後はどうするんですか？」

「晴れて無罪放免になったんだから、とっととこんなシケたコロニーからは出ていくぞ。整備はゲートウェイを通った後にでもじっくりやってもらう」

「それはそうね。ちょっと足止めを食らったけど、まだ当初の予定時間内にゲートウェイのあるエイニョルス星系に到着できそうだし」

「面倒に巻き込んだ分はボーナスでも弾んでおくか」

幸い、臨時収入が転がり込んできたからな。無罪放免となったので、艦に記録されていた交戦記録などのデータを元に功績から換算した褒賞金が出たのだ。クリシュナ単艦で相当数を撃破したから、反応弾頭を四発も使っても十分以上にお釣りが来るくらいに稼げた。

それに、結晶生命体の残骸からはレアクリスタルも採れるので、そちらもミラブリーズ星系の資源管理課が大喜びで買い取ってくれたし。これが全部合わせると傭兵達の雇用費用よりも随分と大きく稼げたので、まぁ危険手当ということで支給しても良いだろう。

報告によると護衛の傭兵艦も結晶生命体に嬉々として殴りかかって、いくらか褒賞金をせしめたらしいけど。まぁそれはそれ、これはこれってことで。

「それじゃあ程なくして出発する旨を皆さんに伝えておきますね。三十分後で良いですか？」

「それで良いだろう。フットワーク軽くコロニーに降りてる連中も三十分ありゃ戻ってこれるだろうしな」

間に合わないやつは知らん。容赦なく置いていくし、逸れた奴には報酬は払わんがな。

そういうわけで、再びクリシュナに乗り込むべくミミ達と一緒に

移動し、格納庫に着いたところで端末に着信があった。通話ではなく、ホロメッセージだな。はて？　送ってくるような相手に心当たりが無いが。クリスが息抜きにでも送ってきたのだろうか？　などと考えながら上着のポケットから小型情報端末を取り出し、その画面を見て思いっきり渋面を作ることになった。

「何よ、凄いブサイクな顔してるわよ」
「どうしたんですか？」
「これ」

二人に小型情報端末の画面を見せると、二人とも眉間に皺を寄せたり、口元を引き攣らせたりした。そうだよね。そういう反応になるよね。

「どうやってヒロのアドレスを探り当てたのかしら……」
「知らん。俺は教えてないぞ」
「考えられるのは傭兵ギルド経由か、雇った傭兵経由でしょうか……？」
「どっちにしろ無視はできんな」

念の為メイに連絡してホロメッセージに変なもの――所謂マルウェアの類――がくっついていないか確認してもらってから開く。

『どうもォ。直接会おうとしてもきっと断られるだろうから、メッセージで失礼するよォ？』

船のコックピットで撮影したのだろうか？　リラックスした様子のマリーの上半身が小型情報端末の上に表示される。憎たらしいニヤニヤ笑いしやがってこのクソアマ。

『まァ、そんなに話すことがあるわけでもないんだけどォ……挨拶くらいは、ねェ？』

芝居がかった仕草でホログラムのマリーが流し目を送ってくる。

「話すことがないならメッセージなんて送ってくるんじゃねぇよ！」

「ホロメッセージ相手にいきり立っても仕方ないでしょ……」

「なんか私も気に入りませんね、この人」

ミミが珍しく頬を微妙に膨らませてホログラムのマリーにジト目を向けている。何かわからないが、今回のマリーはミミの癪に障ったらしい。

『何にせよ見事な手前だったよォ？　たった一隻であの数の結晶生命体を相手に大立ち回り。あたしみたいな凡俗にはとても真似できない芸当だったねェ……おかげであたしもうっかりあんたを『誤射』せずに済んだみたいで何よりさァ』

「こいついけしゃあしゃあと……明らかに狙ってただろうが」

『今度会った時には是非仲良くしてもらいたいもんだねェ……あんたみたいな腕利きがウチに入ってくれりゃ色々と捗るってもんだしさァ。とりあえず色々と水に流して、今度はまっとうに付き合ってくれると嬉しいねェ？　少なくとも、こっちはそういうつもりで接するからさァ』

そう言ってホログラムのマリーは意味ありげにニタリといやらしい笑みを浮かべた。

「どういう意味だと思う？」

「そのままの意味で受け取ればレッドフラッグとしての恨み辛みは水に流すって意味に聞こえるけど、そのまま素直に受け取るのは危

険ね」
「明言してないですもんね。向こうもこっちに言質を取られるような発言はしないでしょうけど」
二人ともマリーの言葉を俺と同じように受け取ったようだが、やっぱりそのままの意味で素直に受け取るのは危ないよな。私は許そう、でもこいつらが許すかな？　とか言って手下をけしかけてこないとも限らないし。
『そういうことで、縁があったら今度は仲良くしようねェ？　なんなら別の意味でも、ねェ？』
「いやです」
「何言ってんのこいつぶっ殺すわよ」
「間に合ってます」
総スカンである。それはそう。こんな匂いに釣られて近寄った奴を養分にする食虫植物じみた女なんてどうあっても御免だ。セレナ中佐――今は大佐か――とは違う意味で地雷臭が凄まじい。
「こいつのことは忘れよう。この広い宇宙だ。ゲートウェイで遠く離れれば二度と会うこともあるまい」
「そうですね、帝国領は広大ですから」
「そうだと良いわね」
エルマが遠くを見るような目をしながら呟く。やめろやめろ、同じようにゲートウェイであちこちに跳んでるのに行く先々で会うセレナ大佐のことを言うのはやめるんだ。また今回も会ってるからな……なんなんだろうね、あの私生活残念美人との縁は。
「切り替えていこう。とにかく今はゲートウェイに到達して遠くに

高跳びするのが先決だ」
「実のところ、逃げるみたいでなんか釈然としないんだけどね」
「大規模宙賊団なんぞまともに相手できるかっての。俺達は英雄（ヒーロー）なんかじゃなく、一介の傭兵なんだぞ」
「ヒロ様がそれを言うのはなんだか物凄い違和感が……」
「一介の傭兵は敵国の正規軍艦隊や結晶生命体の群れに突っ込んで生き残れないし、生体改造も無しで貴族相手に剣で互角以上に戦ったり出来ないし、ましてやプラチナランカーになったりゴールドスターを受勲して皇帝陛下に顔と名前を覚えられたりしないわよ」
「アーアーキコエナーイ」

俺の耳は都合の悪いことは聞こえないようにできているんだ。凄いだろ？　などとマリーの一件を努めて忘れるために他愛のないやり取りをしながらブラックロータスの格納庫へと向かうと、すぐに整備士姉妹が俺達の姿に気付いた。

「あっ、兄さんや。お勤めご苦労さまです」
「お勤めご苦労さまです」
「別に収監されてないからね？　刑期を終えて娑婆に出てきたとかじゃないからね？」
「「きゃー」」

ふざけて深々と頭を下げている二人の頭を作業用のヘルメット越しにぐりぐりしてやる。スペース・ドウェルグ社の社章がプリントされた絶妙にダサいヘルメットだ。あのレトロフューチャー的なロケットに跨ったドワーフのおっさんのやつ。

「ダメージは受けてなかっただろ？　補給だけ済ませておいてくれ。もうすぐ出るから」
「それはもう済ませたから大丈夫や。いつでもいけるで」

「本当は激しい戦闘の後はダメージを受けていなくてもフルチェックしたいんですけどね」
「これは安全な場所でゆっくりやろう。整備ありがとうな、二人とも」
最後にポンポンと二人の頭をヘルメット越しに撫でてクリシュナへと向かう。
さぁ、さっさとこんな場所からはおさらばして次の目的地に行くとしよう。

#300　取り調べとホロメッセージ（後書き）

これでリーフィル星系編はおわりです―（∴3」∠）―

#301　リラックスタイム（前書き）

とりあえず新章のプロローグ的な（　ω　）（難産だったので遅れたのは許して

#301　リラックスタイム

ぐにゅり、と何かに頬を押されて目が覚めた。
そろそろ見慣れた天井。ブラックロータスに用意した俺の寝室の天井だ。両脇に感じる体温。ああ、そう言えば昨日はティーナとウィスカと一緒に寝たんだっけ。ということはこの頬を今も押し続けているのはきっと姉妹のどちらかだろう。両隣で寝ている二人を起こさないように気をつけつつ、俺の頬を押しているものを手で掴む。
ん？　これは？

「……足？」

俺の頬を押していたのは小さな足だった。ふむ、小さいけど意外とぷにぷにはしていないな。やっぱ立ち仕事だからかね？　しかし寝相の悪い……これはティーナの足か？

「んん……起きたん？」

と思っていたら、足があるのと反対の方向からティーナの声が聞こえてきた。視線を向けると、寝ぼけ眼のティーナがもぞもぞと動いて俺の腕に頭を乗っけているところであった。ということは、この寝相の悪い足は――。

「あし……ウィーは寝相悪いんよな」
「悪いってレベルじゃねぇぞ」

何をどうやったら寝ている間に頭の位置と足の位置が逆になるんだ。ウィスカは常識枠に見えてたまに変なことするよな。

「寝相の悪いウィーはほっといて。おはようさん、兄さん」
「おはよう、ティーナ」

枕にされている二の腕は動かせないので、肘から先を曲げて指先でティーナの髪の毛に触れる。うん、ギリギリ。ギリギリ頭は撫でられない。指先が髪に掠るくらい。

「んもー、しゃあないなぁ」

ニヤニヤしながらティーナが俺の腕の付け根あたりに頬を擦り付けてくる。猫か何かかな？　まぁ可愛いのでヨシ。さて、起きるかね。

☆★☆

「ああもう、恥ずかしい……」
「あれがありのままのウィーってことやね」
「お姉ちゃん……」

ブラックロータスの食堂。共に並んで席に着いたウィスカが姉のティーナに恨めしげな視線を向ける。二人は朝食のメニューも同じみたいだな。本当に仲の良い姉妹だ。

「朝からテンション高いわねー」

そんな二人をエルマが俺の隣から眺めている。昨夜深酒でもしたのか、テンションがとても低い。珍しく朝食のメニューも軽いので、本当に調子が悪いのかもしれない。いつもは朝からステーキっぽいものとと潰した芋っぽいものをもりもりと食ってたりするんだが。

「エルマさん、大丈夫ですか？」

俺を挟んで反対側に座ったミミがエルマに心配そうに声をかけている。彼女の朝食メニューはいつもと変わらず、甘いお粥みたいな食事だ。料理の名前を聞いたことがあるが、聞き慣れない名前ですぐに忘れてしまった。キュケなんとかって言ってた気がする。

「朝からそんなに調子悪そうなの珍しいな」

「それが昨日開けたお酒の質が悪くてねー？　捨てるのも勿体ないし我慢して飲んだんだけど、悪酔いした上に二日酔いまで……あー、あたまいたい」

「メシ食ったらメディカルベイに行ってこいよ？」

「んー……」

適当な返事をしながらエルマが俺に寄りかかってくる。返事も億劫になるくらいしんどいのか？　これはさっさとメシを片付けてメディカルベイに連れてってやったほうが良いかな。

「質の悪い酒、なぁ？」

食堂の広いテーブルの反対側に座っているティーナがニヤニヤしながらエルマに視線を向けている。ウィスカもなんだか微笑ましいものを見るような視線をエルマに向けているな。

「……なによぉ」

「別にぃ？　なんでもあらへんよぉ？」

「メディカルベイに行くのも良いですけど、食事を終えたらお兄さんと一緒に休憩スペースでゆっくりするのも良いと思いますよ。安静にしてて治るならそれが一番ですから」

ニヤニヤしているティーナにエルマが噛みつきかけるが、それをウィスカがフォローして宥める。ふむ、俺もニブチンではないのでなんとなく察した。ここは気付いていないふりをしてエルマを甘やかせば良いところだな？

「それじゃあ俺もエルマと一緒にのんびりするかね」
「私はクリシュナのコックピットでシミュレーター訓練をしてますね」
「うちらは会社に提出するための資料作りやな」
「そうだね」

ミミはオペレーターとしての勉強も一通り終えたということで、次はサブパイロットとしての勉強を始めている。サブパイロットに関してはテキストでの勉強も大事なんだろうが、それ以上にシミュレーターによる訓練も大事だからな。最近は暇さえあればクリシュナのコックピットに籠もっている。

そして整備士姉妹ことティーナとウィスカは資料作りか。整備士姉妹は先日の赤い旗宙賊団討滅作戦でサルベージした異国の高速戦闘艦のレストアを終わらせたようで、今はレストアの際に気付いたことなどを彼女達の雇い主であるスペース・ドウェルグ社に報告するためにレポートにまとめているようだ。

まぁそんな感じでゆっくりしている俺達だが、何故こんなにゆっくりしているのかと言うと、ゲートウェイ利用の順番待ちをしているのである、

滞在していたリーフィル星系からゲートウェイのあるエイニョルス星系への道中で歌う水晶を使った結晶生命体テロを食らった俺達であったが、それをなんとか退けてエイニョルス星系へと無事に到着していた。

で、早速皇帝陛下より下賜されたゲートウェイの使用許可証を使

って目的の星系への使用許可を取り付けたわけだが、それですぐにゲートウェイを使用できるわけではない。
何せ何千、下手すると何万光年もの距離を一瞬で移動する装置なのだ。動かすには膨大なエネルギーが必要なので、その運用にはそれなりの手間がかかる。いくら皇帝陛下直々の許可証があっても、申請したらすぐにぴょんと跳べるというものでもないのだ。
つまり、どうせ移動するなら当然ながら一度に複数の船を送ったほうが効率が良いので、同じ星系を目的地とする艦船が一定数集まるか、定められた期間を待ってからでないと使用することが出来ないようになっている。まぁ、その間はこのエイニョルス星系に留まってカネを落としていくことになるってわけだな。無論、そんなことだけを考えてこんな仕組みになっているわけではないのだろうが、上手く出来ているものだ。

「ほら、食い終わったから休憩スペースでゆっくりしようか」
「んー……だっこ」
「はいはい、だっこね」

ミミが後片付けはお任せくださいとジェスチャーで伝えてくれたので、お言葉に甘えて露骨に甘えモードになっているエルマをご要望通りにお姫様抱っこして休憩室へと運ぶことにする。
まったく、手のかかるお姫様だよこいつは。

#302　新天地へ（前書き）

気付いたら夜勤から帰ってきた友人と朝方まで遊んでいるこの生活を改めたい（‘ω’）

#302　新天地へ

だだっ広い休憩スペースに設置された大きなソファーに座り、俺の膝の上に頭を乗せてゴロゴロしているエルマの頭を撫でながら小型情報端末で情報収集を行う。ゲートウェイを使ってどの星系に行くかは決めているが、その星系でどういう風に行動するかまではまだ決めていなかったのだ。

「何見てるの」

「んー？　ウィンダス星系に社屋を置いてるハイテク企業の一覧」

そうしていると、ジトッとした目でエルマが俺の顔を見上げてきたので、小型情報端末の画面を見せてやった――のだが、エルマは俺の腕を横に退けてじっとりと俺を睨みつけてきた。

「私を膝に乗せているのに、私じゃなくて小型情報端末にうつつを抜かすのはどうなのかしら」

「うわぁめんどくさいかわいい」

「ちょっとめんどくさいってなによー」

唇を尖らせるエルマの頭を撫でながら小型情報端末を横に放り投げる。今日はとことん甘えモードらしいので付き合ってやるとしよう。

「まぁ実際エルマはずっと気を張っててくれたしな。今日はとことんサービス致しましょう」

「そうそう、それでいいのよそれで」

一転して満足げな表情になるエルマ可愛いな。さてどうしてやろうか。まぁ時間はいくらでもあるのだし、特にあれをやろうこれをやろうとあくせくすることも無いか。
小型情報端末をちょいちょいと弄り、休憩スペースの証明を少し薄暗くしてホロディスプレイを立ち上げて森の風景と環境音を記録したホロ動画を再生する。

「……なんかジジババくさいチョイスね。苔でも生えてきそう」
「よーしそれじゃあミミオススメのデスメタルでも流すか」
「やめなさい」

ちなみにミミは音楽の趣味が多彩なだけでメタルやロックばかり聴いているわけではない。俺からすると変な音楽が多いように思うのだが、まぁミミの感性は割と独特だからこんなもんかとも思っている。

「別にジジババくさくてものんびりできるなら良いだろ。こうして特に何かすることもなくただぼーっと過ごすのは最高に贅沢な時間の使い方だ」
「そうかもね」

それから暫くエルマと軽くイチャイチャしながら過ごした。こうして甘えてくるエルマは実に可愛いなぁ。

☆★☆

数日待機し、ようやく目的地であるウィンダス星系へと移動できることになった。
え？　この数日はどう過ごしてたかって？　そりゃやることがあるわけでもなし、ブラックロータスの船内で皆と楽しく過ごしてい

たよ。ここのところずっと気を張っていたしな。久々のリラックスタイムで羽根を伸ばしてたってわけだ。
まぁその話は横に置いといて、ウィンダス星系は割と帝都に近い位置にある星系で、超大型の造船工廠が存在する帝国最大の造船基地星系だ。帝国航宙軍の作戦司令部などもウィンダス星系に置かれており、軍事、経済両面におけるグラッカン帝国の副都星系の一つである。
地理的――宇宙だが――な条件として、まずこの星系は豊富な鉱物資源を算出する小惑星帯や資源惑星が多く、更にハイパレーンで繋がっている周辺星系にも鉱物資源や各種触媒となるレアメタルなどを産出する星系が多い上、居住可能惑星まで複数存在するという好立地なのだ。比較的帝都から近いということもあり、開発が進んできたという経緯があるらしい。

「うーん、軍の作戦司令部かぁ……」

休憩スペースのホロディスプレイに大映しになっている目的地の星系情報を眺めながら呟く。

「また会いますかね？」
「タイミング的に居てもおかしくはないわね」

俺の座っているのと同じソファに座ったり、寝転んだりしながら同じ映像を見ているミミとエルマもそれぞれ苦笑いしたり、肩を竦めたりして見せた。
俺達が何のことを話しているのかと言うと、それはもう当然セレナ大佐のことである。彼女とは本当に何かと縁があるんだよな。先日も赤い旗宙賊団掃討作戦の指揮を彼女が執っており、その作戦が終わってから数週間。軍司令部に出頭して報告書を提出したり、艦隊の整備や補給を行なっていてもおかしくはない時期である。

「まぁ今から心配しても仕方がないな。会ったら会ったでまたかぁ……と思うだけの話だし」
「そうね。絶対に会うことになると思うけど」
「予感がしますよね」
「このやり取りも何回目だろうな」

本当にこの広い宇宙で何故俺達とセレナ大佐は何度も顔を合わせるのやら。ここまで来ると本当に運命的なものを感じるな。まぁ、今回もまた出会うと決まっているわけでもないけど。

「それで、ある意味今回の主役さん。手に入れる船の目星は付けてあるのか？」
「んー、いくつかはね。でも、最終的にはヒロの判断よね？」
「ああ、まぁそれはそうだな。俺もある程度の方針は決めてるけど、現地に行かないとわかんないことも多いからなぁ」
「たしかにそれはそうね。今はティーナとウィスカも居るし、整備方面の意見も聞きたいところではあるわよね」
「なるほど。私も勉強はしてるんですけど、正直まだまださっぱりなんですよね」
「船に関してはスペックだけが全てじゃないからなぁ。機体の重量バランスとか重心の位置、スラスターの配置なんかでも使い勝手が変わるから。まぁミミはシミュレーターで色々な船のシミュレーションをするのも大事だけど、ある程度慣れたら実機も飛ばしていかないとな」

今回ウィンダス星系を訪れた理由はいくつもあるのだが、その中でもメインとも言える目的はエルマ用の新しい船を見繕うことである。
後々のことを考えればいずれミミにも船を用意したいが、この船

のハンガーは小型艦二隻までしか収容できないからなぁ。もし将来的にミミにも船を駆ってもらうということになると、母艦の買い替えも検討しなきゃならないかもしれん。まぁ、それも今すぐの話じゃないけども。

「でも、今回調達するのは船だけじゃないでしょ？」

「軽量級のパワーアーマーもだなぁ。正直、もうあんなのは二度とゴメンなんだが……今後も無いとは限らんからな」

テラフォーミング中の惑星に降下して酷い環境の中、生身で生物兵器の化け物共と切り結んだ記憶が蘇ってくる。相手が貴族だから剣でないと白兵戦で仕留めるのが難しい。だがあの状況下で降下して斬り結べそうなのが俺とセレナ中佐（当時）だけ。だから酷い環境の上に生物兵器も跋扈してるけど、剣を使えなくなるパワーアーマーは着ないで生身で来てね！　とかマジで正気の沙汰じゃないからな。もう二度とやらん。

そう固く誓いたいのだが、また何かの拍子に同じ事態に陥る可能性はゼロじゃないからな。カネもパワーアーマーを保管するスペースもあるのだし、そういう事態に備えて着たままでも剣を使えるパワーアーマーを手に入れてしまおうというわけだ。

ただ、実際に俺の要望に合致したパワーアーマーがあるのかというとこれがちょっとわからない。基本的に白刃主義者と呼ばれる貴族達は高度なバイオテクノロジーやサイバネティクスで自分自身の身体を強化しているので、わざわざ身体の動きを制限するパワーアーマーを装備する人はそういないのだという。何ならパワーアーマーの装甲では貴族が使う剣――単分子の刃を持つモノソードの攻撃を防げないからな。

「良いものがあれば良いんだが、どうかな」

「下手にパワーアーマーを着るよりも生身のほうが強かったりして

ね」
「ヒロ様なら有りえますよね」
「俺はそんなびっくり人間じゃ……いや否定できんな」
呼吸を止めると時の流れが鈍化するというか、俺の時間だけ加速するというような謎の能力を発揮する自分のことをびっくり人間の類ではないというのはかなり無理がある気がしてきた。最近は嫌な予感や危険を本能レベルで察するようになってきている気もするしな。
なんだろう、レベルでも上がってるのかね？　ステータスオープンとか言ってみれば良い？
『ご主人様、まもなくゲートウェイによる移動を開始します』
「了解。操艦は任せる」
『はい、お任せ下さい』
ウィンダス星系の情報を表示していたホロディスプレイの画面が切り替わり、巨大なゲートウェイの画像が映し出された。うーん、相変わらずスケール感がおかしくなりそうなデカさだな。デカさだけなら前に討伐したマザー・クリスタルに匹敵する。いや、もっとデカイか？　よくわからんな。とにかくデカい。
『突入を開始します』
一対の巨大構造物であるゲートウェイの間に光が集まり、空間の歪みのようなものが発生する。あれは人工的に作られ、制御された一種のワームホールのようなものであるらしい。細かい理論は全く理解できなかったが、とりあえずあの空間の歪みを通れば何千光年も離れた場所に一瞬で移動ができるというわけだ。なんだかわからんが使えるからとにかくヨシ！

一緒にウィンダス星系へと移動する他の艦船と共にブラックロータスがゲートウェイが作り出した人工ワームホールへと突入する。

さぁ、新天地だ。

#303　舌を噛みそうな名前（前書き）

マニアワナカッタ……―（：3」∠）―

#303　舌を噛みそうな名前

「わぁ、すごいですね。あっちにもこっちにも大型コロニーがありますよ！」
「造船所を併設しているコロニーばかりだから見ごたえがあるな。というか交通量が多くて笑えるわ」
「帝都も星系内の交通量が多い星系だけど、ウィンダス星系はそれ以上よね。この感じ、懐かしいわ」

休憩スペースの大型ホロディスプレイに表示されている各種星系情報やブラックロータスが受信しているセンサー情報を見ながら、エルマが呟く。

「懐かしいってことは昔来たことがあるのか」
「傭兵になりたての頃はウィンダス星系を根城にしてたからね。兄様の調査の手が伸びてくるまでだけど」

そう言ってエルマは軽く肩を竦めてみせた。なるほど、ここはゲートウェイを使わなくても無理なく帝都から来られるくらいには近い星系だし、これだけの数のコロニーがあって交通量も豊富――つまり人の出入りが激しい星系なら紛れることも難しくない。名前を変え、船も乗り換えて性を名乗らずに傭兵として活動すれば、そう易々と捕まることは無さそうだ。

「駆け出しの割には冴えてるじゃないか」
「頼もしいバイブルがあったからね」
「ああ、ミミのお婆ちゃんの」
「お祖母様のアレですか」

ミミのお祖母様は現皇帝の妹に当たるお方で、なんと齢十五歳で成人した直後に密かに用意していた小型戦闘艦に飛び乗って帝室から出奔。身分を隠して帝室からの追手を躱し、傭兵として大活躍したという女傑である。そんな彼女の活躍は小説を始めとして様々な作品として余に出回っており、今肩を竦めてみせた子爵令嬢のお姫様を始めとしたお転婆姫のバイブル的な存在になっているのだという。

「大概は夢見るだけで、私みたいに実行に移すのはほんの一握りだけどね」

「エルマは数少ない実行例かつ成功例ってことか」

「そういうこと。今でも年に一人か二人は帝都から飛び出す令嬢がいるそうよ。大体は実家に連れ戻されるか、より悪い結末を迎えるそうだけど」

「より悪い結末……」

エルマの物言いに嫌な想像をしてしまったのか、ミミが物凄く微妙そうな顔をする。まぁ、右も左もわからない貴族の令嬢が悪いやつに騙されて悲惨な目に遭ったり、船を宙賊に撃破とか拿捕とかされて捕まったりしたら悲惨な目に遭うというのが生温い程の扱いを受けてもおかしくはないからな。

もっとも、それが実家に知られたら騙した悪いやつや宙賊は貴族の財力と権力をフル活用した反撃でそれより酷い目に遭うのだろうけども。くわばらくわばら。

「あぁー……つっかれたぁー」

雑談しながらメイの操艦を眺めていると、しょぼくれた顔をしたティーナがウィスカを伴って休憩スペースに現れた。ここ数日部屋

に缶詰になってレポートを書いていたはずだが、どうやらやっと執筆作業が終わったらしい。ヨロヨロと歩いてきたティーナが俺の膝に倒れ込んでくる。

「やっとこさおわったー。兄さんほめてー」

「はいはいよく頑張ったよく頑張った」

ティーナの頭を撫でてやる。うん？　風呂から上がったばかりなのかサラサラだな。よもやこいつ、よろよろしてたけどわざわざ身嗜みを整えてから来たのか？

「もう、お姉ちゃんったら」

「ウィスカも偉い偉い」

「あはは、ありがとうございます」

遅れて現れたウィスカも招き寄せてその頭をなでなでしてやる。二人とも多分風呂上がりだな。まぁわざわざ指摘したりはしないけれども。

「それでどこに向かってるん？」

「あれ、言ってなかったっけ。まずはスペース・ドウェルグ社の支社があるところが良かろうということでウィンダステルティウスコロニーに向かってるぞ。ところでウィンダステルティウスコロニーって舌噛みそうな名前だよな」

「せやな」

ティーナが真顔で頷く。三回連続で名前を言ったらどこかで噛みそうだよな、ウィンダステルティウスコロニー。まぁ、とにかくウィンダス星系の第三コロニーだな。第一コロニーであるプライムコロニーは帝国軍の泊地となっていて、実質的に軍用コロニーと考え

て差し支えない。第二コロニーであるセカンダスコロニーはウィンダス星系各方面に存在する小惑星帯から採掘された鉱石や、他の星系から集められる物資の集積と配分を行なっているコロニーで、第三コロニーであるテルティウスコロニーが民間のシップメーカー他様々な企業の支社などが存在する交易コロニーだ。

その他にも民間シップメーカーのシップヤードがある第四のクウォータスコロニー、第五のクウィンタスコロニーと沢山あるが、まぁとりあえずはテルティウスコロニーで全て用事は済む筈だ。実際に船を注文するとしても、テルティウスコロニーから以降のナンバーのコロニーに発注をかけることができるわけだからな。同じ星系内なら通信なんていくらでもできるわけだし。

「ということは着き次第出社ですね」

そう言ってウィスカが何やら考え込んでいる。今回は赤い旗宙賊団から奪った遠方の国の小型高速戦闘艦をスペース・ドウェルグ社に売りつけるつもりだからな。ティーナとウィスカにはその橋渡しをしてもらうことになる。

「買い叩かれないように俺達もついていくからな。二人を信用してないわけじゃないが、向こうも身内相手だと遠慮しないだろうし」

「それはそうですね。ドワーフの商人は強かですから気をつけないと」

うちの交易担当も兼ねているミミがうんうんと俺の言葉に同意するように頷く。実は今回もリーフィル星系を出る際にウィルローズ家とローゼ氏族の口利きでリーフィル星系の特産品――主に新鮮なフルーツや野菜、それに肉や天然素材の衣類、精霊銀などをそれなりの量仕入れてきている。どれも宇宙では贅沢品で、交易コロニーで高く売れる品だ。

「リーフィル星系のお土産を買い叩かれないようにな」
「本当に気をつけます」

流石にブラックロータスに積める量の貿易品だけで船を一隻買うほど設けるのはかなり根気のいる作業だが、滞在費を稼ぐくらいはわけもないくらいの稼ぎが見込めるからな。ミミにはこの調子で是非頑張って欲しい。

☆★☆

ブラックロータスは順調にウィンダステルティウスコロニーへと到着し、多少の待ち時間を経て無事入港することができた。

「メイ、お疲れ様」
「ありがとうございます、ご主人様」

メイは今日もメイドとして完璧な立ち居振る舞いである。既にアポは取ってあるので、この後は船を降りてすぐにスペース・ドウェルグ社に向かう予定だ。全員でな。

何故ならとっととあの船をスペース・ドウェルグ社に売り払ってしまわないと、エルマ用の新しい船を入れるスペースが確保できないからな。優先順位はあの船の引き渡し、そしてエルマの船の調達、それから俺の新しいパワーアーマーの調達だ。最悪、ここで手に入らないようならパワーアーマーは別の星系に探しに行っても良いしな。

「疲れてないか？　ってメイに聞くのも変な話か」
「はい。ですが、ありがとうございます。そのように気を遣って頂けるだけで私は幸せ者です」

「そうかなぁ……もうちょっと色々要望してくれたほうが俺としては嬉しいんだが」
「検討させていただきます」
そう言ってメイが僅かに微笑みを浮かべる。
「あー……行くのめんどいなぁ」
「そうもいかないでしょ。ほら、しゃんとして」
「やーん」
よほど出社するのが嫌なのか、全身でだるさを主張しているティーナがウィスカに背中や尻を叩かれている。普段の整備なんかは文句一つ言わずに楽しそうにやってるのに、会社に行くのは途轍もなく嫌いなんだな、ティーナは。
「まずはスペース・ドウェルグ社に行って、それからは？」
「そのままスペース・ドウェルグ社で船を見繕うんですか？」
「いや、スペース・ドウェルグ社は小型の高速戦闘艦はちょっとな……」
前にブラド星系でスペース・ドウェルグ社の小型高速戦闘艦の試作品に乗ったが、試作品とは言えあの出来ではちょっとなぁ。スペース・ドウェルグ社の航宙艦は基本的に同クラスの船の中では積載量と装甲に優れる代わりに機動性に劣るって傾向だから、正直小型の高速戦闘艦を選ぶなら他社製品の方が良いんだよな。そもそも小型艦の中に高速艦と言えるような船が無いし。
「しれっとうちの会社がディスられてるよ、お姉ちゃん」
「しゃあないわ。そっちの分野はあんま得意じゃないのは事実やし」
「整備性の問題もあるから、選ぶときには二人にも意見を貰うから

な」
「こっそりな」
「一応会社に知られると処罰までは行かなくても注意されちゃうから……」
二人が苦笑いを浮かべる。それはまぁ、そういうこともあるだろうな。知られたら自社製品進めんかいワレェ！　ってなるのは確かにそうだろうし。
まぁ、何はともあれさっさとスペース・ドウェルグ社に向かうとしますかね。

#３０４　スペース・ドウェルグ社ウィンダス星系支社（前書き）

キリのいいとこまで書こうとしたら遅れました（，ω，）（ゆるして

#３０４　スペース・ドウェルグ社ウィンダス星系支社

「お疲れ様です、連絡していたウィスカです」
「ティーナや。これ、ＩＤな」
「お疲れ様です」

例の微妙にダサい看板が掲げられているスペース・ドウェルグ社のウィンダス星系支社を訪れた俺達は、とりあえず受付に声をかけるティーナとウィスカの二人を見守ることにした。見た目少女の二人と、いかついけど小さいおっさんが礼儀正しくやり取りしている様はなんだかちょっとおままごとっぽい雰囲気を感じないでもない。実際には両方ともいい年をした大人なのだが。

「あちらの方々はオーナーの？」
「せや、あの兄さんがオーナーのキャプテン・ヒロ様やで。プラチナランカーで、ゴールドスターっちゅう凄い勲章を陛下直々に頂いた新進気鋭の凄腕傭兵にして栄えある帝国の新たな英雄やな」
「名誉子爵様でもありますから、ご無礼の無いようにお願いします」
「それは勿論。本日は商談ということでしたね」

そう言って受付の男性ドワーフはちらりとこちらに視線を向けてきた。本日の訪問内容に関しては既にティーナとウィスカからスペース・ドウェルグ社に連絡を入れてあるので、向こうも事情は全て把握している。

「お待たせしました、こちらへどうぞ」

程なくして所謂ビジネススーツに似たデザインの服を着た女性ド

ワーフが現れ、俺達の先に立って案内を始めた。何度見ても思うんだが、ひげもじゃで顔もそれなりにいかつい男性ドワーフはともかく、どんなに頑張って上に見てもせいぜい中学校低学年くらいの年齢にしか見えないドワーフの女性がああいう服を着ているとどうにも違和感というか、コスプレ感が……でもドワーフの女性って身体が小さいだけで、よく見れば出るとこは出てたりするし妙な色気もあるんだよな。改めて不思議な種族だ。生命の神秘を感じる。

「兄さん、ああいう服が好みなん？」
「今度着てみましょうか？」
「やめなさい」

小声だけど聞こえるかもしれないでしょうが。

「ふぅん？」
「うーん、ああいう服はあまり着たことがないんですよね」

なんか後ろでも小声で話し合ってるな。これから真面目な話だから。後ろ姿を見る分には気づかれないだろうと思って前を歩く彼女に不躾な視線を送ったのは謝るから。この話はここでやめよう。

そうして歩き、エレベーターのようなものに乗ったりしながら移動すること数分。俺達はなかなかに豪華な内装の応接室――というより会議室のような場所に案内されていた。

「失礼します。ヒロ様と同行者の皆様をご案内して参りました」
「ご苦労。人数分の飲み物を頼む」
「承知致しました」
「どうぞ、こちらの席へ」

先に会議室で待っていたスペース・ドウェルグ社の社員らしき人

々に席を勧められたので、素直にその勧めに従って席に着く。テーブルの反対側に座るスペース・ドウェルグ社の面々に向かってど真ん中に俺。左手にエルマとミミ。右手にティーナとウィスカ。そして俺の背後に控えるようにメイが立つ。

「私は従者なので、こちらに控えさせていただきます」

「それは……よろしいので？」

あちら側の進行役らしき男性ドワーフの社員が聞いてきたので、頷いて肯定しておく。メイ自身がそう判断したのなら俺から言うことは特に無い。程なくして先程飲み物を持ってくるように指示されていた女性社員が水差しのようなものとグラスを持ってきて全員に飲み物を用意してくれた。

ふむ？　氷水に何か果物の輪切りのようなものが沈めてあったように見えたな。果汁水とかレモネードみたいなものだろうか？　本物の果物を使っているとしたら、なかなかの高級品だな。

「さて、それじゃあ話を始めようか。こういうのは単刀直入に行きたいな」

「はい、まずは自己紹介させていただきます。私は今回の交渉において社の代表を務めさせて頂くアーガットと申します。そしてこちらは技術部門のテレサです」

アーガット氏に紹介されたテレサさんが無言で頭を下げる。アーガット氏は……ドワーフの男性は年齢の区別がつかんな。声からすると三十代か四十代に思えるが、これもアテにはならないしな。テレサさんは女性ドワーフだが、女性のドワーフも俺からすると年齢がわかりにくいんだよな。ただ、落ち着きのある雰囲気から察するにティーナとウィスカよりは年上のように思える。

「どうも。傭兵のヒロだ。名誉子爵うんたらに関しては振り回すつもりはないから、普通の傭兵として扱ってくれ」

最新型の母艦を値切りに値切って買って、運用データを提供しつつ一度取材を受けただけだと、スペース・ドウェルグ社からしたら大した客でもないだろう。何十隻も船を買ったとか、スペース・ドウェルグ社の依頼を沢山こなしたとかなら話は別だろうけど。

「いえいえ、ヒロ様は我が社にとっては大変な上顧客様ですよ。ヒロ様の活躍によって我が社の母艦の売上は上昇傾向でして、最新ブロックのデータも蓄積されて発注もかなりの数が入っております。砲母艦としての運用は実に斬新なアイデアです。火力はそのままに貨物の積載量を向上させた攻撃型輸送艦の開発計画も――」

「ゴホン」

何やら俺達に聞かせてはまずい情報を口走りかけたようで。テレサさんが咳払いをしてアーガット氏の言葉を止める。

「は、ははは……いや、単刀直入にでしたな。ウィスカ君とティーナ君のレポートは既に技術部門で分析をしております」

「大変に興味深い内容です。レストアした実機や、余剰の残骸なども一緒にお売り頂けるという話でしたね？」

「そのつもりだ。お互いの利益になるだろうと考えているよ」

俺達は出処が怪しい船を売り払ってニッコリ、スペース・ドウェルグ社は自社にない技術がてんこもりで、かつ製造元の会社に入手経路を探られても向こうが泣き寝入りするしかないような実機を手に入れられる。しかも、制御系のソフトウェアも完全な状態で。

無論、本来は簡単に解析されないように十重二十重のセキュリティがかけられている筈のものだが、元々が赤い旗宙賊団に横流しさ

れていたようなモノなのでその辺りは既に解除済み。解析に関しても機械知性のアドバイザーなどに依頼すれば比較的早期に終わるのが見込まれるし、そうなればスペース・ドウェルグ社は今まで苦手としていた小型高速艦に関する研究が一気に進むことになる。互いにとって損のない取引だ。

「額面はどうする？」

「そちらからの提示額などがあればお聞きしたいところですが」

「俺としてはそっちがどれだけの値をつけるのか聞いてみたいところなんだがね。こういうのは先に言ったほうが有利なのかな？」

「一概には言えませんな。では同時に提示するというのはどうでしょうか？　こちらの提示額のほうが高ければ即決で決まりますし、ヒロ様の提示額のほうが高ければそこから交渉するということで」

「良いのか？　買い叩けるチャンスだろ？」

「は、ははは、ヒロ様から買い叩くなんてとてもとても……」

そう言ってアーガット氏が額に汗を滲ませる。なんだろう。その俺を怒らせると超危ないからそういうのは全力で避けたいんですみたいな態度やめてもらえるかな？　俺、そんなハードクレーマーとか厄介客じゃないと思うんだけど。ブラド星系でのウィスカデッドボール騒動とか帝都でのマスゴミの件は悪いけどどう考えてもスペース・ドウェルグ社側が悪いからな？

「じゃあ同時に提示しようか」

「はい、では……」

アーガット氏が指を三本立てて見せ、徐々に二本、一本と減らしていく。

「７５０万」

「１２００万」

俺が提示したのが７５０万エネルで、向こうが提示したのが１２００万エネルである。おや、思ったよりかなり高いな。

「少しびっくりだな。だがそちらがそう言うならそれで」

「はい、ではこれで。ああ、ウィスカ君とティーナ君には数日こちらで情報の引き継ぎなどをして頂きたいのですが、それでもよろしいでしょうか？」

「構わないが、一日あたりの拘束時間はきっかり八時間までとしてくれ。前に帝都で同じようにスペース・ドウェルグ社に預けた時には随分と長時間労働を強いられたようでな。こちら側の仕事に影響が出過ぎた」

あの時は顔を合わせるたびに顔色が悪くなってやつれていったからな……二人がまたあんな風になるのは絶対にＮＯだ。

「あと、二人の所属はスペース・ドウェルグ社かもしれないが、間違いなく俺の身内だ。何かあれば……わかるな？」

「は、はははは……それはもう」

「過剰に特別扱いしろってわけじゃない。ただ、彼女達は俺の船に乗ってる。それだけは肝に銘じて欲しいな」

ここで軽く例の慣習を匂わせておく。まぁ、実際もうそういう関係になっているのだから、何の嘘も偽りもない事実だ。ああ、もう一つ言っておくか。

「それじゃああの船は１２００万で売れたわけだから、二人の取り分は３６０万な。一人１８０万ずつってことでよろしく」

「「「えっ」」」

戸惑いの声が三人から上がった。そのうち二人はティーナとウィスカだか、もうひとりはテレサさんである。

「え、あの、ひゃくはちじゅうまん？」

「回収した船の売却益のうち三割を二人の報酬として渡す契約にしてるんでね」

テレサさんの問いかけに答えて肩を竦める。アーガット氏も顎が外れんばかりに口をあんぐりと開けているな。よほど度肝を抜かれたらしい。ティーナとウィスカは……ああ、なんか遠い目をしているな。

「兄さん、それ今言う必要あったか？」

「マネーイズパワーだよ。何かあったらそれだけのエネルでぶん殴ってくるぞってこった。あと、俺がどれくらい本気で二人を重用しているのかはっきりと分かるだろう？」

「それは……そうですね」

ウィスカが溜息を吐く。まぁ、スペース・ドウェルグ社のウィンダス星系支社に関わるのはほんの数日だ。多少居心地は悪くなったかもしれないが、それ以上に下手に何かするのは危ないと強く印象づけることはできただろう。

「それじゃあ、そういうことで。後は船の移送手続きや二人の勤務シフトについて話そうか」

「はい……」

魂を抜かれたような状態になってしまっているアーガット氏と細かい話を詰めていく。とりあえずはスペース・ドウェルグ社方面は

これで良いだろう。妙に高い値がついたことには多少疑問がないでもないが、うちが得する分には構わんしな。ありがたくエルマの船の購入代金として使わせてもらおう。

#３０４　スペース・ドウェルグ社ウィンダス星系支社（後書き）

近々原稿作業でまた暫く更新を停止する予定です。月末くらいからかな？　ユルシテネ！　―（：３」∠）―

#３０５　新機体に関する話し合い（前書き）

長らくお待たせ致しました。
更新再開！（　，ω，　）

#３０５　新機体に関する話し合い

赤い旗宙賊団から鹵獲し、リストアした他国製の高速小型戦闘艦をスペース・ドウェルグ社に売りつけることに成功した俺達はその足でシップヤードへと向かうことにした。

「兄さんの脅しが効いたんかな？」

「１８０万エネルに動揺したんじゃないかな……」

などとボソボソと話し合いながら整備士姉妹も俺達に同行している。

ティーナとウィスカの二人はそのまま支社で仕事をすることになるかと思ったのだが、持ち込んだ機体の解析と研究を行う人員の選定と姉妹が持ち込んだレポートの査読にも時間がかかるということで、とりあえず今日のところは本来の任務――つまり俺の船のメカニックとしての仕事を続けるように、という話になったのだ。

実際に人事や仕事の引き継ぎ、タスクの割り振りに時間がかかるのか、それとも俺の脅しが効いたのかは定かではないが……まぁ、新たな機体を迎えるにあたってメカニックが同行してくれるのは単純にありがたい。二人は業界人でもあるしな。俺やエルマのような傭兵とはまた違った視点で有効な助言を期待できる。

「シップメーカーの支社を巡るわけじゃないんですね」

「ブラド星系みたいにスペース・ドウェルグ社一強みたいな環境ならそれで良いんだけど、ここみたいに各社がしのぎを削るような場所の場合はシップヤードに行くのが便利ね」

素朴な疑問を抱くミミにエルマが事情を説明している。ＳＯＬだ

と船からコロニーのコミュニケーションメニュー内にあるシップヤードにアクセスして船を売り買いしていたものだが、この世界で船を買うとなるとこうして足を運ぶことになるわけだな。
え？　船からホロ通信とかで済ませられないのかって？　まぁできないこともないみたいだが、そうやって船を買う人は少数派らしい。

「うーん、エルマさんの操縦特性から考えるとやっぱり機動型だよね」
「せやろな。まぁ基本的に小型艦に求められるものは速度とか小回りやし」
「火力とトレードオフなのが問題だよねぇ。出力の問題もあるし」

ティーナとウィスカは話の方向性をエルマが乗る新機体の話に切り替えたらしい。
一般的に小型艦に求められる性能はティーナの言う通り速度や小回りである。その上でどれだけ火力を持たせられるか、というのが永遠の課題だろう。小型艦に積むことができる小型のジェネレーターでは限られたエネルギー出力しか得られないので、必然的にその出力をどこまで機動性――つまりスラスターやブースターに注ぎ込み、どこまで火力――つまりレーザー砲などに割り振るかというのが頭の痛い問題なのである。

「火力は実弾兵器や爆発兵器で補うって手もあるんやけどな」
「確かにマルチキャノンとかシーカーミサイルとか魚雷発射装置は稼働させるのに必要なエネルギーは少ないけど、そっちは重量がね」
「小型艦だと特にそこがきっついよなぁ。装備そのものの重量も問題になるし、そもそも装弾数の問題もあるしなぁ」
「その点クリシュナは反則よね」
「そう言われてもなぁ」

エルマのジト目を受け流しながら肩を竦めてみせる。
確かにクリシュナは反則に近いレベルに性能の高い船だ。小型艦としては最大級の大きさではあるが、搭載している特別性のジェネレーターから生み出されるエネルギー出力は中型艦をも凌駕する。
そのため強力なスラスターで十分以上の機動力を確保した上で、強力なシールドを装備し、更に四門もの重レーザー砲を扱えるだけの余裕があるのだ。無論、あくまでも小型艦という括りの中で破格な性能を誇るというだけで、例えば真正面からの火力勝負では帝国軍の戦艦や巡洋艦にはとても敵わないし、シールドの性能も比べ物にならない。クリシュナは間違いなく強力な小型艦だが、決して無敵の船ではないのだ。

「エルマさんとしてはどんな船が良いんですか？」
「性能も大事だけど、見た目も大事よね」
「せやろか？」
「私はちょっとわかるかも」
「そういうものなんですかね？」

エルマの言にティーナとミミが首を傾げ、ウィスカは頷いている。俺はどちらかと言えば見た目よりも性能派なのだが、見た目も大事だというエルマの言葉を否定する気にはあまりならない。俺だって性能差が然程でもなければ見た目が気に入ったほうを使うだろうしな。

「兄さん的にはどないなん？」
「見た目だけを重視するのは俺の流儀じゃないが、性能が良くても見た目があまりにも趣味に合わないってのはモチベーションの点で良くはないと思う」
「玉虫色の答えやなぁ」

「実際そういうもんさ。見た目が気に入ってる艦だからこそ傷をつけられたくないって思うのが人情ってもんだからな。逆に見た目とかどうでもいいなんて思って船に乗ってると多少のダメージは気にしない雑な操艦になるもんだ」
「なるほどー。そう言われればそういうもんかもな」

ティーナも俺の説明に納得してくれたようだ。実際のところ、アセンブリとペイントを済ませて船を眺めて『なんだこれカッコいいな。最高か？』という感情は馬鹿にできないものだ。船に対する思い入れというのも船乗りにとっては大事なものなのだと俺は思う。
そんな船談義をしながら移動することしばし――もっとも歩いたのではなくコロニー内の移動システムを使ったのだが――俺達はシップヤードへと到着した。

「へー、こんなんなっとるんや」

シップヤードを見回してティーナが感心したような声を上げる。正直に言うと、俺も少し驚いていた。予想以上に小綺麗な場所だったからだ。

「なんだか少しブラックロータスの休憩スペースに雰囲気が似てますね」
「ああ、なんだか見覚えがあると思ったらそういうことですか」

ミミの発言にウィスカが納得したような声を上げる。質の良さそうなソファや長テーブル、それに各所に設置されている観葉植物やテラリウム、航宙艦の広告を表示しているホロディスプレイなど、どことなくブラックロータスに通じるデザインなのだ。

「奥の方に各社のブースがあるわけか」

なんかアレだ、ニュースか何かで見たモーターショーみたいだな。
「そういうこと。あっちで目当ての船を探したら、こっちのスペースで商談するってわけ。まずは端から回って行く？」
「うーん、まずはもう少し具体的にどんな機体を調達するべきかっていう意識の摺合せをしておいた方が良いんじゃないか？」
「ああ、それもそうね。私も色々考えたから、聞いてもらおうかしら」

☆★☆

そういうわけで、俺達は企業のブースを訪れる前に手前側のラウンジスペースで話し合いをすることにした。
「漫然と足の早い船で火力もそこそこ……ってのはどうかと思うのよね」
席に着き、飲み物を注文し終えた段階でエルマがそう話を切り出した。
「なるほど。まぁソロならともかく、チームとして動くならそれはそうだな」
エルマの言に納得した俺は頷く。しかしミミ達は今ひとつ要領を得ないようで、揃って首を傾げていた。
「つまり……どういうことなん？」
「つまり、今の私達のスタイルを続けていくなら現状の穴を埋めるなり長所を伸ばすなりっていう明確なコンセプトを考えて船を選ぶ

べきだし、逆にもう一隻船を増やすことでスタイルを変えるなら、それはそれでその新しいスタイルに即した船を選ぶべきだって話ね」
「なるほど……？」

エルマの説明を聞いてもまだミミはピンときていないようだが、ティーナとウィスカは納得――というか理解できたらしい。これは技術面から航宙艦の設計や改造などに長年携わってきた姉妹と、俺の船に乗るまで全くそういったものに関わってこなかったミミとの差が出た形だな。

「今の宙賊狩りのスタイルって基本的にエサ釣りじゃない？　ブラックロータスを囮にして、のこのことやってきた宙賊をヒロのクリシュナで奇襲して、囮役だったブラックロータスも武装を展開して挟撃するって感じよね」
「そういう流れですね」

ミミがコクコクと頷く。言葉にすると簡単だけど、ブラックロータスが囮だと看破されたり俺が奇襲する前に見つかったりすると台無しだから、それなりに工夫も要るんだよな。
まぁその話は置いておこう。

「それで、今の状態で討ち漏らしが発生するのって宙賊どもに即座に逃げを打たれた時なのよね」
「確かに。言われてみるとそういう傾向があるように思います」

逃げるのが一隻か二隻なら追撃もなんとか間に合うが、四隻、五隻以上に一斉に逃げを打たれると、やはりその全てを撃沈するのは難しい。あいつら、逃げる時には散り散りになって逃げるからな。示し合わせたように……というか実際に事前にそうするよう打ち合わせをしているのだろう。

「だから、穴を埋めるって言うなら追撃能力に長ける船を調達することに考えるべきだし、長所を伸ばすって方向ならそもそも逃げられる前に全部仕留めるって方向で射程や火力に長けた艦を調達するべきってこと」
「よくわかりました」
「ミミも納得できたところで、じゃあ具体的にはどういう方向性で船の仕様を考えるべきかって話だな。追撃能力と火力を同時に、お手軽に獲得するならやっぱりミサイルポッドを積んだミサイル艦が良いだろうな」
「ミサイルっていう実弾を積む関係上、重量増加と継戦能力の低下は避けられんのがネックやね」
「でも、ミサイルポッドは駆動に使うエネルギー出力が小さいから、その分はスラスターに回せるよね。一定の機動力は確保できるんじゃないかな？」
「そうね。撃った分は重量も減るからそれでさらスピードも上がるし」

撃った弾薬分軽くなれば、その分機体が軽くなるから同じ出力でもより高い加速性能が得られるってのは道理だな。いっそミサイルを撃ち切ったらミサイルポッドをパージするなんてのも有りだが……コストが嵩むからナシだな。うん。浪漫はあるけど。
戦闘機動中にミサイルポッドのパージなんてしたら超高速で宇宙の彼方に吹っ飛んでいって回収なんかできんからな。いくら保険に入っていても戦闘のたびにミサイルポッドをパージして行方不明にしていたら、お財布へのダメージがマッハだ。ただでさえミサイルは弾薬費が気になるのに。

「そうなると、気になるのはランニングコストでしょうか？」
「そうだな。継戦能力に関しては俺達が連続で長時間の戦闘するこ

とはあまりないし、戦闘の合間にブラックロータスで補給を受ければ問題ないだろうから気にしなくて良い。ミミの言う通りシーカーミサイルの弾薬費がネックだな」

「意外と高いのよね、あれ」

そう言ってエルマが頬に片手を当てて溜め息を吐く。一般的に使用されるシーカーミサイルの一発辺りの価格は凡そ５００エネルから８００エネルである。日本円価格に換算すると滅茶苦茶に安いのだが、これはレプリケーターによる製造コストの低下や小惑星帯採掘などを始めとした航宙鉱業技術の向上による材料費の低下、それに傭兵ギルドからの補助金など様々な要因が重なった結果である。

弾薬費の価格破壊に一番寄与しているのは基となるデータと材料さえあれば高度な誘導装置なども含めてボタン一つでポンと実物を作り出せてしまうレプリケーターの存在なわけだが、これもまたなんでもかんでも作れるというわけでもない。基となるデータが無ければレプリケーターで物を複製することはできないし、そもそもレプリケーターとは相性の悪い素材などもある。レプリケーターも万能ではないというわけだな。

「一発５００エネルから８００エネルって言っても、それを一回の戦闘で二十発も発射すればそれだけで１００００エネルから１６００エネルだからな。垂れ流していたんじゃ採算が取れん」

一発５０万エネルの対艦反応弾頭魚雷に比べれば一発辺りの金額は千分の一だが、あまり気軽にポンポン撃てるものでもない。これが生き残ればそれで良い戦争だとか、勝てばそれで良い試合だとかなら撃てる限りの火力を全投入してしまっても良いんだが、傭兵業はビジネスだからな。

「シーカーミサイルで宙賊艦を吹き飛ばすと表面要素に大きなダメ

ージが入りますから、敵艦の装備しているレーザー砲やマルチキャノン、スラスターなんかは全損するものが多くなりそうですね」
「結果として経費がかかる上に儲けも少なくなるっちゅうことか」
「こうして聞くと欠点だらけに聞こえるんですけど……」

眉根を寄せながらミミが唸る。

「いや、強いんだよ。ミサイルはほんとに。爆発のエネルギーはシールドを飽和させやすいし、直撃すれば装甲を吹き飛ばして船体に大きなダメージを与えるし、表面要素――つまり敵艦の武装やスラスターなんかに損害も与えるから戦闘能力を大きく減衰させられる。だから使われると厄介だし、絶対に当たりたくないから俺は必ず避けるなり迎撃するなりしてる」
「言っておくけど、シーカーミサイルの弾幕を鼻歌歌いながら切り抜けられるのはヒロみたいな一握りの変態だけだからね。艦の性能によってはそもそもシーカーミサイルの追尾を逃れられるだけの速度を得られないし、レーザー砲で迎撃するにしても飽和攻撃を仕掛けられたらどうしようもないし、シールドで耐えるって言っても小型艦のシールドじゃ二発もまともに喰らえば全損よ」

全損というのはシールドを完全に飽和させられることを指す俗語である。シールドを失った航宙艦は大変に無防備な状態と言って良い。クリシュナは装甲にも金をかけているからシールドをやられても一発や二発くらいのミサイル直撃は耐えられるだろうが、それ以上となるとクリシュナでも危うい。速度を上げるために艦体に軽量化を施しているような小型艦では大抵の場合シールド無しでのシーカーミサイル被弾＝爆発四散である。

「うーん、なるほど。じゃあミサイル艦にするんですか？」
「そうだなぁ。射程と威力、拘束力って意味では理に適ってはいる

んだよな」
「シーカーミサイルに追いかけられているような状況だと超光速ドライブの起動もままならないものね。アタッカーをヒロのクリシュナに任せて私はミサイルを使った足止めに徹するっていうのは悪くない考えだと思うわ」
勿論通常武装としてレーザー砲も数門積むべきだろうけど、とエルマが言葉を続けたところで注文したドリンクが届いたので、各自一旦一息つくことにする。
「話を聞いていて思ったんですけど、小型艦に拘る必要ってありますか？」
一息ついたところでミミからなかなか鋭い意見が飛び出してきた。
「うん、それはなかなか鋭い意見だ。俺も実は小型艦に拘る必要はないんじゃないかと思ってる」
俺もミミの意見に同意する。表情を見る限り、エルマも同じように考えていたのか驚いている様子はない。対して整備士姉妹は首を傾げている。
「ブラックロータスのハンガーは小型用やで？　あれに中型艦入れるのは無理があるわ」
「でも、ブラックロータスでの整備を前提としないならアリなのかな？　小型艦ならブラックロータスに格納して整備ができるけど、それで格納庫を埋めちゃったら今回みたいに戦利品の船をリストアするのは難しくなるよ」
「あー、なるほど。もし今回みたいなリストアするためにスペースを空けるとなるとどっちにしろ小型艦二隻のうち一隻は格納せずに

随行する形になるから、それなら最初から中型艦にするっちゅうのもアリか」

二人で話している間に俺達の考えにすぐに追いついたらしい。ミミは『なるほど！』みたいな顔をしているが、単純に小型艦に拘る必要があるのかどうか疑問に思っただけで、二人が細かい点までは思い至らなかったんだろうな。

「それじゃあ中型艦の導入について話し合うか」

というわけで俺達は小型艦の話から中型艦の話に話題を移すのだった。

#306　営業マン現る（前書き）

間に合った！（　ω　）

#306　営業マン現る

「中型艦にするメリットといえば、やっぱり火力も装甲も小型艦とは一線を画すってところだよな」
「そうね。あとは小型艦と言えば基本的に高速艦ってことになるけれど、中型艦は高速艦から重火力艦まで機体の幅が広いわよね。同じ艦でもカスタム次第で用途が大きく変わるし」
「せやけど、追撃には向かんのと違う？　速度偏重にしても速度で小型の高速艦勝つのは難しいで」
「性能的にはそうだけど、中型艦なら小型艦と比べて威力にも射程にも優れる武装を装備できるから、立ち回り次第では小型艦よりも広い範囲をカバーできるんじゃないかな？」
「うーん、対ＦＴＬトラップを使えれば良いんですけどね」
「あれは軍用装備だし、専用艦でしか使えないしなぁ」

ミミの言う対ＦＴＬトラップというのは広域に作用する強力なインターディクターの一種で、広範囲の超光速ドライブを強制的に停止し、再起動も阻害する大変に厄介な妨害装置である。まぁ、残念ながらエネルギー効率が非常に悪いらしく、長時間起動するとなると戦闘能力の乏しい専用艦での運用が必要になるという話だ。その専用艦も特殊用途の軍用艦ということで一般向けに販売はされていない。

「足止め性能は最高よね。別に常時起動出来なくても良いから、同じような装備があったりしないかしら？」
「短時間稼働で十分なんだよな。エネルギー消費が大きいって言うならキャパシタみたいなものを噛ませてどうにか使えないもんかね？」

「技術的には可能かもしれんけど、一般向けの販売となると難しいんとちゃう？　もし宙賊にそんなものが渡ったら大変やで」
「宙賊に襲われた民間船がＦＴＬトラップで足を止められたりしたらひとたまりもないね」
「そういう面を考えて普及してないのかもしれませんね……」

確かに宙賊がそんなものを使い始めたら襲われる民間船にとっては悪夢にしかならんだろうな。三分もあればメインスラスターを破壊されて行動不能になるだろうし。

「まぁ、ないものねだりをしてもしても仕方ないよな。で、中型艦にするデメリットなんだが、まぁランニングコストの問題だな」
「整備費用も小型艦よりかかるし、ブラックロータスとは別枠で停泊しなきゃならないから停泊費用も嵩むわね」
「性能面ではやっぱスピードが出ないのと、被弾を避けるのが難しいってとこか？」
「小型艦に比べて投影面積が大きいからね。重量が大きい分小回りも聞かないから急激な回避機動も取れないし、そこはある程度諦めるしか無いかな」
「でも、小型艦よりも強力なシールドを運用できるんですよね？　増加する火力も考慮すれば、宙賊相手なら一方的に叩けるんじゃないですか？」
「確かに完全に装備を整えた中型艦は民間船を改造してなんとか武装しているってレベルの宙賊艦なんぞ鎧袖一触にできるな。問題は、宙賊もシーカーミサイルを装備しているってとこなんだよ」
「宙賊も馬鹿じゃないから、中型艦を仕留めるためにシーカーミサイルを装備している艦がそれなりにいるのよね。中型艦の多層シールドなら五発や六発くらいまでならシーカーミサイルの直撃を受け止められるけど、十発二十発と撃ち込まれると厳しいわ」
「多数撃ち込まれるとレーザーを迎撃に回さなきゃいけなくなるか

ら手数が減るんだよな」
「そして迎撃に手間取ってるうちに逃げるのよね、あいつら。でもその点に関してはクリシュナもブラックロータスもいるから大丈夫だと思うわ」

確かに新しく購入する中型艦単独だとそういった戦法で封殺される可能性があるが、クリシュナとブラックロータスもいるならその心配はない。どれかの船に攻撃を集中すれば他の二隻が攻撃に回ることになるからな。そうなると宙賊艦ではまず攻撃に耐えられない。やっぱり逃げを打たれるのが一番厄介だな。

と、そんな感じで話し合っていると企業ブースが並んでいる奥の方から人影が近づいてきた。チラリと視線を向けてみると、見るからにビジネスマンといった風体の男性と、いかにもコンパニオンといった風体のスタイルの良い美人――というか女性型アンドロイドだ。

「何か用かな？」
「ご歓談中のところ失礼いたします。私はイデアル・スターウェイ社のオータムと申します。こちらはコンパニオンのミリーです」

オータムと名乗った男性が名乗り、紹介されたミリーという名の女性型アンドロイドが綺麗なお辞儀をする。

「キャプテン・ヒロ様でいらっしゃいますね？」
「いかにも。それで？」
「単刀直入に申し上げますと、当社商品の売り込みですね。こちらのミリーは少々耳が良いのです。意図せずヒロ様達のお話しされている内容を聞き取ってしまったわけで」
「まぁ、別に盗み聞きを咎めたりはしないさ。わざわざこんなところで普通に話しているわけだしな」

意図せずとか言っているが、まぁ意図的なものだろう。高性能な聴覚センサーを装備している女性型アンドロイドをコンパニオンとして使って、コンパニオンとしての役割だけでなく情報収集もさせているということなんだろうな。

「それで？　天下のイデアルが俺みたいなチンケな傭兵にどんな特別なお話を持ってきてくれたって？」

イデアル・スターウェイ社と言えば帝国航宙軍に艦船を供給している半分国営みたいな立ち位置の超巨大シップメーカーである。作る船のデザインは洗練されており、性能の特性としては中庸。速度も装甲も一定以上の水準を満たし、拡張性も悪くなく、他社に比べると価格も安め。良く言えば万能、悪く言えば中途半端な船を多く作っているシップメーカーだな。

「またまたご冗談を。皇帝陛下の覚えめでたく、ゴールドスター受勲者にしてプラチナランカーでもあるヒロ様が自らチンケな傭兵と自称するというのは流石にご謙遜が過ぎるのでは？」

「それはそうね」

「それはそうですね」

「せやな」

「ですね」

俺以外の全員がオータム氏の発言に同意する。俺の後ろに控えてずっと無言を貫いていたメイさえも頷いている。なんだなんだアウェイか？

「ＯＫＯＫ、俺が悪かった。それで、単刀直入に話をしてくれるんだろ？　まぁ座ってくれよ」

「ありがとうございます」
俺が席を勧めるとオータム氏はテーブルを挟んだ俺達の対面に腰を降ろした。ミリーはオータム氏の後方に立って控えている。
「それで、そちらのミリーさんは俺達の話から俺達がどのような船を欲しているのか理解してるってわけだよな」
「はい。それで、私どもからはこちらの船を提示させていただくのがよろしいかと思いまして」
そう言って彼はタブレット型の情報端末をテーブルの上に置き、こちらへと手で押してみせた。
ふむ？　このテーブルにはホロディスプレイが着いているからそちらにデータを転送すれば表示できるはずなんだが？　わざわざタブレットの画面で見ろというのはなかなかにきな臭いな？
「それじゃ遠慮なく」
タブレット端末を手に取り、画面に目を落とす。
表示されているのはいかにもイデアル製らしい、なかなかにシャープな見た目の中型艦だ。尖った形状の艦首が特徴的な流線型の優美なデザイン。しかし後部はなかなかに頑丈でゴツく見える。この優美さとゴツさが合わさったヒロイックなデザインがいかにもイデアル製だな。
表示されている３Ｄモデルを回転させてみると、メインスラスターは大型のものが三基に小型のものが二基。加速性能はかなり良さそうだ。サイドスラスターの配置も多く、意外に小回りも利きそうに見える。実際には艦の重量に対する出力比がどうかわからんから、意外に重いかもしれんが。もしかしたら直線だけ早い真っ直ぐ番長な機体かもな。

「船の中央、両サイドについてる機構はなんだこれ」
艦の両サイドにボコッと半球状のパーツがついているのだが、見覚えのない装置だ。少なくともオプションパーツの類でこんなものは見たことがない。
「見たことないわね……電子戦装備のようにも見えるけど」
同じ画面を覗き込んでいるエルマが細い顎に手を当てて首を傾げる。確かに電子戦装備――ＥＣＭ発生装置か増幅装置か何かのように見える。
「それがその船の目玉でして。まぁ試作的な意味合いの強いモノなのですが」
「おいおい、俺達に試作機のテストをやれってか？」
「実働試験は完璧にパスしている信頼性の高い装備ですよ。まだ一般流通していない装備であるというのは確かですが」
「実戦データが欲しいってわけね……で、これ何なの？」
「社内ではグラヴィティ・ジャマーと呼ばれています。所謂対ＦＴＬトラップの小型版です」
オータム氏はそう言ってニヤリとなかなかに悪い笑顔を浮かべてみせた。なるほど、俺達の話を聞いていたなら自信たっぷりに近づいてくるわけだ。

#307　グラヴィティ・ジャマー（前書き）

船の名前を考えていたらマニアワナカッタ（‘ω’）（決まりはした

#307　グラヴィティ・ジャマー

ドヤ顔をしているオータム氏をよそに俺達は顔を見合わせ、無言で視線を交わしてからオータム氏に向き直った。

「そんな都合の良いものがこんな都合の良いタイミングで」
「怪しいセールスはお断りなんだけど」
「何か法外な交換条件でも提案するんですか？」
「それともなんか欠陥でもあるんか？」
「爆発でもするとか？」
「いや、そういうのではないですから。私は正真正銘イデアル・スターウェイ社の営業課の人間ですし、騙そうともしていません。至極真っ当な営業取引を提案しているだけです」

俺達全員に一斉に疑われたオータム氏が慌てて手を振って俺達からかけられた嫌疑を否定する。
本当にござるかぁ？　こうして商品に自信のあるシップメーカーからの営業はある程度想定していたとはいえ、流石に一般流通していない機密装備を装備した新型試作艦を持ってくるとかいくらなんでも都合が良すぎるだろう？

「欲しい物を欲しい時に持ってくる商売人は疑ってかからないとな」
「流石はプラチナランカー、用心深いですね」

オータム氏が苦笑いを浮かべたところでメイが口を開いた。

「確認致しました。フィリップ・オータム氏は間違いなくイデアル・スターウェイ社所属です」

「そうか。ならまぁ、信用はして良いわけだな」
「本来はここで営業活動をしている時点で大丈夫なはずなんだけどね」

俺達のやり取りを見てオータム氏が更に苦笑いする。

「すみません、私達ってトラブル体質というかなんというか……」
「黙っててもトラブルが寄ってくるから、めちゃ警戒心強くなっとんのよ。ごめんな」
「いえいえ、お気になさらず」

疑われるくらいなら気にもならないのか、オータム氏は苦笑いを引っ込めて実ににこやかな営業スマイルで対応してくれた。うーん、この変わり身の速さは流石だな。

「それで、グラヴィティ・ジャマーでしたっけ。ＦＴＬトラップの小型版って話ですけど、よく小型化できましたね。アレは消費エネルギーが大きすぎて大型艦――というか最低でも駆逐艦クラスのジェネレーターを使わないとまともに使えないって話でしたけど」

ウィスカが質問をすると、オータム氏はその質問に頷いてから口を開いた。

「小型版というだけあって機能はだいぶ制限されていますよ。ＦＴＬトラップは元々グラヴィティ・ブラストという重力波収束砲として開発したものを流用したもので、簡単に言えば大出力の重力波を放出することで超光速ドライブを強制停止させ、更に再起動も阻害するというものでした。元々が戦艦の主砲として作られたものですから、要求エネルギー出力も大きく、そのままでは小型化が難しかったわけです」

「なるほど。それで、制限というのは？」
「グラヴィティ・ジャマーは既に超光速ドライブを起動して超光速航行中の船を止めることはできません。ＦＴＬトラップはごく簡単に言えば強力な重力波を放射することによって対象となる艦船の質量に干渉し、超光速ドライブを強制停止させるという原理でＦＴＬを阻害するわけですが、グラヴィティ・ジャマーは直近に大質量があるという風に船のセンサーを騙して、超光速ドライブのセイフティを誤動作させます」
「ああ、なるほど。実際に質量を変化させるんじゃなく、近くにデカい小惑星なりコロニーなり大型艦なりがいるぞ、と船のセンサーに誤認させて超光速ドライブの起動自体を妨げるっちゅうわけか。そんなら確かにそんなにエネルギーは消費せんかもやね」

ウィスカとティーナがオータム氏に技術的な質問をしているが、俺は半分程度しか理解出来んな。多分、聞いている俺達にもわかりやすいように話をしているんだと思うが。

「要約すると、超光速ドライブで突っ込んでくる船は止められないけど、戦闘中に超光速ドライブを起動して逃げようとする船は止められると」
「そういうことですね。有効範囲は凡そ半径５０ｋｍほどです」
「半径５０ｋｍね……あまり広くはないわね」
「そうだな」

普通に半径５０ｋｍと聞けば滅茶苦茶に広範囲に聞こえるだろうが、最大出力でスラスターを噴射すると遅くとも秒速１０００ｍ、速い船なら秒速５０００ｍとか出る宙間戦闘においてはさほど広いと言えるような範囲でもない。まぁ、決して狭いというわけでもないが。

「まぁ、船が動けばそれだけ範囲も移動するわけだし十分使えそうではあるな」
「そうね。問題は船のスペックだけど」
エルマの言う通り、グラヴィティ・ジャマーが有用な装備であったとしても船の機動力や火力、防御力がお粗末なのでは使いようがない。それならグラヴィティ・ジャマーをブラックロータスにつけたほうが遥かにマシだ。
「勿論、船の性能も妥協はしておりませんとも。大型の新型ジェネレーターとグラヴィティ・ジャマー用のエネルギーキャパシターを搭載しているので、その分居住性や積載能力は犠牲になっていますがね」
タブレット端末で確認する限り、確かに居住スペースは狭いしカーゴスペースも最低限だ。ただ、その分ジェネレーターは大型で出力には余裕があり、大型のキャパシタを積んでいるので瞬間的に大出力のエネルギー兵器を運用することも可能だな。まぁ、本来はキャパシタに溜めたエネルギーをグラヴィティ・ジャマーの駆動に使うのだろうから、火力方面でキャパシタの容量を使ってしまうとグラヴィティ・ジャマーの使用可能時間に響きそうだが。
「大型ジェネレーターもキャパシタもグラヴィティ・ジャマーも後部ブロックに積んでるのね。なら、前部ブロックは交換できるのかしら？」
「可能です」
「なるほど」
イデアル製の航宙艦はイデアル・ブロックシステムを採用しており、艦を前部ブロックと後部ブロックに分けて自由に組み合わせる

ことができる。
　後部ブロックには主にジェネレーターやシールドジェネレーター、スラスター、カーゴスペースなどが集中して配置されており、ジェネレーターの大きさやメイン・サブスラスターの数、カーゴスペースや居住スペース、その他装備の格納スペースなどに使える区画の大きさなどによって色々と種類があり、前部ブロックには主にレーザー砲などの兵器を装備するスロットの数やミサイルポッドや魚雷発射管の数、その他にはセンサー類などの設置スロットの位置や数がそれぞれ違うものが用意されている。
　そしてこのブロックシステムの有用性は仮に船が損傷を負った際に用意にブロック単位で交換が可能という点である。前部ブロックが損傷したなら前部ブロックだけを別のものに付け替えて迅速に戦線に復帰することが可能なのだ。その分若干船体の耐久力に劣るわけだが、基本的に航宙艦はシールドで攻撃を受け止めるものだからな。船体の耐久力は二の次にされがちなのである。

「後部ブロックは固定として、前部ブロックは……今の構成だとクラスⅡの砲スロットが六門、ポッド系スロットが二門の計八門か」
「火力としてはまぁまぁね。でもこっちのブロックの方が良いんじゃない？」
「ああ、そうだな。クラスⅢ二門にクラスⅡ二門の方が使い勝手は良いかもしれん。こっちにもシーカーミサイルポッドは二門つけられるしな」

　武装のクラスについてはクラスⅠが小型砲、クラスⅡが中型砲、クラスⅢが大型砲だと考えればほぼ問題ない。
　クラスⅠの砲は一部の偵察用小型高速艦が使うもので、民間船を叩くのには十分だが戦闘艦同士での戦いではほぼ役に立たないレベルのものと思って良い。宙賊がよく使うのはこのクラスだ。
　クラスⅡの方が標準的な威力の砲で、航宙艦の武装として尤も普

及している。その為非常に種類も豊富で、用途に合わせて様々な武器を選ぶことができる。
　最後にクラスⅢの砲だが、これはほぼ市場に流通している航宙艦用の砲としては最大クラスのものだ。大きいだけあって火力も高いが、それだけエネルギーの消費も大きい。ただ、威力が高いということは航宙艦のシールドを短時間で飽和させられるだけの性能を持っているということでもあるので、エネルギー出力が許すのであればやはりクラスⅢの砲は強力である。
　クラスⅡの武器を沢山積むべきなのか、それとも手数が少なくなってもクラスⅢの武器を積むべきなのかという議論はＳＯＬでも盛んに行われていたが、俺は射程にも威力にも優れるクラスⅢの武器を積む派である。継続火力よりも瞬間火力派なのだ。
　航宙戦闘では継続火力を発揮しようにもそうそう攻撃を長い時間当てられ続けられるものでもないからな。静止目標に対してなら継続火力が高いほうが有利だとは思うが、動目標に対してなら攻撃を叩き込める一瞬で火力を発揮できたほうが有利だろうと俺は思っている。

「データを見る限り、機動性も悪くはないわね。シールドもまぁまぁのを二枚積むだけの余裕はありそうだし」
「火力面もまぁ、中型艦としては及第点ってところだよな。機動性とグラヴィティ・ジャマーも合わせれば総合性能はかなり高いな。つまり――」
「「実にイデアルらしい機体だな（ね）」」

　俺とエルマの声が見事にハモった。グラヴィティ・ジャマーはともかくとしてその他の性能は実に可もなく不可もなく。突出した性能は無いが、全体的に良いバランスでまとまっているしイデアル・ブロックシステムという利点もある。

「後は値段次第だな」

予算の範囲内かどうか。それが問題だ。

#308 【ISCX-317 Antlion】（前書き）

寝坊しました―（：3」∠）―

#308 【ISCX－317 Antlion】

「なるほど」

提示された金額は凡そ１２００万エネル。中型艦の価格としてはまぁまぁ妥当、というか安めの価格であった。

「これは素の状態だよな？」

「そうですね、概ね傭兵の方々が言うところの『素』とか『バニラ』といった状態の価格です」

ということは、ここからカスタマイズで更に金がかかるわけだ。所謂『素』とか『バニラ』の状態の艦というのはシップメーカーが提示している標準装備ということである。普通はここからジェネレーターをより強力なものに置き換えたり、シールドや装甲、武装を換装したり追加したり、生命維持装置や医療ポッド、その他内装などを整えていく形になる。特に高いのは高出力のジェネレーターと装甲の換装なんだよな。

「ただ、ジェネレーターは軍用の高出力品を、キャパシタとグラヴィティ・ジャマーは専用装備ですから、その分はお得かもしれません」

「そうね……特にジェネレーターは流通している高出力品よりも高性能……というか、軍のコルベット用の最新型じゃない？」

「いかにもその通りです。あと、キャプテン・ヒロ様には軍用装備の販売許可が降りていますので、イデアル製の軍用装備であればご提供可能です」

「軍用装備の販売許可が降りてるって？　まぁ、あり得なくはない

のか」

もしかしたらゴールドスターの受勲時に許可が降りたのかもしれない。いや、もしかしたら軍用戦闘ボットを購入する際にセレナ中佐が手を回したのか？　どちらにせよ軍用装備を購入できるのはありがたいな。

基本的に軍用装備というのは市場流通品よりも高性能のものが多い。同じくらいの性能であれば概ね信頼性も高い。ただ、古い装備をずっと使っていたりすることもあるし、たまに大外れがあったりするのでその辺は注意しなくてはならなかったりする。

やったー軍用品だー！　と飛びついてみたら、うん十年とか下手すると一世紀オーダーの旧型品だったりすることがたまにあるからな。まぁ古いものは信頼性が高かったりする名機というか名器だったりすることもあるんだが。

「正真正銘帝国航宙軍の正式軍用装備をご用意できますよ。装甲も、武装も選り取り見取りです」

「まぁそこはパイプが太いやろなぁ」

「イデアルだもんね」

整備士姉妹がさもありなんという表情で苦笑いを浮かべる。イデアル・スターウェイ社は帝国航宙軍に多くの船を卸している帝国随一のシップメーカーだ。当然ながら、装甲や武装、その他諸々の艤装を製造しているメーカーとのパイプも太い。太い上に直通みたいなもんである。

「それじゃあ予算の範囲内で盛り盛りでいくかね」

「良いけど、元が取れるかわからないわよ？」

「良い装備にしておけば生存率が上がる。それだけで丸儲けだろ」

「そうかしら……？　そうかもね」

安い機体を使ってポンポン壊して修理費用を嵩ませるくらいなら高性能な機体を組んで傷一つつけずに戦い続けられる方がトータルコストは安くなったりするし、何より変なところでケチってエルマが乗った船が撃沈されるのは絶対に駄目だ。ベストを尽くしてなお撃沈されることは無いとは言えないが、ベストを尽くさずに撃沈されてエルマを失うようなことになったら俺は一生後悔するだろうからな。

「そう言えば船の名前は？」
「開発コードは【ＩＳＣＸ－３１７　Ａｎｔｌｉｏｎ】です」
「アントリオン……アリジゴクか。なるほど」
「おや、ご存知で？」

納得した俺を見てオータム氏が意外そうな顔をする。そりゃアリジゴクくらい知って……って、そうだな。普通コロニーで生まれてコロニーで育ったコロニストは昆虫のことなんて知らないし、惑星生まれだとしてもテラフォーミングされた惑星なんかは基本的に生物相が貧弱だったりするからアリジゴクのことを知らない人も多いだろう。そもそも、アリジゴクがこの世界というか宇宙でどれくらい知られているのかもわからんが、彼の反応を見る限り知っている方が珍しいような知識なんだろう。

「地面にすり鉢状の穴というか罠を作って小さな虫を捕食する虫でな。まぁ見た目はあんまり良くないんだが、羽化するとなかなか優美な姿になって飛翔するんだ」

しかし俺の記憶では確かアリジゴク――ウスバカゲロウはあまり飛ぶのが得意ではなかったはずだが、こいつは大丈夫なんだろうな？

「本当によくご存知で。生物学に興味がお有りで？」
「たまたま知ってただけだ。で、アントリオンね。名前の響きは悪くないんじゃないか？」
「そうね。シップネームもそのままアントリオンで良いわね。装甲とスラスターは軍用規格の最上位品にするとして、武装はどうしようかしらね」
「無難にシーカーミサイルポッド二門、クラスⅡのレーザー砲二門と、メインもクラスⅢのレーザー砲で良くないか？」
「本当に無難ね」

強力な軍用規格のクラスⅢ、クラスⅡレーザーに瞬間火力とマルチロック攻撃による面制圧もできるシーカーミサイルポッドという組み合わせは無難で隙がない。

「無理して奇をてらった武装を選択する必要はないと思うけどな」
「シャードキャノンと対艦反応魚雷を装備しているヒロが言うと説得力があるわね？」
「機体に合わせた最適な装備を模索した結果だ」

エルマの皮肉に肩を竦めて答える。ごく短射程だが高威力のシャードキャノン――散弾砲と、弾速が極めて遅く当てるのが困難な対艦反応魚雷をクリシュナに積んでいるのは機体の特性に合わせたからだ。別に散弾砲を中口径レーザー砲に換装することもできるし、魚雷発射管をシーカーミサイルポッドにすることもできるわけだが、そうすると大型艦やそれ以上の特大艦に対す打撃力が激減してしまうんだよな。小型や中型相手には基本敵に四門の重レーザー砲だけで十分以上に渡り合えるし。

「まぁ、最初は無難な構成で戦って後からカスタマイズしても良いわね。そもそも、機体の設計思想的に高速戦闘を想定しているわけ

じゃなさそうだし」
「どちらかと言うと支援艦だものな。前に出てブンブン戦うような機体じゃないし、あまり攻撃に偏重する必要はないんじゃないか？」
「うーん、でも折角大容量のキャパシタがあるんだし、クラスⅢのスロットは普通のレーザー砲じゃなくてもっと高出力の武器を装備するのが良いんじゃないかしら。遠距離から中型艦を仕留められる武装があると総合力が上がるわよね？」
「確かにそれはそうだな」

エルマの言うことにも一理ある。クリシュナの装備で中型艦を速やかに仕留めるには接近して散弾砲か対艦反応魚雷を撃ち込む他なく、対艦反応魚雷なんて使った日にはオーバーキルもいいところである。ブラックロータスの火力なら中型艦も楽に仕留められるが、そもそもブラックロータスの射程に中型艦が入ってくれるかは運次第だし、艦首ＥＭＬなんぞを撃ち込んだ日にはやはりオーバーキルに過ぎる。そうなると確かに適正な距離でから中型艦を仕留められるような火力があると大変に助かるな。

「対小型艦への自衛に関してはシーカーミサイルと軍用のクラスⅡ高出力レーザー砲が二門もあれば十分でしょ。私が思いつくのはプラズマキャノンだけど、ヒロはどう思う？」
「プラズマキャノンは悪くないと思うが、当たるか？」

プラズマキャノンは威力は申し分ないが、弾速が遅くて当たりにくい。動きの鈍い大型艦ならともかく、そこそこに動ける中型艦相手だとなかなかに当てるのは難しい。小型艦相手だと乱戦か超近接戦で不意でも打たないとまず当たらない。

「練習が要るでしょうね。逆に小型艦相手に特化するならレーザービームエミッターでも良いけど」

「あれは確かに射程も長いし避けるのも難しいが、エネルギー管理と熱管理が面倒だろう……」
「私は嫌いじゃないけどね。スワンでも使ってたし」

レーザービームエミッターというのは通称ゲロビとか呼ばれるタイプのレーザー砲である。一般的にレーザー砲と呼ばれているのは所謂パルスレーザー砲で、強力な光線をごく短時間照射し、対象の表面要素を一瞬で蒸発、爆発させてダメージを与える――といった感じの理屈の兵器である。少なくとも俺はそう理解している。整備士姉妹かメイに聞いたらまた別の答えが出てくるかもしれないが。

対するレーザービームエミッターによる攻撃はパルスレーザーに比べると出力の低いレーザーを対象に照射し続けることによって灼き、溶かし、場合によっては溶断するような効果を持つ。

単純な威力的には普通のレーザー砲の方が遥かに高いのだが、このレーザービームエミッターの厄介なところはシールドではその攻撃を完全に防げないという点だ。どういう理屈かは知らないが、ＳＯＬでは攻撃出力の３０％ほどがシールドを貫通して直接装甲と船体にダメージを与えてくる。

これがなかなかに厄介かつ便利な特性で、足は速いが装甲が薄く、船体が脆い機体にぶっ刺さるのだ。回避困難な文字通り光速のゲロビで速度特化の機体が遠距離から灼かれて爆発四散……なんて光景が割とあちこちで見られたりする。ついでに言えば、シールド性能が低い上に装甲も船体耐久力もペラッペラな宙賊艦にもこれがまぁぶっ刺さる。他にはシーカーミサイルや魚雷などの比較的低速な飛翔体――宇宙空間で飛翔体というのもなんだか変な気がするが――の迎撃にも向く。

逆に対熱、対レーザー防御がしっかりしている防御の堅い船には弱い。泣けるほどに弱い。なんだァ？　その豆鉄砲は？　と言われて逆襲されるのがオチである。うちで言えばブラックロータス相手にはほぼ効かないと言っても過言ではない。

「大物対策には対艦反応魚雷とブラックロータスのＥＭＬがあるし、アリっちゃありか……？」
「遠距離から中型艦を焼けるのは良いと思うのよ。小型艦もこんがり焼けるし。宙賊の船って生命維持装置とか消火装置とか貧弱だから、ちょっと炙ってやればすぐ行動不能になるのよね」
「そういうことでしたら、戦艦の迎撃兵装にも使われている高出力レーザービームエミッターなどはいかがでしょうか。標準ハードポイントにも対応しているので、アントリオンにも装備可能ですよ」
オータム氏がここぞとばかりに売り込みをかけてくる。スペックは良さそうだし、運用してみるのもアリか。そう考えながら、俺は装甲やスラスターなども含めた値段交渉を始めるのであった。

＃３０９　外野がうるさい（前書き）

遅れました（，ω，　）（とうとう居直るクズ

#309　外野がうるさい

「ありがとうございます。それでは速やかに納品できるよう全力を尽くしますので」
「はいよ。俺としては速さよりも良い仕事を期待するよ」
「承知致しました。不備などがないように徹底するように言っておきます」

そう言ってオータム氏はホクホク顔でブースへと戻っていった。今回、エルマの船――アントリオンの購入にかかった金額は総額で凡そ１３００万エネルだ。中型艦なので流石にブラックロータスよりもかなり安い。標準的な中型艦を一隻仕上げる費用としてはほどほどといったところか？　いや、軍用装備で全身を固めてこの値段ならかなりお得だな。

内訳としては本体価格が５００万、ハイグレードの軍用装甲への換装費用が４００万、軍用高出力スラスターへの換装費用が１００万、軍用高出力レーザービームエミッター他、武装に１５０万、その他生命維持装置や医療ポッド、内装の変更などに１００万といったところだ。

あとはついでとばかりにブラックロータスの武装やジェネレーターも通常流通品から軍用の高出力品に換装することにした。こちらは換装する数が多いのと、高額なジェネレーターの換装ということもあって凡そ１２００万とエルマのアントリオン並みの金額が吹き飛ぶことになった。

アントリオンはジェネレーターが最初から専用の高出力品なのと、グラヴィティ・ジャマーや大容量キャパシターの金額は本体価格に含まれていたからかなり安く済んだな。その代わりに運用データをイデアル・スターウェイ社に提出することになったが、それはメイ

がやってくれるということなので面倒もない。その分メイには今度何か埋め合わせをしなくちゃな。

「なんだかトントン拍子に決まっちゃいましたけど、他社製品を検討しなくても良かったんですか？」

「そりゃそうなんだが、見たことも聞いたこともないユニークな装備を見せられるとなぁ」

「最悪、使えなかったら売り払って他の船を買い直せば良いからね」

「えっ……良いんですか？　それ」

エルマの身も蓋もない発言にミミが困惑する。

「ここでおおっぴらに私達に売りつけてくるってことは、恐らく同業他社にもある程度知れ渡ってる装備なんだろうと思うぞ。一般に流通していないのは恐らく間違いないし、性質から考えて一般に流通するかどうかはかなり怪しい装備だけどな」

「恐らく特殊な用途の軍用装備……非正規戦部隊用かしら？」

「対象を逃さないようにして確実に仕留めるための装備だからなぁ。案外セレナ中佐の対宙賊独立艦隊向けとか、あるいはセレナ中佐の対宙賊独立艦隊の成功を受けて帝国航宙軍で専用の部署を作るのかもな」

「その新部署向けの特殊装備ってこと？　まぁ、あり得なくもないかしらね」

セレナ中佐の耐宙賊独立部隊が帝国航宙軍の内部でどのように評価されているのかはわからないが、俺達が知る限りは連戦連勝かつ一定以上の成果を挙げているように思える。同じコンセプトで動く複数の艦隊を編成して、それらをまとめる一つの部署というか艦隊？　軍団？　を立ち上げるのかもしれない。グラヴィティ・ジャマーがそういった部隊向けの装備って可能性は十分にありえる。

そして、運用データを効率的に手に入れるために宙賊をメインターゲットにしている傭兵に大して装備を供給するというのも理に適っているように思う。イデアル・スターウェイ社とその背後にいる帝国航宙軍にどのような思惑があるのかは推し量ることしかできないが、まぁ当たらずとも遠からずといったところではないかな。

「とにかく、ある程度知れ渡っている装備なら別に売り払っても問題ないだろう。何ならイデアルが買い上げてくれるんじゃないかな」
「他社に渡すくらいならうちで回収しますってことになるかもしれないわね。まぁ、どう考えても有用な装備だから、船の性能自体には多少目を瞑っても良いと思うわ」

そう言ってエルマが肩を竦める。実際のところ、アントリオンの性能はグラヴィティ・ジャマーと大容量キャパシターが特別なだけで、中型戦闘艦としては凡庸と表現しても差し支えない。もっと火力の高い船も、もっと足の速い船も、もっと防御の暑い船も、もっと拡張性に富む船もいくらでもある。しかし何にも代え難いグラヴィティ・ジャマーというアドバンテージは大きいし、船の性能自体も文句を言うほどのものではない。そこそこに火力があり、そこそこに足が早く、そこそこに防御力もある。

拡張性が低い固定装備があるために拡張性には乏しいが、そこは特殊な装備とトレードオフの関係と考えれば欠点とは言えない。

「実際のところはアントリオンで決まりだと思うけどな。正直俺達に都合が良すぎるというか、求めるものに合致し過ぎていて気味が悪いが」
「同感ね」
「まぁ、そこは兄さんの悪運っちゅうか運命力の為せる業やない？」
「いつもトラブルに巻き込まれる分、こういう利点もあるってことですかね？」

「割に合わん気がするのは俺の気のせいだろうか……？」

整備士姉妹のある種スピリチュアルな発言に思わず眉を顰める。それは逆に言えば、こういった幸運を拾った後に揺り戻しが来るということでは？　こんなに都合の良い出来事が起こった後とか何が起こるのか怖すぎるんだが。クリシュナかブラックロータスに籠もって物忌みでもするか？

いや、閉じこもっていたら物忌みどころじゃねぇな。肉欲は断てないわ。

「船の方は目処がついたし、次はヒロの軽量型パワーアーマーでも探す？」

「それでも良いが、ブラックロータスも改修のために預けることになるから滞在の準備をした方が良いんじゃないか？」

「はい、それが宜しいかと」

「それじゃあ荷造りとホテルの手配ですね！　ホテルの手配は任せてください！」

俺の言葉にメイが頷き、ホテルの手配と聞いてミミが自分の仕事ができたと勢いづく。

「あ、できればなんやけどうちの会社への出勤が楽なとこでお願いしてええかな？」

「お姉ちゃん、図々しいよ……」

「任せてください！」

ミミとティーナがキャッキャしながらホテル選びを始め、ウィスカも若干呆れながら一緒になってタブレット端末を覗き込み始める。メイは相変わらず澄ました顔で佇んでおり、エルマはというとなんだか難しげな表情をしていた。

「どうした？」
「いえ、なんていうか……改めて考えると高い買い物よねって」
「それはそうだな」

否定するようなことでもないので素直に頷いておく。１３００万エネルという価格はエルマの言う通り高い買い物だ。正直に言えば値段相応の稼ぎを出すまでにどれだけの時間がかかるかもわからない。ランニングコストも考えれば相当な時間がかかることだろう。それでもクリシュナとブラックロータスの二隻で戦うより安全性は上がるはずだし、稼ぎも増えるはずだ。一度に動かせる船が三隻になれば単に宙賊を狩るだけでなく、何らかの依頼を受けて稼ぐということもやりやすくなるだろう。高い買い物ではあったが、俺は今回の買い物を無駄な買い物だとは思わない。

「お金を出したのはヒロだけど、私の船……よね」
「そうだな」
「なんて言ったら良いのかわからないけど……どうやって返したら良いのかしら」
「返す？　何を？　船を？　なんで？」

エルマの訳のわからない物言いに頭の中が疑問符でいっぱいになる。お前は一体何を言っているんだ？

「いや、船じゃなくて……恩というかなんというか？　ほら、私って結局ヒロに助けられっぱなしで、お金も返してないし……」

そう言ってエルマが難しい顔をしながらやり場のない感情を表すかのように手をわきわきとさせる。何それは。気でも練ってるの？

「うーん……まぁ確かに金は返して貰ってないと言うか、今更そんなものはどうでもいいんだが」
「どうでもいいってあのね……」
「俺の望みはエルマと一緒にいて……なんというか、今まで通りに面白おかしく？　傭兵生活を続けることなんだよな。それだけで俺は満足だから。だから金がどうとか、恩を返すとかはどうでもいいというか、十分に満たされているわけで」

お互いに顔を見合わせて唸る。多分、俺もエルマも同じような表情をしていると思う。

「なにあの。高度なイチャつきはなに？」
「高度、かなぁ？」
「ここはステイ。見守るところ……」

外野がなんかうるさいな。そしてミミは何故精神統一でもするかのように目を瞑っているのかね？

「とにかくそこはあまり深く気にしないでいつもどおりに」
「いつもどおりね」
「いや少し優しくしてくれるとかむしろ甘えてくれるとかはウェルカムだが」
「ぷっ……気が向いたらね」

そう言ってエルマは笑い、顔を寄せて俺の頬にキスをしてきた。後ろが煩いが、とにかくなんとなく俺の気持ちは伝わったようなのでヨシ！　あとは気が向いてくれることを祈るばかりだな。エルマさんは気分屋だから。

#３１０　白い少女（前書き）

クリぼっちなので昨日の休みの日に友人に付き合って朝からパチンカスムーブキメて何故か増えた所持金を使ってスシを食っていたら遅れました―（∵３」∠）―（私は謝らない

#310　白い少女

船の発注を終えた俺達はホテルに活動の場を移すべく行動を開始した。まぁなんてことはない。数日――もしかしたら一週間かそこらの期間ホテルに滞在することになりそうだから、その間の荷物を取りに行くだけの話だ。俺が持ち出すのは着替えやちょっとした身の回り品くらいのものだが、ミミ達女性陣はそういうわけにもいかないのだろう。まぁ、いざとなったら必要なものは滞在先で用意すれば良いわけだから、そこまで大荷物にする必要はないと思うんだが。

「ホテルへの宿泊となるとどうしてもセキュリティ上の問題を排除できませんね」

さっさと荷物を用意してブラックロータスの休憩スペースで待っていると、メイが呟いた。

「それはそうかもしれないけど、レーザーランチャーとかハチェットガンとかパワーアーマーとか軍用戦闘ボットを持ち込むわけにも行くまいて」

そう言いつつ俺が座っているソファの隣をポンポンと手で叩くと、俺の後ろで控えていたメイが「失礼します」と言って俺の隣に腰掛ける。こうしないとメイは俺の隣になかなか座ってくれないんだよな。

「メイにはいつも苦労をかけるな。いつも世話になってるんだし、少しくらいわがままを言ってくれても良いんだぞ？」

「十分にわがままは言わせて頂いております。ブラックロータスの砲艦化や軍用装備への換装もして頂きましたし、軍用戦闘ボットの配備もして頂きました。それにご主人様は私のことをミミ様やエルマ様と同じように扱ってくださっています。これ以上のわがままなどとても」

「そっかぁ……俺はもっとメイにわがままを言ってもらったり、甘えてもらったりしたいんだけどなぁ」

「ご主人様が私に甘えてくださるのはいくらでも。いつものように」

「ＯＫＯＫ、その話はやめよう。俺が悪かった。でももっとわがままを言っても良いからな？　それが俺の望みならメイは叶えてくれるよな？」

「……善処致します」

メイにしては珍しく断定的ではないふわっとした返答である。イエスにしてもノーにしてもメイははっきり言うことが多いんだけどな。自分の価値観というかポリシーと、俺の甘言が彼女の中で拮抗しているのかもしれない。

そうしてメイとコミュニケーションを取りながら待っていると、エルマ達が現れた。

「ミミだけ荷物でかくね？」

「エルマさん達が少なすぎるんですよ……」

エルマもティーナもウィスカもさして大きくもないボストンバッグのようなものを一つ持っているだけで、ミミと比べると荷物は半分以下である。まぁ、体格の差のせいでティーナとウィスカは荷物が大きく見えるけど。対するミミは同じようなボストンバッグを二個に大きなスーツケースのようなものまで引っ張っている。

「ミミ様、よろしければお持ち致します」

「ありがとうございます、メイさん」

そう言ってミミが大きなスーツケースをメイに引き渡すと、メイはそのスーツケースを軽々と持ち上げた。まぁ、メイだから驚きはしないが。

「お嬢様方、よろしければ私も荷物をお持ち致しますが？」
「何よ突然。気持ち悪いわね」
「気持ち悪いは酷くない？」
「兄さんに気障なのは合わんなぁ」
「あはは……」

いつもはこういう時にフォローに回ってくれるウィスカすらフォローしてくれない。どれだけ似合わないんだよ。確かにガラじゃないのは認めるけどもさ。

「まぁ揃ったようだし行きますかね。もうホテルは決まってるんだろ？」
「はい！　もう予約も入れてありますからチェックインするだけです！」

そう言ってミミがまだ多い荷物を抱えたままフンスと鼻息を荒くする。

「案内するなら両手が空いてたほうが良いだろ。荷物持つよ、ほれ」
「それじゃ私も一つ持つわ」
「あ、う……それじゃあお願いします。すみません」

俺とエルマがミミの荷物を一つずつ受け持ち、それでミミの両手が自由になった。ナビは身軽でいてくれたほうが良いからな。街中

で突然襲われるようなことにはならないだろうし、俺とエルマとメイの手が塞がっていても問題はあるまい。いざとなりゃ荷物なんて地面に放り捨てれば良いんだし。

「戸締まりヨシ！　行くかー」

荷物を用意して人数が集まったら後はもう出発するだけだ。クリシュナをブラッククロータスのハンガーから出して停泊させ、ブラッククロータスは改修のために専用のハンガーへと移送手続きをしておく。

「トラムで移動すればすぐですよ」
「ほい。皆はぐれないようにな」
「子供じゃないんだからはぐれないわよ……」

コロニー内高速移動システム――トラムの駅は港湾区画のすぐ近くにある。このウィンダステルティウスコロニーはウィンダス星系のメイン貿易コロニーなので、必然的に滞在人口も多くなる。そのため、コロニー内物資輸送システムを移動システムもしっかり整備されている。まぁ、いちいちコロニー内高速移動システムなんて呼ぶのは長いから、もっぱらトラムと呼ばれているのだが。

ちなみにトラムというのは路面電車とか市街電車とかそういう意味の言葉である。英語だったかな？　ちなみに俺が最初にこの単語を聞いたのは宇宙最強のエンジニアが化け物を解体して回るゲームの中だったと思う。

とにかく俺達は港湾区画にあるトラム駅から商業区画のトラム駅へと移動した。交易コロニーの玄関口である港湾区画から交易コロニーの中心地へと向かうトラム内は流石に人が多い。スリや痴漢などにも気を配っていたのだが、俺が腰に差している一対の剣の効果か俺達の側に近寄る者はいなかった。具体的に言うと、俺達の周り

にだけ少し空白地帯がある。貴族というか貴族の持つ剣の威光ってすげぇな。

「俺、貴族じゃないんだけどな」

「これ見よがしに剣なんて持ち歩いてたらこうなるし、ヒロは名誉子爵じゃないの」

「そう言われるとそう」

ちゃんとジャケットに銀剣翼突撃勲章とゴールドスターの略章はつけてあるけどな。一般人はこんなの見ないし、知らないんじゃなかろうか？　ああいや、普通見ないから着けてる上に剣も持ってる俺が避けられてるのか。なるほどな。トラブルを避けられるのは悪いことじゃないしあまり木にしないでおこう。

☆★☆

トラムでの移動を終え、駅へと降り立って外へと出る。

「いやぁ、これは凄い人出やね」

「それになんでもかんでもおっきいし、天井が高いよね。空間の使い方が贅沢だよ」

駅の外に出るなり、整備士姉妹が辺りを見回して感心したような様子を見せる。ブラド星系のドワーフがメインのコロニーは逆に道は狭いし天井は低いから俺は圧迫感を感じたものだけどな。

と、何か不意に視線を感じた俺は姉妹から目を離してその視線を感じる方向へと顔を向けた。そうすると、雑踏の向こうに目立つ姿を見つける。白い女の子だ。髪の毛は白髪――いや銀髪だろうか？

それに白い服。どことなく修道服のような、或いは巫女服のような……とにかくなんだかひらひらしていて宗教色を感じさせる服装

だ。
俺と目が合った白い女の子はぱぁっと顔に喜色を浮かべてこちらへと小走りで向かってくる。明らかに俺の顔を見ているように思うのだが、俺には全く心当たりがない。もしかしたら後ろにいる誰かなのかと思って後ろを振り返ってみるが、後ろにいるのはいつも通りの無表情なメイだけだ。
念の為に横に二歩ほどずれてみるが、こちらへと小走りで駆け寄ってきている白い女の子は正確に俺の方へと進路を変えた。ここまで来ると周りのミミやエルマ達も異変に気がつく。

「知り合い？」
「いや、知らんな」
「でもあの子、明らかにヒロ様に向かってきてません？」
「そのように見えるな」
「また女の子引っ掛けるん？」
「またって人聞きが悪い。俺がしょっちゅう女の子を引っ掛けてきてるような物言いはやめろ」

基本的に成り行きで知り合うだけで、能動的に女の子を引っ掛けたことなんてないぞ、俺は。メイはそうと言われればそうかもしれないが、メイだって殆ど押し売りみたいなものだったしな。

「それで、どうするんですか？」
「どうするもこうするも、事の成り行きを見守るしか無くない？」

もはや白い女の子と俺達との距離は１０ｍ未満である。こう話している間にも彼女は俺達の元へと到達するだろう。今からでは逃げるのは難しいというか、逃げたところでどうなるというのか？　俺達はホテルに行かなきゃならないし、トラムの中でミミに聞いた話ではホテルはすぐそこだ。それに俺達は荷物を持っているし、体型

的な問題で歩幅が小さく、足の遅いティーナとウィスカもいる。
対する彼女の身体能力がいかほどのものかはわからないが、まぁ逃げることは難しかろう。何故なら、どういった術理によるものは不明だが、彼女の進行方向だけ人混みが割れているのだ。もうその光景を見ただけで胸焼けがしてくる。絶対に厄介事だ。俺がクリシュナに秘蔵しているレモン炭酸水をケースごと賭けても良い。

「やっとお会いできました！　我が君！」
「わがきみ」

目の端に歓喜によるものと思われる涙を光らせながら白い少女が俺の顔を見上げてくる。遠目からではわからなかったが、かなり若い。俺の目にはミミと同じくらいの年頃に見える。目の色は明るい黄色だ。金色と言っても良いかもしれない。そしてかなりの美人さんである。そして何より目立つのが、頭の上のモフッとしている尖った耳。なるほど、獣耳ですか。大したものですね。

「ええと……とりあえず。少し落ち着かないか。もう完璧に何が何だか分からないが、立ち話で済むような内容じゃないように思うんだ」
「はい！　我が君がそう仰るのであれば此の身は是非もありません」

彼女は目の端を自分の指で拭いながら、親を見つけた迷子の子供のように心底安堵したような表情を見せた。
いや、違うんだって。本当に知らない。知らないから。こんなホワイト系獣耳少女とか知り合いじゃないから。だから皆そういう目で俺を見るのはやめよう？　俺は無実だから。

#310　白い少女（後書き）

友人はなぜか財布の中から諭吉さんが三人ほど失踪したそうです。怖いですね（　，ω，　）

#311　ヴェルザルス神聖帝国からきた巫女（前書き）

余裕の投稿です。馬力が違いますよ（　，ω，　）

#311　ヴェルザルス神聖帝国からきた巫女

「「「……」」」
「……♪」
「ステイ、三人ともステイ」

ミミが予約をしていたホテルのラウンジにて。俺は一触即発の状態をコントロールしていた。

とりあえず俺の腕に抱きついて離れない白い獣耳の女の子を連れたままチェックインを行な――ちなみに受付のお姉さんにゴミを見るような視線を向けられた――い、ホテルのラウンジに設置されているソファに座って落ち着いたのだが、彼女は当然のように俺の隣に座り続けた。

そんな彼女をミミ、エルマ、メイの三人の能面のような無表情で眺め、ティーナはニヤニヤしながら事の動静を見守り、ウィスカはどうしたら良いのかとオロオロしている。そんな状況である。

「とりあえず君も離れよう。そして事情を説明してくれ。俺は君を知らんし、こんなにくっつかれる理由に何一つ心当たりがない」
「そ、そんな……」

白い獣耳の女の子が今にも泣きそうな顔で俺の顔を見上げ、頭の上の獣耳をピッタリと伏せて震える。やめろ。俺の同情心をこの上なく喚起しないでくれ。思わず頭を撫でて慰めたくなる。

「そういうの良いですから。早く話してくれませんか？」

ミミが見たことのないような無表情と聞いたことのないような冷

たい声で白い女の子に突っ込みを入れている。これは相当頭にきてますね。わかります。

「流石に事情も説明せずに自分の都合だけを相手に押し付けて周りを顧みないのはどうかと思うわよ。一人のヒトとして」

エルマはミミほど怒っているわけではないようだが、単純に呆れているようである。いや、怒ってはいるな。割と正論パンチ気味だし。

「……」

メイは無言である。しかし俺の本能というか、戦闘感覚が言っている。この白い女の子が何か俺を害そうと行動を起こしたら即座に取り押さえられるように身構えていると。

「そ、そうですね。此の身としたことが自らを律することもせずにはしたない……申し訳ありませんでした、我が君」

「ああ……うん」

どう反応したら良いのかわからなくて曖昧な返事をするしかない。別に彼女が俺にピッタリと寄り添うのをやめたから残念がっているとかそういうのじゃないから。君達は僕に向けるその視線をやめようね。

「此の身の名はセイジョウ・クギ――ああ、こちらでは名を先に名乗るのでしたね。クギ・セイジョウと申します。ヴェルザルス神聖帝国神祇省に所属する巫女で……あの、どうかされましたか？」

俺は片手で顔を覆ってラウンジの天井を仰いでいた。おお、もう

……これが都合よくアントリオンを手に入れることができた揺り戻しだとでも言うのか。見ればミミも苦虫を数匹まとめて噛み潰したような表情をしているし、エルマも頭痛を堪えるかのようにこめかみに手を当てている。メイはいつも通りの無表情。整備士姉妹は揃って苦笑いを浮かべていた。

「いや、気にしないでくれ。こっちの事情だから。それで、遠路はるばるヴェルザルス神聖帝国からグラッカン帝国に来て何故いきなり俺に抱きついたり、俺を我が君なんて呼んだりするんだ？　さっぱり事情がわからないんだが」

ヴェルザルス神聖帝国はグラッカン帝国からかなり遠い場所に存在する銀河帝国だ。グラッカン帝国との関係は良くも悪くもないようで、国交も一応ある。グラッカン帝国の敵対国家であるベレベレム連邦や、その同盟国であるビルギニア星系連合よりはずっと近い国と思って問題ない。ゲートウェイネットワークを使っての移動も一応可能だと聞いている。

そして、何より特徴的な点は彼らは所謂精神文明に属する国家であるということだろう。精神文明とは何か？　と言われると実のところ俺も詳しくは知らない。要は科学力だけではなく、精神力――超能力や魔法のような超常の力を用い、また重視している文明であるらしい。

「それは貴方様が上位世界より来訪された存在で、貴方様に仕え、此の身を捧げるのが此の身の使命であるからです」

一点の曇りもない純粋な金色の視線が俺の目を見つめてくる。ははぁ、なるほど。全然わからん。

「理解できたか？」

「いえまったく」
「意味がわからないわ」
「とにかく兄さんに身を捧げるのが使命ってのはわかったわ」
「捧げられるんですか？」
「据え膳は食う主義だけど事情があまりに不明なのはちょっと」
「据え膳食う主義は嘘やろ」

ティーナがジト目で睨んでくるが、俺はそれを華麗にスルー。君達二人は見た目が見た目だけに俺が躊躇してしまっただけなので。二人の見た目が人間基準でせめてミミと同程度だったら手を出すのにあそこまで時間がかかることは無かったよ。
え？　セレナ中佐とクリス？　あの二人に手を出すのは手の込んだ自殺みたいなものだろう。据え膳を食う趣味だとは言っても流石に限度ってもんがある。ちなみにクギちゃんは俺的にはかなりＯＫである。見た目だけなら。ただ、この子に手を出すとヴェルザルス神聖帝国絡みで面倒なことになりそうなのでここは慎重を期したい。

「まずその上位世界より来訪された云々ってのがわからない。凡俗な俺達にもわかりやすく説明するとどういうことだ？」
「？　貴方様はこの世界の住人ではなく、上位世界より来訪された存在ですよね？　それは他ならぬ貴方様自身がよく知っておいでだと思うのですが……？　何より、御身から溢れ出るその力を視れば貴方様が特別な御方であることは一目瞭然です」
「あー……そういう。なるほどね」

これは参ったぞ。どうやらこの子は俺が異世界から突如この世界に迷い込んできた存在であることに確信を持っているらしい。そう言えばミンファ氏族のミリアムさんもなんかこんな感じのスピリチュアルな話をしていたような気がするな。

「仮に、万に一つ俺がそういったスピリチュアル感溢れる存在だったとして、それは君には何の関係もない話だろう？　いきなり身を捧げるとか我が君とか言われても困るんだが」
「関係ないということはありません。貴方様のような上位世界からの来訪者様方がこの世界に顕れる原因は此の身どもにあるのですから」
「原因？　どういうことだ？」
「簡単に言いますと、此の身どもはその昔、この世に穴を穿ってしまったのです」
「穴」
「はい。この世と上位世界を貫く大穴です。結果、この世には上位世界を含む多元宇宙より多数の存在やポテンシャル――世界としての力が流れ込み、破裂による崩壊の危機を迎えました」
「お、おう……」

なんだろう。この電波的というはスピリチュアルに過ぎる話の内容は。或いは中学生の黒歴史ノート的なアレは。ふと視線を向けると、ミミをはじめとしてメイ以外の全員が胡散臭いものを見る表情をクギちゃんに向けている。まぁそうなるよね。そうなるよ。俺もそう思うもの。

「しかし上位存在の介入によって事態は収束し、穴は封じられました。ですが一度この世に穿たれた穴から流入したポテンシャルはこの世のあちこちに細かな傷や亀裂を多く遺しており、時折そういった世界の傷や亀裂から様々な存在が迷い込んでくることがあるのです」
「それが俺だと？」
「間違いありません。貴方様から放たれ続ける力――ポテンシャルは明らかにこの世のものではありません。貴方様はその気になればその意志の力でこの世の法則を捻じ曲げることすら可能な筈です。

心当たりがお有りでは？」
「うーーーーん……」

心当たりがないこともない。息を止めるだけで時間の流れが遅くなったり、多言語翻訳インプラントが無いのにどんな言葉や文字も聞き取れて話せて読み取れたりするし、ちょっと前にはクリシュナに直撃したレーザー砲撃を謎の力で捻じ曲げたりもした。異様な悪運というか数奇な運命というかトラブル体質も異常だと思う。

「その話が本当で、俺に心当たりがあるとしても、だ。それで君が俺に仕えるだのその身を捧げるだのって話にどう繋がる？」
「此の身どもは過去の過ちを正すべく行動しています。大穴が開いた時にこの世に流れ込んだ害ある存在をこの世より駆逐し、世界の傷によってこの世に落ちてきてしまった上位世界の存在を保護し、奉仕するのが此の身どもの使命なのです」
「そりゃ随分と遠大な話だなぁ……というか、その話が本当なら銀河中から敵視されて袋叩きにされるんじゃ？」
「上位存在によって事態の収束が行われ、世界が修復された際にその事実は此の身ども以外には忘れ去られました。そして、此の身どもは生まれた瞬間からその事実をその身に刻みつけられます。それは上位存在が此の身どもに課した罰にして唯一の贖罪の道なのです」

一点の曇りもない金色の瞳がなおも俺の目をじっと見つめる。参ったな、これは。説得や言い包めでなんとかできる気配を感じない。仮に彼女を完全に拒否し、無視したとしても使命感に駆られた彼女はどんな手を使ってでも俺達――というか俺に付き纏ってきそうな気がする。突然見かけなくなったと思ったらどこかの路地裏でひっそり死んでたり、ろくでもない連中に食い物にされてたりしそうだ。

「……どう思う？」

「ヴェルザルス神聖帝国が利他的な国家であることは確かよ。彼らの領域を侵さない限りは極めて温厚だし、宇宙怪獣などの危機に対する行動には一貫して無償での協力を申し出ていると聞くわ」
「そんなので国家運営が成り立つのか……？」
「それが成り立ってるらしいのよね。少なくとも周辺国家にとっては益しか無い相手だし、グラッカン帝国みたいに物理的に遠い国にしてみれば毒にも薬にもならないその他国家って扱いよ」
「それでも領土的野心から攻め込む連中がいるんじゃないのか？」
「ヴェルザルス神聖帝国のサイオニック・テクノロジーの前に膝を屈するのが関の山ね。私も噂でしか聞いたことはないんだけど、ヴェルザルス神聖帝国のサイオニック・テクノロジー艦はジャンプするらしいわよ」
「ジャンプ……？　え、まさか瞬間移動するのか？　航宙艦クラスの物体が？」
「ハイパードライブを使わずに艦隊ごと数星系離れた星系にジャンプできるらしいわ」
「艦隊ごとかよ……」

それは勝てんわ。ハイパーレーンの繋がりを無視して一瞬で恒星間を移動する艦隊相手に通常の艦隊で対応するのは不可能だろう。
この世界における銀河帝国間の戦争というのは基本的にハイパーレーンネットワークによって構成された星系を取り合う陣取りゲームのようなものである。主要な国家同士のハイパーレーンネットワークがどのように繋がっているのかは基本的に知り尽くされており、攻撃側も防衛側もハイパーレーンが集中するハブ星系――所謂チョークポイントをいかに支配するか、というのが重要な要素となる。守るにしても攻めるにしてもだ。しかしヴェルザルス神聖帝国の艦隊はそういったハイパーレーンネットワークを無視して好きな場所にジャンプできるらしい。そりゃ普通の銀河帝国が戦っても勝てんわ。チョークポイントを守ってもそれを無視して後方の手薄な場所

をいくらでも攻撃できるんだからな。

「まぁ、船の話は今は置いておくか……しかし参ったね。結構ですと断ったらどうするんだ？」

「そ、それは……それが我が君の望みなら……こ、此の身はそれに従うまでで……」

そう言ってクギちゃんは俺の顔を見ながらポロポロと涙を零し始めた。それはズルくない？　俺の良心にダイレクトアタックしてくるのはズルくない？

「……その後貴女はどうなるんですか？　使命を果たすことが出来なかったと報告か何かするんですよね？」

「お、恐らく処分されるかと……」

「処分？　減給とか降格とか？」

「巫女の役目からは外されると思います……出会った仕えるべき御方に仕えられなかったということは、巫女としては不適格であったということなので。その後どうなるかまでは……」

ミミとティーナの質問に震えた声でそう答え、クギちゃんは涙に濡れたままの顔で俺の顔を見上げてきた。やめてくれ、そのぺたりと伏せられた獣耳とその表情は俺に効く。

「質問があります」

俺だけでなく女性陣を含めてどうしたものか、といった雰囲気が漂う中、メイが声を上げた。

「は、はい……何でしょうか？」

「漠然とその身を捧げると言っておられますが、具体的に貴女はご

主人様にどのようなメリットを提供されるので？　また、貴女とヴェルザルス神聖帝国はご主人様に何を求めておいでなのでしょうか？　いるかどうかもわからない『上位世界の存在』を探し、一方的な奉仕と献身の為に遠く離れた他国に人員を派遣するというのはあまりにも効率が悪く、無駄が多すぎます。何かそうするだけの合理的な理由があるのでは？」

「文字通り全てをです。此の身そのものを捧げます。命も、精神も、身体も全てです。我が君が望むなら此の身は命を捨てることも厭いません。此の身はそのために生まれ、そのために生きてきました。そ、それを他でもない我が君に……ふ、不要と断じられるなら……仕方のないことで……」

「なるほど。それではご主人様に求めることとは？　何かあるのではないですか？」

「と、特には……此の身どもの過去の過ちによって我が君は全てを喪ってこの世に顕れたのです。血族も、財産も、立場も、ありとあらゆる世界との繋がりを断たれた対価として此の身一つでは不足でしょうが、少しでもそれが贖罪となるのであればと」

「本当に何もないのですか？　ヴェルザルス神聖帝国にとってご主人様はこの上なく有用なパワーソースなのでは？　貴女の話から察するに、ご主人様は高レベルのポテンシャルを秘めているのですよね。ヴェルザルス神聖帝国は貴女のような存在を使ってご主人様のような『上位世界の存在』を籠絡し、自国の繁栄に利用しているのでは？」

「そのようなことは決してありません！　確かに此の身どもの国に滞在していただければ何不自由なく過ごして頂く用意はございますが、それを強制するつもりは此の身どもにはありません。自主的に此の身どもに力を貸して下さる方もいらっしゃいますが、決して此の身どもの為に我が君のようにこの世へと迷い込まれた方を利用するような真似はしていません。その言葉だけは取り消して下さい」

興奮して立ち上がったクギちゃんの尻尾がピーンと伸びる。ああ、尻尾もモフモフなのね。しかも三本あるんだ。頭の上の耳もそれっぽいし、狐の獣耳さんなのかな？

「そうですか。貴女の言葉だけでその主張を信じることは不可能ですが、私の推論もあくまでも推論でしかありません。発言を一時取り消しましょう」

そう言ってメイはクギちゃんに軽く頭を下げてみせた。その謝罪を受けてクギちゃんが再びソファに座り、そのまま俯く。どうやら激昂してしまったことを恥じているらしい。

「……で、どうするのよ。この子」

「俺に聞く……？」

「この件についてはヒロ様しか決断できないと思いますけど」

エルマとミミにジト目で睨みつけられる。やだこわい。ティーナとウィスカに視線を向けて助けを求めてみるが、ティーナは肩を竦めてみせるばかりで、ウィスカは首を横に振った。自分達に判断を任されても困るということだろう。

「……ヴェルザルス神聖帝国に行けとか、働けとか、そういうことじゃないならとりあえず……とりあえずお試しで。ただし皆と仲良くするように。まずはメイにお世話を任せる」

「は、はいっ！　ありがとうございます！　必ず我が君のお役に立ちます！」

「承知致しました」

クギちゃんがまだ涙に濡れたままの顔に喜色を浮かべて俺の顔を見上げてくる。頭の上のお耳もピンと立って実に嬉しそうだ。メイ

はいつも通りの無表情だが、とりあえずはメイに任せておけば万事うまく行くだろう。行ってくれ。俺はメイを信じているぞ。

あとミミさんとエルマさん。話し合おう。滅茶苦茶溜息吐いてるけどこれは不可抗力だと思うんだよ。何にせよ完全に拒否して放置というのも無いだろうし、仕方がないと思うんだ。

#311　ヴェルザルス神聖帝国からきた巫女（後書き）

年末年始は休みたいので次の更新は1／7くらいから再開します（ ˇωˇ ）（ユルシテネ

#312　自己弁護とペントハウス（前書き）

18時台に投稿したなら実質遅刻ではないのでは……？（ ˘ ω˘ ）（だめです

#312　自己弁護とペントハウス

とりあえず今住んでいる場所というか、宿とかはどうしているのかと聞いてみた。

「このコロニーにはヴェルザルス神聖帝国の出張所があるので、そちらに滞在していました」

「滞在……それはいつから？」

「此の身がこのコロニーに辿り着いたのは昨日のことです」

クギちゃんが尻尾をふりふりしながらにこやかにそう言い放つ。なるほど、昨日ですか。それって俺達とほぼ同じタイミングでこのコロニーに着いて、割とすぐに俺を見つけたってことだよな？

念の為メイに目配せして裏を取ってもらえるように頼んでおく。そう簡単に裏なんぞ取れるのか？　というとこれが実は傭兵ならなんとかなったりする。傭兵は職務上星系を跨いで活動する犯罪者――主に宙賊などを追跡することがあるので、傭兵ギルドを通して煩雑な手続きを行えばコロニーの入出者記録のような個人情報やセキュリティ情報と言える情報にもアクセス可能なのである。

「そっかぁ……どうする？　こっちに泊まる？」

「我が君のご迷惑でなければ此の身は我が君のお側に置いていただきたく思います」

「なら荷物とかあれば持ってくると良いよ、ウン。手続きはしとくから」

ホテルのランク的にプレジデンシャルスイート、と言うほどでもないが、ペントハウスというのだろうか？　まぁ最上階の部屋を借

り切っているので、宿泊者が一人増えるくらいはスペース的にはわけもない。ホテルの受付に言って追加料金を払えばなんとかなるだろう、多分。

「ありがとうございます、我が君！　それでは早速行って参ります」
「ああ。メイも護衛としてついていってやってくれ」
「承知致しました」

コクリと頷いたメイがクギちゃんの後を追っていく。とりあえずこれで今打てそうな手は打ったことになるか。

「……」
「じー……」

エルマが無言で、ミミがわざわざ口に出して俺をジト目で睨んでくる。二人ともなんだか随分とクギちゃんのことが気に入らないようだな。これは前途多難だ。まぁ、ここは一つフォローしておくとするか。誰をって俺自身をだが。

「一応言っておくけど、全面的にあの子の言い分を信じたわけじゃないからな。正直なところ、七、八割は詐欺とか美人局とかの類じゃないかと疑っている」
「そうなん？　クギちゃん可愛いからそれでホイホイ受け入れたのかと思ったわ」
「それはないと言ったら嘘になる。流石に処分とかああいう重い話を聞かされると寝覚めが悪いよな」
「それはそうですよね。それにしてもちょっとあれは卑怯かと思いますけど」

ウィスカの言葉に苦笑いしながら同意して頷く。本当に感極まっ

たのか、それともそういう演技なのか涙腺がゆるゆるだったからな、あの子。

「……じゃあ、残り二、三割はどうなんです？」

ミミが唇を尖らせながら聞いてくる。とても可愛い。

「ヴェルザルス神聖帝国自体得体が知れなさ過ぎるだろ？　いつ、どこに彼女の言う『上位世界の存在』が現れるかもわからないのに、そのためにクギちゃんみたいな子を養成して派遣するなんて普通に考えると有り得ない。あまりに効率が悪すぎる。でも、サイオニックテクノロジーが発達しているヴェルザルス神聖帝国ならその有り得ないことを実行しかねない。俺の妙な悪運を更に発展させて制御した先に未来予知的な力や、運命を操るような力が無いとも言えないと思うんだ」

「それは流石にホロ映画の見過ぎと違うか？」

「そうかもしれないな。でもそうじゃないかもしれない。その裏を取るために暫く様子を見ようって話だ。仮に詐欺や美人局の類だとして、そうだとわかればそっちの方が事が簡単だ。全部嘘ならただ彼女を放り出せば良いだけの話だからな」

そう言って肩を竦めてみせる。相手がいくら可愛い女の子でも、騙そうと思って近づいてきたような奴を懐に迎え入れる気はない。

「そうじゃなかった場合はどうするんです？」

「それはつまり彼女が正真正銘ヴェルザルス神聖帝国から派遣されてきた巫女さんだった場合だな。彼女の使命が俺に寄り添って生きること、となるとまぁ、そいつを受け入れてやる必要が出てくるわけだが……」

チラリとエルマとミミの様子を窺ってみるが、二人の反応は……おや、以外なことにエルマは不満げというよりは仕方ないかという表情だな。ミミも不満は不満でもそこまで完璧な拒絶というわけでも無さそうだ。

「反対しないんだな？」

「ヒロの思いつきというか同情というか、そういう判断で救われて今の自分がある身としては、ねぇ……」

「何も言えないんですよね」

「いや不満があったら言って欲しいんだが。なんというかそういうのは溜め込むと碌なことにならないからさ」

そういう溜まりに溜まった不満が元になって人間関係が破綻する、なんてのはよく聞く話だ。そういう事例から学んで、できれば同じ轍を踏むような真似はしたくない。

「それはそうなんだろうけど、私はヒロの最終的な判断っていうのを信じているから。お試し、なんでしょ？」

「そうだな。彼女の身分がどういうものだとしても、俺達と上手くやっていけるかどうかってのは大事だろう。第一印象ってのはそう簡単に覆せるものじゃないかもしれないが、とりあえず彼女とコミュニケーションを取ってもらいたいと思う」

「了解。そんな気負うものでもないし、自然にね」

「わかりました。ティーナさんとウィスカさんは……」

「うちらは問題ないで」

ティーナがひらひらと手を振り、ウィスカもその隣でコクコクと頷いている。この二人は最初からクギちゃんに対してネガティブな感情は抱いていないようなんだよな。

「うちらはほら、そもそもエルマ姐さんやミミのついでやし？」
「ついでって……俺はそんなつもりは無いんだが」
「それくらいでいいってことです。まぁこういう話はもうこれくらいにして、部屋に行きませんか？　荷解きもしないといけませんし」
「ぬぅん……」

話を有耶無耶にされてしまった。まぁ結局船に乗ってる全員に手を出している俺が節操なしって話なんだし、俺に都合よくあろうとしてくれる二人には感謝の言葉もないが……どこかで責任を取るべきだよなぁ。どうしたものかと頭を悩ませながら、俺は女性陣の後ろに付いて歩くのだった。

☆★☆

部屋に上る前にフロントで宿泊者が一人増えるという話――こいつまだ連れ込む女を増やすのかという目をされた――をして、追加料金を支払ってから専用のエレベーターを使ってペントハウスへと上がる。

「へぇ、綺麗だし広いし良いわね」

エルマがそう言って上機嫌で部屋の中を見て回る。うん、なんというか広いな。家具もちょっと高級な感じだし、居心地は良さそうだ。スイートルームより一段上、これがペントハウスアパートメントというやつか。

「未だにこういう場所に泊まるとなると落ち着かないです」
「あー、それめっちゃわかるわー。なんちゅうの？　ブルジョワジー的な？」
「ブルジョワジーって……まぁ言いたいことはわかるけど」

ミミとティーナ、ウィスカの三人が部屋の広さと豪華さに圧倒されている。俺もどちらかと言うとこっち組なんだが、この豪華さで一人あたりの宿泊料金が一週間あたり５０００エネルほど。クギちゃんを入れても俺達の人数は七人なので、一週間の宿泊料が合計で３５０００エネル。

以前リゾート星系のシエラⅢに滞在した時には四人で二週間５６万エネルのコースだったから、一人あたりの一週間分の滞在費は７万エネル。なんと一人分で今回の総宿泊料の二倍であった。

「でもリゾート星系で遊ぶのに比べたら安いんだよな」

「それは……そうですねぇ」

「ウィー、ブルジョワや。ブルジョワがおるで。リゾート星系とか言っとる」

「ま、まぁお兄さん達は凄い稼いでる傭兵だし、どちらかと言えば間違いなくお金持ちだよね」

「いや、君等も今は小金持ちだろ？」

「……せやったわ」

「忘れてたのに……」

二人は例の鹵獲機体売却で得た売却益の三割、３６０万エネルを受け取っている。一人頭１８０万エネルだな。多少の贅沢をしたところで使い切れないほどの金額である。航宙艦を買って少し手を入れたらすぐに吹っ飛ぶ金額だが。

「税金とかどうすればええんやろ、これ。副業扱いになるんか？でも兄さんとこへの出向は会社の指示だから、業務上得た報酬ってことになるんかな？」

「その辺もちょっと会社に相談したほうが良さそうだよね……いや、税務署かな？」

なんだか二人が頭の痛くなる話を始めた。俺の場合グラッカン帝国の上級市民権を得ているが、その前に傭兵なので……うん？　市民権を得ているから俺にも納税の義務が発生しているのか？　あとでメイに聞いてみよう。傭兵はちょっと職業として特殊だから税制がどうなっているか俺も完璧には把握してないんだよな。確か報酬額は最初から税が引かれてて、宙賊なんかにかかっている賞金には税がかからないって話だったはずだが、グラッカン帝国の上級市民権との兼ね合いはどうだったか把握してなかった。税務署は怖いからな。ちゃんと身を守らないといけない。メイなら一瞬で税関系の手続きもしてくれるだろうから安心だ。

「ほら、ボケっとしてないであんたも荷解きしなさい」
「へーい。まぁ俺は荷解きするほどの荷物も無いんだが」

所詮バッグ一つである。荷解きの必要があるのかどうかすら疑わしい。ミミは大荷物だから大変そうだが、俺が手伝うわけにもいかんからな。女性には親しい仲でも異性の目に触れさせたくない、触られたくないものがあると言うし。手を貸すように頼まれない限りはそれとなく見守るだけにしておこう。

#313　尋問ではないから。（前書き）

今日はちょいと長めなんじゃ（ ω ）（キリの良いとこまで書いたら遅れたのは許して欲しい

#３１３　尋問ではないから。

荷解きが終わり、リビングルームに腰を落ち着けた辺りでメイとクギちゃんが専用エレベーターでペントハウスへと上がってきた。

「おかえり。君の部屋はそこの扉だから、まずは荷物を置いてくると良い」

「はい、我が君。ありがとうございます」

クギちゃんはペコリと俺にお辞儀をしてから俺が指した部屋へと入っていった。彼女の手荷物は風呂敷包み一つだけで、かなり少ない。ほとんど身一つで旅をしているようなものだろう。

「メイ？」

「はい、ご報告致します。結論から言うと、限りなく１００％に近い確率で彼女はヴェルザルス神聖帝国の『巫女』と呼ばれる構成員だと考えられます」

「判断要素は？」

メイが限りなく１００％と言うからにはそれなりの根拠があるに違いない。

「はい。まず彼女が言っていたヴェルザルス神聖帝国の出張所ですが、所謂聖堂と呼ばれる施設でした。施設建築時の記録を照会しましたが、登録上の権利者は間違いなくヴェルザルス神聖帝国の政府機関です。少なくとも、グラッカン帝国はそう認識しています」

「つまり、ケチな詐欺師やアウトロー連中の隠れ蓑って可能性は低いわけね」

「そういうことになるかと」
「なるほどなぁ……つまり、ホンモノだと考えて接する必要があると」

七割、八割は詐欺か何かじゃないかと疑っていたんだが、ホンモノとなるとそれはそれで厄介というかなんというか……実際のところ、どこまで面倒を見れば良いものかと悩むな。彼女の使命とやらを考えれば、一生モノになるのではなかろうか？　ちょっと責任重すぎでは？

チラリと俺のすぐ横に座っているミミの顔を盗み見る。何かを考えているようで、ちょっと難しげな表情をしている。うん、可愛い。いやそうではなく。

「んー……」

どう判断をしたものかと頭を悩ませるしかなくなると、人は唸り声を上げる以外の選択肢がなくなる。正直、自らの身も心も捧げるとか言われてもなぁ。確かにクギちゃんは可愛いけれども、正直間に合っているとしか言いようがない。ミミ、エルマ、メイ、それにティーナとウィスカ。俺如きが五人も女性を囲っているとか、既に身の丈を超えていると思うのだが……まぁ思い悩んだところで今はどうしようもないか。流れに身を任せるしかあるまい。

「お待たせ致しました。とても良いお部屋で……その、此の身には過ぎるような気がするのですが」
「慣れてくれ。うちはいつもこんな感じだから」
「我が君がそう仰るのであれば」

そう言ってから彼女は視線を彷徨わせ、困った表情を見せた。俺は今リビングルームのソファに座っているのだが、右側にはミミが。

左側にはエルマが座っている。彼女が座る隙間は無い。
「クギちゃん、こっちこっち」
「ここにどうぞ」
そう言って俺達の対面のソファに座っていた整備士姉妹が左右にずれて自分達の間に座るように促すと、クギちゃんは恐縮した様子で彼女達の間に収まった。
「何にせよまずは相互理解が必要だよな。というわけで、まずは自己紹介をしていこう。まず、俺の名前はヒロだ。キャプテン・ヒロと名乗ることが多いな。傭兵ギルド所属の傭兵で、ランクは一番上のプラチナランクってことになってる。ちょっと活躍して帝国の勲章なんかも貰って、上級市民権も取得してる。後は……なんかあったっけ？」
「ご主人様は一等星芒十字勲章を授与されたことにより、グラッカン帝国内で名誉子爵としての地位を得ております」
「なるほど、流石は我が君です」
どの程度理解しているのかはわからないが、彼女は彼女なりに俺の功績というか実績について素晴らしいものなのだろうと認識してくれたようだ。
「じゃあ次は私ね。私はエルマ。見ての通りエルフで、私もヒロと同じく傭兵ギルド所属の傭兵よ。シルバーランクのね。色々あってヒロと一緒に行動しているわ。まぁ、パートナーね」
「公私共にパートナーです」
「あのね……いや、まぁそうだけど。一緒に行動するなら下手に隠しても仕方がないか。ヒロの言う通り、パートナーよ。傭兵としてだけでなく、男女の意味でも」

自分で言っていて恥ずかしくなったのか、エルマの耳が赤くなっている。急に耳を触ってやりたくなったが、今やると思い切り脇腹を抓られそうなので我慢しておこう。

「なるほど。よくわかりました」

割と明け透けな内容の自己紹介だったが、クギちゃんは顔色一つ変えずに素直に頷くだけだった。

ふむ？　なんだか思った反応と違うな。なんというかこう、クギちゃんの話からするとこういった男女関係の云々について何かしらの反応を示すと思ったんだが。

「じゃあ、次は私ですね。ミミです。ヒロ様に命を救われて、オペレーターとして側に置いてもらっています。戦利品の売却や生活物資の管理などもさせてもらってます。あと、書類上ではヒロ様の妻です。妻、です」

大事なことなので二回言ったんですね。わかります。そして俺の腕をぎゅっと抱きしめてくる。うーん、右腕の感触が天国。しかしミミは何故だか知らないがクギちゃんに対抗意識を燃やしているな。この反応はメイを買った当初の反応にかなり近い。

「はい、ミミ様ですね。よろしくお願い致します」

またもやクギちゃんは無反応、というかにこやかにミミの自己紹介を受け入れた。うーん、わからん。何もわからん。ミミも俺と同じく何らかの激烈な反応を予想していたのか、肩透かしを食らったような顔をしている。

「んじゃ次はメイさんかな？」
「私はご主人様に仕えるメイドロイドです。それ以上でもそれ以下でもありませんので紹介は不要かと」
「そうか？　じゃうちやね。うちの名前はティーナや。そっちのウィーとは双子で、うちがお姉ちゃんやで。スペース・ドウェルグ社所属で、今は兄さんのとこに出向って形でメカニックをやっとるんよ。ウィーともども兄さんのお手つきやで」
「お、お姉ちゃん……！」

ティーナの開けっぴろげな物言いにウィスカが顔を赤くして抗議するが、ティーナは笑うだけで取り合うつもりは無いようである。

「なるほど。つまり、皆様は全員が我が君のご寵愛を受けているということですね」
「ご寵愛……まぁ、そうなるな」

クギちゃんにそう言われると、今更ながら大それたことをやらかしているなと思う。元の世界じゃ考えられないが、これで上手く行っているのは奇跡的だよな。それもこれもよくわからない航宙艦にまつわる特殊な貞操観念のお陰なのだろうか？　よく考えると不思議な気がするな。

「素晴らしいことです。皆様のお陰でこの世の均衡が保たれています。今後は私もその末席に加えて頂ければ幸いです」

クギちゃんはそう言って祈るように手を組み合わせ。頭を下げた。

「「「？？？」」」

俺達としては意味がわからず首を傾げるばかりである。俺とミミ

達がそういう関係になっているからこの世の均衡が保たれているとか本当に意味がわからない。お前は一体何を言っているんだ？　状態である。

「つまり、皆様のお陰で我が君は負の面に堕ちることなく今の状態にあるということです」

「ぜんぜんつまってない。意味が全くわからないぞ」

「我が君には皆様の存在が不可欠であるということです。皆様が在って、我が君の今が在る。我が君が在って、今の皆様が在るということですね」

「ヒロと私達がこういう関係になっているのは運命的なものだとか、そういう話？　ヴェルザルス神聖帝国の教えって運命論的な感じなのかしら」

エルマがそう言って眉間に皺を寄せる。運命論ねぇ……なんか結果だけ見て後出しでこれが運命だ、って言ってるようで俺はあんまり好きじゃないんだがな。過去現在、未来まで全ての運命が記されている巻物か何かが実在でもするなら信じないこともないけど、そんなものが存在するってわけじゃないなら最終的には卵が先か鶏が先かみたいな話にならんかね？

「哲学的な話にも興味がないことも無いけど、今は横に置いておこう。自己紹介はこれくらいでいいかな？　なら軽く質疑応答というか雑談でもしようじゃないか」

「なるほど、新入りに対する尋問ですね。此の身に隠し立てすることは何もありません」

神妙な顔をするクギちゃんに俺は手と首を横に振る。

「尋問じゃないからな？　ただの雑談だからな？　ヴェルザルス神

聖帝国については風聞しかしらないから、色々と聞いておきたいんだよ。クギちゃんと行動を共にするってことは、無視できない存在になるだろう」
「なるほど。それは確かにそうかも知れません。此の身どもから我が君に何かを要求することはありませんが、此の身どものことを識って頂ければ何か役に立つこともあるかもしれませんね。それと我が君、此の身のことはクギ、と呼び捨てになさって下さい。ちゃん、と呼ばれるような齢ではありませんので」
「そうか？　まぁクギがそう言うならそうするか。早速だけどヴェルザルス神聖帝国について聞いて良いか？」
「勿論です。何なりとお聞き下さい」

クギが自信たっぷりに頷く。ちょっとドヤ顔っぽくて可愛い。

「前にチラリと聞いたんだが、ヴェルザルス神聖帝国って生粋の純血主義、且つ他種族を奴隷にしてるとか。それが本当ならあまり仲良くするのは怖いんだけど」
「それは大変な誤解です。確かに血統を重んじる向きはありますが、他種族の方を殊更に排斥しようという考えはありません」

クギは至極真面目な表情でそう言い切った。なるほど。まぁ遠い国の話だし、現実とは異なる形で風聞が伝わることもあるだろう。

「それじゃあ奴隷ってのは？」
「それは教化処置中の捕虜を見て流れた風聞かと思います」
「教化処置……なんか物凄いヤバい臭いがプンプンするわね？」
「そ、それって具体的にどういう……？」

エルマとミミがドン引きしながら恐る恐るクギに問う。うん、俺もそこはちょっと聞きたいな。場合によっては俺もその教化処置と

やらを受ける可能性があるわけだし。

「我が国の領域内で活動し、拿捕された宙賊や紛争と称した一方的な侵略行為を行う者に対する処置と聞いています。同じ過ちを繰り返さないよう此の身どもの使命を説き、その成就を助力することによって罪を償う機会を与えているそうです」

「それは洗脳と何か違うんか……？」

「ある意味でそう取られても仕方がない部分はあるのだと思います。ただ、罪には罰が必要でしょう。彼らの行いによって此の身どもの使命が阻害された分はその身と行動で贖ってもらうのが妥当かと此の身は考えます。同時に、二度と繰り返さぬよう此の身どもの使命を識ってもらうのもまた必要な行いかと」

「筋は……通ってます、かね？」

クギの主張を聞いてウィスカが首を傾げる。

まぁ、邪魔された分、被害を与えた分は責任をとってもらう。ついでに自分達がどのような考えでいるのかを理解し、共感してもらう。宙賊行為や一方的な紛争を仕掛けてきた連中への対応としては相応といえば相応なのだろうか？　なんだか言い包められている気がしなくもない。

「宙賊に関しては帝国の場合死ぬまで苦役刑か人体実験行きなんて話も聞くし、それに比べれば幾分人道的か……？」

「宙賊なんてどう処分しても良いと思うけど……他国の捕虜に関してはどうなのかしらね？」

「その辺は国同士の捕虜の取り扱いに関する条約とかそのへん次第やろなぁ……」

「風聞に聞くほど怖い国ではないんですかね？」

「種族的な温厚さと国家的な温厚さは視点が違うからなんともね……領域の拡張意志がない上に宇宙怪獣の類による被害に対しては積

極的に支援する、ってのは国家としては温厚と言えるけど、純血主義且つ排他的、他種族への対応が厳しいって評判は国家じゃなくて主権種族に対する評判とも取れるから」
「此の身どもは純血主義、排他主義と言われるほど他種族の皆様に対する隔意は持っておりません。ただ、此の身どもには果たさねばならぬ務めがあり、他種族の方々にはそれがないというだけです」

エルマのまとめにクギが毅然とした態度で断言する。結局のところ、クギ達ヴェルザルス神聖帝国の人々が排他的な種族であると外部から見られる原因はそういう彼女達の使命とやらに対する態度が原因なのではないかと思うんだが。

「なんとなくわかったからよしとしよう。とにかく、今日のところはゆっくりするか。なんか疲れたし、適当に休みつつ軽量級パワーアーマーの情報を見繕って明日どこに足を運ぶか決めることにしよう。どっちにしろアントリオンの納品とブラックロータスの改装には時間がかかるわけだし、のんびり行こうぜ」
「そうね。クギ……って呼んで良いかしら？」
「はい。此の身の事は好きにお呼び下さい」
「ありがとう。何にせよ、今後一緒に行動するかもしれないってことならお互いに相手のことをよく知るべきだろうし、のんびりと過ごすのは賛成よ。皆もそれで良いわね？」

エルマの発言にミミも整備士姉妹も頷く。メイも何も言ってこないということは賛成なのだろう。

「それじゃそういうことで。まずはどこかにご飯でも食べに行こうか。そろそろ良い時間だろ？」

コロニーには朝も昼も夜も無いが、ブラックロータスを出る前に

食事を取ってからそろそろ時間が経ってお腹が空いてきた頃だ。同じ釜の飯ってわけじゃないが、一緒に食事を取るというのはコミュニケーションの手段としては上等だろう。

#314　歓迎会（仮）（前書き）

間に合っ……た！―（∵3」∠）―

#314　歓迎会（仮）

わざわざホテルの外に出るのも面倒だし、一週間ほどはこのホテルで過ごす予定なのだからと今日のところはホテルの食堂――というかレストランで食事を摂ることにした。

「お、このレストランは調理人がいるのか」

「あら、ドワーフやね」

レストランの奥にある調理場は客席から見渡せるようになっており、そこでは男性ドワーフの料理人と、恐らく人間の料理人が調理に取り組んでいた。

「帝国では料理人と言えばドワーフってイメージですよね」

「宇宙ではそうね。古くから惑星に住んでいる人達にはそれなりに料理の文化も残ってるけど、それ以外の大半の帝国人は殆ど自動調理器任せだから。ヴェルザルス神聖帝国ではその辺の食事事情ってどうなのかしら？」

「此の身は神祇省所管の施設で育てられたので、正直に言うと世間一般の常識には疎いのです。しかし、此の身の知る限りでは簡単な調理ならできる人の方が多い筈ですね。此の身も多少ですが料理の心得はあります」

そう言ってクギは少し自慢げに胸を逸らして頭の上の獣耳をピンと伸ばして見せた。実際にどれくらい料理できるのかは未知数だが、この様子だと多少と言いながらもなかなかに自信がありそうだな。

「なるほど。それじゃあ私達の中だとお兄さんとメイさん、お姉ち

ゃんに続いて四人目の調理スキル持ちですね」
「七人中半数以上が調理スキル持ちって凄いですね」
「帝国人で料理スキルを持っている人なんて数百人とか千人に一人くらいのはずなんだけどね。どっちかと言うと料理スキルの無い私達の方が多数派よ」

そう言いつつ、エルマがテーブルのホロディスプレイを操作してメニューを表示する。なんだかお上品そうなメニューと居酒屋にありそうなメニューがごっちゃになっててカオスだな。どういうことだこれは。

「帝国風のメニューだけじゃなくドワーフ風のメニューもあるなぁ」
「ああ、なるほど。ドワーフのシェフがいるからか」

帝国風のメニューというのは俺から見ると所謂洋食全般って感じでかなり幅が広い。まぁ、多くの星系を領有する銀河帝国である上に歴史もかなり長い国家らしいから、様々な料理文化を吸収して今の帝国風料理というものがあるのだろう。それが俺から見るとフランス料理とかイタリア料理とかがごちゃまぜになっているように見えるだけで。

対してドワーフ料理は……粉物と酒のつまみになりそうな料理ってイメージが強いんだな。あと豪快な焼き物、炒めもの。スパイスの効いた料理も多めって感じ。中華料理＋エスニック風味みたいな。エルフ料理は和風料理っぽい部分があったけど、あんまり帝国料理の枠には入ってないっぽい。

「クギは何にする？」
「私の知らないメニューばかりなので……」

と、彼女は困った顔をしている。なるほど、そりゃヴェルザルス

神聖帝国は遠い国らしいし、帝国風料理とドワーフ料理がメインのこのレストランじゃ見知らぬメニューばかりなのも無理はない。

「んじゃ癖の少ない料理を適当に頼むか。数頼んで皆で色々つつこう」

「ちょっとお行儀が悪いけど、それで良いんじゃないかしら」

「それじゃあ取皿も一緒に頼みますね」

そう言ってミミが卓上のホロディスプレイを操作してメニューを選んでいく。なんか量が多い気がするんだが、見なかったことにしよう。

「帝国ではフードカートリッジと自動調理器で作った料理が食べられてるけど、ヴェルザルス神聖帝国ではどうなんだ？」

「此の身どもの場合は可能であれば食材を調理して作った料理、それが敵わない場合は保存食ですね。ただ、保存技術の発達で自ら調理せずとも美味な料理を食べられるようになっていますから、食材から調理をする人は減っているとも聞きます。フードカートリッジを用いた自動調理などはあまり普及していません」

「なるほどなぁ。どんなもの食べてるん？」

「豆の加工品が多いですね。他には養殖したチラス貝もよく食べられています」

「チラス貝？」

「殻を持つ頭足類ですね。他国の方から見ると気味が悪いそうですが、味も滋養も良い食材なのですよ。後はチコと呼ばれる魚を加工したものや、栽培が容易で栄養の豊富なカロという根菜ですね。葉っぱの部分も野菜として食べられるので、無駄がありません」

「なるほど」

殻を持つ頭足類ねぇ？　アンモナイトとかオウム貝みたいなもん

かな？　それに豆の加工品か……豆の加工品と言っても、豆って割と何にでも仕えるからな。例えば大豆とかだと豆乳に加工して豆腐や油揚げにもできるし、豆乳を絞る際にできるおからだって食べられるし、納豆とか煮豆としても食べられるし。大豆一つでもそんな感じだから、単に豆って言うと物凄い数の料理のバリエーションがありそうだな。それに魚に根菜類か。

「肉はあまり食べないのか？」
「肉食もしますが、やはりお肉は高価なので」
「その辺の事情は帝国もヴェルザルス神聖帝国も変わらないのね」

と、そう言っている間に料理が運ばれてきた。ピザみたいに色々と具が乗った大きな平焼きパンをメインとして、マッシュポテトのようなもの、焼いた肉っぽいものなど様々だ。ちなみに、スープの類はない。汁気の多いとされる料理でもスープというよりはかなりとろみの強い、半ばペースト状というかあんかけ料理みたいなものが大半だ。

「これは……これはお肉では？」

クギが串焼きにされている白みがかった肉を見て目を輝かせている。

「……どっちだ？」
「培養の方です」

俺に問われたミミが神妙な顔でそう答える。

「あー……まぁもう慣れたよな」
「そうね」

前に培養肉の製造工場を見学に行って若干トラウマ気味になった俺達であるが。今はもう普通に培養肉を食べるようになっている。元がアレでも肉として加工されてしまったらそれはもうただの肉だからな。食ってみれば美味いものだし、気にするだけ損だ。

というか、ミミが結構な頻度で見た目かなりゲテモノ風味な他国からの輸入食品を船内に持ち込んでは試食会を開いているので、慣れた。培養肉の元がちょっと気味が悪い触手生物じみた物体だからってなんだというのか？　それよりグロいものなんて世の中にはいくらでもあるのだ。あったのだ。

「培養ものだけど、正真正銘のお肉だぞ。足りなかったら追加で頼むし、遠慮なく食ってくれ」

「良いのでしょうか……？　これはとても贅沢なのでは？」

「クギ、気にしたらあかんで。兄さんと一緒に生活するならこんなん序の口や」

「お兄さんの金銭感覚には未だに度肝を抜かれるもんね……」

「私も少しは慣れてきましたけど、まだヒロ様とエルマさんの領域には辿り着けませんね」

君達やめないか。そんな、俺とエルマが金銭感覚ガバガバみたいな物言いは。俺達は至って正常だよ。傭兵としては。一般人として？　そんなものは知らんな！

「それじゃあ料理が冷める前に食べようか」

「はーい。あ、取り分けますね」

「あ、此の身もお手伝いを」

「クギは今日は主賓だから、大人しく饗されなさい。ヒロ曰くお試しだけど、まぁ歓迎会ってことでね」

そう言ってエルマがクギを押し留め、ミミと一緒に料理を取皿へと取り分けていく。そしていつの間にかメイも取り分け作業に参加している。音も気配も感じさせず自然に交ざってるの凄いなオイ。

「それじゃあクギの歓迎会ってことで、乾杯」

「かんぱーい！」

ティーナが実に嬉しそうに乾杯をして一杯目を飲み干した。当然のように酒である。密かにウィスカも酒……エルマもか。今日はもうゆっくりするって言ったから遠慮ないね君達。

#315　身体強化処置とポテンシャル強化（前書き）

寝坊しました。
昨晩は騒々しかったですよね……―（∵3」∠）―

#315　身体強化処置とポテンシャル強化

歓迎会の翌日。俺達は起床してから朝食を摂り、部屋でのんびりとしていた。

え？　昨晩？　昨晩は何かよくわからないけど、女性同士で何かキャッキャウフフしていたので僕は一人で寝ましたよ。何か俺は聞かないほうが良さそうな話を色々としていたようなので、華麗にスルーしておいたのだ。

「意外と選択肢が少ないよな、軽量パワーアーマーって」

「そうね。剣での戦闘を考えてってことになると更に少ないわね」

エルマと一緒にリビングのソファで寛ぎながら軽量型パワーアーマーについて色々と調べているのだが、どうにもパッとしない。なんというか、俺の要求とマッチしない。

俺が軽量型パワーアーマーに求めているのは生身の体が持つ身体能力の精密性、正確性を維持しつつ、膂力や俊敏性を強化し、更に多少の装甲――耐弾性能と対レーザー性能――を確保し、環境適応性を高める、といった具合の内容である。

しかし調べた範囲ではどれも生存性の強化や俊敏性、膂力の強化という意味では及第点以上なのだが、どうにも動作の精密性という点で今一つという感が否めない感じなのだ。動作の精密性は剣を振る上でこの上なく重要な要素――少なくとも俺にとっては――なので、妥協したくない。

「まぁ、貴族ってパワーアーマーを着る必要がないからね」

「だよなぁ……」

グラッカン帝国の貴族というのは基本的に身体能力を向上させる強化処置を受けている。その結果、彼らはパワーアーマーを装着するまでもなく常人を越える膂力や俊敏性を獲得しているわけだ。パワーアーマーにあって彼らに無いものは環境適応性と耐弾性くらいのものなので、貴族が戦闘を行う際には対レーザー性能をある程度有する環境適応スーツと、個人用シールドがあれば十分なのである。

「需要のないものは作られない。当然やな」
「身もふたもないけど、そういうことですね。あ、お姉ちゃん動いちゃダメ」

隣のソファでウィスカに髪型をいじられているティーナが肩を竦めてウィスカに怒られている。たまにああやってお互いに髪型をアレンジしてるんだよな。今日は頭の上にお団子を作っているらしい。
あと、ミミは少し離れた場所に設置されているテーブルでクギと顔を突き合わせて何か話し込んでいる。メイもついているから変な心配はいらなさそうだが、何を熱心に話し合っているのかは気になるな。まぁ、初対面の時に警戒心剥き出しだったミミがクギと熱心にコミュニケーションを取ってくれるのは歓迎するべきことだろう。

「いっそ身体強化処置でも受けるべきなんだろうか」
「まぁ、それもありなんじゃない？　でも、あれ受けるとなると数ヶ月は動けなくなるわよ？」

経験者は語るというやつだろうか。ウィルローズ子爵家――つまり帝国貴族家の娘であるエルマも、実は身体強化処置を受けているらしい。あの細腕で俺よりも力が強い理由はまさにそれであったというわけだ。尤も、エルマが受けている強化処置は身体能力の強化と反応速度の向上くらいで、貴族家の当主が受けるような脳の処理速度の向上やら何やらといったもっと高度な処置は受けていないそ

うなのだが。

「実際のところ、身体強化処置ってどういうものなんだ？」

「まずはバイオニクス系の処置か、それともサイバネティクス系の処置かってところで分かれるわね。どちらの処置も不可逆なのは変わらないし、身体能力を向上させるという意味では同じだけど」

「なるほど。でもそれぞれの特色があるんだろ？」

「私も詳しくはないわよ？　一般的にはバイオニクス系の処置は強化の度合いに劣るけど身体への負担が少なくて、維持が楽ね。かつ鍛えれば鍛えるだけ能力が向上するって言われてるわ。ただ、処置後身体に馴染むまで時間がかかるし、処置に要する時間が長いのがネックね。そしてサイバネティクス系の処置は強化度合いが大きいし、処置後すぐに能力を発揮することができると言われているわね。ただし、バイオニクス系の強化と違って鍛えるということはできないわ。その分、より性能の高い製品に交換することが可能だけど。あと、完璧にメンテナンスフリーってわけにはいかないから、維持に手間がかかるという点があるらしいわね」

「なるほどなるほど。エルマはバイオニクス系の強化だよな？」

「そうね。帝国ではどちらかというとバイオニクス系の強化のほうが主流よ。機械に置き換えるっていうのが貴族の好みにあまり合わないみたいね」

そう言ってエルマが肩を竦める。ああ、帝国貴族は機械嫌いっていうか、機械知性にちょっと隔意を持っているというか、苦手意識があるみたいだもんな。サイバネティクスで身体が機械に近づくってのが嫌な人が多いのかもしれない。

なんて話をしていると、向こうで話していたミミとクギがこちらへとやってきた。そしてミミがクギを俺の隣――エルマとは反対側だ――に座らせ、その隣に自分が座る。

「どした？」
「クギさんがヒロ様の会話が気になるって言ったので」
「うん？　なんだろう」

なんだかちょっと恐縮気味のクギに視線を向けると、彼女はおずおずとした様子で口を開いた。

「あの、なんだか強化手術を受けるですとか、そういうお話が聞こえたので……申し訳ありません、盗み聞きをするつもりでは無かったのですが」
「いや、別に気にしなくて良いけど」

そう言いつつ、彼女の頭の上でピコピコと動く大きな獣耳に視線を向ける。まぁ、この耳なら普通の人間よりも耳は良さそうだな。エルマのエルフ耳とどっちがよく聞こえるのだろうか。

「ミミ様から伺ったのですが、我が君は生身での戦闘能力と生存性を向上させるためにぱわーあーまー？　という鎧を求めていらっしゃるということで宜しいのでしょうか？」
「うん、そうだな。どうにも気に入るものが無いんで、強化処置を受けるのも有りかななんて話をしていたんだが」
「なるほど……その、我が君のしようとしていることに口を出すのは差し出がましいと思うのですが、私はそういったものは必要ないと思います」
「なるほど……？　その心は？」
「はい。現状、我が君の身体から迸るポテンシャルは殆ど何にも利用されずに放出されているだけの状態です。それを制御すればそのぱわーあーまーという鎧を身に纏うよりも余程強力な力を得られるかと思います」
「「「あー……」」」

俺だけでなく、メイとクギを除く全員が全く同じ反応をした。
「ええと……？　此の身は何か変なことを言ってしまいましたか？」
クギが不安げな表情を浮かべながら首を傾げる。
「いや、変なことは言ってないよ。ただ、その方向性は切り捨てたんだよな」
「切り捨てた、ですか？」
「うん。だって考えてもみてくれ。生身でパワーアーマーを圧倒するような身体能力を発揮して、山一つを消し飛ばすような謎の攻撃を放ち、レーザーや飛んでくる銃弾を歪曲させて身を守るなんてあまりに常識はずれだし、そんな姿を晒したら絶対何か余計なトラブルを引き寄せるだろう？　それならそっちの方向に力を伸ばすのはやめて、普通にパワーアーマーなんかを使って常識の範囲内に収まっていた方が何かと安全じゃないかと思うんだ」
と、そう言って聞かせるとクギは「なるほど」と頷いて少し考えてから再び口を開いた。
「此の身はぱわーあーまーという鎧のことはミミ様から少し聞いただけなのですが、聞いた限りの話ですと此の身どもの国の兵であれば生身で同じか、それ以上の能力を発揮できるかと思います。別に常識はずれとまで言われるようなことではないかと」
「えっ、なにそれ怖」
「我が君であれば此の身どもの兵が束になっても敵わないほどの力を発揮することが可能でしょう。あまりに強力すぎて目立つのが良くない、ということであれば程よい加減で力を制御すれば良いだけの話ではないでしょうか？」

「それはー……そうかも知れないけどぉ」

クギの純粋な眼差しに思わず言い淀む。確かに目立つから嫌とかそういう理由で手に入れられる力を放置し、最善の手を打たないのは俺の流儀に反すると言える。利用できるなら何でも利用すべきだ。それはわかる、わかるんだが。

「だってなんかそれスーパーサ〇ヤ人みたいじゃん！　俺だって空想で舞空術で空飛んだりかめ〇め波撃ったりとかに憧れたことはあるクチだけどさ！　流石にリアルでそういう風になりたいとは思わないんだよ！」

「すーぱーやさいじん……？」

クギが困惑の表情を浮かべる。そうだよね、いきなりこんな話をされても困るよね。

「そのかめなんとかというのは此の身には何のことなのかわからないのですが、山一つを吹き飛ばすというのは……効率が悪いかと。そんなことにポテンシャルを浪費するくらいであれば、高強度の精神感応で敵を無力化するほうが遥かに効率が良いかと此の身は考えます」

「おおっと、なんだか遥かに物騒っぽい発言が出てきたぞ。高強度の精神感応ってどんなもの？」

「対象の精神に強い負荷をかけて集中力を著しく乱したり、気絶させたり、強度によっては精神そのものを破壊したりする手法です。我が君であればこのコロニー全体に影響を及ぼすことも容易かと思います」

「物騒だなオイ。そんな毒電波発生機みたいなもんになりたくないんだが」

「兄さん、話の方向性がずれてんで。まぁ兄さんの好みはともかく

として、クギの言うことも一理あるんとちゃう？　前は修行の為に何ヶ月もリーフィル星系に留まるわけにはいかんっちゅうことでそっちの方向性はナシってことにしてたけど、今後クギがうちらと一緒に行動するならクギに教えてもらってコツコツとそっちの方も頑張ればええんちゃう？」
「そうですね。パワーアーマーはパワーアーマーで用意するとして、その超能力？　みたいなのも習得してみれば良いんじゃないですか？　別に身につけて損になるようなものではないでしょうし」

以外にも明らかに科学の徒であろうドワーフ姉妹が俺の超人化計画に乗り気である。割と君達の分野に真っ向から対立しそうな内容なんだけど。

「実際のところ、ちょっと興味はあるんよね。サイオニックテクノロジー関連には」
「全く違う技術体系だからねぇ。お兄さんがそういう能力を身に着けてくれればなにか面白い発見があるかもって思うんですよね」
「興味優先かい。俺への心配はないのか？」
「言うて、もともと兄さんの身体はそういうもんなんやろ？　クギ曰くやけど。強化処置で変に身体をいじくり回さなくても良いっていうならそのほうがええんちゃう？」
「それはそうかもね。私は小さい頃に強化処置をしたけど、強化処置を受けた後って馴染むまで暫く身体の調子が悪くなるのよね。結構辛いわよ、あれ。最低でも三ヶ月は動けなくなるし、パワーアーマーを買うよりも遥かにお高くつくし」
「ぐぬぬ……」

そのポテンシャルの制御ってのを覚えるだけで安全性が増すっていうなら得しか無いか？　今後、クギが同行するという話になれば修行もゆっくりすれば良いわけだし。後ははっちゃけないように俺

が自制すれば良いだけといえばその通りだ。問題ないな？　無いよな？

「ＯＫ、わかった。そっちの方向性に関しては前向きに受け入れる。身体強化処置はしない。パワーアーマーは手に入れる。そういう方針で行くことにする」

「それでいいと思うわ」

「となればヒロ様に合う軽量型パワーアーマーをなんとかして見つけないとですね」

　それが問題なんだよな。市販品として出回っている中に良いものがないなら、後はオーダーメイドするしかないか？　そうなると、どこから手を付けたら良いものかわからんな。適当なパワーアーマーのメーカーで聞いてみるか、それとも他の手を考えるか。ううむ。

#316　頼りになる人（前書き）

ぎりぎり間に合わなかった……惜しい（‘ω’）

#316　頼りになる人

『それで、私に連絡をしてきたというわけか』
「はい、お義兄さん」
俺が笑顔を作りながらそう言うと、ホロディスプレイの向こうの美男子が嫌そうに顔を歪めた。
『貴様に義兄と呼ばれるのは単純に嫌なんだが』
「まぁまぁそう言わず。可愛い義弟がお義兄さんしか頼れる人はいないとこうして連絡をしたんですから」
『可愛くない。全然可愛くないぞ』

画面の向こうで青筋を浮かべている美男子の名はエルンスト・ウィルローズ。帝都に住むエルマの兄である。
このウィンダス星系は帝都からほど近い場所にあるハイテク工業星系なので、ハイパースペース通信を使えばこうして帝都とも簡単にリアルタイムに通信を行うことができるのだ。もう少し遠くなるとリアルタイムでのハイパースペース通信は不可能になるので、そうなると利用料金が大変に高額なゲートウェイネットワークを利用しなければリアルタイムでの通信はできなくなる。
リアルタイムでの通信に拘らないならハイパースペース通信をリレーしてホロメッセージのデータを送信するか、そうでなければホロメッセージデータを記録した媒体を直接配達するという昔ながらの方法しかなくなる。星間通信というのもなかなかに大変なものなのだ。
『とはいえ、私がお前を助けることで結果的にエルマが安全になる

ならそれも良いか……お前が死ぬとエルマが悲しむだろうしな』
「流石はお義兄さん。話がわかる」
『そのお義兄さんというのをやめ……はぁ、もういい。実のところ、剣を尊ぶ貴族達御用達のパワーアーマーメーカーは、ある』
「おぉ、それは素晴らしい」

白刃主義者というのは言い換えれば強い貴族という理想像を追い求める懐古主義者とも言える。グラッカン帝国の貴族の象徴と言えば剣だが、その剣と対を成す存在が鎧であるのだという。
グラッカン帝国の貴族にとって剣は権力の象徴であり、鎧は財力の象徴なのだとか。確かに地球でも中世期の騎士や貴族の鎧ってのは大変に高価な物だったと記憶している。要は、その延長ということなのだろうか。

『だが、一見客はお断りの上、平民相手には商売をしない』
「なんという殿様商売」
『しかし紹介状があり、且つ本人が貴族であれば話は別だ』
「名誉爵位でも大丈夫かな？」
『恐らくはな。お前は名誉子爵で、御前試合でもその実力を示しているし、また皇帝陛下の覚えもめでたいということになっている。無碍にされることはあるまい』

エルンスト義兄さんがそう言いながら何かのデータを送信してくる。どうやらこいつがお義兄さんのいう紹介状というやつらしい。ついでに店の位置らしきマップデータも送られてくる。なんだかんだ言いながら親切だな、お義兄さん。惚れそう。
『本店は帝都だが、ウィンダス星系にも支店がある。そこには貴族軍人も多いからな』
「戦場で甲冑を着る軍人貴族がいるんで？」

『白刃主義者にだってリアリストはいる。どう足掻いても生身では致死出力のレーザーを避けるのにも限界があるし、一発被弾したら深手は避けられん。個人用シールドの容量は限定的だしな。かと言っていくら貴族の身体が強靭とはいっても重いジェネレーターを背負って戦うわけにもいかん。となれば、ジェネレーターを搭載しているパワーアーマーを利用するのが自然だろう？』

「そう……かな？　そうかも」

そもそも剣を使って戦うのをやめたら良いのでは？　と思わないでもないが、実際のところ相手や状況によってはレーザーガンやライフルよりも剣のほうが有効だったりするんだよな。

『まぁ、細かい話は向こうでするんだな。私も暇ではないのでこれで失礼する』

「ありがとうございました、お義兄さん。恩に着ます」

『ふん……ならたまにはエルマを連れて帝都に顔を見せに来い。父上も母上もエルマに会えれば安心するだろうからな』

「前向きに善処します」

ビシッ、と敬礼をしてみせるとエルンスト義兄さんは溜め息を吐いて通信を切った。最後に溜め息は流石に無いんじゃないですかね？　まぁ、お義兄さんの言う通りたまには帝都に顔を出すのも良いだろう。もしかしたら皇女殿下やファッキンエンペラーから呼び出されるかもしれないが、その時はその時だ。俺は恩には報いる系男子だからな。

「さぁて……皆に連絡するか」

ちなみに、今俺はホテルの部屋に独りでいる。女性陣はどこに行っているのかと言うと、クギの生活用品を買いに行っている。彼女

の持ち物は本当に必要最低限という感じだったので、買い出しに行ったわけだ。まぁ、女性陣とは言っても整備士姉妹は出勤したのでお買い物には同行していないのだが。社畜は大変だなぁ。

☆★☆

「そういうわけで、俺はお義兄さんから紹介状と店の情報をゲットしたわけだ」
「おぉー」
「ついてこないと思ったら、兄さんに連絡してたのね……」

ミミがパチパチと拍手をし、エルマが苦笑いを浮かべる。何やらクギの生活用品を買い足すことは急務であったようで、色々と検討した結果俺だけが部屋に残ることになったのだ。色々というのは護衛とか、あるいは同行者を守るためだとかである。

実際のところ、俺はまだクギを完全に信用していない。それはエルマとメイも同様である。昨日の話を聞く限り、ヴェルザルス神聖帝国にはサイオニックテクノロジー、ないしサイオニックパワーを利用した精神干渉技術があることが推測される。クギがその手の能力を持つかどうかは定かではないが、もし持っていた場合何かしらの干渉を俺たちに仕掛けてくる可能性がある。

そこで、その手の干渉を受ける可能性が限りなく低いメイをクギの側に貼り付けることにしたのである。メイには人格があるが、サイオニックテクノロジーで干渉されるような『精神』は持ち合わせていない――と思われる。

もしヴェルザルス神聖帝国のサイオニックテクノロジーが機械知性であるメイドロイドにまで干渉できるとなるとお手上げだが、メイには数重のセルフチェック昨日とメモリーバックアップが存在するため、万が一干渉されたとしてもリカバリーできる可能性が高い。クギの監視役としては最適だろう。

ミミとエルマを同行させたのは単に買い物となれば同じ女性である二人が同行したほうが色々と捗るのに加え、もしクギが何か仕掛けてくるなら仕掛ける対象――つまりメイ以外が居たほうが尻尾を掴みやすいだろうという考えからだ。

ミミは素直過ぎるので、敢えてこの内容は伝えていない。それで囮のような扱いをすることになっているのには申し訳ない気持ちで一杯なのだが……クギが信用できるということがわかったら、経緯を打ち明けて何か埋め合わせをするべきだろうな。

「我が君、それでは今からその鎧鍛冶に足を運ぶのですか？」

「そうしようかと思っている」

「なるほど。帝国の鎧鍛冶が作るぱわーあーまーというものがどういうものなのか、見るのが楽しみです」

頷きながら、俺はよくわかないプラスチックのような素材でできたカップの中身を一口飲んだ。

なんというか、奇妙な味である。甘いミルクティーのような飲み物なのだが、妙にスパイシーだ。香辛料でもぶち込んでいるのだろうか、これは。俺は飲んだことがないが、インド辺りで飲まれているというチャイというお茶に近い飲み物なのかもしれない。

「あちゅっ……ふー、ふー」

どうやらクギは猫舌であるらしく、お茶にふうふうと必死に息を吹きかけている。ちょっと可愛い。しかし三尾の狐耳なのに猫舌とはこれいかに。

そんなクギにミミがそれとなくチラチラと視線を向けている。その視線は敵意を滲ませるようなものでもなければ、何か疑うような類のものでもない。なんというか、扱いに困っているかのような雰囲気だ。

「それじゃあ一服したら向かってみるとするか。ぶぶ漬けでも出されたりしてな」
「ぶぶ漬け？」
「ああ、俺の住んでいたとある地域の話でな」

と、ぶぶ漬けにまつわる話をする。まぁ、今時ぶぶ漬け云々なんて言い方をすることは無いらしいが、ある意味鉄板ネタだからな。
俺達は猫舌のクギがお茶を飲み終わるまで、そんな話をして時間を潰すのであった。

#317　貴族御用達のアーマー店（前書き）

久々にＰＣ前でガッツリ寝落ちして朝を迎えました（‘ω’）

#317　貴族御用達のアーマー店

かくしてエルンスト義兄さんに紹介された店へと足を運んだのだが。

「いらっしゃいませ」

俺達を出迎えたのは執事のような格好をした初老の男性であった。店内の雰囲気はパワーアーマーショップというよりは高級な仕立て屋のような印象だ。床には落ち着いた色のカーペットが敷かれ、そのカーペットの上にはチリ一つ落ちていない。店内には木製か、少なくともそう見える調度が多く見られ、こういった店内にはありがちな大量のホロディスプレイなども見当たらない。

まぁ、ありがちとは言っても俺が足を踏み入れたことのあるこの手の店というのはガンショップくらいしかないのだが。俺が入ったことのあるガンショップは大量のホロディスプレイに様々なメーカーの様々な商品が目まぐるしく展示されている、という店だったので、この店の視覚的に落ち着いた情景というのは逆に落ち着かない感じがする。

「失礼ですが、初めてのお客様ですね？」

「ああ、紹介状がある」

そう言って俺は小型情報端末を操作してエルンスト義兄さんから貰った紹介状のデータを送信した。データを受け取った店員と思しき男性はそのデータをタブレット型の端末で受け取り、仔細を確認する。

「なるほど、ウィルローズ子爵家の」

そう言って店員――いや、店主だろうか？　彼はチラリとエルマに視線を向けた。視線を向けられたエルマは小さく肩を竦めてみせる。

「貴方様のことは存じ上げております、キャプテン・ヒロ」

「ふむ？」

「このウィンダス星系でもリアルタイムで御前試合は中継されていたので。御前試合には私どもを重用して下さるお客様も出場していたのですよ」

「なるほど、それなら悪いことをしたかな？」

結局あの御前試合では全ての種目で俺が優勝した。つまり、その重陽して下さるお客様も俺の手にかかるか、あるいは他のトーナメント出場者の手にかかるかして敗北した筈なのだ。

「正々堂々とした勝負の結果ですから、含むところなど勿論ございませんとも。それよりも敬服の念を抱くばかりです」

「そうか。まぁ、挨拶はこれくらいにして本題に入ろうか。知っての通り俺は粗野な傭兵なんでね。お上品な世間話は苦手なんだよ」

「承知致しました。お嬢様方もどうぞこちらへ」

そう言って彼は少し奥まった場所にある商談スペースへと案内された。流石に帝城と比べれば数段落ちるが、それでも中々に高級な作りの商談スペースである。シップヤードのラウンジも豪華と言える作りだったが、こちらはちょっと方向性が違うな。あちらは最新、快適をテーマにしているが、こちらは高級、アンティークをテーマにしている感じだ。

「私どもの店にご来店いただいたということは、取り扱っている商品についての説明は必要ありませんかな？」

中々に座り心地の良いソファに俺達が腰を落ち着けたのを見届けた彼は自らも対面の椅子に座り、そう問いかけてきた。俺は彼の問いに首を横に振る。

「いいや、俺が知っているパワーアーマーってのは通常の歩兵用のものだけだからな。貴族用のパワーアーマーってのがどんなものなのかは全然知らないんで、説明もしてくれるとありがたいね」

「承知致しました」

彼はそう言って頷き、指先で自分のタブレットを操作した。すると、木製にしか見えないアンティーク調のテーブルの上にホロディスプレイが立ち上がる。ただの木製テーブルに見えるが、実のところそういう見た目なだけのホロディスプレイ内蔵テーブルであるらしい。

「私どもが扱っているのはオーダーメイドのパワーアーマーです。発注されるお客様の体格や要望など完璧に沿った唯一無二の一品をお届けするのが私どもの仕事であると自負しております」

「なるほど。でも、お高いんでしょう？」

冗談のつもりでそう言ったのだが、彼は真面目な表情で頷いた。

「当然、お値段は張ります。最低でも２０万エネルはくだりますまい」

「ほーん……まぁそれくらいなら大した金額でもないな」

警戒して損をした。これで２００万エネルからとか言われたら流

石にぎょっとするところだったが、２０万エネルからということであればどんなに欲しい機能や性能を盛りに盛ってもその十倍にはなるまい。そんな俺の発言に店主らしき初老の男性は目を丸くした。

「これでも儲けてる方なんでね。それに、いくら高いって言っても船に比べればな？」

「まぁ、そうね。最低クラスの船でもフル改造しようと思えばその十倍の金額は軽く吹き飛ぶわけだし」

「なんともはや……」

俺とエルマの発言に男性は驚きを禁じえないようである。市販のパワーアーマーだと最高クラスのものでも１０万エネルも出せば手が届くものな。型落ちの中古品とかだと下手すりゃ１万エネルもしない。そんなパワーアーマー市場の事情を考えれば、最低でも２０万エネルというのは確かに高額なのだろう。それだけ出せば最新の高性能パワーアーマーが二着買えるし、スタンダードな品質のものなら四着か五着は買える。品質に目を瞑れば一個小隊とまでは行かないだろうが、十着以上のパワーアーマーを揃えることも可能だろう。

「というわけで資金面の心配はいらない。だから一番良い装備を頼むぞ？」

「承知致しました。これは思わぬ大商いになりそうですな」

そう言って彼はニンマリと実に嬉しそうな笑みを浮かべてみせた。

「基本的な機能としては通常のパワーアーマーと変わりません。つまり強靭とは言えない生身の体を守るための装甲を獲得し、その装甲を纏った上でも十全に動き回るためのパワーも獲得する。場合によってはジャンプユニットや光学迷彩機能、固定武装による火力の

獲得などを選択する場合もあります」

彼がタブレットを操作すると、テーブルの上に展開されたホロディスプレイに様々なデザインのパワーアーマーが表示された。どのパワーアーマーも市販のパワーアーマーよりかなりスリムな作りに見える。

「市販品と比べるとかなりスリムだな」

「装着者様の身体に合わせて作られておりますからな。市販品のパワーアーマーはある程度体格に違いがあっても問題なく装着できるようになっておりますが、こうしたオーダーメイドパワーアーマーはそうはいきません。完全にその方の専用機というわけですな」

「なるほど。体型が大きく変わってしまうと装着が難しくなりそうだな」

一番ありそうなのは太ってしまった場合とかだな。まぁ、今まで通りしっかり運動していれば俺にその心配は無いと思うが。成長期だってとっくに終わってるから背が伸びるようなことも無いだろうし。

「貴族はあまり理想的な体型から変わることがないから、そういう心配はいらないのよね」

「強化処置の恩恵か……」

「……ヒロ様、私ちょっと強化処置を受けたくなってきました」

ミミがエルマのスリムなお腹周りを見て呟く。ミミはこれでかなり運動を頑張っている。最初は五回腕立て伏せするのも難しいような非力具合だったが、今は軽く二十回はこなしているしな。全体の運動強度も最初とは比べ物にならないほどになっている筈だ。ミミ的にはもっと痩せたいらしいが、俺は今のままで良いと思う。寧ろ

もう少し肉付きが良くても……いや、今はミミの体型の話は置いておこう。

「貴族用ってことは、勿論剣を使った戦闘を想定しているんだよな？」

「はい。各関節の動きを阻害しないよう、最新の技術を使って着心地の改善に取り組んでおります。やはり剣を使いますか」

「それが目的だからな。戦闘用のパワーアーマーはあるんだが、どうしても剣を扱うのには向かなくてな。主に精密動作性の関係で」

「確かに、パワー重視の市販のアーマーでは繊細な動作を必要とする剣技は扱えませんな。私どもが作るアーマーはその点においてもきっとご満足頂けるかと思います」

かなり自信がある口ぶりだな。これで大金をかけて使い物にならなかったらどうしてくれようか。

「注文の流れはどんな形になるんだ？」

「まずは大まかな仕様を決めて、それから採寸と計測ですな」

「採寸はともかく、計測？」

「はい。お客様の戦闘時の動きを予めトレースしておき、その補助をできるようアーマーにモーションデータを入れておくのです。そうすることによってアーマーのアシスト効率が上がります」

「なるほど」

わかるようなわからないような。まぁそれでアーマーがより使えるものになるのであれば計測でもなんでもしようじゃないか。何にせよ、まずは仕様を決めるところからだな。

#318　新型パワーアーマーの方向性（前書き）

また流行り始めてますね……皆様体調にはくれぐれもお気をつけて

―（∵3」∠）―

#318　新型パワーアーマーの方向性

仕様の決定にはさほど時間はかからなかった。何故なら、俺が求める性能というやつがこの上なくはっきりしていたからである。

まず、最低限度の要件として必要とされているのは環境適応性と精密動作性の二つだ。

環境適応性というのはつまり、テラフォーミング中の惑星や気密の失われた艦内やコロニー内、それに人体に有害な気象条件や有毒性の大気など、そういったあらゆる状況の中で生存し、問題なく活動できるだけの性能だ。これはあらゆる戦闘用パワーアーマーに求められる基本的な性能とも言える。

そして精密動作性というのはパワーアーマーが装着者の動きにどれだけ正確に追従できるか、という性能である。装着者の動きに対してワーアーマーの反応が遅ければそれは『鈍重』なパワーアーマーであると評価できるし、逆に装着者が思ったよりも『やりすぎて』しまうようなパワーアーマーじゃ『過敏』なパワーアーマーであると評価できる。

どちらの場合でも慣れ次第でそれなりに適切に扱えるようにはなるが『鈍重』過ぎれば反応が遅れ、『過敏』過ぎれば精度が落ちる。つまり過敏でも鈍重でもなく、吸い付くような操作感のパワーアーマーこそが精密動作性に優れるパワーアーマーだと言えるだろう。

「その辺りは殆どのお客様が同様に求められる点ですな。無論、そういった需要にお答えするためのノウハウはございますのでご心配なく」

それが先程彼の言っていた計測作業というやつであるようだ。ハードウェア面だけでなくソフトウェア面での調整もしていくわけだ

な。

「整備性も大事だな」

「技術的にはともかくとして、最新鋭の素材を使うとなかなかに難しくなるところですな。それは」

「となると、消耗が激しい部分に関しては予め予備のパーツなり素材なりを用意するか」

「もしくはそういった部分に関しては多少妥協をして整備性を優先するかでしょうな」

と、そんな感じで俺と店主が話している横でエルマとミミ、それにクギはパワーアーマーの見本を眺めながら何やらはしゃいでいる。

「パワーアーマーっていうともっとこう、ずんぐりむっくりしているというかゴツい印象なんですけど、なんだかとってもスリムですよね」

「そうね。貴族用ってことで見た目もかなり重視されているみたい」

「立派な鎧ですねぇ……でも、こんなものを着たら重くて動きが鈍くなるのでは？」

「パワーアーマーにはそうならないように人工筋肉で――」

パワーアーマーの事をよくわかっていないクギにミミが解説を始める。うん、なんだか微笑ましいな。ミミをクリシュナに乗せた直後のことを思い出す。最初の頃はミミにクリシュナの内部を案内しながら積んでいる装備についてあれこれと解説してたんだよな。

ちなみに、デザインに関しては実は俺も結構驚いている。ＳＯＬにはこういった貴族用のオーダーメイドパワーアーマーなどは存在しなかったので、初見なのだ。

「基本性能はこれで良いとして、あとはオプションか。実際のとこ

ろどうなんだ？　俺がいつも使っているパワーアーマーには固定武装がいくつも搭載されていて、武器を装備しなくてもそれなりの火力があるんだが」
「無論、私どもの技術であれば精密動作性を維持したまま火力を追加することも可能です。勿論限界というものはございますが。あまりに多くの固定武装を着けてしまいますと、それだけ重量も増加致しますので」
「なるほどな。ああ、でもこのパワーアーマーを使うシチュエーションを考えるとそこまでの火力は必要ないか……？」

そもそも、普通のシチュエーションであれば元から持っているＲＩＫＩＳＨＩで問題ないわけだからな。剣を使わないといけない相手でもない限り、火力とパワーと装甲でゴリ押しできるＲＩＫＩＳＨＩの方が使い勝手が良い。となると、新しいパワーアーマーに求めるべき方向性は火力や装甲ではなく、素早さや隠密性か。

「ちょっと考え方を変えよう。環境適応性と精密動作性に加えて、隠密性や機動力を重視する方向にしたい」
「承知致しました」

ＲＩＫＩＳＨＩでは隠密性や機動力は全く期待できないからな。同じような方向性を求めた末に中途半端な性能の似たようなパワーアーマーになってしまうのは勿体ない。

「しかし、隠密性と機動力ですか。なかなかに剣呑な注文ですな」

そう言って店主は苦笑いを浮かべる。そんな店主の反応に俺は首を傾げることになった。

「剣呑？　レーザーガンやプラズマランチャーやグレネードランチ

ャーを追加してくれって言う方が余程剣呑じゃないか？」
「隠密性と機動性を重視した貴族用のアーマーなんて、考えようによっては暗殺仕様でしょ……そりゃ剣呑って評価にもなるわよ」
「なるほど」

同じく苦笑いを浮かべているエルマに指摘され、目から鱗が落ちたような心地になった。確かに、高い隠密性と機動力でもって警備を掻い潜り、剣によって音もなく対象を殺傷するとか暗殺者ムーブ以外の何物でもないな。

「でもその方向性で」
「そこは曲げないんですね」
「曲げる理由がないからな」

ミミに突っ込まれたが、俺は肩を竦めてそう答える。
正直、外聞なんぞ知ったこっちゃないからな。俺は名誉と誇りを重んじる貴族様ではなく、金のために命のやり取りをする傭兵なのだ。卑怯と言われようが汚いと言われようが、そんなものは褒め言葉である。最終的に生き残っている奴が勝者なのだ。勝ち方や戦い方に拘って命を失っては元も子もない。
そうして最終的に決まった仕様として、まず装甲は対レーザー積層装甲を採用。これはレーザーを照射された際に爆発的な蒸発を起こさないように工夫された最新の装甲で、レーザーライフル級の威力であれば同じ場所に三発受けても内部を守ることができるものなのだという。なんでも最近採掘量が増加したレアクリスタルを素材にした新素材であるらしい。

「レアクリスタルって、アレよねぇ？」
「まぁ、アレだろうなぁ」
「アレですよねぇ」

俺とエルマ、そしてミミの脳裏を過ぎっているのは間違いなく同じものだろう。パルサーの眩い光をその身に受けてギラギラと輝くバカでかいウニみたいなアレだ。
その他、人工筋肉は現行で手に入る最高級のもので、筋肉量の関係でパワーはＲＩＫＩＳＨＩには及ばないもの、生身の人間ではまず敵わないレベルのパワーがある。こいつはパワーだけでなく瞬発力にも優れる品で、フル装備でも時速８０ｋｍほどのスピードで長時間走り続けることが可能であるらしい。静粛性も抜群だとか。

「慣熟訓練がかなり必要そうだな」
「多少は必要となりましょう。ただ、お客様のモーションデータを予め取り込んでおけばその苦労はかなり軽減されます」
「なるほど」

他には高出力の小型ジェネレーターと、シールド機能。それに多機能迷彩。これはカメレオンサーマルマントよりも更に高機能な迷彩機能で、光学的な迷彩効果だけでなく赤外線や電磁波、その他諸々の探知機能を誤魔化すことのできる高機能迷彩であるらしい。

「ただし、あまり激しい動きをすると迷彩効果は著しく低下してしまいます」
「完璧な透明人間にはなれないってことか」

この世界の技術であればもっと完璧な迷彩技術も開発、実用化されていそうなものだけどな。まぁ、貴族御用達の店と言ってもあくまでも民間の工房だ。軍用の極秘技術まで扱えるわけではないのだろうから、こんなものなのかもしれない。

「しかし、完璧に暗殺者仕様みたいな装備になってるわね……」

「カッコイイだろ？」

その他には高出力のフックショットと対レーザースモーク展開機能を追加した。

フックショットは現実にありそうでなさそうな道具世界一位（当社調べ）の一品である。壁やら屋根やらにワイヤー付きのフックを撃ち込んで、自分の体を引っ張り上げるアレだ。ワイヤー自体が非常に頑丈な人工筋肉の束で出来ており、それに高出力のモーターを組み合わせてパワーアーマーごと使用者の身体を持ち上げるらしい。つまりカメレオンの舌と巻き上げ機を複合したような機構であるのだそうだ。

対レーザースモークは煙によってレーザー兵器の威力を大幅に減衰させる装備で、両肩の部分に二つずつ、合計四回展開できるようにしてある。展開できる回数に限りがあるから、使い所は考える必要があるだろう。

「かっこいいですね！」

「もう少しこう……どうにかなりませんか？　なんだか悪役っぽいような」

ミミがパワーアーマーのデザインを見て絶賛しているが、どうもクギにはウケが悪い。確かにちょっと悪ノリしてニンジャっぽい外観にしたんだが、そう悪くないと思うんだよな。というか、俺に純白や白銀色に輝くいかにも騎士ですって感じのデザインは似合わないと思うんだよ。

「カメレオン機能で色は変えられるから」

「色の問題ではないような……いえ、此の身が我が君に意見するなど烏滸がましいですね」

「いや、そういうのは言ってくれても良いけれども」

良いけれどもデザインを変えるつもりはない。すまないな。しかし力士に忍者とか大概偏ってるな、俺のパワーアーマーのデザインは。いや、ある意味では統一性があるし、これはこれでアリなのか？　そのうちサムライ型のパワーアーマーでも作るかね。

#319　既知との遭遇（前書き）

朝方までゲームで遊んでいて寝坊しました（ ̄ω ̄）（ユルシテ

#319　既知との遭遇

「ではモーションデータの計測を――む？」

各種仕様が決まり、店主がそう言ったところで突然動きを止めた。左手を自分の左耳に当てて何か聴いているかのような素振りを見せる。耳に小型の通信機か何かを仕込んでいるんだろうか？

「申し訳ありません、まだお約束の時間には速いのですが、予約のお客様がご来店なされたようで。少々お時間を頂いても宜しいでしょうか？」

「ああ、勿論。ノンアポで押しかけてきたのはこっちなんだからな」

「ありがとうございます。では、少々失礼致します」

そう言って店主が頭を下げ、席を立って商談室を出ていった。

「これでモーションデータを取ったら後は帰るだけだな。何か買い物でもしていくか？」

「うーん、そうね。別に買うものは特に無いけど、あてもなくウィンドウショッピングするのも良いかもね」

「良いですね、ウィンドウショッピング」

「ういんどうしょっぴんぐ、ですか」

クギは今ひとつウィンドウショッピングという言葉の意味がわからないようで、小首を傾げている。

「これといった目的を持たずに商店を巡って面白そうなものを探して歩く、って感じの行動をウィンドウショッピングって言うんだ。

まぁ、気に入ったものがあったら俺達の場合はその場で買うことになるだろうけど」
「なるほど」

などと話をしていると、出ていった店主が戻ってくる気配が――
うん？　もう一人分足音が増えているような？

「失礼致します。こちらのお客様が――」
「げっ」
「あっ」
「……はぁ」

店主と共に姿を表したその人物を見て俺は思わず声を上げてしまった。ミミも驚いたような声を上げ、エルマに至っては額に手をやって溜息を吐いている。

「人の顔を見るなりげっ、とはなんですか。げっ、とは」

白い軍服に身を包み、不機嫌そうに腕を組んでこちらを見下ろしてくる金髪紅眼の美人さん。最早見慣れた顔である。なんだか被っている軍帽が前よりも豪華な装飾になっている気がする。

「ご無沙汰しております」
「言うほどしばらくぶりってわけでもないですけれどね。本当によく会いますこと」
「そうですね、中佐」
「中佐ではなく大佐になりました。こんなにポンポンと階級を上げられても困るんですけどね」

そう言ってセレナ中佐、もといセレナ大佐が眉間に皺を寄せなが

ら被っている軍帽のツバを指先で弾く。彼女の被る軍帽が前に見たものよりも豪華になっているように見えたのは見間違えではなかったらしい。

「昇進おめでとうございます。それで大佐殿は何故ここに？」
「ここに来る理由なんてパワーアーマー以外にあると思いますか？
少し時間が空いたので早めに足を運んでみたら、店主は飛び入りの客に対応中と言うではないですか。この手の店に飛び入りとは珍しい、と思って少し話を聞いてみればその客が傭兵だという話だったのですよね」
「貴族御用達のオーダーメイドパワーアーマーを必要として、尚且こういう店へのコネを持ってそうな傭兵なんてそう居ないわよね」
「ええ、そう思って店主に引き合わせてもらうよう頼んだわけです。貴方達であるということは問い質せばすぐにわか――……」

セレナ大佐が視線を動かした先にはクギがいた。クギもセレナ大佐に視線を向けていたようで、二人の視線が絡み合う。

「また増えたのですか……？　貴方という人は」
そしてセレナ大佐がゴミでも見るかのような視線を俺に向けてきた。
「違――わないんだよなぁ……これが。まぁ俺にも色々と複雑な事情がな？」
「複雑な事情、ですか……まぁ、貴方のことですから、そうなのでしょうけれども」

おいやめろ。俺に憐れみの視線を向けるんじゃない。まーたこいつ変なトラブルに巻き込まれてるよみたいな目で俺を見るのをやめろ。泣くぞ。

「私の助けは必要ですか？」
「今のところは大丈夫だ。特に困っているようなことはないな」
「そうですか、なら良いのですが。ところで、そちらの方をご紹介しては頂けないのですか？」
「ああ、彼女の名前はクギ・セイジョウだ。ヴェルザルス神聖帝国の巫女さんで、遠路はるばる俺のお世話をするためにこのウィンダス星系まで旅をしてきたらしい」
「……？」

そうだよな。事実しか言っていないんだが、そういう反応になるよな。当事者の俺達だって事態を上手く呑み込めていないんだから、第三者から見ると完全に意味がわからないに違いない。

「ちょっとよくわかりませんでした。もう一度内容を整理してから言ってもらっても良いですか？」
「彼女はヴェルザルス神聖帝国の巫女さんで、彼女が言うには俺はなんか凄い存在であるらしく、彼女はそういったなんか凄い存在に仕えるために訓練されたプロの巫女さんなんだ」
「？？？」

何を言っているんだこいつみたいな顔をされても困る。俺だってよくわかってないんだから、上手く説明できるわけがないじゃないか。

「深く気にしないでくれ。とにかく彼女は彼女なりの目的で俺の側にいるのが仕事らしい。とにかく今はお互いのことをより深く知るために行動を共にしているんだ」
「全く理解は出来ませんでしたが、とにかくそれで納得しておきます。しかし、ヴェルザルス神聖帝国ですか……」

胸の前で腕を組み、セレナ大佐がクギへと視線を向ける。

「彼はフリーの傭兵ですが、銀剣翼突撃勲章と一等星芒十字勲章グラッカン帝国から授与された英雄で、皇帝陛下の覚えもめでたい名誉子爵でもあります。もし我が帝国に何の断りもなく、彼を貴国へと連れ去るようなことがあれば外交問題に発展しかねないということだけは認識しておいて下さい」

「承知致しました。此の身は我が君に付き従うのみです。此の身が我が君に何かを強制するようなことは決して無いとお約束致します」

クギもまた神妙な顔でセレナ大佐の顔を見返しながら宣言する。

まぁ、今の所彼女の言動は一貫してるよな。俺に付き従うのが最優先。彼女の国許まで来てくれれば歓待する用意があるけど、それを強制することはないと。

「覚えておきましょう。しかし、何故ヴェルザルス神聖帝国が貴方に？　なんか凄い存在、とかよくわからないことを言っていましたが」

「ああー……なんか俺ってサイオニックパワー？　の素質があるらしくてな。ちょっと他に見ないくらいに。それが関係してるらしい。正直に言うと俺達もまだよくわかってないんだよ」

「なるほど。つまりいつものトラブル体質というやつですか。貴方も大変ですね」

「他人事みたいに言ってるけど、そのトラブルの何割かは大佐絡みだからな？」

「ところで新しくオーダーメイドのアーマーを注文したのですか？　どのようなものを？」

こいつ、急に笑顔になって露骨に話題を……！

「これよ」
「かっこいいですよ！」

エルマがテーブルのホロディスプレイを操作して俺が発注したアーマーのデザインを表示する。そのデザインを目にしたセレナ大佐は苦笑いを浮かべた。

「また随分と尖ったデザインというかなんというか……まぁ、貴方らしいといえば貴方らしいかもしれませんが」
「俺にヒロイックないかにも騎士様って感じのアーマーは似合わないだろう？」

発注したアーマーは環境適応性ももちろんあるものなので、文字通り頭の天辺から爪先までを覆う全身を覆うタイプのパワーアーマーである。バイザーの色は赤だ。全体的にニンジャっぽいデザインにしたんだが、この世界の人には伝わらんだろうな。
ちなみにこのデザインだが、無数にある外装パーツの中から自分で選んで組み上げることができるようになっている。顔の造形とかの細かい部分がないところ以外はメイをデザインした時と殆ど同じ感じだな。このデザインに合わせて外装を造型してくれるらしい。肝心なのは中身というか、パワーアーマー本体なんだよな。この外装を引っ剥がすと、その下には人工筋肉やセンサー類がぎっしりと取り付けられたシャーシがあるというわけだ。まぁ、本体はシャーシだから、この外装に関しては後から変更することも可能みたいだな。

「そういう大佐は何の用で……ってそりゃパワーアーマー関係なんだろうけど」
「大佐になったからって昇進祝いってことで実家からアーマーシャーシが送られてきたんですよ。シャーシのまま放置しておくわけに

もいかないので、調整と外装の取り付けのためにこうして足を運んだというわけですね。ああ、そう言えば貴方もモーションデータを記録するのではないですか？」
「その予定だったけど」
「なら丁度良いですね。店主、二人で立ち会うのでモーションデータを取って下さい。できるでしょう？」
「はい、可能です。それでよろしいのであれば」
「ということです。手加減は無用です、やりましょうか」

そう言ってセレナ大佐が腰の剣の柄をポンと叩いた。いや真剣でやるんじゃないよね？　もし真剣でとか言われたら逃げるよ、俺は。

#320　セレナ中佐もとい大佐との立ち会い（前書き）

天気が悪くて寒いとどうにも捗りません……－7℃とか勘弁してくれ―（：3」∠）―

#320　セレナ中佐もとい大佐との立ち会い

店の地下――というか下階にモーションデータを取るための部屋があり、俺とセレナ大佐はそこで立ち会いをすることと相成った。

「前から気にはなっていたんですよ。貴方とは肩を並べて戦った仲でもありますし」

「左様で」

セレナ大佐は白いコートのような上着を脱いだだけ。俺はいつもの傭兵服という出で立ちのままで、互いに強化樹脂製の模擬剣を選んでいる。この部屋自体が巨大なモーションスキャナーになっており、こうして模擬剣を選んだりしている今も俺とセレナ大佐のモーションデータを記録しているということらしい。つまり、戦闘時の動きだけでなく、ごく自然な一般的な動作も含めて一挙手一投足までをも記録することによって、アーマー装着時の違和感を少なくすることができるのだそうだ。

「乗り気ではなさそうですね？」

「痛いのは誰だって嫌だと思うんだが……」

長さと重さが丁度よい塩梅の模擬剣を二本選び、セレナ大佐に視線を向ける。ああ、うん。もうなんかやる気満々って感じだね。模擬剣で俺を小突き回すのがそんなに楽しみなのだろうか。

「やる前からそんなことでは勝てるものも勝てませんよ。もっと覇気というものを――」

「それにセレナ大佐みたいな美人さんをボコボコにするのも気が進

まないし」
「――私をボコボコにすると？」
「そうなるでしょう」
「……良い度胸です。気に入りました」

セレナ大佐が笑顔を浮かべる。うん、とっても笑顔なんだけど大変に攻撃的な笑顔だ。やだこわい。
まぁ、セレナ大佐は俺を小突き回すのを楽しみにしていたようだが、多分そう簡単にはいかない。やる以上は手を抜く気はないし、負けるつもりもないからな。セレナ大佐がメイをも上回る豪傑でない限り、俺の勝ちは揺らがないだろう。

「では、始めましょうか」
「オーケー。お手柔らか――」

お手柔らかに頼む、と俺が言い切る前にセレナ大佐が動いた。というか、既に間合いを詰めて両手で持った大型の模擬剣を肩の上に担ぐように振りかぶっている。

「おっと」

交差させた両手の模擬剣をセレナ大佐の模擬剣に合わせるのと同時に後ろに跳び、セレナ大佐の振るう剣の力も利用して大きく間合いを離す。パワーと速度で上回る相手に足を止めて打ち合うのは危険だ。受け流しようのないパワーのある斬撃を何度も連続で見舞われたら逃げることも出来ずに防御ごと打ち崩されて血反吐を吐く羽目になるからな。

「そちらからは来ないのですか？」

剣を振り切った体勢のまま、セレナ大佐が鋭い視線を向けてくる。
「俺は平和主義者なので」
「面白いジョークですね」
そう言った瞬間、セレナ大佐の姿が一瞬ブレた。いや、違う。凄まじい速度で踏み込んできたのだ。軽く１０ｍ以上は離れていたはずなのだが、もう目の前にまで迫っている。うん、人間に出せる速度じゃないと思うんですけど？　強化された貴族ってこえぇな。
「――ッ！」
「くっ――ッ！」
息を止め、スローモーションになる世界の中で一歩踏み込みながらセレナ大佐の斬撃を紙一重で避け、すれ違いざまにセレナ大佐の腹部と右膝の下を二本の剣で撫でていく。真剣だったらこれでセレナ大佐は腹部を斬られて致命傷の上、右膝から下を斬られて倒れ伏していたことだろう。
「なるほど。厄介ですね」
前方に跳んで間合いを離してから振り向くと、セレナ大佐は剣を降ろして俺に斬られた腹部の辺りを左手で撫でていた。
「まだやる気で？」
「当たり前です。納得するまで付き合ってもらいますよ」
「うへぇ」
セレナ大佐が獰猛な笑みを浮かべ、再び剣を構える。どうやらとことん付き合う必要がありそうだぞ、これは。

「行きますっ！」

またもその姿がブレて見えるほどの速度で間合いを詰めてきたセレナ大佐であったが、今度は不用意に間合いを詰めずにアウトレンジから攻めてきた。先程までの攻撃は防御ごと相手を打ち崩すような剛の剣だったが、今度は打って変わって一撃が軽い代わりに驟雨の如き剣である。手数に加えてフェイントも交えた技巧の剣だ。

「むっ！？」

だが、手数が増えれば付け込む隙もそれだけ増える。普通であればその隙すらも手数で覆い隠してしまえるのだろうが、時の流れを鈍化させてその隙を突くことができる俺にとってはその隙を突くことも難しすぎるということはない。

「くっ、どうしてっ！？」

驟雨のような激しい攻撃の合間合間に存在する僅かな隙。その隙を的確に突いていくうちに驟雨もそのうち小降りになり、やがて攻守が逆転することになる。突かれた隙を補うために防御に回れば次の攻撃を繰り出すことができなくなり、攻撃のリズムが崩れ、更に隙が増えるのだ。

「はい、終わり」

俺の突き出した模擬剣がセレナ大佐の胸を軽く突く。完璧に心臓を捉えた致命傷だ。如何に貴族と言えども循環器系の中心たる心臓を破壊されれば死は免れない。たまに第二の心臓を増設してるのもいるらしいけど。

「……」

おや？　セレナ大佐の様子が……？

「もういっかい！　なっとくいかない！」

「うわぁ！　半泣きだぁ！」

顔を真赤にしてぷるぷると震えているセレナ大佐はなんだか可愛く見えてしまうのだが、手に模擬剣を持っているのでそれ以上に物騒が過ぎる。強化樹脂製だから斬れたりはしないけど、それで思い切りぶん殴られると普通に痛いんだよ。だから俺は絶対に手加減はしない。絶対にだ。

「おかしいでしょう！？　何かイカサマしてませんか！？　なんでそんなに速くもない剣に私が負けるんですか！」

「そうは言うがな、大佐。見ての通りの結果が全てだと思うんだよ」

イカサマをしていないかと問われるとイカサマをしていないとは言えないので、しれっとその質問には答えないでおく。嘘はついていない。真実を話さないだけだ。

「納得がいきません！　もう一回！　もう一回！」

ダンダン！　と地団駄を踏みながらセレナ大佐が模擬剣を振り回す。お子様かよ！

「それじゃあ泣きの一回だぞ？　これは貸しだからな？」

「ぐぬぬ……わかりました！　借りておきます！　いざっ！」

結局、更に五戦ほど剣を交えたところで俺がギブアップした。全部勝ったが、これ以上は俺の体力が保たない。

「勝ち逃げはズルい！　ズルいと思います！」

「これ以上付き合えるかっ！　結局七戦もやったんだからもう良いだろ！」

そう言って俺は剣を順手から逆手に持ち替えた。これ以上はやらないという断固たるサインだ。

セレナ大佐はまだまだ元気いっぱいのようだが、俺はもうクタクタである。剣を使った近接戦闘というのは実に集中力と言うか、精神力を消耗するのだ。セレナ大佐もどんどん俺の太刀筋に慣れてきたのか、後半は何度も呼吸を止めて時の流れを鈍化させる羽目になったしな。こんなに連続で能力を使うのはメイとの剣術訓練の時くらいだ。まぁ、メイとの訓練と違って血反吐を吐いて転がるようなことにはなっていないので、まだセレナ大佐の相手をするほうが楽だが。

「こんな屈辱は初めてです……」

「屈辱って……ただの模擬戦だろ」

「模擬戦でも私を七度も連続で下した殿方はいなかったんですよ！」

「左様で……別に責任とか取らないからな？」

「むーっ！　別にそんな事は一言も言ってませんけど！　言ってませんけど！？」

セレナ大佐が顔を赤くして模擬剣の切っ先を俺に突きつけてくる。Oh、ノーノーノーノー、ワタシ無抵抗デース。暴力反対。二本の模擬剣を小脇に挟んで両手を挙げて降参しておく。

「モーションデータを取るという目的は十二分に達成されたでしょ

う。はい、終了。解散！」
「また今度手合わせしてもらいますからね……」
「あーはいはい、今度ね今度」

屈辱に震えるセレナ大佐の視線をスルーして模擬剣を収納するために壁際に設置された棚へと向かう。なんだか以前に増してセレナ大佐にロックオンされることになってしまった気がするが、これは不可抗力……不可抗力かなぁ？　不可抗力ということにしておこう。いつものトラブルメーカー体質がまた顔を出してきている気がするけど、気のせいだ。きっと気のせい。そういうことにしておこう。

#321　かまってちゃん（前書き）

ＰＯＮＰＯＮ！　ＰＡＩＮ！―（：３」∠）―（昨日から引き続きなので薬を飲むことにする

#321　かまってちゃん

「今日は非番なんです」

貴族御用達のアーマーショップから出るなり、セレナ大佐がそう言って俺の顔をじっと見つめてきた。

「なるほど、つまり構えと」

「……そういうことです」

意外と素直な反応であった。まぁ、彼女が非番だからと俺達に構えと言ってくるのは今に始まったことではない。非番だからってクリシュナに単身突撃してきて酒盛りをしたことだってあるしな。結果、べろんべろんに酔っ払って醜態を晒すことになったわけだが。

「どうする？」

「ええと……お酒以外なら良いんじゃないですか？」

「そうね、とりあえずお酒は抜きで食事でもしながらどうするか考えたら？　身体を動かしてお腹が空いてるんじゃないの？」

「そう言われてみればそのような気がするな」

ホテルで朝食を取ってから俺はエルンスト義兄さんに連絡し、女性陣は買い物へと出かけた。その後に外で合流し、軽くお茶を飲んでからアーマーショップへと赴き、セレナ大佐とチャンバラをしたという流れなので、昼食はまだである。時間的には少し早いかもしれないが、今から店を探して入るなら丁度良い時間になりそうだ。

「じゃあそういう方向で行きますか。大佐殿もそれで良いかな？」

「はい、それで構いません」
「オーケー。クギもそれで良いか？」
「はい、我が君」

セレナ大佐とクギからも同意を得られたので、食事処へと移動することにする。メイ？　メイは視線を向けただけで頷いたから。彼女はパーフェクトなメイドなので、こういう時は影のようにそっと俺達に寄り添っているのである。

「うーん、セレナ大佐がいらっしゃるので、少し高級なところのほうが良いでしょうか？」

とりあえず大通りへと出ようということで、歩きながらミミがタブレット型端末を腰の専用ホルダーから取り出す。歩きスマホというか歩きタブレットは危ないぞ、ミミ。

「そうね。少しくらいはお上品なところのほうが良いかもね」
「別に私はどこでも構いませんよ？」

なんだかんだで付き合いの長い三人なので、ミミとエルマ、それにセレナ大佐の三人は気安い感じで行き先の検討を始めた。セレナ大佐は侯爵家の令嬢なので、ミミなんかは最初の頃はかなり遠慮していたのだが、もう何度もセレナ大佐が酒でぐでんぐでんになって管を巻く姿を目にしているのですっかり慣れてしまったようである。

「クギは話し合いに加わらないのか？」
「此の身はまだ皆様の食事の好みなども知りませんし、そもそもどのような食事処があるのかもわかりませんので……」
「なるほど……あ、そういやクギの端末と連絡先を交換してなかったよな。交換しておくか」

「あ、はい。ええと……」

クギが肩掛けの鞄のような小物入れをゴソゴソと探って小型情報端末を取り出す。ピッカピカの新品に見えるな。

「実はあまり使いこなせていなくて……此の身どもの国では貨幣や紙幣が使われていますし、通信に関してはこのような機器を使う必要もなかったものですから」

「なるほど？　それじゃあまずは端末を起動して……おいおい、認証機能は有効にしておいたほうが良いと思うぞ」

「にんしょうきのうとは？」

クギが首を傾げる。あ、これ本当に何も知らないやつだ。おおう、まさかこのＳＦ世界でテクノロジー製品を全く使いこなせない人がいるとは思わなんだ。こんな感じでどうやってこのウィンダス星系まで辿り着いたのだろうか？　誰かにエスコートでもされてきたのかね。

「よし、やっぱり今は鞄にしまっておいてくれ。部屋に戻ってからゆっくりと教えよう。絶対に他人の手に渡らないように気をつけるように」

「はい、我が君」

クギは俺の言葉に素直に首肯し、大事そうに小型情報端末を肩掛け鞄の中にしまい込む。本人も言っていたけど、本当に箱入り娘なんだな。これは順応させるのに手間がかかりそうだ。

そして、俺とクギのそんなやり取りをメイが静かに見守っていた。あまりにじっと見つめてきているのでなんだろう？　と思って視線を向けてみたのだが、メイはなんでもないとでも言うように首を小さく横に振る。メイもなんだか少し様子がおかしい気がするな。ど

うしたのだろうか？

「ヒロ。それにクギもちょっとこっち来て。候補をいくつか絞ったからどこに行くか決めましょう」
「あいよー。ほら、クギも行こう」
「はい」

大通りに出たところで声をかけられたので、俺とクギは数歩先行してあーでもないこーでもないと話しながら歩いていた三人に追いつき、道の端――何の変哲もないビルディングの壁近くに集まって行き先を相談することにした。ここならそうそう通行の邪魔にもならないだろう。

「それで、候補がいくつかあるって？」
「はい！　私のオススメはここです！」

そう言ってミミがタブレットの画面を見せてくる。そこに表示されているのは玉虫色に光る謎の球体や、ピンク色の麺――ではなく何かの幼虫かそれともワームか。とにかく細長い生き物に何かのパウダーがかけられたもの。それと足が四本の昆虫の丸湯で……いや、カニ？　カニか？　いやなんか違うな。とにかくそういう類の俺にはゲテモノに見える料理の数々だ。

「ピッピペロニ星の郷土料理店だそうですよ！」
「ウン、ナルホドネー……次行ってみようか」

チラリと横を見ると、画面を目にしたクギの頭の上の耳がぺたんと伏せられ、わずかに震えている。なんかふさふさの三尾も若干膨らんでいるようにも見える。クギの感覚的にもピッピペロニ星の郷土料理とやらは受け容れがたい見た目であったらしい。というか、

どこにあるんだろうか、ピッピペロニ星とやらは。帝国領内なのか？　絶対に近づきたくないんだが。

「私は無難なところを選んだわよ」

エルマがそう言ってミミのタブレットに手を伸ばし、画面を表示する。どうやら帝国料理をメインで出しているレストランであるらしい。フードカートリッジから作られた合成品の食材ではなく、本物の食材――つまり野菜や肉を使った料理が売りであるらしい。うん、これは無難。とても無難。

敢えてケチをつけるなら、料理の内容がホテルのレストランと同系統なのはいかがなものかというところか。

「そしてもう一つは……えぇ？」

最後の一つは帝国全土にチェーン店を展開するジャンクフード店であった。帝国内最大手の自動調理器メーカーの直営店で、配置されている人員は最低限。多種多様な自動調理器が設置されており、客は自分の好きな自動調理器を使って料理を注文し、テーブルで食べるだけという感じの店である。

「……なんですか」

「意外なチョイスだなと」

「気取った店で食事をするばかりでは面白みがないでしょう」

なるほど。それも確かに。クギも自動調理器で作られる料理を口にしたことはあまりないという話だし、チョイスとしては悪くないかもしれない。俺達も外食となれば最近は高級なお店に行くばかりだったし。

「俺はセレナ大佐の案を採用したいな。たまにはチープな味を楽しむのもアリじゃないか？」
「そうね、たまには良いかも」
「このチェーン店、ターメーンプライムコロニーにもあったんですよね。昔はよく友達と行ってました。ちょっと……うん、懐かしいですね」

ミミが少し悲しげな表情を見せる。ミミにとっては郷愁の念や幸せな記憶を思い起こさせると同時に、辛い記憶も一緒に思い出す場所なのかもしれない。ミミの故郷であるターメーンプライムコロニーは彼女にとっては故郷であると同時に、誰も自分を助けてくれなかった場所でもあるからな。

「ほら、そんな顔しないの。食事は楽しまないと損よ？」

エルマも何か察したようで、そう言いながらミミの背中をポンポンと叩いた。

「はい。そうですね！　今はどんなメニューがあるのか楽しみです。定番メニュー以外は時期によって変わるんですよ」

ミミが気を取り直したように明るい声でそう言って笑顔を浮かべてみせる。まぁ、こういう時にはあまりくどくどと言葉を並べ立てるよりも、一緒に楽しんで楽しい思い出で嫌な思い出を塗り潰してやるのが良いだろう。

「それじゃあジャンクな味を楽しみに行くとするか。自動調理器の料理も案外悪くないもんだぞ」
「そうなのですね。楽しみです」

クギも楽しみにしているようだし、さっさと向かうとしようか。
久々にチープなホットドッグのような何かとか、ハンバーガーのような何かを楽しむとしよう。

#322　世間話（内容は極めて物騒）（前書き）

感染者を殴り飛ばすのは楽しいＺＯＹ（，ω，）

#322　世間話（内容は極めて物騒）

「どうだ？」
「美味しいですね。これが全部機械で、しかもふーどかーとりっじというもので作られているというのが驚きです」

クギが両手で掴んだハンバーガー……のようなものを啄むように食べながら尻尾をふりふりしている。真っ白いバンズに朱色がかったパテ、それと濃い緑色のレタスとは思えない何か。形だけならハンバーガーなのだが、色彩が変なんだよな。でも味はちゃんとハンバーガーなので、やっぱりこれはハンバーガーなのだろう。
まぁその、使うカートリッジによって微妙に色が変わったりするんだけどね、これ。味は殆ど変わらないけど、色は変わるんだよ。原材料の違いなのかもしれない。

「ヒロ様ヒロ様、これも美味しいですよ」
「どれどれ？　おぉ？　これは確かに。なんかカレーっぽい」

ミミが食べていたのは黄色がかったパンのようなものなのだが、中にカレーのようなスパイシーなペーストが入っていて美味しかった。なんかナンの中にカレーが入ってるみたいな料理だな。

「……むぅ」

なんかセレナ大佐がこちらに不貞腐れたような顔を向けてフライドポテト――のようなものをモソモソと摘んでいる。見た目が緑色でも食感と味はフライドポテトそのものなんだよな、アレ。

「どうしてそんなに不満げな表情をしていらっしゃるのかな？」
「別に……楽しそうで良いですね」
「うわめんどくせぇ」
「めんどくさいって言うのやめてもらっていいですか？」
「ちょっと貴方達、こんなところで取っ組み合いとかやめてよね？
ただでさえ目立ってるのに」

笑顔で不穏なオーラを発し始めるセレナ大佐を見咎めたエルマが呆れた様子で注意してくる。
うん、そうだね。目立ってるね。見るからに傭兵って感じの男に美人が四人とメイドロイドが一体。そのうち一人は帝国航宙軍の制服姿で、しかも剣を腰に差している。なんかよく見ると傭兵っぽい男も腰に剣を差している。貴族？　こわ。近寄らんとこ……となるのも当たり前の話だ。
そのせいか、俺達が座っているボックス席の周辺は見事に空白地帯と化している。うん、正直に言うととても申し訳ない。だが俺達としても気を遣って好きなものを食えないなんてのはお断りなので、我慢していただきたい。まぁ、こちらが席を空けろと言ったわけでもなし。勝手に怖がって距離を空けているのだから、気にする必要も無いのかもしれないが。

「貴方達はいつまでこのコロニーに滞在しているのですか？」
「最短でもあと一週間は動けないな。新しい船の納品を待ってるのと、ブラックロータスの改修作業もしてるんでね。クリシュナは動けるけど、新しい船とブラックロータスを置いて他所に行くつもりはないな」
セレナ大佐の質問に答えつつ、俺は俺で注文しておいたホットドッグのようなものを食べる。ソーセージの歯ごたえが今ひとつだが、それ以外は何の不満もない出来だな。やっぱり配色はなんかおかし

いが。

「そういうセレナ大佐はどうしてここに？　ああ、まぁ軍事機密を聞き穿ろうってわけじゃないけど」
「大佐になったからですよ。後は察して下さい」
「ふむ？」

昇進したからウィンダス星系に留まる必要があるってことか。つまり指揮官であるセレナ大佐が昇進したことによって、対宙賊独立艦隊の艦隊規模が大きくなるってことかな？　なるほど。それなら帝国随一のシップヤード星系であるウィンダス星系にセレナ大佐が滞在しているわけだ。恐らく、ここで新造艦とかそうでもない艦とか色々と受け取っている最中なのだろう。

「大変そうだな。手続きとか」
「ええまぁ、色々と……評価されるのは嬉しいんですが、あまりにトントン拍子で事が進むと気苦労も多いですよ。親の七光りだのなんだのと妬んでくる連中もいますし」
「それが全く無いって言ったら嘘だろうけど、それ以上に大佐殿の柔軟な発想とか、ここぞという時の判断力とか、あと運とかも絡んでるよな」
「……運が良いというのは否定はできませんね」

そう言ってセレナ大佐がチラリと俺に視線を向けてくる。まぁそうね。俺とブラックロータスがあの絶妙なタイミングで介入しなかったら、セレナ大佐は結晶生命体相手に戦死してた可能性はあるね。或いはコーマット星系でやった陸戦で深手を負っていたかもしれない。いくら帝国海兵の支援があっても、あの化け物相手にセレナ大佐一人で挑んで無傷で勝てるかどうかは危うかったかもしれない。

「しかし大変だな。部下も相当増えるんだろ？」
「そうですね。今までに比べると大分増えます。まぁ、私も侯爵家の出なので、そういった方面の能力には不足していないのですが」
「凄い自信だな」
「子爵家出身の私は軽く身体能力を強化をしているだけだけど、侯爵家ともなれば身体能力だけでなく脳の処理能力とかも強化しているのよ。凄い自信というよりは、できるようになっているの」
「そういうことです。疲れるからあまり多用したくは無いのですけれどね」

そう言ってセレナ大佐が飲んでいるコーヒーもどきには大量のガムシロップめいた甘味料がドバドバと投入されている。頭脳労働をするために脳味噌が糖分を欲するのだろうか。糖尿病とかになっても知らんぞ。

「まぁ、聞く限りでは俺達に手伝えそうなことは何も無さそうだな」
「そうね。艦隊規模が大きくなるなら私達みたいな小規模の傭兵船団は戦力としては誤差レベルだろうし、対宙賊戦術に関してももう独自に昇華しているんでしょう？」
「まぁ、そうですね。最近は食いつきが悪くなってきたので、偽装により力を入れたりしていますよ……軍用装備でガチガチに固めた小型艦の護衛をつけてそれっぽくしたりね」
「うわぁ、悪質だな」
「駆け出し傭兵が乗るような小型艦が軍用装備でガチガチに固められているとか、襲った宙賊にとっては悪夢でしょうね」

そう言ってエルマが苦笑いを浮かべる。どんな船を使っているのか知らないが、駆け出しの傭兵が乗るような船と言ったら通称ザブトンと呼ばれるスペースマンタとか、通称ニンジンとか呼ばれるスピアヘッドだろう。

どちらも小型艦の中でも最小クラスの船で、ジェネレーターなども当然大型のものは積めないから、戦闘能力には限界がある。しかし、それでも軍用装備で全身を固めれば速い上に小回りが利き、宙賊艦相手には十分な攻撃力を持つ機体に仕上がる筈だ。

そういえば、疑似餌の輸送艦も数を増やしたと前に言っていたような気がする。そうすると数隻の駆け出し傭兵が護衛に就いている美味しい船団だと思って襲いかかったら、輸送艦も護衛の船も軍用装備でガチガチに固めたやべー奴らで、しかもすぐさま対宙賊独立艦隊の本隊が増援に現れるというわけか。恐ろしいな。

「悪質も何も、私達にこういったやり方を教えたのは貴方達でしょう」

心外だ、という表情でセレナ大佐がお上品にチキンナゲット――のような何かを口に運ぶ。手掴みで食べているのにどこかお上品な所作に見えるのは凄いよな。これが本物の貴族ってやつですよエルマさん。どう見てもそういう所作には見えないエルマさん。ああ痛い、二の腕を抓るのはやめてくださいまし。

「目の前でイチャつかないで貰えますか？」

「教育よ、教育」

「とても痛い……話を戻すけど、艦隊規模が増大するってことは暫くは訓練の日々か。大変だな」

「そうなりますね。規模が増える分、戦術も構築し直す必要が出てきますし」

そう言ってセレナ大佐が難しげな表情を浮かべる。

実際のところ、対宙賊独立艦隊は宙賊に対してだけでなく、結晶生命体相手にも戦力として投入されていたりするからな。セレナ大佐の更に上の考えとしては国内の治安維持と人気取りをしつつ、必

要な時に必要な場所に気軽に送り込めるフリーな戦力としたいとか、そういう思惑もあるんじゃないかと思う。
宙賊相手にひっきりなしにドンパチしてる関係上、下手な正規艦隊よりも実戦経験が豊富だったりするだろうしな。

「まぁ、役に立てることがあるかどうかはわからんが、船の調達と改修が終わったら俺達もフリーだからな。条件次第では仕事を受けても良いぞ。船の数も増えたし、俺のランクはプラチナランクだしということもあってお値段は張るけどな」
「そうですね。その時は遠慮なく連絡させて貰います。その時になってやっぱり嫌だというのはナシですよ。そちらから言ったのですからね」
「こっちが納得できる条件ならな」

念を押してくるセレナ大佐に肩を竦めてそう答えておく。こう言っておけば条件が気に入らないからパスで、と言うことはいくらでも可能だからな。つまり、いざとなれば吹っかけて断ることもできるということだ。ガハハ、勝ったな。

#323　平穏な時間（前書き）

大寝坊しました（，ω，）（ゲームが楽しすぎるのが悪い

#323　平穏な時間

非番のセレナ大佐と食事を取ったあの日から三日。速攻でセレナ大佐から断れない条件の案件を投げられるという展開を実は警戒していたのだが、そういったことも特に無く俺達は平穏無事な日々を過ごしていた。

「傭兵というのは思っていたより、その……」
「地味？」
「ええと、はい。我が君にこんなことを言うのは失礼かもしれませんが」
「別に失礼でもなんでもないけどな」

身体にぴっちりとフィットするタイプのトレーニングウェアを着込んだクギの言葉に、俺は肩を竦めながらそう答え、プロテインが配合されているというトレーニングドリンクを飲む。
うーん？　なんかきなこみたいな香ばしい風味が悪くないな。思ったより美味い。

「今回は船のメンテナンス絡みだから尚更ね。ウィンダス星系で活動する宙賊はほぼいないから、この星系で受けられる仕事って基本護衛なのよ。護衛って基本数週間から下手すると月単位での契約になることが多いから、クリシュナ単艦で受けるのはちょっとね」
「ブラックロータスとアントリオンを置いていくわけにもいきませんしね」
「結果としてここから動けない、仕事も受けられないとなるとこうしてトレーニングをするか、そうでなければ食っちゃ寝するしかないわけだ」

朝、食事や身支度を済ませて出勤する整備士姉妹を見送った俺達は四人でホテルの近くにある運動施設へと足を向けていた。ホテルには専用のジムなどが無かったので、わざわざこうして足を運んだのだ。本当に食っちゃ寝してると身体が鈍るからな。

「それにしても、クギにも傭兵に対する一般的なイメージってのがあるんだな？」

「はい、傭兵の活躍を題材にしたホロムービーや小説、それにコミックなども目にしたことがあります」

「意外ね。なんだかクギの話を聞いていると、ヴェルザルス神聖帝国の人ってそういう娯楽と無縁なのかと思ってたんだけど」

「そのようなことはありませんよ。確か此の身どもは使命を果たすことを第一としていますが、そのためにも幸福で健やかな生活というものは大事なものなのです。そして幸福で健やかな生活を送るには、娯楽も当然必要です。此の身どもの国にも娯楽は広く普及しています」

そう言ってクギが胸を張る。

「わかるようなわからないような話だな……まぁ、全員が全員使命とやらに身を擲って、そればかりで楽しみも何も無く一生を終える、なんてのは確かに現実的な話じゃないか」

人は何かしらの寄る辺が無ければ生きていけないものだよな。クギが言っていた使命ってのもなんだか壮大というか遠大というか、ちょっとスケールが大きすぎてよくわからん内容だったし。そんなもののために一生身を粉にして働き続けるというのはぞっとしないな。

「話は変わるけど、クギって結構体力あるっていうか、運動能力高いな？」
「そうですか？　そのような自覚はあまりないのですが」
俺の指摘にクギが首を傾げる。頭の上の獣耳がピコピコと動いていてとても可愛い。
「私もそれは思いました。ヒロ様と殆ど変わらないくらいですよね？」
「いや、多分俺よりも筋力とか瞬発力とかは上だと思う」
ランニングマシンのデータを見る限り、持久力は俺のほうが上っぽいけどそれ以外の身体能力は俺と同等かそれ以上だ。流石に軽くと言えど身体強化処置を受けているエルマには敵わないようだが。
「ヴェルザルス神聖帝国の人って皆そういう感じの耳と尻尾なのか？」
「そうですね、私のような耳と尻尾を持つ方は多いです。形や数は違いますし、耳は我が君と同じような感じで、角が生えている方なども居ますよ」
「なるほど……？」
なんだろう。想像するしかないが、所謂獣人みたいな人達なんだろうか？　耳が俺と同じような感じで角が生えてるってどんなのだ？　鬼っぽい感じ？　よくわからんな。
なんかもうクギの普段着が巫女服のような何かだから、俺の中でヴェルザルス神聖帝国は和風っぽい雰囲気のケモミミ王国みたいなイメージなんだが、ここに来て鬼っぽい人がいるって情報が入っちゃうとなんかもう妖怪王国的な感じだったりするのだろうか？　マジでよくわからんな、ヴェルザルス神聖帝国。

「クギが特別身体能力に優れているってわけじゃないなら、俺とかミミみたいな所謂ヒューマンよりも基本的な身体能力が高いのかもな」
「そうなのでしょうか？」
「ティーナちゃんとウィスカちゃんも種族的に力持ちですし、そんな感じなのかもしれないですね」

あの二人もドワーフだからか腕力と握力凄いからな。あと肝臓の強さも半端じゃない。

「ところで、一通り運動を終わらせたら今日はどうするの？　確か予定は何も無かったわよね？」
「うーん、そうだなぁ。観光をするような場所ももう無いし……」

この三日間でウィンダステルティウスコロニーの商業エリアや娯楽エリアは大体見て回った。特筆するような施設はなかったが、商業エリアの店は全体的に品揃えが良かったな。
そういやなんかミミが輸入品店で色々と買い込んでいたんだよな……たまに大当たりもあるんだけど、ミミが買う輸入品の食料って大抵ゲテモノなんだよ。

「そういえば、注文した品が今日クリシュナに届くんですよ」
「注文した品、ですか？」
「はい！　交易船が持ち込んだ色々な場所で作られた食べ物です！　クギちゃん、興味ありませんか？」

ミミが輝くような笑顔をクギに向ける。ああ、いけない。クギ、早まるな。その笑顔に釣られるととんでもないことになってしまうぞ。その笑顔は地獄の宴めいたゲテモノ試食会へと君を誘う罠なん

だ。
しきりにクギへと輸入食品の素晴らしさを説くミミと、興味深げにそれを聞くクギを見ながらどうしたものかと考えていると、俺の小型情報端末が着信音を鳴らした。この音はティーナだな。仕事中の筈だが、どうしたのだろうか？

「はいよ、もしもし？　どうしたんだ？」

スピーカーモードで通信を開始すると、小型情報端末からティーナの声が聞こえてきた。

『あ、兄さん？　今日、半休もらって午前中だけで仕事終わったんよ。うちとウィスカと三人でご飯食べに行かへん？』

「良いけど、三人でか？」

チラリとミミ達に視線を向ける。敢えて三人でというのはどういうことだろうか？　こんな申し出は初めてだな。

「私とメイがこっちについてるから、行ってきなさい」

こちらに視線を向けてきていたエルマがそう言う。ミミもこちらに視線を向け、コクコクと頷いている。うーん？　何かこれは事前に根回しがしてあった雰囲気だな？

「何を企んでいるんだよ……まぁわかった。どこで合流すれば良い？」

『あんがと。えっと、場所は今からデータ送るわ。うちらもすぐ向かうから』

「了解。また後でな」

そう言って通話を切ると、すぐに合流場所のマップデータが送られてくる。ふん？　ちょっと高級な感じのレストランみたいだな。

「事情は聞かないほうが良いんだよな」
「本人達から聞きなさい」
「オーケー、そっちは任せるぞ」
「任されたわ。貸し一つね」
「セレナ大佐じゃあるまいし、勘弁してくれ」

エルマに苦笑いを返しつつ、トレーニングルームの片隅で待機しているメイにも視線を送ると、彼女はコクリと頷いた。さて、どんな話が飛び出してくるのやら。

#324　だいじなはなし（前書き）

朝までゲームやってて寝坊しました（ ˇ ω ˇ ）（ユルシテ

#324　だいじなはなし

「おー、兄さんこっちこっちー」

トラムを使って待ち合わせ場所へと移動すると、そこには既にティーナとウィスカが揃って待っていた。二人とも揃って行動していたのだろうから、一緒にいるのは当たり前なのだが。

「なんだかちょっと気合い入った格好してるな？」

二人ともいつもの作業用のジャンプスーツではなく、ちょっとお洒落を意識したようなカジュアルな服装であった。朝にホテルを出る時にはいつもの服装だったと思うんだが……そう言えば二人とも何か荷物を持っていたな。わざわざ服を持ち出して着替えてきたのか。今回の行動が計画的なものであるという証拠がどんどん出揃ってくるな。

「ふふん、いっつも芋臭いツナギ姿ばっか見せてるからな。どや？　惚れ直したやろ？　ティーナちゃん可愛いって言ってもええんやで？」

「うん、可愛い、というかかっこいいな、なんだか新鮮な感じだ」

ここは茶化さずに素直に褒めておく。ティーナは身体にフィットしたパンツスタイルのコーディネートで、キュートと言うよりはスタイリッシュと言うべきだろう。種族的に身長は低いが、体格なりに出るとこは出ているので色気も感じる。

「しかし、ウィスカはなんだか随分と緊張してないか？」

「あー、まぁ。それはご飯食べながら話そか」

そう言ってティーナは先陣を切ってお目当ての店へと入っていってしまった。ここでこうしていても仕方がないので、緊張で固まっているウィスカの手を引いて俺もレストランへと入る。ちなみに、ウィスカの格好はスタイリッシュなティーナとは対照的に女性らしさ――というか、少女らしさを強調するようなコーディネートだ。彼女の髪色に似た青いストライプ柄の涼やかなワンピースと、白い帽子という組み合わせである。大人っぽいコーディネートのティーナと並ぶと、なんというか……温度差が凄い。

「大丈夫か？」

「す、すみません……だいじょうぶです」

ガチガチで全然大丈夫じゃなさそうなんだが、本人がこう言ってるとなるとなんともだな。彼女の小さな手はいつになく汗ばんでおり、本当に緊張しているというのが伝わってくる。こんなに緊張するような話を今からされるのかと考えると、こっちも緊張してくるんだが。

レストランに入ると、先にティーナが受け付け――というか席の用意を店員に申し付け終えているところであった。どうやら予約してあったらしい。

「ご案内致します」

「よろしゅうな。兄さん、こっちやって」

「はいよ。ウィスカ、歩けるか？」

「だいじょうぶ、だいじょうぶです」

全然大丈夫じゃ無さそうなんだよなぁ。まぁ、ティーナもウィスカも緊張はしているようだけど悲愴な雰囲気は全く無いから、別に

悪い話では無さそうなんだけども。
　そんなことを考えながら店員に案内された先は奥まった場所に用意されている席だった。パーティションで他の席から視線が通らないようになっており、プライバシーを守りつつ開放感も感じられる工夫がなされている。

「なんだかいい雰囲気のレストランだな」
「せやね。ちょっと薄暗いのがムードあってええやん」

　決して暗いわけではないのだが、間接照明が多用されていて良い意味で薄暗く、落ち着く雰囲気である。暗くても陰鬱な印象を受けないのは五月蠅く感じないボリュームで流されているスローテンポの音楽のお陰かも知れない。

「まずは飲み物か？　俺はノンアルコールで頼むぞ」
「うちらもまずはノンアルコールでいこかな。まず先に片付けるもの片付けんとウィスカが参ってしまいそうやし」

　苦笑しながらティーナが注文用のタブレットを操作する。確かにこの状態だとウィスカは何を食べても味がわからないだろうな。しかし、酒を入れないで素面で話をしようということか？　ますますどんな話題が飛び出してくるのか気になって仕方がないな。

「兄さんは朝から運動しに行ってたんやろ？　何か変わったことはあったん？」
「特にはないな。ああ、でもクギって運動能力高いよなって話はしたか。特に鍛えたりとかはしてないそうなんだが、結構みっちりとトレーニングをしている俺とそんなに変わらないんだよ」
「へー、見かけによらんなぁ。なんか細くて可愛くていかにも女の子って感じやのに」

「種族的なものなのかもなって話をしてたんだよな。ティーナ達も見かけの割に力が強いだろ？」
「確かにヒューマンに比べるとなぁ。うちらからすればヒューマンが見た目の割にひ弱なんやけど」

そうして話しているうちに店員さんがトレーに飲み物の入ったグラスを乗せて現れた。ワインのように見えるが、どうやら葡萄のような果物のジュースであるらしい。本物の果汁で作られたジュースはこういったコロニーでは高級品だ。

「それで、今日はどうしたんだ？　色々と策を巡らせたみたいじゃないか」
「あー、なぁ？　それはアレや、アレ。ウィー？」
「あう、あの、その、ええと……」

急にティーナから話を振られたウィスカが気の毒なぐらい狼狽えている。これは聞き出すのに時間がかかりそうだな。

「ＯＫＯＫ、とりあえず良いニュースなのか悪いニュースなのかだけ教えてくれ」
「そ、それはお兄さんしだい、です」
「俺次第？」

なんとも奇妙な話である。二人がこんなに平常心を失うような話題で、話すのにわざわざこのような場を整え、お洒落までして打ち明ける話……しかもそれが良いニュースなのかどうかは俺次第。
その時、俺の脳裏に電流派が走った。まさか。まさか、そういうことなのか？

「まさか二人同時に命中したのか？」

「「めいちゅう？」」

二人が揃ってきょとんとした顔で首を傾げる。うん？　伝わってない？

「いや、することしてるし、二人揃って俺の子供が出来たとかそういう話かと。それは良いニュースだ――」

「ち、ち、ちゃうわっ！　うちもウィーもちゃんと避妊してるし！」

ティーナが顔を真赤にして否定する。ああ、そう。まぁそうだよな。その辺りはなんか女性陣で情報共有して色々やっているらしい。身体に負担がかかるものなのじゃないかと心配して寧ろ俺が対策すれば良いんじゃないかという話もしたことがあるのだが、総合的に考えて女性側が対策した方が楽なのだとか。

「じゃあなんだろう。全然予想がつかないんだが」

不意の命中でおめでたです、以外にこんなに改まって話をする理由が俺には思いつかない。ここのところ二人とも例の鹵獲機体の引き渡しと研究の引き継ぎでスペース・ドウェルグ社のウィンダステルティウス支社に通い詰めだったから、これといったハプニングや状況の変化が起こるとは考えられないんだよな。ああ、会社からの辞令で配置転換とかはあり得なくもないのか？　それは困るな。だが、もしそうなら悪いニュースだと断言して良いと思うんだが。そうなるとこれも外れか？

「うーん、わからん。降参だ。話してくれないか？」

「えっとな、その……うちら、会社辞めようかと思ってんねん」

「ほう」

なるほど。

「つまり、スペース・ドウェルグ社からの出向という形じゃなくて、正式のうちのクルーになってくれるってことか？」

「は、はい。その、お兄さんが良ければなんですけど……」

「当然歓迎する。大歓迎だよ。タイミングがあればこっちからお願いしたいと思っていたくらいだ」

「え、そうなん？」

「そうだよ。俺としてもいつ切り出したら良いものかと考えあぐねていたんだよな」

これは本当の話である。ただ、現状で特に不便を感じてはいなかったし、二人ともそれで悩んでいる様子は無いように思えたから問題を先送りにしていたのだ。

「もし会社の命令とかでブラックロータスから降りるように言われたとかそういう話になったら、会社を辞めてうちのクルーになってくれないかって言うつもりだったんだ。タイミングを待っているうちにそっちからそういう話をしてくれるとは思ってなかった」

「そっか……はぁー」

ティーナが気の抜けたような深いため息を吐く。なんだかウィスカも同じように脱力してるな。

「断られたらどうしようかって緊張してたんです。何日か前からお姉ちゃんと話をしてたんですけど」

「今日うちの会社にそういうふうにしたいって話してきたとこやねん」

「移籍先に先に話を通さないでいきなりそっちに話をするの強心臓過ぎんか？　まぁ、絶対に断らないけど」

順序が完全に逆だと思うんだが、もしかしたら先にミミやエルマ、メイに相談していたのかもしれんな。それで絶対に俺が断らないって確信を持って行動したのかもしれん。それにしては二人とも滅茶苦茶緊張してたみたいだけど。

「大丈夫か？　ウィスカ」

「大丈夫じゃありません……安心して身体に力が入らないです」

ウィスカはさっきまでガチガチに緊張していたせいか、完全に脱力してテーブルに突っ伏してしまっている。なんか自分達で勝手に心理的なハードルを上げて無用な心労を被ったんじゃないだろうか。こんなに大げさにしなくても、普通に言ってくれれば即ＯＫ出したのに。

「はー……まぁ丸く収まったっちゅうことで、改めて乾杯しよか」

「そうだな。何に乾杯する？」

「うちらの輝かしい未来にってとこやな」

ティーナはそう言ってグラスを掲げた。輝かしい未来に、か。良いね。そういう未来を実現するために力を尽くしていこうじゃないか。

#325　クギとのデート（前書き）

なんだかやるきがでないいちにちでした―（∵3」∠）―

#325　クギとのデート

ティーナとウィスカが正式にうちのクルーになるということが決まってからまた数日が経った。
え？　あの後はどうなったのかって？　飯食って、祝いの席なんだからと酒を無理押しされた上に飲まされて、気がついたらレストラン近くの『休憩所』でご休憩してたよ、三人で。
まぁ、わかってて乗った部分も多分にあるけれどね。とはいえこんな悪いことする二人にはお仕置きが必要だよなぁ？　ということでちゃんと理解らせておきました。

「今日の予定はどうする？」

朝食を終え、最低限の身支度を整えたところでそう発言すると、メイが声を上げた。

「はい。例のアーマーショップから商品が仕上がったという連絡が入っております」
「それじゃあ今日はその受け取りですね」

メイの報告を聞いたミミがにこにこと上機嫌な様子でそう言う。
この三日間、それぞれエルマ、メイ、ミミという順でデートをして過ごしてきたのだ。つまり、昨日はミミの番だったわけだな。二人で食べ歩きをしたり、バーチャルアクアリウムを楽しんだり、まぁその後はイチャイチャしたりなんだりって感じでお互いに大変に楽しめた。それで今日はミミの機嫌が良いわけだ。

「それじゃあ今日はクギちゃんの番やね」

「此の身ですか？」

ティーナに言葉をかけられたクギが耳をピンと立ててびっくりしたような様子を見せる。

「そらそうやろ。順々にデートしてるんやし」

「今回は順番が最後の最後になっちゃったけど、こういうのはやっぱりフェアじゃないとね」

ティーナの発言にエルマも同意する。メイは無表情なので今ひとつ心情を読むのが難しいが、もし反対の立場なのであればすぐにそう発言するだろうから、反対というわけではないのだろう。ウィスカとミミも頷いているので、やはり反対する人は居ないようだ。

「わかりました。では本日は此の身がお供させていただきます、我が君」

「ああ、よろしく」

とクギにはそう返しつつ、エルマに視線を送る。するとエルマは頷いた。次いでメイにも視線を送るが、メイも同様に頷く。とりあえず、今までクギと一緒に生活を供にしてきた結果、クギに何らかの裏というか、危険はないだろうと二人は判断したらしい。判断が早すぎるのでは？　と思わなくもないが、きっと何らかの対策を講じるつもりなのだろう。とりあえず俺自身も何かトラブルに巻き込まれないよう注意をしておくべきだな。

☆★☆

ちゃんと身支度を整え――ジャケットを着てレーザーガンと剣を身に着けただけだが――てクギと一緒にホテルを後にする。

「まずはアーマーショップに行って商品を受け取ってしまうとしよう」
「はい、我が君。しかし、メイさまに手伝って貰わなくてもよろしかったのですか？」
「手伝うと言うと？」
「ああいった鎧は重いのでは？　持ち帰るのは大変だと思いますが」
クギが俺の隣を歩きながら心配そうな表情でそう言う。ああ、なるほど。そういうことね。
「こういったコロニーには物資の配送システムがあるから、ああいう大荷物は俺達の自身の手で運ぶ必要はないんだよ。ほら、コロニー内の移動にトラムを使うだろう？　ああいう店にはあれの小型版みたいなものがあって、物資や商品のやりとりを倉庫から直接できるようになっているのさ」
「なるほど……それでは何故――ああ、わかりました。受け取る前に試着しなければなりませんね」
「そういうことだな。まぁ、俺のサイズやらモーションデータやらはしっかり取ってあるはずだから、そうそう試着して気に入らないなんてことにはならないと思うが」
と、話をしている間にトラムステーションに着いたので、二人でトラムに乗り込む。コロニー内はトラム網がしっかりと張り巡らされているから移動にあまり不便は感じないが、実は結構歩かされるんだよな。
長距離移動はトラムで。そしてステーションからは歩きでって感じになっていて、あまり自動車のような乗り物は普及していない。というか、軍関係とか消防、緊急医療関係しかそういった車両を利用していないんじゃないだろうか。

「わ、我が君、くすぐったいです」
「ん？　ああごめんごめん」

トラム内が混んでいてクギと結構密着気味になったんだが、どうやら俺の鼻息がクギの頭の上にある獣耳にふんすふんすとかかってしまっていたらしい。なんか妙に耳をパタパタさせているなと思ったらそういうことか。いや、別に鼻息荒くしていたわけじゃなく、普通に呼吸していただけなんだけどな。本当に他意はない。不幸な事故だ。

そんな一幕もありながらトラムでの移動を終え、再びアーマーショップへと一緒に歩き始める。

「生活には慣れたか？」
「はい、皆様よくして下さるので。なんとかご恩を返したいと思います」
「そうか。まぁもう数日で船も仕上がってくるだろうから、そうすればまたちょっと違う生活になる。寧ろそっちのが本番というか日常だから、そっちにも慣れてもらわないとな」
「はい。一日も早く皆様に信用されるよう力を尽くしていきたいと思います」

とても真面目な表情で頷くクギに内心で苦笑する。やっぱり俺達がまだクギを完全に信用していないというのはクギ自身にも伝わっているらしい。まぁそれもそうか。

「なんだかすまんな」
「いえ、他国の方に此の身どもの使命が理解されないというのはよくあることですから。それに、此の身どもは法力を操りますので、尚更です」

「ほうりき。所謂魔法とかサイオニックパワーとか呼ばれるやつだよな？」
「はい。呼び方は様々ですが、根は同じです。精神波で此の世の法則を一時的に捻じ曲げる技術ですね。炎や雷、不可視の力など物理的な力を操る術もあれば、精神などに干渉する術もあります。此の身どもの国では、時空間や運命を操るような術が特に高等なものと見做されています」
「そうすると、俺は何の訓練もなしに時空間や運命を操る危険人物なんじゃないか？」

俺がそう言うと、クギは微笑みを浮かべて俺の顔を見上げてきた。
「はい。だからこそ此の身のような者が必要なのです。此の身の使命は我が君を支え、時に教え導くことです。此の世の平和と均衡が保たれるように」
「なるほどなぁ……聞きようによっては、この世の平和を均衡を乱す存在となりそうであれば排除を厭わないというようにも聞こえるんだが」
「そうならないために此の身が在るのです。此の身が我が君の側に在る限り、我が君にそのような道を辿らせるようなことにはなりません。絶対に」

クギが俺のジャケットの袖部分を掴み、強い意志を感じさせる瞳で俺の顔を見上げてくる。うーん、なるほど。これは本気だ。事実がどうかは別として、少なくともクギ自身はそうであると心の底から信じている。何がこの子にそこまでの決意を……いや、それは全て詳らかにされているのか。彼女は彼女の国の人々が生まれたその時から課せられているという使命を全うすべく、ここまでの決意を胸に抱いているのだ。
正直、俺は宗教とかそういうものを胡散臭いものだと感じている

人間だ。だから、俺が彼女を完全に理解するのは無理だろう。だが、彼女がそういう人間なのだと納得し、受け容れることはできるはずだ。あとは目に見えているものを信じるかどうかという話なんだろうな。

「今すぐには難しいけど、俺はクギを信じてみようと思うよ。そうなるように努力する」

「ありがとうございます。此の身が我が君にとって信頼できる存在か否か、どうかその目で見極めてください。此の身も我が君の信頼を勝ち取れるよう力を尽くします」

そう言った次の瞬間、クギの耳がピクリと動いた。そして彼女は足を止め、不快げに眉根を寄せながらスンスンと鼻を鳴らす。

「どうした？」

「……不吉な気配がします。それと、血の臭いも」

「……えぇ？」

アーマーショップはもうすぐそこなんだが……またぞろトラブルか？　勘弁してくれ。

#326　トラブルからは逃げられない（前書き）

おまたせしました。
おなかすいた―（：3」∠）―

#326　トラブルからは逃げられない

「いらっしゃいませ……どうされたのですかな？」

警戒していつでも剣とレーザーガンを抜けるように素早くアーマーショップの店内に入ったのだが、当然ながら前に対応してくれた初老の店長に見咎められてしまった。

「我が君、この建物ではないようです」

すん、と鼻を鳴らしたクギが小声で教えてくれる。

「そうか。いや、なんでも――ないわけじゃないな。この子が外で血の臭いを感じたって言うんでな。もしやこの店でトラブルかと思って警戒していたんだよ」

「血の臭い、ですか？　それは物騒ですな。この辺りは治安が良いはずなのですが……念の為セキュリティに通報すると致しましょう。それが血でなかったとしても、異臭を感じたというだけでも一大事ですからな」

「それはそうだな」

言うまでもないことだが、コロニー内というのは完全な密閉環境だ。毒ガスや疫病はコロニーそのものを滅ぼす原因となりかねないし、疫病や異臭の元となる遺体の放置などは論外である。無論、空調などもしっかりしているし、異常などが発見された場合にはセキュリティや除染チームがすっ飛んでくる。クギが血の臭いを嗅ぎつけている時点でコロニー衛生事情的には大問題なのだ。

「ええ、ええ。お客様が周囲で血の臭いらしきものを感じたということで。はい、それでは」

店主がカウンターのホロディスプレイを操作してすぐにセキュリティに連絡を取り、セキュリティチームと除染チームがすぐさまこの辺りに派遣されることになったようだ。通報だけで早急に人員を派遣してくるとは思えないので、恐らく空気のモニタリングデータにも何か異常があったのだろう。もしかしたら、監視カメラに何か映ったとかかもしれないが。

「私どもにできることはありませんからな。商いの話を進めるとしましょう」

「商売人だねぇ」

「お褒めに預かり光栄です。用意はしてありますので、どうぞこちらに」

そう言って店主が店の奥へと俺達を誘う。念の為クギに視線を向けてみると、彼女は眉根を寄せて盛んに耳をピコピコと動かしていた。

「大丈夫か？」

「はい。とりあえず不吉な気配は遠ざかったようです」

「不吉な気配ねぇ……」

その不吉な気配ってのが何に起因するものなのかがわからないのがモヤモヤするな。まぁ、今聞くことでもないか？　店主に聞かせるような話ではないしな。

「それが何なのか今ひとつよくわかないけど、警戒だけはしておいてくれ。後で詳しく聞かせてくれると嬉しい」

「はい、警戒は此の身にお任せ下さい」

クギが至極真面目な表情で頷く。はてさて、巻き込まれるようなことが無ければ良いんだが……まぁ無理か。無理だな。今までの傾向から考えると無理だ。避けようとしてもどうせ向こうから寄ってくるに違いない。

「こちらです。デザイン通りにできていると思いますが、どうでしょうかな？」

「ああ、良いね。発注通りだ」

案内された部屋――この前セレナ大佐とやりあったモーションデータを録った部屋だ――に用意されていたのは、発注通りの軽量級パワーアーマーだった。黒を基調とした全体的にニンジャっぽいデザインの一品である。こうして見ると、ＲＩＫＩＳＨＩに比べると二回りほど小さく感じるな。それだけスマートだということなんだろうけど。

バイザー部分は今はパワーが落ちているので暗いままだが、起動すると赤く光るようにしておいた。無論、ステルスもできるようになっているわけだから、消すこともできるのだが。装甲の色に関してもカメレオン機能を持っているから、実際にはどんな色にもなれるな。

装甲はＲＩＫＩＳＨＩに比べれば薄いが、それでも市販品のコンバットアーマーよりは防御力が高いし、環境適応能力も持っている。固定武装などは付けていないから火力は低いが、使おうと思えばパワーアーマー用の重火器も使えるし、普通の歩兵用武器も使える。何より、剣を使うことができるので火力はともかく攻撃力という面ではＲＩＫＩＳＨＩに劣ることはないだろう。パワーアシスト機能も勿論あるわけだから、格闘戦能力も上がるしな。

「クギ、剣とレーザーガンを頼む」
「はい、お預かりします」

ガンベルトと剣帯を兼ねたベルトごと腰から外してクギに預け、ジャケットを着たまま自立している新型パワーアーマーの背後に回り込み、中へと入り込む。俺の生体情報を認識して自動でアーマーの背部が開くようになっているのだ。

「着心地が軽いな。まるで普段着のままみたいな感覚だ」
「お客様の身体にしっかりと合わせて作られたアーマーですからな。お客様のモーションデータを利用したフィードバックシステムも働いていますから、生身よりも快適なくらいのはずです」
「なるほどなぁ……これは大したもんだ。クギ、剣と銃をくれ」
「はい、我が君」

クギから受け取った剣を腰や肩、背中のハードポイントに装着し、何度か抜刀と納刀を繰り返して感触を確かめる。ふむ、良いな。抜刀しようとするとハードポイントが自動で動いて剣を抜きやすいようにサポートしてくれる。レーザーガンは左右の腰というか太腿辺りに装着できるようになっているな。

「ふむ。光学迷彩を使うことも考えれば、両肩のハードポイントを使うのが良さそうだな」
「そうですな。追加で重火器などを装着するのでなければ両肩のハードポイントを利用されるのがよろしいかと思います」

両肩というか両肩甲骨辺りに設置されているハードポイントだな。剣を抜こうとするとアーム型のハードポイントが動いて抜刀しやすい位置に柄を持ってきてくれる。これは便利だ。
などと考えていると、クギの耳がピクンと動いた。

「我が君、不吉な気配がこちらへと近づいてきます」
「ああ、そう……まぁタダで済むとは思ってなかったけど。ある意味では都合が良いかね？」

基本的な動作確認が終わった直後とは、これまたお誂え向きじゃないか。そんな俺達の会話を聞いて、店主が首を傾げる。

「一体何の話でしょうか？　なんだか物騒な予感がするのですが」
「先に言っておくけど、俺は悪くないからな」

俺がそう言うと同時に部屋の一角に緑色の光が瞬き、構造材が消滅した。パワーアーマーを着ている俺には感じられないが、クギと店主の様子を見る限り、そちらの方向から熱波というか熱風が吹き荒んできているようだ。

「な、なんと……！？」
「プラズマグレネードか、プラズマランチャーかね……危ないから建物の中心部の方に逃げておけ」

俺がそう言った瞬間、壁に空いた穴から部屋の中へと何かが飛び込んでくる。

「なぁにあれぇ……」

それは黒い球体だった。光沢から金属質の何かであることは察せられるが、正体はまるでわからない。大きさは……結構大きいな。直径１．５ｍほどの真球に近い球体である。パワーアーマーのセンサーがかなりの熱さであるということを報告してくる。

「我が君、あれが不吉な気配の元です」
「それはそうなんだろうがどう解釈したものかね、アレは」
鎮座している黒い球体は動くわけでも――いや、動いた。黒い球体が変形し、蜘蛛のように多数の細長い足のようなものが生えてきた。いや、まさしくあれは蜘蛛なのかもしれない。漆黒の金属で出来た蜘蛛だ。
「どこかのメーカーの戦闘ボットか何かか？」
ウィンダステルティウスコロニーは帝国内最大規模のシップヤードコロニーだ。当然それに付随して大小さまざまな兵器メーカーも軒を連ねている。戦闘ボットを扱っているメーカーもだ。
「いえ、あれは……あれは、生き物だと思います」
「あれが生き物？　嘘だろう？」
「精神の波動を感じますので、間違いないかと」
だとしたら、アレはプラズマグレネードかプラズマランチャーの直撃を食らってもピンピンしているトンデモ生物ってことになるんだが。
「我が君、来ます」
「ああもう。下がってろ！」
カシャカシャと耳障りな音を立てながらこちらへと急速に間合いを詰めてくる鉄蜘蛛に向かって俺も剣を抜きながら間合いを詰める。相当頑丈そうだが、剣は通るのか？　わからんが、真正面から叩きつけるのはアホのすることだな。
鉄蜘蛛が鋭い前肢を振りかぶり、その爪先を俺に振り降ろしてく

る。

「せいっ！」

俺は振り下ろしてくるその前肢――の関節部分に向けて剣を繰り出した。見るからに尖そうな切っ先や分厚そうな装甲部分よりはまだ望みがあるだろう。

「……！？」

「よっしゃ！」

かなり手応えが重かったが、関節部分から前肢を斬り飛ばすことに成功した。この剣の切れ味から考えると、こいつの身体は航宙艦の装甲と同等かそれ以上の強度を誇るようだな。ツルッとしていて刃を立てるのが難しい胴体を斬るのは難しそうだ。

「……！」

俺を脅威と見なしたのか、鉄蜘蛛が体を起こして五本の足で俺を切り刻むべく迫ってくる。速いな！　だが、俺に対して速さはさほどアドバンテージにならんぞ。

「――ッ！」

息を止め、世界の動きを緩慢にする。さぁ、逆に一息でバラバラに引き裂いてやる。

#327　鉄火場（前書き）

おまたせしました―（∵3」∠）―

#327　鉄火場

五本の鋭い爪がほぼ同じタイミングで俺の身体を引き裂こうと迫ってくる。このまま何もしなければあの爪はアーマーごと俺の身体を引き裂くかも知れない。だが、このまま棒立ちを続けて新品のアーマーの防御力を試すのも、装甲に傷をつけるのもごめんである。それなりに高い買い物だったんだからな。

「――ッ！」

身を躱す方向は左前方だ。敵の右前肢を一本斬り飛ばしたので、こちらのほうが爪の数が少ない。すれ違いざまについでとばかりに残り二本の足のそれぞれ関節と足の付け根を斬りつけていく。

『ＥＥＥＥＥＩＧ！？』

ふん？　ちょっと心配してたんだが、このアーマーは呼吸を止めた時の俺の動きにちゃんとついてこられるようだな。もしかしたら俺のこの能力は身につけているものにも効果があるのか？　検証のしようが無いな。まぁ使えるならなんでも良いか。

しかし、この鉄蜘蛛は一体全体何なのか？　クギは生き物だと言うが、俺には近接戦闘用の戦闘ボットか何かにしか見えない。格納状態というか、未稼働状態の時に真球に近い形態になる戦闘ボットを見たことがあるから、先入観に囚われているのかもしれんが。

「突入ッ！」

「伏せろ！　伏せろ！」

身を翻し、右側の足四本のうち三本を失った鉄蜘蛛に向き直ったその瞬間だった。
パワーアーマーを装着した兵士達が壁に空いた穴から突入してきた。重火器で武装した見るからに火力重視の集団である。いいタイミングで騎兵隊が到着したもんだな。

「任せた」

俺以外の奴らが戦ってくれるならわざわざ俺自身がリスクを背負う必要はないだろう。俺は剣を両手に持ったまま、クギと店主が身を隠している部屋の出入り口へと素早く移動する。うん、このアーマー良いな。機動力がＲＩＫＩＳＨＩとは段違いだ。

「何者だ？」

足を三本失って動きの鈍った鉄蜘蛛にパワーアーマーを着た連中が集中攻撃を開始する中、一人だけその攻撃に参加しなかった奴がこちらへと問いかけてくる。一人だけアーマーのペイントが少し違うな。指揮官かな？
まぁそれはそれとして、うん。目標を追って建物内に突入したら見慣れないパワーアーマーを着た謎の人物が先に標的と交戦していたという状況だよな。俺でも何者だって聞くわな。誰だってそうすると思う。

「この店に今着ているアーマーを取りに来ていた客だ。所属や名前も明かしたほうが良いか？」

そう言って剣を両手に持ったまま肩を竦めてみせる。

「……貴族の方でしたか？」

俺の剣を目にしたパワーアーマーの兵士が少しかしこまった口調で問いかけてくる。まぁ、帝国内で剣を使って戦うのなんて貴族くらいだから、当然の反応か。

「いや、貴族じゃな……ああ、いや、名誉貴族だったか？　まぁ生粋の貴族ではない。傭兵だよ」

「傭兵……？　もしかして御前試合で優勝していたキャプテン・ヒロ殿か？」

「ああ、うん、そうだけど……後ろは放っておいて良いのか？」

俺に事情聴取をしている彼の後ろでは激しい戦闘が展開中であった。鉄蜘蛛は足を三本失ってはいるもののまだピンピンしており、パワーアーマー連中がぶっ放している重火器は鉄蜘蛛に命中してはいるが今ひとつ決定打になっていない。というか、パワーアーマー用の重火器――レーザーランチャーだのプラズマランチャーだので攻撃されてまだ動くとかどうなってんのあの鉄蜘蛛。

「何で出来ているんだアレは……」

「同感だな。ああ、動きが鈍ってきたぞ」

「過熱か」

この世界のレーザー兵器は非常に高出力だ。あまりに高出力であるため、着弾した瞬間に対象の表面が蒸発し、小規模の爆発を起こして熱だけでなく衝撃による破壊も発生させる。普通は殺傷出力のレーザーを照射されたらそうなるはずなのだ。しかし、あの鉄蜘蛛はそうはならないようだ。レーザーが直撃しても爆発などは起こらず、表面上は何の効果もないようにしか見えない。

そしてプラズマランチャーなどのプラズマ兵器は瞬間的に数千万度の熱で対象に破壊を齎す。対抗措置を備えてない物質は一瞬で蒸

発することになるわけだが、あの鉄蜘蛛はそれにすら耐えていた。もしかしたら光熱系の兵器に極端に強い性質を持っているのかもしれないな。
だが、間断なくレーザー兵器とプラズマ兵器による攻撃に晒され続けた結果か、ついに鉄蜘蛛はその動きを止めてパーツごとにバラバラになってしまったようだった。ふむ、綺麗に各関節部分から破断してバラバラになったようだな。内部組織が焼き切れたのだろうか。

「片付いたようだが、俺は何か事情聴取とかそういうのをされるのか？」
「あー……いや、この場で少しだけ話を聞かせてもらえば大丈夫だろう。報告書には名前を載せることになるが、それだけだ」
「それも遠慮したいんだが……というか、あんた達こそ何者なんだ？　コロニーのセキュリティチームか？　それとも帝国航宙軍の海兵か？」

装備から考えれば後者だと思うが、一応確認しておく。コロニーのセキュリティチームにしてはパワーアーマーだの重火器類だの重武装が過ぎるからな。

「機密事項だ」
「よくわかったよ」

つまり、帝国航宙軍所属ってことだろう。海兵なのかどうかはわからんが、何か特殊な任務に就いている連中なのかもしれんな。

「しかし、大したもんだな。あれだけレーザーやプラズマで攻撃してもびくともしなかったんだが」

そう言うパワーアーマー男がヘルメット越しの視線を向けているのは俺が斬り飛ばした鉄蜘蛛の足である。確かに、あれだけの熱耐性を持っていた割には剣の攻撃は効いたな。

「もしかしたらレーザーとかプラズマよりも物理的な破壊のほうが効くのかもな。実弾兵器とか」

「実弾兵器か……ＥＭＬ系の武器は使い勝手が悪くてな」

「それはわかる」

パワーアーマー用のＥＭＬ兵器というものは存在はするのだが、あまり流行っていない。理由はいくつかあるが、最大の難点は破壊力と貫通力が高すぎることである。

コロニー内や艦船内における白兵戦でそんなものをぶっ放すと、構造材を貫通して下手をすると気密性が失われかねない。これは宇宙空間に存在する構造体にとっては致命的なダメージになり得るので、実弾兵器の類は白兵戦武器としては廃れているのだ。

あと、単純にデカくて嵩張るし重い。そして発射間隔も長い。白兵戦用の武器としては極めて取り回しが悪いのだ。

「火薬式の骨董品でも持ち出すしか無いんじゃないのか」

「そんな骨董品は物持ちの良い軍にも流石に残っていないだろうな」

パワーアーマーの向こう側から苦笑いをするような気配が漏れてくる。この世界において火薬式の実弾銃は数百年前の骨董品だからな。

超光速航行時にスペースデブリから宇宙船を守るために開発されたのがシールド技術だ。当然ながら、火薬式の銃から発射される銃弾程度では突破することなどは不可能である。過渡期には色々とあったらしいが、最終的に歩兵用の実弾兵器はシールド技術の影響で廃れてしまったわけだな。

まぁ、艦船用の実弾兵器はまだ生き残ってるけど。艦船に積む砲クラスの実弾兵器なら砲弾やら砲そのものやらに対シールド技術を組み込めるらしいからな。クリシュナの散弾砲やブラックロータスの大型ＥＭＬもそういった対シールド技術の恩恵を受けているわけだ。

「それじゃあ俺は失礼するぞ。ここの店主にちゃんと弁償してやれよ」

俺の言葉にパワーアーマー男は肩を竦め、それを返事としたようだった。善良な一般市民を巻き込みやがってからに。始末書を山程書けば良いさ。

それにしても、この状況でこのアーマーの輸送とかちゃんとできるのかね、この店。面倒なことにならなけりゃ良いんだが。

#328　新天地への同行依頼（前書き）

雪が……雪掻きで身体が……――（∵3」∠）――（死にかけている

#328　新天地への同行依頼

結果的に言えば、オーダーメイド軽量パワーアーマー……長いな。もうニンジャアーマーで良いや。ニンジャアーマーの輸送に関しては滞りなく行われることになった。あまりの事態に店主は動揺していたが、それでも彼のプロ意識は仕事をちゃんと果たしたのだ。整備に必要なデータなども含めて納品完了である。

大変に頭が痛そうな彼に別れを告げ、これ以上何か変なことに巻き込まれてはたまらんということでとっとととホテルに帰ることにする。

「どうして二時間もかからないくらい外に出ただけでそんなトラブルに巻き込まれるのよ……」

「ヒロ様、ですねぇ……」

「俺をトラブルメーカーの権化みたいに言うのやめない？　俺何も悪くなくない？」

今回のトラブルに関しては本当に巻き込まれただけだからね？いや、今までも大概そうだったけどさ。

「生物の如き意思を持つ近接戦闘型スパイダーボットのような存在ですか。興味深いですね」

俺とクギの話を聞いたメイはメイでなんだか珍しくあの鉄蜘蛛に興味を示している。

「珍しいな？　そんなに興味深いのか？」

「はい。クギ様が言ったという精神の波動という言葉が。私からは

同じものは感じられないという話ですね？」
「はい。此の身には貴方から精神の波動を感じ取ることはできません」
「なるほど。そうなると、いよいよもってその鉄蜘蛛とやらが生物である可能性が高くなってくるということですね。私の知識の範囲内では軍用のレーザー兵器による攻撃に晒されて破壊現象が発生しない装甲を持つ生物は存在しません。また、プラズマ兵器の直撃に耐える生物も同様です」
「アレが生物だとすると大発見ってことだな。どこから来たんだか……あ、嫌な予感がしてきたぞ」
「ちょっと、やめなさいよ」

エルマが文句を言った瞬間、俺の小型情報端末が着信音を鳴らした。俺は無言で小型情報端末を取り出し、着信相手を確認し――思わず天井を仰いだ。その動作で発信元が誰だか予想がついたのか、エルマが右手で顔を覆って溜め息を吐き、ミミが苦笑いを浮かべる。メイはいつもどおりだが、クギだけは事態を呑み込めず首を傾げていた。

「……はい」
『とても嬉しそうな声での応答ありがとうございます。実に心が温まりますね』

端末の向こうから聞こえてきたのは誰あろうセレナ大佐である。その声はとても平坦で、小型情報端末の向こうにいる彼女自身も大変に機嫌が悪いということを如実に示していた。

『さて、時節の挨拶などが必要な間柄でもないでしょう。単刀直入に言います、仕事の話です』
「今船の整備中なんで無理っすねー。いやー残念ダナー」

『無論、船の整備などが終わった後の話です。そのような事情はこちらも弁えています。まだ傭兵ギルドには話を持っていっていませんが、内々に相場の三倍で傭兵ギルドに指名依頼を出すことが決まっています。依頼、受けてくださいね』
「いや、別に指名依頼だからって絶対に受けなきゃいけないわけじゃないし。拒否権あるし」
『依頼、受けてくださいね』
「いやだから、指名依頼だからって別に受けなきゃいけないわけじゃ――」
『いらい、うけて、くださいね？』
「何だよお前『はい』って言うまでループするやつかよ！」

平坦な声でひたすら言われるのは怖いからやめて欲しい。というか、普段にも増して無理押ししてくるな。これは嫌な予感が的中しそうで怖い。何が怖いって、この手の予感がした時に引き寄せられるトラブルは回避できた試しがないんだよな。

「とりあえず、話は聞くから。ホロ通話に切り替えるぞ？」
『そうして下さい』

セレナ大佐からの了承も得られたので、小型情報端末からホテルの部屋に設置されているホロディスプレイに通信を引き継ぎ、音声通話からホロ通話に切り替える。すると、ホロディスプレイに極めて不機嫌そうな表情のセレナ大佐が映し出された。

「これはまた機嫌の悪そうなお顔ねぇ……」
「でも、セレナ大佐ってなんだかどんな表情でも絵になりますよね……」
「気品のある御方ですね」

女性陣がボソボソと小声で話し合っている。セレナ大佐に聞こえてるかどうかわからんが、それくらいにしておきたまえ君達。まぁ陰口って感じの内容じゃないし、聞こえたところで問題はないと思うが。

「それで、依頼の内容は？」
『機密事項です』
「ふざけてんのか通信切るぞ」
『現状ではそうとしか言えないんですよ。正式に傭兵ギルドから依頼が入るのを待って下さい』
「それだったら今連絡してくる意味無いじゃん。何も話せないなら俺も返事できないし」
『それでも個人的な付き合いがあるからと事前に説得をするように命令された私の気持ちがわかりますか？』

セレナ大佐がにっこりと微笑む。目だけが笑っていなくてとてもこわい。

「そりゃご愁傷さまってところだが、もう大佐だろう？　そんな下っ端仕事みたいなことを未だに押し付けられるのか？」
『ゴールドスター持ちのプラチナランカーで名誉子爵でもある貴方は、多分貴方自身が思っているよりも重みのある立場ですよ。私のように個人的に友誼を結んでいなければ、帝国航宙軍の士官でもおいそれとは話を持っていけないと思われる程度には』
「そうなのか。まぁ、知らない奴にいきなり仕事の話を持ってこられるよりは良いかもな」
『では、今回の依頼も受けて頂けるということで』
「いやそれは話が別だが」
『……』
「……」

互いに無表情で見つめ合う。なんだよいくら俺を睨んでも条件を聞く前に首を縦には振らんぞ。

「機密だろうがなんだろうが、内容も報酬額もはっきりとわからないのにホイホイと依頼を受けるかどうか決めるわけ無いだろ。常識的に考えて」

明日の食事もどうなるかわからない食い詰め傭兵ならいざ知らず、俺達は普通に数ヶ月単位でこのままこのホテルに滞在し続けるだけのエネルを持っているし、船の整備が終われば適当な星系に移動して好きなだけ宙賊を狩って金儲けができる。リスクを見積もることも難しい軍からの謎の依頼を受ける理由なんぞ一つもない。

『それはそうですよね。私でもそう思います』

「じゃあこの話は終わりってことで」

『仕方がありませんね。ところで、先程このコロニーの高級商業区画の辺りで殺人事件が起きたそうです』

それはもしかしなくてもさっき俺が一戦交えた鉄蜘蛛の話じゃあるまいか？　ここでその話を持ち出してくるとか情報はええな。

「へー……それで？」

話の方向を切り替えてきたな。どんな話が飛び出してくるのやら。

『犯人はセキュリティチームによって制圧されたそうですが、それまでに七人もの住人が惨殺されたそうですよ。また話は変わるんですけど、最近このコロニーに最辺境領域（エッジワールド）の探索から帰ってきた調査船が入港して、様々な興味深い品を持ち帰ってきていたそうです。

そのうちの一つが高級商業区画に『あった』とある店に買い取られていたそうで。ああ、ちなみに先程惨殺された七人の住人っていうのはその店の従業員と店主、それに偶然居合わせた客ですね』

「うわぁ一気にきな臭くなってきた」

どう考えてもその調査船絡み――つまり最辺境領域（エッジワールド）絡みの話だ。ここでその話を出すってことは、つまり依頼の内容もエッジワールド絡みの話なんだろう。

最辺境領域というのはただのど田舎と違って、最近グラッカン帝国の版図に組み込まれたばかりの領域――つまり帝国拡大の最前線と呼ばれる領域だ。帝国の法の支配が緩い地域でもあり、宙賊や時には宇宙怪獣すら跋扈する危険な領域である。まぁ、それ以外にも未知の敵性国家の干渉や未コンタクトの異星人や異星生命体、勝手に『王国』を築き上げた無法者達など危険には事欠かない領域だ。

「なるほど、戦力を増強した対宙賊独立艦隊をエッジワールドに投入して一気に支配を確立しようってことか。それによくわからん異星起源と思われる妙なものが見つかったから、掻き集められるものはなんでも掻き集めて行こうって腹だな？」

『キャプテン・ヒロは想像力が豊かですね。とりあえず、帝国航宙軍――というか私も貴方の有効な使い方というのをそれなりに把握してきたとだけ言っておきましょうか』

「なるほどね」

これ以上詳しくは話せないということか。だけど、話の流れからすると依頼を受けるとセレナ大佐の指揮下に組み込まれることになるんだろうな。

まぁ、セレナ大佐なら俺の扱いってのもそれなりに慣れているだろうし、ある程度は気心も知れている。そんなに無茶なことは言われな……いや、言われるかもしれんが、理不尽な命令をされたりは

しないだろう。多分。
「前向きに考えておく。あとは条件に折り合いが付けば、だな。約束もしたことだし」
『とりあえずはその答えで納得しておきましょう。それでは失礼します』
セレナ大佐との通信が切断された。
「で、受けるの？」
「さぁな。言ったけど条件次第だ。まぁエネルが稼げるならわざわざ断る理由もないだろう」
エルマの質問に肩を竦めて答える。
毎日黙っててても金が入ってきて、その上働けば働いただけ上乗せも頂けるってんならフリーでチンケな宙賊を追い回すよりはずっと実入りが良いのは間違いない。このコロニーでそれなりに散財したし、ここらでドカンと大きめに稼ぐのも悪くないな。
「エッジワールドに行くとなると、どんな準備をしておくべきなんでしょうか？」
「帝国航宙軍と一緒に行動するなら弾薬や装甲、構造材、それに最低限の食糧なんかの補給に関しては心配は要らないと思うが、その他生活物資や嗜好品の類は長期間活動になると不足するかもな」
「なるほど。それじゃあ依頼の内容次第でメイさんと相談してその辺りの物資を多めに補給しておきますね」
「そうしてくれ」
「私はアントリオンの慣熟訓練をできるだけ進めておいたほうが良さそうね。流石にぶっつけ本番は勘弁願いたいし」
「ええと、此の身は……どうしたら良いでしょうか？」

ミミとエルマは慣れたもので既に次の依頼に向けて何をするべきかを把握しているわけだが、当然ながらクギには何の経験も無いのでそういった判断ができない。まぁそれはそう。当たり前だな。

「そうだな、クギにはミミのサポートとしてまずはオペレーターとしての勉強をしてもらうか」

ミミにはサブパイロットとしての経験を今後積んでいって貰う予定だったし。いずれオペレーターからサブパイロットに転身してもらって、空いたオペレーターの枠にクギに入ってもらうと。

まぁ、それもクギの適性を見てからかな……ミミは努力によって短期間でオペレーターとして一前と言えるだけの能力を得たけど、クギが同じようにオペレーターの道を進めるとは限らないし、逆にミミにサブパイロットとしての才能が全く無い可能性もある。そうなると、クギをサブパイロットにするという方向性も考えられるかも知れない。あぁ、なんだかんで考えることが多いな。

#329　甘い朝（前書き）

ＰＣのスペックが不足しているのかエルデンリングはカックカクでダメなのでソフィー２やります（ ˘ ω˘ ）（なお単純に寝坊した

#329　甘い朝

誰かの柔らかな気配を感じて目が覚めた。息遣い、微かな衣擦れの音……それに、そっと頬に触れてくる柔らかく、温かい手。些かの敵意や殺意、悪意も感じない、ただただ穏やかな気配だ。

「我が君、起きる時間ですよ」
「んん……」

声のする方向に顔を向けながら目を開けると、金色の瞳と目が合った。それだけで彼女は嬉しげに目を細め、そして実際に微笑みを浮かべる。

「おはようございます、我が君」
「ああ、おはよう」

挨拶を交わし、一度目を閉じてから身を起こす。うん、着衣に乱れなし。まぁ、乱れもクソも俺はいつも寝る時はパンイチスタイルなので、とりあえず情事の気配は無いというだけの話なのだが。

俺を起こした金色の瞳を持つ銀髪の狐耳娘――クギはそんな俺の姿を目にして少し顔を赤くしている。うん、身を起こした俺の上半身が顕になっているね。俺の裸の上半身を見て顔を真赤にしてしまっているようだ。ははは、初心だなぁ。

ちなみに、クギもしっかりと服を着ている。当たり前だが。まだ彼女とそういう関係には至っていないのだ。俺に対するクギの傾倒っぷりを考えると、求めれば応じてくれそうな気がする――というか応じてくれるのだろうな。まぁ、そうする気は今のところ無いけど。

「わ、我が君？　そのようにじっと見られると、その、落ち着かないと言いますか……」

落ち着き無く頭の上の狐のような耳をピコピコと動かしながら、俺から顔を逸らし――でも横目でチラチラとこちらの様子を窺ってきている。なんだろうこの可愛い生き物は。いけない悪戯でもしてやりたくなってくるじゃないか。まぁ、しないけれども。俺は理性的な人間なので。

「悪い。目は覚めたから身支度を整えるよ」
「は、はい……その、失礼致します」

クギはそう言って頭を下げてからそそくさと部屋を出ていった。うーん、なんだかわからないけど、フワリと良い匂いがするな。香水というよりはお香だろうか。どうして女の子って男にはない良い匂いがするんだろうね？　お洒落というものがわからぬ俺のような男にはまったくわからんな。

「さて、クギにもああ言ったし起きるかね」

今日も新しい一日の始まりだ。

☆★☆

「おはよう」
「おはようございます、ヒロ様」
「おはよ」

着替えて洗面所で最低限の身支度を整えて食堂へと赴くと、既に

ミミとエルマが朝食の準備をしていた。まぁ、準備と言っても飲み物を用意するくらいのことなのだが。食器は自動調理器に食事を注文した時に食事と一緒に出てくるからな。

「あれ？　クギは来てないんだな。先に来てるものかと思ってたんだが」

「何か悪戯でもしたんじゃないの？」

「してません。俺は品行方正な紳士だからな」

「紳士ねぇ……？」

何だその疑わしいものを見るような目は。いやまぁ、結局ミミやエルマにはすぐに手を出したわけだし、その後もメイやティーナ、ウィスカも迎え入れて取っ替え引っ替えやりたい放題しているのに紳士も何もないだろうというのは俺も否定はできないんだが。

「まぁ彼女の場合はちょっと事情が特殊だし。もう少し様子見するべきかと思うんだよ」

「そうかしら？　まぁヒロがそう思うんならそうなんでしょう。ヒロにとってはね」

「何を今更と思うかも知れないが、俺にも覚悟を決める時間が必要なんだよ」

「その割には私には遠慮なかったわよね？」

「そう言われるとそうだな。何でだろうな？　何故だかわからないけど、エルマにはそういう気持ちを持つことはなかったんだよな。エルマになら甘えられると思ったからかもしれん」

「何よそれ」

そう言いつつ、エルマは満更でも無さそうな表情だ。

ミミは出会ったその日からもう俺が面倒を見なければ野垂れ死ぬか、或いはもっと酷い目に遭うことが容易に想像がつくようなか弱

い存在だった。だから俺は懐に迎え入れる時点で覚悟を決めていたし、ミミ自身も自分の立場というか状況をわかっていたから、最初から覚悟を決めていた。だから俺とミミはすぐにそういう関係に至ったわけだ。

じゃあエルマはどうか？　エルマに関しては極めて不運なトラブルによってにっちもさっちも行かなくなっていたところを俺が助けたわけだが、そのトラブルさえ凌いでいしまえば寧ろ俺なんかよりも世慣れていて経験も豊富で、強い存在だった。だから俺は覚悟を決める必要もなく、ただただ甘えることが出来たわけだな。

「私にも甘えていいですよ！」
「わーい、ままー」
「おっきな子供ねぇ……」

両腕を広げて俺を迎え入れる姿勢を取ったミミの胸に飛び込む。いやぁ、凄い。これは凄い。圧倒。圧倒されるね。これが母性……あぁ、溢れるバブみでオギャって幼児退行してしまいそうだ。

「おっはよーさーん……って朝から飛ばしとんな」
「むー……」

食堂に元気な声が響き、その後に不満げというか悔しげな唸り声が聞こえてくる。

「やぁ、おはよう二人とも。良い朝だな」
「とりあえずミミのおっぱいに顔を埋めるのをやめてから挨拶しような？」
「お兄さん、私も、私もそれします」

声の主達が俺の側に近づいて片方は俺の頭をペシペシと叩き、も

う片方は俺の腕をクイクイと引っ張り始める。しかしミミも俺を渡すまいと俺の頭を抱え込んでホールドする。うん、素晴らしい。素晴らしいけどちょっと息が苦しい。服の布地のお陰で僅かに息を吸えるからなんとかなってるけど。ああ、でもなんだろう。良い匂いがするし柔らかいしもうずっとここに住みたい。

「ほら、貴方達もいつまでもじゃれあってないで早くご飯食べなさい」

「イエスマム。あと改めておはよう、ティーナ、ウィスカ。あとミミ、ありがとう」

エルマに怒られたので素直にミミから離れ、ドワーフの整備士姉妹――ティーナとウィスカに朝の挨拶をする。あとミミにお礼を言っておく。朝一番のおっぱいは健康に良いな。そのうち癌にも効くように……いやこの世界では癌は死病じゃないらしいけどさ。簡易医療ポッドで治せちゃうらしいし。

「はいはい、おはよーさん」

「おはようございます。あとで私にもなでなでさせてくださいね」

「どういたしまして！」

三人三様のお返事を頂いたところで連れ立って自動調理器のテッジン・フィフスの元へと向かう。ちなみに、エルマは既に朝食を摂り始めていた。朝から人造肉の分厚いステーキとマッシュポテトのような何かをモリモリと食べている。相変わらず胃袋が強いな。

「お、遅れました」

自動調理器の前まで来たところでクギも食堂に現れた。うん？なんだかひとっ風呂でも浴びてきたかのような雰囲気だな？　まぁ、

このブラックロータスの設置されている風呂は入浴から乾燥まで全自動だから、普通の風呂に入った後のように髪の毛がしっとりとしたりはしないのだが。それでもこっちの世界で長く過ごしてきたから風呂に入った後かどうかは雰囲気でわかるようになっている。

「別に待たされたりしたわけじゃないから気にしなくていいぞ」

まぁ、わざわざ指摘するのも野暮というものなのだろう。そこには触れずに軽く声をかけてテツジンに朝食をオーダーする。今日はこの後トレーニングルームで身体を動かすので、その情報を入力しておく。こうすることによってテツジンは俺の体調などのモニタリングデータや膨大なライブラリデータから最適な食事を分析してメニューを組んでくれるのだ。かがくのちからってすげー。

☆★☆

テツジンが出してくれた美味しい食事を皆と楽しく取って、トレーニングルームで身体を動かしてから軽く汗を流す。ここまでが俺の朝のルーチンだ。ああいや、正確には今からやることも含めてが俺の朝のルーチンだな。

「おはよう、メイ」
「おはようございます、ご主人様」

朝の挨拶をしながらブラックロータスのコックピットに足を踏み入れると、コックピットの中央に佇んでいたメイド服姿の美女が俺に向かって振り向いた。腰まで届くような長く美しい黒い髪の毛と、目元を飾る赤いフレームの眼鏡が似合う美人さんだ。今日も耳元から伸びる白い機械パーツはピカピカに磨き上げられている。うん、今日もぼくのかんがえた最強のメイドさんはいつも通りのようだ。

「ブラックロータスの調子はどうだ？」
「はい。改修作業によって総火力は２８％向上し、シールド性能は３１％向上しました。機動性も１２％ほど改善しています」
「そいつは何よりだ。性能はいくら高くても困らないからな」
「仰る通りです」

首の後ろから太いコードを伸ばしたままメイが頷く。そのコードはブラックロータスへと繋がっており、彼女とブラックロータスを直結しているのだ。その目的は勿論、メイによる艦全体の掌握である。このブラックロータスはメイによって全てが管理、運営されているのだ。

「他に問題は無さそうか？」
「はい、船の改修による問題は確認できません。ティーナ様とウィスカ様による詳細チェックでも問題はないという結果が出ております」
「そうか。ならよし。メイにはいつも苦労をかけるな。ティーナとウィスカの移籍手続きにも骨を折ってもらうことになったし」
「いいえ、この程度は苦労のうちには入りません。何より、私にとってはご主人様に仕え、お役に立つことこそが喜びですから」

メイは至ってすました表情でそう言い、ふるふると首を横に振った。まぁ、膨大な処理能力を有する機械知性の彼女にとってはティーナとウィスカをスペース・ドウェルグ社から正式にうちのクルーへと移籍させる手続きなど造作もないことなのだろう。

「それでも俺の感謝の気持ちは受け取ってくれ。何かご褒美でもどうだ？　いつも苦労させてるから、俺としては何かの形で労いたいと思うんだが」

「いいえ、特に必要なものはありません。私の希望通りにブラックロータスを購入して頂き、その管理を任せて頂けるだけで身に余る光栄です」
「そうか……」
「ですが、それでもご褒美を頂けるのであれば……」

そう言ってメイは無表情のまま俺に両腕を広げてみせた。

「私にもご主人様を甘やかす権利を頂ければと」
「……それはメイに対するご褒美なのか？」
「はい」

寧ろ俺に対するご褒美なのでは？　と思うのだが、メイは断固たる態度で頷いた。

「この後も予定があるから、少しだけな」
「はい、存じ上げておりますのでご心配なく」

さぁ、と言わんばかりに腕を広げて待機するメイ。うん、まぁそういうことなら失礼して。

なお、この後あまりに極楽過ぎて危うく寝落ちかけた。メイの甘やかしは危険が過ぎる。

#330　適正（前書き）

寝る前におもむろに小説を読み始めてはいけない（；ω；）（いましめ

#330　適正

はてさて。斯様にのんびりとした、見ようによっては実に優雅な朝を過ごしている俺達であるのだが、実際に今はどのような状況なのか？　と言うと、俺達は変わらず帝国随一のシップヤード星系であるウィンダス星系に滞在したままであった。

変わったところと言えば、ブラックロータスの改修作業が終わったので宿を引き払ってブラックロータスに戻ったこと、整備士姉妹こと双子のドワーフであるティーナとウィスカが手続きを終えてスペース・ドウェルグ社を辞して正式に我が傭兵部隊――戦闘母艦一隻に戦闘艦二隻を擁するなら部隊と名乗っても問題はあるまい――の一員となったこと、エルマ用の戦闘艦であるアントリオンがロールアウトして納品されたということくらいか。

「エルマはアントリオンか？」

「はい。やっぱり自分用の乗艦ということで気になるみたいですね」

暫くメイと過ごした後でブラックロータスの休憩スペースに戻ってくると、ミミとクギが仲良く並んでタブレット型端末を操作していた。ちょっと前には小型情報端末の操作も覚束なかったクギであるが、中々の適応能力を見せて今では小型情報端末の操作もタブレット型端末の操作も問題がないレベルにまでなっている。

「クギはどうだ？　オペレーターの勉強は」

「はい、我が君。難しいです。ですが、少しずつ修練を積んでいきたいと思います」

「うん、無理しない程度に――」

と、言いかけたところでふと思いついた。オペレーターとしての勉強はまぁ必要ではあるから続けてもらうとして、先にパイロットやサブパイロットとしての適性を見るのもアリなのではないか、と。

「お勉強も大事だけど、ちょっとお出かけしないか？」

「お出かけですか？」

ミミが首を傾げる。唐突な申し出だから疑問に思うのも当然だろう。クギの方は静かな表情で俺の顔を見上げてきている。いずれにせよ彼女は俺の提案に是と答えるのだろうな。

「傭兵ギルドにな。シミュレーターを使わせてもらいに行こうぜ」

☆★☆

「なんだか慌ただしい雰囲気ですね」

「ふん？　エッジワールド行きの件と関係があるのかね？」

「どうでしょう？　私達以外にも傭兵が同行するんでしょうか？」

「可能性は無くもないな。エッジワールド行きってことなら戦力はいくらあっても良いだろうし」

エッジワールド――最辺境領域というのは帝国の版図の端の端、最近帝国の支配下に組み入れられた文字通りの最辺境一帯を指す言葉だ。

宙賊やそれを狩る傭兵――半ば宙賊と殆ど変わらないようなモグリ連中も多数いるらしい――や、未探査惑星の探査で異星文明の遺跡やアーティファクトを見つけて一発当てようと考えている所謂『冒険家』などと呼ばれる山師――異星文明由来でもなんでもないガラクタを売りつけて高利を貪ろうとする詐欺師を含む――連中、場合によっては宇宙怪獣の類や未知の敵性国家なんぞが跋扈していた

りするテーマパークのような宙域なのである。
　そんなエッジワールドの現状を憂いた皇帝陛下か或いは軍のお偉いさんの思惑によってセレナ大佐がその面倒を見ることになり、俺達もその作戦行動に同道することが決まっている。場所が場所なので今しがた俺が口に出したように戦力はいくらあっても困らない。セレナ大佐の働きかけによって傭兵の戦力が召集され、その結果として人手不足に陥った傭兵ギルドが賑やかになっていても不思議ではない……という俺の考えをミミとクギに話しながら、受付へと向かう。

「いらっしゃいませ。依頼の受注ですか？　受注ですよね？　ああ、仰らないで。私どもにお任せください。最高の依頼をご用意致しますとも。さぁ、ＩＤをご提示ください」

　マシンガントークを披露する受付嬢に内心辟易しながら小型情報端末を取り出して提示する。やはり傭兵ギルドの受付嬢というのは容姿も選考基準に入っているのだろうか？　今までに顔を合わせた受付嬢の皆さんは例外なくなかなかの美人さんなんだよな。

「ＩＤは提示するが、シミュレーターを借りに来ただけだぞ。ついでに言うと、もう指名依頼が入ってて他の依頼請けられねぇから」
「チッ」

　こ、こいつあからさまに舌打ちを……！　なかなかいい性格をしているな、この嬢。気に入った。別に何もしないけど。

「失礼な方ですね」
「まぁまぁ」

　クギがスッと目を細めて怒りを顕にしている。なるほど、俺に無

礼を働く人は彼女的にはアウトなのか。ミミが苦笑しながらクギをなだめているのがちょっと新鮮な心地である。クギの方が歳上に見えるが、オペレーターとして傭兵生活に身を置いてきたミミの方が精神的には余裕があるのかもしれない。うーん、成長を感じるな。

「はーい、シミュレータールームの使用許可でましたー。どうぞー」

嬢は「あっちでーす」と投げやりな感じでシミュレータールームがある方を指差し、俺達への興味を失ったようだった。俺の傭兵ランクを見ても全く態度に出さず動揺もしない辺り、かなり肝の据わった受付嬢であるようだ。もしかしたら傭兵として大成する才能があるんじゃなかろうか？

「ヒロ様？」

「ああ、なんでもない。行こうか」

まだじっとりとした視線を受付嬢に向けているクギの手を引いてシミュレータールームへと向かうことにする。とりあえず、今日やることはミミのパイロット適性の再確認と、クギのパイロット適正の確認だ。

☆★☆

ミミは前に一度シミュレーターに乗せたことがあるんだが……まぁ、その、お世辞にも適正が高いとは言えない感じであった。

『あぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？』

そして今日もこうなった。ミミが操艦しているシミュレーター上の乗機であるザブトンがコントロールを失って不規則な回転運動を

しながらレーザー砲を乱射している。うん、通常のフライトは大丈夫なんだけど、戦闘機動を始めるとすぐにああなってしまうんだよな。

対するクギの操艦は安定している。今日が初日なので動きにぎこちなさがあるのは当たり前なのだが、それが『多少』レベルなのはなかなかに常軌を逸していると評しても良いかもしれない。まだシミュレーターに触って一時間も経っていないのに、過不足無く船を動かして配置された静止ターゲットをレーザー砲で破壊し、移動するターゲット相手にも冷静に対処している。これは鍛えれば一端のパイロットになれそうだ。

うーん、これは方針を転換してミミのサブパイロット化は一旦停止してオペレーターとしての道を極めてもらい、クギをサブパイロット枠にしたほうが良いだろうか？　無論、ミミも訓練を重ねればあんなことにはならなくなるのかもしれないが、ああなってしまうのもある意味才能なんだよな……いやそうはならんやろっていう。なってるんだから現実を認めなきゃならないんだが。

「はい、ミミは一旦操縦桿から手を離してフライトアシストモードに任せて停止。クギはその調子で次のステップに進もうか」

二人のシミュレーター訓練をコーチングしつつ、ミミにどう話を持っていくべきかと頭を悩ませる。ミミはサブパイロットへの転身の件、かなり前向きに受け止めてたからな。才能無いからやっぱあの話ナシね。新入りだけどクギにやってもらうわ。とストレートに言うのは流石に角が立つだろう。いや、ミミなら俺の言うことには従ってくれるだろうが、それで良い関係を築きつつあるクギとの間がまたギクシャクするのも問題だ。

うーん、こういう時に一回エルマに相談するのが良いかな？　うん、そうしよう。

#331　進路相談（前書き）

ソフィー2終わったのでソフィー1のDX版始めました（ ˘ ω˘ ）（なお59時間かかった

#331　進路相談

「気にしすぎよ」

ここはエルマ用の新造艦、アントリオンのコックピットだ。彼女はそのメインパイロットシートに座ったままそう言って苦笑いを浮かべた。

「ヒロがオーナーで船長で私達のリーダーなんだから、好きにすれば良いのよ」

「適当過ぎんか？」

サブパイロットシートに座ったまま思わず顔をしかめる。ワンマン経営のブラックカンパニーじゃねぇんだぞウチは。

「意外とこういうとこナイーブよね、あんた。普段は宙賊の群れとか結晶生命体の群れとかに平気で突っ込むくせに」

「それとこれとは話が別じゃん。勝てる戦いに尻込みする理由はないし」

「そんなんだから二つ名が『クレイジー』なんて物騒なのになるのよ……まぁ実際のところ、戦闘機動がまともにできないんじゃパイロットは難しいからね。誰よりも本人がそれを一番理解してると思うわよ？」

「訓練で克服できるかもしれないだろう。銃だって撃てるようになったんだし」

「それだってまともに撃てるようになっただけで、人に向けて撃てるかどうかは別の話でしょ？」

「それはそうだけども」

とにかく、ミミは本当に根っから争いごとに向かないらしい。育ちが良すぎるのだろうな。ある意味では貴族のお嬢様や皇族のお姫様よりも箱入り娘なのかもしれん。彼女は元々コロニーの中産階級の家庭の娘さんで、争い事というものから完全に隔離された環境で育ったらしいし。

「あの子は格闘術も苦手だしね」

「争い事自体が苦手って感じだよな。身体を鍛えること自体はあまり苦に思わないみたいだけど」

「サブパイロットじゃなくてエンジニアとかナビゲーター方面に進んだほうがあの子向きかもね」

エンジニアというのはティーナやウィスカのようなメカニックとは別で、機関制御やシールド制御、サブシステムの統制を行うプロフェッショナルだ。ＳＯＬ（ステラオンライン）ではプレイヤーの技能では代替できないＮＰＣクルー専用の職能で、艦の基本性能やシールド性能に若干のボーナスを提供し、シールドセルやチャフといったサブシステムを自動で使用してくれるようになるという性能を有していた。所謂機関士というやつだな。

ナビゲーターは超光速航行時の最高速度や運動性、超光速ドライブやハイパードライブの起動時間を多少改善し、ハイパーレーン移動中に経過する時間も同じく多少改善するＮＰＣクルーだったな。こちらは航海士といったところだ。

「うーん。いずれはミミにも輸送船なんかを預かってもらって、補給や交易なんかを任せたいと思ってたんだけどな」

「将来的にはそれもいいかもね。ただ、今はエンジニアやナビゲーターとしての経験と訓練を積み重ねていくっていうのも良いと思うわよ。後に船長として輸送船を指揮するなら、どっちの経験も有効

に働くしね」
「なるほど。それもそうかもしれないな」
最終的にミミのキャリアとして有効に働くのであれば良いか。操縦技術を持つパイロットは雇うなり何なりして、ミミは艦全体の指揮を執るってスタイルでも良いわけだし。寧ろ、ミミの気性的にはそちらの方が合うのかもすれない。
「いずれミミに輸送艦、ないし補給艦を任せたいって思っていた件も含めてミミにしっかりと伝えることね。ああ、いえ、やっぱり私も一緒に行くわ」
「それは助かる。エルマは本当に頼りになるな」
「当たり前でしょ？　あんたより私のほうが先達なんだからね」
そう言ってエルマが自身に満ち溢れた表情をしてみせる。うん、完璧にドヤ顔だ。だが本当にその通りでこうして頼りになるから頭が上がらんな。
「ま、私としては頼られて悪い気はしないしね。メイよりも先に私に相談しに来てくれたのはなんだか誇らしいわ」
「対抗意識があったのか？」
「対抗意識ってほどのものじゃないわよ。単に頼られて嬉しいって話。さ、行きましょ。善は急げって言うしね」
エルマがメインパイロットシートから腰を上げ、手を差し伸べてきた。俺もその手を取ってサブパイロットシートから腰を上げる。
そうだな、こういうのはさっさと片付けるに限る。早速ミミと話をしに行くとしよう。
☆★☆

「というわけなんだよ」
「なるほど……」

ブラックロータスの食堂に移動してクギと一緒にお茶を飲んでいたミミに先程エルマと話していた件を伝えると、ミミはそう呟いて目を閉じ、俯いた。

「ヒロ様は、私とずっと一緒にいてくれますよね？」

すぐに顔を上げたミミが真剣な眼差しを俺に向けながらなかなかにヘビーな問いを放り投げてきた。これは重い。だが俺の心はとっくに決まっているので、答えに窮することもない。

「勿論そのつもりだ。ミミに愛想を尽かされない限りはずっと一緒にいたいと思ってるよ」
「それなら良いです。私はヒロ様にとって最も都合が良いように力を尽くしたいですね」
「そう言ってくれるのは嬉しいけど、ミミも自分の将来を考えてだな……」
「私の将来はヒロ様とずっと一緒にいることです。だからヒロ様にとって都合の良い技術を身に着けていきたいです」

Ｏｈ……ヘヴィ。実にヘヴィ。

「ＯＫ、それじゃあ今後はナビゲーターとエンジニア、どちらか肌に合う方の学習を進めていってくれ。オペレーターからとなるとナビゲーターへの転身の方が親和性が高そうだが、そこはミミの判断で良い」
「わかりました。じゃあクギちゃんはサブパイロットとしての訓練

を積んでいくことになるんですね？」

そう言ってミミは少し離れた場所からこちらの様子を窺っているクギに視線を向けた。別に内緒話をしていたわけではないので、俺達の会話内容はクギにも聞こえているだろう。というか実際に聞こえているようで、ミミに名前を呼ばれて視線を向けられたからか、クギもこちらに視線を向けて頭の上の耳をピクピクと動かしている。可愛い。

「そうしてもらうことになるな。そういう意味ではミミとクギで役割の住み分けがはっきりする形になるか」

「わかりました。これからも頑張っていきます」

そう言ってミミはにっこりと良い笑顔を見せてくれた。

俺達も一端の傭兵団としてやっていくのであれば、長期的な視点というのを考えて日々過ごしていく必要が出てくるだろうからな。まぁ、あまり人を増やしすぎても俺のキャパを超えかねないし、人員を増やす予定は正直あまりないんだけども。仲間として迎え入れるとなると信用できるかどうかって問題もあるしな。

「うん、無理しない程度に――」

と、言いかけたところで食堂に脳天気な声が響き渡った。

「ういっすー！　あー、つっかれたわぁー。みんなもお疲れちゃーん」

「お姉ちゃん、はっちゃけすぎ」

会社を辞めてなんか色々と吹っ切れたのか、先日からテンションが高いままのティーナとウィスカの登場であった。いや、テンショ

ンが高くてはっちゃけてるのは姉のティーナの方だけなんだけども。あやつ、まさか仕事中にも酒を飲んでるんじゃないだろうな？

「あれ？　なんか真面目な話しとった？」
「しとった」
「堪忍して？」
「まぁええわ。許したる」
「やったー、兄さん太っ腹ー」

ティーナが諸手を挙げて喜びの意を示す。いやほんとテンションたけぇな。やっぱ酒キメてない？　あーゆーどりんきんぐ？　ちょっと息ハーッってしてみ？

「素面です……なんかすみません、お姉ちゃんここのところずっとこんな感じで」
「仕事でミスって大怪我とかしないようにだけ気をつけておいてくれ」
「はい」

妹のウィスカは姉の行動を見て恐縮しきりのようである。苦労するなぁ、この子も。

#332　暇なヒロ（前書き）

来週はカクテイシンコクという強敵を倒したいのでお休みします（ω）

#332　暇なヒロ

さて、ミミとクギの訓練方針も決まったことだし、エルマ用の戦闘艦の調達もブラックロータスの改修も終わった。ここのところ自由に宇宙を飛び回ってドンパチする機会もなかったので、そろそろお仕事に取り掛かりたいのだが、残念ながら今は帝国航宙軍――というかセレナ大佐の対宙賊独立艦隊から指名依頼が入っており、艦隊の出撃準備が完了するまで待機を命じられている状況である。勝手にフラフラとウィンダステルティウスコロニーから出ていくと怒られるどころの騒ぎでは済まないので、不本意ながら特にやることもなく待機しているしかない状況だ。

まぁ、出撃したところでこの星系は帝国航宙軍のお膝元と言って良い星系だ。宙賊とやりあおうと言うのであれば、少なくとも三回。万全を期すなら五回か六回はハイパーレーンを移動しなければまともな稼ぎを得ることは出来まい。五回、六回とハイパーレーン移動を行うとなれば、片道でも数日の行程となる。軽々しく「ちょっとそこまで」と言って出ていけるような距離ではないな。

というか、軍の任務中にやらかしたらほぼ確実に脱走扱いされる行為である。

「それで私達の仕事を見に来たんですか」

「よっぽど暇なんやなぁ」

「人が仕事をしている姿を見ながらくつろぐのは楽しいぞ」

「よっしゃええ度胸や。その喧嘩高く買うたる」

「ゆるして」

ティーナが化け物を解体できそうなプラズマ工具めいたものを持ち出してきたので、早々に降参する。それは人間に向けちゃダメな

やつでは？

「しかし、地味だな」

「そらそうや。クリシュナもブラックロータスもアントリオンも整備は完璧な状態やで」

「そうなると、消耗しやすい部品とか、複製に時間がかかる部品を予め備蓄しておくくらいですね。あとは今みたいにメンテナンスボットとか軍用戦闘ボット達の整備とか、工具類とか整備施設の整備とか」

「なるほどなぁ」

今、彼女達の周りには様々な形状のメンテナンスボットが集まっている。人型のものはほんの数体で、殆どのものは多脚型且つゴツくてパワーのありそうなアームを一本、又は複数持つ作業機械めいた連中である。その他には高所作業を担当するドローン的な連中もいる。こいつらは重力制御技術を使ってふわふわと浮かんでいるらしい。あの無駄にハイテクなドリンクホルダーと同じ原理だな。

「まぁ、メンテナンスボットはメンテナンスボット同士で互いに整備できるようになっていますし、軍用戦闘ボット達は専用のメンテナンスシステムで全自動で整備が出来るようになっていますからあまり手がかからない子たちばかりなんですけど」

「正直うちらが使う工具のが手が掛かるで」

「実際のところ、二人が直接手を使って整備するところなんてあるのか？」

これだけメンテナンスボットが揃っていれば二人が直接工具を振るう機会なんて無さそうだが。

「クリシュナとかブラックロータスとかアントリオンの整備には必

要ないな。ただ、鹵獲した宙賊艦から装備引っ剥がしたり、ニコイチして修理するって話になるとうちらがメインになって作業せなあかんやん？」
「ああ、なるほど。それはそうかもしれんな」
「クリシュナも最初は手作業での整備が多かったですけどね。テンプレートがなかったから」
「ああ、うん。それはそうだろうね」

ブラックロータスはスペース・ドウェルグ社製で、アントリオンはイデアル・スターウェイ社製だが、クリシュナは俺がこの世界に迷い込んだ時に一緒に現れた――と思われる機体だ。どこが製造したものかということは全くの不明で、機体パーツの一部はブラックボックス化されている。

幸い、この世界の船とは一定の互換性があり、なんとか整備できてはいるのだが、ブラックボックス化されているパーツが損傷した場合には修理不能となる恐れが高い。実は今運用している船の中で一番の問題児なんだよな、クリシュナは。

「まぁ、少しずつ解析は進めてるんやけどね。基本的な整備範囲の作業テンプレートは作れたから、よほど重大な損傷を受けない限りは整備もなんとかなる」
「とりあえず消耗の激しいスラスター周りとか、可動アーム型ウェポンマウントは最優先でなんとかしましたからね。他の部分もだいぶ解析が進んで整備ができるようになりましたけど、やっぱりジェネレーター周りがネックです」
「兄さんなら大丈夫やろうけど、ジェネレーターへの直撃弾は避けるんやで」
「ジェネレーターが破損するような状況はほぼ詰みだからなぁ」

当然ながら、航宙艦にとってジェネレーターは一番重要と言って

も差し支えない弱点である。直接的な損傷を受けるような状態というのはシールドも装甲も抜かれてバイタルパートに風穴が空いたという状況に相違無いので、まぁその状況だと搭乗している人員もほぼ無事では済まない。爆発四散する前にコックピットブロックごと脱出できていれば御の字といったところだろう。

「まぁクリシュナの話は置いておいて、出撃はいつになるんやろね？　そろそろ時間潰しのネタも尽きてくるところなんやけど」
「やることのネタが尽きたら二人はどうするんだ？」
「うーん、お勉強ですかねぇ。毎日コツコツとやってはいますけど」
「勉強？」

まさかウィスカの口から勉強なんて言葉が出てくるとは思わなかったので、思わず聞き返す。

「うちらはエンジニアやから、常に最新の素材や技術について勉強し続けないとあかんの。知識が古くて現行の製品の整備ができないエンジニアなんてただの穀潰しやろ？」
「なるほど。知識と技術のアップデートが必要なわけだ」
「そういうことやね」
「そういうのにかかる費用については経費として申告してくれれば俺が出すから、ちゃんと申告するようにな。あまりに趣味に傾いたものはダメだけど」
「ほんま？　助かるわー」
「ありがとうございます」

ティーナとウィスカが揃って嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「メイに精査させるからな」
「うっ……だ、大丈夫や」

一応重ねて釘を刺しておく。専門家じゃない俺には申告された経費が正当なものかどうかなんて判断はできないからな。メイに任せるのが確実だ。メイには苦労をかけるが、これは必要な処置だろう。

「ところで、お兄さんはそんなにお暇なんですか？」

「お暇です」

エルマはアントリオンの調整にかかりっきりだし、ミミとクギは新たなるキャリアを積むべくメイを講師としてお勉強中である。俺はと言うと現状では新しい仕事も受けずにひたすら待機するしかないので、こうして働いているティーナとウィスカに茶々入れしに来るくらいしかやることがないのである。まぁ、趣味のホロムービー鑑賞なりトレーニングルームで身体を動かすなりしようと思えばできるのだが、一人で見たり身体を動かしたりするのも虚しいからな。

「兄さんって結構寂しがり屋なとこあるよなぁ」

「うーん……？　まぁ、そうなのかもしれんな？」

こちらに来てすぐの頃は一人で過ごしていたが、その後はミミを拾って、さして日を置かずにエルマも拾った。なんだかんだでいつもミミかエルマと過ごしていたし、その後もメイが増えてティーナとウィスカが増えて、いつも誰かしらと一緒にいることが多かった。元の世界では割と一人で過ごす時間が多かったのだが。

「ん、まぁうちらも急いでやらなあかん作業も無いし？」

「そうだね、お姉ちゃん。お兄さん、何をしましょう？」

なんだか二人がとても優しい顔になっている。やめないか、君達。そのナチュラルに母性めいた感情を向けてくるのは。なんだかとて

もいたたまれない気分になってくる。
なお、この後二人の部屋でホロムービー鑑賞をしたりして大変に楽しい時間を過ごした。

#３３３　姉妹との時間（前書き）

カクテイシンコクはやっつけましたが代償は大きかった……｜（；３」∠）｜

#333　姉妹との時間

「なーなー、兄さん」
「んー？」

ホロ動画を二本見終わったところでティーナが声をかけてきたので、応じる。今見たのはいわゆる原始文明と呼ばれる恒星間航行技術を持たない文明を研究する研究家兼冒険家が事故の果てに原始文明が支配する原始文明惑星に不時着し、原始文明人との交流を経て絆を結び、最終的には再び宇宙へと戻っていくという内容のドキュメンタリー映画のようなものだった。

ノンフィクションというわけではないが、題材となる出来事はあったらしい。基本的に原始文明及び原始文明人との接触は宇宙文化保護法違反なのだが、不慮の事故によるややむおえない事情があれば罪にはならない。それでも可能な限り接触は控え、文明の発達に影響を及ぼさないようにしなければならないらしいが。

まぁそれはそれとしてティーナの話を聞くとしよう。

「兄さんっていわゆる原始文明人なんよな？」
「あー……まぁ、そうね。俺の世界というか俺の星では宇宙空間は遠い場所だったから。恒星間航行技術なんて夢のまた夢だったな」

理論はあったのかもしれないが、俺は寡聞にして存じ上げない。国際宇宙ステーションが運営されているとか、ロケット開発が色々な国や場所で行われているという話は聞いていたが、俺には直接的な関わりがなかったし。

「宇宙文化保護法的にＯＫなんやろか？　この状況」

「良いんじゃね？　もうグラッカン帝国の市民権もあるし。何もかも今更じゃないかな」
「それもそっか。兄さん、故郷が恋しくなったりはせんの？」
「うーん、それなー……いくつかの理由から諦めてる」
「いくつかの理由ですか？」

黙って俺とティーナのやり取りを聞いていたウィスカが左側から聞いてくる。うん、ソファの上で姉妹に左右からサンドされているんだ。こんな状況になるとかこっちの世界に来る前じゃ考えられないが、俺は前世でどんな功徳を積んだんだろうな？　いや、色々と死にかけるようなトラブルにも巻き込まれているから総合で見ればマイナスなのか？

「まず、俺が知る俺の故郷はソル星系の第三惑星である地球だ。つまりソルⅢだな」
「星系名も第何惑星なのかもわかってるなら帰れるんやない？」
「これは地球人がつけた名前だ。つまり、恒星間航行技術を持たない未開の原始文明人が着けた名前ってことだな。さて、銀河地図上にその名前で登録されるだろうか？」
「あっ……あー……」

俺の言いたいことがわかったのだろう。地球人視点では地球はソル星系の第三惑星だが、銀河地図を運用している恒星間航行種族にとってはソル星系はソル星系ではなくタイヨーピカピカ星系かもしれない。つまり、俺には故郷であるソル星系を銀河地図上で探す手段がない。実際、ソル星系だけでなく宇宙的には比較的近傍であろうと思われるシリウス星系やアルファ・ケンタウリ星系、タウ・セチ星系などもこの世界に来てすぐに調べてみたが、見つからなかった。

「俺がスーパーな天文学者とかだったら無数にある恒星の配置とかからソル星系の位置を割り出せるのかもしれないが、残念ながら俺はそういった知識とは関わりの薄い一般人でな。まず、これが理由の一つ目だ」
「なるほど。他の理由も聞いて良いですか？」
「オーケー。クギの言うことを全面的に信じるなら俺は異世界――ポテンシャルの高い世界から迷い込んできたわけだ。このポテンシャルの高い世界ってのが具体的に何なのかってのは俺にはわからんが、まぁとにかく超自然的な力で時空間を飛び越えたんだろうということだけは想像がつく」
「エンジニア的にはその『よくわからないふしぎなちからでなんやかやあった』ってのは納得いかんとこなんやけど」
「わからないもんはわからないんだから仕方がない」

微妙に納得の行かない表情をしているティーナにそう言って肩を竦める。一体どんな理由でどんな作用が働いて俺がクリシュナと一緒にこの世界に来たのか？　という点についてはクギが主張するスピリチュアルな内容以外で説明がつきそうにないからな。

「でまぁ、話を戻すと仮にこの宇宙と俺が居た宇宙が同一のものだったとして、時空間を飛び越えた『今』ってのは俺が居た『今』とどれだけ離れているのかって問題がな？」
「「？？？」」

俺の発言を上手く噛み砕くことができなかったようで、姉妹が左右で首を傾げる。

「つまりだ、俺がこの宇宙に飛んできたとかそういうことは横に置いて、仮にこの宇宙に俺の故郷があるとして、今のこの瞬間は俺が認識していた『今』とどれくらい乖離しているのか想像がつかんと

いうわけだよ。超未来とか物凄い太古の昔だったりするかもしれないわけでな。宇宙的なスケールで考えると数千年、数万年程度は一瞬みたいなものだろ？　これが二つ目の理由だ」
「ああ。つまりお兄さんが元いた場所からジャンプした時に空間だけでなくて時間も飛び越えている可能性もあるってことですね。しかもそれがプラス方向かマイナス方向か、どちらにしても宇宙的なスケールで考えると元いた惑星に居場所があるかどうかわからないと」
「あー……数万年どころか数百年でも違ったらどうなってるかわかったもんやないなぁ」

医療技術の発達によって寿命が伸びているこの時代においても数百年という時間は長い。何度も世代が交代するだけの時間である。

「仮にこの宇宙から元の宇宙に戻れるとしても、同じ理由で戻ったところで俺の居場所はあるんか？　って問題がな……あと、奇跡的にこの宇宙に俺の故郷が存在して、時間もさして飛んでないとしても大問題がある」
「大問題？」
「俺はもうグラッカン帝国の市民権を持っていて、俺の知る俺の故郷は未開の原始文明惑星だ。帝国法と宇宙文化保護法的に帰れない。あと、仮に帰るにしてもクリシュナに乗って俺の星に降りるわけにもいかないだろう。これが三つ目の理由だ」

クリシュナはそれなりにデカい。何らかの対策をしなければ人工衛星を運用している地球の技術レベルでも反応を捕捉できる可能性がある。仮にそうなった場合、世界は大混乱に陥るだろう。マジモンのＵＦＯの飛来である。騒ぎにならないわけがない。
「うーん、なるほど。確かに色々な観点から考えて無理そうですね

……」
「そういうこと。まぁ、俺は元々親類縁者の類もそう多くはなかったからな。未練が全く無いと言ったら嘘になるし、突然姿を消すことになって申し訳ないという思いもあるが、今の生活を全て捨ててまで戻ろうとは思わないな」
「そっかぁ……でも、寂しない？」

そう言って心配そうな表情でティーナが俺の顔を見上げてくる。

「二度と故郷に帰れないっていうのはそりゃ寂しいけど、今はもうクリシュナとブラックロータスが俺の家みたいなものだしな。それにこうして心配してくれる優しいティーナとウィスカがいるし。今の俺にとってはここが故郷で帰る場所だから、良いんだ」

仮に今の俺がクリシュナだけを供として別の世界だの宇宙だのに放り出されることになったら、なんとしてでもみんなのいるブラックロータスに戻ろうとするだろうな。まぁ、こんなことが何度も起こるとは思えないが、一度あったんだから二度目がないという保証もない。この世界に来てからトラブル体質も甚だしいからな……頼むからやめてくれよ。

「……兄さん、たまーに真顔でクサい台詞吐くなぁ」

茶化すようにそう言いながら、顔と耳を赤くしたティーナが指先で俺の太腿をいじいじし始める。くすぐったいんですけど？　というかウィスカもなんか急に身体の密着度上げてくるじゃん。

「狙って言っているわけじゃないんだ……というか、これはそういう流れか？」
「……野暮ですよ、お兄さん」

「兄さんがふらふらとまたどっかに行かんよう、うちらが重石になったる」
「なるほど」
そういう流れだった。後のことは察してくれ。

#３３４　クギとハイパースペース（前書き）

我慢できずにＰＳ４版のエルデンリング買いました（ ˇ ω ˇ ）
（ＰＣはスペックが足りなかった

#334　クギとハイパースペース

「やっとですね」
「本当にな」

ミミの言葉に同意しながらブラックロータスの食堂でお茶を飲む。整備士姉妹としっぽり過ごしてから更に三日ほど待機し、ようやく出撃することになった。軍という組織に傭兵と同じフットワークの軽さを求めるのは無理な話だというのはわかっているが、それにしてもまぁ時間がかかったな。

「なんだか随分のんびりと過ごしたように思います」

そう言ってクギが静かにお茶を飲む。うん、今も絶賛のんびり中だな。実際のところ、出撃するという話になっても暫くは俺達の出る幕は無い。何せ更に船の数が増えた対宙賊独立艦隊と一緒に行動するのだ。それに、俺たち以外にも多くの傭兵が同行することになっている。要は帝国航宙軍の正規戦闘艦を中心とした戦闘艦の群れである。こんな連中に喧嘩を売ってくる宙賊などいるわけもないので、エッジワールドに到達するまでは敵襲が起こることもまず考えられない。

「私は久しぶりにワクワクしてるわ」
「ワクワクするのは良いが、ヘマしていきなり大破とかやめてくれよ？」
「わかってるわよ」

エルマは久々に自分の船で出撃することに闘志を漲らせているよ

うだ。その闘志が空回りしないことを祈るばかりだが、まぁ機体に不備が無いことは再三確認済みだし、問題はないだろう。クリシュナとブラックロータスの戦い方もよく知っているわけだし、連携面にも問題はないと思う。シミューレーターで連携も確認したしな。本当なら実機で宙賊狩りをして連携を確かめたかったんだが、状況がそれを許さなかったのは大変に残念だ。

ちなみに、アントリオンはブラックロータスが曳航中である。ブラックロータスに装備されている曳航用のジョイントに接続して航行しているのだ。そしてそのジョイントを使って行き来することができるので、エルマはこうしてブラックロータスの食堂に入り浸っているわけだ。

「我が君。今、亜空間内を飛んでいるのですよね？」
「そうだな」
「まったくそのように感じられません」
「それはそうだろうな」

ブラックロータスは三十分ほど前にウィンダステルティウスコロニーから出港し、対宙賊独立艦隊と超光速ドライブを同期させて超光速航行状態へと移行。つい先程ハイパードライブを同期起動して艦隊ごとハイパーレーンへと侵入し、今はハイパーレーン内を航行中だ。

ブラックロータスのコックピットに行けば極彩色に彩られたハイパーレーン内の光景を見ることもできるだろうが、正直言ってアレはとても目に痛いのであまりオススメはしない。オススメはしないが。

「見に行くか？　ハイパースペース」
「はいっ！」

クギが頭の上の耳をピンと立ててぱぁっと顔を輝かせる。好奇心が強いんだよな、クギは。箱入りで育ってきたせいかもしれない。

「二人は？」
「私はパス」
「私もいいです」

エルマとミミは態々ハイパースペースを見るためにコックピットまで行く気はないようだ。
実は見ようと思えばこの食堂のホロディスプレイに外部センサーで捉えたハイパースペース内の様子を映し出すことも出来るのだが、やっぱりコックピットというかブリッジで見たほうが臨場感があるからな。
二人を食堂に残してクギと一緒にブラックロータスのブリッジへと向かう。

「サブパイロットの勉強はどうだ？」
「覚えることが多いですし、その場その場での判断力を求められるようなので、不安です」
「最初から完璧にこなせるわけもないからなぁ。最初は用語だけしっかり覚えて、俺の指示通りにサブシステムを稼働させることにだけ集中してくれれば良いさ」
「はい、期待に応えられるように奮励努力致します」
「ははは、堅いなぁ。まぁ失敗してもフォローはなんとかするから思いつめすぎないようにな」

仕事に対する姿勢が真面目なのは良いが、あまりにも普段から張り詰めすぎるのも良くない。戦闘中にかかるストレスが強い仕事だからな。俺に関しては未だに現実感が無いのか何なのかわからんが、全然ストレスを感じないんだけど。この世界に来る際に脳味噌のそ

ういった恐怖とかを司る部分が変にでもなってしまったのかね？
などと考えたりクギと世間話をしている間にブラックロータスのブリッジへと辿り着いた。

「ようこそ、ご主人様。クギ様も」
「お邪魔します」
「お邪魔します」

クギと二人で同じ挨拶をする。ここブラックロータスのブリッジは実質上メイの私室というかメイのテリトリー、あるいは彼女の城のようなものである。メイドロイドである彼女自身がブラックロータスのブリッジが彼女の私的な空間であると主張したことは一度もないのだが、少なくともこの見解はクギを除いた全員の統一見解であった。メイ自身は決してそれを肯定しようとしないが。

「全くお邪魔ではありませんので、お気になさらず。ハイパースペースの鑑賞でしょうか？」
「うん、メインスクリーンに出してくれ」
「承知致しました」

真っ暗だったメインスクリーンに極彩色のハイパースペースの光景が映し出される。相変わらずサイケデリックな光景だが、今日はいつもとちょっと違う。ハイパードライブを同期して一緒にハイパースペースに突入した僚艦が多数存在するので、原色が入り乱れる極彩色のハイパースペース内に他の船の姿も映し出されているのだ。

「今日は賑やかだなぁ」
「……」

そんなハイパースペース内の光景をクギはジッと無言で見つめて

いた。なんだろう？　なんか一点をじっと見つめているみたいなんだが……何も無いよね？　船も何も無いよね。

「……何か面白いものでも見えるのか？」

「面白くはないです」

そう言いながらも何かをじっと見つめるクギ。いや面白くはないけど何かは見えてるってこと？　怖いんだけど？　一応メイに目配せをしてみるが、彼女も特に何も感じることはないのか、無表情で首を横に振っていた。この映像はブラックロータスのセンサーが拾ったものなので、全く同じデータをメイも閲覧することが出来る。そのメイが異常を検知できないのなら、変なものは映っていないはずなのだが。

「満足しました」

そう言ってクギは画面から目を離し、俺とメイの元へとトテトテと歩いてきた。もうハイパースペース内の光景への興味は失ってしまったらしい。

「お、おう……何が見えたんだ？」

「つまらないものです、我が君」

そう言ってクギは微笑を浮かべた。なんだかちょっと尋常な雰囲気ではないように感じられてしまうのだが、あまり追及しないほうが良さそうな雰囲気がプンプン漂ってくる。なんというか、端的に言って厄い雰囲気が漂っている。

「そうか。それじゃあどうするかね。なんかメイに話でも聞いていくか？」

「それですね……ご迷惑でなければ、メイさんが我が君と出会った時から今までの話を聞かせていただきたいのですが」
「わかりました。ではお話しましょう」

そう言ってメイはシエラ星系の海洋リゾート惑星で俺と初めて出会った時の話を始めた。クギにとっては興味深い話なのだろうが……メイ視点の俺の話を聞くというのは、なかなかに羞恥心を煽られる体験であったとだけ言っておく。

もうやめて、俺はそんなに大した人間じゃないから。許して。

#335　最辺境領域（前書き）

おまたせしました（，ω，）

#335　最辺境領域

対宙賊独立艦隊はウィンダス星系を出発し、ゲートウェイを経由して辺境へと至った。辺境と言ってもこの辺りは俺とミミ、エルマが出会ったターメーン星系とは少し趣が違う。

「どう違うのですか？　我が君」

クリシュナのコックピット。そのサブパイロットシートに座ったクギが問いかけてきた。

エッジワールドが近づいているので、星系内を超光速航行している間は一応緊急発進ができるように備えているのである。

「ここから先は最辺境領域とも呼ばれるエッジワールドで、更にその先は未探査領域だ。辺境は辺境でも国境近くの領域じゃないんだよな。つまり……」

「つまり？」

「ド田舎ってことだ」

「あはは……身も蓋もないですね」

俺の説明にミミが苦笑いする。まぁ、なんというか本当に見るべき場所の少ないド田舎なのである。現状において国家戦略上重要ではなく、特別有用な資源も発見されていない。それはつまり、手を加えずに人類が居住できる惑星が存在しないという意味でもある。遠い将来、居住可能惑星がどうしても足りなくなったとかそういう特別な理由でも無い限り、今後もこの星系――確かボストーク星系だったか――は地味なド田舎星系であり続けるのだろう。

まぁ、星系情報を見てみた限りでは全く資源が採れないわけじゃ

ないようだ。ただ、採れるのは別にこの星系でなくともどこでも採れるありふれた鉱物資源やガスの類で、競争力に秀でているわけでもない。今後、エッジワールドの開拓が進めばこの星系が中継地として発展する可能性も無くはないかもしれない、くらいの星系だろうな。

「実のところこういう星系が宙賊狩りの傭兵としては意外に狙い目だったりするんだけどな」

「そうなのですか？」

「国境に近いわけでもないから有り体に言って星系軍の数も質もお粗末なんだ、こういう星系は。だから宙賊としては活動がしやすい。こういう目立たない星系に宙賊が拠点を構えて周辺星系の治安を悪化させるってのはよくあるパターンだな」

「なるほど」

クギは俺の説明をふんふんと興味深そうに聞いている。ただ、こういう星系だとロクに機体の整備もできないから傭兵にとっては若干不便な星系でもあるんだよな。ターメーン星系は国境の辺境星系だったから配備されている星系軍や帝国航宙軍の戦力も多かったし、それらの船に補給するための武器弾薬や整備施設があったが、こういうど田舎星系のコロニーにはそういったものがまず存在しない。まぁ、うちの場合はブラックロータスがあるからクリシュナの整備には困らないけど。

しかし問題はアントリオンなんだよなぁ。中型艦の収容ドックを持つ母艦となると、もうそれは所謂キャピタルシップとか主力艦とか呼ばれるクラスの船になってしまう。帝国航宙軍で言うところの駆逐艦でも大型のものとか、或いは小型の巡洋艦とかその辺りの大きさだ。

傭兵でそのクラスの船を運用するのは、普通は小型艦や中型艦を合わせて十隻近く擁する大傭兵団くらいである。小型艦と中型艦を

一隻ずつしか運用していない俺達が使うのには少々大仰過ぎる代物だ。

「最辺境領域というのはもっと何もない場所なのでしょうか？」
「ああ、いやそれが実はそうでもなかったりするんだよな」
「そうなんですか？」

クギの質問に俺が答え、その答えにミミが更に質問を重ねてくる。

「実際に今回の目的地をまだ見てないから絶対とは言えないが、この規模の艦隊が停泊できるだけの設備が整えられている筈だ。そしてそういう場所にはすぐに商人達が集まる。安全だからな。そうすると傭兵や未探査領域の探査を行う冒険家達も集まる。そうすると、もっと商人達が集まる」
「なるほど、そうやって交易コロニーが出来上がるんですね」
「まぁ、そうだな。多分まだ完成してないと思うけど」
「そうすると、どうやって商人達は交易とかしてるんですかね？」
「多分アレだろうとは思うけど、実際に目で見たほうが面白いんじゃないかな。多分驚くと思うぞ」

俺も帝国航宙軍というかグラッカン帝国の『ソレ』は見たことがないから、ちょっと楽しみなんだよな。
そんな話をしているうちに艦隊は再びハイパーレーンへと突入した。次が目的地の星系で、ハイパーレーン内の移動時間も短いのでこのままクリシュナの中で待機しておくことにする。その間、ミミとクギは一緒にサブシステムの扱いについて勉強することにしたようだ。そんな二人の話を横で聞くことに徹する。俺が補足したり更に詳しい説明をすることもできる部分がいくつかあったが、こういうのは自分達で学ぶってのが大事だからな。明らかに間違ったことを覚えようとしない限りは黙って聞いているのが吉だろう。

それにしてもミミとクギは仲良く出来ているようで何よりである。最初はミミが若干警戒していたので心配してたんだが、現状を見る限りは仲良くしているように見える。少なくとも俺の目からは。今後も二人の仲については注意深く見守っていく必要があるだろうな……と考えていたら、ブラックロータスのブリッジで待機しているメイから通信が入った。

『ご主人様、間もなく目標星系へと到着します』
「了解。いつぞやの結晶生命体の時みたいなことは無いと思うが、一応備えておいてくれ。エルマにも伝えてくれるか？」
『承知致しました』

メイとの通信が切れる。すると、程なくしてブラックロータスがハイパーレーンを抜けて通常空間に回帰したという通知が来た。

「着いたな。とりあえず物騒な展開は無さそうだ」

コンソールを操作してブラックロータスのセンサーが拾った情報を見ながら呟く。とりあえず襲撃警報とかそういうのは発されていないようだ。メイなら亜空間センサーで拾った超光速通信の内容まで分析してもっと確実な判断を下せるんだろうが、如何せんそれは人の身である俺には荷が重すぎる。
これといった問題もなく艦隊の隊形を整えた俺達は超光速ドライブを同期し、全艦隊が一団となって光より速い速度で星系の中心方向――つまり恒星のある方向へと移動し始めた。

「ハイパースペース内はド派手過ぎて落ち着かないけど、超光速航行時の外の様子は見てて面白いというか綺麗だよな」

煌めく星々が線となって後方に流れていくように見えるこの光景

は単純に綺麗だと思う。星の流れの中を泳いでいるようなこの感覚は万能感というかなんというか、とてつもない自由さを感じさせてくれるのだ。

「えー？　ハイパースペースの中も綺麗だと思いますけど」
「ミミの感性はたまにちょっとズレてるよな」
「酷いです」

ミミが憮然とした表情をしてみせる。
いや、ミミは基本常識人なんだけど、芸術方面というかビジュアル方面というか、そっちの方の感覚はかなりズレているというか独特だと思うよ。

「おっと、もうすぐ目的地に着くみたいだ。さぁ、集中集中」
「話を逸らしましたね、ヒロ様……この件については後でじっくりと話しましょう」
「覚えてたらな」

これから見るであろうものを考えれば驚きのあまりこんな些事は忘れると思うけどね。アテが外れると一転してピンチだな。頼むぞグラッカン帝国。俺が思っていた通りのものをちゃんと配備していてくれよ。

「超光速ドライブ停止まで5、4、3、2、1……今」

ミミのカウントと同時にブラックロータスのセンサーから送られてくる映像が切り替わる。超光速航行から通常航行へと切り替わったのだ。後方へと流れていっていた星の煌めきが線から点へと戻る。

「わぁ、なんですかあれ」

「大きい……ですね？」

通常航行へ戻ったことを確認してからブラックロータスの外部光学センサーが拾っている映像を何度か切り替えると、巨大な物体がメインスクリーンに映し出された。

それは双胴の巨艦であった。流石にこのクラスの船に関してはリサーチもしていないので一見してどこのメーカー製なのかまではわからないが、間違いなく俺が「あるだろう」と予測していた艦種だ。見た目からして新しい船ではない――というか、外装の感じを見る限りかなり年季の入っていそうな船である。

「あのバカでかいのは所謂軍用補給母艦ってやつだな。大量の物資と装備、兵員を運ぶことが出来て、更に小型艦から戦艦まで補給や整備をすることができる移動基地みたいなもんだ」

とんでもない巨体だが、ちゃんと超光速航行能力も恒星間航行能力も備え持っている筈だ。あんまりにもデカいから星系内を航行するのにもコース取りが滅茶苦茶難しそうだけど。

「前にコーマット星系で見た移民船よりも大きいですね」

「だな。まぁあの時は確か五隻くらい居たはずだから、総人口って意味ではあの時のほうが多いと思うけど」

「あの中に何人の人が住んでいるのでしょう……」

ミミは前に移民船を見ていたから衝撃も小さく済んだようだが、クギは初めて見る超大型艦を前に感心しきっていた。ちょっと口が開いてるのが可愛い。

「暫くはあの船を拠点に動くことになるだろうな。馴染めるよう祈っておこう」

「そうですね」

補給母艦のシップネームは『ドーントレス』か。暫く世話になる事になりそうだな。馴染めるように祈っておくとしよう。

#336　ケンサン星系（前書き）

生活リズムが大崩壊（ ，ω，　）

#336　ケンサン星系

ケンサン星系はつい最近グラッカン帝国領として領有の主張がなされた星系である。その存在そのものはかなり前から認識されていたそうだが、実際に帝国の領土として主張され、それが国際的――つまり他の銀河帝国にも――に認められるにはそれなりの手順を踏む必要があるため、実際の編入はつい最近になったというわけだ。

「まぁ、つい最近と言っても三ヶ月くらい前の話だそうだが」
「それは最近、なのでしょうか？」
「どちらかと言えば最近に分類されるんじゃないかなぁ？」

小首を傾げるクギにウィスカも首を傾げつつ応じる。まぁ国家というスケールで見れば三ヶ月という時間はつい最近、と言っても差し支えがない程度の時間だろうと思われる。

「それで、うちらはどういう仕事をするん？」

いつものツナギのような作業スーツではなく、いかにも部屋着といった風情の気楽な格好をしているティーナがそう聞いてくる。まぁ、ブラックロータスの食堂に集まって駄弁っているという状況なので、そういう格好でもおかしくはない。おかしくはないんだけど、上がタンクトップ一枚だけというのはちょっと気が緩み過ぎというか無防備過ぎんかね。

「当面は偵察と情報収集みたいね」

エルマがそう言ってストローの伸びているカップ状の容器から中

身が何なのかわからない謎のドリンクを飲んでいる。いつも身体を動かした後に飲んでいるからプロテインの類じゃないかと思っているんだが、確認したことはないな。美味いのだろうか？　後で聞いてみるか。

「具体的には宙賊狩りです。やっぱり輸送船や冒険船を狙った宙賊の襲撃が多いみたいなんですよね。周辺星系に根城があるんじゃないかって帝国航宙軍は睨んでいるみたいです」
「それで、俺達傭兵が手分けして宙賊どもを狩って情報を引っこ抜こうってわけだ。捕虜を手に入れるか、データキャッシュを手に入れるかだな」
「なるほどなぁ」

エルマとミミ、それに俺の説明を受けてティーナも納得してくれたようである。
捕虜を取る――つまり宙賊を降伏させてコックピットブロックをパージさせた場合、基本的に宙賊はコックピットに残っている情報の類を全て消去する。そうしないと宙賊仲間を売ることになりかねないからだ。宙賊にも宙賊なりに通すスジってもんがあるらしい。どっちにしろ惨たらしく死ぬんだから役に立ってくれれば良いのにな。
まぁ、データキャッシュが無いなら捕虜を尋問するだけの話なので、帝国航宙軍的には手間がかかるだけなんだろうけど。技術の進んだこの世界では黙秘など情報収集する上では何の妨げにもならないのだ。宙賊には半ば人権も認められてないしな。おっかねぇ世界だよ。

「つまりいつも通りっちゅうことやな」
「せやな」

つまるところ、小回りの利かない軍の穴埋めを俺達がやるわけだ。現状、この星系では宙賊に対する防衛戦力が全く足りていないのだそうだ。
補給母艦ドーントレスそのものの守りは全く問題はない。ドーントレス自体に多数の防衛用タレットが装備されている上に、迎撃用の戦闘機も数が揃っているという話だからな。補給母艦なんて呼称だと戦闘能力が低そうな印象を持つかも知れないが、実態は移動できる要塞みたいなものである。
ただ、星系を守るという話になるとドーントレス単艦ではどう考えても手が足りない。迎撃用の戦闘機は一応戦闘艦が必要とする一通りの機能を備えてはいるが、基本的に母艦から遠く離れて活動するのには向かない。なので、救援要請が入った際には戦闘機ではなく戦闘艦艇を派遣することになるわけだが、ドーントレスの護衛艦隊だけでは手が回らなかった。それでセレナ大佐とセレナ大佐に雇われた俺達がこのケンサン星系へと派遣されてきたわけだ。
ただ、話を聞く限りこの星系で活動している宙賊はどうも動きが洗練されていて厄介であるらしい。襲撃は迅速で、実入りよりも身の安全を第一にしているのか星系軍や帝国航宙軍の艦艇が駆けつけてくる前に退散してしまうらしい。
宙賊も馬鹿じゃないからな。勝てないと思ったら普通に逃げる。俺だって何度も逃げられている。

「偶然だと思いますけど、グラヴィティ・ジャマーを装備したアントリオンを手に入れた途端によく逃げる宙賊を相手にすることになるのって出来すぎな感じがしますよね」
「言いたいことはわからないでもないけど、そもそもアントリオンのグラヴィティ・ジャマーは宙賊によく刺さる装備だからな。宙賊を相手にする以上、そうなるのは必然だろう」
ウィスカの言葉にそう答えて肩を竦める。

別にセレナ大佐の仕事を受けずに宙賊狩りをしたとしても同じような感想が出てきたのだろうから、驚くようなことでもない。逃げようとする宙賊の超光速ドライブの起動を阻害して一網打尽にできる装備とか、俺達のような宙賊狩りを生業とする傭兵にこれほど相応しいものもそうそう無いことだろう。

まぁ、クギに言わせればこういう状況も俺の悪運だか運命力だかなんだかが引き寄せたとかそういう話になるんだろうが、何にせよその時その時で判断を下しているのは俺達自身なのだから、運命論とかそういう方向の話で片付けるのはあまり好みじゃないな。

「宙賊に懸けられている賞金も高くなってるって話だからな。慎重かつ大胆に、大いに稼がせてもらうとしよう……まぁ、今日一日は休みなわけだが」

「ティーナとウィスカのお陰で機体は仕上がってるし、補給はウィンダスで済ませてきたものね。これから暫くお世話になるドーントレスにご挨拶でもしにいく？」

「お、ええね。結構年季の入っとる船やけど、中身がどんなになってるか興味あるわ」

「この大きなお船の中を見て回るのは楽しそうですね」

ティーナとクギは乗り気のようだ。ティーナはまぁいつも通りとして、クギも好奇心を剥き出しにしているな。やっぱり箱入りで育ったからか好奇心は強いみたいだな。ゆるゆると尻尾を振っているのが可愛い。

「それじゃあ皆で行きましょうか」

「はい！　メイさんも呼びますね」

ミミがタブレット型端末を操作してこの場に居ないメイにメッセージか何かを送り始める。ゆっくりじっくりと休むのもこれで暫く

先までお預けになりそうだし、精々興味深く拝見させて頂くとしますかね。

#337　地域限定ショップ（前書き）

生活リズムを直したい（ ，ω， ）

#337　地域限定ショップ

目立ってるな。いやそれはそうだろう。男が俺一人で、綺麗どころをぞろぞろと六人も引き連れて歩いているのだ。目立たないはずがない。しかもメイはメイド服だし、クギは例の巫女っぽい衣装だし。

まぁ、ただドーントレスの内部には男しか居ないのか？　というとそんなことは全然ない。やはり軍服を着ている人は多いが、男女比率は若干男性が多いかな？　くらいの印象だ。だからといって俺達が目立たないということではないのだが。七割以上は制服というか、揃いの地味で丈夫そうなシャツとズボンとかそんな感じの出で立ちだし。

「なんだか見られていますね」

「私達の服装は浮いていますから。ですが気にする必要はないかと」

俺達の中でも抜群に服装が浮いているクギとメイが小声で話し合っている。最初にメイにクギの面倒を見るように頼んだからか、クギは意外とメイに心を開いているようなのだ。ガチガチの精神文明人と機械知性ということで実のところ若干心配していたのだが、クギ的にはメイの存在が不快だとかそういった感覚は皆無であるらしい。

「あー、なんかこの船の雰囲気落ち着くわぁ」

「天井の高さとかがドワーフ系のコロニーと似た感じで低いね。あと、適度に年季が入ってる感じがブラドプライムコロニーを思い出すかも」

ティーナとウィスカはキョロキョロと辺りを見回しながら楽しそうにしている。確かに二人の言う通り、この辺りの区画は天井が然程高くない。一般的なコロニーの場合、メインの居住区画などに関しては結構天井が高く作られていることが多い。その方が住人の感じるストレスが格段に小さくなるからだ。一応この船は軍艦だから、その辺の事情よりも省スペースの方に力を入れているのだろう。

「船なのに滞在者用の観光情報があるのってなんだか面白いですよね」

「今回みたいにエッジワールドの前線基地として活動することも多いんでしょうね。そうなると商人や傭兵、冒険家が集まるから、必要なんじゃないかしら」

観光情報と言っても普通のコロニーに比べれば慎ましいものだ。どこに食堂があるとか、物資の取引をするならこの区画だとか、手続き関連はこの区画だとかそういったことが簡素に書かれているものであるらしい。

「船の中に歓楽街があるのは驚いたけどな」

「そりゃ兵士かて人やからな。ストレスを解消できる場所は必要やろ」

「最早一つのコロニーみたいな感じですよね。寧ろ普通のコロニーよりも治安も良さそうです」

「それは確かに」

多くのコロニーでは所謂スラムのような場所だとか、場合によってはもっとヤバい場所があったりする。しかし、この船――ドーントレスにはそういった区画はないようだ。それだけ規律が隅々まで行き届いているということなのだろう。この船の指揮官は相当なカリスマ性を持っているのだろうな。

「まずはお買い物にでも行ってみますか？」
「何か掘り出し物があるかもしれないし、そうするか。その後はメシだな」

そう方針を決めてまずはブラックロータスやアントリオンを停泊しているドッキングエリアにほど近い場所にある商業区画へと足を伸ばす。この辺りは民間の店舗が多数軒を連ねていて、かなり活気のあるエリアであるようだ。人の数も多い。俺達と同じような傭兵らしき格好の人々もかなりいるので、俺達と同時にこの船に到着した連中もこの辺りに繰り出してきているようだ。

「憲兵が目を光らせているわね」
「余所者が大挙して押し寄せてきたんだから、そういう対処をするのも当然だろうな」

特に一般的には血の気が多く、荒んだ生活をしていると思われている傭兵達が多く来訪したとなると、こういった人が集まりやすい区画でトラブルが起きる確率は高くなる。妥当な采配と言えるだろう。

「あ、お兄さん。あそこのお店を見てみませんか？」

ウィスカがそう言ってクイクイと俺のジャケットの裾を軽く引っ張ってきたので、彼女の指し示す方を見てみた。あれは……なんだろう？　何を売っている店なんだ？　見た感じ、用途不明のガラクタしか並んでいないように見えるんだが。

「行ってみるのは良いけど、何の店だあれ？」
「冒険家が持ち帰ってきたアーティファクトのお店みたいです」

「アーティファクトねぇ？」

冒険画が持ち帰ってくるアーティファクトというのは、つまり未知の異星文明の痕跡のようなものを指すものである。実際、ＳＯＬで冒険家プレイをしていた連中というのは未探査惑星のスキャン情報やそういったアーティファクトを見つけては売り払うという感じで金を稼いでいたようだが、俺は実際にそういったものを手にしたことも無ければ探したこともないので実際にどういったものなのかというのは通り一遍の情報しか知らない。

「見るだけなら良いけど、買うのはやめときなさいよ。たまに検疫が甘くて厄介な病気をもらったなんて話も聞くんだから」

「えぇ……怖いですねそれ」

エルマがジト目でウィスカを注意し、それを聞いたミミがドン引きしている。いやそれは初耳だわ。怖いなアーティファクト。

「病気というよりは精神に干渉してくるタイプの厄介なものもあったりするらしいから。ほら、歌う水晶の歌声とかもなんか耳と言うより脳に響いてくるじゃない。あんな感じで」

「なんかいくのこわくなってきたんですけど」

行こうと言っていたウィスカ自身がエルマの脅かし話に怯えてしまった。でもまぁこんな店はエッジワールド近辺でしか見られないものだし、なにか面白いものもあるかもしれないということで中を覗いてみることにする。

「いらっしゃい」

こじんまりとした店の奥にあるカウンターには小柄な男性が座っ

ていた。目をサイバネティクス化しているようで、両目の代わりに緑色のレンズが淡く光っている。うーん、胡散臭さが雰囲気出してるなぁ。

「なんか面白いフォルムしてんなぁ。これなんやろ？」
「うーん、全く想像がつかないね。置き物にしか見えないけど」

ティーナをウィスカは早速透明なショーケースに入れられているアーティファクトらしき謎の物体を鑑賞し始めている。俺もそれに倣って彼女達と同じショーケースの中身を覗いてみるが、なるほど確かにこれは何なのかよくわからないものだ。光沢のある白い材質で形作られた薬研のような見た目の器のような何かである。見た目で材質の推測がつかないのはこの世界ではよくあることだが、これはなんだか無機物と言うよりも有機物っぽい雰囲気が感じられる。見た目だけなら白い陶器のように思えるのだが、何故だか無機物という感じがしないのだ。確かにこれは不思議なものだな。

「わぁ、これはなんで光ってるんでしょう？」
「謎ね。内部で緑色の炎が揺らめいているように見えるけど……危険物だったりしないのかしら？」
「エネルギー反応は然程強くはないですね。エネルギーパック一個分相当です」
「なんだか綺麗ですね」

ミミ達は金色の台座の上に載った深緑色の宝玉のようなものを眺めているようだ。エネルギーパック一個分相当ねぇ？　それはそれっぽく作られた贋作なんじゃないのか？

「クギは何か気になるものは無いか？」
「はい、我が君。特には。ポテンシャルが異常に高い品や精神波を

放出しているような品などは見当たらないようです」
「なるほど」
そうなると、少なくとも俺のように異世界だかなんだかから迷い込んできたような物体だの、精神に干渉してなんか良くないことを起こすような品だのはここには無いということなのだろう。
「何か気に入ったものがあったら買っていくのも良いかもな。神秘的な置き物って俺も割と嫌いじゃないんだ」
「そう言えば結晶生命体の不活性コアの一部とか飾ってあるわよね」
「キラキラしてて俺は好き」
暗闇の中でも淡く七色にきらきらと光って結構綺麗なんだよ、アレ。万が一のことがあったら怖いから、頑丈なシールドケースの中に封印してるけど。不活性だってのがわかっていても素手で触りたくはないな。
「うーん、ちょっと欲しいけど……これなんてどう？」
「どこに置くねんそんなもん。せめてもうちょっと小さいのにしいな」
ウィスカが自分と同じくらいの大きさの捻じれた三角錐というか若干ドリルっぽい何かを指差し、ティーナが速攻でNGを出している。なんだろう、あれは。黒い金属っぽい材質でできていて、なんだか所々に発光する赤い筋が走っていて、そこはかとなく冒涜的というか禍々しい雰囲気が感じられるんだが。なんか魔王城とかにオブジェとして置いてありそう。
その後も散々店を冷やかし、結局何も買わないままアーティファクトショップを後にした。正直申し訳ない気持ちもあったが、流石に然程心惹かれもしない用途不明のガラクタを買っていってもな…

…まぁ他にも同じような店はあるようだし、サクサクと覗いていくことにしようか。

#338　巨大フードコート（前書き）

原稿執筆期間に入るので暫くお休みします。ユルシテネ！―（∵3」∠）―

#338　巨大フードコート

怪しげなアーティファクトショップ廻りをした後、俺達はドーントレスの大食堂へと足を運んだ。

「ここが大食堂ですかぁ……なんだかワクワクしてきました」

ドーントレスの大食堂は大変に広かった。印象としてはめちゃくちゃ広いフードコートみたいな感じである。壁際に料理を提供する自動調理器が並んでおり、食事を取りたい人達はそこで料理を注文し、用意されているテーブルで食事をするという形式らしい。

この大食堂は他の場所と比べると天井が高く、開放的な雰囲気を感じさせる。あちこちに観葉植物や植物の繁茂するテラリウムなども設置されており、乗員達のストレスを極力緩和させようという工夫が見られるな。

「軍が提供する食事なんてそんなに期待するようなものじゃないと思うけどね」

「それはどうかな？　戦闘艦ならともかく、長期任務に当たる補給母艦ならそれなりの質を期待してもいいと思うけど」

高揚する気持ちを隠さないミミとそれに応じるエルマに俺も意見を表明しておく。精々数日から長くても数週間程度の活動が想定される戦闘艦と、短くとも数ヶ月から下手すると数年単位で活動を続けることに補給母艦とでは提供される食事の質に差が出るのではないかと俺は思っている。

まぁ、レスタリアスの士官用の御馳走なんてのは味も質も大したものだったが、普段の食事はかなり質が微妙って話だったからな。

お茶関係だけは妙に充実してるって話だったけど。

「酒は無さそうやなぁ」

「艦内の生活時間的には昼間だしね。どっちにしろ軍の大食堂には置いてないんじゃないかな」

「民間の食堂や酒場があるようです」

「なら酒はそっちかー」

「ティーナさんは本当にお酒がお好きなんですね」

「うちだけやない。ウィーもや」

「流石にこの時間から飲もうとはしないよ。お姉ちゃんはＴＰＯを弁えようね」

あちらはあちらでティーナとウィスカを中心に和気あいあいとした会話をしている。クギもすっかりうちのクルーに馴染んだようだな。後は俺に対する仰々しい言葉遣いをなんとかしてもらいたいんだが……説得は難航している。

「それじゃあ適当に食いもん調達して集まるか。席は……空いてるとこも多いし、確保するほどじゃないかな」

ドーントレスへの到着時間やアーティファクトショップを見て回った関係で昼飯時をちょっと外しているからか、席には余裕がある。というか、テーブルの数が滅茶苦茶多いからな。空いているテーブルも探せば沢山あるのだ。

「そうですね。それじゃあ行きましょう！」

ミミがごく自然に俺の腕を取って歩き始める。エルマに視線を向けると、肩を竦めながら手を振るような仕草を返された。良いからそのまま行けということらしい。ウィスカとクギもこっちについて

きたそうな顔をしていたが、それぞれティーナとメイに止められているようだった。どうやら今日はミミのターンらしい。

「沢山自動調理器がありますね！」

「テツジンと同じメーカーのもあるんかね？　流石にテツジンそのものは置いてないと思うが」

「最新型のフィフスはどうかわかりませんけど、型落ちのフォースはあるかもしれません」

「まぁ、テツジンの料理はいつも頂いてるし、他のを探してみるか」

「そうですね」

自動調理器と一口に言ってもその特性というか、ウリは様々だ。テツジンシリーズは全体的に平均以上というスペックを目指しているハイエンド機という位置づけのシリーズだが、他のメーカーだとフードカートリッジからいかに上質な肉を合成するかに心血を注いでいる機種だとか、甘いお菓子に特化した機種だとか、とにかく一口に栄養を圧縮しようという機種だとか、こだわりの強い機種から変わり種まで色々とある。

「お、あれなんて良さそうだぞ。ファストフード系に特化した機種っぽい」

「良さそうですね。違う種類のを買っていきましょう」

ホットドッグやハンバーガー、それにタコスやピザのようなものを中心に扱っている自動調理器を見つけたので、二人で並んで食事を買い込むことにする。テツジンだと注文しないと出てこないんだよな、こういうファストフードというかジャンクフード系の食事は。なんかちゃんとした、と言うのもなんか変だが、俺の場合だと主食におかず数点みたいなメニューが出てくることが多い。

不思議なことに、お任せにしていると人によって出てくるメニュ

ーが全然違うんだよな、テツジンは。トレーニングルームの運動量とか食事時の脳波とかを計測して最適な食事を提供するってことになっている。無駄にハイテクな自動調理機だ。
俺はホットドッグのようなものを、ミミはタコスロールのようなものを注文した。注文時にシェアメニューにチェックを入れておくと、シェアできるように輪切りにしてくれるのがなかなかに親切である。

「おー、兄さんこっちこっち」

ミミと二人で料理を手にみんなはどこかしらと大食堂を彷徨っていると、ティーナの声が聞こえてきた。見ると、既に席を確保して料理を並べているところである。メイの姿が見えないが、恐らく人数分の飲み物でも調達しに行っているのだろう。

「ほらー、お兄さん達はやっぱりシェアできそうなメニューにしてるじゃない」
「だってこれ珍しいから食ってみたかったんやもん」

ウィスカに文句を言われたティーナがカレーうどんのようなものが入っている丼を抱えて唇を尖らせている。それは別に良いんだが、そいつを食う時には十分に注意しろよ？　服に跳ねたら悲惨だぞ。ああ、いやこの世界の洗濯機は高性能だから別に汚れても簡単に綺麗にできるんだろうけどさ。

「ティーナのそれは伸びると美味くないだろうから、さっさと食っちまえ」
「のびる？」
「麺が汁を吸って膨らんだり食感が柔らかくなりすぎたりするんだよ、そういうのは。良いから食っちまいな」

「ほーん？　珍しい食いもんなのによう知っとるな、兄さん。あ、故郷の味ってやつ？」
「同じものではないと思うけどな。あと気をつけろよ。慎重に食わないと汁が跳ねて服が酷いことになるから」
「はっはっは、そんなん楽勝や」

これはダメそうですね。ティーナが来ている服の冥福を祈っておくことにしよう。

「見てください、我が君。此の身どもの国の料理がありましたよ」

そう言ってクギがニコニコしながら見せてきたのはどう見てもいなり寿司である。狐娘にいなり寿司とはなかなかにハマった組み合わせだが、よくそんなものがあったな？　というかヴェルザルス神聖帝国にはいなり寿司があるのか……和食文化だったりするのだろうか？

「おいしそうだな。俺とミミは無難そうなところを選んできたぞ」
「私はドワーフ焼きを選んできました」

そう言ってウィスカが掲げたのはお好み焼きめいた見た目のドワーフ焼きである。実際、味もほぼお好み焼きだったんだよな。クギが自分の国の料理を見つけて買ってきたから、ウィスカもそれに合わせたんだろうか。

「私はこれ」
「酒のつまみかな？」
「美味しそうだから良いでしょ」

エルマが買ってきたのは大量のからあげのようなものである。何

の肉かはわからない――というか多分自動調理器から出てきたものなのだろうから本物の肉ではないだろうが、見た目は鶏の唐揚げである。主食は？　本当にそれだけを大量に買ってきたのか？　なかなかに思い切ったことをするな。

「お待たせ致しました」

そう言ってメイがお盆のようなものの上に人数分のドリンクを載せて運んできた。どこから調達したんだろうか？

「それじゃあ揃ったし食うとするか。特になにもないけど乾杯ってことで」

「かんぱーい！」

めいめいドリンクのボトルを手に取ったところで俺が音頭を取ると、口の周りをカレー汁っぽいものを黄色くしたティーナが一番に応じてボトルを掲げた。こういうのは何かと素早いな、ティーナは。

なお、味の評価としてはどれも無難というか普通に美味しかった。ただ、いなり寿司は俺以外にはあまり受け入れられなかったようだ。

「美味しくないってわけじゃないんですけど、ご飯かと言われると……？」

「単体で食うなら悪くないと思うんやけど」

「ちょっと他のメニューと合わないような……」

「お酒には合わなそうね」

と割とボコボコである。俺は全然問題無いんだが、クギはしょんぼりしてしまっていた。

「美味しいと思うんですけれど……」

「俺は好きだぞ。ただ、酢飯と甘いおあげの組み合わせは食べ慣れていないと奇妙に感じるものなのかもな」
「残念です」
耳をぺったりと伏せてしょんぼりとしているクギは可哀想だったが、こればかりは好みの問題だものな。
まぁ、このようにクギがしょんぼりとする一幕はあったが、昼食自体は満足の行くクォリティであった。
なお、ティーナの服は俺の予想を裏切らずに戦死した。

#339　エンカウント（前書き）

原稿が一段落したので投稿再開！
お待たせ致しました（　，ω，　）

#339　エンカウント

「うー……うちの一張羅が」
「ゴシゴシしても被害が広がるだけだよ、お姉ちゃん……」

結局カレーうどんめいた食べ物の汁が服に盛大にはねてしまったティーナが涙目で服をゴシゴシしている。ああいうのってなかなか取れないんだよな。まぁ、この世界の全自動洗濯機なら多分問題なく取れてしまうだろう。いざとなったらメイに泣きつけばなんとかしてくれるんじゃないだろうか。

「ティーナの服もあれだし、戻る？」
「そうだなぁ。ここの娯楽関係の施設なんかも少し見てみたかったが、別に急ぐようなことでもなし。今日のところは戻るとするか」

愉快な売り物を売っている店だとか、超大型フードコートめいた食堂があることがわかっただけでも初日の収穫としては十分だろう。これからしばらくはこの補給母艦ドーントレスに厄介になるわけだし、そうすれば自然とドーントレス内部の様相もわかってくることだろうからな。

「ぱしゃりとしておきましたよ」
「おぉー……」

俺とエルマがそんな話をしている横ではミミの撮った写真を見たクギが目を輝かせていた。どうやら食事中にタブレット端末で撮っていたらしい。ミミはああやって初めて食べるものの写真を撮って収集しているのである。どうやら今回はカレーうどんめいたものを

食べるティーナといなり寿司めいたものを食べるクギの写真を撮ってあったようだ。あと山のように詰んだからあげめいたものを食べるエルマも。

「我が君の写真は撮らなかったのですか？」
「ヒロ様が食べてたのは普通のファストフードだったので……」

無難なメニューを選んでしまってすまない。今度は何か面白いものを選ぶから許して欲しい。
そうして俺達は大食堂を後にして再び商業区画に到達したわけなのだが。

「なんだか雰囲気が……」
「物々しいわね」

エルマの言う通り、商業区画は随分と物々しい雰囲気に満ち満ちていた。何が物々しいって、完全武装の帝国海兵達がそこらじゅうを闊歩しているのだ。
先程通りかかった時にも軽装のコンバットアーマーと軽レーザーライフル――あるいはレーザーカービンと呼ぶべきか――を装備した憲兵は見かけたのだが、今この辺りをうろついているのは一番軽装な者でも本格的な戦闘用のコンバットアーマーと標準仕様のレーザーライフルを装備した海兵で、半分以上は戦闘用のパワーアーマーを着込んだ重武装兵であった。

「まさか着くなり反乱とかクーデターとかじゃなかろうな……」
「兄さん、物騒なこと言わんといて……」
「お兄さんが言うと洒落にならないです」
「酷い。まぁそういう感じでは無さそうだが」

彼らは重武装ではあったが、殺気立ってはいない。恐らく戦闘は発生していないのだろう。だとすればこれは一体何なのか？

「ご主人様、速やかに通り抜けるのがよろしいかと」

「それはそうだな。逸れないようにさっさと通り抜けよう」

そう言って俺が先陣を切って歩き出したのだが、速攻で兵隊さんに声をかけられた。

「失礼ですが、キャプテン・ヒロ殿ですね？」

「アッハイ」

一度足を止めたが最後。ガッションガッションと足音を響かせて近寄ってきたパワーアーマー装備のガチムチお兄さん達に取り囲まれる。いや、もしかしたら中身がお姉さんの人もいるかもしれないが、パワーアーマーを装着していると中身がわからないんだよな。

というか何それは。その、黒光りするメイスめいた鈍器イズ何。腰にマウントしてあるけど見るからに急造感漂ってる。しかしそれだけに威圧感が凄い。パワーアーマーの膂力であんなもん振り回されたら人間なんぞ一撃で挽き肉になりそうだ。

「一体何の用なのだろうか。こんな風に取り囲まれたり連行されたりするようなことをした覚えが――」

「丁度良いところに通りがかってくれましたね」

抗議しようとしたところでセレナ大佐が現れた。もう逃げたい。絶対に厄介事じゃんこれ。

「……何の御用で？」

「今、ちょっとした取り締まりと言うかガサ入れをしているところなのですよ。危険なアーティファクトの類が隠匿されていたりしないかというね」

「なるほど。それは大変ですね。頑張ってください」
「ウィンダステルティウスコロニーで面白いものを斬ったそうですね？」

話を切り上げて立ち去りたかったのだが、俺の言葉に被せるようにセレナ大佐がそう言ってにっこりと微笑んだ。心当たりはある。あの殺人鉄蜘蛛のことに違いない。

あぁ、なるほど？　危険なアーティファクトってのはつまり、あの殺人鉄蜘蛛のことなのかな？　あれは確かに厄介だったな。レーザー兵器もプラズマ兵器もあまり効果がないようだったから、そういった武器を主武装としている帝国海兵にとっては鬼門とも言える存在だ。

「よく調べましたね、大佐殿。まぁ、俺も連中には名乗ったんで当たり前でしょうが」

一応彼女の部下の前なので、彼女に恥をかかせない程度の丁寧な言葉で応対しておく。今となっては俺も名誉貴族なのだからそこまで気にする必要は無いかもしれないが、一応雇い主だからな。大佐は。

「なんとなく状況が読めましたが、あっちで話した連中は何か聞こうとしても機密、機密で何も教えてくれなかったんですよ。だから俺もあの件については口を噤んでいたわけで、大佐殿に何も言わなかったのは悪意があってのことじゃないですよ」
「そうでしょうね。まぁ、それは良いです。実際のところどうなんです？　共有されたデータは見ましたが、実際に切り結んだ貴方の話を聞いておきたくて」
「ああ、斬った感触ですか？　硬いけど超重金属ほどではないし、感覚的には戦艦の装甲材よりは斬れたって感じですかね。レーザー

とプラズマには信じられないほど耐えてたんで、熱光学兵器よりも物理的な破壊のほうが有効なんじゃないか、と対応してた兵隊連中と話しましたが」

「なるほど……役に立つと思いますか？　これ」

そう言ってセレナ大佐がパワーアーマーを装着した兵士の腰部分にマウントされた粗雑な作りのメイスのような何かを指差す。

「パワーアーマーの膂力で囲んで棒で叩けば大抵のものはスクラップになるんじゃねぇかな……というか、それはどういう経緯で？」

「回収した例のモノの残骸を解析した結果、即座に用意できる対抗手段としてこれを配備することになったんですよ。物理的な破壊に対する耐性はレーザー兵器やプラズマ兵器に対するそれよりは低かったので。しかし、まさか恒星間航行をするこの時代にただの金属製の棒切れを部下に支給することになるとは……」

そう言ってセレナ大佐が頭痛を堪えるかのように眉間を揉み解し、周りの兵士達が乾いた笑いを漏らす。まぁそうね。レーザー兵器やプラズマ兵器を使って戦う軍隊が急拵えとはいえ戦艦の装甲材か何かを加工した鈍器を武器として支給されたらなんじゃこりゃってなるよね。

「こいつと同じようなブレードとか支給できなかったのか？」

そう言って自分の腰にぶら下がっている剣の柄をポンと叩いてみせたのだが、セレナ大佐は首を横に振った。

「簡単に言いますが、我々の使う剣というのはこれでも最先端の技術と貴重な素材をふんだんに注ぎ込んだ一品なんですよ。数本から十数本程度であればともかく、数百から数千という数をいきなり揃

えるのは不可能です。それに、振るうための剣術なくして有効に使えるものではありませんし。それは貴方も知っているでしょう？」
「それは確かに」

貴族や俺が使っている『剣』というのは紛れもない刃物なので、ちゃんと刃筋を立てなければものを斬ることはできない。凄まじい切れ味を持つのは確かだが、ちゃんと正確に刃を打ち込まなければ下手すれば折れるし、腹の部分で硬いものを殴打すれば砕け散る――らしい。俺はやったこと無いからわからんが。

「レーザー兵器やプラズマ兵器があれば普通は接近戦なんて起こらないもんなぁ……接近戦用の武器なんて支給されてないか」
「そうですね。パワーアーマーであれば相手が生身であれば武器すら必要としませんし」

分厚い装甲で覆われた手足が人間の限界を大幅に超える膂力で振り回されたらもうそれだけで人は死ぬからな。タックルなんぞ食らった日には自動車に激突されるようなもんだし。

「俺から言えることはこれくらいだから。それじゃあ俺達はこの辺で」
「手伝っていきませんか？」
「いきません」

笑顔で戯言をのたまうセレナ大佐にこちらも極上の笑顔で対応する。あんな殺人鉄蜘蛛と好き好んでエンカウントしたいと思うわけがないだろう。お前は何を言っているんだ。しかも今の俺はパワードニンジャスーツすら装備していない完全な生身である。生身でもアレ相手に勝てるとは思うが、そんなリスクを冒すつもりは更々無い。俺の珠のお肌に傷がついたらどうしてくれるんだ。

「チッ……まぁ、良いでしょう。明日からは宙賊対策に動いてもらいますので、そのつもりで」
「アイアイマム」

ビシッと敬礼をしておく。舌打ちは聞こえなかったことにしよう。というか、絶対にお断りだっつうの。今回の傭兵契約は宙賊その他に対する航宙戦におけるもので、未知のアーティファクトだかエイリアンだかとチャンバラするのは契約外だ。

「それじゃあお達者で――」

と、そう言ってこの場を辞そうとした瞬間、商業区画の一画――俺達が居る場所からほど近い場所で赤と緑の光が瞬いた。それと同時に高出力レーザーが着弾地点で発生させる炸裂音と、密閉空間でプラズマ兵器が使われた時特有の熱気が押し寄せてくる。

「クソが」
「お下品ですよ、キャプテン・ヒロ」
「そいつは失礼」

誰かの悲鳴と破砕音が鳴り響き、少し先の店舗から見覚えのある殺人鉄蜘蛛が姿を現す。
その数、なんと三体。

「クソが」
「お下品ですよ、セレナ大佐」
「それは失礼」

セレナ大佐とそんなやり取りをしつつ、腰の二本一対の剣を抜き

放つ。こんなのは契約外も良いところだが、これでセレナ大佐を見捨てて行くのは仁義にもとるし、何より寝覚めが悪い。

「メイ、サポートを。エルマは皆を頼む」

「承知致しました」

「了解」

俺の出る幕が無いと良いなぁ。無理だよなぁ。セレナ大佐との遭遇、それに別れて去ろうとした瞬間のこの事態。相変わらず俺の運命力は捻じ曲がってやがる。

#３４０　＞たたかう（前書き）

『ニア』にするか迷った（　ω　）

#３４０　＞たたかう

「メイ、前には出るなよ」

最辺境領域には流石にメイの製造元であるオリエントの店舗はない。通常のメンテナンスはメンテナンスポッドで何とかなるが、大きな損傷を受けると修理が難しいのだ。軍用戦闘ボットならある程度どうにかなるんだけどな。メイは超高級カスタム機なので、こういう部分には気を遣う必要がある。

「はい。投擲で戦います」

そう言ってメイはどこからか真っ黒い金属製の杭のようなものを取り出した。ああ、あれは確かめちゃくちゃ硬くて重い金属でできた投擲杭だ。カテゴリ的には投矢とか棒手裏剣に分類されるんだろうが、投矢と言うには重すぎるし、棒手裏剣と言うには太くて長過ぎる。というか、どこに隠し持っていたんだろう、あれは。

『ＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＩＫ！』

「うおおおぉぉ！？」

殺人鉄蜘蛛が甲高い叫び声のようなものを上げて暴れ回り、それに巻き込まれそうになった帝国航宙軍の海兵達が必死にその攻撃を避ける。パワーアーマー装備の連中はなんとか踏み留まって応戦しているが、やはりレーザー兵器やプラズマ兵器は効きが悪いようだ。

「どうする？」

「私達が前に出るしか――良いのですか？」

「良くはない。だが見捨てて逃げるほど腐ってもいない」
「好きですよ。貴方のそういうところ」
「そいつはどうも」

まぁ、ここで見捨てて逃げたらセレナ大佐からの信頼は失うことになるだろう。それはあまりよろしくない。傭兵として。
結局のところ傭兵も信用商売なので、お得意様であるセレナ大佐や帝国航宙軍の信用を失うというのは大変な痛手であるのだ。逆にこういう場所で踏み留まって助ければ、大いに信用を稼げる。ここで逃げるという手はない。
何より、ここで逃げると傭兵達の間でも舐められることになるからな。あいつはいざという時には逃げるチキン野郎だと言われて舐められるのは御免だ。まぁ、本当に駄目そうなら逃げるけど。命あっての物種と言うし。勝算もなく危険に突っ込んで死ぬのは勇敢ではなく蛮勇である。

「引きつけるからタイミングを合わせてメイスで一気に叩け！」

大声で周りの連中にそう言いながら飛び出し、滅茶苦茶に暴れている殺人鉄蜘蛛のうちの一体に躍りかかる。殺人鉄蜘蛛の方もパワーアーマーどころかコンバットアーマーすら着込んでいない俺を与し易い相手と判断したのか、それとも明らかに接近戦武器に見える二本一対の剣を脅威と見たのか俺へと向き直って突進してきた。

「おおっと！」

咄嗟にその突進を横っ飛びに避ける。
殺人鉄蜘蛛は然程デカくはないが、それでもフォークリフトとかゴルフカートくらいの大きさはある。しかも全身未知の金属でできているので、見た目以上に重量もありそうだ。突進なんぞを食らっ

た日には骨がバッキバキに折れるんじゃなかろうか。

『ＥＥＥＥＥＥＥＩＧ！』

突進を避けられたのが気に入らなかったのか、殺人鉄蜘蛛が六本足のうち一番後ろの二本だけで立ち上がり、残りの四本の腕――いや足？　で滅茶苦茶に斬りつけてきた。その斬撃を両手の剣で弾き、いなしながら考える。足が六本なら蜘蛛というより虫では？　まぁどうでも良いか。

というか思ったより硬いな？　あれ、こんなに硬かったっけ。ああ、パワーアーマーの筋力アシストが無いから硬く感じるのか？　セレナ大佐に適当なこと言っちまったな。

『ＯＯＯＯＹＧ！？』

ガォン！　と物凄い音が鳴り響き、殺人鉄蜘蛛の身体が傾いだ。なんだかわからんがチャンスなので、素早く殺人鉄蜘蛛の足に刃を走らせて三本ほど付け根からざっくりと斬り落としてやる。

ああ、付け根の部分はそうでもないな。この部分とブレードとか装甲の部分をごっちゃにしてたか。

流石にこれには殺人鉄蜘蛛もたまらなかったのか、明らかに注意が散漫になった。眼前の脅威を排除すべきか、どこからか飛んできたらしき遠距離攻撃を警戒するか迷ったのだろう。うん、こうやって迷いを見せる辺りは生き物っぽいな。クギはこいつを生き物だと言っていたが、それは本当のことなのかもしれない。

『ＡＡＡＹＩＧ！？』

ガォン！　と再度轟音が鳴り響き、殺人鉄蜘蛛が横倒しになった。これはあれじゃな？　もしかしなくてもメイの投擲杭じゃな？　も

しかして横っ腹を貫通しているのだろうか？　明らかに殺人鉄蜘蛛の動きが鈍くなっているんだが。

「かかれ！」
「おぉぉ！」
「くたばれ！」

殺人鉄蜘蛛が転倒したのを好機と見た帝国航宙軍のパワーアーマー兵が床の上でもがく殺人鉄蜘蛛に殺到し、粗雑な作りのメイスで滅多打ちにし始める。うん、これはひどい。みるみるうちに殺人鉄蜘蛛のボディが拉げ、足が叩き折られて不気味な紫の液体を垂れ流すスクラップになってしまった。やはり囲んで棒で叩くのは強い。

チラリとメイに視線を向けると、ちょうど例の投擲杭を構えたところだった。構えた、と思ったら既に投擲杭が投げ放たれており、セレナ大佐が切り結んでいた殺人鉄蜘蛛が轟音と共にたたらを踏む。うん、あんなの食らったら身体に大穴が空きそうだ。メイは強いなぁ。

「ご主人様、もう一体はいかがなされますか？」
「アレに近づくのは御免被りたい」

最後の一体はレーザー兵器とプラズマ兵器の集中砲火を受けて動きが鈍くなってきているようだった。熱光学兵器で表面装甲が蒸散爆発を起こしたり、高温で燃え尽きたりはしていないようだが、いくらかでも熱は内部に伝わっているのかね？　外殻を高熱で炙られ続けて体内が蒸し焼きにされているような感じなのかもしれない。

まぁ、そのせいで奴の周囲は地獄のような熱気に包まれている。ドーントレスの空調は大丈夫かね？　異常加熱で壊れたりしなければいいが。

「はぁっ！」

裂帛の気合を込めて振るわれたセレナ大佐の剣が殺人鉄蜘蛛の本体前半分程を両断し、殺人鉄蜘蛛が動かなくなる。あの装甲を真正面から叩き切るとかゴリラか何かかな？　まぁ、力任せに叩きつけるだけでは斬れそうも無いほど奴の外殻は硬かったので、技術もあってのことなのだろうが。

「キャプテン・ヒロ。聞いていたよりも硬く感じたのですが」
「足の付根あたりは柔らかかったんだが、ブレード部分とか装甲部分は記憶よりも硬かったな。思い違いをしていたかもしれん、すまん。何せ切り結んだのは一瞬だったからな」
「それなら仕方ありませんね。あちらも片付きそうですか」

集中砲火を受けて地獄のような熱の中心でもがいていた最後の殺人鉄蜘蛛が床に崩れ落ち、バラバラになる。

「片付いたようだが……しかしなんでまた大佐がこんなことを？もっと別の部署の仕事なんじゃ？」

そう聞くと、セレナ大佐はなんとも言えない表情を浮かべて肩を竦めてみせた。どうやら機密情報か何かで話せないらしい。

「まぁ装甲としてはかなり有用な……ああ、そういうことか？」
「私達の主な目的はこの辺りの宙賊を叩いて大人しくさせることです」
「なるほど」

主な目的は宙賊対策だが、その他にこの殺人鉄蜘蛛関連の仕事も振られたわけか。こいつの熱光学兵器に対する耐性はかなりのもの

だものな。もしこいつの装甲――いや甲殻か？　とにかくこいつの防御力を戦艦やパワーアーマー、コンバットアーマーなんかに活用できるようになれば有用なのは間違いない。熱対策をどうにかする必要はありそうだが。

「俺にはあまり関係無さそうだし、頑張ってくれ。というかできれば関係させないでくれ」

「考えておきます」

その返事は絶対巻き込むつもりのやつじゃないか。勘弁してくれ。

そうは思っても彼女は限定的ながら雇用主として俺の指揮権を持っているので、彼女の権限でそれっぽい場所に配置されてしまうと俺の悪運が彼女の望む事態を引き寄せそうな気がする。つまり詰みです。諦めましょう。

「ご主人様」

「ああ、メイ。ナイスサポートだった。身体におかしいところはないか？」

「はい。ご心配してくださりありがとうございます。ご主人様もお怪我などはありませんか？」

「大丈夫だ。とにかく今日のところはもう船に帰って休もう」

「はい」

そうして俺はメイと一緒にミミやエルマ達と合流し、今度はトラブルに巻き込まれることなく船に戻ることが出来た。初日からこの調子だと先が思いやられるな……。

#３４０　＞たたかう（後書き）

１７日にワクワクワクチンチンチンなので数日から一週間ほどくたばると思います（　ω　）（ゆるして

#３４１　星系地図とにらめっこ（前書き）

１７日火曜日に三回目のワクチン接種に行くので、数日から一週間くたばります。
ゆるしてね！（　，ω，　）

#３４１　星系地図とにらめっこ

セレナ大佐達と別れ、ブラックロータスに戻ってきた俺達は解散してそれぞれ思いのままに過ごすことにした。今日一日というか、ドーントレスの艦内時間で明日の朝八時までは自由休憩時間としたのである。

投擲のみとはいえ戦闘に参加したメイは、念のためメンテナンスポッドに入ると言って半ば彼女の私室と化しているコックピットへと戻っていった。

「ヒロ様はこの後どうするんですか？」

「俺？　休憩スペースでケンサン星系の星系地図を眺めながら明日どうやって動こうか考えようかと思ってた」

「相変わらず真面目ねぇ……私はもうお酒飲むわ」

「うちも飲むー」

「まだ昼間だよ、お姉ちゃん」

「ええやん。明日から忙しいんやし」

「オフの時はしっかり休めばいいのよ。ウィスカも飲みましょう？　とっておきの出すわよ」

小言を言うウィスカを飲兵衛二人が篭絡しようとしている。流石に二対一ではウィスカもひとたまりもあるまい。こりゃ早々にへべれけ三人組ができあがりそうだな。

「ミミはどうするんだ？」

「そうですねー……ヒロ様と一緒に居ても良いですか？」

「良いぞ。クギは――」

「クギはこっち」

「一緒に飲もうなー」
「おい、無理矢理飲ませるんじゃないぞ」

クギは飲兵衛達に連れ去られてしまった。というか、クギは酒を飲めるんだろうか？　まぁ無茶な飲み方をしないように気をつけてくれればいいか。

「メイ、メンテナンス中のところすまんが、注意して見ておいてくれ」
『はい、ご主人様』

メンテナンス中でもメイはブラックロータスを完全に掌握している。当然ながら、艦内の様子はメイは全てまるっとお見通しだ。メイに見ていて貰えればクギもきっと大丈夫だろう。

「それじゃあ始めるか」
「はいっ！」

食堂の方に歩き去った四人を見送り、ミミと一緒に休憩スペースのソファに腰掛けてホロディスプレイを起動する。

「通常の星系であれば気にするべきはどこにコロニーがあって、どこに身を潜めやすい小惑星があって、交易船や採掘船がどういうルートで航行するかってところだが、エッジワールドだともう少し見方は単純になる」
「はい」

まずは星系地図上にドーントレスの停泊宙域をマークする。

「これがドーントレス。んで、このケンサン星系のハイパースペー

ス突入口はここと、ここと、ここだな」
「そうですね」
一つはグラッカン帝国の辺境へと接続しているハイパースペース突入口で、他の二つは未探査星系へのハイパースペース突入口である。
「で、まずはこの三つのルートがメインのルートだな」
ドーントレスと三つのハイパースペース突入口を結ぶラインを星系地図上に引く。商船の類は基本的にドーントレスと辺境へのハイパースペース突入口を行き来することになる。冒険者や探索者が未探査星系から持ち帰ってきたアーティファクト等の戦利品はドーントレスに集まっているし、他にコロニーの類が無いのだから、持ち込んだ商品を卸す先もドーントレスしかないからな。
そして未探査星系に向かうルートは冒険者や探索者と呼ばれる連中が『仕事』へと向かうルートだ。彼らは未探査星系へと向かい、マッピングデータや資源情報を持ち帰ってグラッカン帝国政府へと売り捌く。その他にも惑星などに降下を行って地表の探査や、アーティファクトの探索などを行うわけだな。
もっとも、アーティファクトとは言っても大半はちょっとめずらしい形の鉱石だとか、そういったものが大半で、未知のエイリアンの手によるテクノロジーでできた本物の遺物なんてものはそうそう見つかるものではない。もし見つかれば物凄い値がつくらしいけどな。
「冒険者や探索者って宙賊に襲われるんですか？」
「他に獲物がいないか、狙いづらい場合は襲われることがある。ただ、連中の船は交易に使われる輸送艦に比べれば重武装だから、宙賊にとってはリスキーな相手だろうな。何せ基本的には帝国航宙軍

や星系軍の庇護下にない場所で活動する連中だから、自衛手段はしっかりと持っている」

場合によっては宙賊だけでなく宇宙怪獣なんかも相手にすることがある連中だ。駆け出しの傭兵よりも装備も戦闘技術も上、なんて手合もゴロゴロいる。

「ただ、そういう連中を狩って装備を剥ぎ取って自分のものにしている宙賊も最辺境領域にはいる。だから、最辺境領域の宙賊は今までに戦った連中と比べると『質』が高いのが多いから、注意が必要だ」

「なるほど。あと、増援に注意、でしたよね？」

「お、覚えてたな？　そうだ。最辺境領域では戦闘が長引いても帝国航宙軍や星系軍が来る可能性が低い。だから最辺境領域の宙賊は傭兵とかの強い敵を相手にする場合に仲間を呼んで獲物を数で押し潰そうとしてくることがある」

これがセキュリティレベルの高い星系だと帝国航宙軍や星系軍が駆けつけてきて一網打尽なのだが、最辺境領域ではそうもいかない。

「だとすると、今までに比べてかなり危ないですね？」

「俺達だけでやるならな。ただ、今回はセレナ大佐の対宙賊独立艦隊と、俺達以外にも大量の傭兵がこの星系に来てる。数で押し潰される心配はあまりしなくてもいいだろう」

「なるほど。そうすると、私達はどう動くのが良いんでしょうか？」

「いつもなら小惑星帯でブラックロータスを囮にして釣りをするんだけどな。今回はハイパースペース突入口近くで網を張るのもアリかなと思ってる」

そう言って俺は未探査星系へと繋がっているハイパースペース突

入口周辺をマークした。

「ハイパードライブの不調を装って宙賊を誘き寄せて、宙賊が寄ってきたところをブラックロータスから出撃して叩くわけだな」

「いないいないばあ！　作戦、ってわけですね」

「良いね、いないいないばあ作戦。んで、逃げようとしてもアントリオンが邪魔をするってわけだな」

味方の増援が来る前に敵の増援が大量に押し寄せてくると危ないかもしれないが、そこはクリシュナとブラックロータスの火力でなんとかなるだろう。ただ、宙賊連中が対艦反応魚雷なんかを装備していた場合にはブラックロータスに危険が及ぶから、メイには十分に注意してもらう必要があるな。もっとも、いくら若干宙賊の質が良くても、ブラックロータス相手に真正面から魚雷を捻り込むのは難しいと思うが。

「ミミは何か作戦を思いつかないか？」

「私ですか？　うーん……」

ミミが頬に手を当てて考え込む。こうして宙賊をどう倒すか考えるってのはオペレーターというか、傭兵としてステップアップするのに重要なことだからな。ミミにもぜひ考えてもらうとしよう。

離れた場所から微かに聞こえるエルマ達の酒盛りの音を聞きながら、俺は暫くの間ミミと一緒に星系地図とにらめっこを続けるのであった。

#３４２　計画通りとはなかなかいかない（前書き）

ギリギリセーフ！（ ，ω，　）

#３４２　計画通りとはなかなかいかない

翌日。俺達はドーントレスから出撃することにした。艦内時間における朝に起き、身支度や食事、運動などいつものルーチンを済ませてからの優雅な出撃だ。

「酒は残っていないようで何よりだ」
「大変ご迷惑をおかけしました……」

サブパイロットシートに座るクギのテンションはどん底である。飲兵衛どものペースに付き合う事になった結果、彼女は結構早い段階でべろんべろんに酔っ払って気持ちよくダウンした。そしてスヤスヤと朝まで眠ったわけだが、そこで彼女に二日酔いが襲いかかったのだ。

朝、いつもなら真っ先に起きてきているクギが起きてこないことに気付いたミミがクギの様子を見に行くと、ベッドの上でクギがうんうんと唸っていたらしい。彼女はミミの介助でなんとか医務室まで辿り着き、朝から簡易医療ポッドのお世話になったというわけだ。

「もうお酒は懲り懲りです」
「下戸仲間ができて俺は嬉しいよ」

ミミもそこまで酒に強いわけではないが、普通に飲めるクチだ。クギは俺と同じでアルコールにあまり強くないらしい。俺としては若干肩身が狭かったから、下戸仲間が出来て嬉しい限りである。そのうち炭酸飲料の沼に引きずり込んでやろう。

『それで、今日のプランは？』

メインスクリーン越しにエルマがそう聞いてくる。これに関しては昨日のうちにミミと話し合って方針を既に決めてあった。

「テスカロープ星系に繋がってるハイパーレーン突入口とドーントレスの間に小惑星帯が被っているポイントがある。そこでいつもの待ち伏せ作戦だ。アントリオンはパワーをカットして小惑星の陰で潜伏、宙賊どもが罠にかかったらクリシュナがブラックロータスから飛び出すから、タイミングを見計らってグラヴィティ・ジャマーを展開しつつ参戦してくれ」

『了解』

エルマが神妙な顔でそう言って頷く。

テスカロープ星系というのは俺達が今いるケンサン星系に隣接する二つの未探査星系のうちの一つだ。まだ調査中だが、現時点で既にそこそこ有用なガス資源が採取できそうなガス惑星が確認されているらしい。その先の星系も名前だけはつけられているが、絶賛探索中とのことである。

『ご主人様、出撃許可が下りました。まもなく発進致します』

「わかった。安全運転で頼む」

俺達以外の傭兵も続々と出撃しているみたいだからな。ぶつけてくるヘボもいるかもしれないから気をつけないといけない。まぁ、ブラックロータスに突っ込んできても損傷するのは向こうだろうと思うが。シールドも装甲も分厚いからな、ブラックロータスは。

「メイさん、目的地の座標を送っておきますね」

『はい、ミミ様。ありがとうございます』

ミミとメイのやり取りを聞きながらクリシュナの状態をチェックしておく。ティーナとウィスカの仕事を疑うわけじゃないが、こういうチェックは何度しておいても良い。横着して『二人がちゃんとやってるから絶対ヨシ！』とかやっていると思わぬところで足元を掬われるかもしれないからな。

「クギ、一緒に機体の状態をチェックするぞ」
「はい、我が君」

メインスクリーンに機体の情報を表示し、セルフチェックプログラムを走らせて各項目を二人で確認していく。これもサブパイロットとしての修練だ。チェック項目は多岐にわたるが、特にサブパイロットが注意すべきなのはチャフやフレア、緊急冷却装置、シールドセルなどのサブシステムが正常に動作するかどうかと、ジェネレーターの出力振り分けが正常に作動するかどうかだ。

サブシステム関係は残弾というか使用回数がちゃんと最大になっているかどうかもチェックするべきだな。可能であれば実弾兵器の残弾チェックや各種スラスターの動作チェックなどもしたほうが良い。

「当然俺もチェックはするし、その前にティーナとウィスカがチェックしてる。それでも絶対にこの辺りのチェックは怠っちゃならない。万が一サブシステム周りとかジェネレーター周り、スラスター周りに不調があったらそれだけで命取りになるからな」
「はい、我が君」

武器に不調があってもサブシステムと足回りが生きていれば逃げる事はできる。だがその逆は難しい。基本的にこの辺りのサブシステムを利用する瞬間ってのはある程度追い詰められた時というか、防御的な行動を取る時だからな。いざという時に使えないとそれが

致命傷になりかねん。
　ということをクギに説明すると、彼女は素直にコクコクと頷いて聞いてくれる。ついでにその隣に座っているミミもウンウンと頷いている。この辺はオペレーターの心得でもあるからな。つまりコックピットにいる全員が各々で何度でもチェックする項目なのだ。命に関わることなので効率性なんぞ度外視して誰が何度チェックしても良い。
　そうこうしている間にブラックロータースはドーントレスから発進し、エルマの乗るアントリオンもブラックロータースにドッキングした。

『ご主人様、指定座標へ移動を開始します』
「了解。いつも通りパッシブレーダーの感度は最大にして、もし応援要請や救難信号を拾ったらそっちを優先してくれ」
『アイアイサー』

　俺達が宙賊を狩るために使う能動的な手は『釣り』だが、既に宙賊と戦闘が発生している地点があるのであればそちらを美味しく頂くほうが効率が良い。釣りはどのタイミングでも始められるが、宙賊との突発的な遭遇は一期一会だからな。俺達なら取り逃れることもない。

☆★☆

　事が起こったのは間もなく目的地へ到着しようかというタイミングだった。

『ご主人様、救難要請を受信しました。発信元はスクリーチ・オウルズ――探索者船団のようです』
「おっと、もう少しってところで。それじゃあそっちに転舵してく

れ」
『承知致しました。到着まで凡そ百二十秒』
「だそうだ。良いな？」
『アイアイサー。アントリオンの初陣を華々しく飾ってやるわ』
「違う意味で華々しくなってくれるなよ」

勢い込むエルマにそう言ってミミとクギにも視線を向ける。クギは初の実戦にかなり緊張しているようだが、ミミは落ち着いたものだ。

「ジェネレーター出力を戦闘モードに。ウェポンシステム起動」
「はい。ジェネレーター出力、戦闘モード。ウェポンシステム起動致します」

俺の指示に従ってクギが慎重にサブシステムを操作し始める。うん、速さはないが正確で結構。まぁこれくらいでドジられても困るが、仕事が丁寧なのは良いことだ。慣れれば黙っててもも速度は上がるだろうしな。

「ミミ、脅威度の振り分けは火力順だ」
「わかりました！」

アントリオンがいるなら足が早くて逃げられるというのはあまり警戒しなくて良い。単純に火力の高い艦を脅威と考えれば良いから楽なもんだ。

『間もなく接敵します。即座に射出致しますが、それでよろしいですね？』
「勿論だ」

俺の返事が終わるか終わらないかというタイミングでブラックロータスが轟音を響かせ、通常空間へとワープアウトする。

『後部ハッチ開放。カタパルト作動、射出致します』

「オーケー。行くぞ！」

「「はい！」」

ミミとクギ、二人の返事と同時に電磁カタパルトが作動し、ブラックロータスのハンガーから宇宙空間へとクリシュナが射出される。

さて、久々のドンパチだ。派手に行こうじゃないか。

#343　乱戦（前書き）

天気が悪いとなかなか捗りませんね（ ˇ ω ˇ ）

#343　乱戦

「こちら傭兵ギルド所属艦、クリシュナだ。今から援護する。持ち堪えろ」
『助かる！　くそっ！　しつこい奴等だ！』

ハンガーから飛び出すと同時に転舵し、戦闘が発生しているエリアへと向かう。ザッと見た感じ、襲われている側は中型艦二隻と、小型艦が……うーん、三、四隻か？　乱戦になっててわかりにくいな。

「ヒロ様、敵味方識別信号を受信。反映します」
「了解」

メインスクリーンに映る船のうち、探索者船団に所属する船が緑色のフレームで友軍としてハイライトされる。それ以外の船は敵艦として赤いフレームでハイライトされた。

「とりあえず数を減らして敵を引き付けよう。エルマは援護に回ってくれ。グラヴィティ・ジャマーの展開タイミングは任せる……ああ、でも食えそうなのはどんどん食っていって良いからな。採算は取れるだろうし補給の心配もいらないだろうから派手に行け」
『アイアイサー。久々に暴れさせてもらうわよ』

そう返事しつつ、エルマの操艦するアントリオンがクリシュナから離れていく。こっちは真っ直ぐ突っ込むつもりだが、エルマは戦場を回り込むつもりらしい。恐らくクリシュナの攻撃で戦場から距離を取って様子見をしようとする宙賊艦を食うつもりだろう。激し

い攻撃に動揺して一旦安全地帯に逃げようとしたところを叩くわけだ。

「小物が多いな。ブラックロータスも攻撃に参加してくれ。魚雷持ちには注意しろよ」

『はい、ご主人様』

ブラックロータスの総火力はクリシュナを大きく上回っている。当然ながら同格の純粋な戦闘艦と殴り合いをするのは分が悪いが、格下の小型艦を相手にした場合の制圧力は圧倒的だ。こういう場面ではブラックロータスにも前に出てもらって殲滅速度を上げたほうが良い。

「我が君、接敵します」

とは言え、アントリオンの参戦にもブラックロータスの参戦にもまだ今少しの時間がかかる。まずは俺達が乗るクリシュナの出番だ。

「よし、突っ込むぞ！」

探索者船団の小型戦闘艦と宙賊艦が入り乱れて戦っている戦場へと突入する。おっと、早速探索者の小型艦が一隻ピンチだ。三隻の宙賊艦から集中砲火を受けて今にも落ちそうな船の援護に入ることにする。

「そぉいっ！」

『うおぉぉあぁぁぁぁぁぁっ！？』

『なッ――……』

「ひゃーっ！？」

「わーっ！？」

探索者艦のケツにチクチクとレーザー砲を浴びせている三隻の小型宙賊艦のうち一隻に戦場に突入した速度そのままの体当たりを仕掛け、ついでにもう一隻には重レーザー砲と散弾砲の一斉射撃をお見舞いしてやった――のだが、体当たりを食らった艦と射撃を食らった艦だけでなくクギとミミまで叫んでいる。ああ、そういやここまで荒っぽい手を使ってみせるのは初めてだったか？

「クギ、シールドセル起動。ミミは集中しろ」
「は、はひっ！」
「わ、わかりました！」

あたふたしながらも二人が指示通りに動き始める。クリシュナの体当たりを食らった宙賊艦はシールドが完全に飽和した上に半壊して行動不能に陥り、近距離で全力射撃を食らった宙賊艦は一撃で爆発四散したようだ。残された一隻が逃げようとしているので、そのケツを追いかけて重レーザー砲を連続で浴びせてやる。

衝突によってかなり減衰していたクリシュナのシールドは急速に回復を始めているし、狙われていた探索者艦はなんとか危機を脱してシールドを再起動できたようだ。それじゃあ目の前の宙賊艦にトドメを――と思ったところで横合いから何かが飛んできて宙賊艦の横っ腹に突き刺さり、宙賊艦が爆散した。

『ごめん、逃げるだろうと思って撃ってたのよ』
「気にすんな。その調子だ」

どうやらエルマのアントリオンが先にシーカーミサイルを撃っていたらしい。流石のエルマもまさか体当たりで一隻航行不能にするってのは予想外だったのかね。ミミに見せてないってことはエルマにも見せてないもんな。その可能性はあるか。

「選り取り見取りだ。片っ端から食うぞ」

探索者艦への攻撃に夢中になっている宙賊どもの船を片っ端から食い散らかしていく。エッジワールドの宙賊艦の性能が他の中域の宙賊艦より多少マシとはいえ、殆どの船が残骸から無理矢理でっち上げたキメラ艦であるということに変わりはない。シールドさえ破ってしまえばいとも容易く船体が崩壊していく。

『畜生が！　他の奴等はまだか！？』

「増援が来るよりお前達が全滅する方が早そうだな？」

『スカしてんじゃねぇぞてめぇぇぇ！』

宙賊艦の攻撃がクリシュナに集中し始める。ああ、いけませんお客様。ああ、お客様お客様お客様。あー、いけませんお客様。

俺だけに集中すると大変なことになるぞ？

『アラート！？　うわぁぁぁぁぁっ！？』

『げぇっ！？　いつの間にデカブツが！？』

『うわっ！　やめ、やめぇ――！？』

大量のシーカーミサイルとレーザー弾幕がクリシュナを避けて飛来し、宙賊艦に突き刺さって大爆発を起こす。

『制圧完了です』

俺が宙賊艦を引き付けて暴れている間に戦闘エリアへと接近したブラックロータスの一斉射撃によって宙賊艦が文字通り一網打尽にされた。うん、やっぱりデカい機体は手数が多いな。

「ヒロ様、所属不明艦が接近中です。間もなく戦域にワープアウトしてきます」
「了解。敵増援の可能性も高いから各自臨戦態勢で」
「はい、我が君」
「はい！」
『アイアイサー』

ドォン！　という轟音を立てて多数の艦船がワープアウトしてくる。その艦影には一つとして同じものはなく、意味があるのかどうかわからない攻撃的な装飾がふんだんに取り付けられ、ドクロマークのペイントやらなにやらがゴテゴテと塗りたくられ……まぁ、つまりワープアウトしてきた艦はどう見ても宙賊艦であった。

その数、僅か五隻。

「エルマ、逃がすな」
『当然。グラヴィティ・ジャマー起動』

腹の底に響くような重低音のようなものが鳴り響いた。それ以外に何か変わったことが起きた様子は無かったが、超光速ドライブの起動は確かに阻害されているようだ。超光速ドライブの起動スイッチが一瞬で暗くなって使用不能になった。セーフティロックがかかったようだ。

『な、なんだ！？　超光速ドライブが起動できねぇ！？』
『セーフティロックが外れねぇ！　おいやめろ、こっちに来るな！』
「ははは、どこへ行こうと言うのかね？」

転舵して蜘蛛の子を散らすように逃げようとし始める宙賊艦のケツに食らいついて一隻ずつ撃破していく。俺達で四隻、残りの一隻

は探索者艦が仕留めたようだ。
『はっはぁ！　やってやったぜ！　クソどもが！』
『い、生き残った……今回ばかりは駄目かと』
探索者達は興奮したり安堵したりと大変なようだ。こっちはそれどころじゃないというか、ここからがお仕事の本番なんだが。
「よーし、ブラックロータスは回収作業に入ってくれ。クリシュナとアントリオンは警戒を続けよう」
『承知致しました』
『アイアイサー』
テキパキと仕事をしていこう、テキパキと。こうして回収している間に他の宙賊が遅れて到着してくれたらラッキーなんだがな。おっと、探索者艦を放置しておくわけにもいかんか。
「改めて挨拶しとこう。俺はキャプテン・ヒロ。傭兵ギルド所属の傭兵だ。そっちはえーと……スクリーチ・オウルズだったか？」
『ああ、そうだ。救援感謝する。私は代表者のキャプテン・ソウルズだ。謝礼に関してはすまんがドーントレスに戻ってからの手続きになる』
探索者の中型艦二隻のうち一隻から応答があった。男の声だな。歳はそこそこいってそうだ。
「構わんよ。まぁ賞金もあるし、俺達は軍に雇われて宙賊を狩ってるんでな。お安く済むんじゃないか？　ラッキーだったな」
『クソどもに襲われてラッキーなものか。まぁ不幸中の幸いではあるかもな』

キャプテン・ソウルズが嘆息混じりに返事をする。確かに集中攻撃を受けていた小型艦は今にも落ちそうなくらいにダメージを負っていたし、修理費を考えると頭が痛くなるのも無理はないか？　完全に他人事だからご愁傷さまという感想しか湧いて出てこないけど。

「なら少しでも元を取っていけ。そっちが撃破した分はそっちの取り分なわけだしな。こっから先に出てくる分はサービスしてやるよ」

『嬉しくて涙が出そうだ。何にせよそうさせてもらおう。おい、回収ドローンを出せ。ヘクトルの船はトラブる前に着艦させろ』

向こうは向こうで戦後処理にかかったようなので、こちらも作業に入ってもらうとしよう。俺達とエルマは警戒を続けるけどな。

#３４４　せんしてぃぶふぉっくす（前書き）

ちょっと寝不足で遅れました（　ω　）（何もかも太閤立志伝５ＤＸが悪い

#３４４　せんしてぃぶふぉっくす

あの後傭兵の船団が遅れて到着してきたが、既に宙賊が撃退されているのを確認するなり去っていった。俺達でもそうするので、何もおかしいことはない。こういうのは早いもの勝ちだからな。

「なるほどー。小惑星帯に引っかかって強制的に超光速航行状態から弾き出されちゃったんですか」

『そうなんですけどそうじゃないんだよね。俺はミスってないんだよ。まだこの星系の星系地図は精度が甘くてさぁ』

ミミがスクリーチ・オウルズのオペレーターの兄ちゃんに愚痴られている。思いっきり聞き流してるけど。向こうは若い女の子とお話ができてご満悦のようだ。でもやらんぞ。ミミは俺のだから。

「ティーナ、回収作業の進捗はどうだ？」

『ぼちぼちってところやね。やっぱ兄さんの行ってた通り、パーツの質は若干ええわ。整備がガタガタやけど』

「いくら良い装備でもメンテナンスがしっかりしてないと本来の性能がなぁ……」

『レーザー砲は弾薬を気にせず撃てるのが強みですけど、メンテナンスフリーってわけじゃないですからね』

『問題はその質の良い装備も一手間かけないと買い叩かれるし、そもそも需要が微妙ってとこよね』

「それな」

エルマの発言に心から同意する。確かにここらの宙賊の装備は若干良い。他の星系の宙賊に比べれば整備状態はアレとしても高品質

だ。しかしこの星系に仕事で来るような傭兵にとっては物足りない品質だし、探索者にとっては自分達が使っている装備と指して変わらない性能のものである。
　そしてドーントレスに交易に来るような民間輸送船にとっては無用の長物だ。まぁ、空荷で帰るのも何だし、整備状態はともかく質はそこそこだからジャンク品として積んで帰っても良いかな？　くらいの品である。

『買い叩かれるんやろなぁ』
「いっそじっくり整備してもらって、高く売れそうな場所に持っていくってのも手だけどな」
『そこらへんは兄さん達で考えといてや。とりあえずうちらはジャンク品一歩手前の装備をピッカピカに磨き上げることにしとくわ。今回は船はでっち上げなくてええんよね？』
「ああ、今回はいい。船の需要がないからな」

　どんな船でも短距離の輸送ができるなら大歓迎、みたいな特殊な特需環境でもなければ宙賊艦の残骸からでっち上げたキメラ艦なんてそうそう売れるものじゃないからな。ただ荷物を運ぶだけならそれでも構わないんだろうが、そういう船に正規の高度な火器管制システムやサブシステムを組み込むのは大変に手間というか、無理をして組み込んでも信頼性が今一つらしい。肝心なところでエラーを吐いて武器が使えないとか、サブシステムが作動しないだとか、そんなことが起こったら戦闘艦や探索艦としてはあまりに致命的だ。だから、キメラ艦を使うのは宙賊か駆け出しの交易商人と相場が決まっている。
　で、このケンサン星系には駆け出し商人なんてものはいない。今回助けた探索者連中はもちろんのこと、交易商人達もしっかりと護衛を付けていたり、そもそも交易商人自体が重武装の武装商船団だったりする。そして交易商人と傭兵と探索者以外でこの星系にいる

のは基本的に軍人、軍属である。急拵えのキメラ艦の需要などゼロなのだ。

『わかったわ。もう少しで回収は終わるで』

「はいよ。終わったら連絡してくれ」

ティーナ達との通信を終え、すぐ隣のサブパイロットシートに目をやる。サブパイロットに座っているクギは何をしているのかというと、何やら目を瞑って瞑想のようなことをしているようであった。別に寝ているとかそういうわけではないらしく、頭の上の獣耳はぴくぴくと動いている。うーん、そうやって動かされるとついつい手を伸ばしてしまいそうになるな。しかしこれは何なのだろうか？彼女なりのイメージトレーニングか何かなのかね。

と、ピコピコと動くクギのミミを眺めていたらその頭越しにミミと目が合った。いつの間にか向こうのオペレーターの兄ちゃんとの話は終わっていたらしい。ミミもクギの耳が気になっているようだが……なんとなく悪戯心が沸いてきたぞ。

そっと気配を気取られないようにクギの頭に顔を近づけ、ピコピコと動く獣耳にそっと息を吹きかけてみる。

「ひゃあぁんっ！？」

クギが今までに聞いたことが無いような悲鳴を上げてブルブルと頭を振った。よほどくすぐったかったのか、息を吹きかけられた耳を手でぐしぐしとやりながら俺に真っ赤になった顔を向けてくる。

「わ、我が君……？」

「いや、なんかピコピコ動いてるのが可愛くて悪戯心が……すまん」

「私も！　私もふーってしたいです！」

「だ、だめです！　敏感なんです、耳は！」

迫るミミをクギが遠慮気味に、しかし断固として押し留める。耳が駄目なら尻尾は……と手を伸ばそうとしたらシュルっとなかなかのスピードで尻尾が逃げた。完全にミミに注意がいっていると思ったんだが、なかなかの超反応を見せてくれるな。

「し、しっぽも……！　いえ、わ、我が君なら……」
「いや、うん。なんかごめん。無理矢理どうこうしようってわけじゃないから」

ミミを押し留めながらも尻尾を俺に差し出してきたクギに謝っておく。そんなに勇気というか決断が必要な事柄だとは思っていなかったんだよ。気軽に触ろうとしてすまない。

「なんというか、耳とか尻尾はセンシティブな部位なんだな」
「せ、せんしてぃぶ……まぁ、その、はい。少し敏感というか、不意に触られるとゾクゾクゾワゾワするというか」
「いつか触らせてくれ。手触りがとても良さそうで気になっていたんだ」
「わたしもです。是非」
「わ、我が君がお望みであれば今度時間がある時に……」

今度触らせてくれるらしい。やったぜ。ちゃっかりミミも触らせてもらうことになっているが、クギはちゃんとわかっているのだろうか？　その時になってやっぱ無理って言われても落ち込まないように覚悟しておこう。

「さて……回収が終わったら彼らをドーントレスまで送り届けるぞ」

一応それくらいのアフターサービスはしても良いだろう。それに、

ティーナ達がデータストレージの回収に成功していたら再出撃せずにまずそっちの分析をメイにしてもらうのが良いかもしれん。
ワンチャン有用な――奴等の襲撃ポイントや合流ポイント、本拠地の座標など――情報があるかもしれないからな。そういうのがあれば釣りをするよりも効率よく宙賊どもを狩ることが出来る。

「わかりました！」
「はい、我が君」

後続の宙賊が来る気配も無いし、後は待つだけだな。もうちょっとバンバン入れ食いで来てくれれば儲かって大層よろしいんだが、なかなかうまくは行かないもんだ。

#３４５　気持ちはわかるが俺は悪くない。（前書き）

ちょっと短いけど定時前にできたからヨシ！（　，　ω，　）

#３４５　気持ちはわかるが俺は悪くない。

スクリーチ・オウルズの船を護衛しながらドーントレスに帰還した俺達はとりあえずセレナ大佐と連絡を取ることにした。

『……もう一度言ってもらえますか？』

ブラックロータスの休憩スペースにセレナ大佐の頭の痛そうな声が響く。

「撃破した宙賊艦から引っこ抜いたデータストレージから宙賊の拠点の座標特定に繋がりそうなデータキャッシュを複数獲得した。まだメイが分析している最中だが、そっちが望むなら解析途中のデータと判明している暗号鍵、あとデータストレージそのものを現時点で引き渡す」

スクリーチ・オウルズを助け、宙賊艦の残骸から戦利品を引きあげた結果、ジャンク品一歩手前の各種装備の他に複数のデータストレージを回収することに成功した。そしてそのデータストレージを帰りがてらメイが精査した結果、今セレナ大佐に説明したようなものが見つかったわけである。

『……実は宙賊と繋がっていたりしませんか？　討伐開始初日――それも昼前に普通そんなクリティカルな情報を持ってきます？』

「そんなわけないだろ、常識的に考えて……とにかく手に入ったもんは仕方ない。俺は悪くねぇ」

これも俺の悪運というか妙な運命力の為せる業なのだろうが、ど

うにもそういうスピリチュアルな方向での解釈はしっくりこない。とは言え、俺が妙な運命というかトラブルを引き寄せるのは目を背けがたい現実なので、ある程度は認めなければいけないのだろうが。

『はぁ……まぁ良いです。仕事が進むのは良いことですからね。宙賊どもを一分一秒でも早く滅ぼせるならそれに越したことはありませんし』

「さっすが大佐殿。話がわかる」

『こちらにデータストレージを送って下さい。ポート番号を転送しておきますので』

「アイアイマム」

敬礼をしながら通信を終える。すぐに艦内物資輸送システムで使用するポート番号が送られてきたので、それをメイに転送しておいた。これでメイがデータストレージと解析途中のデータをセレナ大佐宛に送ってくれることだろう。

「どうしましょうか？」

「恐らく軍から本拠地襲撃の仕事が来るだろうから、それまで待つのもアリだな」

「それで良いのですか？　ちゃんと働かなければ我が君がセレナ様からお叱りを受けるのでは？」

「データストレージの発見と引き渡しでこれ以上なく仕事は果たしたわけだし、本拠地襲撃時に撃破数と賞金は一気に稼げるからな」

ティーナとウィスカもしばらくは鹵獲した装備品の整備に忙しいだろうし、ブラックロータースの格納庫もそこそこに満たされている。意外と嵩張るからな、レーザー砲だのなんだのって装備類は。

「真面目に働くのは勿論大事だが、不要なリスクを避けるのも大事

だ。最終的に多額の賞金を稼ぐことさえできるなら良いのさ」

俺達は悪を討つ正義の戦士ではなく、宙賊どもを叩き潰して賞金を得る傭兵だ。最終的に金を稼げるならそれだけで良いのである。何か目的があって勲功というか、戦果を稼ぎたいわけでもないしな。既に傭兵としては最上位のプラチナランカーになっているわけだから、傭兵ギルドに対する貢献度云々に関しても気にする必要はない。

「どうせリスクを避けても向こうから寄ってくるしね」

「それは言うな……何はともあれお疲れ」

「はいはい、ありがと」

ブラックロータスのシャワーでさっぱりしてきたと思しきエルマに拳を突き出すと、彼女はそれに自らの拳を軽く合わせて俺達が座っているソファに並んで座る。俺の左右はミミとクギが固めているので、エルマはクギの隣だ。

「どうだった？　久々の単独での戦場は」

「やっぱ一人は寂しいというか、不安があるわね。全部一人でやらなきゃならないし、負担が大きいわ。戦闘中何回かミミを呼んじゃったし」

「ふむ。暫くミミと二人で乗るか？　ミミにとっても良い経験になりそうだし」

「んー、やめとくわ。とりあえず今の環境に慣れてからにする」

「そっか。まぁミミの訓練にもなりそうだし、そのうちな」

エルマがチラリとミミに視線を向けたのとか、左頬に突き刺さる圧力の強い視線とかは気づかないことにしておく。スキルアップには必要なことだと思うんだけどな――などと考えていると、俺の端末からコール音が鳴り始めた。相手はスクリーチ・オウルズのキャ

プテン・ソウルズか。さっき話した時に一応連絡先を交換しておいたんだよな。

「ヒロだ。何かあったか？」

『ソウルズだ。いやなに、うちの連中をメシに連れていくんだが、一緒にどうかとな。助けてもらった礼もあるし、一杯奢らせてくれ』

「そりゃいい。俺は下戸なんで飲めないが、うちには大酒飲みが三人いるんだ。高く付くぞ？」

『構わんさ。宙賊どもから頂戴した戦利品だけでも釣りが出るし、俺達も手ぶらで帰ってきたわけじゃないんでね』

つまり、スクリーチ・オウルズは未探査星系で何らかの戦利品を獲得してきたってことか……あ、今凄く嫌な予感が。気のせいであってくれ。とにかくスクリーチ・オウルズの連中をその『積荷』から早急に引き離したほうが良い気がしてきた。

「それじゃあ遠慮なくご馳走になる。こっちは七……いや、飲み食いするのは六人だな。一人は飲み食いはしないんでね」

『飲み食いしない……？　まぁ良い。合流ポイントを送るぞ』

ソウルズからドーントレス艦内にある飲食店の情報が送られてくる。ふん？　まぁ怪しい店ではないようだな。友好的なふりをして何か企んでいる可能性もゼロじゃないから、用心だけはしておかないといけない。何せ俺はキャプテンとしてクルー達の身の安全に責任がある立場だからな。

「オーケー、では現地で。準備をしてから向かうから少し時間を貰うぞ」

『そうだな。一時間後でどうだ？』

「それでいこう……というわけで、スクリーチ・オウルズの連中と

メシに行くぞ」
「うーん……ちょっと不安なんですけど」
ミミが若干難色を示す。
「ああ、なんか向こうのオペレーターに絡まれてたもんな。俺の側から離れなきゃ大丈夫だ」
「それじゃあ私たちは皆ヒロの側から離れないほうが良さそうね」
「べったりくっついていきましょう。べったり。クギちゃんもべったりです」
「べ、べったり？　こうですか？」
ミミとクギが左右から俺にくっついてくる。うん、とっても嬉しいけど流石にここまでベッタリは目立ち過ぎるというか、ちょっと度を越した感じがするぞ？
「ヒロは大変ね。その状態で私とティーナとウィスカの面倒も見なきゃならないんだから」
「酒飲み勢はある程度自衛というか自重してくれ……」
ただでさえ連中の積荷から嫌な予感をビンビンに感じているんだから、これ以上俺の心労を増やさないでくれ。頼むから。

#３４６　的中する予感（前書き）

ちょっと小説を読んでて僅かに遅れました（ ̄ω ̄）（インプットは大事だからユルシテ

#３４６　的中する予感

「おぉ、こうして対面で会うのは初めて――いや、なんというかスゲェな、お前さん」

ホロスクリーン越しではなく、直接顔を合わせたキャプテン・ソウルズは俺を……というか俺達を見るなり頬を引き攣らせた。ミミとクギは予告通り俺の腕を抱え込んでべったり。エルマはすました顔で俺の近くを歩いていて、それにティーナとウィスカ、それにメイも同行している形である。

「男の夢ってやつか？　いや、大したもんだ。さすがはプラチナランカーだな。大物だ」

「事情があるんだ、色々と……改めてどうも、ヒロだ」

「ソウルズだ。お嬢さん達もどうぞよろしく」

ミミとクギに腕を解放してもらってキャプテン・ソウルズと握手を交わす。

彼は壮年の男性で、男の俺から見てもなかなかのハンサム……いわゆるイケオジというやつだった。グレイの瞳に同じくグレイがかった短髪。服装に取り立てて特異な面は無いが、長身でスタイルも良い。筋肉質過ぎず、弛んでもいない。かといってひ弱にも見えない。バランスの良い体つきだな。

「立ち話もなんだ。席は取ってある」

キャプテン・ソウルズに促されて彼のクルーと一緒に店に入る。事前にミミが調べたところによると、ここはドーントレスの正規の

食堂ではなく所謂娯楽施設として運営されている酒場の一種であるのだそうだ。分隊、小隊単位で親睦を深めるのに利用されるのを目的としているそうで、十人から数十人くらいの人数で飲み食いが出来るようになっているらしい。

「こういうのセッティングが得意な奴には事欠かなくてな。今日はだいぶ張り切ってたんだが……」

そう言ってキャプテン・ソウルズがちらりと視線を向けた先にはチベットスナギツネみたいな顔になっている若めの男性クルーがいた。なんか負のオーラが溢れ出しそうになっているぞ。大丈夫かあいつ。

「ハッ、まぁあの勘違い野郎には良い薬だろう。せいぜい格の違いってのを見せつけてやってくれ」

「面倒臭いのは御免だぞ、俺は……」

キャプテン・ソウルズに背中をバシバシと叩かれながら席に着く。珍しいことに、どうやらここはビュッフェ形式でメシを食うようになっているようだ。大量に用意されている料理を自分で皿に取り分けて、適当な場所で話しながら食うか用意された席で食うかを自由に選べるらしい。酒もセルフなのか？　いや、酒はセルフでも良いが、給仕ロボットに注文もできるようだな。酔っ払いがいちいちサーバーに酒を取りに行くのは危ないもんな。

☆★☆

そうして始まった食事会だが、早々に険悪な雰囲気に――はならなかった。

「嫉妬とかそういう感情が一周回って尊敬っすわ」
「いやなんかもう……ほんともう。ヒロさんパネェっす」
「お、おう」

何故かミミやクギではなく俺が若い男性クルー達に囲まれていた。彼等的にはメイドロイドであるメイは別としても五人も女性を囲っている俺はリスペクトの対象であるらしい。

「例のしきたりというかアレも半ばカビの生えかけた古いやつだけど、こうまで見事にハーレムを作ってるのは初めて見たわ」
「つーかよくもまぁあんな可愛い子ばかり……秘訣、教えてもらって良いすか？」

通信でミミに絡んでいたちょっとチャラそうな男性クルーが姿勢を正し、真顔で聞いてくる。

「そんなもんはねぇよ……流れだ、流れ。敢えて言うならタイミングを逃さないことと、どういう結末になるかは別として関わる以上は最後まで責任を持つ覚悟をするくらいか」

実際に狙って船に引き込んだのはエルマだけなので、俺の言っていることは嘘ではない。ミミは衝動的に助けて、その結果として船に乗せる他無かっただけだからな。明確にクルーにするつもりで俺が能動的に船に引き込んだのはエルマただ一人である。

「僕としては可愛い女の子を五人も囲っているのに更にメイドロイドにまで手を出しているのが信じられないんだけど……しかもあのメイドロイドさん、とんでもないカスタム品ですよね？」

今度は少しヒョロい感じの眼鏡の青年が声をかけてくる。うん、

見るからにナードっぽい。ステレオタイプだな！　まぁ、眼鏡といっても妙にメカニカルだし、何らかのウェアラブルデバイスなんだろうけど。

「そうだな。うちのメイと同じ仕様でメイドロイドを作るとなると軽く数十万エネルはかかるな」

「数十万！　船よりは安いとはいえ……いや、なんつぅか……保つんすか？」

そう言ってチャラい船員がカクカクと腰を前後に動かす。

「まぁ……鍛えてるし？　それにうちの『シェフ』は有能だからな」

そう言って腹筋に力を込めて拳でドンドンを自分の腹を叩いておく。実際、うちの船に搭載している自動調理器のテツジン・フィフスは俺の運動データなどを観測して最適な食事を提供してくれている――らしい。定期的に簡易医療ポッドでスキャンしているデータや俺の小型情報端末、トレーニングルームのマシン、それだけでなくメイからもデータを受け取って俺に必要な栄養素なんかを決定しているとかなんとか。高性能が過ぎる。

「毎日のように宙賊とドンパチしたり、貴族の陰謀に巻き込まれたり、結晶生命体の群れに突っ込んだり、パワーアーマーを着たり着なかったりして生物兵器と切った張ったしたり、お貴族様に剣で斬りかかられたり、乗っていた飛行機械が墜落したりしていれば俺みたいな出会いが向こうから転がり込んでくるかもな」

「いや無理でしょ」

「普通死にますよそれ」

「そういうトラブルに巻き込まれた結果として今があるんだ。察してくれ」

こうして羅列するととんでもねぇな。なんで生きてるんだろう、俺。

「でも、トラブルって意味じゃそっちも不自由はしてないだろ？今日のとか」

「いや、今日のはマジでヤバかったわ」

「ヒロさん達が来てくれてなかったら少なくとも僕は死んでたね……シールドも剥げて装甲も抜かれて死を覚悟してたよ」

おや？　どうやらこの眼鏡くんは探索者が出していた護衛の小型戦闘機のパイロットだったらしい。見るからにヒョロいナードって感じなんだが、意外だな。

「なるほど。ということはやはり今日の出会いは俺達にとってのチャンス……？」

「お？　なんだ？　挑戦か？　処す？　処す？」

「冗談っす。無理っす」

「でもメイドロイドは良いなぁ……戦闘のサポートもしてくれるんですよね？」

「ああ、陽電子頭脳に金をかけて戦闘能力をオミットすれば１０万行くか行かないかくらいでいけるんじゃないか？」

「それくらいならなんとか……うーん」

眼鏡くん――確かヘクトルとか呼ばれていたか――は食事もそっちのけで考えに没頭し始めてしまった。そろそろ良いか？　仕掛けてみよう。

「そういやそっちのキャプテンが言っていたが、未探査星系で何かお宝を発掘してきたって？」

「お？　聞いたんすか？　そうなんすよ、これがなかなか――あ、言って良いのかな？」
「聞いたところで俺は傭兵で探索者じゃないからな。別に手に入れた場所とかそんなのは興味ないし。ただお宝って言われたらワクワクするだろ？」
「それはそう。オフレコっすよ？　こういうのなんすけど」

そう言って彼は自分の小型情報端末を使って探索者向けの多機能パワーアーマーと、その横に鎮座している謎の真球のホロを映し出した。

「こんな感じのタマなんすけどね。こいつがレーザーも跳ね返す上にかなり丈夫で、明らかに自然物には見えない。しかもあった場所も明らかに人工物っていうか、自然にできた地形じゃないっぽい感じで。こいつはアーティファクトかもしれないってことでちょっと期待してるんすよ」
「あぁ……そう。ちなみに、船には誰かクルーは残ってるのか？」
「いや、全員で払ってここに来てるっすね」

そう言ってチャラい感じの若い船員が会場内に視線を向ける。ああ、なんかあっちでキャプテン・ソウルズとうちの飲兵衛どもが飲んでるな。ミミとクギはメイに付き添われて俺の周りにいるよりももう少し年齢層の高い船員達と楽しく話をしているようだ。

「ちょっと悪いな」
「うっす」

俺は小型情報端末を取り出し、アドレス帳からセレナ大佐を選択して通信を開始する。すると、程なくしてセレナ大佐が通話に応じた。

『どうしました？　データストレージなら先程こちらに到着――』
「大佐殿、例のタマを見つけた。スクリーチ・オウルズに積み込まれていて、今クルーは全員出払ってる」
『……』
「あー、大佐殿？」
『ちょっと黙って下さい。今、全精神力を感情のコントロールに向けているので』
「……滅茶苦茶に苛ついてるみたいだが、俺に悪意は無いからな。本当に。天地神明にかけて」
『わかってますから黙ってもらえます？』
「はい」

絶対キレてるやつじゃん！　こえぇよ！　俺は悪くねぇ！

#347　話せば長くなる（前書き）

天気が悪くて捗りませんでした（ ，ω，　）

#347　話せば長くなる

「で、ヒロ。キャプテン・ファ〇キン・ヒロさんよ。こいつぁ一体全体どういうこった？」

俺がセレナ大佐に連絡――というか通報してからおよそ三十分後。俺達とスクリーチ・オウルズのクルー達は揃ってスクリーチ・オウルズの船が停泊しているドーントレスのドックエリアへと足を運んでいた。

スクリーチ・オウルズの母船となっている中型艦二隻は既に軍の海兵部隊による包囲――というか強制捜査が実行されており、貨物を搬入・搬出するための大型ハッチが開け放たれてその内部から続々とコンテナが運び出されている。

「俺の目が確かなら俺の大事な船に兵隊どもが押し入って積荷を運び出しているように見えるんだがな？　本当にこいつぁ一体全体どういう事態だってんだ？　えぇ？」

酒のせいか、怒りのせいか――或いはその両方か。キャプテン・ソウルズの顔は真っ赤になっていた。今にも爆発寸前、といった様子だが……さて、どうしたものか。俺が愛煙家ならここで一本煙草をふかすところなんだろうが、俺はあいにく酒も煙草もやらないんだよな。

そもそも、コロニーや宇宙船で空気を汚染する煙草は厳禁なので、基本この世界に愛煙家などというものは殆ど見当たらないのだが。

「話せば長くなる」

「話さねぇならてめぇの顔の風通しを良くしてやるぞ。このレーザ

ーガンでな」

キャプテン・ソウルズが指先で自分の腰のレーザーガンを指す。やめろやめろ。この距離でそんな物騒なことをすると俺はともかくメイがあんたを叩きのめすぞ。

「別に話さないとは言ってないだろ。話せば長くなるって言っただけだ。あー、事の起こりはウィンダス星系だ。知っているよな？」

「帝国最大のシップヤードだな。それで？」

「俺はこの星系に来る前は野暮用でそこに滞在してた。で、ある日のことちょっとした事件に巻き込まれた。人間を切り刻んで殺す殺人マシンみたいなやつに襲われたわけだ。幸い俺は腕に多少覚えがあるし、そもそもそいつは帝国軍の戦闘部隊に追われてた。俺がこいつで応戦している間にそいつを追ってた帝国軍の戦闘部隊が追いついてきて、まぁその場はなんとかなったわけだ。俺とやり合い始めたところで既に死人は出ていたようだがな」

「話が見えねぇな。その話とうちの船が帝国軍の連中に家探しされているのと何の関係がある？」

顔を真っ赤にしたままキャプテン・ソウルズが腕を組んで先を促してくる。流石に歴戦の探索者は冷静だな。いや、単に俺相手に暴力をちらつかせての恫喝は意味が無いと判断しただけか？

「話せば長くなるって言ったろ？　つまり、その犠牲者と殺人ロボットがみたいな『何か』が問題なんだよ。死んだのはウィンダスティルティウスコロニーで珍品を扱っていた店の店員と、その場に居合わせた客で、その殺人マシンみたいな『何か』は元々まんまるの玉だったんだ。謎のな。で、軍の調査でどうもこのエッジワールド方面から運ばれてきたらしいってことがわかった。あんたらは知らないだろうが、このドーントレスに増援の帝国軍艦隊と傭兵達が到着

して程なくこの船で営業しているアーティファクトショップにガサ入れが入ったんだ。そのガサ入れの最中に例の玉が発見されて、また大暴れした」

その場に俺が居たことは……まぁ言っても仕方がないか。黙っとこう。

「あのままスルーして明日の朝、あんた達が全員例の殺人マシンみたいなモンにズタズタに切り裂かれていたなんてニュースを見るのは御免だからな。だから通報したんだ。善意だと言い張るつもりはないが、悪意があってのことじゃないってのは信じてほしいね」
「俺達だってド素人じゃねぇ。危険な橋だっていくつも渡ってるんだぞ」
「相手が悪い。致死威力のレーザーどころかプラズマランチャーの直撃を食らってもピンピンしているような殺人マシンに対処できるのか？　パワーアーマーとレーザーランチャーやプラズマランチャーで重武装した帝国海兵でも手こずるような相手だぞ。俺だってこれが使えなかったら死んでたさ」

そう言って俺は腰の二本一対の剣の柄を叩く。帝国海兵の皆様が即席のメイスをぶん回してたのは彼らの名誉のために黙っておこう。

「……クソ。お前さんの言い分に納得したところでうちの船が土足で荒らされてる現実は変わんねぇな。クソが」
「あー、船長？　この分だと今回の儲けはどうなるんですかね？」
「軍の皆様が持ち出しちまってるからどうにもなんねぇよ。まぁ、持ち出した以上は奴さんどもにお買い上げ頂く他ねぇな。あとはうちの船に土足で上がり込んで荒らした分はきっちりふんだくってやる。行くぞ、野郎ども」
「「「アイアイサー！」」」

キャプテン・ソウルズはクルー達を引き連れて今まさにガサ入れされているスクリーチ・オウルズの船へと向かっていった。

「で、私たちはどうするの？」

「ついていってもやれることはないしな。俺達の船に帰るとしよう。黙っててもセレナ大佐から連絡は――」

「にーさーん。うち飲みたりなーい」

帰ろうという話でまとめようとしたら駄々っ子が不満げな顔で俺の腕を引っ張ってきた。痛い痛い。腕が抜ける。見た目が小さいのに力が強い。ウィスカも控えめに俺のジャケットの裾を摘んで引っ張ってる。こっちは控えめで可愛いもんだな。

「船に帰ってから飲んだら良いのではないか？」

「っかー！　ちゃうねん！　船で宅飲みすんのとお店で上げ膳据え膳で飲むのはちゃうねん！」

「えぇ……？」

ダンダンとなかなか勇ましい音を立てて地団駄を踏むティーナ。それ、俺の足踏むのやめてね？　なんか骨折れそうだから。ウィスカやエルマ、それにミミとクギの顔を順に見回していく。

うーん、確かに通報騒ぎで途中で切り上げてきちゃったし、若干不完全燃焼感はあるけれども。

「ミミ、高くても良いからもう少し良いとこあるか？」

「お任せ下さい！」

ミミが笑顔で胸を張る。うん、何がとは言わんがヨシ！　ミミを見ていると俺の気分も少しだけ上がってきたな。クギは自分の胸元

を擦って深刻そうな表情をしなくていいからな。大きいのも小さいのも普通のも全ての乳は等しく尊いから。おっと、言ってしまった。まぁ良いか。

「それじゃあ内輪で飲み直し、食い直しといこう。どうせ明日からまた厄介事だろうしな。今日はパーッと行こう。パーッと」

たまには一般的な傭兵みたく宵越しの銭は持たないみたいな金の使い方をしても良いだろう。まぁ、流石に今日稼いだ分を全て使い尽くす程に飲み食いするのは無理だろうけど。

#３４８　銀灰色の少将（前書き）

天気が悪い……眠い……―（：３」∠）―

#３４８　銀灰色の少将

翌日、セレナ大佐からドーントレスのブリッジに来るようにと連絡を受けた。出頭命令である。

「実際のところ今回の直接の雇い主みたいなもんだし、軍の任務を受けている傭兵としては従わざるをえないんだよな、これが」

「そういうものなのですね」

俺の隣を歩くクギが納得したように頷く。こうして歩いている間にも周囲に意識を向けているのか、ぴこぴこと頭の上の獣耳が動いているのが可愛い。

「それでも普通は帝国航宙軍の大佐だとか少将に呼び出されることは普通無いけどね……」

俺を挟んでクギの反対側を歩いているエルマがそう言って肩を竦める。今日の俺のお供はエルマとクギの二名であった。ミミにはティーナ達と一緒にドーントレスで売り捌けそうな戦利品を売り捌いてもらったり、補給品の手配などをしてもらっている。

今まではそういう仕事は主にミミに任せていたのだが、ティーナとウィスカもそっちの仕事ができるようになるとミミが身軽になるからな。ミミも傭兵の仕事について本格的に教える側の立場になったというわけだ。メイにもその様子を監督してもらっている。本当はこっちに来てもらっても良かったんだが、万が一何かの手違いで例の玉がブラックロータスを襲ったりした場合、メイがいれば対応は可能だからな。我ながら警戒しすぎだと思うが、こういう……なんというか、厄介事期間に入った場合には一切の油断をしないほう

が良い。どこからどんなトラブルが舞い込んでくるかわかったものじゃないからな。

「流石我が君です」
「流石って言われてもこれ厄介事だからなぁ……出頭命令受けるのが名誉とも思えんし」
「お偉いさんと顔繋ぎ出来るのはそんなに悪いことじゃ……まぁ良い事でもないわね」
「そういうものなのですね」
「そういうものなのです。セレナ大佐経由でこういう厄介事に巻き込まれている時点でなんとなく想像つくだろ？」
「そう言われてみるとそうなのかもしれません。ですが我が君、これも我が君が手繰り寄せた運命というものです」
「そうなのかもしれんが、納得はしたくねぇなぁ……」

こういうのを運命の一言で片付けるのはやっぱりしっくりこない。運が悪かったと言ってしまえばそれだけの話なんだろうが……運命って言葉はなんとなくのイメージだが、最初からそうなると決まっているとか、予定調和だとか、そういう感じで捉えてしまいがちなんだよな。面倒事を避けるためにどんなに足掻いても面倒事が追いかけてくる、それが運命だと言われているようでモヤモヤする。

「その辺のスピリチュアルな話は夜にでも二人でじっくりと話しなさいな。ほら、そろそろ機密区画よ」

エルマに注意を促されたので、とりあえず頭の中のモヤモヤ感を振り払って状況に集中する。まぁ、機密区画だと言っても俺にはちゃんと通行用のＩＤが付与されているし、同行者二名という点も先方には伝えてあるので何の問題もない。守衛が守っているゲートを何事もなく通過し、案内役として同行してくれた帝国軍人の後ろに

ついてブリッジへと向かう。

「へぇ、広いな」

「そうですね」

暫く歩いて辿り着いたドーントレスのブリッジはとにかく広かった。ブラックロータスのコックピットというかブリッジもそこそこ広いが、全く比べ物にならない大きさだ。大型オフィスビルのワンフロア分くらいの面積があるのではないだろうか？　ブリッジの中央部分が一段高くなっており、その周りには多数のホロスクリーンが展開されている。あの部分が中央管制区だろうか？　ああ、セレナ大佐が居るから多分そうだな。あの人は遠くからでもよく目立つ。

「あそこだな」

「はい。ご案内します」

マッチョな身体をピッチピチの軍服で包んだ帝国軍人がブリッジの中央官制区へと俺達を先導していく。その後ろについて歩きながらそこらのホロスクリーンに映っている情報に目を向けるが、なんだかよくわからんな。そもそもドーントレス事態が超巨大な艦船――コロニー級の超巨大艦だから、ブリッジで扱う情報も俺が乗るような戦闘艦とは全く性質の違うものなのだろう。じっくりと腰を据えて観察して、操作もしてみれば把握も出来るかもしれないが、歩きながら流し読みした情報じゃなんともならんな。

「来ましたか」

階段を登り、一段高い中央管制区に姿を表した俺達を見てセレナ大佐が目を細める。なんというか、セレナ大佐はお疲れのようだな。微妙に声に張りがない。

「紹介します。こちらは補給母艦ドーントレスの艦長で、アンゼルム・エスレーベン少将です。エスレーベン少将、こちらはキャプテン・ヒロ。傭兵ギルドのプラチナランカーで、どっちの案件においてもキーとなる情報を拾ってきてくれたトラブルメーカーです」
「俺の紹介内容が酷いな……お初にお目にかかります、少将閣下。キャプテン・ヒロです。この二人はうちのクルーで、エルマとクギです」
「アンゼルム・エスレーベンだ。閣下はいらない、階級名だけつけて貰えれば十分だ」

エスレーベン少将が握手のために手を差し出してきたので、こちらも素直に応じる。
鋭い銀灰色の瞳が印象的な中年男性だ。スクリーチ・オウルズの船団長であったキャプテン・グレイよりもより銀色がかった瞳で、鋭い目つきからは冷たさすら感じられる。髪の毛の色も瞳と同じく銀灰色で、少し長めの髪の毛を頭の後ろで結っている。かなりの美丈夫だな。腰にはセレナ大佐と同じく剣を差しているし、雰囲気からしてこの少将も貴族の血筋なのだろう。

「それで、俺は何故呼び出しを食らったので？」
「それは私が頼んだからだ」

そう言ってエスレーベン少将が銀灰色の瞳でジロジロと俺の顔を見てくる。

「ふむ……」

次いで、エルマとクギにも視線を向ける。エルマはそれに対して何か文句でもあるのかと言わんばかりに視線を返し、クギは微笑を

浮かべて受け流した。

「偶然にしてはあまりに出来すぎだが、大佐の言う通り彼らに後ろめたいことは何も無いようだな」

「それはよかった」

「えっ、何それは。今の一瞬で何がわかった――というか疑われていたのか」

「大佐は何も疑ってなどいなかったよ。裏は取ったようだが。疑っていたのは私だ。残念ながら、私の方は君を信じるに足るものが何もなかったのでね」

銀灰色の瞳が再び俺を見据えてくる。なんだろうな、この何でもお見通しだとでも言いたげな視線は。その目には嘘発見器でも仕込まれているのかね？

「人間、後ろめたいことがあると否が応でも何かしら反応が出るものなのだよ。脈拍、血圧、呼吸、表情筋、その他にも色々だな。少なくとも、君や君の仲間にはそういったものは認められなかった。そういう話だ」

「なるほどー……おっかねぇな、貴族」

つまり、この少将殿はそういったものを人目で判別して判断できるだけのスペックがあるのだろう。恐らく、視覚や聴覚、嗅覚などの五感や脳の処理能力をガチガチに強化しているのかね。生きづらそうだなぁ。

「そう心配せずとも意識的にオンオフを切り替えられるようになっている」

「なるほど……って、えぇ？」

「そういうのも『わかる』ものだよ」

エスレーベン少将が小さく肩を竦めてみせる。つまり、俺の同情だか憐憫だかの感情か何かを読み取ったってわけか？　とんでもねぇな。

「挨拶も済んだということで、話を進めましょう。さしあたっては宙賊対策です」

頃合いを見計らっていたのか、セレナ大佐が良いタイミングで次の話を振ってくれた。いや、うん、助かったが……本当に貴族連中ってのは底が見えんな。今後もできるだけ関わらないようにしよう。

#349　宙賊対策会談（前書き）

天気が良いと捗りますね！（　，ω，　）

#349　宙賊対策会談

「貴方が宙賊艦から引きあげたデータストレージから宙賊の拠点の位置が判明しました。位置はここ。ドーントレスからは恒星を挟んで反対側に近い場所ですね。小惑星帯の外縁部、未探査星系へのハイパーレーン突入口に近い場所です」

セレナ大佐がホロスクリーンに表示された星系地図の一点を指差す。なるほど、この位置じゃ恒星と小惑星帯が邪魔でドーントレスからは探知が難しいし、未探査星系から戻ってきた探索艦の動きをキャッチしやすいな。元からここにあったのか、それともドーントレスの停泊空間を考えてここに急造したのかはわからんが、なかなかに考えられた位置取りだ。

「既に斥候により詳細な座標も装備も割れている。どうも連中は既に逃げ出す準備を始めているようだ。攻略を急ぐ必要がある」

エスレーベン少将の怜悧な顔がホロスクリーンの光で照らされる。うーん、イケメンってか雰囲気があるな。これが将器を感じるというやつか。

「なるほど。出ようと思えば俺はすぐに出られますが、他の戦力はどういう感じで？」

「ドーントレスの戦闘機隊はいつでも発進可能だ」

「幸いなことに対宙賊独立艦隊もすぐに出られます。整備と補給を終えて出撃しようというタイミングで色々あったので。傭兵は既に狩りに出ているのも居ますから勢ぞろいとはいきませんが、ドーントレスの戦闘機隊の参戦があるならば問題にはならないでしょう」

セレナ大佐が色々あったので、というタイミングで俺にチラリと視線を向けてくる。だからごめんて。悪意はなかったんだって。

「それじゃあササッと行ってササッと撃破して終わらせるのが良さそうだ。こちらの戦力規模を考えると一気に押し寄せて力押しで潰すのが正解だと思うが、宙賊の逃亡をケアするなら対宙賊独立艦隊の主力は外縁部から火力押しして、傭兵、戦闘機隊は内縁部から接近して小惑星帯内で宙賊を狩るのが良いんじゃないか。あとはグラヴィティ・ジャマー持ちを護衛機と一緒に内縁部に配置して退路を塞げば良い」

そう言って俺はホロスクリーンを操作して二方面から宙賊基地を挟み撃ちにするように戦力のアイコンを配置した。ドーントレスの戦闘機隊の練度が低いなら小惑星帯の中で戦うのはちょっと危ないかもしれないが、小型戦闘艦よりも更に小さい艦載戦闘機は本来こういった小惑星帯内での戦闘や数で押す乱戦に強い。特性を活かすなら十分アリな選択だ。

「どうして貴方がＧＪの存在を、と思いましたが……そういえば、イデアル製の中型艦が増えていましたね」

「やっぱ大佐のところに配備されてたか。そうじゃないかとは思ったよ」

そう言って肩を竦めておく。用途が限られているから、そうなんじゃないかとエルマと話してたんだよな。とは言え用途が限られていると言っても、星系軍や対宙賊独立艦隊にしてみれば使い勝手の良い装備であることは確かだ。民間船が宙賊に襲われているところに駆けつけた瞬間に展開すれば宙賊を逃さず捕えるなり撃破するなりが容易になるからな。

「キャプテン・ヒロの戦術案は参考にさせてもらおう。詳細は我々で詰める」
「アイアイサー。それじゃあ俺達は出撃準備を整えるってことで」
「そうして下さい。言うまでもないと思いますが……」
「はい、発令までは他言無用ね。承知しておりますとも。二人も良いな？」
「勿論」
「はい、我が君」

俺が視線を向けるとエルマとクギも頷いた。今から漏れても然程大勢に影響は無いだろうが、無論漏れないならそれに越したことがないのが良いに決まっている。重々気をつけるとしよう。

「ああ、そうだ。大佐、例のタマの件は？」
「そっちはとりあえず保留です。事情聴取や『交渉』は進めていますが、宙賊の件ほど喫緊の問題ではないので。現物も確保、収容できましたしね」
「……収容違反とか起こさないでくださいよ」
「何を心配しているのかわかりませんが、スキャンを透過する硬化剤で固めてシールド容器に収納していますから。ああなるとタイタン級の戦闘ボットでも抜け出すのは無理ですよ」
「なら良いんですがね。それじゃあ俺達はこれで」

内心「ほんとぉ？　ほんとに大丈夫ぅ？」という気持ちでいっぱいだが、敢えて口に出すのはやめておこう。うっかり口にして現実になったらセレナ大佐がストレスでぶっ倒れるか、腰のものを抜いて暴れ出しそうだからな。

☆★☆

お行儀よく機密区画を抜け、船に帰る。いつ作戦が発令されるかわからないから寄り道もナシだ。

「ただいま」

「おかえりなさい、ヒロ様。早かったですね？」

ブラックロータスに戻ると、ミミと整備士姉妹は格納庫区画で揃ってタブレットを覗き込んでいた。物資のチェックでもしていたのかな？

「話が早かったからな、色々な意味で」

付き合いの長いセレナ大佐は言わずもがな、エスレーベン少将も単刀直入な人だったからな。俺に一定の信用を置くのにも時間がかからなかったし。

「出撃準備だ。緊急発進するかもしれないから、納品に時間がかかるような物資があるなら金だけ払って取り置きにしておいてもらってくれ」

「急やなぁ。でもそれは大丈夫、補充する物資の量もそんなになかったからすぐ終わるで」

「出撃ってことは、宙賊ですか？」

「そういうこと。データストレージが早速活躍したわけだな」

「なるほどぉ……タマの方はどうなったんです？」

「そっちは一時保留だと。ブツは確保したからじっくりと事情聴取とかを進めていくらしい。ブツさえ確保してしまえば緊急性は下がるからな」

「それはそうやな。それにしてもセレナ大佐はどういう決着を想定しとるんやろね？」

「目的はなんとなくわかるけど、どうするつもりなのかはなんとも見えてこないよね」
「それは確かにそうだな」

ティーナとウィスカが揃って首を傾げる。俺も首を傾げる。
確かにどういう形での決着を望んでいるのかは俺も今ひとつ想像がつかんな。目的としては有用な装甲材となりうるあのタマの装甲だか甲殻だかを自由に加工、生産するってのが一番なんだろうが、宙賊対策に特化したセレナ大佐の艦隊がその目的を達成するのに適切なのかと言うと、俺は甚だ疑問である。彼女の艦隊はあくまでも宙賊を狩るのに特化した艦隊であって、未探査星系の探査や研究となると畑違いも甚だしいと思うのだ。
まぁ、レスタリアスはデカい船だ。船のスペースにはある程度の余裕があるだろう。やろうと思えば急造の研究区画を設けることは可能だろうし、研究スタッフを乗せることも出来るだろうが。

「そっちに関しては宙賊問題が片付き次第セレナ大佐がなんとかするだろう。俺達にはあまり関係のない話だし、気にする必要も無い……と良いなぁ」
「兄さん、それは無理筋やろ」
「絶対巻き込まれるでしょ」
「ですよね」
「私もそう思います」

ティーナ、エルマ、ミミ、ウィスカが順番に突っ込んでくる。セレナ大佐と付き合いが浅いクギだけが「そうなのですか？」と首を傾げているが、まぁ巻き込まれるだろうな。
嫌だなぁ、今度は調査が済んでテラフォーミング中どころか、何があるかもわからない――少なくとも変形して襲ってくる恐れのあるタマは転がっている――未探査惑星に降下することになるのか？

絶対に嫌なんだが。攻撃的なエイリアンだか戦闘メカが潜んでいる謎の惑星に降下とか絶対ＳＦアクションホラーになるやつじゃん。

「兎にも角にもまずは目の前の宙賊対策だ。恐らくブラックロータスは正面からの艦砲射撃、クリシュナは小惑星帯での乱戦、アントリオンは小惑星帯内縁部で逃亡しようとする宙賊の足止めをすることになるだろうから、そのつもりでな。多分アントリオンには護衛機がつくだろうし、対宙賊独立艦隊のグラヴィティ・ジャマー機も近い場所に配置されるだろうから大丈夫だろうと思うが、エルマは特に気をつけろよ。ブラックロータスの支援もクリシュナの支援もすぐには受けられない可能性が高い。出し惜しみはするな」

「わかってたことだけど、ヒロは過保護よね」

「当たり前だ。何にせよ船はぶっ壊してもいいから絶対に死ぬなよ。死ななきゃいくらでもやり直しはきくんだからな」

「はいはい、わかったわよ。安全第一、出し惜しみはなしね」

「わかってくれて何よりだ。しかし、そうなると今回はアントリオンはあまり稼げんな……特別報酬を請求するか」

実際のところ、クリシュナとアントリオンは組んで戦わないとコンセプトが成立しないからな。特殊装備を使って他には出来ない仕事をする以上、多少は請求してもバチは当たるまい。

「ガメつくいくやん。どういう心境の変化なん？」

「心境の変化は別にないぞ。単にスキルと装備の安売りはしないってだけだ。方針は一貫してる。前に二人の整備の腕をあちらさんの要望で役立てた時にもしっかり請求しただろ？」

「あぁ……確かにそうですね」

結晶生命体と戦った際に損傷を受けた傭兵艦の修理を請け負って大変に忙しい目に遭ったのを思い出したのか、ウィスカが遠い目を

する。あれだって二人のスキルとブラックロータスの設備をタダで提供はせずにちゃんと金を取ったってことだからな。今回のアントリオンも同じようにするだけの話だ。

「ということで、出撃準備だ。方針はとにかく『ご安全に！』だ。いいな？」

「「「アイアイサー」」」

クルー達が揃って声を上げる。クギだけちょっと遅れるのが可愛いな。

俺の準備は……ニンジャアーマーのチェックだけしとくかな。今日使うことはないだろうが、近いうちに使うことになりそうだし。あぁ、やだなぁ。

#350　戦闘機（前書き）

朝からどらやき一個しか食ってねぇ！（‘ω’）（お腹すいた

#350　戦闘機

補給母艦ドーントレスは小型戦闘艦から大型戦闘艦、もしくはそれ以上の大きさの巡洋艦や戦艦サイズの船まで、おおよそ航宙戦闘艦と呼べるものであればあらゆる艦種に補給や整備を提供できる船である。その役割から戦略艦とも呼ばれる立ち位置にある船だ。

防衛戦力も相当のものを有している。わかりやすいのは近づく敵艦を火力の投射量で押し潰す膨大な数のタレットだが、それ以上に恐ろしいのはドーントレスに配備されている防衛戦闘機隊だ。

航宙戦闘機というのは非常に小型で、その大きさは傭兵が使う小型戦闘艦の半分程度か、それ以下である。それでいて火力そのものは小型戦闘艦と殆ど変わらず、機動性は大きく上回る。

流石に大きさの関係上強力なシールドジェネレーターを搭載することができないのと、装甲らしい装甲を持つことが出来ないので耐久性に関しては小型戦闘艦の方が大きく上回るが。それを差し引いても戦闘能力は小型戦闘艦とどっこいどっこいと言えるだろう。

そんな航宙戦闘機がドーントレスには大量に配備されている。流石に総数はわからないが。

「何機いる？」

「ええと……合計で百八十機ですね」

「物凄い数ですね、我が君。これで全部なのでしょうか？」

「いや、防衛戦力を残してはいるだろうから……もしかしたらこれで半分くらいかもな」

先にドーントレスから発進していた俺達はクリシュナの中からドーントレスの戦闘機隊発進の様子を観察していた。ドーントレスには戦闘機用のカタパルト――というか発進チューブが六ヶ所あるよ

うで、戦闘機が六機ずつ、短い間隔でどんどん発進してくるのはなかなかに見応えのある光景だった。百八十機が発進するのに一分もかかっていない。とんでもない展開能力である。

「傭兵の皆様が運用しているのは小型戦闘艦ばかりのようですが、何故戦闘機を使わないのでしょうか？」

「居住性の問題と恒星間航行能力の有無の問題、それに戦利品などを積み込むスペースの問題、生存性の問題、他にはマルチキャノンみたいな実弾武器だとか、シーカーミサイルみたいな武器を使う際の弾薬積載量の問題が大きいからだな。ブラックロータスみたいな母艦と一緒に運用するならアリっちゃアリなんだが、それでも傭兵が使う分には小型戦闘艦の方が使い勝手が良いと思う」

「戦闘機って本当に戦闘だけしかできませんからね。小さい分、センサー類も弱いですし」

『傭兵業をするにはそれだけじゃあちょっと能力が足りないのよね』

通信越しにエルマも会話に参加してくる。

傭兵をやる以上は恒星間を渡り歩く必要があるし、船の中が自分の家のようなものになる。宙賊を撃破しても賞金だけでは稼ぎが足りないから、戦利品を回収する必要だってある。場合によっては連続で、長時間戦闘をすることもあるから継戦能力だって必要だ。当然、生きて帰らないと何にもならないから、何よりも防御力や生存性を重視しなければならない。

というか、航宙戦闘機というのは戦闘が起こる場所、起こっている場所に投入するものなのだ。

星系内のどこにいるかもわからない敵を探し出し、追い詰めて狩るための能力が欠如しているか、ものすごく弱いのである。ミミの言う通り、基本的に戦闘だけしか出来ない機体ってことだな。

「なるほど……」

俺とミミの説明を聞いてクギは考え込むような仕草をする。なんだろう、もしかして将来的に戦闘機に乗ろうとか思っているんだろうか？　確かにブラックロータスの小型ハンガーには一つ空きがあるから、戦闘機を運用することは可能だけれども――と考えていると、ドーントレスから作戦開始の通信が入ってきた。音声通信ではなく、文面による通達だ。作戦開始時間と星系内の座標データが添付されている。

「作戦開始みたいだな」
『アイアイサー。落とされるんじゃないわよ』
「そっちもな」

エルマが通信を切断する。さて、俺達も動くか。

「ミミ、ナビの設定を頼む」
「はい。到着時間も設定しますね」

ミミが作戦開始時間ぴったりに指定座標でワープアウトできるように自動航行システムにデータを入力していく。
超光速航行状態からワープアウト時には必ず強烈なエネルギー反応を引き起こしてしまうので、存在そのものを全く気づかれずに奇襲をかけるというのは不可能だ。なので、こういった大規模な奇襲――というか強襲をかける場合には、事前に座標とワープアウト時間を示し合わせて一斉に敵の直近にワープアウトし、すぐさま攻撃に移るという手法が使われる。
一応敵拠点のレーダー範囲外にワープアウトして時間をかけてこっそりと近づくって方法もあるが、どっちにしろ今回の戦術は大火力と物量による短期決戦だから合致しないな。

「行くか」
「「はい！」」
ミミとクギの元気のよい返事を聞きながら、自動航行システムをオンにする。さて、始めるとしよう。
☆★☆
光の矢のように後方へと飛んでいく恒星の光。それが突如停止し、同時にワープアウトの轟音が鳴り響く。
『クソが！　後ろに大量に沸きやがったぞ！？』
『内縁部に出るな！　押し潰されるぞ！』
『どうしろってんだ！？　小惑星帯の中をずっと飛んでけってか！？　そんなんで逃げられるわけねぇだろうが！』
「大盛況だな」
「そうですね」
既にレスタリアスを始めとした対宙賊独立艦隊の艦艇やブラックロータスによる宙賊基地への艦砲射撃は始まっており、運良く発着場を艦砲射撃で潰される前に外へと脱出できた宙賊どもが小惑星帯内に入ってきたところだったようだ。完璧に作戦通りだな。
「データリンク開始……これは丸見えですね」
「ドーントレスの偵察機は良い仕事するなぁ」
クリシュナのレーダーには小惑星帯内を右往左往している宙賊艦の反応がバッチリ映っていた。
ドーントレスの偵察機が斥候としてこの辺りの調査に来た時に、高度なレーダー機能を持つ情報人工衛星をこの辺りに設置していた

のだそうだ。戦闘が始まると同時にその情報人工衛星を起動した結果、こうして宙賊艦の動きが丸見えになっているということだな。

「我が君、サブシステムの起動準備も完了しました」

「よし。それじゃあ始めるぞ」

ウェポンシステムを起動し、小惑星帯の中に飛び込む。

既にドーントレスの戦闘機隊も小惑星帯内へと突入しており、宙賊艦との戦闘が始まっているようだ。少し出遅れたか？

「どこを狙いますか？」

「ど真ん中だな。バチバチやっていこう」

ドーントレスの戦闘機隊の実力の程はわからないが、レーダーの反応を見る限りは順調に宙賊どもを仕留めているようである。なら、同じように端から狩っていったのでは大した戦果は上げられない。ここはど真ん中に突っ込んで大暴れしてやるのが良いだろう。

スラスターを噴かして加速し、空間を漂う大小の小惑星の間を縫うようにクリシュナを疾駆させる。

「……」

クギが静かになってしまっているが大丈夫だろうか？　と一瞬だけ視線をクギに向けたら、頭の上の耳をぺたりと伏せて顔を青くしていた。ミミも小惑星帯内の高速航行に関しては慣れるのに時間がかかってたからなぁ。

「接敵します」

「はいよ」

クリシュナの三倍以上は大きな小惑星の陰から飛び出し、低速で航行している四隻の宙賊艦のうち一隻に狙いを絞って四門の重レーザー砲を斉射する。

『うおぉ！？　なんだ！？』

斉射を食らった宙賊艦のシールドが一瞬で飽和し、艦体の中央部に近い部分が爆発を起こした。一撃では沈まなかったか。やっぱここらの宙賊は少し装備が良いな。

『敵だ！　傭兵艦！』
『クソが！　叩き潰せ！』

意外と反応が早い。中破した宙賊艦以外の三隻がレーザータレットやマルチキャノンタレットで反撃してくる。

「ほい」

攻撃したそのままの勢いで宙賊達が潜伏していた小惑星と小惑星の間にできていた空間を通過し、別の小惑星の陰に入って反撃をやり過ごす。ふん？　少し食らったが、これくらいならいけるか。

「クギ、シールドセル用意」
「は、はいっ！」

再び小惑星の陰から飛び出し、今度は真正面から宙賊艦に突っ込んで四門の重レーザー砲と二門の散弾砲をぶっ放していく。当然ながら真正面から突っ込んでいるので被弾は避けられないが、こちらのシールドが削り切られるよりもこちらが向こうを叩き潰すほうが早い。

『こいつ火力が……うわぁぁぁっ！？』
『ぎッ――！』

四門の重レーザー砲の二斉射で一隻が爆散し、散弾砲の至近距離射撃でもう一隻のコックピットブロックが粉砕される。

『待て、こうふ――』
『やめっ、やめろォッ！？　俺の船はもう動け――』

一瞬で仲間が二隻撃破されたのを見て攻撃を止めた最後の一隻と、初撃で中破していた一隻も容赦なく撃破する。悪いな、そもそもお前ら宙賊に対する慈悲は持ち合わせていないし、今はドーントレスの戦闘機隊と競争中なんだ。七面倒臭い降伏やら何やらを受けている暇はない。

「次だ」
「はい！」

最後の一隻が攻撃を途中でやめたからシールドセルを使うまでもなかったな。チラリと再びクギの様子を窺うが、耳も顔色も相変わらずのままだ。こりゃ慣れるまでまだまだかかりそうだな。

#351　容赦無用（前書き）

なんだか今日は集中力がいま一つ……！（‘ω’）

#351　容赦無用

『バラバラに動くんじゃねぇ！　集まれ！　一点突破するぞ！』
『この状況でどうやって集まってるんだ！？　あぁ！？』
『とにかく逃げろ！　奴らに構うな！　小惑星を盾にしてひたすら進め！』

宙賊どものやりとりが通信越しに聞こえてくる。奴らはアホなので暗号化されてすらいない回線でよく通信しているのだが、今回はちゃんと暗号化されているな。それだけでこいつらの装備が他の星系の宙賊のものよりも多少まともだということがわかる。もっとも、暗号強度が低過ぎて聞いての通り全て筒抜けなのだが。

「ヒロ様、このままだと結構な数が抜けちゃいます」
「仕方ないね。俺の腕とクリシュナの火力なら小惑星帯でガン逃げされようとも追いかけて落とせるけど、軍の機体とはいえ戦闘機の火力じゃ落としきれないやつも出る。機動性とシールドがマシな宙賊なら抜けもするさ」

だからこそ、それを想定した布陣をしているわけだしな。

『超光速ドライブが起動しねぇぞ！　セーフティが解けねぇ！』
『クソどもの待ち伏せだ！　うわぁぁぁぁっ――！』

小惑星帯を抜けた宙賊どもがグラヴィティ・ジャマーを装備した妨害艦とその護衛の戦闘機隊に捕捉されたようだ。小惑星帯内で宙賊どもを追いかけ回している俺達の活躍によって図らずも宙賊側は戦力の逐次投入のような形になってしまっている。

二十隻の宙賊艦が一斉に押し寄せてくれば小惑星帯内縁部に配置されている妨害艦とその護衛機だけでは迎撃が間に合わないかもしれないが、二隻がバラバラに十回抜けていくなら迎撃は容易だ。

『ちょっと？　結構抜けてきてるんだけど？』

「思ったより数が多いんだよ。というか俺は頑張ってる。戦闘機隊の連中にもっと頑張るように言え」

『彼らにヒロと同じくらい働けって言うのはちょっと酷ってものよね……よし、撃破』

エルマも小惑星帯の内縁部で戦闘に入っているようだ。エルマのアントリオンが戦ってるってことはそこそこ多く抜けてるのか？いや、エルマが率先して賞金を稼いでいるだけかもしれんが。

「何にせよ状況をよりマシにするべく動くしか無いな。追撃するぞ」

「はいっ！」

小惑星をギリギリの距離ですり抜けながら宙賊艦をバンバン狩っていく。

これで一部が殿として抵抗し、一部が逃げに徹するとかやられると厄介なのだが、宙賊が自己犠牲の精神なんぞを持ち合わせている筈もないので。

「逃げに徹する宙賊艦のケツを撃ち抜いていくのは最早作業だよな」

「ここまで一方的だと微妙に罪悪感を覚えますね」

「とはいえ宙賊だしな」

有無を言わさず生死不問で爆発四散させるのはどうなのだ？　と思ったことがないわけではない。だが、奴らの所業を一度でも見てしまうとな。そういう同情心は消し飛ぶ。

「我が君、小惑星帯を抜けますが」
「そろそろ応援が必要かと思ってな」

宙賊のケツを撃ちながら情報人工衛星から送られてくるデータを確認していたのだが、そろそろ小惑星帯内での戦闘は終わりだ。基地から逃げた宙賊は小惑星帯から脱出しつつあり、グラヴィティ・ジャマーを装備した妨害艦の妨害範囲内に殺到しつつある。

「うわ、大乱戦ですね」
「突っ込むぞ」

小惑星帯を抜けると、妨害艦の護衛として配置されていたドーントレスの戦闘機隊と宙賊が盛大にやりあっていた。流石にこの乱戦では目視でアントリオンを見つけるのは難しいな。

「アントリオンの援護に向かうぞ。ナビ設定を頼む」
「はい！」
「クギはいつでもサブシステムを動かせるようにな」
「はい、我が君」

アントリオンに向かう途中で接近した宙賊艦を辻斬りのように撃破していく。こういう時には射角の広いアーム型のウェポンマウントが大変に使いやすい。いきなりクリシュナの重レーザー砲をぶち込まれた宙賊艦は何が起こったか理解することも出来なかっただろうな。

「あ、いたいた」

そうしてミミのナビゲーションに従って少し進むと、前方に激し

い光を放っている宙賊艦が見えてきた。あれはアントリオンの高出力レーザービームエミッターで焼かれてるな。キャパシターのエネルギーを垂れ流すとかそういう意味でゲロビーム、ゲロビなんて俗に呼ばれたりするが、あれは撃たれると滅茶苦茶鬱陶しいんだよな。シールドと装甲が弱い機体だと即致命傷になるし。

『やめろぉぉぉぉっ！？　降参！　降参する！』

多分現在進行系で焼かれている宙賊艦のパイロットが叫んでいるんだろうが、エルマは無言で宙賊艦を焼いた。ついにビームが宙賊艦のジェネレーターに到達したのか、それとも生命維持装置の酸素供給システムにでも引火したのか、焼かれていた宙賊艦が爆発四散する。

「容赦ないな」
『あら？　来たのね。あいつらに容赦する必要なんてないでしょ』
「違いない。シーカーばら撒きで牽制してくれ」
『アイアイサー』

アントリオンが二門のシーカーミサイルポッドからミサイルを発射する。これで奴らはシーカーミサイルの回避を優先するために真っ直ぐ逃げるのが難しくなるわけだ。宙賊艦が出せるような速度では普通に真っ直ぐ飛んでもシーカーミサイルに追いつかれるからな。

「どんどんやっていくぞ」
『オーケー。競争ね』
「競争は無理じゃないかな」
『言うじゃない』

機動性と総火力が違うからな。まぁ、本人はやる気のようだしお

手並み拝見と行こうか。

□■□

作戦全体の進捗は順調だ。既に出撃済みで呼び戻せなかった傭兵の戦力以上にドーントレスから戦闘機隊を出して貰えたので、航宙戦では危なげなく勝利を掴み取ることが出来た。エッジワールドの宙賊だからと警戒していたのだが、被害も軽微に収まったようだ。

「制圧作戦の進捗は？」
「敵主力の排除は完了。後は細かいところを制圧していくところです」
「毎回のことながら面倒ですね……海兵のメンタルケアはしっかりするとしましょう」

海兵達の大半は宙賊基地の中で見たくもないものを目にすることになる。奴らの『休憩所』程度ならまだマシな方で『加工場』だの『商品倉庫』だのといった施設となると……思い出しただけで気が滅入る。

「新装備の使い勝手は良さそうですね」
「はい。ドーントレスの戦闘機隊の働きもありますが、やはり超光速ドライブの起動を阻害できるのは有利ですね」

ロビットソンの返事を聞きながら、ヒロ達の戦果を確認する。やはり頭一つどころか二つ三つは抜けていますね、彼は。エルマさんもちゃんと戦果を上げているようですし。これだけの戦果があれば多少の融通はできそうです。知り合いだからと依怙贔屓するのは私の矜持が許しませんが、正当な評価をする分には何の問題もありません。

「あとは制圧が問題なく完了すれば――」
「大佐、問題発生です」
「――内容は？」
「例の玉が発見されたようです。未起動状態ですが」
「面倒な……予備戦力と収容班を向かわせなさい」

どうにもこのところ物事がスムーズに行きませんね。彼の影響――いや考え過ぎか。彼が居ると事態がとんでもない方向に進むことがありますから……前のマザーの情報のように何か知っているかもしれませんね。ちょっと直接会って締め上げ――お行儀よく聞き出してみましょうか。

#352　謎のタマに関するクギの見解（前書き）

今日は暑かったですねぇ（ ，ω，）

#352　謎のタマに関するクギの見解

「それでは、作戦の成功を祝して乾杯」
「「「かんぱーい！」」」

飲兵衛三人――いや四人が杯を掲げてその中身を呷る。スコール！　とか言えば良いのか？　いや、それは北欧のヴァイキング的なアレだから今ひとつこの場には合わないか。どっちかというと俺達は海賊を倒す方の立場だからな。

「どうしました？　キャプテン・ヒロ。あまり飲み物が進んでいないようですが」

一杯目を豪快に飲み干したセレナ大佐が早速絡んでくる。
今が一体どういう状況なのかと言うと、要は打ち上げである。滞りなく宙賊の拠点を破壊し、多くの宙賊をスペースデブリに変えてやった祝いとして、新進気鋭の大佐殿が酒と食い物を用意して作戦参加者達に振る舞ってくださっているというわけだ。
当然、一つの店に収まるような人数ではないので、いくつもの店を貸し切ったり、酒や食い物を対宙賊独立艦隊の船にデリバリーさせて臨時の会場としたりすることで今回の大宴会を実現した。
このマネジメント能力には目を瞠ったね。貴族の能力を無駄遣いしてねぇか？　と思わなくもなかったが、セレナ大佐が無駄なことをするはずもない。彼女の中でこうする必要があると判断したからこの催しは実行されたのだろう。

「そっちは盛大にやっているようだが、あまり羽目を外しすぎるなよ。今日は何かやらかしても庇えないぞ」

ちなみに、俺とクルー達が招待されたのは対宙賊独立艦隊の旗艦であるレスタリアスである。この会場は特に活躍した連中が集められている場所で、うちのクルーは全員こちらに招待された。

「わかってます」

そう言って金髪紅眼の美貌の大佐殿が少しだけ頬を膨らませてみせた。なんだろう、これは。まるで狙ったかのようにあざとい仕草である。何か企んでいないか？　俺は内心でセレナ大佐に対する警戒度のレベルを二段階ほど引き上げた。

そもそも、俺は参加を断ろうとしたのだ。俺達は俺達で慎ましく身内だけでやりますって感じでな。しかし参加した傭兵の中で勲功第一の貴方が参加しないのは私の沽券に関わる。そこをなんとか頼むとセレナ大佐に言われてしまっては断りづらい。結局俺が折れてこうして参加することになったわけだが、セレナ大佐の態度がどうにも妙だ。

「……なんだか警戒していませんか？」

「どうかな」

そう言って俺は甘いお茶のような飲み物をストローで吸い上げる。うーん、これはアレだな。所謂スウィートティーってやつだな。レモンというか柑橘系の風味も利いている。もっとも、本物の果汁が使われているとは思えないが。

「今日は私の部下も居ますし、滅多なことにはなりませんよ。警戒する要素はないですから安心して下さい」

「理詰めで考えるとそうなんだが、こういう時こそ危ないって俺は思うんだよな。何を企んでる？」

「何も企んでません。ちょっと猜疑心が強すぎませんか？」
ほんとぉ？　なんか嘘くさいんだけど。今の俺に権力を使った無理押しはそうそう効かないが、この人策士タイプに見えて脳筋タイプだから。下手な対応をすると予想もしないような力技を使ってきかねない。
「オーケーわかった。腹を割って話そう。俺は嘘をつかない。大佐も嘘をつかない。フェアに行こう」
「人の話聞いてます？」
「だって絶対何か企んでるじゃん。俺も命は惜しいしクルー達を養う責任もあるからさ」
「私が知りたいことを話し合う前に、貴方の私に対する認識について話し合いたくなってきました」
「その点についてはまたの機会にしよう。それで？」
デリバリーで運ばれてきたチキンナゲットのような何かを摘みつつ、セレナ大佐に話を促す。どうせ大佐のことだから仕事＝宙賊か例のタマ関係の話だろうけど。
「いつものことと言えばいつものことですが、貴方が関わると事態の展開が早過ぎます。実は貴方が全て仕組んでいるとかそういうことはありませんね？」
「エッジワールドの宙賊は俺が関わるまでもなくこの辺に居たし、例のタマだって探索者が未探査領域から持ってきたモンだろ……俺がどうやって仕組むんだよ」
「そうですよね。わかっています。わかっていてもなお聞きたくなるくらい貴方が関わるとこういう感じになるので」
「それについてはクギ曰く、俺の才能みたいなもんらしいけどな」
「ああ、前に言っていた要領を得ない話ですか。確かに貴方はそう

そういない傑物の類でしょうが……」

セレナ大佐がジロジロと俺に視線を向けてくる。

「……まぁ、その話は横に置きましょう。私が聞きたいのは例のタマについてです。何か知りませんか？」

「何かってなんだよ……俺だってあんなのを見たのはアーマーを取りに行って突然襲われた時が初めてだし、直接刃を交えて知っている以上の情報はないぞ。寧ろ、アレの残骸やら現物やらを確保して分析している軍の方がアレについては詳しいだろ？」

そもそもどうして俺が知っていると思ったのか。ああ、アレか？　前に結晶生命体のマザークリスタルの情報を話したからか？　今回も同じように『出所不明』のコア情報を持っているんじゃないかと思ったんだな。

「マザーの件と違って今回は本当に何も知らないぞ。アレはたまたま知ってただけだ」

「たまたま、ねぇ……？」

セレナ大佐が疑っていますといわんばかりの視線を向けてくる。いや、実際疑っているんだろうが。結晶生命体のマザークリスタルの件だって出所不明とはいえこの世界の誰もまだ知らない筈の情報を俺は持っていたんだから、今回の殺人兵器に変形する謎のタマについても何か知っているんじゃないかと疑うのは仕方のない話だ。

「本当だからな？　ああ、でも何か知っている可能性があるとすれば……おーい、クギ。ちょっと来てくれ」

俺がクギを呼ぶと、セレナ大佐は首を傾げた。何故クギを呼ぶの

かがよくわからなかったのだろう。セレナ大佐がクギについて知っている情報といえば、彼女がヴェルザルス神聖帝国の巫女という立場で、なんだかよくわからない理由で俺に付き従っているということだけだ。例のタマの話とどう結びつくのかわからないという考えも理解は出来る。

「はい、我が君。セレナ閣下もご機嫌麗しゅう」

俺に呼ばれたクギがトテトテと俺のもとへと歩み寄ってきてセレナ大佐にペコリとお辞儀をした。どこか浮世場離れした雰囲気のクギだが、基本的には素直で礼儀正しい良い子である。

「ここに座ってくれ。改めて聞きたいんだけど、例のタマから思念波を感じたって言ってたよな？」

「はい、我が君。あの存在からは思念波を感じました。主に困惑と恐怖、それに怒りの感情です」

「ちょ、ちょっと待って下さい。話についていけません。思念波というのは？　クギさんは思考を読めるということですか？」

セレナ大佐が珍しく狼狽えた様子で少し身を引いている。なんだ？　思考を読まれるとやましいことでもあるのか？　まぁ全くない人の方が珍しいか。誰だって後ろめたいことの一つや二つ抱えてるものだよな。

「いいえ、此の身に読心の術は使えません。此の身が得意とするのは以心伝心の術で、読心の術とは少し術理が違うのです」

「以心伝心……テレパス能力ってことか？」

「はい。外の国ではテレパシー、テレパスなどと呼ばれているそうですね。此の身が得意とするのは自分の心を思念波を通して相手に伝えること、そして発された思念波を受け取ることです。船に例え

るのであれば、通信機の送受信能力です。読心の能力は科学技術で言うところのハッキング、あるいはクラッキングといった技術にあたります」

確かにそう聞くと別の技術って感じがするな。クギが俺に嘘をつくとも思えないし、きっと彼女の言っていることは本当なんだろう。

「なるほど。となると、あのタマはサイオニック系の言語能力、つまりテレパシーを使ってコミュニケーションを取る知的生命体の可能性があるのか？」

「申し訳ありません。此の身が彼らから感じた思念波はどちらも恐怖と混乱に満ちたもので、その判断はつけられませんでした。ただ、彼らから感じた混乱と恐怖の思念波は相当のものです。正直に言えば、此の身はあそこまで悲痛な思念波を感じたことは今までにありません。コミュニケーションの主な方法が思念波のやり取りによるものだということは間違いないと思います」

「……頭が痛くなってきました」

俺とクギのやり取りを横で聞いていたセレナ大佐が頭を抱えて呻く。まぁ気持ちはわかる。今まで謎の異星文明が作った機械兵器、ないし生物兵器だと思っていた謎のタマが実はテレパス能力を主なコミュニケーション手段にしている知的生命体である可能性が出てきたのだから。

「流石にテレパス能力となると今の我々の装備ではお手上げなのですが。これはどうしたものか」

「上に相談するしか無いんじゃないか？　あるいは聞かなかったことにするか」

あのタマがテレパス能力を用いる生命体であると確信しているの

はクギだけで、その話を知っているのはクギを含めた俺達三人だけである。

「考えておきます……とりあえずこの件は他の人には話さないで下さい」

セレナ大佐がテーブルに向かってガクリと俯き、ブラックホール並に重たい溜息を吐く。いらんことを聞いてしまったセレナ大佐には同情するが、俺には関係ないからなぁ。相手が何であったとしても、殺すつもりで襲いかかってくるなら身を守るだけだし。

まぁ飲め、嫌なことを一時的に忘れるくらいのことはできるぞ。きっと。

#353　弱っている金髪の子（前書き）

過ごしやすい気温なのは良いんだけど、天気が悪いとどうも捗りませんね―（：3」∠）―

#353　弱っている金髪の子

翌日。

「おはようございます……」
「ああ……おはよう。ええと、朝食は？　済ませてるならコーヒーでも飲むか？」
「お茶でお願いします……」

朝っぱらからどんよりとした空気を身に纏ったセレナ大佐がブラックロータスを訪ねてきていた。まだ俺は朝の身支度を整えただけで、朝食を取ってすらいないし朝の運動もまだなんだが。
俺が彼女の乗船を許可した覚えはないのだが、この場にはメイがいる。彼女が付き添っていれば仮にセレナ大佐に何らかの悪意があったとしても余裕で対処が可能だ。ということは、恐らく自分が付き添うことを条件としてセレナ大佐を招き入れたのだろうな。

「お待たせ致しました」
「ありがとう」

メイが俺の朝食とセレナ大佐のお茶を運んできてくれる。俺の今日の朝食は大盛りの白米――のようなものを主食として、肉野菜炒めのようなもの、卵焼きのようなもの、葉野菜のお浸しのようなもの、といった感じで汁物が無い以外はボリュームたっぷりの和風定食のような感じである。
昨晩はちょっとエルマと張り切ったからな、朝からボリュームが多め……うちのシェフことテツジンはそういう情報をどうやって収集しているのだろうか？　メイが一枚噛んでいるのか？　きっとそ

うだな。ちなみにエルマはまだスヤスヤと眠っている。

「朝から良い食欲ですね……」

「これからしっかり運動もするんでな。そうでなくとも朝飯はちゃんと食った方が一日を通したパフォーマンスは上がるってもんだ。それで？　朝っぱらから訪ねてくるとは珍しいな？」

朝っぱらからこんなところで油を売っている暇があるのか？　という意味も込めてセレナ大佐に視線を向けると、彼女はメイが用意したお茶を一口飲んでから重い重い溜息を吐き、たっぷりと時間をかけてから口を開いた。

「……クギさんを貸してください」

「えぇ……？　まぁクギのことだから俺がそうしろと言えば唯々諾々と従ってくれそうな気はするが、セレナ大佐の要請を黙って飲む理由が俺にはないな」

「意地悪なことを言わないでくださいよ……本当に困っているんです」

「知り合いが困ってるなら助けてやるのが人情ってやつなのかもしれないが、クルーの身の安全を預かっているキャプテンとしては安易には頷けんね」

俺としては意地悪を言っているつもりは一切ない。というか、このやり取りで意地悪をしないでくれだなんて泣き言が出てくる辺り、相当弱ってるなこれは。

「弱ってるってのは察せられるが、泣き落としには屈しないぞ。軍の任務、それも機密に関するような案件を傭兵とはいえ一般人に手伝わせるってんならそれなりの体裁を整えて、然るべき筋を通してくれって話だ。今回の案件、下手すれば闇から闇に葬られかねない

じゃないか」
「わかります、わかりますよ……ただ、何もかもちゃんと筋を通して物事を進められるかというと、世の中そんなに上手くは出来ていないわけです。だからこそ、こうして私が人目を忍んで要請しに来ているんです」
「それを高級軍人の大佐殿が言ってしまうのはどうなのよ……」

思わず苦笑いがこみ上げてくる。まぁ、闇から闇にって話をすると知ってしまっている時点で俺とクギはアウトなので、毒を喰らわば皿までという考えも無くはないのだが。正直この案件は着地点も見えないし、あまり関わりたくはないんだよな。意思の疎通が出来なかったが故の不幸な事故とはいえ、帝国は知的種族かもしれないあのタマを収奪して連れ去り、何体も破壊しているわけだから。

もしあのタマがテレパシーを主なコミュニケーション手段とする知的生命体だとしたら、グラッカン帝国は宇宙文化保護法にガッツリ抵触することになる。国際的には大チョンボと言えるやらかしと言えよう。その事実を消し去るために帝国が俺とクギ、というか俺達全員を闇から闇に葬ろうと考えない保証は一切ない。

「警戒する気持ちはわからなくもないですが、貴方は傭兵ギルドのプラチナランカーで、帝国からゴールドスターも授与されている名誉子爵ですよ。いくらなんでも闇から闇に葬る、みたいな真似はできませんから。そこは安心して下さい」
「……俺は何も言ってないが」
「貴方の考えることくらいわかりますよ。もうそれなりの付き合いでしょう……本当に貴方は帝国というか、権力に対する猜疑心が強いですよね」
「俺は相手を過小評価しない性質でね」
「相手を過小評価しないようにするのは立派なことですが、自己分析にも力を入れたほうが良いと思いますよ」

セレナ大佐が紅い眼でジットリとした視線を向けてくる。用心深いのが俺の美点なんだ。ほっとけ。

「協力するのは良いけど、タダではやらないぞ。あと、クギを一人でそっちに貸し出すってのは絶対にＮＧだ。最低でも俺かメイのどちらかの付き添いを必須とする。ついでに言うと今回の件は高くつく。機密保持契約も含めて一日あたり５万エネルだな」

「……それはちょっと法外では？」

「プラチナランカーの一日あたりの拘束費が２０万エネルってことを考えれば有情だろ？　クギを貸し出している間はクリシュナかブラックロータスのどっちかが動かせないんだ。つまり、チーム全体が動けないってことだ」

「いや、既に相場通りの価格を傭兵ギルド経由で払っていますよね？」

「それはそれ、これはこれ。機密保持費と出撃して稼ぐ賞金を考えれば５万で済ませるってのは相当譲歩してると思うが？　というか、機密保持契約金として一日あたり５万払いましたってことにした方が逆にお上は安心するんじゃないのか？」

エッジワールドの宙賊どもにかかっている賞金は普通の恒星系に居る連中よりも高く設定されているからな。三隻も撃破すれば５万エネルくらいあっという間に稼げてしまう。

「……それはそうかもしれませんが」

セレナ大佐はそう言って暫く悩んでみせた後、溜息を吐いた。

「支払い方法は足がつかない方法で良いぞ。レアメタルのインゴットとかでな」

「……頭が痛いです」
「宮仕えってのは大変だな」

基本的にセレナ大佐は清廉潔白かつ品行方正。曲がったことが嫌いな『善い』貴族なので、こういった裏取引だとか不正ギリギリみたいなグレーゾーン行為は意に沿わないんだろう。
とはいえ、帝国航宙軍の大佐ともなれば清濁併せ呑む度量も必要になるのだろうから、これはこれで彼女にとっては良い経験になるんだろうな。多分。知らんけど。

「例のタマは確保、収容してあるんだよな。場所はレスタリアスか？」
「……えぇ、まぁ、そうですね。レスタリアスの貨物区画の一部を改造して臨時の収容、分析、研究施設を作ってあるんです。研究者も同乗しています」
「なるほどね。それじゃあ準備をしたら早速行くとするか」

クギとミミは俺より早く起きて今頃はトレーニングルームで運動をしている筈だ。連絡して途中で切り上げてもらって、早速その研究施設とやらに向かうことにしよう。ああ、何かの役に立つかもしれないからアレでも持っていくかな。ティーナとウィスカもなにか有意な意見を出せるかもしれないし、セレナ大佐が許可を出してくれるなら連れて行ってみるか。

#354　想像だにせぬ再会（前書き）

頑張った（ ˇ ω ˇ ）

#354　想像だにせぬ再会

「外からは何度も見とったけど、遂に足を踏み入れることになったなぁ」
「機関室とか見せてもらえないかな？」

セレナ大佐との話し合いから凡そ一時間後。俺とクギ、それにティーナとウィスカの四人は対宙賊独立艦隊の旗艦であるレスタリアスへと足を運んでいた。俺とクギはいつも通りの格好だが、ティーナとウィスカはそれぞれフル装備に大荷物を背負っている。
尤も、フル装備とは言ってもそれはエンジニアとしてのフル装備なので、いつもの作業用ジャンプスーツに各種工具、データタブレット、それと俺が持ってくるように言っておいた荷物といった感じだ。決して戦闘用とかそういう感じではない。そもそも二人は非戦闘員だが。

「クギも付き合ってもらって悪いな」
「いいえ、我が君。此の身が御役に立てるのであればそれ以上の名誉はありません」

そう言ってクギは耳をピンと立ててふんすと鼻息を荒くしている。三本のふさふさ尻尾もゆったりふわふわと振られている。本当に健気な良い子だなぁ。
そうして歩いているうちにレスタリアスが停泊している特大型ドッキングベイエリアに着いたので、小型情報端末でＩＤを提示してセキュリティゲートを通らせてもらう。当然ながらこの辺りは高セキュリティエリアなので、許可を得ずにうろついていたりすると容赦なく逮捕される。抵抗すればレーザーライフルで撃たれるし、も

し歩哨をなんとかしてもあちこちからパワーアーマーと重火器で武装したガチムチのお兄さんお姉さん達という強力極まりない増援が来ることになる。
当然だが、最悪の場合は停泊しているレスタリアスやその他の軍用艦の艦砲で狙われる可能性すらある。どんなに高額のエネルを積まれてもこんな場所に殴り込むのだけは絶対に御免だな。

「どうも、キャプテン・ヒロ。お手間をお掛けします」
「ああ、ロビットソン大尉。こっちこそわざわざ案内をしてもらって済まないな」

レスタリアスのタラップではセレナ大佐の副官であるロビットソン大尉が俺達を待っていた。

「今日はどうもよろしゅう」
「よろしくお願いします」

ティーナとウィスカがそう言って挨拶し、クギも静かに頭を下げる。
挨拶も済んだところでロビットソン大尉は早速俺達をレスタリアスの内部へと誘った。

「船倉の方に行くのは初めてだな」
「艦橋や応接室、士官食堂にミーティングスペースなどは中央ブロックに集中しているので、今まで来る機会が無かったのでしょうな。下部ブロックには主にクルーの居住区画や物資格納庫などが配置されているので」
「そりゃ確かに用がないな」

レスタリアスのクルーとはまぁ、それなりに仲良くなっている連

中もいる。俺は暫くの間ミミやエルマと一緒にレスタリアスに通って宙賊狩りの方法を指南していたことがあるからな。ただ、居住区画にある彼ら彼女らのプライベートなスペースにまでお邪魔するような関係には流石に至っていない。

アレだからな。個人のスペースってのは一種の聖域だからな。航宙艦の内部然り、コロニーを始めとした宇宙空間構造物然り、個人用のスペースというものはある種の贅沢品なのである。そこに他者を招き入れるというのは親しい仲でもそうそうあることではないらしい。俺の感覚では正直よくわからんところもあるんだが。

そういう意味でクルー達に広大な休憩スペースやトレーニングルーム、それにそれなりの大きさの個室を大盤振る舞いする俺は世間的に見ると超高待遇をクルーに与える太っ腹キャプテンなのだそうだ。

「この先です。今日は爆発してないと良いんですがね」

「ちょっと待って今なんか不穏なワードが聞こえたんだが？」

俺がそう言うのと、ロビットソン大尉が研究区画のエアロックを開けるのと、エアロックの先から炸裂音と圧力が押し寄せてくるのは寸分違わず同時であった。

「ぶおっ！？」

「うおぅ！？」

「おっと」

「きゃっ！？」

俺とロビットソン大尉は爆圧を受けてたたらを踏むことになり、ティーナとウィスカはまるでわかっていたかのような反応速度でエアロックの左右に避けてやり過ごした。クギはウィスカが無言で自分の方に引っ張って事なきを得たようである。

「またか……」
「なんか耳が変な感じに……あーあー」

俺もロビットソン大尉も怪我らしい怪我はしていないが、俺はなんか耳の調子が変になった。閉鎖環境で急な圧力の変化に曝されたからだろうか？　致命的なことにならなかったのはレスタリアスの空調設備を含めた生命維持システムか、ダメージコントロールシステムのおかげだろうな。

「いつもこんな調子なのか？」
「残念ながら」

研究区画から押し寄せてきた圧力を一番前でモロに食らったロビットソン大尉が埃っぽくなった自身の軍服と髪の毛を軽く払い、溜め息を吐く。どうもアレだな？　さてはここにいる科学者だか研究者だかは相当エキセントリックな連中なんだな？

俺の中でエキセントリックな科学者となると長髪に眼鏡の似合うショーコ先生くらいしか頭に浮かんで来ないんだが……元気にしてるかな、あの人は。意外とドジっ子というか抜けてるところがありそうだから、トラブルに巻き込まれたりしていないか若干心配だ。

「だからシールド強度の見積もりが甘いと言ったじゃないか。見たまえ、この惨状を。セレナ大佐やロビットソン大尉に見つかったら大目玉だよ？」
「確かに見積もりが甘かったことは認める。だが誰も怪我をしていないし、機器もそんなには壊れていないじゃないか。それに有意なデータは手に入ったんだからヨシってやつだ」

荒れ果てた――そう表現するしかないほどに色々なものが散らば

っている――研究室で二人の研究者らしき人物が話し合っている。その周りではあちこちにへこみや傷があるロボットアーム付きの宙に浮かぶ球体達がせせこましく掃除をしていた。多分助手ロボットか何かだろう。

「だそうだよ、ロビットソン大尉？」

「説明をしてください。今、私は冷静さを欠こうとしています」

女性科学者に話を振られたロビットソン大尉の背中越しに荒ぶる熊のオーラが見える気がする。これは下手なことを言うと剛腕で一発ノックアウトになりそうだなぁ……などと考えていると、ロビットソン大尉に話を振っていた女性科学者が俺の方をジッと見ていることに気がついた。

実験用のものなのか、フルフェイスの奇妙なマスクをしているので彼女の人相は全くわからない。

背が結構高め――俺と同じくらい――で、女性特有の膨らみが実験着の胸部をこれでもかと押し上げていたから彼女が『彼女』であることがわかっただけで、それ以外の要素では個人を特定することすらできそうにない格好なのである。

「まさかここで会うとはねぇ。久しぶ――なんだか連れている女性の顔ぶれが違わないかい？」

スタスタと俺のもとへと歩み寄ってきた女性科学者がジッと俺に顔を向けてくる。なんだろう。マスク越しだからよくわからないんだが、これは睨まれているんだろうか？

「いや、誰……いやまさか。もしかしてショーコ先生か？」

まさかとは思いつつも、彼女の声はつい先程脳裏に浮かべた人物

とあまりにも似過ぎていた。

「そうだよ。ひと目見てわからないなんて薄情……そうか、マスクをつけていたね」

そう言って女性科学者が被っていたマスクを外す。奇妙なマスクの下から出てきたのは紛れもなくアレイン星系でお世話になったショーコ先生であった。濃い茶色の長髪も、少し野暮ったい眼鏡も、その奥の少し眠たげな目も俺の記憶通りだ。

「久しぶりだね。ヒロ君。風の噂で活躍は耳にしていたよ」

「本当に久しぶりだけど……何故ここに？」

意味がわからない。何故彼女が軍の科学者としてこんなところにいるのだろうか？　彼女は以前立ち寄ったアレイン星系で偶然関わることになったイナガワテクノロジーの女性医師だ。

元々研究畑の人間なのだと聞いたような気はするが、それにしてもこんな場所で例のタマを研究するためにレスタリアスに搭乗しているとは思わなかったし、どれだけ考えても彼女がこの船に乗っている理由の想像がつかない。

「まぁ、それはアレだよ。ええと、キャリアアップってやつさ。それで軍に出向したら、何の因果かエッジワールドくんだりまで来ることになってしまってね……と、私の話は横に置いて、質問に答えてもらっていいかな？」

「ああ。ミミとエルマは船でお留守番だよ。技術的な話となると俺を含めて三人ともお手上げだから。俺は単純にキャプテンとしてクルーの彼女達の付き添いで来たのさ」

「ふぅん、なるほどねぇ……」

納得してくれたのか、ショーコ先生はそう呟いて整備士姉妹とクギに視線を向け、再度俺に視線を向けてきた。

「君は相変わらずみたいだね」

「どういう意味で言っているのかはわかりかねるが、俺は俺のままだよ。いてっ」

ショーコ先生がにやりと笑って俺の尻を叩く。やめてくれ。ショーコ先生に尻を触られると嫌な記憶を思い出しそうになるから。

「……紹介は不要のようですな」

俺とショーコ先生のやり取りを興味深そうに観察していたロビットソン大尉が呟く。

「ヒロ君にはね。そちらのお嬢さん達には必要だろうから、自分で名乗らせてもらうよ。私の名前はショーコ。イナガワテクノロジーの科学者で、以前ヒロ君にはアレイン星系で色々とお世話になったのさ。よろしくね」

そう言ってショーコ先生が掴みどころのない笑みを浮かべて見せた。

#355　収容室（前書き）

あづい―（：3「ノ）―

#355　収容室

「私の事情については横に置いて、まずは仕事の話をしよう。お互い暇な身ってわけでもないだろうしね」
「それはそうだな」
「ああ、ちなみにあっちでロビットソン大尉に絞られているのはウエルズだよ。彼も私と同じく民間の科学者でね。イーグルダイナミクスのボット設計者さ」
「へぇ、イーグルダイナミクスの。あそこの戦闘ボットはうちでも使ってるんだよな」

普段はティーナとウィスカが即席のメンテナンスボットとしても使っていたりする。同じイーグルダイナミクス製のメンテナンスボットのデータを流用しているから互換性が高いとかなんとか。

「ヒロ君のことだから高いのを買っていそうだねぇ」
「メンテナンスシステム込みでまるまる一ユニット、全装備付き」
「それは高そうだ」

人差し指を立てて俺がそう言うと、ショーコ先生は口元に手をやってくふふ、と笑った。笑うのを堪えたのかね、それは。

「それで、私はサイオニック能力者が来るって話を聞いていたんだけど、まさか？」
「いや、俺は違う……わけでもないけど、今日の主役はこっち。うちのクルーのクギだ。ヴェルザルス神聖帝国の出身でね」
「へぇ、神聖帝国の……なるほど。ところでその耳とか尻尾とか触っていいかな？」

ショーコ先生がクギに近寄り、その周りをグルグルと歩き回りながらクギの全身を観察し――めっちゃ気軽に距離を詰めてくるじゃん。

「ええと……耳だけなら」

「ありがとう。ふむ……骨格は一般的なヒューマノイドに近いけど、頭蓋骨の形は結構違いそうだね。クギさんの種族は人間との交配も可能なのかな？」

「はぅ、で、できますぅ」

かなり遠慮なく頭の上の獣耳を触られているクギが頬を赤くて震えながら答える。その質問の意図は一体何なんだ。

「興味深い。ヴェルザルス神聖帝国の人は皆こんな感じなのかな？　当然サイオニック能力者も多いんだよね。後でＤＮＡのサンプルを取らせてもらっても？」

「はい、終わり。下がって下がって。お客様、過度なお触りは困りますよ」

「ああっ、人類進化の鍵が」

いかにも残念そうにしているけど、半分ふざけてるな。いや、半分本気ってことなんだけど。放っておいたら本当にＤＮＡを採取し始めそうなので止めておこう。

「まずは仕事の話って言ったのはショーコ先生だろう？　脱線してるぞ」

「おっと、そうだった。すまないね、あまりに興味深くて……とりあえず、検体のところに行こうか。ついてきてくれ」

そう言ってショーコ先生が踵を返し、先に歩き始める。ロビットソン大尉に監視されながらタブレットに何か入力しているウェルズ氏が恨めしそうな視線を送ってきていたが、無視しておいた。大人なんだから自分でやったことのツケはちゃんと自分で払わないとな。

「暫くの間『彼ら』とのコミュニケーションを試みていたんだけど、手詰まりでね。音声は勿論のこと、あらゆる種類の通信波にも応答してくれなくて困ってたんだよ」

シールドによる二重の封鎖を通過し、広大な空間に出る。

「おぉ……こりゃすごい」

「贅沢にスペースを使わせてもらっているよ。機材もなかなかでね。さすがは帝国航宙軍。お金を持ってるよね」

広大な空間には二十個を超える数のタマが一つ一つ別のシールドに隔離されて収容されていた。球体のまま鎮座しているものもあれば、殺人機械フォームに変形してじっとしているのもあるし、一心不乱にシールドに鎌のような刃物を叩きつけ続けているのもいる。

「じっとしてるのはともかく、ガンガンシールド叩いてるのは迫力あんなぁ」

「そうだね、お姉ちゃん。いくら叩いてもシールドは突破できないだろうけど」

「あの材質は実に興味深いね。特にエネルギー兵器全般に対する耐性が並外れているよ。分析したところ、他に見ない結晶構造をしていてね。エネルギーの伝搬効率が非常に高いんだよ。高出力のレーザーやプラズマの熱に曝されても蒸発や崩壊を起こす前に全体にエネルギーを伝搬、拡散して威力を低下させてしまうんだ」

「……つまり？」

「エネルギー兵器っちゅうのは基本的に膨大な熱量を一点に集中させて照射点を一瞬で蒸発、爆発させて破壊を引き起こすって感じやん？　例えるならこのタマの構造材は百の熱量を一ずつの熱量に分解して構造体全体で受け止めるようになってるってことやね」
「なんとなくイメージができたかもしれない」

点の攻撃を強制的に面の攻撃に変換して受け止める、みたいなイメージでいいのかな。

「まるで物理的なシールドみたいだな」
「その表現は実に的を射ているね。問題は、この構造材を船の装甲材として使った場合エネルギー兵器に対して驚異的な耐久力を発揮する代わりに、許容量を超えると一斉に崩壊する可能性が高いという点かな。シールドが飽和してダウンするみたいにね」
「それでも有用そうに思えるけどな」

もし装甲材として使わないとしても、この性質そのものはいくらでも利用価値がありそうだ。機械にとって熱問題ってのはどんな時にもついて回るものだろうからな。

「人工的に合成できるようになればあらゆる分野で使い途があるのは確かだろうね。装甲材として見ると硬度や靭性は現行の装甲材に比べれば劣るけれど、それを補ってあまりある有用な特性を有していると私も思うよ」

話しながらショーコ先生は殺人機械モードに変形したままじっとしているタマの元へと俺達を連れてきた。

「この個体が検体の中では一番大人しい個体でね。もっとも、大人しいばかりで全く対話に応じてくれる気配がないんだけど」

青白いシールドの向こうにでジッとしている殺人機械モードのタマを眺める。こうしてじっくり見るのは初めてだな。足の数は六本で、全体的に黒い色をしている。装甲だか甲殻だからからんが、とにかく体表はつるりとしており、光沢を放っている。

「そういえばこいつ、戦闘時に叫び声みたいなものを上げてた気がするんだが。やっぱり音声で情報をやり取りするんじゃないのか？」

「ああ、その報告は実際にコレと戦った帝国航宙軍の海兵からもあったね。スキャンの結果、彼らに退化した発声器官と思しきものは発見できたよ。ただ、今のところ同族同士でそういったものを使ってコミュニケーションを取っている様子は見られないね」

と、俺とショーコ先生が話している横でクギは殺人機械モードのタマをジッと見つめ、整備士姉妹は隔離シールドの周りを回って様々な角度からタマを観察し始めた。

「コミュニケーションは取れそうか？」

「……申し訳ありません、我が君。拒否されてしまいました。此の身は彼らではない、と」

「拒否されたってことは、応答はあったわけだね。これは進展と言っても良いねぇ。うんうん」

耳をペタンと伏せて謝るクギであったが、ショーコ先生はその横で満足げに頷いていた。クギが落ち込むのはわかるけど、何故この人はこんなに満足げなのだろうか。これがわからない。

「進展してなくない？」

「いやいや、彼らのコミュニケーションの様式がサイオニック能力者が扱うものと同じ精神波であるということがわかっただけでも十

分な成果だよ。しかし困ったな、そうなると精神増幅素材が無いと、サイオニック能力の無い我々ではコミュニケーションの取りようがないということになるね」
「ああ、それなら用意してきた。おーい、ティーナ」
「ほいほい。あ、兄さんは触ったらあかんで？」
「はい」

俺が触れると粉々に砕け散っちゃうんだよな。これ。なんか俺の力が強すぎるとかで。そのせいで博物館の展示品を破壊してしまったり、デカい森に墜落する羽目になったりとあまり相性がよろしくないんだよ。

「用意してきたって……えぇ？　どういうことだい？」
「前にリーフィル星系に行く機会があってな。ほら、エルマはエルフだろ？」
「ああ、そうだったね。それでエルフの故郷に？　でも、確かこの手の素材の持ち出しは厳しいんじゃなかったかな？」
「まぁそこは色々あってな……あの星系のエルフとは仲良くなったんだよ」
「ははぁ……まぁ、今は事情は聞かないでおくよ。今度機会があったら聞かせてくれ」
「オーケー」

そうして話しているうちにティーナが背負っていたハードケースを床に下ろし、開封した。

「おぉ？」
「おやおや？」

その瞬間、今までじっとしていたタマが物凄い勢いでこちらへと

近寄ってきた。シールドに触れないギリギリまで接近してこちらの様子――というかティーナが開封したシールドケースの中身に興味を示しているように見える。よく見れば、他の個体もこちらに明らかにこちらへと興味を向けているようだ。一心不乱にシールドに鎌を叩きつけていた個体ですらその作業を止めてこちらに興味を示している。

「これは面白いことになったねぇ」

その様子を見たショーコ先生がニヤニヤとした笑みを浮かべた。悪そうな笑顔だなぁ。

#356　科学者と技術者のむずかしいはなし（前書き）

エバースペース2はじめました（ ，ω，　）

#356　科学者と技術者のむずかしいはなし

精神増幅素材に対するタマの反応を確認した俺達は、とりあえず一度腰を落ち着けて情報を整理、交換することにした。何にせよまずは行動方針を決めるのが物事を効率よく進めることに繋がるだろうという判断である。

「とりあえず、現時点ではっきりしたのはあのタマ達がテレパシーで情報のやり取りをしていることと、精神増幅素材に著しく興味を示すことの二点だねぇ」

「せやな。めっちゃ興味示してたけど、どうするつもりなんかな？　食うんやろか？」

「アレってものを食べるようなモノなのかなぁ……？」

整備士姉妹が揃って首を傾げている。俺もそれは気になったな。あいつら目とかの感覚器に相当するものが見当たらないし、どこかに口とかがあるようにも思えないんだよな。まぁ、元々は黒い金属の真球にしか見えない物体があそこまで変形するんだから、そういう器官も隠れているのかもしれないけど。

「そもそもの話で申し訳ないんだが、あいつらに対する方針というか、研究の方向性はどうなってるんだ？　単に奴らの甲殻だか装甲だかを軍事利用するのが目的ってことならあいつらの身体を調べれば良いだけの話だよな。でもクギを呼んだってことはコミュニケーションを取る方向に方針が変わったってことか？」

「そちらのクギさんを招聘する前の段階から彼らとのコミュニケーションを確立しようという試みは進めていたよ。元々未知の異星文明が作った戦闘兵器の類いじゃないかと考えられていたからね。兵

器ならアクセスするためのプロトコルが存在するのが自然だから」
ロビットソン大尉に怒られ終わったウェルズ氏がそう言ってから大げさに肩を竦める。ちなみにロビットソン大尉は自分の仕事に戻っていった。

「しかしまさかサイオニック能力とはね。そっちの分野には全く明るくないんだけど、ショーコさんはどうかな？」
「私は本職の関係上多少は齧っているけどねぇ。ただ、私の専門は遺伝子工学とナノマシン工学だから。材料工学の知識はある程度あるけど、機械系の工学知識なんて持ち合わせていないからね。機器の設計なんてのは無理だよ？」
「私も専攻は材料工学だからなぁ。そちらのお嬢さん達はエンジニアだよね？　機器の設計なんかもできるのかな？」
「モノにもよるなぁ。ある程度の方向性がわかればできなくもないと思うで」
「精神増幅素材に関してはある程度調べてあるので、加工そのものはなんとかなると思います。ただ、思念波を使った通信用のプロトコルを一から作るのは大変そうですよ？」
「その辺りはなんとかなると思うよ。ナノマシン工学でもその辺りの構築はするからね」

研究者とエンジニアがやいのやいのと技術談義をしているのだが、そっち方面の知識が全くない俺とクギは完全に置物である。

「お茶が美味しいですね、我が君」
「帝国航宙軍の船に積まれてる自動調理器は料理の味は今ひとつだけど、お茶の味だけは良いって話だな。前にうちの船に臨検に来た連中がそんなことを言ってた気がする。ああ、いや、セレナ大佐だったかな？」

「そうなのですね。帝国の方々はお茶の時間を大事にしていらっしゃると聞いたことがあります」
「そうなのか……そう言われればそのような気がするな」

今まであまり気にしていなかったが、ミミもエルマも合間合間でよくお茶なりなんなりを飲んでいるように思う。ティーナとウィスカはそうでも無いから、やっぱ文化が少し違うのかね？

「それにしてもテレパシーねぇ……俺には全くあいつらの思念波？とやらを感じられないんだけど。俺も訓練すれば使えるようになるのかね？」
「我が君の場合は力が強いので、まずは力の制御を学ばなければなりませんね。余程強い思念波でない限り、我が君に届かせるのは難しいかと思います」
「あー、俺から溢れ出るパワーが強すぎて、テレパシーを飛ばされても思念波を跳ね返しちゃうってことか？」
「そうなります。逆に我が君が心を伝えるだけならば習得は然程難しくないかと思います。ただし、その場合でもちゃんと力を制御しなければ特定の人物だけでなく、範囲内の全ての者に伝わってしまいますので……」
「クソでかい声を出すのと変わらんわけか……それじゃ使えないな」
「何事も容易には成らず、ですね」

世の中うまくいかんなぁ、と思わず苦笑いを浮かべたらクギにクスクスと笑われてしまった。

「我が君がお望みであれば修行のお手伝いを致しますよ。これでも神祇省の巫女ですから。指導資格もちゃんとあるのです」

そう言ってクギが自分の胸に手を置き、自慢げに胸を反らして見

せる。誇らしげにピンと立つ獣耳が可愛い。最近わかってきたのだが、素のクギは結構なお茶目さんというか無邪気なところがあるようなのである。俺の前では従者然とした態度をあまり崩してくれないのだけども。

「そうだなぁ。持っているものをただ遊ばせておくのももったいないような気はするんだが……でもなぁ。これ以上人間離れするのはちょっとなぁ」

生身で山一つ吹き飛ばせるようになるとか言われたせいか、どうもサイオニック能力を鍛えるのは気が進まないんだよな。そこまでいったらもうジェ〇イの騎士どころかド〇ゴンボールの世界じゃん。あ、でも念動力とか使えるようになれば便利だしかっこいいかもしれない。手からビリビリ雷を出したりさ。いや、これはシ〇の方だけど。

「そうですか……修行したくなった時はいつでも言ってくださいね？」

「うん、したくなったらね」

さっきとは打って変わってしょんぼりと垂れてしまったクギの獣耳を見て思わず笑ってしまう。本当にわかりやすいな、それ。

「二人とも、ちょっと良いかい？」

「ああ、勿論」

ショーコ先生に声をかけられたので頷いて彼女へと視線を向ける。

「二人の意見を聞きたいんだけれど、結局のところあのタマは知的生物なのかな？　それとも生物兵器の類なのか、はたまたただの原

生生物なのか。何か意見は無いかい？」
「そりゃ俺にはさっぱりわからんな。クギ、パスだ」
俺はあれらの思念波とやらを感じられないからな。俺から見ればあのタマは大変に厄介かつ危険な殺人兵器みたいなもんにしか見えん。

「ええと、そうですね……はっきりとは言えませんが、どちらかと言えばこの思念波の感触は動物に近いと思います。此の身は生物兵器というものと対峙したことがないので、そちらはちょっとわかりかねます。ただ……」
「ただ？」
「普通はあまり考えられないのですが、あの『いきもの』が放つ思念波は全て殆ど同じ波長なのです。普通は同じ種類の生き物だとしても、個体ごとに思念波の波長というものは違うものなのです」
「なるほど……それで？」
「はい。その他に気になることとしては、彼らは常に相互に思念波を送り合って『繋がって』います。その上で、更に他の何かとの繋がりを求めているというか……見失ってしまったものを探しているというか……すみません、上手く説明できなくて。もしかしたらなのですが、彼らはもっと大きな『繋がり』のごく一部なのではないかと」
「「「？？？」」」

クギの話を聞いたショーコ先生達が揃って首を傾げる。俺も首を傾げる。何か大事なことを伝えようとしているのだろうが、今ひとつなんだか理解が及ばない。より大きな繋がり……？
「同じプロトコルを用いた大規模ネットワーク、その一部？　つまり彼らは……機械知性と同じような集合知性的な存在なのかな？」

「可能性としては有り得るねぇ。帝国で活動している機械知性と同じような仕組みなのかもしれない。クギくん、彼らの使っている思念波の射程距離というのはどれくらいなんだい？　恒星間の距離を越えてどこまでも届いたりするのかな？」
「思念波は条件が揃えば時間と空間を飛び越えますが、それには相当の強さが必要になります。彼らの放つ思念波の強度を考えれば星系内ならばともかくとして、恒星間の距離までは飛び越せないかと」
「なるほどねぇ……そうなると、このタマを見つけた星系に飛ぶ前に何らかの方法で彼らの放つ思念波を外に漏らさないようにした方が良いかもしれないねぇ。当該の恒星系に到達した瞬間、彼らの放つ思念波をキャッチした『大規模ネットワーク』が一斉に目覚めて厄介なことになるかもしれない。これは大佐殿に報告しないとだ」

全部破壊して思念波を発生できなくしてしまえば良いのでは？
とか思ってしまう俺は駄目なやつなんだろうな。まぁ、こういう未知の種族を雑に扱い過ぎて最悪のファーストコンタクトになった挙げ句、全面戦争なんて展開も映画とかではよくある展開だから慎重に事を進めるのが良いのかね、やっぱり。その辺の判断はセレナ大佐が考えることだな。

#357　お祈り（前書き）

腰が痛ェ……―（∵3」∠）―

#357　お祈り

その後、再び研究者と技術者達の間で専門的な話し合いが行われ、クギは時折発される質問に答え、俺はそれをボケーっと眺めるという時間が続いた。

精神増幅素材である精霊銀を使った思念波の測定装置だの、シールド発生装置の一部に同じく精霊銀を組み込んだ思念波妨害シールドだのを作るらしい。思念波を遮断するのではなく妨害するというのは、クギ曰く思念波というものは物理的な方法で遮断することは不可能に近いそうで、遮断するよりも逆位相の思念波やより強力な思念波によって相殺したり『押し潰し』たりした方が現実的なのだそうだ。

幸い、あのタマ達が放つ思念波の波長は全て同じで、かつ一定の範囲内に収まっているようなので、ちゃんと測定すれば打ち消し、相殺するのは難しくはないだろうとのことであった。

という感じで技術的なアプローチが進む中、俺は何をしているのかというとですね。

「ばなな」

「兄さん、すっごいアホみたいな顔になっとるで」

「一発芸か何かかい？」

ティーナとショーコ先生に容赦のないツッコミを入れられた。だってしょうがないじゃない。技術的な話はマジでちんぷんかんぷんなのだもの。俺が理解できたのは、精神増幅素材である精霊銀を利用すれば思念波、或いは精神波などと呼ばれるサイオニック能力の基礎的な波動を感知したり、何らかの作用を起こしたりできる機器を作れるのだという点くらいだ。他はなんもわからん。

ショーコ先生に暇が有りそうならなんでこんな場所で軍属として働いているのかという経緯を根掘り葉掘り聞きたいところなんだが、ショーコ先生はなんだか忙しそうにしているしな。クギも即席で作られた怪しげなヘッドギアのようなものを被せられてテレパシーの測定のようなことをされているので、俺一人で完全に蚊帳の外なのである。

「お兄さんはこっちにこないでくださいね？　絶対ですよ？」
「貴重なＰ．Ａ．Ｍを崩壊させられてはたまらないからな」

ウィスカとウェルズ氏には精霊銀の加工を行う加工機及び精霊銀を利用した機器周辺への接近を禁じられた。今現在俺がこの研究室の中で行動できる範囲は入り口周辺の休憩スペースのみである。

「ところでこの精霊銀の代金は大佐に請求すれば良いのかね」
「ああ、その件に関しては既に大佐から承認を貰っているよ。返ってきた文面からは高すぎるという言葉が滲み出てきていたけれどね」
「えっ、俺金額聞いてないんだが」
「あ、ごめん兄さん。うちが値付けしてもうた」

１ｋｇ辺り５万エネルで売ったらしい。ケースの中には１ｋｇのインゴットが五本入っていた筈だから、これで２５万エネルか。

「……高くない？」
「そもそもの相場が高いんや。リーフィル星系の精霊銀は惑星外への持ち出し量が少ないから、高騰してるんよ。相場価格で１ｋｇ辺り３８０００エネルくらいやで。最辺境領域価格で三割増しにしてキリよく５万やな」
「三割ってなかなかの暴利だよねぇ」

ショーコ先生がクスクスと笑う。

「寧ろお買い得やとうちは思うで。うちら……というか兄さんが精霊銀を持っていなかったら到着まで艦隊は足止めや。しかも価格そのものは輸送費も乗っかってもっと高くなる。一日分の艦隊活動費だけで精霊銀が軽く数十ｋｇは買えるんとちゃうか」

「なるほど……かつてなくティーナが頼もしく見える」

「兄さんがうちのことをどういうふうに思ってるのか今度ゆっくり話し合いたいなぁ……まぁ、昔取った杵柄ってやつやね」

そう言ってティーナは多くを語らずに肩を竦めてみせた。昔取った杵柄ねぇ？　そういやティーナとウィスカは今でこそ一緒に居るけど、昔は離れ離れで別の場所で育ったとか言ってたっけ。ティーナの方はちょっと治安のよろしくない場所で育ったとかなんとか……その頃に培った交渉術ってことか。

「ヒロ君の船には優秀なクルーが揃ってるんだねぇ」

「それほどでもある。俺は戦闘以外できないから本当に皆には助けられてるよ。ああ、でもまだドクターは居ないんだよね。ショーコ先生はどう？　今ならスペースに余裕のある母艦があるし、医務室や研究室も用意できるよ」

「そんな安易に誘って良いのかい？　本気にするよ？」

「ショーコ先生なら歓迎するよ……俺の事情もある程度知ってるわけだし」

「前向きに考えておくよ」

ショーコ先生がニヤリと笑う。実際のところショーコ先生は腕の良い医者だし、ナノマシン技術の専門家でもあるらしいから頼りになりそうなんだよな。

初めてショーコ先生と出会った時と違って、今は居住用のスペー

スに大幅に余裕があるブラックロータスがあるから彼女用の居室は勿論のこと、研究室兼医務室なんかも用意できる。クリシュナ一隻で星系を渡り歩いていたあの頃とはかなり環境が変わった。
俺以外は女性なわけで、彼女達の体調管理や心身のサポートをしてくれるドクターは居てくれると大変に助かる。俺もその恩恵にあやかれるだろうしな。

「話は聞かせてもらった！　そういう事なら僕も君のところで雇わないか！？」

忍び寄ってきていたウェルズ氏が突然大声で自身を売り込んでくる。俺は気づいてたけど、ショーコ先生とティーナは気づいていなかったのか二人揃ってビクッとしてるな。全く同じリアクションでちょっと可愛い。

「ウェルズ氏は我々の組織においてどのような活躍ができるとお考えですか？」
「えぇと……装甲板の改良とかできるかもしれないよ？　新素材とか発見できれば」
「それは別にうちのメカニック二名でもできるかなぁ……ウェルズ氏の益々のご活躍をお祈りしております」
「その言い方はやめてくれ。なんだか心が折れそうになる……」

どんよりとした空気を漂わせながらショーン氏が材料工学研究者の悲哀というか、働き口のブラックさに関する愚痴を漏らし始める。ショーン氏は軍の機密任務を任されるような人材なのだからそういう方面で困ってはいないんじゃないかと思っていたんだが、実のところそうでもないらしい。

「まぁこう言っちゃなんだけどコネだよ。僕の友人というか、幼な

じみが軍でそれなりのポストに就いていてね。無論、僕はコネだけの無能ではないつもりだよ？」

疑問を口にしてみると、彼はそう言った。他の研究者、技術者の三人がうんうんと頷いているので彼の材料工学研究者としての実力は確かなものなのだろう。

「まぁそれはそれ、これはこれ。ちょっとうちじゃ材料工学研究者はなぁ」

「だよねぇ……はぁ。やっぱりこの仕事で結果を出して軍の技術研究所に潜り込むしかないかなぁ」

ウェルズ氏が重い溜息を吐く。大変なんだなぁ、研究者ってのも。

「それで、結果は出そうなのか？」

「とりあえずはね。思念波の撹乱装置は上手く機能している筈だよ。理論上は」

「これから艦内を回って実際に効果を発揮しているかどうか確かめるんです」

「なるほど。俺も同行しようかな。暇だし」

ここでただ座っているよりはマシだろう。クギも同行するようだし。

#358　不憫な大佐（前書き）

腰が痛い！　天気が悪い！―（：3」∠）―（捗らなかった

#358　不憫な大佐

いかにも急造といった雰囲気の思念波計測装置を小脇に抱えたウィスカを先頭にレスタリアスの艦内を練り歩き、思念波の『漏れ』を検出したら研究室に連絡して撹乱装置の調整をしてもらう。そんな地味な作業を繰り返し、研究室からの『漏れ』を完全に防いだところで一度セレナ大佐に中間報告をすることになった。

「思念波ネットワークを用いた集合知性である可能性と、その接続を妨害するための撹乱装置の開発、設置……効果は間違いないのですね？」

俺とショーコ先生、それにセレナ大佐の三人だけがいる艦長室にセレナ大佐の凛とした声が響く。

「思念波の封じ込めには成功しているよ。少なくとも、今のところはだけどねぇ」

それに対するショーコ先生の声はいつも通りの人を食ったようなゆるゆるボイスだ。相手が帝国航宙軍の大佐でも彼女の態度はあまり変わらないらしい。

「今のところは？」

「思念波の強度に対する安全マージンは十分に取っているけど、彼らの能力は未だに未知数だからねぇ。絶対確実に、とはちょっとねぇ」

そう言ってショーコ先生は肩を竦め、セレナ大佐の赤い瞳から発

せられる圧力を受け流した。
「……コミュニケーションは取れそうなのですか？」
「今のところはまだなんとも。彼らは常に何らかの情報を思念波でやりとりしているから、サンプルには事欠かないけどねぇ。なにぶん未知の言語である上に思念波という我々に馴染みのない伝送波でやりとりをしていわけで。あとついでに言えば、この船には暗号解読や異星言語学の研究者はいないんでねぇ」
「今から新たな人員の手配をするのは不可能です」
渋い表情をしたセレナ大佐が頭痛を堪えるようにこめかみの辺りをトントンと叩く。
「大変っすね、大佐殿。本来の仕事じゃないことまで押し付けられて」
「私は軍人ですから」
そう一言だけ述べてセレナ大佐が口を噤む。本来、彼女の率いる対宙賊独立艦隊はその名の通り宙賊に対する作戦行動を帝国航宙軍全体の戦略方針から独立して行うための艦隊である。裏を返せば、宙賊に対する作戦行動と絡めさえすれば他の目的を達成するために使うことが出来る手駒だとも言える。軍の上層部にしてみれば、だが。
まぁ、例の結晶戦役のことを考えれば、そんな建前すら無視して必要な場所に向かわせるのだろうけれども。あの件は完全に宙賊なんか関係のない話だっただろうからな。
「軍内部の柵っていうか、政治ってのも大変なものなんだねぇ。まぁ、私達もそれに巻き込まれている以上他人事ではないのだけれど」
「そりゃ確かに。とはいえいつまでもドーントレスで研究を進める

ってわけにもいかんのだろ？」
「誰かさんのお陰で宙賊は早く片が付きましたから、若干の余裕はありますけどね。とはいえ、このままうちの艦隊を遊ばせておくわけにもいかないのは事実なので、引き延ばせてもあと一週間……には届かないくらいですね」
「つまり、私達は一週間足らずで成果を上げなきゃいけないわけだ。未知のコミュニケーション方法と未知の言語を使う異星生命体を相手に」
「独自の言語を持っているからって知的生命体であるとは限らないけどな」

独自の言語を持っていればそれだけで知的生命体である、という話になったら地球で言うところの鳥類の大多数とか鳴き声でコミュニケーションを取る生き物全般もそうだってことになってしまうからな。まぁ、知的生命体の定義ってのも大概あやふやな気もするんだが。

「というか、軍としてはどういう着地を想定しているんだ？　目的はあの装甲なんだろ？　既にサンプルは十分以上に集まってるわけだし、後は解析すれば終わりじゃないのか？」
「新型装甲材の開発という意味ではこの船の小さな研究室だけでなく、ウィンダス星系の軍の研究所でも研究そのものは進行していますから。いずれ全てが詳らかになるでしょう。問題は、その原材料なんです。もし新型装甲材を作るために必要な原材料が例のタマが転がっている惑星にしか存在しないとすれば、その惑星の――というか恒星系そのものの支配権を帝国が握る必要があります」
「そのために対宙賊独立艦隊がエッジワールドくんだりまで派遣されたって？　そういうのって正規軍がやるというか、専門の部署があるんじゃなかったか？」
「そうです」

「世知辛いなぁ……つまり本来の任務と言えなくもないエッジワールドの宙賊対策のついでに例のタマがどこから持ち込まれたものかっていうところの特定と、可能な限りの情報収集と分析をやっておけって話か。体の良い露払い役だな」

軍の上層部的には一挙両得というか、一石二鳥というか、戦力の効率的な運用をしているだけなんだろうが……それで本来の任務外の仕事をブン投げられるセレナ大佐にしてみればたまったもんじゃないだろうな。

「その上であのタマがサイオニック能力でコミュニケーションを取っているとか、知的生命体、あるいは集合知性の可能性があるという報告が我々から上がっていけばそりゃ頭も痛くなるよねぇ」

「……そういうことなので、できるだけ速やかに何らかの成果を出していただけると助かります」

「思念波の『漏れ』対策はできたから最低限の成果は上がってると思うけどねぇ。この先は暗号解読機と翻訳インプラントのデータベースを利用した解析がどこまで上手くいくかだねぇ」

「上手くいくことを願っていますよ。心の底から」

渋い表情をしたままセレナ大佐が呟いた。同情するよ、本当に。

#359　ご招待（前書き）

天気が悪い！（‘ω’）

#359　ご招待

思念波の『漏れ』対策もひとまず終わり、セレナ大佐にも報告を終えたということで一旦休憩――というか今日のところは解散という流れになった。

以降は思念波計測器による例のタマどもの思念波のサンプリングと、言語翻訳インプラントのデータベースと収集したサンプルの擦り合せ作業を行っていくのだという。

「殆ど機械任せだねぇ。多少アルゴリズムに手を入れるくらいかな？」

「うちらもメンテナンスボットのアルゴリズムとかは弄るけど、ちょっと次元が違うよなぁ」

「言語翻訳アルゴリズムとか考えただけで頭がワーッてなりそう……」

「メンテナンスボットのアルゴリズムを弄れるなら、こっちもそんなに苦労しないと思うけどねぇ？」

ブラックロータスへの帰り道で研究者一名と技術者二名が技術談義に花を咲かせている。この三人、どうも妙に馬が合うらしい。お互いに近い分野の知識を持っているからだろうか？　まぁ仲が良いのは良いことだ。

「クギは疲れてないか？」

「はい、我が君。久しぶりに沢山歩けて楽しかったです」

そう言って俺を見上げてくるクギの表情は実に満足そうである。尻尾もふわふわと振られているので、本当に楽しかったのだろう。

思念波の漏れが無いかレスタリアスの艦内をかなり歩き回ったからな。

「なら良かった。テレパシーを使って疲れていないかちょっと心配だったんだ」

「あの程度でしたら全く問題ありません。本気で使うと結構すぐに消耗してしまうのですが」

「テレパシーを本気で使うって一体どういう感じなんだ……？」

「思念波を遠く離れた人に届かせたり、同じ空間にいる特定の数人だけに送ったりするのは力の消耗が激しいです。あとはあまり使いたくはありませんが……強力な思念波を送りつけて相手を気絶させたり、苦しめたり、場合によっては強制的に言うことを聞かせたりすることも出来ます」

「へー……テレパシーって一口に言っても色々と使い道があるものなんだな」

「あまり暴力的な使い方はしたくはないのですけれど、時には身を守る術も必要ですから……」

そういえばクギはレーザーガンだのなんだのといった武器を持ち歩いていないが、クギにとってはテレパシーそのものがレーザーガンとかの武器と同じような存在なのかもしれないな。

「ところで、本当にお呼ばれしてしまっても良かったのかな？」

「かまへんかまへん。兄さんのことやからショーコ先生みたいな美人さんの訪問は大歓迎やろ」

「美人なら誰でも大歓迎するみたいな風評をショーコ先生に流すのはやめろ。俺だって相手は選ぶわ」

「あはは……確かにセレナ大佐には大分塩対応ですよね、お兄さんは」

「セレナ大佐だけじゃないけどな」

前に取材クルーとして乗り込んできたニャットフリックスのニーアも大層な美人だったが誘いはキッパリと断ったし、あのマリーとかいうけばけばしい毒蛇みたいな女なんかは絶対にNOだ。

「ショーコ先生なら大歓迎ってのは間違いないから、そこは安心してくれ。多分ミミとエルマもびっくりするんじゃないかな」

「そう言ってもらえると嬉しいねぇ」

ショーコ先生がニヨニヨと口元を綻ばせる。前はプライベートな方面では全く付き合いが無かったから、彼女のこういった反応を見るのは新鮮な気分だな。

☆★☆

「あれ？　ショーコ先生……ですよね？」

「どうしてこんなところに……？」

ショーコ先生を目にするなり、ミミとエルマは大いに困惑した。それはそうだろう。アレイン星系の企業病院で働いているはずのショーコ先生が何故か俺達と一緒にブラックロータスに帰ってきたのだから。俺が逆の立場でも絶対に困惑して驚くわ。

「やぁ、二人とも久しぶりだね。うん、血色も良いし健康そうで何よりだよ」

軽く片手を上げて挨拶をするショーコ先生を目の前にした二人の頭の上に疑問符がいくつも飛び交っているのが目に見えるようだ。そして、その二人の視線が一斉に俺へと向けられた。

「レスタリアスの研究室に詰めてた研究者のうち一人がショーコ先生だったんだ。どうして軍属としてレスタリアスに乗り込んでいたかって事情は俺もまだ聞いてないからわからん」

と言ってショーコ先生に視線をパスする。

「別にもったいぶるようなことでもないんだけどねぇ……面と向かって言うには素面じゃちょっと」

俺からの視線を受け取ったショーコ先生が苦笑いを浮かべる。面と向かってってどういう意味だ？　ミミ達から視線が集まるが俺は首を横に振る。ショーコ先生とはそういう甘い雰囲気になるような関係では無いはずだ。少なくとも、彼女の人生を捻じ曲げるような出来事は無かったはずである。

「皆様。よろしければお食事をされながらお話されては如何でしょうか。すぐにご用意致しますので」

微妙に漂う緊張感をメイの声が打ち砕く。

「君は……」

ショーコ先生の視線がメイに向いた。

「初めまして、お客様。私はメイドロイドのメイと申します」

「ああ、うん。よろしくね。私はショーコだよ」

「はい、ショーコ様。よろしくお願い致します。それでは食堂でお食事会の準備を致しますので」

そう言ってメイはサッと食堂へと引っ込んでいく。その後ろ姿を

見送ったショーコ先生が俺に視線を向けてきた。なんだろうか？

「あのメイドロイド……メイ君。なんだか少し私に似てないかい？」

「……そうかな？」

そう言われれば若干似ているような気がしないでもない。まぁ、胸のサイズはショーコ先生のが上だけど。ミミにも匹敵する胸部装甲の持ち主だからな。ショーコ先生は。

「眼鏡で長髪ってところはそうかもしれないけど、全体的な雰囲気は全く別だと思うぞ？」

「ふーん……ヒロ君がそう言うならそうなんだろうね」

なんだろう、その微妙に含むところがありそうな反応は。いつの間にか俺はショーコ先生のフラグを立てていたというのか？　いやいや、それはないだろう。流石に無い……無いよな。うん、無い。

「ところで、これで全員かい？　どこかにまだ女の子を囲っているんじゃないだろうね？」

「全員です。というか、そんな人のことを女たらしみたいに……いや、うん。そうなんだけど。否定はできないんだけど。ちゃうねん」

「何がちゃうねん」

「ちょっと弁護できないわ」

「えっと……ヒロ様は優しいので」

「それはあんまり弁護になってないと思うなぁ……」

「我が君ならこれくらいは当然かと」

全体的にみんなの言う通りなのかもしれないけど、クギの理屈だけは全く理解できない。これくらいは当然ってどういうこと？　別に文句はないけどもさ。

「相変わらずなんだねぇ、ヒロ君は」
「傭兵業をやっていると色々あるんですよ。本当に」
狙って女性クルーばかりを増やしているわけじゃ……無いこともないけど、めぐり合わせだからね。こういうのは。そういう意味ではショーコ先生も大歓迎ですよ、ええ。大歓迎ですとも。もうどうにでもなぁれ。

#３６０　ショーコ先生の事情（前書き）

ここのところずっと天気が悪いっすね……（‘ω’）

#360　ショーコ先生の事情

「それにしてもなんというか、イメージと違うよねぇ……」

ショーコ先生が広々として清潔なブラックロータスの食堂を見回しながら呟く。

「それ、うちの船に来た人は皆言うんだよな。取材に来たプレスクルーとか、臨検に来た帝国軍人とか、帝都のお偉いさんとかも同じ反応だったし」

「傭兵の船といえば殺風景、粗雑、言葉を選ばずに言えば汚い、ってイメージですよね！　敢えて逆を狙ってプロデュースしました」

ミミがそう言ってドヤ顔をする。元を正せばミミがクリシュナの内装をハイエンドの高級客船仕様にしたのがブラックロータスの内装を決めるための基準となったので、ミミの言うことは間違ってはいない。無論、俺自身もどうせなら綺麗で清潔で広々としている方がメンタル面でも良い効果があるだろう、とそう考えてミミの案に同意したわけなのだが。

「それで、ショーコ先生はなんでこんなところに？」

食堂の隅に設置されている酒飲み用クーラーボックスからよく冷えたビールを取り出してきたエルマがストレートな質問をショーコ先生にぶつける。

「あー……それねぇ。うーん、話しづらいなぁ」

エルマからビールの入った保冷ボトルを受け取ったショーコ先生が苦々しげな表情を浮かべる。あまり何かを言い淀むってイメージがない人なんだが、随分と言いにくそうにしているな。何かよほどの事情があるのだろうか。お金絡みとか？

「そんなに話しづらいなら無理には聞かないぞ。困っているなら相談に乗るけど」

「いや、そういうわけじゃあないんだけどね……というか、ナチュラルに助けようとするね？　そういうところがこんなに沢山の女の子を惹き付ける手練手管かい？」

「美人には優しくしておくと後で得をするんだ。まぁそれは冗談として、知らない仲でもない相手が困っていれば話を聞くくらいはする。実際に助けられるかどうかはその時によりけりだけど」

「言うて、兄さん大体助けるやん」

「お兄さんが助けられないパターンって殆どないですよね」

そんなことはない。俺にだって同じようもないパターンはいくらでもあると思うぞ。具体的にどんなの？　と言われると、そうだな……三日後に爆発する惑星から全住民を救い出せ、とかは流石に無理だ。俺じゃなくても無理だと思うが。

「あー……いや、君達に言わないのは逆に不義理だから言うよ。実はね」

「うん、実は？」

俺達に言わないと逆に不義理ってのはよくわからないが、興味はあるのでちゃんと聞くことにする。

「その、君達がアレイン星系を去ってからなんとなく傭兵業というか、そっちの方に興味が湧いて調べたり、書籍に目を通しているう

ちに、憧れちゃったんだよ。良い歳してこういうのはちょっと恥ずかしいんだけどね」
「……なるほど？」

ちょっと今の状況とショーコ先生の言動が繋がらない。頭のいい人ってたまにこういうとこあるよな。こう、過程を吹っ飛ばしちゃうみたいな。

ええと、俺達がアレイン星系を出た後にショーコ先生は俺達というか、傭兵業というか、多分宇宙を股にかけてあちこちに行くような生活に憧れたと。それはわかった。

「それがどうして帝国航宙軍で軍属をやることに？」
「一から詳細に話すと長くなるんだよねぇ、その話は。簡単にまとめると、仕事が上手くいって長期休暇を取れることになったから、キャリアアップとプチ旅行を兼ねるつもりで帝国航宙軍の臨時求人に応募したわけだよ。うちには私みたいな遺伝子工学やナノマシン工学の研究者兼医者って人材がそこそこにいるから、軍からそういう求人が来ることがあるわけだね。会社としても軍に恩を売れるし、帝国に貢献したという実績も得られる。私達現場の人員は割の良い給料と会社での功績査定に大きくプラスされる。軍は軍で優秀な医者兼研究者をアウトソーシングできるというわけで、Ｗｉｎ－Ｗｉｎなわけだ」
「なるほど。それで偶然セレナ大佐の船に配属されたと」
「うん、まぁそういうことだねぇ。本当は船医枠で応募していたんだけれど、私の実績を見た軍が研究者枠としてオファーしてきたみたいでねぇ。私は医者であると同時に遺伝子工学とナノマシン工学の研究者でもあるだろう？　今回のアレを研究する際にナノマシン工学の分野での知識が必要になるんじゃないかと軍には思われたようでね。ナノマシン工学では材料工学系の知識も使うから、都合が良かったわけだ」

そう言ってショーコ先生が肩を竦める。本来の希望とは違う職場に配置されたけど、結果的に俺達と再会できたというわけか。

「それで再会することになるのって、この広い宇宙で物凄い確率だな……世間は狭いというかなんというか」

「まぁ、ヒロだし」

「ヒロ様ですし」

「俺がなんかそういう超低確率の事象を手繰り寄せる特異点みたいな言い方やめない？」

「いやぁ……それを否定するのは難しいんやないか？」

エルマ達の言動を耳にしたショーコ先生がクスクスと笑う。

「普段からこういう感じなんだねぇ、ヒロ君は。じゃあ私と再会したのも運命的な何かなのかな？」

「まさかショーコ先生の口から運命的なんて言葉が出るとは。意外とロマンチストだったり？」

「傭兵のような自由な生活に憧れて会社を飛び出して軍属として働くくらいには夢見る少女だよ」

くっ、からかっても簡単に受け流してくるな。手強い。夢見る少女なんて年齢か？　みたいなツッコミは入れないぞ。あれは罠だ。女性に年齢の話はタブーである。

「実際のところどうなのかね。ショーコ先生がうちに来てくれるってんなら本当に歓迎するけど」

「うーん、それは魅力的な提案だね。この船は広くて綺麗だし内装も良い感じだし。うちの社宅よりも居心地は良さそうだ。ただ、私も企業に所属している以上はこの船に乗るとなると色々と手続きが

ね……」
「その辺の手続きならメイさんが手伝ってくれますよ」
「お任せ下さい。完璧なサポートをお約束致します」
ウィスカに紹介されたメイがいつにもましてキリッとした無表情で名乗りを上げる。うん、キリッとした無表情という表現が矛盾を孕んでいるのはわかるんだが、無表情なのにどことなく誇らしげというか得意げな雰囲気が滲み出ているんだよ。声もいつも通りのフラットな感じなのに何故そう見えるのかは俺自身も不思議に思うんだが。
「何にせよ今の契約が終わってからだね。途中で仕事をほっぽり出すワケにもいかないし、イナガワには義理も恩もある。そう簡単にはいかないよ」
もううちに来るような前提で話をするウィスカとメイにショーコ先生が苦笑を返す。まぁ、確かに契約は大事だし、うちに来るにしても前の職場の後ろ足で砂をかけるような真似はするべきじゃないな。もしショーコ先生がうちのクルーになってくれるということであれば、彼女のために設備も色々と揃えなければならない。
「なら、今回の仕事が終わったら一旦アレイン星系まで足を伸ばしても良いかもな。社交辞令とかじゃなく、ショーコ先生がうちのクルーになってくれる気があるならだけど」
「いや、それは……良いのかい？　本気にするよ？」
「本気にしてもらって結構だ。簡易医療ポッドでも普段の健康の維持は最低限可能だけど、優秀な船医が居てくれればそれ以上に安心だからな。多少の手間なんてなんでもないさ。俺はそう考えてる」
そう言って同意を求めるためにミミとエルマに視線を送ると、二

人とも頷いてくれた。整備士姉妹やクギはショーコ先生の診察を受けたことがないだろうから判断するのが難しいだろうけど、ミミとエルマはショーコ先生の診察やアドバイスを受けているからな。

「本当の本当に本気にするよ？　良いんだね？」

「俺に二言はない。いや、たまにあるかもしれないけど、この件に関しては無いから安心してくれ」

そう言って手を差し出すと、ショーコ先生は俺が差し出した手を取り、しっかりと握ってくれた。

「じゃあ、お言葉に甘えるよ。そのためにも、まずは今目の前にある問題を片付けないとね」

「それはそうだな」

ショーコ先生がうちのクルーになることを決心してくれたのは目出度いことだが、まずは例のタマの件にしっかりとケリをつけないとな。まぁ、現状俺にできることは何も無いからただただ待つしか無いんだが。

#361　クギの使命（前書き）

なんとなく体調が悪かったけど復活（ ω ）

#361　クギの使命

そうして待つこと一週間弱。俺にとっては試練の一週間弱であった。何が試練かって、とにかく退屈なのである。クギの付き添いで研究室に行っても特に俺にやることはないし、宙賊もほぼ掃討が終わっているので出撃する用事もない。

というわけで、半分くらいは付き添いをメイに頼んで、俺と同じく研究室に行っても何もやることがないミミとエルマと一緒にまったりしっぽりと過ごしたりしていた。ドーントレスにショッピングに行ったりもしたけど。

「そんでなー、なんとかあのタマがやり取りしている内容に関しては大体やけど翻訳する目処がついたんや」

「なるほど。成果が出てよかったな」

そして、夕方から夜にかけてはティーナとウィスカのターンである。俺が日中研究室に行っている場合は逆転するけど。

「後半は私達もやることがなくて、あのタマの甲殻の研究を手伝ってたんですけどね。それにしても凄いですね、ショーコさんは。ナノマシン制御用のプログラミングとかアルゴリズム構築の応用だって言っていましたけど、専門外のことに応用してしまう発想力が凄いです」

「あれはうちらも見習いたいよなぁ」

三人でソファに腰掛けて俺の右にティーナ、左にウィスカというのが三人で過ごす時の定位置である。二人ともピッタリと密着してくるのでとても温かい。こうしてくっつくために部屋の温度を若干

低めに設定してある辺り、割と用意周到である。

「そういや兄さんはどうなん？　クギとは」

「どうとは？　と聞くのは野暮だよなぁ……うーん、良い子過ぎて正直手を出しにくい」

「あー、それめっちゃわかるわー。めっちゃ良い子なんよな、あの子」

「なんかこう、手折ってはいけない花みたいな……伝わる？」

「ニュアンスは伝わってきます」

もう少しこう、エルマとかティーナ程とまでは言わないけどせめてミミとかウィスカくらいにはくだけてくれると良いんだが、もうなんというか温室育ち１００％の純粋培養。お役目を全力で果たします！　なんなりとお申し付け下さい！　的なオーラ全開で接されるとどうにも手を出しにくんだよな。別に俺は自由恋愛至上主義者でも据え膳を食わない鈍感系主人公でもないつもりだが、あんなに純粋な視線を向けられるとちょっと眩し過ぎる。

「でも、いつまでも手を出さないってことにはならんやろ？」

「それはそうね。そのうちね」

「お兄さんは手が早いのか奥手なのかよくわからないですよね……私達に手を出すのも時間がかかりましたし」

「それは仕方のないことだったんだ。許してくれ」

流石にこの二人に手を出すのは勇気が必要だったんだよ。色々な意味で。一度吹っ切れてしまったらもうなんでもないけどさ。

「あんまり待たせるのはやめたげてなー？　仲間外れは寂しいんよ」

「善処する」

とはいえ何か切っ掛けが欲しくはあるなぁ……いや、そんなことを考えているからなかなか手が出ないのだろうけれども。切っ掛けは待つものではなく作るものだしな。

☆★☆

切っ掛け作りを何か考えないとな、などと思っていたら向こうからその切っ掛けがやってきた時って純粋に喜んで良いのか迷うよな。

「我が君、修練をしましょう」
「修練か」
「はい、修練です」

クギの部屋に呼ばれた俺は、彼女の部屋で向かい合っていた。なんとなく正座で。
いや、どうもヴェルザルス神聖帝国は和風文化っぽい感じのある国であるようで、彼女の私室は畳めいたマットが敷かれているのである。当然、畳っぽいマットの上は土足禁止で、彼女の部屋の入り口には靴を脱ぐためのスペースが設けられているのだ。
そんな彼女の部屋に呼ばれて来てみたらしっかりと座布団も用意されていたので、なんとなく正座で座ってしまったというわけである。ちなみに、クギもしっかりと俺の対面で座布団の上に正座をしている。

「修練とはつまりどのようなことをするんだ？　瞑想とか？」
「それも有効ですね。自分の内から湧き出る力に意識を向け、制御をするのには瞑想はとても向いています。ただ、今の我が君にそれをするのは難しいでしょう」
「そうなのか」
「はい。我が君は既に時空間制御や運命操作といった極めて強力な

能力を発現させていますが、それは無意識下でのもの。それを意識化で制御するために、まずはご自身の力を知覚して頂く必要があります」
「なるほど」

今の俺は強大なサイオニックパワー――ポテンシャルなどとも呼ばれていた――を無制御で垂れ流している状態だと前に聞いた覚えがある。俺としてはそんなものを垂れ流している自覚は皆無なのだが、それを知覚することが超能力制御の第一歩というわけだな。

「話はわかった。それで質問をしたいんだが」
「はい、我が君」
「どうして布団が敷いてあるのだろうか」

ついでに言えば、何故クギさんはそんなに薄着なのだろうか。しかもなんか生地が薄くて透けてるんですけども。いやわかる。わかるよ。俺も馬鹿じゃないから意図もこの先の展開も予想がつく。それでも聞かずにはいられない。

「我が君が尋常な能力者であれば『目』を開くのは簡単なのですが、我が君ほどのポテンシャルの持ち主が『目』を開くとなると、色々と危険があるのです」
「目ですか。あれかな？　第三の目、的な？」
「はい、そのようなものです。ごく簡単に言えば、サイオニックパワーの知覚能力ですね。尋常な使い手であれば、外部から刺激を与えて『目』を開かせればそれで終わりです。先天的にサイオニック能力を有している種族であればその必要も無い場合も多いのですが……我が君の場合は極めて強力なサイオニック能力を持っているのに『目』が開いていないという稀な状態なわけですね」
「それを開くのにその格好とお布団が必要になるわけですか」

「説明をすると長くなるのですが、そうです。我が君は此の身に全てを委ねていただきたく思います」

至極真面目な表情でクギが俺の顔をじっと見てくる。うーん、眩しい。使命感に燃えている。

「危険は無いんだよな？　そうでないならそこまでして修練とやらを積まなくても良いかなと思うんだが」

「はい、我が君。とても危険です」

「そうか、それなら――って危険なんかい！？」

思わずノリツッコミを入れてしまった。いや危険ならそういうのは止めたほうが良いと思うんだけど。

「はい。とても危険です。場合によってはこの星系内に居る生命体は全滅するかもしれません」

「そんなに危険な橋は渡れないんだが？」

「しかしこの先のことを考えると必要だと思うのです、我が君。もし、予期せず我が君の『目』が開くような事態に陥った場合、問答無用で大惨事が発生する恐れがあります。そして、これから向かう星系ではサイオニック能力による精神干渉に曝される危険が予測されるので……それによって我が君の『目』が突発的に開いてしまう可能性があります」

「……あのタマかぁ」

「はい」

あのタマがテレパス能力によって情報のやり取りをしている以上、サイオニック能力による精神干渉をしてくる可能性が無いとはいえない。そういった場合に俺の『目』とやらが開く可能性があると。

「でも、今までは大丈夫だったぞ。リーフィル星系でもなんとも無かったし」

例の特級厄物にも良いだけ干渉されたけど、なんともなかったからな。

「今まで大丈夫だったからといってこの先も大丈夫とは限りませんよ、我が君。少なくとも、此の身の指導の元であれば事故に至る確率を極めて小さくすることができます。此の身の心配なら無用です。このために此の身が見出され、我が君の元に馳せ参じることになったのですから」

「押しが強いなぁ……ＯＫ、わかった。任せるよ」

引く気は無さそうなので、諦めることにする。別に不満があるわけじゃないが、こう、お役目とか義務的なのはなぁ……いや、これを切っ掛けとして中を深めていけば良いか。

よし、かかってこい！　箱入りの娘さんに年季の違いというものを見せてやるよ！

#３６２　桃色毒電波（前書き）

虫刺されが痒い（　，ω，　）（キレそう

本日７／２３は宇宙船コミックス五巻の発売日！　買ってね！！！

ゞ（∵３ノシゞ）ノシ

#362　桃色毒電波

新しい朝がきた。

「おはようございます、我が君」

起きたら、それはもう満面の笑みを浮かべているクギと目が合った。心なしか、お肌がつやつやしているように見えるのは気のせいだろうか。

「もう無理寝る」

「おはよう、ございます、我が、君」

布団を被って閉じこもろうとしたが、クギがぐいぐいと布団を引っ張ってくる。くそぉ、力が強い。このままでは何の罪もないお布団が引き裂かれてしまいそうなので、お布団の中に閉じこもるのを諦めることにする。

「おはよう、クギ」

「はい、おはようございます」

ニコニコしているクギは既に服をしっかりと着込んでいた。昨夜の詳細に関してはコメントを控えるが、彼女のテレパシーというか精神感応能力はズルいとだけ言っておく。例えるなら、単純な殴り合いで常に相手に与えたのと同じダメージが返ってきたら勝ち目がないよねって話だ。

「それで我が君、世界の見え方は変わりましたか？」

「うーん、変わったようなそうでもないような」

俺の『目』とやらは無事に開いた。開いたのだが、俺の認識としてはあまり劇的には変わっていない。確かに今までにない揺らぎというかうねりのようなものを自分の中に感じるし、クギにも同じようなものを感じるが、その程度である。

ああ、いや。ブラックロータスの中にいるミミやエルマ達の存在をそれとなく感じられるのは違うところかもしれないな。目で見るのとは少し違う。存在を感じるのだ。脳の中心辺りで。

「とにかく不意打ちとかはそうそう受けそうにないかもしれないな、今後」

「少しずつ馴染んでいけば、いずれは力の制御もできるようになると思います。まずは少しずつ、ご自身の中に在る力に慣れていってください。不安があればすぐにご相談くださいね」

「わかった。とりあえず……」

「はい」

「シャワーを浴びたいな」

☆★☆

ササッとシャワーを浴びてクギと一緒に皆の集まっている休憩室に行くと、足を踏み入れるなり全員から視線が集まってきた。ミミはなんだか顔を赤くしてモジモジしているし、エルマも同じく顔を赤くしてジト目で睨んできている。ティーナはニヤニヤしていて、ウィスカは俺に視線を向けては逸らすという感じだ。メイはここにはいない。メイだけは存在を感じ取れないんだよな。メイドロイドは生命体じゃないからだろうか。

「おはよう、皆」

「お、おはようございます。ヒロ様」
「……おはよ」
「おはようさん」
「おはようごじゃいます」

反応が妙である。クギに視線を向けてみるが、彼女はにこにこしているばかりで何も言わない。なんだろう、この空気は。なにか致命的な事態が起きている気がしてならない。いや、反応を考えればある程度の当たりはつけられるが。

「もしかして、何か漏れてた？」
「漏れるというか、突き抜けてきたというか……」
「私達は発信源がわかってたから理解も出来たけど、そうじゃない人達はわけも分からずびっくりしてたんじゃないかしら」
「クギさん？」
「はい、我が君」

クギ曰く、俺が目を開く際に放出される膨大なサイオニックパワーをクギが受け止め、無害な思念波に変換して大放出することによって『星系内の生命体が全滅するような事故』を防止したらしい。

「そうしないと、場合によっては恒星系そのものを破壊するような現象が発生したかもしれません。我が君の場合は時間と空間、運命を操る能力を発現させているので……最悪、この恒星系の時間が静止したり、その結果発生する時空間の歪みが周辺恒星系を含めた極大範囲の破壊を引き起こしたかもしれませんね。もしかしたらもっと酷いことが起こっていた可能性もあります。運命を操る能力が暴走した場合、何が起こるか想像も付きませんので」
「理解した。理解したけど、もう少し穏当な方法はなかったのだろうか？」

「我が君の力を此の身が受け止めて変換するにはあの方法しかありませんでしたが……お嫌でしたか？」
「お嫌ではなかったけれども、結果には頭を抱えているよ……」

つまり、行為中のらぶらぶ（）思念波が垂れ流されたというわけなので。大半の人にとっては出所不明の現象に過ぎなかっただろうが、俺とクギというサイオニック能力者の存在を知っている人々にとっては発生源がモロバレである。具体的にはセレナ大佐とかショーコ先生とかウェルズ氏とか。ロビットソン大尉もだな。俺の名誉というか尊厳は大きな傷を負った気がするが、結果としては俺のサイオニック能力が本格的に目を覚ましたということでプラスなのだろうか。プラスなのだと言うことにしておきたいなぁ。

「なんかこうさ。こう……ご都合主義というかなんというか。もう少し穏当かつストイックな方法で俺の目を開かせる方法は無かったのだろうか？」
「はい、我が君。ございます」
「あるんかい！？」

ならそっちの方法でやれば良かったのでは？

「はい。しかしそちらの方法ですと、適切な場所で、適切な師による厳しい修行を最低でも五年は受けなければなりませんが」
「それを一晩でなんとかしてくれるクギは本当に最高だな」

手のひら返しが酷い？　仕方ないね。五年も厳しい修行なんて受けていられないし。

「此の身のような巫女は我が君のような方の『目』を安全に、速やかに開かせるのが最大の務めなので。務めを果たすことが出来て、

此の身は幸せです」

そう言って微笑むクギの表情はとても満足げであった。しかし、その表情を見て俺は不安になる。

「その務めを果たしたことによってクギの身体が致命的な損傷を受けたとかそういうことは無いだろうな？　凄く強いっていう俺の力を受け止めて、思念波に変換した負荷で寿命を縮めたとか」

「そのようなことはありません。寧ろ身体の調子が良いくらいです。結果としてそのような事になった場合、我が君が此の世を呪ってしまいかねませんから。そうならないように見出され、練磨された者こそが巫女としてのお役目を頂くのですよ」

務めを果たしてテンションが上がっているのか、クギが胸を張ってドヤ顔をしている。嘘はついていないみたいだし、大丈夫そうかな。

「そろそろいい？」

「アッハイ」

皆が腰掛けているソファにも座らずにクギと話をしていたら、エルマに声をかけられた。声がなんか怒ってる。怒ってるよね？　いや怒ってないのか？　なんだかそこはかとなく感情が伝わってくる気がする。これも『目』とやらが開いた影響だろうか。

「一晩中あんた達の桃色毒電波に曝された私達にお詫びをするべきだと思うのよ」

「桃色毒電波」

エルマのネーミングセンスは実にユニークだな。ＨＡＨＡＨＡ！

「この度はご迷惑をお掛け致しました」

腰を直角に曲げて深く頭を下げる。完全なる白旗である。お前が悪いと言われたら認めざるをえない状況だ。

「言葉だけじゃ誠意って伝わらないものよね」

エルマが静かに立ち上がり、俺に近寄ってくる。目が据わってててコワイ！

「せやな」

いつの間にか――いや気づいてたけど――忍び寄ってきていたティーナが俺の左腕を掴み、エルマが右腕を掴む。ちょっと、力が。力が強いです。一人相手でも腕力じゃ敵わないのに、二人がかりとか勝てるわけ無いだろ！

「ちょっと待て落ち着こう今日はそろそろ出撃になるはずだしこんな時間から遊んでいる暇は」

「ミミ」

「はい」

引きずられる俺と引きずるエルマとティーナに追従してきていたミミがタブレット型端末の画面を俺に見せてくれる。なになに？謎の現象によりドーントレス各所で風紀の乱れ？　ドーントレスの憲兵当局は艦内に持ち込まれたアーティファクトによるものだろうという見解を発表し、大規模な調査を始めているとのことですか。なるほどね。

「一日二日は大騒ぎだろうからセレナ大佐も動けないわよ。ということで観念しなさいね」
「やさしくしてください」

いくら俺がこっちの世界に来てから身体を鍛えたとは言っても、限度というものがあるので。
四人相手に勝てるわけ無いだろ。常識的に考えて。

#363　嘘は言っていない（前書き）

あっついですねぇ――（：3」∠）―

#363　嘘は言っていない

「あっはっはっは！　いやぁ、一昨日の夜から昨日にかけてはしっちゃかめっちゃかの大騒ぎだったみたいだねぇ」

翌日。ショーコ先生達の研究室を訪ねると、ショーコ先生があっけらかんとして大笑いしていた。

「笑い事じゃ……ショーコ先生のとこは大丈夫だったんですか？」

「ちょうどその頃に精神波排除装置（サイオニックディスプレイサー）の試作機を稼働させていてね。私とウェルズ氏は外の大騒ぎを全く知らずに研究に没頭していたんだよ」

「結果として試作機の性能が十分であると証明されたのは良かったよ」

そう言ってウェルズ氏も肩を竦めている。残念そうな感情が全く感じ取れないんだが、ウェルズ氏はショーコ先生にそういう類の感情を抱かない人なのかね？　ショーコ先生も美人だと思うんだが。

などと雑談をしていると、研究室に誰かが入ってきた。ああ、誰かと思えばセレナ大佐とロビットソン大尉か。なるほど、二人の気配はこんな感じね。覚えたぞ。ところでセレナ大佐は何故そんなに猛々しい気配を纏っておられるのでしょうか？　今にも剣を抜いて切りかかってきそうな雰囲気を発しているだけでなく、額に青筋まで浮かべて。ほら、スマイルスマイル。

「余計なことを言うと口にプラズマグレネードを突っ込んで縫い合わせますよ」

「アイアイマム」

冗談を言ったらマジでやられそうなので背筋を伸ばして敬礼する。何故彼女が怒っているのか？　心当たりは一つしか無い。

「なにか弁明があるなら聞きますが」

「何についてですかね？　一昨日の夜から朝にかけての大騒ぎに関してということなら、うちもそりゃもう大変なことになってたんですが」

嘘は言ってない。一昨日の夜から朝にかけてはクギを相手に、その後はメイ以外の全員を相手に大変なことになっていたからな。

「……貴方達が原因ではないのですか？」

「愉快犯じゃあるまいし、故意にあんなことを引き起こすわけがないじゃないか」

至極真面目な表情で言い切る。嘘は言っていないからな。真実を話していないだけで。

セレナ大佐は俺の顔を不審げにジロジロと眺めていたが、やがて諦めたのか視線を逸して溜息を吐いた。

「そうですよね、流石の貴方でもアレは無いですよね……すみません、あまりの大騒ぎに気が立っていたようで」

「……レスタリアスというか、対宙賊独立艦隊内でも色々あったんだな」

「それはもう……幸いというかなんというか、『事故』で済んだ案件ばかりだったのは幸いでしたね。『事案』や『事件』レベルのものがなくて……ええ」

事故と事案と事件の区別がわからんが、重要度というか犯罪性の

有無というか強弱で区別しているのか？　それは。何にせよそれは良かったな。
　あと絶対に俺達が原因だということは言わないでおこう。最悪しょっ引かれそうだ。考えてみたらちょっとした催眠テロみたいなものだものな。うちの船の中だけの話なら気にする必要はなかっただろうが、ドーントレス全体を大混乱に陥れたということになると罰金刑じゃ済まない罪状になりそうだ。

「おや？　どうしたんだい、クギくん。汗が凄いよ？」
「な、なな、なんでもないです」

　そう言うクギの表情は蒼白で、しかも冷や汗だらけである。クギさん？　あまりバレそうな挙動は止して欲しいんですが。

「……」

　セレナ大佐がまた疑念のこもった視線を向けてくる。ノーノーノー、私達何も知りませーン。

「すまん、クギ。明け透けに話しちゃって……疑念を払拭するために仕方なくな」
「は、はい、我が君」

　というデリケートな話題なので、あまり突っ込んで聞かないでくれという視線をセレナ大佐に送っておく。それはそれで気に食わないという感じで睨まれたが、俺がクギとか他のクルーと『大変なこと』になっていたとしても、セレナ大佐にどうこう言われる謂れはない。ないったらない。
　ちなみに、本日の同行者はクギのみである。整備士姉妹は昨日のあれこれでダウンというか疲れ果ててダラダラしているのだ。ミミ

とエルマはそもそも来る必要がないし、メイには留守を守って貰う必要があるからな。

「……まぁ、良いでしょう。なんとか騒ぎも収まりましたから、十二時間後に出航します。案内役としてスクリーチ・オウルズも随行することになるので、そのつもりで」

「了解。それじゃあ俺達も出港準備を整えておくとしよう。クギ、船に戻るぞ」

「はい、我が君」

タマ達が俺とクギが垂れ流した桃色毒電波の影響を受けて異常行動なんかを起こしていないか聞きたかったんだが、タイミングを逃したな。まぁ、ショーコ先生もウェルズ氏も何も言っていなかったし、特異な変化は見られなかったのかね。今度機会があったら聞いてみるとしよう。

☆★☆

「で、やっと出陣ってわけね」

昨日の疲れが取れきっていないのか、若干気怠げな雰囲気を纏ったままエルマが呟く。肌艶は良いので別に体調が悪いというわけではなさそうだ。

「あの、クギちゃんはどうしてあっちで小さくなっているんですか？」

ミミが休憩スペースの隅っこ――テラリウムの辺りで三角座りをしているクギを見て心配そうな表情を浮かべている。

「あー……ほら、一昨日のアレ」
「桃色毒電波？」
「その言い方やめない？　まぁ、それなんだけども。ほら、特に対策もせずに垂れ流したじゃないか」
「せやな」
「あれな、神聖帝国では恥ずかしい行為であることには違いないけど、基本的に各々いくらでも自衛できるから罪でもなんでも無いんだとよ」
「あー……なるほどね」

事情を察したエルマが苦笑いを浮かべる。

「それがこっちではテロ行為扱いだからな。そこまで深く考えずにやらかした上に、それで下手すると俺がしょっ引かれかねないということを今日知って落ち込んでいるんだ」
「なるほど……確かにあれはちょっとしたテロ行為ですよね」

ウィスカの言葉が聞こえたのか、俯いたままのクギの獣耳がピクリと動く。

「クギ、大丈夫だから。証拠もないし、疑惑を向けられたとしても立証は不可能だ。頭の中身を直接覗かれるような尋問でもされれば話は別だけど、疑惑程度でそこまでのことはされないし」

宙賊などの重犯罪者でもない限り、脳味噌の中身を直接覗くブレインハックによる尋問はされないって話だからな。ドーントレスには対サイオニック関係の装備は配備されていないという話だし、俺達の犯行――犯行と表現すべきものかどうかはわからないが、とにかく俺達の仕業であるということがバレることはない筈だ。

「言うて、行く先々でこんなことやってたらそのうちバレそうやけどな」
「もう大丈夫だ、多分」
クギに修行をつけてもらえば制御はできるようになるはずだからな。俺の『目』が開いてからは俺から垂れ流されるサイオニックパワーの量も相当減ったという話だし。
「とにかくそう時間を置かずに出航することになるから、各自準備と体調の調整を頼む」
「それはわかったけど……あんた元気ね」
「なんだか身体の調子が良いんだよな」
エルマもミミもティーナもウィスカも昨日のアレコレで結構お疲れのようなんだが、俺はなんだかかえって身体の調子が良いくらいなんだよな。なんだろう、もしかして多少なりともサイオニックパワーの制御ができるようになった結果、体力の底上げでもされたのだろうか？
「出港の準備って言ったって物資の補充も機体の整備も終わってるから何も無いわよ。体力が有り余ってるならクギを慰めるなりメイを構うなりしてあげなさい。私達は適当に体調整えておくから」
「了解」
メイドロイド相手のご機嫌を取るってのも世間的には変な話なのかもしれないが、メイには世話になってるからなぁ。蔑ろにしようとは思えない。何にせよまずは隅っこで座り込んでいるクギのご機嫌を窺ってからメイの様子を見に行くとしよう。
最近メイには留守を任せるかクギのお供をしてもらうかしてもらっていたからあまり構えなかったし、一昨日から昨日にかけてもブ

ラックロータスのことを任せっきりだったからな。

#３６４　リッシュ星系へ（前書き）

暑いし、寝違えたのか昨日から首は痛いし、薬塗ったらヒリヒリするし、それどころかなんか痒くなって腫れてくるし踏んだり蹴ったりで全く集中できなかったよ……＿（∵3」∠）＿

#364　リッシュ星系へ

出航し、作戦行動に入ってからの艦隊の動きは早かった。流石は対宙賊独立艦隊といったところだな。宙賊相手にちんたらとしていては逃げられるので、普段からキビキビとした艦隊行動を心がけているというわけだ。ダラダラ動いてたら宙賊に逃げられるからな。

「エッジワールドってものすごく危険なイメージだったんですけど、案外何にもありませんね」

「そりゃそうよ。ドーントレスから離れたら宙賊や宇宙怪獣がひっきりなしに襲ってくるような魔境だったら流石に探索者も寄り付かないしね」

ブラッククロータスの休憩スペースでミミとエルマがのんびりとおしゃべりをしているのを横目に、俺はメイに膝枕をされながら頭を撫でられている。今日はメイ感謝デイなので力の限りメイに甘やかされているのだ。というかメイに愛でられているのだ。

対宙賊独立艦隊と一緒に艦隊行動をしている間はあちらのオーダーに従って半自動航行になるので、メイがこうして俺を構っていても何の問題もないというわけだな。

クリシュナはハンガーに格納してあるし、アントリオンはブラッククロータスにくっついているから操縦の必要が無いしな。この艦隊に襲いかかってくる宙賊なんているわけもないし、宇宙怪獣が出たとしてもこの艦隊戦力なら俺達が出る幕はほぼ無いだろう。

「我が君、本当にそんなにのんびりとしていて大丈夫なのですか？」

「今更ジタバタしてもできることなんて大してないから良いんだよ」

装備の整備と確認は完璧だし、そもそも今回俺達は主力じゃないからな。あくまでもピンチヒッターかつ貴重なサイオニック能力に関するアドバイザーとしての同行なので、よくわからん未開惑星の地表に降りて危険極まりない鉄蜘蛛めいた殺人ボールとちゃんばらをする予定は無いのだ。精々やったとしてもクリシュナで近接航空支援をするくらいだろう。

「うちらとしてはあんまり面白みのない仕事よなぁ」
「私達の出る幕が無いもんね」
「何か手に入ったとしても、異星文明起源のアーティファクトは流石に二人の手にも余るよなぁ」

ティーナとウィスカの専門はきちんと技術体系の存在するシップテクノロジーなので、未知のよくわからん異星文明起源のテクノロジーなんぞを万が一手に入れたとしても、どうにもこうにも手に余るのである。

「まぁ、あのタマ起源の新しい装甲材には期待しとるんやけどね。アレはたしかに面白い素材やと思うわ」
「けどコストがねぇ……量産の目処が立てば良いけど」
「装甲材って張替えするとなると高いわよねぇ」
「それな」

船の装備で何が一番高いかって言うと実は装甲材なんだよな。最低限の装甲だと滅茶苦茶安いんだが、グレードを上げれば上げるほど値段が指数関数的にお高くなる。クリシュナみたいな小型艦でも軍用の最高グレードの装甲と通常装甲では費用の桁が二つくらい違うからな。あのタマの甲殻だか装甲だかから開発される装甲の価格がどれくらいのお値段になるのかは現時点では想像もつかん。

「目的地はもう一つ先の星系やったっけ？」
「リッシュ星系ですね。ドーントレスの停泊していたケンサン星系からハイパーレーンで二つ先の星系になります」
「星系情報ってあるのか？」
「私もさっき見たけど、情報は殆ど無きに等しいわよ。B型主星系で、惑星数は四つ。外縁部に岩石と氷塊混じりの小惑星帯があって、四つの惑星はいずれも岩石系の惑星ね」
「氷塊混じりの小惑星帯かぁ……宙賊の温床になりそうだなぁ」

氷塊系の小惑星帯からなら水を得られるし、水が得られるならエネルギー面さえなんとかなれば食料や水も自給できる可能性がある。そうなると宙賊どもが拠点を作りやすくなるんだよな。まぁ、それはコロニー植民をするグラッカン帝国にしても同じことなんだが。

「既に根を張ってるかどうかが問題ね。宇宙怪獣の類の目撃報告は今のところないみたいだし、とっくに宙賊が中継基地を作ってる可能性はあるわよね」
「まぁ、そうだとしても今回は問題にならないだろ。今後このあたりを領地として帝国に組み込んで、実際に植民する段になってからだ。そういうのが問題になるのは」

仮に宙賊が目的地のリッシュ星系に基地を構えていたとしても、今回の調査の間に対宙賊独立艦隊に何か仕掛けてくる可能性は低い。寧ろ息を潜めて見つからないようにするんじゃないかな。

「その宙賊を探して狩ったりはしないんですか？」
「セレナ大佐次第だなぁ。あくまでも今回の調査行の目的は例のタマだろうし、余計なことにリソースは割かないんじゃないかな。本当にいるかどうかもわからないし」

ウィスカの疑問にそう答えて手を振って見せる。
氷塊混じりの小惑星帯が存在するなら自給自足が成り立ちやすいから宙賊どもが根を張っている可能性は高くはなるが、実際に根を張ってるかどうかは別の話だからな。

「間もなく最後のハイパーレーンへと突入するようです」
「ハイパーレーン内航行時間は？」
「およそ一時間半の予定です」
「じゃああと一時間はダラダラしてて良いな」
「はい」

俺を膝枕したまま、メイが俺の頭とお腹を撫で撫でしてくる。メイは機械の身体なのに温かいし柔らかいし本当に不思議な存在だよなぁ。オリエント・インダストリー恐るべし。

#365　HA！　NA！　SE！（前書き）

クッソ暑くてダウンしそう（　ω　）（魂半抜け

#365　HA！　NA！　SE！

「ヒロ様、セレナ大佐からレスタリアスまで来て欲しいと連絡が」
「あぁん？　なんで？」

リッシュ星系に着いて目的地であるリッシュⅢの周回軌道上に布陣したところでミミから妙なことを聞かされた俺は思わず胡乱げな声で聞き返してしまった。いや、だってこのタイミングで直接顔を合わせて話したいとか内容がちょっと予想つかないんだもの。

「パワーアーマーの慣熟訓練に付き合って欲しいとのことです。注文した品を受け取ったは良いものの、全然練習する機会がなかったそうで」
「なるほど……ってあの人また自分で地表に降りるんか」
「帝国貴族としてはねぇ……」
「艦隊の最高指揮官が前線に出張る悪習やめんか……？」
「伝統だから」

そう言ってエルマが肩を竦めてみせる。宇宙空間の艦隊戦なら指揮官が多少後ろに居たところでどうせ被弾は避けられないだろうからってのは理解できるけどさ、白兵戦で前に出るのはどう考えても危ないし非効率的でしょ……まぁ伝統だからって言われたらあんま強く否定もできないんだけどさ。

「じゃあパワーアーマー積んでいくか……エルマも一緒に来てくれ。滅多なことはないと思うが、勢い余って俺が負傷とかしたらミミとかクギにクリシュナを任せるのはまだちょっと早いし」
「仕方ないわね。まぁ、どうせアントリオンは近接航空支援には使

えないから良いか」

アントリオンの主武装は高出力レーザービームエミッターで、サブウェポンはシーカーミサイルなので今回行われるリッシュ星系での近接航空支援には向かない。タマどもにはあまり熱光学系の兵器が効かないからな。恐らくクリシュナの散弾砲の方が有効だろう。いや、歩兵やパワーアーマーが使う熱光学系兵器よりも航宙艦の装備している熱光学系兵器の方が出力が遥かに上だから、効かないことは無いのかな？　まぁ散弾砲の方が効きそうなのは確かだな。

ということで俺とミミ、エルマにクギという現状のほぼフルメンバーでクリシュナに乗ってセレナ大佐に会うためにレスタリアスへと移動したわけだが。

「一緒に地表に降りていただけませんか？」

しなを作ってにっこりと微笑むセレナ大佐。にっこりと微笑み返す俺。

「帰ります」

「待って待って待って急に真顔になって帰ろうとしないで」

踵を返した俺の服を掴んだセレナ大佐が全力で俺に縋り付いて引き留めてくる。ええい離せ、貴族特有の強化された身体能力を無駄に発揮しやがって。力が強いわ！

「嫌に決まってんだろ！　絶対あの殺人鉄蜘蛛とかその親玉とかとチャンチャンバラバラドンパチドンドンになるに決まってるじゃねぇか！　前にテラフォーミング中の惑星に降下した時にも酷い目に遭ったわ！」

「そういう時に貴方が居ると頼りになるんですよ！　今回は私の他にも貴族兵が居ますが、背中を預けたことがあるのは貴方だけなんです！　専用のパワーアーマーを用意してるのは私と貴方だけですし！」
「絶対に！　嫌だ！　ＨＡ！　ＮＡ！　ＳＥ！」

今回はクリシュナから高みの見物をするつもりだったんだよ！
誰が好き好んでわざわざ死地に飛び込むかって。

「報酬！　報酬ははずみますから！　艦隊司令官の護衛任務ということで手当てをつけますよ！」
「……いくら？」
「ええと……五万エネルほどで？」
「俺の命はそんなに安くねぇよ！　少なくとも十倍持って来い！」
「強欲過ぎませんか！？　プラチナランク傭兵の相場は払ってるでしょう！」
「航宙艦での戦闘や近接航空支援は契約内だけど、パワーアーマーを着て惑星降下して殺人機械めいたモンと剣で戦うのは契約外だ！　契約書百万回読み直してこい！」

ギャーギャーとセレナ大佐とやりあっていると、溜息を吐きながらエルマが割り込んできた。

「はいはいはい、ストップ。そんな感情丸出しでギャーギャーやんのはやめなさい。良い大人がみっともない」
「ぐぬっ」
「くっ」

確かにちょっと感情的になり過ぎ……いや感情的になるわ。これはなるわ。と言い募ろうとしたらエルマに手で制された。

「ヒロの不満はごもっともよね。そもそもあんたは生身での戦闘は好きじゃないわけだし。契約外のリスクの高い任務だものね」

俺の不満点を的確に言ってくれたエルマに対し、俺は腕を組んで深く頷いておく。そりゃパワーアーマーを着ていれば生身よりはかなり安全になるが、それでも三重のシールドと分厚い特殊装甲に守られているクリシュナのコックピットと比べれば薄紙のようなものだ。当然危ない。油断したら四肢だの首だのが永遠にバイバイしかねない。

「でもヒロ、あんたも寝覚めが悪いのは嫌いよね？　これでセレナ大佐の依頼を突っぱねて、結果としてセレナ大佐が最悪死んだとしても後悔しない？」

「いやそれはさぁ……」

それはちょっと反則では？　確かにセレナ大佐とももう長い付き合いだし、ここでセレナ大佐の依頼を突っぱねてセレナ大佐が死んだり行方不明になったりしたら後悔するだろうけど、それとこれとは話が別じゃん？　俺達傭兵ぞ？　死んだら何にもならんのだが？

「それで俺が死んだら誰がお前らの面倒を見るんだよ。俺にはクルーのお前らの面倒を見て養っていく義務があるんだ。危険な橋は渡れないぞ。それだけ俺の命の上にはお前らの命も乗っかってんだよ」

「そこはセレナ大佐にケツ持ちしてもらうしかないわね。別にうちのキャプテンを最前線に突っ込ませるわけじゃないわよね？　前回みたいなやりかたを今回もやるつもりならこの話はナシよ」

「今回は探索すべきポイントは最初から割れてますから最初から前衛に戦闘ボットを投入しますし、私も地表に降りはしても最前線で戦うつもりはないですから大丈夫ですよ」

「ほんとにござるかぁ……？」

嘘くせぇなぁ？　結局一番前に投入されることになるんじゃねぇの？

「本当です。もし約束を破るようなことになったら個人的に何でも言うことを聞いてあげても良いですよ」

セレナ大佐が自分の胸に手を当て、ドヤ顔をしてみせる。知ってるか？　大佐。そういうのはな、フラグって言うんだぞ。あと個人的にって言われても使い途がないんで結構です。

☆★☆

で、結局パワーアーマーを着込んでセレナ大佐と一緒に地表に降下した俺です。確かに見捨てたら寝覚めが悪いけどさぁ……なーんか納得行かねぇよなぁ？　言い包められた気がしてならんわ。これはエルマに貸し一つだな。

「大気組成は主に二酸化炭素……大気圧も極めて低いし、まぁ凡そ人類が生身で生存できる環境ではないな」

ＨＵＤに表示されている情報を見て呟く。重力は軽めであるようで、ちょっと慣らさないと急な動きをするのが怖いな。というわけで慣熟慣熟。

『おや、言うまでもなく動きのチェックをしていますか。感心しました』

「そりゃどうも」

白い騎士風のパワーアーマーを着たセレナ大佐が声をかけてきたので、適当に返事をしておく。感心しましたとか済ました声で言ってるけど、あんた一時間くらい前に俺に縋り付いて駄々こねてたよね？　今更格好つけても全く格好つかんぞ。

「今回は絶っっっ対に前に出ないからな」

『わかってますよ。余程のことが起きない限り私達の出番はありません』

やめろよな、そういうこと言うの。そういうこと言ってると本当に俺達の出番が来るんだぞ。

『大佐！　目標の遺跡らしき構造物から正体不明の物体が多数出現しました！』

「……」

『……』

パワーアーマー越しに俺と大佐の視線がバッチリとぶつかり合う。

ほら見たことか。

#３６６　名状し難き三角錐（前書き）

ぐえー、進まなかったンゴ―（∵3」∠）―（でも更新したのでユルシテ

#366　名状し難き三角錐

『映像を』

マテリアルプロジェクターによって生成され、シールドで守られた簡易指揮所の中でセレナ大佐が頭痛を堪えるような声を漏らす。オーダーメイドのパワーアーマーを着ていなかったらこめかみか眉間あたりを押さえていたかもしれんな、あれは。

『ハッ、映像送ります』

前線指揮官らしき男性の声とほぼ同時に簡易指揮所に設置されていたホロディスプレイに彼の視界と思しき映像が投影される。これが音声通信だけしか使えないような状況であれば正体不明とはなんだ報告は正確にしろ！　とセレナ大佐がキレ散らかすところだったのだろうが、帝国航宙軍の技術レベルはこんなこともいとも容易くやってのける。

「……こりゃ確かに正体不明と言わざるをえんわな」

思わずポツリと呟く。

それは名状し難き物体であった。言うなればそれは三角錐である。鈍色に光る足だか手だかよくわからんものを動かして歩き、屹立する鉛色の三角錐だ。目のように見える紋様が表面に見られるが、それが事実感覚器としての目であるのかどうかは定かではない。

『……あのタマのお仲間でしょうかね』

「お父さんかお母さんか、あるいはお兄ちゃんかお姉ちゃんかもし

れませんな、大佐殿」
『頭がどうにかなりそうです。とにかく例の機材でコンタクトを』
『了解』

対宙賊独立艦隊の海兵達がパラボラアンテナのようなものがついた一抱えほどの大きさの機材を用意し、アンテナ部分を三角錐に向ける。あの機械こそがショーコ先生達科学者と、うちの整備士姉妹が多言語翻訳インプラントのデータベースを応用して作った精神波を使った対話装置である。

残念ながらタマとの会話はあちら側に完全に拒否されたので成立しなかったが、連中が相互通信に使っている精神波の解読にはある程度成功し、クギとの精神波通信は完全に成功した。

電波などを用いた既存の科学技術による通信ではなく、精神波を用いた帝国史上初の通信装置なのだ――とウェルズ氏が息巻いていたが、それが凄いものなのかどうなのか俺には判断できん。クギの故郷である神聖帝国にはもっと凄いものがありそうに思えるしな。

『スクリーチ・オウルズの面々はアレを初めて見たそうです』
「あんなもんひと目見たら忘れられそうもないわな」

つまり、今まで一言もあの三角錐に関しての情報があちらから出なかったということは、今回俺達の訪問を受けてあちら側が何かしらの特殊なアクションを起こしたということなのだろう。

「つまり、アレは状況をある程度正確に把握し、それに対して何かしらスペシャルなアクションを起こせる程度の知性を持つ物体、ないしそういった存在の手先なり行動ユニットなりということですな、大佐殿」
『……胃が痛くなってきました』

純白の騎士鎧めいたパアーアーマーがガッキンゴリゴリと音を立てながら自分の腹部を撫でる様は、なんというかコメディを感じるな。折角の純白の装甲に傷が付きますぞ。

『大佐、目標に動きが』

帝国海兵標準のパワーアーマーを装着したロビットソン大尉の言葉でホロディスプレイに視線を戻すと、三角錐の一部が分離して宙に浮いていた。もしかしたらアレは小さな三角錐の群体めいた存在なのかもしれない。

まぁ、今はそんな生態観察に思いを馳せるよりも、その行動が何を意味するのかを警戒したほうが良さそうな状況ではある。友好的なアクションだと良いんだけど、どうにもそう思えないんだよなぁ。

『シールドを展開せよ。最大出力』

『アイアイマム、シールド展開します』

海兵達が陣地防御用の可搬型シールドジェネレーターを起動した瞬間、衝撃が襲いかかってきた。

【控えよ】という思念と共に。

『ガ――ッ！？』

『ぐぅ――ッ！？』

ホロディスプレイに映る映像が激しく動いて地面を映し、簡易指揮所内に居たセレナ大佐達も頭を押さえて跪く。前衛であの三角錐と対峙していた兵達は倒れ、軽く３ｋｍ以上は離れた場所にある簡易指揮所の人々も衝撃で膝をついたというわけだ。

俺以外。

「……大丈夫ですか？」
『……どうして貴方は無事なんですか？』
「体質のようなもので」

事実そうなのでそうとしか言いようがない。『目』とやらが開いた結果、俺は垂れ流しであったサイオニックパワーを身体に留めることができるようになり、今までにも増してサイオニック系の『攻撃』に対する耐性が大きく上がった――らしい。今始めて実感したが。

『何なのですか、今のは』
「皆目検討も。控えよ、と聞こえたんで大出力のテレパシーとかですかね」

ホロディスプレイが据え付けられたテーブルに手を付きながら立ち上がるセレナ大佐にそう言って肩を竦めてみせる。パワーアーマーを着たままこんな動作ができてしまう辺り、流石はオーダーメイドといったところだろうか。

『控えよ？　なんと尊大な……というか、貴方はあのノイズらしきものを理解できたのですか？』
「ノイズ？　いや、普通に言葉だったと……あぁ」

そういえば俺の頭は多言語翻訳インプラントが入っていないのに大抵の言葉を理解することができるという特別製なのだった。これが異世界転移だか転生だかのお約束なのだかどうかは分からないが、少なくとも多言語翻訳インプラントは先程の強大な精神波に対しては仕事をしなかったらしい。

「俺のは特別製なんで」

そう言って自分のパワーアーマーのヘルメット部分を指先でコンコンと突くと、セレナ大佐は呆れたような声を上げた。

『体質もインプラントも特別製で、未強化で帝国貴族に匹敵する剣士で、なおかつ凄腕の戦闘艦パイロットですか。ご職業はコミックヒーローで？　まぁ、今はそれどころではありませんね』

「ご尤もで」

冗談を言い合っている暇があれば前線の様子を見るべきである。しかし悲しいことに前線の兵達は揃って気絶してしまったようで、誰も彼もが通信に応答しなかった。パワーアーマー越しに観測されるバイタルサインは落ち着いているので、命に別条はないらしい。

『ディスプレイサー作動。兵の意識を覚醒させなさい』

『ディスプレイサー作動完了。パワーアーマーのメディカルデバイスによる意識の覚醒……失敗、バイタルサインに異常はありませんが昏睡状態です』

『厄介な……神聖帝国の精鋭兵は超能力で敵の意識を破壊すると聞きますが、それと似た状態ですか』

意識を破壊？　なにそれ怖……精神を崩壊させてくるってことか？　凶悪過ぎんか？

『仕方がありません……キャプテン・ヒロ』

「聞きたくないですが、なんでしょうか？」

『この場でアレと対峙できそうなのは貴方だけであるようです。前線に移動してアレとの対話を試みて下さい』

「……戦闘ボットは健在なのだから、もうぶっ飛ばしてしまえば良

いのでは？」

ホロディスプレイに映る光景は前線の兵士のものから随伴していた戦闘ボットのものに切り替わっている。戦闘ボットに関しては何の問題もなく動作し、制御も掌握できているようなので、あの三角錐氏におかれましては超合金ロボの暴威によって現世から退場して頂けば良いのではなかろうか？

『アレに知性がある可能性を示唆したのは貴方でしょう。アレが未知の知性体なのであれば、グラッカン帝国としては平和裏なコンタクトを試みざるを得ません。残念ながら』

「だからといって傭兵の俺がそれを担当するのは筋が違うのでは？」

『貴方はグラッカン帝国航宙軍の軍人ではありませんが、今この瞬間はグラッカン帝国航宙軍に報酬で雇われている傭兵です。クライアントの命には従ってもらいます』

純白の鎧を纏った騎士様がそう断言する。

畜生め。やっぱり惑星降下なんて断固として断ればよかった。

#367　未知との遭遇（前書き）

ねむみがとれぬ（　ω　）

#３６７　未知との遭遇

兵隊というのはまず何よりも上官の命令に絶対服従することを叩き込まれる。それはまぁ、当たり前といえば当たり前だ。Ａ地点を死守しろという命令を出したにも関わらず、防御行動を勝手に中断してその場から逃げ去るような兵が居ては戦闘行動もままならない。

ビデオゲームで考えると尚わかりやすい。ジャンプボタンでジャンプせず、攻撃ボタンで攻撃を行わず、回復魔法のコマンドを選択したのに敵の攻撃力を下げる魔法を使うようではゲームにならない。

要は、指示通りに動かない手足などゴミ以下の聳え立つクソであるということである。そして、兵というのは使える手足でなくてはならない。それは生粋の帝国軍人ではなく、傭兵である俺にもある程度は求められる資質であるというわけだ。

「これだから帝国軍に雇われる仕事ってのは……」

愚痴を吐きながらニンジャパワーアーマーの機動力を最大限に活かして凡そ３ｋｍ先にある現場へと急ぐ。ごつごつとした岩を飛び越え、砂礫を蹴散らし、中、小型の戦闘ボットによって後送される帝国兵と擦れ違う。

「大佐、前線の様子は？」

『膠着状態、とでも言うべきでしょうか。対象にこれといった動きは見られません』

「つまり、兵の後送を妨害する素振りもなければ追撃をする様子もないと」

『あるいはこちらを観察しているのかもしれませんが。どこに感覚器の類があるのかさっぱりわかりませんがね』

とりあえず最初の『接触』後は奴さん、大人しくしてるってわけだ。残念ながら真っ当な人間である俺にはあの謎の三角錐の思惑なんぞを推し量るのは難しい。あまりに難しい。

「敵対的な意思は無い、と見て良いのかどうか……」

ちなみに、航空支援のために上空で待機しているエルマが操艦しているクリシュナやメイの掌握下にあるブラックロータスには例の三角錐が放った精神波の影響は極めて限定的なものだった。３ｋｍ程度の距離にいたセレナ大佐をはじめとした帝国軍人でも衝撃を受けた程度だったので、もっと距離があるあちらでは更に影響が小さかったらしい。

「何にせよ接触してみるしかないか」

赤茶けた小さな丘を飛び越えた先に砂塵に埋もれかけた朽ちかけの構造物のようなものや、戦闘ボットや陣地防御用のシールドが展開されている帝国の陣地、そしてその前に立ちはだかる大きな三角錐のようなものが見えてきた。うーん、結構なデカさだな。タイタン級の戦闘ボットと同じくらいの大きさとなると、全高は１０ｍ前後といったところか。

「ぬっ……？」

こちらがあちらを認識した瞬間、あちらもこちらを認識した。理由は分からないが、そう感じる。これはいよいよ俺も超人じみてきたな、と内心で溜息を吐きつつ帝国軍の陣地へと移動する。

「全く頼もしい限りだなぁ」

当然ながら、陣地はスカスカである。陣地に詰めていた帝国軍人達はとっ初めの『接触』で全員が昏倒して戦闘ボット達に後送されたからな。残っているのは負傷兵の運搬に向かないタイタン級戦闘ボットのような戦闘に特化した戦闘ボットの類だけで、生身の人間に至っては俺一人である。

俺はここであの三角錐からの『接触』に耐えつつ、セレナ大佐の指示を受けながらサイオニック通信機を操作してあの三角錐とのコミュニケーションに励むというわけだ。

いざとなれば戦闘ボットを動かしてくれるという話だし、せいぜい命を大事にという感じでいつでも逃げ出せるようにしておくとしよう。

え？　敵前逃亡をして良いのかって？　流石に戦死するまで帝国軍に付き合う義理は無いし、危険を感じた場合には戦闘ボットを囮にして逃げて良いって言質だけはセレナ大佐からもぎ取ってきたからな。せめてそれくらいの確約がないと何と言われようと俺は前線には行かんと強硬に拒否させてもらった。

傭兵の立場としてクライアントの命令には最大限応える必要はあるが、クライアントにも傭兵の生命を損なわないように最大限手を尽くす義務がある。つまり、明らかな死地に放り込むのは傭兵を使う上でのルール違反でもあるわけだ。俺はその契約条項を盾にして任意撤退の権利をもぎ取ったのである。『進んだ』人命尊重意識と傭兵ギルド万歳。

「現地到着」

『早かったですね。それでは早速コンタクトを始めて下さい』

「了解」

陣地内に放置されていたサイオニック通信機に取り付き、操作を始める。まぁ、機械としてはそんなに操作の難しいものではない。

共通規格の端子を使ってパワーアーマーとサイオニック通信機を接続し、あとは普通に喋るだけである。喋った際の思念波をサイオニック通信機が自動で読み取って翻訳し、テレパシーとして発信する。そして向こうから発信されてくるテレパシーを感知すると、サイオニック通信機はその内容を翻訳してホロディスプレイに表示するというわけだ。

実に簡単。何の問題もない。そう、俺が俺でなければ。

「あっ」

端子を接続してから俺は致命的なことを思い出した。サイオニック通信機の制作にあたってはサイオニック回路や発振器、それに操作者の思念を読み取る部分などに精霊銀が使われているのだということを。

パァンッ、と破滅的な音が鳴り響き、接続端子が弾け飛ぶ。思い出した瞬間に接続コードを引き抜いたのだが、間に合わなかった。

『今の音は何で――なんですか、それは』

俺の横で作業を見守っていた戦闘ボットからセレナ大佐の声がする。ああ、遠隔操作してるのね。

「なにもしてないのにこわれました」

『ふざけているんですか？』

「ふざけてないです。俺は無実だ」

敢えて言うなら俺と精霊銀の相性が最悪であるということを今の今まで失念していたというだけである。

「一応受信は問題なく動いているみたいですが……ボディランゲー

ジでのコミュニケーションでも試みましょうか？」
『もういっそ今すぐいつもの悪運を発揮して突如テレパシーに目覚めるとか、対象が私達の言葉を話せるようになるとかそういう感じの展開でも引き起こしてくれませんか？』
「無茶を言うな、無茶を……」

そんな都合よく超能力やら自分の望む展開やらを引き寄せられるなら苦労せんわ。

「しかしどうしたものか。ヘイ、三角錐さんよ。俺達は対話を求めているんだが対話に応じる気はあるかね？」

もう破れかぶれで陣地内から三角錐に向かって呼びかけてみる。そうすると、三角錐から分離して浮遊していた小さな三角錐がこちらへとその先端を向けた。なんだ？　攻撃か？　と警戒したのだが、次の瞬間に発せられたのは攻撃ではなく、強大な思念波であった。

【肯定する】

脳味噌の奥を突き抜けていくような思念波に思わず眉を顰める。

「そいつは結構。ただ、声がデカすぎる。俺はともかく、他の連中にとってはな。もう少しテレパシーの出力を絞ってくれ」
【了承する】

今度の思念波は先程よりマシであった。というか、意外と普通に会話できてんな？　俺の声が聞こえているのか？

【否定する。汝の同胞と思しき者どもから理を学んだまで】
「今一つはっきりと理解できんが、ここらで転がっていた帝国兵達

から俺達とコミュニケーションを取るのに必要な情報を引っこ抜いたわけか？」

【肯定する】

「つまり俺の考えは話すまでもなくお見通しってわけだ。今は便利だから良いが、人間ってのは基本的に自分の心の内を秘しておきたいものだ。お前さんにとっては理解し難いかもしれないが、今後は控えることを推奨するよ」

【検討する】

さて、都合の良いことに向こうはこっちにある程度合わせてくれるつもりがあるようだ。困難な対話になりそうな気配をヒシヒシと感じるが、未知との遭遇は今のところ平和裏に始められたというわけだ。上手く交渉できると良いが、さて。

#368　理知的な異星人（前書き）

昨夜から暑くて暑くて溶けそう……｜（：3」∠）｜（短いのはユルシテ

ところで明日8／10は宇宙船8巻の発売日！　是非買ってね！！

（，ω，）

#368　理知的な異星人

彼との交渉――というかコミュニケーションは難航していた。

【グラッカン帝国とは何か】

「グラッカン帝国はこの恒星系と一番近い位置に存在する銀河帝国で、無数の恒星系を支配する星間国家だな」

【銀河帝国とは何か。恒星系とは何か。星間国家とは何か】

「あぁー……」

彼は昏睡していた帝国兵達からある程度の基本的な会話シーケンスというか、コミュニケーションに必要な最低限の情報は抜き取れたようだったが、知識面での情報収集は不完全であったらしい。言葉の一つ一つについて懇切丁寧に説明していかなければならないので、コミュニケーションは遅々として進まなかった。

幸い、三角錐氏の頭脳――脳味噌があるかは知らんが――は優秀なようで、一度説明したことに関してはしっかりと記憶してくれているようだ。それが唯一の救いだ。

「これ、俺一人でやるの？　心が折れそうなんだが」

『貴方以外だと近づいただけで昏倒してしまうので』

「まずそこをどうにかするべきじゃねぇかなぁ？」

俺が居ないとこの三角錐氏とのコミュニケーションが成立しないということでは先が思いやられる。俺は謎の三角錐専属の翻訳者になるつもりはねぇぞ。

と、まぁセレナ大佐に通信越しに愚痴を吐きつつ、彼女の率いる対宙賊独立艦隊のバックアップ――知識的な意味で――を受けなが

ら、三角錐氏とのコミュニケーションを重ねていく。
何にせよ相互理解をするところからだろう、ということで俺達の立場を説明し、彼の来歴を聞き取る。

「つまり、自分でも自分がどこから来たのかわからないと？」
【肯定する。我々がどうやってこの場所に来たのか、我々は答えを有していない】
「我々ということは、あんた以外にもこの惑星に同胞がいるのか？」
【否定する。我々は我々だけである。即ち、貴殿らが『三角錐』や『タマ』と呼んでいる個体群である】
「つまり、お前さんもあのタマも同じ存在の別部位……言うなれば、俺達にとっての手足のようなものだと？」
【肯定する】
「なるほどぉ……」

そのタマ、我々いくつもこの星から持ち出した上に売買したり破壊したり実験動物扱いしてしまっているのだが。

「知らなかったこととはいえ、なぁ」
【個体群の減少は把握している。早急な解放を要請する】
「だそうですよ、大佐殿」
『状況は把握しました。しかし運び出す際に暴れられるのもこちらとしては困るので、外に運び出すまでタマの状態に戻ってじっとしてくれると助かるのですが』
「どうやって降ろすんだ？　レスタリアスは惑星上に降下できるのか？」

重力で艦隊が断裂、崩壊するようなことはないだろうが、一度惑星上に降下したら重力圏から離脱できるのだろうか？

『できないこともありませんが、リスクが高いですね。降下艇で降ろすことになるかと』

なのでタマの皆さんには大人しくして頂く必要があるんですね、ということらしい。

その後、研究室に展開されていた思念波妨害シールドが解除され、三角錐氏が軌道上のレスタリアスにいる研究室のタマを掌握してタマ達が沈静化。沈静化したタマをセレナ大佐麾下の海兵達が降下艇（ドロップポッド）へと積み込み、惑星降下。

「シュール」

黒いタマが一糸乱れぬ動きでゴロゴロと転がってくる様はそう評さざるを得ない。というか、足を展開してカサカサ歩いてくるんじゃないんだな。あれが彼らの省エネモードな移動方法なのだろうか。

「これで全部か？」

【否定する。残存個体数はピーク時の二割程度】

「そんなに持ち出されてんのか……」

全部が全部持ち出されたわけでなく、何らかの事故で行動不能になったりした個体もあるのかもしれんが、それでも二割ね。

【質問】

「はいなんでござんしょ」

【個体群が研究室で発見した物質について問いたい】

タマ達が研究室で劇的な反応を見せた物質となると、精霊銀だろうなぁ。というか、当然のようにタマが見聞きした情報を一瞬で共有するのね。

「アレは精霊銀っていう特殊な金属でな。ここからずっと遠くに離れたとある惑星で珍重されているものだ。なんて言ったかな……そう、精神増幅素材とか呼ばれていたかな。サイオニックパワーに反応して、増幅する効果があるそうだ」
【それぞ我々が探し求めていたもの！】

三角錐から新たミニ三角錐が分離して叫ぶかの如き強烈な思念波を放つ。急に元気になるじゃん。

「どうどう、落ち着いてくれ。俺は大丈夫だが、また他の連中が昏倒しかねん」
【謝罪する。なれど、その物質は我々が長年探し求めていたものである】
「なるほどねぇ……この星では見つからなかったのか」
【この惑星で目覚めた我々はそれを探し求め、幾星霜もの年月を費やしてきた。資源の獲得は我々の悲願である】
「何に使うんだ？　食べるとか？」
【部分的に肯定する。我々はその素材を取り込む事によって我々を増やすことが出来る】

つまり、繁殖――というか自己増殖？　に必要な物質ってことか。増えてどうする気なのだろうか？

【我々にも自己保存の本能は存在する。生存のためにも特定物質の確保は必須である】
「それもそうか。様々な要因で自分達が損耗することは避けられないだろうし、増えることができなければそのうち先細りになるものな」
【肯定する】

「実際にどのような条件になるかはわからないけど、帝国はまぁ、自分達に利する存在たればそれなりに公正な取引をしてくれるんじゃないかね。目下の問題としては、俺以外にはお前さんの念話に耐えられないことだろうな。相手を昏倒させない適度な強度での念話ができるように訓練するしかないと思うぞ」

【肯定する。しかし、その実現には実験と検証が不可欠である】

「そりゃご尤も。実践するしか道はないわな」

というわけで、不屈の海兵達の出番である。この後、数十人の昏倒者を出しつつもなんとか三角錐氏は適切な念話強度の調整に成功し、晴れて俺も交渉役をお役御免となったのであった。

いや、ニンジャアーマーが活躍する出番がなくて本当に良かったわ。いつもこんな風に平和に終わってくれると助かるんだけどな。

#369　嘆きと強襲（前書き）

あ゛づ゛い゛ぃ゛！！！！！！―（：3」∠）―（半融解

#３６９　嘆きと強襲

「どうして……どうして……？」
『泣き言を言わないで下さい』

三角錐氏専属の翻訳者という重責から解放されてから凡そ三十分後。俺はクリシュナのカーゴスペースで世を儚んでいた。俺の隣には騎士のようなパワーアーマーを装備したままのセレナ大佐。そしてカーゴスペースを埋め尽くしているパワーアーマー装備の帝国海兵達。ミッチミチである。乗車率１００％である。通勤ラッシュか何かかな？　ある意味ではその通りなんだよな。

『足が早くて兵員を輸送できる船となると貴方のクリシュナが最適だったんです』
「もう軌道からのレーザー爆撃で潰しちゃえば良いじゃん。どうせあいつらには少々のレーザーなんて効かないだろ」
『それで連中のアジトが倒壊して彼らが押し潰されたらダメでしょう。往生際が悪いですよ』
「クソがよ」

俺達は今、クリシュナに乗ってリッシュⅢの惑星上に存在する宙賊どもの拠点へと急行していた。
　僚機は対宙賊独立艦隊の中でも一番足の早い艦載航宙戦闘機達である。カーゴスペースなんぞ無きに等しいので兵員は運べない。

『間もなく到着するわ。対空火器やタレットの制圧後に地上に降ろすわよ』
『了解。安全運転でお願いします』

『前向きに善処するわ』

嘆く俺をよそにエルマとセレナ大佐がごく穏便かつ物騒なやり取りをしている。どうしてこうなった。

☆★☆

【相互の意思疎通が可能になったところで改めて要請する。我々の即時解放を要求する】

多くの犠牲――別に死んではいないが――の末に三角錐氏とのコミュニケーションが確立するなり、三角錐氏がそんなことを言い始めた。はて？

「俺達が確保してた個体はアレで全部だよな？」

『その筈ですが』

【惑星上に諸君らが建造したと思しき構造物が存在する。そこに我々が拘禁されている】

『惑星上に？　我々が構築した構造物はここと３ｋｍ離れた場所にある指揮所だけですが、それ以外にも構造物があるのですか？』

【肯定する】

ここリッシュ星系はエッジワールドの外。所謂未探査領域である。そんな場所、それも惑星上に拠点を構えるような手合いなんてのは普通のステーションには出入りできないような後ろ暗い連中だけである。

つまり、極めて高い確率で宙賊だ。そういや奴らの宇宙基地にもタマが保管されてたな。

『場所は分かりますか？　方角は？　距離は？』

多少苦労しつつもセレナ大佐が三角錐氏から件の『構造物』がある場所を聞き出す。ほう、ここからちょっと離れてるな。まぁ、遠すぎるということもない。航宙艦なら然程時間がかからない距離だ。

【疑義がある】
「なんだ？」
【何故諸君らが把握していない構造物が存在するのか？】

三角錐氏の疑問に俺とセレナ大佐は揃って首を傾げることになった。何故ってそりゃ宙賊どものやることなんざ俺達が知っているわけもない。寧ろどうして把握していないとおかしいみたいな言い方をされるのだろうか？

『貴方達と違い、我々は集合意識体ではないからです。貴方達と我々が『違う』のと同じように、我々の中にも我々と貴方達と同じように『違う』連中がいるというわけですね』
【……つまり、諸君らは同胞同士で意思統一ができていないということか？　争う可能性すらあると？】
『我々ヒトの歴史を語る上で同胞同士での争いというものは不可分の存在です』

三角錐氏が沈黙する。いや、閉口しているのか。なんとなくだが、苦々しげというかネガティブな感情が伝わってくる気がする。

「こんな野蛮な連中だとは思わなかった、ってところか？」
【……回答を差し控える】
「安心しろ、帝国はまぁ、穏当というか付き合う相手としては悪くない相手だ」

少なくとも端から全部叩いて踏みつけて「服従しろ！」みたいなことをやらないってだけでも評価に値すると思うよ。セレナ大佐の言動や行動を鑑みるに、未開の原始文明人や未知の異星生命体に対しても丁寧な対応を心がけていることが窺えるし。

『スカウトを飛ばしなさい。降下のための兵力は……仕方がありません。キャプテン・ヒロ』

「何かな？」

『貴方のところのクリシュナはそこそこカーゴスペースに余裕がありましたね？』

「あ？　まぁ、そうだな。今はブラックロータースがあるからほぼ空荷だが……クリシュナで制圧のための戦力を運ぶつもりか？」

『その通りです。できるでしょう？』

「できるけどさぁ……それ、俺もついてくことになるよな？」

『……』

セレナ大佐は俺に顔を向けたまま沈黙した。うん、見えるわ。騎士っぽいパワーアーマー越しに見えるわ。すっごい笑顔のセレナ大佐の顔が透けて見える気がするわ。クソがよ。

☆★☆

『敵タレット沈黙』

『造作もなかったわね。降ろすわよ』

リッシュⅢの地表に構築された謎の構造体――まぁ宙賊の隠れ基地だったわけだが――の対空砲やタレットの類を対宙賊独立艦隊の艦載航宙戦闘機と一緒になって全滅させ、エルマがクリシュナを地表へと降下させていく。

ヘボい威力のレーザー砲やマルチキャノンのタレットを一方的に

叩き潰すだけの簡単な戦いだったな。あれじゃあご同業の宙賊相手ならともかく、帝国航宙軍や俺のクリシュナには手も足も出ない。想定してるシールド強度が違いすぎるんだよ。

「降下したらあとは高みの見物で良いんだよな？」
『そんなわけないでしょう？　切り込みますよ』
「待て待て、戦闘ボットが居るだろ？」

そう言いながら愛用の剣の柄に触れるセレナ大佐に慌てて意見具申をするが、彼女は肩を竦めてみせた。ああ、パワーアーマーなのに柔軟な動きですねぇ。流石はオーダーメイド品。

『残念ながらあちらに全部降ろしたので』
「……予備戦力を残すのは基本中の基本では？」
『相手の戦力がわからない状況では戦力の逐次投入になりかねませんし、エアカバーもあったので全てを投入したんですよ。こうなるとは予想できませんでしたから。ですが、所詮は宙賊の基地です。我々だけで十分でしょう？』

フラグかな？　まぁ確かに宙賊の白兵戦能力なんざ高が知れてるが、用心に用心を重ねて悪いことはない。

「メイ、こちらの座標を確認できるか？」
『はい、ご主人様』

パワーアーマーの通信機能を介してメイに連絡をすると、すぐに返事が返ってきた。メイのことだから、俺の様子を完全に追ってくれていたのだろう。

「宙賊の構造物は確認できるな？　うちの戦闘ボットを降ろしてく

れ。制圧戦だ」
『承知致しました。指揮はこちらで？』
「任せる。タマは壊すなよ」
『アイアイサー。お任せ下さい。百八十秒でそちらにお届けします』

メイとの通信が切れる。さて、不本意ながら頑張るかとふと視線をセレナ大佐に向けると、彼女はなぜかじっとこちらに視線を向けているようだった。ヘルメット越しなので顔は見えないが、こちらを注視しているのは気配でわかる。

「なんだよ？」
『別に。なんでもないです』

そう言ってセレナ大佐が視線を逸らす。なんだよ？　パワーアーマーのヘルメット越しだから表情も見えないしマジでなんなのかわからんぞ。なんとなく不満げなのだけはわかるが。いや、羨ましいのか？

「メイドロイドは良いぞ。おいやめろ馬鹿。装甲が傷つくだろ」

何故かガキンガキンと腹パンされた。どうしてだよ。

☆★☆

大気圏突入時に断熱圧縮によって発生する超高熱。それによって発生する火の尾を引きながらうちの軍用戦闘ボット達が降下して……おい、あのコースは直撃では？
ズドドドドッ！　と連続で着弾音が聞こえてくる。戦闘ボットを載せた降下ポッドが岩石に偽装した構造体の外殻をぶち抜いてその内部へと突入したのだ。

構造体のど真ん中ではなく、入口辺りに着弾したのは計算尽くなのだろうか？　あの場所にタマがあったりしたら大事だぞ。

「メイ、あれは無事なのか？　というか、回収は可能なのか？」
『無事です。回収は降下ポッドを別途向かわせているので、そちらで行います。今回使ったのは地表施設襲撃用の強襲降下ポッドです。イーグルダイナミクスから提供されていた試供品ですね』
『場所取って邪魔やってん。丁度良かったわ』

会話にティーナが割り込んでくる。ああ、そう。まぁ運用システムごとまとめて買ったから、そういう余録がついていてもおかしくはないのか。俺は知らなかったが。ティーナ達に丸投げしすぎたかな。

「他にビックリドッキリメカは無いだろうな？」
『運用システムごと買うたから一通りあるで？』
「今度内容をしっかり教えてくれ……」

丸投げしすぎたな。まぁ困るものでもないけど、いきなりでびっくりさせられるのは御免だ。

「敵味方識別は終えてるんで俺達も突入しましょうか、大佐殿」
『ええ、はい、そうですね。しかし貴方が関わると万事が万事派手になるのは何故でしょうね？』
「それは俺も知りたい」

故意ではないんだ。故意では。本当に。

#370　任務完了（前書き）

暑くて捗らなかった（半融解

一区切りということで原稿作業のため、しばらくお休みします！

許してね！ ―（∵3」∠）―

#370　任務完了

「思うんですがね」
『なんですか？』
「この指揮官先頭みたいなクソ文化どうにかならないんです？」

血の海となっている宙賊基地司令室の中心で至極真っ当な意見具申をする。
辺りに転がるのは宙賊『だった』ものの残骸だ。生きたままの確保も出来なくはなかったと思うのだが、セレナ大佐は即断即決で捕虜は取らないと明言した。なので、ご覧の有様である。

『なりませんね。これが一番早いですし』

そう言ってセレナ大佐が血振りをしてから自分の剣を鞘に納める。グラッカン帝国の貴族が振るう剣というのは鋼で作られた日本刀と違って錆びないし、剣の鞘にはナノマシン技術を使った浄化・整備機構がついているからこれで事足りてしまうんだよな。お手入れ。まぁナノマシンが分解した血やらなにやらを定期的に鞘から取り出して捨てなきゃならんのだが。
なんというか、基地の攻略戦は実に簡単なものであった。パワーアーマーを装着した帝国海兵の絶大な火力による制圧射撃。そして俺とセレナ大佐が敵に吶喊し、瞬く間に全てを斬って捨てる。その繰り返しである。苦戦のくの字も無い。
強化手術をしているわけでも高度な義体化をしているわけでもなく、パワーアーマーすら装着していない宙賊が完全武装の精強な帝国海兵と、オーダーメイドのパワーアーマーを装備した貴族将兵に勝てる道理がないのである。ついでに俺みたいなわけのわからんの

もいるし。

『ご主人様、基地内の制圧を完了致しました』

「タマは？」

『北ブロックの倉庫らしき区画に保管されています。几帳面な者でも居たのか、綺麗に並べてあります』

「几帳面な宙賊ねぇ。まぁそんなのもいるか。とりあえずご苦労さん。こっちはデータの引っこ抜きに入る。戦闘ボットの回収準備を進めてくれ」

『アイアイサー』

ブラックロータスが軌道上から上空まで降下してきて、それから通常の降下ポッドを使って戦闘ボットを回収するらしい。

「撤収はどうします？」

『タマを運ぶために艦隊の駆逐艦と降下ポッドがすでにこちらに向かってきていますので、そちらで回収します』

「なるほど。じゃあ俺はここの処理が終わり次第お役御免ってことで船に戻りますけど」

『……私の心の中の無垢な少女はそんなことが許されて良いのか？　と叫んでいますが、冷静な帝国軍人の大佐はそれを止める合理的な理由が見いだせないので許可します』

「それってつまり個人的に根に持つってことじゃねぇか！　面倒くせぇな！」

そういうとこだぞ、大佐。まぁ、これはこれで甘えているのかもしれんが。こんなかつて人間だったものがツキジめいて転がっている血の海でそんな甘え方をされても反応に困るわ。

☆★☆

宙賊基地の制圧を終えた俺はクリシュナに乗ってブラックロータスまで戻り、整備士姉妹にニンジャアーマーの防疫処置などを施してもらった上でやっと一息つくことが出来た。

「どーん」

休憩スペースのソファに座ったところで早速ティーナが俺の膝の上に上半身を投げ出してくる。整備士姉妹も一緒にシャワーを浴びてきたので、三人とも湯上がりなのだ。

「構って欲しいのか？　オラオラ」

「にょあー」

ひっくり返って顔を見上げてきたので、両手の平でティーナの頬を左右から挟んでやる。あっちょんぶりけ。ふふふ、罪なもちもちほっぺただな。いつまでも触っていられそうだぜ。

「んっ」

「なんだこの可愛い生き物」

ティーナのほっぺたを好き放題していたら、ウィスカが近くに寄ってきて俺の手の甲にほっぺたを押し付けてきた。わんこか何かかな？　よーしよしよし。

「んにゅにゅにゅ」

ミミとエルマ、それとクギは上空での近接航空支援を続けるために俺をブラックロータスに降ろしたあと、すぐに再出撃していった。なので、今ブラックロータスに乗っているのは俺とティーナとウィ

スカ、それにメイだけである。メイはコックピットで操艦に専念しているのでここにはいない。

「戦闘ボットの整備は良いのか？」

「天下のイーグルダイナミクス製やから、うちらがすること殆どないんよね」

「お兄さんが運用システムをまるごと導入したので、メンテナンスもほぼ自動化されているんですよ。もちろん、全部終わった後にチェックは必要なんですけど」

「なるほど。そういえば他にもビックリドッキリなメカが隠してあったりしないだろうな？　あの強襲ポッドには驚いたぞ」

「兄さん、買う時にちゃんと資料見たやん」

「斜め読みしかしてないし、じゃあそれでって感じで決めたから……」

ワタシ、ムズカシイコトワカリマセーン。スペックと汎用性の高さだけで決めたからな、最終的には。後で整備士姉妹に色々教えてもらうとするか。

「安い買い物じゃないのに……お兄さんって妙に慎重なところと妙にこう、ガバガバなところがありますよね」

「大金持ってると気がついたらカツカツになってるタイプやね。うちらみたいなのが財布の紐をギュッと締めたらんと」

「ティーナはともかくウィスカはダメじゃね？　アーティファクトショップでなんかよくわからんオブジェ買おうとしてたじゃん」

「うっ……あ、あれはちょっとした気の迷いですから」

などと話していると、エルマからブラックロータスに戻るというメッセージが俺の小型情報端末に入ってきた。どうやら三角錐氏との接触は平和裏に終わったということで警戒態勢が解除されること

になったらしい。

「エルマ達も戻ってくるとさ」
「それじゃあ私達の独占タイムは終わりですね」
「短い天下やったなー。まぁ姉さん達が帰ってくるまでは存分に味わってとこか」

俺の太腿にほっぺたをスリスリしてくるティーナの頭を撫でる。こっちは猫か何かかな？　よーしよしよしよし。
というわけで、特大の厄介事になるかと思われたエッジワールドでの未知との接触は思ったよりも平和裏、かつスムーズに終えることが出来たのであった。
ここから大逆転でピンチな展開になることはまずありえまい。ガハハ。勝ったな。

#371　医療ポッドでの目覚め（前書き）

おまたせしました。更新再開だ！

今まで通り基本隔日で、ただし月木はお休みという感じで行きます。つまり火曜→金曜→日曜→水曜→土曜→火曜というペースで。よろしくネ！ ―（：3」∠）―

#371　医療ポッドでの目覚め

機械の微かな駆動音で目が覚めた。若干の肌寒さと、地肌に直接触れる空気の僅かな冷たさ。

徐々に覚醒してきた脳が服を着ていないことを認識して心細さという感情を発露させ、覚醒のレベルが一気に上がる。俺は裸の方が落ち着くような人間ではないのだ。

「起きたね。今、ケースを開けるよ」

落ち着いた、聞き心地の良い声がそう告げてくる。ケース？　俺は……ああ、そうか。

納得している間に空気の抜けるような音が鳴り、開放感と一緒に少し暖かい空気がケース内――簡易医療ポッドの中に流れ込んでくる。

「疲れてたのかね？　寝ちまったよ」

「そうだね、若干疲労というかストレスレベルが高いみたいだ。気にするほどのものではないと思うけど、可能ならば今日は心安らかに休憩でも取ると良いんじゃないかな」

そう言って彼女――ショーコ先生はタブレット型端末を手にニンマリと笑みを浮かべて見せた。

☆★☆

いつもの傭兵服を着た俺は改めてブラックロータスの医務室の中を見回した。少し前までは簡易医療ポッドと各種の薬が入った棚し

か無い殺風景な部屋だったのだが、今は部屋の中にホロ端末としての機能があるデスクや人間工学に基づいてデザインされた座り心地の良さそうな椅子、何かよくわからない機械、観葉植物やフレグランスマシーンやショーコ先生の私物などが配置されており、生活感というものが生じていた。

「女性の私室をそんなにまじまじと見るのはどうかと思うよ？」
「ショーコ先生が私物化してるだけで、この部屋はブラックロータスの公共設備だからな？　ショーコ先生の私室は隣の倉庫を空けただろ」
「殆どここにいるから、あっちは寝るだけの部屋なんだよねぇ。こっちにベッドも持ち込めば省スペースになるんじゃないかな？」
「私室化を進めようとするんじゃない。大型ドックがあるコロニーに行ったらどうせ改築するんだから」
「そうは言うけど、なんだかこういう医療機器とか研究設備がある部屋にいないと落ち着かないんだよねぇ」
「難儀な職業病だな……」

思わず苦笑いを浮かべながらヘラヘラと笑っているショーコ先生に向かい合うように椅子に座る。こっちの椅子は来客用というか看病用の簡易な作りのスツールのようなものである。こうしてショーコ先生と向かい合うと、なんだか地球の病院を思い出すなぁ。

「診断の結果だけど、まぁ問題はないね。さっき言ったように若干ストレスレベルが高いようだけど、これも日常生活での範囲内の話だしね。身体の方は至って健康。内臓機能から何から花丸をつけても良いくらいだ。適度な運動と適切な食事に勝る薬ってのは今の時代になってもなかなか無いものだよ」
「そりゃ良かった。他のクルー達は？」
「いくら君がこの船の船長でもプライバシーってものがあるからね、

そうそう漏らすわけにはいかないよ。まぁ、主治医――いや、船医として言えることは皆健康で喫緊の問題は何もないってところだね」
「そいつは重畳。ただ、何か問題がある場合には必ず俺かメイに相談してくれよ。いや、まぁ、メイに相談すれば万事解決するだろうが、俺にも言ってね。蔑ろにされたら拗ねちゃうぞ」
「くふふ……アイアイサー、って言えば良いのかな？」
「それでヨシ！」

☆★☆

エッジワールド――最辺境領域――の更に外。リッシュ星系において未知の知的生命体との接触を概ね平和裏に終えた俺達は諸々の後始末を最低限終えた時点でとっととお暇を頂き、一路アレイン星系へと向かっていた。
エッジワールドやその付近に潜んでいる宙賊どもの拠点をあらかた潰して回り、例のタマの問題も謎の三角錐型ケイ素生命体との交渉によって解決し、帝国は新たな知的生命体の保護と新型装甲材の大きなヒントを得るという偉業を成し遂げた。全て丸く収まって依頼達成というわけだ。
『私はまだここに釘付けになるんですが？』
こめかみの辺りに青筋を浮かべているとても怖い大佐殿の顔が脳裏を過ったが、彼女に最後まで付き合う義理もない。俺達は自由な傭兵なのだ。依頼を達成して報酬を頂いたら自分の目的のためにとっととお暇を頂くのが俺達の流儀である。
「……後が怖くありません？」
「そんなのいちいち気にしてらんないわよ。というか、いちいち気にしてたら絡め取られるわよ」
「そういうものですか」

ショーコ先生による健康診断を終えて休憩スペースの食堂に戻ると、ラフな格好で寛いでいるミミ達が何事かを相談していた。

「お、兄さん。終わったんやね」

「問題なしだってさ。で、何の話をしてたんだ？」

こちらに気づいたティーナに片手を挙げて返事をしつつ、俺も食堂のテーブルに腰掛ける。俺だって空気を読むから女の子同士の話の中には入らないように気をつけているが、これはどうもそういう感じじゃないみたいだな。

「ええと、セレナ大佐の話を少し」

「あー……少し聞こえてたけど、いちいち向こうの都合に完璧に合わせてなんかいられないぞ。というか、そういう動きを見せたらエルマの言う通りそれにつけ込まれる予感しかしねぇ」

「そうね。男社会の帝国航宙軍で大佐にまで登り詰める傑物よ、あの人は。残念な人に思える部分もあるけど、あれで頭の回転が速いし相手を利用する手練手管には長けてるわよ。侯爵令嬢ってのは伊達じゃないわ」

「なるほど……でも、なんだか中途半端なところで抜けてきちゃったような感覚が」

「確かに最初から最後まで見届ける方がスッキリするかもしれないけどな。とはいえ、俺達も傭兵稼業をやっている以上は獲物が枯渇気味の宙域に長居するわけにもいかないし」

「何よりあの辺は補給の心配がなー。いざっちゅう時に資材の調達もままならんのはどうかと思うで」

「最新の技術情報も入ってこないしね」

メカニックとして船全体の整備を担当しているティーナとウィスカが技術者視点でエッジワールドに留まることの難点を挙げる。

「私はまだあまり傭兵生活というものに馴染んでいないので皆さんの方針に従うだけですが……色々な場所を見られたほうが楽しいのではないかとは思いますね」

いつもの巫女服のようなものではなく、シンプルなワンピース姿のクギが頭の上の狐のような耳をピコピコと動かしながらそう言う。確かにエッジワールドには娯楽もクソも無いからな。いや、あるにはあるけど補給母艦ドーントレスにあるその手の施設は最低限って感じだし。それに天井も低くて圧迫感があるんだよ。

「それにアレイン星系に行ってショーコ先生の手続きをしないとな」

「それはそうですね」

ショーコ先生は臨時の研究員として帝国航宙軍に雇われていたわけだが、装甲材の解析やサイオニック系ケイ素生命体である三角錐氏とのコミュニケーションに使うサイオニック関連のテクノロジーを開発した功績をもって早期除隊を申請し、そのまま俺達の船に乗ってアレイン星系へと向かうことになった。目的は正式に俺達の船の船医となるために、現在所属しているイナガワテクノロジーから円満退職することである。

実際のところ、そんな面倒なことをしなくてもこのまま俺達の傭兵稼業に付き合うことは可能ではある。彼女は帝国航宙軍の臨時研究員としての職を早期退職した後行方不明――実際には俺達と傭兵稼業をする――ということになるだけだ。

ただ、それだと彼女は一定期間後に行方不明からの死亡という処理がイナガワテクノロジー側からグラッカン帝国のお役所へと正式に申し届けられる可能性が高く、そうすると彼女は生きているのに帝国臣民としての籍を失ってしまう可能性が高い。

そうなると帝国臣民が受けられる様々な権利を失うことになる上、

エネル口座の凍結や医師としてのライセンスも剥奪というか無効といった事態に至る可能性が高い。医師としてのライセンスを失ってしまうと俺達のような一般人が購入できない高度な薬剤や製薬素材、研究機器その他諸々が手に入らなくなってしまう。それは非常によろしくない。俺達としても、彼女としてもだ。

ということで俺達はアレイン星系へと向かっているわけだ。まぁ間違いなく厄介事が起こるに決まっているが、優秀な船医かつ科学者でもあるショーコ先生という存在はそんな厄介事を許容してでも欲しい人材である。そんな人材はそこらに簡単に転がっていないものなのだ。

「アレイン星系といえばターメーン星系も近いわね」

「ターメーン星系ですか……」

エルマの言葉にミミが微妙な表情をする。彼女にとってターメーン星系は故郷だ。良い思い出も勿論あるだろうが、辛い思い出も多いだろう。

「戻ってみたいような、そうでないような、微妙な気持ちです」

「だよな。まぁ、向こうに行って気が向いたらってことで。ただ、行きたいと思ったら遠慮なく言えよ。我慢は絶対にしないこと。約束だぞ」

「はい、わかりました。ヒロ様、ありがとうございます」

少し曇っていたミミの顔に笑顔が戻る。うん、やっぱりミミはそうやってにこにこしているほうが好きだな。俺は。

「良いってことよ。ミミのためならそれくらいはな。皆も一回故郷に戻ってみたいとかあったら遠慮なく言えよ。経済状況がカツカツってわけでもなし。観光気分であちこちふらふらしながら片手間に

宙賊をしばき倒してるだけでも金は稼げるんだからな」
「普通は宇宙旅行って結構命懸けなんですけどね」
「そこはほら、兄さんやし」
その言い方はなんだか微妙に引っかかるな。俺が世間一般の常識から逸脱しがちなのは認めるけども。まぁ遺憾ながら事実ではあるから否定もできないんだが。

#372　今までとこれから（前書き）

昨日は未明から激痛に悶え苦しんだり病院に行ったり石が見つかったりなかなか鎮痛剤が効かなかったり大変だったよ……！
病欠したので振替更新。ほめていいよ！ ―（：3」∠）― （謎のドヤ顔

#372　今までとこれから

さて。最辺境領域（エッジワールド）からアレイン星系へ向かうとなると、ルートは……まぁいくらでもある。とはいえ、普通に行くと滅茶苦茶に遠いので、俺達はゲートウェイを使うわけだが。

ゲートウェイを使うとなると、ルート選択の余地は殆ど無かった。

「最寄りのゲートウェイからアレイン星系直近のゲートウェイに飛んで、そこからアレイン星系へと行くというわけだねぇ」

「あー……まぁ、そうね」

枕元でタブレット型端末を操作してそう言うショーコ先生に俺は生返事を返す。なんというか、色気も何も無いピロートークだなぁ、などと思いながら。

まぁ、うん。ご覧の通り手を出してしまったのけれども。

「何か言いたげだね？」

眼鏡を外した素顔のショーコ先生が顔を寄せてきてそう言う。美人さんだなぁ。

「誘われるままに手を出しておいてなんだけど、良かったのかなと」

「うん？　良かったよ？　みっともない姿を見られて恥ずかしかったけどね。やっぱり経験の差は如何ともし難いよねぇ」

そう言ってショーコ先生はニンマリと笑みを浮かべて見せる。

「ご馳走様でした……って違うそうじゃない。なんかこう、あるじ

ゃん。段階を踏んでというかね？」

俺がそう言うと、ショーコ先生は少しキョトンとした顔をした後に再び口元を綻ばせて見せた。

「別にお互い甘酸っぱい恋がしたいティーンエイジャーというわけでもなし、良いんじゃないかな？　私は大満足だけど、キャプテンはそうじゃないのかい？」

「勿論俺も大満足だけどな。なんというかこう、恋はともかくとして愛的な意味で若干の心配が？」

「愛、愛ねぇ……？　私はそういうのはよくわからないんだよね。両親もいないし、この世に生まれてこの方、そういう感情に触れた覚えがないから」

「おん？　重い話？」

「人によってはそう捉えられるかもね。私にとっては普通のことで、それについて何か言っても仕方のないことだから気にもしてないけれど。私は私だしね」

ショーコ先生はそう言いながらタブレット型端末を枕元に置き、同じベッドに寝ている俺と向き合うようにころりと体勢を変えた。

「私はね、人造人間なんだ。広義の意味ではね」

「広義の意味？」

「うん。身体の作りそのものは人間の女性と同じだよ。ちゃんと子供だって産める身体だ。ただ、私は硝子と金属で出来た子宮から産み落とされたのさ。今はもう存在しない、とある星間企業の研究施設でね」

そう前置いてショーコ先生は自らの出自を語った。要約すると、彼女はとある星間企業とやらが優秀な研究員を『量産』する目的で

作った子供で、様々な人間の優秀な遺伝子情報を統合して作られたデザイナーベイビーというやつであるらしい。
　ああ、つまりアレだね。種で運命な機動戦士に出てきたアレだ。種がパリーンって割れて凄い能力を発揮する。なるほどなるほど。いや、ショーコ先生は種がパリーンしたりはしないだろうけど。

「最終的に私を製造した企業は違法な生命創造だのなんだのと、まぁ色々とやらかしていてお取り潰しになってね。私は帝国政府に保護された後に色々と検査を受けたりして、イナガワテクノロジーに引き取られたわけさ」
「へー、ショーコ先生もなかなかに波乱万丈な人生を送っているんだな」
「……それだけかい？」
「うん？　うん、ショーコ先生が愛とか恋とかがよくわからないって理由はわかったよ。まぁそういうのは身体で繋がってから徐々に育んでも良いよな、と思い始めたところだ」

　ショーコ先生に言ったら怒られるか呆れられるかしそうだけど、遺伝子レベルで調整された人造人間ってなんかかっこいいよね。そもそも、エルマもそうだけど帝国の貴族なんかはサイバネティクスやバイオニクスで身体強化しているわけだし、そういうのと同じっちゃ同じだよな？　なら別に忌避するような筋合いもない。
　というか、それを言ったらなんだかよくわからない理由でこの世界に迷い込んできた俺のほうがよっぽど気味の悪い存在だろうし。

「この話を聞くと気味悪がる人が多いんだけどねぇ」
「俺は別にそう思わないけど。ショーコ先生的に特に段階を踏まずに俺とこういう関係になっても問題ないって思ってるなら今はそれでいいや。後のことはなるようになるし、するから」

ティーナとウィスカの整備士姉妹やクギに手を出すのには時間がかかったが、ショーコ先生が相手なら特に問題もないだろうと思ったんだよな。彼女はエルマと同じで自立した大人の女性だし。
それを言えばティーナとウィスカもそうだったんだが、二人は見た目がな……今はもう慣れたけど。危険な扉が開いた気がするが、今更気にしても仕方があるまい。

「あ、その顔はわかるよ。他の子の事を考えているね？　いけないんじゃないのかい？　そういうのは」

ショーコ先生が俺の頬を摘んでゆるゆると引っ張ってくる。どこかのエルフだと悶絶するぐらい抓ってくるんだが、こういうところはやっぱり人それぞれ――おっと、いけないいけない。

「仕方のない男だなぁ……もう少し私に夢中にさせてあげようか」
「よし、受けて立つぞ」

今は何も考えずにこの温もりを大事にしよう。うん。

☆★☆

「上手くいった事自体は良いことなんやけど、納得いかんよなぁ？」
「じー……」

翌朝、ショーコ先生と一緒に起きてブラックロータスの休憩スペースへと足を運んだ俺はリトルなギャングに絡まれていた。バチクソに威圧というか不満げな様子を隠しもせずに絡んできているのだが、まぁ本気ではなさそうな感じではある。

「クギも言ったれ」

「ええとぉ……その、此の身は特に文句などは無いのですが」

ティーナに担ぎ出されたクギが珍しく苦笑いを浮かべている。クギは何においても俺が一番。本当に心配になるくらい俺を全肯定してくれるから、こういう風に不満をぶつけるぞ！　と担ぎ出されるのはあまり性に合わないのだろうな。

「二人は種族差というか見た目と立場のギャップが原因で、クギに関しては危ういと思ったからだから堪忍してくれ」

「危うい？」

「あー……今でも若干思ってるんだが、クギはもう俺に絶対服従というか、全肯定というか、俺が黒いものを白といえば白ってことにする雰囲気があるというか……な？」

「ん、んんー……まぁ、それは若干わからんでもないけど、別にクギだって盲目的に兄さんを肯定しとるわけやないと思うで？」

ティーナがそう言ってクギに視線を向けると、クギは大きく頷いてみせた。

「そうですよ、我が君。無論、お役目のこともありました。ですが、今はそれだけでなく心から我が君の事をお慕いしています」

「正面からそう言われると照れるが……」

しかし心から慕われるほどクギとの絆はそう深まっていないように俺からは思えるのだが……ん？　もしかして。

「テレパスか？」

俺の問いにクギは答えずにただにっこりと微笑んでみせた。なるほど、クギは他人の頭の中身を覗ける訳では無いが、無意識に発さ

れている思念波を読み取ることには長けている。クギによって能力を覚醒させられる前の俺は力も思念波も垂れ流していたわけだから、クギはそれを読み取っていたわけだ。道理で懐くというか、慣れるのが早いわけだよ。

「それはズルくないか？」
「今はもう大丈夫なので」

などとクギとやり取りをしていると、ウィスカが俺の膝の上にダイブしてきた。しまった、放置しすぎたか。

「……にゃーん」
「ぶふっ！」

俺の膝の上を占領したウィスカがごろりと膝の上に体勢を変え、猫の鳴き真似をしながら俺の顔を見上げてきた。なんだこの可愛い生き物は。

「うぃ、ウィー……なんちゅうあざといことを……っ！　恐ろしい子っ！」
「自分でやってて凄く恥ずかしいよ、これ……」

ティーナに突っ込まれたウィスカが顔を真赤にして両手で覆い隠してしまう。

そんな俺達の様子を見ながらミミとエルマ、それにショーコ先生が食堂からこっちを見ているが、三人で集まって何の話をしていることやら……険悪そうな雰囲気は感じないから、別に何の問題も無さそうではあるが。

「ショーコ先生にあんまり夢中にならんでうちらのこともちゃんと

構うんやで。平等は大事だと思うんよ、うちは」
「ＯＫＯＫ、今晩のお誘いってことだな？」
「ちゃう……！　くは、ないけどぉ……むーっ！」
「ぐほぉ！？　ちょ、パンチはやめろ！　マジで効くから！」

照れ隠しの一撃が重い。まぁ、この調子だと道中でも退屈する暇は無さそうだな。干からびないように気をつけよう。

#373　なんかこんな流れ前にもあったよね（前書き）

ちょっと短いけどリハビリ&病み上がりってことで許してネ！（ω）

#373　なんかこんな流れ前にもあったよね

道行は実に順調だった。

特にトラブルに巻き込まれることもなく最寄りのゲートウェイに到達し、ゲートウェイの通過に関しても待たされることも無くすんなりといった。途中で寄港したコロニーでも傭兵だのチンピラだのご当地のギャングの類だのにからまれることもなく、交易や補給も順調。正に順風満帆というのに相応しい。

「順調だと思うのだけれど、何故君達は日を追う毎に深刻な表情をしているのかな？」

ついに耐えきれなくなったのか、食事の席でショーコ先生がそう聞いてきた。お気づきになられましたか。我々の変化に。

「センセ、兄さんはな、そりゃあもうこれでもかっちゅうくらいのトラブル体質やねん」

苦笑いを浮かべたティーナがすぐに事情の説明を始める。うん、任せよう。

「それは私も知っているつもりだけれど……ああ、つまりこれは嵐の前の静けさというやつなのかい？」

「流石にセンセは察しがええなぁ。前にこういう感じやったんは……ああ、リーフィル星系の時やったね」

「やめてくれ、思い出したくもない」

あの時はあの時で酷かったからな。星系に入るなり宙賊艦をキャ

ッチするなんてのはよくあることだし、それでエルフ達に歓待されたのもまぁ悪くなかった。でも、その後は航空客車なんて妙ちくりんなものに乗った末に未開のジャングルに墜落したり、滞在している惑星が宙賊の降下襲撃に曝されたり、セレナ大佐にキャッチされて大規模宙賊団の討伐に担ぎ出されたり、その大規模宙賊団の残党というか、八割九割方頭目か何かかと思われるやべぇ女に目をつけられたりと実に大変な目に遭ったのだ。

特に大規模宙賊団に目をつけられたのはヤバかったな。対象が俺一人だってんならなんとでもするが、クルー達が狙われたらと思うと気が気じゃなかった。戦力不足を感じたのもあの時だったな。

「ピリピリしても仕方ないんだけどね……なるようにしかならないし」

「対策もしようがないですからね。何が起こるかわからないので」

エルマが肩を竦め、ミミが苦笑する。

そうなんだよな。何が起こるか予想がつかないから、対策のしようがない。ただ、こうして順風満帆な期間が長ければ長いほどトラブルがデカいだろうということが予想されるだけだ。

「クギ、なんかこう、俺の力で良い感じにできないものかね？　運命操作なんて御大層な能力を使うなら今しかないんじゃないかと思うんだが」

「我が君、そうすることができるのが最上なのでしょうが、難しいかと」

「そのこころは？」

「つまり、我が君が意識的に運命の流れを認識できるかどうかが問題なのです。今、我が君は無意識の領域下で運命を操る能力を行使していますので……」

「運命の流れとやらを操る力がキャプテンにあっても、キャプテン

がそれを認識できないから力の使いようがないというわけだねぇ。うーん、興味深い。運命を流れを操る能力っていうのは科学的にはどういう原理なのだろうねぇ？」

ショーコ先生は先日の一件でサイオニックテクノロジーに興味を持ったのか、こういった話題に敏感である。彼女にとっては『よくわからないもの』ほど興味をそそられるものなのだろう。根っからの研究者ってわけだ。

「此の身もあまり運命操作能力については詳しくはないのです。過去に能力を発現させたと思われる人物は片手で数えられる程度にしか存在しないので、研究が全く進んでいなくて……口伝で多少伝わっている程度なのです」

「それは良いね。研究のしがいがあるってものだ。後でその口伝とやらについて聞かせてほしいな」

「はい、それくらいならいくらでも」

このような感じでショーコ先生は他のクルー達ともうまく関係を築けている。ミミとエルマとは傭兵としての生活の話を、ティーナとウィスカとは技術的な話を、クギとはサイオニックテクノロジーに関する話を、メイとは……メイとはどんな話をしているのだろうか？　そういえば二人の絡みはあまり見ていない気がするな。

「どうしようもないんだから気にしても仕方がないのはわかっているんだが、それでも気になるんだよなぁ……」

「目的地に着くまで本当に何も無いっていうのがいかにもって感じで本当に嫌な感じよね」

「物資の備蓄と装備の整備を完璧にしておくくらいしかないですね」

俺とエルマ、ミミという最古参の三人で揃って溜息を吐く。三人

揃ってこんな調子だから艦内の雰囲気が若干暗いというか、重苦しくなってショーコ先生を心配させてしまったのだろうが、今までのことを考えると溜息が無限に出てくるんだよなぁ。でもまぁ、そうしていても何も良いことがないのも確かか。

「よし、気持ちを切り替えよう。警戒はするが、溜息ばかりついてても仕方がないし」

「簡単に言うわねぇ……何か妙案でもあるわけ？」

「アレインテルティウスコロニーには高度な食料プラント運営会社が沢山あったろ。着いたら酒だの飲み物だの食い物だのを買い漁ってパーティーしようぜ、パーティー。ショーコ先生もうちの正式なクルーになる予定だし、歓迎会ってことでさ」

エルマの目の色が変わった。ついでにティーナとウィスカの目の色も変わった。ああ、ミミの目が爛々と輝いて……まぁいいけれども。

「どの程度買い漁るの？　予算は？　それはヒロの財布から出るのよね？」

「酒」

「おさけ」

「ヒロ様！　私、アレインテルティウスコロニーで見かけたコーベ・ビーフっていうお肉を食べてみたいです！」

「こわいこわいこわい、圧が強い」

飲兵衛と食いしん坊が押し寄せてくる。別に君ら酒にも食い物にも困らせてない筈だよね？　なんでそんなに必死なんだよ！

「「「他人の金で飲むタダ酒ほど美味いものはないから！」」」

「アッハイ」

これ以上無い笑顔で言われるともう何も言う気が起きないよね。まぁいくらかかっても数万エネルだろうし、それで士気が上がるなら安い……いや、一般的には安くはないけど傭兵的には安いもんだからヨシとしよう。うん。

#374　再訪、アレインテルティウスコロニー（前書き）

まだ18時台だからセーフ！　ヨシ！！！　―（：3」∠）―

#374　再訪、アレインテルティウスコロニー

アレイン星系の生活圏は二つの居住可能惑星と三つの研究ステーションと一つの交易ステーションで構成されている。
居住可能惑星のうち一つは一年中温暖で気候が良いように調整されているそうで、農業が盛ん。ハイテクを用いた効率的な農業が行われており、主に高級食材を中心に生産されているらしい。
もう一つは強烈な嵐などが頻発するかなり過酷な自然環境であるそうだが、なんでもある種の科学実験に必要な特殊な環境でもあるらしく、研究事業が盛んなのだとか。まぁ、帝国の技術で作られた構造物なら多少の過酷な環境などものともしないだろうし、シールド技術だってあるのだから居住そのものには問題はないのだろう。
え？　コロニー？　研究コロニーは研究バカしか集まっていないコロニーでまともな娯楽施設すらないらしいよ。エルマ曰くだけど。

「いやぁ、なんだか懐かしいねぇ」

交易コロニーであるアレインテルティウスコロニーに降り立ったショーコ先生が嬉しそうな様子でそう言いながら港湾区画の光景を見回す。ハンガーベイを含む港湾区画のある第一層は常に夜のような暗さの空間だ。何の理由があってこんな風にしているのかは全くわからんが。
ということで元住民に聞いてみた。

「ああ、一層がいつも夜中みたいに真っ暗なのは、明るい場所が苦手な種族もいるからだね。人間にも所謂夜型の人っているだろう？
そういう人種や人間が快適に過ごすためにこうなっているのさ。
口さがない連中はモグラだとか陰キャだとか言いたい放題言ってる

けど、思慮深い人が多いよ。気性も穏やかな人が多いしね」
「なるほど、色々なニーズに対応しようとしているわけだ」
「ほかじゃあまり見ませんよね」
「研究を主な商材にしているアレイン星系ならではの政策なのかもね」

などと話をしながら集団でわちゃわちゃと歩いていく。今日は珍しくメイも含めて全員でのお出かけだ。アレインテルティウスコロニーはセキュリティレベルが高いコロニーだし、既に一度足を運んだことがあるので勝手も知っている。まぁ、前に来た時には化け物が大暴れするとんでもない事件が起きたりもしたが、あんな事件はそうそう起こるものでもない。

「流石にハイテク星系と言うだけはあるよなぁ」
「ちょっと天井が高すぎるのが落ち着かないけどね」

テンションの高いティーナに対し、ウィスカは何故だかちょっと不安げにアレインテルティウスコロニーの高い天井を見上げている。天上が高いと落ち着かないってなかなか聞かないな……閉所恐怖症は聞くけども。広場恐怖症とかいうのもあるんだっけ？　それともちょっと違いそうだけどな、ウィスカのあれは。ドワーフは生来の感覚として天井の高い空間が苦手なのかもしれん。

「ブラックロータスの内部構造改築、研究機材や本格的な医療設備の導入、パーティーの準備に私を含めた各種備品のメンテナンス。タスクは山積みですね、ご主人様」

メイは久々の大仕事になんだかワクワクしているような雰囲気を醸し出している。ちなみに、彼女を含めた各種備品の中にはイーグルダイナミクス製の戦闘ボット達も含まれている。アレはティーナ

とウィスカがメンテナンスボットとしても使えるように改造してしまったんだが、ちゃんとサポートを受けられるかどうか俺は心配でならない。
　ついでに言うと、船の改築中には流石にブラックロータスで寝泊まりするのは難しいため、ホテルの部屋を取ることになっている。クリシュナとアントリオンに分かれれば全員で寝泊まりすることも可能なのだが、どうせならということで良いホテルに泊まって骨休めをすることにしたのだ。
　ハイテクコロニーであるアレインテルティウスコロニーは大変に裕福なコロニーである。つまり、大変に発展しているわけだ。相応の金を出せば相応の贅沢ができるコロニーでもあるということでもある。
　エッジワールドではあまり羽を伸ばすこともできなかったからな。ドーントレスの船内には最低限の娯楽は用意されてはいたが、ブラックロータスの休憩スペースの方が大いに寛げるということもあってクルー達は殆ど船に閉じこもっていたし。

「買物するならここは良いところよねー」
「お店が沢山ありますからね」
「流石に帝都とは比べるんはアレやけど、ウィンダス星系はちょっと軍事寄りやったからなー。ここのが色々面白いもんがありそうで良さそうやね」
「ヒロ様。例のお店に皆で行きましょう」
「例の……？　ああ、あそこね。それは良い考えだな、ミミ。実にグッドだ」

　ミミが言っているのはゴス系の服を各種取り揃えたあのお店のことだろう。ミミはたまにしか着てくれないんだが、ああいう服を皆に着せるのは……うん、良いな。実に良い。エルマとか滅茶苦茶嫌がりそうだが、是非着てもらいたい。ティーナとウィスカは小さく

て可愛いから似合いそうだし、クギも絶対に似合う。メイとショーコ先生は……似合うのか？　いや、きっと似合う。可能性は無限大だ。

「なんだか嫌な気配を感じるんだけど」
「気のせいじゃないか？　さぁ、まずは皆でホテルにチェックインだ」

とりあえずは二週間ということで部屋を取っている。既に荷物の発送もコロニー内の貨物循環システムを通して送ってあるので、後は皆でチェックインして電子キーを客員の端末に登録してもらうだけだ。場合によっては宿泊期間の延長もしたいと伝えると、あちらは二つ返事で了承してくれた。どうやら俺のネームバリューが効いたらしい。

「いつの間にやら俺の名前もビッグになったもんだよな」
「あんたはあんまり自分の評判について頓着しないわよね……まぁ、評判は悪くないみたいよ？　概ね温厚で一般人とのトラブルは殆ど起こさない善玉プラチナランカーってね」

少し呆れた様子でそう言うエルマに思わず首を傾げる。

「善玉ねぇ？　トラブルを起こさないっつっても結構スペース・ドウェルグ社の連中には土下座もさせたけど」
「理不尽に暴力を振るったり、暴力を背景に恫喝とかはしてないでしょ。酒を飲んで暴れたとか、一般人と殴り合いの喧嘩をしたとか、船に無理矢理女を連れ込んで乱暴したとかそういうこともしてないし」
「いやしねぇよ。なんだそれ怖……世紀末のモヒカン野郎じゃん」
「そこで引く辺りが善玉って呼ばれる由縁だと思うわよ」

一般的な感性を持っているだけで善玉扱いとか他の傭兵はどんだけ荒れてるんだよ。無礼られたら殺す！　みたいな連中が多いんだろうか？　怖……とづまりすとこ。

でも、今まで会った傭兵にそんなのはあまりいなかったように思うんだが。

「あまり酷いと傭兵ギルドから懲罰を受けるからね。それに、今まであんたは宙賊を狩って賞金を得るのがメインで、依頼は軍のものか貴族からの指名依頼くらいしか受けてないでしょ？　そういう依頼にはそこそこ質の良いのが集まるわけよ」

「へー」

未だにこの世界の傭兵の一般常識みたいなものにはあまり詳しくない俺である。こういう時はエルマの知識のありがたさが身にしみるなぁ。

「ちなみに、これくらいミミは把握してるからね」

「なん……だと……？」

エルマに衝撃的事実を告げられて思わず声が出る。

「勉強熱心なミミに比べてあんたときたら……」

「人には向き不向きがあるじゃん……？」

やめろよな、そういう残念なものを見る目を俺に向けるのは。地味に効くから。

「我が君、お部屋を取った後はどのように動くのでしょうか？」

クギの質問に少し考えてから応える。

「そうだなぁ。俺、エルマ、メイの三人が護衛に付く感じで三つのグループに分かれて行動するのが良いんじゃないか。ショーコ先生、イナガワテクノロジーにアポは取ってあるんだっけ？」

「うん、メイくんにも手伝ってもらって既に退職関係の書類は整えてあるし、既に向こうにも事情を伝えてアポイントメントも取ってあるよ」

「それじゃあ俺はショーコ先生と一緒にイナガワテクノロジーに向かうとしよう。うちの船に迎え入れるんだから、キャプテンの俺が同行したほうが良いだろ」

「それでは、此の身は我が君に同行致します」

「それじゃあ私達はパーティーの食材でも手配しに行きましょうか。ミミも一緒に来るわよね？」

「はい！」

「うちもいくわ！」

「それでは私は部屋に残って船の改装の手配をしようかと思います。もしかしたら直接ディーラーに出向くかも知れませんが」

「それじゃあ私もメイさんと一緒に改築の手筈を整えますね」

というわけで、俺とショーコ先生、そしてクギがイナガワテクノロジーに。エルマとミミ、ティーナの三人が食材と酒の調達に。そしてメイとウィスカが船の改装のために動くということになった。

「何かあったら互いに連絡を取り合うってことで」

「「「アイアイサー」」」

イナガワテクノロジーの件が終わったら俺は船の改装組に合流したほうが良さそうだな。予算の決済というか承認もしなきゃならんし。まぁ、何にせよまずはホテルの確認だな。

#375　人たらし（前書き）

お腹すいたァ！―（：3」∠）―

#375　人たらし

「ははぁ、こういう風になってるんだねぇ……」
「貴族用の部屋って大体こんな感じみたいです」

荷物を解いたショーコ先生が興味深げにホテルで取った部屋の内部を歩き回り、その後をウィスカがついて回っている。ウィスカもティーナと同じく優秀なメカニックだが、方向性としては技術屋というか研究者というか発明家というか、実機を弄るよりも新技術の開発や研究に重きを置くタイプだ。生粋の研究者であり科学者でもあるショーコ先生とは馬が合うらしく、最近はショーコ先生にくっついて回っている姿をよく見かける。

「姉としてはどう？」
「ちょっと寂しい。でも良いことやと思うわ」

ソファに座る俺の膝の上に身体を投げ出しながら俺と同じく二人の様子を窺っているティーナが微笑みを浮かべながらそう言う。
ティーナは物怖じしない性格だからクルー達と仲良くなるのも早かったが、ウィスカは若干引っ込み思案というか、人見知りするタイプだ。無論、この船に乗ってから時間も経っているし既に皆とは打ち解けているが、結局は姉であるティーナと一緒に過ごすことが多かった。そうでなければ部屋やハンガーに引きこもって研究や作業をしていた。それが今は足繁くショーコ先生の部屋に通ったり、ああして一緒になって行動したりしている。

「まぁ良いことなんだろうな」
「ウィーがうちから離れた分は兄さんに寂しさを埋めてもらうし」

「はいはい。お相手しますよー」

俺の膝の上で仰向けになって悪戯っぽい笑みを浮かべるティーナの頭を撫でてやる。

「どこも似たような感じなのですね」

「所謂帝国式ってやつね。他国から見ると面白みがないかもしれないわ」

ティーナが俺の膝の上に身体を投げ出しているその反対側に並んで座ったクギとエルマがホテルの豪華で広い部屋を見ながらそう評している。クギが何を言いたいのかというと、それは部屋の内装や間取りに関してだ。クギと出会ったウィンダス星系でも今回と同じく貴族御用達の大部屋――スイートルームというかペントハウスというか、まぁいくつもの部屋が連なっている部屋を取ったのだが、前回の部屋も今回の部屋も細かい差異はあれど間取りも何もかもほぼ同じであった。

「帝国貴族気質とでも言えば良いのかしらね？　格式と伝統を重んじると言えば聞こえは良いけど」

「なるほど。画一的な面は否めないと」

「そうね。実用本位とも言えるけれど。特にコロニーだと貴族用とは言っても使えるスペースに限りがあるしね」

惑星上居住地ならば横にも縦にもスペースを使い放題――とは言わないが、金をかければなんとでもなる。だが、コロニーという閉鎖的かつスペースの限られる空間では貴族といえども贅沢にスペースを使うのは限界がある。それこそ目の飛び出るような大枚を叩けば話は別なのだろうが、精々数日から一週間、長くとも一月は過ごさない旅先の宿でそこまで贅を凝らそうという者は貴族であっても

稀であるということなのだろう。それで言わば『コロニーにおける貴族の宿』といえばこれ、というような統一規格のようなものが出来上がったわけだ。

「ピックアップ完了です！」

一人テーブルに着いてタブレット型端末を弄っていたミミがそう言って席を立つ。

「よーし、んじゃ動くか」

別にバラバラにホテルを出ても良かったのだが、ショーコ先生がイナガワテクノロジーにアポイントメントを取った時間にも余裕があったし、ブラックロータースの改築改装のために動くのも別に急ぐ必要もないということでミミ達調達組が酒やら何やらを調達する店を探し終えてから皆で動こうということになっていたのだ。

「良いお酒と食材を調達してきますね！」

「それは良いがゲテモノは……いや、いい」

ミミが調達してきた見た目がゲテモノにしか見えないサムシング達も結局は食ってみればどれも美味かった。俺を含めた他のクルー達も慣れてきたし、なんとかなるだろう。まだクルーになってから日が浅いクギと、なったばかりのショーコ先生にとっては試練になるかもしれんが。

初めてクギがゲテモノにしか見えない異星食材を前にした時は正直ちょっとおもしろかったんだよな。頭の上の狐耳が後ろ向きにペタンッてなって尻尾がブワッて膨らんでさ。口元がクワッてなって牙というか犬歯が見えて。それを指摘したら耳を押さえて顔を赤くしてたけど。

☆★☆

イナガワテクノロジーの社屋は以前俺とミミ、エルマの三人が訪れ、ショーコ先生と出会ったあの病院とは別の建物だった。まぁほど近い場所ではあったけれども。

「イナガワテクノロジーって主にどんなものを取り扱っているんだ？」

イナガワテクノロジーの社屋が存在する区画へと移動するべく、コロニー内移動システムの車両の揺られる中、ショーコ先生に聞いてみた。

「うん？　そうだね、基本的には最先端医療機器やバイオテクノロジー全般ってところかな。ナノマシン技術も取り扱ってるよ。所謂バイオニクス系企業ってやつだね」

「ばいおにくすけいきぎょう、ですか？」

それはなんなのでしょうか？　とクギが首を傾げる。俺もよくわからないが、大体は想像がつくな。貴族の身体強化については何度か話を聞いてきたし。

「生物科学を主な研究対象や商材として扱っている企業ということさ。遺伝子操作や薬剤などを使った生体強化だとかね。逆に身体のパーツをより優れた素材で作った義肢やなんかをメイン商材としている企業はサイバネティクス系企業と呼ばれるね。こっちは薬剤や化学製品なんかを副商材として扱っていて、あちらは電子機器や様々なロボットなんかを副商材として扱っている、みたいなイメージで大体合ってるよ。ナノマシンとか医療機器とかふどっちとも言い

難いような商材も勿論あるけどね」
「なるほど、理解できました。そうなると、サイオニックテクノロジーはどちらかと言えばバイオニクス系の分野になるのでしょうか？」
「それは難しい質問だね。でもどちらかと言えばバイオニクス寄りかもね」

クギは意外と学者肌というか、好奇心が強いというか、知識欲が強いというか……前に生い立ちを聞いた限りではかなりの箱入り娘であったようだし、やはり好奇心が強いのかな。外の世界や知識というものに貪欲であるように思う。
そんなことを考えながらショーコ先生と話しているクギの横顔を見ていると、俺の視線に気づいたのかクギが恥ずかしそうな顔をした。

「申し訳ありません、我が君。はしたなく騒いでしまいました」
「いや、謝ることはないよ。うん。好奇心が強くて何でも学ぼうとするクギは偉いなぁと思ってただけだから。気にすることなく心の赴くままにしてくれ」
「はい……」

と言いつつ、クギは顔を赤くして小さくなってしまった。ううむ、いかんな。今度からはもう少しそっと見守ることにしよう。

「くふ、キャプテンもこう言っているんだから気にすることはないよ。私で良ければいくらでも話し相手になるから、いつでも訪ねてきておくれ。船医とは言っても皆健康そうだから、そうそうやることも多くは無さそうだしね。是非一緒に色々なことを学ぼうじゃないか」
「……はい！」

クギの頭の上にある狐のような獣耳がピンと立つ。直後に彼女は俺の顔色を窺ってきたが、俺がウンウンと頷いてやると表情を明るくした。今後も俺に阿ること無く自身のために色々と学んで欲しい。それが回り回って俺を助けてくれるかもしれないからな。

と、考えていると車両が目的の区画周辺に到着したようで、僅かに減速するのが身体で感じられた。いつの間にか俺の身体も加減速に敏感になったもんだ。

「そろそろみたいだ」

「うん？　ああ、本当だ。忘れ物をしないようにね」

「はい！」

いつの間にかウィスカに続いてクギもショーコ先生に懐いたようだ。実はショーコ先生は人たらしの類なのだろうか？　まぁ、船医が皆の信頼を集めて親しまれるのは良いことだな。信用できない人間に自分の身体を預ける気にはならないものだろうし。

何にせよ、まずはショーコ先生が正式にうちのクルーになれるように頑張るとしますかね。

#376　養父（前書き）

みじけぇ！

天気が悪くて捗らなかったからゆるしてゆるして―（：3」∠）―

#376　養父

「……どうしてもかね？」
「どうしてもだねぇ」
「どうしてもか……」

アポイントメントを取ったより少し早くにイナガワテクノロジーに到着した俺達であったが、向こうも早めに容易をしていたようですぐさま面会を行うことになった。
面会場所は応接室――というよりは、会社の重役の執務室のような部屋である。入って正面にホロディスプレイを内蔵していると思われる執務机があり、その前に座り心地の良さそうなソファが一対、ソファの高さに合わせたガラステーブルのようなものが一つ。実際に材質がガラスかどうかはわからんが。
そのテーブルを挟んで俺達は一人の男性と対峙していた。謹厳そうな顔つきの初老の男性である。どことなくだが、クリスの祖父であるダレインワルド伯爵に通ずる雰囲気を感じるようにも思える。事前にショーコ先生から聞いたところによると、彼はショーコ先生の上司にして養父のようなものに当たる存在だという。
その彼が、俺に視線を向けてきた。ジロリ、と。

「よくも誑かしてくれたものだね」
「あまりそういう自覚はないんだが、結果的にそうなったな。だが俺は謝らないぞ」

その視線を正面から受けて立ち、じっとその瞳を見返す。

「君の立場や身分は理解しているとも。だが、そこは謙虚に謝るの

が円滑な人間関係を構築するとは思わないかね？」
「そうかもしれないが、俺はショーコ先生の意思と決断を最大限に尊重する立場だからな。ここで俺が謝ったらその意思と決断に泥を引っ被せることになるだろう。だから俺は謝らない。ただ、こうなった以上は俺は全ての力を振り絞ってショーコ先生を守るし、後悔させないように、失望させないように振る舞うつもりだ。それはこの場で約束する」

俺がそう言い切ると、彼――ディクソンと名乗った初老の男性は暫く俺の顔をジッと見た後に諦めたかのように俯いて溜息を吐いた。

「……いつかショーコくんを嫁として誰かの許へと送り出さなければならない時が来るかもしれないとは思っていたがね。よりによって傭兵が掻っ攫っていくとは思わなかったよ」
「嫁って……あのね、養父さん。ヒロくんとはそういう……そういうのなのかな？」
「俺としてはもう受け入れる気満々というか、責任は取るつもりだぞ」

首を傾げながら聞いてくるショーコ先生に頷いて見せる。
それくらいの甲斐性はあるつもりだ。男の船に女が乗ったら云々とかいう妙な慣習の件もあるわけだし、それを知った上でショーコ先生を受け入れる気だったのだから、今更ショーコ先生は貰っていきます。でも責任は取りませんなんてのは通らないだろう。

「そうか……そうか。うん、そうか。そうだね。なんだか恥ずかしいな」

照れくさそうに顔を赤くするショーコ先生が可愛い。ショーコ先生の中では同じ船で供に銀河を駆ける仲間、程度の認識だったのだ

ろうか？　そうなんだろうな。あまり深く考えていなかったんだろう。

「だからっていきなり亭主面をするつもりはないからな。何事もまずは一歩一歩確実にだ」

「あはは、航宙艦で星から星へとひとっ飛びな傭兵にしてはヒロくんは慎重というか堅実な性質だよねぇ」

そんな俺とショーコ先生のやり取りを見てか、ディクソン氏は今まで引き締めていた表情を少しだけ緩めた。

「ショーコくんにそんな表情をさせる男が現れるとはね……当人の意思も固いようだし、私が何を言っても無駄なのだろう。書類も完璧だから、止めようもないしね」

「ありがとう、養父さん。ところでヒロくん、これで私は第何夫人ということになるのかな？」

「「うん？」」

俺とディクソン氏の疑問の言葉が重なった。

「ミミくんが正妻だろう？　いや、身分的にはエルマくんかな？　どちらにしてもそこの二人ナンバーワンとナンバーツーで、その後はメイくんだよね。ヒロくんは機械知性の彼女も一人の個として扱うだろう？」

「あの、ショーコ先生？」

ショーコ先生の言葉が続けば続くほど表情が抜け落ちていくディクソン氏の顔色を横目に見ながら、ショーコ先生を制ししようとする。

「その後はティーナくんとウィスカくんだよね。そしてクギくんが一番の新参だったと言う話だものね」
「はい、ショーコ様。此の身が一番の新参でした」
俺の横でクギがコクリと頷く。
「ということは私で七人目か。第七夫人ってことになるのかな。お貴族様でも七人もの妻を持つ人はそう多くないだろうにね」
そう言ってショーコ先生があっけらかんと笑う。ディクソン氏もにんまりと笑う。
「義理とは言え娘を嫁に、それも第七夫人として嫁にやる父としては君を一発ぶん殴りでもしたほうが良いのかな。いや、なんだかそうしなければならない気がしてきたね。きっとそうに違いない」
「それはなんとか勘弁して頂きたく」
拳を握りしめてブルブルと震えるディクソン氏に両手を挙げて降参する。確かに成り行き上そうなるのは事実かもしれないけど、俺としては第何夫人とか順位をつけるつもりはないから。皆平等に愛を注ぐから。そういう意味でちゃんと責任を取るから。どうか許して欲しい。

#377　敵意（前書き）

お腹の調子が悪くてお休みしてました―（∴3」∠）―（まだ良くはない

#377　敵意

「存外引き留められなかったな？」

イナガワテクノロジーを出て少し歩いたところでショーコ先生とクギにだけ聞こえるように小声で呟く。

ショーコ先生というか彼女を引き取る俺の女性関係についてディクソン氏からネチネチと嫌味を言われはしたが、残ってくれだとかそういった発言は一切なかった。

「書類も揃っているし、軍に出向する際に私が受け持っていたタスクは全部引き継いでいたからね。そもそも、私の出自が出自だろう？　意外と帝国は私みたいな出自の人間には寛容というか、同情的というか……まぁ、待遇が良くてね。職業選択の自由が保証されているのさ」

「本当に意外だな？」

「つまるところ、下手に抑圧して変に歪まれたら何の得にもならないと考えているんだろうね。これでも設計通りの頭をしているから、脱走の上に潜伏されて変な研究でもされてはたまらないということじゃないかな」

「なるほどねぇ……？　無理矢理従わせる方法なんていくらでもありそうだが」

人間の限界を軽く超える強化手術なんてものが存在する世界だ。脳味噌にチップでもなんでも埋め込んで意のままに他人を操る技術くらいはありそうに思える。

「そりゃね。でも、無理矢理従わせる方法がるならそれを解除する

方法だって、バレないようにそれを回避する方法だってあるってことさ。そして私みたいなのはそういうのを考えるのが得意だからね」
「服従ではなく恭順を促すというわけですか」
「そうだね。まぁ帝国もお気楽極楽ってわけじゃないからしばらくは監視もついていたし、定期的にメンタル調査も義務付けられていたけど」
「メンタル調査？」
「アンケートみたいなものだよ。個室に案内されて精神鑑定みたいなものを受けるわけだね。個室にはそれとわからないように調査機器が設置されてて、考えていることがほぼ正確に筒抜けってわけさ」
「うへぇ」

思想の自由はどこにいったのか。それ、引っかかったらどうなるんですかね？　怖いなぁ。

「そういえば、イナガワテクノロジーの技術情報とかそっち系の機密保持とかに関しては大丈夫なのか？」
「データの入った端末類は全部返却したからね。私の頭の中身まではどうしようもないけれど、そこは機密保持契約があるから」
「頭の中身まで弄るのは流石に無理ってことか」
「できなくはないけどね。ただ、記憶と人格は深く結びついているからねぇ……」
「やだこわい」

つまり記憶を消す、みたいな方向で頭の中身を弄ると人格になんらかの影響が出てしまうというわけか。場合によっては別人みたいになってしまうと。恐ろしいなぁ。

「そういうものなのですね」
「クギのとこではそうじゃないのか？」

「此の身どもの国では記憶の封印処置というものがあると聞いたことがあります」
「へぇ？　サイオニック技術だとそういうこともできるんだね。消去じゃなくて封印か……催眠みたいなものかな？」
「此の身も人伝に聞いたことがあるだけなので詳しくは……捕虜にした他国の人間を追放する際に行われる措置だと」
「なるほどねぇ……」

他国の人間に国内の様子を語られないようにするってことかね？　なんだかんだいってもやっぱり閉鎖的というか排他的な国ではあるんだな、ヴェルザルス神聖帝国は。

「それで、これからはどうしようか？　予定意通りメイくん達に合流するかい？」
「そうしよう。医療設備や研究設備に関してはショーコ先生の意見も――」

重要だし、と言う言葉を口に出さず、俺は立ち止まって辺りに視線を巡らせた。今、何かわからないが急に背中がゾクリとした。首筋もなんだかチリチリとしているような気がする。まるで航宙戦で腕の良い敵にケツを取られた時みたいな焦燥感に駆られる。

「ヒロくん？」
「何かとびきりマズいのに目をつけられた気がする」
「……敵意、ですね。それもかなり強烈な。一瞬でしたが」

クギも俺が感じているものを同じように感じているようで、落ち着き無く頭の上の狐耳を動かしながら辺りを見回している。

「敵意ねぇ？　傭兵稼業なんてのは恨まれるものなんじゃないのか

い？」
「これでも俺は品行方正なんだよ。宙賊とかその同類以外に恨まれるようなことは殆どしていない筈だぞ」
考えられるのは貴族くらいだな。帝都で参加させられた御前試合では騎士だの貴族だのって連中も叩きのめしたから、そっちの線で恨まれている可能性はゼロではない。あとダレインワルド家にちょっかいを出していたなんとかって貴族も俺を恨んでいる可能性がある。
「どうするんだい？」
「こういう時は逃げの一手なんだけどな……まずはメイに合流しよう。生身での戦闘が起こる可能性があるってんならメイと一緒にいるのが次善の策だ」
一番良いのはシールドを張った船の中に避難することなんだが、ブラックロータスはこれから改装作業があるし、クリシュナじゃあ全員を収容するのは無理がある。いや、無理をすればいけなくもないか？　何にせよ最終手段だな、それは。
「ショーコ先生、ミミ達にメッセージを送ってくれ。正体不明の何者かが俺達を狙っている恐れがあるから、買物を切り上げてメイと合流するようにな」
「ん、了解だよ」
ショーコ先生がポケットから自分の小型情報端末を取り出して操作を始めるのを横目で見ながら、いつでも腰の剣やレーザーガンを抜けるように備えておく。いくらなんでも人通りのあるこんな街中で襲撃してくるとは思えないが、絶対にやってこないとも限らないからな。

□■□

男が突然辺りを見回し、白い狐耳の少女――多分ヴェルザルスの民だ――もほぼ同時に辺りを警戒し始めたのを見て思わず舌打ちをする。

「チッ……随分勘が良いじゃないか。厄介だね」

ほんの一瞬殺気が漏れたかもしれないが、それだけであの警戒のしようは尋常ではない。バッチリ身体強化を受けた貴族でもこの距離じゃそうそう気づかないはずだ。

「サイキッカーなのか？　本当に厄介な……」

宇宙広しと言えどもサイオニック能力に目覚めているような連中ってのはそう多くない。エルフみたいに先天的なサイオニック能力者ってのもいなくはないが、この距離で『敵』に気づくような手合いなんてのは宇宙でもほんの一握りの連中だけだ。

「それにしても随分と派手にやってるみたいだね……」

手元のタブレットでヤツの顔と経歴を確認しながら呟く。

小悪党だと思って探し回っていたら、あんな大物だったとはね。さっさと傭兵ギルドを当たれば良かったよ。結構な引きこもり体質なのか、目撃情報が少なかったし。

「初動が遅れたのが痛過ぎたね……」

遠くに足を伸ばしていたのもあるが、ほんの数年であんなことに

なっているとは夢にも思わないさね。場所的には然程安全な場所でもなかったのは確かだけど、かと言ってあまり中央に近い場所は都合が悪いし……それに、関わった連中が軒並み粛清済みで糸を手繰るのにも時間がかかったしね。

『キャプテン、ターゲットアルファが移動を開始』
「監視を続けな。気づかれないようにね。バンデットはサイキッカーかもしれない。監視する時はアンチサイキック装備が要るね」
『……厄介ですね。船から引っ張り出してきます』
「そうしな。とりあえず精神波遮断メットだけで良いよ」

どんな能力を持っているかはわからないが、この距離で殺気に気づくならテレパス系だろうね。なら精神波遮断装備があれば感知もされなくなるし、あっちからの干渉も抑えられる筈さ。

「逃さないよ……落とし前をつけさせてやる」

遥か遠くでこちらを警戒しているバンデット――キャプテン・ヒロを見やりながら呟く。
今、助けてあげるからね。

#378　合流としっぽ（前書き）

中途半端な時間にご飯食べたら超眠い―（：3」∠）―

#378　合流としっぽ

どういうわけか敵意が引いていったので、俺達は急いでメイとウィスカが居るという港湾近くにほど近い場所にあるシップヤードへと向かった。
アレインテルティウスコロニーは船の製造販売に力を入れているコロニーではないが、ハイテク製品を用いた高度な船用のモジュール販売には力を入れている。結果として船の売買も活発になっており、かなりの大きさのシップヤードを有しているのだ。
当然、そういった場所には各種ディーラーも集まるので、メイとウィスカは最初からそちらに向かって条件に合う設備の情報を集めているというわけだな。

「なんだったのでしょうか？」
「マジでわからん。心当たりが全くないとは言えないけど」
「品行方正じゃなかったのかい？」
「品行方正だとも。だからお行儀の悪い連中には恨まれるのさ」

少なくともカタギの連中じゃないのは確かだろう。それが宙賊なのか不良貴族なのかそれとも更に別の第三勢力なのかはわからんが。うーん、ショーコ先生の件は片付いたわけだし、別に設備の入れ替えをするにしてもこのアレインテルティウスコロニーでやることに拘る必要はないんだよな。多少割高になるかもしれんが、ウィンダス星系でも同等以上のものは手に入るだろうし。
まぁ、あっちはあっちで帝都に近いっていう不安要素があるんだが。あんまり帝都に近寄ると親愛なるファッキン皇帝陛下にちょっかいをかけられそうで怖いんだよな。

「とにかく、要注意だな。あの感じだと絶対にどこかで何か仕掛けてくるぞ」
「へぇ？　そこまでわかるものなのかい？」
「なーんか『目』が開いてから他人から向けられる感情にちょっと敏感になってなぁ。ちょっとしたやっかみだのなんだのって程度のものは気にならないんだが、あそこまで強い敵意というか殺意を向けられたのは初めてなんだよ。絶対にぶっ飛ばすという確かな意志を感じたね」
「じゃあ、ヒロくんの勘違いという線もまだあるわけだ。何せ初めてなわけだし」
「それはそうだけど、多分外れてないんじゃねぇかなぁ」

あんな『隙があれば喉笛を掻っ捌いてやる』みたいな敵意が勘違いとは全く思えないんだが。まぁ確かに確定したわけじゃないのは確かだな。何せ敵意を感じただの何だの言っても、所詮はちょっと精度の高い勘でしかないわけだし。

「僭越ですが、油断はなさらないほうがよろしいかと……」
「そうだな。気にしすぎてもいけないだろうけど、油断してとんでもないことになったら大変だ」

と、そんな感じで話している間に港湾区画へと辿り着いた。この辺りはいつも通り夜のように薄暗いが、船のディーラーが集まっている辺りは煌々と明かりが灯されている。まぁ、灯されていると言っても無機質なライトの明かりなんだが。それでも明るいことには違いはない。

「メイ達は……あのディーラーか」

視線を向けた先にあるのはこの辺りに軒を連ねているディーラー

の中でも特に大きなスペースを専有している店舗であった。利用可能な空間が限られているコロニーでは店の大きさとはつまるところ羽振りの良さのバロメーターである。それだけ維持費が高くなるからな。

「この店の評判とか知らない？」

「流石に地元とはいえ関わりのない店の情報は知らないよ……私はどちらかと言えば引きこもり気質だしね」

「なるほど」

それもそうか。俺だって地元の自動車販売ディーラーの評判とか気にかけたことも無かったしな。自動車には乗ってたのに。

「我が君、入ってみましょう」

「あいよ」

意外とクギはこういう初めてのお店に入るのに物怖じしない、というか控えめながらも積極的に入っていく。耳や尻尾の動きを見るに、こういった行為をかなりポジティブに楽しんでいるらしい。さながら自制心のある好奇心の塊といったところか。

「ほう」

「へぇ、なかなかだね」

中に入ってみると正面に人の配置されたカウンターがあり、左手にはガラス越しに見える作業場、右手にはショールームのようなスペースが見えた。カウンターに詰めている男性がこちらに視線を向けてきているので、そちらへと向かうことにする。

「いらっしゃいませ、お客様」

「ああ。メイドロイドとドワーフの女性の二人連れが先に来ていると思うんだが、案内をお願いできるか？　彼女達はうちのクルーでね」
「承りました。ただいま確認致しますので、少々お待ち下さい」
そう言って彼は軽く会釈をしてからすぐにカウンターのホロ端末を操作し始める。どうやらすぐに確認が取れたようで、彼は一つ頷いて俺達に視線を戻した。
「確認が取れました。お連れ様は右手ショールームの左奥、商談室Bにて当社の者と商談中です。ご案内致し――」
「大丈夫だ。商談室Bだな？　迷うような作りじゃないだろ？」
「ええ、それは、はい」
「なら手を煩わせるまでもない。ああ、あと三人ほど同じようにここに来るはずだから、対応を頼む。人間と、エルフと、ドワーフの三人連れで全員女性だ」
「承知致しました」
頭を下げるカウンターの店員さんに手を上げて応えながらショーコ先生とクギを連れてショールームの奥へと向かう。
「お、うちの最新鋭機も置いてるよ」
「ん？　どれどれ……うわでっか、でけぇよ」
ショーコ先生が指さした先に鎮座していたのは医療用ポッドだった。簡易、とつかない本格的なやつである。クリシュナやブラックロータスに設置してある簡易医療ポッドはベッドとそう変わらない大きさなのだが、ショーコ先生が指さした医療ポッドは軽くその三倍以上デカい。いや、横にじゃなくて縦にでかい分には然程スペースを取らないから意外とアリなのか？

「縦横の大きさはそんなに変わらないから、広いスペースに並べる分には見通しがちょっと悪くなるだけで設置感はそう変わらないさ。アレはオススメだよ？」
「でも、お高いんでしょう？」
「それはそうだね。うん」

ショーコ先生が明後日の方向に視線を飛ばす。まぁショーコ先生が必要だって言うなら揃えても良いけどね。高いっつっても限度があるだろうし。
いや、医療機器って滅茶苦茶高いんだっけ？　でもこの世界と地球じゃ物価が違うしな……レプリケーターのお陰で精密機器類の値段が安いんだよな。

「まぁその辺も含めて話そうな。予算はそれなりにあるし。クギも気になる設備とかあったら遠慮なく言うんだぞ」
「はい、我が君」

俺の顔を見上げながら尻尾をふりふりするクギは可愛いなぁ。ショーコ先生、私ももっとこう、可愛い感じに尻尾とかつければ、ってそういうのは……いやアリですね。是非やっていただきたい。どんな顔をして尻尾と耳をつけて俺の前に出てくるのか大変に興味があります。
え？　襲撃の心配してたのに呑気だなって？　流石に人通りの多い街中で仕掛けてくることはないだろうから大丈夫だよ。エルマならその辺も理解して多少遠回りになっても上手くここまで来るだろうしな。
とはいえ、今後のことを考えると頭が痛いけど。どうしたもんかねぇ、ほんと。

#379　何も全部自分達だけで解決する必要はないよね（前書き）

今一つ捗らなかった――（：3」∠）――

#379　何も全部自分達だけで解決する必要はないよね

俺達が商談室に入ろうとすると、勝手に扉が開いてメイが出迎えてくれた。

「お疲れさん、メイ。どんな塩梅だ？」
「はい、ご主人様。こちらの要望を伝え終えて候補となる設備のピックアップをしているところです」
「なるほど。それじゃあまずはこっちの件に注力するか」
「はい、ご主人様」

あの敵意というか殺気の件に関しては俺個人に向けられただけのものならなんとでも対処できるだろうし、ここまで歩いてくる間に策も思いついたからな。まぁ策というほどのものでもないけど。

「この度は当社をご利用頂きありがとうございます。オカモト商会のテラダと申します」
「どうも。このディーラーに決めたのはそこの二人だけどな」

店の選定に間しては俺は完全にノータッチだから、この店を選んだ件でお礼を言われてもな。とりあえず小型情報端末で彼のホロ名刺を受け取り、メイに促されるままに席に着く。
しかしオカモト商会のテラダさんね。なんか日本っぽい名前が多いな、アレインテルティウスコロニーには。ショーコ先生の名前もそうだし、イナガワテクノロジーもそうだし。何か理由があるのかね？

「主に研究設備を使う専門家はそっちのウィスカとこっちのショー

コの二人だから、基本的には彼女達の要望を満たす方向で。予算に関してはメイに一任する」
「承知致しました」
「はい、ご主人様」

なんだかんだで金も結構貯まってるからな。どっかに移動する道中で宙賊をちまちまとしばいたり、この前の軍の依頼みたいに日数で賃金が発生するようなのもあるし。ざっと残高をチェックしてみると、五千万エネルほどになっていた。ミミに任せてる交易も馬鹿にならない金額が入ってくるし、ドワーフ姉妹が剥ぎ取る戦利品の売却益も相当なものだからなぁ。
まぁ、その。相手が宙賊ってだけでやってることが追い剥ぎと変わらん、と言われると反論のしようもないんだが。相手が宙賊だし多少はね？　許されるようんきっと許される。

「シュンダイメトリック社製のチャンバースキャナーは絶対にあったほうが良いよ」
「もうちょっと大きな部品も作れるレプリケーターも欲しいんですけど……」
「それならこちらの商品が」
「ではこのスペースをこのように改築しましょう」
「あー、それとうちの――イナガワテクノロジー製の医療ポッドの最新型もあったよね？」

研究者と技術者と商会員とメイドロイドがブラックロータスのホログラムやら商品カタログのようなものを表示した多数のホロディスプレイを囲んで改築案を話し合っている。俺とクギはそれを眺めながらディーラー所属のコンパニオンガイノイド――オリエント製のメイドロイドかどうかまではわからない――が淹れてくれたお茶とお茶菓子を堪能する。

「美味しいですね、我が君」
「良いお茶とお菓子だな」

メイとウィスカがどのようにこの店と接触したのかはわからないが、上客と見做されたのであろう。天然物というか本物のお茶っ葉から淹れられたものかどうかは判別がつかないが、とても粗茶とは言えなさそうな香り高いお茶である。一緒に出されているお菓子も落雁のような砂糖菓子で、あまりこちらの世界に来てからは食べた覚えのないお菓子だ。あまり向こうでは得意じゃなかったんだが、温かいお茶と一緒に頂くとなかなか良いものだな、これは。

「エルマ様達はご無事でしょうか？」
「もうすぐ着くってさ」

クギが聞いてきたところで丁度小型情報端末にエルマからのメッセージが届いた。ミミ達が着いたら急いで動かないとな。はてさて、簡単に手配できるものなら良いんだが。

☆★☆

「無事で何より」

ディーラーであるオカモト商会に着いたエルマ達にそう声をかけると、エルマにあからさまに呆れられた。

「ヒロじゃあるまいし、こんな治安の良いコロニーでそうそうトラブルになんて見舞われないわよ」
「やめてくれエルマ。その術は俺に効く」

そうはっきり言われると胸に突き刺さるものがあるんですよ。

「ヒロ様、大丈夫ですか？」

その一方、ミミはこうして心配してくれるというね。やっぱミミは天使だな天使。エルマもああ言いつつも心配してくれてたようだけど。

ちなみにティーナは挨拶もそこそこに俺の無事を確かめると、「ヨシ！」と言ってブラックロータス改築計画を話し合っている中央のテーブルに突撃していった。何がヨシなんですかね？

「別に何かされたわけじゃないから大丈夫だ。ただの被害妄想なら良いんだがなぁ」

そう言ってちらりとクギに視線を向けると、彼女は目を伏せながらふるふると首を横に振った。俺だけでなくクギも同じようにあの敵意だか殺意だかを感じたというのなら、やはり俺の勘違いだとか被害妄想だとかで済ませてしまうのは早計というものだろう。

「で？　どうするの？　さっさとケツまくって逃げても良いと思うけど」

「それもそうなんだが、正体くらいは確かめないとだろう」

どの程度の脅威なのか確かめないことには判断も難しい。これでその辺のチンピラに殺意を向けられただけとかだったら笑えるんだが、そうはいかない予感がビンビンするんだよなぁ。

「何か案があるんですか？　結構危険だと思うんですけど」

「あるさ。危ないならアウトソーシングすれば良い」

そう言って俺は手に持っていた小型情報端末の画面を二人に見せた。そこには俺が調べている途中のアレインテルティウスコロニーで活動しているセキュリティサービスの情報が表示されている。

「ああ、なるほど。確かにアリね。それなりに金額はかかるけど……出費は大丈夫なの？」

「大丈夫だろう。いざとなったら稼げば良いし」

ここアレイン星系はハイテク星系なだけあって商品価値の高い交易品が多い。そうすると、それを狙った宙賊どもの活動も活発になる。更に言えば行き交う人々もそれなりに身なりが良いというか、富裕層が多かったりもするからな。人質ビジネスなんかも盛んだ。つまり俺にとっては良い狩り場なわけである。

「それじゃあ早速良さげなところを見繕いますね！　どういう感じのサービスが良いでしょうか？」

「金はかかってもいいから、あっちにカウンターできるような所が良いな。襲撃者が居る前提で、網を張るなり狩り出すなりできるところが良い」

「わかりました、そういう条件で探してみます」

そう言ってミミがタブレット端末を専用ポーチから取り出してセキュリティサービスの情報を探し始めた。こういうのはミミに任せておくのが一番だ。情報の精査をメイにしてもらえば完璧だな。

#380　策士策に溺れる（前書き）

間に合いそうで間に合わない（　，ω，　）

#380　策士策に溺れる

セキュリティサービスの情報検索と選定に関してはミミとエルマに任せ、クギを連れてブラックロータスの改築組へと合流する。

「大分決まってきたようだな」
「せやな。あんま口出すとこも無かったわ」

ティーナと一緒に改築後のブラックロータスの中身を眺める。今まで空き室が多かった居住区画の半分ほどを研究区画に充てる形となる。それでもまだ空き室が何部屋かはあるので、そこそこの人数を追加で乗せることは可能だ。でも、前みたいに四社のメディアクルーを纏めて乗せるとかはもう無理だな。一社か、ギリギリ詰め込めば二社分くらいはいけるかもしれんが。

「研究設備用のサブジェネレーターねぇ……ブラックロータスのジェネレーターだけじゃ容量が足りなかったのか？」

研究区画として新たに割り当てられた部分に小型のジェネレーターが設置されているのを見て俺は眉を顰めた。何故かって、そりゃ危ないからだ。サブでもジェネレーターはジェネレーターなので、ここに直撃弾を貰うとブラックロータスは一発で吹っ飛ぶことになりかねない。航宙艦ってのは内側からの圧力に弱いものだからな。

「ご主人様の懸念は御尤もです。しかし、研究設備を使用するにあたって別系統の電源確保は必須なのです。装甲が最も厚く、また統計的に致命的な被弾が最も少ないスペースに配置することによって被害が出る可能性を最小限に留めています」

「容量が足りないわけではないんだけど、万が一のことを考えるとね……予想外の大電力を一瞬で消費してダウン、なんてことが絶対に無いとは限らないからねぇ」
「航行中の船のメインジェネレーターでそれを起こすと、最悪超光速航行時に突然シールドがダウンして船が穴だらけとか、ハイパードライブを使った星間航行中にハイパードライブがダウンしてとんでもない場所に放り出されたりとか……いや、多分大丈夫なんですけど」
「やだこわい。許可します」

ブラックロータスに致命的な弱点が増えるのは歓迎できないが、いつ起きてもおかしくない事故を未然に防すためというのであれば話は変わる。

「そういう研究をするなとも言えないしな」
「キャプテンは理解があって助かるなぁ」

具体的にどんな研究をするつもりなのかはわからないが。使用できる電力というかエネルギーに制限がついたような状態では満足に研究することは難しいだろう。のびのびと研究してもらうためにもサブジェネレーターは必要だということだ。それによってショーコ先生という優秀な船医がうちのクルーになってくれるなら安い……安いか？　ま、まぁ研究成果が何らかの形で俺達の利益に繋がる予定もあるし、多分プラスだ。うん。そもそもブラックロータスが撃たれなければ良いだけの話だからな。なんとでもなる。する。

「こういうのは現場に任せて上は責任だけ取るって形にするのが一番だとはわかってはいるが……」
「ぉん？」

ちらりとティーナに視線を向ける。テンパると突拍子もない行動に出がちだが、普段は締めるべきところをしっかりと締めるんだよな、ティーナは。

「ティーナが技術陣のトップな。無茶無謀をやらかさないように二人の手綱をちゃんと握るように」

「兄さんそれマジ？　マジで言ってる？」

ウィスカに加えてショーコ先生の面倒まで見ることを突然強要されたティーナが真顔で抗議してきたが、俺は無慈悲にそれを却下した。

「チーフ手当てとして旨い酒が入ったら優先で回すから」

「よっしゃ約束やで？　嘘ついたら引っこ抜くからな？」

「何を引っこ抜くのか怖くて聞けねェ……」

四肢でも髪でも男の象徴でもどれでも怖い。ティーナの馬鹿力だとマジで引っこ抜けそうなのが笑えないんだよ。まぁ引っこ抜く前に握り潰される方が先かも知れないが。

「ジェネレーターと人事はそれでいいとして……うん、何がなんだかさっぱりわからんな。研究室が二つあるのか？」

「ナノテクノロジー、バイオテクノロジー系の研究室とそれ以外の研究室とで分けたんだ。クリーンルームが必要なのはどっちも同じだけど、やっぱりナノ・バイオテクノロジーは漏洩とかにも気をつけなきゃいけないからね」

「漏洩とかおっかないワードが聞こえた気がするけど聞き流しておくよ……俺達にとって役に立つ研究だけをしろとは言わないけど、ある程度の配慮はしてくれよ？」

「前向きに善処するよ」

「前向きに善処します」

ショーコ先生とウィスカがにっこりと笑みを浮かべてそう言うが、滅茶苦茶胡散臭い。まぁ元より成果を期待しての設備投資じゃないし、言うだけ野暮ってものか。

「具体的な今後の展望については後でゆっくり聞かせてもらうよ……あと、医務室も大分広げたな？」

「はい、ご主人様。専門的なスキルを持つ医師が搭乗するにあたって設備と空間の拡張を致しました」

「生きてさえいればどんな状態からでも治してみせるよ。そんなことは無いに越したことはないけどね」

「そりゃ心強いね」

この世界のテクノロジーなら本当に死んでさえいなければどんな状態からでも復活できそうだよなぁ。実際のところ、ショーコ先生の発言は大言壮語でもなんでもないのかもしれない。

「で、これ予算内に収まるのか？」

「はい。ギリギリですが」

「ギリギリかぁ……」

とりあえず三千万エネルまでは使ってよし、とメイには伝えておいたので、メイがギリギリと言うからには本当にギリギリなのだろう。三千万エネルもの大商いともなればそりゃ下にも置かない扱いになるよな。良いお茶とお茶請けが出てくるわけだ。

しかしこれが高いのか安いのか全くわからんな。元の世界と物価が違い過ぎるからなぁ……電子顕微鏡一つで数百万円とか数千万円とか聞いた覚えがあるし。いや、億単位だっけ？　もうはっきりとは覚えてねぇな。

あとはセキュリティサービスの方でいくら使うかだが……まぁどんだけ使っても一千万エネル以上かかることはないだろう。あっちも相場とかわかんねぇな。

「まぁ予算の範囲内に収まるなら良いや。こういうのは上を見ればキリがないものだし」

「それはそうだねぇ。予算無制限で、となればもう少し色々と上を目指せるけれど」

「勘弁してくれ。傭兵目線でも結構なお高い買い物だよ」

「なんだか私、具体的な金額を今改めて認識して怖くなってきたんですけど」

ウィスカの笑顔が急に青ざめてきたように見えるが、自分がやったことなので真摯に受け止めて欲しい。その金のうちの何割かはウィスカとティーナの血と汗と涙の結晶みたいなもんだけど。

あと、テラダさんはそんな笑顔の奥にハラハラとした気配を隠さなくていいから、今更やっぱなしとか言わないから。

☆★☆

オカモト商会のテラダさんに施工の手続きやドッグの手配などを任せた俺達は全員揃ったままホテルへと帰ることにした。今日のところはゆっくりと休みながらセキュリティサービスの手配を済ませようということになったのだ。

「セキュリティサービスの手配が済んだら買い物とか観光とか行こうな」

「そうですね！　前に一回来ましたけど、まだまだ回れそうなところがありましたし」

「ティーナ達には是非あそこに行ってもらいたいわよね」

「あそこ？」
「楽しいところだぞ」
「兄さんの表情があまりに嘘くさいんやけど」
失礼な。見識を深めるために培養肉工場の見学に行ってもらおうと思っているだけだぞ。
「あ、思い出したわ。あれやろ、培養肉工場やろ？　行かないで」
「くっ、前に話したことがあったか」
不覚。そう言えば何かの折にアレインテルティウスコロニーの培養肉工場の話をしたような気もする。ティーナ達に出会う前の思い出話は何回かしてるからなぁ、色んな機会に。それこそ寝物語にもしてるし。
「ばいようにく工場ですか？」
クギが興味深げに首を傾げている。そう言えば、クギには話をしていなかったかもしれない。
「お肉の工場だぞ」
「お肉の工場ですか！　楽しみです」
そう言ってクギは曇り無き、そして期待を込めた眼で俺を見つめてくる。
「俺は前に行ったから良いかな！」
「そうですか……」
クギのテンションがあからさまに下がる。耳も尻尾もしょぼんと

していらっしゃる。いや、ちょっとそれはあまりにあざとくないか？　でも狙ってやってるわけじゃないんだよな、この子は。

「機会があったら……いや機会を作って行こうな」

行けたら行くわ！　の臭いを感じ取ったのか、更にテンションが下がるクギに絆されて行くことを約束してしまった。そしてその横でニヤニヤしているティーナの腕を掴む。

「その時はティーナとウィスカも一緒に来てくれるって。一度も見たこと無いもんな」

「え、ちょ」

「私も！？」

巻き添えを食らったウィスカが愕然とした顔をしているが、見なかったことにしておく。死なばもろともだ。最初の目的は達してやるとも。

「私はパスだよ。多分ヒロくんよりもよく知ってるし」

「左様か……」

俺達が見学したあの工場と取引があったのかどうかはわからないが、例の白い化け物を分析したり研究したりした時に存分に調べただろうからな。ショーコ先生はあの時に対抗策のナノマシンを作っていたし、その後も調査か研究に関わったのだろう。なら、元となっているアレについてよく知っているに違いない。

「とにかく部屋に戻るか」

「そうね」

明らかに呆れを含んだ声でエルマが相槌を打ってくれる。クギが忘れてくれることを祈っておこう。

#381　イガセックとコウガサービス（前書き）

昨日病院行ったら石が消えてました！　ヤッター！
なんか朝から左奥歯が痛いです！　ヤダー！　|（：3」∠）|

#381　イガセックとコウガサービス

できるだけ人通りの多い場所を通りながらホテルへと戻った俺達は楽な格好に着替えてから広く作られているリビングルームに集まった。座り心地の良いソファに綺麗なテーブル、同じくアンティークっぽく見える椅子。素材が木材っぽく見えるが、メイ曰く本物の木材ではなくそれっぽい見た目と触り心地のイミテーションであるらしい。わざわざ科学技術の粋を集めて木材の模造品を作るとか、もともと地上に住んでいた身としては意味がわからんな。

「それでええと、何かに狙われてるって話だっけ？」

タンクトップにショートパンツという超絶ラフな格好で炭酸の入っていないビールの缶を開けながらエルマが聞いてくる。

「そう。勘違いなら良いんだが、どうにもそうじゃなさそうだってのが問題でな」

「此の身も感知しましたので、間違いないかと。ただ……」

「ただ？」

言い淀むクギに先を促すと、彼女は少し躊躇しながらも口を開いた。

「此の身を含めた全員、というよりは我が君だけを対象としているような敵意だったように思います」

「……なるほど？」

クギの言葉を受けて俺は考え込む。仮にクギの言う通りだとして、

何故俺が狙われるのか？　これがわからない。無論、狙われる理由が皆無であるとは全くもって言えるような立場でないことは俺自身が重々承知しているが、それでも表立ってというか、真正面から殺しに来るようなことはあまり考えられないんだよな。
何故なら、俺の戦闘能力は広く知れ渡っている。白刃主義者の貴族とも渡り合う剣の腕だけでなく、レーザー兵器などを使った射撃能力も、そして言うまでもなく航宙戦における強さも御前試合というこの上ない舞台で証明しているからな。そんな相手に喧嘩を売るやつがそうそういるとは俺には思えないんだが。

「もしかして俺をぶっ殺して名を上げようみたいなそういうムーブメントが起きてたり？」
「それは流石に無いんじゃない……？　少なくとも傭兵とか貴族とかそういう表の連中がそういう暴挙に出ることはないと思うわよ。何か正々堂々とやり込める機会を作って、っていうならわかるけど、街中での暗殺を狙うようなことは流石にね」
「なるほど。となると宙賊とかそういう類の連中か、不名誉の誹りを受けようとも俺を絶対に殺すと画策している奴かってことだな。でも、そうするとちょっとおかしいんだよな」
「何がおかしいんや？」
「俺を見つけて殺意を向けるまでが早すぎるだろう」

あれは俺やクギが場所を探れないほどの遠方からの殺意だった。つまり、それほどの遠い場所から俺を監視する手筈を整えていたということになる。

「俺達がこのコロニーに着いたのは今日だぞ？　事前に網を張ってでもいないと監視体制なんて整えられる筈がない。でも、俺達がこの星系に来るのを決めたのは最辺境領域にいた頃だし、俺達はゲートウェイを使ってここまで来たんだ。最辺境領域いた頃から俺達を

ずっと監視して、ピッタリとくっついてでも来ない限り俺達の行動を予測して先に網を張るなんてできるわけがないと思わないか？」
「……つまり、私達の中にスパイがいるってこと？」
エルマが眉間に皺を寄せてそう言う。しかし俺はそれに首を横に振った。
「万が一そうだとしても、ブラックロータスの中でメイの目を出し抜いてスパイ活動なんてできるはずがないと思うぞ。というかそれはそもそも考えてない」
俺は首を横に振る。クルーを疑うような真似はしたくないし、そもそもする気もない。
「俺が何を言いたいかというと、そもそも最初から網を張っていて、監視やら何やらの手筈を整えていた連中じゃないかってことだよ」
「なるほど……なるほど？」
ミミがわかったようなわかっていないような微妙な反応をする。他のお嬢さん方も概ね似たような反応だ。
「つまり、どういう連中ってこと？」
「それがわかれば苦労はしないよな。つまり俺が言いたいのは、相手は『普通』じゃないってことだよ。常識的に考えて頭の中に出てくるような範囲の連中じゃなく、予想もしないようなイレギュラーの可能性が非常に高いんじゃないかって思うんだ」
普通に考えて出てくるような俺に恨みを持った傭兵とか貴族とか宙賊とかって連中ではなく、どう考えても襲ってくるとは思えない、襲ってくるとは思わないような非常識な第三勢力の可能性が高いと

俺は思う。

「結局なんもわからんってことやな」

「まぁ、そうなんだけどな。言語化しておきたかったんだよ。とにかく変な奴らに違いないってことをな」

常識では測れないような奴らだと最初から意識していれば意識の外からの攻撃を警戒できるんじゃないかと思うんだよな。後は相手が白昼堂々というか回りの犠牲も顧みずにコロニー内でプラズマ兵器だの反応兵器だのをぶっ放してこないことを祈るとしよう。

「今話したことを念頭に置いてセキュリティサービスを選定していくということで頼む」

「わかりました。最終的に候補に残ったのは二つなんですけど」

そう言ってミミがタブレット端末を操作してリビングルーム中央のテーブルに仕込まれているホロディスプレイを起動する。

「イガセックとコウガサービスです」

「……奇声を上げながら失禁しそうになるなぁ」

こいつら絶対ニンジャだろ……見てないけどわかるぞ。絶対にニンジャだ。炭酸の入っていないコーラめいた飲料を一ケース賭けても良い。絶対にニンジャだ。そして滅茶苦茶仲が悪そうだ。

「イガセックはバイオテック系の企業をバックボーンにしていて、コウガサービスはサイバネテック系の企業をバックボーンにしていますね。サービスの質はどちらも高いみたいです。お値段もですけど」

「ちなみにイナガワテクノロジーはイガセックと契約してたねぇ。

もしかしたら私の知り合いがいるかもしれない。イナガワテクノロジーで働いていた頃にはよくイガセックの人が護衛についてくれていたからね」
「じゃあイガセックにコンタクトを取ろうか」

どっちも甲乙つけがたい質のサービスを提供してるって言うなら、仄かにでも縁故がある方を選ぶとしよう。長年イガセックの人に警備されていた経験があるショーコ先生がいるなら多少なりとも勝手がわかるかもしれないしな。

「しかしサービス内容を見てみると……これほんとにセキュリティサービスか？」

単なる身辺警備だけじゃなく防諜サービスとか奪還サービスとか穏やかじゃない内容がチラホラと見えるんだが。

「他は知らないからねぇ。こういうものとしか言えないかな」
「そっかぁ……とりあえずコンタクトを取ってみようか」
「案ずるより産むが易しと言いますからね」

この場合その言葉はどうだろう？　当てはまる……のか？　まぁ早くコンタクトを取るに越したことはないのは確かだよな。悩んでいても仕方がないし、早速接触してみるとしよう。

#382　ビジネススーツの二人（前書き）

睡眠不足は良くないっすね（ ，ω，　）

#382　ビジネススーツの二人

イガセックにコンタクトを取ると、すぐに担当者がホテルまで来てくれるということになった。

「ホロ通話やメッセージで済ませるのかと思った」

「結局アナログな方法が一番機密保持に向いてたりするのよ。通信は傍受されたり機器自体をクラッキングされる恐れがあるから」

「そういや前にダレインワルド伯爵宛にクリスのホロメッセージを送るときにもエルマが直接運び屋のとこに記録媒体を持って行ってたな」

あれもセキュリティ対策の一環だったわけだ。ネットワーク経由でデータを送ると、傍受されたり内容を改竄されたりする恐れがあるからということで。

「古い話を持ち出してくるわね……そういえば、あの時のヒロは可愛かったわね」

「思い出しました」

エルマがニヤニヤとした笑みを浮かべ、ミミがニコニコとした笑みを浮かべる。同じ笑顔なのに何故こうも受ける印象が違うのか。不思議なもんダナー。

「え、なになにそれ。聞きたいわ」

「私も興味があります！」

「こ、此の身も……」

ティーナとウィスカは予想通りの反応だが、クギまで……ショーコ先生もニヤニヤしてるし。この部屋に俺の味方はいないのか。メイなら……メイも止めはしないよな。この程度では。表情は読み取れないけど興味がありそうな雰囲気を感じる。

「はいやめ！　その話はやめよう！　いや、後にしような。ほら、すぐイガセックの人来るから」

「はい、ご主人様。それでは後でエルマ様とミミ様にお聞き致します」

「……はい」

後にしようと言ったのは余計だったかもしれない。この様子だと他の全員が忘れてもメイがこの話題を持ち出しそうだ。

まぁ悔やんでも仕方がない。過去に起きたことはもう覆せないのだし、覚悟を決めるとしよう。なに、ちょっと心配が高じて衝動を抑えられなかっただけの話だし……別に恥ずかしくねぇし。

などと考えていると、ロビーから来客の連絡が入った。ロビーでイガセックの担当者であることを確認してもらい、入室許可を出す。

「あちらさんは二人組だってさ」

「ふーん？　何かあった時のためにツーマンセルなのかしら？」

「単に営業担当と現場担当とかじゃないですか？」

「両方とも正解なんじゃないかと私は思うねぇ」

エルマとミミ、ショーコ先生が賑やかに話している一方でティーナとウィスカは少し離れた場所に一緒に座って大人しくしており、クギもその側で静かにしている。こういう荒事が絡むような案件の時には整備士姉妹は大人しいんだよな。クギもどちらかというと外部の人間と接触する時には大人しくしていることが多い。

整備士姉妹の方は単に大人しくしているだけだが、クギの方は目

立たないようなポジションで密かにテレパス能力を使って相手の動向を窺っているっぽいんだよな。最近気づいたことなんだけど。

「……」

目が合ったクギが尻尾を振りながら輝くような笑みを浮かべてくる。後ろ――というか悪意の看破は此の身にお任せ下さいと言わんばかりの笑顔である。頼りになるなぁ。

と、考えていると俺の後ろに控えていたメイが徐に部屋の扉へと近づき、扉を開いた。

「ようこそいらっしゃいました。どうぞお入り下さい」

「これはどうも。失礼致します」

「……どうも」

部屋に入ってきたのは二人の人物であった。一人はあまり背の高くないビジネススーツのようなものを着た細身の男性で、もう一人は同じくビジネススーツを着ている大柄な男性だった。ただ、こちらの方はもうなんというかピッチピチだ。腕も足も腰回りもムッキムキのマッチョなのである。

そのスーツ、サイズ合ってなくない？　大丈夫？　なんかボタンとかがパーンって飛んできそうなんだけど。

「傭兵のキャプテン・ヒロだ」

「イガセックのオオタです。こちらはキラム」

「……」

オオタと名乗った男が慇懃な態度で挨拶をして隣のピチピチマッチョを紹介してくる。

このマッチョ、もう一つ大きな特徴があった。顔が無いのだ。い

や、無いというかなんというか、のっぺりとしているのである。まるで素顔がヘルメットでも被っているかのような感じなのだ。

「彼は全身を義体化しているんです」

俺の視線に気づいたのか、オオタが補足してくる。

「なるほど。いかにも強そうだ」

「……どうだか」

そう呟いてキラムという名で紹介された全身義体の大男は俺とメイに視線を向けている――ように思える。何せ顔が真っ黒くてのっぺりとした感じだから視線も何も無いようにしか見えないのだ。もしかしたらのっぺりとしているのはカバーというか仮面みたいなもので、あの下にメカニカルなレンズとかがあるのかもしれない。

「キラム」

「……俺じゃこの旦那とそこのメイドロイドには勝てんぞ」

オオタの咎めるような声にキラムはそう答えて大きな体を揺すってみせた。どうやら肩を竦めたらしい。

「正面から戦えばそりゃそうかもしれんが、お宅らに頼みたいのは戦力としてではなくてな」

そう前置いて俺は依頼の内容を話すことにした。

「掻い摘んで話すと、どうも俺達――というかもしかしたら俺が何者かに狙われている可能性があってな。だが俺達は暫くこのコロニーに留まって船の改修を行う必要がある。だから、その間の護衛を

頼みたいわけだ」
「わかりやすい護衛依頼というわけですか」
「そうなんだが、どうにも妙でな。俺達がこのコロニーに着いたのは今日のことなんだよ」
「……なるほど？」

オオタの表情が訝しげなものに変わる。そりゃそうだろう。着いたその日のうちにセキュリティサービスに護衛依頼を頼むなんてのはどう考えても異常だ。

「俺がパラノイアでも急性発症したって可能性も無くはないが、どうにも疑念が拭えなくてな。まぁ、詳細は言えないが確度はそれなりにあると思って欲しい」

俺やクギのサイオニック能力に関して説明するわけにもいかないので、確信を持っている理由に関してはぼかしておく。俺はプラチナランカーの有名人だから、何か伝手とかそういうものがあるんだろうとかそんな感じで都合よく納得してくれることに期待しよう。

「相手に心当たりが？」
「あるなら自分でなんとかするんだが、全く心当たりがない。いや、心当たりがないことはないんだが、俺達はつい最近まで最辺境領域にいて、ゲートウェイを使ってこっちまで来てるんだ。その『心当たり』の連中がここに網を張っていたとは到底思えない。だから困ってるわけだ」
「……どの程度の相手だと想定しておいでですか？」

至極真面目な表情でオオタが問いかけてくる。どの程度。どの程度か……。

「確証はないが、全くもって油断のならないプロじゃないかと思う。これでそこらのケチなチンピラだのマフィアだのが相手でした、って話だったらお笑い草なんだが。まぁその時は俺が過剰に怖がった間抜けってことだな」

この短時間で網にかかった俺達を遠距離から監視する手筈を整えるような相手だからな。油断ならない相手だと考えるのが妥当だろう。

「護衛のやり方はそっちがプロだから任せるつもりだ。だがまぁ、俺の考えでは守り一辺倒ではなく相手を炙り出してカウンターを仕掛けるのが良いと思うね。ああ、依頼を受けてくれるならの話だけども」

「……高く付きますよ？」

「金ならあるさ。それに要は生身で――つまりコロニー内で襲われさえしなければ俺は満足なんだ」

相手が生身の俺やクルーを狙うことを諦めてくれればそれでいい。航宙戦に釣り出すことができれば俺の勝ちだからな。

□■□

「とでも思ってるんだろうねぇ」

「こっちの目的を考えればある意味当たりですがね。どうします？」

それはそうなんだよね。航宙戦に引き込まれるのはこっちとしちゃあ歓迎できない。

「イガセックか……奴らは厄介だね。確か商売敵がいただろ？」

「コウガサービスですね。ぶつけるんで？」

「金があんのはあっちだけじゃないさね。とりあえず隙を窺うとしようか」

帝都辺りに逃げ込まれると厄介だったんだが、あっちはこっちの事情なんて知らないだろうからね。ここに留まることを選択してくれたのはラッキーだったよ。私の運もまだ捨てたもんじゃないね。

「ボスぅ、普通にコンタクトを取れば良いんじゃないですかぁ？」
「あの子のことを考えるとその博打は打てないね。ケツまくって逃げられるのが一番困るんだよ、こっちとしては。それよりも調べはついたのかい？」
「それがさっぱりなんですよねぇ。最初に活動が確認されたのがターメーン星系だってことはわかってるんですけどぉ、傭兵ギルドも背後関係とか出自は把握していないみたいでぇ」
「最初にターメーン星系にピンポイントで現れて、都合よくあの子と接触して船に連れ込んで、何をどうしたら数ヶ月でペーペーのブロンズからプラチナまで駆け上がって皇帝のお気に入りになるってんだい。絶対に裏があるはずさ」
「でもぉー……本当に出てこないんですよぉ。なんか帝国の情報部が探った形跡もありますしぃ……下手すると網にかかっちゃいそうでぇ」

いつもの泣き言が始まったね。この子はいつもこうだよ。

「あんたならなんとかなるだろ。もっと頑張りな」
「うぅ……おにばばぁ」
「ゲンコツが欲しいのかい？」

腕まくりをするだけで黙るなら最初から黙っときな。まったく。
しかしどうにも動きが読みにくいね、あの男は。もっと自信過剰

なタイプかと思ったんだが……まぁ良い。いつも通りやるだけさね。
逃しはしないよ。

#383　（　゜∀゜）o彡゜（前書き）

出来心でＣｏｓｍｏｔｅｅｒに手を出してしまったのが運の尽きであった（　，ω，　）（気がついたら朝九時

#383 （ ゜∀ ゜）o彡゜

「今日は色々あったなー」
「なー」
「ねー」

オオタとキラムが帰ったので、交代でシャワーだの風呂だのに入って座り心地の良いリビングのソファくつろぎモードである。
ササッとシャワーで済ませた俺と、じゃんけんで一番風呂を勝ち取ったティーナとウィスカが一番乗りだ。この部屋……部屋？　はシャワーやバスルーム、トイレが複数あって大人数で泊まるには大変に便利ではあるな。

「兄さん兄さん、センセの歓迎ぱーちーはいつやるんや？」
「んー、ブラックロータースの改修を終わらせてから、ブラックロータースの食堂でパーっとやるのが良いんじゃないか」
「そっかー……」

俺の返答を聞いたティーナがぐんにゃりと脱力して寄りかかってくる。酒が飲めないのが残念なのだろうか。ウィスカもティーナと同じようにぐんにゃりと寄りかかってくる。なんだね君達。

「さっぱりしました！」
「気持ちよかったですね」

ミミとクギは一緒にお風呂に入っていたようだ。そのすぐ後ろにはエルマもいる。

「ショーコ先生が最後か」
「ゆっくり入ってくるって言ってたわよ」
「おあー」

エルマがぐんにゃりと俺に寄りかかっていたティーナをひょいと持ち上げて俺のすぐ隣に座り、ティーナを自分の横に放り出す。ティーナ達はナリは小さくても骨や筋肉の密度が高いのかそこそこ体重があるんだが……めっちゃ軽く放り出すじゃん。

「ミミさんどうぞー」
「良いんですか？」
「今までくっついてたので」

ウィスカは自分からミミに俺の隣のポジションを明け渡していた。そして隣に座ったクギの尻尾をどこからか取り出したブラシで丁寧に梳き始める。

「いつもすみません」
「好きでやっているので気にしないでください」

そう言いながらウィスカはクギの尻尾をモフっている。ウィスカはモフリストだったのか……今度俺もブラシを用意してみようかな。あのボリュームのある尻尾を存分にモフってみたい。

「ヒロ様、明日はどうしましょうか？」
「そうだなぁ。ブラックロータスは使えないけどクリシュナとアントリオンは飛ばせるわけだし、軽く宙賊狩りに行っても良いけど。所持金も目減りしたしな。まぁちょっとしたドライブみたいな？」
「物騒なドライブもあったものねぇ……私達らしいっちゃらしいけど」

「傭兵スタイルですね！」

ミミは大喜びである。エルマも満更では無さそうだな。

「んぇー？　べつにそんなせせこましくせんでも部屋でだらだらしてもええやん」

「それも悪くはないわね」

「お休みの時にしっかりと身体を休めるのも大事だと思いますよ」

ウィスカだけはそれっぽいこと言ってるけど、ティーナも急に手の平を返したエルマも昼間から酒飲んでダラダラしたいだけじゃないか？

「私はお肉の工場に……」

「お肉の工場は……ほら、今はアレだから」

「残念です……」

クギの頭の上の狐耳が力なくペタリと伏せられる。実際に今は謎の監視者だかなんだかの件があるからコロニー内を歩き回りたくないんだが、そうでなくとも俺はあの工場には行きたくない。多分一回見たからもう耐性はついてるだろうが、何度も見たいようなものでもないからな。

「はー、さっぱりした。やっぱお風呂はいいねぇ」

「ぶほっ！？」

そうして明日の予定について話し合っていると、ショーコ先生が風呂から上がってきた。パンイチで。肩にタオルだけ引っ掛けたズボラなおっさんみたいなスタイルで。パンティは履いていても上が丸出しである。それはもうボインと。

「先生……流石にもうちょっとこう、デリカシーってものを考えましょう」
「えぇ？　別に良いじゃないか。皆仲良く姉妹なわけだし、ヒロくん相手に隠すようなものでもないだろう？」

そう言ってショーコ先生が肩を竦める。ぽよん。ぶるん。うん、素晴らしい。素晴らしいものだこれは素晴らしい――などと心の中で喝采していたら。ミミが膝立ちになって俺の頭を自分の方に向け、胸元に抱え込むことによって俺の視界を塞いだ。なんということだ。ここが楽園か？　俺ここに住むわ。

「ああもう、髪の毛も生乾きじゃない。折角髪を伸ばしているのにぼさぼさにして。ウィスカ、手伝って」
「はい」
「えぇ？　別にこんなの……いやちょっと待って、力が強いよ二人とも。いたたたた！？」

ショーコ先生はエルマとウィスカに連行されていったようだ。そして俺は楽園から追放される。
おお、神よ。何故俺にこんな仕打ちを。

「……やっぱ乳は質量なんやな」

ティーナが自分の胸元をぺたぺたと触りながら呟く。そんなことないぞ。小さくてもおっぱいはおっぱいだ。そこに貴賤は存在しない！　と声高に力説してもドン引きされるのが関の山なので、黙っておく。こういうのは自分から触れに行くと大怪我をするものだからな。

「やれやれ……私は子供じゃないんだぞ？」
「余計にたちが悪いわよ。せめて服くらいちゃんと着なさい」
「えぇ？　傭兵ってのはこう、粗雑で自由な感じなんじゃないのかい？」
「よそはよそ。うちはうちです」

そうこうしているうちに髪の毛をサラッサラに梳られた上に落ち着いたデザインのネグリジェのようなものを着せられたショーコ先生がエルマとウィスカに引っ立てられてきた。

「ちゃんと寝巻きがあったんだな」
「これはメイのよ」
「ちょっと胸元がきついかなぁ」

そう言ってショーコ先生がネグリジェの胸元を指先で摘んで引っ張っている。うん、確かにパッツンパッツンになってるな。ありがたやありがたや。

「お兄さん。明日はショーコ先生の服を買いに行きましょう」
「えー、めんどくさいなぁ。別に私は必要ないと思うんだけど」
「服が二着、それも同じのしか無いとか駄目に決まってるでしょうが」

聞けばショーコ先生の持ち服は本当に少ないらしい。本人曰く、風呂やシャワーに入ってる間に洗っておけばそれで仕上がるんだから問題ないと。寝る時は全裸だとか。

「状況は微妙なんだけどなぁ……」
「必要よ」
「必要です」

「必要かなぁ？」

本人以外は行く気満々だな。これは今日のうちにオオタに明日のスケジュールと警備体制について連絡しておいたほうが良さそうだ。正直危険だと思うんだが……まぁ、相手の尻尾を掴むチャンスになるかもしれないし、前向きに考えるとするか。

#３８４　初めてのセキュリティサービス（前書き）

肩と首が痛ェ―（：３」∠）―

#384　初めてのセキュリティサービス

「どうも」
「おはようございます」

翌日。身支度を整えた俺達がホテルのラウンジに降りると、そこにはオオタとイガセックのスタッフが待ち構えていた。昨晩のうちに行動計画書を作って送っておいたのだ。翌日にすぐこうしてチームを率いて護衛についてくれるのは大変にありがたいな。

「無理を言ってすまんな」
「仕事ですからね」

今日はオオタも仕事着であった。つまり、ビジネススーツのような衣装ではなくいかにもセキュリティスタッフだとわかるような格好だ。具体的に言うと、わかりやすく軽装のコンバットアーマーやヘルメットなどを装備している。
しかしなんだ。そのライトコンバットアーマーとかヘルメットのデザインが微妙に忍甲冑っぽいし、ヘルメットのデザインも口元がなんかメンポっぽい感じが……やっぱりこいつらニンジャなのでは？

「側で護衛するのは四名で、更に四名が有事に備えて援護に回っています」
「残り四名は？」
「逆撃のために動きます」

なるほど。十二名のうち八名を防御に、四名を攻撃に回すわけだ。それが妥当なのかどうなのかはわからないが、餅は餅屋と言うしな。

こういうのはプロに任せるのが一番だ。

「しかしこうして改めて拝見すると……壮観というかなんというか」

「それ以上言わないでくれ」

ミミ達に視線を向けて呟くオオタにそう言って苦笑いを浮かべる。わかるよ、言いたいことは。ミミ、エルマ、メイ、ティーナとウィスカにクギ、それにショーコ先生。全員若い女性で、それぞれタイプは異なるが美人さん揃いである。

「まぁ、その。尊敬に値するとだけ」

「素直にありがとうとでも言うべきなのかね、それは」

皆が俺を立ててくれるからなんとかなってるが、そうでなかったら俺のメンタルがストレスでやられているんじゃないかな。そのあたりの調整を恐らくメイが積極的に受け持ってくれているからなんとかなっているんだろうと思うが。やはりメイには足を向けて寝られないな。

しかしヘルメット越しだからはっきりとは分からないが、イガセックの皆さんから好奇の視線を向けられている気がする。というか、ホテルのラウンジにイガセックの皆さんがいるせいかラウンジ中の人達に注目されている気がする。俺も含めて十二人もの人間がゾロゾロとしていて、そのうち四人が物々しい格好をしていればそりゃ目立つか。

「あまり騒がせても良くないし、とっとと出るか」

「承知。私どもは少し離れて警備します」

そう言ってオオタ達が先にホテルのラウンジから出ていく。離れて警備ねぇ？　まぁ俺達も警戒するし、四人プラス四人で八人分も

戦力が増えていると考えればそうそう向こうも手は出せないだろう。

「杞憂で済めば何もかも笑い話になるんだけどなぁ」

「そうはならないって思ったからこうなってるのよね？」

「ヒロ様の勘はただの勘違いで済ませるにはちょっと精度が高すぎますからね……」

最初期から俺と一緒に行動しているミミとエルマは既に半ば諦めモードである。彼女たちの中では俺達が何かに付け狙われていることはほぼ確定事項なのだろう。

「もう部屋に居れば良くないかい？」

「うちもあんま服とかには気ぃ遣わん方やけど、センセーはどうにかしたほうがええと思うで」

「お姉ちゃんに言われるのはよっぽどですよ」

ティーナとウィスカがダルさのあまり猫背になっているショーコ先生の両サイドに着いて牽引している。見た目だけなら微笑ましい絵面だが、ドワーフ二人に引っ張られて抗える人間などそうそう居るはずもない。多分身体強化を施した貴族でも二人がかりで引っ張ってくるのに抗うのは難しいんじゃないだろうか。

「あれ？　クギはどこいった？」

「先に外に出たみたいです」

ミミの視線を追ってみると、確かにホテルを出たところにクギの後ろ姿があった。頭の上の耳をピンと立てて辺りの様子を窺っているように見える。よく見るとメイも一緒だな。

「先行偵察でもしてるのか……？　とにかく俺達も行こう」

「はい！」

ティーナとウィスカにショーコ先生を引きずって――エスコートするようにと視線を送ってからホテルの外へと足を踏み出す。

「んー……今日は特に動きはないかな？」

「はい、我が君。時折こちらを探るような気配はありますが、いつものことと言えばいつものことなので」

「それはそうだな」

俺達は目立つみたいだからな。俺はともかくとして、女性陣はある意味で派手と言うか目を引くから。特にクギは見た目が特異だし。

二足歩行するトラとかライオンとかそういう感じの正に『獣人』って連中はあちらこちらで見るんだが、クギみたいにほぼ人間の見た目で獣耳と尻尾があるって感じの『獣人』は殆ど見た覚えがない。恐らくヴェルザルス神聖帝国の民独特の特徴なんだろうな。いや、帝国内ではあまり見かけないだけで、他の国にはいたりするのかね？

「ヒロ君、もうこうなったら早く済ませてしまおう。どうあっても逃げられないとなれば面倒なことはさっさと終わらせてしまうに限る」

「早く終われば良いっすね」

一念発起した雰囲気を醸し出しているショーコ先生に生暖かい視線を送っておく。ミミとエルマ、クリスの三人で俺の衣装を一着ずつ選ぶだけでも結構な時間がかかったからな。今は人も増えているし、何よりもこれから行くのはそういうアパレル関係のお店がぎっちりと詰まった大型構造体だ。そう簡単に解放されるとは俺には思えないが……まぁストレートにそう指摘するとショーコ先生がヤダヤダ病を発症しかねないので黙っておこう。例のショップもあそこ

に入ってるしな。

「あまり待たせても迷惑だろうから行くとするか」

「はい！　私が先導しますね！」

そう言ってミミがタブレット型端末を片手に歩き始める。ミミが先頭で、その後ろに俺とクギ。更にその後ろにエルマが続き、両手にティーナとウィスカをぶら下げたショーコ先生、そしてメイが団子状態になって最後尾だ。

「警備の方々は付かず離れずの距離を保っていますね」

「そうだな」

雑踏に紛れて分かり難いが、こちらに注意を向けている気配が近くに四つ、かなり離れた場所に二つずつある。通りを移動する毎に遠くの二組のペアが大きく移動しているみたいだな。あれは大変そうだ。

「大変そうだな……」

「大変そうですね……」

しかしドタドタと走り回って目立つような気配はないんだよな。やはりあいつらニンジャなのでは？　などと考えながら俺とクギはミミの後ろをついていくのであった。

#385　光学迷彩は何遁の術なのだろうか（前書き）

何故重いものをもったわけでもないのに上腕が筋肉痛になっているのか―（∵3」∠）―

#３８５　光学迷彩は何遁の術なのだろうか

「予算はこの範囲で。適当にやってくれ」
「はい、ご主人様」

構造体に到着したら俺は休憩タイムである。メイに予算を渡して後は『よきにはからえ』で全て任せることにする。何故なら今回はショーコ先生の服をメインとしており、その中には当然ランジェリーの類も含まれるわけでな。俺が同行しても気まずい思いをするシーンが多かろうということでご勘弁願ったのだ。

「ふらふらどこかに行くんじゃないわよ？」
「子供じゃないんだから大丈夫だって」
「兄さんやからなぁ……」

真に遺憾だが、今までの実績を考えると犬も歩けば棒に当たる――どころか百連打される勢いなので、反論もし辛い。俺が一体何をしたと言うんだ……。

「閉所で窓もないし、構造体の壁ごと吹っ飛ばす気でもなければ安全だろうからあっち優先で頼む」
「御意」

ドリンクと軽食の自動販売機が設置されている休憩コーナーに腰を落ち着け。誰へともなく声をかけると返事が聞こえてきた。姿は見えないが、俺に向けられている注意の視線というか気配は感じていたんだよな。光学迷彩か何か使ってるのかね？

「ところで、何か情報は？」
「残念ながら、今のところはまだ……ただ、どうもコウガの連中が逆撃の妨害に入っているようです」
「……特に理由もなくただ見かけたって理由だけで邪魔をしてくるような連中ではないよな？」
「はい。恐らくは敵方に雇われたものかと」
「それだけでも結構な情報だな」

つまり、謎の監視者は確実にいるし、俺がイガセックと接触したのを監視してもいたというわけで。尚且つ、俺が大枚を叩いて雇った――俺の金銭感覚では大枚と言うほどでもないが――イガセックに対抗できるだけの人員をコウガサービスで手配できるだけの資金力を持っていると。
更に言えば、こうしてイガセックを無力化するためにコウガサービスを利用する辺り、コロニー内でルール無用の殺し合いをしようというつもりもないらしいということも察せられる。
いや、本当にそうか？　イガセックとコウガサービスが殺し合いをしていないという保証は無いな。

「その妨害ってのはお行儀の良いものか？　それとも血が流れる類のものか？」
「血が流れるほどでは」
「なるほど、ならあながち的外れでもないか……？」

俺の言葉を聞いているイガセックの人にとっては意味のわからん呟きだな、これは。

「なぁ、コウガサービスの連中と接触できないか？」
「は？」

虚空から虚を突かれたような声が聞こえてきた。クライアントが突然こんな提案をしてきたら驚くのも致し方ないだろう。俺だって同じ立場なら同じような声を出すかもしれん。

「あっちの要求が俺やクルーの身柄や命だってんなら交渉の余地も無いが、そうでないならこんな暗闘じみたことをしなくても済むかもしれんだろ？　そして少なくとも、コウガの連中は俺、もしくは俺達を狙ってる連中と接触する方法があるわけだ。なら、利用するのが利口だと思わないか？」

「逆手に取って罠に嵌められる可能性も高いですが」

「そん時はそん時だ。真正面から踏み砕くなり、別の手を伏せておくなり、やりようはあるさ。一方的に伝えれば良い。向こうに応じるつもりがあるなら勝手に接触してくるだろ……ああ、それで問題が早期解決したとしても、契約した分のエネルはちゃんと満額払うから、そこは心配しないでくれ」

「……承知。上に連絡します」

ブン、と音を立てて全身タイツのようなぴっちりスーツに身を包んだ人物が突如現れる。やはり光学迷彩とかその類……ふむ。声でそうかとは思っていたが、やはり女性だったか。ふむ……ぴっちりスーツもなかなか良いものだな。何がとは言わないが。

しかし、ふぅむ……うちの女性陣がこういうのを着てるのを見たことがないな。ティーナとウィスカが作業中に着ているジャンプスーツは若干近いかもしれないが、やっぱり薄さとピッチリ感が違うな。ＳＦモノの漫画やアニメだとこういうスーツ結構出てくるイメージなんだが。やはりアニメや漫画と現実は違うということなのか。

「……視線が露骨過ぎますが」

連絡を終えたのか、光学迷彩クノイチさんがこちらに顔を向けて

抗議してくる。まぁ、顔を向けられてもフルフェイスのマスクをしているから顔立ちなんてわからんのだが。

「見事な視線誘導技術だと感心する」

「注意されても視線を逸らす素振りすら無いのは流石ですね」

光学迷彩クノイチさんが突如襲いかかってくる可能性はゼロじゃないからな。俺はできる奴なので脅威から視線を逸らすことはしないのだ。うむ。完璧な理論武装だな。

「では、私は警護に戻りますので」

ジジッ、とノイズのような音を発したかと思うと光学迷彩クノイチさんの姿がフッと掻き消える。うーん、某ゲームのように微妙に光学迷彩中の輪郭が歪んで見えるなどということはないな。全然見えん。まぁなんとなく気配でどこにいるかはわかるが。

「……見えているのですか？」

「いや、見えてないが」

クノイチさんの移動を視線で追っていると、困惑したような声が虚空から聞こえてきた。しかし気配なんていう曖昧なものを頼りに光学迷彩を見破るとかいよいよ人外じみてきたな、俺も。良いことなのか悪いことなのか……まぁ役に立つ分には良いか。

☆★☆

「ということがあってな」

「ヒロくんがぴっちりスーツにいたく感動したということはよくわかったよ」

「確かに感動はしたけどそこじゃなくてね？？？」

よほど着せ替え人形にされまくったのか、猫背になった上に目が据わっているショーコ先生に光学迷彩クノイチさんとのやり取りを少し話したのだが、妙なところを拾われてしまった。主題はそこじゃないんですよショーコ先生。

「しかしスキャンデータとプレビュー機能で色々と済むだろうに、どうしてそんなに疲れ果てているんで？」

「下着だけはそうもいかないんだよ。勿論サイズとかはスキャンで測れるけど、フィット感とか色々あるからね……あれこれと下着を着せ替えさせられてクタクタさ」

「ランジェリーショップに足を踏み入れる勇気はないが、下着着せ替え会は見てみたかった……」

「そのうち全部見ることになるさ、その時を楽しみにしておくんだね」

そう言ってショーコ先生がニンマリと笑みを浮かべる。ううむ、それは良いな。楽しみにしておこう。

「それで、他の面子は買い物続行と」

「ああ、なんかミミ君がニコニコしながら皆をオススメのお店に連れて行っていたよ」

「オススメ……なるほど」

例のロリータ系ファッションが充実しているショップに皆を連れて行ったのだろう。あの店はそれはもう種々様々なロリータ服が用意されていたからな。あそこの店員ならきっと良い仕事をしてくれるに違いない。

『エルマとティーナは逃げそうだから逃がすなよ』
『承知致しました』

小型情報端末でメイにメッセージを送っておく。即レスバックがくるのにはもう慣れた。メイは端末を操作する必要もないからな。

「それじゃあショーコ先生も一休みしたら行きましょうか。俺も一回行ったことあるところなんで」
「ヒロくんも？」
「えぇ、まぁ。前にこのコロニーに来た時にミミと一緒に。それでオススメになったわけです」
「ふぅん……？　まぁヒロくんがそう言うならそうしようか」

ショーコ先生は何か違和感を覚えているようだが、その正体まではわからないらしい。それはそうだろう、わかるわけがない。これが看破できたらそれはもうエスパーの類である。今すぐにでもクギを超えるようなテレパス能力に目覚めでもしない限りどうにもなるまい。

しかし、割と長身かつグラマラスな体型のショーコ先生にあの系統の服はどうなのだろうか？　いや、きっと似合うものがあるはずだ。ファッションというのは懐が深いものだものな。ミミもたまに着るクラシカルな感じなのとか似合うんじゃないだろうか。

「なにかスケベなことを考えてないかい？」
「まさかそんな、人聞きの悪い。というかショーコ先生の中でいつの間にか俺って凄い女好きになってませんかね？」
「違うのかい？」
「違っ……わないです」
「素直で可愛いなぁ」

ショーコ先生にクスクスと笑われる。ここで違うって言っても説得力がゼロだからなぁ。認めるしか無いのである。自分の行いは必ず自分に跳ね返ってくるんだね。悲しいね。

「まぁ、とにかくあっちの方も少しは進展があって良かったじゃないか。正体も目的もわからない相手は怖いけど、わかってしまえばそうではなくなるからね。結局、人間にとって一番恐ろしいものは『知らない』ということなわけだ」

「それはそうだな」

確かによくわからんものってのは怖いもんだ。航宙戦でも完全初見の相手ってのは何をしてくるかわからんから怖いもんだしな。そういう手合いは可及的速やかに、何もさせずに速攻で撃破するに限る。相手の腕が良い場合はなかなかそう上手くは行かないが。

「それじゃあ合流しにいくとしようか。私も少しは回復したしね」

「了解」

これで誘いに乗ってくるか、それとも罠にかけてくるか。どっちにしろ事態は一歩前に進むわけだ。用心して事に当たるとしよう。

#386　あちらとこちら（前書き）

Zero Sieverｔ始めました。
カジュアルに遊べてたーのしー（ ˘ ω˘ ）

#386　あちらとこちら

□■□

「せっかちな奴だね」

コウガサービスの連中が持ってきたあちらからの『伝言』を聞いて思わず溜息を吐く。

「臆病なのか自信家なのか……本当に行動が読みづらいね、こいつは」

「どうするんですかぁ？　ボスぅ」

「キャプテンって呼びな。さて、どうしたものかね。始末するなら大チャンスだが」

「えぇ～……？　そんなことしたらきっと恨まれますよぉ？」

「……言ってみただけだよ」

きっと私の表情は苦虫をまとめて数匹噛み潰したようなものになっているだろう。あの子が――ミミがあの男に懐いているのは疑うべくもないからね。調べてみたら戸籍上はあの男の妻になっているし、どう見てもあの男にべた惚れだ。他の女の子達とも上手く関係を築けているようだし、なにより表情が明るい。

「背後関係が不透明な点だけが気に入らないんだよねぇ……」

「それだけはどれだけ調べても出てこないんですよぉ」

この子は優秀だ。少なくとも、ハッキングやクラッキングに関しては右に出るようなのはそうそういない。少なくとも、個人レベル

では。組織や機械知性が相手だと分が悪いだろうけどね。
　そんなこの子がどれだけ調べてもあいつの前歴がはっきりわからない。まるでどこからともなくターメーン星系に――ミミの元にポンと沸いて出てきたかのようにすら思える。星系軍のデータベースにまで潜って出てきたのは『ハイパードライブの事故か何かで突然この星系の空白宙域に船と一緒に放り出されていた』なんていう眉唾の言い訳じみた証言だ。
　その後暫く船に籠もってから傭兵ギルドに登録して、傭兵として活動を開始。そしてその日のうちに現クルーであるシルバーランク傭兵のエルマと接触、そのままミミとも遭遇して船に連れ込む、と。やっぱり出来過ぎじゃないかねぇ？

「もう良くないっすか？　お孫さんは一回どん底に落ちかけたけど、強運を発揮して腕の良い傭兵に拾われることになって、ズブの素人から立派な戦闘艦オペレーターになって惚れた男と自由気ままでリッチな傭兵生活を謳歌している。ハッピーで結構なことでしょ、ボス」
「だからキャプテンって呼びなって言ってるだろ。私はまだ認めてないよ」
「もぉー、そこで意固地になっても仕方ないじゃないですかぁー。本人が幸せで一緒にいたいって思っている以上は梃子でも動かないと思いますけどぉー？」
「ボスのお孫さんですからねぇ」
「ねー」
「二人揃ってゲンコツが欲しいのかい？」

　私が拳を握りしめてみせると、二人とも蜘蛛の子を散らすように逃げていきやがった。まったく、逃げ足だけは一人前だね。
　最初にあの男と一緒にいるミミを見た時には頭に血が上ってついついぶっ殺してやると思ったけど、裏がどうであれどん底に落ちる

前のあの子を助けてくれたのには変わりないからね。時間が経って頭が冷えれば確かにうちの子達が言う通りで然程悪い状態ってわけでも無さそうなんだよね。
調べれば調べるほどあの男は善玉って情報しか出てこないしさ。
「まぁ、任せるにしても何にしてもまずはひと目会ってみないとだね。一応」

□■□

「良いねー、凄く良い。すごい。語彙が消滅くらい良いよー」
「「「……」」」

真っ白なフリルもりもりのドレスを着せられたエルマと同じくピンク系のフリルもりもりのドレスを着せられたティーナ、そして可愛さと格好良さが同居するクラシカルな装いのショーコ先生の三人がどんよりと濁った目を俺に向けてくる。

「エルマさん可愛いです！」
「お姉ちゃん可愛い！」
「ショーコ様もよくお似合いです」

俺と同じ側に立ってはしゃいでいるのは黒系のゴシックなドレスを身に着けたミミと青系のフリルもりもりドレスを着たウィスカ、そしてどこか和風な雰囲気を醸し出しつつもゴシックな雰囲気を感じさせる衣装を着たクギである。

「くっ……最初から完璧すぎて手の施しようがない……！」
「さすがはオリエント……！」
「恐れ入ります」

ちなみに店員さん達はメイを取り囲んではいるもののメイの完成されたメイド服の前に為す術もないようだ。押しがクソ強いここの店員すらも怯ませるとかオリエンド・インダストリーのメイドロイドとメイド服は凄いな。

「ホロ画像を撮って送っておこう」
「……どこに？」
「帝都のウィルローズ家」
「やめなさい」
「ガアァーッ！？」

一瞬で間合いを詰めてきたエルマにアームロックを極められた。しかし残念だったな！　俺は囮で本命はミミ――と見せかけて真の本命はメイだ。俺とミミはなんとかできてもメイだけはどうにもできまい。最初から勝負はついていたな。勝負はついているので腕を離してください！　なんでもしますから！

「ウチには似合わんて……」
「そんなことないよ！　似合ってるよ！」
「せやろか……？」
「せやせや！」

ウィスカが普段あまり見ないテンションでティーナのドレス姿を小型情報端末のカメラで撮りまくっている。ウィスカ的には大変気に入ったらしい。

「なんというか……私にはこういうのはちょっと似合わないんじゃ」
「そんなことないですよ！　格好いいです！」
「はい、よくお似合いですよ。ショーコ様は背が高いので、とても

凛々しく見えます」
「そうかなぁ……？」

ミミとクギに褒められてもなんだか納得の行かない表情をしているショーコ先生がこちらに視線を向けてきたので、極められていない方ほ手でサムズアップしておいた。ところで物凄く痛いのでそろそろ解放してくれませんかね？

「あちらから返事が来ました」

ようやくエルマが俺の腕を解放してくれたタイミングでどこかから声が聞こえてきた。これはステルスクノイチの声だな。もしかして俺がエルマのアームロックから解放されるのを待っていてくれたのだろうか。

「いてて……早かったな。内容は？」
「コロニータイムで明日の十三時にホテルのラウンジで、だそうです」
「あっちから乗り込んでくるのか……？　ふむ」

これはどういうことだろう。あんなに強烈な殺意に近い敵意を向けてきてたのに、急に宗旨変えしたのだろうか。流石にあのホテルのラウンジで、となるとあっちも下手な手は打てないだろうに。結構な高級ホテルだから武装した警備員がいるし、治安組織への通報手段なども完備しているだろう。もしかしたらセキュリティボットや暴徒鎮圧用の非致死性タレットなんかも隠されているかもしれない。

「まぁ、こっちにとって都合の悪いことはないな。可能なら承知したと伝えておいてくれ。別に伝えなくてもこっちの動きは見てそう

だから、無理はしなくても良いぞ」
「御意」
俺の言葉に返事をしたきり、ステルスクノイチは口を閉ざして離れた場所に移動していく。見えてるわけじゃないけど、気配がね。クギもそれを目で追っている辺り、やはり彼女にも気配とかそういった類のものが感じられるのだろう。
「どういうこと？　なんか知らないうちに事態が随分前に進んでるみたいじゃない」
「ああ、説明する……ファッションショーを満喫した後でな」
そう言って俺はエルマの背後に視線を向けた。エルマは訝しげな様子で俺の視線を追い、顔を引き攣らせる。背後には新しいドレスを手にジリジリと迫ってきている店員達の姿があった。
「私も良い歳だし、こういうのは良いと思うのよ」
「大丈夫、超似合ってるから」
嫌そうな顔をするエルマにサムズアップを送ってやる。
「良いじゃないか、いつも傭兵風の格好か超ラフなタンクトップとショートパンツみたいな格好ばっかなんだから。たまにはお洒落してくれよ」
「その言葉、アンタにそっくり返したいんだけど」
「俺？　男の俺が着飾っても誰得だろ」
「今度あんたを同じような目に遭わせてやるから覚悟しておきなさいね」
にっこりと恐ろしい笑みを浮かべながら店員達に引きずられてい

くエルマを見送る。
こわ……戸締まりしとこ。

#387　甘え上手な人（前書き）

寒くなってきましたねぇ（　ω　）

#387　甘え上手な人

「独断専行」
「さーせん」

楽しい楽しいファッションショーの後、セキュリティのしっかりしている高級レストランに入った俺は隣に座るエルマに頬をぐりぐりと突かれていた。地味に痛い。

「せやかて姐さん、兄さんはキャプテンやしそういうもんやない？」
「それはそうなんだけど……まぁ良いわ。別に油断しているわけでもないみたいだし」

そう言いながらエルマは短くため息を吐く。それはそうだ。あちらが話し合いに応じる姿勢を見せたからといって、それでこちらが警戒を緩めるというのはあまりにも早計というものだろう。
話し合う姿勢を見せておいて油断したところを隠し持っていたナイフでズブリ、なんてことをされたら洒落にならないからな。実際に言葉を交わしてからでないと安心などできないし、するべきではない。
なので、ランチはこういう高級レストランで取るという予定を崩さなかったのだ。これもイガセックに昨日のうちに提出しておいた行動プランの内容をそのまま踏襲している。

「何者なんでしょうね？」
「皆目見当もつかないよなぁ……」

この話は今までにも何度か話題に上がっているのだが、俺達の中

では満足の行く推論が今まで一つも出ていない。わざわざアレイン星系で網を張っていたということは、俺達がアレイン星系に滞在していたことを知る、もしくは知った人物であろうということは疑いようもないのだが。

「ターメーン星系からアレイン星系に来てシエラ星系に移動するまでの間にこんな網を張られるような恨みを買った覚えが無いんだよな……」

「ですよねぇ……」

ミミと一緒に首を傾げる。

運命の悪戯か、それとも俺達が認識できない上位存在の介入か。理由はわからないが、俺がこの世界にポンと現れたのはターメーン星系である。

ターメーン星系の空白宙域を漂うクリシュナの中で目覚めた俺は絡んできた宙賊を返り討ちにしてターメーンプライムコロニーに辿り着き、星系軍に尋問されたり、そこをセレナ大佐――当時は大尉だったが――に助けられ、エルマとミミに出会った。

そして宙賊やベレベレム連邦の侵攻軍とバチバチとやり合った後にアレイン星系へと移動。到着するなり宙賊に襲われていたイナガワテクノロジーの船を助けることになり、その縁で健康診断を受けた際にショーコ先生と出会った。

その後は昇進して対宙賊独立艦隊を任されることになったセレナ少佐（当時）と再会し、宙賊狩りの作法を指南した後、どこぞの人工生命体保護活動集団が起こしたバイオテロに遭遇。パワーアーマーで気持ちの悪い生物兵器もどきどもを蹴散らし、リゾート星系であるシエラ星系へと旅立ったわけだ。

「話を聞く限りでは勢力は三つに搾られるよねぇ。一つは言うまでもなく宙賊。つまりこの辺りとかターメーン星系を根城にしていた

連中。そしてもう一つはベレベレム連邦。そして最後にバイオテロを起こした連中だけど……」
「そういう人達がコウガサービスを利用しますかね？」
「せぇへんしできへんのやない？」
「此の身もそう思います」

ワイトもそう思います。
だって犯罪者集団、敵対国家の工作員、テロ組織だもんよ。一応でもなんでもなく、真実真っ当な会社であるコウガサービスがそんな連中に雇われるとも思えない。
イガセックだって俺がプラチナランカーで、尚且つゴールドスターを受勲した帝国の名誉子爵であるからこそ迅速にサービスを提供してくれたわけで、これでもし俺がペーペーで根無し草なブロンズランクの傭兵だったりしたら、いくら金を積んでも依頼そのものをお断りされていた可能性が高いのだから。

「こっちがイガセックを利用するなりコウガサービスを対抗としてぶつけてくることができるだけの資金力と名声がある相手、となると帝国貴族とかかねぇ？」
「うーん……現実的な判断をするとそれか高ランクの傭兵かくらいしか思い当たらないんだよなぁ」

とは言え、仮にそうだとするとここに戻ってくるかどうかもわからない俺達の姿をキャッチするためだけにこのアレインテルティウスコロニーに人員を張り付けていたということになるわけで、そんな事をするか？　という感がどうしても拭えないのだが。
「まぁ、納得いかないよねぇ。じゃあ、発想を逆転させてみたらどうかな？　このアレインテルティウスコロニーで網を張っていたのではなく、このアレインテルティウスコロニーでしか網を張ること

ができなかった、と考えるとか」
「ここでしか張れなかった、ねぇ」

エルマが眉間に皺を寄せながら考えこむ。俺も考えてみるが、何も思いつかない。

「やっぱわかんねぇな。もう良いや、美味い飯でも食って何もかも忘れよう」
「どうせ明日の昼には会えるわけやからな。兄さん、お酒は？」
「へべれけにならない程度なら良いぞ」
「やったー！」

ティーナがテーブルに据え付けられているホロディスプレイを操作して酒の吟味を始める。料理の方は最近帝都で流行り始めたという今までにない全く新しい料理とやらを人数分注文済みだ。

「何が出てくるんでしょうね。私、とても楽しみです」
「帝都で流行、ねぇ」

思い当たるものが無いこともないのだが、あれはそう簡単に再現できるものなのだろうか？　そう考えながら首を傾げていると、注文の品が運ばれてきた。それは真っ白い直方体であった。

「これは……！」
「アレだな」
「アレね」

この料理を食したことのあるミミと俺、そしてエルマが互いに目を見合わせる。見た目は本当にシンプルな料理である。何せ真っ白い直方体だ。率直に言えば光沢のある豆腐――というか牛乳寒天か

何かのように見える。

「なんやこれ？」
「シンプルな料理だね」
「おとうふでしょうか？」
「あー、これが噂のアレかぁ」

どうやらショーコ先生はこれのことを知っているらしい。というか、クギは豆腐を知っているのか。ヴェルザルス神聖帝国の食事事情がちょっと気になってきたぞ。

「ティーナ、ウィスカ、クギ……食ってみな。トブぞ」
「えっ、何それ怖……怪しい薬でも入ってるん？」
「何が飛ぶんですか？」
「記憶……ですかね」
「それは危ないのでは……？」

ティーナとウィスカがドン引きしている。
目の前のこれの名前は完全機能食という名前の料理だ。機能性と味が完全に調和した一品という触れ込みの食べ物で、前に帝都でちょっと口にする機会があったのだ。いつの間にか食べきっていて、その後暫くは完全機能食のことを考えてしまうくらい美味しかった。

「む……これは」

完全機能食をナイフで切り分け、フォークで口に運んだクギが言葉を失う。そして無言で次の一口を切り分け始めた。尻尾がブンブンと振られている辺り、やはり物凄く美味しく感じているらしい。ショーコ先生も無言でナイフとフォークを動かしている。

「俺達も食うか」
「はい」
「そうね」

固すぎず、柔らかすぎない白い直方体にナイフを入れて切り分け、フォークで口に運ぶ。次の瞬間、複雑な味と香りが口内で爆発した。うーん、これは凄い。流石に初見の時ほどのインパクトは無いが、ナイフとフォークが止まらん。単に慣れたからなのか、それとも帝都で食べたものよりも若干品質が劣るからなのかは判別できんが、それでも我を失いかけるほどに美味い。

食後、ティーナとウィスカが注文した酒を一口だけ飲んで残すという珍事が発生し、ホテルで正気に戻った後に地団駄を踏んで勿体なかったと悔しがっていた。

☆★☆

翌日。俺は弱っていた。

「流石に全員相手するのは無理だって……」

ベッドの中で呻く俺にぴったりとくっついたショーコ先生が耳元で囁いてくる。

「増強剤でも用意しようか？」
「やめてくださいしんでしまいます」

弱っている俺を他所に女性陣は皆ツヤツヤしていた気がする。ショーコ先生も。

昨晩は酔っ払ったショーコ先生の提案で酷いことになった。俺とメイ以外の全員に大なり小なりアルコールが入っていたのが良くな

ったな。お陰でごらんの有様だよ。
「裸の付き合いって大事だよねぇ」
「それは普通入浴の時に使う言葉で、断じて昨日みたいな乱痴気騒ぎのことじゃないぞ」
「嫌だったかい？」
「最高でした」
即答する俺にショーコ先生がにんまりと良い笑みを浮かべる。意外にもうちのメンバーではショーコ先生がこっち方面に一番積極的だな。
「私は家族ってものを知らないからね。人肌の温もりというやつに溺れているのだろうね」
そう言ってニヤニヤしていると今一つ本気なのか冗談で言っているのかわからんのだが……まぁ、どんな形にせよクルー同士が打ち解け合うきっかけになっているのは確かな気がするので、これはこれで良いことなのだろう。健全かどうかと言われるとちょっと言葉を濁したくなるが。
「まぁ、ショーコ先生が満足ならそれでいいや。俺も満足だし」
「Ｗｉｎ－Ｗｉｎってやつだねぇ。それじゃあそろそろ起きようか」
「ういー」
他の面子は順々にベッドから抜け出して朝風呂を終えている頃の筈だ。まだ謎の人物との会合まで時間があるが、そろそろ身支度を整えて軽く何か腹に入れておいたほうが良いだろう。
「ヒロくん、だっこ」

「えぇ……仕方ないなぁ」

両手を突き出して甘えてくるショーコ先生を抱え上げてバスルームへと向かう。腹は減ったけど、まずは身支度を整えるのが先だな。

#387　甘え上手な人（後書き）

（夜の描写は）ないです（，ω，）

#388　帝都生まれのSさん（前書き）

キリのいいとこまで書いたら遅れました（；ω；）（ゆるして

#388　帝都生まれのSさん

朝の身支度を整え、軽く朝食兼昼食を取ってからのんびりと部屋で過ごし、約束の時間になったので全員でホテルのラウンジに向かった――のだが。

「アレか……？」
「多分ね」

ラウンジの一角が若干物々しいことになっていた。ラウンジに誰か――恐らく三人ほどの客が座っており、その周りを三人のコウガサービスの警備員が守っている。何故コウガサービスの警備員なのかわかったのかというと、それはもうわかりやすく社章と社名がはっきりとプリントされている制服を着ていたからだ。

「既にお着きです」
「早いなぁ……せっかちなのかね？」
「どうでしょ――んん？　あの人、なんだか見たことがあるような……？」

既に据わっている客人達――俺に殺意を向けてきた連中を客人と呼んで良いのか……？――に視線を向けたミミが首を傾げる。ミミが視線を向けているのは三人いるうちの一人、年季の入った傭兵服を着たマダムであるようだ。

「知り合いか？」
「いえ、どうでしょう……気のせいかもしれません」

そう言いながらミミがしきりに首を傾げる。どうやら必死に思い出そうとしているようだが、うまく思い出せないらしい。

「まぁ、話してるうちに思い出すんじゃないか」

「そう、ですね……」

思案顔のミミを引っ張って会合場所まで歩を進めると、偉そうに足を組んで座っていたマダムがジロリと俺を睨めつけてきた。

「……」

「……」

間違いない。こいつだ。俺に超長距離から身震いするほどの殺気を叩きつけてきたのはこのババアだ。ミミと似たブラウンヘアに、三角眼鏡みたいな形のバイザー。年季の入った傭兵服に、腰にはレーザーガン。そして座っているソファに立てかけられている曲剣――カトラスか？

「何をぬぼーっと突っ立って見下ろしてるんだい。とっとと座りな」

「イエス、マム」

雑に敬礼を返してババアの正面に陣取る。右手にミミ、左手にはエルマ。そして背後にはメイとクギが立った。そして背後に立ったクギが俺の耳元に口を寄せて囁いてくる。

「我が君、あの方達からは思念波が殆ど漏れていません。何か対策装備をしている可能性があります」

「わかった」

整備士姉妹とショーコ先生が左手のソファに腰掛けるのを見守り

ながらクギに短く答え、正面のババアに視線を向ける。
「招待に応じていただいてどうも。キャプテン・ヒロだ」
「知ってるよ。よぉく調べさせてもらったからね。顔も見飽きたくらいさ」
「そいつは手間を掛けさせたな。直接聞いてくれれば答えられることなら答えたんだが。ところでマダムのお名前は聞かせてもらえないのか？　見たところ同業のように見えるが」

俺がそう言うと、ババアは苛立たしげな雰囲気を滲ませて僅かに歯を剥き、小さく舌打ちをした。あからさまに攻撃的というか機嫌悪いじゃん。

「何がマダムだい。ケツが痒くなりそうな気持ちの悪い言葉遣いはやめな」
「オーケー。で、俺のことはよく知ってるってんならそっちのことを教えてもらいたいね。まるっと全部とは言わん。名前と、どうして俺達を狙ったのかくらいはな」
「あんたがあたしの質問に答えるならね」
「おいおい、先に仕掛けてきておいて随分と厚かましくないか……？　まぁ良い。俺は寛大だからな。聞きたいことがあるなら言ってみろ」

最終的に向こうの目的を聞き出して、命を狙われるようなことが無くなればそれで良い。多少の譲歩はしようじゃないか。

「あんた、何者だい？」
「そりゃまた答えに窮する質問だな……？　俺のことは調べたんだろう？　傭兵ギルドのプラチナランカーで、運良くゴールドスターなんぞを受勲して帝国の名誉子爵になったしがない男だよ」

「そんな表面的な情報なんざどうでもいい。もっと本質的な話さ。あんたはどこで生まれて、どんな風に育って、どういう経緯であの船を手に入れてポンとターメーン星系に沸いて出たのかってこと聞きたいんだよ」

ババアが投げかけてきた質問の内容に思わず押し黙る。こいつは困った。随分とまたクリティカルなことを聞いてくるじゃないか、このババア。

「それは答えられない質問の範囲だなぁ。誰にだって触れられたくない過去ってもんがあるだろ？　というか、実のところ俺にもよくわからんのだよな、その辺は」

「どういうことだい？」

「どうやってターメーン星系に俺が辿り着いたのかは俺自身も知らないからだ。気がついたらジェネレーターの落ちているクリシュナ――俺の船のコックピットにいて、なんとかジェネレーターを起動したら宙賊に襲われて、なんとかかんとかそいつらを撃退してデータをサルベージして、サルベージしたデータからターメーンプライムコロニーの座標を知ったのさ。で、ターメーンプライムコロニーにたどり着いた後は星系軍の尋問を受けて、船に戻った後は俺なりにどういう状況なのかを調べたりして、それでなんもわからんかったから傭兵になったんだ。幸い、船の扱いだけは身体が覚えていたんでな」

「ターメーンプライムコロニーで出会ったばかりの頃のヒロは右も左わからないような危なっかしい状態だったの。それは私が証明するわ。まぁ、今でも一般的な常識は怪しいけど」

俺の独白を補足するようにエルマがそう言って肩を竦めて見せる。目付きの鋭いババアは訝しげに眉を顰めながら俺達の発言の内容を吟味しているようだった。

「俄には信じられない話だね。つまりプラチナランカー様はどこの馬の骨ともわからない身元不明人ってことかい？　いつから帝国ってのはあんたみたいな曖昧な存在を平然と受け容れてくれる寛大な国になったのかね」
「そんなの知らんよ。俺の知らないところでお上の意向があったのかもしれんし、単に運良く潜り込めただけなのかもしれん。経緯はどうあれ俺は何不自由なく傭兵として帝国で活動できてるってわけだ。ところでこんな話を聞いて何が面白いんだ？　あんたの目的がさっぱりわからん」
「あたしにとっては重要なことなんだよ。とはいえまだるっこしいのは確かだね。だから単刀直入に聞くよ」
「どうぞ」
「あんた、何が目的でミミに近づいたんだい？　誰の差し金だい？　誤魔化したらその首を叩き落とすよ」

ドスを効かせた声で凄んでくるババアの剣幕は大したものだったのだが、それに対する俺とミミの対応は、というと。

「……何見つめ合ってるんだい。質問に答えな！」
「いや、うーん……誰の差し金でも無いんだよ。目的って言ってもなぁ……俺とミミの出会いは完全に偶然だったし。正直、なんで助けたのかと問われると、見捨てられなかったとしか……まぁ、ミミ可愛いし」
「えへへ、運命ですね！」

ミミがにこにこしながら俺の腕に抱きついてくる。うむ。素晴らしい。何度同じ状況になっても同じように対応すると思うが、それでもよくやったぞ。あの時の俺。

「真面目に答えな」
「いや真面目だし……ミミみたいな可愛い女の子が、見るからに悪そうなチンピラどもの手によって路地裏に引きずり込まれそうになってたらそりゃちょっとくらい無茶してでも助けるでしょ。男なら」
「その場で決断して実行できるかどうかは別として、それはそうっすね」

今まで黙って話の流れを見守っていた相手方の男が頷く。

「だよな？　助けた結果お近づきになれるかも、って常識の範囲内での下心があったのは認めるよ。比率的には義憤三割、見捨てたら寝覚めが悪いのが三割、下心が四割くらいかな」
「ちょっとサバ読んでないっすか？　下心五割か六割じゃないっすか？」
「まぁうん。そうかもしれん。でも最大瞬間風速的には義憤と寝覚めの悪さがもう少しあったと思うんだよ」

そう言ってチラリとエルマに視線を向けると、彼女は気まずそうに視線を逸した。あの時エルマは私達は英雄（ヒーロー）じゃなくて傭兵なんだから、何でもかんでも首を突っ込めば良いってもんじゃないとかなんとか言ってたんだよな。まぁあの時は赤の他人だったんだから仕方ないだろうが、それはつまりミミを見捨てろと諭していたというわけで、エルマとしては気まずかろう。

「……つまり、誰かの差し金とかなにか目的があったってわけじゃなく、本当にただの偶然でミミと出会って、助けて、そのまま船に乗せたってことかい？」
「そうだよ。その時は男の船に女を乗せると慣習的にどうなのかとかそういうことも知らなくてな。助けてからミミを船に乗せるための手続きやら何やら済ませて、その後にそのことを聞いて仰天した

ぞ」
「……えへへ。なんだか懐かしいですね」
ミミが少し恥ずかしそうに頬を赤くしている。ちょっと生々しい話だものな、これは。
「というか、随分とミミのことを聞いてくるな。あんたはミミの何なんだ？」
「……何だと思う？」
質問を質問で返すんじゃねぇよクソババア！　という言葉をグッと飲み込んで思考を巡らせる。見るからに傭兵って感じの中年女性で、カトラスなんぞを持っている辺り帝国式の剣の使い手である可能性がある。隣に座ってる男女は共に若いが、どっちもやはり傭兵っぽい雰囲気を感じる。
ミミを個人的に知っていて、心配する傭兵の女性――となると思い当たる可能性は一つくらいしか俺にはないが。ええ？　マジで？
若くない？　いや、皇族ともなれば身体強化やアンチエイジングに関しては生まれた瞬間から最高級のものを施されている可能性が高いし、噂に聞いたような活躍をしていたなら金だって余るほどあるだろうから、最新技術を使ったその手の手術をいくらでも受けられるか。なら、中年くらいに見えるこの女がそうである可能性は低くはないわけだ。
「ちょっと直接名前を言うのは憚られるなぁ。もしかして帝国で大人気の冒険活劇の主人公として有名なSさんだったりする？」
「どうしてそうなるんだい？」
「ゴールドスター受勲の時に帝都に行くことがあってな。その時色々大変だったんだよ。有名なSさんの兄君にそれはもうウザ絡みされてな。その切っ掛けがミミだったわけだ」

「あの人の差し金かと疑ってたんだけどね、あたしは」
「違うね。できればあまり関わりたくないぞ、あの人には。だから帝都に近寄らないように……そうか、そういうことか。だからここで網を張ってたんだな？」

ショーコ先生の言っていた発想を逆転した時の答えがこれだ。俺と同じだったんだ。
アレイン星系に網を張っていたのではなく、アレイン星系くらいまでしか網を張れなかったんだな。帝国領土内の奥深くに踏み込んで皇帝陛下に見つかるのを嫌ったわけだ。

「そういうことさね。ここは仕事にゃ事欠かないし、辺境に属する割にエッジテックにも触れられる。待つには悪くない場所だったよ」

そう言ってクソババアはバイザーを外し、ミミに視線を向けた。こうして見ると顔のパーツのいたるところにミミの面影があるな。いや、本来は逆か。ミミの方に彼女の面影が濃いんだ。

「面と向かって会うのは十年以上ぶりだね、ミミ。あたしはセレスティア。あんたの祖母だよ」

そう言って俺に殺意を向けてきたクソババアことセレスティア様はニヤリと口の端を持ち上げてみせた。こいつは癖の強そうな祖母さんだなぁ。

#389　やっぱお前ら兄妹だな！（前書き）

天気が悪くて頭痛がペインだったりぽんぽんぺいんだったりしたけど頑張った（ ，ω， ）

#389　やっぱお前ら兄妹だな！

「あたしのことを説明する必要は……無さそうだね」
「ああ。ここに熱心なファンがいｒぐふぉっ！？」

過去最高の速さで繰り出されたエルマの肘打ちが俺の肋にクリーンヒットした。洒落にならないくらい痛い。これ、肋骨にヒビとか入ってないだろうな？

「お、俺はそんなに詳しくはないが、あんたがもともとどういう立場の人なのかは知ってるよ。ミミもな。もっとも、ミミがそれを知ったのは俺と一緒に帝都に行った時なんだが」

ミミはというと、複雑な表情をセレスティアばあさんに向けていた。

「思い出しました。小さい頃に一回だけ会ったことがありましたね。あの時は遠い親戚のおばさんだって言ってたと思うんですけど」
「見ての通り年齢相応の見た目じゃないんだよ、あたしは。だから小さい頃のミミにはそう伝えたのさ。フォルトの人生にあまり干渉するつもりもなかったしね」

フォルトというのは確かミミのお父さんの名前だった筈だ。たまにミミが昔の思い出話をしてくれることがあるんだが、その時に聞いた覚えがある。
え？　いつそんな話をって？　そりゃベッドの中でだよ。致した後にお互いの昔の思い出話をすることがあるのさ。

「この先の話はプライバシーに関わると思うが、このまま話すか？」
「あたしは帝国の外に出るからどうでもいいけどね。まぁアンタ達が動きにくくなるだろうし……アンタ達の部屋は？」
「あそこなら心配は要らないだろうが……」

互いの警備をしているイガセックとコウガサービスの連中をどうするかと、後そもそも宿泊客じゃないこの三人を俺達の部屋に入れて良いのかという問題がある。

「メイ、フロントに確認を取ってくれ」
「はい、ご主人様」

メイに指示を出しつつ、俺はイガセックのオオタを呼ぶ。

「ということで、ちょっと内緒話をしたいんだが」
「私どもの警備を下がらせた状態で何かあっても責任は持てませんよ」
「それは追求する気無いから大丈夫だ。もう敵意も無さそうだしな……油断はできんが」

そもそもどうしてセレスティアが俺に敵意を向けてきたのかまだわかってないからな。ただ、その話をするのに他の目と耳が邪魔になるというなら、ここは虎口に飛び込むしかあるまい。
まぁ、見たところ白兵戦能力に長けてそうなのはセレスティアだけだ。メイもエルマもいるし、もし暴力沙汰になっても然程分が悪いわけでもないだろう。
少し時間がかかったが双方とホテル側の承諾が取れたので、警備の人員をラウンジに残したまま全員で連れ立って俺達が取っている部屋へと向かう。

「フン、貴族用の部屋ってのは変わらないね」
「だだ、大丈夫なんですかぁ？　す、すごい高そうな……」
「はー、良い部屋っすねぇ。俺もいつかこんな部屋で女の子とお泊りしてみたいなぁ」

エレベーターから降りるなり、セレスティアと彼女のクルー達が口々に感想らしきものを漏らす。なんというかセレスティアさんとこのクルーは庶民派なんだな。そういう教育方針なのかね？

「適当に座ってくれ。メイ、飲み物の用意を」
「はい、ご主人様」

各々リビングのソファや椅子に適当に腰掛け、人心地ついたところで話を切り出す。

「で、どこまで話したっけ？」
「謎の監視者がミミのお祖母さんだったってところまでよ」
「ああ、そうだった。んで、俺の素性をしつこく聞いてきたのはアレか。ミミの血筋に目をつけて近づいたんじゃないかと疑われていたってわけだな」

ミミの血筋について話すには、まずその祖母であるセレスティアについて話す必要がある……とは言っても事情は然程複雑ではない。ミミの祖母であるセレスティアは大昔にグラッカン帝国の帝室から出奔したお転婆娘で、その兄が現皇帝であるというだけの話だ。
セレスティアばあさんはあのファッキン皇帝陛下の妹で、ミミはその孫である。つまり、ミミは皇帝陛下の姪孫にあたることになる。ギリギリ皇家の血族を名乗れる身分であるということだな。

「なるほどねぇ……私もルシアーダ王女殿下をホロ映像で見たこと

はあるけど、確かにミミくんと瓜二つだったね。皇太子殿下の隠し子なんじゃないか、みたいな話もあったけど、そういうことだったのか」

うちのクルーの中で一番の新顔であるショーコ先生に説明する意図も兼ねてまずは情報共有をする。セレスティアばあさんが特に否定する様子もないので、やはりこの情報自体は確度が高いというか、確定情報で良さそうだ。まぁ、帝都でゲノム解析をした時にほぼ確定していたわけなんだが。

「で、話を戻すんだがなんで俺はあんな強烈な殺意を向けられたんだ？　絶対にぶっ殺すという強い意志を感じたんだが」

「三年ぶりにフォルト達の様子を見に来たら、フォルト達は事故死。ミミは行方不明。情報を集めてみたらどうやっても情報を洗い出せない胡散臭い傭兵がミミを連れ去ったことがわかって、しかも帝都で活躍して皇帝の覚えもめでたいときた。ミミを利用して皇帝に取り入ったクソ野郎かと思ってたんだよ」

「……まぁ、傭兵ギルドの情報じゃ人となりはわからんもんな。俺自身、別に聖人君子でもなんでもないし」

そういう貴族的な、とでも言えば良いのか。栄達目的でミミを保護したと思われるのは微妙にイラつくが、そんなのは当人達にしかわからないものだしな。ましてや、俺の出自はいくら洗ってもターメーン星系以前のものは出て来ない。セレスティアばあさんからしてみれば、そういう痕跡を完璧に消せる立場――つまり帝国の高位貴族だとか、それこそ皇帝陛下の息がかかった人間がミミの両親を謀殺して、路頭に迷いかけたミミを『保護』したんじゃないかと疑うのも無理はないかもしれない。

「あと、単純にイラついててね。ケチなクソ野郎がフォルトとマイ

ナを嵌めて、ミミを泣かせたっていうのに肝心のクソ野郎はあたしが手を下すまでもなく綺麗さっぱり始末されてたからさ。怒りの向けどころがアンタくらいしかいなかったんだよ」
「それでこの大騒ぎかよ。勘弁してくれ……」

マイナというのはミミのお母さんの名前だ。フォルトさんを主体に話すってことは、ゲノム解析の情報通りミミのお父さんがセレスティアばあさんの息子だったんだな。

「あんたが敏感過ぎるから話が大きくなったのさ。普通はあの距離で殺気に気づかないよ」
「俺が悪いんか……？」

釈然としねぇ、と憮然とした表情を作っていたら、ミミが口を開いた。

「あの……セレスティア、さま」
「なんだい？　自分の孫に様付けで呼ばれる筋合いはないよ」
「はい。その……どうして？」

困惑や不安、そして僅かな怒り。そんな複雑な感情を込めた視線をセレスティアばあさんに向けて放たれた『どうして？』という言葉はばあさんにとってどんな重みを有していたのか。

「どうして、ね。一言で言えばフォルトは一人前の男で、あたしはそれを尊重してた。それだけの話さね。そして、フォルトはツイてなかった。マイナも、あんたもね」
「ツイてなかった、ですか……」
「そう、ツイてなかったのさ。あたしもね。フォルトとマイナが死ぬ前に私があのコロニーに行っていれば、そうでなくともせめて二

人が死んだ後すぐにでもあのコロニーに行っていれば、あんたに苦労をさせるようなことはなかったんだろうけどね……残念ながら、その時あたしは国を三つ跨いだ数千光年も離れた場所にいたんだよ。あたしのところに二人の訃報が届いたのは一ヶ月くらい前の話さ」

そう言ってセレスティアばあさんが肩を竦める。それだけ離れていても訃報が届くってことは、何か変事があった際に連絡が行くような仕組みそのものはあったのかね。ばあさんの立場上あまり大っぴらに帝国で活動はできないし、ミミのお父さんであるフォルトさんも何か理由があってばあさんの庇護下から離れてターメーンプライムコロニーに腰を落ち着けていたんだろうし……そう考えると、セレスティアばあさんの言っているツイてなかったのは的を射た表現なんだろうな。

「そう、ですか」
「そうさ。世界ってのはそんなもんだ。残念ながらね。こんな時、残された側ができることは多くない。始末をつけることと、落とし前をつけることくらいだね」
「始末と、落とし前」
「始末ってのは残したもの、残されたものを受け止めるってこと。落とし前をつけるってのはまぁ、つまり復讐、仇討ちだね」
「急にバイオレンスな話になってきたぞ」

揶揄したらばあさんに睨まれた。俺は別に怖くはないが、迫力はあるな。

「尤も、落とし前に関しては皇帝陛下がつけてくれたみたいだけどね。ターメーンプライムコロニーではあたし達が足を踏み入れる前に厳正な綱紀粛正が成されたようでね。フォルト達を嵌めたクソも含めて結構な数の役人やら何やらが監獄コロニーに送られたり、処

罰されたりしたらしいよ。あの辺りを治めている伯爵から星系の統治を任されていた男爵も相当締め上げられて領主の座を取り上げられたようだね。コロニーの治安も大分良くなってたみたいだよ」
「……職権というか、権力の濫用じゃね？」
「皇帝陛下のやることだからね。誰も文句なんかつけられないさ」

ばあさんが肩を竦める。まぁ、それもそうか。実際に何も問題がなければいくら綱紀粛正と言っても何も起こらないわけだし、それで処分されたり監獄送りにされたりする奴が出たと言うなら、何か法に触れるようなことがあったのだろう。
実際、あのスラムっぽい区画――第三区画とかいったか？――の治安はお世辞にも良いものとはいえなかったし。それだけ真っ当な職に就いていない『浮いている』人々がいたということでもあるのだろうし、統治者が詰められて更迭されるのも自然といえば自然か。あそこ、国境だしな。

「で、そういうのを確認して足取りを追ってこのコロニーで網を張っていたら、あんた達がのこのこと姿を現したってわけさ」
「そして皇帝陛下に先を越されて振り上げた拳の振り下ろしどころがないところにお孫さんとイチャオチャしてるヒロさんが現れたってわけっす」
「ただの八つ当たりじゃねぇか！？」
「だからあん時はイラついてたって言っただろ？　あたしとしてはあんたのお手並みがそれなりに拝見できて満足さね」

そう言ってクソババアはニヤリと笑い、メイが用意したお茶を優雅に啜った。
このクソババア、やっぱあのファッキンエンペラーの妹だな！

#３９０　参考にならないって言われても困る（前書き）

急に寒くなって捗らない……気圧のせいだきっと―（：３」∠）―

#３９０　参考にならないって言われても困る

「どっと疲れたわ」

かなり神経を使って襲撃者対策を考えたというのに、実は相手はミミのお祖母さんで、ちょっとした嫌がらせをしてくれてやがっただけでした、とかもうね。

俺はソファに深く身体を沈めて脱力しながらミミやエルマ、それに整備士姉妹に囲まれて話をするファッキンババアを眺めていた。ショーコ先生は話が落ち着いたということで一人少し離れたところでタブレット型端末を使って何か作業をしている。実にマイペースな人だな。

「我が君、尻尾をどうぞ」

「あぁ～……癒やされるわー」

隣に座ったクギのもふもふ尻尾が俺の手を撫でる。モフモフ加減も素晴らしいんだけど、いい匂いがするんだよなぁ、クギの尻尾は。永遠に吸引していたい。

ああ、イガとコウガのニンジャの皆様には連絡をして最低限の人員だけ残して解散してもらっている。もうお互いに和解というかなんというか、荒事になることはないということでな。

「ご主人様、肩をお揉みします」

「さんきゅー……あー、そこそこ。効くわー」

「……俺、絶対ビッグになるっす」

「あそこまでは無理じゃないです～？」

そんな俺をババアのお供の若い男女が眺めていた。そういやこいつらの名前とか聞いてなかったな。

「すまんな。ストレスから急に解放されたもんで。そういや名前を聞いてなかったと思うが」

「あ、俺はニコラスっす。セレスさんに拾われてメカ弄りとか使いっ走りやってるっす」

「私はラティスですぅ。同じくセレスさんに拾われてオペレーターやってまぁす」

ニコラスにラティスね。見たところ両方とも普通の人間っぽいな。ニコラスは若干ひょろい感じでソフトモヒカンな傭兵風の男、ラティスはおっとりとした雰囲気の女性だ。おっぱいは普通。顔つきは地味めだけど整ってるかな。二人とも特に身体を鍛えている感じはしないし、白兵戦能力が高そうな感じではないな。

「めっちゃ品定めされたっす」

「視線が露骨ですよぉ？」

「職業病みたいなもんってことで一つ。メカニックとオペレーターとなると俺の眼じゃどうにも実力を測りにくいね」

「あー、まぁ俺は多分そこそこっすよ。ラティスの方は凄いっすけど」

「それほどでもぉ。そこのメイドロイドさんには敵わないと思いますしぃ」

「個人の能力でメイに勝てる人間はもう人間の枠組みを超えていると思うぞ……俺でも航宙戦以外ではメイに勝てる気はしないし」

実はシミュレーターでメイと同じ機体を使ったミラーマッチを何度かしたことがある。正に機械といった感じの正確無比な操艦をしてくるんだが、それ故に行動が読みやすいんだよな。必ず最善手を

打ってくるから、それに対処すれば勝つのは意外と難しくない。
「えぇ……？　そのメイさんって、小型陽電子頭脳を搭載したフルスペックの機械知性ですよねぇ？」
「そうだが？」
何故かドン引きしている様子のラティスに答える。
「その本気に勝てるんですかぁ？　シミュレーターの航宙戦でぇ……？」
「今のところ十二戦全勝だ」
「はい。十二戦全敗です」
「うそぉ……？」
ラティスに完全にドン引きされた。どうしてだよ。
「そんなに凄いんすか？」
「機械知性相手に数で圧倒するわけでもなく、一対一のミラーマッチで勝つのは極まった変態さんですねぇ……例えるなら毎回パターンを変えてくる鬼畜難易度のクソゲーをノーミスで一発クリアしているようなものですよぉ？」
「えぇ……何すかそれ、想像つかないんすけど。ゴールドランク用のテストプログラムとどっちが難しいんすかね？」
「ああ、メイのほうがずっと歯ごたえがあるな。アレはヌル過ぎるわ」
こっちに来てすぐ、傭兵ギルドに登録した時に実力を見るとか言ってやらされたな。ヌルすぎてあくびが出そうな内容だった覚えがある。

「よくわかったっす。極まった変態なんすね」
「極まった変態さんですねぇ」
「女の子に言われるのはともかく、野郎に言われるのは腹が立つな」
女の子に変態さんって言われるとちょっと興奮する。しない？
そう……？　いや待て、クギとメイはなるほどみたいな顔をするんじゃない。別にそういうプレイがしたいわけじゃないから。
「兄貴、どうやったら兄貴みたいに沢山の女の子とイチャイチャできるようになるんすか」
「誰が兄貴か。しかし、どうやったら、ねぇ……運とタイミング？」
「参考にならないっす！」
真顔で聞いてきたニコラスに俺なりに真摯に答えたのだが、どうやらお気に召さなかったらしい。
「俺だって狙ってこうなったわけじゃないからわかんないよ。ただ、思い切りとか一歩踏み出す勇気とかは要るんじゃないか？　ミミとの出会いはなんとなくさっき話したよな？」
「聞いたっすね」
「無垢な少女がピンチのところを傭兵に助けられて、船に連れ込まれて無理矢理……でも最終的に相思相愛になっちゃうとか、ホロ小説にありそうな展開でしたねぇ」
「無理矢理じゃないからね？　連れ込んだ後にびっくりさせられたのは俺だからね？　まぁミミの件はそれこそ今行ったように思い切りと一歩踏み出す勇気ってやつだったわけだ。で、エルマに関しては……やっぱトラブってピンチだったところを助けた」
「どうやったらあんな可愛い子とか美人さんのピンチにそんなに遭遇するんすか」
「あー、運？」

「参考にならないっす！」

それこそクギが言う俺の運命操作能力とやらが関わっていそうな気がするんだが、俺自身には何もしている自覚がないんだよなぁ。だからもう運と言わざるをえない。

「まぁエルマを助けるのも手持ちの金をほぼ全部擲つ必要があったからな。これも思い切りだよな」

「あとは経済力、ですねぇ？」

「やっぱ世の中金なんすね」

「世の中金で何とかできることが多いのは一つの真理だろうな」

金で全てが解決するってわけではないけどな。相手が金やモノに興味を持っていなければなんともならないわけだし。

「俺の運が普通の人と違うのは自覚しているけど、良いことばっかりじゃないからな？　何かとトラブルに巻き込まれやすいんだよ、本当に……本当に」

「一瞬で目が濁ったっすね」

「軍の将校に目をつけられて部下にならないかと付け回さるわ、宙賊の基地をぶっ壊してコロニーに戻ったら訳のわからん化け物どもがコロニー内で繁殖して阿鼻叫喚の地獄絵図になっているわ、帝国貴族のゴタゴタに巻き込まれて斬りかかられるわ、件の将校に付き合わされて生身でテラフォーミング中の惑星に降下することになった上に、体長十数メートルはある生物兵器と戦う羽目になるわ……オラ羨ましいだろ、代わるか？」

「絶対に嫌っす。命がいくつあっても足りないっす」

ニコラスに真顔で断られた。ですよね。俺だって逆の立場なら断るわ。

「結晶生命体の群れに単艦で突撃した件もありますが」
「あれは別に危なくなかったし」
「ちょっと何言ってるかわかんないっすね」
「さすがにクレイジーと呼ばれるだけはありますね」
「それ久しぶりに聞いたけどシンプルに悪口だと思わんか？」

ふわふわと動くクギの尻尾を捕まえてモフりながらラティスにジト目を向けてやる。おい、目を逸らすな。目を逸らすってことはお前もそう思ってるってことだな？

「あーっと、その、そっちのクギ、さん？　とはどういう……？」
「強引な話題転換だな……クギとはー……えーと、なんと言ったら良いんだろうな？」
「運命です」
「だそうだ」
「またもや何の参考にもならないっすね。じゃああっちのドワーフのお二人とは？」
「整備を頼んだ船の様子を見に行ったら姉がぶん投げた妹が俺に直撃した」
「はい？　もう一回言ってもらって良いすか？」
「整備を頼んだ船の様子を見に行ったら姉がぶん投げた妹が俺に直撃したんだ。それでなんやかんやあってシップメーカーからの派遣扱いでうちのメカニックになった」
「なんやかんや、ですかぁ」
「姉妹の名誉のためにも詳細は言えないが、色々あったんだよ……で、その後は金だな」
「金っすか」
「やり手の船のメカニックって儲かるだろ？」
「そうなんすかね？　まぁ、確かに会社勤めとは比べ物にならない

かもっすね。月給５０００も行かないって話っすからね」

自分がそうだから、傭兵の船で働くメカニックの稼ぎについてはそれなりに把握しているよな。

こいつらの船の設備がどの程度のものかはわからないが、ブラックロータスの格納庫ほどの設備は無いとしても、最低限の道具さえ揃えてあれば宙賊艦から装備を引っ剥がして整備して売るだけでも相当な稼ぎになるからな。メカニックがいるかいないかで傭兵の収入は結構変わるもんだ。

「勿論金だけじゃないけどな。結局は運と相性だと思うよ」

「そっすか……」

すまんな、有用なアドバイスができそうになくて。でも、何にせよまずは身近な人を大切にすると良いと思うぞ。俺は。野暮になりそうだから何も言わないけど。

#391　一難去って（前書き）

さむい……はかどらない……―（：3」∠）―

#391　一難去って

「それじゃあね、ミミ。あいつに泣かされたらすぐに私に連絡するんだよ。ぐぅの音も出ないくらいにとっちめてやるからね」
「あはは……大丈夫ですよ。ヒロ様は優しいですから」
「フン……本当は連れていきたいんだけどね」

ジロリと睨めつけてくるセレスティアにとっとと帰れという意思を込めてシッシと手を払ってやる。
ミミを中心としたうちのクルー達とひとしきり話をして満足したのか、ババアが帰るというのでこうしてホテルのロビーまで見送りに来たのだ。わざわざ見送りに来たんだから穏便にとっとと帰ってくれませんかね？　という俺の思いが伝わったのか、セレスティアが出入り口へと向かって――。

「ああ、そうだ」

――帰り際に何かを思い出したのか、立ち止まって俺に振り返った。
「あたし達以外にもあんた達をコソコソと嗅ぎ回ってる鼠がいるよ。身の回りには気をつけな」
「えぇ……？　もう勘弁してくれよ」

厄介事が全部終わったと思ったら二重底でしたとか笑えん。

「このコロニーってそんなに治安悪かったっけ？」
「一応セキュリティレベルはクリーンの筈なんだけどねぇ……」

この情報にはショーコ先生も苦笑いだ。いや苦笑いで済む話じゃないんだがね。何にせよどこのどいつが何の目的で嗅ぎ回っているのかは突き止めて対処しなければならんな。

コロニーに長期滞在するって時に船を使えないとなると途端にこれだもんなぁ。船に滞在するなら外に出る時だけ気をつけて船で過ごす時は最悪の場合低出力でシールドでも張っておけばそれで安心なんだけど。万一船に侵入されても、ブラックロータスなら戦闘ボット達もいるし。

「まぁ、対応は変わらんか……どうせブラックロータスの改修完了まではイガセックに守ってもらうことになってるし、このホテルも値段相応にセキュリティはしっかりしてるだろうから」

「呑気だねぇ……自分で調べ上げて締め上げるくらいのことはしなよ」

「血に飢えたバーサーカーじゃあるまいし、そこまでやるかっての。俺は暇人じゃないんだ」

「女を周りに侍らせてよろしくやりたいだけだろう？」

「火事場に突っ込んでいくよりもその方が遥かに建設的だろう、常識的に考えて。トラブルには困ってないんでね。降りかかる火の粉を払うくらいの心持ちでいるのが一番なんだよ」

ただでさえ厄介事を引き寄せやすい体質だってのに、更に自分から首を突っ込んでいくとか絶対に御免だね。今までだって大体は巻き込まれてるからね、俺。自分から首を突っ込んだことは……無くもないか？　深く考えるのはよそう。うん。

「軟弱だねぇ……ミミ、ほんとにこいつでいいのかい？　この様子だとまだ増えるよ？」

「大丈夫です。皆で仲良くしますから！」

「だってさ。少しくらいなら良いけど、ガチで泣かすんじゃないよ。

タマもぎ取ってレーザーガンで炙られたくなければね」
「恐ろしいことを言うババアだなお前は……そうならないようにこれからも細心の注意を払っていくよ」
「フン……二人とも、行くよ」
「ういっす。またいつかっす、兄貴」
「ばいばぁい」

ニコラスが軽く頭を下げ、ラティスが手をひらひらと振ってからセレスティアと共に去っていく。またいつか会うことになるのかね？　なりそうな気がするなぁ。あの婆さん、ファッキンエンペラーと同類の上に、奴よりも自由でフットワークが軽いときてるからな。絶対に何か厄介事を持ってくるに違いない。

☆★☆

「いやぁ、結局何事もなく平穏に終わってよかったなぁ」
「平穏に終わってないんだよなぁ……」

セレスティアが帰るなりラフな格好になって酒を手にしているティーナにツッコミを入れておく。というか皆さん揃ってラフな格好になってるじゃん。

「今日はもう部屋でゆっくりする方向になったのか？」
「まだなんか嗅ぎ回られてるかもしれないってのがわかってるのに、敢えて外に出る必要もないでしょ」

そう言いながらエルマがソフトドリンクのボトルを手渡してくる。確かにそれはそう。引きこもってトラブルが避けられるならずっと引き籠もっていれば良いんだよな。幸い、普段過ごしている環境が環境だけに俺達はずっと部屋に引き籠もっているのは苦にならない

し。まぁ、それはこの世界のコロニーなど宇宙空間に住まう人達全般に言えることなのだが。

「せやせや。酒でも飲みながらホロムービーでも見てればええねん」
「のんびりするのも大事だと思いますよ、お兄さん。気を張ってばかりだと疲れちゃいますから」
「なんか思う存分酒を飲むために丸め込まれてる気がするんだが？」
「気のせいよ、気のせい」

エルマが半ば強引に俺をソファに座らせ、自分自身も俺の隣に腰を落ち着かせる。反対側にはウィスカが、そして膝の上にはティーナが座ってきた。なんてことだ、飲兵衛に包囲されてしまったぞ。

「お姉ちゃん、あとで交代だよ」
「うぃー、覚えてたらなー」
「もー」

ウィスカとティーナがじゃれあいを始める。見た目だけなら子供がじゃれあっているように見えるんだが、二人とも立派な成人女性な上に片手に酒を持ってるんだよなぁ。じゃれあうのは良いけど零すなよ、お前ら。

「クーちゃん！　遊びましょう！」
「はい、ミミさん」

最近、ミミはクギのことをクーちゃんと呼ぶようになった。順調に距離が縮まっているようで何よりである。二人でタブレット型端末を持ち出しているので、タブレット型端末を使った対戦ゲームか何かをするのかもしれない。

「お、これおもろそうやん」
「なんだこれ」
「深夜のファストフード店で店内を徘徊する人食いマスコットロボットをバイトがモニターで監視する映画らしいで」
「ジャンルは一応ホラーなのか……？」
「そんなマスコットとっとと解体しなさいよ」
「姐さん、身も蓋もなさ過ぎや」
「普通の企業がそんなマスコットロボット作るわけないし、三流のモグリが作ったマスコットロボなんだろうね。出処は宙賊とかかも？」

ウィスカがホロディスプレイに表示されているあらすじとプレビュー画像を見ながら謎の考察をしている。ウィスカの推理を採用したらホロムービーの内容が違法ロボ摘発二十四時みたいになりそうなんだが。

まぁ、折角金を払ったんだし、俺達はのんびりしながらイガセックにあくせく働いてもらうってのも一興か。しかし、またしても相手に心当たりがないな……他に考えられるのはショーコ先生の出自絡みくらいだが、昔の話だしなぁ。一体何が出てくるやら。

#392　待ち伏せ（前書き）

どうも気に入らず久々に書いては消して書いては消してをしてしまった（‘ω’）

#392　待ち伏せ

部屋でのんびりしながら過ごすこと数日。引き籠もっている成果か、この数日間は特にこれといった事件も無かった。俺達に対するイガセックの護衛は最低限にしてもらい、その鼠とやらの情報を探ってもらっていたのだが。

「人造生物解放同盟の残党、ねぇ……？」
「はい。まぁ、小物ですね」

ブラックロータスの改修完了が二日後に迫るその日、昼前に俺達の部屋を訪ねてきたイガセックのオオタが報告にやってきた。オオタの話によると、鼠を探し始めたその翌日に怪しい動きをする人物を発見していたらしい。

その後、あの手この手――詳細は教えてもらえなかった――を使ってその人物を調べ上げて追跡し、背後関係を洗っていたという。それで昨晩、遂にその背後関係から団体のアジトまでまるっと全て調べ上げたということで、今日こうして俺のところに報告しに来たというわけだ。

ちなみに、今日も全身義体化マンのキラムが彼と一緒に部屋に訪れている。相変わらずビジネススーツがピッチピチだな。

「それで、対応をどうしようかと」
「どうするって言っても、そいつらってアレだよな。前にこのコロニーでバイオテロを起こしたテロ集団だよな」

例の白い化け物がこのコロニーで大暴れした事件の黒幕がそんな名前の組織だった覚えがある。

「そうですね。テロ組織として構成員は手配されてます」
「なら官憲に通報してしょっ引いてもらうのが良いんじゃね？　いくら俺が傭兵でも依頼でもなんでもなしにそういう奴らのところにカチコミとかしないぞ」
「せやろか？」
「そうでしょうか？」
「そうだよ」

整備士姉妹が揃って首を傾げているが、俺は断言しておく。まぁ、身内が拐われたとかなら話は別だが、今回はそういうわけでもないし。宙賊が相手ならともかく、一応相手はカタギ……ってわけでもないのか？　テロ集団なわけだし、連中も同じ穴の狢といえばそうなのかね。

「ではそのように手配します」
「そうしてくれ」

ひらひらと手を振ってオオタ達を見送る。やれやれ、これで一件落着かね？

「それにしてもなんでそんな連中に監視されたんかね？　あの時にパワーアーマーで暴れたのが恨みを買ったんかな？」
「うーん、どうだろうね。それなら私があの時に作った駆除用ナノマシンの方が可能性がありそうだけど。ああ、もしかしたら私がデザイナーベイビーだということが漏れていたのかな？」
「そんなことある？」
「絶対に無いとは言えないねぇ。社内にも知っている人は結構いたし」

それで人造生物『解放』同盟の皆様がショーコ先生をお迎えしようとタイミングを窺っていたと？
というか、そもそも解放って何から解放するんですかね。奴らに解放されるまでもなく、ショーコ先生は既に何にも束縛されていないと思うんだが。

「まぁ、いいじゃない。あとはコロニーの治安維持部隊とか星系軍に任せておけば良いでしょ」
「それもそうだな。何にせよブラックロータスの改修が終わるまではこの部屋で缶詰だ」

エルマの発言に同意して頷いたのだが、そんな俺にミミとクギが視線を向けてきた。なんだろうか？

「あの……もう外に出ても大丈夫なんじゃ？」
「イガセックから治安機関に情報が渡っても即座に治安機関が動くわけじゃないだろうからな。少なくとも、例の集団が検挙されたって情報が出てくるまでは用心したほうが良い」
「そうですか……残念です」

クギがぺたんと頭の上の狐耳を伏せて残念がる。そんな姿を見せられると心が痛いのだが、流石になぁ……ああいった連中は理屈が通用しないというか、何をやらかすかわかったもんじゃないからな。ある意味でセレスティアばあさんに狙われるよりも厄介な気がしてならない。
決してクギが外に出たがっている理由が培養肉の工場見学だからとかそういう理由で却下しているわけじゃないからな。本当だぞ。
「ブラックロータスの改修も二日後には終わるわけだし、そうすればこんな窮屈な生活ともおさらばさ。それまでの辛抱だ」

「はい、我が君」

クギがぺたんとなっていた獣耳をピンと伸ばして頷く。なんだかその目が「そうしたらお肉の工場に連れて行ってくださるのですね」と雄弁に物語っているようで辛い。そんなキラキラとした瞳を俺に向けないでくれ。連れて行った後にどれだけその目が澱んでしまうのかということを考えると心が痛い。

☆★☆

警戒したような波乱もなく、遂にブラックロータスの改修が完了した。

例のテロ集団？　それなら何の問題もなく検挙されたよ。今回の一件で一人残らず掃討されたのかどうかまではわからないけど、昨晩コロニー内のニュースチャンネルで大体的に報道されていたからな。

で、チェックアウトするために全員でロビーに降りてきたわけだが。

「待ちくたびれたよ。早くしな」

「どうして……」

そこにはセレスティアばあさんが待ち構えていた。当然のようにニコラスとラティスも一緒だ。

「これまでの経緯もあんたの実績も把握はしたけどね。あたしはあんたの実力をこの目で見たわけじゃないからね」

「……つまり？」

「傭兵が腕を証明する方法なんて決まってるだろ？　仕事だよ」

そう言ってババアはニヤリと笑みを浮かべて見せた。あー、見覚えある。その笑い方見覚えがあるぞ。お前ら本当に兄妹だなクソが。

俺は心の中でそう罵りながらロビーの高い天井を見上げるのだった。

#393　仕事（前書き）

エンジンかかるのが遅いマン（ ˘ω˘ ）

#393　仕事

「凄い内装っすね」
「客船みたいですねぇ」

ニコラスとラティスがお決まりの反応を見せながらブラックロータースの内装を眺めている中、面白く無さそうなツラを晒しているババアが一匹。

「ふん、軟弱だね。傭兵ならもっと傭兵らしい内装にしな」
「金があるのにハードボイルドを気取ってわざわざ利便性の低い内装にするのは間抜けのすることだと思うんだよね、俺は」

というかその物言い、もしやオメーが帝国の傭兵が『傭兵らしい』内装とか振る舞いに拘りを持っている原因だったりしません？　だとしたら中々に罪深いと思うんだが。

「いちいち突っかかってくるじゃないか？」
「先に内装にケチつけて突っかかってきてるのはそっちなんだよなぁ……まぁ不毛だし、この話はこれくらいにして仕事の話をしようか」

そう言いながらセレスティアばあさん御一行を休憩スペースに案内する。

「我が君、お飲み物を用意してきますね」
「ああ、ありがとう」

しずしずと去っていくクギの後ろ姿に目をやってから、セレスティアばあさんが胡散臭そうな視線を俺に向けてくる。

「あの子、神聖帝国の子だろ？　なんであんたに付き従っているんだい。しかも我が君ってのは」

「その辺の事情は話すと長くなるし、若干センシティブだからノーコメントで。実際のところ、クギに関しては俺達も正確に事情を把握しているとは言い難いところがあってな」

「よくそんなのを船に乗せるね……好みだからかい？」

「それもあるのは事実だけど、そうしないと彼女の立場が危ういことになりそうって話だったんでな……」

「女にあまっちょろい奴だねぇ……ミミは苦労しそうだ」

「ほっとけ。とりあえず適当に座ってくれ」

休憩スペースに設置されているホロディスプレイ内蔵のテーブル席をセレスティアばあさん御一行に勧め、俺も同じく席に着く。俺の他に席に着くのはエルマと食堂に飲み物を用意しに行っているクギだけだ。ミミやメイ、それに整備士姉妹やショーコ先生は今回改修を行なった区画のチェック作業をしてもらっている。

「あの子は？」

「引き渡しのチェック作業を任せてる。あんたらが押しかけてこなければ俺達もそうしていたはずなんだけどな」

「そいつは悪いね。年寄りはせっかちなんだよ」

悪いねと言いつつ悪びれる様子が全くないぞ、このババア。そうしてジャブを交わしているうちにクギが人数分のボトル入りの水を用意してきてくれた。実のところ、ソフトドリンクの類よりも普通の水の方が高いんだよな、この世界。

「じゃあ飲み物も揃ったところで早速仕事の話とやらを聞こうか」
「そうだね。まぁそんなに複雑な話じゃないよ。あたし達は結構長い間この星系に滞在しててね。日銭も稼がなきゃいけないし、何よりボケっとしていても退屈だから適当に宙賊を叩き潰してたわけだ」
「なるほど。というか傭兵ギルドに所属してるのか？　あんたは」
「一応ね。今のあたしはシルバーランクのファリンばあさんだよ」
「……どうなってんだよ傭兵ギルド」
「あたしくらい長く生きてりゃ抜け道の一つや二つは用意してるさね」

お前ニヤニヤしてるけど、割とマジで傭兵ギルドの正当性というか健全性が俺の中で揺らいでいるんだが。いや、まぁ、なんだかんだ言って傭兵ギルドも命のやり取りを商売にしている組織で、別に正義のヒーロー組織ってわけじゃないからな。そういう後ろ暗い面も当然持ってはいるんだろうけども。
深く考えるだけ無駄か。どんなに後ろ暗い面があろうとも、傭兵ギルドは契約に従ってきちんと報酬を払ってくれるし、俺みたいな傭兵には必要不可欠な組織だ。自分が変なことに首を突っ込まないように気をつけていればそれで良い。とりあえず宙賊と癒着でもしていない限りは問題ないということにしておこう。

「まぁいいや、話が逸れたな。それで？」
「宙賊を潰したら当然色々回収するだろう？　その中には当然、奴らのデータストレージもあるわけだ」
「……話の流れは読めてきたが、本気か？」
「おや、怖気づいたのかい？」

ババアが意地の悪い笑みを浮かべる。
つまり、このババアは俺達と協同で宙賊の基地をぶっ潰そうというわけだ。俺達の戦力だけで。十中八九、データストレージから宙

賊どもの航行データを引っこ抜いたのだろう。複数の航行データを集めれば、宙賊の基地がどこにあるのかを割り出すことは然程難しくはない。

「判断するための情報が少なすぎる。軽々に『オッケー！』と言えるわけがないだろ」

「それはそうだね。ラティス」

「はぁい。ホロディスプレイ借りますねぇ？」

一言断ってからラティスは自分のタブレット型端末を操作し、テーブルに内蔵されているホロディスプレイを使って何かの画像を投影した。

「こいつがターゲットか？」

「そうだよ。当然、事前に偵察は済ませてあるさね」

ばあさんの得意げな声を聞き流しながら投影されている画像――小惑星を改造したとものと思しき宙賊基地を観察する。

規模は大きい方ではないな。どちらかと言えば小規模な部類だろう。前にやり合ったレッドフラッグの基地と違って武装はかなり控えめだな。ミサイルポッド砲台よりもレーザー砲台の方が多めだが、クラスも低そうだし、何より絶対数が少ない。

「こりゃ良い獲物をみつけたもんだな。これならなんとかなりそうだ」

「へぇ？　プランは？」

「最初に一発かましてブチ切れて突っ込んでくる雑魚どもを正面から叩き潰すのが楽だろ。白兵戦力が有り余ってるんじゃなければそれが一番楽だ」

幸いなことに防衛用のタレットはその配置がかなり偏っている。最初の一撃で対艦反応魚雷とブラックロータスのＥＭＬをタレットが密集している場所に放り込んで、その大部分を破壊。その後は沸いて出てくる宙賊艦を正面から叩き潰していけばいい。そうすれば結果的に基地内に残る人員が少なくなって制圧が楽になるからな。

帝国航宙軍が宙賊基地を掃討する場合は、まず最初に砲撃で宙賊感が停泊しているハンガーを中心に遠距離砲撃で滅多打ちにする。これは宙賊を一人たりとも逃さないための戦術で、最初に足を潰すという作戦だ。帝国海兵の白兵戦力の前では基地に立て籠もっている宙賊なんぞちょっと動く練習標的でしかないからな。

逆に、俺達のように白兵戦力が乏しい傭兵だけで宙賊基地を制圧する場合はいかに白兵戦を行わないかというのが重要になる。航宙戦で勝ったのに制圧時の白兵戦で返り討ちにされたら笑えんからな。だからハンガーは潰さずに航宙戦で宙賊の数を減らす。

無論、俺達に敵わないと見れば逃げ出す連中もいるだろう。アントリオンのグラヴィティジャマーを使っても取り逃しは出るだろうが、宙賊基地を一つ潰すことを考えれば、連中に与えるダメージは十分に大きい。

ついでに、報酬もデカい。宙賊に備蓄されている略奪品は当然俺達のものになるし、宙賊基地の掃討を終えてから星系軍なり帝国航宙軍なりに報告すれば莫大な賞金も手に入る。

「正面から叩き潰すのが一番楽、ね。言うじゃないか」

「俺達ならな。そっちはどうなんだよ」

「当然あたしだって同じ考えさ。そんじょそこらの宙賊なんぞどれだけいたって同じさね。特に、うちの子は対多数相手の戦闘が得意なんでね」

「なるほど、そいつはお手並み拝見だな」

「そりゃこっちの台詞さね」

互いを挑発するように笑い合う俺とババアを見てエルマ達が処置なしといった顔をしている。実際にセレスティア様とやらのお手並みには興味があるし、懐も若干寂しくなったところだったからな。案外悪くない話だ。

「それじゃあ話に乗るってことでいいね？」

「そうだな。まずは取り分を決めるところからだ。船の数も大きさもこっちの方が上だってことなら当然こっちの配分が多くなるよな」

「何言ってんだい、がめつい野郎だね。この情報はあたしらが用意したんだからこっちの取り分が大いに決まってるだろ。そもそも、あたしらがどれだけの船を揃えてるのか知ってて言ってるんだろうね？」

「大船団を率いているような状況とは思えんなぁ。それなら見せてくれよ、ご自慢のお船さん達をよぉ」

「この野郎……」

ミミの件を知ってからどれだけ急いでこっちまで来たのか知らんが、元々多くの船を率いていたとしても、こっちに来ているのは精々数隻――多くても三隻くらいだろう。恐らくはどれも小型艦の筈だ。急いでかっ飛んでくるとなると、足の遅い中型、大型艦は足手まといだからな。

ククク、楽しい交渉になりそうだ。

#394　ばあさんの船（前書き）

今日は余裕がありましたね（　ω　）

#394　ばあさんの船

「OK、それじゃあ条件はこれで合意ってことで」
「仕方ないね」

セレスティアばあさんが肩を竦める。
最終的に決まった取り分の分配内容だが、まず宙賊艦の撃墜報酬――賞金も含む――に関しては落とした方の取り分だ。これはつまり、両陣営のどちらが落としたかということだな。
で、宙賊基地を破壊した分の賞金に関しては完全に山分けだ。あちらの手持ち戦力は小型艦が二隻で、俺達の戦力が無ければ基地を落とすのは非常に難しい。ただ、宙賊基地の座標情報も偵察情報もあっち持ちなわけで、それがなければ俺達が宙賊基地を叩くことができなかったのも事実。戦力は重要なものだが、それと同じくらい情報も重要なものだ。なので、そこは山分けという形にした。
最後に略奪品の取り分だが、これは7：3ということで決まった。こちらの取り分が7で、あちらの取り分が3だ。ブラックロータスは言わずもがな、アントリオンも特殊装備のせいで余裕がないとは言え中型艦ということで小型艦よりはカーゴ容量に優れる。中型艦としては最低限の性能だが。
クリシュナも補給をブラックロータスに依存できるようになったので、ほぼ空荷の状態だ。小型艦が二隻だけのあちらに比べると貨物の総積載量に圧倒的な差があるわけだな。それでこの数字になったということだ。
粘れば8まではいかなくとも7．5くらいまでは分捕れそうだったが、あまり阿漕にやってもな。完全に身内ってわけじゃないが一応ミミの祖母さんなわけだし。

「しかし中々面白い機体というか……原型がわからん」
「たまにあるわよね、こういうレガシーシップ」

エルマが珍奇なものを見る目でホロディスプレイに表示されているセレスティアばあさんの船――アナイアレイターを眺めている。殲滅者（アナイアレイター）とはまた大層な名前だよな。

ちなみに、レガシーシップというのは改造に改造を重ねてもはや原型を無くしてしまっている古い船を指す言葉である。なんとかかんとか動いているオンボロ船もあれば、元の船のスペック？　何それ美味しいの？　と言わんばかりのモンスターシップになっていることもあるわけだが……ばあさんのアナイアレイターは後者だな、これは。

誘導性能の高い小型ミサイルを大量に発射できる『ストーカー』ミサイルポッドを四門、それに射角の広い重レーザータレットを二門と、艦首方向に固定されているマルチキャノンを二門装備している。火力だけで言えばクリシュナにも負けないような性能だな。

艦の大きさもクリシュナ同様、ギリギリ小型艦の枠に収まる範囲で、相当でかい。ミサイルやマルチキャノンといった実弾系の武器を主体としているのはクリシュナほどにはジェネレーター出力に余裕が無いからだろう。機動性とシールド、装甲を含めた防御面はクリシュナの方が上だろうな。

「レガシーシップで悪かったね」

俺とエルマの言葉にセレスティア祖母さんが下唇を突き出して見せた。そんなセレスティアばあさんを宥めるようにニコラスが声を上げる。

「でも中身はまぁまぁ現役と言っても良いモノなんすよ。アセンブリの自由度も高いっすしね。整備が大変なのが玉に瑕なんすけど」

「ハードだけでなくソフト面もきっちり面倒見てあるから大丈夫ですよぉ」

と、ラティスもフォローに入った。

「まぁ、この武装を十全に動かせるなら対宙賊戦では滅茶苦茶強いだろうな」

ストーカーミサイルは通常のシーカーミサイルに比べると一発あたりの威力に劣るが、それでも宙賊のボロい装甲や薄っぺらいシールドに対しては十分な威力を発揮する。この機体なら大量の宙賊と戦うことになっても一歩も引かずに真正面から全員ぶっ飛ばせるだろう。

「もう一隻の方は足の早い偵察船だな」

「言うことは特に無いわね」

「まぁ、トロニの船は戦闘向きじゃないしね」

帝国ではあまり見ないタイプの船だが、外観を見れば性能に関してある程度の予想はつく。小さな艦体に多めのスラスター。艦首にクラスⅡのレーザー砲が一門、その他に艦体に小型のシーカーミサイルポッドが二門。戦えないわけじゃないが、明らかに戦闘向きの機体ではないな。センサー類が充実しているようだから、やはり偵察艦だろう。隠し玉を持っているようにも見えんな。

「見たこと無いって言えばあんたの船だってそうだけどね」

「それはそうだろうな。出処は秘密だ」

「ふぅん……？　まぁ良いけどね。スペック通りの性能を発揮してくれるんならさ」

そう言ってばあさんが肩を竦める。さっき俺が言ったことをそのまま言い返されたな。それもまぁ、さもありなんと言ったところだが。クリシュナも整備には手がかかる類の船だからなぁ……幸い、今のところブラックボックスになっているジェネレーター周りでのトラブルは起きていないし、大きな被弾もしていないから何とかなってるけど。

実際、クリシュナが大きな被害を被ってジェネレーター周りに損害が出た場合修理できるかどうかというと、現状としてはかなり厳しい。恐らくその時は船を乗り換える必要性が出てくるだろうな。修理できないし。

「条件もまとまってお互いの戦力も把握できたところで仕掛けの打ち合わせをしようか」

「そうだね。と言っても、然程難しいことはないだろ？　あんたんとこのブラックロータスとあたしのアナイアレイターで正面から派手に気を引いて、注意が集まったところであんたが対艦反応魚雷で基地のタレットをまとめて潰す。そうすりゃあとは流れでなんとでもなるさ。ああ、あんたはそのまま基地のタレットを潰したらどうだい？」

「お前俺に面倒事押し付けて宙賊の賞金を稼ごうったってそうはいかんぞ。それならそっちが基地に近づいてストーカーミサイルでタレットを一掃したほうが手っ取り早いだろうが」

「基地に突っ込む時に撃たれるだろ。御免だね」

「それを俺に押し付けるんじゃねぇって言ってんだよこっちはよぉ」

このババア、本当に良い性格をしていやがるな。まぁ、全体のことを考えるというか、効率的な判断という意味なら確かにタレット群を破壊した時点で宙賊基地に肉薄しているクリシュナが残りのタレットをぶっ壊す方が効率的なのだが。

「つっても仕方ないか。俺のほうが近いのは確かだし」
「いい子だね。わかってるじゃないか。頑張って速攻で潰すんだよ」
「わかってる。言うまでもないと思うが、ブラックロータスの防御をメインにしろよ」
「それこそそんなこと言われなくったってわかってるよ。基地の襲撃となるとあっちも本気で潰しに来るしね」
「反応弾だけは注意しないといけないわよね」
「食らったら洒落にならないっすからね」

俺とセレスティアばあさんのやり取りを聞いていたエルマとニコラスが真面目な表情で首肯している。宙賊というのは仕事をする時にはあまり強力な武装を使わない。過剰な火力を『獲物』に撃ち込んでしまうと、積荷――人間も含む――に被害が出てしまうからだ。

しかし、自分達の基地が攻撃されているとなると話は別だ。本気で抵抗してくる。つまり、シーカーミサイルだって容赦なしに撃ちまくってくるし、下手をすれば反応弾頭を搭載した対艦魚雷や大型ミサイルを使ってくることすらある。舐めてかかると手痛いしっぺ返しを食らうことがままあるのだ。

ちなみに、反応弾頭が直撃すると三層のシールドの上からでもクリシュナは大きなダメージを受けるだろうし、ブラックロータスも被害は免れない。万が一シールド飽和装置を積んでいる対艦反応魚雷なんぞを食らった日にはクリシュナは跡形もなく木端微塵だし、ブラックロータスも当たりどころが悪いと一発で爆発四散である。反応弾頭を搭載したミサイルや魚雷だけは絶対に食らう訳にはいかないのだ。

「それじゃあブラックロータスのチェックが終わり次第出るか」
「おや、良いのかい？」
「仕掛ける時は迅速にやらないとな。グダグダ時間をかける理由もないし」

俺が肩を竦めてそう言うと、セレスティアばあさんは俺の顔をジッと見た後にニヤリと笑みを浮かべた。

「良いね。そういう判断は好きだよ、あたしは」

「そりゃどうも」

即断即決はセレスティアばあさんのお気に召したらしい。結構なことだな。

それじゃまぁ、出撃に備えて用意をしておくとするかね。まずはミミ達に連絡だな。

#395　戦闘開始（前書き）

日曜日にワクチンの四回目を打ってくるので一週間ほどくたばります。
ゆるして（ ，ω， ）

#395　戦闘開始

「それで急遽出撃することになったと」
「そういうことだな」

クリシュナのシステムを立ち上げてセルフチェックプログラムを走らせながらミミに返事をする。クリシュナの整備に関しては整備士姉妹がしっかりと見ているので大丈夫――なのだが、出撃前にセルフチェックプログラムを走らせて自分の目で確認することは絶対に怠らないようにしている。整備士姉妹が完璧に整備しているから絶対ヨシ！　ってやるのはちょっとな。彼女達も人間――抗議の意味で――なのだから、ヒューマンエラーを起こすこともあるわけだし。

「あの、ヒロ様。すみません。いつも私こうやって迷惑をかけてしまって……」
「別に迷惑じゃないし、仮に迷惑だとしても――」
「……迷惑だとしても？」
「まぁ、なんだ。ミミのためならなんでもないというかね？」
「どうしてそこでヘタれるんですか、もう。あはは」

ミミが笑い声を上げる。そうは言っても面と向かって言うのはちょっとクサいかなと途中で思っちゃったんですよ。ゆるして。

「……」

サブパイロット席に目をやると、クギが心なしか寂しそうな顔をしていたのでモフモフの狐耳がある頭を撫でておいた。これだけで

尻尾をフリフリしてしまうクギはとても可愛いのだが、別にジゴロでもなんでもない俺のキャパシティはもう限界なので、もう少しお手柔らかにお願いしたい。
今更だとか自業自得だとかいう非難が飛んできそうだが、多分今の結果を知っていて最初からやり直したとしても同じことになると思うんだよな……となるとこれは俺の運命というか業みたいなものか。受け入れて、乗りこなそう。うん。

「えっと、今回もサーマルステルスで行くんですか？」
「そうしたいところだが、ちょっと難しいな。今回の基地も小惑星帯の中にあるんだが、セレスティアばあさんが持ってきたデータを見る限りサーマルステルスで近づくのは無理っぽい」

言いながら、俺はセレスティアばあさんが持ってきたデータをクリシュナのメインスクリーンに投影した。今回の標的はさっきも言った通り小惑星帯の中にあるのだが、真正面以外は小惑星の密度が濃い。つまり、小惑星を回避しながら基地に接近する必要があるのだ。
サーマルステルス中にスラスターを使うと一発で潜伏状態が露見してしまうので、今回は使えないというわけだな。残念ながら。

「それじゃあどうやって……って決まってますよね」
「そうだな」
「どうなるのでしょう？」

クギだけが首を傾げる。そりゃあどうなるって……なぁ？

「わがきみ！　しょうとつ！　しょうとつします！」
「大丈夫大丈夫」

クギが横でこの世の終わりみたいな声を上げているけど、流石にオーバーだと思うんだ。確かにほぼ最大戦速で小惑星帯を突っ切っているけど、俺は動かない石ころに船を当てるようなヘボじゃないし、万が一当たってもシールドがあるから大丈夫だよ。多分。
流石に目を離せないのでクギの様子を見ることはできないが、多分頭の上の狐耳をぺったりと後ろに倒して涙目になっているんだろうな。

「それよりも突破したらすぐ戦闘だから自分の仕事はちゃんとやれるようにな。集中だ、集中」
「は、はいぃ！？」
「大丈夫ですよ、クーちゃん。ヒロ様は自分から向かってくるわけでもない小惑星ごときに衝突するわけがありませんから。これより密度の濃い結晶生命体の群れの中でも平気だったんですから」
そう言うミミの声もなんか平坦になってる気がするんだが、大丈夫か君達。流石にこの速度で小惑星帯の中を突っ切るとなると流石の俺も集中しないとだからあまりケアできないんだが。

「ヒロ様、センサーの反応をいくつか拾ってます」
「まぁ、完全に無防備ってことはないわな」
いくら宙賊が頭クルクルパーなヒャッハー野郎だとしても、拠点ともなればそれなりに警備には気を遣っている――こともある。ガバガバなことも多いんだが、ここの連中はそんなこともないらしい。

「そろそろか」
「はい、そろそろ――来ました」
俺の視界の隅、レーダーの画面上に味方であることを示す光点が

現れる。クリシュナが小惑星帯を抜けるまであと十数秒。正にジャストでベストなタイミングと言える。こんな正確なタイミングで超光速航行状態からワープアウトをしてのけたのは間違いなくメイの仕事だろう。
クリシュナのセンサーがワープアウトしてきた味方と宙賊基地が戦闘状態に突入したことを報せてくる。最初の一発はブラックロータースの大型ＥＭＬによる砲撃だろう。
小惑星帯を突っ切ってくるクリシュナの反応に気を取られていた宙賊どもは突如出現したブラックロータースとアントリオン、そしてセレスティアばあさん達への対応が遅れる。
そしてあっちの一撃が入ったところで。

「対艦反応魚雷、一番二番発射！　ってな」

小惑星帯を通り抜けたクリシュナの下部ハッチから発射された二発の対艦反応魚雷が凄まじい速度で宙賊基地のタレット群へとすっ飛んでいった。
対艦反応魚雷自体の推進能力は大して高くない。普通に撃つと亀のような速度でゆっくりと飛んでいくものなのだが、今回のように発射する船が十分な速度を出している場合は話は別だ。発射された魚雷に慣性が乗ってとんでもないスピードですっ飛んでいくことになる。

「クギ、シールドセルの使用準備」
「は、はひっ」

クギの気の抜けたようは返事が聞こえた瞬間、クリシュナの直近――宙賊基地の表面に光の玉が生まれた。反応弾の炸裂によって膨大な熱量と光が発生したのだ。膨大な熱量が宙賊基地の構成要素である小惑星の表面とタレット群を飲み込み、爆散させ、その余波や

破片がクリシュナのシールドへと襲いかかってきた。

「シ、シールドセル使用しました！」

「よし、上出来だ。あとは基地の表面を舐めながらタレットを潰していくぞ」

今の一撃で宙賊基地に配備されていたタレットの七割ほどが吹き飛んだはずだが、まだ他にもタレットはある。とりあえずは危険度の高いミサイル系のタレットを優先的に破壊していくか。

「ミミ、あっちとも連携してミサイルタレットの場所をピックアップしてくれ」

「わかりました！」

クリシュナのセンサーも小型艦としてはまぁ高性能な部類だが、それでもブラックロータースやアントリオンには負けるからな。情報をリンクしてもらったほうが精度は上がる。

「気合を入れろ。第二ラウンドだ」

「「はい！」」

二人の元気な返事が聞こえる。クギもなんとか持ち直したようで大変結構。それじゃあじわじわと手足をもいでいくとしますかね。

#396　爆炎の中から（前書き）

ワクチン接種後の体調不良が落ち着いたから投稿再開！（ ˘ ω ˘ ）

#396　爆炎の中から

□■□

「おやまぁ。器用な奴だねぇ」
「キャプテン、感心してる場合じゃないっす！」

小惑星を改造した宙賊基地の表面をまるで這い回るかのように動いてはタレットを的確に潰していく坊やの船を見ながら感心していると、ニコラスが切羽詰まったような声を上げた。

「肝の据わらない奴だねぇ。だからアンタはモテないんだよ、ニコラス」
「レーザーとシーカーミサイルの弾幕に晒されてる割には平常心保ててると思うんすけどね！？」

確かに宙賊艦からレーザーは飛んできているけど、どれも整備がガタガタのヘボレーザーだし、偏向シールドを前面に集中させればなんてこたないさね。シーカーミサイルに感してはメイドの船が即座にレーザーで迎撃してるから届きやしないし。楽な仕事だよ、まったく。

「マルチロック完了でぇす」
「はいよ。それじゃあ一番から四番、発射」

大量のストーカーミサイルがパパパッ、と何度も明滅させるかのように推進剤を燃焼させて宙賊の群れへと食らいつくように向かっていく。

『なんだ！？　ミサイルアラート！』
『シーカーミサイルじゃないのか！？　的が小さすぎる！』
『早い！　迎撃できん――うわぁぁあぁっ！？』

混乱した宙賊どもがストーカーミサイルを迎撃しようとレーザーやらマルチキャノンやらを乱射しているけど、そう当たるもんじゃないさね。ストーカーミサイルの弾頭はシーカーミサイルの弾頭と比べると大きさは三分の一くらいで的が小さいし、燃料の噴射も散発的で光学的にも熱源的にも捕捉しづらいときてる。

「ああ、いいね。奴らの悲鳴を聞くと胸がスッとするよ」
「悪趣味ですよぉ……」
「何言ってんだい。くたばる宙賊の悲鳴を傍受して聴くのは傭兵の嗜みだよ。戦場音楽ってやつさ」
「えぇー……？」

ラティスは感性がまだ堅気のままなんだよねぇ。まぁ、堅気の感覚で考えればたしかに悪趣味かもね。やめるつもりはないけどさ。

「着弾。爆発四散っすね」
「汚い花火だねぇ」

宙賊艦一隻辺りにストーカーミサイル三発。これがアナイアレイターの宙賊確殺レシピだ。一発目で貧弱なシールドを吹き飛ばして、二発目で船体を粉砕する。三発目は前の二発のうちどっちかが空振りした時の予備だね。もし生き残ったら重レーザータレットの出番さ。

「しかし楽な仕事っすね。動く必要すらないとか」

「あっちは大変そうだけどね」

□■□

「シールドセル！」
「はいっ！」
「シーカーミサイル来ます！」
「チャフとフレアもだ！」
「はいっ！」

思ったよりも宙賊基地の抵抗が激しい。セレスティアばあさんの情報に間違いがあったわけじゃないが……基地の防衛設備を指揮してるヤツの能力が高いのか？
降り注いでくるシーカーミサイルをチャフとフレアで騙しながらクリシュナを加速させて誘導を振り切る。当然、振り切ったミサイルはそのまま宙賊基地の表面に突き刺さって爆発するわけだが……図らずも宙賊基地にダメージが入っているのは不幸中の幸いとでも言うべきか？

「船を回すぞ！」
「はいっ！」
「はいっ！？　うぐっ！？」

スラスター全開で宙賊基地の表面から離脱しながらフライトサポートを切り、サイドスラスターを使って反転する。予想通り、然程遠くもない位置にシーカーミサイルの群れだ。ミサイルアラートがさっきから鳴りっぱなしだよ。
散弾砲を連射し、追ってきたシーカーミサイルを一掃してから爆炎の中に飛び込みながら、重レーザー砲の射撃モードを自動照準から手動照準に切り替える。

「――ッ！」

息を止め、時間が緩慢に流れ始めた世界でクリシュナが爆炎を突き抜けた。

もどかしいほどに遅い照準の動きにやきもきしながら、こちらに砲口を向けているシーカーミサイルポッドに重レーザー砲の照準を合わせていく。

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ――よし。

「はぁっ……！　これで、終わりだ！」

「敵基地のシーカーミサイルポッド全滅です！」

「シ、シールドセル残り三つです！」

「三つあれば足りる。残りのレーザータレットを潰すぞ」

「「アイアイサー！」」

☆★☆

『お疲れ様でした、ご主人様』

宙賊基地のタレットを全て破壊し、抵抗手段を全てもぎ取ったところでブラックロータスから通信が入った。

「ああ、お疲れ。そっちは問題なかったか？」

『はい。こちらに損害はありません。ただ、宙賊艦の賞金はかなりあちらに取られてしまいましたが』

「そりゃ仕方ないな。宙賊艦狩りに特化したあの船相手じゃ分が悪い」

『圧巻だったわよ。アントリオンにも積もうかしら、ストーカーミサイル』

「それも良いと思うけど、弾薬費が嵩むのが問題なんだよなぁ。アレ」

威力が弱いからどうしても数を撃つ必要があるんだが、一発辺りの弾薬費は普通のシーカーミサイルとあんまり変わらないんだよな。シーカーミサイルとどっちが使いやすい？　と言われればそりゃストーカーミサイルのほうが使いやすくはあるんだが、コストを考えるとちょっとなぁっていう。

「で、攻撃の調子は？」

『メインジェネレーター以外のバイタルパートを狙って順次砲撃しています。無力化もまもなくかと』

「オーケー、そのまま砲撃を続けてくれ」

ブラックロータスの艦首が激しく発光し、然程間を置かずに宙賊基地に爆発が起こる。何をしているのかって？　内部の人員を砲撃で減らしてるところだよ。

つまり、安全に物資をサルベージするために砲撃で基地を穴だらけにして基地の気密性を破壊しているわけだ。当然だが、普通の人類――広義の意味で――はきちんと適切に加圧されている、呼吸に適した空気が満たされた空間でなければ生存することができない。

稀に生身でも宇宙空間で活動できる種族もいるそうだが、まぁ殆どの場合は無理だ。宇宙空間に生身で放り出されれば一分も保たずにヒトは死ぬ。それは気密性の失われた宇宙空間の構造物の中でも同じことである。

人道的な対処？　何それ美味しいの？

いや、うん。わからないでもないけどね。現代日本に生まれた人間としては思うところがないわけでもない。でも、人道とやらは致死性のレーザーを防いではくれないからな。宙賊や居るかどうかもわからない犠牲者の命よりも俺達の命のほうが大事だ。

『お疲れさん。良い踊りだったよ』
「そりゃどうも。上手くやったな？」
『弾薬費でトントンさ。薄利多売は辛いね』

通信の向こうでニヤニヤしているのが脳裏に浮かぶようだ。確かに弾薬費はかかってるだろうが、基地の破壊ともなれば通常の賞金の他にも討伐報酬が入る。そうなると別に薄利ってわけでもねぇんだよなぁ？　まぁ良いけども。宙賊の基地からサルベージした物資の売却益はこっちが七割だからな。最終的にはほぼ同じくらいの稼ぎになるだろう。

『処理が終わるまで一服させてもらうよ。ストレージ位置はわかってるね？』
「メイがしくじることはないから安心してくれ」
『なら結構。一服し終わったら連絡するから、そうしたらそっちもちょっと休みな』
「了解」

流石に完全に油断するつもりはないみたいだな。現時点で宙賊の抵抗は全て排除したが、基地が落ちたのに気づかずに戻ってくる宙賊がいないとも限らない。だから、ここで油断をすると実は結構危なかったりするのだ。

「コロニーに帰るまでが仕事だ。油断しないように行くぞ」
「わかりました！」
「はい、我が君」

クギもいつもの調子を取り戻したようで何より。というか、ミミは本当に動じなくなったというか、慣れたよな。真面目に報酬配分

率のアップを考えよう。早速だが、今回の報酬配分からだな。

#397　戦いのあとのお楽しみ（前書き）

メリークリスマス！　僕はお犬様とふたりきりだけどね！　―（：3」∠）―

#397　戦いのあとのお楽しみ

ブラックロータスの砲撃によって宙賊基地は文字通り穴だらけになり、制圧――というか掃討はほぼ完了した。無事なのは倉庫区画と発電区画くらいだ。

少し頭の回る奴なら物資が集積されている倉庫区画や、下手すると基地全体が吹っ飛びかねない発電区画が砲撃されることはないと気づいてそれらの区画に逃げ込んでいる可能性がある。まぁ、逃げ込んだところで袋の鼠なのだが。

ただ、そういう場所に逃げ込んだ連中というのは白兵戦で一発逆転を狙っているかもしれないからな。白兵戦で襲撃者を返り討ちにして船を奪えば確かに一発逆転だ。

『強襲ポッド、射出しました』

「オーケー、あとは仕上がりを待つばかりだな」

当たり前の話だが、俺達がわざわざ出向いてその思惑に乗ってやる必要など微塵も無い。うちには優秀な戦闘ボットが揃っているので、基地の外殻を破壊して突入する強襲型の突入ポッドで戦闘ボット達を突っ込ませてやるだけである。

丁寧にブリーチングをするのではなく、外殻を壊して気密性を奪いながら突入してくる戦闘ボットとか、生き残っている宙賊にとっては悪夢そのものだろうな。

「クーちゃん、浮かない顔ですね」

「そうですね……もう少しこう、どうにかならないものかとは思います」

「言うて宙賊だからなぁ……まぁ、中には『良い』宙賊もいるのか

もしれないが」

個人レベルでは交流を持てるようなやつはいるかもしれない。でも宙賊だしなぁ……ヒトを加工して売り捌くような奴らとわかり合うのはちょっと。薬漬けにした上で手足ナイナイして出荷くらいなら序の口で、もっとこう、口にするのも憚られるような状態にされちゃってるヒトとかを見ちゃうとなぁ。

宙賊の戦利品の中にある食品の中で、ラベルも何もないようなのは間違っても口にしてはいけない。勧められても「いいえ。私は遠慮しておきます」ってな。そういうことも平気でやる連中だから。

「あれは姿形が似ているだけの別の生き物と思ったほうが気が楽だぞ」

「そういうものでしょうか……」

クギは箱入りだからなぁ。傭兵を生業としている俺についてくるなら、こればっかりは慣れてもらうしかない。宙賊は邪悪で、悪逆非道な連中だから慈悲など掛ける必要はない――ってのはある意味思考停止みたいなものかもしれないが、そういうのは皇帝陛下とかがなんとかする領分の仕事だと思うんだよな。一介の傭兵がなんとかできるような問題の範疇を超えてるわ。

『ご主人様。倉庫区画の掃討が完了致しました』

「了解。クリシュナは引き続き警戒を続けるから、向こうと協力して戦利品の選別と回収を始めてくれ」

『はい、ご主人様。軍への連絡は如何致しますか？』

「ああ、手間をかけるが連絡しておいてくれ」

『はい、お任せください。それでは』

メイとの通信を終了する。いつものことながら有能で実に助かる

な。

「回収用のドローンを出して権限をブラックロータスに移譲しておいてくれ」

「わかりました！」

「はい、我が君」

☆★☆

俺達が乗っているクリシュナが警戒をしている間にブラックロータスとアントリオンから戦利品の回収ログがどんどん流れてくる。戦利品で目立っているのはやはりハイテク製品だな。

まぁ、ハイテク製品と一口に言っても内訳は様々なわけだが。例えばナノマシンの基になるナノマテリアルだとか、様々な薬品の基材となる化学物質だとか、レーザーなどの攻撃に耐性を持つ装甲材や特殊繊維の素になる特殊合金だとか、他にもメイにも使われている小型陽電子頭脳だとか。

どれもこれもなかなかの高額で売り捌けそうな品ばかりだ。これは戦利品の売上額にかなり期待できそうだな。

「ああ、そうだ。ミミ、今回の報酬分配から分配率を上げるからな。給料アップだ」

「えっ！？　い、いえ、別に上げなくても大丈夫ですよ？　今でもお金とか全然使いきれてませんし」

「いや、ミミの働きを考えるとそうもいかないと思うんだよな。とにかくコロニーに戻って戦利品を売り捌く準備を終えたら、一回全員で傭兵ギルドにいって報酬分配率の見直しをしよう。そろそろ良い時期だと思うんだ」

この世界だと暦が星系ごとに違ったりするし、宇宙空間で寝起き

していると昼も夜もないし、その上ハイパードライブで恒星間航行なんかもするということもあって、日々の移り変わりというものを感じづらい。でも、そろそろミミを船に迎え入れて一年くらいは経つ筈……だよな？　きっとそう。多分そう。

「そう、ですかね。でも、その、私とヒロ様は……ふ、夫婦？　じゃないですか？　いちおう？」
「普段あまり意識してないけど、そう言われるとそうなんだよな」
「むっ……」

ミミのほっぺたがぷくりと膨らんだ。ちゃうねん。可愛いけど、ちゃうねん。

「いや、夫婦だからとか関係なく、いっつも仲良くしているというかね……？　話がずれたな。それで？」
「むぅ……夫婦だと、そういう報酬の分配？　とかその辺の扱いはどうなるのかなって思ったんです」
「なるほど、確かに。帝国だと夫婦で財布を完全に一緒にするのがメジャーなのかね？」
「うーん？　どうなんでしょう。あまりパパとママからそういう話を聞いた覚えはないです。クーちゃんはわかりますか？」
「此の身も帝国のそういった事情は存じ上げません。帝国の、というか此の身どもの国でもどうなのかはよくわからないのですが」

ミミに話を振られたクギもそう言って首を傾げる。うん、これはやっぱりちゃんと話し合う必要がありそうだな。このへんの常識は誰に聞けば良いのかね。困った時のエルマか？　それともショーコ先生か？　ティーナとウィスカは……どうだろうな？　うーん。なんか全員微妙そうな気がする。
やっぱり困った時には傭兵ギルドだな。アレインテルティウスコ

ロニーに戻ったら早速訪ねてみよう。

☆★☆

戦利品の回収は何事もなく終わり、星系軍の巡回部隊も程なくして到着した。

彼らの目的は現場の調査と宙賊基地に使われている各種資材の確保だ。ジェネレーターをはじめとして、宙賊基地を構成している資材そのものリサイクルすればステーションやコロニーの資材として使用可能だからな。俺達は流石にそこまではしない――ステーションの解体や建築には専用の設備を搭載した船が要る――ので、連中にお任せである。

「今日はあたしの奢りだよ。乾杯！」

「「「かんぱーい！」」」

そして、アレインテルティウスコロニーに戻ってきた俺達はコロニーの酒場でばあさん達と打ち上げをしていた。どうして。

#398　ばあさんとサシ飲み（前書き）

今年の更新は今日で一旦終わり！　皆さん良いお年を！（　ω）

#398　ばあさんとサシ飲み

「まだ戦利品の整理も船のメンテも何もかも終わっていないのに……」

「この期に及んで細かいことを気にする奴だね。一仕事終えたら酒と飯。傭兵の常識だろ？　そんなのは後で良いんだよ、後で」

俺の隣に陣取ったセレスティアばあさんがそう言いながら酒をかっ食らう。結構強そうな酒だが、大丈夫なのかこのばあさん。

「うちにはうちのやり方があんだよ。あと、俺は下戸だ。酒は勘弁しろ」

「かぁーっ！　下戸だって！？　それで傭兵名乗って恥ずかしくないのかい？」

「恥ずかしくねぇよ。あんま旨いと思ったことも無いしな」

「そりゃ旨い酒を飲んだことがないからだよ。下戸っつったってそんなもんはいくらでも治せるだろ？」

あまり飲んだことがないから旨さもわからないんだろうというのは確かにそうかもしれないが、その度にぶっ倒れたり前後不覚になって記憶を失うのはちょっとなぁ。

「そうかもしれないが、そうまでして飲みたいとは思わないんだよな……」

あまり旨いと思ってもいないものを飲むために身体改造まで行うか？　という話である。この世界の技術ならその程度の身体改造というか体質改善は簡単にできてしまいそうだが。

「ノリが悪いねぇ、あんたは。まったく、あの子はあんたのどこがそんなに気に入ったんだか」
「それは俺にもわからん。でも俺はミミを大事に思ってるよ」
「男は乳のデカい女に弱いからね」
「確かにミミのおっぱいは素晴らしいものだけどな。それだけじゃないさ」

ばあさん相手にのろける趣味はないからこれ以上は口に出さないけどな。あんなに健気でまっすぐな子はそうそういないぞ。ミミの為なら命を賭けても惜しくはないさ。

「ふん？　そうは言うけど、男としてあまり誠実ってわけでもないよね？　アンタは」
「身の丈に合ってないことは自覚してる」

俺としてはこれでも気をつけているつもりなんだよ。でも、こう、どうにもこうにもならないことがあってな。世の中ってのはままならないものだよな。

「ま、あの子があんたにお熱な以上はあたしにどうこう言えることでもないんだけどね。仮に無理矢理あの子を連れて行ったとしても、あの子はどんな手を使ってでもあんたのところに帰ろうとするだろうし」
「そんなことは絶対に許さんが？　ミミが望むなら……どうしてもって言うなら話は別だが」

俺としてはミミと離れるのは……うっ、考えただけで胸が。だけど、どうしてもとミミ自身が言うならその意志は尊重したい。多分しつこいくらいに説得を試みるだろうが、それでもとどうしても言

うなら……やはり考えるだけで死にそうな気分になる。

「その様子だとただ遊んでるってわけじゃなさそうだね。ならいいよ。もしアンタがあの子の純粋な気持ちを弄んでいるようだったら引きちぎってレーザーガンで灰にしてやろうと思ってたんだけどね」

「ナニをだよ……恐ろしいばあさんだな」

このばあさんなら本気でやりかねないのが恐ろしいところだな。実際のところ、俺はそんな器用な事ができるような性分でもないから、そんな事態に陥る可能性は皆無だろうが。

「結果的には良かったのかもね。フォルトとマイナのことは残念だったけど、ミミは今、自由に宇宙を飛び回ってる。ミミは両親と一緒に平和な人生というものを失ったけど、代わりにアンタって存在と自由で刺激的な人生を手に入れた。釣り合いは、取れているのかもね」

「どうかな。ミミにそう思ってもらえるように力を尽くして行こうとは思うが」

「良い心がけだね。そうしな。泣かしたらババアが飛んできてやるからね」

「そりゃおっかねぇ」

実際のところ、このばあさんとガチでの殺し合いにでもなったらたまったもんじゃないな。メイから戦闘中の様子を聞いたが、ばあさんの船はかなり油断ならない性能をしているようだし。偏向シールドは十全に使いこなせるなら滅茶苦茶強いからなぁ。

通常のシールドは船の全方位に複数層のシールドを展開するものなのだが、偏向シールドは全方位ではなく、一定の方位にだけ集中して強力なシールドを張ることができる。扱いは難しいが、上手く使えば小型艦でも驚くほど堅く、分厚いシールドを展開できるのが

強みだ。
　クリシュナは至近距離で乱戦を行うことが多いから、あまり偏向シールドを使うのに向かないんだよな。何せ乱戦中は四方八方から撃たれまくるから。どちらかというと敵集団から一定の距離を保ってボコスカ撃ちまくるタイプの船に向いているシールドだ。

「で、聞いておきたいことがあるんだけどね」
「なんだよ」
「曾孫の顔はいつ見られるんだい？」
「鋭意検討中だ。今はお互いに傭兵生活が楽しいんでな」
「ふん？　まぁ確かに子供は生むのも育てるのも大変だからね。でも、あんたんとこには有能なメイドがいるし、船医もいるし、大層な医療設備も整えたんだろ？　ならもうすぐだね」
「ノーコメントだ」

　実際のところ、今回のブラックロータスの改修はそういう事態にも対応できるようにという意図もあってのことではある。簡易医療ポッドだけでなく、ちゃんとした医療設備があればそういったことにも対応しやすくなるからな。ベビーシッターに関してもうちにはメイがいるし、何ならメイの部下としてメイドロイドを何人か増員しても良い。俺達も仕事中はともかくとして、移動中は手持ち無沙汰な時間も多いし、育児に関してはなんとか回していけどうな気がするけどな。
　ショーコ先生が仲間に加わったからということで今回改修作業を行ったわけだが、もしショーコ先生が仲間として加わっていなかったとしても遠からず同じような改修作業はしていただろうな。船医に関してはそういう専門技能をインストールしたメイドロイド――この場合ドクターロイドとかナースロイドか？――を用意しても良かったわけだし。

「ま、もし子供が生まれたらちゃんと連絡するんだよ。顔ぐらいは拝みにくるからさ」
「気が向いたらな」
「アンタが連絡しなくてもミミが連絡してくれるだろうけどね」
なら俺に言うなよ。どうもこのばあさんは苦手だ。
「ヒロ様、セレスさん、お料理の準備ができましたよ！」
ちょうど良いタイミングでミミが俺達に声をかけてきた。これ以上ばあさんと話していると面倒なことになりそうだからな。本当に良いタイミングだ。
それに料理の準備ということは……恐らくミミチョイスのアレだろう。これはばあさんに一泡吹かせられそうだな。
「だそうだ。可愛い孫が用意してくれた料理だぞ。楽しんでくれ」
「んん？　なんだいその顔は。何か企んでるね？」
「別に何も企んでなんかないさ。楽しみにしているだけだ。さぁ行くぞホラホラ」
警戒するばあさんの背中を押して既にニコラスとラティスが顔面蒼白になっているテーブルへと向かう。俺達はある程度慣れているが、ばあさんはどうかな？

#399　後片付けと次の目標（前書き）

明けましておめでとうございます！―（：3」∠）―

ちょっと近々原稿作業に入ることになりそうです（，ω，　）（

諸事情によりいつもより早い

#399　後片付けと次の目標

「これで勝ったと思うんじゃないよ……」
「もう勝負付いてるから」

捨て台詞を吐きながら覚束ない足取りで去っていくばあさん御一行を見送り、打ち上げの後片付けを終わらせて一晩休んだ翌日。
俺達は次の目的地についての話し合いをすることにした。

「現状特にこれという目的はないから、行き先は自由に決められるんだよな」
「目的は無いのかい？」

首を傾げるショーコ先生に俺は首肯した。

「具体的なものはな。とは言え俺達は傭兵団なわけだから、宙賊をしばくなりなんなりして金を稼ぐのが行動理念と言っても良い。今回の稼ぎはそこそこのものになりそうだけど、まぁ物足りないというかもっともっと稼ぎたいな」

ブラックロータスの改修でまた金を使ったからな。最辺境領域で稼いだ分なんぞはそれだけで簡単に吹っ飛んでいる。自転車操業は辛いねんな。食うに困るほどではないけれども。

「何か美味そうな稼ぎの種を見つけるまで適当に星系を渡り歩いて宙賊どもをしばいて回るというのも手なんだけどな」
「それでも良いけど、もう少し具体的なプランは欲しいわね」
「言うて、兄さんやし適当にほっつき歩いてても飯の種は転がり込

んできそうやけどな」
「そんな適当な……とは言えないよね」

やめてくれ二人とも。その術は俺に効く。犬も歩けば棒に当たるくらいのノリで俺がトラブルに巻き込まれるとか暗に言うのはやめろ。悪質な事実陳列罪だぞ。

「案、と言えるかどうかは微妙ですけど、一つあります！」

ミミがやる気を漲らせて挙手をした。こういった経営というか金稼ぎの方針決定の場でミミが先陣を切って発言するのは珍しいな。

「オーケー、聞かせてくれ」
「はい！　今回の宙賊基地襲撃で手に入れた戦利品なんですけど、アレイン星系で捌くのはちょっと勿体ないんですよね」
「ああ、なるほど。それはそうよね」

ミミの発言にエルマが同意する。なるほど、確かにそうだなと俺も納得する。表情を見る限り、ティーナとウィスカだけでなくショーコ先生も納得した表情だ。ピンときていないのはクギだけのようである。

「交易の基本ってやつだ。今回宙賊基地からかっぱらってきたものは基本的にこの星系で作られた産品だ。つまり、それをこのアレイン星系で売り捌こうとしても、あまり値がつかないわけだよ。何せ産地そのものだからな。商品が溢れてる」
「なるほど……つまり、お肉をお肉屋さんに売ろうとしても買い叩かれるから、お肉を使う食堂や一般のご家庭に売りに行こうということですね」
「うん、まぁ、そうね」

しかし何故例がお肉なのか？　お肉好きだよな、クギは。そういや結局クギを連れて培養肉工場を再訪したのだが、クギにはグロ耐性でもあるのかまったく気にした様子がなかった。謎にメンタルが強いんだよな、クギは……俺はまた気分が悪くなったのに。

ちなみに俺以外の犠牲者を道連れにすることには失敗した。畜生め。

「アテはあるの？」

「はい！　おばあちゃんから聞きました！」

そう言ってミミが卓に内蔵されているホロディスプレイを起動し、銀河地図を立ち上げる。

「少し遠いんですけど、このあたりの星系域でパンデミックの兆しがあるそうです。もしかしたら今から向かうと、パンデミックがもう始まっているかもしれないですね」

ミミが指し示したのはアレイン星系から十レーン以上離れている場所にある星系域であった。最寄りのゲートウェイなども見当たらないから、向かうとなるとコツコツとハイパーレーンを伝って移動するしかないな。

「パンデミックねぇ……危なくね？」

一口にパンデミックと言われても何がパンデミックしているのかがわからないと迂闊に近寄れない。インフルエンザみたいな罹ると辛いけど若くて体力があれば概ね死なない、程度のものならまだ良いが、未知の致死性ウィルスだの細菌だのとかだと困る。

「私を含めてこの船のクルーは大概の感染症に対応できるワクチンを打っているから、大丈夫だと思うけどねぇ。よしんばワクチンが効果を発揮しない新種の病原だとしても、感染対策をしっかりとすれば少なくとも我々がそのパンデミックに巻き込まれる可能性は大きく減らせるさ」
「それはそうかもしれんけども」

宇宙船内は閉鎖環境なので、そもそもそういったウィルスだの細菌だのを「持ち込まない、持ち込ませない」仕組みが完備されている。エアロックとか除菌室だとかもそうだし、空調自体にウィルスや細菌などの増加をチェックする高性能センサーが付いていたりもする。クルーの誰かが感染症に罹った場合、下手すると本人に自覚症状が出る前にセンサーが反応したりするわけだ。
最悪の場合全員が環境対応のスーツなり何なりを着るって手もあるし、そもそもそういうクルー達が何らかの病気でダウンした時の事を考えて今回ブラックロータスを改修したわけなのだが。

「うーん……まぁ、今回の改修の成果を見るって意味でも悪くはないか」
「そうね。今後はそういう星系域でも問題なく活動できるってことの証明にもなるし。傭兵ギルドへの実績アピールとしても悪くないと思うわよ」
「病気に苦しむ方々を救えるのであれば、それも功徳を積む道かと思います」

エルマは傭兵としての観点から、クギは……クギはどういう視点なんだ、それは。俺は修行僧とかじゃないんだが。まぁ人の助けになるのは良いことだよな。金は取るけど。
「オーケー、それじゃあそのプランで行こう。戦利品の売却はキャ

ンセルして、山分けの内容もばあさんに掛け合って医療系の資材を優先でこっちに回してもらって、ついでに積めるだけ医療系資材や機械の類を積んでいく。もし行き先でパンデミックが起こっていなかったとしても、医薬品や医療系資材はどこでも需要は高いから不良在庫を抱えることにもならないだろ」
「そうだねぇ、医療関係の品は確かに飛ぶように売れてたと思うよ。持っていく物資の選定には私もミミ君に協力するね」
「頼んだ。ティーナとウィスカはショーコ先生に意見を貰いながら感染対策関係の準備を進めてくれ。エアロックとか除染室の用意とか、環境スーツの用意とかな」
「合点承知！」
「わかりました」

ティーナとウィスカがそれぞれ返事をする。さて、そうなると後は俺とエルマ、それにクギだが。

「俺達は戦利品に関してばあさんとの話し合いをするのと、傭兵ギルドと星系軍基地に行って今回の討伐報酬と賞金の受け取りだな。後はショーコ先生とミミの報酬分配率について相談だ」
「あっ……はい」
「よろしくねぇ」

なんとも言えない表情のミミと、にこやかに手をひらひらと振るショーコ先生の対比が実に印象的だな。実際のところ、俺とミミの関係性を考慮してどのような報酬分配率にするのが正しいのかはよくわからん話なのだよな。しっかりと聞いてくる必要があるのは間違いないだろう。

「それじゃあそういうことで。各員行動開始」
「「「アイアイサー」」」

☆★☆

ばあさんとの交渉は難航するようなこともなく、ごく簡単に終わった。

「あの子に話したのはあたしだからね。こうなるとは思ってたさ」
「そりゃそうか」
「ま、別にあたしらが損をする話でも無いしね」

ばあさん達に医療系以外の戦利品を分配し、向こうはそれをこのアレインテルティウスコロニーで売るなり、自分達で運べる分は別の星系に持っていくなりして売り捌いてエネルを稼ぐというわけだ。賞金や撃破報酬の分配条件については事前に話し合っていた内容で進めることにしたので、特に問題にはならなかった。条件に関しては既にお互いに確認して傭兵ギルドに送ってある。あちらで処理を進めてくれているはずだ。

え？　他人任せの部分が多い？　そりゃお前、仕事はプロに任せるのが一番だよ。俺は船の操縦がちょっと上手いだけの男だぞ。一体俺に何を期待しているんだ。

「それじゃあ俺達は傭兵ギルドに顔を出しに行くから。達者でな」
「そっちもね。そのうちデカい山でも見つけたら声を掛けるよ」
「お手柔らかに頼むぞオイ」

ばあさんが言うデカい山とかどれだけデカいんだよ。勘弁してくれ。大宙賊団の家を焼きに行こうぜ！　あたし達だけでな！　とか言ってきそうで怖いわ。

溜息を吐きながら通信を切ると、出かける準備を終えたエルマとクギが俺をジッと見つめていた。

「なんだよ」
「いや、別になんでもないけど。あんたってなんだかんだ勤勉というか、真面目に働くわよね」
「素晴らしいと思います、我が君」
「急に褒められるの怖いんだが……？　任せるところは任せて丸投げしてるだろ」
「でも、自分でやれるところは自分でやってるじゃない。それこそメイとか私達に丸投げもできるのに」
「それが普通じゃね？」
「はいはい、そうね。それじゃその調子で傭兵ギルドにも行きましょうか」
「えぇ……何その反応」

上機嫌なエルマとクギに両腕をホールドされ、連行される。鈍感ではないつもりだが、マジで理解ができん。この程度で勤勉だとか真面目だとか言われるって、一体この世界の一般的な傭兵はどれだけぐうたらなんだよ……いや知るのが怖えわ。できるだけ調べないようにしておこう。

＃４００　数字は強敵（前書き）

寝不足で捗らなかった……―（∵3」∠）―

#４００　数字は強敵

「頭が爆発しそう」
「メイに任せたら良いわよ」

ミミへの報酬分配率変更の話から派生して、傭兵の配偶者との財産分与だとか船医の給料についての話とかで頭がフットーしそうだよぉ！　エルマも俺と同じように思ったのか、苦笑いをしている。

「？？？」

クギに至っては理解が及ばなくて宇宙猫みたいになっている。数字の話は難しいねんな……俺もマジでわからん。内容が半分も頭に入ってない。

ごく簡単に纏めると、今のスキルを考えればミミへの報酬分配率は０．５％アップして１．５％が妥当ではないかという話と、ショーコ先生への給料はスキルや資格を考慮すると三十日あたり２万から３万エネルを基本給として、船医もしくは科学者としてのスキルを活かして利益に貢献した場合に適宜ボーナスを出すのが良いのではないかという話になった。

「うーん、ショーコ先生の取り分が少なくなりすぎないかしら？」
「そこは賞与で適宜調整するしかないんじゃないか？」
「三十日で３万から４万エネルは十分な高給取りだと思いますが……？　プラチナランカーにとってはそれくらいは端金ですか」

傭兵ギルドのお姉さんが呆れたような視線を向けてくる。確かに小さい金額ではないと思うけども、他のクルーに分配している金額

を考えるとな。まぁ今は然程懐に余裕があるわけでもなし。２万から3万エネルってのも決して小さくはない金額ではあるか。
なお、配偶者との財産共有に関しては傭兵とクルーの場合は一般的な帝国法を参考しつつも若干特殊な扱いとなり云々と、お経か呪文か何かの類かと思うような大変に長い内容となっており、俺が辛うじて拾えた内容としては取りあえずは傭兵家業を続けている間は今のまま、財布は別にしてミミにも報酬を分配するという形で進めて、今後ミミが傭兵稼業から離れて育児に専念するなど状況が変化した時に改めて『事が起こった時』の財産分与などについて法的な書類を作るのが良いだろうという話――だったと思う。

「まぁ、実際には無責任に種を撒き散らかして勝手に死んでってパターンが多いんですけど」
「世知辛いなぁ……」
「というか、行きずりでってパターンですね。基本的に傭兵というのは星系を渡り歩いていくことが多いですし。その点ちゃんと囲って連れ歩いているキャプテン・ヒロ殿はまともですよ。ええ」

そう言う受付のお姉さんの口元は笑っているけど目は笑っていない。メイはメイドロイドだから除外するとしても、ミミとエルマ、ティーナとウィスカ、クギ、そしてショーコ先生と合計六人も女性を囲っているというのは確かにうん。俺もどうかとは思うけれども、これには海よりも深い事情があるので許してほしい。

「人数はともかく、概ね誠実だから心配は要らないわよ。一般的な傭兵と違って呑んだくれたり娼館に通い詰めたり、変なドラッグに手を出してラリったりもしてないしね」
「それに我が君はとてもお優しい御方ですよ」
「それはそれは……」

このスケコマシ野郎めという目で睨んでくるのはやめていただきたい。俺は悪くないしそもそもとやかく言われる筋合いもないわ。

「コホン。それでは今回キャプテン・ヒロ様達が討伐した宙賊及び破壊した宙賊基地とその戦力の撃破報酬――これには宙賊基地の資源としての価値も含まれたものになりますが、ヒロ様達の取り分は合わせて２３０６万エネルと算定されました」

「まぁそんなもんか。小さかったもんな、あの基地」

「そうね。小惑星部分がかなり多そうな基地だったし」

「おおもうけ、ですね？」

「まぁそうね」

「そうだな。そこそこ儲けたな」

２３０６万エネルの内訳を見てみると、一番大きいのは撃破報奨金の項目で、次に基地資材の買取金額、その後は宙賊艦の撃破報酬と賞金ってところか。この他に鹵獲品の売却益もあるので、今回の儲けは全部合わせると３０００万エネルをちょっと超えるくらいになるかな。もっとも、戦利品の売却は一旦キャンセルして他所に運んでいくつもりだからまだ現金化できていないし、持っていく先の状況次第では値段が跳ね上がる可能性もあるのだが。

「それと、たった今アレイン星系の統治当局から傭兵ギルドに照会があったようなのですが、高度医療物資の大量購入を試みているそうですね？」

「あー、そうだな。今回手に入れた戦利品はここで捌くよりも遠方で捌いたほうが当然カネになるだろ。で、戦利品にそっち系の物資が多かったから、どうせなら満載して高く売れる場所に売りに行こうと思っているだけだ。というか、そんなことで照会が来るのか？」

「それは通常の医療物資ではなく高度医療物資だからですね。使い方によっては常用性の高い危険なドラッグなどの製造にも使えるも

のだったりしますから、流通に制限がかけられているわけです。取り扱いには専門のライセンスが必要なものもあったりするのですが……キャプテン・ヒロの船団には有資格者がいるので問題ありませんね」
「ショーコ先生か。そういやラボには小型の製造プラントもあったはずだな」

つまり、材料も設備も技術を持っている人間もいるから、うちの船団はやろうと思えばヤバいお薬のディーラーめいたこともできてしまうわけだ。それについて本当に大丈夫か？　アレイン星系を統治している当局から「こいつら本当に大丈夫？」と問い合わせが来たと。

「プラチナランカーとしての立場と信頼を利用してそういった類のドラッグを流通させた場合には称号その他すべて剥奪の上、傭兵ギルドとしても生死不問の賞金をかけることになるのでご注意ください。帝国法上でも重罪となりますので」
「俺は善玉で通ってるんだろ？　心配しないでくれ。そもそもそんな手段でカネを稼ぐなんざリスキーに過ぎるし、そんなことせんでもいくらでもカネは稼げる」
「そうですね。傭兵ギルドとしてもプラチナランカーを舐めるなと言いたいところです」

そう言って受付のお姉さんはにこりと笑顔を浮かべてみせた。
うん、その笑顔はあれですね。だからこそプラチナランカーの看板に泥を塗ったらとんでもないことになりますよということですね。わかります。

「とりえず、先方への返事は任せる。報酬は一旦俺の口座に振り込んでおいてくれ」

分配はメイに任せよう。数字に強いからな、メイは。

#401　次なる目的地へ（前書き）

キリが良いので、ここで一旦更新を停止して原稿作業に入ります。
次巻はまた書き下ろし比率が物凄いことになりそうなので（白目）

次回更新までお時間ちょうだいね！―（：3」∠）―

#401　次なる目的地へ

「なんか迷惑をかけたみたいですまないねぇ」
「ごめんなさい……」

傭兵ギルドで全ての精算ができたので星系軍基地には寄らずに船に戻ると、ショーコ先生とミミに謝られた。どうやら医療物資を用意する過程で身分照会が傭兵ギルドに行った件について謝っているようだが……。

「いや、扱うものを考えれば当たり前だから謝るようなことじゃない。多分今後も同じようなことがあるだろうからな。報告だけちゃんと俺に来ればヨシ！　今回はたまたま傭兵ギルドに居たからすぐわかったけど」

医者というか薬学の知識がある人間がいて相応の設備があるなら警戒されるは当たり前だし、それが医療物資を主に扱っている商船とかでなく俺達みたいな傭兵だとことになれば当局が疑惑の目を向けてくるのも当然だ。本来はそういった疑いを避けるためのライセンスというものなのだろうが、恐らく特殊なケース過ぎたんだろうな。

「最終的に儲かるなら多少疑われたり、面倒があったりしても問題ない。それで助かる命もあるわけだしな」

別に悪行というか殺生を生業としていることに対して善行でこう、カルマのバランスを取ろうというわけではないが、誰かの助けになってそれで儲かるならそれに越したことはないよな。ちょっと行政

手続きで面倒をかけられるくらいはなんてことないだろう。
そもそも、俺が主な収入源としている宙賊狩りも結果的に無辜の民間人の命を救っているに違いないのでカルマバランスは絶対にヨシ！　だけどな。
え？　宙賊もヒト？　そういうのは拐った人の四肢モギモギして上で内臓もコショコショしてある種の化学物質製造機に『加工』したりするのをやめてから言ってもらって良いかな？　それだけでなく別の道具としても『使え』ます！　エコだね！　じゃねぇんだわ。

「そうだね。私も医者の端くれだから、少しでも怪我や病気に苦しむ人が減るように活動するのは賛成だ」
「つっても俺達は金儲けが目的の傭兵団だからな。無償奉仕とはいかんが」
「それは当然だね。私だって腕を安売りするつもりはないよ。そういう施しはお偉い貴族様の仕事さ」
「それを言ってしまうと、ヒロは帝国の名誉子爵だけどね」
「そういや一応あの勲章には名誉子爵の肩書と一緒に僅かばかりだが年金も付いてたなぁ……とは言え俺は領地も持っていないわけだし。誰とも知らない他所の貴族の領民に施しをしてやる謂れもないんだが。とりあえずえげつなく稼ぐのは控えるって方向で」

エルマの指摘にそういえばそうだったと思い直す。年金いくらだっけ？　あとでメイに確認しておこう。正直端金だったから気にも留めてなかったわ。

「それでええと、そうそう。ショーコ先生、なんかヤバいドラッグとかも作れちゃうんだって？」
「理論的にはそうだね。興味があるのかい？」
「無いよ。一応キャプテンとして確認しただけだ。外に流すのは勿論駄目だし、自分達で使う用にってことで作るのも基本的に禁止な。

医療的な措置でどうしても必要ってことなら俺の許可を得る必要はないけど、事後報告でもいいからちゃんと報告するのと、管理はショーコ先生が責任を持ってやってくれ」
「了解。管理に関してはメイくんに手伝ってもらっても良いかな？」
「それは良い考えだな。メイ、大丈夫か？」
『はい、ご主人様。お任せください』

話し合いをしている食堂のスピーカーからメイの声が聞こえてくる。ショーコ先生に加えてメイも一緒になってそういったドラッグを管理してくれるなら安心できるな。

「しかし、一口に危険なドラッグと言っても範囲が広いんだよねぇ」
「そこはショーコ先生の裁量に任せるよ。不安なら都度メイと協議してくれ。素人の俺の判断でスペシャリストを縛るのは愚策だからな。スペシャリストであるショーコ先生が報告が必要と思ったものだけ報告してくれれば良い」
「あはは、信頼が重いねぇ……応えられるように頑張るよ」

ショーコ先生が苦笑いを浮かべる。熱烈な視線を感じてティーナに視線を向けてみると「ウチは？　ウチは！？」という顔をしていたので頷いておく。うん、君とウィスカもシップエンジニアリングのスペシャリストとしてショーコ先生と同じように信頼してるから。

「物資の積み込みが終わったらアレイン星系でやることは終わりかしらね？」
「そうだな。ミミはばあさんとはもう良いのか？」
「はい！　挨拶もしましたし、連絡先も交換しましたから！」

そう言ってミミはタブレット型端末を掲げて見せる。なるほど、連絡先を交換したのか。この広い銀河では電子的なメールでさえ届

くの数日から下手すりゃ一月ほどかかる場合があるが、とりあえずは届くからな。いつでも連絡が取れるとなればお互いに安心できるってものだろう。
かく言う俺も今までに出会った人のうち何人かと連絡先を交換している。例えばクリスとかな。文通みたいな感じでそこそこの頻度でメールをやり取りしているぞ。たまにセレナ大佐から愚痴めいたメールが届いたりすることもあるし、前に船に乗せたプレス各社のクルーから連絡が来ることもある。頻繁にではないけど。

「ならよし。ショーコ先生も――」
「大丈夫だよ。別れの挨拶はあの時に済ませたし、連絡先だって知ってるしね」
「そっか。んじゃ荷物の積み込みが終わり次第行きますかね」
「ういー。せや、兄さん。次の目的地ってどこなん？」
「ああ、そういや言ってなかったか。次の目的地はリーメイ星系だ。ミミのばあさん曰く、その星系周辺で新種のウィルスか何かによるパンデミックの兆候があるらしい」
「リーメイ星系！？」

俺の返事を聞いたティーナが突然立ち上がって叫ぶ。なんだおい、尋常な様子じゃないぞ。

「何か因縁のある星系なのか？」
「それは……まぁ、せやな」

ティーナはどうにも歯切れが悪い様子だ。ウィスカに視線を向けてみると、彼女も同様である。

「二人とも因縁があるみたいだな。無理に話す必要はないけど、今更目的地を変えるのもちょっとって状況だぞ？」

医療物資はどの星系でも売れるから、地道にコツコツと売っていっても良いんだが、やはり何らかの事情で医療物資を大量に必要としている星系にまとめて売るのが効率が良い。余程の事情で無ければ予定通りに行きたいんだが。

「……まぁ、因縁はある。でも、船の行き先をうちらの事情だけで変えるのは道理が通らんしな。気にせんでええで、兄さん」
「ティーナがそう言うなら良いけど……ウィスカも大丈夫か？」
「お姉ちゃんが良いなら……お姉ちゃん」
「まぁ、話さんわけにもいかんよなぁ。別にもったいぶるようなことでもないんやけど。ええとな、リーメイ星系はうちの古巣やねん。ウィーと再会して、出てくまでのな」

気まずそうな表情でティーナがそう言った。
古巣。古巣ねぇ……そういやティーナはウィスカと再会するまではどこぞのコロニーで筋の良くない連中とつるんでて、再会してからそう言う連中と手を切って、危ない橋を渡ってブラド星系に逃げてきた、みたいな話を聞いたような。

「……つまり、厄介事の香りだな？」
「せやな……ごめんな、兄さん」
「ええんやで」

しょんぼりとしているティーナにそう言っておく。最早どこに行こうとも平穏無事に済まないのは予定調和みたいなもんだからな。

「悟ったような表情になってるわねぇ……」
「あはは……こういうのはいつものことですし」

確かにミミの言う通りいつものことだな。何の問題もない。

「いつもこうなのかい？」

「此の身もまだ日が浅いのでなんとも……ただ、今のところはそうですね」

「そっかぁ……大変なことにならないといいねぇ」

ショーコ先生、他人事みたいに言ってるけどショーコ先生も一緒に巻き込まれるんだからな。逃さないぞ。あと、クギは諦めたような表情になるのが早い。順応が早いのは結構なことなんだが。

「そういうわけだ。今回もフォローを頼むぞ、メイ」

『お任せください、ご主人様。戦闘ボットをいつでも出撃させられるようにしておきます』

頼もしいけど物騒だなぁ。その用意が無駄になることを祈っておこう。

#402　引っ付き虫（剛力）（前書き）

大変長らくお待たせしました。更新再開です！（ ，ω，　）（隔日更新、月曜日木曜日休載

#402　引っ付き虫（剛力）

誰かの悩ましげな呻き声で目が覚めた。感じる温もりは二つ。なんだか身体が痛い。寝返りが打てなかったからだろうか。

「にゅぬぬぬ……ぎゅぬぬ」

「なんだその寝言は……」

眉間をぎゅっと寄せて謎の寝言を漏らしている赤い髪の毛の少女にツッコミを入れつつ、腕を曲げてその頭を軽く撫でる。すると、ぎゅっと寄っていた眉間の皺が僅かに解れた。夢見が良くないらしい。

「すー……」

寝ていても騒々しい姉と違い、青い髪の毛の少女の方は実に穏やかだ。身体を俺にぴったりとくっつけて幸せそうに眠っている。姉の方もそうだが、すべすべのお肌と高めの体温がとても心地よい。

実際のところ、見た目はともかくとして二人とも良い大人なのだけどな。そうじゃなかったら完全にアウトの絵面である。二人とも生まれたままの姿なので。現場を押さえられて「憲兵さんこいつです」などと言われた日には弁明は不可能であろう。あくまで絵面だけ見ればだが。

「……起きるか」

早起きしなければならない理由も特には無いが、惰眠を貪るのも良くない。まずは見た目以上の力で俺の身体をホールドしている二

人をなんとか起こして引っ剥がすところからだな。

☆★☆

「おはようございま……えぇ？」

なんとかかんとか身支度を整えてブラックロータス――俺達の母艦だ――の休憩スペースに顔を出すと、クルー達からドン引きされた。

困惑している栗色の髪の毛の女の子の名前はミミ。俺の船の最初のクルーで、優秀なオペレーターだ。身長は低めだが、服の胸元を押し上げる胸部装甲の厚さは戦艦並みである。

実はやんごとなき血を引いていたりするのだが、本人は割とどうでも良いというか俺達と一緒に行動するのには寧ろ邪魔だと思っている節がある。まぁ、血筋がどうのという理由程度で今更彼女を手放すつもりは無いが。少なくとも、彼女がそう望む限りは。

「どうしたのよ、それ」

呆れた様子で俺に問いかけてきたのは銀色の髪の毛と、その髪の毛から飛び出してきている笹穂型の尖った耳が特徴的な美人さんだ。彼女の名前はエルマ。優秀なパイロットで、傭兵としてのランクもシルバーランク。更に帝国の子爵家令嬢ということで身体強化手術も受けており、細身の見た目に反した膂力と運動能力までも併せ持つスーパーソルジャーみたいな人だ。

胸部装甲の厚さはミミに到底敵わないが。

「ちょっと夢見が悪かったみたいでな」

俺の胴体に正面から抱きついて離れない赤い髪の毛の少女――テ

ィーナの身体を左腕で支えつつ、右手で彼女の背中をポンポンと軽く叩く。
普段は似非関西弁のような口調で話す明るいムードメーカー的存在なのだが、今日は朝から見た目相応の幼女めいた言動で俺を困らせてくれている。ちなみに、見た目というか身長は少女のようだが、出るところは出ているし何よりドワーフは筋肉や骨の密度が高いようで見た目以上に重かったりする。
この状況でそんなことを言ったら熊めいた膂力で肋骨とか背骨とかが危険なことになりそうだから絶対に言わないけど。俺も普段から鍛えているから、重いと言ってもこれくらいなんでもないしな。

「お姉ちゃん……」

複雑な表情で姉のティーナを見上げているのはウィスカ。髪の毛の色が姉のティーナと違って青いが、それ以外は殆ど瓜二つのドワーフの少女――というか女性である。まぁ、顔の作りが殆ど同じでも、纏う雰囲気が全然違うので間違えることはまず無いけれども。
姉に比べるとかなり控えめ――というか落ち着いた性格なのだが、知的好奇心が刺激されると暴動しがちという欠点があったりする。とは言え、姉ともどもこれ以上無いほどに優秀なメカニックなので、その程度の欠点なんて可愛いものなのだが。

「よろしければ此の身が診ましょうか？」

そう言って狐のように尖った銀色の獣耳をピクピクと動かし、モフリティの溢れる尻尾をフリフリとしながらクギが俺の側に歩み寄ってくる。
彼女は何千光年も遠く離れたヴェルザルス神聖帝国の人間――というか獣人？　で、彼の国において巫女と呼ばれる身分の少女である。俺を含めたクルー達は未だに彼女が遠路遥々俺の元へと旅して

きた上に盲目的に俺に付き従う理由を今ひとつ理解しきれていないのだが、兎に角害意の欠片もない上に、彼女が俺に付き従うことを拒否して『処分』されてしまうのも忍びないということで、クルーとして迎え入れた。

実際のところ彼女は物覚えが良い上に努力家で、短期間でサブパイロットとしての技術を身に着けつつあり、しかもサイオニック能力――所謂超能力関連のスペシャリストでもある。俺自身が伏在怪奇な事情でサイオニック関連の事象と関係が深い身の上であるため、彼女の存在は色々な意味で俺達の助けになってくれている。彼女の言う『診る』というのも彼女が得意とするテレパス――精神感応能力によってティーナの状態を確認し、可能であれば改善しようという申し出なのだろう。

そろそろ彼女のことについても色々と考えるべきなのだろうが、今は目先にやることが山積みのため、後回しになっている。彼女曰く、彼女とヴェルザルス神聖帝国としては彼女が俺に付き従っているだけで目的を達せられるということなので、あまり気にしなくても良いということらしいのだが。

「待ち給え。クルーの心身の状態をケアするのは船医である私の領分じゃないかな？」

そう言って待ったをかけてきたのは最近船のクルーとして迎え入れることになった船医兼科学者という立ち位置のショーコ先生である。

ちょっとボサついている長い黒髪、お洒落より快適性重視の服装、その上に纏った白衣。そしてその白衣を押し上げるミミと同レベルの胸部装甲が特徴的と言えば特徴的な女性だ。

その出生には多少厄介、というか特殊な事情があるということなのだが、色々な意味で今更である。

俺は本当に人間と呼んで良いのかどうかも微妙なラインの異世界

人めいた何か。
ミミはグラッカン帝国の帝室の血に連なる、ギリギリお姫様と呼ばれてもおかしくない身の上。
エルマは帝国貴族であるウィルローズ子爵家の令嬢だ。
ティーナとウィスカは特に特別な事情を有してはいないようだが、クギはヴェルザルス神聖帝国においては巫女としてそれなりの血筋であるようだ。
そんな中で予め遺伝子工学に基づいて優秀な頭脳を持つように設計されたデザイナーベイビーであったという事情は可愛いものじゃなかろうか？　こう言ってはなんだが、俺とミミの出自と比べればなんてことはないように思えてしまう。
そもそも、帝国貴族なんかは後天的に強化手術を施して脳の処理能力や記憶能力を強化するのだという話だしな。先天的なものであるかそうでないかという違いがあるだけで、本質的に両者に大した違いはないように俺には思えてしまう。

「メンタルヘルスは博士の守備範囲外では？　ご主人様、よろしければ私が対応致しますが」

そう言っていつの間にか現れたのはメイだ。彼女はハイスペックのメイドロイド――つまりメイド型のアンドロイドで、しかもただの機械ではなく所謂機械知性である。つまり、滅茶苦茶に高度なＡＩだ。人格を有するほどの。
実際のところ、彼女達機械知性は一応『個』という概念はあるものの、基本的には高度な情報ネットワークによって常に相互接続されている群体というか、集合知性体に近い存在であるらしい。
何にせよ、彼女は設計者にして購入者でもある俺に絶対の忠誠というか愛情というか、そういったものを向けてくれる優秀な存在である。ブラックロータスの管理運行の全てを掌握しており、並外れた演算能力による電子戦能力と、パワーアーマーすら凌駕する戦闘

能力を併せ持つスーパーなメイドさんだ。
　どうせ作るなら「ぼくのかんがえた最強のメイドさん」が良いよね、ということで考え得る最高スペックのパーツで全身を組み上げ、ありとあらゆるスキルをインストールした結果が彼女という存在だ。俺達にとっての鬼札だな。
　え？　彼女の容姿？　艶やかな黒髪のロングヘアーにアンダーリムの赤フレーム眼鏡クールなメイドさんだよ。身長は俺と同じくらいで、胸部装甲はミミには及ばずだが大きめ。俺の趣味と嗜好をこれでもかと盛り込んでいる。感情値最低、愛情値高め。クーデレメイドさんって良いよな。

「皆の心配や申し出は有り難いけど、ちょっと様子見で……まぁ、そっとしておいてやってくれ」

　実は、さっきから俺に抱きつく力が微妙に強くなってきている。もしかしたらティーナは今、この時点で初めて周りの状況に気づいて猛烈に恥ずかしがっているのではなかろうか？　その証拠に、引っ剥がそうとすると、力がめっちゃ強くなる。ちょっと痛い。

「……なら良いけど。あんまり抱え込まないように言っておきなさいよ」
「アイアイマム」

　若干事情を察した感のあるエルマに返事をして敬礼しておく。とりあえず、食堂で何か食う……前にこの引っ付き虫をどうにかせんといかんな。やれやれ。

☆★☆

「で、昔のことを色々夢に見てメンタルが一気に弱ったと」

「まぁ、その……せやな」

一時間後。なんとかティーナを引っ剥がした俺は、食堂の自動調理器で調達してきた朝食をティーナとウィスカの部屋に持ち込み、話をしながら二人だけで食べていた。

ウィスカも一緒にどうかと誘ったのだが、「二人きりの方がお姉ちゃんもお兄さんに色々と話しやすいと思います」と言って二人きりにしてくれたのだ。実に姉思いの妹である。

「こう言ってしまったらおしまいだが、俺は精神科医でもなんでもないからな。専門的な治療とかはできないんで、できることと言っても大したことはないんだが」

「身も蓋もないなぁ」

そう言ってティーナが笑うが、その笑顔はどこかぎこちない。相当やられてるな、これは。

「気休めを言っても仕方ないだろ？」

「それはそうやな」

「まぁあんまりグダグダ言っても仕方がないからズバっと言うけど、何があったとしても俺はティーナを守るし、どこかにやったりするつもりはないからな」

「……事情も聞かずにそんなこと言ってええの？」

「ええの。特に他人の命に関することなら悩む必要は一切なし」

「……そのこころは？」

断言する俺にティーナはそう聞いてきたが、俺は彼女に肩を竦めて見せた。

「それを言い始めたら俺の手は既に真っ赤っ赤だし。居たかもしれ

ない被害者ごと宙賊の船を宇宙空間で爆発四散させたかもしれないとか、そんなこといちいち気にしていられない」
「それはそうやろうけど……」
ティーナが今度は苦笑いを浮かべる。状況というか立場が違うとでも言いたげだな。
「とにかく何も心配するなってことだよ。いざとなったら例のー……あー？」
「リーメイ星系や」
「そう、そのリーメイ星系で医療物資をとっとと売っぱらってササッと出てけば良いだけの話だし」

そもそもの話、ティーナがこうしてメンタルに以上をきたしたというかダメージを負ったのは彼女の『古巣』であるリーメイ星系に行くことになった、というのが発端である。
アレイン星系でショーコ先生が俺の船に乗るための正式な手続きを終えた俺達は、彼女の伝手で高品質のハイテク医療物資を大量に仕入れることができた。俺達は傭兵だが、行商人の真似事もする。傭兵家業と違って帝国に規定の税金を取られるけど、それでも安く物資を仕入れることが出来るのならわざわざチャンスを逃すこともないからな。
で、色々とあったミミのお祖母様ことセレスティア様から、リーメイ星系で何かしらのパンデミックが起こりつつあるという情報を得た俺達は一儲けしようとリーメイ星系へと向かっているわけなんだが、そこで目的地のリーメイ星系がティーナの古巣であることが判明して今に至る、と。

「兄さん、今までそう言ってササッととんずらできたことあった？」
「……さて、冷める前に飯を食ってしまおうか」
「兄さーん？」
「ほーら、テツジンの作ってくれた美味しいご飯だぞー？　あーん」

ティーナの追及を無理矢理スルーしつつ、朝食を摂る。今まで目を逸らしていたが、まぁ十中八九また何かしらのトラブルに巻き込まれることになるだろうとは思っている。何にせよ、ティーナのメンタルが最優先だけどな。

とりあえず、防疫装備とブラックロータスの防疫体制についてミミとショーコ先生、あとメイにも確認しておくとするか。パンデミックが起こっているコロニーに寄港して、艦内で同様のパンデミックを起こしたりしたらあまりに間抜け過ぎるからな。

#403　ミーティング（前書き）

ちょっと遅れた（ ˇ ω ˇ ）（昼に食べたガーリックスパイシーチキンが良くなかった

#403　ミーティング

ティーナをウィスカに任せ、他の皆が集まっている食堂へと移動した。これからリーメイ星系内での活動についてミーティングを行う。まず気にするべきことと言えば……これか。

「防疫装備は大丈夫か？」
「大丈夫です！　問題ありません！」

俺の質問にミミがフンスと鼻息を荒くして答える。なんだろう、微妙に不安になるこのやり取りは。念のためショーコ先生にも視線を向ける。

「ミミ君の言う通り、問題ないよ。販売用の医療物資とは別に私達の分の医療物資は確保してあるし、この船にはしっかりとした防疫設備が装備されているようだしね」
『艦内での活動に関しては今まで通りで問題ありません。ただ、コロニーで行動する際には感染対策を行なってください』

ショーコ先生だけでなく、スピーカーを使ってメイも答えてくれた。自分の言葉が信用されなかったことにミミがちょっと拗ねたが、膨らんだ頬をつんつんしてご機嫌を取りながら謝ったら許してくれた。

「ところで大丈夫なの？　ティーナは」
「多分な。一体古巣で何があったのかは知らんが、最終的にはなんとかなるだろ……というか、する」
「そ、なら大丈夫ね」

カネも権力も暴力も持ち合わせが十分にあるので、何があっても大概のことは跳ね除けられるだろう。無論、それに胡座をかいて油断をする気は毛頭無いが。

極端な話、ティーナを船の外に出さなければティーナ関連のトラブルが起こることは考えにくいし、念のためにティーナだけではなくウィスカも船から出ないようにしてもらえば更に安心だ。ティーナとウィスカは髪の毛の色は違うが、双子なだけあって顔凄く似ているからな。下手に連れ回すと、ティーナが髪の毛だけ染めて古巣に戻ってきたとか勘違いされるかもしれない。そう考えると、今回二人には船で留守番をしてもらうのが良さそうだ。

「我が君、僭越ながら申し上げますが……厄介事を避けるのを優先するなら、そもそもリーメイ星系に行くのを取りやめたら良いのではないでしょうか？　多少利益が落ちるとしても、他の星系で医療物資を売り捌いたほうが安全なのでは？」

「それはそうかもしれないけど、一応医者の端くれとしては今まさに伝染病で苦しんでいる人達に医療物資を届けてもらいたいと思うね」

クギの意見にショーコ先生が苦笑しつつ職業倫理の観点から反論する。確かにクギの言うことも尤もではあるんだよな。とはいえ、倫理的な観点から考えればショーコ先生の意見にも一理はある。

儲けや名誉、名声という観点で言えばやはりリーメイ星系で医療物資を売り捌くのがベストだ。俺達は儲かる、リーメイ星系の人々は助かる、危険な病気のパンデミックが起こっている星系に医療物資を運び込んだことを世間は称賛してくれる。傭兵ギルドの顔でもあるプラチナランカーがこういったことをするというのは傭兵ギルドとしても評価が高いだろう。

売り手よし、買い手よし、世間よしで三方よしってやつだな。

「まぁ、トラブルって言っても精々が一つの星系に活動範囲が収まるレベルのギャングかマフィアとのいざこざってところだろうからな。喧嘩を売ってくるならカネとコネ、全てを使って暴力で全て解決するまでだ」
「……そういう言動を見ると、やっぱり君は傭兵なんだねぇって思うよ」
「当然です。プロですから」
「そこで胸を張るのは何か違うと思うわ」

ショーコ先生に自信満々で答えたら何故かエルマにジト目で睨まれた。賊に無礼られたら殺す。それが傭兵というものでは？　ギャングやマフィアを宙賊と同等に見ても良いのかというとちょっと微妙か？　一応帝国臣民が相手となると法的な問題が……いや、そういう連中は平民だろうし、俺は名誉貴族なんだから別に問題ないか？

「なぁ、メイ。仮に相手が帝国臣民だとして、武器を持って襲ってくるなら貴族の権利として切捨御免で手討ちにしまくっても別に問題は無いんだよな？」
『判例によれば問題はありません。実際のところ、グラッカン帝国内では法的に取り締まることが難しいギャングやマフィアを、貴族籍にある剣士がそういった手法で排除することが稀にあります』
「ならよし。そうなると、一応リーメイ星系を統治している貴族にも話を通しておいたほうが良いかな？　メイ、必要なら『金庫の中身』を使っても良いから、良い感じに取り計らってくれ。ミミはメイにくっついてこういった場合における貴族への対処を覚えてくれ」
『承知致しました』
「は、はい。わかりました」

驚いたような表情のまま、ミミが頷く。はて？　何故そんなに驚

いた顔をしているのだろうか。

「ヒロ、唐突に宗旨変えしたわね」

「は？　別に何も変えてないが。というか、宗旨変えって何のことだよ」

「今まで貴族関係のアレコレには関わらないようにしてたじゃない。それが急に領主への根回しを始めるとか、宗旨変えしたのかと思われても当然だと思うけど」

「そうか？　別に俺としては何も変えたつもりはないんだが……俺のモットーは貰えるものは貰う、使えるものは使う、だ。単に貴族の切捨御免の権利を本気で使うような事態が今まで無かっただけだぞ」

俺だってお馬鹿ではないんだから、いざ使うとなれば使うための準備くらいはする。

「なるほどねぇ……ところで気になったんだけど、金庫の中身ってのはなんだい？」

「ああ、それはアレだ。足がつくのはちょっと困るような取引の時に使うためのへそくりみたいなもんだな。宙賊を撃破すると賞金だけでなく戦利品も色々手に入るんだが、その中には足がつきにくくて価値がある品ってのが結構あるんだよ。レアメタルとかな」

この世界における通貨といえばエネルなのだが、これはやり取りをするとバッチリ履歴が残る。つまり、不正……とまではいかなくとも、あまり表に出したくない取引をする際には少々都合がよろしくない。そういった時に役立つのが価値の高いレアメタルや希少品の類である。

レアメタルはその名前の如く宇宙的に見ても産出量の少ない大変に貴重な金属鉱石で、工業的価値が非常に高い。具体的に言うと、

１ｋｇのインゴット一つで凡そ１０万エネルの価値がある。日本円に換算すると１０００万円だ。こっちの世界に来た時にはそれが大量にあったお陰で初期資金に困ることが無かったんだよな。
　他に希少品というと、所謂宝飾品や芸術品、あとはモノによっては酒なんかも該当する。エルフの母星系であるリーフィル星系でしか産出されない精霊銀なんかも一応希少品に該当するか。帝国内で欲しがる人はあまりいないそうだが。

「そういうのをいざという時のために蓄えているわけだ。だからへそくりだな」
「つまり緊急時の資金源でありいざという時の賄賂用でもあるわけだ。そういうのってアリなのかい？」
「そりゃアリだろ。俺達はあくまで傭兵であって、別に正義の味方とか穢れなきヒーローってわけじゃないんだから」
「ふむ、なるほど」

　納得したのかショーコ先生はそう言って頷き、何か考え込むかのように沈黙した。

「我が君、リーメイ星系に到着した後はどういった計画で行動するのでしょうか？」
「まずは星系のメインコロニーであるリーメイプライムコロニーに移動して、情報収集だな。まぁ、十中八九メインコロニーのリーメイプライムコロニーが星系内の物流ハブになってるだろうから、そこで荷を売り捌くことになると思う」
「そうなるでしょうね。問題は売り先だけど、一番確実なのは傭兵ギルドを通すことじゃないかしら。多分、傭兵ギルドからも依頼が出ていると思うわ」
「依頼が出ているなら、それが一番楽ではあるな。傭兵ギルドを通す分、利益は少し落ちるが面倒が一番少ない」

「普通に市場で売ったほうが利益は高くなりそうですけど、まずは傭兵ギルドを通したほうが良いですよね」
「筋は通したほうが良いわね」

傭兵ギルドの顔が利益優先で傭兵ギルドをガン無視とか、あまりにも体面が悪いものな。ギルドとしても看過はできまい。なんだかんだで世話になってるわけだし、顔を潰すのは良くないだろう。

「傭兵っていうのは思ったよりも柵が多いんだねぇ」
「木っ端ならともかく、プラチナランカーともなればな。最高位に相応しい規範を示す必要があるだろ」
「単にヒロが変なところで生真面目なだけよ」
「此の身は素晴らしいことだと思います。流石は我が君です」

はっはっは、クギは素直に褒めてくれて本当に良い子だなぁ。それに比べてエルマの捻くれていること。どうして素直に褒められないのか？　これがわからない。

「とにかく、方針としてはリーメイプライムコロニーを目指して到着次第情報収集と傭兵ギルドとの接触を図る。あとは情報収集の結果に応じて領主にも接触するということで」
「「「アイアイサー」」」

俺の決定にクルー達が返事をする。
さて、リーメイプライムコロニーの状況はどうなってるのかね。流石に半数以上が既に死亡、なんて大惨事にはなっていないと思いたいところだが。

＃４０４　流行り病（前書き）

ホライゾンゼロドーンフォビドゥンウェストやってます（ ，ω，）（特に意味のない情報

#４０４　流行り病

「さて、到着か」

俺達の乗ったブラックロータスが極彩色で彩られたサイケデリックな亜空間を抜け、リーメイ星系端のハイパーレーン突入口付近へと到着した。基本的にハイパーレーン突入口というのは星系の外縁部に位置するため、ここからブラックロータスがコロニーや居住惑星が存在するハビタブルゾーンまで移動するのには超光速ドライブをもってしても二時間ほどかかる。

クリシュナならもう少し早いが、クリシュナだけ先に着いてもあまり意味がないからなぁ。

「とりあえず出歩くのに備えて環境防護服の用意だけしておくかね」

「そうね」

手の空いている人員で船のカーゴ区画へど移動し、一応全員分の環境防護服を用意しておく。所謂ジャンプスーツ……というか、わかりやすく言えば『つなぎ』のような服で、そこそこに頑丈かつ付属のヘルメットをつければ病原体や有毒なガスなどから身を守ることができる装備だ。

なんだかレトロフューチャー感溢れる一見ローテクな装備なのだが、自動調整機構を搭載しており体格に合わせて完全にフィットするだとか、オプション装備をつけることによって宇宙空間での船外作業もできるだとか、地味に性能が高い。

「身体のラインがぴっちりと出るのが玉に瑕だよな」

「そう言いながら、随分と熱心に見てくるじゃない」

そう言ってジト目を向けてくるエルマのボディラインは実に芸術的である。全体的に華奢なのだが、腰から太ももにかけての曲線だとか、胸元の慎ましやかながらもはっきりと存在を主張するラインが実にこう……イイ。とても良い。

「俺が見る分には構わないんだ。他の男に見せるのは勿体ない。ということでこれな」

「ああ、カメレオンサーマルマントね」

前にブラド星系で買った体温調節機能と光学迷彩とまではいかなくともかなりの迷彩機能を持つマントである。当時は無駄遣いとか言われた気がするが、度々役に立ってるんだよな。迷彩機能を使っていない時はヘックス柄の白っぽいマントなんだが、迷彩機能を発動させると名前の如くカメレオンのように周囲に合わせて柄と色を変えて風景に溶け込むことができる。

こいつを着れば外出時にうちの女性陣が不躾な視線に晒されずに済むというわけだ。

「我が君、装備が増えると出入りの際の滅菌処理が面倒になりませんか？」

「なるだろうが、トラブル対策と考えれば安いコストだと思う」

実際に所面倒は増えるが、もしマントを身に着けないで外出してうちの面々が不躾な視線で不快な思いをしたり、万が一変な連中に絡まれたりしたら結局のところより面倒だからな。何より俺が安心できる。

「なるほど……あの、我が君。やっぱり私には無理そうです」

「そっかぁ……仕方ないな。リーメイプライムコロニーにクギが着

られそうな防護服が有ると良いんだが」

クギの場合はもっふもふの尻尾があるのでどうかとは思っていたのだが、やはり駄目だった。俺達が用意していた環境防護服は尻尾に対応していないからな。まさか穴を開けるわけにもいかないし。これはクギも基本はお留守番ということになりそうだ。

「問題なしとは言えないが、とりあえずクギの分以外は大丈夫そうということで。一旦解散だ」

「了解」

「はい、我が君」

とりあえず環境防護服の最終チェックはできたので、各々着替えて解散する。

無いとは思うが、一応宙賊の襲撃とかも警戒はしておかないといけないんだよなぁ。リーメイ星系でパンデミックが起こっていようが宙賊どもは基本お構いなしに輸送商船を襲う。

ブラックロータスも見た目は多少ゴツいが、武装を展開していない限り輸送船に見えなくもない外観だからそこそこ襲われる。まぁ狙い通りではあるんだが、ちょっと煩わしい時もある。こればかりは仕方ないけども。

☆★☆

リーメイプライムコロニーへの移動中。ティーナの様子を軽く見た後は緊急事態に備えてクリシュナのコックピットに詰めていたのだが……。

「これは酷い」

移動中にメイが集めてくれていた情報をクリシュナのメインスクリーンに表示して閲覧していたのだが、リーメイプライムコロニーの状況は正直かなりよろしくないようだ。

まず、流行している伝染病だが、主な感染経路は空気感染であるようだ。ただし、これはくしゃみや咳などを介したヒトからヒトに対する空気感染ではなく、病原となっている菌の子実体……つまりキノコから散布される胞子に曝露することによって起こっているらしい。

症状としては発熱、咳から始まり、症状が進行すると胸の痛みが出てくるのとほぼ同時に血痰が出るようになる。最終的には肺組織が壊死して呼吸困難の末に窒息死するか、運が悪いと中枢神経系感染を起こすこともあるようだ。いずれにしても、治療をしなければ最終的には死に至るということだ。

この病気の厄介なところは患者が死亡した後、急速に『繁殖』を行うことだ。遺体を適切に処置しないとその遺体が新たな感染源となる。具体的に言うと、遺体を放置すると二時間もしないうちに遺体からキノコが生え始めてすぐさま胞子をばら撒き始めるらしい。

しかも、こいつは今のところヒトだけでなくあらゆる生物に対して牙を向いている。つまり、ネズミのような換気ダクトだの下水管だのメンテナンス通路だのを徘徊する小動物をも殺し、苗床にしてコロニー全体を脅かしているのだそうな。

「もうここまで来ると生物兵器じゃないか？　これ」

「それに近いですよね……」

生えてくるキノコはとても食用できるようには見えない。細い軸の先に傘がついている……なんとなくワライタケ――所謂マジックマッシュルーム――に似ているような気がする。

『この病原になっているキノコなんだけど、含まれる成分や遺伝子

情報を見る限り、元は麻薬の原料になるものだね。かなり改変されてるけど』
「つまり？」
『どこかのバカがそのキノコを持ち込んで栽培しようとして失敗したのか、それとも精製が甘いドラッグを使って感染した奴がそのまま死んで感染爆発を起こしたのか……真相はわからないけど、事の起こりはそんなところじゃないかな？』
「傍迷惑な話ですね……これって事態を収束させられるんでしょうか？」
『感染源を全て浄化した上で感染者全員に然るべき治療を施せば？
まぁ、なかなか厳しいんじゃないかなぁ』

リーメイプライムコロニーは結構大きめで古いコロニーだし、感染源となる小動物は相当数いると思われる。それらを全て駆除、浄化し、更に全ての住人を治療するというのは確かに難しそうだ。この世界の技術をもってすればカネと手間をかければできなくはないだろうが。

『まぁ、とにかく胞子を体に入れないこと、艦内に持ち込まないことを徹底すれば大丈夫だよ。この船には感染源になりうる小動物はいないらしいからね』
『はい、検疫体制は万全です』

ブラックロータスはメイが艦内を完全に掌握しており、ネズミの類は入りこんでいないということなので俺達がしっかりと気をつければ問題ないようだ。それは安心できる情報だな。

『ああ、後は心配ないとは思うけど変なドラッグを買ってこっそりキメたりしないようにね。さっきも少し言ったけど、あのキノコを材料とした加工が甘いドラッグは感染源となり得るから』

「そういう趣味を持っているクルーはうちにはいないから。でも一応全員に注意は促しておく」
『そうしておいてくれ。どうしてもそういうのが欲しかったら私に相談してくれればいいからね』
「さらっと不穏なことを言うのはやめてくれ」

それはおクスリ欲しいという意思を何らかの手段で挫こうというのか、それとも危険なブツに手を出すくらいならショーコ先生が何か用意してくれるということなのか。どちらにしても不穏が過ぎる。
しかし、ドラッグ絡みの可能性があるってことか。ティーナの古巣の件と合わせるとどうにもあまり良い予感がしないな。備えようも無いしなぁ……とりあえず、覚悟だけはしておくとしよう。

#405　寂れた港（前書き）

Ｘ４のＤＬＣが来ましたね……（，ω，）（特に関連のない情報

#４０５　寂れた港

『ご主人様、間もなくリーメイプライムコロニーに到着致します』
「はいよ。とにかく事故を起こさないように。ご安全に、だな」
『はい、ご主人様。安全に細心の注意を払います』

クリシュナのコックピットでメイとやりとりし、パイロットシートのシートベルトを解除する。ここまで来たら流石に緊急発進をすることはまずありえないからな。
実は、意外とコロニー周辺というのは危険区域なのである。それはそうだろう、大小様々な船がコロニー周辺にひしめき合うのだから。中にはレスタリアスのように全長１ｋｍを超える大型船もいるし、ブラックロータスだってさほど小さい船というわけでもない。これでも４００ｍはゆうに超える船なのだ。４００ｍ超と言えば地球の原子力空母よりデカいのである。
まぁ、そんな船を俺達みたいな少人数で運用できてしまうこの世界の艦船制御システムがどれだけ優れているのかという話なのだが。尤も、うちの場合はメイがその辺りを差配してくれているからという理由もある。彼女はとても有能なので。

「まずはいつも通りドッキングリクエストですね」

遅れてクリシュナへと乗り込んできていたミミがオペレーターシートでホログラムのインターフェースを起動し、ドッキングリクエストの準備を始める。

「特記事項にアレイン星系より医薬品を輸送、って書いておけば多分優先的にドッキングさせてくれると思うぞ」

「あ、そうですね。そうしておきます」

ホログラムで投影されているキーボードをミミの指が軽やかに叩いていく。技術が進んでも人が何かを入力する際のインターフェースとしてキーボードが使われているというのは感慨深いものがあるよな。まぁ、キーボードが物理的に存在するわけでなく、ホログラムになっているという点は技術が進歩している証なのであろうが。

「コロニーがどんな状況なのか、心配ですね。我が君」

「ソウダネー」

返事をしつつも、実は俺はあまり心配していない。件の病は治療されなかった場合は高い致死率を発揮するようだが、治療さえされればさほど恐れるようなものではないようだからな。コロニーの住人が十分に医療措置を受けられる体制が確立されているなら危機的状況には陥らないだろうし、グラッカン帝国のコロニーがそんなにお粗末な運営をしているはずが……いや、ミミが住んでいたターメーンプライムコロニーにもスラム街めいた区画があったな？　今まで見てきた限り、そういうコロニーは少なくなかったように思う。そう考えると意外と危ないのだろうか。

「生返事してる場合じゃないな。本当に意外と危ないのかもしれん」

考えてみれば、進んだ医療技術があってなおパンデミックの噂が流れ、実際にそうなっているのだ。俺達が二の轍を踏まないように対策はしっかりとしているものの、あまり楽観できる状況ではないのかもしれない。

「運んだ医療物資が役に立つと良いですね」

「そうだな」

どこの間抜けが最初に病を持ち込んだのかはわからんが、巻き込まれて苦しんでいる病人に罪は無いからな。俺達が運び込んだ医療物資が助けになれば良いというのは確かにその通りだ。

『ヒロ、まずは情報収集ね？』

「そうだな。そのためにまずは傭兵ギルドを当たるか。ミミとクギはメイと協力して他の情報源を当たってくれ」

「わかりました！」

「はい、我が君」

さて、動こうか。

☆★☆

ズドォン！　と轟音が鳴り響き、スクリーン越しに外の様子を見ていなくてもブラックロータスが超光速ドライブ状態を解除したことが自ずと知れる。どうやら問題なくリーメイプライムコロニーへと辿り着いたようだ。

「ドッキングリクエストを送ってくれ。俺はエルマのアントリオンから傭兵ギルドに連絡をつける」

『わかりました！』

俺は、というとブラックロータスの艦内を経由してブラックロータスの外部ハッチにドッキング中のアントリオンへと向かっているところである。中型艦に分類されるアントリオンはブラックロータスのハンガーには入らないので、今回みたいな長距離移動の際には艦隊下方の外部ハッチにドッキングして行動しているのだ。

「へーい、ノックしてもしもーし」
『今開けるわ』

外部ハッチに辿り着いた俺はハッチからアクセス要請を出してアントリオンの中へと入る。傭兵ギルドと連絡を取るだけなら別にブラックロータスの休憩スペースでも構わないと言えば構わないんだが、初対面のギルド職員相手に広くて豪華に見える休憩スペースからこんにちは、というのも若干体面が悪い。なので、アントリオンのコックピットから通信をすることにしたのだ。クリシュナのコックピットはミミとクギに使ってもらうことにしたからな。

あっちはあっちで民間のニュースだとかコロニーの広報だとか、コロニー内のフォーラムサイトだとかから情報を収集してもらう予定だ。

「お疲れ様」
「そっちもな。とりあえず何事もなくコロニーに到着できて何よりだ」

アントリオンのコックピットに入ると、エルマが出迎えてくれた。まぁ、出迎えてくれたと言ってもメインパイロットシートを回転させてコックピットの入口側に向けていただけだが。

「見て、船の数がかなり少ないわ」
「パンデミックを起こしているコロニーにわざわざ寄り付こうって船はそりゃそう多くはないだろうしな」

下手をすればパンデミックの元となっている病原体を艦内に招き入れることになりかねない。そんなリスクを取るくらいなら他の安全なコロニーに向かう方が良いと考えるのが普通である。コックピットのメインスクリーンに映されている光景はその考えを証明する

かの如き有様であった。

「スッカスカだな」

「ドッキングしている船は多いみたいだけどね。これは一回ドッキングするとなかなか離れられなくなるんじゃない？」

「可能性はあるなぁ。病原体を外に持ち出さないために安全認証を受けなきゃならないけど、その認証をするための人手が足りなくて安全認証を得られず出港できないとか」

「意図的だったりするかもね」

「船が止まっている限り停泊費用だの水、空気、食料だのとカネがコロニーに落ち続けるからな。流石にそんな阿漕な真似をしているとは思いたくないが……まぁ、そうなったらプラチナランカーの権限でも名誉子爵の特権でもなんでも使って出港するけど」

力というのはそういう時のためにあるのだ。必要とあらば使うことを躊躇するつもりはない。

「じゃあ予定通りドッキングする？」

「そうしないと結局医療物資を売りつけることもできないからな。何にせよまずは傭兵ギルドと連絡を取ろう」

エルマの隣、サブパイロットシートに腰を落ち着けつつ、サブパイロットシートのインターフェースを操作してリーメイプライムコロニーの傭兵ギルドに通信を行う。すると、程なくして通信が確立された。

『こちら傭兵ギルドリーメイ支部』

ホロディスプレイに怜悧な顔立ちの女性職員が投影される。やっぱり受付とかの外部対応職員は組織の顔になるからか、美人さんが

多いよな。うちのクルー達には負けるが。
「どうも、キャプテン・ヒロだ。ＩＤを照会してくれ」
「エルマよ、こっちも照会して」
俺とエルマはそれぞれの小型情報端末を使って身分証明の情報を送信した。何にせよ身分を明かして証明しないことには話が始まらないからな、こういうのは。
『確認致します……ようこそ、キャプテン・ヒロ様。それにエルマ様。プラチナランカーとその優秀なクルーをお迎え出来て光栄です』
そう言いつつ、女性職員の表情は全く動かない。表情の動かなさに関してはメイ並みだな、この人。
「アレイン星系から高度な医療物資を山ほど積んできた。ここで下ろすから仲介してくれ。依頼、出てるんじゃないか？」
『流石はプラチナランカー。ご慧眼ですね。有象無象はやれ宙賊狩りだ、賞金稼ぎだ、商人の護衛だ戦争の陣借りだと戦うことばかりに目を向けるというのに』
「結果としてエネルが稼げて助かる人が居るならそれで良いのにな。傭兵らしく戦って稼ごうが、商人紛いのことをして稼ごうが、エネルに色がつくわけじゃあるまいし」
『至言ですね。どう稼いでもエネルはエネルで、傭兵の本懐はエネルを稼ぐことですから。積み荷の目録を頂いても？』
「オーケー、今送る」
手元でインターフェースを操作し、積み荷の目録を送信する。
『……これはかなりの量ですね。ただ、積んでいる物資が少々問題

では？』
「うちにはライセンス持ちの船医が居るんだ。今そっちにライセンスの情報を送らせる」

積んできた物資は専用のライセンスが無ければ取り扱いが違法になるものもあった。ひと目でそれを看破する辺り、この人はなかなか優秀だな。ショーコ先生にも通信に参加してもらい、ライセンスを確認してもらったところで商談に移る。

『現在調達を依頼されている物資に関しては全て賄えますね。それでもまだ余りますが、残りの物資についてもこちらで捌きますか？』
「とりあえず今は良い。領主とも話をする予定だから、そちらで使うかもしれないからな。それでも余った場合に頼めるか？」
『承知致しました。依頼分を納品できるだけでギルドとしては十分に顔が立ちますので。ありがとうございます』
「ああ。仕事の話が終わったところで情報を貰いたいんだが、良いかな？」
『はい。ギルドで掴んでいる情報ならばなんなりと』

よし、これで傭兵ギルドとの話はスムーズに進むだろう。

#406　惨状（前書き）

おまたせだぜぇ！―（：3」∠）―

#406　惨状

「思った以上に状況が良くないな」
「そうね」

傭兵ギルドの女性職員から回してもらった情報を読み進めるにつれて明らかになってくるコロニーの実情に思わず顔を顰める。エルマも俺と同じ感想を抱いたようで、眉間に少し皺が寄っていた。
まず、今現在このコロニーでは間違いなく件の伝染病のパンデミックが発生している。ただ、その対象というか住民層は大きく偏っている。

「格差の大きいコロニーなんだな、ここは」
「そうね。ほぼ綺麗にスッパリと上と下で分かれているんでしょうね」

住民の凡そ９５％が『下層民』と呼ばれる人々で、所謂労働者階級と言えば良いのか。まぁその下層民の中でも更にいくつかの層に別れてはいるようだが、生活の質はそう変わらないみたいだな。こっちのグループが主な感染者。出ている死者もこちらが大半。
対して残り５％の『上層民』は企業エリートや官公庁務めなど、大手の商家なんかが占めている。つまり金持ち連中なのだが、この二つの階層の格差がなかなかに大きいようだ。こっちのグループは感染してもすぐに高度な治療を受けられる状態にあり、殆ど死亡者が出ていない。
リーメイプライムコロニーは人口凡そ五十万人を誇る最大規模のコロニーだ。そのうち９５％が感染の危機に晒され、今もジワジワと死者が出ているという状況は非常に危うい。

「暴動とか起こったりするんじゃないか、これ」
「可能性はあるわね……密航を試みるような連中もいるかもしれないわ」
「注意が必要だな」

この状況に更に拍車をかけているのが件のキノコを使った粗雑な出来のドラッグが下層民の間で蔓延しているという事実である。コロニーの統治機構はとうに今回の流行病の感染源を特定しており、件のキノコを原料としたドラッグの危険性を含めてコロニー全体にアナウンスをしているのだが、ドラッグの蔓延が止まる気配がない。つまり、流行病も収束する気配がない。

件のキノコを原料としたドラッグには向精神作用の他、強い鎮痛作用や服用の際の多幸感などもあり、病の痛みと苦しさから逃れるために安価なドラッグを服用するといった本末転倒な事態が横行しているのだという。

「いやいやいや……そうはならんやろ」
「人間、追い詰められると藁をも掴むっていうしね。それに、どんな状況でも逆張りする人とか陰謀論に傾倒する人とか、理屈に合わない行動を取る人は出るものよ」
「外野の俺ですら頭が痛くなりそうなんだが。これ、領主は頭を抱えているんじゃないか？」
「それはそうでしょうね」

どんなに科学技術が発達しても、所詮ヒトはヒトのままということだろうか。道具が便利になり、惑星から宇宙に飛び出してもそう簡単にヒトの精神性は変わらないか。まぁそうだよな。俺だってこの世界に来たからってさほど考え方というか精神性に変化があったとは思わないし。

いや、必要とあらば他人の命を奪えるようになった点は大きな変化か。もしかしたらこっちに来て変化したわけじゃなく、元からそういう精神性だったのかもしれんが。平和な日本で暮らしていたら命のやり取りをすることなんてまず無いからな。今更検証のしようがない。

「ショーコ先生の話だと適切な治療を行わなかった場合の致死率が凡そ七割だっけか。それでまだ死者が一万人程度っていうのはかなり善戦してると言っていいのかね、これは」

「感染抑制にかなりの資金を費やしてはいるようね。ただ、それでも全員がに十分な治療を施せてはいないみたい。免疫も殆どできないみたいだから、再感染する人も多いみたいね」

「地獄過ぎる……どうにかなるのか、これは」

「さぁ？　そういうのはショーコに聞くしかないでしょ」

エルマが肩を竦めてそう言う。まるで他人事だが、まぁ他人事なんだよな。俺達としては医療物資をこのコロニーで下ろして領主と行政の健闘を祈る他ない。この状況をいち傭兵にどうにかしろというのは土台無理な話だし、そもそもそんなことをする立場にもないからな。

「とりあえず情報は共有しておくか」

傭兵ギルドから入手した情報を他のクルー全員に向けて共有する。後から考えてみればこの行動は迂闊だったよな。本当に後の祭りだが。

☆★☆

「どうしてもコロニーの知り合いの安否を確かめに行きたいと」

「うん……」

俺の目の前でしょぼくれているティーナが頷く。何がどうなってこうなったのかというのは簡単な話で、俺が共有した傭兵ギルドからの情報を目にしたティーナがその惨状に心を乱したというか、予想以上の酷さに居ても立っても居られなくなってしまったという話だ。

「却下だ。ただでさえティーナにとってリスクのあるコロニーなのに、更にパンデミックによって情勢が不安定になっていて、疫病だけじゃなくドラッグまで蔓延してる。外出は許可できない」

「私も同意見ね」

「私も同意見だねぇ。まぁ感染症はどうとでもなるし、するけれど、疫病による死の危険っていうのは物凄いストレスだからね。コロニー内の治安は地の底だと思うよ」

俺とエルマとショーコ先生が揃ってティーナの要望に否を突きつける。それはそうだろう。あまりにリスクが高過ぎる。それに、安否を確認したところでできることなどほぼ無い。医療物資をいくらか融通することはできるが、できるのは所詮その程度のことである。

あとはティーナが私財を擲って何らかのアクションを起こすくらいか。ティーナもスペースドウェルグ社に所属していた頃に比べれば大分懐は暖かくなっていると思うが、今までの稼ぎを全部使っても彼女一人の資金でコロニーの外に逃がせるのは精々五人かそこらくらいだろう。

「むむむ……」

「……」

ミミはどうにかならないかと頭を捻っている様子だ。クギはこと

の成り行きを静観する構えのようだな。ティーナの妹であるウィスカも何か考え込んでいるところを見ると、ミミと同じようにどうにかできないか考えているのかね。

「まぁ、そうは言っても危ないから無理と言ってもそれで大人しく引き下がるようなタチじゃないよな、ティーナは。いよいよとなったらこっそり出ていくつもりだろ」

「うっ……」

「だから、行くなら俺だな。コンバットヘルメットのコマンドリンクを使って遠隔でやり取りしろ。俺が譲歩できるのはそこまでだ」

「一人で行くのは危ないわよ。私も行くわ」

「ご主人様、私も同行致します」

「この状況下なら医者も連れて行くと良いんじゃないかな」

「我が君、此の身もお連れください」

「ストップ、ストップ。収拾がつかないから！」

我も我もと次々と同行者として皆が名乗りを上げるが、流石に全員は連れていけない。というか、そんな大所帯では本末転倒である。

「私も行きたいですけど……！　行きたいんですけど……ッ！」

白兵戦能力に定評が無さすぎるミミが悔しげに身を震わせている。うん、自分を客観視できるミミはとてもお利口さんだ。偉いぞ。

「まず、ショーコ先生とクギは却下。ショーコ先生には万が一に備えて船の防疫体制を完璧なものにして欲しいし、クギはそもそも身体に合う環境防護服がないから」

「むぅ、残念だ」

「尻尾が災いするとは……口惜しいです」

二人が露骨に残念がる。同行してもらえれば何かと安心ではあるんだが、ショーコ先生はトラブルに巻き込まれた場合に完全に足手まといになるし、クギはそもそも船の外に出る条件を満たせない。まぁ、最悪環境防護マスクだけして戻ってきた際に服も身体も全部念入りに滅菌すればなんとかなるだろうが、流石に手間が過ぎる。

「次に、メイには船を掌握していて欲しいから却下。帰るべき拠点を完璧に任せられるのはやっぱりメイだからな」

「承知致しました。船のことはお任せください」

メイが胸を張って頷く。メイならそもそも疫病に感染することがないから完璧に安心だし、白兵戦能力だけでなく全ての面で頼りに頼れる実力を持っているのだが、だからこそ船を守ってもらいたい。メイが船で目を光らせていればティーナがこっそり船を降りるなんてことも起こらないだろうしな。

「というわけでエルマに頼む」

「消去法なのが気に入らないけど、妥当な判断ね」

不満げなセリフを吐いているが、ピコピコと忙しなく動いている長い耳が全てを台無しにしている。嬉しいのが丸分かりなんだよなぁ。

実際のところ、エルマは傭兵としての経験が豊富で目端が利くし、白兵戦能力も高い。レーザーガンの腕前は俺とメイに次ぐ腕前だし、素手による格闘術に至っては俺でも敵わない。流石のエルマもメイの圧倒的膂力と体重、そして素早さと技術の前には為す術もないようだが。

「というわけで、一応領主にアポを取ってから面会に行って、その足でティーナの知り合いの安否を確認しに行く。それまでにその安

否を確認したいっていう知り合いの所在を確認しておくように」
「うん、わかった……兄さん、おおきにな」
「ええんやで」

リスクを考えれば売るものだけ売ってとっとと退散するのが一番なんだが、この状態のティーナのお願いをにべもなく却下してとっととずらかるってのもちょっとな。まぁ、ある程度覚悟はしていたんだ。毒を食らわば皿までだな。

#407　リーメイプライムコロニー（前書き）

三度寝しちゃった☆

ゆるして―（：3」∠）―

#407　リーメイプライムコロニー

「うーん、いいねいいねー。素晴らしい。モールトベネ」

環境防護スーツ――いかにもＳＦチックな身体のラインがはっきりと出るピチピチスーツ――を身に着けたエルマを前に俺は思わず拍手をする。素晴らしい。これは素晴らしいものだ素晴らしい。

「い・い・か・ら！　早くマントを寄越しなさい！」

「えぇ……別に環境防護スーツだから恥ずかしくないって言ってたじゃん」

「あんたのスケベな視線に晒されてたら恥ずかしくなってきたの！」

エルマが長い耳を赤くしてプンプンと怒りながら俺の手からカメレオンサーマルマントを分捕る。ああ、マントの下に隠れてしまった。

「ヒロ様、ああいうのが好きなんですか？」

「なんて言えば良いんだろう。一種のロマンだよね」

ミミの質問に誠心誠意真面目な表情で回答する。この世界、確かに服装が全体的にＳＦチック……というと漠然としすぎているが、そう言う風味を感じるファッションがやはり多いのだが、ここまでコッテコテのＳＦ風ピチピチスーツってあんまり見た覚えが無かったからな。やっぱり感動するよね。この調子でビキニアーマーとかも出てこないかな。

「ええと……後で私も着てみましょうか？」

「いいね」

ミミが素晴らしい提案をしてくれたので、右手の親指を立てて全力で賛同しておく。ミミやミミに匹敵するモノをお持ちのショーコ先生がこの環境防護スーツを着たら、それはもう大迫力だろう。俺としては全力で賛同する以外の選択肢が存在しない。

「ご主人様」
「なんだ？」
「メイド服も負けてはいないと思うのです」

ズイッと身を乗り出してくるメイの圧力が強い。

「落ち着こう、メイ。何か論理が飛躍していると思う」
「はい、私は落ち着いております」

目にも留まらぬ速度で身を引いたメイがすました顔でそう言いながら頷く。

メイはメイでメイド服に並々ならぬ拘りを持っているからな……頼めばメイド服以外も着てくれるけど、メイド服が至高のコスチュームと信じて疑っていないところがある。

「ほら、行くわよ。とっとと行くわよほら！」
「痛っ、痛い。わかったわかった、俺が悪かった」

エルマに夢中だったところをミミやメイに気を取られたのは俺が悪かった。だから蹴るのはやめて欲しい。鞭のようにしなるエルマの蹴りはコンバットアーマーの上からでも痛いので。

「コマンドリンクは常時接続にしておくからな」

「わかりました！　お気をつけて」
「行ってらっしゃいませ、ご主人様」

ミミとメイの見送りの言葉を聞きながらコンバットヘルメットを被る。その俺を見ながら、既に環境防護スーツのヘルメットを装備し終えていたエルマが呟いた。

「……私もコンバットアーマー買っておこうかしら。経費で」
「経費で落ちますねぇ……俺が許可すればな」
「許可するわよね？」
「もちろんですとも」

だからその構えた両手を下ろして欲しい。コンバットアーマーを装備していれば蹴りの打撃はある程度防げるが、関節技には無力なのだ。寧ろアーマーのせいでテコの原理が強く働いて逆に危ないまである。エルマに密着されるのは良いが、それで俺の腕とか指が曲がっちゃいけない方向に曲がるのは勘弁して欲しい。

「ティーナは大丈夫かしらね」

ブラックロータスのエアロックで滅菌処理を受けながらエルマが少し心配そうな声で呟く。

「大丈夫だろう」

メンタルが落ち込み気味のティーナはショーコ先生とクギによるメンタルヘルスケアと心を落ち着ける瞑想の処置を受けてもらっている。二人とも張り切っていたが、逆にティーナのメンタルにダメージが入ったりしないか少し心配なんだよな。まぁ、ウィスカも一緒にいるし滅多なことにはならんと思うが。

「それよりも俺達の方が気をつけなきゃな」
「これ見よがしに剣をぶら下げて、その上でコンバットアーマーまで着込んでいるあんたを見て喧嘩を吹っかけてくるようなのは流石に居ないと思うけどね」
「そう願うよ」

コンバットヘルメットのバイザーを非透過モードにしておけば俺の人相もわからないから、威圧感はバッチリだしな。どうにも俺の顔つきはプラチナランカーの傭兵に相応しい威圧感とか迫力が足りないようだから。剣の威圧感は別として。

☆★☆

「しみったれたコロニーだなぁ……」
「パンデミックの最中だからでしょ」

港湾区画を出る際に念入りに滅菌処理を施されてコロニーの中へと足を踏み入れたわけだが、リーメイプライムコロニーに対する俺の感想は言葉のとおりである。
まず、人通りが少ない。少ないと言っても比較的というか、他所の同規模のコロニーを比較しての話だが。あと、俺達みたいに完全に全身を防護している人よりも、マスクだけをしている人が多い。恐らく、マスクだけをしているのがこのコロニーの住人達なのだろう。俺達と同じような格好をしているのは多分このコロニーに寄港している船のクルーなんだろうな。
何故そう思うかって？　そりゃ全身を防護するタイプのスーツはそれなりのお値段がするからさ。使い捨てタイプにしろそうでないものにしろ、経費が嵩むし運用するのに滅菌設備が必要だったりするし。そんなものをこのコロニーの『下層民』が運用できるとは思

えないからな。
「マスクだけで感染を防げるのかね？」
「胞子を多量に吸引しなければ大丈夫って話だし、ノーガードよりはましなんじゃない？」
そんな会話をしながら下層区画――下層と言っても物理的な意味でなく、立場的な意味――を抜けて、領主がいるという上層区画へと向かう。
「領主は準男爵だっけ」
「レイディアス準男爵ね。領主というよりは代官と言った方が正確だけど」
「領主と代官の違いは？」
「領主っていうのは本来その土地――というか星系を領有している貴族のこと。代官っていうのはその領主から星系の統治を任されている貴族ね。つまりこれから会うレイディアス準男爵の上に本来の領主が別にいるってこと。マグネリ子爵ね」
「なるほどなぁ……そういや言葉遣いとかどうするべ。あんまり丁寧な言葉遣いなんてできんぞ」
「丁寧さを心がける程度で十分よ。名誉爵位とはいえ、爵位はヒロの方が上だしね」
「そういうものか」
と、話をしながら移動をしているうちに下層区画と上層区画を隔てるゲートに到着した。環境防護機能もありそうなコンバットスーツに身を包み、レーザーライフルを装備した兵士がゲートを守っている。その他にも据付型のレーザータレットとかも置かれてるな。随分と厳重な警備体制だ。
まぁそれもそうか。この状況じゃな。

「これは酷い」
「まぁ、こうなるわよねぇ……」

ゲート付近には怒れるコロニー住民達が押し寄せていた。いや、押し寄せるとは言ってもゲートの直近まで近づいたり、出入りを妨害するようなことはなく、遠巻きに集っているという感じか。

「えー、なになに？　食料と水、そして仕事を寄越せ？」
「空気税を免除しろ、我々にも手厚い医療支援を、ね」
「統治機構は感染爆発の責任を取って遺族に弔慰金を、か。うーん、まぁ。妥当？」
「初期対策を誤ったのかどうかは知らないけど、現実問題として感染爆発が起こるのを止められなかった以上、統治機構が批判されても仕方はないわよね」
「それはそう。結果が全てだものな」

初期段階で封じ込めに失敗したのか、それとも気付いたときにはもう手遅れだったのかは知らないが、代官はご愁傷さまだな。俺達には関係ないが。

「この状況で近づくのは気が進まんが、致し方ないか」
「徒歩だと目立ちそうねぇ……どこかでレンタルの車両でも調達するべきだったかしら」
「というか、カーゴスペースには余裕があるんだし偵察車両を調達すべきかもな」
「それはそうね」

話しながら二人でゲートへと歩いていく。警備をしている兵士達が俺達の姿を認めて警戒するが、警戒はすぐに解けた。俺の腰に差

してある大小一対の剣を目にしたからだろう。グラッカン帝国内では剣を腰に挿して歩いている人＝貴族だからな。

「どうも、ゲートを通りたいんだが良いかな？　レイディアス準男爵にはアポを取ってる」

「イエス、サー。ＩＤを照合させていただいても？」

「勿論だ」

マントを翻し、コンバットスーツのポケットを兵士達によく見えるようにしてから小型情報端末を取り出してＩＤを照合してもらう。

「あー、君達は帝国航宙軍の海兵ではないよな。星系軍所属なのか？」

「イエス、サー。我々はマグネリ卿の配下で、星系軍に所属しております」

「なるほど。事態が収束することを祈ってるよ」

照合している間に兵士と世間話をする。なるほど、マグネリ子爵のね。レイディアス準男爵ではなくマグネリ子爵の配下と名乗るということは、領主も兵を派遣して事態の収束に動いてるってことかな？　直属の兵を遣わしているということは多分そうなんだろうな。

「照合が完了致しました。お通り下さい、ヒロ卿」

「ありがとう」

兵士に礼を言って物々しい警備体制のゲートを通り、上層区画へと抜ける――前に全身に滅菌処理を受ける。上層区画に入る際の感染対策は完璧といったところか。

「上層区画はクリーンです。環境防護ヘルメット無しでも問題ない

状態となっています」
「なるほど、情報感謝する。行こう、エルマ」
「ええ」

今度こそ下層区画と上層区画を隔てるゲートを通過し、俺達は上層区画へと足を踏み入れた。

「へぇ、こっちは下層にくらべるとだいぶマシだな」
「格差社会よね」

上層区画ではマスクをしている人も殆どおらず、俺達のように全身に防護対策を行っているような人も殆ど見当たらない。例外はゲートを守っている兵士くらいか。恐らくだが、この状況下で下層と上層を行き来するような人間は殆ど居ないんだろう。そしてゲートの此方側はクリーンだからマスクをする必要もないというわけだ。

「とにかくレイディアス準男爵に会いに行くか。挨拶は大事だからな」
「そうね、向かいましょう」

小型情報端末を取り出し、目的地へのルートを表示する。さて、移動手段は徒歩にするか、それとも他の手段を模索するか。さほど遠くないから徒歩でも良いんだけどな。

#408　代官（前書き）

ぽんぺ―（∵3」∠）―

#408　代官

上層区と言っても立ち並ぶ構造体の質にそう差がある訳ではない。若干派手……いや、洗練されたデザインの広告が目立つのと、看板類があまりゴチャゴチャしてないくらいか。あとは何と言っても壁に落描きの類が無いのと、地面にゴミが落ちていないな。全体的に綺麗。

「上層区画と言うだけあって本当に小綺麗だよな。こういうのなんて言ったっけ……ああ、割れ窓理論？」

「割れ窓理論？」

「ガラスの割れた窓を放置しているとそこは誰も注意を払っていない場所だと思われて、やがて全ての窓が割られるとかなんとか。要は小綺麗さを保つことで誰かがその場所を汚すことを防ぐ、みたいな理論だったかな。誰だって最初の一歩を踏み出すのは勇気が要るだろ」

「なるほど。なんか昔統治論の勉強をしていた時にそんな記述があった気がするわ」

「統治論なんて勉強してたのか」

「貴族の娘だから多少はね」

そう言ってエルマが肩を竦めて見せる。考えてみればエルマは子爵家の娘だし、順当にどこかの貴族――それも領地を持っていたり任されていたりする貴族に嫁いだりした場合には領地の経営に携わる可能性もあったわけか。それならそういう教育を施されているのも当然なんだろうな。

「どんな知識も無駄にはならないもんだよな」

「何よ急に」
「俺も勉強しないとなぁって。日々精進だ」
「意味がわからないわね……向上心があるのは良いことだけど」

折角勉強したのに、傭兵生活を続けるんじゃ使い所が無いよなぁと思っただけなんだけどな。いずれエルマの知識を十全に活かすような場を整えるべきなのかね？　最終的には安全な惑星上の居住地に庭付きの一戸建てを手に入れられれば良いなと思っていたけど、もう少し目標を高く設定するべきか？　このままだと嫁さんの数が最低でも六人ってことになりそうだしな。普通の一戸建てじゃ無理だな。豪邸だな。でなければ複数……それはもはや集落では？

「何か変なことを考えている時の顔をしているわね」
「どうして」
「もう付き合いも長いんだからわかるわよ……それよりほら、着いたわよ」
「ほう……ここか。なんだろうな、カクシキィーって効果音が聞こえてきそうだ」
「頭でも打った？　それとも脳に例のキノコでも生えた？」

本気で心配そうな顔をするのはやめてほしい。いや、だって仕方ないだろ。無機質な構造体が林立しているようなコロニーの中に、突然赤レンガと鉄柵を組み合わせた塀に囲まれている庭付きの邸宅が現れたんだから。俺の目がおかしくなったのかと思ったわ。

「いや浮いてるだろ。明らかに周りから浮いてるだろうこれは。存在が反重力装置じゃん。なんだよあの青々とした芝生」
「イミテーションだと思うけどね」
「人工芝生かよ……」
「コロニー内で『生』の芝生とか無理よ。微生物コントロールがね

……対処するとなると維持費がとんでもなくかかるらしいし」
「カネの問題かぁ……世知辛いな」
「準男爵だしね」
「準男爵という爵位の立場がどういうものなのかなんとなく理解できた気がする」

つまり、貴族の中でも一段下に見られるような地位と経済基盤しか持たない貴族なのだろう。

「準男爵相手に爵位について擦るとアレだから、話題に出さないようにね。センシティブな話題だから」
「了解」

こちらとしても余計な敵は作りたくないからな。そうさせてもらおう。
正面に見える古めかしい（ようにみえる）鉄柵の門に近づき、門番として立っている兵士に身分とアポイントメントを取っていることを伝えると、すぐに邸内へと案内された。

（なぁ、挨拶の際に気をつけることってあるか？）
（ヘルメットは取り外して左の脇に抱えて。あとは普通に話せば良いわ）

案内してくれる兵士の後ろに付いて歩きながら、ヘルメットの通信機能を使ってエルマと内緒話をする。

（この兵士、ゲートを守っていたのと同じマグネリ子爵の兵じゃないか？）
（装備が同じね。レイディアス準男爵の手勢も同じ装備で統一しているのかもしれないけど）

この声量であれば特別な対策でも取っていない限り俺達の会話は案内している兵士にも聞こえないだろう。通信を傍受でもしない限り。流石にそこまでやってるってことはないと思う。

「こちらです。お客様をお連れしました」

「入れ」

扉の中から聞こえた声は思った以上に若々しかった。そのことに「おや？」と疑問が浮かぶ。確か事前に調べた限りでは、レイディアス準男爵はそこそこお歳を召しているという話だったはずだが。

「ようこそ、ヒロ卿。そしてエルマ嬢。私はハルトムート・マグネリ。ギュンター・マグネリ子爵の長子で、マグネリ子爵家の嫡子だ。よろしく頼む」

俺とエルマを出迎えたのは俺と同じか、少し若いくらいの年齢に見える美男子だった。

なるほど、マグネリさん家のハルトムート君ね。なるほど？

「よっと……どうも、傭兵のキャプテン・ヒロだ。お会いできて光栄だが……レイディアス準男爵とアポイントメントを取った筈なんだが」

コンバットヘルメットを取り外し、左の小脇に抱えつつ疑問を口にすると、ハルトムートは頷きつつ口を開いた。

「すまないな。ファビアン卿は体調不良により今朝方リーメイ星系の代官の任を解かれ、その代わりに私が代官として就任したのだ。父の命でな。ヒロ卿が面会を取り付けたのは彼の任が解かれる前だ

ったので、こうして行き違いが発生したわけだが……代官との面会という意味では何一つ変わることはないので、どうか了承して頂きたい」

「承知した。それで、面会の目的なんだが……」

ちらりとエルマに視線を向けると、エルマは何も言わず肩を竦めてみせた。良いから言えという意味か？　まぁ当たって砕けるしかないよな。俺には貴族同士の交渉に役立つような話術があるわけでもなし。単刀直入にいこう。

「私用で下層区のちょっと治安のよろしくない場所に足を踏み入れる可能性が高くてな。何かしらのトラブルが起こった際に『お騒がせ』するかもしれないから事前に挨拶をと思って訪ねたんだ」

「……ヒロ卿は私に私が治める領地の民を斬り殺す赦免状でも発行しろと仰るのか？」

「俺を血に飢えた人斬りか何かと勘違いしてないか……？　襲われたら反撃するから、その点はよろしくってだけの話だぞ？　別に治安の悪い場所に入り込んで目に入った奴を片っ端から真っ二つにしますってわけじゃない」

眉間に皺を寄せて敵意を滲ませるハルトムートに苦笑いをしながら反論する。何事も起こらなければ良いんだが、何かが起こった時に事前に話を通しておけば余計なトラブルを避けられるだろうという配慮なんだが。

「申し訳ない。貴方に関する噂はなんというか……勇猛なものが多くて」

「どんな噂が広がっているのか調べたくなってきた……」

「やめときなさい。言いたい奴には言わせておけば良いのよ」

頭を抱える俺にエルマが忠告してくる。忠告をしてくるってことはエルマはある程度把握しているのか。あとでやんわりと教えてもらおう。やんわりと。

「まぁコロニーの状況に関しては俺も承知しているから、あまり迷惑をかけないようにしはしたいんだがな。ただ、俺はどうにもトラブルに巻き込まれ気味で……」

「理解した。事前に話を通して頂けることに感謝する。兵と治安維持要員には最大限の配慮をするように通達しておく」

「ご配慮痛み入るよ。代わりといっちゃなんだが、アレイン星系から運んできた医療物資があるから、適正価格で提供させてもらう。うちの母艦に積んできただけだから然程の量は無いが、一助になれば幸いだ」

「有り難い。商人どもはここぞとばかりに値を吊り上げてきているようでな」

「後で目録を送るよ」

無料で譲るのではなく、適正価格で提供するのは貸し借りを作らないためだ。無償で譲って貸しを作るという案もあったのだが、貴族相手に貸し借りを作ると結局面倒だから、後腐れの無いように適正価格で譲ったほうが良いだろうということになった。ハルトムートの反応を見る限り、俺達の選択は間違ってはいなかったらしい。

俺はコロニーでの行動について配慮してもらう。あちらは吊り上げなしの適正価格で医療物資を手に入れられる。これでフェアな取引というわけだ。

「このコロニーにはどの程度の滞在を見込んでいるのだろうか？」

「そんなに長期間ってことにはならないと思う。仕事をするのにも向かないしな」

パンデミック下のコロニーは入港はともかく、検疫のせいで出港にかかる手間があまりにも大きい。高騰している医療物資を運んでくる商船を狙った宙賊も増えているのだろうが、出入りする度に大きな手間と時間がかかるのでは割に合わない。

「そうか……滞在している間に卿の腕を見込んで頼み事をするかもしれない、その時は――」

「傭兵ギルドを通してくれれば考慮する。ただ、依頼を受けるかどうかは条件次第だからな」

「承知した。あまり吹っかけてないでくれると有り難いな」

「腕の安売りはできないんで、それはあまり期待せんでくれ」

プラチナランカーの腕を安売りすると他のプラチナランカーに迷惑がかかるからな。結果として他のプラチナランカーに絡まれでもしたら絶対に面倒なので、安売りはしないぞ。絶対に。

#409　目的地（前書き）

遅れたぜ！（　，ω，　）（もはや開き直っている

#409　目的地

ハルトムートととの顔繋ぎを無事終えた俺とエルマはパンデミックへの対処で忙しいだろうということで早々に会見を終え、次なる目的地へと向かうべく上層区画を移動していた。

「出入りは面倒だけど、上層区画なら観光というかブラブラすることもできそうだな。港湾区画から近いのもポイントが高い」
「そうね。治安も良いみたいだし、感染の危険もないって話だし。でも、わざわざする？　この状況で」
「しないっすね」

長期滞在するなら息抜きに船の外に出ることも必要だろうが、今回は然程長期の滞在をする予定はないので、わざわざリスクを取ってまですることではない。パンデミックのせいで商品や物資の流通も縮小しているだろうし。そうなると全体的に商品やサービスの提供価格が上がるからな。わざわざ高い金を払ってまでやることではない。クリーンとは言っても感染の可能性がゼロってわけでもないしな。

「そろそろあっちにも連絡しておくか……聞こえるか？　これからゲートを出て目標地点に向かう」
『はい、ご主人様。通信状態は良好です。お気をつけて』

上層区画のゲートを通過する前にコンバットヘルメットに搭載されているコマンドリンク機能を使ってブラックロータスに連絡すると、メイの声が聞こえてきた。音声通信はよし。次は映像だな。

『映像も来ましたね……ってなんだか凄い物々しいですね』
「暴動でも起きやしないかとビクビクしてるんでしょ」
「そうなんだろうけどあんま大声で言うなよ……？」
「別に聞こえたところで怒られるわけでもなし、気にしなくていいわよ」
『ははは、エルマくんは実に剛毅だよねぇ』

エルマが剛毅、ね……まぁ、そうね。剛毅と言っても良いか。女傑タイプではあるよな。ベッドの上では女傑どころか可愛らしい子猫ちゃんなんだが。

「……何よ？」
「なんでも？」

ゲート通過の審査中、隣に立つエルマの横顔を見ていたらジト目で睨まれてしまった。別に不穏なことは考えてないヨー？　と心の中で言い訳してみるが、どうにも疑われているようである。今はコンバットヘルメットのバイザーも透過していないからエルマからは俺の視線がどこを向いているのかも見えないはずなのに、どうしてピンポイントで視線を感じ取られてしまうのか。これがわからない。

「審査完了です。お気をつけて」
「どうも」

入る時に比べれば出る時の審査は早いな。まぁそれもそうか。大荷物を背負っているってわけでもなし、チェックするのなんて俺達が携行している武器くらいだものな。
ちなみに、今回持ってきている装備類はかなり少ない。俺が大小一対の剣とレーザーガン、予備エネルギーパックと負傷に備えて救急ナノマシンユニット。エルマも俺の装備から剣を除いただけで、

基本は同じようなものである。あとは小型情報端末とか、万が一何かの間違いで船に戻れなくなった上にメシもロクに食えない時に備えて用意してあるカロリーバーくらいだ。
　実はもっと携帯性に優れる非常食もあるにはあるんだが、あまりにもアレなので最後の保険としてブラックロータスに死蔵されている。
　え？　どんなものかって？　ちょっと大きめの錠剤みたいなモンで、それ一粒とあとは水だけで一日食いつなげる栄養タブレットってやつだよ。胃の中で水と反応して胃の中で膨れ上がって、満腹感も得られる逸品だぞ。味も素っ気もないけど。

「目的地までナビゲートしてくれ」
『わかりました！　コンバットヘルメットのバイザーにミニマップとロケーターを投影しますね』

　ミミがそう言うやいなや、コンバットヘルメットのバイザーにミミが言った通りのものが表示される。ミニマップというのは読んで字の如く小さな地図なのだが、ロケーターというのは行き先を視覚的に指し示してくれる補助機能だ。わかりやすく言うと、地面に目的地までの経路が線として走ってハイライトされる。どこかの惑星採掘船かな？　急に例の伝染病が変異して死体が動き出したりしないよね？

「で、目的地はどういうところなんだ？　ああいや、地域性は知ってるんだけど建物としてというか施設としてというか」
『あ、言ってへんかったか。んー、まぁなんて言えばええんやろな。孤児院？　託児所？　まぁそんな感じ？』
「とてもふんわりとしている」
「治安の悪い場所って話じゃなかった……？」
『姐さん、どんなに治安が悪くても男と女がいれば子供は生まれん

ねん。で、養えないから捨てられたりする。でも、そこらに子供の死体が転がっとるとお上がうるさい。悪たれどももついでとばかりに痛い腹を探られたくない。やから、そういう子らを集めて最低限そこらで野垂れ死にせんようにする場所が作られたっちゅうことや』

「イイハナシカナー？」

『此の身にはあまり良い話には聞こえませんが……』

『どう足掻いても後ろ暗い連中の干渉は避けられんからね。でも、そういう連中の中にもそこ出身のがおるわけやから、案外最悪の状態にはならんかったりするんよ』

「世の中善と悪でスッパリ二元化できるほど単純じゃないわよねぇ」

このコロニーの下層区画にどんだけ悪党どもの派閥があるのかは知らんが、ティーナの言うことをそのまま信じるなら、これから向かう予定の孤児院だか託児所だかなんだかは一種の不戦地帯というか、緩衝地帯というか、不可侵領域というか、とにかくそんな感じの場所であるらしい。

「そこでティーナが昔お世話になってたってことか？」

『ん、まぁ……お世話になったっていうかお世話したっていうか……まぁ色々あったんや。知り合いはいっぱいいるけど、今の状況下で一番心配なのはそこなんよ』

「他の知り合いは良いの？」

『心配は心配やけど、皆いい大人やしな。自分のケツくらい自分で拭いてるやろ。それより、こんな状況で周りの連中が助ける余裕も無くなってたら……って考えるとな』

「なるほど」

ティーナとその施設にどんな因縁があるのかははっきりしないが、話を聞く限りではだいぶ不安定というか、薄氷の上に辛うじて立っているような危うい立場の場所であるということは推察できた。伝

染病によって各組織のパワーバランスが崩れたりした場合、何が起こっても不思議ではない場所なんだろうな。

「とにかく行ってみないことには話は始まらんな」
「そうね。でも焦らず着実に行きましょう」
「アイアイマム」

ロケーターに従って歩いていけばそのうち着くからな。ちょっと遠いから足を確保したいところだが……まぁ無理なら歩くしかないんだが。

☆★☆

「……ここだよな？」
「ミニマップもロケーターもここを指してるわね」

歩くこと三十分から四十分ほど。俺達はブラックロータスにいるクルー達に誘導に従って目的地に辿り着いたのだが、そこにあったのは……。

「えらいボロボロだが」
「レーザー痕に血痕もあるわね」

ここで誰かが派手にドンパチでもしたのか、目的の構造物はそれはもう酷い有様であった。焦げ付いた破壊の痕跡は致死威力のレーザーによるものだろうし、そこかしこに飛び散っている赤黒い飛沫の痕跡は血痕であろう。どうやら構造物の入り口辺りに陣取った勢力と、入り口に面する路地側に陣取った勢力が激しく争ったようである。

『……兄さん、中入って。何があったのか調べて。お願い』
「あいよ。エルマ」
「バックアップは任せて」

この破壊の痕跡に関係があるのかどうかはわからないが、辺りには人気が全然ない。今こうして建物に近づいていっても視線らしきものも感じないので、周辺の住民は逃げ出すか、それともこの建物に近づく者を見ることもできなくなっているか、或いは関わり合いを避けるために息をひそめているのだろう。
いつでも剣を抜けるように右手を剣の柄に添えたまま、ボロボロになっている建物の扉を開いて中へと足を踏み入れる。

「ふん？」

意識を集中してみると、建物の中に複数の気配を感じる。クギにサイオニック能力を覚醒させてもらい、その後も折を見て修行らしきものをしているので、最近は近距離であればかなり明確に生き物の気配というか、精神の波長のようなものを捉えられるようになってきた。これは壁越しだろうが、戦闘艦のレーザー砲の直撃にも耐える装甲越しだろうが変わらない。

「どう？」
「複数いるな。大人が多分三人か四人。あとは子供だ。子供が七人くらいかな。多分だが、何人かはかなり弱ってるな」

感じられる気配が明確に弱々しいのがいくつかある。これは気配を断っているとか潜めているというよりは単純に弱ってる感じだ。

「いきなり踏み込むのは危ないと思うわよ」
「それもそうだ。声を掛けていくか」

場所が場所だし、建物の外の惨状を見る限りでは内部にいる人々は武装している可能性がある。それも致死レベルの威力のレーザーを放つことができるレーザーガンで。レーザーガンで武装していれば子供ですらいとも容易く大人を殺せるのだから、危険は避けるべきだ。

エルマに後方の警戒を任せながらずんずんと施設の奥へと進み、人の気配が固まっている部屋へと向かう。ふむ、施設内部には戦闘痕が無いな。薄汚れてはいるが荒れた様子もないし、内部への侵入は防いだのか？　それとも入り口で防衛側が全滅して内部への侵入を許したのだろうか。

「ここだな」

「ノックでもする？」

「いや、普通に声をかけよう。足音には気付いてるみたいだし……おーい、聞こえるか？　知り合いに頼まれて様子を見に来たんだ。扉を開けてくれないか」

返答はない。伝わってくる気配がざわついているので、恐らくどう対応するか迷っているのだろうと思う。

『兄さん、赤毛の修理屋からの知り合いやって言ってみて』

「オーケー。あー、知り合いってのは赤毛の修理屋だ。彼女に頼まれてきたんだ。とりあえず、誓ってあんたらを害するつもりは一切ない」

また部屋の中でゴソゴソと気配がざわつき、少しして扉のロックが解除された。

「……怪しい動きはするなよ」

「善処する」

扉が開き、中からなかなかに跳ねっ返りの強そうな男の子が顔を覗かせる。彼の手には小型のレーザーガンが握られていた。うん、やっぱ武装してたな。

俺の胸ほどまでしか身長がない彼の頭越しに部屋の中に視線を向けてみると、これがなかなかの惨状であった。彼以外の全員が明らかに調子の悪そうな様子で、その中でも四人の大人達は起き上がることも出来ないほどに消耗しているようだ。

「これは酷い」

「参ったわね。これは。ああ、メイ。ティーナが飛び出さないように捕まえておいてね」

『はい、エルマ様。既に実行済みです』

『はーなーせー！』

『お姉ちゃん、落ち着いてー！』

通信越しにティーナとウィスカの騒々しい声が聞こえてくる。心配していたティーナとしては居ても立っても居られないのは理解できるが、とりあえずティーナがこの場に来てもできることは殆どないので落ち着いていて欲しい。

「話せるのか？」

「……話すだけなら多分」

奥で倒れている大人に視線を向けてから少年に問うと、彼は頷いてみせた。ならとりあえず話すなり、倒れているのをどうにかするなりするしかないな。

しかし、この状況下でマスクもせずにピンピンしてるこの男の子は何者なのかね？　生まれつき超強力な免疫能力でも持ってるのか

？

何にせよ、まずはこの惨状をどうにかしないと始まらんな。

#410　状況把握（前書き）

ドヤァ……（ ，ω，　）（筆が乗った

#410　状況把握

「とりあえず、状況を確認する……前に、自己紹介だな。俺の名前はヒロ。傭兵だ」
「私はエルマ。私も傭兵よ」

そう言いながら俺とエルマはヘルメットのバイザーを透過モードに変更し、人相を明らかにした。そうすると、レーザーガンを手にした少年は若干だが警戒を緩めたようだ。まぁ、顔も立場も隠している人間よりも、自ら明らかにしている人間の方が信用はできるだろう。

「ここに様子を見に来た理由は、さっき言った通り赤毛の修理屋……まだるっこしいな。ティーナが心配していたからだ」
「その人のことは知らない、けど……」

レーザーガンを手にした少年が倒れている大人に視線を向ける。まぁ、知ってるとしたらあの人達のうちの誰かなんだろうな。とにもかくにも話をできるようにするしかあるまい。

「ショーコ先生」
『はいはい、とりあえずコンバットヘルメットに搭載されているスキャン機能で簡易診断をするから、近づいてね』
「了解。近づいてスキャンする。良いな？」
「……わかった」

確認すると、少し迷った末に少年は頷いた。頷いた理由が何であれ、物事がスムーズに運ぶのは良いことだ。

「私は子供の中で症状の重い子がいないか確認しておくわ」
「頼んだ」

そうしてエルマと手分けして部屋の中で苦しんでいる人達をスキャンし、トリアージ――傷病の緊急度や重症度に応じた優先度分け――を行っていく。

「何本持ってきてる？」
「私は二本。そっちは？」
「三本。ギリギリ足りるな」

スキャンの結果、大人三人と子供二人が緊急度が高いと診断された。何本、というのは俺達が用意してきた救急ナノマシンユニットの数だ。

『そのクラスの救急ナノマシンユニットなら、とりあえずの時間稼ぎにはなるね』
「流石に治らないのか」
『その救急ナノマシンユニットは基本的に外科的治療しかできないからね。投与しても免疫機能向上したり、抗体が作られるようになったりするわけじゃないから、今の状況だとすぐに症状が再発すると思うよ』
「なるほどな」

救急ナノマシンユニットは伝染病でダメージを受けた内臓等を『再構築』することによって病気で弱った人間を一時的に快復させる。ただ、ショーコ先生が言ったように免疫機能を強化するわけではないので、程なくして再度感染すると。

『何にせよ、今言った五人は早めに処置しないと危険だからね』
「了解」

エルマと手分けして緊急度が高いと判断された大人の三人と特に症状の重い子供二人に、ガンタイプの無痛インジェクターを使ってぷしゅぷしゅと救急ナノマシンユニットを投与していく。

「うっ……ぐうぅぅっ！？」
「うあぁぁぁっ！？」
「おい、何したんだよ！」
「いや、救急ナノマシンユニットを打っただけだが……先生？」
『今、投与されたナノマシンがダメージを負った内臓を病原菌ごと分解して再構築しているんだよ。肺などの内臓が広範囲にダメージを負っていた場合、それなりに苦痛を感じることになるね。まぁ、すぐに安定するよ』

ショーコ先生の言う通り、投与した人達の苦しみは一分足らずで終わった。大人達はともかくとして、子供二人はぐったりとしてしまっている。

「子供がぐったりしてるんだけど」
『すぐに元気になるよ』
「大人はともかく、子供が苦しむのは見るに堪えんな」

できる範囲でなんとかしてやりたいところだが、何にせよまずは事情を聞くべきか。幸い、倒れていた大人三人は救急ナノマシンユニットのおかげですぐに話せるようになりそうだ。

「ああ……おい、お前」
「……なにさ」

「食えそうなやつに食わせておけ。あまり数がないから、一口ずつでもいいから分けてな。後で追加で食い物を調達してきてやるから」

そう言って俺はカロリーバーと水のボトルを少年に押し付けた。エルマに目配せをすると、彼女が頷く。何にせよ身体が病原菌と戦うための栄養がないと弱る一方だからな。幸い、俺達が用意してきたカロリーバーはカロリーだけでなく各種栄養素も豊富だ。放置しているよりはマシだろう。

☆★☆

「助かりました」

「ええんやで」

「ふふ……ええ、あの子を思い出しますね。その返事」

なんとか動けるようになった三人の大人のうちの一人――アイリアと名乗った女性が微笑む。俺と同年代くらいの穏やかそうな雰囲気の女性だ。髪の毛の色は……薄いピンク色？　地毛なのか？　なかなかファンキーな髪色だな。美人……とは少し違うが、愛嬌のある顔つきをしている。

「実際のところ、流行病で倒れている可能性はともかくとしてまさか荒事に巻き込まれているとは思わなかったんだが……一体何があったんだ？」

「別になんてことはありません。略奪ですよ。ティーナからうちのことはどれくらい聞いているんですか？」

「あー、ここがこのあたりをシマにしてるギャングだかマフィアの支援を受けて運営されてるってのは聞いてるが」

「それを知っているのなら十分です。最悪の状況になる前に面倒を見てくれていた人達が医薬品や食料、水なんかを用意してくれたん

ですが、組織に属してないチンピラにそれを狙われまして」
「えぇ……？　そんなことをしたらギャングとかマフィア連中の顔を潰すことになるんじゃ？」
「それはそうですが、組織も壊滅状態ですからね」
「Ｏｈ……」

つまり流行病のせいでこの界隈のアウトローの秩序が崩壊してしまい、その結果この施設が襲われたと。

「それって襲撃者を始末すればそれで終わるって話じゃないよな？」
「そうですね。ですが、既にここには何も残っていないですから。もう襲撃されることはないと思いますよ」

そう言ってアイリアは自嘲気味に笑った。全く笑えないんだよなぁ。

「どうしたもんかね、こいつは」

ここにいる全員が危機を乗り切れるだけの支援をするのは簡単だ。ティーナはそれくらいの金は持っているだろうし、足りないとなればウィスカに頼ることもできるだろう。別に俺が手を貸したって良い。ただ、物資的、経済的に支援したとしても支援した先からそれを暴力で奪われるのでは意味がない。暴力で奪われる際に命までも失うかもしれないのだから、下手すれば逆効果である。

「俺達が常駐して守るのは論外として……選択肢その一、ここに略奪に入りそうなチンピラを片っ端から皆殺しにする」
「何人斬るのよ……そこら中を血塗れにする気？」
「あの、略奪に来る方も生きるのに必死なだけなので……」

エルマが呆れ気味に突っ込みを入れ、アイリアが焦った様子で俺を止めにかかる。いや、流石に冗談だが。

「選択肢その二、ゴリッゴリの戦闘ボットを警備用に配備する」

「ちゃんと管理できる人がいないとそのうちシステムをクラッキングされるわよ？　そうしたらその戦闘ボットがここの人達に牙を剥くと思うけど」

「そういうのに強い人材に心当たりは？　いない？　なら駄目だな」

俺の質問にふるふると首を横に振るアイリアを見て第二案も却下する。

「選択肢その三、ハルトムートに押し付ける」

「あの人の信条がどういうものなのかは知らないけど、帝国貴族がギャングやマフィアの支援を受けていた孤児院の面倒を見るかしらね？」

「交渉した時に領地の民を斬り殺す赦免状を発行しろと？　って凄んでくる程度には大事に思ってるようだったじゃないか。ワンチャンあるんじゃないか？」

「あの、ハルトムートというのは……？」

「ここ数日でこのコロニーの代官になった新しい貴族だ。前の代官はパンデミックを防げなかったからってことで更迭されたらしいぞ。ちなみに領主の息子で嫡子……つまり跡取りらしい」

「お貴族様が私達に何かをしてくれるとは思え……ああ、いえ、貴方のこともそう思っているわけではないんですけど」

「こんなものぶら下げてるけど俺は似非貴族だから。別に気にしなくていいぞ」

エルマとアイリアは懐疑的なようだが、俺はワンチャンあると思うんだよな。このコロニーの住民が上層区と下層区に分けられて、

下層区の治安が著しく悪いというのは前任者の政策方針がそういうものだったからだろう。だが、トップが交代したことによってこの構図が崩れる可能性がある。
何せ今回の流行病で下層区の面倒な連中――つまりギャングやマフィアに相当の被害が出ているって話だからな。ハルトムートがこれを気にギャングやマフィアを一掃して下層国新しい秩序を齎そうと考えていても不思議ではない。

「仮にハルトムートがそう考えていたとしても、この施設を優遇する理由なんて無いわよね？」
「それはそうだな。俺がゴリ押しで頼めば可能性は無くもないと思うが、それをやるとちょっとあとが怖いよなぁ……何か奴に利益があれば良いんだが。うーん、人道的な行動を喧伝して支持率アップとか？」
「お貴族様はあまり下々のことなど気にされないと思いますが……」
「そんなこともないと思うが……まぁ数字で見る面はあるかもな」

高みにいる者にとって地下の者はしばしばただの数字にしか見えないこともある。そうでなければ領地の管理運営など立ち行かないという面もあるのだろうけども。いちいち住人達が抱える個々の事情に付き合っていては、行政など行えないということだろう。

『ヒロくん、ちょっと良いかな？』
「んあ？　どうしたんだ？　先生」
『一人だけピンピンしてる子がいただろう？　もしかしたらあの子が全ての事態を解決する鍵になるかもしれない』
「話が見えてこないな。どうしてあの子が鍵になるんだ？」

通信越しにショーコ先生にそう聞きつつ、比較的症状の軽い子に俺が渡したカロリーバーを食べさせている少年に視線を向ける。

『この状況で症状が出ていないあの子には流行り病に対抗できる免疫が備わっている可能性がある。それを解き明かすことができれば、流行病の特効薬を作れるかもしれない』
「つまり、それがハルトムートとの交渉に使えると？」
『可能性はあるだろう？　彼は何が何でもこのパンデミックを収束させたいはずだ。その特効薬は十分に交渉のカードになるんじゃないかな？』
「そりゃそうかもしれないけど、そんな簡単に特効薬なんて作れるのか？」
『勿論簡単ではないよ。でも、君がブラックロータスに用意してくれた設備があれば可能さ。高いお金を払っただけの価値があると、私が証明してみせよう』

ヘルメット越しにショーコ先生の自信に満ち溢れた声が聞こえてくる。なるほど、そういうことならその方向で模索してみるのもアリか。そう考えて少年に視線を向ける。

「……なんだよ？」

少年は俺が与えた僅かな食料を皆に分け与え終えたところだった。

「お前、ちょっと俺の船に乗らないか？」
「はぁっ！？」

少年が眦を吊り上げて腰のレーザーガンに手を伸ばしかける。おいやめろ馬鹿。どうしていきなり武器を抜こうとするんだ。

「――ッ！　それで皆を助けてくれるのか？」
「結果的にそうなる可能性は高いな」

「……わかった。乗る」

少年はそう言って肩を落とした。良かった。武器を抜かれたらどうしようかと思ったぞ。流石に斬り殺したり撃ち殺したりするわけにもいかないし、何より救急ナノマシンユニットはもう品切れなんだ。怪我をしてもさせても大変面倒なことになるところだった。

「あの、私が……私が代わりではいけませんか？」

アイリアが悲壮な雰囲気を漂わせながら懇願してくる。

「いや、あの子じゃないと駄目なんだ」

「そこをなんとか……あの子はまだ成人もしていないんです。私ならいくらでもお相手しますから」

「ンンン？　待ってくれ。何か齟齬が生じている気がする。エルマ、助けてくれ」

縋り付いてくるアイリアに違和感を覚えた俺がエルマに視線を向けると、エルマは呆れを隠さない表情で俺にジト目を向けてきていた。なんだ、その視線は。

「詳しく事情も説明しないでこの状況で船に乗れ、は誤解されるに決まってるじゃない」

「……？　あっ！　えっ？　そういうこと？　いや違うから。そういうのじゃないから。伝染病に罹らないでピンピンしてるからパンデミックを解決できるかもしれないってうちの船医が……ああ、しまった。ショーコ先生の声は俺達にしか聞こえてなかったか」

スピーカーモードにしてなかったもんな。そりゃ聞こえてないはずだし、俺の提案があまりに唐突に思えたのも仕方ない。

「というかお前、女の子だったんだな」
「女に見えなくて悪かったな！」

犬歯をむき出しにしながら少年――もとい少女が顔を真赤にして鋭い蹴りを繰り出してくる。ははは、そんな蹴りではコンバットアーマーの防御力を抜くことは出来んよ。というか怪我するぞ。ほら、痛がってる。

「きちんと説明しよう。うちの船医が言うにはだな……」

俺は少女の攻撃を無視しながらアイリアに事情を説明し、彼女を船に招く許可を得るのであった。

#411　臨時乗船（前書き）

正式リリースされたエバースペース2面白い（，３，）

#411　臨時乗船

「というわけで、臨時クルーとなったリンダだ」
「どうも……」

ブラックロータスの休憩スペースで借りてきた猫のように大人しくなっているリンダ――俺が少年だと思っていた少女だ――が居並ぶクルー達に向けて頭を下げる。
あの後、ショーコ先生との通信を繋いで詳しく事情を説明した俺とエルマは、リンダを連れてブラックロータスへと一旦戻ってきていた。

「すぐに連れてきてくれてよかったよ。検査は早ければ早いほど良いからね」

そう言って特に満足そうなのがショーコ先生である。活躍の機会ということで張り切っているのだろう。

「センセ、まずは船の案内やない？」
「そうですね。どれくらいの期間になるかわかりませんけど、一緒に船で過ごすわけですから」
「いきなり一人で知らない人ばかりの場所に来ることになって不安だよね？　何か気になることがあったらすぐ相談してね？」
「うっす……」

ティーナとミミ、それにウィスカが早速リンダを囲んでいる。ウィスカが妙に親身だな……？　何か特別思うところがあるのだろうか？　それとも単に保護欲というか母性的なものが働いているのか

？　単にお姉ちゃん風（？）を吹かせたいだけなのかもしれないが。

「しかし、やっぱ出入りが面倒だな」

「お疲れ様です、我が君」

クルー達がリンダと打ち解けるべく対話に勤しんでいるを眺めながらソファに身を預けると、クギがそう言いながらスルリと滑り込むように俺の隣に座った。ナチュラルに俺の膝の上にもふもふの尻尾を預けてくれる辺り、俺を労ってくれているのだろう。ああ、もふもふの尻尾を触るだけでストレスが溶けていく。

「……なぁ、この船ってあいつ以外は全員女なのか？」

「せやで。兄さんのハーレムやな」

「お前も……？　オレとそんな変わらない歳じゃん」

「あはは、私達はドワーフだからね。リンダちゃんが考えるてるよりもずっと歳上なんだよ」

「うちら、アイリアとタメくらいやで。兄さんもな」

「……マジで？」

「リンダちゃんに一番歳が近いのは私ですね！」

「いや……まぁ、そうなのかもしれないけど……」

胸を張るミミを見ながらリンダがなんとも言えない表情をする。圧倒的な装甲厚の違いに絶望の感情を抱いたのだろうか。まぁ当たらずといえども遠からずといったところじゃないかな。背丈は多分だけど５ｃｍくらいしか変わらないものな。

「つまり、あいつはとんでもないスケベ野郎ってことか」

リンダが汚物でも見るかのような視線を俺に向けてくる。おいおいやめろよ、褒めても何も出ないぞ？

「そうだぞ」
「開き直ってんじゃねぇよ」
「大丈夫だ、心配するな。お前に手を出す予定はゼロだから」
「そんなことをしようとしたらタマが脳みそに食い込むくらい蹴り上げてやるからな」
「蹴り上げてやるわよ」
「蹴り上げてやるで」
「やだこわい」

リンダの脅しはともかく、エルマとティーナが真顔で言ってくるのはマジで怖い。でも実際のところ手を出す気は毛頭ないので、安心して欲しいと思う。
ちなみにリンダの容姿だが……まぁ、顔立ちは整っているのだと思う。改めて見てみるとだが。
だが、絶望的に平坦な上に服装がボーイッシュを通り越して完全に男の子のものだからな。俺が少年と見間違えたのも仕方がないと思うんだ。
もっと注意深く見ていれば気付いたかもしれないが、レーザーガンの動きを注視していたからわかんなかったんだよ。だからリンダの性別を誤認しても俺は悪くねぇ。

「とにかく、暫くはこの船で過ごしつつショーコ先生の研究に付き合ってもらうぞ。上手いこと行けばコロニーも施設も助かって皆ハッピーになれるさ」
「それはいいけど、なんでお前はそんなことをするんだよ。そんなことして何の得があるんだ？」
「俺自身に直接的な利益はないぞ。でも、ティーナが世話になったみたいだからな。ティーナが助けたいって言うなら、パートナーの俺が力を尽くしても何の不自然もないだろ」

「兄さんには感謝してる。ほんまに」
「苦労した分は身体で払ってもらうぜ。へっへっへ」
「大丈夫なのか？　こいつ」
「お兄さんがああやってふざけている時は照れ隠しをしている時だから」
「そういうことというのやめよう？」

ウィスカ、その発言は俺に効くのでやめて欲しい。そういうのは知ってても知らないフリをしてくれ、頼むから。

「あー、歓談中のところすまないが、そろそろ動こうじゃないか。あまり時間に余裕があるわけでもないしね」

リンダがクルー達と打ち解ける様子を見ていたショーコ先生が声を上げる。確かに、ちょっとのんびりしすぎたか。

「そうだな。そうするか。ティーナ、わかってるな？」
「わかっとる。無断で船を飛び出したりしない。約束や」
「ならよし。ミミ、準備は？」
「はい、積み込みは終わってます！」
「よし、そんじゃ行くかぁ……メイ」
「お任せ下さい」

☆★☆

三十分後。用意を整えた俺は再びリーメイプライムコロニーに降り立っていた。

「ふーむ、やはり微量だが空気中に胞子が混ざってるね。ああ、患者からサンプルを取るのは勿論のこと、どこかで純粋な病原も手に

入れないと……」

環境防護スーツを着たショーコ先生が何かよくわからない機器で辺りをスキャンしながら歩いている。そのすぐ側にはいつもの格好のメイが護衛についており、更にその後ろには物資輸送ポッドを背負った軍用戦闘ボット四体が追従していた。奇妙な研究者っぽい女とメイドと戦闘ボット。それに剣を腰に差したコンバットアーマーの男という組み合わせ。

「滅茶苦茶目立ってて草も生えない」
「派手に動いて目立つのもプランの内です」
「それはそうだけどな」

俺達は何をしているのか？　話は単純で、施設への再訪である。先程訪れた際に特に症状が重篤で、命に関わると判断された五人に対して救急ナノマシンユニットを打ち込んで処置をしたが、あれは一時しのぎにしかならない。それに、他にも直ちに命に影響は無くとも症状が重い子供もいた。

なので、その状況に対処すべくこうして施設に向かっているというわけだ。医薬品だけでなく食料や水も殆ど根こそぎ奪われたという話だったから、そっちの支援も必要だしな。

で、物資的な支援をしても奪われるという事態を避けるためにこうして戦闘ボットも連れてきた。

え？　クラッキング対策？　そのためにメイを連れてきたし、そもそも軍用戦闘ボットは電子戦に備えて強固なセキュリティを有しているからそう簡単にはクラッキングされない。

それでも時間をかければどうにかなる可能性はあるが、一週間や二週間程度ならメイが定期的にチェックをすれば問題はない。ずっと置いておくという話になるとちょっと厳しいと思うが。

「そういやショーコ先生、俺とミミとエルマって万能型のワクチンを打ってたよな？」
「うん、打ってあるね。もちろん私もね。ティーナくんとウィスカくんもそうだし、クギくんも種類は違うけど同じようなものを打ってあるよ」
「なら、俺達ってこの病気に感染しないんじゃないか？」
「それはイエスともノーとも言えるね。実のところ、感染はするよ。ただ、症状が重篤にはならないというか、症状が出ないね」
「なら防護スーツいらなくない？」
「症状が出ないだけで、感染はするんだよ。つまり船を汚染することになる。そうすると、面倒なことになるよね？」
「なるほど。それは確かにそうだ」

俺達乗員がピンピンしてても、船が汚染されているとなるとまずこのコロニーから出られないし、もし出られたとしても俺達が伝染病のキャリアーとなって他のコロニーに伝染病を広げてしまう恐れがある。だから、俺達は感染するわけにはいかないというわけか。

「じゃあ、どういう状況で役に立つんだ？　あのワクチンは」
「正確にはワクチンではなく免疫機能を強化するナノマシンユニットなんだけど……まぁ、ワクチンでいいか。あれはね、このコロニーみたいに既にパンデミックが発生した環境ではなく、パンデミックの発生前に致命的な伝染病を貰ってしまった時とか、未知の病原菌に汚染された船にうっかり接触してしまった時とか、未知の病原菌が蔓延っているかもしれない惑星に不時着した時とかに役に立つんだよ」
「つまり、環境防護スーツを着る発想すらないような状況とか、その他の万が一に備えた転ばぬ先の杖と」
「そういうこと。そもそもそういう性質のものだよ、予防接種というものは」

「そういうものかー」

打っておけば病気に対して無敵！　ガハハ！　というものではないのだな、と新たな知見を得た俺なのであった。

#412　支援（前書き）

ＤＬＣが２つほど来ていたのでメックウォリアー５の再プレイを開始しました（　ω　）（エバースペース２はクリアした

#412　支援

特に問題もなく――流石に襲撃を仕掛けてくるような命知らずはいなかった――施設へと辿り着いた俺達は、荷ほどきをして早速治療を開始していた。
もっとも、治療をしているのはショーコ先生とメイで、助手を務めているのはメイにコントロールされた戦闘ボット達である。俺自身は万が一の襲撃に備えていることくらいしかできないので、こうして壁に身を預けて様子を見ているだけなのだが。
そうしていると、一度重症化しているということで真っ先に診てもらっていたアイリアが近づいてきた。

「本当に、ありがとうございます」
「どういたしまして。ただまぁ、きっかけはティーナだから」
「はい……」

ティーナの名前を聞いたアイリアが微笑みを浮かべ、暫く視線を彷徨わせる。何かを言い淀んでいるような雰囲気だが……？

「あの……あの子は、元気にしているんです……よね？」
「ティーナか？　勿論元気にしてるぞ。ああいや、偶然にもこのコロニーに来ることになって、最近は少しメンタルが不安定になってたけど。その点を除けば元気一杯に日々機械いじりをしてるよ。妹と一緒にな」
「そうですか……」

俺の話を聞いたアイリアは心底ホッとしたような表情を浮かべた。ティーナとアイリアがどういう関係で、このコロニーを去る際にど

んなことがあったのかはわからない。ティーナにも詳しくは聞いてないからな。ただ、ティーナとアイリアが互いに互いを思いやる関係だということはよくわかった。俺がアイリア達を助けるために動く理由はそれがわかっただけで十分だな。

「そういやぶっ倒れていた大人の男二人は何者なんだ？　ここの職員か？」

「いえ、そういうわけでは……なんと言えば良いのか。いつも助けてくれる人達なんです」

「煮え切らない言い方だな……？」

と、首を傾げていると話題の男の内、一人がズンズンとこちらに向かってきた。

「おい、お前。アイリアさんと何を――イデェ！？」

「やめろ馬鹿。兄貴、施設の子やアイリアさんだけでなく俺達まで助けてくれてありございます。恩に着ます」

最初に突っかかってきた紫プリン頭――染めたと思われる紫の部分と地毛の金髪の対比がそう見える――の背中をかなり強めにどついた金髪角刈りが頭を下げてくる。

「別にお前の兄貴になった覚えはないが……感謝は受け取っておく。そっちのは不満そうだけどな」

「すいません、こいつは見込みはあるんですがまだ世の中ってのをわかってないんで。見逃してやって下さい」

「別にいくら俺が傭兵でもこれくらいでそいつを真っ二つにしたりはしないぞ。うちのクルーに手を出したらその限りじゃないが」

見たところ、二人とも何か特別に身体強化を受けていたり、サイ

バネティクスで強化をしているようには見えないな。なら、こいつらがレーザーガンで武装していたとしても五秒もあれば十分だ。

「――！」

俺の視線に何か感じるものがあったのか、紫プリンと金髪角刈りが息を呑んで身を固くする。怖がらせてしまったのだろうか。別にぶっ殺す気はないから安心していいぞ。

「それで、お前らはどういう立場の誰なんだ？」

「俺はハインツ、こいつはジーク。俺達は……押しかけの用心棒みたいなもんです」

やはり煮え切らないというかなんというか。今ひとつ理解が及ばないな。なんとなくカタギじゃないのはわかるんだが。少なくとも、こいつら二人は一般人じゃないな。二人からは血の匂いとまでは言わないが、暴力の匂いがするし。実際に匂ってるわけじゃなく、感覚的なものだけど。

「カタギじゃないのは見りゃわかる。ここがどういう場所から支援を受けて運営されていたのかも知ってる。お前らは支援者関係の人間ってことで良いのか？」

「そういうことです。ただ、今回の騒動で俺とこいつが所属している組織はもう……だから、俺達は宙ぶらりんなんですよ。だけど、ここを守らないといけませんから」

「わかったようなわからんような……でもまぁ、上が滅茶苦茶になっても仁義を貫いて殉じようとするその心意気は見上げたものだな」

俺みたいに金で動く傭兵には理解し難い。ああいや、俺が今やっていることもある意味では同じことか？　あんなになったティーナ

にお願いされると流石に断れない。そういう意味ではこいつらも同じようなものなのかね？　多分だけど、こいつらはアイリアのために動いているんだろうから。

「一応暫くの間は戦闘ボットを配備する予定だが、俺達だっていつまでもこのコロニーにいるつもりはないからな。後を任せられる奴がいるのは嬉しい誤算だよ」

仮にこの施設がハルトムートの預かりとなったとしても、場所自体が動かないなら結局のところある程度の暴力が必要だ。基本的に暴力というものは暴力でしか抑止できないものだからな。戦えない女子供しかいない場所にまともなメシと寝床、それにその他の物資があるとなれば悪心を抱くやつが出るものだし、事実そうなって今のこの施設の状況があるわけだから。

「ところでお前ら、得物は揃ってるのか？」

俺が自分のレーザーガンが収まったホルスターを軽く叩きながらそう聞くと、金髪角刈りのハインツはろくにメンテもされていなそうなボロいレーザーガンを取り出し、紫プリンのジークに至っては鉄パイプか何かを加工したと思しき警棒というか棍棒めいた何かを取り出した。うーん、粗雑！

「……あー、どうすっかな。船に積んでる予備を渡しても良いが、そうするとメンテがな」

「兄貴？」

「思い入れのある品なのかもしれんが、有り体に言ってゴミ寸前のボロ武器にしか見えん。良い仕事をするには相応の得物が必要ってのが俺の信条だ。で、聞きたいんだがまともな得物の調達先はあるのか？　今でも使えるところが」

「ありますが、この情勢下だと高く付きますよ」
「価格なんざどうでもいい。そこでエネルは使えるか？」
「使えますが……」
「端末出せ」

有無を言わさずそう言うと、ハインツは困惑しながらも自分の小型情報端末を取り出した。俺も同じく小型情報端末を取り出し、手早く操作してハインツに5万エネルを送金する。

「んなっ！？　あ、兄貴？」
「それで必要なものを取り揃えてこい。武器だけじゃなくアーマーもな。いくらボラれてもそれだけありゃ二人分くらい賄えるだろ」
「二人分どころか軽く十人分くらい賄えそうですが……」
「この状況だと色々と入用だろ。余った分は好きに使え。ほら、俺達と戦闘ボットがここを守っている間にとっとと動け」

そう言って俺が部屋の出入り口を指差すと、ハインツは少し考えた後に俺に黙って頭を下げ、ジークを連れて部屋から出ていった。示威目的にしても普段から俺みたいなコンバットアーマーフル装備というわけにはいかないだろうからな……まぁコロニーでのそういうアレコレに関してはあいつらの方がプロだ。上手くやるだろう。

「話はついたみたいだね。アイリアくんがそわそわしてたよ？」
「俺は生身では無茶をしない主義なんだけどな。処置は終わったのか？」
「勿論。完治には少し時間がかかるけどね。言っただろう？　然るべき治療を受ければ助かる病気だと。問題は再感染だけど、まぁ感染対策を心がけてこの部屋で過ごすようにすれば大丈夫さ」

そう言いながら、ショーコ先生が部屋の中央に鎮座している機械

に視線を向ける。あれは小型の空間清浄化装置で、設置した空間内の空気を清浄化する機能がある……らしい。簡単に言えば密閉した空間をクリーンルームに変えてしまうトンデモマシンだ。かがくのちからってすげー。

「この構造体はちょっと古いみたいだけど、部屋ごとの気密は問題ないみたいだからね。全員を治療して、空気をクリーンにすればひとまずは大丈夫。問題はいつまでも、というわけにはいかないってことだね」

「それに関してもショーコ先生が頼りだな」

「サンプルは採れたからね。ヒトに感染していない元の株も欲しいところだけど、まぁ贅沢は言わないさ」

ショーコ先生が厳重に封印された一抱えほどの大きさの箱に視線を向ける。あの中には空気中に浮遊していた感染源のサンプルや、ここで苦しんでいた大人や子供達から採取したサンプルが入っているというわけだ。

「それじゃあ俺達はとっとと戻る――」

か、と思いメイに視線を向けると、彼女は囲まれていた。床に座ったメイの周りには子供達が集まっていたのだ。

「きれいなふく」

「はい。メイド服はこの宇宙で最も美しい服です」

「きれいなかみのけ」

「はい。私の髪はご主人様が作ってくださった宇宙で一番美しい黒髪です」

「かっこいい」

「はい、メイドロイドは――……」

淡々と、しかし妙に嬉しそうにメイが子供達の相手をしている。耳のあたりにあるメカっぽいパーツが格好良く見えるのか、女の子だけじゃなく男の子まで目をキラキラさせているな。男の子ならコンバットアーマーフル装備の俺のほうがかっこよく思えないものか？　何故だ？

「剣を差してるから」
「なるほど」

剣を持っている人＝貴族という概念は施設の子供達にも浸透しているのか。流石に子供相手に無体を働く貴族はそうそういないと思うが、絶対に居ないということもないだろうから、子供の身の安全を考えれば真っ先に教えてもおかしくはないのかね。貴族相手に厄介事を起こすと大変なことになるだろうからな。

「……少しだけ待つか」
「……少しだけだよ？」

そう言って笑い合いながら俺とショーコ先生は子供に囲まれるメイを暫く眺めているのであった。

#413　話半分に。（前書き）

うたた寝したけど間に合ったよ！（ ，ω， ）

#413　話半分に。

□■□

「それじゃあ、まずは船の中を案内しますね！」

アイツ――傭兵のヒロがメイドと医者を連れて出ていくのを見送るなり、おっぱいのでかいミミがそう言ってオレの手を引いた。別に手を引かれなくったって歩けるんだけど……無碍にするのも感じが悪いと思うので、黙って手を引かれておく。

「ミミめっちゃ張り切ってんなぁ」

「先を越された……」

後ろからはドワーフの二人もついてくる。髪の毛の色が違うだけで、顔が殆ど同じ。オレ、双子って初めて見たな。うちの施設にもいなかったし。その後ろにもう一人、今までに見たことがない種族の女もついてくる。クギって言ったっけ。一応全員の名前だけは聞いたけど、ミミとオレが一番歳が近いっていうのと、ティーナとウィスカがドワーフってことしかわからないんだよな。クギのあの頭の上の耳とお尻の尻尾みたいなのは本物なのか？

「まずはここ、休憩スペースですね！」

「……広いな。あと、金がかかってそう」

「実際カネはかかっとるんよな」

「お兄さん、妥協しなかったって言ってたもんね」

だだっ広くて開放感のある広い空間に、明るい照明。通路を挟ん

で食堂とソファやなんかが置かれているホールが隣接していて、通路と各スペースの間も壁ではなくパーティションのようなもので区切られているだけで見晴らしが良い。ホールの方の壁に緑色の植物みたいなものが見えるけど、あれは本物なのか？　本物の植物って滅茶苦茶高いらしいけど。

「……貴族のボンボンの道楽か」
「違いますよ？　ヒロ様は元々貴族じゃないですし」
「せやな。うちらと会った時はまだ貴族じゃなかったわ」
「この船を買ったのもその時だしね」
「でも剣を持ってたじゃんか。貴族なんだろ？」
「元々貴族だったんじゃなくて、傭兵として活躍して貴族位を賜ったんですよ。世襲できない名誉爵位ですけど」

そんなことがあるのか？　貴族って元々貴族じゃないのか？

「その話は後でゆっくりするとして、今は案内を続けたほうが良いのではないでしょうか？」
「そうですね！　ええと……ここは皆の共有スペースなんです。掃除はメイさんとクリーナーボットがしてくれますけど、あまり散らかさないように……くらいですかね？　注意事項って」
「せやなぁ。まぁ、わからんことあったら都度聞いてくれればええんちゃう？　いきなり全部詰め込んでも把握しきれんやろし」
「そうだね。あと、あっちの食堂ではいつでも飲食できるよ。自動調理器も良いのが入ってて、ご飯が美味しいんだよね」
「ごはん……」

そういえば、ここ数日ろくに飲み食いをしていない。なんだか急にお腹が空いてきた。

「皆さん、良い時間ですし、お茶でも飲みながらお話をしませんか？」

そう考えていると、クギがそんな事を言いだした。別にオレの様子を見てそう言ったってわけじゃなさそうだけど……随分とタイミングが良いな。文句はないけど。

「せやな。テツジンにお菓子でも作ってもらおか」

「そうですね！」

ミミがオレの手を引いてズンズンと食堂へと引っ張っていく。そしてオレを席に座らせると、奥の機械――多分自動調理器ってヤツだ――から見たことのない食べ物のようなものやら何やらを持ってきた。

「はい、どうぞ」

クギがそう言ってオレに微笑みかけながらプレートに盛られたお菓子……お菓子かこれ？　なんか普通のパンみたいに見えるんだけど。

「まま、気にせず食うたらええんや」

「飲み物もおかわり自由だからね」

「……いただきます」

あんまり大きくないパンだけど、なんだかずっしりとしている。進められるままに食べてみると、もっちりというかずっしりとしていて甘い。お腹にたまりそうだな、これ。

「……なんだよ？」

オレがお菓子――というかパンを食べるのをジッと見ているミミにそう言う。そんな微笑ましいものを見るような視線を向けられるのはなんとなく気になる。

「なんでもないです。ええと、何から話しましょうか？」

「そうですね。我が君についてお話するのが良いのではないでしょうか？　自分の身柄を預かるのがどういう人なのか、ということは気になるでしょうし」

「うん、それが良いかもね。誰から話そうか？」

「うちが話そうか。ミミとクギに話させたら兄さんがどこかの王子様か何かになってしまいそうやし」

「「えー」」

ミミとクギが不満そうな声を上げる。うん、オレでもわかるぞ。二人があのヒロとかいう傭兵の男が大好きだっていうのが。でも、その点はティーナとウィスカも変わらないんじゃないか？　と思ったが、言うのはやめておいた。とりあえず、話半分に聞くことにしよう。

□■□

施設で治療と物資の搬入を終え、守備のために戦闘ボット達をその場に残した俺達はブラックロータスへと戻ってきたわけだが……各種防疫措置を終えてコンバットアーマーを脱ぎ、シャワーでも浴びようかと休憩スペースを通りかかったところでリンダに珍妙なものを見るような視線を向けられた。

「なんだよ？」

「……別に、なんでもねぇよ。汗臭いからとっととどっかいけ」

「辛辣ゥ……！」

何か言いたいことがあるのかと思って聞いてみたらこれである。まぁ、汗臭いまま話しかけた俺が悪いか？　悪いな。うん、そういうことにしておく。べ、別に気にしてなんかないんだからね！

心の中で涙を流しながらシャワーを浴び、再び休憩スペースに戻ると既にリンダはいなくなっていた。ぬぅ、ちょっと話をしておきたいと思ったんだが、もうショーコ先生のとこに行ったのか？　わざわざ追いかけてまですることでもないし、機会を待つか。

とりあえず、ショーコ先生がリンダの免疫能力について調べるまでは特段やることもない。残りの医療物資の目録をハルトムートに送る件に関してはメイに任せておいたから俺がやることはないしな。

「お疲れ様。はい」

「あんがとよ」

休憩スペースのソファにどっかりと腰を掛けて考え事をしていると、エルマが水のボトルを持ってきてくれた。ありがたくボトルを受け取り、蓋を開けてグビグビと飲む。うむ、よく冷えていて美味い。やっぱり水はキンキンに冷えているのが一番美味く感じるな。健康のことを考えると常温の方が身体に良いみたいだが。

「で、どうだ？　リンダは。馴染めそうか？」

「大丈夫じゃない？　私、あんた達が出てった後は武器の整備とチェックをしてたからあの子とあまり話してないのよね。でも、ミミ達とは結構仲良くやってたみたいよ？」

「そうなのか。ならまぁ、大丈夫かな。あいつの寝床についてどうなったか聞いておかないとな」

「ティーナとウィスカのところで預かるみたいよ。ベッド作るでー、とか張り切ってたし」

「空き部屋に備え付けのベッドも何もかも揃ってるのに……まぁいいけど」

ティーナがそうしているということは、きっとそれが必要だと判断したからなのだろう。あの施設での暮らしがどんなものなのかは知らないが、建物の構造を見た限りでは一人ひとりに個室が割り当てられているという感じではなかったように思う。一人だと帰って眠れないかもしれないとか、そういう感じの配慮なのかもしれない。

ティーナとウィスカが揃っていれば部屋の模様替えも家具作りも思いのままだろうし、リンダに不満がないのであればそれで良いか。一応後で聞いておくかな。

「施設の方は大丈夫だったの？」

「ああ、治療はちゃんとできたし、再感染しないように対策もしてきた。先生が言うにはとりあえず、当面の措置としてはあれで大丈夫だとさ」

「ならひとまずは安心だけど、ずっと戦闘ボットを貼り付けておくの？」

「いや、あそこで倒れてた大人のうち二人が男だったろ？　どうも支援をしていた組織の人間らしくてな。荒事もいけそうな感じだったから、カネを握らせて警備員として雇った」

「大丈夫なの？」

「もし期待に応えずカネだけ持ってとんずらしたら宇宙空間にぶっとばしてやるさ」

比喩表現じゃなく本当にやってやるぞ。なに、船まで連れてきて宇宙空間に出た時にうっかり放出するだけだ。この混乱したコロニーの状況下で二人くらい消えても誰も気にもしないさ。員数外の人間を乗せたまま船を出す方法なんていくらでもあるしな。

コロニー居住者が正式な手続きをせずに他のコロニーに移住した

り、船員として船に乗るのは違法だが、荷に潜り込んで密航すること自体は簡単にできる。潜り込むことさえできれば。
ただ、密航者が到着先のコロニーで不法滞在者だとバレると大変なことになる。一発で臣民権剥奪の上に監獄コロニー送りだ。宙賊とさして変わらない扱いをされるらしいので、実質死刑みたいなもんである。
まぁ、船主が拉致してきたコロニー民が逃げ出して憲兵に助けを求めるみたいなパターンもあるんだが……それを利用してライバルの商船に密航者を潜り込ませて、攫われましたと証言させて失脚を狙う悪徳商人とかもいるらしい。まぁ、あまりに埒が明かない場合はまとめて頭の中身を覗かれるから、大体不正がバレるそうだが。何にせよ密航者には関わり合いになりたくはないものだな。
おっと、思考が逸れた。

「何にせよ、あとはショーコ先生の研究結果次第……ああ、念のためにリンダの一時乗船の手続きだけ進めておくか。痛くもない腹を探られるのも面倒だしな」
「それがいいかもね。メイに任せるのが一番だけど……たまには自分でやってみる？」
「嫌どす」

メイには悪いが、俺はそういう手続き関連で良い思い出が無いんだ。存分に頼らせてもらうとしよう。

#414　善意は20%くらい。（前書き）

今日も間に合ったぜ！　そして今日は10巻の発売日！　買ってね！！！（　，ω，　）

#414　善意は20%くらい。

リンダを臨時クルーとして船に乗せてからの日々は、実に平和なものであった。何せ、ショーコ先生の研究結果が出るまで積極的にやることがない。

「さほど時間はかからないよ。数日でケリをつけるさ」

と、そう嘯いてはいたものの、そういった研究がたったの数日の終わるものなのかしらん？　と俺は懐疑的である。

「私も専門外なのでそこまで正確に把握しているわけではないですけど、設備的には割と最新のものが取り揃えられているみたいですよ」

「兄さん、設備に関しては良きに計らえって感じで丸投げやったもんな」

「そんなこと言ったって、それこそ門外漢の俺が口を出したって仕方ない分野だろ。俺にできることって言ったら金を出すくらいだったし、ショーコ先生ほどの人に船に乗ってもらう以上はそれなりの待遇が必要だろうと思ったわけだよ」

「うちらにもあれくらい甘くしてくれてええんやで？」

「しているつもりだが？」

船の整備に関する能力というのは俺達の航宙戦能力に直結するものだから、設備投資に妥協したつもりは一切ない。必要なものに関しては遠慮なく言うように言ってあるし、上がってきた要望に関してはメイに精査をしてもらった上で、彼女の精査を通過したものに関しては許可している。

「メイのチェックは厳しいんよなぁ……」
「懐柔するなら俺よりもメイを懐柔するんだな。俺は難しいところを極めて有能なメイに丸投げして、その判断にＯＫを出すだけのバカ殿みたいなもんだぞ」
「そこまで卑下するようなものじゃないと思いますけど……お兄さんの判断力と決断力は凄いと思いますよ、私」
「それはうちもそう思うわ」
「褒めても何も出ないぞー？」

と言いつつもこうして褒められると悪い気はしない。いや、とても嬉しい。俺って単純な男なので、可愛い女の子に褒められてちやほやされるとそれだけで舞い上がってしまうのだ。仕方ないよね、男の子だもの。
さて、こんな会話をしている俺と整備士姉妹はどこで何をしているのかというと、まぁ休憩スペースで寛いでいた。ソファーにどっかりと腰を下ろした俺の両サイドにティーナとウィスカがぴったりとくっついている。二人とも体温が高めなので、こうしてくっつかれるととても温かい。
と、まったりとしていると突然目の前に影が差し、広げていた俺の足と足の間にストンと誰かが収まってきた。

「だらけてるわねぇ」
「あっ！？　姐さんずっこいでそれは！」
「あーっ！？」

互いを慮って『特等席』を敢えて空けていた整備士姉妹が非難の叫びを上げる。そんな姉妹の抗議など知った事かという態度で俺の胸板に背中を預けてきたのはエルマであった。シャワーを浴びてきたようで、彼女の銀髪が幾分かしっとりとしている。

「おつかれ。で、成果は？」
「意外と筋は悪くないわよ、二人とも」

エルマがここに居ない二人――ミミとクギのことをそう評する。
何の話かというと、ミミとクギの二人は最近エルマを教官として戦闘訓練――それも徒手での格闘の訓練を行っているのだ。
精神感応能力を利用した護身が可能なクギとは違い、ミミには自身の身を護る術というものが無い。いや、一応レーザーガンは買い与えたし、訓練もさせてはいるが、いざという時というか最後に頼りになるのはやはり己の肉体である。
ミミも日々のトレーニングで多少なりとも体力がついてきたので、こういう暇な時間が多い時にエルマやメイから護身術というか格闘術を習うようになっているのだ。クギも一緒に格闘術の訓練を受けているのは、もののついでなのか何なのか……本人がやる気を出して参加したいと言ったので、教えるなら一人も二人もあんまり変わらないということで一緒に訓練を受けている。

「そりゃ何より。チンピラを楽に伸せるくらいになってくれれば言うことは無いんだが……いや、やっぱ独り歩きは無理か」
「無理でしょ」

ミミはあの背丈にあのおっぱい、それにあの美少女っぷりなので、護衛を付けずに放流すると三分で男に絡まれるからな……そもそも絡まれないようにするという方向でどうにかするなら、体型を隠すマントと威圧感のあるフルフェイスのガスマスクめいた何かでも装備させないと無理だろう。

「悲しいなぁ……それで姐さん、ミミとクギはどないしたん？」
「ミミは訓練でヘロヘロになって部屋で休んでるわ。クギはミミを

寝かしつけたらそのうちくるんじゃない？」
「ぶっ倒れるくらいシゴくの怖すぎるでしょう？」
「苦しくなければ覚えないわよ」

さらっと恐ろしいことを宣うよな、エルマは。見た目はスレンダーな美人さんなのに、頭の中身が筋肉なんだよ。

「で、ずっとこうしてのんびり過ごすわけ？」
「それも悪くないと思うんだが、もう少しハルトムートの心証を上げておくのも手だよな」
「それはアリね。ただの知り合いよりは、窮状を見かねて手を差し出してくれる味方の方が話を聞いてくれる可能性は高いし」
「なら、そのように動くか。リンダの一時乗船手続きも終わったみたいだし」

そうなれば出港するのに否やはない。まぁ、この星系を離れるとなるとちょっと話が違ってくるが、星系内で活動をする分には問題はなかろう。

「兄さんが何かやるってことはアレやな。宙賊狩り」
「ご名答。まぁ、難しくもなんともないが」
「稼げそうなんですか？」
「それがそうなんだな、これが」

パンデミックの影響で商船の往来が減り、また入出港の手続きが面倒になっているのも相まってリーメイプライムコロニーの補給能力は大きく減衰している。そんな状況下では星系の治安を守る星系軍も稼働効率を落とさざるを得ず、必然的に星系全体の治安は低下する。治安が低下すれば当然宙賊どもが活発に活動するようになる。つまり俺達のような傭兵の飯の種が増えるというわけだ。

「でも、パンデミックが起こっているリーメイプライムコロニーに立ち寄る商船は減りますよね？　そうなると、普通は宙賊の獲物も少なくなるんじゃ？」
「それがそうでもない。リーメイプライムコロニーに寄らないとしても、リーメイ星系を通らざるをえない商船の数はそんなに変わらないだろうからな。ここは三つの星系にハイパーレーンが繋がっているハブ星系だから」

リーメイプライムコロニーに荷を下ろせない、もしくは下ろすのはリスクが高いとなれば商人達は他の星系に商品を下ろしに行くことになる。だからといってリーメイ星系を通らないというわけではないのだ。つまり、現状ではハイパーレーン突入口とハイパーレーン突入口を結ぶ航路の通行量が増えていると思われる。当然、それを狙った宙賊の数も。

「ただまぁ、戦利品を売りに来る度に検疫のため長期間拘束されるのは面倒だからな。こちらからハルトムートに働きかけて、そこらへんを簡略化する特権でも付与してもらうのが良いだろう」
「ズルない？」
「使えるものはなんだって使うさ。向こうとしても俺が自主的に宙賊討伐に精を出してくれる分には助かるだろうから、拒むことはあるまいよ」

戦利品の中にはパンデミック下のコロニーでは不足しがちな物資も多く含まれている筈だ。俺達が戦利品として供給する物資の量なんてのは大したものではないだろうが、パンデミックを起こしたコロニーには商船が近寄らなくなって下手をすればライフラインに関わる物資すら不足する可能性がある。
ハルトムートや彼の父君であるマグネリ子爵も物資の欠乏などが

起こらないように商人に荷を運ぶよう手配していることだろうが、そこで俺が治安の向上と物資の供給に僅かなりとも貢献すると申し出ればどうか？　胡散臭がられるかもしれないが、あちらとしては感謝をしないというわけにもいくまい。

「そういうわけで、ハルトムートに早速連絡してカネを稼ぎつつ、彼の好感度を稼ぐとしよう」

アイアイサー、と三人の声が重なる。よし、では楽しい宙賊狩りのお時間だ。

#415　宙賊狩り（前書き）

ちょっと気になる小説を読んでいたら時間が……（ω）

#415　宙賊狩り

『申し出は有り難い。有り難いが……何故そこまで？』

ハルトムートにアポイントメントを取り、今回は直接顔を合わせてではなく通信でコンタクトを取った。そしてこちらからのお願いと提案を聞いたハルトムートの反応がこれである。

まぁ、わからないでもない。ハルトムート自身がすることと言えば俺達の船の出入りを簡略化できるよう専用のタグなりＩＤなりを付与して、子飼いの商人達と同じように入港はしても人のやり取りは行わず、防疫的な意味で安全で素早い物資のやり取りができるようにするだけだ。

これは既に動いている仕組みを俺達に適用するだけなので、担当をしている部下にそうするよう指示を出すだけで良い。手間とも言えない手間だ。

それに対して俺達は特別な対価を要求するわけでもなく、自主的に宙賊を狩って手に入れた戦利品を卸すと言っているのだから、ハルトムートとしては自分に都合が良すぎると思ったのだろう。俺の動機がわからないんだろうな。ハルトムートにしてみれば。動機と意図の読めない善意というものを気味悪く感じるのは然程ズレた感覚でもないと思う。

「腹を割って話すと、実はうちのクルーの知り合い……というか恩人とか、親友にあたる人物がこのコロニーに居てな。その人を助けて欲しいと頼まれたのが一つ。あともう一つは単純に困り果てて、苦しんでいる臣民を『関係ないね』と見捨ててはは陛下から賜ったゴールドスターが泣くだろう？」

俺の言葉を聞いたハルトムートは一瞬きょとんとした表情をしたかと思うと、微笑んだ。うん、イケメンが微笑むと破壊力が凄いな。俺が女なら心の中で黄色い悲鳴の一つでも上げていたかもしれん。

『貴殿のことを見くびっていた。この通り謝罪する』

「下心あってのことだ。槍働きの後にはちゃんとご褒美を強請るからな」

『ご褒美？』

「言っただろう？　このコロニーに住むクルーの恩人を助けるのが目的だと。そのために一肌脱いでもらいたいのさ」

後で義侠心の男とか評されても困るので、しっかりと釘を刺しておく。傭兵的にも喜んでロハで働く便利屋と思われるのは避けたいし。

『具体的にはどのようなことだろうか？　私の権限でもできることとできないことがある』

「下層区画に孤児を引き取って面倒を見ている施設があるんだよ。そこを後援している連中が今回の流行病で大打撃を被って、保護も後援も打ち切られてしまっていてな。そこの面倒を見てもらいたいのさ。今は俺が面倒を見ているが、いつまでも見ているわけにはいかんし……そういうのは本来そっちの領分だろう？」

『耳が痛いな……』

ハルトムートが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。ナントカ準男爵……レイディアスだっけ？　その準男爵が下層区を顧みない政策を推し進めてきた結果、ギャングやマフィアが互助的に施設を整備、運営していたわけだからな。これは行政――或いは貴族の敗北というか、失態であると言えるだろう。

「あと、うちのドクターがもしかしたらこの伝染病をどうにかできる鍵を見つけられるかもしれん。被験者を一時乗船させて絶賛研究中だそうだから、期待しないで待っていてくれ」
『どういうことだ？　貴殿の船のドクターは何者だ？』
「少し前までハイテク星系で医療系や遺伝子工学系の企業で働いていた人でな。うちの船に船医として迎え入れる際にケチらずラボとして使えるレベルの設備も導入したんだ」
『人材の層が厚いのだな……このコロニーは交易を主体としたコロニーでそういった研究職の人材が殆ど居ないのだよ。全く、羨ましい』
「やらんぞ。とにかくそういうことで……とりあえずは出入りの簡略化に関する許可を貰えるか？」
『承知した。すぐに担当の者に話を伝えておこう』

☆★☆

「簡略化と言っても、検査不要で素通りというわけではないのですね」
「それはそうよ。正しくは優先通行権ってところじゃないかしらね」

リーメイプライムコロニー港湾区の防疫チームを見送ったクギとエルマがハルトムートが手配してくれた出入りの簡略化――というか優先通行権について話し合っている。
検査そのものは比較的短時間で終わった。タラップのエアロックをチェックし、船内各所で空間中の胞子量――今回の流行病の病原となっているものだ――を測定し、俺を含めたクルーが感染していないかをチェックする。リンダは当然これに引っかかったが、医師免許を持っているショーコ先生が彼女の身柄を管理しており、また星系外には出ない一時乗船の立場ということで見逃された。

「多少のことには目を瞑れと言われていたんでしょうね……」
「お貴族様様だねぇ」

通常、いくら優秀な医師の管理下にあると言ってもこのリーメイプライムコロニーの厳戒な感染拡大防止態勢の中で感染者を外に出すようなことなどあり得ない。だが、そこはそれ。貴族の絶対権力万歳である。

「疲れた……」

感染者ということで徹底的に検査されたリンダが魂の抜けたような顔になっている。一応彼女は感染しているが、症状も出ていなければ咳やくしゃみなどによる胞子の拡散も行っていない状態だ。
どうしてそのような状態なのかということをショーコ先生が調べているわけだが、これ本当に数日で結果が出るのかね？　疑問に思ったところでできることがあるわけでもなし。ショーコ先生を信じて待つしか無いのだけれども。

「思ったよりも大変だったが、やっとこさ開放されたわけだし……行くか」

かくいう俺も執拗なチェックにげんなりである。優先通行権を持っていてもこれとか、他の船はどれだけ厳しいチェックを受けているのだろうか？　いや、このチェックを優先的に受けられるだけで、内容は変わらないのか……？

「頑張りましょう！」
「ミミは元気やなぁ……」
「そうだね……私達も準備しておこうか」

元気なのはミミだけである。何故ミミだけこんなに元気なのだろうか？　謎だ。整備士姉妹も宙賊艦やその装備の鹵獲に向けて準備をするようだ。本当は半日くらい休んでから行動したい気分なんだが、あまりダラダラしても仕方ない。動くと決めた以上は動くとしよう。

☆★☆

宙賊を狩って回る手法というのはいくつかある。
その中でも比較的スタンダードな手法はと言うと、宙賊の襲撃が発生しやすい宙域をブラブラと巡回し、宙賊に襲われた商船が発信する救難信号に急行するという方法である。

「こちら傭兵ギルド所属のクリシュナだ。戦闘に介入する」
『傭兵！？　金なら払う！　助けてくれ！』
『傭兵だァ！？　クソッ！　どうする！？』
『でけぇ船もいるが、戦闘艦は二隻だけだ。やっちまえ！』

天の助けとばかりに声を上げる襲われていた商船と、それを襲っていた宙賊ども。見たところ、商船の護衛を務めていた船は既に撃破されたか死に体になってしまっているようで、残っている商船は二隻のみ。一応タレットで武装はしているようだがその火力は大変に貧弱であるようで、宙賊どもをなんとか寄せ付けないようにするのが精一杯であるようだ。

『ジャマーを展開するわよ』
「そうしてくれ。距離を取って様子見してるような手合いを任せた。ブラックロータスはゆっくりと商船に接近しつつ、敵勢力を射程内に十分に捕捉したら防空戦闘」

『アイアイサー』
『承知致しました、ご主人様』

宙賊の数は十四隻か。これくらいなら全部食えそうだな。

「吶喊するぞ。必要ないとは思うが、一応シールドセルを準備しておいてくれ」
「はい、我が君。チャフとフレアもお任せ下さい」
「敵前衛、来ます！」

クギの返事とミミの警告を聞きながら、スロットルを全開にして宙賊艦の前衛に正面から突っ込む。シールドの硬さでも火力でも勝っている場合、ヘッドオンでの撃ち合いほど効率的な敵の撃破方法などそうそうないものだ。先方からのお誘いとあらば喜んでお受けするとしよう。

四門の重レーザー砲を乱射しつつ、クリシュナの姿勢制御スラスターを小刻みに上下左右に噴かして船を揺らす。宙賊の船も揺れに合わせて偏差を取った射撃を撃ち込んでこようとするわけだが、火器管制システムがヘボなので小刻みに船を揺らすと大げさに偏差取りすぎて射撃を外すのだ。安物を使うと碌な事がないというのはこういうことだな。

『ええいくそ！　当たらねぇ！　つか硬ぇ！』
『ぎや――ッ！？』
『やべぇ！　こいつ強いぞ！？　絶対シルバー以上だ！』
『散開！　散開しろ！』

残念、シルバーどころかプラチナだよ。慌てて逃げようとした宙賊艦の横っ腹に散弾砲を撃ち込み、更に逃げようとする宙賊どもを重レーザー砲で散々に追い散らす。

『超光速ドライブが起動しねぇ！？　ミ、ミサイルが！　助け――！』
『やめろォ！　焼ける！　焼ける！？　焼け――』

エルマの駆るアントリオンは予定通りグラヴィティ・ジャマーで宙賊どもの超光速ドライブの起動を阻害しながら、シーカーミサイルとレーザービームエミッターで奴らを始末しているようだ。
しまいには戦場に接近してきたブラックロータスがコンシールド装甲で隠されていた各種砲台を展開し、逃げ惑う宙賊を殲滅しにかかる。これで詰みだな。奴らが対艦反応弾頭魚雷でも持ち出してこない限りどうにもならん。

『た、助かったのか……？』
「運が良かったな。それでお金の話なんだけど」

宙賊どもの賞金と戦利品だけでも十分といえば十分なんだが、折角くれるというなら貰うのは吝かではないよな！　俺は貰えるものは貰う主義なんだ。

#416　勝利の美酒（前書き）

Ｓｔｒａｎｄｅｄ：　Ａｌｉｅｎ　Ｄａｗｎを始めました。
ＳＦの墜落モノはいいぞ（　ω　）

#416　勝利の美酒

「はっはっは、傭兵丸儲けとはこのことだな」

襲われていた交易商人から宙賊艦一隻分よりもマシな額の礼金をせしめて彼らを見送り、宙賊どもがドロップした戦利品と奴らの船が装備していた中でもマシな部類の装備を引っ剥がし、更には奴らの首に懸かっている賞金も頂ける。ボロい商売だぜ。俺にとっては、だが。

「幾ら儲けたんだ？」

手術着のようなシンプルな服を着たリンダが興味本位といった感じで聞いてくる。

「商人の謝礼金が２万、宙賊は特別な札付きじゃなければ一隻辺り３０００から５０００程度、それが十四隻だから少なく見積もっても４２０００、他には戦利品を売り払えばプラスでドン、船用の装備で更にドンってとこだな。まぁ１０万弱ってとこか？　戦利品と装備の質次第ではもう少し行くかもな」

「マジかよ……傭兵って儲かるんだな」

「これだけ儲けるためにはこの何百倍、何千倍の投資が必要ですけどね」

「オレには遠い世界の話だってことだけはよくわかったよ……でも、それじゃあどうやって傭兵になれば良いんだ？」

「それはですね……」

と、ミミがリンダに傭兵になる道筋をレクチャーし始めた。ミミ

はリンダに色々と話を聞かせるのが楽しいのか、こうしてよくリンダと話をしている。その傍らでクギもふんふんと耳をそばだてているのがちょっと面白い。頭の上の狐のような獣耳がピクピクと興味深げに動いている。

ミミの話に聞き入るリンダから離れて食堂に行くと、一仕事を終えたエルマがビールを飲んでいた。俺も冷蔵庫から炭酸抜きのコーラもどきを出して同じ席に着く。

「お疲れ様。で、あの子はどうするの？」

「どうもせんが。行く先々でクルーを増やしてたらすぐに船室が足りなくなるぞ」

「ふーん？　ティーナとウィスカにも手を出してるんだし、ああいう子もいけるのかと思ったけど」

「流石に正真正銘のはちょっとなぁ……俺にだって良心とか一般的な良心とか道徳観の持ち合わせくらいあるぞ。というか、あの二人に手を出すのを相当に躊躇った上にクリスにも手を出してない時点で察して欲しいんだが」

「宗旨変えしたのかなって」

「そういった事実はございません。というか、随分そっち方面で絡んで……なるほど」

そういうことか。完全に理解した。ＯＫＯＫ。

「……何よ？」

「別に。ただ、今日は俺も少しお前に付き合おうかなって思ったんだよ。癖の少ない強めの酒ってあるか？」

「珍しいわね。でも、付き合ってくれるならご馳走するわ」

炭酸の爽快感が無いのは残念だが、ラムコークっぽくすれば俺でも酒に付き合えるからな。無論、酒に弱い俺は一杯で顔真っ赤のへ

ロヘロになるが、そこはエルマに面倒を見てもらうとしよう。たっぷりとな。

「すぐに潰れるから、面倒は見てくれよ」
「吐くのはやめてよね」
「いくらなんでも一杯でそこまではならんから大丈夫だ」

そう言いながら、エルマが専用の収納棚から出してきてくれた無色透明の酒――匂いを嗅いでみると少し甘い――を適当にコーラもどきに混ぜてグラスの中身を掻き回す。多分ラム酒じゃないんだろうからラムコークとは言えないのだろうが、まぁ些事だな。

ちなみに、酒盛りとなればすぐに湧いて出てきそうなドワーフ二人は剥ぎ取った装備を高く売るために整備で大忙しで、実はいけるクチのショーコ先生もリンダから取得したデータの解析で忙しいらしい。メイはリーメイプライムコロニーにブラックロータスを移動させていても俺達に構うくらいわけないと思うが、流石に酒盛りに顔は出さない。呑めたとしても酔いもしないからな。身体の中に『貯蔵』することになる。

それをどう処理しているのかは知らないが……無駄になるからな。誰も幸せにならないので、メイもわざわざ飲み会には顔を出さない。

「それじゃあ乾杯」
「何に乾杯するの？」
「いつも通りの勝利とか？」
「なんでそこで疑問形なのよ……締まらないわねぇ」

そう言いつつも、エルマはご機嫌である。このままご機嫌を取って是非色々とサービスをしてもらうとしよう。そのためにもべろんべろんに潰れないように気をつけないとな。

☆★☆

「スッキリだ」

「程々にね。ヒロくんはあまりお酒に強い体質ではないから」

「そうする。ありがとう、先生」

翌日――宇宙空間では明日も昨日も無いが――若干痛む頭を医療ポッドで癒やしてもらった俺はショーコ先生に軽いお小言を頂いていた。昨日はエルマと一緒に酒盛りをして、そのまま一緒に部屋に行って夜を過ごした。俺よりガブガブと酒を飲んでいたというのに、エルマは二日酔いもせずに一緒にシャワーを浴びたらさっさとメシを食いに行ったっていうね……あいつの肝臓は鋼鉄か何かで出来ているのだろうか？

「そう言えば、リンダの件はどんな感じなんだ？」

「仕組みは解明したよ。今はその仕組みを他人にも適用できるか演算中だね」

「演算？」

「いちいち生体で治験なんてしていられるほど時間もないからね。幸い、君が環境を整えてくれたから仮想上で結果を演算しているのさ。こっちの方が手間も時間もかからないからね」

「人体に新薬的な何かを投与したらどうなるかをデータ上でシミュレーションするのか……それ、確度は大丈夫なのか？」

「勿論さ。帝国内に存在する種族のデータはほぼ網羅しているから問題ない筈だよ。種族固有の特定の疾患がある場合どうかってところまでシミュレートするから、結構時間がかかっちゃうんだけどね。それでもこれから二十四時間かかるってことはないかな？」

あっけらかんとした様子でそう言うが、俺にしてみれば発展した科学の力ってスゲーという気持ちである。薬の開発の速さも目を見

張ったが、その薬が本当に効くのか、重篤な副反応などは発生しないか、などといったデータの収拾が仮想上でたったの一日で終わるというのが凄い。しかも確度も保証されているときた。

「こういった分野のことは普通の人にはわからないよね。気になったことがあったらいつでも聞いてくれたまえよ？」

「聞くことを思いつけるかどうかもわからんが、とにかく凄いことをやっているんだなぁという雰囲気だけはよくわかった」

「それはよくわかっっとは言えないような気がするんだけど……まぁ良いけどね。流行病の件に関しては私にどーんと任せてくれていいよ」

「そうする。ハルトムート相手に使えそうな手札ができたら教えてくれ」

「任せておいてくれたまえ。高い買い物をした甲斐があったと思わせてみせるよ」

そう言ってショーコ線はその大きな胸を反らしてみせた。うん、眼福だね。

#417　進捗と襲撃（前書き）

stranded alien dawn がとても面白い……（ ´ω`）

#417　進捗と襲撃

宙賊から奪った戦利品は物資が不足気味のリーメイプライムコロニーに下ろし、需要が少なめであろうと思われる航宙艦のパーツや装備類はひとまずブラックロータスに溜め込むことになる――と思っていたのだが。

『船のパーツも売ってくれないだろうか』

一応、リーメイプライムコロニーでも航宙艦のパーツを売れないかとミミ達が調べたのがハルトムートの耳に入ったらしく、あちらから連絡を入れてきた。

「それは構わんが、またどうして？」

『食料や医療品を優先して確保した結果、機械系のコンポーネントが不足気味なのだ……』

「なるほど。うちとしては構わんよ。荷が捌けるのは良いことだし」

つまり、スクラップパーツとして買い取りたいというわけだ。確かに船の装備に使われているパーツ類は分解すればコロニーの機能を維持するためのパーツに流用することも可能だ――とティーナとウィスカが言っていた。

「パーツとして使うなら、整備済みの完動品にする必要はないかな？」

『その方がお互いに手間は省けるだろうと思う』

「既に仕上げた分は相応の値段で買ってもらうことになるが」

『流石にそこにケチを付けるほど吝嗇家ではないさ』

ホロスクリーンの向こうでハルトムートが笑う。うむ、イケメンというかなんというか……帝国の貴族ってのはどいつもこいつも見目麗しいな、本当に。やっぱり美男と美女が脈々と血統を作り上げてきた結果なのかね？

『ところで、先日言っていた流行病に対する有効な手立てというのは見通しが立ったのだろうか？』

「ああ、それなら既に生理学的？　な仕組みの解明が終わって、他の人や種族にも適用できるかシミュレーション中だそうだ。演算は今日中にも終わりそうって話だったぞ」

『私も専門外のことなのでよくわからないのだが、それが終わるとどうなるのだろうか？』

「生体での治験を吹っ飛ばして確実性の高い結果が出るらしいから、特効薬ができるんじゃないかと思うが……うちのドクターも会話に参加させようか？」

『すまないが、頼みたい』

ハルトムートの要請でラボのショーコ先生に通信を繋ぎ、二人の会話を邪魔しないよう聞くことに専念する。ハルトムートが求めている情報は単純で、ショーコ先生の研究結果はすぐ使えるものなのか、そしてその安全性はどの程度のものなのかというものだ。

『精度は古巣のものと遜色ないものなので、すぐに使って頂いても問題ないかと思いますよぉ。身体が入ってきた感染源に対して極めて高い免疫機能を発揮するようになるので、感染はしても症状が出ない上に、新たな感染を広げることもなくなるという感じなのでぇ』

『その特効薬は量産できるのだろうか？』

『相応の設備があるならば、ですかねぇ。うちのラボでも小規模ながら作れますが』

『どれくらい作れるのだろうか？』
『資材があればフル稼働で一時間あたり二百人分、日産で４８００人分ってところですねぇ』
『すぐにでも作ってほしいが、全然足りんな……』

ハルトムートが難しい顔をする。このコロニーの人口は凡そ五十万人という話だから、うちのラボにある製造プラントで全員分を賄うとなると軽く三ヶ月以上はかかることになる。そんなに長期間ここで滞在するつもりはないぞ。

『そりゃうちのラボの製薬プラントはあくまでも小規模なものですからねぇ。それなりの製造設備さえあれば製造そのものは難しくはないので、コロニー内で製造可能な機器を持っている企業などを探してみては？』
『そうしてみよう。どういった設備が必要になるのか、データを送ってくれないだろうか？』
『だってさ。どうするんだい？　キャプテン』
「うちの優秀なドクターには俺が報いるとして、そんなドクターの研究結果と労働力を提供する俺に対する報酬は頂けるんだよな？」
『私の権限の範囲内で……なるほど、そういうことだな？』
「そういうことだな。孤児院というか施設の件をしっかり頼むぞ、お代官様」
『承知した』

これでとりあえず行政方面というか、所謂お上の問題は片付きそうである。口約束に過ぎないが、この会話のログは記録しているからな。万が一シラを切られたら有効に使ってやるし、それすらも無視してシラを切り通そうとした日には俺も覚悟を決めよう。なに、最終的にモノを言うのは暴力だからな。カネでもコネでも単純な暴力でもなんでも使ってやるさ。さしあたっては航宙艦を用いた決闘

か、あまり気は乗らないが剣での決闘って手もあるしな。

『さて、それじゃあキャプテンから何か報いて貰えるというお話のようだし、どうやって報いてもらおうかねぇ？』

とはいえ、まずはハルトムートとの通信を切り、ニンマリと笑みを浮かべたうちのドクターのお願いをどう乗り越えるかだな。お金で解決できないかな？　ダメかな？　ダメそうだね。

☆★☆

俺の特異な出自と体質――というか身体そのものに興味津々なショーコ先生の『研究』に彼女が満足するまで付き合い、身体的にも精神的にも大変な目に遭った。最近はクギの指導もあってサイオニック能力に磨きがかかってきたというか、実は色々できるようになりつつある。その点も含めてショーコ先生の問診という名の尋問じみた何かによって吐かされた。ちゃんと習得できるまで秘密にしようと思っていたのに……。

「ヒロ様、お疲れですか？」

「そうなのですよ、ええ」

休憩スペースのソファでぐったりとしていると、ミミが声を掛けてきたのでそう返す。すると、ミミは俺の隣に座ってぐいぐいと身体を引っ張ってきた。俺はそれに抵抗せずにパタリと倒れ、頭は見事ミミの太ももの上に着陸。うむ、目の前にミミの大きなお胸があって絶景。寧ろちょっと触れてる。最高。精神力がどんどん回復していく気がする。

「……先を越されてしまいました」

「ふふん。今日は私のターンですね」

ミミの膝枕に癒やされていると、クギの声が聞こえてきた。俺の弱まった精神でも感じ取ってきたのだろうか？　しかし今日はミミの豪運がクギのテレパスに勝利したようである。ぷにぷにもっちりもモフモフふっさりも癒やしぢから的には甲乙つけ難い。今日のところはミミに癒やされよう。

「リンダはどうしてる？」
「はい、我が君。リンダさんはティーナさんとウィスカさんに整備について教わっているようです」
「なるほど。短い期間で何かを習得するのは難しいだろうけど、端緒のようなものを掴めると良いな」

リンダに関してはあの二人に任せておけば良いだろう。下手に俺が関わって希望を持たせるようなことをしても仕方がないし。まぁ、リンダが俺達みたいな傭兵生活に魅力を感じてるかどうかは知らんが。実際のところ、リンダを乗せるような余裕は……余裕はあるな。必要性が無いが。

「あー、そうだ。ティーナとウィスカに剥ぎ取った装備のオーバーホールを止めるように伝えておいてくれるか？　今作業してる分は仕上げてくれて良いけど、先方はスクラップパーツというか再利用可能なコンポーネントとして引き取りたいみたいでな」
「わかりました。メッセージを入れておきますね」

俺の頭を膝の上に乗せたままミミがタブレット端末を操作し始める。うむ、良いぞ。とても良い。何が良いとは言わないが遥かに良い。これが幸せ……いや、宇宙の真理……！

「……ミミさん、ここは一つ協力して我が君を癒やしてさしあげるというのは如何でしょうか？」

俺の精神的な何かを感じ取ったのか、クギがミミに素晴らしい提案をする。素晴らしい提案だ素晴らしい。しかしミミ的にはどうなのか？　若干クギと張り合うような場面を見ることがあるが。

「そういうのも良いかもしれませんね！」

アリらしい。ということは、二人がかりということだな？　良かろう、この俺は逃げも隠れもせんぞ。存分にかかってきてくれたまえ。なに？　疲れているんじゃなかったのかって？　それはそうだけど、二人でサービスしてくれるってことなら精神が肉体を凌駕することって勿論あるよね。

☆★☆

俺がミミとクギの二人による熱烈なサービスで癒やされ、エルマが酒をかっ食らってリラックスし、ショーコ先生が俺から得たデータやサンプルを前にニヤつき、ティーナとウィスカがリンダと一緒に剥ぎ取った装備のメンテナンスや分別を行っているその時にそれは起きた。

というか、起きていた。

「ご主人様。下層区画の施設に襲撃がありました」

「なんて？」

ミミ達と一緒に楽しくシャワーを浴び終えたところでメイに衝撃的なことを聞かされた俺は思わず聞き返してしまった。いや、そういうこともあろうかと思って戦闘ボットを配置していたのはそうな

んだが、まさか本当に役に立つことになるとは思わないじゃないか。あの軍用戦闘ボットが四体も配備されている場所を襲うとか、俺でも躊躇するというか御免被るんだが。

「はい、戦闘ボットを配置していた施設に襲撃がありました。戦闘ボットと現地雇用の警備員二名の手によって無事撃退されましたので、ご安心下さい」

「そりゃそうなるだろうが……」

「子供達に被害は無いんですよね？」

「はい、ミミ様。現地雇用の警備員二名も含めて負傷者はいません」

「動機がわからんな……いや、物資があるから襲っただけかもしれんが」

むしろそれ以外の動機とかあまり考えたくないんだが。施設を支援してたマフィアだのギャングだのってのは概ね壊滅状態だと言っていたし、そっち関連ではないと思うんだが……ああいや、待てよ？　支援していなかったマフィアやギャングの存在についてはそういや聞いてなかったな。そっち方面からの攻撃って可能性はあるのか？　そもそも、そうでもないとあの施設が襲われること自体考えられなかったかもしれんな。支援してたマフィアやギャングが勢力を盛り返したら確実に襲撃者にはけじめをつけさせることになるだろうし。

「現地と連絡は着くのか？」

「はい。配備している戦闘ボットを通じてコンタクトを取ることは可能です」

「そうか、ならまずは事情を聞くところからだな……」

折角良い気分だったのに頭が痛くなりそうだな。この状況ではしゃいでる跳ねっ返りかぁ……どうするかなぁ。もう面倒くさいし綺

麗さっぱり消毒するか？　物理的に。
そんな物騒を事を考えながらミミ達を連れ、俺は休憩スペースへと向かうのだった。

#418　盛大に巻き込むことにする（前書き）

朝っぱらからインターホンで起こされた上に雨で体調も優れずポンペ……僕が何をしたっていうんだ――（∵3」∠）―

#418　盛大に巻き込むことにする

「まずは無事なようで何よりだ」
『兄貴のお陰です』

ホロスクリーンの向こうで金髪角刈りのハインツと紫プリン頭のジークが頭を下げる。お前らみたいなむさ苦しい連中の兄貴になった覚えは無いんだが……まぁいいや。リスペクトしてくれるならさせておこう。あっちの界隈ではそういうの大事らしいし。

「それで、襲ってきたのはどういう連中なんだ？　ただ単に物資に目が眩んだ三下のチンピラですって話なら楽なんだが」
『物資に目が眩んだチンピラなのは間違いないんですが……』

オイなんだよその微妙な間は。目を逸らすなハインツ。そしてジークは動揺すんな。ヤッベ、みたいな顔してんぞ。

「その反応で大体察した。面倒事だな？」
『まぁ、はい。そうですね。バックにいるのは外の連中とも付き合いがあるって噂の奴らで……』
「外の連中？　まさか宙賊か？」
『噂ですがね。普通には手に入らないようなヤバいブツを仕入れたり、人をどこかに売り飛ばしたりする伝手があるのは間違いないです』
「この状況でそういうのが暗躍してるのはよろしくないな……そういや、この状況でも精製の甘いドラッグが出回ってるとかいう話を聞いたような」

いや、ショーコ先生が精製の甘いドラッグからも感染するとかいう話をしてたんだっけ？　うろ覚えだな。まぁどっちでも良いか。

『耳が良いですね、兄貴。それをばら撒いてるのも奴らです。痛みと苦しさを忘れられるって言って、ちゃんとした治療を受けるようなカネがない連中に売りつけて回ってるんですよ』

「で、そいつが死んだら死体はそいつらが片付けるってか？」

『え、ええ……なんで知ってるんで？』

「知らんのか？　病原のキノコは生き物の死体を養分にして繁殖するらしいぞ」

『……つまり、奴らはクスリをばら撒いてクスリの素を回収してるってことですか』

「じゃねぇかなぁ」

状況からの推測に過ぎないが、然程的を外している感じもしないな。宙賊と仲良くしているような連中ならそれくらいやっても不思議ではないし。

「しかしそんな連中がわざわざそこを襲いに行くのってのもわけがわからんな……奴らがそこまでして殺したいような人物でもいるのか？」

『奴らの考えていることは正直ちょっとよくわからないんですよ、イカれた連中なんで……ここを襲ってきたのも奴らの構成員じゃなくて、クスリを餌に奴らにここを襲うよう言われたチンピラでしたから』

「そりゃ面倒な話だな……」

つまり、件のイカれた連中は直接手を出してきたわけじゃなく、クスリを買うこともできなくなったような連中を鉄砲玉に使ってきてるってわけだ。もしかしたら直接的に「あの施設を襲え」と言っ

ているわけではなく「カネもカネになるようなモノも無いなら奪ってこい。そういえばあの施設は今なんか羽振りが良いらしいぞ」みたいなことを言っているのかもしれん。

「いや本当に面倒だな。そいつらの居場所というか本拠地みたいな場所はわかってるのか？」

『一応奴らのアジトの場所はわかりますが、ブツを保管している場所だとかブツを作っている場所だとかまではわかりませんね。兄貴、そんなことを聞くってことはまさか』

「綺麗さっぱり消えてもらうのが一番後腐れが無いよな。宙賊とも繋がっているとなると尚更」

物資の集積所だとか製造拠点だとかはアジトを潰した時に場所を探れば良いだろう。最悪、知っている奴が生き残っていればそいつの頭の中から引っこ抜けば良い。引っこ抜くのは俺じゃなくてハルトムートの仕事になるだろうけど。

『い、いや、それはそうかもしれませんが』

「宙賊と繋がってる時点で交渉の余地ねぇから」

『めっちゃ過激っすね、兄貴』

「お前も宙賊に手足切り落とされて何かしらの有用な成分の液体を分泌する前衛芸術作品みたいにされた被害者を見れば俺と同じ結論に至ると思うよ？」

俺の返答を聞いたジークが「えぇ……？　何それ怖……」みたいな顔になっている。まぁ、そういう反応になるよね。俺もこっちの世界に来て初めて見た時は脳が理解を拒んだからね。

「絶対に無理をしない範囲で奴らの情報を探っておいてくれ。俺は消毒の手筈を整える。製造拠点か物資の集積拠点の場所を特定でき

たら報酬で５０００やる。両方わかったら１万やるけど、無理して死ぬなよ。命の対価としては安すぎるだろ」
『わかりました、兄貴。ここの守りは戦闘ボットだけでも大丈夫そうなんで、俺達は情報収集に動きます』
「ああ。もう一回言うが、死ぬなよ」

俺が振った仕事で死なれたら寝覚めが悪いからな。

☆★☆

「これが特効薬か」

ケースにびっしりと並んだ乾電池のようなもの――一本辺り五人分の特効薬が入っている薬液入りのセル――を確認し、ハルトムートが感慨深げな声を上げる。
戦闘ボットを通じてハインツ達と話し合ってから凡そ一時間。俺はエルマとメイ、それにショーコ先生を連れてハルトムートの元へと足を運んでいた。

「標準的なシリンジで使えるようにしてあるから、打つのは難しくないと思います。ナノマシン製剤だから、保存も常温で問題ないですよぉ」
「承知した。こちらの記録媒体に製造用のデータが入っているのだな？」
「お察しの通りで。必要な設備の仕様なども一緒に入ってます」

相手が貴族だからか、ショーコ先生の口調がいつもと若干違って違和感が凄い。失礼のないように気をつけているんだろうなぁ。
「そいつの効果を検証するのに数日、更に量産体制を整えるのにま

た数日とかかるだろうが、そこは頑張ってくれ」
「勿論だとも。ここまでお膳立てをされて事態を収束させることができなかったら、私は父上に廃嫡の上縁切りされて放逐されることになるだろうしな」
「厳しい親父さんだなぁ……で、今度はこっちが手を貸してもらう番なんだが」
「ああ、私の権限でできることなら何なりと言ってくれたまえ」
「何なりと。言ったな？　言質取ったぞ？」

この時俺が浮かべた笑顔はよほど邪悪なものだったのだろうと思う。何故なら、ハルトムートが一瞬身を引いたから。そこまで警戒しなくても良いのに。大丈夫！　大丈夫だって！　色々しっちゃかめっちゃかに混乱しているのに乗じてちょっと無理するだけだから！
と、いうわけで。俺はハルトムートに保護を頼んだ施設が襲撃されたことと、襲撃者のバックにいるのが宙賊とも繋がりがある可能性が非常に高い組織であるということを伝えた。

「なるほど……それでどうしろと？」
「潰そう」
「えっ」
「つまり皆殺しだ」
「ちょっと待ってくれ」
「汚物は消毒するに限る。そうだろう？」
「頼むから本当に落ち着いてくれないか？」
「何なりとって言ったよな？　誇り高き帝国貴族に二言は無いよな？」
「……そう言われると弱いな」

よし、押し切った。

「良い機会じゃないか？　ハルトムートはここに着任したばかりで、しがらみも無い。どうせ奴らの巣を叩いて生き残ったやつの頭から片っ端から情報を引っこ抜いていけば、宙賊と縁のあるクソ野郎どもと繋がっている上層区画の連中の情報も出てくるさ。混乱しまくっている今ならやりたい放題できるだろ？」
「ヒロ卿。私は帝国貴族として法と秩序の番人を自称する立場なのだが……？」
「宙賊の協力者もどうせ極刑だ。多少の横紙破りは許されるさ」
「それは確かに……そうだろうか？」
「武勇伝になるぞ。帝国貴族には一つや二つそういうのがあると良いだろ？」
「う、ううむ……」

最終的に俺はハルトムートを言い包めることに成功し、賊どもにぶつける兵力を確保することができた。ハルトムートが親父さんの領地から私兵を多めに引っ張ってきていたのが功を奏したな。
あとはハインツ達と連絡を取って、早々にアジトを潰すとしよう。
二人に探らせている情報に関してはアジトでも引っこ抜ける可能性が高いし、必須ってわけでもないからな。
しかし、煽るだけ煽って俺は後ろに引っ込んでますってわけにもいかないか。俺も最低限、切った張ったをする姿勢だけでも見せないといかんな。

#419　やると決めたら全力で（前書き）

ぽんぽんぺいん！ ―（：3」∠）―

#419　やると決めたら全力で

三時間後。俺は軽量型のパワーアーマーであるニンジャアーマーを装着し、出力可変型レーザーランチャーを装備したメイと船に残っていた戦闘ボットを引き連れて襲撃対象――ブラディーズとか名乗ってるらしい――のアジト、その裏手で待機していた。

そこへ少し遅れてハインツとジークも現れたのだが。

「あの、兄貴？」

「なんだ？」

「戦争でもするつもりですか？」

「そうだが？」

何を言っているんだ、こいつは。殺ると決めたら殺る。妥協はしない。全力投球だ。特に相手は宙賊とも繋がっているような連中である。何が飛び出してくるかわからない。急に正体不明の生物兵器とかが出てきても驚かんぞ、俺は。

「お前達はそんな装備で大丈夫か？」

「兄貴が気合い入れすぎなだけだと思うっす……」

ジークがドン引きした様子でそんなことを言う。そうは言うけどお前、対レーザー繊維を使っているかも怪しい普段着とまぁまぁマシになったレーザーガンだけ持って襲撃とか俺から言わせるとナメてんのか？　って感じなんだが。そんなの致死出力のレーザー一発貰ったらそれでアウトじゃん。

「お前らは絶対に前に出るなよ。火事場泥棒には目を瞑るから、他

の拠点のヒントになりそうなものを漁ってくれ」
「えっ、金目のものとか懐に入れても良いんすか！？」
「それで足がついて監獄コロニーにブチ込まれることになっても知らぬ存ぜぬを貫くから、何を持ち出すかはちゃんと選べよ」
「りょ、了解っす」

一瞬喜色満面になったジークが神妙な顔で頷く。まぁ、こいつらのことだから多少ヤバいものでも安全に捌くルートの一つや二つは持ってるだろうが、一応な。

「ご主人様。そろそろ作戦開始時間です」
「あいよ。んじゃ初手は派手にぶっ放して思う存分に目立ってくれ。応戦してくるやつを釘付けにする感じで、積極攻勢には出なくて良い」
「はい。お任せ下さい」

そう言ってメイが有線で自分のジェネレーターに直結した出力可変式レーザーランチャーを持ったまま頷く。いざ戦闘となると重機関銃並みに重いそれを小枝のように振り回すんだよな。質量×速度＝破壊力なので、近接戦であれに殴られたやつは酷いことになる。

「俺達は裏からこっそりですね、兄貴」
「そうなるな。ああ、敵味方識別のビーコンリングは無くすなよ。それが無いとお貴族様の突入部隊に出会った瞬間レーザーで滅多打ちにされるぞ」
「「絶対外しません」」

生身の彼ら二名の腕には青い光を放つブレスレットのようなものが嵌っている。あれが俺が言ったビーコンリングで、敵味方識別信号を発信することによって誤射を防ぐことができる装備だ。あれを

装備している味方に向かってレーザーガンやレーザーライフルの引き金を引いてもレーザーが発射されないという優れものである。

「よし、時間だな。ランチャーで斉射だ。派手にやれ」

「アイアイサー」

メイの返事と同時に待機していた戦闘ボット達が一斉に武装を起動し、その砲身――デモリションバックパックに装備されたグレネードランチャーを目標の施設へと向ける。

「発射します」

スポンッ、ポポポポンッと小気味良い音が響いた。その次の瞬間、目標施設の壁に緑色の光が炸裂し、熱風がこちらまで押し寄せてくる。

「……マジかよ」

「やべぇよ、やべぇよ」

五機の軍用戦闘ボットから発射されたプラズマグレネードはその威力を遺憾なく発揮して壁面を焼き溶かし、蒸発させた。赤熱した丸い穴がボコボコと空いているのがここからでもよく分かる。

「その調子でよろしく。行くぞ」

「え、あそこに突っ込むんすか！？」

「そうだよ。おら早くしろよ」

「ご旬人様、お気をつけて」

尻込みするジークのケツをニンジャアーマーを装着した足で軽く蹴りながらブラディーズのアジト――プラズマグレネードによる爆

撃に晒されていない右側面へと向かう。さてさて、押し込み強盗の時間だ。

☆★☆

「んだテメッ――！」

威嚇する暇があったら腰のレーザーガンを抜いたほうが良いと思うが、と考えつつ容赦なく三下っぽいチンピラの胸に銃を向けて引き金を引く。

「ぇんっ！？」

バチィ！　と景気の良い音が鳴り、青白い雷光が一瞬だけ部屋の中を真っ白に染め上げた。ドサリと三下が倒れるくぐもった音が響く。

「この臭いは慣れないですね」

「死んでもおかしくない威力の電流だからね。仕方ないね」

ニンジャアーマーを装着している俺には感じられないが、生身のハインツとジークの鼻にはなかなかの悪臭が感じられているらしい。人体がほんのり焦げ、小便も垂れ流しとなればまぁ臭うのも致し方あるまい。小便だけじゃなく大便も漏らすのが居るみたいだし。

「問答無用でぶっ殺してないだけ有情だろ？」

「そうっすかね……？」

「そうだよ」

問答無用でぶっ殺すつもりならこんなテスラガン――電撃銃なん

ぞ使わんで致死性のレーザー光線を一度に複数発射できるレーザーショットガンを使うなり、剣で真っ二つにするなりしてるわ。
まぁ、これなら死なないってわけでもないけどな。死なないかもしれない。致死出力のレーザーガンよりはまぁかなりマシ。死んだら運がなかったね！　みたいなレベルの武器だし。非致死性武器というよりは低致死性武器だ。いや、中致死性くらいかもしれない。まぁ誤差だよ誤差。

「というか兄貴滅茶苦茶強くないですか？」
「一応プロだぞ、俺は」

本当は船だけ乗り回していたいんだが、最近はこんなのばっかりだよ。お陰で無駄に白兵戦スキルが上がっている気がしてならん……最近はクギの教えを受けて白兵戦に使えるサイオニック能力も使えるようになったしな。
それに、ニンジャアーマーはこういう閉所での戦闘を想定してパッシブセンサーを高級なのにしてあるからな。足音どころか身動ぎでの衣擦れの音や武器を構える音もその方向も丸聞こえだぜ。資格に反映してサポートまでしてくれるしな。

「で、なにか良さげなものはあったか？」
「データキャッシュが入っていそうなブツは確保してます」
「金目のものも確保してるっす」
「おう、その調子でキリキリ働いてくれ」

二人ともそこらで拾ったと思しき大きめの肩掛けカバンのようなものに色々と拾ったものを詰めているらしい。ハインツがデータ関連、ジークが金目のものを掻き集めてるみたいだな。

「お、前方から味方だ」

味方の識別信号を出している人物達が接近してきているので、ハインツ達に教えておく。こいつらは視覚化できるユニットを持っていないからこうして俺が伝えてやらないと相手が敵か味方か識別できんからな。

「お疲れさん。何人かこいつで無力化してあるから、回収を頼む」
「承知。我々はこのままエリアの制圧を続ける」
「了解。こっちは上のフロアに向かう。一応データが取れそうなものは漁ってるが、チェックしておいてくれ」

連絡事項を手短に話し、ハルトムートが用意した突入部隊と分かれて移動を再開する。

「……ガチガチのやべぇ奴らでしたね」
「これを機に面倒な連中を一掃するらしいからな。俺に付いたお前達は幸運だと思うぞ」

なんだかんだで帝国内で貴族の力ってのは圧倒的なものだからな。本気で暴力を行使し始めると、マフィアだのギャングだのヤクザだのといったアウトロー連中ではまず太刀打ちできない。結局のところ、力の源泉というのは最終的には暴力だからな。

「さあ、掃除を続けるぞ。ブラディーズとか名乗ってイキってる連中を今日中に壊滅させないとな」
「はい、兄貴」
「うっす」

頷く二人を引き連れ、再びスリーマンセル……というより俺一人が前衛を務める隊形で、俺達はアジトの探索を続けるのだった。

#420　フォースプッシュ！（前書き）

デパルソ！―（：3」∠）―（違う

#420　フォースプッシュ！

「どこのどいつか知らねぇが、うちにカチコミかけるたぁいい度胸だ！　生きたままバラして身体のパーツが欠けていくのを見せつけてやる！」

顔を真赤にした上に青筋もビキビキと立てた不健康そうな細マッチョ――いや、ガリマッチョ？――体脂肪率ゼロでひょろっとしてるけど、筋肉だけはついているという微妙に不自然な体型の男が唾を飛ばす勢いで捲し立てつつ、何やらバチバチと不穏な音を立てている棍棒のようなものを手に走り寄ってくる。

「ヒヤアァァァァッ！　貰ったあああァァ！」

息を止め、時間を延ばす。世界のすべてが遅くなり、間延びしていく。そんな中で、生身の人体が出すにしてはそこそこの速度でガリマッチョが飛びかかってきている。

バチィッ！　という耳を劈くスパーク音が鳴り響いた。その発生源は俺が手に持っているテスラガンである。青白い電光に胸を打たれたガリマッチョはもんどり打って倒れ――ない。

「おぉ？」

「くはっ……！　この程度ぉ！」

「電撃対策でもしてんのか？」

ダメージがないわけではないようなので、二発、三発とテスラガンを打ち込む。

「ぎぇっ！？　ちょっ！　待っ！？」
「いや待たんが」
結局五発打ち込んだところでガリマッチョはダウンした。全身から湯気が上がってこんがり焼けているように見えるんだが、生きているのだろうか？　まぁ死んでたら死んでたでも構わないが。とはいえ、ザコってわけでもないようなので用心はしておくか。
「おい、さっき手錠みたいなのを拾ってたろ？　かけとけ」
「うっす」
ジークがバッグの中からサイバーチックな形状の手錠を取り出して湯気を上げながら痙攣しているガリマッチョを拘束していく。あれ生きてるのか？　生命力が黒いアイツ並だな。
「今のがここのアタマかね？」
「どうでしょう。奴らの組織に関しては幹部やリーダーについてあまりよくわかっていないんですよ。ただ、今のやつは何度か顔を見たことがあるので、おそらくは幹部格だとは思いますが」
「そうか。頭の中身が無事なら良いんだがな」
テスラガンを五発も打ち込んだので、脳味噌の中身がトンだり熱が通り過ぎていたりしなければ良いんだが。まぁその時はその時か。
「ハインツはデータストレージの類を漁ってくれ」
「はい、兄貴……兄貴は？」
「俺はそういう仕事は苦手なんだ。なんというか戦闘全振りなんでな」
「なるほど……」

そういうのは概ねミミかメイに任せているからなぁ。日常生活レベルで機械を使うのに不便はしないが、ハッキング――というかクラッキングとか、繊細なデータ処理だとかは俺の手に余る。

「と、お客さんだな」

俺達が今いるのは構造体二階の奥にある袋小路の大部屋だ。退路は入ってきた扉しか無いのだが、そこへ敵味方識別信号がない複数の足音が近づいてきている。

「三……四人か。四人はちょっと困ったな。仕方ない」

テスラガンはあまり連射が効く武器ではないので、四人まとめて来られると一人無力化している間に他に撃たれかねない。それでも相手がふたりくらいならカバーを取って対処することもできるが、四人相手だとちょっと面倒だ。

「隠れてろ」
「うっす！」
「援護射撃くらいなら」
「要らん」

レーザーガンやレーザーライフルを手に部屋に飛び込んできた四人の賊相手にとりあえず一発テスラガンを撃ち込み、すかさず左手を突き出す。

「吹っ飛べ」

ほんの一瞬だけ賊どもの目の前の空間が歪み、その直後ドンッ！と何かが爆発したような音と共に衝撃波が発生した。目の前でそ

の衝撃波をモロに浴びた賊どもがそのまま部屋の外へと吹っ飛んでいく。
そして、俺はそんな賊どもを追いかけて部屋の入口まで走り、まとめて吹っ飛ばされて団子になっている賊どもに対して容赦なくテスラガンを撃ち込む。ぎえぇとかぐえぇとか汚い悲鳴が聞こえてくるが、念入りに一人に一発撃ち込んでおいた。

「兄貴、今のは……？」
「パワーアーマーについてる指向性エネルギー兵器の試作品だ。カッコイイだろ？」
「凄かったっすね」

実はそんなものは真っ赤な嘘で、これはクギ監修のサイオニック訓練の成果の賜物なのだが。いわゆるフォースプッシュ的なアレである。ますますジ〇ダイの騎士っぽくなってきてしまったが、実際にそういうものなのだから仕方がない。
クギ曰く、俺の力の性質や規模を考えると鼻息レベルの些細な力の行使であるそうだが、実用レベルで使えるので俺的には十分である。ちなみに、こいつはジェ〇イの騎士のアレとは違い、ものを掴んだり引き寄せたりできるような便利な能力ではない。少なくとも、今のところは。
今俺ができる力の行使というのは指定地点に強力な『押し退ける力』を発生させることだけである。どちらかと言うと竜の血脈の主人公が最初に覚えるアレに近い。そのうち力の扱いが上手くなったら掴んだり引き寄せたりもできるようになるかもしれないが。

「兄貴、集めたデータはさっきの連中に渡せば良いですかね？」
「そうしてくれ。ロック解除して分析してってのは手に余るだろ？」
「できる伝手はありますが、カネも手間もかかるんで任せられるならその方が良いですね」

「ならそうしよう」
「兄貴ー、こんなもんがありましたよ」
そう言ってジークが部屋の隅の方から何かがパンパンに詰め込まれたバッグを持ってきた。中にはピンク色の粉が入った薬包のようなものが沢山入っている。
「なんだそりゃ？」
「アレっすよ、こいつらがばら撒いてるクスリっす」
「ああ、これが例の……分析用に一袋だけ持っていくかな」
「一袋で良いんすか？」
「お前これ使うのはやめとけよ？　重篤な感染症に罹っても次は助けんぞ」
「え、どういうことっすか」
「うちのドクターの話だと、原料のキノコの精製が甘いとこいつが新たな感染源になるそうだ。ああ、こいつの材料は十中八九今このコロニーを騒がせている感染源のキノコで、こいつの原料になってるキノコは流行病で死んだ人間の死体を苗床にしたやつだぞ」
「マジっすか……」
ジークがクスリの入ったバッグをテーブルの上において後退る。ついでにポケットから薬包をいくつか取り出してポイポイと口の開いたバッグの上に放り投げる。俺が言わなかったらこいつクスリキメてハッピーになるところだったな。
持ち帰っても今更有意義なデータを得られるとは思えんが、まぁ何かの足しにはなるかもしれんから持ち帰っておこう。ショーコ先生なら無害化してただハッピーになれるだけの安全なキノコにしてくれるかもしれん。してくれたところで扱いに困るが。
「マジだよ。今度は味方だ……制圧は終わりかな？」

味方の識別信号を出している人員がこちらへと向かってきていることをニンジャアーマーのセンサーが拾っている。あとは電撃で伸びてる連中を連行してもらって、データが入っていると思しき機器類を引き渡せばとりあえず襲撃は完了だな。

しかしテスラガンで撃たれてもピンピンしてたあのびっくり人間はなんだったんだろうな。薬物で興奮状態の人間は拳銃で撃たれてもナイフを持って向かってくることがある、なんてことを元の世界で聞くことはあったが、テスラガンの威力は元の世界で使われていたバネで飛ばした針を通して電撃を流す武器よりも強力な武器である。

そもそも、人体というのは強力な電流を流されてもピンピンしていられるようにできていない。痛みを根性で堪えるだとか、そういう次元の話ではないのだ。そりゃちょっと豊満過ぎて通りが悪いみたいなことはあり得るが、流石にあのガリマッチョがそうだとは思えん。何かしらの強化手術だとか、対策装備だとか、何かあったのではなかろうか。

もしかしたら電撃に強い特殊体質だったとか、普段から電撃で気持ちよくなっちゃう何かが趣味の人で頻繁にビリビリしてたとかかもしれんが。そういやなんか電撃棍棒みたいなものを武器にしてたな。暇な時にバチバチして遊んでたのかもしれん。しらんけど。

「撤収ですかね」

「そうなるだろうな。ブツの引き渡しの準備をしといてくれ」

「はい、兄貴」

何にせよまずは情報を引っこ抜くところからだな。データを引っこ抜くか、アタマから引っこ抜くかだが、すぐに終わるものでもあるまい。今日のところはここまでだな。

#421　違うんです。信じて下さい。（前書き）

次巻の原稿を書く時期が近づいてきた……！（‘ω’）

#421　違うんです。信じて下さい。

「では勝利を祝して乾杯」
「乾杯っす！」
「かんぱいー！」

ブラディーズのアジトへの襲撃を終え、データストレージなどをハルトムートの部下達に引き渡してから凡そ一時間後。俺はハインツとジークを連れて施設へと戻り、子供達の面倒を見ていたアイリアとその子供達を交えてちょっと慰労のパーティー……というか食事会を執り行っていた。

「うまっ！？　え、美味くないっすかこれ？」
「おいしー！」

食事会に並べられている食べ物はブラックロータスから運んできたもので、いずれもテツジンが作ったものである。施設には自動調理器が無く、今までは電子レンジ的な加熱調理機で温めるだけで食べられるレトルト食品を主に食べていたらしい。高性能な自動調理器であるテツジン・フィフスによって作られた料理の数々は子供達だけでなくジーク達にも驚きを齎したようだ。

「喜んでもらえたならわざわざブラックロータスから食い物を運んでもらった甲斐があったな」
「そんなことに軍用の戦闘ボットを使うのは兄貴くらいだと思いますけどね」

この料理を運んできたのはアジトへの襲撃に参加していた軍用戦

闘ボット達であった。彼らはメイと一緒に一度ブラックロータスに帰還した後、背部のプラズマグレネードランチャーパックをカーゴパックに換装してこの施設まで食い物を届けてくれたのである。
アジトへの襲撃後、この食事会を思いついた俺はすぐにメイに連絡をして料理や装備換装の手配をしておいてもらったのだ。メイならブラックロータスを離れていてもテツジンや戦闘ボットの整備・換装システムにアクセスできるし、船に残ったクルーへの連絡も安心して任せられるからな。

「ヒロさん、ありがとうございます。子供達もとても喜んでいて……最近はずっと窮屈な思いをさせていたので」
「ええんやで。まぁついでだよ、ついで」

これは実際にそうで、最初に思いついた時点ではハインツとジークを連れてちょっと高級なお店に案内させて奢ってやろうと思っていたのだ。しかしそこでどうせなら施設の子供達にも美味いものを食わせてやったほうが良いのでは？　と思い直し、こうして施設で食事会を行うことを決めたのである。

「ふふ……そういう言い方、本当にあの子にそっくりです」
「別に意識してるわけじゃないんだけどな」

ティーナとは馬が合うというか、一緒に過ごしてて楽だなと思うことが多いのはそういうお互いに似た部分があるからかもしれんな。偶に突飛もない行動を取ることもあるが、まぁそれは俺も同じことだし。うん、自覚はしているんだ。ただ、そういえばそうだったなと思うのは後から指摘されたり、自分の行動を思い返したりしている時なんだけど。

「とりあえずここを襲った連中に関してはメインのアジトと思われ

るところを潰して、その人員の大半を戦闘不能にした上でしょっ引かせたから暫くは安全だと思うが、一応気をつけてな」
「はい、ありがとうございます」
「あと、勝手に話を進めて悪いんだが、ここの面倒を新しい代官に見てもらえるよう頼んでる」
「えっ」

アイリアの目が点になった。うん、そうだよね。そう言えば勝手に話を進めるばかりで肝心のアイリアに全然、何も、一切この施設に対する保護工作の話をしてなかったわ。

「ここの後援をしていた組織は力を失ってしまったって話だし、そもそもなんというか裏稼業な連中だろう？　今回のパンデミックによる混乱を利用して新しい代官はこのコロニーのちょっとアレな部分を一掃する予定だし、そうなるとそもそもパンデミックが落ち着いてもここは後ろ盾を失うことになる。だから、勝手だとは思うがこっちで話を進めさせてもらった」
「えぇ……あの、大丈夫なんですか？　この施設の権利者も後援をしていただいている組織の一つなんですけれど……」
「ハルトムートにはここの面倒を見ることの対価として色々と利益を供与しておいたから、心配はいらない。建物の権利に関しても必要なら分捕って正式に統治機構の預かりにするなり、アイリアのものにするなり良い感じに便宜を図ってくれる筈だ」

突然の俺の発言というか宣言にアイリアが滅茶苦茶焦っている。すまない、今思えば当事者を蚊帳の外にして殆ど決まりって段階まで話を進めてたわ。ままええやろ！　悪いことにはならんし！

「あ、あの、代官様って貴族の方……ですよね？」
「ああ、そうだな。なかなかのイケメンだったぞ」

一応俺もそうだが、今そんなことを言ってもアイリアの混乱が加速するだけなので賢く謙虚な俺は黙っておく。そもそも賢かったらアイリアを混乱させるような状況に陥らせることはないのでは？　という突っ込みはノーセンキューだ。

「ほ、本当に大丈夫ですか？　なにかの気まぐれでやっぱ支援するのやめただとか、気に入らないから全員斬り捨てるとか言いません？」

「アイリアの中の貴族ってのは一体どんだけ理不尽な存在なんだ……？　ハルトムートは誠実そうな好青年だったから心配要らないと思うぞ。そんなに心配なら俺との約束を破ってアイリア達を酷く扱ったら俺がとんでもない復讐をすると匂わせておくから」

「そ、そんなことをして大丈夫なんですか……？」

「大丈夫だ、問題ない。何せ俺はプラチナランカー様だからな。プラチナランクの傭兵、というか傭兵ギルドを敵に回すような真似は大概の貴族は避けるし、何より俺を敵に回すのは良くないと今回の件で十分にわかってもらえていると思うから」

だが、もし万が一にも約束を反故にするようならこちらにも考えがある。傭兵ギルドや知己の貴族、最悪は王族を使ってハルトムートは信用ならない奴だと社会的に攻撃を仕掛けても良いし、なんならもっと直接的に貴族同士での決闘を申し込んでも良い。航宙戦に引き込むことができればまず負けないし、なんなら剣で決着をつけても良い。どちらにせよナメられたら殺すの精神だ。

「そうですか……でも、こんなに良くしてもらっても私に返せるものが何もなくって……」

そう言ってアイリアが俯く。ふむ、返すものね。アイリアは美人

だし、体つきも……うん、良いね。とても魅力的だ。なので、それなら一晩とか思わなくもない。アイリアはちゃんとした大人の女性だし、分別もあるだろうからきっと後腐れなく楽しめるだろう。
　ただまぁ、そんなことをした日にはうちの可愛いクルー達から白眼視されるのは確定的に明らかだ。もしかしたらハインツやジークにも悪い印象を与えるかもしれないし、そもそもどちらかと既に良い仲だったりするのかもしれない。やっぱり良くないよね、そういうのは。良くないと思っていても考えてしまうのもまた男の性というものなので許して欲しい。

「大丈夫だ、ティーナに沢山返してもらうから」
「ティーナに……あの、ええと……その、ヒロさんとティーナは……そういう？」
「どういう関係かと言われると、そういう関係だよ。いわゆる男女の親密な？」
「ティーナと……あの、もしかしてそういう趣味の……？　リンダを連れて行ったのも……？」

　こころなしかアイリアが俺の視界から子供達を守るような位置にすり足で移動しているような気がする。オーケーオーケー。まずは話し合おう。冷静に。

「違うから。ティーナと、あと妹のウィスカともそういう関係にはなってるけど俺はロリコンじゃないから。あの二人に手を出すのを決心するのにかなり時間かかったからね？　俺は正常だからね？　好き合った相手がたまたまそういう体型だっただけで。あと俺は誓ってリンダをそういう目で見てないから」
「そういえば、ヒロさん以外のクルーって皆さん女性の方でしたよね」
「……」

「……」

こころなしか、アイリアの俺を見る目が親切な傭兵さんからとんでもない女好きにランクダウンしたような気がする。事実だけど、事実だけども釈然としねぇ。

「何を言ってもダメそうだからこの話はやめよう。はい、やめやめ」

「……そうですね」

同意しつつも、アイリアの俺に対するジトッとした目つきは変わらない。しょんぼりである。ああ、そうだ。ティーナの連絡先を教えれば色々と誤解――誤解ではないかもしれない――を解いてもらえるのではないだろうか。後でティーナに連絡を取って、アイリアにティーナの連絡先を教えて良いか聞いてみよう。

#422　大出血（前書き）

原稿作業に向けてキリの良いところまで進めたい（ω）

#422　大出血

食事会を終えて一時間ほど。俺はアイリア達の施設を見下ろせる位置に身を潜めてその様子を窺っていた。

『ご主人様』
「ああ、こっちでもキャッチした。やっぱり来たな」

ニンジャアーマーの高性能センサーが施設を包囲するように展開しつつある多数の熱源を探知した。センサーレンジを調節し、妙な動きをしている連中を拡大して仔細を確認する。

『如何致しましょうか？　こちらから仕掛けますか？』
「今回は敢えて生かす必要もないからな。まずは俺が仕掛ける。一度くらいはニンジャアーマーの性能を十全に活かして戦ってみたほうが良いしな」
『承知致しました。状況を見て援護致します』
「任せた。ドジを踏まないように気をつける」

メイとの通信を切りつつ、施設を包囲しつつある集団のうちの一つに接近していく。下層区画の構造物の屋根の上を飛び移り、その壁面にフックショットを撃ち込んで落下速度を軽減しながら音を殆ど立てずに奴らの頭上を取った。
数は五人。全員つい先程襲撃したアジトで見たようなチンピラどもだ。全員がレーザーガンやレーザーライフル、それに釘バットめいた凶器やら大ぶりのナイフやらで武装している。ナメられたらおしまいだ、とか見せしめにしてやる、とか息巻いてるな。

「まるでステルスアクションゲーだな」

今度ニンジャアーマーの前腕部に暗殺用の飛び出す刃でもつけようかな？　などと胡乱なことを考えながら静かに大小一対の剣を抜き放ち、逆手に持ち替えて建物の上から飛び降りる。目標は最後尾のモヒカン野郎だ。

「グェッ！？」

落下の勢いそのままに右手の長剣を右肩から身体の中心に目掛けて深く突き刺し、剣の切れ味を頼りに臓器や骨を寸断しつつ『開き』にしてやる。一瞬にして辺りは血と臓物塗れだ。

「なんっ――！？」
「おばっ！？」

逆手のまま振った左手の小剣で二人目の首を刎ね、手の中でくるりと回転させて順手に持ち替えた長剣で三人目を袈裟斬りに斬り捨てた。

「ひぃっ！？」
「ぎっ！？」

残った二人に接近しながら左手の小剣も順手に持ち直し、それぞれ左右の一刀で上半身を半ばから切断する。うーん、やはり貴族が使うこの単分子剣（モノソード）の切れ味はとんでもないな。力を込めずとも刃筋さえ立てれば人体をスッパリと両断してしまう。

「まず一つ……次に向かう」
『お見事です、ご主人様』

☆★☆

「まぁこんなものだよな」
「我々は後始末に大変なのですが」
「頑張れ！」

血塗れになった下層区を掃除しにきたリーメイプライムコロニーの除染チームに向けて、ニンジャアーマーの親指を立てながら爽やかにエールを送っておく。何故か執拗に洗浄液と消毒液をぶっかけられた気がするが、ニンジャアーマーを装着しているので完全にノーダメージだ。むしろ船に戻って洗浄作業をする手間が省けて助かった。

「兄貴……」

死体袋やら除染装備やらを担いで下層区へと散っていく除染チームを見送っていると、施設から出てきたハインツが声を掛けてきた。流石にこれだけ大騒ぎをしていれば気づきもするだろうな。

「よう、さっきぶり。そこら中死体とその中身がぶちまけられてるから、あまりうろうろしないほうが良いぞ」
「それはなんとなく察してますが……」
「どうして？　ってか？　そりゃお前、あいつらだって面子を真正面から叩き潰されたんだから、報復くらい考えてもおかしくはないだろ。正直来るかどうかは五分五分じゃないかと思ってはいたんだが、警戒しておいてよかったな」

そう言って俺はハインツに向かって肩を竦めてみせた。ＲＩＫＩＳＨＩじゃこんな繊細な動作なんて出来ないが、この辺は流石オー

ダメイドパワーアーマーだよな。
つまり、ハインツに言った通りで、俺はブラディーズの報復を予想して食事会の後、奴らを待ち伏せしていたのだ。空振りに終わる可能性も高かったが、俺の悪運が上手い具合に働いてくれたな。
奴らとしてはアジトを真正面から叩き潰されたのは面子を木っ端微塵にされたのと同等だ。当然、ナメられたら終わりなのは傭兵も奴らみたいなアウトロー連中も同じなので、潰された面子を回復するために報復をする必要がある。
ただ、襲撃者のうち片方はハルトムート――つまりこのコロニーの代官で、いくらなんでもお上に真っ向勝負を仕掛けるのは不味いし、無理がある。だからもう片方の襲撃者に報復をするだろうと思ったのだ。
どうして奴らが施設を襲撃したのかって？　そりゃアジトを襲撃した戦闘ボットと施設を守っている戦闘ボットが同じ機種だってのは見れば馬鹿でもわかるからな。関係があるだろうと考えるのが自然で、そうなるとこの施設が襲撃されるのが道理というわけだ。
え？　それじゃあ施設が襲撃されたのは俺のせいじゃないかって？　ははは、知らんな。
で、報復に来た連中を待ち伏せすると言っても俺一人ではドジを踏んだ時に詰む可能性がある。なので、メイと再武装した軍用戦闘ボット達も近くに伏せていた。結局出番はなかったが。なんというか、一方的な戦闘だったからな。
敵集団を殲滅したら多機能迷彩を起動してフックショットで高度を取り、高所から飛び降りつつ奇襲。敵からしてみれば殆ど透明な何かが振ってきて一瞬で五、六人を斬り捨ててくるという悪夢だ。
奴らは殆ど団子になって集団で動いてるせいで、襲撃に気付いても誤射を恐れてレーザーガンやレーザーライフルをぶっ放せない。かと言って相手の姿は殆ど透明でよく見えないから棍棒だのナイフだので攻撃しようにもうまく当てられるとは思えない。そうして迷っている間に俺に真っ二つにされる、と。

そうして報復に来た連中を残らず皆殺しにした俺はメイを通じてハルトムートに連絡を取り、死体を片付ける除染チームを送ってもらったわけだ。その除染チームには昼のアジト襲撃と合わせての一日二度の大規模出動の件で怨念をぶつけられているわけだが。

「兄貴はやっぱり傭兵、なんですね……」

「そうだよ。怖いか？」

「怖いですよ」

ハインツが苦笑いを浮かべる。今回の件で軽く三十人以上は斬り殺したからな。実のところ、俺自身も割と無感動にこの人数を殺せてしまうことに若干戸惑っているんだが、まぁ考えてみれば奴らも宙賊もどきだしな。積極的に例の精製の甘いドラッグを広めてパンデミックを広めているのもあって、どうせハルトムートに無傷で逮捕されたとしても死ぬまで苦役刑か人権を剥奪されて実験動物行きだ。ここでサックリ殺してしまったほうが慈悲深いといえば慈悲深い気もせんでもない。

「こいつらをぶっ殺しても1エネルにもならないのは残念だけどな。傭兵としては。ただ、これで奴らの戦力も払底したんじゃないかね」

「それじゃあ、暫くは襲撃に関しては安心できますね」

「何の策もなしに襲撃してくるようなことは無くなるだろうな」

そうやって手駒を突撃させる度にまるごとよくわからない理由で全部溶かしてたら、あちらとしても組織を維持できまい。というか、今回の襲撃者全滅という脱出血によって既に失血死している可能性もあるのだが。

そうなったら、取れる手段なんてのは相当限られてくる。隠れるか、逃げるか、玉砕するかだ。投降はできないだろうな。投降しても恩赦は望めないし。まず間違いなく前述の苦役か実験動物コース

だし。

「このコロニーでの活動もそろそろ終わりかね……なぁ、聞きたいんだが、お前はティーナについて何か知ってるか？　あいつがこのコロニーでどんなことをしてきて、どんな因縁があって、どうやってこのコロニーを出ていったのか」

「名前だけは聞いたことがありますが、詳しくは知りませんね。確かドース一家と揉めてたって話だったと思いますが、詳しくは」

「そのドース一家ってのは？」

「ドワーフを中心とした組織で、違法な武器やテック製品の製造とか密売をシノギにしてた連中です。この騒動で幹部連中が殆ど病気でやられて、組織はバラバラになった筈ですが」

「なるほど。聞かせてくれてありがとうな」

この情報だけでなんとなく見えてくるものはあるな。ティーナがそのドース一家って連中のシノギにどの程度関わっていたのかは不明だが、このコロニーから出る際にトラブったのは予想に難くない。でも、その連中がほぼ壊滅してるってんならティーナが直接アイリアと顔を合わせる機会はあるか……？　いや、危ないか？　寧ろアイリアを船に呼んだほうが良いかもしれないな。

「この一件が落ち着いたら、アイリアとお前らを船に一回招待しようかね」

「えっ？」

「何にせよティーナがコロニーに降りるのはまずそうだし、一目だけでもアイリアと合わせてやりたいんだよ。でも、アイリアだけを俺の船に乗せるのは色々と不味いだろ？」

「あー……それはそうですね、ええ。確かに」

「だからついでにお前らもな。俺の船はなかなかのものだぞ？　多分イメージと違ってびっくりするんじゃないかね」

「そうなんですか？」
「今のところほぼ１００％驚かれているな」
そんな話をハインツとしながら俺は除染チームが死体を片付けるのを待つのであった。

#423　緊急発進（前書き）

今日は特にコメントがねぇ！（ ´ω` ）

#423　緊急発進

翌日、アイリアとハインツ、ジークを船に招待した。その間施設の子供達を放置するわけにはいかないので、メイと戦闘ボットの増援を代わりに施設に送っておいた。

「子守りも完璧にこなすことができます。メイドなので」

と本人は言っていたが、感情値を最低限に設定したからな……子供達に怖がられたりしないと良いのだが。メイは滅茶苦茶美人だから、人によっては近寄りがたい雰囲気を感じるという話なんだよな。流石にデザインした俺が気後れするようなことは無いが。

「わぁ……」
「おぉ……」
「ははぁ……」

ブラックロータスに乗船し、休憩スペースまで到達したアイリア達が感嘆の声を上げる。タラップから乗船し、除菌処置などを行って船の通路に入った段階で既に「思ったより明るい」とか「床とか壁とか綺麗なんすね」とか言っていたのだが、広々として明るい休憩スペースを見て遂に驚愕の声が口から漏れてきた。

「傭兵の船と言えば暗くて汚くて構造材剥き出しの金属の床と壁、天井ってイメージらしいな」
「少なくとも、こんなに広くて綺麗なイメージではないですね。感服しました」
「めっちゃ高級なホテルとかみたいっすね……えぇ？　あの壁どう

なってんすか？」

ハインツはただただ感心し、ジークは目ざとく壁面のテラリウムを見つけて興味を示していた。そしてアイリアは……。

「ティーナ！」

「アイリア、久しぶりやな」

ティーナを見つけて駆け寄っていた。うん、あっちは積もる話もあるだろうしそっとしておこう。アイリアはウィスカとも顔見知りであるようで、リンダも交えて四人でじっくりと話をするようだ。

「俺等は食堂に行くか」

「はい」

「うっす」

野郎二人を引き連れて食堂に向かうと、ティーナとウィスカ以外の女性陣はこちらについてきた。ああいや、ショーコ先生は研究室にでも篭っているのか姿が見えないが。

「我が君、お客様、どうぞ」

「ありがとう、クギ」

飲み物を用意してくれたクギにお礼を言う。温かいお茶だな、帝国式の。紅茶っぽい何かだ。

「ありがとうございます」

「ッス……兄貴、あの、この人達は……」

「うちのクルーだ。お茶を出してくれたのがクギ、神聖帝国の出身だな。で……」

「ミミです。帝国臣民で、オペレーターとか物資の管理をしてます」
「エルマよ。私も帝国臣民で、パイロットね。シルバーランクの傭兵でもあるわ」
「我が君よりご紹介頂きましたクギです。此の身はサブパイロットの見習いですね」

ミミとエルマ、そしてクギがそれぞれ自己紹介をすると、ハインツ達も自己紹介を始めた。

「これはご丁寧に。ハインツです。用心棒ってとこですかね」
「ジークっす。ハインツの兄貴と同じくっす……あの、兄貴。皆すげぇ綺麗で可愛い人ばっかりっすね」
「羨ましかろう？　正直俺も身に過ぎていると思っている」

これは正真正銘正直な感想である。俺如きにこんな人数の女性を囲う資格があるのか？　と自問自答することは度々ある。本当にある。

「意外と謙虚な答えっすね」
「当然それなりの甲斐性は必要だし、見合う男になるべく日々精進と研鑽が必要だと思っている。ふんぞり返って弛むわけにはいかないよな」
「ははぁ……ハーレムの主ってのも大変なんすね」
「それなりにな。まぁ、実際のところ俺は皆に頼り切りな部分が多いからな。尊大になんかなれないよな」

けれども俺を慕ってくれる彼女達に応えるために力を尽くすのが俺の責任ってものだろうと思う。無論、俺一人の努力でできることも、俺一人で支えられる重さというものも限られているので、実際にはみんなと支え合ってこのチームは成り立っているわけだが。

「殊勝なことを言ってるわねぇ。こう言ってるけど、仕事のない日は結構だらけてるわよ？」
「それでもヒロ様は日々の鍛錬は欠かしませんよ。それに、仕事のない日にだらけてるのは私達も同じじゃないですか」
「我が君は大変な努力をしておいでです。どんな頑丈な糸も常に張り詰めていては容易に切れてしまいます。此の身は今の生活に良き調和を見出しておりますよ」
「二人はすぐにヒロを甘やかすんだから」
「なんなんすかね……俺は何を見せられてるんすかね。なんだろう、この胸の内に湧き上がってくる感情は」

俺に対する惚気めいた何かを目の当たりにしたジークが闇落ちしそうになっている。このままでは嫉妬の炎に焼かれたジークが大変なことになってしまいそうだ。
さて、どうやって気を逸したものか？　と考えた俺はとりあえずハンガーのクリシュナを見せに行くことにした。ミミ達にはアイリアとティーナ達の様子を見てもらうことにして、俺達男三人だけでだ。

「実際のとこどうなんすか、兄貴」
「どうとは？」

クリシュナを置いているハンガーへと二人を案内していると、ジークが主語のない質問をしてきた。何のことだろうかと俺は首を傾げる。

「あの子達と本当にくんずほぐれつ……？」
「そうだぞ」
「羨ましくてどうにかなりそうっす……」

「マジでそれなりに苦労してるからな？」
「どうやったんすか、一体」
「あー……そうだな。タイミングと甲斐性、かな」

ミミにしてもエルマにしてもティーナとウィスカにしてもまだ紹介していないショーコ先生にしても、結局のところは俺の言った通りタイミングと金が大事だったように思う。まぁ彼女達と金だけで繋がっているわけじゃないが、切っ掛けとしては金だよな。

「いざという時に自分の全てを擲つ覚悟が要るよ。金銭的な意味でも、単純に命的な意味でも」
「それは……大変っすね」
「路地裏でチンピラに絡まれてるところを助けて、衣食住に自由移動権の面倒を見るとか、帝国航宙軍相手に対する数百万エネルの賠償を肩代わりするだとか、ウン千万エネルの船を買うだとか、同じくらいの金額の船をの設備を揃えるだとか」
「無理っす。そんな大金逆立ちしても人生何回やり直しても稼げるとは思えないっす」
「他には貴族の跡取り騒動に巻き込まれて送り込まれてきた航宙艦隊クラスの暗殺者を返り討ちにするとか、ベレベレム連邦の侵略艦隊に単艦突っ込むとか、数万の結晶生命体の群れに単艦突っ込むとか、フル武装の帝国海兵の集団を一体で鎧袖一触にするような生物兵器と生身で斬り合うとか……他にもまだあるけど」
「もうお腹いっぱいっすね……というかマジすか、それ」
「本当だぞ。なんならミミかエルマに聞いてみるといい」
「金だけでなく命もいくらあっても足りませんね。それだけの修羅場を潜り抜けてるなら、ブラディーズの連中を皆殺しにするのは散歩みたいなものってのも納得です」

今まで黙って俺とジークの話を聞いていたハインツも苦笑いを浮

かべる。言うてレーザー兵器は怖いけどな。ニンジャアーマーは装甲が薄いから、シールドを張っていない状態で何発も直撃すると単純に危ないし。

「殺すのが楽しくてたまらないってわけじゃないけどな。相手が宙賊だのそれに類する連中ってんならなんとも思わないってだけで。あと、積極的に殺しにくる連中にかける慈悲は無い」

「滅茶苦茶ドライっすね」

「傭兵なんてそんなもんだ。そして着いたぞ、こいつが俺の愛機だ」

「おー、デカいっすね」

「戦闘艦としてはこれでも小型だけどな」

感嘆の声を上げるジークと感心した様子のハインツを連れてクリシュナの内外を案内し、ついでにハンガーや俺の白兵戦装備の保管庫なども案内していく。

「こう、いつでも使える状態の自分のお気に入りの武器を並べて飾っておくのってロマンだよな」

「わかります」

「超わかるっす。いいなぁ、俺もいつかこんな感じの武器庫を持ちたいっすね」

なお、趣味全開の白兵戦武器庫は二人にも大好評だった。パワーアーマーに試乗させてやったのも大満足だったようだ。ついでに格納庫区画の一部を改造したシューティングレンジで武器の試射もさせた。

「こうして使ってみると、質の良い武器ってのは大事なのがよくわかります」

「だろ？　やっぱりいい仕事をするにはそれなりの質の武器が要る

と思うんだよ」
「兄貴の武器庫レベルのものだとちょっと俺たちが使うには過剰っすけどね」
下層区画の治安の悪い地域では殺った殺られたって話は日常茶飯事であるようだが、流石に俺が揃えているような軍用レベルの武器でドンパチをやるようなことはまず無いらしい。結局のところ死人を出すと除染チームの出動から官憲の介入も免れないそうなので、意外と致死出力一歩手前のギリギリ当たっても重症で済むくらいの出力でレーザーガンを撃ち合うことが多いんだそうだ。
と、アウトローの武器事情的な話をしていると俺の小型情報端末から着信音が鳴った。なんだろう？　と懐から小型情報端末を取り出して発信者を確認してみると、発信者はハルトムートであった。
「すまん、通話が入った」
二人にそう断って武器庫から出ながら通話に出る。
「ヒロだ。どうしt――」
『単刀直入に言う、今データを送るからマークされた船を追って拿捕か撃墜してくれ』
「了解。報酬は弾んでくれよ」
俺は詳しい事情も聞かずに即答した。ハルトムートの人となりは既に結構わかってきている。どんな時でも敬意を忘れない彼がこのような言動で即座に頼み込んでくる辺り、何か事情があるのだろう。
「クリシュナとアントリオンで緊急発進する。手続きはそっち任せで良いな？」
「小型と中型の戦闘艦だな。了解した。絶対に逃さないでくれ」

「了解」

ハルトムートに短く返事をして通信を切り、武器庫に顔を出す。

「お代官様から急なお召しでな。緊急発進する。悪いが休憩スペースのティーナとウィスカに世話を任せるから、船で大人しくしててくれ」

「わかりました」

「了解っす」

頷くハインツとジークに俺も頷き返しながら、小型情報端末でミミ達に緊急発進の連絡を入れる。

事情は分からないが、俺に緊急発進を要請してくるってことは既にターゲットは出港してるんだろう。間に合わせるためにも一秒でも早くクリシュナを発進させないといけないな。

#424　追跡（前書き）

ぽんぺ……ではないんだけどなんかお腹の調子が微妙。妙に冷えてる（‘ω’）

#424　追跡

「お待たせしました！」
「お待たせしました、我が君」
「俺が丁度クリシュナの近くにいただけだから。エルマはどうだ？」
『今っ！　アントリオンにダッシュしてるっ！』

航行時にはコバンザメのようにブラックロータスにドッキングして航行しているアントリオンだが、流石にコロニーに入港する時にはドッキングしたままではいられないので、個別に入港している。なので、エルマがアントリオンに搭乗するには一旦ブラックロータスから出てアントリオンまで走らなければならないのだ。

「頑張ってくれ」

割と必死なエルマの声にエールを送りながら一足先に走らせていたクリシュナのセルフチェック画面を確認する。残弾ヨシ、装甲、船体に異常なし、ヨシ、ウェポンシステムヨシ、生命維持装置、ジェネレーター、センサー類もヨシ！　スラスターの可動域もヨシ！
流石に今試験噴射すると格納庫内がとんでもないことになって整備士姉妹にレンチやスパナで酷いことをされるので、やらない。身体のあちこちが凹むことになるので。

「とにかく出港だ。港湾管理局にはハルトムートが手を回しているはず」
「わかりました！」

俺の指示でミミが素早くオペレーターシートのコンソールを操作

し、出港手続きを始める。

「我が君、今回の出撃は随分と判断が早かったようですが」

「ああ、いつもなら傭兵ギルドを通して、しっかり報酬とかの条件も決めてから依頼を受けるんだけどな。今回みたいなケースはちょっと話が別だ」

「今回のような、というと？」

「単純にそんな悠長なことをしていたらターゲットを取り逃す可能性が高いのがまず一つ。ハルトムートとはもう知らない仲でも無いから、取りっぱぐれる心配は無いのが一つ。もう一つはこの展開を俺がある程度予想していたからだな」

追い詰められたブラディーズの取れる道は少なかったからな。逃げるか、隠れるか、玉砕するかの三択くらいだったから、逃げを打ったのだろう。結局ハルトムートの目を完全に誤魔化して逃げるのは無理だったようだが。

「なるほど……我が君は実は参謀向きなのでは？」

「まさかだろ。俺なんて好き勝手に戦場を引っ掻き回す一兵卒未満の傭兵がお似合いだよ」

戦術眼だの戦略眼だのと言われるような先を見通すような眼とオツムの中身は持ち合わせていないし、俺はお勉強の類があまり得意じゃないんだ。そういうのは教養たっぷりのインテリのお仕事だろう。

「ヒロ様、出れます！」

「よし、出すぞ。ハッチオープンだ」

「ハッチオープン、電磁カタパルト最低出力で稼働」

格納庫内でスラスターを全開で噴かすと内部が大変なことになるし、電磁カタパルトの出力最大で射出されるとクリシュナがコロニーの内壁に激突するので、出力は最低だ。いつになく緩やかな加速度でもってクリシュナがブラックロータスの格納庫から外部へと射出され、すぐに俺はコロニーの内外を隔てている気密シールドに向かってクリシュナを飛ばす。入出港規制のおかげで交通量が少ないから、大変に楽ちんだな。

「エルマはまだ少しかかりそうだな。ハルトムートから送られてきたデータがあるから、検証してくれるか？」

「はい！　任せて下さい！」

小型情報端末からクリシュナにデータを転送し、内容をミミに確認してもらう。ミミはこういった情報の処理に関してメイにみっちりと教育を受けているので、今ではメイの次に処理が早い。俺はそっち方面にあまり明るくないが、多分ハッカーとかクラッカーとして一人前というレベルに達しているのではないだろうか？　今度確認してみるか……ミミにそっち方面の才能があるなら、その才能を伸ばせるように手助けするべきかな？　パッと思いつくのはバイオニクスかサイバネティクスによる強化手術だけど、その辺りはショーコ先生も交えて一度じっくり相談してみるか。ショーコ先生はそっち方面の強化手術に関しては紛うことなきプロフェッショナルの筈だからな。

「ターゲットのシップＩＤと、星系レーダー網の一時アクセス権みたいです」

「そいつはまた豪勢な。早速星系レーダー網で対象を捕捉してくれ」

「わかりました！」

星系レーダー網というのは、星系軍が管理している軍事偵察衛星

による情報網のことで、上手く使えば超光速ドライブを使って遁走中の相手だろうが容赦なく捕捉することができるすごいヤツである。まぁ、超光速ドライブを使って移動している船に関しては亜空間を航行しているから、直接船のＩＤを閲覧したりするのは不可能なんだが。

「我が君、標的を見つけることはできそうですか？」
「大丈夫だろう。その船がコロニーから飛び出した時間もはっきりしているから、航跡も簡単に辿れる」

超光速ドライブを使って航行している間は船のＩＤや詳細を知ることは不可能だが、いつ超光速航行を始めたのかが解ればその航跡を辿ること自体は難しくない。超光速ドライブを使った超光速航行を行うと、亜空間波動の痕跡――所謂ＦＴＬリークと呼ばれるものが残るのだ。
亜空間理論に関してはサッパリだが、それらの因果関係を理解さえできれば標的を追うことは可能だ。テレビのリモコンの作動原理なんてサッパリわからなくたって、リモコンを使うこと自体は難しくないのと同じである。

「対象を捕捉しました！」
「よし、データをエルマにも送っておいてくれ。アントリオンでも追いつけそうか？」
「かなり足が速いです。クリシュナなら追いつけると思いますけど、アントリオンじゃ難しいかもです」
「仕方ないな。エルマ、聞いたな？　先行して足止めするから、追ってきてくれ」
『了解！　すぐに追いつくわ！』
「よし。ミミ、超光速ドライブ起動だ」
「はい！　超光速ドライブ、起動します！」

さて……逃さんぞ、ドブネズミめ。いや、宙賊もどきをドブネズミ呼ばわりはドブネズミに失礼か。とにかく逃さんぞ。

☆★☆

超光速ドライブを起動して標的の航跡を追いかけること凡そ三十分ほど。

「ヒロ様！　標的を捕捉しました！」
「よーし。距離を詰めるぞ」
「標的の観測を開始します！」

通常空間から亜空間内を超光速航行している船を観測することは難しいが、同じ亜空間内にいるなら話は別だ。専用の亜空間センサーを使えば標的のシップＩＤなどを確認することは可能である。

「インターディクターの準備よし。そっちは？」
「照合できました！　標的です！」
「オーケー。ならとっとと追いかけっこを終わらせよう」

ターゲットのケツを取り、インターディクターを使って超光速ドライブを強制停止に追い込みにかかる。

「あっちも必死ですね」

ミミの言う通り、相手も必死だ。インターディクターによる強制停止を行うにはインターディクターの重力波照射範囲内に一定時間相手を捉え続けなければならない。当然、インターディクトをかけられる方はその照射範囲から逃れるべく船を上下左右に振ってこち

らを振り切ろうとする。

「はっはっは！　どこへ行こうというのかね？」

「我が君が楽しそうで何よりです」

クギのほっこりとした声が隣から聞こえてくる。確かに獲物を一方的に追い込むこの瞬間は結構楽しいんだが、その感想はなんかちょっとズレてないかね？　まぁ楽しいんだけどさ。

奴さんの必死の抵抗も虚しく、インターディクトが成立して敵艦が亜空間から通常空間へと弾き出される。ああなると多軸回転を伴う反動で暫く身動きが取れなくなるんだよな。インターディクトをかけた側は普通に通常空間に戻ることになるけど。

『うわあぁぁぁぁぁっ！』

通常空間に遷移したクリシュナのメインスクリーンに映ったもの。それは、多軸回転でしっちゃかめっちゃかな状態になりながら宙間機雷を四方八方にばら撒く小型偵察艦の姿であった。

「おいおい……」

「えぇ……」

「わぁ……」

一同、絶句である。俺の側に近寄るなぁぁァァ！？　って感じでばら撒いているんだろうが、あれは自分が抜け出せなくなるやつである。というか、確かに近寄って接舷なんかはできなくなるだろうが、機雷原の外から一方的に撃つことができるし、そもそも機雷ごと吹き飛ばすことすら可能なのだが。

「素人か……面倒な」

時に素人の方が厄介なことってあるんだよな。何をするか予測ができないって意味で。さて、どうしたものか。

#425　俺達は何も聞いてない。良いね？（前書き）

今日は朝早めに目が覚めたのだ（ ̄ω ̄）

#425　俺達は何も聞いてない。良いね？

「一応確認するが、対象は生死不問で良いんだよな？」
『勿論それで構わない。何かあったのだろうか？』

クリシュナのスピーカー越しにハルトムートの怪訝そうな声が聞こえてくる。そりゃ怪訝にも思うよな。ターゲットを追った俺からいきなり通信が入ってきて、こんなことを聞かれたら。誤魔化しても仕方がないから素直に話すけども。

「俺に追いつかれた途端、自分で自分を機雷原の中に閉じ込めやがってな……少しでも船を動かしたらドカン、って状況なんだよ。奴さんが」
『拿捕が最善だが、間違いなく始末してくれるならこちらとしてはそれでも問題ない』
「どうも。それじゃあ機雷原ごと吹き飛ばすわ」

そう言って通信を切り、ウェポンシステムを起動したところでターゲットの船から通信が入ってきた――が、俺はそれを無視。身動きの出来ないターゲットの船に容赦なく重レーザー砲四門による斉射を行い、機雷ごとターゲットの船を爆散させる。ああ、大量の機雷が炸裂して実に汚い花火だな。あれでは万に一つも助かるまい。

「あの……何か通信が入ってきてましたけど、良かったんですか？」
「くだらない時間稼ぎに付き合う理由はないな。命乞いだの聞くも涙、語るも涙のお涙頂戴の身の上話だのを聞かされても結局殺すんだし、そんなのを聞いたら寝覚めが悪くなるだろ。口からでまかせの可能性も高いし」

「そこはこう、なんというか……手心というかお約束というか」
「そんなお約束は知らん」

まぁアニメやドラマとかだと最後に犯人とかが自分の思いを吐露したりするのは確かにお約束かもしれない。だが、それを聞いたばかりに悩むだとか、それが時間稼ぎで逆転して状況が悪化するだとか、そういう展開もよくあるよな。俺はそんなことになりたくないので、容赦なくやる。殺れる時に殺るのが一番だ。獲物を前に舌なめずりは三流のやることだって軍曹殿も仰っていたじゃないか。

「ところで我が君、此の身達が撃破したのは一体何者だったのでしょうか？」
「あー……そういやわからんな。このタイミングでとなると例のギャング関係かと思ったんだが、考えてみると連中が船を持ってるのはおかしいよな？」

宙賊との繋がりがあるとはいえ、軍用艦ではないがちゃんとした高速偵察艦を所有しているというのは妙な気がする。資金力を考えれば買えてもおかしくはないが、傭兵でもない一般臣民が船を買うにはそれなりの手続きが必要だからな。アウトロー連中には少々荷が重い。
それに、あの偵察艦では精々数人しか乗り込めないだろう。組織が脱出手段として使うには少々小さ過ぎるように思う。

「もしかしたら面倒くさいのを殺ったか……？」
「大丈夫ですかね？」
「ハルトムートに嵌められた可能性はゼロじゃないが、まぁその時はその時だな」

やりようはいくらでもある。今更ビクついても仕方がないだろう。

ハルトムートはそういうことをするような人間ともあまり思えないしな。

「残りの機雷を片付けておこう。こんな空白宙域で誰かが引っかかるとは思えないが、その確率もゼロってわけじゃないしな。アフターサービスってやつだ」

「はい！」

☆★☆

「必死で追いついたのに無駄足だった私の気持ち、わかる？」

「ごめんて……言うて俺が悪いわけじゃなくない？」

「そうだけど、釈然としないのはわかるでしょ」

「それはそう」

後始末を終えた後に合流したエルマのアントリオンと共にリーメイプライムコロニーに戻り、ブラックロータスで一息ついているとアントリオンから戻ってきたエルマに文句を言われた。俺が悪い訳では無いが、気持ちはわからないでもないので後で何か埋め合わせをしてやろう。

「で、依頼主に報告はしたの？」

「一息ついてたんでな。今からだ」

休憩スペースの方にはまだアイリア達がいたので、食堂の扉を閉めて声が漏れないようにしてからハルトムートに通信を繋ぐ。

「よう、ボス。確実に仕留めてきたぞ」

『こちらでも星系レーダーで確認した。流石に超一流の傭兵は仕事が早くて確実だ』

「お褒めに預かり恐悦至極、って言うところかね？　で、俺がスペースデブリにしたあいつは何者だったんだ？」
『卿が気にするような者ではないが……簡単に言えば、卿と我が家の私兵が持ち帰ってきた情報で立場が悪くなり、逃げ出そうとした鼠だよ。あちこちにサボタージュまで仕掛けて逃げ出したのでね……そちらの対応に手が取られて追撃ができなかったので、助かった』
「なるほど」

結局は何の問題もなく悪党が相手だったってわけだ。まぁ、この状況下でブラディーズから引っこ抜いた情報で追い詰められるようなやつというのは半分くらい宙賊みたいなもんだな。問題なし！
ヨシ！

「ドラッグの製造工場や倉庫の場所は突き止められたのか？」
『そちらは問題なく。明日にでも我が家の私兵が突入する予定だ』
「助けは？」
『必要ないさ。卿の手を煩わせるほどの相手ではない』
「そうか……ああそうだ。例の施設の面倒を見ている人が丁度この船に来ているんだが、顔を合わせておかないか？」
『ふむ……そうだな、時間に余裕もある。先方が良ければそうしよう』
「オーケー、今呼んでくる」

エルマをその場に残し、食堂の扉を開けてアイリアを呼びに行く。
「アイリア、ちょっとすまんがこっちにきてくれるか？」
「はい？　どうしました？」

ハインツ達も交えてティーナ達と話していたアイリアに声をかけると、彼女は俺の方に視線を向けて首を傾げてみせた。

「代官殿と通信中でな。良い機会だから顔を合わせを済ませておこうぜ」
「えっ！？　あ、あの、私こんな格好ですけど！？」
アイリアの手が物凄い速さで彼女自身の身体の各所を動き回る。身嗜みチェックか何かなのか？　それは。
「別に良いだろ。ドレスを着なきゃいけないってわけでもないし……ホラ代官殿が待ってるぞ。ハリーハリー」
「いやっ、無理！　無理ですって！」
手をパタパタと振る彼女の背後に回り、後ろから押して食堂へと連行していく。
「姐さん、ファイトっす」
「……気をつけて下さい」
「いってらー」
「大丈夫かなぁ？」
「駄目そうだぞ」
ジークにハインツ、ティーナにウィスカ、リンダも俺を止めるつもりはないらしい。代官と顔合わせなんてしたくないんだろうな、誰も。ハルトムートは感じの良いイケメンなのに。
「待たせたな」
『気にしないでくれ、エルマ嬢と少し話をしていたのでね。そちらが……？』
「例の施設で子供達の面倒を見ているアイリアだ。アイリア？」
「ほ、ほんじつはおひがらもよく……？」

アカン。緊張しすぎて完全にテンパっている。漫画的な表現なら完全におめめぐるぐるしてるやつだ。まともな会話になりそうもないな。

「お代官様を前にして緊張してしまったようだ」

『私は子爵家の嫡男ではあるが、正式に地位を継いだわけではないから貴族としての身分の話をすると、名誉子爵であるヒロ卿の方が上なのだが……レディ、そんなに緊張しないで欲しい』

「そ、そそそ、そう言われましても！？」

ハルトムートもホロスクリーンの向こうからアイリアを宥めようとしているが、なかなかうまくいかないな。これが貴族に対する帝国臣民の一般的な対応というか、態度なのだろうか？　そう考えると、ミミはクリスやダレインワルド伯爵を前にしてもここまで動じなかったな……やはりミミは大物なのでは？

「落ち着け、アイリア。えー、ハルトムート・マグネリ殿だ。見ての通りのイケメンで、義を知る男だよ。公式の場というわけでもあるまいし、少しばかりの無礼があってもそれを咎めたりする人じゃないから」

『ヒロ卿に義を知る男などと言われるのは面映ゆいが、彼の言う通り私的な会合で貴族に対する礼儀云々などと言うつもりはないので、安心して欲しい』

「あ、ありがとうございますぅ……」

ハルトムートもアイリアを宥めるためか、いつになく穏やかな声音で彼女に語りかけている。今日は顔合わせということで施設に関する話をいくつかした後、連絡先を交換して解散ということになった。

「そ、それでは失礼しますね……？」
『ああ、アイリア嬢。また後日時間を取って話そう』
「は、はいぃ……」

小動物のように縮こまりながらアイリアが食堂から去っていく。うん、前途多難だな。連絡先の交換をしたということは、今後もアイリアはハルトムートと顔を合わせるようになるわけだ。アイリアの胃に穴が空かなければ良いが。

『ヒロ卿』
「何かな？」
『今、貴殿の船に彼女は乗っているそうだが……』
「用心棒の男も一緒だし、ずっとうちの女性クルーと話してたから。そういうのは無いから」
『そうか……彼女は可憐な人だな』
「そうかな……？　そうかも……？」

ピンク色に近いなかなかに凄い髪の毛の色が目立って仕方ない人だが、確かに愛嬌のある顔つきをしているな。美人というよりは可愛い人だというのは同意する。童顔気味だしな。というか何故そんなことを？

「おい、ハルトムート。まさかお前」
『交際している男性はいるのだろうか……身分の差は……一度レイディアスの養子にでもすればなんとでもなるか。貸しはある……』
「通信、通信繋がったままだから。切るぞ？　切るからな？」
『ああ、そうだな。私にもやることが出来た。それでは失礼する』

真面目な顔になったハルトムートが一礼して通信を切断した。

「俺達は何も聞いてない。良いね？」
「そうね」
この先のことを想像して気が遠くなったのか、チベットスナギツネみたいな顔をしたエルマが頷いた。俺達は知らん。何も知らん。貴族の嫡男が平民女性に一目惚れしたとかそういうクッソ面倒そうな地雷案件なんて何も知らん。

#426　めんどうくさいおはなし（前書き）

ＰＳ５でサイバーパンク２０７７を再プレイし始めたらやっぱり面白くて止まらない（ ，ω， ）

#426　めんどうくさいおはなし

「えっ？　そんなことになっとるん！？」
「あぁーっ！？」

アイリア達が施設へと戻り、皆で揃って晩飯を食いつつ今日あったことの情報共有中にティーナが素っ頓狂な声を上げた。うん、素っ頓狂でもないかな？　自分の友人が貴族に一目惚れされたとか聞いたらそりゃびっくりするよね。
ところで君の隣でお酒の入ったジョッキをひっくり返されて涙目になっている妹さんのことは放置して良いのか？

「ど、どうしよ兄さん！？　アイリアにはよ連絡入れなあかんよね！？」
「いや、放っておけよ……互いに子供じゃないんだし、何らかの形で上手く折り合いはつけるだろ」
「せやかて兄さん！　お貴族様に迫られたら平民の女なんてそうそう断れへんやん！」
「あーっ！？」
「あぁっ！？」

ティーナが食堂のテーブルに手を叩きつけて吠える。うん、もう少し手加減してくれんか。このクソでかいテーブルがアニメの過剰演出みたいに一瞬たわんで卓上が凄いことになってるから。皿が舞ったから。　ミミの夕食にクギのおいなりさんもどきがダイブして大変なことになってるから。ついでに俺の食事もなんか溢れたりなんだりと色々酷いことになってるから。

「落ち着け。そりゃそうかもしれんが、そこで俺達が介入するのはなんか違うくねぇか？　そりゃハルトムートが単にアイリアをオモチャにしてやろうって感じで無茶するなら、俺だって介入することは吝かじゃないぞ？　でも、あれはどう見てもそういう感じじゃなかったんだよ。一回レイディアスの養子にしてとか言ってたし。貸しがあるとも言ってたから、ハルトムートにとって他の用途にも切れる札を切ってまでってなると……俺はちょっと邪魔しにくいな」

ハルトムートとは既に一緒に仕事をしている仲だしな。あいつは誠実なやつだし、貴族の嫡子でコロニーの代官でもあるということで、地位も金も持ってるし、顔も良い。身分の差は大変だろうが、あいつ自身がそうと決めたなら好きにすれば良いと思うんだ。

一度レイディアス準男爵の養子にするとしても、そもそもアイリアが貴族としてやっていけるのかとか心配なことは多いけどな。

というか、ハルトムートは婚約者がいたりしないのかね？　子爵家の嫡男ともなれば子供の頃からの婚約者とかいそうだし、いるとすればアイリアをどうするつもりなのだろうか。側室みたいな感じにするのか？　それとも愛妾みたいな？　現地妻的な？　あいつがその辺どう考えているのかは確かに不透明だが、それを含めて俺達が関わるようなことではないと思うんだよな。

「兄さんは……」

「うん？」

「兄さんはアイリアが貴族のボンボンの慰み物にされてもええっちゅうんか！？」

「話が通じねぇ！？　酔っ払ってんじゃないのかこいつ！」

まだ一口か二口くらいしか酒を飲んでいないはずなのに、どうしたんだティーナは。

「なんというか、アイリアが絡むと途端にポンコツになるなお前は。アイリアがティーナにとって大切な人だってのはよくわかったよ。でも、繰り返し言うがアイリアは十分に良い大人だろう？　ハルトムートにお付き合いを申し込まれたとして、それを受けるか断るかを決めるのはアイリアであって、アイリアが心配で心配でたまらないティーナちゃんじゃないだろうが？」
「せやから貴族にそんなこと言われたら断りたくても断られへんやろってうちは言うてんのや。下手すると恥をかかさせたってことでバサッとやられるで」
「そりゃ確かに公衆の面前でお断りされたら赤っ恥だろうが、それで逆上して相手をバサっとやったらそれ以上の赤っ恥だぞ……そもそもそんなことをする男じゃないと思うが」
「ぐぬぬ……ああ言えばこう言うな！？」
「そりゃお互い様だろう……」

どうにもティーナはアイリアが絡むとおかしくなるな。精神的に不安定になるというかなんというか……それにいつにも増して帝国貴族への不信感が凄い。ティーナがこのリーメイプライムコロニーに居た頃はレイディアス準男爵がコロニーの代官をしていたんだろうけど、その時に何かあったのかね？

「オーケーオーケー、じゃあ俺が折れるよ。俺がハルトムートに言い聞かせれば良いんだろ？　アイリアは慎み深い模範的な帝国臣民だから、子爵家嫡男のハルトムートに交際やそれ以上のことを迫られた場合、彼女の意に沿わなくても頷いてしまう可能性が高いって。で、そのあたりをよく考えてやってくれって。そう言えば良いよな？」
「……それだと貴族のボンボンがアイリアにつきまとうのは止められへんやん」
「それくらいは許してやれよ……俺だってハルトムートのことをよ

く知ってるわけじゃないが、人を好きって気持ちなんて他人がどうこう言っても抑えられるものじゃないだろ？　外野にできることなんて、精々これくらいのアドバイスが限度ってもんだと俺は思うがね。むしろ、無理矢理邪魔なんてしようものなら、より一層燃え上がりそうな予感しかせんぞ」

「……」

俺の言葉に納得してくれたのか。ティーナは俯いて言葉を発しなくなってしまった。気がついたら俺達二人以外のクルーは他のテーブルに避難してこっちを眺めている。お前ら、俺を矢面に立たせて逃げるなよ……俺が逆の立場でもそうするから責めたりはしないけど。

「うぅ……」

「うん？」

「ふぐ……うっ……うえぇぇぇ……」

「どうして泣くんだよ……」

突然泣き始めたティーナを前に思わず頭を抱える。助けてくれとエルマ達に視線を送ってみるが、首を振られたり手でバッテンを作られたり、ペコペコと頭を下げられたりした。俺がどうにかしろってことですか。そっかぁ……まぁ泣かしたの俺だもんね……俺なのか……？

「ティーナはこのコロニーに来てから情緒不安定だなぁ。おめーはほんとによー」

頭を掻きながら席を立ってティーナの隣に座り、背中を撫でてやる。

「兄さんわがまま言ってごめぇぇぇん……うぇー……」
「はいはい……ええんやで」

ティーナが俺にしがみついて泣きじゃくる。見た目が見た目だけにティーナに泣かれると罪悪感が……こんなナリですけど普段は火をつけたら簡単に燃え上がるような酒をスポドリの如くガバガバ飲む大酒飲みなんですよ。この子。

「そう泣くなって。別に怒ってないから」

そう言うと余計泣かれた。こりゃもう泣き止むまで黙って背中でも撫でででやるのが一番良さそうだな。

☆★☆

「お疲れ様」
「うい」

泣き疲れて寝た……というわけではないが、泣いてちょっとおめめが腫れぼったくなったりなんだりでお隠れになられたティーナをウィスカに任せ、食堂に戻ってきた俺をエルマ達が出迎えてくれた。

「色男も大変なんだな」
「俺が色男なものかよ……あー、腹減った」

リンダの言葉に肩を竦めつつ、冷めた晩飯をモソモソと口に運ぶ。流石にテツジンの料理でもこう冷めてしまうと今ひとつだな。それでも食うけど。勿体ないから。

「実際のところ、アイリア姉が貴族のお坊ちゃんの奥さんになると

か可能なのかね？」
「お坊ちゃんって、お前よりずっと歳上だぞ……俺は別になんとでもなると思ってるけど、その辺どうなんですかね、子爵家令嬢のエルマさん？」
「そこで私に聞くわけ？　私はその子爵家から単身飛び出して傭兵なんてやってる跳ねっ返りなんだけど」
「えっ……エルマ姐ってそういう……え？　マジ？」
「本当ですよ。帝都にこーんなおっきいお屋敷があるんです」

ミミがバーっと大きく腕を広げて大きさを表現する。そりゃ大きそうだな、うん。

「そんなにはデカくないでしょ……ブラックロータスのほうが遥かに大きいわよ。で、実際のところどうかって話よね。まぁ、問題ないわよ。当然血筋について何か言われることはあるだろうけど、レイディアス準男爵の庶子ってことにでもしてしまえば側室に入るくらいはなんでもないんじゃない？　レイディアス準男爵のご家庭が大変なことになるかもしれないけど、それでハルトムートに借りが返せて、何らかの便宜が受けられるってことならそれくらいの不名誉は喜んで被るでしょうね」
「しょし？」
「庶子というのは、高貴な身分の方が正式な配偶者でない方との間に作った子供という意味の言葉ですね」
「つまり、アイリア姉を前の代官の子供ってことにするってこと？」
「そういうこった。養子にするよりはそっちの方が通りは良いかな？　レイディアス準男爵の評判はガタ落ちだろうが」

アイリアがあの歳になるまで認知してなかったということになれば、エルマの言う通りご家庭内でもご家庭外でもレイディアス準男爵の評判はズタボロだろう。まぁ、コロニーの代官を降ろされた時

点で評判なんてゴミクズ以下になっているのだろうから、ある意味殆どノーダメかもしれないが。

「へー……じゃあそくしつって？」

「貴族なんかが正式な妻の他に持つ第二、第三の妻って考え方で大体合ってるわ。うちの場合、ミミが正室で私やクギ、ティーナとウィスカ、ショーコ先生、あとメイも側室ってことになるわね」

「……」

俺は沈黙を貫くことにする。その辺りに関しては俺が口を出すと碌なことにならなそうなので。俺の感覚としては全員平等に扱っているつもりなのだけれども。みんなちがって、みんないい。

「ふーん……」

リンダの視線が痛い。はい、俺は最低のクズ野郎です。だが私は謝らない。こうなった以上は全員で幸せになるべく、日々面白おかしく傭兵稼業を続ける所存である。

「此の身は帝国貴族の作法などについては詳しくありませんが、アイリア様はちゃんと適応できるのでしょうか？」

「それはなんとでもなるんじゃないか。いざとなれば脳味噌に直接ぶち込む方法なんていくらでもあるんだろうし」

脳味噌から情報を引っこ抜く技術があるなら、詰め込む技術だってあるだろう。脳の処理能力を向上させる強化手術さえあるという話なのだから。

「ヒロの言い方はちょっと極端だけど、まぁそうね。帝国はその手の技術に関しては不自由してないから、少し時間をかければなんと

でもなるわ。極論、血筋の点さえクリアできればあの二人がくっつくのは然程難しくないってことね。あとは本人達次第じゃない？」
「本人次第、かぁ……アイリア姉はどうするのかな」
「どうするんでしょうね？　でも、平民の女性が貴族の王子様に見初められてっていうのはホロ小説とかドラマとかでよく見る展開ですよね！」
「確かに。あと、ちょいワルの傭兵が相手ってのもあるよな」

そう言ってリンダが俺に視線を向けてくる。俺はちょいワルじゃないし。品行方正で清く正しいホワイト傭兵だし。え？　品行方正で清く正しいホワイト傭兵は歌う水晶を悪用して連邦軍艦隊を壊滅させたりしない？　知らんな。

「いくらハルトムートがのぼせ上がってたとしても、今日明日いきなり動くってことは無いだろ。まだブラディーズの倉庫とか生産施設を潰したりしないといけないし、パンデミックも収束したわけじゃないし」
「ヒロ……あんた……」
「え？　あっ……いやいや、大丈夫だって。絶対大丈夫だって！」

そろそろ心配して口に出したことが実際に起こってしまうジンクスからは解放された筈だから！

#427　ゲームチェンジャー

「気が進まねぇなぁ……」
「ご主人様がそのようにお考えなのであれば、私からお伝え致します」
「いや……気は進まないけど約束を破るような真似はしないよ」

翌日、俺はメイと戦闘ボットを引き連れてハルトムートの元へと向かっていた。別にカチコミをかけようというわけではない。先方にアポイントメントを取った際に、そろそろ情報が出揃いそうだという話があったので、襲撃用の戦力を引き連れてきただけである。

戦闘ボット達とメイ用のレーザーランチャーをを上層区と下層区に跨るチェックポイントで預かってもらい、ハルトムートが詰めている代官のオフィスへと更に歩を進めていく。

「俺みたいなのがあの超絶イケメンのハルトムートに男女の仲について忠告するとかどんな冗談なんだよ。何様だって話だと思うんだが……」
「ご主人様は実際に複数の女性と円滑で円満な相互互恵関係を築いているのですから、その分野では何歩も先を行く先達なのでは？」
「それはメイを中心として皆が俺に気を遣ってくれているだけの話だろう？　おんぶに抱っこで今の状況があるということは俺だってよく知っているから……」

そりゃ俺の人徳的なものももしかしたら数％くらいはあるのかもしれないが、それを根拠に大上段からハルトムートに物申すとかどういう視点なんだよっていうね。

「まぁ、腐っても悩んでも仕方がないな。こういうのはズバッと言ってスパッと終わらせよう」

長引かせても俺の精神が苛まれるだけで、良いことが何も無いものな。

☆★☆

「ごきげんよう、ヒロ卿。そろそろ報告が上がってくるはずだから、掛けてくれ。今、茶を持ってこさせる」

「そりゃどうも」

ハルトムートはなんというかこう、やる気に満ち溢れていた。なんだろう、上手く言えないがこう……目の輝きが違う。士気ＭＡＸ！　って感じだ。

「それで、今日はどうしたのだろうか？　情報の共有であればホロ通信でも可能だが……？」

「あー……まだるっこしいやり取りは抜きで単刀直入で言うが、アイリアの件だ」

俺の言葉にハルトムートがピクリと反応する。急に無表情になるのやめてくれ。すげぇ怖いから。

「早とちりするなよ？　手を出すなとか俺の女だとか言うつもりは一切ないから。むしろ、俺はハルトムートを応援してるから」

「……なるほど？　詳細を聞かせてもらおう」

聞く姿勢になってくれたようなのは何よりなんだが、圧が強い。やる気と真剣さがビシビシと俺を圧してくる。

「まずどうして俺がわざわざこの件に嘴を突っ込みに来たのかと言うとだな、うちのクルーの一人が以前このコロニーに住んでいたことがあって、そのクルーはアイリアと大変に仲が良いんだ。一応言っておくと、女性だぞ」
「続けてくれ」
「オーケー。で、そのクルーが心配したわけだ。ハルトムートは子爵家の嫡男で、このコロニーの代官だ。その言葉は平民であるアイリアにとってとても重いものだ。今後施設の面倒を見るのもハルトムートだからな。だから、ハルトムートから何かしらの申し出をされた場合、それが彼女の意に沿わない内容だとしても頷いてしまうんじゃないかってな」
「……」
俺の言葉を咀嚼するかのようにハルトムートは瞑目し、しばしの間考え込んだ。
「だとしても、最終的に私がアイリア嬢を幸せにすれば問題ないのでは？」
「それはそう。ワイもそう思います」
「ワイ……？」
「極論そこなんだよなぁ。最終的に皆がハッピーになればそれで良いよな。本当にそう思うわ」
どんな物語でもハッピーエンドに至るまで大体は山も谷もあるものだしな。ましてや今お話しているのは物語ではなく現実の男女関係についてである。最初から最後まで順風満帆に行くわけがない。
「そもそも、ハルトムートがアイリアに好意を伝えないことには話が始まらないよな。それをするなっていうのはアイリアに手を出す

なというのと同じことだし……というか、割と一方的にハルトムートがアイリアに好意を持っていると断定して話をしているんだが、そういうことで良いんだよな？」
「面と向かって言われると私も若干恥ずかしいのだが……まぁ、そうだ」

かーっ！　イケメンは恥じらう姿も様になるなぁオイ！　俺があんな反応したら殆どコメディだぞ。

「ちなみにどういうところが良いと思ったんだ？　見た目か？」
「アイリア嬢の可憐な容姿に惹かれたのも確かだが、何より彼女の高潔さと善良さ、意志の強さに惹かれたんだ。卿に件の施設の話を持ちかけられた後、私も独自にあの施設について調べてな。あの極限とも言える状況下でも子供達を見捨てず、自分を犠牲にしてでも職務を全うしようとする彼女の高潔さには衝撃を受けたよ」
「なるほど。確かにそうだな。あと一日でも俺があの施設に行くのが遅かったら、今頃アイリア達は死んでいたかもしれない。子供達はマシな状態だったけど」

あの場に居た大人達はアイリアを含めて全員が伝染病と栄養失調の影響でいつ死んでもおかしくないような状況だった。それに対して子供達はまだマシな状態だったことを考えると、医薬品や食料を自分達でなく子供達に優先的に回していたのは間違いないだろう。アイリアが高潔な人間だというハルトムートの評価は妥当なものだと思う。

「あー……まぁ、とにかくだ。最終的にアイリアを幸せにすれば問題ないという意見は俺も大いに同意するところだが、一応は俺の言ったこと、うちのクルーが心配したことも心の片隅に留めておいてくれ」

「承知した。他ならぬ卿の言うことだからな。心に留めておくことを約束する」
「ありがとう。すまないな」

他人からこんな話をされるのは不快だろうに。こんな話を至極真面目に聞いてくれるという事実だけでもハルトムートの人となりというものがわかるというものだ。普通なら怒るぞ、こんなの。

☆★☆

その後、メイドさんが持ってきてくれたお茶を飲んで俺とメイはブラックロータスに戻ってきた。
え？　戦闘ボットまで引き連れていったのにブラディーズ潰しに加わらなかったのかって？　それはご尤もなんだが、ハルトムート本人に「賊の討滅は統治者たる私の職務だ。厚意はありがたいが、卿の力を借りるのは筋違いというものだろう」とはっきり言われてしまったからな。
実際のところ、報酬も出ないのに自分の身を危険に晒しても本当に危ないだけで何一つ得をしないし……強いて言うなら死線を越えることによって何か研ぎ澄まされるものはあるかもしれないくらいか。ゲームのレベル上げじゃあるまいし、結局リスクの方が勝つのでハルトムートの言う通り退散してきたわけだ。

「あ、おかえりなさいヒロ様！　早かったですね？」
「ブラディーズ潰しには不参加ってことになってな。ハルトムートとも話をしてきたし、パンデミックも後は収束に向かうばかりだろうし、そろそろこのコロニーとも――」
「兄さん！　どやった！？」
「――おごぉ！？」

休憩スペースソファに座っていたミミと話をしていると、俺の声を聞きつけたティーナが食堂から飛び出してきて俺の横っ腹に突撃してきた。

「落ち着け……ハルトムートにはちゃんと話をしてきたし、最終的にちゃんと俺の言葉を気に留めて行動するって言ってくれたから。ただ、そうあれ最終的にアイリアを幸せにしたいと言っていたし、ハルトムートはアイリアの容姿だけでなく心根を含めて彼女に好意を持ってるって話も聞いたから、そこまで心配する必要はないと思う。後は本人達がどうするかって話だ」

「ん……わかった。ありがとな、兄さん」

「ええんやで」

ティーナの頭をなでなでしておく。相当に振り回されることになったが、最後にちゃんと納得してくれたようで何よりだ。そろそろこのコロニーともおさらばかね。リンダもそろそろアイリアのところに帰さないとな。

「そういやショーコ先生はどうした？　ここ二日くらい見ていない気がするんだが」

「研究室に篭っていらっしゃいます。お呼び致しましょうか？」

「いや、無事なら良いんだが……一体何をしているんだろうか？」

興味が湧いた俺はショーコ先生のラボに足を向けることにした。二日もラボに篭って一体何をしているのだろうか？

「ショーコ先生？　何を……うわ」

「んん？　どうしたんだい？」

ショーコ先生のラボはキノコだらけになっていた。いや、あちこ

ちに生えているんじゃなくて、ちゃんと株毎にケースに管理されているんだが、そのケースが多い。十や二十ではきかない。

「どうしたんだ？　これ」

「これかい？　件の病原体のキノコを品種改良して無害化できないかと思ってね。色々と試行錯誤していたんだよ。ヒトに対する特効薬はできたけど、感染源を全滅させないといつまで経ってもパンデミックが収束しないだろう？　だから、病原体のキノコを殺すキノコを作れないかといじくり回していたのさ」

「なるほど……？　上手くいきそうなのか？」

「うーん、そうだね。上手くいきそうだけど、結局のところコロニーを新たな菌で一旦汚染し直すことになるからね。流石に認可が降りないんじゃないかなぁ」

「だめじゃん」

「だめだねぇ」

そう言いながらショーコ先生がアッハッハと笑っている。

「まぁ、件の病原菌だけをターゲットにした浄化ナノマシンのデザインは終わったから、それを使えば良い話なんだけどねぇ。うーん、やっぱり生き物っていうのは制御が難しいねぇ」

「なるほど……？　ん？　じゃあコロニーのパンデミックって」

「特効薬と浄化ナノマシンを併用すればすぐに収まると思うよ。ああ、データとサンプルをまとめておいたからよろしくねぇ。私はシャワーでも浴びて一眠りするから。ふあーぁ……」

そう言ってショーコ先生は一抱えほどの頑丈そうなコンテナを俺に押し付け、あくびをしながら研究室を出ていった。

「……実はこの船で一番ヤバいのはショーコ先生なのでは？」

俺は受け取ったコンテナの重さを感じながら一人ぶるりと身を震わせるのであった。

#427　ゲームチェンジャー（後書き）

原稿作業のため暫くお休みします！
今回は……また修羅場だぁ！（‘ω’）

#428　三年後の約束（前書き）

本当は昨日投稿しようと思っていたんだけど身体が闘争を求めたので許して（，ω，）（明日も投稿するから

#428　三年後の約束

ショーコ先生が用意した浄化ナノマシンの効果は覿面だった。試験散布された区画では空気中から検出される病原菌の胞子量が激減したのである。ハルトムートは段階的に浄化ナノマシンの散布範囲を広げ、ショーコ先生が用意した特効薬も併用して急速にパンデミックを収束させつつあった。

そして、俺がショーコ先生から預かったコンテナをハルトムートに届けてから一週間ほどが経った。

その間、俺達は復興しつつあるコロニーでアイリア達の孤児院の様子を見に行ったり、浄化ナノマシンの件についてショーコ先生を連れてハルトムートに会いに行ったり、浄化ナノマシンの設計データに関する報酬の件について交渉をしたりとそれなりに忙しくしていた。

「それにしてもナノマシンのちからってすげー。たった一人の科学者の活躍でこんなに状況が変わるものなんだな」

休憩スペースでショーコ先生に膝枕をしながら呟く。休憩スペースに設置されたホロディスプレイにはパンデミックが収束しつつあるというニュースが流れていた。

「今回の件がたまたま私の専門分野に関連する事態だっただけだよ」

俺の膝に頭を載せたショーコ先生は謙遜してそう言っているが、その横顔はかなり誇らしげであった。迫真のドヤ顔である。実際にドヤるだけの成果を出しているので、思うところもないけれども。

「それにしたって凄いと思うよ。素直に感心した。でも、ナノマシン技術って兵器利用とかしたら大変なことにならないか？」
「あー、それはねぇ。結構聞かれるんだけど、確かにできなくはないんだよねぇ。作れるよ？　所謂殺人ナノマシンってやつはね。ただ、兵器として利用するとなると生物兵器や化学兵器に比べると無効化が容易だし、色々と割に合わないんだよね」
「そうなのか？」
「そうなのさ。何せ精密機器だから、ＥＭＰパルスの類に弱いんだよ。当然、シールドにもね。それに、人一人を死に至らしめるにはそれなりの量が必要になるから、例えばコロニー一つを殺人ナノマシンで殺しつくそうって話になるとクリシュナ一隻分くらいの質量のナノマシンを効率よく散布する必要があるんだ。正直コストが見合わないと思うね」
「それなら反応弾頭を一発打ち込んだほうが手間もコストもかからないな」
「そういうこと。まぁ個人レベルの暗殺とかには使えなくもないだろうけど、兵器として使うのは難しいんじゃないかな」
「なるほどなぁ」

つまり簡単にグレイ・グー――ナノマシンの暴走による滅亡――は起こらないってわけか。安心したような、ちょっと夢を壊されたような、なんとも言えない気分だ。

「うーん、なんだか少し眠くなってきたよ」
「俺の膝なんか枕にして寝て首を痛くしても知らんぞ」
「程よい硬さだと思うけどねぇ。でもそうだね、ちゃんとベッドで寝ようかな」
「あいよ……その手は何かな？」
「ヒロくんに運んで欲しいな」

そう言ってショーコ先生はニンマリと笑みを浮かべた。なるほど？　良いでしょう、お運びしますよ。ええ。意外と甘え上手だよな、先生は。

☆★☆

リーメイプライムコロニーでやるべきことは概ね片付けたが、一つだけやり残したことがある。

「さて……今日お前達三人を呼び出した理由はわかってるな？」

食堂の隅のテーブルで三人並んで座っている少女達――本物の少女は一人だけだが――は俺の言葉にそれぞればつが悪そうな顔をしてみせた。

「まぁ、半ば俺達の都合で一時的とはいえリンダを船に乗せたわけだから、その判断をした俺にだって責任はある。リンダが切っ掛けとなってこのコロニーのパンデミックに有効な特効薬ができたということもあるし、俺達はそれでハルトムートから少なくない金額の報酬もせしめている。その一部は当然リンダにも配分するつもりだ」

そこまで言って俺は言葉を一度切り、彼女達――ティーナとウィスカ、そしてリンダの三人の様子を窺う。うーむ、三人とも気の毒なくらいにしょげかえってるな。なんだか悪いことをしている気分だ。

「率直に言うが、リンダを連れて行く気は無い。今のところ人手は足りてるしな。それに、ここには俺達の他にも頼れる相手がいる。そうだろ？」

「まぁ……うん、それはそうやな」

元々リンダが所属している孤児院にはアイリアがいるし、ハインツとジークもいる。アイリアが請えばハルトムートだって力を貸してくれるだろう。俺、というか俺達がリンダに渡す金額は自由移動権を買うには足りないが、リンダが自分のしたいことをするために様々な学習をするのには十分な額だ。正気に言えば、リンダの身の丈に合わない金額になる。

年端も行かない女の子にそんな大金を渡した結果、身を持ち崩すことになる――というような結末は俺も望んでいないので、管理はハインツ辺りに任せることになると思うが。多分あいつなら大丈夫だろう。もしリンダの金を使い込むような真似をした日にはわかってるよな？　とでも言っておけば滅多なことはあるまい。まぁ、面倒事を押し付けるわけだから、何かしらの便宜は図ってやる必要があるだろうが。

「でも、オレは……あんた達についていきたい」

リンダがそう言って俺の目を真正面から見据えてくる。うーん、まぁそうだよな。リンダとしては俺達について来たいのだろう。それはわかる。俺がリンダの立場でも同じように思うだろう。今までリンダが育ってきた環境を思えばそれは当然のことだ。

親の顔も知らない、バックにマフィアやギャングがついている下層区画の孤児院出身の娘が就ける職業なんてのはたかが知れている。教養もなければ金もない子供が身一つでのし上がっていくのにはこのコロニーの下層区画というのは絶望的な環境だ。

それなら命の危険や貞操の危険があろうとも――誓って手を出す気はないが――見習いとして傭兵の船に乗り、傭兵や船員としてのスキルを身につけたほうが将来の展望も拓ける。少し頭を回せばそれくらいのことは誰にだって……リンダのような子供にだってわかるだろう。

「実際のところ、リンダを連れて行くこと自体は可能だろうさ。容易いと言っても良い。リンダ一人分の食費や生命維持費なんてのは微々たるもんだ。俺達の収入から考えればな。だが、厳しいことを言えばリンダを連れて行くメリットが全く無い。皆無だ。むしろリスクの方が高いと俺は思う」

これは単純にリンダがまだ子供だからだ。これから思春期を迎えるリンダは感情の制御が難しい年頃でもあるし、単純に身体が出来上がっていないから身体能力面でも心配がある。今回パンデミックを起こした病原菌への耐性に関しては稀有な才能であるのだろうが、他の疾病にも有効なのかどうかについては未知数だ。そもそもの話、疾病への対策という意味では大概のものに対応しているワクチンが存在しており、俺達は全員接種済みである。つまり、相対的に彼女の特異体質の価値は下がるということだ。

「オレは我慢強いよ。すばしっこいし、手先だって器用なつもりだ。自分で言うのもなんだけど、度胸だってあると思う。頭は良くないけど、ティーナ姉とウィスカ姉には飲み込みは早いって言われてる。すぐには無理だけど、きっとすぐに役に立つようになってみせる」

「なかなか口も上手いじゃないか。だが、駄目だ。俺の船に血気盛んなニュービーは要らん」

最初は普通の女の子だったミミも、今は一端のオペレーターだからな。寧ろ、今回の件を考えるとティーナの方がメンタルを大きく揺らしてしまっている。普段は明るいムードメーカーなんだけどな。彼女は。

だが、リンダは若い。俺だってまだ他人を若いとか言えるような年じゃないが、流石にリンダは若すぎる。幼いと言っても良い年頃だ。ただでさえトラブルが寄って来やすい身の上なのに、この上で

トラブルメーカーになりそうなクルーを抱えるのは御免である。
「ただまぁ、これで納得しろってのも無理があるよな？　密航なんてされちゃたまらんから、一つ俺からも譲歩しよう」
俺の言葉に三人が固唾を呑んで身構える。
「確かリンダは今十二歳だったな？　なら成人する十五歳までこのコロニーで頑張れ。その時までに船員として役立つスキルを身に着けていればベストだが、とりあえず健やかに、年齢相応に心と身体を成熟させておくだけでも十分だ。三年経って、まだ船に乗りたいって気持ちがあるならその時は迎えに来てやるよ」
「ほ、本当か？」
「嘘は言わん。ただ、忘れるなよ？　俺の船に自分の意志で乗り込んでくるってのは『そういうこと』だぞ？　覚悟しておけよ？　わかってて自分から来る相手には遠慮しないからな？」
「んなっ……！？」
リンダが顔を赤くし、身体をビクリと震わせて身を引く。
「せいぜい良い女になっておけよ、ハッハッハ」
「このエロ野郎……」
「まぁそんなにシリアスに考えるな。お前ができるだけ好きなことをできるように環境を整えられるようにはしてやるよ。その環境を利用してなりたい自分になれるように全力で頑張れ。別にリンダが別の道を選んだって裏切り者とか言わないから。選択肢の一つとしてうちの船に乗るのもアリってだけの話だ。言っておくが、傭兵稼業は稼げるが命の危険だらけだぞ？　エンジニアをやってるティーナとウィスカだって命の危険を感じたことは一度や二度じゃないだろ？」

顔を赤くしてこちらを睨みつけてくるリンダに肩を竦めてそう言ってから姉妹に話を振る。

「それはそうやな」

「宙賊相手に戦闘なんてしょっちゅうですし、負けたら良くても死にますもんね」

「良くても死ぬ？　悪いとどうなるんだ？」

「捕らえられて死ぬまでオモチャにされるか、最悪『商品』という名の死ぬこともできないオブジェに加工されてそういうのが好きな変態に引き渡されるかだな」

「うげぇ……」

リンダがドン引きしている。コロニー内のマフィアだのギャングだのって連中もそういった残虐系エピソードには事欠かないだろうが、宙賊連中のやることはそういうのを軽く飛び越えるからな。生首にした上で生命維持装置に繋いで歌う愉快なオブジェの完成！とか平気でやる連中だし。

「まぁ宙賊なんぞに遅れを取る気はないが、そういう悲惨な結末を迎えるかもしれないのが傭兵ってもんだ。その辺もよく考えながら三年頑張れ」

「うん……わかった」

そう言って神妙に頷くリンダに俺も頷き返す。これでリンダの件はなんとかケリが付いたな。あとはハインツ達に丁寧に頼み込んで、ハルトムートにも気にかけてもらうよう言付けて、アイリアにも話を通して……面倒は面倒だけど、ティーナのためだ。もうひと頑張りだな。

#429　その上つったらもう紛れもなく奴じゃん（前書き）

奇しくも戦場送りになるご一行なのであった（，ω，　）

#４２９　その上つったらもう紛れもなく奴じゃん

結論から言うと、リンダの教育環境を整える調整についてはスムーズに完了した。

「俺がこんな大金の管理をするのは胃が痛くなりそうなんですが……他ならぬ兄貴の頼みとあればお任せください。上手くやってみせます」

どうもハインツはリンダの件についてハルトムートよりもハインツを頼ったことが嬉しかったようで、リンダに渡す報酬分配金の管理について快く引き受けてくれた。なんだかんだでコロニー内には色々と伝手があるので、リンダの要望を聞きながら面倒を見てくれるという。

「ハルトムートにも気にかけてもらうように言ってあるから、変な意地の張り合いとかするんじゃないぞ」

彼は彼でリンダが望むなら高等教育を受けられるよう手配をすると快く請け負ってくれた。サイコロの転がりようによっては、もしかしたら三年後のリンダはとんでもない淑女になっているかもしれんな。

「わかってます、兄貴。いずれ兄貴の女になるってことですし、変な虫がつかないようにも気を配っておきます」

「そうと決まったわけじゃないからな……？　その辺はリンダの好きにさせてやってくれ」

これからの三年間でリンダに恋人ができて、俺の船に乗るのをやめてこのコロニーで暮らしていくっていうならそれはそれで構わない。リンダの人生はリンダのものなんだから、俺に縛られる必要なんてこれっぽっちもない。三年経っても気持ちが変わらないなら連れて行くってだけの話だからな。今のリンダは幼すぎるが、十五歳ならミミがクリシュナに乗ったのと同じ年齢だ。グラッカン帝国では十五歳で成人だし、自分の道を自分で決めても良いだろう。

というか、三年後の俺がどうなっているかなんてわかったもんじゃないしな。死んでいなければ傭兵稼業は続けていると思うけど。

「そうですか……わかりました。ところで、そろそろですか？」

「ああ、明日には出る。自由気ままな根無し草生活が性に合ってるんでな」

今回は特にこれといった目的地もない。現状、喫緊の課題もないからな。俺のクリシュナとエルマのアントリオン、それにメイのブラックロータス。この三隻での宙賊狩りに関してはまだ完全に連携が取れているわけでもない。暫くは金を稼ぎつつ練度を向上させるのが当面の目標となるだろう。

まぁ、本当の意味で無目的かつ適当にほっつき歩くわけにも行かないから、今晩は皆で集まって行き先を決めるミーティングを行うことになるだろうな。

☆★☆

皆でミーティングをすることになるだろうと言ったな？　あれは嘘だ。いや、嘘ではないか。

「えー……ということで、全く気は進まないが俺達の次の目的地はクリーオン星系ということに決まりました。はい、拍手ー」

あまり状況を理解できていないクギだけがパチパチと拍手をしてくれる。クギは可愛いなぁ、ハハハ。

「ヒロが決めたなら従うけどね……まさか最前線送りじゃないでしょうね？」

「それこそまさかだ。後方の兵站を狙う『宙賊』の討伐が依頼内容だよ」

「ものは言いいようよねぇ……上は？」

「いつものあの人になるそうだ」

「セレナ大佐も大概貧乏くじを引かされますよね……あはは」

ミミが彼女には珍しく感情の薄い表情で乾いた笑いを漏らす。ティーナは難しげな表情をしており、ウィスカは不安げな表情を見せ、ショーコ先生はニヤニヤと面白そうに笑っていた。メイはいつもの無表情だ。

俺達がこのようなやり取りをしている理由を語るには少々時間を遡る必要がある。

そう、あれはハインツにリンダのことを頼んで――当然タダではなくいくらか金を握らせておいた――ブラックロータスへと足を向けた直後のことだった。俺の小型情報端末が着信音を鳴らした。

今思えばあの時……いや、無駄か。どっちにしろ詰んでたな。今後一切傭兵ギルドと連絡を取らずに生きていくことなんて傭兵の俺達にはできないわけだし。

☆★☆

「ヒロだ」

『こちらは傭兵ギルド、リーメイ星系支部のデイビットと申します。そちらはキャプテン・ヒロ殿で間違いありませんね？』

「ああ、間違いない」

傭兵ギルドから直接音声通話を飛ばしてくるのは珍しい。あちらから俺達のような傭兵に通達事項がある場合は殆どの場合専用のアプリを介したメッセージを送ってくるのだ。

「音声通話とは珍しいな。用件は？」

『キャプテン・ヒロ殿宛に最高優先度の指名依頼が入っております。早急に確認していただけるようご連絡をさせていただきました』

「最高優先度の指名依頼……？　本当に信用できるクライアントなんだろうな？」

高額報酬の指名依頼でのこのこと待ち合わせ場所に行ったら『騙して悪いが』みたいなのは御免だぞ。俺は基本的に宙賊をメインターゲットにしているから、傭兵ギルドに依頼を――それも指名依頼を出せるような依頼人に恨みを買っている可能性は低い筈だが。

『それはもう……帝国内ではこれ以上なく信用できるクライアントですとも』

依頼人が指名依頼を出すにはそれなりの信用というものが必要となる。信用とは何か？　というとそれはもう傭兵ギルドとの取引実績……つまり依頼完了時の確実な支払いだとか、依頼内容の妥当性――例えば無茶な依頼で傭兵を磨り潰していないか――だとか、依頼人の社会的認知度だとか、そういった多岐にわたる判断材料を元にして傭兵ギルドが判断したものだ。

「帝国航宙軍か？」

傭兵ギルドが帝国内でこれ以上ない信用を置くクライアントとな

ると、真っ先に挙がるのは帝国航宙軍だろう。そもそも宙賊への懸賞金を払ってくれるのも帝国航宙軍だし、宙賊のアジトを制圧する時などは大口の依頼を出してくれる。半ば癒着しているのでは？と思ってしまうほどつーかーといかズブズブの関係であるはずだ。

『半分正解です』

「おい、俺は謎掛けをしているわけじゃ――」

『その上です』

「Ｆ◯ｃｋ」

『聞かなかったことにしておきます』

その上？　その上だって？　その上って言ったらファッキンエンペラーしかいねぇじゃん！　あの野郎、俺をどんな面白おかしい場所に放り込むつもりだ！？

『合流地点はクリーオン星系です。ベレベレム連邦との最前線にほど近い星系で、そこに設置されている帝国航宙軍の補給物資集積所で先方が手配した帝国航宙軍の艦隊と合流し、協働で帝国の兵站を脅かす『宙賊』を排除するのが依頼内容となります』

小型情報端末から投影されるホログラムに目を走らせて内心溜息を吐く。案の定というかなんというか、合流する艦隊というのはセレナ大佐の対宙賊独立艦隊であった。相手が『宙賊』という時点で予想はついていたが、なんともはや。もはや腐れ縁だな。

「まだ受けるって言ってないが？？？」

『何か今すぐに動けない特別な事情があるのであれば考慮しますが、そうでないなら受けて頂きますよ。破格の条件の高報酬依頼です。キャプテン・ヒロ殿にとっても悪い話では無いと思いますが？』

「それはそうなんだけどなぁ……」

提示されている条件を見て心が揺らぐ。弾薬費や補給は全部向こう持ち。その上で１０００万エネルの固定報酬に敵艦の撃破報酬付き、鹵獲やサルベージも基本自由で、向こうが欲しいものは向こうに渡す必要があるけどその分はエネルで埋め合わせをしてくれる。拘束日数が三十日を超えた場合には一日当たり３０万エネルの報酬が上乗せされる。任務内容も基本的には兵站を狙う『宙賊』への対処となるから、基本的には最前線ではない。状況次第では最前線の鉄火場に巻き込まれる可能性はあるが、これは紛争宙域で活動するなら当然のリスクだ。

「はぁ……とりあえず、受ける方向で話を進めてくれ。どちらにしても明日にはここを出る予定だったんだ。でも、覚えておけよ。俺は何よりも自由気ままな傭兵生活ってものを愛しているんだ。今回は折れるが、あまりに強権を振るわれると嫌になって逃げ出すかもしれないからな」

『ありがとうございます。先方にも可能な限りお伝えしておきます』

そう言ってギルド職員のデイビットは通信を切断した。

帝国内で活動する以上、文字通り帝国の最高権力者である皇帝陛下からの依頼を蹴るのはリスクが高い。これで傭兵ギルドが敵に回るというようなことは無いだろうが、クソでかい借りを作ることになるのは確実だ。それもまたあまりにリスクが高い。つまり、あのファッキンエンペラーが出張ってきている時点でほぼ詰んでいるのである。

まぁ、思うところがない訳では無いが、別に俺は反権力の無政府主義者ってわけでもない。むしろ、長いものには巻かれる主義である。どうせ今回の依頼を蹴って逃げ出したところで別の厄介事に巻き込まれるに違いないのだ。それならば少しでも得があってリスクが低く、貸しを作れる方が良いだろう。

「次は最前線の自称『宙賊』狩りか……泣けるぜ」

リーメイプライムコロニーの天井を見上げて思わず嘆く。きっとその宙賊はベレベレム連邦かその友好国の戦闘艦を使っていて、軍用装備満載で、練度も異常に高いんだろうな。鹵獲すれば良い金になりそうだなぁ、はっはっはっ……はぁ。

#430　日々のルーティン（前書き）

昨晩のうちに更新を書き上げていた。勤勉（　ω　）（ドヤ顔

#430　日々のルーティン

小型情報端末のアラーム音で目が覚めた。頭と身体の芯にまだ幾ばくかの眠気や疲れが残っているような気がするが、だいたい自分が原因なので無視することにする。少し身体を動かしてシャワーでも浴びれば吹き飛ぶだろう。

「ふぁ……おはようごじゃいましゅ」

俺が起きたのに釣られたのか、俺の隣で寝ていたミミも目を覚ましたようだ。寝起きの蕩けるような声が途轍もなく可愛い。

「まだ寝てても良いぞ」

「ヒロ様が起きるなら私も起きます……ん、よし。起きましょう」

しょぼしょぼとしていたミミの顔がしゃきっとする。この船に初めて乗った時と比べると随分と寝起きが良くなったように思う。それも彼女が傭兵生活に慣れてきたことの証左なのだろう。

後悔……とも少し違うが、こういう彼女の変わってしまったのであろう部分を見てしまうと、俺が本来あるべきであったミミの姿を歪めてしまったのではないかと罪悪感のようなものを覚えることがある。最初に出会った時、いや見かけた時に俺が介入しなければ彼女の未来はより暗いものになっていたのだろうとは思うが、それでもそう思ってしまう。

案外、ミミの豪運ぶりを考えると俺が介入しなくともなんとかなっていたのかもしれないが……いや、なんというかｉｆの話をしても仕方がないか。

「まずはシャワーだな」
「はい！　綺麗にしましょうね！」
腕に抱きついてきたミミと一緒にシャワールームへと向かう。いやはや、起き抜けに巨乳の美少女とシャワーとは。こっちの世界に来てからというもの、我ながら偉くなったものだよな。

☆★☆

ミミと楽しい楽しいシャワータイムを終えて食堂へと赴くと、そこには既に先客がいた。
「おはよ、お二人さん」
「おはよう、エルマ。朝からしゃっきりしてるってことは昨夜は深酒したな？」
朝っぱらから人造肉のステーキと自動調理器製のポテトサラダめいたものをモリモリと食べているのはうちの傭兵団の二番機であるアントリオンのパイロット、銀髪宇宙エルフのエルマである。
華奢な見た目に反して単純な身体能力は俺よりも高い。エルフの皮を被ったゴリラ……とか言うと物理的に身体を折り曲げられてしまうので決して口にしてはいけない。
「別に良いでしょ。お酒は人生の潤いよ」
「ショーコ先生に怒られても知らんぞ」
エルマの反応を見る限り、朝っぱらから簡易医療ポッドのお世話になったことは明白である。最近うちの船医になってくれたショーコ先生はあまり細かいことを言うような人ではないが、度が過ぎればお小言を頂戴することになるのではなかろうか。

「あ、おはよーさん。二人とも起きてきたんやね」

ミミと一緒に自動調理器のテツジン・フィフスから朝食を受け取っていると、元気な声が食堂に響いた。視線を向けると、そこには赤い髪と青い髪の少女――ではなくドワーフが二人。

「おはようございます。お兄さん、ミミさん」

「ティーナとウィスカもおはよう。今から飯か？」

「うんにゃ、ちょっと休憩。うちらは結構前から起きとったから」

そう言いながらティーナは飲み物が入っている冷蔵庫へと向かっていく。ウィスカはテツジンに何かお菓子でも出してもらうつもりなのか、俺達の方へと歩いてきた。

「激戦になりそうって話だったので、素材の在庫確認と消耗の激しい部材の複製をしてたんです」

「そっか。必要になりそうな物資については予めリストを作っておいてくれよ。帝国航宙軍の物資集積基地で補給を受けるから」

「はい、任せておいてください」

「うん、任せた。そういやミミも色々荷物を積んできてたよな？」

「はい、前線で不足しがちな嗜好品の類を途中で寄ったコロニーで仕入れてきました」

少し前まで滞在していたリーメイプライムコロニーでは全体的に物不足で物価が高かったからな。ゲートウェイで移動する前に適当なコロニーに寄って前線で高騰しがちな嗜好品の類を仕入れるとミミが気合を入れていたんだ。

「ならよし。それじゃあ今日も元気に飯食って頑張っていきますか」

「はい！」

☆★☆

毎日が自由な傭兵生活だからこそ規則正しい生活というものが必要だ。少なくとも俺はそう思っている。

俺のルーティンはこうだ。まず朝起きたらシャワーを浴びる。これは昨晩を共にした誰かと一緒にってことが多い。お楽しみの時間だ。

そうしたら朝食を取り、身体を動かしにトレーニングルームに向かう。これも誰かと一緒にってことが多いが、一人でということもある。それが終わったら再びシャワーで汗を流し、艦内を見回る。これは異常がないかどうかを見回るという意味もあるが、広いブラックロータス内を歩いて足腰が弱らないようにしているという側面もある。これもトレーニングの一環だな。

その際に顔を合わせたクルー達と挨拶をしたり、適度にコミュニケーションを取るのも大事だ。顔色が悪かったり、表情が暗かったりしないかなど注意を払うのも忘れない。

でもまぁ、この辺については最近は専門家に頼ったほうが良いかなとは思っている。

「うん、少し寝不足気味みたいだけど健康そのものだね。昨晩はお楽しみだったのかな？」

「そうだな。しかしこれは所謂セクハラでは？」

「医学的見地からの質問だからセクハラには当たらないさ」

そう言ってショーコ先生がニヤニヤと笑う。本当に医学的見地からの質問なのかは大いに疑わしいが、聞かれて困ることでもないか。

「毎日の同衾で色々と消耗しているということならそれに応じたサ

プリメントでも出すところだけれど、血液の状態その他諸々の情報を見るに問題は無さそうだねぇ」
「うちのシェフは優秀だからな」
「本当にね。そういうものが必要ないくらいしっかりと栄養が摂れているようで何よりだよ」

うちの高性能自動調理器であるテツジン・フィフスは搭乗員の運動量や健康状態を自動的に判別して適切な食事を出してくれるからな。船の各種センサーから情報を拾って判断しているらしいが、精度の高さが異常である。便利だから別に良いんだが。

「ところで、クギは一体何をしているんだ？　というかクギに一体何をしているんだ？」

そう言って俺が視線を向けた先には妙ちくりんなヘッドギアのようなものを被らされて座っているクギの姿があった。頭の上の狐耳はピンと立っているし、お尻というか腰の当たりから生えている三本の尻尾もふりふりしているので、別に何か本人が嫌がるようなことをしているわけではないようだが。

「はい、我が君。先生の研究？　に協力をしています」
「ヴェルザルス神聖帝国人はあまり国の外に出ないし、出ても遺伝子情報の提供なんかはしてくれた試しがないからね。色々と興味深い点が多いのもあって、クギくんに協力してもらっているんだよ。ほら、サイオニック能力っていうのは先天的な素養が無いと使うのは難しいという話だろう？　幸い、この船にはその素養というのが全くない私やミミくん、それにティーナくんとウィスカくんがいて、そういった素養があるヒロくんやクギくん、エルマくんがいるわけだ。種族もバラバラでサイオニック能力の素養の有無もばらばらで、でも互いに交雑が可能……ということはつまり、遺伝子情報的には

大変に近しい――」

ショーコ先生がめっちゃ早口で喋り始めた。自分の専門分野の話になるとこういう風になる人っているよな。なんかまだ喋ってるけど内容が半分も理解できないぞ、俺は。

「嫌だったら断っても良いんだからな？」
「はい、我が君。でも、先生はとても楽しそうなので」
「それはそうね……あとはメイのところに行ったら見回りも終わりだから、その後に修練をしたいと思うんだが」

クギは現在クリシュナのサブパイロットとして修練を詰んでもらっているところなのだが、同時に俺のサイオニック能力の開花を促してくれる師でもある。

「承知致しました。それでは後で此の身の部屋に」
「了解。ああ、ショーコ先生。俺は見回りを続けるから」
「む、そうかい？　それじゃあ引き留めるのも悪いね。また後でね」
「はいよ。あんまり根を詰めないようにな」

二人に手を振って医務室を後にする。さて、ルーティンを続けよう。

☆★☆

ブラックロータスのコックピットに入ると、すぐにメイを見つけることができた。まぁ、見つけることができたも何も、彼女は隠れているわけでもなし。いつも定位置にいるので見逃すはずもないのだが。

「おはようございます、ご主人様」

振り返ったメイが朝の挨拶をしてくる。うん、美人。メイの容姿をデザインしたのは俺自身だから、自画自賛になってしまうような気もするが、本当にメイは美人だ。しかも美人なだけでなく強いし何でもできる。正にぼくがかんがえたさいきょうのメイドさんである。

「おはよう、メイ。運行は問題ないか？」
「はい、全て順調に進んでおります。目的地への到着予定はおよそ五十二時間後です」
「ならよし。いつも任せきりで悪いな」
「いいえ、ご主人様。私にとってはご主人様のお役に立つことこそが幸せなのです。ご主人様がそのように謝られる必要などありません」
「そうは言うけどなぁ……」

メイにはブラックロータスの全権掌握だけでなく、俺の訓練相手や女性陣の諸々の調整やら相談役やら、その他にも数え切れないほどの業務を担って貰っている。正直、頭が上がらないというか足を向けて寝られないというかなんというか、そんな感じなのだ。

「そのように私のことを想っていただけるだけでも十分に私は幸せです。どうしても、と仰るなら……」
「仰るなら？」
「ハグの一つでもして頂ければ」
「オーケー」

どちらかというと俺のご褒美のような気がするが、メイがそう言うのであれば否やはない。首筋と腰にケーブルを接続しているメイ

の正面に回り、彼女を抱きしめる。ああ、なんでメイはメイドロイド――機械なのにこんなに柔らかくて温かくて良い匂いがするんだろうな。とても不思議だ。
尤も、体重に関しては相応なので、俺では持ち上げられないほどに重かったりするのだが。こうして抱きしめているとそんなことは微塵も感じられないけど。

「ありがとうございます。これで一ヶ月はは稼働し続けられます」
「一ヶ月も我慢しないでね？　いくらでもハグするからね？」

というかメイ、君は一応定期的にメンテナンスポッドに入らないといけない筈だろう。流石に一ヶ月は身体のどこかに不具合が出ちゃうぞ。
こうして日々のルーティンをこなしながら目的地へと向かっていく。傭兵稼業というのは実に移動時間というものが多い職業でもあるので、こうした日常というものが意外と大事なのだ。一歩間違えば爆発四散というとびきりの非日常に挑むために。

☆★☆

リーメイプライムコロニーでのパンデミック騒動の後、俺達は次なる目的地としてクリーオン星系に向かっていた。
クリーオン星系自体は然程特別な星系というわけではない。特に居住に適した惑星があるわけでもなく、しかしそれなりに交通の便が良く、鉱石資源が若干豊富。星系単位で見ればごくごく平凡な星系だ。問題は、このクリーオン星系がグラッカン帝国とベレベレム連邦の係争宙域にあるという一点である。
現在実効支配しているのはグラッカン帝国なのだが、元々はベレベレム連邦の領土――いや、星系を領土というのはおかしいか？　領域？　うん、領域だな。元々はベレベレム連邦の領域であったの

だ。だが過去に行われた二国間の戦争の結果、クリーオン星系を含む周辺星系のいくつかについてグラッカン帝国が支配権を得ることになった。
しかし、ベレベレム連邦は未だに捲土重来を諦めておらず、クリーオン星系を含むかつて失った星系に関してグラッカン帝国に返還要求を叩きつけ続けており、グラッカン帝国としては過去の戦争の末に正式に支配権を得たものとしてその要求を突っぱね続けている。結果、このあたりの星系は両国が常に小競り合いを続ける紛争地域となってしまっているというわけだ。
まぁ、俺達傭兵にとっては歴史的正当性なんぞはどうでも良い話で、重要なのはクリーオン星系を含む周辺星系が飯の種に事欠かない稼ぎ場所であるということだ。そして、良い稼ぎ場所であるということは、危険な場所でもあるということでもある。
本来の俺達のターゲットは民間船を襲う宙賊で、基本的には大国間の紛争には極力関わらないようにしてきた。何故なら、実入りも大きい分危険も大きいからだ。
宙賊相手なら安心安全なのかというと決してそういう訳では無いが、紛争宙域で正規軍や敵地に潜入してきた非正規部隊と戦うことに比べたらその危険度は比べるまでもない。改造民間船に無理矢理武装を乗っけた連中よりも、純粋な戦闘艦にしっかりとした装備を積んだ連中のほうが危険なのは火を見るより明らかだ。
金を稼ぐのにそんなリスクを背負う必要はないので、極力ご遠慮願いたいというのが本音なのだが……今回ばかりはそうもいかない。グラッカン帝国を治める皇帝陛下直々に帝国航宙軍に俺を引っ張ってこいと勅令が下ったらしいからな。なんということをしてくれたのでしょうって感じだ。

「セレナ大佐も大変だな」
「こうして顔を合わせた以上は一蓮托生です。キリキリ働いてもらいますからね」

クリーオン星系にある帝国航宙軍の物資集積基地に到着して三十分足らずで再会したセレナ大佐はそう言って笑みを浮かべて見せた。口は笑ってるけど目が笑ってないんだよ、目が。絶対に俺達がまだ知らない厄介事の種があるな、これは。畜生、あのファッキンエンペラーめ。いつか何かしらの形で一泡吹かせてやるからな！

#431　近況報告（前書き）

成し遂げたぜ（　ω　）（AC6、3周クリア

#431　近況報告

帝国航宙軍クリーオン星系物資集積基地――という字面だけを見ると、物資コンテナが沢山積み上がっている平和な基地という印象があるかもしれない。しかし実際のところどうかというと、これはもう要塞である。宇宙要塞である。

この物資集積基地はクリーオン星系に存在する唯一のステーションであり、周辺星系に展開している帝国航宙軍や貴族諸侯の軍に対する補給任務を担っている重要拠点である。当然ながら、敵対するベレベレム連邦軍から見た場合には重要な攻略目標となるわけで、それに対抗するために大変に強力な武装化を施されているというわけだ。

まぁ、物資集積基地に関してはこのクリーオン星系だけでなく周辺星系にも点在しているので、真っ先に狙われる基地なのかというとそういうわけでもないのだが。

「なんというか、物々しいところですね」

俺達が乗っている車両の後部座席の窓から外の様子を見たミミが率直な感想を述べる。

物資集積基地に辿り着いてすぐにセレナ大佐にお出迎えされた俺達は、彼女が用意していた軍事車両で彼女の船である戦艦レスタリアスに向かって移動していた。

「そりゃガチガチの軍事拠点だしね。民間人とか殆どいないんじゃない？」

同様にチラリと車外に視線を向けたエルマがミミの発言に応える。

補給と休暇のために寄港した軍人向けの店というのも殆ど無いみたいだものな。前にエッジワールドに行った時に乗った大型補給母艦のドーントレスには民間人も沢山乗っていたし、それに応じて色々と羽目を外せる店舗もあったりしたんだが……この物資集積基地にはそういったものは無いように思える。

「ここは前線に近いですからね。民間人を入れると相応に鼠も入り込むことになりますから」

俺達と向かい合って座っているセレナ大佐がそう言いながら肩を竦めて見せる。確かに、彼女の言う通り民間人が容易に出入りできるような環境だと、ベレベレム連邦の工作員なんかもポンポン入ってきそうだものな。前線に近い物資集積基地にそんなのが入り込んだ日には大変だ。補給物資にＢＣ兵器やら爆発物やらを仕込まれたらたまらない。

「で、わざわざ速攻で俺達をエスコートしに来たのにはどんな理由があるんだ？」

「その話は船に着いてからしましょう。それで、あの後またクルーが増えたりしたんですか？」

「なんでだよ……別に増えてないよ。そんなポンポコクルーなんて増えるもんじゃねぇよ」

「三年後に増える予定はあるけどね」

「三年後？　どういうことです？」

「十二歳の女の子にそういう約束をですね」

「うわぁ……」

セレナ大佐がいかにもドン引きしましたという目を俺に向けてくる。流石に温厚な俺もこれにはキレそうですよ？

「身体も出来上がっていない子供を連れて行くのは無理だから穏当に断っただけだ。というか、多感な時期の女の子なんだし、三年も経つうちにそんな約束忘れて他にやりたいことを見つけるだろ。それを見越しての対応だっての」
「それでも三年後には迎えに行くのよね？」
「口約束でも約束は守る主義だ。様子を見に行くくらいするのは当たり前だろ。なんだかんだでリンダには身体を張ってもらったんだからな」

件の十二歳の少女――リンダはリーメイプライムコロニーでパンデミックを起こしていた菌に対する強い耐性を持っており、特効薬を作るのに身体を張ってもらったという経緯がある。それに伴ってコロニーを治める貴族から報奨も頂いたので、その分け前を与えもした。ティーナと縁のある娘でもあるし、三年後に様子を見に行くくらいの義理は果たしても良いだろう。

「あの様子だとしっかり三年間ヒロ様を待っているんじゃないかと思いますけど」
「そんなことないだろ。リンダとはそんなに接点も無かったし、三年もあれば俺のことなんて忘れるさ」

そう言うと、ミミとエルマだけでなくセレナ大佐まで俺に呆れたような視線を向けてきた。どうしてだよ。

「オーケー、わかった。この話題が俺にとってアウェイなのはよくわかった。だから他の話をしよう。セレナ大佐、今回ここに来るにあたってミミが酒とかの嗜好品の類を仕入れてブラックロータスに積んできたんだが、捌くのに協力してくれないか」
「ああ、ブラックロータスに積んできた程度の量であればうちの艦隊で引き取りますよ。幸いなことに予算はありますから」

「それは嬉しいが、良いのか？」
「前線では予算があっても好きなだけそういったものを手に入れられるわけじゃないんです。補給物資の割当量は決まっていますからね。貴方達から調達する分には軍の割当量は関係ないので」

セレナ大佐が悪い笑みを浮かべる。それで良いのか、帝国軍人。いや、割り当てられている予算を使って正当な値段で物資を手に入れる分には別に何の問題もないのか。明らかに不当な値段で俺達に利益を供与したり、逆に俺達から搾取するような形になったほうがよくないんだな、これは。

「それじゃあこの件に関しては後でそっちの補給担当と話をすれば良いか？」
「そうしてください。ミミさm……ミミさんの端末に連絡が入るようにこちらで調整しておきます」
「はい、セレナ大佐。よろしくお願いします」

今ミミのことをミミ様って呼びかけたな。セレナ大佐はミミが皇帝陛下の姪孫であることを知っているからな……思わず呼びかけて、慌てて言い直したな。

そんなやり取りをしている間に車両がレスタリアスが停泊しているエリアへと到達し、俺達は車両を降りてレスタリアスに乗艦する。ちなみに、今回レスタリアスに出向いているのは俺とミミ、それにエルマの三人だ。メイはブラックロータスの掌握ともしもの時のために居残ってもらっていたほうが安心だし、整備士姉妹とショーコ先生は足を運ぶ理由が無い。そしてクギはいざという時にテレパシーで俺と情報をやり取りするために残ってもらっている。俺もクギに教えてもらって簡単なテレパシーくらいは使えるようになったからな。もっとも、まだクギとしかやり取りができないから、完璧に習得できたってわけじゃないんだが。

「……」

無骨な軍事車両から降り、エレベーターのような大型のタラップを使ってレスタリアスのハッチへと移動していると、セレナ大佐がジロジロと俺の格好を頭の天辺からつま先まで眺めてきた。

「なんだよ」

「ちょっと身嗜みをチェックしていただけです。代わり映えのしない格好ですが、ちゃんと略章ではないゴールドスターと銀剣翼突撃勲章をつけているのは褒めてあげます」

「そいつはどうも」

褒められている気が全くしないが、一応礼を言っておく。一応軍事施設だからな。多少のハッタリにはなるだろうと思って結晶生命体とやり合った時に貰った勲章はちゃんとつけてきたんだよ。これをぶら下げて剣を腰に差していれば相手がよほどのパッパラパーでない限りそうそう絡まれることも無いだろうからな。

俺の知っている帝国航宙軍の兵隊ってのは誰も彼も真面目な堅物って感じの奴が多いんだが、そんな奴ばかりじゃないってのもわかってるからな。事前にトラブルを避けられるならそれにこしたことはない。

それに、この物資集積基地には帝国航宙軍の兵士だけでなく招集されている諸侯軍の連中もいる。諸侯軍というのは貴族が自前で用意している兵隊連中だ。その殆どは普段は貴族が統治している星系内で治安を維持する星系軍として活動している連中であるはずだが、そんな奴らの中にも荒くれ者ってのは一定数存在する。中には軍隊というよりかは愚連隊といった方が適切な連中も存在するので、用心するに越したことはない。

そうだ、丁度良い。セレナ大佐にその辺りのことを聞いておこう。

「ところで前線というか、この基地の雰囲気はどうなんだ？　変な連中が幅を利かせていたりしないと助かるんだが」

何気ない話題を振ったつもりだったのが、俺の言葉を聞いた瞬間セレナ大佐の表情がスッと抜け落ちた。怖い。チビるかと思った。

「正にそれが船に着いてから話そうとしていたことです」
「なるほど。つまりあまりよろしくないってことなんだな」
「そういうわけでは……いやそういう……うーん」

セレナ大佐が難しい顔で言葉を濁す。本当に複雑な状況みたいだな、これは。つまり、その辺りが今回の厄介事の種ってわけだ。名前は忘れたが、見覚えのあるセレナ大佐の副官らしき女性士官も苦笑いを浮かべている。ロビットソン大尉のことはよく覚えているんだが、この人の名前はなんだったかな。

「率直に言うと、ちょっと我々とは因縁のある貴族が現在この基地を含めた周辺星系の防衛を担っているというか、有り体に言うと被害担当になっていまして」
「どういうことだよ……懲罰部隊的な感じで前線で磨り潰される担当になってるってことか？」
「ああ、その言い方は実にしっくり来ますね。正にそんな感じです。その貴族というのがイクサーマル伯爵です」
「へー……？　誰だっけ、それ？」

俺がそう言うと、セレナ大佐がコケた。ついでにエルマが深い溜息を吐いて、ミミと女性士官さんは苦笑いを浮かべた。女性士官さんはそれだけでなく頬を引き攣らせていたが。

「覚えていないんですか？　本当に？」
「いやまったく。聞き覚えがあるような気もしないこともないような……？」
「それって覚えてないってことですよね……？　コーマット星系で生物兵器相手に切った張ったしましたよね？　まさか忘れてませんよね？」
「ああ、嫌がる俺をセレナ大佐がテラフォーミング中の惑星に無理やり連れて行った時のことね。あの恨みは忘れてないぞ」
「そんな小さいことをいつまでも気にしないでください。その時に追っていたのだがイクサーマル家の人間だったでしょう？」

絶対に小さいことじゃないんだが？　あの経験のせいでニンジャアーマーを買う決意をしたんだが？　いや、まぁ今重要なことじゃないのは認めるけども。

「そういやそんな名前の不良貴族めいた何かを追い詰められるぜフィーヒヒヒってセレナ大佐が邪悪な笑みを浮かべていた気がするな」
「私はそんな品のない笑い方をしませんがっ！？」
「そうだったカナー？　よく覚えてないナー」

フシャー！　と怒った猫のように威嚇してくるセレナ大佐から目を逸らして誤魔化しておく。たしかそんな感じだったと思うんだが、興味がなかったし今後関わることもないと思っていたからあまりよく覚えていないんだよな。
しかし、そうなると俺とセレナ大佐の行動によって皇帝陛下あたりからお叱りを受けた貴族家がこの辺りで幅を利かせているってわけか。こりゃ厄介事だわ。そしてそんな場所にセレナ大佐と俺を放り込むあのファッキンエンペラーマジで許せねぇわ。

#432　密室での会合（前書き）

スターフィールドのためだけにＭｉｃｒｏｓｏｆｔに魂を売ります
（　，ω，　）

#432　密室での会合

「で、政治的なアレコレはセレナ大佐はともかくとして俺達の管轄外なわけだが……あのクｓ――偉大なる皇帝陛下は何を考えて勅令まで出して俺達をこんな場所に放り込んだんですかね？」
「私の前で皇帝陛下に対する暴言はやめてくださいね。立場上マズいので」

対宙賊独立艦隊の旗艦である戦艦レスタリアス――その中でも内装が豪華と言える船長執務室でティーカップを片手に持ったセレナ大佐がにっこりと笑みを浮かべながらそう言う。
確かに帝国軍人にとって皇帝陛下は敬意を払い、忠誠を誓っている君主なのだろうけれど、俺にとっては面白半分で俺を過酷な状況に放り込む愉快なクソジジイだからな。

「皇帝陛下の意図までは私にははかりかねます。単に賊退治の手腕を見込んで、というだけの話ではないと思いますから、恐らくは状況を動かすための一石として投じられたのでしょうけど」
「状況……状況ねぇ？　そもそもどういう状況なのかも今ひとつわかっていないんだが。この辺りが帝国と連邦の係争地帯かつ紛争地帯で、帝国側の兵站を脅かすために宙賊に偽装した敵方のコマンド部隊が暗躍してるんだろ。それとダレインワルド家にちょっかいをかけていた不良貴族がこの辺で磨り潰されて……」

ふと嫌な予感が脳裏をよぎる。この状況下で最悪の出目はなんだろうか？　と考えると自ずとあのクソジジイが期待していることが透けて見えてきた気がしたのだ。

「何か？」
「想像するのも嫌になるんだが、皇帝陛下は不良貴族の暴発を期待してるんじゃないかと思ってな。今この状況で起こりうる最悪のシナリオって件の不良貴族――イクサーマル伯爵家が連邦に寝返ることだよな？」
「いくらなんでもそれは。腐っても帝国貴族ですよ、イクサーマル伯爵家は」
「セレナ大佐には釈迦に説法かもしれないが、ありえないなんてことはありえないってやつだよ。特に戦場においてはタブーだろ？そういう可能性を『ありえない』って固定観念で無視するのは」
「それは……そうですが……」

セレナ大佐が絶句してしまう。俺にしてみれば追い詰められて懲罰的な意味で前線送りにされて、戦力やら何やらを磨り潰されるとなれば敵方に寝返るような奴が出てもおかしくないと思うのだが、帝国貴族的には考慮の外にするくらいありえない出来事らしい。

「貴族的には帝国を裏切って連邦につくってのはそんなにありえないことなのか？」

隣に座っているエルマに聞いてみる。

「そりゃ連邦に寝返ったら貴族としての地位も領地も失うことになるしね。伯爵家ともなれば保有する星系は最低でも五つ以上よ？領地から得られる税収だけで莫大な額になるし、それ以外にも帝国貴族としての特権は多いから普通は寝返るなんて発想は出ないわね」
「なるほど。誇り云々だけでなくそういう実利もあるからか。でもなぁ……こういう事態に俺が関わると大体ろくなことにならないし」
「その、半ば諦めているのはどうなんです？　もっとこう、覇気を持って逆境を跳ね返すとかそういう心持ちでいるべきなのでは？」

セレナ大佐が俺に咎めるような視線を向けながら根性論めいたものを叩きつけてくる。この人見た目は軍服よりもドレスが似合いそうな実に可憐な美人さんなのに、意外と体育会系というか頭の中身が筋肉なんだよな。

「今までの経験上、避けようと思って避けられるもんじゃないし……最初からそういうものだと覚悟を決めておけば、とりあえずパニックに陥ることだけは避けられる」

「諦観し過ぎでは？」

「学習していると言ってくれ。まぁ、政治方面の事情はなんとなくわかったよ。どっちにしろ俺達みたいないち傭兵にできることなんてないから、そっちで精々目を光らせておいてくれ。で、次に気になるのは宙賊どもの情報なんだが……まぁ宙賊なんかじゃないんだろうけど」

「やけに装備が良いのと、動きが組織立っていて巧妙であるということ以外は宙賊で間違い有りませんよ。実際、何人か捕らえましたがやはり宙賊です」

「あーはん？　つうことはスポンサーになってるか、雇って指揮を執ってるか、あるいはその両方ってとこか」

「そんなところでしょうね。プロとしてはどういった手を打ちますか？」

「特別な方法はないな。ひたすら叩いて叩いて叩きまくって、割に合わないと思わせるのが一番だ。結局は宙賊だからな。上手く行かなくなれば勝手にスポンサーと仲違いをして関係が自然消滅する。可能であれば宙賊を指揮している敵のコマンド部隊を叩けると良いんだけどな」

敵がよほどの間抜けで無い限りはこまめに指揮所を動かしているだろうからな。もしかしたらブラックロータスと同程度か、少し大

きいくらいの母艦を運用しているのかもしれない。ステルス性の高い母艦というのはゲリラ戦の移動指揮所としては大変に有用なものだからな。小惑星やデブリに紛れてしまえば発見も困難だし。

「最適なのは斬首戦術ですか……実行できるかどうかは運次第ですね」

「まぁな……というか兵站を狙われてるって話だが、帝国航宙軍は警戒網を敷いていないのか？　前線に近い場所なのに」

「クリーオン星系を含めた紛争宙域ならともかく、その更に後方となると前線ほどの警戒網は敷かれていませんよ。奴らが活動しているのはここよりも後方のザイラム星系やダオムン星系、ボークス星系などです」

「ああ、なるほど。ここから前線への兵站が攻撃されているんじゃなくて、ここに来るまでの兵站が攻撃されているのか……考えてみればここから前線に物資を運ぶのは帝国航宙軍だものな」

クリーオン星系の物資集積基地から更に前線への物資を輸送するのは当然ながら帝国航宙軍の輜重部隊で、それには相応の護衛がついている。流石にいくら装備が充実しているとはいえ、そんな輜重隊が宙賊に襲われるのはおかしいなとは思っていたんだ。なるほど、ここより更に後方の紛争宙域直近の星系に連中が出没しているのか。

「そうなると……厄介だなぁ、それは」

「わかりますか」

「わかるよ」

「わかるわよ」

「わかります」

セレナ大佐の問いに俺達三人は口を揃えて答える。何が厄介かというと、宙賊どもの行動範囲がさっぱりわからないという点だ。ク

リーオン星系よりも後方というか、国境の内側の星系はどの星系も三つから四つのハイパーレーン突入口を有する星系ばかりなのだ。前線に近いということで傭兵などの武装した船の行き来が多いし、それが賞金のついていない新品の戦闘艦だったりするとそいつが宙賊なのかどうかもわからない。それ以前に装備が良いということであれば、賞金がついていてもすぐにはわからないような欺瞞装置を積んでいる可能性もあるからなぁ。

「武器や資金の流入ルートは押さえられないのか？」
「紛争宙域にハイパーレーンの安定化装置なんて置けませんからね」
「あー……まぁそうか」

星系と星系を結ぶ亜空間路であるハイパーレーンというモノは大変に便利なものではあるのだが、その亜空間をより早く、確実に行き来するためにはそれなりの用意というか、下準備というものが必要だ。曲がりくねっている上に場所によって流速が不安定な大河を下るよりもしっかりと整備された水路というか運河の方が効率的かつ安全に船を進ませられるのと同じように、ハイパーレーンも然るべき場所に安定化装置や亜空間ビーコンといったモノを設置することによって移動を効率化することが可能なのだ。

反面、そういったものを設置してしまうとハイパーレーンに突入できる座標や、逆に行き先の星系でワープアウトする座標がある程度固定化されてしまう。つまり、出待ちが可能になってしまうのだ。これは防衛側にとっては大変有利に働いてしまう。尤も、これは双方に設置されて初めて効果を発揮するものなので、紛争宙域などでは攻め手によって真っ先に無効化されるわけだが。

そしてこれらの装置が機能しなくなることによってハイパーレーン航行にかかる時間は長くなってしまうが、ワープアウト座標はかなり広い範囲でランダムになる。恒星系外苑であることとある程度の方角は決まっているが、範囲が本当に広い。超光速ドライブを使

用しても数時間かかる範囲でばらけるようになる。これは攻め手にとってかなり有利に働くし、密輸業者や宙賊にとっても行き来が楽になるというメリットがある。侵入される側にとってはあらゆる意味でデメリットだが。

「哨戒部隊も目を光らせていますが、完全にはカバーしきれないのが現状です。あちらも今のところは嫌がらせに徹していますから、対処がどうしても後手後手になってしまって……」

「抜本的な対処をしないと細かい出血を重ねさせられるだけになると思うけどな……まぁそれは俺が考えるようなことじゃないか。俺達は俺達の仕事をするまでだ。大佐も別に前線で戦えって言われているわけじゃないんだろ？」

「そうですね。うちの艦隊の任務は兵站を叩いて後方を撹乱している賊の討伐です」

「それじゃあお互いに幸せになるために任務に邁進するとしましょうや」

「自信満々に言いますね。何か考えが？」

「無いこともない。相手がいきあたりばったりに動いてるわけじゃないってんならやりようはある」

そのためにはまず情報収集だ。俺の勘が正しければ尻尾を掴むことはできるはず。

＃４３３　状況整理と方針提示（前書き）

明日は！　スターフィールドの発売日！―（∵３」∠）―

#433　状況整理と方針提示

今回の件の何が問題なのか？　ということでセレナ大佐から話を聞いてみる。俺があのクソ皇帝の勅命で投入されたってことは、奴のお楽しみ以外にもきっと意味はあるはずだからな。ただの道楽でこんなことはすまいて。流石に。

で、セレナ大佐に聞いてみると彼女は自称宙賊どもの活動を制限し、可能であれば撃滅したいのだが、奴らが活動している星系は出入りできる場所が多く、対宙賊独立艦隊一艦隊だけでは網を張って封鎖することが不可能であるし、戦艦や巡洋艦などの足の遅い艦を擁しているので速度を求められる追跡などが難しいということであった。

参考までに今までの話を聞いてみると、惜しい案件は複数あった。救難信号をキャッチして現場に急行したが到着した時には全て終わっていただとか、超光速航行中の怪しい艦隊を発見したが戦艦や巡洋艦を擁する対宙賊独立艦隊よりも相手の方が足が早くて追いついてインターディクトをかけることすらできなかっただとか。

「案の定というかなんというか、戦艦と巡洋艦が足を引っ張ってるな」

「あまり意地悪を言うと泣きますよ？　良いんですか？　大声で泣きますよ？」

「どういう脅し方だよ……別に使い途がないわけじゃないから。というわけで俺が考えた作戦を伝授しよう」

「一応言っておきますが私は帝国航宙軍の大佐で、それに相応しい戦略・戦術レベルでの軍事的知識を持っていますし、相応の教育を受けていますからね……？」

セレナ大佐がジト目を向けてくる。その背後で控えている彼女の副官殿も俺に興味深げな視線を送ってきている。それはそう。彼女達は軍事のプロで、佐官に上り詰めたりその副官になったりするほどのインテリだ。アカデミーで学んだわけでもない傭兵如きに作戦を伝授などできるのか？　と思われても、まぁそれは妥当な疑問であると言わざるを得ない。

「その軍事的な知識や教育が常識だとか定石だとかそういったものを作って思考の自由度を狭めるんだ。もっと柔軟に、単純に考えれば良いんだよ」

「言いますね。では教えてもらいましょうか、貴方の考えた作戦というやつを」

「つまりだ。一艦隊で手が回らないなら戦力を割って分艦隊を作れば良いんだよ。そうすれば網も晴れるし、擬似的にチョークポイントを作ることも可能だろう？」

「……なるほど？　でも、それは……いや……？」

俺の言葉を聞いたセレナ大佐が口元に手を当てて考え込む。きっと彼女の生体強化された頭脳が超高速で回転を始めているのだろう。

つまりアレだ。問題は連中が自由に動ける範囲が広過ぎるのと、足の速さが違い過ぎることの二点なのだ。そこで足の遅い戦艦や巡洋艦を小分けにしてハイパーレーン突入口に配置し、自称宙賊どもが他の星系へと移動するのを阻害すると同時に、多星系からジャンプアウトしてきた艦隊をブロックする。それだけで奴らの行動範囲を大幅に制限することができる。

ハイパードライブの起動には超光速ドライブの起動とは比べ物にならないほどに時間がかかるから、自称宙賊どもが星系内から超光速航行でハイパードライブ突入口にワープアウトしてきてからハイパードライブを起動してハイパーレーンに逃げ込む前に戦艦や巡洋艦でスキャンして撃破することが可能だし、逆にハイパーレーンか

らジャンプアウトしてきた艦に対してはスキャンを強制して、それを拒否したり無視したりして超光速ドライブを起動しようとした艦には問答無用で主砲の大口径レーザー砲をぶちこんでやれば良い。
帝国航宙軍の戦艦や巡洋艦の主砲を食らって無事でいられる小型、中型艦なんてのはまずいない。というか、クリシュナでもハイパーレーンから出たところを帝国航宙軍の戦艦や巡洋艦に出待ちされたら詰む。遮蔽も無ければ即座に距離を詰めることもできないような状況では主砲の射撃から逃れる術は無いからな。
斉射を喰らえば最低でもシールドは一撃でダウンさせられるだろうし、シールドが完全にダウンすれば超光速ドライブを起動することもできなくなる。シールド無しで超光速航行中にデブリと衝突した場合致命的な損傷が避けられなくなるため、シールドがダウンした状態ではセーフティが働いて超光速ドライブが起動できなくなってしまうからな。

「あの、艦隊戦力の分散配置というのは帝国航宙軍の戦闘教義上禁忌なのですが……？」
「宙賊相手には役に立たない。そんなものは投げ捨てろ。その戦闘教義ってのは対ベレベレム連邦だとかの星間国家軍対星間国家軍を想定したものだろう？　相手は軍の運用基準で言えばフリゲート一隻とコルベット二隻でも対処できるような小勢なんだぞ」

副官氏が発言を求めるように片手を小さく挙げて進言してきたが、俺はそれを一蹴した。俺達は普段傭兵基準で大まかに小型艦、中型艦、大型艦、母艦などと戦闘艦を区別しているが、軍の運用基準で言えば中型艦以下は全てコルベット判定だし、母艦や大型艦はフリゲート艦だとか駆逐艦といった判定になる。どちらも軍用艦としては最小か、そのひとつ上くらいのサイズの艦となるだろう。小型艦の一部はもう軍用艦というより艦載戦闘機枠だしな。
まぁそれは今はいい。重要な問題ではない。問題は、セレナ大佐

までもがその戦闘教義に引っ張られて艦隊戦力を小分けにして運用するという発想が出てこなかったことである。
いや、まぁ多少は理解はできる。この世界での軍対軍の戦闘というのはどれだけシールドや装甲が分厚くて砲の威力が高い艦の頭数を揃えるかというものだからな。
レーザー砲というものは宇宙空間においては特に射程が長く、命中力もほぼ百発百中と言って良い代物だ。武器そのものの威力やシールドや装甲の性能に圧倒的な差がない限りは基本的に頭数が多い方が勝つことになる。そうなると、艦隊運用上というか戦闘教義上で戦力の分散配置が禁忌となるのも当然である。何せ頭数が少ない方が各個撃破されるわけだから。

「前線に近い宙域で戦力を分散配置するのは少々怖いですが、貴方の言うことは理解できました。実行は可能ですし、効果もあるでしょう。あとはうちの駆逐艦以下の船で星系を洗っていって、最終的に網を狭めて追い込むわけですね？」
「そうだな。狩っていけばどこかのタイミングでクリティカルな情報も得られるだろうから、そうなったらとっとと頭を潰しても良いだろう」

撃破した自称宙賊艦からデータストレージを引っこ抜いて解析するなり、自称宙賊を捕らえて尋問するなりしてしまえば自称宙賊どもを指揮している連中が隠れている場所もそのうち割れる。そいつらを潰してしまえば組織立った後方撹乱も終わらせられるに違いない。もしかしたらもっと厄介なことが判明したりするかもしれんが。
「あとは網を張る位置の選定だな。そもそも網を張っても中に獲物がいないんじゃ話にならん。今までに遭遇した宙域や被害が出た宙域、行方不明になっている商船の位置なんかを洗って……って感じの情報分析はそっちの方が得意だろ」

「そうですね。それが終わったら貴方達にも働いてもらいます」
「どうぞご随意に。そういう連中を追いかけ回すのには慣れてるんでね」

とはいえ、今回は連中の装備が良いという話だからあまり油断もできないけどな。まぁ、エルマのアントリオンがいれば、足の遅いブラックロータスやセレナ大佐の対宙賊独立艦隊の分隊が現場に到着するまでの足止めには不自由はしないだろう。船に戻ったらその辺りの打ち合わせをエルマやメイとしっかりしないといけないな。

☆★☆

セレナ大佐との初回のミーティングを終えた俺達はブラックロータスへと戻り、クルー達を集めてミーティングの内容を共有した。

「なるほどなぁ。つまりうちらのやること自体はいつもと変わらんってことやね」
「そうなるな。装備は多少良いようだから注意は必要だが、やること自体はいつもと変わらん。二人は忙しくなるだろうけど」
「装備が良いならそうなりますね。頑張ります」

ウィスカが自分の胸の前でぎゅっと拳を握り込んで意気込む。俺達の懐がどれだけ潤うかは二人にかかっているところもあるので、ぜひ頑張ってもらいたい。

「うーん……気になったのだけど、帝国航宙軍は何故こういった敵少数戦力の浸透に対応する戦術を持っていないのだろうねぇ？」
「効果が薄いからどの宇宙帝国もこんな手を使うことは殆どないんだよ。後方撹乱って言っても民間からの嗜好品の類の補給が若干滞るだけで、帝国航宙軍が担っている兵站そのものを破壊するほどの

ものじゃない。それが行えるだけの戦力を前線を超えてこちらに浸透させるのは不可能だからな。できて精々嫌がらせ程度にしかならない」

実際、被害に遭っているのは嗜好性の高い食品などを前線に運ぶ民間船ばかりで、前線の維持に必要な武器弾薬や食料品などの補給物資を輸送する帝国航宙軍の輜重艦隊は襲撃されていない。ベレベレム連邦はそれなりのコストを払っている筈だが、その成果は前線に届く嗜好品が若干減って兵士達がほんの少し苛ついたりする程度のものだろうと思う。

「なら、なんでベレベレム連邦はそんな手を打ってきたんだろうねぇ？」

「それは奴さんにしかわからないだろうなぁ……何が狙いなのかを調べるのも含めて、この件をまるっと解決するのがセレナ大佐の任務なんじゃないかと俺は思うね。実際のところ、セレナ大佐の対宙賊独立艦隊の任務は後方を撹乱する自称宙賊の討伐で、前線で起こっているベレベレム連邦との小競り合いとは無関係というか、そっちの頭数には入れられてないっぽいし」

これはミーティングの後の雑談というかセレナ大佐の愚痴で直接聞いたことなので間違いない。前線に来たのにうちの任務は後方撹乱を企てるチンケな連中の相手だけで、前線で戦っている同僚連中と挨拶した時には『所詮は人気取りのためのお飾り艦隊ですなぁ』みたいなことを遠回しにネチネチと言われたとかなんとか。大佐殿の機嫌があまり良くなかったのもその辺が原因だろうな。

「ぶっちゃけこの件とイクサーマル伯爵家の不穏なアレが繋がっているかどうかもわからんし。俺はイクサーマル伯爵家が裏切ったりするんじゃないかと今でも疑っているけど、セレナ大佐もエルマも

それだけは絶対に有り得ないって言うしな」
「そりゃそうよ。いくら追い詰められて落ち目になっているとはいえ、イクサーマル伯爵家が帝国そのものを裏切るメリットなんて一切ないんだから」
「だとさ。まぁ因縁のある相手だから何かしらの嫌がらせを受けたりする可能性はある。ただ、その場合はセレナ大佐の名前を出しても良いって言われたから」
「私達は傭兵だけど、ここから暫くはセレナ大佐の指揮下に入ることになるわ。立場上はね。だから、もしイクサーマル伯爵家の連中が私達にちょっかいを掛けたら、それは同時にセレナ大佐に喧嘩を売るってことにもなるわけ。だからそうそう手出しはしてこないと思うわ」

こういう貴族方面の知識というか立ち回りとか考え方については本当にエルマは頼りになるよな。いや、他の方面でも頼りになるんだけども。

「我が君、今回は我々も宙賊を捕縛するのでしょうか？」
「あー、まぁ生きていたら捕縛するのも吝かではないな。情報源は多ければ多いほど良いし。それがどうかしたか？」
「いえ、もし尋問などもするのであれば此の身がお役に立てるかと。少し無理をすることになりますが、手早く知っていることを喋らせることもできますので」
「ああ、なるほど……その時は頼む」
「はい！」

クギが頭の上の狐耳をピンと立てながらふんすふんすと意気込む。確かにクギのサイオニック能力を使えば拷問したり、素直になるお薬を使ったり、機械を使って脳味噌の中身を直接見たりするよりも手早く『自発的に』知っていることを吐かせることも可能だろう。

俺もその手の攻撃から自分の心を守るための精神防壁の構築を習得するためにクギから何度もその術を喰らいまくったからな……アレで色々と自白させられたからな、面白がったクルー達に。あの術をマスターしたらいつか俺も同じ事をしてやろうと思う。オラッ！

催眠ッ！　って感じで。

もっとも、あれはなかなかに高度な術であるらしいし、俺に習得できる日が来るかどうかはわからんのだが。どうも俺のサイオニック能力の素質は時空間操作系と念動力を始めとした物理的なパワーを発揮する系が強いようで、クギが得意とする精神操作系の素質は無いこともないが、他二つに比べると若干劣るらしい。

まぁ、今のところ完全に使いこなせる能力なんてないんだけどな！　息を止めると時間の流れが鈍化するのは具体的にやろうと思ってやってるわけじゃないし、数奇な運命を引き寄せるヤツは意識して使ってないから。精神防壁は意識すれば使えるようになったし、ちょっとした念動力は使えるようになったけども。念動力も極めると触れもせずにパワーアーマーを着用した兵士をぶっ飛ばしたり、引き裂いたり、拳大に圧縮したりできるらしいからな。それなんて化け物？　って感じだけど。

「とりあえず、今後の動きに関してはセレナ大佐の準備が整うまで待機ってことで。情報の再分析と編成に少し時間がかかるそうだから」

俺の結論に皆がそれぞれ了解の意を示す。メイは俺の後ろに控えて何も喋っていないが、何も喋っていないということは特に突っ込むような点も無かったということだろう。

それならそれでよし。出撃に備えて暫くの間英気を養うことにしますかね。

＃４３４　猟犬に休む暇はない（前書き）

スターフィールドたのしいぃぃ―（∵３」∠）―（アヘ顔ダブルピース

#434　猟犬に休む暇はない

「おかしいなぁ……俺の予定では対宙賊独立艦隊の準備が整うまで暫くのんびりする予定だったんだが」
「あはは……クライアントからの命令じゃ仕方ないですよね」
「我が君、頑張りましょう。此の身もお手伝いしますので」

セレナ大佐との会談を終えておよそ半日後。俺達はクリーオン星系からほど近い場所にあるボークス星系で哨戒任務――というか見敵必殺の宙賊狩りを敢行していた。
つまり、ブラックロータスを中心として鶴翼の陣――三艦では鶴翼の陣というよりVの字だが――を組み、超光速ドライブを使って星系内をお散歩中ということだ。

『私達は再編成をしなければ動けませんが、貴方達は今すぐ動けますよね？　レスタリアスが陣取る予定の星系がありますので、露払いをしておいて下さい』

とのお達しがセレナ大佐から下ったためである。あの人は鬼か何かか？

『軍の予算も無限ではないのです。貴方達は時間単位で莫大な経費がかかる一流の傭兵なのですから、キリキリ働いて下さい』

とクライアントであるセレナ大佐に言われると、それはそうとしか言えないので大人しく彼女の言葉に従ったわけだが。クリーオン星系に到達し、セレナ大佐と会談を終えた瞬間から契約は成立しているわけだし。

帝国航宙軍が今回俺達に提示してきた報酬はまず基本報酬として三十日の従軍で１０００万エネル。それ以降は一日ごとに３０万エネル。それに加えて弾薬その他の補給費用は向こう持ち、撃破した船の鹵獲とサルベージも基本自由で、敵艦船の撃破報酬もある。

つまり、艦隊の再編成に時間がかかるからと俺達を遊ばせておくのは無駄が多いというわけだ。再編成をしている間に最前線で暴れてこいとか言われたわけでもないので、命令を拒否する理由もない。

「再編成している間は食っちゃ寝してるだけで金が湧いてくるぜヘッヘッヘとか思ってたのになぁ」

「あの……我が君、まさかとは思いますが、そのためにセレナ大佐に艦隊戦力の分散配置を提案したわけでは……ありませんよね？」

「その意図が一欠片も無かったと言ったら嘘になるけど、あれはあれで間違いなく有効な手だから。今回の案件で対宙賊独立艦隊が一塊で動くのは小魚を捌くのに鮪包丁を持ち出すようなもんだよ」

「なるほど、そうなのですね」

クギが少しだけホッとしたような声でそう言う。まったく、俺が私利私欲でセレナ大佐に献策をするんじゃないかと疑うなんて悪い子だ。あとで尻尾の付け根をトントンしてやる。

「しかし、見当たりませんね。宙賊」

「初めての星系で情報不足だから仕方ない。やっぱ一回ボークスセカンダスコロニーに向かうべき――お？」

その時、クリシュナの亜空間センサーが何らかの反応を拾った。内容は判然としないが、より性能の高い亜空間センサーを積んでいるブラックロータスなら内容まで拾えている筈だ。

「ヒロ様、救難信号だそうです。メイさんから連絡が入りました」

「オーケー。それじゃあメイに突撃指示を出して、エルマには状況を見てグラビティ・ジャマーの起動をするように伝えておいてくれ。クギ、戦闘準備だ」
「はい！」
「はい、我が君」
「装備が良いって話だからな。気を引き締めていくぞ」

超光速ドライブの同期元となっているブラックロータスがゆっくりと回頭して救難信号の発信源へと進路を変える。よしよし。さて、装備が良い宙賊とやらがどの程度のものなのか見せてもらおうじゃないか。

☆★☆

ズドォン！　という轟音と共にワープアウトすると、まさに戦いの趨勢が決まる直前のタイミングであったようだ。襲われている輸送艦側の護衛艦で辛うじてまだ動けているのが二隻。襲撃側は中型艦二隻を含めた合計九隻が健在で、交戦宙域には少なくとも五隻以上の船の残骸が散らばっているようだ。

『救援か！？　手を貸してくれ！』
『はっ！　まずいところに来たようだな。護衛艦はたったの二隻で獲物が追加だ。野郎ども、やっちまえ！』

ワープアウトしてきた俺達を確認した二隻の護衛艦側からは協力要請が、そして九隻の襲撃艦側からは襲撃宣言が飛んできた。うん、襲撃者の諸君はブラックロータスを輸送艦か何かと誤認しているな。まぁそのために武装をコンシールド装甲で隠しているのだから狙い通りなのだが。

「こちらは傭兵ギルド所属のキャプテン・ヒロ。救援に入る」
『頼む！　おい、敵味方識別信号のコードを送れ！　今すぐだ！』

護衛艦から慌ただしく敵味方識別信号のコードが送られてきたので、それを受諾しながらこちらへと向かってくる四隻の襲撃艦を観察する。中型二隻、小型二隻の四隻か。まぁ、こっちが中型一隻、小型一隻だから倍の戦力をぶつけてくるのは妥当な判断だと言える。

「確かに装備が良いな」
「普通の宙賊の船じゃないですよね」

スロットルを徐々に開けてゆるゆると加速しながら敵艦の装備を目視で確認しつつ、ミミが行っているスキャンの結果にも軽く目を通す。船体は若干ボロいし古いが、ちゃんとした戦闘艦のフレーム。積んでいる装備も見る限りはまともな品。少なくともただ撃てるだけって品質ではなく、駆け出しの傭兵が装備していてもおかしくはない『普通』の品質の一品。船体と同様にボロいながらも装甲もちゃんとしていて、シールドもまともな品のように見える。

「この程度問題にはならんが、駆け出しには辛いだろうな。これは。さて、良い間合いだ。行くぞ」

敵の射程に入る直前で一気にスロットルを全開にしてスラスターを噴かし、間合いを詰める。

『うおっ！？　速いぞこいつ！？』
『撃て、撃て！』

襲撃艦が慌ててレーザーやマルチキャノンを撃ち込んでくるが、火力の集中が甘い。クリシュナのシールドにまともなダメージが入

る前に敵中型艦の至近距離にまで接近することに成功した。

「まず一つ」

フライトアシストをオフにしながらすれ違いざまにコックピット付近を目掛けて二門の大型散弾砲をお見舞いし、一隻目の中型艦を沈黙させる。いくらまともなシールドを張っていたとしても、至近距離ならば散弾砲はシールドを問答無用で貫通できる。コックピットに撃ち込めばそれで終わりだ。

「二つ」

フライトアシストを切って慣性で艦を移動させたまま姿勢制御スラスターを使って艦をグルリと回頭させ、慌ててこちらへと回頭しようとしている小型艦のうち一隻に四門の重レーザー砲の斉射を連続で浴びせて撃破する。ついでにフライトアシストをオンにして再度スラスターを噴かして間合いを再度詰める。反復攻撃は戦闘の基本だ。

『私に尻を見せるとは良い度胸ね』

『あぁぁァァーーーッ！？　やめっ、焼けっ！？』

が、小型艦のうちもう一隻は無防備な横っ腹からケツにかけてアントリオンの高出力レーザービームエミッターで灼かれて爆散した。残り一隻の中型艦は――。

『なっ！？　輸送艦じゃ――！』

コンシールド装甲を解除して武装を展開したブラックロータスの軍用レーザー砲十二門の火力は洒落にならない。まともなシールド

と装甲を装備している、ごくまともな中型戦闘艦を薄紙のように引き裂いてしまった。哀れな襲撃者は瞬時に爆発四散である。

『おい！　新手に向かってった奴らが殺られたぞ！？』
『クソッ！　ババ引いたか！？　死にかけは放っておいて逃げるぞ！』
『超光速ドライブの起動がキャンセルされた！？　エラーだと！？』
『どこに高質量の惑星があるってんだ！？　動け！　動けってんだよこのポンコツが！』

生き残りの護衛艦二隻と護衛対象と思われる輸送艦二隻を嬲っていた残り五隻の小型襲撃艦が逃げようとしたようだが、エルマがグラビティ・ジャマーを起動したようで超光速ドライブの起動に失敗している。よしよし、良い感じだな。

「残りも片付けるぞ」
「はい、我が君」

意味も分からず逃げるのに失敗した残敵の掃討は難なく終わった。逃げようとしてケツを見せながらフラフラと飛ぶ連中の掃討なんぞ鴨撃ちみたいなもんだ。

☆★☆

『本当に助かった。あんた達は命の恩人だ』
「貰えるもんはちゃんと貰ったから気にするな。達者でな」

場所は移ってボークスセカンダスコロニーである。護衛艦と商船を助けた俺達は戦場に散らばった襲撃艦の残骸からサルベージできるものを根こそぎサルベージし、ほぼコックピットだけを潰した襲

撃者の中型艦を曳航して襲撃されていた商船団と共にボークスセカンダスコロニーへと移動したのだ。
そして到着するなり護衛艦の船長からこうして感謝の通信を頂いていたというわけだ。彼は傭兵ギルド所属の傭兵で、依頼を受けてあの二隻の商船を護衛していたのだそうだ。流石に二隻だけでは護衛を続けられないということで、クライアントの意向でこのボークスセカンダスコロニーで船の修理と欠員の補充をしていくことになったらしい。

「俺達は特に補給の必要もないが……どうするかお伺いを立ててみるか」

俺達のクライアントであるセレナ大佐にも一応事の次第を報告しておいたほうが良いだろう。事前情報通りの質の良い装備をした宙賊のような何かと遭遇し、連中を撃破してデータストレージやコックピット以外無事な中型艦を鹵獲することができた。もしかしたら何か有用な情報が手に入るかもしれない。
ああ、ちなみに中型艦にはうちの戦闘ボットを突入させて内部の安全確保をさせておいた。生き残りは居なかったようだが、艦の内部には物資だけでなく襲撃者達の私物などもそっくりそのまま残っている。意外とそういうものから得られる情報で奴らや艦の出自がわかる可能性もあるので、馬鹿にならない。無事な小型情報端末やタブレットに重要な情報が入ってたりすることもある。
そして、サルベージした物資や装備、艦のスクラップを仕分けしたりレストアしたりする整備士姉妹は既に作業に入っている。戦闘ボット達まで作業に駆り出しているのには笑ってしまった。
何にせよまずはセレナ大佐に連絡だ。首輪付きになっている身としてはちゃんとお仕事したワンとご主人様に報告しないとな。

#435　傭兵ギルドボークス星系支部（前書き）

ちょっと朝方までスターフィールドやっててぇ……起きれなくってぇ……（ ，ω，　）（許して

#435　傭兵ギルドボークス星系支部

『犬も歩けば棒に当たると言いますが……』
「ワン」

ホロディスプレイの向こうでドン引きした様子のセレナ大佐に犬らしく一声鳴いてやる。

『本来はフラフラ動いていると災難に遭うからじっとしていろという意味の言葉なのですが……いえ、動けと言ったのは私ですけれど。それにしても貴方は持ってますね』
「俺のトラブルエンカウント率に関しては犬も歩けば棒に当たるというか犬自体が謎の引力を発揮して棒以外も飛んでくる感じだけどな。自慢じゃないが」
『本当に自慢になりませんね、それは。とりあえず鹵獲した艦のレストアに関しては後回しにして、ボークスセカンダスコロニーに係留しておいて下さい。合流次第内部を検めます』
「了解。サルベージしたデータストレージの類は引き渡せるようにまとめておく。ああ、メイに分析させても良いが、どうする？」
『引き渡してくれれば問題有りませんが、分析を進められるならば進められるだけ進めておいていただけると助かりますね』
「アイアイマム、そのように指示しておく」
『お願いしますね。できるだけ早く再編成を終えてそちらに向かいますので。それでは、通信終了』

ホロディスプレイ越しに敬礼をしてきたセレナ大佐に敬礼を返しつつ、通信を終了する。

「話は聞いていたな？　すまんがティーナとウィスカに今セレナ大佐と話した内容を伝えてくれ」
「わかりました！　メイさんにも連絡しておきますね」
「すまん、頼む。俺はエルマと……そうだな、クギも一緒に来てもらうか。傭兵ギルドに顔出しだ」
「はい、我が君。お供致します」

ショーコ先生は趣味の研究で研究室にこもりきりだろうが、一応声をかけておくか。行き先が傭兵ギルドとなると彼女の知的好奇心を満たせるようなものはないだろうから、多分ついてこないと思うが。

☆★☆

「ここがあの傭兵ギルドか！　いやぁ、遊園地に来たみたいでテンション上がるねぇ！」
「……」
「ごめんて」

傭兵ギルドの扉を潜るなりテンションを爆上げするショーコ先生を見たエルマが俺にジト目を向けてくる。いや、ショーコ先生がこんなにテンション上げてはしゃぐとは思わないじゃん……俺にだってわからないことくらいあるよ。

「おほん。ショーコ先生？」
「ん？　ああ、失敬失敬。私みたいな研究職だと傭兵ギルドに足を運ぶ機会なんて無くてね。セキュリティ部門や外商部門なら関わることもあったのかもしれないけど。まぁ、君の艦に乗ることになったのもそもそもは傭兵稼業への憧れみたいなものが原因だっただろう？　それまではホロムービーやホロ小説で憧れの気持ちだけを高

めていたわけでね？　ついに自分の足でこの場所に来たと思うとついね？」
「めっちゃ喋るじゃん……理由はわかったから、あんまりはしゃがないでくれると嬉しい」
「うんうん、わかったよ」

そう言ってショーコ先生がにっこりと無邪気な笑みを浮かべて見せる。普段はニンマリニヤニヤといった感じの笑顔を浮かべることが多い彼女にしてはかなり珍しい表情だ。しかしそれはそれとしてはしゃぐのはやめてほしい。今、この辺りの星系では普段は見ないような高性能の装備を手にした宙賊のような何かが跋扈している。ということはだ。

「チッ、女連れで……お気楽極楽かよ」
「見ねぇ顔だな。つうことはあの可愛い子ちゃん達も遠からず死ぬか宙賊どものおもちゃか。勿体ねぇ」

事務カウンターから遠い入口付近にはラウンジのようになっていた。

こういうスペースが設置されているかどうかはギルド支部にもよるのだが、このギルド支部にはそういったスペースが設置されていたのだ。流石にファンタジーものの小説とかに出てくる冒険者ギルドみたいに酒場まで併設されていることはないが。戦闘艦の飲酒運転ダメ、絶対。

で、そこにたむろしていた傭兵連中が俺達を見てなにやらぶつくさ言っているというわけだ。

「ヒロくん、彼らは――」
「はいお口チャックしましょうねー。どうもどうも、ちょっと通りますよ」

ショーコ先生がマズそうなことを口走りそうな気配を感じた俺は彼女の口を手で塞ぎ、羽交い締めにしてずるずるとカウンターへと引っ張っていくことにした。面倒事はノーサンキューである。

「アンタも慣れてきたわよね。トラブルの対処に」

「こんなことに慣れとうなかった……ショーコ先生、何を言おうとしたのかはわからんけど、強力な装備の宙賊のような何かが跋扈しているこのタイミングで仕事をしないでグダグダしてる連中は手酷くやられて船を修理しているだとか、メンバーに欠員が出てどうにか補充しないと仕事に出られないとか、身を謹んで嵐が過ぎ去るのを待っているだとか、そんな感じの連中だ。鬱憤も溜まってる。下手なことを言ってキレさせると絶対に面倒なことになるからな」

「ああ、なるほど。傭兵っぽいのになんでこんな場所で管を巻いているのかと聞こうとしたんだよ」

「着火の天才かな？」

ただでさえ鬱憤の溜まっているところに三人も綺麗どころを連れた新顔が現れて、その綺麗どころの一人が「ねぇねぇなんであの人達仕事も行かないで座ってるの？」なんて言った日には暴発必至である。ムカ着火ファイヤー（死語）である。

「ナイス判断だったわね……」

「悪いが二人とも、頼むぞ？　俺も頑張るけど頼むぞ？」

「あのねぇ、ヒロくん。私だって子供じゃないんだから、事情を察すれば気を遣うことくらいはできるよ」

冷や汗を垂らすエルマと、ニコニコしながら尻尾をフリフリしているクギに本気で頼み込んでいる俺を見たショーコ先生が頬を膨らませてプリプリと怒る。いや、最初にやらかすところだったじゃな

いですか。そういうのはやらかす素振りも見せない人にだけ許される反応だよ。
そういうわけで傭兵ギルドに入るなり落ち目の傭兵どもに絡まれるというハプニングのイベントフラグを華麗に叩き折った俺達は、大変に暇そうなギルド職員達がいるカウンターへと向かった。

「あら、華やかで良いですね。傭兵ギルドボークス星系支部へようこそ。ご依頼……では無いですよね？」

カウンターで俺達を出迎えたギルド職員のお姉さんがそう言って首を傾げる。剣を腰に差して女連れで傭兵ギルドに来るということは、護衛でも頼みに来た貴族のボンボンだろう……と最初は思ったが、どうも連れている女のうち少なくとも一人は傭兵のように見えるし、その女達を引き連れている男もよくよく見れば傭兵風の格好で、剣だけでなくレーザーガンも装備している。ということは傭兵だろうか？　といったところだろうな。

「依頼ではないな。顔出しと、情報収集だよ。上からの依頼でこの辺の掃除をすることになっててな」
「上から？　傭兵ギルドの方では何も……そういえば軍でそんな動きが――」

カウンターを指先でトントンと叩いて音を立て、口走ってはいけないことを口走りかけたギルド職員の口を止めてからそのまま自分の唇の前に指を立てる。こういったジェスチャーは違う世界でも共通だというのは少し面白いよな。

「まぁそういうわけでな。この星系と周辺星系で起こった襲撃の座標と、行方不明になっている船の予想航路なんかのデータが欲しいわけだ」

「事情はわかりましたが、そういったデータはそうやすやすと渡して良いものでは……」
「依頼自体はちゃんとギルドを通ってる。俺のＩＤで調べれば従事している依頼の情報も出るだろう？　知っての通り普通の状況じゃない。慎重に事を運びたいんだ」
「これは……？　っ！？　ちょ、ちょっと上の者と話してきますから、少々お時間を下さい」

俺のＩＤを確認したギルド職員のお姉さんが慌てた様子でカウンターの奥に引っ込んでいく。俺の名前もそこそこ売れてるからな。ただでさえプラチナランカーは少ないみたいだし、彼女が驚くのも無理はない。

「我が君、どうしてわざわざ足を運んだのですか？　そういったデータなら通信越しにでも請求できるのではないしょうか？」
「通信でのやり取りはどうしても傍受の危険性があるからな。宙賊連中ってのはそもそもそういうやり口が得意だし、今回のきな臭さを考えるとそういったやり方は漏れる危険性が高い。直接顔を合わせてデータをやり取りするアナログな方式の方が安全なのさ」
「流石に傭兵ギルド内で盗聴だのなんだのは無理だろうしね」
「そうなのかい？　職員も人間なんだから、魔が差す人もいるんじゃないのかなぁ？」
「ギルド職員に限ってはそれはないと思うわよ。背任なんてやらかした日には宇宙の果てまで追手がかかるって話だし」
「それは怖いねぇ」

帝国法との兼ね合いがどうなっているのかは知らないが、たまに背任行為をやらかしたギルド職員に生死不問で賞金がかけられているのを見ることがある。俺から見てもかなりの高額で、当然ながらそんな高額の賞金をちらつかせられた傭兵達は元ギルド職員を血眼

になって追いかけ回す。ギルド職員は普通の人であることが多いので、まず逃げられない。

「そういうわけでギルド職員の裏切りは警戒しなくて大丈夫。お、戻ってきたみたいだ」

先程のギルド職員のお姉さんが上司らしき女性を連れて戻ってきた。さて、何が聞けるかな。

＃４３６　情報分析と面白い人達（前書き）

船作るの楽しい！（　，　３，　）

#436　情報分析と面白い人達

「本来はあまり直接的なデータのやりとりというのはしていないのですが」
「ですが？」

ギルド職員のお姉さんが連れてきた上司のお姉様にそう聞くと、彼女は軽く溜息を吐きながらカウンターの上に小さなデータチップを差し出してきた。小型情報端末にも対応しているデータ媒体だ。

「相手がプラチナランカーなら話は別です。どうぞ。ただ、生のデータと分析中のデータになりますので、このままでは役に立てるのは難しいですよ？」
「そこはこっちで分析するから大丈夫。うちのオペレーターは優秀なんでね」

そう言いながら俺はデータチップを小型情報端末に挿入し、データに軽く目を通す。
オペレーターとして一人前になったミミはこういった情報を分析して宙賊の活動範囲やねぐらの位置を特定するだけのスキルを身に着けている。いざとなったらメイもいる。なんとでもなるだろう。まぁ、この辺りの分析というかあたりをつけるのは俺も得意なんだが。

「ははぁ……なるほど？　この感じだと、奴らのねぐらはもう一つお隣のザイラム星系っぽいな」

データをざっと眺めてそう言うと、ギルド職員のお姉さんと上司

のお姉様が目を丸くして俺の顔を凝視してきた。なんだよ、その反応は。いきなりガン見されると引くんだが。

「キャプテン・ヒロはデータ分析にも明るいのですか？」

「いや、分析なんてそんな難しいことはできないが。経験と勘みたいな？　ほら、ここととここで襲撃が起きてて、このルートを通ろうとしている商船が何隻か行方不明になってるだろ？　で、この二つの襲撃は未遂で、星系軍が出動してる。それはこの消えた商船がこの辺りを通る時間とほぼ同じで、この襲撃未遂は囮だな。こっちで星系軍を引き付けて、ここで仕事をしてるんだ。で、この星系軍は本来この後の時間にザイラム星系へのハイパーレーン突入口付近で警備する予定だったのが、この襲撃のせいで配置につくのが大幅に遅れてる。ザイラム星系側でも同じような星系軍の艦隊が介入する襲撃未遂が起きていて、僅かな時間だが双方の星系のハイパーレーン突入口付近の警備が手薄になってる。ただ、ザイラム星系側で行方不明になってる船はない。ということでこの一連の襲撃未遂事件と消えた商船の関連性が判明するわけだ。ついでに仕事をしたのがボークス星系で、その上がりを持った連中がザイラム星系に移動していることも示唆してる」

端末から小型のホロスクリーンを立ち上げて宙賊の動きを解説する。

「で、同じような流れの囮襲撃と消えた商船がこれで一つ、これで二つ、これで三つ。つまり連中はこの流れでの襲撃手段を確立してるってわけだ。で、ここからわかることは少なくとも宙賊にボークス星系軍とザイラム星系軍の巡回ルートがバレてるってことと、このルートを通る商船のルートを特定する手段を持ってるってことの二つだな。内通者が情報を流しているのか、情報が流れてくるように何かしらの細工をされてるのかはわからんが、確実に漏れてる。

まぁそこの原因追求はどうでもいい。俺達にとっては重要な問題じゃない。重要なのは、これを逆手に取れば奴らを叩けるってことだ」

と、そこまで解説したところでギルド職員達に視線を向けると、二人とも口を半開きにしてぽかんとした表情を俺に向けているところであった。おい、興味がありそうだったから折角解説してやったのに、ちゃんと聞いてたのか？　というか、妙齢の淑女が二人揃って口を半開きにして固まるんじゃない。せっかく二人とも結構な美人さんなのに台無しだぞ。

「いや、恐れ入ったねぇ。ヒロくん、もしかして科学者としての素質があるんじゃないかい？」

「まさか。俺は頭を使うのはそんなに得意じゃないよ。これは経験則による職人の勘めいた何かだし、科学的なあれこれとか統計学的なあれこれとか数字的な裏付けがどうのとかそういうのは全く無いから。多分合ってるだろうけど」

「ヒロってたまに変なところで変なスキルを発揮するわよね」

「変じゃないが？？？」

ショーコ先生とエルマの発言に対応していると、上司のお姉様が手を上げて発言を始めた。

「いえ、あの、すみません。今のもう一回、もう一回聞かせてもらっても良いですか？　というか記録させてもらっても良いですか？　今後の参考に」

「えぇ……？　あまり時間は取られたくないんだが」

何か凄い熱量で頼み込んでくる上司のお姉様の熱量に思わずドン引きする。面倒事は御免なんだが。

「少しだけ、少しだけですから。ほら、データをお渡しするわけですし、そのお返し的な意味で。どうかお願いします」
「確かにここまでのデータをまるっと傭兵ギルドに提供してもらうのは通常の範囲を超えた支援かもしれないが、それでもまだギリギリギルドの通常業務の範囲だろ。それで恩を着せようってのはちょっと厚かましくないか……？」
「不足なら私が個人的に一晩付き合いますから。おまけでこの子もつけます」
「おまけ！？　私の意思は！？」
「いや、お二人とも美人だから食指がピクリとも動かないって言ったら嘘になるけども、そういうのは間に合ってるんで大丈夫です」
「しかも断られた！？　あの、先輩、私の尊厳的なものが私の意思をよそに滅茶苦茶にされてる気がするんですけど！？」

上司のお姉様におまけとして諸共に貞操を差し出されそうになったギルド職員のお姉さんが愕然としたり憤慨したりしている。面白いなこの人。

「というか一晩付き合いますとかそういうのはアカンでしょ。職業倫理とかどうなってんだよ」
「先輩、女性を三人も侍らせている人が正論でパンチしてきていますよ。私もそう思います、先輩」
「確かについつい職業倫理的にマズい手法に頼ろうとしてしまったことは認めますが、まさか女性を三人も侍らせている人にそう言われるとは夢にも思いませんでした」
「あぁ、ちなみに船にもあと三人……いや四人いるよ」
「どうしてそんな人が正論でパンチしてくるんですか？　おかしいと思いませんか？」

ショーコ先生、余計なことを言うんじゃない。メイをちゃんと一

人としてカウントしてるのは良いことだと思うけど。あと上司のお姉様は真顔で聞いてくるんじゃねぇ。そういう事を言うならこちらにも考えというものがあるぞ。

「よーし、その喧嘩買った」

「すいませんごめんなさい取り乱しました許して下さい」

笑顔を浮かべながらげんこつを握り締めてみせると、上司のお姉様が平謝りしてきた。まぁ本気でぶん殴ろうとしたわけじゃないけど。

「別に本気で怒ったわけじゃないが……どうしてそんなに必死なんだ」

「有り体に言うと、先程の分析が今までに聞いたことがない革新的な内容だったからですね。襲撃箇所の傾向からある程度の襲撃予測地点を割り出す手法はありますが、精度が今ひとつなんです。ですが、先程披露して頂いた分析手法を確立して体系化できれば、今後の宙賊被害を減らせる重要な一手になるかもしれません」

「なるほど……？　いやそんな大したもんじゃないと思うが……？」

この世界では科学技術がこれだけ進んでいるんだから、宙賊の襲撃頻度や確率なんかをもっと効率的に分析する方法がいくらでもありそうなものなんだが。というか、俺が披露した程度のことは軍とかの戦術を学べるようなところでいくらでも教えてそうな気がするんだが。いや、セレナ大佐も最初は宙賊対策なんて全く出来てなかったもんな。意外とこういうことを教えるような機関がないのか？

宙賊関連の物品を高値で買う宙賊研究家みたいな連中は存在するはずなんだが。

「まぁいいや。二人のやりとりはちょっと面白かったから解説はも

う一回聞かせるよ。ただ、ギルド内で俺の解説を何かに利用するなら、元が俺の解説だってのと、なにか成果が出た場合には相応の便宜を図ることを忘れないでくれ」
「後者は確約できませんが、前者に関しては必ず」
「後者の方が主題なんだが……まぁ良いや。もう一回解説するぞ」

俺はもう一度先程の解説を繰り返し、ついでにギルド職員のお姉さんが持ち出してきた解決済みの宙賊襲撃の案件についても簡単に分析してみせた。その結果、俺の導き出した宙賊の襲撃場所の予測やねぐらの位置の予測の精度が高いことが改めて確認された。

「この案件、何度も商船が襲撃されて解決まで二ヶ月近くかかったのに……」
「これがプラチナランカー……」
「いやプラチナランクが関係あるかは知らんが」

このへんはＳＯＬでの経験がモロに活きてくるところだからな。俺が凄いと言うよりかは、宙賊の行動パターンがＳＯＬのものと一致しているだけなんだと思うが。その辺がどうしてそうなのか考えたり追求したりするのは俺の手には余るね。
俺の分析手法を理解して確立させればギルド内での出世に役立ちでもするのか、やる気を出している上司のお姉様を放置し、適当に別れを告げて傭兵ギルドを後にする。実に個性的な二人だったな。今後関わり合いになることは無さそうだが。
まぁ、何にせよ情報は手に入った。恐らくボークス星系はただの狩り場で、ザイラム星系も本拠地ではなく戦利品の集積場である可能もあるが、どう対処するかはセレナ大佐に投げておけば良いだろう。今回の狩りのリーダーはセレナ大佐なんだから、その辺の判断は彼女にしてもらわないとな。

＃４３７　宙賊に関するちょっと深い話（前書き）

すたーふぃーるどたのしい―（∵3」∠）―

#437　宙賊に関するちょっと深い話

傭兵ギルドから持ち帰ってきた膨大なデータをミミと一緒に精査して過ごすこと半日。女性副官を連れたセレナ大佐がブラックロータースへと訪ねてきた。

「これはどうも、ようこそ自慢の我が艦へ。むさ苦し……くはないな。あばら家……も無理があるな。まぁ適当に座って下さい、今片付けるんで」

むさ苦しいも何もこの間に男は俺しかいないからむしろ艦内の雰囲気はフローラルな感じであるし、あばら家などと言うにはブラックロータースの内装は豪華でしっかりしている。正直に言うとセレナ大佐の船であるレスタリアスよりもよっぽど豪華である。

「慣れない美辞麗句を使おうとするからそうやってボロが出るんですよ。ところで、それは？」

「傭兵ギルドから引っ張ってきた宙賊の出没情報とか商船の行方不明情報だよ。同じようなものは軍でも取り扱っているだろ？」

ホロスクリーンに投影されている星系地図と、そこに表示されている様々なマークに目を向けながら質問してきたセレナ大佐にそう答える。

傭兵が宙賊と交戦した座標などのデータは星系軍経由で帝国航宙軍にも共有されている筈だし、同様に星系軍と宙賊との交戦データや商船の行方不明情報なども共有されているはずだ。

「この色分けしてあるラインは……？　ああ、このラインで繋がれ

ている事件が一つの連動した作戦下での宙賊の行動ということですか。ということはこれが囮で、本命は消えたこの船……え？　宙賊ってこんな綿密な作戦を立てて動いたりするんですか？」
「そりゃ宙賊って言っても全員が全員ヒャッハーって言いながら見かけた船を手当たり次第に襲う奴らばかりってわけじゃないし、あいつらも一応は思考能力を有する人間なんだから、しっかりと計画を立てて襲撃を行う連中だっているよ。一握りだけど」
「そ、それじゃあ普段私達が撃破している宙賊は……？」
「ほぼヒャッハータイプの雑魚宙賊じゃないかな。こういうエリート宙賊は慎重だから遭遇戦で出会うことは稀だし、不利と見れば速攻で逃げるからたちが悪いんだよな」

随分前の話だが、ショーコ先生が乗っていた船を襲っていたのがエリート宙賊の類だな。形勢不利と見るなり速攻で逃げやがったし。今ならエルマのアントリオンに積んでいるグラビティ・ジャマーがあるから逃さんけど。

「まぁ、主に被害を出しているのは山ほどいるヒャッハータイプだから、エリート宙賊を撃破しないと意味がないというわけではない。エリート宙賊の方が賞金が高めで、船や装備の質も良いから戦利品が美味しくて、物資の集積場やねぐら、アジトの情報を持っていることが多いから傭兵の俺達としては美味しい相手だけど。ああ、でもまぁ治安維持の観点から言えば積極的に狩ったほうが良い連中かもな。奴らは頻度は少ないけど確実に被害を出してくるし……ってなんで固まってるんだよ？」

何か静かだな、と思ったらセレナ大佐が愕然とした表情を俺に向けたまま固まっていた。何故そんな目で俺を見るのか？　これがわからない。

「なんですか、そのエリート宙賊っていうのは」
「え？　なんかこう、狡猾で装備が良くて、レアな宙賊？　宙賊は宙賊だよ」
「それはそうでしょうけど、そのエリート宙賊という概念を初めて耳にしたのですが。貴方以外の口からそんな言葉を聞いたことがありません。もしかしてアレですか？　マザー・クリスタルの時と同じで出所不明のクリティカルな情報ですか？」
「いや、そんなことは……ない、はず？」

確かにこのエリート宙賊とかの概念はＳＯＬから俺が持ち込んでそう呼んでいるものだけども、そうすることによってエリート宙賊が発生した訳では無いし、何も問題はない。無いはずだ。いや、重要なのはそこじゃない。問題なのはＳＯＬで学んだ対宙賊戦術や概念がそのままこの世界の宙賊に適用できることで、つまるところこの世界では一般的に認知されていない宙賊に関するクリティカルな情報を俺が持っているのではないか、ということだ。

「自信なさげですね。本当は何か隠しているんじゃないですか？吐くなら今のうちですよ？」

考え込んでいるうちに俺のすぐ側まで接近してきていたセレナ大佐が俺の頬に手を添えてニッコリと微笑む。目が笑っていなくてとても怖い。

「ない。ないです。ほんとうです」

頬に添えられた手をそっと退けながらセレナ大佐から目を逸らし、必死にＳＯＬにおける宙賊関連の情報を思い出す。宙賊根絶系のイベントは無かったから、そっち方面のクリティカルな情報はない。同様に、宙賊の発生源についての情報もない。どこかにクローンプ

ラント的なものがあるのでは？　とか深宇宙のどこかに宙賊の大規模コロニーがあるのでは？　とかそういう匂わせはあったが、確定情報は俺の知る限りでは存在しない。また、所謂一般市民というか普通の人間が宙賊に転向するケースについてはＳＯＬで確認されていたが、それはこちらの世界でも同じことだ。

「私の目を見て言いなさい」
「近い近い、大佐殿近い。あと首が痛い」

セレナ大佐が両手で俺の顔をホールドしてぐいっと自分の方に向け、至近距離から見つめてくる。紅い瞳が綺麗だなぁ、とかやっぱり美人だなぁ、なんてことを考える余裕がある辺り、俺もまだまだ本気で追い詰められているわけではないな。うん。

「本当に隠していることはないんですか？　素直に答えないならこちらにも考えがありますよ」
「ないない、無いです。というか、宙賊関連で何かクリティカルな情報を持ってるならそれを利用して荒稼ぎしてるっての。大佐に売れば大儲けできそうだし」
「ふむ……そう言うなら良いでしょう。何か思い出したらすぐに教えるように」
「アイアイマム。ところでこの体勢、この距離はマズくない？」
「お互いにこの程度で動揺するような人間じゃないでしょう。それに、私はロマンチックなのが好きなんです。こんな雰囲気も何もない状況で無理矢理唇を奪っても愉しくもなんともないじゃないですか」

そう言いながらセレナ大佐が俺を解放する。少し顔が赤くなっているように見えるが、指摘すると剣を抜かれそうなので黙っておこう。うちのクルー達とセレナ大佐の副官さんもジト目とかワクワク

した目とか向けてきてるし。

「というか、俺としては宙賊の戦術研究が全くと言って良いほどに進んでいないのが逆に気になっているんだが。そんなに難しい内容じゃないし、俺みたいな素人――いや素人ではないが、別にそういった教育を受けたわけでもない傭兵が理解できる程度のものをエリート職業軍人達が揃いも揃って検討したこともない、概念も無かったってのはおかしくないか？」

「確か過去に何度か研究されていた筈ですが、すべて無駄に終わったと聞いた覚えがありますね。衝動的というか場当たり的な襲撃の度合いが多過ぎて、まともにパターン化できなかったとか。同様に彼らのルーツについても調査されたことが何度もありますし、現在も調査されていますが、宙賊に転向した元帝国臣民などを除いた『純粋な宙賊』のルーツは未だに不明です。彼らの生体工学技術の高さから見て通常の妊娠出産といった方法での繁殖だけでなく、クローニングによる人口増加などを行っている可能性が高く、またその痕跡も発見されています。が、それがどこで行われているのかは判明していません。ただ、彼らのゲノム情報を解析すると、過去に行方不明になっている商船の乗組員や客船の乗客などのゲノム情報が確認されることがあるので、彼らに攫われた人員のごく一部が彼らの本拠地とも言える場所に連れ去られ、繁殖に使われているのであろうということは推測されています」

「捕らえた宙賊からも情報を引っこ抜けないのか」

「駄目ですね。厳重な記憶処理をされているのか、それともそもそも存在していないのか、自分がどこで生まれてどのようにして宙賊の一員になったのかを記憶している宙賊は殆どいません。どんなに古い記憶でも生後八歳から十歳程度からの記憶しか持っていない宙賊が殆どです。例外は、宙賊同士や宙賊と犠牲者との間にできた子供が自然分娩を経て宙賊の拠点で成長したというケースくらいですね」

「徹底的だなぁ……もしかして宙賊って宇宙怪獣の一種なんじゃないのか……？」

起源不明で人語を解し、人類と交雑可能で人類の技術も利用し、独自とも言える高度な生体工学技術も有する人類に敵対的な存在ってかなり不気味だよな。宇宙エルフならぬ宇宙ゴブリン的な何かかよ。いや、宙賊の見た目は人類（ヒューマンレース）と変わらないけどさ。

「まぁ、宙賊の話に関してはこれくらいにして……出撃か？」
「そうですね。その前にちょっとした打ち合わせということで来たのですよ、本来は。そういうわけで、本題に入っても？」
「オーケー。ミミ、クギ、すまんが人数分の飲み物を頼む。ここは俺が片付けとくから」
「はい！」
「はい、我が君」

ミミとクギが揃って食堂へと駆けていくのを見送りながら、休憩スペースのタブレットや小型情報端末をまとめたり、ホロスクリーンに投影していたデータを保存して格納したりしておく。格納庫で整備士姉妹を手伝ってるエルマも呼んでおくか。

＃４３８　帝国航宙軍の艦隊運用思想（前書き）

短いけどキリが悪いのでここで（，ω，）

#438　帝国航宙軍の艦隊運用思想

「というわけで再編成と配置は完了しました。再編成した分隊は既に所定のハイパーレーン突入口を封鎖するために移動を開始しており、作戦開始時間も設定済みです」
「了解。で、俺達の役割は勢子ってわけか」

セレナ大佐とその副官氏が持ってきたデータを休憩スペースのホロディスプレイで確認する。作戦内容は単純で、要は網を張ってのローラー作戦である。前にも同じような作戦をやったが、結局のところ潜伏したりそこらを飛び回ったりしている宙賊どもを根絶やしにするならこれが一番確実な作戦なのだ。
で、勢子というのは狩りなどにおいて獲物を追いかけてハンターが潜伏しているキルゾーンに獲物を追い立てる役割のことである。つまり、猟犬ポジションである。ワン。

「無論、ローラー役は貴方達だけではありませんよ。うちの艦隊のコルベットやフリゲート、駆逐艦で構成した分隊も作りましたから、彼等と連携して事に当たって貰います」
「ああ、かなり増員されたんだったよな」
「はい。貴方に言われて上には再三要請していましたからね。幸い、帝国航宙軍は巡洋艦や戦艦を主軸とした高火力主義を採用しつつあるので、コルベットや駆逐艦は若干『余り』気味です。そこで他の艦隊からのお下がりになりますが、駆逐艦以下の小型艦を多く集められたというわけですね」
「高火力主義ねぇ……大艦巨砲主義の言い間違えと違うか？　まぁ正解だとは思うけど」

実際のところ、距離を空けての真正面からの射撃戦をやるというならデカい砲と分厚い装甲と猛烈な弾幕を張れる大型艦が強いのは間違いないからな。俺のクリシュナだって遮蔽物になる小惑星とかが全く無い空白宙域で巡洋艦や戦艦を相手に真正面から戦ったら勝ち目がないし。

そりゃ対艦反応弾頭魚雷をぶちこむなり、至近距離で艦橋やジェネレーターなんかのバイタルパートに散弾砲を撃ち込むなりすれば戦艦だって撃破できるが、そもそも撃ち込める距離に近づく前に消し炭にされてしまうからな。距離を無視したショートジャンプとかができるなら話は変わるのだろうが、残念ながらそんなトンデモテクノロジーとかサイオニック能力の持ち合わせは無い。

で、基本的にレーザー砲などの光学兵器というのは回避が困難である。回避ができないならシールドと装甲で耐えるしか無いわけで、そうなると相手より分厚いシールドと装甲で時間を稼ぎ、可能な限り強力な砲火力で押し切られる前に押し切るという戦い方が正解となる。なので、帝国航宙軍の艦隊編成が戦艦と巡洋艦に偏っていくのは自然といえば自然なのだ。

「何か思うところが？」

「いや、別にないよ。正解だと思うって言ってるだろ？　結局長射程高火力を横に並べて一斉射撃が強いのは二次元上での戦闘でも三次元上での戦闘でも変わらないってこった」

無論、並べるにしても並べ方は重要なわけだが。目標が分散していればいるほど相手が再照準するのに時間がかかるわけなので、多数の戦艦や巡洋艦が投入される大規模航宙戦においては殊の外陣形と連携が重視される。敵の火力の分散を狙いつつ、こちらは火力を集中して速やかに敵の火力を削っていく。オーバーキルはロスなので、適切な火力を相手に叩き込むのも大事だ。その辺りがどれだけ最適化されているかによって被害と戦果に馬鹿にならない差が生じ

る――のだという。
残念ながら俺はプレイヤー同士の大規模戦とかにはあまり縁のないプレイをしていたから、聞き齧った程度の知識なんだよな。たまに撹乱要因としてちょろっと参加したりはしたけども。

「話がちょっと脱線したな。ええとそれで掃討についてだが、特に意見とかは無いな。堅実な内容だから文句のつけようもない」
「本当ですか？　何か気を遣って口を噤んでいるのなら、遠慮はいりませんよ？」
「いや、だから何もないって。俺をどういう目で見てるんだ、大佐は」
「いつもは何かとケチをつけてくるじゃないですか」
「いやつけてないが。つけてないよな？」

そう言ってミミとエルマに視線を向けると、二人とも微妙な表情をした。なんだよその反応は。

「ミミが言いづらそうだから言うけど、編成されている艦種が目的とアンマッチだとか、宙賊相手ならああしたほうがいい、こうしたほうがいいって大体いつもケチつけてると思うわよ。そもそも、今回対宙賊独立艦隊の戦力を小分けにして配置したほうが効率が良いって言って再編成させたのもそうじゃない」
「……正直すまんかった」

俺にジト目を向けてきているセレナ大佐に素直に頭を下げて謝った。俺は悪いと思ったことは素直に謝る素直な人間なので。

「別に良いですけどね。貴方の語る対宙賊戦術論は帝国航宙軍の艦隊運用ドクトリンで凝り固まった私の頭には良い刺激になりますし。うちの古参メンバーは艦隊の立ち上げ時に貴方から伝授された戦術

で宙賊を狩ってきたという実体験もありますから、不満も最小限です。新入りの面々からはいち傭兵の意見で云々と不満が上がってきてますけど」
「それはすまん。言ってる内容はガチだから許して欲しい」
「そうあることを祈っていますよ。これで戦果が上がらないどころか艦隊に致命的な損害が発生したら……ふふ。私はいい笑いものです」

黒い、笑顔が黒いよ大佐殿。これは暗に思うような戦果が上がらなかったらデカい貸しだぞと言いたいのだろうか。だが俺はそんな脅しには屈しない。

「じゃあこれで大戦果が上がったら、俺は大佐の名誉を守った立役者ってことだな」
「そうですね、報酬分の働きは存分にしてくれたということで傭兵ギルドにはその点よく伝えておきましょう」

互いに笑顔を交わしあう。こちらの攻撃が見事に避けられた気がする。やっぱこっち方面では本物の貴族にはかなわんな。

「ＯＫＯＫ、俺の負けだ、まぁよほどのポカをやらかすか、何らかのイレギュラーが無い限り失敗は無い。何にせよ安泰だと思うよ」
「そうだと良いんですけどね。貴方がそう言うとどこはかとなく不安感が込み上げてくるのは不思議ですよね」
「そこまでの責任は負えねぇよ……」

いくら俺があらゆる類のトラブルを引き寄せる体質だとしても、俺が直接手出しができない場所で起こることまでは責任は持てない。なんでもかんでも俺のせいにされるとか、俺は天狗じゃねぇんだぞ。

#439　変事（前書き）

本日9／22はコミックス7巻の発売日！
買ってね！！！　―（：3」∠）―（直球懇願

#439　変事

『なんで超光速ドライブが起動しねぇんだ！？　や、やめっ……』
「悪いな。宙賊にかける慈悲は売り切れだ」

そもそも最初から入荷もしてないがな。
ケツを振って逃げようとする宙賊艦に重レーザー砲を撃ち込み、トドメを刺す。
おや？　スラスターが完全に破損しただけで爆発四散は免れたか。運の良い宙賊だな。スラスターには大量のエネルギーが供給される関係上、完全に破損すると宙賊の船は八割方船ごと爆発四散するんだが。

「やっぱりちゃんとした船は安全措置がしっかりしてるよな」
「そうですね。ただ、その分手間も増えますけど」
「ミミも言うようになったねぇ……ま、ブラックロータスが到着次第戦闘ボットを送り込むか」

ミミの言う『面倒』とは恐らく生き残っているであろう宙賊の処理についてである。生きてピンピンしている宙賊を乗せたまま鹵獲してブラックロータスに収容すると、ティーナとウィスカが危ないからな。まずはその宙賊を制圧して船を掌握する必要がある。船が爆発四散していればそんな手間をかける必要はないので、ミミの言う通り面倒といえば面倒なんだよな。その分実入りは大きいけど。

「あの、我が君。捕虜を取ったりは……？」
「普段はしない。普段はな」
「今回は取れるなら取る必要がありますよね」

普段なら宙賊なんぞ見敵必殺である。捕虜などは取らずに処すのである……が、今はセレナ大佐の指示で取れる捕虜は取ってセレナ大佐に引き渡すことになっている。頭から情報を引っこ抜くつもりなんだろうな。

「とりあえず戦闘ボットに降伏勧告と可能な限り非殺傷での制圧を試みるように指示はしている。それで生き残ったらショーコ先生に治療させて鎮静剤なり麻酔なりで無力化の上拘束かな」
「え、ええと……我が君？　生き残らなかったら？」
「運が無かったね。来世でのご活躍をお祈り申し上げます」

そう言って俺が肩を竦めてみせると、ミミがうんうんと同意するように頷いた。ミミも本当にたくましくなったな。俺としては大変に感慨深い。案ずるな。頭の上の狐耳をへにょらせているクギもそのうちこちら側に染まる。

「それにしても今回は平和ですね、ヒロ様」
「ミミ、あなた疲れているのよ……今しがた宇宙空間でドンパチして物騒な話をしたばかりだぞ」
「い、いや、そうなんですけどっ……！　なんというかこう、決定的なピンチというか、トラブルには巻き込まれていないじゃないですか」
「皇帝陛下の勅令を受けた帝国航宙軍に最前線近くまで呼び出された上に、セレナ大佐とブッキングして、更にセレナ大佐の指揮下に入って宙賊のような何かを狩ってるのってもう十分トラブル満載だと思うんだ。トラブルに慣れきってしまって感覚が麻痺してるのと違うか？」
「うっ……でもでも！　いつもならもう一波乱くらいはあるじゃないですか！」

「ミミ、あなた疲れているのよ……」
「ヒロ様、それで誤魔化そうとしてませんか？」
「ソンナコトナイヨ？」

オペレーターシートから身を乗り出してジト目を向けてくるミミから目を逸らす。今のところは問題ないんだから良いじゃない。もしもに備えるのは必要なことだが、必要以上に訪れるかもしれない何かを警戒しすぎるのも良くないと思うよ、俺は。
高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変にって銀河で英雄なアレに出てきた偉い人もそう言ってたじゃないか。いや、あの人は完全無欠のダメな奴だったような気がするけど。
そんな話をしながら周囲を警戒していると、轟音と共に見慣れた艦影がワープアウトしてきた。ブラックロータスだ。

『お待たせしました、ご主人様』
「待ってたぞ。残骸の回収と無力化した艦の制圧を始めてくれ。タグは打ってある」
『承知致しました。戦闘ボットを射出します』

中型艦とか大型艦相手なら専用の移乗攻撃用突撃ポッドを使って戦闘ボットを送り込むのだが、小型艦となるとそうもいかない。なので、直接戦闘ボットを送り込んで内部に侵入させる。宇宙空間をふよふよと飛んでいって、宇宙船のハッチに取りついてそこを破って侵入していくのである。侵入される側にしてみれば恐怖だろうな。

『ヒロ、私達の担当エリアに逃げ込んできた連中がいるわ』
「忙しないなぁ……俺らも手伝うか？」
『いえ、このままキルゾーンに追い込むみたい』
「なら手は出さなくて良いか。一応追跡だけはしといてくれ」
『了解』

エルマから入っていた通信が切れる。エルマのアントリオンにはグラビティ・ジャマーの他にも高品質でクリシュナより大型の各種センサー類や電子戦装備を積んでいるから、そっち方面の性能はクリシュナよりもずっと上なんだよな。だから超光速ドライブを起動して逃げている宙賊艦や、それを追っている対宙賊独立艦隊のコルベット分隊をセンサーで追跡し続けるのもお手の物だ。

ブラックロータスの方がデカくて高性能なセンサー積んでるんじゃないかって？　それはそう。だけどブラックロータスは足が遅いからな。足がそこそこに早くて視野が広いアントリオンはすでに俺達の『狩り』に無くてはならない存在になりつつある。というかもうなってる。いい買い物をしたよな、本当に。

『ご主人様、確保しました』

「了解。安全第一で無力化しておいてくれ。完全に無力化して拘束するまで戦闘ボットを貼り付けるか、メイが対応してくれ」

『承知致しました。ブラックロータスに護送次第、完全無力化まで私が監視致します』

「頼んだ」

恒星系封鎖とローラー作戦による相当はレッドフラッグ討伐戦で一度やった流れなので、セレナ大佐麾下の対宙賊独立艦隊の面々も対応が早いし正確だ。この分だとそう苦労せずに仕事を終えられそうだな。

などと考えた瞬間、クリシュナのメインスクリーンに通信の接続要請が入ってきた。うん？　これはセレナ大佐のレスタリアスからか？　軍用の秘匿回線を使った通信……嫌な予感がするな。

「はいどうも、従順で優秀な傭兵のヒロです」

『何をふざけているんですか。いや、与太話をしている場合では無

いんですよ』
「それはそれは……通信を切っても良いですかね？　ちょっと急用を思い出したと言うか、お腹が痛くなってきたんで」
『駄目です。ベレベレム連邦の攻勢が強まりました。我々は宙賊への対処を一時取りやめてクリーオン星系の物資集積基地で集結し、物資集積基地の警備をしつつ予備戦力として待機します』
「おお、もう……ミミぃ」
「わ、私は悪くありません……よ？」

俺が視線を向けると、ミミが誤魔化すような笑みを浮かべる。いやまぁ、ミミのせいではないけどさぁ……苦労せずに仕事を終わらせられそうと考えた瞬間にこの事態とか、やはり呪われてるのではなかろうか。これも俺の運命操作能力とやらのせいなのだろうか。本気で制御できるようにならないと身が保たんぞ。

「そんなに危ない状況なのか？　俺達の仕事をまっとうしたほうが良いんじゃないのか？」
『私もそう思いますが、防衛司令官からの要請となると無下にはできません』

セレナ大佐も大変に不服そうなお顔である。折角宙賊を名乗って蠢動している連中の尻尾を掴もうと思っていたところなのに、完全に邪魔をされた形だからな。

『情報の精査にも時間がかかりますから、とりあえずはここまでに集めた情報の精査と分析に当てる時間を確保したと考えるとします。配備されている戦力やゲートウェイを使って駆けつけてくる増援も考えれば帝国の負けはまず無いとは思いますが、万が一ということもあります。あなた達も気を抜きすぎないように。合流座標を送信しておきますので、可能な限り急いで向かってください』

「アイアイマム」

俺の返事に満足したのか、セレナ大佐が頷いて通信を切断する。嫌なタイミングでの攻勢だな……妙なことにならなければ良いが、望みは薄いか。何が起きても良いようにせいぜい警戒しておくとしよう。

#440　暇なのか？

「おつかれーっす」

セレナ大佐の部下が先の掃討戦で鎮圧した宙賊の捕虜をメディカルベイから休憩スペースを通って連行していくのを見送りつつ、声をかける。その他にも今のブラックロータスにはセレナ大佐の部下達が結構な数乗船しており、これまた先の掃討戦でスラスターだけ綺麗に破壊して無力化した宙賊艦（仮）の内部を精査などしている。

連中のアジトや組織の情報の他、船の入手ルートやベレベレム連邦との繋がりなど、何かしらの証拠というか手かがりが見つからないかと探し回っているというわけだ。

ちなみに、件の艦はティーナとウィスカがブラックロータスに収容する前にジェネレーターをカットして爆発などを起こさないように処理をした。撃破した瞬間に爆発しなくても、放置しておいたら突然爆発するかもしれないからな。

今、二人は件の艦のレストアを開始している。幸い、今までに撃破した敵艦のパーツはそれなりに確保していたので、作業そのものは問題なく進みそうであるということだ。シップＩＤの追跡やなんかはセレナ大佐が行う予定だが、ティーナとウィスカ曰く船の状態を見る限りは相当古い船だろうという話である。

それもその筈で、製造元は二十年以上前に倒産、廃業しているベレベレム連邦のシップメーカーであるらしい。ただ、シップメーカー業界ではそういう企業も少なくはないらしく、そういうメーカーで作られた船はシップメーカーの正規メンテナンスも受けられない上に整備に手間がかかるということで維持費も高く、あまり人気が出ないので安く叩き売られていたりするらしい。

実はクリシュナもこの手の船と同じで、性能が高いのは良いのだ

が整備の手間がかかるのだそうだ。何せシップメーカーも不明、ジェネレーター周りはブラックボックス、その他パーツも見たことのないものが結構あるのだという。尤も、その状態でも分析機とレプリケーターを使えばなんとか整備そのものは可能であるらしいが。二人の仕事ぶりには本当に頭が下がるな。

クリシュナの話は置いておいて、鹵獲艦の話に戻そう。ティーナとウィスカの分析によれば恐らくだがコンセプトは傭兵や商船の護衛向けの安価な護衛艦といったものであろうということだ。機動性、堅牢性、ジェネレーター出力、運動性、火力など、全ての水準で標準的な宙賊艦を上回り、お値段もそれなり。頭数を揃えれば宙賊の襲撃なんて怖くない、というのが売りといったところか。

残念なのは拡張性の低さで、設計に余裕が無いせいでジェネレーターやスラスターなどをより高性能なものに積み替えるのが難しいらしい。そこを積み替えて拡張できないということは、火力の向上もシールド性能の向上も機動性の向上も望めない。積みである、

更にぶっちゃけて言うと、性能そのものも傭兵達に『ザブトン』と呼ばれている船若干勝るものの、拡張性ではボロ負け。値段も若干ザブトンより高く、将来性はあっちが圧倒的に上。そうなると、こいつの存在価値とは？　という話になり、件のシップメーカーは早々に倒産したとか。デザインは悪くないと思うんだけど、そっちにパワーを振りすぎたな、これは。

まぁ、それでも中古船市場での需要はないわけではない。見るからに戦闘艦といった見た目ではあるし、そんじょそこらの宙賊艦には易々とは負けない程度の性能はある。護衛の頭数合わせという用途になら十分使える性能だ。中古船なら新品のザブトンより安いし、買い手はつくだろう。

「どうして真面目に仕事をしているんですか？」

ティーナ達とタブレット端末で綿密に連絡を取りつつ、ミミに補

給の指示を、クギには捕虜の引き渡しに同行するよう指示を出してと忙しくしていると、メイに出されたお茶を優雅に飲みながら俺を観察していたセレナ大佐が変なことを言い始めた。

「どうしてセレナ大佐がここでのんびりしているんだと聞き返しても良いか？」

「質問を質問で返すなと教わらなかったのですか？　仕方のない人ですね。何故かと言えば、対宙賊独立艦隊くらいの規模になると適切な権限と指示さえ事前に与えておけば、各所属長がしっかりと仕事をしてくれるからですよ。艦隊の長である私があくせくと働く必要は殆どありません。無論、重要な決断は私が下す必要がありますし、上がってくる報告にはしっかりと目を通しますけどね」

「なるほどねぇ……って俺が言うまでもなく俺がこうして真面目に仕事をしている理由わかってるよな？　それ」

俺がそう言うと、セレナ大佐はニンマリと良い笑みを浮かべてみせた。この野郎……いや野郎じゃないが。煽ってやがるのか？　おォン？

「俺の機嫌を損ねると大変だぞ」

「どう大変なのですか？」

「相手が雇い主だろうがなんだろうが、この船は俺の船だ。船長の権限は何にも勝る。船長権限で撮み出すぞ」

「なるほど？　できますか？」

不敵に笑ってみせてるけど、ワクワクしているのが丸見えだからな？　お前、俺とじゃれ合っているのを必死に見ないようにしている部下の皆様の気持ちを考えろよ。

「構って欲しいのが見え見えなんだよなぁ。艦隊の規模が大きくな

って大佐にまで上り詰めたのにまだボッチなのか？」
「ボッチじゃありません。ボッチじゃないです。そういうことを言うのは良くないと思います。人の心とか無いんですか？」
「まぁ、セレナ大佐の場合ボッチというよりは立場とか地位とか家柄の問題で敬遠されているというか、近寄りがたいと思われているんだろうけどな。まさか親交を深めようとして剣の稽古に部下を付き合わせてボコボコにしてないだろうな？」
「……してませんよ？」
「嘘臭ぇ！　絶対してるだろ！　そういうところだぞ！」

この金髪紅眼の美人さんの皮を被った脳筋ゴリラめ。頬を膨らませて拗ねるんじゃない。子供か。

「剣の稽古といえば、あなたとは決着がついていませんでしたね」
「俺が圧勝だっただろ。もう勝負付いてるから」
「まだついてません。私がついてないったらついてないんです。あれは本気じゃありませんでした。ノーカンです」
「涙目になって地団駄踏んでたのによく言うよ……」

溜息を吐きながらセレナ大佐の正面に座ると、傍に控えていたメイが音もなくお茶を出してくれた。うん、流石はメイだ。俺じゃなかったらテーブルにお茶を置く瞬間すら見逃してたね。

「で、わざわざブラックロータスまで足を運んで与太話をしている理由が何かあるんだろ？　まさか単に暇だから遊びに来たってわけじゃないよな」
「えっ」
「えっ」

しばし見つめ合う。おい、まさか本当にただ暇でボッチだから遊

びに来たわけじゃあるまいな。何か目的があるんだよな？　顔を合わせて話さなきゃならない何かがあるんだよな？　そうだと言ってくれ大佐。

「も、もちろん、そうです、よ？」
「露骨ぅ……マジかよ。嘘だろ？　一応厳戒態勢じゃないの？　今」
「ここは最前線に直接接してはいないですから、突然襲われることはありませんからね。ここが奇襲されるということは連絡をする間もなく前線が突破され、その後の情報も完全に遮断されたというあり得ない事態が起こった時くらいですから」
「戦場でありえないはありえないんじゃないのか？」
「有人、無人で十重二十重に張り巡らされた警戒網に一切引っかからずにこの物資集積基地を奇襲することは事実上不可能ですよ。貴方ならできますか？」
「少なくとも正規の方法では無理だな」

いくらクリシュナが小型艦としては図抜けた性能を持ってるとは言っても、ステルス性に関しては然程でもない。そもそも、ステルス性がどんなに高い船であってもハイパードライブ使用時の反応を隠すことはできないので、厳戒下にある軍の警戒網を掻い潜るのは不可能だ。敵味方識別信号と船籍、シップＩＤを誤魔化すだとか、内通者の手引きがあるだとか、そういった正攻法以外の手段を用いない限りは。

「だけど、正規じゃない方法を提供しそうな怪しい味方がいるだろう？」
「イクサーマル伯爵ですか。それに関しては言ったと思いますが、いくら落ち目でも帝国貴族が帝国を裏切って貴族の地位を捨てるような真似はしませんよ。エルマ嬢もそう言っていたでしょう？」
「話を聞く限りは納得できなくもないんだが、そう単純に考えて良

い話なのかね？　宙賊と繋がっているような連中だぞ？　常識で考えて良いものなのか怪しいものだと俺は思ってるんだが」
「宙賊との繋がりについては決定的な証拠は出ていませんよ」

そう言うセレナ大佐の顔には「絶対繋がっていると思いますけど」と書いてあるように見える。なら、俺の懸念も真面目に考えてほしいものなんだが。

「仕方ありませんね。貴方がそこまで心配するのなら、私も今まで以上に注意しましょう。貴方と一緒にいると常識とは何だったのかと考えさせられることが多いのも確かですしね」
「それは褒めてないよな？」
「どうでしょう？」

セレナ大佐がにっこりと笑みを浮かべる。ああ、本当に美人は得だよな。笑顔を一つ浮かべられるだけでころりと全てを許してしまいそうになる。だが美人なら普段から見慣れているんでな、俺は笑顔一つ程度では誤魔化されんぞ。その点についてはよく話し合わせて貰おうじゃないか。

#441　待機任務（前書き）

歯痛と頭痛で捗らなかった（‘ω’）

#441　待機任務

今の状況、切迫しているのかいないのか？　という話をすればどちらかと言えば切迫している状況なのだが、それが結晶戦役の時と比べるとどうか？　という話をするとそこまでではないというのが正直なところである。

結晶戦役の時にはそもそもの防衛戦力が乏しく、周辺からかき集めた戦力を全て防衛に差し向けなければ結晶生命体どもに防衛線が食い破られかねないという状況だったのに対し、現在のクリーオン星系周辺の紛争宙域に関しては最初から敵の攻勢に備えた相応の戦力が集められていた。

なので、攻勢が始まったとしても、本来は員数外の戦力である対宙賊独立艦隊の出る幕は無い。

とは言え急事に戦力を遊ばせておく余裕があるわけではないので、対宙賊独立艦隊をクリーオン星系物資集積基地の警備に使い、本来の防衛戦力をいつでも増援として動かせるようにしたというわけだな。イクサーマル伯爵家の連中は。

「まぁ、俺らからしてみれば黙ってぼけーっとしてるだけで金が湧いてくるようなもんだよな」

「固定報酬は一定期間の雇用費で、それを過ぎると日当が出ますからね」

「そ、それで良いのでしょうか……？」

休憩スペースでのんびりしている俺とミミを見たクギが苦笑いを浮かべる。クギは真面目だなぁ。

「というか『独立艦隊』だなんて言っても有事の際には結局軍令に

縛られるんだなって感じだよ」
『平時に独自の裁量で艦隊を運用できるから独立艦隊なんですよ。有事の際には当然軍令に従う義務があります。我々は皇帝陛下の剣なのですから』

ホロディスプレイの向こうでセレナ大佐が憮然とした表情を見せる。いやお前暇なのかよって話なんだが、実際暇らしい。部下に効率よく仕事を振った結果、彼女のところまで上がってくる仕事というのは大変に些少なものとなり、しかも彼女はバチバチに身体能力強化をしている侯爵令嬢様だ。その強化項目は身体能力だけではなく脳の処理能力強化などにも及んでおり、実際に本気を出すと常人が五時間かけて行うような作業を一時間足らずで軽く終わらせてしまえるらしい。

『とはいえ今回の件も実際にはあくまでも要請であって、命令ではないんですよ。こちらに正当な理由があれば要請を突っぱねて行動することもできるのですが、そもそも今回の後方を脅かす宙賊の排除もイクサーマル伯爵家の要請を受けた上からの指示ですからね。直接ではないにせよ大本の要請がイクサーマル伯爵家からのものというところもありますから』
「つまり軍上層部から特別な命令がない限りは自由に行動できるのが対宙賊独立艦隊が独立艦隊の名を冠する謂れというわけか」
『そういうことです。流石に軍に所属していながらにして傭兵のように自由に動けるというわけではありませんよ。運用方法や指揮系統の構築には参考にしている部分もあるようですが』
「なるほどねぇ……で、例の件は？」
『特には何も。近々我々を招待したいそうですよ。晩餐会に』
「なんだそれ……」

俺達を目の敵というか目の上のたんこぶみたいに思ってたんじゃ

ないんかい。そんな俺達を晩餐会に招待したいとかどういう風の吹き回しだ？

「仲が良くない相手でも有事となれば手を取り合わないといけないこともあるわ。何にせよ今だけは蟠りを捨てて手を組みましょうっていうポーズよね。まぁ、貴族らしい行動だわ」

セレナ大佐に映像を送っている光学センサーの範囲外で酒を飲みながらダラダラしているエルマがつまらなそうにそう言って肩を竦める。あの女、予備戦力としての待機任務という実質的な休暇を全力で満喫中である。

酔っ払った状態で待機とかナメてんのかって？　医療ポッドに入ればすぐ抜けるからなぁ、アルコール。規律の乱れだぞと言われるとそれはそうなのだが、俺達は軍人じゃなく傭兵だし。エルマもへべれけになるほど酔わないようにはセーブしているようなので、俺からは特に注意するつもりもないんだ、これが。

「しかし晩餐会ねぇ……油断させて『騙して悪いが』みたいな展開を狙ってるんじゃないのか？」

『そうすることによってイクサーマル伯爵家に何か得があるのであれば可能性はなくもないですが、まずそんなことは起きないでしょう。仮に私と側近数名、そして貴方達全員を騙し討ちで捕縛なりなんなりしたとしても、うちの艦隊のクルー達がすぐに救出に動きます』

「それもそうか」

俺ももし晩餐会に呼ばれたら最低でもメイは船に残していくだろうし、もし俺達に何かがあればメイが戦闘ボット達を引き連れて行動を起こすことになるだろう。どうあっても大騒動になるだろうし、メイならその様子を各方面に流すなりなんなりして周りを巻き込ん

だりするんじゃないかね。そうすれば事態はより大事になって、イクサーマル伯爵家でも制御不能に陥る可能性が高い。
俺が考えつくことをお貴族様が考えつかないわけもないので、何らかの対策が為される可能性もあるが、果たしてその手間に見合うような利益が向こうにあるかどうか。

「まーたヒロの悪い癖が出てるわねぇ」
「たまに心配性になりますよね、ヒロ様は」
「我が君はご自身の引き寄せる数奇な運命を警戒してらっしゃるのだと思います。此の身としては妥当な警戒心かと思いますが」

流石にセレナ大佐の前で運命操作能力云々には触れなかったようだが、クギは俺の抱くイクサーマル伯爵家への警戒心を妥当だと評価しているらしい。エルマとミミはいつもの警戒し過ぎだと思っているようだけど。確かに心配し過ぎな気はするんだが、どうも引っかかるんだよな。
この状況で帝国航宙軍に負け筋があるとすれば、ゲートウェイが使用不能になって増援が来なくなり、そこにベレベレム連邦軍が一気呵成に攻め立ててくるってパターンくらいか。

「心配し過ぎて何も無ければそれはそれで笑い話になるだけだし、俺は引き続き警戒することにしとく。その晩餐会とやらに俺達も呼ばれるのかどうかは知らんが、そのときは連絡をくれ」
『その時はそうします』

そう言うセレナ大佐の表情はあまり芳しくない。まぁ、不本意なんだろうな。警備のためにクリーオン星系で待機してるのは。招集がなければ今頃は宙賊を追い詰めていたのだろうし。
まぁ、お貴族様の都合で色々と左右される状況ってのはある意味慣れっこだ。精々鋭気を養わせてもらいつつ、その時に備えるとし

ますかね。

#442　グイグイ来る人（前書き）

おくれました！＾ｑ＾（ナイトシティで刀を振り回すのが楽しすぎて寝坊した

#442　グイグイ来る人

『くそっ！　逃げるなぁ！』
「いや、逃げるが」

後方から放たれるレーザー砲撃を急加速で掠める程度にやり過ごし、小惑星を盾にして敵艦の追跡を振り切る――と見せかけて航行アシストを切りながら姿勢制御スラスターを使って反転。こちらを追って小惑星の影から顔を出した敵艦の鼻っ面に四門の重レーザー砲と二門の散弾砲の一斉射撃をお見舞いしてやる。

『なっ――ッ！？』
「はい撃墜。次」

急いで追ってきたせいか大回りで小惑星を回り込んできた敵艦は無防備な腹――船底をこちらに晒す状態だった。航宙艦というのは所謂『腹』側の装甲が意外と薄かったりするので、シールドを抜いた上で腹側に砲撃を貰うとバイタルパート直撃判定となって『撃沈』になりやすい。腹側の他にはスラスターが集中していることが多いケツも装甲が薄い判定なんだよな。

『舐めやがって！　野郎ぶっ殺してやる！』
「三人くらいまとめてかかってきても良いぞ？」
『タイマンで十分だオラァ！』

威勢が良いが、熱くなっても良いことはあんまりないぞ。ほら、勝負を焦って飛び出してくる。クロスレンジでやり合う場合は速度が乗ってればそれが大正義ってわけじゃないんだぜ。

新たに出現した敵艦とのヘッドオンでの撃ち合いをやり過ごし、低速度のままくるりと反転し、速度が乗っているせいで旋回が遅い敵艦の横っ腹に重レーザー砲を命中させていく。流石に軍用装備のシールドと装甲を使っている設定なだけあって宙賊艦と比べれば格段に固いが、それでもクリシュナの火力にそう長く耐えられる筈もない。哀れにもこちらを再び射撃範囲に捉える間に敵艦が爆散する。

「次、本当にタイマンで良いのか？」

『上等だ！　やってやらぁ！』

血の気が多いなぁ……と内心呆れつつ、新たに出撃した敵艦を撃破しにかかる。どうせ暇だし、疲れるまでは相手をしてやるか。

☆★☆

「やったぜ」

「やったぜじゃないんですが」

シミュレーションルームのテーブルの上に積み上がったエネルチップの山を前にしてドヤ顔で宣言してやると、セレナ大佐が青筋を浮かべたまま笑顔で文句を言ってきた。

「俺は訓練を手伝ってエネルをゲットした。帝国航宙軍のパイロット達は対価を払って天下のプラチナランカーとの貴重な戦闘体験を得られた。これこそまさにｗｉｎ－ｗｉｎというやつでは？」

「天下のプラチナランカーがケチな小銭稼ぎをしないでください」

「どうせなら賭けをしたほうが楽しいだろ。俺が」

だって勝てるからな。勝てるとわかっている賭けほど楽しいものはないぞ、大佐。

ちなみにこのエネルチップだが、基本的には少額のエネルを他人と安全にやり取りするためのプリペイドカードのようなものである。相手の小型情報端末と直接やりとりをしたくない場合や小型情報端末を保たない相手との取引に使われたりする。Ｓ○ｉｃａみたいなものである。

「だいたい一戦たったの１０エネルだぞ？　プラチナランカーと安全なシミュレーターでやり合って経験を積めると考えれば破格の安さだろう」

「だとしてもです。艦隊内で賭け勝負が蔓延したら規律が乱れるでしょうが。今後うちのパイロットを巻き込んだ賭け勝負は禁止です。良いですね？」

「へーい」

返事を返しつつ、積み上がったエネルチップをジャケットのポケットに突っ込んでおく。今回俺が毟り取った分を返却しろと言わないのは対宙賊独立艦隊を含めた帝国航宙軍パイロットへのお仕置きなのだろう。

「貴方達には後で上官からありがたいお話があるでしょうから、そのつもりで」

「「「イエス！　マム！」」」

セレナ大佐に整列させれていたパイロット達が一斉にセレナ大佐に敬礼する。こうして見るとセレナ大佐もちゃんと高級軍人やってんだなって思うわ。というか、何故かパイロット達から尊敬の眼差しを向けられている気がする。何故だ。

「元気が有り余っているようなら私にも付き合ってもらいましょうか」

「え、嫌だが」

腰元の剣の柄にポンと手を置いて笑顔を浮かべるセレナ大佐に即答する。身体強化の副産物なのか、この人本当に体力も尋常じゃないんだよ。割とデカくて重い剣をぶん回すくせに、連戦しても疲れる素振りを見せない。こっちは五戦もすれば疲れるってのに。

「彼らには時間を割けるのに私には割けないと？」

「だって大佐面倒くさいし、疲れるし」

「喧嘩を売ってますか？　売ってますね？　１００％オフですね？」

笑顔のままピキピキと青筋を浮かべるのやめよう。ほら、整列してるパイロットの皆様とか震え上がってるし。遠巻きに野次馬していた軍人の皆さんもそそくさと逃げ始めてるじゃん。

「オーケーオーケー、わかったよ。少しだけだぞ？　貸しだからな？」

「そうですね、私を怒らせた件に関しては不問にしてあげましょう」

「割に合わないんだが……？」

踵を返してスタスタと歩き始めるセレナ大佐の後を追って俺も席から立って彼女の後を追うことにする。

「んじゃそういうことで。また機会があったらやろうぜ」

「「「サー！　イエッサー！」」」

パイロット達が何故か俺に尊敬の眼差しを向けながら敬礼してきた。なんだ、そのまるで勇者か何かを見るような目は。もしかして、俺がセレナ大佐にタメ口で気安く接していたのを見ての反応か？　別に違うからな？　あの人とは何もないからな？

☆★☆

「で、現状はどうなんです？　戦況は？」

ビュオン！　ととんでもない風切り音を鳴らしながら迫ってくるセレナ大佐の模擬剣を半歩後ろに避け、駆け上がってくる雷光のように跳ね上がってくる切り返しを右手の長剣で受け流してセレナ大佐の大勢を崩そうと試みる――が、彼女はどんな体幹をしているのか、びくともせずに手元で柄の握りを変えて強烈な突きを放ってきた。本当に人間か？　なんか特殊合金製の人工筋肉繊維とかで強化してたりしない？　いやまぁ、生命工学的なアプローチで身体強化処置を受けているらしいから、近いものはあるのかもしれんが。

「余裕、です、ねっ！」

「最近勘がすごく冴えててな」

今の俺にはビュンビュンと恐ろしい音を立てて迫る模擬剣をいなしながら周りを見る余裕すらある。ここはセレナ大佐に連れてこられたレスタリアスの訓練室で、訓練室の中には俺とセレナ大佐の二人しかいない。彼女が人払いをしたのだ。

「くっ……このっ！」

何故俺が彼女を圧倒できているのか？　それはセレナ大佐が次にどのように剣を振るおうとしてきているのかが俺には『理解る』からだ。これもクギからサイオニック能力の訓練を受けている成果の一つなのだが、対峙している相手が次にどこを狙ってきているのかが最近手に取るようにわかるようになってきた。

クギの得意分野はヴェルザルス神聖帝国では第二法力とよばれて

いる分野の力で、早い話がテレパシーなどの精神関連の能力全般である。そんな彼女からサイオニック能力の手ほどきを受けている俺も、それなりに第二法力――テレパシー関連に関しては熟練度が上がってきたわけだな。

攻撃的な精神波――つまり殺気だの悪意だのといったものに対する感度が格段に上がったのである。テクノロジーで例えるとパッシブセンサーの強化と言ったところだろうか。宇宙世紀の新人類が身につけるアレみたいなものである。ぴきゅいーんって効果音が鳴るやつ。そういや遠い銀河のフォースを操る騎士とかもこの手の能力に長けているんだったか？　ますます人外じみてきたな、俺も。

まぁ、この能力はメイには一切効かないので、未だにメイにはボコられるわけだが。

「何か！　イカサマを！　してませんかっ！？」

「そうだとしても手の内を明かす必要性は感じないなぁ」

「ひゃんっ！？」

一瞬の隙を突いてセレナ大佐の尻の辺りを模擬剣でぺちりと叩いてやる。これで何戦目だったか？　そろそろ終わりにしたいんだが。

「ズルくないですか？　どうして身体強化もしていない上に剣を手に取って然程長くもないのに私が圧倒されるんです？　おかしくないですか？　おかしいですよね！？」

「俺に聞かれても困る。気がついたらこうなっていたとしか……」

肩で息をしながら詰め寄ってくるセレナ大佐に苦笑いを返す。自分のぶっ飛び具合は俺自身がよく知っているので、そこを詰められると困るんだよな。あまり言いふらしたいような内容でもないし。

「何か隠してますね？　私には言えないんですか？　貴方のクルー

達は当然知ってるんでしょう？」

「そりゃねぇ……」

言葉を濁しながら頬を掻く。剣を振って昂っているのか、グイグイ来るな。でも、適当にやって負けたりしたらセレナ大佐は絶対に激怒するだろうしなぁ。さて、話すか話さざるか……どうしたものか。

#443　セレナの想い（前書き）

ちょっと長くなったのだ（，ω，）（ゆるして☆

#443　セレナの想い

「俺は謎の多い男、キャプテン・ヒロ！　ってことで一つ」

そう言ってビシっと親指を突き上げて見せると、セレナ大佐の目がスッと細くなった。あっ、とても嫌な予感がする。

「この期に及んでそう言うことを言うんですね。良いでしょう。泣きます。泣きますからね？　大声で泣いて喚いて地面を転げ回りますよ？　うちのクルー達が何人か様子を見に来るくらい大声で泣きますよ？　良いんですか？」

そう言ってセレナ大佐がスッと流れるような動作で訓練場の床に正座する。おいやめろ馬鹿。完全にやる気じゃねぇか。

「俺の評判だけでなく自分の尊厳まで人質に取って自白を促すのは流石にえげつなさが極まってない？？？」

なんという恐ろしい手を使おうとしているんだこの女は。ああ、クリス。君の言ったことは本当だったよ。貴族出身の女と二人きりになんてなるもんじゃないな。

しかし、俺の事情を大佐に話して聞かせるのもなぁ……彼女がそこら中に言いふらして回るとも思えないが、なんだかんだ言って強かな女だからなぁ。見ての通り、場合によっては手段を選ばない女でもあるし。

「待て待て、落ち着け。どうしてそんなことを聞きたがるんだよ？　俺がどんな事情を抱えていたとしても、それを知らなきゃセレナ

大佐がどうにかなるってわけでも、俺との仕事ができなくなるってわけでもないだろ？　今までだってなんだかんだ一緒にやれてきているんだから、無理に知ろうとしなくても良いじゃないか」
「それ、本気で言ってます？　本気で？　私がどういう思いでこう言っているのかわからないということですか？」

セレナ大佐がワナワナと肩を震わせながら地獄の底から響いてくるような声で問いかけてくる。
いや、まぁ、そう言われると察せないものが無いわけではないんだが……なぁ？

「それを言うならそっちこそ察してくれよ。前から何度も言ってるだろ？　大佐とそういう関係になるのはどう考えても無理だって。だからお互いにちょうど良い距離を保ってきたんじゃないか」
「……」

無言で頬を膨らませるんじゃない。ちょっと可愛いじゃないか。

「別に面白い話でもない……こともないかもしれないが、知ったところでどうなるものでもないだろ？　なら無理に聞かなくても良いと思わないか？」
「懸想している相手のことを深く知りたいと思うのは自然なことでしょう？」
「Ｏｈ……火の玉ストレート投げつけてくるじゃん。あー……はぁ」

正座をしている大佐の真正面にしゃがみ込み、大佐の赤い瞳にじっと見つめられながら溜息を吐く。そうやって直接的に好意をぶつけられると困る。俺は美人に弱いんだよ。でもなぁ、大佐はなぁ。色々と無理があるよなぁ。

「大佐なら俺なんかよりも良い男がいくらでも寄ってくるだろうに」
「男は星の数ほどいるかもしれませんが、貴方は一人しかいないでしょう？」
「ロマンチックな表現だねぇ……まぁ、話を聞かせるくらいなら良いさ。ただ、荒唐無稽な話にしか聞こえないと思うぞ？」

そう言ってから俺は立ち上がり、訓練場の壁際に設置されているベンチへとセレナ大佐を誘った。
二人で並んで座り、どこから話したものかと少し頭を悩ませる。

「まず、要点から言うけどな。俺自身、俺が何者なのか……というか、自分の正体については把握しきれてない。だが、うちのクルーのクギ――ヴェルザルス神聖帝国の巫女……まぁ聖職者みたいなものか？　の話によると、俺は別次元、別宇宙、彼女の言葉によれば上位世界とやらからの来訪者なんだそうだ」
「……？」
「何言ってんだこいつって顔ですね、わかります。でもヴェルザルス神聖帝国では俺みたいな境遇の人間と過去何度も接触しているらしい。実際、今現在も俺と似たような境遇の人間があの国では囲われてるって話だし、俺ももしかしたらこいつはって奴とは一回遭遇してる」

脳裏にいけ好かない赤髪のクソアマの顔が過る。どうあってもあの女とは仲良くできそうにないが、今頃どこで何をやっているのかね？　関わり合いになりたくないから、できればどこか遠くで野垂れ死ぬなり爆発四散するなりしていてくれると助かるんだが。

「……まぁ、良いでしょう。それで？　その異世界だか別宇宙だからの来訪者というのはなんなんですか？」
「クギが言うにはとんでもないパワーを秘めた存在らしい。サイオ

ニックパワーをな。実際、俺もそうなんだそうだ。俺が無強化でイカサマじみた動きができるのもそれさ」
「なるほど……ではあの変態的な操縦技術も」
「いや、それは素」
「そっちの方が驚きなんですが？」
「なんでだよ。練習すれば誰でもできるって」

何故そんな目で俺を見るんだ。できるって！　頑張れば誰でもできるって！　諦めるなよ！

「最近はクギからサイオニックパワーの訓練も受けててな。手札は増えつつあるよ」

そう言いながら俺は小型情報端末を懐から取り出し、意識を集中して『掴んで』持ち上げた。すると、小型情報端末は俺の手からふわりと浮き上がってゆっくりと空中で回り始める。こうやって安定してものを浮かせたりできるようになるまで結構苦労したもんだ。

「……つまり、先程は全力ですらなかったと？」
「模擬戦にレーザーガンやプラズマグレネードを持ち出す馬鹿はいないだろ。本当の切り札はここぞって時のために取っておくもんだ」

肩を竦めてみせてから空中浮遊している小型情報端末を掴み取る。

「それはそうですが……」

そう言うセレナ大佐の表情は不満げである。俺が全能力を駆使してセレナ大佐と戦えば、恐らくセレナ大佐は為す術も無く敗北するだろう。先に俺の一手が決まればだが。セレナ大佐だって隠し玉の一つや二つは持っているだろうからな。それが先に決まれば逆にや

られるのはこっちだろう。
互いに使う武器の性能が高くて一撃必殺となると、結局のところどっちがより早く相手に致命の一撃を入れるかって話になるからなぁ。アクション映画のラストみたいに一発ずつ交互に殴り合うような感じにはならないのが現実の戦いってもんだ。

「で、話を戻すが。俺はターメーン星系の空白宙域で目覚めたんだ。ジェネレーターの落ちたクリシュナの中でな。どうしてそうなったのかはわからない。元の世界の記憶はあるが、こっちの世界に来る前に何をしていたのかは朧気にしか覚えてない。もしかしたら向こうの世界で突然死でもしたのかもな」

多分仕事を終えて帰ってきた後、メシを食ってＳＯＬで遊んで寝落ちか何かしたんだと思うが、はっきりとは覚えていない。最初は夢だと思ってたからな。

「この世界と似た世界観のゲームで遊んでた記憶があってな。最初は夢でも見てるのかと思ったが、起きてすぐに宙賊に襲われて返り討ちにして、ターメーンプライムコロニーで入管に止められて、そこをセレナ大佐に助けてもらって、それから船で何日も過ごしてるうちに夢じゃないってことに気がついてな。最初は頭を抱えたが、幸い船もあるし船を動かすだけのスキルもある。それで開き直ってこっちの世界で傭兵稼業を始めたわけだ。あとは大体知ってるだろ？」

「知っていますが、その話を信じろと？」

セレナ大佐がジト目を向けてくる。まぁ、俺が逆の立場でも適当な作り話で煙に巻こうとしているんじゃないかと疑うだろうな。だが、俺には切り札がある。

「皇帝陛下曰く、ターメーン星系以前の俺の痕跡はどこにも無いそうだ。本当に、どこかからいきなり沸いて出てきたと思うしか無いほどにな」
「皇帝陛下がそんなことを？」
「ああ。帝都で帝城に滞在している時に謁見する機会があってな。俺の言葉は信じられなくても、皇帝陛下の言葉なら信じられるだろ？」
「別にあなたの言葉を信じないわけではありませんが……」
そう言いながらもあまり納得できてないような表情じゃないか。気持ちはわからんでもないが。
「だから言っただろ、荒唐無稽な話にしか聞こえないだろうって。とにかく、俺の秘密ってのはこんなもんさ。結晶生命体のマザークリスタルの話も、俺が向こうの世界で遊んでいたゲームの設定がドンピシャリだったってわけだ。種を明かしてみれば存外つまらない内容だろ？」
「いえ、それどころかもっと他に何か情報を持っているんじゃないかと興味が尽きないんですが」
「しまった。失言だった」
「ですが、なるほど……確かにマザークリスタルの件は証明になりますね。少なくとも、帝国の科学者でも知らないようなことを貴方は知っていた。それは事実です」
セレナ大佐が暫し考え込み、顔を上げて俺を見つめてきた。真剣な表情だ。
「ヒロ。貴方、やはり私のものになりませんか？」
「なりません」
「即答！？　どうして一考すらしてくれないんですか！？」

真剣な表情が一瞬で崩れて涙目になる。うん、こう言っちゃ悪いが大佐はそういう表情のほうが可愛いと思うね。真剣な表情だと顔面偏差値が高過ぎて近寄り難さすら感じる。

「何度も言ってるが、俺は気ままな傭兵生活が気に入ってるんだ。セレナ大佐だって帝国航宙軍を辞めるつもりはないだろ？　なら話はそれで終わりだよ。互いに今の生活を捨てられないんだ。仕方が無いだろ？」

「結局傭兵をやっていても宙賊を狩って回るんですから、帝国航宙軍に入っても同じじゃないですか。どうしてそんな意地悪を言うんですか」

「全然同じじゃないが。給料いくらだよ」

俺の反撃にセレナ大佐が怯む。

「そ、それは……いや、でも、ほら。私のものになればホールズ侯爵家の一員として最終的には世襲できる男爵位くらいはもぎ取れますよ？　星系の一つや二つくらいは管理できるでしょうし」

「興味ないね。第一、俺にはもう妻がいるし」

「聞いてないんですけど！？！？」

セレナ大佐が愕然とした表情で叫ぶ。そういや言ってなかったっけ。

「ミミと籍を入れてるぞ。まぁ、だからって何か変わったわけでもないんだが」

「それはそれでどうなんですか？」

「いきなり落ち着くじゃん」

一瞬で真顔になったセレナ大佐に思わず引いてしまう。確かに夫婦らしいことをしているかというとそういうことはないので俺もどうかと思わなくもないが、ミミ自身がそういうことに興味がないというか、今の俺達全体の関係を気に入ってるみたいだからな。そもそもうちの女性陣はメイを中心として何かこう、結託……いや、共同？　俺をシェア？　してるというか……とにかく上手くやってくれてるからな。

「うちの事情はちょっと特殊だから。そういう意味でもセレナ大佐のものになるのは無理」

「ぐぬぬ……」

セレナ大佐が悔しげに呻く。まぁその、本音を言えば光栄ではあるんだけどなぁ……互いに抱えるものがあるし、立場も違う。譲れないものもある。出会うべくして出会った二人が互いに好意を抱いていても相容れないことだってある。世の中ってのはままならないものだよな。

#４４４　これは尋問では？（前書き）

天気が悪いと捗らない（‘ω‘）

#４４４　これは尋問では？

「それでぇ？　セレナ大佐との逢瀬はどうだったんだぁい？」
「どうもこうもないって。模擬戦でストレス解消に付き合った後、少し話をしただけだ」
「ほんとにぃ……？」

セレナ大佐との模擬戦を終えた俺はブラックロータスへと戻ってきたのだが、そこで運悪く食堂で酒盛りをしているショーコ先生とエルマに絡まれてしまった。シミュレーターと模擬戦で頭も身体も疲れているから少し休みたかったんだが、絡まれてしまったからには仕方がない。どうせ抵抗しても無駄なので。

「会話の内容まで気になるってんならかいつまんで話すけど、別に聞いて面白いような内容でもないぞ」
「それは聞いてから判断させてもらおうかなぁ」
「酔っ払ってんなぁ……」

俺の肩に手を回してニヤニヤしながらショーコ先生が酒臭い息を吹きかけてくる。そしてエルマはエルマで逆サイドから寄りかかってきた。ああ、左側の感触は幸せなのに右側ときたら……痛い痛い。太ももを抓るな。

「俺の素性というか秘密というか、出自？　そういうのを聞かせろって駄々こねられてな。皆には話してることだけど。どうしても知りたい、拒否するなら子供のように泣き叫んで醜態を晒すことも辞さないと脅されたんだ」
「なりふり構わなさがすぎないかい？」

「そこまでやるのはドン引きだわ……」

ほら大佐、酔っぱらいが素面に戻るくらい引いてるぞ。

「大佐なら何を話しても言いふらすってことはないだろうし、別に良いかと思って話したんだけどな。そうしたら私のものになりませんかって直球でプロポーズされて」

ガタッ！　と椅子を蹴倒す勢いで少し離れたテーブルでクギと話していたミミが立ち上がった。クギも俺にじっと視線を向けてきている。頭の上の狐耳もピクピクと動いてこちらに向いている気がする。

「いや断ったからな？　互いに今の生活を捨てられないわけだし。それに俺には皆がいるし。まぁ、俺だって大佐のことは嫌いじゃないし、尊敬はしてるけど」

プライベートではポンコツなところがあるのも可愛いと思う。でもなぁ。

「とにかくそういう感じで色っぽい展開とかは特になかったし、あったとしても乗る気はゼロだから安心してくれ」

「……まぁ、今更ヒロがセレナ大佐に靡くとは思ってないけど」

「ヒロくんの女としてはこう、嫉妬心を煽られるというか、危機感を抱いてしまうというか、落ち着かない気持ちになる話だったよねぇ？」

「君達が話せって言うから包み隠さず話したんだぞ……俺だってつまらない嘘は吐きたくないし」

ゴロゴロと喉を鳴らしそうな勢いで俺の肩に頬を擦りつけてくる

ショーコ先生に溜息を吐きながらされるがままにしておく。エルマはエルマで俺の右腕に自分の左腕を絡ませて酒を飲み始めてるし。

「くわしく、おはなしを、きかせてください」
「ちょ、ミミ、うちのお酒ぇ！？」
「それは強いからこっちにしてね」
「ありがとうございます、ウィスカさん」

少し離れた席に座っていたミミとクギがテーブルを挟んで対面に座っていたティーナとウィスカを横に退かし、真正面に座ってくる。ミミ、ティーナが飲んでたのは多分かなり度数が高いやつなんだけど……一気は良くないと思うぞ。危険が危ないぞ。その点クギにアルコール控えめのお酒をそっと渡す辺り、ウィスカはそつがないよな。

「これ以上詳しく話しようがないんだけど……身の上話をした後に私のものになりませんか？　って言われたからノータイムでなりませんって言って断っただけだし」
「あー、身の上話なぁ。どこまで話したん？」
「俺が突然ターメーン星系に現れたことは皇帝陛下にも知られているから、ほとんどまるっと全部だな。その際にマザークリスタルの件についても話をすることになってな。もしかしたらこの世界でまだ知られていない重要な情報をもっているんじゃないか、って意味でも興味を持たれたみたいだ」
「ああ、ヒロのゲーム知識とやらね。頼りになるようで頼りにならない、でもたまにとんでもない情報だったりするやつ」
「酷い言われようだ」

食堂のソファに身を預けながら思わず苦笑いする。俺がチェックしていた情報は主に戦闘関連だったからなぁ。テクノロジーとか商

売とかアーティファクト関連とかにはあまり興味がなかったから、存外役に立ちそうな情報って少ないんだよ。宇宙怪獣の類とはそこそこやりあったから、そっち関連の情報はいくらか持ってるけど。あと、あのゲーム内で紛争を行っていた宇宙帝国関連ならかなりの情報を持ってたんだが、この世界だと役に立たないんだよな。肝心の宇宙帝国が見当たらないから。

「あとはそうだな……ああ、ミミと結婚していることを言ったら驚愕してたな。そういや言ってなかった……あれ？　言ってなかったっけ？　帝都で色々やってる時に言ったような言ってないような……いや言ってないか」

多分言ってない。俺が知ったのもずっと後だった筈だし。

「とにかくそれで驚愕して、でもあんまり夫婦らしいことはしてないというか、うちの事情はアレだからって話をしたらそれはそれでどうなんだって言われたよ。よくよく考えると俺もどうかとは思わなくもないんだけど」

「そのあたりはちゃんとはなしあっていますから大丈夫ですよ、ヒロさま」

「そうそう、兄さんは気にせんといてええで」

物凄い勢いで俺の気遣いは丁重に断られた。まぁそうね。俺が下手に気を回すよりも皆で話し合ってもらって納得の上で俺をシェアしてもらったほうが良いよね。その辺りはお任せします、はい。

「あー……何を話してたっけ？　とりあえずセレナ大佐とはそういう感じで――」

と話を纏めようとしたところで俺の小型情報端末から電子音が鳴

り、そのセレナ大佐からメッセージが入ってきたことを伝えてきた。
「例のパーティーとやらの開催が決定したらしい。明日だそうだ」
「無理に強行するようなことでもないと思うのですが……？」
クギが不思議そうに首を傾げる。確かにタイミングとしては不自然な気がするが、このタイミングでないと俺達とセレナ大佐達がクリーオン星系の物資集積基地に滞在してないだろうからな。クギが言うほど不自然ではないとは思うんだが。
「大丈夫だと思いたいが、宙賊とも繋がりがある可能性が高い不良貴族って話だからな。警戒はしておこう。分断されるのが一番怖いから、メイはブラックロータスに残っていざという時に動けるようにしておいてくれ」
『はい、ご主人様』
食堂のスピーカーからメイの返事が聞こえてくる。はてさて、何が起こるのか。それとも何も起こらないのか。何が飛び出してきても対応できるよう、油断だけはしないように気をつけておこう。

#445　イクサーマル伯爵家旗艦（前書き）

今日は少し余裕を持って間に合った（　，ω，　）

#445　イクサーマル伯爵家旗艦

「まさかパーティーの開催場所がこんなところとはなぁ」

翌日。ミミとエルマ、それとクギの三人を連れて招待された場所へと赴いた俺の第一声である。

整備士姉妹やショーコ先生も連れてこようかどうか迷ったのだが、万が一のことを考えると非戦闘員が多くなり過ぎるのは問題があると考えて船に残ってもらった。ミミとクギだけなら俺とエルマの二人でなんとかカバーできるだろうし、クギはクギで普段は使わない切り札的な自衛手段を持っているのだという。実質完全な非戦闘員はミミだけということなら、何かあってもまぁなんとかなるだろう。

「立派ですねぇ……」

「年代物ねぇ」

俺と並んで目的の構造物を見上げているミミとエルマがそれぞれ感想を口にする。俺達の前の前に聳え立つ構造物――いや、戦艦を眺めての大変に素直な感想である。

船の名前は知らないが、確かに立派な戦艦だ。若干古びているように見えるが、四角張ったデザインとずらりと並ぶ大口径レーザー砲は圧巻だ。レスタリアスと同等かそれ以上の大きさなので、ここまで近づくと全貌を捉えることができない。

「クギ、お口が開いたままだぞ」

「はっ！？　す、すみません。圧倒されてしまって」

ミミ達と同様に一緒に戦艦を見上げていたクギが顔を赤くして口元をもにょもにょとさせる。うん、まぁ気持ちはわかる。いかにも戦艦って感じの角ばってゴツゴツした巨大な船だものな。イデアル製のレスタリアスはもっと流線型を多用したシャープなデザインだし。

「しかしなんというか……人が多いな」

「帝国海兵じゃないわね。多分イクサーマル伯爵家の私兵よ。でも確かに多いわね」

セレナ大佐が指揮を取るレスタリアスもこの船と同じくらいでかいが、これほどの人員が出入りしているのは見たことがない。あれも巨大な船だが、動かすのに必要な人手は然程でもないって話なんだよな。ティーナとウィスカに聞いた話だけど。

「普通の船じゃないんでしょうか？」

「古いし、もしかしたら対機械知性戦争の頃の船じゃないかしら」

「というと？」

「機械知性に制御を奪われないようにコンピューター制御で動かす部分を極端に減らしたりとか、そういう対策をした船よ。だとすると確実に百年以上は前の船ね。もっと古いかも」

そう言って船を見上げるエルマの目は胡散臭いものを見るようなものになっている。そういやグラッカン帝国の貴族ってどうも機械知性に対して一歩引いた態度というか、何か含んだような態度を取るんだよな。

「伯爵家ともなれば最新の船なんて買い放題だろうに、どうしてそんな古い船を使ってるのかね？」

「機械知性に用心してるんでしょう。ネットワークに繋がってさえ

いれば、彼女達はどこにだって入り込めるから」
「そりゃおっかない」
でも納得できる話でもあるな。メイ一人で軽くブラックロータスを掌握してしまえるのだから、機械知性達の手にかかれば帝国航宙軍の船でもなんでもやろうと思えば乗っ取れてしまうのかもしれない。無論、そんなことをしないようにグラッカン帝国との間で協定だのなんだのは組まれているのだろうけれども。

「商売に都合が悪いからかね？」
「それ以上は口を閉じときなさい」
「アイアイマム」

エルマに怒られたのでこれ以上の発言はやめておくことにする。
イクサーマル伯爵家は宙賊との繋がりが疑われている貴族だからな。奴らと取引をするのに機械知性なんぞに船の中に入り込まれてしまったら都合が悪い。だからこの時代になっても古臭い対機械知性艦を使っているのではないか？　というのが俺の考えだ。
制御を奪うまでは行かなくとも、監視カメラなどを機械知性にクラッキングされて悪事の証拠なんかを記録されたら奴らとしては大変なことになるんだろうからな。
え？　イクサーマル伯爵家を真っ黒に見過ぎじゃないかって？
皇帝陛下に睨まれて前線送りにされた上に宙賊絶対殺すウーマンのセレナ大佐にも睨まれている時点でほぼ確定で黒じゃないかと俺は思ってるよ。そうじゃないとしても、ダレインワルド伯爵家というかクリスにちょっかいをかけた時点でよろしくやるような仲にはなりえないからなぁ。

「とにかく中に入ろうか。タラップはあそこかな」
「はい！」

「はい、我が君」

元気よく返事をするミミとしずしずと俺の三歩後ろをついてくるクギと共にタラップへと向かう。エルマ？　エルマは鋭い目つき……というより胡散臭いものを見る目つきで辺りを警戒しながらクギと並んで歩いてきてるよ。

「傭兵のヒロだ。ご招待にあずかって参上したんだが、話は通ってるか？」

タラップに近づき、歩哨をしている兵士に声をかける。ふむ、品質の良さそうなコンバットアーマーに、これまた品質の良さそうなレーザーライフル。その他の装備も金がかかってるな。行くサーマル伯爵家ってのはやはり金回りが良いらしい。

「待て、確認する……リストにあるな。後ろのは連れだな？　三人ほど足りないようだが」

「一応待機任務中だろ？　いつでも船を動かせるように残ってもらったんだ。問題はあるか？」

「……いいや、問題ない。入ってくれ、案内役が待機してる」

「あいよ、お疲れさん。行くぞ」

歩哨とのやり取りを終えてタラップを上がり、船の中へと足を踏み入れると、そこには本当にあの古臭い戦艦の内部なのかと疑ってしまうような光景が広がっていた。

「わぁ、綺麗ですね」

「内装が豪華だな」

綺麗なカーペットが敷かれた床。明るい照明を放つ天井、シミ一

つ無い壁、それに俺達を待ち構えている執事やメイドらしき人々。船の外の物々しい雰囲気とは隔絶された華やかな空間がそこに広がっていた。

「航宙艦ではスペースは貴重なものだろうに……大胆な空間の使い方だな」

ここは来客をお迎えするホールなのだろう。もしかしたら戦艦のこのブロックだけが独立した歓待スペースになっているのかもしれない。

「イクサーマル伯爵家の旗艦、マジェスティックへようこそ。傭兵のキャプテン・ヒロ様とお連れの方々ですね？」

「ああ、そうだ。凄い船だな」

こちらへと歩を進めてきたダンディな執事風の男性にそう答える。すると、彼は誇らしげな表情をしながら恭しく頭を下げた。

「ありがとうございます。この船にはイクサーマル伯爵家の歴史が刻み込まれておりますから。どうぞこちらに。ホールズ大佐は既に到着されております」

「そうか。遅刻はしてないと思うんだが、待たせるのも悪いな。案内してくれ」

俺の返事に彼は再び軽く会釈を返し、先に立って歩き始めた。

「……どうだ？」

「……今のところは何も」

俺のすぐ側まで近づいてきていたクギに聞いてみる。どうだ？

というのは俺達に対する悪意や敵意を抱いているような人物の有無を聞いてみたのだ。
俺も今はそういうものに関する感度を上げているところだが、特に成果はない。俺よりもずっと精神感応能力に長けているクギがそう言うなら、今のところは大丈夫なんだろう。だからといって警戒を解くことはできないが。

「何事もなければ良いがな」
「それは高望みし過ぎじゃない？」
「この願いが高望みになってしまうのはおかしいと思わんか？」
「あはは……」

俺とエルマのやり取りを見たミミが苦笑いを浮かべる。ミミもエルマと同意見なんだろうな。
とはいえ、ここからイクサーマル伯爵とやらが俺達を捕らえて何かすることにはデメリットの方が大きいはずだし、普通に考えれば何もないはずなんだが。

＃４４６　伯爵家の男達（前書き）

読者の皆様のお陰で１１巻の出だしは好調のようです！　ありがとうございます！―（：３」∠）―

#446　伯爵家の男達

俺達が壮年の執事に案内されたのは落ち着いた雰囲気の食堂のような場所だった。程よい広さの空間には真っ白のテーブルクロスが敷かれた大きなテーブルが設えられており、既に貴族らしき男性が二人とセレナ大佐、それに副官の女性士官が席についていた。

「デイビット様、傭兵のヒロ殿をお連れ致しました」

「ご苦労。ヒロ殿、お連れの御婦人達もどうぞ席についてくれ給え」

二人いる男性貴族のうち年嵩――中年男性の方が俺達に着席を促してきた。特に断る理由もないので、素直に従って全員で席につく。

「実に華やかで素晴らしい。最近は忙しくて花を愛でる時間も取れていなかったのでね。ああ、いやいや、わかっているとも。あまりに露骨で不躾な視線を送るつもりはないので安心してほしい。ただただ最近は心労が募るばかりだったという話なのだよ」

俺達が席につくなり、俺達に着席を促した紳士はそう言って爽やかな笑みを浮かべてみせた。いや、その発言だけでかなり失礼というか眼福ですって言っているようなものだと思うが。それでもあまり不快な気持ちにならないのはこの男が放つ不思議なカリスマ性のようなものの効果なのか。

「ああ、これは失礼。自己紹介がまだだったな。私はデイビット。デイビット・イクサーマルだ。イクサーマル伯爵家の当主で、伯爵だ。私の隣に座っているのが――」

「ヴィンセント・イクサーマル……こいつの息子だ」

ヴィンセントと名乗った男性貴族――見た目だけなら俺と同じか、少し若いくらいに見える――がそう言って軽く肩を竦めてみせた。こちらは目付きが鋭く、いかにも油断できなそうな相手だ。

「やれやれ……当主にして父である私をこいつ呼ばわりとは。これが反抗期というやつなのだろうかね？　まぁ良い。ヒロ殿、良ければお連れの御婦人達を紹介してくれないかね？」

「オーケー。ただ、先に断っておくが貴族に対する適切な振る舞いというものは期待しないでくれ」

「いいとも。この場は公式な場というわけでないからね」

「そりゃどうも。まずこの子がミミ。ターメーン星系出身で、俺の妻だ。俺の船のオペレーターで、傭兵団全体の補給官としても腕をふるってもらっている」

「つ、妻のミミです」

ミミがガチガチに緊張したまま顔を真赤にして小さな声でそう言ってから頭を下げる。そういえば他人にミミのことを妻だと紹介するのは初めてかもしれない。自然とそうしてしまったんだが、はて？

「次にこっちがシルバーランク傭兵のエルマ。帝都にあるウィルローズ子爵家の娘で、俺のパートナーだ。傭兵団の運用全般を支えてくれるアドバイザーで、うちの団のナンバーツーだ」

「どうも」

エルマはミミと打って変わって事務的にイクサーマル伯爵家の二人に挨拶をした。

「そして最後にこの子がクギ。諸般の事情によって俺の従者をしてくれている。団全体のメンタルサポートもしてくれている」

「クギと申します。お見知りおきを」

クギはそう言って優雅にお辞儀をしてみせる。ふむ、こうしてみると三者三様というか、それぞれ個性的だよな。うちの面子は。ここにティーナやウィスカ、それにショーコ先生がいたらどんな風に挨拶をしていたのかね？　メイだけは容易に想像がつくけど。

「妻にパートナーに従者か。生きたままシルバーウィングとゴールドスターを賜る英雄らしいといえば英雄らしいな。変人揃いのプラチナランカーの一人でもあると考えれば、まぁ妥当というか穏便というか、まだ理解できる範囲だ」

そう言ってヴィンセントが皮肉げな笑みを浮かべる。

女性を大量に側に侍らせているスケベ野郎という評価は甘んじて受けざるをえないが、少し気になることを言ったな？

「俺以外のプラチナランカーとも付き合いが？」

「一人だけだがな。やり取りはメッセージだけ、顔どころか姿も見せない変人だ」

なんか御前試合でそんなのと戦った気がするな……名前は忘れたが。そういやあんまりプラチナランカーに関してはリサーチもしてないんだよな。そもそも会うことがないし、会いに行く予定もないから。

「なるほど、俺以外のプラチナランカーはそんなにアクの強いのばかりなのか」

「連中と比べてお前のアクが強くないわけじゃないと思うがね……歓談も良いが、そろそろ喉ぐらい潤しても良いんじゃないか？」

「そうだな。用意を」

デイビットがそう言うと、壁際に待機していたメイドや執事達がテキパキと動いて食前酒のようなものを用意し始めた。高級そうなボトルから注がれた金色の液体がクリスタル製と思しきグラスに注がれていく。

「俺は下戸なんだが……」

「そうなのかね？　まぁ、然程酒精の強いものではないから、アレルギーというわけではないなら一杯だけ付き合ってくれ給えよ。さて、何に乾杯するべきか。そうだな……月並みだが、ヒロ殿達との新たな出会いに乾杯ということにしよう。では、新たな出会いに」

そう言ってデイビットはグラスを掲げ、金色の液体を飲み干した。俺を含めた他の面子も彼に倣い、グラスを掲げて金色の液体を飲み干す。渋みの少ないさっぱりとした味の液体だ。甘みよりも酸味が強く、とても飲みやすい。だが、しっかりとアルコールも感じる。こりゃ飲みやすいからとカパカパ飲んだら速攻で潰れるやつだな。ああ、もう既に顔が火照ってきている気がする。

「それにしても今回はすまなかったね、大佐。作戦の途中だというのに呼び戻してこの集積基地に貼り付けるような真似をして。しかし万が一のことを考えると予備兵力はいくらあっても足りないというのが現実だ。現状の戦力だけでも連邦軍は跳ね返せるだろうし、数日で帝国軍本隊の増援も来るから問題はないとは思うのだがね」

「いいえ、司令。私が貴方の立場でも同じ選択をしたかもしれませんから、お気になさらず。陛下の剣として為すべきことを為すだけです」

「そう言ってくれると助かるよ」

デイビットはセレナ大佐と帝国航宙軍トークを繰り広げるつもり

らしい。完全にあちらに意識を向けているところを見ると、俺達のホストはデイビットではなくヴィンセントの方なのだろう。

「データを見たが、貴様の戦果はなかなかユニークだな。それに、宙賊ばかりを狩っているというのも珍しい。何か宙賊討伐への拘りがあるのか？」

「別に執着しているわけじゃないが、奴らはどこにでもいて、狩り方を知ってさえいれば良い金蔓になるからな。それに好きなだけぶっ飛ばして奪い尽くしても良心が傷まないし、なんなら各方面から感謝もされる。獲物として理想的だろ？」

「なるほど。参考までに、どれくらい稼げるものなのか聞いても良いか？」

「狩り場によってムラがあるが、だいたい一週間で百万エネル以上だな。今は船も増やしたし、もう少し行けるんじゃないか？　まだ連携を調整中でね」

「ほう？　流石にプラチナランカーともなれば稼ぐものなのだな。まぁそれだけ女を囲うならそれくらいの甲斐性は必要か」

「そんなところだな。他にも大きなヤマが入ればそっちに専念するし、母艦のカーゴ容量を活かしてちょっとした物資輸送なんかもやるな。大きなヤマの発注元や仕事内容については話せないが」

ヴィンセントは俺の話を興味深げに聞いている。

ふん？　ちょっと警戒していたが、こうして話してみると普通の貴族と変わらんな。取り繕うのが上手いのか、それとも取り繕うまでもないのか。今のところ特に敵意も害意も感じないが、そのような感情を持たず、息をするようにこちらを害してくるような人間だとすると厄介だ。

「グラスが空いているな」

「ああ、だが」

「酒は要らないんだろう？　酒以外にも飲み物の用意はあるさ。じきに料理も運ばれてくる」

ヴィンセントが手で合図をすると、メイドさんが何か飲み物を持ってきた。色からすると何かの果物の果汁とかだろうか？　かなビビッドなピンク色で手を伸ばすのを躊躇ってしまうんだが。

「とりあえず、貴様との縁に乾杯だ」

「そりゃどうも」

すぐに切れる縁じゃないかと思うんだがね。どんなにこの場で友好的にふるまったとしても、クリスへの妨害の件については忘れないからな。俺は。

#447　急転（前書き）

（メタ視点では）予測可能回避不可能（ω）

#447　急転

まず一つ言い訳をさせて欲しい。警戒していないわけではなかったが、流石に食事に一服盛ってくるとは思わないじゃないか。セレナ大佐も普通に食事をしていたし、クギも特に反応をしていなかった。エルマも遠慮せずに酒を飲んでいたし、ミミも満足そうに食事をしていた。

俺も特に悪意や敵意を感知しなかったから、油断していたといえば確かにそうなんだが、貴族出身の二人が裏切りは絶対にないと太鼓判を押していたんだ。情状酌量の余地はあると思わないか？

まぁ何にせよ、俺はしくじったわけだ。それは認めなければならない。

ガシャン、という音と共にミミが食卓に突っ伏したのが最初だった。

「……？　ッ！？　まさか！？」

「嘘でしょ……？　何のメリットが……？」

状況を理解したセレナ大佐が席から立ち上がろうとして立ち上がれずに愕然とし、エルマも今にも気絶しそうな様子だ。かく言う俺も今にも寝落ちしそうな程に眠い。殺すタイプの毒ではなく、睡眠薬とかそういう類か。最悪だ。

クギに視線を向けると、彼女は今にも眠り込んでしまいそうな様子でこちらに視線を向けてきていた。

どうか、こころおだやかに。

彼女から懇願するような思念が飛んでくる。なるほど、心穏やか

に、ね。彼女の言わんとすることは理解できる。イクサーマル伯爵家の連中は知らないからな。実は俺が反応弾頭なんかよりもよほど危険な爆弾だってことを。

「おい……」

「……なんだ？」

ヴィンセントが感情を感じさせない声で返事をしながら俺へと視線を向けてくる。気に入らない目だ。人のことを人と見ていない、モノを見る目だな。俺も宙賊に対してこんな目を向けているのかもしれないが。

「悪いことは言わないから……彼女達に手を出すのは……やめて、おけ」

「ふん？　何故だ？」

「そうしたら俺がお前らを破滅させちまうからだよ……」

「破滅だと？　それは随分と大きく出たものだな。薬の影響で今にも気を失いそうな負け犬が」

「忠告したからな……？　良いか？　絶対に手を出すんじゃないぞ……？」

そして俺は意識を手放した。

☆★☆

俺が奴らを破滅させる危険な爆弾とはどういうことか？　という話をすると少し複雑な話になる。いや、実のところそんなに複雑でもないか？

つまり、クギの言うところの上位世界からの来訪者である俺は膨大なサイオニックパワーをこの身に秘めている。もし、その膨大な

サイオニックパワーが何らかの切っ掛けで暴走し、解放されたら？　最悪の場合、その力はこの宇宙に巨大な穴を穿ち、宇宙そのものを破裂させてしまうかもしれない。

或いは恒星のエネルギーをも巻き込んで超新星爆発のような破滅的な結果を引き起こし、巨大なブラックホールを発生させるかもしれない。何にせよ恒星系一つ消滅するのが最低ラインという大惨事を起こしかねないというのがクギの説明であった。

ではそういった事態はどのような時に発生するのか？　と言うと、過去に何度も来訪者と接触したヴェルザルス神聖帝国ではある程度の研究が進んでいるという。簡単に言えば、来訪者が怒りや憎悪を募らせた果てに絶望し、精神的に修復不能なダメージを負うか、肉体的な死を迎える。大体の場合はそのどちらかがトリガーとなって破滅的なシナリオが発生するそうだ。

「最悪の目覚めだ」

サイオニック能力の訓練を始めるにあたってクギから聞かされた嫌な話を夢に見て目を覚ました。

目を覚ました俺は床に固定された背もたれ付きの椅子に座らされており、身体を丈夫そうな紐のようなものでぐるぐる巻きにされて椅子に固定されていた。腕も片腕ずつ手錠のようなものを嵌められて肘置きに固定されている。首だけは自由に動かせるが、身体は一切動かせない。

唯一自由な首を動かして俺が勾留されている部屋の中を見回してみたが、意外と内装は悪くない。床にはカーペットが敷かれているし、俺の正面にはローテーブルとソファまで設置されている。まるで応接間か何かのようだ。

室内の様子を観察していると、扉が開いてヴィンセントと二名の兵士が入ってきた。目覚めてすぐに入ってくるところを見ると、俺のバイタルをチェックしていたのかね？　まぁそんなことはどうで

も良いか。

「目覚めの気分はどうだ？」

つまらないモノを見る目を向けてくるヴィンセントの真正面から見返し、口角を釣り上げて見せてやる。

「最悪だ。貴族の間では客に一服盛って椅子に縛り付けるのが流行ってるのか？　良い趣味してるな」

皮肉たっぷりに言葉を返しながら意識を集中し、椅子の肘掛けを『掴んで』捻り始める。肘掛けが軋む音がバレないように腕を動かしてガチャガチャと手錠を鳴らし、偽装することも忘れない。

「この状況で虚勢を張れるのは称賛に値するがな。お前の命もお前の女の命も私の一存で如何様にでもできる状況だ。言葉は慎重に選ぶんだな」

「薬を盛って椅子に縛り付けて、人質も取ってから勝利宣言か？　かっこいいなお前」

俺の煽りにヴィンセントの眉がピクリと動く。どうやら効いたらしい。

「口を慎めと言っているのがわからないのか？　私の指示一つでお前の女達に死ぬよりもなお酷い結末を迎えさせることもできるんだぞ？」

「おお、怖い怖い。それで？　そのカードを使って俺に何をさせようって言うんだ？　お前のナニでもしゃぶれってか？　えぇ！？」

俺の『手』が金属製の肘掛けを捻って破断させる音を大声で隠し、

次の手としてヴィンセントの腰元に見える剣の柄に目標を定める。俺の『右手』を奴の剣の柄に伸ばし、『左手』を巨大化させて拳を握る。集中するのに時間が掛かるな、これは。

「お前は傭兵だろう？　私達に協力しろ。報酬は払うし、ちゃんと働けば女達も無事に返してやる」

「お前はアホか？　薬を盛られて拘束された上に、自分の女を人質に取られて脅された奴が素直に従うと思ってるのか？」

「従うだろう。お前は女達を見捨てられまい？　そういう男だ、お前は」

「クソ野郎がよ……その綺麗な顔を吹き飛ばしてやる」

「何だと……がっ！？」

『右手』で掴んだ剣の柄を手元に引き寄せながら、巨大化させた『左手』でヴィンセントと二人の兵士をまとめて殴り飛ばす。目に見えない巨大な拳に殴り飛ばされた三人は揃って壁に激突し、苦悶の声を上げた。いくら身体的に強化された帝国貴族だろうとサイオニック能力が無い以上、サイオニック能力による不意打ちは回避できない。

俺はヴィンセントの剣を使って胴体を縛り付ける頑丈な紐を切り裂き、自由を得ると同時に息を止めて周囲の時間の流れを鈍化させた。

「――ッ！？」

鼻血を出しながら驚愕の表情を浮かべるヴィンセントの右腕を斬り飛ばし、ついでとばかりに二名の兵士も同様に片腕を斬り飛ばす。

息を吐くと同時に鈍化した時間が元に戻り、ヴィンセント達の苦悶の声が室内に響いた。

「グッ！？　な、何を……！　どうして……！？」
「さぁな」

両手の手錠をヴィンセントの剣で斬って外し、兵士達の装備を探って救急用ナノマシンやレーザーガン、レーザーライフルなどの装備を奪う。

「形勢逆転だ。ミミ達が捕らえられている場所を吐け。こいつが欲しいだろ？」

そう言って救急用ナノマシンのインジェクターを見せびらかしてやる。奴らは片腕を斬り飛ばされているのだ。今は残った左手で切断面を押さえているが、そんなものは気休めにしからならない。いくら身体強化を受けていると言っても人間であることには変わらない以上、大量の血液を失えば貴族とて死ぬ。つまり、早急に救急用ナノマシンを投与して傷口からの出血を止めなければ奴は死ぬのだ。

「き、さま……このようなことをしてただで済むと……！」
「ただで済むかどうかは知らん。だが俺は俺と俺のクルーの命を脅かす相手に容赦をするつもりは一切ない。なに、いざとなれば皇帝陛下か皇女殿下に泣きつくさ。セレナ大佐かダレインワルド伯爵家に縋る手もあるし、何なら帝国から逃げ出したって良い」

そう言いながら俺はヴィンセントの剣を油断なく構える。片腕を失っても相手は貴族だ。とんでもない速度で立ち上がって反撃してくるかもしれないからな。

「時間稼ぎはナシだ。今すぐ吐くか、死ぬか選べ」
「ふっ……クク、お前のような傭兵如きが貴族を殺せるわけが――」
「いいや？　殺すぞ？」

そう言って俺は呆気なくヴィンセントの首を斬り飛ばした。俺の言葉を聞いて目を丸くしたままのヴィンセントの首が宙を舞う。話す気がないなら生かしておくだけでリスクが高い貴族なんざ最優先でぶっ殺すに決まってるだろ。常識的に考えて。え？　後の面倒？　イクサーマル家の当主もぶっ殺せば有耶無耶になるんじゃね？　知らんけど。どうにもならんかったら帝国領から出れば良い。

「さぁ、どっちが話す？　先着一名様だ」

ヴィンセントの剣を一振りして刀身についた血を振り払い、愕然とした表情で俺を見上げる二人の兵士に声をかける。

「おいおい、呆けてるんじゃねぇよ。とっとと話さないと手元が滑るぞ。こう見えて俺は今盛大にキレ散らかしてるんだ」

自然と口角が釣り上がるのを感じる。頭の中がざわつく。心なしか室内の調度が僅かに震えている気がする。もしかしたら俺のサイオニック能力が暴走しつつあるのかもしれない。

「知っていることをとっとと話せ。そうすれば殺さないおいてやる。何も話さないなら、主人の後を追わせてやるよ」

腕の切り口を押さえ、ガタガタと震える二人に俺はそう言って刃を向けた。

＃４４８　屍山血河を築きながら（前書き）

ぐへへ展開は無いです（，ω，）（ネタバレ

#448　屍山血河を築きながら

先を争うように情報をゲロった二人の兵士をテレパシーの応用で昏倒させ、奴らの装備を奪ってミミ達の救出に動き始めた。
え？　テレパシーの応用でどうやって昏倒させたかって？　俺のサイオニックパワーは強大だからな。直接頭に触れて『眠れ！』って感じで思念を最大出力で脳味噌に叩きつければ一発よ。
普通の人にやると後遺症が残りかねないというか、最悪死ぬ可能性があるから使う時は慎重にって言われたけど、この状況じゃ知ったこっちゃないな。クギくらいテレパシーの扱いに熟達していればもっとスマートにやれるらしいが、サイオニック能力をやっと扱えるようになった程度の俺ではこれくらいが限界だ。

「しかしやたらでかい船だな。クソ、マップ表示機能があるガジェットが欲しい……」

この状況では片手を小型情報端末で塞ぐのは得策じゃないし、そもそもいつ俺の脱走がバレてこの船に乗っている兵士が襲いかかってくるかわからない。スカ〇ター的なウェアラブルデバイスの導入も考えておくか。
などと考えながら兵士に吐かせた情報に従ってミミ達が監禁されているという部屋へと向かっていると、二人組の兵士と鉢合わせした。

「お前は……止まれ、ここで何をしている」
「ヴィンセント殿の依頼を受けることになってな。仲間の無事を確認するために移動中だ。ほら、信頼の証に彼の剣を借り受けてるぞ」

そう言って俺は誰何してきた兵士にヴィンセントの剣の柄を指し示してみせた。声をかけてきた兵士は剣の柄に視線を向け、もう一人の兵士はいつでもレーザーライフルを俺に向けられるように身構えている。流石にまだ銃口をこちらに向けてきてはいないが、いつ向けてきてもおかしくないな。

「待て、確認する」
「それは困るな」
「は――？」

俺は一瞬息を止め、抜き打ちで二人の兵士を両断した。
信じられない、とでも言いたげな表情で胴体の半ばから両断された二人の兵士が艦内の廊下に倒れ、俺の足元が血と臓物に塗れる。

「やるしかないな」

警戒している相手の頭に直接触れることは難しいし、そもそも集中が間に合わない。こうなってしまっては斬るしかない。
俺は既にヴィンセントを手にかけているし、イクサーマル伯爵家が俺とセレナ大佐と敵対するという姿勢は明白だ。こうなったら後は暴力で押し通る他あるまい。ああ、やだなぁ。致死出力のレーザーライフルなんざ食らったら一発でお陀仏なんだが。

「パワーアーマーどころかコンバットアーマーもなしの完全生身はなぁ……仕方ない」

手近な壁に剣を振るい、盾として使うのに適当な大きさに切り出す。
レーザー兵器というのは対象の表面要素を超高熱で蒸散爆発させて破壊するという原理上、破壊力は高いが貫通力はあまり高くない。

戦艦内の通路の壁材というのは白兵戦を想定してそれなりに頑丈な素材でできている筈なので、これでも数発……最悪でも一発はレーザー兵器の攻撃を防げる筈だ。盾が壊れたらまた壁から切り出せば良い。その分イクサーマル伯爵家の旗艦がボロボロになるが、知ったことか。

切り出した壁材の盾をサイオニック能力で作り出した『手』で一枚ずつ持ち、駆け足で目的の部屋へと向かう。

「うわっ！？　なんだ！？」

「止まれ！」

「断る！」

曲がり角で出会った兵士に向けて壁材の盾を押し出し、盾が当たってたたらを踏んだところを一息で斬り捨てる。彼らに罪は何もないだろうが、立ちはだかる以上は敵だ。敵は斬る。

俺が派手に暴れればそれだけミミ達への注意も逸れるだろう。そうすれば彼女達だけで脱出を果たすということも考えられる。ミミはともかくとしてエルマも徒手格闘では俺よりも強いし、人並み以上にレーザーガンなどの武器を扱うことだってできる。クギには強力なサイオニック能力もある。可能性は十分だ。

「何事だ！？」

「負傷者あり！　コード０３！　コード０３！　セクター２－Ｂでコード０３発生！　応援求む！」

騒ぎを聞きつけた兵士達が集まってきた。ＳＯＬで白兵戦を何度もやってわかったことはいくつかあるが、一対多で戦闘をする時の鉄則がある。

「うわぁっ！？　突っ込んできた！？」

「応戦し――グァッ！？」

頭数の多い相手と腰を据えてまともに撃ち合ってはいけないということだ。完全にジリ貧になって火力差で押し負けるからな。装甲とシールドが許す限り距離を詰めて敵の体を他の敵からの攻撃の盾にして、的を絞らせず、誤射を恐れさせ、攻撃頻度を下げさせる。

それを意識しながら盾を全面に押し出して兵士達に詰め寄り、まごついている間に左手のレーザーガンで撃ち、右手の剣で斬り捨てていく。当然間合いが開いている敵兵はレーザーライフルで射撃を加えてくるが、引っ剥がした壁材の盾と切り捨てた兵士の死体をサイオニック能力で作った『手』で掴み上げ、盾として使って防ぐ。

「ひっ、ひいぃ！？　し、死体が！？」

「死体を操ってるぞ！？」

「こうなりたくなきゃ武器を捨てて道を空けろ！　そうしないなら同じように斬り捨てる！」

見た目がかなり邪悪なことになっているが、壁から盾を切り出す暇もないのが悪い。

「わ、わかった！　武器を捨てる！　捨てるから！」

「馬鹿野郎！　伯爵閣下に殺されるぞ！」

「知るか！　俺は殺されて死体まで弄ばれるのは御免だ！」

レーザーライフルとレーザーガンを放り出して床に伏せて降伏する兵士も出てきた。それでも抵抗する奴はいるので、死体を投げつけて動きを止め、死体ごと斬り捨てて命を奪う。ついでに放り捨てられているレーザーライフルやレーザーガンも斬り捨てておく。背中から撃たれるのは御免だからな。

「面妖な！　斬り捨ててくれる！」
「出たな貴族兵」

曲がり角から躍り出てきた貴族兵が死体の盾を掻い潜って肉薄してきた。振り上げられた剣が照明を反射してギラリと輝く。

「もらっ――なっ！？」
「残念」

貴族兵が振り上げた状態でピクリとも動かなくなった剣に驚愕し、俺は剣を振り上げて無防備になった貴族兵の腹をヴィンセントの剣で撫で斬りにする。
確かに剣の切れ味はパワーアーマーどころか戦艦の装甲材すら切り裂くのだろうが、目に見えず、触れることもできない『力』を斬ることはできない。貴族の剣でもシールドを斬ることはできないのと同じことだ。
死体の盾を手離した『手』で刀身を受け止め、握り込んだ剣はいくら身体強化した貴族であっても振り抜くことなどできはしない。

「ばか……な」
「剣は貰っていくぞ」

上半身だけになった貴族兵の手から剣をもぎ取り、ヴィンセントの剣で首を刎ねてしっかりとどめを刺しておく。左手用の剣としては少々重いが、贅沢は言えない。これでいつものスタイルに戻ったな。

「おらぁ！　死にたいやつからかかってこいや！」

両手の剣で壁を切り裂き、新しい盾を補充しながら敵兵を挑発す

る。こうなったらとことんやってやろうじゃないか。死体の山を築き上げてでもうちのクルーを返してもらうぞ。

□■□

「ふん……算盤が合わんな。忌々しい」

ヒロが誰かから奪った二本の剣でイクサーマル伯爵家の私兵を斬って斬って斬りまくる大暴れをしているライブ映像を見ながら、反逆者デイビット・イクサーマルが言葉通り忌々しげな表情をする。

「船を降りても強いという報告は聞いていたが、ここまでとは……」

別のホロディスプレイには対宙賊独立艦隊の海兵達とイクサーマル伯爵家の私兵達が一触即発の雰囲気で睨み合っている映像が表示されており、また別のディスプレイにはこの船、マジェスティックのハッチをブリーチングして突入し、艦内で戦闘を繰り広げている軍用戦闘ボットとメイドロイドの姿が映し出されている。

「役立たずなのは君だけのようだな？　ホールズのご令嬢」

「……」

デイビット・イクサーマル伯爵……いや、反逆者デイビットがそう言いながら皮肉げな表情を向けてくるが、私はそれを黙殺した。何らかの反応を返してもこの男を喜ばせるだけだ。

天井から垂れている鎖に両手を繋がれ、辛うじてつま先が床に着くくらいの状態で吊るされている私に為す術が無いのは事実だが、この反逆者にそう言われると腸が煮えくり返りそうになる。

「変に色気を出さずにあの男は殺しておくべきだったか。人質を集

めたほうが良いな……ゴンザレス、応答しろ。女どもを私のところまで連れてこい。ジェイムズ、艦の被害は考慮しないで構わん。仕留めろ。せめて足止めをしろ。ボットどもにはＥＭＰを食らわせてやれ。使用を許可する」

部下達から了解の旨が返ってきたのか、デイビットは満足そうに頷いて私に向き直った。そして、私のすぐ近くに設置されている台に視線を向ける。

「ふぅむ、軍用の異物除去インプラントの影響か、薬剤系の効きが極端に悪いな。量の調節が難しい。ワームを試してみるか……？それとも他の手を……」

小さなカプセルの中で蠢く悍ましい何かを見ながらデイビットがブツブツと呟いている。先程から私に怪しげな薬剤をインジェクターでブスブスと……何を期待しているのか知りませんが、気色が悪い。身体的要因ではなく、精神的な要因で吐き気がする。

「こいつは物理的に脳を破壊する恐れがな……流石にそれは手間だし、スキャンですぐにバレるのは良くない。マリオネットの投与量を増やして異物除去インプラントのキャパシティオーバーを狙うか……？　これも過剰投与は危険だが……」

『閣下、人質の女どもを連れて来ました』

デイビットが何事かろくでもないことを思い悩んでいるうちに、奴の部下らしき声が聞こえてきた。人質の女ということは、ヒロのクルー達が連れてこられたのでしょう。これはまずい。私のように身体強化も異物除去インプラントも無い彼女達ではデイビットの怪しい薬剤に対抗できない可能性が高い。

「ご苦労、入れ――……」

扉が開いた瞬間、デイビットが突然身体をピンと伸ばして仰向けに倒れ込んだ。倒れたまま身体をガクガクと震わせ、白目を剥き、泡まで噴いている。一体何が？

「うわ……凄いことになってるわよ、イクサーマル伯爵」

「これ、大丈夫なんですか？」

「少々強くしましたが、命を奪う程ではありません」

大柄な士官の後ろから部屋に入ってきたヒロのクルー達が緊張感の欠片もない様子で反逆者の様子を見ている。肝心の士官は倒れている反逆者を見ても全く無反応だ。よく見ると、瞳の焦点が合っていないように見えるが……何らかの方法で操っているのだろうか？

「あら、随分な格好ね。ご機嫌いかが？」

「最悪です。早く解放してくれませんか？」

「今助けますね！」

「此の身はこの男を傀儡にします」

どうやったのかはまったくわかりませんが、彼女達は自力で危機を乗り越えたようだ。ヴェルザルス神聖帝国の巫女――確かクギという名だったはず――が泡を吹いて倒れている反逆者の額に手を置くと、反逆者の痙攣が強くなり始めたが……あれは大丈夫なのだろうか？

「その男を操れるなら早くしてください。ヒロが死にますよ」

ミミさんが頑張って私を解放しようと鎖を下ろす方法を探しているのを横目に見ながら、激しい攻撃に晒されながらも奮戦している

ヒロが映っているホロディスプレイを顎で指し示す。

「うわ、これは不味いわね。クギ、急いで」

「もう少しです。なかなか頑固な方ですね」

そう言いながらクギさんは冷酷さすら感じさせる冷たい目で痙攣する反逆者を見下ろしていた。ヴェルザルス神聖帝国のサイオニック能力者というのはやはり侮れない……帝国貴族を反撃の余地もなく昏倒させて傀儡にすると言ってのけるとは。帝国貴族にして帝国軍人である私としては言いたいこともあるが、この状況では黙認するしかない。

「あ、このコンソールでしょうか？　こうかな？」

「いたたた！　上がってます！　逆です逆！」

「す、すみません！」

どうしてそこで逆を引くのか。助けてくれたことには感謝しますけれど。

#449　溢れ出る力（前書き）

18時ジャストに書き上がったらそりゃ掲載が間に合わないよね（ ̄ω ̄）

#449　溢れ出る力

「ぎゃあああぁぁっ！？」
「フレッド！？　ぐあっ！？」

時の流れが戻った瞬間、無骨な金属で形作られている戦艦内部の回廊に悲鳴が響き渡り、血飛沫が舞って白い金属製の壁を朱に染める。

「人間の動きか！？　あれが！？」
「貴族でもあそこまでは――まずい、来るぞ！？」
「撃て！　撃て！」

イクサーマル伯爵家の私兵達が通路に設置したバリケードの裏に身を隠して息を整えた俺は、再び息を止めて物陰から飛び出し、私兵達が向けてくるレーザーライフルの銃口が向いているポイントを死体や通路の壁材を利用した盾で防ぎ、それでカバーできない部分は剣で防御しながら敵兵へと突進した。
敵意と殺意が肌を突き刺し、恐怖の感情が香ってくる。希望と絶望が織りなす極彩色が通路を満たし、奇妙なコントラストを描いている。戦闘の興奮で拡大した俺のサイオニック能力が感情知覚をより鋭敏にしていく。

「――ッ！？」
「！！！？」

減速した時間の中で、彼等の声は音として俺の耳には届かない。ただ、彼等が放出する感情だけが空間に広がり、俺の心を撫でてい

く。怒り、悲しみ、苦痛、恐怖、それらの感情は減速した時間の中でも関係なく、声よりも早く俺に到達するのだ。
レーザーライフルから放たれた致死出力のレーザーが俺が盾としている死体や壁材に阻まれ、レーザーに晒された死体や壁材が緩やかに爆発し、破壊されていく。俺はその爆発よりも早く動き、両手の剣で私兵達を斬り捨てる。
彼等の得物を、手足を。時には胴や首を。バリケードに身を隠している者相手にはバリケードごと叩き切ることすらやってみせる。

「いや、待てよ……？」

再び物陰に入り、攻撃をやり過ごしながら考える。
わざわざ手の数を二本に限定する意味があるのか？　いや、手である必要すらないのでは？　俺が直接斬り捨てる必要は？　そもそも敵を殴り飛ばせるなら、締め上げることも、握り潰すこともできるのでは？

なんだ。かんたんじゃないか。

「な、なんだ！？」
「バリケードが……！？　ぎげっ！？」
「ひ、ひぃぃ！？　ぎゃあぁぁっ！？」

力の奔流が通路に存在する物体を掌握し、瓦礫と、バリケードと、光学兵器と、死体で作られた濁流と化して全てを粉砕し、押し流していく。

「通路はダメだ！　部屋の出入り口に退避してリーンし……あっ、がっ！？　ぎ、けぺっ！？」
「あ、頭が……や、やめ――」

部屋から頭部とレーザーライフルだけ出して攻撃しようとしてきた連中の首や頭を捕まえ、縊り、握り潰す。最早剣を振る必要すらない。レーザー兵器すら必要がない。

「ば、化け物……！」

「こんなの無理だ！　撤退！　撤退！」

私兵達が武器を捨てて逃げていくのを見送る。流石の俺も武器を捨てて逃げていく連中まで皆殺しにするほど鬼じゃない。そう、鬼じゃ……。

「……やっべ」

俺以外に誰一人生きている者がいなくなった通路の惨状を見て思わず呟く。何故か急に冷静になって気がついたが、明らかにやりすぎた。大虐殺だ。いや、武器を向けてきていた以上こちらとしても手加減ができない状況であったのは確かだが、いくらなんでも限度ってものがある。

というか、なんか今までにない力の使い方に開眼してたんだが……今同じことをやろうとしてもできる気がしない。やったことは覚えているし、理屈もわかるんだが、できない。なんだこの感覚は。気持ち悪いな。

しかし、呆然としている暇はない。一刻も早くミミ達と合流しなければならない。

『我が君』

と思い直して動こうとしたところでクギからはっきりとテレパシーが飛んできた。装備と一緒に小型情報端末も奪われていたから、

こうして連絡が入ってくるのは助かる。

『聞こえた。連絡が取れて安心した。安全なのか？』

『はい、我が君。今までは予断を許さない状況で、身を守ることに注力しなければならず連絡が取れませんでした。今は安全を確保できましたので、こうしてご連絡を』

『わかった。今はどこに？』

『誘導致します。兵達ももう手出しはしてこない筈ですが、ご用心を』

了解、と思念を返してクギの誘導通りに通路を移動していく。イクサーマル伯爵家の私兵達はどこかに身を隠しているのか、それとも集結でもしているのか一人も見かけない。一体動やったんだ？　いくらクギが強力なテレパシーを扱えるとは言っても、この戦艦――マジェスティックだったか？　この船全体に影響を及ぼすような力はない筈だが。

暫く歩き、かなり奥まった場所にある部屋へと辿り着いた。中へと入ると、呆然とした表情で椅子に拘束されているデイビット・イクサーマルが最初に目に入ってきた。どうやらうちのクルー達の活躍で拘束されたらしい。奴の私兵達が戦闘を停止したのはこいつが拘束されたからか。

他にももう一人、ガタイの良い士官らしき男が拘束されて床に転がされている。

「無事で何より……だけど酷い格好ね」

最初に声をかけてきてくれたのはエルマだったが、彼女の表情は渋かった。言われて改めて自分の身体を見てみると、あちこちに血がついていて酷いことになっていた。控えめに言っても血塗れである。全部返り血だが。

「必死だったんだよ……気がついたら椅子に拘束されてるし、お前らも捕まって別の場所に囚えられているって話だったし」

深いため息を吐きながら両手に持っていた血塗れの剣を床に突き刺し、どかりとソファに座り込む。部屋の床が傷ついたりソファが血塗れになったりするが、知ったことか。

「それで、どういう状況なんだ？」

俺が説明を求めると、気怠げな様子で俺とは別のソファに座っていたセレナ大佐が口を開いた。

「イクサーマル伯爵はベレベレム連邦に寝返るつもりだったようです。ゲートウェイからこっち、ベレベレム連邦に接している星系群と、私と貴方を手土産に」

「やっぱり裏切る気満々だったんじゃないか……それで？　ここでゆっくりしていて良いのか？」

「全くよくありませんが、動こうにも動けないんですよ。度重なる限界駆動で異物除去インプラントがオーバーロードを起こしたようで、下手に動くとこの男に注入された薬剤が効果を発揮しかねません」

セレナ大佐がそう言って忌々しげな表情をデイビットに向ける。

「そんなものがあるのに一服盛られて行動不能になったのかよ」

「あのですね、このインプラントだって万能ではないんですよ。許容量以上の薬剤を投与されれば普通に薬が効きますから。宙賊を相手にする私だから特別に未知の薬剤にもある程度対抗できるような仕様のものを入れていただけで、普通の貴族や軍人ならどんなこと

になっていたかわかりませんからね？　とにかく、今は対宙賊独立艦隊の海兵達にこの船の制圧と掌握を進めさせているところです。貴方のメイドロイドも――」
「ご主人様」

セレナ大佐がメイについて言及しようとしたところで丁度良くメイが部屋に到着したようだ。それを目にしたセレナ大佐が肩を竦める。

「救援が遅くなって申し訳ありません」
「いや、こうして来てくれただけで十分だ。ソノ荷物は？」
「ご主人様達の装備です。大佐の剣なども回収してきました」
「感謝します」

メイが見覚えのある剣を荷物から取り出したのを見たセレナ大佐が安堵の息と共に感謝の言葉を口にした。やはり貴族の彼女としては自分の剣は大事なものなのだろう。俺も愛用の剣が手元に戻ってくると少し安心する。今回鹵獲した剣も一応持って帰るかな。戦利品だ戦利品。

「それでええと……寝返る気だったって？　こうして動いたってことはもうマズい状況なのか？」
「まだ各所と連絡が取れていないのでなんとも。この船の艦橋を制圧したわけでも、基地の司令所を占拠したわけでもないですしね。この男の息がどこからどこまでかかっているのかも不明ですし、前線の状況もまだ情報が入ってきていません」
「つまり何もわからないってことか？」
「状況はね。ただ、この男の計画については全て詳らかになっていますよ。貴方のところの可愛らしくも恐ろしいクルーが全部吐かせてくれましたから」

そう言ってセレナ大佐がクギに視線を向ける。視線を向けられたクギは頭の上の狐耳をピコピコと動かしただけで、微笑みを浮かべているが。

「先程言ったように私達と帝国の領地を手土産にベレベレム連邦に寝返ろうとしていたようです。最寄りのゲートウェイにサボタージュを仕掛け、帝国の増援が前線に来られないようにした上で彼の持つ戦力とベレベレム連邦の戦力で前線の帝国軍を撃破し、電撃的にゲートウェイが設置されている星系までベレベレム連邦に実効支配させようと目論んでいたようで」

「そいつはまたデカい話だな……領地はともかく、俺と大佐がなんで手土産になるんだよ」

「ターメーン星系でベレベレム連邦の艦隊を撃滅したでしょう？実は私達、その件で向こうの軍の上層部に結構恨まれているんですよ。誰かさんが歌う水晶を使った外道戦術を行使したせいで」

「なんのことかわからんなぁ。アレはベレベレム連邦の旗艦に乗っていた誰かが歌う水晶を密輸していたんだろ。俺達だって結晶生命体に襲われたんだぞ。むしろ俺達が被害者だ」

「……まぁ帝国としてもそんな感じの主張をして結晶生命体の出現についてはしらばっくれてますけどね。とにかく良い値で売れるそうですよ、私達は」

「連邦って帝国の封建的な社会を前時代的とか言って批判するけど、あっちはあっちで別に褒められた文化ばかりってわけでもないわよね。拝金主義というか、倫理観が低いというか」

「お金持ちが割と好き勝手してるって話は聞きますよね。どこまで本当か知りませんけど」

俺とセレナ大佐の話を聞いたエルマとミミが何やら話しているが、ベレベレム連邦は民主主義と自由経済を掲げてグラッカン帝国を批

判しているが、自分達はどうなのかというと割と歪な点も多いらしい。金が全ての超資本主義社会とかなのだろうか？

「状況はまだ掌握しきれていませんが、いつまでもここで休んでいるわけにはいきませんか……司令所の制圧に向かいましょう」

「その身体でか？　無理じゃないか？」

「イクサーマル伯爵の行った一連の行動は完全に皇帝陛下への反逆行為に他ならないですから、既に防衛司令官として振る舞う正当性はありません。速やかに私が指揮権を引き継ぎ、事態を掌握する必要があります。無理でも何でもやるしか無いんですよ」

セレナ大佐はそう言って剣を杖にしてソファから腰を上げた。

彼女は大事なクライアントだからなぁ……仕方がない。付き合うとしよう。

#450　後始末（前書き）

天候が良くないせいか頭痛がペインで捗らなかった―（：3」∠）

―

#450　後始末

セレナ大佐はデイビットの身柄を既に確保しているという事実を大いに利用し、帝国航宙軍クリーオン星系物資集積基地――正式名称が長くてキレそう――の制圧を進めていった。

曰く。

「デイビット・イクサーマル伯爵は帝国と皇帝陛下への反逆を企て、その手始めとして卑劣な手段で私の身柄を拘束しようとしましたが、失敗しました。既に彼は私の手によって拘束されており、物的証拠も押さえ、自供も得ています。最早デイビットに与する意味はありません。投降し、帝国と皇帝陛下への忠誠を見せなさい」

イクサーマル伯爵家の旗艦、マジェスティックのブリッジを掌握したセレナ大佐が体調不良にも構わず物資集積基地全域に演説を打ち、結果としてイクサーマル伯爵家の私兵を含め物資集積基地の兵達の多くはセレナ大佐へと降った。

無論、従わない連中もいる。そういった連中はセレナ大佐麾下の海兵達が制圧中である。

「はぁ……結果論ですが、貴方がヴィンセントを討っていたのが功を奏しましたね。継嗣となりうる血筋の者は他にも居ますが……はぁ、この基地にはいませんから。求心力の行き先が無ければ兵は纏まるのが難しいですから……ふぅ」

レスタリアスの艦橋まで戻ってきたセレナ大佐が艦長用のシートに腰掛け、時折苦しげ……というか悩ましげな息を吐きながら現状を分析する。

「大丈夫に見えないんだが」
「はぁ……正直キツいですね。一体何を打たれたのやら……早急にメディカルチェックを受けないと……ふぅ」

受け答えこそしっかりできているが、彼女の顔色は発熱でもしているかのように悪く、発汗もしている。身体も震えているように見える。どう考えてもまともなクスリを打たれたとは思えないので、かなり心配だ。恐らく死ぬようなことはないだろうけれども。もしデイビットが彼女を殺す気だったなら、そんな回りくどい真似をしないで剣で斬れば良かったわけだからな。

「ところで、デイビットの状態はどれくらいこのままなのですか？」

デイビットは専用の器具でガッチリと全身を拘束されたままレスタリアスの艦橋の床に転がり、忘我の表情で虚空を見つめている。セレナ大佐が彼女の海兵達に命じてここまで移送してきたのだ。

「何もせず放置していればあと一時間も保たないと思います」
「では今のうちに吐かせるべきことを全て吐かせておきましょう。協力してくれますか？」

セレナ大佐に協力を要請されたクギが視線を向けてきたので、俺はクギに向かって頷いた。

「はい、わかりました」
「はぁ……助かります。エマ」
「はい、大佐。クギさん、こちらに」

セレナ大佐の女性副官がセレナ大佐の指示を受け海兵達と共にデ

イビットを連れてクギと一緒に艦橋の外へと退出していく。彼女も無力化されてマジェスティックに拘束されていたのだが、対宙賊独立艦隊の海兵達と一緒にマジェスティックの艦橋を制圧する傍ら、彼女を解放したのだ。

「はぁ……それで……聞きたいことがいくつか……あるのですが……」

「いや、それよりも休めよ。どう見ても普通の状態じゃない。聞きたいことは後で時間のある時にでも話してやるから」

「約束ですよ……？」

「わかったわかった、約束だ。それで、この船の治療設備はしっかりしてるのか？　船医は？　うちの船なら一流の設備と一流の医者が揃ってるぞ？」

「ご心配なく……うちのクルーも優秀ですから……」

そう言ってセレナ大佐は彼女のクルーを呼び、二人がかりで肩を貸されながらメディカルベイへと運ばれていった。

さて、それじゃあ俺達は……帰れないな。クギがデイビットの尋問に協力してるし。仕方ない、ここで待つか。

「じー……」

「……」

周りの人が少なくなった途端、ミミとエルマが俺を凝視してきている。メイは戦闘ボット達を連れて先にブラックロータスに戻っているので、今レスタリアスのブリッジに残っているのは俺とミミとエルマ、それにレスタリアスのブリッジ要員が数名だけだ。

「随分無茶をしたみたいね？」

「必死だったからな」

嘘偽りが一切ない事実である。何にせよミミ達を取り戻さないことには詰むと思っていたので、一切余裕がなかった。サイオニック能力までフル活用して暴れたのは今思えばもう少しやりようがあったのではないかと思わなくもないが、そんなものは後知恵である。

「怪我はなかったみたいですから、それは良かったですけど……なんというか、コミックのダークヒーローみたいになってましたね」

「言わないでくれ」

ミミにそう言って両腕を組み、目を瞑って天井を仰ぐ。サイオニック能力の『手』もとい念動力を使って大暴れしたからなぁ、今回は。呼吸を止めての時間鈍化も多用したし、何より剣を使って相当数の兵を斬り殺した。終いには血に酔いでもしたのか、新たな念動力の使い方に開眼してしまった。もうここまで来るとジ〇ダイの騎士というよりシ〇の暗黒卿である。そのうち手から電撃とか放つようになるかもしれない。

「で、大丈夫なの？　クギはあんたが危険な状態だって言ってたけど」

「何が危険なのかはわからんが、今の俺はいつもの俺だと思うぞ。ただ、剣を振るって血の海を作っていた瞬間の俺はどうだったかと言うと自信がないな。やっぱりクリシュナで船ごと何十人も宙賊をスペースデブリにするのとは勝手が違うよな」

今思い出してもあの瞬間の俺はいつもの俺ではなかったように思える。落ち着いたら座禅でも組んで心を落ち着けるか、誰かに甘えて心を癒やすかした方が良いかもしれない。

「そういえば俺、兵士をかなり斬り殺してしまったんだが……もし

かして逮捕される？」
「ええっと……どうなんでしょう？」
ミミも不安げな表情でエルマに視線を送る。俺とミミの二人に視線を向けられたエルマはというと、これまたかなり苦々しげな表情であった。
「情状酌量の余地はあると思うし、そもそもヒロは名誉貴族だから平民の兵士に関しては戦闘になった時点でヒロに有利な裁定が下る可能性が高いけど、ヴィンセントを始めとした貴族に関してはどうかしらね……セレナ大佐の主張が認められれヒロの正当性も補強されるでしょうけど、そうでなかった場合には覚悟したほうが良いかもしれないわ」
「……最悪逃げるか」
「あなたいつもそう言うけど、結局逃げないじゃない……それは本当に最終手段にしなさい。傭兵ギルドでも貴族のコネでもなんでも使って切り抜けるしか無いわね」
「いざとなったら俺をここに送り込んだ皇帝陛下にケツ持ちをしてもらおう……」
それはそれで面倒なことになりそうだが、仕方があるまい。最悪の場合は帝国を出ていくという選択肢もあるが、そうすると帝国内のコネをすべて失うことになるし、傭兵ギルドからも良い顔はされないだろうし。最悪、傭兵ギルドから追手がかかるかもしれん。
「ままならねぇ……とにかく今はシャワーでも浴びて休みたいぜ」
「同感……」
「皆でゆっくりしたいですね……」
しかし状況を考えるとゆっくりしている暇があるかどうか……べ

レベレム連邦の大攻勢も始まっていそうだし、最寄りのゲートウェイの様子も心配だ。
くそ、あのファッキンエンペラーめ。こんな面倒な状況に俺達を放り込みやがって。今度会うことがあったら文句の一つも言ってやらなきゃ気が済まんな。

#451　お風呂（前書き）

前回短かったので、今回は少しボリュームアップ（ ˘ω˘ ）

#451　お風呂

クギによるデイビットの催眠尋問の完了を待った俺達は四人揃ってブラックロータスへと帰還した。セレナ大佐の体調は心配だが、レスタリアスにも軍医とそれなりの設備が揃っていると彼女自身が言っていたし、きっと大丈夫だろう。大丈夫じゃなかったらブラックロータスで面倒を見るから遠慮なく来い、と一応セレナ大佐のアドレス宛にメッセージは入れておく。

「兄さんめっちゃ血塗れやん……大丈夫なん？」

「全部返り血だから問題ないぞ。エアロックで滅茶苦茶念入りに滅菌されたけど」

などとティーナと話していると、防護スーツに身を包んだ謎の人物がノシノシと歩いてきた。いや、謎の人物じゃないけど。完全にショーコ先生だけど。

「いや、問題あるからね？　早く脱いでシャワーを浴びて綺麗にしてきてね。血液ってかなり強力な感染源だから。ほら、服も滅菌消毒するから早く脱いで。皆も近寄っちゃダメだよ。そっちの三人もすぐに身体を洗ってね。服も回収して滅菌するから」

「ここで！？」

「ここで。ここまでヒロくんが歩いてきた艦内も清掃しなきゃいけないんだからね。これ以上手間が増えるのは許容できないね」

「あい……」

ドクターがそう言うなら逆らってはいけないな。彼女はその道のプロフェッショナルなのだ。プロの言葉には素直に従ったほうが良

い。

「このボックスに入れてね」

「うっす……」

「ひゅーひゅー、ええぞー、もっとぬげー」

ストリップショーじゃねぇんだよ。というかこれ以上脱いだら全裸だよ。

「それじゃあお風呂でしっかり身体を洗うこと。ダッシュで」

「ダッシュで？」

「ダッシュで」

「はい……」

何が悲しくてパンイチで船内をダッシュしなければならないのか。私はとても悲しい。しかしショーコ先生の言うことは聞かなければならない。いくら俺がキャプテンでも医者には勝てないのだ。

「お待ちしておりました。どうぞこちらに」

「お、おう……」

風呂にはメイが待ち構えていた。正座で。しかもなんか見覚えがあるようなないような安っぽいエアーマットまで用意されているし、明らかにボディソープとかじゃない透明でぬるぬるしそうな液体まで用意されている。

「全てこの私めにお任せ下さい。さぁ、どうぞ」

「ＯＫ！」

ナニが起こるにせよメイに任せておけばヨシ！　ストレス環境下

で切った張ったをせざるを得なかった俺には少しくらいご褒美があっても良いと思うんだ！

☆★☆

「……随分とスッキリした顔ね」

「風呂って最高だよな」

シャワーから上がってきたエルマに何故か冷たい視線というか呆れたような視線を向けられたが、今の俺は最高にご機嫌なので全く気にならない。

「はぁうー……」

更に俺の目の前にはヘヴン状態になっている狐がもう一匹。今の俺はエルマよりも先に風呂から上がってきたクギの尻尾にドライヤーをかけながらブラッシング中なのである。もふもふになっていくクギの尻尾を堪能できて俺は幸せ。丹念にブラッシングされるクギも幸せ。正にＷｉｎ－Ｗｉｎというやつだな。

「クギさんのしっぽ、最高ですよねー」

ミミも俺の隣でクギの三本ある尻尾のうちの一本をブラッシングしている。ミミとクギは一緒にお風呂から上がってきたので、ミミもお風呂上がりだ。

「ま、何事も無さそうで何よりだわ。白兵戦でメンタルやられる人って多いから」

「全く思うところがないわけでもないけど、割り切ってるからな。こうして俺を心配してくれる優しい相棒もいることだし」

「はいはい」

はいはいなんて言いながらちょっと嬉しそうな顔をするエルマは可愛いなぁ。なんて事を考えていると、俺の小型情報端末からデデーン！　と何かアウトになってケツをタイキックされそうな音が流れてきた。この着信音はセレナ大佐からのものだと思うが、何か用だろうか？　船を使った戦闘に駆り出されるまではお鉢は回ってこないと思っていたんだが。

「へーい、ヒロです」
『ふぅ、はぁ……調子が、良さそうで、何より、はぁ……ですねぇ！？』
「いやそんなことでキレられても……そっちは調子悪そうだが、そっちの医療設備じゃどうにもならんかったのか」
『残念……ながら……はぁ、はぁ』
「あー……うちのドクターに受け入れ準備を進めさせておく。迎えに行ったほうが良いか？」
『はぁ……いえ、。それは大丈夫です……はぁ、投与された薬剤の、サンプルも持っていきますので』
「了解。入り口にメイを待機させておく」
『迷惑を、かけますが……』
「良いって。切るぞ？　すぐに来いよ」

通話を切り、そのままメイとショーコ先生に事の次第を連絡する。レスタリアスも最新と言って良い戦艦のはずだし、設備はそう悪くない筈なんだけどな。まぁ専門分野の違いとかなのかね？

「メイか？　セレナ大佐が船に来るから、すまんがタラップまで迎えに出てくれ。体調が悪いみたいだから、メディカルベイまで運ぶことになると思う。用意しておいてくれ」

『はい、ご主人様。お任せ下さい』
「頼んだぞ」
メイに任せておけば出迎えと案内は万全だろう。あとはショーコ先生か。
「ショーコ先生、良いか？」
『うん？　どうしたのかな？　何か身体に異常を感じたのかい？』
「いや、俺じゃなくてセレナ大佐がな。一旦向こうに囚えられて身動きができない時に何やら色々と怪しげな薬を打たれたらしい。症状についてはよくわからんが、顔が赤くて息が荒かった。打たれた薬のサンプルは持ってきてくれるとさ」
『ふぅん……？　見てみないとわからないけど、何の目的で打った薬なんだろうね。まぁ、女性を囚えて身動きを封じて打つ薬なんてどう考えてもまともなものじゃなさそうだけど。とりあえず受け入れの準備はしておくよ』
「よろしく」
通信を終えて再びクギの尻尾をブラッシングし始める。え？　お前は何もしないのかって？　俺ができることは何もないからな。セレナ大佐も体調を崩して弱っているところを見られるのは良い気分ではないだろうし、俺は俺にやれることをやるよ。
「セレナ大佐、心配ですね」
「まぁそうだな。身体強化もされているわけだし、生命力そのものが俺達よりもだいぶ高そうだから問題はないと思うけど。少なくとも死ぬようなことはないだろ」
「薄情というかドライというか……ヒロって大佐に厳しいわよね」
「厳しいというか、意図的に一線を引いているのは確かだな」

ブラッシングの終わったクギの尻尾を手でモフモフしながら肩を竦める。もう一本の尻尾は俺が通話をしている間にミミがブラッシングし始めてしまった。残念だ。仕方がないので俺が手によりをかけてブラッシングしたこの一本をモフって吸ってやる。ずぞぞぞぞ。

「へぇぁー……！」

「クギの顔が大変なことになってるけど……」

「満足した」

最後に軽くブラッシングしてクギの尻尾を解放する。クギの背中がプルプルと震えているのは見なかったことにしよう。

「別に大佐と仲良くというか、親密になったほうが良いって話じゃないんだろ？　ならいいじゃないか、今まで通りで」

「それはそうなんだけどね」

そう言いながらもエルマの表情はいまいちスッキリとしない。まぁ、セレナ大佐とも長い付き合いだからな。俺への好意を割とストレートにぶつけてくるし、エルマとしても何か思うところがあるのだろう。

「ところでクギに聞きたいことがあるんだが」

「ひゃんっ！？　な、なんでしょうか……？」

俺の手というか腕に軽く巻き付いてきている尻尾を引っ張るというか揺らしただけなんだが、滅茶苦茶激烈な反応が返ってきた。尻尾、敏感なんだな。今度は尻尾と腰回りを攻めてみようか。

「あの船で俺が暴れたときに使った力とか、急に落ち着いた件とか。何か知ってるよな？」

「そ、それは勿論……あ、あの、ミミさん。我が君の方に身体を向けたいのですが」
「はーい。じゃあ私はこっちに座りますね」

クギが俺の隣――ソファの上だが――に正座し、ミミがその後ろに座ってブラッシングを始める。クギはキリッと真面目な表情を作ろうとしているのだが、頬がヒクついていてちょっと面白い。

「あ、あの、尻尾はまた後に……ま、まじめなはなしをするので」
「えー……？　また後で、絶対ですよ？　ぼさぼさになっちゃいますから」
「は、はい……おほん。では、その、話をしますね？」

キリッ、と真面目な表情を作り直したクギが俺の使った力に関して解説を始める。

「サイオニックパワー……法力というものは精神に大きく依る力です。なので、何かの拍子に感情の箍が外れてしまった場合には平静な時には扱えないような大きな力が発現する場合があります。今回の場合は我が君が戦いによって直接的な命の危機を感じたことに加え、エルマさんやミミさん、それに此の身も含めた、その……親しい関係にある人の命が危険に晒されていたこと。それに戦闘を重ねる中で多くの命を奪ったことも原因となったのだと思います」
「なるほど」

生存本能や焦燥感、怒り、憎しみ、血への興奮と恐怖、そういったあまりプラスとは言えない方向の感情が精神に影響を与えて普段以上の力を発揮したってことか。

「もしかして、あまり良くない状況だったのか？」

「そうですね……仮にミミさんとエルマさん、そして此の身のうちの全員が何らかの方法で害され、全員が死亡していたりいた場合には最悪の事態もあり得たかもしれません」
「最悪の事態って……どうなってたわけ？」
「感情と精神を爆発させた我が君があの船ごとこの物資集積基地を念動力で粉砕し、ブラックロータスごとティーナさん達も巻き込まれたことに気づいて恒星系ごと何もかもを破壊する、というのが最悪のシナリオでしょうか」
「ひえぇ……」

クギの答えに質問したエルマだけでなくミミと俺もドン引きする。いや、それは流石にオーバーだろう？　と言いたいが、クギは大真面目なんだよな。最悪そんなシナリオも有り得たのかと思うと、割と紙一重だったんじゃないか？　今回の事件は。

「ご心配なく。そうならないために此の身がおりますから。いざとなれば今回のように上手く立ち回ってみせます。そうするために此の身のような巫女が我が君の側にいるのです」
「クギさん凄かったですよ。あっという間に私達を監禁していた兵士を全員昏倒させて、リーダー格を操り始めましたから」
「なにそれこわい」
「そう感じるのが当然です。なので、此の身どもは法力をみだりに使うことが無いよう自らを戒めているのです」

そう言ってクギが自分の胸に手を当てて祈るように目を瞑る。

「此の身の力は全て我が君をお守りするためにあります」
「うん、それは信じてるから大丈夫だ。それで、話を戻すけどあれから同じように力を使おうと思っても全く使える気がしないんだ。あと、クギから念話が飛んできた瞬間いきなり冷静になったのも何

かしたのか？」
「どのような力かは目にしていないので存じ上げませんが、同じように力を使えないのは我が君が無意識にその力を忌避しているからかと。状況から考えるに、かなり破壊的な力だったのでしょう？」
「それは……そうかもしれん」

手も触れずにイメージだけで人間の首を縊って殺し、頭蓋を握り潰すような暴威だ。無意識にあの力を忌避していると言われれば、そのような気はする。

「念話を通して何かしたのかと言われると、それはしました。距離が離れていても我が君の法力が暴走気味なのはわかりましたから、以前作った我が君との経路を通じて鎮静の法力を送り込みましたので」
「なるほど……そういえばそんな話をしたような気がするな」

クギと初めてその、アレをした時にそんな話をした気がする。なるほど、そういうこともできるのか。あの時は特に重要なことだと考えていなかったんだが、クギはあの時点で既にこういう事態に備えていたんだな。

「なるほど、色々と納得できたと思う。話してくれてありがとうな」
「はい、包み隠さず何でもお話します。今後も何か気になったことがあればお聞きくださいね、我が君」
「ああ、その時は抱え込まないで今回みたいに聞くことにするよ。ありがとうな」

俺の返事にクギがにこりと微笑む。うん、かわいい。
戦闘で激しく体を動かしたせいか小腹が空いてきたし、皆を誘って何か食おうか……と思ったところで俺の小型情報端末からコール

音が鳴った。ショーコ先生からだ。
「はいよ。どうした？」
『あー……大佐の件が少々困った事態でね。力を貸してくれるかな？』
「俺が？　別に良いけど、俺で何か役に立つようなことがあるのか？」
『うーーーーん……まぁ、そうだね。ヒロくんが適任かなぁ』
随分長い『うーん』だったなオイ。なんか全体的に歯切れが悪いし、何か嫌な予感がするんだが。
とはいえショーコ先生がそう言うなら俺が必要な事態……どういう事態だよ？　大佐が暴れでもしてるのか？
『とにかく来てくれたまえ。急いでだよ』
「微妙に腑に落ちないけど、オーケー。すぐ行く」
通話を終了し、ソファから立ち上がる。
なんだか嫌な予感がするなぁ……サイオニックパワーの訓練で鋭くなった俺の第六感がビンビンに反応している気がする。とはいえ放ってもおけないか。
俺はクギ達に軽く事情を説明し、メディカルベイへと走るのであった。

#452　そんなエロ漫画みたいなことある？　まことに？（前書き）

待たせたわね！！！（　ω　）

#４５２　そんなエロ漫画みたいなことある？　まことに？

「単刀直入に言うとだね。ヤっちゃいなよって話なんだ」

メディカルベイ――医務区画兼ショーコ先生の研究室に俺がダッシュで到着し、顔を合わせるなりヤブ医者……じゃないショーコ先生はそう言って俺に向かって拳を突き出し、指の間から親指の先を覗かせて見せた。これ以上無くわかりやすいサインである。

「やめなさい。というか、色々とすっ飛ばし過ぎている。説明をしてくれ、説明を」

「えー？　面倒だし結局ヤることになるんだし良くないかい？」

「良くないから」

唇を尖らせてぶーたれるショーコ先生のフィグ・サインをペシッと手で払ってやめさせ、毅然とした態度で説明を求める。セレナ大佐の様子は……相変わらず呼吸が浅く、荒いな。顔も赤いし、熱もありそうだ。ぼんやりしているが、目の焦点も定まっていないように見える。

「まぁ、鎮静剤が切れるまでもう少し時間があるか……ええとだねぇ、まず結論から言うと大佐を蝕んでいたのはナノマシン製剤だ。それに関してはもう無力化したし、他の薬剤に関しても一通り無害になるように処理した。後は本人の代謝能力と異物除去インプラントに任せる形で良いね」

「それなら話を聞く限り、全て解決して俺の出番は無いように聞こえるんだが？　というか、異物除去インプラントと強化された肉体の代謝能力で無効化できなかったのか？」

「まず勘違いを訂正しておくけど、いくら身体の代謝能力が高かろうと、異物除去インプラントがあろうと、ナノマシン製剤の前には無力だから。自己複製能力のあるナノマシンが一ユニットでも体内に入ったら、目的を達するまで増え続けて止まらないからねぇ。異物除去インプラントがいくらフル稼働しても体内のどこかで増え続けるんだから、ナノマシンそのものを無力化しないといずれオーバーフローを起こしてしまうわけだよ。まぁ、このインプラントがあったからこそ、ここまで保ったんだけどね」

「なるほど。それがどうしてえヤッちゃえに繋がるのかが全くわからんが？」

「それに関しては私に文句を言われてもねぇ。そういう趣味の悪いナノマシン製剤を大佐に注入した外道に言って欲しいかなぁ。採取したナノマシンのコードを見る限りは十中八九宙賊製だね。相当悪辣な品だよ？」

「……鎮静剤とかでどうにかならないのか？」

「結論から言うと、大佐が耐えられない。本当に悪辣な品でねぇ、身体と脳をもう弄り終わってるんだよね。カウンター用のナノマシン製剤は作り始めてるけど、出来上がるのにどんなに急いでも丸一日はかかる。鎮静剤でそれまで寝かせておくことはできなくもないけど、何もしなかったらその頃には大佐は天国行きだね。いや天国イキかな？」

「しゅ、趣味が悪いにも程がある……それに、丸一日だって？　今の状況でそんなに時間なんて取れないぞ。なんというかこう、いい感じにどうにかならないのか？」

「なるならしてるよ」

そう言ってショーコ先生が肩を竦めて見せる。それはそう。ショーコ先生ならどうにかできるならどうにかするだろう。わざわざ俺をハメる……いやハメさせる？　意味も無いだろうしな。

「それにしても冗談みたいなクスリだな……どういう需要があるんだよ」
「需要はあるんじゃない？　大佐みたいなタイプの女性の尊厳を徹底的に破壊するのには向いてると思うよ」
「頭が痛くなってきた……満足すれば良いだけならこう、大佐に自分でなんとかしてもらうとかは？」
「それならわざわざヒロくんを呼ばないよ。私が医療措置を取れば良いだけなんだから。直截に言うと、男の人とアレしないと収まらないようになってるんだよ」
「そんなエロ漫画みたいなことある？　まことに？」
「それに関しては私に文句を言われても困るって言ったよね？　宙賊の趣味の悪さは今に始まったことじゃないでしょ」
「それは……そうだな」

四肢を取っ払って愉快で『使える』オブジェにするだとか、それに飽き足らず内臓を改造してクスリを垂れ流すようにするだとかに比べれば、際限なくムラムラして致さないと死ぬ……くらいならまだマシな方か？　マシか？　本当にマシか？

「そろそろ鎮静剤が切れるから、助けるか見殺しにするか決めてね」
「言い方。本当に他に方法はないのか？」
「少なくとも私には思いつかないねぇ。ああ、もしかしたらヒロくんのをシリンジに入れて大佐の」
「わかった。わかったから少しだけ考えさせてくれ」

まだそっちのほうがマシか？　と一瞬思ったが、そんなことをするくらいなら大佐は自分で自分の首でも切りそうな気がする。貴族の持つ剣なら難しいことじゃないからな。
とにかく、今まで大佐とそういう関係になることは避けてきた。何故かと言えば、彼女が大貴族の令嬢で、帝国航宙軍の高官でもあ

るからだ。俺としては今の傭兵生活を続けたいし、彼女とそういう関係になることでミミ達との仲が変わってしまう――最悪、引き離されるのではないかという懸念があったからな。

それが今ではどうか？　まぁ、立場を考えればそこまで一方的にやり込められるような立場でも無いように思う。傭兵ギルドは進んで宙賊を狩って回り、帝国航宙軍や帝国そのものに貢献して覚えのめでたい俺を手放したくはないだろうから、全面的に俺を守ろうとするだろう。

帝国法的にも俺は名誉爵位とは言え貴族なので、起こったセレナ大佐のパパやママやグランパやグランマ、或いはブラザーやシスターに斬り殺されるということは……無いとは言えないが、決闘なら受けて立とう。そうだ、決闘だ。最終的に剣と暴力で全てを解決してしまえば良いのでは？　なんか白刃主義者みたいなことを考えている自分に若干戦慄を覚えないでもないが、最終手段としてはアリだろう。

というか、そもそもの話。俺はセレナ大佐を見捨てられるのか？

無理じゃないか？　無理だな。なんだかんだでセレナ大佐とは長い付き合いだし、憎からず思っている。というか、普通に好きだ。隙が無くて狡猾な帝国軍人としてのセレナ大佐も、私生活ではぽっちでぽんこつなセレナ大佐も。面倒な立場さえ無ければとっくに俺からアプローチしてただろう。

うん、よし。心は決まった。

「だから言ったじゃないか、結局ヤることになるって」

「先に言っておくけど、面倒事になるからな。その時にはショーコ先生にも大いに苦労してもらうからな」

「ふふん、望むところ――うぁんっ！？」

自信満々に胸を張るショーコ先生にイラッとしたので唐突に乳を揉んでやった。ふふん、隙ありだぜ。

「それじゃあ大佐は連れて行くから。とりあえず大佐に関しては救急治療中で面会謝絶ってことにして対応しておいてくれ」
「ぐぬぬ……仕方ない、お姉さんがうまい具合にやっておいてあげようじゃないか」
「よろしく」

そう言って俺はセレナ大佐をお姫様抱っこの形で抱き上げ、俺の部屋へと連れて行くのだった。
え？　ここで？　いや流石にここではちょっと……ムードもクソもないし、後で我に返ったセレナ大佐に怒られそうだから。

☆★☆

流石に俺も鎮静剤で意識も定かではない状態のセレナ大佐に手を出すほど非道ではない。非道ではないので、とりあえずは彼女をベッドの上に寝かせてシャツの胸元なんかを緩めてやりつつ、喉が渇いているかもしれないからと水のボトルなどを用意したりと甲斐甲斐しく世話を焼いていた。
そうしているうちに鎮静剤が切れ始めたセレナ大佐の意識が少しずつはっきりしてきた。それはもう可愛らしく甘えてきたので、望むままに頭を撫でででやったり、抱きしめてやったりしているうちにキスをしたり、身体を触り合ったりと内容がエスカレートしていって、最終的にはセレナ大佐に押し倒された。
それはもう情熱的だったね。流石に身体強化しているだけあって体力は凄い。まぁ、例の趣味の悪いクスリの影響か、それともセレナ大佐の感度が元々良かったのか、攻撃力と体力が高くても防御力が低かったのですぐに経験の差を理解らせてやったけど。
そうしてくんずほぐれつした結果、遂に彼女は完全に我を取り戻したわけなのだが。

「いっそ殺して下さい……むしろ死にます」
「そうしないために一肌脱いだんだからやめてね？」

完全に我を取り戻したセレナ大佐は枕に顔を埋めて完全に自分の殻に閉じ籠もってしまっていた。俺はそんな彼女の横に片肘を付いて横臥し、彼女の背中を撫でつつ苦笑しているわけだが。

「ううっ……こんなっ、こんな形でぇ……あの男、何が何でも絶対に殺してやります」
「理想的な形ではないかもしれないけど、結果だけを見れば良かったじゃない。俺は後悔してないし、大佐は可愛かったし、満足だよ」
「……セレナって呼んで下さい。あと頭を撫でて下さい」
「はいはい、セレナは可愛いな」

枕に突っ伏したまま我儘を言うセレナの頭を撫ででやる。そうしていると彼女の心も多少は落ち着いてきたのか、ころんと横に転がって俺に背中をくっつけてきた。

「ここはお互いに顔を合わせて話すところじゃないか？」
「……恥ずかしいですし」
「なら仕方ないな」

お互いに特に言葉を発さず、暫し互いの体温を確かめ合う。うーん、まぁ、苦労に見合ったご褒美ではあるか？　とはいえこれから降り掛かってくるであろう災難を考えると、採算が全く合わない気がするな。

「良かったんですか。私みたいな面倒くさい女に手を出して」
「根に持ってるなぁ。まぁ、後悔はしてないとだけ。こうしないと

セレナが死ぬって話なら面倒くらい飲み込むさ」
「え？　死ぬってどういうことです？」
「あのまま放置したらどんなに強靭な精神力や体力があろうと、鎮静剤で誤魔化そうと天国行きだったらしいよ」
「あ、あの男なんという劇物を打ってくれているんですか……！
それで、もう治ったんですよね？」
「いや、まだ。今は落ちいついただけ」
「は？」
「セレナの身体はデイビットに打ち込まれた胡乱ナノマシン製剤で定期的に致さないと悶死する身体に作り変えられてしまってるから、このままだとまた耐え難い衝動に苛まれる。ただ、今うちのドクターがその身体を元に戻すカウンターナノマシン製剤を作ってるから。それを打てば治せるらしい。なおその薬が出来上がるのは今から二十時間以上後だ」
「この状況下でそんな時間はありません」

ぐるりとこちらに向き直ったセレナの顔が軍人のものに戻っている。そりゃこんな話を聞けばこうもなるわな。

「治療のためにブラックロータスから出られないから、ここから指示を出すってことにするしかないだろうな。この物資集積基地の掌握はそろそろ終わるだろうけど、その後の情報分析と戦場への移動でそれくらいの時間はかかるだろ？　最終的には戻ることになるだろうが、それまではこの船にいるしかないだろうな」
「どうにかならないんですか？」
「薬の開発を早めるのは無理っぽいな。衝動に関してはどれくらいの間隔で来るのかわからんが、解消するには相手が必要だ。その相手を他の奴に譲るつもりはない。だから諦めてくれ」
「そ、それは……むぅ」

相手が必要という言葉の意味を理解してくれたのか、セレナが唸って黙り込む。

「私……面倒な女ですよ？」

「知ってる」

上目遣いでこちらを覗き込んでくる紅い瞳を見据えながら思わず笑ってしまう。本当に今更だ。

「良いんですか？」

「そうじゃなかったらこうしてないから」

「独占しようとしますよ？」

「できるならどうぞご自由に。ただし、ミミ達に手を出すような真似だけはやめてくれよ？　その時にはディビットやヴィンセントみたいな連中が量産されることになるから」

「それは肝に銘じておきます……これまで以上に付きまとってあげますからね。覚悟をしておいて下さい」

「イエス、マム」

俺はセレナの宣言にそう返事をして彼女の額に軽くキスをした。

#453　急に湿度高くなるじゃん……（前書き）

鉄騎の少女が楽しい（ ，ω，　）

#453　急に湿度高くなるじゃん……

「こんなことをしている暇はないんですが……」
「言うてショーコセンセがお薬作るまでは戻られへんねやろ？　ならゆっくりしたったらええやん」
「適度な休息も大事だと思いますよ、セレナ様」

憮然とした表情のセレナ大佐が酒飲み二名に挟まれてお酌をされている。同じ席に座ったエルマはその様子をニヤニヤしながら眺めており、ミミとクギもまた同様ににこにこしながら眺めていた。
俺？　俺はそんな女性陣の様子を遠目に見ながら、マジェスティックで囚えられた際に一度没収された武器のチェックと整備をしているよ。あと、鹵獲してきたヴィンセントの剣と名も知らぬ貴族兵の剣の鞘をセレナ大佐の部下達に回収してきてもらったので、剣の手入れもしている。
一応鞘にもある程度のメンテナンス機能があるけど、酷使した後はちゃんとメンテナンスした方が良いものだからな。まぁ、このモノソードってやつは帝国貴族が偏執的とも言える情熱でもって作り上げたトンデモ武器だからな。真っ二つに折れでもしない限り簡単なメンテナンスで性能を維持できるようになっている。
しかしどうしたものかな、この剣は。
俺が最初に手に入れた二本一対の剣――クリスの両親の仇であるバルタザールを倒して得たものだ――は細身の剣で、少々耐久性に難はあるが軽くて扱いやすい長剣と小剣のセットである。俺はこの一対の剣をずっと使ってきた。
対して、今回手に入れたヴィンセントの剣はバルタザールの双剣に比べると若干長く、刃の厚みもあり、耐久性に優れる。バルタザールの双剣ではいくら斬れると言ってもパワーアーマーを装着した

敵兵や、戦闘ボットなどを両断するのは不安があったが、この剣なら安心して斬れる。ただ、刀身が長くて厚みもある分重く、扱いづらい。

名も知らぬ貴族兵の剣はバランスに優れている。バルタザールの双剣の長剣の方よりは頑丈で、長さは同じくらい。しかしヴィンセントの剣に比べれば長さは短く、そこまで刃に厚みはない。中途半端と言えばそうなのだが、使い勝手は良さそうだ。

手数とカウンターで攻めてるならバルタザールの双剣、破断力と打撃力、耐久性を求めるならヴィンセントの剣。中庸の名も知らぬ貴族兵の剣といったところか。

バルタザールの双剣なら素の状態でもレーザー銃撃を防御したり打ち返したりする光線斬りもできるが、ヴィンセントの剣だと一本ならともかく、左手に名も知らぬ貴族兵の剣を持って無理に二刀流をすると光線斬りはできそうにないな。カウンターの精度と速度も落ちるだろう。息を止めての時間滞留を使えば可能だろうけど。

名もなき貴族兵の剣とバルタザールの双剣の長剣の方ならギリギリできるかな……？　って感じだ。悩ましいなぁ。まぁ装甲の薄い対人用途ならバルタザールの双剣、装甲の厚いパワーアーマー兵や戦闘ボット相手ならヴィンセントの剣と使い分けるのが無難か。名も知らぬ貴族兵の剣は予備
だな。

ちなみにだが、セレナ大佐の剣はヴィンセントの剣よりも更に少しだけ長く、刃の身が厚くて幅が広い。長剣というよりは剛剣と言ったほうがしっくりきそうな代物だ。あれならパワーアーマー兵だろうがなんだろうが真っ二つにできるだろう。

「それにしても、これでセレナも姉妹の一員ねー」
「姉妹？」
「ほら、兄さんの……わかるやろ？」
「び、微妙に下世話な……ま、まぁ事実ですけど」

「長かったですよねぇ。念願叶って、ですね」
「この中で彼と一番最初に出会ったのは私なんですけどね……」
向こうは向こうで楽しくやって……あれは楽しい会話なのだろうか？　などと考えていると、セレナ大佐の小型情報端末からコール音が鳴ったようだった。
「私です。ええ、はい。ではそのように。前線は？　そうですか。それでは戦力を取りまとめてすぐにでも動かす準備を。ええ、大丈夫です。その頃には治療も終わるはずですから」
短いやり取りを終えたセレナ大佐が剣の手入れをしている俺の方へと歩いてきた。なんとなく内容はわかるが、一応聞くとしよう。
「基地の掌握が完了し、状況も掴めました。ゲートウェイの方は現地の帝国軍だけで対処できそうですが、前線の方がベレベレム連邦の攻勢に持ちこたえられそうにありません。前線が食い破られる前に我々が予備戦力として駆けつける必要があります」
「なるほど。それじゃあ船を動かさないとな。連邦の正規軍相手かぁ……砲撃戦に参加できるブラックロータスはともかく、クリシュナとアントリオンはどうするかな」
基本的に正規軍同士の戦いっていうのは陣形を組んでの長距離砲撃戦になりがちだから、傭兵の小型中型艦はハイパーレーン突入口で待ち伏せを上手くドンピシャで当てた時に乱戦か、ジリジリと砲撃戦をしながら距離を詰めて、大型艦の後ろから一斉に飛び出して肉薄する接近戦か、砲撃されるのを覚悟で損害上等で数を頼りに突撃するかしか無いんだよなぁ。
俺くらいの手練ならサーマルステルスで上手く近寄って単身敵中に突撃なんてこともできなくはないが、流石にガチで攻撃をしにき

ている侵略軍規模の相手だと割とあっさりすり潰されかねないんんだよな。今回は歌う水晶みたいな隠し玉もないし。

「安易に突撃して死なないで下さいね。折角こうしてその……とにかく死なないで下さい。良いですね？」

「アイアイマム、報酬分はしっかり仕事をしながら生存を優先しますとも」

とはいえ、正規軍相手の傭兵業は儲かるからな。戦利品もそうだが、撃破に応じて帝国航宙軍から報奨も出る。今回の契約でもしっかり敵艦船の撃破で報酬が出るようになっている。

「まぁそこは現地に行ってから状況を見て適宜戦力として投入してくれれば良い」

「そうさせてもらいます。それまでは……貴方はこういう時は何をして時間を過ごすのですか？」

「特に何も。戦場となる星系の情報が手に入るなら予習しておくのと、機体の調子を軽く見ておく以外には心穏やかにリラックスしてる」

「そ、そうですか……私は普段なら色々とやることがあるのですが、今回は全て部下達に任せているので……落ち着きませんね」

そう言ってセレナ大佐が俺の隣に座り、休憩スペースに広げている俺の店を眺める。

「おや？　宗旨変えですか？」

そしてすぐにヴィンセントの剣を目に留めて不思議そうに首を傾げた。今まで俺が使っていた剣とは方向性がかなり違う剣だからな。

「鹵獲品だよ。まぁ良い剣だよな。それより、身体は大丈夫なのか？」
「な、か……す、すけべ！」
「なんでさ！？」

純粋に身体を心配しただけなのに、突然のすけべ呼ばわりとはどういうことなのか。これがわからない。

「な、なんでもなにも！　私の身体の状態は知ってるでしょう！？　大丈夫かって、大丈夫じゃない場合は、その……わかりますよね！？」
「あー……そう。そうね。確かにそうだ。すまん、心配したつもりでデリカシーが足りんかったわ」
頭を掻きながら素直に謝っておく。
既にセレナ大佐の身体に悪さをする薬剤やナノマシン製剤はショーコ先生の手によって無効化されており、残っているのは冗談みたいな悪辣なナノマシン製剤に弄られてしまったセレナ大佐の身体だけだ。今は落ち着いているが、弄られてしまった身体が再び苛まれるということは……つまりそういうことである。また行為に及ばないとならないというわけだ。俺はウェルカムだが。

「悪かった。考えが足りなかった。ただ、純粋に身体を心配しただけなんだってことはわかってくれ」
「それは、そうなんでしょうけど……うう、どうしてこんなことに」

セレナ大佐が耳まで真っ赤にして両手で顔を覆う。どうどう、感情を昂らせるとまた発作が来るぞ。結果的に恥ずかしがらせている俺が言うのも間抜けだが、どうか落ち着いて欲しい。

「と、とにかく、この件が片付いたら帝都まで同行してもらいます

からね！？　実家にも挨拶に行きますから、付き合ってもらいますよ！？」
「えー……？」
「なんでそんなに嫌そうな顔するんですか！？　成り行き上仕方がなかったとは言え、私に手を出してタダで済むと思っているんですか！？　責任は取ってもらいますからね！？」

まぁ、タダで済むとは考えてないし、それなりに責任を取るというか、ご実家への挨拶に付き合うくらいはするつもりだけど。ここで素直にハイハイと従うのも面白くないな。

「どうしよっかなぁ……逃げよっかなぁ……」
「逃げたら宇宙の果てまで追いかけて貴方を殺して私も死んでやりますよ？」
「急に湿度高くなるじゃん……」

騒いでいたセレナ大佐が急にスンッと真顔になって目からもハイライト消えるのあまりにも怖すぎるでしょう？　まぁ、今となってはセレナ大佐に暴力に訴えられたとしても、真正面からならなんとでもできると思うけどさ。

「わかったわかった。帝都にはちゃんと付き合うから。皇帝陛下に申し上げたいこともあるし、成り行き上とは言えイクサーマル家の私兵を斬りまくったからな。特に何の取り調べや手続きもなくお咎めなしとはいかんだろ？」
「私達の正当性が認められることになるでしょうから、然程問題にはならないと思いますけどね。国境線の失陥に繋がりかねないイクサーマル家の反逆行為を防いだということで、何かしらお褒めの言葉を頂ける可能性の方が高いんじゃないですか。上手く行けばですが」

「あまり期待はしないでおく。それで、もう一戦か？」
「し、しません！　このすけべ！」
「いってぇ！？」
セレナ大佐に平手で肩を叩かれたんだが、骨が砕けるかと思った。
ちょっとしたジョークなのに。

＃４５４　最終的に勝てば良いんじゃないか？（前書き）

スターフィールドを再開したり（　ω　）

#454　最終的に勝てば良いんじゃないか？

「うーん、つけ入る隙が無ぇなぁ……」

セレナ大佐がいきなり高湿度になってみせてから凡そ二十時間後。結局あの後セレナ大佐とは二回戦ほど致すことになり、ようやっと出来上がったカウンター用のナノマシン製剤を打ったセレナ大佐はブラックロータスから退艦していった。

ちょうどのその辺りのタイミングで最前線に辿り着いたわけだが、グラッカン帝国航宙軍とベレベレム連邦軍は睨み合いに突入していた。

宇宙空間で睨み合い？　と思うかも知れないが、いくらレーザー砲撃が文字通り光速で標的に到達するとは言っても、あまりに距離が開き過ぎれば位置を変え続けている標的にはそうそう当たるものでもない。また、宇宙空間ではレーザー砲撃は減衰しにくいとはいえ、全く減衰しないわけでもない。

超光速ドライブを使用しない通常航行で距離を詰めるには少々時間がかかり過ぎ、またレーザー砲撃を行っても有効打となりにくいレーザー砲撃限界距離というものが存在するのだ。

超光速ドライブで距離を詰めた場合、距離を詰めた側は超光速ドライブの解除時に隙を晒すことになる。当然、待ち構えている側にしてみれば良いカモなので互いに超光速ドライブを使うことも難しい。

また、防御側である帝国航宙軍は対ＦＴＬトラップ艦なども配備しているし、対ＦＴＬトラップ艦が発生させる強力な重力波は重力レンズ効果によってレーザー砲撃を曲げるので、遠距離からのレーザー砲撃を大きく逸らす効果も発揮する。何せ距離が距離なので、軌道が少しずれれば着弾点は大外れになってしまうからな。

「というわけで、レーザー砲撃限界距離付近での超長距離レーザー砲撃戦では防御側の帝国航宙軍の方が有利だったりする」
「なるほど、対ＦＴＬトラップの一時停止と同期して牽制射撃を行うから、超長距離レーザー砲撃の精度は帝国航宙軍側の方が上になるんですね」
「お陰様で超光速ドライブを使って突っ込むことも出来ないわけだがな。対ＦＴＬトラップ艦が放つ強力な重力波は敵味方を区別しないから」
「では、暫くは様子見ですか？」

クギが狐耳をピコピコと動かしながら首を傾げる。

「そうなるが、均衡はそんなに長くは続かないと思うぞ。あっちは恐らく大きな犠牲を払ってこの星系のハイパーレーン突入口付近のセクターを確保して、橋頭堡を築いてる。つまり、敵の後方からはどんどん増援が押し寄せてきてる筈だ。対して、帝国航宙軍はイクサーマル伯爵の部下がやらかしたサボタージュのせいでゲートウェイが使えず、増援の到着が遅れている。一応近辺の星系からも星系軍を招集して頭数を補ってるようだが、帝国航宙軍よりも戦力的には劣るからなぁ……」

星系の治安を維持する星系軍の装備というのは基本的に帝国航宙軍の任務を退役して払い下げられた型落ち艦ばかりなので、戦力としては二線級だ。練度もまちまちだしな。

「……ええと？」
「つまり、こっちを蹴散らせるだけの頭数を用意したら連邦軍は損害覚悟で突っ込んでくるかもしれないってことだ」
「それは……マズいのでは？」

「とても良くないな。今の帝国航宙軍は堰から溢れ出そうになっている水を必死になって押し留めているような状況だ。ああいや、わかりにくいか？　そうだな、どんどん破断して空気が漏れつつある船殻を応急処置でなんとかしている状況と言ったほうが正確だな」

まぁ、帝国航宙軍も勝てる見込みが少ないというか、もし押し返せたとしても被害甚大で次の攻撃に耐えられないというような状況を黙って受け入れるほど馬鹿でも無いが。

「見たところ、招集されたはずの星系軍の艦艇の数が明らかに少ないから、どこかで何かしらの仕込みをしてると思うけど。多分水際阻止はもう諦めてるんじゃないか。この防御地点を放棄して次の防御地点に退くと思うぞ」

「それは……良いんですか？」

ミミが難しい顔をしながら首を傾げる。帝国臣民としては帝国領土を明け渡すような行動は名誉ある帝国航宙軍のふるまいとしていかがなものかと思うところもあるのだろう。

「最終的に勝てば良いんじゃないか？　ゲートウェイが復旧して帝国軍の主戦力が来るまで持ち堪えれば逆にこちらから攻勢をかけられるんだからな。敵を自陣の深くに誘い込みつつ、何度も足止めを行って前進を阻み、出血を強いる。ありふれた手だが、有効だからこそありふれた手なのさ」

いわゆる縦深防御ってやつだな。領土、領域を犠牲にして遅滞戦闘を行い、時間を稼いで敵の消耗を狙う。

問題は、宇宙空間の広大さと各種センサーの性能、そして光学兵器の射程と着弾速度だろうか。敵を誘い込んで伏撃をしようにも、中途半端な戦力では即座に対応されて損害を与える前に撃破されか

ねないからな。まぁその辺の難しい布陣に関しては帝国航宙軍のエリートが良い感じにやってくれるだろう。
　などと考えていると、軍用の暗号メッセージが飛んできた。配布されていた暗号鍵を使って暗号化を解除し、内容を確認する。

「次は小惑星帯の近くで足止めか。伏撃チャンスだ」
「そんな絶好の伏撃ポイントに連邦軍がわざわざ近づいてきますかね？」
「対ＦＴＬトラップ艦を上手く使ってコントロールするつもりらしい。俺達を含めてコルベット以下の船とか艦載機を小惑星帯に潜ませて、その他の大型艦が牽制射撃を行って陽動。敵の意識が大型艦に向いたタイミングで伏撃を仕掛けて一撃離脱だとさ」
「被害が大きそうですけど……」
「だから伏撃かつ一撃離脱なんだろ。ハプニングが起きなきゃ良いがな」

　アントリオンも伏撃に参加することになっている。アレでそこそこ火力があるからな。足の速さはそこまででもないから、ぶっ放したら即離脱して貰う必要があるが。

「敵がアントリオンのグラヴィティ・ジャマーみたいな装備を持っていたら大変ですね」
「帝国航宙軍の最新秘匿装備だから、多分大丈夫だと思うけどな。もしそんなものがあったら、ジャマー持ちを最初にぶっ壊さないと大変なことになる」

　コルベット以下の戦闘艦や艦載機でも肉薄できれば大型艦に十分なダメージを与えることはできるが、密集している大型艦の対空砲火に晒され続けたらひとたまりもない。だからこそ、敵大型艦に本格的に反撃される前に一撃を加えて離脱する必要があるわけで、離

脱が邪魔されでもしたらとんでもない被害が出てしまう。
そう考えると、グラヴィティ・ジャマーはこういう戦場での小型艦や艦載機による伏撃に対するカウンターにもなるのか。帝国航宙軍はそっち方向でも利用するのかね？

「心配しすぎても仕方がない。計画通りに動こう」

恐らく招集された星系軍の連中はデコイだの機雷だのの散布に奔走しているのだろう。そういったものを利用して上手く伏撃の設定ポイントに敵を誘導できるかどうかが指揮官の腕の見せどころだな。

□■□

「ぐぬぬぬ……二枚舌のクソ貴族め。やはり野蛮な封建貴族制などというものを採用している連中は信用がならん」

顔を真っ赤にして今にも憤死でもしそうな連邦宇宙軍提督閣下を横目に、私は内心で大きな溜息を吐く。お顔を真っ赤にしていらっしゃるが、ろくに艦隊の指揮も出来ないくせに血筋とコネで連邦宇宙軍の中将にまで昇りつめたと評判の貴殿と貴殿が批判している帝国貴族との違いが私にはよくわからないのだが。
というか、帝国貴族という連中は貴族という字面に引っ張られて連邦内では白眼視されがちだが、実際に接してみると誇り高く、能力も高い者が多い。私のような艦隊指揮官ともなればそういう人間と接する機会も無くはないのだ。

「大した抵抗もなくゲートウェイまで到達できるという話だったのに……このままでは私のキャリアに傷がついてしまうではないか！」

今のところ我が連邦宇宙軍は帝国航宙軍に対して数で勝り、犠牲

を払いつつもじわじわと敵国であるグラッカン帝国の領域に食い込みつつある。提督閣下は内通者の手引きにより大した抵抗もなくゲートウェイまで進行できると仰っていたのだが。

「敵の抵抗が弱いのは確かではありますが」
「ならもっと押さんか！　ゲートウェイを奪取するのだ！」
「帝国の指揮官は狡猾です。無理押しをすれば必ず手痛いしっぺ返しを喰らいます」
「提督は私だ！　良いからやれ！　小惑星帯を盾にして肉薄しろ！　数で勝る今ならしっかりと有効射程内に敵を捉えさえすれば火力差で押し切れるだろう！」
「確かにそうすれば敵艦隊を射程内に捉えられるでしょうが、伏撃を受ける恐れが――」
「私はやれと言っている」
「……はっ」

絶対ろくなことにならんぞ、と心の中で呟き、ついでに電脳経由で各艦に伏撃に対して最大限の警戒を呼びかけておく。全力で稼働を始めたらオペレーションに手一杯になってサポートに割り振るリソースは最低限になってしまうからな。
頭痛が酷い。こんなに長時間戦闘をするのは久しぶりだからな。脳のサイバーチップに負荷がかかりすぎて焼け付きそうだ。ジャックインしている神経接続端子にもピリピリと痛みを感じる。

「缶詰の分際で口答えをするとは生意気な……作戦が終わったら交換するか」

この野郎、お前も艦内のネットワークに繋がってるのを忘れていやがるのか？　電力サージを装って脳味噌をカリカリのフライにしてやろうか、この豚め。

「超光速ドライブ同期完了。小惑星帯を盾にできるポイントへ移動します」
「抜かるなよ」
私が抜からなくても命令をするお前がイモ引いたらどうしようもないんだよ。クソが。どうか待ち伏せがありませんように。

#455　運の良いやつがいるもんだ（前書き）

お待たせしました―（∵3」∠）―

#455　運の良いやつがいるもんだ

「……罠でしょうか？」
「……いや、どうだろう。これは」

暗号通信を受信してからもう三時間ほども経つだろうか。あれから二度ほど防御地点を放棄して星系内を後退しつつ、こちらの戦艦や巡洋艦が牽制砲撃で敵を少しずつ削り、遅滞戦闘を敢行した。
そして遂に伏撃ポイントである小惑星帯にベレベレム連邦軍を誘い込んだのだが……なんというか見事過ぎるくらいにこちらの意図通りにベレベレム連邦軍が小惑星帯に布陣していた。伏撃なんて全然考えてませんと言わんばかりに無防備というかなんというか……少しくらいは警戒すると思うんだが。
仮に罠で、迎撃の準備を整えていたとしてもこの状態からだと痛手を与えられる。というか、一撃離脱じゃなくて乱戦に持ち込んで壊滅させられそう。どうしてこいつらはこんな見事なほどの密集陣形を組んでいるのだろうか？

「我が君、如何致しましょうか？」
「何にせよ奇襲はする。場合によってはそのまま留まって乱戦を提案するのも手だな……リスクは高いが、ここで連邦軍を叩ければ大金星だ」

とはいえ俺には指揮権が無いから、周りが引き始めたら俺も引かないと袋叩きにされてミミとクギごと爆散することになる。あまり無茶も出来ないんだよな。まぁ、優秀な帝国航宙軍のパイロットと指揮官なら機を見て攻撃続行指示を出すだろう。
そうしてメインジェネレータを落とし、キャパシターからの動力

供給で最低限の生命維持機能とパッシブセンサー、メインスクリーンだけを動かしている状態で待つこと十数分。ベレベレム連邦軍と帝国航宙軍の大型艦船による砲撃戦が始まった。敵の艦載機も警戒のためかいくらか出撃しているようだが、数が少ない。なにか事情があるのか、ベレベレム連邦軍は小型戦闘艦や艦載機の数がどうもあまり多くないようなんだよな。

あ、ベレベレム連邦の巡洋艦がシールドごと派手に装甲を粉砕されて派手に中破した。今のは多分ブラックロータスのＥＭＬだな。弾頭にシールド中和装置を積んでる徹甲弾が直撃したらしい。

「ヒロ様！」

「来たか。よし、行くぞ」

パッシブセンサーの数値に注目していたミミの合図でクリシュナのジェネレーターを起動し、すぐさまウェポンシステムを立ち上げてベレベレム連邦軍へと突撃を開始する。

「一番槍は頂きだ」

最初に狙うのは？　当然デカくていかにも旗艦って感じの大型艦だ。四門の重レーザー砲で既に展開しているベレベレム連邦の小型艦や艦載機に損害を与えつつ、クリシュナ下部のウェポンベイを展開して対艦反応魚雷を敵の大型艦に一発ずつ撃ち込んでいく。

一応はデカい船を狙ったわけだが、どれが旗艦なのかは流石にわからないからな。四発ある対艦反応魚雷を一発ずつ撃ち込んで、どれかが大当たりなら御の字といったところだ。

トップスピードまで加速したクリシュナから放たれた四発の対艦反応魚雷がそれぞれ四隻のベレベレム連邦軍戦艦――その横っ腹に突き刺さり、大爆発を起こす。

「やりましたか！？」
「いや、流石に一発ではよほど運が良くないと仕留められん。でも戦闘能力はほぼ喪失するだろうな」

装甲が吹っ飛び、船体が一部消失。船殻にはヒビが入り、ダメージコントロールに人員を割かなければそのまま爆沈。当然攻撃に人員を割く余裕は殆ど無くなり、場合によっては即座にジェネレーターを停止しなければやはり爆沈、というような事態になるのは必至である。確実に仕留めたほうが戦果としては大きいが、今回は戦闘に勝利することのほうが大事だからな。どっちにしろクリシュナの放った一撃が決定打であることには変わらないので、撃破報酬額も然程減りはしない。

「我が君、次はどのように？」
「敵陣を駆け抜けつつ、散弾砲で大型艦のメインスラスターを破壊していく。ただでさえ鈍足の大型艦だ。メインスラスターを潰せば全体の足が更に遅くなる」

基本的に船団を組んでの行動をする場合には一番足が遅い艦の速度が船団全体の行動速度となる。船団として行動するなら足が遅い船を置いていく訳にはいかないからな。
一撃離脱するなら敵の行軍速度を遅らせるという意味で大変に有効だし、もしこのまま掃討戦を行うことになる場合には接舷して海兵を送り込む際に船の足が潰れていたほうがやりやすいし、逃げられにくい。どちらにしてもやり得の行動である。

『応戦しろ！　叩き落とせ！』
『味方が近過ぎる！』
『ユニット１０４応答しろ！　ユニット１０４！　クソッ！　自席の指揮ユニットは！？』

『ユニット２０３、ユニット３２２沈黙。当ユニット２５１も生命維持装置に異常、長くは保たない』

ミミが傍受した敵方の通信内容が聞こえてくる。ふむ？　指揮ユニット？　あまり聞かない単語だな。

『帝国航宙軍突撃艦隊は戦闘継続。敵が混乱している間に叩くぞ。敵コルベット艦以下の船は適当にあしらって、駆逐艦以上の船を狙え。足を潰せば味方が片付けてくれる』

『了解』

突撃艦隊の指揮官から攻撃続行の指示が出たので、一撃離脱を中断して敵大型艦の戦闘能力喪失を狙うことになった。第一目標は敵大型艦のスラスターで、敵小型艦は適当にやれと。ふむ。

「指揮官様の指示に従うとしよう。対空砲火と敵小型艦の迎撃に気をつけながら戦果拡大だ」

「はい！」

「エルマは小型艦の対処を頼む。アントリオンは対大型艦戦闘よりもそっちのほうが向いてるだろ？」

『アイアイサー。背中は守るわ』

「任せたぞ、相棒」

アントリオンを置き去りにしないように気をつけながら、組織的な反撃ができずにどんどん被害を拡大しているベレベレム連邦軍に攻撃を加えていく。四方八方から対空砲火を浴びせられたら流石にクリシュナでもどうしようもないが、密集しているせいでフレンドリーファイアを恐れて全力射撃ができない上、指揮が混乱して目標を定めた統制射撃が飛んでこないのなら怖くもない。場当たり的な対空砲火なんぞ早々当たるものでもないしな。

「さーて、バイタルパートはどこかな？」

至近距離であればシールドと装甲をものともせず船体に直接被害を与えることができる散弾砲の特性を活かしてベレベレム連邦軍の艦船をどんどん穴だらけにしてやる。流石にジェネレーターは船の奥まったところに配置されているだろうから散弾砲では大型艦を一撃で仕留めることは難しい。

しかし、艦橋や武装などの各システムに供給するためのエネルギーを蓄えているキャパシター、シールドを発生させているシールドジェネレーター、キャパシターやシールドジェネレーターにメインジェネレーターからのエネルギーを運んでいる導管なんかは上手くやれば十分狙える。その辺りに被弾させることができれば、艦の戦闘能力を大きく低下させることが可能だ。

「散弾砲の弾を撃ち尽くすくらいの気持ちで行くぞ」

「アイアイサー！」

「はい！」

ミミとクギの元気な返事を聞きながら、俺はクリシュナを加速させた。

☆★☆

「兵どもが夢の跡、ってか」

「なんです？　それ」

壊滅し、無惨な姿を晒すベレベレム連邦軍の艦船を眺めながら呟くと、耳聡いミミが俺の呟きを聞き咎めた。いや、単に気になっただけだろうが。

「あー、俺の世界の詩人が詠った有名な詩？」
「どのような意味なのでしょう？」
「んー、正式には確か『夏草や、兵どもが夢の跡』だったかな。かつて勇敢に戦った戦士達が居たが、今はすべて死に絶え忘れられ、草が生い茂るばかりで何も残っていない、みたいな感じだったはず」
「……なんだか寂しいというか物悲しいというか」
「その詩人もそういう気持ちを歌にしたんじゃないかね。知らんけど」
「そこで知らんけど、と言ってしまうのは台無しでは。此の身は情動を揺さぶる素晴らしい詩だと思いますが」

珍しくクギが苦笑いを浮かべている。実際には詩人ではなく俳人なのだが。いや、俺も詩と俳句の明確な違いなんてよく知らんのだがね。五、七、五で作って季語を入れるというくらいしか。そもそも季語というのがわからんし。わからないよね？　俺はわからん。何がどの季節の季語とかマジでよくわからん。

「我が君、生命反応です」
「運の良いやつがいるもんだ。脱出ポッドか？」
「いえ……見たことがないものですね。脱出ポッドには見えません」

遅くなったが、結論から言うと大勝利であった。見事に伏撃が決まり、最初の一撃で敵の指揮系統が完全に崩壊。奇襲を行った帝国航宙軍突撃艦隊は一撃離脱を中止してそのまま戦闘を継続し、ベレベレム連邦軍は更に大混乱。小惑星を僅かに迂回して距離を詰め、射線を確保したセレナ大佐率いる帝国航宙軍本隊による艦砲射撃で破滅的に被害が拡大。終わってみれば損害比は１：１０以上の大勝利である。
で、今は人道的観点から撃破した船から放り出され、奇跡的に生

きている生存者を探しているところだ。船やその残骸の方に残っている生存者は帝国航宙軍の仕事で、俺のような傭兵や帝国航宙軍のコルベット以下の小型艦船、それに艦載戦闘機などはこちらの任務に就いていた。

まぁ、生身で放り出されて生き残れるような人間はそういないし、宇宙服やコンバットアーマー、パワーアーマー等を着ていても放り出された時の爆発や衝撃でスーツやアーマーが損傷を受けて気密が失われ、そのまま死んでしまう奴が殆どだ。

なので、今回見つかった生存者はかなりの幸運の持ち主だと言えよう。

「……なんだこりゃ？　棺桶？」

「円筒ですし、缶詰じゃないですか？」

「回収しますね」

クギが操作する回収ドローンが生命反応のある謎の物体を回収する。何にせよこれで捕虜一名ゲットというわけだ。あまり居心地のよくなさそうな物体に収まっている生命反応が人間なら良いんだが。何らかの生物兵器とかじゃあるまいな？

#456　缶詰少女（前書き）

昨晩筆が乗って書けてしまったので特別更新（ ，ω，　）（褒めていいよ！

#456　缶詰少女

「缶詰と言うにはでかいよな」

回収した缶詰（仮）の生命維持装置がいつまで保つかわからないので、クリシュナは早々にブラックロータスへと帰還した。そして今はクリシュナのカーゴルームから例の缶詰をメディカルベイに移し、開封作業を行おうとしている。

ちなみに、エルマのアントリオンと整備士姉妹はまだドローンを使って生存者の探索と回収を進めている。今、メディカルベイに集合しているのは俺とショーコ先生、それにミミとクギとメイ。あとはこのデカい缶詰（仮）をメディカルベイまで運んできた戦闘ボットが一機だけだ。

「確かにそうですけど、人が入っているにしてはかなり小さくないです？」

「子供くらいしか入らなさそうですね」

「スキャンは弾かれますね。データポートがあるようなので、アクセスします」

そう言ってメイが首筋の辺りからコードを引っ張り出し、缶詰（仮）の基部にある機械部分に接続する。メイのことだから一瞬で解析が終わる……終わらないな？　なんか固まってるぞ。

「……メイ？」

「……」

メイが目を見開いたまま固まっている。どうしたんだ？　まさか

壊れたのか？

「おい、大丈夫か？」

「……はい。少し手間取りました。制圧しましたのでご心配なく」

「制圧……？　どうやって開けるんだ？　これ」

「開ける方法は現状ではありません。専用の設備が必要だとのことです。なので、ご主人様に斬って頂きたく。このままでは内蔵動力と各種薬液が枯渇して死んでしまうそうなので」

「力技ぁ……まぁそう言うならそうするけど。バッサリ斬ったら中身ごとやっちゃうよな。どう斬れば良いか指示してくれ」

「お任せください」

メイの指示で缶詰（仮）を縦に真っ二つに割ることになった。当然、中身を斬るわけにはいかないので、ぐるっと缶の金属板部分だけである。とても面倒である。普通に缶詰開けるみたいに上の部分斬ったほうが良くない？　と言ったら色々と繋がっていて、引っ張り出すのは無理なのだそうだ。縦に割ってぱかりと開ける必要があるらしい。

少し苦労したが、ご注文通りに缶詰の金属部分だけを斬って縦に割り、更に下部を斬ることによってぱかりと半分だけ外装を取れるようにした。物凄い手間である。

「では」

メイが割と分厚い缶の外側――外殻を持ち上げ、中身を露わにする。

「……ええ」

「――」

「……」

「へぇ？」

俺とミミ、クギの三人は絶句した。ショーコ先生だけは興味深げな声を上げている。

缶詰の中身は真っ白な全裸の……多分少女だった。何故多分なのかというと、缶詰の底から伸びている無数のコードが身体のあちこちに突き刺さっており、体中の穴という穴に管が挿入されていたからだ。口にも、鼻にも、下半身にも。

俺が絶句している間にメイがテキパキと少女に接続されていたり挿入されていたりするコードや管を抜いていき、彼女を抱き上げて医療ポッドに連れて行った。

素早く動いたショーコ先生に続き、俺達も医療ポッドへの側へと移動する。

「どれ、スキャンするよ」

「はい。生命維持装置に繋がっているのが『通常』の状態であるようなので、身体が少し大きい新生児のようなものだという話です」

「へぇ？　それは興味深いね……」

「耐用年数は一年を切っているそうで」

「耐用年数、ねぇ……連邦はこんな子をあんな缶詰に閉じ込めて生体ユニットとして何かに利用してるってことかい？　なんというか、度を越してるねぇ」

二人の会話を聞いて思わず天井を仰ぐ。マジかよ。ということはあの通信で言ってたユニットなんとかだのなんだのってのはあの子みたいな生体ユニットのことを指してたってことか？　流石にちょっと、なんというか……人の心とか無いんか？　もう少しなんとかならんかったんか？

「この子、頭の中に何か入ってるね。というか、脳を中心になんか

色々入ってるなぁ……内臓機能は何をどうしたらこんなことになるんだろうか。骨格も歪んでしまっているし、筋肉も酷いなぁ。とりあえずこれとこれとこれを……」

医療ポッドのスキャン結果を精査しながらショーコ先生がぼやく。俺には表示内容がまったく理解できないが、とにかく酷い状態だというのはわかった。

「あー……助かるのか？」

医療ポッド内で何種類もの薬剤を注入されたり、謎の光を照射されたり、呼吸器らしきものを装着されたりしている少女を眺めながらショーコ先生に問いかける。

「この医療ポッドの中ならとりあえず死ぬことはないよ。ヒロくんが大枚叩いて良いのを入れてくれたおかげだねぇ。というかこの子、多分だけど人為的に脳以外の成長を抑制されてるね。きちんと調べてみないとわからないけど、脳の状態から考えると軽く二十歳は超えてるよ」

「マジかよ」

どう見ても彼女の外見年齢は一桁歳にしか見えない。ギリギリ少女？　いや、幼女では？　って見た目なんだが。

「あの、ヒロ様。流石に女の子の裸ですから……」

「まぁそうだが……メイ、この子と話したのか？」

真っ白くて起伏もクソもない幼女の裸を見てもなんとも思わないが、向こうはなんとも思うかもしれないのでミミの言葉に素直に従って彼女の身体から視線を外しつつ、メイに話を振る。

「はい。言葉を交わしたわけではありませんが、コミュニケーションは取りました。いきなりクラッキングされかけましたが」
「おい。大丈夫なのか、それは」

それで固まってたのか。短時間とはいえメイが応答できなくなるほどの負荷をかけるって凄いな。

「問題ありません。脳内のチップと人間の脳をフル活用した電子戦能力は人間としては驚異的なものなのでしょうが、陽電子頭脳を持つ機械知性をどうにかできるほどのものではありませんので」
「な、なるほど……？」
「あ、制圧ってそういうことですか。メイさんと脳を直結して電子戦を……え、それ大丈夫だったんですか？　この子」
「生命機能に重篤なダメージは無いと思います。少々刺激が強かったかもしれませんが」
「刺激が強かったというか、完全に失神してるけどね。もう少し刺激とやらが強かったらあの缶詰から出す前に死んでたかもしれないよ？」
「少々チップから情報を抜くのに手間取りまして。脳細胞に損傷を与えるほどにはチップの温度は上がっていない筈です。ドクター、脳の冷却をお願いします」
「まだ何かやるつもりかい？　負担が大きいのはやめてほしいんだけど」
「起きた時にパニックに陥らないように処置する必要がありますので」

そう言ってメイが先程缶詰にしたのと同じように医療ポッドに接続する。すると、医療ポッド内の少女にコードのようなものが伸びていって首筋に突き刺さった。どうやらあの部分に接続ポートのよ

うなものがあるらしい。

「これで大丈夫です」

「何をしたんだ？」

「この医療ポッドを電子的な意味で隔離しました。彼女が目覚めればすぐに私が感知できるようにもしましたので、ご安心を」

「そっかぁ……よくわからんが、この子のことは二人に任せる。頼んだぞ」

「はい、ご主人様」

「うん、任せておいてくれたまえ」

とりあえず、この缶詰の中身のことは一旦忘れて生存者探索に戻るとしよう。ああ、この缶詰のことについて帝国航宙軍の士官とセレナ大佐に連絡もしておかないとな。本来見つけた生存者に関しての報告先はセレナ大佐じゃなくて帝国航宙軍の生存者探索を指揮している士官なんだが、どうも普通の生存者じゃないみたいだし。まぁ、これ絶対厄介事だよな。間違いなく。

☆★☆

『生体指揮ユニット……噂には聞いていましたが、鹵獲――いえ、捕獲？　できたのは初めてですね。これも貴方の悪運の賜物でしょうか』

ホロディスプレイの向こうでセレナ大佐が軽く溜息を吐く。いや、溜息を吐かれてもな……俺は別に悪くないよな？

クリシュナで戦場跡に戻った俺は適当に船を走らせつつ、ミミとクギに生存者の探索を任せてセレナ大佐から入った通信に対応していた。

『まぁ、政治的な意味での武器にはなりそうですね。その解体したポッドを含め、引き渡して頂けますか？』
「引き渡しは構わんと言えば構わんのだが、耐用年数間近らしくてな？　内臓はボロボロ、筋肉も骨格もふにゃふにゃのスカスカ、骨格も歪んでいるとかなんとか。うちのドクターが言うにはデカい新生児みたいなもので、少なくとも現状では高性能医療ポッドの中でないとすぐ死にかねんそうだ」
『そこまでですか……非道な。宙賊と大して変わりませんね』
「その意見には同意するよ」

人の命を目的に沿うように都合よく歪めて、本人の意志も何もかも無視して使い潰すというのは宙賊がよくやる手口だ。人間が家畜にしているのと変わらないって？　でも人間は家畜じゃねぇしなぁ。俺はそのように扱われたくないんで、全力でNGを出したいね。度が過ぎた博愛主義者以外は同じ意見だと思うが。

「で、彼女はその大佐が言う生体指揮ユニットとやらだと思うか？」
「連邦軍が宙賊から奪還した被害者ということもないでしょうし、ほぼ確定かと思いますね。それをあちらが認めるかどうかは別の話ですが、まぁ非難の材料にはなるでしょう。問題は……」
「問題は？」
『あちらが認めなかった場合ですね。そんな人間は連邦には存在しない。当然、連邦軍にもそのような人間は存在しない。帝国の妄言によりでっちあげられた哀れな少女に関してベレベレム連邦は一切関知しない、などということになると……』
「オラ嫌な予感がしてきたぞ」
『そうすると帝国法的にも宇宙法的にも彼女は身寄りのない遭難者ということになるので、貴方に一定期間の保護義務が発生しますね。状況が状況なので、ベレベレム連邦の非道な行いの生き証人として帝国が保護するということも考えられますが……』

「是非そうしてほしいがね……というか、この先彼女が生き残れるかどうかが不明なんだが。ちょっとドクターを呼び出すぞ」
『ええ、専門家の話も聞きたいですね』

数度のコールを経てショーコ先生の顔がホロディスプレイに表示される。

「あー、ショーコ先生？　缶詰から出したあの子の状態を聞きたいんだが……率直に言ってこの先どれくらい生きられそうなんだ？」
『ベレベレム連邦の生命・遺伝子工学技術だと延命も難しいだろうね。だが……帝国の技術があれば話は違う』

なんかギュッて効果音が聞こえた気がするのは気のせいだろうか？　一瞬顔も妙に濃くならなかった？　俺の気のせい？

『何か今、変な音が……一瞬顔も変わりませんでした？』
『何を言っているんだい？　とにかく、彼女の延命や回復処置に関してはできないことはないよ。時間もお金もかかるけどね』
「金ねぇ……具体的には？」
『そうだね。五百万エネルくらいかな？　技術料諸々込みで。技術料を抜いた原価は二百万くらいだよ』
「技術料高いなぁ……まぁそういうものか。余命一年未満の人間を大幅に延命するのに五百万エネル、と考えればそうでもないのかもしれん。というわけで国から金が出るならうちでやるが？」

ちらりとセレナ大佐に視線を向けると、彼女は額に手を当てて苦い表情をしてみせた。

『一応上にはかけあってみますが、そこまで予算が出るかどうか……検討させてください』

『とりあえず、今は容態を安定させてコミュニケーションくらいは取れるようにしておくよ。それじゃあ、処置に戻るけど。良いかな？』
「ああ、ありがとう。とりあえず、優しくしてやってくれ。国が面倒見ないならうちで面倒見るから」
『おや？　優しいね？』
「ベレベレム連邦からも帝国からも見捨てられたらあの子は死ぬしか無いだろ。見た目と年齢は合致してないらしいが、流石にあの見た目はな……子供を見捨てるのは寝覚めが悪すぎる」

医療ポッドに寝かせられている少女の姿を思い浮かべる。まともに歩くどころか立つこともできない彼女が帝都のアンダーレベルの路地に打ち捨てられて弱って死んでいく……いや無いわ。そういうのは無いわ。俺はそういう話が嫌いなんだ。多少苦労してでも手が届く範囲なら助けるわ。俺にだって限界ってもんはあるが、少なくとも直接関わったなら助けるわ。

『……また新しい女ですか』
「流石にあれに嫉妬するのは心が狭いと思うが……」
『ちなみにこんな子だよ』

ホロスクリーンに少女の姿が映し出される。全裸なのは相変わらずだが、血の気の薄い彼女の白い肌に呼吸器やら点滴の管やら何やらが装着されていて実に痛々しい。

『前言撤回します。私が狭量でした』
「わかってくれて嬉しいよ、俺は。とりあえず、そういうことで……あー、後始末が終わったら逆侵攻か？」
『とりあえずは元々こちらが実効支配していた領域までは取り戻します。その後はゲートウェイが復旧して後詰めが着てから決めると

いうか、あちらが上からの命令を持ってくるはずです』
「了解。それじゃあ俺は生存者探索に戻るわ」
セレナ大佐とショーコ先生との通信を切断し、宣言通り生存者の探索に戻ることにする。
まったく……変な拾い物をしてしまったものだな。クリスと若干ダブってる気がするが。もう色々と諦めるしか無いな、これは。

#457　どうしてそういうこととするの???（前書き）

一区切り！（、ω、）

#457　どうしてそういうことするの???

戦場に散らばったベレベレム連邦軍の生存者の収容と捜索を終え、戦場を漁りに来るスカベンジャー対策に星系軍を中心とした二線級の戦力を残した帝国航宙軍は逆侵攻を開始し、今回の戦役が勃発する直前までの支配領域を取り戻した。

ベレベレム連邦軍の補給艦隊やその護衛戦力との偶発的な戦闘は何度か起こったものの、帝国航宙軍はこれを難なく撃破。臨時ながら防衛体制を確立したところで復旧したゲートウェイから帝国航宙軍の本隊が到着し、俺達はお役御免となった。

いや、クビとかではなく修理と補給のために後方へと退くことになったのだ。

『仕事、手伝ってもらえません？』

「嫌です。契約外なので」

イクサーマル伯爵を捕らえ、クリーオン星系の物資集積基地の指揮権を奪取していたセレナ大佐はそのまま後方へと戻る帝国航宙軍への補給を行う責任者とされてしまい、その仕事に忙殺されることになった。俺達の契約内容はあくまでも戦闘関連だけなので、補給業務を手伝うのは完全に契約外である。まぁ、流石に食っちゃ寝して報酬だけ分捕るというのは仁義にもとるので、クリーオン星系のパトロール任務はしているけど。

『鬼！　悪魔！　冷血の人でなし！　愛しい伴侶に冷た過ぎると思わないんですか！？』

「公私混同は良くないと思うなぁ……」

あと伴侶ではないと思う。少なくともまだ。
後方を騒がせていた重武装宙賊に関しては姿を消したようだとの話をセレナ大佐から聞いた。作戦の失敗を受けて身を隠したのか、ベレベレム連邦に返ったのか、それとも手足として使っていた宙賊に裏切られて活動ができなくなったのかはわからないが、活動を中止したとなると追うのは難しそうだ。
ちなみに、イクサーマル伯爵は証拠と共に憲兵によって帝都に連行されていった。いくらイクサーマル伯爵が伯爵としては埒外とも言える強大な権勢を誇っていたとしても、今回の証拠とやろうとしたことの内容を考えれば完全にアウトである。
本人はどんなに軽くとも死罪。家自体は存続される可能性があるが、利権や資産などの多くは帝国に接収されることになり、家が存続したとしても殆ど名ばかりの爵位となるか、帝国によって都合の良い傀儡にされるか……まぁその未来は暗いものになりそうだというのがセレナ大佐の話である。

「今回は大儲けね」
「大戦果ですよ！　また勲章が貰えるかもしれません！」
「堅苦しい式典は嫌だなぁ」

クリシュナの撃破スコアは撃沈だけでなく大破や中破を含む戦闘能力の喪失を含めると、旗艦を含む戦艦級が四隻、巡洋艦級が七席、駆逐艦が十二隻、コルベット三隻、艦載機十八機となった。
アントリオンはコルベット七隻、艦載機二十二機、ブラックロータースは巡洋艦三隻、その他宙賊を名乗る武装艦などの撃破報酬も含め、契約金の１０００万エネルなども加えると報酬額は総額で凡そ８０００万エネルほどに膨れ上がると思われた。これはもうちょっとした大金持ちというか、億万長者である。
「鹵獲した物資とか装備品の売却益とかを抜きにしてそれかぁ……

普通なら一生使い切れんね」
「ちょっと現実感無いよね」
「我が君はそれだけの富を何に使われるのでしょうか？」
「うーん……どこかの惑星上居住地に土地を買って豪邸でも建てるかな？」

そろそろ夢の一戸建ても現実的な選択肢になってきた。いや、ここは一つブラックロータスよりもデカくて強力な母艦を買って、そこを生活の拠点とするのもアリと言えばアリか？　これだけの金額があれば選択肢はかなり広がるな。

「様子は？」
「最低限の処置を済ませるまでは意識レベルを下げてるから、目覚めないよ。しかしまぁなんというか、雑なやり方をする連中だよ。本当に」

そう言ってショーコ先生が苦笑いを浮かべる。その視線の先には医療ポッドの中で複数の管だのコードだのに繋がれた全裸の白い少女が横たわっていた。

「治療じゃなくて身体を作り替えて意識とか生体脳を載せ替えるとかはできないのか？　彼女の遺伝子から培養したスペアボディとか、完全に義体化しちゃうとか」
「ヒロくんは偶にとんでもないことを言い出すよね……？　そういう所謂スペアボディというかクローンを勝手に製造すること事態がまず違法だし、培養したクローンに意識や生体脳を載せ替えるっていうのは普通に重殺人だからね？　脳以外の完全義体化に関しては帝国では技術がまだ確立されていないし、陽電子頭脳などを持つアンドロイドなどへ意識をコピーする手法も同様に帝国では技術が確立されてないから。帝国の遺伝子・生物工学の分野から見ると、壊

れたり機能が著しく低下していたりする臓器やなんかをナノマシン製剤などを使って正常な状態に戻したり、作り替えたりするほうがローリスクで確実だよ」
「なるほどなぁ……意識のデジタル化って機械知性でもできないのか？」
「はい、ご主人様。申し訳ありませんが、そういった手法に関しては私は存じ上げません」

メイが俺の質問に謝罪して頭を下げる。いや、謝るほどのことでもないんだが。

「まぁ、素人の思いつきだから。彼女に関しては二人に完全に任せるから、何かあったら報告してくれ」
「うん、わかったよ」
「はい、ご主人様」

☆★☆

と、いうわけで今回のお仕事も無事完了したというわけで……いや、無事だったろうか？　最終的にうちのクルーには怪我人も無く、船も無事。ならトラブルはあったが無事に仕事を終えたと評価しても良いな。ヨシ！

「ちょっと、聞いてるんですか？」
「聞いてるヨー。セレナチャンカワイイヤッター」
「えへ……そ、そうですか？　えへへ」

俺のとてもぞんざいなお世辞に顔を赤くしたセレナ大佐がふにゃりと表情を崩して笑う。顔が赤いのは照れているだけではなく、酔っ払っているからだけど。

セレナ大佐と関係を持ってからというもの、彼女は暇さえあればこうしてブラックロータスに遊びに来ては酔い潰れたり、俺に甘えたり、うちのクルーとおしゃべりと言うか酒盛りをしにきたりしている。

俺もセレナ大佐のオフタイムを狙ってこうしてブラックロータスを帰港させているのだけれども。いくら軍人とは言っても流石に二十四時間勤務ってわけじゃないからな。事前にスケジュールを教えて貰っていればそれくらいの融通はきかせられる。

「別に俺が気にすることじゃないかもしれないんだが、こんなに露骨にうちに通い詰めて大丈夫なのか？」

「気にすることはないですよーだ。大佐の想いがついに実っただとか、大佐が男を知った顔にだとか言われてますけどぉー」

「それは気にするべきことなのでは……？」

俺は訝しんだが、セレナ大佐は俺の心配に取り合おうともしなかった。まぁ、本人が良いって言うなら良いけどさ。

「そ、れ、よ、り、もぉー……わかってますよねぇ？」

「なんのことかな？」

「ごたごたを片付けてここの後任が来たら、一緒に帝都に帰りますよって話ですよぉ。付き合ってもらいますからねぇ？」

「はいはい、行きます。行きますよ」

今回は対ベレベレム連邦軍との戦闘において帝国航宙軍が雇った傭兵として公式な戦果を……それも大戦果を挙げたので、またぞろぴっかぴかできらきらの勲章を頂くことになるようだし、その前にイクサーマル家の連中をバッサバッサと斬りまくったからな。イクサーマル家の嫡男であったヴィンセントの首も落としたし。物理的な意味で。そっちの方の裁判というか審問というか、軍法会議とい

うか、そんな風味のイベントもある。セレナ大佐の帝都帰還にはついていかざるを得ない。

「わかってるなら良いんですよ、わかってるなら。えへ、貴方も素直になりましたねぇ」

セレナ大佐はニコニコしているが、別にセレナ大佐とそういう関係になったから彼女の言うことを素直に聞くことになったわけじゃなく、今回は必要に駆られてなんだけど……まぁそういう部分が一ミリもないと言ったら嘘になるだろうけどさぁ。

「んや？　らんれふかぁ？」

「可愛いからつつきたくなっただけだ」

微妙にドヤ顔成分を含んだ笑顔が可愛いけどちょっとイラッとしたので頬をつついてやっただけである。まぁ、少し前ならセレナ大佐のご尊顔にこんなに気軽に触れようとは思わなかっただろうから、自分ではあまり変わっていないつもりでも結構変わってる部分はあるんだろうな。

「えへ、えへへ……ならしかたないですねぇ」

少し可愛いとか褒めるとこんなにちょろくなってしまうセレナ大佐が正直かなり心配である。いや、俺以外に言われてもこんなにはならないのかもしれないが。くそ、可愛いなぁ。

「ぐぬぬ……」

「どうどう。気持ちはわかるけど」

「ここは先駆者の余裕を見せるところやで、ミミ」

「お姉ちゃん、強化樹脂製のグラスが軋んでるよ……」

少し離れたテーブルからミミ達の強い視線を感じる。エルマとウィスカは押さえに回ってくれてるけど、あれはあれでなぁ……今は冷静だけど反動が激しいんだよな。二人とも。反動とは何かという点については説明を控えるが。

「……」

クギはそんな俺達を見て機嫌が良さそうにこにこしている。尻尾の動きも機嫌が良い時というか、嬉しい時の動きなので本当に機嫌が良いのだろう。クギは一歩引いているところがあるから、あとでちゃんと構ってやらないとな。

ショーコ先生はメイと一緒に例の白い少女――ベレベレム連邦の生体指揮ユニットにつきっきりである。彼女がつきっきりでないとすぐにでも容態が急変してしまう、というような状態ではないようだが、連邦の遺伝子・生命工学について知る良い検体でもあるということで没頭しているようだ。

メイは生体指揮ユニットの脳内チップにアクセスして情報を引っこ抜いたり、夢を見ているような状態の彼女に脳内チップを介して彼女の状況や俺達の関しての情報を提供しているらしい。

生体ユニットの彼女の意識レベルはショーコ先生によって意図的に落とされているが、脳が活動を停止しているというわけではない。そこに彼女の脳に埋め込まれているチップだのなんだのが作用してそのような芸当ができているようだ。

え？　説明が曖昧？　んなこと言われてもな。一応説明は受けたが、俺の頭じゃ理解できなかったんだよ。身体は寝てるけど脳とチップが動いてて、そこにメイがアクセスしてるってことくらいしか。

「粗相をしないようにちゃんと教育をしておきますので、ご安心を」

「お、おう」

教育って一体何をしているんだ？　とは聞けなかった。なんか怖くて。

「メイくんがアクセスしてる時、たまにあの子のバイタルが不安定になるんだよね。困るから言っておいてくれないかい？」

「メイがやることだし、必要なことなんだろうから目を瞑ってくれ」

「うーん……まぁ、そう言うなら」

ショーコ先生はすっきりしない表情だったが、俺も藪を突きたくはないので我慢してもらおう。少なくとも、俺にとって不利益になるようなことはないだろうから。

そんないつも通りといえばいつも通りの日々を少しの間過ごした後、ついに帝都からセレナ大佐の後任が赴任してきた。俺が顔を合わせることはなかったが、どこかの貴族の跡取りか何かが実績作りのために抜擢されたしい。

そんな彼に後を任せ、セレナ大佐の対宙賊独立艦隊と俺達は帝都へと向けて出発した。

「ああ、ヒロ。クリスに今回の件について書いたホロメッセージを送っておいたから。頑張ってね」

「どうしてそういうことするの？？？」

「淑女協定がありますから」

「俺の知らんところで俺の知らん協定が……」

なんとなく存在には感づいていたけどさ。ああ、そうなるとクリスも帝都に来そうだな。下手するとホールズ侯爵家とダレインワルド伯爵家の板挟みになるのか？

い、胃が痛ぇ……！！

#458　俺にも譲れないラインはある。（前書き）

天気が悪いと今ひとつ捗らない―（∵3」∠）―

#４５８　俺にも譲れないラインはある。

プロローグ

くすり、という密やかな笑い声で目が覚めた。まだ覚醒したばかりではっきりとしない頭を誰かのたおやかな手が撫でる。その手付きは念願叶ってやっと手に入った珍品を愛でるかのように繊細だ。やっと自分のものにできたのだ、という怨念に近い執念を感じる気がするが、多分気のせいだろう。

「……おはよう」

目を開け、隣で俺の頭を撫でている女性に視線を向けると、真紅の瞳が俺を見返してきた。

「おはよう。寝顔は無邪気で可愛いのね」

「起きてる時の顔は可愛くなくて申し訳ないな。大佐の顔はいつも綺麗だと俺は思ってるよ」

「二人きりの時に大佐はやめて。様も禁止」

そう言ってジト目になったセレナが俺の頬を指先でつついてくる。

「そいつは失礼。それじゃ、起きるか。セレナ」

「ええ、ヒロ」

身体を起こし、一つのびをしてからベッドを降りる。さて、あとは帝都まで一直線だ。

☆
★
☆

セレナ――セレナ・ホールズ侯爵令嬢にして、帝国航宙軍大佐にして、対宙賊独立艦隊の司令官でもある彼女との楽しい朝のバスタイムを過ごした俺は、彼女と連れ立って我が傭兵団の旗艦にして母艦であるブラックロータスの食堂へと足を運んだ。

我が母艦ブラックロータスの設計思想は敵には悪辣に、クルーには慈母のように、といったような感じのものである。コンシールド装甲によって武装が隠蔽された状態だと一見貨物輸送艦のように見えるブラックロータスだが、武装を展開するとたちまち重武装の砲艦に変身する。

それでいて居住区画には最大限のスペースと快適性を確保しており、各種施設の充実ぶりと豪華さは客船もかくやという金のかけっぷりだ。食堂は広く、明るく、設置されている自動調理器は最新かつ高性能。自動調理器テツジン・フィフスが作り出す合成料理は侯爵令嬢であるセレナ大佐をも唸らせる出来だ。

「おはようございます、セレナ様。それにヒロ様も」
「おはよう、ミミさん」
「おはよう、ミミ。ミミだけか？」
「エルマさん達は揃ってメディカルベイに行ってます。昨晩飲みすぎたみたいで」

そう言ってミミが苦笑いを浮かべる。

彼女は俺の愛機であるクリシュナのメインオペレーターで、傭兵団の補給や戦利品の売却業務、情報収集なども一手に引き受けている。うちの傭兵団の最古参クルーだが、実は一番歳若い。

元は特に何の技能も無いただの女の子だったが、経験を積んだ今となってはうちの傭兵団にとって欠かせない存在である。

実は俺達が活動しているグラッカン帝国の皇帝陛下の姪孫である

だとか、皇太子殿下の娘――つまり皇女様と顔つきが瓜二つであるだとか平凡そうに見えてとんでもない爆弾を抱えている……が、俺達にとってはミミはミミである。それ以上でもそれ以下でもない。

「全員？　クギもか？」

「クギさんは私よりも早く起きてて、もうトレーニングルームに行ってるみたいです」

「なるほど。クギは早寝早起きだよなぁ」

などと話しながらセレナ大佐と一緒にテツジンから排出されてきた食事のトレイを持ってミミと同じ席に着こうとすると、そのクギがひょっこりと食堂に現れた。

「おはようございます、我が君。セレナ様もおはようございます」

「ああ、おはよう。朝の訓練を終えたのか？」

「おはよう、クギさん」

セレナ大佐と一緒にミミの対面に腰掛けながらそう聞くと、クギは「はい」と言って頷きながらミミの隣に腰を下ろした。

彼女はヴェルザルス神聖帝国という遠い異国から俺に仕えるためにはるばる旅をしてきた巫女さんで、頭の上にはつんと尖った狐のような獣耳が生え、更に腰の当たりから三本のモフッとした尻尾も生えている狐娘である。

傭兵団内での立場としてはサイオニック――所謂超能力関連全般におけるアドバイザー兼俺のサイオニック能力の師匠で、船のクルーとしては俺の愛機であるクリシュナのサブパイロット見習いといった感じだ。まだ傭兵団の一員として船に乗って日が浅いので、クルーとしての方向性に関しては模索中といったところだ。

ちなみに、彼女は極めて強力な精神系サイオニック能力――神聖帝国では第二法力と呼ばれているらしい――の使い手である。

「はい、我が君。朝の瞑想だけですが。身体を動かすならお付き合い致します」
「じゃあそうするか。ミミも行くよな。セレナ大佐はどうする？」
「私は船に帰ります。そろそろ夢の時間も終わりです」

セレナ大佐が洗練された所作で食事を口に運びながらそう言う。
俺達の現在地はベレベレム連邦軍との衝突が起こったクリーオン星系に一番近いところにあるゲートウェイが存在している星系だ。このゲートウェイは先日の騒動中に帝国を裏切ってベレベレム連邦に与しようとしていたクソ貴族の手の者によってサボタージュを仕掛けられていたのだが、既にサボタージュを仕掛けた連中は排除され、運行も復旧している。
ゲートウェイを通れば帝都は目の前なので、こうして俺とセレナ大佐がイちゃつけるのもここまでということだな。帝都に戻ればセレナ大佐はもちろんのこと、俺も色々と予定があるし。何より、帝都にはセレナ大佐の実家であるホールズ侯爵家の屋敷もある。帝都滞在中は軍務と実家関係でセレナ大佐はそうそう自由には出歩けなくなるだろうからな。

「ヒロ、わかっていますね？」
「どうしても外せない用がある時を除いてセレナ、というかホールズ侯爵家の呼び出しには応じるよ。何が何でも優先しろってことなら、相手がある用事の場合にはホールズ侯爵家に骨を折ってもらうからな」
「良いでしょう……責任を取ってくれるつもりはあるんですよね？」
「俺が譲歩できるところまでは最大外譲歩することを約束する。ただ、俺にも譲れないラインはある。それだけはわかってくれ」
セレナ大佐としては珍しい、不安げな表情で発された言葉に俺は

真摯に答える。多少、いやかなりの面倒事を言いつけられても俺はそれを飲むつもりだ。ただ、傭兵としての生活、そしてミミ達。この二つに関しては譲れない。一切譲らない。それだけはどうしても守らなければならないラインだ。

「わかりました。そのラインについても私はそれなりに理解しているつもりです」

俺の返事にセレナ大佐は微笑み、そう答えた。

帝都はもうすぐそこだ。

☆★☆

「んで、セレナ大佐は自分の船に帰ったと」

「エルマ達に挨拶もせずに帰るのを気にはしてたけど、時間がなかったようでな」

「まぁ、深酒し過ぎて医務室の世話になってたうちらが悪いわな」

「そうだね、お姉ちゃん」

セレナ大佐を見送り、ミミとクギと俺の三人で軽くトレーニングルームで身体を動かし、汗を流してから休憩スペースでまったりとしているとエルマとティーナ、ウィスカの三人が現れた。

「ま、ゲートウェイを抜けたらすぐ帝都だし、いつまでもこの船で遊んでいられないか。仕方ないわね」

そう言って少し残念そうな様子で俺の隣に腰掛けたエルマはツンと尖った笹穂のような耳が特徴的な美人さんである。一般的にエルフと呼ばれている種族なのだが、一般的というか俺が想像するようなエルフのイメージとは違ってフィジカルが非常に強い。俺よりも

傭兵のキャリアが長いベテランの傭兵で、俺だけでなくクルーの全員に頼られる我が傭兵団の姉御ポジションだ。
彼女は最近導入したアントリオンという中型戦闘艦のパイロットを務めており、戦闘では俺の背後を守りつつ、アントリオンに搭載されているグラヴィティ・ジャマーという特集装備を使って逃げようとする獲物の足止めを行う重要な役割を担っている。

「せやからあの酒は絶対アカンって言うたやん……」
「そういうお姉ちゃんも最後はノリノリになって飲んでたでしょ」

そう言い合いながら俺の目の前の床に座り、ナチュラルに俺の足に寄っかかったり抱きついたりしてくるのはドワーフのティーナとウィスカである。
二人とも子供にしか見えないような体格をしているが、立派に成人している大人の女性だ。彼女達は優秀なエンジニアで、俺の愛機であるクリシュナやこのブラックロータス、それにエルマのアントリオンのメンテナンスなどを担当している。それだけではなく宙賊から鹵獲した装備品や船のレストアなども担当しており、ミミとは違う意味でこの傭兵団の運営に欠かせない人材だ。
ちなみに、ステロタイプなドワーフらしく非常に酒が好きである。少女みたいな見た目でどでかいジョッキに入った強い酒をグビグビと飲み干す絵面はなかなかに危険な匂いを感じさせるが、完全に合法である。なんせ俺とほぼ同年齢なので。

「そいや兄さん、シロちゃんの目ぇ覚めたみたいやで」
「ショーコ先生とメイさんがメディカルベイで対応してましたよ」
「シロちゃんってお前ね……まぁ、わかった。ちょっと様子を見に行ってみるわ」

名無しちゃんとかよりは良いかもしれないイが、シロちゃんは安

直すぎるだろう。わかりやすくはあるが。とりあえず、メディカルベイに足を運んでみますかね。

#459　手の平超高速回転ドリルか？（前書き）

肩と首がつらたんですわ！（ ' ω ' ）

#459　手の平超高速回転ドリルか？

「ご主人様、おはようございます」
「ああ、ヒロくんか。おはよう。エルマくん達に聞いてきたのかな？」
「おはよう、二人とも。そんなところだ」

メディカルベイへと移動すると、メイドロイドのメイとショーコ先生に出迎えられた。
メイドロイドのメイはオリエンドインダストリーというメイドロイド専門企業で造られたカスタムメイドロイドだ。設計者は俺で、俺のメイドという存在に対するロマンがこれでもかと詰め込まれている。
具体的にはメイドロイドに搭載できる最上級の小型陽電子頭脳に始まり、特殊な合金製の金属骨格、最高品質の小型ジェネレーター、特殊金属繊維製の高出力人口筋肉、お掃除から船の管理、戦闘に教育まで詰め込める限り詰め込んだ技能プリセットなどなど、ぼくのかんがえたさいきょうのメイドさんという理想をそのままに体現している。
当然、顔の造形や体つき、性格なども俺の趣味全開で設計させてもらった。黒髪ロングでクラシカルなメイド服に身を包んだ眼鏡装備のクールだけど愛情深いメイドさん。うん、最高だな。

「何か？」
「いや、メイは今日も頼りになる究極で完璧のメイドだなと」
「お褒めに預かり光栄です」

そう言ってメイが恭しく頭を下げる。

「おや？　私には何か無いのかい？」
「ショーコ先生のおっぱいは今日も最高だな」
実際彼女の胸部装甲はミミにも匹敵する重装甲である。ミミよりも身長がずっと高いので、単純にプロポーションがとても良いとも言える。
「そういう褒め方はどうかと思うけど……まぁ良いけどさ」
俺の物言いを避難しながらもショーコ先生は機嫌良さげにニンマリとした笑みを浮かべる。
彼女は優秀な生物・遺伝子工学を専門とする学者であり、医師でもある。それに関連してナノマシン工学や材料工学にも明るく、ティーナやウィスカと技術談義に花を咲かせていることもあるほど多彩な才能と知識を持つ才人だ。
その才人という部分も、実は彼女がそうなるように造られたデザイナーズベビーであったからという理由があるらしいが、俺からしてみれば彼女はやはりなんかすごい知識と技術を持っている優秀なお医者さんである。生まれは少々特殊ななようだが、それを言ったら異世界から転がり込んできた俺のほうがよっぽど特殊な出自であるのだから、気にするようなことでもない。
「で、起きたって？」
「起きたというか、起こしただね。まだ免疫機能に問題があるから医療ポッドの外には出せないけど、自発呼吸とか代謝機能に関してはまぁなんとか目処がついたからさ。免疫機能の問題が片付いて、運動機能をある程度取り戻せたら外に出せるようになるかな」
「なるほど」

ひょいと医療ポッドの中身を覗いてみると、血のように真っ赤な瞳がぼうっと天井に向けられていた。時折瞬きをしているので起きているのだろうが、反応らしい反応は何もない。
彼女の名前はわからない。ベレベレム連邦の戦艦か何かに搭載されていた生体指揮ユニットとやらの中身が彼女だったのだ。彼女について俺達が把握できている情報は少ない。
人間としては驚異的なレベルの演算能力というか、電子戦能力を有しているというのが一つ、見た目は少女というかもはや幼女と言っても良いような外見だが、何らかの生体工学的処置によって身体の成長をとめられているだけで、実際の年齢はミミよりもずっと年上、もしかしたらセレナ大佐と同い年くらいではないかということがもう一つ。
そして、俺達が捕虜として回収するまで十数年、下手すると物心付いた時から生体ユニットのコアとして缶詰のような専用ユニットに詰め込まれていたのではないかということが最後の一つ。それ以外の情報は今のところ殆ど得られていない。彼女の脳内に埋め込まれているチップを経由してメイは何か情報を掴んでいるようだが、今のところ話してくれていない。メイが自分から話さないということは、今の時点で俺が知るべき情報ではないのだろうと思う。

「今日は服を着せたんだな」

今日の白い少女は簡素な手術着のようなものを着せられていた。医療ポッドの中に入れられたままの彼女にどうやって服を着せたのかはわからないが、何かしら方法があるのだろう。

「いつまでもヒロくんの目に彼女の裸体を晒してるわけにもいかないからね」
「別にこんな起伏も何もない身体を見てもなんとも思わんが……まぁ素っ裸よりは落ち着くな。目のやり場には困らない」

『起伏も何もない貧相な身体で悪かったな』

いきなり声が聞こえてきてびっくりした。どこからだ？　と辺りを見回すと医療ポッドの中の少女の瞳が僅かにこちらに向けられているような気がした。焦点は全然合ってないが、確かな意志を感じる。

声は恐らく彼女自身の声ではないだろう。どこかで聞いたことのあるような合成音声だ。

「今のはお前の言葉か？　話せるのか？」

『身体も動かないしほとんど目も見えないし、音も微かにしか聞こえない。だが医療ポッドに取り付けられたセンサーの情報は拾ってる』

そう言われてみると、医療ポッドに見覚えのないパーツがいくつかついているように思える。これのどれかが光学センサーだったり集音センサーだったりするのだろう。

「なるほど。無遠慮にお前の身体を見たり論評したりして悪かったな。今後は気をつける」

『別に気にしなくて良い。私の肉体なんてただの容れ物だ』

「なかなかキマった意見だなぁ……名前とか聞いても良いか？　俺はキャプテン・ヒロだ。こっちはメイドロイドのメイで、こっちはうちの船医を勤めてもらってるショーコ先生だ」

『ユニット１０４だ』

「それは名前じゃないと思うが……」

『私はそう呼ばれていたし、そう呼ばれたことしかない。人間としての名前なんて元から無いんだ』

スピーカーから憮然とした声が返ってくる。なるほど、徹底して

るなぁ。

「一応俺の立場とお前の状態を説明しようと思うが、聞くか？」

『そこのメイドロイドにある程度の情報は貰っているが、聞こう。状況を判断する上で複数の情報源があったほうが精度も上がるし、比較検討もできる。それに、お前はそのメイドロイドの主だそうだしな』

「オーケー。まず、国境沿いでの戦闘は覚えてるな？　戦闘終了後、俺が戦場を漂っているお前が入ったポッドを見つけて回収した。ちなみに、戦闘はグラッカン帝国の勝利に終わった。そして俺はグラッカン帝国に雇われていた傭兵で、今この船は帝都に向かってる。お前の立場は俺が拿捕した捕虜ってことになってて、お前は身体が弱いから、少なくとも動けるようになるまではうちのドクターがお前の身体を治療することになってる」

俺の説明を聞いたユニット１０４はほんの少しだか考えるような間を置き、発言した。

『状況は理解したが、私を治療しても無駄だと思うぞ。私の耐用年数は一年を切っている。治療したところで耐用年数は超えられないだろう。資源と時間の無駄だ』

「ベレベレム連邦の技術だとそうなのかもしれないけどね。私達の技術ならそこはクリアできるんだよ」

俺の代わりにショーコ先生が答えた。俺にウィンクをして見せてるってことは、ここは任せろってことか。

『だとしても費用対効果が見合わないだろう。確かに私は立場上ベレベレム連邦の軍事機密をいくつも記憶しているが、情報の鮮度は刻一刻と落ちる。私を治療する技術は恐らくグラッカン帝国の貴族

に使用される生体工学的身体強化技術なのだろうと思うが、あの技術は施術コストが高いという噂を聞いている。私のような使い捨ての指揮ユニットに使用するにはコストが高すぎる筈だ』
「それは強化の度合い次第さ。普通に生活できる程度の処置なら、目玉が飛び出るほどの高額ってわけでもないよ」
『なるほど。だがそれでも安くはない筈だ。グラッカン帝国がそのコストを許容するとも思えないが。一体何が目的だ？　誰がどのような意志をもって私を治療しようとしている？』

ユニット１０４の問いかけにショーコ先生は答えず、ただ俺に視線を向けた。メイも同様に俺に視線を向けている。

『キャプテン、君の意志なのか。何故だ？』
「別に深い理由なんて無い。見捨てたら寝覚めが悪いと思っただけだ」
『寝覚めが、悪い……？』

ユニット１０４が心底理解出来ないというような声を発した。機械音声の割には感情が乗ってるな。

「帝国航宙軍はお前を尋問するだろう。お前が抵抗せず、洗いざらい喋ればまぁ、処刑されるようなことにもならないだろうな。で、お前を捕虜として扱って、場合によってはベレベレム連邦の非人道的な行いの証人として利用したりしようとするかもしれない。でも、それもベレベレム連邦がしらを切れば然程のダメージにはならないだろうと帝国航宙軍の大佐は言っていた」

これはセレナ大佐から聞いた話だ。絶対にそうなるとは限らないが、高確率でそうなるだろうとセレナ大佐は寝物語にそう言っていた。

「そうするとお前は帝国臣民でも連邦国民でもない異邦人として放免されることになる。誰の助けもなく、帝都に放り出されるだろう。そうしたらお前は死ぬだろう。そこらの路地裏で寒さと飢えと苦しみに塗れながら、惨めに。そんなのは寝覚めが悪いじゃないか」
『そんな風に死ぬ人間など連邦にも、帝国にだって掃いて捨てるほどいる筈だろう。お前のその行動は偽善に他ならないのではないか？』

それはそうだな。そういう人間は多分掃いて捨てるほどいるし、俺自身コロニーに降り立ってそこらを歩けば路地裏で無気力に座り込んでる連中だの、物乞いだのって連中を見かける。その全てに手を差し伸べるほどの博愛精神は持ち合わせてはいない。いないがな。

「偽善で何か悪いことがあるか？　俺は俺の心の安寧のためにお前を助けようと思ってるだけだ。世のため人のためじゃない、他でもない俺だけのためにな。それを誰かに批判される筋合いはないね。お前に自身にもな」
『流石に私のことなのだから文句の一つくらい言う権利くらいはあると思うが……？』
「じゃあなんだ？　お前はベレベレム連邦に利用されるだけ利用されて、お前なんぞ知らんと放り出されて惨めに死ぬのが良いってのか？　よくもやってくれたなと一発かましてやろうとか思わんのか？」
『当然思っている。奴らのケツの穴に手を突っ込んで奥歯をガタガタ言わせてやりたいさ。だが、お前の庇護下に入ったところで何ができる？　お前が傭兵だというのは知っているが、だからといってベレベレム連邦相手に何ができるというんだ？』
「先の戦いでは俺が操艦するクリシュナだけで旗艦を含む戦艦級を四隻、巡洋艦級を七隻、駆逐艦を十二隻、その他コルベットや艦載

機も山程叩き落した。配下の船とこのブラックロータスでも戦果を上げているが」
『よし乗った。私は使えるやつだぞキャプテン。なんなら君の情婦になってもいい。貧相な身体だが、貧相な身体には貧相な身体なりの魅力があると思うぞキャプテン。これでも二十四歳だから合法だしな』
「手の平超高速回転ドリルか？　滅茶苦茶食いついてくるじゃん……まぁ、帝国の思惑も関わってくるところだから確約は出来ないけど、俺はお前を引き取るつもりだから。そのつもりでな」
『了解した。信じているぞ、キャプテン』

こうしてユニット１０４とのファーストコンタクトは終了した。下手すると帝国航宙軍よりも過激なベレベレム連邦絶対殺すウーマンが誕生しそうだが、今のところはグラッカン帝国で活動するつもりだから問題にはならないだろう。協力的なのも結構なことだしな。

＃４６０　もう滅茶苦茶だよ！（前書き）

考えるな、感じるんだ―（：３」∠）―

#460　もう滅茶苦茶だよ！

グラッカン帝国の首都星系、グラキウス。惑星一つをまるごと構造体で覆ったエキュメノポリスである帝都を中心として、複数のコロニーを擁するグラッカン帝国の文字通りの中心部にして心臓部である。

特にエキュメノポリスである帝都のセキュリティは厳重で、無許可での降下を試みるどころか、降下軌道に侵入する素振りを見せただけで駐屯している帝国航宙軍の近衛艦隊から容赦のない無警告砲撃が飛んでくるほどだ。それが帝国航宙軍所属の船であっても。

そういうわけなので、セキュリティをパスするためにはそれなりに面倒な手続きをする必要がある。まぁ、その辺は前回と同様セレナ大佐がやってくれるそうなので、俺達はこれまた前回と同じようにグラキウスセカンダスコロニーに滞在して降下申請が受理されるまで待つだけだ。

待つだけなのだが。

「どうも、ヒロ様。あなたのクリスティーナです」

「アイエェ……」

入港して一時間足らずでドス黒いオーラを身にまとったクリスがブラックロータスに押しかけてきた。助けて。

彼女の名はクリスティーナ・ダレインワルド。ダレインワルド伯爵家の跡継ぎで、今は伯爵家の跡を継ぐための修行としてコーマット星系の総督をしている……筈なのだが、どうしてか帝都グラキウスに足を運んでいたらしい。

過去に二度ほど彼女を助けたという経緯があり、彼女からは直球の好意を向けられている。

しかしまた暫く見ないうちに大人っぽくなったな……背はミミよりも高くなったんじゃないだろうか？　出会った頃はおかっぱに近かった艶のある美しい髪の毛も背中のあたりまで伸びているし、ぺったんこだった体型も女性らしく変化しつつあるようだ。
でも、とりあえず、その今からあなたを刺しますと言わんばかりに両手で構えている短剣をしまおう？　な？　ここは平和的に話し合おうじゃないか。

「ヒロ様を刺して私も後を追います」
「取り付く島もない！」
「なーんて……冗談です。冗談ですよ？　うふふ」

そう言ってクリスが笑いながら指先で短剣の先に触れると、短剣の刃がシャコーンと安っぽいバネの音を立てて柄の中に引っ込んでいった。どうやら手の込んだジョークグッズだったらしい。焦った。流石に肝が冷えた。

「でも、私のようないたいけな乙女の純情を弄ぶ悪い人は一回か二回くらい刺されても文句は言えないのではないでしょうか。ヒロ様はどう思います？」
「仰ることはごもっともだと思うが、止むに止まれぬ事情というものがな？」
「私も同じ薬を打ったら良いですか？」
「どこまで聞いてるんだ……？　やめようね？」

クリスなら本当にやりかねないので諌めておく。割と手段を選ばないというか、行動が火の玉ストレートな子だからな、この子。初めて保護した時も一人で俺の部屋に訪ねてきたりしたし。勿論「そういう」意味で。
助け舟を呼ぶべく休憩スペースでこちらの様子を窺っている連中

に視線を向けてみる。

「……ぴゅー、ひゅひゅー」

ミミは露骨に目を逸らして吹けてない口笛を吹いている。主犯と認定。

「いいわよー、やれやれー」

ポンコツ酒クズ宇宙エルフは俺とクリスのやりとりをつまみにして呑んでやがる。ゆるせねぇ。

「んまぁ、年貢の納め時っちゅうかなんちゅうかな」

「流石にまずいんじゃないかな……」

ティーナ、諦めるな。諦めたらそこで色々と終了なんだよ。あとウィスカはいつもこういう時に常識的な判断をしてくれるよな。愛してる。でも見てないで止めてくれないか？

「……」

どうしてクギさんはにこにこしながら静観してるんですか？　君の主の危機だよ？　どうして尻尾フリフリしてるの？

メイとショーコ先生はそもそもこの場にいない。ユニット１０４につきっきりのショーコ先生はともかく、メイが飛んでこないということはきっと然程危険はないのだろう。ないのか？　本当か？

「セレナ大佐の件については本当に止むに止まれぬ事情が……というか薬の件を知ってるってことはクリスも事情の大半を理解してるよな？」

「事情に理解を示すのと、私が事実に憤慨して抗議するのは別の問題だと思いませんか？　ヒロ様」
「はい、ごもっともです」

ぐうの音も出ない反論であった。

「ＯＫＯＫ、クリスの怒りはよくわかった。だが年齢の問題があるだろう？　流石に未成年には手を出せないからな。そもそも伯爵閣下が俺のような傭兵風情とクリスがそういう関係になるのをお許しにならないだろう」
「未成年であることとお祖父様のことが片付けば良いんですね？」
「……ちょっとタンマ。少し落ち着こうじゃないか」

猛烈に嫌な予感がした俺はクリスを止めることにした。俺が彼女の年齢とダレインワルド伯爵の話を出した瞬間、オニキスのように美しいクリスの瞳に勝利を確信した煌めきを感じたのだ。

「ヒロ様は私の正確な年齢をご存知ですか？　ご存知ではないですよね？」

クリスがそれはもう楽しそうにウキウキとした様子で俺に聞いてくる。ここで自信満々に十三歳か十四歳くらいだろ？　と言えれば良かったのだが、彼女の公式な年齢を調べた覚えはない。彼女の体格から出会った当初は十二歳か十三歳くらいだろうと思っていたのだが、思えば彼女に年齢を直接尋ねた覚えもない。

「実は私、ミミさんとは半年ほどしか歳が離れていないんです。私の言いたいこと、わかりますよね？」
「貴族パワーで誤魔化したりとかは……？」
「してませんし、できませんよ。貴族籍の情報なんてそんな簡単に

書き換えられるわけがないです」

そう言ってクリスは彼女の小型情報端末に表示されている彼女自身のＩＤを見せつけてきた。確かに成人済みである。なるほど。

「わかった。年齢の件をクリアしているのはよくわかったよ。その様子だと伯爵閣下の了解も取り付けているんだろ？　だとしてもだ。俺はそんな軽々に女性に手を出すような男じゃないから」

「ええと、今この船にはヒロ様以外に何人のクルーがいましたっけ？」

「七人かな」

「……全員とそういう関係ですよね？」

「……そうだね」

「もう一度先程の言葉を仰って頂けますか？」

「……」

さて、旗色が悪くなってきたな。よし、逃げるか。

俺は振り返り、逃げ出した。しかしその俺の腰に後ろから激突してくるものがあった。悪質なタックルである。俺は為す術もなく転倒した。ズベシャッ、と真正面から倒れることにはなったが、両腕を使ってなんとか受け身は取った。

「逃しませんよ」

「ク、クリス……随分素早くなったな？」

振り返った肩越しにクリスがにこりと笑みを浮かべる。

「跡取りになるためにしっかりと強化手術を受けましたから」

「ＯＫわかった、降参する。降参するから話し合おう」

そう言って俺は床に突っ伏した。クリスに連絡が行ってるって時点でこうなる気はしていたんだ。腹を括ろう。

☆★☆

「セレナ大佐もそうなんだが、そうまでして俺に拘るのは……いや、嬉しい。嬉しいよ？　そうまでして求めてくれるのは男冥利に尽きるよ？　だけどこう、障害が色々と多いだろう？　身分差とか、世間体とか、貴族としての責務とか、実家の意向とかさ。更に言えば俺がひとところに縛られるのが嫌いで、自由な傭兵生活を好んでいるというのも周知の事実じゃないか。相手としてはかなり無理目だと思うんだけど……いや嬉しい、嬉しいから。クリスの好意はとても嬉しいから。本当に」

休憩スペースにて対面で話し合いをしているのだが、俺が座っているソファが一人がけで、他の面々が複数人がけのソファで尚且つ俺を半包囲するような状態になっているのは何事なのだろうか？　なんだか裁判中の被告人か何かみたいな気分なんだが。

「ヒロ様の懸念はよくわかりました。ですがご安心ください。ヒロ様の懸念は全て解決済みと言っても過言ではありません」

「その心は？」

「まず、身分差や世間体に関してですが、ヒロ様が一等星芒十字勲章を受勲して名誉子爵となった時点で問題ありません。それに、伝え聞いた話では今回のイクサーマル家の造反とベレベレム連邦の侵攻においても帝国航宙軍と共に殊勲を挙げられたとか。一層のこと問題ありませんね」

「な、なるほど。でも俺に貴族の責務を果たせと言われても無理だぞ？」

「その点はご心配なく。貴族としての責務は私が果たします。その

ためにお祖父様も私を鍛えてくださっているのです。つまり、お祖父様は他所から婿を取って伯爵家の運営を任せるのではなく、私自身に伯爵位を継がせ、伯爵領を切り盛りさせると決めた時点で、既に私の伴侶としてヒロ様を婿に取る心づもりでいたのです」

「な、なん……ま、マジで？」

俺の言葉にクリスが自信満々で頷く。流石にこれはたまげた。いや、まぁ、確かによく考えれば年端もいかない、とはいえ貴族家の当主としての教育を始めるには少し時期を逸しているであろうクリスに星系の総督を任せ、領地運営について現場で学ばせるというのは若干不自然だったかもしれない。

それならばしっかりと領地運営を学んだ貴族の子弟を婿として迎え、クリスにその補佐をさせたほうが確実だし、苦労も少なかったことだろう。

しかし、あの謹厳なダレインワルド伯爵が殆ど最初から俺をクリスの婿にするために動いていたというのか……？　信じがたい話だが、辻褄が合っていないというわけでもない。

「それに私はヒロ様を縛り付けたりはしません。私のところにちゃんと帰ってきてくれるなら、それで良いんです。ヒロ様の夢は安全な惑星上居住地に家を建ててのんびりすることですよね？　それならダレインワルド伯爵領のどこにでも土地を提供できますし、ダレインワルド伯爵領の防備はほぼ完璧と自負しています。帝都に住むということであれば一等市民権などが無ければ惑星上居住地に住むことは難しいですが、ダレインワルド伯爵家の領地内ならいくらでも融通が利きます」

「た、確かにクリスなら俺の望むことは全てわかってるよな……それなら――」

「ちょっと待ったぁーーーーーッ！　抜け駆けは許しませんよ！」

「ちっ」

いくつかの事が同時に起こった。
まず、大声とともにセレナ大佐が休憩スペースに駆け込んできた。そして駆け込んできたセレナ大佐の空中タックルを横合いから受けて諸共に俺とセレナ大佐がソファの上から吹っ飛んだ。そして誰かの舌打ちが聞こえた。もしやクリスだろうか？
更に、休憩スペースにぞろぞろと人がなだれこんできた。腰に剣を佩いた女性近衛騎士を引き連れた少女の顔はとても見覚えのあるものであった。具体的に言うと、ミミと瓜二つだ。

「そこまでです！　この争いは皇帝陛下の孫、このルシアーダが預かります！」

もう滅茶苦茶だよ！　誰か助けてくれ！

#461　なに、いざとなったら元凶に大鉈を振るってもらうさ。（前書き）

天気が悪くて起きた瞬間から頭痛がペインだった（ ，ω， ）

#461　なに、いざとなったら元凶に大鉈を振るってもらうさ。

「とりあえず最初に聞きたいんですがね。どうして皇女殿下がうちの船に突撃してきてるんですか」

「話せば長くなるのでごく簡潔に言うと、ホールズ侯爵令嬢との面談中に彼女の部下から連絡が来て、事情を聞いてみるととても面白そ――仲裁が必要な案件だと思ったので、駆けつけました」

「今面白そうって言いかけたよな？」

俺がジト目を向けると、ルシアーダ皇女殿下はにっこりとロイヤルなスマイルをお浮かべになられた。こいつ……やはりあのファッキンエンペラーの孫だな！

「ヒロ殿、皇女殿下にその言葉遣いは不敬ではありませんか？」

前に訓練でボコボコにしたことのあるくっころ近衛騎士のイゾルデが一歩前に出て抗議してきたが、俺はその抗議を一蹴した。

「ここは俺の船だ。皇女殿下だろうが皇帝陛下だろうが誰であろうが、嫌なら出ていってもらって結構。で、気になるワードがあったんだが……セレナ、まさか俺の船を部下に監視させていたのか？」

「そ、それは……そこの黒い泥棒猫に連絡が行っているということは聞いていたので、念のためにですね？」

「一度関係を持っただけで随分な束縛のしようですね？　しかも部下に監視までさせて。それは職権濫用というものでは？」

しどろもどろに弁明をするセレナにクリスが仕掛ける。やだ、こわい。

「非番の部下にごく個人的に頼み込んだものですから、職権濫用にはあたりません。ヒロを何の関係もない赤の他人の悪辣貴族から守るための緊急措置です」

セレナもクリスの仕掛けに応じ、互いの視線が火花を散らす。サイオニック的な力は何も働いていないはずなのだが、得も言われぬ緊迫感というか圧迫感が押し寄せてくる。とてもこわい。

そしてルシアーダ皇女殿下はその様子を楽しそうに眺めている。もう目がキラッキラしてる。おい、あんた仲裁しに来たんじゃねぇのかよ。何もしないなら帰ってくんねぇかな？

そんな俺の感情が目から伝わったのか、ルシアーダ皇女殿下は一瞬だけ「あっ」みたいな顔をした後にゴホンと咳払いをした。取り繕っても駄目だからね？　俺、全部見てたからね？

「はい、二人ともそこまでです。二人とも同じ相手を想っているのですから、喧嘩などしてはいけませんよ」

今まで目をキラキラさせてその様子を見ていたのにどの口が言うのか？　と思ったのは俺だけではあるまい。誰も何も言わないけど。

「そもそも、二人が争うのは不毛だと私は思います。別に二人ともキャプテン・ヒロを独占しようと考えているわけではないのでしょう？」

「それは、まぁ……」

「そうですね……」

セレナとクリスが渋々といった様子でルシアーダ皇女殿下の発言を認める。俺を独占するということは、俺とミミ達との関係も認めないということになる。それは流石に俺としても看過できない。ど

うしてもというなら付き合いを考えさせて貰う必要がある。

「それなら、争うまでもなく序列は決まっているでしょう？　争ってもキャプテン・ヒロを困らせて、彼の心が離れていくだけですよ」

ニッコリと後光でも差してきそうなロイヤルスマイルだが、残念ながらルシアーダ王女殿下のご尊顔はミミで見慣れているからな。俺にはそこまで効果がない。それよりもルシアーダ皇女殿下のロイヤルスマイルを目の当たりにして自分のほっぺをむにむにしているミミの方が気になる。無理に真似しなくて良いからね？

「あー、まぁ多少じゃれ合う程度でそんな心が離れるなんてことはないけれども。争うまでもなく序列が決まってるってのは？　というか序列って何の序列だ？」

「それは勿論キャプテン・ヒロ。あなたの妻としての序列です。あなたが娶った妻の中で、誰が正室で誰が側室なのか、ということですね。ちなみに貴族や皇族の常識で考えるのであれば、正室の座に相応しいのが次期ダレインワルド女伯爵のクリスティーナ・ダレインワルド、側室の筆頭がセレナ・ホールズ侯爵令嬢、次席がエルマ・ウィルローズ子爵令嬢ということになるでしょう。侯爵と伯爵では基本的には侯爵の方が地位は上です。これは子女にもそのまま適用されます。しかし、軍人としてはともかく貴族としては無位無冠のセレナに対し、クリスティーナは正式に貴族位と領地を持つ貴族となるわけですから。その時点で妻としての序列はもう決まっているということですね」

ルシアーダ皇女殿下の長広舌を大人しく聞きながら、その内容を頭の中で咀嚼する。

難しい話ではない。将来的に女伯爵になるクリスが地位としては筆頭になる。他は親の爵位に従って順位が決まる。ミミやティーナ、

ウィスカなど貴族の世界とは無縁の子達はその下というわけか。
「ルシアーダ皇女殿下がはっきりと裁定して諍いを事前に収めてくれるのはありがたいんだが、俺としてはそういう順位をつけるみたいなのはちょっとね……？」
「流石、次期女伯爵と侯爵令嬢まで入れて八人――いえ九人も女性を囲う人の言うことは一味違いますね」
　ルシアーダ皇女殿下がそう言って満面の笑みを浮かべて見せる。ちなみに彼女の両脇と背後を固めている女性近衛騎士の皆さんからはゴミとか不快害虫でも見るような視線を向けられている。とてもつらい。
　しかし八人と言いかけてチラッとメイに視線を向けたのはそういうことなんだろうな。グラッカン帝国において機械知性は一応人権を認められている筈なんだが、そう簡単な話でもないらしい。
「ご家庭内での話はお好きにしてくださって結構ですよ。あくまでもこれは帝国貴族としての形式上の話ですから。ところで流石の貴方もそろそろ年貢の納め時のようですね」
「年貢の納め時……？」
「それはそうでしょう。自分で家を飛び出して身分を隠して傭兵として活動していたウィルローズ子爵令嬢に関してはともかくとしても、ホールズ侯爵令嬢と関係を持った件に関しては言い逃れはできないでしょうし」
「ああ、そういう。別に逃げはしないよ。そういう約束だし。とはいえ、クリスもとなるとその調整に関して俺が手綱を握るのは不可能ではあるな……」
　逃げはしないという俺の言葉を聞いてセレナが、そしてクリスもという俺の言葉を聞いてクリスがそれぞれ顔を輝かせる。二人とも

ちょっと不安そうな顔をしていたものな。

「ただ、俺にも譲れないラインはある。まず、今の俺達の関係を崩すような話は受け入れられない。この傭兵団は……自分で言うのも烏滸がましいが、俺という男を中心に才能ある女性達が集まってできた一つの家族、あるいは氏族（クラン）だ。当然、中心にいる俺を取り上げて貴族家に組み込めば、この氏族は崩壊する。それは受け入れられない」

俺はセレナとクリスに言い聞かせるようにそれぞれの顔を見ながらそう言った。

「つまり、俺は傭兵としての活動をやめるつもりもないってことだ。この二点が受け入れられないというなら、残念だが俺のことは諦めてほしい。もしこの二点について何が何でも受け入れられない、どうあっても取り上げるというなら俺は何がどうなろうと全力で抗うし、何ならどこまででも逃げる。無論、そんな物騒なことにならないように譲歩できるところは全て譲歩するし、俺も最大限の努力をするけどな」

「ありがとうございます。お祖父様はヒロ様のことをよくわかっておいでですから、その辺りはご心配なさらずとも大丈夫です」

そう言ってクリスは微笑んだが、それとは対象的にセレナは苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

「そのようなことにならないように最大限の努力はします」

「なに、いざとなったら元凶に大鉈を振るってもらうさ。なぁ、ルシアーダ皇女殿下？」

俺に水を向けられたルシアーダ皇女殿下が恍けるかのように首を

傾げる。

「私ですか？」

「今回、あんな胡散臭い場所に俺とセレナを放り込んだ御方がいるだろう？　いざとなればその御方に骨を折ってもらうぞって言ってるんだよ。本当に最後の最後、にっちもさっちも行かなくなった時の最終手段としてだけどな。どうせ全部把握してるんだろ？　というか、そもそもルシアーダ皇女殿下がこのタイミングでグラキウスセカンダスコロニーにいるのもあの御方の差し金だろ」

「まさか、偶然ですよ。地方への視察を終えて帝都に帰ってきたところだったんです」

「左様ですか」

絶対に嘘だ。いや、地方への視察はあったのだろうが、本来帝都の帝城にいるのが自然なはずのルシアーダ皇女殿下がこのタイミングで介入してくるのは絶対に偶然じゃない。これもあのファッキンエンペラーの指した一手だと見るのが妥当だ。俺とあの野郎とでは見えている視点そのものが違い過ぎるから、どんな意味のものなのかはまったくわからんがな。

「何にせよ帝都に降りてからの話でしょう。ああ、伯爵はこのコロニーに滞在してるのか？　なら挨拶には行くべきだろうが」

「いえ、お祖父様は領地にいます。こちらには私と供の者が数名です」

「そうか。少しはゆっくりできるのか？」

「はい、お祖父様に少しだけ我儘を言ってお休みを貰ってきたんですよ」

クリスがそう言いながら嬉しそうに擦り寄ってくる。うん、可愛いんだがなまじっかこう、身体が成長しているからな。少しこう、

扱いに困るな。出会った頃なら頭の一つも撫でていたのかもしれないが、もう立派な淑女だし。

「そいつは重畳。セレナは……こんなところで遊んでいる暇は本当は無いんだろうな」

「まぁ、その……一応ルシアーダ皇女殿下の接待を務めさせていただいている状態ですね」

「それでその接待相手を引き連れてブラックロータスに突撃してきたのかよ。何してんの……？」

「そこは私も楽し――納得していることですから」

「もう無理に隠そうとしなくていいよ……でももう話し合いも終わったし、帰ってね」

そう言ってジト目を向けると、ルシアーダ皇女は両手を合わせ、左頬に添えてにっこりと笑った。これ以上無いほどのぶりっ子おねだりポーズである。あざといにも程がある。

「風の噂で聞いたのですが。なんだか面白い子がこの船に乗っていると。是非会ってみたいです」

「……オイ」

俺はセレナを、いやセレナ大佐を睨みつけた。

「流石に帝室特権を振りかざされるとですね……？」

「……はぁ。メイ、安全は確保できるか？」

「はい、ご主人様。彼女はネットワークから完全に遮断されているので問題ありません」

「だそうで。自己責任ってことで良ければご紹介致しますよ、皇女殿下」

「それは僥倖ですね。ではエスコートをお願いします」

とても楽しそうな笑みを浮かべて皇女様はそう言った。もう好きにしてくれ。

#462　『ははは。楽しいね、キャプテン』（前書き）

Ｓｋｙｒｉｍのアニバーサリーエディションをプレイ中。
ＣＯＤ：ＭＷ３のゾンビモードも面白そうなんだけど、ボッチで遊べるのかな（ ˇ ω ˇ ）

#462　『ははは。楽しいね、キャプテン』

『絵に描いたようなお姫様に、沢山のこれまた絵に描いたような女騎士……キャプテン、私というものがありながらダイナミック過ぎないか？』

俺とルシアーダ皇女殿下御一行を医療ポッドに取り付けられたセンサーでキャッチしたユニット１０４が平坦な機械音声でいきなりぶっこんでくる。私というものがありながらってなんだよ。確かに引き取るつもりだとは言ったけどさぁ。

「もうどこから突っ込んだら良いかわかんねぇよ……」

『どこに突っ込んでくれても良いんだよ？』

「お前さんの語彙が若干お下品なのはアレか？　ベレベレム連邦軍の兵士どもから学習したせいか……？　とりあえず、こちらはグラッカン帝国の皇帝陛下のお孫さん、皇太子殿下の娘さん、つまり皇女殿下であらせられるルシアーダ様だから、あまり無礼を晒すとポーンだぞ。後ろの近衛騎士のお姉様がたにポーンされるぞ」

そう言いながら俺は人差し指の先で自分の首元を撫でる。

『キャプテン、それはその……本当に？』

「どれについて本当に？　と言っているのかわからんが、ルシアーダ皇女殿下に関しては大マジだぞ。近衛騎士のお姉様がたがポーンするかどうかは知らんが、貴族の剣なら医療ポッドごとお前さんをスッパリ斬るのは難しくないだろうな。そんなことしたら流石に俺も黙っていないが」

そう言いつつ「そんな事するわけないだろう」とでも言いたげに憮然とした表情を俺に向けるイゾルデに視線を送る。まぁ、イゾルデを含めて五人の腕利き剣士を俺一人で制圧するのは多分無理だけどな。今は武器を持ってないし。

いや、サイオニックパワー……というか念動力を駆使して剣を奪えればいけるかもしれんが。

『ミミのコスプレじゃ……ないみたいだな。えぇ……？　キャプテン、それが本当だとすると、一体あんたはどういうコネクションを持っているんだ？　それに見覚えのないご令嬢もいるし』

キュイン、と駆動音を立ててセンサーが動き、クリスとセレナを捉える。

「こちらは次期ダレインワルド女伯爵のクリスティーナ・ダレインワルド、そしてこっちがお前さんを撃破した戦闘で指揮を取っていた帝国航宙軍大佐のセレナ・ホールズ侯爵令嬢だ」

『それはそれは……まさかとは思うけど、全員キャプテンのコレなのかい？』

「コレっていうのがドレなのかわからんな。ただ、俺は皇女殿下に手を出すような身の程知らずではないとだけ言っておく」

皇女殿下、どうしてそんな「えー？」みたいな顔してるんですか。頬を膨らませても駄目です。可愛いけど流石に皇女殿下は無理でしょう。常識的に考えて。あと近衛騎士の皆様、品定めするような目を向けるのはやめてください。こんな船を買えるような経済力があるのは……ふむ。じゃないんですよ。クリスが暗黒オーラを放ち始めているのでやめてください。あとセレナもなんかガルルしてるんで。

「それで皇女殿下、もうひと目見て満足されましたかね？　聞いての通りあまりお上品なことが言えない奴なんで、失礼をする前に」
「面白い娘ですね。名前はなんと言うのですか？」
「……ユニット１０４だそうです。それ以外には『缶詰』や『ポンコツ』と呼ばれていたそうで」
「まぁ、隣国の方々はネーミングセンスというものが無いのでしょうか？　私ならシロちゃんと呼びますけど」
「アッハイ」
『やはり中身はミミなんじゃないか？　キャプテン』

シロちゃんという愛称はミミがつけたもので、それが艦内のクルー達の間に浸透している。俺とメイ以外にだが。ちなみにユニット１０４には不評である。

「冗談ですよ。あまりに安直過ぎますからね。そうですね……貴方は雪のように真っ白ですし、ネーヴェというのはどうでしょう？」
「ネーヴェ、ほう……語感も悪くないな。俺は良いんじゃないかと思うが」
『ネーヴェか。うん、悪くない。シロちゃんよりはずっと良いね。皇女殿下に名前を頂けるなんて光栄だ。無事キャプテンのクルーになれた暁には、グラッカン帝国と皇女殿下のために喜んでベレベレム連邦のクソ野郎どもと宙賊のゴミカスどもを宇宙の藻屑にさせて頂くよ』
「それは頼もしいことですね。そうなってくれるように心からお祈りしておきます。それにしても、ネーヴェは可愛らしいですね。お人形さんみたいです」
『そうなのだろうか？　私は私の外見を知らないんだ。センサーも内側にはついていないし、私はまだうまくものを見ることが出来ないし、身体を動かすこともできない』

機械音声でそう言うユニット１０４――いや、ネーヴェの身体は焦点の合っていない瞳で虚空を眺め続けている。瞬きはしているが、彼女の言葉通りその瞳には何も映していないようだ。
ポッドから出た直後のネーヴェは髪はボサボサ、手足の末端はぼろぼろ、お肌も水分はともかく質が劣悪と実はあまり見られた状態ではなかったりしたのだが、ショーコ先生とメイによるケアによってそれらは改善し、整えられ、最近はポッドから出た当初に比べればまぁまぁ健康的なお姿に変わっていた。ルシアーダ皇女殿下の仰る通り、お人形さんのように可愛らしい姿になっているのはそのその通りである。
もっとも、口を開けば――実際には開いていないが――語彙が若干お下品というか若干言葉が汚いので、その姿とはかけ離れた印象を与えてくるのだが。

「ええ、可愛らしいですよ。ねぇ？　キャプテン・ヒロ」
「そこで何故俺に同意を求めるのかわかりませんが、まぁ見てくれだけは美少女ですね。見てくれだけは。中身と実態は美少女とはかけ離れてますが」
『そこは素直に褒めても良いんだぞ、キャプテン。なんなら私の身体を自由にモノのように激しく使い捨ててても良いんだぞキャプテン』
「断る。お前、そういう発言は時を場所を考えろ。これ以上皇女殿下の前で下品なことを口走るならセンサーとスピーカーを切断するぞ」

流石に視線が痛い。皇女殿下から向けられているのは好奇の視線だが、その他――彼女の近衛騎士達やクリス、セレナから向けられる視線が痛い。あまりに痛い。
『おおっと、それは後生というものだキャプテン。わかったよ、お行儀よくするよ。申し訳ありません、皇女殿下。名前を頂いたとい

う感激で舞い上がってしまいました。お許しください』
「ふふ、許します。それにしても、随分とキャプテン・ヒロに心を開いているんですね？」
『皇女殿下、キャプテンは私をベレベレム連邦のクソ野郎どもから解放してくれたし、ポッドからも出してくれた。耐用年数間近の私にこうして治療を施してくれているし、何があっても最終的には私を拾ってクルーとして迎え入れると約束もしてくれた。あのクソ野郎どもに使い潰される部品ではなく、人としての運命を与えてくれるっていうんだよ。だから、私はキャプテンに残っている全てを捧げるんだ』
「そうですか……キャプテン・ヒロ。ネーヴェのことを頼みますよ？」
「仰せのままに。ちゃんと責任を持って面倒を見ますとも」
ルシアーダ皇女殿下に言われるまでもなくそうするがな。拾った以上はちゃんと最後まで面倒を見るさ。他に面倒を見る奴がいないならな。

「……」

クリスがなんとも言えない複雑な表情をネーヴェに向けている。立場と状況が違うが、もしクリスが貴族の娘ではなく、亡くなった両親以外に親族が居なかったならクリスも同じように俺の船のクルーになっていたかもしれないものな。そして、それはクリスが心の底から欲して、諦めた立場でもある。そう考えるとクリスがネーヴェに複雑な気持ちを抱くのも仕方がないのかもしれない。
うん？　なんか医療ポッドのセンサーが俺とクリスの間を行ったり来たりしてるな。
『……なるほど。私はこれでも立派な大人だからね。肉体の方はこ

んななりだけど、少なくとも二十四年は生きている。肉体の治療が無事に終わって、生殖能力も正常に働くようになったら子供の一人くらいは欲しいな。生きた証というものを遺したいんだ。だから、その時はお願いするよ、キャプテン。ちゃんと責任を持って面倒を見てくれるなら安心だね』

「「「……！」」」

突如放り込まれた爆弾は激烈な効果を発揮した。

まず、クリスの顔がぐりん、とこちらを向いた。クリス、怖いよ。その動きと目は怖い。

そしてミミを始めとして女性陣がそわそわしたり、チラチラと視線を送ってきたり、じっとりとした湿度の高い視線を向けてきたりしている。落ち着いてくれ、皆。今はまだその時期ではないと思うんだ。そういうのはせめて拠点を構えてからにした方が良いと思う。ショーコ先生は優秀だし、メイも子供の世話は完璧にこなしてくれるだろうが、それでも航宙艦の中というのは育児に適した環境とは言えないと思うんだ。

そして近衛騎士の皆様。これ見よがしに剣の柄の具合を確かめたりするのはやめませんか？　俺は何も悪くないよね？

「そういう冗談……いや冗談じゃないんだろうが、軽口は身体をしっかり治してから言え。あと、まだ帝国側の対応がはっきりとはわからないから、今後に関してはなんとも言えん。帝国で引き取るって話になるかもしれないしな。あと、お前わざと引っ掻き回してるだろう？」

『ははは。楽しいね、キャプテン』

「俺は楽しくない……クリス、落ち着こう。な？」

「はい、ヒロ様。私、沢山産みますね？」

「早い。その発言は色々な意味で早すぎる。あと手を離そう、な？」

謎の滑るような歩法で俺に近づいてきたクリスが俺の服の裾を掴んで離してくれない。だれかたすけて。

#463　「そういうのはほら、時期とか色々あるじゃん」（前書き）

The Last Faithで遊び始めました。
たのしいよ（ ˘ ω˘ ）

#463　「そういうのはほら、時期とか色々あるじゃん」

コックピットなどの最重要機密エリア以外を除き、概ね船全体を見て回って満足したルシアーダ皇女殿下は近衛騎士のお姉様達とセレナを引き連れて去っていった。結局、セレナとクリスの仲裁をしに来たというか、トラブルになる前に火消しをしていった、ということになるのだろうか？　あと、ネーヴェの様子を見に来たのかもしれない。

「で、えーと……クリスは……」

タラップでルシアーダ皇女殿下達を一緒に見送り終え、俺の隣に立ったままのクリスに視線を向ける。

ルシアーダ皇女殿下と一緒に帰るでもなく、船に残ったクリスに視線を向ける。考えてみれば彼女は最初から一人でこのブラックロータスに乗り込んできたんだったな。そりゃルシアーダ皇女殿下と一緒に帰る理由もないわ。

「お邪魔ですか……？」

「いや、邪魔なんてことはないけど。一人で来たのか？　お供の人がいるって言ってたよな？」

「この船には一人で来ましたよ。供の者達には明日まで休暇を与えていますから」

「どこかに宿を取ってるのか？　というか宿から一人で？」

「ヒロ様、私ももう成人した立派な貴族です。自分の身くらい自分で守れますよ」

そう言ってクリスは腰元に差した細身の剣の柄に手を置き、胸を

張る。クリスの剣は細身の小剣だな。ダガーと言うには長い。スモールソードと言うには短い。刀で言えば小太刀くらいの長さの剣だ。

「ヒロ様、その目は『その剣、使えるのか？』とでも言いたそうな目ですね」

「すまん。クリスも暫く見ないうちに身体強化をしたり訓練をしたりしたんだろうが、どうしても戦えるってイメージが無くてな」

クリスが大きく成長しているのは俺も認めるところではあるのだが、どうしても俺の中ではシエラ星系で共に過ごしていた頃のクリスのイメージが強いのだ。

「当然ヒロ様や軍人のセレナさんには勝てないでしょうけど、これでもお祖父様からは筋は良いと言われているんですよ」

「なるほど。まぁ、剣を持って歩いていれば絡んでくるようなやつはそうそう居ないか」

もし居たとしたらグラッカン帝国の外から来た人か、命が惜しくないホームラン級の馬鹿くらいである。基本、この国の貴族というのはあまり貴族としての特権を振りかざしたりしないようなのだが、一般人の方から悪意を持って絡んでいけば普通に斬られるらしいし。

「ところでヒロ様」

「なんだ？」

「クギさんとショーコさんを紹介して頂けませんか？」

「ふむ……まぁ、実際に顔を合わせるのは初めてだもんな」

メッセージで情報はやり取りしていそうなのだが、きっと何か意味のあることなのだろう。

クギに視線を向けると、俺とクリスの方に視線を向けてゆっくり

と尻尾をふりふりしている。頭の上の狐耳もピンと立っているので、クリスのことを怖がっているだとかそういうことは無さそうだ。
　ちなみに、ショーコ先生はメディカルベイに残っている。ユニット１０４改めネーヴェの様子を見ておくためだ。もういきなり容態が急変してぽっくり、なんてことはないそうだが、それでもいまはまだ現在進行系でネーヴェの身体を正常な状態に治している最中なので、できるだけ側を離れたくないらしい。

「こんなところで立ち話もなんだし、休憩スペースで腰を落ち着けて話そうか。今回はホテルに部屋を取るつもりもないし」
「何から何まで少し高いですからね。このコロニーは」

　休憩スペースに向かいながらクリスが困ったように微笑む。
　グラキウスセカンダスコロニーは帝都の城門のような役割をしているコロニーだ。帝都への降下申請を行うには基本的にこのコロニーに来る必要があるし、審査の際には徹底的に素性などを洗われる。
　というわけで、必然的にグラキウスセカンダスコロニーにはヒトもモノも集まる。当然、滞在者向けの宿や食事処なども多く用意されているのだが、それがまたクリスの言うようにそこそこにお高い。具体的には二割から三割くらい。あまり高くなりすぎないように規制はされているらしいが。
　なので、俺達のように居住性の高い船を持っている連中は基本的にグラキウスセカンダスコロニーでは宿は取らない。本物の貴族だとこういった機会にカネを落としてくのも貴族の嗜みということでそうもいかないようだが。俺は天下御免の『名誉』貴族様だからな。わざわざそんなことをする必要はないってわけだ。

「それでええと、紹介ね。それじゃあ改めて。クリス、彼女はクギ。ヴェルザルス神聖帝国の巫女さんで、俺のお世話をするために遥々俺の元へと旅をしてきた凄い子だ。俺のサイオニックパワー関連の

師匠でもある。今はエルマに代わってクリシュナのサブパイロットとしての修練を積んでいるところだな」

休憩スペースに腰を落ち着けたところで俺に紹介されたクギがペコリとクリスに頭を下げる。

「そしてクギ、彼女はクリス。フルネームはクリスティーナ・ダレインワルド。ダレインワルド伯爵家の次期当主で、今はコーマット星系の総督を務めている。腰の剣を見れば分かる通り、貴族だ。前に話したと思うが、帝国のリゾート星系であるシエラ星系で俺が偶然宙賊から救出したことで縁ができてな。詳しくは話せないが、一緒に死線を潜った仲だし、えー……まぁ、親しい間柄でもある。互いに仲良くしてくれ」

「よろしくお願いしますね、クギさん」

「はい、クリスティーナ様。宜しくお願い致します」

クリスとクギが互いに微笑みを交わし合う。まぁ一種の儀式のようなものなのだろうな、これは。

「ここにはいないが、ショーコ先生のことも紹介しておく。彼女は元イナガワテクノロジーの研究員兼医者で、クリスと出会う前にアレイン星系でお世話になった人だ。その時はその時で宙賊に襲われていたところを偶然助けたり、謎の生物兵器によってアレインテルティウスコロニーが大変なことになった時に助けたりと色々あったんだが……訳あって最辺境領域に行った時に再会してな。その後もまぁ、色々あってうちの船医として船に乗ってもらったんだ」

「色々ですか……クギさんとも色々あったんですね？」

そう言ってクリスがじっとりとした視線を俺に向けてくる。それはうん、そうだね。イロイロありましたね。ええ。

「私にも色々してほしいですね」
「そういうのはほら、時期とか色々あるじゃん」
俺の中でクリスはまだ保護対象カテゴリかつ手を出してはいけない娘カテゴリなので、そんなことを言われても困る。
「こうして見ると、割と躊躇なく手を出された私って実はレアケースだったのね」
「エルマさんとショーコ先生には躊躇しなかったみたいですね。あとメイさんも」
「自立した大人のオンナってのがポイントなんやない？」
「私達はお兄さん基準で大人っぽくなかったから時間がかかったってことだね。でも、ミミちゃんはすぐだったんだよね？」
「私はその、例の慣習もありましたし……それに、あの時はヒロ様に捨てられまいと必死だったので」
「此の身は結構時間がかかりましたが……」
「立場を笠に着て迫るみたいで嫌だったんじゃないかしら？」
君達、コソコソ話す風に装いながら全く隠す気のない声量でそういうことを話すのはやめないか？　いたたまれなくなるから。そしてクリスがグイグイ来るから。俺の臍の下あたりをすりすりと撫でても何も無いからやめようね。微妙にスキンシップとして際どいから。

☆★☆

その後、クリスの際どいスキンシップをいなしながらコーマット星系での仕事の後にあったことを話せる範囲で色々と話したり、トレーニングルームでクリスと模擬剣を使って軽く訓練したりして時

間を過ごし、クリスは別れを惜しみながらも滞在先のホテルへと帰っていった。
一応護衛としてメイを同行させたのだが、模擬戦をしてみた感じだと必要なかっただろうなと思う。少なくとも、そこらのチンピラでは相手にならない。レーザーガンを使わない無手だと、エルマでも多分苦戦する。下手すると斬られるな。

「クリスちゃん、少し見ないうちに大人になってましたね」

ミミと一緒にお風呂に入り、ほっこりとした状態で並んでベッドの上でだらだらとしていると、ミミがぽつりと呟いた。

「確かに。女の子の成長ってのは早いな」

出会ったばかりの頃のクリスと今日顔を合わせたクリスを頭の中で思い浮かべながらしみじみとしてしまう。出会ったばかりの頃はミミよりも背が低く、小柄で細かったクリスも今ではミミよりも背が高くなり、おかっぱのようだった髪の毛もセミロングと言えるくらいには長くなっていた。

「私は全然成長していないような……むむむ」

そう言ってミミはベッドの上に座ったまま背筋を伸ばし、バンザイでもするように両腕を上に挙げる。背を伸ばす運動か何かなのだろうか？　それよりもパジャマの胸元が凄いことになってるな。はちきれそう。素晴らしい。

「筋肉はちゃんとついてると思うぞ」
「でも全然痩せないんですよ。むしろ体重が……！」
「筋肉のほうが重いからなぁ。体型を維持したまま筋肉の比率が上

がれば重くなるのは必定……でも俺は今の感じがベストだと思う。強くそう思う」
「そうですか？　私はもう少しスラッと……こう、エルマさんみたく」
「エルマがそれを聞いたらキレるんじゃねぇかな」

持つ者には持たざる者の気持ちが分からぬ。というようなことをエルマが言いながら笑顔で青筋を浮かべている姿が容易に想像できる。あとその左右にティーナとウィスカもいる気がする。
まぁエルマもエルマで酒をかっくらいながらちょくちょくなんか摘んでいるのに太る気配が全く無いので、ミミからは同じように思われているのかもしれんが。

「ヒロ様。クリスちゃんと結婚するんですか？」
「あー……それなぁ。どうしたもんかと思っているのが本音だな。クリスのことはもちろん好きだし、クリスが俺のことを好いてくれているというのも嬉しい。でも結婚って話になるとな。俺はもうミミと夫婦だし」
「私のことはあまり気にしなくても……その、今まで通りに過ごせるなら」

そう言いながらもミミは少し残念そうというか、寂しそうである。互いに意識してこう、夫婦っぽいことをしたことはないんだけどな。なんというかこう、確かな繋がりが消えてしまうようで気分はあまりよろしくはない。

「何もかもセレナに手を出した俺が悪いんだけどな……でもあの状況で見捨てるのはな」

冗談みたいな状況だったが、あれ以外に手はなかっただろう。他

の可能性については今更考える気も起きない。何にせよ、あの選択以外の選択肢は途轍もなく苦い結果になっただろうから。

「思考放棄みたいでアレだが、何にせよなるようにしかならないし、今うだうだと考えても無駄だな。可能な限り俺達が一番納得できる結果を引き寄せられるよう、その場その場で努力する。そう心に決めて……」

「決めて……？」

「今はミミとイチャイチャする。カモン、好きなだけ甘えてくれて良いんだぞ？」

そう言って俺がベッドの上で胡座をかいたまま両腕を広げてみせると、ミミは少しだけ惚けたような顔をした後、笑顔になって俺の胸に飛び込んできた。

おお、よしよし。ミミは可愛いなぁ。

#464　「ま、まさかそんな……あはは」（前書き）

Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｆａｉｔｈクリア。
ストーリーの内容は三割くらいしかわからなかった……（ ˘ ω˘ ）（固有名詞と難解な言い回しが……！

#464　「ま、まさかそんな……あはは」

セレナと関係を持ったり、クリスとの婚約なり結婚なりという関係の進展に対する埋め合わせというわけでは断じて無いが、降下申請が受理されるまでの数日間の間、クルー達とイチャイチャしたり、ダラダラしたり、デートに行くことが多かった。

また、エルマは帝都のウィルローズ家に連絡を取ったりもしていたようだし、ティーナとウィスカもどこかに連絡を取っていた。これは二人の行動としては珍しい。今までに見た覚えが無い。

「リーメイのアイリアのとこにでも連絡してたのか？」

というわけで聞いてみた。

リーメイ星系はティーナが昔住んでいた星系で、リーメイプライムコロニーにはティーナの顔馴染が住んでいる。帝都に滞在するのを機として連絡でも取ったのかな、と思ったのだが、返ってきた答えは予想外のものであった。

「うんにゃ、母ちゃんに連絡してん」

「母ちゃん」

「はい。お兄さんとはあまり家族の話をしたことがなかったですよね。ええと、私達の両親は離婚していて、お姉ちゃんはお父さんに、私はお母さんに引き取られたんです」

「で、アホ親父はうちを残してくたばってん。それでもなんとかかんとかリーメイでやってたところでウィーと再会して今に至るわけやな。アホ親父と違って母ちゃんはまともな人やで」

「まともねぇ……そのまともな母ちゃん、まともな企業から飛び出して傭兵なんぞとよろしくしてることに怒ったりしてない？」

「「……」」

俺の質問に二人は目を逸らした。大変わかりやすい反応どうもありがとう。

「ま、まぁいうてメッセージでお小言もらうくらいの話やし？　あちこち移動してるうちらの船に怒鳴り込んできたりするのは無理やし？」

「そうだな。交通の便が良い帝都にブチ切れたお母さんが突撃してこなければ良いな」

なんだかんだいって帝国の中心地である帝都という場所は交通の便が良い。全てのゲートウェイは当然帝都への接続が多いし、旅客業や運送業を運営している企業には当然のようにゲートウェイの使用権が付与されている。

つまり、俺が言ったように二人のまともな母ちゃんとやらが娘達と娘達を誑かした傭兵が帝都にいると知れば、仕事の予定なりなんなりを全てキャンセルして帝都に突撃してくる可能性が割とある。

「ま、まさかそんな……あはは」

という話をしたのが二時間前。

「どうも、二人の母のシェーラです」

「伯父のバルガンだ」

「ガトラム。俺も二人の叔父だ」

お義母さんとその兄、その弟という組み合わせの三人がブラックロータスに突撃してきた。

「これはご丁寧に、傭兵のヒロです。娘さん達にはとてもお世話になっています」

訪ねてきたティーナとウィスカの母と伯父達を門前払いするわけにも行かないので、船に入ってもらって休憩スペースへとご案内した。この船には応接室なんて洒落たものはないからな。食堂かここくらいしか来客に応対できるようなスペースはない。今度新しい母船を買う時には応接室の設置も検討するとしよう。

「「……」」

ティーナとウィスカは俺の隣に座ってすらいない。俺が座っているソファの後ろで顔だけ覗かせている。ソファと俺を盾にする体勢である。

「なんというか、随分と早いご到着で」

「仕事でウィンダス星系に来ていたところで娘達からメッセージが届いたのでご挨拶にと。以前からご挨拶したいとは思っていたのですが、なかなか機会が無くて」

「こちらから伺うべきでした。ご挨拶もせずに娘さん達を連れ回して申し訳ない。なんせ傭兵稼業というのはあちこち飛び回ってなんぼの世界で」

「新進気鋭のプラチナランカーで、陛下からゴールドスターを頂くほどの英雄であれば仕方ありませんね。私と同様娘達は何の変哲もない平民ですし、名誉子爵様としては親への挨拶よりもお役目を優先するのが当たり前です……ね？」

「いやほんとすいません」

優しげな笑顔の中に込められた威圧感に俺は頭を下げて無条件降伏した。実際のところ、両親どころか肉親の存在すらあやふやであ

ったミミや、存在そのものを秘匿していたエルマに慣れてしまっていたせいか、ティーナとウィスカの両親や親戚の存在に無頓着になってしまっていた俺が悪い。遅くともスペース・ドウェルグ社から引き抜いた時点で連絡と挨拶くらいはするべきだったのかもしれない。後知恵だが。

「シェーラ、それくらいにしておけ」
「そうだぞ、姉さん」

シェーラさんの左右からバルガン氏とガトラム氏が彼女を諌める。二人に諌められたシェーラさんは目を瞑り、暫し黙想した後に溜め息を吐いた。

「どうしてこう、よりによって、二人揃ってこう……」
「シェーラだって俺達が止めたのにグラムと一緒になったじゃないか」
「血筋だと思う。でも、彼は姉さんが思うよりもずっとまともな人だ」

グラムというのは亡くなった二人のお父さんの名前だろうか？ガトラム氏にまともな人判定されるのは嬉しいが、そもそもまともな人と評されないといけない立場なんだなぁ、俺……まぁ傭兵だしな。根無し草だしな。いつ死んでも不思議じゃない職業だしな。

「わ、私はお兄さんから離れる気はないからね！」
「う、うちも……兄さんと一緒にいる」

ソファの後ろから伸びてきた姉妹の手が俺の両肩にそれぞれ置かれる。二人がこう言ってくれるなら俺の態度も決まったようなものだ。

しかし、家族に対してはウィスカの方がちょっと強気に出るんだな。逆にティーナの方がちょっと一歩引いた感じというか、声から遠慮のようなものが感じられる。

「ウィスカちゃん、ティーナちゃん、別に俺達は二人を無理矢理連れ帰ろうと思って来たわけじゃないよ」

「そうだ。そうしようにも、相手があのキャプテン・〝クレイジー〟・ヒロじゃどうにもならん。一瞬でドワーフの輪切りにされる」

「いや、流石に余程のことがなければ大切な人の叔父さんを輪切りにしたりしませんが。ご挨拶が遅れた点は本当に至らず申し訳ないと思ってます。この通り。ですが二人が俺の側を離れないと言っている以上、俺も二人と一緒に居たいと思います。何がどうあろうと」

俺はもう一度頭を下げ、それからシェーラさんの顔を正面から見据えて宣言した。シェーラさんもじっと俺を見返してくる。どことなくティーナとウィスカに顔立ちが似ているように思えるのは、やはり母娘だからなのだろう。彼女の髪の毛の色は若干紫っぽい青色で、伯父のバルガン氏と叔父のガトラム氏も同じような髪の毛の色をしている。もしかしたら亡きグラム氏は赤髪だったのかな？　などと考えていると、シェーラさんが再び溜め息を吐いた。

「ちゃんと二人まとめて面倒を見られますか？　ドワーフの女は愛情深いですが、裏切るとそれはもう大変なことになりますよ？」

「俺なりに誠心誠意尽くします」

俺の返事にシェーラさんは頷き、バルガン氏とガトラム氏は苦笑いを浮かべた。うん、これはアレだな。おじさん二人は俺の情報をしっかりと調べてるな。まぁ、その、俺の相手が多いことに関しては二人とも承知の上でのことだから大丈夫だろう。俺だって二人を蔑ろにするつもりはないし。

「そうですか……なら、娘達と少しお話をさせてください。新しい姉妹の皆さんともね。女だけで」
「アッハイ」

シェーラさんもしっかりと俺の情報を把握していらっしゃった。こういう場合、女性には逆らわないほうが無難である。

☆★☆

「うちの家系は代々商人でな。まぁ、今の時代家業を代々ってのも珍しい話だが。それに、全員が全員家業に携わることができるわけでもない」
「兄貴が家業を継いで、俺は軍人になったんだ。今はもう退役して客船の雇われ船長をやってるが」

シェーラさんとうちの女性陣が話をしている間、俺とバルガン氏、ガトラム氏はティーナとウィスカの仕事場でもある格納庫へと足を運び、そこで適当に椅子になりそうなものを見繕って話をしていた。

「シェーラさんは？」
「シェーラは頭が良くてな。良い学校を出て、航宙エンジンメーカー務めをしてるんだ。そこでエンジニアをやっていたグラムと出会って、ティーナちゃんとウィスカちゃんが生まれたんだよ」
「ただ、グラムはちょっと酒癖が悪くて、賭け事も好きな奴だった。結局、ティーナとウィスカが生まれて二年か三年かそれくらいで大喧嘩して、別れた。グラムはその時にティーナを半ば拐うような形で姿を消した」
「マジか……」

死んだ人のことをどうこう言いたくないが、ちょっとそれはどうだろうと思うなぁ……結局ティーナを残して死んで、ティーナは結構苦労したようだし。無論、悪いところばかりの人だったわけじゃないんだろうが。

「暫くしてウィスカちゃんがティーナちゃんを見つけてリーメイプライムコロニーから連れ出してきた時にはびっくりしたし、シェーラは喜びながらもグラムにブチ切れてたな。あいつを生き返らせてこの手でぶっ殺してやりたいとか物騒なことを言ってた」

「そりゃティーナを誘拐みたいな形で連れ出して姿を消して、さっさと死んでティーナに苦労させたら怒るわ……」

しかも地元のマフィアだかギャングだかと関係を持ってたから、ティーナがリーメイプライムコロニーから脱出する時には結構危ない橋を渡ったって話だったしな。そりゃキレるわ。

「そういう事もあって、ヒロ殿との関係にはかなり否定的だったんだが……実際に顔を合わせて少し方針を転換したようだな」

「なら嬉しいんですけどね。あと、俺のことはそんなに畏まって呼ばなくても良いですよ。プラチナランカーだゴールドスターだ名誉子爵だって言ってもまだまだ若造ですし、貴方達にとっては姪の……夫ですかね？　そういう間柄ってなんて呼ぶんだろう？」

「姪婿だな」

「なるほど、姪婿。まぁティーナとウィスカほどの可愛げは無いかもしれませんが、同じように扱ってくれると嬉しいですね」

「ははは、話題の英雄が姪婿か。これはちょっとした自慢になるな」

バルガン氏が愉快そうに声を上げて笑い、ガトラム氏もニヤニヤと口元を緩めている。

「しかし英雄ってのはちょっと言い過ぎじゃないですかね。というか、世間的にはどう伝えられてるんです？　俺って」
「おや、姪婿殿は自分のことには無頓着と見える。前に何社か合同でメディアの同行取材を受けたんだろう？　その映像を使ったドキュメンタリー番組が放映されているんだよ。クリーンでセレブリティな一流傭兵の暮らしぶり、麗しい女性達とのロマンス、帝国航宙軍や他の傭兵達と強力してのスリル溢れる宙賊との戦い、目の飛び出るような報酬額、宙賊という社会悪についての傭兵視点での問題提起……今、キャプテン・ヒロの傭兵ドキュメンタリーは大人気番組さ」
「なにそれこわい……どんなことになっているのか怖くて見れねぇ」
自分の日常の一部を切り出したドキュメンタリー番組とか恐ろしくて見れねぇ。意図的に視聴を避けてきたんだが、どうもミミとかは映像データを保管して度々見てるっぽいんだよな……その度にニヤニヤニマニマしてるからわかりやすいんだ、これが。
「正直に言うと俺はファンなんだ。こうして話せる機会が降って湧いてきて実はかなり舞い上がってる」
ガトラム氏が片手で口元を隠しながらとんでもないことを言い始める。
「あー……ホロとか撮ります？　クリシュナをバックに」
「良いのか？」
「勿論。宙賊の戦利品もなんか色々あるんで、ヤバくないものなら記念にプレゼントしますよ」
「俺は今、最高に嬉しい。叫びだしそうだ」
ガトラム氏が天井を見上げて震える。声量ヤバそうなんで叫ぶの

は勘弁してください。

#465　「誠心誠意、頑張るのよね？」　「はい……」（前書き）

天気が悪いと捗らないねぇ！（‘ω’）

#465　「誠心誠意、頑張るのよね？」　「はい……」

ティーナとウィスカの母であるシェーラさんはかなり長い時間をかけてうちの女性陣と話し合い、最終的には満足した様子だった。

「孫の顔を早く見せてくださることを期待します。誠心誠意、頑張るのよね？」

「はい……その、準備が整ったら」

「どこかの惑星上居住地に土地と家を買うって話ね。コロニー暮らしからすれば夢のような話だけど、貴方ならできるのでしょう。期待していますからね？」

「はい……」

俺の返事に満足したのか、シェーラさんは笑顔で頷いて帰っていった。

「その時には俺達にも是非連絡してくれ、姪婿殿」

「ああ、是非頼むぞ。それと、土産をありがとう。家宝にする」

バルガン氏とガトラム氏は宙賊からの略奪品である酒のボトルに俺がサインを入れたものを数本ずつ土産として持って帰っていった。どの酒も粗末なボトルに入ったメインドイン宙賊製の無銘柄の一品――つまり密造酒なのだが、二人としては逆にそれが良いということだった。

保管用、観賞用に一本ずつ。そして実際に飲むために四本ずつと計六本ずつをそれぞれに持たせた。酒のボトルを六本というのはそれなりの荷物になるのだが、そこはドワーフ。小柄でも強靭な肉体を持つ彼らにとっては背負う程の量の酒瓶など何の負担にもならな

かったようだ。
ちなみに、シェーラさんはシェーラさんでティーナ達とエルマからきちんとした酒造メーカーが作った高級で上等なお酒をお土産として持たされていた。やはり彼女もドワーフであった。
シェーラさん達が帰っていった後、俺達は揃って休憩室に集まり、暫く放心した。

「……疲れた」
「……うちも」
「……私もです」

ぐったりとした俺とティーナとウィスカの三人を見たミミ達は苦笑いを浮かべていた。嵐のような人だったな。本当に。

☆★☆

遂に降下申請が承認されたので、俺達は武装の封印処置を受けたブラックロータスとアントリオンでそれぞれ帝都へと降下した。当然だが、ブラックロータスには同じく武装を封印したクリシュナも格納してある。今回は先の国境紛争で活躍した俺達の功績についても取り沙汰されることになるため、戦闘に参加した船も三隻まとめて降下せよということになったのだ。
普段はアントリオンもブラックロータスにドッキングして移動しているのだが、帝都に降下して着陸するとなるとブラックロータスにドッキングしたままというわけにもいかない。なので、ドッキングを解除して別々に降下したというわけだな。

「で、クリスもついてくるんだな」

徐々に近づいてくる帝都の威容を視界の端に入れつつ、隣で大人

しく座っているクリスに声をかけた。俺達は今、ブラックロータスの休憩スペースに集合してホロディスプレイに投影されている帝都の様子を見ながら、帝都への降下を待っている。
尤も、エルマは一人でアントリオンに乗って降下しているし、メイはブラックロータスのブリッジにいる。それにショーコ先生と元ユニット１０４ことネーヴェはメディカルベイにいるので、全員というわけではないのだが。

「エルマさんがいるとはいえ、彼女は貴族社会からは離れて久しいですから。ホールズ侯爵家の方々とお話をする時には私がいたほうが良いですよ？」
「クリスがそう言うならそうなんだろうな。頼らせてもらうよ」

俺の返事を聞いたクリスは嬉しそうに微笑んだ。前までであればこういった場面でクリスに頼り切るのは危険だと考えただろう。なんだかんだ言ってクリスは俺と添い遂げることを諦めていないようだったからな。
だが、今となってはもうその点について警戒する必要はない。俺も腹を決めたからな。それに、クリスは俺の傭兵としての生き方を尊重してくれるようだ。彼女の祖父であるダレインワルド伯爵もそのように考えているかどうかはわからないが、少なくともクリスはそう考えているし、そう考えているクリスを帝都に寄越して自由にさせている以上はクリスが言っていた通り伯爵もそのことに関しては了承済みなのだろう。
で、あればだ。クリスは完全に俺の味方ということである。クリスの目的は自分の伴侶としてありのままの俺を迎え入れるというものであって、その目的を達成するためにはホールズ侯爵家からの干渉や影響は最小限に抑えたい筈だ。ならばホールズ侯爵家との話し合いで彼女があちらに与する理由は何一つない。つまり、完全に信頼して良い。

「とはいえ、まずは帝城だけどな」
「査問会ですね。そちらには私は同行できませんね……」

クリスが残念そうな顔をする。
要は、今回クリーオン星系で起こったことの全貌を詳らかにし、俺とセレナの行動に関して潔白を証明するのが何よりも先ということだ。見ようによってはデイビット・イクサーマル伯爵に夕食へと招待された俺がヴィンセント・イクサーマルを暗殺し、更にイクサーマル伯爵家の兵を相手に大立ち回りをして陽動を行い、その隙にセレナがデイビット・イクサーマル伯爵を制圧。クリーオン星系物資集積基地の指揮権と防衛司令官としての権限を不当に奪取し、功績を奪った……なんて見方もできなくはないからな。
尤も、イクサーマル伯爵家の連中が晩餐会で俺達に一服盛ったこと、俺達の身柄を手土産にベレベレム連邦へと寝返ろうとしていたこと、セレナに宙賊製の胡乱な薬剤をブスブスと打ちまくったことなど、それら全ての行状に関して物的な証拠やデイビット自身の自白があるし、その自白に関してデイビットが否認したとしても、改めて帝城で脳の中身を引っこ抜かれれば言い訳のしようもない。イクサーマル伯爵家の破滅はまず避けられないだろう。
それは同時に、俺達の功績も確定的であるということでもある。だが、いずれにしても事の次第は明らかにされなければならない。それがけじめというものだ。

☆★☆

帝都へと到着した俺達はクリス達――お付きのメイドさんが三人と女性騎士一名も含む――と別れ、帝城へと向かった。帝都駐在の帝国航宙軍憲兵隊の皆様による堂々たる送迎である。
当然だが『俺達』の中にはネーヴェも含まれる。尤も、彼女はま

だ医療ポッドの外で活動するだけの体力が無いので、搬送用のポッドに移し替えられてのことであったが。
彼女の立場も微妙だからな。一応はベレベレム連邦兵の捕虜として扱われているのだが、そもそも彼女は軍籍に無いらしい。
ドッグタグ――この世界では皮膚の下にＩＣチップのようなものが埋め込まれているらしいが――の類もなければ、軍人としての認識番号も存在しない。そもそも、ベレベレム連邦市民としての市民番号も存在しない。名前すら無かったことを鑑みれば、さもありなんといったところだが。
つまり、彼女はどこの誰でもない人間なのだ。なので、帝国航宙軍としては微妙に扱いに困る存在なのである。もっとも、彼女の証言や彼女が回収された座標、それに彼女が詰め込まれていたポッドというか缶詰を構成している部品などから、彼女がベレベレム連邦側の人員であることは明らかなのだが、それをベレベレム連邦が認めるかといえば、まず認めないだろう。全てグラッカン帝国によるベレベレム連邦を貶めるためのでっちあげだと主張する筈である。
実際のところベレベレム連邦がそう主張した場合、グラッカン帝国側としてはその主張を退けるだけの証拠を用意することが難しい。言い逃れのしようのない完璧な証拠が存在するわけではないからだ。

「こっちは任せておいてくれたまえ。私はイクサーマル伯爵家との件にも無関係だし、彼女の主治医だからね」
「悪いが任せる。ネーヴェの身の振り方については――」
「基本的には彼女の望むように、だね。よくわかっているとも。考える限り、うちで引き取るのが一番無難だろうしね」

政府機関や帝国航宙軍などで彼女の面倒を見ることは不可能ではないだろうが、そうするとネーヴェの身の上を使ったベレベレム連邦へのネガティブキャンペーンに悪影響を及ぼすかもしれないしなぁ……彼女を政府機関などで雇い、面倒を見るとベレベレム連邦側

から「やはりあの少女はグラッカン帝国側のサクラで、ネガティブキャンペーン自体がでっちあげなのでは？」などと言われかねない。
しかし何の支援も行わずに放り捨てて野垂れ死なせたりしたらそれはそれで大変に都合が悪い。そうなると、ネーヴェを戦場で拾った中立の傭兵――建前上は――である俺が彼女の面倒を見るという構図はグラッカン帝国にとっても都合が良い。
ベレベレム連邦に兵器の部品として造られ、虐げられた少女を心優しい傭兵が拾い上げ、その面倒を見る。演出のしようによっては美談である。そんな傭兵に帝国が少なからず支援を行えば対外的にも体面が大いに保たれる。恐らくだが、そういう方向に話は転がるだろう。

「頼んだ。俺達は俺達で頑張ってくるわ」
「ああ、頑張って。何も心配は要らないだろうけどね」
「そう祈るよ」

多少の面倒はあったけど最終的には「めでたしめでたし」で終わるのが何にせよ一番だからな。

#466　「なんでだよ」（前書き）

起きた時からずっと頭痛がペイン（ ' ω' ）（捗らない

#466　「なんでだよ」

査問会は和やかな雰囲気で行われ――るわけもなく。大荒れとは言わないがピリピリとした雰囲気が漂う居心地の悪い中で行われた。

まぁ、その中でも幸いだったのはピリピリとした雰囲気というか、敵意というか、糾弾される先が俺達ではなく、イクサーマル伯爵……いや、元伯爵だったことか。

査問会を取り仕切るメンバー達によるイクサーマル元伯爵への詰問、いや尋問はそれは苛烈なものであった。

俺達やセレナに睡眠薬のようなものを盛った件、クルーを人質に俺を従わせようとした件、セレナに宙賊製の胡乱な薬剤――用意されていた中には脳に寄生し、自由意志を奪う人工寄生虫もあったらしい――を投与した件、そもそもの話として国境最寄りのゲートウェイまでの領域を手土産としてベレベレム連邦に寝返ろうとした件、その計画を成功させるために私兵をゲートウェイに潜入させてサボタージュを行い、帝国航宙軍本隊の増援を遮断しようとした件など、追及内容は実に多岐に及んだ。

いや、それにしても追及が苛烈というかなんというか。イクサーマル元伯爵が行状について否認などしようものなら物的証拠と自白内容、それに彼の頭から引っこ抜いた情報を提示して片っ端から否認そのものを粉砕してかかっている。

更に沈黙は肯定とみなすとか言って黙秘すら許されない。

「黙秘すら許されないって帝国法的にアリなのか？」

「帝国法は貴族に有利な内容も多いですが、悪事などを働いて責められる立場になった時には一転して厳しい内容になるんですよ。今回は証拠も出揃っているので、イクサーマル元伯爵は悲惨ですね」

イクサーマル元伯爵が言葉でボッコボコにされているのを眺めながら、口元を手で隠して小声でセレナと話をしているうちにイクサーマル元伯爵への尋問は終わり、彼は憲兵に引っ立てられていった。心なしか、頭髪に白髪が目立つようになっている気がする。多分気の所為だが。

「さて、次はキャプテン・ヒロ。君にも話をしてもらおうと思う」
「ああ、俺も聞かれるのね。どうぞ、お手柔らかに」

イクサーマル元伯爵が連れ出されて行った後、俺に矛先が向いてきたので素直にそれを受け入れることにする。査問会のメンバーは誰も彼も高貴なオーラをこれでもかと放っておられる。恐らくは全員が高位貴族なのだろう。とすれば、ほぼ全員が高度な生体強化の果てに脳の処理能力なども上がっているのだろうと思う。嘘や誤魔化しは通じまい。そう考えるとありのままに話す以外の選択肢はほぼ無いということでもあるので、ある意味では気が楽だな。

「では、イクサーマル伯爵家の所有する戦艦、マジェスティックの中で起こったことを順に確認させてもらいたい。イクサーマル伯爵家の招待を受ける形で君と君のクルー達はセレナ・ホールズ大佐と同道してマジェスティックへと向かった。間違いないかね？」
「間違いない。俺は招待されてクルーを連れてセレナ大佐と一緒にマジェスティックへ向かった」

俺の返答に査問会メンバーの進行役が頷く。
その後も食事会の内容や薬が盛られた時のことなどを話し、話題はヴィンセントとのやり取りについての部分に及んだ。

「身体を椅子に拘束されて、離れ離れにさせられたクルーの身柄を盾に自分達に従うように脅されたから、密かに拘束から脱して隙を

突いてヴィンセントと二名の護衛を制圧した。それでもなおヴィンセントは脅威度が高かったから、彼から奪った剣を使ってとどめを刺した」
「その後、君はマジェスティックのクルーと激しい白兵戦を行い、多くのクルーを殺害した。間違いないかね？」
「間違いない。俺はキャプテンとして囚えられたクルー達を救助しなければならない立場だったし、薬を使い、人質までをも使ってこちらに何かを強制しようとするイクサーマル伯爵家の連中には、一般的な倫理観や善性といったものを一切期待できなかった。クルー達の命と尊厳を守るために俺は一分一秒でも早くクルー達を救わなければならないと考えていた。その結果として戦闘が発生し、多くの死傷者が発生した」
「なるほど。気になる点が数点ある。君は椅子からの拘束をどのようにして脱したのか？　そして不意を突いたとはいえ貴族であるヴィンセントを含む三人をどのようにして制圧したのか？　さらにこちらは映像にも残っており、白兵戦の生き残りからの証言もあるのだが、君は壁材や死体を浮かせ、意のままに操って盾としていたとか。どのようなからくりでそのような真似をしたのかね？」

おっと、やっぱり来たな。俺のサイオニック能力に関して何かしらの質問が来るとは思っていた。真似ができるとも思えないし、別に話しても構わないと言えば構わないが、手の内はできるだけ晒したくないんだよな。

「その質問に関しては回答を拒否する。戦闘を行い、結果として多数の私兵を殺傷したという事実に関しては認めるが、俺がどのような手段を用いたのか、ということに関しては今回の査問内容には関わりが極めて薄い」
「ふむ……確かに査問会の趣旨からは若干外れるか。良かろう、今の質問は撤回する。貴殿の行動に関しては短絡的かつ大いにやり過

ぎな面もあるが、当査問会としては概ねその正当性を認め、不問とするつもりだ。ただ、それも今回に関しては、という但し書きがつくということには留意して貰いたい。今回はたまたまイクサーマル伯爵家が皇帝陛下への反逆を企てていたという確かな証拠が揃っていた。だから貴殿の行動も反逆者との戦闘、という形で不問となったのだ。そうでなければ君は同じ帝国臣民を大量に殺害した咎を償うことになったのだからね」

「承知した」

と言いつつも、同じような状況に陥ったら結局同じように暴れると思うけどな。そうならないよう用心に用心を重ねるのが最善だろうな。しかし、随分あっさりと退いてくれたな。

その後、セレナ大佐の行動に関しても査問は行われたが、俺の時と同じようにイクサーマル伯爵家が行おうとしていた反逆行為の証拠が出揃っていたので、各種の越権行為などに関しては不問とされていた。

また、その過程でミミとエルマ、クギにも質問がいくつか飛んだが、彼女達が危機を脱するにあたってどのような手段を用いたのかということに関しては俺と同じく回答を拒否し、認められた。

ふむ？　俺達に関しては深く追求しないようにというお達しでもあるのかね？　俺の時も思ったが、随分とあっさり退くな？

「報告書に記載があったが、宙賊のナノマシン製剤へのカウンター薬剤があるとか？」

「うちのドクターがでっちあげたものは確かにあるな。俺は専門家じゃないんでよくわからんが、データの提出に関しては安請け合いはできんね。なんせよくわからないから。キャプテンとしてはクルーの腕を安売りするわけにもいかない。興味があるならうちのドクターに問い合わせてくれ」

「そのドクターは今日は同行していないのかね？」

「帝城には来てるが、別件で今は手が離せないと思うね。別件の内容については俺がこの場で話して良いものかわからないから、別途そちらで調べてくれ」
「承知した」

大逆者とされたデイビットが退室した後は和やかーーとまではいかないが、然程の緊張感もなく粛々と査問が続き、俺達はあっさりとお役御免と相成った。

「……思ったよりも楽勝というか、波乱もなくあっさりと終わったな」
「普通はこうは行きませんからね？　恐らく、どこかかなり上の方から私達への査問はあっさりと終わらせるように命令でもあったんだと思いますよ」
「それで良いのか、査問会」
「良いんですよ。今回の査問会のメインディッシュはデイビット・イクサーマルを大逆者とすることで、私達は添え物だったんですから。大逆者を捕らえた私達が査問会で処分をうけるというのも都合が悪いでしょうしね」
「どういうことだ？」
「すぐにわかりますから教えてあげません」
「なんでだよ」

なんだその目は。養豚場に売られていく子豚でも見るような哀れみを感じさせる視線なんだが？
なんだかよくわからんが面倒事だな？

「そんなことよりも次に行きましょう。クリスティーナも待っているようですし」
「次？　クリスも待ってるってどういうことだ？」

事態が飲み込めない。説明。俺に説明をちゃんとしてくれ。

「パパとの面会です。責任、取ってくれるんですよね？」

「ああ、そういう……帝城で会うことになるとは思ってなかったよ」

てっきりホールズ侯爵家の帝都屋敷とかそういう感じのところで会うと思ってたよ。今度からそういうのは早めに教えてくれるように言っておくとしよう。

#467　「ナシ寄りなんですね」（前書き）

敗因：二度寝をした＾ｑ＾

#467　「ナシ寄りなんですね」

帝城というのはとても広い。一つの建物……いや、建物というのは少し語弊があるか？　構造体？　とにかく、帝城と呼ばれている範囲は大変に広大だ。徒歩で端から端まで歩いたら数日かかるらしい。

なので、帝城内には専用の交通手段がいくつか用意されている。それは電車のようなものであったり、空を飛ぶタクシーのようなものであったりするわけだが……今回はそのような交通手段を使わずに徒歩数分で到着できる場所が目的地であった。

「この辺ってまだ帝国軍の区画だよな？」

「そうですね。私の家は代々軍関係の要職に就いているので、この区画に私的なスペースを下賜されているんですよ」

「別荘的な？」

「そこまでセレブリティなものではないですよ。単に出仕に手間がかからないように、いつでも即応できるようにという意図のスペースですよ」

「なるほど……？」

それはつまり仕事場に設けられたちょっと豪華な専用仮眠スペース的なアレなのでは……？　帝国軍は暗黒メガコーポめいた存在だった……？　いや、まぁ、当たらずとも遠からずって感じはするが。

そんな話をセレナから聞きながら辿り着いたのは、明らかに帝国軍の軍人ではない兵士が歩哨として立っているゲートの前だった。何故明らかに違うのがわかるのかと言うと、まずもって制服が違う。なんというか、いかにも儀礼用というかなんというか、金がかかっているというのがわかるお洒落というかキラキラ度が高い制服なの

だ。高級感があると言い換えても良い。

「セレブリティじゃないって話じゃなかったか？」

「あまり貧相だとそれはそれで不都合があるんですよ……通りますよ」

「はっ、どうぞお通りください！」

ホールズ侯爵家の私兵と思われる兵士達から敬礼されながらチェックゲートを通り、ホールズ侯爵家のプライベート区画とやらに足を踏み入れる。

「……セレブリティじゃないって」

「帝都基準では十分質素なんですよ、本当に」

俺の指摘にセレナが疲れたように言葉を吐く。

見るからにアンティークな雰囲気漂う木製のフロアに綺麗なカーペット、天井には歴史を感じさせるランプのような照明装置。お高そうな調度品や絵画、それに恐らく『本物』の花が差されている花瓶など、どうみてもセレブリティな空間がそこには広がっていた。この豪華さはそこらの高級ホテルも霞んで見える。それで質素となると、豪華と言われるような邸宅はどのようなことになっているのだろうか？　眩しさで目を開くことができないんじゃないか？

「落ち着く雰囲気です」

「これが落ち着くんですか……？」

「クギってなんというか、大物よね」

ゆっくりと尻尾を振っているクギにミミとエルマが驚愕したり呆れたりしている。最初はちょっと高級なホテルに泊まるだけでもあたふたしていたのに、今となってはこの程度では小揺るぎもしない。

これが精神的な修練を積んだサイオニック能力者の実力……いや、クギが元々そういう性格なだけかもしれないな。きっとそうだ。

「クリスはもう来てるって話だったな」

「はい、護衛と二人で既に到着しているようです。応接室でしょう」

そう言ってセレナはスタスタと迷いなく歩を進めていく。彼女にとっては勝手知ったる自分の家ってところなのだろうか。まぁ、軍関係の区画の中にあるし、もしかしたら帝都に滞在する時にはこのプライベート区画を利用することが多いのかもしれないな。

途中、何人かのメイドさんとすれ違いながら区画の奥へと進み、セレナは一つの扉の前で立ち止まった。そうしてコンコンコンとノックをする。

「セレナです。入りますよ」

「どうぞ」

扉越しに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

セレナに続いて応接室の中に入ると、そこにはクリスがいた。ソファから立ち上がり、俺達に視線を向けたクリスが笑顔を浮かべる。

「その様子だと査問会は問題なく終わったみたいですね。安心しました」

「まぁなんとかな。どうも遥か上からの見えざる手が介入していた気もするが……」

そう言ってセレナに視線を向けると、彼女は目を瞑り、肩を竦めてみせた。セレナはその件に関しては何も知らないということなのだろうが、否定するような素振りを見せない辺り、俺と同じような感想は抱いているらしい。

「パパなら何か知っているかもしれませんけどね。そちらの方はクリスティーナの護衛ですか？」
「はい。エデルトルート、挨拶を」
「はい、クリスティーナ様。ダレインワルド伯爵家の寄り子、クラウゼ男爵家のエデルトルートと申します。セレナ様、ヒロ様、それに皆様も。よろしくお願い致します」

そう言ってクリスの女性護衛騎士が優雅に礼をしてみせた。黒に近い茶色のくせっ毛を肩の辺りまで伸ばしている美人さんだ。恐らく人間で、歳の頃は俺より少し下……いや、結構下かな？　二十歳になったか、なっていないか……それくらいの歳かもしれない。

「寄り子……あー、なんだっけ。貴族的な意味での部下とかそういう感じだったっけ？」
「大体合ってるわ。ダレインワルド伯爵家は複数の星系を所有する在地領主で、その領主の下で単一、もしくは複数の星系を管理する貴族家や、ダレインワルド伯爵家の側でその政務をサポートする貴族家がいたりするわけよ。そういった貴族家を寄り子と呼ぶわけね。そして、ダレインワルド伯爵家が寄り親って立場になるわけ」
「なるほどなぁ」

ダレインワルド伯爵家が親会社として複数の貴族家を子会社みたいな感じで統括してるって感じなのかね？　まぁ、クリスとエデルトルートとの関係はなんとなくわかった。親会社の後継者の護衛として子会社の社長令嬢が付き添ってるってわけね。
ちなみに、エデルトルートの腕前は……うーん、まぁ正直あんまり高くはなさそう。もしかしたらクリスの方が強いかもしれんな。なんとなくだが。多分、クリスの方が強力な身体強化処置を受けているからだと思うけど。

「ヒロ様、どうぞこちらへ。皆さんも」
「ありがとう」

クリスが少し横にずれて今まで自分が座っていた場所を手でポンポンと叩いたので、大人しくその場所に座る。うん、なんか尻が温かい。クリスの温もりを感じるな。

セレナが俺を挟んでクリスの逆サイドに座ろうとしたが、何か思い出したかのように座るのをやめてテーブルを挟んで対面に座り直した。ああ、そうか。今からセレナのお父さんが来るなら俺の隣にセレナが座ってるのは違うよな。

結局、セレナに身振り手振りで促されたミミが俺の隣に座り、その隣にエルマが座った。クギはクリスの隣に座った。五人並んで座っても若干余裕があるな、このソファ。座り心地も良いし、流石は侯爵家といったところだろうか？　良い家具を使っている。

部屋付きのメイドさん達によって如才なく全員にいかにも高級そうなお茶が用意され、そのお茶を飲みながら査問会について少しの間クリスと話しをしていると、ドアからノックの音が響いてきた。

「どうぞ」

セレナが返事をすると、ドアが開くと同時に俺とクギ以外の全員が立ち上がった。え？　そういうものなの？　と考えながら俺も遅れて立ち上がり、入ってきた人物を出迎える。クギもいつの間にか立っていた。

「やぁ、どうも。先程ぶりだね。座ってくれたまえ」

そう言って俺達に着席を促したのは先程の査問会で司会進行を務めていた人物であった。なんと、この人がセレナのパパさんだった

のか。
彼が何を言うまでもなく全員のお茶が出し直された。ティーカップから何から総取り替えである。カチャリとも音が鳴らず、慌ただしくも感じない。メイドさんってすごいなぁ。

「先ほど顔を合わせたが、自己紹介はしていなかったね。私はラウレンツ・ホールズ。ホールズ侯爵家の当主だ。よろしく頼むよ、キャプテン」
「こちらこそ。ただ、自分で言うのもなんですが、侯爵閣下のような高位の貴族の方と接するのに相応しい礼節といったものとは無縁な浅学非才の身なもので。失礼のないように振る舞いたいとは思いますが、その点どうかご寛恕頂きたく」
「ああ、その点は気にしないでくれたまえ。これでも私も軍人だからね。いちいちそんなことを気にされては部下からの報告を受けることもできない。公式の場ということであればともかく、このようなごく私的な場では普通に話してくれて構わないよ」
「ありがとうございます」

そう言って頭を下げたりしつつ、あくまでにこやかにそう言うラウレンツ・ホールズ侯爵をこっそりと観察する。短く借り揃えた金髪に青い瞳の正統派イケオジだ。かなり若く見える――というか、俺と十歳も変わらないように見えるんだが。貴族が受けている強化処置の影響か、それとは別のアンチエイジング的な何かの影響か……凄いな、貴族って。
その後、ミミ達の紹介をしたのだが。

「……あの？」
「い、いや、なんというか、本当に瓜二つなのだね……？」

ミミを前にして若干引いているというか、変な汗をかいてしまう

ラウレンツ氏なのであった。そりゃまぁ、ルシアーダ皇女殿下とまさに瓜二つだからなぁ……最近は割とオープンに活動しているらしいし、ホールズ侯爵家当主ともなれば顔を合わせる機会の一度や二度はあったのだろう。

「オホン。ええと、今回この会を催し、集まってもらったのは他でもない。私の不肖の娘の件なのだけどね」

「……不肖の娘は酷くありませんか？」

「私やヒルデが用意してきた縁談を文字通り全部叩き潰した挙げ句、軍に入って勇名を鳴り響かせ、その年齢になっても浮いた話の一つもなかったというのはね、一般的な貴族の娘としては不肖の娘扱いをされても仕方がないものなのだよ、セレナ」

「……」

ぐぅの音も出ないとはこのことか。セレナは苦虫をまとめて何匹も噛み潰したような顔をして押し黙ってしまった。

「帝国軍には女性士官も珍しくないけど、女性士官の花形といえば近衛騎士団の方なのだよね。だというのにこの子はわざわざ危険な辺境艦隊への配属を希望するし、しまいには功績を盾に対宙賊独立艦隊なんてものを編成してあちこちで血みどろの戦いを繰り広げるし……知っているかい？　キャプテン。帝都の貴族界隈でこの子はホールズ侯爵家の狂犬だの、血塗れ娘だの、宙賊喰らいだのとそれはもう未婚の乙女とは思えないような二つ名で呼ばれているのだよ」

「コメントしづらいっすね」

正直言って否定できる部分が何も無いのでは？　婚約者というかお見合い相手を片っ端から叩き潰したみたいな話を前に聞いたような気もするし。

「まぁ、そこに君が現れたわけだけどね。名誉爵位とはいえ階級としては子爵だし、君は軍と良い関係を築いている。曲者揃いのプラチナランカーの中では大変にまともな類の傭兵だし、今回のイクサーマル伯爵家の反乱をセレナと一緒に防いだのも高得点だ。今までにも何度かセレナと一緒に仕事をしているようだし、この子が心を許したということは腕も立つんだろう」

来るぞ。これは来るぞ。「だが」が来るぞ。間違いない。何かここでケチをつけてくる流れだこれは。

「実に素晴らしいね。このままこの子のことを頼むよ。ダレインワルド伯爵家と縁ができるのも実に良いね」

「えっ。あ、はい。どうも？」

「意外そうな顔だね？　考えてもみてくれたまえ。この子は器量も良いし、優秀だ。だが、なんというか理想が高過ぎてね……この年齢で結婚どころか婚約者すらいないのはもう……わかるよね？」

困ったような表情を俺に向けて同意を求めてくる侯爵閣下だが、その娘さんが顔を真っ赤にしてバシバシと閣下を叩こうとしてるんですがそれは。それを見もせずに全部いなしてるの地味に凄いなアンタ。

「だからね、私としてはこの話には前向きなんだよ。妻もね。やっと手綱を握れる男が現れたのかと胸をなで下ろしているというのが本音だ。無論、侯爵家の当主という立場から見た場合、君という存在は娘の嫁ぎ先としてベストというわけではない。だがベターだ。ナシ寄りのアリだね」

「ナシ寄りなんですね」

「そりゃね。君は正式な貴族というわけではないし。だが、有無を言わせぬ軍功と実績がある。陛下の覚えもめでたい。それに……」

「それに？」
「帝国の歴史も長いわけだけど、偶にいるのだよね。名も無き傑物というか、運命の愛し子というか……味方にすれば頼もしく、敵とすれば破滅を齎す、そういう存在がね。ホールズ侯爵家の歴史にも記されているんだよ」
「あー……なるほど」

同意しつつクギにちらりと視線を向けると、クギも俺に視線を向けていた。恐らくは、そういうことなのだろう。

「そういうわけで、セレナとは大いに関係を進めてもらって構わない。まずは婚約かな？　今はミミさｍ――ミミさんと夫婦関係にあるんだったね？　その辺りに関しては結婚後に夫婦のどちらかが貴族となった場合の特例措置があるから、それを上手く使えば良いだろう。実際に結婚をするのは二年後くらいかな？　クリスティーナ嬢の成人を待つことになると思うけど」
「なるほど……ん？　クリスはもう成人年齢なんじゃ？」

そう言ってクリスを見ると、クリスは笑顔を浮かべていた。これは笑顔で誤魔化そうとしているな？

「クリスティーナ嬢が平民ならそうだね。貴族の場合はもう三年いるんだよ。まぁ、形骸化している部分もあるんだけどね。でも、ダレインワルド次期伯爵が成人前にこう、お世継ぎをご懐妊とかされてしまうのはちょっと色々問題がね？」
「……クリス？」

クリスはっ全力で俺から目を逸らした。完全に顔がクギの方に向いている。おいコラ、こっち向いて俺の顔を見んかい。

「まぁまぁ、二年くらいすぐだよ。結婚式の準備もしなきゃいけないしね。あと、ウィルローズ子爵家にもちゃんと顔を出すんだよ？三家の力を合わせて式を執り行わないといけないんだからね」

クギに抱きついてその胸元に顔を埋めて抵抗するクリスと、それを引き剥がそうとする俺を見ながらラウレンツ氏は朗らかな笑みを浮かべるのであった。

それはそれとして嘘つきの悪い子にはお仕置きをせねばならぬ。クギもクリスの頭を抱きしめて守るんじゃない。

#468　「そういう意味じゃないんだよなぁ……」（前書き）

昨晩久々に飲酒しました（ ，ω，　）（激レア行動

#468　「そういう意味じゃないんだよなぁ……」

「はっはっは！　いや、君達は本当に仲が良いね。うちの子がその環の中にちゃんと入れると良いんだが」
「……！」
「おっと、そういうところだよ。我が娘よ」

お仕置きしようとする俺と、クギに守られてそれを逃れるクリスを見たラウレンツ氏が呵々大笑し、ついでに擦られたセレナが無言の暴力で父に抗議をしようとしてまたいなされている。
セレナさん？　パパさん相手にはそうやって甘えるのは構わんが、俺にはやめてくれよ？　身体強化とかしてない俺がそれをやられると最悪肩の骨が砕けかねないから。

「まぁ、ダレインワルド次期伯爵としても焦らざるを得なかったんだよ。貴族としての格というのは厄介なものでね。仮にセレナが先に君と結婚なり婚約なりをしてしまうと、もうその時点でダレインワルド次期伯爵としては君との関係を結ぶ道がほぼ閉ざされてしまうのだからね。もしセレナと先に婚姻を結んだ場合、君にはホールズ侯爵家傘下の貴族として名誉爵位ではない男爵になってもらうことになる。つまり、ホールズ侯爵家の分家扱いだね。その男爵家にダレインワルド伯爵家当主が嫁として入るわけにはいかないし、当然男爵家当主となった君を婿に迎えるわけにもいかない。男爵家の当主にしてホールズ侯爵家の分家の当主でもあるわけだからね。この問題を丸く収めるためには無理矢理にでもセレナよりも先に君と婚姻、ないし婚約関係を結んでダレインワルド伯爵家の婿に迎えるしかないわけだよ。まぁ、婿としてダレインワルド伯爵家に入った男性に第二夫人、第三夫人どころではない数の妻がいるというのも

若干変則的だけどね。それでもホールズ侯爵家傘下の男爵家に伯爵家当主が嫁ぐことに比べたら無理筋ではないね。その辺の事情を鑑みて君の側にいる女性達も次期伯爵殿に協力したのだと思うよ？」

ラウレンツ氏の懇切丁寧な説明を受けて俺は考え込む。いずれにせよセレナとクリスの二人とはどこかで何かしらの決着を着けなきゃならないとは思っていた。なら、こういう形で落ち着いたのは悪くないか……？　まぁ、悪くはないか。結果だけを見れば最良か。なら過程には目を瞑るのが良い男ってものだろうか？　そうだな。うん、きっとそう。そういうことにしておこう。

「オーケー、侯爵閣下の説明で納得した。次からはちゃんと相談してくれ。良いな？」

そう言ってミミ達に視線を向けると、彼女達は素直に頷いた。ならよし。これで俺を騙したことに関しては終わりだ。クギに抱きしめられているクリスの背中もポンポンと軽く叩いておく。そうだ、ラウレンツ氏にもお礼を言わないとな。

「ありがとうございます、侯爵閣下」

「良いさ。娘が原因で婿殿の家庭を壊してしまうというのは寝覚めが悪いしね。心配になるほど頑固なこの子が選んだ君の為ならこれくらいはなんでもないさ」

笑ってそう言うラウレンツ氏にもう一度頭を下げる。うーん、これは頭が上がらんなぁ。

「まぁ、正直に言うと少し残念なんだけどね。本当はうちで欲しかったなぁ……」

「欲しかった、というと？」

「それは勿論君だよ。キャプテン・ヒロ。君は宙賊掃討のエキスパートだろう？　セレナの対宙賊独立艦隊も君のテコ入れがあってあれだけの戦果を上げたという話じゃないか。連中は本当に百害あって一利なしの存在だからね、我がホールズ侯爵家も奴らには常に頭を悩ませているのだよ。君を我が家の分家の当主として迎え入れることができたなら、きっと宙賊対策が捗っただろうと思うとね」
「なるほど。うちとしては相応の対価が頂けるなら、傭兵としてお力添えをさせて頂くことは可能ですが」

流石に命懸けの商売なので、タダでやりますなんて安請け合いはしない。俺の命だけを賭けるというのはそれでも構わないが、うちのクルー達も巻き込むことになる以上はそんなことはできないからな。

「それは良いね。いずれ頼らせてもらうとしよう」

☆★☆

「それではね。また会おう！」

爽やかな笑みを残していったラウレンツ氏とセレナの二人と別れ、俺達はショーコ先生とネーヴェを迎えに行くことにした。少々待たされたが、二人とも無事に尋問――というか聞き取り調査を終えて合流することができた。

「お疲れ。どうだった？」
「特に問題はなかったと思うよ。ただ、尋問官が言うにはあちらとの協議次第だけれども、恐らくはベレベレム連邦がネーヴェくんの存在を認めることはないだろうということだね。とはいえ、対外的に喧伝すればベレベレム連邦のイメージを少なからず落とすことは

できるだろうとも言っていたよ。一応ネガティブキャンペーンを打つつもりではあるみたいだね」

そう言ってショーコ先生が肩を竦めて見せる。彼女としては自分の患者が政治的に利用されることに何か思うところがあるのかもしれない。

「なるほど。で、その後の身の振り方については？」

『私の能力については大変優秀かつ有用であると認められたみたいだよ、キャプテン。ただ、雇用先がグラッカン帝国の政府機関や帝国航宙軍ということになると、ベレベレム連邦のクソ野郎共に「それ見たことか。やはりでっちあげだった」などと言われかねないから、引き取るのは難しいらしい。一応民間団体などでどこか世話をしてくれるところを探すことはできると言ってくれたんだけどね。それなら先約があるからキャプテンにお世話になるよって言ったんだ』

「そうか。なら約束通りうちのクルーだな。元気になったらキリキリ働いてもらうぞ？」

『勿論だとも。キャプテンの熱い滾りをいつでも好きなだけぶつけてくれていいよ。私が全部受け止めてあげよう』

「そういう意味じゃないんだよなぁ……」

今はそういう冗談を楽しめる精神状態ではないんだよ。自らが蒔いた種とはいえ、女性関係があまりにもアレ過ぎる……俺が悪いんだけどさ。いや、本当に俺が悪いのか？　そこには若干議論の余地があるのでは？　少なくともセレナとクリスに関しては最大限の自制心を発揮してこの上なく慎重に接してきた筈だし。今更言っても後の祭り？　それはそう。

「あー、やめやめ。うじうじと悩んでも仕方ねぇや」

『キャプテン？』
「とりあえずネーヴェはウチで面倒見るから。こまけぇこたぁ全部元気になってからだ。ショーコ先生、帝都ならネーヴェの治療に必要な素材は全部揃うだろうから、必要なモノは忘れず発注かけておいてくれよ。請求は俺に回してくれ」
「いいのかい？　結構すると思うけど」
「最終的にはネーヴェ自身に稼いで返してもらうよ。ネーヴェが回復してクルーとして働けるようになったら、報酬から天引きする。ネーヴェもそれでいいな？」
『もちろんだよ、キャプテン。ちゃんと働いて返すさ』
「ならよし。それじゃあ一旦帰るか……いや、ウィルローズ子爵家に顔を出したほうが良いか？」

帝都に足を運んだのならエルマの実家に顔を出すのが礼儀というものだろう。前回は都合が合わなくてティーナとウィスカを紹介できていなかったし、クギやショーコ先生も紹介しなきゃいけない。
ちなみにティーナとウィスカ、それにメイにはブラックロータスで留守番をしてもらっている。整備士の二人はイクサーマル伯爵家の旗艦であるマジェスティックには連れて行っていなかったので今回の査問会に出席する必要がなかったし、メイに関しては帝城に入るとなると性能の封印処置などの面倒が多いという話だったので遠慮してもらったのだ。メイの所業に関しては所有者である俺の責任だから、本人――本人でいいのか？――の出席は必要ないって話だったし。

「今日は父様も兄様も仕事で家に居ないから、明日来なさいって母様が言ってたわ」
「そうか。なら今日のところはブラックロータスに戻るか。ネーヴェのことを考えるとそれが良いよな？」
「そうだねぇ。容態の急変だとかそういった心配はもうないけれど、

、メディカルベイの設備の方が安心はできるね」

と、話をしていると袖に何かが触れたような気がした。そちらへと視線を向けると、そこには手を引っ込めて俯くクリスの姿が。ああ、俺を騙したことを気にしてるんだな。

「クリスのとこにも遊びに行かないとな。明日はエルマの実家に行くから、クリスも一緒に行こうな。で、明後日はクリスのところにお邪魔しようか」

「……はい、あの」

「別にもう怒ってないから。それでもまだ気になるなら、明後日遊びに行った時に美味しいお菓子でも用意しておいてくれ」

「……はい、美味しいお菓子を用意しておきますね」

顔を上げたクリスが微かな笑みを浮かべる。うーん、背が伸びたから頭を撫でたりはしづらくなったな。まぁ、もう小さな女の子という感じでもなくなったから、ほいほいと頭を撫でるというかスキンシップを取るのは憚られるような感覚が強くなってしまったのだけど。

「明日はウィルローズ子爵家、明後日はクリスのところ、他にはええと……？」

「反乱阻止と国境防衛の件で受勲式もあると思うわよ。それと、ホールズ侯爵家の帝都屋敷にも顔を出す必要があるんじゃないかしら？」

「割と盛りだくさんだなぁ……とりあえず今日は帰ろうか。クリスもブラックロータスで一服していかないか？」

「はい、ご馳走になります」

今度は掛け値なしの笑顔を浮かべるクリス。うん、沈んだ表情で

俯いているよりもこっちのほうが良いな。
俺だって好き放題やってるんだから、多少のことには目を瞑らんとバチが当たるってもんだ。多少のことは笑って受け止められるような器の大きな男ってやつを目指すことにしよう。

#469　「それはなんというか、俺に都合が良過ぎないか？」
（前書き）

毛布が気持ち良すぎて三時間も寝坊した＾ｑ＾

#469　「それはなんというか、俺に都合が良過ぎないか？」

ブラックロータスで留守番をしていたメイとティーナ、ウィスカの三人も誘ってクリスを交えたお茶会――というほど高尚なものではないが、まぁとにかく一服した。

話題には事欠かなかったが、こちらの近況を話したり、あちらの近況を聞いたりと会話の内容は差し障りのないものに限ったのだが。

「結構アレだよな。立場的に話しづらいというか、話すのはまずい内容が結構あるよな」

「それは立場上仕方がないことかと……結婚すればそういうことも殆ど無くなると思いますけど」

「クリスと結婚ね……実際のところ、伯爵は本当に賛成してるのか？」

「はい、お祖父様はヒロ様との結婚について後押しをして下さっていますよ。お父様とお母様が亡くなって、叔父様もその……病死されたので。お祖父様が私に伯爵位を継がせると決めてからは婚約の申込みが殺到してきていたんですけど、お祖父様が言うにはどれもこれもダレインワルド伯爵家を食い物にしようと目論んでいる卑しい思惑が透けて見えると」

「そんな連中にクリスを差し出すくらいなら、どこの紐付きでもないヒロとクリスを結婚させて、クリスが一人前になるまで自分が後ろ盾になる方が良いってところかしら？」

「はっきりとそう仰ったわけでありませんが、恐らくはそんなところかと思います。ホールズ侯爵家との縁が思ったよりも強くなりそうなのは懸念点ですが、セレナ様はルシアーダ皇女殿下の唱えた序列論に異を唱えはしなかったので、なんとか折り合いはつけられるかと……ラウレンツ閣下もダレインワルド伯爵家に過剰に干渉する

つもりは無さそうでしたし。少なくとも、表面上は」
「あの、貴族というならエルマさんの実家もそうですよね？」
「うち？　うちは大丈夫よ。うちは領地持ちじゃないしね。権力闘争と無縁ってわけじゃないだろうけど、それはあくまでも宮廷内での話だし。宮廷の外でヒト、モノ、カネを大きく動かしたりする領地貴族とは土俵が違うから。まぁ、ダレインワルド伯爵家が宮廷というか、中央に何か干渉する時には私の実家は少しは力になれるかもしれないけど、私自身にそういうのを求められても、ねぇ？」

そう言ってエルマが肩を竦めてみせる。確かに、帝都で淑女らしくお茶会や舞踏会などに参加して社交界で活躍してるとかならともかく、早々に帝都から飛び出して傭兵稼業をしていたエルマにそっち方面で力を発揮しろって言ってもなぁ。

「それはそうだな。まぁ、その辺りは明日ウィルローズ家に行けば自ずと話し合うことになるか……クリスも行くよな？」
「私もご一緒してよろしいのですか？」
「勿論良いわよ。クリスのことをパパとママにも紹介したいしね。勿論ティーナ達もね」
「うちらはあん時は忙しかったからなぁ……」
「あはは……今となっては良い思い出……でもないね」

ティーナとウィスカの瞳からハイライトが消えている。あの時はスペース・ドウェルグ社の帝都支社から仕事を振られて文字通り忙殺されていたものな。

「エルマさんのご家族とお会いするのが楽しみです。どんな方々なのですか？　我が君」
「俺も少し話しただけなんだよな……今回は御前試合みたいなクソイベントも無いし、ゆっくりと腰を据えて交流したいもんだ。お義

兄様には世話になったしな」

エルマの兄であるエルンストにはニンジャアーマーを手に入れる際にアーマー専門店に口利きして貰ったからな。あっちは俺のことをあまり良く思っていないようだが、なんだかんだと言って頼ったらちゃんと応えてくれる良い人である。

エルマの家族については明日会ってのお楽しみということで、クリスとは合流する時間を決めて本日のお茶会は終わりにした。今日はなんというか精神的に疲れたな……もう風呂に入ってひたすらのんびりしたい。

☆★☆

テツジンが振る舞ってくれたディナーで腹を満たし、風呂に入った後はティーナとウィスカの二人とのんびりと過ごすことにした。今日は二人とも留守番をしてもらったので、その埋め合わせのようなものである。

「今日はお疲れさんやな、兄さん」

「身体はともかく精神的にな……身から出た錆だから仕方がないんだが」

「言うほど悪いものじゃないと思いますけどね。お兄さんは基本的に悪事は行ってないわけですし。クリス様もセレナ様もお兄さんの優しいところとか、人となりとか、勇敢さとか、そういうところに惹かれただけじゃないですか」

ベッドの上でぼやく俺に添い寝をしてくれているウィスカがフォローしてくれる。今の俺は船長室――つまり俺の部屋のベッドの上に寝転がっており、その両脇にティーナとウィスカが添い寝をしてくれているという両手ならぬ両脇に花スタイルだ。二人とも体が小

さいので、三人で寝転がってもベッドの広さにはまだまだ余裕がある。

「確かに積極的にコナをかけていった結果ってわけじゃないから、身から出た錆っていうのは言い過ぎかもしれないけどな。なんとか避けようと思って行動していたつもりだったのに、結局捕まったなぁという気はするな」

「言うてセレナさまはなぁ。最初から兄さんを逃すつもりなさそうだったけど」

「もうなんというかあれだよね。執念を感じたよね。狙った獲物は逃さないみたいな」

「兄さんはついに仕留められたってわけやな。仕留められたっちゅうよりは、兄さんが根負けしたというか情に負けて懐に入れたって感じやけど」

「お兄さんの優しさが自分の首を締めたって意味なら身から出た錆っていうのもあながち間違いじゃないかも？」

冷静に分析しないでくれ。その分析は俺に効く。まぁなんだ、俺の弱点と言えば弱点なんだろうな。身内に甘いというか、情を捨てられないというか。無論、セレナを見捨てるという選択肢はあった。だが、その選択肢を俺に取れたかというと……まぁ、巡り合わせというものなのだろうな。運命論だとかそういったものを信じてるわけじゃないが、そういう星の巡りだったのだと諦めよう。

「このままずるずると相手が増えないように気をつけるよ……現時点で二人は増えそうな見込みがあるのが頭が痛いけど」

「リンダとネーヴェやな。ネーヴェはともかく、リンダはどうやろなぁ。半々くらい？」

「そうかな？　なんだかんだ言ってあの子は義理立てしそうだけど」

「出会いも多いやろうし、何があるかわからんやろ。リンダはまだ

子供やしな。心境の変化とかもあるんやない？」
「リンダについては俺もティーナの意見に賛成だが、もうネーヴェに関しては決定事項なんだな……」
「お兄さんはああいう境遇の子を見捨てられないですよね？」
「うちらがいけるんやからネーヴェもいけるやろ？」
「わかった。俺の負けだ。感情的な意味と身体的な意味の両輪で攻めてくるのはやめてくれ……で、今のうちに聞いておきたいんだが、二人は今回の話に何か思うところはないのか？　今のうちに話しておいてくれると助かるんだが」

俺がそう聞くと、二人は同時に考え込んだ。二人とも目を瞑って「うーん」と唸っているのが可愛い。こういうちょっとした仕草が似ているのが可愛いんだな、この二人は。

「結局、結論としてはクリスさまが正妻になって、第二、第三夫人がそれぞれセレナさまとエルマ姐さん。で、ミミを含めてうちらは更にその下みたいな扱いになるんよね？」
「俺は誰が上で誰が下とかそういうのはなんか嫌なんだけどな……まぁ対外的というか、建前上はそうなるかな」
「私達は平民ですし、別に張り合おうとも思いません。ただ、お兄さんの赤ちゃんは欲しいです」
「極論、うちらは兄さんと書類上の結婚とかには拘らんよ。兄さんと一緒にいられるならそれで満足やし。でもウィーの言う通り赤ちゃんは欲しいなぁ」
「それはなんというか、俺に都合が良過ぎないか？」
「前にも言うた気がするけど、うちらは都合の良い女でええねん。最悪、子供ができた後に兄さんに捨てられたとしても、二人一緒ならどこででも生きていけるから」
「俺はそんなことしないが」

ティーナの物言いに思わずムッとする。子供だけ作って放り出すなんて真似をすると思われているとしたら流石に心外なんだが。

「わかってる。兄さんはそんなことせんよな。あくまで例え話や。つまり、兄さんから報酬としてう受け取ったお金もぎょうさんあるし、うちらは手に職もある。なんなら母ちゃんを頼っても良い。せやから、兄さんは何も心配しなくても良いってことや。うちらは兄さんがうちらを必要としてくれる限り、そばに居るよ」

そう言ってティーナは微笑み、俺にぴったりとくっついてきた。ウィスカも同じようにくっついてくる。

「お兄さんの好きなようにしてください。私達はお兄さんについていきますから。たまにこうやって甘えさせてくれればそれで満足です」

「俺が甘えられているというよりも、俺が甘えさせられているような気がするんだが……」

ぴったりとくっついてくる二人の高めの体温を感じながら天井に視線を向ける。

今になって思ったんだが、この二人も感情が結構重いというか、こう……湿度が高いような。いや、気のせいだ。きっとそうだ。俺の考えすぎだな、うん。

何にせよ二人がここまで慕ってくれているというのは嬉しい、というか誇らしいことだ。二人を裏切るような真似だけはしないようにしよう。

#470　「違うんすよ」（前書き）

歯が痛ァい！―（：3」∠）―（歯医者は三日後

#470　「違うんすよ」

整備士姉妹に精神的な疲れを癒やして貰った翌日、俺達はエルマの実家であるウィルローズ子爵家へと向かうことにした。

「行ってらっしゃいませ、ご主人様」
「また留守番ですまんな」
「お気になさらず。私のような機械知性は帝都ではあまり歓迎されませんので」

俺の謝罪にメイが首を振ってそう答える。
まだネーヴェは医療ポッドから出て歩くことができないので、側に医療知識を持つ者が控えている必要がある。そうなると適任者はショーコ先生かメイしかいない。今回、ウィルローズ子爵家に行く理由の一つはクルーとウィルローズ子爵家の人々との顔合わせでもあるので、ショーコ先生は同行したほうが良い……となると、自然と留守番役はメイになってしまうのである。

「それに、今日はその埋め合わせをしていただけるそうなので」
「あ、はい」

今日はブラックロータスに帰ったらメイを甘やかす……いや、メイに甘やかされることになりそうだ。

「ほら、準備ができたなら行くわよ。メイ、留守番をよろしくね」
「行ってきますね！」
「はい、エルマ様。ミミ様。皆様も行ってらっしゃいませ」

そう言ってお辞儀をするメイに送り出され、俺達は帝都のウィルローズ子爵家へと向かった・

☆★☆

「お嬢様を狙う不逞の輩め！　覚悟！」
「セレナ嬢の伴侶の座はこの私が頂く！　覚悟！」
「貴族もどき風情が生意気な！　覚悟！」

「みたいな感じで襲われたりするんじゃないかと思ってたんですけど、意外とそういうのが無いんですよね」
「流石に今のヒロ殿にそんな無謀な行為をする者はいないと思うが……」

俺の発言にエルマの父であるエルドムア・ウィルローズ子爵が苦笑いを浮かべる。その横ではエルマの兄であるエルンストが仏頂面でお茶を飲んでいた。
ウィルローズ子爵家に無事到着した俺達は早速顔合わせというか自己紹介を互いに終え、男性陣と女性陣に分かれて和気藹々と――どう見てもこっちは和気藹々としていないが――交流をしていた。

「今の、とは？」
「お前の所業が貴族の間で出回っている。イクサーマル伯爵家のボンクラから奪った剣一本で奴の首を容赦なく叩き切り、数十人の完全武装の私兵を相手に大暴れをしたという話がな。怒らせれば伯爵家の跡取りの首さえ容赦なく叩き切るような奴に喧嘩を売るのは余程の馬鹿だけだ」
「えぇ……？　それ、一応機密事項の筈なんですが……？」
「意図的に情報が流されているのだろうね。査問会メンバーのどなたかから」

「あの人か……」

にこやかな笑みを浮かべた美丈夫の顔が脳裏をよぎる。恐らくセレナの父君であるラウレンツ氏の仕業なのだろうが、意図が読めない。

「つまりだね、そのように凶暴な手駒を手中に収めたと喧伝すると同時に、その手駒に手を出すということはどういうことかわかっているな？　とも言っているわけだよ。ホールズ侯爵家といえば武門の名門で、その影響力は図りしれぬほどに強いし、複数の軍事品製造メーカーとのパイプも太い。つまり、権力も軍事力も資金力も大変に強い名家だ。帝国内でも上から数えたほうが早いくらいの指折りの実力を持つ家なのだよ。下手に突っかかろうものなら……」

そこまで言ってエルドムアが肩を竦めてみせる。侯爵家というだけでホールズ侯爵家の力はとんでもないものなのだろうなと漠然と考えていたんだが、こうして本物の宮廷貴族であるお義父さんんから話を聞くとより一層そのヤバさが伝わってくるな。

「ウィルローズ子爵家はエッティンゲン侯爵の派閥なのだがね……まぁ、エッティンゲン侯爵とホールズ侯爵は不仲というわけではないから大丈夫だろうが……」

そう言いつつもエルドムアは胃の辺りをさすっている。なんか申し訳ねぇ。

「ちなみにエッティンゲン侯爵というのは……？」

「ごく簡単に言えば帝都を縄張りとする貴族の中でも帝室を支持している派閥の長といったところだ。ホールズ侯爵家は広大な領地を持つ在地貴族だが、どちらかと言えば帝室支持派だ。だから、両家

の関係は悪くない」

俺の質問にエルンストが答えてくれる。仏頂面を見せつつもちゃんと親切に教えてくれる辺り、やはりエルマの兄なのだなとつくづく思う。根本的なところで優しいというか、面倒見が良いというか。

「しかしあれだな……お前はこう、見境がないな」

「違うんすよ」

ジト目を向けながらそう言うエルンストに弁明しようとする。

「我々には真似できそうにないな……我々エルフはこう、そこまで旺盛じゃなくてね」

「だから違うんすよ。いや事実だけを見るとそうなんですけど、違うんすよ。話を聞いてください」

エルドムアにまで言われて俺は必死に弁明することにした。

「違うって言ってもお前、何人だ？　あそこにいるだけで六人だぞ。メイドロイドもいるんだろう？　他にもいるんじゃないのか？」

「……いや、いないっすね。今のところは」

ネーヴェは将来的にそうなりそうな気がするが、リンダはわからないし。他には……いないよな？　え？　ティニア？　いやティニアは無いな。リンダと違って彼女には宇宙に出てくる理由が何一つ無いし。

「目が泳いでいるぞ」

「違うんすよ。聞いてくださいよ」

俺は必死に弁明した。これは避けえぬことっだったのだと。俺を除いたクルーが全員女性なので、今更男性クルーを入れるわけにもいかないということも併せて説明した。どう考えてもトラブルの元にしかならないからな。

「何もかも今更だから、とやかくは言わないがね……だが、うちの娘を蔑ろにしたらどうなるかはわかるね？」

「蔑ろにできるわけがないですし、する気も一切無いです」

そんなことをしたら首の骨をへし折られそうだし、それ以前にエルマはかけがえのないパートナーだ。俺がエルマに見切りをつけられることは有りえるかもしれないが、逆は無いだろう。エルマは俺が居なくても一人で生きていけるかもしれないが、俺はエルマがいないと困り果ててしまう。

「なら良いがね。正式な婚約の儀については三家が関わることだから、こちらで協議しておく。事の次第が決まったら連絡するので、そのつもりでいなさい」

「やっぱりあるんですね、そういうの」

「当たり前だろうが……お前、貴族の娘を三人も正式に娶るのに適当に済ませられると思っているのか？」

「世間知らずな上に帝国の一般常識に疎いもので」

「これだから傭兵というやつは……」

エルンストが心底呆れたといった様子で深い溜め息を吐く。そんなこと言われても知らないものは知らないのだから仕方があるまい。何かあるとは思ってはいたよ。それが具体的にどういうものか知らなかっただけで。

「それよりあっちは楽しそうっすね」

「ミルフィもエルフィンも話し好きだからな……」

女性陣の方に目を向けると、あちらはお茶会というか世間話に花を咲かせているようで大変楽しそうにしている。

「こっちも世間話に花を咲かせますか……お義兄さん、なんか話題振ってくださいよ」

「俺を義兄と呼ぶなと……いや、義兄になるのか。結局なるのか。はぁ……」

「クソでかい溜息っすね」

「誰のせいだと……まぁいい。そうだな、それは今話題のホールズ侯爵令嬢との馴れ初めについて聞かせてもらうか。最初から全部」

「最初から？　それは長い話になるなぁ……」

そう言いながらもセレナと初めて出会ったターメーン星系でのことを思い出す。そう言えばうちのメンバーの中では実は一番最初に顔を合わせた相手でもあるんだよな。

「最初に顔を合わせたのはターメーン星系の港湾管理局にある取調室でね」

興味深そうに耳を傾けるエルドムアとエルンストの二人に向け、俺はセレナとの出会いから今に至る長い話を話し始める。本当に長い話になりそうだ。

#471　「フリじゃないですよ。絶対だぞ」（前書き）

これが読まれる頃、私は歯医者から帰ってきてシケ顔になっていることでしょう（ ' ω' ）

#471　「フリじゃないですよ。絶対だぞ」

「「もう運命だな」」

セレナとの出会いから今に至るまでの思い出を一通り話すと、エルドムアとエルンストの二人に声を揃えてそう言われた。

「親子で声揃えて言うのやめてもらえます？」

「とは言うがね、いくら意図的に追ったとしてもそんな頻度で顔を合わせるわけがないと思うのだが」

「標的が同じ宙賊で、帝国領内で活動しているということを差し引いても異常だ。一体どれだけの星系が帝国の支配下にあると思っている？　軽く三千を超えるんだぞ？」

「現実を突きつけるのをやめてくれ……」

まぁ、無意識的にだが俺はその運命を操作しているらしいしなぁ……具体的にどうやっているのかはわからないが、無意識で「セレナと再会する」という運命を何度も引き寄せているのだとしたら、それはもう運命的であるというウィルローズ親子の主張もあながち否定はできないのだろう。

そうすると、俺は無意識下でセレナをずっと求めていたのだということになるわけだが……面倒くさいとか言いながらも俺は無意識下でセレナを求めていたということか？　それはなんか恥ずかしいな……俺の運命操作能力に関しては絶対にセレナには知られないようにしなければならない。

セレナのことだから絶対に「あれだけ邪険に扱ってたくせにやっぱり私のことが大好きだったんですね！」とか勝ち誇った顔で言ってきそう。そんなの耐えられれん……。

「最後のひと押しは陛下の手で、か……やはり最初から逃れられなかったのでは？」
「こうなることを予測して陛下が介入したと？」
「陛下の深謀遠慮はもはや人の領域を超えていらっしゃるからな……」
「帝国の辺境で民間の輸送艦が一隻宙賊に襲われた、といった些細なことも全て把握していらっしゃると言われるほどだ」
「あー……それはね。マジであるかもしれない」

以前あのファッキンエンペラーと初めて顔を合わせて話をした時にも俺とクリシュナがターメーン星系に現れた瞬間からして把握していたし、その後コロニーに辿り着いた俺がクリシュナに引きこもって情報収集していた内容も、俺がどんな心理状態で情報収集をしていたのかも全て筒抜けだったからな。あの時もそうだったが、今思い出してもゾッとする。
などと考えながらちらりと女性陣に目を向けると、先程までの和やかかつ華やかな雑談は鳴りを潜めて今度は何か額を突き合わせてヒソヒソと話している。何か嫌な予感がするな。

「ところで先に聞いておきますけど、エルフィンさんはお付き合いとか婚約とかされている方は？」

エルフィンさんというのはエルマのお姉さんである。なんかさっきからチラチラと視線を感じるんだよな、あっちから。

「……それを聞いてどうするつもりかね？」
「どうするつもりもないってことを先に言っておきたいだけです。なんか面白そうだからついていくとか、皆に聞いてみたらなんか相性良さそうだから私も、とか仮に言い始めたら絶対に止めてくださ

いね。フリじゃないですよ。絶対だぞ」
「家長として絶対に止めるから安心してくれ……」
「そんな悪夢みたいなことは絶対に実現させんから心配するな」

□■□

「実際のところ、どうなの？」
「どうって言われても……何が聞きたいのかはっきり言って欲しいわね」

姉様が興味津々といった様子で聞いてくる。言いたいことはなんとなく分かるけど、あまり答えたくない。

「人となりとか、身体の相性とか」
「わ、私も気になります……！」
「……後ろの方は聞かなかったことにしておくわ。大体において誠実だし、私達を尊重してくれてると思うわよ？　ヒロなりに気がつく範囲で配慮してくれてると思うし」

明らかに後半の方に力が入っている姉様とクリスの興味をスルーしてヒロの人となりを無難に述べておく。正直ヒロってかなり浮世離れしてるとは思うのよね。でも、それは彼の出自に関わることだから、いくら家族相手でも公言はできない。

「えー？　でもほら、こんなにいるじゃない？　皆不満とか無いの？」
「うーん、勿論全くないとは言いませんけど、ヒロ様の身体は一つですし。そこは折り合いをつけけてますよ」

微妙に口を尖らせながら言う姉様をミミが上手くいなす。ミミも

頼もしくなったわよね。船に乗ったばかりの頃は何をやるにもビクビクして小動物みたいだったのに。

「いくら兄さんが頼りがいあっても、流石に皆で寄っかかったら潰れてしまうさかい。そこはうちらも一緒に支え合うってことやね」

「お兄さんという柱を中心として、私達自身も柱となって互いに支え合ってる感じです。その辺りの調整はメイさんが上手くやってくれてますよね」

「はい。メイさんは我が君を中心とした集団の調整役として上手く差配をしてくださっていると思います」

ティーナ達の意見にクギが乗っかる。ティーナ達に関しては今更言うこともないけど、クギは如才ないわ。ヒロよりもずっと浮世離れした性格のはずなのに、こういう場ではそれをまったく感じさせない。

「ヒロくんが表のリーダーだとすればメイくんは裏のリーダーだよねぇ。まぁ、恐らく彼女達の観察対象として極めて興味深いのだろうね。明らかなバックアップを受けてるよ」

「あー……ヒロは気にしてないけど、メイは優秀よね。異常に」

ショーコ先生のメイへの評価には私も同意する。確かにメイの優秀さは異常よね。フルスペックのメイドロイドなら優秀なのは当然なのだけど、それに輪をかけて彼女は優秀だ。

「やっぱりそういうことなんですか？」

「まぁ、間違いないかと」

ミミの疑問にクリスが苦笑いを浮かべながら答える。別に悪いことは何もないのだけれど、彼女達は強かと表現するのも生ぬるい程

度にはやり手だから。ヒロのような特殊な存在を前にして彼女達が何も行動を起こさないなどということは絶対にありえない。まず間違いなくメイは機械知性達の大いなる支援を受けていることだろう。

「彼女達は個にして全、全にして個の存在だからねぇ。いくらメイくんがオーダーメイドのフルスペック機とは言っても、あの優秀さは異常だよ。多分彼女達が独自開発したって噂の反エントロピー演算器とか入ってるんじゃないかな？」

「熱を利用して演算を行って低温になっていくっていうやつ？　あれほんまに存在するん？」

「彼女達は実用化しているという噂だね。エネルギーを使って演算し、熱を発生させる通常の陽電子頭脳と組み合わせれば冷却装置を必要としなくなる上に演算能力が跳ね上がるってわけだ」

「まさかと思う自分と、やっぱりと思う自分がせめぎ合ってる……」

メイの異常な性能の話になった途端、うちのインテリ達が技術論議に脱線し始める。

「あー、もう。テッキーが三人もいるとすぐそっちに脱線するわね。今はそっちの話はやめよ、やめ。メイが優秀で困ることなんてない。オーケー？」

「はいはい、そうだね。それじゃあ身体の相性の話でもするかい？　エルマくんにとってはある意味鬼門だと思うけど」

「……そっちの話もなし。いくら家族相手でもそういうのはあまりオープンにすることじゃないと思うの」

混ぜっ返してきたショーコ先生に正論をぶつける。だが、私のささやかな抵抗はニヤリと笑ったティーナに呆気なく破壊された。

「まぁ競うことでもないしなぁ。ちなみにうちはウィーと一緒に可

愛がられる事が多いで」
「ドワーフ二人相手にってちょっと凄くない？」
「その……まぁ、実際すごいと思います」

頬を染めて口元を隠しつつ、まさに興味津々といった感じで姉様が聞き返し、ウィスカが顔を赤くしながらもじもじとしはじめる。クリスなんて顔を真赤にして鼻息も荒いし……次期伯爵様、はしたないわよ。

「私はいつも先にダウンしちゃいます……もっと体力をつけないと」
「此の身もですね……でも、我が君は優しいですよね？」
「乱暴なことはしないねぇ」
「だからやめなさいって」

皆が話題に乗り始めてしまった。こうなるともう止まらない。
その話題はやめましょう？　ね？　なんでって……話したくないからよ！　ミミはわかってるでしょ！　母様、その顔をやめて。

「エルフの女はそういうものだから」
「やめてってば！」

私の叫びも虚しく、全ては詳らかにされてしまった。もうやだ。

#472 「問題しかありませんが！？」（前書き）

ワイトもそう思います（ ，ω， ）（天気がめっちゃ悪かったけど頑張った

#472　「問題しかありませんが！？」

翌日はダレインワルド伯爵家の帝都屋敷でクリスの歓待を受け、皆で軽く買い物などを……いや、軽くないな？　ほぼ半日あちこち歩き回って最新の寝具だのなんだのといった生活雑貨の類を買って回ったのは軽くじゃねぇな？

「うーん、こっちの方が肌触りが良いですね」
「肌触りが良いのは良いけど、寝る時に暑くない？」
「私、寒がりなのでこれくらいのほうが良いかもです。クリスちゃんもそうですよね？」
「前まではそうだったんですけど、強化してからはどちらかと言うと暑がりになっちゃったんですよね……」

ミミとエルマ、クリスは熱心に毛布のようなものを手にしてああだこうだと話し合っていた。
身体強化すると体質が大きく変わって暑がりになったりするんだな……。

「洗うのが楽なのが一番とちゃう？」
「寝具選びは大事だよ、お姉ちゃん。寝具の質は人生の質だよ」
「滅茶苦茶マジトーンやん……」

安さと洗いやすさを優先しようとするティーナをウィスカが真顔で止め、その迫力にドン引きするティーナがいたり……ウィスカってたまに変なこだわりを発揮するよな。

「私は寝具よりもこっちの椅子のほうが気になるなぁ」

「先生はちゃんとベッドで寝たほうがよろしいかと思います」
「いやいや、椅子で寝るのも良いものだよ？　なに、質が良ければベッドと変わらないさ」

寝具を選んで――一部寝具でないものを選んでるのもいるが――いるだけでこれなので、それはもう目立ちまくったよね。あれはどういう集団だ？　みたいな目で見られたよ。そりゃクリスとその護衛も含めると十人近い集団だものな。大所帯と言っても過言ではない。目立ちまくる。クリスにはひと目でそうとわかる護衛もついてるしな。クリスがやんごとなき身分のご令嬢であることは一目瞭然だ。

尤も、実際にはご令嬢ではなく次期伯爵なのだが。身分を公言しなければまだギリギリただの高位貴族の娘として振る舞っても許されるらしい。

実を言うと星系一つを支配する総督ともなれば公式には無位無冠の貴族の娘であっても男爵相当の扱いをされるのだそうだ。そうなるとこのように友人と一緒に店頭の売り場で直接商品を手に取ってああだこうだと商品を選ぶことなど許されない。基本的には商人を家に呼びつけて買い物をすることになるのだそうだ。少なくとも、帝都においては。

え？　名誉子爵の俺はって？　俺も望めばそうすることもできるらしいが、名誉爵位というのはちょっと扱いが微妙という話でな。世襲もできないし、真の意味で貴族としては扱われないわけだ。ただ、貴族同士の格という話になると話がまた少し変わってくるそうなのだが……詳しくメイに説明されたのだが、右の耳から左の耳に説明が通り抜けてしまってな。あまり覚えていないんだ。ガハハ。

で、買い物を終えた俺達は船に戻ったわけだが。

「いけません、お嬢様」
「大丈夫です。ここより安全な場所などそうありませんから」

「お館様からもきつく言われておりますので、これだけは引き下がれません。お嬢様、お屋敷に帰りましょう」
「嫌です」

船でお茶を一服し、そろそろ夕食でもという時になってそれは勃発した。

「今日はブラックロータスに泊まります。エデルトルートはお屋敷に戻って良いですよ」
「つまり、お嬢様は一人でここに残るということですよね？」
「そうですが、何か問題が？」
「問題しかありませんが！？」

ダレインワルド次期伯爵様とその護衛の騎士様がキャンキャンとじゃれ合いを始めた。いや、本人達にとっては至極真面目な言い争いなのだろうが……平和だなぁ。

「見てるだけで良いの？」

炭酸の抜けたコーラのような何かを片手に事態を傍観していたのだが、エルマが声をかけてきた。うーん、俺は正直どっちでも良いんだが。

「介入したほうが良いか？」
「それはヒロの好きにしたら良いと思うけど……」

そう言ってエルマが視線を向ける先にはハラハラとしながらクリスとその護衛であるエデルトルートが言い争うのを見つめているミミがいた。仕方ねぇなぁ。

「あー、はい。やめやめ。そこで言い争うのはやめよう。泣きそうになってる娘もいるんで」
「あ、ぅ……申し訳ありません、ヒロ様」
俺に声をかけられたクリスがシュンと縮こまる。
「うん、怒ってるわけじゃないからそこまで縮こまらなくて良いぞ。エデルトルートの懸念は当然ながら俺の存在だよな？　ああ、言うまでもないことだから返事は結構だ。クリスも別にこの期に及んで俺と既成事実を作ろうとか考えているわけじゃないだろう？　久々にミミとお泊りしたいとか、そういうことだよな？」
「は、はい。そうです……よ？」
若干返事が怪しいが、言質は取った。ならよし。
「ならこうしよう。俺は今日外泊する。どうしてもクリスが心配ってことならエデルトルートもブラックロータスに泊まっていけば良い。そうすれば万事解決だな？」
「い……いやいやいや、万事解決ではありませんよ！？　女性が男性の船に乗って一夜を過ごすということの意味は知っていますよね！？」
「エデルトルートに関しては知らんが、クリスに関しては今更だろ？　前にも俺の船に長々と乗った上にリゾート惑星でお泊りすらしてる。それに、今後正式に婚約なり結婚なりをするならかえって対外的には既成事実になって都合が良いんじゃないか？　肉体的な意味での既成事実に関しては、俺がダレインワルド伯爵本人に直接確認を取るまでは作るつもりはないが」
「いや、それは……そう、ですかね？」
エデルトルートが首を傾げる。俺がそう思うだけで君がどう思う

かはわからんし、貴族的な意味での一般常識に欠ける俺には判断はできんが。

「とにかく、エデルトルートが懸念しているのが俺だってことならそれで良いだろう。あとはよろしくやってくれ。俺はメイと一緒に外泊するから」

「……メイと行くの？」

「駄目か？　二日連続で留守番とネーヴェのお世話をしてもらったから、労いたいと思うんだが」

尤も、メイは飲み食いもしなければ大凡物欲というものも持ち合わせてはいないので、特別に何かしてやるということもないのだが。敢えて言うならこの上なく甲斐甲斐しくお世話されてあげるのが彼女にとって一番のご褒美ということになるのかもしれない。

「……そういうことなら仕方がないわね」

若干残念そうな雰囲気を醸し出しつつ、エルマが納得してくれた。

ここで俺が誰か一人を指名するって時にメイ以外を選んだら角が立つってことくらいは俺にだってわかるんだ。だからそんなに残念そうにしないでくれ。

あと、ミミとクリス。そんな露骨に目論見が外れたみたいな顔をするのをやめなさい。特にミミ。

どうもミミは俺とクリスを割と強引にくっつけようとしているフシがあるんだよな。そういう意味ではもうチェックメイトしてるんだから、焦らずにことの成り行きに身を任せるべきだとおもうんだけどな。俺は。

☆★☆

「ご主人様。この度はこの私をお供に選んでくださりありがとうございます」
「いや、礼を言われるようなことじゃないけどな……」

あれから凡そ二時間後。外泊の準備をした俺はメイと共にブラックロータスを後にし、高級な空中タクシーめいた代物に乗ってそこそこに高級なホテルへと移動した。

そして今は無事にチェックインを済ませ、部屋の確認などを終えて早速ご奉仕されながら直ぐ側に傅いたメイから謝辞なんぞを述べられているというわけだ。まぁ、ご奉仕と言っても備え付けのティーセットで淹れた高級そうなお茶を供されているだけなのだが。

「お疲れのようですね」
「まぁね……自縄自縛というか身から出た錆というか。誰かが悪いわけではないんだが」

敢えて言うなら俺をクリーオン星系に送り込んだファッキンエンペラーか、そもそも売国と反乱なんぞを考えたイクサーマル伯爵家の連中が悪いんだろうけど、前者には文句を言うのも簡単じゃないし後者は概ね滅びたようなものなので文句を言う先がない。そもそも跡取りは俺がこの手で処したしな。それに比べれば帝国貴族と逃れようのない縁を結ばざるを得なくなり、それに振り回される程度は安いものか。

「ご主人様は今の状況を憂いておられますか？」
「いや？　ちょっと疲れただけで嫌になったわけじゃないな。セレナやクリスとはいつか決着をつけないととは思ってたし……こういう形に落ち着くとは思ってなかったが。いや、そうでもないか？何れにせよ手を出すとなったらこうなっていたか」

ウィルローズ子爵家でも言われたようにこれも運命なのだろう。うじうじ悩んでも仕方ねぇし、なるようになれだ。

「まぁその話は置いておこうか。後は帝都で受勲式か何かをやるのに参加して、その後はまた
自由な傭兵稼業……とは行かんか。ホールズ侯爵領かダレインワルド伯爵領に顔出しが要るかな」
「そうなるかもしれませんが、ご主人様の思うようになさるのが一番かと。極論を言えば、ご主人様が貴族の流儀に縛られ、従う必要はありませんので」
「そうはいかないんじゃないか？」
「いいえ、そんなことはありません。寧ろ、相手の都合に合わせない方が良いかもしれません。譲れば付け込まれます。弱みを見せ、どこまでがセーフで、どこからがアウトなのか一度見極められてしまうと確実に。どこまでも」
「なるほど」

ありそうな話だ。例えば俺を都合よく操るためにセレナをダシにするだとか、身内の情をダシにするだとか、誰かうちのクルーの家族――例えばウィルローズ子爵家の人達だとか、整備士姉妹の母であるシェーラさんだとか、あの辺りを助けるためにだとか適当に理由をつけて良いように使われるなんてこともあるかもしれない。
ダレインワルド伯爵はそういうことをやるような人じゃないと思うが、セレナの父であるラウレンツ・ホールズ侯爵その人がどう出るかはわかったものではない。どうにも謀に長けている人であるようだしな。

「なら少し遠くに足を伸ばしてみるのもアリかもしれないな」
「遠くに、ですか？」
「一度帝国から出て距離を置くのもアリじゃないか？　例えばヴェ

ルザルス神聖帝国とかな」
「……なるほど。それは予想外のオプションでした」
珍しく少し目を見開いてパチクリとさせるメイなんてものを見れてしまった。これはレアな感情表現だな。
「メイの裏をかけたなら俺もなかなかだな。まぁ案の一つとしてだけども。その他には新しい母艦の調達のためにシップメーカーのある星系に行くのもアリだ。ブラックロータスよりも居住性が高くて、中型艦も収容できるハンガーがあるような母船をな」
「それはまたお金がかかりそうなお話ですね」
「そうだな。またどこかのメイドロイドがあれもこれもと武装をモリモリにして金額が嵩むかもしれない」
「その節はご迷惑をおかけしました」
「結果的に大正解だったけどな。だから今度も思うように口を出してくれ。他には、そうだなぁ……」
メイを相手にこれからの予定というか、未来への展望を話すのはとても楽しいな。メイは本当に聞き上手だ。とりとめもない話を真面目に聞いてくれるし。
そんな感じでメイとゆっくりとおしゃべりをしたり、疲れた身体を凝り解してもらったりとメイとの二人きりの時間を存分に堪能する俺なのであった。
あっちの女性陣は一体どんな話をしているのかね？　いや、想像するのはやめておこう。その方が良い気がする。

#473　「それは言ったらダメなやつだろう……」（前書き）

ノーマンズスカイ再走。

何だこれめっちゃ別ゲー（ ' ω' ）（発売当初に走った人

#473　「それは言ったらダメなやつだろう……」

「「……」」
「……何かな？」
「ひゃいっ！？　な、なんでもないです……よ？」
「わ、わわわ、わたしもなんでもないですわ？」

翌日、メイと一緒にブラックロータスへ戻ったら、まだクリスとエデルトルートがいたのだが
……顔を合わせるなり俺の顔をガン見である。それで声をかけたらこの反応である。明らかになんでもなくないし、エデルトルートに至っては口調までおかしくなっている。君はそんなアニメにでも出てきそうなステロタイプなお嬢様言葉じゃなかっただろう。

「……さては見せたな？」
「兄さん、なんでうちらに聞くん？」
「ナニをとは言わないが、撮ってるのは君らくらいだろ……」

じっとりとした半目の視線を向けてやると、ティーナもウィスカも天井に目を向けて口笛を吹いたり、露骨に視線を逸したりしはじめた。本当にナニをとは言わないが、この二人くらいだからな。所謂『記録映像』的な物を撮って楽しんでるのは。俺にはそういう趣味はないから撮ってないぞ。メイは撮ってるかもしれないが、それを公言したことはないな。まぁ、メイの場合は撮る撮らない以前に確実にログが残るだろうけども。そのログを保存しているかどうかは……いやしてそうだな。絶対にしてる。だってメイドロイドだし。

「ミミ？」

「え、ええと……あはは」
「露骨に笑って誤魔化そうとするじゃん」
「まぁ、参考にはなったわ」
「参考になるか？　無理じゃない？」
「うるさいわね！」
「とてもいたい……」

澄ました顔で「参考になったわ（キリッ」とか言うからちょっとからかっただけなのに、そんなマジでローキックすることないだろう……エルマの場合参考にするしない以前の話だからなぁ。感度が良すぎて。何のとは言わないけど。

「我が君」
「何かな？」
「此の身は今まで以上に励みたいと思います」
「そうか……」

真面目な表情でジッと俺を見つめてくるクギに「何を」とは聞かなかった。もう良いって？　俺はこれでもＴＰＯは弁えるんだよ。そこそこに。今はとりあえずこの流れをどうにかしよう。

「あー、ごほんごほん。とりあえずその話は横に置いておいてだな？　今後の予定について少し話しておきたいんだが」
「今後の予定ですか？」
「うん。この後あるであろう表彰式だか受勲式だかなんだかを終えた後の予定だな。本来であればホールズ侯爵領なりダレインワルド伯爵領なりに行くのが筋だろうが、俺としては一度ヴェルザルス神聖帝国に足を伸ばすのもアリだと思ってる。あるいは、ブラックロータスの次の母艦を調達するかだな」
「ひ、ヒロ様……？　帝国から出て行ってしまわれるのですか……

？」

クリスが目を見開いて呆然としている。

「いやいや、今後も活動の中心は帝国にするつもりだ。クギの故郷であるヴェルザルス神聖帝国には俺のルーツに関する情報とかがありそうでな。それに、サイオニック能力関連でも少し興味がある。クギ曰く、俺はなんかＶＩＰ待遇を受けられるという話だし。もしかしたらまだ見ぬサイオニック関連のテクノロジーを使った船の装備とかも手に入るかもしれないというのもある」

「……一時的な滞在で、すぐに戻って来るということでしょうか？」

「そうだな。観光旅行に行くくらいの気持ちだ」

「良かったです……もしかしたらその、今回の件で嫌われてしまったのかと……」

そう言ってクリスが胸を撫で下ろす。

「ああ、婚約とか結婚とかそういうのが面倒臭くなったとかか？いや、流石にこのタイミングで国外逃亡するのはクズ過ぎるだろう。クリス相手にそんなことはしないよ」

セレナだけの話だったら？　あったかもしれないな。もしダレインワルド伯爵家がクリス経由で今回の婚約なり結婚なりの話に絡んでこなかったら、あの人なら俺を取り込むために何か手を打ったかもしれない。それが俺にとって受け入れられないものだったりした場合、国外逃亡というのは一つの選択肢として有り得たことだろう。

ただ、ラウレンツ氏の話しぶりからすると俺を敵に回すような真似はしなさそうではあるんだよな。ホールズ侯爵家の長い歴史の中で、俺のようにちょっと数奇な運命を持ち合わせている存在と何度か接触した記録があるとか言っていたし。なんかニュアンス的には

敵に回すと危ないのはわかっている、みたいな感じだった。

「安心しました……とても」

「そいつは何より。で、この考えはどうだろうか？　クギ」

「はい、我が君。我が君を此の身どもの国にお招きできるのであればこれ以上無い幸いです。そうと決まれば此の身どもの聖堂に連絡を取って受け入れの準備を進めますが、如何致しましょう？」

「ああ、それは流石に本決まりしてからの方が良いな。ヴェルザルス神聖帝国に行くにしても、まずはダレインワルド伯爵領に寄って惑星上居住地に土地を確保してからということにした方が良いかもしれないし」

「土地の確保ということは、ついにですね？」

「ついにだな」

俺のとりあえずの目標であった庭付き一戸建てを得る算段をつけようという話である。

惑星上の居住地に居住権と土地を得るには帝国の一等市民権が必要なのだが、俺とミミは前回帝都を訪れた際に皇帝陛下から褒美として一等市民権を付与されている。エルマは子爵家の令嬢として生まれているので最初から一等市民権を所有しており、一等市民権を持つ市民一人に付き二人……いや三人だっけ？　どっちか忘れたが一等市民権を持たない人間を惑星上居住地に連れて行くことができる権利があるので、一等市民権を持たないティーナやウィスカ、クギ、ショーコ先生にネーヴェなんかも惑星上居住地に住むことができるわけだ。

メイ？　メイはメイドロイドなので俺の所有物扱いだな。一応機械知性にも人権が認められているからそういうわけにはいかないのでは？　と思わなくもないのだが、機械知性に関してはその辺の扱いが特殊らしい。

「そう上手く行くと良いんだけど……」
「えっ、何か問題があるのか？」
「無いはずよ。市民権の問題も無いし、ダレインワルド伯爵家が協力してくれるなら土地の確保も構造体の建造も問題無いはずなんだけど、どうも今までのことを考えると……ねぇ？」
「それは言ったらダメなやつだろう……」

何らかのトラブルで上手く行かない、なんてのは容易に考えられるだけに俺は絶対に口にしないようにしていたというのに。有り得るんだよなぁ。俺の場合。その時何か不思議なことが起こった！って感じで完成間近の家が吹き飛ぶことすらありえる。

「母船も買い替えるん？」
「ああ、今はエルマのアントリオンを外部ドッキングポートを使って無理矢理運用してるだろ？　中型艦が入れるハンガーを持った母艦に乗り換えるのもアリかなと思ってる。幸い、予算は十分にあるしな」

流用できるモジュールは流用しつつ、ブラックロータスを下取りに出せば予算は余裕で足りるはずだ。それに、搭載している兵器の大半はそのまま使えるだろう。

「なるほど。それじゃあ希望に合いそうなのをいくつか見繕っておきますね」
「任せた。プロに選んでもらえるなら安心だな」

元シップメーカーの二人なら大外れのものをピックアップするということもあるまい。実際にブラックロータスの運用も見てきているのだから尚更だ。
実際にどこから、というかどれから手を付けるのかというのは決

まっていないが、母船の乗り換えに関してはいつ検討を始めても良い案件だからな。
と、そんな話をしていると俺の小型情報端末から着信音が鳴った。セレナからか。

「セレナからのメッセージだ。三日後の昼前に式典をやるらしい。また勲章を貰えるっぽいな。服装は準正装でよし、と。前に着た服で良いかな……？」
「新しく仕立てましょう！」
「そうした方がいいわよ」
「私もそうした方が良いと思います」
「はい」

ミミ、エルマ、クリスの三人から流れるように連続で新しく仕立てろと言われた。別にカネに困ってるわけじゃないから仕立てるのは構わないけど、面倒じゃん……まぁ三人がそう言うならそうするけどさ。

#474　「……いつもこんな調子なんですか？」（前書き）

ちょっと所用で作業が遅れました（ ˇ ω ˇ ）（ノーマンズスカイたーのしー

#474　「……いつもこんな調子なんですか？」

セレナからのメッセージを受け取った三日後、俺達は揃って帝城へと出頭すべく、ブラックロータスで衣装の確認をしていた。

ああ、揃ってと言ってもクリスは一緒には行かないぞ。今日は傭兵としての活躍を表彰されるイベントだから、クリスが俺達と一緒に式典に参加する理由がない。ダレインワルド伯爵の名代としては参加しているだろうけどな。

あと、メイとネーヴェも一緒には行かない。メイは機械知性だから一応人権は認められているのだが、こういったイベントに参加する資格は無い。少なくとも、俺のメイドロイドでいる間は彼女の為したことは俺が為したことにカウントされる。俺から独立してメイというういち機械知性として活動を始めたら話は別なんだとかなんとか……なんかその辺りの事情は複雑怪奇でよくわからん。

「どうや、兄さん。似合ってる？」

「おう、似合ってる似合ってる。可愛いぞ」

自身の髪の毛の色と同じ赤をアクセントにした黒いドレスを着たティーナを褒める。雑な賛辞に聞こえるかもしれないが、率直に言って本当に可愛いのである。

「そこは綺麗って言ってぇな。一応うちも大人のレディーなんやし」

「可愛い可愛い」

「もー、なんか適当と違う？」

頑なに可愛いと言い続けたらティーナが牛さんになってしまった。そうは言われても、綺麗というよりはどう見ても可愛い系だし……

身体が小さいだけでぺったんこではないし、お尻のボリュームもあるから、普段みたいに身体のラインが出るジャンプスーツだと色っぽさも感じるのだけども、今日着てるような身体のラインがあまり強調されないドレスだと綺麗とか色っぽいというよりもシンプルに可愛いんだよな。

「お兄さん、私も可愛いですか？」

「とても可愛い」

白をベースに青のアクセントを入れたティーナとは色違いの同じドレスを着たウィスカにもそう言って深く頷く。二人は双子だからな。こうして見るとよく似てるが……やっぱり所作とか目つきとかは性格が出るのか結構違うものだ。

「ちょっと窮屈ですね……」

「それはねぇ……」

今回、ミミとエルマはドレスではなくスーツ姿だ。スーツというか、軍の正装に近い装いである。ミミをドレス姿で連れて行くと、ルシアーダ皇女殿下に瓜二つなことが強調されてしまうからな……前にドレス姿で式典に出ているので今更かもしれないが。今回はしっかり対応したというわけだ。

しかしまぁ、ミミは窮屈そうだな。それも仕方あるまい。あの胸部装甲ではな……エルマは楽そ――ヒェッ、睨まれた。

「うーん、私にこういう服は合わないと思うんだけどねぇ……」

「そんなことありませんよ、先生。とても良くお似合いです」

「そうかなぁ……なんかヒラヒラしてて落ち着かないよ」

エルマから目を逸らすと、あちらではいつも通りのスペース風巫

女服を着たクギがドレスに身を包んで落ち着かないショーコ先生を宥めていた。クギの巫女服はいつもより少し豪華というか、身につけている小物が多くなっている程度だが、彼女の巫女服は正式な場でも通用する格式の衣装でもあるそうで殆どそのままだ。
対してショーコ先生はフォーマルな装いである。いつもはボサボサ気味のロングヘアも頭の上にしっかりとまとめ上げられ、色合いそのものは若干地味ながらもしっかりと身体のラインが出るドレスがマッチしている。なんというかその、ミミにも匹敵する胸部装甲が凄い。色っぽいというレベルではない。まぁ、あの上に身体のラインを隠すためのストールを纏うそうなので、好奇の視線に晒されるようなことは減る……と良いな。
今回は戦闘に関わるクルーを軍服に、そうでないクルーはドレスにという感じで服装を分けた。
本当はクギも軍服っぽい感じの衣装を着せたかったんだが、狐耳はともかく尻尾が問題でな……既存のテンプレートを使えず、完全にオーダーメイドになる＝三日後には間に合いそうにないということで断念したのだ。

『おー、凄いね。選り取り見取りだね、キャプテン』
「そうだぞ。凄かろう？」

医療ポッド入りを卒業し、昨日からチャンバー式の半自律型多機能車椅子――浮遊して動くので車輪はついていないが――での移動を許されたネーヴェに向かってドヤ顔をしてやる。
ちなみにこの車椅子、実に簡易的にだがある程度治療ポッドとしての機能を持っており、かなりお高い。ネーヴェは出世払いで払うとか言っていたが、船の設備を整えるのはキャプテンの甲斐性みたいなものである。丁重にお断りしておいた。

『そのうち私もああいう服を着せられるのかな？』

「そうだな。ネーヴェは肌が白いし、黒ゴスとか似合うかもな」

髪も肌も真っ白な少女が黒系のロリータ衣装を纏うのは実に映えることだろう。ミミはあんまり着てくれないからな。まぁ、一口にロリータと言っても色々と種類があるようだが。その辺は店員さんに「この娘に似合う衣装を頼む」で丸投げしてしまうのが一番だ。

あれ似合うこれも似合うと品数が増えまくったり、店員同士の宗派の違いが顕在化して殴り合いになったりすることがあったりするのが玉に瑕だが。

「ちょっと、私達の服はそんなにじっとりねっとりと吟味したくせに、自分の服装に関しては何か一言ないわけ？」

「男の服装なんてどうでもいいじゃん……皆が選んでくれただけあって着心地は最高だよ。ありがとう」

俺の服装を敢えて言うならミミやエルマが着ている服と同じ系統のデザインで、少しばかり各所の装飾が豪華なくらいである。豪華と言ってもあんまりゴテゴテと豪奢な感じなのは俺の趣味ではないから、控えめなものだが。

「それじゃあ行くかね……そろそろお迎えも来るだろうし」

流石にスーツを着ている俺達戦闘クルーはともかく、ドレス組はこのままで普通の交通手段を使って雑踏の中を歩くわけにもいかないからな。セレナが帝国航宙軍の車両を回してくれると言っていたので、ブラックロータスで着替えたわけだ。そうでなかったら着替えを持ってあちらでセットすることになっただろうな。

そんなことを考えている間に迎えが来たので、メイとネーヴェに見送られながらセレナが回してくれた軍の車両に乗り込む、軍の車両って言っても、なんかデカい銃が屋根に乗ってたりするすような

威圧的な奴じゃなく、地味なシャトルバスみたいなやつだが。普通のシャトルバスと違って飛ぶけど。

「ふぅん……悪くないですね。合格です」

「そりゃどうも。そちらはいつも通り麗しいな」

「本当にいつも通りですけどね」

そう言って空飛ぶシャトルバスの中で俺達を待っていたセレナが肩を竦める。セレナの言う通り、彼女はいつもの白い軍服姿であった。いつもと違うのは略綬ではなく勲章が軍服の胸元にいくつかぶら下がっているくらいか。

「そのうち私のドレス姿も見せましょう」

「それは楽しみだ。いつも通りのその軍服姿も似合ってて綺麗だと思うけど」

正直セレナといえばこれ、って気がするほどに似合ってる。やっぱり第一印象って大事だよな。初めて顔を合わせた時も軍服姿だったし。

「……いつもこんな調子なんですか？」

「そうですね、普段からこうですね」

「そうね、割とストレートに褒めてくることが多いわよ」

「そうですか……」

ミミとエルマの返事を聞いたセレナが少し頬を赤くしながらじっとりとした目で睨んでくる。

「なんだよ？」

「……前まではそんなに歯の浮くような台詞は言ってこなかったじ

ゃないですか」
「そりゃそうだ。セレナは美人だから、塩対応するのもなかなか大変だったぞ。内心ではいつも綺麗だな、美人だなと思ってたし」
「ああ、もう……いいです。わかった、わかりましたから」

セレナは赤くなった顔を片手で隠しながら俯き、待ったをかけるように俺の方にもう片方の手を突き出してきた。
ふむ、なるほど？

「ひゃっ！？」
「いえーい、恋人繋ぎー」

なので、突き出してきた手に指を絡めて恋人繋ぎをしてやった。
ははは、反応が面白――いだだだ！？　わかった！　悪かった！
からかって悪かったから許して！　手の骨が砕ける！

なお、シャトルバスが目的地につくまでセレナは手を離してくれなかった。流石に力は緩めてくれたけど。

#475　「結局暴力が一番か。何事も暴力だな」（前書き）

クリスマス？　知らないイベントですね（　，ω，　）

#475　「結局暴力が一番か。何事も暴力だな」

勲章の授与式は滞りなく終了した。今回は授与式に帝室の方々が出張ってくるようなこともなく、粛々と進行されたな。え？　俺がもらった勲章？　二つ目の銀剣翼突撃勲章だったよ。戦果が戦果だったからなぁ……旗艦を含む戦艦級が四隻、巡洋艦級が七隻、駆逐艦が十二隻、コルベット三隻、艦載機十八機というのは戦場に出ていた小型艦の中では頭一つどころではなく、頭三つくらい飛び抜けた戦果だった。

ちなみに、エルマもアントリオン単艦で敵コルベットと艦載機を合わせて三十ほど撃破していたので、銅剣翼突撃勲章を授与されていた。済まし顔だったが、いつもより耳の角度が上がっていたからあれは嬉しかったんだと思う。

「それにしてもサクッと終わったよな」

「今回は醜聞もありますからね」

発泡する黄金色の飲み物が入った小さめのグラスを片手にセレナが肩を竦める。発泡酒があるのに何故コーラが無いのか？　これがわからない。

「醜聞？」

「皇帝陛下に領地の管理を任され、地位を安堵されていた貴族が反逆を企てたというのは十分に醜聞ですから」

「なるほど」

そう言われてみればそうかもしれない。セレナの言うように、イクサーマル伯爵家の離反と売国工作は帝室の権威をいたく傷つける

醜聞だったのだろう。幸い、その計画は完遂される前に俺達の介入によって頓挫したわけだが。そして、その差配をしたのがあのファッキンエンペラーなのだと思うと、やはりあの男は只者じゃないなと感じさせられる。さすがは数千の星系を支配下に置く皇帝といったところか。

「全ては皇帝陛下の手の平の上かぁ」
「おや、ヒロのような人にも皇帝陛下の威光は及ぶのですね」
「俺の悪運というかトラブル体質を見越した上でセレナと一緒にあの時、あの場所に配置したのだと考えるとな。まぁ、偶然かもしれんが……偶然にしちゃ出来過ぎだ。過程も、結果も。そりゃ少しどころじゃなく感じ入るところはあるさ」

あの差配にも何かしらのバックボーン――帝国の長大な歴史から導き出された経験則や、機械知性のバックアップなど――があるのだろうが、それでも驚異的な差配なのは間違いない。凄いものを凄いと素直に認める心は大事だ。

「それに、こんな粋なパーティーも手配してくれたしな」

そう言って小皿に取り分けたローストビーフのような料理を口に運ぶ。うーん、美味い。見た目は牛肉っぽいのに、味と食感は……これはカツオのタタキでは？　いや、うん？　まぁ美味いけどなんか予想を裏切られる。

授与式が終わったらそのままパーティータイムとなったのだ。パーティーと言っても立食形式で、さほど格式の高いものではないようだが。この場には貴族よりも軍人が多いしな。勲章の授与に加えて美味いものを飲み食いさせることによって士気を高めようという狙いもあるのだろう。

「それにしても貴方のところのクルーは大人気ですね」
「そうだな。というか、思ったよりも女性軍人が多いんだなって今更ながら思うわ」
「意外と船乗りには向いているんですよ。パワーアーマーを使えば男女の体力差も殆ど無くなりますしね。それでも比率はやはり男性が多めではあるんですけど」
「なるほどな。お陰であまり気を張らなくて済むのは助かるよ」

軍服風の格好をしているミミ達やドレスを着ているショーコ先生やティーナとウィスカ、それに珍しい巫女服を来ているクギ達は女性軍人達に囲まれて楽しそうにお喋りをしていた。特に背が高くてスタイル抜群なショーコ先生が人気で、女性軍人達に囲まれてワタワタとしているのが可愛らしい。凛々しくてスタイルの良い彼女がギャップのある初心な反応をするのが俺と同じく可愛らしく思えるのか、本当に大人気である。

男性軍人の皆様はそんなうちのクルー達や女性軍人達を遠回しにチラチラと見ているだけで、声をかけたりする様子はない。まぁ、あの雰囲気に割り込んで声をかけに行くのは勇気がいるだろうな。

「なんとなく考えていることはわかりますけど、声をかけに行く人がいないのは貴方のお手付きだとわかっているからですからね？」
「んぇ？　なんでまた。いや、それならそれで助かりはするが」
「あのですね、ここにいるのはあの反乱騒ぎを収拾した人間ばかりなんですよ？　貴方、生身かつ単身で、しかも無手の状態から自分が何人の敵兵を無惨な姿にしたと思っているんですか？　逆の立場で考えればわかるでしょう。恐ろしくて手なんて出せませんよ」
「えぇ……？　いや、確かにそう言われればそうだけど……」

何人倒したかなんて数えてなかったからわからんが、十人や二十人じゃ済まない数だったのは確かだな。もしかしたら五十人を超え

ていたかもしれん。流石に百人まではいってないと思うが。
薬を盛られて昏倒して、拘束までされた状態から逆襲して敵の装備を奪い、立ちはだかる完全武装の兵士を数十人殺して回った凶悪な傭兵の女に手を出す……うん、俺もそんなこと恐ろしくてできねぇわ。絶対に無理だわ。

「俺の評判が変に独り歩きしないと良いんだけどな……」

「傭兵なんてのは恐れられてなんぼだろうが。相変わらず変わっているな、お前は」
そう言って声をかけてきたのは……誰だこのガタイの良いおっさん。見覚えはあるんだが。ああ、思い出した。傭兵ギルドのグラキウス支部長だ。名前は確か……？

「ヨハンネス支部長」
「そう、ヨハンネス支部長」
「お前な、せめて名前を忘れていたことを取り繕うとかせんか？まぁ、お前は帝都を拠点にしてるわけじゃないから仕方ないかもしれんが」

セレナに小声で教えられてああそうだ、と頷いた俺の胸を拳で軽く小突きながらヨハンネス支部長が苦笑いを浮かべる。

「申し訳ねぇ。あんたが美人のお姉さんなら間違いなく覚えていたと思うんだが」
「やれやれ。お貴族様の娘さんを三人も手籠めにした男は言うことが違うな」
「まだ二人だ。もう一人には手を出してないからな」
「時間の問題と言っているようにしか聞こえんな」

そう言ってヨハンネス支部長がちらりとセレナに視線を向ける。セレナはツンと澄ました表情をしてみせている。そっちの娘には手を出してるんですよ、これが。とりあえず話題を変えようか。

「ところで支部長も来てたんだな。タダ酒目当てか？」

「お前さんは一応ギルドの顔だからな。そのギルドの顔が華々しい戦果を挙げて表彰されるとなれば、ギルド支部長としては出向くのが筋というものだ」

「なるほどなぁ。お勤めご苦労さまですってとこか。で、景気はどうだ？　何か変わったことは？」

「景気は悪くないな。正直なところな、お前のドキュメンタリーの反響がかなり大きい」

「マージでぇ……？」

「本当だ。傭兵と言えば粗暴なチンピラだとか、下手をすれば酒やドラッグに溺れているだとか、小汚い船に女を連れ込んで好き勝手するだとか、そういうイメージを持たれていたわけだ。だが、お前のドキュメンタリーでそのイメージが変わりつつあるようでな。清潔でセレブリティだとか、ストイックで紳士的だとか」

「確かにうちは居住性や福利厚生に関しては気を遣ってるつもりだが、ストイックで紳士的ってのはどういうことだよ。俺はそんなキャラじゃないぞ」

清潔でセレブリティな感じなのはメイがちゃんと船を管理してくれているからだし、ミミをはじめとして女性陣が住環境の整備に口出しをしてくれているからだ。俺ははいはいとそれに従って金を出しているだけだ。ストイックで紳士的という評価はマジで意味がわからない。俺、暇と時間があれば皆とイチャついてるが？

「いや、一般的な傭兵に比べるとかなりストイックで紳士的だと思いますが」

「そうだな……驚くほどストイックだな。紳士的かどうかは知らんが、少なくとも酒にもドラッグにも溺れてないし、連れ込んだ女性に無理やり関係を迫っているわけでもないようだし、コロニーでの問題行動もない。色んな傭兵を見てきた俺からすると信じられないほどの善玉だと思うぞ」
「それは俺が特別なんじゃなくて一般的な傭兵ってやつがダメ過ぎるだけじゃねぇの？」
「だからそのお前が言うダメ過ぎるのが普通なんだと言う話だろう。それでいて宙賊には容赦がないだろう？　お前は。傭兵の悪いイメージを払拭するような面を見せつつ、傭兵らしい恐ろしさのイメージもちゃんと保持して、それでいて女に甘いお前のドキュメンタリーは本当に人気が出ているんだ。お前としてはあまり嬉しくないようだが、お陰で今まで傭兵ギルドに寄り付かなかったような人達が傭兵ギルドに仕事を回しに来ることも増えてな。それで景気が良くなってるわけだ。一部傭兵からは軟派だの軟弱だのと反発の声も上がってるんだが……」
「その割には最近あまり絡まれた記憶は無いが」
「お前がそれだけ実績を積み上げているというのもあるし、名誉貴族だってのもある。それに白兵戦もそつなくこなすだろ、お前は」
「結局暴力が一番か。何事も暴力だな」
「なんせ傭兵だからな」

頷き合う俺とヨハンネスにセレナが冷めた視線を送ってきている気がする。だって仕方がないじゃない。傭兵は暴力を売り物にしている商売なんだもの、強いやつが偉い、弱いやつは強いやつに文句を言えない。そんな道理が基本原則として罷り通るような界隈でもあるのだから。当然、度が過ぎればギルドが介入してくるわけだが。
さて、適度に飲み食いしたら撤退しますかね。

#476　「ハハハ、ナンニコトダカワカリマセンネー」（前書き）

今年は更新終わり！
あと、書籍の作業でしばらくお休みします！　ゆるしてね！　—（：3」∠）—（できるだけ早く復帰するよ

#476　「ハハハ、ナンニコトダカワカリマセンネー」

「適度に飲み食いしたら撤退するつもりだったのに……」
「あはは……皇帝陛下直々のお招きですから」

程よいところでさぁ帰るか！　とクルー達を集めて立食会場を立ち去ろうとしたところ、待ち構えていた近衛騎士――俺と剣術稽古をした『くっ殺』女近衛騎士のイゾルデだ――の手によって帝城の奥の間に連れてこられてしまった。奥の間というのはつまり、帝室の皆様達が暮らすプライベートスペースである。

「しかも俺とミミだけとか……」
「多分気を遣って下さったんですよ！」
「その気遣いを俺とミミにも発揮して欲しかった」

などと歩きながら愚痴っていたらイゾルデに睨まれた。そりゃ不敬かもしれんが、皇帝陛下に振り回される哀れな一般市民の愚痴くらい聞き流してくれよ。

「今日は皇帝陛下だけではなくヴァルター皇太子殿下とルイーゼ皇太子妃殿下、ルシアーダ皇女殿下も臨席なされる」
「気でも狂ったのか？　何の冗談だ？」
「不敬だぞ。陛下の……お考えは我々凡俗には理解が及ばぬものだ。それと、我々近衛がこんな冗談を言うと思われているのなら心外なこと極まりない」
「そりゃそうだろうがよぉ……」
「こ、皇太子殿下と皇太子妃殿下まで……？」

イゾルデの衝撃的な発言に思わず不敬罪まっしぐらの発言をしてしまったが、それも仕方がないと思うんだ。だって皇帝陛下御本人に継嗣である皇太子殿下、その奥方である皇太子妃殿下、その娘の皇女殿下まで雁首揃えて俺とミミに会うって言うんだぞ？　グラッカン帝国の文字通りの中枢人物達だ。いや、正確に言えば確かルシアーダ皇女殿下には兄がいる筈だから、もし万が一この場で四人が身罷ったとしてもなんとかなるようにはなっているのだろうが。

というかほら見ろ。皇太子殿下と皇太子妃殿下まで待ち構えていると知ってミミが動揺しているじゃないか。

「覚悟を決める他無いな……ああ、一応念入りにボディチェックとかしとく？」

「両手両足を拘束されて武器を突きつけられているような状況からでも伯爵家の子息を斬り殺す貴殿を『安全』にするには、首から上を切り離すくらいしか方法が無いのでは？」

「恐ろしいことを言う女だなお前は……」

というか、それでか。先導しているのがイゾルデ一人で、他の近衛兵達がいつでも俺に斬りかかれるように真横から後ろにかけて包囲するように俺を取り囲んでいるのは。

「こんなに警戒せんでも暴れるつもりは無いっつうのに」

「帝室の御方々を守るためにあらゆる手を尽くすのが我々の責務なのでな」

「左様か……」

これはどうしようもないな。大人しく連れて行かれるとしよう。

☆★☆

「久しいな、キャプテン・ヒロ。お主の活躍は余の耳にも届いておるぞ」
「お久しゅう御座います、皇帝陛下。醜聞などが届いてお耳を汚していなければ良いのですが」

溢れんばかりのカリスマオーラを発しているファッキン皇帝陛下に対し、俺は努めて笑顔を浮かべながら恭しく応じる。

「んん？　良いのだぞ？　いつも通り余のことをファッキンエンペラーと呼んでも」
「ハハハ、ナンニコトダカワカリマセンネー」

たちの悪いストーカーか何かかお前は。口に出して言ったことなんて数えるほどしか無い筈だぞ。

「本当に瓜二つなのだな……」
「ええ、本当に……ミミさんでしたね？」
「は、はひ……」
「ミミさん、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

ミミはミミで皇太子殿下夫妻とルシアーダ皇女殿下に囲まれてガチガチになっているな。ルシアーダ皇女殿下には多少慣れているかもしれないが、皇太子殿下と皇太子妃殿下とは初対面だから仕方ないと思うけど。

「それで皇帝陛下、私めのようなチンケな傭兵なんぞを呼び出して何の御用で？」

ここには帝室の皆様方以外には近衛兵しかいない。とはいえあまり無礼な言葉遣いをすると本気で近衛兵に斬り殺されそうなので、

そこそこに気を遣って話すことにしておく。

「なに、一度顔を見ておこうと思っただけよ。それに、ヴァルターとルイーゼにもミミの顔を見せてやろうかとな」
「なるほど。ああ、そう言えばお転婆の妹君に会いましたよ」
「……なに？」
「最辺境領域に行った後、アレイン星系に立ち寄った時に。ミミを騙して無理矢理船に連れ込んだ挙げ句好き放題していると思われて、危うく殺し合いになるところでしたね」
「……はぁ。アレのことだ。もうとっくに雲隠れしているだろうな」

皇帝陛下が眉間を揉み解しながら大きなため息を吐く。すげぇなあの婆さん。天下の皇帝陛下に嘆息させるとか、そうそうできることじゃないぞ。

「そういえば、リーメイではよくやってくれたな。褒めて遣わす」
「お褒めに預かり恐悦至極。とは言っても、リーメイ星系に向かったのも実は妹君の助言が切っ掛けだったんですがね。アレイン星系で仕入れた高度な技術製品や医療物資を卸すのに良いところがあるよ、って感じで」
「アレは昔から目端が利くのだ……まぁ、何にせよ礼を言っておこう。多くの犠牲を出してしまったのは余の不徳のなすところであったな」
「治めていた能無し貴族のせいじゃないですかね？」
「その能無しがコロニーを治めていたというのが元を辿っていけば余の責任なのでな。マグネリめは少々脇が甘い。今後に関しては現場を見て育った倅に期待するしかない」
「ハルトムートですか。あれは気持ちの良い男でしたよ」

帝国貴族だがアイリアへの対応を考えると平民に対する隔意もあ

まり無いようだしな。領民に対する慈しみの心も持っているようだし、あれは良い領主になるだろう。優しすぎて父親同様脇が甘いということにならないかだけが心配だが。

「貴族嫌いのお主の目から見てか。それは期待ができるかもしれぬな」

「別に嫌いじゃないですけどね、貴族は」

「嘘を言うな。それならとっくの昔にホールズの令嬢かダレインワルドの令嬢に手を出していただろう。ドワーフを二人も囲っているお主なら多少青い果実でも口にするのだろうしな」

「生々しいのはやめましょうよ、陛下。多感な年頃のお孫さんもいるわけですし」

いつの間にか打ち解けて和気藹々と交流している皇太子家族とミミを横目に見ながら皇帝陛下に進言する。あっちは楽しそうだなぁ。こっちは油断ならない爺さんと腹の探り合いになってるのに。

「ミミに手を出しておいて今更ではないか？　ああ、あのように朗らかな笑顔を浮かべている娘がお主の毒牙にかかっているのかと思うと、なんだか憤懣遣る方無いな」

「洒落にならないからやめてくれ皇帝陛下。近衛騎士に切り刻まれるのは御免だ」

「大人しく切り刻まれるお主ではあるまい？」

そう言って皇帝陛下が意味ありげな視線を向けてくる。このおっさん、俺のサイオニック能力に関しても何か掴んでるな？　まぁ当たり前か。最辺境領域での仕事を終えてからはあまり隠してもいないしな。

「それはその時にならないとわかりませんね。ところで陛下、近い

うちにヴェルザルス神聖帝国に行きたいんですが」
「なんだ？　ホールズの娘やダレインワルドの娘と本格的な関係になる前に逐電するのか？」
「ちがいます。うちに巫女がいるでしょう？　あの子に里帰りをさせてやりたいのと、御存知の通り俺のサイオニック能力関連や出自の関連で何か情報がありはしないかと思いましてね。短期間で帰ってくるつもりです」
「ふむ……邪魔立てをするつもりはないとだけ言っておこう。お主のような手合いを敵に回すと大体ろくなことにならぬのでな」

皇帝陛下の判断は正しいと思う。下手すりゃ恒星系を一つ、ないし複数吹き飛ばす可能性があるわけだからな。そうでなくとも俺の運命操作能力がどう作用するかわかったもんじゃない。

「それはどうも。帰ってきたら今まで通り帝国の隅っこで暴れている宙賊共を始末して回りますんで」
「期待しておこう」

そう言って皇帝陛下はニヤリと笑みを浮かべた。嫌だなぁ、また何か企んでそうだ。

#477　「しっぽりはしてねぇよ……」（前書き）

大変おまたせしました。更新再開です。
本当はもう少し早く再開するつもりだったんですが、遂にコロナの魔の手にかかりまして……幸い、症状は大変に軽かったんですが。
リハビリってことでちょっと短いけどユルシテネ！―（：3」∠）
―

#477　「しっぽりはしてねぇよ……」

「他にもお主らと顔を合わせて話してみたいという帝室関係者は多いのでな。今度帝都に来た時にはもう少しゆっくりとしていくが良いぞ」

「ハハッ、アリガタキシアワセ」

絶っ対ぇー嫌だ！　もう来ねーよバーカ！　俺の胃に穴が空くわ！

ニヤニヤとした笑みを絶やさないファッキンエンペラーに純度１００％の作り笑いを返しながら心の中で叫ぶ。

「泊まっていったら良いのに……部屋も用意させますよ。ね？　母上」

「私もそうして欲しいとは思っていますが、ミミさんやキャプテンにも都合があるでしょうから。無理強いはできませんよ、ルシアーダ」

「ミミくん、辛いことがあったらいつでも言ってきなさい。ご両親には及ばないかもしれないが、力の限り手助けをするからね」

ミミはミミで皇太子夫妻とルシアーダ皇女殿下に引き留められたりマジトーンの保護宣言をされたりと大変そうであった。笑顔を浮かべてはいるけど、あれは相当困ってるな。俺にはわかる。

というか、マジでヴァルター皇太子殿下には参った。実の娘と瓜二つのミミと懇ろな関係になっている俺に対して露骨に胡乱な視線を向けてくるんだよ、あの人。そりゃ良い気分にはならないだろうが、露骨に「こいつぶっ殺そうかな」みたいな視線を向けてくるのはやめて頂きたい。マジで洒落にならんので。次期皇帝陛下に睨まれるとか寿命が縮むわ。

そろそろ陽も落ちるというか落ちた頃、ようやっとロイヤルな人々から解放された俺とミミは近衛女騎士のイゾルデをはじめとするロイヤルガードの皆々様に案内されて帝城を出ることができた。帰りの足までしっかりと用意してくださって実に至れり尽くせりだったが、帰りの車内でもミミとの間に殆ど会話が発生しない程度には疲労困憊であった。もっとも、会話が発生しないだけでミミとは身を寄せ合っていたので、寂しいことは全く無かったが。お互いに静かな癒やしを求めていたのだ、俺達は。

「お疲れ様――って二人とも目が死んでるわよ」
「数時間にもわたって巨大な宇宙帝国の最高権力者ファミリーと過ごせば誰だってこうなる」
「お、お疲れ様です、我が君」

俺とミミを出迎えてくれたエルマとクギが揃って顔を引きつらせている。どうやら俺とミミの顔色は相当悪いらしい。帰りの車内で互いに身を寄せ合って気力的な何かを充電しあっていたのだが、全く足りてないな、これは。

「とりあえず着替えてくる。何にせよとっとと帝都からは発ちたいから、可能な限り出港準備を進める方向で」
「アイアイサー、メイも良いわね？」
『承知致しました。出港準備を進めます』

エルマが天井に向けて話しかけると、どこからかメイの声が響いてきた。タラップ近くにはセンサーやスピーカーの類が結構な数設置されているので、その辺のものを使ってメイは俺達の会話を把握していたのだろう。
何にせよ礼服のままでは寛ぐことも出来ないので、さっさと部屋に戻っていつもの格好に着替える。気分的にはシャワーも浴びたい

ところだが……浴びちまうか。出港準備はエルマとメイに任せておけば万事問題ないだろうし。

「あ、ヒロ様……」
「ミミも考えることは同じか」
「みたいですね」

シャワー室前でばったりと会ったミミを互いに力なく笑い合う。折角だからシャワーではなくしっかりと風呂に入るとしよう。二人でゆっくり風呂に浸かれば元気も出てくるだろうしな。

☆★☆

「よし、ちょっと復活」
「復活ですっ」

ミミと二人でゆっくりと風呂に入ったら元気が出た。やはり風呂とスキンシップは最高だな。生きる活力が湧いてくる。

『じっくりしっぽりってわけかい？　羨ましいねぇ』
「しっぽりはしてねぇよ……」

ネーヴェの茶々入れに苦笑を返す。お互いにそこまでの元気はなかったんだよ、本当に。特にミミはずっと皇太子夫妻とルシアーダ皇女殿下の三人を相手にしていたからな。元々小市民的というか、割と模範的な帝国臣民マインドを持っているミミとしては心労甚だしい一時であったようだ。

「お疲れ様やね、ほんと。で、お疲れのところ悪いんやけど、結局どう動くん？」

「とりあえずはヴェルザルス神聖帝国行きを主目標とする。ただ、ダレインワルド伯爵家とホールズ侯爵家を蔑ろにするわけにもいかないから、まずは両家とコンタクトを取ってからだな。何も言わずに帝国を出たらどう考えてもまずい」

皇帝陛下の言った通りに受け取られる恐れがあるからな。婚約を前にして他国に逐電した、などと思われたら色々とまずい。確実に両家の面子を潰すことになる。貴族なんてのは面子商売みたいなところもあるから、そんなことをしたらどうなるのか想像するだけでも恐ろしいわ。

「それじゃあ明日はお出かけですか」

「そうだな。ただ、俺一人で行くのもあまり具合が良くないよな？」

「どうかしら……正直、貴族の婚礼という意味で捉えるとかなり特殊なパターンだから、私じゃ判断が難しいわね」

「婿入りする当人が既に複数の女性と事実婚関係だものねぇ……というか、ダレインワルド伯爵家とホールズ侯爵家だけでなく、エルマくんのウィルローズ子爵家にも話を通さないといけないんじゃないかな？」

「そっちは私が話しておくから大丈夫よ。何にせよデクサー星系のダレインワルド本家には一度足を伸ばして、ダレインワルド伯爵本人と顔を合わせる必要はあるでしょうね。勿論、クリスも一緒にね」

「それじゃあ、とりあえず帝都で済ませなきゃならない用事はホールズ侯爵家への挨拶と説明だけだねぇ。ヒロくんが一人で行くのは論外として、同行するならまずエルマくんが当確ってところかな？」

『プラス従者ってことでメイさんがついていけば良いんじゃない？』

我が傭兵団のインテリ勢が今後の動きについて話し合ってくれている。こういう時に考えるのを任せられる人材が多いのは本当に助かるよな。俺も色々と考え込む方ではあるが、あんまり頭が良いわ

けではないし。
話し合いの結果、とりあえず明日はクリスと連絡を取ってデクサー星系のダレインワルド本家行きについて相談し、同時にセレナ経由でホールズ侯爵家とのアポイントメントを取るということに決まった。ウィルローズ子爵家への連絡は今晩のうちにエルマがしておいてくれるそうだ。

「エルマには苦労をかけるな……本当にありがとう」
「別にこれくらいなんでもないわよ。それよりあんたは明日までにはちゃんとシャキッとしときなさいよ？　そんなしょぼしょぼヘロヘロの状態でホールズ侯爵と会ったら足元見られるわよ」
「うっす」

結構復活したつもりだったんだが、エルマから見ると俺はまだ弱ってるらしい。確かにあの胡散臭さＭＡＸの侯爵閣下に足元を見られるのは危険過ぎるな……忠告通り、今日のところはしっかりと英気を養うとしよう。

＃４７８　「急に湿度高くなるの怖いんでやめてもらっていいですか」（前書き）

エンジンの掛かりが遅い……！　―（∵３」∠）―

#478　「急に湿度高くなるの怖いんでやめてもらっていいですか」

翌日、俺達は各々のタスクをこなすべく動き出した。ミミはデクサー星系行きに関してクリスと相談。ティーナとウィスカは出港の準備を進め、ネーヴェは二人からレクチャーを受けつつお手伝い。クギは帝都にあるヴェルザルス神聖帝国の大使館に連絡を取り、ヴェルザルス神聖帝国に行くための相談と手続き。ショーコ先生はネーヴェの治療に使う資材の調達。

そして俺とエルマ、それにメイはセレナと連絡を取ってホールズ侯爵家に接触を図ると。

「ちょっと遠出するだけでこの大騒ぎだ。まったくもってしがらみってのは面倒なもんだよな」

「私もこういうのが面倒で家を飛び出したクチだから、言いたいことはよくわかるけどね……」

本日の俺とエルマの服装は昨日ほどカッチリしたものではないが、いつもの格好よりはフォーマルな服装となっている。まぁ、所謂軍服っぽい格好だな。帝国航宙軍の士官なんかと間違われてはいけないから、彼等のものとはデザインが違うものだが。

「貴方達、言いたい放題ですね……」

空中を走るリムジンのような高級車の中、俺達の対面に座ったセレナがジト目を向けながらそう言ってくる。

朝一番に俺達からの連絡を受けたセレナは自分の父親であるラウレンツ・ホールズ侯爵のスケジュールに俺達との面会をねじ込むというとんでもない苦労をしたわけで、メッセージ一つでそんな大仕

事をさせられた上にいかにも乗り気ではない俺達の態度に言いたいことの一つや二つや三つくらいはあるのだろう。

「いや、突然の申し出に骨を折ってくれたことには感謝してるよ、本当に。今日もまたセレナの顔を見れて嬉しいとも思ってる」

「……どうだか」

そう言ってセレナは顔を赤くしながらそっぽを向いてしまった。別におべっかを使ったとかそういうわけではなく本当にそう思っているんだけどな。セレナの職務の関係上、クルーの皆と同じようにべったりってわけにはいかないし。それはまぁ、クリスも同じなんだけど。

「いま、ほかのおんなのことをかんがえましたね……？」

「それどころか隣にいますけど……急に湿度高くなるの怖いんでやめてもらっていいですか」

サイオニック能力があるわけでもないのに俺の考えを的確に読んでくるとか怖すぎるんだが。これが女の勘というやつだろうか？いや、セレナのことだから強化された感覚で俺にはわからない何かを捉えた可能性もあるが。

「まったく……どうしてこんなのに引っかかっちゃったんでしょうね？」

「あら、嫌なら離れても良いのよ？」

「……もう少し優しくしてくれないと泣きますよ？　良いんですか？　大声で泣きますよ？　地面に寝転んで駄々をこねますよ？　我が家の前で」

「恐ろしい脅し文句を使うわね……」

セレナの強烈な脅し文句にエルマが引きつった顔でドン引きしている。本当にそんなことをやられた日にはラウレンツ氏に何を言われるかわかったものではないので本気でやめて欲しい。

「そのようなことを実行した場合、婚約を含めてご主人様とセレナ様の関係が徹底的に断ち切られる可能性が高いので、セレナ様はそんなことはなさりません。そういう時はもっと直截に甘えると良いですよ、セレナ様」

「……」

「俺に恨めしげな視線を向けないでくれ……ほら、隣に座るか？」

「……座る」

対面から俺の隣の席に移動してきたセレナが俺の腕をぎゅっと抱いて寄りかかってくる。ちなみに、今までその場所に座っていたメイはしれっと先程までセレナが座っていた席へと移動していた。

「日も高いうちから二人も女を侍らせて良い身分ね？」

「せやろか……？　まぁ、せやな」

その二人の美女がどちらもヒグマめいた膂力を有した恐ろしい女であるということを除けばそうだな。いや、それを差し引いても幸せなことなんだが。俺を含めて二人とも結構かっちりとした服を着ているから、あまり感触を楽しめないのが残念だ。

☆★☆

「すまないが多忙でね、本当に時間が取れないんだよ。さっそく本題に入ろうか」

ホールズ侯爵家の屋敷――屋敷というか巨大なビルめいた構造体

だが――に到着し、客間のような場所に案内されるなりすぐに現れたラウレンツ氏がそう切り出してきた。セレナも朝一番に連絡を取ってすぐに予定をねじ込んだようだから、本当に時間がないんだろうな。

「少しの間帝国を離れる予定ができたので、その報告と相談をしにきました」

「帝国を？」

「はい。うちのクルーにヴェルザルス神聖帝国の巫女がいまして。彼女曰く、俺の出自やルーツに関する情報が神聖帝国にあるということでしてね。その確認と、俺の――まぁ、今更隠すことじゃ無いか。俺のサイオニック能力の修練なんかもついでにしてこようかと。あとは、彼女の里帰りという側面もあります」

「このタイミングでかね？」

ラウレンツ氏が首を傾げる。確かに婚約が決まったこのタイミングで他国に行くというのは勘ぐられるよな。それは仕方ない。

「このタイミングだからですね。どちらにせよダレインワルド伯爵との顔あわせにも行かなければならないんで、そのついでに足を伸ばそうかと」

「ふむ……まぁ、良いのではないかな。そのまま逐電しようというわけじゃないのだよね？」

「勿論。そのつもりなら何も言わずにセレナを拐って尻に帆をかけてすっ飛んでいってますよ」

自分で言ってなんだが、それも悪くないような気がしてきたな。セレナとクリスを拐ってヴェルザルス神聖帝国に逃げ込んで上げ膳据え膳の悠々自適な引退生活か。うーん、悪くないがスリルが足りなくて三ヶ月と経たずに飽きそうだな。

「それもそうだね。なら私から言うことはないかな。戻り次第連絡をくれれば良いよ。その間にこちらでできることは進めておくからね」
「お手数をおかけします」

結婚関連の準備やダレインワルド伯爵家、ウィルローズ子爵家とのやりとりのことだろうな。これは頭が上がらなくなりそうだ。

「まぁ、それくらいの面倒はね。そっち方面で君に苦労をさせたらホールズ侯爵家の甲斐性を疑われてしまうから……おっと、すまないが時間だ。後のことはセレナに任せるよ。良いね？」
「はい、お父様」
「うん、それではね。ヒロ君、それにエルマ嬢も。今度、時間がある時にゆっくりと旅の話を聞かせてくれ」

そう言ってラウレンツ氏は応接間から去っていった。本当に忙しいところに予定をねじ込んだんだろうな。申し訳ない。

「よし、それじゃあこれ以上ご迷惑をかけてもいけないし、お暇しようか」
「そうはいかないでしょ……」
「ですよね」

呆れたような表情のエルマが視線を向けている先を見ると、そこには頬を膨らませてむくれているセレナの姿があった。

「すまん、冗談だ。ここまできてご家族に挨拶もなしに帰るわけにはいかないのはわかってるから」
「本当にそう思ってます？　面倒くさいならいいですよ？　私が後

で父様や母様や兄弟姉妹にちくちくと嫌味を言われるだけですし？」
「わかったわかった。本当に悪かった。冗談でも言うべきじゃなかった。許してくれ」

今日のセレナは面倒くささが当社比三割増しくらいになってるな！　もしかしたら家族との関係が悪いんだろうか？　ちょっと気をつけたほうが良さそうだな。

#479　「これ、断れないやつか？」（前書き）

少しだけ感覚が戻ってきた気がする（　ω　）（なお時間

#479　「これ、断れないやつか？」

「どうしてこんなことに……」

死屍累々。そう表現するのが妥当な光景に俺は溜息を吐いた。肩の骨や指の骨を砕かれて呻く者、血反吐を吐いて震えている者、刃引きされた金属製の剣を杖に辛うじて倒れず、片膝を地面に突いて蹲っている者、その他にも怪我人多数。直ちに死ぬような重傷者はいないが、さりとて決して浅い傷ではないものばかりだ。

俺の方も身体のあちこちが痛い。攻撃をまともに貰うようなことは無かったが、剣先が掠めたことは何度もあった。いくら刃引きされた剣とはいえ貴族の膂力で振るわれたのだ。その斬撃は容易に俺の服を引き裂き、身体に傷を負わせた。ああ、この服は数少ないよそ行き用の服なのに……。

どうして家族への挨拶に来てこんな修羅場になっているのか？それはな。

☆★☆

不貞腐れ気味のセレナに最初に案内されたのは瀟洒なインテリアがふんだんに配置された応接室のような場所だった。これはアレだろうか、所謂サロンというやつだろうか？

「よく来てくれたわね。さぁ、こっちにきてよく顔を見せて頂戴」

入るなり、すぐに部屋の奥から声をかけられる。奥の方、日当たりの良い場所に何人かの女性が――日当たり？　いや、ここは巨大な構造体の中心部に近い場所の筈だから、日光なんて差すわけがな

い。となると、あの光は所謂人工太陽灯のようなものなのだろうか？　じゃあここサロン兼サンルームなのか？　よくわからんコンセプトの部屋だな。

そんな事を考えながら人の気配がする方に移動すると、そこには三人の美女がいた。ゴージャスとでも言えば良いのか？　三人が三人ともこう、気品に溢れる感じの美人さんだ。セレナよりも年上だろうから、彼女の姉とかだろうか？

「約束通り、連れてきましたよ。お母様」

「おかあさま……おかあさまぁっ！？」

「何をそんなに驚いているんですか」

驚愕の声を上げた俺にセレナが怪訝な表情でそう聞いてくる。

「いや、何をって……お母様ってことは、セレナのお母さん……ってコト！？」

「そうですけど……こちらが父上の第一夫人のアンネリーゼお母様、こちらが第二夫人で私を生みの親であるヒルデガルドお母様、そしてこちらが第三婦人のベアトリクスお母様です」

紹介された三人のお義姉さん……もといお義母さん達がそれぞれ優雅な挨拶をしてくれたので、こちらもそれに応じて挨拶をする。俺は驚愕の光景に動揺しまくりだったが。

「そんなに驚くことだったかしら？」

第一夫人のアンネリーゼさんがそう聞いてきたので、俺は頷きながら素直な感想を言うことにした。

「凄く驚きましたね。皆さんとても若くて綺麗なので。正直、セレ

ナのお母さんだというのが未だに信じられないくらいで……お姉さんかと」

そう言ってセレナに視線を向けると、彼女は憮然とした表情を浮かべてみせた。

「正真正銘お母様達です」

「そっかぁ……ああ、申し遅れました。俺は傭兵のキャプテン・ヒロです。肩書は……色々あるけど、どれが一番通りが良いんだろうな？　プラチナランカーか、帝国の名誉子爵か、それともゴールドスターか」

「プラチナランカー傭兵っていうのが一番無難じゃないかしら」

「だそうです。それで、ええと……何を話したら良いのかね？」

ご家族へのご挨拶ってどうしたら良いのかね？　娘さん以外の婚約者とかメイドロイドまで連れてきているんだが、これはアリなのか？　少なくともエルマもメイも異論はなかったようだから、ナシではないと思いたいが。

「立ち話というのも無いでしょう？　こうしていつまでも見上げていたら首が痛くなってしまうわ。そうね、それじゃあセレナとどうやって出会って、どう過ごしてきたのかを聞かせてもらえる？」

第二夫人のヒルデガルドさんの言葉に俺は頷き、エルマ達と一緒に勧められた席に座ってセレナとの出会いやその後の関わり合いについて話していく。無論、俺の出自や歌う水晶を使った件など、話せないことはうまいことぼかしつつだ。

そうしているうちにサロンに人が集まってきた。セレナの姉妹――いや、妹達だ。

「へー、ほー、ふーん……？」
「なるほど」
「あんまり強くなさそうだけど……？」

妹さん達の見た目の年齢はクリスやミミと同じくらいだと思うんだが、お義母さん達のことを考えると本当にそうなのかどうか……お義母さん達のアンチエイジング技術が凄すぎるんだよ。ヒルデガルドさんとかセレナによく似た美人さんなんだが、姉と言われたら納得してしまうような見た目だぞ。まぁ、流石に妹さん達は見た目通りの歳だろう。多分。

「見た目で判断すると痛い目を見ますよ」
「そんなに弱そうな見た目かね……？　どちらかと言えば強面寄りだと思うんだが」

俺はあまり目つきがよくないし、こちらに来てからは身体もよく鍛えるようになったから、服の上からでもわかる程度には鍛えた体つきになっているはずだ。脱いだらもっと凄いぞ。

「貴方は戦闘時と平時で雰囲気が違いますからね……」
「なるほど？　そりゃまぁ四六時中気を張ってたらいざという時にパフォーマンスを発揮できないからな。しかしそこまで違うかね？」
「違いますね」
「違うわね」
「違うと思います」

セレナだけでなくエルマとメイにも言われてしまった。そんなに？　平時の俺はそんなにボケっとしているように見えるんだろうか……それはそれで少しショックなんだが。

「ふふ、可愛いところもあるのね」
「そうですね。勇猛果敢な傭兵と聞いてどんな人なのかと思っていましたけど」
第一夫人のアンネリーゼさんの言葉に第三夫人のベアトリクスさんが同意している。可愛いと言われてもあまり嬉しくはないが……一体今のやり取りのどこを見たらそんな感想が出てくるのだろうか。
「用意が整ったぞ！」
バンッ！　と勢いよく扉を開けながら入ってきた人物に視線を向ける。金髪紅眼の超絶イケメンだ。背も高いが、身体の厚みも凄いな。ムッキムキじゃん。アレと比べられたらそりゃ俺は弱そうだわ。
「兄のレオンです」
セレナが耳打ちしてくる。なるほど、お義兄さん。確かにそうなのだろうな、と思うが何故彼は笑顔でノシノシとこちらに近づいてくるのだろうか。
「貴様がキャプテン・ヒロだな！　よし、行こうか！」
「待って待って待って待ってってんだよ。どこにだよ……セレナ、説明してくれ」
ガシッ、と俺の両肩を掴んで強制的に立ち上がらせたお義兄さんが俺を引っ張っていこうとするのに抵抗しつつ、セレナに説明を求める。
「レオン兄様、何事ですか。私の婚約者をどこに連れて行って何をするつもりです」

「立ち会いだ！」

レオンお義兄さんが俺の肩に手を回し、一方的に肩を組んでくる。なんだよこの人、滅茶苦茶暑苦しいぞ。

「セレナは今まで相手方の剣の腕を理由に散々縁談を断ってきただろう？　そんなセレナが突然婚約をするという。しかも相手はプラチナランカーとはいえどこの馬の骨ともわからない元平民の傭兵だ！　それでは納得できないという連中がごまんといる！　だからこの俺が彼と立ち会いをして彼の剣の腕を証明するというわけだ！　それじゃあ行こうか！」

「これ、断れないやつか？」

「諦めなさい」

エルマが気の毒そうな表情を俺に向けてそう言った。嘘だと言ってくれ……。

#480　「どうしてこんなことに……」（前書き）

遅れたぜ！―（：3」∠）―（威風堂々

#480　「どうしてこんなことに……」

「どうしてこんなことに……」

セレナの兄、レオンにほぼ強制的に連行されてきた場所。それはだだっ広い訓練場であった。

「フロア一つを訓練施設にしてあるんだ！　我がホールズ侯爵家は帝国の武門だからな！　男子だけでなく女子もそれなりの訓練を積んでいるぞ！　まぁ、セレナの場合はそれが行き過ぎたんだが」

そう言ってお義兄さんが少し遠い目をする。もしかしたら兄としてそれなりに苦労をしてきたのかもしれない。

「サロンに現れたのはセレナより年下の妹達ばかりだっただろう？　それより年上の妹達はとっくに他家へ嫁に行くか、婿を取って本家から出ていてな……」

「なるほど」

帝国貴族の子女の皆様は結婚年齢が低めなのかね。いや、成人が十八歳くらいなんだっけ？　多分成人を迎える前に婚約して、成人すると同時に嫁に行くなり婿を取るなりするのが常識なんだろうな。そういう意味では早々に俺を捕獲したクリスはちゃんとそのしきたりというか常識にきちんと守っているわけだ。

「まあ、それはそれだ！　さっそくやろうか！」

「嫌なんだが……というか、なんかスタンバイ状態の人が沢山いるのはなんなんだ？」

「勿論、君と手合わせをする面々だ！　当然、私もだぞ！」
「すっげぇ嫌なんだが……しかも持ってるの刃引きした剣じゃんか」
いつだったか帝城で近衛騎士の連中と訓練をした時には高度な判定装置を備えた安全な模擬剣を使ったが、ホールズ侯爵家の訓練場にはそのような装置は用意していないらしい。
「こういうのは嫌いかな？　意外だな。傭兵なんてやっているのだから、好戦的な性格なんじゃないかと思っていたんだが」
「嬉々として危険に飛び込むようなやつは傭兵としては長生きできないと思うよ……大成もな」
てめぇなんざ怖かねぇ！　とか言って無策で強敵に挑むのは死亡フラグ以外の何物でもないと思うんだ、俺は。
「そうなのか……？　だが、君は『クレイジー』なんて二つ名で呼ばれるほどの命知らずだろう？」
「周りが勝手にそう言ってるだけだ。結晶生命体の群れに単艦で突っ込む程度で大げさな」
「いや、全然大げさではないと思うが……」
「相互理解って難しいなぁ……まぁ、まったく気乗りはしないけど、お義兄さんがわざわざ人手を集めたのに顔に泥を塗るわけにもいかないか」
そう言いつつ、模擬剣が沢山置かれている訓練場の片隅へと移動して適当な模擬剣を見繕う。なかなか質が良い、というかこれよく見たら刃をつけていないだけで、材質そのものは貴族が使う単分子刃の剣と変わらないじゃないか。実戦的というかなんというか……金かけてるなぁ。

「これとこれで。少し準備をさせてもらうぞ」
「ああ、恩に着る！　我々も準備をしよう！」

そう言ってレオン義兄さんは訓練場で待っていた俺の対戦相手達――恐らく全員貴族の子弟――に声をかけにいった。義兄さんは天然のリーダータイプというかなんというか、人を率いる気質を持っていそうな感じだな。強引だけど何故か嫌悪感を覚えないというかなんというか。あれがカリスマってやつなのかね？

ストレッチをしたり、軽く模擬剣を振ったりして身体の感触を確かめる。いま着ている服は結構かっちりとした感じの余所行き用の服なんだが、剣を振ったりといった戦闘行動を取っても邪魔にならない程度の柔軟性はある。何せ元は軍服だからな。

「こっちの準備は良いぞ」

両手にいつも使っている大小一対の剣と殆ど同じ長さ、重さの模擬剣を引っ提げてだだっ広い訓練場へと足を向ける。しかしエルマもメイもセレナも着いてきていないけど、何をやっているのかね？

「それじゃあ始めようか！　ああ、この訓練場の様子は君の連れやセレナ達も見ているぞ！　精々気張ってくれ！」
「左様で……で、誰から来るんです？」

恐らくこの訓練場のどこかにカメラというか、光学センサーのようなものが仕込まれているんだろう。となると、サイオニック能力全開でってのは控えるべきか？　使うのは呼吸を止めての時間流鈍化だけにしとこう。

「では、私からお相手願おう」

そう言って俺の正面へと進み出てきたのは壮年の剣士だった。明らかに俺やレオン、セレナよりも二周りは年上の男性だ。ラウレンツ氏と同年代じゃないかな？　眼光も鋭いし、かなりの使い手のように見えるが。

「いきなり強そうな人が出てきたんだが？」

「……ローレン殿は私やセレナの剣の師だ。ホールズ侯爵家の剣術指南役を務めている」

「Ｏｈ……」

剣術指南役とか絶対強いじゃないか。俺は剣を握ってまだ半年未満の素人なんだけど。

「開始の合図は？」

「そのようなものはない。いつでも来るが良い」

「それじゃ遠慮なく」

言葉通り、俺は剣を両手にぶら下げて無造作にローレン氏へと間合いを詰めていく。困惑の感情が伝わってくるな。あまりに無防備に見えるからだろう。だが、俺は油断など欠片もしていない。貴族の身体能力なら十歩どころか二十歩程度の間合いなど在って無いようなものである。その辺りは普段からメイを相手にしているから慣れている。メイなら三十歩くらいの間合いも瞬きの間に詰めてくるからな。

来るか。メイと違って攻撃の意思がビンビンに伝わってくるからわかりやすいな。

「ッ！」

「おっと」

十歩以上の間合いを一瞬で詰めると同時に繰り出された一刀を左手の剣で受け流し、相手の体勢を崩――せないな。俺が剣を受け流した一瞬で間合いを取ったか。

「……面妖な」

「酷い言われようだ」

「見せてもらうぞ、貴殿の底を」

「やってみな」

ローレン氏の身体が一回り膨らんだように見えたかと思うと、とんでもないスピードで斬りかかってきた。身体強化のリミッターを外したのか、それとも何か剣術の奥義的なものなのか。それはわからないが、凄まじい剣速だ。

だが、足りないな。これでは俺には届かない。普段俺を叩きのめしているメイの剣の方がこれよりも速いし、重いんだ。

「ぐっ！？」

凄まじい速度で俺に向かって剣を叩きつけていたローレン氏が苦痛の声を上げながら俺から距離を取る。剣を取り落とさないのは流石といったところか。

「私の……負けだ」

ローレン氏の剣を握る手、その指が三本ほど折れ、あるいは千切れかかっていた。彼の手からボタボタと流れ落ちる血が訓練場の床を赤く濡らす。

ローレン氏は強かった。剣速も速いければ剣捌きも俺が今までに戦ったどの剣士よりも老練だった。

だが、相手が何処を攻撃しようとしているのか、どの攻撃がフェ

イントなのかがわかっているなら対処は難しくはない。要所要所で時間流を鈍化させて剣を弾き、受け流してカウンターを入れれば良いだけだ。

「……驚いた。ローレン殿を一蹴するのか」
「後が詰まってるだろ？　さっさと来てくれ」
「実戦形式で良いか？」
「良いぞ。ただし、怪我しても責任は取らんからな」

俺がそう言うと、レオン義兄さんだけでなく他の貴族の子弟達も剣を構えた。
よっしゃかかってこいや！

☆★☆

「どうしてこんなことに……」

死屍累々。そう表現するのが妥当な光景に俺は溜息を吐いた。肩の骨や指の骨を砕かれて呻く者、血反吐を吐いて震えている者、刃引きされた金属製の剣を杖に辛うじて倒れず、片膝を地面に突いて蹲っている者、その他にも怪我人多数。直ちに死ぬような重傷者はいないが、さりとて決して浅い傷ではない者ばかりだ。

「で、出鱈目だな、義弟殿は……」

片膝を突いて脂汗を流しているレオン義兄さんが呻き声を漏らす。土手っ腹に良いのが入ったからな、義兄さんには。流石に四方八方から貴族の子弟の剣が飛んでくるような状況では手加減をする余裕など無かった。俺だってなんとか立ってはいるが、割と満身創痍なのだ。というか、俺はこのボロボロになった服で帰るのか？　着替

えなんて持ってきてないぞ。

「ちなみに」

「な、なんだ……？」

「俺はまだ本気を出していないからな」

「嘘だろう……？」

「本当さ」

そう言って俺は貴族の子弟達の手からこぼれ落ちた剣を念動力で掴み上げ、俺の周りで回転させて見せた。本当はもっと危ない力の使い方にも開眼したんだが、そこまで見せる必要はあるまい。

「……サイオニック能力か！？」

「正解」

念動力を解除すると同時に空中で回転していた剣がガシャガシャと音を立てて床へと落ちる。

「とりあえずこの惨状を収拾しようか」

「そ、そうだな……ぐふっ」

気力が尽きたのか、レオン義兄さんがべしゃりと床に突っ伏してしまった。責任者が勝手に寝るんじゃない。起きるんだよオラァ！

#481　「そういうものか？」（前書き）

今ひとつ筆が乗らなかった……―（∵3」∠）―

#481　「そういうものか？」

レオン義兄さんを叩き起こし、後始末を手伝ったり着替えを用意してもらったりしているうちに結構な時間が経った。正直、もうお暇したいのだが。

「ヒロの服を急ぎ繕っているし、私達だけでこんなに長時間独占していては後が怖い！　案内をつけるので、すまないがサロンに戻って母上と妹達の相手をしていてくれ！」

「アイアイサー……」

嫌だよ！　と言いたいところだがこの訓練場は彼女達にモニタリングされている可能性が高い。滅多なことを言うと機嫌を損ねる恐れがあるので素直に聞いておくことにする。

というか、繕ってるって本当に誰かが手作業でやっているのだろうか？　この世界というか帝都ならなんというかこう、自動で修復してくれる便利マシーンとかありそうなものなんだがな。

「どうぞ、こちらへ」

「ありがとう」

案内人は端正な顔立ちの少年だった。訓練場で俺とお義兄さん達との戦いを見学していた少年達が居たんだが、そのうちの一人だな。そんな彼に案内されてホールズ侯爵家の屋敷を進んでいく。

ホールズ侯爵家の屋敷はメガビルディングじみた巨大な構造体だ。全部で何階層あるのかわからんが、恐らく五十階以下ということはあるまい。しかも高さだけでなく広さもある。一体この構造体で何人の人間が生活しているのだろうか？　絶対に百人とか二百人とか

の規模じゃないよな。
　そんなクソでかい構造物なので、案内人がいないと目的の場所に行くこともおぼつかない。案内板みたいなものも殆ど無いしな。
「この屋敷には全部で何人くらいの人が住んでいるんだ？」
「……っ！？　あ、え、ええと……確か一万人はいなかったと思います」
　俺の質問に一瞬ビックリしたようだったが、少年は俺の質問に答えてくれた。目の前で大人達をボコボコにしてやったせいで怖がられているのかもしれない。
「一万って単語が出てくるだけで凄いな……九千人や八千人くらいは住んでるってことだろ？　まるで一つの街だな。生活必需品とかはどうやって手に入れているんだ？　この屋敷の中に店があったりするのか？」
「ええと、必要な品を部屋から注文すると、注文した品が部屋に届けられるようになっていると聞いたことがあります」
「コロニーで使われている物資配送システムと同じようなものか……？　なるほどなぁ」
　少年の説明に感心しつつ、彼の正体に思いを馳せる。この屋敷に住んでいる一般的な住人として認識が若干弱いというか、人伝に聞いたって感じの態度だな。普段はそういうことに気を回す必要がない生活をしているのだろう。
「もしかして君はホールズ侯爵の御子息だったりするのか？」
「えっと……はい。カミル・ホールズです。第三夫人、ベアトリクスの息子です」
「なるほど。セレナとは異母姉弟になるわけか……つまり将来的に

は義弟ということに……？」
「そうですね」
「そっかぁ……ぶっちゃけた話どう？　俺みたいな馬の骨が姉さんの旦那になるのって」
俺がそう聞くと、彼は立ち止まって少し考え込んだ。
「良くはない、のではないかと思います。本来であればセレナ姉様はホールズ侯爵家のために然るべき家に嫁ぐべきなのでしょうから」
「ですよね」
ぐうの音も出ない正論である。
「でも、ヒロ殿は強いですから」
「うん？」
「強いから良いと思います」
「そういうものか？」
「そういうものだと思います。父上も常々言っていますし。貴族は舐められたら終わりだと」
「なるほど」
舐められないためにはどうするのが一番か？　それは勿論暴力である――と考えているかどうかはわからないが、まぁ確かに暴力というのは貴族社会に欠かせないものなのだろうなとも思う。何せレオンお義兄さんですら俺に相応の暴力が備わっているかどうか確認するために殴りかかってきたわけだし。貴族の間で剣というものが尊ばれ、白刃主義者なんていう怖い連中が幅を利かせているのも事実だしな。
☆★☆

カミル君とぽつぽつととりとめのないことを話しながらサロンへと辿り着いた――のだが。

「お姉様、あの人、私にくれない？」

「あげません」

「ほら、お姉様は軍人から適当なのを見繕って貰って」

「ふざけるのも大概にしなさい」

「いいじゃない。お姉様は今までだって独り身だったんだし、急いで相手を作らなくても。ここは一つ可愛い可愛い妹に譲って姉の威厳を示しましょう？」

「剣で威厳を示しましょうか……？」

セレナが妹さん達に滅茶苦茶絡まれていた。一見するとセレナにしなだれかかったり、抱きついたりして姉に無邪気におねだりをする妹達という構図なのだが、言っていることが酷い。というかセレナが爆発寸前である。

「あー……ただいま戻りました？」

サロンの入口からそう声を掛けると、セレナに絡みついていた妹さん達がするりとセレナから離れた。遅い遅い、私達はセレナに絡んでもいなかったし、変なことも言ってませんでしたよ？　みたいな顔を今更しても遅い。遅すぎる。

「おかえりなさい、ヒロ殿。いえ、ヒロ君って読んだ方が親しげな感じで良いかしら？」

「ヒロ様、とお呼びしたほうが良いのではなくて？　子爵家当主様ですもの」

「それは流石に媚び過ぎじゃない？　さん付けくらいが丁度良いと

思うわ。ね、ヒロさん？」

先ほどサロンを出る前は値踏みするような視線を送ってきていた妹さん達の態度が一変していた。

いや、もう色々と遅いし、その程度で籠絡されるわけがないだろう。なんか面倒くさいことになりそうだな……服とかどうでもいいし御暇するか。

#482　「この子、可愛いわね」（前書き）

カクテーシンコクという年一湧きのクソボスを倒してきたので遅れました（‘ω’）

#482　「この子、可愛いわね」

最初の態度とは打って変わって俺に秋波を送るような態度を見せたセレナの妹さん達だが、セレナの物理的な干渉によりサロンから駆逐された。一人一人にサブミッションを仕掛けて制圧していく様はちょっと面白かっ――瀟洒なドレスを着た美少女が身体を折り曲げられて悲鳴を上げるのを面白いと感じるのはだいぶヤバいのでは？　いや、でも面白かったから仕方ないな。セレナも含めて全員貴族のお姫様なのに、やりとりが姉妹というより兄弟めいてるんだもの。

「少しもなびきませんのね？」

妹さん達が追い出されて静かになったサロンで俺達は再び三人のお義母さん達とお茶を飲んでいたのだが、急に第二夫人でセレナの母であるヒルデガルドさんがそんなことを言い出した。

「なびくどうこう以前にやり取りが面白すぎませんかね？」

そう言って苦笑いを浮かべて見せると、彼女は目を瞑って溜息を吐いた。呆れているのだろうか。

「確かにアレではなびく以前の問題ですか……でも、ヒロ殿も若くて美しい娘に言い寄られるのは悪くない気分でしょう？」

「うーん……基本的にはそうですけど、婚約者の妹さんが相手だと微妙ですね。それにムードの欠片もないのはちょっと」

まず初対面であからさまに値踏みされたのがな。そこから急に手

の平を返して媚びられても反応に困る。これが全く違う状況であればまだわからないけどな。

「ムード」

「あら、あらあら……うふふ。ちょっと、セレナ？　この子、可愛いわね」

「なるほど」

俺の返答にヒルデガルドさんが目を丸くして驚き、第一夫人のアンネリーゼさんが優雅にコロコロと笑い、第三夫人のベアトリクスさんが納得したように頷く。なんですか、その反応は。

「ふふ、うふふ……そうね、ムード作りは大事よね。ふふふっ」

何かわからないがアンネリーゼさんの笑いのツボに入ってしまったようだ。どうして。

「結晶生命体の群れに単艦で飛び込み、百人弱のイクサーマル伯爵家の私兵を斬り伏せる、泣く子も黙る百戦錬磨の傭兵が、ムード……？」

「くっ……ふふっ、うふふっ……あはははっ！」

ヒルデガルドさんの言葉を聞いてとうとう堪えきれなくなったのか、アンネリーゼさんがお腹を抱えて笑い出した。そんなに笑うことなくない？　なくなくなくない？

「セレナさん、貴女は彼の人柄に惹かれたのね」

「……最終的にはそうです」

セレナはそう言って顔を赤くしながらベアトリクスさんから目を

逸らした。最終的には、ね。最初は確かに俺の戦闘能力とかそういった面を見て執着していたようだけど、なんやかやと絡んでいる間にいつの間にか好意を隠さなくなってきたよな。一体何がきっかけだったのやら。

「貴族の娘としてはどうかと思うけれど……貴女は子供の頃から型破りだったものね」

ヒルデガルドさんがそう言いながらなんともいえない笑みを浮かべた。呆れてる、とは少し違うな。困ったような笑みと表現するのが一番正しいか。

「あははは っ！　ふふっ、ふふふ……っ！　ふふっ……久しぶりにこんなに笑っちゃったわ。ヒルデ、セレナは最終的に自分もあの人も納得させられる伴侶を捕まえられたのだから、それで良いじゃない。最終的に幸せになれさえすれば勝ちでしょう？」

「それはそうだけど……アンネ、貴女がそうやって甘やかすから……もう」

ヒルデガルドさんがようやく笑いのツボから復帰したアンネリーゼさんに諭され、今度は正真正銘困った笑みを浮かべている。お二人は仲が良いらしい。第三夫人のベアトリクスさんとは少し距離がある……というかベアトリクスさんが一歩引いているのかね。この三人もうちのクルー達のように女性同士で色々とこう、あるんだろうな。不和が発生しないように調整をしてくれているうちの女性陣には頭が上がらんね、本当に。

☆★☆

あの後も散々お義母さん達に弄られ、根掘り葉掘りセレナや他の

クルー達との馴れ初めを聞き穿られた俺は疲労困憊であった。ホールズ家が用意した空中リムジンでブラックロータスに戻るなり自分の部屋へと直行し、余所行き用の服を脱ぎ散らからしてベッドに倒れ込む。

「あー……」

疲れた。とても疲れた。レオン義兄さん達と戦って身体が疲れているのも勿論なのだが、それ以上にお義母さん達への対応で頭が疲れた。心が疲れたと言っても良い。

ベッドにうつ伏せに倒れ込んでぐったりとしていると、誰かが部屋の中に入ってきた。まぁ、見えていていなくてもわかる。これはミミだな。修行でサイオニック能力が開花するにつれてテレパシーの感度もかなり自由に調節できるようになった。流石に馴染みの気配みたいなものは目で見なくともわかるようになった。

そろそろと近づいてきているな。でももうすぐそこだ。あと三歩、二歩、一歩……ここだ。

「とうっ」

「わわっ！？」

俺の様子を覗き込もうとしてきたミミを捕獲し、ベッドに引きずり込む。あー、いい。遥かに良い。素晴らしい。この温かさ、柔らかさは本当に良い。身体と心の疲労が溶け出していくような感覚だ。

「んもー……ヒロ様？　疲れているんじゃないんですか？」

「今回復してる。ミミ成分を摂取している。ずごごごご」

「むむぅ……匂いをかがれるのはちょっと恥ずかしいです」

猫吸いならぬミミ吸いで俺の精神力が回復していく。え？　精神

力の回復量に反比例して俺の尊厳とかダンディーさ的な何かが急速に減少しているって？　知らん知らん。そんなものよりもミミとイチャイチャすることの方が重要だ。

「落ち着きました？」

「少しな。セレナの姉にしか見えないゴージャス美女のお義母さん達に根掘り葉掘り色々聞かれて気疲れしたよ、本当に」

そう言ってミミの服越しにミミのお腹に顔を埋めながら溜息を吐くと、ミミが俺の頭を撫で始めた。そんなに甘やかされるとバブみが天元突破してオギャっちゃいそうなんだが。流石にそこまで堕ちるわけにはいかない。心を強く持たねば。

「それはお疲れ様です……大丈夫ですか？」

「だいじょばない……けど何か用事があって来たんだよな？　どうしたんだ？」

「はい、クリスちゃんなんですけど、デクサー星系に戻るなら同道したいということなんです」

「まぁ、妥当な申し出だな。どうせ行き先は同じなんだから一緒に行ったほうが安全だ」

クリスがどのような手段で帝都に来たのかは……聞いたっけ？聞いた覚えがないか、忘れたな。ただまぁ、定期便に乗ってきたわけではあるまい。それなら同道ではなくブラックロータスに乗せてくれという話になるだろうし。恐らくダレインワルド伯爵家所属の船で来たのだろうと思う。

「ただ、アレだぞ。無料ってわけにはいかないぞ」

「ですよね。いくら身内になる予定とはいえ」

「護衛をするとなるとなぁ……傭兵ギルドはちゃんと通して貰う必

要があるな」

少なくとも、傭兵ギルドや他の傭兵から見てギリギリ妥当だと判断される範囲で報酬を払ってもらう必要がある。エネルではなく特産品や交易品などの物納でも良いし、他の便宜でも良い。貴族相手の依頼でダンピングなんてした日には流石にプラチナランカーでもギルドから怒られるだろうなぁ。特にプラチナやゴールドの高位ランカーにとっては貴族連中ってのは良いお得意様だろうし。

「その辺りはクリスと話し合った方が良いか。よし、行くか。ミミのお陰でだいぶ回復したし」

「そ、そうですか……？　何ならもう少し回復しても良い、ですよ……？」

「……時間は？」

「少しだけなら……本当に少しだけですよ？」

なら少しだけミミとイチャついてから行くとしよう。少しだけな！

＃４８３　『興味津々に決まってるだろう』（前書き）

ユニコーンオーバーロードはじめました（　ω　）

#483　『興味津々に決まってるだろう』

あれからもう少しだけミミとイチャイチャしてからミミと一緒に休憩スペースへと移動した。シャワーが必要になるようなことはしていないぞ。実際健全。いいね？

『おお、おかえり。しっぽりやってきたのかね？』

休憩スペースに入るなりネーヴェが笑いを含んだ声で声をかけてきた。彼女は移動型ポッドの中からとはいえ自分の意志である程度自由に動けるのが楽しいらしく、艦内をよく徘徊――散歩している。今は休憩スペースに腰を落ち着けていたらしい。

「しっぽりしてません。というかどこからそんな言葉を……いくらでも供給源があったのか」

『そういうことだよ。兵士連中なんてのは皆お下品だからね』

ネーヴェの入っている移動型ポッドを指先でコンコンと叩きながら注意すると、ネーヴェはポッドの中で皮肉げな笑みを浮かべながら肩を竦めてみせた。

『というか、私の見た目に引っ張られ過ぎだよ、キャプテン。こんなナリだけど私は二十四歳の成人女性だからね？』

「……頑張って認識を改める」

理屈では理解してるんだが、このネーヴェの姿を見るとな……多分身長はティーナ達と然程変わらないと思うが、身体の厚みというか肉付きがな。本当に細い。細くて薄い。

『そんなにジロジロ見られると流石の私も恥ずかしいな……その、もう少しだけ待ってくれるかな？　先生になんとかお願いして行為に耐えられるように急いでもらうよ』
「そういう目で見てたわけじゃないから。まぁ、急がなくても良いからショーコ先生の指示にはよく従うようにな。ショーコ先生に任せておけば安心だ。なんせスペシャリストだからな」
『アイアイサー、キャプテン。それで、結局しっぽりしてきたんだろう？』
「してきてねぇって言ってんだろ。興味津々かよこのエロガキがよぉ」

混ぜっ返してきたネーヴェの入っている移動式ポッドのガラス面をコンコンと叩いてやったのだが、返ってきたのは至極真面目な声音と表情であった。

『興味津々に決まってるだろう。今まで自由に身体を動かすことも出来ず、見るだけだった上にそのまま死ぬと思ってたんだぞ。それが健康な身体を手に入れられるとなったら、そりゃもう興味津々さ。そうだろう？　見た目はともかく、私は二十四の健康になりつつある女なんだぞ』
「それはー……そうね。うん」
『それに最近は味のある流動食も食べられるようになってきたんだ。甘いっていうのは凄いものだよ、キャプテン。胃がパンパンになっても詰め込みたくなるんだ』

なんだろう、ネーヴェの話を聞いているといたたまれない気持ちになってくる。甘い流動食って多分だけど、フードカートリッジに最低限の処理と単純な味付けをした栄養補給ペーストじみた物体だぞ。栄養は十分だがお世辞にも美味しくはないはずのものだ。

「もっと身体が良い感じに治って普通の食事もとれるようになったら色々美味いもん食おうな。な？　ミミ」
「はい！　ネーヴェちゃんが気に入りそうな美味しいものを沢山用意しますね！」

今まで黙って俺とネーヴェのやり取りを見ていたミミが拳を握りしめて鼻息を粗くする。ミミが張り切ると「顔面にくっついて寄生してきそうなクリーチャー（まろやかクリーミー味）」とか用意してきそうでちょっとアレなんだよなぁ……その時は俺が助けに入れば良いか。ミミが用意するゲテモノ珍味にも結構慣れてきたし。意外と味は良かったりもするしな……たまに大外れがあるが。

☆★☆

再び散歩に出かけたネーヴェを見送り、休憩スペースに腰を落ち着けてクリスとコンタクトを取る。休憩スペースの大型ホロディスプレイに小型情報端末をリンクし、情報端末を介してクリスの個人アドレスに通信要請を送った。

『お待ちしてました、ヒロ様！』

いきなりのドアップである。大型ホロディスプレイにリンクしていたので圧が凄い。視界いっぱいにクリスの端正な顔というか花が咲くような笑顔が広がっている。
「お、おう。なんか待たせてすまんな。ちょっと気力を使い果たしてダウンしてたんだ」
『ホールズ侯爵家の方々とお会いになってこられたんですよね？　それなら仕方がないと思います』

ドアップで表示されていたクリスの顔がススっと後ろに下がっていく。ミミが密かに上手く調節したらしい。ホロディスプレイは投影位置もかなり自由に動かせるからな。

「早速本題に入りたいんだが、デクサー星系まで一緒に行こうって話だな」

『はい！　折角なので是非ご一緒させていただきたいと思って。私達の船はグラキウスセカンダスコロニーに停泊させたままなんですけど、小型艦なのでブラックロータスで一緒に運んでもらえませんか？』

「小型艦用のハンガーは一個空いてるから、乗せていくのは問題ないな。ただ、無料というわけにはいかないし傭兵ギルドも通さないと――」

『その点はご心配なく！　私がバッチリ何の問題もなく手配しますから！』

またもや圧力すら感じる満面の笑みである。なんか怪しいな。対面で会っているわけではないからサイオニック能力で思考を感知できるわけではないが、なんか怪しい。何か企んでいる気配がする。

「クリスがそこまで言うなら信頼できるな。クリスのことだから俺が悲しんだり嫌がったりするようなことは絶対にしないもんな。じゃあ完全に任せるよ」

『……も、勿論です。お任せください』

俺から全幅の信頼を寄せられたクリスの顔に冷や汗が見える気がする。やはり何か企んでいたか？　まぁ、クリスのことだから何も言わなくても俺が本当に嫌がるようなことはしないと思うが。

「まぁ、そっちで契約関係を上手いことやってくれるなら実務面で

は問題はないと思う。ブラックロータスには空き部屋もあるしな。同伴者は二人いるんだったか？」
『はい、この前ご紹介させていただいたエデルトルートと、グラキウスセカンダスコロニーの船で待っているグートルーンを合わせて二人ですね』
「グートルーンさんね、その人も女性騎士なのか？」
『はい。私の護衛なので』

それはそうか。未婚の女性貴族の護衛として船で一緒に移動するとなると、男性騎士を乗せるわけにもいかないよな。

「それじゃあ乗員三名の護衛と小型艦一隻の輸送って内容だな。ミミ、クリスとメイと三人で協力して手続きを進めてくれ。他に帝都でやるべきことが無いかチェックして、大丈夫そうなら明日にでも帝都を発つぞ」

あまりゆっくりしていたらまたぞろあのファッキンエンペラーか皇女殿下辺りが何か仕掛けてくるかもしれん。ヴェルザルス神聖帝国に行くんだろ？　ついでに親交使節としてルシアーダ皇女連れてってくれよ！　ガハハ！　とかな。考えただけで血反吐を吐きそうなほど厄介事の香りしかしないから絶対にそんな事態に陥るわけにはいかん。

「俺はティーナ達に発艦準備が整っているか確認する。クリスは傭兵ギルドとのやり取りもそうだが、宿を引き払う準備も進めてくれよ。ああ、セレナにも一応連絡するか」

何の連絡もなしに帝都を発ったら後でいじけられそうだ。

＃４８４　「何も誤魔化してないって」（前書き）

天気が悪いと筆が進まぬ（‘ω’）

#484　「何も誤魔化してないって」

発艦準備の確認など諸々の作業を終えたらそろそろ晩飯時である。俺はブラックロータスの食堂でいつのもように我らがシェフ、テツジンの作り出す料理を食べて……いなかった。

「なんでそんな砂でも噛んだような顔なんですか」

「酒に強いわけでもないくせに、早速ワインのボトルを一本空けようとしている素敵な婚約者を目の前にしているからかな」

「む、むぅ……し、仕方ないじゃないですか」

そう言って目の前の婚約者――瀟洒なイブニングドレスを着て着飾ったセレナ――が頬を薄紅色に染めながら視線を逸らす。

☆★☆

発艦準備の確認をしながらセレナに事情を説明し、早ければ明日にも帝都を発つという話をしたら彼女は大慌てで一度通信を切り、十分かそれくらい後にもう一度あちらから連絡を取ってきた。

『あの……その……あ痛っ！？　うぅ……その、今夜は、私と一緒に過ごしてくれませんか……？』

小型通信機のホログラム越しに顔を真っ赤にしてお願いされてしまった。これは断れない。まぁ、冷静に考えればそうだよな。セレナには軍務があるのだから、俺に着いてくることなど出来はしない。しかも、俺はこのあとダレインワルド伯爵家の領地に赴き、その足でヴェルザルス神聖帝国に行く予定だ。帝国の外に出るわけだから、今までのように旅先で偶然会うなんてことも起こり得ない。つまり、暫くの間セレナと顔を合わせる機会は無くなってしまうのだ。

「わかった、万難を排してでも今夜はセレナと一緒に過ごす。あと、誰かわからないけどありがとうございます」

通信しているセレナの後ろで彼女のケツを叩いている誰かがいるな。間違いない。

『うぅ……それでは、そういうことで。プランはすぐに端末に送りますから』

そう言ってセレナは通信を切り、宣言通りすぐにデートプランが送られてきたんだが……。

「送られてきたデートプランがコロコロ変わりまくってるんだが」

どういう仕組みなのかわからんが「ブラックロータス前で送迎車に搭乗」後の予定が目まぐるしく変わっている。どこぞのレストランで食事後高級ホテルに併設されているホロシアターに行き、同じく併設されているバーに行くというプランが表示されたかと思えば、貴族の扱う剣や衣装のオーダーメイドショップを軽く巡った後にどこぞの高級ホテルのプール付きスイートルームで上げ膳据え膳のディナーだとか。おい、いきなり明らかにそういう用途のホテルに行くとかいう雑なプランは流石にどうかと思うぞ。

明らかに複数のプランナーが好き勝手やってるな。プランナーの正体はお義母さん達あたりなんじゃないかと思うが、もしかしたら既婚者のお義姉さん達辺りも参入しているのかもしれん。ホールズ侯爵家の屋敷で顔を合わせる機会はなかったが、他家に嫁いでからもホールズ侯爵家の屋敷の何処かにお相手と一緒に住んでいるみたいなパターンもあるって話だったんだよな。なんせ構造体自体が滅茶苦茶でかいから。屋敷の構造体の中に寄子や分家の貴族の屋敷が

あったりもするらしいし。

「……時間まで放置しよう。ああ、一応服装だけ聞いとくか」

出来れば普段着ている傭兵服で行けるところが良いんだが、まぁ可能な限り向こうの要求に合わせるか。多分外泊になるよなぁ……とコロコロと変わるデートプランを見ながら考える。

メイに相談しよう。

☆★☆

とまぁ、そんな経緯があってこうしてセレナと二人きりのディナータイムとなっているわけだ。

ちなみに、最終的にはシンプルに食事のあとご休憩というプランに落ち着いた。これでもかという三大欲求優先プランである。

「男性と二人きりでのデートなんて初めて……初めてですから」

そんなことを言いながらセレナが微妙な表情を浮かべる。そうだね、初めてだね。今までは二人きりにならないように絶対にミミ達の誰かと一緒に行動してたから。

「アレイン星系で再会した時には二人きりでレストランの個室デートなんてのも企ててたのに、なんで今更そんなに狼狽えるんだ」

「それはその、あの時とは互いの立場も何もかも違うじゃないですか……その、最後にはアレもするわけですし」

「そこを意識してそんなにテンパってるのか……」

顔を真っ赤にしてワイングラスを呷るセレナ大佐に思わず苦笑する。それでなんというか失敗を恐れているわけか。それで酒量が増

えるんじゃ本末転倒だと思うが。

「それも今更だと思うんだけどな。でもまぁ、そうだな。何も心配はいらないさ」

「……そうでしょうか？」

「そうだよ。そうでなければ伯爵家を相手に牙を剥くような真似はしてない」

「……でも、あの時は私だけでなくミミさん達もいたでしょう？」

そう言ってセレナは顔を赤くしたまま唇を尖らせて見せる。ははぁ、なるほど。俺がイクサーマル伯爵家の私兵相手に切った張ったの大立ち回りをしたのは、あくまでもミミ達が囚われていたのが理由で、自分はおまけでしか無かったんだろうとそう言いたいわけだな？

「もしあの時にあの船に乗り込んでいたのが俺とセレナだけで、同じような状況に陥ったとしたらやっぱり俺は同じことをしたと思うよ」

「……本当ですか？」

「多分な。というか、今までに他にも命の危険があるのにセレナに付き合ったことなんて何度もあっただろ」

「それはそうですけどぉ……」

セレナが再び唇を尖らせてそっぽを向く。本当に面倒くさい子だよ、この子は。

「それに、今はセレナと二人きりじゃないか。それじゃ駄目か？」

「むー……なんだか上手く誤魔化されている気がします」

「何も誤魔化してないって」

苦笑しながらナイフとフォークを使って豪華なディナーを口に運ぶ。とても立派なホテルのこれまたかなり格式の高そうなレストランだが、個室のお陰で食事のマナーに関しては然程気を遣わなくても良いのが救いだ。食事のマナーなんて本当に最低限しか知らんからな、俺は。

「しかし美味いけど量が絶妙に足りんな」

「こういう貴族向けの店では満腹になるほどの量は出てこないものなんですよ」

「そういうものか。何かそういう風になる歴史的な経緯があるんだろうな」

満腹になるほど食べるのはみっともないとか、或いは満腹になると人間というのは集中力が落ちるものだからそういったことを貴族は嫌う傾向があるだとか、もしくは食品のロスを減らすのが元々の目的で、それがそのまま続いているだとか。

元の世界の紅茶が大好きなあの国でも、戦時中に普及したあまり美味しくないけど栄養豊富なパンがそのまま定着しかけたとかそんな話があった気がする。

「……やっぱり誤魔化そうとしてません？」

「してないしてない。本当にセレナは酒を飲むと悪い酔い方をするなぁ……あんまり飲んでへべれけになると、この後大変だぞ。沢山疑われた分沢山愛を確かめ合うからな」

「……すけべ」

「そうだよ」

そういう意味ではあまり満腹になり過ぎないこのレストランのディナーは丁度良いのかもしれん。

ふむ、新たな知見を得たな。

#485　「……私にはつけないんですか？」（前書き）

ユニコーンオーバーロード完……ッ！
ああ、明日からはライズオブローニンだ……（ ˘ ω ˘ ）

#485　「……私にはつけないんですか？」

翌朝、ホテルのベッドで目を覚ました俺はすぐ側にぴったりと寄り添う温もりの主に目を向けた。

「すぅ……んん？」

俺がわずかに身じろぎしたのに気がついたのか、穏やかな寝顔を見せていたセレナも目を覚ます。しょぼしょぼとした紅い瞳とばっちり目が合った。普段キリッとしていて格好良い人が、こういう無防備な表情を見せるのってなんでこんなに可愛いんだろうな。

「おはようございます……」

「おはよう。もう少し寝てても良いぞ？」

起きた時に時計を見たが、時間的にまだまだ余裕があった。起きて動き出すのはもう少しばかり後でも大丈夫だろう。

「んー……」

俺の言葉を理解しているのかどうか怪しいセレナが俺の肩辺りに頬を擦り付けてくる。猫か何かかな？　いてぇ、噛むな。ガジガジするんじゃない。

「何をしているんだ、何を」

「跡を残しておこうかなと……んー」

吸い付くな吸い付くな。肩からどんどん這い上がってくるな。跡

が残る。いや、そのつもりなんだろうけども……まぁ好きにさせておくか。

「……私にはつけないんですか？」

胸元にくっついたまま、セレナが上目遣いで俺の顔をじっと見てくる。

「朝っぱらから挑発してくるねぇ……」

ベッドの上で俺を挑発するとどうなるのか、じっくりと理解らせてやろう。

☆★☆

「はぁ……」

「こういうことをした後に深い溜め息を吐かれると、とても微妙な気分になるんだが……疲れたか？」

部屋付きのメイドロイドが用意してくれた朝食を前に、俺は思わず苦笑を浮かべた。あの後起き抜けにしっぽりと楽しみ、二人でシャワーを浴びてメイドロイドに朝食の用意を頼んだんだが、シャワーを終えた辺りからセレナのテンションがダダ下がりしていた。

「いえ、これくらい別になんでもありませんけど……ただ、しばらくお別れだなと思うと」

「それはそうだな。俺も寂しい」

俺がそう言うと、セレナはジト目で俺を睨んできた。

「貴方は船に帰れば私以外にも沢山女の子がいるじゃないですか。寂しい思いをする暇なんて無いでしょう？」
「すまん、それはそうかもしれん。でも、今寂しいと思っているのは本当だから」

ここは誤魔化さずに素直に謝っておく。無論、セレナのことを完全に忘れるといったようなことにはならないだろうが、他の女の子と一緒にいる時にセレナのことを考えるのはそれはそれで失礼だからな。

「……まぁ良いです。わかっていて貴方とこういう関係になったんですから。そこは割り切ります。ただ、次に会う時には私一人の身体ではなくなっているかもしれないので、そこはよく考えておいてくださいね」

すました表情でぶち込んできたとんでもない発言に飲んでいたミルクを思わず噴き出しかける。そんな俺の反応が楽しいのか、セレナはティーカップを片手にニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

「びっくりしたけど、良いのか？　まぁ良いだけ婚前交渉しておいて俺が言うのもなんだが」
「母上達の入れ知恵ですから。父上は良い顔はしないでしょうが、父上は母上達には頭が上がらないですし。ああ、でも確実にというわけでもないですよ？　急なことで薬剤の調達も間に合わなかったですし。運次第といったところですね」
「薬剤って……」

なんだろう、服用したら百発百中にでもなる薬でもあるんだろうか？　まぁ、簡単な注射一本で骨折や内臓損傷が治るような技術レベルだものな。致す前に一錠飲むだけで命中率１００％みたいな薬

があっても不思議ではないか。

「貴方みたいな人は子供くらい重い重石がないとフラフラと何処かへ行ってしまうでしょう？」

「いや、そんなことはない……と思うが」

ターメーン星系で目覚めてからこっち、散々方々の星系をふらついてきた俺が言っても何の説得力も無いが。

「でもいつもいつもそうやってフラフラして私の行く先に先回りしていたじゃないですか」

「逆だ逆。いつもいつも俺達の行く先にセレナが後乗りで現れてたんだろ。あの人めっちゃ執念深いよなって話してたんだぞ、俺達」

衝撃の新事実。セレナはいつも俺達の後を追ってきていたのではなく、偶然俺達のいる場所に現れていただけだった！　いや、まぁなんとなく察してはいたけどね。俺が無自覚に使ってるっていう運命操作能力の影響だろうということは。

「なんでしょう。謂れのない中傷を受けていたと知って微妙に腹が立ってきました」

「どうどう。朝飯をゆっくり食べて落ち着こう。ほら、なんかよくわからんが美味しいぞこれ。あーん」

朝食に出てきていたヨーグルトかチーズかは判然としないが、乳製品っぽい風味が豊かなパイのようなものを一口大に切ってセレナの口元に運んでやる。すると、セレナは仏頂面のままぱくりと食いつき、そのままモグモグと口を動かし始めた。

「……あー」

「はいはい」

無言で口を開くセレナの口元にせっせと朝食を運んでやる。雛鳥か何かかな？　まぁセレナみたいな美人さんに甘えられるのは悪い気分じゃないけれども。

そうやってセレナのお世話をしながら食事をしていたのだが、なんか部屋付きのメイドロイドにガン見されている気がする。いや、気のせいか？　ちらりと見ても視線が合わないし。

☆★☆

朝食を終えたらそろそろ船に帰る時間だ。セレナと一緒に送迎の飛行型リムジンに乗って一路帝都の総合港湾施設に向かう。

ちなみに、俺の服装は昨日船から出た時と同じだが、セレナはレストランで着ていたイブニングドレスではなく上品な色合いのスカートと、暖かくて柔らかそうなセーターのような上着という実に普段着じみた服装である。いつもの軍服姿も凛々しくて格好良いが、こういう普通の格好をされると、雰囲気がかなり丸くなって単純に可愛い。正直イブニングドレス姿よりもこっちの方が俺は好きだ。

「……」

「……」

お互いに無言。しかしセレナは俺にべったりである。それはもう、これ以上無いほどに。俺の右腕を抱え込んで肩に頬を乗せ、ずっとすりすりしている。ぎゅっと抱きしめられた腕に柔らかい感触がこれでもかと押し付けられてもいる。セーター越しにしっかりと伝わってくる。素晴らしい。

「いかないでください」

「無理を言うな……さっきの割り切ってる発言はどこにいったんだよ」

セレナの可愛いお願いに思わず左手で顔を覆って天を仰いでしまう。残念ながら、リムジンの天井は俺に何も打開策を与えてはくれない。

「じゃあわたしがついていきます」
「それもアカンだろ……寂しいのはわかるが、それで互いの立場や仕事をぶん投げて無責任な行動を取るのは良くない」
「……ヒロは私よりも仕事や他の女の子が大事なんですね」
「うわぁめんどくさい。めんどくさいけど可愛い」

セレナの頬がぷくーっと膨れてフグみたいになっている。左手でその頬を撫でてやると、ぷしゅーっと音を立てて膨らんでいた頬が萎んだ。吐息が耳元やら頬やらに当たってくすぐったい。
そんな感じでセレナに一方的に絡まれつつイチャイチャしているうちに空中リムジンが目的地へと辿り着いた。

「ほら、降りるぞ」
「やだぁ……」
「やだじゃないから……泣きそうな声でそういうこと言うの本当にやめてくれ。胸が締め付けられる」

ぐずるセレナをなんとかかんとかリムジンから引っ張り出してブラックロータスのタラップ前に降り立つ。さて、このひっつき虫をなんとか宥めすかしてやらんといかんな。どうしたもんか。

#486　「昨晩はお楽しみでしたね」（前書き）

3／26修正　―（：3」∠）―

ライズオブローニン楽しいですね。
ペリーがサーベルぶん回してピストル乱射したり、福沢諭吉が居合で斬撃飛ばしたりして（，ω，）

#486　「昨晩はお楽しみでしたね」

「昨晩はお楽しみでしたね」
「うっ……」

セレナと一緒にブラックロータスに帰還し、休憩スペースに移動するなり満面の笑みを浮かべたミミに出迎えられた。ちなみに、呻き声を上げたのは俺ではなくセレナである。ミミの笑顔に気圧されるような何かを感じたらしい。

「でも今日は私の番ですから。ね？」
「うぅ……はい」

有無を言わせぬミミの圧力にセレナが負けた。ミミ強いな……もしかしたらミミの身体に流れる帝国王室の血がセレナを屈服させたのだろうか。実際、ミミの出自に関する真実もミミと瓜二つのルシアーダ皇女殿下の顔も知っているセレナにしてみれば、ミミは相当にやりづらい相手だろうな。

そしてミミの威圧によって俺の側から排除されてしまったセレナはしょんぼりと肩を落として休憩スペースへとトボトボと歩いていった。その後ろをティーナとウィスカがついて行っている、物怖じせず、明るいティーナと思慮深く、優しいウィスカに任せておけばセレナのフォローに関しては問題ないだろう。

「むー……」

セレナの後ろ姿を見送り終わったミミが俺に抱きついてきた。そして胸元で頭をグリグリとやり始める。なんか新しい服を着たら自

分の匂いをつけようとしてくる犬か猫みたいな挙動だな。
「むむむ……あっ」
「ん？」
俺の顔を見上げたミミの視線が俺の顎の下、というか首の辺りに固定される。なんだ？
「ぢゅー……ッ！」
「痛い痛い！」
ミミが急に背伸びして俺の首筋に吸い付いてきた。さてはセレナのつけた跡を見つけたな！？
だからって対抗して痛いほど痕をつけるのはどうかと思うのだが。ミミが首元にキスしてくれるのは嬉しいけどさぁ。
「あら、面白いことしてるわね。私もやろうかしら？」
「此の身も良いですか？」
「良いですよ。ちゅーっとやっちゃってください」
「ミミが許可するのか……？」
わちゃわちゃと集まってきたエルマとクギにも首を吸われる。ミミほど強くなく、適度な強さで吸ってくれたので痛くなかったが、吸うだけでなくペロペロと舐められたので妙な気分になってしまった。二人ともどうしてそういうことするんですか？
「ま、この程度の焼き餅を妬くくらいは良いわよね？　ナイフとかレーザーガンとか持ち出してるわけじゃないし」
「はい。何の文句もございません」

三人に囲まれた状態で反抗しても勝てるわけがないので、素直に従う。全面降伏である。

「良いですね……完全に二人きりで逢瀬……ちょっとだけ羨ましいです」

背後からクギのしっとりとした声が聞こえてくる。ジャケットの端を掴んでくいくいと引っ張ってきているのがなんともいじらしい。

「どこかでそういう機会を作ろう。約束する」

「ふーん……その約束が果たされるのがいつになることやらね。ここから先、結構予定が詰まってるわよ？」

「ヴェルザルス神聖帝国には暫く滞在することになるだろうし、あっちでどうかな。クギ、どう思う？」

「はい、此の身どもの国には風光明媚な名所が沢山ありますし、そういった場所には旅籠も多く、宿場町――観光の名所となっている場所も多いですから、良い考えかと思います」

背後から俺に服を引っ張るリズムが早くなっている。微かにフサフサフサと風を切るような音も聞こえるが、これはクギの尻尾が高速で振られている音だろうか。

「それじゃあそういうことで……いいよな？」

俺の提案にミミ達が揃って了解の意を返してくる。これでとりあえず家内安全は成ったようだ。そもそも論、俺如きの器でこんな何人も女性を囲うってのが土台無理な話なんだが……これまでも色々と我慢も苦労もさせてきてしまっているんだろうな。皆に報いることができるよう、これまで以上に俺なりに気を遣っていこう。

☆★☆

「また……また今度。絶対、ぜったいにかえってきてくださいね」
「はいはい……絶対に戻ってくるから、それまでちゃんとお仕事してるんだぞ」

俺に抱きついて泣きそうな声で可愛いことを言うセレナをぎゅっと抱きしめる。今までにも一ヶ月や二ヶ月くらい顔を合わせないことなんてあっただろうに……とは思うが、やはり俺も寂しいようだ。こうして抱きついてくるセレナを見ていると、このまま拐ってしまいたくなってくる。

そんな俺とセレナの間に強引に押し入って引き剥がす小さな影が一つ。

「はいはいはーい、離れてください。嫁入り前の淑女がそんなにベタベタして良くないと思います」
「そ、それは貴女も一緒じゃないですか……！」
「私は婚約者ですから」
「わ゛た゛し゛も゛こ゛ん゛や゛く゛し゛ゃ゛た゛も゛ん゛！」

クリスに引き剥がされたセレナが半泣きになりながら俺に両手を伸ばしてくる。ちょっと可哀想だけど可愛い。どうしてセレナは半泣きになるとこんなに可愛いのか。これがわからない。

「自分ばっかりずるいんですよ！　しばらくお別れだからってやり過ぎです！」
「あ゛あ゛あ゛ー゛ッ！」

正真正銘の貴族のお嬢様二人が取っ組み合いを始めた。体格差と単純な修練の差のせいか、浜辺で棒でぶん殴られているアザラシみ

たいな声を出してるのにセレナの方が圧倒的に優勢である。流石は腐っても軍人だ。

「助けなくて良いのか？」

「アレに巻き込まれるのはちょっと……」

俺の指摘にクリスの護衛であるエデルトルートが勘弁してくれという顔でそう言う。まぁ、バチバチに身体強化した貴族同士の取っ組み合いに交ざるのは抵抗あるよな。取っ組み合いというか、あれはじゃれてるだけだろうが。

暫くして満足したのか、取っ組み合いが終わったので今度こそ出発のためにセレナを見送る。

「あの、車までついてきてくれませんか……？　最後まで一緒にいたくて……」

「駄目ですよ、ヒロ様。拐われますよ。とっとと行ってください。シッシ」

取っ組み合いで負けて若干衣服が乱れているクリスがセレナから俺を守るように俺の前に立ち、野良犬か何かを追い払うようにシッシと手を振る。そこまでやらんでも良いと思うんだが、セレナが露骨に「余計なことを」みたいな顔をしたのを俺は見逃さなかった。本当にやる気だったのか。いざとなったら手段を選ばんな、セレナは。

「うぅ……じゃあまた……」

そう言ってセレナはトボトボとタラップへと向かって歩いていった。チラチラとこっちを何度も振り返ってくるのが可愛い。その度にクリスが「シャーッ！」って怒った猫みたいな声を出して威嚇し

ているのも可愛い。クリスに猫みたいな尻尾があったらボンッて膨らんでそうだ。

「まったく……さて、ヒロ様。これからしばらくお世話になりますね」

「ああ、うん。ようこそ。なんだかこうやって同じ船に乗って旅をするのも久しぶりだな。なんだか楽しみだよ」

「私もです。あ、私はエデルトルートと一緒に荷解きをしてきますので。また後で構ってくださいね！」

セレナがタラップから船外に出ていくのを確認したクリスはそう言って笑顔を見せ、エデルトルートを伴って居住区画の方へと歩き去っていった。ちなみに、ミミ達はクリスとエデルトルートが滞在する部屋を用意するために既にタラップからは離れている。俺一人がこの場に取り残された形だ。

「……なんか朝から疲れたな。そうも言ってられないけども」

仕事の大半は皆に受け持ってもらっているから、俺自身がやることは多くない。だが、だからといって皆に働かせて俺は休憩室でダラダラしているというわけにもいかない。

「全員の作業の最終確認をしておくか……」

帝都からの出港に関する手続きや物資の手配などは終わっている。その報告も上がってきているので、休憩スペースでそいつを確認することにしよう。なんだかんだで休憩スペースが居住区画からもハンガーやカーゴスペースからも近いから、そこで仕事をするのが一番効率が良いんだよな。

#487　「やめてくれ、外聞が悪すぎる」（前書き）

前回ラスト辺りを少しだけ修正しました。
ユルシテネ！　―（：3」∠）―

#487　「やめてくれ、外聞が悪すぎる」

特にこれといった妨害やアクシデントも無く帝都を出発し、宇宙へと飛び出したブラックロータスはアントリオンとドッキングし、そのままグラキウスセカンダスコロニーへと向かった。

首都星系であるグラキウス星系から出立する前に物資の補給を行うためである。

え？　帝都で物資は補給したんじゃないかって？　帝都の物価と流通はちょっと特殊なんだよ。

帝都で生産している一部物資――例えば一部の食料や農作物――の値段は嘘みたいに安いんだが、それ以外の星系外から輸入しているような物資は市価よりだいぶ高い。あと、俺達みたいな船乗りが使うような物資に関してはそもそも取り扱いが無かったりする。これは帝都は航宙艦の出入りが厳しく制限されているからだな。需要が少ないから取り扱いが無いわけだ。

なので、帝都から出立するとなるとグラキウスセカンダスコロニーで旅支度をする必要があるというわけだ。尤も、ブラックロータスに積んでいる物資には余裕を持たせているからこのまま出立したとしても問題はないが、どちらにせよクリス達の船を回収してブラックロータスに収容しなければならないしな。船には留守番役が乗っているらしいし、その人を置いていくわけにもいかない。

というわけで、グラキウスセカンダスコロニーに寄港したブラックロータスにその人が合流してきたわけなのだが。

「貴方が……なるほど。私はマーリオンと申します。よろしくお願い致します、キャプテン・ヒロ様」

そう言って彼女は恭しく俺に頭を下げた。恐らく年齢は俺と同程

度か、少し上だろうか。かなり背の高い、痩せぎすの女性である。俺よりも背が高いかもしれない。セレナの輝くような金髪とは少し質感が違うが、金髪のメイド服の女性だ。なんというか、不健康そうで目つきが悪いというか怪しいというか目の下の隈がすごいというか……大丈夫か、この人。

「よろしく、マーリオンさん。俺のことはもっと気楽に呼んでくれて構わない。いちいちキャプテン・ヒロ様だなんて呼ぶのは仰々し過ぎると思うんだ」

「いいえ、将来的にクリスティーナお嬢様の伴侶となられる方に対してそういうわけには参りません。それよりも私のことはマーリオン、と呼び捨てにして頂きたく。貴方様はクリスティーナお嬢様の伴侶として私どもの上に立つお方なのですから」

「そうかもしれないけど、今はまだ正式な婚約者になることすらダレインワルド伯爵に認められたわけではないから。その時が来るまでは俺の提案を受け入れて欲しい」

「……わかりました」

渋々と、といった感じではあったがマーリオンさんは俺の提案を受け入れてくれたようだ。

彼女の荷物を彼女達の船から降ろし、クルー達に案内を任せることにする――と同時に、俺はショーコ先生に連絡を取った。今はクリスとエデルトルートのメディカルチェックを実行しているはずだ。

『うん？　どうしたんだい？』

「今乗船したマーリオンさん、もう一人のクリスの従者なんだが、早急にメディカルチェックを実行してくれないか？」

『それは勿論良いけど、何かあったのかい？』

「素人の目線で見たことをプロに言うのもなんなんだが、どう見ても不健康そうにしか見えなくてな……ミミ達に部屋まで案内させて

るところだから、ミミにでも連絡して早めに実行してくれ」
『了解、すぐに連絡するよ』
ショーコ先生は話が早くて実に助かる。本当にただの素人判断で、健康に何の問題も無いってんならそれが一番なんだが。
「あっちは任せるしかないか」
どっちにしろ俺ができるのは指示出しくらいだからな……何もなければそれで良いんだが。
☆★☆
『極度の寝不足だね』
「寝不足」
『クリスくんのことが心配で殆ど眠れていなかったようでね……とりあえず、今は眠ってもらってるから』
「そっかぁ……わかった」
ハンガーで整備士姉妹と一緒にクリス達の船を検分していると、マーリオンさんのメディカルチェックの結果がショーコ先生から返ってきた。ほんの数日のことなのに心配過ぎて眠れなくなって体調不良って、それはもうなんか適切なメンタルケアをした方が良いのでは。
「どしたん？　なんか疲れた顔になっとるけど」
「気にしないでくれ、本当に些細なことだから」
思わず溜息を吐いてしまった俺にティーナが声をかけてきたが、俺は軽く手を振ってそう答えた。俺が積極的に関わる問題でも無い

だろうからな。現状を把握すればクリスが自分でなんとかするだろう。一応クリスには後で伝えるだけ伝えるけど。

「で、えーと……クリスの船なんだが」

「イデアル製の二世代前の高速小型艦やな。外観から見る分には特に変なところも特殊なところも無いで」

「中身は流石に見るわけにもいきませんしね。多分帝国航宙軍の払い下げ品でしょうから、そこそこの性能だとは思いますけど」

「もとより戦力にするつもりも無いけど、クリスが出張に使う船がこのレベルか……前にダレインワルド伯爵の艦隊も見たけど、やっぱり装備が全体的に古そうなんだよな」

「それは知らんけど、コーマット星系で仕事してた時には特に目立った戦力は無かったように思うな」

将来的に俺とクリスが結婚して、将来的に俺がダレインワルド伯爵領の治安維持に関わることになったらその辺がネックになりそうな気がするな。まぁ、この船もまともな装備を積んでいる分、一般的な宙賊艦よりも戦闘能力が高いんだが。

うーん、俺の一存でダレインワルド伯爵領の戦闘艦を最新のものに刷新！　とかそう簡単に出来るとも思えないしな。何か考えておいたほうが良いかもしれない。

「よくわかった。スキャンはしていいけど、整備とか弄ったりとかはクリスに許可を取ってからにしてくれ」

「りょーかーい」

「はい、わかりました」

「頼んだぞ。俺はクリス達の様子を見に行ってくるから」

元気に返事をする整備士姉妹にそう告げ、俺はハンガーを後にした。

☆★☆

何にしてもまずはダレインワルド伯爵に話をつけなければならない。お孫さんを頂きます――じゃないな。俺が頂かれるのか。その件に関して彼がどのように考えているのかは正直ちょっと俺にはわからんのだよな。実のところ、ダレインワルド伯爵と言葉を交わした回数はさほど多くないし。

ただ、今までの経緯を考えれば嫌われているということは恐らく無いし、クリスとの関係について言語道断であると考えてるわけでも無さそうだとは思う。

もし彼がそのように考えているならコーマット星系での依頼を俺に持ちかけたりはしてこなかっただろうし、その後のクリスとの連絡や今回の帝都での件に関しても何らかの干渉を行っていただろう。

「とまぁ、色々と考えを巡らせてはいるが……なんというかこう、快刀、乱麻を断つといった感じでスパッと何でもかんでも解決できないもんかね」

『それは私じゃなくてどちらかと言えばメイ辺りに相談するのが良い案件じゃないかな、キャプテン。もしくはエルマ姉さんとか』

「それはそうなんだが二人とも忙しそうでな。暇そうなネーヴェは丁度良かったんだよ」

『キャプテンは私のことをペットか何かみたいに思っていないかい？』

「？？？」

『なんだいその「そうだが？」みたいな顔は。噛みつけるものなら噛みついて理解らせてやるところだよ』

そう言いつつポッドで俺の膝にゴツゴツとぶつかってくるのはやめてくれ。地味に痛い。

「まぁペット云々は冗談としてだな。実際にネーヴェしか暇な人いないから仕方がないじゃないか」

ミミとエルマ、クギの三人はクリスと従者二名の部屋を用意したり、荷解きを手伝ったり、補給物資の手配だったりに忙しい。整備士姉妹も出港のために各種チェック作業や資材の確保に奔走している頃だし、ショーコ先生はマーリオンの面倒を見ている。メイならどんな業務を行っていてもマルチタスクで俺の相手をしてくれそうだが、忙しいのをわかっていて邪魔をするのはな。

『私もそろそろ手に職が欲しいんだけどね？』

「せめて生身で自由に歩き回れるようになってから言ってくれ、そういうのは」

浮遊車椅子というか自立型の簡易医療ポッドめいたものに入ってある程度動けるようになったのがつい先日の話だ。今も彼女の身体はショーコ先生の手によって治療を施されている最中であり、こんな状態で仕事を受け持つのは不可能であろう。もっとも、彼女の強みはハッキングやクラッキングなどの電子戦方面なので、平時にやることがあるのかと言うと微妙なところなのだが。

「……ま、しばらくは賑やかし役というか相談役だな」

『良いんだよ？　ペット役って言っても？　今度から私はキャプテンの愛玩用ペットですにゃん、とか名乗ってあげようか？』

「やめてくれ、外聞が悪すぎる」

ショーコ先生に癒やされ、うちの女性陣に磨き上げられたネーヴェの見た目は本当に可憐な少女そのものなので、そんな自己紹介をされた日には俺が社会的な意味で致命的なダメージを負ってしまい

そうだ。

『まぁ、なるようにしかならないんじゃあないかな。良ければ私の出来る範囲でダレインワルド伯爵家について調べておくけど？』

「頼む。でも危ない橋は渡るんじゃないぞ」

『大丈夫だよ。メイに監視されているからね』

それなら安心だな。まぁ、ネーヴェのネットワークアクセスについてはメイが掌握しているはずだし。しかし、いくらメイとはいえオーバーワークになっていやしないだろうか？　スペックアップとか必要じゃないか今度相談してみるか。

「なんとか穏便にダレインワルド伯爵との打ち合わせというか話し合いを終えて、さっさとヴェルザルス神聖帝国に向かえると良いんだが……」

『話に聞く限り無理じゃないかな？』

「どうしてそういうことというの？」

新入りのネーヴェにさえ俺の平穏な旅路が諦められているという現状に戦慄する。誰から話を聞いたんだ、ネーヴェは。いや、うちのクルーなら全員同じことを言うか。そうだよな。そして実際にそうなるんだろうな。

「気が重いぜ……」

『私は少し楽しみだよ、キャプテン』

ニヤニヤと笑いながらそう言うネーヴェであったが、そんな余裕があるのは今のうちだぞ、と心の中でそう思いつつ、俺は天井を見上げるのであった。

#488　「兄さんも大変やなぁ」

衣擦れの微かな音で目が覚めた。隣りにあったはずの温もりは既に無く、その残滓が微かに感じられる。俺が彼女の温もりを探していることを察したのか、温かな手がするりと俺の手を捉えた。なんだか安心してその温かな手をニギニギとしていると、フサフサとなにか柔らかいものが空を切る音が聞こえ始める。

「……おはよう」
「おはようございます、我が君」

目を開けると、俺のTシャツを羽織ったクギがベッドサイドから俺に笑顔を向けていた。フサフサという音は彼女の三本の尻尾が立てていたものらしい。
頭の上の狐のような獣耳はピコピコと機嫌良さげに動いているし、金色に輝く瞳は活力に満ちてきらきらしている。今日もクギは絶好調のようだ。

「うふふ……」

寝起きでぼけーっとしたままクギの手をにぎにぎとしていると、クギに笑われてしまった。昨晩はあんなにクギをいじめたのに、朝になったらこんなに甘えて……とか思われているのかもしれない。いや、いじめたって本当にいじめたわけじゃないけど。クギは誘い上手なんだよ……むしろ俺が彼女の手の平の上で転がされているのかもしれん。

「起きるかぁ……」

「はい、我が君。湯浴みを致しましょう。お背中お流ししますね」
「そりゃ朝から楽しみだ」
心の底からそう思う。まぁ、お楽しみの後には気が重い出来事が待ち構えているんだがな。

☆★☆

「婚約者となるクリスティーナ様がいるというのに、他の女性と同衾を……？」
「……」
クギと一緒に楽しく朝風呂に入り、二人揃って休憩スペースにまで足を伸ばしたわけだが……そこで俺の気が重くなっていた原因と遭遇した。
遭遇するなり、二人分の鋭い視線が俺の顔に突き刺さってくる。一人は格式高そうな騎士服を着込み、実際に腰に剣を差している茶髪の癖っ毛が特徴的な美人さんの女性騎士で、もう一人はメイとは少しデザインの違うメイド服を着込んだ少しばかり目付きの悪い長身の金髪メイドさんだ。
「クリスと同衾するわけにはいかんだろ……それに、クリスは俺達のこういうライフスタイルを百も承知で俺との関係を構築しようと考えているわけでな」
「そうですけど、蔑ろにされて嬉しいというわけではないですよ」
婚約者（予定）がそう言いながら頬を膨らませ、ジト目を俺に向けながら両手の人差し指で俺の胸や腹をズドドドドッと突いてくる。地味に痛い。というか何故人差し指。俺の経絡秘孔でも突くつもりなのか？

「別に蔑ろにしているわけじゃないだろ。だからこそ隠しもせずにこうして普通に接しているんだし」
「むむむぅ……つまりこれは、私がヒロ様のライフスタイルに耐えられるのかという試練というわけですね」
「試練ってのは大げさ過ぎる物言いだと思うけどな」

俺の胸や腹を人差し指で突きまくるのを止めた婚約者（予定）もとい、クリス――クリスティーナ・ダレインワルド次期女泊を前に肩を竦めてみせる。
正直なところを言うと、クリス達が乗船している間の営みに関しては自重するか、それとも普段通りにするかで意見が割れた。ミミとメイとティーナ、それにクギが普段通りにするべきだと主張し、エルマとウィスカは自重することを主張した。ショーコ先生とネーヴェ？　あの二人はニヤニヤしながら事の推移を見守っていたな。
普段通りにしようと主張するクルーの方が数が多かったというのもあるし、俺もそうするべきだと思ったのでまぁいつも通りというかスケジュール通りというか、女性陣で決めた順番通りに昨夜はクギとイチャイチャしたわけだ。
どうしてクリス達を乗せているというのに自重をしなかったのかと言うと、今後クリスと順調に婚約者としての契りを結び、更にその先に進んで婚儀も終え、夫婦関係になったとしよう。
もしそうなったとしても、俺は傭兵稼業を辞めるつもりは今のところ無い。少なくとも、現時点では。何故なら、俺にはまだ追い求めるべきものがあるからだ。
そう、コーラである。黒くて甘くてスカッとした酸味を味わえる魅惑の炭酸飲料である。
クリスと結婚すればダレインワルド伯爵領にある居住惑星の何処かに庭付きの豪邸を建て、そこで悠々自適の結婚生活を送ることは可能だろう。だが、そこにコーラはあるのか？　いや、無い。俺の

命の水たるコーラがなければ、俺が求める庭付き一戸建ての平穏な生活というものは完成しない。コーラが無ければ――おっと思考が逸れたな。

「とはいえ、その認識も当たらずとも遠からずってところだな。結婚後も俺はライフスタイルを変えるつもりはないし、そうなればクリスと離れ離れになる時間は自ずと多くなる。クリス以外の女性と関係を結ぶこともな。それに耐えられないなら、俺と関係を構築するのは考え直した方が良い。それが純然たる事実だ」

この場だけ取り繕っても仕方がないんだよな。クリスが一緒だから自重する。ほんの短い期間なのだからその間くらいはクリスに配慮すべきなのでは？　という意見にも一理はあると思うけど。

「勿論、私だってそれはわかっています。でも夜の手番は譲ったんですから、今度は私に手番をくれても良いですよね？」

「それはー……そうね」

俺の返事にクリスはにっこりと極上の笑みを浮かべた。

☆★☆

「それでクリスちゃんが朝からずっとくっついているんですね」

クリス達を伴って食堂で朝食を取り始めたところで少し遅れて食堂に到着したミミが、俺と、俺の隣に座ったクリスの対面に座りながら納得したように頷く。

「ヒロ様が普段どういう生活をしているのかお勉強をさせてもらっています」

クリスが俺の隣で胸を張ってミミにそう答えた。二人の胸部装甲の厚みの差に関してはコメントを控えるが、大戦艦と駆逐艦という言葉が脳裏に浮かんでくる。以前は大戦艦とコルベットくらいの差だったので、順調に育っているといえばそうなのだろう。既にエルマとは並んでいるか、勝って――。

「いてっ」
「オホホ。何か不快な波動を感じたからついつい手が出てしまったわ」

ペシッ、と俺の頭を叩いたエルマが俺の隣――クリスとは逆側――に座る。今日も朝からパワフルな食事内容だ。不快な波動ってなんだよ、不快な波動って。いつの間にテレパシー的なサムシングに目覚めたんだ、エルマは。

ちなみに、クギは俺達と一緒に食堂に直行しないで研究室にこもったままのショーコ先生を呼びに行った。あの人、研究に熱中し始めると飯も食わずに延々と何か作業をしているからな。気がついた時に様子を見に行かなきゃならんのだ。

「兄さんも大変やなぁ」
「あの、私達のことは適当で良いので……」
「いや、適当にはしないけども」

ティーナはともかく、ウィスカは見るからに貴族のお嬢様って感じのクリスが若干苦手らしく、ティーナと一緒に少し離れた席に座っている。控えめで穏やかなのはウィスカの美徳でもあると思うんだが、あまり過剰に引くのもな……ティーナくらい図太くなれってわけでもないんだが。

「そんなに熱心に見つめられたら照れるわー」
「おう、そうだな。ティーナはいつも可愛いよ」
「えへへ、あんがとさん」

ティーナが少し顔を赤くしてはにかむように笑う。うん、可愛い。そしてそんなティーナを見ながらクリスが参考になりますみたいな顔をしている。いや、クリスにあのノリは無理じゃないかな。

☆★☆

「で、まぁ真面目な話なんだが。ダレインワルド伯爵にはどの程度話が通っているんだ？」

食後、トレーニングルームでの運動を終えて休憩スペースに移動した俺はクリスにそう聞いてみたのだが……俺の質問にクリスはついっと視線を逸らした。おい、冗談でもやめろ。

「あはは、冗談ですよ。お祖父様はちゃんと事情を把握していらっしゃいますし、私とヒロ様が婚約を結ぶことにも当然賛成していらっしゃいます。ただ……」
「ただ？」
「家臣の全員が納得しているのかと言うと、それはまた別の話で」

そう言ってクリスが肩を落とす。

「なるほど……？」

なるほどと言いながらも俺は首を傾げた。ダレインワルド伯爵家の家臣ということは、恐らくは子爵以下の寄子というやつなのだろうが、そういった家臣達が主家の婚姻話に嘴を突っ込んでくること

などあるのだろうか？　あるのだろうな。クリスが懸念事項として口に出すということは。

「何が問題なんだ？　いや、俺の身分というか立場は次期女泊の伴侶としては問題だらけなんだろうが」

「ヒロの立場が問題っていうよりも、あわよくば自分の家の人間をクリスの婿として押し込んで、ダレインワルド伯爵家の派閥内での立場を盤石なものにしようって連中がいるんでしょ」

「えーと、まぁ、その、皆に悪意があるわけではないんですよ？　無論、打算的な部分もあるでしょうが、主家の危機である今こそ家臣たる我々がお支えする時、と純粋にダレインワルド伯爵家のためを思っている家も多いです」

ジト目で向けてくるエルマにクリスが苦笑いを浮かべながらパタパタと両手を振る。だが、クリスからしてみれば有難迷惑なのだろうな。自分で言うのもなんだが、クリスは俺と身を固めたいと思っているのだから。

「だが、臣下達の言うことにも一理あるというか、何の後ろ盾もない文字通り名ばかり貴族の俺がクリスの伴侶になったところで、ダレインワルド伯爵家の窮状を打破する助けになるわけじゃ……いや、ダレインワルド伯爵家って窮状にあると言うほど危機的な状況なのか？」

「ある意味では。私が子を成さずにこの世を去った場合、下手をすればお家の断絶に繋がりかねないので。尤も、家臣の中にも代を遡ればダレインワルド伯爵家の血が入っている家が多いので、その時には家臣の中から適切な人材が選出され、ダレインワルド伯爵家を次ぐことになるかと思いますが」

「それって、一つ間違えばクリスを暗殺してダレインワルド伯爵家を乗っ取ろうなんて連中も出てくるんじゃないのか？」

俺の素朴な疑問を耳にしたエデルトルートとマーリオンからチクチクとした意思を感じる。これはアレだ、彼女達から発せられる怒気が俺に刺さってるんだな。俺のサイオニック能力も順調に伸びてるからな。これくらいは肌で感じられるようになってきている。

「流石にそこまで考えているような家は無いと思いますが、可能性としてはゼロではありませんね」

「なるほど。まぁその点は横に置くとして、ダレインワルド伯爵家の血統が途切れかねないという点以外の問題は？」

「細々としたものは無数に。ただ、彼らが問題視しているのはヒロ様をダレインワルド伯爵家に迎え入れたところで、ダレインワルド伯爵家に利するところが無いという点、だったのですが……」

「ですが？」

「セレナさんやエルマさんとも一緒に婚約をすることになりましたから。これは帝都との太いパイプになりますし、ホールズ侯爵家といえば武門の名門ですから。領地もダレインワルド伯爵家よりも大きいですし。将来的にあちらの領地や帝都との交易や人材交流、技術交流などの話が纏まれば、十分過ぎる利益になるかと」

「つまり、クリスだけでなくエルマとセレナとも婚約することが決まっている今の時点で、家臣達の懸念点は粉砕されていると？」

「そうなります。後は領地に戻って皆を納得させるだけですね」

そう言ってクリスはにっこりと笑みを浮かべてみせた。なるほど、つまり「勝ったなガハハ！　風呂入ってくる！」状態なわけだな？

うん、絶対に何か一悶着あるわ。もう天丼が過ぎてお腹いっぱいだよ。

#489　デクサー星系（前書き）

今日は私用で出かけるので、昨日の晩からコツコツ書いていたのだ（，ω，）（勤勉

#489　デクサー星系

デクサー星系。ダレインワルド伯爵領の中心地で、合計四つの星系へとハイパーレーンが繋がっている、ハブ星系と呼ばれる立地の星系だ。

隣接する四つの星系全てがダレインワルド伯爵領に属しており、そのうちの一つがコーマット星系。以前俺がダレインワルド伯爵の依頼を受けて星系の治安維持に従事し、その過程で生身でテラフォーミング中の惑星に降下したり、生物兵器と切った張ったを繰り広げたりした星系だ。今、このブラックロータスに同乗しているクリスが総督を務める星系でもある。

で、俺達が今到着したデクサー星系には最初にクリスを助けた際にも立ち寄ったことがあるのだが、本当にその時は護衛対象であったクリスを護送する最終目的地として立ち寄っただけで、すぐに立ち去ってしまった。

「なんだか、前に来た時と比べると随分と賑やかになっていませんか？」

『そうね、行き交っている船の量がかなり多くなっているように感じるわ』

エルマが通信越しにミミの話題に反応する。見る限り、俺もそう思う。そう思えるほど顕著に以前に訪れた時と比べて交通量が増えているようだ。

一応、今の俺達はクリス達の護衛を依頼として請けている状態なので、ハイパースペース内を航行している時間以外はこうしてクリシュナやアントリオンに搭乗し、万が一の事態に備えていた。特に、ハイパーレーンを脱した直後は無防備になりがちで、奇襲を受ける

危険性が高いからな。
そんなわけで、ハイパーレーンから出るなりミミとエルマはブラックロータスのセンサーから得た周辺宙域や星系情報を確認し、前述の会話が展開されたわけだ。

「我が君、危険は無さそうです」

周辺に存在する艦船のチェックが終わったのか、クギがそう報告してきた。俺もちゃんとその辺りはチェックしていたので、クギの言葉に頷く。

「そうだな、デクサー星系の星系軍――ダレインワルド伯爵家の戦闘艦の反応も近くにあるし、ちゃんと治安維持が行われているってことだ。前に依頼で来た時もしっかりと治安維持が行われていて、傭兵の仕事が少なそうって感じだったんだよ」

実際のところ、銀河地図上におけるデクサー星系の治安評価は実にクリーンなものだ。これ以上上となると、帝都とか、帝国航宙軍の大規模な造船所があるウィンダス星系とかになってくるな。

『そうなるとうちら的には美味しくないなあ』
『でも、治安が良いなら拠点にするには良いんじゃないかな？　ゲートウェイもそこそこ近いし』
『デクサー星系は歴史のある星系だろう？　もし惑星上に土地を確保して家を建てるだとか、物件を購入するだとかって話になると高いんじゃないかい？　それなら、クリスくんの治めているコーマット星系の方が開拓初期ということもあって安く上がりそうだし、傭兵としての仕事もありそうだしで丁度良いんじゃないかねぇ？　コーマット星系のほうがハイパーレーン一本分ゲートウェイにも近いだろう？』

通信越しにうちの技術者集団も話に加わってくる。ショーコ先生の意見は一考に値するな。土地家屋の購入費が安くなれば、その分セキュリティ対策に回すことも出来る。コーマット星系の治安はデクサー星系に比べると一段か二段は落ちるが、完全に助けが来ずに居住惑星が丸ごと蹂躙されるといったような心配は流石にない。ならば降下してきた宙賊を十分に足止めできるだけのセキュリティ対策をしてしまえば、危険はグッと減ることになる。

『私としてもヒロ様にはコーマット星系に居を構えて頂きたいですね。将来的にはコーマット星系に立てた屋敷を別荘としても良いわけですし』

護衛対象のクリスまでもが会話に参加してくるのは若干どうかと思うが、恐らくはメイが問題ないと判断して回線を繋いだのだろう。メイがそう判断したなら俺がとやかく言うつもりはない。メイのことは全面的に信用しているからな。

「何にせよ今すぐ決めるものでもない。実際の金額やその他の条件も詳細を確認しないことにはわからないしな。ただ、俺もコーマット星系に拠点を作るのが良いんじゃないかとは思ってるよ」

クリスが治めている星系の方が色々と融通が利きそうというのもあるしな。え？　コネを使って楽するなんて恥ずかしくないのかって？　コネも立派な力の一つだ。恥ずかしくもなんともないね！　第一、将来的に子供を育てようっていう家の話なのだ。ガチなのだ。本気なのだ。そんな小さなことに拘って最善手を打たないなんてのは自己満足以外の何物でもない。子供と皆の命がかかっているかもしれないのだから、俺も本気である。

『キャプテン、こういう時はまずどう行動するんだい？』

ネーヴェが仕事の進め方について質問してくる。彼女なりに傭兵としての仕事を覚えようとしているのだろうな。実際のところ、彼女は航宙戦における戦闘補佐についてはミミよりも経験豊富なので、こういった傭兵としての基本的な動きについて学びさえすれば下手をすると独り立ちすらできる可能性があるほどなんだよな。

「まずは主要なコロニーに向かう。護衛対象の目的地が惑星上の居住地だったりした場合でも、大概の場合においてまずは主要なコロニーで降下申請を行う必要がある場合が殆どだからな。場合によっては主要なコロニーと惑星上居住地との間で定期便が運行されていることもあるから、護衛対象を主要なコロニーに送り届けるだけで良いこともある。その辺りは護衛対象に要確認といったところだな」

『今回はちゃんとお屋敷まで送ってくださいね』

「だそうだ」

『了解だよ、キャプテン』

というわけで、俺達はデクサー星系の主要な交易コロニーであるデクサープライムコロニーへと向かうことになるのであった。

☆★☆

デクサープライムコロニーの防衛圏に到達したので、警戒態勢を解除した俺達はブラックロータスの休憩スペースへと移動した。で、その休憩スペースで大混雑している船外の様子を眺めているわけだが。

「なかなかの盛況ぶりだな。コーマット星系の開発特需がここにまで波及してるのかね？」

「はい。ヒトもモノもコーマット星系に向けて沢山動いているので。コーマット星系にも交易コロニーはありますけど、あちらも既にキャパシティオーバーを起こしていますからね。一応、コロニーの拡張計画も進めてはいるんですが、一朝一夕ではなかなか」
「あー、あんまり無茶やるとブラドプライムコロニーみたいになってしまうからなぁ……」

クリスの説明にティーナが遠い目をする。ブラドプライムコロニーなぁ。あのコロニー、改築に改築を重ねた結果、入り組み過ぎたり使いにくい空間ができてしまったりして、結果的に犯罪者とかマフィアめいた連中の溜まり場みたいな区画ができてしまっていたりしたからな。無計画な拡張はそういった問題を起こしかねないと。それは確かに一朝一夕ではどうにもならんだろうな。

「それで、ダレインワルド伯爵には連絡を取れたのか？」
「はい。デクサーIIIのダレインワルド本家で私達を待っているとのことです。既に降下申請も出してあるので、申請が通り次第向かって頂ければと」
「となると、デクサープライムコロニーには寄港しないで、手続きが完了次第直接向こうに向かうことになるか。ブラックロータスが降りられる港湾施設はあるのか？」
「本家の近くに」
「オーケー、なら降りる準備をしておこう。エルマ、アントリオンを」
「はいはい。やっぱ中型艦も収容できる船が欲しいわねぇ」

ボヤきながらエルマがアントリオンの面倒を見るべく休憩スペースを出ていく。中型艦のアントリオンはブラックロータスに収容することができないので、ブラックロータスの船底にあるドッキングポートを使ってブラックロータスにくっついている。当然、そのま

まだと地上に降下して着陸することはできないので、着陸時には分離して別々に着陸する必要があるわけだ。コロニーの宇宙港に停泊するだけならそうする必要も無い場合が殆どなんだけどな。

「難しいところなんだよなぁ。スペース・ドウェルグ社との専属契約の件もあるし」

失念しかけていたのだが、ブラックロータスを購入する際に結んだ専属契約の内容に可能な限りブラックロータスを母船として使い続けること、というものが盛り込まれていたんだよな。ブラックロータスは購入してまだ半年も経っていない船だ。まぁ、傭兵によっては一週間で今使っている船から別の船に乗り換えることもあるので、別に半年近くという時間が極端に短いというわけでも無いと思うのだが。

「乗り換えじゃなくて拡張とか改造を検討した方が良いかもな」

「そうすると、スペース・ドウェルグ社の造船所がある星系に行かなきゃですね。ブラド星系に戻ります？」

「ブラド星系か、それともスペース・ドウェルグ社の本社がある星系にまで足を伸ばすか……何にせよ、ここでの用事とヴェルザルス神聖帝国での用事を済ませた後だな」

「不便やけど、致命的な問題ってわけでもないもんなぁ」

母船の乗り換え、改造計画について整備士姉妹と話している間にデクサープライムコロニーの港湾管理局からデクサーⅢへの降下の許可が降りた。

「よし。メイ、あちらの誘導に従って降下してくれ」

『はい、ご主人様。お任せください』

デクサーⅢへの降下はメイに任せておけば万事問題なし。さて、地上では一体どんなトラブルが待ち構えていることやら。

#490　「いつもこんな感じなのか？」

降下申請の手続きは速やかに承認された。そりゃ次期女泊にして現伯爵の孫を事務手続きでお待たせするわけにはいかんよな。クリスはそんなことはしないと思うが、下手すると首が飛ぶものな。物理的に。

『降下軌道に到達。降下を開始します』
「了解。ご安全にな」
『はい、ご主人様。この私に万事お任せください』
「エルマもな」
『はいはい。今更この程度のことでポカなんかやらかさないわよ』

先にブラックロータスが降下を開始し、その後を追ってアントリオンが降下する。まぁ、今の航宙艦には大気圏降下時の断熱圧縮で発生する熱から船を守ってくれるシールドもあるし、強力なスラスターも重力制御装置もある。減速さえ上手くやれば墜落なんてすることはないのだが、もしやらかした場合は大惨事確定だからな。心配くらいはする。

「立派な総合港湾施設ですね」
「帝都と同じくらい、とまではいきませんけどね。地方の総合港湾施設としては大きく作ってあると思いますよ」
「確かにこう言ったらアレやけど、リーフィルⅣの総合港湾施設よりも規模がデカいなぁ」
「リーフィルⅣの総合港湾施設はブラックロータスくらいの大きさの船が停泊できるポートが二つか三つくらいしか無かったよね」

ミミとクリスの会話にティーナとウィスカも加わっていく。確かにウィスカの言う通り、以前立ち寄ったエルフ達の母星であるリーフィルⅣの総合港湾施設はデクサーⅢの総合港湾施設と比べると小さかったな。デクサーⅢの総合港湾施設にはブラックロータスが停泊できそうな大型のポートが沢山並んでいるし。敷地面積は五倍くらいあるんじゃないだろうか？　流石に帝都の港湾設備に比べると規模が違い過ぎるけど。

ブラックロータスとアントリオンが総合港湾施設の管制官の指示に従ってスムーズに着陸する。もっとも、ブラックロータスとアントリオンでは着陸する場所が遠かったから、アントリオンの着陸はこの目で見届けられなかったのだが。何せ船のサイズが全然違うからな。まぁ、トラブルの報告もないからスムーズに着陸できたのだろう。

「じゃあ事前の打ち合わせ通りにな」
「あいよ、任せとき」
「お留守番してますね」

今回、整備士姉妹は船に残ってクリス達の荷物の運び出しや船の搬出作業、それにブラックロータスだけでなくクリシュナやアントリオンの整備や補給などに専念することになっていた。その他のメンバーは全員下船する。特にショーコ先生とネーヴェはダレインワルド伯爵と顔を合わせたことがないからな。整備士姉妹は辛うじてだが面識があるので、今回は留守番役を務めてもらうことになったわけだ。

「伯爵閣下とご対面か。いやぁ、緊張するねぇ」
『私はこのままでいいのかな？　高位貴族の前で寝そべったままなど無礼千万！　とか言われて真っ二つにされない？』
「お祖父様はそのような事は言いませんし、もしそうなっても私が

絶対に止めますから」

ある意味で差別感溢れるネーヴェの言葉にクリスが苦笑いを浮かべている。まぁ、ベレベレム連邦の人間からしてみたらグラッカン帝国の貴族なんてのはアレだからな。白兵戦となれば嬉々として剣一本でサツジンレーザーの飛び交う戦場に突っ込んでくる激ヤバ強化人間みたいなものだろうからな。

あれ？　なんだろう。そんな連中が日本にも昔いたような気がするな。島津……薩摩隼人……うっ、頭が。いや待てよ？　最近俺も白兵戦ではレーザーガンよりも剣をよく使ってるな？　もしかして傍から見ると俺も同じような扱いなのでは……？　これ以上考えるのはよそう。オレの心の平穏のために。

「エルマさんも船から降りたみたいです。合流地点を送っておきますね」

「ありがとう、ミミ。ほら、俺達も移動するぞ」

「はい、我が君」

ブラックロータスから降りた皆を引き連れて総合港湾施設内を移動するためのトラムに乗り込み、エルマと待ち合わせをしているロビーへと移動する。

予定では二泊三日でデクサーⅢに滞在し、ダレインワルド伯爵やその臣下達と顔合わせや婚約、婚儀に関する打ち合わせをする予定である。その間、整備士姉妹はずっとブラックロータスで留守番だ。お土産にダレインワルド伯爵領の銘酒とか何かを買っていってやらんとな。買い物をする余裕はあるんだろうか？　いや、その辺はダレインワルド伯爵家の使用人の誰かか、最悪の場合はクリスにでも相談すれば良いか。

☆★☆

俺とミミ、メイ、クギ、ショーコ先生にネーヴェ、護衛と従者を引き連れたクリス、それにロビーで合流したエルマという合計十名という大所帯で移動することになったわけだが、移動そのものは大変にスムーズに行われることになった。トラムで港湾施設のロビーに移動し、トラム駅に降り立った瞬間からＳＰ――民間のボディーガードではなく本物の官憲だからＳＰで良いだろう――の群れに護衛されることになって滅茶苦茶目立ったけど。

エルマも小型、中型艦の発着場からロビーへと移動したところでＳＰに護衛されることになったらしく、合流した時にはこれでもかというほどウンザリとした表情になっていた。

まぁ、クリスはこのデクサー星系を中心としたダレインワルド伯爵領内で言えばナンバーツーと言っても過言ではないＶＩＰであるわけだし、こういった扱いになるのもさもありなんといったところか。特に、クリスに関してはその両親が謀殺されたという事実もあるわけだしな。

「いつもこんな感じなのか？」

「はぁ、まぁ、本星にくると大体はこんな感じで……」

そう言ってクリスが苦笑いを浮かべる。しかし、そんなクリスに護衛のエデルトルートが小言を言い始めた。

「クリスティーナ様が無頓着過ぎるんです。今回の帝都行きだってマーリオン殿と私だけを伴にして半ば無理矢理出立なされて……」

「急ぎ出立する必要があったのですから仕方ありませんね。伴を数十人から数百人、船も巡洋艦他護衛付きで動かすとなると絶対に間に合っていませんでしたし」

小言を言われたクリスは柳に風、糠に釘、暖簾に腕押しといった

感じで全く反省はしていないようだ。俺としてはエデルトルートの意見に賛成したい部分もある。何せクリスの両親が亡くなったのも護衛を連れずに夫婦水入らずでリゾート星系に行楽に行ったのが原因と言えば原因だったわけだからな。同じ轍を踏みかねないような真似は控えて欲しい。特に、俺の手が届かない範囲では。

「結果論としてはそうかもしれないが、今後は少し気をつけようなな。俺が言うのもなんだが」

「確かにヒロが言うのはなんか違うわよね」

「あはは……危険に自分から突っ込んでいくようなお仕事ですからね、傭兵稼業は」

エルマとミミに突っ込まれる。でもそれを言ったら俺に付き合って傭兵稼業をしてくれている君達だって同じ穴の狢だからな！　いや、巻き込んでいるのは俺だけどもさ。

ううむ、俺もライフスタイルの変化というやつを受け入れる時なのだろうか？　だがなぁ、俺がこの世界で出来ることなんて傭兵稼業くらいだぞ、多分。元々の世界でやっていた仕事なんてこの世界じゃメイ一人で全部解決だし。

「我が君？」

「なんでもない。とにかく今はダレインワルド伯爵との話し合いに集中しないとな」

考え込んでしまった俺を心配したのか、声をかけてきてくれたクギに首を振ってそう答え、頭を切り替えることにした。あの爺さん、寡黙な割に自分の意思を通す力が滅茶苦茶に強いからな。何か変な条件を呑まされでもしないか警戒しとかないと痛い目を見そうだ。

#491　「はなしを、なかったことに？」（前書き）

ライズオブローニン終わったらドグマ2かDLCに向けてエルデンリング再走か悩む（ ，ω， ）

#491　「はなしを、なかったことに？」

「うぉでっか……」
「はわぁ……」
「立派なお屋敷ねぇ……」

ダレインワルド伯爵邸に着いた俺達は、その威容を前に感心しきっていた。いや、でかい。本当にでかい。庭が広すぎる。そして奥に見える建物もデカい。いや、高さはそうでもないけど横幅も奥行きもかなりありそうだ。これ、庭を含めた敷地面積はどれだけあるんだろうか？

「凄い庭だねぇ……これだけの植物を管理するとなると、手間も大変そうだ」
『物凄く贅沢な空間の使い方だ……凄いなぁ、帝国貴族』

執事さんらしき人に案内されて門を通り、バカでかいゴルフカートのような乗り物に乗せられて奥に見える屋敷へと向かう。庭が広すぎるもんな。徒歩だと軽く二、三十分くらいかかりそうだ。

「あのお屋敷もとても大きいですね。お掃除が大変そうです。でも、ボットが見当たりませんね？」
「そういった管理を敢えて人力で行うことによって雇用を創出しているのです」

ショーコ先生とネーヴェ、クギとメイもそれぞれ庭や屋敷を見て思うところを話し合っている。俺も庭付きの一戸建てを地上に建てたいとは思っていたけど、ここまではなぁ……これは俺の想定する

レベルを遥かに超えているんだよ。もう少しこう、こじんまりとしたものにしたい。
とはいえ、将来的に何人家族になるかもわからないような状態だからなぁ。クリスとセレナは俺が建てる家に住まない可能性が高そうだが、それでも軽く十人近い人数で住むわけで。更に子供が生まれたりすることを考えると……うん、ここまでは行かなくともかなり広い家にする必要があるな。
それに、これまでの経緯を考えれば今後もっと増える可能性も考慮しなきゃならない。最近もネーヴェを拾ったばかりだからな。
俺の節操の無さをどうにかすれば解決？　それはそうなんだが、じゃあミミやエルマ、ネーヴェを見捨てれば良かったのかと言うとそれは違うと思うし、メイやティーナやウィスカ、それにクギに関しても彼女達の事情なんざ知ったこっちゃねぇと突っぱねれば良かったのかというと、やはりそれも違うと思うんだ。
ショーコ先生に関しては喫緊の差し迫った事情があったというわけじゃないけど、船医は必要だと前々から思っていたしな。
リンダ？　リンダに関しては三年後にどうなってるかわからんしな。とりあえずノーカンで。
セレナに関してはもう初対面からここに至るまで俺は深い関係にならないように努力していたのに結局こうなったし、クリスに関してもほぼ回避は不可能だったと思うんだ。いや、そのことに不満があるわけでは全く無いが、ただの節操なしみたいに思われるのは心外である。

そう、心外なのである。

「こんなに沢山の女性を側に侍らせた節操なしの似非貴族をクリスティーナ様の伴侶とするなど言語道断！　私は断固反対します！」
口から唾を飛ばす勢いで……というか実際に飛ばしながら断固た

る主張をしているのは中年くらいに見えるおっさんだ。彼の名はアードルフ・ブッシュバウム子爵。ダレインワルド伯爵の寄子の中ではもっとも地位の高い人物で、見ての通り俺とクリスの婚約というか結婚について大反対している。

「ブッシュバウム子爵。そのように興奮するものではない。品位を疑われますよ？　貴方がそうして無礼にも指をさしている相手は貴方と同じ子爵位の帝国貴族なのだからね」

そう言って扇子のようなもので優雅に口元を隠している熟女はベッティーナ・エルツベルガー女男爵だ。彼女は俺がクリスの伴侶になることについて今のところ是も非も表明していない。

「名誉爵位とはいえヒロ殿の子爵位は多数の将兵の命を救ったその功績を皇帝陛下に認められて賜ったもの。それを軽視することは同じ帝国貴族として慎むべきかと思いますが。それと、ヒロ殿が多数の女性とパートナーの関係を構築していることは特に問題は無いのでは？　きちんとクリスティーナ様との間にお世継ぎを設けて頂くことのみが肝要かと」

いかにも堅物らしい厳然とした声音でブッシュバウム子爵を諌めているのはルートガー・シュノール男爵。彼はクリスと俺との関係に消極的ながら賛成の立場らしく、先程からギャーギャーとうるさいブッシュバウム子爵を何度も諌めてくれている。

「ぐぬぬ……お屋形様！　どうかお考え直しを！」

青筋を浮かべたブッシュバウム子爵がダレインワルド伯爵に翻意を促したが、ダレインワルド伯爵の態度は明確なものであった。

「クリスティーナの伴侶としてキャプテン・ヒロを迎える。これは決定事項だ」
「しかし、それではホールズ侯の軍門に降ることになります！　どうか！」
「アードルフよ、お前の心配はよくわかっている。だが、クリスティーナがダレインワルド伯爵家を背負って立つのにはまだまだ時間がある。それまでに我々大人が道を整え、歩き方を教えていけば良い。そうではないか？」
「それは……わかりました。お屋形様がそうまで仰られるなら」

主従の暑苦し――熱い人情劇が展開されているが、俺は殆ど置いてきぼりである。それはそうだろう、俺が彼らについて知っていることなど今聞いたばかりの名前と爵位くらいで、彼らの収める星系がどの星系なのか、ダレインワルド伯爵領においてどのような仕事をこなしているのか、などの情報が何も無い。

「それで、婿殿はクリスティーナ様と婚儀を交わした後にはどのような形でダレインワルド伯爵領に貢献していただけるのかな？」

おっと、ボケっとしていたらエルツベルガー女男爵に水を向けられてしまったぞ。

「現時点で具体的にどうこうというのは難しいな。俺個人が持つ力はせいぜい宙賊どもを蹴散らす程度のものだし。俺個人が持つコネクションというモノもごく限定的なものだ。何か莫大な利益を能動的にダレインワルド伯爵領に誘導できるほどのものとは思えないな」

俺のコネクションといえばセレナ経由でのホールズ侯爵とのものと、非公式ながらミミ経由での皇帝陛下とのもの。あとはリーフィル星系のエルフ達との個人的なものくらいだ。

「順当に考えればダレインワルド伯爵領内での治安維持に軍事分野の方面から貢献するのが妥当なんじゃないか。対宙賊独立艦隊の初期の対宙賊戦術を確立させたのは外でもない俺だ。その後の対宙賊独立艦隊の功績を考えれば、そっち方面での貢献というのが現実的なところだと思うが」

実際、セレナ率いる対宙賊独立艦隊の勇名は帝国中に轟いている。無論、そこには帝国航宙軍の人気取りという意図が多分に入ったプロパガンダという側面もあるのだろうが、実際に撃滅した宙賊艦や潰した宙賊拠点の数については一切の割増などはされていない――とセレナが言っていた――ので、その立ち上げに関わったという事実はそれなりに評価されても良いだろう。

「ダレインワルド伯爵領のセキュリティレベル向上に貢献していきたいとは思ってる。無論、ダレインワルド伯爵領内の仕事にずっと専念するわけにもいかないが」

「ふん？　まさかクリスティーナ様とご成婚された後にも傭兵として帝国内外をフラフラするつもりだとでも？　そんなことが許されると思っているのか？」

「許されないならそこで話は終わりだ。この話は全て無かったことにさせてもらう」

俺がそう言うと、俺に絡んできたブッシュバウム子爵が目を点にして固まってしまった。

「はなしを、なかったことに？」

「傭兵としての活動を制限するというなら、婚約の話は断らせてもらうと言っている」

俺の宣言にブッシュバウム子爵は怒りで顔をドス黒く染め上げ、エルツベルガー女男爵は口元を扇子で隠し、シュノール男爵は口元を真一文字に引き締めた。そして、ダレインワルド伯爵は表情を全く変えず、クリスはハラハラとした様子で動静を見守っている。

クリスには悪いと思うが、こればかりはな。アイデンティティだけは捨てられないし、ここだけはなぁなぁにしておきたくないんでね。正念場だな。

#492　「……他にもあるのか？」

「というかだな、ブッシュバウム子爵は俺の何もかもが気に入らないんだろうということはよくわかるんだが、冷静になって考えて欲しい。結局のところ、ダレインワルド伯爵家、というかダレインワルド伯爵領の諸氏からすれば、俺はあまりダレインワルド伯爵領の運営に深く関わったり、あちこちに嘴を突っ込んで回ったりしないほうが良いんじゃないか、と思うんだが」

俺がそう言うと、ブッシュバウム子爵は顔をドス黒くしたまま沈黙した。茹で上がった頭で俺が言ったことの意味を頑張って呑み込もうといるのだろうと思う。そんなブッシュバウム子爵の反応とは対象的に、エルツベルガー女男爵は俺に向ける目を細めた。ああ、伝わってくる精神波動が注意や警戒という色から興味の色に変わったな。

「俺がダレインワルド領内のあれこれに深く関わると、俺を通してホールズ侯爵がダレインワルド伯爵領への干渉を行ってくるかもしれない。恐らく一番警戒されるパターンがこれじゃないかと思うんだ。俺もあの人ならやりかねないと思う。だから、俺はダレインワルド伯爵領内の活動に関しては傭兵としての領分以上のものを背負わないほうが良いと思っている。無論、俺が単純にそれ以上のことをしたくないというのも正直に言えば多分にあるんだが」

「正直に言うんだね」

そう言うエルツベルガー女男爵の言葉に俺は肩を竦めながら口を開いた。

「俺は権謀術数とかそういうのが全く無い、宙賊を徹底的にぶっ殺していれば全てハッピー！　って世界に生きていたい人間なんだ。無論、クリスのことは好きだから、お願いされればホイホイと聞いてしまうと思うが」

そう言ってチラリとクリスを見ると、クリスは「そうかな……？」みたいな顔で首を傾げていた。確かにクリスのお願いってあまり聞いたことがないというか、どちらかと言えば「ダメ」って言ったモノのほうが多いような気がするけど、それって大体クリスが自分の身を差し出す系のやつだからな。クリスを守ったりだとか、クリスの意向を受けて帝国航宙軍に力を貸したりだとかは素直に聞いたからな？

「まぁ、俺の使い所はクリスがダレインワルド伯爵と相談して良い感じに決めてくれるだろう。場合によってはある程度長いスパンの依頼を請けるのも構わない。対価がちゃんと支払われるのであればな」

長いスパンでの依頼を請けるというのはつまり、コーマット星系の何処かに家を建てている間だとか、あるいはクルーの誰か、あるいは複数が身重になって、その対処というか出産、子育てなどの間だとか、ダレインワルド伯爵領に長期滞在する必要性が出た場合の時の話だな。

「ふん、結局金か……」

「そうだよ。金と責任の切っても切れない関係については貴族のブッシュバウム子爵にわざわざ説明するまでも無いことだろう？」

冷静になったのか、少し顔色が落ち着いてきたブッシュバウム子爵に頷きそう言う。

身内だろうがなんだろうが、仕事をする以上はしっかりと責任を持ってそれに当たるべきで、その責任の担保となるのが金である。金をもらう以上はしっかりと責任を持ってやる。無料の仕事なんて信用ならんよ。

「繰り返して言うが、俺がいろんな責任を背負い込まずにフラフラしたいというのはもう性分だし、半ばアイデンティティみたいなものなのでこれを隠す気はない。どう言い繕っても俺は俺がそうしたいから傭兵稼業を続けるわけだ。ただ、もう一つ俺にはどうしようもない理由がもう一つあってな」

「興味深い。聞かせてもらっても良いだろうか？」

「ああ。俺はな、とんでもないトラブル引き寄せ体質なんだ」

真顔で俺がそう言うと、俺の事情をある程度知っているクリスとダレインワルド伯爵以外は「なんて？」みたいな顔をした。いや、意味がわからないよな？　俺も自分で言っていてそんないきなり納得してもらえるだろうとは思っていないから説明するよ。懇切丁寧に説明するよ。

「航宙艦がハイパードライブを終えてコロニーに行き着くまでに宙賊と接触する確率を知っているか？　無論、その星系のセキュリティレベルに大きく左右されるが、平均すると凡そ千五百回に一回くらいの確率って言われているらしい。ちなみに俺は凡そ半年で三十回以上接触している。自分からわざと接触したわけじゃなく、インターディクターで狙われたり、既に宙賊に襲われている民間船に遭遇したりとか、それだけでな」

俺の話を聞いてまずエルツベルガー女男爵が「うわ」みたいな顔でドン引きした。まだまだこんなのは序の口だぞ？

「帝国航宙軍と協力して宙賊の基地を潰して戻ってきたら帰還先のコロニーがバイオテロで壊滅しかけていたり、宙賊を撃破してその荷物をサルベージしたら伯爵家のお姫様を拾って、しかもそのお姫様を巡る伯爵家のトラブルに巻き込まれたり、依頼で荷運びをしたらその配達先が結晶生命体の大襲撃に遭っていたり、それをなんとか切り抜けて受勲のために帝都に行ったら、光栄にも皇帝陛下の目に止まって御前試合をすることになったり、伯爵様の依頼を受けたらどういうわけかテラフォーミング中の惑星に生身で降りることになった上に、人を簡単に捩じ切る生物兵器の群れと戦うことになったり、エルフの母星に遊びに行ったら現地で使用されている航空機が人里離れた森のど真ん中に墜落した上、宙賊の降下襲撃に遭ったり……他にも聞きたいか？」

「……他にもあるのか？」

俺が頷くと、流石にブッシュバウム子爵も俺を哀れに思ったのか、同情するような表情を見せてきた。さっきまで俺に対する怒りで顔をドス黒く染めていたのに……。

「つまり、ヒロ殿がダレインワルド伯爵領に長く留まると……？」

「何の科学的裏付けもない話なんだが、何かしらのトラブルを引き寄せる可能性はあるよな。いや、そうなるとは限らないが。結局最終的には切り抜けて丸く収まっているわけで、災い転じて福となす可能性も無くはない。それでも下手したら死ぬほど大変な目に遭うかもしれないが」

「いくらなんでも非科学的な……と言いたいが」

そう言ってエルツベルガー女男爵が少し離れた場所でこちらの様子を窺っている俺の同行者達――というかクギに視線を向けた。俺に同行してきたミミやエルマ達にこの会議での発言権は無いのだが、傍聴権はあっても良いだろうということで席を用意してもらったの

だ。ちなみに、その際に全員を軽く紹介している。つまり、クギが何処の国から来た何者かを知っている。

「サイオニックテクノロジーの分野から見ると、俺のこの不運については説明がつくらしい」

「つまり、ホンモノってことなんだね」

「そうなるかな」

「私はヒロ殿が傭兵稼業を続けることを支持しよう。そしてできればステアリン星系には来ないで欲しい」

エルツベルガー女男爵が広げていた扇をパチンと音を鳴らして閉じながらそう宣言する。いっそ清々しいなオイ。

「それが叶うかどうかはクリスとダレインワルド伯爵の判断次第ってことで一つ。それで、俺がクリスの伴侶になっても傭兵として働き続けて、積極的にはダレインワルド伯爵領内での仕事には関わらないって方針はエルツベルガー女男爵だけでなくブッシュバウム子爵とシュノール男爵も了承するってことで良いかな？」

俺の問いかけにブッシュバウム子爵は苦虫を噛み潰したような顔で頷き、シュノール男爵は特に表情を変えることもせずに頷いた。

ふむ。ブッシュバウム子爵はある意味でわかりやすくて結構なんだが、シュノール男爵はどうにも表情を殆ど変えないからわかりにくいな。伝わってくる精神波動の色的には俺に隔意を抱いている感じは無いんだが……まぁ、初対面なのだからこんなものか。

その後、クリスとの婚約や結婚に関する準備の細々とした話し合いをして会合は平和裏に終わることになった。ブッシュバウム子爵には若干チクチクネチネチとやられたが「なんだかヴェルザルス神聖帝国に行く前にブッシュバウム子爵の治める星系を見に行きたくなってきたなぁ」といった内容の話をしたら黙った。自分で利用し

ておいてなんだが、そこまでドン引きされるのも微妙に納得がいかねぇ……。

#493　「と、俺は思ってたんだよ」（前書き）

ちょっと筆が進まなかったね！（‘ω’）（ゆるしてね

#493　「と、俺は思ってたんだよ」

さて、クリスが貴族として成人と認められるにはまだ三年ほどの時間がある。しかし、以前にホールズ侯爵が言っていたように、このしきたりに関しては既に形骸化しており、実際には平民と同じ成人年齢を迎えた時点で婚約や結婚などをする貴族も少なくはないそうだ。

それと、切実――という程ではないが、同時に婚儀を挙げる予定であるセレナの年齢の問題もある。俺の感覚的にはそんなこともないと思うのだが、二十代も半ばの彼女は貴族の女性としては嫁き遅れに片足どころか両足を突っ込みかけている年齢なのだそうだ。日本では晩婚化が進んでいたからな……いや、今は地球の話はどうでもいいや。とにかく、双方の事情を鑑みた結果。

「婚儀の日程は早まるだろう。恐らく、クリスティーナの成人を待ってからということにはなるまい」

ダレインワルド伯爵が厳かにそう宣言し、その言葉に特に反論は無いのか、ブッシュバウム子爵を始めとしてエルツベルガー女男爵とシュノール男爵も同意するように頷いていた。

ホールズ侯爵家との打ち合わせ式場の準備、招待客への連絡、その他諸々、細かく言い出せばきりがない程に準備をすべきことは多い。それでも一年以内には婚儀を行うことになるだろう、との話だ。

で、俺の今後の動きに関してはブッシュバウム子爵達が帰った後にダレインワルド伯爵から話があった。

「ヴェルザルス神聖帝国に足を伸ばすのは構わん。だが、定期的な連絡を欠かさず、どんなに長引いても一年以内に帰るように」

会議室のような部屋からもう少しゆったりとした雰囲気の応接室のような部屋に場所を移し、メイドさんが用意してくれた紅茶のようなものを一服してからダレインワルド伯爵は厳かにそう言った。なんだろう、この爺さんは貴族オーラ的なサムシングを身に纏わないと発言できないのだろうか。

「はい。あの、俺が他にすることは……？」

厳かに沙汰を伝えてくるダレインワルド伯爵に若干気後れしつつ、一応聞いておく。この爺さん、顔と雰囲気が怖くて正直苦手なんだよ。

「無い。いくらお前が子爵位を持つ帝国貴族だとは言っても、それは名誉爵位だからな。無論、帝国貴族としての立場は尊重するが、真の貴族ではない者に貴族の儀礼的な諸々の手続きや用意を強要しても、互いに何も得をせん。良くも悪くも、お前はお飾り。ダレインワルド伯爵家とホールズ侯爵家、そしてウィルローズ子爵家の三家の関係を繋ぎ止める鎖のようなものだ。我々に任せておけ」

と、そこまで言ってダレインワルド伯爵は少し考え込んだ。

「だが、急ぐ旅でもなかろう？　暫く滞在していけ。領内の有力者と面通しくらいしておいた方が後々面倒も少ないだろうからな」

「アイアイサー」

確かに急ぐ旅ではない。一週間やそこらならダレインワルド伯爵領に滞在していくのも良いだろう。

☆★☆

「と、俺は思ってたんだよ」
「あはは……」
「馬鹿ねー……そりゃこうなるに決まってるじゃない」

三日後、俺はソファにひっくり返って口から魂が出かかっていた。あの爺、朝から晩まで分単位で俺にスケジュールを詰め込みやがった。スケジュールの内容は領内の視察だの会食だのと称した挨拶回りというか、挨拶され回りというか……俺がクリスと一緒に各所に足を運ぶのだから挨拶回りと言えばそうなのかもしれないが、現地に赴けば下にも置かない歓迎っぷりで賓客待遇。だから挨拶され回り。

相手はダレインワルド伯爵領の各地域を統括して治めている代官――大半が先日会談を行った三人の部下――だの、ダレインワルド伯爵領で手広く商売をやっている商会の社長だのといった面子だ。前者は男爵だとか男爵よりも下の準男爵だとか騎士爵だとかといった貴族とか準貴族みたいな人々で、校舎は平民の有力者だな。

まぁ、グラッカン帝国はバリバリの貴族主義というか権威主義というか封建主義というか、身分社会というか……なので、こちらから訪ねたとしても次期女泊であるクリスも一緒となると、それはもう完全なるＶＩＰ対応なのである。

だが、それも一日に何件も、朝から晩まで分単位で予定を詰め込まれれば流石に参ってしまう。歓待される側でも疲れる。自然体で良いとは言われても、あちらさんにお客様扱いされて上げ膳据え膳で歓待されると疲れるのだ。

「此の身は色々な場所を見られて楽しいのですが」
「クギは大物やな……」
「私達は無理」

俺達のメンバーでぐったりとしていないのはクギとショーコ先生、それにネーヴェだけだ。ショーコ先生とネーヴェがピンピンしているのはネーヴェの治療と体調を理由に挨拶され回りに参加してないからってだけだがな！

「まぁ、スケジュールが詰め込まれているのも今日までだ。明日からは少しはゆっくりでき――」

るさ、という言葉はバァン！　と開いた扉の音に掻き消された。

「ヒロ様！　遊びにきました！」
「グワーッ！？」
「わーっ！？」
「ちょっ！？」

まるで全てから解放されたとでもいった様子のクリスが弾丸のように飛び込んできた。俺の胸に。当然、俺はその運動エネルギーをまともに受け止めることになって大ダメージを食らうことになり、過剰なエネルギーは一緒に座っているミミとエルマごとソファをひっくり返す。

結果として、仰向けに倒れたソファの上に俺とミミとエルマが団子になるという大惨事が展開されることと成った。とても痛い。

「すっっっっげぇ痛い……」
「ご、ごめんなさい……」

勢い余ってゴロゴロと転がっていったのか、少し離れた場所からクリスの声がする。

「クリス……貴女、まだ身体強化に振り回されてるの？」

「稀に制御のタガが外れてしまうんですよね……お祖父様には少しだけ剣を習ってはいるのですが、普段は身体を動かす機会があまりなくて……ごめんなさい」

流石に不機嫌そうなエルマの声に、クリスがしょんぼりした声で答える。うん、とりあえず起きようか。すっげぇ痛いけど。

#４９４　欲望には抗えなかったよ。

クリスに激突された俺は全治十五分の怪我を負った。医療ポッドの力ってすげーよな。自然治癒だと最低でも三週間から四週間くらいかな？　ってショーコ先生に言われたんだが、それって下手すると骨が逝ってたってことでは？　と聞いたら曖昧な笑みを返された。

「クリスは結婚するまでに強化された身体の制御を完璧にしておくように。制御訓練をサボっちゃダメよ？」

「はい……」

ブラックロータスの医務室から休憩スペースに移動すると、クリスがエルマに説教されていた。さもありなん。忙しいという理由があるにせよ、日々の訓練をサボった結果、他人に怪我をさせるというのは完全にケジメ案件である。俺は許すけど。

「クリスくんは成長期だからねぇ。慣れたつもりでも、成長によって制御が外れることがあるんだよ、そのくらいの年齢だと。訓練は日々しっかりやっておいてくれたまえよ？　初夜でヒロくんの肋骨とか背骨とか腰骨とかがポッキリ、なんてことになりかねないからね」

「なにそれこわい」

「たまにあるのよね。普段運動とかしない貴族のご令嬢が、新婚初夜に旦那さんの骨を何本か……って話。軍人のセレナは欠かさず鍛錬しているからそんなこと無かったでしょうけど」

俺と一緒に医務室から移動してきたショーコ先生がクリスに忠告をして、その忠告を聞いたエルマが恐ろしい話をしはじめる。それ、

旦那さんってのも身体強化を施した貴族だよな？　そんな貴族ですら骨を何本かやるってことは、身体強化なんてしていない俺はそれよりも酷いことになるのでは？
　考えてみれば、身体強化を施した貴族ってパワーアーマーと同程度か、少し劣るくらいの膂力を発揮するんだよな。そりゃ生身でくんずほぐれつした時にそんな力を出されたら骨なんざボキボキに折れるわ。

「クリス、訓練頑張ろうな」
「はい……」

　久々に仕事から解放されて元気いっぱいだったクリスも青菜に塩といった様子だった。それはもうなんというかしおしおである。とてもしょんぼりしている。そりゃ自分の不注意で怪我をさせてしまったらこうなるか。

「痛かったけど治ったから問題なし。クリスも謝ったんだからこの件はおしまい。イイネ？」
「ヒロがそう言うなら良いけどね。ミミもいい？」
「勿論です！」

　ミミが笑顔でそう言いながらしょんぼりとしているクリスを抱きしめる。うんうん、仲良きことは美しきかな。

「クリスの件はそれでええとして、遊びに行くんよね？　どこ行くん？」
「ネーヴェちゃんの服を見に行くとかどうかな？　ポッドから出て普通に生活するようになったら、いつまでもシンプルな病衣のままってわけにはいかないよね」
「いいですね！　あ、でもポッドに入ったままだと試着とかもでき

ないですよね？」
「身長とかのデータは完璧なものがあるから大丈夫だよ。ただ、少し余裕をもったサイズのほうが良いだろうねぇ。治療が進めばもう少し筋肉とかもつくし」

着飾るというか、服に興味がある勢はネーヴェの服の話題でキャッキャしているが、若干三名ほど静かになっている人物がいる。一人目、俺。二人目、エルマ。そして三人目、クギである。

「うん、良いんじゃないか？　ついでに皆も何か可愛い服とかあったら買ったら良い」

俺は同じデザインの服を大量にストックして着回す勢なので、あんまりなぁ。エルマも俺と同じような感じだし、クギはいつも巫女服だ。クギの場合は頭の上の狐耳はともかく、三本のモフモフ尻尾が問題でな……基本的にグラッカン帝国内で流通している服のテンプレートの大半が彼女の尻尾に対応できない。

無論、クギ以外にも尻尾やそれに相当する器官を持つ種族はいるので、そういった種族向けの店に行けば良いのだが、そういう店ってあんまり見かけないんだよな。栄えた交易コロニーならたまにあるって感じ。人間が主な住人であるデクサーⅢ上の服飾店では恐らく期待できまい。

「そうね。私はデクサーⅢの銘酒でも集めに行こうかしら」
「此の身は我が君にお供致します」
「では服からお酒からなんでも揃う総合商業施設にでも行きますか？」

クリスの提案に頷いた俺だったが、ふと考え込む。

「……貴族ってわざわざ店に行って買い物とかするのか？　屋敷に呼びつけたりするんじゃ？」
「そういうこともできますけど、それってなんだか遊びに行った感が無いと思いませんか……？　顔に笑顔を貼り付けて揉み手をしながら媚びてくる商人を相手にするんですよ？　昨日までやっていたことと殆ど同じ感じになりますけど」
「やめよう」

即答した俺にクリスが深く頷き返してくる。少しでも好印象を残して何かしらの利益を得ようとする大人達の相手は暫くしたくない。

「行くならクリスは顔も割れてるし、目立つから変装しないとダメね。うーん、私とミミの服で着られそうなのを見繕って、髪型も変えましょうか」
「傭兵っぽい感じの服装にしましょう！」
「お化粧なら此の身にお任せください」
「私も手伝いますね」

クリスがミミ達に連行されていった。残ったのはメイとティーナ、それにショーコ先生とネーヴェの四人である。

「……うちは化粧とかお洒落とかそういうの苦手やし」

ウィスカは行ったけど、ティーナは行かないのか？　という俺の視線を感じ取ったのか、ティーナが言い訳めいたことを言いながら俺の隣に座る。そして俺を挟んでその反対側にショーコ先生も腰を下ろした。

「私も知っての通りそっち方面はあんまり、ねぇ？　メイくんは強い意志でメイド服を着てるし」

「皆様もメイド服を着れば良いと思うのですが」

全員にメイド服を着せていたら俺が他人にどう思われるか、という点を除けば素晴らしい提案だな。皆のメイド服姿、見てみたいです。問題はそんなことをしたら無類のメイド服好きとして俺の対外イメージが固定されかねないという危険を孕んでいる点だ。

『キャプテン、私も着てあげようか？　メイド服』

「良いねぇ、今度メイくんに全員分のメイド服を見繕ってもらおうか」

「予算を頂ければ完璧なメイド服を調達してご覧にいれます」

「いいね」

対外イメージ？　そんなもの知ったこっちゃねぇ！　複数のメイドさんにチヤホヤされるのは男の夢だよなぁ！？　まぁ、船の中でだけ楽しめば良いだろう。

「兄さんも好きやなぁ……他のコスプレとかもしてみる？」

「しようか。予算なら出すぞ。俺のポケットマネーから」

その後、イメチェンしたクリスを連れて総合商業施設に赴き、ネーヴェの服を買ったり、デクサーIIIの酒や特産品の類を買い漁ったり、コスプレ衣装――というかコスプレ用の衣装を買い漁ったりした。

コスプレ衣装とコスプレ用の衣装の何が違うのかって？　安っぽいペラペラのそれっぽい服じゃなくて、ホンモノってところが違うところかな……店員さんには変な顔をされたけど。

まぁ、アレだ。欲望には抗えなかったよ。

#495　「どうしてもか？」（前書き）

天気がいと悪し（‘ω’）（天気が悪いと捗らない

#495　「どうしてもか？」

「うちらみたいなちんちくりんには似合わんのと違う？」
「いや、凄い良い。とても良い」

買い物を終えてブラックロータスに戻ってきたので、俺はキャプテン権限を行使して買ってきたコスチュームを早速着てもらうことにした。職権濫用？　知らんな！　それよりもコスプレだ！

「そ、そうですか……？」

赤系と青系の綺麗なエルフ風衣装――チャイナドレスっぽいもの――を着たティーナとウィスカが俺に真顔で拍手をされて照れてクネクネしている。深めのスリットから覗く二人の太ももが実に良い。ヒップラインも美しい。これは良いものだ。

「一応それはエルフの伝統ある衣装なんだけど……」

そう言って俺にジト目を向けてくるエルマはメイが監修したメイド服姿だ。胸元が開いていたりも、異常にスカートが短かったりもしない古式ゆかしいヴィクトリアンスタイルである。ちゃんとホワイトブリムもつけているのがグッドだ。

「き、着てみましたけど、ちょっとこれは」

そう言ってミミが顔を赤くしながら胸元を隠している。うーん、バニー。バニースーツ。おお、バニースーツ。バニースーツ。何がとは言わないけど溢れそう。でも溢れないのは何故なんだろうか。

何故か分からないが、無駄に高度な技術が使用されているのだろうという確信がある。

「ミミさんと比べると迫力が……」

「俺からはグッドだ、と言っておく」

クリスも同じくバニースーツを着ているのだが、ミミと自分の胸を見比べて閉口している。だがな、クリス。そう言うのは大きさが全てじゃないんだ。勿論大きいことは素晴らしいことだし、ミミのそれは大きさも形も最高なので本当にもう最高なのだが、だからといってクリスの成長中のそれが素晴らしくないということではないんだ。おっぱいに貴賤はないんだよ――とあまり熱く語るとドン引きされてしまうからな。俺は謙虚なので多くは語らないでおく。

「はっはっは、華やかでいいねぇ」

『ドクターは着ないのかい？　ああいうの』

「私が買ってきた衣装はちょっと刺激が強いからね」

『ミミが着ている衣装よりも……？　それはもう下着なのでは？』

いつもの格好から白衣だけを除いたショーコ先生が笑いながら皆のコスプレを眺めている。そんなショーコ先生にツッコミを入れているネーヴェの格好は真っ白いワンピースである。ネーヴェの白い肌と白い髪の毛、それに白いワンピースと真っ白白だが、見た目だけなら儚げな少女にしか見えないネーヴェには良く似合っていると思う。その実態は別として。

というか、刺激が強いって一体ショーコ先生は何を買ったんだ？

俺が口を出したのはバニースーツとチャイナドレスっぽいエルフ服だけで、それ以外は適当に皆にお任せしたんだが。

「な、なんだか落ち着きません」

「にゃーん」

クギもエルマやメイと同じくメイド服を着ているのだが、ホワイトブリムのつけ心地が良くないのか、しきりに頭の上の狐耳をパタパタと動かしている。もしかしたらいつも着ているサイバーな感じの巫女服と服の着心地が違って落ち着かないだけかもしれないが。

そしてメイ。なんだそれは。そのネコミミはなんだそれはオイ。けしからん。しかも尻尾までついているじゃないか。

「これはクギさんのデータを元に作られた試作型のねこみみアタッチメントです」

「ねこみみアタッチメント」

「しっぽもあります」

完全な無表情なのに物凄いドヤ顔感を醸し出しながらメイが俺に背を向けて腰の辺りから伸びる猫っぽい尻尾を披露する。ああ、クギのメイド服と同じでちゃんと尻尾穴がついてるのね。いや、違うそうじゃない。

「どこからそんなものを持ってきたんだ」

「はい、ご主人様。デクサーIIIにオリエントの工房がありまして。そちらから速達で試作品を送ってもらいました」

「あの、私のデータって……？」

「自然な耳と尻尾の動きを少しだけ。大丈夫です、個人情報は一切含まれません。モーションデータのみなので」

ぴーんとメイの頭の上で立っているネコミミと腰の後ろでゆらゆらと揺れている尻尾が得意げな雰囲気をありありと醸し出しているのが面白い。無表情なのに感情が視覚化されている。

「それにしてもあんたねぇ……キャプテン権限だとか言ってこういうことをさせるのはどうかと思うわよ？」
「だって見たかったんだもん……」
「そんなマジで言われると流石にドン引きなんだけど……」
「我が世の春って感じがする」

エルフドレス姿のティーナとウィスカを両脇に侍らせて真顔でそう言うと、エルマに処置なしという顔をされてしまった。仕方ないじゃん。こういうのは男のロマンじゃん。流石にお触りとかはしないから許して欲しい。

「まぁええんやない？　たまにハメ外すくらいなら。兄さん、夜はともかくとして普段は割とストイックやし、危険な時はうちらの安全第一で気ぃ遣ってくれるやん？」
「わ、私も嫌ってわけじゃないですし……」

ティーナが俺に身体を押し付けてしなだれかかりながらそう言い、ウィスカもまた控えめな発言をしながらも俺にピッタリと密着してくる。

「んまぁ、キャプテン権限使ってやるのがコスプレ大会ってのも大人しいといえば大人しいのかしらね……？」
「エルマさん、大人しくないとどうなるんですか？」
「そりゃもうドラッグでもキメながら大乱交よ。そういうのに比べればヒロみたいにコスプレ衣装着せて眺めるくらいはまだ大人しいものよね」
「冗談ですよね……？」
「改めて言っておくけど、ヒロは傭兵としては本当に極めて品行方正な類なのよ？　金ができれば酒にドラッグ、女に溺れる傭兵なんてのも珍しくないし、船に何人も女を囲ってるような手合いはヒロ

が可愛く見えてくるくらい凄いわよ」
「凄い、ですか」
エルマから倫理観低めの一般的な女好き傭兵の生態を聞いてクリスが顔を赤くしている。その横でミミも困ったような顔で顔を少し赤くしているが、クリスほどの反応ではないのはクリスと違ってミミは傭兵のそういう話を今までに色々見聞きしているからだな。傭兵ギルドの受付のお姉さんとかとそういう話をするらしい。主に心配されて。あなたも女の子をいっぱい囲ってるキャプテンのところで働いているんでしょう？　大丈夫？　無茶なことされてない？　みたいな感じで。
俺としては大変に心外である。俺は極めて紳士的にクルー達に接しているというのに。今お前が何をやっているのか省みてみろって？　嫌だね。

☆★☆

コスプレ大会が終わったらコスプレ大会の二次会が開催された。そう、今度は俺が皆の着せ替え人形化である。なんか色々と良くわからん格好をさせられ、小芝居までさせられた。いや、まぁ俺が皆にコスプレ衣装を着せてニヤニヤしながら眺めたりしたのだから、彼女達にもその権利はあるだろう。まったくもって誰得な絵面なので、俺はその記憶を封印することにしたが。
で、その夜のことである。
「駄目に決まってるだろ」
部屋を訪ねてきたクリスに俺はそう言い放った。
「大丈夫です。お祖父様も許して下さりますから」

そう言ってにっこりと微笑むクリスの衣装はスケスケのネグリジェめいたものであった。あー、いけません。いけませんお客様。あー、困ります困ります。

「仮にそうだとしてもだな……」

困った。まさかダレインワルド伯爵に「お孫さんに手を出しますけど、良いですね？」などと聞くわけにも行かない。許可をもらっている、問題ないと言われて迫られると拒む理由に乏しい。

「まさか婚前だからとか、婚約前だからとかそういう理由では断りませんよね？」

「ぐぬぬ……」

それを引き合いに出されると弱い。俺が正式に婚姻関係を結んでいるのはミミだけで、その他のクルーとは公的にそういった関係を結んではいない。事実婚みたいな状態ではあると思うが。そんな状態で彼女達に手を出している以上、クリスの言うような理由で彼女の覚悟を拒むというのは理屈が合わない。

「身体や年齢の事ならミミさんとそう変わりませんし、私も成長していますし、何より強化手術を受けてもいますから頑丈ですよ」

「先回りするんじゃない」

正面から俺に抱きつき、腰に腕を回してきたクリスがジリジリと俺を部屋の中に押し込んでくる。体格的にも体重的にも俺の方が勝っている筈なのだが、抵抗しようにもびくともしない。サイオニック能力も駆使して本気で抵抗すればクリスを制圧するのは容易だが、そうまでして拒否などしたらどうなるか予想がつかないなぁ……。

「どうしてもか？」
「どうしてもです。また遠くに行ってしまうのでしょう？」
じっと俺の顔を見上げてくるオニキスのような瞳の意思は固そうだ。
クリスのことだから、ダレインワルド伯爵がゆるしてくれるというのも本当のことなのだろう。以前はそれを理由に断ったし、それは彼女もはっきり覚えているだろうからな。
「……オーケー、観念する」
なに、もしダレインワルド伯爵が怒ったらその時はその時だ。土下座でも何でもして許してもらおう。斬り捨てる！　とか言われたら抵抗するまでだ。

#496 「貴族特権……強いッ！」（前書き）

頭痛がペインだったけどロキソニンとモンエナが解決してくれた（ ´ω` ）

#496　「貴族特権……強いッ！」

「うぅ……恥ずかしい」

クリスが俺のすぐ後ろでぐずっている。俺の背中に顔を埋めて。

「気持ちはわからないでもないけど……」

ぐずるクリスを背中に引っ付けたまま俺は食堂へと向かう。部屋に水のボトルはストックしてるけど、メシはやっぱり食堂にいかないとな。昨晩のアレコレで俺は腹が減ってるんだよ。

ああ、先にシャワーはサッとだけど浴びてきたよ。二人ともほら、昨晩の名残がね？

「ヒロ様は平気そうじゃないですか……！？」

「俺はもう慣れてるし……」

ほぼ毎晩彼女達の決めたローテーションで誰かと同衾しているのだ。誰かと一緒に朝を迎えて一緒にシャワーを浴びた後に食堂へ行くのは一種のルーチンみたいなものになってしまっている。今更気恥ずかしいとかそういう感情はちょっと湧いてこないんだよな……。

「それに、いつまでも引きこもっていれば解決するようなことでもないだろ？　ほら、覚悟を決めろクリスティーナ」

「うーっ……」

唸るクリスを引きずって食堂に入ると、そこにはミミとクギがいた。他の面々がいないのは珍しい気がするな。

「あ、おはようございます！　ヒロ様、クリスちゃんも」
「おはようございます、我が君。クリスティーナ様もおはようございます」
「おはよう、二人とも。ほら、クリス」
「お、おはようございます……」

元気よく挨拶してくるミミとクギに朝の挨拶を返し、クリスにも挨拶を促すと蚊の鳴くような声でクリスも挨拶を返した。

「まぁ見ての通りでな。適当に接してやってくれ」
「はい、適当にですね！」
「ああ、適当にだ。それで、エルマ達は？」
「はい、我が君。エルマさん達は昨日は夜遅くまで酒盛りをしていらしたようなので、恐らく起き出してくるのはお昼ごろになるかと」
「あー……なるほど？」

クリスに気を遣ったのかね？　朝起きてきた時に全員でお出迎え！　みたいな感じになるとクリスもバツが悪いというか、やりにくいだろうしな。ミミとクギならクリスとの接触もソフトな感じになるだろうし、人選としては悪くないかもしれない。

「クリスティーナ様、お身体は問題ありませんか？」
「は、はい……その、大丈夫です。ちょっとだけ歩きづらいような気がするだけで」
「そうですか。それでは朝ご飯を食べたら一緒に医務室に行きましょう。ショーコ先生にお任せすれば何の心配もありませんよ」

早速クギがクリスの手を取ってにこやかにコミュニケーションを取っている。あれはこっそりテレパシーを使って気持ちを落ち着か

せているな。他の人にはわからないだろうが、俺にはわかる。まぁ、悪いことではないからそっとしておこう。

「それで……どうでした？」

「どうでしたってなんだよ……何の問題もなかったよ」

少なくとも、俺の肋骨や背骨や腰骨が砕け散るようなことはなかった。行為そのものの感想については黙秘させてもらう。そういうのは女の子同士で共有してくれ。ただ、身体強化を施された貴族なだけあってやっぱ体力は凄かったとだけ言っておく。

「とりあえずメシだメシ。ほら、クリスもメシを食おう」

「はいっ！」

クギと話している間にメンタルを持ち直したらしいクリスが元気に返事をして自動調理器のテツジンの元へと向かう俺についてくる。飯を食ったら日課の運動もするからな。腹八分目くらいにしておくかね。

「……食うね？」

「身体強化をしてから食事量が増えて……」

そう言って恥ずかしそうに俯くクリスのプレートの上には人造肉のステーキが山盛りになっていた。エルマも朝からガッツリと食うタイプだが、そういう事情があったのか。エルマも身体強化を受けているって話だものなぁ。それに加えてクリスは成長期ってのもあるか。テツジンがこの食事量を出してきたってことは、これがクリスの適性な食事量なのだろう。

「食が太いのは良いことだと思うぞ。食が細いよりはずっと安心だ」

「そうですか？」
「俺はそう思うよ。しぶとく生き残るにはちゃんと食えないとな。クリスは案外傭兵向きかもしれないぞ？」
「私が傭兵向きですか。ふふ、そんなのも良いかもしれませんね。全部投げ出してそうしてしまえたら、どんなに良いことでしょう」

そう言って微笑むクリスを見ながら、もしそうなっていたらクリスにはこの傭兵団でどんな役割をこなしてもらっていたのだろうかと考える。
次期女伯爵に相応しい身体強化を施されたクリスの身体能力と反応速度、脳の処理能力を考えれば、エルマのように新しく機体を用意して第三のパイロットになってもらうのも良かったかもしれないな。彼女の身体能力をフルに活かして経験を積めば、さぞかし頼りがいのある仲間となってくれたことだろう。白兵戦能力においても剣を扱うことができるなら頼りになっただろうしな。

「そういう未来にはならなかったが、それでも帰って来る場所をクリスが守っていてくれるなら俺は安心だよ」
「そうして下さるんですか？」
「その予定だ。一応話し合いの結果、コーマットⅢに家を建てようと思ってるんだが」
「詳しく聞かせてください」

滅茶苦茶食いついてきた。メシを食いながら少し前にクルーの間で話し合ったことをクリスに伝える。広い土地を確保するとなった時の価格の安さ、それと拠点にした際の食い扶持の有無、もっとも太いコネであるクリスが振るえる権限の範囲など、総合的に考えてコーマットⅢに拠点を作る方向で考えるのが良いだろう、と。
「勿論。勿論協力します！　仰る通り、コーマットⅢなら私の権限

できることも多いですからね」

食後のお茶を飲みながら、クリスは大変に上機嫌である。昨晩のアレコレに関する羞恥心など何処かに吹っ飛んでいってしまったようだ。

「敷地は広めに取って、最低でもクリシュナが着陸できる着陸パッドが欲しいと思っているんだ。できれば中型艦くらい停泊できれば良いんだが、そうなると建物の敷地面積よりも着陸パッドの敷地面積が広くなりそうだからな。それと、万一に備えて防御の硬い地下シェルターを用意しようかと」

「あれから大規模な宙賊の降下襲撃などは起きていませんが、万が一ということもありますからね。地下シェルターに関しては私も賛成です。着陸パッドに関してはブラックロータスが停泊できるようなものも用意できますけど」

「いやいや、流石に個人で大型艦クラスの着陸パッドを維持するのはしんどいだろう。将来的にブラックロータスが着陸できるような総合港湾施設が近くに出来ればそれで良いと思うんだよな。家には小型艦用の着陸パッドがあれば十分じゃないかな。あとは、家というか屋敷の作りをどうするかだよな。その辺りは確保できる土地の広さというか、財布と相談って形になるが」

いくら開拓を開始したての惑星とはいえ、最終的に数十人が暮らすような邸宅になるだろうという話なのだから、十分な広さの土地を確保するだけでも今の貯金がすべて吹っ飛ぶかもしれない。

「土地に関しては簡単に用意できますよ。そもそも開拓された土地は全て私というかダレインワルド伯爵家の土地ですし。ヒロ様は私の伴侶となるわけですから、実質タダみたいなものです」

「ええと、税金とかは？」

「ダレインワルド伯爵家の土地でダレインワルド伯爵家の身内のヒロ様からどこの誰が税金を取ると？」
「貴族特権……強いッ！」
首を傾げるクリスに戦慄を禁じえない。確かにダレインワルド伯爵家は徴税側だけども、そんな身内だから無税みたいなことが罷り通って良いのか？　誰か税務署の人呼んできて！　と思ったが、そもそもその税務署がクリスというかダレインワルド伯爵家の手先なのであった。
「その、法的に大丈夫なのか……？」
「領地貴族が自分の領地をどのように利用するのか、という裁量に関しては帝国法によって皇帝陛下の名の下に認められていますから」
そう言ってクリスが得意げに胸を張る。良いのか？　良いのか……後でメイにも聞いてみよう。
「ま、まぁクリスが良いって言うならお言葉に甘えるけど……その、法に触れるようなことまではしないでくれよ？」
「しませんよ。ヒロ様は私を何だと思ってるんですか」
心配する俺にクリスがジト目を向けてくる。いや、だって俺のためにってことなら割と黒いことも平気でやりそうな雰囲気があるんだよ、クリスは。正直、そういう面に関してはセレナよりもクリスの方が一枚上手というか、躊躇なくやりそうな気がしてならないんだよな。
「それでは私達の屋敷を作る土地の確保と選定に関しては私が責任を持って進めておきますね！　将来的に総合港湾施設を作る予定の場所に近くて、邸宅と最低でもクリシュナを停泊させられるだけの

着陸パッドが設置できる土地、と……ああ、費用に関しては心配しないでください。今回プラチナランカーのキャプテン・ヒロに帝都からデクサー星系までの護衛をしてもらった、その対価として用意しますから」

そう言ってクリスはにっこりと満面の笑みを浮かべてみせた。

うん、頼りにナルナー。

#497　「え？　冗談だよね？」

「土地と建物に関しては任せてください！　だから絶対に帰ってきてくださいね？」

笑顔でそう言うクリスに別れを告げ、ダレインワルド伯爵にも挨拶をしてから俺達はゲートウェイへと向かった。ヴェルザルス神聖帝国へ行くためである。

目的地となるのはニーパック星系。ダレインワルド伯爵領の中心星系であるデクサー星系からハイパーレーン経由で五つ先にある帝室直轄領である。そこに最寄りのゲートウェイが存在している。

「まずはニーパックプライムコロニーに向かうんだな？」

「はい、我が君。ゲートウェイが存在する星系の主要コロニーからであれば本国と連絡を取ることができますので、迎えを寄越してもらうことになります」

「迎えですか？」

「はい、ミミさん。実質的には迎えというよりは交代要員の派遣なのですが。此の身どもの国は外部との交易や船の往来を制限しています。帝国とのゲートウェイ接続なども定期的なものは行われていないので、こういった接続する機会があった時に外交に関わる人員や不定期の交易船などを一気に移動せさせるわけですね」

ニーパック星系への道中、ブラックロータスの休憩室に皆を集めてクギを中心にヴェルザルス神聖帝国行きについて話し合っている。

「どうして往来を制限してるん？」

「はい、ティーナさん。此の身は然程詳しくはないのであくまでも

伝聞になりますが、他国から必要以上に警戒されないためということのようです」
「「「？？？」」」
クギの説明に一堂が首を傾げる。俺も首を傾げる。他国から必要以上に警戒されないために半ば鎖国みたいな政策を取っているっていうのはなんとも解せない。
「ええと、此の身どもの国の船や兵器、兵士達は他国と比べるとかなり異質なので……」
「なるほど……？」
わかるようなわからないような。ヴェルザルス神聖帝国といえばサイオニックテクノロジーなので、それを応用した船となると確かに既存のテクノロジーで作られた船とはデザインや性能が異質なものになるのだろう。
「それって大丈夫なの？　一回入ったら出られないとかそういうことにならないでしょうね？」
「それに関しては大丈夫かと思います。我が君のような上位世界からの来訪者と呼ばれるような方と事を構えると、下手をすれば此の身共ですら滅ぶ可能性があるので」
『いきなり物騒な話になったね？』
「あー、半信半疑ではあるんだが、俺みたいなのが精神的に追い詰められまくって死んだりすると、恒星系を複数巻き込むような大惨事が起きるらしいぞ」
「ははは、スケールの大きな話だねぇ……え？　冗談だよね？」
ショーコ先生は俺が言ったことを笑い飛ばしかけたのだが、俺とクギの様子を見て真顔になって聞いてきた。クギは大真面目な顔を

しているし、俺もまたそれに近い顔をしているからだろう。

「……初耳なんだけど？」

エルマが不機嫌そうな声でそう言う。そういえばこの話はクギと俺との間でしかしていなかったかもしれん。そんな気がする。

「いや、俺も未だに半信半疑というか、八割五分くらいしか信じてない話だから」

「それってほぼ信じてるってことじゃない。そういう大事なことはちゃんとパートナーに報告するべきだわ。そう思わない？」

「はい、そう思います。ごめんなさい」

これは俺が悪かったと思うので素直に謝っておく。俺の出自に関する情報は割とセンシティブなものだ。クギからエルマを含めた他のクルーに説明することはできなかっただろう。

「改めて説明すると、俺はこの世界、というか宇宙？　次元？　の人間じゃない。クギを始めとしたヴェルザルス神聖帝国の人達が上位世界と呼んでいる世界の出身で、強烈なサイオニックパワーを有している。そんな俺が怒りと憎しみと絶望の果てに死んだりすると、その強烈なサイオニックパワーが大惨事を引き起こすらしい。最低でも恒星系一つ、最悪複数の恒星系を消滅させかねないんだそうだ」

『スケールが大き過ぎる。それ、一体どれくらいのエネルギーなんだい？』

「超新星爆発の威力が１０の４８乗から５２乗ジュールと言われておりますので、それと同等から数倍、もしくは十数倍くらいかと推察されます」

呆れたようなネーヴェの言葉にメイがクソ真面目に答える。うん、

なんとなく莫大なエネルギーだということはわかるけど全く実感が沸かない数字だな。

「大丈夫なん？　兄さんいきなり爆発したりしない？」

「いるのかどうかわからん神様的な何かが突然俺を爆発させたりしないという保証はないけど、多分大丈夫なんじゃねぇかな……ショーコ先生の検診でもいきなり俺が爆発しそうみたいな結果は出てないし」

「いや、出てないけどね？　あくまでも私が診られるのは科学の範囲での話だからね？　サイオニックテクノロジーに関しては殆どお手上げだよ？」

ショーコ先生が苦笑いをしながら軽く両手を挙げてヒラヒラしている。そう言うけど、俺は知ってるぞ。ショーコ先生が俺の遺伝子の解析を進めてサイオニック能力の発現因子を探したり、それを特定するためにサイオニックテクノロジーの領域に手を出し始めているのは。

「まぁ俺が爆弾を抱えてるって言っても爆発するのは死ぬ時くらいみたいだし、死んだ後のことなんて気にするだけ無駄だと思うんだ。よほど精神的に酷い状態で死なない限り起爆もしないみたいだしな」

「もしかしてクギってヒロが起爆しないように監視するお目付け役なんじゃないの？」

俺の説明に納得したのかしていないのか、エルマがクギにジト目を向ける。お前、それはそう思っても言っちゃ駄目なやつだろう……。

「そうです。ですが、それだけではありません。最初に言ったように我が君がこの世界に落ちてきてしまったのは此の身どもの過去の

所業が原因ですし、それを贖うために此の身が遣わされたというのも事実です。ですが、今となってはそれらの理由は主たるものではありません。此の身が我が君の傍にいるのは、此の身がそうしたいからです。もし本国に戻って此の身の任が解かれたとしても、此の身は我が君の傍から離れるつもりはありません」

クギはエルマの言葉を肯定した上で、そう言い切った。頭の上の狐耳をピンと立て、凛とした表情で真正面からエルマを見つめて。そんなクギの迫力に気圧されたのか、エルマが苦笑いをしながら両手を挙げ、降参の意を示す。

「オーケー、クギの覚悟はよくわかったわ。疑ってごめんね」
「いえ、当然の疑問だと思いますから、謝って頂く必要はありません……ですが、その」

クギが凛とした表情を一転させて不安げな表情を俺に向けてくる。そんなクギの手を取り、俺はその小さな手を両手で包みこんだ。不安を感じているのか、少し汗ばんでて冷たい。

「俺も今更クギを手放すつもりはないから。クギがそう思ってくれているなら尚更な。だから、何も不安を感じる必要はない。いざとなったらクギを拐ってヴェルザルス神聖帝国から逃げ出してやるさ」

俺がそう言うと、クギの頭の上の狐耳がピコピコと嬉しそうに動き、三本のモフモフ尻尾がブンブンと振られ始めた。言葉もなく涙目になっているクギの目元をジャケットのポケットから取り出してハンカチで拭いてやる。

「あー、あついあつい。あっついなー。メイはん、空調さげてーな」
「はい、ただいま」

「むむむ、ラブの波動が……！」
『今日はクギの一人勝ちかなぁ？』
「向こうでは一番頼りになるわけだし、ここは譲っておこうかねぇ」
そんなことを言いながら俺とクギを残して他のクルー達が解散していく。いやあのねぇ、君達。ちょっと露骨過ぎないか？
「あー……ちょっと休むか」
「……はい、我が君」
ピッタリと寄り添ってきたクギを抱き寄せて二人でソファに座る。流石にこの時間から部屋に戻ってご休憩とはいかないけれどもね。まぁ、良い機会だからヴェルザルス神聖帝国のことについて色々聞いてみるかな。

#498　「よし、この件については忘れよう」

クギからはヴェルザルス神聖帝国について本当に色々と聞かせてもらった。政治体制とかのお堅い話から、どんな食べ物が流行っていたとか、どんな人達が――種族的な意味で――住んでいるのかとか、そういう話だ。

「なるほどなぁ……そうだ、クギの子供の頃の話って聞いて良いか？」

特に何か意図があるわけではなく、本当にただの興味本位でそう聞いたのだが、クギの反応は俺の予想外のものだった。

「あ、その……子供の頃の話は、ちょっと、できなくて……」

クギは頭の上の狐耳をぺたりと伏せ、まるで怯えているかのような挙動を見せる。なんだ？　子供の頃の記憶にトラウマでもあるのだろうか？　何にせよ、あまり聞かない方が良い話題のようだ。

「気にしないでくれ、興味本位で聞いただけだから。それじゃあ巫女さんの生活について教えてもらったりするのは大丈夫か？」

「はい、そちらであればいくらでもお話しできます」

どこかホッとしたような表情でクギが巫女の修行生活とはどういうものなのか、ということを話し始める。その話を聞きながら、俺はクギの反応について考えていた。あれは一体どういう反応なのだろうか？　ミミは特にクギと仲良くしているし、今度ミミに聞いてみるかな。

☆
★
☆

ニーパック星系までの道程は実に平和なものであった。宙賊の襲撃もなし、襲われている民間船もなし。何故かと言えば今のコーマット星系――クリスが治めている星系だ――はテラフォーミングが済んだばかりの居住惑星が大々的に開発され始めた直後であり、所謂開拓特需というか、開拓好景気というか、そういった状況が発生している最中なのだ。

何故それがコーマット星系からニーパック星系間の安全に繋がるのかと言うと、それはもちろんゲートウェイ経由でコーマット星系へと流入する開拓用物資の流通や移民が滞らないように帝国航宙軍がしっかりと警備をしているからである。

俺達が取ったルートはデクサー星系から始まり、コーマット星系、ウェリック星系、ジーグル星系、メルキット星系、ニーパック星系となるので、物資の流通ルートと丸被りしているわけだ。

ウェリック星系とジーグル星系はなんとかっていう子爵が治める領地なのだが、この開拓特需、好景気に水を差さないように全力で航路の安全確保をするように帝国のお偉いさんから圧力がかかっているらしい。可哀想に。まぁ、移民船や物資を流通させている輸送船が補給や整備のためにそれらの星系の交易コロニーにもカネを落としているそうなので、役得もあるんだろうけど。

ちなみに、ゲートウェイがあるニーパック星系とその隣のメルキット星系は帝国の直轄領である。直轄領なだけあってセキュリティレベルは大変に良好だ。何せ、下手に宙賊どもが暴れようものならゲートウェイ経由で帝国軍の戦力がいくらでも送り込まれてくるからな。そんな場所で活動している宙賊なんてのは一隻で活動するはぐれか、精々三隻程度の小集団で狩りと移動を繰り返す渡りと呼ばれる小物どもである。

尤も、小物と言っても油断のならない連中だったりするんだけど

も。少数精鋭ってパターンもあるし。
「何にせよ、安全で何よりだよな」
「そうね。ハイパーレーンから出る度に停船命令とセキュリティスキャンが飛んでくることに目を瞑ればね」
アントリオンのメインスクリーンに表示されているセキュリティスキャンを受けているという警告文を見ながらエルマが不機嫌そうにそう言う。
「あはは……まぁ、別にやましいことは何も無いんですから、少し待機するくらい良いじゃないですか」
そんなエルマをミミが宥めた。いつもと違うオペレーターシートに座っていても、ミミはしっかりと落ち着いている。もうベテランのオペレーターだな。俺？　俺はアントリオンのサブパイロットシートに座ってるよ。クリシュナが使えなくなった時のことを考えて、俺達三人でアントリオンを動かす訓練中なのだ。
「まぁ良いわ。それで、クギのことについて聞きたいことがあるって？」
「そうそう、先日の話なんだがな」
まぁ、その訓練というは口実で、実際のところはミミとエルマと俺の三人でちょっと内緒話をしたかったというわけなんだが。
というわけで、俺は先日クギの子供の頃の話を聞き出そうとしたらクギの反応が妙だったのが気になるという話を二人に聞かせた。
「あー、私は聞いたこと無いわね。ミミは？」
「私は前に聞いた覚えがあるような気がするんですけど……うーん

？　覚えてないですね。はぐらかされたような……？」

ミミは首を傾げている。まさかテレパシーを使って質問の記憶そのものを弄ったんじゃあるまいな。そこまでして隠す内容なのか？

「クギに子供の頃の話は地雷っぽいな……あまり話題に出さないようにしよう」

「そうね。別に危険を冒してまでして聞きたいことでもないでしょ？」

「それはそうですけど、なんだか少しもやもやしますね」

ミミの言うこともっともだが、埋まっているのがわかっている地雷を踏みに行くのもな……エルマの言う通り危険を冒してまで聞きたい話というわけでもないし、話したくないなら聞かないというもの一種の優しさというか、配慮というやつだろう。

「よし、この件については忘れよう。少なくとも、そう努力することにしよう」

「そうするのが無難ね」

「わかりました」

それはそれとして、折角こうしてアントリオンのコックピットに集まったんだからシミュレーターでも起動して慣らし運転くらいはしておくか。エルマ先輩の操艦術、見せてもらおうじゃないの。

☆★☆

セキュリティスキャンを受け終えたブラックロータスは、俺達が乗ったアントリオンをくっつけたままニーパックプライムコロニーへと到着した。ニーパックプライムコロニーはゲートウェイが設置

されている星系の主要コロニーなだけあって、艦としては比較的大型であるブラックロータスが下部外部接続ハッチにアントリオンをドッキングさせたままでも停泊できる港湾設備を有していた。ゲートウェイ星系ってのは軍事だけでなく物流の拠点にもなる星系だからな。港湾設備に関しては充実してるってわけだ。

「おつかれちゃん。有意義な訓練はできたん？」

軽くシャワーを浴びてくるというミミ達と分かれて休憩スペースに到着した俺にティーナが声をかけてきた。どうやらウィスカと一緒にソファでのんびりしていたらしい。

「それなりにな。クリシュナが動いている間はそうそう問題はないと思うが、万一に備えることは重要だよな」

「クリシュナのジェネレーター回りは完全にブラックボックスですからね……急に動かなくなったらお手上げです」

それは本当にそう。ウィスカの言う通り、クリシュナのジェネレーター回りは完全にブラックボックスになっていて手が出せないので、動かなくなったらそれで終わりなのである。一応ジェネレーターが暴走したりして大爆発、なんてことにはならないようにセーフティなどは存在するようなのだが、それすらもどうやって動くのか解析できていない。エンジニアの二人曰く、あのサイズでどうやって巡洋艦並みの高出力を発揮しているのか全くわからない謎のジェネレーターであるらしい。

ちなみに、この世界で一般的に使われている船用のジェネレーターは対消滅炉の類である――らしい。らしいというのは、俺の頭ではこの世界のジェネレーターがエネルギーを発生させる原理が理解できなかったからだ。出てくる単語を見る限り、エネルギー生成のサイクルに反物質が使われているということはわかったのだが、そ

れがどのように利用され、どのように作用してエネルギーを生成するのかは理解できなかった。
そもそも、生成される『エネルギー』とは何なのかということが理解できなかった。電力なのか？　というとそういうわけでもないようだし。いや、電力も発生させているのは確かなようなのだが。
ついでに言うと、クリシュナが装備している対艦反応弾頭魚雷に使われている反応弾頭というのも反物質を利用した弾頭であるらしい。俺は知らず知らずのうちに反物質兵器をぶっ放していたようだ。
まぁ、テクノロジーの全貌を理解しなくても利用することはできる。原理を理解していなくても家電製品やらスマートフォンやらパソコンやらを使えるのと同じことだ。少々そのスケールというか、危険性が段違いなだけで。

「解析は難しいか。スペースドウェルグ社でも無理っぽかったもんなぁ」
「せやねぇ、うちらも頑張ってはいるけど、正直手に余ると思うわ」
「あ、でもヴェルザルス神聖帝国ならどうでしょう？　私達とは全く別系統の技術体系を持っているわけですから、もしかしたら何かわかるかもしれませんよ？」
「ああ、それは有り得るな。そもそも、クリシュナは俺がこっちに落ちてきた時に生成された船なんだろうし。そう考えるとヴェルザルス神聖帝国なら、って可能性は十分あるか」

そうだとしたら、ヴェルザルス神聖帝国に行く目的が一つ増えたことになるな。あっちのシップエンジニアにクリシュナを見せてみるってのは大いにアリだ。

『ご主人様、入港完了致しました』
「了解。それじゃあ皆で船を降りて息抜きがてらコロニーを散策しつつ、クギの手続きについていくとしよう。皆を集めてくれ」

『はい、ご主人様』

さて、好景気に沸くコロニーの様子ってやつを見に行くとしますかね。はぐれないように注意をしないとな。

＃４９９　「愛と勇気と希望と来たか……」（前書き）

同人ＲＰＧやったりアプデのきたＦａｌｌｏｕｔ４やったりして僕は元気です（，ω，）

#499　「愛と勇気と希望と来たか……」

「こりゃ今まで見た盛況のコロニーとはまたちょっと趣が違うもんだな」

ニーパックプライムコロニーに降り立ち、暫くコロニーの様子を見て歩いた俺は思わずそう呟いた。なんというか、客層……と言うのは変か。歩いている人々の質が違う感じがする。恐らく新規の入植者であろう人達はどこか高揚しているというか、生気に満ち溢れているし、商人であろう人達は儲け話に目をギラつかせている。そんな彼らの発する空気がコロニー全体を活気づかせているのだろう。

「なんやろ？　なんちゅーかこう、金持ちっぽい人多ない？」
「そう言われるとそうかも？　なんででしょう？」
「惑星上居住地に入植できるのはごく一部の運の良い人を除けば、基本的に優良納税者か帝国貢献者の一等市民権所持者だからね」

ティーナとミミの素朴な疑問にウィスカが微妙に社会の闇を匂わせる発言をしている。ああ、そうか。一等市民権ね。なるほど。惑星上居住地に居住するための大前提が一等市民権だものな。一等市民権の付与条件はわからないが、ウィスカの言うように金持ちか軍務や公務などで帝国に多大な貢献をした人物なのだろう。そりゃ身なりの良い人が多いわけだ。

「ごく一部の運の良い人ってどんな人だ？」
「一等市民権を所持してない人にも惑星上居住地の入植者に選ばれる枠があるみたいですよ。各コロニーから数人とかの小規模で」
「なるほど……よく知ってるな？」

「えっと……お兄さんが惑星上居住地に家を建てるって聞いてたので、ちょっと調べた事があったんです」

そう言ってもじもじするウィスカの頭を思わずなでなでしてしまう。ウィスカは俺とほぼ同い年のれっきとした大人の女性なのだが、どうしても頭の位置が撫でやすい位置にあって撫でちゃうんだよな……ミミくらいの身長ならうっかりってこともないんだが。

「我が妹ながらあざといなぁ……」

「べ、別にそういうの狙ってるわけじゃないからね！？」

弁明する妹に完全に疑惑の眼差しを向けるティーナ。正直俺も少しだけそう思ったが、可愛いから仕方ないね。

「目がギラギラしてるのは商人達ね。ゲートウェイを利用できるってことは、それなり以上の規模の商会の連中でしょ」

「なるほど。こういう特需は儲けは出しやすいと思うんですけど、チキンレースみたいなところもありそうですね。確実に売れると思って大量に仕入れてきた資材が、先に納入されていたせいで死に在庫になったりとか」

ミミは最近交易商人みたいな視点で物事を語ることが増えてきた。補給物資の管理だけでなくブラックロータスのカーゴスペースを利用した交易も任せるようになった結果だろう。このまま一端の交易商人としてもやっていけるくらいのスキルをぜひ身につけて欲しい。

「あぁ、それは商人にとっては悪夢だろうねぇ。だから情報収集に躍起になってるわけだ。失敗すればその噂も一瞬で広まりそうだね」

『浮世は世知辛いねぇ。私もそのうちそういう世知辛さに揉まれる時が来るのかな』

「さぁ、どうかな？　ヒロくんの傍にいる限りはそういう浮世の世知辛さとは無縁かもしれないねぇ。それ以上に危険な荒波に晒されるだろうけれど」
「それは否定できないなぁ」

ショーコ先生とネーヴェのやり取りに苦笑いをしながら答える。良くも悪くも俺と一緒にいる限り一般的な世知辛さというものとは無縁だろうからなぁ。大体のことは金の力とか暴力とかプラチナランカーとか帝国の名誉子爵といった権威の力とかで解決できてしまいそうだし。

とはいえ、そういうものにばかり頼って問題を解決していると、いつかしっぺ返しがくるだろうからほどほどに自重する必要があるだろうな。

「お？　あれじゃないか？　迎えの人って」
「はい、我が君。恐らく間違いないかと」

俺が差した方向にいる人物を確認したクギが頷きながらそう言う。

別に俺達は人々が行き交う港湾区画で目的もなく通行人ウォッチングに勤しんでいたわけではなく、人を待っていたのである。その待ち人というのはヴェルザルス神聖帝国の迎えの人員というやつだ。ニーパックプライムコロニーに到着した時点でクギがヴェルザルス神聖帝国の大使館に連絡を取った結果、港湾区画に迎えの人を寄越すので待つようにとあちらからそう言われたわけだな。

「なんかサムライっぽいのが来たな……」

恐らく迎えと思われる人物達の人数は三人であった。一人は俺と背丈が同じくらいで、額の生え際辺りから角のようなものが生えている男性。もう一人はクギと同じような尖った獣耳が頭の上に生え

ている女性。そして最後の一人は丸い獣耳が頭の上に生えている女性だ。角の生えた男が中央に立ち、女性二人がその後ろに並んでついてきているところを見るに、角の生えた男が代表というか上司なのだろう。

全員が和装っぽい衣装に身を包んでおり、腰には日本刀めいたものを差している。ただ、打刀と脇差しのように大小二本を腰に差しているわけではなく、一振りだけ腰に差しているのが侍とは少し違うか？

「ご挨拶申し上げる。私はこの、ニーパックプライムコロニーにあるヴェルザルス神聖帝国の聖堂で聖堂護衛官の長を務めている、ランシンと申す者。貴殿がキャプテン・ヒロ殿と巫女のセイジョウ殿、そしてお連れの方々で間違いないだろうか？」

「ああ、間違いない。キャプテン・ヒロだ。わざわざご足労頂いて申し訳ないな」

「これも護衛官の務め故、お気になさらず。寧ろ、港湾区画で出迎える事ができずお待たせして申し訳なく思う。後ろの二人は部下のモエギとコノハと申します。二人とも、挨拶を」

「はい、モエギと申します。お見知りおきを」

「コノハです。どうぞよろしく」

ランシンの後ろで控えていた二人もそう言って会釈をしてきたので、こちらも会釈を返しておく。ついでと言ってはなんだが、他のクルー達の紹介も軽く済ませておく。

「ここで立ち話を続けるのも不用心というもの。早速聖堂にご案内致そう。すぐ近くに移動用の車両を待たせてあります」

「了解。しかしこんな大所帯で押しかけて良いものかね？」

「些かも問題ありませぬ。どうぞこちらへ」

そう言ってランシンが踵を返して俺達を先導し始めたので、俺達もぞろぞろとその後ろをついて歩いていくことにした。

「ん？」

俺達とランシン達を含めて十人以上の人間がぞろぞろと歩いている上に、俺以外は誰も彼も人の目を惹く美女だの美少女だの変わった格好だのをしているのに周りから全然注目されていないことに気が付き、思わず声を上げる。

「何か？」

「いや、少し違和感が……ああ、なるほど」

俺のすぐ近くを歩いているコノハと名乗った丸耳獣侍ガールに聞き咎められてしまったが、違和感に気づいて注意をしてみればすぐに理由がわかった。モエギと名乗った狐耳侍美女から何か精神波が放たれている。恐らく人避けとか隠密とか認識阻害とかそんな感じの第二法力――精神干渉系のサイオニック能力を使用しているんだろう。

「わかってしまいましたか。巫女殿の薫陶を受けていらっしゃるなら当然でしたね」

モエギがそう言いながらクスリと笑みを漏らす。うん、美人。とは思ったけどもクギさん、確かにそう思ったけども密かに俺の服の裾を引っ張って抗議するのはやめないか。ほら、呼応してミミもやり始めた。あー、いけません！　いけませんお客様！　ドワーフ姉妹のお客様！　後ろから引っ張るのはいけません！　歩きにくいのでいけませんお客様！

「……仲、よろしいんですね」
「まぁ、そうね。身に余る光栄だと思ってるよ」

コノハにどことなくジト目っぽい視線を向けられてしまった。傍から見るとお前何股してんだよこのスケコマシ野郎がって絵面なので、こういう視線を向けられるのは仕方がないと思う。俺も多分そういう目で見ると思うし。

「ヒロ殿の立場を考えれば悪いことではない。寧ろ大いに歓迎するべきだ」
「そうなのか？　リスク要因だとか考えられるかと思ってたんだが」

俺という爆弾に爆発されては困るヴェルザルス神聖帝国的には俺の『起爆スイッチ』になりかねないミミ達のような存在の多さは歓迎されないんじゃないかと思っていた。

「そのような事はありませぬとも。いつだって人を強くし、絶望に抗う力となるのは愛と勇気と希望と、そう相場が決まっておるのですからな」
「愛と勇気と希望と来たか……」

こちらを振り返りもせずに粛々と歩きながら面白いことを言うな、この男。愛と勇気と希望、愛と勇気と希望ねぇ……？　まぁ、精神文明的な立場から言えば、そういった精神論というやつも馬鹿にできない要素なのかね？　ちょっとヴェルザルス神聖帝国というか、その思想に興味が湧いてきたぞ。

#500　「そうかな……？　そうかも……？」（前書き）

ちょっと身内のペットに不幸があって遅れました（ ，ω， ）

#500　「そうかな……？　そうかも……？」

「こりゃまたファンタジーというかなんというか……」

ヴェルザルス神聖帝国の聖堂とやらに辿り着いた俺は、その威容――というよりは前庭に存在する『あるもの』を見上げて思わず呟いた。宙に浮かんでいる直径２ｍほどの球体だ。その球体は紫色の煙、もしくは炎のようなもので構成されており、その実態は何かというとサイオニックパワーの塊のようなものである。一体どういう用途で、何のためにこんな場所にサイオニックパワーを集中させているのだろうか。

「気になりますか？」

「そりゃね。ありゃ何なんだ？」

声をかけてきたモエギに聞いてみると、彼女はあっさりとその正体を教えてくれた。

「あれは法力通信機用の法力貯蓄器なんですよ。ほら、あそこととあそこ、それにあそこにも装置があるでしょう？　あれらの装置で聖堂によって増幅された法力を空間に固定して貯蓄しているんです。ここから本国に直接通信するとなると、流石にヒト一人分の法力ではどうやっても届きませんからね」

「なるほど……？　空間に固定ってそんなことができるのか。すげぇな」

エネルギーを空間に固定して貯蓄できるって物凄いことでは？　どれくらいのエネルギーを貯蓄できるのかわからんが――って、早

速うちのエンジニアや研究者が目を輝かせている。
「ヴェルザルス神聖帝国に行けばその辺りの技術的な理論を学ぶ機会もあるだろうから、好奇心は抑えておこうな」
「えー」
「ぶーぶー」

ブーイングが飛んできたが、無視だ無視。よくわからないスキャナーっぽいものを貯蓄器――キャパシタに向けるんじゃない。というか、どこから取り出したんだよそれ。持ち歩いてるのか？

「はいはい、見るにしても後でな。後で。すまん、案内してくれ」
「ふふ、はい。どうぞこちらへ」

モエギが足を止めた俺達を聖堂の入口で待っていたランシンとコノハの元へと先導してくれる。
そしてそのモエギにホイホイとついていく俺の服の裾をまたクギとミミが引っ張って抗議している。いや、別にモエギがおっとり系美人お狐お姉さんだからホイホイついていってるわけじゃなくて、単に早く用事を済ませようとしているだけだから。
それ比べて見ろ、あのエルマの落ち着きようを。

「……」

平静を装っているけど、耳の角度があまり機嫌が良くない時の角度だ。少し後ろめにキュッてなるんだ。俺は知っているぞ。ティーナとウィスカ、それにショーコ先生はそれどころではなくサイオニックテクノロジーに夢中だな。メイは……メイはいつも通りだな。ネーヴェはショーコ先生の傍でポッドに入ってて様子がわからん。
あー、目の前でフリフリしてるもふもふキツネしっぽだけが俺の

今の心の癒やし――モエギの尻尾は一本なんだな。クギは三本なのに。個人差なんだろうか？

「我が君、尻尾を凝視するのはマナー違反ですよ。あれです、せくはらです」

「そうなのか……難しいな、神聖帝国のマナーは」

どうしてだろうと考えていたらクギに注意されてしまった。尻尾を凝視するのはおっぱいやおしりを凝視するのと同じくらいのレベルのセクハラなのだろうか。それともそれ以上なのだろうか。わからん、何もわからん。

「履物は脱いで上がってくださいね」

「了解」

聖堂の入口、というか玄関というか土間のような場所でコノハにそう言われたので、素直に靴を脱いで板の間に上がる。うーん、どことなく日本家屋っぽいというか、神社っぽい雰囲気があるな。クギと、あとエルマとミミは特に手間取ることもなく靴を脱いで板の間に上がってきたのだが、他の面々はあまり靴を脱いで板の間に上がる文化が無いからか、少し手間取っている。そういやエルフもどことなく和風っぽさというか、アジア系の文化っぽさを感じさせる雰囲気があったな。

ミミが慣れているのはなんでだ？

「クギさんのお部屋にお邪魔することが結構あるので！」

「なるほど」

そういえばクギの部屋は入口部分以外は畳敷きっぽくしてあって、入口の所以外は土足厳禁にしてるもんな。ミミは普段からクギの部

屋に遊びに行くことが多いから、慣れてるのか。

「そういやうちらはあんまりクギの部屋に遊びに行くこと無かったなぁ」

「クギちゃんがよく遊びに来てくれるから」

「私もないねぇ……私はいつも研究室にこもってるから」

「いつでも遊びに来てくださいね」

『ドクターはもう少し部屋から出たほうが良いと思うけどね』

そんな話をしながら護衛官の三人に案内されてぞろぞろと聖堂の奥へと進んでいく。うーん、やっぱりなんかこう、神社とかお寺とかそれっぽい感じがするな……それに、なんだろうか。なんか建物全体にサイオニックパワーの残滓――いや、残滓というのは違うな。これは現在進行系で何か動いているというかなんというか。サイオニックパワーの回路が建物全体に張り巡らされている？

というか、俺の勘違いじゃなければ壁の装飾っぽいものとか色々なものが青紫色に発光している。

「……気になりますか？」

気がつくと、またもやモエギがいつの間にかすぐ近くに寄ってきていた。俺が若干上の空になってきょろきょろと建物を見回しながら歩いているのに気がついたようだ。しかし次はないとばかりにクギがインターセプトしてくる。物理的に。具体的には俺の腕に抱きつくという形で。

「我が君、この聖堂には聖堂内にいる人員から増幅された余剰の法力を吸い上げ、先程の法力貯蓄器に貯蓄するという機能や、聖堂自体の保護機能などがあります。その法力結界が建物そのものに組み込まれているので、建物全体から法力を感じるのです」

「なるほど。建物自体にサイオニックテクノロジーが組み込まれているわけか。あれ？　それ大丈夫か？　俺から吸い上げるとオーバーフロー起こしたりするんじゃないか？」
「大丈夫、と言いたいところですが……少し大変みたいですね。すみません、隊長。私は制御の手伝いに行ってきます」
「そうしてくれ。案内は俺達だけで十分だ」

ランシンがそう言ってモエギを送り出す。直前にテレパシーで交信したっぽい様子だったから、管理部署辺りから応援要請でも入ったのだろう。すまんな、俺がサイオニックパワー垂れ流しマンというか、強すぎるマンで。クギとの修行で大分制御できるようになって、俺のサイオニックパワーは垂れ流し状態ではなくなったわけだが、それでも潜在的な力の強さが変わったわけではない。
吸い上げるサイオニックパワーの量が例えばほんの数％だとしても、俺が持っているサイオニックパワーの総量は桁違いらしいからな。何せ星系を複数消滅させるような規模のサイオニックパワーだ。吸い上げ、貯蓄機構が何らかの不具合を起こしても不思議ではない。

「なんか来るだけで面倒をかけてすまんな」
「ヒロ殿が気にされることではない。こちらの想像以上のポテンシャルに寧ろ敬服致した。しかも、その溢れ出んばかりの法力をしっかりと制御し、内に留めておられる。ヒロ殿は剣も使われるとか？　是非一手お相手願いたいところなのですが」
「隊長」
「わかっている。いやはや、実に残念無念。某達のような者達が全力で戦うにはこのコロニーは脆過ぎる」
「そうかな……？　そうかも……？」

この角つきのおっさん、本気で戦ったらコロニーが壊滅すると暗に言ってるぞオイ。いくらなんでもそんなことは……ある、か？

あるかもしれんな。俺もサイオニックパワーを全開にするとメイとの剣技訓練場にしているブラックロータスの格納庫がぶっ壊れかねないってことで、サイオニックパワーを使ってメイと模擬戦をする時には力を抑えてやってるしな。

そんなことを考えながら少し歩くと、どうやら目的の部屋に辿り着いたようだった。結構奥まったところにある部屋だな。

「聖堂長、ヒロ殿とセイジョウ殿、それに連れの方々をお連れ申した」

「どうぞ、入ってくだされ」

中から聞こえてきた声に応じてランシンが襖のような引き戸を開ける。中に入ると、そこには一人の男性が待っていた。なんか神主っぽい格好をしているな。頭の上の耳はコノハのような丸っぽい感じだ。クマ？　タヌキ？　いや、イタチとかか？　わからんな。

「お初にお目にかかります。私は当聖堂を預かっているフウシンと申す者」

「これはご丁寧にどうも。俺は傭兵のキャプテン・ヒロだ。知っているかもしれないが、巫女のクギと、俺のクルー達だ」

そう言って一人一人紹介し、用意されていた座布団に腰を落ち着ける。俺はあぐらでクギは正座をしているが、普段床に座る習慣がないミミ達は思い思いの格好で座っているな。いや、その中でもミミは正座で座ってるんだけど。クギに教えてもらったのかな？

「本国では既にあらかた準備を終えているそうで、迎えの船団も既に待機中とのことですな。本国行きに関してはグラッカン帝国とゲートウェイの運用についての話し合いが終わり次第となりますが、さして時間はかからないかと」

「既に待機中って、随分と早いな」
「それはヒロ殿がセイジョウ殿を通じて予め帝都の大使館に訪問の旨を我々に伝えてくれていたからですな。十分な準備期間を設けられた結果というわけです」
「なるほど」

あの時点ですでに動いてくれていたわけか。そりゃ準備万端なわけだ。

「我々も今回の便で本国に帰還する予定なので、道中は一緒に行動することになりましょう」
「なるほど。そういえばついでに人員の入替えをするとか聞いたな」

クギからそんな感じの話を聞いていたことを思い出す。どうせ迎えの艦隊を寄越すなら、ついでに人員の入替えやら交易やらを行ったほうが効率的なのは確かだよな。

「そのの通りですな。数日中、遅くても一週間以内には本国行きの便が運行されることになるでしょう。その間は当聖堂にご滞在くだされ」
「あー、んー……いや、申し出は有り難いんだが、自分の船の方がリラックスできると思うんだが」

そう言ってクギに視線を向けると、クギもそれを肯定するように頷いた。

「はい。我が君の仰せの通りかと。とはいえ、船にずっといるのも退屈でしょうから、聖堂に顔を出すのはどうでしょうか？　此の身どもの国の文化について予め知ることもできますし、きっと我が君に取っても皆様にとっても面白いものがあると思います」

「なるほど……それは良い考えだと思うが、迷惑じゃないか？」
「いえいえ、そのような事はありませぬ。是非ともお越しください。正直なところを申し上げますと、本国に行く前にヒロ殿の力がどれほどのものなのか、ある程度目星をつけておきたいという事情がありましてな。この聖堂と同じように、本国には滞在者の法力を増幅し、蓄える機能を持つ建物が多いですから」
「ああ、なるほど。俺みたいなのがポンと現れると、今この聖堂で起こっているようなオーバーフローみたいなことが起きかねないと」
「そういうことで」

フウシンが好々爺めいた笑みを浮かべながらそう言い、頷く。なるほどな。まぁそういうことならあちらの思惑に乗っても良いか。特に悪意とかは感じないし。
もっとも、全面的に信じるというか、警戒を解くようなこともできないけどな。クギのことは信じているが、ヴェルザルス神聖帝国がどのような思惑を持つかはまた別の話だし。最悪、俺のことを捕らえて莫大なサイオニックエネルギーの供給源にしようとするかもしれない。
我ながら疑い深いにも程があるとは思うが、警戒を怠って取り返しのつかない事態に発展するよりはマシと思おう。

#501　「またなの？」

「またなの？」

ヴェルザルス神聖帝国の聖堂で挨拶を終え、お茶を馳走になって帰ってくるなり食堂に皆を集めて一応ヴェルザルス神聖帝国に気をつけるように言ったのだが、エルマに呆れられてしまった。どうやら無用の警戒をしすぎだと思われてしまったらしい。

「俺が凡百な一山いくらみたいな雑魚傭兵ならこんなことを心配する必要は無いと思うんだがな。あと、相手が俺に秘められたサイオニックパワーになんて殆ど興味もなければ認知すらしていないグラッカン帝国なら。だが、今から俺達が行くのは精神文明国家で、かつサイオニックパワーに対する理解が深いヴェルザルス神聖帝国だ。俺みたいな人間の利用の仕方なんてものもよく心得てる連中の国だぞ？　警戒するに越したことはないと思うんだが」

「そうは言うけど、それは同時にあんたみたいな落ち人？　とやらの危険性を一番よく知っている人達ってことでもあるわよね？　心配はいらないと思うけど」

「俺みたいな存在がどれだけ危険なのかということを知っているのなら、その対策も研究していて然るべきだろ。俺が『爆発』した時に発生させるエネルギーすらそのまま利用するような技術を開発しているかもしれん。そもそも、その俺が爆発すると大変なことになるって情報すらヴェルザルス神聖帝国からの情報だ。俺達に話していない情報がどれだけあるかもわからん。油断はしないがいい」

エルマの物言いに反論する。危険であればこそより研究して利用しようと考えるのが人間というものだ。そもそも、彼らが俺に全て

を話しているという証拠もない。
「あの……我が君。此の身どもはそういう陰謀めいたことは何も、本当に何も考えていませんから。本当に、本当なんです……」
そして、そんな俺とエルマを見ながらクギが涙目になっている。というか、祈るように訴えかけてきている上に今にも泣きそうである。泣くのは反則だろう……。
「あの、ヒロ様。流石にクギさんがかわいそうというか……クギさんのことも疑っているんですか？」
「いや、クギのことは疑ってないけど、クギを疑っていないということとヴェルザルス神聖帝国を信用するというのは別の問題だろう。クギが知らないだけで、俺みたいな落ち人を捕らえて利用しようという思惑がヴェルザルス神聖帝国には存在するかもしれないし」
俺のミミへの返答を聞き、ティーナが苦笑いを浮かべる。
「兄さんのは殆どビョーキやなぁ……」
「うーん……確かに少し疑り深いと思うけど、私は警戒するに越したことはないと思うな。相手が国となると、国益に沿うかどうかというところが判断基準になると思うし」
『それに関しては完全に同意だね。キャプテンが宇宙帝国という巨大な組織を警戒するのも無理はないと思うし、私はキャプテンの意見に同意するよ』
「そうだねぇ。とはいえ、実際のところヒロくんの爆発を制御したり、その爆発すらも利用するなんてことが可能なのかね？　ヒトの精神や意識を完全に壊し、制御する方法もまぁ無くはないけど、一歩間違えれば超新星爆発の数倍から十数倍、下手したらそれ以上のエネルギーが放出されてしまうんだろう？」

ショーコ先生の言う通り、俺みたいな落ち人というのは敵対的な方向で手を出すにはリスキーな存在であることは確かだな。ヴェルザルス神聖帝国の人達が言うことを信じるならば。

「いくらヴェルザルス神聖帝国が私達の理解が及ばないサイオニックテクノロジーを有しているとは言っても、そんな巨大なエネルギーを制御できるとは流石に思えないよ。そんなエネルギーを扱えるくらいの技術レベルがあるなら、とっとと銀河全体をまとめ上げて彼らの使命とやらを達成するために動いているんじゃないかな？」

確かにそれはそうだ。そんな巨大なエネルギーを完全に制御し、自由に利用することができるなら銀河の覇権を手にすることなど容易なことだろう。

「だけど、現実にはそういうことはなく、彼らは然程広くもない領土内に引きこもり、外界との接触を最低限にして自分達の使命を達成しようとしている。ということは、そこまでの技術力を有してはいないと考えるのが妥当で、そうなるとクギくんの言う通りヴェルザルス神聖帝国としてはヒロくんを必要以上に刺激せず、何か困ったことがあった時にお互いに協力しあえるような関係を構築する、というのが最適解になると思うのだけれど」

ショーコ先生の発言には一理あるように思える。少なくとも、俺の漠然とした警戒感よりは筋道が通っているような気がする。うーん、確かにそう言われるとそうか？　俺を陥れて利用できるだけの技術力があるなら、前にクギが言っていたヴェルザルス神聖帝国の民の贖罪だかなんだかとかいうお勤めもとっくに果たしてるか？　そう言われればそうかもしれない。

「今日行った聖堂でも下にも置かない扱いだったし、わざわざゲートウェイを使って遥か遠くの本国から護衛艦隊まで回してくれるって言ってくれてるのよ？　ゲートウェイの使用に関してはグラッカン帝国にも勿論通達が行っているわけだし、ヒロがヴェルザルス神聖帝国に足を運んだ件に関しては帝国だって承知してるわけ。そしてヒロはゴールドスター受勲者で、帝国の名誉子爵でもあるの。そんな貴方がヴェルザルス神聖帝国に行ったまま戻ってこないとなったら国家間の問題になるわよ」

ショーコ先生の後に続き、今度はエルマがグラッカン帝国の貴族としての視点から話を始めた。

「しかも侯爵家、伯爵家、子爵家が関わる婚儀も控えている上に、同行者の一人はその当の婚約者で子爵家の縁者。あと、非公式だけどミミは皇帝陛下の姪孫。そういう立場が私達や貴方を守ってくれるわ。ヒロにとっては面倒なしがらみでも、そういう視点で見ればしがらみは私達の身を守る鎧にもなるの。だから、ヒロもそろそろ自由な根無し草のいち傭兵って自己認識を改めなさい」

「耳が痛いなぁ……でも柵が鎧にもなるって視点は新しいな。なるほど」

ゴールドスターだの名誉子爵だのといった勲章や立場は帝国につけられた首輪みたいなもんだと思っていたが、逆に他の宇宙帝国から身を守る鎧にもなるのか。確かにそうか。グラッカン帝国からすれば自分が首輪をつけた犬を勝手に連れ去られて檻に入れられたりしたら、舐めてんのかてめぇって話になるものな。そもそも敵対しているベレベレム連邦相手には無意味だろうが。

「うーむ……それじゃあ、警戒は……ほどほどに？」

「そうね、程々にしておきなさい。悪意を持って陥れられるような

ことはないかもしれないけど、ハニートラップだとか、情に訴えた取り込み工作くらいはあるかもしれないから。ヒロはお人好しで困った可愛い女の子を見ると助けずにはいられないでしょ？　そういうのだけは本当に気をつけなさい。あまり節操なしに女の子を拾ってくるんじゃないわよ？」

「今までにも節操なく拾ってきたみたいな言い方はよさないか……？」

もし俺が本当に節操なく女の子を拾ってきていたら、今頃ブラックロータスは満員になっているぞ。多分。いや、流石の俺にもそこまでの女子吸引力は無いと思うけど。

「ほら、それよりもあんたに疑われてクギが泣きそうになってるわよ。なんとかしなさい」

「はい。クギ、疑ったりしてすまなかった。クギのことを疑ったりはしてないから。どうか許してくれ」

「いえ、我が君が此の身どもの国を信用しきれないのも此の身の不徳と致すところです。今後はより我が君からの信を得られるように努力いたします……」

「いや、クギが悪いわけじゃなくてな……？　本当にごめん」

俺の疑り深さがクギを深く傷つけてしまったようだ。これは俺の性分なのでそうそう直せそうに無いが、今後はもう少し視野を広く持つべきだな……反省しよう。

『私はキャプテンの考えがおかしいとは思わないけどね。国家という巨大組織の前には個人の命や尊厳なんてゴミみたいなものさ。油断するといいように使い潰されるよ』

「ネーヴェも混ぜっ返さないの。あなたが国家というものに不信感を持ってるのは理解できるけどね。はい、とりあえずこの話はこれ

でおしまい。迎えの艦隊が来たらしばらくグラッカン帝国を離れることになるんだから、帝国内でしか出来ないことがあるなら早めに済ませておくのよ。家族への連絡とかね。ティーナとウィスカには連絡する相手が結構いるでしょ？」

自身の経験から国家に対する不信感を顕にするネーヴェを窘め、エルマがこの場をまとめる。うーん、やっぱりエルマは頼りになるな。年の功とか言ったら腕をへし折られそうだが。

「ん、せやな。母ちゃんとかアイリアとかにも連絡しとくわ」

「私も養父に連絡しておくかねぇ」

ティーナだけでなくショーコ先生もそう言い、この場は解散ということになった。俺はクギのフォローをしなきゃいけないな……クギの言う通り本当に何事もなければそれに越したことは無いんだが……実際にどうなるかは行ってみないとわからんよな。とりあえず、明日は聖堂に行って色々話を聞いたりしてみるか。

#502　「駄目です」（前書き）

天気が悪くて捗らねぇですわ！！ ―（：3」∠）―

#502　「駄目です」

「いえ、何もかも此の身の不徳が招いたこと。慰めて貰うなどというのはあまりに惰弱というものです」

ヴェルザルス神聖帝国への対応についての話し合いを終えた後、クギをフォローしようと思ったのだが、彼女は気丈にそう言った。頭の上の狐耳もピーンと立っている。やる気だ。

しかし彼女の三本の尻尾はしょんぼりと萎え萎えになっていた。だらーんと垂れている。どう見ても空元気というやつである。

「俺が悪かった、と言ってもクギはそう簡単に納得しないだろうな」

「いえ、此の身の身から出た錆ですから」

クギはこれでかなりの頑固さんなので、口で言ってもそうそう容易くは納得してくれないだろう。というか、聞いての通り納得してくれる気配がない、

なので、俺は強硬手段を取ることにした。

「そうだよな。クギはそう言うよな。というわけで――」

息を止め、時間の流れを鈍化させる。

クギはまだ完全に無警戒状態。意思の強さを感じさせる瞳で俺の顔を正面から見つめてきていた。

鈍化している時間の中で、素早くクギの頭に両手を伸ばして抱え込み、そっと彼女の額に俺の額を接触させる。当然、クギは俺のこの急な動きに反応することすら出来ない。

「――こうするぞ」
「へっ……？」

本来、第二法力――つまりテレパシーだの精神干渉だのといったサイオニック能力はヒトが放つ精神波を様々な方法で活用するものだ。その行使に身体的な接触は必要ではなく、寧ろ身体的な接触なしで、能力の行使を感知されることすら無く影響を及ぼすのが最上とされている――と、クギが言っていた。
しかし、こうして身体的な接触を介して能力を行使することにもちゃんとメリットがある。

「んピィッ！？」

クギが今までに聞いたことがないような悲鳴を上げ、視界の隅に映る彼女の尻尾がブワっと膨らむのが見えた。
精神波を介して相手に影響を及ぼすのが第二法力と呼ばれるサイオニック能力の定義なのだが、こうした身体的接触――特に脳味噌が入っている頭部同士の接触を介した場合、その威力というか貫通力というか、そういったものが格段に上がる。つまり、精神波を伝えやすくなる。

「……」
「ワ……ア……ァ……？」

というわけで、クギにはこうして俺がどれだけクギを信用し、信頼しているのかという思いの丈をぶつけた。ぶつけたのだが……。

「あの、ヒロ様？　クギさん鼻血出てますよ！？」
「んん？」
「ぴゃー……」

なんかクギが鼻血を垂らしながら人様には見せられない表情になってしまっていた。おかしい、俺はただクギに俺の想いをわかって欲しかっただけなんだが。

「……加減を間違えたかな？」

「間違えたかなじゃないですよ！？　クギさん？　クギさんっ！？　ショ、ショーコ先生を呼んだほうが良いですかね！？　これ！」

「へ、下手に揺らさないほうが良いかもしれない」

わたわたと慌てるミミを落ち着かせながら俺は小型情報端末を取り出した。と、とりあえずショーコ先生を呼ぼう。あと、メイも。

☆★☆

「エンドルフィンをはじめとして脳内の報酬系に作用する脳内麻薬がドバドバ出て危ない状態だったねぇ」

「……つまり？」

「もう一歩で戻ってこれなくなってたかもね。二度と同じことをしないように」

「はい」

ショーコ先生にガチトーンで注意された俺は素直に頷いた。今の今までショーコ先生からの診察と治療を受けていたクギは簡素な手術着のようなものに着替えさせられている――どうして着替えさせられる必要があったのかは聞かないでくれ――のだが、まだ他人様にはお見せできない表情のままである。鼻血は止まったけど。

「一体何をしたらこうなるんだい？　宙賊から鹵獲した快楽系のドラッグでもキメさせたのかい？　全く感心できないんだけど」

「いや、そんな恐ろしいことはしてないって。ちょっとこう」
「こう？」
「おでことおでこをくっつけて、テレパシーでクギへの信頼とか好意とかそういうものをぶつけてみただけで」
「なんだいそれは……？　でも、ヒロくんのサイオニックパワーは超新星爆発の数倍とか数十倍とかなんだっけ？　そんな力をクギくんの頭に流し込んだら、そりゃこうなるんじゃないのかい？」
「そうかな……？　そうかも……？」

そう言われるとそうなのかもしれない。もしかしたら、俺はクギにとんでもなく危険なことをしてしまったのか？　起きたらちゃんと謝らないとだな。というかこれは……うっかりでクギを殺しかけたのか？　マジでか……いや、まさかそんなことになるとは思わなかった。背中にじんわりと冷や汗が湧き出てくる。

「ご主人様、これは上手く使えば非殺傷の制圧手段になるのでは？」
「なんという恐ろしいことを考えるんだ。いや、でも多分無理だぞ？　クギがこうなったのは互いの好意というか、そういったものが作用してってこともあるだろうし。赤の他人、それも制圧しなきゃならないような相手には効かないと思う。いや、伝える感情というか、精神波の方向性次第かな……？」
「本当に反省しているのかい？　あんまり反省の色が見えないようなら私にも考えがあるよ？」
「本当に反省しています。二度とやりません」

害意などというものは欠片も無かったとはいえ、迂闊に身内に俺の力を使ってはいけないな。本当に迂闊だった。心の底から反省している。
というか、ショーコ先生がどんなことを反省の薄い俺にしてくるのかがわからなくて怖すぎる。医者だけは、医者だけは敵に回しち

ゃなんねぇよ。本当に。人体に精通している医者という存在は、それを破壊することにも精通していると言えるのだから。

「それで、今日はどうするんだい？　クギくんに関しては恐らく数時間で目を覚ますと思うけど」

「俺はクギの傍にいるよ……流石にこの状態にしてしまった責任があるし」

「そうかい？　他の面子はどうする？」

「フリーで。買い物に行くなりなんなりな。ただ、外に出るならメイがついて行ってくれ」

「承知致しました、ご主人様」

ニーパックプライムコロニーにうちのクルー達が欲しがるようなものがあるかどうかはわからないが、物資のやり取りが盛んなこのコロニーなら何か掘り出し物があるかもしれない。それに、買い物ってのは楽しいものだからな。

☆★☆

他人様に見せられないような表情で半ば気絶していたクギが目を覚まし、焦点の合わない視線を俺に向けて襲いかかってきたりしたが、それをなんとかいなすと彼女は今度こそ正気に戻った。

「……」

「本当に申し訳ない」

「……」

正気に戻ったクギは頭から布団を被ってメディカルベイのベッドに引きこもってしまった。まぁ、そうは言っても尻尾だけは布団の外に出ていて、俺の手に巻き付いているのだが。

ショーコ先生は正気に戻ったクギを軽く診察した後、席を外している。普段メディカルベイに入り浸っているネーヴェも今は他のみんなと一緒に買い物に出ているので、今のメディカルベイには正真正銘俺とクギの二人きりだ。

「前にクギが訓練を付けてくれた時にも俺の力は強いから、使う時は慎重にって何度も言ってたよな。言いつけを守らずにクギを危険な目に遭わせて本当にすまん」

「……」

俺の手、というか手首というか腕に巻き付いているクギの三本の尻尾が微妙に動いている辺り、俺の言葉は聞こえているのだと思う。しかし、クギは布団に閉じこもったまま顔を見せてくれない。相当に怒らせてしまったようだ。

「……反省してますか？」

「反省してます」

「……仕方がないので許してあげます」

俺の腕に巻き付いていた尻尾がシュルリと解けて、代わりにクギの手が俺の手をぎゅっと握ってくる。なんだか感触を確かめるかのようにニギニギと握られてちょっと気恥ずかしい。

「私ばかりというのは不公平、ですよね？」

「うん？」

「抵抗、しないでくださいね？」

「ちょっと待って」

「駄目です」

クギが俺の手を引くと同時にガバッ！　と布団が跳ね上がり、ク

ギのもう片方の手が俺の顔に向かって伸びてくる。その手は俺の後頭部に回り、クギの顔が近づいてきて――クギの額が俺の額に触れた次の瞬間、俺の頭に何かが流れ込んできて、俺は意識を失なうのだった。

#５０３　「まだ、大丈夫ですよ」

「頭がいてぇ……」

気がついたら何故かメディカルベイではなく俺の部屋のベッドの上だった。しかもどういうわけか、クギだけでなくミミとウィスカもベッドにいるし。脱ぎ散らかしてある服を見るに、姿はないけど他の面々も居たのでは……？　というか今何時だ？

「……どういうことなの」

クギの看病をしていたのが昨日の昼過ぎ。今は翌朝というか、ほぼ昼前である。まるっと二十時間分くらいの記憶が無いんだが。

あ、いや、待って。何か思い出してきたような気がする。クギに何かされて、意識が吹っ飛んだと思ったらなんか色々ととんでもないことを自供させられたような……その自供内容を元にクギに色々されたような……そのうちミミ達が帰ってきて――ウッ、頭が！？

思い出そうとすると頭が痛い！？　何か脳が思い出すことを拒否している気がする！

俺は痛む頭を押さえながらクギ達を起こさないようにベッドを抜け出し、とりあえずシャワーへと向かった。何故かってそれはもう完璧に事後なんだもの。身体が痛いし、よく見ればなんか色々と痕がついている。身体のあちこちに。

最近皆勘違いしていそうなんだが、俺の肉体的な強度はあくまでも鍛えた一般人クラスなのだ。身体強化が施されている帝国貴族と違って、無茶をすれば簡単に壊れる。もう少しこう、手心というか……。

誰かが入ったすぐ後、といった様子のシャワーで軽く全身を洗い、

シャワールームにストックしてある下着やラフな部屋着を着て食堂へと向かう。ものすごく腹が減っているのだ。二十時間近くの記憶がないので、最後にいつメシを食ったのかもわからない。

「あ、起きてきたのね。おはよ」

「兄さんおはようさん。もう正気なんやね？」

「もうその発言だけで色々と察せられたが、二十時間分くらいの記憶がさっぱり無いんだよ……あ、いや、詳細は語らなくて良い。脳が思い出すことを拒否して頭が痛くなるから」

「後でちょっとメディカルチェックしようか。やっぱり脳に全くダメージなしとはいかないよねぇ、アレは」

ショーコ先生がさもありなんといった様子で恐ろしいことを言っている。ショーコ先生がそう考えるくらい俺はまともな状態ではなかったらしい。オラッ！　催眠！　されたみたいな状態になっていたんだろうか？　一体俺の失われた二十時間で何が起こっていたんだ……本当に失われたのは俺の記憶だけなのか？　なにか尊厳的なものも失っているのでは？　俺は訝しんだ。

「それで、今日は聖堂とやらに行くわけ？」

「足を運ぶって言ったしな……口約束とはいえ、破るわけにもいかないだろう」

テツジンからいつもより多めの朝食……いや昼食？　が盛られたプレートを受け取りつつ、そう返事して三人が座っている卓に俺も腰を落ち着ける。ああー、塩味の利いた食事が失われた電解質を補う感覚ぅ。

「律儀やねぇ。それじゃあ皆起こしてくるわぁ」

「ヒロくんは食事を摂ったら出かける前にメディカルチェックをし

ようね」
「ああ……あれ？　そういやネーヴェは？」
「ああ、ネーヴェなら休憩スペースでいじけてるわ」
「いじけ……？」
「ほら、昨日のアレに参加できんかったから」
「……反応に困る」

昨日から今日にかけて何が起こっていたのかはもう察しがついているが、確かにネーヴェは参加できなかっただろうな。未だにポッドから出ることも、自分の足で歩くこともできない彼女には負担が大き過ぎるし、そもそも彼女の身体では色々と難しいだろう。ティーナやウィスカと違って彼女の身体は頑丈なドワーフのものではなく、俺やミミと同じ人間のものなのだから。

「あとでフォローしておきたまえよ？」
「どうフォローしろっていうんだ……」

ショーコ先生の無茶振りに俺は内心頭を抱えながらメシを腹に詰め込むのであった。

☆★☆

『私だけ放っておかれて聞き分けよくヘラヘラしていろというのは流石に無理があると思うんだ、キャプテン』
「わかった。わかったから。今回の件は借り一つってことで覚えておいてくれ。できる範囲で何か言うことを聞くから」
『ん？　今なんでもって』
「一言も言ってない。できる範囲でっつってんだろ」

というやり取りがあり、ネーヴェがいじけていた件はとりあえず

一件落着ということになった。本当に一件落着なのかというと少々疑問が残るが、まぁ本人が納得したからヨシ！
問題は、いつどんな無茶振りをされるかということなのだが。忘れた頃に権利を行使されそうで実は少し怖い。やっちまったかもしれねぇ。

「はい、診察終わり。このサプリを飲んで水分もちゃんと摂ってね」
「はい」

メディカルチェックの結果は上々であった。健康って素晴らしいな。身体のあちこちが痛いのも治ったし。ただ、ミネラルとかビタミンとかを補助するサプリメントを飲まされた。

「食事だけで補うのは追いつかなさそうだからねぇ」

何に関するサプリメントなのかは敢えて聞くまい。しかし今になって考えると何も覚えていないのは損――いや、思い出すのは止めておこう。なんか考えただけでまた頭が痛くなってきた。
俺とネーヴェ以外はこころなしかお肌とかがツヤツヤしている気がするし、概ね機嫌が良さそうだからな。それで満足しておこう。望みすぎてはいけない。

「それじゃあ俺は出かける用意をしてくるから……ショーコ先生も行くんだよな？」
「もちろん。サイオニックテクノロジーに接するチャンスは逃したくないからねぇ。もしかしたら遺伝子サンプルも手に入るかもしれないし」
「同意の元にやってくれよ……？」

そこらに落ちてる髪の毛とか尻尾から抜け落ちた毛とかを回収し

て遺伝子サンプルゲット！　とかはトラブルの元になりそうなので本気でやめてほしい。なので、一応釘を刺しておいたのだが、ショーコ先生に「当然じゃないか！」と怒られてしまった。そういえば、俺の遺伝子サンプルを取った時にもちゃんと同意を取ってきたもんな。そりゃそうか。

ぷりぷりと怒るショーコ先生に謝ってからメディカルベイを後にし、自室で着替える。いつもの傭兵服に着替えてレーザーガン、大小一対の剣、それに小型情報端末を持てば準備は完了だ。小型情報端末が通信機器兼財布兼キーチェーンだからこそできる軽装というやつだな。

治安の悪いコロニーだとこれに加えて万が一の時に備えた救急ナノマシンユニットとか、予備のエネルギーパックだとか、対レーザースモークグレネードだとか、携帯型のパーソナルシールドだとかを装備したりするんだが、ニーパックプライムコロニーは非常に治安の良いコロニーなのでそこまでは持っていかない。嵩張るしな。

「お待ちしておりました、我が君」

全員に聖堂に行くから用意してくれ、という旨のメッセージを送って休憩スペースに赴くと、そこには既にクギが待っていた。狐耳をパタパタと動かし、尻尾をフリフリしてのお出迎えである。狐耳も尻尾もツヤッツヤである。毛並みの良さが当社比五割増である。

「元気いっぱいだな」

「はい。我が君からたくさん元気を頂きましたから」

そう言ってクギが自分のお腹の辺りを撫で、にっこりととても良い笑顔を浮かべる。その仕草の意味と本当に元気を吸われたのではないかという懸念で俺の胸がドキドキしてくるな。もしかしてなんだけど、クギさん命中しないようにするお薬とか飲むのやめておら

れる？　いや、それはそれで良いのだけれども。俺はクギをはじめとして皆の選択を尊重するし、そうなったら腹を括るだけだ。やることをやっているのだから責任は取るさ。

などと考えていると、クギが俺にそっと近寄り、耳元で囁いた。

「まだ、大丈夫ですよ」

「そ、そっかぁ……」

なんだろう、昨日からクギに滅茶苦茶に振り回されている気がする。これは主というか、キャプテンとしての沽券に関わるのではないか……？　い、いや。これくらいなんでもないな。うん、なんでもない。とにかく振り回されて情緒が滅茶苦茶になってしまったので、心を落ち着かせよう。

#５０３　「まだ、大丈夫ですよ」（後書き）

おとなしそうに見えて情緒を滅茶苦茶にしてくるの好き（　，ω，）（唐突性癖開示

#５０４　「痛くなければ覚えませぬ」

用意を終えた俺達は聖堂へと向かった。今回はお留守番なし、全員での出陣だ。出陣と言っても別に戦いに行くわけではないけども。

「お待ちしておりました。歓迎いたします」

「すっげぇ憮然とした表情じゃん……」

で、ヴェルザルス神聖帝国の聖堂の入口でコノハ――丸獣耳系サムライガール――に滅茶苦茶嫌そうな顔で出迎えられた。なんでだよ。

「嫌なら帰るけど……？」

「別にそういうのではないです……フウシン殿が皆様をお待ちしておりますので、どうぞ」

そう言ってコノハが踵を返し、しずしずと俺達を先導し始める。彼女から伝わってくる精神波はごく僅かで、感情の機微を読み取ることは難しい。恐らくだが、そういったものを漏らさないような訓練を積んでいるのだろう。

それにしても解せぬ。どうしてコノハはこんなに塩対応なのか。俺達に対してというか、特に俺に対して塩対応っぽいんだよな。何か彼女に嫌われるようなことをした覚えは無いのだが。

「どうしてこんなに塩対応なんだと思う？」

「さぁ……？　潔癖な質なんじゃない？」

「沢山女を侍らしてサイテー！　とか思われてるやつやな」

「申開きのしようもねぇ……」

手当たり次第ってわけじゃないし、誰だって良いってわけでもないんだと反論したい気持ちも無くもないのだが、客観的に見てそういう関係にある女性の数が多いというのは事実でしかないし、なんなら昨日から今朝にかけて全員とくんずほぐれつしていたという事実がある――もっとも、殆ど覚えていないが――ので、そういう理由で隔意を持たれているということであれば言った通りに申開きのしようもない。

皆で靴を脱ぎ、昨日案内された奥の部屋へと移動する。

「おお、お待ちしておりましたぞ。本日もお元気そうで何よりですな」

「そりゃどうも。誘われるままに来てはみたものの、俺達の相手でそちらの手を煩わせるのも心苦しいんだが」

「いえいえ、その点はお気になさらず。これも我々の務めですからな。大いに楽しんでいって頂きたい」

にんまりと好々爺めいた笑みを浮かべ、フウシンはそう言った。

☆★☆

「それで、貴方は護衛官の訓練見学を志望したんですか」

「目下ヴェルザルス神聖帝国に関連する事柄で俺と密接な関係があるのって法力関係だしなぁ……それはそうなるだろ？」

「そうですか……」

俺を訓練場へと案内するコノハから今にも溜息が漏れ出てきそうだ。どうして俺にはそんなに塩対応なのよ、君は。

まぁ、ちょうど良いから聞いてみるか。幸い、コノハと一緒に訓練場に向かうのは俺だけで、他には同行者もいないし。

「回りくどいのは苦手だから単刀直入に聞くが、俺は何か君のお気に召さないことをしたかな？」
「……いいえ」
「絶対嘘じゃん……」

あの間は絶対に何かあるやつじゃん。と言っても、何も心当たりが無いんだが。うーん？　やはりエルマが言っていたように潔癖な質なんだろうか？

「俺が沢山の女性と仲良くしているのが気に入らないとかそういう……？」
「……それも関係なくはないですね。はぁ」

彼女は溜息を吐き、ちらりとこちらを振り返った。

「巫女様というものがありながら、どうして貴方は他の女性にうつつを抜かしているんですか」
「えっ？　どうしてって言われても困るが……クギが来た時にはもう五人の女性がいたわけだし、クギが来たからって皆を蔑ろにする方がクズの所業じゃない……？」

ショーコ先生とネーヴェがクルーとして俺の船に乗ったのはクギが来てからの話だが、ショーコ先生は個人的な事情だけでなく船に船医がいてくれると心強いという思惑もあったし、ネーヴェに至っては俺が保護しないと野垂れ死ぬのがほぼ確定みたいな状態だった。いや、そこまではいかなかったかな？　政治的に使えるかもしれないと考えた貴族が拾った可能性はあるか。

「そ、それは……」

「君の価値観からするとクギ以外の女の子にも手を出している俺はとんでもないスケコマシ野郎なのかもしれない。それはまぁそう、否定はしない。ただ、俺は全員と真面目にお付き合いしてるし、ちゃんと向き合っているつもりだぞ。無論、誰にも寂しい思いをさせず完璧に振る舞えているとは思ってないけど、少なくともそうなるように努力はしているつもりだ。俺一人が頑張ってるわけじゃなく、皆で支え合っているんだけどな」

寧ろ、俺が皆に支えられている面の方が多いと思う。俺をシェアするローテーションとかに関しては全部丸投げだしな。主にメイがその辺りを差配しているんだと思う。その差配に従って俺をちやほやしてくれる皆には頭が上がらんね。

「とはいえ、俺の考えを押し付けても仕方がない話だよな。とにかく、君が俺のことを気に入らない理由はわかった。機会があったらクギと話してみてくれないか？　彼女にも同郷人にしか話せない悩みとかあるかもしれないし。俺に対する不満とかが聞き出せたら教えてくれると有り難い」

「……考えておきます」

俺の言葉が少しは響いたのか、コノハの塩対応が少しだけ緩和した気がする。やはりコミュニケーションというのは大事だよな。

☆★☆

「よし、戦りましょう」

コノハに案内されて訓練場に辿り着くなり満面の笑みを浮かべたランシンにそう言われた。もしかして頭の中身にまで筋肉とか詰まってらっしゃる？

「いや、俺は訓練を見学しに来たんだが……それもチャンバラとかじゃなく、法力の」
「それは少し難しいのですよ、ヒロ殿」
「どうして」
「我々が法力も併用して戦うにはこのコロニーは脆過ぎますからな。設備が整っていれば話は別なのですが」
「設備ねぇ……それはどんなものなんだ？」

自分の扱う第一法力――念動力系のサイオニックパワーの威力を知っているだけに、その威力を持つ攻撃を振るっても問題なくなる設備というものに興味が湧いた。

「一種の精神空間で肉体の損傷や周りへの被害などを気にせず訓練することができる専用の設備がありましてな。残念ながら、そういった高度な法力設備は本国にしか配備されていないのです」

そう言ってランシンがいかにも残念だといった様子で溜息を吐く。つまり、何も気にせずに全力で殺し合い同然の訓練ができる設備……ッテコト！？　こいつら、思っていた以上に脳筋なのでは？

「もう少しこう、なんというか、穏便な訓練は無いのか……？　クギにはお部屋でできるかんたん念動力訓練みたいなのを習ってたんだが」
「お恥ずかしい話ですが、某はそういった地道な訓練が苦手でして」
「ランシン隊長は第一法力の中でも自己強化系の法力が得意な方なんです。逆に放出系の法力は……」

頭を掻くランシンの横でモエギが苦笑いを浮かべる。なるほど、自己強化系。

「具体的には自己強化系の第一法力ってどういうものなんだ？」
「某が得意とするのは身体能力や自己治癒能力の向上、自身や得物の耐久力強化です」
「ピンとこねぇ……グラッカン帝国の貴族と比べるとどんな感じなんだ？」
「ああ、前に模擬剣を使った立ち会いをしたことがあります。反応は良かったですが、力と速度は今ひとつでしたな。あと脆すぎます」
「おーけー、なんとなくわかった」

恐らくだが、帝国貴族を子供扱いできるレベルの身体強化だな。もしかしたらメイと同等か、それ以上の身体能力を発揮するのかもしれん。いや、コロニーを脆いと言い放ってる辺り、それ以上かもしれないな。単純なフィジカルでコロニーを壊しかねないとか、タイタン級の巨大戦闘ボット並みか、それ以上か？　恐ろしいな。

「まぁ……やってみるか？　模擬戦。言っておくが、俺の身体能力は少し鍛えた一般人レベルだからな？　模擬剣でぶん殴られたら簡単に骨折して血反吐を吐くからな？」
「ははは、それならば某が自己強化系の法力の使い方を伝授いたしましょう。実地で」
「それ、痛くないやつ？」
「痛くなければ覚えませぬ」
「おい誰かこいつを止めろ！」

俺に模擬剣――いや、模擬刀を投げ渡したランシンが良い笑顔で間合いを詰めてくる。助けて！

#５０５　「え？　なんですか？　その冒涜的な作物は……」

ランシンは強かった。天然物のフィジカル強者であった。その上、自身の身体能力や耐久力を第一法力で強化し、更にそれを制御する戦闘センスにも長けていた。

「メ、メイを相手にするよりもキツい……」

俺の限界を測るように徐々にスピードとパワーを上げていくランシン相手に十分か十五分かわからんがそこそこに粘った末、俺は修練場の床に汗だくで転がることになった。

「ランシン隊長を相手にあれだけの時間攻撃を凌げるだけで大したものだと思いますよ」

そんな俺の傍に屈み込み、コノハが汗だくになった俺の顔やら額やらをタオルのようなものでゴシゴシしてくれている。もうね、指一本も動かしくたくない。

「帝国の貴族などよりも余程歯応えがありましたな。強化していなければ手指が何度も砕かれておりました。某も修行のし直しが必要です」

そう言いつつも、ランシンは汗一つかかずピンピンしている。俺の得物がグラッカン帝国の貴族達が使う単分子の刃を持つ剣だったら、ランシンの手指はとっくにそこらに転がっていただろう。しかし今回の得物は模擬刀だったので、ちょっと痛いくらいで済んだようだ。

「勝ったと思うなよ……」
「もう勝負は着いておりますな。とはいえ、ヒロ殿が法力の使用を制限していたのも、本来の得物でなかったのも事実。実戦でどうなるかはやってみなければわからぬでしょう」
「それはそうだが、あんたと本気で殺し合いは絶対に嫌だ」

正直、勝てるビジョンが見えん。本気じゃないのはあっちも一緒だろうしな。ランシンが全力で身体強化をしたら一体どれくらい強くなるのか想像もつかん。

「それはこちらも同じこと。ヒロ殿とそのようなことになることが絶対にないよう、本国に意見を送らせて頂く」
「そうかい？　それは嬉しいね」

まぁ、実際のところ絶対に殺し合いなんてしたくない相手だが、絶対に殺せない相手だとは思ってはいない。殺すだけなら真正面から正々堂々とやる必要はないし。

あと、イクサーマル伯爵の私兵とやり合った時にどうも第一法力の使い方に開眼したようで、あれからいくつか切り札めいたモノを習得したりもしている。無論、切り札というのはいざという時に使う必殺技――本来の意味で『必ず殺す技』――なので、みだりに使ったりはしないのだが。

「さて、ではヒロ殿の実力もある程度測ることができたところで、訓練と参ろう」
「本気で言ってる？」
「無論。さぁ、起き上がられよ」

誰だよ、このクソ脳筋鬼野郎がいる修練場に見学に行こうとか言

い出したのは！
俺だわ。まぁ少しは体力も戻ってきたから素直に立ち上がるが。コノハも俺の汗をゴシゴシするのやめたし。
「結構。とはいえ、某は所謂理論的に法力の使い方というものを教えるのが苦手でして」
「そうだろうな」
いきなりぶつかり稽古を始める辺り、さもありなんといった感じである。
「なので、某が身体強化や耐久力強化をするのを目で見て盗んで頂く」
「なるほど……？」
目で見てわかるものなのか？　それは。
「実際に目で見て、その効果を実感することによって習得が促進される……こともあるのです」
「なんと微妙な……なんかアレだな。思ったよりも原始的というか、理論だっていないというか」
「結局のところ精神力と想像力がものをいう力ですからな、法力というのは。無論、個人の資質によって習得できる能力は左右されますし、その強さもその者が内包するポテンシャル次第。内包するポテンシャルの高さという意味ではヒロ殿の右に出るものは銀河中を探してもそうおりませぬ」
「つまり、気合と根性でなんとかしろと」
「左様で。それでは、まずは身体強化から」
そう言ってランシンは全身に力を漲らせ始めた。

☆★☆

「あ、ヒロ様！　見てください！　これはおにぎ……どうしたんですか？」

悪夢のような訓練を終え、ミミ達がいるという食堂に顔を出すとそこにはミミだけでなくエルマも一緒にいた。ミミが不格好な形の握り飯を手にしているのだが、あれはミミが握ったのだろうか？

「いや、訓練を見学しに行ったら訓練に参加することになって色々な……」

ちなみに、ランシンが得意とする身体強化も耐久強化も俺は習得することが出来なかった。力を漲らせるランシンを見たり、耐久強化を発動しランシンを模擬刀や手足でぶん殴ったりしてその効果を確かめたりしたのだが、ついぞ同じことができるようにはならなかったのだ。

身体強化といえば帝国貴族が手術を受けて実現するもの、攻撃されてもダメージを受けないと言えばシールド、みたいな固定観念がいけないのかもしれないとランシンとコノハは言っていたが、そうだとすると俺が身体強化や耐久強化のサイオニック能力を習得するのは難しそうだ。

「それで、おにぎりか。米を炊いたのか？」

「あ、いえ。加熱器で温めるだけで食べられるおいしいごはん？というやつらしいです」

「ふーん？　まぁそういうのがあってもおかしくはないか」

ミミが手に持っていたおにぎりを差し出してきたので、海苔が巻

かれていないそれを受け取って口に運ぶ。うん、おにぎりだ。塩おにぎりだ。サ◯ウのご飯的なレトルトご飯なんだろうが、炊きたてみたいに美味しいな。正直、テツジンが作るごはんもどきよりも遥かに美味い。

「うん、美味しい。ミミもこれで立派なおにぎりマスターだな」
「まだまだです、モエギさんみたいにきれいな形にするのは難しくて……手にいっぱいついちゃいましたし」

そういうミミの手にはご飯粒が沢山くっついている。確かにおにぎりって上手に握ろうとすると結構難しいんだよなぁ。俺は手がベタベタになったりするのが嫌なのでラップで握る派だ。モエギは素手で上手に握っているようだけど。

「で、エルマは飲んだくれてるのか。お前、ＴＰＯとか弁えようぜ……」
「酔っ払うほど飲んでないわよ。味見よ、味見。ヴェルザルス神聖帝国で栽培してるお米から醸造されたお酒だって」

そう言ってエルマが徳利とお猪口でチビチビと清酒っぽいものを飲んでいるのだが、既に顔が少し赤い。清酒って結構アルコール度数高いらしいからな。普段エルマが飲んでいるビールやワイン類に比べると倍くらいあるんじゃないか？

「おかわりはやめとけよ？」
「わかってるわよ」

唇を尖らせながら俺から徳利を守るかのように抱え込むエルマ。本当に好きだね、お酒。俺も炭酸飲料、特にコーラは大好きだから気持ちは少しだけわからんでもないけど。

「それにしても醸造ね。ヴェルザルス神聖帝国ではお酒が絞れる米とかは作ってないのか？」
「え？　なんですか？　その冒涜的な作物は……」
「グラッカン帝国では作ってるぞ。ワインが直接絞れるブドウっぽい果物」
「さ、流石は生物工学に強い国ですね……うちにはありませんよ、そういうのは」

俺の話を聞いたモエギが苦笑いを浮かべている。なるほど、ヴェルザルス神聖帝国にはそういう作物はないのか。結構そういうところにお国柄ってのが出るものなのかね？

「ところでその大量に作っているおにぎりはどうするんだ？」
「これは今日の聖堂の晩ごはんですね。提供する前に少し温めて他のお料理と一緒に出すんですよ」
「なるほど」

食堂の奥、厨房ではモエギ以外にも何人かが食事の用意をしているようだ。そういえばそろそろ夕飯時だな。

「ティーナ達は？」
「ティーナとウィスカ、それにドクターとネーヴェは聖堂の奥にあるサイオニックテクノロジーを見に行ったまま帰ってきてないわよ。そろそろ戻ってくるんじゃない？」
「なるほど。で、クギはフウシン殿と話し合い中か。随分と長話だな」

俺が修練場で訓練をしていた時間は結構長い。昼過ぎくらいにブラックロータスを出て、もうそろそろ夕飯時という時間だ。そんな

に長く話し合うような案件が何かあったのだろうか？

「あ、ヒロ殿。皆様もお夕飯、食べていかれますよね？　というか、既にそのつもりでご飯を用意しているのですけど」
「そりゃ有り難いが……うーん、じゃあご馳走になっていくか。ありがとう」
「いえいえ」

俺の返事にモエギがにっこりと良い笑みを浮かべる。既に用意されているのに断るというのもないし、向こうからの申し出に「良いのか？」と聞くのもちょっとな。ここは素直に感謝しておこう。

「こちらにおいででしたか、我が君」
「おお、クギも来たのか。随分と長話だったみたいだな」
「はい。フウシン様の指導を受けながら我が君と出会ってから今までの報告書をしたためていましたので。モエギ様、此の身もお手伝い致します」
「はい、歓迎致します」

クギも調理を手伝うらしい。ふーむ、俺も何か手伝おうかな？
ただボケーっと見てるだけってのもアレだし。食材が乏しくて料理が難しいって言ってたけど、少しくらいは何か無いもんかね？

#506　「……なんだか負けた気分なんですが」

残念ながら、厨房には食材らしい食材は殆ど存在していなかった。聖堂に備蓄されていた食料というのは基本的にほぼ全てがヴェルザルス神聖帝国産のレトルト系食品であったからだ。それも封を切って加熱器で温めるだけでいいタイプの。一応、鍋に移してから加熱する味噌汁というか豚汁っぽいものがあったが、これもフリーズドライになった各種の具やら何やらを水で戻しつつ温めるだけのもので、調理に使うのは難しそうだった。

いや、一部の具だけを抜いて使うことは出来そうだったが、その一部の具を失った汁物をどう処分するのか？　という話だな。残りは廃棄、みたいなことは流石にちょっと気が咎める。もったいないお化けが出てくるよ。

「お、意外といけるやん。兄さん、これ美味しいわ」
「むむ……雑なのに結構美味しいですね」

俺が作った焼き飯もどきを食べたティーナとコノハが俺に感想を伝えてくれる。コノハの「雑」という評価も仕方なしの出来ではあるが、自分としては結構頑張ったと思う。

前述のように、厨房にはまともな食材などほぼ存在しなかった。だが、よく探すとグラッカン帝国のレーションにも入っているあの塩辛いソーセージが入ったパッケージと香辛料の類、そしてヴェルザルス神聖帝国産の醤油のようなものだけは見つかった。そして厨房の設備だけはまともなものだったし、大きめのフライパンやら何やらの調理器具もあった。

そこで細かく刻んだソーセージ（のような何か）を原料不明の食用油で炒め、そこにパックのご飯を投入して炒めてから醤油のよう

なソースを少々回しかけ、醤油が香ばしく焼けた辺りでパパッと香辛料を適量ふりかけて焼き飯もどきをでっち上げたのだ。
雑な男飯だが、油と香辛料が良かったのか、我ながら結構上手く出来たと思う。

「本当に、無駄に変なスキル身に付けてるわよね……あー、お酒が進む味だわ」
「うーむ、美味い。即席飯も悪くはないが、久々にちゃんとした料理を食べている気がする」

エルマとランシンが焼き飯をつつきながら酒をチビチビと飲んでいる。飲み屋街のラーメン屋でチャーハンを肴にビールを飲むおじさんか何かかな？

「ヒロ様の作ったお料理、人気ですね」
「こっちのご飯は美味しいけど万人向けの上品な味だからな。ああいう雑でジャンクな感じの味付けのものをたまに食うと美味しく感じるんだと思うぞ」

俺はと言うと、俺が大量に作った焼き飯を食べるうちのクルーや神殿の面々を眺めながらミミやクギ、モエギ達が作ってくれた本来の聖堂のご飯を頂いている。メニューは豚汁のような具沢山の汁物と、だし巻き卵のようなものだ。このだし巻き卵もフリーズドライ系レトルトらしい。一体どうやっているのかわからんが、凄い技術だ。

「……なんだか負けた気分なんですが」
「我が君のなさることなので」

モエギがチベットスナギツネみたいな顔をしながらもそもそとお

にぎりを口に運んでいる。ちなみに、彼女もしっかり小皿にさらっと一杯分、俺の焼き飯を試食していた。
　ところでクギさんや。それはフォローになっていなくないか？
別に良いけどさ。しかしまぁ、塩おにぎりも嫌いじゃないが、やっぱり冷めると今一つだな。海苔があれば少しはマシだと思うんだが、海苔はいままでこっちで見たことがないんだよな……となると、アレが良いか。

「焼きおにぎりにしてみるとか、おにぎりのバリエーションを増やしたらどうだ？」
「やきおにぎり……？」
「あれ？　知らない……？」

　どうにもこの世界の飲食物関係は虫食いになっているというか、どこか宇宙進出の過程でロストしたようなところがあるんだよな。食い物は割と豊かでバリエーションも多いのに、これがあって何故それが無い？　みたいなものが結構ある。恐らく宇宙に進出した際に気圧の関係で破裂などを起こしやすいだとか、熱や煙が生命維持システムに負担を与えるだとか、そういう関係で宇宙空間に長らく持ち込まれなかったものや調理という文化自体が衰退したか、喪失したかしたんじゃないかとは思うが……食品史的なものを研究している研究家とかいないのかね？

☆★☆

　モエギに焼きおにぎりの作り方をレクチャーし、今日のところは御暇することにした。あとでフウシンに差し入れてみるそうだ。そういえば食事の場にフウシンが居なかったが、一応聖堂の長ということもあって一緒に食事を摂ると周りを萎縮させてしまうということで気を遣って、基本的に執務室で独りで飯を食っているらしい。

それはそれで少し寂しそうなんだが……まぁ、彼らはいざとなればテレパシーですぐ繋がることができるんだろうから、そうでもないのかね？

「それで、サイオニックテクノロジーの端緒は掴めそうだったのか？」

「いや全然駄目だねぇ。基礎の基礎からちゃんと学ばないとどうにもならなそうだよ」

「本当に技術体系が全く違い過ぎて、どうにもならない感じです」

『1＋1が気分次第で5とか8とかになるって言われるともうお手上げだねぇ』

「気分ってなんやねんって真顔になったわ」

「さようか……まぁ懲りずに頑張ってくれ」

それがクリシュナの強化に繋がったら儲けものだしな。或いはヴェルザルス神聖帝国の船と戦う時のヒント――いや、流石にそれは無いか。ヴェルザルス神聖帝国とやり合うようなことにはならないだろうし、なったら詰むからな。そうならないように立ち回るつもりだ。もしそうなったら「爆発して星系ごと吹っ飛ばすぞ！」みたいな脅しをかけて逃げる他ない。それですら成功率が低そうだが。

「明日はどうするかね……あまり連日お邪魔するのも、文字通りあちらさんのお邪魔になりそうだから控えたいんだが。出発の用意はできているよな？」

「はい、ばっちりですよ！」

ミミがそう言って良い笑顔でサムズアップする。俺自身は用意を特に何もしていないのだが、別に何か特別必要なものがあるわけでもなし。俺が使う日用品のストックに関してはメイが管理してくれているので、抜かりはあるまい。

俺もどうかとは思っているんだぞ？　そんなことをメイに任せっきりにしてしまうのは。しかし主にお使えするメイドロイドとしてこれだけは譲れないと言い張って聞かないので、仕方なくメイに任せているんだ。まぁ、本気で俺が拒否すればきっとメイも引き下がるんだろうが、そこまでして拘るほどのことでもないからな……こうしてヒトはメイドロイドというか機械知性に堕落させられていくんだろうか。

「それじゃあ明日は船でゆっくりしようか」
「えー？　もう少しサイオニックテクノロジーについて調べたいんやけど」
「こっちで中途半端に学ぶよりも、ヴェルザルス神聖帝国に行ってちゃんと基礎から学んだほうが良いだろ……」
「お姉ちゃん、私もお兄さんの言葉に賛成だよ。興味深いのは確かだけど、今の私達じゃ理解の端っこにすら手が届かないよ」
「んむー……しゃあないか」

ウィスカが俺の言葉を支持し、それによってティーナが折れてくれた。ショーコ先生に目を向けると、彼女も頷いている。どうやらショーコ先生も俺の意見に賛成であるらしい。

「ネーヴェの治療も進めないといけないからねぇ。もうじきにポッドから出られるはずだよ」
『それは初耳だね。どれくらいでかな？　明後日とか？』
「流石にそんなに早くは無理だねぇ。まぁ、一週間くらいは見てほしいかな？」
「それでも一週間なのか」

帝都で大枚を叩いて買い集めた素材とやらが役に立ったのかね？
まぁ、ネーヴェがポッドから出て、自分の足で自由に歩けるよう

になるのは喜ばしいことだ。ショーコ先生には是非その調子で頑張って頂きたいね。

#507　「激ヤバですな」（前書き）

え？　前回のタイトルの数字が間違っていた？　知りませんね（ ˘ω˘ ）（こっそり

#507　「激ヤバですな」

それからの数日は実に穏やかな日々であった。ヴェルザルス神聖帝国の聖堂とゆるく「今日は船で休むね！　明日まだ迎えが来ないようなら遊びに行ってもいいかな？」といった旨の連絡などをゆるくやり取りしてのんびりと……え？　もっとこう、血湧き肉躍るバトルとか、宙賊を蹂躙してヒャッハーとか無いのかって？

言いたいことはわからんでもないがな、このニーパック星系というのはセキュリティレベルが最高の星系なんだ。つまり、宙賊なんぞは入って来た瞬間過密スケジュールで星系中を巡回しているゲートウェイ防衛部隊に発見されて即座に殲滅されているし、傭兵としての仕事なんてのもほぼ交易船の護衛依頼オンリーなんだよ。つまり、ヴェルザルス神聖帝国からの迎えを待っている俺達が受けられる依頼は無い。

一切無いってわけでもないが、怪しげな失せ人探しだの、盗まれた積み荷探しだの、密航ブローカーを探し出して始末しろだのといった面倒で危険もありそうな割に報酬が２０００エネルだのなんだのっていう端金しか入らない仕事なんてやりたくない。それですら解決前にヴェルザルス神聖帝国帝国からの迎えが来たら途中放棄って形になって何も良いことが無いし。

「随分と……豪華では？」

「わぁ……贅沢な空間の使い方ですね」

「おお、これは開放感がありますなぁ」

というわけで、本日のゲストはこちらの御三方。ブラックロータースを初めて訪れた人々がするテンプレート的な反応を返してくださっているコノハとモエギ、それにフウシンの三人である。

え？　そこはランシンじゃないのかって？　聖堂護衛官が三人とも聖堂を離れるのは不用心。さりとて男の俺の船に女性二人で向かうのは外聞を考えるとよろしくない。それじゃあ護衛官の二人を供として聖堂長のフウシンが、という話になったわけだ。

「ようこそ。まぁ好きに見て回ってくれ痛い！」

「おもてなしくらいちゃんとしなさい」

適当な歓迎をしたらエルマに脇腹をキュッと抓られた。とても痛い。

「イエスマム……しかしそう言われてもな。まずは駆けつけ一杯？痛い！」

「真面目にやりなさい」

「だからそう言われても歓迎方法が思いつかないんだよ……機関部やコックピットに案内はできないし、私室に招き入れるってのも違うだろう。メディカルベイに用事はないだろうし。ああ、希望するならクリシュナがあるハンガーに案内しても良いけど」

そう提案すると、意外なことにフウシンがハンガーの見学を希望した。

「ほっほっほ、実は恥ずかしながら戦闘艦鑑賞が趣味でしてな。ヒロ殿のドキュメンタリーも全て見ております」

「さ、左様ですか……俺自身は小っ恥ずかしくて見てられないんですがね、あのドキュメンタリー」

好々爺めいた笑みを浮かべながらしっかりとした足取りで俺の後ろをついてくるフウシン殿にそう言いながら彼をハンガーへと案内する。

あのドキュメンタリーなぁ……編集の妙とでも言えば良いのか。なんか俺がストイックで意識の高いヒーローみたいな感じに見えるようになってるんだよ。もう見てて小っ恥ずかしいのなんのって……一度ミミに誘われて一時間ほど鑑賞したんだが、耐えられずに逃げ出すことになった。

「ヒロ殿は高潔な心をお持ちですな。私も見習いたいところです」
「全然そういうのじゃないから……本当に。ああ、着きましたよ」

どうしてこんなにヨイショしてくるんだ、この人……明らかに俺より年上で貫禄もあれば人徳もありそうな人にそんなにヨイショされても居心地が悪いだけだよ。勘弁してくれんか。

「おー、兄さん……と、フウシンさん、やったっけ？」
「フウシン殿、だよお姉ちゃん。すみません、姉が失礼な口をきいて」
「ごめんなさい」
「いえいえ、私も堅苦しいのは苦手でしてな。聖堂から出ればただの爺ですから、さん付けで十分ですとも。それよりも興味本位でお仕事場にお邪魔して、こちらこそ申し訳なく思います」

整備士姉妹と和やかにコミュニケーションを取っているフウシンを横目に見ながら、小型情報端末を操作してクリシュナのタラップを開放する。

「なんと、中を案内して下さるので？　見てはいけないものなどもあるのでは？」
「居住空間の共有スペースとかコックピットくらいまでなら大丈夫ですよ」

ブラックロータスのコックピットはセキュリティ上見せるわけには行かないが、クリシュナのコックピットは市場にも流通しているコックピットブロックだからな。特に見られても問題はない。居住空間も同じく市場に流通しているモデルだし。流石にミミやエルマの私室とか、白兵戦用の武器が置いてあるカーゴブロックとかは見せられないけども。

「ほう……おお……確かにこれはドキュメンタリーで見た……」

フウシン殿のようなおじいちゃんが感動して言葉を失っている絵面ってのはなんか新鮮だな……映画やドラマで見たそのまんまのロケ地とかに聖地巡礼したような感覚なんだろうか。

「それにこのコックピットは……」

と、何かを言いかけたフウシン殿が急に固まった。いや、固まったのは一瞬だけだ。何を思ったのか、急にコックピットの床に這いつくばって無言になった。いや、何してんだこの爺さん。

「急に気分でも悪くなったか……？　簡易医療ポッドに運ぼうか？」

思わず丁寧な言葉遣いを忘れて素が出てしまう。

「いえ、そういうのではなく……すみませんが、もう少し……」

這いつくばるフウシン殿の横にしゃがんで彼の顔色を確認してみると、特に体調を崩しているような感じでは……ああいや、なんだか急に顔から血の気が引いて、ダラダラと脂汗を流し始めているような。やはり体調不良なのでは？

「なんということだ……これは、まさか、いや、間違いない……だが、いや、そういえば報告で……」

冷や汗を顔中に浮かべたフウシン殿が横にしゃがみこんでいる俺にゆっくりと顔を向けてくる。なんか首の辺りからギギギ……と金属音でも鳴りそうな感じだな。

「あの、ヒロ殿。巫女のセイジョウ殿はこの船について何か言っておりませんでしたかな？」

「え？　いや、特に何か言っていた記憶はないけど……何か問題が？」

クギとは何度もクリシュナで一緒に出撃しているが、今のフウシンのように動揺しているような様子を見せたことは一度もなかったように思う。

「この船は……この船は、此の世のものではありません」

「えっ？　いや、まぁそれはそう」

俺がこの世界に落ちてきた時に生成されたか何かしたものなのだろうから、言った通りそれはそうだろう。ＳＯＬ（ステラオンライン）の突発イベントで手に入れたユニークシップだし。ゲームの中の架空の船が実体化したプロセスは全く不明だけど。この動揺の仕方を見るに、尋常なモノではないとフウシン殿は判断しているようだな。

「もしかして、この船ってサイオニック的な観点から見ると、かなりヤバい代物だったりする？」

「ヤバいかヤバくないかで言うとだいぶヤバいですな。激ヤバですな」

フウシン殿が真顔でそう言う。好々爺めいたじいちゃんが激ヤバとか言うのちょっと面白いな。意外とノリが良い。

「どういう感じでヤバいのか一つご教授願えるかな？」

「そうですな、この船は一種の聖遺物、宝具と申しますか……ヒロ殿の力を増幅し、事を為すための焦点具……いや、もっと簡単に言えば、ヒロ殿専用の超兵器と表現するのが一番簡単でしょうな」

「超兵器……？　いや、クリシュナはそんなトンデモ兵器じゃないが……？」

クリシュナのスペックは俺の頭の中に完全に入っている。武装も、シールド容量も、ジェネレーター出力も、各部のスラスター出力も何もかもだ。確かに一般的な小型戦闘艦と比べれば怪物と表現しても良いようなスペックを誇っているのは確かだが、例えばセレナ大佐の乗艦であるグラッカン帝国の最新戦艦、レスタリアスと正面から殴り合えば一瞬で消し炭になる程度のものだぞ。

「それはヒロ殿がこの船、クリシュナを『そういうもの』と定義しているからです。自ら枷を付けているようなものです。今までこの船に乗っていて不思議なことが起きたりはしませんでしたかな？突然空間を飛び越えたり、想定以上の出力の攻撃を放ったり」

「いや、そういうのは無い……あ」

あった。一度だけだが、あった。直撃コースのレーザー砲撃を捻じ曲げて無効化していたことが一度だけあった。あれはいつだったか……そう、帝国のエルフの本拠地であるリーフィル星系を脅かしていた宙賊の基地をセレナ大佐と一緒に襲撃した時のことだ。

確か宙賊基地からの猛烈な迎撃レーザー砲火に晒されて、クリシュナのブラックボックスに隠されていた偏向シールドシステムが起動したんじゃないかって話に落ち着いたはず。結局、ティーナもウ

ィスカもそういったものは見つけられなかったんだが。
「一度だけだが、あったな。ということは、俺の想像力というか、定義次第ではクリシュナはもっと化ける可能性があるということか？」
「正直、この私も戦闘艦の形をした落ち人の聖遺物などを目にするのは初めてなので……本国にも記録があるかどうか……」
フウシン殿が眉間に深い皺を刻んで唸る。
「ヴェルザルス神聖帝国ならクリシュナのことを調べられるのだろうか」
「恐らくは。落ち人の聖遺物、もしくは宝具と呼ばれるモノを研究している部署がありますし、こういった船もサイオニックテクノロジーの一種として分析は可能だと思います。大騒ぎになりそうですが」
「それはどれくらいの大騒ぎに？　というか、どうしてそんなにこの船がヤバいのかがまだピンと来ないんだが」
確かにレーザーを捻じ曲げて逸らすのは滅茶苦茶に強いと思う。戦闘艦のメイン武装をほぼ無効化するってことだからな。それに、フウシン殿が言っていたように空間を突然飛び越えたり、常識では考えられないような出力の砲撃を放てるとなれば、クリシュナの戦闘力は飛躍的に向上することになるだろう。だが、その程度でランシン殿が激ヤバなどと言うとも思えない。
「想像もつきませんな。ヒロ殿が秘めているポテンシャルを十全に扱うだけの性能を有していた場合……もしかしたらですが、一隻で正規軍の艦隊を軽く一蹴するようなことも可能かもしれません」
「……弾幕シューティングゲームの主人公機かな？」

たった一隻で無数の敵を撃破したり、敵中枢に乗り込んで撃滅したりするのは、それはもうスペースコンバットシミュレーターというより弾幕シューティングゲームとか無双ゲーとかそういうジャンルなんよ。

あー、でも、まぁ、オンライン要素の無いソロゲーならあるあるではあるかな？　リボン付きとか円卓の鬼神とかああいう感じの。あれはスペースコンバットシムじゃなくてフライトシューティングだけど。

「ちなみにだけど、俺がクリシュナに乗った状態で例の爆発を起こした場合、更なる大惨事になったりしない？」

「……医療ポッドをお借りしてもよろしいですかな？」

フウシンは胃の辺りを押さえながらそう言った。はい、みなまで言うなってことですね。わかります。

#508　「うちゅうのほうそくがみだれる」（前書き）

そろそろ原稿期間なのでお休みをもらうよ！　ゆるしてね！（‘ω’）（明後日の更新で一回お休みに入ります

#508　「うちゅうのほうそくがみだれる」

「あー、はいはい。兄さんがそうしろと念じれば偏向シールドシステムも追加のスラスターも大口径レーザー砲も生えてくるってことな。なるほど、完全に理解したわ」

俺と胃の辺りを押さえたままのフウシンからクリシュナ超兵器説を聞いたティーナは神妙な顔でそう言って頷き、それからすぐに真顔になった。

「いくらなんでも与太やろ、それは。ブラックボックス周りはどうにもでけへんって言うても、うちらがどんだけクリシュナを弄ってると思ってんねん。未知の部分はあってもクリシュナは戦闘艦やぞ？　機械やぞ？　そんなポンポン機能が生えてくるわけあるかい」

「いやまぁそれはそう。信じられないよな。正直俺も半信半疑だ」

ティーナの真顔のコメントに俺も思わず頷いて同意した。

わからんでもないよ？　こう、ありがちだよな。異世界から現れた勇者が強力な聖剣を携えて現れる、みたいな話は。元の世界での娯楽小説の類にもよくある描写だし、なんならこっちの世界の娯楽系コンテンツにも似たような内容のものは山ほどある。不思議だよな。全く別の世界のはずなのに、そういったコンテンツにはある程度の類似性があるってのは。

まぁ、今はその辺りの話は横においておこう。問題は、その聖剣にあたるものが俺の場合小型戦闘艦であるクリシュナだということだ。確かに物語では聖剣の秘められた力が何かの切っ掛けを得て解放され、見た目もチェンジ！　みたいな展開もある。よくある。だが、クリシュナは戦闘艦だ。テクノロジーと精密機器の塊だ。そん

なおとぎ話の聖剣みたいにポンポン秘められた力が解放されたり、見た目が変わったりするわけがない。

「でも、そういうお姉ちゃんが言うような常識が邪魔をしてクリシュナの性能が制限されている、って話だよね？」

「そうですな」

ウィスカの言葉にフウシンが頷く。しかし、ティーナは納得しない。

「せやかてウィー、クリシュナはうちらの知っとる技術と明らかに互換性がある技術を多数使うとるやろ。武器だけで言うても散弾砲の弾薬然り、対艦反応弾頭魚雷然り、足回りやシールドジェネレーター周りの動力伝達回路然り。他にもそんな例は数え切れへんで？

特に消耗の大きい足回りに関してはうちらがレプリケーターで作った予備部品との交換だって何度もしとる。クリシュナが兄さんがこっちの世界に来た時に生成された聖遺物とかいう訳のわからんモンだとしたら、うちらの技術で作られた部品が適合して問題なく動作すんのはおかしいと思わん？」

俺が聞いてもそれはそう、と納得できるような地に足がついた理論をティーナは展開したが、ウィスカはその主張に小首を傾げてみせた。

「それに関しては確かにそうだけど、それはお兄さんが『そうあるべきだ』と思っているからとかなんじゃないかな。私達がクリシュナに触り始める前からお兄さんはコロニーの港湾区画が提供している整備サービスを利用してクリシュナを整備していたはずだよ。当然お兄さんはその時に『コロニーに停泊すればクリシュナはちゃんと整備サービスを受けられる』と考えていたんだろうから、クリシ

ユナがそのように『適合』したんじゃないかな？」
「んなアホな……それじゃあクリシュナにまるで意思でもあるみたいやないか」

ウィスカの斜め上にぶっ飛んだような理論展開を受け、ティーナが頬を引き攣らせながらハンガーに鎮座しているクリシュナを見上げる。

「実際近いものがあるんじゃないかなぁ。だって、そうとでも考えないと辻褄が合わないよ。恐らく、クリシュナはお兄さんと一緒にこの世界に合わせて適合を進めてきたんだよ。この世界の技術者にありとあらゆる場所を観測されて、整備されると同時にこの世界の技術に適合するように自己改変を進めてきたんだ。つまり、だよ？」
「つまり？」
「クリシュナは私やお姉ちゃんみたいなこの世界の技術者が見ても何の疑問も抱かないように今も『擬態』しているんじゃないかな。本当は、ジェネレーター周りと同じように隅々まで私達の技術体系じゃ理解できないようなブラックボックスなのかも」
「うせやろ……ウィーは頭が柔らか過ぎるわ……お姉ちゃんもうついていかれへん」

ついにティーナの心が折れてしまったのか、彼女は両手で顔を覆って俯いてしまった。

「ウィスカ、あんまりお姉ちゃんを虐めるなよ」
「虐めてないです。むしろ虐めているのはお兄さんとクリシュナだと思いますけど」

そう言ってウィスカが俺にジト目を向けてきた。そんなこと言われても、俺だってクリシュナがそんなトンデモ戦闘艦だって今の今

まで知らなかったし。

「専門家のフウシン氏としてはウィスカの推測はどう思う？」

「私も落ち人や聖遺物に関しては聞きかじった程度の知識しか持ち合わせていないので、専門家などと呼ばれるのは烏滸がましいのですが……しかし、落ち人が創り出し、携える聖遺物は落ち人の意を汲んでその形や性能をある程度は柔軟に変えると聞きます。ウィスカ殿の推測は的を射ているのではないかと」

「つまり、クリシュナは戦闘艦の形をした一種の生物なのか？」

「いえ、聖遺物は生物ではないという結論が出ていたはずですな。意思があるわけでもないと聞いた覚えがあります。ただ、主の意思に呼応する性質があると」

「ふーむ……？」

ある程度俺の意に沿って性質を変化させる特徴がある、強力な武器のようなものだというわけか。クリシュナが強力な兵器であるというのは俺を含めたクルー全員が言われるまでもなく理解していることだが。

「ただその、このサイズ、かつ航宙戦闘艦の姿の聖遺物というのは恐らく前例がないので……一体どれほどの性能を秘めているのかまではわかりませぬな。私が言えるのは、恐らく前例のないレベルの強力な聖遺物だろうということです」

そう言ってフウシンは畏怖を込めた視線をクリシュナに向け、ぶるりと身を震わせた。彼の頭の上の丸い獣耳がしきりに動いているのは、もしかしたらクリシュナが放つ威圧感のようなものを感じているのかもしれない。俺には全く何も感じられんが。

「はーい、しつもん。どうしてクリシュナが前例の無いレベルの強

力なせいいぶつ？　とかいうものだってわかるんや？」
「それは簡単なことですな。聖遺物というのは物質化したアストラル体――と言っても通じませぬか。ううむ……そうですな。つまり、物質化した高次エネルギー体なのです。物質として安定した反物質のようなものだと思って頂ければ」
「ぶっしつとしてあんていしたはんぶっしつ」
「うちゅうのほうそくがみだれる」

フウシンの説明を聞いた整備士姉妹の目からハイライトが消えて無表情になる。何故か背後に銀河とか猫の顔が見えるような気がするのは気のせいだろうか。
ちなみに、反物質というのはごく少量でなんかスゴイエネルギーを発生させるヤバい何かだ。航宙艦のジェネレーターや反応弾頭に使われている……らしい。宙間太陽光発電とかで発生させている大量のエネルギーを使って生成してるらしいよ。詳細は知らんけど。

「どれだけ稀有なものなのかは理解頂けたようで何よりですな。つまり、デカければデカいほど秘めているエネルギーも大きいということです」
「兄さん、ちょっとうちクリシュナを触るの怖くなってきたんやけど」
「危険手当とか出ません？」
「出ません。これはちょっと変わってるけどただの小型戦闘艦。メーカー不詳のユニークな小型戦闘艦。決して爪の先ほどの欠片が反応するだけで全てを吹っ飛ばすような危険な物体ではない。イイネ？」
「欺瞞！　フウシンはんがさっきから胃を押さえてる意味がわかってきたわ！」
「お兄さんに労働環境の改善を要求します！」

整備士姉妹が両手を振り上げ、ぴょんぴょんと跳ねながらやいのやいのと騒ぎ始める。

「大丈夫大丈夫！　今までも大丈夫だったから大丈夫だよ！　ヨシッ！」

「どこがヨシッ！　やねん！？　このサイズの反物質が対消滅起こしたらそれこそ星系一つ吹っ飛ぶわ！」

「んなこと言ったって今更クリシュナを使わないわけにも行かないだろ！　ブラックボックス搭載、出所不明の航宙戦闘艦って時点でハイリスクなのはわかってたじゃないか！　今更だ、今更！」

「それは……！　それはそうですけど……ッ！」

騒ぐ姉妹を落ち着かせるのに滅茶苦茶苦労したが、最終的には「あくまで例え話だから。危険はない。多分」というフウシンの言葉と、ヴェルザルス神聖帝国で危険が無いかしっかり調べてもらうということで、なんとか落ち着いてくれた。

いやはや、先が思いやられるな。

#５０９　「お前は俺をなんだと思っているんだ」（前書き）

原稿作業のため暫くお休みします！　ユルシテネ！！！　―（：３」∠）―

#509　「お前は俺をなんだと思っているんだ」

「そのような大騒ぎになっていたのですね……」

胃を痛めてしまったフウシンをメディカルベイに送り届け、食堂に戻ってきて事の顛末をクギに話すと、クギはそう言って表情を曇らせた。

「クギはクリシュナが聖遺物とやらだということに気づいていなかったのか？」

「はい、我が君。その可能性については考えていたのですが、皆様もあまりにも普通にクリシュナに接していらっしゃいましたし、此の身も普通に操作できてしまったので、やはり違うのかなと考えていました」

「……？　どういうことだ？」

「落ち人の聖遺物というものは、普通は落ち人本人にしか使えないものなので……ぶらっくぼっくす？　になっているじぇねれーたー？　そのものか、或いはじぇねれーたーの中に聖遺物があるか、それか我が君が肌身離さず持っているレーザーガンが聖遺物なのかと……」

「なるほど」

クギと出会った時にはミミとエルマが俺と一緒にクリシュナに乗っていたし、その後すぐにクギ自身もサブパイロットとしてクリシュナに搭乗している。聖遺物は持ち主本人にしか使えない、という先入観があるとクリシュナが聖遺物だと気づかない可能性はあるか。

「フウシンはんはクリシュナに乗ってすぐにクリシュナが聖遺物や

って気付いたみたいなんやけど」
「そこは此の身の知識と経験不足で……」
俺と一緒に食堂まで来たティーナに突っ込まれ、クギが狐耳と尻尾をへにょらせて肩を落とす。ちなみにウィスカは飲み物を用意をしに行った。厳正なるジャンケンの結果である。
「聖堂長は法具の専門家で、博識な方なので。巫女殿が気づかない点に気づいても不思議ではないかと」
「私どもが言うのもなんですが、とても立派な方なんですよ。聖堂長は」
コノハとモエギがクギの擁護に回る。いや、まぁ気づかなかった事自体は別に良いんだけどな。そういうこともあるだろうし、クギは俺のレーザーガンが聖遺物だと思ってたらしいし。ん？　待てよ？
「それじゃあこれは普通のレーザーガンなんだよな？」
そう言って俺は腰のホルスターからレーザーガンを抜き、エネルギーパックを外してからクギ達の前に置いてみせた。確かこれもＳＯＬのイベントで手に入れたちょっと性能の良いレーザーガンだったんだよな。前にガンショップのオーナーに見てもらった時には随分と良いものだって話を聞いた気がする。
「ええと……はい、恐らく普通のレーザーガンだと思います」
クギは恐る恐るといった様子で俺のレーザーガンをためつすがめつした後にそう結論付けた。
「ヒロ殿、私も見せもらってもよろしいですか？」

「私も良いでしょうか？」
「どうぞどうぞ」

レーザーガンに興味津々といった様子でコノハとモエギも俺のレーザーガンを手にとって眺め始める。エネルギーパックを外してあるので暴発の心配も無い。

「そういえばクギもそうだけど、コノハとモエギもレーザーガンを持っていないよな。何かこう、戒律的なものでレーザーガンを持ってはいけないとかそういうのがあるのか？」

俺がそう聞くと彼女達は互いに顔を見合わせ、代表としてなのかコノハがコホンと咳払いをしてから話し始めた。

「ヒロ殿、クギ殿とモエギは第二法力の使い手ですし、私は第一法力の使い手で、刀も差しています。これだけで十分なのです」
「なるほど……？　まぁ、クギの第二法力はえげつないって話だもんな」
「えげつない……」

俺の物言いにクギが愕然とした表情を見せて固まる。いや、だってイクサーマル伯爵家の連中にクギ達が捕らえられた時にクギがやったことは聞いてるし……第二法力でイクサーマル伯爵家の連中を洗脳して手足のように使ったり、イクサーマル伯爵本人を無力化したりしてたらしいじゃんか。

「必要がないから持たないってわけね。まぁ納得ではあるか。武器として以外には役に立たないし、第二法力を利用すればそもそも示威効果自体が必要ないし、グラッカン帝国で剣を腰に差している人間に絡みに行くアホもそういないもんな。コノハのは刀だけど」

普通の人には剣と刀の区別もそうそうつかないだろう。腰に剣っぽいものを差しているだけで一般市民は「うわ貴族だ。近づかんとこ」ってなるらしいからな。

「そういうことで――む？」

コノハが急に視線を宙空に彷徨わせ、頭の上のタヌキっぽい耳をピクピクと動かす。モエギも同じようにしているところを見ると、ニーパックプライムコロニーの聖堂から何か連絡でも来たかな？

「ヒロ殿、迎えが来たようです」

「そいつは良かった。のんびりするのも悪くないが、そろそろ退屈しそうなところだったからな」

迎え、というのはヴェルザルス神聖帝国から来るという話だった俺達をエスコートする護衛艦隊のことだろう。さほど時間はかからないと言っていたが、数日で到着か。本当に早かったな。

「退屈してる暇がありましたかね……？」

モエギがそう言いながら首を傾げていたが、ここは華麗にスルーしておく。

「そういえばグラッカン帝国に赴任している人員の入替えもするんだっけか。二人も本国に帰るのか？」

「むぅ……そうですよ。私もコノハちゃんも今回の人員転換で一度本国に戻ります。聖堂長とランシン隊長は居残りですけど」

スルーされたことが気に入らなかったのか、モエギが若干ふてく

されながら返事をする。うーん、ふてくされるお狐お姉さんは可愛いな。何故クギが「なるほど」と頷いているのかはよくわからないが、こっち方面のキャラはクギには合わないんじゃないかな。

「よかったらブラックロータスに乗っていくか？　行き先は同じだし」

俺は軽い気持ちでそう言った。そこには下心は欠片もなかったし、袖触れ合うも他生の縁というか、旅は道連れ世は情けといった意味での発言だった。

「……女の私達がヒロ殿の船にですか？」

「これだけの女性を船に乗せて、まだ飽き足りないのですか？　うーん、私はもう少しお互いによく知り合ってからの方が……」

「違うそうじゃない。そういう意図での発言じゃない。わかった、撤回する。この話はナシだ」

俺は両手を挙げて発言を撤回した。部屋も余ってるし、自慢するようでなんだがブラックロータスは大変に快適な住環境を実現している。折角知り合ったのだし、どうせ行き先が同じならどうかと思っただけだったのだ。

「身から出た錆ね」

「ヒロ様は親切なだけなんですけどね」

今まで黙って俺達の話を聞いていたエルマが好き勝手言っているのをミミがフォローしてくれる。そうだぞ。俺は親切なだけなんだぞ。まぁ、男よりは女に甘い傾向はあると自分でも思うけどな。でも、それは誰だってそうなんじゃないかと思うんだ。男は自分でなんとかしろ。俺もなんとかする。

「親切心からの提案ということはよくわかりました。場合によって

はこちらから同行を願う可能性もあるので、お返事は少し待って頂けますか？」
「そっちから？　どういうことだ？」
「本国で私とモエギがヒロ殿の護衛や付き人として付き添う可能性があるので。初対面の人がそういった任務に就くよりは、少しでも気心が知れている私達の方がヒロ殿達も安心でしょう」
「それはそうだな」

ヴェルザルス神聖帝国側がそういう配慮をする可能性もあるのか。確かにコノハの言うことはもっともな話だな。彼女達がグラッカン帝国で何年過ごしたのかはわからないが、少なくともヴェルザルス神聖帝国から一度も出たことがない人達よりはこっち側の流儀や考え方というものを知っているだろうし、その方が無用なトラブルや行き違いは少なくなるだろう。
もっとも、俺自身グラッカン帝国の流儀や考え方に完全に適合しているのかと言われると、正直自信はあまりないんだが。

「先に言っておきますが、無体を働くようなら容赦はしませんよ」
「お前は俺をなんだと思っているんだ」
「貴方の所業に関しては皆さんから色々と聞いたので」

そう言ってコノハはツンとそっぽを向く。確かに俺はお世辞にも女癖が良いとは言えない所業を積み重ねてきてはいるが、嫌がる女性を無理矢理とかそういう外道な行為は一切していないという自負があるぞ。

「……コノハ様？」
「うぐっ……すみません。言い過ぎました」

笑顔のクギから放たれたプレッシャーにコノハが怯み、俺に謝罪

してくる。謝ってくれるのは良いんだが、それよりも突如放たれたクギのプレッシャーに驚いてしまった。笑顔なのに目が笑ってない。コノハは何かクギの地雷でも踏んづけたのだろうか。

「まぁ、同道する件に関しては決まったら連絡してくれ。いずれにせよ部屋は空いてるから、出発までに連絡をくれれば良い」

「はい、わかりました。いいわね？　コノハちゃん」

「はい……」

クギの威圧が効きすぎたのか、コノハは丸耳も尻尾もシュンとさせたまま頷く。もしかして、ヴェルザルス神聖帝国においてクギ――というか巫女の権威は俺が思った以上に強いものなのかね？

まぁ、何にせよ迎えが来てくれて良かった。これでようやっとヴェルザルス神聖帝国に向かえるな。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n3581fh/

目覚めたら最強装備と宇宙船持ちだったので、一戸建て目指して傭兵として自由に生きたい

2024年5月26日18時00分発行